ROMANCE DAWN STORY

ヘビとマングース

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海賊をやめて故郷へ帰る道中、船が転覆して遭難。

気付けば無人島に漂着していた。

そこで少年は、麦わら帽子をかぶった海賊に出会う――。

オリ主を加えて原作沿いのストーリー。

転生とかではないです。だけどオリ主です。男です。

連載開始前の読み切り版、ロマンスドーンを組み込みつつ原作の流れを踏襲。

原作以外の媒体（アニメ、ゲーム等）の物語も要所要所で入ってきます。

あと、原作で仲間にならないキャラが仲間になる場合もあるでしょう。

目次

Prologue
冒険の夜明け 1
冒険の夜明け（2） 22
冒険の夜明け（3） 38
冒険の夜明け（4） 52
冒険の夜明け（5） 64
東の海編
また遭難 68
海賊の襲来 84
モーガニア 99
ピースメイン 116
DEPARTURE 129
海賊の宴 145
アルビダ海賊団 158
アルビダ海賊団（2） 172
シェルズタウン 187
〝海賊狩り〟 198
決起 215
Swing it! 229
Swing it!（2） 243
Swing it!（3） 260
ずっと友達 276
珍獣の島 289
波打ち際の一時 302

あんたも珍獣 318
ルク 331
麦わら帽子のジョリーロジャー 349
オレンジの町 363
海賊専門の泥棒 374
紙と犬と獅子 385
覚悟 398
SHOW TIME 413
SHOW TIME（2） 423
SHOW TIME（3） 433
ギブアンドテイク 445
ロストアイランド編
〝声〟を聞く少女 457
軍艦島 475
千年竜伝説 488
出逢い 499
GO—ON 512
GO—ON（2） 527
GO—ON（3） 539
GO—ON（4） 554
ロストアイランド 565
蘇る伝説 578
蘇る伝説（2） 592
蘇る伝説（3） 604
memories 616

幕間1
断章　敗北者たちの航路 630
断章　夢見る者たち 640
シロップ村編
シロップ村 656
うそつき 668
前夜の静寂 684
ギガparalyze 693
ギガparalyze（2） 705
ギガparalyze（3） 715
ギガparalyze（4） 730
ギガparalyze（5） 743
ゴーイングメリー号 756
ウーナンの黄金編
〝ウーナンの黄金郷伝説〟 770
探し物 787
探し物（2） 801
探し物（3） 812
VOICE 826
VOICE（2） 841
海軍の英雄 854
海軍の英雄（2） 871
友愛 884
SWEET ESCAPE 901
SWEET ESCAPE（2） 912

SWEET ESCAPE（3） 926
SWEET ESCAPE（4） 943
SWEET ESCAPE（5） 964
バラティエ編
Re：START 979
海上レストラン〝バラティエ〟 992
客 1003
海賊艦隊 1015
〝鷹の目〟 1026
ファイター 1041
ファイター（2） 1054
語らう 1069
クソレストラン 1084
スカイ・ブルー 1095
アーロンパーク編
Sweet Refrain 1109
集結 1118
〝助けて〟 1131
賭け 1142
Shake it down 1154
Shake it down（2） 1168
Shake it down（3） 1177
Shake it down（4） 1197
Shake it down（5） 1214
Shake it down（6） 1230

Shake it down（7）―― 1247
生ハムメロン―― 1264
海賊の流儀―― 1278
ANTI―HERO―― 1292
ANTI―HERO（2）―― 1305
Believe―― 1314
幕間2
断章　動き出す海軍―― 1327
断章　蘇る者たち―― 1338
断章　世界の甲板から―3000万の男―― 1341
断章　世界の甲板から―2000万の男―― 1352
ローグタウン編
休息の後で―― 1364
友ではなく、仲間ではない―― 1380
ローグタウン―― 1394
三刀流の復活―― 1405
グランドラインへの準備―― 1425
処刑台―― 1437
〝海賊王になる男だ〟―― 1450
新時代―― 1463
トランス・トラップ―― 1472
トランス・トラップ（2）―― 1484
トランス・トラップ（3）―― 1496
偉大なる航路突入編
リヴァースマウンテン―― 1507

置き去りの仲間 ―― 15
最初の航路 ―― 21
ウィスキーピーク ―― 36
月下の宴 ―― 51
月下の再会 ―― 54
ＮＡＭＥＬＥＳＳ ―― 62
デッドエンドの冒険編
〝海賊島〟ハンナバル ―― 75
Ｃｒａｚｙ ｇｒｏｕｎｄの王様 ―― 87
ＵＮＬＯＣＫ ―― 101
Ｃｒａｚｙ ｇｒｏｕｎｄの王様（２） ―― 161
Ｃｒａｚｙ ｇｒｏｕｎｄの王様（３） ―― 163
ＵＮＬＯＣＫ（２） ―― 165
〝海賊処刑人〟 ―― 166
乱闘騒ぎ ―― 169
それぞれの思惑 ―― 170
弱者の覚悟 ―― 172
〝宴へようこそ、プリンセス〟 ―― 173
レース開始の朝 ―― 175
海賊レース〝デッドエンド〟 ―― 176
不正 ―― 177
侵入者 ―― 179
将軍の策略 ―― 180
将軍の海戦 ―― 182
ゴール目前 ―― 183

パルティア　1850
海軍要塞ナバロン編
Ｇｏ　Ｆｏｒ　Ｉｔ　1865
家族　1878
海軍要塞ナバロン　1890
獄中の出会い　1902
崩壊した町　1913
ハリネズミの日々　1929
ハリネズミの日々（２）　1940
ハリネズミの日々（３）　1952
ハリネズミの日々（４）　1968
ハリネズミの日々（５）　1981
〝人生は面白い〟　1988
リトルガーデン編
太古の島〝リトルガーデン〟　2000
小さな庭の住人　2016
決闘　2027
友の手紙　2040
Ｗａｎｄｅｒｌｕｓｔ　2053
Ｇｉａｎｔ　Ｗａｒｒｉｏｒ　Ｐｉｒａｔｅｓ　ＶＳ　Ｓｔｒａｗ　Ｈａｔ　Ｐｉｒａｔｅｓ　2062
Ｇｉａｎｔ　Ｗａｒｒｉｏｒ　Ｐｉｒａｔｅｓ　ＶＳ　Ｓｔｒａｗ　Ｈａｔ　Ｐｉｒａｔｅｓ（２）　2083
巨兵海賊団　2097
〝まっすぐ進め〟　2116

ドラム編

アラバスタへ向けて≠緊急事態 …… 129
奔走 …… 142
元ドラム王国＝名も無き国 …… 156
唯一の医者 …… 169
ドラムロックへ …… 181
ブリキング海賊団 …… 199
ブリキング海賊団（２） …… 210
ドラム城へ …… 222
鼻の青いバケモノ …… 239
王の帰還 …… 252
ＧＲＯＷＮ ＫＩＤＺ …… 267
ＧＲＯＷＮ ＫＩＤＺ（２） …… 282
ＧＲＯＷＮ ＫＩＤＺ（３） …… 295
ＧＲＯＷＮ ＫＩＤＺ（４） …… 310
治療のあとで …… 326
〝うるせぇ！　行こう！〟 …… 342
冬に咲く、奇跡の桜 …… 353

珍獣島のチョッパー王国編

突然の苦難 …… 369
島を守る者 …… 383
空から降ってきた王 …… 401
動物王 …… 424
ヒカリへ …… 425
ヒカリへ（２） …… 434

ヒカリへ（3）　249
ヒカリへ（4）　124
ヒカリへ（5）　80
二重奏　247
またね　324
アーロン一味の航路編　592
戦いの日々　447
はっちゃんの海底散歩　254
はっちゃんの海底散歩（2）　025
アーロン一味二番船〝タコヤキ8〟　212
トレジャーバトル編　502
ニュースクーからの招待状　549
祭りの気配　622
招かれざる男　925
開会式　257
大会前夜　592
予選一回戦　トレジャーハント　102
トレジャーハント（2）　426
トレジャーハント（3）　242
予選二回戦　クロスカントリー　638
クロスカントリー（2）　026
クロスカントリー（3）　652
クロスカントリー（4）　665
クロスカントリー（5）　792
予選三回戦　バトルロイヤル　679
予選三回戦　バトルロイヤル　126
予選三回戦　バトルロイヤル　691
予選三回戦　バトルロイヤル　326
予選三回戦　バトルロイヤル　703
予選三回戦　バトルロイヤル　132
予選三回戦　バトルロイヤル　713
予選三回戦　バトルロイヤル　728

バトルロイヤル　Aブロック　741
バトルロイヤル　Bブロック　742
バトルロイヤル　Cブロック　764
本戦出場者決定　774
本戦　トレジャーバトル　787
トレジャーバトル　一回戦　800
トレジャーバトル　一回戦（2）　815
トレジャーバトル　一回戦（3）　832
トレジャーバトル　二回戦　844
トレジャーバトル　三回戦　857
トレジャーバトル　四回戦　869
準決勝直前　880
トレジャーバトル　準決勝一回戦　890
トレジャーバトル　準決勝二回戦　901
トレジャーバトル　準決勝二回戦（2）　915
決勝直前　929
トレジャーバトル　決勝戦　936
トレジャーバトル　決勝戦（2）　951
それぞれの航路へ　962
アラバスタ編
Episode of Arabasta：Prologue
2983
白と黒　990
最終作戦　1002
一日の始まり　1013

ナノハナの一件 3023
Welcome to the Black Parade 3042
BURN the FLOOR 3056
BURN the FLOOR（2） 3069
BURN the FLOOR（3） 3083
再会 3093
out of the blue 3101
out of the blue（2） 3118
out of the blue（3） 3135
再会（2） 3147
Calling Out 3154
Calling Out（2） 3166
Calling Out（3） 3182
砂漠の国の王者 3201
YOLO 3209
YOLO（2） 3232
発見 3242
BREAK 3253
LET IT DIE 3270
遭遇 3289
参入 3301
反乱 3317
REVIVER 3332
絶叫 3349

独言 …… 364
HIS WORLD …… 337
HIS WORLD（2） …… 338
HIS WORLD（3） …… 339
HIS WORLD（4） …… 341
HIS WORLD（5） …… 342
ONE …… 293
終戦 …… 342
《P.S. 12 years old》 …… 345
《P.S. 13 years old》 …… 346
《P.S. 14 years old》 …… 348
《P.S. 15 years old》 …… 349
《P.S. 16 years old》 …… 350
《P.S. 17 years old》 …… 351
戦いのあとで …… 352
二日後 …… 354
三日後 …… 355
雨のち晴れ …… 356
裸の王様 …… 357
第一回枕投げ大会 …… 358
次なる航路 …… 360
更新 …… 361
出発 …… 362
For the future …… 363
幕間3 …… 364

断章　七人の海賊 ―― 36
断章　一億ベリーの賞金首 ―― 54
金色の獅子編 ―― 36
新たな仲間 ―― 38
冒険の誘惑 ―― 71
〝金獅子〟 ―― 83
海賊会談 ―― 93
Ｂｌａｃｋ　ｏｒ　Ｗｈｉｔｅ ―― 169
Ｂｌａｃｋ　ｏｒ　Ｗｈｉｔｅ（２） ―― 173
Ｂｌａｃｋ　ｏｒ　Ｗｈｉｔｅ（３） ―― 170
牙を剥く者 ―― 303
海賊会談再び ―― 373
伝説の海賊 ―― 374
敗北のあとで ―― 337
ねじまき島の冒険編 ―― 382
荒れ狂う海 ―― 538
再起を誓って ―― 537
ねじまき島 ―― 786
トランプ海賊団 ―― 773
トランプ兄弟 ―― 753
解放 ―― 873
ナワバリ ―― 891
幕間４ ―― 1390
断章　動き出す海賊たち ―― 1388
断章　空から降る敵 ―― 1387
―― 1538
―― 1623
―― 1847
―― 3834
―― 3922
―― 3936

オーシャンズドリーム編

同乗者 ―― 39
記憶喪失の島 ―― 47
お前は誰だ？ ―― 62
お前は誰だ？（2） ―― 75
お前は誰だ？（3） ―― 90
眠りを操る者 ―― 97
ネムネムの戦い ―― 140
オーシャンズドリーム ―― 402

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ
冒険の夜明け

波の音が聞こえる。
瞼の裏には強い光を感じ、徐々に意識が浮上していく。
ひどくゆっくりとだが、体を包む感触があると気付いた。
一つは砂。背に感じる柔らかさからおそらく浜辺に居るのだろうと連想させる。もう一つは水。腰の辺りまで包んでは去る生温い感触があり、海水に浸かっているのだろうかと気付いて、どうやら波打ち際に倒れているらしいとわかった。
らしい、というのは今の今まで気を失っていたからだ。
気を失う前まで小舟に乗って旅をしていたはず。それがどうして浜辺に寝転んでいるのか。ゆっくり目を開くと同時に、何が起きたのかわからず不思議に思っていた。
全身が気だるい。疲労感が大きく、そこに加えて服が水を吸って重くなっている。
起き上がるのも億劫で気分は晴れなかった。それでも周囲が気になって腕を突っ張り、なんとか上体を起こすことに成功する。
途端にくらりと眩暈がして、思わずよろけながら右手で額を押さえた。
その場に座り直し、視界には広大な海。呼吸を整えるよう深く息を吐く。
脱力感がひどかった。海水を飲んだせいだろう。今すぐにも口をゆすぎたい気分である。
気分は最悪で疲労は言い切れないほど。しかし優しく声をかけてくれる人間もいない。
たった一人、絶不調の状態で辺りを見回してみた。
見た事もない景色が広がっている。
前方には海。すでに見慣れたとはいえ今日は日差しで輝く様相。
後方を見ればのどかという表現が似合う白いビーチ。静けさを湛

える広い森と、その向こうには高い山々。どうにも人の手が入っていなさそうな島であった。
まさか無人島なのでは。そう思うのも当然なほどの大自然がそこにある。
とても美しい景色だった。
思わず危機感を忘れて見入ってしまうほど、その景色には表現しきれない力が溢れている。
辺りに目を向けて確認したところ、船の残骸だろう木材が至る所に漂着していた。バラバラに砕かれてひどい有様。正しい形を持つ物は一つとしてない。
そうだ、と思い出す。
確か気を失う直前には、穏やかな海の中にぽっかりと存在した大渦を発見し、興味を惹かれている内に逃げられなくなって呑み込まれたのだ。
あれはまずかったと他人事のように頷き、気をつけようと決めて納得する。
死んでいなかったのは奇跡だろう。
警戒心の無さを反省する前に、自分の悪運の強さに感謝した。
それからようやく気付いたのだが、遠くには他の誰かの姿がある。同じく波打ち際で倒れているようだ。ひょっとしたら遭難者かもしれない。
少年は震える脚で立ち上がり、そちらへ向かって歩き出す。
何度か転びそうになるものの必死に耐え、危なげな足取りでなんとか近寄ることができた。
寄せては返す波を踏みながら辿り着く。倒れているのは同年代の少年だった。
短い黒髪に少年然とした純朴な容姿。赤いベストと膝丈のジーンズを身に着け、大の字に倒れて目を閉じていた。胸の動きが見えたので気絶しているだけらしい。
同じ境遇の人なのだろう。嘆息した少年はひとまず安堵する。
辿り着いたのは無人島の可能性が高いが、一人ではない。今はそれ

だけで安心だ。
濡れた髪を掻き上げ、とりあえず彼を起こそうと考えた時、目の端にそれが映る。
少し離れた場所、岩場に引っかかる物がある。なんの変哲もない麦わら帽子。赤いリボンがついていて、ずいぶん年季が入っているように見える。
この人の持ち物だろうか。海の中へ少しだけ入り、膝まで浸かりながら岩場へ向かう。
どうせ全身濡れているのだ、躊躇いはない。ただ少しだけ力が入らなくなるというだけで、大した危険があるわけでもなく、あっさりと岩場へ辿り着く。
波の動きを体で感じつつ、転ばないように注意して手を伸ばす。
拾い上げた麦わら帽子を掲げ、太陽の光にかざしながら眺めた後、軽く振って水を飛ばした。
何気なく帽子をかぶってみる。
頭上から降り注ぐ太陽の日差しが少し緩和された気がした。
視界が少し変わったことで、海水の中に立ったまま海を眺める。
広く、果てが見えない海原。近くにいくつかの島が見え、だからこそその巨大さがありありと伝わり、あまりの威容に言葉を呑んで立ち尽くす。
空は快晴で雲一つない。降り注ぐ光は水面を輝かせ、とても美しい様相を湛えていた。
海を見てこれほどきれいだと思うのは、これほど心躍るのは久しぶりだ。
ただ帽子をかぶっただけの些細な変化である。しかし気分を変えるにはちょうどよかったらしく、目の前の光景も加えて、遭難したばかりの少年は事実すら忘れて気分を良くしていた。
まるで冒険に出かけたあの日を思い出すかのよう。
視界に広がる風景は、どこか懐かしさを持ち合わせていた。
しばらくそのまま立ち尽くして風景に見入る。
どれほど時間が経ったか、本人に自覚はない。視線を外したきっか

けは背後で小さなうめき声が聞こえたからで、その時にようやくもう一人の遭難者を思い出し、パッとそちらに振り返って歩き出した。歩き辛いが海水をかき分けてビーチへ戻り、大の字に寝転がる少年の顔を覗き込む。

黒髪の少年は目覚めたらしい。目元を手の甲で擦り、眠たげな目をうっすら開く。

ひどく子供っぽい仕草にくすりと笑って、麦わら帽子をかぶった少年は自らの手でそっと帽子を取り、寝転んだままの彼の顔にそれをかぶせてやった。

途端にわっと声が出る。わずかながらも驚く声に、またくすくすと笑い声が漏れた。

「おはよう。生きてるようで何よりだね」

「んん～……おはようございます」

黒髪の少年は視界を塞いだ帽子を頭へかぶり直し、自身の前に立つ少年を見た。

最初にわかったのは、その笑顔。まるで子供のようにキラキラした純真無垢な様子に見える。

少しくすんだ色の金髪と、別段特別にも見えない青色のパーカーにジーンズ。頭の先から靴まで濡れているが、どこにでも居る至って普通の人物だ。

気楽に思える優しい声で語り掛けられ、麦わら帽子の少年は眠たげな声で答えていた。しかし数秒すれば状況に気付いたらしく、辺りを見回し、自分が居る場所に違和感を感じた様子だ。

「あり？　どこだここ？　おれなんでこんなとこにいんだ？」

「さぁ、なんでだろう」

目覚めたばかりで不思議そうに首をかしげる少年と、それを優しく見守る少年。

二人の出会いは特別な物でもなく、そんな程度の物だった。

＊

脱いだ上着をぎゅっと絞れば、吸い込んだ海水が大量に吐き出された。
広げたそれを振ればぱんっと小気味良い音が発せられる。広大なビーチでは響きようもないが、静かな波の音だけがあるその場所ではよく耳に残って、麦わら帽子の少年はじっと見つめる。
パーカーを脱いでTシャツ姿になった金髪の少年は落ち着いた素振りで過ごしていた。
遭難したとわかった上で微塵も慌てていない。
最初からそこに住んでいたかのように見えるほどの冷静さで、服を乾かす余裕まである。
太陽は高く、日は浅い。視界は良好で遠くまで見渡せるため、もしも船が近くを通ればすぐに発見できるだろうが、助けを探す素振りさえなく。
何をするより先に休憩しようとするかのような、独特の緩さすら持っていたらしい。
当然、二人は顔見知りでもなんでもなく、たった今出会ったばかりである。
それにしてはどちらも警戒心がない姿。片方は濡れた服を干そうと近くにあった木材をビーチに突き立て、上着を引っ掛けている。もう片方は座ったままでぼんやりそれを見るばかり。
設置が終わると金髪の少年が振り向き、座ったままの彼を見て声をかけた。
「そういえば、まだ名前聞いてなかったね」
「お、そうだな」
「ボクはキリ。ただの旅人だよ」
金髪の少年が先に名乗った。
警戒心など欠片もない。端的に告げて黒髪の少年の隣へ腰を下ろし、濡れた服が多少気にはなったが熱くなった砂の上へ座って、彼の顔を見る。
こちらも屈託のない笑みを浮かべていて、敵意はない。どうやら危険人物ではないようだ。

「おれはルフィ。海賊だ」
「海賊？」
「ほんとだぞ」
「そうは見えないけどね」
「昨日出航したばっかりなんだ。仲間もいねぇし船もねぇ。だから海賊志望ってことでいいよ」
「あぁ、そういうこと。じゃあ遭難したのも一人でってことだ」
「おまえは？」
「こっちも一人。お互い、とりあえず知り合いを心配する必要はなさそうだね」
燦々と照る太陽は熱い日差しを送っている。時間が経てば自然と服も乾くだろう。
周囲に広がる景色はあまりにも大きく、小さな彼らを迎えて尚、雄大に立っている。決して傷つけようとする素振りではない。そのせいか、見ているだけで心が穏やかになった。
麦わら帽子をかぶった少年はルフィ。
金髪の少年はキリ。
名乗った二人は海を眺めながら、別段慌てることもなく話を始めた。
「なんでこんなとこに居んだろうなぁ」
「多分、渦潮に呑まれたから。ずいぶん大きくて珍しいからさ、近くで見ようと思ったら、逃げられなくなっちゃって」
「あ、おれとおんなじだ。おれも大渦に呑まれて、気付いたらここに居たんだ」
「ほんとに？　じゃあ、奇跡的に似たような境遇でここに来たってことかな」
「しっしっし、理由もいっしょだ。あんなに大きい渦潮見た事なかったからな」
「ってことは、間抜けな二人が揃っちゃったってとこだね。普通、渦潮を見つけたら間違いなく呑まれないように離れるはずだよ。それがわざわざ自分から近付いてみようだなんて」

「でもあれはしょうがねぇよ。珍しかったし」
「あはは、確かに。それは言えてる」
心配するどころかお気楽な様子で、笑顔を向け合う余裕すらある。似た者同士だと知ってむしろ警戒心はゼロになってしまったようだ。
出会ったばかりで数年来の友人であるかのような、そんな姿だった。
妙に崩れた姿勢で座り、わずかに後ろを振り返って島の全景を眺める。心配をしているのかいないのか、緊張感がない声色でキリがぽつりと呟いた。
「無人島かな」
「そうみてぇだな。誰もいなさそうだぞ」
「困ったな。誰かに船出してもらうってわけにはいかなそうだし、どうやって出よう」
「なんだ、なんか急いでんのか？」
「そんなことないけど、いつまでもここに居るわけにもいかないでしょ」
「んん、そうだな。でもまだいいんじゃねぇか」
青々と茂る森や山々を見て、目を輝かせたルフィがそっと立ち上がる。
見上げるキリには目を向けず、広がる大自然に心を躍らせた様子だ。
「冒険のにおいがするっ」
「まぁ、未開の土地みたいだしね」
「なぁキリ、せっかく来たんだから冒険しようぜ。なんかおもしろそうだろ」
まるで好奇心の塊だ、と思った。
非常に楽しそうな笑顔を向けられ、思わず呆気に取られたキリが言葉を失う。自分自身を好奇心や探求心が大きい人間だと思っていたが、どうやら上には上が居たらしい。
遭難して無人島に漂着。普通の人間ならば途方に暮れてもおかしくないというのに、そんな暇もなく冒険を優先させるとはなんという

胆力か。流石海賊志望だというだけあって只者ではないと見え、呆れるより先にキリは笑っていて、無邪気な様子で肩を震わせた。
冒険。稚拙にも思える言葉だが魅力的な誘いだ。
この状況下で誘われるとは思わなかったが、悪くないと思う自分が居る。どうせ海を眺めていても助けになる船も見当たらず、ビーチに座っているだけでは何も見つけられない。
島を脱出することを考えるならば動くべきだろう。
キリもまた迷わず立ち上がる。
「ここに居ても仕方ないか。でも冒険って何するの？」
「そりゃ冒険するんだろ」
「いや、そうだけど。例えば食料や水を探すとか、この島から出る方法を探すとか」
「ん～全部だな。とにかく行ってみりゃ何か見つかるよ」
「大雑把だなぁ。どんな危険があるかわからないんだよ？」
「なんかあったらそん時に考えればいいさ。おれ出たとこ勝負好きだし」
そう言ってそそくさと歩き出してしまうルフィの背に、苦笑したキリの溜息が向けられた。
「ハァ……やれやれ」
じっとしていられない性分なのだろう。きっと止めても無駄だ。
全く迷わずに行ってしまう彼には理路整然とした説明や話し合いなど必要ない。言ったところでおそらく聞かないだろうと、体感で理解できたからだ。
キリもまた歩き出す。
歩調を合わせてもらったせいかすぐに追いつき、肩が並んでから少し速度が変わった。
抑えきれない冒険心を抱きながら、ルフィはキリを置いていくつもりはないらしく、思いのほか優しい態度である。
熱くなった砂を踏みしめ、向かう先はビーチの切れ目で、森への入り口だった。
「もうちょっと警戒心持った方がいいんじゃないかな。何があるか

わからないってことは、隠れてるだけで誰かいるかもしれない」
「誰かって、だれが？」
「密猟者とか、原住民とかかな。人の気配を感じないってことは、多分危険な人」
「心配いらねぇよ。おれは強いしね」
「猛獣や毒虫だって出るかもよ」
「ガキの頃から山の中で走り回ってたんだ。怖くねぇ」
「へぇ、そう。とりあえず言っても聞かない人なんだってことはわかったよ」
からからと笑うルフィと共に森の中へと入る。すると周囲の様子はあっという間に一変した。
木々の背は高く、緑の葉がまるで天井のように頭上を覆い隠して、わずかな隙間から落ちてくる日光が辺りを神秘的に照らす。わずかな音がそこかしこから聞こえ、葉が揺れたり、動物や虫が鳴き声を発していたり、音が存在していながらとても静かな様相だった。
不思議な空間が演出されている。人の手が入らないからこその姿で。
二人の口から感嘆の声が漏れた。そこにある風景は想像よりもずっと美しい。
ビーチを抜ければ地面は砂から褐色の土に変わり、落ちた葉が敷き詰められている。
それらを踏みつけてどこへともなく進み始めた。目的を定めていないため、キリは少しばかり戸惑いがちであったが、対するルフィは向かう先さえわかっていないというのに心配事など皆無。ひどく上機嫌で淀みなく歩いていた。
「きれいなとこだなぁ。昔おれが遊んでた山とも違う感じだ。なんでだろ」
「そりゃ所変われば景色だって変わってくるよ。山でも森でも、海でも、全く同じ場所なんてない。立つ場所が変われば全く違う物に見えるようになる」
「それもそうだ。そういやおれ、故郷から出たことってなかったん

だよ。だから故郷以外の島に来たの、ここが初めてだ」
「それはいい体験したね。漂流しただけってのが微妙なとこだけど」
「いいじゃねぇか。結局死んでなかったんだし」
「それで海賊志望なら苦労するよ。多分」
「いいんだ。苦労するのだって楽しいんだぞ」
森の中に入ると直射日光を避けることができて、微弱な風もあって、先程より涼しく感じる。
額に浮かんでいた汗を拭い、キリはふぅと小さく息を吐いた。
奇妙な展開だと改めて思う。
遭難したことに加えて、出会ったばかりの少年に連れられて見知らぬ島の冒険を始めるとは。しかもその歩みに恐れが見られないのが驚きである。
年頃はまだ若く、外見は全く怖さがない。そんな様子で海賊志望とは言いつつ、ひょっとしたらすでにとんでもない大物なのかもしれない。或いは、ただのバカという可能性もある。
なんとなくだがそんな風にも思っていた。
「キリはなんで旅してるんだ？」
「ん？　どうしたの、急に」
「おれは海賊になるためだけどさ、キリのは聞いてなかっただろ」
「確かにそうだけど」
「なんで一人で旅してたんだ？」
首をかしげて心底不思議そうに問うてくるルフィに、この人は純粋過ぎるほど純粋なのだろう、という感想を抱く。
よく言えば穢れのない、悪く言えば子供っぽい人物。何を目指すのかは勝手だが、一人で旅をさせるには些か心配な人物だろう。よく一人で海に出たものだと、出会ったばかりでもそう思う。
別に隠すことでもないため、答えはすぐに言葉として吐き出された。
「故郷に帰ろうとしてたんだよ。ちょっと遠くに行ってたから」
「へぇ。遠くってどこだ？　イーストブルーか？」

「いや。偉大なる航路（グランドライン）だよ」
何気なくキリが言った言葉でルフィの目が見開かれた。
原因は彼が口にした言葉にある。
彼らが現在居る場所は、世界地図で見れば四つに分かれた海の内の一つ、東の海（イーストブルー）。四つの海の中で最も平和だと言われている場所だった。
対して、以前キリが居たというのは偉大なる航路（グランドライン）。それは世界を真っ二つに分ける一筋の航路にして、海賊になろうとするルフィが最終的な目的地とする場所。
言わばルフィが目指す場所から来た人物だ。俄然彼への興味は大きくなって、輝くような笑みを浮かべたルフィは前のめりの姿勢でキリを見た。
「グランドラインに居たのか？　おれもそこ行こうと思ってたんだよ。何やってたんだ？」
「別に言ってもいいか。ちょっと前まで、海賊やっててね」
「海賊!?　キリも海賊だったのか！」
「元だよ。今は違う」
「え～？　なんで今は違うんだ」
「続ける理由はなかったし、やめたんだ。だから今はただの旅人」
そっけないとも思える声色。気負うことなく言われていた。
その時の表情に少し違和感を覚える。しかし今のルフィに引っかかるのは彼が海賊だったという事実のみ。ほんの数秒で気になることは変わってしまった。
「じゃあさ、おれの仲間になれよ。いっしょに海賊やろう」
「断る」
「なにィ！　おい、なんでだよキリ！」
「さっき言ったばっかりじゃないか。海賊はやめたんだって」
「いいじゃねぇか、もっかいやろう。キリだって知ってるだろ？海賊は楽しいんだぞ」
「知ってるよ。でも昔の話だから」
「やめたってもっかい始めればいいだろ。おれの仲間になれよ」

「いやだ」
子供っぽいとは思ったが、存外、しつこい性格らしい。
どんな言葉で誘われようと断るキリに対し、ルフィは尚も諦めない。なぜかすでに気に入られてしまったようで勧誘は止まらず、仲間になれと同じ言葉を向けられる。
「おれは船長がいいんだ。一人目だからキリは副船長かな」
「だから仲間にならないって」
「なんでならねぇんだよ。絶対楽しいって」
「でも一回やめちゃったからねぇ」
「そんなのすぐに慣れるだろ。大丈夫だ、おれが保証する」
「適当な保証だなぁ。それに君の仲間ってのが大変そうだよ。色々心配事も多そうだし、頭も悩ませそうだし、簡単には頷けそうにないね」
「おまえバカだなぁ、大変だから楽しいんだぞ。全部簡単にできちまったらおもしろくねぇじゃねぇか。何も知らねぇから冒険は楽しいんだ」
「良い事言うね。肝に銘じとくよ」
「じゃあおれの仲間になるか？」
「いや、ならない」
「え～っ」
尚もルフィの勧誘は止まらずに、歩く最中キリは常に誘われ続けた。
確かに気のいい男ではある。けれどそれだけでは済まされない人物でもあって、苦笑しながらものらりくらりと巧みに避けられているようであった。
諦めない姿には好感を持つ一方、驚くほど厄介だと思う。
やれやれと首を振りながら、それでもキリは首を縦に振らなかった。
「海賊は良いんだぞ。海を旅して、宝を探して、しかも歌うんだ」
「歌なら陸でも歌えるよ」
「そういうことじゃねぇよ。船の上で歌うから気分がいいんだ。

なぁキリ、おれと海賊やろう」
「あ。あんなところにフルーツが」
「んん？　どこだ？」
止まない勧誘の攻撃を受け、キリが出した回避の術はルフィの注意を逸らすことだった。
木の上を指差し、見れば確かにフルーツが生っている。黄色い皮の丸々とした実。多少珍しいものの食べても問題がないはずの物だった。
ただし、木を登ろうにも幹が細く、頑丈そうには見えない。
食べるには考えなければならないだろう。上機嫌なルフィとは裏腹にキリはふむと考える。
「んまほ～。ちょうど腹減ってたんだよ」
「登るにはちょっと細過ぎるね。石を投げるとかしないと無理かな」
「いんや、大丈夫だ。おれに任せろ」
ルフィが景気よく右腕を回し始めた。
その行動に疑問を抱き、キリは怪訝そうな表情を浮かべる。
「どうする気？」
「おれなら届く」
ぐるぐると回された後、勢いよく右腕が木のてっぺんへ向けて突き出される。
届くはずがない、とキリが考えた瞬間。あろうことかルフィの右腕が勢いよく伸びて、数メートルは離れた位置にある頭上のフルーツへ届いてしまった。
予想だにしていなかった光景に彼の目が大きく見開かれる。
伸びた腕は行きと同じ勢いで元の長さに戻って、手にはしっかりとフルーツを一つ握っている。手品の類ではない。彼自身の腕が伸びたのだ。
その様はまるでゴムのようだと思う。
そう考えれば納得できる部分もあって、呆然とするキリは気付けば尋ねていた。

「腕が、伸びた……パラミシア？　まさか、悪魔の実を？」
「ああ。おれはゴムゴムの実を食ったゴム人間だ」
合点がいったと頷く。
悪魔の実とは、一口食せば悪魔に取りつかれ、人智を超えた能力を手に入れるという。
解明されていない謎は多くあり、世界的に見ても実を食した者はごくわずか。悪魔の力を手に入れた者は総じて能力者と呼ばれ、常人を遥かに凌駕する戦闘能力を有していると言われている。
ゴムゴムの実を食したということはおそらく彼の全身はゴムで出来ているということ。皮膚や筋肉、内臓や血管、細胞の一つ一つに至るまでがすべてゴム。
それが悪魔の実、超人系（パラミシア）に属される能力者の特徴だ。
常人とは明らかに一線を画した存在であって、驚いた様子のキリは感心したように呟いた。
「へぇぇ、イーストブルーにも能力者が居るんだね。まぁ確かにあり得ない話じゃないけど、ちょっと驚いたよ。しかもゴムゴムって面白い能力だね」
「ししし、そうだろ」
「引っ張っても痛くないの？」
「おう、全く痛くねぇ」
「どれ」
試しにキリがルフィの頬を引っ張る。ぐいと力を入れて引けば、笑みが崩れることなく皮膚がみるみる伸びていき、痛みを感じる様子もないまま手が止まるまで伸び続ける。
続けて、引っ張った頬を突然離してみた。急速に縮む皮膚がバチンと元の位置まで戻るが、相変わらずルフィは上機嫌そうだ。
痛みを覚えた素振りはない。
打撃、或いはそれに準ずるダメージは無効化してしまうゴムの体にとって、引っ張られた程度ではダメージにさえならない。強がっている訳ではなくて、本当に痛くないようだ。
どうやら本物らしい。人間の皮膚はあそこまで伸びないのだから

信じるのは当然。
冷静に考えれば感触もどこか違っている気がして、尚も彼の頬を指先でつつくキリは興味津々といった様子。気安い態度でしばらく彼に触れていた。ルフィも敢えて抵抗はせず、気分を害することすらないまま彼のしたいようにさせている。
満足した後で指が離れると、ルフィは再び木に実るフルーツへ向き直った。
「んじゃ腹も減ったし、メシにしようぜ。おれがあれ取るから」
「任せるよ」
「おれから渡して欲しかったら、仲間になれ」
「やっぱりいらないや」
「チェッ、いい案だと思ったんだけどな」
ルフィは両腕を伸ばして次々フルーツを取っていく。一定の速度で淀みなく、ずいぶんと素早い。ひとまず見える位置にある物は全て落とせた。
地面に落としたフルーツを見て満足気な笑顔。
その内の一つを拾い上げたルフィはキリに放り投げ、自身は先に地面へ座った。
「ほら、キリも食えよ」
「仲間にならないけどいいの？」
「いいよ、メシくらい。仲間にはなって欲しいけどそんなにケチじゃねぇって」
「さっきは脅されたけどね」
「でも聞かなかったじゃねぇか」
「そりゃボクにだって主張はあるから」
「ちぇ～、おれは本気なのになぁ」
キリもルフィの隣に座って、彼が先にフルーツをかじったのを見た。
些細な食事の風景でも、幸せそうな笑顔を見れば不思議とキリも笑顔になってしまう。
同じくフルーツを一口かじり、口内に広がる甘い果汁に気を良くす

る。
「うんめぇなぁ。でもやっぱ肉がいいな、うん」
「今日中に島を出るのは難しそうだし、夜のことも考えないとね」
「島出るにはどうすりゃいいんだろ」
「イカダでも作った方が早いんじゃないかな。人もいそうにないし」
「キリ作れんのか？」
「多分ね。大体の構造はわかるよ」
フルーツを食べながらの、のどかな会話だった。
ルフィの質問とキリの返答によれば、元は海賊の見習いだったらしいキリは航海に必要な技術を身に着けているという話だ。航海術に料理、応急処置程度の医術や、船の修理まで。船で一番の年下で、航海のイロハを叩き込まれたために色々出来るようになったのだと説明される。
さらに聞くと、初めて船に乗り込んだのは五歳くらいだったという。
腰を落ち着けたということでキリの口も多少は軽くなった。海賊だったと話してしまったこともあって、隠すほどの内容でもないと思ったのだろう。快く答えを返している。
興味津々のルフィの質問に答えて、過去が少しだけ窺い知ることができる。
子供の頃から海賊船に乗り、見習いとして航海したばかりでなく、グランドラインへの航海へも同行した。幼い頃から海賊に憧れていたルフィにとっては非常に興味深い話だった。
「すげぇなぁ。キリってほんとに海賊だったんだな」
「そりゃこんなことで嘘つかないよ」
「楽しかったか？　グランドラインの航海」
「うん、もちろん」
「じゃあやっぱおれの仲間になれ。今からグランドラインに行くんだぞ」
「それはだめ」

「え～」
「いい加減諦めて他当たりなよ」
冷静にキリが言えばルフィは笑うだけ。諦めるつもりはなさそうだとすぐにわかった。
だんだん彼のことがわかってきた気がする。言い出したら他人の言うことを聞かず、子供のようなわがままさを発揮する。しかしそれが嫌かと問われればそうではない。不思議なことにどれだけしつこくても彼に対する怒りは沸かなかった。
屈託のない笑顔が敵意を削いでいるのだろうか。
それはそれでずるいと、心の中では多少面倒とは思っているはずなのに、思いのほか快く答えてしまっている自分に苦笑する。
集めたフルーツを食べきるまでさほど時間はかからなかった。大半はルフィがぺろりと平らげたのである。細身に似合わず大食漢なようで、ゴムの腹はわかりやすく少しばかり膨らんでいた。
呆れが半分、その姿を面白いと考えるのが半分。キリはくすくすと笑う。
「よく食べたね。全部は無理だと思ってたけど」
「んん、肉ならもっと食えるぞ、おれは」
「でも少しくらい残しといた方がよかったんじゃない？　いつまでここに居るかわからないんだし、簡単に食料が見つけられるかどうかもわからないんだから慎重に行動しないと」
「あ、そっか」
「うーん、君はあんまり先のこと考えるの得意じゃないのかな」
「まぁいいじゃねぇか。歩き回ればまたすぐ見つかるって」
危機感もなく笑う仕草はやはり子供っぽく。怒る気力すら削がれていった。
あからさまに溜息をついた後、すでにキリの中には文句もない。
ふと、木の幹に背を預け、だらしなく力を抜いて座って、先程よりリラックスした状態となる。
そちらの方が素なのか、もはや考える気力すら捨てて表情が和らいだ。

キリの穏やかな顔を見やり、ルフィも同じ体勢になって力を抜く。
耳を澄ましてみれば風が動く音が聞こえる。葉が揺れるためそこを通ったのだとわかるのだ。静かな森の中で不思議な空気に包まれ、驚くほど心が安らいでいくのを理解する。
「君はお気楽だねぇ。そこまでブレないと羨ましいよ」
「そうか。海賊やりたくなったか？」
「それはまた別の話」
「なかなか頑固だな、おまえ」
「それを君が言う？　普通ボクが言うセリフだと思うけどな」
腹もある程度満たされて、心地良い風と緑の匂いに気分が良くなる。隣に居る少年も出会ったばかりではあるが邪魔にはならない。むしろ慣れてきて居心地が良くなってきたところだ。
キリはそっと目を閉じた。
熱い気候のせいかすっかり服も乾いている。いよいよ奇妙なほどに落ち着き始めて眠気すら感じるようになっていた。
ルフィもまた、隣の彼を見習って目を閉じてみる。
視界が無くなれば弱弱しい風もより一層鮮明に感じた。なるほど、気分は悪くない。体の力を抜くと心地良さが増して眠りたくなってくる。
遭難していることを忘れているらしい。二人は妙に安堵していた。
緊張感も敵意も持たずにまどろみを感じて脱力する。
力を抜きながら、それでも会話は終わらず、今度はキリがやる気に欠けた声で切り出す。
「海賊やるのって大変だよ。生半可な覚悟じゃやり通せない」
「だったら心配いらねぇよ。覚悟ならもうできてる」
「どうして、海賊になろうと？　冒険がしたいなら冒険家でもいいじゃないか。わざわざ悪名を得るような真似しなくてもいいのに」
「おれはな。海賊王になるんだ」
目を閉じたままで、キリの呼吸が変わった。
驚いた様子でわずかに息を呑み、ルフィが気付かぬ内にまた元に戻る。

声色は変わらず。至って平静な声で再度尋ねた。
「海賊王って言えば、グランドラインを制覇した海賊に与えられる名前だ。世の中有名な海賊は数えきれないほどいるけど、そう呼ばれたのはあのゴールド・ロジャーただ一人。まさか君がそれを目指すの？」
「ああ、そうだ。そのために村を出たんだからな」
「また大きく出たなぁ。もう少し小さい夢だって十分海賊やれるよ」
「いいんだ。おれはこれがいい」
ししし、と特徴的な笑い声。
ルフィの声には自信が満ち溢れていた。一体なぜそれほど確信を持って言えるのかはわからないが、なれないとは微塵も思っていない、そんな風に思わせる。しかしだからこそ覚悟の強さも感じ取れた。なると決めているのなら、おそらく命さえ賭けるつもりなのだろう。
それを勇気と呼ぶか覚悟と呼ぶかは受け止める側の勝手である。少なくともキリは面白いと思っていた。お世辞にも褒められた夢ではないが、バカはバカでも、愛すべきバカだ。こういう手合いは案外周囲が思っている以上の成長を見せたりする。
達観した様子でキリが呟いた。
「それはそれで、面白いかもね……」
「おっ、ほんとか？　海賊やるか？」
「ううん、やらない」
目を開けてキリの顔を見、唇を尖らせる彼を無視して、キリが立ち上がった。
元々休息を取るほど疲れていなかったのだ。昼寝を諦めるのは心苦しいが、気分が変わったこともあって動きたくなり、誘うようにルフィを見下ろす。
「それじゃあ、未来の海賊王がいつまでもこんな島に居る訳にはいかないでしょ。さくっとイカダなりなんなり作って島を出ようか」
「うし、そうすっか」

ルフィが立ち上がったことを確認し、先にキリが歩き始める。
イカダを作るならビーチに近い方がいいと考え、向かう方向はさっきまで居た場所。それに気付いたルフィが首をかしげて彼へ問う。
「戻るのか？」
「島を出るなら海が見える場所にいなきゃ。奥に行っても多分何もないよ」
「バカだなぁおまえ。何があるかなんて自分で見に行かなきゃわからないだろ。それが冒険なんだぞ。何もないかどうかを見に行くのが冒険なんだ」
「いや、それはそうだろうけどさ」
「とりあえず行ってみようぜ。ひょっとしたら何かあるかも」
「何もなかったら？」
「んん、それも冒険だ」
キリが向かおうとした方向とは逆の方向を目指し、意気揚々とルフィが歩き出す。キリは呆気に取られてその背に見入るばかりだった。
流石は海賊。自分勝手で他人が善意で言った言葉さえ受け流してしまう。
溜息をついて、しかし自分が元海賊ということもあってキリは怒りを持たず、やれやれと首を振りながら彼の後ろへ続いた。態度とは裏腹に少し楽しそうでもある。
「キリはさ、海賊だったんだろ？　冒険とかしたことなかったのか？」
「いいや、毎日が冒険だったよ。色んな物だって見てきた」
「じゃあキリだって冒険好きだろ。ちょっとくらい寄り道した方が楽しいぞ」
「さっきも言ったけど、ボクはもう海賊じゃないんだから冒険する必要はないの」
「海賊だったら冒険しても問題ないってことか？」
「あいにく海賊にはならないけどね」
またもルフィが不満そうな声を出すが、キリは笑って受け流すばか

り。
軽口を叩きながら肩を並べて歩く様は当人たちが思っている以上に親しさを感じさせ、まるで何年も前からの付き合いに見えた。
二人は一路、冒険のために島の奥を目指す。

冒険の夜明け（2）

再びお互いのことを話しながら、二人はしばらく森の中を歩いた。
一部とはいえキリの過去を知った後とあって、今度はルフィの過去について聞く。
生まれはイーストブルーのフーシャ村。幼い頃は村に住み、海賊が村に居ついていた頃にはその海賊たちと頻繁に会って話していたという。海賊らしく自由気ままで勝手な連中だったが村に害を与えることはなく、むしろ山賊を追っ払ったことさえあったらしい。
彼が大事そうにかぶる麦わら帽子も、その海賊から預かった物だと教えられた。
試しに名前を聞いてみれば、伝えられた海賊の名は世界的に有名な物。思わずキリは目を見開いて驚き、興味がないふりをするのも失敗して質問する。
「フーシャ村なら知ってるよ。これでも一応イーストブルー出身だから」
「良いとこだぞ。キリにも見せてやりてぇなぁ」
「でもまさか、そこに赤髪のシャンクスが居たなんて。確かに一時期イーストブルーを航海してるって噂があったけど、みんな嘘だって言ってたし、そんな小さな村に居るなんて普通信じない」
「シャンクスのこと知ってんのか？」
「ボクだけじゃなくて世界中の人が知ってるよ。知らない者はいない大海賊だ。その名前を聞いただけで震え上がる海賊だって珍しくない」
「へぇ～、そうなのか。おれにとっちゃただの友達って感じなんだけどな」
なんでもないことのように語るルフィに自慢している様子はなく、心からそう思っているのだと理解できた。全世界に名を轟かせる大海賊はただの友達。普通の人間ならひっくり返って驚くか、馬鹿馬鹿しいと断じて信じない話の内容だろう。
不思議とキリはすぐに信じた。

彼を大物だと思ったのはそういった幼少期があったせいでもあるのかもしれない。そう考えれば不思議なことだとは思わなかった。
子供の頃の体験は年齢を重ねてからもかけがえのない宝になる。
彼の体験はきっと今のルフィを作る大きな要因となったことだろう。
話を聞く前より親近感が増して、興味も大きくなってきた。話を聞き出そうとするキリも少し前のルフィのように、ずいぶん前のめりになっていたようだ。
「シャンクスたちが村を離れる時、もっといい仲間を見つけて海賊王になるって誓ったんだ。そん時にこの帽子を預かった。いつか必ず返しに来いって」
「なるほど。海賊王になるだけじゃなくシャンクスに会うのも夢の一つか」
「ああ。海賊王になる前に会っとかないとな。おれはいつかシャンクスにだって勝つぞ」
「大きな野望だね。大き過ぎて眩暈がしそうだ」
からからと笑うルフィには本当に眩暈がしそうである。
彼は知っているのだろうか。大海賊とまで呼ばれるようになった人物がどれほど強いか。
長年グランドライン後半の海に君臨する者たちであれば、一人で百や千の兵士を倒すなどさほど難しいことではない。海賊王亡き今、一部の者たちは海賊の皇帝とさえ呼ばれている。
海賊王になるということは彼ら全員に打ち勝つということ。
そしてキリが知る限り、赤髪のシャンクスは今や皇帝の一人だ。
知ってか知らずか大口を叩く彼には返す言葉が見つからず、肩をすくめる他ない。
「たとえ勝てるとしても、長い旅路になりそうだよ」
「長い方がいいじゃねぇか。いっぱい冒険できるぞ」
「まぁそうだよね。君ならそれを楽しいって言う人だよ。うん、だんだんわかってきた」
納得した顔で頷き、今度はキリが質問する。

誰にだって過去はあるが彼のは一際楽しそうだ。聞いていて飽きる気配はない。
さらに知りたくなってしまって、海賊になるのはだめでもこれくらいなら許されるだろうと、次の話を促してみる。
「それで、山賊に襲われて、赤髪のシャンクスに助けられて、その後は？　何事も起きずに平々凡々と暮らしてました、とは言わないと思うんだけどさ」
「ああ。おれのじいちゃんがすげぇ厳しくてよぉ、海賊になりたいって言ったら、だめだって言われて、海兵になれって言われたんだ。じいちゃんも海兵で忙しかったからな。ほとんど村にはいなくて、自分で育てる代わりにおれを山賊に預けたんだ」
「皮肉なもんだね。人質にされたのに預けた先が山賊？」
「つっても別の奴らだけどな。山賊は嫌いだけどダダンたちは好きだ」
「ふぅん。確かに聞いてる限りじゃ悪い関係性じゃなさそうだね。ちなみに、一応聞いときたいんだけど、海兵だっていうおじいさんの名前は？」
「モンキー・D・ガープってんだ。拳骨がすんげぇ痛くてよぉ。おれゴム人間だから打撃は効かねぇはずなのに、なんでだろ」
腕を組んでうーんと首を捻り、考え始めてしまったルフィの隣で、キリは彼の顔から視線を外して前を見る。きょとんとした顔で、表情が消えてしまったらしい。どこか様子がおかしくなっていたが考え込むルフィに気付かれることはなかった。
歩いていると森の切れ目が見つかり、視界が開けて幅の狭い川を見つける。
流れは緩やかで穏やかな様相。海とは違った美しさがある。
二人は一度そこで足を止め、静かな川のせせらぎを耳にした。
「きれいな川だね。これなら飲み水にもできそうだ」
「よし。とりあえずこれで死なねぇな」
「とりあえずはね。後は食料が手に入ればなんとかなるかな」
「やっぱ肉がいいなぁ。どっかで狩りしよう」

「じゃあ次はどっちに行こうか」
「上流に行ってみようぜ。なんかあるかも」
「また適当な理由で選んで。まぁいいけど」
足は自然と上流を目指し始め、二人並んで歩き出す。
流れる川の音を聞きつつ、歩き出すと同時にキリがルフィに質問する。
「さっきの続き。〝ゲンコツのガープ〟の孫だって？」
「やっぱ知ってんのか。じいちゃん有名らしいからな」
「シャンクスと同じくらい、いや、下手したらそれ以上の有名人だよ。海軍の英雄って呼ばれてる。それこそ海賊王のロジャーとやり合った一人で、生きる伝説の一人さ。階級こそ中将だけど、それは昇進を自分で蹴ったから。実力だけで言えば大将クラスかそれ以上になる」
「まぁとにかく有名ってことだろ」
「本当にわかってる？　事態の凄さが」
「なんとなく」
「ハァ……だと思った」
眉間に皺を寄せて訴えるキリだが、どうにも状況がわかっていなさそうなルフィは上機嫌に笑うばかりで、特別態度が変わる訳でもない。それほど興味を持っていない顔なのだ。
反応に困ってキリは溜息をついた。話が通じていない気分になってしまう。
理解しつつあると自覚していたのに、どうやらまだまだ認識が甘かったようだ。彼を理解した気になるのは大きな間違いなのだと改めて理解する。
あまり考えないようにしつつ、会話は途切れさせない。
そんな調子でも話したいことは山ほどあった。それもまた不思議な気持ちになる一因である。
「まぁいいや。案外身内だとその程度なのかもね。ええと、山賊に預けられて――」
「預けられたけど、ダダンたちとはたまに会うだけで、おれはほとん

ど兄ちゃんと居たんだ。最初はあんまり仲もよくなかったしな。ダダンたちは好きでも、やっぱりおれ山賊嫌いだから」
「兄ちゃん、ね。山賊に預けられたのに？　血の繋がった兄弟が居たの？」
「いんや、血は繋がってねぇ。盃を交わして義兄弟になったんだ」
ふむ、と納得した様子でキリが頷く。それなら合点がいった。血が繋がっていると言われた方がよっぽど理解に苦しむ。
山賊に預けられて再会はないだろうと思っていたが、やはりその時が初対面だったらしい。
それにしても変わった人物だ。海兵の祖父がいて、海賊に憧れ、山賊に育てられた挙句に子供の時分に盃を交わして義兄弟を得るとは。ずいぶん稀有な人生を歩んでいる。
ゆくゆくは大物になりそうだな。全て信じた上でそう考えていた。
「エースとサボといっしょに山の中を走り回って、ガキの頃はずっと修行だった。将来海賊になろうって三人で決めたからな。誰よりも自由にこの海を航海するんだって」
「その名前、どこかで聞いた気が――」
「エースはおれより先に島を出て海賊やってんだ。手配書が出たのも知ってる。かなり有名らしいから、多分キリなら知ってると思うぞ」
純真な目で問われて思わずキリも顎に手を当て、考える。
真っ先に思いつく名前と顔が一つ。世界的に有名で誰でも知ってる有名人。
もし考えた通りだとすれば大変な事態だと思う。その人物の身内など噂にも聞いたことはない。
まさかと思いながらも試しにそれを口にした。
「エースって名前でまず頭に浮かんだのは、火拳のエースだ。ひょっとしてその人？」
「そうそう、そいつだ」
「マジで。ハァ……いよいよ頭が痛くなってきた」
「なんで？」

「知らないの？　火拳のエースがどれだけ有名な人間なのか」
「んー、エースのことは知ってるけど、どんだけ有名かは聞いたことねぇな。おれ山の中で住んでたし、噂も聞かなかった。マキノは有名だってことしか言ってくれなかったんだ」
「じゃあどう言えばいいかな……すごく簡単に言えば、ロジャーと渡り合った海賊の部下になってて、その中でも隊長の地位に居る。他の隊長より若いこともあって、知名度で言えば世界で見ても上から数えた方が早いくらいだよ」
「へぇ～。とにかくすげぇってことだよな」
「あれ？　説明した甲斐なし？」
想像通りのビッグネームに虚を突かれたようだ。思わず頭を抱えたキリは足を止めそうになる。それだけ大きな名前なため、衝撃も大きかった。
それと同じくらい驚きなのが、ルフィがそれを凄いことだと思っていない事実である。
あっけらかんとする彼は大したことだと思っていなくて、そちらの方が驚きが大きい気がした。
「関係者がとんでもない人ばっかりだね。ほんと気が遠くなりそうだ」
「しっしっし。どうだ、おれの仲間になりたくなったか？」
「悪いけどその手には乗らないよ」
「キリは全然うんって言ってくれねぇな。どうやったらおれの仲間になるんだよ」
「だから、海賊にはならないって。もう足を洗ったんだから」
そうは言いつつも、徐々にキリが惹かれつつあったのは確かだ。ルフィの関係者が有名人ばかりで、昔を思い出すきっかけになったことばかりではない。冒険と称して未開の土地を歩いていること自体、自分で想像するより大きな興奮を抱えてしまっている。
もう海賊はやめると決めたのに。
意思が弱い自分を叱って首を振った。
ルフィが特殊な環境下で育ったことはわかった。祖父や兄、友達、

豪華な顔ぶれだ。しかしそれが自分に何の関係があるというのだろう。無理やりにでもそう思うことにする。
ただ、気になることがもう一つだけ。
先程エースと同じタイミングで聞いたもう一つの名前だ。
「もう一人は？　確か今、サボ、って」
「ああ。兄ちゃんは二人居たんだ」
「その人も海賊になったの？　でもその名前、どこかで――」
「サボは死んだんだ。まだおれがガキだった頃に」
事も無げにそう言われて、一瞬時が止まる。
ルフィの顔はなんでもないことを告げている様子。しかし想像とは違った答えに言葉を呑み、気まずげに顔をしかめたキリは頬を掻いた。
こんな時ばかりは静寂に包まれた周囲が恨めしい。
言葉を止めれば痛いほどの沈黙に襲われそうで、気まずい想いながらも口を動かす。
「そうか……ごめん。悪いこと聞いた」
「別にいいよ。もう何年も前のことだし」
「そう。それならいいけど」
ルフィは気にしていないようだ。変わらぬ笑顔で彼を見る。
気を取り直してキリも笑おうとしたところ、ちょうど視線の先に何かを発見した。
真剣な目つきに変わってそれを注視する。まだ距離はあるが大きな音は聞こえていた。
前方を指差してルフィに教えてやれば彼も気付く。
「ねぇ、あれ」
「ん？　なんかあるな」
歩調を速めて進む。
どちらも好奇心を露わにしていて楽しんでいる顔だ。緊張した空気はあっという間に霧散し、目の前の物に集中する。距離が近付くとそれが何かは火を見るより明らかとなった。
大きな音を立てるのは、滝だ。

さほど大きな規模ではないが大量の水が一気に落ちて轟音を立て、その先へ川を作り出している。そこへ辿り着くと一気に空気が変わったように感じられて、清々しい心地を感じた。
ルフィは滝を見上げて感嘆の声を上げ、笑みを取り戻したキリはぐぐぐと伸びをする。
「おおっ、滝だ」
「これが見れたんなら無駄足じゃなかったかもね。空気が澄んでる」
美しい景色の中に立って、二人はしばし足を止めた。
緑に囲まれた円形の広場にまん丸な滝壺。背はあまり高くないものの見事な滝が爽快な音を発し、ここだけは葉の天井も切れて空が窺え、辺りは一層輝くよう。滝壺に落ちる水で小さいながらも虹まで出来ていた。滅多に見れないと感じるほど、ひどく美しい風景である。
腰に手を当て、言葉を失って見入った。
これだから冒険はやめられない。そう思った直後にまたキリは自分を叱りつける。流されてついて来たが気分まで流されてしまった。これではいけないのだ。
気合いを入れ直そうとするキリとは対照的に、喜ぶルフィは滝へ向けて歩き出した。
「なぁキリ、知ってるか？　滝の裏には洞窟があって、お宝があるんだぞ」
「確かに海賊の冒険譚にはそういうのつきものだけど、別に全部の滝が同じわけじゃないよ」
「いいじゃねぇか、調べてみようぜ」
「何もないかもしれないよ」
「それならそれでいい。何もないならそれを確かめるんだ」
「ハァ、またこうなるのか」
ルフィは小走りになって滝まで近付くも、キリは呆れた様子で歩く。
すっかりその気になっている彼を止めるのは無理そうだと感じながら、やはりこのままではいけないのではと話しかけるが、想像して

いた通り止まりそうにもない。
「あのさ、もういいんじゃないの？　十分冒険らしい冒険はしたと思うよ」
「でも急いでないんだろ？」
「急いではいないけど、冒険するのはまた別だって。そういうのはちゃんとした仲間を見つけて、それから始めればいいでしょ。ボクは遠慮しときたいんだ」
「おれはキリを仲間にしたいんだぞ」
「無理だって」
「なんで」
「もう足を洗ったから」
先にルフィが滝壺のすぐ傍、滝を見上げる位置に辿り着いた。
すぐに視線は滝の裏へ向かい、洞窟がないかと探し始める。追いついたキリは俯いて溜息をつき、一転して飽き飽きといった様子を見せた。というより、ポーズだけでもそうしなければこれ以上はまずい。彼のペースに乗っていると後々後悔することになる。
「それにそもそも、普通はお宝があると知って探しに来るものだ。たまたま遭難して辿り着いた島に、そんな都合よく滝の裏の洞窟やお宝があるわけない――」
「おいキリ、あれ見ろよ」
キリの言葉を遮って、ルフィの右手が滝の裏を指差す。そこを見てみると、まさかとは思うものの、確かに洞窟らしき窪みが見えていた。偶然にしてはあまりに出来過ぎている。
あんぐりと大口を開けるキリに対し、してやったりのルフィは彼の背を強く叩いた。
「ほらみろっ、言った通りだろ！　やっぱりお宝があるんだよ！」
「まさか。人がせっかく足洗おうとしてるのに、なんでこんな時ばっかり……」
「うし、じゃあ早速探しに行くぞ。キリも行くよな。海賊だもんな」
「いやボクは――」
断ろうとしたその一瞬、ルフィの右腕が伸びてぐるりと腹に回さ

れ、しっかり掴まれる。むしろ捕まったといった姿であった。
あっと思う暇もなく左手が伸ばされて滝を突っ切り、洞窟内の岩場を掴む。
まずいと気付いた時にはすでに遅い。伸ばされた左腕が急速に縮んで、勢いを利用してまるで弾丸のように、二人の体が足場を離れた。真っ直ぐに落下する水の壁へ向かい、激突する。
滝へ突っ込んで勢いよく通り過ぎた結果、せっかく乾いた服や全身がびっしょり濡れていて、そんなことを気にする暇もなく、勢いを止める術もなく洞窟の中へ飛び込んで地面を転がっていた。
ごろごろ転がり、勢いが弱まった頃に体が止まる。
体のあちこちをぶつけたせいでひどく痛んだ。だがそんなことより、無理やり連行されたことの方が問題である。
ルフィの腕が腰の辺りに巻き付いたまま、仰向けに倒れたキリは深く嘆息した。
「これはまた、厄介な人に出会ったもんだなぁ。ここまでするかな、普通」
「しっしっし、上手くいった。さぁて、お宝どこだぁ？」
軽やかに立ち上がったルフィは喜々として早速歩き出し、洞窟の奥へと進み始めた。解放されたキリだが滝を越えて外へ戻るには滝壺を泳がねばならず、あいにくカナヅチで泳げない。仕方なく後に付き従うように歩き出すが、胸中では予想外の展開を楽しみつつある。
子供の頃から体験していたせいか、どうやら根っからの海賊のようである。
努力とは裏腹に冒険を楽しむ自分が恨めしい。
洞窟はそれほど広くない。幅は二人がギリギリ歩ける程度、薄暗いものの水流を隔てて光が差し込み、完全に視界がないわけでもなく、ルフィの後ろ姿もはっきり見える。迷いようもない一本道のため追いつくのも難しくなかった。
奥行きは約十メートルほど。一番奥に辿り着くまで一分とかからなかった。
そこにある物は薄暗い中でも鮮明にわかって、呆気に取られた二人

は大口を開ける。
「うわぁ」
「これは……」
座り込む形で放置されていたのはボロボロの服を纏った白骨だった。もうずいぶん前に動かなくなった亡骸だろう。骨には所々苔が生えており、ここに居座ってからの長い時間が感じられる。他の者の姿はない。たった一人で何年も暗い洞窟に居たようだ。
怯えることもなくじっと見つめた二人は口々に感想を漏らす。
「可哀想に。孤独に死んでいってずっとそのままだったんだ。ここじゃ誰にも見つからないだろうし、妙なところで死んだもんだなぁ」
「こいつ、ここで何してたんだろうな」
「さぁね。ボクらみたいに遭難したのか、宝探しでもしてたのか。或いは密航者か犯罪者かも。まぁ、少なくとも服装を見る限りカタギじゃなさそうだね」
キリは一歩近づいて膝を折り、白骨化した遺体に両手を伸ばす。何やら服を調べ始めたようだ。
ルフィは不思議そうにそれを眺めて、止めるつもりもなくただ質問する。
「何やってんだ?」
「どうしてここに居たのか、手掛かりくらいは持ってるかと思って」
ふぅん、と興味なさげに呟き、観察する。
嫌悪感はないらしく、テキパキとした動き。妙に手慣れているように見えた。
調べた結果、胸の内ポケットに手を伸ばした時に何かを発見する。取り出したそれは古い羊皮紙だった。他に見つかったのはピストルが一丁と壊れたコンパスだけ。それらは地面に放置して羊皮紙だけを持って立ち上がる。
折りたたまれた紙を開けば、途端に興味を持ったルフィが肩越しに覗き込んでくる。
どうやらどこかの島の地図らしい。
空から見た島の全景と何かを示す印が四つ。おそらくだが、宝の地

図らしき物だ。
「おっ、なんだこれ。宝の地図か？」
「どうもそうらしいね。ほら、この砂浜。多分ボクらが漂着した場所だ」
「そんなのわかんのか？」
「地形を見れば大体わかるよ。つまり、これは今ボクらが居る島の地図ってことだろうね」
推測でしかないがそう言い切る。するとルフィが即座に反応して地図を指差した。
「印がついてるぞ。なぁ、これってお宝だろ？」
「どうだろう。一概にはそう言えないと思う」
「うーん、四つあるな。このどれかにお宝があるんじゃねぇの」
「いや、多分そんなに簡単じゃないでしょ。何か仕掛けがあるはず」
「なんで？」
「滝の裏の洞窟にお宝を隠すように、宝の地図にもセオリーがあるんだ。一旦外に出て考えてみよう。ここはちょっと暗過ぎる」
「おし、わかった」
キリの言葉に従って行きと同じく、ルフィの手によって外へ出た。
またしても頭から大量の水をかぶることになったがもう気にしない。今は見つけた地図に気を取られているため、すっかり夢中になっていたようだ。
自制心もどこへやら、外へ出て土の上に降り立ったキリは早速地図を広げる。多少濡れているが問題はない。丈夫な羊皮紙は尚も島の全景と四つの印を表している。
あまり大きな島ではないと見える。その気になれば一日でも一周することはできそうだ。
ルフィがキリの隣に立ち、地図を覗き込むと、指で指し示しながら解説が始まる。
発見してからたったの数分。
それだけで地図に記された全てを理解できるとは、存外彼は頭が良いらしい。

「それで、どういうことだ？」
「この手の地図は、宝の在処を直接示さずに、ヒントを与えているだけの可能性がある。例えばほら、この右下の印。多分ここがボクらの現在地だ。砂浜から歩いた距離から考えても、辺りの風景から見てもほぼ間違いない」
「すげぇなキリ。おれにはそういうのわかんねぇや」
「確かに滝の裏には洞窟があったけど、そこには何もなかった。仕掛けもなさそうだし、あったのは宝探しに来て力尽きた死体だけ。そこから考えるに、海賊が好むセオリー的には、この四つの印のどこにも宝がないってことが考えられる」
「んん？」
「例えば、そうだな――」
腕を組んで首をかしげ、明らかにわかっていない顔のルフィを見て苦笑し、キリは近くに落ちていた木の枝を拾った。そしてガリガリと土を削って何かを書き始める。
四つの丸。地面に描いた後でルフィの顔を見る。
「印は四つ、これでも等間隔に描かれてる。多分このタイプだとこうして」
木の枝の先端が地面を走り、四つの丸から線を伸ばして、すべての線が交差した。
四つの丸の中央、自然とバツ印が描かれる。
ルフィの笑顔が輝いて何かに気付いた様子であった。
「おぉっ」
「こういう風に、四つの印から線を伸ばして交差する場所に、お宝が眠ってる可能性がある」
「そういうことかぁ。キリ、この場所わかるか？」
「憶測だけど大体は。縮尺から見てもそんなに時間はかからない」
「よぉし、じゃあ行こうぜ！　お宝はおれたちがもらったぁ！」
「うん」
意気揚々とルフィが歩き出し、続いてキリが歩き出そうとする。しかしその一瞬、表情を変えた彼が自らの額を叩き、自らの失敗を責め

るように唐突に天を仰いだ。
気付いたルフィが足を止めて振り返る。
何が起こったというのか。
わからないと見つめていれば、大きなため息を吐き出したキリが呟く。
「――って、何やってんだボクは。海賊やめるって決めたのに」
「なんだよ、せっかく盛り上がってたのに」
「あのさ、ボクはもう冒険とかそういうのやめたんだ。ここまでは付き合ったけど、この先は自分でやってくれないかな。これ以上付き合うと、その……」
「おまえだって楽しそうだったじゃねぇか」
「それが問題なんだ。もうやめるって決めたから、楽しいって思うのは良くない」
「別にいいだろ。楽しいんだったら」
「そういうわけにはいかないよ。海賊のまま村に帰ったらそれこそ問題になる」
キリの視線はふと川へ向き、そちらに数歩進む。
ルフィには背を見せ、少し気落ちした表情で穏やかな流れを見つめた。
「いつまでも変わらないなんてことは無理だ。環境が変わるなら自分も変わらなきゃ」
「う～ん、そうかな。おれはそんなこと思ったことねぇぞ」
「まぁ、君はね。そのままでいいと思うよ。うん、きっとその方が海賊らしい」
「だろ？　キリも無理に変わろうとしねぇで、海賊やればいいじゃねぇか。海賊好きなんだろ」
「もう決めたことだから」
遠くを見るような目つきが気になった。ルフィの表情も少し強張る。
なぜ無理に変わろうとするのだろう。これまで自分らしく生きてきた彼には理解できそうにない。幼い頃から海賊になるため、誰より

も自由に生きると決めて生きてきた。何が正しいかより、兄たちと共に後悔しない人生を選ぼうと決めたからだ。
キリはきっと、海賊が嫌だからやめようとしているわけではない。むしろ今でも海賊は好きなのだろう。些細な素振りからなんとなく伝わる。
だからこそ気が合いそうだと思って誘い続けたわけだが、どうやらかなり決意が固いようだ。
ちっとも振り向いてくれる素振りはなくて、だがそれでも、川べりに佇む彼はひどく寂しそうに見えて無視はできない。断るのならそんな顔を見せなければいいのに。
彼はまだすべての過去を語っていない。知りたい、と思った。
ただ今は話してくれないだろうとわかっているため、宝を優先すべきだと判断する。
黙り込んだキリの背に、心底明るい声をぶつけた。
「まぁ細かいことはいいから、とりあえず行こうぜ」
「あのね。ボクの話聞いてた？」
「聞いてたよ。でもなキリ、はっきり言っとくぞ」
「なに」
「おれは地図が読めねぇんだ」
腰に手を当て、胸を張り、堂々とした姿である。
自分の弱みをこれほど自信満々に言えるものだろうか。
驚いて呆然としたキリは言葉を失くして、目をまん丸に開いて立ち尽くした。
続けてルフィが堂々と言う。
「宝の在処を教えてもらったって、おれは一人でなんて行けねぇぞ。おまえに助けてもらわなきゃ島から出ることもできねぇ。だから助けてくれ」
「いや、そんな自信満々に……」
「色々あったのかもしれねぇけどよ、海賊がどうとか置いといて、今は助け合おう。ここにはおれとおまえしかいねぇんだから」
その妙な自信はどこから来るのかはわからないが、強い確信を持っ

て話しているのは伝わる。キリは何と言っていいかわからずに戸惑う。これほど困ったのはずいぶんと久しぶりだ。
じっと見つめていれば、ルフィがにこやかに笑う。
「もう仲間になれなんて言わねぇから、最後の冒険しようぜ。それくらいはいいだろ」
「……まぁ、それくらいなら」
「ししし、決まりだ」
体の向きを変えたルフィは歩き出そうとし、その前にふと腕を伸ばしてキリの手を取った。
歩み寄ることなく、自分の方へぐいっと引き寄せる。
力強い様子にたたらを踏む。しかし転ぶことなく彼のところまで近寄った。
一緒に歩いていればわかることもあるだろう。
それなら話さずとも一緒に居ればいい。お宝探しが楽しいのは確かなのだ。
隣に並んで、笑みを向けられる。
手を繋いだままでルフィが足を動かし始めて、自然とキリが連れられる形となって後へ続く。
「ちょっと、引っ張らなくても自分で歩けるって」
「キリ、どっち行きゃいいんだ？　おれはもうわかってねぇぞ」
「だったら先歩かないでよ。ちゃんと案内するから、とりあえず手ぇ離してよ」
「うし。任せた」
慌てたキリが必死について行きながら言って、ようやく手が離された。
また流されてしまった気がするが仕方ない。ルフィの言葉に動揺してしまったのがいけなかった。今回くらいはいいだろうと気軽に考えてしまう自分が居る。
何の因果か、そう簡単にやめさせてはもらえないようで、キリは苦笑して小さく嘆息した。

冒険の夜明け（3）

地図を見ながら、目的の場所を探して、二人は再び森の中を歩いていた。

自信満々に地図が読めないと言い切ったルフィのため、キリが先導して道案内を務めている。生い茂る草をかき分け、固い地面を踏み、川の傍を歩いていた頃より険しい道のりを進む。若干坂道になっているようだった。暑い気候も手伝って汗を掻き始めており、滝によって濡れた服が予想とは違って涼しさを与え、まるで散歩をしているかのような心地である。

見知らぬ土地での冒険に心が落ち着く。今度はキリもその感覚に抵抗しなかった。

ルフィの相手をする以上は細かいことを考える暇などない。短い付き合いでもそれがわかる。一人で物憂げに考えるのは、もう少し時間を置いて、彼と離れた後がいい。

まずは考えるのをやめてルフィの冒険に付き合おう。そんな判断だった。

「あっ、またフルーツがあるぞ。キリ、食うか？」

「冒険に集中するんじゃなかったの」

「腹が減ったら集中できないだろ」

「さっきあれだけ食べたのによく減るね。ボクはまだ大丈夫」

「んじゃおれが食おう。よっと」

右手を伸ばして次々掴み取り、左手に抱える。これ以上は取りこぼすという数を取った頃、収穫をやめたルフィは落としかけた一個を受け止め、それをキリへ投げて寄こした。

多少驚きながらも彼は見事に受け止める。

「ほいっ」

「あー、どうも」

そそくさと食べ始めるルフィを尻目になんとも言えない表情のキリだったが、手に受け取ったフルーツを見つめると食べ始める。しゃりっ、と小気味良い音だ。

甘い果汁が口いっぱいに広がり、甘さと清々しさが同時にやってきて喉の渇きを潤す。
腹は満たされたと思っていたが気分は悪くない。
素直に礼を言って、再びキリが先導して歩き出す。
「それにしても、地図も読めないのによく航海に出ようと思ったね。海を旅するには海図や天候を読めなきゃ話にならない。航海術は持ってないの？」
「いや、まったく。航海士を仲間にすればいいと思ってたんだよ。そういうのはサボが得意だったし、おれはエースもサボもおれの船に乗ると思ってたしよぉ」
「で、結局三人バラバラになってしまったと」
「そうなんだよ。だからそういうのは仲間に任せることにした」
「勝手というのか、効率的というか……じゃあ君の役割ってなんなの」
「そりゃおまえ、船長だよ」
「それは聞いたけど」
「うーん、そうだな。仲間を守るのがおれの役目だ」
少し声色が変わったことに気付き、些細な変化だったが、妙に気になってキリが振り返る。前を向いて歩くルフィはフルーツを食べる手を止め、決意を持った目をしながら、端的に言った。
「サボが死んだ時、思ったんだ。おれが強くなってみんなを守れば、誰も失わずに済む。そのために何年もエースと修行したんだ。おれが仲間を死なせねぇ」
キリの視線が前へ戻り、次いで少しだけ空を眺める。
木々に付いた葉の隙間から覗く澄んだ青。目の中に飛び込んでくるようだった。
「ふぅん。そうか」
たったそれだけの反応。奇妙なほど静かであった。しかしルフィが気にした様子はなく、左手に抱えるフルーツからまた新たな一個を取り、かぶりついて口の端を汚しながら彼へ尋ねる。
佇まいが変わったようにも見えるが歩調は変わらず。歩きながら

の会話である。
「キリは見習いだったんだよな。役割とかあったのか？」
「一通り教えられたよ。見習いだからなんでもさ。基本は雑用だけど、戦闘に参加したし、操船は当然として、コックや船医や航海士の手伝いなんかも」
「だからなんでもできるのか」
「と言っても、やっぱり専門で学んでる人には敵わないけどね。いわゆる器用貧乏ってやつ」
「きようびんぼう？」
「要するに全部中途半端ってこと」
苦笑してキリがそう言うと、すぐにルフィがそんなことはないと返す。
「なんでもできるってすげぇじゃねぇか。おれはなんにもできねぇから尊敬するぞ」
「なんにもってことはないでしょ」
「でも航海術だって持ってねぇし、料理もできねぇ。道もよくわかんねぇからお宝だって見つけられねぇしな。誰かに助けてもらわなきゃ生きていけない自信があるね」
「くくっ、なに、その自信。自慢することじゃないんじゃないかな」
ルフィの言葉にキリが肩を震わせ、やっと純粋な笑顔を見せた。
今までどこか距離があるようにも思えていたが、少しは距離が変わっただろうか。けれどルフィには気になることもあって、まだ彼といっしょに居たいと思っている。
知りたいことがあった。だから今後はどうなるかわからずとも、せめてその時まで。
また一つ熟しきった果実をかじり、甘い果汁に頬を緩ませる。
先に食べ終えたキリが指先をぺろりと舐めていた。
「そんなもんなんだと思うよ。一人で生きるのって難しそうだ」
「キリも仲間といっしょに居たんだろ？」
「うん、まぁね。でももう別れてから長いけど」
「聞いてもいいか」

「何を？」
「なんで海賊やめたんだ？」
答えはすぐに返ってこなかった。概ね予想通りである。
黙り込んだのはほんの数秒。しゃりっ、と心地良い音がよく耳に残る。
わずかに息を吐いた後、キリが笑みをそのままに答えた。
「つまらない話だよ。どこにでもある普通のことだ」
やっぱり、という感想。
キリは何かを隠している。或いは、ただ言いたくないだけなのか。
少なくとも先程の説明では語られていない過去があると見て間違いないようで、幼少期から考えなしで動くことが多いルフィは、その実他人の感情の揺らぎには敏く、嘘をついているだろう笑顔は本能的に理解できた。
寂しげに見えたのはきっと間違いではない。
しかし敢えてそのことは指摘せず、それ以上の追及もしなかった。
「もうそろそろ着くよ。多分この辺りだ」
「お、そうか」
声色が変わったことに気付いてフルーツを食べる手を速め、あっという間に胃袋へ納めてしまう。今度は外見の変化が起こるほどではなく、すべて平らげたルフィは喜々として辺りを見回し始める。一つの行動を終えればすっかり次に興味が移っていて、後腐れも残さず、純真で素直な様子はまさしく子供っぽい部分であった。
周囲の景色に大きな変化はない。が、進む内に前方には大きな岩が見つかった。
全長にしておよそ十メートル。
白い岩肌で明らかに周囲から浮いており、目立つ物体である。
あれが怪しいと狙いを定め、キリが右手を持ち上げて指し示した。
「あれが怪しいかな。調べてみたら何かあるかも」
「んん、いかにもって感じだな」
「と言ってもどう調べるか。見た目はどう見てもただの岩だけど……」

「とりあえず登ってみるか？　おれならすぐ登れるぞ」
どうやって、と問おうとした瞬間に気付いた。彼が悪魔の実の能力者だということは先程間近で見せてもらったばかりだ。
他に方法はないかと思い、キリはさほど考えずに頷く。
「そうだね、そうしよう。だけど何もなかったらいよいよ手掛かりは何もないよ。お宝探しは中断、島から脱出する方法を探す。オーケー？」
「よし、オーケーだ」
「じゃあ行こう。お先にどうぞ、隊長」
巨大な岩の間近にまで到達した時、キリが促したことでルフィが前に立つ。
準備するように右腕をぐるぐる回し、決意が固まったところで勢いよく右腕が伸ばされた。十メートルの大岩にも全く問題なく天辺を掴み、ぐっと力を入れて離さず、今度は地面から足を離して手の方へ体が引き寄せられた。軽やかに飛び上がって見事に着地する。
無事に岩の上へ立ったことを確認し、すぐさまキリの声が上へ飛んだ。
「どうかな。ええと、何か、秘密の扉とかある？」
「んー……あっ。なぁキリ、こっち上がってきてくれよ」
「え？　いいけど、どうやって」
「おれが引き上げるから。ほら」
何かを見つけたらしいのはわかった。ルフィは素早くキリへ向けて腕を伸ばし、すぐさま頭上へ掲げられた右手を掴んで引っ張り上げる。
同じく軽やかに宙を舞って、着地も見事なもの。
驚く素振りもなく岩の上へ立ったキリはルフィが見つけた何かを探そうと視線を動かし、すぐに気付いて眉を動かすと、もっとよく見るため数歩そちらへ近付いた。
「ここ、なんか書いてあるよな。これなんだ？」
「ふむ。これも地図みたいだね。だけどこの紙とは違う……印が一つだ」

懐から取り出した紙を確認しつつ、その場に膝をついて二つを照らし合わせた。
岩を削って作られた、白い傷跡による島の全景。だが印の位置が違っている。四つ記されていた紙の地図とは違って、岩場にあった同じ形の印はたった一つだ。
示された位置はその場とも違う、彼らが最初に漂着したビーチにほど近い。
海に沿った岸壁の辺りだろう。
おおよその見当をつけた後、今度こそ当たりらしいと振り返ってルフィの目を見、頷く。途端に彼は心底嬉しそうに肩を揺らして笑った。
「やっとか。いよいよ見つけられるな」
「まぁ、まだ誰も見つけていなければの話だけどね。宝の地図が一つとは限らないし」
「ないならないでいいよ。とにかく行ってみようぜ。場所わかったんだろ？」
「一応は。最初のビーチに戻って移動すれば、多分辿り着ける」
「よし。絶対見つけてやるぞ」
二人は同時に岩の縁に立って下を見下ろすも、中々の高さ。
キリがルフィを見て肩をすくめた。
「降りるのには苦労しそうだね」
「おれに任せろ。ゴムだから大丈夫だ」
「便利な体してるね。で、どうやって？」
以前と同じく、腰に手が回されてしっかり掴まれ、唐突にルフィが宙へ跳び出した。あっと思って悲鳴を上げかけるが、伸ばされたもう片方の手が岩の天辺を掴み、伸びるゴムの腕が落下の速度を調整しながら降りていく。速度は速いが身の危険を感じるほどではない。
それでも説明がなかったことで驚きは隠せなかった。
想定外の浮力を感じ、驚いたキリは思わずといった様子でルフィに抱き着く形となり、意識せずとも開かれた口からは悲鳴にも似た声がこぼれた。

対してルフィは笑顔のまま。楽しそうな姿である。
「おぉっ……！」
「いやっほ～っ！」
軽やかに降りて無事に着地した。巧みに勢いを殺したおかげで二人とも無傷のまま。
ただ生きた心地はしなかったようで、解放されたキリはほっと胸を撫で下ろす。
「ふぅ。ゴムの体が欲しいと思ったのって、多分初めてだよ」
「うまくいったな」
「なんとかね。でも二度目はもういいかな」
深呼吸を何度か繰り返して呼吸を整える。落ち着くまでさほど時間はかからなかった。
気を持ち直した後、顔を上げたキリはいとも容易く最初のビーチがある方向を見る。しかしルフィにはどちらへ向かえばいいかわかっていないようで、嘘ではないのだとわかりやすい。堂々と道がわからないと言ったのは本心で、彼がどれほど正直な性格なのかよくわかった。
もう驚いたりはしない。彼の人となりは理解しつつある。
歩き出すきっかけはキリが作ることとなった。
「さて、最初のビーチに戻るわけだけど、道はわかる？」
「さっぱりわかんねぇ」
「だと思った。じゃあ案内するからついてきて」
「頼んだ」
接し方にも慣れたようだ。キリが歩き出せばルフィが後に続く。
すでに数時間、こうして二人きりで歩いている。太陽の位置も変わりつつあって、時計がないため正確な時間もわからないが、一日の終わりは着実に近付いてきていることだろう。気付けば匂いが変わろうとしている。歩いてみなければわからない島の匂い。夕暮れの時が近い。
人生の大半が航海と冒険だった。空の色を見たキリは静かに想う。
今回の冒険は以前と何かが違っていた。

訪れた島が違うことは当然として、隣に立つ人。同行する人が違うだけでこうも変わるのか。
良いのか悪いのかわかったものではない。手のかかる人だ。一人にしておくこともできないほど心配で、放っておけばあっさり死んでしまう可能性さえ持っている。運動能力に長け、サバイバルには慣れていそうだから島内に居れば死ぬことはなくとも、きっとこの島を出るには奇跡を待つしかないことだろう。よく見れば手先が器用そうだとは思えない。イカダを作るのも無理そうだ。
本当に面倒で目が離せない人。だけど嫌ではない。
そんな風に思える自分に苦笑してしまった。
さほど大きな島ではないため、ビーチにはすぐ辿り着いた。
地面が土から砂に変わってぎゅっと音を立てて踏みしめる。暑い日差しが強く降り注ぎ、波の音が近くなった。相変わらず漂流してきた船の残骸がそこらに散らばっていて、その一つが立たされ、青い上着を風にたなびかせている。
「しまった。上着干したままだった」
「おぉ、ちゃんと戻ってこれた」
「道くらい覚えられるからね。でもまだ到着じゃないよ」
「そうだった。ここからが本番だな」
海を見つけてしばし足を止めた後、先に歩き出したキリが自分の上着を取って身に着ける。日差しのおかげですっかり乾いていたようだ。
その頃になれば滝の水に濡れた服もずいぶん乾いた。
気分も一新して海を眺めて辺りを見回す。
最初にここで出会った時とは何かが違っているように感じる。些細な物だが島内を歩いた時間は決して無駄ではない。肩の力も前より抜けていた。
「さて、次はどっちだ？」
「この海岸に沿って行けば着くはず。向こうだよ」
並んでビーチを歩き始める。向かう先には海と、岩礁地帯があった。

どこへ向かえばいいのか。教えられずとも自然とわかる気がする。しかしルフィは敢えて問い、キリが答えて、それから歩き始めるのだった。

歩く内にも会話は止まらず。すっかり二人で居ることに慣れた様子である。

「なぁ、キリって泳げるのか？」

「また唐突だね」

「おれは悪魔の実を食っちまったからカナヅチなんだ。その前からカナヅチだったんだけどな。もし溺れたら誰かに助けてもらわねぇと絶対死ぬぞ」

「それは残念。ボクもカナヅチだからもしもの時は助けられない」

「なんだ、泳げねぇのか。キリにもできないことってあるんだな」

「そりゃたくさんあるよ。なんでもできる完璧な人間なんていないもんさ」

「でもやっぱ頼りになりそうだ。道だって覚えられるし」

「それ別に特殊能力じゃないから。結構誰にでもできることだよ」

「そうかぁ？」

もはや軽口を叩くのも違和感はなく。二人の顔には当然のように笑みがあった。

ビーチを横断して、辿り着いたのは海に面した岩礁地帯。海水に触れて尚も立つ岩がそこらにあり、その付近だけは波が強く、船で近付けば船体に穴が開くこと間違いなし。

岩礁を越えた先には、小さな洞窟があるのが見えた。足場はないがどことなく怪しげだ。

そこを目の前に、一度足を止めた二人は顔を見合わせて言い合う。

「あそこ、なんかありそうだぞ」

「ジャンプしていくしかなさそうだ。お互い泳げないんだから、落ちないでよ」

「んん、大丈夫だ。こういうのは得意だぞ」

何度か屈伸をして、準備を終えた後にまずはルフィが跳び出す。砂浜を蹴って近くの岩に乗り、そこからは軽やかな様子で次々岩の間を

跳び回って進んでいく。
同じくキリも続いた。野生児じみたルフィとは動きが違い、軽やかで無駄がない。
どちらも失敗して海に落ちる心配がないことは確かで、いとも容易く洞窟へ近付いて行った。
十を超えるジャンプで岩場を跳んだ後。直線状に洞窟を置く位置で二人は別々の岩の上に立ち、自分の目の前に移動に使える岩がないことを知ると、前へ進む方法を考えるべく動きを止める。
考え、答えを出したのはルフィが先。キリが何かを言う前にすでに手は差し出されていた。
「もう少しだ。ここから飛ぶぞ」
「また伸びるの？」
「その方が早ぇだろ」
差し出された手をキリが握り、ルフィの左手が洞窟へ向かって勢いよく伸ばされた。
内部の岩をしっかり掴んで、慣れた様子で腕を縮める。引っ張られる形となった二人は弾丸の如く小さな洞窟内へ突っ込み、勢いもそのままに滑るようにして地面へ着地した。
やはり痛みを伴う。
ゴム人間のルフィは堪えないが、キリとしてはこの方法をやめて欲しいところだった。
からりと乾いた岩の地面に薄暗い環境。
その場に立って背筋を伸ばすと潮の香りに満たされていると知る。
海に近くとも閉鎖された場所だ。匂いは独特でキリが鼻の辺りへ手を伸ばす。
「すごく濃い匂い。犬が嗅いだら卒倒するかも」
「うわぁ……すげぇ」
「どうかした？」
「ほら、あれ」
先に気付いたルフィが指し示した先、暗がりの中に大きな影がある。

数歩前へ出てその姿がわかった。光の入らない洞窟は入り口とは比べるまでもなく巨大で、その中で静かに佇んでいるのはボロボロになった帆船である。

海には近いが洞窟内に海はない。ひび割れた地面に帆船が置かれ、ずいぶん年季を感じさせる姿で動かなくなっている。一体どうやって入り込んだのか見当もつかなかった。

圧巻の光景に言葉を失くし、ルフィはわくわくして笑顔を浮かべ、キリは呆然と立ち尽くす。

「帆船だ。こんなところになんで」

「すんげぇ。海賊が乗ってたやつかなぁ」

「わからないけど、普通こんな場所にはないよね。どうやって入ったんだろ」

「きっとあそこにお宝があるんだ。調べに行こうぜ」

元気よくルフィが駆け出し、ゴムの体を利用してひらりと甲板へ飛び乗る。キリもすぐに後から続くが、驚きが彼の歩みを遅くさせ、ゴム人間のように伸びることもできないため船体の出っ張りを使ってゆっくりと登っていく。

甲板へ立った時、すでにルフィは改めて船の姿を眺めていた。

薄暗くとも近くに来ればよくわかる。全身がボロボロでまるでゴーストシップ。いつからここに居るのか、とてもではないが航海できる姿ではない。放置されて数十年は経っているだろう。老朽化も進んでいるだけでなく、甲板には元は人間だっただろう白骨が無数に倒れていた。

そこに倒れる人々に話を聞かずとも、全員ここで死んだことはわかる。

死因がなんだったかは調べなければわからないものの、良い死に方はしなかったに違いない。中には骨にまで朽ちたサーベルを埋め込んでいる遺体すらあった。仲間割れか、敵襲か。どちらにしても生前は肉や内臓に深々と刃が刺さっていたはず。想像するだけで痛そうだ。

甲板の中央に立って辺りを見ていたルフィは、ある時唐突にぽつり

と呟く。
「何があったんだろうな」
「さぁ。死人に口無し、骨に話を聞くのは動物としゃべるより難しそうだね」
平然としているキリはしゃがみ込み、転がる内の一つ、頭蓋骨へ触れる。
ひび割れているだけでなく穴まで開いて無残な姿。額が銃弾で穿たれていた。
きっと苦悶の表情で死んだのだろうな。指先で穴を撫でながら思う。
「聞かない方が身のためだよ。ここに死者が居れば、きっと冷静になんて話してくれない。生きてる人は想像して自己完結するしかないね。それが死者との付き合い方だ」
「うん。どんなに頑張ってもおれにはこいつらとは話せねぇ」
「お宝を探そう。生きてる内は、生きることを頑張らないと」
キリの言葉に頷き、気遣いがあるのかルフィは骨を踏まないように船室へ続く扉を目指し始めた。どんな金銀財宝も死者の手の内にあっては無用の長物。頂くことに躊躇いはない。
何しろ、海賊なのだ。略奪は基本なわけでむしろ喜々とした様子すらある。
「どこにあるんだろうなー。やっぱ倉庫とかかな」
古びた扉を無理やり押し開け、彼の姿は船の中へと消えていく。キリは追わない。そっと立ち上がると彼が消えた扉とは違う場所を見た。
骨を避けて歩き、船室へ続く扉の両側にある階段を上って、一段上にある扉を開ける。
やはり薄暗く、光はない。
広い一室だった。おそらく船長室なのだろう。暗闇に目が慣れると部屋の中央に幅広の机が置かれていることに気付き、その向こうには豪勢な装飾の椅子があって、誰かが腰掛けている。
つばが広い帽子をかぶった、骸骨だった。

厚手のコートを着たまま、右手は机の上に投げ出されており、傍にはペンが落ちている。
机の上に残されたのは文字が書かれた羊皮紙だった。
手紙だろうか。そっと持ち上げたキリが文面を読み始める。古くなっているが達筆に書かれた文字はしっかりと読み取れ、おそらく彼にとって最後の言葉を何年か越しに受け取る。
文章にはこの船の最期が描かれていた。
嵐と高波によって船は陸へ投げ出された。海の上へ戻ることはできず、人が近寄らない無人島では誰かの助けもない。船員たちは困惑して次々に案を出したが話し合いは上手くいかずに、ついには反乱まで起こってしまった。同じ釜の飯を食った仲間たちは殺し合い、怒号ばかりが連日響いて、甲板には血の雨が降った。
自分の死を悟っていたのだろう。或いは、どこかに怪我をしていたのかもしれない。
一味の終わりを嘆く船長は最後にこう記している。
ただ無念だ、と。
長く苦楽を共にした船と共に海の上で死にたかった。
なぜ洞窟の中に船があるのかは説明されていないが、キリにとってはすでに原因や理由などどうでもよくなっており、ただ一言、最後の言葉だけが異様なほど頭の中に残っている。
力尽きる寸前、掠れた文字で書かれた最期の言葉。
たかが悪党、されど海賊として誇りを持って生きたに違いない。海の上で死にたかったという言葉は彼に重くのしかかり、思考が止まってしばし見つめたまま動けなくなる。
なぜか彼は悲痛な面持ちとなっていた。
どれほどそうしていたかわからない。
やがてルフィが扉を開けて室内へ入ってきたことにより、重苦しい空気が切り裂かれる。
「おい見ろよキリ！　すげぇぞ、宝がいっぱいあった！」
勢いよく飛び込んできて笑顔を見せるが、彼の佇まいがおかしいことに気付いて笑みが消える。

静かで儚げな、見た事が無い姿。これまでの数時間で見れなかった顔だ。
両脇に抱えた、金貨が詰まった宝箱を取り落とし、その音でようやくキリが顔を上げる。
すぐに笑みが浮かべられた。だがその寸前の顔はしっかりと焼き付いており、明確な変化が気遣いか、或いは隠し事をしていると感じさせ、ルフィの心に楔を残す。
「そう、あったんだ。こんな偶然ってあるのかな。ほんと奇跡的」
紙を机に戻してキリがルフィへ歩み寄る。彼の表情は変わらなかった。
暗い一室の中を見、状況がある程度わかったのだろう。ひどく落ち着いた声で尋ねる。
「あれって船長か？」
「そうみたいだね。色々災難が重なったみたいだ」
「海賊だったのかな」
「さぁ、どうだろう。どっちにしろ後悔したまま死んだんだと思うよ」
二人で船長の亡骸を眺めた後、ふとキリがルフィの足元に置かれた箱を見る。
落下の衝撃で少しこぼれているが無数の金貨が納められていた。床に落ちた一枚を拾い上げ、目の前で眺めたキリはふむと頷く。
「船が古い割に状態がいいね。これなら高値になりそうだ」
「他にもいっぱいあったぞ。おれ一人じゃ運びきれねぇ」
「それじゃ、頂いていこう。死者にはもう使えない」
金貨を指で弾き、ルフィへ渡すとキリが先に部屋を出る。
慌ててルフィも箱を二つ持ち上げ、後へと続いた。
二人はそれから船内へ赴き、数えきれないほどの宝を見つけ、全て外へ運び出したのである。

冒険の夜明け（４）

洞窟内部にある幽霊船に残された金銀財宝は、全て二人の手によって運び出された。

手で運び出すには量が多過ぎたため、船内に残っていた小舟を二つ拝借し、一つに宝を乗せ、一つは二人が乗る用として外へ運び出した。洞窟の中で船を引きずり、岩礁地帯を越えるのには苦労したがビーチに戻れば大漁といった様相で喜ぶばかりである。

小舟を二つ引き連れてビーチへ戻った時、空の色は変わっていた。日が沈むにつれて赤みを増した空は夕暮れに染まっている。夜が来て暗くなる時は近い。今からの出航は危険であろう。夜の航海は昼間よりも困難になることは知っている。

そのため、二人はその島で一日を終えることを決め、野宿の準備に取り掛かっていた。

無人島に漂着して、一日中を冒険に使った。初めこそ文句を言いつつだったが、結局は楽しんで収穫も多い。目まぐるしい一日だったと今になって思う。

ルフィは森の中へ狩りに出かけ、キリはビーチで焚火の準備をしていた。

木の枝を集めて火打石を使い、火を点けた。徐々に薄暗くなりつつある辺りでオレンジ色の炎が映える。静寂の中でパチパチ小さな音が鳴って、彼の顔を照らし出した。表情は暗い。今はこの場に居ないルフィと共にお宝を運び出していた時とは一転して物憂げな顔だ。

何かを考えているのか。一人で焚火の前に座り、時折思い出したように木の枝を放り込む。

彼の仕事はすでに終わってしまった。一度川へ赴いて、島に漂着した物を使って水を汲んだし、ルフィの手を借りずにフルーツも収穫した。それでも時間が余ったらしい。

準備が手早く終わってしまったため、手持ち無沙汰になってしばらくそうしていた。正確な時間にして二時間と三十四分五十二秒。何をするでもなくじっと火を見つめて、自分の思考に埋没していき、周

囲にある些細な音を聞きながら頭の中にはかつての情景が浮かんでいる。
懐かしくも楽しい冒険譚。海賊として生きた自らの証明。
今や遠く、全ては過去だ。
過ぎ去って以来思い出さないようにしていた。思い出せば辛くなる。だからと努めて考えないようにして、それも難しくて時間がかかった。
だがやっと忘れられたかと思っていたのに、思い出そうとすれば一秒とかからず頭の中に浮かんでくる。忘れようとした物など何一つ捨て切れておらず、他人にとってはどうでもいいような小さなことまで覚えているなど、皮肉な物である。
ルフィが傍に居ないと島は驚くほど静かだった。
嫌というほど考え事をする暇があって、彼と行動を共にしていた時がどれほど恵まれていたかわかる。誰も居ない島で一人になるとどうしても孤独を感じ、様々な出来事があったせいだが、暗い思考に陥ることもしばしばある。特に思い出されるのは洞窟内にあった幽霊船の状況だ。
大きな後悔を抱えたままでの最期だっただろう。気持ちはわかる、気がする。それだけにつらつらと考え事が止まらずに表情が浮かないのだ。
小さく溜息をつく。
その時を見計らったかのように森からルフィが飛びだしてきて、あまりにも大きな声に肩がびくつき、見てみれば仕留めた獲物を運んでいた。
「おーいキリっ、見ろこれ！　ワニだぞワニ！」
「おぉ、すごいの捕って来たね」
嬉しそうに駆けてくるルフィを立ち上がって迎えてやり、ずるずると引っ張られてくる獲物を見る。尻尾を持たれて引きずられていたのは二匹の巨大なワニだった。
目を回して気絶しているらしく、ぴくりとも動かない。
武器すら持っていないため素手で仕留めたのだろう。尻尾を離し、

二匹を置いたルフィはひたすら楽しそうに笑っており、彼らを食料として食すことに全く躊躇いはなかったようだ。
海賊として航海した経験を持つキリでさえ、ワニの肉を食べた経験などない。
二人で囲む初めての食卓としては、中々豪快な食事になりそうだと驚きを隠せなかった。
「しっしっし、川で泳いでたんだ。知ってるか？　ワニの肉ってうめぇんだぞ」
「流石に経験ないなぁ。ちょっと怖い気もするけど」
「丸焼きにしようぜ。絶対うめぇから。キリも気に入るぞ」
「そうかなぁ。やったことあるの？」
「ああ。これなら慣れてる」
「じゃあ任せるよ。これは手伝えそうにないや」
「おし、任せろ」
大丈夫だろうと一任すると、ルフィが手慣れた手つきで準備を始める。と言ってもやることはワニの巨体に串代わりの木の枝を通し、火で焼くだけだ。テキパキと素早く火にかけられる。
昼間とはまた違った姿である。どうやら慣れてさえいれば手先が不器用というわけでもないらしい。性格のイメージからてっきり細かい作業は苦手だと思っていたが違ったようだ。
キリは彼の動きを眺め、砂浜に座って胡坐を掻く。
丸焼きにするため木の枝が放られ、火が大きくなった。熱気が強くなって距離があっても熱さが伝わる。けれど逃げることもなくそこに居て、なんとなくルフィの顔を眺める。ずいぶん楽しそうだ。冒険を終えても上機嫌さはそのまま、真似し難い気楽さが見える。
やはり傍に居れば自然と笑顔になる人だった。キリの肩の力も抜けていたらしい。
嫌な思考は消え去って、ようやく落ち着きを取り戻す。
「ありがとう」
「ん？　なんだ？　ワニか？」
「違うよ。今日一日のこと。最後の冒険にふさわしいくらい、楽し

かった」
今は穏やかな笑みを浮かべていた。軽くなった声で気楽に告げられる。
ころころと表情が変わるのはルフィだけではない。キリの表情もよく変わる。
全く同じという様相でもないが、同じ笑みでもルフィの目には感情が違っているように見え、お互い相手に対して似たような感想を持っていたようだ。表現は同じで、わかりやすい人間だ、と。
達観した様子で言うキリに対し、少し不満げなルフィは手を止めずに言った。
「やっぱり最後なのか。もったいねぇなぁ。せっかく海賊やってたのに」
「またその話」
「村に帰るのか？」
「うん、ゆくゆくはね。とりあえず町がある島までは送っていくよ。お世話になったし」
「そうか……」
ぼうっとした顔でルフィが呟く。
寂しがっているのだろう。仲間に勧誘していたのは冗談ではなく本気だったに違いない。
その顔を見れば悪いとは思うものの返答は変わらず。
ワニを焼き始めたルフィも準備を終え、砂浜に座って彼の目を見た。
「なぁ、キリは村に帰って何するんだ？」
「元は漁師の子供だからね。漁師でもしようかと思ってた」
「父ちゃんの跡継ぐのか？」
「いや、ボクが村を出た時には、両親が亡くなった後だったから。跡継ぎって感じではないかな。まぁ最悪、他の仕事でも良かったし」
「海賊は？」
「それはやめた」
「なーんだ」

つまらなそうに唇を尖らせたルフィだが、尚も質問を続ける。
「グランドラインにも行ったんだろ？」
「うん。何年か航海してたよ」
「どんな冒険してたんだ？　聞かせてくれよ」
「それは自分で行ってみて確認してみた方がいいんじゃないかな。これから向かうんでしょ」
「そうなんだけどさ。このままキリと別れちまうんだったら、どんな冒険したか知るのは今しかないだろ。せっかくだから教えてくれ」
「まぁ、そりゃ確かに」
「一つでいいからさ、どんなことがあったんだ？」
尋ねられてキリも頷き、納得した様子。
興味津々といった顔のルフィに逆らえず、思案しながら話し始める。
「そうだなぁ……それじゃあ――」
パッと笑顔が咲くようで、キリが前のめりの姿勢になる。
「空島、って聞いたことある？」
「知らねぇ。なんだそれ？」
「その名の通りさ。空の上に島が浮いていて、独自に文化を築いているんだ」
「空の上に？」
「そう。白い雲の海が広がって、陸地も雲で出来てる。ソファやベッドも雲で作られてて、生態系も独特の物になっててさ。この青海とも違ってすごくきれいな場所なんだ」
「へぇぇ」
「例えば――」
珍しいと感じるが、キリは喜々として語り出し、ルフィも楽しそうに聞いていた。
語られる話は信じ難いような情景ばかりで、紡がれる言葉は興味深い物ばかり。
想像するだけで興奮した。
次第に二人の声は大きくなり、笑い声も辺りへ広がる。

時間が経ち、食事を始める頃になっても会話は止まらずに、食事が終わった後でも、日が落ち切った後でも二人の楽しげな声は無人島の中で響いていた。

＊

辺りはすっかり暗くなり、夜の帳が下りた。

食事を終えて以降、きれいさっぱり食されたワニの骨がビーチに転がっており、近くには焚火の名残がある。火は消えて、光となって辺りを照らすのは空に浮かぶ月だけであった。

二人の少年は大の字になって寝転び、ただ静かに星空を眺めている。

食事時の喧騒とは打って変わった静かな風景。しばらくの間、二人の間に会話はなかった。ひとしきりしゃべって満足したのか、何か思うところがあったのかは本人のみが知るところだが、口を開くことはなく、少なくとも以前はあったはずの笑みは鳴りを潜めている。どちらも真剣に見える眼差しで、なんとなくではあるものの同じ方向を見ているのはわかっていた。

空気は決して悪いものではない。相手が眠っていないことは知っていて、不思議なことに会話が途切れても息苦しさは感じなかった。

それでもある時、ルフィがぽつりと呟く。

「キリは、やっぱり海賊が好きなんだな」

唐突だと感じる言葉である。

わずかに顔を動かして彼を見たキリは、心底不思議そうに眉をひそめた。

「なんで？」

「さっき話してた時、すげぇ楽しそうだった。好きじゃなきゃあんな顔できないだろ」

「うん……そうだね。きっと好きなままなんだと思う」

「なのに海賊やめるのか？」

「続ける理由がなくなったんだ。だからもういいかなって」

「やめた理由聞いても答えなかったよな。なんか関係あんのか？」
「まぁ、そうだね。考えてみれば隠すことでもないから、今聞かれたら答えるよ」
キリの顔が再び空を見上げた。ルフィの問いは尚も続く。
「仲間はどうしてるんだ？」
「死んだよ。一人残らず」
端的に告げられた言葉は穏やかで、しかし驚愕するものだった。
ルフィがキリの横顔を見るも、彼の顔には動揺のない微笑みがある。
「グランドラインを航海中、同業者とやりあってね。だけど相手の方が何倍も強くて、ボクらじゃとても太刀打ちできなかった」
「負けたのか？」
「うん、あっさりと。見る見るうちに仲間が殺されていって、一味全員、一夜の内に全滅した。最後は船ごと海の中に沈んでいったよ」
「でもキリは生きてるじゃねぇか。仲間なのに」
「戦ってる最中に、ボクだけ逃がされたんだ。一味の中じゃ一番年下だったし、仲間になった時は子供だったからね。そういう情があったんだと思う。無理やり小舟に乗せられて海に放り出されて、それっきり。嵐の日だった。ボクも波に呑まれて、仲間たちも海の中に消えて行った」
なんでもないことのように言っているが、それなりの感情はあるのだろう。無理に笑っているように見えて、見ている方がひどく心が痛んだ。
ルフィもまた空を見上げ、何も表情を浮かべずに彼の声に耳を傾ける。
「あの時のことは目に焼き付いてるんだ。敵船の旗も船が沈んでいく姿もよく覚えてる。仲間は、きっと善意でやってくれたんだろうけどさ。自分だけ生き残っても、全然喜べなくて」
自嘲するような静かな声だったが、その一瞬、確かに表情は変わっていて。
感情が変わって強く告げられる。

「いっしょに死にたかった」
それはきっと初めて口にする本心だった。
文句を言おうにも伝えたい相手はすでにこの世におらず、誰にも言えずに心の中へ深く突き刺さっていた楔。吐露したところで誰も戻ってきたりはしない。
今日一日を共にして見た事がない彼がそこに居て、空気が重くなったように感じる。
キリが目を閉じ、ふっと笑みを見せた。
「海賊やってる以上はいつでも死ぬ覚悟はしてたし、別に今更相手を恨んだりもしない。ただ、仲間が死んで、もう海賊やる理由がなくなった。終わりでいいんだ。後悔だってない。後はこのまま村に帰って静かに暮らすよ。お宝も手に入れたし、山分けにしたってかなり手元に残る。新しく何かを始めるには十分でしょ」
「ほんとにそれでいいのか？」
「もちろん。もう納得してることだ」
「ん～……おれは納得できねぇ」
何かが納得し難いとルフィが呻く。
しばし沈黙が生まれ、言葉にするのに多少の時間はかかったが、なんとか気持ちを整理することはできたようだ。厳しい表情から一転、いつかのような楽しげな笑みが浮かぶ。
突然立ち上がり、口の端をにっと上げて、寝転ぶキリを見下ろしてルフィが言った。
「キリ、おれの仲間になれ！」
予想だにしていなかった発言である。彼の勧誘を断り続けた理由を話していたはずが、まさかそんなことを言われるとは。あんぐりと口を開けてキリが言葉を失う。
どんな考えを持ってそんな答えになったのだろう。興味がない訳ではない。
体を起こし、その場に座ったキリは溜息をつきながら返答する。
「あのさ、話聞いてた？　ボクは海賊にならないって言ったつもりなんだけど」

「おう、わかったぞ。おれだってそこまでバカじゃねぇ」
「じゃあなんでそんな答えになるの」
「おれが納得できなかったからだ。やめるとか言うなよ、おまえだって海賊好きなのによぉ」
「……ハァ」
思わず頭を抱えてさっきより深い溜息をつく。
話し合いで分かり合うのは難しい相手だ。おそらく感情と勢いで話している部分が多いに違いない。こういうタイプは中々自分の意見を曲げないのだと知っている。
長くなりそうだと思いつつ、苦笑する彼は諭すように言葉を選んだ。
「好きだからってだけじゃ続けられないことだってあるよ。今から海賊になったって――」
「海賊やる理由、ないんだろ？　だったら作りゃいいだけじゃねぇか」
「作る？」
「おれは海賊王になるのが夢だ。手伝ってくれよ。おまえがおれを海賊王にしてくれ」
「はぁ？」
首をかしげて間抜けな声が出た。こんなに驚いたのはいつぶりだろうか。驚きつつも頭のどこかに残った冷静な思考がそう考えている。
ずいぶんと突飛な考え方だ。何を言われてもおかしくはないと思っていたがそれは流石に受け止めきれない。自分勝手で、自由で、予想の斜め上を行く変わった提案だった。だがルフィは自信満々に腰に手を当て、胸を張り、威風堂々といった立ち姿でキリの目を覗き込む。
邪気のない、黒々としながら輝くような目。暗闇の中でもよくわかった。
月の光を背負い、にかっと笑う彼の姿は、不思議と鮮明にキリの頭の中へ焼き付いた。

「おれは海賊王になるけど、一人じゃ無理だ。地図も読めねぇし道にだって迷う。だからさ、おれにできねぇことはキリがやってくれよ。代わりにおれは、これからおれたちの仲間になるやつを絶対死なせねぇ。何があっても守ってやる」
堂々と言いのけられるのは自信がある故か。はたまた根拠のない虚勢か。
とにもかくにもキリの中にするりと入り込んだのは事実だ。
「おれはおまえに逃げろなんて言わねぇぞ。死ぬなって言って、戦えって言う。そんでキリに勝てない奴がいたら、おれがぶっ飛ばす。そしたら誰も死なずにまた航海が続けられるだろ」
「そりゃ、まぁ、そうだろうけど……」
「これから先何があっても、海賊王になるまでおれは死なねぇって約束できる。で、キリはおれを死なせるな。二人でいっしょに海賊王になろう」
大した胆力だと思う。どこまでも傲慢でわがままな頼みだった。
キリが語った話を理解しているかどうかすら不明瞭。ただ妙に自信満々で迷いがないことは確かである。だからこそ海賊らしい、といったところだろうか。
気分は悪くなかった。
そうでなければ海賊などふさわしくないとすら思っている。他人を気遣っているようではグランドラインでの航海は不可能、海賊王など夢のまた夢。そういう意味では好意的な態度だった。
「ボクが海賊になる理由が、君を海賊王にするため？」
「ししし、ああ」
確認しても答えは同じ。
気分で言っているのではない。本気でそう決めたようだ。
断ることだって可能だった。考える時間は与えられていて、命令するようで彼の意思を待つ態度。選択することは許されている。
それなのに心中は驚くほど静かだった。
彼も海賊の端くれだからか。人の話も過去も顧みない自由気ままな言葉を向けられたキリは、不思議と笑みが溢れてくるのを自覚して

いた。ルフィの言葉や態度にわずかな身震いを感じてすらいる。まるで初めて海賊船に乗り込んだ時のように。
様々な想いや情景が脳裏を駆け巡る。
かつて海賊として航海した頃、大きな悲しみを抱いた一味の最期、一人で広大な海を旅したことや、今日の出来事まで。洞窟内に取り残された幽霊船のことが思い出される。陸の上で死に絶えた海賊たちはひどく後悔し、船長は手紙に無念の言葉をしたためた。
海の上で死にたかった。その言葉に共感したのは嘘ではない。
やめようと決め、目を逸らし続けても、本心は納得している訳ではなかった。
離れたはずの海賊家業に大きな後悔を残しており、寂しさは増大されていて、それに気付かされた今となっては彼に逆らうことなど不可能だ。もうこれ以上無視することはできない。
諦めたように溜息をついて、笑顔でルフィの顔を見上げる。
「ハァ、ほんとしつこい人だ。これじゃボクがうんって言うまで終わらないでしょ」
「んなことねぇよ。決めるのはキリだぞ」
「はは、どうだか」
すっと憑き物が取れたかのような表情に変わる。キリは自然と笑っていた。
静かに立ち上がって彼に向き合い、目を合わせて、ひどく落ち着いた声で告げる。
「負けたよ。そこまで言われたら試してみたくなった」
「おっ、それじゃあ――」
「約束する。ボクが君を、海賊の王にする」
ようやく、望んでいた答えが得られた。
ルフィは心底嬉しそうに笑い、あまりにもわかりやすいその表情にキリが肩をすくめる。
どちらからともなく手を握り合った。しかし最初に差し伸べたのはルフィだとキリは思う。
彼に誘われなければきっと後悔したままだったはず。言うなれば

チャンスが与えられたということ。何より、それだけ自信に満ちた声で言われた後では、彼の行く末を見守りたいと思った。
かつては、ただ憧れから海賊になった。それだけに仲間を失い、失意のどん底に落ちた後では続ける理由もないと決めつけていた。しかし今度は違う。明確な理由を定めて、目的を見続ける限り前のようにはならないに違いない。
決意を新たに旅立つには良い機会だ。
海賊らしいが故に厄介な相棒と、心躍る冒険。そして後悔しない生き方を模索した結果である。
手を離し、月明りに照らされる穏やかな波を見たキリは静かに問う。
「ねぇ。さっき、自由に生きるって言ってたよね」
「ああ、言ったぞ。エースとの約束だ」
「ボクにもできるかな」
「そりゃできるさ。おれもおまえも海賊なんだからな」
「あはは、そうだね」
再び二人の視線が合わさり、わずかな光の下でも鮮明に表情が見えた。
「これからよろしく、ルフィ」
「しっしっし。やっとおれの名前呼んだな」
輝くような笑顔で、期待と好奇心に溢れた、そんな顔だった。

冒険の夜明け（5）

夜が明けた。
白みゆく空は海の向こうから現れる太陽によるもので、徐々に世界が明るさを取り戻していく。
数時間の眠りを経て、思考は冴えている。気分もすっかり晴れやかだ。
遠い水平線から太陽が昇り、空を白く染め上げる朝焼けの中。冷めやらぬ興奮からか、早くに起き出した二人の少年が出航のための準備を始めていた。
昨日の朝とは、或いは島に漂着した瞬間とは景色の見え方が違う。
確実に心の持ちようは変わっていて、それが理由かもしれない。
今日の朝日を浴びれば昨日よりも気分が良かった。
風は緩やかで波は穏やか。出航には絶好の日和だ。
今日からは新たな生活が始まる。一度はやめたはずの海賊人生。我慢し続けていた昨日とは一転して嬉しくなっており、気付けばくすりと笑っていた。
「ルフィ。朝焼けだ」
「おぉ～、きれいだなぁ」
これから向かうべき海原に太陽。白い光が水面を照らし、キラキラ光ってひどく幻想的な光景が生まれる。これから自分たちはあちらへ向かうのだ。
ルフィは感心しきりで声を洩らし、キリは漂着していた樽を小舟の上へ乗せた。
出航準備とはいえ、大した物は持てない。なにせ店もない無人島だ。
島の奥地で汲んだ水を樽に、果物をまた別の樽に入れて、あとはもう乗せるものなどない。せいぜいが辺りに漂着していた木材で作ったオールくらいのものだろう。
二隻の小舟はすでに手一杯で、特に一隻は幽霊船から持ち出したお宝が山ほど乗っている。

実質的に二人が乗れるのは一隻だけ。かなり狭く感じるだろうが二人旅とはこういうものだと納得している。何より旅立ちへの好奇心が不満など感じさせない。

二隻の船ははぐれないよう、島内で見つけた丈夫な蔓で縛って連結させている。あまりにも頼りなく、みすぼらしい姿、海へ出るには大きな不安が残る状態だった。海賊と名乗るにはあまりに頼りない。町へ辿りつけばきっと笑われてしまうだろう。

それでも胸を躍らせる二人の決意は固く、これ以上の準備は行わない。新たな一日を迎えた今、ついに海へ出る瞬間が来ていた。

「新しい船出には最高の景色じゃないかな。船はボロボロで、ちょっとお粗末だけどね」

「いいじゃねぇか。また新しい船手に入れよう」

「これだけお宝があればそれなりの物が手に入ると思うよ。どういうのがいいかな」

「でっかい船がいいな、海賊船っぽいやつ」

「いいね。でもそのためにはまず町へ行かないと」

「この船沈まないといいけどな」

「やなこと言わないでよ。縁起でもない」

「しっしっし」

簡単ではあるものの準備が整い、小舟を挟んで二人が立つ。

何気なく海を眺めながら少しの時間が生まれた。

胸の中に広がるのは希望と期待と冒険心。まだ見ぬ海へ出航するため心が躍っていた。

どちらも楽しげな笑顔を浮かべてとても幸福そうである。

「んん、まずは仲間集めだ。十人は欲しいな」

「ご希望の人材は？」

「コックだろ、航海士だろ。あとやっぱり音楽家だな。まず音楽家探そう」

「普通だとコックや航海士が先じゃないかな。それに船医も必要になるだろうし、船が欲しいなら船大工を仲間にするのもいいと思うけど。なんで音楽家？」

「おいキリ、おまえ海賊やってたんだろ。だったらわかるじゃねぇか。いいか？　海賊は歌うんだ。歌う時に音楽家がいなかったらだめだろ」
「うーん、そういうもんかなぁ」
「そういうもんなんだ」
ルフィは何やら細かなこだわりを見せるものの、キリは笑って受け流す。
たった一日、しかし濃密な一日を過ごした。すでに彼の人となりはある程度理解しているつもりだ。後は航海を共にする内に理解を深めるとしても、ずいぶん変わった人であるとわかっていて、少なくとも今はそれだけわかっていればいい。
彼との航海は大変そうだ。一方でだからこそ楽しそうだとも思う。大変だからこそ楽しい。言われてみればその通りかもしれない。見飽きた風景ばかりの航海なんて楽しくないと同意するわけで、そう思えば苦難は望むところだった。
夢は海賊王。
あまりにも遠すぎる野望だがその旅路のなんと楽しそうなことか。すっかり彼に毒され、かつての自分を取り戻したキリは上機嫌に彼へ声をかけた。
「ま、なんにしてもルフィが気に入った相手がいいんでしょ。ゆっくり探してこうよ」
「うん、まぁそうだな。キリはやっぱり副船長かな」
「任せるよ。どうせ何があってもついていくさ」
「よし。じゃあそろそろ行くか」
「いつでもどうぞ、船長。号令があれば今すぐにでも」
手で小舟を押し、徐々に波打ち際へ進んでいく。いよいよというところになれば足首まで海水に濡れ、足で小舟を蹴るように押し進めた。
先に彼らが乗る小舟が海に浮かぶ。それを見たルフィが楽しげに笑い、まず自分がぴょんとへ飛び乗って、それから空まで届く声で調子よく号令を下す。

「よぉし、出航だァ！　行くぞキリィ！」
「あいあいさー」
最後にぐっと足で押し、船が完全に浮かんでからキリも飛び乗る。
その後はオールで水の下にある砂を押し、お宝を積んだもう一隻は蔓で引っ張られ、波の力に助けられながら彼らの船はいよいよ海へ出たのである。
やけにあっさりした船出だったが、確かに最初の一歩は踏み出し、新たな旅路が始まった。荷物は少なく、人数は二人。新たに生まれた海賊団のまず最初の航海。
古びた小舟の上、無人島を脱出した二人は朝日に向かう形で漕ぎだした。

東の海編
また遭難

それはある日の昼時のこと。
彼女が散歩に出たのはただの偶然であった。朝の日課である剣の修行を終え、汗を流し、何気なく町の近くにある砂浜へ赴いたのである。
そこで見つけたのが、うつ伏せに並んで倒れる二人組だった。
海から流れ着いたのだろう。全身が水に濡れていて、気を失っているらしい。
状況から見ればどこかから流れ着いて来たようだ。近くに人が住む町がないことは知っている。ということは彼らは遠い場所から来たのだろうか。
少女は倒れた少年たちの顔を覗き込む。
あどけなさを残す顔。見覚えはない。
やはり知り合いではなく、町の住人でもなさそうだった。
曲げていた背筋を伸ばした彼女は二人の顔を見、次いで辺りを見回す。乗っていた船が壊れたのか、少量の木材が浜辺に打ち上げられていた。その他には何も見当たらない、と思ったその時、波打ち際で水に遊ばれている麦わら帽子を発見する。
彼らの持ち物だろう。そこを目指して歩き出す。
波で靴が濡れないよう気をつけて、帽子を拾った。
軽く帽子を振って水を飛ばし、太陽に透かして見てみる。中々古い物だ。赤いリボンが巻かれていて、何度も修繕したのだろう、跡が残っている。何か不思議な魅力を感じる一品だった。
再び二人を振り返る。
胸が動いていることから生きていることはわかった。とりあえず死んではいないらしい。それだけわかってほっとした。まだ助けることはできそうだ。
二人に近付いて膝を折り、しゃがんで確認する。穏やかな寝顔であ

る。
きっと死にかけただろうにあまりにも落ち着いた顔に見えて、少女は苦笑した。
得体の知れない相手だが助けようと思う。見た目からは海賊には見えない。かといって若すぎるため商人にも見えず、冒険家といったところだろうか。とにかく悪い人間といった風貌ではない。
しかし倒れているのは二人。彼女一人で運べるほど軽くはないだろう。
どうやって助けよう。
そんなことを考えて顎に手を当て、少女は二人を見下ろしながら考え始めた。

＊

「んがっ」
ひょんなことから唐突に目を覚ました時、ルフィは自分が家の中で眠っていることに気付いた。真っ先に視界へ飛び込んだのは木目の天井。見覚えなどない。
ほんの少し前まで海に居たはず。寝ぼけた頭でもそれがわかり、普通なら天井が見えるはずもないことを知っていた。見えるべきは空である。
不思議に思いつつ意識は覚醒し切れていないようで、眠たげな目をした彼は部屋の中を見回す。
上体を起こしてベッドの上で胡坐を掻き、ふと右手で頭に触れた時だ。
自らの髪に触れる。それ自体は大して不思議なことではないだろう。しかしそこで、自身の宝と称する麦わら帽子がないことに気付いた。ぱっちり目が開き、何度頭を撫でても、そこに帽子はなかった。慌てて部屋の中を見回しても見つからない。
どうやら失くしてしまったようだ。そう気付いた瞬間、意識が変わる。

呆然と手を下ろしたルフィは動きを止める。
目を見開いたまま呆けること数秒。
状況を理解したルフィは突然叫び出して勢いよく跳び上がった。
「あっ!? 帽子がねぇっ!?」
命より大事な宝が見つからず、ルフィは慌てて動き出して探し始めた。
見つからなければ一大事である。眠気は吹き飛んで目が冴え、ベッドの下を覗き込み、室内にあるタンスや棚を次々開けて中身を散らばらせ、部屋の様相は一気に変わってしまった。
それでも見つからない。ルフィの焦りは深まるばかり。尚も慌てる彼は扉を破壊しかねん勢いで開いて飛び出し、すぐに見つけた階段を急いで下り始める。そうして階段を下り終えてすぐの空間へ飛び込んだ時、建物中に響くほどの大声を出していた。
「帽子〜っ!」
強く床を踏みしめて立ち、その場が酒場らしいことがわかった。
席の一つに座る人物を見つめ、頭に彼の帽子をかぶっている姿が見つかる。
途端にルフィの顔が笑みで輝き出す。麦わら帽子をかぶっているのは呆けた様子のキリだった。
仲間が持っていたことに安堵し、盗まれた訳ではないのだと知ると一気に安心してしまったようで、佇まいを直したルフィは胸を押さえながらふぅと深く息を吐いた。
「あぁっ、おれの帽子! なんだ、キリがかぶってたのかよ。ふぅ〜焦ったぁ。おれはてっきり誰かに盗まれたのかと」
「おはようルフィ。いきなりでなんだけど帽子だけ盗むバカはいないと思うよ」
酒場の一席に腰を落ち着けている彼はどうやら食事をしていたらしく、目の前にはきれいに料理を平らげた皿が置かれている。手には水が入ったコップを持っていて一息ついたところだろう。
帽子が無事ならと落ち着いたルフィは途端にそれへ興味を持ち、腹を鳴らし始める。

大食漢で食に異様なほど興味を持つため、空腹を感じれば我慢するなど不可能。そそくさとキリの傍まで歩み寄り、肩口から皿を覗き込んで犬のように舌を伸ばした。
「キリ飯食ってたのか？　なんだよずりぃなぁ、おれの分は？」
「あるらしいから落ち着いて。行儀悪いよ」
「あっ、ばあちゃんが作ってんのか？　ばあちゃん、おれ大盛りで」
「とりあえず座りなって。ほら、こっち」
「しっしっし。腹減ったなぁ」
カウンターの向こうで働く老婆へ声をかけつつ、ルフィがキリの隣へ座った。
それからすぐキリの手によってルフィの頭に麦わら帽子をかぶせられる。
やはり帽子があった方が安心するようだ。自分の手で位置を直し、すでに気分は持ち直しており、楽しげな笑みがキリへ向けられた。
「ありがとな。失くしちまったかと思ってた」
「お礼言うのはボクじゃなくて」
「ん？　キリが見つけてくれたんじゃねぇのか？」
「ボクは受け取っただけ。見つけてくれたのは彼女だよ」
小首をかしげるルフィに、キリが促して教えてやれば、彼の前に座る少女がくすくす笑う。
美しい金髪をポニーテールにした、細身の可憐な少女。半袖のTシャツとチェック柄の半ズボンという軽装で、彼女が座る席の傍らには剣が置かれていた。
無邪気な笑顔で二人の顔を見てわずかに肩を揺らしている。
歳も二人とそう変わらない頃だろう、妙に親近感を感じる仕草だ。
帽子のことで慌てていたせいか、気付いたのは今頃である。
呆けた様子で瞬きを繰り返すルフィにキリが付け加えて教える。
「ついでにボクらを助けてくれた」
「そうなのか。ありがとう、助かった」
「ううん、気にしないで。二人とも怪我も病気もなさそうでよかった」

少女は興味津々といった目で二人を見ており、不思議と非常に楽しそうであった。
「私はシルク。キリから話は聞いたよ。二人とも海賊なんだってね」
「と言っても駆け出しで船もなければ二人しかいないけどね」
「いいじゃねぇか。まだ始まったばっかりだからよ。おれはルフィ、海賊王になる男だ」
「海賊王？　それってあの？」
「知ってんのか」
前のめりになるルフィを見て、シルクもまた同様に身を乗り出した。
どちらも好奇心が旺盛なようで、目を輝かせる姿は子供のように見える。
出会って数秒、もう仲良くなったのか。苦笑するキリは呆れて溜息をついた。やはりこのルフィという男、不思議な魅力を持っていて他人と仲良くするのが得意なようだ。
「グランドラインのどこかにある〝ひとつなぎの大秘宝〟を見つけた奴が海賊王だ。おれはいつかそいつを見つけて、この海の王者になるぞ」
「でもワンピースはただの噂だって聞いたことあるよ。本当に存在するの？」
「知らねぇ。でもそれを探しに冒険するんじゃねぇか。あってもなくてもどっちでもいいよ」
「じゃあどうして海賊になったの？」
「そりゃ海賊王になるためだよ」
「そうだよね。それなのにワンピースがあってもなくてもいいの？」
「いいんだ」
「なんか、話がわからなくなってきた……」
まるで押し問答のようである。
ルフィの言葉に眉根を寄せ、困惑したシルクが腕を組んで悩み始め

る。
そんな二人を見るキリは机に頬杖をつき、ひどくやさしい笑みで見守っていた。
納得できないらしいシルクがルフィへさらに問いかけようとした時、料理を作っていたシルクの祖母が皿を運んでくる。腹を空かせたと言っていたルフィの前に大盛りのそれを置き、喜ぶ彼の声を聞いてにこにこ笑っていた。
どうやら理由はそれだけでないらしく、妙に楽しげなシルクを見て和やかな空気を醸し出す。
「ずいぶん機嫌が良さそうだねぇシルク。海賊と話せて楽しいかい？」
「やめてよおばあちゃん。別にそういうんじゃないよ」
「んまほーっ！」
「おかわりもあるからね。たっぷり食べておくれよ。最近は客も少なくて退屈だったんだ」
そそくさとルフィが食事を始める。フォークを使ってはいるが非常に豪快な様子で見る見るうちにその量を減らしていく。キリに用意された物より多かったはずだが苦心する素振りもなかった。
気持ちのいい食べっぷりを目の端に見ながら、キリは笑顔を見せる祖母を見た。
「景気、良くないんですか」
「ああ。近頃はこの辺りを根城にする海賊が居るらしくてねぇ。怖がって誰も来なくなったよ。うちは宿も兼任してるから、外から人が来ればお客さんで溢れかえったもんだけどね」
「大丈夫よおばあちゃん。海賊が来たって私が追い返すから。また人が来るようになるよ」
シルクが剣を手に持って言った。
鞘からわずかに刀身を覗かせたサーベルはきれいに磨かれて汚れの一片もない。おそらく人を切った経験はないはずだ。刃に血の滲みを見出せなかったキリはそう判断する。
腕前のほどは知れないが、握りは悪くないと思う。ただ実戦経験は

なさそうだった。
それなりに航海の経験があるせいで強いかそうでないかはある程度見た目で判断できる。キリの目に映る彼女は、あくまでも村の中で修練を積んだ一般人といった程度。武器の扱い方を覚えただけでは戦闘に慣れた海賊に勝つのは難しい。これも経験から知ったことだ。
やる気を見せる彼女の表情とは裏腹に、少しばかり目は冷静さを取り戻す。
じっと見つめてくるキリに気付いて何を想ったか、恥ずかしげに笑ったシルクが言った。
「私もこの町で育った一員だから、私がみんなを守るんだ。この町は私の宝物。海賊になんて絶対傷つけさせないよ」
「私はやめて欲しいんだけどね。年頃の女の子が剣なんて持って、怪我したらどうするんだい」
「いいの。町を守るためなら怪我だって怖くない」
「こんな調子でね。ばあちゃんは心配でひやひやしっぱなしだよ」
「あはは」
キリは苦笑し、しかしすぐに祖母へ疑念をぶつける。
「だけど、海賊が横行してるなら海軍へ連絡すればいいんじゃないですか？」
「でもこの町が襲われた訳でもないし、誰かが海賊を見た訳でもないしねぇ」
「何かあってからじゃ遅いですよ。海賊なんてのは大概容赦しないし、略奪を始めたら欠片も残さず全部持ってく。噂があるなら調査をお願いするとか、何かしら対処した方がいいと思います」
「そうだねぇ……町長に言ってみるよ。ありがとうねぇ」
「二人もそうなの？」
剣を元の位置に置いたシルクがキリを見つめて尋ねる。
彼らも海賊だと名乗ったばかり。この町を略奪し、容赦なく奪い尽くすのかと聞いているのだろう。正面切って海賊に尋ねるというのも面白く、頬杖をやめたキリが背筋を伸ばして答える。
たった二人。略奪するには手が足りないと。

「あいにくこっちは二人だし、何より船がない。略奪したって持ち出せないさ」
「ふふ、そっか。それじゃあ安心だね」
「でも今度来た時は同じかわからない。船を手に入れて仲間を集めて、今度はこの町の全てを奪い尽くすかもね」
「ふふん、望むところよ。その時は私が返り討ちにしてあげるんだから」
冗談混じりに言っていれば、早くもルフィが食事を終えたらしい。空になった皿を持ち上げ、祖母へ元気よく声をかけた。
「ばあちゃん、おかわり！　このメシうんめぇなぁ」
「ありがとね。シルクもこれくらいは作れるようになってくれればいいんだけど」
「ひ、人にはそれぞれ得意な物と不得意な物があるの。私は剣の修行で忙しいし……」
「本当に心配だねぇ。これで嫁の貰い手があるのやら」
「もう、すぐそんな話になるんだから。興味ないから結婚しないだけなの。その気になったらちゃんとできるから安心して」
「できない子は大抵そう言うけどねぇ」
「ぐっ……」
カウンターを回り込んでキッチンへ入る背にシルクの厳しい視線が突き刺さる。しかし日常茶飯事なのか、さほど大した反応もなく祖母は料理へ取り掛かる。ルフィのおかわりを用意するためだ。多めに作ったつもりがぺろりと平らげられてしまい、怒るどころか嬉しそうな顔をしている。
次の料理が来るまで手持無沙汰になってしまい、ルフィがキリを見た。
「そういやなんでおれたちここに居るんだっけ？」
「今更それか……普通食べ始める前に気にすると思うけど。あのボロ船が沈んだんだよ。やっぱりあれがまずかったね、欲張って宝を全部乗せたのが悪かった。重さに耐え切れなくてあっという間だったから」

「なるほど、そうだった。それでおれたち二人ともカナヅチだから溺れたのか」
「島に流れ着いたのは奇跡だったよ。悪運が強くてよかった」
「いやぁよかったよかった。まぁこういうこともあるさ」
「しかしどうなんだろうね。この短い期間で二回も遭難する海賊って」
「生きてたんだからいいだろ」
「良くない。やっぱり頑丈な船を手に入れないと、ほんとその内死んじゃうね。二人ともカナヅチじゃ一度海に落ちたら誰も助けてくれないし」
「近くに誰か居りゃ助けてくれるんじゃねぇかな」
「そこまで楽観的になれるルフィはすごいと思う」
気軽な様子でやり取りする二人は仲も良さげで、思わずシルクは笑わずにはいられなかった。
やはり彼らが海賊だとは思えない。想像していた姿とは違い過ぎる。野蛮で無情な無法者。彼らがそんな人間だとはとてもではないが思えなかった。
海賊とは何だろうか。彼らに出会ったことで改めて考える。
善人か悪人か。その存在の影響力を考えればきっと悪者なのだろうが、結局はその人がどんな人間なのかで決まるのかもしれない。少なくとも彼らが海賊になって誰かが泣かされる気がしない。
ひょっとしたら彼らをよく知らないだけで、勝手な想像かもしれないが、笑顔で語り合う姿を目にして、どれだけじっと見ようと怖くはなかった。
二人は相変わらず軽快なやり取りを続けていた。
シルクはテーブルに頬杖をつき、その様子を微笑ましく見守る。
「せっかくのお宝は沈んだし、どうやって船を調達しよう。下手したらこの町から出られない。今のところお金もほとんど残ってないし」
「一文無しなのか？　肉は？」
「こういうこともあるかと思って金貨は持ってたけど、この程度な

らすぐなくなるよ。しばらく肉は禁止の方がいいんじゃない？」
「え～、それはだめだ。あのなキリ、おれは肉を食わねぇと力が出ねぇんだ」
「それは聞いたよ。でも状況が状況だ」
「よし、じゃあ船長命令だ。おれは肉を食いたいぞ」
「今から食べられるよ」
「そうじゃなくて船の上のメシのことを言ってんだよ。肉がねぇとおれは嫌だからな」
「あのさシルク、この町に船大工とかいるかな」
「おいキリ、聞いてんのか。おれは大事な話をしてんだぞ、今」
ルフィがキリの肩をぱんぱん叩き始めるが一向に気にせず。そんな素振りすらおかしい。
あくまで主張を変えようとしなかったルフィは、祖母が新たな料理を持ってきたことで瞬時に大人しくなってしまい、嬉しそうに食事を始める。これによってキリは解放された。
彼はシルクと視線を合わせ、和やかに話し始める。
「居るよ。大きな帆船は作ってないけど、何人かで乗れる小型帆船なら見た事ある」
「何人乗りくらいかな」
「一番安いのでも五人は乗れる、かな」
「問題はやっぱり金だ。流石にこれっぽっちじゃ買うのは無理だろうし、物々交換といってもボクらは何も持ってない。ルフィにとってのお宝も通用しないだろうしね」
懐から取り出した小さな袋を机に置くと、チャリンと小さな音が鳴った。せいぜい十数枚といったところ。たとえ金貨でも高値ではない。
貧乏は大敵だ。いよいよどうするかとキリが頭を抱える。
たまたま辿り着いた無人島で山ほどのお宝を手に入れて順調過ぎるとは思っていたものの、まさかたった一日でこうも状況が変わるとは。
船があるならまだしも何も持っていない状態で金がないのは辛い。

これではお宝探しも略奪もできないだろう。次に海へ出るのが遅れそうだった。
隣ではルフィが能天気に食事を続けている。わかっていたがここからどうするかは彼の仕事なのだろう。船長と副船長の違いがわかったようで、キリは天を仰ぎながらわずかに嘆息した。
二人がそれぞれ違った表情を見せる時、不思議そうな声色でシルクが問う。
先程何気なく呟かれた言葉。ルフィにとってのお宝。それが妙に気になった。
「ねぇ、ルフィにとってのお宝って何？」
「ん？　この帽子さ。友達から預かった大事な物なんだ」
食事を中断し、ルフィが顔を上げた。
自分の頭から麦わら帽子を取って胸の辺りでそれを見つめる。
その時の表情はさっきとも違っていて、わずかなのに明白な変化にシルクが驚く。思わず息を呑んでしまうような、そんな独特な空気を纏っていた。
「おれの友達も海賊やってて、いつかそいつを超えるのがおれの夢だ。いい仲間を見つけて、あいつらにも負けねぇ一味を作って、海賊王になる。そのためなら命だって賭けるぞ」
「命を……」
「ああ。おれはこれで生きるってもう決めた。だから絶対に後悔しねぇ」
帽子をかぶり直し、にかっと笑う。その顔をシルクは真正面から見ていた。
「そうだ、シルクはいい奴だよなぁ。おれたちの命の恩人だし、おれの宝物見つけてくれたし。おれの仲間にならねぇか？　一緒に海賊やろう」
「え――？」
唐突な誘い文句だった。
虚を衝かれたのか、動きを止めたシルクはじっと彼を見つめる。
驚き、それ以外にも感情が含まれていると見える。しかしそれを正

しく見切れる者は店内にはおらず、ただ彼女の祖母だけはわずかに身じろぎしていた。
シルクが困っていると見てキリがルフィを止めに入る。徐々にとはいえ、副船長としてその辺りも扱い方を覚えつつあるらしい。
「こら。そんな簡単に勧誘しないの。言ったって海賊だよ？」
「なんで。いいじゃねぇか、海賊。キリも好きだろ」
「誰もが好きな存在じゃない。むしろ町に住むような人は襲われないかと思ってひやひやしてるくらいなんだから。嫌ってるのが普通だと思うよ」
「そうかなぁ。なぁ、どうだシルク。一緒に海賊やらねぇか？」
「私は……」
きゅっと唇を結び、俯いて考え始める。
シルクの挙動に違和感を覚えた二人は顔を見合わせた。出会ってからの短い時間でも、二人は彼女が自分の気持ちを素直に言える人間だという認識を持っている。言葉に詰まった姿は初めて見て妙に困惑している様子。まるで自分の気持ちを整理できていないかのようだと判断できた。
海賊が嫌いなのか、それとも好きなのか、それさえ判別できない。妙な空気が流れ始めて言葉が止まった。
しかしそれも数秒。
一度目を閉じ、意を決した様子でシルクが何かを言おうとする。
その瞬間、外で鐘が鳴り始めた。
せっかくのタイミングで邪魔されてしまう。どうやら普段鳴らされる鐘ではないようで、パッと目を開けたシルクの顔には心配が浮かんでいた。
会話のタイミングは失われてしまい、扉の方を見つめた彼女は剣を持って席を立つ。そのまま慌てた様子で、二人へ顔を向けて断りながら歩き出してしまった。
「なんだろう。何かあったのかな。私、ちょっと様子見てくるね」
「ん、そうか」
「急がなくていいよ。こっちは勝手にやっとくから」

扉が開かれてシルクの姿が見えなくなり、数秒、宿の中に沈黙が流れる。
彼女が居なくなって少ししてから、ルフィが食事を再開する。それでいてそちらに集中するでもなく、何かを気にしていて表情はいまいち優れない。キリも肩をすくめている。
二人は佇まいを変え、だらしなく座って話し出した。
「聞いちゃいけない話だったかな」
「んー、でも嫌いって感じでもなかっただろ。なんなんだろうなぁ」
「あの子はね、海賊がこの町に置いて行った子供なのさ」
カウンターの向こうから祖母の声が聞こえた。洗い物を続けながら顔を上げず、ぽつりと呟くような小さな声。思わず二人がそちらを見る。
見えたのは小柄な体の小さな背。
どんな表情をしているのかはわからない。しかし声色から感情は伝わった。
決して喜ばしい声ではない。だが気落ちしている訳でもないだろう。感情が揺れ動いているようには聞こえない平坦な、静かな様子で祖母は語る。
「今から十年以上前、あの子が赤ん坊の頃にね。この町に来た海賊に置き去りにされたんだ」
「置き去り？」
「略奪はなかった。ある日突然やってきて、あの子だけ置いて行ったんだ。私たちは困り果てたけど、町が壊されることがなくて安心したし、置いて行かれたのは生まれたばかりの赤ん坊。一人で生きていくことはできない。だから私が引き取ったのさ」
動きを止めて集中する二人に、さっきよりずいぶん柔らかくなった声が届けられる。
いつの間にか手を止めて、懐かしい記憶を辿っているのか。彼女は懐かしむ声を出し、視線は中空を漂いながらやさしく告げる。
「親も分からない、自分の腹を痛めた子でもないけどね。赤ん坊には何の罪もないんだよ。見捨てて殺すことはできなかった。今はあ

んなに元気に育ってくれて、町のみんなとも仲良くしてるからね。間違ってなかったんだと思うよ」
「へぇ。あいつ海賊の子なのか」
「そうとも限らないけど、変わった境遇なのは確かだね。そうか、この町が宝か……」
「恩を感じることもないんだけどねぇ。境遇を知ったせいなのか町を守るって聞かないんだ。私は武器を持つより、包丁を持って料理を学んで欲しいところなんだけど聞かなくて」
穏やかな笑い声が聞こえた。どうやら良好な関係を築いているらしい。
少し思案するような素振りの後、真剣に話を聞いていたルフィヘキリが苦笑し、背もたれに体を預けて提案する。おそらく彼も同じことを考えていた。
「勧誘は諦めた方がいいんじゃない？　望みは薄いよ」
「んー、そうか。ここに宝があるんじゃしょうがないな」
二人の声を聞いて祖母が振り返った。
町がお宝。そう言ったシルクを思い出して微笑み、ふと聞いてみたくなったのだ。
「二人にはあるのかい？　自分にとって大事なお宝が」
「あるぞ。おれはシャンクスから帽子を預かってるから、これが大事なお宝だ」
「ボクは――」
ルフィに続いて答えようとしてキリが言葉に詰まった。
咄嗟に考え始める。自分にはあるのだろうか。彼らが持つような〝お宝〟が。
全て失くしたから東の海（イーストブルー）に戻って来た。持っている物など何もない。船も、仲間も、楽しい記憶さえ、全てあの海で失くしてしまった。果たして今の自分に何が残されているのだろう。様々なことを諦めていたせいか今になるまで考えたことはなかった。
自分の宝は何だろう。
真剣に考えても答えは出ず、彼はしばし黙り込んで考え込む羽目に

なった。
真剣に悩み始めてしまったキリを見てルフィの表情が曇る。
何か想うところがあるのか、珍しくも眉間に皺が寄せられていた。
彼の言葉にはやさしさがあり、関わった時間に限らず仲間を想う気持ちがある様子である。
「キリはないのか？　自分の大事な物とか」
「うん……そうだね。ちょっと思いつかないかな」
「じゃあこれから探せばいいじゃねぇか。海賊王までの道のりが長いって言ったのはキリだろ。だったら航海の途中で探せばいい」
「なるほど。お宝探し、ね」
「冒険してれば見つかる物もあるよ。おれも手伝うから一緒に見つけようぜ」
一転して笑顔になって言った後、今度はキリの顔を指差し、怒った顔で言う。
本当にころころ表情が変わって飽きない人だ。
そんなことを想いながら、キリは怒られているという自覚もなく気楽な笑顔で話を聞いている。ルフィの意志を無視して傍目から見ても緊張感のない姿だった。
「でも言っとくけどな、今のおまえの仲間はおれだぞ！　それだけ絶対に忘れんなよ！」
唐突な言葉にキリの目が真ん丸に開かれる。
かつての仲間を思い出したことに気付いたかのようで、言っていないのだから自然と心を読んだかのような反応に思えた。驚くものの、直後にはなぜか笑いが込み上げる。
「わかってるよ。同じになんて見てないって」
「うん、わかってればいいんだ」
「ちなみにさ、今のってヤキモチ？」
「知らん」
ようやく残りの料理を食べ終え、すぐに腹の中へ入れたルフィは再び皿を持ち上げる。
「ばあちゃん、おかわりくれ」

「あんまり頼み過ぎないでよルフィ。こっちは金がないんだから」
「いいんだよ、お代なんて。こんなこと滅多にないんだから好きなだけ食べていきな」
そう言われるとわかっていたのか、祖母はすでに準備を始めており、次の皿を持ってくる。
これに対しルフィは心底嬉しそうに笑い、キリは仕方ないといった様子で苦笑していた。

海賊の襲来

蹴破られるような勢いで扉が開けられ、店内に一人の男が飛び込んできた。

食事を終えて一息ついていた二人の少年はいち早くそちらを向き、次いでシルクの祖母がそちらを見る。やけに大きな物音だった。流石に無視することはできない。

慌てた様子の男は汗を滴らせながら言う。

「た、大変だ！　海賊が来たぞォ！」

「海賊？」

真っ先に呟いたのはルフィだ。お茶が入ったコップをテーブルへ置き、小首をかしげる。

突然の事態であったがさほど驚く様子もなく、好奇心だけが露わになっていた。しかし男には彼らを気にする余裕すらない。振り返ったシルクの祖母しか見えていないようだ。

慌てふためいたまま彼女へ言葉をかける。

「セツヨさん、あんたも町の奥へ逃げてくれ。ここに居ると危ないかもしれねぇ」

「本当かい？　海賊なんて、もう何年も現れなかったじゃないか」

「確かだ。もうこの町まで近付いてきてる。もう他のみんなも逃げ始めてるぞ」

「やだねぇ、せっかく平和な毎日が続いてたのに」

セツヨ、と呼ばれたシルクの祖母はキッチンを出て出口へ歩き始める。腰に手を当ててゆっくりとした歩調。歳を考えたところでさほど慌てている様子には見えなかった。

彼女を見送るようにじっと見ていた二人は動かず、相変わらず椅子に座って気楽な表情。

気付いたのは男の方で、知らない顔だと理解しつつも慌てて声をかける。

なぜ逃げないのか。そう思うのは当然だった。

落ち着く二人は焦る男を冷静に見やり、いまだに茶など啜ってい

る。
「あんたら何落ち着いてるんだ。海賊が来てるんだぞ、早く逃げないと」
「そういやおれ、海賊ってあんまり見た事ねぇな。ずっと山の中に居たし。シャンクスと、ブルージャムと……あと誰かいたっけ？」
「ルフィ。まさかとは思うけど」
「なぁキリ、ちょっと見に行こうぜ。どんな海賊が居るのか知りてぇしよ」
「やっぱりそうなったか」
焦る男など一切気にせず、からからと笑うルフィを見てキリが溜息をついた。
想像はできていた。そのせいで驚きはなく、至って冷静に相手をできる。放置される形となった男はあんぐりと口を大開にそんな彼らを見るばかりだ。
「別にいいけど、そんなに面白い物じゃないと思うよ。ここらの海じゃ大物も居ないだろうし」
「それでもいいよ。おれあんまり海賊見たことねぇしさ」
「それでよく海賊やろうと思ったね」
「好きだからな。港に行けば会えるんだろ？」
「ハァ、わかったわかった。どうせ急ぐ旅でもないし、まぁそれくらいは」
「うし。じゃあ行こう」
「ちょ、ちょ、ちょっと待て！」
ようやく席を立った彼らに対し、町民の男は出口を塞ぐように立って声を荒げる。
何をする気だというのか。話を聞いているだけで背筋を汗が流れ、よからぬことを考えているらしい二人を見過ごしておくわけにはいかない。
おそらく好奇心だけで海賊を見に行こうとしている。
そもそも彼らが町民でないことは一目でわかったのだ。信用できるはずもなく、今になって不安が膨れ上がり、声をかけずにはいられ

なかった。
「あんたたち、何するつもりなんだ。海賊が来てるんだぞ？　どこの誰だか知らないけど、逃げた方がいいんだって。みんな避難してるからそこに――」
「おれはいいや。別に怖くねぇし」
「こ、怖くないって、相手は海賊で……！」
「それにおれたちも海賊だから」
ルフィが笑顔でそう言った。すると男は言葉を失い、呆気に取られてまた大口を開ける。
彼の発言を受け止められなかったのだろう。意味が分からないと百面相が繰り返され、口を開閉させるのみで何も言えない。動きもすっかり止まっていた。
その間にもルフィとキリは歩き出し、立ち尽くす男の傍を通り抜けようとする。
ハッと我に返り、両手を伸ばして彼らを止めた。
訳が分からずとも黙って行かせる訳にはいかず、行ってもただ死ぬだけ、問題を大きくされては堪らないと必死の形相で彼らへ語り掛ける。
「ま、待て！　だから行くんじゃねぇ！」
「なんだよ、いいだろ別に」
「忠告はありがたいけど、この人多分聞かないよ」
「か、海賊って、本当なのか？　おれたちの町にいつの間にか海賊が？」
「ほんとだぞ。まだ二人しかいねぇけどな」
気楽に笑うルフィは腰に手を当てて仁王立ち。まるで恐怖心を見せなかった。
海賊が怖くないのか。
静かに心中で思うが問えるだけの余裕はなかった。焦りに加えて驚愕が交じり、何を言うべきなのかさえわからずに、隣を通り過ぎていく二人を止められない。
二人は出入り口となる扉の前に立った。しかしそこで、立ち塞がる

セツヨに止められる。
曲がった背もそのままに目を見つめられ、足を止めた二人はふと表情を引き締める。
「私は止めないよ。あんたたちが海賊だって話も信じるし、行きたければいけばいい」
「うん。そうする」
「でもね。一つだけ、頼まれてくれないかい？」
わずかに頭を下げられた。
「あの子を……シルクを守ってやって欲しいんだよ」
視線を床に落としたまま、セツヨが言う。
目を見ずに聞いているだけでも声色の変化がわかる。ただやさしそうだった先程とは違って、己の家族を心配する、どこか心細そうな声だった。
ルフィとキリは静かに紡がれるその言葉を邪魔できず、じっと佇んだまま耳にする。
「あの子は昔から無茶ばかりする子でねぇ。確かにそこいらの男の子と喧嘩しても負けないけど、今回の相手は海賊。きっとあの子はまた無茶をする。だからお願いだよ。少しだけでいい、あの子が怪我をしないように見守ってやっておくれ」
深々と頭を下げる彼女を見つめ、ふとルフィがキリを振り返った。
それだけで彼は納得したようにくすりと笑う。
「お代をチャラにしてもらった貸しがあるから」
「しっしっし、そうだな。わかったばあちゃん。おれたちに任せろ」
そう言われてセツヨが顔を上げる。
二人は邪気もなく笑っていて、それが妙に印象に残った。
子供っぽいと言うべきか、あまりに警戒心が無さ過ぎて心配になるほど。
セツヨは密かに、とても海賊には思えないと改めて考えた。
「シルクはいい奴だからな。おれたちを助けてくれたし、メシもうまかったし、約束する。シルクもあいつの宝もおれたちが守るよ」
「そうかい。そう言ってくれると助かるよ」

嬉しげに笑ったセツヨは再び頭を下げる。
深々と丁寧に。そんな些細な仕草からも高揚が見えるようだった。
「私が行っても邪魔になるだろうから、先に避難しておくよ。あの子をよろしくね」
「ししし、ああ」
「じゃあ行こうか。港に行けば見れるんだよね」
歩き出した二人は扉から外へ出て、キリの先導で歩き出す。
去り際はなんともあっさりしたものだ。
呆気に取られたままでようやく動き出せた男は、妙に肩の力が抜けているセツヨへ恐る恐る声をかける。彼らのことがまるで理解できなかった。
「せ、セツヨさん、いいのかあいつら……海賊が来てるってのに、なんで」
「大丈夫だよ、あの子たちは。シルクのことも任せられる気がしてね」
気負いもせずに言いのけて、歩き出したセツヨも外へ出ていった。
状況を理解できているか否かは定かでないものの、慌てて男も外へ出る。
町には高い鐘の音が鳴り響いていた。
港へ建てられたやぐらとそこに置かれた警鐘が鳴らされているのである。つまりそれは海岸線に船が見えたということ。町を襲う可能性がある海賊船の襲来だ。
心配そうな表情を浮かべる町民たちの一部が港へ集まっている。
日頃来訪者がない島であり、海軍が訪れることもない。従って敵襲への備えなど一切なかった。
襲われでもしたらひとたまりもないと誰もが顔を青ざめさせている。
鐘の音を耳にして町民たちが島の奥へ避難する中、大人の男たちが水平線を眺める。やぐらの上で確認した海賊旗は髑髏と三日月のマーク。手配書の束を調べれば相手が誰なのかすぐにわかる、非常にユニークなマークだった。

町長を中心とした男たちは焦った様子で言葉を交わしていた。
「見ろ、こいつだ。三日月のギャリー。懸賞金は……五百万ベリーっ」
「そんな大物が、どうしてこの町に……！」
見つけた手配書に戦々恐々とする一同は狼狽し、声を大きくし始める。
船はまだ彼方。しかし到着など時間の問題だろう。猶予は一時間と残されていない。
自分たちはどうするべきなのだと、町長を囲んで話を続ける。しかし本物の海賊を前にすっかり怯えた彼らは一向に良い解決策を見いだせない。どれだけ会話を続けても同じことの繰り返し。
話は全く進む気配がなかった。
「どうする。避難したところで、町を破壊されるかもしれん」
「金を払って見逃してもらった方がいいんじゃないか。今からかき集めたところでそんな大金はないかもしれんが、他に方法はないぞ……」
「だが海賊に払う金なんてっ」
「だったらどうするって言うんだ。おれたちが他に生き残る方法は――」
大の大人が話し合っていたそこへ、大きな声が割り込んだ。
「戦えばいいのよ！」
自信満々な声に驚いて振り返った彼らの目に、剣を持って佇むシルクの姿が入った。
笑顔を浮かべ、左手で鞘を持って右手はすでに柄へ伸びている。外見はやる気満々といった様相、妙に得意げな姿だと思え、町民にとっては見慣れた姿。
なぜか全員の顔色は優れない。
皆が一斉に肩を落とし、俯いて、重苦しい溜息を吐いた。
言わばこれがいつもの光景。何一つ驚くことがないこの町の当たり前だった。
「なんだ、シルクか」

「おまえは引っ込んでろ」
「セツヨさんといっしょに町の奥へ避難しとけ」
「ちょっと！　無視しないでよ！」
その場に居る全員がおざなりな態度である。
あっさり背を向けられてしまったシルクは肩を怒らせ、さらに声を大きくした。
「相手は海賊なんだよ。その場しのぎでお金だけ払って見逃してもらおうなんてダメ。この町を守りたいって気持ちがあるなら、武器を取って戦わなきゃ」
「シルク、おまえは引っ込んでろ。おまえが出てくると小さな問題も大事になるんだ」
「ここは大人に任せて、おまえはセツヨさんを守ってればいい」
「じゃあみんなはいいの⁉　この町が海賊の手で汚されても！」
真剣な顔と声でシルクが言った途端、また数々の溜息がつかれた。
多くの言葉はない。けれどその態度が彼らの本心を語っている。
想いは同じだということだろう。しかし彼女が言う提案は実行することが難しい。確かにそうできればどれほどいいだろうとは思うものの、武器を取って戦って、死者が出るのは町民の方だ。決して選んではいけない方法だと認識されている。
誰もがそれを理解していのだ。
代表として独特な髪型の町長がシルクの前へ進み出て答えた。
「いいか、シルク。この町を守りたいと思うから我々は頭を使うんだ。私たちは海賊じゃない。それなりの解決方法がきっとあるはず」
「もし相手が、話を聞いてくれなかったら？」
「それでも武器を取ってはいけない。暴力で解決しようとすれば、必ず誰かが怪我をする。死んでしまう者が居るかもしれない。私は町長として、皆に傷ついて欲しくないんだ」
町長の言葉に嘘はない。それがわかってシルクはぐっと唇を噛む。
気遣いを感じたせいだろう。強く言えないのは心配されているとわかったせいだ。
「シルク、おまえは海賊じゃないんだぞ。時には耐えなければなら

ない状況がある」
「でも、それでみんなが傷つくくらいなら」
「いい加減にしろ。子供のわがままじゃないんだ。今はそんなこと言っていられない」
一人の男がシルクと町長の間に割って入って言い始める。
まだ遠いが船は着々と町に近付いていた。悠長に構えていられるのも今だけだ。
男はすぐに町長に振り返り、シルクをそっちのけに話を続ける。
「町長、やっぱり交渉すべきだ。戦ったって勝ち目がある訳ない」
「だけど奴らに渡す金なんてないぞ」
「持つ物を持って逃げた方がいいんじゃ……」
「島から出るのは無理だ。船もなければ時間もない。逃げたところで追いつかれる」
「うーん、しかし……」
顔を突き合わせてまたも一同は考え始めた。
一体いつになったらこの話し合いは終わるのか。
大人はいつも慎重で口ばかり。ここぞという時は決まって即座に動き出せない。
今まで何度こんなことを繰り返してきた。その度にシルクは持ち前の行動力で解決しようとするのだが、いつも周りからは窘められるのみだった。
納めたままの剣を強く握り締める。
町を守りたい気持ちは同じはずなのに、なぜこうも食い違う。やりきれない想いは心の中に沈殿していて、きっかけ一つで爆発してしまいそうなほどとなっていた。
そんな頃に彼らがやってきたのである。
「お、シルクじゃねぇか」
ついさっきまで耳にしていた声に振り返れば、ルフィとキリが近くまで歩いてきていた。
なぜここに来たのだろう。
そう思うより先に驚きが心を埋め尽くして、ぽかんと口を開いて立

ち尽くしてしまう。
「ルフィと、キリ？　どうしてここに……」
「海賊見に来たんだ。なぁ、海賊居たか？」
「あれじゃないかな。海に居るよ」
「ほんとか？　どれだ？」
シルクの隣に立ったルフィは目を凝らして海を眺め、その隣にキリが立つ。
まるで危機感のない姿。好奇心を露わにする彼らに周囲の町民たちは目を大きくさせ、この場に合わない声色に動揺を隠せない表情となった。
当の本人はそんな周囲の状況など一切気にせず、あくまでもマイペースを貫く。
海賊船を見つけたルフィがますます目の輝きを強めていた。
「おぉ～、でっけぇ船だなぁ。おれたちもあんなの欲しいな」
「金がないから無理だよ。航海できたとしてもまだしばらくは小舟かな」
「まぁいいや。すぐに見つかるよ、おれたちの船」
「楽観的だなぁ。どこからその自信が来るんだか」
目の前の海賊船を見て、尚も一切慌てない二人はあまりに異質。
周囲の視線は痛いほど彼らに突き刺さった。
「シルク。こいつらはおまえが拾ってきた……」
「例の漂流者か。どうしてこんなところに居るんだ」
「おまえたち遊びじゃないんだぞ。海賊が来てるんだ、早く逃げなさい」
「あ、お構いなく」
海賊船に興味津々のルフィではなく、キリが手を振りながら答えた。どうやら逃げる気は皆無らしい。それどころか真面目に話を聞く素振りすらなさそうだ。
厄介な少年たちだと思うのは極々自然なこと。
眉間に皺を寄せる者も少なくはなくて、顔を見合わせる者も複数居た。

「いや、お構いなくって……」
「そんなこと言ってる場合じゃなくてだな」
「あのさルフィ。見るのはいいけど、ここで見たからってどうするのさ」
「ん？　ただ見たかっただけだぞ」
「つまり何をするわけでもないってことだね」
困惑する町民たちもそっちのけに、彼らだけはのんきな態度を変えようとしなかった。
しばし困り果てていた一同だが、ある時ふとシルクが気付く。
彼らは海賊。自分でそう名乗ったのだ。
自分が町民だから戦ってはいけないと言うならば、敵と同じ海賊の彼らなら。
意を決したシルクはルフィの前へ立ち、真ん丸な彼の目を見つめながら言った。
「ねぇルフィ、お願いがあるの」
「なんだ？」
「私と一緒にあいつらと戦って。この町を守りたいの」
「なっ!?　何を言い出すんだシルク！」
驚く人々とは対照的に、すでに覚悟は決まったようだ。
振り返ったシルクは見知った顔を眺めながら力強く言い切る。
「この町を守るためならなんでもやるよ。戦っちゃいけないって言うなら、私、海賊になる！　ルフィたちの仲間になってあいつらを追い返してやるから！」
「バカを言うんじゃない！　海賊と戦うために海賊になるなんて、どうやったらそんな発想になるんだ！　この町のことを考えるなら、もう少し大人になれ――！」
「あっはっは！　それおもしれぇなぁ」
肩を怒らせて叫び始めた町長の言葉が遮られる。
腹を抱え、背を反らして大声で笑っていたのはルフィだった。
ただでさえ物々しい空気に包まれていた辺りは妙な空気に呑み込まれる。原因は間違いなく、突如として現れてこの空気を笑い飛ばし

た至って普通な一人の少年。
麦わら帽子に手をやった彼は、笑顔でシルクを見つめて堂々と答える。
「いいぞシルク。おまえはおれの仲間だ。いっしょにあいつらぶっ飛ばそうぜ」
「バカなっ！　君、自分が何を言ってるのかわかっているのか！　シルクは普通の女の子だぞ、海賊と戦うなんてできるはずがない！」
「言っても無駄だと思いますよ」
向かい合うルフィとシルクの傍を離れ、静かにキリは怒りを発する町長の前へ立つ。
力の抜けた笑みで隙だらけな立ち姿。ひどく緩い雰囲気を纏う少年だ。
こちらを見てもルフィとはまた違った印象を受けて、やはり今の状況にそぐわないのだと思う。彼らはなぜ恐怖心を抱いていないのだろうか。
思い通りにいかないせいか、町長は悔しげに歯噛みする。
その彼にキリが穏やかな声で告げた。
「彼も海賊なんで」
「な、なにっ？」
「と言ってもまだ船出したばかりですけど、わがままさじゃそこらの海賊だって及ばない。一度言い出したらここで何を言おうが聞かないと思いますけどね」
「しかし、シルクはこの町の一員だぞ。巻き込む訳にはいかん。もし何かがあったら――」
「〝何か〟がなければいいんでしょ？」
キリはほくそ笑む。対して、町長はぐっと言葉を吐き出せなくなった。
緩い笑顔だというのにこの感覚はなんなのだろう。
言い知れぬ感覚に囚われた彼は二の句を告げられず、もやもやとした感情を胸中に宿したまま、自然とキリの発言を受け止めることになった。

「心配する気持ちはわかりますけどね。多分シルクも言って聞くタイプじゃないでしょう。それこそ本気で止めたいなら縄で縛りでもした方が早い」
「あの子は何も悪いことをしていないんだぞ。なぜそんな必要がある」
「ふぅ、わがままなのはみんな同じだなぁ。敵がすぐそこまで迫ってるのに解決策も見つけられずにただここに立ち尽くして怯えてるだけ。無謀な少女を止めようって割には無理やりこの場から遠ざける訳でもなく、言いくるめられる訳でもない。それじゃどっちつかずってもんだ」
「おいおまえ！　何知った口利いてやがる！　部外者は引っ込んでてくれ！」
キリの発言に怒った誰かが大声で叫んだ。表情を変えずに彼はそちらへ向き、怒った様子など皆無、至って冷静にその誰かへと声をかける。
「ここにボクらが居ようが居まいが、あなた方の対応だとシルクは死にますよ。説得も聞かなそうだし、縛り付けもしないなら、一人でもここに戻ってきて海賊と戦おうとする。今日初めて会ったボクでもわかるんだから、みんなもわかってるんでしょう？」
「それは、そうだが……」
「戦わないなら引きずってでも連れて逃げた方が良かったと思いますよ。それができなかったから彼女はあんなこと言い出した」
「しかし我々の町だぞ！　おめおめ引き下がって海賊の好きにされるというのは……」
「だったら戦えばいい」
「戦って勝てる相手ではない。我々は、武器を握ったことさえないんだぞ」
「じゃあ逃げればいいでしょう」
「おい！　適当なことを言うな！　それじゃあおれたちはどうすればいいって言うんだ！」
「さぁ？　そんなことボクに聞かれても」

どう聞いていても真面目に相手しているとは思えない発言である。煙に巻かれているのか、或いは適当に受け流されているだけか。どちらにしても良い気分はしない。

町民たちは一斉に怒りを表し始めるがキリはさほど相手にせず。

彼らを見ながらもルフィたちの傍へ歩み寄ろうとしていて、笑みは少しも変わらなかった。

「選ぶ権利も力もあってそれをしないのはただの怠惰だ。シルクに説教する暇があるなら、たまには彼女を見習って、どう行動するか自分で決めたらどうですか」

一方的に言葉をぶつけてあっさり背を向けられる。

侮辱とも思える態度と発言。怒りに囚われる彼らだが相手が離れてしまったことで何も言い返せず、状況を理解しないままに好き勝手のたまう彼を見つめるばかり。

町民から離れたキリはルフィの傍へ戻り、シルクと合わせて彼を見る。

「船長、命令は？」

「戦うぞ。シルクもお宝も守ってやるってばあちゃんと約束したんだ。それに本物の海賊がどれくらい強ぇか試してぇしな」

「了解。じゃあ準備して待ってようか」

彼らはすっかり戦うつもりのようで、逃げる素振りなど微塵も見当たらない。

しばらく町民たちは動けずにいたが三人に振り返られて反応する。

戸惑った表情と迷い。俯く誰もが押し黙っていた。

「町民のみなさんは？」

「みんな。私のことは気にしなくていいから、早く逃げて。ルフィたちに手伝ってもらえばきっとなんとかなる。私がこの町を守るから」

シルクの真っ直ぐな目を見た後では尚更何も言えなくなった様子。町民たちはどうすることもできずに立ち尽くしたまま、問いかけたキリに言い返すこともない。

ルフィはそんな彼らをじっと見つめていた。

何を考えているのか、その顔を見ても想像することは簡単ではない。しかしある時急に彼らの間を縫うように歩き出して港へ赴き、背後の町民たちへ声をかけた。
目は前方の大海原だけを見ている。必然的に町民たちが目にするのは背中だけであった。
「おまえら早く逃げた方がいいぞ。おれ弱ぇ奴守るつもりなんてねぇし」
「お、おい、おまえら……」
「どんな奴らなんだろうなぁ。強ぇのかな?」
その背はすっかり町民たちへの興味を失っていて、すでに眼中にない様子。今や徐々に近づいて来る海賊船を見つめるのに忙しそうだった。
かける言葉が見つからず、困り果てた彼らは誰ともなく顔を見合わせ、何を言うでもなくとぼとぼ歩き出す。おそらく町の奥へ避難するのだろう。通りを歩けば当然シルクの傍を通り過ぎるのだが何も言えないまま、皆が戸惑いを隠せずに歩き去った。
通り過ぎる際、町長だけがただ一言。すまないと呟いた。
去っていく彼らに目を向けることなく、あくまでもシルクは決意を持って海を眺める。或いは、町へやってくる海賊船から目を離さなかった。
隣に立つキリも同じ方向を見ながら口を開く。
「気持ちはわからないでもないよ。平穏無事な毎日が続いてたんだろうしね」
「うん」
「だけど、逃げもせずに突っ立ってたことは理解できないかな。建物は壊されてもまた作れる。人間はそうじゃないのにね」
ぽつりと呟くキリが気になり、シルクがそちらへ顔を向ける。
さほど変わったようには見えないものの少し寂しげな顔。わずかに、呆気に取られる。けれど彼自身はすぐにその色を隠してしまい、視線が合えばまた先程の笑みだった。
「それよりさっきの発言大丈夫かな。ルフィの仲間だなんて言っ

て」
「え？」
「意外としつこいからね。ボクはいいとしても、ひょっとしたらこの一件が終わった後、海賊として海に連れ出そうとするかもよ」
「あっ、そういうこと」
問われてシルクは考える。つい思い付きと勢いで言ってしまったのだ。自ら海賊になるなどと、今まで一度たりとも口にしたことがない言葉。
後悔する訳ではないがなぜ言ってしまったのか。
それだけ切羽詰まっていたとも言える。しかし一方で、まさかと思う部分もあって。
顎に手を当てて考え込んでしまったシルクにキリが笑う。
「ま、どうするか決めるのは終わってからでもいいよ。とりあえずこれから誰も死なないように頑張らなきゃいけないし。今はこっちに集中しよう」
「あ、うん。そうだよね」
歩き出したキリは港に立つルフィへと歩み寄って背に声をかける。
「ルフィ、準備しよう。そんなとこ立ってたら狙撃されるよ」
「ん？　そうか？　でもおれゴムだからきかねぇぞ」
「あぁ、なるほど。銃弾もだめなんだ。意外と強い能力っぽいよね、ゴムゴム」
「しっしっし、そうだろ」
「それはいいからこっち来なさい。ちょっと手伝って欲しいから」
「わかった」
敵が到着するまで時間もないだろうに準備とは何をするのか。
考え事を中断して気にしていたシルクもまたキリに呼ばれ、彼らに続いて歩き出した。

モーガニア

近くの家屋から勝手に持ち出した本を道端へ置き、三人はそれだけで準備を終えていた。
提案したのはキリである。武器にもならない本を掻き集めてそこへ運び、後は何もしない。準備の時間がないとは言ってもあまりに奇妙な行動であった。
己の肉体で戦うルフィは武器など必要とせず、何も気にしていないものの、シルクはキリの提案の意味を読み切れずに困惑している。その行動に意味などあるのか。しかしすでに海賊船は港のすぐ傍まで迫っていて、悠長に会話している暇もないようだった。
「シルク。流石に帆船相手だと町全体はカバーできない。砲撃されたら被害が出るかも」
「うん……でも、できるだけ最小限にしたい。なんとかできるかな」
「どうだろう船長」
「おれに任せろ。いいこと考えたんだ」
両の拳をぶつけて喜々とした様子のルフィが答える。自信満々で不安など一切感じさせない。その姿に少しはシルクもほっと息をつくことができた。
それでも胸中の不安は消え去らない。
子供の喧嘩は経験があっても海賊と戦うなど初めてのことだ。緊張するのは当然で、気付けば知らぬ間に腕が震えている。大丈夫だと思っていても少なからず恐怖を感じているらしい。
目を閉じて、深く息を吸い、吐く。
落ち着こうと試してみてもあまり変化はなく、全身の緊張はそのまま。
困って二人を見たら、彼らは和やかな会話の最中だった。
「なんで本なんか持って来たんだ？　これ武器か」
「子供の頃ケンカで投げたりしなかった？　背表紙でも当たると痛いんだよ」
「んー、ねぇ。ケンカの時は殴り合ってたもんなぁ」

「そういえば野生児だったね。ジャングルで本なんか持ってないか」
「それにおれは投げるより伸びた方が早いや」
「ますます聞く相手を間違えた。まぁこれはボクが使うからいいよ。先頭はよろしく」
「おう、任せろ」
何一つ変わらぬ気軽な様子には思わず頬が緩み、不思議とシルクは落ち着くことができた。
敵を前にしても恐れを抱かない。彼らはどれほど強いのだろうか。想像する暇すらなかったようで、落ち着いた頃に海賊船は港へ足を止めていた。
「あっ……」
「来たね」
「どんな奴かな。でもここまで来ても攻撃して来ねぇな」
「油断させようと思ってるだけじゃないの。海賊の常套手段だって知っといた方がいいよ」
「ふぅん。キリもやったことあるか？」
「一人の時はね。生き残るためには嘘も必要だと思うもんで」
錨を下ろして船は完全に停泊。船上はやけに静かだった。
港に立つ彼らはじっと船を見上げて待つ。
人の話し声すら聞こえずに奇妙な様相には間違いない。やがてのろのろと地面と船とを繋ぐ板が置かれ、数人の男たちが下りてきた。やって来たのは三人。三日月型のひげを蓄えた、見るからに船長らしき風貌の男を先頭に、やせっぽちと太った男が後からついてくる。
武器はおそらく持っていない。
無手でやけによろよろした危なげな足取り。何か様子がおかしいとルフィたちが見守っていると、三人の男たちは彼らの下までゆったりした歩みでやってきた。
三日月型のひげ。船に掲げられたジョリーロジャー。
シルクから教えられた通りだ。
目の前に来たのは三日月のギャリーに間違いないようで、ルフィた

ちは呆気に取られていた。
「すまない……嵐に見舞われて、食料が底をついた。船で部下たちが、腹を空かせて倒れてるんだ。頼む、食い物と水を……あいつらに持って行ってやりたいんだ」
「もう死にそうになってるぞ」
「顔色悪いね。ねぇキリ、本当に遭難してたんじゃないかな」
「うーん、とりあえず武器は持ってなさそうだね。でも船を調べないと一概にはそう言えないと思うよ。実は全員ピンピンしてたりしてね」
「た、頼む。本当なんだ。金なら払う、だから食料と水を……」
伸ばした腕を震わせるギャリーに、シルクの表情は歪む。
弱々しい仕草は彼らが本当に飢えているのだと感じさせた。海賊旗を掲げていたから戦うつもりだったが、これでは戦闘などできるはずもないだろう。ならば今すぐ剣を捨てて、みんなを呼んで、腹を空かせた彼らに食事を提供した方がいいのでは。
逡巡する彼女はルフィとキリに目を向ける。無駄な戦闘などするべきではないと。
ルフィはじっと彼らを見つめて離さず、まるで真意を問おうとするかのよう。一方でキリは手に持った一冊の本を見、ぺらぺらとページを捲っている。どちらも笑みは消していた。
「ねぇ、二人とも。何か事情があったんじゃないかな。食料、持ってきた方が……」
「やめといた方がいいよ」
「え？　だけど」
キリが手元に視線を落としながら小さく呟く。
ゆっくり上がった視線はルフィへ手を伸ばすギャリーを捉え、冷ややかな声だった。
「ギャリーっていったっけ。食料が無くなってから何日？」
「も、もう三日三晩飲まず食わずだ。いい加減、意識が遠くなって――」
「それにしちゃしっかりした足取りだね。食事ならともかく、水を

三日も飲んでなければさっきみたいな速度で歩くのは不可能だと思うけど」
そう言われた途端、ピンと空気が張り詰めた。少なくともルフィとシルクはその変化に気付いており、三人の男たちが動きを止め、わずかに表情が変わった気がする。
キリはさらに続けた。
「経験済みだよ。ボクも昔死にかけたけど、人に助けられてなんとかなった。飲まず食わずという割にはずいぶんな速度で、しかも支えられもせずここまで来れたね」
いつの間にか腕の震えは止まっていた。
それに気付いたシルクが即座に後ろへ跳んで三人から距離を取り、鞘を捨てて剣を抜く。
練習通りに両手で構え、男たちに敵意を見せた。
観念したのか、ギャリーはすっと背筋を伸ばす。とても腹を空かせて限界を迎えた人間には見えない。続いて他の二人も背を伸ばして平然と立った。
やはりと思うキリに、ルフィは感心した様子でへぇと声を漏らす。
ギャリーが話し始めたのはそれからだった。
「チッ……せっかく穏便に済ませてやろうとしたってのによぉ。人様の気遣いには甘えとくもんだぜ。頭の回る人間ってのは、時に早死にするもんさ」
発砲音が聞こえた。
音の出所は船上、メインマストの頂点。見張り台から放たれていたらしい。
重力に従って落下の軌道で飛来した銃弾は、気付けばキリの胸を打っていて。
まるでスローモーションのように全てがゆっくり見えていた。振り返るルフィと、剣を構えて目を見開いたシルクの目に、力なく倒れていくキリの姿が映る。わずかな音を立てて彼は地面へ横たわり、力が入らない姿で動かなくなった。
血の気が引いていくと嫌でもわかる。全身の感覚が狂い始めるよ

うな奇妙さだ。
かつてない感覚に驚く二人はすぐに動き出すことができず、その間にギャリーの命令で二人の部下が動き出していた。
「取り押さえろォ！」
太った男がルフィの背後から襲い掛かり、力ずくで彼を押し倒した。体重をかけて上からのしかかったことでそう簡単には動けない状態となる。しかし当のルフィは倒れたキリを気にしていてそれどころではなかったようだ。
「おいキリッ！　おまえ大丈夫か!?　黙ってないで答えろよ！」
「ギャッハッハッハ、バカめ！　このおれ様の前に立つからそんなことになるんだ！　おれ様は三日月のギャリー様だぞ！　旗を見た段階で道を開けてろ、バカどもがァ！」
押さえつけられたルフィはキリへ必死に声をかけるも、反応はなし。
面白がるギャリーはそんな彼らを笑っていた。どうやら迎え撃とうとそこに立っていたようだが抵抗の一つもできず、一人は撃たれて一人は捕まった。こんな間抜けは見た事がない。
笑い声は建物を使って広い通りに響き渡る。
やせっぽちの男と相対し、剣を持つせいかすぐには襲われず、敵と睨み合っていたシルクは強く歯噛みする。一瞬でも彼らを助けようとした自分が恥ずかしくて堪らない。やはり海賊を信じてはいけなかったのだ。もっと警戒すべきだった、と今更考える。
まだ彼女は取り押さえられてはいない。しかし人数の差で明らかに分が悪そうだ。
状況を読んでかシルクは動き出せず、嫌な汗が流れるのを知る。
対峙するやせっぽちの男が彼女を見たままギャリーへ言った。
「船長、こいつ武器持ってますぜ。せめてナイフくらいもらわねぇと」
「あぁ？　フン、女のくせに面倒な奴だ。まぁいい、どうせやることは変わらねぇ……全員降りて来い野郎どもォ！　略奪を始めるぞ！」
オォォッ、と雄々しい叫び声。

船からは微塵も衰弱していない、元気な姿の海賊たちが一斉に飛び降りて、手には武器を持って港へと降り立った。総勢で二十名を超える。並び立つ威容はまさに海賊といった風情で雄々しくも荒々しい。サーベルを振り上げ、ピストルを掲げて発砲し、その姿にはシルクも恐怖心を覚えずにはいられなかった。

一人で勝てる人数ではない。しかも仲間となった二人があっという間にやられてしまった。

勝ち目があると感じるにはあまりに難しい状況だが、それでも逃げ出す訳にはいかない。町を守ると決めた。たとえ勝てないとわかっていても、敵に背を向けて好き勝手にさせることだけはしたくない。剣の柄を握り直したシルクは仁王立ちで彼らに対峙する。

海賊たちに怯えた様子はない。

立ち止まってにやりと笑う彼らの群れを掻き分けて、同じく余裕綽々のギャリーが先頭へ現れ、シルクを見つけるといやらしい笑みを浮かべた。

「ふふん、一人で何をするつもりだ女ぁ。殺されたくなければ今すぐそこを退け。おまえ一人で何ができるってんだ、あァ？」

「くっ……！」

「おまえがそこで何をしようが、おれたちを止める手立てはねぇ。そっちのガキみてぇに殺されてぇのか。わかったら二度とおれ様の前に立つなァ！」

部下からピストルを受け取り、銃口をシルクへ向けたギャリーが叫ぶ。

それなりに離れているがピストルならば届く距離。ぴたりと狙いを定められると命の危険を感じたか、それとも動揺したのかもしれない。シルクが持つ剣がわずかに揺れた。

緊張感が漂い、海賊たちは一様に闘志をむき出しにしている。

いつ戦闘が始まってもおかしくない状況。そんな中で、突如轟音が響いた。

音は彼らの後方から響いていたようだ。唐突な物音に誰もが疑問を抱き、振り返って確認すると、見えたのはゆらりと立ち上がるル

フィ。傍には砕けた地面に頭がめり込んだ、太った男が倒れている。どうやら殴られたらしく、頬にはルフィの拳の跡が残っていた。
一瞬で空気が変わる。
大の男が一発で沈黙させられた。その事実は間違いなく、武器を持っていても恐怖心を抱かずにはいられない様子。笑い声は消え、笑みも消えて危機感が増す。
誰もがルフィを見つめていた。
そしてルフィは、凄まじい気迫を放つ目でギャリーを見据えていた。
「おまえ……おれの仲間に何してんだ！」
大気を震わす力強い叫び。
あまりの気迫に海賊たちは気圧され、ギャリーは気付けば悲鳴を上げていた。
倒れたキリを想っての発言であることは明らか。その場に並び立った海賊たちの中に彼を撃った男も居て、まだ誰なのかはわかっていないようだが本人は生きた心地がしない。
ただの若造だと思っていれば想像以上の気迫。
汗を流し、足を震わせる者も居た。
棒立ちになった一同に彼を止められる者はおらず、ルフィは地面を蹴って高く跳び、海賊たちの頭上を越えた。空中でくるりと一回転。右の拳を構えてギャリーの姿に集中する。
ゴムの体を利用した攻撃を放つため、腰の捻りを利用したパンチが繰り出された。
「ゴムゴムのォ、銃（ピストル）！」
猛然と伸びたゴムの腕が拳を持ってギャリーへ接近する。その様は強く、速く、勢いが凄まじい。見ている間にも立ち尽くして動けないギャリーの悲鳴は止まらなかった。
避けること叶わず、ギャリーは思い切り頬を殴られて体が飛び、ぐるりと回転しながら落ちた。
「ギャーッ!?　ぐほぉっ、歯がァ!?」
「こいつ、よくもキリを殺しやがったな。おまえだけは許さねぇぞ」

「くそ、なんだあのわけわからん奴は……おい、おまえら！」
「は、はい」
「あいつを殺せェ！　今すぐだ！」
滑るように地面へ落ちた後、頬を押さえて痛がるギャリーは歯を剥き出しに、部下へ叫んだ。途端に海賊たちが武器を握り直し、怯えながらもルフィ目掛けて駆け出す。
先に攻撃しようとしたのはサーベルを持った男たちだった。
剣を振り上げて襲い掛かってくる集団に対し、ルフィは両の拳を構えて待ち受ける。足を開いて立ち、腰を落として姿勢を低く、睨む目つきで敵を見据える。
一斉に駆けてくる集団を目にして、ギャリーはほくそ笑んでいた。自分を殴りつけた生意気なガキ。この人数を相手に生き残れるはずがないと。
そんな瞬間に、その場を奇妙な光景が包み込んだ。
バサリと大きな音。宙を舞うのは白い何か。
目を凝らせば紙であることはすぐにわかった。小さな紙片が群れとなって空を舞っている。それらは道端に置かれた本から離れ、独りでに動き出しているかのようだった。
誰もがその光景に目を奪われる。
全員の動きは止まり、攻撃は一時的に止められていた。
「なんだ……紙？」
「これは、一体」
ルフィやシルクもまた見惚れていた。ただの紙が空を舞う。美しくもあり、不思議でもあるその景色は世界広しと言えどそう簡単に見れる物ではない。
紙が舞う景色の中、ある時突然景色が晴れた。
視界を阻害する群れは消え、代わりに空中で紙がいくつもの束を作り、矢のように武器となる。
穂先は全て海賊たちに向いていて、空中でぴたりと止まり、狙いを定めるかの様子。持ち手のいない無数の武器に狙われる現状はなんとも恐ろしいもの。あまりに不可解で、あまりに理不尽。ギャリーを

含む海賊たちはただ怯えるばかりであった。
全ての武器が、一斉に放たれる。
海賊たちへ飛来したそれらは数多の悲鳴を生み出し、肌をわずかに削って血を噴出させた。
放たれた多くが甲高い音を立てて地面へ突き刺さった。傷ついた者たちはその場に倒れ、武器を取り落として動けなくなる。しかし不思議とギャリーは無事だったらしく、攻撃の範囲に入っていなかったのか、尻もちをついた彼の目の前には突き刺さっているものの怪我は一つもない。
また甲高い悲鳴が響いた。
ギャリーが発する声を聞いて微塵も表情を変えないルフィは、気配を感じ取って背後を見る。
やはりと言うべきか、想像した通り、ルフィの背後ではキリが平然と立ち上がっていた。
「あーっ！　キリィ！」
「勝手に殺さないでくれる？　ちゃんと生きてるよ」
ひらひらと宙を舞う紙を周囲に置いて、微笑むキリが辺りを見ていた。
この光景は彼が生み出したものなのだろう。無慈悲な攻撃、神秘的な景色、ゆらりと動かされる右手で操られているように見える。その姿は不思議なものだった。
それを見て初めてルフィは気付く。
カナヅチで、何の変哲もない紙を操る人間。彼も能力者だったのだ。
ルフィの視線に気付いたキリはくすりと笑い、指先を動かして自分の手元に紙を集める。
「ペラペラの実の紙人間。ご覧の通り紙を操る能力だよ」
「すんげぇーなぁ～。キリも能力者だったのか」
「別に隠してた訳でもないけど、紙がなければ大して何もできない能力だからね。その代わりこれだけ紙があれば大抵のことはできるよ」

キリが指を回せば宙に浮いていた紙の束が群れとなり、同じ動きで空を駆ける。調教された動物よりももっと従順な、無生物であって生物にも等しい見事な動き。見ているだけで存外面白い能力で、いつしか先程の怒りも忘れてルフィの目が輝いていた。

くるくると回る紙の群れに意思などない。キリの意思によって動かされているだけだ。

その動きが見事。おどけるような紙の動きにルフィの笑い声はさらに大きくなった。

「あっひゃっひゃ。いいなぁその能力。肉とか作れねぇかな？」

「作っても材質は紙だよ。本物なんて作れないから」

「そっかぁ。それじゃあ惜しい能力なんだな。せっかく作れそうなのに」

「何を基準に惜しいんだろ。食事のための能力じゃないんだから」

彼らがそうして話していると、同じく驚いた様子のシルクは剣を下ろしている。

「すごい……」

ぽつりと呟かれた声は誰の耳にも届かない。

決着がつくのはあっという間だった。

倒れたと思ったキリが動き出してすぐ、その場に居る海賊たちは倒れ伏し、死んだ者など一人もいないが戦闘のための気概はへし折られていたようだ。気絶した者だって一人もいないが、それでも武器を拾い上げようとする者どころか、動き出そうとする者さえ一人としていない。

勝ち目などないとさえ思っていたのに場はたった数秒で治められた。

加えてルフィの一撃。数多の人間をくぐり抜けてギャリーだけを殴り飛ばした、ゴム人間としての性質を利用した攻撃を見た後だ。どちらも普通の人間ではないと当然気付ける。

想像もしていなかった状況に言葉を失い、シルクは呆けて立ち尽くしていた。

相も変わらず平然と話す二人の会話を聞いていて、徐々に気分を落

ち着けていく。
「でもなんで無事だったんだ？　さっき撃たれたはずだろ」
「相変わらず大事なことを後回しにするよね。まぁいいけど……特別なことは何もしてないよ。ただ紙で受け止めただけ」
「紙で？　受け止められねぇだろ」
「それが悪魔の実の能力だよ。鉄みたいに硬質化させれば銃弾だって受けられる。ほら」
左手に持った小さな紙切れ。へにゃりと折れるその中央には確かに潰れた銃弾が張り付いていて、硬い鉄板に衝突したかのような結果が見て取れた。
紙を硬化させて防いだ。れっきとした証拠である。
わかっているのかいないのか、笑顔のルフィはひとまず頷いていた。
「へぇ。なんかすげぇんだなぁ」
「本当にわかってる？　それなりに凄いこと言ったと思うけど」
呆然とする面々を置き去りにのんきな声だけが聞こえている。どう見ても異様な光景であった。
しばし動けずにいた海賊たちだが場の空気に耐え切れず、怯えながらも立ち上がると武器さえ拾わずに逃げ始めようとする。だがギャリーだけは諦めの悪い様子でピストルを構えた。
「チクショー！　なんなんだてめぇらは！　おれ様が誰だかわかってんのか！　懸賞金五百万ベリーの大海賊、三日月のギャリー様だぞ！」
「知らねぇな。そうなのかキリ？」
「五百万じゃ大物とは言えないね。イーストブルーの相場で言えば大物は一千万ベリーを超えてから。そんなに大したことないよ」
「なにを～っ！」
銃口は舐めた口を叩くキリに向けられた。目視で理解したルフィは射線上に入る。
庇うような立ち姿である。
仁王立ちしたルフィは真っ向からピストルに向かい合った。

「もうキリは撃つなよ。さっき死んだのかと思ったからな」
「やかましい！　ガキどもが好き勝手言いやがって、一体何のつもりだ！」
「おれたちは海賊だ」
帽子を押さえてルフィが笑う。
ピストルにも全く怯えず、逆にギャリーが気圧されていた。
「海賊だとぉ？　何を言い出すかと思えば、海賊はガキの遊びじゃねぇんだぞ」
「遊びじゃねぇよ、昨日から海賊だ」
「昨日からぁ？　尚悪いわ！　海賊のなんたるかを知らんガキどもが偉そうにしやがって。理解しちゃいねぇんだろう、本物の海賊の恐ろしさを！」
引き金にかかった指が力を入れる。ルフィの様子は変わらない。
「ええい、野郎ども！　船に戻って砲撃準備を始めろ！　この町ごとこいつら消してやる！」
「やめなさいよ！」
ギャリーがルフィを撃とうとした時、静止したのは厳しい表情のシルクである。剣を下ろした状態で無警戒にギャリーへの歩を進め、銃口を向けられたところでやっと足を止めた。直線距離にして五メートル。銃弾が放たれさえすれば間違いなく当たるだろう位置だ。
恐怖心など一切なく、全て消し去ってシルクが厳しい目で彼を睨む。
本物の海賊と睨み合っても視線は外れず、体の震えはいつしか止まっている。それだけ覚悟が固まっていたということだろう。
バタバタと騒がしく船へ戻る部下たちをそっちのけに、危険な空気が漂った。
「あなたたち、もう十分でしょ。帰って。二度とこの町に来ないでよ」
「小娘ぇ、誰に向かって物言ってんだ？　おれァ海賊だぞ」
「海賊でもなんでも、この町を傷つけていい理由なんてない」
「バカ言え。おれたちに法は適用されない。おまえらのルールも適

用されない。つまりおまえの命令を聞く理由なんざ一つもねぇってことだ」
ぐっと歯を食いしばったシルクが眉間に皺を寄せて、再び剣を構える。
サーベルとピストル。どちらが勝つかは簡単に想像できるため、本来ならば退いてもおかしくないがシルクは逃げず、二人は対峙した。
当然ギャリーは力で彼女を黙らせようとし、引き金を引こうと力を入れる。
その瞬間にルフィが動き出していた。
「どいつもこいつも海賊を舐めてんじゃねぇよ！」
声と同時に容赦なくシルクへ向けて発砲された。キリが指の間に挟んだ紙を投げようとした時、すでに動き出していたルフィが素早い動きでシルクを抱きとめ、横跳びで弾丸を回避する。二人はごろりと地面を転がって無傷。空を駆けた弾丸は通りを横切って家屋の壁へ突き刺さる。
麦わら帽子がふわりと宙を舞った。
転がるように動いたせいかルフィの頭を離れた帽子は風に乗ってギャリーの足元へ運ばれる。チッと舌を鳴らす彼は無事な二人を視認し、忌々しげに地団太を繰り返した。
しゃがんだままで体勢を整えたルフィとシルクは互いの様子を確認し合う。
「ふぅ。危ねぇな」
「あ、ありがとう……」
「チクショー！　なんなんだこいつは、化け物め！」
ダンダンっと地面を踏みしめる強い音は何度も聞こえていた。そちらを見るのは何ら不思議なことではなかったが、ギャリーの姿を見た途端、なぜかルフィの顔が一瞬で強張る。
彼の目は今まで見た事がないほど鋭くなり、わかりやすく怒気が放たれた。
「おい！　やめろ！」
「あぁ？」

「その帽子は、絶対に踏むなよ」
即座に立ち上がって拳を握り、血相を変えてギャリーを睨みつけた。その様子に驚きを隠せないらしく、キリもシルクも、睨まれたギャリーと同じく呆けた顔を見せる。
言われてやっとギャリーの目が足元の麦わら帽子を見つけた。
踏むな。確かにそう言われたのだ。
理解して、ギャリーの顔がにやりと歪む。
「なんだ？　そりゃあ、これを踏めって言いたいのか？」
「おまえ……それを踏んだら、絶対に許さねえぞ」
「おやおやぁ？　急に目の色が変わっちまったじゃないの。どうかしちゃったのかなぁ？　もしも間違えてこれを踏んじゃったら、君はどうなっちゃうんだろうなぁ」
「やめろっ！　踏んだらぶっ飛ばすからな！」
「どう見ても薄汚えただの帽子だがな。そうかそうか、そんなに大事な物なのか」
「やめろォ！」
町中へ響くほどのルフィの絶叫も空しく、振り上げた足が、強かに麦わら帽子を踏みつけた。
帽子はいとも容易く形を変え、無遠慮なギャリーのブーツの下。
激しい怒りに見舞われたルフィは咄嗟に駆け出し、拳を振りかぶってギャリーへ突進する。しかし狙い澄ましたかのようなタイミングで船からの砲撃が始まり、辺りを轟音が襲った。
飛来する砲弾。怒りに支配されながらも一瞬そちらへ注意が逸れた。
町を守るという約束。言い換えればそれはシルクのお宝を守るというものだ。走りながらもわずか数秒、確かに彼の脳裏にその言葉が浮かび、視線は頭上へと向かう。
船から放たれた砲弾は町を破壊しようと迫っていた。
宝のピンチにシルクが悲鳴を上げた時、動けない彼女の代わりとばかりキリが動いていた。
独りでにふわりと動き出す紙は彼の手の中で束となり、まるで剣の

ように細長く連なって形を得る。見た目はただの紙の集合体であってもピンと伸びる姿はまさしく鉄製の真剣そのもの。手の中でくるりと回されても紙片が離れることはなかった。

「鉛紙」

武器となった紙は硬質化されて剣となり、キリの手から投げられ、飛来する砲弾へ向かう。軌道を読んだ上で投擲。両者は空で激突し、その地点で大爆発を起こした。

再びの轟音。粉塵と共に小さな紙片が舞い落ちる。

視界の変化に伴い、咄嗟に足を止めていたルフィは再度ギャリーの姿を探すが、すぐには見つからず。気付けば彼は今の一瞬で素早く移動していたようで、出航して港を離れようとする船へ飛び乗っていた。外装にしがみつき、ひどく間抜けな姿で町を振り返る。

「ギャッハッハッ、ざまぁみろバカどもめ！　勝った気になるなよ！　こうなりゃ町ごとおまえらを消してやる！　おいクソガキ、おまえのその古臭い麦わら帽子も大砲で木っ端微塵にしてやるからなァ！」

「あんにゃろ、いつの間に」

帆を開いて風を受け、船はぐんぐん島から離れていく。けれど攻撃をやめる気はない。誰にも手出しできない位置から一方的な襲撃を始めるつもりだ。

歯噛みしたルフィは帽子を拾い上げ、己の頭にかぶる。

すでに決意した目を見せており、戦闘が終わったとは思っていない顔だった。

キリが彼らの下へ駆けつけて声をかける。

「二人とも大丈夫？」

「ああ、ありがとなキリ。……追いかけるぞ。あいつおれの帽子踏みやがって」

「む、無理だよ。船は海の上だし、それに大砲だって……」

怒りを露わにするルフィや冷静なままのキリとは違い、か細い声でシルクが呟く。今になって不安に苛まれているのか、顔色は変わって指先が震えている。

無理もない。生まれて初めてピストルを向けられ、発砲された。ルフィが助けなければきっと死んでいただろう。強烈に感じた死の恐怖に心が折れかけて視線が泳いだ。
シルクの異変に気付きつつ、ルフィは厳しいとも思える態度で彼女を見た。
「無理じゃねぇよ。まだ終わってねぇ」
「相手は、本物の海賊なんだよ。本当に私たちを殺そうとしてる……さっきだって、死んじゃうかと思って。このままじゃ町も……」
「おれたちだって海賊だろ」
「でもあいつらとは違うじゃない。船もないし、大砲もない。あなたたちは確かに、あいつらより強いかもしれないけど、もう戦う方法なんてないでしょ」
「じゃあ諦めるのかよ。おまえの宝があるんだろ」
「それは……」
俯くシルクは言葉を失くし、己を恥じながら唇を結んだ。
それでも尚見捨てるつもりはなく、ルフィは帽子を手に取り、無理やり彼女へかぶらせた。
「任せろ。全部おれが守ってやる」
帽子をかぶったシルクはゆっくり彼の顔を見上げ、にこりと笑う様子を目にする。
「落としたら困るからな。おまえが持っててくれ」
「あっ……う、うん」
頷く彼女を見た後で、隣に立つキリへ向き直ったルフィは表情を引き締め直す。
準備するかのように腕を回して、妙に力のある目を見せた。
「キリ、さっきので砲弾落とせるか？」
「何発かなら。でも紙が無くなったら一巻の終わりだよ」
「じゃあその前に決着つけてやる」
振り返る二人は海上へ出て横っ腹を町に向ける帆船を見つめる。
準備は完了、といったところか。場の空気が変わったように思える。

それぞれが別々に動き出そうとしたその時、町を滅ぼすべくついに砲撃が始まった。

ピースメイン

砲撃音が町を襲った。
海上で足を止めた帆船は次々砲撃を行い、雨あられとばかりに砲弾を町へ送り込む。海から放たれる轟音は町の奥地にまで届き、多くの町民たちを恐怖のどん底に陥れていた。
甲板では部下たちを焚き付けるギャリーが騒がしく、上機嫌に叫び続けている。
「ギャッハッハ、どんどん撃てぇ！　生意気なガキどもに海賊の恐ろしさを教えてやれぃ！」
砲撃音に紛れて叫ぶ声は部下たちへ届いて、絶え間なく砲撃が続けられる。しかしある時、一人の男が騒がしいギャリーへ歩み寄って報告した。
「しかし船長、なんか空中で撃墜されてますが」
「あァ!?　なぜだ！」
「さぁ。なんかに当たってるみたいですけどねぇ」
上機嫌で攻撃をしていたはずだが、実情は成功していなかったようである。
騒ぐのをやめて、慌てて駆け出したギャリーは望遠鏡を手に町の方角を眺める。
宙を舞った砲弾は空中で爆発していた。その周囲では小さな何かが舞っているのが見え、それが砲弾と激突し、落としているらしい。
詳細は不明だが攻撃が失敗しているのは事実。
喜びから一転怒りを露わにするギャリーは、歯を噛みしめてギリギリと鳴らした。
「ぬぁんだあれはッ!?　全然届いてねぇじゃねぇか！」
「へぇ。どうやらそのようで」
「何寝ぼけたこと言ってやがる！　もっとじゃんじゃん撃て！　あいつらを吹き飛ばすんだ！」
尚も攻撃の手は緩めず、砲撃は続けられる。
空から降ってくる砲弾を目にし、それらを防いで町を守るのは紙を

操るキリだった。ペラペラの実の能力により、繰り出されるのは紙の舞。鉄の硬度を手にした紙は彼に投げられた末に砲弾と激突し、いくつもの爆発を繰り広げて、かろうじて町を守り切っているようだ。
いまだ被害はなく無傷。それがいつまで続くかはキリではなく、ルフィにかかっている。
ある家屋の屋根の上。仁王立ちするルフィは眼前の塔を目にして納得したように頷く。
算段はついている。己の体はゴム。その性質を利用すれば、少々の距離など問題なく詰められるはずだ。かつての経験を思い出してイメージは完璧に出来上がる。
「よし。ここなら行けるな」
距離の目測に問題はない。
覚悟を決めて両手を伸ばしたルフィは塔の外壁を掴み、ぐっと指先に力を入れた。
「ゴムゴムのォ～……ロケット！」
屋根から足を離し、伸ばされた腕を縮める反動で空へ飛び出す。塔の頭上を飛び越えた彼は驚くべき速度で宙を飛び、一直線にギャリーの船へと向かった。
砲撃は相変わらず続いている。
砲弾が飛び交う空を飛ぶことは危険も伴ったが、彼は微塵も恐れてはいなかった。砲弾が来たのなら対応するだけの方法がある。なにせ彼はゴム人間。
空中に居る最中、正面から砲弾が来ることを視認したルフィはにやりと笑う。
「しっしっし。ゴムゴムのォ～風船！」
考えを止めることなく大きく息を吸い、すると見る見る体が膨らんでいって、ゴムの腹はまるで風船のよう。一瞬の内に外見はまるで別人のように変貌した。
丸々太った体は的を大きくしただけにも見えたが、勢いよく迫った砲弾を腹で捉え、柔らかく受け止めたことで爆発させることなく跳ね返す。

敵の攻撃をそのまま反射させて、敵船へと送り返した。
そうして直撃する。
ギャリーの船はメインマストへの砲撃を受けて激しく動揺していた。折られることはなかったが損害は甚大。誰もが狼狽するのも無理からぬ状況だったようである。
「どうしたぁ!? どこからの攻撃だァ!」
「わ、わかりません。いきなりどこかから飛んできて……」
「海賊か!? 海軍か!? とにかく犯人を探せ! 急げてめぇら!」
騒がしくなった甲板へドスンと大きな物音。
船員が走り回るそこで違和感を覚えたギャリーは船首へと目をやり、そして気付く。
いつの間にかそこには腕を組んで立つ笑顔のルフィが居た。
「ゲ!?」
「ゲじゃない。ルフィって名前がある」
軽く跳んで船首から降りたルフィに、恐れおののいたギャリーがたたらを踏んだ。
忘れてはいけない。彼の拳が確かに自分に届いたことを。並み居る屈強な男たちを避けて正確に殴られたのだ、ギャリーの頬はまたその痛みを思い出すかのようですらある。
威風堂々の立ち姿。
頬を緩めるルフィはギャリーを見て口を開く。
「ギャリーって言ったよな。よくもおれの宝を踏みやがって」
「た、宝だと? ふざけんな、宝ってのは金銀財宝のことを言うんだ。あんなカビ臭ぇ帽子のどこが宝だってんだよ」
「もういいよ。おれもおまえを許すつもりねぇし」
気軽な様子でにっと笑い、一見すれば敵意のない顔。
ルフィは柔らかな姿勢で言い切る。
「なぁギャリー、おまえの宝はこの船か? おれもおまえみたいに思いっきり踏んでやる」
「あァ!? 何ふざけたこと言ってやがる……!」
「この船を踏みつぶす」

穏やかだというのになぜか体が震えるほどの迫力を感じる。馬鹿馬鹿しいと思うのに、不思議と頭の片隅には彼ならば本当にやりかねないという危機感があった。
半ば反射的に体を震わせながら、それでも気丈にギャリーは叫ぶ。
「ば、ば、ばかなことを言うなっ！　やれるもんなら――！」
「やる」
ルフィが左足に体重をかけ、右足を動かし始めた。
左足一本で立ち、唐突に右足が空へ向かって伸ばされる。勢いは凄まじくびゅんと音が鳴るほどで圧巻の一言。数十メートルに及ぶほど足は天へと近づいた。
踏み潰すと彼は言った。きっとそうなのだろうと空を眺める。
もはやギャリーを始めとした海賊たちに言葉はなく、為す術もなく、訳もわからず彼の行動を見つめるばかりで、逃げ出そうという気概さえ生まれない。
ルフィは気合いを入れて一気に足を振り下ろした。
「踏み――つぶすっ！」
砲撃音さえ敵わないほどの大轟音。
天高くから振り下ろされた足は確かに甲板を踏み砕いており、帆船は真っ二つに折られた。
ほんの一瞬の出来事である。
敵襲からわずか数十秒。会話もそこそこに、たった一撃、船は確実に沈められようとしていた。
船上は当然大混乱となっていた。
船体が割れたことで船員、大砲、その他あらゆる物が海へ落ちて行き、悲鳴が止むことはない。
その中で一足先に船首へ避難したルフィは片腕を伸ばし、素早くも彼を掴んでいる。衝撃で海へ落ちかけたギャリー。彼の胸倉を掴んで無理やり引き上げ、自分の前まで連れてきた。
「どうだ、参ったか」
「ひぃぃっ!?　クソ、化け物め！　なんだってこんなことに……！」
「おれの宝と仲間に手を出すからだ。海賊なら、どんな時でも命を

懸けろ」
「何をっ、ガキしかいねぇルーキーどもめ！　おまえに海賊の何がわかるっ」
「さぁね。ただおれは、おれの大事なもんに手ぇ出したおまえをぶっ飛ばしたかっただけだ」
胸倉を掴んで釣り上げていたギャリーの体を、思い切り上へぶん投げる。突然の行動に意味を見いだせなかったギャリーは悲鳴を発するも、落下の最中、ようやくルフィの意図に気付く。
両手が後方へ伸ばされ、何かを準備する様子。
これはまずいと必死に四肢をバタつかせるのだが空中で動けるはずもなく、そのまま真っ直ぐ落下していくのみ。助けを乞おうと口を開いても聞き入れてもらえそうにはない。
さらに焦りは増していく。
「ゴムゴムのォ――」
「ぎゃああっ、待て待て!?　おいどうだ麦わら、おれと手を組まねぇか！　海賊やるんなら色々教えてやれるぞ！　おれならおまえの役に立てる！」
ギャリーが自身の正面まで落下してきた時、伸ばされた両手が高速で前方へ突き出される。
凄まじい速度の掌底。
両手によるそれはギャリーの腹へと突き刺さった。
「バズーカァ！」
「ぐぼほぁっ!?」
強烈な一撃を受けて、ギャリーの体は彼方まで吹き飛ばされてしまった。
これを見たルフィはにやりと口角を上げ、バチンと勢いよく戻った腕でわずかに体勢を崩す。
「どうだ。思い知ったか、変なひげ」
体勢を立て直すため周囲を見やり、はたと気付く。
船を踏み砕いてやろうと決めたのは自分だった訳だが、よくよく考えれば決めた本人はカナヅチである。悪魔の実を食べた者は例外な

く海に嫌われて泳げなくなるのだ。
ルフィが泳げるはずもなかった。
つまり今、もし海に落ちれば彼は二度と上がってこれない。
笑みが消えてしまい、命の危機を感じる。
船は今にも沈もうとしている。彼が乗っているのは船首部分、甲板を含む他の部分はすでに海へ沈んでいて、今からでは小舟を探すというのも不可能。
絶体絶命だと理解した。
急激に取り乱し始めたルフィは自身の頭を抱え、思わず絶叫した。
「あーやべぇ～!? おれ泳げねぇのに！ 小舟、小舟とかねぇか！」
慌てて水面を見渡すも使えそうな物はなく。せいぜい割れた船体の破片が漂っているだけだ。
あれでは乗った瞬間に沈んでしまう。そう考えるのは当然で、ルフィはさらに焦りを募らせた。
「どうしよう、このままじゃ沈んじまうぞっ。キリは泳げねぇし、落ちたらもう――あっ」
バキッ、と軽い音。
気付けば船首がぽっきり折れていて、自然とルフィの体は宙へ投げ出されていた。
悲鳴を上げる暇もない。重力に従って落下していき、海面が迫る。
まずい、と歯を食いしばった時。
不思議な浮遊感を感じ、直後にがくんと体が揺れた。なぜか落下は止まっていて宙に浮遊するかのような、しかし冷静に考えればシャツの襟首辺りを掴まれて吊り下げられているようだ。
訳が分からず、頭上を見上げる。
目にすることができたのは体長が彼の倍はあろうかという巨大な白い鳥。
嘴がルフィのシャツを銜えていて、首をかしげてさらに見ていると覗き込む影が視界に入った。
途端にルフィの顔がパッと輝きを取り戻す。
「キリィ！」

「ま、こうなるとは思ってたよ。考え無しに動いてそうだったしね」
鳥の背に立つキリと目が合い、状況が理解できたらしかった。
紙を操る能力で鳥の傀儡を生み、大きな音を立てて翼を動かし、空を飛んでいるのである。その姿は圧巻であって羨ましいほど格好いい。
想像もしなかった姿に好奇心は膨れ上がり、吊られるルフィは元気に動いて笑みを振りまいた。
「すんげぇなぁこれ。どうやったんだ？　これも能力なんだよな」
「あんまり動かないでよ。言っとくけど今落ちたらボクじゃ助けられないから」
「あ、そっか。いやぁしかし助かった。ありがとなキリ」
「いいよ、これくらいならお安い御用だ。ただ次からは逃げる算段もつけてて欲しいけどね」
翼を動かして鳥は旋回し、体の向きを変えると町の方向へ戻り始める。
どちらも只者ではなかった。
帆船を踏み抜いて破壊するゴム人間も、紙を集めて空を飛べる紙人間も、見ているだけで度肝を抜かれる光景が続き、言葉を失うのも無理はない。
空を飛んで帰ってくる二人を見て、シルクは驚愕して立ち尽くしていた。
静かに想うのは彼らがすごいということ。並びに、自分は何もできなかったということ。
町は今も無事な姿で、海賊が来たとは思えない状態。それは嬉しい事実であるのだが、もしも彼らが居なかったらどうなっていたのか。想像するのも難しくない。
戦いを終えて被害がなかったことを嬉しく思いつつ、自分の無力さを嘆いてしまう。
手にする剣の柄を強く握って唇を噛み締める。
嬉しいはずが笑顔は浮かべられず。困惑した顔の彼女はふと視線を落とした。

落ち込み、考え込もうとした矢先、背後から声がかけられた。振り返ってみると多くの町民たちが居て、手に手に武器らしき物を持ち、せいぜいが箒やフライパンといった日用品ばかりだが、先程とは違って意を決した顔つきでそこにやってくる。
あっと声が漏れた。
皆、戻ってきてくれたのだ。自分たちの町を守るために。
動揺は徐々に消え去り、ようやくほっと安堵して笑みが浮かべれる。どうやら見知った顔を見て安心できたらしい。その場に力なくへたり込んで座ってしまい、震える指が剣から離れる。その様子に町民たちは彼女が怪我をしたと思ったのか、大声を発しながら駆け寄って来た。
「シルク！　大丈夫か！」
「どうした、怪我したのか?!」
「もう心配いらないぞ。おれたちも戦う。この町を、海賊の好きになんてさせるもんかっ」
どう見ても頼りになりそうな体つきではなかったが有難い話ではある。
微笑んだシルクは左手で震える右手を押さえ、嘆息する。すると町長が彼女の傍へしゃがんで目線の位置を合わせ、心配そうに尋ねた。
「シルク、大丈夫か?　怪我はしていないようだな」
「うん、ありがとう……もう大丈夫。全部終わったから」
「終わった?　だが」
「彼らがやってくれたの。海賊たちはもう、この町には来ない」
視線を動かしたシルクが見る方向、町民たちも確認する。
バサッという音を伴って大量の紙切れが降ってくる。その中から二人、件の少年たちが身軽な仕草で着地した。
飄々として無傷の外見。町民たちは驚きを露わにする。
「ま、まさか、彼らが本当に……?」
「船がどこにも見当たらないぞ」
「それじゃあ、終わったのか……」
着地して早々、不思議そうな顔を見せるルフィは小首をかしげた。

「あり？　なんでおっさんたちが居るんだ？」
「そりゃこの状況を見たらわかるでしょ。一応武装してるっぽいし」
「あぁ、そういうことか」
キリが囁けば納得いったとの表情。
うんうん頷き、軽快に笑った。
「町長のおっさん、もう終わったぞ。おれがあいつら沈めといた」
「ほ、本当に……なんとお詫びすればよいか……！」
ルフィへ数歩寄って地面に膝をつき、頭を下げる。深々とした土下座で声は揺らいでいた。
「ありがとう、本当にありがとうっ。感謝のしようもないっ。君たちが居なければこの町はどうなっていたことか……！　君たちに対する非礼を詫びたい。そして、感謝しているよ」
「いいよ。おれたちが勝手にムカついただけだから。なっ、キリ」
「ムカついてたのはルフィだけだと思うけどね。まぁいいよ、それで」
「ぜひお礼をさせてくれないか。こんなちっぽけな町ではできることも限られるが、できる限りのことはしたい。なんでも言ってくれ。我々に準備できるものはなんでも用意しよう」
「ほんとかぁ～？」
舌を出して笑うルフィは腹を空かせているらしい。横顔を見てなんとなく次の言葉を予想できたキリは、ハァと静かに嘆息する。幸か不幸か彼のことがわかるようになったらしい。
「じゃあ肉くれ。おれ腹減ったんだ」
「ちょっと待った。もらえるんなら船が先でしょ。足がなければこの島からも出られないし、海賊だってやれないよ。肉ならまた買えばいいから」
「そうか。じゃあ船と肉くれ」
「やっぱり肉は外せないんだね」
嘆息するキリとは裏腹に、パッと笑みを浮かべた町長は快く頷いた。

堂々とした催促に気を悪くした様子はない。海賊の襲撃を終えて安堵しているのか、目の前の彼らが海賊だと名乗ったことはすっかり忘れて、体の良い略奪にも簡単に頷いたのである。

ようやく状況を理解してわっと盛り上がる町民たちと共に、ルフィもまた元気に騒ぎ始める。

さっきまでとの様子も違って仲良くなるのは一瞬。すぐに楽しそうにしている。

呆れるやら感心するやら。

苦笑するキリは笑顔の人々の隙間をくぐり抜けてシルクの下へ歩み寄った。座り込んだままの彼女へ手を差し出し、手を取ってゆっくり立たせる。

「ありがとう」

「気にしなくていいって。ルフィが勝手にやったことだし」

「うん、そうだけどさ……あ、そうだ。ルフィの帽子」

「そういえば返してなかったっけ。まぁ、でも」

ルフィへ視線を送った二人は彼の背中を目で追う。

町民たちを伴って町へ向かい、楽しげにしている姿。

キリはすでに理解しつつあるが、戦闘時との変化が凄まじく、シルクは多少驚いている様子。先程の気迫はまだ脳裏に焼き付いているため、その変化は無視できなかった。

「宴だ～！」

町民たちを引き連れて、先導を取って宴を始めようとする男。まさに海賊、といった風情か。享楽的な思考は出会ったばかりの人間さえも巻き込んでしまうようだ。

ぼんやりするシルクはそっと帽子に触れる。

今日、二組の海賊に出会った。一組は町を襲撃しようとする海賊、もう一組は彼らを打ち倒し、船と肉を対価に町を守った海賊。どちらも確かに海の無法者だ。

ずいぶんと姿は違っていて、胸に抱えた感想はそれぞれ違った。

ルフィとは裏腹に落ち着いた風貌のキリの隣に立ち、シルクがぽつりと呟く。

「あのね」
「ん？」
「思い出したの。昔おばあちゃんに聞いた、海賊の話」
宴を始めようと駆け出す一同を眺めつつ、静かに語られた。
昔を懐かしむような、何か特別な想いを感じる声。
ひどく穏やかで澄んだ声だと思った。キリはルフィの背を見つめながらそれを受け止める。
「今からずっと昔。まだ海賊王が居なくて、大航海時代が始まっていなかった頃、海には二種類の海賊が居たんだって。町や商船を襲って略奪するモーガニアと、そいつらをカモに冒険するピースメイン。どっちも海賊王が死んで大航海時代が始まるまで存在していたって」
「あぁ、聞いたことあるよ。そんなに詳しくはないけどさ」
「あなたたちは、ピースメインみたいだね。そんなつもりないかもしれないけどそう思ったの」
今となっては夢物語のような海賊の話。
過去、世界に存在した海賊は二種類に分けられていたという。
キリもその話には詳しくなくとも聞き覚えがあった。
私利私欲に従って略奪行為を繰り返すモーガニア。
そのモーガニアを標的に航海するピースメイン。
時代が変わったのは海賊王が生まれた頃。
ただの無法者であった海賊に一人の王者が生まれ、世界の秩序が乱れた。略奪者を狩る側だったピースメインまで王者を目指して乱暴を始め、海賊としてどれほど名を上げるか、それ一つのみが重要視される時代が作られる。王が時代を変えたのだ。
以来、海賊王は時代を変えた男として善悪様々な意見を持って高名となった。
ずいぶん古い時代の話を持ち出す。話を聞きながらキリは首をかしげる。
突然何を言い出したのだろう。不思議に思うが、軽く頷いて納得した。
「私、あの話が好きなの。海賊が富や名声に縛られてなかった時代。

特に、ゴールド・ロジャーの冒険譚。あなたたちの姿が、なんとなくあの話を思い出しちゃって」
「ピースメインか……今となってはどれだけの人が知ってるか。でも、いいんじゃないかな。シルクがそう思ったんならきっとそうなんだよ」
「いいの？　勝手に意見を押し付けたみたいだけど」
「ボクらは別に、善人でも悪人でもどっちでもいいから。ボクらがどんな人間か、どんな海賊かは見た人が勝手に決めてくれればそれでいいよ」
「ふぅん。そういうものなのかな」
くすりと笑うシルクの声を聞きながら、キリは想う。
ゴールド・ロジャーの冒険譚。世界的に有名な、嘘か本当かわからない話。語られるのはほんの一部で、真実を知る者は世界でたった数人だと語られている。
この先も航海を続ければ、海賊王の足跡を辿ることもあるのだろうか。
考えてみてわずかに微笑み、こちらへ駆けてくるルフィを待った。
「ピースメイン、海賊王、ゴールド・ロジャー。なんか、この先の航海が楽しみになってきた」
「そう？　そういえば、キリの夢って何？　ルフィは海賊王になるって言ってたけど」
「ボクは――」
肩をすくめておどけるように。
今は一切の迷いを持たず、心からその言葉を口にすることができた。
「ルフィを海賊王にする。それがボクの夢だよ」
「海賊王に……そっか。二人とも、夢があるんだね」
「キリ！　シルク！」
草履で地面を蹴る軽い音。一直線に向かってきたルフィは二人へ飛び掛かった。
肩に手を回して上機嫌に笑みを見せ、二人に抱き着いてたたらを踏

ませる。
驚くシルクは倒れかけるもルフィに支えられ、キリは仕方ないとそんな彼を支えていた。
「おまえら何やってんだよ、宴やるんだぞ？　早く行こうぜ。肉も作ってくれるってよ」
「ルフィ、危ないから。いきなり飛びつかないでくれるかな」
「しっしっし、おまえら遅いからよぉ。ほら、みんなも待ってるんだからな」
「あ、そうだルフィ」
ルフィがぐいぐいと強く腕を引っ張り始めた頃、シルクが頭の帽子を手に取る。
間抜けな顔で振り返った彼の頭にかぶせてやれば、幸せそうな笑み。
「お宝、ちゃんと返したからね」
「おう。守ってくれてありがとな、シルク」
「え？　いや、守ったっていうか……」
「ほらほら、肉だぞ！　海賊と言えば宴だ！」
自由気ままな船長に手を引かれて、町の中へと入っていく。危機が去ったことで笑顔を取り戻した町民たちが快く彼らを迎え入れ、宴が始まる。
彼の言葉に戸惑いを持つシルクは眉根を寄せて困るも、苦笑したキリに声をかけられる。
「こういう人だから。あんまり考え過ぎない方が身のためだと思うよ」
「う、うん。そう、かな」
急激に賑やかになっていく町へ入り、三人もまた宴へ参加した。
ルフィが先頭で一番に楽しみ、最初は部外者だと戸惑いを抱いていた者たちも、彼の陽気さにあてられて次第に盛り上がりを見せるようになったようだ。
昼の頃に始まった宴は夜まで続き、深夜に差し掛かる頃まで大盛況を見せていた。

DEPARTURE

盛況を博した宴は深夜を迎える頃にはすっかり鳴りを潜めて、人々は片づけもほどほどに家へと帰り、眠りに就いた。町全体が静かになった後、明かりが無くなった街並みは満月によって照らされている。どこか幻想的にも見える光が島に降り注ぎ、家々を浮かび上がらせていた。

自身の家に戻ったシルクは、窓ガラス越しに満月を眺める。

祖母と共に住む家は二階を宿屋としつつ、一階は簡易的な酒場。彼女たちが住むのは二階にある角の部屋で、室内にはベッドが二つ並び、二人で暮らしている。

窓側に置かれたベッドにパジャマを着たシルクが座り、もう片方にはセツヨが寝ていた。

静かな寝息が聞こえている。きっともう眠ったのだろう。だがシルクはいつも通りには眠れず、妙に寝つきが悪くてベッドに寝転ぶことにさえ疲れていた。

仕方なく月を眺めながら考える。

今日は大変な一日だった。遭難していたルフィとキリを拾ったことに始まり、海賊たちの襲撃と戦闘。それが終われば経験したことのない規模の宴だ。

大変だったと思う。しかし終わってみれば案外楽しいものだった。

興奮冷めやらぬといったところか、はたまた別の要因か。

不思議と浮かない様子の、寂しげに見える表情のシルクは物憂げに月を見つめる。

月の見え方さえ変わってしまったかのよう。大きなそれが不思議な力を放っているようで、その光がどこか奇妙にも思えて目が離せなくなりそうだった。

今夜ばかりは眠れる気がしない。その理由がわからないのが厄介だ。今までも眠れない夜は経験したことはあるが理由がわからないなど初めてである。

ちらりと背後を振り返ってセツヨを見るが、穏やかに寝ている。な

んとも言えない鬱憤を相談できそうな雰囲気ではない。起こすのは躊躇われたためずっと一人で悶々と悩んでいた様子だった。
小さく溜息をつき、立ち上がる。
ベッドを離れたシルクはパジャマ姿のまま部屋の扉を開けて廊下へ出た。眠れそうにない時は時折こうしている。港が近いため海を眺めることが習慣となっていたのだ。
階段を下りて一階へ。裏口から外へ出ようとした時、ふと酒場の方から声が聞こえた。
盗人というわけではないだろう。時間を気にしてか声は潜められていたが、覚えのある声だ。宿の中に居るのは今日ばかりは主人の二人だけではない。
なぜか足音を消し、ゆっくり近付く。
壁に背を預けて忍ぶように、角から酒場のスペースを見た。
席につき、小さなランプの灯りに照らされるのは、やはり客人たる二人だった。ルフィとキリがまだ起きていて何やら話しているらしい。
ほっと胸を撫で下ろした。
とりあえず不審者ではないことに安堵し、頬を緩ませて彼らの下に行こうとする。ただ、彼らが話している言葉が聞こえた一瞬、なぜか足がぴたりと止まってしまった。
理由はよくわからない。
彼女は壁際に隠れたまま話を聞こうとしたようだ。
「海賊なんてあんなもんだよ。町を襲って何の罪もない人を傷つけ、宝を略奪して、何の責任も取らずに逃げ出す。シャンクスみたいに良い海賊なんて滅多に存在しない」
静かに語るキリの声だ。ランプの炎に照らされた彼はルフィの麦わら帽子を持っていて、糸と針を使って修繕しているらしい。穏やかな表情が確認できた。
対面に座るルフィはテーブルに顎を置き、だらしない姿勢。
どちらも昼間より落ち着いた様子に見えて少し奇妙な空気を感じる。そのせいか、シルクは声をかけることを戸惑い、隠れたままで彼

らの話を聞く羽目になってしまった。
二人はシルクに気付かないまま話している。
「今は世界中に海賊が居るだろうけど、大半があんな連中。そりゃ一般市民に好かれないよね」
「うん。おれもそう思う」
「幻滅した？　今ならまだ引き返せるよ。冒険したいだけなら、海賊じゃなくても冒険者になればいいわけだし。海賊やめるなら懸賞金もかけられてない今だけがチャンスだ」
外見の様子よりよっぽど真剣な話をしているらしい。
息を呑むシルクは慌てて口元に手を当て、存在感を消そうと躍起になる。
海賊だと名乗ったのは今日の昼のこと。それが今、三日月のギャリーと戦った後でこの先のことを話している。あれだけ楽しそうにしていた二人の真剣な声を聞いて邪魔してはいけないと思ったのだ。海賊をやめるか、続けるか、きっとこの場で決まるのだろう。
穏やかながらも緊張感のないルフィは平然と答えた。
「いいよ。おれはこれがいい」
何ともあっけない返答だった。虚をつかれて驚いてしまう。
真剣な話題だろうにここまで悩まないものか。
眉をへの字にして困惑するシルクだが、一方で予想していたのか、キリはくすくす笑うだけ。驚いてはいないし、ルフィの言葉を否定する気もなさそうだ。
「海賊になりたくて海に出たんだ。おれはおれがなりたい海賊になるぞ」
「それもそうか。じゃあルフィがなりたい海賊って？」
「うーん、そうだなぁ……やっぱり宴がしてぇな。さっきも楽しかったじゃねぇか」
「らしいと言えばらしいけど、それだけ？　あんまり海賊っぽくはないなぁ」
「バカだなキリ、海賊は歌うんだぞ。そんで宴をするんだ。冒険した後に宴したら楽しいだろ。おれはそういう海賊になるんだ」

「具体性があるんだかないんだか。まぁいいよ、それで。そっちの方がルフィらしいってわかってきたから。冒険とケンカと宴が肝だね」
声は穏やかだがやり取りは昼間とそう変わらなかった。相変わらず二人の仲は良さそうで、聞いているシルクまで微笑んでしまうような気楽な空気。
自然と肩の力が抜けてくるのがわかる。
悩みが消えたというわけではないが、それでも先程よりマシだった。
どうしようと思う。二人の会話に参加するか、それとも部屋へ戻るのか。
考えるシルクの耳にまた二人の声が聞こえた。
「そう言えば、シルクが面白いこと言ってたよ。ボクらがピースメインみたいだって」
「ピースメイン？　なんだっけそれ。どっかで聞いたなぁ」
気になる言葉を耳にした。部屋に戻ろうかとも考えたシルクは動かずに耳を立てる。
「昔の海賊の呼び名だよ。大航海時代が始まる前、海賊はモーガニアとピースメインの二つに分かれてた。海賊王が生まれた後はすっかり廃れた呼び名だけど」
「あぁ、思い出した。シャンクスの船の副船長から聞いたんだ」
「海賊を狩る海賊。ボクらがそのピースメインに見えたって」
「へぇ～。いいな、おれも好きだぞピースメイン」
窺い見ればルフィがからから笑っているのが見える。
悪い気分ではないらしい。それどころか上機嫌そうだ。
盗み聞きを悪いとは思いつつ、続きが気になって今更離れることはできそうになかった。
「目指す海賊はピースメインってこと？」
「いんや。それは違う」
「あれ？　そういうことじゃないんだ」
「おれがガキだった頃にさ、マキノが言ってた」

あっけらかんと言うルフィにキリが小首をかしげた。唐突に出てきた名前に戸惑ったのだろう。疑念を露わにしてすぐに質問していた。

「ルフィ、マキノって誰？　突然言われてもわからないよ」

「フーシャ村の酒場の店主だ。いっしょに副船長の話聞いてたんだけどさ、ピースメインのこと聞いたら言ったんだよ。ヒーローみたいだって」

「まぁそう見るのも仕方ないかもね。海賊を倒すわけだし」

「そうじゃねぇ。いいか、ヒーローと海賊は別物なんだ。おれだってヒーローは好きだけど、海賊になりたいんであってヒーローになりたいわけじゃねぇ」

「んん？　それどういうこと？」

「たとえば肉があるだろ。海賊は肉を食って宴をするけど、ヒーローはそれを困ってる奴に分けちまうんだ。おれは肉を食いてぇし宴だってやりてぇ。だからヒーローにはなりたくない」

「あーなるほど。ほんとぶれない人なんだね」

力なく笑うキリはわかっているのかどうかさえ怪しいが、妙に力が抜けているのは確か。ただ話を聞き流したという訳ではない様子に思える。

少し俯き、ぽつりと呟いた。

「海賊は海賊、か」

「ああ。海賊は自由なんだぞ。でもヒーローは窮屈だ」

「あはは、確かに。好き勝手やれる分、ボクも断然海賊が良いかな」

小さな、それでいて無邪気な笑い声が広がる。

暗闇に包まれた酒場はシルクにとって見慣れた場所なのに、今だけはあの二人の世界。

楽しげに海賊のことを話す二人を中央に置き、支配しているわけでもないというのに独特の空気を放って、混じる物を許さない何かを感じさせる。

まるで自分と彼らとの距離を感じさせるようで。

立ち尽くすシルクは彼らから視線を外し、自身の前方にある闇を見

た。
海賊は海賊。
町を襲うギャリーたちやモーガニアも、海賊を倒すピースメインやルフィたちも、どちらも変わらず同じ存在。今まで考えたことはなかった。どこか別物に思っていた節もある。
彼らは海賊で、自分はただの町娘。
唐突に虚無感を感じてしまう自分が居て不思議に思う。そうだ、と思い出した。仲間になると言って、仲間だと認められて、どこかで安心している自分が居た。けれど自分が海賊になったという自覚はなくて、明日がどうなるかも見えていない。だから今日は眠れなかったのだ。
自分は海賊なのか、この町の一員なのか。
しばし俯いて考えるがもやもやした感情が胸の内を占める。ますます表情は苦しげになって、唇をきゅっと強く結んだ。果ては両目も閉じてしまう。
視界が無くなって暗闇の中。鮮明に声が聞こえてきた。
「シルクは、どうするかな」
キリがルフィへ問いかける声だ。
シルクの目がパッと開き、彼らを見ずに耳を傾ける。
自分でもなぜかはわからないが胸の鼓動が高鳴っていた。おそらく動揺していたから、驚きを隠せないのだろう。その一言にひどく緊張してしまっている。
よく覚えている。ルフィに向かって仲間になると言ったのは彼女自身だ。
海賊として海へ連れ出されても文句を言えないことは理解している。ただ問題なのは、自分がそれを望んでいるのかいないのか。それがわからなくて思い悩んでいて、今もまだ結論を出せずにいるだけ。ひょっとしたら彼の一言で何かが変わるのかもしれない。
期待と不安を胸にルフィの一声を待った。すると平坦な声が聞こえる。
「それはあいつが決めるよ。おれたちと来るか残るか、自分で決め

ればいい」
果たして待ち望んだ答えであったか否か。
金槌で頭を殴られたような衝撃を覚え、シルクは呆然と思考を投げ打った。
当然、二人はシルクが聞いていることを知らないためその後も止まることはなく、ただ思うがままを口にする。聞こえてくる言葉は間違いなく彼らの本心だった。
「来たいならくりゃいいし、残りたいならここにいりゃあいいだけだ。強制はしねぇよ。海賊は自由で、誰かに命令されるもんじゃねぇだろ」
「よく言うよ。ボクのことは無理やり連れ出したくせに」
「それはおまえが海賊やりたがってたから」
「確か断ってたはずだけど」
「いいや、海賊やりてぇって思ってた。おれの目は節穴じゃねぇぞ」
「ハァ、じゃあそれでいいよ……まぁ、今にして思えば、間違ってないと思うしね」
何を言われるかもわかっていなかったが想像と違って、ちらりと二人の姿を確認する。
姿勢はさほど変わっていない。あくまでも気楽そうな体勢だ。
「シルクは自分で決めるさ。おれたちの仲間だからな」
「ここに残るかもしれないのに？」
「それでも仲間に変わりねぇだろ。あいつが仲間になるって言って、船長のおれが認めたんだ。おれの船に乗っても乗らなくてもこの先ずっと仲間だ」
「ふむ、間違ってはないのかな。そういう考え方もあるんだね」
ルフィの言葉に驚きを抱く。
そしていつしか、シルクの目は輝くように喜びを表していたようだ。
出会ってたった一日。きっかけは町の存亡を懸けた一大事だったが、言い出したのはただの勢いで口走ってしまっただけ、自分自身でも本当に海賊になる覚悟があって言った訳ではない。彼はそのこと

に気付いているのだろうか。
きっと知っているだろう。シルクに覚悟があるかどうかなど。
それでもルフィはシルクを仲間だと認めている。その声に、言葉に、目に嘘はない。
遠目ながらにその声の温かさを知ったシルクはきつく拳を握りしめる。
迷っていたはずなのに、心は驚くほど穏やかになっていた。
「明日には自分で決めてる。おれはそれを聞くだけだ」
「信頼してるんだねぇ。出会ったばっかりでよくそこまで言えるもんだ」
「しっしっし、おまえだっていっしょだろ？　シルクのこと仲間だって認めてるじゃねぇか」
「まぁね」
二人の言葉に胸が熱くなる。同時にもやもやした感情が溶けていくようだった。
ふぅと小さく息を吐いて落ち着こうとする。
確かに迷いは晴れた気がする。だからといってこのまま決定してしまうのは違うように思えて、一度冷静にならなければと考える自分が居た。
また、ルフィが話し出す。
「でもシルクの宝はここにあるから、ひょっとしたら来ねぇかもな」
「その時はどうする？」
「別にいいよ。無理に言ったって仕方ねぇし」
「そうだね……来るとしたら、彼女がこの町以外の何かを求めるか」
「そうだな。なんか欲しいもんがあったら来るかもしれねぇ」
修繕が終わったのか、キリが麦わら帽子をルフィの頭へかぶせた。
彼は抵抗も恥じらいもなく、嬉しそうにそれを受け止める。
和やかな空気。それを間近に感じながら、シルクは思案する。
部屋へ戻ろうと人知れず決めた。
最後にちらりと二人の姿を確認して、足音を消して階段を上る。
物思いに耽るせいで少し危なげな足取りだったが、無事に部屋まで

戻り、音を立てないようゆっくり扉を開けて中へ入り、同様に静かに閉める。
セツヨは気付かず寝ていたようだ。その寝顔を確認してから自身のベッドへ戻ろうとする。
その時、部屋の片隅に置かれた剣が視界に入った。
海賊を追い払うため、毎日振るって訓練を続けてきた。けれどいざその時が来ると自分は何もできずに、外からやってきた海賊の少年たちに助けられただけ。果たしてあの戦いで自分は何ができただろうか。無傷で良かったと安堵するのは町民としての態度。しかし自分はそうではない。
はたと気付いた様子で、シルクの視線が上がった。
「そっか」
納得できた気がする。どうしてもやもやしていたのか、なぜ迷っていたのか。それはきっと自分の在り方に違和感を感じていたから。思考はきっと入れ替わっていた。
ルフィに向かって強く訴えたあの瞬間、すでに生き方は変わっていたのだ。
壁に立てかけられていた剣を取り、抱きかかえるように持ってベッドへ腰掛ける。まるで子供のようにそのままごろりと力なくシーツに全身を預けた。
暗い部屋の中で天井を見つめる。
迷いはある。幼い頃から過ごした町と部屋だ。寂しさはあって、親と想い続けたセツヨを一人にしてしまうことに恐怖さえ覚える。けれど、どうしようもないほど胸が高鳴っていた。
この衝動を止めるのは自分にとっても、きっとセツヨにとっても失礼になってしまう気がする。
全ての点が今繋がり、線になった。
乳飲み子の頃、海賊の手によって置き去りにされた。
幼少期、海賊の冒険譚に憧れた。
成長するにつれて、海賊という存在を強く意識して、町を守るために剣の腕を磨いた。

考えてみれば簡単なことだ。彼女の人生においてその存在は強烈に根付いて、いつだって無視できないものになっている。意識せずとも生まれた頃から常に関わりがあった。

今なら奇妙なほどに納得できて、心中は穏やか。

シルクは天井を眺めたままぽつりと呟いた。

「おばあちゃん。起きてる？」

返答はない。きっと眠っている。

けれど今なら届く気がして、今しか言えないとも思って、今言いたいという気持ちがあって。

シルクは静かな声ながら強い意志を持って言った。

「あのね……私、決めたよ」

端的な言葉。説明らしい説明はなかった。

それでいいと思う。それ以上言う必要はないと思えて、彼女は目を閉じた。

今なら眠れる気がする。胸の中のもやもやは消えて気分は晴れやか。大きな喜びがあって叫び出したっておかしくないのに、自分で不思議に思うほど冷静で、妙に眠たくもあった。

シルクが穏やかな寝息を立て始めたのはそれからたった数秒後のこと。

剣を抱いたまま、布団もかぶらずに寝てしまっていた。

今の時期ならば昼間は暖かいが、夜になれば少し肌寒くなる。普段はきちんと布団をかぶっているというのに今日だけは、幼き日のようにお転婆な様子を色濃く出している。その寝顔も含めて、まるで本当に幼き日に戻ってしまったかのよう。

そんな彼女に気付いてセツヨがゆっくりと起き上がった。

起きた時にベッドの端から落ちてしまった布団を持ち上げ、丁寧にやさしく彼女へかけてやる。

剣を取り上げたりはしなかった。その様さえも、愛おしい。

あどけない顔で眠る彼女を見ても何も言わず、セツヨはただやさしく微笑んで、再び自分のベッドへ戻った。寝転んで布団をかぶりながら思う。いつかこんな日が来ると思っていたと。彼女の告白に決し

て驚いてはいなかった。
来るべき時が来たのだと受け止めて、セツヨも再び眠ろうと目を閉じる。
寂しくもあるが、懐かしくもある。
セツヨは笑顔のままで眠りに就いた。

＊

辺りが明るくなり始めた頃。町と海には霧が立ち込めていた。
まだ朝日は昇っていない。町は昨夜の疲れを残して眠り続けている。
その中で密かに起き出して動き出す影が二つあった。
やけに眠たげなルフィは大あくびを繰り返しながら宿の扉をくぐって通りへ立ち、その背後ではキリが金貨が入った袋を手の中で遊ばせ、自分たちが使ったテーブルへ置く。宿代と食事代のつもりだろう。世話になった量を考えれば足りなかっただろうが残していくことを決めたようだ。
まだ町民たちが起き出さない頃に二人は旅立とうとしている。
きっかけはルフィの一言だった。眠る前に早く冒険がしたいからとキリをせっつき、まだ十分な睡眠を取れていないものの、早起きして海へ出ようとしたのである。
しかし起きる時間になってみれば、眠気には勝てないのか、ルフィはだらしないままだった。今も足取りはふらふらと危なく、キリは溜息をつく。自分で言い出したのに、と不満を持ちながら歩み寄って隣に立ち、力を入れずに手でぺちぺちと頬を叩いた。
「ほらルフィ、しっかり起きて。楽しい楽しい冒険だよ」
「んん～、ねみぃ……」
「自分で言ったんでしょ。船で寝ることもできるから今は自分で歩いてね」
「うい」
昨夜話していた時や宴の時とはまるで別人。元気のない姿でとぼ

とぼ歩く。そんなルフィを隣に見ながら、比較的足取りに力があるキリは苦笑しながら見守った。
無人の町は閑散として人気を感じない。
空気は少し冷たく、それでやっと気を張ることができそうだがルフィには効かないらしい。
港は宿からほど近い場所にあり、昨日と同様にさほど時間もかけずに到着することができた。
船は昨夜の内に準備している。宴の最中、キリが船大工に会って話を通し、町を救った礼だとして無償で譲り受けていた。これも形を変えた略奪のような気はするが、ご厚意によるものなため、誰からの悪評も得ずに話を進められたのである。
譲り受けたのは五人が乗っても広々使える小型帆船だ。船室が一室のみあり、マストと帆もあるが小舟より少しマシになった程度の見栄え。やはり海賊らしさはない。
海賊旗の一つも掲げれば見栄えは変わるだろうに、あいにく今はその準備もない。
しばらくは海賊らしく見えない海賊として航海することになる。遠目に船を見つけたキリは教えるために眠そうなルフィの肩を叩きながらそう思った。
「ちゃんとあったよ。ボクらの船だ」
「んあ？　おーあれか。前よりでっけぇな」
「交渉したからね。と言っても一応気遣って小さめにしといたんだけどさ」
「ししし、まだ二人だからな。あれで十分だ」
「本格的なのはまた後々だね。良い船もきっと見つかるよ」
気楽な会話を続けながら歩いていると、霧に紛れながらも自分たちの船の上に誰かの姿が見えるようになった。小柄な人物が背を向けて立っている。
二人同時に首をかしげて眺めた。
他人の船で何をしているんだ、と思えば、その人物はくるりと振り返り、二人に顔を見せる。

驚きは二人の方が大きかった。
腰に手を当て、船の上で仁王立ちするのはにっと笑うシルクだった。
「こら。私を誘わずにどこ行くつもりだったの？」
「あ～っ、シルク！」
「ずいぶん早いね。ボクらも早過ぎたと思ったくらいだったのに」
怒る風を装っているがそうは見えず。笑顔ではつらつとしたシルクは喜びを噛みしめている様子だった。船を降りて二人の前に立ち、正面から見つめ合う。
昨日とはまた違った印象を受ける。その姿は何かを吹っ切ったように見えた。
迷いはすっかり感じられずに、ルフィとキリの方が虚を衝かれる。
驚きを見せる二人へ向けてシルクが言った。
「私、行くよ。海賊の仲間だもんね」
「いいのか？」
「お宝はここにあるんでしょ。一度航海に出たらいつ戻ってこれるかわからないよ」
「うん、いいの。もう決めたから」
見れば彼女の剣とリュックが一つ、船に乗せられている。
決意は固まっているらしく、今の彼女の目には迷いは見られない。
多くの言葉は必要なさそうだった。
ルフィは嬉しそうに笑って肩を揺らし、キリも同じくやさしく微笑む。
「さあ、出発しよ。もう行くんでしょ？」
「準備はもうできてるよ。町の人に手伝ってもらったから」
「うし。じゃあ行くか」
ルフィの号令に従い、三人は船へ乗り込んで出航準備を始める。
ぐるりと見回せば全貌が見えてしまう小さな船。キリが港と船を繋ぐロープを解いて回収し、シルクが手慣れた動きで帆を張った。
あっという間にすべての準備は整って、ルフィが大声で宣言する。
「よぉし、出航だァ！」

おおっ、と二人が威勢よく返答し、小さな海賊船は走り出した。
霧によって視界が悪い中で船はゆっくりと進み出す。先は見えず、目的地はいまだ定められていない。けれどその姿は威風堂々。迷いや戸惑いはなかった。
船が順調に走り出してからシルクが語り出す。
「ねえ。二人とも、自分の夢を持ってるんだよね」
「ああ。おれは海賊王に」
「ボクも同じく、かな。ルフィを海賊王にするために」
「そうだよね……私もね、考えたの。海賊になる理由」
船首の傍で座るルフィとキリを見つめ、床に座り、膝を抱えたシルクが告げる。
それは彼女自身の夢で、きっと二人を巻き込んでしまうだろう言葉。昨日ならば聞かせるのに戸惑ったかもしれないが今はそれがない。自信満々に堂々と言える。
その時の彼女の目は楽しそうに輝いていた。
「私は、ピースメインになる」
笑顔でそう告げると、二人の顔がきょとんと驚きを露わにした。
「ピースメインに？」
「そう。私、自分の町を守りたいと思って強くなろうとしてた。これでも結構強くなったつもりだった。でも、いざとなったら何もできなくてさ。きっと二人が来なかったら無茶苦茶にされてたと思う。それがなんだか悔しくて」
「いやぁ、やってみなきゃわからなかったと思うよ」
キリの返答に勢いよく首を振り、否定を示す。
きっと何もできなかった。彼女は強くそう思っているようだ。ならばわざわざ強く否定することもないかと思い、二人はまた口を噤んでシルクへ続きを促す。
「もっと強くなりたいの。でも強くなるだけじゃだめ。きっと私たちみたいに、町を海賊に襲われて、困ってる人たちがいっぱいいると思うから、そういう人たちを助けたい」
「海賊と戦って、ってことだよね」

「そう。だけど、ヒーローになるつもりはないよ」
突発的な発言に表情が変わった。
シルクはしてやったりとばかりににやりと笑って言い切る。
「私さ、海賊に捨てられてあの町の一員になったの。だからきっと海賊の子供。多分だけど、昔からずっとね、海賊になってみたいって思ってたんだ」
だから目指すのはピースメイン。
悪戯っ子のような気軽さで、ぺろりと舌を出しながら簡単に言い切ってしまう。
そんな彼女は存外可愛らしく、珍しくて、早々出会える人物ではない。
話を理解した途端、ルフィとキリは大笑いを始めた。目を細めて天を仰ぎ、我慢することなく笑い声を響かせる。静かな朝に広がっていく声は風に乗って走っていった。
変わった人物だ。だが気分が良い人間でもある。
仲間として共に航海するには十分な気概を持ち合わせているだろう。
海賊が好きで、憧れるだけの少年少女が三人。まだ実績はなく、船出したばかり。それなのに行く先は希望に満ち溢れているようで、ただただ期待で胸が膨らんだ。
ひとしきり笑った後、すでに二人は彼女を仲間と認めていた。
機嫌はさらに向上。不思議と三人の気は合うかのよう。
無邪気な笑みを浮かべる彼らはまだ若く、海賊とも名乗れぬ冒険者。しかしだからこそ進む先はあまりにも広く見えて、未知なる物ばかり。
それらを知りたいと望んで胸が躍り、互いに顔を見合わせ、果てのない海を見た。
「ししし、面白くなってきた。今度はどんな奴が仲間になるかな」
「さぁね。なんにしても退屈はしなさそうだ」
「ふふふ。なんだか楽しくなってきたね」
「よっしゃ。キリ、シルク、おれはやるぞ」

ルフィが一番先頭に立って立ち上がり、固く握った両の拳を天高く掲げた。
不思議なことに、その時になって霧が徐々に晴れ始めて、強い太陽の光が彼を照らす。
その背はきっと二人にとって忘れられぬものとなっただろう。
光に照らされたルフィは海に向かって大声で宣言した。
「海賊王に、おれはなる!!」
天から差し込む光と輝く海。辺りは白い霧で幻想的な風景。
三人になった小さな海賊団の航海は、静けさを保つ町、いつの間にかセツヨを先頭とした数多くの町民たちに見守られて、またも朝日の下で始まった。

海賊の宴

とある島に、一隻の船が停泊していた。
アヒルを模した船首を持つその船は、メインマストの天辺にジョリーロジャーを掲げており、一目で海賊船なのだということがわかるだろう。
幸いにと言うべきか、誰も近寄らない無人島を拠点とするのは辺りで有名な海賊団であった。こうして停泊して休息を取ることも少なくはなく、だから人が近寄らなくなったとも言えるが、今日は珍しく島内へ上陸して休息を取ろうとしていたらしい。普段はきれい好きな船長が野宿など好むはずもないため、自然の中で一日を過ごそうとしなかったはずだが今日は気分が違ったようだ。
海賊団の船長は女性である。
その首にかけられた懸賞金は５００万ベリー。〝金棒のアルビダ〟と言えばこの近海では誰もが縮み上がるビッグネームだった。
見た目は丸々と太った大柄な人物で、頬にはそばかすが目立ち、トレードマークだと言わんばかりに大きな金棒を手に持っている者こそ彼女である。
きれい好きでだらしない物が許せず、ミスをすれば手下でさえその金棒で殴りつけ、海賊らしいとも言える危険さを持ち合わせるため近隣の村々から恐れられていた。とはいえ、大した事件を起こすことはなく、せいぜいが略奪と称して近隣から金や食料を巻き上げるのみ。
自らを美しいと語って献上せよと要求する。それが彼女の日常だった。
イーストブルーの中ではそれなりに有名。しかし世界的に見れば名も広まらぬ小さな海賊団。
森の中でキャンプの準備をしているというのに、どこかギスギスとした空気を醸し出す彼らは、傍目から見ても何かに怯えていた。船長こそ知らないものの、その恐怖の対象が自分たちの船長だということは仲間内では周知の事実だったのである。
「きびきび動きなぁ！　夜が来る前には宴を始めたいからねぇ！」

「は、はいっ。了解です、アルビダ様」
大きな木の幹を背に、運ばれた椅子に座って腕組みをするでっぷり太った女性がアルビダだ。
彼女の指示で動く男たちは皆屈強な者たちばかりだが、この中に一人として彼女に勝てる者はいない。それだけ強いのだ。従って力に屈した男たちは蟻の如くせっせと働き、女王のご機嫌を取ることに必死。この状況に異論を唱える者など一人もいない。居てはいけない。
逆らう者には例外なく自慢の金棒を。力による圧政は明らかだった。
その虐げられる者たちの中に、一際弱々しそうな少年が居るのが、この一味の奇妙な点だった。
「おいコビー！　頼んだ物はまだかい！」
「す、すみませんアルビダ様っ。今すぐに……！」
少年の名はコビー。どう見ても海賊とは思えないひ弱そうな人物である。
背丈は小さく、中肉中背で鍛えられた肉体とは思えない。頭髪はピンク色で眼鏡をかけており、見るからに気弱だとわかる顔つきと仕草。アルビダに呼ばれただけで肩がびくりと跳ねていた。
彼女を恐れているのは明確な事実。そればかりか周囲の男たちにすら怯えている。
善良な市民だと言って疑われないだろう彼は、手に持つワインとグラスを彼女の下へ送り届け、媚びへつらうように恭しく頭を下げた。礼儀はなっているが気に入らないらしく、鼻を鳴らしたアルビダはひったくるようにしてそれらを受け取る。
椅子の傍に置かれたテーブルの上にグラスを置き、ワインの瓶を眺め始めた。
「まったく、あんたはグズだねぇ。もっと速く動けないのかい。いつまで待たせる気だよ」
「す、すみません。急いだつもりだったんですけど……」
「フン、どうだか。それにねぇコビー、あんた、またミスったね？」
「な、なにを、ですか」

「とぼけんじゃないよッ！」
アルビダは突然ワイン瓶をコビーへ投げつけ、咄嗟に頭を庇った彼の腕に当たって割れてしまう。中身が頭から上半身を濡らして、白いシャツが赤く染まってしまって、破片で肌を切ることはなかったがぶつけられた痛みが鈍く残る。
尻もちをついたコビーに対し、アルビダは立ち上がって怒り出した。
「アタシが持って来いって言ったワインと銘柄が違うじゃないか。とろいだけならともかく人の話すら聞けないのかい」
「ごめんなさい……で、でも、探したんですけど、見つからなくて」
「それでアタシを騙そうとしたんだね」
「ち、違いますっ！　もう船には残ってなかったので、代わりの物をお持ちして、きちんと理由を説明しようとしただけで、決してそんなことは――」
「それじゃあんたは何かい、アタシが人の話も聞けないと言うわけだ」
「そ、そんなつもりは……!?」
「良い度胸してるよ、おまえ」
金棒が振り上げられてコビーが反射的にきつく目を閉じる。しかしそれは振り下ろされず、代わりにアルビダの足が彼の頬を思い切り蹴りつけた。
小さな体が軽々飛んで激しく転がる。
体の至る所を地面へぶつけて、強かに打ったため鈍い痛みが全身を襲った。
両手で頬を押さえ、わずかに呻いて体を小さくし、コビーは必死に耐える。
なぜこんなことになったのだろう。なぜこんな目に遭わなければならないのだろう。
世界はなんとも理不尽で救いがない。これだけ辛い目に遭っても助けられることはない。
周囲からの嘲笑と侮蔑する視線を感じる。

なぜ、こんな目に。
そう考えても口に出すことはできず。
健気にも黙ったまま、うずくまって耐える彼に唾を吐きかけ、興味を失ったのか、苛立った様子のアルビダは再び椅子に座り直した。蹲っていつまでも動かないコビーを睨みつけて心配することすらない。早くそこから退けと冷たく吐き捨てる。
「無くなってたんなら近くの町から略奪してきな。あんた、自分がどの船に乗ってるかわかってるだろう」
「あ、アルビダ様の船です」
「そういうことじゃない。海賊船に乗ってるって意味さ。つまり、あんたも海賊なんだよ」
言われた言葉にコビーの肩がぴくりと反応する。
気付きもせずにアルビダは続けた。
「一人くらい殺せば少しは度胸がつくだろう。こいつを貸してやるよ。町へ行ってきな」
アルビダの手からぽんっと放り投げられたのは一丁のピストル。それがコビーの足元へ落ちて、勢いが止まらず靴に当たる。思いのほか軽そうだと初めて身近に感じて思った。
それが武器だということは知っていて、見た事だってある。しかし自分が持ったことはない。
持てと言われて体が震え上がった。
与えられた雑用ならば何でもやってきたが、まさか人を殺せと言われるだなんて。それだけは承諾できない。蹴られるのも雑用を任されるのも耐えられるが人殺しだけは。
襲い掛かる衝撃に耐えきれず汗が噴き出した。自覚した途端に痛みさえ忘れてしまう。明らかに呼吸が速くなって息切れを起こし、動いていないのに疲労や憔悴さを感じさせ、ついには顔色まで変わり始める。今まで感じていた物とは違う恐怖によって腕の震えが止まらない。
それでもアルビダは一度出した命令は引っ込めずに、歪んだ笑顔で彼への命令を下した。

「アタシが飲みたいワインの名は覚えてるね？　あんたが度胸を見せたらさっきの蹴りの分を謝ってやるさ。ただし、できないなんて言ったら――」
「できませんっ。略奪だなんて、しかも、ひ、人を、殺すなんてこと……！」
「だったらあんたが死ぬかい？」
ゆっくりとアルビダが立ち上がった。反射的にコビーの体が震える。
金棒を肩に担ぎ上げ、時を待つかのようにぽんぽんと肩を叩く。
振り下ろされれば死。
それで殴られた屈強な男が一瞬で意識を刈り取られる様を何度も見てきた。
恐怖はすでに植え込まれている。以前から構えられただけで全身が硬直して動けなくなる程度には恐れていて、自らの死を幻視してしまって背筋が震えた。
わざと歩調を遅く歩いて目の前に立たれる。
その姿を見上げたコビーはこの世の終わりを感じ、震え上がって声すら出ない。
凶悪な笑みを浮かべたアルビダが言った。
「何をやってもだめだが航海術はそれなりだったからねぇ。今日まではどんなミスでも見逃してきてやった。でもこの辺りの海はずいぶん航海したし、あんたが口答えするなら、生かしておくってのも癇に障る。ここらが潮時じゃないかい？」
「そ、そんな……！」
「何をやっても役に立たないグズだったんだ。せめて死ぬ時くらい逃げずに逝きな」
「ひぃっ!?」
金棒が掲げられて、無慈悲にコビーを見下ろす。
彼はこの瞬間、死にも等しい絶望を味わった。
周囲に助けを求めることもできず、自分の力でどうすることもできずに、死は確実なものとされていた。これを理不尽だと想いながらも

一番に責めるのは自分のこと。
なぜこんなことになったと考えながら、やはり原因は自分にあると知っていて。自らを殺そうとするアルビダや虐げてきた彼女の手下を恨むより先に情けない自分自身をきつく叱った。
もっとやりようはあったはずだ。賢く立ち回れば逃げることだってできたはず。
ほんの少しの勇気があったならきっと未来を変えられた。
やりたくもない海賊家業をやらず、自分の夢を追う未来だってあった。それを無下に捨ててしまったのは自分自身の勇気の無さ。怖がるばかりで一歩さえ踏み出そうとしなかったせいだ。もしも勇気があったなら、力はなくとも戦おうという姿勢があったなら。
自らの最期を感じ取ったせいか、後悔は尽きることなく胸の内から溢れ出して、彼の全身を一瞬で駆け抜ける。それは彼自身も理解していた。
もしもやり直せるのなら。恐怖の中で強くそう考えた。
アルビダの形相が変化して、力強く金棒がまさに振り下ろされそうとしたその一瞬。
「んまほーっ！　でっけぇ肉だなぁ～それ！」
救いであったか、破滅であったか。
その声が割り込んできて全ての時が止まった。
聞き覚えのない声に空気が変わり、誰もが言葉の出所を探して顔を動かし、視線を走らせる。知らない誰かが確実にこの広場に存在する。おそらく仲間の誰でもない者だ。
想像通り、部外者らしき少年はすぐに見つかった。
まず目についたのは麦わら帽子と、網の上でじゅーじゅー音を立てて焼かれる肉の塊を前によだれを垂らしている口元。この緊迫した状況下に颯爽と現れた理由は腹が減っていたからしい。コビーやアルビダには目もくれず、料理に精を出していたコックの隣に立っている。
振り上げた金棒はぴたりと止まって、そんな状況で能天気な質問がコックにぶつけられた。

「なぁなぁ、これってもう食えんのか？　やっぱ肉がいいよなぁ。うまそうだっ」
「は？　あ、あぁ、まぁできちゃいるが――」
「そうか！　いっただきまーす！」
骨についた肉を持ち上げ、がぶりとかぶりつく。思い切りが良くて見ている方が美味そうと思える姿だ。にんまり口角が上がって上機嫌な様子、この場の緊張感とそぐわない。
呆気に取られる一同はしばし彼の食事風景を眺める羽目となってしまった。
だが、何かがおかしいと気付いて時が正常に動き出す。
すぐさま近くの手下を見たアルビダは厳しい声で問いかけた。
「あれはいったい誰だい」
「さぁ、おれたちも知りませんぜ。どこから紛れ込みやがったのか」
「だったらなんでアタシらのメシを食ってんだい！」
「ひぃっ!?　お、おれに言われましても……」
一喝によって手下が怯えるが気にしてもいられず。
もはやコビーのことなどどうでもよくなったアルビダはその少年に向かって歩き出し、金棒で指しながら荒々しく声を発した。叫ぶようなそれは無視できずに二人の視線がぶつかる。
「ちょっとあんた、どこから来たんだい。人様の料理に勝手に手を出しておいてただで済むと思ってるのか。出すもん出せるんだろうねぇ」
「ん？　おれはルフィ。海賊王になる男だ」
「ルフィ？　海賊王？　ハッ、どこのバカかと思ったら大バカ者だったみたいだね。聞いたこともない海賊が、ご大層な夢語ってんじゃないよ」
「んーが。んまらっぴぃっぽぅ」
「食うのをやめねぇかぁ！」
いよいよアルビダの怒りが抑えきれないものとなってきた様子だ。思い切り振り下ろされた金棒が強く地面を叩き、めくれ上がった土が宙を舞った。

怯え始めたのは手下たちの方で、彼らは巻き込まれないようにと素早く動き出して広場を抜け、木々の陰に隠れ始める。アルビダの金棒にかかれば人体すらその地面のようになってしまうのは何度も見ている。威圧するには十分過ぎるほどの力があった。

そんな光景の中でルフィの食事は終わらず、ますますアルビダの怒りが大きくなる。

手首を回して金棒を振り回し、準備しつつも一歩ずつ彼に近寄っていった。

「海賊の物を奪うとどうなるか、知っておいた方がいいんじゃないかいルーキー。見たところあんた武器を持っちゃいないようだ。それでよく海賊王だと大口叩けたもんだねぇ」

「んびっ。おーほれぴぐっくもー」

「何言ってんだかわかんねぇんだよ！　ふざけた小僧だ、しつけが必要だね」

あっという間に骨付き肉を食べ終えたルフィの手は他の料理に狙いを定め、次々拾い上げて口へ運んでいる。網で焼かれていた、串に刺された肉や野菜も、刺身となって皿の上にあった魚も、好き嫌いはなく全て美味いと食される。

そのスピードは常人とは思えず目を見張るものがあった。しかし仲間でもない彼がそうすることに問題があって、この場においては感心するどころか怒りに火を注ぐばかり。

速ければ速いほどアルビダの額の青筋が目立つようになる。

ここから金棒を投げてやろうか。ルフィのスピードに耐えかねたアルビダが考えた。

ちょうどその時、意を決した様子のコビーが立ち上がって顔を上げ、一心にルフィを見つめて大声を上げた。全身にだくだくの汗を掻いていたがその声は辺りに木霊する。

「に、にに、逃げてくださいっ！」

「んあ？」

その一言に気付かぬはずはない。

アルビダの厳しい視線がコビーに向けられる。彼はそれだけで怯

えながらも口を閉じなかった。
「てめぇ、コビー……どういうつもりだい！　誰の味方しようってんだ！」
「アルビダ様、お、お願いです。ぼくのことはどうしてくれても構いません。ですから、どうか、あの人だけは助けてあげてくださいっ」
腰を折って頭を下げ、緊張と恐怖で脚が震えているのに、コビーははっきりと言い切った。
一度死にかけたせいか、開き直ったとも思える強気な声で、先程とは違う姿である。やけになっているとも言える。おそらく自分が何を口走っているかわからない状態でアルビダの視線を受け止めていた。そのせいで今にも失神してしまいそうなほど精神状態は危うい。
死ぬほど怖いと思っているのは嘘ではない。
しかし、今この時だけは退いてはならないと思っていた。
かつて自分が夢見たものはなんだっただろうか。今になって鮮明に思い出していた。
震えているのに強い声で、自分の意思を乗せてしっかりとアルビダに対して放つ。
ほんの些細な、殴られれば途端に潰される小さな勇気。
それはコビーなりの初めての抵抗であった。
「ぼ、ぼぼ、ぼくは、子供の頃から海兵になるのが夢だったんです。今の今まで、怖くて、何もできなかったけど……何の罪もない人が殺されようとしてるのに逃げ出したら、ぼくは本当に弱虫だっ。グズで役立たずで、あなたたちみたいな、海賊と同じじゃないですか！」
「コビー、てめぇ……誰に口利いてるかわかってるんだろうね」
「略奪も、人殺しもしません。いいえ、できないんです。ぼくはそれでいい。あなたたちみたいな海賊じゃないから……ぼくは、海賊じゃありません！」
肩を震わせ、額に青筋を浮かべ、激怒するアルビダに見つめられて尚コビーは退かなかった。
言うべきことを言うのだと強い意思を感じる。今までそんな彼を見た事がない。

ある瞬間、ふっと笑みを浮かべた。
唐突に表情が変わったアルビダはルフィへ向かう足を止め、代わりにコビーの方へ振り向く。なぜか奇妙なほどにやさしく見え、驚いたコビーの震えが止まった。
痛いほど握りしめていた両手も緊張感から解放される。しかしそれはわかっていないから。
やさしい眼差しでコビーを見るアルビダは、今まで一度も聞いたことがない声で語る。
「よく言ったねぇコビー。それがあんたの本音かい？」
「は、はい……」
「アタシにこき使われてたこの二年間、ずっとそう思ってたってことだね」
「は、はい……」
「そうかい。本当に、よく言ったじゃないか」
言い終えた途端、一瞬で形相が変わって、まるで鬼のよう。
噴き出すような強烈な怒りを感じ取ってコビーは卒倒しそうになった。表情を変えたアルビダに睨まれただけで脚の力が抜けて腰砕けになり、転ぶようにその場へ尻もちをついて動けなくなる。
かつてこれほど己の死を間近に感じたことがあっただろうか。
死の恐怖は先程とは比べ物にならなくて、あぁ、もうだめなんだと理解した。
嫌になるほど冷静になって彼女の動きがつぶさに観察できる。それが余計に怖い。いっそ楽に死なせてくれればいいのに、一歩一歩近づいて来る姿を見なければならないのは、心臓をぎゅっと痛くさせる。彼は大絶叫を上げながらアルビダから目が離せなかった。
「アタシに盾突いてタダで済むと思ってんのかよ！　人を舐めるのも大概にしなッ！」
「うわあああああああぁぁっ!?」
もう死ぬ。そう理解していた。
金棒を振り上げて走ってくる彼女から逃げることはできず、力が入らなくて立ち上がることさえできない。ここで死ぬのだ。後悔が残

る短い人生だった。
押し潰されそうな恐怖に支配されながら、けれどこれでいいのだと思う。
自分は言うべきことを言った。素直になって恐怖心に打ち勝ち、たった一瞬、されど確かに、ただの弱虫をやめて自分の意思を貫き通せた。あの一瞬だけアルビダに勝った。
悔いはない。叫びながらも自分に言い聞かせるようにそう想う。
（ぼくは言った！　言ったんだ！　アルビダに逆らうことができた！　ぼくは変わったんだ！）
アルビダの足が止まり、コビーの目の前で思い切り金棒を振り下ろし始める。
悲鳴は響き渡り、必死の絶叫は生きようとしているかのよう。
無慈悲に金棒は落下してくる。目をつぶることすらできなくなっていて、その光景を嫌でも見続ける羽目となった。自らの死をしっかり視認しようとしている。
しかし振り下ろされる最中、アルビダの金棒が吹き飛んだ。
彼女の後方から飛んできた何かに激突され、手からすっぽ抜けたのだろう。突如飛んだ金棒はくるくると回りながらコビーの傍を通って、頬を掠り、わずかに血を流させて飛んでいく。
キャンプの荷物に激突した金棒は重さのせいで地面にめり込み、もうもうと土煙を上げた。
コビーは泡を吹いて気を失った。精神の限界だったようで、体は大の字で倒れてしまう。
アルビダが気にするのはそんな彼のことではなかった。
何かがぶつかってきた。当たったのは金棒で彼女の手ではないが、衝撃から右手がわずかな痺れを感じている。強烈な勢いでぶつからなければそうはならない。
手下がそうするはずがないだろう。ならば考えられるのは一つ。
ゆっくりと振り向いたアルビダが見たのは、もぐもぐと口を動かし続けるルフィの姿。
周囲の手下たちは先程の光景を見ていたようで、いまいち理解でき

ていなかったアルビダに代わるかのようにぽつぽつと、口々に驚愕の光景を言葉にしていた。
「う、腕が、伸びたぞ」
「なんだったんだ、今のは……幻覚か？　いや、でも」
「アルビダ様の金棒は吹っ飛んじまったぞ」
「なんで腕が伸びるんだ――」
「そうかい、悪魔の実ってやつだね。そのシリーズを口にした奴が本当にいるとはねぇ」
手下たちが口々に言う話から推測し、アルビダがほくそ笑む。
楽観的な様子で食事を続ける姿は間抜けだが、腕が伸びたという話を信じる限り、彼は悪魔の実の能力者に違いない。どんな能力かはわからずとも厄介であることは確か。
おもむろに歩き出したアルビダはコビーの傍を通り過ぎ、気絶しただけの彼には目もくれず、飛ばされた金棒のところまで歩いて拾い上げる。
彼女の腕力にかかれば鉄さえ砕くこの金棒を殴り飛ばしたというのか。
実際に自分の目で見ていた訳ではないので信じ難いが、だとしたら驚くべき行為だ。
戦慄したアルビダはルフィを振り返り、能天気な表情の彼をじっと見つめる。
只者ではない。その顔を見て不思議とそう思う自分が居た。
「あんた、何者なんだい……？」
「うんん、んぐっ。さっき言っただろ。海賊だ」
食事の手を止めずに端的に言って、ルフィの目はアルビダを見ていた。しかし倒れたコビーを忘れたわけではなく、言葉だけで彼を指して言う。
「さっきは助けてもらったからな。今度はおれがそいつを助ける」
「助けた？　ハンッ、コビーのことかい？　とんでもない皮肉だね。こいつはビビッて気絶しちまっただけだ。あんたを助けてなんていない」

「でも逃げろって言ってくれたじゃねぇか。それで十分だ」
微塵も恐れを感じさせない、平然とした声。それが彼のまだ見ぬ強さを示すようだった。
黒々とした眼はアルビダを見つめており、敵と認識しているのかそうでないのか、何を考えているのかわかりにくい。ただ彼女を恐れず、怯えを持たずに見つめ合い、視線を外さずに時を過ごすなど振り返ってみてもきっと初めてのことだ。
なぜ、彼は彼女を恐れないのか。アルビダ本人が一番不思議に想う。
「おれは決めたぞ。そいつを守る。だからおまえら、そいつを殺したかったらまずおれを倒せ」
あくまでも両手を食事のために動かし続けながらそう言って。
「よし、どっからでもかかって来い」
こんがり焼けた骨付き肉にかぶりつきながら、ルフィは堂々とその場に立っていた。

アルビダ海賊団

森の中にあるキャンプ地とは少し離れた海岸線。
アルビダ海賊団の船、Ｍｉｓｓラブ・ダック号が停泊する位置からも少し離れて、船番として残っていた二人の男が海に向かって並んで立ち小便をしていた。
わざわざ船の傍を離れたのは、船体に引っ掛けでもしたらアルビダによって殴り飛ばされてしまうため。自らの船長を恐れたためである。
自分たち以外には誰も居ないそこで用を足しながら、話すのは己の船長についてだった。
「なぁ、どう思う」
「何が」
「何がじゃなくて、船長だよ。いきなりキャンプだなんっっちゃってどうしたんだ？　野宿なんて嫌いだし、虫が出たらブチギレるだろ、あの人」
「確かにな。ただの気まぐれなんだろ。これでキレなきゃいいんだが」
「最近、居辛くなってきたなぁ。今月だけで何人ぶん殴られて怪我したか」
「だな。このままこの船に居ていいのかねぇ」
「っっても金は手に入るし。そう簡単にやめちまうと後々苦労するぞ」
「あーあ。せめてキャンプじゃなくて町に入ってくれよ。そしたら女だって買えるのに」
怖い船長が居なければ出てくるのは文句や不満ばかり。
立ち小便を終え、船へ戻る最中も当然とばかりに言葉が止まらなかった。
「まったく割りに合わねぇぜ。船長もあれできついしよぉ。せめて絶世の美女とかじゃねぇとやる気も起きねぇってもんだろ」
「容姿が良いか、性格が良いかのどっちかは必要だろ。性格はきつ

くて体が丸いなんて最悪じゃねぇか。真逆だったら言うことなしだってのに」
「ハハッ、違ぇねぇ。性格だけでも丸くなってくれりゃな」
「まぁ言っても無駄だろ。おれたちの言うことなんざ聞く訳ねぇ」
「他所に移るかなぁ。それも無理だろうなぁ」
陸地と船を繋ぐ板を渡って甲板へ戻る。
男たちは別段やることもないため、欄干の脇へ座って酒瓶を持ち上げた。
船番が必要だと言ってもこの船を盗もうなどという輩はいない。懸賞金５００万ベリーは最弱の海と呼ばれるイーストブルーで破格の部類だ。
金棒のアルビダのマークに逆らう者が居るはずがない。
その船に乗る以上、そうした驕りも持っていた。
警戒心の欠片もなくまた酒盛りを始める。
ちょうど彼らが椅子さえ用意せず甲板に座った時だ。
誰も居ないはずの船で船室の扉が開き、何者かが現れた。
すぐに二人が気付いてそちらを見る訳だが、仲間の誰かが戻って来たのかと思えば全く違って、なぜか見知らぬ少年がそこに立っていて、きょとんとした顔で二人の顔を見ている。
しかも両脇には宝箱を抱えて。
どこからどう見ても明らかに泥棒だとしか思えなかった。
一瞬の静寂が重々しくあり、奇妙な沈黙の中で見つめ合う。
ある時、くすんだ色の金髪を持つ少年が宝箱を落とし、すっと両手を見せて唐突に言った。
「怪しい者じゃないですよ」
「どう見ても怪しいモノだろうがッ！」
「誰だてめぇ！　おれたちの船で何してやがる！」
どうやら逆効果だったようである。
キリが放った一言は男たちを怒らせただけで、途端に肩を怒らせた二人が武器を抜き、腰に差したサーベルを持って剣先を彼に向ける。
彼が誰であっても侵入者には違いない。武器を向けるのは当然

だった。
唐突に現れればその反応も当然であろう。キリは慌てず、至って冷静に声をかける。
「いや違いますよ。別に泥棒とかじゃなくて、ただどんな船なんだろうとちょっと気になっただけで、探検してたんです。あ、もちろん悪いなとは思いながら」
「てめぇが持ち出したそれは何だ」
「宝箱には見えますね」
「見えるじゃなくてその物だろうが！　すぐに降りろ！　さもねぇと痛い目見るぜ」
「言っとくがおれたちは素人じゃねぇぞ。泣く子も黙るアルビダ海賊団だ」
「アルビダ？」
「ウチの船長に決まってんだろうが。そんなことも知らずに乗り込んだのか？」
「船長はおれたち以上に怖いぜ。バレたらてめぇの首が飛ぶかもなぁ」
首を動かしてメインマストの頂点を見たキリは、そこに掲げられた旗を確認する。
マークは横向きのドクロにハートをあしらった珍しい形。しかしあいにくと覚えはない。つい最近手配書を確認したばかりだが、気にならないと無視してしまった可能性がある。
ともかく本物の海賊には間違いないようだ。
緊張感のないまま恭しく頭を下げた彼は二人に一礼し、おもむろに宝箱を抱え上げる。
「そうですか、それはそれは大変な失礼を……じゃ、失礼しまーす」
「おう。これに懲りたら二度と、ってこらァ！　それを置いてけって言ってんだよ！」
「盗む気満々じゃねぇか！　舐めてんのかガキ！」
あっさり去ろうとしたキリを止めるため、前に回り込んで道を塞いだ二人は改めてサーベルの切っ先を突きつける。間近に刃を感じ、尚

もキリの表情は変わらない。けれどようやく話を聞く気になったようで、やれやれと溜息をつきながらパッと宝箱から手を離し、二つを床に落とす。
床に当たった拍子に蓋がわずかに開き、中から数枚の金貨がこぼれる。中にはそれ以上の金貨や装飾品が詰められていた。二人が見た事もないほどの量である。
きっとアルビダの私室から盗み出してきたに違いない。彼らだって試した事が無いのに。
羨ましいやら腹立たしいやら、二人の声は当然厳しくなった。
「見ろ、中身も詰まってやがる」
「こいつを独り占めしようって腹だったか？」
「やだなぁ、そんなわけないでしょ。ただの勘違いですって」
「てめぇ、この期に及んでまだ言い訳するか」
「動かぬ証拠があるんだぞ。海賊から盗んで生きて帰れると思ってんのか？」
「ハァ、わかりました。正直に白状しましょう」
観念した、と告げて一言。
笑みを湛えて語り出したキリは甲板の上を優雅に歩く。
つられるように二人は剣を向けながらその足取りを追った。
奇妙な状況だが今は気にならず、キリの一挙一動に注意を向け、片時も目を離さない。
「実はつい最近、この辺りの海に来たある大物海賊が居ましてね。ボクはその部下。目につく宝は全て持って来いとの命令があったので、仕方なく忍び込んだ次第です」
「大物海賊？」
「バカ言え、ハッタリだろ。そいつの名前を言ってみろよ」
「聞かない方がいいと思いますよ。驚いて腰抜かすだろうから」
「言え」
やれやれと首を振り、端的な言葉で告げられた。
「赤髪のシャンクス」
聞いた男たちは目を丸々と大きくし、思わず剣を取り落としそうに

なる。
その名は知らない者がいないほどの大海賊。世界中に存在を知らしめる男だ。
嘘だろうと思い込んで聞いたというのにあまりにもビッグネーム過ぎて平静を保てなかった。名前を聞いただけでも焦りが生まれて、二人は顔を見合わせる。
嘘だったならばいい。だがもし本当だったなら。
赤髪のシャンクスは大海賊の一人だが噂が立つことも少ない。所在地は知れず、ナワバリの位置も不明。自由に航海する男だと広まっている。グランドラインの後半に居るという情報が最も有力とはいえ、だからといってそれが真実だと証明できる者はいない。
ここに来ていたとすれば大変な発見だ。
もしもの光景に想いを馳せた彼らは体の震えを感じながら、目の前のキリに再び集中し始め、半信半疑ながら先程よりも興奮した面持ちで真偽を問うた。
「う、嘘つけよ。赤髪がこの海に？」
「あり得る訳ねぇ。あんな大海賊がなんで最弱の海に」
「誰もがあり得ないと思ってるからこそ成功する偉業もありますよ。知っての通り彼は大海賊の一人で知らない人間の方が少ない。普段どこに行っても騒がれる人ですしねぇ、有名であればあるほど身を隠したくなる時だってあるんでしょ」
知った顔で話す彼は堂々としていて、語る声に力がある。唐突で信じ難い話なのにそれが妙に真実味を強めるようで、聞いていた二人は徐々に本当だろうかと思い始めていた。
さらに押そうとキリがしたり顔で言う。
「それにウチの船長はイーストブルーに思い入れがあるんで。色々あったけど時期を考えて前々から戻りたがってたんですよ。それがたまたま今回のタイミングになりましてね」
「なんだよ、その思い入れって」
「いやいや、これ以上部外者に情報を明かすのはちょっと」
「てめぇ、ここまで言っといて何をいまさらっ」

「だって今は脅されたから答えただけで、あんまりぺらぺらしゃべり過ぎてもねぇ」
「んだとぉ……」
「もちろん仲間に話すのは、何も問題ないんでしょうけど」
ひどくわざとらしい様子でキリが呟いた。さほど大きな声ではないものの、流し目で彼らのことを見やり、聞こえやすいようにはっきりと鮮明に告げた。
聞き取れなかったはずはない。二人の表情が変わる。
それはまさか、暗に可能性があると告げているのだろうか。赤髪のシャンクスの仲間になれる、そんな言葉に聞こえてしまった。きっと間違いではない。キリはそれを伝えようとしたのだろう。まるで二人に期待を抱かせようとするかのようだった。
不安よりも徐々に期待の方が大きくなり、疑いきれなくて表情は変わりつつある。
ひとえに自らの船長への不満を抱えていたせいだ。気に入らない奴は即座に殴って怪我人を何人も出し、部下を気まぐれに振り回して、見返りはごくわずか。不満を抱えるのは仕方なく、戦闘は少ないため楽ではあるが、その代わり心が躍るような出来事もずいぶん久しい。
船を乗り換えるチャンスがあるなら試してみる価値はある。
心は揺れ動いていて、冷静に考えたところで望む道は変わらなかった。
「まぁでも信じてない人にこれ以上言ってもなぁ。もうしょうがないか。うん、わかりました。じゃあボクは退散します。多分もう会うこともないでしょうけど――」
「ま、待て。本当なのか、赤髪の部下ってのは」
「今の話、マジなんだろうな」
「やっぱり信じてないんでしょ？　無理もないですよね。じゃ」
「おい待てって！　信じる、信じるから教えろよ！」
後悔も残さずあっさり帰ろうとするキリを押し留め、二人はついに彼に心を許した。

にこにこ笑うキリは手を伸ばす彼らに振り返る。
してやったりの顔が鬱陶しく感じるも、仕方ない。成り上がるチャンスをくれるというのだ。この機を逃す気は微塵もなく、大海賊の一味としておいしい想いをしたかった。
二人はへらへらと気色の悪い笑顔を見せ、やけに親しい様子で声をかけてくる。
「な、なぁ。さっきの話が本当なら赤髪に会わせてくれよ。じゃねぇとやっぱり信用しきれねぇってのもわかるだろ、な？」
「赤髪のとこに行くなら宝も持って行っていいからよぉ」
「そういうことなら、いいですよ。というよりもう近くに来てますけどね」
キリが背後を指し示しながら言うと、驚く二人は慌てて駆け出し、欄干へ身を乗り出して海を眺め始めた。見えるのはいくつかの島の姿と大海原。帆船どころか小舟一つ見当たらない。しかしそれでも本当なのかもしれないと思う心があって、視線をあちこち走らせる。
「どこだ？　どこにいるってんだよ」
「まさか嘘だったとか言わねぇよな」
「本当ですって。島の向こう側に隠れちゃったかな」
「どの島だよ、見えねぇぞ」
「ほら、あっちですって」
焦りを見せながら騒ぐ二人にキリが歩み寄る。
微笑みを見せたまま、害のなさそうな姿だ。
「どこなんだよ。おまえ、これで嘘だったら絶対たたじゃおかねぇ――」
片方の男が話している途中だった。突然、後ろからぐっと頭が押されて、力任せに船の外へ押し出される。身を乗り出していたのがまずかった。気付いた時には空中に居て、ぐるりと体が回転しており、頭から海に行く途上でキリの満面の笑みが見えた。
騙された、と今になって気付く。しかし気付いたところでどうにもできない。
二人は頭から海へ落ちて水柱を立てた。

船上では一仕事終えたとばかりにキリがふぅと息を吐く。
「よし、バカの始末は済んだ。上がってこない内にとっととずらかろう」
楽しげな笑顔のまま小走りで駆け出し、放置していた宝箱へ駆け寄る。落ちた衝撃で散らばった金貨も拾い上げて箱の中へ詰め、気合いを入れて二つを小脇に抱えた。
見た目で想像していたより重い。それだけ中身が詰まっているということだ。
箱を抱えて立ち上がったちょうどその時、開きっぱなしだった船室から誰かが出てくる。
宝箱を一つ抱えて現れたシルクはすぐにキリを見つけ、不思議にそうに見つめた。
「キリ？　さっきから騒がしかったみたいだけど、何かあった？」
「いや大丈夫。それより早くここから離れよう。ちょっと厄介なことになるかも」
剣を腰に提げて、宝箱を持ち直しながらシルクがキリの傍まで歩いて来る。
海賊稼業を始めると決めた以上、彼らが金を手に入れ、日々の生活を送るためには略奪するしかない。そのために海賊船を見つけて盗みに入ったのだった。
初めは抵抗を見せたシルクも仕方ないと納得した様子。
それでも何かを想うのか、ずっしり重い宝箱を持ち、物憂げに溜息をついていた。
「なんか想像してたのとは違うなぁ。海賊って世知辛いんだね」
「そりゃ海賊だって人間だから。生活費稼がなきゃいけないし普通に買い物だってするよ」
「でもまさか略奪するなんて」
「ピースメインだって略奪するよ。町を襲わないだけモーガニアよりはマシってだけ」
「それもそっか……うん、でも大丈夫。私も強くなるって決めたからね」

「要は慣れだよ。海賊だっていう自覚ができればもうちょっと変わるだろうからさ。今は多少我慢してもらうしかない」
和やかに話しているが危機感がない訳ではなく、キリは先にシルクを船から降ろそうとする。
しかし海に落ちただけで無傷の人間がいつまでも泳いでいるはずがなく。
「それより早く逃げないと、面倒なのが戻ってくる――」
「待てやコラァ！」
激しい水の音がすると同時、船体をよじ登って来た二人の男が甲板へ戻った。振り返るシルクは状況が読めずにきょとんと目を大きくし、キリは溜息をつく。
どうやらすっかり怒らせてしまったらしい。
目がギラついて危ない雰囲気に、剣を持つ手に不必要なまでに力が入っている。
これはただでは済まなそうだと思って、いっそ頭を殴っておくべきだったかと反省した。そう考えるキリは普段と変わらず緩い表情のままで、だからこそ男たちの怒りはさらに燃え上がる。
悪びれるどころかのほほんと間抜けな顔を見せるなど、舐められているとしか思えなかった。
状況が読み取れず、シルクだけは眉をひそめて困惑している。
「ひょっとしてこの船の人？　すごく怒ってるみたいだけど……」
「遠くを見たがってたから押してあげたら、海に落ちたんだ」
「ふざけんな！　おまえがおれたちを騙して突き落としたんだろうが！」
「ふざけやがって、てめぇただで帰れると思うなよ！」
「ちょっと考えればわかることだと思うけどなぁ。海の皇帝って呼ばれてる赤髪のシャンクスがそう簡単にイーストブルーに来るわけないでしょ。来たとしたって盗みなんかまずしないって」
「て、てめぇ！」
力のない声で言ったキリに反応し、男たちは肩を怒らせて駆け出した。

即座に反応したのはシルクである。おそらくキリが何かしたのだろうとは予想したが、流石に剣まで持ち出されては見過ごせない。
咄嗟に重い宝箱をキリへ投げる。これには彼も慌てずにはいられなかった。
「キリ、お願い！」
「え？　うわっ――!?」
飛んでくる宝箱は凶器にもなって。
両手が塞がっていた彼は額で受け止める羽目になってしまい、脳が揺れるほどの衝撃を受けて、どうしようもないまま勢いよくその場へ倒れ込んだ。
背後を気にせず、腰の剣を取ったシルクは男たちの前に立ち塞がる。
不思議と恐怖心はない。視界は鮮明で、体の状態も良く、思う通りに動く自信がある。
前方に迫った男が剣を振り上げて襲い掛かって来た。以前ならば怯えて動けなかった可能性もあるが今は違うと思う。腰を落として、鞘と柄を握って待ち受ける。
「女ァ、邪魔すんな！」
相当頭に来ているのか、そのままの勢いでシルクへと襲い掛かる。
頭を狙って思い切りサーベルを振り下ろし、彼女を切ろうと迫った。慌てず、シルクは両手を頭上へ掲げ、降り注ぐ刃を受け止める。
刀身を隠したままの鞘に激突し、ギィンと硬い音。
手に走る衝撃を理解しながら、慣れた動きでシルクは腕を引いた。受け止めるというよりも受け流す仕草。するりと鞘の上を走ったサーベルは彼女を傷つけることなく空を切り、思わぬ姿勢を強いられたせいか、男の体勢が一瞬で崩れた。
互いにダメージはない。が、優位に立ったのは明らかにシルクの方。
転びかけた状態で傍を通り抜ける男を狙い、両手で柄を持って思い切り剣が振るわれた。
まるでバットを振り抜くかのような姿勢。全力の一撃は男の後頭

部を強かに打った。鞘に納まっていたため刃で斬られることはないものの意識を刈り取るには十分な衝撃が走る。
痛みを感じる暇があったかどうかさえ定かでない状態で、勢いよく転んだ男は意識を失った。
「て、てめぇ、何しやがる！」
続いてもう一人が襲い掛かってくる。同じくサーベルを頭の上まで掲げて、腕力に任せた隙だらけの構え。さほど腕が立つようには見えなかった。
以前、ルフィとキリの戦闘を見たのは無駄ではない。
相手は本物の海賊。しかしあの時の二人に比べれば全くすごいとは思わない。
自分の剣を持ち直したシルクは右手で柄を、左手で鞘を握る。
距離が狭まって相手が剣を振り下ろす。その動きを冷静に見極めて、勢いよく剣を抜くと同時、露わになった刀身で素早く的確に敵の攻撃を受け流した。
甲高い金属音と共に力の行き場を見失った男が転びかける。
その一瞬、逆手に持った鞘が思い切り振るわれたのだ。
シルクの一撃が男の顎を的確に捉え、全力で殴りつけた。
よろよろと数歩前へ進み、頭を揺らす彼はおそらく脳を揺さぶられていただろう。視界が奇妙にぐねぐねと動き、やがて冷静さを取り戻すこともできず意識を手放す。
時間にして一分もかからぬ数十秒。
シルクは己の力のみで自分より体格のいい男二人を倒し、ふぅと息を吐いてから剣を収めた。気絶した男たちが起き上がらないことを確認して、それからキリを振り返る。
「もう大丈夫だよ。ごめんねキリ、いきなり投げちゃって」
「あー、うん。できればこの重さを理解した上で考えて欲しかったけどね」
「ご、ごめん……」
キリは床に倒れていた。
放り投げられた宝箱を受けて鼻を打ったらしい。鼻先を赤くした

彼がぼんやりした顔で言う。当然とばかりにこの時は笑みが消えていて、どこともなく空を眺めていた。
振り返って初めて気付いたシルクが申し訳なさそうに頭を下げる。
両手が塞がっていてはそうなるのも無理はない。
倒れた彼へ近付き、顔を覗き込む。別段怒っている訳ではなく、目が合えばふっと笑った。シルクはそれで安堵し、手を貸してキリが起き上がるのを待つ。
その場に座って、倒された男たちを見た。
鮮やかな手並みだったのは近くで見て重々承知している。細身の女性ながら戦闘の腕は立ち、力を受け流す姿は堂に入っていた。想像よりずっと頼もしい姿に思えて彼女を見直す。何年も修行してきた成果はきっちりと形になっているらしい。
座り込んだままキリはシルクを見上げ、笑顔で伝えた。
「やるねシルク。助かったよ」
「うん。って言っても、キリなら簡単に勝てたでしょ？」
「さぁどうかな。ルフィと違って血の気は多くないんだよ。シルクが居てくれて助かった」
「んー……ひょっとしてめんどくさいだけ？」
「まぁそうとも言うけど」
無邪気に笑うキリに呆れてシルクが苦笑する。ルフィが目立つためあまり気付いていなかったがこちらはこちらでそれなりに厄介らしい。
命を落としかねない状況で一体何をめんどくさがったというのか。
どうやらルフィとは対照的な一面を持つようだ。
呆れた一方で仲間に褒められたことは嬉しい。
役に立てそうでよかったとシルクはあどけない様子で微笑む。
彼女の隣、立ち上がったキリは早速宝箱を持ち上げた。
「とりあえずこの船から離れよう。誰かが戻って来たらまた厄介なことになる」
「そうだね。私たちの船までちょっと歩くし」
シルクもまた宝箱を持ち、二人揃って船を降りる。

彼らの船は少し離れた場所に停泊させていた。何も考えずに上陸しようとするルフィを制し、慎重を喫しようとしたキリの判断である。
船へ戻ろうとする二人はさほど急ぎもせず歩き、ふと森の方角を眺める。
無事に略奪を終えて宝を手に入れて、次に考えるのはこの場にいないルフィのことだった。
「あとはルフィの方か。一体どこ行ったんだろ」
「ねぇ、ひょっとしてルフィが言ってたうまそうな匂いって、さっきの人たちのことじゃないのかな。今頃どこかで鉢合わせてるかも」
「可能性は大いにあり得るね。いや、むしろそうなってないとおかしい気がする」
「どうして？」
「騒動を起こすのが得意そうだからさ。思えばルフィと出会ってから毎日退屈しないからなぁ。大渦に呑まれて辿り着いた無人島で財宝を見つけ出して、船が沈んでまた遭難。助けてもらったと思ったら今度は町が海賊に襲われて……」
「そ、そっか。大変だったんだね」
「これから先が心配になってくるよ。ひょっとしたらそういう星の下に生まれたのかもね。多分ルフィと一緒だと楽な航海なんてできないんだろうなぁ」
陰鬱とした顔で重苦しい溜息をついたキリはがっくり肩を落とす。
苦笑したシルクは空気を変えようと彼へ問いかける。
「だけどルフィ一人で大丈夫かな。もし敵と会ってたりしたら」
「うーん、大丈夫だと思う。その辺の奴に負けるような実力じゃないよ」
「それはそうかもしれないけど、もしものことだってあるかも」
「もしもがあっても死ぬことはないよ。それより心配すべきは道に迷わず帰って来れるかってところだね。前に無人島に居た時も獲物を狩るより帰ってくる方に時間かかったんだから」
「ひょっとして方向音痴？」

「多分ね。本人も認めてるし間違いないんじゃないかな」
話しているとキリの表情も柔らかくなったようだ。
静かな森を眺めてその場にいないルフィを想いつつ、やはり苦労が多そうだと考える。しかし航海を始めてみた今、久々となる海賊稼業を楽しく思っているのも事実だった。
苦労をかけられるのも悪いことばかりではない。
気を持ち直してそう考え、キリは再び笑顔で前を見る。
「あとで探しに行くよ。じゃないと帰って来れない可能性がある」
「うふふ、そうだね。キリは副船長だから、しっかりルフィを見てないと」
「それもどうかと思うんだけどなぁ。なんか貧乏くじ引いてない？」
「仕方ないよ。そういう役職でしょ」
「代わりたいなら代わるよ」
「ふふ、遠慮しときます」
仲も良さげに歩く二人はすでに肩を並べることに違和感を持たない。
出会ってからの時間も関係なくすっかり仲間となっている様子。互いへの信頼も窺えた。
以前は海賊をしていたキリとは違い、シルクには戸惑いもあったはず。しかし今この瞬間は見えなくなっていた。ルフィとキリ、気のいい彼らといっしょに居たせいだろうか。確かにあったはずの彼女なりの海賊像は良くも悪くも壊されていて、徐々に順応しようとしているらしい。
良い変化なのか、悪い変化なのか、略奪を終えたばかりの今でも笑っていられた。
幼い頃から見守り続けていた町民たちにとっては想像もしたくない変化なのかもしれない。ただ彼女の心からの笑顔を見れば、少なからず喜ぶ人々も居たはずだ。
くすくすと肩を揺らすシルクはとても楽しそうだった。

アルビダ海賊団（2）

ルフィは相変わらず食べ続けていた。
すでに場の空気に耐え切れず、コックが料理をやめて距離を取っているがそれでも気にせず目の前の料理を食し続けている。
咀嚼もまた早い。速度の変化はなく次々口の中へ放り込んでいく。
いくつもの皿を空にするが勢いは尚も止まらなかった。
その場にあるのは殺伐とした空気である。とても食事を続けられる状況ではなかったがルフィの顔色だけがまるで変わっていない。その代わり周囲の海賊たちや、或いは彼と対峙するアルビダの表情は厳しくなり、明らかに彼を睨みつけている。
周囲に立って取り囲む海賊たちは武器を抜いて今にも襲い掛からんとしていた。
言わば絶体絶命の環境で彼の態度はなんとも和やか。食事に集中する程度には器が大きかったということか。もしくは、ただ場の空気が読めないだけのバカかもしれない。
その様子が気に入らないアルビダは大声を張り上げる。
「舐めやがって。そこまで言うならやってみればいいさ。あんたたち、こいつを黙らせなァ！」
おうッ、と威勢のいい声。
サーベルを持つ男たちは一斉に駆け出し、ルフィへ目掛けて真っ直ぐ向かった。
悪魔の実の能力者であっても剣で切られて無事なはずはない。彼のことを何も知らずに、そう決めつけて動き出していたようだ。彼らはまだ能力者について何も知らなかった。
三十名を超える海賊たちの内、サーベルを手にする二人がルフィへ斬りかかる。
何の能力かを詳しく知らずに動き出していたが、能力者の中でもゴム人間を相手にする場合には有効だった。打撃や銃弾を受けても跳ね返してダメージを受けないゴム人間は斬撃を弱点としている。海賊たちのサーベルが彼の肌に当たれば、或いは彼を倒すことすらでき

るだろう。
太い腕で振り下ろされようとする剣に気付き、ルフィが動き出したのはそれからだったが、あまりにも動きが素早い彼は高く跳び上がって攻撃を回避した。
空を切ったサーベルが机に激突し、力ずくでそれを叩き割る。
一瞬の内の行動である。思わず姿を見失うほどで二人はすぐさま頭上を見上げた。
くるくると回るルフィは尚も手に持った肉を食べており、むしゃむしゃと緊張感のない様子。動揺も怯えもなく見事に着地すると、肉を食べ終えて骨までバリバリと噛み砕く。
腹はある程度満たされた。まだ満腹ではなく、料理もそこらにあるが今はいい。
戦闘が始まったことに上機嫌となり、肉汁で汚れた指先を舐めた彼は楽しげに笑う。
「うし。腹も落ち着いたし、やるか」
「こいつ、速ぇぞ」
「構うもんか。敵は一人なんだぞ！」
今度は四方を取り囲んで一斉に襲い掛かる。強いとわかっても敵は一人。恐れることはない、逃げ場を塞ぐように動き続ければ倒すことは難しくないと考える。しかし今度はルフィが逃げず、その場に立ち止まったままで彼らを迎え撃った。
目の中にある意思は強く、剣が振るわれようとも身軽な仕草で避けていく。
反撃は一瞬。殴られ、蹴られた男たちが抵抗もなく宙を舞った。
意識を刈り取るまでにかかった時間は数秒と存在しない。瞬きすればすでに四人の男たちが飛ばされていて、受け身も取れずに背中から地面へ落ちた。
男たちは驚愕して動きが止まる。
この少年、見た目以上の強さがある。警戒心は大きくなり、攻撃の手に迷いが生まれた。
場は膠着状態に入り、上機嫌に笑みを浮かべるルフィに対し、緊張

した面持ちの男たちはアルビダが見ている前でもすぐには動き出せなくなってしまったようだ。
「んん、調子いいぞ。やっぱ肉食ったからだな」
「チッ、何やってんだい！　相手はたった一人なんだよ！」
アルビダの叱責が入って肩がびくつき、また数人の男たちが動くも結果は同じ。
ルフィの行動は素早く、狙いが的確で強力な攻撃が放たれる。ゴムの体を生かした強烈なパンチはピストルを思わせ、殴られた際にはどうしても体が宙を舞い、意識さえ刈り取られる。
また同時に数人、その場に倒れた。
この実力は嘘ではない。体感して知ったが本物である。
ようやく彼の強さが伝わったのか、海賊たちには大きな動揺が広がる。しかしアルビダは怒りを増長させるのみで、退くつもりもなければ彼を許すつもりもない。怒りを示して金棒で強く地面を叩いた。ついに我慢できなくなった様子だ。
「だらしない男どもだね！　もういい、下がりな！」
どうやらずいぶんな短気らしい。
顔を真っ赤にし、業を煮やしたアルビダは自らが進み出て、振り返るルフィと目を合わせた。
反応は上々。動きもいい。だが今まで彼女の金棒を受けて立っていられた者など一人としていないのである。捉えさえすれば勝負は一瞬でつく。彼女はそう確信しており、負けるつもりはない。決着は自分でつけられると信じてやまない様子だ。
ルフィが彼女に向き直る。唇をきゅっと結んで真剣な眼差しが目についた。
怯えずに立ちはだかれるのは見事だと思う。だからと言って脅威とは思えず、間抜けな顔のガキが一人、この後の光景が想像できているのかアルビダがほくそ笑む。
金棒で軽く肩を叩き、大きな余裕が見える姿だ。
「それなりに腕は立つようだねぇ。だけど喧嘩を売る相手を間違えたようだ。今なら泣いて謝れば許してやらないこともないけど、どう

する?」
「いやだ」
「だったら死になァ!」
鈍重な外見とは裏腹に、一足飛びで前へ出たアルビダは凄まじい速度でルフィへ躍りかかった。
辺りに置かれていた机や椅子すら弾き飛ばし、その巨体は圧倒的な威圧感を放ち、ぶつかっただけで無事では済まないだろうと連想させる。しかも右腕には今にも振り下ろされようとしている金棒がある。彼女から伝わる恐怖感は凄まじいものだった。
彼女の手下たちが戦慄する時、しかしルフィは微塵も恐れていなかった。
猛然と振り下ろされた金棒は彼の脳天を狙っていた。それを見た直後一歩を動くだけであっさり攻撃が空を切り、轟音を立てて叩いた地面を陥没させる。
金棒が土を抉って半ばほど埋まり、壮絶な攻撃力を見せつけた。
ルフィはそれを見ても笑顔である。
「おおっ。すんげぇなぁ」
「チィ、ちょこまかするなァ!」
すぐさま金棒を地面から抜き、振り上げる軌道でルフィを狙うもあっさり避けられ。
彼の目はしっかりと彼女の攻撃を見切って、首を動かすだけで金棒が動く軌道から逃げていた。
風切り音がひどく、鼓膜を震わす。
間近を通り過ぎる金棒を涼しい顔で見送り、尚もわずかに足を動かすだけで避ける。
さほど大きな動きはないというのに回避し続けていた。運動能力によるものか、それとも視力の良さか、彼女の攻撃は空を切り続ける。何度振ろうとも当たらない。
その姿はあまりにも異質で、海賊たちは声を失くした。
いまだかつて彼女の猛攻を避け続けられた人間が居ただろうか。
いや、居ない。居るはずがない。

誰を相手にしようともアルビダは自慢の金棒で一撃の下に片付けてきた。当たればまず間違いなく決着がつき、外したとしてもそれは怯え切った相手が転んだ時くらいしか経験がない。
なのに今は、何度振っても当たらない。
軽やかに舞うルフィに傷一つつけることができず、思わぬ光景にアルビダは汗を掻いた。
なぜ捉えられないのだろう。理由は思い当たったがそれを肯定するのが怖い。自分と彼との実力差を考えることができずに、当たらないと知っても止めることができなかった。全力で金棒を振り続け、辺りの物を弾き飛ばし、地面を爆ぜさせて、凄まじい風を起こしながら前へ進む。
散々周辺を荒らした後。ルフィが後ろへ飛び退いたことをきっかけに両者の距離が開く。
着地したルフィは汗一つ掻かずに冷静な面持ちを見せ、対するアルビダは肩で息をしている。実力の差は明らか。流石に動揺を隠せなくなって思わずアルビダは呟いていた。
「ハァ、ゼェ、バカな……あんた、一体――」
「言っただろ。おれは海賊王になる男だ」
握った両の拳をぶつけ、にっと口の端が上がる。
こんな男は見た事が無かった。今まで彼女に勝てた男など存在しない。女でありながら腕っぷし一本でのし上がって来た海賊、それが金棒のアルビダだ。
一撃も当てられない現状にひどい侮辱を感じ、ギリギリと歯を食いしばる。
その時ようやくルフィが構えた。
「んん、そろそろこっちからもいくぞ。覚悟はいいか、イカついおばさん」
「だッ!? 誰がイカついおばさんだってェ!」
疲労の色を見せ始めたアルビダが、再び猛然とルフィへ襲い掛かった。
小細工は使わず真っ向勝負。真っ直ぐに向かってきた彼女を見据

え、ルフィは逃げない。強く拳を握りしめ、攻撃も繰り出さずに待ち構え、口の端を上げていた。
「生かしちゃおかないよ！　叩き潰してやるッ！」
間近に迫って全力の一撃が振り下ろされた。
その威容にも屈さず、ルフィは拳を突き出す。
下から迎え撃つような軌道のパンチが金棒と激突する。鉄すら破砕させるそれを殴ると、硬い音が森中に響き、生まれた衝撃が辺りを駆け抜ける。肌をびりびりと震わせる風に尻もちをつく男も少なくはなかった。目を奪われる光景は確かにそこにあったのである。
勝ったのはルフィだ。
彼に殴られた金棒はアルビダの手を離れて宙を舞い、鉄であるにも関わらずくっきりと彼の拳で殴られた跡が残り、力なく回転しながら落下してくる。
武器を殴り飛ばされた。まさか力で負けるとは思わず、アルビダは血相を変える。
にやりと笑う小柄な少年。
こんな男は知らない。これほど強い人間は見た事が無い。
アルビダが戦慄する内にもルフィは拳を構えており、再度の攻撃がやってくる。今度は彼女の心を折るためでなくとどめを刺すため。言わばすでに勝敗は決していた様子。
何もできずに立ち尽くしたアルビダは彼の姿をじっと見つめていた。
「ば、バカな……!?」
「ゴムゴムのピストル――！」
勢いよく伸ばされるゴムの腕に、そこから繰り出されるパンチ。正確に彼女の頬を撃ち抜いたそれはたった一発で意識を刈り取る力を持っていて、男から見ても巨体だと思える外見は軽々と宙を舞っていた。その場に居た誰もが絶叫する。まさか、最強だと思っていた船長が殴り飛ばされる姿を見る日が来るなどとは思っていなかっただろう。
森の中から響いた絶叫は広場の外まで届く。

アルビダの巨体が地に落ちた時、衝撃音から全員が押し黙り、奇妙な沈黙が生まれる。
攻撃の拍子に落とした帽子を拾い、かぶったルフィはゆるりと海賊たちを眺めた。
「おい」
「ひぃっ!?」
「まだやんのか」
平坦な声で端的に告げれば、一人残らず即座に走り出した。その場から逃げようと我先に船を目指していくのである。しかしルフィの目にはそこに倒れたままのアルビダが映っていて。
小走りで気絶したアルビダへ近寄ったルフィは、逃げ出す背中に向けて声をかける。
「おい、待てよ!」
「ひぃぃっ!? ま、まだ何かっ?」
「このおばさん、おまえらの船長だろ」
両手でアルビダの服を掴み、ぐいっと思い切り引っ張る。
彼の細腕によって彼女の巨体は投げられた。目標とするのは当然彼女の部下たちである。
またも大絶叫が響き渡った。
悲鳴が終わらぬ内にルフィは金棒をも拾い、それもまた部下たちへ向けて投げる。他の何を差し置いてもそれだけは気になったらしい。
「持って帰れ!」
「ぎゃあああっ!? あ、危ねぇ!」
どすんと落ちてアルビダの下敷きになった者たちも居たようだが、慌て過ぎて痛みも感じないのか、多くの者がすぐに起き上がって協力しながら運び始める。彼らの逃げ足は速かった。
誰も居なくなった広場で腰に手を当てて立ち、ルフィは辺りを見回す。
あいにく残っていた料理は全てひっくり返ってしまったようだ。無残な光景を見てもったいないと思う。しかし拾って食べるには土がついて流石の彼でも戸惑われた。

仕方なく食事を諦め、少し離れた位置で気絶する少年に目を向ける。
あれだけの騒がしさにも関わらず微塵も起きようとしなかった。
眠ったままの彼に歩み寄り、傍に着くと膝を折ってしゃがみ込む。
眠るというより気絶したという表情だった。白目を剥いて口からは泡を吹いている。
けらけらと笑い、ルフィは彼の肩を揺すった。
数度揺するとようやく反応を示し、ゆっくりと意識が戻ってやがて起き出す。
その場へ座ったコビーは眼鏡の位置を正しながら辺りを見回し、傍でしゃがむルフィを確認し、広場の光景が一変していることを知って冷や汗を掻き始めた。アルビダたちの姿も見えず、手下たちも居ない。現状を理解できずに救いを求めるような目が向けられた。
ルフィはにっと笑い返す。
「助けてくれてありがとな。もう終わったぞ」
「え、は、ええ？　あの、これは一体……」
「おれはルフィ。海賊王になる男だ。おまえは？」
「か、海賊、え？　あ、ええと、ぼくはコビーです……初めまして」
「おう。はじめまして」
言葉を交わしてもまだわからず、コビーの混乱はさらに深まっていく。
彼が落ち着くのに必要な時間は数分でも足りず、またルフィが細かく説明しようとしないため、まだしばらくは辺りの惨状を理解しようと頭を悩ませることとなった。

＊

「ええっ!?　か、海賊王に!?」
「ああ。そのために海に出たんだ」
広場を少し離れて森の中。
たまたま見つけた太い丸太に腰掛けて、ルフィとコビーは話してい

た。
語るのは自身が海へ出た理由。ルフィはいつもの通り恥ずかしげもなく海賊王になる夢を告げ、それを聞いたコビーはあんぐりと大口を開けて驚くばかり。あまりにも大きな話についていけず、理解が及んでいない様子。ただただ困惑していた。
大き過ぎる夢に驚くコビーは否定するように首を横に振り始める。ルフィを否定するつもりはなかったが結果的にはそう見えてしまっていた。
「む、むむ、無理ですよ！　無理無理無理！　海賊王っていうのはこの世のすべてを手に入れた海賊ですよ！　このイーストブルーからグランドラインへ入って、最も危険な海を航海しなければならないんです！　誰にだってできることじゃないんですよ、無理です無理無理！」
「無理じゃねぇよ。やってみないとわからねぇだろ？」
「いいえ、わかります！　これだけはもう無理なんですよ！　無理無理！」
「むんっ」
「あいたっ!?」
少しむっとした顔のルフィがコビーの額を小突いた。力は入っていなかったがそれでも痛みはあって、咄嗟に小突かれた額を押さえ、コビーは驚いて体をびくつかせる。しかしそれによって冷静さを取り戻せたようだ。ハッと我に返ったコビーが血相を変えた。
拳を突き出したままのルフィと目が合い、戸惑いがちに尋ねる。
「ど、どうして殴るんですか」
「なんとなくだ」
「な、なんとなくって……まぁ別にいいですけど。えへへ、殴られるのは慣れてますから」
自嘲するように笑って頭を掻く。そんなコビーに違和感を抱き、ルフィは首をかしげる。
そう言えばアルビダと対峙した時、彼は叫んでいた。
海兵になりたい。

意を決した様子で叫ぶ彼の姿はなぜか鮮明にルフィの頭へ残っており、一種の尊敬すら感じたが今はあの時の覇気を感じない。ただの臆病で弱気な少年にしか見えなかった。

慣れているという言葉と、海賊船に乗っていた事実が気になった。

冷静になったコビーへ疑問の声がかけられる。

「なぁ、なんでおまえ海賊だったんだ？　海兵になりたいって言ってたじゃねぇか」

「あ……えっと、それはですね」

佇まいを直してコビーが話し始める。

やけに神妙な顔つきで、相当な理由があるのだろうと思われた。

戸惑いながらだったが重々しく口が開かれる。

「あれは二年前のことです……釣りに行こうと思ったぼくは船に乗ろうとしたんですが、あろうことか間違えて乗ってしまった先がなんと海賊船。ああいう人たちですからそりゃあ激怒してました。以来、ぼくは殺されない代わりに航海士兼雑用として働かされることに……！」

「おまえドジでバカだなー。釣り船と海賊船間違えねぇだろ」

「うぅ、そ、そうですよね。ほんと自分が嫌になっちゃうくらいドジでバカで……」

落ち込んでしまうコビーにルフィはからからと笑っていた。

ドジでバカだとは思うが別段嫌っている様子はない。それだけでないという姿はすでに見せてもらったからだ。彼に対しては守られたという印象もあって友人のように想っている。

「でもあいつらもう行っちまったし、今なら海兵になれるだろ。行くのか？」

「そ、そうですね……でも、ぼくなんかにできるんでしょうか。よくよく考えてみればぼくなんてダメダメだし、意気地なしで、海賊だってやりたくないのに二年間もやらされて……こんなぼくが海兵になったって、誰かを守ることができないのかも」

「そんなのやってみなきゃわかんねぇだろ。おまえさっきおれを守ってくれたじゃねぇか」

「あ、あれは、ただ必死で。もう自分が死ぬと思ったから、せめて最後にって」
「だったら死ぬ気でやればいい。あの時のおまえならできるさ」
元々自信を持たないのか、コビーは自分の未来を想像しただけで不安に苛まれて怯えてしまっている。そんな彼を見てルフィは気遣うでもなく素直に言った。
自身の帽子を手に取り、それを見つめる顔は驚くほど穏やかだった。
「おれは死んでもいいと思ってる」
「えっ――？」
「おれがなるって決めたんだから、海賊王になるために戦って死ぬんなら別にいい。くいを残さないように生きるって決めた。だから絶対諦めたりしねぇ」
彼の表情に、言葉に衝撃を受け、コビーは絶句する。
自分で考え付いたことはない。死んでもいいなど、考えたことはなかった。今までずっと死にたくないと思って何年も雑用を続けていたのだ。
ただ、言われてみれば確かにアルビダに立ち向かった時。確かにあの時だけは死んでもいいと思っていたのかもしれない。
あれが覚悟なのだろうか。
正確なことはわからないが少なくともコビーはそう思い、ルフィの姿に自分の夢を見る。
幼い頃から海兵になりたかった。叶いそうもないその夢を捨てたことは一度だってない。できないのではないかと思いながら、ずっとなりたいと考えていた。
自分は、変われるのだろうか。変わりたいと思う。
唇を噛んだコビーは震える声で恐る恐る呟く。自分にとって分不相応だとも思いつつ、やはり口に出さずにはいられなくて、拳を固く握りしめた。
「ぼくでも……やれるでしょうか」
「ん？」

「海軍に入って、海兵になって……今までずっと無理だと思ってましたけど。こんなぼくでも、死ぬ気で努力すれば、悪い奴を捕まえたりできるんでしょうか……？」
「知らねぇよ。おれはおまえじゃねぇし」
「い、いいえ……いいえ！　やりますよ！　ルフィさんがやるって言ってるんだから、ぼくだってやってみせます！　死ぬ気で頑張って努力して、そしていつかは、か、か、か……！」
勇ましく立ち上がったコビーは握った自分の拳を見つめ、意を決して言い放つ。
その横顔を見てルフィの顔は穏やかだった。
「海軍将校になってみせますッ！」
勢いに任せた発言だったが確かに言い切った。
叫んだ直後、急に顔を青ざめさせたコビーが足をふらつかせ、その場に尻もちをつく。
分不相応だったと自覚して脚がすくむ。気付けば体が震えていて、自分の発言に驚いている様子で、手を見てみればこちらも自然にがくがく震えていた。
今度は自己嫌悪から来る叫び声が響き渡り、それを聞くルフィは上機嫌だ。
「うわっ、うわぁぁっ!?　ぼ、ぼくはなんてことを……！　言わなきゃよかった、やっぱりそんなのできっこありませんよね！　恥ずかしいっ！　穴があったら入りたい！」
「しっしっし。おまえおもしれぇ奴だなぁ」
「す、すいません。ちょっと舞い上がっちゃって。ルフィさんとしゃべって気が大きくなったのかも。ぼくには、そんなこと――」
「やってみろよ、コビー」
恥ずかしげに頭を掻くコビーに向け、軽やかにルフィが言った。
途端に驚く顔を向けられるも言葉は引っ込めず。思ったままに伝える。
「おまえならやれる。おれはそう思うけどなぁ」
「ほ、本当ですか？　でも、何を根拠に」

「知らん。根拠はねぇけどそう思った。なんとなくだ」
「……は、ははは」
彼の発言がおかしくてつい笑ってしまった。どうして根拠もないのにそれほどはっきり言えてしまうのだろう。ルフィも楽しそうに笑っている。
理由はよくわからない。けれど彼にそう言われたらできる気がするのは不思議だった。
いつの間にか震えは止まって体が自由に動くようになっていた。
ゆっくりした動きで立ち上がったコビーがルフィの目を見つめて、今度は安堵にも似て落ち着いた微笑みを持ち、深々と頭を下げる。どうにも彼には伝えきれないほどの感謝がある。
「ルフィさん、ありがとうございます。あなたに会っていなかったらどうなっていたか」
「ん？　おれはメシ食いに来ただけだぞ」
「ぼく……やってみます。できるかどうかわかりませんけど、二年間雑用してましたし、我慢強さなら鍛えられました。また一から始めて、頑張ってみます」
「ししし。そっか」
ようやくコビーの表情も落ち着いたようで、穏やかな様相になる。
両者は笑い合って静かな森の中に笑い声が広がっていった。
その頃になって草や木の枝を踏みしめ、音を立てながら近付いて来る気配に気付いた。
振り返る二人を見つけてキリが声を発する。
「あ、居た居た。おーい、ルフィ～」
「おぉ、キリ」
「やっと見つけた。迷ってるんじゃないかと思ってたけどこんなとこに」
「わりぃなぁ。色々あったんだ」
草むらを掻き分けてやってきたキリが二人の前に立ち、ルフィは笑顔だが、見知らぬ顔にコビーは戸惑った様子。眉根を寄せて不安を露わにしていた。

何も気にした様子はなくキリは彼を見つけ、わずかに首をかしげる。
「で、こちらの人は？」
「コビーだ。おれの友達」
「へぇ。君はちょっと目を離した隙に色んな騒動を巻き起こすね」
「そうか？」
「向こうで荒らされたキャンプ地があったけど、あれも？」
「まぁな。イカついおばさんをぶっ飛ばしたんだ」
「いかついおばさん？　ひょっとしてさっき聞いたアルビダって人かな」
顎に手を当てて考え始めたキリだったが、すぐに思考を切り替え、現状を見る。
よくは知らないがこの島に人の気配はない。見た目や気弱そうな様子から島の住民ではないと推測できた。友人だと紹介されたコビーを置いていく訳にもいかないだろう。
彼にとってもすでに目的は達成したのだ。いつまでもこの島に居る理由はない。
次はどうするかと問おうとした折、先にルフィがキリへ頼んだ。
「なぁキリ、コビーを送り届けてやりてぇんだけどいいかな。こいつ海兵になるんだってよ」
「海兵？　ボクらの仲間じゃなくて？」
「ま、まさか！　ぼくに海賊なんて無理ですよ」
「ふぅん。わざわざ敵になる人を送り届けるなんて」
「いやか？」
「ううん。ただ変わった人だなぁって思ってさ」
「いいんだ。友達だからな」
上機嫌に笑うルフィと違ってキリは苦笑して肩をすくめた。たったそれだけの挙動で彼らの関係性が窺えるような気がする。なぜか見ていて安心できる様相だ。
ルフィもまた立ち上がってコビーの隣に並ぶ。
出発したいとは思うものの、目的地は定まらず、また定めようにも

近海について知識もない。
海軍支部へ送り届けようにも位置がわからないため、すぐには動き出せなかったようだ。ルフィほど楽観視できないキリがまずそれを尋ねる。
「って言っても、あいにくこの辺りの海には詳しくないからどこへ向かえばいいかわからない。向かうんならやっぱり海軍の基地でしょ？」
「うーん、それもそうか。コビー、おまえ知らねぇか？」
「あ、はい。一応知ってますけど」
「ほんと？」
あっさり答えたコビーに二人が驚く。
この件に関しては恥ずかしがることもなく、自信を感じる声だった。どういうことだと見つめれば照れたように頬を掻きながら答え始める。
「一応、アルビダの船に居た時は航海士も兼ねていたので。この辺りのことはよく知ってます」
「マジか。おまえすげぇなぁ」
「やっぱり航海士は偉大だね。ボクらも早く仲間にしないと……ねぇコビー、ウチの船で航海士やらない？　あいにく海賊だけど」
「ええっ!?　いやいや、それは流石に……！」
「あっはっはっは」
彼らのやり取りにルフィは大笑いする。キリとコビーもすぐに距離感を縮めたようだ。
確かにキリの言う通りだった。海の上を旅する以上、航海術を持っていなければ話にならない。キリもある程度は対応できるものの専門で学んだ訳ではなく、特にイーストブルーの地理には疎いのが現状。一刻も早く仲間にしたいところだった。
だが今はそんなことだってどうでもよくなり、気分も良く次の島を目指すことだけ考えていた。

シェルズタウン

アルビダのアジトを抜け出た海賊麦わらの一味は、コビーを連れて近くの町へ向かっていた。

憶測でしかないが到着まで二時間足らずだと言われていた通り、さほど時間もかからずにその島の姿は見えた。栄えている様子も希薄な至って普通の小さな町。

ただ町の奥には大きな海軍基地が見え、特徴のない町の中でそれだけが妙に目立っている。

聞いた名ではシェルズタウン。

噂を耳にしたコビーが言うには色々と曰くつきの場所らしい。

「いいですか。あの町にある有名な噂は二つあります。一つはずっと前から囁かれている物で、基地長のモーガン大佐が変わった人物らしくて、町民からかなり怖がられているようです」

「町民から？」

船の中央に座って真剣に話すコビーの前、顔を突き合わせて真剣に話を聞くルフィとシルクが居た。何を想ってか三人揃って礼儀正しく正座している。妙にかしこまったようにも見える姿だが、当人たちは意外に楽しんでいるらしい。

一方でキリは船首付近に座って遠方から町の状況を眺めている。話は聞いているが船の動きを確認するため、島に近付いた今でも気を抜いていない。

コビーの言葉に疑問を持ったシルクが前のめりに尋ねた。

「どうして町に住む人が海軍大佐を怖がるの？　海賊から守ってもらってるんでしょ」

「理由はぼくも知らないんですけど、そういう噂が流れてまして。ただモーガン大佐は腕っぷしで出世していったらしいですから、ひょっとしたら武闘派な人物なのかも」

「そいつ、強いのか？」

「ええ、おそらく。アルビダも絶対にシェルズタウンには近付かなかったくらいですから」

真剣に言うコビーから目を離し、振り返ったルフィがキリを見る。背中合わせの彼は振り返らなかったが話に応じる気はあるようだ。
「なぁキリ、海軍大佐ってえらいのか？」
「それなりだとは思うよ。基地長っていうならあの基地で一番偉いだろうね」
「へぇ」
「ただ本部の人間に比べればどうしたってランクは下がるかな。海軍本部の大佐は、支部の大佐より何倍も強いと思っていい」
「なんだ、じゃあ弱いんじゃねぇか」
「本人に会ってみないとわからないけどね。まぁ初戦はこれくらいがちょうどいいよ」
知った風に語るキリに違和感を抱き、事情を知らないコビーは眉をひそめた。
本部に所属する海兵と支部に所属する海兵、両者は平等に見えてその内情は案外違っている。実力で言えば本部所属の者の方が上。待遇もそれなりに違いがあった。
海軍入隊を目指すコビーは情報を聞きかじることも多かったが、なぜ彼が知っているのか。
気になったコビーが続きを話し始める前に聞く。
「キリさん、詳しいんですね。ひょっとしてイーストブルーの出身じゃないんですか？」
「いや、出身はイーストブルーだよ。ただ何年かグランドラインを航海してたってだけで」
「グランドラインを？　そんな人がどうしてここに……」
「色々あったんだよ。今はまた目指すことになったけどね」
軽く言い切った辺りでルフィとシルクによって続きを促された。コビーは二人に向き直り、コホンと咳ばらいを一つ、表情を引き締め直して説明を始める。
「もう一つの噂はつい最近の物です。この辺りで有名な賞金稼ぎが居るんですけど、最近この町で捕まったって話がありました」
「捕まった？　賞金稼ぎは海軍の味方でしょ」

「なんで捕まるんだ?」
「それは……詳しい理由まではぼくも知らないんですけど。ただこの話が大きな噂になったのは捕まった人が有名だったからなんです。戦った相手は絶対に逃がさない魔獣のような剣士。巷では〝海賊狩り〟って呼ばれていた人で」
「おぉ〜かっこいいっ」
目を輝かせるルフィは危機感もなく楽しんでいた。
そんなつもりではなかったろうに、コビーの話は彼の好奇心を刺激しただけだ。
嫌な予感を覚えつつ、まさかと思う自分を無視して。話し始めた以上は最後まで語ろうと真面目な面を見せ、尚もコビーは彼らへ語って聞かせる。
「その人の名前はロロノア・ゾロ。今、あの基地に囚われているらしいです」
「はぁーっ、海賊狩りかぁ……なんか強そうだなぁ」
期待を露わにするルフィの笑顔は、なんともわかりやすいものだった。出会ったばかりのコビーでもその様子はまずいと思う。彼の行動力ならば何をしでかすかわからない。
念を押すように言い聞かせておく。
「いいですかルフィさん。ぼくは気をつけてくださいという意味でこの話をしたんですよ。見に行こうだとかそういう話をしないでくださいね」
「海賊狩りかぁ。どんな奴なんだろうな」
「ちょっと、ルフィさん! ぼくの話聞いてるんですか!」
「しかも剣士だもんなぁ。おもしろそうだよなぁ」
すでにコビーの忠告など聞いていないようで、ルフィは楽しげにまだ見ぬ魔獣に想いを馳せている様子。こんなつもりじゃなかったのに。コビーは肩を落として頭を垂れた。
どうやら隣で話を聞いていたシルクも興味を持っているようで、何かを思案する表情だ。
本来、賞金稼ぎは懸賞金を懸けられた者を捕まえて、海軍に引き渡

して金を受け取ることを生業としている。言わば海軍にとっては味方で平和を作る協力者でもある。
そのロロノア・ゾロが本当に賞金稼ぎだったのならばなぜ海軍に捕まってしまったのか。
その理由が気になって仕方ない。只事ではなさそうだ。
ルフィは海賊狩りという異名に。シルクは不可思議な事情に惹かれている。
考え込んでしまった二人を確認した後、言わない方が良かったかと頭を悩ませるコビーは小さく溜息をついた。そんな彼に微笑むキリが声をかける。
「だめだよコビー。会わせたくないならそういう話は隠しとかないと」
「うぅ、そうですよね……みなさんを心配したつもりだったんですけど」
「気持ちはありがたいけどね。まぁこれで基地の見学は確定かな」
キリも止める気はないらしく、おそらくはシルクも興味津々。
この船の上にはルフィを止めようとする者はいないらしい。果たして本当に大丈夫なのだろうかと心配になって、コビーはまた溜息を我慢できなかった。
船はすでに島に辿り着こうとしている。
好奇心を露わにルフィはキリの隣へ行って座り、町を見つめた。
一際目立つ海軍基地。そこにどんな男が待っているのだろうと想像しながら。
「なぁキリ、ゾロってどんな奴だろうな」
「確かめに行く？」
「そうだな。いい奴だったら仲間にしよう」
「ちょ、ちょっと待ってくださいよルフィさん！　だめですって！」
ルフィの発言を聞いたコビーが慌て出し、傍へ寄って背後から声をかけた。
振り返った彼と目を合わせた瞬間に厳しい声をぶつける。
「だ、だめですよそんなの。悪い人だから捕まってるんですよ。賞

金稼ぎが捕まるなんて滅多にあることじゃないですし、きっと理由があったんだと思います。それにあの人は前々から色々噂があって、あんまり良い人っていう印象は――」
「見てみりゃわかるよ。とにかく行ってみようぜ」
「ルフィさん……だからぁ」
「まぁまぁコビー、しょうがないって。こうなったら梃子でも動かないから」
諦めた様子でコビーが肩を落として深く息を吐く。もはや言葉は出ない。
ちょっとした騒ぎはすぐに治まり、集まる三人の方へシルクも近付いて、キリへ声をかけた。アルビダのアジトで宝を運ぶ最中、次の島へ到着した時のことを話していたのだ。
「でもさキリ。買い物もしなきゃいけないし、航海のために色々準備しなきゃいけないこともあるって話してたじゃない。これからどうするの？」
「それもそうだね。じゃあコビー、ルフィのこと任せていいかな」
「ええっ!?　ぼ、ぼくですか？」
キリから唐突に話を振られたコビーは驚き、肩を震わせる。まさかそんなことを言われるとは思っていなかった。見るからに行動力がありそうな彼を任されて何事もなく終えられる気がしない。けれどキリは何一つ心配していない顔で微笑んでいた。
それに対してむしろルフィの方が不満そうだ。
「え～？　キリは来ねぇのか？」
「ボクとシルクで必要な物を用意しておくよ。軍資金は手に入れたし、そのロロノア・ゾロって人は任せる。仲間にするかどうかは船長が決めてくれればそれでいい」
「シルクまで来ねぇのか。なんだよ、せっかく仲間探しなのによぉ」
「役割分担は必要だよ、ルフィ。仲間なんだから協力しないと」
くすくす笑って窘めるシルクの言葉を聞いたルフィは、それもそうかと思い直す。
不満を納めるのは早かった。すぐに彼は純真な冒険心だけを胸に

して町を眺め始める。
変わり身の早い彼と違ってコビーはそうもいかないのだが、すでに話は進んでいて、準備していたらしいキリが小さな袋を投げ渡す。じゃらりと音がしたそれにはいくらかの金、ベリーが入っていた。袋は小さいがぎっしり詰められている。
ずいぶんな大金にも思えて、疑問を持ちながらキリを見る。
途端に不安げなコビーを見てキリはやさしく言った。
「何があってもいいようにね。ルフィのお守りは多分大変だよ」
「は、はぁ」
話が纏まりかけたところでいよいよ上陸の瞬間が近付いていた。
一味の小さな船は港へ到着し、ロープを使って繋ぎ止め、無事に陸地と隣接して足を止めることができた。帆をたたむのはキリが手早く終えて、上陸準備は瞬く間に整う。
いの一番に船を降りたのはルフィだった。
草履を履いて着地した途端、ぺたっと間抜けな音。顔を上げれば見知らぬ町。
顔には抑えきれない喜色が浮かんで、もはや感情を抑えられない様子だ。
「ついた！　海軍基地の町っ！」
「ルフィ、一人でどこかに行かないでよ。はぐれたら大変なんだから」
続いて降りたシルクがルフィの隣に並んで町を眺める。キリやコビーも二人に遅れたがすぐに陸地へ渡り、彼らの傍へ立った。
穏やかな風景の至って平和な街並み。
人々は笑顔で通りを歩いており、いざこざの一つも見られない。
少々過激な噂を聞かされていたが、本当にそれほど大変な町なのかと思うほど特別な何かは見当たらなかった。一見しただけではこれなら平穏無事に抜け出せそうだとも考えられる。
拍子抜けしてしまった気はするものの、むしろ彼らにとっては有難い。
きょろきょろと辺りを見回すルフィとは裏腹に、危険を望む訳では

ないキリはひとまずシルクへ向き直り、彼女を見ながら口を開いた。
「ここなら買い物できそうだ。航海に必要な物を買い揃えよう」
「オッケー。何が要るかな？」
「とりあえず水と食料と……コビーと別れるならこの辺りの海図も必要かな。ボクらの場合武器は必要ないし、あとは――」
「あ、服は？　流石にずっと同じ服のままだと気持ち悪いでしょ。洗濯もしなきゃいけないし、着替えも必要なんじゃないかな」
「そうだね。その辺はシルクに任せるよ。ボクらじゃセンスの方が、ね」
「わかった。って言っても、私も自信ないんだけどね」
予定は簡単ながらもすぐに決められて、二人が話し終えるともはや待つ必要はなかった。うずうずと我慢できない様子のルフィは今にも町へ入りたいようで、その姿には苦笑せざるを得ない。彼の背中にはキリが声をかけて出発を促した。
「ルフィ、もういいよ。しばらく離れるから問題起こさないようにね」
「おう。まかせろ」
「ほんとに大丈夫かなぁ。それとコビー、悪いけど、まぁ、頑張ってよ」
「は、はい。でも何も起こりません、よね？」
「さぁ。それは行ってみないとわからない」
「ええっ!?」
いとも簡単に肩をびくつかせるコビーにくすりと笑い、キリとシルクが歩き出した。
振り返りながら手を振り、先に港へ沿って右側へと向かっていく。
「じゃあ先に行くよ」
「ルフィ、コビー、またあとでね」
「おう。またな」
ルフィもまた手を振り、コビーは頭を下げて、すぐに視線は目の前の通りへと向けられた。
こぢんまりとした通りだが賑わってはいる。どことなく楽しそう

だ。
喜々とした表情で先にルフィが歩き出し、続いてコビーも足を動かし始める。
「ルフィさん、本当に行くんですか？　危なそうだし、やめといた方が……」
「よし、見に行こう。コビー案内してくれよ」
「や、やっぱり行くんですね……大丈夫かな」
戸惑いなく歩いていく彼を止められそうには思えず、仕方なく後へ続いた。
道がわからない上に方向音痴だというのにどんどん進んでいき、確かに目的地は真正面に見えているため、ただ前へ進めば辿り着くのだが、それにしたって迷いがない。
その自信の出所がわからなかった。
ルフィを先頭に通りを歩き過ぎていく。
様々な店が並んでいるがそちらには一切興味を持たずに、ただひたすらに基地を目指そうとしているらしい。その意思の強さを見れば怯えているのが馬鹿らしくなった。ルフィの姿に意思の強さを感じ、コビーはよしと頬を叩いて気合いを入れ直す。
何を怖がることがある。死ぬ気で努力すると決めたばかりだ。
言わば捕まったロロノア・ゾロと出会うのは海兵になるための第一歩。本物の海兵になれば賞金首の悪党と出会って、尚且つ捕まえなければならないのだからここで逃げる訳にはいかない。
コビーが気合いを入れて表情を変えた頃、ちょうど一軒の店先を通り過ぎる。
不思議とルフィの足は急に止まってしまった。その背に当たりかけたコビーは驚くも、なんとか当たらずに済んで、突然の変化に戸惑いを隠せない。
「どうしたんですか。急に立ち止まって」
「ん～……」
「体調でも悪いですか？　だったら医者を探して――」
「うまそうな匂いがするっ」

くるりと振り返ったルフィは口元をだらしなくよだれを垂らしかけていて。つい数秒前まで好奇心を露わにしていたのに今やすっかり食欲を優先しようとしていた。
なんという変わり身の早さか。
驚くコビーだったがハッと気付いてポケットの中に仕舞った袋を思い出す。
もしもの時のためにと渡されたお金はこのために渡されたのだろう。おそらくこうなることも考慮した上で用意していたに違いない。準備の良さに感心すべきか、よくわからない状況だ。
呆れるコビーはげんなりしつつ、匂いの原因を探すルフィをじっと見つめる。
「おっ、あの店だな。メシ食おうぜ」
「食事って、さっき船で軽食取ったじゃないですか。それに二人が働いているのに」
「まぁいいじゃねぇか。すぐ終わるからよ」
「あ、ちょっと」
制止も聞かずにルフィは意気揚々と店の中に入ってしまい、残されたコビーもそのままでいる訳にはいかず、慌てて追いかける。
すでに彼は席を見つけて座ろうとしており、そこへ向かった。
こんなことをしていていいのだろうか。キリとシルクが航海の準備をしていると知るため、そう思わないでもないが、やはり想像していた通りルフィの行動を御することはできない。
溜息をつきつつ大人しく席へ座る。
こうなれば食事を終えてから基地へ向かうことになりそうだ。
楽しそうに早速メニューを見るルフィを見やり、窘めるように呟いた。
「ルフィさん、食べてもいいですけどすぐ出ましょうね。今頃キリさんとシルクさんはルフィさんのために働いてるんですから」
「ししし、わかってるって。でもキリはメシ食ってもいいって言ってたけどな」
「え、そうなんですか？　いつの間に」

「それにゾロは捕まってるんだろ？　どこにも逃げたりしねぇって」
ルフィが噂の人物の名を口にした瞬間。なぜか店の中でガタンっと大きな音が鳴った。それも一つや二つではない、一斉に複数の人間が動いたようで音がいくつも重なる。
不審に思った二人が店内を見回せば、各席で転んでいる客がルフィたちを見ている。
まるで何かに怯えるような視線。違和感の残る不安げな表情だ。
状況が読めずにただ困惑した。
コビーだけでなくルフィまでその視線に不思議そうな表情を浮かべ、しばし目が離せなくなる。
「なんだ？　なんでみんな転んでんだ？」
「ひょっとして、名前じゃないですかね。今ルフィさんが言った」
「あぁ、ゾロのことか」
呟いた途端、再びガタンと大きな音。
目を丸くして驚く二人が見ている前で、全ての客人が盛大に転んでおり、皿やテーブルすらひっくり返しそうな勢いだった。些細な言葉で異常なまでに驚いている様子である。
これを見てようやく理由を理解し、声を潜めたコビーは身を乗り出しながらルフィへ伝えた。
「ここではどうやらロロノア・ゾロの名前は禁句みたいです。理由はわかりませんけど、きっとみんなその名前を恐れてるんですよ」
「そうなのか。しっかしおもしれぇ奴らだなぁ」
転んだまま二人を見つめていた客人たちは、座り直すためのろのろと動き出す。
その様子を確認しながら少し声量を戻してコビーが口火を切る。
「話を変えましょう。そうだ、せっかくこの町に来たんだから海軍の話とか。さっきも言ってましたけど、ここの基地長のモーガン大佐は――」
再び、ガタンという物音。
予想していなかった反応に驚いて見てみると、ロロノア・ゾロの名

前を出した時と同じように客が転んでいた。しかも全員である。
驚きか、恐怖か、目を丸々とさせているのは一人ではない。
面白い反応だと捉えたか、ルフィはけらけらと笑っていた。
しかしコビーは同じように笑えない。彼らのリアクションに何か違和感を感じたのだ。
海軍に捕縛されたロロノア・ゾロならいざ知らず、なぜ海軍大佐の名を聞いて怯える。
怯え。彼らの瞳に映し出されていたのは聞かされた名に対する恐怖だ。
何かがおかしい。そう感じてコビーの顔は真剣になって、真面目に考え始めていた。
この島には何か問題があるのかもしれない。
ただ楽しそうに笑っていたルフィだったが、ふとした瞬間にそんな彼の表情に気付き、ふっと表情を変える。笑みは消えて何かを感じ取った様子だった。
異様な空気が店内に流れていた。だが今更店を出ることも躊躇われる。
当初の予定通り、ルフィはメニューを選んで店員に伝え、ひとまず食事を始めることにした。

〝海賊狩り〟

じりじりと降り注ぐ太陽の光が恨めしかった。
体が熱くなって汗が流れる。濡れたシャツが鬱陶しい。
ただ今はそれでさえ奇跡に思える。
まだ汗が出てくることが不思議で思わず笑ってしまった。
食事を絶って今日で九日目。必要最低限の水は与えられて、排泄が必要になれば係の者に連れられてトイレへ行けるが、それ以外はずっと磔にされて立ち尽くすのみ。
それは一つの賭け事であって、同時に一種の拷問であった。
普通の人間ならとっくに音を上げて死を望むほど辛い。
それでも彼は何も言おうとしなかった。
ただじっと立ち尽くすだけ。己の不幸を呪う訳でもなく、自らの行動に反省する訳でもない。
約束を守るために立ち続けていた。本当ならば今すぐその場へ倒れて眠ってしまいたいが、地面に突き刺さった十字の木材に両腕を縛られ、立つのを強制されてはそれもできない。
汗を掻いて疲労にまみれ、体を洗うどころか服を着替えることさえ許されていなかった。きっと今はひどい匂いがしただろう。しかしそれさえ気にならず、余計な思考が消えている。何も考えずにただ耐えて、来るべき時が来ればそれでいい。
そうしていると水を与える時間が来たらしかった。
小さな水筒を持った一人の海兵が近付いてきて、睨むような目つきの男へ話しかける。
「給水の時間だ」
ひどく事務的にそう言われ、感情を感じないかのような素振りでただ水筒の口を向けられる。もはや慣れた物だ。生きるために口をつけて抵抗もなく水を飲まされる。
ごくごくと音が鳴る。美味そうに飲む物だと海兵は静かに思った。
ずっとここに立ち続けているなど並大抵の精神力ではないだろう。むしろ正気の沙汰とは思えなかった。一体なぜそこまで生きようと

するのか。否、生きたいと思っているのならなぜ命乞いをしないのだ。恥を捨てて頭を垂れれば助かるものを、敢えて辛い道を選ぶ気が知れない。

栄養がある訳でもない水を飲み終えて、生き返るような心地だった。

水分を得た肉体は疲労を覚えながらもまだ生きようとしている。

それだけでいい。今この瞬間はそれだけで十分だ。

深く息を吐いて水筒の水を飲み干した男は、俯いてまた動かなくなる。

役目を終えた海兵は何も考えないよう努めてその場を離れようと振り返った。しかしその背に対してようやく口が開かれる。少し掠れた、しかし妙な力を感じる声が鼓膜を揺らす。

「おい。昨日のガキはどうした」

思わず肩が震える威圧感。これほど弱ってまだそんな声が出せるのか。

多少の怯えを密かに隠し持ちつつ、平静を装って海兵が振り返る。

その男と目が合った。今度は震えることはなかったがやはり死にかけの人間とは思えない迫力を持っていて、あまりにも力強い眼差しに言葉を失いかけてしまう。

自分を奮い立たせて問いに答えようと口を開いた。

意外にも男は海兵の言葉をきちんと聞いていて、決して話し合いができない様子ではない。

「安心しろ、丁重にお帰り頂いただけだ。怪我の一つもない」

「へっ、どうだかな。あの七光りのバカ息子なら何しでかしてもおかしくねぇだろ」

「……口を慎め。あの御方は海軍大佐のご子息だ」

男は笑っていた。今すぐくたばってもおかしくない風体だろうに、口の端を釣り上げ、なんとも凶暴そうな笑顔を浮かべて余裕すら感じられる。

背筋に悪寒が走る。もはやそれを人間だとは思えなかった。

きっと噂は本当だったのだろう。

人の形を持った魔獣。異様な強さと精神力を持つそれを表すにはそれが一番適している。
今すぐにもこの場を離れたかったが、また男が口を開く。
「約束は覚えてるか。一ヵ月ここに突っ立ってりゃ釈放だ。男に二言はねぇな」
そう聞かれて海兵は息を呑んだ。
約束。それは男を釈放するための条件だ。
彼がその場に一か月間立ち続けていられたら、無罪放免で解放される。
そうなるはずで縛られているものの、海兵はすぐに頷くのを戸惑い、わずかに視線をあちこち動かすも、やがてゆっくり顔を動かした。
「ああ、わかっている。それが釈放の条件だからな」
「頼むぜ。はっきり言って今すぐにもぶっ倒れそうなんだ。おれァ、何がなんでも生き抜いて、ここを出る。約束を違えてくれるなよ」
「……ああ」
ほんの幾ばくかの間があったが、戸惑いがちに頷いた海兵はすぐに歩き去ってしまう。
話し相手を失った男はふと空を眺める。
恨めしいほどに晴れ渡っていた。今日は雲一つなく、混じり気のない澄んだ青。太陽の光が世界を明るく照らしていて、何物にも縛られない二羽の鳥が彼の頭上を通り過ぎて行った。
何を想うかは当人のみぞ知る。
男は再び俯き、ただ静かに立ち続けた。

＊

食事を終えたルフィとコビーは海軍基地を目指して歩いていた。
何やら上機嫌なルフィと違い、厳しい表情を見せるコビーは俯きながら考える。
一見平和に見える町だが実情を目にした後ではどうしても違和感

が感じられ、街並みや町民を見る目も疑念を表していた。辺りを見回すコビーは少し落ち着きがないように見える。
胸中にあるのは表現できない不安で、それだけは嫌だと思う気持ちがあった。
彼はルフィを相手に不安を言葉にして聞かせる。
「やっぱりおかしいですよ。犯罪者ならともかく海軍大佐の名前を聞いて怯えるなんて。もしかしたら何か良くないことが起こってるのかも」
「いいじゃねぇか、おもしろかったし。おれもっかいあの店行こうかな」
「良くないですよ。海軍が不正をしていたとしたら、それほど最悪なことはありません。市民を守る海兵が市民から恐れられているなんて……とても普通とは思えませんよ」
不安を口にするコビーの表情は冴えず、歩調も人知れず緩やかな物となっていた。
対して、ルフィに落ち込んだ様子はなく、間近に迫った基地に再び好奇心を露わにしている。
果たしてロロノア・ゾロとはいかなる人物だろうか。そればかりが気になって歩調は速くなり、思案するコビーを急かすように前へ出た。
「とりあえずゾロを見に行こうぜ。どんな奴なんだろうなぁ」
「そ、そうですね。でもあんまり期待しない方がいいと思います」
「なんで？」
「悪いことをしなきゃ捕まりませんよ。特にロロノア・ゾロは海賊じゃなくて賞金稼ぎですし、もし何の罪もないのに捕まってたら、海軍の過失ってことに――」
言いかけてまさかと思う。
もし、ロロノア・ゾロが何の罪もないのに捕まっていたとしたら。
この町の海軍大佐に対する怯えといい、嫌な想像が頭をよぎる。過失とは不注意から来る失敗を言うものだ。しかしもし、失敗ではなく故意に起こされたものだとしたらひどくまずい。

想像すれば徐々に海軍への不信感が生まれかけて、真相を知りたいと思う。
きっと捕まった本人に聞けばわかるはずだ。
表情を引き締め直したコビーは恐怖を捨ててルフィの隣に追いつく。
「行きましょうルフィさん。なんだか嫌な予感がして……」
「おう。やっとあの時みたいになったな」
表情を緩めるルフィと共に、数分と経たずに海軍基地の前に辿り着いた。
大きく、壮観な姿である。
基地は厳重な警備を敷いている様子。門番が基地の正面に立っており、当然侵入を許してくれる訳もない。ロロノア・ゾロはどこだと尋ねたところで答えてもくれないだろう。
通りに立ち尽くしてその建物を見上げた二人はしばし考える。
会いたいとは思うが簡単にできそうにもない。どうすべきかを早々に見失っていた。
「で、ゾロはどこなんだろうな。やっぱり中かな」
「普通、囚人は牢屋に入れられると思いますけど、そうなるとやっぱり基地の中なんじゃ」
「裏口探そうぜ。こっそり入ったら大丈夫だろ」
「ほ、本当にやるんですか？　いい人である証拠は何もないんですよ。そんな危険なこと……」
「嫌ならいいよ、おれ一人で行くから」
「それはだめですっ。ぼくだって一応キリさんに任されたんですから」
「じゃあ行こう」
「うぅ、いいのかな本当に……」
二人は正面の門を回避し、高い塀に沿って歩き始めた。どれだけ大きな基地であっても警備が薄い場所はあるはず。今やそこを頼りにするのが一番の近道だった。
正面からぐるりと回って数百メートル。

人気もなくなってきた場所に差し掛かると、奇妙な物を見つける。
基地の塀に梯子を立てかけ、上がっていく少女だ。歳の頃にして十歳前後。体は小柄で、そこにある梯子を運べそうな外見にも見えないが、行動力の賜物かするする塀の上まで上がっていってしまう。大人の目線でも相当の高さだというのに、どうやら向こう側へ飛び降りるつもりのようだ。
奇妙な光景に思えて呆気に取られる二人の前で、少女がパッと飛び降りる。
姿が消えてしまったせいでコビーが心配から悲鳴を上げるも、対照的にルフィは笑顔で面白そうだと思っている風体。すぐに駆け出して塀へ駆け寄った。
「ルフィさん！　あの子基地の中に……しかもこの高さですよ！　怪我してるかも……！」
「あいつ度胸あるなぁ。向こうになんかあんのかな」
「あっ、ちょっと！　だめですよ、海軍の敷地に入ったら！」
コビーの忠告を聞かず、塀の前に立ったルフィは梯子を使おうとしなかった。自らの脚力のみを頼りに強く地面を蹴って、高く跳び上がる。するとそれだけで高い塀の頂点にまで達し、両手で縁を掴み、腕の力で体を持ち上げればすぐに向こう側の景色が見えた。
敷地の中、広大な演習場らしき場所が広がっている。
そこに誰かの姿が見えた。磔にされてひどく疲弊した様子が伝わる。
その男のことも気になったが、ひとまずルフィの視線は真下に向かう。塀のすぐ傍で先程の少女が転んでいた。だが大した怪我はなかったようですぐに立ち上がる。
服をはたいて土を払った後、彼女は歩き出した。
向かう先には磔にされた男が居る。目的はあの男、ということか。
ずいぶん迫力のある人物だった。頭に黒い手拭いを巻いて、わずかに緑色の短い髪が見え、服装は白いシャツに緑の腹巻、黒いズボン。だらりと力が入らない姿勢で脚を投げ出しており、背後の木材にもたれかかっている。どうやら両腕が縄で木材に縛り付けられているら

しかった。
男は目を閉じているようだ。だがその外見から鬼気迫る雰囲気が醸し出される。
まさかと思って見つめていると、梯子を上がって来たコビーがすぐ隣のルフィを見た。
「る、るるる、ルフィさん、いいんですかこんなことして」
「なぁコビー、あそこにいるのってさ」
「え？　あぁ、あの子無事だったんだ――えっ？」
ルフィに促されて敷地内を見た途端、血相を変えてコビーが絶句した。
今にも気絶しかねないほどの衝撃を受けて、視線は挙動不審に動き出す。
何度見ても間違いない。磔にされている男は噂で聞いた姿と全く同じだった。
「て、手拭いに腹巻、間違いないっ……ほ、本物はなんて迫力なんだ。あの人ですよルフィさん。あの人が噂の賞金稼ぎ、海賊狩りのゾロですっ」
梯子から落ちそうになりながらも必死で指差し、ついにその名が呼ばれる。
じっと見つめるルフィは片時も目を離さなかった。
確かに危険な空気を纏っている。傍に居る者全てを傷つけそうな殺気はまさしく飢えた魔獣。見た目だけでも強そうだと判断できる。
ただ、剣士と聞いていたのに剣を持っていない。それが不満なのかルフィの表情は優れない。
一足先に基地の中へ入った少女は真っ直ぐゾロ目指して歩いていて、やがて彼の前へ辿り着くと足を止める。異様な空気を発する彼を見て微塵も恐れてはいなかった。
少女は手に持った小さな包みを差し出して言う。
「お兄ちゃん、ごはん持ってきたよ。お腹空いてるでしょ？」
弾むような少女の声に反応して、ゆっくりと両目が開かれた。
その迫力に再びコビーはぞっとする。開かれた目のなんと鋭いこ

とか。眼差しだけで人を殺せそうな、睨みつけるような目つきはギラリと怪しく光り、見る者に圧倒的な恐怖を与える。
並大抵の人間ではない。
一体どれほど強くなればああなれるのだろうと理解が及ばなかった。
危険な眼差しは確かに少女に向けられていて、彼女を見つけても様子は変わらなかった。
「また来たのか、ガキ。メシはいらねぇっつっただろ。帰れ」
「あのね、おにぎり作ったの。私がにぎったんだよ。ちょっと形は変だけど、味はおいしいと思うんだ。お母さんにも手伝ってもらって――」
「蹴り殺されてぇのか。とっとと失せろ。おれは機嫌が悪ぃんだ」
取りつく島もないとはこのこと。包みを開いて中身を見せた少女が健気にもおにぎりを渡そうとするのに、ゾロは冷たい声で追い返そうとするのみ。
表情を微塵も変えようとせずに感情が感じられない声色だった。
本当に蹴り殺されてしまうのではないかとコビーが心配するのだが、止めることもできず。またルフィは無表情でじっと見つめるばかりだった。
手酷くあしらわれても少女は諦めない。
丸々した形ながら歪なおにぎりを一つ手に取って、自分より背が高いゾロへ差し出した。
「はい、どうぞ。食べないと死んじゃうよ」
「死なねぇ。おれにはまだやることがあるんだ」
「やることって何なの？　仕事？」
「おまえに話す必要はねぇ。帰れっつっただろクソガキ。いつまでもここに居たら、あのバカ息子に磔にされるぞ」
ゾロの言葉に、少女が俯いて悲しげな表情を浮かべた瞬間だった。
唐突に新たな声が聞こえて、全員の視線がそちらへ向かう。演習場への出入り口、そちらから三人の男たちが歩いてきて、声を発していたのは真ん中の人物だ。

「ロロノア・ゾロォ！　子供相手にそんな冷たい態度はいかんねぇ」
「チッ、バカ息子が来やがったか」
忌々しげに呟くゾロへ歩み寄ってくる人物。質の良い服を着て、高値のアクセサリーをいくつもぶら下げ、海兵二人を従える彼はどうやらそれなりの地位に居る人物だったようだ。
独特の髪型の金髪に、二つに割れた顎。あまり容姿がいい部類ではない。
意気地が悪そうないやらしい笑みを張り付けてゆっくり近づいて来る。
歯を剥き出しにするゾロはますます機嫌を悪くし、少女と相対した時とは違って殺気を醸し出していたようだ。それに気付かない男は馴れ馴れしくゾロの頬を叩いていた。
ぺちぺちと軽い音が鳴る程度。痛みはないが、侮辱と捉えるのも仕方ない様子である。
「君ぃ、子供の扱い方を知らんのか。それに今おれのことをなんて呼んだ？　んん？　忘れるなよロロノア、おまえはおれによって生かされてるんだ。なんなら給水時間を廃止して枯れさせてやってもいいんだぞ？　そしたら一か月も生きてられるかな？」
「うるせぇ野郎だ。ガキと何を話そうがおれの勝手だろ」
「ひえっひえっひえ～！　そんな訳ねぇだろう、罪人が。おまえは刑を受けてる最中なんだ。無駄口を慎め。自分のしたことを反省しろ。それができなきゃ一生このままだぞ」
「チッ……」
ずいっと寄せられた顔に頭突きの一つでもかましてやろうかと思ったが、それでへそを曲げられては困るため断念する。だがゾロの様子ならいつ動いてもおかしくはなかった。
数歩後ろに下がって距離が離れる。
それから男は得意げに自分を指差した。
「よぉく思い出せよ。おれはモーガン大佐の息子、ヘルメッポだ。おれが白と言えば白となり、黒と言えば黒になる。それがわからねぇ奴は全員処刑だぞ」

そう言って金髪の男、ヘルメッポは独特な笑い声を発した。
背を反らしてひとしきり笑い飛ばした後、またにやけた笑みで言い始める。
「まぁそう心配するな。約束の件は忘れちゃいない。ここに突っ立って一ヵ月死なずにいれたら釈放してやろう。なぁに、約束は約束だ」
「本当だろうな」
「おいおい、疑うのか？　おまえを処刑するならわざわざこんなめんどくせぇことするわけねぇだろ。すぐに処刑して終わりに決まってる。だからこれは本当の話だ」
にやにやしながらはっきり告げた後、続けてこうも言う。
「もっとも、本当に一ヵ月も生きてられればの話だけどなぁ」
悪意を顔面に張り付けたかのような嫌な顔だ。
上機嫌に笑うヘルメッポを睨みつけ、それでもゾロは何も言わなかった。
言う必要はない。ただ耐えればいいだけだ。そう思っている。
一ヵ月間、磔にされて死ななければ無罪放免で釈放される。
今はその時を待てばいい。
押し黙るゾロに興味を失ったか、今度は傍に居た少女に注意が移る。ヘルメッポは怯えた表情で固まる彼女へ歩み寄り、猫なで声で話しかけた。
「さぁて、問題はこっちだ。お嬢ちゃん、お名前は？」
「あ、あの……り、リカ」
「リカちゃんか。だめだろぉリカちゃん、勝手に基地内へ忍び込んでしかも罪人とお話なんてしちゃ。本当だったらすごく怒られるところだよ。んん？　それはおにぎりかい？」
「あの、これ、私が作って……」
「へぇぇ、そうかい。最近の子供は偉いねぇ。自分でおにぎり作れるんだから」
膝を曲げてやさしく話しかけていたヘルメッポだが、少女、リカが手に持つおにぎりを見つけ、勝手に一つを手に取った。あっと声を出

すが止まらず、それはヘルメッポに食べられてしまう。
一口かじられた。
途端にヘルメッポは驚愕して咳き込み、リカから顔を背けて米粒を吐き出した。口に合わなかったのか自ら吐き出そうとしており、瞬時に怒りの形相に変わる。
「ぶおえぇっ!? ぺっ、ぺっ! クソ、なんだこりゃ! 甘えじゃねぇか!」
「お塩の代わりにお砂糖を使ったの。私、甘い物好きだから」
「ふざけんな! こんなもん食えるかァ!」
「あっ!?」
怒りを露わにしたヘルメッポが腕を振り、リカの手を叩いておにぎりを地面に落とされる。同時に自分が持っていた一個も投げ捨て、地面を転がった二つを思い切り踏みつけた。
「クソまじいもん食わせやがって! 甘ぇおにぎりなんざ美味いわけねぇだろうが! おにぎりっつったら塩! 普通は塩だろ! こんなもん、こんなもんっ!」
「ああっ!? やめてよ、やめてっ! 食べられなくなっちゃう!」
何度も何度も、米粒が潰れて土と同化するほどに踏みつける。慌てたリカがその場に跪き、潰れていくおにぎりを見つめて悲痛な声を上げるが、ヘルメッポは止まらない。怒りに任せて飽きるまで足を振り下ろした。傍に立つ海兵も、塀から見ていたコビーも表情を歪める。
その中でもルフィとゾロは一見すれば無表情で静かに見つめていた。
ひとしきり踏みつけるとヘルメッポは満足した表情。額に浮かんだ汗を拭いて深く息を吐いた。
足元ではリカが泣きじゃくっており、すっかり泥と化してしまったおにぎりを悔しげに見つめている。手を伸ばして触れようとするがもう食べられないと知って引っ込めた。
「ひどい……ひどいよ。一生懸命作ったのにっ」
「あーあー泣くな泣くな。大体おまえが悪いんだぞ。看板が読めねぇのか。こいつに肩入れした奴は同罪になる。おまえが大人なら

処刑されてたっておかしくないんだぜ」
大粒の涙を流す彼女に顔を近付け、憮然とした顔でヘルメッポが告げる。
高圧的な態度は子供にも容赦はなく、怒りをぶつける口調だった。
「おれの親父の怖さは知ってんだろ？　だったら余計なことしねぇで黙ってりゃいいんだよ。二度とここへ来るんじゃねぇぞ。もし来たら、ハハ、チクっちまうかもな」
リカは両手で涙を拭っていた。
立ち上がったヘルメッポはそんな彼女に舌打ちし、連れてきた海兵に声をかける。
呼ばれた海兵は肩をびくつかせ、どこか疲弊した様子で返事をした。
「おい、こいつを摘まみ出せ。めんどくせぇから塀の上から投げ捨てとけ」
「は？　し、しかしそれでは――」
「あぁ？　おまえ、おれに逆らううつもりなのか」
意見しようとした海兵がギロリと睨まれた。その瞬間に体が硬直して何も言えなくなる。最悪の想像が頭の中に浮かび上がったせいだった。
一気に詰め寄られて、心臓を掴まれるような恐怖を味わう。
ヘルメッポを怖がっているのではない。恐怖の対象は彼の父親だ。
それを理解しているため、気軽に大口を叩く彼は傲慢な態度で、年上の男に偉そうに言う。
「おまえだって養わなきゃならねぇ家族がいるんだろ。いいのか？　おれ様にそんな口叩いて。おれが親父に言えば、おまえの首を飛ばすのは簡単なんだぜ？」
「は、はい……」
「わかったら何も言わずに頷け。そして行動しろ。できねぇんならおまえも処刑だ」
言われて歯を食いしばった海兵は、歩き出して小さなリカの体を持ち上げる。

急ぐ様子で塀まで歩いていき、おもむろに両手に力を入れた。
近付いて来る海兵に見つかってはいけないと、慌ててコビーは梯子に掴まったまま隠れたが、ルフィはその様子をじっと見つめたまま。
リカの体が投げ飛ばされる光景をじっと見ていた。
「きゃあっ!?」
小さな体は軽々と投げられた。塀を越えて落下しようとする。
それを見たルフィが瞬時に動き出し、落下してくる彼女と地面の間に入ってリカを抱きとめる。体勢を変えることなく落下していくと背中から地面に激突した。
隠れて声を潜めたままだがコビーは小さな悲鳴を発する。
確実に死んだと、そう思ったらしい。
しかしゴム人間であるルフィの肉体は物理的な衝撃を吸収してしまう性質があり、背中から落ちようが激突しようがまるで痛くなかった。リカを抱えたままむくりと起き上がり、平気な顔でその場に座ると、驚いた表情の彼女を見る。
その様子にも驚くコビーは急いで梯子を下り、二人へ駆け寄る。
どちらも無傷。全く無事な姿だった。
「大丈夫か?」
「う、うん……ありがとう、お兄ちゃん」
「ルフィさん! 大丈夫ですか!」
駆けつけてきたコビーに目を向け、先にリカを立たせた後でルフィが立ち上がる。
すぐにコビーはリカを心配するものの、尋ねてみたところで彼女は気丈にも大丈夫と答えた。確かに怪我はなさそうだが相当怖かったはず。しかし涙は止まっていた。
二人の会話を見たルフィは静かに塀を見上げる。
見た事が無いほど真剣な表情で、何かを思案するようでもあった。
「コビー、こいつ頼む」
「え? ちょっと、何する気ですかルフィさん」
再び跳び上がって塀に上り、敷地内を見る。
すでにヘルメッポたちは去った後らしい。見えたのは磔にされた

ままのゾロ一人。
塀を越えたルフィはリカと同じように侵入を果たした。
当然、すぐにゾロも気付いて、鬼気迫る様子で睨みを利かせてくる。
「誰だ、おまえ」
「おれはルフィ。海賊王になる男だ」
「海賊？　おまえバカか。ここは海軍の基地だぞ。自分から捕まりにでも来たかよ」
「違えよ、おまえを見に来たんだ。いい奴だったら仲間にしようと思って」
「あぁ？」
さらに迫力が増した気がした。彼の睨みには凄まじいものがあって、常人ならば震え上がって動けなくなるだろう。ただし、ルフィは楽しげに笑って気楽に受け流していたようだ。
腰に手を当てて堂々と立ち、逃げもせずにその視線を受け止めて会話する。
そんな変わった奴は初めてで、睨む目つきだがゾロは彼を見続けた。
「おまえなんで捕まってんだ？」
「関係ねぇだろ。失せろ」
「約束とか言ってたな。助かるのか」
「ああ、一ヵ月ここで突っ立ってるだけでな。だからおまえの助けはいらねぇ。とっととおれの前から消えろ。蹴り殺されたくなきゃな」
「殺されねぇよ。おれは強いからね」
「へっ、そうかよ。そりゃあ、教えてくれてありがとう」
口の端を上げてゾロが言う。初めて見る笑みにルフィが頬を釣り上げた。
「なんだ、笑えるんじゃねぇか。魔獣とか呼ばれてるからもっとおっかねぇ奴かと思ってた」
「別におれが言い出したわけじゃねぇよ。誰が何を言ってようが興味ねぇな」

「そっか。じゃあさ、海賊になる気あるか？」
「誰が好き好んでそんなもんになるってんだ。帰れ。おまえとしゃべることなんざねぇよ」
またも冷たい声で言われてしまい、ふむと頷いたルフィは背を向けて歩き出す。
今すぐ決める必要はないのかもしれない。この場にはキリもシルクもいないし、なんとなくは彼を知れた。ひとまず何もせずに帰るのも悪くなかった。
「まぁいいや。別に今すぐじゃなきゃいけねぇわけじゃねぇし、まだ仲間にするって決めたわけじゃねぇから。また来るよ。一ヵ月もちそうになかったら言ってくれな」
「ふざけんな。二度と来るんじゃねぇぞ」
ルフィは塀へ向かって歩き出した。
それから数秒とせずゾロが声をかける。
「おい、ちょっと待て」
「なんだ？　海賊やるか？」
「ちげぇよ。んなつもりはねぇ……それ、取ってくれねぇか」
「んん？」
くいっと顎で指し示された場所を見てみると、そこには泥となったおにぎりがある。
話はなんとなく理解できたが笑うより先に心配してしまう。
そちらへ向かいながらルフィは疑念を示した。
「おまえこれ食う気か？　おにぎりじゃなくてもう泥だぞ、これ」
「いいから寄こせ。腹減ってんだ。残さず食わせろよ」
大口を開けて待ちながら、今度ははっきりそう言った。やはり食べる気なのだ。
一応念のためにと泥のようなそれを持ち上げ、さらにルフィは尋ねる。
「本気か？　おまえ腹壊すぞ」
「うるせぇ。おまえにゃ関係ねぇだろ」
「あ、そうだ。だったらさっきの子にさ、もっかい作ってくれるよう

に頼んでやろうか？　多分まだその辺にいるから言えばすぐに――」
「それを寄こせっつったんだ。さっさとしろ」
その外見を見ても気は変わらないらしい。
不思議とルフィは頬を緩めて、もう止めようとはしなかった。
口を開けて待つゾロにそれを食べさせてやり、地に落ちたすべてを渡してやる。
食事と呼ぶべき姿ではなかった。一噛みするごとに奇妙な音が鳴り、石や土が混ざっているのは当然で、どこかでは砂糖の甘さも感じられ、凄まじい味である。
口にした途端に体の反射で涙が込み上げてくるも、頬へ流れる前に耐えて、辛くとも必死で噛み潰した。睨みつける瞬間とは一味違い、食べ続ける間も凄まじい気迫を放っている。
そうして全てを食べ、呑み込む。
咳き込みながら荒い呼吸を繰り返すゾロは、息も絶え絶えに呟いた。
「ゲホッ、オェッ……さ、さっきのガキに、伝えちゃくれねぇか」
「なんだ？」
俯いてしまって目は見えない。しかし凄んでいた時が嘘のような声色だった。
「うまかった。ごちそうさまでした……ってよ」
予想もしていなかったセリフにルフィは笑った。
魔獣と聞いていたが人間の心を失くした訳ではないらしい。鍛えられた肉体から放たれる威圧感も理解するが、今の彼なら噂とは違った人物像に見えた。
軽く頷いたルフィだがそれだけでは終わらず、視線を下げたままのゾロへ言う。
「いいぞ。でもどうせなら自分で言った方がいいんじゃねぇか？」
「あぁ？　おれはここから動けねぇんだ。何言って――」
もう一度睨もうとしたのだろう、ゾロが視線を上げた。
その時に気付く。ルフィよりずっと後方、塀の上には再び梯子を上って来たリカが顔を出して、輝く目で彼の姿を見ていた。

何も言えなくなって、眉間に皺を寄せながらまたうなだれる。
してやったりといった顔のルフィは楽しそうに笑い、しばしゾロの傍から離れなかった。

決起

基地の傍を離れたルフィ、コビー、リカの三人は場所を移して話していた。

人の姿がないとある街角。偶然見つけた階段に腰掛け、話すのはゾロについて。

何やら事情を知っているらしいリカに詳しい事情を聞いていて、どうやら賞金稼ぎの彼が捕まったのにはそれなりに理由があって、けれど何もゾロばかりが悪い訳でもない様子。

それをリカが熱心に語っていた。

「お兄ちゃんは何も悪いことしてないのよ。私を助けてくれただけなの」

「助けた？」

小首をかしげるルフィへ頷き、ぽつりぽつりとリカが語り出す。

「ちょっと前まで、あのヘルメッポって人が飼ってた狼が町の中を歩き回ってたの。怖かったけど、もし文句言ったりしたら大佐さんに怒られるから、誰も何も言えなくて。狼に怪我させられちゃう人もたくさんいた。お兄ちゃんと会った時も、私が狼に襲われそうになった時だったの」

「そんな……海兵の身内の人間が、町民に危害が及ぶようなことをしてただなんて」

「大佐はなんにも言わなかったのか」

「うん。自分の子供のことは何も言わないから」

すでにコビーは愕然としていた。てっきりゾロが犯罪相当の悪いことをしたから捕まったのだとばかり思っていたが、これではそういった現実でもないらしい。

リカはさらに続ける。

「それでね、私が助かったのは、お兄ちゃんが狼を斬ったからなんだ。私が転んじゃって逃げられなかったから仕方なく斬っちゃったんだけど、みんなも狼には困ってたし、町の人たちは喜んでたの。だけど、ヘルメッポって人はすっごく怒っちゃって……」

「それでゾロが捕まったんだな」
「うん……あ、でも死刑にはならないんだって。反省するためにあそこにいるけど、絶対釈放されるはずだって海兵さんが言ってた」
「そうなんだ……だけど、一ヵ月もあんなところになんて」
ゾロが死なないと伝えてリカが笑顔になっても、やはりコビーの表情は優れない。
確かに理由はあった。だけどこれはやりすぎではないのか。素直にそう思ってしまう。
非はヘルメッポにもあったはずだ。町民たちの安全を脅かすペットを町中で放し飼いにするなど海軍云々は関係なく、一人の町民として態度がおかしい。しかも話を聞く限り、怪我をさせられた人々は泣き寝入りをしていた様子。
ペットを斬られて悲しむのは理解できるが、だからといってその責任をゾロ一人に負わせ、罰を与えるのはおかしいのではないだろうか。
この町は何かがおかしい。特に海軍、モーガン大佐を取り巻く何かが。
海軍への不信感を強めるコビーとは裏腹に、さほど表情に変化のないルフィが口を開いた。
「うーん、じゃあ仲間にすんのは無理なのかな。一ヵ月も待てねぇし、約束なら連れ出すのもだめだろ。せっかくいい奴そうなのになぁ」
腕を組んで得意ではない考え事を始め、自問自答のように呟く。
ゾロを仲間に、と考えていたがあまり条件は良くない。本人が海賊になることを望んでいないし、約束を破って逃げ出す気もなく、強固な意志を確認すると連れ出すのは無理そうだ。
諦めるべきか。しかし本心としては諦めたくない気持ちがある。
一度キリとシルクに話してみた方がいいのかもしれない、と思った頃。
ちょうどいいタイミングでこちらへ歩いて来るキリとシルクの姿を見つけ、パッと笑顔が咲く。

「おーい、キリ、シルク！　こっちだ！」
立ち上がったルフィが大きく両手を振り、二人も小さく手を振り返す。
やってきた二人はまた知らぬ間にリカの姿が増えていることに気付いて、次から次に出会いを見つける人だなとルフィに対して呆れた表情。きょとんとした彼女へ微笑みかける。
「また新顔が増えてるね。まさか仲間、ってわけじゃないでしょ？」
「ししし。リカっていうんだ。友達だ」
「ふぅ、一体何があったんだか……えっと、よろしくねリカちゃん。私はシルクよ」
溜息をつきながらも笑顔を浮かべて、友好的な態度でシルクがリカの前へ赴く。少し膝を曲げて視線を合わせると、リカは恥ずかしそうにしながら頭を下げて返事をした。
それからシルクは彼女の隣に座って和やかに会話を始める。
女性同士なら恐怖心はないのか、すぐに打ち解けられそうな様子だった。
一方でキリはふと真剣な表情になり、傍に立つルフィを見る。まるでリカには聞かせないかのように、一瞬シルクと目を合わせればわずかに頷き、その場を少し離れようとする。
「ルフィ、それにコビーも。話したいことがあるんだ。ちょっといいかな」
「ん？　どうした？」
「ぼくもですか？」
キリにつられて二人の少女から離れ、角を曲がったところで足を止め、三人は立ったまま話を始める。その地点からなら先程梯子を立てかけていた場所も目視できた。
リカの視線が無くなって、小さく息を吐いたキリは肩をすくめる。
普段の力が抜けた様子ではなく、目の色を変えて冷淡な表情。何やら緊迫した状況を思わせる。自然とコビーは息を呑むが、ルフィの表情だけは緩んだままだった。
「ゾロはどうだった？」

「ああ、結構いい奴みたいだったぞ。まだ仲間にするかは決めてねえけど」
「うん。そっか」
「あ、そうだ。おまえらに相談しようかと思ってたんだよ。ゾロのことどうするかなぁって思ってさ。なんか色々事情が――」
「話したいのはそのことについてなんだ」
キリがルフィを見つめて静かに告げる。
「ゾロは明日、処刑されるらしい」
はっきりと聞こえて瞬間的にルフィとコビーの表情が変わった。流石に今度は笑みが消え、目を大きく見開いて動きが止まり、思考が一瞬停止する。
かなり衝撃的な言葉だった様子でしばしの間が生まれた。
数秒間驚いた後、絞り出すような声でルフィが呟く。
「え……なんで」
「しょ、処刑って、どういうことですか!? だってリカちゃんの話では、一ヵ月間あそこに居れば無罪放免だって……!」
「大佐の息子が吹聴してたらしい。決定したのもその人みたいだ」
「大佐の息子、って……あの人だっ」
俯いてコビーが呟いた言葉に違和感を覚えるも、今は気にしている場合ではない。
動かないルフィを見やり、どうするかを問う。
「幸い、処刑は明日だ。考える時間はあると思うけど決断しなきゃならない。仲間にするか、見捨てるか。海軍に喧嘩を売るか売らないかだ」
「ちょ、ちょっと待ってください！ その話、本当なんですか？ひょっとしたら誰かの勘違いかもしれないし、か、海軍の人間がそんなことするとは思えません」
「おそらく本当だよ。この町の人間はみんなモーガン大佐を恐れてる。徹底的な恐怖政治で管理されてるみたいだ。息子は息子で傲慢になってるみたいだしね」
「そんな……」

「これも現実だよコビー。海軍だって一枚岩じゃない。これだけ世界が広くて海兵も多いと、正義の体現者は、案外一部だけだったりするからさ」
コビーはがっくりと項垂れた。
子供の頃から夢見ていた海軍の姿とは思えない。一方的に罪をかぶせて罰を与え、あまつさえ嘘をついて命まで奪おうとする。それを実行しているのが息子だとしてもなぜ大佐の地位に就く父親が止めないのだ。やりきれない想いで胸の内がいっぱいになる。
何も言えなくて、だがそれでも黙ってはいられなかった。
進言を続けようとするキリの声を遮り、思わず声が大きくなってしまう。
「勝負は今日と明日、ゾロが処刑される前にどうするか決めて動こう」
「やっぱり納得できません！　リカちゃんの話を聞いてやっと確信しました……こんなの間違ってますよ！　そりゃ他にも方法はあったかもしれないけど、人の命を助けたゾロさんを処刑するだなんて海兵のやることじゃない！　しかも釈放するなんて嘘までついて――！」
「リカちゃん、待って！」
拳を握りしめて強く叫んでいた時だった。何がきっかけだったか、飛び込むように角を曲がったリカの姿が見え、しまったと辺りの空気が重くなる。
リカは驚愕して表情を強張らせていた。
慌てて駆けつけたシルクが抱きしめるも、顔の筋肉がぴくりとも動かない。
呆然と立ち尽くすコビーや何も言わないルフィを見つめ、声が出ないようだった。
数秒、時が止まったかのように沈黙が続く。
何秒か経ってようやく、必死に喉を動かし、リカが声を出した。
「お兄ちゃん……処刑されちゃうの？」
悲痛な声だった。

キリは視線を外して、彼女を抱きしめるシルクはぎゅうっと腕に力を入れ、何も言えずに目を閉じる。子供に聞かせる話ではなかった。二人はそう思う訳だが、事情を知る二人はそうではない。
リカとゾロとの関係性を知ってしまった後だ。
一瞬で変化してしまった表情がとても悲しく思えて、なんとも言えない感覚を得る。
コビーはばつが悪い顔を見せ、ルフィは何も言わずにじっと彼女を見た。
「え、だって、海兵さんが大丈夫だからって。すぐ自由にしてもらえるからって、言ってたのに。罰は受けるかもしれないけど、そんなの軽いものだって」
「あ、あの、リカちゃん――」
「お兄ちゃん、死んじゃうの？　どうして、何も悪いことしてないのに……」
そこまで聞かされればなんとなくでも事情はわかった。少なくともリカがゾロに対して友好的な態度を取っているのは確実で、尚更聞かせてはいけなかったと気付く。
止められなかったシルクは特に強く後悔して、大事そうにリカの体を抱き寄せた。
シルクの胸の中、色を失ったかのような声で静かな呟きが続けられる。
「私のせいなのかな……」
視線は下へ。地面を見つめながら言う。
小さな体は弱々しく、見ている方が辛くなった。
「私が、ドジだから。あの時転んじゃったりしたから、お兄ちゃんが助けてくれて、それで死んじゃうの……？　うっ、だって、大丈夫だって、言ってたのにっ」
「違う。あなたのせいじゃないの。あなたのせいじゃない」
「大丈夫だって、死なないって、言ってたのに……！」
ついにリカの目から大粒の涙が流れ始める。
ボロボロととめどなく、一度こぼれだしたそれを止める術はない。

次から次へと溢れ出ると同時、後悔の念はさらに強くなる。気付けば訳も分からず自分を責める言葉を吐いていて、悲痛な表情は何よりも心を痛めさせた。
「ひっく、いやだよぉ。まだちゃんとお礼も言えてないのに、こんなお別れなんて……！」
「リカちゃん……」
シルクが声をかけるとリカの視線が上がった。
ルフィを見つめて、今度は確かにはっきりとした口調で言った。
「ルフィお兄ちゃん」
「なんだ？」
「ゾロお兄ちゃんを、たすけてよ……！」
涙ながらにそう言われた時、時を待たずにルフィは笑った。
「いいぞ。その代わり、ゾロはおれがもらっていくからな」
「ル、ルフィさんっ」
非常に楽しそうな笑みを見て、いつしかリカの涙は止まったようだ。自分で言ったことながら驚きは大きく、あまりにも力強い一言に心が落ち着いた。
いとも容易く告げてルフィは早くも背を向ける。
ゆっくり歩き出して向かう先は、すぐ傍に見える海軍基地。
先に動いた彼は当然とばかりに背後へ声をかける。
「キリ、シルク。行くぞ」
「了解。やっぱりそっちになったか」
「ちょっとルフィ、まさか海軍を相手にするの？」
「ああ。ゾロはおれの仲間にする」
呼ばれてすぐキリは歩き出し、ルフィの後へ続く。一方でシルクは戸惑いを持ってすぐに動き出す訳でもなかったが、事情を理解したためか、拒むことはしない。
体を離したリカの肩に手を置き、正面から見つめる。
「心配いらないわ。私たちに任せて。きっと戻ってくるから、リカちゃんは家で待っていて。危ないから来ちゃだめだよ」
「お姉ちゃん、戦うの？」

「うん。お姉ちゃんたちね、海賊なの」
「海賊？」
シルクも立ち上がって、小走りで二人の傍まで駆けつける。
迷いも持たずに三人揃って海軍基地へ向かい始めた。
呆然と立つリカはその背を見送ろうとしていたが、歩き去る前に、コビーが大声を出す。
彼らを心配するがため。いまだ己の信念を見出せないせいでもある。
たった三人で海軍に挑もうとする彼らが無謀に見えて、死なせたくないと心が騒いでいた。
「ま、待ってくださいよ！　正気なんですか？　相手は海軍で、そりゃみなさんは海賊でしょうけど、正面から戦って無事に済むわけありません！　こんなことしたって根本からの解決になるかどうかもわからないのに……」
「コビー、おれたちは海賊だ。海軍がどうとか、そういうのは知らねぇ」
「う、それは確かに……」
「だからよ、海軍のことはおまえがなんとかすりゃいい。いつか海軍将校になるんだろ？」
「あ……は、はいっ」
独特な笑い声を響かせ、彼は再びコビーに背を向けて歩き出す。他の二人も間を置かずに後ろへ続いた。恐怖心など欠片も無くて、悠々と歩く姿には目を惹きつけられる。
立ち尽くすコビーは三人の背を見て胸の鼓動を高鳴らせていた。
認めてもらったと、自惚れていいのだろうか。
今の言葉には試されているような、同時にそれだけの力があると言われているような気がして、嬉しがっていいものか否か、こんな状況でわからなくなる。
緊迫した空気は置き去りに、彼らは笑顔を消さぬままに去っていった。
「うし、ゾロに会いに行こう。まずはあいつを説得しねぇとな」

基地はすぐそこに見えていた。そのためすぐに塀へと近寄って、侵入はそこからだと決める。
ゾロを見つけた地点まで辿り着いて、まずはルフィが慣れた様子で跳び上がり、塀の上に立った。それからゴムの腕を伸ばして二人を引き上げてやり、三人同時に降りる。
隠れるつもりもない堂々とした侵入だ。
礫にされているゾロが気付かないはずもなくて、呆れた表情で睨む気すら失くしている。
堂々と歩いて来る彼らを見る以外にやることはなく、目の前に立たれてようやく声をかけることにした。それも仕方ないからで興味を持っている訳ではないらしい。
「おまえ何しに来やがったんだ。今度はぞろぞろ連れて来やがって」
「なぁ、縄といてやるからおれたちの仲間にならねぇか？」
「人の話聞いてんのかてめぇは。勧誘ならもう断っただろ。興味ねぇんだ」
「それじゃおれが困るんだよ。もうおまえを仲間にするって決めたんだから」
「あぁ？　勝手なこと言ってんじゃねぇ」
ゾロの目がルフィの後方、両側から挟むようにして立つ二人を見る。
パーカーのポケットに手を突っ込んでにこにこ笑っているキリと、腰にはサーベルを提げたシルク。どちらも軽装で海賊らしさはさほどない。仲間であることはすぐにわかったようだ。
二人の顔を見回して鼻を鳴らし、再びルフィを見やって厳しい声で言う。
「そいつらおまえの手下ってわけか。今度は全員で説得でもする気か？」
「そういや紹介してなかったっけ。こっちがキリで、こっちがシルクだ」
「よろしく」

「シルクだよ。よろしくね」
キリがひらひらと手を振って、シルクも笑みを浮かべて挨拶を終える。緊張感のない面々だ。おそらくはルフィが船長だろうと予想するが、トップがこうなら仲間も同様なのかと考える。
考え始めて馬鹿馬鹿しいと頭を振った。
仲間になる気はないのに彼らのことを考える必要はない。
ともかくゾロの態度が変わる気配はなくて、あくまでも口から出るのは拒否の言葉ばかり。
眼差しは鋭さを取り戻しつつあり、冷静に話し合いを、とも言わせてはくれないようだ。
「何をしに来たんでもいいがとっとと帰れ。おれはおまえらの仲間にはならねぇ」
「おまえ剣士なのに剣持ってねぇんだな。なんでだ?」
「人の話を聞けっつってんだろ」
「ルフィ。普通囚人に武器を持たせたりはしないよ。多分海兵に取られたんじゃないかな」
「あ、そっか」
「てめぇも無視して話進めてんじゃねぇ」
なぜこうまで人の話を聞かないのか。
後ろから進言するキリに耳を傾けたルフィはあっさり振り返り、彼へと向き直って話し始めてしまう。何やら作戦会議のようで、もはやゾロの意見を聞く気はない。
頭痛すらしそうで深く溜息をついてしまう。
項垂れてしまったゾロにはシルクが気遣う言葉をかけ、すでに役割は分かれた様子。おそらくこの瞬間に、それぞれに己のすべきことが自然と見えてきた結果であろう。
「ごめんね。ルフィは結構勢いで動いちゃうだけで、悪気はないの」
「それはそれで問題だろ。どうなってんだこいつら」
「あはは……ちょっと一緒に居れば悪い人じゃないってわかるんだけどね」
二人が話している間にルフィとキリの作戦会議も終わったらしい。

わかった、と言わんばかりに手と手を打ち鳴らし、ルフィが笑顔で頷く。
「そうか。じゃあ基地に忍び込んで剣を奪ってくりゃいいんだな」
「そうそう」
「んで、ゾロ。おれがおまえの剣を取り返してきてやる」
「へぇそうかい。そりゃありがてぇな」
すでにゾロには彼と真面目に話そうという態度がなく、おざなりな対応で適当な返答を出していただけだった。しかしルフィは本気で話していて嘘の一つもつく気がない。
「だからおまえはおれから剣を取り戻したかったら、仲間になれ」
「はぁっ!? てめぇが一番性質悪ぃじゃねぇか！」
「よーし、そうと決まったら行ってくるぞ。キリ、あとは頼んだ」
「いってらっしゃーい」
「お、おい待て、本気か!? 本気で基地に侵入するつもりかよ！」
元気よく走って行ったルフィが背後を振り返ることはなかった。
咄嗟に心配するゾロの気など知らず、キリは見送るために手を振っていて、つられたのかシルクまで同じようにルフィの背へ手を振っていた。
奇妙な三人組だ。
正気の沙汰とは思えず、どことなくぐったりした姿のゾロは疲労を色濃くした。
九日間突っ立っていたせいではない。厄介な奴らに会った、理由はただそれだけだ。
「おまえらバカなのか。海軍相手に戦争でも吹っ掛ける気かよ。黙って帰ってりゃそれでよかったのに、なんでおれに関わる」
「船長が君のこと気に入ったらしくてね。理由はそれだけかな」
「なんだそりゃ。くだらねぇ理由で死ぬ気かよ」
「さぁね。基本的に何考えてるかわかんない人だし、なんにも考えてなさそうだし。理解するのは無理なんじゃないかな。でも多分、死ぬつもりなんてないよ」
「どうしてそう言える」

「ルフィは海賊王になる男だ。ここで死ぬほど柔じゃない」
自信満々にそう言われた。キリの言葉や眼にはそう信じて疑わないという強さがあり、何とはなしに奇妙に思えるものの、ただ鼻を鳴らして受け流す。
わずかな沈黙が生まれた瞬間、剣の柄に触れたシルクが言った。
助けに来たのにいつまでもゾロを磔にしたままなのも気が引ける。そういった意味で彼を解放しようとしてやり、すぐに剣を抜こうとした。
止めたのは他ならぬキリだった。
「ルフィが戻ってくる前に縄切っとこうか。もしもの時すぐに逃げれた方がいいでしょ？」
「まだいいんじゃないかな？　なんか反抗的だし」
「おい」
「でも助けに来たんじゃない。このままじゃ海兵が来た時に危ないんじゃ」
「その時はボクがなんとかするよ。とりあえずルフィが帰ってくるまでこのままにしとこう。色々あるけどそっちの方が面白そうだ」
「てめぇ、この縄が解けたら一番に斬ってやる」
敵地へ侵入した上で軽口を叩くキリに対し、ゾロは凶悪な笑みでもって宣言した。
気楽な微笑みが癇に障る。
今まで出会ったことのない性質の人間に嫌な予感しかしなかった。
キリへの不信感を露わにしていると、シルクは納得した様子で剣から手を離してしまい、すっかり諦めてしまう。これには不思議とゾロも舌を鳴らした。助けて欲しいと思っていた訳ではなかったのに。おそらくキリの思う通りになって気に入らないといったところだろう。
沈黙が生まれかけたところで、突然キリが間抜けな顔で声をもらした。
「あっ」
「どうしたの？」

「いや、そういえばルフィって方向音痴だったはずだなぁと思って。海軍の基地って内部は入り組んでるだろうし、仮に剣を取り返してもちゃんと出てこれるかな」
「そ、それって結構重要なことじゃない？」
「うーん、ミスったなぁ……まぁでもいいか。困ったら壁壊してでも出てくるでしょ」
「手助けは？」
「必要ないと思う。とりあえず死にさえしなかったらどこかからは出てくるよ」
何とも適当な発言だ。これにはゾロだけでなくシルクも呆れてしまった。
緊張感の無さで言えばルフィに比べて勝るとも劣らない。その余裕は緊迫した状況で頼もしくもあって、一方では思わず気が抜けてしまいそうになる。
心配事が無くなった後、さらにキリの勝手な行動は続く。
服が汚れるのも気にせずゾロの目の前に胡坐を掻いて座り、柔和な笑顔で彼を見上げた。
「さて、ルフィが帰ってくる前にちょっと話でもしようか。確か海賊狩りって異名で呼ばれてたんだよね。何人くらい海賊狩ったの？」
「知らねぇよ。いちいち数えてたわけじゃねぇ」
「ふむ。腕は立ちそうだね。有名になるくらい狩ってたなら度胸もありそうだ」
「この話し合いは必要か？　おまえらとっとと帰れ。海軍に捕まっても知らねぇぞ」
「心配いらないよ」
投げかけられた言葉は心配からだろうと気付きながらあっさりと受け流して。
揺らぎない表情でキリが言いのけた。
「ボクらは強いからね」
「……あぁ？」
それは初めて会った時のルフィと同じ言葉。あの時彼はここに居

なかったはず。
よっぽどの自信家か、或いはバカか。どちらにしても面倒な人間には間違いなくて、やりきれずに溜息をつき、なんとなく顔を背けて目を閉じる。
ルフィが船長ならば、おそらく彼がナンバーツー。厄介な一団も居た者である。
これなら一人でやることもなく突っ立っていた方が楽だったかもしれないと考え、尚もキリの気軽な声は聞こえてきて、苦笑するシルクだが止める気はなさそうだ。
「なんで賞金稼ぎになろうと思ったの？」
「金が必要だったんで適当に捕まえてただけだ。別になりたかったわけじゃねぇ」
「じゃあどうして海へ？」
「まるで尋問だな……探し物がある。そいつを探して海へ出たが、簡単に見つけられるもんじゃねぇし、村がどこにあるのかわからなくなっちまったんで海賊を捕まえて生活費を稼いだ」
「ひょっとして迷子？　ルフィと一緒か」
「その呼び方するんじゃねぇよ！　誰が迷子だ！」
いつしか緊迫した空気など消え失せていた。
演習場では楽しげな笑い声と怒りを滲ませる声が響き、ひどくのんきな様相に変わっている。その場にある空気の重さまで変わったようで気楽なそれには三人の体の力も抜けていた。

Ｓｗｉｎｇ　ｉｔ！

ひとまず勢いに任せて走り出したルフィだったが、走っている途中にようやく気付いた。
奪われたゾロの剣がどこに保管されているのか知らない。まずいと思ったものの今更止まることはできず、まぁいいかと判断してとりあえずなんとなく走り続けることにした。
基地は巨大で、外に出されているゾロでもきっと知らないだろう。
なんとかなるかと思って敢えてみんなのところへ戻らず、巨大な外観を前にしたルフィはふと足を止め、背の高い建物を見上げた。
「さて、どうすっかな。とりあえず高いとこに行ってみるか」
何の根拠もなく屋上へ上ってみようと決め、何十メートルも上にある建物の天辺を見る。
常人ならば建物の中に入って階段を使わなければ上がれない。しかしゴム人間たるルフィならばその場から天辺まで跳び上がることができる。
よしと頷き、勢いよく両腕が伸ばされた。
屋上の縁を掴んで腕を縮め、ゴムの伸縮を利用して自らの体を天高く撃ち出す。
「ゴムゴムのォ、ロケット！」
高く飛ぶのは問題なかった。しかし勢いが強過ぎたためか、屋上へ辿り着く頃には高く飛び過ぎて通り過ぎてしまい、基地の向こう側へ落ちてしまいそうになる。
屋上の上には仁王立ちする、体格のいい男の大きな像があった。一瞬、それが目に入る。
「うわっ、飛びすぎっ」
落ちないように慌てて両腕を伸ばし、像の頭を掴む。
像を使ってなんとか勢いは止めることができた。だが勢いが相当だったようで、ルフィに掴まれた像はしっかり屋上に立っていたはずが、ぐらりと頭から倒れ始める。
あっと言う暇もなく。

手を離して屋上へ降り立ったルフィの眼前、背から倒れた男の像は為す術もなく縁に当たって破壊されてしまい、腰の辺りで上半身と下半身が分かれて、首が折れて屋上から姿を消す。何十メートルかの高さから落下した男の頭は地面に激突すると粉々に砕けてしまったようだ。

無情な破壊の音だけが響いて、ふと、屋上を清掃中だった一人の海兵と目が合う。

気まずそうに冷や汗を垂らしたルフィは彼を見つめ、恐る恐る声を発した。

「ご、ごめんなさい……」

妙に罪悪感に襲われて謝らざるを得ない。

呆然と立つ男はルフィの登場にも驚きつつ、像が破壊されてしまった事実を受け止めきれていない様子。あんぐりと口を開けて悲鳴の一つも出なかった。

そこに居る海兵は一人だった。

箒を持つだけで武器の一つも持っていないらしく、その箒さえ手放してしまう。

棒立ちになっていた彼はしっかりルフィの目を見つめ返し、思わず叫んだ。

「た、大変だっ。モーガン大佐の像が壊されたァ!?」

「やべっ」

叫び声を聞いてルフィは反射的に逃げ出した。

近くにあったドアを蹴破り、内部へ飛び込んですぐに見つけた階段を下りていく。

瞬く間に海兵の視界から消えてしまい、颯爽と基地の中へ突入してしまった。

基地内への侵入は比較的容易に行われた。

ただし潜入ではなく侵入だ。人の居ない屋上とはいえ、先程の海兵の叫びを聞いた者が居るかもしれない。敵に襲われる危険性は十分にあった。

とりあえず目的地も定めず長い廊下を走り出す。

海軍の基地に入ったことなどこれが初めてである。当然初めて来た土地であってどこに何があるかはわからない。右も左も無機質な光景で目印になりそうな物もなかった。
ゾロの剣がどこにあるかなどいよいよわからず困り果てる。
ひとまず人の姿がない廊下を走りながら、ルフィは首をかしげて表情を歪めた。
「まいったなぁ～、どこ探せばいいんだ？　あ、さっきの奴に聞けばよかったのかな。でも逃げてきちまったしなぁ。しょうがねぇから誰かに聞いてみるか」
走っていると草履が起こすぺたぺたという音が間抜けに響く。廊下には彼の存在感が一際目立っている様子で、その音を耳にする者も少なくはなかった。
ある時、角を曲がった瞬間にばったり人と遭遇してしまう。
見つけて、見つかったのは海兵二人を引き連れたヘルメッポだった。
出会った途端にヘルメッポの肩がびくりと跳ね、ルフィはあっと声を漏らす。ちょうど出会った時には言いたいことがあった。チャンスとばかりに足を止めて向かい合う。
「うおっ!?　な、なんだおまえ、誰だこの野郎っ！」
「ちょうどよかった。おまえに聞きたいことがあったんだ」
「あぁん？　なんだってんだ、こいつ」
ルフィの顔からは笑みが消えて真剣な眼差しで睨みつける。
対するヘルメッポの前には二人の海兵が庇うように立ち、余裕を感じさせる笑みを浮かべた。
「ゾロと約束したのはおまえだろ」
「はぁ？　あぁ、ロロノアか。それがどうした」
「あいつが一ヵ月立ってたら解放するって約束だった。なんで処刑するんだよ」
「あー、そのことか。確かにそんな約束もしたっけなぁ……」
にやにやと意地の悪い笑みを見せ、もったいぶるかのように間が置かれる。

ルフィは怒りを滲ませかけたが何も言わずに待った。
しばしの間を持って、ヘルメッポが悦に入った顔で告げる。
「あんな話、ギャグに決まってんだろぉ？　バカな野郎だぜ。たったそれっぽっちのことで許してもらえると思ってるんだからなぁ。しかも信じて疑わねぇときた」
「なにィ……！」
「なーにが約束だ。あんなもんあのバカを騙すための口実に決まってんだろぉ？　釈放されると思って九日間も頑張ったのに、結局は処刑されちまうんだよ。それを聞かされて絶望するあいつの顔が楽しみでしょうがねぇぜ、ひえっひえっひえっ！」
顔色を変えたルフィが強く拳を握る。それが見えたのだろう、咄嗟にヘルメッポは制止するために言った。変わらず自信満々の口調であった。
「おっと、おれを殴りてぇとでも思ったか？　でもそれも無理無理ぃ。なぜかって思うだろ？　だっておれはあのモーガン大佐の息子だぜ。おれを殴ったら親父がブチギレておまえも処刑されちまうからだ。それでもいいなら別だがなぁ。殴れるもんなら殴って――」
みろ、と言いかけた瞬間。
ヘルメッポの顔面にルフィの拳が突き刺さった。
「ぶふぉぇぇっ!?」
「へ、ヘルメッポ様！」
殴り飛ばされたヘルメッポの体は宙を舞い、鼻血を飛ばしながら地面を転がる。受け身を取ることもできずに体のあちこちをぶつけて痛みが走り、彼の中で混乱が大きくなった。
転がる勢いが止まってもしばらくの間は動けない。
一人の海兵が助け起こし、もう一人がピストルを抜いてルフィを警戒する。当然と言うべきか、突然の行動に二人の海兵たちも焦りを見せる状態だ。
荒く鼻息を吐いたルフィは怒りも冷めやらぬようでヘルメッポだけを睨んでいる。
握った拳から力は抜けない。まだ気は済んでいないようだ。

強い怒りを感じさせる姿は強烈な迫力を感じさせ、海兵たちはわずかに怯む。その彼らに守られるヘルメッポは鼻血が流れる顔を押さえながら口調を荒げさせた。
「で、でめぇ、一体何したのかわかってんのか!?　おれは斧手のモーガンの息子だぞっ！　おれの顔に傷つけて、親父が黙ってるわけが――！」
「おまえの親父が誰かなんて知らねぇ。おれはおまえに聞いてんだぞ」
「こ、このっ……！　おまえら、やっちまえ！　じゃねぇと親父に言いつけるぞ！」
「は、はいっ」
海兵たちは二人揃ってルフィの前に立ちはだかり、戸惑いながらピストルを構える。
おそらく基地の中で使用するのは初めてだろう。どこか迷いが垣間見れた。
それだけでなく相手の詳細がわからずに一般市民かそれ以外かの判別もできない。戦いに対する覚悟ができておらず、ヘルメッポの命令を受けてもすぐには動けなかった。
ルフィは微塵も恐れを抱かず、自分から彼らへ叫ぶ。
「おれは海賊だぞ。殺せるもんなら殺してみろ！」
威勢よく叫んだ直後に動く。
向けられた銃口から逃れるように姿勢を低くし、素早く走って一瞬で彼らとの距離を詰めた。
ゴムの性質を利用せずとも力の差は歴然。そのスピードは見切れなかった。
繰り出されたパンチが右側に居た海兵を殴り飛ばし、体を回転させた勢いで蹴りを放つと左側の海兵を蹴り飛ばす。どちらも壁で強かに背を打ち、ただそれだけで動けなくなった。これにはヘルメッポも信じられない想いで大きな悲鳴を発する他ない。
尻もちをつく彼の前へルフィが悠々と辿り着く。
呼吸を乱す様子もなく、威圧感はさっきより倍増するかのよう。

「おい」
「ひぃぃっ!?」
「もういいよ。おまえなんか殴る価値もねぇ。でも一個聞かせろ」
へたり込む彼の胸倉を掴んで聞いた。
細身とはいえ人の体を持ち上げるだけの腕力。これにも怯えてヘルメッポの悲鳴は大きくなる。
「ゾロの剣はどこだ。この中のどっかにあるんだろ」
「はぁぁっ!? な、なんでおれがそんなこと……!」
「言わねぇんなら――」
「わぁぁっ、待て!? わかった、教えるから殴らないでくれ!」
渋るヘルメッポに拳を構えて見せれば、すぐに答えようとした。やはり父親の権力を盾にしてきたためか、あまり根性はないらしい。ルフィの拳は下ろされる。
胸倉を掴んだまま解放されることなく説明を強いられた。
「お、おれの部屋にあるんだ。奴から奪った刀はそれなりの物みたいだったんで、全部処分せずにとってある。そ、そこに行けば全部揃ってるよ……」
「案内しろ。どこだ」
「うぐっ……わ、わかった。案内してやる」
ぐいっと無理やり立たされて、ヘルメッポを先頭に歩き出す。いつ何が起こってもいいようにルフィは後ろからぴったりくっついて行った。
「言っとくけどウソつくなよ。今度ウソついたらぶっ飛ばすからな」
「くそぉ、覚えてろよ……!」
二人は無人の廊下を歩いてどこぞへと向かい始める。
正しい道を歩いているか判別する手段はない。脅迫はしたが罠に嵌められる可能性はある。それでもルフィは心配していなかった。
戸惑いながらではあったがゆっくりと着実に前へ進む。
基地内の構造は複雑でいくつもの曲がり角があり、敢えてわかりにくい内装となっていた。

二つ、三つと曲がって順調に進んで階段を見つける頃。やはり誰とも会わずに動くというのは不可能だったらしい。前方からは海兵が三人歩いて来る。
ヘルメッポを見てぎょっとし、さらにその後ろに居る麦わら帽子の少年を見てぎょっとする。
途端にヘルメッポは助けを求めて絶叫した。すぐ傍にルフィが居ることも気にせず、しかし逃げようとした一瞬の挙動で後ろから首根っこを掴まれ、解放されることはない。
「おぉい、おれを助けろ！　侵入者だぞ！　こいつは海賊だ！」
「おい、逃げんな」
「へ、ヘルメッポ様……それに、あの少年は」
「何やってやがる！　急げ！　おれが死んだらてめぇら処刑だぞ！」
「うるせぇ奴だなぁ」
ギャーギャーと騒ぎ立てるヘルメッポに気圧されるものの、異変は目に見えるため解決に乗り出そうとするのは必然。
三人の海兵は道を塞ぐように立ちはだかり、武器を持たずに説得を始めようとした。
「君、今すぐヘルメッポ様を解放して投降しなさい。今ならまだ罪は軽いぞ」
「いやだ」
ルフィは端的に言って動きを見せた。
右手でヘルメッポの首根っこを掴み、左手は肩を掴んで、ずいっと前へ押し出す。
訳が分からなかったが一瞬、解放されると思ったらしい。ヘルメッポも海兵たちもほっと息を吐きかけた。しかし彼は解放するどころかその状態で走り出した。
ヘルメッポを盾に敵への特攻を仕掛けたのだ。
予想外の行動にどちらも驚愕するばかりで、盾にされた本人は悲鳴を発する羽目となり、待ち受けた海兵たちは手出しできないと困惑する。それでもルフィは向かってきた。

「捕まえてみろォ！」
「ぎぃいやぁぁっ!?　助けてぇえっ!?」
「なっ、ヘルメッポ様を盾に――！」
人質を盾に猛然と駆け出して向かってくる。
初めて見る光景に戸惑いが隠し切れず、また対処の方法も知らない。
一気に距離が近付いて、傍を通り過ぎようという時にルフィが足を伸ばし、唸りを上げるゴムの足で海兵たちを蹴りつけた。
「ゴムゴムの鞭！」
ヘルメッポの悲鳴が響く中、数名の海兵が蹴り飛ばされて壁へ激突する。気絶するほどではなかったが痛みは相当な物ですぐには動けない。
ルフィとヘルメッポは彼らの間を悠々と通り過ぎていく。
このまま逃がしてはいけないと、腹を押さえた一人の海兵が叫んだ。
基地内には大勢の海兵が居る。たった一声で彼を捕まえることは不可能ではない。
「し、侵入者だ！　ヘルメッポ様が捕まったァ！」
声は廊下に反響して遠くまで響く。
近くにはすぐ反応できた者が居たようで、通路の途中にあった扉から海兵が現れる。
ちょうど進行方向。真っ直ぐ階段を目指すルフィの前へ立ちはだかった。
驚いた顔は見せるものの、部屋を出た途端に走ってくる不審者を見つけ、ヘルメッポの悲鳴で即座に状況を理解した。しかし基地の中では武器は携帯していない。
護衛の者はヘルメッポの指示で携帯を許可されているが、何も持たない彼らがルフィを止めるためには己の体でなんとかするしかなかった。
海兵たちは腕を広げて彼らを止めようとした。
それを見た後、もはやルフィは手慣れた様子でヘルメッポの体をず

いっと押し出す。
「ゴムゴムの身代わり！」
「やめんかアホォ!?」
やはり人質を盾にされてはうかつに手出しすることはできない様子。特にルフィが捕まえたのは大佐の息子で権力者だ。下手に怪我をさせれば首を飛ばされる可能性がある。
またもあっさり突破してしまったルフィは海兵を蹴り飛ばし、颯爽と階段を下り始めた。
飛び降りるような動きと速度にヘルメッポは気絶寸前。悲鳴さえ小さくなった。それでも道を尋ねられれば答えてしまう辺り、全く根性がない訳ではないらしい。
爆走を続ける二人を止められる者はそうおらず、嵐のような侵攻はそれ以降も続いた。

＊

基地内のどこか一室。
広い執務室に重苦しい空気が漂っている。
一人の海兵が緊張した面持ちで背筋を伸ばし、手の甲を見せる敬礼を行っており、それを背中で受け止める椅子に座った大男が一人。この基地で一番偉い人物であった。
大きな窓ガラスの方を向いて大男は口を開く。
その男こそこの町で絶対の地位に就く、斧手のモーガン大佐である。
「おれは、偉い」
「はっ！　なにしろ大佐ですから」
「そうだろう。偉い奴の命令を聞くのは当然のことだ。だが、それにしちゃあ最近町民の貢ぎが少ねぇんじゃねぇか？」
「は、はい……しかし、市民にも生活がありまして」
モーガンは席から立ち上がった。ただそれだけの挙動で海兵が怯えを増す。

その姿、身長は二メートルを超え、筋骨隆々の肉体に、顎には金属製のギブスを装着して、右手は鋭利な刃を見せる斧その物の義手をつけている。見るだけで相手に恐怖感を与える姿で、語り出す声は重々しく、反論の一つも許さない雰囲気を湛えていた。

冷たい眼差しが恐ろしい。

睨みつけられた海兵は生きた心地がしなくなり、逃げ出したい一心だがそうすることは死を意味すると知っているため、必死の形相で勇気を振り絞ると恐ろしい視線を受け止めた。

モーガンが己の斧手を撫でて静かな声で問い始める。

「おかしなことを言う。それなら何か、生活のためならおれの命令に逆らっていいのか」

「そ、そういう意味では……」

「だったらごちゃごちゃ言うんじゃねぇ。誰が海賊からこの町を守ってやってると思ってんだ。ただ守られてるだけじゃ市民の役目を果たしちゃいねぇとは思わねぇか？　守られてぇならそれ相応の対価が必要だ。それを怠った奴にはこの町に居る権利がねぇだろう」

厳めしい顔で睨まれ、不思議と斧の刃が怪しい光を放ったように感じた。

背筋がぞっとし、声を失う。

モーガンは続けて言った。

「加えて、おれの命令に逆らった奴に生きてる権利なんざねぇんだ。逆らう奴が居るならここへ連れて来い。すぐにでも処刑してやろう」

「お、落ち着いてください大佐。なんの罪もない市民を殺すことは許されません――」

「おまえもおれの命令に逆らうのか？」

ギロリと眼差しの力強さが増した。

モーガンは大きな数歩で海兵の間近まで迫り、自身より小さな体を見下ろす。

「言いてぇことがあるなら、聞いてやるが」

その恐怖たるや、今まで生きてきた中で最も大きい。自らの死を幻視せずにはいられずに、全身が震えて膝が笑った。恐怖からぴくりと

も動けなくなる。
斧手は力なく下ろされていた。しかしいつ動き出してもおかしくない。
生きた心地がしないままその場に立ち続けるしかなかった。
モーガンは奇妙なほど穏やかに話す。
「払えねぇって言う奴に生きてる価値はあるか？」
「い、いえ……」
「それでいい。世の中偉い奴が正しいんだ」
きっぱり言い終えたモーガンは椅子に戻ろうと海兵に背を向けた。
恐ろしい人だ。権力をかざし、力で圧制する。海軍にあるまじき姿だが明らかに強い。
現状、誰一人彼に意見することができなかった。おかしいと思っても口には出せず、間違っていると言えば首を斬られる。おかしな基地だとは町に居る人間、それだけでなく自ら入隊した海兵たちも皆が思っていた。それでも変わるきっかけはない。
悔しげに拳を握った海兵は押し黙ってしまった。
報告は終わったとばかりに部屋を出ようと考えて、もう一度敬礼した時だ。
ノックもそこそこに慌ただしく扉が開かれ、一人の海兵が飛び込んでくる。
「ほ、報告します！　基地内に侵入者です！」
「なんだ騒々しい。侵入者だと？」
「は、はい。麦わら帽子をかぶった少年が、そ、その……屋上にある大佐の像を、破壊して逃走しましたッ！」
モーガンの形相が変わる。即座に振り返って報告に来た海兵を睨みつけた。
凄まじい気迫にそこに立つ二人が同時に肩をびくつかせるが気にもしていられず、聞く者を震い上がらせる声色で雄々しく言葉を吐く。
「像を、破壊だと……？　あれはおれの権力を象徴する像だぞ。そいつを壊すってのは明らかな反逆罪だろう。どこのどいつだ、このお

れに盾突こうってふざけた野郎は」
「そ、それが、見た事がない顔で……おそらく町の者ではないかと」
「基地の中に居るのか」
「は、はい。逃走しましたが間違いないと思われます」
「すぐに捕まえておれの前に連れて来い！　この手で直接殺してやる！」
空気が震えるほどの大声量で告げられた。
居ても立っても居られなくなった二人は急ぎ部屋を出ようとするも、開かれたままだった扉から新たな海兵が飛び込んでくる。こちらもひどく慌てていて、額に汗を掻いていた。
「報告します！　基地内に侵入者！　すでに止めようとした海兵数名が意識を失い、敵は相当の実力であると予想されます！」
「チッ、腑抜けどもが。武器の使用を許可する。すぐに鎮圧しろ」
「はっ！」
報告が終わると同時、さらに海兵が飛び込んでくる。
すぐに敬礼して次なる報告が始まった。
「報告します！　基地内に侵入者！　敵はヘルメッポ様を人質に取り、基地内を逃走中！」
「バカ息子が。余計なことを……」
さらにもう一人海兵が現れて、敬礼するとすぐに報告した。
「報告します！　侵入者はヘルメッポ様の部屋へ閉じこもり、籠城を始めた模様！　いまだヘルメッポ様の救出は完了していません！」
「扉を蹴破って突入しろ。役立たずを気にして犯罪者を捕まえられるか」
「し、しかし……」
「急げ。言っとくがおれァもうトサカに来てんだぜ」
苛立った様子で呟く様にぞっとする。彼を怒らせるとまず良いことがない。怒りの原因を取り除かない限り、誰が傷つけられるかわかったものではなかった。
執務室に集まった海兵たちは外へ出て侵入者を捕らえに行こうとする。

一斉に扉へ向かおうとしたのだが、どうやらまだ報告は終わっていなかったようだ。
新たに飛び込んできた一人が海兵たちを掻き分け、部屋の中央で敬礼する。
「報告します！　ロロノア・ゾロを磔にする演習場に侵入者！　少年が二人に、少女が一人、武器を携帯している模様です！」
威勢のいいはきはきとした口調で告げられる。また頭を悩ませる問題だ。
なぜ今日に限ってこうも問題が起きるのか。全てを力で抑えたはずだった。問題も不満も、徹底的な管理によって抑え込んで平和を作り出したはず。なぜ今になって崩す者が現れる。
全てが気に入らなくて、モーガンの怒りは頂点に達した。
右腕を振るって幅広の机を叩き割った後、モーガンは硬直する海兵たちに力強く叫ぶ。
「全海兵に武器を携帯させろ！　半数はおれの像を壊しやがったクソガキを捕まえ、もう半数はおれについて来い！　演習場の連中を処刑する！」
「お待ちくださいっ。しかし彼らはまだ何も――」
「おれの命令に従えねぇのかッ？」
一人の海兵が落ち着かせようと進言したが、狂気を感じさせる目つきを見て言葉を呑みこむ。
もはや止めることはできない。
戦闘か、処刑か。基地に侵入したとはいえ犯罪を犯した訳でもないだろう少年少女たちは死ぬことになる。誰もがその光景を想像し、口惜しく唇を噛んだ。
「基地内に居る海兵は全員今すぐ動け！　逆らう奴は悉く処刑だ！」
巨大過ぎる怒りに支配されたモーガンは腕を振って命令した。
あまりの恐ろしさに全員一斉に走り出し、指示を伝達するために方々へ散る。
モーガンもまた自らの手で決着をつけるため歩き出し、鬼気迫る形

相で執務室を後にした。

Ｓｗｉｎｇ　ｉｔ！（２）

キリとゾロの会話は続いていた。
もっぱらキリが話しかけ、ゾロが悪態をつきながら返答するのが通例となっているのだが、これが不思議と途切れることはない。外見からはゾロの機嫌がすこぶる悪そうに見えるというのに、笑顔のキリと合わせて傍から見れば、ひどく仲が良さそうに見えるのだから不思議なものである。
彼らはわずかな時間で軽口を叩き合う関係を築いていたようだ。
不思議なのは何もルフィだけではない。キリのこういった姿は船長にも匹敵する何かを感じる。
苦笑するシルクは少し離れた場所に立ち、子供のような彼らをやさしく見守っていた。
ある時、妙な音が聞こえたのでふと塀の方を見る。
いつの間にか外側から梯子が立てかけられていたらしく、見ればコビーが地面に転んでいた。飛び降りて着地に失敗したのだろう。痛そうに顔を歪めて頭を擦っている。
流石にキリやゾロも気付いたようだがその場から動かず。
外で何かあったのだろうかと気にしたシルクが彼の下へ駆けつけた。
「どうしたのコビー？　なんで基地の中にまで。用があったら外から叫んでくれればいいのに」
「いてて……い、いえ。ぼくもみなさんの傍に居ようと思って」
「え？　何かあった？」
「その、リカちゃんと約束したんです。ちゃんとみんなで帰ってくるって。ぼくは戦えるほど強くありませんし、何もできませんけど、みなさんの傍に居ることはできますから。ただのお邪魔虫になる可能性高いですけど……友達ですから、最後まで見守りたいんです」
照れたように笑いながら、コビーはそう言った。
話しているだけでわかったがやはり根っからの善人だ。彼の気遣いに嬉しくなったシルクは転んだ彼に手を貸してやり、引っ張って立

たせた。
転んだことに恥ずかしそうだったがそれを笑ったりはしない。
コビーのやさしさは大切な物で、誇るべき物。海兵になりたいという夢を応援したくなる。
些細な言葉で胸の内が温かくなり、シルクは穏やかに問う。
「リカちゃんはどうしてる？」
「家に帰りました。おいしいごはんを作って待ってるって」
「そっか。じゃあ絶対無事に帰らないとね」
「はい。……って、どうしてまだゾロさんは縛られたままなんですか？」
「ちょっとね。キリがそうしておいた方がいいって言うから」
「はぁ」
理解できないといった風情でコビーがゾロを見れば、彼は彼で顔をしかめている。また厄介な奴が増えたと思っているのだろう。
シルクとコビーは歩き出し、二人の近くまで赴く。
新たにやってきたコビーに対する視線は厳しい物で、ゾロはぽつりと尋ねる。
「誰だこいつは。またおまえらの仲間か？」
「だってさコビー。ボクらの仲間になる？」
「な、なりませんよ。ぼくは海兵になるって決めたんですから」
「そういうことだから違うよ。ただの友達」
「友達ねぇ。おまえ、つるむ奴は選んだ方がいいぜ。こいつらと一緒に居たら疲れるだろ」
「それって褒めてる？」
「褒めてねぇよ。どう聞いたらそうなるんだ」
軽快なやり取りに驚き、コビーが苦笑する。
キリと話すゾロは全く怖くない。それどころか、風貌と違って悪人にも見えなかった。
やはりリカから聞いた話に間違いはないのだろう。彼は人助けをして捕まった。それも責任を取ろうとしないヘルメッポの、或いはその父親の権力によって。

正義であるべき海軍の無残な姿に唇をきゅっと結ぶ。表情は悔しげだった。
そんなコビーには注視せず、相変わらずの会話は続く。
「大体おまえら、何しに来たんだ。人を脅迫するくれぇなら金持ちを狙えよ」
「お金には困ってないよ。今のところはね。それより必要なのは仲間だ」
「他を当たれ。おれはやることがあるっつったろ」
「海賊になってもできることなんじゃないの？　それなら船はあるし、お金もあるし、迷子にならなくても済む。ボクらと一緒に来た方がいいんじゃないかな」
「結構だ。間に合ってる」
「迷子になって賞金稼ぎになったくせに」
「おまえは人をイラつかせる天才か？　迷子じゃねぇって言ったろうが」
「でも村に帰れなかったんでしょ」
「帰らなかったんだよ。野望を果たすまでは甘っちょろいこと言ってる場合じゃねぇからな」
「さっきと言ってること違うと思うけどなぁ。まぁいいや。そんなことより仲間にならない？」
「自由になったらまずおまえを斬ってやる……」
ああ言えばこう言い、人の話を聞こうとしないキリにゾロは凶悪な笑みを見せていた。思いのほか肩を並べてみたら息は合うのではないかとシルクは思う。
ただその時、今来たばかりのコビーはゾロの言葉に違和感を覚えた。
仲間にはならない。だが自由になる時を待っている。
これは一体どういうことだろうか。
事情がわからずに彼らをやり取りを見守るしかなかった。
「大体、おれはおまえらに助けてもらう必要なんざねぇんだ。ここに一ヵ月突っ立ってりゃ釈放するとあのバカ息子が約束した。もう

九日耐えた。あとはそう長くねぇ――」
「ちょ、ちょっと待ってください！」
話を聞くだけだったコビーが叫ぶ。
今の話に更なる違和感を覚えた。おそらく予想は間違っていない。
ゾロの言葉を止めさせてキリを見る。今や必死で、ゾロの機嫌を伺っている場合ではなかった。
「キリさんっ、まさか話してないんですか？」
「あぁ、そういえば言ってなかったね」
「どうして！　一番大事なことじゃないですか！」
「まぁまぁそう怒らずに。どっちにしたってルフィは助け出すだろうしさ、今更大した問題じゃないよ。どの道やることは同じだ」
「そ、そんな理由で……」
「おい、何の話だ」
疑問を持ったゾロがコビーを見て尋ねる。キリに聞いたところで無駄だと判断した様子。そう思われたキリも大して気分を害した様子もなく笑っていた。
言っていいものかどうか。確かに無駄な不安を煽るだけかもしれない。
そう考えた直後にそんな柔な人間ではなさそうだと判断した。
意を決してゾロと目を合わせたコビーは真実を伝える。噂を聞いた後、道を行く町民に尋ねて、改めて真実味を得たその話を。
「ゾロさん、あなたは解放されません。明日になったら処刑されるからです」
「あ？　急に何言い出しやがる」
「嘘じゃありません。あなたがバカ息子って言ったあの人が、町中を歩きながら言いふらしてたらしいんです。何人も目撃者が居ました。偽物じゃなくて本人だって」
「なんだと……」
「あなたを落ち込ませた後で処刑するつもりだったんです。あの人ならそれもやりかねない……だからルフィさんは助けに来たんです。リカちゃんと約束したから」

コビーの必死な様子に嘘だとは断じない。本当なのだろうと思った。
不意に視線を動かしたゾロは目の前に座るキリを見る。
今も変わらず笑顔のまま。地面に手をついて姿勢を崩し、妙にリラックスした状態だ。
「知ってたのか？」
「噂程度にはね。本人に聞いたわけじゃないよ」
「チッ。そういうことか」
納得がいったように舌を鳴らす。なぜ彼らが来たのかようやくわかった。
初めから結果はわかっていたのだ。助かる術はなかった。言わば九日間自分を奮い立たせて耐えていたのは全て無駄。どう転んでも死ぬことは決まっているのだ。
やりきれない想いを抱いて何も言えなくなってしまう。
覚悟は無駄だったということか。急激に脱力感が増していた。
思わずゾロは自嘲して笑う。
「怖い顔」
「うるせぇ。結局、全部無駄だったってことだな」
茶化してくるキリの一言をばっさり切り、小さく溜息をつく。
「心配いりませんよ。きっとルフィさんが助けてくれますから」
「それも納得いかねぇんだよ。何が嬉しくて海賊なんぞにならなきゃならねぇんだ」
助け舟を出すように見えたコビーにも彼は冷たく。
彼らに助けられることその物に対して良い印象を抱いていない。自分が死ぬかもしれない危機的状況で、何やらこだわりを見せていたようだ。
おそらくそれ以上話しても理解は得られそうにない。
大人しくコビーは引き下がり、ゾロが見つめる相手はキリとなった。
いつの間にか笑みは薄まって少し真剣な表情。数秒、無言で視線がぶつかる。

「先に言っとくが、おれにはやらなきゃならねぇことがある。ここでくたばるわけにはいかねぇし、死ぬわけにもいかねぇ。悪いが海賊にはならねぇぞ」
「でもこのままじゃ死ぬよ。縄を解く条件は海賊になることだ」
「なんでそこまでおれに拘る。他所の人間じゃいけねぇ理由があるのか？　それとも、あのガキに絆されちまっただけか」
「理由ならルフィに聞くといい。すべての決定権は船長が持ってるから」
「おまえは命令に従うだけってか」
「そういうわけでもないけど、今回は同じ気持ちだね。君を仲間にしたいと思ってる」
「理由は？」
「野心を持ってる人が好きなんだ。特に簡単には折れないような強さの方がいい」
佇まいを直し、キリは静かに立ち上がった。
目線はほとんど変わらない。身長はゾロの方が高いが体勢のせいか正面から目が合った。
「別に脅迫しなくてもいいくらいだけどね。野望を果たすためなら海賊になるのも悪くないと思うよ。探し物があるんでしょ？　どの道航海はするんだから」
「わざわざ悪名を高めたい奴はいねぇだろ」
「じゃあどんな野望を持ってるのさ。ここに一ヵ月突っ立ってなきゃできないこと？」
「いや……」
「言いたくないなら聞かないけど、ここから逃げたら海軍に追われることになる。そうなったらどっちみち海賊になるのと変わらないよ。ただ一人で逃げるか、みんなで逃げるかだけの違い。権力に逆らうならそれ相応の覚悟をしておかないと」
ゾロは何かを思案するように視線を落とした。ひどく真剣な表情で、茶化すようなキリの言葉にも反応しない。しばらく黙った後で顔を上げて再び視線を交える。

「おまえはなんで海賊になったんだ。夢でもあんのか？」
「あるよ。ルフィを海賊王にすることだ」
「海賊王……そういや言ってたな。真面目に聞いちゃいなかったが」
「グランドラインを制覇する旅路だ。ひょっとしたら探し物も見つかるかもよ」
「フン」
頭では理解できていた。このままでは海軍に殺されて終わりだ。
生き残るためには海軍と戦わなければならない。そしてその先にあるのは海賊と同じく、犯罪者として扱われる道。生き残れば海軍に狙われるようになるだけだ。
こうなってしまった以上もはや選択の余地はない。
それでもすぐ頷くには材料が足りず、仲間となる彼らを知らな過ぎる。
平静を取り戻したゾロが静かに言った。
「あいつが戻ってきたら、話がしたい。答えはその後だ」
「うん。それでいい」
話が通じないという訳ではないらしい。
可能性を見出したキリは敢えて多くを言わず、答えを彼に任せた。
脅迫などきっと必要ないだろう。すでに答えは持っていると見える。
二人の会話が一段落したと見てシルクがキリの背へ声をかけた。
先程からずっと思っていたことがある。基地の外観を眺めつつ、心配する口調で呟かれた。
「ねぇキリ。ルフィ、大丈夫かな。ちょっと時間かかってるような気がする」
「そう？　心配ないと思うよ。ゾロと同じで方向音痴は間違いないけど」
「おい」
「私もそう思うけどさ。あんまりずっとここに居ると、海兵が――」
そう言っている最中、シルクが瞬時に剣の柄を掴んだ。

様子の変化に気付いて全員が同じ方向を眺め、気付いた。
危惧していた通り海兵の姿を目にする。しかもずいぶんと大勢、数えきれないほどの男たちが武器を手に演習場へ駆け込んできた。
足音は重なり、騒がしくなる。
あっという間に一方向に展開した複数の部隊に、一斉に銃口を向けられた。
一見すれば絶体絶命。四者四様の表情が浮かべられた。
「全員、大人しく手を上げて降伏しろ！」
鋭い声で怒鳴られてコビーの悲鳴が響いた。他の者たちは声を漏らすことさえしない。
キリは微笑んで彼らを眺め、シルクは油断のない様子で剣を抜く準備をしている。また、ゾロは殺気を感じさせる凶悪な目つきでその場に居る者を敵と認識していた。
総勢で二百名は軽々と超え、銃を構えている者だけでも五十名はくだらない。
たった四人を相手に大した戦力を投入したものだ。
整列する海兵をぐるりと眺めて、後からゆっくり歩いて来る大男を見つける。全員が気付いていただろうが一際キリが楽しそうにしていて、ふと彼らの方へ数歩近寄った。
隊列を掻き分けて前へやってきたのは、斧手を持つモーガンだ。
一見すれば善良な市民に見えなくもない侵入者三名を目にし、怯むどころか怒りの形相。
今すぐ発砲命令を出してもおかしくない顔つきをしている。目に見えそうな危険な雰囲気を纏っていた。それは一種の狂気であり、強烈な妄信でもある。
目の前の少年少女を見たモーガンは忌々しげに口を開いた。
「こいつらか。おれの決定に従わねぇ奴らは」
「大佐、彼らはまだ何も――」
「基地の中への侵入はおれが決めた取り決めに従わなかったことになる。おれが下した命令に従わなかった、つまり反逆罪だ」
冷淡な声で端的に告げ、ゆっくり左手が上げられた。

命令が下される瞬間を待つ海兵たちは気を引き締めて引き金に指をかける。その手が振り下ろされた瞬間、即座に発砲しなければならない。でなければ危なくなるのは自分の身だ。
分かり合うどころか話し合おうともせず、すぐさま攻撃が始められようとしている。これに待ったをかけたのは狙われる者たちではなく海兵の一人だった。他の者よりも階級が上であるだろう男は慌ててモーガンを呼び止め、その手が降りる直前で場を止めた。
当然、怒りの形相は彼に向けられることとなる。
「お、お待ちください大佐！　彼らは確かに罪を犯したかもしれませんが、いくらなんでも銃殺はやりすぎなのでは。ただの一度くらい見逃してやっても――」
「おまえはおれより偉いのか」
「え？」
左手が下ろされるより先に、素早く右腕が振るわれる。
一瞬の出来事だった。モーガンに駆け寄った海兵は高速で振り抜かれた斧によって腹を抉られ、大量の血を噴き出す。そのまま声すら出せずに力なく地面を転がった。
誰も悲鳴すら上げられずにその光景を見ており、バチャバチャと音を立てて落ちる血液の量に驚愕する。どう見ても致死量、同時に簡単には塞がらないだろう傷の大きさだ。
その場では耐え切れずにコビーだけが絶叫していた。
声こそ出さないものの、海兵たちの間に拭い切れない不安が走り、覚悟をしていたシルクまでわずかに手を震わせる。まさかこんな光景を見ようとは想像すらしていない。
キリとゾロは冷静さを保ったままだが、その男の危険性は理解できる。
殺伐とした空気が流れ始めた演習場は一気に混沌とした現場と変貌していた。
「他に異論がある者は言え」
モーガンの言葉に反応する者はない。誰もが口を噤んでいた。
それを良しとしたのか、目標をじっと見据え、声色を変えずに言い

放たれる。
「ならおれの命令に従え。逆らう者は全員、処刑だ」
再び左腕が掲げられた。
息を呑みながら銃を構え、一斉に発砲準備を整える。
倒れた男を助けていいのか、悪いのか。そんなことさえわからず、判断する間も与えられずに戦闘が始められようとしている。しかし誰もが表情を硬くしていた。
統率はしっかりとれているが全て恐怖によるものだ。決して絶対の様子ではない。
発砲の瞬間、キリは前へ歩き出した。
「撃てェ！」
銃声を聞きながら、銃弾が放たれる光景より、傍に居た人間の唐突な行動に驚いたゾロやシルクがあっと声を出した。名を呼んで止めようとするもすでに遅く、背は離れていく。
銃弾がやってくる。
迷う時間すら与えてくれない突然の攻撃に、走馬灯のように過去の情景が脳裏へ浮かんだ。
しかしそれを理解するより先に目の前の行動に驚く。
勢いよく両腕を振るったキリは、袖から懐から、大量の紙を宙へ放った。バサバサと大きな音を立てるそれはまるで群れのようで、意思を持つかのよう。宙へ飛んだ無数の紙は能力によって操られて動き、硬化し、壁のように連なって四人と海兵とを隔てる。
いくつもの硬質な音。銃弾は紙切れを貫けず、全て受け止められていた。
誰一人傷つけることなく硬化された紙に銃弾がめり込み、丸い形が潰れている。勢いを失くしたそれらは地面へと落ち、同じく紙も連結を外して、ただの紙片としてひらひら落ちた。
異様な光景に海兵たちはどよめきを生んで動揺していた。
キリの後方では同じくコビーが気絶しかねない形相に変化している。
誰もが驚愕する中、シルクだけはほっと息をつき、持ち上げかけた

剣を下ろした。ただしその後ろではゾロも血相を変えて驚いており、この瞬間だけは平静を失っている。
奇妙な沈黙。
全ての紙が地に落ちた頃、前を向いたままでキリが背後へと声をかける。
「シルク、二人は頼むよ。もしもの時は守ってやって」
「あ、うん。わかった」
「悪いけどこの人たちもらうね。しばらく能力使ってなかったから、腕が鈍っちゃってしょうがない。ここらで一回リハビリしとかなきゃって思ってたんだ」
無手にも見えるが武器とするのは辺りに散らばったただの紙切れ。
余裕を感じさせるキリは両手を広げ、たった一人で全ての海兵に立ちはだかった。
見れば見るほど生意気な人物だ。
勝算があるのか、顔には笑みが浮かべられていて、緩い態度には緊張感など欠片も無い。
額に青筋を立てて怒りを発するモーガンは周囲の海兵に次なる命令を下す。こうなれば殺さなければ気が済まない。少なくともその生意気なガキだけは自らの手で殺すと決めた。
「チィ、次だ。さっさと構えろ！」
「は、はっ！」
先程銃弾を放った者たちが下がり、すでに弾の装填を終えた部隊が前へ出る。即座に構えて命令を待ち、腕を振り下ろしたモーガンの号令で引き金を引く。
「撃てェ！」
再びの一斉掃射。キリは両腕を振り上げた。
地面に落ちたはずの紙がズズッと異様な音を立てて持ち上がり、壁となって立ちはだかってキリたちの姿を隠してしまい、再び無数の銃弾を受け止める。やはり鳴り響くのは金属にぶち当たったにも等しい音だ。紙を突っ切ることは失敗し、回転する弾は衝撃で潰れてしまう。

発砲が終われば紙はまたひらひら地に落ちた。受け止めた銃弾と共に地面へ広がる。
一歩も動かずに無傷のキリは外見以上の脅威に思え、多くの海兵たちが戦慄していた。
殊更、モーガンが驚きと共に怒りを膨れ上がらせていたようだ。
「無駄だよ。鉛紙って呼んでるんだけどね、紙を硬化させて金属レベルまで硬くしてるんだ。銃弾でも剣でもこれは破けない。少なくとも普通の人間にはね」
「お、おまえ、一体――」
背後からゾロの声が聞こえたことで首だけ振り向き、にこりと笑いかける。
ひらりと舞ってきた一枚の紙片を指に挟み、それを見せながら教える。
「ボクはペラペラの実を食べた紙人間。悪魔の実の能力者だよ」
「能力者……あれが噂の」
彼が呟く間にもキリは右腕を振って指に挟んだ紙を投げる。
能力で硬化された紙片は銃弾のように飛来し、真っ直ぐにモーガンへ迫った。確かに速いが見切れないほどではない。おもむろに腕を振って斧を使い、叩き落す。
固い音を発して地面へ紙が突き刺さる。だが次の瞬間にはへにゃりと力が無くなった。
これが悪魔の実の能力。たかが紙でも立派な凶器だ。
怯え始めた海兵たちを叱咤し、またもモーガンは攻撃を始める。
「銃弾が効かねぇならサーベルに持ち替えろ！　悪魔の実の能力者といっても所詮は一人だ！　四方から一斉に襲って殺せェ！」
雄々しく応えて海兵たちが一斉に動き出す。
サーベルを持つ者が前へ出て走り出し、キリを目掛けて一直線に向かう。
数十名による一斉攻撃だ。常人ならば怯える光景にもキリは表情を変えない。
気楽な様子で右腕を振り上げれば辺りに落ちていた大量の紙が一

斉に舞い上がり、円を描いて旋回する。その光景には皆の足が止まった。思わず見上げて見惚れてしまう。
自らの能力で奇妙な光景を作り出し、準備しようとキリが軽く数度ジャンプを繰り返す。
「よし、じゃあ始めようか。できるだけ動いとかないとな」
大口を開けて放心しているコビーや、安堵した表情で見守っているシルクとは違い、じっとその背を見つめるゾロは不可解な点に気付く。
軽く跳んでいるだけなのに妙な動きに見える。
キリの動きは軽過ぎるのだ。
脚力が優れているという訳ではない。遠目に見ている限りでは特別筋力が発達しているという意味ではなく、単純に体重が軽過ぎると思える。彼の背丈はルフィとそう変わらず、シルクより少し高い。しかし身のこなしを見る限りでは彼女よりも軽いのではないだろうか。
悪魔の実の能力者だと言っていた。自分は紙人間だ、とも。
いまだ不可解なことが多数あり、ただ彼の強さはすでに理解できたようで、ゾロは密かに小さく舌を鳴らす。様々な点からやはり厄介そうな奴だった。
「来ないんならこっちから行くよ」
身動きが取れない海兵たちに告げて先にキリが動き出す。
人差し指を伸ばして腕を振り下ろし、宙を舞う紙は一斉に海兵たちの頭上から降り注ぐ。慌てふためき身を強張らせ、中には目を閉じてしまう者も居たが、降り注ぐそれはただの紙。硬化されておらず誰一人として怪我を負った者はいない。だが目くらましには十分過ぎた。
素早く駆け出していたキリはあっという間に混乱する集団へ入り込む。
敵の懐へ入り込み、一人の男が思い切り腹を蹴られた。
細身ながら外見以上の力を見せた攻撃は男の体を軽々飛ばし、他の海兵へ激突する。流石にもう悲鳴を堪えることは不可能で、舞い落ちる紙によって視界も悪い中、すでに攻撃が始まっていると知った海兵たちは怯えずにはいられなかった。

至るところに紙があった。そして全ての紙はキリの支配下にある。
近くにあった無数の紙を手元に引き寄せ、剣の形を作り出した。さらに硬化させて金属のそれと遜色ない様相となり、紙の集合体であって、切れ味鋭い刃を持つ武器となる。
鉄製のサーベルへ向けて紙の剣を振り、当てて、高い金属音を響かせながら弾き飛ばす。
たったそれだけでも再び空気が変わっていた。
彼は敵の武器の狙いを逸らさせ、態勢を崩した敵を左手で殴るか蹴り飛ばした。
慣れが伺える動きは軽快で素早い。
見る見るうちに海兵が倒され、混乱はますます大きくなっていった。
「全員で囲め！　速いぞ！」
「誰か捕まえろォ！　相手は一人だけなんだぞ！」
混乱する状況の中で怒号が飛び交う。だがキリを捕まえることはできなかった。
振り下ろされるサーベルを避け、金属音は鳴り止まず、鈍い打撃の音まで聞こえる。
人数の差がありながら猛攻は一方的だ。
圧倒的な強さでキリが敵を退けて、縦横無尽に駆ける。
その動きのなんと軽いことか。
一度地面を蹴れば数メートルは跳び上がり、ふわりと宙に滞空する時間が常人より長く、空から敵の立ち位置や混乱ぶりを確認できる。どこが弱点で、どこが強いか。的確に見抜いて次々襲い掛かっていく。ほんの一瞬の出来事ながらその判断は誰にも真似できないような代物だった。
落下してきて一瞬で数名の海兵を吹き飛ばし、また舞い上がる。
ただそれだけの動きでさえも止められない。動きは素早く、身軽さに秀でている。
周囲に海兵が居ない地点へ着地した時、気付けば紙の剣が両手に持たれていた。

四方八方から襲われるが逃げもしなければ慌てもしない。
軸足を一本、その場でぐるりと回転し、向かってくる相手に対して激烈な斬撃を与えた。
初めて血が舞う。
ただ硬いだけの剣ではなく切れ味を持つ刃だと、証明された瞬間だった。
傷は浅いが腹を斬られて痛みに支配されてしまった様子。数名が一斉に倒れて呻き声を上げた。
部隊の士気はさらに削がれて統率が乱れていた。海兵の様子は明らかに変化しており、たった一人の敵にかき乱されて冷静さを保てなくなっている。
空気を変えるべきだと判断したのはモーガンだった。
斧手を振って暴風を起こし、地面にすっぱりと凄まじい亀裂が入った。
その時になってキリの動きは止まり、海兵たちも一斉に後退する。もはや平静で居られる者などおらず、キリの体に注がれる視線は恐怖のみ。言葉を失い沈黙が生まれる。
キリとモーガンの視線が絡み合い、一方は余裕を見せつけ、一方は激怒を表した。
「役立たずどもめ……もう十分だ。おまえらは向こうのガキどもを始末しろ」
「あれ？　もう大ボスの登場？　まだ調整中だったんだけど」
「クソガキ。貴様はおれが直々に殺してやる」
コートを脱ぎ捨て、身軽になったモーガンが前へ歩き出す。
逃げるように海兵たちが道を開け、キリの周囲から人の姿が無くなった。
二人は必然的に一対一で向かい合う状況となる。
両手には紙の剣。足元には無数の紙片がばら撒かれている。
戦闘の準備は十分だった。
キリは敢えて動かずに待ち構え、モーガンが距離を詰めてくる様を見守っている。

「小僧、無知なおまえに教えてやろう。この世は偉い奴こそ正しい。そしてこの斧手のモーガンはこの町において最も偉い。つまりおれには貴様を処刑する権利がある」
「別にそれでいいよ。正義にも悪にも興味ないし。ただ、問題は力があるかどうかだよね」
「なに？」
「この首、そう簡単に落ちないよ」
紙の剣で首筋を撫で、キリはしたり顔でそう言った。
途端にモーガンは我慢できなくなり、荒々しく駆け出そうとする。
「大口を叩けるのもここまでだ――」
強く地面を踏みつけて走り出し、斧手を振り上げながらモーガンが走る。
大柄だというのに素早い動きを見据えてキリは剣を構えて待った。
「おれを誰だと思ってやがる！　おれは斧手のモーガンだ！」
「知ってるよ。名前だけは有名だからね」
距離は一気に詰まった。
全力で振り下ろされた斧手を二本の剣で受け止める。凄まじい衝撃が周囲まで届きそうなほどで、激突する二人に目が釘付けになり、全員が動きを止めていた。
キリがモーガンの攻撃を受け止めたのだ。
今日まで多くの人間を始末してきたその強烈な一撃を、真下から受け止めている。
交差した二本の紙の剣は重厚な斧を受け止めても壊れない。そればかりかキリの表情から余裕が消えている訳でもなくて、体格差を物ともせず、互いの獲物は拮抗していた。
「こいつ……！」
「ぐっ、流石に結構すごいけど……やっぱり落とせなかったね」
「ぬかせッ！」
モーガンが腕を振ったことでキリは自ら後ろへ跳び、二人の距離が開く。
仕切り直しで武器を構え直して向かい合った。

両者の表情に違いはあるが、どちらも明らかな強者であることに間違いはない。海兵やコビーは格の違いに背筋を凍らせ、呆然と眺めるシルクも冷や汗を掻いている。

その中でゾロだけは面白いとばかりに笑みを浮かべていた。

Ｓｗｉｎｇ　ｉｔ！（３）

演習場全体に聞こえるほどの大声が聞こえたのはちょうど戦闘が止まった瞬間だった。
キリとモーガンの距離が開くのを待っていたように、遠くから何かが飛んでくる。
基地の方から飛んできたのはルフィだ。
凄まじい勢いで飛来する様は砲弾にも似ている。どこからかゴムの反動を利用して飛んだのか、一直線に演習場へ向かってくるものの、着地が心配になる姿である。
案の定、彼はゾロ目掛けて飛んでいるようで、撃ち出した今となっては止められそうにない。
見ていたゾロは表情を変え、動けない状況をまずいと思う。
しかし思ったところで動けないため、接近してくる彼を見続けるしかなかった。
「おーいゾロ！　刀見つけたぞォ！」
「おい、バカっ!?　おまえどうやって止まる気だ――！」
全員が手を止め、見守る中。
想像通りというか、飛んできたルフィは磔にされたゾロに激突し、盛大な様子で轟音を立てた。ゾロが縛り付けられていた木材は壊れてバラバラになり、二人揃って地面へ転ぶ。
転んだだけでなく多少の怪我も負ったらしい。
勢いよく起き上がったゾロは頭から多少の血を流すも、あまりに驚きが大き過ぎて全く気になっていない。それよりも現在の気持ちを相手へぶつけてやりたくて仕方なかった様子。
すぐ傍に寝そべる彼を睨みつけ、時間を置かずに大声で叫んだ。
「てめぇ何やってやがる！　いきなり突っ込んでくる奴があるか！」
「いやぁ～びっくりしたぁ。思ったより勢いついちまってよ。やべぇなぁと思ったけど止まれなかった、ししし」
「くそ、一体何考えてやがんだ。おかげで額が切れやがった」

「まぁいいじゃねぇか。縄もほどけたし」
「代わりに怪我したっつってんだろ。それでチャラにはならねぇよ」
壊れた木材の傍へ並んで座って、二人の視線は同じ方向を見る。
少しの距離を置いて目にするのはキリの背中と並び立つ海兵たち。戦力差は圧倒的で、それでも状況は拮抗しているようだ。乱れた統率は目で見てわかりやすい。
瞬時に状況を理解したルフィは目を輝かせて声を漏らす。
「おぉ～っ、盛り上がってんなぁ。キリも本気か」
「あいつは一体なんなんだ。人の話は聞かねぇわ、悪魔の実の能力者だわで滅茶苦茶だ。まぁ、腕はそれなりみたいだがな」
「キリは副船長だ。頼りになるぞ」
「んなこと聞いてねぇ。ったく、おまえといいあいつといい……」
ゾロは頭を抱え出したが、気にせずルフィは立ち上がる。
背にはロープで縛った三本の刀を背負っていた。肩から提げるようにしていたそれを手に取り、ゾロに見せる。柄と鞘が黒い物が二本、白い物が一本。一人で三本も使うとは思えなかったがどれが彼の持ち物かわからず、ヘルメッポの部屋にあった刀を全て持ってきたのである。
刀を見せられたゾロはふと怒りを霧散させた。
本当に奪い取って来たのだ。海軍の基地に単身乗り込んで、怪我一つ負うこともなく。
「ほら、おまえのどれだ？　わかんねぇから全部持って来たんだ」
「三本ともおれのさ……おれは三刀流なんでね」
「そっか。んじゃこれで揃ったな」
「いいのか？」
「ああ。だっておまえの刀だろ」
差し出されたそれを受け取るのに数秒かかり、戸惑いながら立ち上がって手に取る。
奪われたのは刀のみで、鞘を提げるベルトまでは取られていなかった。受け取った三本をそこへ納め、腰の右側に刀をぶら下げれば、驚

くほど気分が落ち着く。
九日間の疲労が肉体にへばり付いて無視はできない。
それでも武器を取り戻せば並み居る海兵たちにも負ける気はしなかった。
眼光鋭く、自身を見つめてくる敵を睨み返す。するとそれだけで相手は肩をびくつかせて怯んだ顔つきに変わった。刀に手をかければ恐怖心はさらに大きくなって対峙した相手へ伝わる。
肩を揺らして笑うルフィはゾロの隣に並び、同じく海兵を眺めた。
「で、どうする？　ここでおれたちといっしょに戦えば、おまえも政府に盾突く悪党だ。このまま死ぬのとどっちがいい？」
「おまえは悪魔の息子かよ。ほんっとに性質が悪ぃ」
ゾロが刀を抜いた。ゆっくりと鞘から刀身を抜き出し、両手に黒い鞘の刀を二本持つ。
それを海兵へ向けるのかと思いきや、右手に持った刀はルフィへと向けられる。
首筋に刃が触れそうな距離。
今まで静観していたシルクは慌てて自身も剣を抜こうと力を込め、ゾロへ厳しい視線を向ける。
「ルフィ!?」
「いいんだ、シルク。大丈夫だ」
殺気がないことを知ってか、ルフィは言葉だけでシルクを制した。それだけで安心できる状況ではないがひとまず動きを止めて見守ることにする。
すぐには動き出さず、緊迫した空気で二人が視線を合わせる。
ゾロは殺気を放っていたはずだ。だが殺そうとした訳ではないことはバレていて、ルフィは冷静に見つめ返してくる。ただ問いかけたかっただけだと知っていたとでも言うのか。あり得ないことだが彼を理解するのは難しく、細かな思考は即座に捨てる。
相手を本気で睨みながらゾロが呟いた。
「そこまで言うんなら上等だ。ここでくたばるくらいなら、なってやろうじゃねぇか、海賊に。だがな、最初にはっきりさせとくぞ」

「なんだ？」
「おれには野望がある。世界一の大剣豪になることだ。こうなっちまったら名の浄不浄も言ってられねぇ。海賊だろうがなんだろうが、おれの名を世界中に轟かせてやる」
そう前置きした上で、嘘を許さぬ口調で言う。
覚悟を問われていた。そう知りながらルフィは視線を外さない。
「いいか、おれは腑抜けについていくつもりはねぇぞ。誘ったのはてめぇだ。野望を断念するようなことがあったら、その時は腹切っておれに詫びろ」
「いいねぇ、世界一の大剣豪。海賊王の仲間ならそれくらいなってもらわねぇとおれが困る」
「へっ……言うねぇ」
添えられた刃は静かに下ろされた。
シルクはほっと息を吐いて肩の力を抜く。不測の事態は免れたらしい。
今度こそようやく敵に向かい合った。
少し遅れて二人の横にシルクも並び、ルフィを挟んで三人が肩を並べて敵を見る。その様はいっそ壮観で、彼らの実力を知らない海兵たちだがわずかに息を呑む。
戦闘の始まりを予感させ、立ち尽くしたまま動かず、機を窺っていたキリも背後の会話を耳に時を待つ。前方には肩を怒らすモーガン。彼との戦闘はもらったとばかりにその場を動かない。
すでに自分の獲物だと判断した様子だ。
それがわかっているのかルフィも何も言わなかった。
戦闘の前の奇妙な沈黙。
ふとルフィが後ろを振り返り、その場にそぐわない声色で呟く。
「ところで、なんでコビーがいるんだ？」
「今更!?　み、みなさんを応援しに来たんです！」
「そうだったのか。なんかおかしいなぁと思ってよぉ」
「ルフィさん！」
「ん？」

再び前を向こうとしたルフィを呼び止め、コビーが必死の表情で叫ぶ。
覚悟が決まった顔での一言は非常に力の入ったものだった。
「ぼくには何もできませんけど、この海軍がおかしいってことだけはわかります。だからお願いします……こんな海軍、潰しちゃえ！」
「しっしっし。おう、まかせろ」
拳を鳴らしてやっと場が整った。
並び立つ仲間に戸惑いはなく、後悔もない。むしろ戦闘を心待ちにしている雰囲気すらあった。
背後を見ないまま手の中で剣を回したキリがルフィへと尋ねる。
「船長、号令は？」
「うし。野郎ども、戦闘だ！　思いっきり暴れろォ！」
ルフィの雄々しい声に全員が答え、一斉に動き出す。
最も早かったのはやはりキリだ。先頭に立っていたため動き出せば真っ先に敵へ接近し、武器を振って互いの獲物が激突する。紙の剣と斧手が触れ合った。
二人の顔が近くなって、必然的に睨み合いも至近距離である。
「てめぇら全員纏めて処刑だ！　おれの命令に従えねぇ奴は死ね！」
「殺したかったら殺してみなよ。その権利は持ってるんだからさ」
激突した二人はすぐに離れてまたも戦い始めた。
彼らの傍に近寄る者はない。海兵は誰もが戸惑いを露わに逡巡していた。戦うべきか否か、正常な判断を下せる者はおらず二の足を踏んでしまっている。
斧手を振りながらもそれに気付いたモーガンが大声で叫んだ。
「おまえらはロロノア・ゾロと麦わら帽子を始末しろ！　おれの像を壊しやがった奴だ！　絶対に生かして帰すなァ！」
「は、はっ！」
命令を下されれば怯えながらも全員が動き出す。
無数の人間がサーベルを振り上げてたった三人の敵へ向けて走ってくる。凄まじい光景だ。だがすでに覚悟を決めている三人は好戦

的な笑みを湛えて待ち構え、今やコビーも決意を感じさせる強い眼差しでその光景を見ている。
その場の空気は確実に変えられていた。
訓練されているとはいえ、怯えたまま武器を持った人間と覚悟を決めた人間。
どちらが強いかは明白。些細な動きにさえ違いが見えた。
「面白くなってきた！　ゴムゴムのォ――」
満面の笑みを浮かべるルフィが前へ出て、おもむろに右脚を振り上げる。
前方へ向かって繰り出される蹴りは向かってくる海兵に届かないはずだが、ゴムの特性によって急速に伸びていき、攻撃の範囲を一気に広げた。
その光景には海兵やゾロが目を剥いて驚く。
「な、なんだあれは――!?」
「鞭ィ！」
伸びた脚による蹴りが海兵の集団を蹴り飛ばし、十名以上から成る隊列が一気に突き崩された。蹴られた者たちは勢いよく飛ばされて地面を転がる。やられたのはほんの一部、まだまだ数は居るというのに、たったそれだけで士気は著しく低くなった様子。
キリが能力者だと知ったばかりなのに、もう一人能力者を見つけたのだ。
これだけで驚嘆に値し、物珍しい存在に動揺が走る。
事情を知るシルクは冷静な思考で敵を見て、それも仕方ないと思うものの、驚いている人間は敵ばかりでなくもう一人。それも彼女のすぐ傍に居た。
脚を戻したルフィの背を見つめ、ゾロが呆然と呟く。
「今のは……まさか、おまえも能力者か」
「おう。おれはゴムゴムの実を食ったゴム人間だ」
振り返って笑う彼に溜息が出た。
厄介だと思っていた二人はどちらも能力者。噂は聞いている。悪魔の実を食べた者は必ず海に嫌われてカナヅチになると。つまり海

に落ちれば自力で助かる術はない。
それでよく海賊をやろうと思ったものだと一人ごちつつ、三本目の刀を抜く。
多少怯みはしたもののいまだ向かってくる敵が居た。
彼らを相手にしなければならないだろう。そう判断してゾロは白い柄の刀を口に噛んで持った。
「まったく厄介な奴らに絡まれちまったもんだ。どいつもこいつもめんどくせぇ」
「一人ずつ分断させろ！　包囲して武器を奪うんだ！」
「おいおまえら」
三本の刀を構えた、独自の三刀流。その奇妙な姿で手拭いの下から覗く両目は恐ろしいほどギラついており、強い怒りを感じさせ、目にした者には腹を空かせた魔獣を思わせた。
「おれァ今機嫌が悪ぃんだ。死にたくねぇ奴は今すぐ逃げろ」
「ひぃっ――!?」
悲鳴も一瞬。先頭の二人が吹き飛ばされた。
見れば気付かぬ内にゾロが間近に迫っていて、集団の足が止まる。軽々宙へ舞った二人の男は血を撒いており、胸から腹にかけて切り傷が作られている。
ほんの一瞬、視認できたはずが止めることさえできずに接近を許してしまったらしい。
あっという間に恐怖は浸透して全体へ広がる。
格が違うと思わされた。
伊達や酔狂で三本持っている訳ではない。彼の力は三本の刀によって発揮されていた。
振るう腕は逞しく、技術を見せながら力強く振るわれる様はまさに豪剣。
フェイントもなく真っ直ぐ向かってくる姿には恐ろしいほどの何かが纏われていた。
「う、うわぁぁぁっ!?」
誰かが悲鳴を発していた。だが声の主を探す暇もなくまた数名が

切り裂かれ、地に倒れ伏す。バタバタと無残に倒れていく海兵は数秒ごとに増えていくばかりだ。
集団の中にゾロを止められる者など居なかった。
形を持った暴力である彼には抗えず、武器を振り上げることさえできずにいる。
「てめぇらとは格が違うんだ。わかったらもう邪魔するんじゃねぇよ」
刀を噛んだままそう言われる。
もはや言い返す気力すらなくて、海兵たちは恐怖から立ちすくむばかりだった。
「道を開けろォ！」
「ぎゃあああっ!?」
また数名が一斉に斬り飛ばされてついに悲鳴が抑えられなくなった。すっかりゾロに対する恐怖に支配された海兵たちは逃げ惑い、中には武器を捨ててしまう者まで居る。
圧倒的な強さ。自分より数の多い敵でさえ赤子の手を捻るようである。
戦意を失くした敵を前に、刀を下ろしたゾロは小さく鼻を鳴らした。
あまりにも張り合いがない。
今しがた斬った連中も死んではいないだろう。誰一人として本気で斬ってはいない。血は流れたが敵につけられたのは浅い傷ばかりだ。
久々に刀を振ったのにこうも相手に手応えがなくては面白いとも思わない。
ゾロは不意に戦闘中のキリへ目を向ける。
紙を武器にする彼は剣を使ってモーガンの斧を弾いている。動きは身軽で身のこなしも中々。足捌きもこなれていて豊富な戦闘経験を思わせる。
あれを相手にしたら楽しそうだと、凶悪な笑みが期待を表した。
そんなゾロを見ていたルフィは傍に立つシルクと何やら話してい

たようだ。緊迫した場にそぐわない楽しげなやり取りが彼の耳にまで届く。
「すんげぇなぁ三刀流。なぁ、あれシルクはできねぇのか？」
「む、無理だよ。あんなことしたら普通顎外れるよ？　なんで大丈夫なんだろう」
「ゾロは顎が強ぇんだな。顎鍛えたらおれにもできるかな？」
「うーん、どうだろう……でも人を切ったら衝撃も相当なはずだし、そもそも顎を鍛えるってどうやるのかな。あれはゾロだけの技だと思って諦めた方がいいと思う」
「そうか？　おもしろそうなのになぁ、三刀流」
「ゾロがおかしいだけだよ、きっと」
「おまえら真面目に戦えよ！」
棒立ちになって和やかに話す二人にゾロが叫んだ。
キリも含め、なぜ彼らは誰もが揃って緊張感がないのか。頭が痛くなる想いで体の力が抜ける。考えようによっては一人として普通の人間は居ないのかもしれなかった。
そう思えば決断は性急過ぎたかと後悔を抱きかけて、頭を振る。
一度決めたことだ、二言はない。
しかし和やかな彼らにはどうにも力が抜けて。
敵が向かってくる前で突っ立って居られる神経の図太さに溜息が出て、思わず助けに行こうかと思ったほどだ。だが動き出す決断をする直前、シルクが動く。
ルフィへ迫ってくる海兵の前へ彼女が躍り出たのだ。
「ルフィ、危ない！」
「ん？　そうか？」
彼が弱くないことは知っているが能天気な態度を危惧して防御に入った。
毅然として敵を見据え、斬りかかってくる敵のサーベルに剣を合わせると、上手く力を受け流してするりと刀身を鞘の上に走らせる。すると剣を振った海兵は思わぬ力を受けて態勢を崩した。
後はいとも簡単である。ただ鞘で急所を殴りつけて意識を刈り取

ればいい。
顎を強打された海兵は滑り込むように地面へ転がった。
相手が女性だと侮っていたか、後続の男たちは一斉に怯む。そのためシルクから前へ出た。
彼女はまだ人を斬ったことがない。まだその勇気がなかったからだ。
刀身での防御と鞘での殴打を主流戦法とし、鍛錬でも繰り返し復習してきた。だがゾロの姿を、戦い方を見て覚悟を決める。敵を斬る刃を持っていながら斬らないのはただの甘えだろう。
海賊になって強くなると決めた以上、もう甘えは許されない。
自らの意思で剣を抜いたシルクは猛然と敵に襲い掛かった。
「やぁぁっ！」
力が強そうとは見えない細腕。それでも正面から向かってくる。
先頭に居た海兵は警戒して身構えるも、やはり躊躇いは残ってしまう。相手はまだ若い少女。たとえ武器を持って襲い掛かってこようとも切ろうとは思えない。
果たして、そんな逡巡のせいだったか。
素早い動きを見せたシルクは男の傍を通り過ぎ、その一瞬で腹を斬りつけていた。
傷は浅い。だが刀身に血液が付着する。
肉を裂く感触と血の匂い。
わずかに動揺するがぐっと歯を食いしばって耐え、剣を振って敵を見た。刀身から剥がれた血液はべちゃりと地面へ落とされ、背後からは苦しげな声。本人としては初めての戦闘だと思う。今、海兵に剣を向けて、人を斬ったこの瞬間こそ、初めて自分が海賊になった瞬間だった。
「シルクもすげぇなぁ。おれの仲間は頼りになる奴ばっかりだ」
「おまえはいつまでサボってんだ。敵の数が多いんだぞ、とっとと戦え」
「おう！」
指揮は乱れているもののまだ相手に戦闘をやめる意思はない。や

はりモーガンが倒れない限り、どれだけ兵を失おうとも戦闘が中断される様子はないようだった。
従ってゾロとルフィもまた敵へ駆け出し、更なる戦闘を繰り広げる。
状況を打開する鍵はキリだと、コビーも含めた四人全員が思っていた。
総大将を彼に任せた以上、手助けはできない。
自身の敵と戦いながらも彼らはキリの勝負を気にし、その動きを時折確認していた。
「ぬぅん！」
モーガンが腕を振る度、強烈な旋風が起こる。
近くにある物を風だけで切り裂いてしまうかのような威容。遠目で見ているだけでも脅威だと感じるものの、キリは相変わらず軽い動きで避けていく。傷一つも負わずに余裕の表情だ。
ふわりと舞って距離を開け、敵が機を窺おうと構えた瞬間に接敵する。
まるで一つの舞を見ているかのようだ。
彼の動きと周囲で空を泳ぐ紙片。幻想的な光景は見る者の心を奪う。
「チィ、ちょこまかと……！」
「うん。良い調子。やっとエンジンかかってきたかな」
着地したキリはくるりと回って両手の剣を捨てる。
空中で地面に触れる前にばらけた紙は宙を舞って、風に遊ばれながら彼の周囲で旋回した。
不思議と気分が変わって上機嫌になっていた。
数分戦い続けて疲労を感じてもおかしくないはずなのに、体の調子は尚も向上する。
傍目から見ても紙の動きが良くなっていると感じた。見た目はただの紙片であることに変わりないにも拘らず、バサリと音を立てて動くそれは生物にも等しい。見た目がどこにでもある物なだけにこの状況では剣や銃よりよっぽど驚異的と思える。

剣を捨てた彼だがそれは形を変えただけで武器を捨てた訳ではない。すでに見せられた行動の節々から、異なる形となって襲ってくることは理解している。
戦闘の放棄とはならず、モーガンもすでに承知していた。
「長々待たせて悪かったね。そろそろちゃんとやるよ」
「おかしなことを言う。今までは手を抜いていたとでも？」
「いいや、本気で戦ってたよ。ただ動きが固かったのは認める。あれじゃ勝てないよね」
「ふざけた小僧だ。勝てないと分かって負け惜しみか？　大口を叩くのも大概にしろ」
怒りを滲ませてモーガンが駆け出す。
直情的な様子で真っ直ぐ。ぶれることなく向かってくる。
慌てずにキリは周囲から紙を呼び寄せ、二枚を右手の指に挟んだ。
それを投げるように腕を振るう。すると彼の手から放たれた紙は、風に負けることもなく真っ直ぐな軌道を描き、反応できないほど素早くモーガンへ届いた。
二枚の紙は彼の両目を塞ぐ。ぺたりと張り付いて間抜けな様子。しかし驚愕するには十分で、視界は一瞬でゼロになって何も見えず、一瞬動きが怯んだ。
その間にキリは全力でモーガンの腹を蹴りつけ、巨体を軽々と吹き飛ばす。
紙はすぐに剥がれて視界が戻ったが、あまりにも予想外の出来事に反応できず、痛みを覚えながら背中から落ちる。受け身は取れなかった。我がことながらひどく屈辱的な姿である。
転んだもののすぐに起き上がり、立ち上がる。
前方を見ればキリはその場から動きもせず、手には紙で作られた長い棍棒を持っていた。
「もう準備できてるよ」
「クソガキがァ……！」
再びモーガンが前へ出て襲い掛かった。
今度は下手な小細工などない。キリは手慣れた姿で棒を構えて待

ち受ける。
急速に接近し、何度目かで斧が脳天目掛けて振り下ろされた。
すでに何度も見た軌跡である。素早く振るわれた棍棒で斧の腹を叩き、軌道を逸らす。
無理やり軌道を変えられ、攻撃が空を切ったせいで態勢が崩れた。明らかに隙が生まれて、まずいとは本人も理解しており、次にやってくる攻撃を視認する。
体を回して繰り出された攻撃がモーガンの後頭部を殴った。
たたらを踏んで転びかける。だが今度は倒れない。寸でのところで態勢を立て直した。
瞬きさえ許さずくるりと棍棒が回される。
視認できた途端、素早く攻撃が繰り出されたことに気付いた。左の頬と首筋、胸、ほぼ同時に突きが当てられて痛みが生じる。体勢がぶれて痛みと怒りで表情が歪んだ。
先程までは拮抗していたはずが、今は一方的に攻撃を当てられている。転ぶことはないとはいえ一方的に打撃を当てられたことがプライドを刺激したらしい。
自分の方が強いはずだ。そう思う心が今もある。
無視できない事実に憤りが止められず、怒声はさらに大きくなった。
「クソがァ！　調子に乗ってんじゃねぇよ！」
すぐさま攻撃に転じて斧手を振るも、攻撃は単調で速度は見切った。何度攻撃しようともキリの体に傷はつかない。
巧みな技術と身軽な動きで防御は完璧。武器を合わせて押し負けることはなかった。
力任せな攻撃を受け流し、立ち位置を変え続けて見事に回避する。
キリが後ろへ跳び、距離を作ってもモーガンの攻撃は変わらず、あくまでも接近戦で始末しようとしていた。まさしく猪突猛進。今や見切られた斧手に脅威はまるで感じない。
着地と同時、キリはにこやかに笑いかけた。
「クソォ！　おれはこの基地で最も偉い！　おれより強ぇ奴など居

やしねぇんだ！」
「どうにも厄介な人だね。あの妄信でよく大佐になんてなれたもんだ」
真っ直ぐ向かってくるモーガンに対し、キリは棍棒を捨てた。
ばらけて紙に戻った後、すぐさま別の形が作られる。無数の紙が寄り集まって、完成したのは四足歩行の動物を模した外見、狼に見える。
意思を持たないそれも、キリが指を振れば意思を持つかのように動き出す。
駆け出した紙の狼は人間より速く走ってモーガンへ飛び掛かった。
「邪魔だァ！」
地面を蹴り、上半身へ飛び掛かったが斧手によって狼が斬られた。途端にただの紙に戻ってばらけてしまい、血の一滴もなく散って、姿が消える。代わりにモーガンの目の前には大量の紙がばら撒かれていた。攻撃こそ防いだが瞬間的に視界が狭まる。
それを見越してか、気付けばキリが間近に迫っていた。
狼と同じく地面を蹴って跳んでいた彼は、勢いのままにモーガンの顔面へ蹴りを食らわせる。
体格差があっても虚を衝かれては反応しきれない。
体重が後方へ流れてまた無様に地面を転がる羽目となった。今度はすぐに立ち上がらず、地面に背中をつけたままでキリを睨む。
余裕綽々な彼の姿には怒りしか感じない。ただただ腹立たしかった。
「ぐっ、がっ……!?」
「腕は悪くないけどね。相手に当たらないなら不便なだけだよ、その右腕」
「クソ、なぜ当たらねぇ……あんなガキ一匹に」
モーガンがゆっくり立ち上がり、厳しい視線でキリを睨む。
実力の差はあるのだろう。だがそれを認めるか認めないかは別だった。余裕を称えて微笑む彼が気に入らず、その笑みを崩したくて仕方ない。
倒されたところで戦意は消えずにさらに膨れ上がった。

やはりキリが気にすることはなく、笑みを湛えたまま足元の紙を能力で宙に浮かばせる。
「あっていいはずがねぇ、おれが負けるなどあっちゃいけねぇんだ……！」
「そろそろ決着つけようか。だいぶリハビリも済んだし、もう十分だ」
操られた紙はキリの手の中でさっきの棍棒よりも大きな武器となる。
槍の柄に斧の刃を取り付けたような武器。
長大な戦斧を手にして、紙製のそれは鉄製の武器より軽く、尚且つ硬度では負けていない。
キリは軽々とそれを振り回し、構えた。
「鉛紙武装〝ハルバード〟。ただの紙でも斧にだって負けないよ」
「たかが紙でおれが負けるか。おれは海軍大佐のモーガンだ！」
「だから、支部でしょ。本部大佐になってからそれ言いなよ」
全力で駆け出してくるモーガンを目にし、同じくキリも駆け出した。
両者が前方から接近して攻撃が届く距離に入り、同時に振るって、二人は交差する。
傍を通り過ぎて武器を振り切った状態。
しばし動きが止まった。だがほんの数秒で結果は現れる。
モーガンの胸から血が噴き出し、大きな傷ができてぐらりと体が揺れた。白目を剥いたモーガンはその場へ大の字になって倒れ、気を失ったのだ。
勝敗は決した様子である。
キリはかすり傷一つなく立っており、武器をばらけさせてただの紙に戻すと辺りへ落とす。
両手を垂らして深く息を吐く。さほど疲れを感じさせる顔色でもない。圧倒的な勝利を手に入れた後でもさほど喜ぶ様子ではなかった。
戦闘の終わりを感じて場の空気が一変する。

モーガンの敗北とキリの勝利。二つを理解して海兵たちは自然と武器を下ろし始めていた。
誰もが喜ぼうとしている。圧政の終わりに、権力の暴走に。
敗北は彼らにとって絶望ではなかったようだ。
呆然と誰かが呟きかけた時、演習場に声が響き渡った。
「終わった、のか……？　これで、モーガンの支配が――」
「まだだッ！」
鋭い声に全員の注意が惹きつけられる。
視線の先では、ヘルメッポがコビーのこめかみにピストルの銃口を当てていたのだ。

ずっと友達

一時はルフィに人質に取られたヘルメッポが、自室で解放されたことを機に演習場へ来ていた。
どこから持ってきたのか一丁のピストルを手に、こめかみに銃口を当てて、ただ一人離れた場所に立っていたコビーを人質に取っている。
意趣返しのつもりだろう。最も弱い者を狙う姿からは彼の性質の悪さが窺えた。
緩みかけた場の空気は再びピンと張り詰め、全員の表情が引き締められる。
注意が自分に集まったことを知って、ヘルメッポは大声で叫んだ。
「てめぇら全員武器を捨てろ！　おい海兵ども、そいつらを捕まえろ！　じゃねぇとこいつの頭が吹っ飛ぶぞ！」
「あ、バカ息子」
「あいつはまた……」
ルフィが呟けばゾロが続く。二人とも表情を歪めて忌々しげだった。
どうやら場の空気が読めていないらしい。すでに決着はついたというのに、なんというタイミングで声をかけてくるのか。あまりにもタイミングが悪い。
支配から逃れて、自由を手に入れて喜ぼうというその瞬間だったせいなのだろう。今や海兵は誰一人動こうとしない。全員が複雑そうな表情で、互いの顔を見合わせて逡巡している。ヘルメッポの命令は聞こえていたはずだが従おうとはしていなかった。
それに気付かず、尚もヘルメッポは自信満々に言う。
「おまえらもう終わりだな。いいか、おれの親父は海軍大佐で！　まぐれで勝っちまっても本部からの応援が来る！　もうおまえらに助かる方法なんてねぇんだよ！　ひえっひえっひえっ！」
「別におまえがすごいわけじゃねぇだろ。すげぇのは親父じゃねぇか」

「うっ……!?」
「おまえに何ができるんだよ」
得意げに話したヘルメッポに違和感を感じ、歩き出しながらルフィが告げる。ひどく不用心で何も気にしない、ただの散歩のような歩き方。ヘルメッポへ真っ直ぐ向かっていく。
途端に彼は怯え始めるが、引き金は引けず、気付けば膝が笑っていた。
「く、来るなっ」
「親父が誰とかおれは知らねぇ。止めてぇんならおまえがやれよ」
「う、うるせぇぞ。おれに指図すんじゃねぇ！」
「言っとくけどコビーはおまえより強ぇぞ。脅したって無駄だ」
「くっ、うっ――」
ピストルを見ても何一つ怯えないルフィに、今はヘルメッポが怯えていた。
人質を取っているのになぜ躊躇わない。コビーが死んでもいいのかと考える。
彼にとってみればその姿は異常で、権力にも力にも屈しない異常性が、今は怖くて仕方がない。初めて見る姿は彼の人生において関わり合いがなかった物だ。
力を入れてピストルを握り直し、引き金にかけた指が震えた。
その時、意を決した表情のコビーがルフィへ向かって叫ぶ。
「ルフィさんっ！」
「ん？」
「ぼくは、ルフィさんの邪魔をしたくありません……死んでもっ！」
「ししし。ほらな」
ルフィは笑顔になった。
覚悟を決めた顔になったコビーの一言を受け取って上機嫌である。
もはやヘルメッポは負けを認めたかのようにガチガチと歯を打ち鳴らしていて、それでも腕は下ろせない。下ろしてしまえば、本当に負けだと認めてしまう気がして。
負けたくないという気持ちがあった。勝てないとわかっていても、

勝ちたいと思う。
誰にも負けない人生だった。常に勝利してきた人生だったのだ。
些細なプライドが邪魔をして命乞いさえできない。
ルフィの歩みは着実に近付いていた。
「おまえの負けだ、バカ息子。覚悟しろ」
「くそ、くそぉ!?」
必死に前を向いていたヘルメッポは、恐怖に支配されながらも確かにその光景を見ていた。
なぜかはわからない。咄嗟に動いた右腕はピストルをルフィへ向けていて。
伸びたゴムの腕に殴りかかられる一瞬、気付けば引き金は引かれていた。
「ゴムゴムの――」
「親父、早くそいつを――!」
「ピストル!」
「ぐぼふぁっ!?」
ズドンッ、という銃声と共にヘルメッポは殴り飛ばされていた。
間近で聞こえた銃声にコビーの肩が怯えていたが、自身が撃たれていないことを知ると自身の体を確認し、ほっと息を吐く。笑顔のルフィと目が合えば表情が緩んだ。
放たれた銃弾はルフィへ放たれていたのだと気付く。しかし当たらなかったらしい。
倒れたヘルメッポを見た彼は小さく呟いた。
「なんだ、自分で戦えるんじゃねぇか」
その一言が妙に気になったコビーは、倒れたヘルメッポをふと見つめる。もし彼が起きていて、ルフィの精悍な顔を見れば何を想うだろう。それだけが少し気になった。
再び友人たちへと目を向けようとする。
直後、コビーはふと見回した先でモーガンが立ち上がろうとしている姿を目撃する。
ルフィの動きを見て拍手するキリの背後、怒気に包まれる巨体がゆ

らりと起き上がった。
「おぉ～、いいねルフィ。お見事」
「キ、キリさん危ないっ!? 後ろですっ！」
ギロリと危険な瞳が睨みを利かし、鈍く光る斧手が振り上げられる。
「おれは偉い……おれは、誰よりも強いんだッ！」
振り下ろされようとされた一瞬、コンマ数秒の差で、剣閃が数度。再びモーガンの体から血が噴き出し、傷は浅かったものの、今度こそとどめとなって巨体が地面に倒れ伏す。
再度決着はついた。
キリは決着がつくまで背後を見ず。モーガンの傍では三本の刀を納めるゾロが居て、背後の光景を理解していたのか気軽に彼へ声をかけていた。
「流石。良い腕してるよ」
「物は言いようだな……新入りを顎で使う点についてどう思ってんだよ、副船長」
「そう言われても別にボクが命令したわけじゃないしね。仲間が助けてくれたってだけだよ」
「わかってやがっただろうが。めんどくせぇ野郎だ……」
ようやくキリが振り返った。
近くではゾロが不機嫌そうにしていて、もう一方を見れば思わず苦笑する。
剣を振り抜いたはいいものの、少しばかり気まずそうにしていた。
「まぁ、何も二人がかりでやる必要はなかったと思うけどね」
「あ、あはは……つい、手が勝手に動いちゃって」
ゾロとは対面になるよう、苦笑するシルクがモーガンの傍に立っていた。
攻撃は全くの同時。隙だらけだったキリを助けようと二人同時に敵へ斬りかかったのである。
思いのほか良いコンビネーションだ。
何もしなかった自分を棚に上げてくすくす笑い、肩を揺らす。

そうするキリは年相応の少年に見えた。
ようやく場が鎮圧される。
結果は海軍の敗北、たった四人の海賊の勝利。
怪我をした海兵は多く、モーガンは倒れて、ヘルメッポもまた気絶している。損害は大きい。これが悪の限りを尽くす海賊相手であったならば由々しき事態だろう。しかし今この時ばかりは、海兵たちは武器を放り捨ててわっと盛り上がった。
一人残らず笑顔になって騒いでいる。よっぽど嬉しいのか涙を流す者も少なくなかった。
仲間がやられたというのに奇妙な光景である。
想像していなかった反応にルフィは小首をかしげ、反対にコビーは表情を緩ませた。
「なんだこいつら？　仲間がやられたのに喜ぶなんて変なの」
「みんな、やりたくてやってたわけじゃないんだ……大佐が怖くて従ってただけだったんだ」
「ふぅん。まぁどっちでもいいよ。とにかくおれたちの勝ちだ！」
ルフィが両の拳を掲げて宣言し、戦闘は終了した。
喜ぶ海兵たちの間を縫って歩いた三人も彼らの下へ合流する。顔を突き合せれば力を合わせて勝利を勝ち取った影響か、清々しい空気すら流れていて、不機嫌そうなゾロでさえ大人しく傍へ並んでいる。口や態度とは裏腹に彼らを仲間と認める心はあるようだ。
全員が無事に勢揃いした。
敵も味方も死人はなし。言わば完全勝利である。
気楽な笑顔は誇らしげにも見え、皆の声は弾んでいた。
「よぉしおまえら。勝った後は宴やるぞ。知ってるかゾロ、海賊は宴するんだ」
「海賊じゃなくても宴はするだろ。とにかく一刻も早くメシが食いてぇ。九日間何も食ってねぇと流石にぶっ倒れそうだ……」
「大丈夫だよ。きっとリカちゃんが先に準備してくれてるから、もうちょっとだけ我慢してね」
「それまで倒れないでよゾロ。重そうだから捨てていくよ」

「てめぇ、マジでぶった切ってやろうか」
笑顔を絶やさず声を掛け合う彼らは良いチームに見えた。
傍から見ているコビーの目には特に眩しい物を見るようにも思えて、羨ましいという気持ちも少なからずある。自分が海兵になるという夢を持っていなければ、彼らと共に海賊をやる未来があったのかもしれない。それはそれできっと楽しかっただろう。
けれど、すでに道は分かたれた。
今から夢を変える気はなく、少し離れて四人を見る。
何かを想わせるその距離だったが、ルフィのたった一歩によってあっさり詰められた。
「コビーも来るだろ？　宴くらいいっしょにやってもいいよな」
「あ、はい。リカちゃんにも報告したいですし」
「そうだ、せっかくならこの基地の奴らも呼ぼうぜ」
「ええっ!?　だって、みなさん海賊でしょう？」
「いいじゃねぇか、なんか知んねぇけどみんな喜んでるしよ。こうなったら町のみんなも呼んでパーッとやろう！　宴は人数多い方が楽しいもんな！」
「そんなことってありますか……海賊と海軍は敵同士なのに」
呆然とそう呟くもルフィは笑って返すだけ。
仲間たちへ振り返り、うずうずしている様子であっさり告げられる。
「しっしっし、みんなで手分けして準備するぞ。宴だァ！」
ルフィの気まぐれな一声により、盛大な宴が始められようとしていた。

＊

これまで沈黙を保ち、羽目を外すことのなかったシェルズタウンが大いに騒いでいた。
盛り上がりはかつてないほどで、たった一人の海兵が倒れただけで驚きは凄まじく、喜びは堪えきれない。モーガンの敗北は全町民に大

いなる自由を与えた。
自由を謳う町民たちは海賊の導きに従って大いに騒ぎ、盛り上がる。
しかも喜びを露わに騒いでいるのは町民ばかりでなく海兵もだ。
長らく権力による支配を受けていた。今日、ようやくその支配から解き放たれたのである。以前から多くの不平不満を抱え、やりたくない命令にも従うしかなかった海兵たちには大佐を倒した海賊を恨むどころか、感謝すらしているのが目に見えた。
町民、海兵、そして海賊までも入り混じって宴が行われている。
支配から解き放たれて感じた自由はなんとも尊い。これを嬉しく思わないはずがなかった。
笑顔で溢れる町はかつてないほどの大歓声に包まれていた。
そんな風景の中で飯をたらふく食い、酒が入ったジョッキを傾けるゾロは九日ぶりの食事で飢えを満たし、空にしたジョッキを機嫌よく地面へ置いた。
頭の手拭いは左腕に巻き付けられていて、先程よりは緩んだ表情が確認できる。
初めて笑みを見せた彼は思いのほか若々しい様子に溢れていた。
「ふぅー、食った食った。流石に九日も食わなかったらやばかった」
「じゃあやっぱり元々一ヵ月は無理だったんだな」
「おまえはなんでおれより食が進んでんだ……」
ゾロの隣では次々料理の皿を空にしていくルフィの姿がある。ゾロも他の人間に比べればずいぶん食べていたが彼はすでにその倍以上を食している。
その細身にどれだけ入るのか。九日間の空腹を満たしたゾロよりも上に行くとは末恐ろしい。
呆れて物も言えないゾロの隣、リカがくすくす笑う。
命の恩人が無事に帰ってきてくれてよかった。今浮かべられる笑顔には安堵が窺える。
「お兄ちゃん、お腹いっぱいになった？」
「まぁな。やっと人心地ついたぜ」

「よかったねリカちゃん。頑張って作ったおにぎり食べてもらえて」
「うん！」
リカの隣にはシルクが座り、胡坐を掻いて笑顔で語り掛ける。笑い合っている姿は姉妹にも見えるほど仲が良い様子だ。やはり同性であるためか、すでに親密になったらしい。
和やかな時間が流れていた。
戦闘はすでに遠く、いざこざがない穏やかな時間。
珍しく楽しそうにしている町民たちを見るだけでも笑顔になる。
宴の雰囲気はいつまでも壊れることなく続く。しばしのどかな時間が流れていた。
「ル、ルフィさーんっ！」
「んあ？」
基地がある方角から聞こえてきた声にルフィが振り返る。走って来たのはコビーだった。
何やら慌てているようで彼らの前で足を止めると肩で息をする。
少し落ち着きかけた頃、笑顔で伝えられた。
「やりましたよ！　今、海軍の人に頼んできたんです。海軍に入れて欲しいって。そしたら、雑用ですけど、入隊を許可されたんです。ぼくが海軍に入れたんですよ！」
「お、そうなのか。しっしっし、これで敵同士だな」
「はい、そうですね……確かにそうですけど、このご恩は一生忘れません。あなたたちに出会えたからぼくは変われたんです」
意を決した様子でコビーがルフィを見る。何やら真剣な表情だった。
「ルフィさん、ぼくらここで別れちゃいますけど……これからもずっと友達ですよね？」
「当たり前だろ。ずっと友達だ」
心配そうな顔から一転して笑顔に。
思わず感涙しそうになってコビーは慌てて腕で目元を擦った。
それを見ながら微笑むゾロとシルクが声をかける。

「何泣いてんだよ海兵。そんなんでおれたちを捕まえられんのか？」
「いいじゃない。コビーは感動屋さんなんだよね」
「あ、ははは……すいません。もう泣きませんよ。ぼくだってたくさん努力して、勉強して、修行して、強くなってみせます。次に会った時、みなさんに胸を張れるように」
涙を拭って、今度は笑顔で。
全員の顔を見回したコビーは元気な声で言った。
「いつか必ず、海軍将校になってみせますから」
「ああ。でも負けねぇぞ。次に会った時は海賊と海兵だ」
ルフィが右腕を伸ばして拳を向けてきたため、一瞬虚を衝かれるが、理解して拳を突き出す。互いの拳がこつんと触れて、まるで誓いを立てるようだった。
海賊らしくはないが約束というのも悪くないだろう。
苦笑するゾロとは違い、シルクは微笑ましくその姿を見守っていた。
重大な瞬間が終わった時になって、彼らへと声をかける人物が近付いて来る。
「話がまとまったところで、そろそろ出発しようか」
「お、キリ。どこ行ってんだ？」
しばらく姿が見えなかったキリは右手に古びた紙を持ち、ひらひらとそれを振っている。
いつも通りの笑みのまま、気楽な声で告げられた。
「近場の町までの海図。必要な物はまだまだあるし、一つ一つ手に入れていかないとね」
「ここで色々もらっときゃいいんじゃねぇか？　そんなに急がなくてもよぉ」
「タダメシがあるからそう言ってるだけでしょ。色々あったとはいえここは海軍基地がある町。いつまでも海賊が居たら都合が悪いんじゃない？」
「んー、それもそうか。じゃ、行こう」

決断はあっさりしていた。
ルフィが言えばゾロやシルクも続いて立ち上がり、いつ旅立っても文句はなさそうな姿。嫌がる素振りなどない。だが傍で見ていたリカはそうではないようだ。
自身も立ち上がって彼らを見つめ、寂しそうな顔を見せる。
「みんな、行っちゃうの？」
「ごめんね。私たち海賊だから、いつまでも一緒にはいられないの」
「せっかく仲良くなれたのに……」
「心配しないで。一生会えなくなるわけじゃない。必ずまた会いに来るから」
膝を折って目線を合わせ、彼女の頭を撫でながらシルクが言う。するとリカも視線を合わせて、そっと右手を差し出した。
「じゃあ、約束」
「うん。約束だね」
小指と小指を結んで約束し、笑顔を見せ合った二人は肩を揺らした。
それから見送りのためにとついて来るコビーとリカと共に、全員で歩き出して、口々に声をかけてくる町民たちに言葉を返しながら港へ向かった。
人々は温かく、町の雰囲気はとても良い物だ。
先頭を歩くルフィは笑顔で街並みを眺める。
「じゃあ行くか」
「ゾロ、腹ごなしは済んだ？」
「ああ、ばっちりな。今ならおまえだって斬れるぜ」
「やだよ、そんなの。ボクに何か恨みでも？」
「どの口がそう言ってんだ。人が縛られてんのをいいことに散々言いたい放題言いやがって」
「まぁまぁいいじゃないか。そんな過去のことは水に流そう」
「てめぇが言うんじゃねぇよ！」
「しっしっし、おまえら仲いいなぁ」
キリとゾロの軽口も相変わらず。周囲の喧騒にも負けていなかっ

た。
港へ赴き、船へやってきた彼らは後ろからついてきて惜しむ人々の声に負けず、早々に乗船してしまう。と言っても小さな船だ、目線はそう変わらない。
船にはキリとシルクが買い揃えた物が運ばれている。
多めに用意された食料、水が入った樽、人数分の服が数着。前もってゾロを仲間にすることまで考慮していたためか、本来用意するはずだった量よりも多めに設定されている。これもアルビダの船から奪った宝で払われていたのだ。
出航準備など数十秒で済む。
港へ繋がるロープを回収。そして帆を張ればそれだけで出航だ。
まずロープを外し、船が自由に動けるようになってから船員は町へ視線をやった。
多くの町民が集まっている。それだけでなくいつの間にか海兵たちもやってきており、先頭にはコビーとリカの姿。涙はない。笑顔で見送ろうとしてくれている。
「おれたち行くよ。また会おうな、コビー」
「はい。ルフィさんたちも大変でしょうけど、頑張ってください」
「またね、お兄ちゃん」
「おう！」
軽く手を振り、帆が張られる。
風は西に向かって緩やかに吹いていた。速度は出ないが着実に前へ進むだろう。
出航の瞬間、ルフィは海賊らしく大声で叫ぶ。
「出航だァ～！」
雄々しく空へ響かせ、船は走り出した。
まだそう遠くへ行ってしまう前にコビーが最後とばかりに大声を張り上げる。
「みなさん、ありがとうございました！　このご恩は一生忘れません！」
「全員、敬礼！」

手の甲を相手に見せる海軍の敬礼。それを行ったコビーに続き、海兵が全員同じく敬礼をする。海賊に向かって敬意を表すなど、そう滅多に見られる物ではない。
船上では口々に彼らの姿を見た感想を言葉にしていた。
「すごい……ほら、みんな敬礼してるよ。なんだか不思議な光景」
「海賊に敬礼する海兵があるかよ。まったく、何考えてやがんだか」
「それだけモーガンが怖かったってことだよ。それにウチは魔獣を引き取ったわけだし、そりゃあ感謝してもらわないと」
「てめぇ、まだ減らず口が止まんねぇか」
「おもしれーやつら。うし、また来よう。世界を一周して海賊王になってから」
ルフィの決意を聞いてしばらく。
船室にあった荷物の中から酒瓶を取り出してきたキリが、全員へジョッキを渡す。
宴を抜け出しての出航だ。それだけならまだしも、今は仲間が増えたばかり。
仲間たちの顔を見回して笑顔を浮かべる。
「それじゃ、せっかくだからゾロの歓迎会でもやる？」
「あ、いいね。宴も途中で抜け出してきちゃったから」
「つっても歓迎会で酒はこれっぽっちか？」
「とりあえず形だけでもさ。ほら船長、音頭取ってよ」
「おう、まかせろ」
四人で円を描くように座って、ルフィに合わせてジョッキを掲げ、一様に時を待つ。
「えー、それじゃゾロを仲間に迎えまして……かんぱーいっ！」
かんぱい、と全員で声を合わせ、一斉にジョッキがぶつけられた。
中身がこぼれようとも気にしない。ただ笑顔で上機嫌に笑い合った。
まだまだ小さな船だが、仲間が一人増えて、自覚だけは一人前の海賊。
旅は順調に進んでいるに違いない。

新たな航海へ乗り出す面々の顔は期待に輝いていた。

珍獣の島

シェルズタウンを離れて一日。
ルフィを船長とする麦わらの一味は一夜を無人島にて過ごし、時間を使って次の航海に備える。
ゾロは九日ぶりに体を洗い、気分も晴れやかになった。更には服を着替えて気分を一新し、一夜は野宿で終えたとはいえ横になってしっかりと睡眠が取れ、新たな朝になった時にはすっかり晴れやかな表情となっていた様子である。
朝日が昇って少しした頃、また新たな航海に出た。
問題を発見したのはその時である。
昨日とは違った服装。青いパーカーはそのままだが、その下のシャツを着替え、ズボンは七分丈で足首を出す物に変わっている。何やら腕組みをして難しい顔を見せるキリは、胡坐を掻いてううんと唸っており、一人で物思いに耽っていたようだ。
「由々しき事態だ」
「どうした？　なんかあったのか」
キリを気にしたルフィは船首近くに座りながら彼を振り返る。
彼もまた昨日とは少しだけ服を着替えていた。膝丈のジーンズはそのままで、上半身に着るベストの色は黒色になっていて、変わらず麦わら帽子を大事そうにかぶっている。
右手にはリンゴ。出航前に人一倍食べたはずなのにまだ食べれるらしい。
しゃりっと小気味良い音をさせながらキリと視線がぶつかった。
「食料の問題だよ。それなりに多く見積もって買ったはずなのに、消費が激しい。もっと多めに買わなきゃいけなかったかな……かといってこの船に乗せられる量にも限界がある。あんまり買い込み過ぎると、船が沈む恐れがあるしね」
「そりゃ大変だな。おれは毎日メシ食えないといやだぞ。なんでそうなったんだ」
「おまえがバカみてぇに食いまくってるからだよ。腹八分目って言

葉知らねぇのか」
「いでっ」
寝そべったままのゾロが気軽にルフィの頭を蹴った。本気ではないとはいえゴスッとそれなりに痛そうな音が鳴る。だがルフィは驚いた様子だったものの怒りはしなかった。
町を離れて早々の食糧難。
今はまだ危機だがいずれそうなるかもしれないという心配がある。
原因はルフィであった。人一倍食欲が旺盛な彼は食事のやめ時がわからず、あればあるだけ食べられる。そのせいでクルー一同たった一日で食料が尽きてしまう光景が頭に浮かんだ。
キリが止めて危機的状況とはならなかったがそれもいつまで持つか。
船長は全く心配せずに能天気なため、副船長のキリがしっかりするしかない。
思案しながら表情は優れなかった。
「やっぱり船にも問題があるか。最初はこれだと結構広めかなと思ったけど、四人になってそれなりだし、荷物があると尚更だ。やっぱり大きい船が欲しい」
「そうだな〜。やっぱ海賊船っぽいのがいいな」
「元々の計算が間違ってた。ルフィに合わせて考えるならもっと多めに積んどかないと。で、必要な分を用意するには船が小さい」
「それは困った。うーん、どうすっかな〜」
「海賊から奪っちまえばいいんじゃねぇか？　そっちの方が手っ取り早いだろ」
腕を枕に寝っ転がったままのゾロが言う。
体を洗った後、彼も上着を替えている。白いシャツから黒と黄色で彩られたジャケット。革製に見えるそれの前を開いて鍛えられた肉体を露わにしている。
特に考えることもなく告げられて、案外良い話かもしれないとキリが頷いた。
「ふむ、それもそうか。まぁ後々ちゃんとした船を手に入れるとし

て、とりあえず航海しやすい船を手に入れた方がいいかもしれない。誰かから奪おうか」
「軽く言いやがるな。この中じゃおまえが一番危ねぇよ」
「どう思う？　船長」
「いいぞ。メシがいっぱい食えるんならそうしよう」
何も考えていないかのように笑ってルフィが言った。
本当に船長としての自覚があるのか、甚だ疑問が残る姿だがきつく責める者もいない。
ただ、疑問を持つ者は居たようで、今まで舵を見ていたシルクが少し離れた位置から口を開く。
「それでこれからどうするの？　シェルズタウンからは離れちゃったし、一応まだ食料も残ってるけど、次の町まで持つかな」
「どうだろう。一度無人島にでも寄って何か探した方がいいのかも」
「さっきの島で探した方が良かったかもね」
「一度どこかの島へ寄ろうか。町はなくても木の実くらいはあるでしょ」
シルクも舵を離れてやってくる。
波は穏やかで多少離れても航路に影響はない。きっと真っ直ぐ進むはず。
近寄って来た彼女も服を着替えて、黒いTシャツに青いジーンズ。今は船を降りる予定がないためサーベルを置いている。
船室の壁に手を触れ、立ったままで仲間たちを見た。
「ねぇルフィ、私たちの船ってどんなイメージなの？」
「かっこいいやつだ！」
「前途多難な気がしてきた」
「奇遇だな。おれもだ」
軽やかに告げられた答えにキリとゾロは同時にやれやれと首を振る。じゃれ合っている時は喧嘩しているようにも見えるというのに今は息がぴったりだった。
シルクは彼らの様子を微笑ましく思いつつも、ルフィの発言にくす

くす笑う。
「ふふ、かっこいい船か。でもどこで手に入れたらいいんだろうね。海賊船を手に入れるのって簡単じゃなさそうだし……生活費のこと考えるとお金だってあんまりないよ」
「まぁなんとかなるよ」
「なんとかって。いいの？　そんなに考え無しで」
「んん、大丈夫だろ。おれ出たとこ勝負好きだしさ」
「それだと危ない目に遭うかもしれないよ？」
「そっちの方がおもしれぇじゃねぇか。冒険は何も知らねぇからわくわくするんだ。初めから全部わかってる冒険なんておれは好きじゃねぇ」
「なるほど……言われてみたらそうかも」
「な？　だから危ないか危なくねぇか知るために冒険すればいいんだ」
何を話しているのやら。キリは嘆息して視線を手元に落とす。
二人の話し声を耳にしながら海図を確認し始めた。
航海は順調に進んでいる。イーストブルーを離れて早数年、この海の地理に関しては疎いが正確に書かれた海図さえあれば道案内くらいは簡単にできる。今のところ問題はないはず。次に目指す町まで、あと一日もかければ到着できるはずだった。
今はこれでいい。問題なのはグランドラインを目指す頃だろう。
多少なりとも航海術を持つとはいえ、キリは航海士ではない。海図の描き方は知らず、波と風の読み方は長い航海の間に肌で覚え、方角を見失うこともないとはいえ、やはり専門家とは違う。
この世で最も危険な海、グランドラインを航海するには新たな仲間が必要になる。
果たしてどこへ行けば航海士に会えるのか。
できれば優秀な人がいいと、考える内から表情は曇った。
言うは易し。実際見つけるとなればきっと簡単なことではないだろう。
一見すれば楽しいだけの航海だが考えることはあり過ぎる。加え

て船長は流れに身を任せる自由な人物。頭を悩ませる問題は多過ぎてどんどんやる気が削がれていく気がした。
海図を傍へ置いて少し横になろうと決める。
考えるだけ無駄なこともあるだろう。もう少しルフィの気軽さを見習わなければならない。
キリは仰向けに寝転がって深く息を吐き、落ち着き始めた。
目を閉じたちょうどその時になってゾロが声をかけてくる。
「……おい」
「ん？」
「おまえ何してやがる」
「いや、ボクもちょっと寝ようかと思って。真面目に考えるのも良い事ばっかりじゃないね」
「んなこたぁどうでもいいんだよ。おまえが枕にしてんのが何かわかってんのか」
「ゾロの太もも」
「どけ。重てぇだろうが」
「でも枕がないと寝違える可能性あるよ」
「だからって人の脚勝手に使っていいわけねぇだろ。猫か、てめぇは」
「じゃあいいよ、猫で」
「てめぇ……本当にぶった切ってやろうか」
「あぁー疲れた。しばらく何も考えないでいよう」
何を想ってかキリはゾロに対して馴れ馴れしく、勝手に膝枕を奪って、抗議してくる言葉にも飄々とした態度だ。動かないと知って舌打ちされるも蹴り飛ばされることはなかった。
そんな彼らを見て仲が良いのだと判断し、ルフィとシルクも笑顔になる。
それぞれが肩の力を抜いて船上が緩んだ空気に包まれる。
しばらく誰も舵を見ず、航路を見ない危険な状態だ。それでも船は前に進む。
数分もすれば新たな島の姿が見えてきた。

目的地ではないものの、途端にルフィが目を輝かせたため、一同は上陸すると早くも気付き、動き始める。指示される前にシルクが舵取りのため移動し、キリは起き上がって前方を眺め、特にやることがないだろうゾロでさえひとまず上体を起こした。
「なぁ、あの島いいんじゃねぇか？　ちょっと寄ってみようぜ」
「了解船長。面舵いっぱーい」
「はーい」
ルフィの決定を受けてキリが指示を出し、シルクが舵を取って船の目指す先が変わる。
たまたま見つけた小さな島。
人の気配はなさそうなのでおそらく無人島なのだろう。
別段目立った問題もなく船は砂浜へと辿り着き、ゆっくり浅瀬まで乗り込んでいく。
「ゾロ、引っ張って乗り上げさせといて。錨がないから流されないようにしないと」
「おれの仕事かよ」
「一番力があるわけだから頼むよ」
「しょうがねぇな」
濡れたとしても足首辺りまでだろう浅瀬までやってきてから、水の中へゾロが降り、力ずくで船を引っ張る。船の先端が浜まで引っ張り上げられて、これで船を失くす心配はない。
カナヅチの二人が溺れる心配はなくなった。
上機嫌に島へ降り立ったルフィは全景を眺めて興奮した面持ちになる。
小規模とはいえ目の前には大自然が広がり、鬱蒼と草木が生い茂る森がそびえ立つ。どこにでもありそうな風景に思えてもルフィの目にはそう映っていないらしい。
拳を握って楽しそうな彼は、気持ちを抑えられない様子で言った。
「冒険のにおいがするっ」
呟いた直後には我慢できずに元気よく走り出していた。
後ろを振り返らず、しかし仲間たちには声をかけて、一直線に森へ

突入していく。
「行くぞみんなァ！　冒険の始まりだァ～！」
「あ、ルフィ」
「ちょっと待ってよルフィ！　一人で動くと危ないよ！」
シルクが声をかけても遠ざかっていく背は森の中に消えて行った。
一同は一斉に溜息をつく。
想像はできていたがやはり彼を止めることは簡単でなさそうだ。
船が止まった後でキリとシルクも船を降りる。
サーベルを持ち出し、慌ててルフィを追おうとしたシルクだがふと立ち止まった。
後ろへ振り返ってみればキリとゾロは動こうとしていないのだ。
来るつもりがないのか。疑問を持って尋ねてみれば、返ってくるのは緊張感のない声。島にどんな危険があるかわからないというのにルフィを心配する様子はない。
「二人とも、来ないの？　ルフィとはぐれちゃうよ」
「ガキじゃあるまいし、見てなきゃいけねぇ理由はねぇだろ。おれは寝る」
「ボクも今回はいいかな。ビーチって久々な気がするし」
「え～？　もう、しょうがないなぁ」
仕方なく二人を置いてシルクが駆け出し、森の中へ入っていく。
木々は背が高く、草むらも多くて、視界は悪い。
すでにルフィの姿など見えなかったが放っておく訳にもいかずに、視線をあちこちへやってとにかく探した。相変わらず足が速い。どこへ行ったのかも見当がつかずに歩調はゆっくりになった。ひょっとして迷子になったのではないかとシルクの表情が歪む。
ついには歩き出して文句を言うように呟いた。
「みんな勝手な人ばっかりなんだから。ルフィ、どこ行っちゃったんだろ」
「おーいシルク！　こっちだこっち！」
声が聞こえて左手の方向を見れば、草むらの向こうからルフィが手を振っていた。

あっと声を出してそちらへ歩いていく。
草むらを掻き分けて数十メートル。傍へ近寄って驚愕する。
何やら彼は動物を捕まえていたらしく、それがまた変わった外見の動物で、見つけたところで思わず感想に困ってしまう。
ルフィが捕まえていたのは狐のような四足歩行動物だ。
それだけならば問題もないが、奇妙なのはその毛並みが真っ白なことと、頭の上には赤いトサカがついていること。よく見れば尻尾の色も鮮明な赤。外見こそ狐だが、鶏の特徴を思わせる部分も持っていて、どちらとも判別できない。
責める言葉さえ忘れてシルクが表情を強張らせる。
ルフィは逃げもせずのんきに立っている奇妙な動物の背を撫で、自慢するように彼女を見た。
「見ろ、変わったにわとりだ」
「に、にわとり？　変わった狐だと思うんだけど……」
「珍しい動物だなぁ。ほら、トサカ。トサカついてるぞ」
「この子、なんていう動物なんだろう。こんな変わったのは見た事ないよ」
トサカを撫でられて嫌がる素振りさえない。
狐はやる気に欠けた目つきですぐ傍に居る人間たちを見つめていた。
どれだけ見てもやはり馴染めず、珍しがるシルクは戸惑いを隠せない。この動物はなんだろうとその場へしゃがみ込み、目線を合わせてじっと顔を見つめ始めた。
警戒心を持ち合わせないのか狐は逃げない。じっとシルクの目を見つめ返す。
それでいてやる気のない目つきなのだから困惑は深まるばかりだ。
「うーん、狐？　それともにわとり？　どっちもなんだけどどっちでもないというか――」
「おい、あっちにもなんかいるぞ。なんだあれ」
何かを見つけたルフィが歩き出した。
シルクの傍をわずかに離れ、地面に膝をつき、草むらの中へ上半身

を突っ込んで何かを探し始めたのである。行動力はあるのだが危機感はない。心配になってしまう態度だ。
そうして出てきた彼は手に何かを持っていて、それを見たシルクはまた眉根を寄せた。
「こっちはうさぎだぞ。変わったうさぎ」
「うさぎ、かなぁ……それは変わった蛇だと思うよ、多分」
ルフィが捕まえたのはこちらも珍妙な外見の動物だ。
外見は蛇その物でありながら、うさぎの物だと思われる白い毛並みと長い耳が一組生えている。捕まって持ち上げられても攻撃しようという気配はなかった。不思議と攻撃性も見せずに手の中で大人しくしており、時折ちろりと蛇の舌を覗かせるものの害はないらしい。
また困惑が深くなる。
この島の生き物はどうやら相当珍しいようだ。
二種類の動物が混ざったかのような外見。人間を見ても一切反応しない、攻撃性の無さ。
野生動物とは思えない様子には開いた口が塞がらない。
ルフィから蛇を受け取ったシルクはその姿をまじまじと眺め、やはり噛みつかれもしないのだなと首をかしげて、やけに安全なそれの観察を始める。
「蛇、なのかなぁ。うさぎ？　やっぱり見た事ない」
「変な島だな。探したらこういうのいっぱいいそうだぞ」
「そうね。多分、独特の生態系が築かれてるんじゃないかな」
「他のも探してみようぜ。ひょっとしたらもっとおもしれぇ奴がいるかも――」
好奇心から目を輝かせるルフィがそう言った瞬間、不思議な声が聞こえた。
《出ていけっ！》
「きゃっ!?　なに？」
「なんだ？」
森のどこかから聞こえていたようだ。周囲を見回しても誰の姿もなく、声は木々を使って辺りに木霊し、正確な位置が掴めない。計算

され尽くした発言だったか。
二人は警戒心を高めて辺りを見回すが声の主は見つからず。
それでも声は聞こえていて、自然と緊張感が増していた。
「聞こえた、よね？」
「ああ、聞こえた。誰か居んのか？」
《おれはこの森の番人……森に入る者は誰であろうと許さねぇ。今すぐ出ていけ！　でなければおまえたちを森の裁きが襲うぞ！》
「ルフィ、敵襲ってことかな」
「さぁ～どうなんだろうな」
どことも知れず、ルフィは前方に数歩出て、森に向かって話しかける。
位置はわからないが誰かが居るのは間違いない。人間の声だ。
「おっさん誰だ？　裁きってなんだよ、おれたちなんにもしねぇぞ。ただ冒険しに来ただけだ」
《帰れ。この森に入ることは誰にも許されない》
「おっさん入ってんじゃねぇか」
《黙れ！　おっさんじゃねぇ、森の番人だ》
「でも声はおっさんだろ」
《やかましいわ！　ほっとけ！》
ルフィの言葉への反応はずいぶん人間らしいものだった。
聞いていただけのシルクまで、それは果たして危険な物なのだろうかと疑い始め、すでにルフィは森の裁きとやらを気にしていない様子。
唐突に歩き出して森の奥へ入ろうとしていた。
《おい、やめろ！　裁きが下るぞ！》
「待ってルフィ！　ひょっとしたら本当に危険かもしれない！」
「いいよ、別に。おれは冒険がしたいんだ」
《ここはおれの森だ！　勝手に足を踏み入れるな！》
「お邪魔します」
《そういうことじゃねぇ！》
すたすたと無遠慮に入られそうになっていた。

ついに堪忍袋の緒が切れたか、声の主は迫力を増して叫ぶ。
《森の裁きを知れェ‼》
ズドン、と銃声が一発。森の中へ響き渡った。
咄嗟にシルクは身を小さくして耳を塞ぐが、前方に立ったルフィを見て驚愕する。
足元がふらついて倒れかけていた。きっと撃たれたのだろう。
心配から気付けば叫んでいて、思わず彼の背に手を伸ばした。
「ルフィ!?」
「ふんっ」
しかし持ち直してしっかりと足を踏ん張った。直立すると同時、腹に突き刺さっていた銃弾はゴムの弾力で跳ね返され、森の向こうへと飛んでいく。速度は来た時と変わらなかった。
やられたと思ったのに全くの無事だったらしい。
今しがた見た光景にシルクはぽかんと口を開いて言葉を失う。
その直後、彼の能力について思い出し、納得したように頷いた。
「あ、そっか。ゴム人間だから銃弾も効かないんだ……」
「あーびっくりした。おれゴムじゃなかったらやばかったよ」
腹を撫でながら呟くルフィに肩の力が抜ける。
能力者とはつくづく奇妙だ。銃弾を受けてかすり傷一つないとは。
心配して損をした。がっくり肩を落としたシルクは多少疲れた表情で、気にせず尚もルフィは前へ向かって歩き出そうとする。
今度は、なぜか森の主からの声は聞こえなかった。
「森の裁きって銃だったんだな。やっぱり誰か居るんだろ」
「やっぱり行くの？　大丈夫かな」
「ああ。さっき向こうから飛んできたからな。多分向こうに居ると思う」
がさがさと草むらを掻き分けて奥へ進む。シルクも後に続いた。
今の一瞬は流石に驚いたが、これで不安を抱えるようなら海賊にはなっていない。持ち前の行動力なのか、航海に出てから手に入れた胆力か、彼女の表情に揺らぎはなかった。
ルフィについては言わずもがな。持ち前の行動力で喜々として原

因を探ろうとしていた。
奥へ進んで数分もかからず、少し開けた場所で奇妙な物を見つける。
草むらを出た二人はそれへと近付いて行った。
周囲に木々がなく、日光を直に感じる地面の上に、ぽつんと宝箱が一つ置かれている。それだけでも奇妙なのになぜか宝箱からは草が生えたかのような様相。ブロッコリーのような緑色の何かが上に乗っかっていた。そして傍には硝煙を発する銃が落ちている。
明らかに周囲から浮いた物体で、二人の興味が向けられるのは当然だった。
「あり？　誰もいねぇな。なんだこれ？」
「銃が落ちてる。きっとさっきまで誰か居たんだね」
「これなんだろうな。宝か？　ブロッコリーなのか？」
しゃがみ込んだルフィが奇妙な物体に興味を寄せる。すると突然、その物体が動いた。
急に反転して二人から遠ざかろうと駆け出し、素早い動きで遠ざかっていく。
当然二人は驚きが隠せなかった。
「う、動いた!?」
「逃げたぞ！」
反射的にルフィが追おうとするが、その瞬間に石につまずき、奇妙な宝箱は転ぶ。
危機感を露わにした二人はすぐにそれを消してしまい、その光景に妙に落ち着いてしまう。
「あ、転んだ」
「なんなんだ、あいつ」
歩いて近寄ってみる。
自力で横へ転がり、向きを変えた様子の宝箱は仰向けの状態となっており、そこにすっぽり嵌った人間の顔が確認できるようになっていた。
宝箱に人間が嵌っているのである。

緑色の巨大なアフロを持った、外見から見ると中年だろう男性だ。
人間ではあるもののただの人間ではなく、先程見た珍獣にも等しく奇妙な男は、転がったまま自力で起き上がれないらしい。見下ろしてくる二人へひっくり返ったまま凄んだ。
「くらぁ！　てめぇら舐めた真似しやがって！　とりあえず起こせ、この野郎が！」
「うわっ、おっさんが生えてる」
「いや、嵌ってるだけじゃないのかな。宝箱に入っちゃってるんだよ、きっと」
「んなこたぁいいからまず起こせ！　さっさとしろ！」
「なんで威張ってんだよ。自分でこけたくせに」
「とりあえず起こしてあげようよ。じゃないと話もできないでしょ」
宝箱から辛うじて出た手足をじたばた動かし、叫ぶ彼を丁寧に起こしてやる。
奇妙な出会いだとは思うが、だからこそ面白く、ルフィは彼に興味を持ったらしい。起こしてやるや否やもう逃げ出さないようにと宝箱を掴みながら、笑顔で問いかけた。
「おっさん何もんだ？　なんで宝箱入ってんだよ。箱入り息子か？」
「そう、子供の頃から大切に育てられて――って違うわ!?　こんな文字通りあって堪るか！」
逃げることを諦め、男は溜息をついて二人を見る。
「おれの名はガイモン……元海賊だ」
ぽつりとそれだけが呟かれた。
元海賊。その言葉には惹きつけられる何かがある。
一際目を輝かせたルフィは興味津々に口の端を上げて笑った。

波打ち際の一時

穏やかな波の音を聞きながら、砂浜で寝転ぶゾロは考えていた。
妙な事になったものだ。
野望を果たそうと村を出たというのにひょんなことから海軍に捕まり、目をつけられた相手が厄介な奴で、気付けば今は海賊。こんな予定ではなかったと改めて思う。最終的に海賊となることを決めたのは自分だが、よくよく考えればやはり妙な事態だろう。
仲間となった彼らもずいぶん厄介だと思う。
ルフィは人の話を聞かない性質で、良く言えば自由、悪く言えばわがまま。
シルクはマシな部類だ。だが時折抜けている部分を目にするし、意外に猪突猛進な一面もある。
そして何より厄介なのが残る一人である。
出会ってすぐから今の今まで、ゾロにとっては天敵にも等しい男、副船長のキリ。
緩い表情で何を考えているのか読み取れず、冷静なのかと思いきや案外何も考えていなくて、何も考えていないのかと捉えれば意外にも色々見えている。まだ短い付き合いでしかないが漠然とした人となりは見えていた。その上で面倒臭い人間だと考える。
ゾロと同じくルフィにはついていかなかった彼は、今は波打ち際で海に触れている。
裸足になって足首までを海水に浸し、波の動きを見つめて微笑む。
ずいぶん気持ちよさそうだった。カナヅチになってしまう能力者は本来海辺に近付かないものだと考えていたのに、彼はそうではない。むしろ喜々として海水に触れている。
足を持ち上げて水を飛ばし、幼子か女子のように遊ぶ。
長く海賊をやっていたという話は聞いた。そうは見えない外見にしばし目を奪われる。
あまりにも無防備な姿に心配してしまったのか、気付けばゾロは声をかけていた。

「あんまり奥に行っちまうと溺れるぞ。力入らねぇんだろ」
「大丈夫だよ。気を張ってればちょっとは耐えられるから」
「どうかしてるぜ。こんな時に気ぃ張ってまで入りてぇと思うとはな」
「その分いつも気を抜いてるから大丈夫。疲れたりしないよ」
「それはそれで問題だろうが。威張って言うことじゃねぇよ」
怒られている様子なのにくすくす笑うばかり。果たして反省しているのだろうか。
定かではないものの彼を見てみれば少し様子が違うことに気付く。
声色や表情はそのままでも雰囲気は違って見えた。儚げとでも言うべきか、普段とは違った力の抜け方をしている。少なくとも昨日今日の姿とは違う。
一度話し始めれば戸惑いはなく、ゾロはさらに彼へ声をかける。
「なぁ。なんでおまえはあいつについて行こうと思ったんだ」
「ん？」
「ルフィのことだよ。腕は立つようだし、航海術も持って頭も回る。別におまえが船長になってもおかしくはねぇはずだ。なんであいつの下についた？」
寝転がったままで視線が合って、考え始めると彼は空を見上げる。
なぜ、と言われれば答えははっきりしている。
ただ何から説明すればいいかと頭を悩ませ、再び目を合わせて答えた。
「別に下についたって考えでもないんだけどね。仲間って認識の方が強いから」
「質問に答えてねぇぞ」
「面白い話じゃないよ。ルフィに誘われたからまた海賊やろうって決めた。それまで自分で立ち上げようなんて考えはさらさらなかったんだ」
「一度海賊やめた理由は」
「続けられなくなったから。仲間が全員死んじゃったからね」
あっさり告げられたものだ。表情こそ変わらないもののゾロは多

少の驚きを抱く。
ふと見せる大人びた表情はそういった経験からか。
不思議とそれ以上聞かず、彼もまたあっさり頷いた。
「そうか」
「うん。でもルフィはしつこいからね」
「ああ、それは同意するな。初めておまえに同情できそうだ」
「初めて？」
「初めてだ」
また肩を揺らしてくすくす笑う。キリはおどけるように少し水を蹴った。
光を受けて輝く水がどこか幻想的に見える。
辺りは静まり返っていた。
耳に入ってくるのは波の音と、キリが遊んだ水の音だけ。どこからでも聞こえてきそうなルフィの声は遠く聞こえず、森は風で揺らされる小さな葉の音のみを運んでいた。
海軍基地で大暴れした光景が遠い日に思えた。
つい先日の出来事が遠く思えるほど穏やかな時間。
時折なぜこんなことをしているのだろうとも思うが、悪い気分ではない。
目を閉じることもなく、しばし黙っていたゾロへ今度はキリが声をかける。
「ゾロはさ、世界一の大剣豪になりたいんだっけ」
「なりたいんじゃねぇ。なるんだ」
「どうして？」
「あぁ？」
「理由が気になってさ。それだけの野望を持つなら相当の理由があるんでしょ」
「……まぁな」
ゾロが渋い顔をする。
そちらを見ていれば表情の変化はわかった。
「だが言いたくねぇな」

「あれ？　そうなっちゃう？」
「どうでもいい話だ。おれは誓いを立てて、世界一の大剣豪になると決めた……たとえ途中でのたれ死のうが、どんな敵が立ちはだかろうが、諦めるつもりはねぇ」
「なるほど。お強い人みたいで安心しました」
「心配すんな。仲間になった以上、おまえらに迷惑かけるつもりはねぇよ」
「有難い心がけだね。ルフィに見習って欲しいところだ」
視線を外して足元を見つつ、ゆっくり歩くと水面に波紋が生まれる。
穏やかな波を眺めながらキリが呟いた。
「でもあんまり気負い過ぎない方がいいよ。ゾロはルフィを見習ってもいいかもね」
「あ？　どういう意味だ、そりゃ」
「ウチの船に乗ってればわかるよ。必然的にルフィと関わるわけだし」
尋ねたところではっきりした答えは返ってこない。ゾロは自然と厳しい表情になった。
「肩肘張っててもいいことないよ。ボクら自由な海賊だ。もっと気楽に構えて笑ったら？」
「別に笑うようなことがねぇだろ」
「理由はなくたって笑えるって。ルフィもシルクもそうじゃないか」
「能天気なあいつらと一緒にするな。ついでにおまえともな」
「大体ゾロは顔が怖いからさ。子供が見たら泣くよ、絶対」
「うるせぇ。生まれつきだ」
「脇とかくすぐったら目つき変わる？」
「ちょっとでも触れたらぶった切るぞ」
相変わらずの態度である。
雰囲気が変わっていても吐き出す言葉はそのままで、楽しげに笑う表情はあどけない。

盛大に溜息をつき、不思議と寝れる気分ではなくなったゾロは起き上がってその場に座った。足を投げ出して体のどこにも力を入れず、なぜともなくキリの背中を見つめる。
そうして不意に思い出した。
シェルズタウンでモーガンとの決闘。あの姿を。
常人とは思えぬ軽いステップ、見事な跳躍力。紙を様々な武器に見立ててあらゆる戦法を用いた奇妙な戦い方。あれを見た途端にキリへの印象が変わった。ただのんきなだけの人間ではなく明らかな強者だと。一度手合わせしてみたいと思ったのだ。
おそらく世界一の大剣豪が居るだろう海、グランドラインを航海した海賊を相手に、果たして自分の腕はどれほど通用するのか。自分の現在地を知っておきたい。
そう考えたゾロは傍らに置いていた刀を持って立ち上がり、腰に提げる。
何気なく自身も波打ち際まで歩み寄った。
「勝負しねぇか」
「は？」
「おまえも剣の心得はあると見た。だったら試しておきてぇ。今のおれはどれほどのもんか。グランドラインを見てきたおまえに勝てるかどうか」
イーストブルーが東西南北の名を冠する海で最弱の海と呼ばれていることは知っている。
様々な海賊を相手にし、賞金稼ぎとして生活したが、苦戦したことは一度もない。
そろそろ窮地を感じるほどの戦いを経験したいと思っていた。気付けばゾロは好戦的な笑みを見せて鞘に手を置いており、うずうずしている様子が伝わってくる。
それを見たキリは目をぱちくりさせ、さほど慌てずに端的に告げた。
「いやだ」
「なにぃ？」

「仲間同士で決闘なんて、厄介だからやめた方がいいんじゃない？
遺恨が残ったら大変だ」
「怪我させたりはしねぇよ。ちょっと手合わせするだけだ」
「それにめんどくさいし」
「それが本音か」
腕を下ろして鞘から手を離し、ゾロは疲れた表情を見せた。
ちょっと真面目に話せば疲れてしまう。そんな相手だ。
今まで出会ったことのないタイプの性格である。
のらりくらりと身軽に逃げて掴ませない。しかも嫌な理由が面倒なだけだとは力が抜ける。
キリはもう少し深い場所へ赴き、足から伝わる冷たさに気分を良くしつつ、ゾロへ振り返った。
「最強を目指すのはわかるけど急ぎ過ぎても意味ないよ。グランドラインの実力は実際入ってから確かめればいい。それにボクだってあの海の敗北者だ」
「その能力を持ってるのにか。相当な腕だと見たが」
「諸々事情があって修行したからね。ルフィに出会わなかったら無駄になるとこだったけど」
「負けた時よりマシってことか」
「負けたというか、まぁ、戦わせてもらえなかったんだけどね」
彼の言葉に意味がわからず、小首をかしげる。
ゾロが真意を尋ねようとした時、キリの目は彼を通り過ぎてその背後へ向かっていた。
「そりゃどういう意味――」
「あ。ゾロ、あれ」
「ん？」
振り返ってみた方向、森の切れ目を越えてトコトコ歩いて来る動物が居る。
野生の豚なのだろうが、ただ一点奇妙な部分があった。
まるでライオンを思わせる鬣が生えていたのである。
見た目は豚。鬣だけはライオン。そんな珍獣を見たキリが思わず

呟いた。
「変わったライオンだ」
「いや豚だろ。どう見ても」
「でも鬣があるよ。あれがあったらライオンじゃない？」
「それ以外の部分が豚っぽいじゃねぇか。どっちを優先するかなら豚だ」
「ううむ、自然と議論させる珍妙な姿とは、なんて奴。珍しい動物も居たもんだ」
「そもそも議論の必要もなく豚だろ、こいつは」
呑気に話していると奇妙な豚はゾロの傍を通り過ぎ、何の危機感もなく海へと入っていく。
どうやら水浴びに来たようで気持ちよさそうに海水に浸かっていた。
キリとの距離感もそう遠くない。
どうやら人間に対する恐怖や危機感はないらしく、気になったキリは触れ合おうかと考える。元々動物が好きな性質だ。これほど変わった動物に出会って無視をするというのも忍びない。
ゆっくりと豚へ向かって歩き出す。
「おい、気をつけろよ」
「大丈夫だって。危険そうには見えないし」
「ライオンだって言ったのはおまえじゃねぇか」
「ライオンが相手でも近付くよ、ボクは」
「自慢することじゃねぇ」
水を掻き分けて歩き、なぜか足元がふらついている。やはり能力者に水は天敵なのか、陸を歩いている時とは明らかに様子が違っていた。
口出ししないもののゾロは眉間に皺を寄せ始める。
そもそもなぜ能力者が海に浸かりたがる。わざわざ死にに行くようなものだ。
心配するように見守っていれば、案の定何かに躓いた彼はぐらりと体勢を崩した。

「あっ」
バシャンと一際大きな音。
盛大に水しぶきを上げて転んだキリは海中へ姿を消し、浅瀬だというのに全身が水の中へ浸かってしまった。時間を置かず途端にもがき始める。
見ていたゾロは頭を抱えて溜息をつき、まだその状況に気付いていない。
「つたく、何やってやがんだ。だから言っただろ、不用意に近付くなって」
厳しい目でゾロは彼を見ていた。
じたばたともがいて時折海面へ手足が出るも、どうも弱々しい。それだけ浅かったのなら地面に足がつく訳で、能力者でも立ち上がれるだろうに、一向に起き上がってくる気配がない。
いよいよとおかしいと感じ始める。
ふざけているようには見えない。むしろ今にも死にかけているかのような。
ついには力が抜けていく腕が海面の下へ消えてしまい、動かなくなって、血相を変えたゾロは何も考えずに走り出していた。
「バカ野郎ッ、何やってんだ！」
荒々しく水を蹴り飛ばして彼の所まで駆けつけ、すぐに水の下の体を見つける。
うつ伏せの状態で全く力が入っていなかった。本当に死んでしまったかのようにも見える。
慌てて首根っこを掴み、片手で持ち上げて胸までを海水から引っ張り出した。
勢いよく水を跳ね飛ばし、やっと空気に触れたキリは即座に思い切り空気を吸い、九死に一生を得た模様。必死に吸う姿はふざけている訳ではなく本当に死にかけたらしい。
「――ぶはっ!?　ハッ、ハッ……！」
「おまえ何考えてんだ!?　本気で死ぬ気か、バカ野郎！」
何度も咳き込むもののやはり全身から力が抜けたままで、立ち上が

れる状態ではない。
多少海水を飲んだのか、苦しそうな顔に変わっていた。
呼吸が落ち着く前にキリは返事をするため口を開こうとするのだが、呼吸が荒くて上手くいかないようで。ただなぜか、その時にはまたわずかながら笑みを浮かべようとしていて、いまだ彼を理解しきれないゾロは歯を剥き出しにする。
なぜ笑えるのか。たった今自分が死にかけたところだ。
しかも強敵と戦った訳ではない。ただの不注意、事故で死にかけただけのこと。
これで本当に死んでいたらルフィはきっと許さないだろうし、シルクは涙するだろう。この状態でなぜ彼は笑おうとしているのか。
意味がわからず、表情は厳しくなる一方だった。
「ゲホッ。いやぁ、ちょっと……水が苦手なもんで。力が、入らなくてさ」
「あぁ？　カナヅチでもここで立つことくらいできるだろ」
「普通の能力者より、水に弱いんだ……エホッ。ボク、紙人間だからさ。全身が紙だから、雨とか真水とかでも、ちょっと濡れただけで力が入らなくなっちゃって」
「おまえ、それを知ってて自分から水に近付いたのか？　バカだろ」
意外な弱点だった。
戦闘での強さを自分の目で見て知っていただけに驚愕する。しかしそれよりも驚くのは彼の危機管理能力の無さだ。自分の弱点を知りながら、敢えて海水に触れて遊ぶなど、気がどうかしているとしか思えない。自殺志願者なら理解もできるが彼はそうではないのだ。
右手で彼の首根っこを掴んだまま、左手は自然な動きで頭を抱える。
これは、ルフィより厄介かもしれない。
助けなければきっと死んでいた。そう考えるだけに彼の思考が読めない。
呆れる声は責める口調でキリの耳へ届いた。
「どうかしてやがるぜ。こんな惨めな死に方聞いたこともねぇ」

「あはは……でも助けてくれたじゃん」
「あ？」
「ボクだって、一人の時にこんなことしないって。ゾロが居たから安心してた。絶対助けてくれるからって」
「何を根拠に……」
「だって仲間だし。理由はそれだけで十分じゃないかな」
緊張感もなく笑ってそう言われた。
試されていたのか。仲間としての自覚があるのかどうかを。否、そんなことのために命を落としかねないリスクは無視できないだろう。だが彼ならばあり得なくはないと思う。
考えがこんがらがって思考を投げた。
右手にキリを提げた状態で、乱暴に頭を掻いたゾロはひとまず考えることをやめる。
「なんでわざわざ海に近付く。おまえにとっちゃ天敵だろ」
「さっきみたいにしてるのが好きなんだ。海を敵だと思ったことはない」
「航海の途中で仲間が死んでもか？」
「うん。それも覚悟の上での航海だった。悲しかったし、海賊をやめようと思ったけど、それでも海を嫌いになったことはない」
「変な野郎だ」
「よく言われる」
水に浸かったまま話していると水浴び中の豚が二人へ近寄って来た。
何を想ったかキリの顔をぺろりと舐め、わっと声を出す彼に笑い、ゾロは笑顔で呟く。
「こいつも同意するとよ」
「むぅ。可愛い顔してひどい奴だね、君は」
キリは顔をしかめて唸る。初めて見る表情だった。
そんな彼をぐっと引っ張り、砂浜へ向かって歩き出す。
顔が水に浸かりかけてギリギリ溺れそうな様子だったがゾロは気にせず、聞こえてくる悲鳴にも冷ややかな対応で、ただ笑顔を浮かべ

ていたのは確かだった。
「ちょっ、ゾロ、死ぬ……！　せめて抱きかかえてもらわないと――！」
「うるせぇ。ほんの少しだろうが」
危うげな対応だったがさらに浅瀬まで連れてってやり、波打ち際、もう溺れないだろう場所で手を離す。途端にキリはへたり込んで動かなくなった。
傍らにゾロが座って、もはや一度濡れてしまった服を気にせず足先が波に当たる。
倒れたキリの上半身には届かないとはいえ、伸ばした足の先には波が触れる場所だ。
なんとか力を入れ、仰向けに寝転がったキリが笑顔で空を見上げた。
「はぁ～、久しぶりだなぁ。誰かに助けてもらうのなんて」
「喜ぶ場面じゃねぇがな」
「あはは、まぁね。でも、なんか懐かしかった。昔を思い出したよ」
一度死にかけたというのに晴れやかな笑顔。
昔を懐かしみ、嬉しそうにしている彼へ問いかける。
「いつ悪魔の実を食った」
「海賊になってからだったかな。一番年下で弱いのがボクだったから、もらって食べた。だけど最初は全然扱えなかったよ。戦闘に利用できるようになったのはほんとここ数年」
「で、紙の体ってやつか」
「そう。ルフィのゴム人間と同じで性質が紙だからね。体重は軽いし、やろうと思えば体を紙みたいに薄っぺらくすることもできる。その代わり他の能力者よりよっぽど水に弱くて、体が濡れれば雨でも力が入らなくなる。まぁ雨の場合は気合い入れれば動けないってわけじゃないけど……あとは火かな。気をつけないと火傷はしやすいかもね」
「一長一短だな。能力者ってのも楽じゃなさそうだ」
「でも慣れると楽しいよ。ルフィもそう言ってるし」

「おれはごめんだ。人間までやめる気はねぇよ」
「魔獣って呼ばれてるのにね」
「うるせぇ」
しばらく休んでいると水浴びを終えた豚もやってきた。
大の字に寝るキリへ近付き、その腹へ顎を乗せて休み始める。まるで気遣わず気楽にそうされたが予想以上に重く、彼の口からは小さな悲鳴が漏れる。
「ぐえっ」
「気に入られたか？」
「だからってこんな無礼な接し方ある？　しかも出会ったばっかりなのに」
「おまえが人のこと言うんじゃねぇよ。まだこいつの方が可愛げがあるぜ」
「なんだよ魔獣、ひどいなぁ」
「魔獣言うな、ペラ紙男」
気付けばゾロは笑顔を見せることへの躊躇いを失くしていて、キリのペースを理解しつつあったようだ。言葉は決してきれいではないが二人の態度は気楽な様子がある。
肩の力が抜けたのかもしれない。
表情の変化を見たキリは静かに微笑み、敢えて指摘はしない。言う必要はなかった。
ルフィが選んだ人物だ。きっと彼も良い仲間になる。
人知れずそう思ってまた空を見上げ、果てのない水平線を眺めた。
そんな一時、キリがわずかに目を大きく開いた。
ふとした瞬間に空の上にある何かを見つける。島に何かが近付いているらしい。
キリは寝転んだままでゾロへ伝えた。
「ゾロ。パンダが飛んでくる」
「パンダは飛ばねぇだろ」
「でもほら、あれ。空見てよ」
「あぁ……パンダだな」

飛んでくるのはこれもまた珍獣。
目の周りに隈取りが如く黒い毛を生やす鳥で、他の部分は白い毛に覆われ、一応は嘴を持ち、確かに翼をはためかせて空を飛んでいるものの二人はパンダだと断ずることにしたようだ。
その鳥は島を目掛けて飛んできて、飛行の最中からふらふらしている。
かなり疲れている様子で砂浜へ降りてきた。
着地を考える余裕もなく、速度は落とされていたが浜の上へ転げ落ちる。怪我はなさそうだが疲労は相当な物だと見えた。おそらく動けはしないだろう。
気になった二人は近付いてみることに決め、先にゾロが立ち上がった。
「ゾロ」
「どうした？」
「手ぇ貸して」
しかしキリはまだ濡れた体に力が入らないらしく、おもむろに右手を伸ばしてくる。
ゾロの反応は冷ややかで、あからさまに嫌がる顔だった。
「自分で立てるだろ。甘えんな」
「濡れたら力が入らないんだって。せめて立たせるだけ」
「ガキか、てめぇは」
「世話してくれるんならガキでもいいよ」
やれやれと首を振り、結局は引っ張って立たせてやる。
腹を枕にしていた豚は、ライオンのように喉を鳴らすも自身も立ち、ついてくるようだ。
立ち上がったキリはわずかに足元をふらつかせたが、なんとか転ばずに済み、笑顔でゾロへ礼を言う。だが彼はそれを見ずに先へ歩き出してしまった。
「ありがと、ゾロ」
「礼を言うくらいならもう二度とすんなよ」
「うーん、それはどうだろう。能力者だって泳ぎたいって気持ちは

あるからさ」
「なら泳げるようになってから試せ。それまではできるだけ近付くな」
「それじゃ一生近付けないじゃないか」
「だからそうしろって言ってんだよ」
砂浜へ寝転がる鳥へと近付く。
大の字で寝転んだ彼は相当疲れているらしい。呼吸は乱れて、近付いて来る者への警戒心すら露わにできない。今は呼吸を落ち着けるのに必死だった。
そっと歩み寄った二人と一匹は彼を見下ろす。
パンダにも見えるがれっきとした鳥で、なんと表現していいかわからない。
この島には多種多様の珍獣が居るのかもしれないと、二人が顔を見合わせた。
「一体なんなんだこいつは」
「さぁ。顔立ちを見ると危険な感じはしないけどね」
「渡り鳥か？　だからこの島に来たのかもしれねぇぞ。或いは狩りにでも出てたか」
「それにしては疲れ過ぎてる。この息の乱しようは普通じゃないと思う」
「なら、何かから逃げてきたか――」
ゾロはふと彼が来た方向、海を眺めた。すると先程まで見えなかった物が見える。
遠い水平線、見えたのは一隻の船だ。遠すぎて海賊船かそれ以外かも判別できないが、どうやらこちらに近付いて来ることだけはわかって事情を察し始める。
一方のキリはしゃがみ、鳥の腹を撫でている。
もふっとした柔らかい毛に驚き、手触りの良さから歓喜の声を発した。
「うわっ、もっふもふだ。すごいよゾロ、質の良い毛布みたいだ」
「のんきなこと言ってる場合じゃなさそうだぜ」

「ん？　どしたの、怖い顔して。あ、元からか」
「おまえなぁ……まぁいい。あれを見ろ」
顎で示されて振り向き、彼も遠くの船を見つけた。
鳥の腹を撫でながら表情が変わる。
「こいつは逃げてきたらしいな。あの船から」
「まだ決まったわけじゃないよ。ただ単純に体力がないだけかもしれない」
「それにしちゃタイミングが良すぎるだろ。疲れ切った鳥に、こっちへ向かってくる船。それにこいつは普通の鳥じゃねぇ、大体は想像できるぜ」
「まぁ確かに、珍しいのは間違いないけどね……」
キリも立ち上がって同じ方角を見る。
鳥を挟んで二人が肩を並べ、さっきよりも真剣みが増した。
海賊ならば戦闘の可能性がある。海軍だったならば状況次第では戦闘なし。それ以外ならば、やはり状況に従って反応するのみ。何にせよ戦闘の可能性はゼロではない。
二人の反応はそれぞれ違っている。
好戦的な笑みを浮かべるゾロに対し、キリは面倒な物を見る目つき。
外見からやる気の違いは明らかとなっていて、それでも警戒心は等しく大きくなった。
「参ったね。まだ船長が帰ってきてないのに」
「おまえが居るだろ。命令さえありゃ誰でも斬ってやるぜ」
「好戦的だなぁ。そんなに悪くない人間の可能性だってあるよ」
「相手がどんな奴かはこいつに聞けよ。あいにくおれァ鳥と話せねぇが顔色でわかるぜ。あいつらは敵だってな」
「ほんといい性格してるよ。魔獣って呼ばれた意味がわかった」
この男、どうやらそれなりに戦闘狂らしい。
やる気を見せ始めて目をギラつかせる様子はどう見ても魔獣。そこらの剣士にはない強かな覇気を感じる。そう呼ばれるのも納得といった表情だろう。

キリがふぅと溜息をついた。
状況の異変には彼も気付いたが、戦わずに済むならそれが一番いい。
そう思いながらも船が見えたタイミングが気になって安心はできない様子である。
ふと自身のパーカーの内側を覗き込み、表情はますます歪む。
「仕込んでた紙も濡れちゃったな。こりゃ使えないや」
「怖ぇんなら守ってやってもいいぜ」
「ならそうしてもらおうかな。ゾロなら一人でも五十人くらいまでなら楽勝でしょ」
軽口を叩いてもやはりあっさり受け流される。
ゾロは反射的に舌を鳴らした。
たださっきよりも彼と呼吸が合わせられる気がして、なんとなくではあるものの、不快感を与えられるだけではない。これが自分たちの呼吸なのだとわかった。
しばし二人は奇妙な豚と鳥と共に砂浜へ立ち尽くし、彼方に見えた船の接近を待つ。

あんたも珍獣

森の中にある広場で腰を落ち着けた三人は向かい合って話をしていた。

もっぱらルフィとシルクは話を聞くのみで、語るのは出会ったばかりの珍妙な人間である。

空の宝箱に嵌った元海賊の男、ガイモン。

彼は二十年もの間、たった一人でこの島で生活をしているらしい。

きっかけは単純。岩を登ろうとして途中で落ちてしまい、落ちた衝撃で真下にあった空の宝箱に嵌り、気絶している間に不在を気付かぬ仲間たちに置き去りにされてしまった。間抜けな話だが考えようによっては悲惨である。

以来、二十年。

彼は島を出ることなく森の番人としての生活を続けて、裁きを生き残った彼らと出会った次第。

珍しい人間を見つけたと思ったのはお互い様で、どちらも興味津々だった。

過去の話を聞かされた後は彼らも自身が海賊であること、悪魔の実を食べたことを説明する。

ガイモンはルフィがゴム人間であることに興味を示しており、ルフィとシルクは宝箱に嵌った人間という、世界にたった一人彼だけだろう姿を見過ごせない。

「悪魔の実の能力者か……噂には聞いてたが初めて見たな。まさか本当に存在していたとは」

「おっさんもすげぇな。宝箱に詰まった人間なんて初めて見たよ」

「フン、好きでこうなったわけじゃねぇ。できれば抜け出してぇところだがそれもできねぇもんだからな」

「抜けないんですか？　私たちが手伝っても？」

「ああ。あいにくこいつに入って二十年。今じゃ運動不足もあってミラクルフィットしちまってるようでな。多分引っ張ろうが何しようが抜けねぇ――」

ガイモンが丸太に座るシルクへ目を向けた時、ルフィが動き出してガイモンの背後へ立つ。
唐突な行動を見過ごしていれば、おもむろに彼の髪を掴み、ぐいっと上へ引っ張った。
おそらくは宝箱から抜こうとしていたらしく、しかし全く抜ける気配がない。ただ頭を引っ張られただけのガイモンはルフィの動きに合わせて悲鳴を発していた。
「痛い痛いっ!? 急に何しやがる、やめろ! そんなんで抜けるかァ!」
「抜けねぇなぁ……!」
「やめろっつってんだろおい! 首が折れるわ!」
あまりにも抜けないためパッと手が離される。反動を受けてガイモンが倒れ込んだ。
どうにもコントのようなやり取りで、倒れた姿は痛そうに思え、シルクはなんと言っていいかわからず冷や汗を流す。これにはルフィの自由気ままさに驚いてガイモンに同情した。
また転んでしまったガイモンは巧みに動いて横に転がり、仰向けになって叫ぶ。
「起こしてくれぇ!」
「なんでそこだけ偉そうなんだよ」
「ルフィ、無理しちゃだめだよ。動きにくそうだし、とりあえず起こしてあげよう」
シルクも駆けつけて二人で起こしてやり、再び会話できる環境が整う。
二人は倒れた丸太を椅子にして座り、ガイモンはその前で相変わらずの姿だった。
「まったく妙な奴らに出会ったもんだ。おまえら海賊だっつってたか?」
「そうだ。海賊王になる男だぞ」
「海賊王? そりゃおまえ、一つなぎの大秘宝を見つけた奴に与えられる称号だろう。もしかしてグランドラインを目指してんのか」

「ああ。今は仲間集めてるんだ。まだ四人しかいねぇけどな」
「そうか……海賊はいいな！　宝探しってやつは心が躍るもんだ！」
ルフィの言葉を聞いてガイモンの笑顔が輝いた。
彼も元は海賊。思い出すものがあったに違いない。
気になったシルクはふと尋ねてみる。
「ガイモンさんも、海賊が好きなんですね」
「あぁそうさ。そうじゃなきゃ自分からなったりはしねぇだろ」
「じゃあ……どうして二十年もこの島に居たんですか？　仲間は、戻ってこなかったんですか」
聞いてはいけないことだろうと思った。しかし聞かずにはいられない。二十年も絶海の孤島に取り残され、たった一人で生きていくなどどれほど辛いのか。
問われたガイモンは気を悪くした様子はなく、ただ少し目を伏せて答える。
「あぁ、戻っては来なかった。きっと忘れちまったんだろう。おれはそんなに重要な役割を担ってたわけでもねぇし、仮に思い出してたとしても、戻ってくるほどじゃなかった。それだけだ」
「そんな……それじゃ見捨てられたってことじゃないですか」
「なんだそれ、ひでぇ話だな。おれそういう海賊は嫌いだ」
「いいんだ。所詮、海賊なんてのは法を守れねぇクズども。目先の宝に目が眩んじまうことなんて日常茶飯事で、仲間の命よりてめぇの命を優先する奴だって少なくねぇ。そういう奴らほど長生きできんのさ。海賊として海の上で生きて行こうと思うならな」
達観した表情で呟かれ、直後に溜息がつかれた。
頭ではそう理解しているだろうが心でどう思っているかまではわからない。
二十年、人と会わずに生活してきて、考える時間も多かっただろう。ひょっとしたらそれは自分を納得させるための言葉なのではないか。そう考え、表情を変えたシルクは視線を落とす。
世の中、見ていて憧れるような格好いい海賊ばかりではない。

最初からわかっていたことだが、やり切れない問題には心が痛み、複雑な気持ちを抱く。
きっとルフィがその船に居たならばそんな事態にはならなかったのに。
気付けば自然とそう思っていて、真剣な眼差しをガイモンに向ける彼に気付いた。
複雑な心中は彼も同じらしい。普段では見られない表情だ。
「でも二十年間一人も来なかったわけじゃないでしょう？　仲間じゃないにしても、私たちみたいにたまたま立ち寄った人とか。そういう人たちに助けてもらえばよかったんじゃ」
「それにも理由がある。おまえら、この島の動物を見ただろう」
「ああ。変わったにわとりとかだろ？」
「ルフィ、あれは変わった狐だよ。多分……」
「あと変わったうさぎ」
「あれは変わった蛇」
「まぁどっちでもいいさ。とにかくこの島の動物は珍しくて、島にやってくる連中なんてのは大概海賊か密猟者。あいつらを狩ろうとする奴らばかりだった」
ガイモンは森を眺めながら言う。
二人も気になってそちらを伺うと、草むらから顔を出す動物たちが彼らを見ている。
攻撃の意思はない。ただ不思議そうにルフィやシルクを見ていて、中には草むらから飛び出て近付いて来る動物も居た。どれもこれも見た事がない変わった外見。だからといって恐怖感はなく、むしろ呑気な顔つきをしているせいか、可愛げがある。
動物は警戒心を持たずに来て、虎模様の毛並みを持つリスがちょこんとガイモンの隣に座る。
「二十年、こいつらといっしょに生活した。おれが腐らずに生きてこれたのはこいつらのおかげなんだ。だから乱獲なんざ許さねぇ。見世物にもさせねぇ。そんな奴らは全員森の裁きで追っ払ってやったのよ」

「そっか。おっさんいい奴だな」
「ピストルや弾はどうしたんですか？　そう簡単に手に入る物じゃないでしょ」
「なぁに、さっき使ったのはそいつらが落としてったもんさ。それまではこの島の物を使って罠や武器を作った。こんな姿だから殴ったり蹴ったりはできねぇ。身を潜めて罠にかけるんだ。それにその気になりゃこいつらも強ぇんだぜ」
ガイモンがリスに目を向けると、慣れた挙動で宝箱を伝って髪の毛を掴み、天辺まで登る。
ずいぶん懐いている様子だ。仲が良いと言ってもいいのだろうか。
人と会えない孤独感はあっただろう。だが彼らの存在に支えられていたのは間違いなさそうだ。些細な姿にも信頼関係が見えるようで二人の表情が緩む。
しかし不意にその場の雰囲気が変わる。
ガイモンは多少目つきを変え、再び二人を見た時には真剣な顔で言った。
「だがな、実は理由はそれだけじゃねぇ。もう一つ守ってるもんがある」
「守ってるもん？　なんだ？」
ルフィが首をかしげた途端、ガイモンは笑みを浮かべた。
「ここまで人間と話したのは二十年ぶりだ。おまえらに一つ、頼みたいことがある」
「なんですか？　私たちにできることなら手伝いますよ」
「箱から出して欲しいのか？」
「いや、それとは別のことだ……歩きながら話す。ついてきてくれ」
そう言うとガイモンは森の奥へ向かって歩き出した。
二人もすぐに後へ続く。動物たちはついて来ないらしく、それぞれ気ままに過ごしている。アフロの上に乗ったリスも自ら軽々と飛び降りてどこかへ行ってしまった。
広場を通り過ぎて木々の間から獣道へ入り、一気に視界が悪くなる。

草むらに囲まれては本当にガイモンの姿を見失いそうだった。草と間違えそうになる緑色のアフロは、わずかに揺れているおかげで他と選別できるも、本気で隠れれば見つけられそうにない。森の番人を続けられた理由はここにあったのか。人の手がない島で髪を切ることもできず、伸び放題だった髪型が役に立ったのだろう。

見失わないように気をつけながら後ろを歩いていく。

顔は見えないもののガイモンの声は事情を説明しようとしていた。

「おれがこいつに嵌っちまった時の話はしたな」

「ああ。岩から落ちたんだろ？」

「そうだ。だがそれには理由がある。おれはあの日見た光景を忘れられねぇ……」

「何を見たんですか？　守ってたってことは、ひょっとして」

見えなかっただろうがガイモンは頷いていた。

シルクの問いに心なしか興奮しながら答えを返す。

「あぁそうさ、おれは確かに見た。あの岩の上にはおれたちが探してた宝があったんだ。宝の地図を頼りにこの島へ来て、目的の物はずっとあそこにあった。何日も探して仲間たちは見つけられなかったがおれは見つけた。それから二十年、ずっとこの日のために守り続けてきたんだ」

興奮した面持ちで語られる間、額に汗が浮かんでいた。島の気温のせいではない、ついにこの時が来たのだと実感しているからである。

どれほどこの時を待っただろう。

箱に嵌って岩壁を登れない自分に代わり、素直に宝を渡してくれる人物を待っていた。

きっと彼らなら。そう思うが故に宝を手に入れた瞬間が待ち遠しく、歩む足も自然に速くなる。

後ろから続く二人もガイモンの変化に気付いていて、よっぽど心待ちにしていたのだろうとやさしく微笑んで見守るかのようであった。

「やっと、やっとおれの悲願が叶う。おれの宝探しは今日で終わるんだ」

そう呟いた瞬間視界が開け、件の場所へ辿り着いた。

前方、大きな一枚岩がある。たった一つで巨大なそれは確かに岩肌がつるりと登りにくく、尚且つ高さも相当で、普通は登ろうと考えることさえ億劫になる姿だ。
岩の前に立ち止まり、掌でそっと触れてみたガイモンは神妙な面持ちで呟く。
「ここに来るのもあの日以来だ。だが島に入ってここへ辿り着いた奴はいねぇ。宝はきっと、今もこの上で眠ってる……なぁ麦わら」
「おう」
「おまえゴム人間なんだろう。ここにある宝を取って来ちゃくれねぇか」
「まかせろ！」
笑顔で快く頷いたルフィは思い切り右腕を伸ばし、岩の天辺を掴んだ。
引き寄せられて勢いよく飛び、高くジャンプしてあっという間にそこへ辿り着いてしまう。その光景にガイモンは喜び、小さな体で飛び跳ねて喜んだ。
「おぉぉっ、すごいぞおまえ！　ありがとう！　まさかこんな日が来るなんて！」
「ふふ、よかったねガイモンさん。ずっと守り続けてきたんだもの。その宝は誰が何と言ったってガイモンさんの物だよ」
「そう言ってくれるか。ありがとう。おまえらには感謝してもし足りねぇ」
シルクとガイモンの位置からはルフィの姿が見えず、宝箱の有無も確認できない。
しばらくしてルフィが縁に立って姿が見えた。
手には一つ、宝箱を持っていて、それがガイモンを歓喜させた。
「あったぞ。宝箱五個」
「おぉっ、それだ！　恩に着るよ、そいつを落としてくれ！　あぁでもおれには当てるなよ！　当たったら死んじまうからな、ははっ！」
ガイモンは喜々として手を伸ばした。けれどルフィは、笑顔で端的に返す。

「いやだ」
「えっ……？」
呟いたのはシルクかガイモンかもわからない。
ルフィの返答は明らかに想像と違っていて訳がわからなかった。
驚愕し、言葉を失った二人はすぐには反応できず、しばしの無言を挟んで動き出す。咄嗟に口を開いたのはシルクだった。自身が信頼する船長を見つめ、必死の形相で声をかける。
「な、なに言ってるのルフィ!?　それはガイモンさんの物でしょ！　こっちへ渡して！　私たちは手に入れなくたって困らないじゃない！」
「いやだ。これは渡せねぇ」
「どうしてそんなこと……！　あなた、そんな海賊好きじゃないって――！」
「もういい。もういいんだ」
「ガイモンさん!?　どうしてっ」
音を上げるように呟いたのはガイモンが先だった。
ルフィの目を見れば、渡す気がないのがわかる。それだけではなく他にも伝わることがある気がして。上手く言えないがいつの間にか胸が一杯になってしまう。
動揺するシルクを尻目に、表情を変えて、じっとルフィの顔を見上げた。
「麦わら……おまえは、いいやつだなぁ」
「え……？」
「うすうすな、もしかしたらって……気付いてたんだ。なるべく考えないようにしてたんだが。そうか、おまえがそう言うんなら、もう渡さなくてもいい」
はらりと、涙がこぼれた。
もはや上を向いていられなくなり、視線を下げたガイモンの目から大粒の涙が溢れ出す。
「ないんだろう……？　中身が……」
「えっ――？」

宝箱を足元に置き、ルフィが胡坐を掻いて座った。
シルクは真偽を問うため頭上を見上げるが、彼は静かに、頷いた。
「うん……全部からっぽだ」
「そんなっ。だって、ガイモンさんは二十年も守り続けて」
「宝の地図が存在する財宝にはな、よくあることなんだ。はうっ……！　ぐっ、地図を手に入れた時には、宝はすでに奪われた後だってことは……」
涙はとめどなく溢れ出て、感情の制御が利かなくなる。
ガイモンは手で顔を覆って涙を流し続けた。
その胸に宿るのは喪失感か後悔か、窺い知ることはできない。
彼の様子を見た後、シルクは再びルフィを見上げる。
わざと渡さなかったのか。彼に何も入っていない宝箱を見せたくなくて、自分で気付かせようと敢えて拒んだのだろう。結果としてガイモンは最悪の結末を受け入れ、自ら答えを出した。
そうだと気付いてもすっきりしない結果だが、不幸中の幸いなのかもしれない。
何も言えなくなって苦心する。
果たしてこんな終わりでいいのか。二十年の歳月の結末が、こんなにも切ない。
理不尽を感じ、シルクもまた悲痛な面持ちで俯いてしまった。
仕方がないことだとはわかっている。だからといって納得できない。
そんな二人を見下ろして、鼻の辺りを指で擦ったルフィはからりと元気な声で笑った。
「なっはっは！　おっさん、残念だったな。残念だったけどしょうがねぇよ。こんだけバカ見ちまったんならさ、あとはもうワンピース見つけるしかねぇだろ」
「ワンピースを……？」
「おっさん、おれともう一回海賊やろう。一緒にグランドライン行って冒険しようぜ」
「おまえ……こんなおれを、誘ってくれるのか」

手の甲で涙を拭い、ガイモンは小さく呟く。
「ありがとう……」
救われはしなくとも、その一言で変わる物があったかもしれない。
目元を拭ったシルクは微笑みを湛え、繰り返し礼を言うガイモンを見つめた。

＊

「本当に来ねぇのか？」
さっきの広場へ戻ってから、ガイモンは誘いに対する答えを出した。
島に残る。それが彼の決定だ。
二十年間守り続けた宝箱が空だった。確かにそれはショックではあって、今すぐ忘れられるものではないかもしれないが、他にも島には大切な物がある。常々共に生きてきた珍獣たちだ。彼らを守らなければならないと決めたらしい。
晴れ晴れとした表情を見せる彼は一点の曇りもない笑みを浮かべていた。
「ああ。まぁ残念だったがこれでケリがついたんだ。これで気にしなくていいんだとわかると気が楽になった。これからはあいつらのために生きるよ」
「みんな仲良しですもんね」
「おっさんも珍獣だからな」
「違うわ!?　ふざけんな！」
気楽に笑い合って和やかな空気が流れていた。
憑き物が落ちた様子。怒鳴る素振りを見せてもすぐにガイモンは笑う。
彼らへの恩義を感じた。
そのため友人だと感じる想いがあって、気を取り直して一つの提案をする。
「おまえら、食料を獲りに来たんだろう？　この島の動物を狩るの

は許さねぇが、果物ならたくさんある。好きなだけ持っててくれ」
「いいのか？」
「ガイモンさんも食べる物でしょ？」
「いいんだ。そこら中にできるもんだし成長も早い。大量に持ってかれたってこっちは痛くも痒くもねぇのさ」
「おっさんいい奴だなぁ。じゃあいっぱいもらってこうぜ」
「二人にも手伝ってもらおっか。きっとさっきのビーチで休んでるから」
シルクがそう言ったことでルフィが頷き、くるりと反転して歩き出す。
自信満々な笑顔だったが慌ててシルクが手を伸ばした。
「よし、じゃ呼びに行こう」
「ちょっと待ってルフィ、そっちじゃないよ。二人が居るのはこっち」
やはり目を離せない人物だ。放っておけばどこに辿り着いてしまうかわからない。
結局はシルクの先導で歩き出し、三人揃って最初のビーチを目指す。
道中も会話は止まらずにすっかり打ち解けた様子だった。
「おっさん、ここの珍獣仲間にしてもいいか？」
「やめときなよルフィ。キリに怒られるよ」
「そうか？　キリなら喜ぶと思うぞ」
「おれァ動物が行きてぇって態度なら止めねぇけどよ、あんまりおすすめはしねぇな。ここの連中はマイペースな奴ばっかりだから言う事は聞かねぇぞ」
「……うん、やっぱりやめといた方がいい気がする。ただでさえウチはマイペースな人ばっかりだもん。なんだか大変なことになりそう」
「うーん、おもしれぇ奴ばっかりなのになぁ」
自らはマイペースだと思っていないのか、ルフィは首をかしげるばかりだった。

草むらを掻き分けて道なき道を進み、しばらく歩けば迷うことなく最初のビーチへ辿り着く。視界が開けると大海原が見え、それ以外の物も確認できた。
島のすぐ傍に大きな帆船が停まっていた。明らかにさっきはなかった物。旗を見上げれば海賊であることを告げるジョリーロジャーが確認でき、少し遠めだが甲板には人の姿も多く確認できる。同時に、ビーチを見回そうともキリとゾロの姿は見られない。
まさかと思うのは自然なことだった。
「すんげぇ、海賊船じゃねぇか」
「チッ、また密猟者か？　裁きが必要になりそうだな」
「ねぇ、それより二人の姿が見えないんだけど……まさか」
最初に呟いたのはシルクであって、三人の視線が一か所に集まる。
まさかあの船に乗っているんじゃないだろうか。現状最もあり得る話だと思えて、裏切るつもりもないだろうが、あの二人なら何かしでかすのではないかと予想できる。
ちょっと目を離した隙に何をするかわからないのはルフィだけではないらしい。
わずかに苦悩してシルクが溜息をついた。
「ルフィ、どうする？　二人ともあそこにいるんじゃないかな」
「なんかおもしろそうだな。おれたちも行こうぜ。おっさんも来るだろ？」
「あ？　いやおれは――」
「後で帰ってくりゃいいじゃねぇか。とにかく行こう」
そう言うとルフィは何やら森の方向へ小走りで近寄るも、ちょうどその時にはシルクがガイモンへ話しかけていて、二人は彼から目を離してしまった。
「ちょっとだけいいでしょ、ガイモンさん。長く島から出てないんだったら久しぶりに冒険しましょうよ。これが最後かもしれないし」
「う、うむ……まぁ、そう言われりゃ確かに」
「って、あれ？　ルフィはどこに……」
傍に姿が見えなくなったと気付いたシルクが首を振った時だ。

ルフィは両腕を伸ばしてそれぞれ別の木を掴み、自らを発射する準備を整える。
がさがさと草木が揺れれば当然気付いて、ゴムの体でそうしていれば何をしようと考えているかはすぐわかる。ガイモンは疑問符を浮かべていたようだが、シルクは慌てて両手を伸ばした。
「ゴムゴムのォ――」
「ちょ、ちょっと待ってルフィ！　そんなことしなくても船出せばいいじゃない！　流石にそれは危険過ぎるんじゃ――！」
「ロケットォ！」
ゴムの反動を利用して勢いよく撃ち出されたルフィは、二人の間を通る一瞬、シルクの腰に腕を回して、ガイモンの宝箱を掴んで、勢いを殺すことなく海へ向かって飛び出した。
強烈な風を感じて空を飛んでいるのだと感じる一瞬。
かつてない感覚にシルクとガイモンは悲鳴を発し、ルフィだけは楽しそうに笑っていた。
「きゃあああっ!?」
「うぉおおおっ――！」
「しっしっし！」
三者三様、それぞれ違った表情で強い風に包まれる。
幸か不幸かルフィの狙いは正確で、軌道上には未知なる帆船があった。
果たして望んだことだったか、三人は猛烈な勢いでその甲板へ落ちたのである。

ルク

海上を飛んできた奇妙な鳥を介抱していたキリとゾロは、彼を連れて海賊船に招待されていた。
帆船は島に近付いたところで足を止め、砂浜には小舟が近付いてきたのである。そして武器を突き付けられて一言、そいつを寄こせとの言葉。
力ずくで倒すのはそう難しいことではない。しかしキリがそれを許可しなかったため、敢えて二人は手を上げながら鳥を連れて船の上へ立っていた。
年季もまださほど入っていない、立派な造りの船だった。
甲板から目視で細部を確認するキリは何かを納得するように小刻みに頷いている。何を考えているのやら。興味さえ持たなかったゾロはメインマストの下に居る少女を発見した。
マストにロープで縛られ、どうやら捕虜のようだ。
ショートカットで軽装の彼女はキッと二人を睨むと、怒りを剥き出しに大声を出した。
「ちょっとあんたたち、どうしてバルーンを連れてきたのよ！せっかく逃がしたのに！」
「バルーン？」
「鳥よ！　あんたたちが連れてきたあの！」
「あぁ、パンダか」
「どこがパンダよ!?　ちゃんと翼があるでしょ！」
キーキーと騒がしい少女であった。
海賊に捕まっているのにさほど恐れている様子もなく、妙に偉そうな態度だ。面倒に思えたゾロはげんなりした様子で耳をほじる。
その声に気付いてキリもゾロの隣へやってきて彼女を見た。
特別何かを想うでもなく、慌てることもなければ、元気のいい娘さんだといった印象。シルクに似ていないでもない。ただ彼女より声が大きいのは確かだった。
怒られていようが一切気にせず緩い表情のキリが尋ねる。

「やぁどうも。いきなりで悪いけど、君なんで捕まってるの？」
「ふん、馴れ馴れしい奴ね。私が捕まってる理由？　そんなの……可愛いからよ」
「おい。こいつめんどくせぇ奴じゃねぇか？」
「まぁまぁそう言わず。とりあえず話聞いてみようよ」
周囲では海賊たちが立っているものの、今のところ戦闘態勢に入る様子はない。
ゾロならば刀を持って体格もいいが、キリの見かけはただの少年。そして二人しかいない。
戦っても楽に勝てると思われているのか、警戒されてもいない状況だ。
それを好機と見てキリが少女へ近付く。
彼女は明らかに警戒していたが縛られていては逃げられずに、あっさり接近を許してしまう。戦闘が得意そうな外見ではない。おそらくただの町民か旅行者だろう。
声を潜められる距離まで近付いて、辺りを見回しながら小声で話し始めた。
「あの鳥は君の？」
「そうよ。友達で家族。私にとっての宝」
「ふぅん、そっか。確かに変わった鳥だけど、なんで狙われてるのかな。ただ見世物小屋に売り飛ばそうってだけ？」
「違うわ。バルーンは怪鳥（ルク）なの。とっても珍しい鳥」
「パンダみたいだもんね」
「それだけじゃないわ。詳しくは知らないけど、ルクには噂があって、その血を飲めば妖力が手に入るとかなんとか。ここの船長はそれを狙ってるのよ」
「船長の名前知ってる？」
「ええ。六角のシュピール。妖術使いとか言って変な技を使うの」
六角のシュピール。
頭の中を探してみるも知っている名前ではない。おそらく無名か懸賞金が低いのだろう。

大した相手ではなさそうだと断じ、振り返ってゾロを手招きで呼ぶ。
三人で集まって顔を突き合わせ、ギャアギャア鳴きながら檻に入れられる怪鳥、バルーンの位置を確認しながら言葉を交わす。
何やら悪そうな顔をしたキリが少女へ笑いかけた。
「ねぇ、助けてあげてもいいよ」
「本当っ!?」
「静かに。不審がられないようにね。君の名前は？」
「あ、ごめん……私はアン。ねぇ助けて。バルーンを殺されたくないの」
「わかってる。任せて」
勝手に話を進める二人に眉間の皺を寄せ、思わずゾロが割り込んだ。
何を考えてそんなことを言い出す。関係のない人間だろうにあまりにも唐突だった。
彼の思考がわからない。
苦悩するようで責める口調が問いかける。
「どういうつもりだ。おまえ自分が何言ってんのかわかってんのかよ」
「もちろん。ついでに言えば考えだってあるよ」
「おまえ海賊だろ。この一味は慈善事業まで引き受けんのか？」
「別に悪事だけが海賊のやることじゃない。自由に、好きにやるのが海賊だ」
「どっちもおんなじ意味だろうが。何考えてやがる」
「この船いただこう」
にっと口の端を上げて言われた。
周囲には海賊たちも居て囲まれているというのに、何を言っているのか。聞こえていないのが幸いだがもし聞かれれば即座に戦闘が始まってもおかしくないだろう。
目を丸々とさせたゾロは虚を衝かれる。
「いただくって、奪う気か？」

「そういうこと。まぁ業界用語みたいなもんさ」
「よくもまぁ、堂々と言えたもんだな。やっぱり悪事じゃねぇかよ」
「だけど人助けでもある。この世は二律背反で溢れてるんだ。正義とか悪とか簡単な言葉じゃ片付けられない問題だらけだよ」
「つまり考えるだけ無駄ってか」
「よくわかってるじゃん。この場合、人命救助と船の奪取、どっちが本命でどっちがついででもボクらには得がある。彼女たちに恩も売れるしね」
「売ったとこで意味あんのか？　金持ちには見えねぇぞ」
「もしもの場合があるから、意味なんて売った後で考えればいいんじゃない？」
「そんな適当な理由で働かされるわけか……」
溜息をつくゾロを傍目に、助けてもらえると知ったアンは喜色を満面に笑っていた。
最愛の友達、バルーンが無事に解放される。今や自分の身の安全よりそちらを考えていた。
特殊な種族であるだけに狙われることは少なくなかった。
その度に自分たちで危険を退けてきたが今度ばかりはだめだと思っていたのに、まさかの手助けがあって喜びを抑えきれない。これでまた失わずに済む。
ロープに縛られたままだというのに早く逃れたいと激しく動き出していた。
「早くこれ解いて。助けてよ」
「今はまだだめ。こっちは人数少ないし準備しないと」
「準備って、こんなところで今から何を――」
「それについて君に聞くんだ。六角のシュピールは能力者？　どんな奴か教えて欲しい」
「あ……うん」
バルーンはすっかり檻へ入れられ、捕獲は完了している。
そのせいで周囲の海賊たちはご満悦の表情。すっかり客人の二人を忘れている。バルーンを捕まえたのは彼らだが気にしてさえいな

かったようだ。
これで船長にどやされず一安心といったところか。
ゾロが彼らを見ながら警戒する間にキリとアンが密かに話す。
「妖術使いって言ってたけど」
「変な力よ。何もないところから炎を出したり、爆発させたり、箒で空飛んだりとかね。私だってバルーンを守るためにちょっと剣の使い方を学んだことあるけど、全然歯が立たない。私が居た町はあいつのせいで滅茶苦茶にされたわ」
「それだけバルーンの血が欲しいってことか」
「そう。だけどそんなの許せない。あんたたちあいつをぶっ飛ばせる？」
「多分ね。ただ炎に爆発か……船の上で使われると厄介だな」
周囲への警戒で背を向けるゾロの背へ声をかける。
話は聞いていただろう。振り向かずに彼も答えを出した。
「できるだけ船を傷つけないように戦いたい。できる？」
「問題ねぇよ。だがあいつらはどうするんだ？」
「殺すと死体の処理も厄介だし、海にでも落とせば自力で泳ぐでしょ。この辺りは無人島がいくつかあるようだし、きっと助かるって」
「ひでぇ野郎だ。じゃなきゃ海賊なんざやってねぇか」
聞かされたゾロは好戦的な笑みを浮かべる。反発する言葉を発していても戦闘ができると知って喜んでいるらしい。その笑顔を見れば誰もが凶悪だと認識するだろう。
発する雰囲気だけで理解したか、キリも密かにほくそ笑んだ。
なんだかんだで息は合いそうである。
「戦闘が始まったらボクが彼女のロープを切るから、ゾロはバルーンを頼むよ。鉄は斬れる？」
「あぁ？　おまえバカか、刀で斬れるもんじゃねぇだろ」
「そうかな。きっと世界一の大剣豪なら斬れるよ」
「また適当なこと言いやがって……」
「無理なら鍵見つけてくるか、壊すしかないね。誰かに連れ出され

ないように早く頼むよ」
彼の言葉をむっとした顔で聞いていたゾロだが、ふと考えてみる。
鉄を刀で斬るなんて馬鹿げた話にも思えるも、噂くらいなら聞いたことはある。世界にはそんな技を持つ剣士が居ると。加えて、曲がりなりにもキリはグランドラインへ入った男。そういった技術を見た可能性はある。それだけならまだしも、まさか世界一の大剣豪を見たことはあるのか。今になって思い当たって気になった。
わずかに振り返り、今の状況に関係がないとは思いながらも尋ねてみる。
「おまえ、大剣豪に会ったことあんのか？」
「ないけど」
「ねぇのかよ」
「でも大剣豪じゃなくても鉄を斬る人は見たことある。野望を叶えるなら絶対条件だよ。今から修行しといて、ゆくゆくは斬れるようになってね」
「マジで言ってんのか？　チッ……考えが甘かったな」
呟いて己の刀を見下ろす。
そういえば以前、子供の頃、剣術道場に通っていた頃に聞いたことがある。
師匠が言っていた。本当に強い剣士は斬る物を選べるのだと。
薄っぺらな紙を斬らないこともでき、刃が通らないだろう鉄を斬ることもできる。
自身が斬るべき物は刀ではなく剣の持ち主が選べる。それこそが真の剣。触れる物全てを傷つけるだけの剣は持つなと言われた。
今はまだその意味がわからない。
刀を見下ろしながらゾロは珍しく真剣に考える。
かつての自分が目指したのは全てを斬ることができる剣。それこそ鉄すらも斬れるようになりたいと思っていた。しかし師匠が言うには何も斬らない剣もあるという。その剣ならば岩でも鉄でも斬れるとも。なんでも斬れる剣は、何も斬らない剣。明らかに矛盾している。今になってキリの二律背反という言葉を思い出した。

修行が必要だと考える。
なんにしても今の技量で鉄は斬れない。もっと強くならなければ。
強くなるにはおそらく戦闘を重ねることが最も手っ取り早い。
ついさっきまで興味はなかったものの、そう考えれば海賊を襲うのは願ったり叶ったりだ。
うずうずした様子でいつでも刀を抜けるように体から余分な力を抜いておく。
あとはいつ動くか、タイミングだけ。
キリがゾロの背へ声をかけた。
「気持ちはわかるけどもうちょっと待ってね。良い機会を待とう。まだ船長の姿も見えないようだし、せめてターゲットの確認くらいはしておいた方がいい」
「フン、言ってる傍からってやつらしいな」
ゾロの言葉に気付いて視線の先を確認すると、明らかに周囲から浮いた長身の人物を見つける。
ほっそりした印象の外見で腕っぷしは強そうには見えないが、海賊たちは明らかにその人物を恐れていた。統率力のほどは背筋を伸ばして立つ男たちの姿でよくわかる。
お世辞にも整った容姿とは言えず、奇妙な髪型だ。
船室から出てきた一人の男、これが六角のシュピール。
さほど強そうにも見えなくて肩透かしを食らったよう。ゾロはつまらなそうに嘆息する。
そうとは知らずシュピールは笑みを浮かべてバルーンを確認し、次にキリとゾロの二人を見た。
「おまえたちが、連れてきてくれたのか。礼を言おう」
「いえいえそんな大したことでは」
穏やかな歩みで檻へ近付いていく彼を見ながらキリが謙遜する。
二人に対して興味はないらしい。注意はバルーンにのみ向けられている。
檻へ手を触れ、うっとりした目で見つめて、満足気なシュピールの声には喜びが表れた。

「これでおれの妖術はさらに力を増す。くっくっく、怖い物なしだ」
「あの～シュピール船長。ちょっとお話したいことがあるんですけども」
「ん？　なぜおれの名前を知っている」
「あちらのお嬢さんから聞きまして」
名前を呼ばれたことでシュピールが振り返り、見られたキリは手を差し出してアンを指す。
注目を浴びた彼女は緊張した面持ちでわずかに喉を鳴らした。
「そうか。で、話ってのはなんだ？」
「こういうこと言うと厚かましいですけど、一応その鳥を捕まえたのは我々なんで、多少なりとも報酬的な物を頂けないかと」
「ふん、そういうことか」
「我々しがない旅人なので、路銀を手に入れるのも一苦労なんです。こういったチャンスは物にしておかないと後で困るものですから」
「海賊から金をせびる気か。まぁいい、今は気分が良いんだ。何が欲しい？　金か？」
「そうですねぇ。欲しい物って言えば――」
顎に手を当ててキリが考え始めた頃、奇妙な何かを感知したゾロが眉間の皺を深める。
先程まで自分たちが居た島の方角を見ながらそっとキリへ歩み寄った。
「妙な声が聞こえねぇか？」
「え？　声？」
「ああ、島の方から――」
言っている最中に見つける。何かが猛スピードで船へ向かってくるのだ。
気付いたのは二人だけでなく、海賊たちも同じだった。
砲弾の如く飛来するのが人間なのだと気付いた時にはすでに間近。瞬きも許さず勢いもそのままに突っ込んでくる。柵を壊して甲板を転がり、ごろごろと激しく反対側の柵まで跳ねていき、再びの轟音。そちらの柵は壊れず、その前に置かれていた木箱や樽が破壊されてい

た。
船上は沈黙し、唐突な乱入者に目が点になる。
誰もがそこへ目を向けていた。すると突貫してきた人物が勢いよく立ち上がり、周囲の者が驚愕する。大怪我してもおかしくない光景の直後だというのにひどく元気そうだ。
視線の先では麦わら帽子を押さえて笑うルフィが楽しげに笑っていた。
「なっはっは！　いやぁ～危なかったなぁ。危うく海に落ちるとこだ」
「バ、バカ野郎！　おれたちゃゴムじゃねぇんだ、ケガするとこだぞ！」
「うぅ、やっぱり目を離すべきじゃなかった……」
壊れた木箱の破片を蹴り飛ばし、さらに立ち上がるのはシルクともう一人、見たこともない奇妙な姿の人間である。宝箱に詰まった小柄な男を目にして全員が目を疑っていた。
船上は一気に妙な空気に支配されていた。
これを機にキリはふむと頷き、傍に立ったゾロへ伝える。
「うん、よし。今だゾロ！」
「って今かよ!?」
敵船に乗り込むと知る前から服の下に仕込む紙は代えている。
キリの動きは驚くほど素早い。
懐から取り出した一枚の紙片を投げつけ、アンを縛るロープが切られた。唐突な行動に彼女自身も驚いていたが、マストに紙が突き刺さった途端拘束が解けて、助けられたと理解できると笑みを浮かべる。そのまますぐにマストの傍を離れてキリの下へ駆け寄った。
時を同じく、命令をきっかけにゾロはシュピールへ向かっていた。
両手に黒い鞘の刀を持ち、素早く接近して二刀流で攻撃を行う。突然の行動にシュピールは驚愕していた。しかし地面を蹴ることなくふわりと空中へ跳び上がって逃げられる。
妖術使いというのは嘘ではなさそうだ。
奇妙な挙動で攻撃を避けられて敵を見上げる。シュピールは一段

上の欄干の上に着地した。
その外見からは想像できぬほど、妖術を使って意外と腕は立つのだろう。
大した実力ではなさそうだと思っていたが反応は悪くない。舌打ちを一つ、しかしゾロは追わなかった。命令はバルーンの救出で彼を倒すことではないからである。
頭上から聞こえるシュピールの声など気にしなかった。
「てめぇら……一体なんのつもりだ？　おれからルクを奪うつもりか」
檻へ駆け寄ったゾロは深く息を吐きながら意識を研ぎ澄まし、全力で右腕を振る。
鉄で作られた柵を斬りつけた。だがやはり斬れずに甲高い音が鳴るだけ。
悔しげに表情が歪められる。
「ちょ、ちょっと！　バルーンはケガさせないでよ！」
「無理はしない方がいいよ。刃毀れするだけだろうしさ」
「わぁってる。いちいち言うな」
まだ己の腕が足りないのだ。
改めて自覚させられながらゾロは鍵を壊そうと扉に回った。中に居るバルーンはすっかり怯えているが構わないだろう。柄を使って鍵を殴り壊そうと試し始める。
唐突な行動に船上の混乱はさらに深まっていて。
それを見たシュピールが黙っているはずもなかった。
「ガキども、好き勝手やってんじゃねぇ！　そのルクはおれのだッ！」
「バカ言わないで！　バルーンは私の家族よ！」
ゾロへ攻撃を加えようと動くシュピールを見て、咄嗟にキリが紙を投げていた。
硬化されてもいないそれは大量に彼へ纏わりつき、視界を白く染めてしまう。周囲でバサバサと音が騒がしく、ダメージはなくともたたらを踏むのは無理もない。

「くそ、なんだこりゃ。まさか妖術かっ」
両腕を振って紙を払いのけたと思えば、顔面に見知らぬ足が迫っているのが見えた。
視認した直後、シュピールの顔面は蹴り飛ばされる。
後頭部から壁へ激突し、木目のそこさえ破壊して室内へ運ばれる。騒々しい音で海賊たちはぽかんとしたままそれを見ていた。
くるりと回って着地したキリはすぐにルフィたちへ目をやり、笑顔で言う。
「ルフィ、シルク、喧嘩だ。この船いただくよ」
「おっ、メシいっぱい食えるって意味か？」
「どうなったらそうなるの……あ、そっか。食料いっぱい積めるって意味？」
嬉しそうに拳を握るルフィに対し、疑問を露わにしていたシルクだが、理解した途端に迷わず剣を抜く。ルフィの発言から食料のことになると以前の話をよく覚えているらしいと驚いた。
彼らの傍にはもう一人奇妙な人物が居て、キリは思わず首をかしげる。
「それとその人誰？」
「おれの友達だ。たわしのおっさん」
「違うでしょ。ガイモンさん。あの島で珍獣を守ってる番人だよ」
「へぇ。まぁなんかよくわかんないけど手伝ってもらっていいかな。今から一戦始めるから」
「あ、ああ」
戸惑っている顔のガイモンが頷いたちょうどその時、檻の鍵が壊されて扉が開く。
喜んで外へ出たバルーンは一目散にアンの下へ向かい、彼女と強い抱擁を交わした。
「あぁっ、バルーン！　よかった……！」
「こっちもなんかあったのか？」
「ついさっきね。とにかく船手に入れるから、あんまり壊さないでよ」

困惑しているのはガイモンだけでなくシュピールの部下たちもであった。
突然の乱入者。さっきまで大人しかった二人の攻撃。そして蹴り飛ばされたシュピールの姿。一体何が起こっているのかを理解するのに膨大な時間がかかる。
それでも彼らは臨戦態勢で戦闘を始めようとしていて、身構えずにはいられない。
いつ襲われるのかと彼らも手に手に武器を持ち始めた。
殺伐とした空気が流れる中、唐突にキリが高く跳び上がる。直後に彼が居た場所を大きな炎が通り過ぎ、壁の内側から噴き出した攻撃が船の欄干を焼いた。ふわりと着地した彼は素早くアンの傍へ戻っており、視線はすぐに自分が立っていた場所を捉える。
鼻を押さえたシュピールが壊れた壁から出てきて、不思議にも掌に炎を握っていた。
「こ、こいつら、舐めやがって……！　おいてめぇら、やっちまえェ！」
「うわぁ、本当に炎握ってるよ。あれが妖術か」
「どっちにしたって脅威には感じねぇだろ。これなら前の大佐殿の方が強そうだったぜ」
戸惑っていた様子の海賊たちがサーベルを振り上げて駆け出す。敵と判断した彼らへ向かって一斉に殺到し、数で押し切って始末しようとしていた。
それを許さないとばかり、即座にルフィが動く。
自分たちへ向かってくる敵に対してゴムの足を伸ばして一気に蹴り飛ばす。
またアンとバルーンを狙う者たちにはゾロが駆けつけた。
三本目の刀を口に銜え、慣れ親しんだ三刀流にて一閃。力強い斬撃は屈強な男たちを一瞬で蹴り飛ばし、辺りに鮮血が舞って、勢いから海へ落とされる者も少なくなかった。
たった一瞬で力の差は歴然だと感じさせる。
海賊たちは見るからに怯むも彼らは容赦なく、攻撃の手は緩めな

い。
「こいつらどうすんだ？」
「当初の予定通り。適当に海に捨てといて」
「了解、副船長」
好戦的な笑みを浮かべてゾロが敵へ接近する。
その後は一方的な攻撃が続いた。斬り飛ばすというより殴り飛ばすに近い。
荒々しい様子ながらも確かな技術は窺え、敵からの攻撃は一太刀たりとも受けなかった。
視線の先を変えればルフィを先頭とし、三人が奮闘している姿が見える。
これなら人数の差はあってもすぐに終わるだろう。キリは肩の力を抜いて苦笑した。
数の利をたった数人で覆してしまうのは仲間ながら恐ろしい。
そうする彼以上に恐れているのが背後に居るアンとバルーンだったようで、震えながら抱き合った彼女たちは、ルフィたちの強さに恐れおののいていた様子だ。
「あ、あなたたち、一体何者なの？　シュピールたちをこんなにあっさり……」
「あぁ、言ってなかったっけ？」
振り向いたキリはアンへ微笑みかける。
「ボクら海賊なんだ。連中と同じでね」
「か、海賊ぅ？」
今更ではあったがなんて人たちに助けを求めたのだと思った。
彼らの強さときたら、シュピールの一味が全く相手になっていない。特に素人目に見てもルフィとゾロが凄まじい。伸びる体と三本の刀、珍しい戦い方で敵をあっという間に海へ落としていく。
見ていて爽快だった。
あれだけ苦労して逃げ続けた敵が簡単に倒される。胸がスカッとする光景だ。
アンが思わず笑みを浮かべてしまった時、ハッと気付いて、視線を

キリの方へ戻す。
まだシュピールが残っている。
彼はいつの間にかキリの前に立って血走った目で睨んでいた。
どうやら鼻血が止まらないらしく、左手は顔を押さえ、かなり苛立っているのが伝わってくる。明確な怒気は殺気に変わり、全員に向けられるそれは今だけキリに注がれていた。
「くそっ、もう少しだってのに、せっかく捕まえたってのに……なんなんだてめぇらは！」
「あんた方とは格が違うんだ。ウチの船長は海賊王になる男だよ」
「海賊王だぁ？　ふざけるな！　そんなバカな夢語ってる連中がおれの邪魔をするってのか！」
右手が掲げられた。するとどこからともなく大きなハンマーが現れる。
「出て来いハンマー！」
片腕で思い切り振り下ろされた。だがキリは右腕に紙を纏わせ、硬化し、ドラゴンを思わせる鋭利な爪を持った腕で真っ向から受け止め、ハンマーを破壊する。
弾け跳ぶ破片の向こうに余裕を浮かべた笑みが見える。
歯噛みしたシュピールは咄嗟に後ろへ跳び、先程同様掌に炎を出現させた。
「くそぉ、燃えろォ！」
大きな炎の塊が投げられる。
それに対しキリは右腕に纏った紙を全て飛ばして、真っ向から迎え撃つ。
当然紙は火で燃える。しかし空中で止まったままの紙の束は炎をそれ以上前へ進ませず、床へ落ちることもなく、何にも被害を及ばせない場所で燃え続けた。
繰り出す全ての攻撃が封殺され、良い結果を生み出さない。
まるで掌の上で踊らされているかのようだった。
目を合わせれば彼の底が知れない実力が知れるようで、怒りを忘れてシュピールは恐れた。怯え始めた末に思わず意識せずとも後ず

さってしまう。
そこへ左手側から声がかけられた。
「おいおまえ」
「ひぃっ!?」
肩をびくつかせて振り返れば、見えたのはこじんまりとした姿の宝箱男。
その姿にほっと息を吐いて、シュピールの余裕がわずかに戻った。
「おまえ、あの鳥を攫おうって腹か？」
「な、なんだおまえは。関係ねぇ話だろ。黙ってろ」
「いいや黙ってられねぇ。おれはあいつらと仲良しじゃねぇし、なんなら今初めて見た。だがそんな間柄でもな、長年珍獣と一緒に暮らしてるとよ、おまえみたいな密猟者が許せねぇんだよ」
「はぁ？　密猟だぁ？　わかっちゃいねぇな、奴はルクっつって血を飲めば妖力が――」
「んなこたぁどうでもいいんだよ！」
大声を出してガイモンはピストルを構え、反射的にシュピールの全身が強張る。
怒りの形相だった。
どこの誰とも知らぬ相手だが迫力は相当な物で、反撃を考えることさえできない。
「あいつがどこの誰だろうが、おれは珍獣を守る森の番人！」
引き金が引かれて、銃弾が飛びだす。狙いは正確にシュピールの左足を穿った。
痛みから転びかける相手を見、ガイモンはピストルを捨てて走り出す。
「うがぁっ!?」
「おれの目が黒い内は――」
動きにくそうな外見を物ともせずに素早く接近し、懐へ入ると思い切り跳んだ。
久々の戦闘は気分が良くて普段以上に体が動く。不思議だが自分の想像以上に体が動いた。

自らを砲弾に見立てて思い切り跳び、彼は全力で体当たりする。
「おれのダチは狩らせねぇよッ!!」
凄まじい頭突きが鼻に激突した。
体が宙を浮いた後、シュピールは勢いよく倒れて後頭部を打ち、気絶してしまった様子。
どうにも着地が難しく、慌ただしく転げ落ちたガイモンは、動きが止まった時には仰向けに倒れた状態で苦々しい顔になり、自身の額を撫でる。痛い。相当痛い。
久しく感じていなかった痛みと興奮に全身からどっと汗が出た。
こんなにアドレナリンが出たのは何年振りだろう。森に入ってくる密猟者たちを撃退する時でもこうはならない。森の番人と叫びつつ、意識は海賊に戻っていたのだろうか。
二十年ぶりに乗る帆船。二十年ぶりの戦闘。
気分が高まっているのは自分でもわかる。
自力では起き上がれないため転んだまま、空を眺めて、頬が緩んでいくのが如実にわかった。
その視界の中へ二つ、覗き込んでくる顔がある。
「しっしっし。やるなぁおっさん」
「かっこよかったですよ。森の番人らしくて」
笑顔で見下ろしてくるルフィとシルク。なぜだか彼らが嬉しそうにしていた。
苦笑してしまい、手を伸ばしながら呟く。
「ったく、うるせぇよガキども……さぁ、起こしてくれ。おれは自力じゃ立てんからな」
「そこだけ今も偉そうだよな」
「あはは。その方がガイモンさんらしいんだよ、きっと」
二人に起こしてもらって立たせてもらい、ようやく落ち着く。
甲板にはすでに敵の姿はなかった。気絶したシュピールを残し、全員が海に落とされたらしい。
中々容赦がない海賊たちだと笑っていれば、集まった彼らは落ち着いて会話を始める。

「また妙な奴が増えてんな。まさか仲間になったとか言わねぇよな？」
「ああ。誘ったんだけど断られた。おっさんも珍獣だからな」
「誘ったのかよ」
「ねぇキリ、そっちの人は？　この船の人じゃないよね」
「ついさっきまで捕虜だったんだ。ボクらも出会ったばっかり」
戦闘の余韻も早々に捨て去り、平気な顔で話し始める彼らはあまり普通じゃなさそうだ。肝が据わっているというのか、空気が読めないだけなのか、四人全員が気楽な姿に見えてくる。
それでも信頼し合う関係から特別な存在に見えた。
久しく忘れていた海賊の感覚。
彼らを見ていると思い出してガイモンは笑った。
その刹那、突然どたどた走って来たバルーンがガイモンを抱きしめた。体格差があるため抱きすくめられ、若干苦しいとも思う体勢だ。堪らず悲鳴のような声が出る。対照的にバルーンは嬉しそうに鳴いていた。独特な鳴き声が船上から響くのである。
「ぶふぁっ!?　おい、なんだいきなり！　なんで襲って来やがる！」
「ふふふ、襲ってるわけじゃないよ。助けてくれたからお礼を言ってるの。それにさっき、友達だって言ってくれたから、それが嬉しいんじゃないかな」
バルーンの気持ちを通訳するようにアンが伝えた。
確かに嬉しがっているのは明白。不思議と笑っているようにも見える。
拒む素振りを見せていたガイモンだが、そう言われては言い返せず、抵抗をやめてされるがままとなる。表情こそ拗ねた風にも見えるが嬉しさを噛みしめているのは分かり易い顔だ。
心底嬉しそうに笑い、やがてアンは全員へ向けて頭を下げる。
「みんな、ありがとう。みんながいなかったらどうなってたか……バルーンが無事なのはあなたたちのおかげよ。この恩は一生忘れない」
出会った時には険の強い表情だったが今は朗らかに笑っている。

彼女の言葉を受け取った四人は一様にバルーンを見た。
パンダに似た外見の鳥。確かに珍獣。
戦闘の名残もなく、これはパンダか鳥かどちらなのだろうという妙な話し合いが始められた。
「で、このパンダなんなんだ？」
「ルフィ、これはパンダじゃなくて鳥でしょ？　ほら、翼だってある。パンダは飛べないよ」
「いやでもパンダだと思う」
「ああ、パンダだ」
「二人まで……あーもうっ、わかりました、折れます。パンダでいいですよもう」
「ちょっと、勝手に決めないでよ！　バルーンはパンダじゃなくてルク！　どこからどう見たって鳥でしょ！」
彼らの勝手な発言にはアンも笑みを消し、叫ばずにはいられなかった。
大事な家族を勝手にパンダ扱いされているのである。
これを認める訳にはいかず、恩人たちに対して本気の抗議が始められた。

麦わら帽子のジョリーロジャー

捕らえたシュピールはアンとバルーンが海軍へ突き出すらしい。
聞けば彼も賞金首。それなりの懸賞金は見込めるらしく、動けないように首の下までロープでぐるぐる巻きにして連れていかれることに決定した。
ガイモンは島へ残り、森の番人を続ける。
そして四人は敵から奪った帆船を使って新たな航海に漕ぎ出すようだ。
それを本船として使う予定はないものの、大きな船を手に入れたことで以前まで使っていた船はアンへ譲った。バルーンの背に乗って帰ると言うから心配したシルクが提案したのだ。
荷物を積み替えて、ガイモンからもらったフルーツを乗せ、準備は整う。
別れの時は近付いていた。
移動させた帆船は砂浜ではなく島の崖に寄せられていて、そこにはガイモンを始め、島の珍獣たちが集まって旅立つ彼らを見送ろうとしていた。
「じゃあなおっさん。短い間だったけど楽しかったよ」
「ああ。おれもこんな気分になったのは久しぶりだ。ありがとよ」
ルフィに声をかけられ、晴れ晴れとした顔でガイモンは答える。
浮かぶ笑みに迷いはない。
守り続けた宝箱が空だったからなんだ。今は一人ではなく、新たな友もできたではないか。
未練など何一つない。新たな生活を始められそうだ。
「麦わら。おまえ、海賊王になるって言ってたな」
「そうだ」
「何の根拠もねぇけどよ、おれァおまえならできるんじゃねぇかって思ってる。グランドラインを制覇して、ワンピースを見つけて、おまえが世界を買っちまえ！」
「ししし。ああ、そうする」

別れの挨拶を済ませて、船は出航を始めた。
傍にある小舟からはアンが手を振っており、バルーンが鳴き声を発している。
遠ざかりつつも彼らはガイモンへ手を振り続けた。
「またな～おっさん！」
「ガイモンさん、私またここに来るよ。バルーンと一緒にっ」
船はゆっくりと、しかし着実に島を離れて行き、やがては遠く彼らの姿さえ見えなくなる。島の姿が見えなくなった訳ではない。彼らはきっと岸に立っているだろう。
島の全景を眺めるルフィへ、隣を航行するアンが声をかけた。
「ルフィ、私も行くよ。町に帰ってみんなに安全を伝えなきゃ」
「そっか。寂しくなるなぁ」
「うん。でも大丈夫だよ。あのね、私海賊ってあんまり好きじゃなかったけど」
にんまり笑って告げられた。
「ルフィたちのことは好き。だから応援してるね」
「おう。離れてても友達だぞ」
「なれるといいね、海賊王」
「なるさ！」
笑顔で手を振り合ってアンの船もまた遠ざかる。バルーンは最後まで翼を振って鳴いていた。
遠ざかってしまった後はすっかり静かになる。
帆に風を受けて走る帆船。やはり小舟とは迫力が違う。
甲板へ立って船を見回したルフィは難しい顔をしていた。
やはりしっくりこない。この船ではないのだと思う。前々から自分たちの船が欲しいと思っていたがどうにも違う気がしてならない。欲していたのはこうではなかった。
「どしたのルフィ？　珍しく難しい顔して」
「うーん、なんか違うんだよなぁ」
「船のこと？　仕方ないよ、とりあえず急ごしらえで奪っただけだから。良いのはまた別で見つけよう。こうでもしないと食料の確保

も難しくなるわけだし」
「そりゃだめだな。よし、我慢する」
船の後方、一段高くで舵輪を握ったキリが語り掛ける。
船長をなだめる言葉は吐き出すのに躊躇いがない。すでに慣れた様子だ。
それでもルフィは腕を組んで難しい顔のまま。考え事は得意ではないというのに何やら考えているらしい。気になったシルクは近くに居たこともあって彼へ質問する。
「ルフィはどんな船が欲しいの？」
「カッコいいやつだ」
「もう、またそれ。それがわからないから聞いたんだけど……」
「どういうのかはわかんねぇけどさ、なんとなくこれじゃねぇ気がすんだよな」
「これも立派な船だと思うよ。ちょっと壊れちゃってるけど」
戦闘の余韻から船の一部には傷が残っている。修繕するにも船大工は仲間におらず、手先が器用そうなのはキリとシルクの二人。今すぐ修繕とは決めなかった。
あくまでも彼らは自分たちの船を欲していて、敵から奪った船でずっと航海するつもりはない。
言わばこれは一時しのぎ。
自分たちの船を手に入れるまでの代わりでしかなかった。今後がどうなるかは不明なため、ひとまずいいだろうと誰も修繕には乗り出さないのもそのためだ。
「次の町に行けば船見つかるかな」
「でもお金もたくさんはないし、ねぇキリ、買えると思う？」
「まぁ無理だろうね。食費削ってもこのサイズは手に入らない」
「おいキリ！　食費削るのはだめだぞ！　船長命令だ！」
「あいあいキャプテン。しばらくはこれで航海することになりそうだね」
舵輪を回して舵を取りながら、キリは海図を見る。
珍獣の島に寄り道したことで多少時間を使った。今日中に次の町

へ到着するのは無理だろう。しかしそう時間はかからない、明日には辿り着けるはず。
ならば今日は急ぐ必要もないだろう。
航路はすでに掴んだ。舵輪を離しても問題ないと判断してキリが甲板へ降りてくる。
二人の傍へ歩み寄り、欄干を背に座っているゾロも手招きで呼んで、一味全員で話し合いを始めようとしていた。今やこれがすっかり習慣となりつつある。
「さて、一応とはいえ新しい船も手に入れたし、海賊に見えるサイズの帆船だ。一つ提案があるんだけどいいかな船長？」
「いいぞ。なんだ？」
「ボクらのマークを考えた方がいいんじゃないかと思って」
やってきたゾロも加えて四人で向かい合う。
四角を作るように立って、その状態のまま話が始まった。
「それもそうだな。ようやくおれたちも海賊らしくなるんだ」
「確かに今までは海賊だって名乗らなきゃバレなかったもんね」
「旗作んのか？　誰が描くんだよ」
「それを今から決めようかと思って。全員で試しに描いてみて、一番上手い人が旗に書き込む。それが一番分かり易いと思うけど、どう？」
「しっしっし、勝負ってことだな。いいぞ、やろう！」
ルフィの号令に従ってキリが指示を出し、準備が始められる。
これから作るのは自分たちが海賊だと示す目印、ジョリーロジャーだ。黒い旗にドクロを描き、相手への死を宣告する。これを持てば彼らも一目で海賊と認識されるのだ。
まずは描く人間を決める必要があった。
大きな紙が数枚用意され、それを甲板へ広げ、ペンがそれぞれに手渡される。
四人はその場へ座って下書き用の紙を前に、気合いの入った顔を見せた。
書き始める直前、自由に決める訳にはいかないとあって構想を聞か

ねばならず、シルクがルフィを見て尋ねる。その時にはもう頭に浮かぶ物があったようだ。
「それでどんなマークにするの？　やっぱりルフィが船長なら麦わら帽子にドクロかな」
「それいいな、そうしよう。おれたちのマーク」
「ちょっと可愛い感じになるかもしれないけど、そっちの方がらしいよね」
くすりと笑ったシルクが最初に描き始める。続いてルフィもしっかり構想ができたのか、喜々として描き始め、キリとゾロは考えながらペンを動かす。
航海中の船としては異例の光景である。
誰も舵を見ずにお絵描きに興じて、しかも四人が雁首揃えているのは新鮮だ。
奇妙な光景の中で、ぽつりとゾロが心中を吐露した。
「しっかしこの面子で絵ぇ描くなんざ大丈夫なのか？　いまいち得意そうな奴がいねぇが」
「それは言えてる。強いて言えばシルクが得意だって言うならわかるけど」
「う～ん、難しい……」
「おいキリ、おれだって得意だぞ。失敬だなおまえは」
「おまえが一番心配なんだよ」
時折言葉を交わしながらもそれぞれ集中して描く。
時間はそうかからず、次々完成していく。描き終わった絵は各々が一旦隠し、一斉に見せる手はずとなっていた。顔を見合わせてタイミングを計る。
不思議と一瞬息を呑み、ルフィが号令を取った。
「せーのっ」
声に従って一斉に紙を床へ置いた。
瞬時にそれぞれの絵を確認する。その際の四人の表情は同じではなかった。
ルフィは何も考えていないかのように笑っているが、キリとゾロの

眉間には皺が生まれ、シルクはふと目を伏せる。特に不思議な反応だったのがシルクだが誰も気にしない。理由はすでに目の前にあったからだ。
それぞれの絵を見れば、キリが描いたマークが最も上手だ。
そのまま旗に描き込めばジョリーロジャーとして掲げられるクオリティと見受けられる。
ゾロも彼ほどではないがそれなりの見栄えで、非難される物ではない。
問題なのは残りの二人。奇抜なというか、ある意味でセンスが優れているというか、子供が描いたようにも見えるし、とにかく目にするとぎょっとしてしまう物がそこにある。
からから笑うルフィとは対照的にシルクは恥ずかしそうに赤面していた。
予想外の出来栄えにキリとゾロはしばし顔を上げられず、まじまじと彼女の絵を見つめる。
「これは、ルフィは想像できたけど……まさかシルクまで？」
「おまえは普通だと思ってたんだがな。なんつーか、かける言葉が見つからねぇ」
「独創的、って言うのかな。こういうのは」
「と言うより破滅的って言った方が――」
「そ、そこまで言わなくてもいいじゃない！　人には得意不得意があるの！」
「あっひゃっひゃ！　シルクは絵がヘタだなぁ」
「笑わないでよ！　ルフィだって似たような物じゃない！」
騒ぎ出したシルクは敵意を剥き出しに抗議を始めて、冷静な姿ではない。
彼女自身、自分の絵がどんな評価を下されるか理解しているようだ。ほとんど何も言わない内から何も言うなという空気を醸し出し、珍しく拗ねてしまっていた。
思わず溜息をついてしまうのが二人。
予想外の結果とはなったが、とにかく何をすべきかは決まったの

だ。
旗にドクロを描くのはキリ。それだけわかれば十分だとキリとゾロはいそいそ準備を始めて、楽しそうにしているルフィは背を向けて膝を抱えてしまったシルクを慰めていた。
「人間、そうなんでもかんでもできねぇもんだな。改めて身に染みたよ」
「だね。まぁその分腕は立つからさ」
何も書かれていない黒い旗を持ち出し、船の中から見つけた白いペンキで早速描こうとする。それに気付いたルフィは今更になってキリが描くと知ったようで、膝立ちで近付いて来る。
「結局キリが描くのか。おれは？」
「ダメに決まってんだろ。おまえが描いたら海賊とは認めてもらえねぇよ」
「私は？」
「おまえはもっとダメだ」
「ひどいっ!?　えっ、私ルフィより下手なの!?」
また騒がしくなった三人を気にしないようにしつつ、キリは丁寧に描いていく。
一枚描いただけできれいに成功したようだ。
描き終わった旗を目にした三人は感心して声を漏らす。
麦わら帽子をかぶった骸骨と、その背後で交差する骨が二本。
様になった姿で頬が緩み、彼らも納得した顔だった。
「できた。後はこれをマストの上に掲げれば海賊船の完成」
「よし、おれが行ってくる」
旗を持ったルフィが威勢よく告げ、腕を伸ばした。メインマストにある展望台を掴み、しっかり力を入れたままで腕を縮めて、慣れた調子で跳び上がった。
一番上まで登って旗をつける。
風にたなびいた旗は海賊らしさを見せて、ようやく気分が変わった気がした。
ルフィもすぐに降りてきて四人並んで頭上を見上げる。

掲げられたジョリーロジャー。麦わら帽子をかぶったドクロは彼らだけのもの。四人が海賊であることを示し、また仲間であることを告げる印だ。
些細な変化ながら気分も新たに、腰に手を当てたルフィが笑う。
「これでやっとおれたちも海賊らしくなってきたな」
「とはいえ、船は乗り換える予定だけどね」
「それでもいいよ。一歩前進したって感じがして」
「だがこの程度で喜んでられねぇぞ。海賊王を目指すんならな」
表情も四者四様だが、気分が良いのは変わらない。
広々とした船に四人が並んで立ち、同じ旗の下、航海する。前々から海賊だと名乗ってはいたものの今になって本物になれた気がする。
今日はいつもと違う。
不意に肌を撫でる風は非常に心地良かった。

＊

夜になった頃には航海を中断し、帆船は大海原で足を止めて休息を始めた。
敵から奪った船であるため荷物もそのまま。前の町で用意した自分たちの食料とガイモンにもらったフルーツに加え、大勢の乗組員のためだろう食料は四人のための物となっている。いつもより少し豪勢に、それでいて今後のためを考えながら、船室ではキリの料理が披露されていた。
「うんめぇぇ！　キリのメシはやっぱうめぇなぁ」
「すごい。フルーツをソースにしたの？　よく考えたねキリ。これってレシピがあったの？」
「ううん。思い付き」
磨かれた皿に置かれた彩りは美しく、肉や魚や野菜が様々な姿となって用意されていた。それだけでなくガイモンにもらったフルーツも早速利用されていたらしい。
ルフィは喜々として食し、シルクも思わぬ技術に感心しきりだ。

傍ではゾロが焼き魚に舌鼓を打ち、空になった彼のジョッキにキリが酒を注いでやる。
小舟で航海していた頃とはやはり違う。
テーブルがあって椅子があって、体をのびのび動かせるのが嬉しい。そういった面では船を手に入れられたのは僥倖だった。
落ち着いた食事風景は彼らの英気を養い、疲労を忘れさせて心をリフレッシュさせる。
しかしそれだけに気になることもあったようで、シルクはふと昼の出来事を思い出した。
この船を元々使っていた人間たちが居て、今頃彼らは海に落とされ、近くの無人島まで泳いで行ったことだろう。それが珍獣島の可能性もあった。
人の物を奪って自分たちの幸せがあるのだ。
悪いことをした。そんな自覚がずっと胸の奥から離れない。
「本当においしいけど……いいのかな、こんなことしてて」
「ん？　どしたの急に」
隣に座ったキリがいち早く反応する。話は聞いているがルフィもゾロも手を止めなかった。
フォークを置いたシルクは思案する顔でぽつりぽつりと呟く。
つい最近までただの町民として育っていて、海賊を名乗り始めてたった数日。意識が変わるのはそう簡単ではなく、罪悪感を捨て去るのは難しい。
他の三人はそうではなさそうだが性別の違いだろうか。或いは育った環境か。
思い悩むシルクは俯きがちに話し始めた。
「私、町を襲う海賊が嫌いだったはずなのに、気付けば同じことやってる気がして……結局力ずくで奪ってさ、そんなに違わないよね。これでいいのかなと思って」
「相手が武器を持たない町民ならそう思っても無理はないけど、今回の相手が海賊なら話は変わってくる。他人から奪う覚悟があるなら奪われる覚悟を持ってるのが通例だ。海賊やってるなら自分がど

んな目に遭っても構わないぐらいの気持ちがないと。今回の一件であいつらがびーびー泣いてるようなら向こうが悪い」
「そういうものかな……」
「というより、そう思ってないとやってられないでしょ。心配しなくてもあの姿のガイモンさんが二十年生き延びたんだからそう簡単には死なないよ」
「うん……そっか」
キリの勧めに従い、納得することにする。
町民と海賊の違い。それを理解して海賊という自覚を得る必要があるのだろう。
シルクは、彼ら三人と自分の違いは自覚の差だろうかと考える。己が海賊だという覚悟、町民とは違うのだという感覚。いい加減自分を海賊だと認めなければいけない。
結局は自分の甘えなのだと思って小さく嘆息する。
ルフィとゾロはまるで気にした様子もなかった。
「キリ、肉おかわり！」
「おれも酒」
「君らもたまには自分で動くってのを覚えなよ。キッチンにあるから取ってきな」
「はーいっ」
席を立って陽気に駆けていくルフィとマイペースに歩いていくゾロの背を見送る。そんなキリに再びシルクが静かになった声で言った。
「ねぇキリ。ルフィとゾロは、強いよね」
「え？　うん。強いよ」
「キリも強いし、料理もできて絵が描けて、航海術も持ってて頭がいいし」
「全部浅くかじっただけだよ。専門家にはどうしたって勝てない」
「私、みんなの役に立ててるかな」
少し落ち込んだ表情でシルクが伝える。
思い悩む様子はありありと伝わって、キリも真剣な顔になった。

「町を守るために剣の修行ばっかりやってきたんだ。そのせいかはわからないけど、料理もできないし、絵だって下手だし。だけど、三人とも私より強いでしょ？　このままじゃ私、足手まといになっちゃうんじゃないかって……みんなの役に、立てないのかな」
「そんなことないよ。シルクはウチの一味に必要だ」
「でも」
「何も強いから仲間になるのを認めたわけじゃないと思うよ、ルフィは。役に立つとか立たないとか、多分そんなのは二の次で、一味に加わる資格があるから頷いたんだ」
「資格って？」
「それは本人に聞かなきゃわからないけど、ボクはシルクが居てよかったって思ってる。さっきの島でだってさ、ルフィ一人で行かせてたら一日中迷いっぱなしだったよ、きっと。些細なことかもしれないけどちゃんと役に立ってるじゃないか」
キリが微笑みかけて言えば、シルクは目を大きくして驚く。
本当に些細なことだ。誰にでもできそうだとさえ思う。
それなのに彼は必要だと言ってくれるのか。
「腕っぷしは強いかもしれないけどあの二人だって完璧じゃない。もちろんボクも。ルフィは強いだけで、方向音痴だし料理もできないし絵も下手だ。ゾロはゾロで方向音痴らしいし、ボクにだって弱点はある。仲間ってそういうお互いの足りない部分を補い合う存在じゃないかな」
言葉を失ってしばし沈黙する。
気負い過ぎていた、ということだろうか。他人を羨んで大事なことを忘れていたかもしれない。
腕っぷしでは敵わない。ならば何で役に立てるだろう。
シルクは真剣に考え始めた。
「ルフィが選んだ面子なんだ。一緒に旅してる仲間に必要ない人間なんていないよ。みんなもう大事な仲間でしょ。悩むことを悪いなんて言わないけど、もうちょっと気軽に考えたら？　どうせこの旅は長くなる。自分の役割とか何ができるかなんて後々考えて行けばい

いよ」
「――うん。そっか」
今すぐに答えは出せないだろう。だけど気は楽になった気がする。
シルクは晴れ晴れとした顔で微笑み、時間をかけて考えてみることを決めた。
彼らには何ができて、何ができなくて、自分が彼らを助けられる場面とはどんな瞬間か。考えてみなければならない。幸いルフィが海賊王になるまで時間はある。航海が長いと言うならば、様々な冒険を経て得られる物がきっとあるだろう。
迷いが消えてようやく落ち着けそうだった。
「キリ、ありがとう。ちょっと楽になった気がする」
「それは何より。まぁあの人たちが強過ぎるからそりゃ流石にへこむ――」
やっとシルクが笑みを浮かべられた後、隣接するキッチンからボンッと爆発するような音が聞こえてきた。嫌な予感がして二人は慌ててそちらへ向かう。
扉を開けると黒い煙がもうもうと立ち上り、極端に視界を狭めている。
何事なのかと奥へ進めばルフィが火を使っていたらしい。
料理を温めようとしたのだろう。しかし何がどうなればこれほどの煙を生み出せるのか。
煙を払いながらキリが二人へ近付いた。
彼らは予想外に慌てていなくて、ゾロは酒瓶に直接口をつけて酒を飲んでおり、ルフィは実験するかのようにコンロに向かっている。真剣な顔なのがむしろふざけているようにも見えた。
キリは溜息をつき、シルクは呆然とした表情。
頭を抱えた彼がやれやれと頭を振る。
「何やってんのルフィ。ものすごい煙だよ」
「おぉキリ。メシがちょっと冷めてたからあったためようと思ってよ。そしたらこうなった」
「爆発でもさせた？　普通こうはならないと思うけど」

「そうだよなぁ。きっと不思議コンロだ」
「いや、間違いなく君の手順の問題だと思う。ハァ、やっぱり自分でやるべきだった。これからは料理のことはボクがやるよ」
「ほんとか？　いやぁよかった。おれがいじったら船燃えそうだもんな」
「わかってるなら呼んでよ。事情が事情ならちゃんとやるから」
ちょっと目を離した隙にこれである。全く油断も隙も無い。
想像通り、彼らは戦闘に参加すれば誰にも負けないほどの力を発揮するが、日々の生活に必要な技術はまるでだめだ。ただの日常生活で自身の船を破壊する可能性さえある。
能天気に笑うルフィ。文句を言いながら世話を焼くキリ。我関せずと楽しそうに酒を飲むゾロ。
個性的な面子で確かにそれぞれ得意なものと不得意なものが違っている。
その光景を見ればキリが言った言葉が先程以上に体の中へ浸透してくるようで、不思議と胸の中が熱くなった。くすくす笑うシルクは彼らの仲間なのだと自覚して嬉しくなる。
入り口に立って少し距離を置き、背面で手を組んで、俯瞰的に仲間たちを見つめてみる。
そうしているのが妙に楽しかった。
「あっ、ほらルフィ、焦げてるよ。どんな火力で熱したんだよ」
「普通にやったぞ。ゾロも見てたよな」
「まぁ手順は普通だったがなぜか爆発しやがったな」
「ある意味才能だね……」
「うーん、おかしいなぁ。よし、明日はおれが作ってみるか」
「それだけはやめて」
「おれからも頼む」
黒い煙の中で話し合う彼らは良くも悪くも能天気でマイペースらしい。
冷静になって見てみれば役に立てそうだとは思えた。考えるより先に行動するルフィはサポートのし甲斐があるし、あのキリでさえ時

には面倒だと投げ出す時がある。ゾロに関してはいまだわかっていることが少ないものの、冷静に周りを見ている時があれば我関せずといった態度もある。

纏めることは不要でも手助けする人間は必要だろう。

自分は仲間を助けられる海賊になろうと、この時シルクは決めた。

まず最初に、明日からはキリを手伝って料理を覚えよう。なぜか料理を覚えることに対してやる気を見せ始めてしまった船長の真剣な顔を目にして、そう決めた。

オレンジの町

「島が見えたぞォ～！」

日の出と共に航海を再開し、海の上での停泊を終えてから約二時間。

朝の間に島を見つけたルフィは船の先端から大声を出した。

舵輪を握っていたキリは当然気付いていたとして、船内のキッチンで皿を洗っていたシルクや、甲板で昼寝していたゾロもルフィの声に反応する。

皆、前日とは服を着替えていた。

そう提案したのは唯一の女性であるシルクだ。いくら船上の生活でも体を清潔に保つのは必要だろうと、毎日の風呂は勧めずとも服装くらいは変えた方がいいとの進言があった。

ルフィは前日の物とは少し形が違う膝丈のジーンズを履き、フードがついたノースリーブの赤いシャツを着ている。いつも通り麦わら帽子をかぶって楽しげだ。

シルクは長袖のTシャツを着て肘まで袖を捲り、脚を見せるショートパンツ。

キリは白いパーカーと黒いジーンズ。今日は靴ではなくサンダルを履いている。

ゾロは暗い色のカーゴパンツに青いシャツを身に着け、前を開いて厚い胸板を風に晒していた。いつもの如く緑の腹巻も外していない。

服装が変わっただけで前とは見栄えが全く違う。

一同は甲板の上に集まり、一様に前方の島の姿を確認した。

「ようやくで次の島か。ちゃんと町はあるんだろうな」

「気になるなら確かめてみれば？　あそこならご所望の物も手に入ると思うよ」

後からやってきたキリがゾロへ望遠鏡を投げて寄こした。受け取った彼はそれを覗き始める。

キリはそれを使ってすでに町があることを確認した。

正面にはちょうど船が入りやすい場所がある。このまま真っ直ぐ

進めば港へ辿り着いて町へ入れるだろう。そうすればゾロが好きな酒の補充も、ルフィが求める肉も買い込める。
ただそれはあくまでも何もなければの話。
望遠鏡を下ろしたゾロは訝しむ顔で呟いた。
「確かに町はあるな。だが妙なもんも見える」
「どうしたの？」
「ありゃあまさか、海賊船じゃねぇか？」
尋ねたシルクに望遠鏡を手渡しながら答えられた。
すぐに彼女もレンズを覗いてまだ遠い島を確認する。一目瞭然、港には大きな帆船が停まっていて商船の類には見えない。
装飾は独特だがどうも海賊船に思えた。
念のためにメインマストの天辺を眺めてみれば風にはためく旗は黒。
間違いなくジョリーロジャーを掲げていて、町に海賊が入っていることがわかった。
「本当だ。あれ、多分海賊船だね」
「襲撃中かもな。こりゃあのんきに買い物してる場合じゃねぇぞ」
「うん……やっぱりこういうのは日常的に起こってるんだ」
望遠鏡を下ろしたシルクがぽつりと呟く。
思い出すのは自身が住んでいた町の姿。ルフィたちが来たおかげで危ういところを守ってもらえたが、あんな偶然はどこにでもある訳じゃない。平和だと言われるイーストブルーでは比較的数が少ないだけ。世界的に見れば海賊の略奪に涙する者たちが多いのが現実だ。
彼女の視線はルフィへ。真剣な表情で言う。
「ねぇルフィ。何も起こってなければそれでいいけど、もしあの町が襲われてるんなら、助けてあげようよ。じゃないと私、何のために海賊になったのかわからない」
「ん？　いいぞ」
「んな簡単に決めていいのかよ」
「シルクはピースメインになるためにうちに来たからな。これで見逃してたら一生ピースメインになんかなれねぇだろ」

「ありがとう、ルフィ」
「いいさ。気にすんな」
あっさりした様子で作戦会議は終わったらしい。呆気ない姿にゾロは理解に苦しむ。すると彼の隣に並んだキリが二人のやり取りに補足するように言った。
「古い話でね。相手を選ばずただ略奪を繰り返すのがモーガニア。そのモーガニアを専門に狩るのがピースメイン。昔の海賊はそう呼ばれてた」
「なるほど。海賊を狙う海賊か」
「そう言えばゾロも海賊狩りって呼ばれてたし、奇遇なもんだね」
「フン。別に望んだ名じゃねぇがな」
話している間にも船は進み、徐々に陸地が近付いて来る。
キリの指示に従って全員が着港準備に入った。
張っていた帆を畳み、速度を落としてゆっくり港へ侵入する。辺りに人の姿はないらしい。大型の帆船がやってきても町は奇妙に静まり返っていた。
無事に船を停泊させることができた。タイミングを見計らってゾロが錨を下ろす。
全ての工程を終えて停泊が完了しても町の人間の姿は見えず、驚くほど静かな街並みに違和感を持つ。やはり近くに停まる海賊船が理由となって静まり返っているのだろう。改めて旗を確認すればドクロマークも確認できる。
状況を見れば良くない事態なのは簡単に理解できた。
一同はひとまず甲板で集まり、町へ出る前に話し合いの場を設けることにした。
皆の顔を見回して口火を切ったのはキリだ。
「やっぱり妙だね。あまりにも静か過ぎる」
「だけど攻撃されてる様子もないよ」
「どっかを占拠して集まってる可能性もあるな。前に捕まえた奴らもそうだった」
「んじゃ探してみっか。多分その辺にいるだろ」

早々に告げてルフィは歩き出してしまうのだが、あいにく三人は真剣に話している最中。予想外な行動を取った彼に気付けず深く思案してしまう事態となった。
「まだ確定したわけじゃないけど、この活気の無さを見る限り襲撃はほぼ間違いないと言っていいと思う。問題はどうやって海賊を排除するかだ。望遠鏡で確認したら向こうの船に人気はない。多分全員か、そうじゃなくても大半が町に居るだろうね」
「よっぽど自信があるか、もしくはバカかのどっちかだな」
「キリ、マークで敵が誰かわからないの？」
「う～ん、どっかで見た気がするんだよなぁ……あの赤っ鼻」
問われたキリは目を閉じて考えていた。
確認したジョリーロジャーには特徴がある。ドクロに鼻がついていてそれが赤くて丸いのだ。
それだけ珍しい身体的特徴は手配書を見た時に確認した気がするものの、なぜか思い出せない。
思い出せそうで出てこない感覚が気持ち悪く、喉の奥に何かがつっかえた感じを味わい、困った顔になるキリは思い悩む羽目になった。
しばしキリが話せなくなったため、自然とシルクとゾロが目を合わせる。
こちらは四人。対して敵船は大きく、船員も多そうだ。
確実に人数の差はあるだろうと理解しつつ、正面衝突は避けるべきではないかと考える。しかし慎重に行動しようとするシルクの考えに対して、ゾロは正反対の考えだった。
「これからどう行動しようか。敵の人数もわからないし、とりあえず町の人に会って情報収集からした方がいいんじゃない？」
「面倒だ、正面からやっちまえばいいだろ」
「それじゃ危険が大き過ぎるよ。ケガする可能性だって高くなる」
「時間をかけりゃそれだけ町の被害が増える可能性もあるぜ。その前に敵を斬っちまった方が早く済むだろ」
「それはそうかもしれないけど……」
「こんなとこで負けるようじゃ海賊王も大剣豪も夢のまた夢だ。

突っ切って勝つ」
意見が割れて二人ではどうしようもなくなった頃、悩むのをやめたキリが顔を上げる。
結局思い出せない。よって考えることをやめた。
いつもの緩んだ微笑みを見せる。その顔を見て二人は同じタイミングで理解した。
この表情の時、彼はきっと何も考えていないと。
「あーだめだ。やっぱり思い出せない。よし、じゃあとりあえず行こう」
「お前、おれたちの話聞いてなかったのか」
「今作戦を立てようって話してたんだよ」
「へぇ、そうなんだ。ところでルフィは？」
今になってルフィの不在に気付いたらしく、辺りを見回した三人は肩を落とす。
気をつけようと思っていたのにこれだ。目を離してはいけないと思っていたのに、気付けば居なくなってしまっている。
ルフィも含めてお互い変化がないことを自覚して多少なりとも落ち込んだ。今でこれなら一体これから何度繰り返すのかわからない。
ゾロは呆れた顔で、シルクもやれやれと首を振る。
そんな状況でもすぐに気を取り直してキリが肩をすくめた。
「またこうなるのか。しょうがない。状況もわからないからとりあえず町へ入って行動しよう。ボクがルフィを探すから、二人は町を調べてくれる？」
「わかった」
「もし敵に会ったら？」
「暴れていいよ。ただし本隊にはバレないようにね」
「難しい注文だな。まぁ、問題ねぇ」
好戦的な笑みを浮かべて答えたゾロに頷き、次いでシルクを見る。
真剣な彼女もまた何かを察した様子で頷いた。
「ゾロのことよろしく。特に迷わせないようにね」
「うん。任せといて」

「人のことばっか言ってんじゃねぇよ。ルフィも同じだろうが」
文句をぶつけてくるゾロに笑顔だけを返し、先にキリが船を降りていった。その後で二人も港へ降りて町を見る。キリは先に通りを歩いていて、声をかける人影など一つもない。
大きな町だった。それなのに静か過ぎる。
その静寂はいっそ恐怖を感じるほどで、シルクは腰に差したサーベルを確認しつつ不安を抱く。
ルフィたちがタイミングよく島を訪れなければ、彼女の故郷もこうなっていた。或いはこれよりもひどい可能性だってある。たまたま漂流してきただけだったが今にして思えば本当に救いだ。
だからこそ気合いを入れ直す。
今度は自分が、この町の人にこれ以上嫌な想いはさせない。
力を漲らせてシルクが歩き出し、少し遅れてゾロも隣へ並んだ。
目にする横顔は真剣そのものだが体に力が入り過ぎているような気がして。
町を眺めながらゾロがぽつりと口にした。
「あんまり力入れ過ぎんなよ。もしもの時に反応が鈍くなる」
「あ……うん。ただ、この町を見るとどうしても緊張しちゃって」
「あいつらに故郷を守ってもらったって話か。色々思うところあるだろうが集中しろ。海賊を追っ払おうって言ったのはおまえだ」
「そうだよね。うん、一旦落ち着こう。このままじゃみんなの役に立てないよね」
歩きながら深呼吸して気持ちを入れ替える。
真剣な状態と緊張は違う。無駄な力が体にあれば十全の力を引き出すことなど不可能だろう。
強くなりたいと思ったばかりなのだ。これではいけないと肩の力を抜く。
わずかではあるものの顔つきは変わった。
にこりと笑ったシルクはゾロへ笑顔を向けて、自然に礼を言う。
「ありがとう。心配させたかな」
「別にそういうわけじゃねぇが。足手まといになられても困るんで

な」
「大丈夫。それだけはないように気をつけるから。自分の身を自分で守れるだけでも、ゾロは思う存分戦えるもんね」
「まぁな……」
ゾロが気まずげに頭を掻いた。
珍しい表情を目にして不思議に思ったところ、そっぽを向きながら言われる。
「おまえは真面目過ぎんだよ。少しはあいつらを見習ったらどうだ」
「いいの？　あの二人を見習っても」
「……よくはねぇな。厄介なのは二人でも多いくれぇか」
「ふふ。でもそうだね。もうちょっと気軽に考えた方がいいのかな」
誰も居ない大通りを歩いて、十字路へと差し掛かる。
その時、穏やかだったゾロの目が突然鋭くなった。
腰の右側に提げた刀へ手を伸ばし、臨戦態勢と思える姿勢。いつでも刀を抜ける状態で一方向をじっと眺める。その変化には当然シルクも気付いていた。
「どうしたの？　敵？」
「かもな。誰か居る」
視線が向けられたのは左手にある曲がり角。違和感を感じたのはそこだった。
気配を感じたのだろうと信じてシルクもまた柄を掴み、いつでも抜けるよう身構える。
敵は確かにその曲がり角から飛びだしてきた。
ただ一つ予想が違ったのは、どう見ても海賊ではなく、申し訳程度に武装した町人らしき人物。しかも老人だ。髪は白くなって体は細くなり、顔には皺も見える。
戦えそうにない風貌の男が槍を持って立っていた。
ゾロとシルクは警戒をやめて、そっと武器から手を離す。
「海賊どもめ、わしらの町に立ち入るな！　これ以上何を望む！」

「誰だ、あのおっさん」
「町の人だとは思うけど……警戒されてるね」
「そりゃ襲撃受けてんなら当然の行動だろ」
槍の切っ先が向けられた状態で言葉をぶつけられていた。
冷静さは感じられず、大きな怒りだけを感じる。物々しい雰囲気は彼によって醸し出されて、たとえ二人が話し合いに応じようと考えても受け入れてはもらえなさそうだ。その様子を見ていても海賊の襲撃は起こっていたのだと判断できる。
シルクとゾロは武器を下ろして戦意がないことを伝えようとするも、老人の怒りは収まらない。
町人に襲われかけるというまさかの事態に、思わずシルクは慌ててしまった。
彼を落ち着かせる必要がある。
シルクが前に出てゾロを隠すようにしながら、危険でないことをアピールし始めた。
その後ろでゾロは表情を変えることなく腕を組む。
「この町はさながらわしらの宝！　もう好きにはさせん、たとえわしの命に代えても！」
「ちょ、ちょっと待ってください。私たち確かに海賊ですけど、この町を襲った奴らじゃ――」
「無理だな。完全に目が血走ってる。落ち着いて聞いてくれってのも無理な話だ」
ぎこちない動きで槍を回し、再び構えて男が走り出した。
素人が扱う様は達人が使うよりも危険だろう。放っておけば彼ら二人はおろか、持っている本人さえも傷つけかねないと考え、仕方なく溜息がつかれた。
咄嗟にゾロが前へ出る。
「町長はこのわしじゃ！　何も知らん小僧どもの好き勝手にさせるかァ！」
「へぇ、おっさん町長か」
馬鹿正直に正面から走ってくる様はどう見ても素人。武術を扱う

者ではない。
一気に距離が詰められ、全力で槍が突き出される最中も、ゾロは笑って彼の言葉を聞いていた。
真っ直ぐに頭を狙った槍を回避し、瞬時に懐へ潜り込んで、おもむろに柄が掴まれる。腕力の差はあった。ゾロは迷わず彼の槍を持って体を捻りながら思い切り引っ張る。
頑として槍を手放さない町長を武器ごと背負い投げたのだ。
勢いよく背中から地面に叩きつけられた町長は息を呑み、呼吸が乱される。
痛みが全身へ広まってすぐには動けないらしい。
町長はその場でぐったり倒れ、一瞬の攻防とはいえ人が投げ飛ばされる光景を見たシルクは慌てふためいた。あれではダメージも相当だろうと思えたせいだ。
一方でゾロは全く心配する素振りさえ見せず、奪った槍をその辺へ捨てている。
荒々しい方法だったがひとまず危機は去った様子だった。
「うぅっ、ゲホッ――」
「ちょっとゾロ！　やりすぎっ！」
「これくらいやらねぇと頭に血が上ってしゃべれねぇだろ。死にゃしねぇよ」
放り捨てられた槍がカランと音を立てて転がる。
痛みを堪えて目を開けた町長の視界に、覗き込んでくる顔が二つ。
しゃがみ込んで心配するシルクとは対照的に、冷ややかな目を向けてくるゾロは腕組みし、強かな態度で声をかけてきた。
「今ならおっさんを殺せたが、おれたちはそうしなかった。ちょっとは理解できたか？　おれたちは敵じゃねぇ」
「もう、荒っぽいんだから。違う方法だってあったんじゃないかな」
「こうしなきゃおれたちが刺されてた」
「確かにそうだけど……あの、大丈夫ですか？　心配しないでください、私たちはあなたの味方です。この町を襲ってる海賊をやっつけに来ました」

「お、お前たち、さながら奴らの仲間じゃなかったのか」
シルクの手を借りながら起き上がり、その場で座った町長は潔く頭を下げる。
危うく無関係の人間を殺してしまうところであった。
土下座せんばかりの勢いで、後悔を抱いて謝罪の言葉が告げられる。
「申し訳なかった……！　わしはてっきり、あの道化のバギー一味かと」
「道化のバギー？」
「それが町を襲った連中か」
「そうじゃ。ある日突然やってきて酒場に陣取り、わしらから金品を巻き上げた。町民は避難させたため被害は少ないが……町はそうもいかなかった。奴らは強力な砲弾を使い、家屋をいくつも吹き飛ばしてわしらへの威嚇とし、抵抗を封じ込めたんじゃ」
頭を垂れて語る町長を目の当たりにし、シルクの表情は暗くなる。
やはりこれが海賊だ。ルフィたちがどれだけ異質かよくわかる。
無力な町民は暴力に屈して逃げ出す他なく、たとえ宝の如く町を大事に思っていても、それを守る力と手段がない。だから涙を流して耐え忍ぶことしかできないのだ。
痛いほど拳を握り締めて歯を食いしばる気持ちは、嫌というほど伝わった。
彼女はそっと町長の背に手を添え、安心させるようにやさしい声で言う。
「安心してください、もう大丈夫です。私たちがなんとかしますから」
「なに……？　そうじゃ、お前たち連中を倒しに来たと言ったのか？　一体何者……」
「私たちも海賊なんです。ただし船長は別の人。無抵抗な人たちを襲ったりしない人なんです。彼ならきっと助けてくれるはず」
にこりと笑う彼女の言葉はにわかには信じ難く、町長は言葉を失った。

それでも気にせずシルクが語り掛ける。
「私の宝も彼らが守ってくれたんです。だから今回もきっと大丈夫」
「う、うむ。そうか……」
妙に力強く言われたことで半ば無理やり頷かせられたが、まだ理解は及んでいない。
困惑する町長から目を離したゾロは無人になった町を見ながら呟く。
「ま、それもあいつらと合流できればの話だけどな」
今はこの場に居ない二人を思えば溜息が出そうになる。
彼らが単独で動いて問題を起こさず合流できる可能性がどれだけあるだろう。ルフィがどこで何をしでかすかわからないのはすでに理解したし、キリでさえ勝手に海辺で転んで死にかけるような人間だ。一口に信用できるとは言えない性質である。
果たしてこの町を出るまでにいくつの事件を起こすのか。
彼らを理解しつつあったからかすでに心配事が思考を占め、ゾロは我慢できずに溜息をついた。

海賊専門の泥棒

目的地も決めずにとりあえず動き出したルフィは無人の町に嘆いていた。
食事ができる店、或いは肉屋でもあればと歩いていたがそんな物は一切見えず、看板があったとしてもシャッターは下りたまま。人っ子一人見えずに空腹を満たせそうにない。
「どこも閉まってんなぁ。これならキリに弁当作ってもらえばよかった」
草履で歩く音がぺたぺたと妙に大きく聞こえ、この場にどれほど音がないかよくわかった。
喧騒のない町とは寂しいものだ。
どれだけ歩いても食事にはありつけず、笑顔を見るどころか人に出会うこともない。
しばらくすれば退屈だと感じるのも無理はなかった。
町民にも出会えず、敵の海賊も見つからず、船へ戻ろうにも道はわからない。ついに困り果ててしまったルフィは歩みを止めないまま腕組みして口を尖らせた。
全く困った姿に見えないがきっと困っているのだろう。
呑気に呟く彼は少なくとも慌ててはいなかった。
「いやぁーまいった。適当に歩いてりゃ見つかるかと思ったけど見つかんねぇな。やっぱキリと一緒に動いた方がよかったかな。全然道わかんねぇや」
話す相手もいないためぶつぶつ呟いて歩いていた。
特に理由も無く角を曲がって右手にあった道へ入る。
ちょうどその時、目の前の通りを横切っていく人間を数名見かけた。ようやく自分以外の人間を見つけたルフィはパッと笑顔を咲かせ、早速追うことに決めた。
「しっしっし、やっと誰か見つけたぞ。敵かな？　それか町に住んでる奴かな？」
機嫌よく駆け出して路地を出て、通りに出た途端に件の人間の背中

を見つける。先頭を走るのは少女で、他の三人は男だ。何やら慌ただしい様子である。
そこには緊迫したムードもあったはずだがルフィは受け取らず、走って追いかけ始める。
何も気にしないのか手を振りながら声さえかけ始めた。
「おーいっ！」
声に気付いた男たちが振り返る。眉間に深い皺を刻み、決して友好的な態度ではなかった。
「あぁん？　誰だあいつは？」
「知らねぇ。町の奴じゃねぇのか」
「とにかく今はあの女だ！　早く海図を取り戻さねぇと大目玉喰らうぞ！」
走りながら振り返った男たちだが足は止めず、どうやら必死で少女を追っているらしい。すぐに視界からルフィの姿を消して逃げる背に集中した。
よほどの理由があったようだ。
声は少女にも届いている。
彼女も同じように振り返り、ルフィの姿を確認した直後、ふわりと笑顔を見せた。
息を切らしながらも必死に足を動かして逃げていたはずが、唐突にその場で立ち止まり、体ごと振り返ってルフィを見る。そして胸に丸めた紙を抱きながら叫んだ。
「お、親分！　早く助けてください！　命令通り取ってきましたからっ！」
「なにぃ？　親分ってのは……」
三人の男たちもまた足を止め、追いついて来るルフィを見る。
傍に来て立ち止まった彼は笑顔のまま、恐怖心もなく気軽に強面の彼らへ話しかけた。
「やっと人に会えた。なぁ、この町に来た海賊ってどこにいんだ？　あとメシ食えるとこ教えて欲しいんだけどよぉ」
「親分、か」

「ただのガキじゃねぇか」
「つまりこいつが海図を盗むように言いやがったわけだな」
「ん？　なんだ？」
サーベルを手にした男たちは見るからに威圧感を発して彼に迫る。
剣呑な雰囲気は察したがルフィの顔つきは変わらない。
おもむろに男の一人が腕を振りかぶって剣を振るおうとしても表情は変わらなかった。
「面倒なことしてくれやがって。おれたちがバギー一味だってわかってんのか！」
思い切り剣が振るわれた。攻撃というより彼の間抜けな麦わら帽子を弾き飛ばそうとする動き。それをルフィは背を逸らしただけで回避する。
反射的に拳を握って一撃。
腹を殴られた恰幅の良い男は凄まじい痛みを感じ、一瞬で意識が混濁した様子だ。
膝から崩れ落ちて動かなくなってしまう。
鳩尾に喰らって一瞬で決着はついた。残る二人の男や少女は信じられない物を見る目でルフィを見ており、本人は左手で大事そうに帽子を押さえ、少し怒った表情だった。
「なにすんだ。おれの宝だぞ」
「て、てめぇ！　いきなり何やってんだコラァ！」
残る二人が怒りを露わにルフィへ殺到する。
明らかに武器を振り上げて彼の命を奪うつもりであり、そこに迷いは微塵も見られなかった。
思わず少女は反応しかけるも、それより先にルフィが動く。
決着は一瞬でついた。襲い掛かる右側の男の顔を殴り、左側の男は顔面を蹴られる。
たったそれだけで彼らは倒されたのだ。
力の差があり過ぎる。無手でサーベルを相手に無傷で勝つなど普通ではない。外見からは想像もできない強さが今の彼からは窺え、驚きを抱かずにはいられなかった。

呆然として、思わず思考が停止する。
あっさりした決着はそれほどの衝撃を伴っていたようだ。
しばし静観していた少女は意を決して彼に歩み寄る。
想像以上に使えそうだ。彼ほど強い人間なら使い道はあるかもしれない。
胸の中には密かな策略を忍ばせ、親しげな声で話しかけた。
「すごいわね。一人でこいつら倒しちゃった」
「誰だお前」
「私はナミ。海賊専門の泥棒なの。ねえ、手を組まない？」
「んん？」
唐突な提案だった。
ルフィは訳も分からずに首をかしげ、ほくそ笑む少女の顔をじっと見つめた。

＊

場所を移し、二人は倒れた男たちから離れて、一軒の家屋に入っていた。
先に家へ入ったのは見知らぬ少女。
オレンジ色の髪のショートカットと、Tシャツとミニスカートというラフな服装に身を包んで、とても海賊には見えない。ただルフィへ対する態度は決して恐怖を持ち合わせなかった。
少女はナミと名乗った。
ルフィを先導してリビングに入ると椅子を勧め、自身はその前に置かれた椅子へ座る。腰を落ち着けたところでルフィが口火を切った。
「ここお前の家か？」
「違うわ。だってこの町の人間じゃないもん」
「いいのかよ、勝手に入っちまって」
「どうせ何も取らないし別にいいでしょ。ちょっと場所を借りるだけ」
ナミは真剣な様子でテーブルに一枚の紙を置いた。

「それより取引よ。私、欲しい物があるの」
聞いているのかいないのか、ルフィの反応は思いのほか悪い。
ナミの声は聞こえていたはずだがだらしなく座ってのんきな表情だ。
「それよりおれ腹減ったよ。お前なんか作れねぇか？」
「あのね、今から大事な話をするの。少しくらい集中できない？」
「メシがねぇんだったらいいよ。おれ難しい話だめだからキリに言ってくれ。それにお前と組むつもりもねぇしな」
「あっ、ちょっと」
何か気に入らないことでもあるのか、ルフィは席を立つと家を出ようとしてしまう。慌てて止めるための声を出さなければならなかった。
彼女にはどうしてもやりたいことがある。この町で、或いはその先で。
見知らぬ人間ではあったもののここで可能性を捨てる訳にはいかなかった。
「わかったわ、料理なら私が作ってあげるから話を聞いて」
「ほんとか？」
「その代わりちゃんと協力してよね」
仕方ないといった顔でナミが立ち上がり、家の奥へと向かう。
何気なくルフィも様子を見に行けば、キッチンに入った彼女はいくつかの棚や冷蔵庫を漁り、食材を見つけて料理を始めていた。
泥棒と名乗ったことに嘘はないらしい。
キッチンの入り口に立つルフィはテキパキ手を動かす彼女へ言う。
「ここお前の家じゃねぇんだろ？　じゃあ空き巣か」
「違うわよ。私は海賊専門の泥棒。海賊以外からは盗まないわ」
「今盗んでんじゃねぇか」
「仕方ないじゃない、わがまま言ったのはあんたでしょ。嫌なら今すぐやめるけど」
「それはだめだ。おれは腹が減った」
「だったら余計なこと言わないで。こっちだってこんなことしてる

場合じゃないんだから」
コンロの火を使い、熱されたフライパンにベーコンと卵が落とされる。ジュージューと耳に心地よい音が聞こえて徐々に匂いも漂ってきて、ルフィはいよいよ腹の虫を鳴らす。
一方で彼の目は彼女を気にしていた。
疑問を持つからこそ素直に質問をぶつけ始める。
「お前、なんで泥棒なんかしてんだ？」
「なにそれ。関係ないでしょ」
「だって海賊専門だろ？　この町誰もいねぇから盗み放題なのにさ、そっちの方が簡単だろ。なんで海賊しか狙わねぇんだ？」
「そんなの簡単。海賊が大ッ嫌いだからよ」
端的に言われたが今の一言には複雑な感情が乗っていた。
ルフィはじっと彼女を見る。
「おれたちも海賊だぞ」
「はぁ？　嘘つかないでよ。あんたみたいな海賊居るわけないでしょ。全然見えない」
「本当だ。船も旗もあるんだぞ。まぁ船は奪ったんだけどな」
「はいはい。そういうのは別にいいわよ」
ルフィの言葉を聞いてナミは信用しなかった。手を組むとは言ったがそこまで深い関係になるつもりはないのかもしれない。或いはまだ信用し切れていないのか。
料理を続ける手だけは止まらず、律儀な面は見られるものの、表情はどことなく固い。
「なんで海賊が嫌いなんだ？」
「そんなの……私の大切な人を――」
最後まで言わずに唇を噛んだ。それだけでなんとなくの事情は察する。
すぐに表情が変わって気丈に振る舞い、焼き上がった目玉焼きとベーコンが皿に移された。さらに近くの籠に入っていたパンもつけてやり、ルフィへ見せる。
おおっと嬉しそうな声。瞬時に笑顔が戻った。

食事をするならさっきの場所で。部屋へ戻った二人は同じ席に座って向かい合い、ルフィの前には一枚の皿と少量の料理。嬉しそうに食べ始める。
その間にナミはテーブルの上に置いてあった海図を手に取った。
苦労して手に入れた、明るい未来への希望。
それを大事そうに見つめた後、再びナミがルフィへ提案する。
「話、聞いてくれるわよね」
「ああ、いいぞ。メシ作ってもらったしな」
「そう。じゃあ始めるけど……私は何が何でも一億ベリー稼ぎたいの。そのためにはここに来てる連中のお宝を盗みたい。ついでに言えばこの海図、これはグランドラインの海図よ。どんな場所かは知らないけど、そこへ行けばきっと一億ベリーなんてすぐ貯まる」
「金が欲しいのか」
「ええそうよ。悪い？　一億ベリーまであと少し。何度か航海すれば今の私ならきっと稼げる」
「そっか。で、おれは何すりゃいいんだ？」
尋ねられてナミはにこりと笑う。
整った容姿だ。見る者が見れば可愛らしいと誰もが思うだろう。しかしルフィにとっては目の前の食事の方がよっぽど興味があるらしく、見ることはあっても見惚れることはない。
「あんた強いんでしょ？　あの海賊たちに勝てる？」
「当たり前だ。おれは海賊王になるんだぞ」
「あっそ。だったらあいつら倒してよ。あんたたちが戦ってる間に私は宝を盗み出して、安全なところへ避難する。その後合流してお宝は山分けってことで」
「んん、わかった」
皿の上をあっという間にきれいにし、パンを口いっぱいに詰めながらルフィが頷く。
予想通りの反応にナミはほくそ笑んだ。
提案はしたが、その通りに動く予定はない。彼が敵と戦って騒ぎを起こしている内に、自分が宝を盗んで逃げ出す。ここまでは作戦通り

だ。しかしその後、ルフィと合流する気などない。山分けするといったお宝は彼女が独占して使わせてもらう。
伊達に海賊専門の泥棒として一人で航海していない。
頭を使わねば女性の一人旅など危険過ぎてとてもではないができないだろう。
その点、彼女は自分が持てる能力を理解し、上手く使っていた。頭の回転の速さと自らの美貌、そして優れた感覚による航海術。そこらの海賊にだって負けるつもりはない。
そして自信もある。
航海を始めておよそ八年。幾度も窮地を潜り抜けてきた。
ルフィのことは強いと認めていても、信用してはいない。きっと今回も切り抜けられる。
そう思って頭の中で計画を組み直していたが、食事を終えたルフィが気軽に言った。
「でも宝はお前が全部持ってっていいぞ。おれ別にいらねぇし」
「えっ……？」
気軽に告げられた言葉に耳を疑った。
金銀財宝は誰もが欲しがる物だろうと思っている。だからこそ価値があるし、渡さないために姑息な手段と知りながら作戦を考えた。それを今、いらないと言ったのか。
理解ができずにじっと見つめてしまう。
ルフィは別段特別なことを言ったつもりはないようで、嘘を言った様子もない。
それが余計に混乱を深め、ナミは二の句を告げるのが難しくなった。
「いらないって、どういう意味？」
「だってお前必要なんだろ。おれたち元々あいつらぶっ飛ばすつもりだったし、もらわなくても困らねぇしな。あ、そうだ。泥棒だったら肉とか盗んでくれよ。海賊からならいいだろ？」
「お宝がいらないって、あんた、海賊だって言ったでしょ？　いらないわけないじゃない。なにそれ、私をからかってるの？」

「別にからかってねぇよ。でも海賊なのはほんとだ」
「バカみたい……なんなの、あんた」
理解が及ばず、苦悩したナミは仕方なく理解せぬまま割り切ることを決めた。
くれると言うならもらっておく。どうせそのつもりだったのだ。
食事を終えてコップに入った水を飲むルフィを見やり、視線は麦わら帽子を捉え、そういえばと思い出す。彼はそれを傷つけられそうになって怒っていなかったか。
おれの宝だ。そう言っていた。
思い出したのを機に試しに聞いてみる。ひょっとすると価値のある物なのかもしれない。
「そういえばさっき、その帽子がお宝だって言ってなかった？」
「ああ。友達から預かった大事な帽子だ」
「へぇ……ひょっとして宝の地図が隠してあるとか？」
「そんなんじゃねぇよ」
「じゃあ、それ自体に価値があって、滅多に手に入らない材質で出来てるとか」
「普通の帽子だぞ」
彼の話にはわからないことが多い。普通の帽子なら宝ではないだろう。
表情を歪めて不満を露わにするナミは文句を口にし始めた。
「それでどこがお宝なのよ。どこにでもある普通の帽子でしょ」
「この帽子は、おれがガキの頃に偉大な海賊から預かったんだ。いつか必ず返しに来いって約束してさ。これはおれとシャンクスの誓いの証だ」
帽子を手に取って笑顔で言われ、ナミが静かに目を伏せる。
シャンクス。その名は知っている。
グランドラインに君臨するという海賊たちの皇帝。今や四人居る内の一人に数えられるほどの有名人で、知らない人間の方が珍しい。
まさかそんな大物の知り合いだとは。
赤髪のシャンクスが麦わら帽子をトレードマークとしていた噂も

知っている。
聞かされてすぐに信じられる話ではないとはいえ、自分で海賊だと名乗ったことといい、いよいよ彼が海賊だという話の信憑性が高まったようにも感じる。
信じなければならないのかもしれない。そう思った時には思考が変わっていた。
ナミの目には冷たさが表れ、海賊を忌避する感情が大きくなる。
「そう。あんた、本当に海賊なのね」
「だから言ったじゃねぇか。海賊だって」
「はぁ……まぁいいわ。それならそれで利用できるでしょ」
ちょっと待ってて。
そう言ってナミは家の奥へ行ってしまい、しばしルフィが取り残される。
待っていろと言われて待って居れば彼女は数分で戻って来た。ただ奇妙だったのは手にはロープを持ち、何に使うかわからないそれを隠すでもなく現れたこと。
気になってルフィが尋ねてもただ笑顔で避けるだけだった。
「なんだそれ？　なんか使うのか」
「ふふふ、使い方は後でわかるわよ」
ナミがルフィの傍へ立って彼の目を見つめる。
「作戦を教えるわよ。今から私があいつらの居場所を教えてあげる。そこであんたは敵を倒してくれればいいだけ。その間に混乱に乗じて私がお宝を盗む。どう？　簡単でしょ」
「うし、いいぞ」
「それじゃ腹ごなしも済んだし、行きましょ。出来れば今日中に終わらせたいしね」
二人は連れたって家を出た。
大通りの真ん中を歩いて、向かう先はナミに任せる。地理に詳しくないルフィは大人しく後ろからついていくだけで周囲を警戒する様子さえない。
歩く最中にルフィが口を開いた。

「なぁ、お前海図読めるのか？」
「ええ。航海術は持ってるからね」
「そうか、それ聞いてなかったなぁ。じゃあさ、おれたちの航海士になってくれねぇか？　海賊の仲間に」
「冗談。私はね、この世で海賊が一番嫌いなの。好きな物はお金とみかん」
「そうなのか。おれは好きだけどなぁ、海賊」
「わからないわよ。あんたみたいな能天気な奴には」
妙に険の強さを感じる表情だったと理解する。
しばらく歩いていれば静かな町の中、唯一喧騒を感じる大きな酒場が見えてきた。
あれが敵のアジトなのだろう。
表情を変えずにルフィが建物を見つめていた時、なぜかナミは彼の周りをくるりと回って、手に持っていたロープを体に巻き付け、腕を拘束していた。
特に抵抗する訳でもない。
あっさり縛られてしまった後でルフィは首をかしげる。
「なんでおれ縛られてんだ？」
「すぐにわかるわよ。ほら行きましょ。向こうの大将に挨拶しないとね」
縛られたルフィを連れてナミが歩き出す。
どうせ乗り込むつもりだったのだ。別段おかしいことと感じず、ルフィも後へ続く。
そして二人は敵の本拠地へ静かに乗り込んでいったのだ。

紙と犬と獅子

普段とは違ってサンダルで歩くせいで、ペタペタ間抜けな音があった。

ルフィを見習ってというべきか、楽そうだと考えて真似てみたのだが思いのほか気分がいい。草履より少ししっかりした作りではあるものの身軽に動けそうな感触だった。

町中を一人で歩くキリは足元の心地良さとは裏腹に、少し気落ちした顔になっている。

どこへ行くかもわからない迷子を探すのは骨が折れる。

これからどこを探せばいいかもわからず、とりあえず町の奥へ奥へと向かっているものの、最初と比べて足取りは重くなってしまった。

今では溜息さえ堪えきれない。

ハァと息を吐いて俯く。

「あーあ、ルフィどこ行ったんだろ。これから上陸する度にこれだと流石に困るなぁ。今度から縄でもつけといた方がいいかもしれない」

一歩を踏み出すごとに徐々にやる気が削がれていって、独り言が止まらなくなる。

すっかり気力を失ったキリはとぼとぼ歩き、辺りの風景を見ながらもはや散歩気分の様子だ。

しばらく前へ歩いているとやがて初めて何者かの姿を見つける。

通りにぽつんと存在しているのは一匹の犬だった。白い毛並みながら薄汚れていて、感心するほどじっと動かずに座っている。小柄な体だというのにどことなく意志の強さが伝わった。

人の気配がない町で、唯一見つけた動物の存在はあまりにも異質。

一旦足を止め、犬を見つめるキリは思わず呟く。

「あ、犬だ」

小さな呟きに反応して犬が振り向き、目が合った。

キリは知る由もなかっただろうが、シュシュという名のその犬は、主人の帰りを待って一軒のペットフードショップの前で店番をして

いる。海賊の襲撃が始まっても、たとえ主人がもう戻ってこないと知っても、思い出がたくさん詰まった店に誰も手出しできないように守り続けた。
そんな事実、人の言葉で説明されなければわかるものではないとはいえ、無人の町に犬が一匹。決まった店の前で座り込んでぴくりとも動かない。
少なくとも奇妙な状況とだけは理解して、キリは歩み寄った。
ゆっくり近付けばシュシュは興味を失ったかのように目線を外してしまう。
傍まで行き、隣に並んでしゃがむと彼の顔を覗き込み、ふと声をかける。
笑顔を見せるキリを感じながら、シュシュは微塵も反応しなかった。
「やぁどうも。ボクはキリ。よろしく」
隣から声をかけられても鳴き声さえ発さない。それどころかじっと前を見つめたままで首を振ることさえしないのである。まるでそこに彼が居ないかのように扱っていたようだ。
驚くほど落ち着いた風貌で感心した。
無視されるような光景だったがキリはめげずに話しかける。
「あのさ、今ウチの船長探してるんだけど見なかった？　麦わら帽子かぶってて、ちょっと抜けてる感じの男性。歳の頃で言うとボクと同じくらいなんだけど」
再度話しかけても無視されてしまった。それでいて逃げることなく店の前から動かない。
このことからよっぽどの事情があるのだろうと推測した。愛想のないこの犬が自分から逃げないのはきっと大事な物があるからなのだろうと。
理解できない訳ではない。ただそれで無視をされても平気かと問われれば話は別だ。
どうやら一旦ルフィの件は忘れ、シュシュとの交流を図ろうと決めたらしい。

今度は隣ではなく前に回り込んで正面から向き合った。
「お腹空いてない？　ここペットショップだよね。奢ろうか？」
ちらりと見られるものの肯定の意志はなさそうだ。
ただ前に回ったから気になっただけだろうか。敵対心はないものの心を開く様子はない。
苦心するキリはそっと右手を差し出した。
「お手」
「ガウ」
「あいだっ!?」
試しに言ってみたのだが思いのほか気に入らなかったようで噛まれてしまう。
慌てて手を引っ込めるとすぐ離された。だが痛みはそれなりに手に残る。
親しげな目から一転、じろりと不満を伝える目に変わった。
本気の怒気をぶつける訳ではないとはいえ、多少は納得できない様子で睨まれている。しかしシュシュは我関せずと前を向いており、今は視線も合っていない。中々の胆力だと思われる。
コミュニケーションは失敗してしまったようだ。
嘆息したキリはその場に尻を置き、胡坐を掻いて、いよいよそこから離れる気を失くす。
こうなればルフィは後回し。まずはじっくりこの犬と話さなければならない。
シュシュを見ながらそう考え、興味津々に彼に顔を寄せた。
「そんなに嫌い？　別に嫌われるようなことってしてないよね」
「ワフ」
小さく鳴かれる。が、それが何を意味するのかわからなかった。
困り果てて言葉に詰まってしまう。
犬とのコミュニケーションは難しいと腕組みをして彼が頭を悩ませ始めた時、右側より唐突に声をかけられた。そちらへ振り向いてみればなぜかまた動物を見つける。
今度は犬より大きな個体だ。

まず目についたのが町中を歩くライオンで、その背に人間が乗っているのだと気付く。
「おいお前、そんなところで何をしている」
「うわっ、ライオン。この町って変わってるなぁ」
驚く挙動を見せたのも一瞬で、心底動揺している訳ではなさそうだ。
座ったままのキリはライオンと奇妙な男を交互に確認する。
ライオンは獰猛そうな顔つきをしていて、多少は人に慣れている様子だが低く唸る喉の音やだらりと唾液を垂らす姿からは、野生が抜けきっていないと判断できる。
おそらく調教者は背に跨る男。こちらの方がよっぽどおかしな外見だった。頭は動物の被り物をつけているかのような姿で、ズボンと腰布は普通とはいえ、上半身に身に着ける服と靴はふざけているのかと思ってしまう。
胡坐を掻いて腕組みをし、偉そうな態度である。
しばらく同じ態勢だと気付かなかったキリは警戒心も持たず、ただ好奇心だけを見せていた。
「ライオンに乗ってる君は誰？」
「おれか？　おれはバギー海賊団の副船長、モージ。そしてこいつはリッチーだ」
「あぁ、この町を襲ってるって海賊だね。変わった風貌だなぁ。サーカス団にでも居た？」
「サーカス団か……いいや、違う。だがそう間違ってもいねぇな。ウチの船長は派手好きでね、そう思われても仕方ねぇのさ」
「何か芸とかできるの？」
「できるとも。例えば」
奇妙な男、モージはちらりとキリの傍に居るシュシュを見る。
何やら指差して自信満々に言い切られた。
「おれはどんな動物でも手懐けることができる。さっき見ていたぞ、おまえはその犬に嫌われたようだな」
「嫌われたわけじゃないよ。ただ出会ったばっかで仲良くなれてな

いってだけで」
「フッ。おれなら今すぐ仲良くなることができる。時間はかからん」
そう言ってモージはライオンのリッチーの背から下り、シュシュの傍へ歩いていく。
キリと同様にしゃがんだ状態で右手を差し出した。
「お手」
「ガウ」
「ぎゃああっ!?」
思わず目を疑ったが、結果はまるで同じだった。
シュシュはモージの手に噛みつき、腕が振るわれた瞬間にパッと離して涼しい顔。
痛みを得たはずのモージは右手を軽く振り、何事もなかったかのように表情を戻して歩き出し、再びリッチーの背に乗る。胡坐を掻いて腕を組み、堂々とした風格だ。
まさかそれでやり過ごそうとしているのだろうか。
疑念を目に浮かべて見つめるキリと視線が合ったのはそれからで、彼は冷静に話し出した。
「おれにはこいつの気持ちがわかるんだ」
「今噛まれたよね？」
あくまでも失敗したとは言わないつもりらしい。反射的にキリは言っていた。しかしその言葉は受け流されて拾われることはなく、モージは冷静に見える顔で語り続ける。
「お前こんなところで何をしている。理由によっちゃ見逃すわけにはいかんな」
「いやそんなことより犬の件は」
「近頃、ウチの船長に逆らう町民が居るようでな。ちょうど今おれがパトロール中だ。バギー船長は恐ろしい御方だ、逆らう奴には容赦しねぇぜ」
「犬に噛まれたのはどうするつもり？　逃がさないよそんなんじゃ」

「すでにこの町の建物もいくつか吹っ飛ばしてる。たった一発の砲弾でな。バギー船長がオリジナルで作った砲弾は非常に強力だ」
「こいつ、全力でこのまま流すつもりか……」
もはや話の内容さえ入ってこない。先の問題をあやふやにしたまま話を進めようとするモージに対し、常にキリは不機嫌そうに止めようとしたが、やはりその話題には触れないようだ。
仕方なく頭を振って思考を切り替える。
どうでもいい問題に直面してそちらばかり気になっていた一方で、本来の目的を思い出した。
彼はルフィを探すために町へ入ったのである。さらに言えば仲間と合流しようとしたのは町を襲う海賊を倒すため。そして今、目の前に居るのは自分たちが標的としていた一味の一人。情報を得るにはちょうどいいと判断したのであろう。
不服なのは変わらぬまま、表情を緩めて会話の内容を変える。
「わざわざ副船長がパトロール？　働き者なんだね」
「フン、見ればわかるだろう。おれとリッチーが揃えば敵う者など居やしねぇ。部下たちに万が一がねぇようにおれが来た。ただそれだけのこと」
「でもめんどくさいでしょ。ほんとに逆らう人なんているの？」
「居るからおれが出てきてるんだ」
「へぇ、そう。でも正直町民の一人や二人が襲ってきたところで問題ないでしょ？　確かバギー船長のクルーだよね」
「そうだ」
「思い出したよ。道化のバギーなら知ってる。手配書で見たんだ」
キリの笑みが深まった。
リッチーの威容を目にして微塵も恐れず、徐々に悪巧みを始める顔になっていく。
その顔を知る由もないモージはなぜ彼が笑うのかを知らぬまま、訝しむ顔になった。
「バギー船長に会わせてくれないかな。ちょっと確かめたいことがあるんだ」

「うん？　何を確かめる」
「ウチの船長を探してるんだ。ひょっとしたら流れ流れて辿り着いてるんじゃないかと思って」
「船長だと？」
「ボクも海賊だよ。ついさっきこの町に来た」
足を伸ばして座ったキリを見てううむと唸る。
どこから見ても至って普通の少年。本人の口から海賊だと言われて信じられるだろうか。
半信半疑で見つめていれば、キリは毒気のない笑顔を見せる。
やはり信じられない。海賊には見えなかった。
「どう見ても海賊には見えんな。この町の人間じゃないのか？」
「違うよ。だから地理がわからなくて困ってる」
「おれに嘘をついて、バギー船長を襲おうとしているんじゃないか？」
「そうだとしても君が守ればいいだけの話でしょ。警戒してるんなら尚更」
「フン……」
「ついでに言えばライオンまで連れてるんだ。怖がる必要ないと思うけど」
だらしない姿勢で座る姿からは恐怖を感じない。腕っぷしは強くないと思える。
そう考えればまぁいいかと思えた。
別段危険性はなし。連れて行ったところで問題はないだろう。
何より自分から海賊に近付こうなどいう者はおらず、少し物珍しくて見てみたい気はしていた。彼がバギー船長に会ってどうなるのかを。
頷いたモージは彼の同行を許可する。
「いいだろう。だが船長を怒らせないようにするんだな。お前が町民だろうが海賊だろうが、あの御方を怒らせるとこんな町一瞬で吹き飛ぶぜ」
「気をつけるよ。それも後味悪いし」

「よし、ついて来い。船長が居る場所へ案内してやる」
そう言い切れたのは自分たちが負けるはずがないという絶対の自信があるから。
してやったりと微笑むキリは元気よく立ち上がる。
その時、モージはアジトへ戻ろうとした様子だがリッチーが動かなかった。唐突に低く唸って首の向きを変える。目を向けた先はシュシュが守るペットフードショップだ。
「ん？　どうしたリッチー、腹が減ったか」
肯定するように首を上げたリッチーの動きにより、モージは頷く。
「仕方ないな。とっとと済ませろよ」
「ワンっ、ワンッ！」
「んん？　なんだ、この犬」
リッチーが店に狙いをつけた途端、シュシュは怒りを表して吠え始めた。これまで見知らぬ人間に近付かれようがライオンを見ようが動揺しなかったのに、初めて感情を露わにしたのである。
キリはその姿を見ると笑みを消して驚き、モージは煩わしいと感じていたようだ。
必死な様子で鳴くのを止めない。
鳴き声は大きく耳にわずかな痛みを与えるほど。それで苛立ったのかモージが怒りを見せ始め、リッチーもいつしかシュシュを睨みつけていた。
それでもシュシュは吠えるのを止めない。
店に近付くな。強い意志でそう言っているようだった。
「チィ、うるさい犬だ。店番のつもりか？　こんな店もう誰も来ねぇだろうが。この町にはもう誰も居ねぇんだから売れるわけねぇだろ」
「そうかもね。でもこんなに必死なんだから、やめてあげてくれないかな」
「フッ、おまえ海賊なんじゃなかったか？　海賊がそんな頼み聞くわけないだろう。おれに命令できるのはバギー船長だけなんだよ」
「だろうね。ボクも同じだからわかるよ」

リッチーに指示を出したモージはシュシュに向かい合う。
威圧感を感じる巨体。だがシュシュは睨みつけてその場を動こうとしない。傷つけられてもおかしくない状況下で歯を剥き出しに敵意をぶつけていた。
「おい犬。そこをどくんならおれの手を噛んだことは忘れてやろう。どけ」
「やっぱり噛まれたんじゃないか」
「黙れ小僧。さぁ犬、そこをどけ。リッチーに殴られりゃただじゃ済まねぇぞ」
尚もシュシュはその場を動かない。あくまでも姿勢は敵対するもの。
眉をひくつかせ、意を決したモージはすかさずリッチーへ命令を下した。
「そうか。おれに盾突くなんざ賢い選択じゃないぜ、犬。やれェリッチー！」
咆哮を上げてリッチーが前脚を上げた。
刹那の瞬間でも鋭い爪が視界に入り、強靭な脚で殴られれば即死さえ有り得る。それを理解していたかは不明だがシュシュは逃げなかった。飛び掛かってくるライオンを睨みつけてぐっと足を踏ん張り、最後まで逃げようとしない。
そんな姿を見たせいだったか。
懐にあった紙を操ったキリは右腕へ大量に纏わせ、太い腕を作り出すと、素早い動作でリッチーを殴り飛ばす。巨大さとは裏腹に速度は常人では見切れない。殴られたリッチーは通りを勢いよく転がった。当然背に跨っていたモージは転げ落ち、無様に地面へ叩きつけられる。
痛みはさほどなかったのだろう。彼らはすぐに立ち上がった。
その後でキリの腕が奇妙な姿になっていることに気付き、一瞬浮上した怒りさえ忘れ、驚愕を露わにする。周辺に紙が舞っているのも気になる点だ。
両者動かなくなり、キリは傍に居るシュシュを見下ろす。

視線がぶつかった。彼は驚いた様子もなく強い眼差しで見つめてくる。
くすりと笑い、キリの視線は慌てずにモージたちへ向かう。
「な、なんだおまえっ!? まさかバギー船長と同じ悪魔の実の……!」
「へぇ。バギー船長も能力者なのか。良いこと聞いた」
「チィ、舐めるな! 所詮ただの人間、リッチーに勝てるはずがねぇ!」
殴られたことで怒った様子のリッチーはキリを注視し、今にも飛び掛からん体勢。
それを許可するためキリを指差したモージが威勢よく叫んだ。
「やれェリッチー! 奴をズタズタに切り刻んでやれ!」
再びの咆哮と共に飛び出す。
キリは怯えもせずに突っ立って待ち構えた。
地面を蹴って高く跳び、頭上から襲い掛かられる光景を見た後で、ようやく腕を振る。
紙の腕で作られた拳は風を起こすほどの速度で、的確に顔面を捉えた。ただの紙の集合体、だが能力によって硬化されていたため、鉄で殴られたような感触である。
あっさり殴り返された巨体は軽々宙を舞い、やがて強かに地面へ叩きつけられた。
まさかの光景にモージは開いた口が塞がらず、無傷のキリと倒れたリッチーを交互に見る。
何度確かめても状況に変化はない。倒れたのは人間より大きなライオンだ。
こんな簡単に決着がついていいのかと、驚かずにはいられない。
ようやく理解できたモージは滝のような汗を流して、背筋が凍える感覚から逃れられなかった。初めてリッチーが負けた姿を目にし、もはや冷静さなど持っていない。今はただ、妙な笑顔でキリを見つけるだけ。次は自分だろうかと心配するのみだった。
「ズタズタに切り刻んでやれ、だっけ」

「はいぃ!?　いえいえ違います、今のはちょっとした言葉の綾で――！」
「まぁ別にいいけどさ。海賊を語るくらいなら、もう覚悟はできてるってことだよね」
「いやっ、ちょっ！」
脚を震わせて立ちすくむモージへ向け、一足飛びでキリが接近した。
常人より軽い紙の体はたった一歩でふわりと宙を飛び、次の足を踏みしめずとも速度を落とすことなく、あっという間にモージへ距離を詰めていく。
笑顔で迫る姿はなんとも恐ろしい。
腕を振り上げ、拳が見えたモージは悲鳴を上げるので精いっぱいだった。
「ぎゃあああっ!?　ちょっと待って――！」
正面から拳を叩き込まれ、顔を含む上半身全てに攻撃が当たる。
思い切り殴り飛ばされた彼の体は宙を舞って、先に倒れていたリッチーの体にぶつかると二人揃って盛大に飛び、改めて地面へ落ちる。軽快で間抜けな姿だ。
勝負は一瞬で終わる。
戦闘を終えたキリは使用した紙を操って懐へ回収した。
服の下に仕込んだホルスターへ戻っていく挙動も慣れた物。修行の成果で淀みはない。
あっという間に自身の武器を集め終えた彼はすぐさまシュシュを見下ろす。しばし倒れた敵を眺めていた彼は、視線に気付くと見上げてくる。
少しは見直してもらえただろうか。
出会った瞬間と同じようにその場へしゃがみ、視線を合わせてキリが話し出した。
「詳しい事情は知らないけど、気持ちはわかる気がする。この店を守りたかったんだよね」
返答はなくじっと見てくるシュシュへ語り掛ける。

犬と真剣に喋る間抜けな光景ではあったが、本人に羞恥の類はない。
彼の覚悟は今しがた目にしたばかり。馬鹿にするどころかむしろ尊敬の念を覚えてすらいる。
自分より大きな動物を相手に立ち向かう姿は格好良かった。笑みを浮かべるのもおそらくはそういった面を見れたからであろう。
「ボクにも宝があるんだ。大事な仲間。守るためなら命を賭けたっていいと思ってる」
シュシュは真剣に聞くように目を見つめてくる。さっきの仕草とも違っていた。
嬉しくなって試しにもう一度右手を差し出してみた。
「お手」
今度はすぐに噛まれることはなく、少しの間じっと見つめて、恐る恐る前脚を置かれた。
変化は確かにあったようだ。
手を下ろしたキリはそのままシュシュの頭を撫でる。
「うん。ありがと」
手を離して立ち上がると彼に背を向け、倒れたままのモージたちの所へ歩き始める。
背を向けた状態でシュシュへ語り掛けて、その声には強い意志が感じられた。
「大丈夫、守るよ。君の店には誰も手出しさせないから」
離れていく背を見てシュシュは吠えた。ただし敵意を持ってのことではない。まるで礼を言うかのように、たった一度だけ大きくワンッと聞こえた。
キリは振り返らずに手を振って返答とする。
歩み寄ってみればモージは気絶しているらしく、白目を剥いて意識を手放していた。しかし一方でリッチーは大きなダメージを受けたものの気絶するほどではなかったらしい。こそこそ逃げ出そうとして自分だけキリに背を向けていた。
わかり易く足音を立てるとびくりと背が震える。

リッチーはゆっくり振り返った。
傍にはやはり彼が居て、モージの傍へ立ち、にんまり笑うキリが気楽な声で伝える。
「さぁライオン君、君らのアジトへ連れてってもらおうか。ちょうど今約束ができたもんで、この町傷つけられるのは困るからさ」
恐怖を抱いたリッチーは迷う素振りもなく何度も頷いた。
良い答えをもらえてキリは上機嫌に微笑み、では彼に乗せて行ってもらおうと考えてモージの体を抱え上げ、怯えるリッチーの背に跨った。

覚悟

町を襲撃した海賊たちが占拠していたのは、町で一番大きな酒場だ。

二階建てで広さも周囲の家屋が二つ分。相当数の人間が訪れられるようになっていて、さらに屋上も利用できる造りとなっていた。海賊たちが居たのはその屋上である。

気ままに酒を飲み、メシを喰らい、上機嫌に過ごしていたある時、町人なら誰も近付かないこの場所へ船長に会いたいという輩がやってきた。

ロープで縛られた男が一人と、彼を連行するかのような女が一人。

宴を中断して彼ら二人を見る海賊たちは珍しい物を見る目で集中しており、その間を歩く二人は一人の海賊の案内で屋上の一角、豪華な椅子に腰かける船長の前へ通された。

ふんぞり返って座る男はパラソルの下。日差しで作られた影の中で俯いている。

その前へ辿り着いた時、ナミはルフィの背を強く押して彼を転ばせた。

為す術もなく転び、しかしゴム人間であるため痛みはない。

何をするんだと言うより早くナミが声を発していた。

「親分とケンカしたんです。私を仲間にしてくれませんか？」

にっこり笑顔でそう告げられ、周囲で成り行きを見守っていた男たちがざわついた。

様子がおかしいとは思っていたが一目見ただけでは裏切りとは思っていない。親分をやるから命は助けろということか。状況が理解できたようで周囲の会話も多くなる。

ナミは周囲の喧騒も気にせず船長のみを見つめていた。

海賊、道化のバギー。手配書に顔が載るほどの有名人だ。潰した町は数知れないとの噂もある。

間違いなくイーストブルーではトップクラス。

わかっていたことだが改めて認識すれば体が緊張感に包まれ、冷や

汗を流すも、自分を鼓舞する彼女は笑みを絶やさない。自分ならやれる。上手く盗めると言い聞かせてそこから動かなかった。
やがてバギーが動き出し、パラソルの下から出てくる。
独特の風貌の男だった。一目見ればまず忘れないだろうと思わせる。
派手な色目の服装に海賊らしい帽子をかぶり、コートを肩にかけ、それだけならばどこにでも居そうなものだが何よりも目につくのは彼の顔。
多少のメイクすら霞むほどのインパクトが目について仕方ない。
鼻が丸くて赤いのだ。
まるで付けたかのようなその鼻は手配書で見た通り凄まじい個性を発揮していて、彼をピエロ然とした姿に見せるのは服装より何より、自前の鼻だった。
ナミは緊張して彼の顔を見る。
噂は耳にしている。その鼻を笑った者は間違いなく殺される、と。
どうやらコンプレックスを持っているらしく、笑われただけで町を潰したことも多いらしい。
決して怒らせてはいけない。ひとまず取り入らなければならないと冷静な思考を心がけていた。
「おれの仲間になりたいと、そう言ったのか？」
「え、ええ。私、お宝に目がないもので、それで」
「妙な話だなぁ。確かおれから海図を奪ったのはおまえだと言う報告を聞いてるんだが、まさか間違いってわけでもあるまい。一体どういう了見だ？」
「それは、この男の指示だったんです。私は利用されてただけ。でも今はもう言う通りにする必要もないんです。隙を突いて捕まえましたから」
「ほう。だから見逃して欲しいと」
「ええ……」
鋭い目で睨みつけられれば自然と焦りが生まれてきた。
流石に厳しいか、とは思う。空気の重さが状況の悪さを伝えるよう

で生きた心地がしない。だが言った限りは嘘を貫き通さなければ。もし転がったままのルフィが何か言っても言い繕えるよう、柔軟な思考が必要だと考える。落ち着こうと密かに呼吸を深くした。

そんな彼女の心中など知らなかっただろうが、バギーは顎に手を当てて頷く。

威圧感を感じる姿。知らず知らずの内に手を強く握りしめていたらしい。

重苦しい沈黙が終わって、バギーの顔に笑みが浮かんだ。

「よぉし、いいだろう。おまえを仲間にしてやる」

「ほんとっ？」

「ただしおれの仲間になるっつうのに何もなしじゃ信用できねぇな」

「心配しないで。盗んだ海図はちゃんと返すわ。これはちゃんと――」

「いいや、そういうことじゃねぇ。それより先にやってもらいてぇことがあるんだが」

困惑するナミから目を離し、部下を見たバギーが声を大きくして言った。

「誰かこいつに剣を貸してやれ。ちゃーんときれいに磨いたやつをなぁ」

「へい、船長」

「ちょっと、えっ？　剣？」

近寄って来た男が抜き身のサーベルを差し出し、とりあえずナミは促されるまま柄を握った。

嫌な予感がする。だが、信用を得るためには逆らってはいけない。

密かなジレンマに悩んでいるとバギーが確信をついた言葉を放った。

「こいつを殺れ」

「え？」

「首をちょん切って楽にしてやれよ。一時とはいえおまえと一緒に居た奴だろう。せめて最期くらいてめぇの手で看取ってやろうとは

思わねぇか？」
背を向けたバギーはまた元の位置へ戻り、不遜な態度で椅子に座る。
ナミの手は震えていた。訳が分からず考えるより先に口が動いてしまう。
「ちょ、ちょっと待って……確かに愛想は尽きたけど、何も殺さなくても」
「どの道おれの船にはいらねぇんだ。どうせ始末することになる」
「そんな、だって――」
「そいつはおれから海図を奪った。つまりおれの宝に手を出そうとしたってことだろ」
何を言っているのかわからない。暴論を振りかざそうとしているだけで、海図を盗んだだけでなぜ宝まで盗むという思考になるのか。
理解できないナミは反論しようとするのだが、話など通じそうにないと気付く。
これだから海賊は面倒だ。簡単に他人の命を奪おうとし、それでいて自分の物は奪われたくないと言う。子供のわがままよりよっぽど性質が悪くて反吐が出る。
そう言いたい気持ちをぐっと抑えて、剣を握る手が震えた。
周囲の海賊たちが止める様子はない。むしろへらへら笑って楽しんでいる節がある。
この場に頼れる人間など居ない。
自分でなんとかしなければならないのだ。
「盗んだのは私よ。こいつがやったわけじゃない」
「おぉ？　そいつぁおかしいことを言う。おまえがさっき言ったんじゃねぇか、そこで縛られてる親分の指示だったと、私は利用されただけだったとなぁ」
「それはそうだけど……」
「だったらそういうことだ。親分なら責任を取らなきゃなぁ。海賊の持ち物に手を出して、タダで帰れると最初から思ってたわけでもあるまい？」

「でも殺さなくたって」
「おいおい、ずいぶん庇うじゃねぇか。おまえは何か、愛想尽かせた男に死んで欲しくないとでも言ううのか？　自分から裏切っといてよく言うぜ」
「殺したいとも思ってないわっ」
「めんどくせぇ野郎だ。ならおまえも一緒に死ぬか？」
そう言われては何も言えなくなる。ナミが二の句を告げられずにぐっと唇を噛んだ。
死ぬ訳にはいかない。死んではいけない理由がある。
何としてもこの場を生き延びなくてはならないのだ。しかしそれでルフィを殺してしまっては、それこそ大嫌いな海賊と同類になってしまう気がして絶対にやりたくない。
前に進めず、後にも退けず、立ち往生。
戸惑いを露わに動けないナミを見据えて、再びバギーは冷徹に告げた。
「やれ」
「くっ……！」
やらなければ殺される。だがやってしまえば海賊と同類。
どちらも選べぬナミは手を震えさせ、それでも剣を捨てられず、ただ歯噛みする。
そんな緊迫した状況下で、体をもぞもぞ動かし、一人で勝手に起き上がって座ったルフィは彼女を見つめ、口を開いた。
「手が震えてるぞ」
口の端を上げて笑みを湛え、危機的状況にあって余裕を失っていない。
ナミは彼を見下ろし、なぜ笑えるのかがただ不思議だった。
「中途半端な覚悟で海賊を相手にしようとするからそうなるんだ」
「覚悟……？　覚悟って何よ、人を簡単に殺してみせること？　それが海賊の覚悟？」
「違う」
力強い眼差しで見つめられて目が離せなくなる。

「自分の命を賭ける覚悟だ」
何も言えなくなって言葉を呑んでしまった。
ナミが押し黙った途端、ルフィは視線の先を変えてバギーを見る。
笑みを消して心底不思議そうに、何も恐れずに言葉が吐かれた。
「おいお前」
「あぁん？　偉そうに呼びやがって。なんだ」
「変な鼻だな」
瞬間、辺りの空気が凍り付いた。
バギーに向かって最も言ってはいけない言葉。それが今、あっさり吐かれた。
海賊たちは血相を変えてしまい、動けなかったナミもそれで我に返る。
そう言った者たちがどうなったかなどきっと彼は知らない。だから言えてしまうのだ。
確かに言葉を受け取ったはずのバギーはしばらく動かず、だが明らかに額には青筋が浮かんで、肘置きを掴んだ手には必要以上に力が入っていた。
短い沈黙の後、バギーの口からは明らかに冷ややかな声が発される。
「お前、今ぁ……なんつった？」
「それってつけてんのか？　それとも自分のか？」
「なんだぁそりゃ……こいつが自前だったらおかしいとでも言いてぇのかよ」
「うん、おかしい。でもまぁ悪くはねぇんじゃねぇかな、赤っ鼻で」
「誰が赤っ鼻じゃクラァ‼」
椅子を蹴り倒してバギーが立ち上がった。荒々しく怒りを感じる仕草ですっかりルフィのみに注意が向いている。大股に歩いた彼は至近距離にまで近寄り、顔を寄せてきた。
「てめぇ、とことんふざけた野郎だな。もういいっ、てめぇの処罰は決まった！　市中引きずり回した後で磔にして滅多刺し、その後で首をぶった切ってやる！　誰も手を出すな、こいつはおれが殺してや

るッ！」
「なぁ、悪いけどこれほどいてくれねぇかな。おれまだ死にたくねぇんだ」
「フザけてんのかてめぇは!?　今からてめぇをぶっ殺すっっってんだよ！」
ただでさえ場が混乱しているというのにルフィの一言がさらに火へ油を注ぐ。
苛立ったバギーはおもむろに足を振り上げ、彼の頭を蹴りつけた。しかしゴム人間に打撃は通用せずダメージは与えられない。
代わりにふわりと麦わら帽子が頭を離れた。
「ええいっ忌々しい！　その口を閉じやがれェ！」
「きかん」
蹴られた衝撃で帽子が飛び、地面へ落ちた。
肩で息をするバギーはそれに気付いて視線を移動させる。
ただ視線を移しただけでルフィはまずいと気付いた。咄嗟に表情が変わる。
「チィ、ムカつく野郎だ。あの帽子を見てるとあいつの顔を思い出すぜ」
「おい！　それには触るなよ！」
「あぁ？」
「その帽子はおれの宝だ！　傷つけやがったら絶対許さねぇからな……！」
始めて見せる表情を目にし、怒り心頭だったはずのバギーが笑みを浮かべる。次いで彼を馬鹿にするように大声で笑い始めた。
笑いながらも帽子へ歩み寄っていく。
「ぎゃーっはっは！　宝だと？　宝ってのは金銀財宝を言うんだ。こんな古臭い帽子が宝？　ふざけんのも大概にしろッ！」
「おい、触んな！　それはシャンクスから預かった帽子なんだ！」
落ちた帽子を拾おうとした手が、ぴたりと止まる。
静止は一瞬。バギーは帽子を拾い上げた。
最初は踏みつけてやろうかと考えて、ナイフで貫いてやろうかとも

考えて、しかし彼の一言でそれを止めた。持ち上げた帽子を右手にルフィへと振り返る。
表情は驚きを露わにしていて、信じられない物を見る目となっていた。
「シャンクスの帽子だと……？　嘘つくんじゃねぇよ小僧」
「嘘じゃねぇ、ほんとだ。フーシャ村にいた頃に預かったんだ」
「あいつの帽子だと。ってことはこりゃあ、まさかロジャー船長の――」
呆然と呟いたバギーは驚愕している様子だ。
麦わら帽子をじっと見つめて感慨に耽っているらしい。
奇妙だと感じたルフィは少し落ち着きを取り戻した。
「返せよ、帽子」
「返せだぁ？　元々こいつが誰のもんか知ってんのかよ」
「シャンクスだろ。おれはシャンクスから預かったんだ」
「ケッ、なぁにがシャンクスだ。奴も譲り受けたに過ぎねぇよ」
話についていけない周囲の部下たちやナミを置き去りに、会話は続いていた。
バギーには帽子を返すつもりがなく、それがルフィの視線を厳しくする。
「いいか、奴とおれは見習い時代同じ船に乗っていた。こいつはその船の船長がかぶってたもんなんだ。つまりてめぇのもんでもなけりゃシャンクスのもんでもねぇ！」
「でもおれはシャンクスから預かったんだぞ」
「だぁからそのシャンクスが図々しくも船長の帽子をかぶってやがったんだよ」
「さっき譲り受けたって言ってたじゃねぇか」
「うるせぇ！　とにかくおれァ昔から奴が気に入らなかった」
目を閉じて昔を懐かしむよう、バギーは語り始めた。
「昔、奴はおれから巨万の富を奪った。敵船から宝の地図を奪ったおれは計画を立て、陸だけでなく海に沈む宝も全て掻き集めようと考えていたんだ。それをあいつが――」

「せ、船長ォ！　大変です！」
語り始めた矢先に屋内へ続く扉が勢いよく開かれ、一人の男が現れた。
首を振って全員が確認する。町へ出たはずのモージだ。
何やら怪我をしていて、同時にひどく慌ててもいるらしい。
騒がしくやってきた彼はバギーの声を遮って注目を集めた。
「どうしたってんだモージ……今このハデにフザけた野郎に罰を与えようとしてるんだが」
「そ、そんな場合じゃありません、敵です！　おれたちに歯向かう奴が――」
「はいちょっと失礼」
モージに注意が集まっている間に突然バギーの手から帽子が奪われた。
どこからやって来たのか、キリが笑顔で帽子をかぶったのである。
「これ傷つけられるとルフィが怒るんだ」
「あ～っ！キリィ！」
「そ、そいつです船長！　おれとリッチーをやりやがったのは！」
注意は一気にキリの姿へと集まった。
周囲の喧騒も気にせず彼はルフィへと歩み寄り、傍で見下ろして肩をすくめた。
何がどうなれば海賊たちに囲まれて縄で縛られ、余裕綽々で座っているのだろう。目を離している間に何があったのか非常に気になった。
傍で呆然と立っている少女も気になったが、ひとまずはルフィだ。
「ちょっと見ない間に趣味変わったね。一体どういう状況？」
「ししし、今ちょっと利用されてんだ。縄ほどいてくれ」
「あぁそう。利用されてて笑える君はすごいと思う」
「クラァてめぇら！　おれ様を無視してくっちゃべってんじゃねぇよ！」
楽しそうに話す二人へバギーが吠えた。
途端に二人が振り返って同時に見てくる。そうする仕草は幼く、た

だの少年にしか見えない。
一体なんだと思っていた。今日は面倒な連中が続々とやって来る。町全体を支配したはずなのになぜ命令に背く連中がぞろぞろ集まってくるのだ。
ふつふつと沸き上がる怒りによってバギーの表情はみるみる険しくなっていく。
「てめぇらはなんだ。ここに何しに来やがった」
「ボクらも海賊だよ。この町から出て行って欲しいと思って」
「出ていく？　バカ言え、なぜおれたちがおまえらの言うことなんざ聞かなきゃいけねぇんだ。ちゃんちゃらおかしくて笑えるぜ！野郎どもォ、笑っておしまい！」
バギーに従い周囲の海賊たちが大声で笑い出した。腹が捩れるといった様相である。
いくつもの声が重なる中、ナミは不安げに、それでいて悔しそうな表情で辺りを見る。
状況はすっかり変わっていた。もはや逃げ出すことは困難だと考えている。彼らが余裕で笑えるのもそれがわかっているから。状況は明らかにバギー一味の有利にある。
気にせずキリが紙を使ってルフィのロープを斬ってやり、拘束が解けた。
自由を取り戻した彼は嬉しそうに立ち上がる。
一方で状況はそのまま。敵に囲まれて戦力差も明らかとなっている。三人は海賊たちが武器を手にする光景を目の当たりにすることとなった。
「海賊を名乗るのは勝手だがな、その名にはそれなりの覚悟ってもんが必要なんだ。てめぇらこのバギー様に盾突いて生きて帰れると思ってんのかァ！」
「ああ、思ってる」
「ハデにフザけんな麦わらァ！　だったら教えてやる……バギー様の恐ろしさを！」
仰々しく腕が振るわれて大声が出された。

「野郎どもォ、バギー玉用意ッ！」
「へいキャプテン！」
命令されて数名の海賊たちが即座に動き始める。屋上の端に置かれていた大砲が運ばれ、そこへ赤い砲弾が装填された。その砲弾に一味のマークが描かれていたのも確認できる。
海賊たちは立ち位置を変え、四方を囲んでいたのが一方へ集まり、扉を塞ぐように並ぶ。
砲口が狙いをつけるのは当然たった三人の少年少女たち。
時間もかけずに砲撃準備は完了。後は船長の命令を待つだけといった姿である。
大砲の隣へ立ったバギーは上機嫌に見える笑顔で語り出した。
「おれがこの町をどうやって脅迫したか教えてやろう。たった一発の砲弾だ！　このバギー玉は一度放たれればその脅威の爆発によって甚大な被害を与える！　こいつを一発放っただけでこの町の一部は消し飛んだ。てめぇらに向けて撃てばどうなるかわかるよなぁ？」
「多分死ぬだろうね」
「うん。死ぬと思う」
「のんきに言ってる場合か!?」
しばらく口を閉ざしていたナミが八つ当たり気味にルフィの頭を叩いた。小気味良い音がするもののダメージはなし。ルフィは全く気にしていなかった。
今度こそ命の危機を感じずにはいられない状況だ。
冷や汗を流したナミは手から離れなかった剣をようやく捨て、震えを止めて辺りを見回す。
「どうすんのよ、この状況っ。こんな距離で大砲なんか撃たれたら絶対避けられない！」
「ルフィ、この人誰？」
「うちの航海士だ。さっき仲間にした」
「違う！　っていうかそんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」
焦るナミとは対照的に二人は落ち着き払った態度だった。
そのことに苛立ちを募らせるのはナミだけでなく。怯えていない

どころか話を聞いているのかすら定かでない彼らを見てバギーの額に青筋が現れる。もはや我慢の限界。何を言い出そうとも止まる気は持ち合わせなかった。

「てめぇら……まさかの人を舐める天才ですか、この野郎ォ。トサカに来たぞ！　温厚なおれ様ももう勘弁ならねぇ！　こうなりゃこの町ごと消し飛ばしてやる！」

「ほらこうなった！」

「で、名前は？」

「ナミっていうんだ。なんか海賊嫌いらしいけどな」

あくまでマイペースを崩さない二人を目にしつつ、再び下される命令。

バギーの鋭い声が空へ響き渡った。

「バギー玉発射ァ！　ガキどもを消し飛ばせェ！」

大砲へ繋がる導火線へ火が点けられる。その動きを確認してキリが腕を振った。

袖から、パーカーの胸元から無数の紙が飛び出して、風に逆らって飛ぶそれらが素早く大砲の砲口を塞ぐのである。掛かった時間はほんの数秒だった。不思議な光景に多くの者たちが驚き、驚愕の声を上げる中、キリはナミの手を取って扉とは反対側へ駆け出した。即座にルフィも続く。

「な、なんじゃあこりゃあっ!?」

「ほらこっち」

「えっ、あっ――」

砲口が塞がれてまずいと思ったのだろう、慌てて数名が剥がしにかかるも強く張り付いて全く剥がれない。手で引っ張ろうが、剣で斬ろうが、妙に硬い紙はちっとも剥がれる気配がないのだ。

鉄にも等しい硬さを誇るその紙で、砲口を塞がれたままではどうなるのか。

想像など難しくはなく、おそらく砲弾では破れない。それどころかバギー玉は着弾と同時に爆発するよう作られている。つまり、このままでは砲身の中で着弾だ。

海賊たちの混乱が深まるのは当然だった。
さらに慌てて紙を剥がそうと手で掴み、剣の切っ先で斬ろうとするのだが全く破れない。
余裕綽々の態度から一転。冷や汗を流す者がどんどん増えていく。
「バカ野郎っ、何やってやがる！　さっさとなんとかしねぇか！」
「む、無理ですぅ。こいつ硬くて、ちっとも剥がれねぇ！」
バギーが叫ぶものの導火線が短くては時間も残り少なく。
「だったら導火線を切れ！　今すぐ火を消せェ――！」
そう叫んだ瞬間、導火線が無くなって火が着火剤へ届く。
キリはナミを横抱きにして屋上から飛び、隣ではルフィも勢いよく飛び出していた。
放たれるはずだった砲弾は砲口を塞がれたことにより、発射と同時に硬い紙の壁に激突することになり、その結果、起爆した末に大砲の中で爆発を起こす。
起こった爆発は凄まじい規模となった。
大砲どころか酒場自体が轟音と共に爆炎に包まれ、空の色を変えるほどの灼熱が放たれる。
強烈な熱風を背に受けたキリとルフィは風に押されて軽々吹き飛ばされてしまい、体勢を保つことすら難しい。しかし着地のタイミングは見失わず、ルフィは大量の空気を吸い込んで腹を風船の如く膨らませ、ボインと間抜けな音で地面を跳ね、キリは紙を使って足元にクッションを設け、速度を殺すよう柔らかく着地した。
ずいぶん吹き飛ばされた。振り返ってみれば百メートルはくだらない。
三人揃ってダメージがないとはいえ、バギー玉の威力は相当な物だと認める光景を確認した。
吹き飛ばされて廃墟と化した建造物を目にしつつ、キリは抱えたナミの体を下ろす。
「立てる？」
「あっ、うん……ありがと」
「いやぁーすんげぇ爆発だったなぁ。死ぬかと思った」

三人並んですっかり崩れ落ちた酒場を見つめる。
彼らは死んだのだろうか。逃げられたとしても無事では済まないだろう。予想外の威力は確かに町を一つ潰すことも簡単ではなく、自慢するのも頷ける。
決着はついたのかと考える一方、思った以上に手応えが無さ過ぎた。
間にナミを挟んで、ルフィがキリへ問う。
「終わったのか？」
「どうだろう。大半は仕留めただろうけど全員じゃないと思う。手配書で見たけどそこそこ有名な一味みたいだし、数人は立ち上がってくるんじゃない？」
「んん、おれはそっちの方がいいけどな。今回なんもしてねぇし」
「じゃあバギーは任せるよ。あの人ならまだ死んでないだろうから」
ほんの一瞬の出来事がまるで夢のようだった。
いまだ自分が経験した光景が信じられず、平静を取り戻せないナミは信じられないと左右に立つ彼らの顔を見る。なぜそれほど落ち着いているのだろう。まさかこれが日常だと言うのか。そうでなければ不自然なほどの落ち着きや、キリが浮かべる笑みに納得できない。
しばらく落ち着くこともできずにただ突っ立っていた。
そうしていると爆音を聞きつけたのか、彼らの背後から駆けつけた人物の声が聞こえてくる。
「し、信じられん……」
三人が振り返ると、左からゾロ、見知らぬ老人、シルクの三人が立っている。通りの前方にある酒場の残骸を目にして驚いている様子だ。
仲間の姿を見つけてルフィは笑顔になった。
「ゾロとシルクも来たのか。これで全員揃ったな」
「こっちも知らない人が増えてるか」
「ルフィ、キリ、あれは一体……？」
「ちょっと目を離した隙にこれだ。おまえらもうちっと大人しくできねぇのかよ」

戸惑いを表すシルクと呆れた顔のゾロが前へ進んできて、ルフィが肩を揺らす。
そして彼はすぐに敵へ向き直った。
「開戦だ。あいつらぶっ飛ばすぞ」
応っ、と揃った声。
歩き出したルフィへ続いてキリ、ゾロ、シルクが歩みを進める。
恐れを抱かず敵へ向かった彼らはナミや町長を置き去りに、決着をつけるため武器を手にした。
その背を見るナミは言葉を失い、思考する。
こいつらは普通じゃない。
かくして、一つの町を舞台に海賊同士の決闘が始まろうとしていた。

SHOW　TIME

オレンジの町の町長、ブードルは信じられない物を見て驚愕していた。
酒場が消し飛んだことは確かにショックだ。持ち主になんと言えばいいのだろうと思う。しかし今この瞬間だけはそれさえ気にならず、バギー海賊団へ手を出す者が居たことと、彼らが占拠してアジトとしていた建物を吹き飛ばしてしまった事実に驚きを抱く。
彼らは死が怖くないのか。
海賊に喧嘩を売った事実を知って言葉が出せないため、ただ考える。
ブードルは遠ざかる背から目が離せなくなった。
最初こそ助けに来たという言葉が信用できなくて、少し話してみたら希望も持てたが、今になると改めて心配が大きくなって躊躇う。
行かせていいのかと考えつつもなぜか期待している自分も居て。
立ち尽くすブードルは隠れることすら忘れて、自分より年下の彼らの背に見入っていた。
「小童ども、海賊というのは本当じゃったか……」
「そうみたいね。まったく、どうかしてる」
ブードルの呟きにナミが反応する。
残された二人が抱える疑念や不安はとても似通っていて、そのため挨拶なしでも話せた。
困惑するブードルとは違い、表情を歪めるナミは不満を露わにしたようだ。
自分は彼らに助けられたのだと理解している。これまでずっと一人で生き抜いてやると決めていたのに、赤っ鼻と言ったルフィに庇われ、キリに抱えられて爆発から逃がされた。命が助かったのは喜ばしいはずだというのに素直に嬉しいと言えない何かがある。
おそらくは彼らが海賊だったから。
大嫌いな海賊に助けられて、そして尚も助けられようとしている。
それでいて彼らには彼女が持っていた海賊像が見えず、それとはか

け離れた姿だけが見えて、複雑な気持ちになって胸中がもやもやしていた。
「娘、あいつらは知り合いか？」
「いいえ、違うわ。私も出会ったばっかり。あなたこそどういう関係？」
「わしもついさっき出会った。だがこの町を助けてくれると」
「助ける？」
「あそこにおる海賊たちを追い出してくれると言っておった。まさか本気じゃったとは……」
また信じられない話を聞いてナミは四人の背へ視線を向けた。
なぜ追い出すなどと言ったのか。彼らも海賊だろうに。
その姿を見ても彼らの行動基準が理解できない。
ナミの疑念は深まるばかりだ。
「どうして海賊が海賊を追い出そうなんて思うのよ。狙いはお宝？それともグランドラインの海図があるって知ってたの？」
「あいつら、海賊を狩る海賊だそうじゃ。確か、そう、ピースメインと言っとった」
「海賊を狩る、海賊……」
ぽつりと呟いて動きが止まる。だが心底信じた訳ではないらしい。
しばしの静寂の後に彼女は振り返って歩き出した。
もうその場に用はないと言わんばかりだ。
「馬鹿馬鹿しい。海賊は海賊でしょ。潰し合いでもなんでも勝手にやってれば？」
「娘、どこに行く。下手に動くと危険じゃぞ」
「私には関係ない話よ。ほんっと、海賊なんてバカばっかり」
そう言ってナミは歩き去ってしまい、路地へ入って姿が見えなくなってしまう。
ブードルは彼女が去るまで背を見ていたが、姿が見えなくなると再びルフィたちを見る。
彼らは崩れた酒場の前に到達していた。
敵が出てくるだろうかと待っているらしく動きが止まっている。

「ルフィ、帽子は？」
「預かっててくれ。ちょっと派手に動きそうだしな」
「了解。全員揃ったんならボクは動かなくてもいいし」
「ところで二人ともここで何やってたの？」
「聞いたところで理解できねぇんじゃねぇか。普通の思考回路じゃねえだろ」
戦闘を目前にひどくリラックスした状態。普段の気楽な会話はこの時にもあった。
キリが麦わら帽子をかぶったまま、気楽な顔で笑っていて、その隣ではルフィが両腕を動かし準備をしている。状況を知りたいシルクは二人へ問いかけるものの、答えを待たずにゾロが気にするなと断じる。全く緊張感など持ち合わせていなかった。
四人が待っているとやがて残骸の中から敵が姿を現す。
瓦礫を蹴り飛ばし、まず見えたのは特徴的な鼻を持つ男。怒り心頭といった表情のバギーはすぐには敵を見ず、俯いたままで瓦礫を踏みつける。傷は思いのほか少ない。どうやって逃げたのかダメージもほとんど残っていない状態だった。
その傍でさらに二人が立ち上がる。
片方は事前にキリと戦ったモージだ。
もう一人、独特な髪型の曲芸師然とした優男が居る。一味の参謀長カバジである。鋭い眼差しが印象的で、腕っぷしのほども期待できそうな筋肉が服の下から垣間見れた。
酒場から離れていたのか、少し遅れてリッチーが駆けつけてくる。
どうやら役者は揃ったようだ。
顔を上げたバギーは憤怒を感じさせる声で小さく呟く。
「おいおい、ハデに滅茶苦茶してくれるじゃねぇか……おれァもうキレたぜ。仲間はみんなノされちまって、残ったのはこれだけか？」
「ええ、そのようで」
「上等だ。てめぇら生きて帰れると思うんじゃねぇぞ！　おれ様の本気見せたらァ！」
服の下に仕込んだナイフを取り出し、指の間に一本ずつ挟んだバ

ギーが構えを取って叫ぶ。それをきっかけとして彼らの戦闘準備は瞬く間に整った。モージは腰の裏に提げていた鞭を取り出し、カバジは右手に剣を持ち、なぜか一輪車に乗って構える。
まるで本当のサーカス団。変わった一味だ。
彼らが準備を終える頃、ルフィたちはすでにいつでも動ける体勢。
上機嫌に笑うルフィは拳を鳴らし、麦わら帽子をかぶったキリは指の間に紙を挟み、シルクは剣を抜いて、ゾロは好戦的に笑って手拭いを頭に巻いていた。
きっかけ一つですぐに動けるだろう。
開戦となる直前、それぞれの船長が睨み合って話を始める。
「麦わらァ、謝るんなら今の内だぜ。命が惜しけりゃ頭を垂れろ」
「いやだ。おれァ死ぬ気ねぇし」
「ハデにフザけた野郎だ……！　どうやら本気で死にてぇらしいな」
「おれは海賊王になるんだ。おまえに負けてるようじゃ、この先の海になんて進めねぇ」
ルフィの発言を聞いてバギーの怒りが倍増する。
怒り過ぎて笑えてきたらしい。へらりと笑った直後、今度は激昂して荒々しい口調となった。
「ほざけハデアホがァ！　てめぇが王ならおれは神かッ！　この海を知らねぇ甘ちゃんどもが偉そうな口叩くな！」
「海のことならこれから知るんだ。おまえをぶっ飛ばして」
にっと笑って告げればいよいよバギーの我慢も限界となる。
宣言もなくナイフを投げて、突然ルフィへの攻撃を開始した。
「てめぇは！　ハデ死刑だァァ！」
「ししし。やるか」
ルフィへ飛来するナイフを目視し、二人の間にシルクが割って入った。
しっかり見据えて剣を振れば、軽い音と共にナイフが弾かれて、攻撃は船長へ届かずに終わる。
途端に敵も動き出した。

なぜか一輪車に乗ったカバジは巧みな動きで跳ね上がり、一番前へ出る。手に持つのは剣だがそれだけではない。水平に構えられた刀身の上には回転する独楽が乗せられていた。
「船長、おれにお任せを。奴らを処刑してやりましょう」
「おぉカバジ、やってやれ！　ただし麦わらは残しておけ。おれが直々に仕留める」
「御意」
懐から独楽が取り出され、片手で巧みに回されたそれがさらに刀身へ乗る。カバジは素早く剣を振ることでそれを弾丸の如く飛ばし始めた。
「曲技、カミカゼ百コマ劇場！」
飛ばされた独楽は十を超える。しかもその全てが音を立てるほど回転していた。
独特ながら明らかな攻撃を前にシルクは身構え、剣を握る手に力を入れ直す。後ろにはルフィが居て、彼なら問題なく避けられるだろうが逃げる気はない。その場で全て叩き落とすつもりだ。
彼女がそうして覚悟しているとしかし、さらに敵との間へ割って入られた。
両手に刀を持ったゾロが突如躍り出て刀を振り、向かってくる独楽を全て弾き飛ばす。
唐突な割り込みに驚きつつも流石の腕前であっさりやってのけた。シルクは思わず目を見開いて驚きを露わにする。彼女が難しいと判断していたことを息をするように終えたのだ。
「悪いな。こいつもらうぞ」
「ゾロ」
しばらく腕の立つ男を相手にしていなかったせいか、敵意も満々にゾロが笑う。
その姿を見たカバジは何かに気付いた様子で表情を変える。
「そこまで言うなら試させてもらおうか。本物の海賊がどれほどのもんか」
「ほう。三本の刀……貴様、ロロノア・ゾロとお見受けする」

「だったらどうした」
「嬉しいねぇ。噂の海賊狩りと手合わせできるとは、おれは運が良い。しかし、噂じゃ貴様は賞金稼ぎだったはずだが？」
「どうでもいい話だ。おれとお前の戦いにはな」
刀二本のみで構え、ぐっと姿勢が低くされる。
飛び出す準備を終えたのだと気付いてカバジも笑い、迎え撃つつもりで一輪車でジャンプした。
瓦礫から飛び降りた彼は喜々とした表情で一輪車を漕ぎ、真っすぐ向かってくる。剣を持っていなければただ遊んでいるようにしか見えないがそれが彼の戦法らしい。
「フッ、いいだろう。何にせよ貴様の首を獲ればおれの名が上がるというものだ！」
「やってみろ」
ゾロも前へ出て両者が刀を合わせ、金属音が鳴って瞬時に離れる。
素早い動きで立ち位置を変えつつ剣戟が繰り返され、互いに無傷のまま、一瞬の油断さえ命取りになる激しい戦いが繰り広げられた。二人は徐々に戦う場所を変えて、いつの間にかまるでルフィへ道を作るように前が空く。
その動きを確認しながら、次にやってくるのはリッチーとモージだ。
獰猛な姿で飛び掛かってくる姿を見てシルクはまたも驚愕する。
「えっ、ライオン!?」
「ちくしょー、これ以上負けるとおれの命が危うい……！　てめぇらには死んでもらわなきゃなんねぇんだ！」
唐突な敵の襲来に一瞬体が固くなり、反応が遅くなる。
上から降ってくる巨体を見つめて動けなくなる一瞬。シルクを助けたのは背後に居るルフィではなく、横から突進してきた狼型の紙の集合体だった。頭突きの瞬間にバサバサと音が鳴って形がバラけてしまい、津波のような紙によってモージとリッチーが流される。
彼らが地面を転がった時、咄嗟にシルクはキリへ顔を向け、歩み寄ってくる姿を目にした。

大して緊張もしていない笑顔。
また助けられたと思う。役に立たなければと思ったばかりで、本来なら敵の前に立っていた自分がルフィを守らなければならないのに、キリに取られてしまった。
悔しく思いながらも彼女はキリと肩を並べて敵に向かい、もう一度剣を構え直す。
「そう慌てなくてもいいよ。一歩ずつ進んでいければさ」
「うん……ふぅ。大丈夫。ちゃんと役に立つからね」
「期待してる。できるだろうって信じてるから」
わずかとはいえ彼らが脇へ逸れたことで、ルフィとバギーの間に邪魔する者は無くなった。この間に二人は動いていない。己の力を誇示するように互いの仲間が動いただけだ。
向かい合う彼らの表情は違っている。ルフィは笑みを、バギーは怒りを。
己の意志を貫き通すために睨み合いが続き、やがて仲間たちの戦闘がさらに離れてしまった後でバギーが口を開いた。
すでに怒りは頂点に達している。
彼らを海賊だと判断しても、おそらく海に出て間もないルーキーども。自分に逆らうのは何事だという想いがある。無名の彼らの中で唯一光るのは〝海賊狩り〟の異名を広めたロロノア・ゾロくらいだろうか。他は素人同然の少年少女ばかり。それに対して、〝道化のバギー〟と言えばイーストブルーでトップクラスの脅威、１５００万ベリーの懸賞金を懸けられた海賊だ。
格が違うだろうと、再認識したバギーが唸る。
海に出たばかりのルーキーがそんなに堂々と向かい合っていい相手ではない。
プライドを傷つけられたバギーは瓦礫の上に立ったままルフィを見下ろした。
「ガキども、多少は腕が立つようだなぁ。あの金髪は能力者だな？見たところパラミシアってとこか。それに海賊狩りのゾロまで引き連れてるとは恐れ入ったぜ」

「どうだ、参ったか」
「やかましいっ！　それで勝ったつもりじゃねぇだろうな。てめぇとおれとの力の差が埋まったわけじゃあねぇんだぞ」
「いいよ。おれは負けねぇし」
そう言ってルフィは右腕を振りかぶり、接近することなくバギーを狙う。
当然彼は訝しげな顔を見せた。この距離では届くはずがない。確かにバカっぽい顔をしているがそれがわからぬほどではないだろうと思っていたため、突っ立ったまま彼の行動を見守る。
「ゴムゴムのォ――」
「バカが。そんなとこからパンチが届くと思ってんのか」
「ピストル！」
その場所からパンチが放たれた。だがゴムの腕は勢いよく伸び、硬く握りしめられた拳はバギーの顔面目指して急速に接近していく。距離を物ともしない攻撃にバギーは驚愕した。
普通の人間ではないとこの時気付いたようだ。
ただ、接近する間に彼は不思議と笑みを浮かべ、慌てなかった。
拳が顔面へ迫った一瞬、バギーはまるで動かない。だというのになぜか彼の首が胴体から離れてしまい、ぽーんっと軽く飛んでしまった。
攻撃は当たっていない。にも拘らずの光景に今度はルフィが驚愕した。
大きな絶叫と共に腕が戻ってきて、バチンと音がして元通りになる頃には、尚もバギーの首が浮いたまま。高い場所からルフィを見下ろしていた。
「ぎゃあああっ!?　く、首が飛んだぞ！　しかも死んでねぇ！　なんだそりゃ！」
「ぎゃーっはっはっは！　貴様も能力者だったとは驚かされたぜ。だがこのおれ自身も能力者。バラバラの実を食ったバラバラ人間だ！」
どうやらバギーも悪魔の実の能力者だったらしい。

自分の体をバラバラにできるという、外見だけならゴム人間以上に奇妙な能力。
その恐ろしさはいまだ不明瞭だが回避能力には優れているようで、ルフィの鋭い一撃を避けたことは確かである。あれがまぐれでないのなら相当な力量だ。
ルフィは佇まいを直して彼を見る。
驚きはしたがその方が面白いと思ったようで、早くも余裕は取り戻していた。
「おまえも能力者だったのか。バラバラ人間っておもしれぇなぁ」
「フン、何が面白いもんか。思えばこの実を食っちまったのがおれの運の尽き。そしておれが悪魔の実を食っちまってカナヅチになったのも、あの憎きシャンクスのせい……！」
「え？　シャンクスが？」
「あの時あいつがおれに声をかけなきゃ、おれは宝も悪魔の実を売った大金も手に入れることができたんだ。そう、すべてはあいつが居たせいでっ」
昔の出来事を思い出して、バギーは戦闘中にも関わらずわなわなと震え始める。
明らかに隙だらけだったが、浮かんだままの首を眺めてルフィは動かず、彼の話に興味を持つ。
子供の頃、赤髪のシャンクスが村に居た時に様々な話を聞いたものの、そういえば見習い時代の話は聞いていない。聞いていたのは冒険の話が主だった。
友人を知る人物の話とあって、珍しくルフィは人の話を聞こうという態度である。
「おまえシャンクスのこと知ってんだよな。仲間だったのか？」
「仲間というより腐れ縁だ。思い出すだけで腹立たしいぜ。おれァ奴を許したわけじゃねぇ」
「なんでそんなに嫌ってんだよ。シャンクスはいい奴じゃねぇか」
「いい奴……？　いい奴だと……？　バカにしてんのかてめぇはァ!?　どうやらてめぇは何もわかっちゃいねぇようだな。よおし、そこ

まで言うなら語ってやろう。おれたちが同じ船に乗る見習いだった頃――」
「まぁそれは別にどうでもいいけどよ」
「てめぇが今聞いたんだろうがッ!? ふざけてんのかこのすっとんきょーめ!」
即座に掌を返したルフィに振り回されて、バギーが吠える。
相容れないのはシャンクスだけでなくこの男もだ。
この瞬間、はっきり認識してさらに怒りを燃え上がらせた。
もはや話し合いなど不要。どうせ話したところで理解し合えるはずもない。形相を変えたバギーがナイフを構え直したのを見てルフィも拳を構える。
最初からこうしておけば良かったのだ。
互いに海賊。暴力での解決に躊躇いを抱く必要はない。
バギーが本気の殺意をぶつけてもルフィの態度はまるで変わらず、笑みを浮かべる余裕は失われなかった。この場に彼が宝だと語る麦わら帽子があって、万が一にもそれを傷つけられでもしたら表情は変わっただろうが、今はキリが預かっている。行動を制限されず自由に動ける彼を止めるのは実のところ難しい。
それをまだ知らぬまま、本気で勝てると思うバギーは忌々しげに呟いた。
「まったく鬱陶しい野郎だぜ、てめぇもシャンクスもよぉ。二度とその口開けねぇようにズタズタにしてやる」
「おまえなんかに負けるか。おれはシャンクスに帽子を返すんだ」
「口だけなら何とでも言えるんだ。見せてやる、バラバラの実の底力を――」
対峙する二人は見つめ合い、他の者たちが発する音を聞きながらしばし動きを止める。
緊張か、興奮か、体に染み渡る感覚は独特。
戦闘が始まる直前の感覚に呼吸をゆっくりと吐き、肩に入った力の違いはあったものの、どちらも油断なく敵を見据えていたのは確かだ。

SHOW TIME（2）

キリとシルクは走っていた。
走り出したきっかけは敵にルフィの邪魔をさせないため。しかし途中で次第に追いかけっこに熱が入り、特に意味もなく逃走を繰り返している。たまにその場に止まれば勝負の続きをして、また逃げ出して、戦っては逃げてまた戦う。相手にしてみればストレスが溜まる戦い方だ。
戦えば勝てるだけの力量を持つ二人であるため、逃走の意味は無くなっていたはずである。
全てはキリが走れと言うからだろう。シルクは首をかしげながらも彼と肩を並べている。
どんな時でも余裕を失わないのは彼の良い所だが今回ばかりは理解に苦しむ。
何を想ってのことかわからない。決着を望むならば立ち止まって迎え撃てばいいだけだ。
後方から追ってくるリッチーとその背に跨るモージは必死の形相。しかしたまにキリが紙を飛ばして邪魔をするため、脚力で勝るリッチーだがトップスピードに乗れず、追いつけずに苦悩しているらしい。時折振り返るキリは彼らにも笑みを向けていた。
「いやぁ、意外と粘るね。疲れてくれれば僥倖だと思ってたけど」
「これって意味あるの？　キリなら普通に戦って勝てるんじゃないかな」
「そうかもしれないけどいつもいつも真正面から向かってくだけじゃ芸がないでしょ。たまには頭を使わないと。まぁ今回はあんまり頭使ってないけどね」
「それ、ルフィの悪口になるよ」
「これは失敬。でもルフィくらい突き抜けてれば立派な武器なんだよ、きっと」
走りながらも会話は止めず、二人はまだ余裕を保っていた。
対してモージは敵を仕留められない苛立ちから平静を失くしかけ

ており、それだけでも走り続けた甲斐はある。おそらくその焦った表情では冷静な判断は下せない。
「それにさっきの爆発で手持ちの紙が少なくなってさ。考えて使わないと武器がなくなる」
「いつも思ってたけど、紙ってどこに隠してるの？」
「服の下に専用で作ったホルスターがあるんだ。それに収納してる」
「いつの間にそんなのを」
「これは昔から持ってるよ。何年か前に戦闘を見越して作ったんだ」
「へぇ……私も何か考えなきゃなぁ」
ある時、キリが前方に小さな路地を発見した。
「ええい、待て貴様らァ！」
「シルク、あそこ右」
「うん」
素早く右手の路地に飛び込み、一瞬モージの視界から二人が消える。
迷うことはない。倒すためには追わなければ。
リッチーに指示を出した彼は即座に路地へ飛び込む判断を下した。
「リッチー、右だ！　絶対奴らを逃がすなよ！」
強靭な脚力でそれまでのスピードを殺し切り、向きを変えて正面に見据えた路地へ飛び込む。
リッチーが跳んだ瞬間、モージの目には路地の入口付近でしゃがんで隠れているキリを捉えた。飛距離から見てリッチーが飛び越えてしまう。瞬間的に思わず舌打ちをした。
それだけならばよかったが、腕を振ったキリは無数の紙を飛ばす。
バサバサと群がる紙によって視界が奪われ、目の前は白く染まった。
モージもリッチーも視界が利かず苦心する。その中で何とか着地した。危うい様子はあったが足元には何もなく、転ぶこともなくリッチーは地面に四肢をつく。

紙が落ちて視界が戻りつつある中。
そのタイミングを狙ってシルクが正面からモージへ飛び掛かった。
「なにィ!?」
着地点を予想して潜んでいたらしい。
唐突に現れたように見えた彼女に驚愕すると、体が固まって動けなくなっていた。
驚いている一瞬で素早く接近されてしまい、跳んだ勢いで交差する一瞬、鞘に仕舞ったままの剣で腹を殴られ、力ずくでリッチーから叩き落される。特別腕力に優れる訳でもない彼女も、思い切り飛び掛かった勢いで威力が増したようだ。
背中から地面に落ちたモージは痛みによって目を閉じた。
さらにシルクが追撃を加えようと剣を振り上げ、目を開けた彼はちょうどその姿を見る。
「ひぃっ!?」
「ごめんね」
謝罪の直後、剣が振り下ろされて鞘で顔面を殴られた。
強かな一撃にモージの意識は刈り取られ、脱力して大の字に倒れる。
一方の決着はついた。後はもう一匹。ライオンのリッチーを仕留めるのみである。しかしこちらはモージと違って急所を殴って一発で気絶、ともいかないだろう。
振り返って彼らの姿を見つけたリッチーは、喉を鳴らして襲うタイミングを見計らっていた。
シルクが剣を抜くか抜くまいか考えた時、背後からキリが声をかける。
「シルク、こっち」
手招きされて迷わずそちらへ走る。同時にリッチーも駆け出していた。
狭い路地での一瞬の攻防。
追いつかれれば死、追い付けば勝てる。そんな静かな激闘だ。
思い切り跳んで先に大通りへ出たのはシルクであり、それを確認し

た途端キリが紙を操った。
落ちた物と新たに取り出した物、路地を埋め尽くすほどの紙が、キリの手に纏わりつくと一瞬で拳となってリッチーへ迫る。
あまりに巨大なその威容には王者と名高いライオンであっても怯えずにはいられない。
先の光景を思い出したのだろう。怯えたリッチーは微塵も動けなくなって目を丸くし、轟音を立てて迫る攻撃を目の当たりにしていた。直後、逃げる暇なく強かに殴られる。吹き飛ばされた彼は路地の反対側から通りへ運ばれ、意識を失った様子で勢いよく地面を転がった。
勝負はいとも容易く終わった。
武器が足りないと言っていたキリだが今の一撃では決してそう思えず、シルクは驚愕する。
やはり彼一人でも終わったはずの勝負だ。
路地から飛び出した勢いで地面にへたり込んでいた彼女は項垂れ、自分が空回りしているのだと思い込んでしまう。役に立ちたいと言って、無駄な努力ばかりしているのではないか。
そんな彼女を見てキリが紙を集めながら言った。
「周りの環境を利用して戦うのも大事な戦法だよ。ライオンは人間より身体能力に優れて、牙や爪も立派な武器だけど、あれだけサイズが大きいと小回りが利かない。それならこれだけ狭い場所に誘い込んだ方が行動を制限させられるし、小回りが利く分こっちの方がよっぽど有利だ」
彼の言葉にシルクの顔が上がる。
「ひょっとして、それを教えるために？」
「思い悩んでるみたいだったから。腕力だけが戦闘じゃないよ。強くなるには戦闘中も焦らず冷静に考えられるかどうかだ」
全ての紙を回収し終わると、気絶したモージが路地の中で倒れているのがわかる。
起き上がってくる気配はない。
安心してキリはシルクに向き直った。

「ルフィやゾロもあれで意外と考えてると思うよ。あの二人の場合、反射で動いちゃうって場合も多いだろうけど」
「そっかぁ……私、まだまだだね。最近落ち込んでばっかり」
「ちょっと真面目に考え過ぎてるんじゃないかな。そこまで思い悩むことでもないって」
キリが右手を差し出す。
彼女が立ち上がるため手を貸してやり、立ったシルクはまだ表情が暗い。
どうにも真面目過ぎる傾向がある。町民を助けたいとの想いも然り。海賊を楽しんでいる一方でやはり根っこは町民なのか、まだ性質は変わり切っているとは言い難い。元海賊のキリや海賊に憧れて育ったルフィ、賞金稼ぎとして旅していたゾロとの違いも仕方ないだろう。
「まぁ、追々頑張ろう。航海は長いから気楽にね」
「うん。私、もう落ち込むのやめるよ。そんな暇あるなら修行する」
「別にいいけど、ゾロみたいにはならないように。あの人は最近寝てるか修行してるかのどっちかだから」
「あはは、大丈夫。ちゃんと仕事もするから」
モージとリッチーは放置したまま、ただ忘れているだけなのか、それとも町民に任せるべきだと判断したのか定かでないが、二人は何気ない会話を再開させながら歩き出す。
ずいぶん遠くまで走って来た。よってルフィの下へ帰ろうと来た道を戻っていくのである。

＊

最初に激突した位置からそう遠くはなく、しかしルフィたちの姿が見えなくなった場所。
ゾロとカバジの戦闘は続いていた。
両手の二本に加えて三本目の刀を口へ、三刀流を披露するゾロが終始圧倒している。

一輪車に乗ったまま戦うカバジは確かに器用だが、それがそのまま強さに直結しているかと問われれば疑問が残る。巧みなバランス感覚も、剣とは異なる武器を用いる曲技も、ゾロに対してさほど優位に立つための材料とはなりえない。

あくまでもこの場で必要とされるのは剣の腕である。

力強く隙のない剣術を見せるゾロに比べて、カバジのそれは特別性を感じない。

曲技を絡めて見るならば確かに一流程度の実力は持っているものの、その曲技が相手に通じず、剣での力押しに持ち込まれるようならば不利は否めない。

カバジの顔からは徐々に、しかし確実に余裕が削り落とされていった。

「曲技、火事おやじ！」

「うわっ!?」

接近戦の最中、口内に何か仕込んでいたのか、カバジが口から火を吹いた。至近距離からの奇襲に思わずゾロは体勢を崩し、たたらを踏む。

直撃はしていない。ダメージはなかった。

ただし一瞬の隙は生まれていて、目を光らせたカバジが鋭く刺突を行う。

「隙ありだ！」

脇腹を狙った素早い一撃。常人には避けられないタイミングだった。しかしゾロは手拭いの下で目をギラつかせ、彼以上の速度でその刺突を受け流す。

荒々しい挙動で金属音は大きかった。

攻撃を受け流されたことで体勢が崩れ、今度はカバジに隙が生まれる。

まずい、と思った瞬間。なぜかゾロは隙だらけの背を斬りつけず、咄嗟に彼の一輪車を蹴った。強く蹴られたせいで一輪車は跳ねるように飛び、カバジはその場で転んでしまう。

剣は手放さなかったため、転んだ状態ですぐに切っ先を彼へ向ける

も、ゾロは見下ろすばかりで追撃を行わない。むしろ構えを解いて彼が立ち上がるのを待ってすらいた。
「立て。続きだ」
「くっ……貴様舐めているのか。なぜ今攻撃をしなかった」
「いいから立て。待たせんじゃねぇよ」
悔しげに歯噛みしながらもカバジは立ち上がり、右手で剣を構える。
「さっきおれを殺さなかったこと、後悔しろ……曲技！　湯けむり殺人事件！」
手の中で剣が高速で回され、巧みな様子で地面の表面だけが削られる。二人の間で土煙が発生して視界が極端に悪くなった。
何もない場所から土煙を発生させるのは見事。まさに曲技だ。
一方でゾロはまるで慌ててはおらず、土煙の中から逃げることなく立ち尽くしている。
まるで相手を待っているかのよう。
そうして数秒、カバジが突然死角を突いて背後から襲い掛かって来た。今度は剣が大上段に構えられて、脳天から叩き割る挙動。両腕に力が入って歯を食いしばり、全力で振り下ろされる。
その、ほんの一瞬の出来事だった。
気付けばゾロと目が合っており、気付いた時には剣を握ったままの拳で腹を殴られていた。
当然カバジの剣が届くはずもなく、ただの打撃で殴り飛ばされた彼は地面を転がる。軽い様子で地面を跳ねて一気に二人の距離が開く。単純な驚きと予想していなかった痛みでカバジはしばし動けなかった。
土煙はすぐに晴れ、互いにいまだ無傷。しかしダメージの量はあまりに違う。
圧倒的な実力差を感じさせられたカバジは心身ともに疲弊していたようだ。表情の変化からそれは明らかである。対してゾロは微塵も疲労を感じず、恐れを抱かず、威風堂々たる姿で仁王立ち。両者の外見の違いは誰の目にもはっきりとしていた。

「立て」
「ぐほぉ……!?　貴様、剣士の癖に、殴ったかっ!?」
「細かい話だ。気にすんな。それよりとっとと立てよ」
「うっ、ぐぅ……!」
震える腕を地面につき、ふらつきながらもカバジが立ち上がる。
予想外の強さだ。それなりの腕前だと想像していたがここまでとは。
完璧に目測を見誤り、結果、一方的な状況となっている。ただ奇妙なのは彼が刀を使って攻撃して来ないことだ。チャンスはいくつかあったはず。そのいくつかを彼は一輪車を蹴り、腹を殴り、一度として斬撃でカバジを傷つけようとしていない。
舐められているのか、ただ人を斬る勇気がないだけなのか。
どちらにしてもカバジの気分は良くならない。
何が真実であっても自分が押されていることに変わりはない。それが許せないと剣を強く握り直した彼は、強い眼差しで敵を睨みつけるのだが、ゾロの気迫は微塵も揺らがない。
鋭い視線は彼も同じ。下手をすれば押し負ける危険性がある。
再び切っ先をゾロへ向け、しかしどう攻撃すれば良いかまるでわからなくなった。
「こんなもんか？　本物の海賊ってやつは」
「な、なにィ……!」
「少しは骨のある剣士が居たかと思えば大したことはねぇ。曲技だかなんだか知らねぇがお遊戯なら他でやってろ。おれはもっと強ぇ奴と戦いてぇんだ」
つまらないと語るような、そんな口ぶりで言われていた。
不遜な態度には我慢ならず、カッと頭に血が昇ったカバジは何も考えずに走り出していた。
気付けば曲技など使える精神状態ではなくて、ただ我武者羅に剣を振り上げて突っ込んでいく。
ゾロはそんな彼を冷静に見据えた。
ゆっくりと構えを取り、三本の刀、三刀流にて迎撃の姿勢を取る。

「貴様ァ、言わせておけば！」
接近する様を冷静に見極め、自らの技が最大の力で相手を捉えられる一瞬、ゾロが前へ出た。
「そこまで言うなら見せてやる、おれの本当の剣技を――！」
「鬼斬り！」
刀が振るわれ、確かに感触があった。
二人の体が交差する。
ゾロの体は無傷。対照的にカバジの体には三本の刀傷が刻まれていた。
強烈な一撃を受けたカバジは斬られた衝撃で吹き飛ばされており、自身が空中に居ること、血を噴き出していることを知ってからようやく痛みを認識する。
背から勢いよく地面へ落ちて、大の字に倒れた後、意識を失う直前に呟いた。
「ゲホッ……!?　おのれ、たかが、ルーキー如きに……！」
「悪いがお前は眼中にねぇ。とっとと寝てろ」
カバジは意識を失った。だが死んではいない。加減をして死なないように斬っていた。そのまま放置していたところで万が一もないだろう。
刀を仕舞ったゾロは頭の手拭いを外し、腕に巻き直す。
どことなく不満の残る表情だった。もっと期待していたが、これでは修行にもならない。
懸賞金付きの船長を持つ海賊団、その幹部を相手にしても物足りず、彼は表情が晴れないまま首を鳴らした。これならキリを相手に斬り合っていた方がよっぽどいいと考える。
「まったく、有意義にはならねぇ時間だったな。これじゃあまだまだ足りねぇ」
一つの勝利を得ても彼はいまだ満足せず、慢心することもない。更なる強さを目指して微塵も気を緩めることはなかった。
決着の後、仲間に合流するため辺りを見回し、歩き出す。
幸いにもルフィが居た場所からさほど離れてはいない。

道さえ間違えなければ最も早く合流できる位置だった。
「とりあえずあいつらのとこに戻るか。ここからだとさっきの場所は……右だな」
ただし残念だったのは、強い代わりと言うべきか彼は驚くほどの方向音痴で、自分が居る場所、自分が居た場所がいまいち理解できず、また詳しく考える癖もない。
そのため適当に歩き出し、当然といった顔で見当違いの方向へ向かい始めたのである。
それで自分が迷うとは微塵も考えていないのだろう。
後に仲間が迷子の彼を探さねばならず、迷惑をかけることになると理解していないようで、勝利の高揚感もなく冷静に歩いているというのになぜか目的地には辿り着けなかった。

ＳＨＯＷ　ＴＩＭＥ（３）

先に動き出したのはルフィだった。
ゴムで出来た肉体を十全に操る彼は距離を選ばず素手での攻撃を繰り出せる。
振り上げられた右脚は、蹴りを放つと同時に伸びてバギーの体へ迫る。
「ゴムゴムの鞭ィ！」
速度は十分。素早くバギーの腹へと迫っていった。しかし攻撃が届く前に彼の上半身と下半身が分かれてしまい、上半身は空を飛ぶ。それによって蹴りは空を切った。
瞬時にバギーが反撃のため、指の間にナイフを挟んで腕を構える。
右腕を銃に見立て、攻撃はナイフによる刺突。
投擲とは違って腕ごと発射すれば空中で攻撃の軌道を変化させることも可能だ。
バギーは雄々しく叫んで右腕を発射した。
「バラバラ砲！」
「うわっ、飛んできた」
肩から切り離された右腕がナイフを持って飛来する。奇妙な光景だがバラバラ人間であることを考えれば至極当然の攻撃方法。驚くルフィは即座に動き出す。
回避しようと軌道上から離れようとした。しかしバギーの腕は空中で自由自在に動き、翼もないのにまさしく飛んでいて、逃げようとするルフィを追いすがる。これでは逃げられないと判断し、仕方なく足を止めた。迫る腕を自身に当たる直前に受け止めたのである。
ナイフが顔に当たらないよう、がしっと手首の辺りを掴んだ。
「ふんっ！」
「バカめ。切り離し！」
「うわっ!?」
完璧に掴んだはずだったが、手首がさらに腕から切り離され、距離が近過ぎて突進してきた手は避け切れず、ナイフがルフィの右頬を掠

る。少量とはいえ確かに血が流れた。
すぐに腕を離して距離を取る。
傷は浅いとはいえ痛みはある。だが今ので仕留められなかっただけマシだろう。
体勢を立て直そうとするルフィとは裏腹に、バギーは悔しげな表情だった。
上手くいけば今の奇襲で仕留められてもおかしくなかったはず。恐るべきはその反射神経と即座に動ける身体能力。顔面を捉えられる距離だったが一瞬の挙動で顔を背けられた。
互いに一つずつ互いの能力を把握していくようだ。
ルフィのゴムゴムは攻撃、防御に優れ、しかしナイフで傷つけることは可能。
対するバギーのバラバラは斬撃こそ無効にするが、打撃を受け流すことはできない。
互いに得意不得意があって勝機は伺える。
勝負は一時の切れ目ができた。
「なるほど、ゴムの体か。どうやら斬撃は効くようだな」
「うん」
「バカが、自分から弱点をバラしやがって。それさえわかればこっちのもんだ」
上半身は宙へ浮いたまま、下半身が独りでに動いて爪先で地面を叩く。すると靴に隠されていた小型ナイフが爪先から顔を出し、攻撃方法を変えるようだ。
分かれた上半身と下半身がくっついて、元の姿に。
その直後、力を溜めるように片足が上げられた。
「バ～ラ～バ～ラ～せんべいッ！」
脚を振って遠心力を手にした下半身は上半身から分離し、己の力のみで高速回転しながら飛んでいく。まるで巨大なブーメランだ。
それを見たルフィは冷静にその場でジャンプする。
「なんだ、こんなの」
「かかったな」

跳んだルフィの真下を攻撃が通り過ぎていった。
それを見越していたのか、にやりと笑うバギーは両手のナイフを構える。
「空中じゃあ、身動きが取れんだろう！」
彼が避けることはわかっていた。そこも考慮した上での攻撃。
空中へ逃げれば後は落下するだけ、回避行動を取るのは不可能。
バギーは両手で八本のナイフを投げつけ、空中で動けないルフィを狙った。その挙動は確かに彼も見ていたものの、不思議と慌てず、笑みを浮かべるとおもむろに右腕を伸ばす。
「取れるさっ」
伸びた右腕は近くにあった家屋の柱へ巻き付き、縮む力で体がそちらへ引き寄せられる。投げられたナイフは当然空を切り、目標を見失って確かに回避された。
ルフィは無傷で地面へ降り立ち、バギーは歯噛みして悔しがった。
放った下半身が戻ってきて再びくっつく。
彼もまた地面へ立ち、最初の時と同じ状態で対峙する。
変わったのはルフィの頬に浅い傷が出来たのみ。状況には有利も不利もない。
「おのれゴムゴム、予想外に動けやがる」
「あー危なかった。あいつ何本ナイフ持ってんだ？」
互いに疲労の色はない。まだ勝負は始まったばかりだ。
それでいてバギーは苦心した表情を見せる。
この男、想像以上の身体能力を持っている。頭は良くなさそうだが脅威に成り得た。
早々に決着をつける可能性がある、と考えたらしい。
再び両手にナイフを持ち、彼はにやりと笑う。
「おい麦わら、おれはおまえと長く遊ぶつもりはねぇんだ。さっきも言ったな？　バラバラの実の力を見せてやると」
「言ってたな。で、何すんだ？」
「今見せてやる。バラバラフェスティバル！」
そう叫んだ直後、バギーの全身がバラバラになった。

体のパーツがいくつにも分かれ、目で見て数えられるサイズだがその動きは奇妙で、ふわりと浮かぶパーツは空を飛んで自由自在に動き回る。これがバラバラの実の真骨頂。重力に逆らって空を飛ぶことができるのだ。ただし足だけは能力の範囲に入らず、地面から浮かび上がらせることはできない。それでも常人にしてみれば奇跡の光景だろう。

体をいくつにも分ければ敵の攻撃は喰らわず、また自分の攻撃が当たりやすくなる。

様々な角度、あらゆる死角から敵を奇襲できるのだ。

腕や脚、武器を持てないパーツで敵に体当たりし、体勢が崩れた隙に手に持ったナイフで刺し殺す。作戦は完璧。ただそれだけで敵に勝つことができる。

回避は簡単で攻撃は多種多様。バギーが自信を持つのも無理はなかった。

バラバラになった体を見てルフィは感嘆した声を発する。

「ぎゃーっはっはっは！　どうだ見たか、これでてめぇはおれに触れることもできねぇ。いや触れられたとしてもその間にどっかから刺されちゃうかもよぉ？　ただのゴムで止めれるもんなら止めてみやがれぇ！」

「うし、わかった」

バラバラになった状態で真正面から飛んでくる。ただしパーツが描く軌跡は多種多様で、目で見えていようがそう簡単に見切れる物ではない。

ルフィは敢えてその場から動かず、両脚を踏ん張った。

そしてなぜか拳を作って両腕を素早く動かし、何かの予備動作を始める。

小刻みなパンチを無数に繰り返して威力を溜めるかのようだった。

「ゴムゴムのォ――」

「バァカめ、伸びるしか能がねぇゴムゴムが何をやっても無駄だ！」

「銃乱打（ガトリング）！」

「ハッ!?」

繰り出されたのは伸びる腕による、無数のパンチだった。
伸びて縮んで、また伸びて。ただそれを繰り返すだけの高速の攻撃。
その攻撃の凄まじい点は手数の多さと、何より制圧力にある。
バラバラになったパーツはどこから攻撃してくるかわからない。また、攻撃を当てることが難しい。最も恐れるべきは四方八方を囲まれて隙を探される状況。ならば囲まれないためには接近される前に殴り飛ばし、当てるためには手数を増やすしかない。ただそれだけの単純な思考。
選んだのは前方、空間を埋め尽くすほどの攻撃を放つこと。
数えきれないほどのパンチは確かにバギーのパーツすべてに当たり、一度触れた感触を覚えた直後に位置を覚え、その後はむしろ選んで敵へ攻撃を当て始めた。
「おおおおおおっ――――！」
「ぶべぼがべぇ!?」
奇妙な悲鳴を発しながらバギーは殴られ続ける。
数秒、強烈なパンチを全身に浴びた後、最後とばかりに顔面が一際強く殴られる。
勢いから飛ばされたパーツは積み重なった瓦礫まで飛び、やがて衝突して物々しい音を立てた。
「ぎゃあああっ!?」
間抜けな音を立てながら瓦礫の中を転がっていった。それ以来しばしバギーは静かになり、腕の動きを止めたルフィは深く息を吐く。上手く迎撃できて満足そうな顔だ。
「よっし。どうだ、止めてやったぞ」
自信満々にそう言うもののバギーには聞こえていなかったらしい。瓦礫から飛び出した彼はパーツを集め、元の姿で痛みから足をふらつかせる。
「こ、こなくそぉ……よくもあんなふざけた攻撃でまぁ」
「ふざけてねぇよ。大まじめだ」
「やかましい！　クソ、必ず消し飛ばしてやる……」

恐ろしいガキである。常人が混乱する危機的な状況の中で逃げるどころか反撃してきた。しかもゴムの特性を生かし、腕力だけでない力が加わった強烈なパンチの嵐で。
ますますバギーの怒りが大きくなる。が、今度は不用意に攻撃できない。
頭を使うタイプではないだろうが、代わりに本能的な判断力に優れているのだろう。
ならば頭を使って勝ってやる。
そう考えながら周囲に視線を走らせた時、バギーの目に一つの物体が飛び込んだ。
元酒場の瓦礫の近く、おそらく外に出されていた木箱がある。あれはバギー海賊団の荷物。中には彼らの所有物が入っているはずだった。
船長たる彼ならば中身が何かも記憶している。
喜々として走り出したバギーは疑問視するルフィも気にせず、木箱の傍へ立った。
蓋を開けて中身を確認。一つだけ入っていたそれを取り出す。
再び瓦礫の山の上へ立った彼は勝ち誇った顔で笑った。
「ぎゃーはっはっは！　どうだ見たか麦わら、おれの勝ちだァ！」
「なんだよ、まだ決まってねぇだろ」
「これから決まるんだよぉ。見ろ！」
バギーが小脇に抱えていたのは赤い砲弾。赤鼻のドクロマークが描かれたバギー玉だった。
町一つを消し飛ばす威力を持つ武器だ。
その威力は酒場を吹き飛ばした光景からルフィも理解している。大砲がない現状とはいえ、確かに起爆さえさせれば辺りに甚大な被害を与えるだろう。
勝ち誇った顔でバギーが笑い、ルフィは冷静な顔で向き合う。
「いいか小僧、海賊に必要なのは姑息さと残忍さとそして勝利だ！
勝った奴がルールになり、敗者は悪になる。たとえどんな卑怯な手を使おうが勝った奴が偉いんだよォ！」

「ふぅ～ん。でもおれは負けないけどね」
「言ってろ。こいつの威力はその目で見たはずだ。今からおれがこいつでおめぇを消し飛ばし、海賊の何たるかを教えてやる――」
「もうやめんかッ！」
バギーが両手で持った砲弾を純粋に投げつけようとした時、鋭い声が割って入った。
二人は同時に同じ方向を見る。
そこには申し訳程度にお手製の鎧を胴につけた老人が一人。
思わずといった様子で駆けつけた、町長のブードルがバギーを睨みつけていた。
「なんだてめぇは。町の人間か？」
「そうじゃ、わしはこの町の町長ブードル！　ここはわしらの町！　わしの許可なく傷つけるのは許さん！」
「なるほど。じゃあてめぇに許可を仰げば傷つけていいわけだ……」
そう言うとバギーは頭を下げ、いやらしく笑いながら言う。
「お願いします、この町を消し飛ばさせてください。これでいいか？　ぎゃっはっはっは！」
「くぅ、もう辛抱ならん……この町から出ていけ！　おまえにこの町を壊す権利などない！」
「あぁ？　おいおい、また面倒なこと言い出しやがったぜ。権利だと？」
「そうじゃ。苦節四十二年、かつて海賊に町を壊されたわしらが、この土地にて一つずつ築き上げ、育て上げた大事な町。なぜ貴様らに壊されねばならん！」
「そりゃあ決まってんだろう……おれが海賊で、てめぇに力がねぇからだ」
冷徹に吐き捨て、再びバギーは砲弾を振りかぶった。
遠心力を使った投法で自らの腕から砲弾を放ち、狙った先はブードル。やかましい老人をルフィごと消し飛ばすのだと砲弾は確かに投げられた。

「大事なら、ちゃんと守れェ！」
「うぅ、うおぉ――！」
迫り来る砲弾を見てブードルは動かなかった。
逃げる暇もあったかもしれない、しかしそれを拒んでその場に立つことを決めたのである。
すべては町を守りたい一心。力はなくとも想いはある。
最後の一瞬まで目を離しはしないと砲弾を睨み続けた。
しかして、その想いは確かに届く。
ブードルと砲弾の間に飛び込んだルフィは迫る攻撃を見据え、大きく息を吸い込んだ。ゴムの体が一瞬で膨らみ、太ったかのような様相で、腹の内に大量の空気を含む。まるで風船といった姿と性質。その大きな腹で飛んでくる砲弾を受け止めた。
まさかの光景であった。人体が奇妙に膨らむことも、砲弾を受け止めることも。
ルフィは受け止めたのみならず、弾力を使って受けた砲弾を跳ね返す。
再び放たれたそれは狙い澄ましたかのように同じ軌道で、今度はバギーへと向かっていった。
「な、な、なっ、なにィィ!?　んなァホなァ!?」
逃れることはできず、バギーの体に砲弾が直撃する。
以前と同じ光景、砲弾は爆発した。ただし今回の物は失敗作だったか、爆発の規模は小さく、それでも人体には甚大な被害を与えるものだったが、バギーの体を吹き飛ばす。
黒煙から突き出たバギーの体は空を飛ぶ。
それでもルフィは止まらずに、両腕を伸ばして両側にある家屋を掴むと、腕を発射台に自らを発射した。勢いよく空へ飛んで一直線にバギーを追う。
「ゴムゴムのロケットォ！」
「お、おい小童！」
ブードルの制止を聞かずに飛び出した彼は、瞬く間にバギーへ接近し。

ようやくその事実に気付いた表情を見ながら、後方へできるだけ長く腕を伸ばした。
「おいバギー！」
「ぎゃああっ、麦わらァ!?」
「あのおっさんの勝ちだ。諦めろ」
笑顔で告げてゴムの両腕を一気に前方へ突き出す。
後方へ伸ばした反動を利用した一撃は目にも止まらない。凄まじい音を称えながらすべての力が攻撃に利用され、視認するのも難しい速度で、バギーの体へと迫った。
「吹き飛べ！」
「ま、待て、やめろォ――」
「ゴムゴムの、バズーカァ！」
繰り出された掌底は強かに腹を打ち、息が詰まったのも一瞬、バギーを吹き飛ばす。
絞り出た悲鳴は空の彼方まで飛んで行き、すぐに彼の姿は見えなくなった。
攻撃の衝突で飛ぶ勢いを失くしたルフィは、決着がついたと感じてそのまま落ちていく。
四肢は大の字に伸ばされ、笑顔を浮かべる。恐怖心の一切もなく町へ落下していった。
その様を、ブードルはじっと見つめて目が離せなかった。
バギーを吹き飛ばして、町を守って、自分を助けてくれた少年を。名前も知らぬ他人でありながら、この一瞬、彼は確かにやり遂げた。
痛いほどに握られていた手から力が抜け、ふっと体が軽くなる。
ブードルは笑顔でルフィを見上げた。
町は今、海賊たちの支配から逃れたのだ。
「あーっ、危ねぇぞゾロぉ！」
「あぁ？　おいバカっ、何やってんだ――！」
着地を考えてルフィが地面に目をやった時、なぜか真下にはゾロが居た。
避けろと声をかけたところで遅く。逃げ遅れた彼に衝突する。無

理やりではあったがゾロに受け止められた形となり、元々ゴムだからダメージはないのだが、ルフィは無傷で町へ降りることに成功した。代わりに下敷きになってしまったゾロは多少体を痛めたようで、自分の上に居るルフィを素早く投げ飛ばす。衝突の音は凄まじかったが思いのほか元気そうではある。

からからと笑うルフィへ牙を剥いて、ゾロは思わず頭を殴った。

「こんのバカが！　何いきなり降ってきてんだ！」

「なっはっは、敵ぶっ飛ばしたとこだったんだよ。悪かったって」

「ったく。敵につけられた傷はねぇってのに、なんで味方にやられなきゃいけねぇ」

「まぁよくあることだ。気にすんな」

「よくあって堪るか！　二度とすんなよ」

何も本気で怒っている訳ではないらしく、頭を抱えたゾロはやれやれと首を振る。

その場へ座った二人は互いの勝利を理解し合っていたようだ。

結果は聞くまでもなくわかっているが話のきっかけにはなるのだろう。別段慌てる必要もなく、誰も居ない通りの地べたに座ったまま会話が始まる。

「で、勝ったのか？」

「おう。そっちは？」

「手応えのねぇ相手だったぜ。これじゃ肩ならしにもなりゃしねぇ」

「ししし。ゾロは強ぇからなぁ」

上機嫌にルフィが笑えば、つられたのかゾロまで笑みを浮かべる。

戦闘後のわずかな気の緩みでようやく肩の力が抜けた。

座り込んだ彼らが話していると路地を通り抜けてキリとシルクが駆けつけた。空中で起きた爆発とルフィが飛んだのが見えていたらしい。座っている二人を見て少し驚く。ゾロは無傷でルフィは頬を切っただけ。無事なのはいいがなぜ道の真ん中に座って話しているのだろう。

不思議に思いながら近付いて来る二人を見てルフィが嬉しそうに

手を振る。
傍へやって来たキリが呆れた顔で彼らに声をかけた。
「何がどうなったらこんなとこに居るんだろ。君らほんとに迷うのが得意だね」
「別に迷っちゃいねぇよ。たださっきの場所に戻ろうとして右に――」
「それを迷ってるって言うんだよ」
「まぁまぁ二人とも」
くすくす笑うシルクが止めてキリとゾロの間に割って入った。
状況から見て戦闘は終了している。ルフィがほんのわずかに怪我をしているが問題はない程度。
つまり当初の目的は果たしたことになる。
襲撃していた海賊たちを倒し、町を救うことができた。
彼女は満足した様子で笑みを称えて皆の顔を見回す。本当に強い。決して簡単ではない戦闘を終えて怪我など些細な物一つだけだ。
「これからどうする船長？　今から町民が戻って来たとしても買い出しやその他には多少時間かかるだろうけど」
「うーん……よし。島を出よう」
「いいのか？　まだ何も補給しちゃいねぇぞ」
「なんとかなんだろ。そんなことよりおれはピースメインになるのはいいけど、ヒーローになるのがいやなんだ。あいつらはおれたちがぶっ飛ばしたいからぶっ飛ばした。それでお礼を言われるのはなんか違う」
「ふむ。一理あるか」
「人に集まられんのも面倒だしな」
男性陣の意見は固まったようである。
その後でキリがシルクへ振り返り、意見を求めた。
「どうかなシルク、そういうことで」
「うん、私もいいよ。みんな無事に済んだみたいだし」
「補給はまた別の島で考えよう。最悪サバイバル能力はある面子だし無人島でも大丈夫でしょ」

「酒は」
「必要なら略奪してくる？」
「そしたらおれがシルクに斬られんだろうが……」
溜息をつくゾロの隣でキリがルフィの手を掴み、引っ張って立たせた。
すぐ後にゾロも立ち上がる。
一同は考えも同じで歩き出し、人知れず町を出るため港へ向かい始めた。
「ゾロ、港はどっちでしょう」
「あっちだろ」
「残念。こっちでした」
「あっはっは！　ゾロはほんとバカだなぁ」
「うるせぇ！　じゃあてめぇはどっちかわかってんのかよ」
「もちろんだ。あっちだろ」
「今こっちだって言ったばっかりなんだけど……」
「それはもう人の話を聞いてないだけとかじゃないと思う……」
四人の間にはいつも通りの会話があり、戦闘の余韻を残さず気楽な姿だ。
誰も居ない通りを堂々と歩き、笑い声は妙に大きく響いていた。

ギブアンドテイク

船へ戻って来た四人は甲板へ辿り着いてから、これからの旅路について考えた。まず最初に考えたのは傍に停泊しているバギー海賊団の船を目にし、あそこからなら略奪してもいいのではないかということ。最初に思いついたのはキリで、出航準備を始める仲間たちに声をかけた。

「そういえばあっちの船からなら取ってもいいんじゃない？ちょっと行ってこようか」

「無駄よ。あの船には何も残ってないわ」

返事をしたのは三人の内誰でもなく、誰も居ないはずの船室から扉が開き、そこから聞こえた。

全員の注意が同じ場所へ向かう。

開いた扉の向こうから現れたのはルフィのみが詳細を知る少女、海賊専門の泥棒ナミであった。彼女の姿を認めたルフィはパッと笑顔を咲かせ、嬉しそうな表情だ。しかし残る三人にとってはちらりと見た程度の顔でしかないため、良い反応は期待できない。

「おまえナミじゃねぇかっ。なんでこんなとこいんだ？」

「別に。ただあんたたちが勝つって予想してたの。思ったより強いみたいだし、こう言っちゃなんだけど利用できそうだしね」

「おれの仲間になる気になったか？」

「違うわよ。手を組む、って言ってくれる？　私は海賊になんて絶対ならないしあんたたちとずっと航海するわけじゃない。時が来ればここを離れるわ」

甲板の中央まで歩いてきて四人の顔を見渡す彼女は、自信満々といった態度で言う。

「しばらくは協力しましょう。私はあんたたちに航海術を提供する。代わりにあんたたちは私のためにお宝を集める。いいわね？」

「おいルフィ、誰なんだこの女は。突然出てきて偉そうにぺらぺらと」

「私は海賊専門の泥棒、ナミ。好きな物はお金とみかん。嫌いな物

は海賊。……これで自己紹介は十分？　だったら船を進めましょう。あんまり悠長にしてる暇はないの」
決して友好的な態度ではない。高圧的で一方的な発言だった。
これに反発したゾロは眉間に皺を寄せ、明らかに不満を訴える表情である。
船上には奇妙な空気が漂っていた。戦闘時とはまた違う緊張感が辺りを支配し、剣呑な光を目に灯す者も居れば、ただ困惑する者も居る。
ゾロとシルクが押し黙った時、ルフィだけは笑っていて彼女の乗船を喜んでいる顔だ。
同じく普段通りの表情を称えるキリに目が向けられ、ルフィが意見を問う。
「いいかキリ？　ナミが船乗っててもー」
「お好きにどうぞ船長。決めたことなら拒まないよ」
「キリ、今だけは適当にすんじゃねぇぞ。そんな簡単な問題じゃねぇはずだ」
「わかってるけど、一度言い出したら聞かないって知ってるでしょ？　大丈夫、上手くやるさ」
ゾロが真剣に訴えるものの、さらりと受け流してキリは肩をすくめる。
いつも通りの微笑みが崩れない姿から大した問題とは思っていないのかもしれない。
結局はゾロが折れ、意見を引っ込めることとなった。
物々しい雰囲気だったが一応話は纏まったようである。
腕を組んでツンと立つナミへ、シルクが歩み寄った。そっと右手を差し出し、厳しい視線を向けてくる彼女に、にこりと笑って握手を求める。
「私、シルクっていうの。よろしくね」
「……まぁ、よろしく」
憮然とした表情は変わらなかったがナミはその手を取った。
きゅっと握り合って握手とし、女性同士で他よりも少しは近くなれ

そうな気配である。
鼻を鳴らしたゾロは納得していない顔だったが錨を上げるため動き出し、命令に逆らうつもりはないらしい。なんだかんだと上の者を立てる性質だ。しばらくは大人しくしているだろう。
代わりにキリが彼女を見る。
「向こうの船には何もないって言ってたね。それは？」
「簡単よ、私が全部盗んだの。水も食料もお宝もこっちの船に移しといたわ」
「へぇ、気が利くね」
「あんたたちが勝つ方に賭けてたからね。負けてたらこの船を盗んで逃げるつもりだったわ」
「この大きい帆船を一人で？」
「できなくはないわよ。私は一流の航海士で、操船技術だって学んでる」
ふぅんと頷いてキリはかぶっていた麦わら帽子をルフィの頭へかぶせた。確かに受け取ったそれは無傷で、嬉しそうにルフィが肩を揺らす。
頭が回る人物には違いないらしい。
いずれはその機転の良さが一味にとって悪い方向へ転がらなければよいが。
そう思いながらもキリもまた乗船を許可し、船を動かすための準備へと戻っていった。
「歓迎するよ。ちょうど航海士が欲しかったんだ」
「念を押すようだけど仲間になるつもりはないから。あくまでも一時的な関係よ」
「それで十分」
傍を離れたキリは帆を張るために手を動かし始め、そこに錨を上げ終えたゾロが近付き、手伝いながら密かに話し始める。やはり不満は消えていないようだ。
「いいのか？　どう見ても怪しい奴だぞ」
「そうだね。少なくとも使えない人間じゃなさそうだ。問題はいつ

裏切るかってとこだけど」
「わかってて乗せる気か。厄介事を生むだけじゃねぇのか」
「しばらくは様子を見るよ。もしもの時はなんとかする。それに最初から何か狙ってるってわかる相手ならいくらでも対処はできるしね」
キリは欄干に背を預け、やさしい微笑みを浮かべて言った。
その顔を見るゾロは普段とは違う雰囲気を感じ取る。
「ルフィの意見は優先させる。ただし、この一味を壊すつもりなら容赦はしない」
短い言葉だからこそ本気の意志が伺えた。
常に微笑みを持ち合わせ、誰に対しても険の強さを見せない人間だと思っていたがそうではないらしい。今、この瞬間だけは鬼気迫る空気を感じる。
視線を外して、全く気付いていない三人が談笑する姿を見つめる。
ゾロはぽつりと呟いた。
「今、初めておまえをおっかねぇと思ったよ」
「そう？　人畜無害だと思ってたんだけどな」
「ああ。普段はな」
二人の会話に気付いていない三人は和やかに話している。
特にシルクは自分以外の女性が共に旅をするということで嬉しそうだ。これまでの航海、男と一緒だからと言って困ったことなどさほどないが、やはり同性が居ると安心する。
ルフィはルフィで自分が選んだ人間が来てくれたと嬉しそうで、何も心配していなかった。
「この船に女の子は私一人だから、ナミが来てくれて嬉しいよ」
「あんたも海賊なの？　よくやるわねぇ。もっと他の生き方選んだ方がよかったんじゃない？」
「いいの。自分で選んだから後悔なんてしてないよ」
「あっそ……よく自分から海賊になろうなんて思えるわね」
ナミはシルクの発言を聞いて呆れていたようだ。首を振って溜息をつき、表情は明らかである。

海賊嫌いという話は本当らしい。
不思議に思ってシルクが尋ねる。
世間的に海賊を嫌うのはおかしくないこととはいえ、ならばなぜ関わろうとするのか。そこまで言うのならば彼女こそ別の生き方を選んで平和に暮らせばいいのに。
何か理由があるのだろうかと考えて、聞かずにはいられなかった。
「ナミは、海賊が嫌いなんだね」
「当たり前でしょ。あんな連中、居た方が迷惑する人間が増えるのよ」
「どうしてそんなに嫌ってるの？　私、海賊になる前から元々悪い印象は持ってなかったけど、ナミのそれってかなり強く思ってるんじゃないかな」
「それは……」
「それに海賊専門の泥棒なんて。どうして自分から海賊に近寄るようなことするのかな」
問われて二の句が告げられなくなり、ナミの表情が曇る。しかし数秒考えた後で顔を上げ、シルクの目を正面から見据えながら説明を始めた。
その声は船上の全員が耳にしている。
「私は何がなんでも一億ベリー掻き集めて、ある村を買うの。その資金を得るためには海賊が一番いいカモなのよ。自分から近付くのはそのため」
「村を、買う？」
「信じるか信じないかは自由よ。それとこれ以上は言えない。とにかくお金が必要なの」
「あ、うん。そっか」
困惑した様子でシルクが苦笑した。
あまり深く聞き過ぎるのも悪いと思ったのだろう。戸惑って、取り繕うような笑顔だった。
出航準備が終わる。
後は号令さえ出ればいつでも出航できるという状態になり、報告の

ためキリがルフィへ近寄った。彼も今しがた作業を終えたようでキリへ向き直る。
「準備が終わったよ。号令があればいつでも」
「おう」
ルフィの隣へ並んだキリは、ナミを見ながら呟いた。
「訳ありだね」
「そうみたいだな」
「どうする？　助ける気？」
「いや。だって助けて欲しいなんて言われてねぇし。おれは仲間になって欲しいだけだ」
ルフィは迷いのない顔ではっきりとそう言った。意味を理解してキリはくすりと笑う。
何も考えていないようで意外にシビアな考え方を持っているらしい。
「海賊はヒーローじゃなく、あくまでも海賊か」
「おれは仲間が困ってるなら何やってでも助けるけど、それ以外の奴を助ける理由はねぇ」
「そう言ってもらえると助かるよ。こっちも動きやすくなる」
「なんのことだ？」
「こっちの話。雑務はボクがやるからルフィはそのままでいてよ」
「わかった」
素直に頷くルフィはやはり何も考えていなさそうだ。
全員の顔を見回した彼は両腕を振り上げて大声を発する。
「野郎ども、出航だ！　海へ出るぞォ！」
答えるクルーたちの動きにより、船はゆっくり港を離れ始める。
滞在時間は短かったが収穫はあった。航海士が一人と略奪品が多数。何も得られなかったよりはよっぽど良かった寄り道だろう。船は再び海へと向かう。
その頃になって港に人影が現れた。
船の上に居る彼らがそれに気付いたのは、大きな犬の鳴き声が聞こえたからである。

全員が船の後部へ集まって港を眺めた。
「あ、犬だ」
「町長さんもいるね。何かあったかな」
「おい小童どもぉ！」
鎧を外したブードルと、元気に尻尾を振って鳴くシュシュが見えた。
伝え忘れたことがあったか、必死に走って来たらしい。
息を切らしていたブードルは顔を上げると彼らに向かって笑顔で伝えた。
「すまん。恩に着る」
決して大きな声ではなかったが不思議とはっきり届いた。隣ではシュシュが鳴いていて、言葉ではなくとも礼を言っているのだろうと伝わる。
彼らの頬は緩み、笑顔を浮かべた。
中でもルフィが元気よく手を振り、離れていくブードルへと答えた。
「気にすんな！　楽にいこう！」
「言葉もないわ……」
胸の内が熱くなって自然と涙がこぼれた。
共に過ごした時間など決して短くはない。ゾロやシルクとは言葉も交わしたが、それ以外の者はほとんど知らず、ルフィに至っても会話らしい会話はしていない。それなのに彼らは見ず知らずの町を助けて、海賊たちを退けてくれた。感謝のしようもない。
礼を求める訳でもなく、物品を奪う訳でもない彼らはあっさり出航してしまった。
感謝の念を称えてブードルは手を振り、シュシュも送り出すため鳴き続けた。
ルフィもまた、島から遠ざかって彼らの姿が見えなくなるまで手を振っていたのである。
無事に海を出た後はまたいつも通りの航海。
ただし今度は航海士ナミが一時的な協力とはいえ船の上に居るた

め、彼女に関する話をしなければならない。甲板の中央へ全員が集まった。
「さて、ナミが一緒に来て変わることもある。部屋はシルクと一緒でいいかな？」
「私は構わないよ。ナミは？」
「別に女同士だし気にしないわ」
「それと宝の取り分はなんとかならないかな。奪ったお宝全部渡してたんじゃウチの一味に生活費が回らない。多少は頼むよ」
「仕方ないわねぇ。九：一でいいわよ」
「ナ、ナミ、流石にそれじゃあんまり変わらないと思うけど」
今の所一味と彼女を橋渡しする役割となったシルクが苦笑すれば、キリはくすりと微笑む。
「航海のための船を提供してるのはこっちだ。分け前がないなら君を乗せていられない。そっちは泥棒でもこっちは海賊、嫌なら今から海に叩き落してもいいけど？」
「むっ、意外と言うわね……だったら八：二」
「山分け」
「だめよ。盗むのは私なんだから、七：三」
「六：四」
「七と三よ。これ以上まけないわ」
「じゃあそれでいこう。ま、あとはなんとかやりくりするよ」
話は終わったとばかり、キリの目はシルクへ向いた。
ナミは彼を見つめながら思う。この船の男どもの中では一番厄介そうだ。ルフィは何も考えていなさそうで、ゾロは嫌悪感をはっきり示しているが、彼だけはそのどちらでもない。
海賊とは見えない風貌ながら、立場を利用するかのように脅迫までする始末。かといって話がわからない訳でもなく、想像していた以上にナミの提案をあっさり呑んだ。
いまいち読み切れない。
ナミが今最も警戒すべきは彼で、短いやり取りの間で素早く決められていた。

「シルク。ナミと一緒に盗んだ物資を確認してきてくれないかな。振り分けを決めたい」
「うん、いいよ」
「ちょっと、私まで顎で使う気？」
「だって盗んできたのはナミ本人じゃないか。どこに置いてるのかも知らないし、何を持ってきたかも知らないから確認するのは当然でしょ」
「しょうがないわね。もう、こんなはずじゃなかったのに……」
渋々ナミが先導してシルクを連れ、二人で船内へ向かう。
当初の予定では彼らを顎で使う気だったのかもしれないがそう簡単に上手くいかないらしい。しかしそれも今だけだと思えば、この場は我慢できた。
離れていく背へキリがさらに声をかける。
「それとナミがちょろまかさないようにちゃんと見張っといてね」
「うっさいわね！　そんなことしないわよ！」
「まぁまぁ」
仲裁するシルクにナミが背を押され、二人の姿は扉の向こうへ消える。
一気に人の姿が減った甲板の上、キリは舵を取るため移動した。
舵輪を握るのとちょうど同時、ゾロがそこへやってきてキリへと声をかけた。
警戒心を露わにする様子からやはり信用していないのだとわかる。思いのほか神経質なのかもしれないとその顔を見て思った。舵輪を回すキリはすっかり笑顔で何も気にした様子は見られない。
「これからどうすんだ。あいつを信用したわけじゃねぇだろ」
「しばらく待つよ。動く気はあるんだろうし」
「なぁなぁ、おれたちこれからどこ向かうんだ？」
体を伸ばしてルフィが飛んできた。
船長という自覚があるのかないのか、航路の有無を求めるのは問題があると思われる。やれやれと嘆息したキリは苦笑しながら、それでも甘やかすかのように答えた。

「それは普通ルフィが決めることでしょ」
「でもおれ道なんてわかんねぇもんよ」
「それならボクだって同じだけどさ。とりあえず前には進んでるよ。グランドラインへの入り口には近付いてるはず」
「えぇ？　そんなとこまで知ってんのか？」
「ボクは元々イーストブルーからグランドラインに入ったんだ。そりゃ知ってるって」
キリの前にある欄干の上でしゃがみ、まるで視界の邪魔をしようとするかのようなルフィは笑顔で帽子を押さえた。邪魔する気はないようだが前は見えない。想いのままに行動しているようだ。
「そういやさ、ナミはグランドラインの海図を盗んだって言ってたぞ。一億ベリー集めるためにグランドラインに行きたかったんだとさ」
「グランドラインの、海図？　本当にそう言ってたの？」
「ああ。なんかおかしいのか？」
「いや、おかしくはないけどさ。確かにあの海を航海したんなら海図だって描けるだろうし」
キリは少し考える素振りを見せた。
経験者だからこそ知っている。グランドラインの航海は決して生半可な物ではないと。
そのグランドラインの海図が他の海へ流れることは、決して珍しいことではないだろうが高値にはなるはず。むしろグランドラインの海図だと騙った詐欺すら横行している。
グランドラインとはそれだけ特殊な場所だった。
海賊のみならず船乗りならば成功を求めて多くの者が目指し、そして散っていく危険な海。
ナミがその海図を持っている状況は些か疑念が残る。
「盗んだって言ったよね。元々誰が持ってたの？」
「そりゃバギーじゃねぇか？　あいつの仲間に追われてたみてぇだし」
「ふむ、バギーか……」

「そういやあいつシャンクスの見習いん時の仲間なんだってよ」
「シャンクスの知り合い？　だったらあの人もグランドラインに居た可能性はあるね。だから海図を持ってた」
「そうなのか？」
キリがわずかに頷いた。
さっきの場面で言わなかったということは交渉材料にするつもりはないという意味だろう。やはり今はタイミングを計っているだけなのだという考えが有力視された。
傍に居るゾロを見れば腕組みして頷かれる。
考えは同じ。彼女がいつ何をしでかすかはわからない、ということだ。
「まぁ海図のことは置いとくとしても、ルフィ、ナミのことどうするつもり？　仲間にする気ならそれなりに説得は試みるけど」
「うーん、でも一回断られちまったしなぁ」
「次の島で置いてきゃいいだろ。本人も仲間になる気はねぇって言ってんだ」
「でもあいつなら大丈夫だと思うんだ。おれはあいつを仲間にしてぇ」
苦言を呈するようなゾロの口調にものんきな声色は変わらず、ルフィがはっきり告げる。
ゾロは小さく呻いた。
「根拠はあんのか。あいつとは出会ったばっかだろ」
「ない。なんとなくそう思っただけだ」
「でもそれを言い出したら、ボクもシルクもゾロも出会ってその場で判断してたし。こんな感じだけど案外ルフィには先見の明があるのかも」
「どうだかな。まぁいい、今は置いといてやる。いずれわかることだ」
そう言ってゾロは階段を降り、甲板へ赴くといつもの如く欄干を背にして座った。おそらくそのまま眠るつもりだろう。ここ最近は修行か昼寝かの選択肢しか持ち合わせない。

彼の意見はもっともだと思うが、一方ではルフィの意見を面白いとも思う。
言うなれば自分はその二つの間の道を探すのが仕事だろうと、キリは自分の立場を理解した。
船長の命令を聞きながらゾロの理解を得られればいい。簡単ではないだろうがそれが一番の方法だと思う。別段ナミを嫌っている訳でもなし、航海士が仲間になれば嬉しい限りだ。
現状、この船に乗っているのは個性的な人間ばかり。
御し切るのは難しいだろうが面白い状況だと想い、彼は肩の力を抜いて息を吐く。
「もしナミが仲間になってくれたとして、あと必要なのはコック、船医、船大工あたりか。手先が器用な人が仲間になってくれればいいけどね」
「どんな奴がいいかな。なぁ、キリは仲間にしたい奴とかいるか？」
「そこは任せるよ、船長。言ってくれれば誰でも引き込む」
「しっしっし、頼りになるなぁ」
風に吹かれて飛びそうになる帽子を押さえて、上機嫌にルフィは笑っていた。
何も心配していないだろう能天気な笑顔。きっとその方が彼らしいのだろう。
嘆息したキリは自分の気持ちを再確認する。
自分にとっての宝はこの場に居る仲間。目的はルフィを海賊の王にする。
それを崩すのならば時に冷徹にならねばならない。元より正義も悪も興味がないと断ずる性質だ。どんな方法でも使えるだけの胆力は持ち合わせている。かつて仲間を失って以来。
微笑む彼は密かに己の中で覚悟を決めていた。

ロストアイランド編

〝声〟を聞く少女

夕暮れ時になって船は停泊するため、海原の上で足を止めた。

錨は降ろさず、帆を畳んで波の動きに身を任せる。こうしていれば案外一夜の前に進むのだと言うのはキリで、普通そんなことはしないと発言するナミを気にせず決定していた。長い航海の経験から知ったことらしい。船番さえ立てておけばそう間違った航路に乗ることもないようだ。

ただ方向音痴なルフィとゾロに任せる訳にはいかず、女性陣にも無理はさせたくない。

夜番を引き受けると言ったのはキリだった。

慣れているからの一言。海賊としての経験が最も長い彼が航路を見ると言っていた。

他の者が代わると言っても態度は頑なで、一人で十分だから大丈夫だと断られたのである。

仮眠を取りながら時に確認をするだけで十分らしい。航路のみならず、その辺りの采配を知っているのも彼だけだ。強く言われては逆らうこともできなかった。

船上では休息を取るための準備を始めようとしている。

キリは夕食のために料理を開始しようとしていたが、それを手伝う直前、シルクは修行中のゾロへと声をかけ、意を決した表情で剣を持っていた。

「ゾロ。私に修行つけてもらえないかな」

「あぁ？」

上半身裸で鍛錬を行い、汗を流すゾロは逆立ちしたまま彼女を見上げる。

片手には剣を持って普段と違った表情。

並々ならぬ決意が見られてゾロは鍛錬を中断し、その場へ座った。

胡坐を掻いた彼は真剣な顔で尋ねる。

「修行だと」
「うん。私、もっと強くなりたい。今までずっと独学で剣を学んできたけどゾロの方がずっと強いでしょ？　だからゾロに学んだ方が早いと思う」
「そういうことか……」
ゾロは小さく嘆息した。
彼女の剣は刃と鞘の両方を使う物。男と比べて腕力に劣るため、斬撃にのみ頼らず、体の柔らかさを利用して敵の攻撃を受け流し、殴打さえ行う。独特だと思っていたがあれで独学なら大した力量だ。相当長い期間鍛えてきたのだろう。それは確かに彼も認めるところだが、しかし修行をつけるとなると話は変わってくる。
彼ら二人の戦法は違っていて、一日やそこらで変えられる物ではない。
加えて言えば、シルクは剣士という訳でもない。彼女の戦い方は斬撃よりも回避技術や鞘による殴打、つまりは敵を斬らないことに長けている。言わばゾロの剣技とは真逆に位置するだろう。それを理解できるだけゾロの目も確かな物だがやはり修行は難しく感じる。
簡単に答えていい局面ではない。
真剣に考えたからこそゾロは答えを決めかねていた。
「言ってることはわからなくもねぇが、そりゃ難しいんじゃねぇか」
「どうして」
「おれとおまえじゃ戦闘が違う。持ってる武器からして違うんだ。おれに教えを乞うたところで望んだ結果になるとは限らねぇぞ」
「うっ、それはそうかもしれないけど」
その意思は悪い物ではなく、彼女が嫌いな訳でもないが疑念は残る。強くなるためと言って戦法を一から変えるのは得策ではないのだろう。従って彼の表情は優れない。
ゾロの言葉に対してシルクは負けじと食い下がった。
「じゃあ稽古に付き合ってくれるだけでいいから。実戦形式で戦うだけならいいでしょ？」
「それなら話はわからねぇわけじゃねぇが……だがな」

「いいじゃねぇか。やってやれよ」
話している二人を見ていたルフィが言った。
欄干の上で胡坐を掻いて、食事前だというのにねだってもらったフルーツを食しつつ、いつもの気楽な笑顔。話を聞いていたようで自身の意見を口にする。
「シルクが強くなったらおれたちが助かるだろ。それにおもしろそうじゃねぇか」
「てめぇ、他人事だと思いやがって」
「迷惑はかけないようにするから。時間がある時だけ、ね？」
「ハァ……わかった。気が向けばな」
観念した様子でゾロが溜息をつけば、シルクの表情がパッと明るくなった。
ルフィと顔を見合わせて笑い、嬉しそうに告げる。
「ありがとうゾロ。ルフィもありがとね」
「ししし、気にすんな」
「この船にゃ我が強い奴しか乗ってねぇのか、まったく……」
「我が強いのは君もでしょ」
頭を抱えて呟いたゾロへ、いつの間にか船室から出てきていたキリが声をかける。
三人の視線は一斉にそちらへ向いて、どうやら食事の準備のためシルクを探しに来たらしい。できる限り手伝うと言った彼女も料理を学ぶ気だった。その代わり、昨日妙なやる気を見せたルフィを必死に押し留めたばかり。どちらの方が安全かと考えれば確実にシルクだろう。
キリは彼女だけを呼び、ルフィはその場から動かなかった。
「夕食の準備するよ。シルク、手伝ってくれる？」
「うん。それじゃゾロ、明日からよろしくね」
二人が船室に行ってしまったことでルフィとゾロだけが取り残される。
フルーツはすっかり食べ終え、手持無沙汰となったらしい。
何を言うでもなくルフィはゾロの隣へ腰を下ろした。

話す事がある訳でもなく、しばし無言の時間が続く。脚を止めた船の上には穏やかな風が走り、和やかな空気が感じ取れる。時には危険な状況がある航海の中の一瞬の静寂。

頭の後ろで手を組んだルフィは欄干へ背を預け、ふと目を閉じる。

珍しく静かで大人しい姿だ。

なぜか困惑してしまうゾロは彼の顔を見やり、気になったため声をかける。

「おまえもおれになんか用か」

「ん？　別に」

「それにしちゃ大人しいじゃねぇか。なんかあったように見えるぜ」

「腹減っちまってよぉ。キリはメシの前だから我慢しろって言うし」

「バナナ食ってただろ」

「でも一本だけだ。二本目はだめなんだってよ」

「あぁもういい……あいつの苦労が少しはわかった」

いつも通りのルフィだった。

大食漢で興味の大半は食と冒険にのみ向けられ、はしゃいでいる姿が多く見られる彼。今が妙に落ち着いてしまっているものだから物珍しいと感じてしまった。

思えば、彼と二人で話す場面など初めてかもしれない。

キリとは珍獣島で少しの時を過ごし、シルクとはオレンジの町へ入った際、二人で歩いた。

改めて考えてみるとルフィとだけは二人きりの時間を共有した経験が少ない。

ふとゾロが尋ねてみた。

「そういや一度聞いてみたかったんだが」

「おう」

「なんでおれだったんだ？」

気安く聞いてみればルフィは少し考えたようだ。

なぜ自分を仲間にしたのか、それを聞きたかったのだろう。思いの

ほかゾロの顔は真剣になっていて、しかしそれを見ずにルフィは何もない空を見上げている。
唇を尖らせて真面目とは思えぬ顔つきだが、すぐに自分なりの答えが出された。
「わかんねぇけどおまえがよかったんだ」
「答えになっちゃいねぇだろ」
「まぁいいじゃねぇか。もう仲間になったんだし」
「ほんっとに何も考えてねぇようだな。こりゃおれとあいつがしっかりするしかなさそうだ」
「おう、まかせた」
「おまえも努力しろよ」
他人任せな言葉を吐いてからから笑うルフィには参った。とはいえ、ゾロも気分を害した様子はないらしく、すぐに表情を変えて反対側の欄干の傍へ立つナミを見る。
彼女は欄干に肘をつき、海を眺めていた。
何を考えるのかはあずかり知らぬところだがゾロはまだ信用していない。キリはあやふやな立場で、シルクはおそらく彼女の合流を喜んでいる。そしてルフィもまた喜んでいて、この分ではいずれ本気で仲間にするつもりなのだろう。自分を勧誘した際に大して理由がないのならば、今度もきっと理由はない。冷静に理解すれば頭が痛くなりそうだ。
ルフィもゾロの様子に気付いて、同じくナミの背を見る。
彼女自身もきっと信用してはいないだろう。ただこの時の横顔は何かを思案する様子。
それぞれ違った表情で会話は続いた。
「そんな調子であいつも引き込む気か？」
「ああ。優秀だって自分で言ってたぞ」
「てめぇの口からならいくらでも言えるだろ。本当とは限らねぇ」
「そうか？　おれはほんとだと思ったけどなぁ」
「おまえは人の話を信用し過ぎなんだよ。少しは疑うってことを知れ」

少しと言わず、彼は警戒心が無さ過ぎる。よく言えば純粋なのだが悪く言えば騙され易い。この性質のままではいつか必ずバカを見ることは予想できた。
腕組みをして考え始めたルフィは、何か閃いたかのように目を輝かせる。
何を想ってか元気よく立ち上がったかと思えば喜々としてナミの下へ歩き始めたのだ。
「そうだ、あいつに聞けば早いだろ。優秀な航海士かどうか聞いてみようぜ」
「あぁ？　おまえそれ本気で言ってんのか」
「おーいナミぃ」
止める間もなく気軽に歩き出してしまう。そんなルフィの背を見てゾロは深い溜息をついた。
やはり、危うい。
一味の船長としての態度ではないと思えた。彼については面白い男だという認識を持っている。ただその一方、こういう彼だから周囲の人間がしっかりしなければならないに違いない。そういう意味では、偶然とはいえキリを拾えたのは幸運だった。
今はこの場に居ないキリに代わり、自分がしっかりすべきだとゾロもついていく。
振り返ったナミの前へ二人が並んだ。ルフィが傍へ立ち、ゾロは少し距離を取って。
ナミの表情は決して優れていない。
多少の警戒心を露わに、ルフィの顔へ目をやった。
「何の用？」
「おまえ優秀な航海士なんだろ？」
「当然でしょ。航海術に関しては誰にも負ける気はないわ」
「ほらみろ、優秀だった」
「おまえは……もういい」
疲れた顔で首を振り、ルフィの会話は聞いてられないとばかりにゾロが口を開く。

ナミを見つめる目は厳しく、信用していない素振りはわかりやすい。彼女にとってはそちらの方が有難かった。勝気な表情で見つめ返し、何を言われようが構わないといった立ち姿である。
「何考えてやがる。ウチの船長はこうでも、おれは騙されねぇぞ」
「ずいぶん嫌われちゃったわね。何もしてないのに」
「仲間になるって言うなら歓迎もしてやったがな、海賊専門の泥棒が手を組もうって言ってきたんなら何か裏があると考えんのが普通だろ。考えねぇこいつがおかしい」
「そうかもね。でも心配しなくていいわ。あんたたちと居たら稼げそうだし、十分な成果をくれれば何もしない。大人しく船を降りたっていいわよ」
「ふん……どうだかな」
ゾロの目は微塵も彼女を信用していない。
それが当然だと思う。出会ったばかりの見ず知らずの人間を船に乗せるなど普通はあり得ない。
この場合、ルフィの態度が問題なのだ。
元々海賊など、いつ裏切者が出てくるかわからない非情な集団。それだけに仲間へ目を光らせる者が居て、信頼できる者を仲間にしようとするのが当然だ。
知らない人間を、ましてや海賊相手に泥棒稼業をしていると公言する人物は特に危険視する相手だろう。それをあっさり乗せてしまったルフィは大物か、或いはバカか。いまだナミも判別できない。ただ彼らの姿を見てみようと思った理由はある。
どうしても聞きたい事が一つあった。
それはオレンジの町、町長のブードルから聞かされた言葉。
ナミの目はのんきな顔のルフィを見つめ、どこか真剣な顔つきで尋ねられた。
「一つ、聞きたいことがあったんだけど」
「ん？　なんだ？」
「海賊を狩る海賊って、何？」
首をかしげるルフィだったが、思い当たる存在が頭の中にあった。

シルクが志すといった海賊のことだろう。
ルフィは笑顔で伝える。
「ああ、ピースメインのことだろ？　昔の海賊は相手が誰でも略奪を繰り返すモーガニアと、そいつらをカモにするピースメインが居たんだ」
「つまりモーガニアって連中を狩る海賊って意味？」
「そうだ。シルクは元々港町に住んでて、そこが昔海賊に襲われたらしくてさ。抵抗できない奴らを襲うのが許せねぇからピースメインになりたいんだってよ。おれたちもその話に乗った。だからバギーをぶっ飛ばしたんだ」
「へぇ……変な奴ら。海賊なのに人助けするんだ」
「別に人助けじゃねぇよ。おれはシルクの頼みを聞いてやっただけだ」
「それの何が違うのよ？」
「海賊はヒーローじゃねぇんだ。だから人助けなんてしないんだぞ。もしおれがバギーをぶっ飛ばしてあの町の奴が喜んでても、おれがバギーをぶっ飛ばしたかっただけで、別に町の人間のためにやったわけじゃねぇ。わかったか？」
「ええ。ほんと変な奴だってことはね」
呆れた顔でナミが溜息をつく。
何も考えていない訳ではなくこだわりは持っているようだが、その内容がいまいちわからない。人助けと認識されたくないとは、悪人だと思われたいという意味だろうか。だとしたら子供じみた願望だ。海賊らしさを追求した結果だとしても格好いいとは思えない。
一方で気になる点もある。
疑念は晴れたようで、晴れていない気もして。聞きたい事は別にあるのだと自覚した。
ふとナミの表情に戸惑いが浮かぶ。
その様子はルフィとゾロの目にもはっきりと映り、一体何を意味する変化なのだろうと思った。気丈に振舞っていたさっきとは明らかに違っている。

視線を落としつつ、何かを思案しながら、ナミがぽつりと呟く。
「あんたたち、強いのよね」
「ああ。強えぞ」
「無抵抗の町を襲うような、海賊が嫌いなのよね」
「うん。だからバギーをぶっ飛ばしたんだ」
「だったら……だったらもし、私が、そんな海賊を知ってたら――」
思わずといった様子で言いかけた直後、ナミは首を振って言葉を遮った。
自分の感情を無理やり押し留めたように感じる。二人が違和感を覚えるのも当然だ。
一転して笑みを浮かべたナミが取り繕うように口を開いた。
違和感は拭えず、二人は真剣な表情で彼女を見つめる。
「なんでもない。気にしないで」
「そうか？　そう言うならいいけどよ」
嘘だとはすぐに見抜けるがルフィは詰問しない。敢えて泳がせたようだ。
ナミは再び海へ向け、二人から視線を外す。
笑みがあるのだが不思議と楽しそうだとは見えず、上機嫌には思えず、無理をしているような印象。彼女のことを深く理解していなくとも変化に気付くのは難しくなかった。
何かを隠している。そう思うのは不思議ではない。
会話が途切れたことでルフィが振り返り、ゾロと目を合わせた。
お互いになんと言っていいのか、生まれてしまった沈黙を破れない。
そんな一瞬をナミが切り裂いた。海を眺めた彼女は何かを発見したらしく、欄干に手をつき、身を乗り出しながらその何かを見ようとしている。
遠方から波に流されて漂ってくるのはどうやら小舟のようだった。
「ねぇ、あれ何かしら？」
「小舟じゃねぇか？　だれか乗ってんのかな」
「だけど誰も居ないようにも見えるけど……」

「とりあえず引っ張ってみるか」
新たな発見に喜々として欄干へ寄ったルフィが、右腕をぐるぐる回して準備する。
それを見たゾロは咄嗟に止めようとするが聞き入れられず。
やはり彼は勝手に腕を伸ばしてしまっていた。
「おいルフィ、いい加減冷静に考えて動けよ――」
「ふんっ！」
「って聞いちゃいねぇ」
勢いよく右腕が伸ばされてギリギリで小舟へ到達する。
強く掴んで力強く引っ張り、徐々に帆船へと引き寄せてくる。
傍までやってきた小舟の上には、一人の少女が倒れていた。外見から見て年齢は十歳前後。まだ成長期半ばだろう少女が眠っている。
或いは気絶していた。
何やら奇妙な光景に思えてルフィは腕を伸ばして彼女の体を抱え上げた。
甲板へ連れてきて横たえ、三人で少女を囲って様子を眺める。
外傷はない。だが年端も行かぬ少女がたった一人で小舟に乗り、眠りこけているのは明らかに異常だ。訳があってのことだろうと推測できた。
真剣な顔つきを見せる三人は顔を突き合わせて話す。
「気絶してるみたいね。どこの子かしら」
「それよりあっさり乗せちまう方が問題だろ。おまえはいい加減緊張感を持て」
「いいじゃねぇか、寝てるし。死にかけてんのかな」
「変わったところはなさそうだけど、これだけ動かされて気付かないってことは疲れてるみたいね。どことなく顔色も悪い。きっと何かあったのよ」
「そうだ、キリ呼んで来よう。あいつだったらなんとかしてくれる」
そう言ってルフィはしゃがむのをやめて立ち上がり、船室へと駆け出していく。
荒々しく扉を開けて足音が遠ざかる中、ゾロはふとナミの顔を確認

する。少女を見つめて、そっと頬へ触れる彼女の姿は思いのほかやさしい。悪党だとは思えなかった。
疑念を込めた視線に気付いたナミが顔を上げる。
二人の視線が一瞬ぶつかるも、すぐにゾロが顔を下げて視線を外す。
そうするとむっとした顔でナミが彼へ言った。
「何よ」
「泥棒って言うからには薄情な奴かと思ってたが、意外にそうでもねぇんだな」
「フン、ほっといてよ。泥棒やっててても私は心まで捨てたつもりはないわ。あんたたち海賊と違ってね」
「あのなぁ」
じとりとした視線を彼女へぶつけ、ゾロが言う。今の発言に納得していない顔だった。
「おまえが海賊を嫌うのは勝手だがな、そいつとおれたちを一緒くたにすんじゃねぇよ。八つ当たりがしたいだけなら最初っから海賊に関わんねぇことだな」
「何よ、あんたに命令される筋合いはないわ」
「だったら今すぐ降りるか？　ちょうど小舟は一つある。こいつを連れて町を探しに行ってもいいんだぜ」
少女を指差しながら言えば、ナミの表情が曇る。眉間に皺を寄せて怒りをぶつけていた。しかしそれはゾロも同じ。彼女を信用する気はないと眉間の皺は深くなっている。
しばし剣呑な空気を醸し出して睨み合っていると、三人分の足音がやってきた。
キリとシルクを連れてきたルフィが甲板へ現れて倒れた少女へ近付いて来る。
それを機に二人の睨み合いは終わり、疲弊した様子で眠りこける少女へ注目が集められる。誰とも知らない少女だが一同は助けるための行動を起こし、キリが的確に指示を出し始めた。

＊

少女が目を覚ました時、室内は真っ暗であった。

見知らぬ場所だと瞬時に判断する。慌てて乗り込んだ小舟でもなければ、以前見た船内、海軍の軍艦でもない。暗い中でも室内の様子が見えて辺りを確認する。

医務室だろうか。自分はベッドに寝かされて、傍には一人の女性が居た。

ベッドに上半身を預け、椅子に座ったまま眠りこける金髪の少女。知らない顔だ。しかしその寝顔を見ると怖そうな人物とは思わない。

少女はゆっくり起き出し、そっとベッドを降りる。その際に自分にかけられていた薄い布団を彼女の肩へかけてやり、その後で扉へと歩き出す。

音を立てないように廊下へ出て、真っ直ぐ歩けばもう一つの扉から甲板へ出られた。

やはり知らない船。軍艦でもなければ小さな小舟の訳もない。全く知らない場所である。

少女はどうすべきかと辺りを見回す。

人気はなく、周囲に危険はなさそうだがいつまでもここに居る訳にはいかない。どうすれば船から降りられるのだろうと思いながら、その先を考える。一刻も早く故郷へ帰らなければならない。だがそうするためには、島がある方角さえわからなかった。

見知らぬ場所で困り果てた少女は立ち尽くした。問題が山積みで動けそうにない。

焦りだけを抱えて立っていると、突然声をかけられた。

「あぁ、起きたんだ」

「ひっ!?」

「こっちこっち。上だよ」

正体不明の声に従って頭上を見上げれば、メインマストの展望台から顔を覗かせ、手を振る人間が居る。声から男だろうと思われた彼は

軽い仕草で飛び降り、上から降ってくる。
危ない、と思ったのも束の間。
ふわりと奇妙な動きで軽く着地してしまい、どうやら怪我もない様子。
少女は目を丸くして驚き、目の前に立った青年を見る。
月が雲に隠された暗闇の中。それでも彼の姿はわかった。くすんだ色の金髪と、人の良さそうな微笑み。素直に助けてくれたのだろうと安心できる風貌である。
「大丈夫？　君、小舟で漂流してたんだ。その時のこと覚えてる？」
「あ、うん。助けてくれてありがとう……」
「心配しなくていいよ。何もする気はない。ただ助けたいだけだから」
「あの、この船って」
「パッと見じゃわからないか。海賊船へようこそ、お嬢さん」
「か、海賊船？」
そう聞かされた少女は思わずメインマストの頂点を見上げ、そこではためく黒い旗を見つける。
海賊であることを示す印。その存在は知っていた。
どうやら本当に海賊の船であるらしいと知り、少女は怯え始める。それを当然の反応だとしながらキリは微笑み、危害を加える気はないと両手を広げた。
「大丈夫だよ、襲ったりしないって。幸いそこまで飢えてないから」
「う、うん……でも、本物の海賊なんでしょ？」
「一応ね。最近旗揚げしたばっかりのルーキーだけどさ」
「そうなんだ。よくわかんないけど、危険じゃないんだよね」
「もちろん。ボクも何度か漂流した経験があるから君の気持ちはわかるんだ。警戒するのも無理ないけど、しばらく休んでいきなよ」
「そっか……はぁ」
安堵した顔で少女がへたり込む。その場へ力なく座ってしまい、小さく溜息がつかれた。
キリもしゃがんで目線を合わせて、笑顔を絶やさずに声をかける。

「何か飲む？　ずっと寝てたからお腹も空いてるんじゃないかな」
「うん、ちょっと。でもそこまでしてもらうの悪いよ」
「気にしなくていいよ。漂流した人は見過ごせないしさ」
「あなたも助けてもらったの？」
「最低でも三回はね」
ちょっと待ってて。そう言って歩き出したキリが扉を開けて船室へ入る。
しばし少女が一人で待つこととなった。
薄暗い辺りでは光が見えず、ただ星は見えていて、ふとそちらを見上げる。
薄い雲がゆっくりと動いて月が現れようとしていた。暗かった辺りに月光が降り注ぎ、少しは明るくなる。それだけでは心細さは変わらないものの、さっきよりはマシだろう。
当初は逃げようかと考えていた少女だがマストを背にして座る。
少し肌寒い風が吹いていた。少女の小さな体を苛むようで、思わず自分の体を抱きしめる。
ここはどこなのだろうか。
すっかり知らない場所に居て、なぜこんなことになったのだろうと思い返してみる。きっかけはそう遠く離れた日ではない。ほんの数日前、島に海軍がやってきた時から始まった。友達を助けたい一心で彼らに対して嘘をつき、協力すると言って船へ乗り込んだ。もちろんそんな気はない。最初から隙を突いて逃げ出す気で、自分から提案した瞬間から常に機を伺っていた。
心配するのは友達のこと。今頃海軍に見つかっていないのか、ひどく心配だ。
彼は今動けない。だから少女が守ろうとしたのだが、軍艦から逃げ出してしまった今、あの船が島へ戻って捜索を始めていたとしてもおかしくはなかった。
見つかっていなければいいが。そう考えるだけで胸の中がもやもやする。
少女は抱えた膝に顔を埋めた。

その頃になって声がかけられる。戻って来たキリがコップを一つ、小皿を持って彼女へ差し出していた。水と食べ物を持ってきてくれたようだ。
顔を上げた少女は彼の微笑みを目にする。
「顔色悪いよ。無理してでも食べた方がいい」
「……うん」
コップを受け取って水を飲み、それを置くと小皿とフォークを受け取る。
キリは彼女の隣へ腰を下ろした。
緊張しながらではあったが少女はゆっくり食べ始めた。表情には不安が色濃く出ており、伝わってくる雰囲気からも元気がない。
不思議な沈黙が辺りに漂っていて、キリは空を眺めながら待ち、彼女が話し出すのを待った。
「ありがとう」
「うん？」
「助けてくれたことと、それからこれも」
「いいよ、お礼なんて。ウチのクルーが勝手にやっただけだし」
「海賊、なんだよね」
「そうだよ。そう見えないかもしれないけどね」
キリが少女の顔へ目を向ける。
表情は暗い。心を開くにはまだ時間が必要なようだ。
「名前は？」
「アピス」
「アピスはどうしてあんな場所に居たの？　しかも小舟で」
「私、海軍から逃げてきて、それで――」
ぐっと唇を噛んで言葉が止められる。
事情があるのだと瞬時に伝わった。誰にでも言いたくないことはあるだろう。それも今聞いた言葉、海軍が関わっているのなら相当な一件だ。犯罪者の類には見えないが何かに巻き込まれた可能性は高い。逃げてきた、という言葉が非常に引っ掛かる。
数秒黙った後でアピスはパッと顔を上げた。

キリの目を覗き込み、必死な様子で言葉を吐き出す。
「私、今すぐ故郷に帰りたいの」
「故郷？」
「軍艦島っていう場所。友達が待ってるの。心配だから今すぐ会いたくて……こんなこと頼むの、悪いと思うけど、連れて行ってくれない？」
「軍艦島か……聞いたことないな」
キリは思案する顔で呟く。
あいにくイーストブルーの地理には疎い。この手の話ならナミに聞く方が得策だろう。加えて船の航路は船長のルフィが決めるもの。
今ここで決断できるものではなかっただろうに、敢えてキリは頷いた。
途端にアピスの顔に笑顔が咲く。
「ほんとっ!?」
「どうせ今は寄り道の最中なんだ。目的地に行くのは早いし、送り届けるくらい問題ない」
「ありがとう！　もし断られたらどうすればよかったか……」
「後で船長の決定を仰がなきゃいけないけど、まぁあの人ならオッケーするよ。冒険が好きなんだ。軍艦島ってワードにはまず引っ掛かるだろうね」
「船長？　あなたじゃなくて？」
「ボクは違うよ。でも船長は悪い人じゃないから心配しなくていい」
食事の手を止めていたアピスは、それを聞くと嬉しそうに手を動かし始めた。
すっかり表情は柔らかくなっていて、安心しきったかどうかは本人にしかわからないとはいえ、少なくとも痛々しい様子は消えている。子供らしい温かな雰囲気だ。
食事を終えるのを待ってやり、その間にキリは考える。
軍艦島。位置を知らない島を探すのは骨が折れそうだ。
今のところ心配はそれだけ。

大した問題はないとはいえ数日を使わなければならないかもしれない。
「だけど軍艦島か……まずその島がどこにあるかを調べないと。方角もわからないんじゃ辿り着くはずないし……アピス、どっちに進めばいいかわかる？」
「ううん。でも大丈夫だよ。聞けばいいんだから」
「そうだね。じゃあ近くの町に――」
「そんなことしなくてもいいよ。私が聞くから」
そう言ってアピスは空になった皿を置き、コップに入った水を飲み干す。その勢いのまま立ち上がって欄干へ駆け寄った。
何をするのだろうと見守りつつ立ち上がると、彼女は辺りを見回している。
そして何も見つけられないと知るや、海面へ向かって大声を出した。
「おーいっ！」
周囲に変化はない。キリがアピスの隣へ並んだ。
アピスが見つめる海面へ目をやるとそこにだけ変化がある。ボコボコと水中での呼吸から生まれる泡ぶく。海中の生物が上がってきているらしい。
眉を顰め、訳も分からず見ているとやがて顔が出てきた。
浮上してきたのは一匹のイルカだった。
まさかアピスの声を聞いて上がって来たのか。キリが驚く隣、アピスはさらに声をかける。
「動物たちは島がどこにあるか詳しいんだよ。だから道に迷っても聞けば教えてくれるの。ねぇ、軍艦島はどっち？」
イルカに尋ねれば言葉を理解しているようで、頭を振って一方向を指し示す。
驚愕したままのキリへ笑顔を向け、アピスの指がそちらを指した。
「あっちだって」
「あ、ああ……君、動物としゃべれるの？」
「うん。やっぱり変だよね」

海中へ帰っていくイルカを見送り、自嘲するように笑う。
「私ね、悪魔の実を食べたの。ヒソヒソの実。動物としゃべれるんだ」
「能力者だったのか……」
アピスの笑顔を見てしばし言葉を失う。
ヒソヒソの実。能力は動物としゃべれること。
直接的には戦闘に役立ちそうもない能力だが、考えようによっては非常に厄介な力となる。或いは、海軍はそれを知って彼女を捕まえたのかもしれない。
そう思考しながら、キリは取り繕うように笑うので精いっぱいだった。

軍艦島

朝日が昇り、出航した後。
帆に風を受けて進む船の上ではアピスを囲むルフィとシルクの姿があった。
面倒見がいい性格からシルクは彼女を心配しており、ルフィは単純に好奇心を発揮していたようである。共に食卓を囲んだこともあって、すっかり打ち解けた様子だった。
「アピスは軍艦島で住んでるんだね」
「うん！　おっきな山が一つあるだけで、他には何もないんだけど、いいところだよ。みんなやさしいし、それに……って、これは言っちゃだめなんだった」
「しっかしおもしれぇ能力だなぁ。動物としゃべれんだろ？」
「えへへ、結構楽しいんだ。その代わり泳げなくなっちゃったけどね。でも海に住んでる動物にお願いすると背中に乗せてもらえたりするんだよ」
「いいなぁ。おれもそんな能力使ってみてぇなぁ」
「ルフィはゴムゴムだからダメでしょ。それはそれで面白いと思うよ」
「んん、そうだな。まぁこれも気に入ってるし、いいか」
和やかな態度で話す三人は無邪気な姿で、少し離れた位置から見る三人は対照的に落ち着いていた。舵輪を握るキリと、傍らに立つナミ、そして欄干を背に座るゾロだ。
アピスについては本人とキリの口から語られている。
軍艦島に住んでいて、そこまで送り届けて欲しい。
ヒソヒソの実を食べた能力者である。
小舟に乗って漂流していたのは、諸事情あって海軍の船から逃れてきたから。
伝えられたのはそれだけだが訳があるのだろうとは理解できるだろう。小さな子供が一人で海軍船から抜け出してきたのだ。よっぽどの覚悟がなければそんな事態はあり得ない。

アピスの笑顔を見ながら、ぽつりとナミが呟いた。
「あんな歳で、一体何があったのかしら……事情がないと海には出ないわよね」
「海の上に居る人は大概訳アリみたいだねぇ。しかも能力者と来たもんだ」
「能力者っつってもあれじゃ戦えねぇだろ。戦闘に向かねぇ奴もいるんだな」
動物と話せるだけと聞いてそう判断したらしい。ゾロが何気なく言った。しかしそれに異を唱えたのはキリである。
視線は前を向いたままの発言だった。
イルカに教えられた甲斐あってか、すでに島の姿が見えている。
「そうとも限らないよ」
「あぁ？　動物と話すだけの能力だぞ。言っちゃ悪いが強そうには思えねぇ」
「普通に考えればそうだろうけどね。だけど悪魔の実を食べた人間は必ず普通じゃなくなるんだ。能力者ってだけで一概にはそう言えないよ」
「ならあれで戦うんならどうする気だ？」
「悪魔の実の能力は、鍛えれば鍛えるほど力を増す。戦闘に特化できるかどうかは本人の熟練度次第。動物と話せるなら十分じゃないか。強い動物と意思疎通できれば、それだけで身を守る力は手に入る。自分自身体を鍛えなくてもね」
「つまり用心棒を雇える能力ってか？」
「イメージ的にはそんな感じ。それに多分、ボクらが思ってるほど簡単な能力じゃないよ」
「ん？」
どこか真剣な顔つきで、その能力の真意を恐れるかのようだ。
キリの横顔は二人ともが見ていた。
「話せる動物を定義するのはおそらく彼女自身だ。多分本人はあまり意識してないだろうけど、昨日見た限りじゃ海中のイルカを呼び出せてた。声が届く範囲じゃなかった可能性もあるのに。あれができ

るんなら下手すれば海王類クラスまで話せるようになるかもね」
「か、海王類と話せるの？　そんなの、もしあいつらを操った日にはあんたたちですら勝てないじゃない。そんなのってあり？」
「あくまで可能性だよ。できるとも言ってないし、できないとも限らない。でもそれが悪魔の実の能力だ。上手く乗りこなせるかどうかは能力者次第」
上体を起こしたゾロがアピスを見ながら言う。
「鍛えれば鍛えるほどってやつか」
「彼女が自覚してその気になったら、本当に最強の能力者になれるかもね」
「は、はは、笑えないわね……ほんとなんなの、悪魔の実の能力者って」
渇いた笑い声を発したナミが口の端をひくつかせる。
事情は聞いていた。今この船上に能力者が三人居ることを理解している。ルフィ、キリ、そしてアピス。世にも珍しいと語られた悪魔の実を食した者が三人も居るのだ。
頼もしいと思うより何より、恐ろしいという感情を抱く。
未知なる物に対する恐怖。小さな町など簡単に潰せそうだと考えてしまう。
ただ反対に彼らへ期待する感情もあった。
これだけ強いのならば、例えば人間以外の種族と戦ったとしても。
近頃ナミはそんな考えで思い悩んでいた。自分がなぜ海へ出たのかを思い出し、海賊のみを対象に絞る泥棒稼業を始めた理由を考え、もしかしてと期待してしまう。しかし彼女は逸る想いを必死で抑えた。自分一人でやり通すと決めたのだと。
余計な思考を吹き飛ばし、改めてアピスの笑顔を見る。
まだ年端も行かぬ少女。どれだけ辛い目に遭ったのだろう。
表情は自然と気遣う物に変わっていて、それに気付いたキリが振り返りながら言った。
「思う所でもあった？　自分の境遇と重ねたとか」
「まさか。海賊に拾われたあの子が不憫で仕方ないだけよ」

「あの子は海軍から逃げてきたんだけどね。正義の集団が一枚岩だと思わないことだよ」
キリがそう言えばナミはぐっと唇を噛む。
海賊として海の上を航海していた彼ならば知っていることも多いだろう。彼女とて理解している。正義の集団と称される海軍が、時にどんなことをしでかすか。泥棒として八年間の航海を経験した今、海軍を頼るのもそう良いことばかりではないと知っている。
それでも海賊に対する嫌悪感は消えないのか、表情が明るくなることはない。
苦笑したキリは舵輪を離した。
「ナミ、舵よろしく」
「え？　あっ、ちょっと」
軽快に歩き出したキリは階段を降りていき、代わりにナミが舵輪を握った。
和気あいあいと盛り上がる三人の下へと歩み寄って声をかける。
「アピス、島が見えたよ。もうじき到着だ」
「ほんとっ!?」
朗らかに笑うアピスは喜びを露わにし、今にも飛び跳ねかねない様子となった。
子供っぽい仕草にルフィとシルクは笑顔をこぼす。
明るい性格故に落ち込む素振りもなく笑顔を振りまく彼女だ。傍に居るだけで不思議と気分は良くなり、船上の雰囲気が一気に明るくなったように思える。
一同は欄干から身を乗り出して前方を見る。
進行方向にあった島は、白い岸壁が目立つ奇妙な形の島だった。
天へと伸びる大きな岩山が独特な姿。
その形が軍艦に似ているとの理由から軍艦島と呼ばれるのだとアピスは語った。
目的地をその目にした彼女はますます笑顔を輝かせる。嬉しそうに三人へ振り返って感謝の言葉を伝えた。こんなに早く戻って来れたのも彼らが連れてきてくれたためである。

「あれが軍艦島で間違いない？」
「うん！　みんなありがとう。出会ったのがみんなでほんとによかった」
三人の顔を見回せば彼らの顔も緩む。
一方でシルクは彼女の能力を目の当たりにしたばかりで、感心していたようだ。
「すごいんだね、ヒソヒソの実って。動物に道を聞くだけで到着できるんだ」
「まぁ普通の人間じゃなくなるわけだからね。悪魔の実を食べて弱くなることはまずないよ。あくまでも海に落ちなければの話だけどさ」
「うーん、そっか……」
シルクが腕を組んで考え始めるも、ルフィは気にせずアピスへ目を向けた。
「おまえ海軍に追われてんだろ？　戻って大丈夫なのか」
「うん……それが心配なんだけど」
「今のところ島の近くに軍艦は見えないね。向こうはまだ到着してない可能性がある」
「でもまた戻ってくんだろ？」
「多分ね」
「あ、あのさ」
意見を交わすルフィとキリをアピスの一声が止める。
おずおずといった様子で戸惑いが感じられた。笑みが鳴りを潜め、眉を寄せて困った顔だ。
今更何を躊躇うのだろう。一日にも満たない時間とはいえ寝食を共にし、今の今まで仲良くしていた。それでも言い出しにくいというのは相当な事を言おうとしているのか。考え事をやめたシルクも合わせ、三人の視線が集められる。
意を決したのか、顔が上げられた。
不安は色濃く、しかし覚悟を持って伝えられる。子供とは思えぬ表情だった。

「ほんとは、海軍に狙われてるのは私じゃなくて、友達なの。私は助けるために嘘をついて、それで島から離れようとしたんだけど……もし海軍がまた来たら、困っちゃう」
「そうだったの……」
「友達を守りたいの。だけど私一人じゃどうしようもないから、助けてくれない？　あなたたちなら、多分、悪い人じゃなさそうだし」
「いいぞ。おれたちもう友達じゃねぇか」
ルフィが笑顔でそう言った。簡単に言いのけた言葉だったがアピスにとっては嬉しく、印象と変わらぬ人物だと思えて安堵できたらしい。パッと笑顔が咲くようだ。
そう感じられた直後、なぜか笑顔は曇る。
信じたいとは思っている。だが今感じる不安はそう簡単には拭い切れない。
もしも、と考えるのが怖かった。
アピスの口からは念を押すような言葉が吐かれ、ルフィは落ち着いた様子でそれに向き合う。
「でもね、私の友達普通じゃないから。ルフィたちは悪いことなんてしないよね」
「するわけねぇだろ。アピスの友達はおれたちの友達だ」
「そっか……そうだよね。うん、信じる。ルフィ、私の友達を助けて」
「まかせろ」
力強く頷いた姿を見て、今度こそアピスが笑った。
海賊だと聞いた時には驚いたが彼らは驚くほど気が良い。暴力を振るうこともなければ、仲間内でいざこざが起こる訳でもなく、笑顔を絶やさずに仲睦まじい姿ばかり見られた。
この人たちならきっと大丈夫だろう。そう思って決意する。
アピスの顔は晴れ晴れとしていた。
「島に着いたら私の友達紹介するね。きっとびっくりするよ」
「ししし、そうか」
「アピスの友達、どんな人だろう」

「二人とも楽しみにするのはいいけど、こっちの動きも決めとかなきゃいけないよ」
到着を今か今かと待つ仲間たちをキリが制した。
彼らは旅行者ではない。帰る場所があるならばただの行楽気分を責められもしないが、これから先もずっと航海を続けるならばそれ相応の準備が必要になる。
誰が何を担当するか。決めなければならないことがあった。
「うちは大食漢がいるんだし食料の補充はしとかないと。あと水も。武器や砲弾なんかは船内にあるからいいとして、何も準備せずにって訳にはいかないよ」
「あ、そっか」
「じゃあ私がやっとくよ。何が残ってるかも大体覚えてるし」
自信満々にシルクが胸を叩いた。料理の手伝いをしたため、また記憶力の良さがあってか食料調達なら問題なく遂行できる。役に立ちたいという一心であっただろう。
それを良しとしたキリは頷く。
「ならボクは船の修繕をしとこうかな。ルフィはアピスについて行ってよ」
「わかった。いいぞ」
「シルクはナミを連れてってくれる？　多分まだ警戒してるから仲良くなってくれると助かる」
「いいよ。私もナミとは仲良くしたいから」
話が纏まりかけるとアピスも口を開く。
自分なりの意見があったようだ。くいっとシルクの手が引かれる。
「ねぇ、友達に会う前に家に帰ってもいい？　おじいちゃんが心配してると思うの」
「当たり前じゃない。私たちもそこまではついて行くね」
「よし、決まりだ。そろそろか？」
「もう到着するよ」
彼らが話している間も船は進んでいて、やがて島へと辿り着く。
砂浜の近く、桟橋がある。

その先には小さな村があってそこがアピスの村らしい。
船は帆を畳みながらゆっくりと桟橋へ横づけされる。ナミの舵取りも問題なかったため船体が傷つくことはなかった。無事に到着し、錨を下ろして完全に船の移動が止まる。
その後で一行は桟橋へと降り始めた。
まず最初に嬉しそうなアピスが飛び出して、続いて同じく好奇心を露わにするルフィが飛んだ。立て板を渡す前に気の早い行動である。二人が一足先に村へ走り出してしまった後でゾロが船と桟橋の間に板を立てかけ、足場とし、ナミとシルクが降りていく。
船の修繕のためキリは船上へ残り、ゾロもまた降りようとしなかった。
「気が早ぇ奴らだ。ちょっとは落ち着けねぇのか」
「あれがいいところだよ。それよりゾロはどうする？」
「別にやることもねぇし、昼寝でもしとくか。用事が済んだらシルクが手合わせしろって言ってたしな」
「それまで手伝ってよ。流石にこのままじゃ見栄え悪いし」
「どうせ乗り捨てるんだろ？　意味あんのか」
「そりゃそうだけどいつまで使うかわからないじゃん。これで旗掲げてるとうちの一味がだらしないみたいな印象になるよ」
「実際だらしないんだがな……」
船上ではキリとゾロが船の修繕を始め、船内から掻き集めた材料で作業を始めた。
島内へ降りた者たちは桟橋のすぐ傍にある村へと入っていく。
巨大な帆船が近付いて来たことで島民たちはその動きに注目していたようだ。そして船から下りてきた人物が、海軍に連れていかれてしまったアピスだと気付いて、皆がわっと声を上げる。小さな島の中では知らない顔などない。元気な彼女が帰ってきて喜ばない者は居なかった。
笑顔で駆けてくるアピスは一人の老人を見つける。アピスの祖父、ボクデンだ。
「アピス！　無事じゃったか！」

「おじいちゃーんっ！」
アピスは勢いよく彼の胸の中へと飛び込み、熱い抱擁を交わす。
よほど心配していたのだろう。涙さえ流しておいおい泣いていた。
追いついたルフィは足を止めて彼らを見守る。
同じ船から下りてきたことで事情は悟ったらしく、ボクデンは彼が恩人なのだと判断したらしい。アピスを抱きしめたまま深く頭を下げた。
「おぉぉ、あんたが助けてくれたのか。すまん、礼を言う」
「いいよ。たまたま拾っただけだったし」
「ルフィ、私のおじいちゃんだよ」
幾ばくもせずナミとシルクも歩いて追いついて来た。
島民たちは船が海賊船だと理解している。掲げられた黒い旗を見れば一目瞭然だ。しかしやってきた彼らがあまりに想像と違っていて、戸惑っている者も多いようだ。
それを理解してか、アピスは島民たちを見回して言う。
「みんな大丈夫だよ。この人たちは海賊だけど良い人なの。私を助けてくれたし、リュウ爺を助けてくれるんだって。さっき約束したの」
「リュウ爺を？　おまえ、しかしそれは……」
「大丈夫。きっとリュウ爺もそう言うよ」
その言葉を聞いてボクデンは苦々しい顔をする。ちらりと目の前の彼らを見た。
能天気そうな少年が一人。荒事が得意とは思えない少女が二人。
確かに見た目からは悪人だと思えないものの、それとこれとは別。この一件に関してはそう簡単に信用できる問題ではないと判断するため素直に喜べない。続けてアピスが説得した。
「絶対大丈夫だから。だって私のことも助けてくれたんだよ？　ね？」
「むぅ、しかしリュウ爺のことは……」
「もうこうするしかないの。リュウ爺がここに居るとあいつらまた来ちゃう。だから、ルフィたちに連れ出してもらうしかない。ロスト

アイランドへ」
「……そうか」
ボクデンは深く息を吐いた。
再びルフィたちの顔を見回し、厳しい表情で口を開く。
「わかった。そういうことならばリュウ爺のことを任せるしかない。しかし何も事情を知らぬ者をリュウ爺に会わせる訳にはいかん」
「どういうこと？」
「皆、わしの家へ来てくれ。説明した後に託すとしよう。わしが知る限りを話す」
事情が呑み込めないナミとシルクは顔を見合わせ、首をかしげる。一体どういう状況なのか。ただアピスの友達に会うだけだと思っていたのに予想以上の緊迫感を感じる。しかしルフィはそれを物ともしていないらしく、何も考えていないかのように軽々しく頷いた。
「わかった。話聞いたら会えるんだな」
「いいの？　そんなに簡単に頷いて」
「話聞かなきゃアピスの友達に会えねぇんだろ？　だったらしょうがねぇ」
「うむ。ではこちらへ」
ボクデンを先頭に一行は歩き出す。そして数分とせず一軒のこじんまりとした家へ入った。
椅子を勧められて四人が並んで座り、その前にボクデンが座る。
この時アピスは考えていた。
ボクデンの話は長い。特にこれから話そうとしている事については他の話以上に長くなる可能性がある。そのため、帰って早々だが無駄な時間を過ごしてしまう可能性が高かった。
今は一刻も早く友達に会いたいのだ。
コホンと咳払いをして話し始めようとする。まさにその瞬間、アピスが立ち上がった。
「えー、ではこれよりわしが千年竜に関する歴史を――」
「あっ、おじいちゃん。私みんなのお茶入れてくるよ。せっかく来てもらったのに何も出さないのは失礼でしょ？」

「おぉ、そうかそうか。それもそうじゃな」
「おじいちゃんはそのまましゃべってて。ルフィ、手伝ってよ」
「ん？　おれか？」
アピスが手を引いてルフィを連れ出そうとする。そこへ反応したのがシルクだ。
「私が手伝おうか？　ルフィは不器用だからそういうの向かないと思うけど」
「いいの。そんなに難しくないから。ほらルフィ、はやく」
「わかった、わかったから引っ張んなよ。まぁ伸びるだけだけど」
ガタガタと椅子を鳴らしてルフィを立ち上がらせ、引っ張って奥へと連れ出す。
その間にボクデンが再び話し出そうとした。
「えー、コホン。では改めてわしが千年竜の伝説を――」
「ねぇおじいさん、それもいいんだけど先に別の話をしない？　アピスをここへ連れてきたのは私たちなんだけど、お礼の一つもなしってのもどうなのかしら」
「ちょっとナミ、そんないきなり……」
「ふむ、それもそうか。しかし」
「別にお金じゃなくてもいいのよ。価値のあるお宝とかでも」
「ううむ、そうじゃなぁ……」
「もう、ナミったら。今はそういう場合じゃないのに」
ナミの主導により、三人は本題と関係のない話を始めていた。
その隙にアピスはルフィを引っ張って裏口から家を出る。
少し急ぐ足取りで山を登っていて、遠目にも確認できる岩壁へ向かっているようだった。
「この島って変わってんなぁ。お茶入れるのにこんなに歩くのか」
「違うよ、さっきのは嘘。おじいちゃん話長いから、あのままだと夜まで終わらないよ」
「そうなのか」
「早くしないと海軍が来ちゃう……ねぇルフィ、信じてるからね。私の友達、絶対に傷つけないでね」

「心配すんな。んなことしねぇよ」
訳もわからぬまま山を登って、やがて二人は洞窟へと入っていった。
入り口は大きく、天井も高くて道幅も広い。水源が近いのか空気は湿っている。
どことなく不思議な空間だった。
ルフィは好奇心を露わに辺りを見回しながら歩く。その手を引くアピスは前だけを見ている。どうやらこの場所には慣れているらしい。
やがて、一際大きな空間に出た。
軍艦に見える大岩の内部。広大な空間には大きな物体があるように見えた。
辺りが薄暗いせいでルフィはそれが何かわからなかったが、アピスは警戒心も無く駆け寄っていく。その際、親しげな声を発するのも耳にしていた。
「リュウ爺、大丈夫？　助けてくれる人を見つけてきたの。この人ならきっと大丈夫だよ」
「おいアピス、おまえ何としゃべって――」
数歩前に出たルフィの足が止まった。
暗闇の中でそれに気付く。
巨大な物体は岩ではなかった。それは巨大な生物だった。
一見すれば竜だとわかる外見だ。トカゲにも近い顔立ちに、口元からは鋭い牙が伺え、巨大な体には深い緑色の体毛が生えている。しかしずいぶん年老いた個体のようで、頭頂部は禿げていて、どことなく覇気もない。だが存在感は凄まじく他の生物からは感じられない迫力があった。
体を丸めて動かない竜は目を開き、黄金色の瞳を覗かせる。
ルフィはその瞳を見て息を呑んだ。
竜について、幼少期に絵本で読んで知った。だが実在するとは思っていなかった。兄たちと話しても実在するはずがないと言っていたし、いつしか自分もそう思っていた。

アピスが鼻先を撫でるその生物はどう見ても竜で。
目を輝かせて笑顔になったルフィは耐え切れずに叫んでしまう。
「すんげぇぇぇっ!? なんだこれ、本物なのかぁ!」
「静かにしてよルフィ。リュウ爺が驚いちゃう」
「なぁアピス、こいつなんなんだ! おれ竜なんていないと思ってたのに、でもこいつはいて、しかも生きてて、なんで――!」
「ちょっと落ち着いてよ! ちゃんと説明するから!」
興奮するルフィを落ち着かせて、アピスは小さく嘆息する。
そしてリュウ爺と呼んだ生物へ振り返り、ぽつぽつと語り出す。
「この島には伝説があるの。千年竜の伝説」
「伝説?」
「そう。それでこのリュウ爺がその伝説の千年竜で、私の友達……ううん、私だけじゃなくてこの島に住む人全員にとって大事な存在。子供の頃からいっしょに居るの。もう千年くらいこの島で村を守ってくれてる」
ルフィは竜の顔を見つめた。
やはり弱っているように感じる。そのせいかやさしい目つきに見えていた。
リュウ爺の顔を見るアピスはいつしか複雑そうな顔になっていた。
「リュウ爺は帰らなきゃいけないの。故郷の竜の巣へ、ロストアイランドへ」

千年竜伝説

「竜の巣？」
ルフィは驚いた様子で呟いた。
アピスがわずかに頷く。
「千年竜はそこで生まれてくるって言われているの。そして死ぬ時もその島へ帰るんだって。だけどリュウ爺は高齢で、もう自分で動くのも難しい状態。だから巣に帰れなくて困ってたの」
「死ぬのか、こいつ」
「……わからない。だけどリュウ爺本人が言ってるの、竜の巣へ帰りたいって」
なぜそんなことがわかるんだ、と思った瞬間に思い出したが、彼女は能力者だ。動物の声を聞き、自らも語り掛けることができるヒソヒソの実の能力者。その力は竜と話すこともできるらしい。本人の希望が聞けるからこそ島へ連れて行ってくれる人間が必要だったのだろう。
気になるのはなぜ今日まで連れて行かなかったのかだ。
年老いているとはいえ方法はいくらでもありそうな物だとは思う。
ルフィは気になった時点ですぐに問いかけた。
「なんで連れて行かなかったんだ？　こいつ帰りたがってたんだろ」
「船を用意するのに手間取ったの。この島の人みんながリュウ爺のこと知ってるから、協力しておっきなイカダを作ったんだよ。だけど、完成した頃になってあいつらが来て」
「あいつらって？」
「海軍よ。基地はちょっと離れた所にあるのに、わざわざここまで来たの。リュウ爺を狙って」
「あーなるほど。こいつ珍しいもんなぁ」
「それだけが理由じゃないわ」
アピスは厳しい目となって説明を始めた。
「伝説によれば、千年竜の骨からは寿命を延ばすことができる秘薬

が作れるんだって。どこで知ったのか知らないけど、それを狙ってあいつらはリュウ爺を捕まえに来たの。だから私が嘘をついて、リュウ爺が居る場所を教えるって言って船に乗り込んだ。その後、すぐに隙を見て逃げ出したんだけど」

「それで漂流してたのか」

「一応目的地を適当に言っておいたけど、そこが間違ってるってわかったらきっとまたこの島へ来る。私を探すかもしれない。そうなる前に早くリュウ爺を連れ出さなきゃ」

「うーん、それは大変だなぁ」

でも、と続ける。

違和感を感じて振り返ったアピスとルフィの目があった。

彼はふざけてなどおらず、腕を組んで至って真面目に問いかける。

「でもさ、なんでそこまでこいつを守ろうとすんだ？　死にかけたんだろ。それにおまえらがなんで友達になったのかも聞いてねぇぞ」

「……理由なんてないよ。さっきも言ったけど、リュウ爺は千年近くこの島を守り続けてた。だからこの島の人間みんなにとって、リュウ爺は親で、家族で、大切な存在」

アピスの顔にはわずかに笑みが戻った。

表情は柔らかくなり、緊張しているだけの状態からは抜け出す。

思い出すのは子供の頃のこと。物心ついたばかりの時、祖父に手を引かれて初めてリュウ爺に出会った。とても雄大で力強い体躯。それとは対照的にやさしい目。あの瞬間のことは今でも忘れていない。恐怖心を抱くより先に羨望を抱いたのを覚えている。

島のみんなが親のように慕い、家族として認識する、とても大事な存在。

軍艦島の守り神は誰よりも彼らに密接で親身だ。敵が来れば島民を守って打ち払い、長年の経験から嵐が来ることを事前に察知しては教え、それでいて争いを好まない。

この島の平和が続くのはきっと彼のおかげ。

その彼が死期を感じ取り、今まで離れようとしなかった島を離れ、故郷に帰りたいと言う。

必ず連れて行かねば。
強く決心するアピスはルフィに頼むしか道がないと思っているらしく、目の中の意志は揺らがない。彼を見つめ返してはっきりと告げた。
「私がヒソヒソの実を食べたのも、リュウ爺と話してみたいと思ったから。悪魔の実の図鑑で形を調べたから食べたの。リュウ爺は私のお願いをなんでも聞いてくれたわ。だから今度は、私の番。絶対にリュウ爺を竜の巣へ連れて行ってあげたい」
「うん」
「だけどこの島にはイカダを引っ張れる大きな船がないから、私たちだけじゃだめなの。ルフィ、手伝って。リュウ爺を竜の巣へ連れて行くために」
「ああ。いいぞ」
考えもせずにあっさり頷かれた。驚いたアピスは目を大きくする。
「ほんとに!?」
「おれも竜の巣っての見てみたいしな。ただし、手伝うだけだ。リュウ爺を連れてくのはおまえの役目なんだろ」
「う、うん」
「ちゃんと送り届けてやれよ。その代わりうちには優秀な航海士もいるからな」
だから安心しろ。
そう言ってルフィはリュウ爺へ歩み寄って鼻先に手を置く。
リュウ爺の反応はない。ただ瞬きしただけだった。
「よろしくなリュウ爺。おれはルフィ、海賊王になる男だ」
老いたせいなのか、ほとんど動くこともない。
ただ、触れてみてわかる。言葉にはできない感覚が伝わってくるようだった。
ルフィは驚き、すぐに微笑んで鼻先を撫でる。
言葉は通じなくとも不思議と彼の気持ちがわかる気がした。
「そうだよな、故郷に帰りたいんだよな」
「うん。リュウ爺は仲間から離れて、ずっとここに居たから」

アピスは恐る恐るルフィの顔を見上げる。
「わかるの？　リュウ爺の言葉」
「いんや。でもなんか言いたいことはわかる気がする」
「どうして？」
「んん、なんとなくだ」
そう言ったルフィはにかっと笑った。何の根拠もない発言だったのだ。しかしなぜかリュウ爺の気持ちを汲んでいるようで不思議な気分になる。
アピスも不安を消し飛ばして笑った。
なんとなく。そう、なんとなくだがルフィに任せれば大丈夫な気がする。
必ずリュウ爺を竜の巣へ連れて行く。決意を新たに表情を引き締めた。
傍を離れたルフィは近くにあった小さな岩の上に座る。そのまま腰を落ち着けるようでアピスを見やり、笑顔で言った。
「なぁ、リュウ爺の話聞かせてくれよ」
「いいよ。あのね、すっごくかっこよかった話があるんだけど、三年前くらいに――」
アピスもまたルフィの隣へ腰掛け、昔話を始める。
交流を図っての事か、それともただ興味が沸いただけかは定かでないものの、二人はそうして話を始めた。リュウ爺がどんな行いをしてきたか、またはアピスとどれほど仲睦まじかったか。伝説についてというよりも、彼女たち二人の関係性について。
音のない洞窟の中で二人の声が反響し、しばしリュウ爺は二人を見守っていた。

＊

家の奥から持ち出してきた小さな箱を手に、ボクデンがテーブルへ戻る。
ナミの目の前に置かれたそれは年季が入って古ぼけている。お宝

の類には見えないが、差し出された以上は不服を露わにするのも戸惑われた。
困惑した顔のナミは首をかしげる。
「これは何？」
「あいにくおまえさんらに払えるほどの金はない。代わりにこれを持って行ってくれ」
「って言ってもお宝には見えないわね」
「ちょっとナミ。ごめんなさい、悪気はないんですけど……」
「構わんよ。こんな物しかないうちも悪いじゃろう」
悪いという気持ちもどこへやら、不服そうにしたナミは木箱の蓋を持ち上げる。するとその中身を見て瞬時に表情が変わり、驚愕を露わにした。
見覚えはない。だが噂なら聞いたことがある。
そこにあるのは奇妙なフルーツだった。
皮には螺旋を描く模様がいくつも並べられていて、色は水色。明らかに危険だと思わせる毒々しい色をしている。それだけにこれは間違いなく悪魔の実なのだと理解できた。噂に聞いた通りの奇抜な外見である。一体どこで生まれているのかと不思議に思った。
これが報酬。ナミの眉間に深い皺が刻まれる。
金銀財宝を期待していた彼女にとっては裏切られた気分なのだろう。
聞いた噂では、悪魔の実一つで数億ベリーの取引も行われているらしい。そう考えればこれ以上ないほどの報酬だ。だがイーストブルーは四つの海で最も平和な海であり、政府に気取られない裏取引など存在しない。これを使って大金を手に入れようと画策するならばそれ相応のリスクと、何より手間がかかる。もし成功したとしても名前が売れることは必至だろうと推測できた。
海賊専門の泥棒は無名であるからこそできた芸当だ。
悪魔の実を売って大金を稼げばそれなりに拍が付く。それを良しとするか否か。
盛大に溜息をついたナミとは対照的に、シルクは覗き込んだそれに

目を大きくした。
「ねえ、これって……」
「悪魔の実よ。何よ、意外にどこにでもあるんじゃない」
「これは数年前、海賊が持っていた物を手に入れた。それ以来食す者もなく持ち続けていたが、珍しい物であることは知っている。これで勘弁してくれんか」
「海賊が？　まさか、戦って奪ったんですか」
「そうとも言える。が、戦ったのはわしらではない」
首をかしげるナミだったが深くは追求せず、それよりも目の前のこれをどう処理しようか考える。食べるつもりは当然ない。最も利用価値があると言えば海軍に売りつけるくらいか。しかし如何せん海軍を信用している訳でもないため、相手は選ぶ必要があった。
そうして考えているとシルクの表情の変化に気付く。
何かを考えているのかじっと悪魔の実を見つめ、やけに真剣な顔になっていた。
まさかとは思う。不穏なことを言い出さないかと心配になる。
しかしシルクは意を決し、予想とは違わず、ナミの顔を見るとそれを言い出した。
「ねぇナミ。悪いんだけどこれ、私に譲ってくれないかな」
「あんたまさか……バカなこと考えてるんじゃないでしょうね。これを食べたら一生カナヅチになるのよ。それに考えてみなさいよ、あんたたちの船に二人もカナヅチが居るんだから。海に落ちたあいつらを助けるだけでも役に立てるでしょ？」
「うん。そうだよね」
「昨日今日だけじゃなく一生よ？　そこまでしなきゃいけないことなの、海賊って。どいつもこいつもなんでそんなに海賊を良い風に考えるわけ？　ただの犯罪者じゃない」
シルクは真剣な顔で頷く。だがナミの顔は見ない。
意識はあくまでも悪魔の実へ向けられていて、考えるのは仲間のこと。
そんな態度にナミの苛立ちが増した。

「海賊がどうとか、それだけじゃないよ。私はみんなの傍に居れるだけの価値が欲しいだけ。そのためには、カナヅチになるのだって怖くない」
「バッカみたい。あいつらだって所詮海賊なのに」
「ナミが海賊嫌いなのは知ってるよ。だけどね、確かに海賊に憧れてた部分はあったけど、それ以上に大きかったのはルフィとキリだったから。私はあの二人に出会ったから海賊になったの。それ以外の人に出会ったならきっと海に出る事はなかった」
ようやくシルクがナミを見た。だがそこに普段のやさしさはない。船上で見た笑みはなく真剣な様子で彼女を睨みつけている。
「海賊は嫌いなままでいい。だけど私の仲間を悪く言わないで」
流石に怯んだ。やさしいだけの人物だと思っていたが怒ることもあるらしい。
二の句を告げられず、再び視線が悪魔の実へ戻るのを見送る。
唇を噛んだナミはシルクが実を持ち上げる挙動を目にしていた。
「ルフィは海賊王になるために、ゾロは大剣豪、キリはルフィのために命を賭けるって言ってた。私もそれくらいじゃなきゃみんなの傍には居られない。悪魔の実を食べて弱くなることはないってキリが言ってたし、強くなりたいの。それにルフィも、カナヅチなら海から落ちない海賊になればいいって。全部みんなの受け売りなんだけどね」
「ちょ、ちょっと」
苦笑したシルクは両手で悪魔の実を持ち、間近に見る。
味は相当悪いと聞いている。だけど一口食せばそれで能力は手に入るはず。
覚悟を決めてシルクがナミを見た。
すでに怒りの念は皆無で笑顔。妙に清々しい姿だ。
「ごめんナミ。これ、もらうね」
がぶりと一口、噛みつかれる。
口内に広がるのは形容しがたい味。なんと言っていいのかわからないがとにかくマズイ。経験した事のない味でもそれだけは理解で

きた。
ひどい形相になるものの必死に耐え、吐き出さずに数度咀嚼。それすらも辛くて彼女は無理やりに呑み込んだ。喉の内側までマズイ味を感じて何度かせき込んでしまう。
それでも、食べた。
悪魔の実を食べたのだ。
シルクは残った実を置き、自分の両手を見下ろす。何の変化もない。試しに指を開いたり手首を返したり、些細な動作をしてみたが今までと何一つ変わらない。
そんなシルクにナミは溜息を抑えきれず、あからさまに肩を落とした。
彼女だけは冷静に状況を判断できる人間だと思っていた。だが勢いで動いてしまう部分もあったらしい。そんな面子ばかりではないかと妙な疲労感が拭えなくなる。
「まったく、こいつらは……まぁいいわ。どうせ悪魔の実を捌けるルートなんてなかったし。その代わり、私があげた物なんだから代わりのお金はもらうからね」
「うん。それくらいならなんとかするよ。ナミにお願いしてもらったんだもんね」
「そこまで素直に頷かれると逆に戸惑うわ。ハァ、もう。手を組んだの失敗かしら」
頭に手をやったナミはやれやれと首を振る。
裏に何かを抱えているキリやゾロより、彼女やルフィのような素直な相手の方がやりにくい。長く海賊を相手に泥棒していたせいか自然とそう考えていた。
ともかく悪魔の実の処理は済んだ。予定外だがこれはこれで良い。
問題なのはこれからどうするか。
この島に海賊はいないし、ただの島民から盗むつもりはない。お宝を手に入れるには海賊を見つける必要がある。次の航海で標的を探すしかなかった。
その航海が何やら不穏な空気を感じるのだ。

アピスとボクデンのやり取り、そして何より彼が話したがっている内容が気になる。
一通りのやり取りを見終えてついにボクデンが話し出そうとしていた。
「そろそろいいか。では本題を」
「ちょっと待ってよ。まだあいつもアピスも戻ってきてないじゃない。お茶を入れるだけにしては時間かかり過ぎてない？」
「そうじゃな。だがもういいだろう。では本題を」
「待たなくていいわけ？　あの麦わら帽子はあんなでも船長なのよ」
「言い忘れていたがアピスは理由をつけてはわしの話から逃げる癖がある。よって今頃裏にはおらんじゃろう」
「はぁ？　じゃあなんで追わなかったのよ」
「おまえさんらが聞けばいいだけじゃろうと思って。もういいか？」
お茶の一つも出さぬまま長話が始められようとしている。
振り回されるばかりのナミは表情を歪めるがシルクは気にせず、真面目に聞く姿勢となる。
ボクデンはようやく話し始めることができた。
「おまえさんらに頼みたいのは、この島を守って来たリュウ爺を竜の巣へ連れて行って欲しいということ。そのためにはまず千年竜について知らねばならないじゃろう」
「千年竜って、あの？」
「それって絵本に出てくる空想上の生物でしょ。とっても強くてやさしいとかなんとか」
「いいや、実在する。千年竜はこの世に実在しておるのじゃ」
興味深い話だった。
千年竜の名は世界に広く知れ渡っている。その多くが絵本を用いた童話によってだ。
強くてやさしい千年竜はある一人の少女と出会い、少女の願いを叶えてやるため一緒に冒険するストーリー。あまりにも有名でイース

トブルーにも出回っている。
読んだことはないがシルクもその名を知っていて、ナミは母親に読んでもらった経験がある。
その千年竜が作り話ではなく実在する。この発言にはルフィでなくとも興味を持たずにはいられなかった。
「千年竜とは海における最強生物とも言われておる。空を飛び、地を駆け、海を泳ぐ。普段は心優しく人々を傷つけないのじゃが、一度怒れば、海王類でさえも仕留めてしまうとも」
「ますます作り話っぽいわね。海王類ってそんなに弱くないでしょ」
「左様。つまりそれだけ強いということになる」
「すごい、そんな生物が実在してるんだね」
「ねぇシルク、あんた信じるの？　竜なんて空想上の生物、伝説とかがあっても実在はしないものよ。そんなのがほんとに居るなら今頃大問題になってるじゃない」
話半分で聞いているらしいナミとは違い、シルクは前のめりに目を輝かせている。自身が能力者になったか否か、そればかり気にしていたはずがすっかり話に惹き込まれていた。素直過ぎるとも言うべきそんな彼女の姿にまたナミが呆れる。
信じるか否か、そんなことはどうでもいいとばかりにボクデンが続けた。
「千年竜は千年の寿命を持つ生物じゃ。しかし、その生まれは皆が同じ場所であり、戦いや事故で突発的に死んでしまわない限り、死に場所に選ぶのも己の故郷。千年生きたリュウ爺は今、自身の死に場所を求めている。己が生まれたロストアイランドにある竜の巣を」
「ロストアイランドの、竜の巣。そこが千年竜の故郷」
「そうじゃ。千年竜はそこで生まれ、そこで死ぬ」
「何を根拠にそんなこと言ってんのよ。本当に竜が実在するかどうかもわからないのにこんな話聞かされても、信用できないわよ。大体おじいさんはなんでそんなこと知ってんの」
「すべて壁画に描かれていた。わしらの先祖から語り継がれた言葉

じゃ」
ボクデンの言葉に二人が口を噤む。
想像以上に大きな話であると思い知ったようだった。
「この島の特徴とも言える岩山の内部には、この島で生きた先祖たちの言葉が残されている。それこそが千年竜の伝説じゃ。千年もの間この島を守り続けたリュウ爺に関する多くの情報が残されており、彼が敵ではないこと、この島を守ってくれる存在だと教えてくれた」
「千年も……どうしてそんなに長い間、島を守ったんだろう」
「理由はわからん。言葉での意思疎通はできぬし、唯一言葉を交わせるアピスが尋ねても彼は答えなかった。なぜ守るのか、真実を知るのはリュウ爺本人のみ」
「竜とも話せるの、あの子は。なんでもありねヒソヒソの実……」
本来は通じ合えないはずの生物同士の言葉での交流。それが悪魔の実の能力によるものだと思い出してシルクは再び自身の能力を気にする。だがこの場はぐっと堪えて、話に集中した。
ボクデンは尚も話している。むしろ今からノってきた様子すらあった。
「さらに千年竜には他の生物にはない特徴があって、寿命を全うするまで生きた千年竜はロストアイランドへ戻り、故郷の地にてなんと――」
その後もボクデンの話は続くのだが、これが異様に長く、最終的には千年竜に関係があるのかという話にまで行ってしまった。最初こそ真面目に聞いていた二人も次第に表情を変えてくる。
これを知るからこそアピスは逃げたのだと理解したのは数十分を越えた後。
ボクデンの語りはいつになっても終わらず、二人が疲れ果てても気にせず続けられた。

出逢い

船に残ったキリとゾロは船の修繕を行っていた。壊れた柵や壁に板を打ち付けるだけの応急処置。見栄えは良くないが壊れたままでいるよりかは遥かにマシだろう。と言っても作業しているのはほとんどキリだけで、ゾロは彼に板を渡すだけで大したことはしていなかった。

作業はのんびり進められて急いでいない。

それでいて二人は気楽に会話していた。

「おまえはいいのか？　あいつをほっといて」

「ん？」

「ルフィのことだ。ずいぶん好き勝手にやってるだろ。おまえが面倒見るかと思ってたが」

「見てるよ、ちゃんと」

「今回のもあいつが勝手に決めただろ。止めなくていいのか」

「別にいいんじゃない？　悪いことしてるわけじゃないし」

「そりゃあそうだけどよ」

「冒険に寄り道はつきものだよ。グランドライン以外にも広い世界があるんだ。時間をかけて一つずつ見ていくのも成長のための材料だと思ってさ」

「フン。鉄も斬れねぇおれに強くなれってか？」

「そんな当てつけみたいには言わないけど、戦闘は一つでも多い方がいいでしょ」

不満そうに唇を尖らせるゾロだったが、否定はしない。強くなるためならば望むところだった。

目指すのはあくまで世界最強の剣豪。

こんなところで躓いている場合ではなく、できる事ならば強者との戦いで己の腕を高めたい。自分がいまだ未熟であるとは理解している。おそらくキリとやり合ってすんなり勝つのは無理だろう。それさえできないのならば世界一など夢のまた夢だ。

次の板を渡して、作業を続けるキリを見る。

グランドラインの敗北者。以前自身をそう表現していた。
そこが一体どんな場所か、今のところ知るのは彼一人しか居ない。
恐怖心より先に興味が沸いてきてゾロが尋ねた。いずれ自分たちも目指す世界最強の海。そこには自身が目指す世界一の大剣豪も居るはずだ。
「グランドラインに居る奴は強いのか」
「うーん、人によるかな。今のゾロより弱い人も居れば、ボクら全員が束になっても勝てない人も居る。一概には言えない感じじゃない？」
「いまいちピンと来ねぇな」
「例えば、ゾロが目指してる世界一の大剣豪。今のボクら四人で挑みかかったとして、多分得物を抜かせることもできないね。こっちから触れることもできずに斬られて終わりだよ」
「見たことあんのか、本人」
「ないけど」
「ねぇのかよ」
「でも同格の人間なら見たことあるよ」
眉を動かすゾロへ振り返って、目を合わせたキリが笑う。
得意げにも見えるが普段と変わらぬ表情。そういえば常々余裕を称えていたと再認識する。
「現世界一の大剣豪は〝王下七武海〟の一角、鷹の目のミホーク。当然その名前は知ってるよね」
「まぁな」
「じゃあ七武海については？」
「聞いたことはあるが詳しくは知らねぇな。なんなんだそりゃ？」
「そういうタイプだと思ったよ。ルフィに聞いても知らなかったし」
「あいつと同じに考えんじゃねぇよ。あそこまで能天気じゃねぇ」
「そう？　案外似てると思うけど」
再び壊れた壁に板を打ち付け始める。トントン、と釘を打つ音がリズムよく奏でられた。

「七武海っていうのは、世界政府に認められた七人の海賊。彼らが行う略奪行為は政府によって認められる。ただし略奪品の何割かは政府に渡さなきゃいけないから、政府の狗だって罵倒する人も居る。正直ボクはそんな風に思わないけどね」
「どういう意味だ？」
「海賊やるような人間が望んで政府の下につく訳ないでしょ。七武海になった段階で懸賞金は撤回だし、恩恵を利用して悪事を働く気なのさ。もちろん政府にバレないように」
「……鷹の目は海賊なのか？　おれァそんな話聞いたことねぇが」
「微妙なとこだね。ボクも加入した経緯は知らないし。気になるなら本人に聞けば？」
「いつ会えるかわかったもんじゃねぇだろ。それともおまえどこに居るか知ってんのか」
「いや知らない。って言うか話逸れたね」
七武海に関して話していたのだったと話を元に戻す。
流石グランドラインを航海していただけあってか、彼はその手の話に詳しいらしい。というよりも七武海の名は全世界へ轟いており、この場合知らないゾロが異質と言える。
興味があるのは〝鷹の目〟と呼ばれた男だけ。
そうは言っても一応この場は真剣に話を聞いていた。
今は以前と状況が違う。一人で旅をしている訳ではなく、ただ大剣豪を倒して最強の名を奪うだけの旅ではなくなった。海賊の自覚を持って、それ以外の勢力にも目を向けようとしている。
「七武海は有事の際に政府側の味方をする存在で、加入に必要なのは強さと知名度。今となっては全員世界中に名が知れてるよ」
「で、そいつら全員おれたちより上か」
「もちろん。加入した時期は様々。その時の懸賞金も一億を超えてない人間も居たけど、もう何年も席を離れてない人間が多い。今懸賞金をかけるなら全員五億はくだらないんじゃないかな」
「五億……一人仕留めりゃ五億か」
「あくまでボクの勝手な予想だけどね。それくらい強い」

「今のおれが鷹の目と戦って、結果はどう予想する」
「勝てる確率はゼロだね。向こうが手を抜いてれば多少遊んでもらえるんじゃないかな」
「もし、最初から本気だったら」
「一瞬で上半身と下半身がさよならして終わり。二秒あれば終わるんじゃない？」
修理しながら、あっさりした口調で、思わずゾロの眉間に皺が寄る。
己の力量不足は理解している。とはいえそこまで言われるものか。
流石に受け止めきれない言葉であって、不服そうな態度が色濃くなった。
「ずいぶん言ってくれるじゃねぇか。だが何を根拠にしてんだよ」
「勘？」
「まったく、真面目に聞いていいんだかわからねぇ。おまえ、七武海を見たんだろ？　そいつはどんな奴だったんだよ。鷹の目より強いのか」
「どうだろうねぇ。七武海の中でランク付けとかあるのかな」
「大体でもいいが。つうかおまえが会ったのは誰なんだよ」
「いいよ、どうせ言っても知らないだろうし」
「調べることはできるだろ」
「どうせ昼寝したら忘れてるって。この後寝るんでしょ」
「てめぇ、久々に言いやがったな。なんならこの場でおまえとやり合ってもいいんだぞ」
「あはは、それはパス。これ以上船が壊れると直すのが大変だ」
「チッ……」
板を渡すのをやめてしまい、ゾロはその場で寝転がる。
頭の後ろで手を組み、すぐに目を閉じてしまった。
拗ねた訳ではない。彼に言われた言葉をすべて受け止め、冷静に考えるのは目標と自分との距離について。きっと彼は嘘をついていない。野望はまだ遠く彼方、このままでは手を伸ばしても届かない位置にある。キリの言葉があってより一層強く思った。
果たしていつ手が届くのか。そう思う一方で体が疼く。

早く挑戦してみたいという欲求と、今すぐに誰でもいいから戦いたいという気持ちが沸いてくる。
まさしく野獣じみた迫力を滲ませていた。
相変わらずの気質にキリは苦笑し、自分で次の板を持ち上げる。
「一歩ずつ進んでこうよ。焦ったっていいことないからさ」
「焦っちゃいねぇ。ただやる気になってるだけだ」
「それはそれで問題な気はするけど、まぁいいか」
釘を打って板を張り付け、なんとか簡易的な修繕が終わった。
キリは肩を撫で下ろす。
壁の穴は塞いだものの直さなければならない場所は他にもある。道具を持ち上げたキリは寝転がるゾロを見下ろし、板を持ってくるよう言って歩き出した。
「ほら、次は柵直すよ。泳げないのが二人居るんだから。おいでゾロ」
「てめぇ、犬扱いすんじゃねぇよ」
ぶつぶつ文句を言いながらもゾロは板を持ち上げ、後ろから続く。
階段を下りて以前ルフィたちが壊した場所へと歩み寄り、柵がないそこの前へ座って、しばし考える。あいにく船大工ほどの技術は持ち合わせていない。壁に板を張り付けるだけならそう難しい作業ではいが、壊れた柵を直すのは中々骨が折れそうだった。
胡坐を掻いたキリは難しい顔を見せる。
その隣へ立ち、適当に板を置いたゾロが言う。
「今更だが直せんのか。船大工じゃねぇっつったのはおまえだろ」
「これは流石に難しいかなぁ。そうだ、島の人に直せないか聞いてみようか」
「むしろ最初からそうしときゃよかったんじゃねぇか？」
「そうとも言う」
気楽に言ってキリは立ち上がろうとしたが、疲れたように頭を抱えるゾロに気付かず、海を眺めて何かに気付く。妙な波の動きがあった。
天変地異の類ではない、おそらく大きな何かが泳いでいる。

途端にそちらが気になって、座ったまま接近してくる物体を注視した。
「何か来るよ」
「あ？　敵か」
「敵は泳いで来ないでしょ。野生動物の可能性が高いかな。また珍獣かもね」
「またか。もうパンダだのたわしのおっさんだのは腹いっぱいだぞ」
「気持ちはわかるよ。でもグランドラインに行けばあの島も目じゃないくらいの珍獣も――」
近付いて来る姿を見ていたキリが思わず身を乗り出した。
壊れた柵から前のめりに、海へ落ちかねないかという姿だ。ゾロは何気なくフォローのため、彼の背後へ近付く。
「ゾロ、シロクマがバタフライで泳いでくる」
「は？　クマは泳いでもバタフライはしねぇだろ」
「でも見てよあれ」
「……確かにバタフライしてるな」
「でしょ」
「ほんとにシロクマか？　だとしたらどう考えてもおかしいだろ」
「でもまぁ、悪い事してるわけじゃないしいいんじゃないかな」
「前々から思ってたがその判断基準はなんなんだ」
脇目も振らずに船へ接近してきたのは一匹のシロクマであった。
体長はおよそ三メートル。人間と比べてあまりに大きな個体は船体の傍まで来ると、泳ぐのをやめて船上を見上げる。つぶらな瞳で見上げてくる顔は存外可愛らしく、体の大きさに反して獰猛さや危険性は感じない。ますますキリが身を乗り出して彼を見下ろし、視線を合わせた。
襲ってくる様子はない。大人しい動物のようだ。
危機感もなくキリは甲板へ寝そべり、シロクマへ向かって手を伸ばした。
流石にゾロが表情を変えて彼へ忠告する。

「おい、気をつけろよ。無暗に触ろうとすんな」
「大丈夫じゃない？　可愛い顔してるよ」
「大体なんで真っ直ぐここに向かってきた。明らかに怪しいだろ。しかもこいつ、最初からおまえしか見てなかったぞ」
「そりゃゾロは顔が怖いからさ、目を合わせたら食われるって思ったんでしょ」
「こいつ、まずおまえを喰ってやろうか……」
額に青筋を立ててゾロが唸るものの、全く意に介さずキリはシロクマを見ている。
巧みな様子で立ち泳ぎをし、その場から動くことなく、奇妙な様子ながらじっとキリの顔を見つめていた。どう見ても怪しい。あまりにも目的がはっきりし過ぎている。
ゾロは密かに刀へ手を伸ばしていた。
まだ敵と決まった訳ではないが、この雰囲気ではそうなってもおかしくないとの判断だ。
普段は頭も回るキリだが時折抜けている部分がある。相手が動物だというだけで全く警戒していないのだろう。そのせいか状況の奇妙さに気付いていない。
鼻先を撫でようと手を伸ばして、やがて右の前脚を上げたシロクマに触れる。
「ほら、握手できた。大丈夫、安全だって」
「この状況でそう言えるおまえはどうなってんだ」
「人懐っこいみたいだし寂しかったんじゃないかな。まぁそうでなくても別に危険は――」
そう言っている最中から、腕を引っ張られたキリの体が船を離れる。
あっと思った一瞬。ゾロは咄嗟に手を伸ばしていた。だが彼を捕まえることは叶わず、シロクマに引っ張られたキリの体は、シロクマと共に海中へと姿を消す。
バシャンという音を聞いて背筋が凍った。
彼は能力者だ。海に嫌われ、一生カナヅチになった。

海に引きずり込まれた今、自分の力で浮上してくることは不可能である。
何を考えるより先にゾロもまた海へ飛び込もうと足に力を込めた。しかし跳ぶ寸前、再び水しぶきを上げてシロクマが顔を出す。胸の中にはしっかりとキリの体を抱きしめて。
訳が分からず動きが止まる。
なぜかシロクマはキリの体を大事そうに抱えており、溺死させるどころか、溺れないように気をつけて海上へ引き上げている。何度も咳き込む彼は苦しそうだがひとまず呼吸はしていた。それでいてシロクマの奇行は続き、不思議にもキリの髪や首筋に鼻を近付けて匂いを嗅いでいる。
状況が読み切れず、ゾロは固唾を飲んで見守った。
そうするとシロクマが視線を上げてゾロを見る。
直後、言葉を発されるより先にシロクマは脚をバタつかせ、背泳ぎの状態で腹の上にキリを乗せ、抱きしめたまま逃げ出した。
突然の行動にゾロはさらに驚愕し、大声で叫ぶ。
「はっ!? おいおまえ、ちょっと待てコラァ!」
大声で叫ぶもシロクマは止まらず、虚しくも彼は去ってしまう。キリは誘拐されてしまった。
立ち尽くすゾロはしばらく状況を理解できずに、遠ざかる姿を見るだけだったようだ。
その間にキリを連れたシロクマは強靭な脚力により、高速で泳いでどこかを目指す。海水に浸かってしまったキリはぐったりしており、目を開くことさえ辛い状態。少量とはいえ海水を飲んでしまったらしい。体の表面から内臓、細胞の一つ一つまで紙でできた彼にとって水は天敵。しばらくは動けそうにない状況であった。
目を開ける動きすら億劫で、どこへ連れていかれているのかもわからない。
そんな状態だが島を離れていることだけは知っていた。
水に浸っている時間が長い。顔は水上にあるため呼吸はできるが抵抗できず、そうでなくとも体をがっちり抱きしめられて身動きが取

れなかった。
おそらく慣れている。このシロクマは何度もこうして誰かを捕らえたのだろう。
思考が朦朧とする中で、やがて目的地に到着したのがわかる。
慣れた様子で一度海中へ潜り、キリの驚愕にも気付かず、勢いよく海面を目指したシロクマは泳いだ勢いを利用し、高く跳び上がった。
そうして着地したのは一隻の軍艦である。
怯える事無く堂々と立ったシロクマが見るのは見慣れた顔。
白い制服に身を包む海兵から注目を浴びている。この場は海軍の軍艦だった。
シロクマはそっとキリの体を床へ横たえる。
つま先から髪の先まで濡れ、呼吸は荒く、ぐったりした姿で動かない。だが死んでいないのは明白だ。苦しげな表情と、必死で目を開けようとする様から存命は確認できる。
周囲に居るのが海兵だと気付き始める頃に、数名の海兵たちが傍へやってきた。
「ドニーが戻ったぞ。誰か連れてる。また海賊か？」
「誰かこいつの顔を手配書で見たか」
「いや、見覚えはないが……」
三人の海兵が口々に話していると、彼らより階級が上、少尉が歩み寄ってくる。
気付いて振り返った三人が慌てて敬礼し、少尉は倒れたキリを見つめる。
「ドニーが海賊を捕らえてきたか。いつもながら見事な手腕だ」
「はっ。しかし奇妙なことがありまして」
「なんだ？」
「この男、手配書で見たことがない顔なんです。少尉殿はご存知でしょうか」
「ふむ……」
改めてまじまじと見てみる。
言われてみれば確かに見覚えのない顔だ。

特徴的な髪の色とまだ幼さを残す若々しい少年。懸賞金がつけば話題になってもおかしくはないだろう。これで覚えていないのなら手配書が出ていない可能性がある。
まさか海賊でない人間を捕まえてしまったのかと、動揺が走った。キリが衰弱しているのは明らか。これでもし海賊でない者を溺れさせたとなれば、海軍の信用に関わる。
厳しい顔を見せる海兵たちに対して、少尉はわずかに頷く。
「なるほど。確かに見覚えのない顔だ」
「ドニーが間違えてしまったのではないでしょうか。誰かと間違えたとか」
「それはないだろう。ドニーは我々よりよほど長く海賊たちと戦っている。覚えた海賊の顔は一度も間違えたことがないという話だ」
「しかし彼の件については……」
「確かに疑問は残る。仕方ない、大佐に尋ねてみるとしよう」
シロクマのドニーは倒れたキリの隣へ寝そべり、何やら愛着がある様子でその体に触れる。普段滅多に人へ懐かない彼が、初めて誰かに甘えている姿を見せた。これには甲板の上に広がる動揺も止められない。見覚えのない顔だというのに事情がありそうだと感じさせる。
疑念を強めた少尉が振り返って歩き出す。
向かうのは船室の一つ、船の最高責任者が持つ部屋。
ノックをしてから返事を待ち、声が聞こえた後に室内へと入った。
「ウェンディ大佐。少しお耳に入れたいことが」
「無理よ。大道芸人じゃないんだから」
「真面目に聞いてください。何も物を耳に入れようという意味ではありません」
幅広の机の向こうに座っていたのは若い女性だった。
少し青みがかった黒髪がセミロングの長さ。紺色のスーツに身を包み、肩には白いコート。背中に正義の二文字を掲げる海軍特有のコートである。
何やら気だるげな態度を見せる彼女はこの船で最も高い位にある人物。

海軍本部大佐、並びに海軍監査役である。
非常に整った容姿を持つ麗人でありながら、今日はあまり機嫌が良くない様子。唇を尖らせつつ本を読んでおり、不平不満を抱えた姿は分かり易く、ページから目線を上げようとしない。そんな上官に少尉は溜息をつき、またかと頭を振った。
こうした状況はそう珍しくない。
理由は単純。ただ単に彼女が長旅を嫌うせいであった。
「私、海軍に向いてないみたい」
「今更そんなこと言い出しますか。大佐にまでなっておいて」
「どうせおじいちゃんのコネよ。有名人だからってだけでしょ」
「別にあなたが利用した訳ではないでしょうに」
「でもお偉いさんはそのつもりなんでしょう？　面倒な話だわ、おじいちゃんはおじいちゃんで、私は私。どうしてわざわざ同じ役職に就かなきゃいけないのかしら」
「あなたに向いているからです。それ以外に理由はありませんとも」
「あーあ、支部の基地長になりたい。そうしたらこんな遠いところまで来なくて済むのに」
「海軍内部の不正を正すために必要な部署です。良いお仕事だと思いますよ」
ふぅーっと分かり易く息を吐き出して、机に本を置いたウェンディは背もたれに体重を預けた。
海軍へ入隊したのは自らの意志。実のところ、監査役の地位を嫌っている訳ではない。
気に入らないのは長期間の航海だ。本来、グランドラインの方々を飛び回って海軍内部の不正を調査する彼女が、四つの海へ赴くことなどそうあり得ることではない。しかしなんでも、今回だけは特別だとの言葉があってウェンディが動くこととなったのだ。
監査役ならば他にも居るだろうに、なぜ自分なのか。
そんな不満はありありと見え、彼女を傍で支える少尉は今日も頭を悩ませる。

ともすれば吐き出しそうになる溜息を飲み込み、苦心しつつも真剣な顔で言う他なかった。
「ドニーの件で確かめて欲しいことがあります」
「なぁに？　また海賊でも捕まえてきた？」
「いえ、今回は様子が違うようで……手配書にない人間を連れてきたようです」
その言葉にウェンディの表情がわずかに変わる。
背もたれに寄りかかってだらしなかったはずの姿勢は変わり、背筋を伸ばして前のめりに。
信じられない話を聞いたとばかりの驚きの表情だった。
「ドニーが海賊の顔を間違えたの？　にわかには信じられないけど」
「いえ、それが、ただ単に間違えたとも言いにくい状況でして」
「どういうこと？」
「見て頂いた方が早いです。一緒に来て頂けますか」
「わかったわ」
席を立ったウェンディを連れ、少尉が先頭となって甲板まで連れて行く。
船室を出るとドニーの周囲に人だかりが出来ているのが見えた。皆が連れてこられた人間の顔を確認しているのだろう。普段、そこまでドニーに近付く者は居ないが今日は特別らしい。
二人が近付くと人垣は割れるように離れて行き、敬礼と共に道が作られる。
倒れたままのキリと寝そべるドニーを見つけ、ウェンディの眉が動いた。
いつも通りではない奇怪な光景である。
そう思いつつ、ウェンディが注視するのは目を閉じるキリの髪の色、それから彼を見る妙にやさしいドニーの目つき。まるで何かを懐かしむような眼ではないか。
キリの傍でしゃがんで顔をじっくり見つめる。
どうやら気絶しているらしい。試しに頬へ触れてみても反応はな

かった。
彼女はなぜかそのまま動きを止めた。
黙り込んでしまうウェンディへ少尉が声をかけるも、反応は決して良い物ではない。
「如何でしょう。我々には見覚えのない顔ですが、ドニーが間違えるはずはないと思いますし」
「そうね……」
「とりあえず目が覚めるのを待ちますか。もし間違いであれば、その後謝罪して、彼をどこか近くの町へ送り届けて――」
「いいえ。手錠を持ってきて」
ウェンディは立ち上がり、きっぱりした口調で言う。
これには少尉が驚き、言葉の真意をくみ取ることができなかった。
「彼に聞きたいことがあるの。目が覚めたら私の部屋に連れてきて」
「しかし錠は」
「間違ってたら謝るわ。だけど私はドニーが間違えるとは思えない。実際に彼を見て余計そう思ったの」
「手配書にはない顔です。たとえ海賊だったとしても、何をしたかすらわからない」
「それを調べるのも私たちの仕事でしょう？　逃がさないようにお願いね」
言い切ってウェンディは歩き出し、再び船内へと戻っていく。
状況を理解できない少尉は何と言っていいかわからず、しばし立ち尽くした。
彼女にしろ、ドニーにしろ、いつもと何かが違う気がする。そう簡単に気まぐれを起こす性格ではない。これでも理解していたつもりだった。
よっぽどの理由があるのか、それとも思い付きか。
どちらともわからず、少尉はキリを大事そうに抱えるドニーを見た。
やはり、いつもより表情が柔らかい気がする。

GO—ON

ノックの後、返事をして扉が開かれた途端、ウェンディは冷静に視線を上げた。
表情こそ落ち着いているが心は弾んでいる。なぜかと問われればわからない。自分でも理解が難しい感覚で、今までこんな経験はなかったと思い返す。
ただこの場で何かが起ころうとしているのは間違いなかった。
少尉が手錠をかけられた少年、キリを連れてきたことで室内の空気は変化する。
「そこへ座って。少し話が聞きたいの」
軽く背を押されたキリはふらつく足で進み、荒々しく椅子へ尻を下ろす。
決して良い態度ではない。笑みはなく、小生意気に見える顔だ。
警戒しているらしい彼はだらしない姿勢でウェンディを見、座った途端自ら口を開いた。
「着替えないかな。服が濡れたままだとやる気が削がれて」
「海兵の制服ならあるけど、それでどう？」
「いやぁそれはパス。諸事情あって袖通せないしさ」
「そう。その事情も聞きたいところだけど、今はいいわ」
彼の態度にも文句を言わず、机に肘を置いたウェンディは微笑む。
柔らかい表情、やさしい声色で、彼とは対照的な姿だ。
「まず名前と職業を教えてくれるかしら。こっちの事情はその後に説明するわ」
「名前はキリ。職業海賊」
あっさり言われた途端、扉の前に立つ少尉の眉が動いた。
海兵の前で海賊を名乗るとはどういうことか。ふざけているのならば問題があるし、本当ならばあまりに思慮が浅すぎる。少なくとも機嫌を損ねる一言には間違いなかったようだ。
対するウェンディは一向に気にした様子がない。
今の言葉をそのまま受け止め、鵜呑みにし、ふむふむと頷く。

次なる質問は気にせず続けられて、キリは鋭い目のまま素直に答えた。
「出身地はどこ？」
「イーストブルー、ココナ村」
「あなたの経歴を教えてくれるかしら」
「海賊やってて、一度やめて、今は別の海賊団で航海中」
「以前の所属は？」
「ビロード海賊団。今はもう全滅したよ」
「そう。それじゃあ今の所属は？」
「あのさ、いきなり手錠かけられて質問攻めってどういうことかな。正直まだそこまで悪いことした覚えないんだけど」
「ちゃんと説明するわ。でもあなたのことが知りたくてしょうがないから、先に聞かせてもらってるだけ。言いたくないならノーコメントでいいわ。拷問もしない」
「ならノーコメント」
「理由だけ聞かせてくれる？」
「海軍の取り調べで名を上げるってのも嬉しくないでしょ。心配しなくてもうちの船長はすぐに名を上げる。その時にはボクが誰の下についてるかすぐわかるよ」
「なるほど。中々の自信家ね」
手元の紙にペンを走らせ、話した内容を記しながらウェンディは満足そうだ。
いまいち彼女を読み切れない。なぜか楽しそうなのも気になる。
キリは隙を見て辺りを見回していたが、まだ脱出の方法は見つかりそうにない。一番厄介なのが体と服が濡れたままの状態だということ。彼は濡れた紙を操ることはできない。詰まる所、自身の体が濡れてしまっては力が入らず、他の能力者が海に浸かっている状態が常に続くことになる。これが渇かない限り能力は使えず、周囲の紙を操るどころか自分の体を紙にすることさえできない。
脱出自体はそう難しく思わない。
問題はいつ万全の状態に戻れるか。正直今でも足がふらついて体

に力が入らない。
ここから逃れるためには機会を待たねばならないだろう。
そう決めてキリはひとまず従順な態度を見せ、隙を伺うつもりであった。
「じゃあ聞かせてよ。なんでこんなとこ連れてこられなきゃならなかったか」
「もう？　まだ聞きたいことがあるんだけど」
「ハァ、ならさっさと終わらせてよ。あいにく海軍には良い思い出がないんだ」
「ふふ、ごめんなさいね。それじゃあ早く終わらせましょ。あなたのご両親は、今もこのココナ村というところでお元気かしら」
「もう死んだよ。だから村に来た海賊船に乗り込んで旅に出た」
「二人の名前を聞いてもいい？」
なぜそんなことを聞くのか、意図が掴めなかったが、キリは答える。
五歳になるまでのたった五年間、自身を育てた父と母の名。口にするのも久しぶりだった。
二人が死んでからは身よりもなく、生き方に困り、はたと思いついたのがよく父が聞かせてくれた海賊の話だった。自分も海賊になって海へ出よう。そう思ったのは海賊でもない父が楽しそうにその話をしていたから。きっと楽しい物なのだろうと思うようになった。
そんな話を思い出すのも久しぶりのことである。
無表情を変えずにキリが思い出す間、ウェンディは思案する顔でペンを動かす。
やがて口を開き、再び問いが始まった。
「それがあなたの両親ね。死因はなんだったの？」
「さぁ、なんだったかな。見つけたのは近所の人だった。事故だって聞いたけど」
「そう。ごめんなさい、辛い話を聞き出して」
「ずいぶん昔の話だ。今更これで傷ついたりしない」
ウェンディがペンを置く。
それからしばし腕を組んで考え始め、聞き出した情報を羅列した紙

をじっと見つめる。しばらくの間、キリは口も開かずにただ待つことになった。
奇妙な状況である。
突然攫われて錠に繋がれ、なぜか冷静に話をしている。
なんとなく嫌気が差してくるが今は仕方ない。体に力が入らないため耐えるしかないのだ。
顔を上げたウェンディは真剣な顔でキリを見やり、ようやく沈黙を破った。
「ここへ連れてこられた理由だったわね。ドニーに捕まったんでしょ？」
「シロクマだよ。名前は知らない」
「あの子がドニーって言うの。海兵をやってた私のおじいちゃんが育てた家族。しっかり教育されちゃったせいで物覚えが良くてね。あの子は海賊を見つけると勝手に連れ去っちゃうのよ」
「海賊を、ねぇ……匂いでもしたのかな」
「あの子が捕まえるのは手配書で覚えた人間だけ。それ以外の海賊には目もくれないわ」
「だったらおかしいじゃないか。懸賞金かけられた覚えなんてないよ」
「そうね。だけど、今あなたから聞いた話で大体事情は察したわ」
机に腕を置き、そこへ体重をかけ前のめりになって、ウェンディが彼の顔を覗き込む。
親しげな態度とでも言うべきか。表情の柔らかさが妙に気になった。
「私のおじいちゃんもね、海兵だったの。私と同じ監査役。世界中にある海軍基地で不正が行われていないか、市民が苦しめられていないかを調査する部署」
「ちゃんと仕事してる？　ついこの間シェルズタウンが圧政に苦しんでるのを見たよ」
「あら、あれってあなたがやったの？　シェルズタウンも調べる予定だったのよ。そしたらモーガン大佐が基地の中尉に捕まったって

話を聞いて、誰かが手引きしたはずだと思ってたんだけど、それが無名の海賊だったなんてね」
「ボクがというより、ボクたちが、かな」
「そうだったわね。まだ見ぬ船長さんのご意向かしら？」
「色んな事情が重なったんだよ」
初めてキリが薄く笑みを見せた。それにウェンディが気分を良くする。
「話を戻すわ。おじいちゃんは基本的に海軍の相手をするのが仕事だったけど、ある時期から一人の海賊に執着するようになった。それこそその海賊が現れたって情報が耳に入れば、他の何を差し置いても駆けつけるくらいに。二人がどんな関係だったのか、何があったのか詳しくは知らないけど、確実におじいちゃんの人生において重要な人物だったでしょうね」
「へぇ、そう」
「その海賊は世界中に名が知れるほど有名で、強くて、何より行った悪事は今でも語り継がれてる。とにかく悪い人だったの。殺した人間は数知れず、しかもそのほとんどがわざと苦しませようとひどい所業を受けていて、滅ぼされた国もたくさん。悪い事ばかり繰り返して、世界中の人間に嫌われた海賊よ。その悪名はゴールド・ロジャーすら上回る。ロジャーを恨む人間は多いけど、同時に認める人だっていた。あの人は、ほとんど恨まれるばかりだったらしいわ」
「へぇー」
「おじいちゃんは動物好きで、仲良くなった子はたくさん居たわ。ドニーはその頃からおじいちゃんと一緒に居た。きっとその海賊の顔も何度も見てたはずよ」
「……それで？」
興味がないと態度で示していたキリだが、話の方向性が不穏になってきているのがわかった。
理解してもらえたと思うのか、ウェンディが嬉しそうに肩を揺らす。
「私もあの子と同じ意見。顔を見た瞬間にわかったわ」

「何を。言ってる意味がよくわからない」
「あなた、似てるのよ、その海賊と。笑った顔も、さっきの鋭い目つきや髪の色なんて特にね。写真で見た顔にすごくそっくり」
「馬鹿げてる」
首を振ってキリが苦笑した。
何を言い出すかと思えば、まさかその海賊の息子だとでも言うつもりか。
それはないと思う。事実彼には両親が居て、離れてしまったのは子供の頃だったがその頃の生活を覚えている。彼らは自分に愛情を注いでくれていた。
「さっき名前まで教えたはずだ。ボクにはちゃんと親が居た。ただの他人の空似だろ」
「だけどわからないこともあるのよね、あなたの話を聞いただけでは」
「何が」
「あなたのご両親、髪の色はあなたと同じだった？」
当然だ、と言おうとして気付く。そういえば、彼らとは色が違ったのではないか。
記憶の中を探ってみる。
そうして愕然としたのは、両親共にきれいなブロンドの髪だった。同じ金髪で、おかしい話ではないと思う。しかし同じだったかと問われれば違うとも言える。キリの髪の色はくすんだ金色。同じ色に見えてその実違いがある。
二の句を告げられなくなった彼を見てウェンディの確信が強まっていく。
しかしまだ聞きたいことがあった。
「ご両親の死因、知らないのね。ひょっとして海賊と知り合いだったせいで、逆恨みした誰かに殺されたってことはない？　友達だった可能性もあるわね」
「なんでそんな、何を根拠に」
「あなたの出身地、ココナ村。奇遇ね、その海賊もその村で生まれ

育ったらしいわ」
語気を強め始めたキリは、今度こそ口を閉じてしまう。
ただの推測。まさかと思いながら驚愕が身を包んでいる。
冷静に考えれば、違う、と叫ばなければならないほどのことではないかもしれない。両親はすでに死に、その海賊とやらが実の親だったとして、だからなんだというのか。
頭の中ではそう判断していても、跳ね出した鼓動はしばらく落ち着かなかった。
「そうねぇ……私の推測では、あなたを育てられないとわかった実の親が、あなたの両親に子供を託して、村を離れた。そしてあなたにはその事実が隠されたままだった。そんな感じでどう？　こういうの、事情が事情ならあり得るんじゃないかと思って」
「根拠のない妄想だ。それに生みの親が誰であれ、ボクが親だと思ってるのはあの二人だけ。今更そんな話持ち出されたところでなんとも思わない」
「ふふ、確かに。だけど私はそう思わないわ」
冷静に、あくまで楽しそうに告げられる。
「おじいちゃんが追い続けた海賊の子供。私はおじいちゃんと同じく海兵になっていて、あなたも親と同じく海賊になって、こうして出会ってる。こういう状況、運命的だと思わない？」
「どうでもいい。さっさと独房でもなんでも入れてくれないかな」
「あら、つれないのね。それじゃあ最後に一つだけ聞かせて」
ペンを持ち上げて紙の一部分を指し、視線は合わせたままで尋ねられる。
いつの間にかキリの目は睨む様子に変わっていて、ウェンディは逃げることなくそれを受け止めていた。どことなく物々しい雰囲気を感じさせる、危険な状況だ。
「キリって名前、これは本名？」
「は？　そうだけど」
「おじいちゃんが追ってた海賊は、Ｄの名を持っていたはず。あなたもそうなんじゃない？」

聞かれたところでそんな話は知らない。キリは眉間に皺を寄せるだけだった。
どうやら本当に知らないようである。
ただこの一件において、人間違いだとは思わない。彼を目にしたドニーの態度や、自身の勘が告げている。この人物からは懐かしい匂いがすると。
調べてみる必要がある。
覚悟を固めたウェンディは肩の力を抜き、ふっと背もたれに体を預けた。
「一度休憩しましょうか。あなたも疲れてるみたいだし、知らないこともあるみたいだしね」
「知ってたとしてもしゃべる気はない。今更、どうでもいい話だ」
「あらそう。知りたくないの？　ひょっとしたら本当にあなたの親かもしれないのに」
「別に知ったところで……その人、生きてるの？」
「ええ。あくまでも噂だけどね」
再び表情が変化し、困惑しているのが伝わる。
ウェンディは席を立ち、少尉の顔を見た。
「お茶にしましょうか。彼を私の私室へ通して」
「結構だ。ボクだって海賊、手錠までされてる以上牢屋で十分」
「少しくらいいいじゃない。昔話を聞いて欲しい時だってあるの」
「少尉殿に頼めば？　こっちは興味がないって言ってるんだ」
「ふふ、すっかり嫌われちゃったわね。それなら言葉を変えるわ。私の私室へ連行して」
「はっ」
背後から少尉が歩み寄り、腕を掴んでキリを立たせる。そのままぐいっと引っ張って扉まで連れていかれた。その間、キリの目はウェンディを睨んで離さなかった。
「すぐに行くわ。また後で」
扉が閉まると彼らの姿が見えなくなる。ウェンディは苦笑して左手にある棚へ近付いた。

妙に敵意を持たれてしまったらしい。
触れられたくない部分だったのか、想像していたよりは険が強い。だがこうなるかもしれないという想定はあった。今となっては別に気にするほどでもない。
彼女は喜んでいたのだ。海兵になって初めて自身の確固たる目的を持てそうで。
海兵の祖父と因縁があった海賊、世代を越えて再び向かい合う時が来るのかもしれない。
今は可能性でしかないが、そう考えれば面白いと思う。
「監査役になって初めていいことがあったわ。あの子、あの人みたいな海賊になるのかしら」
何やら訳知り顔で呟く彼女は、戸棚の中から一枚の写真を取り出し、眺める。
そこには一人の人間が映っていた。
懐かしい気分が蘇ってきて、ときめきに近い感情を抱く。
ウェンディは満足するまでその写真を眺め続けた。

＊

血相を変えたルフィが椅子を蹴り飛ばして立ち上がった。
ボクデンの家の中である。室内には彼の他にゾロとシルクとナミ、アピスとボクデンが居て、誰もが真剣な表情となっている。中でも特に後悔の念を強めているのがゾロだ。今しがたの発言も彼によるもの、その場に居て止められなかったことを強く悔やんでいる。
キリが攫われた。
その言葉を聞いた途端、すでにルフィの心は決まっていたようだ。
「すぐに助けに行くぞ。キリを取り返す」
「ちょっと待ちなさいよ！　相手は海軍よ？　あんたたち本気で海軍に喧嘩売る気？」
席を立ったルフィはすぐさま家を出ようとした。しかしその前にナミが立ちはだかり、止めようとする。扉の前を塞ぐ彼女には流石に

足が止まった。
迷いなく言い切れる彼がわからない。
海軍は世界政府直属の組織で、言わば海上の正義、市民の平和を守る者。
彼らへ襲い掛かるということはもう後戻りできないということ。海賊として認知され、海軍に追われ続ける日々が始まるだろう。まだ無名な彼らも名実共に海賊となるのだ。
もしもそれを喜ぶと言うのなら、いよいよどうしようもない奴らだと思う。
ナミは真剣に言ったつもりだったが、手を組むか否かの大事な局面、ルフィは冷静だった。
「どけよ。おれはキリのところに行かなきゃならねぇんだ」
「あんた本当に理解してんの？　海賊になるって意味とか、海軍に盾突く愚かさとか。海で生きていくならね、勢いだけじゃだめなの。ちゃんと頭使って、生き残る努力をしないとあっさり死ぬことだってあり得る。どれだけ強い奴でもね」
「ああ、知ってる。いいからどけよ」
「その口ぶりが信用できないんでしょ！　なんでそこまで海賊なんかに拘るのよ。そんなこと言って、あんな旗掲げてるからあいつも連れ去られて、全部自業自得じゃない！」
無表情のままでルフィは話を聞いている。
海賊嫌いは相当だ。ナミの叫びにはおそらく彼らに対する物だけでない感情も含まれており、彼らを憎んでいるのか、心配しているのかは不明だが、必死なことだけは確かだった。
やはりルフィの決定は覆らず、握り締めた拳が解けることはない。
「おまえがなんと言おうとおれは行く。約束したんだ。キリも、あいつの仲間もおれが守るって。おれはキリがいない航海なんてしたくねぇ」
「そんな理由で、命まで捨てる気……？」
「死なねぇよ。海賊王になるまでは」
そっと手を伸ばしたルフィはナミの肩を掴み、大して力も入れずに

横へ押しやる。
大人しく道を開けた彼女へは振り返らずに、自らの手でドアを押し開いた。
「来たくねぇんなら来なくていいぞ。おまえはまだ仲間じゃねぇし」
「ちょ、ちょっと」
「シルク、ゾロ、行くぞ。早く追いかけねぇと見失っちまうかもしれねぇ」
ルフィが外へ出ると同時、当然とばかりにゾロとシルクが後を追う。
ゾロは何も言わずに行ってしまったが、傍を通った時、ナミを気遣ってかシルクは彼女へ声をかける。どことなく申し訳なさそうな、謝罪するかのような態度だった。
「ごめんね。多分ルフィは、キリがいないから焦ってるだけだと思うの。ナミが嫌いなわけじゃないから」
「シルク――」
言うだけ言って、彼女もそそくさと行ってしまう。その足取りに恐怖心はない。
馬鹿げているとしか思えない。
たった一人の仲間のために三人だけで何ができるのだ。一味の存続を考えるならば、時には見捨てることも考えなければならないはず。なのになぜ彼らは海に出ようとしている。
これまで賢く立ち回ってきたつもりだったナミには理解できない行動だ。
ずっと一人で航海していたのは足手まといに足を引かれないため。
危険な海で生きるためには非情な考えも必要になる。ただ誰かに甘えているだけではだめなのだ。だから一人を貫いてきたはずなのに、彼らは全く違う。仲間の存在こそ重要視し、勝てないはずの戦いに挑む気だ。その先にどんな結果があるか、気にしようともしていない。
彼らのことが理解できず、苦々しい表情のまま立ち尽くす。

一応は手を組んだ相手。嫌いなはずの海賊だが、追うべきか、追わないべきか。
逡巡していると脇を通り抜ける影があった。
勢いよく飛び出したアピスは遠ざかる三人へ声をかけ、一目散に走っていってしまう。
「待ってみんな、私も行く！　私も手伝うよ！」
「アピス!?　なんであんたまで！」
手を伸ばして声をかけるも届かず。慌てたナミは背後を振り返った。
そこには椅子に腰かけたままのボクデンが居る。
孫娘が海賊について行ってしまった。きっと止めるはず。そう思うものの、彼は微塵も慌てていなかった。
「いいのボクデンさん、アピスを行かせても！　あいつら海軍と戦う気よ！」
「そうじゃなぁ」
「そうじゃなって、心配じゃないの!?　自分の孫が死ぬかもしれないのに――」
「もちろん心配しておる。しかしだからといって止めてしまったのではあの子のためにならんじゃろう。行動を制限することばかりがあの子のためになる訳ではない」
「今回はそうも言ってられないでしょ。ついて行こうとしてるのは海賊なのよ」
「わしらにとっちゃ、あの海軍よりも彼らの方が信用できる」
何か事情があったか、ボクデンはあっさり言い切る。
海軍より海賊の方が信用できる。そんな話を聞いたのは初めてだっただろう。しかも出会ったばかりの海賊たちで、まだ会ってから一日も経っていない。
怒りの声が飛んでくる前に、さらに続けられた。
「アピスが笑っとる。それだけで海軍との違いは明白でな」
「なんなのよ、それ。どいつもこいつも……」
なぜ皆が彼らを支持する。ただの海賊のはずなのに。

胸の中がもやもやして、堪らずナミは走り出した。
坂を一気に駆け下りて桟橋へ向かう。その間も考えるのは麦わら帽子をかぶった海賊のこと。オレンジの町の町長が感謝していたのは知っている。アピスが楽しそうに彼らと話していたのも知っている。けれどそれがなんだという。
彼らは海賊。忌むべき存在のはずだ。
こうも良く言われる状況が納得できず、苦悩する。
海賊など害悪でしかないと思って育った。事実彼女は苦しめられた。
それなのにそれを打ち破る海賊が居るのも、気に入らない。
呼吸を乱すほど必死に走って、急ピッチで出航準備を整える帆船の前に辿り着き、ナミは足を止めた。船に乗り込む素振りを見せず、その前に肩を怒らせて大声を発する。
「待ちなさいよルフィ!」
声を耳にし、すぐにルフィは欄干へと寄ってきた。真剣な眼差しで見据えられる。
彼女は海賊が嫌いだった。だが一方で彼らが略奪を繰り返すだけの海賊でないとも知っている。むしろそんな連中をカモにする海賊、ピースメインなのだという理解があった。それでも長年持ち続けた固定観念を崩す事は難しくもあり、まだ素直に受け入れられない。
今しばらく傍でその姿を目にし、己で判断しなければならないだろう。
胸中はもやもやしたまま、拳を握りしめて彼女は言った。
「威勢よく出て行くのはいいけどね。あんた、あいつを乗せた船がどこへ行ったかわかるの?」
「知らねぇ。でもキリがいねぇのはいやだ」
「ほんとガキみたいなことばっかり……もし場所がわかっても、航海士もなしでどうやって航海するつもりよ。唯一頼りになりそうだった奴が攫われたのに」
「あっ」
そういえば、といった調子でルフィが呟き、ナミは吸い込んだ息を

一気に吐き出す。
「私はあんたの仲間じゃない……でもいいわ。今は手を組んでる状態だし、私が連れてってあげる。あんたが行きたい場所ならどこへでも」
「いいのか？」
「仕方ないでしょ、あんたたちを利用するにはそうするしかないんだから」
歩き出した彼女も船上へとやってきて周囲の顔を見回す。
ルフィに加えて、シルク、ゾロ、アピスのたった四人。その中でアピスは海賊でもなければ、まだ子供だ。本当に彼らだけで行くつもりだったのだろうか。
そこへ自分を足して五人。付け焼き刃にしか思えなくてやはり頼りにはならない。
しかしルフィはにっと口の端を上げた。
たった一人の加勢を心底嬉しそうに受け止めているのだ。
「そっか。じゃあいっしょに行こう」
「言っとくけど、あくまで一時的に手を貸すだけよ。海賊の仲間にはならないからね」
「まぁ今はそれでいいよ。話は全部キリを取り戻してからだ」
「まったく……ほんとにわかってんのかしら」
船上は慌ただしくなり、動き出した船は迅速な行動で桟橋を離れた。
誰もが一様に表情を引き締めており、来たるべき時を待って意識を研ぎ澄ましている。本気で海軍と戦う気だ。空気で伝わる緊張感からナミは理解して唇を結ぶ。
ゾロの表情は険しく、怒りすら感じさせる気迫を発して刀の感触を確かめている。
シルクもまた、己の剣を見つめて思案していたようだ。悪魔の実を食べたのはついさっき。いまだ能力は知れず、どんな実だったのかさえ知らない。不安と期待、その両方が表情にある。おそらくそれを知るのは戦闘が始まってから、ぶっつけ本番になるだろう。

そして誰よりルフィが、いつもと違った真剣な顔でほとんど笑みを見せなかった。
のどかに過ごしていた時とはまるで違う。声色さえも変わっていた。
「アピス、リュウ爺のことはおれたちがなんとかする。だからもうちょっとだけ待ってくれ。キリがいねぇと前に進めねぇんだ」
「う、うん。ねぇみんな、私も手伝うから、なんでも言ってね」
「ししし、ああ。頼りにしてるぞ。野郎ども、出航だァ！　海軍からキリを取り返すぞォ！」
勇ましく宣言して船は出航した。
敵の詳細は知れないものの、ゾロが確認して海軍であるということだけはわかっている。
それだけでいい。仲間に手を出した以上は誰であっても容赦しない。
初めて見るルフィの強い怒りには誰もが目を疑い、そして従う姿勢を見せていた。

ＧＯ―ＯＮ（２）

窓から見える空の色が徐々に変わり始めていた。
厚い雲が現れて青が隠され、風も強くなり、波が荒れ始めている。
壁際に立ったウェンディは外を眺めてぽつりと呟いた。
「天候が変わったわね。嵐が来るのかしら」
「気分が滅入るね。雨は苦手なんだ。嫌いじゃないんだけど」
彼女の私室で、菓子と紅茶が置かれたテーブルを前に座ったキリがぼやく。
部屋に迎え入れられた瞬間から手錠を外されており、今は両手が自由に使える。しかし彼はすぐに暴れ始めることはなく、気軽に菓子を指でつまんで食べていた。
作法の欠片もない仕草。それを見てウェンディは微笑むだけだ。
彼の対面へやってきて椅子へ座り、改めて会話が始められる。
「もう服は乾いた？」
「微妙ってとこかな。徐々に乾いてきてるけど完璧じゃない」
「そう。それなのに着替えないのね」
「海兵になるのはごめんだ」
「なんなら私の私服を貸しましょうか？　もちろん下着付き」
「遠慮しとくよ。そんな趣味じゃないんだ」
「ふふ、そう。残念ね、似合いそうなのに」
紅茶が入ったカップを持ち上げて、傾けるウェンディの仕草には気品が伺える。
そんな彼女を見てキリは表情を曇らせた。
「手錠、外しといていいの？」
「ええ。心配はいらないわ」
「舐められたもんだよね。ボク一人程度じゃ護衛もいらないってわけだ」
「あなたを甘く見てるわけじゃないの。だけど私が強いってことも忘れないでね」
「その口ぶりじゃ違わない気もするけどね……」

苦笑したキリは布巾で手を拭き、背もたれに体を預けた。
この会話に意味はあるだろうかと考える。
あいにくまだ死ぬつもりもなければ牢獄に入れられるつもりもない。諦める気は毛頭ない。現に今も部屋のあちこちへ視線を飛ばし、隙がないかと伺っている。まだ彼女にバレた形跡はない。或いは知った上で見逃されているだけか。
本を納めた本棚は右手側背後。テーブルの上には紙ナプキン。
服は完全に乾いた訳ではないが、時間を気にしなければ能力は使える。
彼女の実力はわからない。戦って勝てるかどうかも。ただ気になるのは、若い外見ながら大佐の地位に就いていること。本部大佐というならば、以前戦ったモーガンの比ではないはず。
多少心地が変わって柔和な表情。しかしキリは油断なくウェンディを観察している。
きっかけ一つでいつでも戦える気概だった。
「あなたは、父親似？　それとも母親似かしら」
「またその話……誰から生まれたとしても今更興味はない。両親は死んで、それがたとえ他殺だったとしても恨まないさ。憎んだり復讐したりなんてきりがないから」
「クールなのね。海賊にしておくのはもったいないわ」
「どうも。でも海軍には入らないよ」
「残念。それじゃあ話を変えましょうか」
脚を組み替えてウェンディが口火を切る。
キリとは対照的に彼女はリラックスしていた。警戒していない態度とも取れる。だからこそ警戒しなければならないと言える。彼女の余裕が恐怖へと繋がりそうだ。
一時も油断してはならない。そう思って体から余分な力が抜けていた。
「海賊になったのはいつ頃のこと？　昨日今日の話じゃないんでしょう」
「五歳。両親が死んだ頃、たまたまうちの村に海賊船が来た。略奪

じゃなく補給のために。それが妙に気分が良い人たちで、父から海賊の話は聞かされてたし、船に忍び込んで海へ出た」
「そのまま一員になったってことね」
「最初は大反対だった。だけど船長が許してくれて、その日に海賊の仲間入り」
「それからはどこへ？」
「二年間はイーストブルー各地を旅して回った。その後はグランドラインへ。五年近く航海したけど、ある日海賊にやられて仲間は全滅。ボクだけが生き残った」
「それから一人で旅をしたの？」
「色々あった。その件に関して話す気はない」
「そう、訳アリね。悪い事でもしてたのかしら」
「さぁね。知りたかったら調べてみたら」
「そうするわ。いずれ時間をかけて、ね」
微笑んでそう言い、ウェンディは提案を受け入れる。
元より調べるつもりだった。なんとしても知りたい過去がある。
彼自身はそれを知らず、おそらく知っていただろう人物は死んでしまった。ならば虱潰しに動けばいいだけ。
言われるまでもない事だった。
もし想定している通りだとしたならば、彼にも秘められた力はあるはず。
選ばれた者だけが持つ才能。覇王になる逸材なのかもしれない。
警戒心と好奇心。両方が合わさって彼に注目する結果となっていたようだ。
「グランドラインを旅していたのね。どこまで進んだ？」
「後半には辿り着いてない。前半の方々を飛び回った。色んな場所を見てる」
「例えばどんなところへ行ったの。あなたの冒険、詳しく聞かせて」
「そんな仲でもないでしょ」
「これからそうなるわ。お互いを知って」
「ずいぶん執着するんだね。真実かどうかも定かじゃないのに」

「女の勘よ。特に私のは当たるって評判。きっと仲良くなれるわ」
嘆息して肩をすくめる。やりにくい相手だ。
きっと相性は良くないのだろう。少なくとも同じ席につくのは分が悪いと思われた。
「私が海兵になったのは、おじいちゃんの背中をずっと見てきたから。今になってわかったけど意外と憧れてたのかもしれないわね。ライバルを追い続ける姿に」
「そのライバルがボクってこと？」
「そうなるかもしれないって話よ。ただあいにくあなたはここに居て、私に捕まってる。さて、これからどうなるかしら」
彼女の発言で眉間に皺が寄る。
「ボクに逃げて欲しがってる。そんなはずないよね」
「ふふ、まさか。そう聞こえたのなら謝っておくわ。不穏な行動はやめてね」
もう一口、紅茶で喉を潤してウェンディが微笑む。
わずかに姿勢を変えて話を変えることにしたらしい。
話はさらに続けられる。
「監査役は大変なの。あちこち飛び回って、長い航海を何度も繰り返して、嘘つきの将校を相手につまらない問答をして、海軍内部から疎まれる。おじいちゃんはよくやってたわ」
「そんな仕事、ボクなら耐えられそうにないな」
「そうね。私も海賊になろうかしら。……だけど、今になって監査役になってよかったと思う。意外とこれで自由に動けるのよ。それこそグランドラインからイーストブルーへ来るのだって。何しろ海兵も色々居るからね、これからいくつかの支部を回らなきゃいけないの。本当はシェルズタウンもその一つだったんだけど……本部から応援が来て手伝ってくれるらしいわ」
「へぇ。あんまり興味はないけどね」
「つまりあなたがどこに居ても追うことができる。おじいちゃんがそうだったように」
「ストーカー気質じゃん。今の内に海兵やめたら？」

「ご忠告どうも。だけどやめた方がいいのはあなたじゃないかしら。海賊やめると追われなくて済むわよ」
「さっきからそれがわからないよね。もう捕まえたのに追いかけるって言う」
「ふふ。もう少し込み入った話をしましょうか」
笑みを称えたまま、ウェンディの表情に真剣さが混じる。
途端にキリの警戒心が大きくなった。
「地理的に言って、あなたが居たのは軍艦島ね。私は今からその軍艦島に注目している将校に会いに行くの。海軍第八支部、そこに提督のネルソン・ロイヤルが居る」
「聞いたことないね。有名じゃなさそうだ」
「あら、イーストブルーでは結構有名よ。艦隊を指揮する海戦では東の海一って言われてる」
「だけど上には上が居る。グランドラインで通用するかどうかは別だ」
「厳しいわね。でも実際その通り。それにこの男、秀でているのは海戦だけでそれ以外はてんでダメ。正直私もよく海軍に残れるわねって思うくらい」
「その提督様が軍艦島に何の用？」
「千年竜伝説って知ってる？　彼はその千年竜を狙っているらしいわ」
千年竜。その話なら聞き覚えがある。絵本になるくらい有名な生物で、存在は知られながらいまだ所在地が知れず、半ば伝説的に語られる生物。
久々に耳にする生物の名に驚きは隠せない。
「あの軍艦島に千年竜が居るって？」
「それは確かではないけど、ネルソン・ロイヤルは竜の巣を探しているって話は聞いているわ。千年竜たちが集まる故郷」
「権力者ってのは何考えるかわからないね。どうせ永遠の命が欲しいとかそんな感じでしょ」
「私もそう思うわ。正義を掲げる軍隊らしくはないわね」

「それで？　そんな話した理由は？」
ウェンディは笑った。反応はただそれだけだった。
「さぁ、どうしてかしら」
その笑みが怪しい物に見えてキリは口を閉ざす。
紅茶で喉を潤し、カップが空になった頃。軍艦が大きく揺れ始めた。
いつの間にか嵐が本格化してきたようだ。
奇妙な沈黙を過ごした後、ウェンディがそれを破る。
「揺れてきたわね」
「そうだね」
「雨は苦手って言ってたわね」
奇妙な空気を感じてキリが押し黙る。
そんな一瞬、強い風に煽られた雨が壁を通して音を立てているのが聞こえた。時同じくして扉がノックされる。また誰かが来たらしい。
無言の睨み合いが終わってウェンディがそちらを見た。
「どうぞ」
「失礼します」
入って来たのはまたも少尉だった。外に居たらしく全身が雨に濡れている。
背筋を伸ばして入り口に立ち、毅然とした態度で告げられる。
「大佐、見知らぬ船がこちらへ向かってきます。旗も掲げられていました……海賊です」
「マークは？」
「見覚えがありません。麦わら帽子にドクロです」
「そう」
ウェンディがキリの目を見据え、笑みが鳴りを潜める。
不思議と緊迫した空気に包まれていた。
室内の雰囲気は一気に変貌し、訪れたばかりの少尉もその事実に気付く。見つめ合っている二人は冷静な姿に見えて、その実そうは見えず、何かがおかしいと感じる。
一瞬の静寂。外で雷鳴が鳴り響いた。

再びウェンディが沈黙を破って、微塵も笑わなくなったキリに問いかける。
「ふふ。あなたの船長さんが、助けに来たのかしら？」
その言葉を聞いて沈黙が数秒間続いた。それから突如、キリはテーブルを蹴り上げる。縁を蹴られてふわりと舞ったテーブルは、乗っていた物を飛ばし、回転しながらウェンディへ迫る。
蹴った勢いを利用する彼は椅子ごと背面へ倒れ、後転から即座に背後の本棚へと跳ぶ。
少尉が懐へ手を伸ばした時、すでに彼は本棚へ納められた本に触れていた。
「なにっ、貴様――!?」
触れただけで本棚からは大量の紙が飛び出し、宙を飛んで少尉へと殺到する。直接的な攻撃力はなかっただろうが、体に纏わりついて外へ押し出され、そのまま紙が壁となって入り口を塞いでしまった。これで増援はない。ひとまず室内に二人きりの状態となる。
それからキリはウェンディへと視線を戻した。
コンマ数秒のやり取り、瞬間的に驚愕する。
菓子や紅茶が散乱する室内。テーブルと椅子がひっくり返った状況の中で、ウェンディは立っていた。全くの無傷はともかく、スーツとコートにわずかなシミさえ作らず。
蹴り飛ばしたテーブルをどう回避したのか。
移動した形跡は見られず先程と同じ場所。席を立っただけで回避はしていない。しかし彼女の背後にひっくり返ったテーブルが落ちていて、明らかに当たる軌道だった。
両手に紙を持ってキリが警戒する。
強いという言葉に嘘はない。彼女は、本部大佐に値する実力のようだ。
「ひどいわね。私の部屋がぐちゃぐちゃにされちゃった」
「どうやって避けたんだ。今のを避けたならそこには居ないはず」
「そう、紙を使う能力者だったのね。パーカーの下にあるホルスターの話は聞いていたの、紙が詰められてたって。それにあのふらつ

き方は不思議だったけど、なるほど、水に濡れるのが嫌いなのかしら。雨が苦手って話もあったし」
「質問に答えないなら」
キリは腕を振って両手から紙を飛ばす。
硬化したそれらは銃弾の如く宙を駆けてウェンディへ殺到し、その身を貫くはずだった。
接触の瞬間、目を見開く。
当たるはずのウェンディの体へ触れたはずだった。だがなぜか彼女の体に傷はつかず、それでいて紙は体をすり抜けていく。まるでそこに何もなかったかのように。
通り過ぎた紙はすべて反対側の壁へ突き刺さる。
能力を使えなかった訳ではない。服が濡れた状態で力が入りにくいとはいえ、確かに使えた。
当たらなかった要因は別にあって、不審な光景に気付いたキリは小さく舌打ちする。
「能力者か……！」
「ミス・ディープ。そう呼ばれてるの。知られてないなんて私もまだまだね」
すぐさまキリが本棚へ手を伸ばし、納められていたすべての本を床へ落とす。するとそれだけで能力につられ、本から離れたページが宙を舞う。
ただ紙を操るだけの能力も武器があれば使い道はある。
どうやら彼女には攻撃が当たらないようだ。ならばどれだけ避けられるかと大量の紙を動かす。
次に放たれる攻撃は言わば紙の壁。視界一杯を塞ぐ白い大群が正面から迫って、ウェンディはふむと頷き、動かない。
接触の瞬間、彼女はほんの少しだけジャンプした。
たったそれだけでやはり紙の壁は彼女の体をすり抜け、後方へ進んでいくだけ。着地も簡単に終わり、些細な仕草で乱れた髪が手で払われた。
これではっきりしたことがある。体が物体に触れていない。

おそらくは回避に適した能力であると推測できた。
「物体をすり抜ける能力……」
「正解よ。よく見てるわね」
「攻撃が当たらないってことだ。大佐の肩書は嘘じゃなかったか」
それならと、キリは紙を束ねていくつも武器を作り、それらが指の動きに合わせて地面に突き刺さる。右手がくるりと回されれば、数本の剣が一斉に動いてがりがりと床を削る。
敵を倒すための攻撃ではない。
それはもっと悪い物だ。
流石にウェンディも表情を変え、動き出そうとした瞬間に別の紙が宙を駆け、彼女へ殺到した。狙われたのは足。おそらく彼はすでに能力の性質を理解している。仕方なく彼女は跳び、能力を使わず回避する手段を取った。
その間にキリの足元がくり抜かれ、ふっと浮遊感を感じて下の一層へと降りていく。
選んだ道は逃走。それだけではない。彼は他の海兵に手を出すつもりだ。
海の上に居る以上、船を失くしては能力者であるか否かに限らず、生きてはいけない。床を削った能力でわかった。彼は船を破壊するつもりだ。
素早くウェンディも能力を利用し、床をすり抜けて下へと降りる。
着地した場所は敵船が接近しているとあって戦闘準備の真っ最中。海兵たちが慌ただしく走り回り、武器を用意する者も居れば、大砲に弾を装填する者も居て、見ようによっては混乱しているようにも見える。人数はあまりに多い。しかしキリの姿だけはすぐに見つけられた。
床をすり抜けたウェンディとは違い、彼は床を壊して現れた。
着地と同時に敵に囲まれていたのだが、それだけにどの方向へ攻撃しても敵に当たるのだ。
紙で作られた武器を四方八方へ飛ばしつつ、さらに多量の紙を使って生み出された傀儡が海兵を弾き飛ばし、船内はかつてないほどの大

混乱に包まれている。肌を切り裂かれる者、紙の狼に突進されて吹き飛ばされる者、転げまわる者は少なくなかった。
その中を軽やかに移動して、敵からサーベルを奪ったキリは大砲へ目をつけている。
「これって装填した後？　迅速な行動で助かるよ」
「あ、こらっ――！」
大砲の傍に居た海兵を蹴り飛ばし、手の中から奪ったマッチを使って導火線に着火する。
直後に揺れる船内で大砲が動かないよう、固定していたロープをサーベルで切り裂く。
導火線が燃え、発射直前となった大砲は船体の揺れに従い、車輪によってその場を離れた。鈍重な音と共に動いてしまって、砲口が船内へと向けられる。
悪戯っぽく笑うキリが耳を塞ぐ姿を目にして、咄嗟にウェンディは叫んでいた。
「全員伏せなさいっ！」
直後に砲弾が発射される。
砲口が外へ出されていれば問題もなかっただろうが、轟音が響くと同時に砲弾は船内から壁を吹き飛ばし、大爆発を起こす。たった一発で軍艦に大穴が開いてしまった。
そこから大雨と高波が入り込み、慌てたキリは急ぎその場を離れる。
濡れない場所に立った後で、厳しい視線を向けてくるウェンディと視線を交わした。
「やってくれるわね……ずいぶん手慣れてるじゃない」
「一人で船壊すのって得意なんだ。能力の使い勝手がいいもんで」
「さっきより生き生きしてるわね。暴れるのが楽しい？」
「いいや。仲間が来てくれたから嬉しいんだ」
今は妙に柔らかい笑みを称えて。
明らかに目の輝きが違っていてその体から発される雰囲気も変わっている。

ウェンディは嘆息し、苦笑してやれやれと首を振った。
「残念ね。あなたとは仲良くしたかったところだけど」
「仲良くしたいんならしてもいいよ。ただしお互い立場があるんだ」
紙を手元へ呼び寄せ、蛇の傀儡を作り出した彼は、その尾にマッチで火をつける。
一方で傍には牙を持ったフクロウの傀儡が翼を動かして滞空する。
それら二体を並べられた大砲へ向かって動かしつつ、笑顔でキリが告げた。
「そっちがどう思おうとやめる気はないけどね。止めたいんなら止めてみなよ」
フクロウが素早く飛んで混乱する海兵たちの間を潜り抜け、固定された大砲のロープを切っていく。船体の動きに合わせて大砲が右往左往し始めて、地を這って密かに接近する蛇が尾を振り、次々導火線に火をつけていった。その結果、当然船内で次々砲弾が飛び出す羽目になる。
爆音と爆撃で船にいくつもの穴が開けられ、いよいよ損害が無視できないほどとなってきた。
入り込んでくる高波を受け、外へ放り出される海兵も少なくはない。
そんな状況の中でウェンディは強く歯噛みし、あからさまに動揺する部下を叱責した。
「全員、命懸けでしがみつきなさい！　海に落ちたら命はないわよ！」
「は、はいぃ！」
船の中だというのに海水を浴びて全身が濡れた。
髪を掻き上げて前を見たウェンディは、気付けばキリの姿が消えていることに気付く。また別の場所を壊すつもりか。雨を苦手としているようだが、船の中ならば自在に動けるようだ。
甘く見ていたと言わざるを得ない。何かあれば抑える気だったが想像以上だ。

悔しく思う一方、なぜかそれを嬉しがる自分も居た。
そうこなくては。いつしかそう思ってしまっている自分に驚く。
どこへ行ったか探すため、追おうと一歩を歩き出した途端、船の後方で爆音が響いた。あの位置ならばおそらく火薬庫。船の急所をよく理解している。
これでは本当に沈められかねないと足を急がせ、音の出所へ向かう。
激しく動揺する海兵たちとは違い、彼女だけは妙に落ち着いており、むしろこの状況を楽しむかのよう。笑顔でキリの姿を探し始めた。

GO―ON（3）

波が荒れ狂い、雨が横殴りにやってくる環境の中、船は真っ直ぐに軍艦を目指して進んでいる。
航海士の優れた手腕によるものか、帆は張ったままで風を受け、波を乗りこなしていた。本来であれば自殺行為に等しい。しかし彼らは命よりスピードを優先するかのようにその態度を変えなかったのである。おかげで軍艦に追いつくことができた。
甲板では船が沈まないようにとクルー一同が慌ただしく走り回っている。
知識があるなしに関わらず、操船などした事が無いアピスまであちこちで頑張っていた。
そうしていよいよ船が軍艦へ近付いた時、帽子を押さえたルフィが軍艦を見て叫ぶ。
「ナミ！　このまま突っ込め！　おれが向こうに飛び移る！」
「はぁ!?　あんた正気なの!?」
「キリが待ってんだ！　おれは行く！」
「ああもう、どうなっても知らないわよ……！」
舵輪を握るナミは文句を口にしながらも舵を切る。
船首から敵の横っ腹に突っ込む。そうすれば敵の虚をつけるはずだ。
その代わり相当な負荷が船へかかることになる。普段ならば轟沈もないだろうがこの嵐ではわからない。船が大破して海に呑み込まれてもおかしくはない。
それでもルフィは進めと言う。
不思議とナミは逆らわず、船の針路は決められている。
大きく揺れる船体をよろけながら歩き、ナミの下へシルクがやってきた。
「このまま突っ込むの？　体当たりする気？」
「しょうがないでしょ、あいつがそう言ってんだから！」
苛立った様子で返すナミから目を離し、敵船を見たシルクが考え

る。
内部で何が起こっているのか、軍艦からは何度も火の手が上がり、攻撃する前からその姿が変貌していく。詳細不明でも異変が起こっていることだけは確かだった。
敵からの砲撃はない。戦力差を埋めるならば、この機を利用しなければ。
真っ直ぐ敵船に向かうと知り、シルクは意を決してナミへ言った。
「ねぇナミ、船首から突っ込んだら舵を切って左舷を向けて」
「あんたまで何言い出すのよっ」
「お願い。正面から戦っても勝ち目はないでしょ？　だから、やってみる」
「やるって何を……あっ、ちょっとシルク！」
言い切ったシルクは階段を下りて、船の動きに耐えられず甲板を転び始めたアピスと、彼女の首根っこを掴んで止めてやるゾロへ目を向けた。
「アピス、ゾロ、手伝って！　大砲使うよ！」
「あぁ？　一体なんだってんだ」
「わかった、手伝うよ！」
「おまえは転ばねぇように気をつけてろ。海に落ちたら一巻の終わりだぞ」
ゾロは片手でアピスを持ったまま、一足先に船の内部へと降りて行った。
それを見ずシルクはルフィを見やり、敵船に集中する彼へ声をかける。
「ルフィ、大砲で攻撃するから、チャンスが来たら命令して！　私たち下で待ってるから！」
「わかったぁ！」
暴風の中でも彼の返事が聞こえた。
踵を返してシルクは船内へ降り、これまで使った事の無かったスペースへと入る。
すでにゾロとアピスが待っていた。雨のせいで全身が濡れ、乾いた

床に滴が落ちる。そんなことさえ気にしていられない。髪を掻き上げてすぐに作業へ入る。
とは言いつつも、海賊になったばかりの二人。そこに市民が一人。大砲を使った経験などなく、咄嗟の思い付きだったがいきなり息詰まる。
砲弾と火薬、それから大砲を前にして、三人は立ち往生することとなった。
「それで、どうやって準備したらいいんだろう」
「知らねぇのに呼び出したのか」
「だ、だって大砲なんて使ったことないし。海で戦うなんて初めてでしょ」
「こうなりゃ適当にやるしかねぇだろ。要するに火薬詰めて弾込めりゃいいんだろ」
「とにかくやってみようよ。なんとかなるかもしれない」
締めくくるようなアピスの一言によって、訳も分からず動き出す。
砲口から火薬を詰め、砲弾を押し込む様はまるで実験の様相である。誰も正しい知識を持たず、どれだけ火薬を用意すればいいか、砲弾も目についた物を押し込むだけだった。
慌ただしく動いてようやく準備できたのは六門。
一人二門ずつ発射できれば、六つは砲弾を放てる計算だ。
外が見えないためタイミングはルフィ任せになる。
準備が終わるか終わらないかという頃に、外からルフィの大声が聞こえてきた。
「シルク、もうすぐ来るぞ！」
「こっちはいつでもいいよ！　二人とも、発射する前に船が揺れるから気をつけて」
緊張した面持ちで三人が大砲の傍へしゃがみ、攻撃のタイミングを待つ。
船は接近していた。
マストの上に立ったルフィは飛ばされないよう帽子を押さえ、片手でロープを掴みながら、軍艦の甲板を見る。視界が悪い中でもよくわ

かった。サーベルを手にしたキリが海兵に追い詰められている。辛そうな表情で動きも危ういが、少なくとも死んでいない。
接触まで一分とかからない。
それでも耐え切れず、ルフィが思い切り叫んだ。
「キリィ～ッ！」
暴風を越え、雨に負けず声は届いた。
キリだけでなく海兵たちまで振り返ったその瞬間に、船は船首から軍艦の横っ腹へ激突し、上手くナミが舵を切ったことで擦り付けるように左舷が接触する。
それを待ったルフィは冷静だった。絶好のタイミングで叫ぶ。
「シルク、撃て！」
「発射ァ！」
威勢よく叫んで、一斉に火が点けられた。
連続して六度、轟音が聞こえて砲弾が発射される。
隣へ並んだ船のサイズは軍艦の方が大きい。しかし至近距離からの砲撃を受けては被害も小さくはなく、ただでさえ穴が開いていた船体にダメ押しの一撃。船上各地から悲鳴が上がって混乱が深まった。もはや船の構造はかつてとは違っており、至る所が壁を抜かれている。
砲撃で船体が大きく揺れ、多くの海兵が足元をふらつかせていた。
船首付近で追い詰められたキリと、それを見ていたウェンディも例外ではない。
ただチャンスではあった。同時にやってきた襲撃と砲撃、これによって船上に冷静な者は居なくなる。この瞬間しかないとわかっている。
隣の船、マストの上に居るルフィを見たキリは最後の力を振り絞った。
「キリ、来い！」
奪ったサーベルを投げ捨て、苦手な雨に晒されながらも必死で走る。向かう先は当然隣の船だ。
紙は使えない。自身が紙になることもできない。

そんなことは全く関係がないとばかり、欄干へ飛び乗ったキリはその勢いで海へ跳んだ。
誰もがその光景を見ていた。接触したとはいえ、波に揉まれて二隻の船の間には早くも隙間ができている。加えて今の彼はふらふらで、とても辿り着ける距離ではない。
それは承知の上だったか、宙でキリが手を伸ばした。まるで助けを求めるように。するとマストの上からルフィの腕が伸ばされ、あっという間に彼の腕を掴んだ。互いに離さないよう強く握りしめ、思い切り引っ張られる。見事にキリの体は甲板へ落とされたのである。
ウェンディは彼らの行動に驚きを隠せないでいた。
なんと無謀で大胆な人間なのだろう。死すら恐れぬ行動は信頼の故か。
見事に奪われてしまった後では素直に感心してしまい、立ち尽くしてしまう。
捕らえたはずのキリは見事に彼らの下へ戻っていた。
「キリィ！　おまえ大丈夫だったか！」
「ハァ、ありがと船長。ちょうど危ないとこだった」
「しっしっし、いいんだ。おれはおまえがいねぇと航海できねぇからな」
キリが戻った様を見たナミは、ほっと息をついてすぐに舵輪を回す。
もうこれ以上用はない。大打撃を受けた軍艦はきっと追って来れないだろう。
逃げるために船の向きを変えて、荒れ狂う波を乗りこなしながら逃げるための航路を取った。
その頃の船内では砲撃音に耳をやられた三人が呻いており、いまだ動き出せない様子。しばらくした後にようやくゾロが辺りを見回して口を開いた。
どうやら火薬を入れ過ぎた。辺りは黒い煙で視界が悪くなっている。
その中でもシルクとアピスの無事は確認できて、咳き込む二人へ声

をかけた。
「おまえら無事か？　今すぐ上に戻るぞ。まだ終わってねぇんだからな」
「え、何？　何か言った？　耳がキーンってしてて……」
「いいから上がるぞ！　ついて来い！」
ゾロは比較的ダメージが少なかったようだ。そのため耳を押さえて呆けた声を出すシルクへイライラと声をぶつけ、ジェスチャーで甲板へ上がれと伝える。
多少の不安は残るがシルクは歩き出し、次にゾロがアピスを見る。
能力者とはいえまだ子供、しかも戦闘には向かない。シルクならば同行しても問題ないが彼女は外へ出ない方がいいのかもしれない。そう思って表情を引き締める。
「アピス、おまえはここに残ってろ。まだ戦闘が終わった確信はねぇんだ」
「え、何？　何か言った？　耳がキーンってしてて……」
「おまえら……もういい。とにかく戦闘があるようなら顔出すなよ」
耳を押さえるアピスへ、端的に言いのけて踵を返した。
シルクに続いて甲板に出れば、大の字に倒れるキリとその隣にしゃがむルフィが見える。
雨に晒された状況など微塵も気にならず、喜色満面にシルクが駆け出した。その後ろからゾロも口の端を上げて歩き、すぐに出てきたアピスも嬉しそうな顔に変わる。
「キリ！　無事だったんだね！」
「やぁみんな、助けに来てくれてありがとう。どうしようかと思ってたんだよ」
「ったく、面倒な奴だ。だから近付くなっつっただろ、バカ」
全員が一か所に集まり、雨に打たれて動けないキリを見下ろす。
ずいぶんな迷惑をかけたはずだが彼らに怒りの態度はない。厳しい言葉を向けたゾロでさえ笑みを浮かべて責める態度ではなかった。
そこへアピスも加わって、一同は何が楽しいのか笑い合う。

嵐に見舞われ豪雨の中。
揺れる船はいつ転覆してもおかしくなく、軍艦から離れたとはいえ安心できる距離ではない。
それなのに彼らは笑ってひどく楽しそうにしている。仲間をたった一人取り返しただけ、お宝を手に入れた訳でもなく特別な冒険をした訳でもないのに。
舵輪を握るナミはそんな彼らが不思議で仕方ない。
能天気というのかバカというのか、今まで出会ったことがない海賊だ。
ただ不思議と気分は悪くない。
今まで彼らが海賊だという理由だけで毛嫌いしていた部分はあったが、認識を改めなければならないらしい。彼らは海賊でも、少なくとも仲間を見捨てるような薄情者ではなかった。キリを助けるために嵐の中へ突っ込んでいったのがその証明。とても温かい一味だ。
表情を変え、声色は前より柔らかく。
ナミは集まる一同へ笑みを向けた。
「ちょっとあんたたち、まだ航海は終わってないわよ。この嵐を生きて抜けなきゃいけないんだから、今からしっかり働きなさいよ」
「おう！」
「あぁ、ナミも来てくれたんだ。わざわざありがとう」
「私は別に、あんたたちを利用してお宝集めなきゃいけないわけだしさ……そうよ！　あんた、せっかく海軍の軍艦に居たんだから、お宝の一つも盗んできなさいよね！」
「あはは、流石泥棒らしいお言葉。ブレない姿勢は見習わないとね」
「だけどナミって海賊専門じゃなかった？」
「細かいことはいいのよ。とにかくチャンスがあったら盗むの！」
首をかしげるシルクへ言いのけ、ナミは晴れやかな笑顔を見せた。
徐々にではあるが馴染んできた感じがする。
今や肩の力が抜けて、舵輪を握るのもリラックスしていた。
「さぁみんな、この嵐を抜けるわよ。まずは破けない内に帆を畳んで、それから――」

航海のためナミが指示を出そうとした瞬間にそれがやってきた。
荒波にも負けずに泳いできたシロクマ、ドニーが海中から飛び出し、船上へ飛び込んできたのである。二本足で甲板へ立ったその巨体は全員の目に留まり、当然無視できないものとなった。ルフィは大口を開けて喜んでいるかのような表情で、他の皆は純粋に驚愕する。
堂々とした風格で立ったドニーはすぐにキリを見つける。
その視線の動きで状況を理解したルフィは、咄嗟に拳を構えて立ちはだかった。
「こいつか、キリを連れて行きやがったのは」
「ルフィ、そいつかなり強いみたいだよ。グランドラインから来たんだ」
「心配すんな。負けねぇよ」
拳を握るルフィを先頭に、両隣にすぐシルクとゾロが得物を手に対峙した。
ドニーは冷ややかな目で彼らを見下ろす。
「アピス、キリを頼む。今動けねぇんだ」
「う、うん。わかった」
「こいつぶっ飛ばして全員で帰るぞ！」
軽く跳んだルフィが拳を握って右腕を伸ばす。慣れた調子の攻撃がドニーの腹へ迫った。
「ゴムゴムのピストル！」
腹へ迫った拳だがドニーの反応が素早く、両前脚で掴まれた。
流れるような動きで、人間かと見紛う仕草。背負い投げの要領で腕を引っ張り、軽々持ち上げた体を思い切り甲板へ叩きつける。ダメージはなかったろうが起こった音は痛そうで、あまりの勢いに甲板の一部に穴が開いた。
「ぶへぇ!?」
「野郎、かなり鍛えられてるようだな……！」
間を置かずに三本の刀を抜いたゾロが飛び掛かる。
些細な動きから実力が垣間見れるものの、やはり動物。毛皮があっても鎧を纏っている訳ではない。刃で切り裂けばダメージは与えら

れるはず。
真正面から挑みかかって刀を振り上げた。
ルフィの手を離したドニーは冷静に彼へ顔を向ける。
慌てる様子は微塵もなく、怖いくらいに冷静な挙動。
ゾロが繰り出した右の刀による斬撃は、黒色の鋭利な爪によって見事に受け止められた。
「うっ、こいつ――」
動きを止めずに左手による攻撃。やはり爪で受け止められて、わずかに削ることさえできていない。態度さえも全く慌てずに落ち着いたままだ。
続けて数度、連続して攻撃する。
ドニーは完璧にゾロの動きを見切っているようで、肉体はおろか毛皮にさえ掠らない。
歯噛みして、思わず一度距離を取った。
想像以上の実力だ。武器を持っていない上に相手は動物。だが動きの一つ一つに知性を感じて、さらに身体能力ではおそらく人間よりも上。今まで出会った敵の中で最も強いと感じる。
距離を使って助走を取り、再び三刀流の構えで敵へと突進する。
ゾロは厳しい表情で思い切り跳んだ。
「虎狩りッ！」
刀三本でまるで爪で引っ掻くような軌道の攻撃。高く跳んでドニーの胴体が狙われた。しかしその攻撃を見切った動きは素早く、軽いステップで立ち位置を変えると、それだけでゾロの攻撃が空を切った。宙で驚愕した彼はその隙を突かれて全力で殴り飛ばされる。
勢いよく飛んだ体は船室への壁に激突してぶち破り、内部へと姿を消した。
ルフィとゾロを相手にして無傷。あまりにも強い。
すでにルフィは立ち上がっているが人数の差は利点にならないらしい。
素早くシルクがキリとドニーの間へ入り、両手でサーベルを構える。勝てるとは思っていない。それでも、仲間を守りたいという意志

は強かった。
「連れて行かせないよ。キリは私が守るから」
「こんにゃろっ！」
シルクを通し、キリを見るドニーへ再びルフィが飛び掛かる。
後方へ勢いよく伸ばした拳で顔面を狙い、腕が縮む勢いを利用して強烈な一撃を放つ。
「おおおおぉっ――銃弾（ブレット）オ！」
狙いは確かで横っ面に叩き込まれるはずだった。しかしまたも軽い動作で、しゃがんで避けられる。攻撃が空を切ったことにルフィが驚き、飛んでくる彼の腹へ拳が突き刺さった。
カウンター気味のアッパーカット。ダメージは無くとも衝撃までは吸収できない。
跳ね上げられたルフィは天高く飛ばされ、身動きが取れない所にさらにドニーが跳ぶ。
全身を捻って繰り出される蹴りは強烈な迫力を放っている。それを間近に見たルフィは咄嗟の防御すら忘れ、強かに頬を蹴られて体が飛んだ。先程ゾロが突っ込んでいった壁まで蹴り飛ばされ、ちょうどそこから出てこようとしたゾロと激突し、また大きな音を立てて壁が壊れる。二人とも室内で転がって、出てくるまで時間がかかりそうだ。
見事に着地したドニーの目は再びキリへ。
その前にはシルクがサーベルを構えており、どうしても無視できない状況。
緊張した面持ちの彼女と目が合い、強風に煽られながら対峙する。
「シ、シルク……」
「大丈夫よアピス。大丈夫、大丈夫だから」
言い聞かせるような言葉。それは自分に向けられているかのようだった。
ともすれば腕が震えそうになる。堪えるのに必死だった。大きな不安に押し潰されそうで、けれど背後に動けないキリと戦えないアピスが居ては逃げる訳にもいかない。

きつく唇を噛んで、必死にドニーを見上げる。
目が合った状態で彼がゆっくり構えようとしているところ、アピスが言った。
「この子、すごく怒ってる。多分キリを取られたから」
「何言ってるの。キリは私たちの仲間なんだから、あなたが連れて行っちゃだめ」
「そうなんだけど、なんか――」
「絶対守るから。もう足手まといにはならない」
こうなれば奇跡を信じる他なかった。
自信はないが強い意志だけを持ち、毅然として剣を前へ立ち塞がる。
そうするとドニーは拳法を使うかのような構えを見せた。
激しく揺れる船上にて睨み合うこと数秒。緊張感が辺りを支配し、高波が少なからず甲板へ乗り込んでくる環境下。先に動いたのはシルクだった。
見る者の予想を裏切って彼女が走り出して、正面から剣を振り上げる。
スピードで言えばルフィやゾロに敵う訳もない。ドニーにとって見切るのは簡単。
彼女の腕の動きに合わせて後ろへ跳び、刀身が届かない場所へと軽やかに逃げた。
「やああっ！」
気合いの声も空しく、攻撃は空を切った。その瞬間。
なぜかドニーの腹から血が噴き出し、白く見える体毛を真っ赤に染め上げた。
「えっ……？」
呟いたのは他でもなくシルクだった。目の前の状況に彼女が一番驚いている。
刀身は届いていない。斬った感触など手にはなかった。しかしドニーの腹からは確かに血が出ていて、見れば刀傷のような痕がある。
不思議な状況だったが間違いなくシルクが斬ったようだった。

その状況に一番早く順応したのは倒れたまま見守るキリで、呆けるシルクへと檄を飛ばす。
「シルク、そのまま剣を振り続けるんだ！　届かなくていい、早く！」
「え、あっ、うん」
次いでもう一度。大上段からサーベルを振り下ろす。
距離感は変わらないため刀身は届かない。それなのに再び、ドニーの体が切り裂かれた。
傷は決して深くない。だがルフィとゾロが敵わなかった相手に攻撃を当てたのである。
当てた本人が最も驚き、いまだ状況が理解できていない。しかしドニーが警戒して後ろへ飛び退いた頃にふと思い出した。軍艦島で食べた、悪魔の実である。
自身が能力者になったことを忘れていた。なにせどんな能力なのかは今でも判明していない。ただこの時、知らない内に能力を使って攻撃していたようだ。
混乱したままであったが場の空気は一変する。
シルクの攻撃によってドニーの余裕がわずかに崩れ、思わず船の淵まで下がっていた。
荒々しく壁を破壊し、慌ただしく出てきた二人はそこへ殺到する。
「んがぁぁっ！　こんにゃろ、シロクマァ！」
「上等だ、ぶった切ってやる！」
怒り心頭といった様子の二人は騒がしく現れたにもかかわらず、一方で冷静さを失っていない。そうとわかったのは互いに協力しようとしている態度である。
床を蹴ってルフィが飛び出す一方、刀を納めたゾロは木片を拾い上げて思い切り投げつける。
攻撃と陽動。瞬時に役割を分けて行動していた。
それを見てシルクも敵の隙を伺うべくドニーを注視する。
敵は強い。だからこその連携だ。
ドニーは飛び掛かってくるルフィを相手にしながら、ゾロが投げる

木片を弾き、さらにシルクの見えない斬撃を気にしなければならない。明らかに危険な状況に変わっている。
かくして三人同時の強襲により、ドニーの動きは精彩を欠いた。
「うおおおりゃっ！　ゴムゴムの銃乱打（ガトリング）！」
連続で繰り出されるパンチを両の前脚で捌き、一歩ずつ後退して攻撃を避けようと動き続ける。幸いまだ一撃も受けていない。見切れない速度ではないのだ。
しかし突然、ルフィが攻撃をやめてその場を飛び退く。
次いで飛んできたのは顔面を狙う木片だった。ドニーは慌てず首を逸らして攻撃を避ける。
その瞬間、左の後ろ脚に痛みが走った。
見てみればシルクが剣を振り切った姿。間違いなく彼女は狙って斬っている。まだ自分でも理解し切れていない能力を利用して、離れた場所からの攻撃を当ててきている。
脚の痛みで体勢がわずかに崩れた。
ほんの些細な仕草、その隙を見逃さず、後方へ両腕を伸ばしたルフィが飛び込んでくる。
一瞬で懐へ入って逃げられない位置。ドニーが反撃するより早く両腕が前へ繰り出された。
「ゴムゴムの、バズーカ！」
ゴムの反動を利用した強烈な掌底。それが強かに腹を打つ。
ドニーの巨体はわずかに浮かび、船の一部を壊して空中へと飛ばされた。それでも諦めずに前脚を伸ばす。彼を必死に求めるが故に。
それを許さずゾロが飛んで、三本の刀を構えて、落下するドニーへと追撃を行った。
「鬼斬りィ！」
強烈な斬撃は爪で受け止められたものの、彼の体を無理やり海中へ叩き落す。防御されることも考慮の内だったらしい。斬るというより力ずくで押した印象だ。
ドニーは荒れ狂う海に落ちて姿が見えなくなる。
本来ならば自ら空中に躍り出たゾロも同じように落ちるはずだっ

たが、ルフィが腕を伸ばして素早く腹巻を掴み、ぐいと引っ張って甲板へ連れ戻したことで事なきを得る。
強い相手だった。だがひとまずの勝利を得たのだ。
ルフィとゾロは甲板に座り込み、シルクも急に力が抜けたのか座り込む。
皆が思うことは同じ。生き残れて良かったということだ。
「ハァ、見たかクマ。舐めんじゃねぇぞ」
「ナミ！　帆を畳んでる暇はねぇ、このまま逃げるぞ！　あいつがまた来ねぇ内に！」
忌々しげに呟くゾロは己の腕を嘆く。
シロクマ一匹仕留められない。これでは最強など夢のまた夢だと。
一方でルフィは船長として航海士に方針を告げている。嵐の中で帆を張ったままでは自殺行為とわかるが、今はそれよりも速度を重視したい。まだ軍艦の姿が見えなくなった訳ではないのだ。キリが万全の状態だったならば戦闘も良しとしよう。だがこの場は逃げておきたい。
ルフィの発言にナミは頷き、舵輪を回す。
その直後に大きな咆哮が聞こえた。
暴風すら吹き飛ばして天まで響く声。さっきのシロクマなのだと全員が気付く。
中でも動物の意志を理解するアピスは寂しそうな顔で呟いた。
「あの子、とっても悲しんでる。寂しいって言ってるみたい」
「寂しい、か……ボクに関係してるのかな」
「でも、呼んでる名前はキリじゃないよ。別の誰か。私も聞いたことない。多分だけど、離れたくないって言ってるんだと思う」
そう聞かされてキリは無表情に、感情の感じられない声でぽつりと呟く。
「ただの人違いだよ。そんな人間知らない」
名前も聞かずにそう断じて、のっそり動かした腕でアピスの頭を撫でる。
なぜ彼女が辛そうな顔をするのか。きっとその叫びが悲痛な物

だったせいだろう。
しかし、関係はない。
ドニーがキリを通して他の誰かを見ていたとしても、そんな人間は知らない。ウェンディから聞かされた話も興味はない。自分は自分で、これまでの記憶がある。
たとえ真実がなんであっても、今更知りたいとは思わなかった。

ＧＯ―ＯＮ（４）

嵐を抜けて、死に物狂いで穏やかな波間へと到達した軍艦はすでに這う這うの体だった。
船体はボロボロで無数の穴が開き、いまだ沈没していないのが不思議な姿。至る所が水浸しで明らかに危機的状況であった。それでもなんとか海の上に浮いていて、前に進むことができている。
ひどい目に遭った、と誰もが思っていた。
かつてない被害に生き残った者たちでさえ心を折られ、動くのも億劫な精神状態。
見知らぬ少年が連れてこられた時にはこんなことになるとは思っていなかった。
濡れた甲板に座り込んで項垂れる海兵たちは非常に多く、その中で動いているのはほんの一部。
ウェンディは船医の手で治療されるドニーを見つめ、微笑みながら声をかけている。
「やられちゃったわね。あの子たちは強かった？」
彼が怪我をした姿など何年ぶりに見るだろう。それくらいの実力者だったのだろうか。
船出したばかりの少年少女にやられ、船は穴ぼこだらけで、海軍としては面子も丸潰れだ。だがウェンディはむしろ嬉しそうにすらしていて、他とは違い妙にリラックスしている。
傍には少尉が立っており、神妙な顔で彼女へ報告する。
「被害は甚大です。これでは第八支部に到着する前に沈没するのがオチでしょう。ここは一旦近くの町へ立ち寄り、船を直して部下を休ませるべきです」
「そうね。そうしましょう」
報告に対してもどこか心ここに非ずといった様子で、違うことを考えていそうな顔。
眉間に皺を寄せた少尉は叱るように言った。
「まさか、楽しんでいるなどと言いませんよね」

「そうねぇ……複雑な気分だわ。ひょっとしたらとは思ってたけど、ここまで一方的にやられると流石にへこんじゃう」
「当然です。これで能天気に構えているようでは、私は部隊を離れます」
「それじゃあへこんでてよかったわ。あなたが居ないと私の仕事が増えるもの」
「ですから、そういう気楽な発言が問題だと何度も何度も――」
「ねぇ、彼らの顔は見た？」
ドニーを見ながら言えば少尉が重く溜息をつく。
前々から勤務態度に問題があるとは思っていたが、何かがおかしい。
それが私室でのキリとの対話によるものではないかと思って心配事が増えていた。逡巡するものの、やはり従う気はあるのか少尉が報告する。
「あの嵐ですから正確な数はわかりません。ただ、舵取りをしていた少女が一人。ドニーと戦っていたのが剣士らしき青年が一人と少女が一人。そして、あの麦わら帽子の少年」
「腕が伸びてたわね。きっと能力者よ」
「無名とはいえ変わった一味ですね。能力者が二人も乗っている」
「ええ。腕が伸びる子に、紙を武器にする子。興味深いわ」
楽しそうにしている顔が気になった。ここ最近、というより何年か前からつまらなそうにしている表情が目立っていたのに、今日は一転して生き生きしている。
変化の理由はわかっていた。
けれど敢えて聞くような形で、彼女に真意を問う。
「予想は当たっていた、ということですか」
「ええ、そうなの。おじいちゃんが遺した手記でそうじゃないかとは思ってたけど、やっぱりあの人には子供が居た。そしてその子が、何の因果か海賊になったの。信じられる？　これを運命的と思わずにどうするっていうのよ」
「運命の出会い、ですか」

「ドニーもそう思ってるわ。彼に間違いないって」
大人しく座るドニーはつぶらな瞳でウェンディを見つめる。
思うことは同じ。彼を見た感想はきっと揃っている。
見つめ合う二人は同じ気持ちで、いつかでもいい、彼との再会を願っていた。
「それを差し置いても、今回の件はいい教訓になったわ。私の采配ミス。考えが甘かった。もう一度引き締め直す必要があるわね」
「ようやく真面目になられましたか」
「鍛え直しよ。私だけじゃなく全員ね」
踵を返したウェンディは甲板で項垂れる海兵たちを見る。
鍛えられた男たちが揃いも揃ってだらしない。
腰に手を当てて元気な笑顔で、まるで少女のような活発さで告げる。
「この中で、イーストブルーを最弱の海だと思っていた人が何人いる？」
通りの良い声はその場の全員へ届いていた。
顔を上げる海兵たちだがその様子に覇気はなく、ウェンディを見る目にも元気はない。
その顔をぐるりと見回し、楽しげな笑顔。
溌剌とした声は全員へ届けられた。
「あなたたちはグランドラインの海を知る者たちよ。それは紛れもない事実。でも今回の一件でわかったでしょう？　この海には最強も最弱もない。油断した者が死に、驕りを持たずに自分を磨き続けた者だけが生き残れる。それだけが世界中の海に共通するルール」
叱咤するようでもあって、元気付けるようでもあり、両方が感じられる。
海兵たちはその声に集中する。
「認めましょう、今回は私たちの負け。でもこれで終わりじゃないわ。いずれ海賊と交戦することもあるでしょうし、また彼らと再会する時がきっと来る。その時勝利を得るか死を得るかはあなたたち次第よ。腐らずに前を見れる人間だけが生き続けられる」

徐々にではあったが海兵たちの目に生気が戻ってくる。
確かに今は絶望していた。だがまだ死んだ訳ではないのだ。変わるチャンスはいくらでもある。
元気付けられた彼らの顔が上がり始め、立ち上がる者も次々増えていった。
「頭を垂れる暇があるなら自分を鍛えなさい。次は勝つわ」
そこかしこから威勢のいい返事が聞こえてきて、船上は一気に騒がしくなった。
少尉は静かに溜息をつく。
「まったく。調子がいいものですね、あなたも彼らも」
「ふふ、そうかしら。意外といい演説だったんじゃない？」
「さぁどうでしょう。如何せん私はあなたのことを知ってますのでなんとも」
「とりあえず町を目指しましょう。その後はちゃんと仕事しないとね」
ウェンディは風を受けて頬を緩ませ、濡れた髪を掻き上げ海を眺める。
「第八支部か……あーあ。誰か正義の味方が問題を解決してくれればいいのに」
「またそんなことを」
「あのおじゃる、気味が悪いのよねぇ」
「不穏な発言はやめてください。どこで誰が聞いているかわかりませんので」
少尉に窘められても微笑みは崩れず、楽しそうに肩を揺らしている。
ウェンディは心底楽しそうに嵐があった方角を眺めていた。

＊

時刻は夕刻だったはずだが、嵐を抜けても厚い雲が空を覆い隠し、夕日は拝めない。

薄暗い空の下を行く帆船は以前より外傷が増えて修繕の甲斐が無くなっている。しかしそんなことすらどうでもよくて、甲板で大の字になって脱力する彼らはのんきな態度だった。雨に濡れて弱体化したキリだけでなく、厳しい戦闘を終えてぐったりするルフィ、ゾロ、シルクに加え、初めての海戦や大砲の砲撃音を経験したアピスまでしばし動く気力すらなく寝転がっている。

その様を見たナミは舵輪から手を離し、彼らの傍へやってきて苦い顔を見せた。

「こら。あんたたちいつまで寝てんのよ。私にばっかり舵取りさせて、自分たちは恥ずかしくならないの？　海賊でしょうが」

「いやぁーあのクマが強かったからよぉ。なんか力が抜けて」

「だから言ったでしょ、海軍に手を出すなんて馬鹿げてるって。……まぁ、なんとか全員無事に戻って来れたけどさ」

倒れた彼らを見回して呆れたように嘆息する。

あの嵐の中、すべてを見ていたナミはこの一味を侮っていたと言わざるを得ない。

妙な事態で敵船がボロボロだったとはいえ、まさか生きて帰って来れるとは。土壇場での彼らの迫力は表現し難い物があった。的確な指示と作戦、死を恐れない無謀さ、強敵を前に一歩も引かない姿勢。何より目を引かれたのは言葉もなく向けられる信頼感である。

明らかに敵わないだろうドニーを前にした時、彼らは何も言わずに役割を分けて協力した。あの一瞬の出来事で仲間の関係性が如実に伝わった気がする。

仲間。あれがそうなのだろうかと考える。

少ししんみりとした表情になったナミは頭を振り、彼らに気付かれる前に苦笑した。

何はともあれ無事に逃げ切り、嵐も抜けて、あとは軍艦島へ戻るのみ。

緩んだ空気に浸る彼らへ目をやって引き締めるように手を叩いた。

「はいはい、いつまでも寝てる場合じゃないわよ。早く軍艦島に戻らないと、またあいつらが来ちゃう可能性もあるんでしょ？　さっさ

と動く」
「次はアピスの頼みを聞くんだったな。リュウ爺を故郷に連れてってやらねぇと」
「うん！」
「リュウ爺？　誰？」
ルフィが放った言葉から知らない名前を見出し、キリが小首をかしげた。
皆が事情を聞いていたが攫われていた彼だけは聞いていない。軍艦島と千年竜の関係について。
体を起こして胡坐を掻いたシルクが、寝転んだままのキリへ説明を始める。
「あの島には一匹の千年竜が居るんだって。私たちは見てないけどルフィが見たらしいの。アピスの友達で、故郷に帰りたがってるから送ってあげるみたい」
「千年竜ねぇ……伝説上の生物かと思ってたけど本当に居たのか」
「すんげぇんだぞ。でっかくてかっこよくてさぁ、ほんとに竜なんだ」
興奮した面持ちでルフィも起き上がった。少し前の疲れなど吹き飛んだかのように千年竜を見た印象を語る。キリも興味津々にそれを聞いていた。
一方でゾロもその場に胡坐を掻いてアピスを見る。
掻い摘んだ事情は耳にしている。そのリュウ爺が海軍に狙われていることも。
彼らは今しがた海軍と戦ったばかりだ。
あの船はボロボロになったものの、いつ応援がやってくるかはわからない。つまり悠長に休んでいる暇などない。無事に軍艦島へ到着したとして、また海軍と鉢合わせになれば、今度こそ勝てる見込みはないだろう。圧倒的な戦力差は微塵も変化していないのだ。
海戦では人数が物を言う、と彼らは今回の戦いで理解した。
操船する者、大砲を使う者、敵の動きをつぶさに観察する者。
今回勝てたのは運が良かった。

嵐という環境下で、敵船ではキリが暴れ回って陽動していたのが大きい。あれを海戦と呼ぶのは些か語弊がある。従って今、改めて海軍と正面から戦うのはまずかった。
厳しい顔つきでゾロが口を開く。
「こうなった以上、もうゆっくりはしてられねぇぞ。おそらくおれたちは海軍に目をつけられた。リュウ爺を守りたいんなら、そいつを連れてとっとと島を出た方が得策だ。連れてくんだろ、竜の巣に」
「うんっ。リュウ爺がそんなこと言うの初めてなんだもん」
「死期が近いってことか」
「そ、そんなこと言わないでよ……でも、うん。多分そうなんだと思う」
俯いたアピスは唇を噛んだ。
別れを惜しむかのような表情に見える。しかし覚悟はしつつあるらしい。
ただ認めたくないといったところか。
沈んでしまった声はリュウ爺を想っての変化だ。
「リュウ爺は何も言わないけど、わかってる。食べる量だって減ってるしほとんど動かないんだもん。昔は空を飛んだり、泳いだりとか、全く問題なかったのに。今は歩くだけでも辛そう」
「単純に歳くったってことか」
「でも、いいんだよね。寿命まで生きられたんだもん。リュウ爺は、千年も生きたんだ。そろそろゆっくり眠る時なんだよね」
アピスは顔を上げて、自分に言い聞かせるように呟く。
寂しさが胸中に込み上げている。本音を言えば離れたくなどない。けれどリュウ爺を想えばこそ、無理をして延命させるのも申し訳ないと思う。
別れの時が来たのだろう。
目を閉じてしばし考え、再び目を開けるとアピスは皆に聞こえるよう言った。
「大丈夫、ちゃんと笑って見送るから。私が弱いままだとリュウ爺が心配しちゃうもんね」

「アピス……」
気丈に言いながらもその時を想像し、アピスの目には涙が溜まっていた。自身を抱きしめるように腕を抱いたナミが名を呼ぶも、それだけで忘れられる様子ではない。
彼女は涙を流さなかった。必死に堪えて呑み込もうとし、ぎゅっと服を握りしめる。
頭が良くてもまだ子供。感情を抑え切れるほど完成されてはいない。
ふとシルクが彼女を抱きしめて、自らの胸にアピスの顔を埋めさせる。
どうやら事態は想像以上に緊迫しているようだ。
まだ体が動かず、大の字に倒れたままのキリが神妙な声で呟いた。
「わかった、そうしよう。軍艦島に着いたらすぐリュウ爺を連れて島を離れる。これから夜になる。闇に紛れれば海軍が近くに居ても見つかりにくいはずだ」
「問題は航路ね。その竜の巣ってどこにあるのかしら」
「それならボクデンさんに聞いてみようよ。壁画があるって言ってたから何か知ってるかも」
アピスの頭を撫でるシルクがそう言うと、誰も異論を口にしなかった。
船の針路は決まった。
ひとまず軍艦島へ立ち寄り、リュウ爺を連れてすぐに海へ。その先どこへ向かうのかはボクデンの話を聞いた上で決定する。どの道楽な道のりではなさそうだ。
敵は海軍。船は傷ついて、今度は動けない千年竜を連れて行くことになる。
大変な航海になりそうだという認識が強まった時、ルフィがパンと膝を叩いて立ち上がった。
「よしわかった。とりあえずメシ食おう」
「は？　なんでそんな発想になるのよ」
唐突なルフィの提案にナミが顔をしかめる。

一体どんな思考回路をしているのか、つくづく彼だけはわからない。キリやゾロが真面目な顔で話していただけにその念は強くなった。
ナミは呆れて物も言えなくなるが、他の面子にとってはいつものことらしい。
さほど慌ててもいないのがまた気になる点だった。
「腹減ってると落ち込んじまうだろ。メシ食って腹いっぱいになればまた笑えるようになるって。アピスもそう思うだろ？」
「う、うんっ。そうだよね」
シルクの体から顔を離し、目元を腕で拭ってアピスがにっと口の端を上げた。
無理に笑っているのがわかるが気分を変えるきっかけとはなっただろう。確かにあったはずの緊張感も緩んで空気が軽くなっている。ルフィの発言も無駄ではなかったようだ。
それでいて考えがないようだから問題がある。
この状況で誰が料理を作れるのか。当然議題はそちらへ進む。
「だけど誰が作るの？　キリは動けないみたいだし、私もまだまだで上手には作れないよ」
「じゃあおれが」
「それはダメ。えっと、ナミは？」
「いいわよ。一人五千ベリーね」
「金取んのかよ。どこまでがめついんだてめぇは」
「じゃあじゃあ、私が作る！」
困惑する一同の中でアピスが手を上げた。
全員の視線が彼女へ集まる。
共に食事を取った仲だが料理の腕に関しては未知数。他に選択肢はない状態だが果たして任せてしまっていいものか、逡巡して妙な空気が流れ始めた。
アピスはすっかり笑顔になっており、生き生きとした様子だ。
恩返しとばかりに役立とうとしているのだろう。先の戦闘の疲れさえ感じさせない。

それが子供の利点なものの、一同は思わず顔を見合わせてしまった。
「アピス、料理できるの？」
「まかせてよ。自信あるから」
「いまいち気乗りはしねぇが、金払うよりかはマシか」
「聞こえてるわよ。フン、別にいいわよ。作りたいわけじゃないし」
「しっしっし。そんじゃアピスにまかせるぞ。うまいメシ頼むな」
「うん！」
嬉しそうに頷いて話は纏まった。
その時になってしばし黙っていたキリが口を開く。相変わらず寝転ぶ姿は間抜けそのもので、もはや立ち上がろうという努力すらしていない。緩い表情はいつも通りと言えばいつも通りだ。
「その前に着替えようよ。ボクじゃなくても濡れた服だと嫌でしょ？」
「それもそうだね。ナミとアピスには私の貸すよ。サイズが合うかどうかわからないけど」
「この際着替えられれば文句言わないわ。流石にこのままじゃ寒くなってきたし」
「アピスもいいかな？」
「うん、大丈夫。みんなの前ならどんな服でも恥ずかしくないと思う」
「あはは、そんなに変な服持ってないけどね」
先に雨で濡れた服をどうにかしようと、女性三名が女部屋へと向かった。
ゾロも同じく立ち上がって男部屋へ向かおうとするのだが、はたと気付いて視線の先を変え、倒れたままのキリを見つける。ルフィと二人して見つめると彼はへらりと笑った。
「悪いんだけどさ、着替えさせてくれない？」
「っとにめんどくせぇ……」
「しょうがねぇなぁ。まぁキリは水に弱いからな」
頭を抱えるゾロとは対照的にルフィはすぐに彼を背負う。世話焼

きな姿は普段とは真逆になっているようでおかしく、溜息をつくゾロはやれやれといった調子だ。
「甘やかし過ぎなんじゃねぇのか。弱点だってのは聞いたが、だったらそもそも近付くべきじゃねぇだろ。あのシロクマに手ぇ伸ばしたのはこいつなんだからな」
「いいじゃねぇか。キリにはいつも世話になってるし、これくらい」
「ありがとルフィ。やっぱ船長は頼りになるなぁ、どこかの誰かと違って」
「蹴り落とすぞ。これだからこいつは……」
「おまえら仲いいなぁ」
「よくねぇ。何を見てそう言ってんだ」
男たち三人もまた船内へ入り、着替えを始めた。
この後気分を新たにしたアピスがキッチンに入るのだが、料理の知識を持たない彼女が作ったそれはなんとも形容しがたく、凄まじい味がした。
平気な顔をしていたのはルフィだけで、他の四人は悲鳴を上げることになったようだ。

ロストアイランド

辺りはすっかり夜になっていた。
昼とは違う静寂さが辺りを包み込み、星が海を見下ろして、冷たい風が吹く独特な瞬間。
服を着替え、食事をし、足を止めることなく船を動かした一行は軍艦島へと辿り着いていた。
到着と同時に出迎えてくれる島民たちに顔を合わせる。アピスの無事を知って安堵する者は多く、声を上げて喜ぶ者も居て、ただどこか緊張した様子も見受けられた。
「おじいちゃん!」
「おぉ、アピス。無事じゃったか。よかったよかった……」
シルクからシャツを借り、ダボダボのそれを着た姿でアピスは嬉しそうに祖父へ駆け寄った。服装は変わっているが外傷は見られない。ひとまず無事だったと胸を撫で下ろす。
しかし安心するのが早いとも知っている。
あくまでも島民全員の目的はリュウ爺を竜の巣へ連れて行くこと。そのためには再び航海に出なければならず、アピスもついて行くつもりだ。
危険は去った訳ではなく、まだ一度退けただけ。島民たちが心配するのもそのせいだった。敵は海軍であって、近頃のしつこさを知っているだけに警戒心は消え去らない。いつやってくるとも知れぬ恐怖を抱いたままなのだ。
彼らへの期待値は高まり、アピスへ賭ける気持ちも強まっている。皆が協力的な態度であった。
「おじいちゃん、リュウ爺は？　ここは危ないからすぐ離れようってルフィたちが」
「そうか。わしらもその方がいいと思って準備しておった。本当はここで休んでもらった方がいいんじゃろうが……」
「みんなはやる気だよ。ねぇ、すぐ出れる？」
「今ここに居ない者でリュウ爺をイカダに乗せようと頑張ってお

る。島の裏へ回ってくれれば船で引ける手はずじゃ。それでいいか？」
「キリ」
「うん、問題ない。ルフィとシルクでアピスといっしょに手伝いに行って。その間にこっちで島の場所を確認する」
「おう」
「わかった」
アピスが耐え切れずに小走りで進み出し、すぐにルフィとシルクも続く。
急ぐ様子で歩きながら、彼女が振り返って、足を動かしつつ二人を見て話しかけた。
「その前にちょっと家に寄っていいかな？　このままだと動きづらいし、着替えたいの」
「いいよ。やっぱり私のじゃ大きかったよね」
「えへへ、でも嫌いじゃないよ。ありがとね、シルク」
三人は桟橋を離れて行き、残ったボクデンへキリが歩み寄る。
互いに初対面。しかし船を降りた以上はアピスの恩人には違いない。
軽く頭を下げるキリと向き合って、すぐに質問がぶつけられた。
「ボクデンさん、ですね。竜の巣に関する情報が欲しいんですけど」
「急ぎのようじゃな」
「ええ。いつ敵が来るかもしれないし、多分今のボクらじゃ守り切れない。できることなら戦闘はなしで逃げ切った方が得策ですから」
「一刻を争うというわけか。あいわかった、それなら教えよう。こちらへ」
詳細を伝えずともすぐに理解した様子。振り返ったボクデンはアピスたちと同じく、山へ向かい始めた。家に向かう様子でもないようである。
キリはその後へ続こうとし、ナミも足を動かす。だがゾロは腕組みをしたまま動かない。
ふとキリが振り返ってその彼を見つめた。

「船のことは任せる。海軍が見えたら手筈通りに。すぐ戻るから」
「ああ。可能性はあると思うか？」
「今夜が勝負だ。抜け出せなかったら、戦うしかない」
「了解」
ゾロは船の上へと戻り、キリたちはボクデンの後へ続いた。
緊迫した状況である。
アピスを拾った時、これほどの大事になるとは思わなかった。千年竜に関わり、海軍と一戦交えて、これからさらに大事になろうとしている。独特の緊張感は島民たちにまで伝わるようで、この島の全員が一丸となって動いているのが伝わる。
キリの後ろを歩きつつ、ナミは複雑な面持ちとなっていた。
利用してやろうと近付いた彼らの姿は想像していた物とは違っていて、気持ちが伝わる。
彼らが求めるのは富でも名声でもなく、ただアピスの願いを叶えてやることだけ。
一文の得もないだろうと思われる問題に自ら突っ込み、そこに宝が無くても命を懸けようとしている。不思議に思う一方で理解できない訳ではないのが苦しいところだ。
心底お人よしなのだろう。
損得勘定無しに動ける彼らはあまりに純粋過ぎる。特にそう思うのはルフィの普段の行いを見た時。腹が空けば腹が減ったと言い出して飯をねだり、驚いた時には大口を開けて感嘆の声を発し、楽しい時には気兼ねなく笑う。まるで子供のような仕草だが羨ましくもあった。
良くも悪くも彼らとの航海は一人の頃と違い過ぎる。
思案していたナミはいつしか視線を下ろしており、キリの声でハッと我に返る。
「ナミ、あそこみたいだ」
目線を上げると村のすぐ傍、山の麓。
岩壁の眼前にある人間大の岩が目につき、ボクデンはその前で足を止めた。

どうやらそこが目的地らしく、振り返った彼はそれ以上先へ行こうとしない。
「すまんが、これをどけるのを手伝ってくれんか。この歳になると一人では厳しくてな」
「下がっててください。ボクがやりますよ」
岩に歩み寄ったキリは懐から取り出した紙を使い、岩を押しやって横へずらす。
見事な挙動だ。驚いたボクデンは目を丸々とさせる。
「ほう、これは驚いた。悪魔の実の能力者か」
「ええ。そう言えばシルクに悪魔の実を渡したみたいですね」
「どうせたまたま手に入れただけで、使い道もなかった。喜んでもらえたようじゃしあれで納得してもらえるなら安いもんじゃ」
「言っとくけどもらったのは私だからね。シルクにも言ったけど代金はもらうわよ」
「わかってるって。なんとかやりくりするよ」
岩を押しやって現れたのは小さな洞穴。
そこへボクデンが入っていき、二人も続く。
洞窟は狭く、長く続いていた。細い道を一人ずつ歩いて並んで進み、一列になったせいかしばらくは会話も無く、ずいぶん奥まった場所へ到達する。
目的地に着くと少し広いスペースに出た。
夜の時間も相まって薄暗い空間。それなのにそこかしこに不思議な光がある。
どうやら岩壁に埋まった水晶が独りでに光を放っているらしい。どことなく幻想的な風景となって、その岩壁にある壁画が確認できる程度の明るさだった。
千年竜に関する事柄を描いた壁画。
答えはここに揃えられている。後は正しく理解するだけ。
そんな状況下でナミは光を放つ水晶に気を取られていた。
「これは？」
「大昔からある水晶でな。暗闇にあれば光を放つ。なぜ光るのかは

わしらにもわかっておらん」
「すごくきれい……ねえ、キリはこれ知ってる？」
「あいにく聞いたことはないね。盗まないでよ。壁画が見えなくなる」
「盗むかっ。私は海賊専門の泥棒。他の人からは盗まないの」
「海軍は？」
「あんたたちが盗めば、あんたたちから盗めばいいのよ」
「なるほど。ご立派な考え」
気楽に告げてキリが壁に歩み寄る。
見事な壁画だ。長く残されていただろうにほとんど傷つかず残っている。長い間、大事に保管されてきたのだろう。島民たちの努力が見えるようだった。
岩を削って描かれた絵は千年竜を表している。
量は膨大で、とても即座に解読できる物ではない。
聞けば島民たちでさえすべてを理解した訳ではないと言うのだ。特にリュウ爺がどこから来たのか、ロストアイランドの位置は正確に理解できていない。だがヒントとなる場所は判明しているらしく、壁画を見上げるキリにボクデンが指差して教えた。
「おそらくあの辺りがロストアイランドの位置を示す。だがいまだ理解できていないのだ」
「あれね。確かに絵だけじゃ解読は難しそう……」
指された場所に記されていたのはたくさんの竜が集まる一つの島。おそらくそれ自体がロストアイランドを示す。問題はそれがどこにあるのかという情報だ。
周囲にある絵を見れば、竜たちを囲うように四方へそれぞれ違う何かを示す物がある。
上には雨と荒ぶる波。
右手には奇妙な動物が小さく、いくつか描かれて。左手には高い山々。
そして下にあるのは海面から顔を出す巨大な生物。
わかりにくいとはいえ風化していないため、判別は可能である。

キリは口元に指をやって真剣に考え始めた。
「どう？　わかるの？」
「さぁねぇ。でも、わからなかったらこの島から離れられない」
「確かに。こういうのやったことある？」
「正直経験はない。ただ、昔ちょっと歴史に詳しい人と話したことはある。幸いこれは文字じゃないから理解しやすいし、考えればなんとかなるんじゃないかな」
「そう……私にできる事ってあるかしら。何か手伝える？」
「海図は持ってきた？」
「ええ、一応ね」
ナミは頷くとスカートの背面へ差していた海図を取り、地面に広げる。
オレンジの町から続く航路と軍艦島、そこへ加えて嵐が起こった周辺のみしか描いていないが、位置を探るには海図が必要になる。やはり航海士の彼女が居てくれて助かった。キリでは海図を描くことまではできず、海里を図るのは難しい。
真剣に海図を見る彼女もそれを理解しており、今や不満の一つもなく思考を働かせている。
壁画を眺めつつ、キリが尋ねた。
「海軍と戦った嵐の地点、この島から見て方角は？」
「ちょうど北よ。海軍支部もそっちにあるって言ってたわね」
「北、上に嵐の絵か……やっぱり方角に見合った特徴が描かれてるみたいだ」
「どういうこと？」
「オレンジの町の方角は？」
「えっと、ここからだと北東。でもあの町は千年前になかったでしょ」
「うん、知りたいのはあの町じゃないんだ。ボクらがその前に立ち寄った島が、見たことない珍獣がたくさん住んでる孤島だった。あそこは多分、ここから真東」
指で壁画をなぞり、竜の巣から右側の絵に向けて進む。

こじんまりとしたサイズでいくつもの動物が描かれ、よく見ればその姿は普通ではない。どれもキリが見た珍獣とは違っている。しかし可能性はあった。もしも彼らが訪れた珍獣の島が、長い年月を独特の生態系のみで過ごしていたのならば、ここに描かれてもおかしくはないかもしれない。島自体は小さかったが他の島になかった特徴は存在した。

おそらくそこに描かれているのはどれだけ時間が経っても変わらないだろう特徴。

嵐が起こりやすい海域。珍獣の島。

後者は変化が起こる危険性があるとはいえ、見つければ記憶には残るに違いない。

そして何より左と下にある絵。それはあまりにも見覚えがある。

キリだけではない。普通に生活しているだけの者でも知り様がある、あまりに大きな世界の特徴だ。問題があるとすれば縮尺の問題だけ。それら四つが同じ距離感で描かれているとは限らない。距離だけはこの場では確かめようがないものの、可能性は高まってきたと思案する。

「左にあるこれは高い山だ。おそらく、リヴァースマウンテン」

「リヴァースマウンテン？　それって」

「そう。〝赤い土の大陸（レッドライン）〟の一角、グランドラインへの入り口だ。たとえ世界情勢が変わってもあの大陸だけはまず変わらない。それこそ千年経ってもね」

「そっか。だから壁画に残したのね」

「で、この下側、同じく千年経っても変わらない物と言えば」

「〝凪の帯（カームベルト）〟……」

キリが指先で撫でた絵を見つめ、ナミは呆然と呟いた。

その名は世界中の誰もが知っている。よっぽどのバカでなければ覚えているだろう。

振り返ったキリがにやりと笑って、同意するように頷く。

「あそこは大型海王類の巣だ。右のこれが珍獣島だと仮定するなら、大きいのを一匹だけ描いて差別化してるのも理解できる」

「それじゃあ、その四つが囲む中心地にロストアイランドがある」
「ただしカームベルトだけはグランドラインに沿う形で長く伸びてる。ある意味これはイーストブルーのどこに居ても当て嵌まる。位置を知るためには、他の三つとの距離が等間隔になる場所じゃないかな。珍獣島とリヴァースマウンテンの正確な距離がわからないけど……」
「ちょっと待って、バギーから奪った海図があるの。これなら大体の距離が推測できる」
もう一枚海図を取り出し、広げて、ナミが意気揚々と距離の計算を始める。宝探しのために盗んだ海図が思わぬところで役に立った。自信満々にペンを走らせ、迷う素振りもなく、自身が描いた海図に新たな情報を描き込んでいく。
その間にキリは静観するボクデンへ向き直った。
「ボクデンさん。ロストアイランドは海に沈んだって聞いたんですけど」
「うむ。そのため探して見つかるような場所ではない」
「まずいなぁ。たとえ場所がわかっても、海に沈んでるんじゃ到着のしようが――」
「ねえ、これ」
手を止めて海図をじっと見つめたナミが声をかけた。
位置がわかったのだろうか。
すぐにキリも傍へ駆け寄ってしゃがみ、彼女の手元を眺める。
「リヴァースマウンテンからの距離を想定して、珍獣島ってとこを同じ距離で計算したの。全部を繋ぐと、島の位置がわかる」
「場所は？」
「ここよ。この壁画は、この島を指してる」
ぼんやりした声を受け取って、キリとボクデンの眉が動いた。
それに気付かずナミはわずかに手を震わせ、千年近くその場に在り続けた壁画を見上げる。
「ロストアイランドはこの軍艦島……竜の巣はずっと、ここにあったのよ」

彼女の言葉に動揺し、すぐに呑み込むことができず、表情を変えてキリも壁画へ目をやった。
様々な歴史を記す過去の産物。まさか嘘を描いているはずもない。
ロストアイランドはここにあった。
ではなぜ軍艦島と名を改めたのか、海に沈んだという話がなぜ伝えられていたのか、謎が残る。島民たちはその話を信じて疑わず、軍艦島とロストアイランドを別物だと考えていたのだから。
キリは壁画をつぶさに観察しながら、驚愕した様子のボクデンへ問いかけた。
「ボクデンさん、ロストアイランドが海に沈んだって話は」
「先祖代々伝えられてきた。嘘は言っておらん」
「それは口頭で？　壁画で知ったわけじゃないですよね」
「うむ……じゃが」
「この情報じゃ実際に航海した人間じゃないと理解できない。隠していたのか。島民たちにまで知らさないように伝説を塗り替えていたんだ」
つまりそれは先祖代々嘘をついていたことになる。
ナミは訝しんで聞かずにはいられなかったようだ。すぐ傍のキリの横顔を見上げる。
「なんでそんなことを？　だって自分の身内を騙してるんでしょ」
「千年竜を守るため、かな。情報なんてどこから漏れるかわからないし、それだけ大事な存在だったって可能性もある。この情報じゃ島を出ない限り、ここのことを指してるとは思わないだろうしさ。ボクらが来たのは奇跡だった」
「でも……じゃあ、リュウ爺が帰りたいって言ったのは？　ここが竜の巣なら帰りたいなんて言う必要ないじゃない。だってもう居るんだから」
「それだけがわからない。実際、ここに竜の巣っぽさなんてないからね」
「何よ、竜の巣っぽさって」
「だってどこからどう見ても普通の村じゃないか。ここが竜の巣

だって言われてもそれこそ信じられないよ」
「確かにそうだけど」
キリが立ち上がり、続いてナミも海図を持って立ち上がった。
たとえ彼らの考察が当たっていたとしても、そこへ辿り着く方法はわからない。壁画を見回してみても他に有力そうな情報はなかった。示しているのは位置のみである。
情報漏えいをかなり拒んだのだろう。徹底した管理だ。
島民の話に壁画を加えても竜の巣の詳細は知れず。
完全に手詰まりとなって彼らは立ち尽くした。
「どうするのよ、これから」
「想像以上にまずいね。この島を離れちゃいけないみたいだし、かといって次に海軍が来たら今のボクらじゃ――」
そう呟きかけた時、外から砲撃音が聞こえて、洞窟内に反響した。
敵襲ではない。港からの空砲、ゾロが合図を出したのだ。
それはつまり敵が来たと知らせる音。
一番厄介な状況になったと知って、キリとナミは顔を見合わせ、互いに表情を歪めた。

＊

「よっ、と」
自宅の中、服を着替えたアピスは本棚から一冊の本を手に取った。
リュウ爺と話せないかと想い、何気なく読んでいた悪魔の実の図鑑。過去に能力が判明した物が並べられているその中からヒソヒソの実を見つけ、村を襲おうとした海賊をリュウ爺が潰したことにより、たまたま実を手に入れたのだ。
リビングへ戻って小さな蝋燭の灯りに照らされるシルクの下へ駆け寄る。
彼女が悪魔の実を食べたと聞いたのは船上。祖父が持っているのは知っていたがヒソヒソの実ではなかったため気にしなかった物だった。

手渡しで彼女の手に本を預け、暗闇の中でアピスは笑った。
「はい、これ。もう見つかってる物だったら載ってるはずだよ」
「ありがとう。ごめんね、忙しい状況なのに」
「ううん、みんなにはお世話になったもん。それに悪魔の実を食べたら、自分がどんな能力なのか気になるのは当たり前だって知ってるから」
「そっか。アピスも能力者だもんね」
椅子へ座って、テーブルへ本を置いたシルクは神妙な面持ちを見せる。
片鱗は見た。仲間に相談もした。
後は自分の力を改めて再認識して、操ることが重要だと考える。
どことなく緊張した面持ちの彼女を見やり、心配そうなアピスが横に立って腕へ触れる。
「大丈夫？　実の能力にもよるけど、食べた人は体質が変わるらしいから。辛い所とかない？」
「大丈夫だよ。痛くもかゆくもないから。強いて言うなら、ちょっと軽くなったくらいかな」
「キリも体重軽くなったって言ってた。シルクも似たような能力なのかな」
「どうだろう。体重が変わった感じはないけど、なんとなく前より動きが速くなったって言うか、そんな感じだと思う。うーん、やっぱり自分じゃわからないものだね」
「私も体質変わらないタイプなんだ。ひょっとしたら似てるのかも」
しばし緩んだ空気の中で話していた。
危険な航海を共に生き残って距離がぐっと近づいた様子。そうして話すのも緊張感はなく、互いに無駄な力のない笑みを浮かべている。
そうしていると家の外から扉の内側を覗き込み、ルフィが声をかけた。
ここへ来たのはあくまでも寄り道。目的地はリュウ爺の居る洞窟

である。
シルクの能力を調べるために来ただけで、本当はすぐに行かなければならない。
「おーい、まだかぁー？」
「あ、ごめんルフィ」
「先に行ってて。すぐ追いつくから」
シルクが微笑んで言うと、アピスは一瞬戸惑った顔を見せたがすぐに頷く。
今は一刻を争う時だと知っている。時間はかけていられない。
意を決してアピスは先に行くことを決め、出口へと駆け出した。
「じゃあ先に行ってるから、また後でね」
「うん。すぐに行くよ」
家を出たアピスはルフィの手を引っ張って駆け出した。これから山を登って洞窟を目指す。リュウ爺はきっと洞窟の奥へ進んで、島の反対側から海へ出るのだろう。今すぐにでもそこに合流したいと思っていて、彼の顔が見たかった。
二人を微笑で見送った後、改めてシルクは図鑑に向かい合う。
自分が食べた実の外見は覚えている。
問題はページに描かれているか。少しの緊張感に吐く息が多くなった。
深呼吸して心を落ち着け、ゆっくり本を開く。躊躇している場合ではない。すぐに自分の能力を知って仲間たちに合流しなければならないのだから。
一枚ずつページを捲っていく中で、様々な実があるのだと知りながら見つからず。
ついに自分の実を発見した時にぴたりと手が止まり、鼓動が一際速くなったのを理解した。
「あった……」
本を手元へ引き寄せ、蝋燭を差した燭台も持ってくる。
開かれたページには実の名前と能力が記されていて、細かな文字を読み進める。

彼女はこの時、今の自分について知った。
カマカマの実のカマイタチ人間。
分類は超人系（パラミシア）。自らの体から風を発生させ、カマイタチを放つのだという。風を操れるというのなら自然系（ロギア）ではないのかと思ったが、それとも違うらしい。彼女はあくまでも人間のままだった。
「そっか、かまいたちが飛ばせるから、あの時のシロクマに――」
攻撃が届いたのだ。そう考えるのと外から轟音が聞こえるのはほぼ同時だった。
シルクは咄嗟に扉の方向を向き、次いで反射的に火を吹き消す。
立てかけていた剣を手に取り、本を置き去りに外へ急ぐ。
扉をくぐって外へ出て、アピスの家から海を眺めると、沖に海軍の軍艦が並んでいるのが見えた。数はこちらの比ではない、前方だけでも十隻はあるだろうか。
遠目に見ても物々しい雰囲気はまるで島を滅ぼそうとしているかのようにも見える。
想定していた最悪の状況となってしまった。
居ても立ってもいられず、シルクが駆け出す。こうなってしまっては能力について調べている場合ではない。まだ一部しか知れていないがそれも仕方なかった。
まさか村を守るために海軍と戦う羽目になるとは思っていなかったが、一度決めた以上はもはや譲れず、立ち止まることさえできない。守るのは一つではない。小さな村と、リュウ爺と、そして大事な仲間。それらを守るためには敵を討たねばならないと知っている。
今は力も手に入れた。
まだ使いこなせないだろうが強くなるきっかけを手にしたのだ。
決意した顔でシルクは自身の船へ向かって走り、不思議と軽く感じる脚を精いっぱい動かす。

蘇る伝説

天へ響く空砲の音を聞き、洞窟へ入る直前ルフィが振り返った。
合図を覚えているおかげで状況が変わったのだとわかる。自然と柔和な笑みが消えて真剣な表情。体に纏う雰囲気が変わってアピスの表情も変化した。
海を見ればすでに敵船が見えていて、戻る必要があるのだと理解する。
最悪の展開。彼もまたそれを理解していたようだ。
「アピス、おまえはリュウ爺のところに行け！」
「ル、ルフィ……」
「心配すんな、おれたちがなんとかする」
隣に居たアピスへ笑いかけた直後、走り出した彼は真剣な顔で前を見つめた。
現在地から船までは真っ直ぐ進めば着ける。山の上に登っていたということもあって自身の船も見えていて、方向音痴だと自称する彼でも迷いはしなかった。
風のように駆け抜け、身体能力の高さ故か到着は驚くほど早い。
それでもクルーたちそれぞれの立ち位置からすれば最も遠い場所に居て、船に乗り込んだのは一番最後である。その頃にはすでに全員が船に戻って出航準備中。村の傍に居ては危ない、こちらから迎え撃って沖で戦う。それが事前に決めた唯一の作戦。
甲板へ戻ったルフィは全員の顔を見渡した。
キリ、ナミ、ゾロ、シルク。一人も欠けずに揃っている。
こちらは帆船が一隻にクルーは船長を含めて五名。対する敵は、彼らの船よりも大きな軍艦が目に見えるだけで十隻、その上に乗る海兵は総勢で数百を超えるだろう。彼らが如何に強かろうが、正面から戦って勝てる相手ではなかった。
それを知りながらもすでに見つかってしまっている。
逃げ場はなく、体勢を立て直すことさえできない。
選べる道はたった一つ。リュウ爺を守るためには戦うしかなかっ

た。
望遠鏡で敵船を見るキリへ歩み寄ったルフィは、無謀を承知か厳しい表情で声をかける。
「キリ、こっちから行くんだろ？」
「そうするしかなさそうだね。多分連中、島を包囲するつもりだ」
「じゃあリュウ爺が逃げるのも無理か」
「倒さない限りはおそらく」
望遠鏡を下ろしたキリは苦笑する。
かつてこれほどの窮地を感じたのは、仲間を失った戦闘の時くらいの物である。その時でさえ、一隻対一隻で海上で睨み合った。これほどの戦力差は初めてだった。
心底まずいと思ったのは初めてかもしれない。
胸騒ぎがする。しかも認めたくないが嫌な感覚だ。
苦笑はすぐに消えてしまい、キリは真剣な眼差しで遠方の敵船を眺める。
「これは流石に死ぬかなぁ……」
「んなことねぇ！　まだ始まったばっかなのにこんなとこで死ねねぇぞ。おまえがおれを海賊王にするんだろうが」
「わかってる。ふぅ、やってみるしかないか」
船は動き出して桟橋を離れ始めており、ナミが舵を取って船首の向きが変わりつつある。
それを知ってキリは全員に聞こえるよう言った。
「狙いは正面の一番装飾がきつい船だ。おそらくあれに指揮官が乗ってる。間違ってなければ第八支部のネルソン・ロイヤル、海戦には滅法強いらしい」
「それじゃやっぱりこっちが不利なんじゃないかな」
「だからこそ沈められない内に指揮官をやる必要がある。ボクらが勝てるとすれば、敵将の首を獲って指揮系統を滅茶苦茶にしてやることだけだ」
相当危険な状況なのだと伝わる。すでに全員の顔つきが違っていた。

これだけ焦りを抱えるキリは見たことがない。当然ではあるのだが、表情が引き締まり、笑みが見えないのが不安にさせた。
余裕がないところを見るとそれでも勝ち目は薄いと思っているのだろう。
海の上での戦闘は今までと勝手が違う。
個人の力ではなく組織としての力だ。上手く船を操った方が勝てる。その上、彼らの船には大砲を操れる狙撃手が居ない。扱い方を知っているキリでさえ、装填と整備の方法を知るだけで、照準の合わせ方や目視で敵との距離を測る力は決して優れていない。
最悪の状況は、こちらが反撃できないのに敵の攻撃ばかり続く場合。
今この船には不安要素しか存在していない。あまりにも人数が足りな過ぎる。
やはりキリの表情は優れなかった。
「さっきと同じだ。ギリギリまで接近して体当たりする。その後ルフィとゾロが敵船へ乗り込んで、ボクらは船が沈まないように努力する」
「それで勝てんのか？」
「勝てる確率は、せいぜい十パーセント」
「低いな……そんなもんか」
「問題は敵船に接近できるかどうかだ。二人の強さなら協力すれば海兵にだってそう簡単には負けないと思う。だから最悪の場合、この船を捨てる覚悟で敵に突っ込むしかないだろうね」
「聞けば聞くほど辛くなってくるね。でも逃げるわけにはいかないし……」
「勝負は多分一瞬で決まる。全員気を緩められないよ。油断したら全員死ぬだけだ」
あっさり告げられた言葉にゾロが唸る。想像以上の低さだった。憂鬱に思ったのかシルクも同じように表情を歪めていて、前方の景色に溜息が漏れそうになる。
しかしキリの顔を見れば冗談や嘘ではないと気付く。

落ち込んでいる暇もなければ考える時間だって与えられていない。
どうやら混じり気無しに窮地に立たされたようだった。
「死ぬ気でやるしかないね。ルフィ、勝てると思う？」
「勝つ！」
「だそうだから、みんな頑張るように」
ようやく笑みを取り戻したキリが肩をすくめる。
確率などもはや口にしていられない。どちらにしろ海賊旗を掲げている限り、相手が海軍ならば勝利以外はすべて悪い結果になるだけだ。
後ろに退く道はなく、ただ前に進むだけ。
敵は着実に島を目指して前進を続けてくる。彼らはその敵を目指して進んでいた。
徐々に距離が詰まっていく中で全員の緊張感が増していく。
耐え切れないほどの空気に船上が包まれ、舵を握ったまま黙り込んでしまうナミは彼らの顔を確認し、胸の内のざわめきを無視できなくなっている。このまま、全員無事に生きて帰れればいいのだが。募る不安からそんな想いを抱かずにはいられない。
「ボクとルフィの能力なら船の防御ができる。ただし反撃はほぼ砲撃だ。シルク、能力は？」
「実の名前はわかったよ。カマカマの実の、カマイタチ人間だって」
「かまいたちか……ロギアに近い能力かな」
「私もそう思う。あの時、もう使ってたんだよね」
そう答えたシルクは視線を落とした。
剣の柄を握りしめて見つめる。自分で気付かぬ内に使用した経験があるのだ。
それを自分の意志で使えるかはわからない。あの時と今では状況が違う。仲間を守りたいという強い気持ちは同じ、だが目の前に剣が通用する敵が居るのと、帆船が居るのではあまりにも違っていた。まさか剣と能力で軍艦を斬れるとも思っていないのだから。
船を守るくらいならばとは思う。だが使えなければ、仲間たちに危険が及ぶ可能性もある。

不安を抱えたシルクにキリが言った。
「心配しなくても悪魔の実を食べて弱くなることはまずない。大事なのはイメージと覚悟だ。確固たる意志があればきっと使える」
「そ、そうかな」
「能力は鍛えれば鍛えるほど強くなるものだ。土壇場で試すのは案外ありだったかもね」
「火事場の馬鹿力ってやつ？　そうだね、もうやるしかないもんね」
気合いを入れ直したシルクの姿が見れた後、船の後方で舵を握ったナミが告げた。
「あんたたち、そろそろ砲弾が飛んでくる距離よ。数発なら大丈夫だろうけど、こっちも限界があるんだからしっかり守ってよね」
「任せてナミ。私も船の防御に回る。あの時の感覚が使えれば、きっと砲弾だって斬れるはず」
シルクがゆっくりと剣を抜いた。
他の者たちも所定の位置につき、戦闘準備は整う。
ルフィは指を鳴らして敵船を見据え、キリとゾロは大砲の準備をしてその時を待つ。
「こっちから撃って当たるもんなのか？」
「当たらなくてもいいんだ。威嚇して平静を乱せればそれで十分」
「乱せなかったら」
「勢いで突っ込む」
「ご立派な作戦だな。気が遠くなりそうだぜ」
敵船の並びは少し前と変わっている。
おそらくは指揮官の船だろう、金色に彩られた鬼を船首の装飾とする軍艦の前に、左右の軍艦が出てきている。狙いを理解して守ろうとしているようだ。これでは接近も難しくなる。
他の船は一味の船を囲うため、大回りで動いて回り込もうとしている。
すべてに気を回すのは不可能だ。狙いはあくまで一隻のみ。
多くの軍艦を無視しようとする彼らはただ一直線に進もうとした。
そうして見る見るうちに近くなっていって、敵船が先に砲撃を始め

る。まだ届く射程ではない。それでも開戦とするには十分なタイミングだっただろう。
「来たぞ！」
当たるコースではなかったため、砲弾は海面へ落ちて高く水柱を上げる。
前方の二隻がわずかに船体を横へ逸らし、一味の船を挟み込もうとするかのように船首の向きを変えていた。船体の横っ腹が見えて、無数の砲門が見えるようになる。
一斉に砲撃が始められた。
飛んでくる砲弾は十や二十ではない。
前方の二隻、さらに距離を開けて彼らを挟んだ二隻からの攻撃で、轟音が連続する。
すべてが当たる訳ではないが迫力は十分だ。
防御を担当するルフィとシルクが縁へ駆け寄り、迷わず能力を使用する。
「ゴムゴムの風船！」
「ええいっ！」
軌道から船に当たると予想した一発を選び、ルフィは空気を吸って腹を膨らませると砲弾を弾き返した。敵船までは届かない、だが船を守ることには成功する。
同じく、シルクは能力を使用するイメージを持って剣を振っていた。
必ずできる。自分に強く言い聞かせた結果、確かに風が起こる。
刀身から放たれたのは視認できない斬撃と言っても相違はなく、横薙ぎに振るわれた軌跡から広範囲に渡って風が走り、数発の砲弾を一斉に切り裂いた。自身の想像を遥かに超える。結果となって現れた彼女の能力は、たった一度で使えると思える物だ。
砲弾を切り落としたシルクは笑顔を咲かせ、船を守れたことに安堵する。
「やった、使えたっ」
「やるじゃねぇかシルク！　いいぞ、その調子だ！」

嬉しそうに告げたルフィは別の砲弾を蹴り落としつつ彼女へ声をかける。
その能力、この状況においては特に役立つ。
攻撃の範囲は広いらしく、それだけでなく鉄製の砲弾を軽やかに切り裂いて見せたのだ。ただの風とは違う圧倒的な攻撃力を持ち、尚且つ風の流れなど視認できる物ではない。
続けて一撃、振ってみれば、やはり風は刀身から駆け出して宙へと放たれる。
またも見事にいくつかの砲弾を切り捨てた。
予想外の頼もしさを心強く思いつつ、少し希望が見えた気がする。
二人が必死に動く間にキリとゾロが慌ただしく甲板を走り、並べられた大砲に一つ一つ着火していった。
「ゾロ、狙いなんてどうでもいいからとにかく着火だ！　全部に火をつけるんだ！」
「今やってる！」
次々に火を点けていき、こちらも連続して砲撃音を響かせる。
狙いはほとんどつけられていない。放たれた砲弾は敵に当たることなく、数発は届きもせずに海へ落ちた。しかしこれにより攻撃意志はあるのだと伝えることができただろう。近付けば迎え撃つとはわかったはずで、多少なりとも時間稼ぎにはなる。
ただし今接近されると確実に沈められる。砲撃が威嚇射撃、ただのハッタリであることがバレる前に本船へ接近して指揮官を倒す必要があった。
幸いにも前方は開けている。
横へ回り込もうとする二隻が離れたことで、本船が真正面に見えた。
それだけ包囲が完成しつつあるという事実ではあるものの、もはや待っていられないし、構ってもいられない。玉砕覚悟で突っ込むのが生き残る術だ。
次々飛んでくる砲弾に気をやきもきさせながら前だけを向く。
距離があるせいで幸いにもまだ直撃はしていないが、それも時間の

問題。
徐々にでも距離を詰められれば届くようになってしまう。
その時、ナミが叫んだ。
「キリ、後ろに回られた！」
後方で舵を握るナミの言葉に、素早く反応したキリが船の後部へと走った。
半ば跳ぶようにして後方へ辿り着き、紙で武器を模り、すでに放たれていた砲弾を見つけると全力で投げつける。硬化した紙は槍の如く宙を駆ける。狙いが正確だったため砲弾と紙が空中で激突し、ギリギリの所で軌道が無理やり変えられた。
砲弾は海面を打ち、高い水しぶき。
見れば統率が取れた動きで十隻の軍艦に囲まれており、もはや逃げ場など残されていなかった。
わかっていたこととはいえあまりにも速い。
キリは自分たちの数秒後を幻視した気がして、悔しく思いながら歯噛みする。半ば無意識下での行動。それでは負けを認めているようなものだとすぐに頭を振って考えを打ち払った。
「ついに逃げ道が無くなったわね……」
「このまま真っ直ぐ進むんだ。こうなったら船が壊れてでも前に進むしか――」
船の前方には一つだけサイズが違う軍艦。あそこにさえ辿り着ければ、と思う。
敵船の動きを警戒しながらキリがちらりと振り返れば、本船がついに動き出していた。
獅子を模した船首の口から、大砲が飛び出したのである。
それがまた妙な形をしていて、三門の大砲を一つに纏めたような形。
不幸にも見覚えがあった。咄嗟にキリは驚愕し、動く前に悲痛な声を発した。
「回転砲……!?」
本船が攻撃態勢に入ったことを確認して、急いでシルクが船の前方

へ走った。
船首の傍に立って剣を構える。
奇妙な形の大砲は初めて見るが、今ならやれるという自信がある。この力なら仲間を守れるのだ。今度は以前のように負い目を感じずに済む。
しかし、敵の行動は予想とは違っていて。
三門の大砲が一発放つごとに回転し、連続で三発の砲弾を発射すると同時、包囲していた軍艦すべてが一斉に砲撃を開始して、その様はもはや砲弾の雨。正面だけを守ればいいという状況ではない。いくつも聞こえた砲撃音に一瞬我を忘れ、シルクの注意が逸れた。
守らなければ、という意志から気付けば腕を振っていた。だが変化は腕から如実に伝わる。能力は確かに使えたのだがまるでそよ風で、斬撃とは成り得ない微風が放たれた。
「あっ――」
呆然と声を発した直後、船体に無数の砲弾が直撃した。
守ろうとしたルフィとキリであっても防ぎ切れない。嵐の如く猛威を振るった砲弾の群れがあっという間に帆船を穴だらけにしていき、轟音の次にまた轟音、木材が引き千切られて飛んでいく音が数え切れないほど耳の中に飛び込んできた。
五人は為す術もなく船の上で伏せる。
衝撃で揺れる船上では立っていられず、直撃していないのは奇跡だった。
装填のためか、攻撃が一度止んだ時。
ほんの数秒で、船はみすぼらしい様子に様変わりしており、浮かんでいるのがやっとの状態。立ち上がった彼らは呆然としていて、どうあっても拭えない絶望感に浸る他なかった。
「ハァ、みんな大丈夫か？」
「う、うん。なんとか」
一番に口を開いたルフィが全員の顔を見渡せば、浮かない表情ばかり見える。
士気は明らかに下がっていた。

あまりに無謀だったと認めざるを得ない。やはり戦力に差があり過ぎた。敵もそう甘くはなく、むしろ思考を読まれて誘い込まれた様子すらある。

海戦が得意という話、嘘ではない。

冷酷無慈悲な砲撃はあまりに慣れていた。この分ならば最初の数発は油断を誘うためにわざと外していた可能性も高い。そこまで近付かれた訳ではなく、通常では外れてもおかしくはない距離感で、一発も外さず全弾ぶち込まれたと言ってもおかしくはない状況だ。

呆然と立ち尽くす彼らはしばし敵船を眺め、何かを言いたくても言葉が出なかった。

戦力が違い過ぎる。

これが海の上での戦い。海賊として生きるならば決して逃れられないもの。

船上が緊迫した空気に包みこまれ、その中でなんとか話せたのはルフィとキリだ。

「もうこの船は動かせない。戦法を変えるべきだ」

「敵の船まで飛ぼう！　それしかねぇだろ！」

「いや、大砲の数が多過ぎる。この距離からじゃ撃ち落されるのがオチだ」

「じゃあ、どうすんだ」

焦りを見せながら落ち着こうとし、声を抑えたルフィが問う。その言葉にキリはいつも通りとはできず、すぐには答えを返せなかった。

思考がぐるぐる回る。

生き残る方法。勝つ方法。様々なパターンを考えるが焦りが募るばかり。

何一つとして思い浮かばない。

そんな彼を見るのは初めてだった。

苛立った様子で歯を食いしばり、血が滴るほど拳を握りしめ、それでも言葉が出ない。この戦いに勝ち、尚且つ全員が生き残る術が見つからなかったようだ。焦燥は傍から見ても明らかで待つのが辛くなるほど。言葉を出すことが驚くほど難しい。

緊迫した状況下で時間が静止していると、敵の準備が終わったらしかった。
再び砲撃の音が聞こえてきて、咄嗟にゾロが鋭く叫んだ。
「伏せろ！」
もはや防御する余裕もなく、全員が一斉に甲板へ伏せた。直後に再び砲弾の雨が船を穿ち、簡単に貫き、また大量の木材が宙を舞った。
船は大きく揺さぶられ、伏せた彼らの体は為す術もなく転がる。
その結果、船体が真っ二つに割れて前部と後部に別れてしまって、二手に分断されてしまった。
ルフィ、キリ、ゾロは船首側で倒れており、後部にはナミとシルクが取り残される。
いよいよ船が大破してしまって沈没寸前。
敵にとっては楽勝ムードで、敵を包囲したままとあって余裕綽々の状態。次弾の装填も余裕を持って行われる。言わばこれは戦闘ではなく処刑。敵の死が決まったも同然だった。
対する彼らの動揺はさらに大きくなり、とても冷静でいられる状況などではなくなる。
「うっ、くっ」
「おいキリ、おまえ血がっ」
「大丈夫。ちょっと切っただけだから」
傾いた船体で三人が起き上がった。
その時、ルフィがキリの額から血が流れていることに気付く。
どうやら宙を舞った木材で切ったらしい。深手ではないが彼の怪我は初めて見て、髪の一部が赤く濡れてしまい、思いのほか多量に流れて顔の右側が血濡れとなる。
いよいよルフィは居ても立っても居られなくなってきたようだ。
彼の仲間が海上で敵と戦い、船ごと海に沈められた話は以前聞いている。そうはさせないと約束したのに、このままでは全員が海の藻屑だ。それだけは認めることができない。
立ち上がったルフィは敵船を見つめ、怒り心頭といった顔で呟いた。

「あの船潰せばまだ勝てるんだろ。だったらおれが行く。あいつさえ踏み沈めれば……」
「おい待てよルフィ。ここからあそこまでどんだけ距離があると思ってんだ。どうやって飛ぶかは大体わかるがな、もし届いたとして大砲が全部こっち向いてんだぞ。キリじゃなくても途中で撃ち落とされるなんざ考えりゃわかることだろ」
「避けるか跳ね返せばいいじゃねぇか！　このままだと全員死んじまうんだぞ！」
「バカが、それができりゃ最初っからやってるだろ！　相手は訓練された軍隊だ、そこら辺の海賊とは違うんだよ！」
「じゃあ撃たれんの待ってろって言うのかよ！　おれはそんなのいやだ！」
「そうは言ってねぇ！　海に落ちたらおまえは泳げねぇんだ！　少しは考えて――！」
「二人とも落ち着いて。ここで争っても意味はない」
二人の間にキリが割って入ったことでいがみ合いは一時中断された。しかし今まで言い争いをしたことがない二人の姿だ。この場の緊迫感を感じずにはいられない。
だからと言って動き出せなかった。
何をすればいいのか、どうすればいいのかわからず、途方に暮れてしまう。
空気はますます悪くなるばかり。こうしている間にも、敵はとどめを刺す準備をしているはず。
一方で後部に隔離された二人もまた、平静を保てる状態ではなかったようである。
「まずいっ。このままだと……！」
「あ、ちょっとナミ！」
突然駆け出したナミは扉を蹴破り、船内へと赴く。
壊れて沈みかけているそこは浸水も多く、すでに半ばまでが海中にある様子。
内部に入るのはあまりにも危険だったがナミは慌てる様子でちっ

とも気にしない。
傾いた中で階段を駆け下り、ある一室に辿り着いたナミは外れかけた扉を蹴りつけた。
そこは今まで手に入れた宝を保管していた一室だった。すでに海水が入り込んで宝は水に浸かっている。本来ならば命の危険さえ感じる光景。閉じ込められれば命はないが、そんなことはお構いなしとばかり、海水に足を踏み入れたナミは全ての宝を持ち出そうとしているようだ。
慌てて追いかけてきたシルクがその姿を見つけ、反射的にナミの腰へ腕を回し、強く抱き着いて止めようとする。だがナミは必死の形相でやめようとはしない。
「ナミ、危ないよ！　この船もうすぐ沈んじゃうから、外に出ないと！」
「離してよ！　私にはこれが必要なの！」
「お宝ならまた見つけられるでしょ！　だけど今死んじゃったらもう二度と探せないんだよ！」
必死に止めようとするシルクへ向き直って、その肩を掴んだ。
ナミはかつてないほど必死な表情で叫び、今まで隠し続けた胸の内をさらけ出す。
「私の村を救うためなの！　みんなを助けるためにはこれしかないのよ！」
思わぬ言葉と悲痛な声に、シルクの思考は一瞬停止した。
その直後のこと。
三度行われた一斉掃射によって更なる砲撃が降り注ぎ、船は完全に崩壊した。
メインマストが半ばほどからぽっきりと折れて、天辺に掲げられていた旗は衝撃からマストを離れてしまい、風に乗って島の方向へと飛んでいく。やがて麦わら帽子のジョリーロジャーは砂浜へと辿り着き、ふわりと力なく落ちて動かなくなった。
そこへ、息を切らしたアピスがやってくる。
一度はリュウ爺の下へ辿り着いたはずの彼女も、友達のことが気に

なって仕方なかった。
洞窟内に居たリュウ爺へ少しだけ待つように頼み、慌てて外へ出てみれば砲撃を受けてボロボロになる船。共に食事し、海軍と戦い、嵐を乗り越えた船が無残な姿に変わっている。
何ができるかもわからずに走り出し、砂浜へ辿り着く頃には轟沈していた。
呆然と立ち尽くしたアピスは言葉も出ず、震える手で口を押えるのが精いっぱいの動きだ。
「あぁ、そんな……!?」
アピスは砂浜へ落ちた海賊旗を持ち上げる。
よろめいた足でなんとか歩き、かつて船にあったはずのそれを見ると、凄まじい物悲しさを感じた。初めて見た日はそう遠くないというのに、なぜこれほど愛おしくなるのか。
ルフィたちがどうなったのかわからない。
船の状態を見たところ、死んだのかもしれないと思うのも仕方なかった。
痛いほどに胸が苦しくなる。
海賊旗を胸に抱きしめ、溢れ出した涙が頬へ伝い落ちる。
俯いた彼女は絞り出すような声で呟いた。
「助けて……」
誰を助けて欲しいのか、何をして欲しいのかは自分でもわからない。
ただ彼らに死んで欲しくなくて、込み上げる気持ちを抑えられなかった。
それを言ってはいけないと知っている。
だが今この時だけは、堪えきれない。
「助けてよ、リュウ爺ッ!!」
自分が助けたいと思っていたその名を、感情のままに大声で叫ぶ。
直後、懐かしさを感じるあの力強い咆哮が、島中へと響き渡ったのだ。

蘇る伝説（2）

海軍第八支部提督、ネルソン・ロイヤルはご満悦だった。

何やら一隻だけで挑んでくる馬鹿な海賊も居たが、いつも通りあっさり倒すこともできた。その上でようやく望みの品である千年竜の骨が手に入るのである。これでにやけずにはいられない。

その男、でっぷりと肥えた男で自力では歩くのも一苦労といった巨漢。

権力に身を任せ、日々の鍛錬すら怠った海兵らしさなど皆無な人物。

そんな彼でも第八支部基地長の地位と海戦における指揮能力は評価されているらしく、今回のような暴挙に出ても咎められることはない。

にやけた面で島を眺めるネルソンは、ワイングラスを片手に余裕を称えていた。

「提督。海賊船の排除、完了しました」

「うむ。我が艦隊に挑もうなど不届き千万。我が艦隊に勝てる海賊など存在しないでおじゃる」

自慢げに言ってグラスを傾ける。

溢れるのは大きな自尊心。自らの敗北など考えていない、傲慢とも思える態度だ。

中身を飲み干した彼は報告を続ける海兵に対し、冷たいとも思える態度で端的に答えた。

「標的は船の残骸によじ登り、まだ生きている模様ですが」

「撃て」

「は？　しかし素性も知れない相手に――」

「海賊なのでおじゃろう？　なら生かして帰す必要などないでおじゃる」

持っていたグラスを傍らへ捨て、パリンと割れる音がする。

それが何を意味するのか。上司に逆らった部下の末路を伝えているようで、海兵は青ざめる。

ネルソンは改めてにんまりした顔で言った。
「それとも、命令に背く気でおじゃるか？」
不思議と寒気すらする気がして、答えなど一つしかない。
海兵は即座に敬礼し、彼の意向に沿うよう行動することを決めた。
これこそ彼の権威を膨れ上がらせた所業である。拒めば命の保証はない。暴走した権力は部下たちに恐怖となって伝わっており、今や逆らえる者など一人もいなかった。
「はっ、了解しました。では直ちに砲撃を行います」
そう呟いた途端に島から巨大な咆哮が聞こえた。作業していた者たちさえも手を止めてしまい、驚愕して、その声は無視できなかった。
中でもネルソンだけは反応が違って、歓喜を表して両手を上げる。
待ち望んだ存在。探し続けた伝説。
やはり存在したのだ、この軍艦島に。
嬉しそうに頬を緩ませた彼は弾む声で語り出す。
「おぉ、おぉぉっ！　あれこそ千年竜の雄たけび！　やはりここに居たのでおじゃる！」
喜んでいると島の全景から、巨大な影が飛び立ったのが見えた。
夜の闇の中、厚い雲が天を覆って月明りさえない環境で、如実にその威容が伝わる。
遠方から飛んでくるのは間違いなく千年竜だ。
不思議なことに、幸か不幸か、呼ぶまでもなく自らネルソンが乗る軍艦へと向かってくる。その速度は速い。鳥の如く、軽やかながらしなやかな姿で飛行する。
瞬く間に頭上へ現れたリュウ爺を目にし、ネルソンが天へと手を伸ばした。
「ついに竜骨が、永遠の命が――あれ？」
呟いた直後、自重を利用して落下してくる千年竜の姿に呆気に取られ、悲鳴を上げる暇もなく、甲板が踏み抜かれた。巨大な船は一瞬で真っ二つに折られたのである。
沈没するまでかかった時間は、攻撃を始めてたった数秒。
あっという間に海の藻屑と化してしまった軍艦はバラバラになっ

て海へ散らばり、提督の姿は消えた。これにより海の上に取り残された艦隊は混乱し始めることとなる。
突如現れ、攻撃を始めた千年竜。
たった一匹とはいえその威容は人間に抗える物ではない。
凄まじい光景に誰もが息を呑んで、そして動揺した。
もはや平静を保てる者など一人として居ない。自分たちは敵と見なされた、千年竜の怒りを買ったのだ。そんな認識が彼らを恐怖のどん底に陥れ、冷静な判断力を失くさせる。
「て、撤退しろォ!?」
リュウ爺は強い眼差しで別の軍艦を睨んだ。
翼を広げて素早く飛び上がり、次の標的目指して凄まじい速度で空を駆ける。
彼にとって軍艦など、沈めるためにはただ思い切り踏みつけてやればいいだけ。
急降下してきたリュウ爺は足を広げ、真上から軍艦の甲板に着地し、自らの体重で船を壊した。方法は単純だがそれだけに威力も約束されている。二隻目の軍艦も高い水しぶきを上げて海の中へ消え、多数の悲鳴が重なり、勝負にさえなっていない。
竜と人とが織りなす光景。
まさに圧倒的強者による一方的な蹂躙だ。
リュウ爺は敵の動きが騒がしくなってきたことを見切り、またも空へ飛ぶ。
船の残骸、海に浮かぶ大きな木目の床に乗った五人は、その姿に目を奪われた。
「あれが、千年竜？　アピスが言ってたリュウ爺よね」
「すごい。あんな大きな軍艦があっという間に。私たち、助かるのかな」
「……だめだ！」
呆然と呟いたナミとシルクに賛同せず、ルフィは厳しい顔で言った。
リュウ爺を見つめる目はいつになく真剣で、その強さに感心する訳

ではなく、むしろ心配するような目。この中でルフィだけが以前にリュウ爺の姿を見ている。洞窟の中で蹲り、動けなくなった姿。明らかに今ほど飛べる状態ではなかったと知っている。
年老いた体はもう動けないはずだ。
意志の強さだけで限界を超える彼はきっと長く持たないだろう。
動けなくなれば、いかに巨体を誇る千年竜でも砲撃には耐えられない。アピスと約束したはずだ。リュウ爺は必ず竜の巣へ連れて行くと。
見ているだけなど我慢できず、ルフィの目は厳しくなる。
「リュウ爺は動けなくなってたんだ。このまま戦わせちまったら、竜の巣までもたなくなる」
「そうかもしれないけど、でも今の私たちにはどうしようもないわ」
「アピスと約束したんだぞ！　見てるだけなんておれはいやだ」
ぐっと唇を噛んだナミがルフィへ歩み寄り、その肩を強く掴んだ。
彼女も想いが同じなのは目を見ればわかる。真剣な眼差しで不安を抱え、やり切れない気持ちで一杯になっている。それでも今はできることが何もない。
今にも泣き出しそうな悲痛な表情で、震える声が発された。
「いい加減わかりなさいよ。感情論じゃどうにもならない時があるの。船も壊れて、敵はこっちの比じゃないくらい人数が居て、今の私たちに、何ができるのよ……」
視線を合わせていた顔がふと俯いてしまう。
疲れ切ったかのように両肩からするりと手を離されて、ルフィは辺りを見回した。
シルクは傍に剣を取り落として座り込んでおり、一度海に落ちたキリも同じくぐったりした様子で座る。ゾロは力強い眼差しでルフィを見つめ、気持ちは折れていないが何も言えず。誰もが見たことのない表情で絶望感に浸っていた。
こんなにも暗い表情の仲間たちを見たことがない。
リュウ爺は三隻目を沈め、さらに空へ飛んだ。大きな音は絶えず聞こえている。

ルフィが悔しげに歯を食いしばった。
わかってはいる。船も無ければ仲間たちも疲弊し、今更戦闘を続けたところで良い結果が得られるとも限らない。もはや逃げる手段すら残されていないのだ。自分たちの敗北だと認めるのはおかしくない。だが納得できるか否かはまた別の話だった。
無理を押して戦い続けるリュウ爺を見て何も思わない訳がない。
苦心する表情でルフィはキリを見やり、俯いた彼に想いをぶつけた。
「今ならあいつらもリュウ爺しか見てねぇだろ。おれが飛んで軍艦に乗り込んであいつら倒してくる。急げばリュウ爺が動けなくなる前に終わらせられるはずだ」
「ルフィ」
「こんなとこで終われねぇ……海賊王になるって決めたじゃねぇか！」
キリは目を閉じた。言い返す言葉など何もない。
動揺していた海軍は混乱しながらも、大砲の準備をしてリュウ爺へ狙いをつけている。砲撃は間近。それを知ってか知らずか、リュウ爺は攻撃をやめようとしなかった。
ゆっくり目を開いたキリは顔を上げ、ルフィと目を合わせる。
彼自身、迷いは消えていない。しかしここまで打ちのめされては失う物も残らなかった。
わずかな頷きで返答とし、気分が変わったかルフィの顔に笑みが戻る。
細かな説明もないまま、彼だけが軍艦へと向き直った。
「ちょっとルフィ！」
「いいんだナミ」
「一人で勝てる相手じゃないでしょ！　あんたたちだってわかってるのに！」
「もう、それしか方法がない」
力のない呟きだった。
初めて聞く声色にナミは驚きを隠せず、すぐに何も言えなくなって

しまう。
戦う意志を見せて軍艦を見たルフィが腕を伸ばそうと身構える。
果たしてそれを見たせいだったか、或いは別の何かを見ての行動か。
突如空から飛来したリュウ爺は彼らの傍へ着水し、大きな波の揺れを起こしつつ、両翼を広げ、まるで彼らを庇うように覆いかぶさって彼らを隠した。
直後に一斉掃射が始められ、残った軍艦が無数の砲撃を放つ。
彼らが驚いている間に、間近でリュウ爺が多くの砲弾を受けた。
硝煙と血が舞うのは明らかで、悲痛な顔に変わった一同は真上にあるリュウ爺の体から目が離せなくなる。痛いだろうに呻くことさえせず、何発当たろうと彼はその場を退こうとしない。どれだけ波が荒れようが、攻撃が永遠に感じられようが、砲撃が止まるまで決して動かなかった。
やがて音が止むとリュウ爺がゆっくり体を起こす。
首を伸ばした彼は天へ向かって口を開き、全くの同時、砂浜からアピスが大声を発した。
「リュウ爺イィィッ!!」
リュウ爺の咆哮が天へと轟く。
そして船の残骸を避けると海面へ倒れ込んだ。水しぶきが上がって全員の体が濡れるが、今更気にしていられる物ではなく、倒れたリュウ爺に視線が集まる。
幸い沈みはしない。彼はすぐ傍に居た。
もう動けないのは明らかで、砲弾が直撃した傷がひどい。
貫かれた箇所には風穴が開き、肉が爛れた場所も多く、荒れた呼吸はかろうじて続く状態。
もはや見ているだけではいられず、ルフィがリュウ爺の首へ飛び乗って顔を見やった。そこに砲弾は当たっていない。しかし光を失いかけている目には力がなかった。
「おい、リュウ爺！　竜の巣まで行くんだろ、まだ死ぬなよ！」
目は、確かにルフィを見ていた。

その時ルフィは奇妙な感覚に囚われ、不思議な声が聞こえたと感じ、表情を変える。
「え？　今の……おまえか？」
四人が呆然と見守る中、リュウ爺の頬へ触れて問いかける。
とても穏やかで安心する声。
初めて聞くそれは確かに鼓膜を揺らす物ではなかった。だがリュウ爺の言葉なのだと信じて疑わない。なぜか彼の言葉なのだとしか思えなかったのだ。
「ここでいいってどういうことだよ。竜の巣に行くんじゃなかったのか？　おれたちはまだ諦めてねぇんだ。絶対なんとかするから、そんなこと言うな」
彼がそう言っている姿を見て、不思議と会話できているらしいのだと伝わった。
四人には聞こえていない。リュウ爺は咆哮を除けば一度たりとも声を出していなかったから。
ルフィだけが聞こえている。
ヒソヒソの実を食べた訳ではないルフィがそうしていることに違和感は付き纏ったが、決して嘘が得意ではない彼の態度なのだから疑うことも難しい。
きっと聞こえているのだろうと、全員が静かに見守った。
「目覚めた？　誰のこと言ってんだよ。それより早くここから離れねぇと――うわっ!?」
「ルフィ！」
突然両手で頭を抱えたルフィを見、キリが声をかける。
激しい耳鳴りがする。聞こえていない様子だ。苦しそうに表情を歪める彼は何かの声を聞いている。耳鳴りの中でも大きな誰かの声だ。
やはり四人には聞こえていない。それを認識できるのはルフィだけだ。
声は、海から聞こえているように思われた。
「うっ、おまえら誰なんだよォ！」

辛そうにしながら叫んだ時、海に明確な変化が現れた。
リュウ爺とたった五人の海賊たちを囲う海軍艦隊。彼らは竜骨など関係なく、命の危険となる千年竜を始末するため、次なる砲撃の準備をしていた。
その艦隊をさらに囲うようにして、海中から何かが浮上してくる。
高波を起こして現れたのは四つの影。
それらすべてが千年竜。それも、リュウ爺の体躯と比べて倍以上はありそうな、超大型海王類に匹敵するほど巨大な個体が、四体現れていた。
海に起こった光景を見ていた誰もが驚愕する。
海賊、海軍、或いは島民に関わらず、あまりにも大きな姿の竜は凄まじい威圧感を放っていて。
おもむろに動き出した彼らは、一斉に翼を振るった。
一撃はもはや攻撃とは呼べず、災害にも等しい決して敵わぬものだった。高速で振るわれた翼は風を起こし、波を高くさせて、打った軍艦を一瞬で粉々に粉砕する。包囲網を完成させていた軍艦は四匹がたった一度翼を振っただけで全滅した。残骸が海に沈んで、海の上には麦わらの一味のみが残る。千年竜たちは彼らを攻撃する気はないらしい。
軍艦の姿が無くなると千年竜は動きを止め、波が落ち着いて来たところで五人はようやく冷静に彼らの姿を見られるようになった。
リュウ爺とは外見の細部が違い、若々しさを感じる。
それでいて体は大きく、力強さは初めてリュウ爺を見た時とは段違いで、恐怖心すら抱く。
彼らは慈しむ目つきでリュウ爺を見つめていた。
時間をかけて彼らの巨体に慣れた頃、五人は戦いが終わったことを今になって理解する。だがそんなことが気にならなくなるくらい、やはり彼らの姿に惹かれたのだ。
「でっけぇ！　なんだこいつら！」
「軍艦があの一瞬で全部……」
「これが全盛期ってことか。なんて奴らだよ」

なんとか沈まずに済んだ船の残骸に乗ったまま、口々に呟かれる。
そんな中、へたり込んだままでキリが何かに気付いた様子を見せた。
驚いた表情で名も知らぬ千年竜を見つめて、小さな呟きは疑問を解こうとするかのよう。
「彼らは海中からやってきた……ナミ、ロストアイランドの伝承」
「え？　あっ、海の底に沈んだって」
「壁画はこの島を指してたはず。だけど島民たちでさえその事実を知らなかった」
四匹の千年竜たちは静かに海中へ潜っていく。
ルフィなどは大声を出して残念がっていたものの、他の三人はキリを見て次の言葉を待つ。
「鍵は千年竜だったんだ。彼らだけが真実を知ってた」
しばらく待つとそう時間も置かず、海の様子が変わろうとしていたのが伝わった。
急速に巨大な物体が浮上してくるのだ。
波の動きが変わって異変には気付いたが、五人とリュウ爺はその場を動けずにただ海面を見つめる。そうして巨大な影が海中から見えるようになった。
海水を押し上げて現れたのは、軍艦島をぐるりと囲う王冠のような白い陸地。
リュウ爺と五人は受け止められるようにその陸地の上へ乗せられ、海水を離れる結果となった。
島の四方、千年竜が海に沈んだ島を引き上げた。
これこそがロストアイランド。
千年竜の故郷、竜の巣がある島を見つけ、一同は思わず言葉を失う。
混じり気の無い真っ白な陸地。美しさすら感じるそこが暗闇の中で光り輝くようだ。
ある時、四匹の千年竜が島の四方から鳴き声を上げる。天へ向かって吠える様はどこか神妙にも思えて、声色から深い感情が見え隠れし、戦闘時にリュウ爺が放った咆哮とも違う。不思議と心が落ち着く

ような声だったのが全員の耳へ残った。
「呼んでる……」
「え？」
ぽつりと呟いたルフィにシルクが振り返った。
白色の陸地には王冠のように、端には尖った岩が規則性を持って並んでいて、中でも大きな四つに千年竜たちが足を置き、乗っていた。どうやらそこを使って引っ張り上げたようである。
一番近くの千年竜を見つめたルフィは真剣な表情。少し呆けた顔にも見える。
先程と同じ。
誰かの声が聞こえているらしく、心底不思議そうに言葉が吐き出された。
「誰かを呼んでるみてぇだ。遠いとこにいる誰か」
「千年竜の言葉がわかるの？　さっき、リュウ爺の時もそうだった」
「うん。なんでか知らねぇけど。でもリュウ爺の声はもう聞こえねぇや」
リュウ爺の体の上から陸地へ降り、振り返る。
死んだ訳ではない。まだ呼吸は続いている。だがすでに虫の息だった。もう長くはないどころか、しばらくすれば息絶えてしまうだろう。
皆が悲痛な表情で彼を見つめる。
命の恩人だ。リュウ爺が居なければ間違いなく死んでいた。
死を目前にした彼に万感の想いを持って目を離さず、どうすればよいかもわからず見守ることしかできない。今できる事は、彼を看取るくらいしか思いつかなかった。
「リュウ爺、死んじゃうのかな」
「元々動けねぇくらい弱ってたんだろ。この傷じゃ、もう」
「この時のために竜の巣を求めてたんだ。本望だったと思うしかない」
「うん……リュウ爺の最期だ。全員で見送ってやろう」
一味の面々が呟き、リュウ爺から目を離さない中、ナミがふと島を

振り返った。
軍艦島と呼ばれていたそこを見て、まだ全員ではないと思う。
間に合うか否か、危機的な状況で。
胸の内が痛いほど苦しくなった彼女は呟かずにはいられなかった。
「全員じゃないわ。アピスが居ないじゃない。あの子が誰よりもリュウ爺の傍に居たいはずなのに……こんな終わりでいいわけないっ」
ナミが四人を見て言うと全員が彼女へ振り返り、その背後にある島を見た。
同意をする想いは同じ。だが表情が変わって、わざわざ心配する必要はないのだと知る。
今にも泣きだしそうなナミへ、ルフィが教えてやった。
「ナミ。見てみろ」
「えっ――？」
「あいつはちゃんとわかってる。最期はいっしょだ」
急いで振り返ったナミの目に、走ってくるアピスの姿が映った。
必死な様子で、呼吸は乱れ、急ぐせいで足がもつれて転ぼうともすぐに立ち上がり、前だけを見て、リュウ爺だけを見て駆けてくる。
ちゃんとわかっていた。別れの時は来るのだと。
その時を拒まないと決めていたのだ。
絶対に彼の傍で看取ってやる。それが彼女の決意。
今にも涙をこぼしそうな表情で、ぐっと唇を噛み、必死に耐えて。
ぎこちない笑みを浮かべたアピスは自らの足で彼らの下へやってきた。
「リュウ爺っ、来たよ！」
耐え切れなくなってナミが口元を手で押さえた。大粒の涙がこぼれ出して止められなくなり、シルクはそんな彼女の肩を抱いてやり、そっと寄り添う。
ルフィたちの間を歩いて通り抜け、見守られながら到達する。
アピスはリュウ爺の顔へと触れ、疲弊したせいかしばらく目を閉じていたリュウ爺は、その時になって目を開き、ひどくやさしい目でア

ピスの姿を見つけた。
輝くような可憐な笑顔。
在りし日と変わらぬ彼女に、不思議と彼が笑った気がした。

蘇る伝説（3）

ルフィたちが少しだけ離れて、しばし二人は懐かしい気分に浸っていた。

ヒソヒソの実を食べた影響なのだろう、リュウ爺の意志が頭の中へ伝わってくる。けれど今なら実の能力が無くても触れているだけで気持ちがわかる気がした。

リュウ爺は彼女へ感謝の念を伝えている。

一夜ではとても伝えきれないほどのたくさんの想い。

長く生きた彼はいくつもの時代を越え、世代を越えて、軍艦島を見守ってきた。島民たちを守り、距離は密接で、たくさんの記憶が一つ残らず鮮明に思い出される。

そんな中で彼女は特別だった。

同世代の子供たちの中でも一際リュウ爺に懐き、言葉を理解したいと考えて、共に遊び、共に食事をして、共に寝て、二人で冒険をして同じ物を見た。千年の中のたった数年、とても短い時間。とても楽しかった。とても幸せだったのだと、彼の心がそう告げている。

アピスは彼へ触れ、やさしく笑ってその気持ちを受け取る。

思い出す様々な風景が流れ込んでくるようで、それらすべてが彼女にとって大事な思い出だ。

ずっと彼と一緒に居た。

一つとして欠けた思い出はなく、今の彼女を作る要因になったとさえ思う。

思い出と共に多大な感謝の念が伝えられて、不意にアピスは首を振った。

リュウ爺の目を見つめ返して、素直な気持ちを隠さず伝える。

「そんなことないよ。いつも助けてもらって、守られて、感謝するのは私のほう。いっつもリュウ爺にまとわりついて、いっぱい迷惑かけたよね。ごめんね、リュウ爺」

リュウ爺は目を細めて、謝る必要はないと伝える。

それから彼はいくつかの話をした。

自分がこれから死ぬことを正直に伝える。次に千年竜たちの故郷を守って欲しいこと、島民たちにも礼を言って欲しいこと、そしてアピスには、腹を出して寝ないことを約束する。
彼女は何度も頷いた。
少し恥ずかしそうにしながらもすべての約束を承諾し、はっきりと彼へ言う。
「うん、約束するよ。私が生きてる間は誰にもロストアイランドは傷つけさせない。でも、お腹出して寝てるのはわざとじゃないし、それだけ見逃してくれないかなぁ」
照れた様子で頬を掻く。そんな仕草も彼の記憶の中にはしっかりと残っていた。
ずいぶん長く生きたと思う。同じ場所に留まり続け、様々な人と出会い、共に暮らし、決して平坦な日々ではなかった。それももう終わろうとしている。
楽しかったと素直に思えた。
特にここ数年、自らの死期を悟って以降、彼女がずっと傍に居てくれた。
後悔はない。彼女にすべて任せられると知って、むしろ安堵すらした。
すべての気持ちがアピスへ流れ込む。
彼女はふと表情が崩れそうになって唇を噛み、必死で涙を呑む。最期の時くらいは笑って見送りたい。リュウ爺が安心して眠れるように。
そんなふとした一瞬に、周囲に異変が起こり始める。
ロストアイランドの白い大地が、淡い光を放ち始めた。
天が雲に覆われた暗闇の中、軍艦島を取り囲むそこだけが光り始め、幻想的な光景が生み出される。光は温かく、目にしても痛みは感じないやさしい物で、周囲を明るく照らし出していた。まるでロストアイランドがここにあると主張するかのようである。
見覚えのある光にキリが呟いた。
軍艦島の洞窟で似た光を見たばかり。同じ物なのだと気付くまで

そう時間はかからない。
「そうか、洞窟にあったのはこれだったんだ」
「きれい……」
「不思議な景色だね。こんなの見たことない」
寄り添い合うナミとシルクが呟き、皆が賛同するように頷いた。
変化はそれだけでなない。
照らし出された暗い空を見上げれば、遠くから飛んでくる巨大な生物の群れが見える。数百匹を超えるだろうそれらがすべて千年竜だと気付いたのは着地の体勢に入った頃だ。
ここは竜の巣と呼ばれる場所。
すべての千年竜にとっての故郷であり、始まりと終わりを委ねる場所。
次々降りて着地する千年竜たちを見つめ、ちっぽけな人間でしかない彼らはしかし恐れを抱かず、感心する心情でもって彼らの姿を見つめていた。
「すっげぇぇ！　全部千年竜だ！」
「こいつらこんなに居たのかよ。いくらなんでも多過ぎじゃねぇか」
「は、はは、すごいな。こんな光景、二度と見れないよ」
しばらく神妙な顔をしていた一味にも、わずかに余裕が戻ってくる。
故郷へ降り立った千年竜たちは一様にリュウ爺の姿を見守った。
言うなれば彼は、たった一匹故郷に残り、その地を守り続けた番人といったところか。千年竜の目はやさしく、尊敬の念すら持って彼の最期を看取ろうとしていた。
驚いた顔で周囲を見回していたアピスもリュウ爺へ視線を戻す。
いよいよという時が迫っていた。
最後の力を振り絞って、リュウ爺はアピスへと言葉を告げる。
「……うん、そうだね」
最期の言葉はさよならではなかった。
微笑んだアピスはリュウ爺へ抱き着き、幼い頃そうしたように、強

く力を込める。
ゆっくりと閉じようとする目を見つめる。
「ねぇ、リュウ爺」
笑顔で見送ろうとした一瞬だったが、ついにせき止められず、大粒の涙が流れる。
次から次に落ちてくる涙はもはや止めようがなく、気にせずアピスは口の端をにっと上げた。
泣きながらの笑顔はひどく懐かしく思えて。
リュウ爺はその表情を最後に目を閉じた。
「ありがどうっ……！」
絞り出すような声だったがちゃんと彼に伝わっただろうか。
触れていればリュウ爺の意識が徐々に沈んでいき、やがて途絶えるのがわかる。
それがわかった途端に抑え切れなかった。
今度こそアピスは大声で泣き、涙を流して別れを惜しんだ。親のように慕っていた一匹の千年竜。彼はたくさんの仲間に見守られ、この世を去ったのだ。
ルフィたちは言葉を失くしてアピスを見つめる。
悲痛な面持ちとなったナミは自らシルクを抱きしめて、肩に顔を押し付け、そんなシルクも複雑そうな表情でナミを抱きとめる。
死とはいつになっても慣れない物だ。
出会ったのは昨日のこと。しかし泣きじゃくる彼女の気持ちは痛いほどわかる。船上で聞いたリュウ爺との思い出話は、まるで自分が見た光景のように頭へ残っていた。
しばしリュウ爺の亡骸とアピスを見つめて、為す術もなく立ち尽くす。
するとルフィたちの背中へ突然声がかけられた。
「千年竜には伝説がある」
振り返ってみれば歩いて来るのはボクデンだった。彼だけでなく後方には島民全員がやってきていて、リュウ爺の亡骸に涙していたようだ。

五人の前まで進み出たボクデンは立ち止まり、リュウ爺を見つめて静かに語る。
「死期を悟った千年竜が竜の巣へ帰るのは、何も郷愁に駆られてのことではない。ある特殊な生態のためじゃ」
「生態？」
「詳しいことはわかっておらんが、確かなことは千年竜の寿命がおよそ千年であること。そしてこの竜の巣が彼らにとって神聖な土地であること」
光を受けたせいなのか、リュウ爺の体に変化が現れる。体が徐々に化石になるかのように干からびていき、体の端から灰になって、風に運ばれて宙へ舞い始めた。
その変化には誰もが驚き、アピスもパッと離れてリュウ爺を眺める。
骨だけを残して灰になっていく体を見つめて、不思議な静寂が訪れた。
「この島で彼らの体は灰となり、竜骨だけを残し、そして死と同時に新たな命が生まれる――」
やがて全身が灰となって骨だけが残った時、腹の中だっただろう場所に奇妙な肉の塊だけが残された。卵にも似た形の球体で、赤々とした膜の中で何かが動いている。
内部から膜が破られ、外へ出てきたのは幼体の千年竜。
アピスは驚愕して息を呑み、脚が震えるのを自覚しながら近付いていった。
「転生。それがこの世で千年竜のみが持つだろう特殊な生態じゃ」
「リュウ爺、なの……？」
恐る恐る近付いて声をかけると、目を開けた幼体はアピスを見つける。
ピィ、小鳥のような鳴き声。
たったそれだけで彼女は歓喜した。
頬を濡らしたままで駆け出し、生まれたばかりの千年竜をきつく抱きしめる。

間違えるはずがない。彼だという確信があった。
抱き合う二人を目にして奇跡だとしか思えず、ルフィたちはしばし呆然と見つめるのみで、状況を理解するのも難しかった。死んだはずが、リュウ爺は生き返ったのか。わからないことは多く、けれどアピスが心底嬉しそうに笑っているのは確かで、気付けば肩の力が抜けて頬が緩む。
激動の一夜でようやく落ち着けそうだ。
小さくなったリュウ爺を抱き上げ、楽しそうに回るアピスを見ながら、彼らはやっと笑顔を取り戻すことができたようである。

＊

「うっひゃーっ、すっげぇな！　どっち見てもリュウ爺だらけだ！」
「違うよルフィ。リュウ爺はこの子だけ、ここに居るのは千年竜」
「そうだっけ？　まぁいいや、とにかく千年竜ってでっけぇんだな」
大型の千年竜の頭に乗り、辺りを見回すルフィは上機嫌そうだ。
右を見ても左を見ても千年竜が居て、個体差により大小様々。だがどの個体を見てもカッコいいと思える姿なため、先程から目がキラキラ輝いて仕方ない。
伝説の島、ロストアイランド。そこに集まった千年竜たち。
これほど心躍る経験にじっとしてはいられず、逸る冒険心が抑えられない。
傍でリュウ爺を抱きながら見上げるアピスもまた、厳しく言い聞かせるような口調でありながら、この状況を楽しんでいるらしい表情だ。
千年竜の頭の上からルフィが声をかけて、彼女も頭上を見上げて答える。
「そういやリュウ爺って名前変えねぇのか？　もうじいちゃんじゃねぇだろ」
「そうなんだけど、ずっとリュウ爺って呼んでたから他の呼び方わかんないし……それにリュウ爺はリュウ爺だもん。私はこのままで

いいと思う」
「ふぅ～ん、おれもどっちでもいいけどさ。ほんとにリュウ爺なんだなぁ」
「うん！　だってリュウ爺本人もそう言ってるもん」
腕の中に居るリュウ爺を見つめて、アピスは確かにそう言った。
こういう時にはヒソヒソの実が有難くなる。リュウ爺の意志は伝わっていて、以前と変わらぬ声を聞いて安堵する。間違いなくリュウ爺の声だった。
そういえば自分も聞いたのだとルフィが思い出す。しかし興味がないのかすぐに思考を捨てた。
転生、つまりは生まれ変わったリュウ爺を見て心から不思議に思う。
一度死んで生まれ変わるなど考えたことがなくて、ルフィはぽつりと呟いた。
「生き返るってどんな感じかな。おれにもできるかな？」
「それは無理だと思う。だってルフィ、人間だし」
「うーんそうか、残念だ。まぁいいや、しばらく死ぬ予定ないし」
「予定があったら大変だよ。それよりルフィ、いい加減降りたら？　その子が困ってるみたい」
「別にいいじゃねぇか、乗ってるくらい」
「怒らせる前にやめた方がいいと思う。千年竜は強いんだから」
「なぁに、心配いらねぇよ。おれだって海に落ちなきゃ強い――」
しゃべっている最中で千年竜が首を動かし、頭上に乗っていたルフィをポンと空へ放り投げた。そのまま落下してくる彼に狙いをつけ、手加減しているとはいえ頭突きを繰り出し、地面へ叩きつける。ゴムの体は勢いよく地面に激突して何度か跳ねた。
「あいでっ!?」
「あははっ。だから言ったのに」
「ちくしょー、ケチめ。いいじゃねぇか乗ってるだけなのに」
フンとそっぽを向いてしまう千年竜に恨めしい目線を向け、頭を擦るルフィは唇を尖らす。そんな彼と千年竜とのやり取りにアピスは

楽しそうにしており、リュウ爺も気楽な顔だ。
仲睦まじい様子は出会って数分で作られている。
ルフィ特有の特技と言ってもいいだろう。彼が関わる者は大半がペースに乗せられ、最初こそ困惑するのだが、気付けば肩の力が抜けて笑っている。その千年竜も例外ではなかったらしい。足元まで来て話しかけてくる彼に少しは付き合おうという態度だった。
今はもう声は聞こえない。しかしそれでも仲良くはできそうである。
ルフィとアピスは初めて会う千年竜たちとの交流を始めた。
所変わって、幾分離れた場所。
海中へ沈んだはずの船の残骸が見つかり、その中を調べたナミとシルクは、奇跡的に一室ごと無事だったお宝を発見していた。ナミの表情は輝き、涙を忘れてそれらの詳細を調べ始める。
「やった！　ちゃんと残ってるじゃない！　流石にちょっと減ってるみたいだけど、全部無くなっちゃうよりかはよっぽどマシ。ほんと千年竜様様だわ」
すっかり機嫌が良くなっている。
お金が好きだと公言していたのは嘘ではなかったようで、さっきとはまるで別人だ。
ただ、シルクには気になることがある。
ちょうどこの一室だった。
船が沈没する寸前、この部屋へ駆け込んだナミの叫びが耳から離れない。あの瞬間の彼女は本心を露わにしていた。それを考えれば、今も自分たちに嘘をついているのではないかと思ってしまう。果たしてそれは悪意からか、善意からか。逡巡するだけに表情は優れない。
聞いてはいけないとわかっている。しかし黙っているままではいられず。
意を決してシルクがナミの背へ質問をぶつけた。
「ねぇ、ナミ」
「何？　あぁ、心配しなくても独り占めにはしないから安心して。ほんと一時はどうなることかと思ったけど、神秘的な景色も見れた

し、千年竜も見れたしで、流石に感謝しない訳にはいかないからね。ちゃんと山分けにするわ」
「そうじゃなくてさ」
「あ、でも食費とかそういうのはそっちで出してもらうからね。悪いけど私の方からは出さないから、そのつもりで――」
「さっきの言葉、本当なんでしょ？」
まるで何を言われるかわかっていて、話を逸らそうとしているかのようで。
彼女の言葉を遮るように、シルクは敢えて強い口調で言い切った。
その態度は隠そうとしているのだと理解している。きっと聞かれたくない事情なのだろう。だがシルクは、本人が否定しようとも彼女のことを仲間だと思っていた。寝食を共にして、笑顔で話して、協力して危険な航海を乗り越えた。かかった時間など関係なくそれだけでいいではないか。
これから先も一緒に航海したいと思うからこそ、無視はできない。
あの言葉の真意を知りたくて問いかけ、動きが止まったことを理解し、あくまで返答を待った。
しばしの沈黙を置いた後、ナミは振り返る。
「バカねぇ、あんなの嘘に決まってるでしょ？　ただお宝を失くすのが惜しくてああ言ったの。じゃないとあんた、私のこと無理やり引きずり出したでしょ。ま、結局私があんたを引きずって助けることになったんだけどね。あの分もちゃんと貸しにしとくわよ」
「……うん、そっか」
彼女は笑っていた。楽しそうに表情を緩めて、あの時の緊張感など欠片も持っていない。
対照的だがシルクは寂しげに微笑み、背中で手を組んで頷いた。
「お礼、ちゃんとするから。お金の方がいいのかな」
「今回は安くしとくわ。だけど私は安い女じゃないんだからね。それを忘れないこと」
「ふふ、わかった。肝に銘じとく」
そう言ってシルクは踵を返し、外へ出ようと足を動かし始める。

「運び出すの大変でしょ？　ちょっと待ってて、みんなを呼んでくるから」
「ゆっくりでいいわよ。流石に疲れちゃったし、島の人にも声かけてみて。この量だと人数多い方がいいだろうしさ」
「うん。そうする」
シルクが部屋を出ていき、再びお宝を見たナミはふっと笑みを消した。
金銀財宝が目の前にある。すべてお金に代えれば、一体いくらになるだろうか。
ずっと欲しかった物だ。喉から手が出るほど欲しくて、八年間も駆けずり回った。これが欲しくて、一億ベリー貯めようと決めて、一人で航海を続けてきた。
深く息が吐かれる。
果たしてそれが何を意味するのかは本人のみぞ知るところ。
その場にしゃがみ込み、膝を抱えたナミは脚に顔を押し当て、暗い空間で目を閉じる。
孤独を感じる環境だ。しかし彼女はそこから出ようとはしなかった。
ともすれば嗚咽さえ聞こえてきた気がして、入り口のすぐ傍、壁に背を預けて立つシルクは悲しそうな顔で空を眺めていた。天井が壊れたせいで、空へ立ち昇るかのような大地の光が見える。
二人ともしばらくその場から動かず、一人きりで時間を過ごした。
外では、島民たちが千年竜と触れ合っている。
伝説を知る者は島民全員。リュウ爺のおかげで千年竜に対する恐怖心など皆無で、皆が親しげに交流を図ろうとしている。言葉は通じないがそれでもよかった。時折アピスに通訳を願い出る者も居たが、誰もが彼らの存在を受け入れていたのは間違いない。
その中に混じらない影が二つ。
光る大地に尻を置いて、座り込んだキリとゾロ。
先程からずっと口を開かず、奇妙なほど静かなキリには不気味さすらあって、ゾロは何も言わずに隣から動こうとはしなかった。

顔は俯き、視線は千年竜ではなく光る大地を目にしている。
微笑みも無く、いつもの軽口が飛び出す様子もない。
いつまで経っても話し出す気配がないため、仕方なくゾロが口火を切った。
「おまえ、大丈夫なのか？」
何が、ともなく聞いてみた。答えは返ってくるだろうと推測しながら。
するとキリはゆっくり顔を上げ、前を見つめたままでようやく口を開く。
表情が無いのがひどく心配させる。
ゾロはその横顔から目を離さなかった。
「ゾロ」
「ああ」
「ボクらは……弱いね」
ぼんやり呟かれる力の無い声。彼らしくないとは思った。
けれど一度吐き出した言葉は止められず、キリは無防備な顔で続ける。
「強くなったと思ってたんだけどな。全然足りなかったみたいだ。やっぱり、こんなんじゃだめだよなぁ……グランドラインに入ればもっと強い奴だって居るのに。これじゃ全然ダメダメだ」
「これから強くなりゃいいじゃねぇか。おれたちは生きてる。チャンスはあるはずだぜ」
「そうだね。だからさ、決めたんだ」
わずかに笑みが浮かべられて、それでも普段通りには見えない。
ゾロはその時、彼の狂気を見た気がした。
「失わないためには力が必要だ。腕っぷしだけじゃない、組織としての力。この一味が大きくならなきゃ、海賊王になんていつまで経っても届かない。だからボクは力を手に入れる。ルフィの性格はわかってるから、ボクがやらなきゃいけない場面だってあるはずだ」
穏やかなのに力を感じるようで、静かなのに激しさを感じる。そんな不思議な姿。

キリは迷わずきっぱりと言ってのけた。
「誓いは立てた。ボクがルフィを海賊王にする。そのためならなんだってやってやる。たとえ世界がどうなろうと……もう誰も死なせない」
今まで感じた事の無い感覚を得て、不意にゾロは視線を外した。
この日、彼は船長に告げる事無く新たな誓いを立てた。ルフィの姿を見ていれば人を惹きつける力があるのだろうと思われる。ならばその下に就く副船長の役割は別になる。
ルフィにはできないことを。他の誰かにはできないことを。
力強い眼差しの中には怪しい光が宿り、今やゾロには何も言えず、勝手に決めてしまった彼の傍でできることは、ただその場を離れないことだけだった。

memories

夜が明ける頃には、軍艦島を囲うロストアイランドは再び沈んでしまい、千年竜たちはまたそれぞれの住処へと飛び立って、島は以前の様相に戻った。しかし海中からロストアイランドを引っ張り上げた四匹だけは残り、そのまま島で暮らすようだ。

アピスに聞けば彼らは竜の巣を守る番人のような存在らしい。

しばらく長い眠りに就いていたので、彼らの不在の間、リュウ爺が島を守っていた。

彼らが目覚めた今、リュウ爺は転生した体でアピスと共に新たな生活を送る。

元通りでもあってそれだけではない。

今日からはまた以前のような時間が戻ってくる。

ロストアイランドが沈んだことを知った一味は冒険の終わりを知り、数日を軍艦島での休息に充てることに決めた。アピスとボクデンの家に泊まり、一夜が明けた後。

新たな一日を迎えて彼らはのどかに過ごしていた。

砂浜に集まった五人とアピスとリュウ爺は、何やら騒々しい様子で話していたのである。

「よぉし！　おれは今日泳ぐぞ！」

海を眺めて腕組みをしたルフィが威風堂々と大声を出した。

これにより全員の視線が集まって妙な物を見る目を向けられる。

「どしたのルフィ。急に自殺志願？」

「違う！　だってよぉ、たまには泳ぎたくなるだろ。今日なら行ける気がする」

「いや無理だろ。おまえらカナヅチじゃねぇか。しかもシルクまで泳げなくなっちまって、溺れたおまえらを助ける手が減っちまったぞ」

「あっ。そこまで考えてなかった」

「とにかくおまえら、水着に着替えるぞ。みんなが貸してくれるらしいからさ」

それぞれ違った表情を見せるものの本気で嫌がる者はいない。
激しかった一日を終えてやっと安堵できる時間。今は喧嘩の一つもしたくなくて、疲れた心を癒したいという欲求が強い。海水浴の提案もそのためなのだろう。面倒そうだと表情を歪めていたゾロも本気で否定する訳ではなくて、彼らが溺れた場合が面倒だと考えていたらしい。
潮風を受けたナミが両手を伸ばして背伸びする。
心地のいい太陽の光だ。前日の嵐や戦闘が遠い日に感じる。
泳ぎが得意な彼女は拒否する様子はなく、ルフィに振り返ると笑顔で言った。
「別にいいんじゃない？　カナヅチなんだから無茶はしないだろうし、浅瀬で浸かるくらいなら問題ないでしょ」
「おまえは知らねぇかもしれねぇがな、居るんだよ、こん中に。自分がカナヅチだって知ってる癖に海に近付いて勝手に溺れちまうバカが」
「水着なんていつ以来かな。ひょっとしたら子供の時以来かも」
「話聞けよ、バカ。おまえに言ってんだ」
ルフィだけでなくナミに加えて、キリまですっかり乗り気で、ゾロが頭を抱えたくなる。
彼らの尻拭いをすることになるのが自分だと知っている。
泳げないのになぜ海水浴に興味を示すのかと頭が痛くなりそうだが、寸でのところでやめた。
どうせ考えるだけ無駄。彼らが普通の思考回路を持っているとは思っていないのだ。
腕組みをして呆れた態度を分かり易く見せるゾロとは対照的に、上機嫌なナミは村へ向かって歩き出し、傍に居た二人の名を呼んだ。
「アピス、シルク、行きましょ。水着なんて久しぶり」
「うん。えへへ、私も泳ぐの久しぶりだなぁ」
「わ、私も？」
「一人だけ着替えないのも変じゃない。ほら早く」
「あの、ちょっと……」

シルクの手を引いてナミが歩き出し、アピスが先頭となって自宅へ向けて歩き出した。
続いてルフィが自分たちもとばかりに、残った二人へ笑顔を見せる。
昨日の顛末があっても好奇心は次なる物へ向いているらしくて、飽きない人物だ。元気よく駆け出したルフィもまた一目散に村へと向かう。
「キリ、ゾロ！　おれたちも行くぞ！」
「ったく、面倒なこと言ってるって自覚はあんのか」
「いいねぇ水泳って。この機にじっくり練習してみよっかな」
「無駄な努力だ、やめとけ。つーかてめぇはあんだけ弱っててまだ懲りねぇのか」
文句を言いつつゾロも歩き出し、最後にキリが続く。
その刹那、すぐ傍にある村へ続く坂道を進む途中、なぜかキリはふと海へ振り返った。
自分でもなぜそうしたかはわからない。ただそうした甲斐はあったのだとすぐに気付いて、肩をすくめて苦笑した彼は踵を返した。
ルフィは先に行ってしまった。そのためゾロに声をかけて砂浜へ戻る。
「ごめん、先行ってて」
「あん？　どうした」
「ちょっと忘れ物。すぐ行くから」
「あぁ……」
わずかに振り返ったゾロも事情を察したか、深くは聞かず前を向いた。
「もう溺れんなよ」
「大丈夫、話すだけだから。多分ね」
一人で砂浜に戻った彼は海からやってくる人物を見つめる。
シロクマ、ドニーの背に乗った美女が一人。以前の堅苦しいスーツとは違って、気楽なアロハシャツとハーフパンツで、帽子とサングラスまでつけてまるで観光気分。

お気楽にやってきたウェンディはドニーの背の上で足を組み、気安く手を上げた。
「お久しぶり。と言うより、昨日ぶりかしら」
「どうも」
「今日はにこやかなのね。昨日もそうだったら良かったんだけど」
犬かきをするドニーが砂浜へ上がって、背には彼女を乗せたまま、何気なく会話が始まった。
外見からして今日は捕まえる気がないらしい。
リラックスした状態で話しかけられて虚を衝かれ、しかし苦笑した彼は逃げずに向き合う。わざわざ向こうから出向いたのだ、それなりの話があってのことだろう。
ネルソン・ロイヤルの名を口にしたのは彼女。海戦の名手だと教えたのも彼女だ。
今にして思えば身内の情報を簡単にしゃべったものだと思う。敵の行動も奇妙なほど迅速で、夜中だというのに船を出して、千年竜捕獲のためとはいえ航海するのは少しやり過ぎのようにも思える。それだけ強欲だったとも考えられるが、ある疑念が胸の内に生まれた。
両者の衝突を彼女自身が望んでいたとしたら。
一方には艦隊の情報と戦法を教え、一方には千年竜が実在するとリークする。
その結果海賊と海軍の正面衝突を狙ったのだとしたら、とんでもない女性だと思えた。
「ネルソン・ロイヤル、行方不明らしいわね。まぁ私は案外助かっちゃった方だけど」
「全部狙ってのことだったのか。ボクらが逃げたことも、艦隊が崩壊したことも」
「ふふ、どうかしら。あなたに上手くしてやられたのは本当よ。おかげで船が壊れちゃったし、迎えを呼んだけどしばらく自由には動けそうにないわね」
「船内には電伝虫が見当たらなかった。最初から隠してたんだね」
「隠すだなんて。ただちょっといつもと違う場所で寝ちゃってただ

けよ。不思議ね、勝手に動いたのかしら」
「電伝虫は勝手には動かない。加工された物ならどれでもね」
くすくす笑うウェンディに、キリが溜息をつく。
自分が甘かったのだと考えなければならない。思慮が浅かった。ただ敵船を壊していい気になっていたが、仲間を想うならば連絡の手段を奪っておくべきだった。
すべては後の祭り。しかし彼は反省し、それを見透かしたウェンディが言う。
「別にいいじゃない。もう終わったことよ」
「ちっとも良くない。危うく死ぬところだった」
「だけど結果はあなたたちの勝ち。今も生きてるでしょう」
「勝ったのはボクらじゃない……千年竜だ。ボクらだけなら今頃死んでる」
笑みを消して真剣な表情になり、キリは複雑な感情を胸に言う。
個人と組織の力量は別物。海賊として名を上げるならば、クルーそれぞれの腕っぷしが強いだけではだめだ。他の力を掻き集めなければ。
それを知ったという意味では、今回の戦闘には意味がある。
感謝が半ば、半分は彼女に対しての恨みで、視線を受け止めたウェンディは肩をすくめる。
「そう、真面目なのね。多くの海賊は結果が良ければすべて良いって言うのに」
「ハァ、もういい。それで今日は何しに？　今から戦おうって格好じゃないけど」
「挨拶をね。あなたたちを追えなくなったから、またの機会に会いましょうってこと」
「それだけを言いにわざわざ？」
「律儀でしょ。それにこの子があなたの顔を見たいって言うから」
ドニーの背を撫でると、彼が嬉しそうにキリを見つめている。
複雑な気持ちでキリが目を合わせたままウェンディへ聞いてみた。
「どんな関係なの、その海賊と」

「うーん、難しいわね。おじいちゃんにとっては天敵でライバル。だけど世間がどれだけ悪く言っても、私たちは嫌いになれなかった。関係って言えばそんな感じ」
「その人の最期は？」
そう問いかけるとウェンディはサングラスを取って微笑んだ。
「まだよ。最期じゃないわ、あの人は生きてるから」
思わず唸ってしまった。
前にもちらりと聞いた気がするものの、やはり生きているのか。
それが嬉しい事か否かはまだわからない。キリが俯いて考え込んでしまう。
ウェンディはズボンのポケットへ手を入れ、それを取り出す。
手に持っていたのは一枚の紙だった。
「それは……」
「ビブルカード。人間の爪を使って作る物よ。その人がどこに居るのかを指し示す、別名〝命の紙〟。これが燃えて消えてしまわない限り、あの人が生きてることだけはわかる」
「噂だけは聞いたことある。それがあればその人を探せるんじゃ」
「ええ、可能よ。でも私にはその気がない」
なぜとは言わず、紙を掲げて軽く振る。
「必要なら二つに破って片方渡すけど、どうする？」
「いや……」
必要か否かを問われ、逡巡するもすぐに答えは出る。頭を振って否定し、笑顔で彼女を見た。
否定する訳ではないが欲しいとは思わない。
海賊として長く旅をして、今更親の温もりを求める性質でもないのだ。自分から会おうとは思わない。ただ、逃げる気もしないのが正直なところ。
彼は素直な想いを吐露する。
「もらう必要はない。会う時が来ればそれでもいいけど、自分から探す気はないから」
「そう。わかったわ」

ポケットに紙を戻し、用件は終わったらしい。
村から駆けてくる人影も見えた。
寂しそうではあるもののドニーが体の向きを変えて、ウェンディは笑顔を向けてくる。
キリが見送る中で彼らは沖を目指し始めた。
「また会うことになると思うわ。それじゃまたね」
「会わなくて済むならそっちの方がいいけどね」
「ふふふ」
二人が行ってしまい、砂浜にはキリだけが残された。
それから幾ばくもせず水着に着替えたルフィが走ってきて、嬉しそうに彼へ声をかける。
「おいキリ、見ろっ！　浮き輪！」
「おぉ、いいアイディアだね。それで泳ぐの？」
「しっしっし。これならカナヅチだって関係ねぇだろ」
「上手くいけばいいけど。ゾロかナミがいないとこではやんないでよ」
「わかってるって。それよりほら、キリの水着も持って来たぞ」
「まさかここで着替えろってわけじゃないよね」
「別にいいだろ、減るもんじゃねぇし」
水着だけでなく浮き輪を身に着けたルフィは、右手に持った男性用の水着を見せる。
キリはすぐに受け取るものの、返答する前に別の人物の声がかけられた。
「やめなさい。セクハラよ、それ」
「お、ナミたちも来たか」
声をかけてきたのはナミだった。島民から借りたというビキニを身に着け、左肩の辺りは包帯が巻かれているが、美しいプロポーションを誇る肉体を惜しげもなく晒している。
その背後にはまるで隠れるようなシルクが居て、同じくビキニで恥ずかしそうにしている。
彼女たち二人から少し遅れてアピスも走ってきて、ワンピース型の

水着を身に着けて、胸には相変わらずリュウ爺を抱いていた。
ルフィが浮き輪を体に通しているのを見て、彼女の表情はパッと明るくなる。
「わぁ、それすごいねルフィ。私たちでも泳げるのかな」
「いい考えだろ。あとでアピスにも貸してやる」
「ほんと？　やった！」
「はしゃぐのはいいけど、あんたたちちゃんと気をつけなさいよ。基本はカナヅチなんだから、溺れたら終わりだってこと忘れないでよね」
「大丈夫だろ。だって浮き輪持ってんだぞ？」
「それだけで賄えないでしょ。力が抜けるって言ってるんだから」
気楽に笑うルフィを見ていると肩の力が抜けてくる。呆れた顔でナミが溜息をついた。
ひとまず泳げる人間が来たため、この場を任せていいだろうとキリが歩き出す。流石に解放的な砂浜で裸になる予定はない。一旦アピスの家へ戻って着替えてくるつもりだ。
「それじゃ、悪いけど一旦失礼して。せっかくだし着替えてくるよ」
「おう。早くなぁ」
「ナミ、もしもの時はよろしく。泳げない人が三人いるから」
「はいはい、わかったわよ。それとあんたを合わせて四人ね」
笑って歩き出したキリはすぐにゾロとすれ違い、後を託してしばしその場を離れた。
彼も水着に着替えている。だが刀は置いてこなかったらしく、専用のベルトを使っていつも通りに右腰に提げていた。それがないと落ち着かないのだろう。
ゾロが砂浜へ入ってすぐ、ルフィは海へ向かって駆け出した。
もはや我慢ならない様子。試してみたくて仕方ない。
浮き輪を信用しきって思い切り跳び、彼は海へ飛び出した。
「いやっほー！」
バシャンと海面へ到達してすぐに体から力抜ける。浅瀬で腰まで浸かって、浮き輪があるおかげでそれ以上は沈むことなく、水面で漂

うことに成功したようだ。
浮き輪に体重を預けるようにしてへたり込む。
とても泳いでいるとは言い難い姿だったが、ひとまず死ぬことはないと見え、ゾロは呆れた。
「はぁ～……力が抜ける～」
「風呂じゃねぇんだ。そりゃ泳いでるって言わねぇだろ」
波の動きに合わせてゆらゆら揺れて、ルフィは海水浴を楽しんでいるようだ。
心配はいらないのだとわかってナミが微笑み、アピスを見る。
彼女も泳ぎたいと言っていた。今よりも幼い頃に能力者になってしまったせいで水泳などほぼ経験がない。そんな彼女に、真似事だけでもさせてやりたいと思った。
「アピスも行ってみる？　私が見ててあげるから」
「うん！　リュウ爺も泳ぎは得意だもんね」
今まで抱かれていたリュウ爺が鳴き声を発して、地面に下ろされると自らの足で歩き出す。本来の幼体とは違って彼は体の動かし方を知っている。淀みない足取りだった。
アピスとリュウ爺がゆっくり波打ち際へ進み、一方でナミはシルクへ目をやった。
恥ずかしがっている彼女はやけに口数が減っている。
体の各所からわずかに筋肉質な様子が伺えるものの、きれいな肌と抜群のプロポーションを持っている。しかし肌を晒すことに慣れていないようで、自分の体を抱きしめて離さず、所在なさげに視線をうろうろさせている。この時ばかりは年頃らしい表情だった。
そんな彼女を可愛らしいと思い、苦笑したナミは小さく嘆息した。
「いつまでそうしてるのよ。あんたも海賊ならいい加減腹括りなさい」
「う、それとこれとは話が別だよ……これ、ちょっと布少ないんじゃない？」
「今時みんなそんなもんだって。心配しなくてもあんたはきれいだから、ほら手ぇどけて」

「ちょ、ちょっと……もう」
胸元を隠す両手を下ろさせ、仕方なくシルクは背面で手を組んだ。
まだ頬は赤いままだがそれも彼女らしいといったところか。
満足気なナミは数度頷き、笑顔で尋ねる。
「あんたはどうする？　浅瀬なら別に二人でも見れるけど」
「ううん、今はやめとく。ちょっと能力を使う練習しようかと思って」
「今？　何もこんな時にやらなくたっていいじゃない」
「こんな時だからやっておかないと。もしもの時に使えなかったら困るでしょ」
「真面目ねぇ。ちょっとはあいつを見習えばいいのに」
海にぷかぷか浮かぶルフィを見て一言。二人は揃って苦笑した。
「あれはちょっと勇気が要るかな」
「ま、下手すれば死んじゃうしね。そっちの方が賢明よ」
「でも後で泳いでみようかな。ナミ、お願いできる？」
「いいわよ。アピスの後で良ければね」
そう言ってナミは振り返ったが、少し離れた位置で鍛錬を始めるゾロを見つけた。
砂浜で逆立ちをして、そんな状態で腕立て伏せを始める様はどうにも異質。逞しいとは思うものの間抜けさも感じられ、呆れた彼女はアピスの下へ向かう前に声をかける。
「で、あんたはあんたで何やってんのよ」
「見りゃわかんだろ」
「そういう意味じゃなくて……あぁもう。あんたたちってほんと変人揃い」
「うるせぇ。あの二人に比べりゃマシだ」
強かな様子で鍛錬を続ける彼は簡潔に答えて、すぐに集中してしまう。会話はすぐに終わってナミはアピスの下へ向かった。それでも以前より関係は近くなったと思える。
嬉しく思ったシルクは気分を切り替え、自身も鍛錬を始めようと右手を胸の前に上げた。

剣は置いて来ている。この場には必要ないという判断だ。
人差し指を伸ばしてじっと見つめ、力を入れるようにイメージする。
想像するのは風。
使ってみた結果から性質はわかった気がする。キリに話してみればそれもただの片鱗でしかないと言われたが、ひとまずは一つの技に執着する。風を放って敵を切るカマイタチ。それこそが自らの主戦力となるに違いない。独学の剣術と合わせれば、自分だけの戦法となる。
彼女は真剣な顔つきだった。
「むんっ」
能力は問題なく使用できた。
指先に巻き付くようにどこからともなく風が発生し、その場で旋回する。
彼女の意志に従って動く自然現象。ロギアではないとしてもこれだけで大きな武器だ。
しばらくはその場で留めるよう集中して注視する。
些細な挙動だが確かに彼女が操っているらしい。かなり筋が良い様子のため、逆立ちしたままでゾロがその指先を見やり、感心した声を出した。
「へぇ、やるじゃねぇか。能力を使うのは簡単じゃねぇって聞いてたが」
「えへへ。暇さえあれば練習してるんだ。問題はこれから――」
シルクの目は海を捉え、おもむろに腕が振るわれた。
指先からは小規模とはいえ風が飛ばされ、宙を駆けて、確かに彼女の手から放たれる。
「えいっ！」
離れた瞬間、やったと思う。能力を操った結果だ、続ければもっと強くなれる。しかしそう思えたのも一瞬のことで、放たれた風は斬撃の性質を持ったまま、ルフィの浮き輪に直撃してしまう。
あっと声を出したのはシルクとゾロが全く同時。

パンっと軽い音を残して浮き輪が割れてしまい、ルフィが海に落ちた。
当然浮き輪を失くせば彼は為す術もなく海に沈んでしまい、あっという間に姿が消える。
シルクが悲鳴を発する瞬間、ゾロが慌てて駆け出して海へ飛び込もうとしていた。
「きゃあっ!? ご、ごめん!」
「バカ野郎ッ、どこ当ててんだ!?」
大急ぎでゾロが飛び込んだことでなんとかルフィは救い出された。だが彼が砂浜まで引き上げられた時にはたらふく海水を飲んでいたらしく、ゴムの腹が大きく膨らんでいる。
首根っこを掴んで引きずり、パッと離して砂浜へ置く。
ゾロが呆れた表情で溜息をついた。
そのままではいけないだろうと思い切り腹を踏みつけてやる。すると押し出されたことによってルフィの口から噴水のように海水が噴き出し、勢いよく吐き出された。
九死に一生を得てルフィは大の字に倒れ、深呼吸を繰り返す。
危ないところだ。そんな間抜けな姿でさえ死んでしまう可能性を持つのが能力者の特徴。どんな環境であれ、海に落ちればそのまま死に直結するのだ。
シルクがすぐに彼の傍でしゃがんで両手を合わせ、謝罪の言葉を伝える。
彼自身こんなことで怒る人間ではないが心配と罪悪感が入り混じったらしい。申し訳なさそうな顔をして、顔を覗き込んで彼の様子を伺った。そんな彼女を見てルフィは笑みを浮かべる。
「ごめんルフィ! ちょっと狙いが逸れちゃって……!」
「しっしっし、気にすんな。大したことじゃねぇよ」
「どこが大したことねぇんだ。死にかけてんだろ」
「なんか盛り上がってるね。どしたの?」
そうして騒いでいるとキリも着替えてやってきた。
水着になって白い肌を晒し、気分も変わっている。今やすっかりい

つもの緩い表情で仲間たちを見つめていた。ついさっきの光景は見ていないとはいえ、ルフィが倒れている姿を見て大体の事情は把握したらしく、気楽に笑って歩いてくる。
倒れたままの彼を覗き込んで、傍には謝るシルクと呆れて腕組みするゾロ。
どうせ溺れたのだろうと思うのは当然。予想は見事に大当たりだ。
「あーあ、また溺れたの？　浮き輪は？」
「シルクが能力で破っちまったよ」
「わ、わざとじゃないんだよ。まだちょっと練習が必要で」
「ししし、いいんだ。おれ今楽しいから」
彼の一言にきょとんとし、三人の視線が一身に集められる。
上体を起こし、脚を投げ出して座ったルフィは前を見た。
アピスとナミが手を繋いで浅瀬に居て、傍には昨夜転生したばかりのリュウ爺。昨日の夜には目の前の海が消え、代わりにロストアイランドが存在して、思いがけない大冒険をした。
それを思い出したのだろうか、笑顔の彼は仲間たちの顔を見上げて呟く。
弾む声は少年っぽさに溢れ、彼らしい物だった。
「な？　海賊って楽しいだろ」
「だね。サイコー。流石に死にかけた時はビビったけど」
「おまえはもっと海に落ちることをビビれってんだよ」
「色々な物を見て経験したね。グランドラインにも入ってないのに、すごく遠くへ来た気分」
「もっともっと遠くに行くぞ。もっと色んな物だって見る」
決意するかのようにルフィが言って四人は同意するように海を見た。
その瞬間を見計らったかのように、突然ルフィは勢いよく立ち上がり、両腕を伸ばす。
「よし、みんなで泳ぐぞ！　これも経験だ！」
左手がシルクの腰に巻き付けられ、右手がゾロを捕らえ、キリは伸ばされた腕でぐいっと引っ張られる。走り出したルフィにより、三人

は無理やり海へと突撃することとなった。
「ちょ、待ってルフィ!? 私とキリは泳げない――!」
「てめぇ、ふざけんなっ!? 早く離せ!」
「あははは。ルフィはまた無理やりだなぁ」
勢いそのままに四人は海へ飛び込み、浅瀬とはいえ頭から盛大に転ぶ羽目となった。
当然、海水に弱い能力者三名は危うく溺れかけ、慌ててゾロが救出する結果となり、傍で見ていたアピスは楽しそうに笑って、ナミは苦笑しながらも悪い気分ではないらしい。
昨日とは違って晴れ晴れとした空の下。
輝くような海で遊ぶ彼らはひどく楽しそうだった。

幕間1
断章　敗北者たちの航路

1

小さな窓から差し込む光を見つめながら、囚人服に身を包んだ男はじっと動かずに居た。

元海軍大佐、斧手のモーガン。

守るべき市民から金品を奪い、人知れず圧政を敷いていた彼の行いは世間の目に触れ、此度逮捕される流れとなった。しばしシェルズタウンの独房に入れられた後、現在は軍艦で護送中。グランドラインにある本部から来た船に移って、やがては裁判にかけられる。

ここ数日、彼は驚くほど大人しい。

自身を捕まえた元部下たちには一言も文句を言わず、不思議なくらい静かなまま。

軍艦に乗せられ、本部へ連れていかれる手筈となっても一切不満を口にしない。

恨みを言葉にすることもなければ、すべて冷静に受け入れるかのようにも見えて、一方で返事はするものの、自身の気持ちを何も語らないのが恐ろしくもある。

そんな状態の中、引き渡しの日がやってきた。

本部の船がやってきて、モーガンがそれを知らぬまま扉が開けられ、檻の前に海兵が来る。

以前は部下だった男が真剣な顔つきで見つめてきて、モーガンがそちらを見ないまま、口が開かれた。ついに別れの時が来たのである。

「本部の船が来た。甲板へ出るんだ」

「ああ」

冷たい、感情が乗らない声だ。端的に答えたモーガンは迷わず立ち上がる。

身じろぎ一つで手錠と足枷が音を奏でる。鎖が起こすそれにもまるで反応しなかった。達観している姿は自身の身の不便をなんとも

思っていない様子である。
開かれた牢屋の扉を潜り抜けて、数名の海兵に囲まれながら歩き出した。
甲板へ出ると小さな窓など比ではないくらいの光に溢れている。
一瞬目を細めた。外の景色は彼にとって少々眩しく、だが改めて目にすれば気分は悪くない。
船の上には多くの海兵が整列していた。
流石は海軍本部中将の船。良い兵が揃っているだけでなく統率もしっかり取れ、士気も高い。イーストブルー広しと言えどこれほどの海兵たちを揃える部隊はないだろう。
前方、すでに中将の姿を見つけている。
白いスーツを身に着け、肩には正義のコートをかけて、犬の被り物をした体格のいい男。
海軍の英雄、拳骨のガープ。並み居る中将たちの中でも頭一つ抜きんでて強い男は老兵だが、世界中に名を轟かすほどの逸材でいまだ現役。かの海賊王ゴールド・ロジャーと何度も戦い、そして先の時代を生き抜いた、まさしく生きる伝説の一人である。
ゆっくり歩いて、モーガンはその目の前へと立つ。
なるほど、凄まじい強さだと感じる。
ただ立っているだけでありながら周囲の海兵からは感じない威圧感があった。
その時、ふとモーガンは様子の奇妙さに気付く。確かにガープは間近に立っているが何かおかしい。その威圧感とは裏腹な間抜けさを見出したのだ。
凪のように落ち着いていた心が動き出す。
数秒前まですべてを投げ出し、死刑すら受け入れる心地だったがここに来て変わった。
彼の目に力が戻り、体に力が戻ってくる。
ちょうどそんな時にどこかから息子の声が聞こえてきた。
「親父ィ！」
「ヘルメッポさん、だめだよ近付いちゃ！」

興味なさげに振り返れば、海兵の制服を着たヘルメッポが泣きじゃくりながらこちらへ駆けつけようとしていて、同じく制服に身を包んだコビーに止められている。
今更興味はない。だが視界の端に納めた意味はあった。
何がきっかけだったかはわからない。
周囲の予想に反した光景が生み出される。周囲の海兵の隙を突いて突如動き出したモーガンは、手錠をつけたまま自らの斧手でガープの胸を切りつけた。
鮮血が舞って、一瞬の静寂。彼の体は倒れていく。
これほど緊迫した状況下でガープは眠っていた。立ったままで不用心に、護送する犯罪者を目前にして。それを利用しない手はない。
流れるような仕草でモーガンは自らにかけられた錠に斧を叩きつけ、鎖を引き千切る。
真に解放されて周囲で海兵たちが慌てる中、素早く動いた彼は一直線にヘルメッポへ接近した。
傍で悲鳴を上げて硬直するコビーを蹴り飛ばし、我が息子を盾として、彼の視線は素早く周囲を見回す。ガープの船に乗っていたなら困惑もするが、これはシェルズタウンの軍艦、つまりは元々彼が乗る機会もあった船だ。どこに小舟があるかくらいは理解している。
その証拠にロープで釣り上げられた小舟を即座に発見した。
「やめろモーガン！　これ以上罪を重ねるな！」
「お、おおぉ、親父ィ!?」
「おれに近付くなァ！」
息子の首に斧を突きつけ、素早く移動した彼はロープを切り、小舟を海へと落とす。
そのまますぐに駆けてヘルメッポを盾に前へ突っ込み、縁に足をかけて思い切り跳んだ。先に海へ落ちていた小舟へ上手く乗ると、船を動かして軍艦を離れる。
まさしく犯罪者の手並み。素早い行動だった。
軍艦の上ではすぐさま砲撃準備が始められるものの、ヘルメッポが居ては簡単に撃てないだろうと考える。一瞬の出来事とはいえそこ

も考慮済みだった。
十分に離れた後で、ようやく恐怖で震える息子から手を離し、モーガンは床に座った。
「たまには役に立つじゃねぇか。ありがとよ、初めておまえが居てくれて助かったぜ」
冷たい声でそう言われて、震えていたヘルメッポに小さな変化が起こる。
膝はがくがく震え、脂汗が滝のように流れ、そんな状態なのに初めての表情を見せる。歯を食いしばって涙を流し、惨めながらも決意を滲ませる表情。
よろよろと立ち上がった彼はモーガンに向き合った。
力強く彼を指差し、明らかに動揺した声で大きく叫んだのである。
「お、おいモーガンッ！」
「あぁ？」
「ぐっ……お、おまえみたいな奴を親父だと思ってたおれがバカだったぜ！」
「急に何言い出しやがるんだ。ええ、バカ息子」
呼吸は荒れて怯え切り、みっともない姿。
それでも緊張が高まり過ぎたせいか、もはや自分が何を口走っているのかわからない。
ヘルメッポは声を大きくし続けた。
自分の思考がわからなくなっている状態で、一つだけわかるのは自分が怒りを抱えていること。以前にもバカ息子だと罵られ、父親らしい姿などほとんど見たことがなく、反抗のように権力を利用しようとあったのは無関心だけ。そして極めつけは、人質として利用されただけだった。
我慢の限界といった様子で、自然と溢れ出てくる言葉に口が突き動かされる。
思えば、彼は初めて思いの丈を父親へとぶつけた。
「おれはもう、おまえを親父だとは思わないッ！」
モーガンは冷静な面持ちで聞くのみだった。

「今に見てろよ……おれはおまえより強くなって！　いつか捕まえてやるからな！」
「フン。勝手にしろ」
ヘルメッポはもつれた脚で逃げ出し、自ら海へと飛び込んだ。向かう先は軍艦。なぜか砲撃して来ないようで小舟は問題なく遠ざかっていく。
決意したヘルメッポの姿を見たところで、大して心は動かない。
小さな帆が風を受け、舵を取れば船は思いのままに進む。どこへ行こうかと考えた。
もう海軍には戻れない。戻るつもりもない。今まで積み重ねたすべてが崩され、何もかも失くし、手元には何も残っていなかった。かといって他人に従うのが嫌いな彼は、独房の中でじっとしているのを認めないらしい。今から新たな生き方を見つけなければならないのだろう。
さてどうしよう。
目的も無く大海原を見た彼は密かに思う。
ひとまず、復讐でも考えてみようか。
今となっては自分を倒したガキどもへの恨みもない。不思議なほど心が落ち着いて興味はなかった。だがどこへ行けばいいかもわからないのなら、よくある話の一つとして、彼らを恨んで復讐するために探すのもいいかもしれないと思った。
立ち上がったモーガンは船の先端へ立った。
こうして一人で旅をするのは初めてのことである。
しばらく麦わらの少年たちを探して彷徨ってみるかと決意して、彼は旅立ちを決めたのだった。

2

がちゃがちゃフォークとナイフの音が騒がしい。十人程度乗れば精いっぱいだろう小型帆船の上、テーブルと椅子を持ち出して二人の人間が対面していた。
一人はオレンジの町から吹き飛ばされた海賊、道化のバギー。近く

の島で頭から地面に突っ込んでいたところを助けられ、有難いことに食事まで世話になり、ボロボロの格好のまま肉に喰らい付いている。ルフィに与えられたダメージは思いのほか大きかった。少しでも回復を望むかのように勢いよく料理を平らげていき、その勢いは留まる所を知らない。

その対面に座るのは麗しい美女だった。

袖を捲ったコートを着ているものの、その下に着けるのは水着のようなビキニのみ。胸だけを隠して括れた腰が艶めかしく、ほっそりとした外見は男心を鷲掴みにする。

微笑を称えてバギーを見つめる顔は誰が見ても美しいと唸るだろう。

たまたま見つけた彼を助けた美女は、己の名をアルビダと名乗った。

「そうかい、海賊に吹き飛ばされて……災難だったねぇ。実はアタシもある海賊に負けちまってね。船も部下も失って、今はこうして気ままな一人旅さ」

「まったくムカつく野郎だぜ。絶対に許してなるものか、すぐに見つけて報復してやるっ！」

「意気込むのはいいけどまずは仲間と合流しなきゃいけないだろ。ところで、アタシも人探しをしてるんだけどさぁ……その海賊ってのは、麦わら帽子をかぶってたかい？」

「なにィ!?　てめぇ、なんで知ってやがる！」

驚愕したバギーは食事を中断し、強くテーブルを叩いた。

アルビダはちっとも驚かずに微笑んでいる。

「やっぱりそうかい。その海賊はちょうどアタシが探してた男さ」

「何ィ？　まさかあの野郎にやられた同志が居たとは……！」

「あんた、ルフィを探すんだろう？　だったら手を組もうじゃないか。近頃この辺りを本部の監査役がうろついてるって話だし、味方は多い方がいいだろう」

「ふ、ふふふ、そういうことか……よぉしいいだろう。おれたちは今から同盟関係だ」

味方が増えたことでほくそ笑んだバギーだったが、それだけでは終わらず。
いつもより頭が回っている。認めたくないが、認めざるを得ない。彼の底知れぬ強さとやらを。
上機嫌な彼はアルビダへと更なる提案をした。
「だがな、おれ様はあいつらにひどい目に遭わされた。もちろん報復してやるがただじゃ終わらせねぇ。どうせならドハデに騒いでやろうじゃねぇか」
「どうする気だい？」
「戦力を集めるのよ。奴らを完膚なきまでに叩き潰すために」
元より頭が切れる海賊だった。だからこそ労力を使わずいくつもの町を潰したし、平和なイーストブルーで名を上げ、千五百万ベリーの懸賞金がかけられた。
今は時を待って暗躍し、いずれ派手に彼らを出迎える。
そう決めたバギーは怪しく笑い、同じく賛同したアルビダも肩を揺らす。
「面白そうだね。いいよ、乗った。それじゃあ使える人間を集めようじゃないか」
「まずはおれ様の仲間と合流する。あいつら今頃おれが居なくて悲しみ嘆いていることだろう。その次はいよいよ戦力集めだ。できるだけ有能な奴らを集めようぜ」
「しかしそう簡単に協力するかね。相手も海賊だとしたら裏切る可能性は高いよ」
「あぁ、わかってるさ。だから連中を利用してやるのよ」
「連中？　ひょっとしてルフィのことかい？」
くつくつ笑うバギーはしたり顔で言い切った。
「そうさ、おれたちをぶっ飛ばしたってことは、あいつらの腕も多少は認めてやらねばなるまい。これから先もあいつに負ける海賊が出てくる可能性がある。そいつらをスカウトして掻き集めりゃ、恨みを理由に結束する同盟が完成するだろう？」
「なるほどねぇ。金でも信用でもなく恨みで結束か」

「もしもおれたちと再会する前に死んじまうようなら、所詮それまでの男だったってことだ。だがもし、再会する時が来るのなら、それまでにすべての準備を終えて待ち構えてやる……」
バギーがジョッキを持ち上げたことで、アルビダも同じく手に取った。
二人で掲げて目を合わせ、互いに勢いよくぶつけて祝杯とした。
「おれたちゃ今日から〝麦わら討伐連合〟だッ！　ぎゃははっ、成り上がってやるぜ！」
「いい気概だねバギー。それじゃひとまずあんたについてくとしようか」
中身を煽って話を纏め、この日、新たな勢力が生まれようとしていた。
今はまだ小さな力。しかし寄り集まればやがて止め切れない大きな嵐ともなり得る確信がある。
新たな航海に乗り出した二人は上機嫌に計画を練り始めた。

3

電伝虫というのは、特殊な生態を持つ生物である。
電波で遠く離れた仲間と交信する特徴を持っており、人間はそこに目をつけて彼らへ受話器とボタンを設置。まるで電話のように人間同士の連絡手段として確立された。
今しがた電伝虫での連絡を終えたばかりで、ウェンディは受話器を殻へ置く。
通信を終えた電伝虫はすぐに眠り始めてしまい、一気に静かになる。
応援として寄こされた軍艦の執務室、深く溜息をついたウェンディがだらしない姿で椅子に座り直してしまい、それを見た少尉がすぐさま口を開いた。
「大佐。きちんと座ってください」
「だめ。もう無理よ。ほんとに毎日毎日次から次に色んな問題が……」

「仕方ないでしょう。そもそもはあの海賊に執着したのがいけなかったんです。おかげでネルソン・ロイヤル提督は行方知れず。第八支部は混乱中です」
「そう？　案外ほっとしてるんじゃないかしら」
「思っていても口には出さないで頂けますか。それが大人というものですよ、大佐」
子供のように唇を尖らせて拗ねてしまうウェンディの態度は子供その物。
信頼する少尉の前とあってか遠慮もせず文句を言っている。
こんな姿、部下たちには見せられないと少尉が溜息をついた。基本的に彼女は仕事もできるし真面目だ。だが時折こうしてやる気を失い、愚痴っぽくなって働かなくなることがある。目下の所それが一番厄介な癖。少尉が頭を悩ませる部分だ。
体重をかけて椅子を傾かせたり、戻したり。
カタカタと音を立てながらウェンディがつまらなそうに言った。
「ガープ中将、モーガンを逃がしちゃったんだってさ。引き渡しの時に立ったまま寝ちゃったらしいわ。なんか若くて活きが良いのを見つけたとかなんとか言ってたけど、ほんと、センゴクさんが言った通りよね。良くも悪くも自由なんだから」
「仕方ありません。ガープ中将ですから」
「そう言われるのってすごいわよね。こういうの今まで何回もあったのかなぁ」
「いえ、敵を逃がしたなど滅多にないことでしょう。あの方は戦闘力で言えば現段階でも海軍トップクラス。全盛期と言われた頃ならまず敵が逃げられる訳がありません」
「そ。流石におじいちゃんになっちゃったってことかな」
「否定はできませんが、強いことに変わりありません。それと大佐、ガープ中将を引き合いに出して仕事をサボろうとしてもダメです。聞きませんよ」
「ちぇっ。まだ何も言ってないのに」
ぐぐっと両手を上げて伸びをするウェンディを見て、少尉は一層眉

間の皺を深くする。
言いたいことならいくらでもある。そのせいでどれから言うべきかを悩んでしまうのだ。
険しい表情で彼女へのお小言が今日も始まり、厳しい口調で言葉が飛んだ。
「大体、今回の航海も無駄足でしょう。応援まで来てもらったのに私情を挟まないでください。第八支部所属海兵の役職の選定し直しに、シェルズタウンも人材不足、それから他の基地からも不正に関する報告が来ているんです。次から次に解決しないといつまで経っても終わりませんよ。グランドラインにも帰れません」
「いいのよ、しばらくこっちに居ようと思うから」
「前は散々嫌がっていたじゃありませんか。家族に会えないから、と」
「そうねぇ、あの子たちは寂しがっちゃうけどね。でもたまにはいいじゃない、イーストブルーの市民のために働かなきゃ」
「ハァ……やはり彼のことですか」
少尉が溜息をつけば、ウェンディは笑っただけだった。
ちょうどその頃になって扉がノックされ、外から一人の海兵が入ってくる。背筋をぴしりと伸ばして報告した彼は、目的地に到着したことを告げた。
ウェンディは頷き、少尉を伴って甲板へ出る。
前方に島が見えている。
小さな島で、砂浜に面した位置に小さな村が見えた。
確認した名前では、ココナ村。彼から聞き出した故郷である。
これは明らかに私情、彼女の都合だ。知りたいことがある。だからたとえ短い期間であろうと彼が育った村へ赴き、聞いてみたい話があった。
期待から胸を膨らませるウェンディは笑みを称える。
その感情は生まれて初めて得る物で、今まで感じたことのない不思議な感覚から、彼女自身興奮を抑え切れなくなっていたようだ。

断章　夢見る者たち

1

骨を銜えた犬の船首を持つ海軍船が航海していた。
海軍本部中将、英雄とまで言われたガープの船である。
犬の被り物をした男はとぼけている風に見えて実は海軍屈指の逸材。山を拳で砕き、幾人もの海賊たちを打ち倒して捕縛して、かつては海賊王を名乗る前のゴールド・ロジャーと何度も渡り合った経験を持つ。世代が変わりつつある今の海軍にあってもれっきとした強者だ。
その男がイーストブルーに来ること自体、早々簡単に受け入れられる事実ではない。
その上、海軍の英雄に自分たちが鍛えられるという事実は、まだ見習いになったばかりのコビーとヘルメッポにとっては信じられない事態だった。
二人は現在、甲板に突っ立ってガープの背を見ている。
今も彼は電伝虫で誰かと話している最中。
相手の名前を聞かされ、やはり驚かずにはいられず、全身が硬直して微塵も動けなかった。
《ガープ！　何度言ったらわかる！　任務が終わったのならすぐに戻って来い！　おまえを野放しにしておくと我々の負担となるのだ！》
「ぶわっはっは！　断る！　わしは孫の顔が見たいんじゃ！」
《そんなくだらん理由で断るなァ！》
受話器の向こうで怒鳴っている声に動じもせず、ガープは機嫌よく笑っている。
休暇でもなければ訪れることのできないイーストブルー。久しく寄ることが嬉しくて仕方ないのだろう。ただそのせいで古くからの仲間に迷惑をかけているのは事実のようだ。
コビーとヘルメッポは背筋を伸ばしてその光景を見ている。
噂に違いはない。ガープと肩を並べる古くからの親友と言えば、あ

の男しかいなかった。
「な、なぁコビー、ガープ中将としゃべってるのって……」
「う、うん。きっとセンゴク元帥だよ……や、やっぱり、すごい人なんだ」
どんどん熱くなる相手とは違ってガープの機嫌は揺らがない。
大きな笑い声まで響かせ、傍目に見る腹心が呆れるのも気にせず自由気ままに振舞っている。
コビーはその姿に誰かを幻視しそうになるものの、そんなはずないという思考に邪魔されて、確信に至ることができない。今できることと言えば事態を見守ることだけであった。
「まぁそうカリカリするな。心配せんでも孫の顔を一目見たらすぐに帰るわい。あやつめ、わしを無視して海賊になんぞなりおって。じいちゃんへの愛はないのか」
《おまえもおまえなら孫も孫だ。報告は聞いているぞ。モーガンを取り逃がしたそうだな》
「おっ、早いな。あの監査役の嬢ちゃんか。まったく面倒な奴に報告を……」
《あれも勝手だがおまえはそれ以上だ。まさか居眠りで捕虜を逃がすとは……いいからさっさと戻って来い！　これ以上面倒を増やすな！》
「だーからそれはできんと言うとろうが。わしはルフィのじいちゃんじゃぞ！」
《知るか！　おまえが誰のじいちゃんだろうが海兵の一人であることに変わりはない！　このまま海軍に居続けたいなら処分される前に行動しろ！》
「ふん、何を今更。命令違反なんぞ今に始まったことじゃないじゃろうが」
《それが問題だと言っとるんだ！　まったくおまえはいつもいつも――！》
ガープの笑い声に怒鳴り声が混じる。センゴクの機嫌は彼とは対照的だったらしい。

一方で無視できない物を見つける。
会話の最中、確かに聞こえた名前にコビーとヘルメッポが反応した。
互いに顔を見合わせ、驚愕の表情。
孫に会いたいと言っていた。そして聞こえた、ルフィの名前。
まさかと思って再びガープの背を見れば、焦れた様子の彼は無理やり通信を切ろうとしている。
「とにかくそういうことじゃからしばらく戻らん。すぐ会えたらすぐ戻るわい」
《待てガープ！　話はまだ終わっていないぞ！》
「こっちは終わった。というわけで、またな」
《おいガープッ――！》
受話器が置かれ、電伝虫は眠ってしまう。通信は無理やり切られてしまった。
きっと今頃センゴクが怒り狂っていることだろうが、やはりガープは心配せずに上機嫌。久しぶりにイーストブルーへ来た機会を最大限に利用しようとしている。それも私利私欲のためだけに。長い付き合いのある部下であっても海兵として如何な態度かと思ってしまう姿だった。
小さく嘆息し、呆れた様子で腹心の男が口を開く。
ボガードという男、目深にかぶった帽子の下からガープを見やり、落ち着いた声で問いかけた。
「いいんですか？　またどやされますよ」
「いつものことじゃ。それより今は孫に会うチャンス。これを使わん手はないじゃろ」
「親バカも大概にしてください。ま、言っても聞かないでしょうが」
「ぶわっはっは！　わかっておるなら結構。さぁて、あいつはどこへ行きよったか」
電伝虫の傍を離れて海を眺めるガープに、堪えきれずにコビーが声をかけた。
今でも上官が相手だと緊張する。特に彼はそんじゃそこらの海兵

ではない。海軍の中では知らぬ者は居ない、どころか、世界中に名を轟かせた英雄の一人。
自然と声は震えたが、それでも聞いてみたいことがある。
「あ、あの、ガープ中将。さっき、ルフィって名前を……」
「んん？　ああそうじゃ、わしの孫はルフィという。なんじゃ、もしかして知り合いか？」
「えっと――」
不安げな表情でコビーは一度ヘルメッポを見た。驚きのあまり彼もまた顔面蒼白となって何も反応できずにいる。それも当然だ、海軍の英雄の孫が海賊となり、すでに顔見知りなのだから。
言って良い物かどうか。
わからなかったが上官に嘘をつく訳にはいかないと、真面目な彼は有りのままを語る。
「実は、ぼくが海兵になるきっかけをくれたのは、ルフィさんなんですっ。圧政に苦しむシェルズタウンを救ったのも、モーガン大佐を倒したのも、全部ルフィさんがやったことなんです！」
「なにっ!?　あいつめ……！」
「で、でもルフィさんにも戦う理由があって、決して悪いことがしたかったわけでは――！」
「よくやった！　流石我が孫！」
「へ？」
怒り出すかと思いきや、ガープは拳を握って喜色を露わに吠えた。
想像していた反応ではない。
コビーとヘルメッポはぽかんと口を半開きに、ボガードはやれやれと首を振る。
「少し前まで鼻水垂らしとったあいつが強くなったもんじゃ。まさか海軍大佐に勝つとはな。やはりわしの教育は間違えていなかったということか」
「ガープ中将、お忘れなく。あなたの孫は海賊です」
「なぁに今からでも間に合う。わしが説得すればいちころじゃて。じいちゃんを舐めるな」

「あなたの孫という時点で、とてもそうは思えませんが……」
腕組みをしてガープが若い二人を見た。
見られた二人は体がびくりと震え、表情が強張ったのだがさほど気にされることもなく。ガープはふと考えてみる。二人の顔を見つめるため自然と緊張を強いるような状況だ。
彼らはルフィと出会っている。しばらく会っていなかった孫の今を知っている。
親心から気になってしまい、自然とやさしい口調になって問うてみた。
「おまえたちルフィに会ったか」
「は、はい」
「ルフィはどんな男になっておった？」
「それは……とても自由で、誰にも縛られなくて」
被り物をしていてもガープの笑みが柔らかくなったのには気付いた。
そのせいもあって、ルフィのことを思い出したこともあって、ふっと胸の中が軽くなる。この瞬間だけは緊張を忘れてしまい、彼について語る時だけは口がスムーズに動く。
自分の想いのままを伝える。
それが友に対する尊敬の表れで、嘘一つない言葉が並べられた。
「ぼくが見てきた中で最高の、とても素敵な海賊でした」
「気に食わん！」
「ええっ!?」
しかし言い終えた直後に表情が一転し、瞬時に怒りの念が放出された。
振り回されるコビーとヘルメッポが動揺する。
それを全く意に介さずにガープは迫力のある姿で言いのけた。
「わしはルフィを海兵にしたかったんじゃ！　それをあいつめ、赤髪になんぞ毒されおって、まさか本当に海賊になりよるとは……全く気に入らん！」
「だから、それなら自分で育てればよかったでしょう。目を離すか

らそうなるんです」
「仕方ないじゃろう。仕事せんかったらセンゴクの奴がうるさいし、それにエースのこともあった。わしの体は一つしかない」
「それはそうですが」
「おのれ、憎きは赤髪じゃ。あれが四皇などと呼ばれてなければ、わし自らが出向いて仕留めてやるものを」
「それだけはやめておいてください。四皇の誰かが欠ければ、それだけで新世界の秩序は乱れる。きっと今以上に大荒れになりますよ」
「わかっておる。だから今こそルフィを捕まえ、わしの手で海兵に育てる！」
「元海賊の入隊を大将赤犬が許すとは思えませんがね」
「サカズキにはわしの方から上手いこと言っとく。孫じゃからと言えばなんとかなるじゃろ」
「それは全然上手いこと言ってません」
ガープとボガードのやり取りは堂に入ったもので、長らくの経験を感じさせる。
見つめるままのコビーとヘルメッポが割って入る隙間などなく、何をする訳にもいかない雰囲気で、しばし緊張したまま無言で立ち尽くすこととなった。
「とにかくこれからルフィを探しに行く。さて、どこから探したものか……確か監査役の嬢ちゃんが海賊に船をやられたと言っておったな。それに関わっておらんのか？」
「関わっているんでしょう。麦わら帽子をかぶったドクロだったそうです」
「何？　そんな話は聞いておらんぞ」
「嫌な予感がしたもので」
「その麦わら帽子こそルフィに違いない！　憎き赤髪から受け取ったという帽子じゃ！　その船はどこへ行った！」
「さぁ、詳しくは聞いていませんが」
「今すぐウェンディに電伝虫を繋げ！　遠くへ行く前に捕まえるぞ！」

「やれやれ……」
今度はボガードが受話器を取って通信を始める。疲れた表情で全く気が進んでいない。しかし反論したところで自由気ままな彼が考えを変えるはずもなく、こうするしかないのだろう。
ボガードの動きを見た後でガープは振り返る。
今になって思い出したとばかり、立ち尽くす二人を見て笑いかけた。
「おぉ、そう言えば言うのを忘れておった。おまえたちには今日から特別に修行をつける」
「え？　修行、ですか」
「そうじゃ。わしの船に乗る以上は強くなってもらわねば困るのでな」
唐突に彼は拳を握り、ポキポキと音を鳴らし始める。
妙に恐怖心を煽る音で二人の表情が変わった。
まさか嫌なことは言わないだろうな。そう思った瞬間に笑顔でガープから告げられる。
「とりあえず今の実力を見てやろう。さぁ、どこからでもかかってこい」
「え？　あ、あの、ガープ中将……」
「お、おれたち雑用で、まだ訓練にも参加してないんですが」
「だからわしが鍛えるんじゃろう。遠慮はいらんぞ、思いっきり来い！」
顔を見合わせる二人だったが、やはり上官の命令に逆らう訳にはいかないという考えが変わらず、行くしかないのかと怯えながら頷く。
二人は駆け出し、そしてガープに殴り飛ばされた。
たった一撃で気絶させられてしまったものの、吠えながら向かってくる様を見て、度胸はあると思ったらしく、ガープは上機嫌。鍛え甲斐があるだろうと大声で笑った。
今日この日より彼らの修行は始まり、強くなるための手ほどきが始まったのである。

2

平穏に包まれる軍艦島の桟橋。一味の休養は二日目に入っていた。ルフィは先端に座っており、近くには水着の上にTシャツを着たナミが居る。

釣りをする彼の近く、背中を向けられているとあって、誰も見ていないと思って少し思案する表情。どことなく物憂げでもあった。膝を抱えて座るナミは何一つ変化のない海を眺めている。

水平線は遠く、和やかな様相。

驚くほど平和な日々だ。今まで何度も危険な目に遭ったがそれが遠い日のことに感じる。

こんなに落ち着いていていいのかと思う。

のんびりするなど、何年振りのことだろうか。ひょっとしたら子供の頃以来の可能性もある。泥棒稼業を始めてからというもの、心が落ち着く日などなかった。それを想えば今はやはり不自然なほど落ち着いている。まるで自分が自分じゃないのではないかと思うほどに。

緩やかな風に触れて目を閉じる。

波の音が心地いい。海をこれだけ近く感じて、やさしいと思ったのは初めてだ。

きっと今までは心に余裕がなかった。そして今は余裕が生まれていて、今まで見えなかった物が見えているのだろう。変化は自分自身でも理解している。

安心しきった顔でまどろんでいると、ふとした瞬間にルフィが声をかけてくる。

「そういやさ、なんでナミは泥棒やってんだ？」

「なによ、急に」

「なんか気になった。まだ聞いてなかっただろ」

「別に大した理由なんて。ただお金が欲しかっただけよ」

「ふぅん」

「聞いといてそのリアクション？　あんたは相変わらず自分勝手ね」

くすりと笑って彼の背中を見る。

いつもと変わらずマイペースな姿。興味があるのかないのかさえわからない。顔と視線は自身が落とした釣り糸を見つめていて、そちらに集中しているようにも思える。
それでいい。その方が気が楽になる。
再び目を閉じ、薄く笑みを浮かべてナミは安堵した。
ルフィだけでなく彼らと共に居ると肩の力が抜ける気がする。これがリラックスと言うのだろうか。詳しくは知らないが気分は悪くない。
「じゃあさ、なんで海賊が嫌いなんだ？」
「なんでって言われても」
「おれは海賊好きだぞ。海賊ってのはさ、冒険するし喧嘩するし、お宝だって見つかるんだぞ。金が欲しいなら海賊やりゃいいじゃねぇか。おれやっぱ航海士はおまえがいいや」
「また勝手なこと」
「海賊は宝探しもするんだ。おれとキリだけで見つけたことだってある。なぁ、いっしょに海賊やろうぜ。金が必要ならいくらだって集められるぞ」
「冗談。私は海賊が嫌いだし、それにほんとに欲しいのは、お金じゃなくて……」
言いかけてハッと我に返る。気を抜き過ぎてしゃべり過ぎたらしい。リラックスするのは良いのかもしれないが気を許し過ぎてもいけない。気付いた後で佇まいを直して顔を上げた。
もう緩み切った彼女は居ない。また前のような姿。
背中でそれを感じつつ、ルフィはやはり敢えて問い詰めることはしない。
「先に言っておくけど、私はあんたたちの仲間に、海賊にはならない。待つのは勝手だけどいつまで経っても変わらないわよ」
「キリだって最初はそう言ってた。でも今はおれの仲間だぞ」
「いっしょにしないでよ。私はそうはならない」
「まぁいいや。しばらく待ってみる。そしたら気が変わるかもしれねぇだろ」

「はいはい、どうぞご勝手に」
脚を伸ばした後で両腕も伸ばし、大きく体を伸ばす。ぐぐっと筋肉が伸びるようで心地良さがあった。腕を下ろしたナミはまた静かに海を眺める。
いつか彼らとの別れの時が来るのだろう。ただ今はそれがいつなのかわからない。
情を残さない方がきっと楽だ。
今はもうすでに危うい。このままずっと居れば必ず離れ難くなってしまう。
それでも、今はまだ。
人知れずそう思ったところでルフィがいつも通り口を開いた。
「でも重くなったら言えよ。おれは敵にはならねぇ」
「え？」
「おまえのこと気に入ってるからな。仲間になるかどうかは自分で決めりゃいいけど、ナミが本当に困ってる時はおれたちに言え」
それだけ言って声は途切れてしまう。もう言い終えたらしかった。
驚いた様子のナミはまだ続きを待っていたような素振りさえあるが、ルフィはそれ以上語らず。
ある時、餌に魚がかかったらしくて竿が揺れた。
途端に両手に力が込められ、ぐっと強く引っ張られる。今日初めてのヒットだった。
「おぉっ、きた！　今日の昼飯ぃ！」
「あ、うん……」
「おいナミ、網ないか網！　あとバケツ！」
「どこにあるのよ。それくらい先に用意しときなさい、もう」
表情を変え、溜息をつきながら立ち上がる。
桟橋のどこを見回しても網もバケツも置かれていない。
仕方なく取りに行ってやるつもりだった。
そうしてナミが砂浜へ行こうとすると、向こうからアピスが走ってくる。
アピスが網を持って、隣を走るリュウ爺はバケツを頭に乗せてい

た。絶好のタイミングで持ってきてくれたものである。思わずナミが微笑んでルフィに振り返る。
しなる竿に夢中な彼はまだ気付いていない。仕方ないので教えてやった。
「両方来たわよ。まったく不用心なんだから」
「ほんとか⁉　ありがとう、助かった！」
「私じゃなくてアピスにね。それとリュウ爺にも」
言い残してナミは桟橋を歩き、アピスたちとすれ違って歩き去った。
背後からは慌ただしい声が聞こえてくる。初めての釣果に興奮しているらしいことが声から伝わった。しかし彼女は振り返って確認するでもなく離れていく。
「上がってきた！　でっけぇぞ！」
「ルフィ、ほら網っ！」
「掬ってくれ！　も、もってかれちまいそうだ！」
「うん！」
バシャバシャと水音が激しくなっている。魚が上がってきたのだろう。
ゆっくりその場を離れて砂浜へ降りる。
釣竿を一本持って村から来たシルクともすれ違い、その一瞬に足が止まった。
シルクは何かに気付いた様子で不思議そうに首をかしげる。
「あれ？　ナミは釣りしないの？」
「今日はパス。気分じゃないし、昼寝でもしようかしら」
「ふぅん……ねぇ、何かいいことあった？」
「ん？　どうして」
「だって、なんだかいい顔してる。前よりやさしく見えるよ」
「そう？　気のせいなんじゃない」
ふわりと笑って肩をすくめる。
やはり今日のナミはいつもよりきれいで、思わず目が惹きつけられた。

見ているだけでシルクまで嬉しくなり、彼女へかける声も弾み出す。
「ルフィと話してみて、いいことあったかな」
「別にぃ。めんどくさい奴ってわかっただけ」
「ふふ、そっか」
「あんたも気をつけなさいよ。振り回されてばっかりじゃ疲れるからね」
またナミは歩き出し、村へ入っていく。
その背を見送ってシルクは嬉しそうにしていた。
前よりずっと距離が近くなって、もっと親しくなれればいい。それで友達のままか、仲間になれるかはまだわからないものの、今より近くなった方がきっといいに決まってる。
言葉にはせず心の中で伝えた。
ナミを見送っていると桟橋の上から声が聞こえて振り返ってみる。
ルフィとアピスが両手を上げてこちらを見ており、ルフィの手には一匹の魚。中々大きなサイズが釣れている。おかげで二人とリュウ爺は嬉しそうにしていた。
「釣れたぁ～！　にっしっし、大漁だな！」
「シルク～！　ナミ～！　一匹釣れたよぉ～！」
声をかけられてすぐにシルクが手を振り始める。ナミはそのまま行ってしまった。
しかし彼女が密かに笑みを浮かべていたことは、たとえ背中合わせであってもシルクにも伝わっている。彼女の隠された素直さが今ではわかるかのようだった。

3

いつもと変わらぬ朝が来て、その少年は日の出を見た後に村の入り口に立った。
腕組みをして堂々とした態度。まだ朝の陽気さに包まれ、緊張感に欠ける辺りを見つめる。
全くけしからん。この村へ刺激を与えてやろうと思う。

いつものことではあったとはいえ、少年は大きく息を吸い込むと覚悟を決め、すべての村人へ伝わるように大声を出した。
「おいみんな、大変だぁ！　海賊が来たぞぉ～！」
彼は村の中を走り回って叫ぶ。海賊が来たぞ。
その言葉に反応した村人は慌てて起き出し、中には気軽に笑う者も居て、やがて家の外へ飛び出してくる者も居た。しかも手に持たれた武器代わりのチリトリは少年へと投げられる。
足元へ落ちるチリトリを見て、堪えきれない様子で少年は大声で笑い出した。
「ウソだぁ～！　わっはっはっはぁ！」
「こらぁウソップ！　てめぇは毎日毎日懲りねぇ野郎だな！」
家から道具を持って出てきた中年の男性が言う。
他にも何名か武器を手に彼を睨みつけていた。
これがこの村の風景。嘘つきの少年が朝一につく嘘で村が目覚め、一日が始まる。今やすっかり習慣となってしまっている光景で、好意的に受け取る者も居れば、武器を持ち出すように否定的な態度を持つ者も居る。だがそれらすべて含めて朝の風景だ。
少年は楽しげに笑い、誰かが走り出すよりも先に自分が駆け出し、逃げ出した。
「今日という今日は許さねぇ！　この嘘つき小僧め！」
「わーっはっはっは、捕まえてみろぉ！」
少年の逃げ足は大人たちでも追い切れず、すぐに皆を置いて村を出て行ってしまう。相変わらず尊敬できるほどの逃げ足。村人たちの追跡はすぐに終わってしまった。
一見殺伐とした雰囲気を持ちながら、一方でのどかな空気である。
不思議なのは本気で怒っている者が一人も居ないことだった。
毎日嘘をつかれているが、誰も本気で彼を嫌っていない。常日頃から普通に挨拶をして、なんでもない世間話をして、朝になれば嘘をつかれて追い回す。そんな奇妙な関係。
シロップ村の一日は今日もいつも通りだった。
逃げ出した少年は村の近場、木の上に登って一息ついている。

朝一番に活気を取り戻した村を眺め、ひどく満足そうな笑顔である。
「ふぅ～、今日もいい仕事をした。退屈なこの村に刺激というスパイスを与えてやったぜ」
木の上で脱力し、少し休んでいると木の下へ子供たちが三人集まってくる。
彼らは少年を見上げて平然と声をかけた。
「キャプテン・ウソップ、ウソップ海賊団集まりました！」
「ん？　おぉーおまえら来たのか。今日はなんか早くねぇか？」
「だってキャプテン、今日はいつもと予定違うでしょ」
「今日はお屋敷に行く時間、早くしたんでしょ？　ひつじに見つからないようにって」
「やべっ、そうだった！　約束があるんだった！」
すっかり失念していたことを教えられ、慌てて少年が木から降りてくる。
降りてすぐに走り出し、子供たちと向き合うこともなく行ってしまう。それを不満に思ったりはしない。今日は約束があるのだと知っているからだ。
「悪いなおまえら、今日の冒険は後回しだ！　おれは用事があるんで行ってくる！」
「行ってらっしゃーい」
「おみやげ買ってきてねー」
「旅行じゃねぇんだよ!?　買えるか！」
振り向き様に大声で叫びつつも、尚も駆けていく。
辿り着いたのは丘の上にある大きな屋敷だった。村一番の大きな家に、村を見下ろす位置。この村で一番の金持ちが住む家なのは傍から見ても明らかである。
その屋敷へ到達した少年は、正門から見て西側にある塀に沿って歩いた。
あらかじめ印をつけていた地点で足を止め、植え込みを前にすると両手を伸ばす。

事前に植え込みを切り、穴をあけていた。手で引っ張れば四角くくり抜かれた一部分がすぽっと抜けてしまい、屈めば大の大人でも通れるスペースが現れる。そこから庭の中へ潜入し、ちゃんと穴を隠して、彼は誰にも見つからずに屋敷の敷地内へ入った。

そうしてすぐ傍に見えた窓を軽く小突く。

小突いた後は勝手知ったる様子で傍の木の根元へ腰を下ろし、座って時を待った。

やがて窓が開いて一人の少女が顔を出す。

ふわりと柔らかい笑みで少年を見つけ、嬉しそうに声を弾ませた。

「ウソップさん」

「よぉ、ちょっと遅れちまったか。悪いな」

「ううん。ちゃんと来てくれたから気にしてないわ」

「実は遅れたのには理由があってな。昨日からずっと冒険に出てたもんで」

「そうなの？　どんな冒険？」

「まぁそう慌てんな。時間はあるからゆっくりな」

佇まいを直して少年が語り出す。

それは嘘の冒険譚。彼の頭の中で作られ、紡がれ、言葉にして彼女だけに伝えられる物語。

他の誰もが知らない、彼らだけが知るストーリーだった。

「おれの友達が好物が食いたいって言うもんだから、そいつを探す旅だったんだ。ただここで普通じゃないのはおれの友達でよ、信じられないかもしれねぇけど、ドラゴンなんだ。空想上じゃなく本当に存在してる」

「それって、あの千年竜みたいな？」

「そうさ、まさしくその千年竜だよ。友達の千年竜は貝が大好物なんだ。だけど体がでか過ぎるせいで、その辺の貝じゃちっとも腹いっぱいにならない。そこでおれを頼ってきた。一度でいいから、腹がはち切れるほど大きな貝を食ってみたいってな」

「大きな貝を探す冒険ね」

「正直言って大変だったね。島を見つけるのは早かったけど、なん

せ島みてぇにでっけぇ貝だ。運ぶのがそう簡単じゃなくてよ、おまけに友達はもう歳食っちまって動きたくねぇって言うし、一番時間かかったのはその貝を運ぶことだった」
「どうやって運んだの？」
「たまたま近くを巨人の海賊たちが通ったのさ。こいつを持ち帰ったらいっしょに宴をしようって言って手伝ってもらった。千年竜は大満足で、巨人たちとも仲良くなれた」
「ふふ、そっか。いいお話ですね」
「でもこれで終わらねぇのがおれの冒険よ。いいか、その島には実は秘密があった。島くらいでっけぇ貝殻の中には、これまた大きな真珠があったんだ」
「真珠？　それも島くらいの大きさ？」
「もちろんだ。当然おれたちはそれを見て喜んだけど、そんだけでかかったら気付く奴らも当然居て、すぐに横取りしようとする海賊たちがやってきたんだが――」
少年は堂々とホラ話を進め、少女は興味津々にその話を聞き、時折幸せそうに笑う。
ひどく歪な時間で、奇妙な空間。
しかしこれが二人にとっての当たり前であって、その後も楽しそうな雰囲気のまま続けられた。

シロップ村編

シロップ村

三日間の休息を終えて、軍艦島を旅立つ時が来た。
一味は二隻の小舟を島民から譲り受け、それぞれ男性と女性に分かれて乗船する。
世話になった間に打ち解けたこともあってか、島民総勢で見送られようとしていた。
桟橋の上、小舟に最も近い場所にはアピスが立っており、傍らにはリュウ爺。その後方に島民たちが並んでいて、四匹の巨大な千年竜も海に浸かって彼らを見ている。
奇妙な体験だった。死にかけた時もあったし、絶望した瞬間もあって、けれど生き残った後に見れたのはとても美しい風景。あの光景は今も彼らの心に刻まれ、温かな気持ちが生まれている。今回の冒険も決して無駄な物ではなかった。皆がそう思えていただろう。
船上から振り返った麦わらの一味はアピスの笑顔を見つめる。
別れを辛く思う様子はない。休息の間、彼女とはたくさん親交を深めた。
すでに再会を約束し、必ず会いに来るとの言葉を受け取っている。その時まで彼女は竜の巣を守り続けることを約束した。千年竜たちの故郷は誰にも荒らさせないと。
後ろ手に隠していたそれを前へ掲げ、アピスはにこやかに笑う。
「ねぇルフィ。これ、もらってもいいかな？」
「ん？　あ、おれたちの旗か」
「うん。船が壊れちゃった時に島まで飛んできたんだ」
見せられたのは彼らの旗だった。麦わら帽子をかぶったドクロ。端の辺りが少し破けているものの、船に掲げればそれだけで自らの身分を海賊だと証明するマーク。
それが欲しいとアピスは言って、ルフィは不思議そうに首を傾げた。

「別にいいけどよ、何すんだ？」
「みんなと約束したから、迷わないようにこの旗を上げておくの。そしたら方向音痴のルフィでも、ここが軍艦島だってすぐわかるでしょ」
「そりゃいいなぁ。おれ道とか全然わかんねぇから助かるぞ。なっはっは！」
「笑い事じゃないよルフィ。方向音痴って傍から見てると面倒なんだから」
「おい、なんでおれを見て言ってやがる」
ルフィは腰に手を当て笑っていた。後ろではキリの言葉にゾロが眉間の皺を寄せている。
拒否する理由はない。それが彼女の決めたことならばしたいようにすればいいと思う。
彼がそんな様子なのもあって、身を乗り出したのはシルクだ。
村や町が海賊旗を掲げればどうなるか。海賊に関する話をいくつも聞いていた彼女は意味を理解している。言わばその言葉は親切心から来る忠告だった。
「気持ちはわかるけど、気をつけなきゃだめだよ。もし海賊旗が見つかったら海軍が怒るかもしれないから、あんまり目立ち過ぎないようにね」
「大丈夫。私たちには強い友達がいるんだもん」
アピスが海を見れば、首をもたげた千年竜が小さく鳴き、同じくリュウ爺も鳴き声を発する。
前々から思っていたがやはり彼女は思い切りが良い。
一人で海軍に立ち向かったり、海賊に向かって助けを求めたり、行動力はとても普通とは言えない。とはいえ、それで軍艦島が助かったのも事実だ。
シルクは思わず苦笑してしまう。
確かに千年竜が居れば海賊も海軍も簡単には手を出せない。
世界で最も平和な海、イーストブルーに彼らを倒せるほどの実力者は居ないだろう。

多少の危険も承知で旗を掲げる気があるようで、溜息をついたナミが口を開いた。
「ハァ、ほんと世も末ね。ここにも海賊に憧れる子が一人……あんたと同じよ、シルク」
「そうだね。ふふ、そう言えば私も同じ歳くらいの頃から好きだったかな」
話すことなら島に滞在している間にたくさんしゃべった。
今更話すことは少ない。出航の時は確実に近付いて、桟橋と小舟を繋ぐロープが投げられる。
潮の流れに乗って、船はゆっくりと動き出そうとしていた。
ルフィがアピスを見て呟く。
離れながら最後の会話が行われる。
「なぁアピス。おまえは友達じゃなくて、おれたちの仲間だ」
「仲間？　友達とどう違うの？」
「友達よりもっと近いってことさ。おれたちは世界を一周して、ワンピースを見つけて海賊王になって、もう一回この島に来る。それまで竜の巣とその旗、守っててくれ」
「うん！　もちろん！」
「約束だ。おれたちの仲間ってこと忘れんなよ」
「絶対だよ、絶対また会おうね！」
徐々に離れていく船を見送り、アピスは見えなくなるまで手を振り続けた。
しばらくして、船は彼方へと消えていく。
手を振るのをやめ、両手で旗を持った彼女はしばらく水平線を眺めた後、ふと振り返る。
何を想ってか突然小走りで駆けだした。
「リュウ爺、来て」
傍らにはリュウ爺もついてきて、島民たちの間をすり抜けて砂浜へと走る。
浜へ辿り着くと、あらかじめ選別しておいた長い木の棒を持ち上げ、端に海賊旗を括りつける。風にたなびくようになれば、棒を地面

へ突き立てた。
風に揺れたドクロマークが海を眺める。
本来、海賊が島に己の海賊旗を掲げる時、そこを自らのナワバリだと主張する意味があった。それを知ってか知らずか、軍艦島には確かに彼らの旗が立てられたのである。
この風景に気を良くしたアピスが笑って水平線に目をやった。
彼らと出会えてよかったと心から思える。
いつか必ず、約束は守ってもらえるだろう。
そう信じてアピスはリュウ爺に微笑みかけ、小さくなってしまった彼も笑ったように思え、前とは違う可愛らしい鳴き声を発した。

＊

昼時になって太陽の位置が変わっていた。
今日は快晴。空には雲の姿も少なく、青々とした色が広がっている。
温かい陽気を感じて崖の上から海を眺めていた少年は、島に近付く二隻の小舟に気付いた。
「ん？　なんだあれ」
体重を預けていた木の幹から背を離し、立ち上がって船を見つめる。
船は右手側にある海岸を目指しているらしい。島の住人として地形を知り尽くしている彼はふと小走りでそちらへ向かい、やがて船が着岸する頃にその場所へ到着する。
この島に来訪者など来ない。村は陸の中にあり、海に面していないため存在を知っている者以外は滅多にやって来ないのだ。彼が動き出したのも単純に珍しい物を見たからだろう。
片方の小舟から一人の少年が降りてきた。
麦わら帽子をかぶって、歳の頃はおそらく同じ。危険そうな顔つきではない。そのせいか海賊の類には思えず、ただの旅行者だと思って、彼は逃げ出さずに坂を下りていく。

対して、一足先に上陸したルフィも顔を上げ、目の前に立つ人物を見つけた。
「だれだおまえ？」
「いやそりゃこっちのセリフだろ。誰だおまえら？」
妙に鼻の長い人間だった。
茶色のオーバーオールを着て、頭にはバンダナを巻き、肩からがま口の大きな鞄を提げている。
おそらく町民だろうと思うほどやさしげな顔つきで、大して警戒心はない。相手も同じく警戒心は持っていない。初対面でありながら好奇心を見せるようですらあったようだ。
どうやら、目が合った瞬間に馬が合う物を感じたらしい。
他の面子が船が流されないよう作業している間、二人は何の気なしに話し始めていた。
「おれはルフィ。海賊だ」
「海賊ぅ？　嘘つけよ」
「うそじゃねぇよ、ほんとだ」
「どっからどう見ても海賊には見えねぇ」
「でも海賊だ。マークだってあるんだぞ」
「どれ？」
「今はねぇけど」
「じゃあ証拠はねぇじゃねぇか」
「証拠はねぇけど、海賊なのはうそじゃねぇ」
「やっぱりおまえら海賊じゃないだろ。船だってそんなちっちぇぇし」
「もうちょっと前はでっけぇ船乗ってたんだぞ。あれは奪った奴だったけどな」
「言っとくけどな、おれに嘘ついたって騙されやしねぇぞ。嘘にかけちゃそこらの奴に負ける気はねぇんだ。おれ自身が嘘つきだからな」
「ほんとなんだって」
ルフィの言葉を聞き、不敵に笑った少年は親指で自身を指しなが

ら、自信満々に言いのける。
「おれの名はウソップ。このシロップ村を占拠するウソップ海賊団の船長だ」
「へぇ～おまえも海賊なのか！」
「気をつけた方がいいぜおまえら。もしこの村を襲うようなことがあれば、このおれが絶対に許さねえ。おれの一声で八千人の部下が動き出し、おまえたちをあっという間に倒すだろう」
「ええっ!?　八千人!?」
ウソップと名乗る少年の言葉に、面白いほどルフィは一喜一憂。
さらに調子を上げてきたウソップがしたり顔になる中、船から下りたナミが近付いて来た。
「あぁそうだ。だからおまえら、言葉遣いには気をつけろ。人々はおれを称え、さらに称え、こう呼ぶんだ。キャプテ～ン・ウソッ――」
「嘘でしょ」
「げ、バレた!?」
「ほらバレたって言った」
「あぁっ、バレたって言っちまった！　おのれ策士め！」
「あっはっは！　おまえおもしれぇ奴だなぁ」
ナミの端的な言葉に次々大げさな反応を見せる彼。ウソップのリアクションでルフィは腹を抱えて笑い、ずいぶん面白がっていたようだ。
自ら嘘つきだと名乗ったのだから、嘘をついたとバレるのも当然だろう。
それ以前に、彼は八千人の部下を従える海賊には見えない。
呆れたナミは嘆息し、やれやれと頭を振る。
彼らが軽快なやり取りをしている間に残りの三人もやってきた。
会話は聞こえていて、ウソップの態度や言葉からは危険性が感じにくく、警戒する者は居ない。むしろ楽しそうな人物だと興味を持ったところで不思議はない相手。
気軽にやってきて戸惑い無く会話に混ざる。
「面白い人だね。そのシロップ村ってとこの人？」

「まぁな。それよりおまえらこそどこの誰なんだよ」
「さっきルフィが言った通り。海賊さ」
「嘘じゃなくてか？　おれには旅行者にしか見えねぇが」
「そう見えても仕方ないよ。まだ駆け出しで自分たちの船さえ持ってないんだ」
一歩前に出てルフィの隣に並んだキリが右手を差し出した。
多少の驚きを抱きつつ、ウソップも笑顔ですぐにその手を取る。
「ウソップ、だったよね。ボクはキリ。よろしく」
「ああ。しっかし海賊かぁ……人は見かけによらねぇっつーか。全然見えねぇな」
「それでさキャプテン。一つ聞きたいんだけど、村に船を造ってくれる大工さんとか居る？　もしくは売ってくれる人とか、譲ってくれる人とか」
「あとメシ屋！　メシ屋教えてくれ！」
警戒していないのはウソップも同じで、友好的な態度の彼らを恐れていない。
尋ねられればすぐに考え始めて、顎に手を添えて平然と答え始めた。
「うーん、メシ屋くらいならそりゃ案内できるけどよ。船ってことはあれだろ、海賊船が欲しいってことだろ？」
「ズバリその通り。どっかで手に入らないかな」
「そりゃ無理じゃねぇかな。いや、可能性があるとすりゃ一つか」
顔を上げたウソップはキリを見ながら言う。
すっかり役割は分けられているらしく、誰が指示するでもなく雑務は彼が受け持つ様子。細かな話し合いも大概はキリが進み出て行っているのが常だ。
他の者は彼らのやり取りを見守るばかりで口を挟むことはなかった。
「大きな屋敷が一つだけあるんだけどよ。船を持ってるとすりゃそこだけだろうな」
「じゃあ交渉の余地ありか。とりあえず行って確かめてみよう」

「つーかおまえらほんとに海賊なのか？　おれはそこが半信半疑のまましゃべってんだが」
「本当だって。証拠は何もないけどさ」
そう言われてもまだいまいち理解できていないらしい。船を必要としていることはわかったものの、話したところでそれらしさが感じられないのが原因だろう。特に笑顔で話しかけてくるルフィとキリの態度は海賊だと名乗られてもそうは思えない。
ルフィは尚も笑顔で、妙に親しげに話しかける。
「なぁ、ウソップは得意なこととかあんのか？」
「は？　なんだよいきなり」
「なんとなくだ」
「そりゃおまえ、おれは狙撃の王様って呼ばれてるんだぜ。おれのパチンコに狙われた奴は絶対に逃げられねぇさ。まず間違いなく百発百中だからな」
「へぇ～。じゃあ狙撃手にちょうどいいな」
笑顔のまま告げられた一言に全員がきょとんとした顔になり、気にせずルフィは言う。
「ウソップ、おれの仲間になれよ」
「……はぁ!?」
唐突な発言にウソップが思わず声を出した。だがその一言には他の面子も驚いており、彼の突発的な行動には慣れているキリでさえ驚愕して表情を変える。
これにはシルクやゾロも口を開かずにはいられず、見守っているだけから口を開いた。
「ねぇルフィ、ちょっと突然過ぎない？　いくらなんでも出会ったばっかりだよ」
「それに船も見つかってねぇんだぞ。ちゃんと考えて言ってんのか？」
「んー、なんか懐かしい感じがするんだよな。なんでだろ？」
「いやおれに聞かれても」
言われたウソップも困惑しているようだ。

嘘つきの彼でも、ルフィが嘘を言っているのか否かがわからない。ただ出会ったばかりでも本気で言っているのではないだろうかという疑念があって、不思議な男だと思う。
腕組みをして笑いかけてくる顔は本気に思えた。
彼は尚も意見を変えない。
「だっておれたちには狙撃手が必要じゃねぇか。大砲撃っても当たんなかったんだし、キリも必要だって言ってたろ？　それになんかウソップはいい奴そうだ」
「だからってこいつの腕も見てねぇだろ。一発でもその腕前を見せたんならまだしもだ」
「じゃあ見せてもらおう。なぁウソップ、海賊やる気になったか？」
「いやいやいやいや。ちょっと待て、待てって。おまえら会ったばっかりで何を色々と……」
話が好き勝手に進められてウソップの困惑が深くなる。
出会って数分、ここまで親しい態度になれるものか。初めて出会う性質の相手に、人懐っこい彼ですら戸惑ってしまう。他人と話したりするのは好きで、自分でも得意だと思っているが、あまりに唐突過ぎる。尚且つ、今直面している問題はあっさり決められるほどの簡単さではない。
海賊になるか否か。
いつか、とは思っていた彼は徐々にだが真剣に悩み始めていた。
海賊に対する憧れがある。それも理由があって幼少の頃から。
今になって状況が理解できてきたらしく、ウソップがじとりと汗を掻く。
自分は今、確かに出会ったばかりの彼らから仲間にならないかと勧誘されたのだ。
「おれが、本物の海賊に……？」
「ああ。おれはさ、グランドラインを航海して海賊王になるんだ。いっしょに冒険しようぜ」
「か、海賊王!?　そりゃおまえ、あのワンピースを見つけるってことじゃねぇか！」

「本気でやるぞ。おれはガキの頃からずっと決めてたんだ」
迷いのない目を見ると体が震えそうだった。
心の奥底から焦りも生まれてきて、決断を求められていると感じる。しかし彼らが悠長に待ってくれる様子もなく、緩い表情でキリが仲間を振り返った。
「それじゃ、ウソップの力量のほどは船長に見極めてもらおう。その間に必要な物資を買って来ようか。ルフィは肉でしょ」
「おう！」
「お、おい、おまえら本気か？」
「嫌だったら断ってもいいんだよ。無理強いはしないから」
キリは気楽に言うものの、ウソップの表情は晴れず。
どことなく楽しそうなキリがルフィの頭へ手をやり、撫でるように軽く頭を叩きながら言う。
「この人も多分まだ半信半疑の状態なんだ。なんとなく波長は合ってるみたいだけど、本気で連れてくって決めたらしつこいよ。断るなら今の内だから」
「しっしっし」
「あ、ああ……」
一方的に振り回されている気がするウソップだが、異論を唱えるだけの冷静さも無いため頷くしかない。彼らは気遣いも無く独自のペースを守っていた。
仲間たちの顔を見回したキリは別行動を考える。
人数も増えて役割を分けられるようになった。
何も常に全員で行動する必要はないだろうと提案を始める。
「ルフィにはウソップの狙撃技術を確認してもらおうか。その方が確信も強まるでしょ」
「そうだな。じゃそうする」
「とはいえ一人じゃ不安だな。もしもの場合を考えるとストッパーを用意したいところだけど」
キリの目がゾロを捉える。途端に彼は表情を歪めた。
「なんだよ」

「人格は問題ないとしても方向音痴がネックなんだよなぁ。不安が二つ重なりそうだ」
「うるせぇ。ほっとけ」
「やっぱりシルクの方が任せられるかな。頼んでいい？」
視線を向けられたシルクは戸惑わずに笑顔で頷く。
この面子の扱いにも慣れてきた頃だ。特にルフィとの航海では二番目に付き合いが長くなる。
そろそろ彼の性格もわかってきて、おそらくは暴走を抑えることもできるだろう。
「うん、いいよ。ルフィを見てればいいんだよね」
「そうそう。問題起こさないように」
「おまえら子供扱いすんなよ。失敬だな」
「仕方ねぇだろ。普段のおまえ見てたら」
ゾロが声をかければ、ルフィは不満そうな顔を見せた。
置いてきぼりでウソップが困惑しているだろう。それを知りながらキリはくすりと笑う。
「ボクとゾロとナミで買い出しかな。またここで合流する？」
「そうすっか。じゃあよウソップ、パチンコ見せてくれよ」
「それくらいならいいけどよ……しかし、海賊かぁ」
まだ答えは出せずに悩む彼を押し切り、頷かせることができた。
相変わらず強引だと思いながらキリは歩き出し、他の二人を呼ぶ。
ゾロは表情を変えず、ナミは溜息をつきながら歩き出した。
「それじゃ行くよ。おいで、二人とも。あとで船のことも聞かないとね」
「犬か、おれたちは」
「ほんとナチュラルに使ってくれるわよね。念を押すけど仲間にはなってないのよ」
三人が坂道を上り出し、村へ向かおうとして、振り返るウソップにルフィが声をかけた。
やけに楽しそうで迷いなど欠片も無く、まるで友達のような感覚。
不意にウソップの表情も緩み始めた。

「おれたちも行こうぜウソップ。どっかで的当てやろう」
「ったく、しょうがねぇなぁ。それじゃおれがいつも使ってる練習場に行くか」
「おう！」
「二人とも、あんまりはしゃぎ過ぎないでね。怪我するようなことはだめだよ」
残った三人も歩き出して、向かった先は真っ直ぐ進んだ先にある村ではなく森の中。
土地勘のない二人とは違い、視界の悪い中を楽々歩いていくウソップはまさしく島中のことを知っているかのような態度で、一度も道に迷うことはない。
歩く内にも会話は続き、不思議とルフィは出会ったばかりの彼に対し、最初から親近感を持っていることを自覚していた。
その理由が掴めそうで掴めない。
首をかしげながらしばし考え、どこで彼を見たのだろうかと考え始める。

うそつき

目的地についてしばらく。
シルクは二人を視界の端に入れながら、少し離れた場所に座っていた。
見つめるのは己の指先。能力を使用して風が巻き起こっている様をじっと見つめる。
悪魔の実を食べてからというものすっかり習慣と化してしまった。悪魔の実を食べて弱くなることはまずあり得ない。鍛えれば鍛えるほどに能力が強くなる。キリが言った言葉を心に刻んで、休息の期間も休まず上手くなろうと練習を重ねていたのである。
その甲斐もあってか、徐々に操れるようになってきた気はする。
キリによれば、体質が変わらない超人系（パラミシア）は少々変わっていて、風を発生させるカマカマはやはり自然系（ロギア）の種類に近いらしい。しかしロギアは体その物が自然界のエネルギーに変わる。火ならば火の体、風ならば風の体になるはず。シルクにはそれがない。
それなりに変わった実だが、それでも鍛えれば強くなることには変わりないらしい。まだ正確な性質が読み切れないものの、常人との違いは明らかにある。
かまいたちを発生させられる人間。現状それだけはわかっていた。
指先に巻き付くようにして弱々しい風を生み出す彼女は、難しい顔をしていた。
「うーん、細かい調整はできるようになってきたと思うんだけど、本当に強くなってるのかな。剣を使うと危なそうだし、実感ないなぁ……」
すっかり慣れてしまった練習法を中断し、ふと息を吐きながら海を眺める。
上陸した北の海岸から少しだけ離れ、海を眺められる崖の上。辺りには木々が生い茂った森が広がり、のどかな風景が間近にある。
太陽の麗らかな陽気を感じながら彼女は考えた。
果たしてこの能力で何ができるのか。

比較的悪魔の実について詳しいキリに言わせれば、表面的な能力とその力の真髄は別である可能性もあるという。かまいたちを放てるのならば他にもできることがあるはずだと。
カマカマの実の真髄とは何か。改めて考えてみる。
そんな瞬間にルフィの楽しそうな声が聞こえてきて、何気なく振り返った。
彼とウソップは少し離れた位置に居て、数メートル向こうにある的を標的に、パチンコで弾を放っていて、狙撃の腕を見せている。彼女は何気なく座ったままで二人のやり取りを見た。
「すんげぇ！　全部当たった！」
「ふふん、おれ様にかかればこんなもんよ。なんなら三つ連続でもいけるぜ」
「ほんとか⁉　やってみてくれよウソップ！」
「よぉし、よく見とけよ」
左手でパチンコを構え、右手に弾を持って構えられる。
弾を番えて紐を引っ張り、一発目を放つと流れるような動作でさらに二発。
放たれた鉛玉は見事に的のど真ん中へ当たって、それが三発ともだ。
見事な腕前にルフィは大口を開けて興奮し、ウソップは自慢げな表情。二人とも子供っぽい姿で楽しそうに見え、シルクは悩みを忘れてくすりと肩を揺らした。
「おぉぉっ、三発とも当たった！」
「ふふーん、まぁ当然かな。これくらいの距離なら目ぇ瞑ってても当てられるぜ」
「おれにもやらせてくれよ！」
「しょうがねぇな。いいか、狙いをつける時はまず――」
ルフィにパチンコへ渡し、細かな挙動を教えてウソップがレクチャーを始める。
そんな二人を見ていて突発的に思いついた。
ウソップの狙撃は見事な腕前だ。そこで思うのは、例えば指先に集

中できるようになった小さな風を、弾丸のように放つことができたのなら。きっとそれだけで立派な武器になるはずだ。
カマカマの実の能力についてわかっていることは少ない。だが少なくとも自分の体から風を発生させることができて、それを飛ばすことが可能である。その一つが刃のような性質のかまいたち。それこそが真髄だと思っていた。
もしもを仮定する。
パラミシアでありながら風を操るその能力、かまいたち以外にもできることがあるのなら。
まだ確定ではない想像だが、そうだとするならば特殊なパラミシアだ。鍛えようによってはロギアの性質の一部を手に入れることができるだろう。
再び能力の考察に集中し、シルクは練習を再開した。
ひとえに仲間たちの役に立ちたい一心である。それを知るせいもあってか、ルフィは敢えて彼女を巻き込むことはせず、練習している姿も以前見ているため好きにさせている。声をかけずに彼女だけ離れているのも、練習に集中したいだろうと思うからだ。
一方で自分も好きに行動していて、パチンコを借りて何発か弾を撃ってみた。
これが一つも当たらない。簡単に見えて意外にも難しいようだ。
今更になってウソップの凄さが理解でき、肩を落とした彼は残念そうな表情を見せる。
「う～ん難しいっ。やっぱウソップすげぇんだな」
「はっはっは、まぁこいつは慣れもあるからな。おまえだって練習すれば上達するさ。だがおれを尊敬するならキャプテンと呼んでもいいぜ」
「それはだめだ。キャプテンはおれだぞ」
「ちぇっ。意外とこだわるんだな、おまえ」
ウソップが次の弾を渡してやり、再びアドバイスをしてやるとルフィが構える。
その際、何やらルフィは微笑んでいた。

「そういやさ、おれやっと思い出したんだ」
「ん？　やったことあんのか？」
「いいや。昔、こうやってピストルの撃ち方教えてもらったことがあるんだ。マキノは危ないからだめだって言ってたけどおれは嬉しかった。ずっと海賊になりたかったからな」
弾を放ってまた逸れた。的には当たらず地面へ落ちる。
やはり難しい。昔習ったピストルとも勝手が違っていた。しかしルフィの顔には笑みがある。
ルフィは笑顔で振り返るが、ウソップはきょとんとした顔になっており、彼が言い出した話が見えない様子。さっきよりも嬉しそうに、外れたことなど意に介さず言われる。
「おまえ、ヤソップの息子なんだろ？」
「えっ……？　な、なんで親父の名前を」
「おれに教えてくれたの、ヤソップなんだ。海賊として村を拠点にしてた。結構長い間いっしょに居たんだぞ」
呆然と突っ立ったウソップの手から弾を取り、再びルフィは構える。
もはやウソップには的当てなどどうでもよい物になっていて、ルフィが放つ弾を見ていない。構える彼の横顔をただじっと見ていた。
それを知ってか知らずか、また弾が放たれる。
「ヤソップは酔うと必ず子供の話するんだ。おれと同じくらいの息子がいて、家族と別れるのは辛かったけど海に出られずにはいられなかったって。海に出たのは海賊旗がおれを呼んだからだっていつも言ってた」
放たれた弾は的の端っこに当たって、カンッと小さな音を立てる。
ルフィはおぉっと声をあげるがやはりウソップは反応できず。
振り返った彼を見ても呆然とするしかできなかった。
「いい奴で、いい海賊なんだ。きっと今も海賊やってるよ、赤髪のシャンクスの船で」
「そ、そうか……そうかっ！」
嬉しそうに答えたウソップは拳を握り、わずかに頷いた。

確かにそうだ、父は海賊になるため村を飛び出してしまった。けれどそれを嘆いたことも恨んだこともない。父親が海賊であること、これを誇りにして生きてきたから。
ルフィに褒めてもらえたと感じて心が躍る。
これまで父親に関する話をできる相手など居なかった。幼馴染の少女も、ウソップ海賊団を名乗る子供たちにもあまり話したことはない。自身の誇りの話。
わかってもらえる相手が居たとウソップの表情は明るくなる。
「やっぱりおれの親父は本物の海賊なんだ。おれに海賊の血が流れてるのは、嘘じゃねぇんだ……！」
「ししし」
「あんまり噂も聞かなかったからさ。生きてるのか死んでるのかも知らなかったんだ。そうか、今でも赤髪のシャンクスの船で――ん？シャンクス？」
感動に打ち震えて数秒、奇妙な言葉に気付いて首をかしげる。
顔を上げて視線が合って、それから気付いた。
それはかの有名な大海賊の名前ではないか。
「えええっ!?　しゃ、シャンクスぅ!?　おまえそれ、大海賊の名前じゃねぇか！」
「ああ。ヤソップはシャンクスの船に乗ってるんだぞ」
「ま、マジでか？　なんだって親父はそんな大物の船に……」
「手配書見てねぇのか？　ヤソップのだってあるんだぞ。シャンクスの船の幹部だからって、かなり高額だったと思うけど」
「いや、それも知らねぇ……マジか」
「ああ、マジだ」
にかっと笑うルフィを見ると、なんだか理由も無く笑えてきた。
手配書なんて知らなかったとか、村の人間はなぜ教えてくれなかったのかとか、疑問は色々あるものの、とにかくわかったことがある。父親はまだ生きて海賊を続けていて、それが赤髪のシャンクスの船で、大海賊の幹部になっている。
我が父のことながら夢を見せてもらったようで、今までにない興奮

を覚えた。
自然と声は大きくなり、拳を握る手にも力が入る。
「おれも海賊の血を引いてるんだ。だったら、やっぱりおれにだって」
「おまえも海賊好きなんだろ？　いっしょに行こうぜ、グランドラインに」
「お、おぉぉ、そ、そうだな……親父はやったんだ。自分の夢を、叶えた。だったらおれも、おれにだって――」
そう呟いている最中に、崖のギリギリで伏せたシルクが二人を呼んだ。
なぜか声を潜めながら手招きして、片手は唇に指を当て、静かにするようにとの指示。
首をかしげた二人はゆっくりとそちらへ歩み寄った。
「どうしたシルク？」
「静かに。あそこ、誰かいる」
「ん？　あれは……」
二人も寝そべって崖の下を見る。
彼らの真下に位置する場所、二人の男が向かい合って立っていた。
片方は派手な服装でサングラスをかけた男。妙なポーズがダンサーを連想させる。
もう片方は彼よりも小奇麗な格好をした、眼鏡の男。妙な癖がそこから確認できて、ズレかけた眼鏡を掌で元の位置に直している。
ウソップには片方の男に見覚えがある。
数年前に出会い、今でも仲良くしている友人、資産家が遺した屋敷に住む少女の執事。眼鏡の男はクラハドールなる人物に間違いない。もう一人は知らないが、その場所は村の人間でさえほとんど近寄らない場所。何やら怪しい雰囲気が伝わってきて、彼らは耳を澄ませて二人の会話を聞こうとしていた。そこへ声を潜めたシルクが語り掛ける。
「あの二人、怪しいことを言ってたよ。お嬢様を暗殺するとかって」
「なにィ――！」

「しーっ。静かに。バレないようにしてね」
咄嗟の行動で大声を出そうとしたルフィの口を手で押さえ、押さえ込む。
何やら怪しげな雰囲気なのだ。バレてしまうのはもったいない。
幸い波の音が近いこともあってまだ気付かれていない様子。二人はその場を動かずに話している。だがウソップはとても冷静でいられる状況ではなかった。
「あ、暗殺って、まさかカヤをか？　あのクラハドールって奴はカヤの執事なんだぞ。今まで一番近くで見守ってきたはずなのに」
「確かに聞こえたの。嘘じゃないよ」
「でも、なんでそんなこと……」
「ひょっとしたら、遺産が目的、とか」
口を押えられたままのルフィをそのままに、シルクとウソップは崖下を覗き込む。
クラハドールとサングラスの男、ジャンゴは、三人の存在に気付かず話を続けていた。
「計画は簡単だ。明朝、部下どもを率いて村を襲撃し、騒ぎを起こせ。その間におまえがお嬢様に催眠術で遺書を書かせろ。内容を間違えるな。全ての遺産は私が最も信頼する執事、クラハドールに譲る、だ」
「オーケー。そこでキャプテン・クロにと書かせちゃ大失敗ってことだろ」
「おい、その名を軽々しく口にするな。キャプテン・クロはもう死んだ。この計画のために何年かけたと思ってる」
「わかってる、そう怒るな。おれはあんたの指示に従うだけさ」
声は決して大きくないとはいえ、なんとか聞き取れる程度の物。
ウソップはその言葉に驚愕している。
それは明らかに村を襲う計画だ。聞き間違いもしていなければ勘違いでもない。明朝、村に海賊たちが攻め込んでくるということだろう。
キャプテン・クロ。

その名前だけで十分過ぎる。
不安を露わにシルクを見れば、彼女は下を見たまま顔を険しくした。
「お、おい、これって……」
「キャプテン・クロって名前、聞いたことあるよ。確か何年か前に海軍に捕まって処刑された海賊。すごく強かったらしいけど急に捕まったからみんな不思議がってた」
「じゃ、じゃあ、もしもだぞ。あの男が言ったみてぇに、あそこに居るクラハドールが本物のキャプテン・クロだと仮定した場合……」
「処刑は、偽装。本物は死んでなかったってことになる」
まさかの事態に息を呑んでしまう。
あの男はつい数年前に村へやってきた人間。昔から居た訳ではない。
仮に彼が本物の海賊だったとすれば、村には何年も前から海賊が潜伏していたことになる。言葉をそのまま借りるならば計画とやらのために。
背筋がぞっとした。そんな海賊、聞いたこともない。
だからこそか、とも思うもののやはり海賊らしくない思考だろう。もしあの会話が嘘でなかったとしたならば、ウソップの故郷、シロップ村は危険な目に遭ってしまう。
どうすべきかと彼の全身に力が入る時、さらに二人の声が聞こえた。
「しかし面倒なことするもんだ。そんなことしねぇでも遺産が欲しけりゃ襲えばいいだろう。どうしてわざわざ三年も時間かけて準備するんだか」
「野蛮な考えはやめろ。おれはもう海賊に嫌気が差したんだ……そんな短絡的な考えしか持てねぇバカどもにな」
「言ってくれるねぇ。まぁいいさ、報酬がもらえりゃおれたちは動く」
「ああ。ちゃんと遺産から報酬を用意するさ」
クラハドールは笑っていて、その笑顔が以前見た物と違うのだとウ

ソップが気付いた。
以前までは厳しい目を向けながらも真面目な男だった。だが今はどうだ、冷酷で感情を感じさせない目つきをしている。それではまるで犯罪者だろう。
いよいよ真実味を帯びてきたと思わずにはいられなかった。
「それとよ、もし村の連中が抵抗してきたらどうする？」
「構わん。殺せ」
冷淡な声に驚愕する。
やはり以前の彼ではない。
「何人か犠牲が出た方が悲劇に思えるだろう。海賊に襲われ、事切れたお嬢様を抱き上げ悲しみに暮れる執事。そうすれば村民はおれに同情し、遺産を継いであの屋敷に住み続けることになっても疑いはしない。筋書きは完璧だ」
「それだけのために大勢死ぬのか。恐ろしい男だよ、あんたは」
「フッ、これが頭を使うということだ。おれはただ動くだけのバカどもとは違う」
地面に伏せたまま、草を握りしめるウソップは強く歯噛みする。
あいつは、とんでもない嘘をついていたのだ。両親を失い、病弱になっていた少女を支え続けた人物。まさかと思ってももはや疑いようもない。
奴は少女を傷つける嘘をついていた。
それが許せなくなり、全身がかっと熱くなったように思える。
密かに後ろへ下がって、崖下から見えないだろう場所で立ち上がったウソップは血相を変え、森の中へ向かい出す。目的地は自身の村だった。一目散に走り始めてあっという間に背が遠くなり、バレてはいけないと思うシルクは声を出せず、口を押えられたままでルフィも何も言えない。
熟知した森の中を駆け抜けながらウソップは想う。
両親を亡くして意気消沈している少女が居ると聞いて、それだけ大きな屋敷なら存在は知っていたのだ、初めて会いに行った。許可など取らず、勝手に庭の中へ侵入して。

そこで出会った彼女は確かに元気を失くしていて、なんとかしてやりたいと思って話しかけた。
たくさんの嘘をついて、行ったことも無い島の話を聞かせて、色々な冒険譚を語って聞かせて、何度も些細なことで笑わせようとした。今では彼女もそのホラ話を楽しみにしている節さえある。些細な出来事でも互いにその一時に安堵を覚えていたはずだった。
その彼女が死ぬ。海賊に襲われて。
計画が始まれば死ぬのはきっと彼女だけではない。生まれ故郷が荒らされて、被害はきっと一人や二人では済まないだろう。そんな光景、想像するのさえ嫌だった。
全速力で走るウソップは森を駆け抜け、開けた場所へ差し掛かった。
そこが村の入り口。向かう先には点々と存在する小さな家屋がいくつも見える。
ぐっと歯を食いしばって涙が出そうになった。
絶対に壊させたくない。
そんな想いで必死に走り、道中キリたちとすれ違おうとも相手にはできず。
「あぁウソップ、ちょうど買い出し終わったんだ。ルフィたちはどこに――」
声をかけてくるキリの傍を通り抜け、驚いている顔のナミと険しい表情のゾロにも気付かず、視線はあくまで故郷を見ていた。
今はただみんなを助けたい一心で。
「海賊が来るぞォ～！」
彼は大声で叫び始めた。

＊

ウソップが一日を始めるため、必ず行う日課がある。
それは村人に向かって大声で嘘をつくことだ。
セリフは決まっていつも同じ。

海賊が来たぞ。
その言葉から毎日が始まり、村人の中には怒りを抱く者も居れば、習慣として慣れ親しんでいる者も居て、少なくとも全村民にとっての日課になっていたことは間違いない。
ただ今この状況においては、その日課が仇となっていたと言わざるを得なかった。
毎日海賊が来たぞと叫んでいたウソップが、本当に海賊が来ることを知って叫び回っても、誰も相手にはしてくれない。この嘘つきめ、また懲りずに嘘をつくか。そう言って箒やフライパンを持ち出し、懲らしめようと追ってくる大人たちばかりだった。
ウソップの声に耳を傾ける者など一人も居ない。たとえそれが真実の言葉だったとしても。
歯を食いしばり、苦心するウソップは屋敷へと向かって駆けていた。
たとえ嘘つきだと罵られても構わない。守りたい相手が居る。
せめて先に彼女だけはと塀を乗り越え、庭の一角、いつもの場所へ向かった彼に早くも気付き、少女は自室の窓を開けた。
ふわりと揺れる金色の髪に、病弱そうな白い肌。
カヤという少女はウソップを歓迎し、笑顔で彼に声をかけた。
「ウソップさん、今日は遅かったのね。ひょっとしたら来ないのかと思って心配――」
「カヤ！　悪いが話してる暇はない！　今すぐ逃げてくれ！」
「え？　あの、急に何を……」
「明日の朝、この村に海賊が来る！　おまえの執事のクラハドールだ！　あいつが実は死んだはずの海賊で、おまえの遺産を狙って潜り込んでたんだよ！」
「え、え？　ちょっと待って、いきなりで話がよく」
「とにかく逃げろ！　ここに居たら殺されちまうんだよ！　あいつの狙いはおまえなんだ！」
焦るウソップはカヤの手を掴み、窓から逃がそうとする。というより無理やり連れ出そうといった姿だ。この動きにはカヤも受け入れ

られずに恐怖心を抱く。
弱々しい抵抗をするが、今のウソップに気付けるだけの余裕はなく。
彼の大声を聞いて執事が部屋へやってくるものの、それでも連れ出そうと引っ張っていた。
「い、痛いっ。痛いわウソップさん……！」
「ここに居ちゃダメなんだ！　事情なら後でゆっくり話す！　だからまずは村から離れて――」
「お、お嬢様⁉」
やってきたのは羊のような容姿をした執事である。
メリーという名の彼は慌ててベッドへと駆け寄り、窓の外に立つウソップを見る。
目は血走って明らかに冷静ではない。
危険な様子を感じ、主の危機を知って、落ち着いて対処している場合ではなかった。
「おいやめろ！　お嬢様から手を離すんだ！」
「なぁあんた、カヤを今すぐ逃がしてくれ！　この屋敷じゃダメだ、もっと遠くへ、とにかく村を出るんだ！　あいつらがやって来れないほど遠くに――！」
「お嬢様から離れろォ！」
こちらも焦りを募らせ、メリーが懐から拳銃を抜いた。護身用、或いはカヤを守るため常に持ち歩いていたのである。まさか顔見知りの少年に使わなければならないとは。そう思う冷静ささえ持っていなくて、自身でも混乱しながら抜いているのはわかっている。それでも止められない。
予想していなかった光景にウソップの手から力が抜けて、するりとカヤの腕が抜けた。
その瞬間、彼女はメリーの動きに気付いて慌てて振り返る。
「だめっ、メリー⁉」
銃声が一度。弾が放たれてしまった。
なぜ引き金を引いたかはわからない。きっとひどい緊張状態の中

で、咄嗟の声で体が反射的に動いてしまったのだろう。構えはなっていなくて、狙いは逸れてしまっていた。
だがそれでもウソップの体には届いてしまう。
態勢を崩した彼の左腕に掠り、皮膚が破れて鮮血が舞った。
ウソップはそのまま尻もちをつき、すぐさま左腕を押さえる。
カヤとメリーはそんな彼の姿から目が離せない。
罪悪感が胸を占めていた。銃を持つ彼も持たない彼女も。ただそれを伝えて謝罪しようとする前に、俯いてしまったウソップが小さく呟く。
「うっ、ぐっ……！」
「ウソップさん⁉　あぁ、傷が……ごめんなさい、今すぐ手当てを！」
「そうか、そうだよな……おれが何言ったところで、信用なんかできねぇよな」
「えっ……？」
小さく呟いた直後、屋敷の門から大勢の声が聞こえてくる。おそらくは村の人たち。手に手に武器を持って追いかけてきた人々が追いついてきたのだろう。
立ち上がったウソップは即座にその場から逃げ出した。
もはや表情も見えやしない。日頃とは明らかに様子の違う彼の姿に違和感が拭えず、カヤが慌てて声をかけるが、まるで聞こえていないかのようにその足が止まることはなかった。
「ウソップさんッ！」
塀を乗り越えて外へ出て、さらに走る。振り向くことなく村を離れようとした。
初めからわかっていたことだった。
自分は嘘つきで、村民はみんなその嘘に飽き飽きしていて、今更誰も信用しないことくらい。海賊が来たと毎日言い続けた男が、今更本気で訴えかけたところで信じる者など居やしない。
ひょっとしたら、それさえも計画の一部なのかもと考えた。
たまたまにしては色々な要因が重なり過ぎている。

今まで一度も海賊に襲われたことのない、海から少し離れて内陸の小さな村。そこには両親が死んで弱ってしまった金持ちの少女が居て、屋敷には使用人も大勢居て、人を疑うことを知らないようなのどかな風景が広がっている。その中で毎日嘘をつく少年が居て、彼の言葉を聞いて笑い飛ばす村民たちは、まさかこの村に海賊が来るとは思っていない。

考えようによっては計画の片棒を担がされた感じすらある。

誰にも会わないように村を駆け抜け、再び森へ入った頃。ようやく速度は緩まった。

徐々に足を動かす速度を落としていき、歩き出して、しばらくしてぴたりと止まってしまう。

頭を抱えた彼は木の幹に背を預け、俯いてしまった。

誰一人として信用しようとしなかった。きっといつもの嘘だと思っている。明朝もその次もさらにその次も、海賊など来るはずがなくて、いつも通りの日常が繰り返されるはず。

みんなはそう思っていて、だけど自分だけがそうではないと知っている。

彼はいつしか苦悩していた。

このままでは何の罪もない彼らが大勢犠牲になる。

そうして悩んでいれば、村での話を聞きつけただろう子供たち、ウソップ海賊団を自称する三人が彼の下へやってきた。ピーマン、にんじん、タマネギ。共に島の中で冒険を繰り返した仲間だ。

「キャプテン、ほんとなんですかっ!?　明日の朝、海賊が来るって！」

「こうしちゃいられませんって！　戦いましょうよ！　ウソップ海賊団が村を守らないと！」

「僕らも頑張りますよ！　そりゃ、キャプテンの足元にも及びませんけど……！」

三人は真剣な様子でウソップを見ている。それを見て彼はぐっと唇を噛んだ。

すくと立ちあがり、血が滴る腕は咄嗟に隠して、胸を張って笑い始

める。
「はっはっはっは！　すまん、ありゃ嘘だ！」
「……は？」
「え？　だって、キャプテン……」
「いやよぉ、前々からあのクラハドールって奴はムカつく奴だったんだ。よくおれを睨んできやがるし、二度と屋敷には来るなとかなんとかさ。それで大っ嫌いだったもんでちょっと嘘をついてやったんだ。いやぁ胸がすっとした。これでおれは満足だ」
「えぇ～、嘘だったんですか？　なぁんだ……」
そう聞かされて三人はがっくりした様子。肩を落として落ち込んでしまう。活躍の時が無くなって残念なのだろう。しかし、すぐに表情が変わる。
「だけど、おれちょっとキャプテン軽蔑だな。キャプテンは人を楽しませる嘘しかつかないと思ってた。カヤさんにだっていい嘘しかついてなかったのに」
「おれも。キャプテンはそんな人じゃないって信じてた」
「僕も。人を傷つけるような嘘は、キャプテンらしくない」
尊敬しているからこその失望。彼らしくない言葉に不満が募る。
三人はそれから何も言わずに振り返ってしまい、村へ向かって歩き出した。
それぞれつまらなそうに呟いて、少なくともこの場でウソップを見ることはなかった。
「あーあ、なんかやんなっちゃったな」
「さっさと帰ろうぜ」
「今日のおやつは何かなぁ」
離れていく三人の背を見つめ、ウソップは笑みを消して真剣な顔つきに変わっていた。
彼らの背が遠ざかり、声が遠くなった頃。
唐突に村へ続く道とは反対側から声が聞こえる。
「おい、ウソップ」
「あぁ……おまえら、見てたのか」

目を向ければ一味が全員揃っている。
先頭に立つルフィとシルクは険しい表情。彼の行動をよく思っていないのかもしれない。
海賊が来るのは嘘ではないだろう。だがウソップはそれを嘘だと言った。
血に濡れた左腕は隠さず、むしろ掲げて、自嘲気味に語られる。
「これでいいんだ。嘘つきのおれが本当のこと言おうなんて、そもそも間違ってたんだよな……最初から誰も信じるはずなかったんだ」
「んなことねぇよ。おれたちは信じる」
「そりゃ、おまえらはいっしょに聞いてたから」
「それがなくてもだ。おまえが本気で言ってるんだったら、おれたちは疑わねぇ」
ルフィが真剣な目で言い切った。
その胆力には言葉も失うが、やはりそう簡単に状況は変えられず、村人たちはこのままいつも通りの生活を送り、夜を迎えて、朝になるまで眠るに違いない。
彼らが信じてくれるのは素直に嬉しかった。だが問題の解決には繋がらない。
重く溜息をついたウソップを見やり、心配する顔でシルクが尋ねる。
「これからどうするの？　きっとこのままじゃだめだと思う」
「あぁ……そうだな」
目を伏せたウソップは数秒黙り込み、やがて目を開いて全員の顔を見回した。
共に話を聞いたルフィとシルク。二人からなんとなくの事情を聞いたキリ、ゾロ、ナミ。誰もが同じ眼差しだ。彼を笑わず真剣に話を聞こうとしている。
その顔つきだけで妙に力が沸いて来る気がするのはなぜだろうか。
「おまえら、ちょっと頼みがあるんだがいいか？」
気付けば意志は固まっている。
ウソップは強い声色でそう言った。

前夜の静寂

すっかり日は落ちて、時間は夜になっている。
シロップ村に唯一ある大屋敷では、徐々に光が消えていき、就寝の時間が近付いていた。
カヤは自室のベッドに座って窓の外を眺めている。
いつもそこに彼がやってきて、嘘だとわかる大冒険をいくつも聞かせてくれていた。きっと彼女を元気付けるためである。もはや今となってはなくてはならないもの。真実などどうでもいいほどそれが楽しくて面白かった。けれど、今日だけは彼の様子が違っている。
約束の時間に遅れたことは一度もない。だが今日だけは遅れて、そして耳を疑う発言だ。
クラハドールが実は海賊だった。
今まで人を傷つけるような嘘をついたことはないのに、今日だけは内容が違っていて。
とても信じられる話ではないがやはり様子がおかしかったことが頭から離れず、何かあったのだろうかと思案してしまう。昼の顛末から今までそればかりが脳内を回っていた。
「ねぇクラハドール……私、ウソップさんに会いたい」
「いけませんお嬢様。お体に障ります。そうでなくてももう夜ですよ」
傍に居る執事、いつもと何も変わらぬクラハドールに言えば、やはり厳しくもやさしい彼だ。
彼はいつも彼女の傍で支えてくれていた。
とても海賊とは思えない。ではウソップが意味も無くそんな嘘をついたのかと考えれると、そんな人ではないと思う。堂々巡りで答えが出なかった。
重く溜息をついたカヤに気付きつつ、布団を整えたクラハドールは敢えて尋ねない。
「今日ね、ウソップさんの様子がおかしかったの」
「またお会いになったんですか？　いけませんと言っておいたで

しょう」
「いいじゃない。悪いことなんてしてないんだから」
「しかし妙な話も聞きました。何やら村で騒ぎがあったと。ウソップ君がついた嘘が原因らしいではありませんか」
「……うん」
そう言うとカヤは俯いてしまい、ひどく落ち込んだ表情。
クラハドールは溜息をついた。
普段ならばまず言わないだろうが、今夜の彼は妙に大人な態度だった。
「仕方ありませんね。では明日、彼に会いに行きましょうか」
「本当っ？」
「ただし、お体に障る前にお話を終わらせてください。あまり長話はいけませんよ」
「うん、それでいいわ。聞きたいことがあるだけだから」
やっとカヤの顔にわずかな笑みが戻り、期待を胸に抱いた表情だ。
思わずクラハドールは苦笑する。
「今日はもうお休みください。夜更かしはいけませんよ」
「わかってる。でも明日は早く起こしてね」
「ええ、メイドにはそのように伝えておきます」
ベッドに横たわったカヤへ布団をかけてやり、クラハドールが電気を消す。
「おやすみ、クラハドール」
「お休みなさいませ、お嬢様」
クラハドールが部屋を出て廊下を歩き出した。
執事に割り当てられた休憩室に赴けば、部屋に居たメリーが笑顔で振り返る。
事の顛末は彼から聞かされたのだ。
大変な一日だったと語られる。
「お嬢様はお休みになられましたか？」
「ええ。問題なく」
「そうですか……ウソップ君もなぜあんなことを言い出したのか。

今まで見逃していたのが仇になったんですかねぇ」
「私が海賊だという話ですか」
くいっと掌で眼鏡の位置を直し、クラハドールは笑う。
メリーもまさかと思っているようで、まだ若いウソップにも抑えられない感情があったのだろうと理解を示しつつ、信用する気は一切ないようだった。
「ははは、また大胆な嘘をついたものですね。おかげでお嬢様は思い悩んでしまっているようですが」
「無理もありません。お嬢様は彼を良く想っている」
「おや、珍しいですね。ウソップ君を良く言うだなんて」
「まぁ……認めたくはありませんが、あれで意外と誠実な男ですよ。案外、私が海賊だという話も本当なのかもしれませんよ?」
「はっはっは、まさか。いや本当に珍しい、あなたが冗談を言うなんて」
笑い飛ばすメリーはやはり、海賊が来るなどと信用していない様子だ。港にある訳ではないこの村が海賊に襲われることはあり得ない。そんな態度が伺えた。
眼鏡の位置を正したクラハドールが苦笑する。
笑い声が治まる頃に話を変えられた。
「では私もそろそろ休みます。明日は少し用事がありますので」
「あぁ、明日が休暇の日でしたか。そちらも珍しいと言えば珍しい。そう言えば自分から言い出したのは初めてじゃないですか?」
「お嬢様の誕生日が近いものですから、少し考えがね」
「ははぁ、なるほど。そういうことであればお嬢様もきっと喜びますよ。あなたのことを信頼しておられますから」
「もったいない限りです」
わずかに頭を下げて、荷物を持って彼は部屋から出ようとした。
「それではこれで。先に失礼します」
「ええ、お疲れさま」
廊下へ出て扉が閉まる。
パタンと小さな音が無くなれば、辺りは一気に静まり返った。

クラハドールはふぅと息をついて、それから歩き出す。
その眼差しは誰に知れることもなく如実に変化していた。

＊

海岸に移動した麦わらの一味とウソップは、月の灯りだけを頼りに向かい合っていた。
各々近場の岩に腰掛け、円を描くように座っている。
ウソップの左腕には包帯が巻かれ、状況の危機感が伝えられており、誰もが真剣な表情。中でもウソップが真剣な顔つきで皆に語り掛け始める。
「あいつらみんな信じちゃいねぇんだ。明日もし海賊が来たとしても、きっと逃げる前にやられちまう。説得しても聞いちゃくれねぇ。おれがなんとかするしかねぇんだ」
「でも本当に来るの？　いくら密会を見たからってそれが嘘じゃないとは限らないでしょ」
「いいや、来る。それだけは間違いねぇ」
ナミが口を挟むもののウソップの意志は揺らがず。なぜそこまで確信を持って言えるのかがわからなくて、ふとキリを見てみると、彼も首を横に振った。
彼はイーストブルーの海賊について疎い。
現在も手配書が出ている高額賞金首くらいは見たことがあるが、昔死んだはずのキャプテン・クロについて持っている情報など一欠けらとしてなかった。
代わりとばかりにシルクが口を開く。
彼女はずっとイーストブルーに居た。噂くらいならば知っているらしい。
「私もそう思う。キャプテン・クロはすごく頭のいい海賊で、悪事をする時は必ず綿密な計画を立てて動くの。三年も執事をやって準備したんなら間違いなく動くよ」
「遺産を奪うためだけに三年も執事をやるなんて、それはそれでバ

カみたい。そんな面倒なことする海賊もいるのね」
「どう思われようがあいつは必ずやる。それにキャプテン・クロっつったら本気を出せば海軍の軍艦一隻を一人で制圧したって話もある。かなり強いぞ」
「なんだ、そんなの。うちのキリは一人で軍艦ボロボロにしたんだぞ」
「いぇい」
ルフィが自慢するように言うとキリがピースサインを見せるものの、ウソップの表情は変わらない。どうやら緊張感を緩めることにも失敗して流されてしまったようだ。
二人は再び静かになり、続けてウソップが説明する。
「あいつらが来るんだとしたらこの村は終わりだ。止めるには他に方法がない。だからおれは、ここで奴らを迎え撃つことにした。海賊を全員追っ払って、この一件を嘘にする！　それが嘘つきのおれが通すべき筋ってもんだろ」
握り締めた拳を震わせて、恐怖心が抑え切れていない。よく見れば膝も震えていた。だが目の中にある意志は強くて揺らがず、何を言ってもおそらく答えは変えないだろう。
彼の覚悟が伝わる言葉だった。
自然と聞いている面々の表情が引き締められる。
退く気がないのなら放ってはおけない。たった一人で海賊団を止めるのが無理だと誰もが知っていた。それこそ、ゾロが目指す世界一の大剣豪でもない限り。
全員の意志が統一される。
恐る恐る口を開くウソップがルフィを見て声をかけてきた。
「なぁ、おれを仲間に誘ってくれたよな」
「うん」
「正直言ってわかってるんだ、おれは一人じゃなんにもできねぇことくらい。だからさ、情けねぇけど、おれが仲間になったらおまえら手伝ってくれねぇかな？」
「バカ言うな。おれたちは初めっから手伝う気だぞ」

「そうだよ、ウソップ一人でなんて戦わせない。私たちにも守らせて」
問いかけてすぐにルフィとシルクが答えて、迷いのない笑顔を向けられた。
ウソップは泣き笑いのような顔になり、思わず俯いてしまう。
「おまえら……ありがとうっ」
「それじゃ、今日から仲間だ。だけど喜んでる暇はなさそうだね」
しばらく口を閉ざしていたキリがようやくしゃべり始めて、近くで拾った木の枝を持った。
ルフィはその棒にこそ興味津々だが、キリはさほど気にしない。そちらに目を向けることもなく、砂利を除けて地面を露わにし、ウソップへ声をかける。
彼にとっては戦力が増えたことになる。だがそれでも戦力差は大きい。
勝利を求め、村を守るならば無計画に突っ込むだけでは足りないだろうと考えるのは必然。
微笑む彼が皆の顔を見回した。
「作戦会議だ。敵は海賊、ただ追い返すだけじゃ懲りない可能性だってある。どうせ迎え撃つなら徹底的に打ちのめすくらいはしないとね」
「できるのか？」
「もちろん。こっちはウソップを入れて六人。準備さえすれば十分過ぎる」
持っていた棒がウソップへ投げられ、慌てて受け取る。
キリはウソップを見ながら尋ねた。
「海岸から村へ続くルートはいくつある？」
「えっと、二つだ。こことも一か所、おまえらが上陸した場所」
「その二つで村に近いのは？」
「向こうだな。こっちからだと直線で行こうとすれば森の中を通ることになる。だけど向こうは道を真っ直ぐ進めば村だ」
「なら敵が来るのは向こうの海岸だ。間違いない」

ウソップがガリガリと地面を削り、地形を描きながら言う。するとキリが自信満々に言って疑念の視線を向けられた。首をかしげるのはウソップだけではないらしい。
ルフィやシルク、ナミまで不思議そうにしており、それでいて真剣な顔で聞いている。
代表で質問したのはウソップだった。
「なんでそう思うんだ？　あいつらこの辺りで密談してたんだぞ」
「向こうの方が近いからさ。理由はそれだけ」
「それだけで決めちまうってのは、その、いいのか？」
「基本的に海賊ってのはみんなバカだと思ってた方がいいよ。たとえ相手がバレてると知ってたとしても、この村には自警団もなければ海軍の駐屯地もない。待ち伏せがあっても力でねじ伏せればいいって考えてるはずだ。それに多分、村の中に居たキャプテン・クロが事情を知ってて、ここには障害になる人間が居ないって伝えてる」
「なるほど。勢いで一気に攻め込もうって腹か」
「村人と海賊の戦闘じゃ結果は目に見えてるし。それに見た感じ、あの地形は使えそうだ。ただ突っ込んでくるだけなら多分苦労しないで済みそうだね」
迷いのない言葉は大きな自信を感じる。本当に恐怖心など持っていないようだ。
ルフィやシルクに続いて頼もしいと思えて、俄然ウソップもその気になってくる。
「準備に必要な物はあるか？　集められるもんは掻き集めてくる」
「そうだね、それじゃあ――」
キリとウソップが顔を突き合わせて話し始めたことで、眉間に皺を寄せたゾロは密かにシルクへ声をかける。腕組みをして何やら面倒そうな顔だった。
「あいつはなんではしゃいでんだ。ほっといて大丈夫なんだろうな」
「確かに、いつもよりテンション高いね」
「あの海戦からこっち、しばらく大人しかったが何しでかすかわか

らねぇぞ」
「何？　あいつなんかあったの？」
ひそひそと話す二人へナミが顔を近付け、話へ加わった。
暇だったのかルフィも彼らへ振り返って聞き始める。
「別に大した話じゃねぇ。が、どうも気になってな」
「落ち込んでるようには見えなかったけど」
「キリが落ち込んでんのか？　おれはそうは思わなかったぞ」
「気にし過ぎでしょ。確かに死にかけたけど、いつも通りにしてるじゃない」
「まぁ、な」
ただの杞憂か、それとも上手く隠しているのか。
微笑みを称えて作戦会議を続けるキリを見て、他のクルーは何も気にしていないらしい。
ゾロの表情は優れないものの深くは語ろうとしなかった。それでもあの夜の宣言は妙に気になっており、あれ以来戦闘は初めてのことになる。
幾ばくもせず二人は話し合いを終えたらしい。
顔を上げたキリとウソップは仲間たちに振り返った。
「話はまとまったよ。移動して準備しようか」
「おっ、そうか。じゃあ行こう」
「その前に必要な物資がある。ウソップがなんとか用意してくれるらしいから取りに行こうか」
全員が立ち上がって、その中でも二つに分けられる。
「ボクとルフィとウソップで行ってくる。みんなは先に北の海岸へ行ってて」
「襲撃は明日の朝でしょ？　今から行くの？」
「残念ながら屋根はなさそうだね。毛布も必要かな」
溜息をつくナミに苦笑し、三人は踵を返して歩き出した。
ひとまず向かうのはウソップの家。小高い丘に一軒だけ立つ小さな家屋。そこならば村人にも見つからず自由に動ける。余計ないざこざは無しだ。

必要な物だけを取って戻ってくる。その後は北の海岸で野宿だろう。
まだ他の三人とさほど離れていない距離で、彼らは言葉を交わした。
「さぁて、海賊撃退作戦の始まりだ」
「しっしっし、面白くなってきた」
「よし、よぉし、これならいけそうな気がする……おれはやるんだっ。海賊になるんだから！」
三者三様、違った表情を浮かべている。しかし海賊と戦う意志を持つのは同じ。
ゾロたちは彼らの様子に一抹の不安を抱えつつ、不思議と苦笑を禁じえなかった。

ギガｐａｒａｌｙｚｅ

水平線から日が昇り、夜明けを迎えた。
ちょうどその時を見計らったかのように島へ近付く帆船が見えるようになる。
強い光が空を照らし出す頃。
望遠鏡で海を見ていたウソップは敵襲の時を知った。
「来たっ」
小さく叫んですぐに周囲へ目を走らせる。
それぞれ自身の持ち場で待機する面々は頷き、多少離れているが言葉もなく、それぞれ身を潜めようと隠れた。すぐにウソップもその場を離れて森の中へと消えていく。
北の海岸。そこは独特な地形を持っている。
海岸のすぐ傍から崖が連なっており、その上へ上るためには一本の道を使うしかない。道はおよそ二十メートルほどの幅で、両側を高い崖に挟まれている。道幅こそそれなりだが崖に見下ろされる地点もあって侵攻するにはあまり向かない。言い換えれば待ち伏せにはうってつけである。
果たして一介の海賊がそこに気付くかどうか。
船はゆっくりと海岸へ近付き、やがて浅瀬に乗り上げる前に動きを止める。
その直後に大きな雄たけびが聞こえた。
海賊たちは次々船から降りて海岸へ辿り着いている。眼前はすでに陸地、だが上陸してからの働きを考え小舟を下ろして体を濡らさぬようにし、少しでも疲労を少なくしようと上陸した。その数、およそ五十名を超える。小さな村を踏み潰すには十分な数だ。
長い航海により戦闘経験も豊富。武器を持たない村人など怖い物ではない。
意気揚々と島へ降り立った彼らは朝日の中で駆け出した。
その中には当然、一味を統べる男、クロネコ海賊団船長のジャンゴの姿もある。以前と同じハート形のサングラスをかけて、興奮する

面々の中で唯一落ち着いた足取りだ。
海賊たちは一斉に坂道を上り始め、駆けていく。
そこを上り切る前に、森から飛び出してきた男が彼らの前に立ちはだかった。
「全員止まれェ！」
突然現れたウソップの一声によって、驚いた面々は思わず足を止める。
計画では油断した町を強襲するはずだった。だが明らかに海賊ではない、村に住んでいるだろう少年が飛び出してきて、しかも一人。一時は驚くものの、あまりに弱そうな姿に緊張感は生まれない様子。足を止められて怒る者、中には不敵に笑う者も居た。
止まった一同を掻き分けてジャンゴが前へ出てくる。
昨日も見た顔だ。おそらく船長だろうと考えられたのだろう。
ウソップは目元を守るゴーグル越しにジャンゴを睨みつけ、片手にはパチンコを持ち、体の震えを気合いで押し殺した状態で、大声で叫ぶ。
「なんだ、てめぇは」
「よぉく聞けっ、おれ様の名はキャプテ～ン・ウソップ！　この村を牛耳る大海賊だ！　おまえら言っとくがな、誰であろうがこの村には手を出させねぇぞ！　逃げ出すなら今の内だ、おれには八千人の部下が居る！」
「な、なにっ!?　八千人だと!?」
「今すぐ尻尾撒いて逃げ帰るって言うなら見逃してやろう！　だがもしそうしない場合、おまえたちは逃げなかったことを後悔するぞ！
さぁ、とっとと逃げやがれ！」
脂汗が噴き出すのを感じながら叫べば、なぜかジャンゴは身を仰け反らせて驚いている。どうやらウソップの嘘を信じたらしい。周囲で部下たちが白けている中で彼だけ表情が違った。
当然海賊たちは呆れた顔。微塵も信じている顔ではない。
純粋というべきか、思慮が足りないというべきか、のんきな彼の肩を叩く。

八千人も居るはずがないだろう。
誰一人として騙されることなく冷ややかな目だった。
「ジャンゴ船長、嘘に決まってんでしょう」
「あんなガキが海賊で部下が居るわけないでしょうが」
「げ、バレた!?」
「ほらバレたって言ってるし」
「バカだ……普通自分からバラすかよ」
ウソップが思わず漏らしてしまった一言を機に、ジャンゴの顔色が変わった。
間抜けな様子は霧散して怒気を感じる顔つきとなる。
雰囲気を一変させ、彼の口から出たのは海賊らしい迫力を伴っていた。
「てめぇ、おれに嘘をつきやがったな」
「ひぃっ」
「許しはしねぇぞ！　奴ごと村を踏み潰してやれェ！」
再び雄たけびを上げて、海賊たちが走り出した。
あまりの迫力に全身が竦みそうになる。やはり本物、気を抜けば腰が抜けてしまいそうな恐怖感を発揮しているように感じる。だが、必死に歯を食いしばって耐えたウソップは鞄へ手を突っ込み、準備しておいたそれを素早く両手いっぱいに持った。
取り出したのはまきびし。
逃げる寸前に彼は大量に持ったそれを地面へとばら撒いた。
「これでも喰らえ、まきびし地獄ッ！」
向かってくる海賊たちの前へまきびしが敷き詰められ、見えはしたものの走り出した勢いはそう止められず、大勢の人間が思い切り踏んでしまう。そうすると尖った先端が靴底を破り、足の裏にまで刺さった。痛みから悲鳴は止められずに阿鼻叫喚の光景となる。
哀れにも、海賊たちは痛みに逆らえずその場で間抜けに飛び跳ね出した。
その間にウソップは後ろへ向かって駆け出し、逃げ始める。
慌ててまきびしを抜いて、その場へ捨て、海賊たちは怒りを露わに

すぐ追おうとした。ただその時に彼と入れ違いに走ってくる人物も見つける。
すれ違う一瞬、ウソップがルフィへ声をかけた。
「あとは頼んだっ！」
「頼まれた！」
勢いよく、真っ直ぐ駆けてくるルフィを見て海賊たちは怒りを噛みしめる。
やはり強そうには見えない至って普通の少年。舐められているとしか思えない。
真っ直ぐ向かってくること自体が腹立たしかった。
「なんだあのガキ、仲間が居やがったかッ」
「構うもんか！　どうせ今度もガキだ、始末して村へ急げ！」
いきり立った様子で武器を振り上げ、恐怖心の一切も持たずに走り始める。
正面からはルフィが迫っていた。
両腕を高速で動かし、予備動作を始める彼は鋭い目つきで敵を見据えている。今から攻撃を始めようとしているらしいが、その挙動に不審な点が見つかり、動揺が生まれる。
ゴムの腕が伸び縮みを繰り返しており、その様は明らかに異質だった。
「ゴムゴムのォ～……ガトリングッ！」
「な、なんだ!?」
異様に伸びた腕が、見切れないほど無数のパンチを放った。この異常な光景に海賊たちは驚愕しない訳にはいかず、慌てて足を止めようとするも、迫り来るパンチは避けられない。
数十名の男が為す術もなく殴られ、一斉に体が宙を舞った。
士気を折るのはそれで十分。
殴られた者、殴られていない者も含めて、目の前の光景が信じられずに動きが止まった。
降ってくる仲間を受け止めることもできなくて、大勢が下敷きとなってその場へ倒れ込む。それでも敵の攻撃は終わらず、跳び上がる

ルフィは勢いよく集団の中へ飛び込んでいき、伸びる体によるパンチと蹴りで次々敵を弾き飛ばしていく。
それを傍目に見ながら、道を挟む両側の崖の上で動きがあった。
大暴れするルフィを見て気分を良くしつつ、片方ではキリとナミが立ち、もう片方ではゾロとシルクが待ち構えている。そうして時を見てついに動き始めた。
「さて、こっちも行こうか。ゾロ、いつでもどうぞ」
「面倒なことするぜ。正面から斬っちまえばいいだろ」
キリは能力を使って紙を利用し、ゾロは自らの腕で、用意していた樽を持ち上げる。そして何を想ってか海賊たちが居ない場所、彼らが一人も居ない、むしろ後方の海岸目掛けて投げた。
瞬時にシルクが剣を抜く。
「シルク」
「任せて！」
両手で柄を握り、思い切り振るわれた剣からは刃の如く鋭利になった風が飛んだ。
風の刃、放たれたかまいたちは狙い違わず進み、本来の目的通りに二つの樽へ触れる。
横薙ぎに一閃。
いとも容易く割られた樽からは多量の油が飛び散って、風に煽られた影響もあってか辺り一面に広がり、落ちる。まるで狙い澄ましたかのように海賊たちの後方を塞ぐ形だった。
それを見て気分を良くし、満足したようにシルクが微笑む。
明らかに以前剣を振った時の感触とは違う。日々の鍛錬は形となって結果に表れ、満足のいく光景だったらしい。風は彼女の意志に従っていた。
準備が整い、キリが傍を見る。
森の中から駆けてきたウソップがやってきて、すでに右手には一つの弾を持っているようだ。
「準備できたよ。あとよろしく」
「おう！　いくぞ必殺……火炎星！」

百発百中だと語る彼が放った弾が向かった先は、崖に挟まれた海賊たちではなく、今しがた広げられたばかりの油だった。放たれた弾丸は特殊な細工をされているらしく、空気中を駆けている内に独りでに火が点いて飛んでいく。そして火の玉が油へ到達した瞬間、地面が燃え上がった。

黒々とした煙を空へ舞い上げ、強烈な熱風が背後から襲い掛かる。

ルフィによって統率を乱されていた海賊たちは慌てて振り返り、その光景を目にした。

退路を断つかのように燃え盛る炎の壁。恐怖心を煽るそれは彼らを怯えさせ、挟み撃ちに遭っていることを自覚させる。前方には不思議なほど強い少年、後方には炎の壁。右も左も崖に挟まれていて、逃げる隙が微塵も残されていない状況だ。

すでに彼らの統率は乱されていて、平静な思考を持てる者など居ない。

余裕から一転、大混乱へ。

想像もしていなかった状況に海賊たちの声は明らかに乱れ始めた。

「おい燃えてるぞ！　これじゃ逃げ場がねぇ！」

「な、なんなんだよこいつらっ!?　気は確かか！」

「あの麦わら帽子、強過ぎだろ……こんなもんどうすりゃいいんだよ」

「おれたちを殺す気だっ！」

「ジャンゴ船長！　どうすりゃいいんですか！」

「まだ死にたくねぇよ！　おれたちを助けてくれェ！」

狼狽する彼らが助けを求めるのは自らの船長だ。

強く歯噛みするジャンゴは距離を取って道を塞ぐルフィを見やる。

敵は一人。しかし笑顔で腕組みして仁王立ちする姿。余裕は全身から溢れていた。

どうにも倒すのは難しそうで、このままでは計画に支障が出て、怒らせてはならない男を怒らせてしまう。焦りを募らせるジャンゴは声を荒げさせた。

「チィ、ガキどもが舐めやがって……仕方ねぇ、総力戦だ。出て来い

ニャーバンブラザーズ！」
腕を振り上げて叫べば、即座に反応してクロネコの船首を持つ船から飛び降りてくる影が二つある。常人以上の跳躍力で軽々と海岸へ降り立った。
炎の壁の向こう側、見事に着地したのは大柄な男と細身の男の二人組。
他とは見るからに雰囲気が違う。目立つ武器も持っておらず、身体能力も高そうだ。おそらくは幹部だろう人物二人を見つけて、崖の上からゾロが好戦的な笑みを見せる。
細身の男シャムと、太った男ブチが顔を上げ、炎の壁の向こうに居るジャンゴに笑みを向けた。
「お呼びですか？　ジャンゴ船長」
「お呼びで」
「このガキどもを殺せ。約束の時間に遅れるわけにはいかねぇんだよ」
炎越しに話している彼らを見て決意は固まったらしい。
ゾロは跳び、崖を滑り降りて海岸へ立った。
頭に手拭いを巻いてにやりとした笑み。刀を二本抜いて両手に持つ。
注意が向けられるのも当然である。
全身から放たれる威圧感はまさしく強者の凄みだった。しかし怯えた様子のないニャーバンブラザーズは自身の得物、猫を模したグローブの先端にある爪を舐める。
「あぁ、このガキどもか。何を騒がしいかと思えば、こんな奴らに足止めされてんのかよ」
「クロネコ海賊団の恥だなおまえら。鍛錬が足りねぇんだ」
すぐさま戦闘態勢に入った二人に対して機嫌も良く、ゾロが崖の上を見ぬまま呟く。
「おいキリ、こいつらおれがもらうぞ。悪ぃが一匹たりとも渡さねぇ」
「いいよ。それならボクはみんなのフォローに回るから」

狼狽するクロネコ海賊団とは裏腹に彼らは奇妙なほど落ち着いている。風格すら感じられそうなその姿にはジャンゴも危機感を抱かずにはいられない。
予想とは違って、今はかなり厳しい状況だと判断している。
このまま阻止されたのではまずいのだ。
キャプテン・クロの計画に支障が出れば間違いなく消される。それが敵であれ、味方であれ。
クロネコ海賊団一同は焦りを募らせるのだが、目の前の敵が全く揺るがない。そのせいもあって前にも後ろにも動けず動揺が深まるばかり。
そんな様子を知ってナミは敵船へ乗り込む隙を伺い、動き出そうとした挙動にキリが気付いた。
「降りるんなら手を貸そうか？　ゾロみたいにするのはきついでしょ」
「そうね……それじゃ借りようかしら。でもどうやって？」
「簡単だよ。指揮紙（しきがみ）、〝隼〟」
懐から取り出された無数の紙が折り重なって、大きな鳥の形となる。世にも珍しい光景にナミは嘆息し、いよいよ悪魔の実の能力者という存在に呆れ返る。これではまるでなんでもありだ。
「背に乗ってくれれば下まで下ろすよ」
「どうせなら船まで乗せてよ。そっちの方が手間かからないじゃない」
「それは無理。これでも能力が使える範囲って決まってるんだ。多分船まで運ぶと途中で形が崩れる。まぁボクが乗ってればそうはならないけど」
「だったらついてきて。迅速な行動は必要でしょ？」
「お宝盗むのにこの状況をほっとけって？」
おどけるキリの動きを見てナミは周囲を見回すが、どう見ても麦わらの一味が有利。
大したことはないだろうと語る。それでもキリは頷こうとしない。
「どう考えても楽勝ムードじゃない。あんたの出番必要？」

「今のところはね。だけど何がこれから起こるかはわからない」
「ハァ、わかったわ。一人で行けばいいんでしょ」
「戻ってくる頃には終わってるよ。多分ね」
ナミは大人しく鳥の背に乗り、羽ばたき始めたそれによって崖下へ運ばれていく。人間一人を乗せて問題ないサイズだが不思議と落下することはなく、自らの降下速度を操る。やはり紙で出来ているのが理由か、鳥自体さほど重い訳でもなさそうだ。
無事にナミが降りて、紙の鳥を自身の傍まで連れ戻し、バラけた紙を回収した後。
しばしの間を置いて再びキリが坂を見れば、激昂するジャンゴが動き出そうとしていた。
「おまえら全員これを見ろォ！」
糸で結んだチャクラムを掲げ、それをゆらりと揺らし始める。
奇妙な仕草で自然と視線が集まった。
この時、不穏な動きを感じたキリはやはりこの場を離れなくてよかったと思う。
「ワン・ツー・ジャンゴで眠くなれ！　ワ～ン……」
「みんな見るなッ！」
「ツ～……」
キリが発した鋭い声に気付き、ただ言われるがまま反応して、シルクとウソップが咄嗟に顔を背けて視線を外した。しかし聞いていながらルフィは気になって仕方ないらしく、揺れるチャクラムを見つめたまま。一時も目を離さない。
するとジャンゴが大声を発して、自身の帽子をずり下げると自分で目元を隠した。
「ジャンゴォ！」
「おぉっ？」
叫んだ瞬間、ルフィに異変が起きる。今の今まで問題なく立っていたはずなのに急に体から力が抜け、意識が遠ざかっていく。痛みや苦しみはない。襲ってくるのは抗い切れない睡魔だ。
意識を手放して眠ってしまうまでたった数秒。

ルフィの体は受け身も取れずに大の字に倒れてしまった。かといって怪我を負った訳ではなくてただ眠っているだけ。あまりにも奇妙な光景には仲間たちも心配する。
「ルフィ!?」
「ね、寝ちまったのか？　なんでこんな時に」
「お嬢様に遺書を書かせる方法、催眠術ってこのことか。つまり奴は催眠術師」
三人が目を向けるのはジャンゴ。あからさまに奇怪な外見の男だ。
催眠術という、悪魔の実にも劣らない物珍しい技術を持つとは予想外だった。しかも一瞬でルフィが眠ってしまったところを見るとかなり強力。決してかけられてはいけないと理解する。
道を塞いでいた彼が倒れてしまったことで道が開けた。
状況は変化し、再び海賊たちが大声を発する。
異様なほど強い彼を倒すのは不可能だと思われたものの、流石は船長。見事な手腕で彼を退けた。これで炎の壁を突っ切って逃げ出す必要はなく前に進める。
「やったぜ、流石ジャンゴ船長！」
「あのバカ強ぇ奴を倒しちまった！」
「よぉし野郎ども、これで村に入れるぜ！　進めェ！」
目指すはシロップ村。計画通りに事を為す。
雄たけびを上げた海賊たちが武器を振り上げ走り始めた。
それを見て咄嗟にキリが動こうとしたが、それよりも早くシルクが駆け出し、軽やかな動きで跳ぶと坂へ降りる。立った場所はルフィの傍。真剣な眼差し、両手で剣を構える。しかしやってきたのが細身の少女一人ということもあって、海賊たちは足を止めなかった。
「女ぁ、踏み潰されてぇのか！　そこをどけェ！」
威圧されたところでシルクは逃げず、代わりに剣を振るった。
横薙ぎに全力で。坂を両断するような軌跡である。
剣の動きに合わせて能力が使用されており、放たれた風が刃のように研ぎ澄まされ、目に見えないまま空を駆けた。結果、海賊たちの進行方向を塞ぐように地面に当たって、ガリガリと荒々しく削られる。

突然の事態に海賊たちは恐れおののいて思わず足を止めた。
剣を振り切った態勢のシルクに注目が集まる。
一度血振りをして、背筋を伸ばした後で改めて構え直す。
今の一撃は良かった。驚愕して口を大きく開いているウソップは別として、見ていたキリもシルク本人も思う。今までの練習の成果は今こそ形となったのだ。
自信すら感じる表情で言葉が吐かれる。
地面に刻まれたのは境界線。生と死を分ける場所だ。
シルクはまたも言葉を失くした海賊たちへ、静かな声色で語り掛ける。
「その線、越えないでね。ここからでも斬れるよ」
それは明らかな宣戦布告。同時に敵への警告でもあった。
自分の意志で使えるようになりつつあるが、それでも細かな調整にはまだ甘さがある。以前は砲弾さえ切り捨てた技だ。一歩間違えれば人体さえ両断してしまう可能性があるだろう。それを考えるにできればこのまま退いて欲しいというのが正直なところ。
敵の士気を折りながらもシルクも緊張している。
ただこの場が硬直したのは確かで、空気は一変していた。
普通の人間ではないだろうシルクの力を目にして、考えも無く突っ込んでいくことはできない。
再び前へ出るのを戸惑い始めたため、思わずジャンゴは頭を抱えて溜息をついた。
「てめぇら一体何やってやがる。相手はガキだろうが」
「でも船長、あいつらやっぱおかしいですぜ。ありゃ悪魔の実の能力者だ」
「あんなバケモノに勝てるわけねぇって」
「だらしねぇ連中だ。仕方ねぇ、ならおれの催眠術で恐怖を取り除いてやろう」
そう言ってジャンゴは仲間たちへ振り返った。
催眠術を使うため糸に吊られたチャクラムが揺れ始める。
海賊たちはこぞってそれを見つめた。船長の催眠術が嘘の類では

なく本物だと知っている。それはいっそ、魔法だとも思わせる強力な力を持っているのだから。
しかしその時一人の男が気付いた。
揺れるチャクラムから一瞬目を離し、不意に見たのは坂道の一番上。
いつの間にかその場へ現れた見覚えのある顔が目に映り、小さくあっと呟かれる。
「ジャンゴ船長、あれ……」
「あぁ？　なんだってんだいきなり。人が催眠かけてやるってんだから集中しろ」
「あ、あれっ、あれを」
「わかったようるせぇな。向こうに何があるんだ？」
その男の一声によって全員の目が彼に気付いた。
黒髪のオールバックと黒い執事服。不機嫌そうな顔には眼鏡をかけて、それを掌で押し上げる手には奇妙な手袋がつけられていた。爪のように取り付けられた五本の刀身が、まるで猫の爪を思わせる。だが本来のそれよりも鋭い。少なくともそれが猟奇的な凶器であることだけは確かだ。
クラハドール、及びかつての海賊キャプテン・クロ。
屋敷で待っている手筈だった彼がなぜか昔の武器を持ち出してそこに立っており、途端に海賊たちからは口々に悲鳴が放たれた。
彼の恐ろしさを知っている。それだけで体の震えが止まらない。
言葉を失くす一同の中でジャンゴのみ声を出すことに成功し、震える声で問いかけた。
「キャ、キャプテン・クロ!?　なぜここに……！」
「その名は捨てたと言ったはずだぞ。今はクラハドールだ」
クロは眼鏡を直す癖を見せ、昔の名残もそのままに口を開く。
冷徹な表情だ。かつての仲間たちを見る目はあまりにも冷たい。
自身の爪で傷つかないよう、くいっと掌で眼鏡を押し上げ、冷静に場の状況が見極められようとしている。その事実に、その姿に、やはり海賊たちの震えは異様なほど治まらなかった。

ギガｐａｒａｌｙｚｅ（２）

胸騒ぎがする。
いつもより早く目覚めてしまったカヤは自室のベッドの上、物憂げに膝を抱えていた。
昨日のウソップの姿が頭から離れない。今まで仲良くしていたのに、なぜ急に態度が変わってしまったのか。昨日だけは明らかにおかしかった。いつもの彼ではない。確かに彼は嘘つきだが決して他人を悪く言ったりしないはずなのに。
ある種の強い信頼を胸に秘めるからこそ、眠れない夜を過ごしてしまったようだ。
俯く彼女はふと顔を上げ、窓の外を眺めた。
徐々に朝日が昇ってくる。そのためいつも彼が座る木の根元もよく見えた。
やはりおかしい。
そんな想いがぐるぐる頭の中で回って溜息が出てしまう。
「はぁ……ウソップさん、どうしたんだろう。何かあったのかしら」
考えても考えても答えは出ず、彼に会いたいと思う。
こればかりは本人に聞かなければわからない。
居ても立っても居られなくなった彼女は、ベッドを降りてカーディガンを羽織り、部屋を出た。
今はまだ朝も早い。今すぐ会うことはできないだろう。
ウソップに会いに行くとしてもう少し日が出るのを待たなければ。
扉を抜けて廊下へ立ち、キッチンへ向かおうとする。ひとまず水が飲みたかった。すると玄関が騒がしい気がして、何人かが言い争う声が聞こえてきたのを機にそちらへと歩き出す。
確かめようと辿り着いてみれば大声を出しているのは子供たちだった。
ウソップ海賊団。にんじん、ピーマン、たまねぎの三人である。
顔見知りの彼らがやってきていることに驚き、カヤは何気なくそちらへ歩み寄る。

「みんなどうしたの？　こんな朝早くに」
「あっ、カヤさん！」
「あぁ、お嬢様……申し訳ありません。こんな朝早くに」
声をかけたことで彼らが気付いた。
応対するメリーはほとほと困り果てた表情で、カヤが来たことでほっと一息つけたらしい。
何かあったようだ。
やってくる彼女が膝を折って視線を合わせ、彼らの話を聞いてやることにする。
ウソップを知る以上、彼らとの関係も知っていて、時には共にホラ話を聞いて楽しむこともあった。こうして正面から来るのは初めてのような気もするが、どうやら冗談を言っていられるほどの余裕はない様子。妙に切羽詰まっている顔つきが気になった。
三人は焦る様子で口々に話し始める。
「おれたちやっぱり昨日のキャプテン、おかしいと思ったんだ」
「だから今日の朝、家に行ってみたらキャプテンいないんだよ。どこにもいなかった」
「それにさ、北の海岸の方から煙が上がってるんだ。今までそんなことなかったよね？」
「北の海岸？　ちょっと待って、どういうことなの……？」
冷静に聞こうと思っていた心がざわつく。
慌てる彼らの言葉ではわかりにくいが、それはつまり、ウソップの話が本当だったと言いたいのか。海賊が来るぞ。彼の必死の叫びが思い出される。
いつもとは様子が違うと思っていた。しかし本当に海賊が来るなど、想像もしていない。
傍らに立つメリーと顔を見合わせれば、彼も眉間に皺を寄せて困った顔。
まだ全貌が伺えず、それでも嫌な予感が胸の中に生まれた。
「それってどういうこと？　ウソップさんが昨日叫んでた、海賊が来るぞって」

「それが本当なんだよきっと！　うそじゃなかったんだ！」
「キャプテン、みんなに信じてもらえなかったからおれたちにうそだって言ったんだ。本当は海賊が来るのに、一人で戦うために」
「キャプテンはそういう水臭い人だ！　僕たちだって戦えるのに！」
三人はそう信じて疑わない顔つきで怒りさえ滲ませている。
よく見れば手に手にフライパンやバットやシャベルを持って、武器のつもりらしい。彼らはどうやら戦う気だ。もし本当に海賊が来ていたとして、立ち向かうつもりなのだろう。
意を決した様子でピーマンが言う。
右手に持つバットを掲げ、子供ながら威勢が良かった。
「やっぱりあのクラハドールって奴が海賊だったんだよ！　そうじゃなきゃキャプテンがおれたちにうそつくはずがないっ！」
「バカなことを言うもんじゃない。クラハドールさんは三年間もお嬢様の傍でお仕えしていたんだ。もし本当に海賊だったらどうしてそんなことをする？　憶測だけで人を悪く言うんじゃない」
やれやれとメリーが言いのけるのだが、カヤは思案する表情。
確かに一理ある。ウソップが誰かの悪評判を広げるような嘘をつくはずがない。ただそうすると、彼女にとって最悪な事実があるように思えて。
子供たちを嗜めるメリーへ、そちらを見ずにカヤが尋ねた。
「ねえ、メリー……今日、クラハドールは？」
「はい？　以前から休みを取っていたので、今日は隣町に行くと――お嬢様、まさか」
「そんなことないって思いたい。だけど」
「お嬢様落ち着いてください。クラハドールさんが海賊などと、そんなことは」
「私だってそう思いたいよ。だってクラハドールは、ずっと私の傍に居てくれたんだから」
嫌な想像が頭をよぎる。
考えたくはない。考えている通りなら最悪の結末だ。

真実を訴えたウソップを信じず、裏切り、その代わり彼女たちへ嘘をついていた男を擁護したことになる。自分たちだけではない、村人全員の罪だ。
もしこれで本当に村に海賊が来て滅ぼされるようなことがあったら。
背筋がぞっとし、平静ではいられなくなった。
カヤの表情が変わったのを知りながら、子供たちは言う。顔には決意が表れていた。
「カヤさん、おれたちが確かめてくるよ」
「うん。キャプテンはきっと海岸にいるから、おれたちが見てくる」
「そしたらカヤさんには一番に教えるから。危ないかもしれないからここで待ってて」
「待って」
頭に手を当て、胸の苦しさを覚えながら深く息をする。
ゆっくり顔を上げた彼女は気丈に振舞っていて、冷や汗を掻いていた。しかし意志は揺るがず、強い声色で彼らへ伝える。
「私も行く。一緒に行きましょう」
「お嬢様⁉　いけません、そんな無理をしては」
「大丈夫。彼らが守ってくれるから」
「お、おう！　おれたちウソップ海賊団にまかせてくれ！　カヤさんには指一本触れさせないぞ！」
武器を掲げて威勢よく言う彼らに微笑んだ後、立ち上がったカヤは真っ直ぐにメリーを見る。
これほど強い眼差しは見た事が無い。
普段の儚げな空気もどこへやら、初めて見せる顔で迷いなく告げられた。
「自分の目で確かめたいの。今ここで何が起こっているか、知らないままでなんていられない」
「でしたら、私が確かめてきます。危険があるかもしれません。お嬢様はここで」
「それじゃだめ。私、ウソップさんを信じてあげられなかった……

今までずっと助けてもらってたのに、肝心な時に何もできなかった」
自分自身に失望しているのかもしれない。弱々しくぽつりと呟かれる。
その一言にはメリーも二の句を告げられなくなった。
かつてここまで傷ついている彼女の顔を見たことがあっただろうか。否、おそらくはある。両親が亡くなった時、塞ぎ込んでしまった彼女は今と同じように寂しそうな顔をしていた。いつからか変化が起こって、そういえば傍には彼の姿があったのだ。
彼は嘘つきだが決して悪人ではない。
今になってそれを思い出し、苦心するようにメリーも表情を歪める。
「待ってなんていられない。私、ウソップさんに会ってくる」
「お嬢様……ハァ。仕方ありません。そこまで仰るのでしたら、私も行きます」
「メリー」
「お嬢様をお守りするのが、私の役目ですから」
笑顔でメリーが言った時、ようやくカヤにも笑顔が戻り、晴れやかな表情になる。
三人へ向き直った彼女は笑顔になって声をかけた。
「行きましょう。ウソップさんは北の海岸に居るのね？」
「間違いない！　キャプテンは一人で戦ってる！」
「うん。急がなくちゃ」
五人は間も置かずに外へ出て、早足で海岸へと向かい始めた。
不思議と嫌な予感がする。三人の言葉が間違っているとは思えない。だがそうだとすればクラハドールの姿も嘘になってしまう訳で、苦悩せずにはいられなかった。
どちらが良いとも思えず、苦しい思考を放棄し、今はただ足を動かすことしかできなかった。

＊

「面倒だ、まとめてかかって来い。頼むからあっさり倒れてくれるなよ」
三本目の刀を口に銜え、三刀流の威容を見せたゾロは好戦的に笑った。
炎の壁を傍目に、立ち向かうのは二人の男。
ニャーバンブラザーズ。彼らはそう呼ばれていた。猫を連想させる爪を持ったグローブに、身軽な動きは確認している。身のこなしからおそらく強いのだろう。問題は力量のほどが如何ほどか。二人がかりで来たとして、果たして自分を満足させてくれるのか。
できるだけ強い方がいいと思う。
自らを高めるならば、敵にも相応の実力を求めたい。
村を出て以来、今日まで一対一で戦って苦戦するほどの相手に出会ったことはなかった。それだけならばまだしも、つい先日海軍を相手に大敗を喫したばかり。あの時は組織としての戦闘だったが、自分がもっと強ければとは思っている。要するに鬱憤が溜まったままなのだ。
切り伏せる相手が一人であろうと二人であろうと大差ない。
この状況が問題だとは思えず、力は内から漲ってくるばかりであった。
「舐められたもんだぜ。おれたちを相手に本気で勝つ気だぞ」
「こいつ、噂の海賊狩りか？　刀三本持ってるぞ」
「あぁ、そんな賞金稼ぎが居たか」
「二人でやっていいんだとよ。ありがてぇ話だ」
二人はいつでも動ける体勢となって、余裕綽々に舌なめずりを始める。
負けるなどと微塵も思っていない。そんな顔だ。
対峙するゾロも自信が見えるようでどちらも退く気はなかった。
見つめ合って数秒。
突如ニャーバンブラザーズが駆け出し、二人同時にゾロへ襲い掛かった。
「ネコ柳大行進！」

「ズタズタにしてやる！」
鋭い爪を光らせ、真正面から突進してきた。
繰り出されるのは二人同時に来る無数の乱打。腕を振って引っ掻くような挙動はとても素早く、簡単に見切れる速度ではない。かなりの戦闘経験を伺わせた。
それを目にしてゾロは刀を構えただけ。
逃げ出す素振りも無く待ち受け、その場から動かずに彼らの攻撃を受け止める。
凄まじい様子で繰り出される連撃はとてつもなく素早い。だがゾロの動きは巧みで、一撃たりとも受けずにすべて防御する。爪は刀で弾かれ、受け流される。
彼の肌に触れる事さえ叶わなかった。
大きな動きも無くすべての攻撃がいなされる。確かに違和感は拭えなかったが、それでも一時の物だろうと二人は退かない。いずれ必ず隙が生まれる。或いは疲労を感じた瞬間、動けなくなって防御もできないはずだ。その時までこちらが隙を見せなければいい。
高速の乱打はしばし続いた。
それでもゾロの体には届かない。
疲労を感じるどころか、彼はつまらなそうに二人を見ている。両手と口で三本の刀を使い、一撃たりとも逃さず受け流している。
変わり映えの無い攻撃の数々。いい加減飽き飽きしたらしい。
ある時、唐突に、ゾロがぐっと腕に力を込めた。
刀がシャムの爪を受けて力ずくで払いのける。
無理やり体勢が崩された。今までの挙動と大差はないというのに、触れ合った刹那、あっと気付けば前のめりに転びそうになっていて、無防備な背中が晒される。
腕を振り上げたゾロは冷徹にその背を見つめていた。
慌てた様子でブチが割り込もうとするも、その一瞬でシャムは己の死を間近に感じる。
「シャムッ!?」
倒れ込むシャムの体を飛び越えつつ、ブチが急いで爪を突き出し、

ゾロとの間に割って入った。その行動さえ冷静に見切られて受け流される。
勢いそのままにブチの体はゾロまで飛び越えてしまった。
ほんの一瞬とはいえ隙を見てシャムも慌てて飛び退き、二人に挟まれる構図となる。
攻撃は中断され、表情を険しくしたニャーバンブラザーズは強く歯噛みした。
想像以上の強さだ。その身からは疲労など一切感じず、むしろ眼光の鋭さは増すばかり。肌に感じる迫力からは怒気すら見出せそうなほど恐ろしい。
背筋が凍り付いた一瞬。
二人を一瞥したゾロは退屈そうに言葉を吐いた。
「こんなもんか？　だとすりゃあ期待したおれがバカだったぜ」
「な、なにィ……！」
「てめぇ、おれたちを舐めてんじゃねぇか？　あぁ？」
「舐められたくなきゃ実力見せてみろよ。その程度ならもう斬っちまうぞ」
全身に力を漲らせて、笑みを浮かべてそう言われた。
まるで侮蔑するような態度。
二人が怒りを滲ませない訳も無く、前後から挟み込んだ状況を利用し、挟み撃ちが行われる。
どちらも思い切り駆け出し、感情のまま叫び声を上げた。
「てめぇ、言わせておけばァ！」
「キャプテン・クロが降りた後のクロネコ海賊団ナンバーワンはおれたちだ！」
「三刀流……」
刀を構え、迫り来る二人を見る事も無く迫力が増す。
ニャーバンブラザーズが跳び、襲い掛かってくる一瞬。それを間近に見ながらゾロは慌てず、逃げ出すこともなければ、その場でぐるりと回転しながら刀を振るった。
そうして起こるのは強烈な風。

シルクの修練に付き合う最中に見出した。能力が使えずとも、己の身体能力を極限まで高めて利用すれば、条件次第によっては風を巻き起こすことができる。
これこそがその技。
繰り出された竜巻は確かに斬撃の性質を持っていた。
「龍巻きッ‼」
強烈な斬撃により、腹を深々と斬られた二人は風に煽られて宙を舞い、ほんの一瞬で意識を刈り取られた。着地の体勢を整える暇もない。どすんと痛そうな音を立てて地に落ちる。
決着はあっという間であった。
勝利に余韻に浸ることもせず、早々に刀を仕舞い、手拭いを取ったゾロは息を吐き出した。
呆気ない。思うのはただそれだけ。
喜びもなければ悲しみ、怒りもないまま終わってしまった。
せっかくやる気になっていたのにやり切れない状態で、不満そうに倒れた二人へ目を向ける。
「なら大したことねぇな、クロネコ海賊団。おまえら全員おれ一人で十分だ」
端的に告げて左腕に手拭いを巻き、崖に歩み寄って見上げる。
そこには坂道を見つめるキリが立っていて、気付かない彼に声をかけると目が合った。
「おいキリ、終わったぞ。上げてくれ」
「もうちょっとで火が消えるから待っててよ。今こっちも状況が変わりそうでさ」
「どういうことだ？」
「それにめんどいし」
「叩き落とすぞ、おまえ」
普段と変わらない様子のキリだが、目を合わせたのも一瞬。すぐに坂の上へ見始めてしまう。
よっぽどの状況だろうと気付くのは必然だった。
弱り始めた炎の向こう側へ、同じくゾロも目を向ける。坂道の上に

誰かが立っている。見覚えのない顔、両手には奇妙な武器を装備していた。
確かに、他とは違う雰囲気を感じる。
なぜかルフィは道の真ん中でのんきに寝ていて、男と対峙するのはシルク。キリとウソップは相変わらず崖の上から坂道を見下ろして立っている。知らぬ間に多少の変化があったらしい。
再びキリを見上げて言う。
今度は彼も目を合わせようとはしなかった。
「助太刀は？」
「いや、シルクに任せてみよう。しばらく練習ばっかりで実戦で使う機会もなかったでしょ」
「大丈夫なんだろうな。まだ完璧に扱えるわけじゃねぇだろ」
「伸びしろはすごいと思うよ。この短期間でずいぶん上達してるしさ」
「別におれは構わねぇが……」
「フォローのために気が抜けなくてね。そういうことなんで、しばらく休んでてよ」
「チッ、損な役回りだな」
腕組みをしたゾロは炎の前へ立ち、その向こうにあるシルクの背を見つめる。
能力を操り始めている節はある。だがそれはあくまで鍛錬の話。実戦で敵を前にしてどれほど使えるか、本気で試したことはない。言わばこれが彼女にとっての初陣。
背を見てみれば意外にも堂々としている。
自信があるのか、見てみるのも悪くないと思った。
炎が道を遮っていることを理由に、彼は最も強い敵をシルクに任せ、果たしてどこまでできるか、真剣な面持ちで静観することを決めたようである。

ギガｐａｒａｌｙｚｅ（３）

くいっと眼鏡の位置を直したキャプテン・クロは冷静に辺りを見回した。

計画を進めなければならないのに足止めされているクロネコ海賊団。足止めしているのは、ほんの数人の少年少女たち。その中に一人、見覚えのある顔が居る。

ウソップだ。

以前からカヤの屋敷に忍び込んではホラ話をしていた少年。何度も注意したため覚えている。

まさかこんな状況で出会おうとは、一切想像していなかった。

「ウソップくん……君はこんな所で何をしている？　私が海賊だと言いふらしていたようだが」

「て、てめぇ、やっぱり本当だったんだな。あの計画は嘘じゃなかったんだ」

「バレてしまったのなら仕方ない。君の言葉は真実だ。私は元々海賊だった」

そう語る彼は冷静で、少しも慌てている様子はない。

ウソップを見る目は以前より冷ややか、と言うより驚くほど冷酷だった。決して顔見知りに対して向ける物ではなく、むしろ虫やゴミを見る目と同じだ。

その視線に背筋がぞっとする。

前々から口うるさく怒られていたせいで、仲良くはなかったが、互いにカヤを気遣う者同士。本気で嫌っている訳ではないと思っていた。だが彼の目を見れば違うのだと気付く。彼はウソップという人間について何とも思っておらず、おそらくカヤに対しても同じ。両手につけた奇妙な武器で殺そうと思えば躊躇いなく殺すに違いない。

戦慄を覚えたウソップは強く歯噛みし、今まで見抜けなかった自分を憎らしく想う。

何が執事。何が拾われて三年間の忠誠。あれこそ紛う事無き海賊ではないか。

今までずっと同じ村に住んでいたのが恐ろしく感じ、気付いた者が一人も居ないのが驚きだ。
癖となっている眼鏡の位置を正す動きをした後、両手を下ろしてクロが呟く。
「だが海賊だったのは三年も前のこと。君が知らなかったのも無理はない。この村に居る間、私はもう海賊ではなかった」
「嘘つけ！　だったらなんでカヤを狙う……あのまま暮らしてりゃよかったじゃねぇか！」
「そうだな。確かに海軍に追われる日々は終わった。確かにあれも平穏だったのだろう」
「ならっ」
「だが私が欲しかったのは静かな日常でね。お嬢様に付き合って慌ただしく走り回る日常ではない。その違い、わからないかな」
冷徹に言いのけ、表情はぴくりとも変わらない。
ひどく冷たい人間なのだ。
その声を聞いて、そんな程度の理由で人を殺そうとしているのかと愕然としてしまう。
ただ邪魔だから。カヤはそんな理由で殺されようとしているらしい。
カヤの傍に居た時とは全く違う姿に、驚愕しながらも怒りに震えるウソップは今にも殴りかかりたい衝動を必死に堪え、その場を動かなかった。
今すぐ黙らせたい気持ちはあるものの、一応とはいえ聞いておきたい。
彼が本当にカヤのことをどうでもいいと思っているか否かを。
この村に居た三年間、彼女に対する情は生まれなかったというのか。
「自分のためだけにカヤを殺そうってことなんだろ……」
「そうだ」
「なんで、そこまで……！」
「バカどもを相手にする生活に飽き飽きしたんだ。おれは静かな日

常が欲しい」
「カヤは！　おまえを信頼してたんだぞ！」
「当然だ。そうなるように行動したんだからな」
「おまえはっ……三年間カヤを傍で支え続けて、何も思わなかったのか！　可哀想だとも、殺すのをやめようとも、このまま暮らそうとも何も――！」
「何一つ、思わない。おれの計画は絶対だ」
ぎゅっとパチンコを握りしめ、素早く弾が番えられた。
もはや激情は止まらず、そんな程度の願望で人を殺そうとしている彼を許せるはずはない。激怒を露わにしたウソップが大声で叫んでいた。
「クロォォォッ‼」
放たれたのはただの鉛玉。だが顔面が狙われている。
当たれば肌を貫くことはできずとも相応のダメージが与えられただろう。しかし鉛玉は空を切ることとなる。放たれたと同時、なぜかクロの姿が掻き消えたのだ。
目を剥いて体が硬直した瞬間に、背後から彼の声が聞こえたのである。
「やれやれ……これだから嫌気が差したんだ」
慌てて振り向けば右腕を振り上げるクロが居て。そこには爪のような五本の刀身。
斬られる。
そう認識せざるを得なかった。
不思議とこの一瞬はスローモーションに見えていて、死の恐怖や自身の敗北を気にするより先に、敵の姿をしっかり見つめていた。自身を斬ろうとする、海賊の姿をだ。
今まで本気で死ぬと思ったことはない。死にたいと思ったこともない。
この場で見ているそれは偽物ではない戦闘だった。
ずっと夢見ていた海賊だ。
刃が迫る中、恐怖さえ忘れてそんなことばかり考えていた。もはや

逃げる術はない。もう死ぬのだと冷静に理解している。しかしそこで奇妙な出来事が起こった。
斬られたのはウソップではなく、斬ろうとしたクロだったのだ。
「ぐぉ……!?」
「えっ？」
呆けた声で呟いてしまった。直後に全身から力が抜けて尻もちをついてしまう。
胸を袈裟切りに斬られたクロから血が滴る。
裂けた服の切れ目からわずかに肌が覗き、浅いとはいえ確かに切り傷が作られている。しかも傍に人など居ない。誰に斬られたのかすぐには理解できなかった。
訳も分からずウソップが恐る恐る振り返る。
そこには剣を振り切った姿のシルクが居て、おそらく彼女が斬ったのだろうと思わされた。見るからに刀身は届いていないが、他に動きを見せる者などおらず、彼女にだけ注目が集まる。
彼女自身、どことなく放心した様子。
しばし沈黙が続くとキリが真剣な顔で問いかける。
「シルク。今……見えたの？」
「う、ううん。違うと思う。なんか、自分でも変な感じ……」
弱々しい風がそよそよと吹いている。
彼女自身不思議に思うが、それを如実に感じ取りつつ、視線はクロへ向いている。
「なんて言うのかな……風が動いたのがわかったの。ウソップの後ろまですごく速く動いていくのが。だからきっとそれがあの人なんだと思って」
呆然としながら語り、自らの剣を眺める。
カマカマの実。パラミシアでありながらロギアに近い奇妙な能力。
他のパラミシアと違って体質の変化がないと思っていた。それも間違いなのかもしれない。
命を賭けた戦闘という特殊な環境下、驚くほど風の動きが感じ取れる。自然発生した弱々しい物も、それこそクロが目に見えないほどの

速度で動き、伴って生み出された強い風も。今までにない感覚だった。能力を手に入れて以来、ずっと修練を重ねていたのに、今になって初めて気付く。
自覚した途端、シルクの胸中で興奮が生まれる。
「前に言ってたよね。悪魔の実の能力には、必ず真髄があるって」
「うん。言った」
「私、わかったかもしれない。この能力のこと」
両手で柄を持ち、眼前に掲げて。
刀身に巻き付くようにして強い旋風が生み出された。
それが彼女の能力。かまいたちを飛ばすことができる。だが言い換えれば、自らの体を起点に自在に風を生み出せるということ。
明らかにさっきとは違う表情で剣を見つめ、シルクは言った。
「かまいたちだけじゃない。ロギアとは違って、だけどすごく近くて。この能力はきっと風を操る力……私、使えるよ。これでみんなを守れるんだ」
彼女を起点に周囲へ風が走った。
決して強い勢いではない。ただ頬を撫でるだけ、木々につく葉が静かに揺れる。だがそれがシルクから放たれたことだけはその場の誰もが理解していた。
ウソップは呆然と見るのみだったが、キリは嬉しそうに笑ってその能力に目を輝かせた。
世にも珍しいロギアの性質を持つパラミシア。
その力には歴戦の海賊たちも怯えているらしく、ジャンゴも含めて誰もが沈黙している。それを知っているためだろう、胸を押さえたクロが額に青筋を立て始めた。
「悪魔の実の能力者か。おれの計画を、邪魔しようって腹だな」
「ウソップは傷つけさせない。私が相手だよ」
「チィ、こんな日に限って妙な奴らが。おいジャンゴ！　てめぇら何をやっている！」
クロの鋭い声を受けてジャンゴの体が震えた。
反応したのは彼だけでなく、背後で佇む海賊たちもだ。

キャプテン・クロの恐ろしさは嫌というほど知っている。身のこなしと足の速さだけで海軍の軍艦一隻を無力化した出来事も嘘ではない。そのため一睨みされただけで平静が保てなくなる。自らの命が危ないと知って表情を変える者ばかりだった。

眼鏡越しに、クロの厳しい視線はかつての仲間たちへ向けられる。

「この計画が頓挫したらどうなるかわかってるんだろうな？　おれの三年間は無駄になり、この村の居場所を失くす。もしそうなったらてめぇら全員皆殺しだ」

「あ、あぁ、わかってる。あんたに逆らう気はねぇって」

「だったら今すぐ村へ行け！　この小娘はおれが殺す」

クロに睨まれ、表情を引き締め直したシルクが緊張感を見せる。

強い相手であることはわかる。ただ今は自分の力を試してみたいという欲求が強く、退く気もなければ他の誰かに渡す気もない。自分だけで倒したかった。

シルクとクロが対峙したことを知り、ジャンゴを先頭に海賊たちが動き出そうとする。

動くなと言ったシルクは彼らへの注意を怠っているはず。背を向けてクロとのみ対峙しているのが良い証拠。今なら、彼女が設けた境界線を越えるのも容易い。

その隙に動き出そうとしたら、一歩を踏み出しかけたジャンゴの足元へ、一枚の紙が突き刺さる。硬い地面へ食い込んだそれに驚き、視線の先を変えれば微笑みを称えるキリ。その様子は先程のシルクと寸分違わず、まだ状況が変化した訳ではなさそうだった。

「その線、越えるなって言われたはずでしょ？　動かないのをお勧めするけど」

「フン、どうせ動かなければ死ぬんだ。おれたちに選択肢なんてない」

「それもそうだね。仲間だったはずなのに」

「向こうはそう思っちゃいねぇよ。おれたちゃ自分の命を守るために計画を遂行しなきゃならねぇってことだ」

くるりと振り向いたジャンゴは仲間たちに向き直る。

何をするのかとキリが見ていれば、チャクラムを揺らして仲間たちに催眠をかけるつもりらしい。敢えて止めようともせずにそれを見守った。

「いいかおまえら、この輪をよぉく見ろ。そしておれの言葉を聞け。おまえたちは普段以上に強くなり、後から後から力が沸いてきて、怖い物なんて何も無くなる。目の前のガキどもを始末して、村へ入って騒ぎを起こし、お嬢様を殺すんだ」

海賊たちの顔がとろんと力の無い物に変わっていく。それを確認してジャンゴは吠えた。

「ワン、ツー、ジャンゴォ！」

叫んだ途端、様子が変わった。

海賊たちの体は見た目からして変化が起こり、表情は険しく、血気盛んに叫んで、まるで音でも立ちそうなほどに筋肉が隆起していった。誰もがそんな調子で雄々しい姿。怖い物など何もないとばかりに武器を振り上げ、坂の上を目指して走り出した。

シルクはクロから目が離せない。気付いていても止められなかった。

そのため彼女へ接近される前にキリが動き出し、道の中央へ立つと懐から紙を取り出す。

バサバサと無数に出てくるそれらは軽やかに集まり、手の中で武器となった。湾曲する鋭利な刀身を持つ、長大な鎌。両手で持って体ごと回転しながら攻撃を繰り出す。するとたったそれだけで、向かってくる海賊たちが一斉に切り裂かれ、衝撃から数人の体が簡単に宙を舞った。

回転が止まった時、海賊たちは血を流して倒れている。

状況はいとも容易く変わった。

催眠術にかかっていたはずなのにすっかり恐怖心に囚われてしまったらしい。全員がキリの笑顔を見ただけで肩をびくつかせるほど、たった一撃で明確な差を教えられた。

勝ち目などない。

そう思わされたところで前には進めそうにないのだと知る。

「いいから大人しくしてなよ。今すぐ死にたくないならね」
「うっ……こ、このガキっ」
再び道が塞がれ、催眠術もどこへやら、一同は動けなくなってしまう。
これではいかんと動き出したのはジャンゴであった。
怯んで下がってしまった仲間の一人を捕まえ、右手側の崖まで連れて行くと荒々しく言う。そちらはゾロもシルクも離れてしまい、ちょうど手薄となった場所だ。
「おい、手を貸せ！」
「ジャンゴ船長、一体何を……」
「おれを上へ飛ばすんだよ！　急げ！　こうなりゃ一人でも行かなきゃならねぇだろ！」
両手を組んだ上に足を乗せ、ジャンゴが持ち上げてもらって崖の上へと上る。今なら場が混乱して止める者が居ない。迂回して森へ入ればなんとか突破できそうだ。
苦渋の決断。こうなれば単独でもやり遂げなければ。
止める手もなく、決死の覚悟でジャンゴが走り、それを見るキリはわずかに逡巡する。
「チクショー、こうなりゃおれ一人でも辿り着かねぇと！」
「あ、まずいな。あんな所から」
一瞬追おうかと思ったキリだったが、それこそ彼がその場を離れれば海賊たちへの抑止力が無くなり、敵の侵攻を許してしまうこととなる。シルク一人で片付けるには厳しい。彼女はこれからクロの相手で手一杯になりそうだ。
追うか追うまいか、一瞬の逡巡。
ジャンゴの姿があっという間に森の中へ消えてしまう。
答えを出したのは駆け出したウソップだった。
「キリ、おれに任せろ！　おれが止める！」
「ウソップ」
「あいつ一人くらいならなんとかしてやる……！　全部おまえらにおんぶにだっこじゃ締まらねぇだろ！」

クロの注意が逸れたことをきっかけに、坂道を横断して反対側へと移り、ウソップはジャンゴを追って森の中へ駆け込んでいく。
迷いはないらしい。不安そうな顔を見せていた時とは違って頼もしい姿だ。
威勢の良い声にキリは敢えて動かず、満面の笑みを浮かべて、去り行く背に声をかけた。
「よし、任せた！」
「おぉし！」
ウソップの足は存外速く、ルフィにも負けていないだろう。あっという間に木々の間をすり抜けて行ってしまった。その姿が見えなくなるまでそう時間はかからない。
反対に彼がジャンゴの姿を見つけるのは早かった。
土地勘がある者とない者、駆ける態度にも違いはあって、ウソップの足に迷いはない。
ただなんとなくで走るジャンゴと違い、子供の頃から村の周りを探検していた。成長してウソップ海賊団を結成し、その範囲はさらに広くなる。昨日今日来たばかりの新参者とはあまりにも知識が違い過ぎるのだ。この島に関して知らない場所など一つも無い。
この場においては圧倒的な有利があると言えるだろう。
早くもジャンゴの姿を射程範囲に捉えたウソップは、走りながら大声を出した。
「そこまでだ催眠術師！　村には行かせねぇぞ！」
「チッ、例のガキか。面倒事を増やしやがって」
速度を緩めて背後を確認し、ジャンゴは懐からチャクラムを取り出す。
如何なる相手であっても催眠にかかれば大した相手ではない。しばらく眠ってもらえればそれで十分。たった一人、しかも能力者でもないただの村人だ。
警戒するほどではなく、立ち止まって体ごと振り返った。
「言っとくが、おれを舐め過ぎてるんじゃねぇか？　腐っても海賊、クロの野郎にゃ敵わねぇがこんな村でぬくぬく育ったおまえにやら

れるほど、弱いつもりはねぇんだよ」
「へっ、そう言ってられるのも今の内だぜ……」
「なにぃ？」
逃げずに迎撃するつもりらしい。
それを知ってウソップも慌てて足を止め、密かに攻撃準備をしつつ、厳しい視線を向ける。
距離はいまだ二十メートルほど離れたまま。
動きを止めた二人は距離を置いた状態で対峙し、やがてウソップが自信満々に語り出す。勝算あり。彼について深く知らずとも、その意志が如実に伝わってくるほど分かり易い表情だった。
「おまえは知らねぇかもしらねぇがな、おれたちが何の準備もしなかったと思うか？　森に入られることも考慮済み！　この辺りにゃすでに罠を仕掛けてあるんだ！」
「な、なんだとォ!?」
「さぁてどこにあるかわかるかなぁ？　下手に動くんじゃねぞ、足が無くなっちまうぜ」
「くっ、こ、このガキ、なんつー真似を……！」
「はーっはっはっは！　知ってるか？　海賊に卑怯なんて言葉は通用しねぇんだ！」
当然、嘘である。
得意のホラ話で敵の動揺を誘えば、ジャンゴは疑う素振りもなく驚愕を露わにする。足が無くなるほどの罠とはなんだろうと真剣に考え始め、きょろきょろ辺りを見回す始末だ。
本物の海賊と言っても存外騙され易いらしい。そういえばさっきの嘘も彼だけ反応していた。
反応が良ければ舌に脂が乗ってくるというもの。
好都合とばかり、ウソップはさらに続ける。
「しかもだ、この辺りには毒蛇や毒蜘蛛が生息してる。ちゃんと下も見てねぇと噛まれて毒が回っちまうから注意しろよ」
「なんだとっ。くそ、クロからそんな話は――」
「今だ、必殺！　鉛星！」

「うごぉ!?」
ジャンゴが足元を見た途端、ウソップが放った鉛玉が見事に腹へ当たり、激しく悶絶する。ピストルで撃たれるよりよっぽどマシだが痛さは相当だ。
たたらを踏んで転びかけ、腹を押さえた彼は急ぎ顔を上げる。
しかし先程まで立っていた場所に彼の姿はなかった。
「うぐぐっ、おのれクソガキめ、どこへ行きやがった……」
辺りは静かな森。
風が草木を揺らすものの音はない。
ウソップの姿は簡単には見つからず、思わず歯噛みした。そんな瞬間に左からガサッと一際大きな物音が聞こえ、草むらが揺れたことに反応する。
振り向きざまにチャクラムが投げられた。
糸をつければ催眠をかけるための道具でも、それ単体では敵を切り裂く円形の刃。
見事な腕前で真っ直ぐ飛び、草むらを突き抜けて向こう側へ進む。だが悲鳴は聞こえず。ただ単に石か何かが投げられただけのようで、そこにウソップの姿はない。
代わりに背面から声が聞こえて、同時に攻撃がやってきた。
「鉛星ィ！」
「うごはぁっ!?」
今度は背中。思い切り殴られたような衝撃が体を駆け抜けて倒れ込む。
勢いよく転び、悔しく思わずにはいられない。
ジャンゴはすぐに立ち上がるが相変わらず敵の姿さえ見つけられていない状況。頭に血が昇って、不必要なほど体に力が入っていることを自覚できなかった。
敵の姿は見えない。これでは催眠術にかけるどころか、チャクラムを投げるのも不可能。
完全に敵の掌の上だった。
海賊ですらないただの村人。しかも歳は彼よりも遥かに下の少年。

素人に負かされるのが我慢ならず、さらに冷静さを失いかけそうな状況である。だがそんな最中、長年の経験故か、彼はピンと閃いた。
「そうだ、てめぇはついさっきおれに嘘をつきやがった。つまり今度も嘘の可能性が高いな。本当は罠もなければ毒蛇も毒蜘蛛もいねぇ、そうだろう？」
「げえっ!?　バレた!?」
「そこかァ！」
ジャンゴが呟くと、反応してしまったウソップが草むらから立ち上がり、姿を見せてしまう。それを素早く見つけてジャンゴは自身の右手側へと駆け出した。
両手にはチャクラム。
投げつけて始末するのも良いがあいにくと今しがた舐められたばかり。
直接決着をつけるべきだと考え、彼は真っ直ぐにウソップ目掛けて走って行った。
「ハッ、バカめ！　嘘がバレたくらいで顔を出すとはな！」
「あぁぁ～っ、またバレたって言っちまった！　おのれ策士め！」
「もう逃がさねぇぞ小僧！　海賊に盾突いてどうなるかわかってるんだろうなぁ！」
「ぎゃああ～!?　ま、待ってくれ、命だけはぁ！」
両手を上げて叫ぶウソップは慌てて後ろへ逃げるも、ジャンゴは止まらない。逃げるウソップと追うジャンゴの構図となった。さっきまで彼が隠れていた草むらを飛び越え、両者の距離はほんのわずかに埋まっておよそ十メートル。
そんな状況で、ジャンゴが着地するまさにその瞬間、不意にウソップがほくそ笑んだ。
地面に勢いよく両足をつけた彼は、表情もそのままに血相を変えて、全身をぶるりと震わせるのである。理由がわからないがなぜか両足の裏から鋭い痛みが走り、無視できずに声が漏れた。
「んんっ!?」
「なぁんてな」

上手くかかったとウソップが笑う。
ジャンゴは自らジャンプしたことで、強くまきびしを踏みつけてしまい、足の裏に突き刺さったそれが途方もなく痛く、なぜか笑えてくるほど。直後に彼は耐え切れず大きく跳び上がった。
嘘と逃げ気と的確な狙撃。それが自身の武器だとウソップは初めて理解した。
本物の海賊と渡り合える。
この瞬間に自信さえ持てたようで、流れるような動作でポケットから新しい弾を取り出す。
間抜けな姿で飛び跳ねるジャンゴをしっかり見据えて、再びパチンコが構えられた。
「嘘でおれに勝てるなんて思うなよ。くらえ催眠術師！」
「おおぉ……くっ、クソガキめ！　舐めるなァ！」
痛みを堪えながらもジャンゴが両手のチャクラムを投げた。
慣れが伺える仕草からは技巧さが見え、鋭利なカーブを描いて向かってくる。
ただこの時、ウソップは驚くほど冷静だった。普段の優柔不断さや臆病さが全くもって消えており、アドレナリンが出ているせいか、はたまた別の原因か、慌てることなく判断する。
飛来するチャクラムを理解しながら逃げず、横っ飛びで姿勢を崩し、それでもジャンゴから目を離さない。構えられたパチンコは片時も狙いを外さずに、ぴたりとジャンゴを見据えている。それでいて慌てずにチャンスの一瞬を待っていた。
飛んできたチャクラムが彼の体を掠る。
右頬と左の脇腹。どちらもわずかに掠って切り裂いていく。
それらを持ってしてもウソップは止められない。
選んだ弾丸は特別な物。試しに作って、危険だろうと今日まで使ったことはない。
それを今、気合いを込めて放つ。
「必殺！　火薬星！」
「ぐぼふぁあっ!?」

着弾したのは顔面だった。激突した途端に小さな爆発を起こした弾丸は、致死性がないとはいえ相当な衝撃をジャンゴに与え、たった一発で意識を刈り取る。
先にウソップが地面へ落ち、次いでジャンゴがゆっくり倒れた。
見た目の派手さとは裏腹に思いのほか軽傷らしい。
気絶したジャンゴの顔にはわずかな火傷はあるものの、そう顔が崩れている訳でもなかった。
存命は確実。
倒れたまま彼を見たウソップは大きく息を乱し、興奮した面持ちだ。
「ハァ、ハァ……か、勝ったのか？」
自分でも信じられずに呆然としたまま呟いた。
本物の海賊。殺す気で戦っていた彼が倒れているのだ。
それをやったのが自分とあってそう簡単に信じられずに、我を忘れて見つめること数秒。
時間をかけてようやく自分がやったのだと理解できて、ウソップの顔に笑みが戻った。
膝立ちになって拳を握り、自然と体が震え始め、全身に漲る衝動に逆らえなくなる。
「よっ……よっしゃ～！　見たかこの野郎ッ！　おれだってなぁ、本物の海賊になったんだ！　やるときゃやるんだ、こんちくしょーっ！」
体が熱くなって思わず叫んでいた。今までこれほど興奮したことはないし、かつてないほどに緊張して、同時に自分はやったのだという充実感に包まれている。
もう遊びではない。本当の命の駆け引きを行った。
今になって切れた頬と脇腹が痛み出すものの、どうでもいいとさえ思ってしまう。
自分はやっと本物の海賊になったのだ。
そんな自覚が生まれてきて、雄たけびは生まれて初めての喜びを噛みしめるための物。自身を子供の頃から夢見た海賊なのだと称し、溢

れ出す喜びに衝動は止まらなかった。

ギガｐａｒａｌｙｚｅ（４）

対峙するクロとシルクの間に剣呑な空気が流れていた。
彼女は確実にクロのスピードに反応した。今はまだそれが必然か偶然かも判別できない。たった一度、まぐれの可能性もある。もう一度確かめなければわからないことだ。
一方で彼女は自信を持っているらしい。
決して逃がさないとばかり、片時もクロから目が離されない。
ただの小娘ではないようだと思えて、考えを切り替えた彼は全身から余分な力を抜いた。
意識が研ぎ澄まされていく。まるで海賊をしていた頃のように。
しばらく稼業から離れていたとは言っても、身に付いた技術はたった三年で消えてしまう物ではない。深く息を吐けば自分自身のすべてが塗り替えられていく気がする。視線は鋭く、腕はだらりと力なく伸びて、無防備に見えるほど脱力するが油断している訳ではない。
ふとクロの姿が掻き消えた。
凄まじい移動速度。動く瞬間の動作からその場を離れるまで、とてもではないが見切れない。まるで本当に消えてしまったかのようだ。
だがシルクは、間を置かず反応した。
自分の右側へ素早く振り返って剣を振り、刀身から風を飛ばす。
音も無く姿を現したクロは脚を止めていて、攻撃が向かってくると知って顔の前で両手を交差させた。完全に防御が間に合うタイミング。しかし攻撃はそれで止められず、爪に当たった瞬間に勢いを弱めながらもクロの頬を切り裂く。
一つ、二つ、三つと、小さな切り傷が顔に生まれた。
手を下ろしたクロは少量の血を流しつつ、痛みなどないかのようにシルクだけを眺める。
「防げるはずのタイミングだったが」
「うん。だけど、これは普通の剣じゃない。風は止められないよ」
「なるほど。風の刃、というわけか。鉄で受け止めても無駄な徒労だな」

爪が顔に当たらないよう、掌を使ってずれた眼鏡の位置を直す。
今のではっきりした。シルクはクロの移動を見切っている。
目視で確認した様子はない。だが先回りするように攻撃が繰り出され、無理やり足を止められたのだ。あんな芸当は目が良いだけの人間にはきっとできないだろう。
能力者の中でもかなり厄介な部類に入る。
かつて単独で能力者を仕留めたことがある彼にとっても、一切油断できない相手だった。
「今、おれの動きを止めたな？　おれのスピードに反応できるとは」
「目で見たわけじゃないよ。風を感じるの」
「風？」
「あなたが速く動けば動くほど、強い風が起こってどこへ向かおうとしてるのかがわかる」
剣を構えたままでシルクが笑った。
自らの力を実感している。性質を知って、技を再確認していた。
風を飛ばすだけが能ではない。ロギアと比べれば劣るかもしれないが、やはりパラミシア、普通の人間との明らかな違いが身に沁みついて実感できている。
この攻撃は強者にも通用する。
戸惑うどころか、今のシルクには喜色が滲み出ていた。
「あなたみたいな人が相手でよかった。この力のこと、もっとよく知れたから。今ならきっとあなたにだって勝てる」
「舐められたもんだ。ただ位置を知って風を飛ばすだけでもう勝ったつもりか？」
クロが憎々しげに表情を歪ませる。
まだ技のすべてを見せた訳ではない。クロが海賊として名を上げたのはその移動速度も含め、無音の移動術を持つことである。シルクは風の動きを感知して位置を判別しているが、彼の挙動は無音。忽然と姿を消して再び現れ、敵が気付かぬ内に始末してしまう。
動きに伴って発生する風を感知しても、彼女は速度について来れる訳ではなく、無音であれば尚更チャンスは見いだせる。負けたと判断

するのはあまりに早過ぎるだろう。
戦闘をやめるつもりもなければ降参する気もない。
「その程度で勝ったと思うならそれでいい。おれの〝抜き足〟はそう簡単な物じゃないがな」
再びクロの姿が掻き消える。
足音はなかった。相当なスピードで走っているはずが物音一つ立たない。
シルクは風の動きだけで感知する。
確かにどんな軌道で移動しているのか大体わかるが、ただ彼女とて理解している。目では見えていないのだ。肌で風を感じ取らなければ見つけられそうにない。さっきまではなんとか対応できていたとはいえ、余裕を持って反応できる訳ではなかった。
クロもそこに気付いている。
風の動きが事細かに感じ取れることと、反応できるか否かは別。
素早く動き、彼女の反応速度を上回って攻撃できれば、勝ち目はある。
無音の高速移動術、〝抜き足〟を使う彼は冷静にシルクを仕留めようとしていた。
（やっぱり、速い。目ではちっとも見えない……）
移動に伴う風はシルクとの距離を一定に保ち、回り込むように動いている。ただし先程と違うのは直線ではないこと。先読みさせないためか、曲線を描くような軌道だ。
シルクは棒立ちになって前を見続けるしかない。
おそらく攻撃のチャンスは一瞬。
敵が攻撃を仕掛ける瞬間にカウンターを狙うしかないだろう。
片時も油断せず構える。たとえどこから来ようと迎撃するつもりだった。敵の狙いがわかるだけに集中力は増し、周囲三百六十度へ注意力が向けられる。
しかし、それでどうにかできる物ではないらしく。
接近してくると感じてシルクが剣を振った。だがどうやらそれは誘いだったようで剣が空を切る。かまいたちは確かに放たれるもの

のクロには当たらない。
凄まじいスピードを誇る抜き足は、それでいて自由な方向転換を可能とする。
シルクが狙った瞬間には進む道を変えていて、飛ばされた風は無慈悲に地面を削って駆け、最終的に崖へ当たるまで何にもぶつからなかった。
対するクロは素早い判断で彼女の背後を取る。
そこに現れたことは知ったが、振り返ったところで間に合いそうにはないタイミング。
クロが勝ち誇って爪を繰り出そうと構え、振り向きざまに視線が合い、シルクが驚愕する。
「殺(と)った！」
腕が伸ばされ、前へ駆け、爪が迫ってくる。それを見るシルクはどう考えても防御が間に合わない体勢。今からでは風を飛ばすどころか剣で防ぐことさえできない。
キリは咄嗟にクロを止めようとするが、動き出すその前に目が見開かれる。
狙われた顔面に切っ先が届くか否かという瞬間に、突如旋風が巻き起こったのだ。
シルクの周囲で発生した風はかなりの強さ。物を切り裂く力を持ちながらも彼女には一切触れず、それでいて近寄る者を寄せ付けない。速度に乗ってしまっていたクロは今更自分の体を止められなかった。驚愕して腕を引こうとするが勢いそのままに突っ込んでしまう。
その結果、嵐のような旋風に右腕を切り裂かれ、多量の血が噴き出した。
思わぬ展開にクロは咄嗟に後ろへ跳ぶ。
離れると同時に旋風は消えた。改めて確認してみればシルクも息を乱して驚いているようで、右腕を確認すれば、ズタズタに切り裂かれている。確実に彼女の能力だろう。だがシルク自身も慌てていて動揺が垣間見え、半ば無意識に発生させていたらしい。

距離を置いて、両者は共に戦闘を中断させた。
「ぐっ、おおっ……！　こんな芸当までっ」
「ハァ、ハァ……で、できた。危なかった……」
「すごいねシルク。まさかこの短期間でここまで使えるとは」
気楽なキリの声が聞こえるがシルクは呆然と頷くしかできない。能力について研究し、鍛錬する中で考えなかった訳ではないが、実戦は初めて。命の危機を感じて上手くいったようだ。だが唐突な使用によって慣れていないせいか、今の一瞬でどっと疲れてしまっている。
クロへ与えられたダメージは着実に増えているものの、そう長く戦えないのはお互い様。
完全に疲れ切ってしまう前に決着をつけなければならないだろう。まだ能力に慣れた訳ではないのだ。余裕で勝てる状況ではない。
シルクは再び彼へ向き直る。自分の腕を眺めた後、クロは忌々しげに彼女へと目をやった。
「生意気な。やはり腐っても能力者か」
「ハァ、その腕じゃ戦えないでしょ。降参して。今すぐ仲間といっしょに村を出て行って。そうしたらお互い死ぬことはないよ」
「フン……仕方ない」
そう呟かれたことでキリとシルクが眉間に皺を寄せる。
クロが構えを変えようとしていた。
戦闘をやめるかと思いきや、さっき以上に体から力を抜いて、上半身がだらりとだらしなく、両腕に一切の力が入らずにぶらりと揺れる。
沈黙して見守っていた海賊たちの表情が明らかに変わった。
そんな状態で体が揺れ始めようとした頃、突然彼に新しい声がかけられる。
「クラハドール！」
クロの動きがぴたっと止まった。
顔の向きだけを変え、見つめたのは坂の上。そこに新たな人影が五つある。

血相を変えたカヤとメリー。驚いたまま口をあんぐり開けているにんじん、ピーマン、たまねぎの三人。全員が信じられない物を見たと前方を眺めている。
立ち並ぶ風貌の悪い男たち。海岸につけられた大きな帆船、黒い旗。
そして何より驚くのが、多量の血を流し、両手に武器を装着してシルクと対峙する執事の姿。
彼は執事ではなかったか。五人が皆一様に思っていたことだろう。
カヤの姿を見つけ、背筋を伸ばしたクロは冷静に彼女へと声をかける。その姿はやはり五人が知る執事の物。時に言葉が厳しくなるも、カヤを心底心配していたはずの男だ。
「お嬢様……こんな朝早くにどうされましたか。お体に障ります。遠出になる外出は控えてくださいとあれほど言ったでしょう」
「クラハドール、私の話を聞いて。今、あなたは何をしているの？」
「無論、邪魔者を排除しようとしているところですが」
短く息を呑んだ。
どんな事実があっても受け入れようと思っていた。ウソップかクラハドール、どちらかが嘘をついていたとしても、笑って許せればそれでいいと。
しかし想像していた以上に事態は簡単ではない。
思わずカヤは手で口元を押さえ、全身を震えさせた。
メリーも同じく驚愕しており、今までの彼と同じ口調と声色で、今までの彼とは思えない言葉に頭が真っ白になって、気の利いた言葉でカヤを気遣ってやることもできなかった。
この時、ウソップ海賊団だけは顔色を変えて、想いのままに言葉を吐き出していた。
「ほら！　やっぱりキャプテンの話は嘘じゃなかった！」
「キャプテンは本当のこと言ってたんだ！」
「村を守ろうとしてたんだよ！　あいつは本当に海賊だったんだ！」
「その通りだ。つまり君たちは、真実を口にする彼の声に耳を傾け

ず、海賊をこの村へ入れるための手伝いをしてくれたということになる」
絶句する一同を見回し、クロはくいっとずれた眼鏡を元通りにした。
「カヤお嬢様暗殺計画、加担してくれてありがとう」
黙り込んでしまう子供たちに代わり、耐え切れない様子でメリーが一歩を踏み出す。大らかで怒った経験など数えるほどしかない彼も、この場では激情のままに叫ばずにはいられなかった。
「クラハドールさん、あなたなんてことを！　倒れていたあなたを旦那様が拾って召し抱えてくださったというのに、その恩に背くおつもりか！　その上、カヤお嬢様は本当にあなたを信頼して、それなのにあなたは――！」
「言い忘れていましたが、旦那様と奥様が亡くなられたのは私のせいです」
三度全員が絶句した。言葉を呑んで何も言えなくなり、何も考えられなくなる。
クロは笑っていた。
それを悪いとも思わず、三年共に過ごした彼らに対する情さえ持たず、平然と話し続ける。
「すべては計画のため。遺産を手に入れるためにはカヤお嬢様が相続人となる必要があり、この三年間は私が遺産を手に入れてもおかしくないと認識させるための時間。あなたが海賊に殺されでもしたら、遺書に私の名が書かれていたとしても至って普通だと思うでしょう」
「まさかあなた、最初からすべて計算して……!?」
「当然だ。でなければなぜおれが小娘のお守りなど」
血の気が引いていく気がする。
目の前でそう言われて、最初に感じるのは怒りよりも喪失感。
信頼していたはずだ。そしてそれは互いに向けられる物だと思っていた。けれど彼は自分に対して何も思っておらず、あまつさえ最初から計算ずくで殺そうとしている。
カヤの目に涙が浮かんできて、しかし流すのが悔しくて堪えるため

に唇を噛んだ。
尚もクロが言葉を止めない。
「覚えておいでですかお嬢様。思えば、私は常にあなたと共に在りましたね」
「やめて……」
「あらゆる状況においてお供しました。買い物に付き合えば病弱なあなたに代わって荷物を持ち、船が完成したと聞けば共に乗り込んで、あなたが体調を崩した時には背におぶって隣町まで走りましたね」
「やめて……！」
「それもこれも、今日の日のため。おまえを殺しておれが平穏を手に入れるためだ」
ついにカヤの涙がこぼれる。
聞いていたメリーやウソップ海賊団も怒りを露わにし、今すぐ殴りかからんばかりの姿勢。敵うはずもないのに激情に任せて走り出しそうだった。
まずいと感じてシルクが剣を振るう。
呼吸は整った。能力の使用にも違和感はなく、クロを黙らせるため風の刃を放つ。
「それ以上はやめて！」
「チッ、邪魔を……」
剣が振り切られると同時にクロの姿が掻き消える。
攻撃は無駄に終わって、風の動きに応じ、咄嗟にまずいと思うがシルクは動けない。
次に姿が見えたのは五人の背後だった。
助けなければと思うが彼女たちが壁になってしまっている。これでは風を飛ばせない。
「一つ仮説を立てた」
「みんな逃げて！」
「その能力、直線にしか動かないようだな。それならおれとの間に遮蔽物があれば攻撃はできないことになる。例えば、傷つけてはなら

ない人物など」
慌てて振り返った五人がクロの姿を見つけるものの、爪を突きつけられて動けなくなる。
彼は冷徹に言い切った。
「知られた以上は全員死んでもらわなければな。その行動力が無ければ、犠牲になるのはお嬢様だけで済んだというのに」
「もうやめてクラハドール！　お金が欲しいなら全部あげる！　だから誰も殺さないで！」
「それでは交渉にならない。金も欲しいが、おれが求めているのは平穏だ。馬鹿どもの相手をしなくても済む、何事もない穏やかな日々が欲しい」
「そんなの、どうすれば」
「簡単なこと。おまえたちを始末して遺産を手に入れ、元の生活に戻る。それだけでいい。と言うより、おまえたち全員が死なない限りは解決策などない」
「そんな……せめて、この子たちだけでも」
「そうです！　まだ子供ですよ！」
「自らの足でここへ来たんだ。死ぬ覚悟がないなら海賊の前に立つな」
ギロリと子供たちを睨みつければ、彼らはそれだけで震え上がって何も言えなくなった。
海賊を甘く見ていたと言わざるを得ない。好奇心だけで動いて、今や後悔すらしてしまっている。本物の海賊は想像以上に怖い存在だ。
カヤたち五人は、抵抗もできずに人質となってしまった。
距離が離れて視界も変わり、静かにシルクが立ち位置を変えようとする。
この時ばかりはキリも協力しようと動きかけるのだが、やはりそこらの考え無しな海賊ではないのか、そんな二人を制止するよう、大声が出された。
「てめぇら動くんじゃねぇ！　動けばこいつらを殺す」
シルクは歯噛みして動くのをやめ、キリも腕を下ろした。

危機的な状況である。
村を守る彼らにとって死者を出す訳にはいかない。だがどちらにしろクロは目撃者を全員殺すつもりで、どうにかしなければならないのだが、それが難しい。
ひとまず五人を守ることが最優先。二人は思考を巡らせ始めた。
ちょうどその時にキリが辺りを見回せば、クロの側面、数メートルの距離を置いて草むらの向こう、わずかに手だけが出されているのを見つける。ひらひら振って何かを伝えたい様子だ。
瞬時に理解してキリが表情を変える。
頭を使いながら口を開いた。
「バカだなぁ。なんにもわかってないんだね」
「何？」
「人質ってのは自分を守るための盾だ。それを殺しちゃったら危なくなるのは自分だよ？　シルクに勝てない癖にそんなことしたら自分が殺されて終わりなのに、それでも殺す気？」
「てめぇ、誰が勝てないだと……！」
「断言するよ。シルクには勝てないね」
にこやかな笑みでキリがそう言うと、明らかにクロの表情が変わる。
侮辱されているに違いなかった。とはいえその程度では揺らがず冷静で、決断を覆すこともなければ腕が下ろされることもない。
「安い挑発だ。それでどうにかなるとでも思ったか？」
「どう取ってもらっても結構。正直脅威とは思えないし、今のボクらなら全員死なせずに勝つことだって簡単だね」
「ほう。どうやって助ける？」
「それは言えないけど」
「ただのハッタリだ」
「違うよ。あのね、知らないようだから言っとく。ウチの船長は海賊王になる男だ。そのクルーになる人間が、心が折れて海賊やめたいって言い出す男に負けるわけないでしょ」
眉間の皺を深くし、額に青筋を立てて怒り狂った時だった。

突如森の中から飛来した弾丸がクロの顔面に当たって、小さな爆発が起こる。
小さくとも確実に強烈な攻撃で、意識さえ刈り取られそうな衝撃。クロは忘我の状態でその場へ倒れ、五人は突然の出来事に目を丸くした。
直後に森の中からウソップが駆け出してくる。
わずかに傷を負っているが元気そうだ。慌てた顔で辺りを見回し、敵が起き上がらないかとひやひやしながら、最後にキリを視界に納めて大きく叫ぶ。
「キリ、今だ！　みんなを避難させろ！」
「あれ？　そういやボクもやめようとしてたっけ……まぁいいや。やめたかったわけじゃないもんね。ただ続けられなくなっただけで」
「話聞けよ!?　チャンスだっつってんだろ！」
「ウソップさん……!?」
「キャプテ～ンッ！」
カヤと三人が声を上げた時に、ようやくキリが動き出して彼女たちへ駆け寄る。途中、道の真ん中で眠りこけていたルフィも拾い上げ、五人の間へと放り捨てた。
そうして跳び上がったキリは紙をばら撒き、ドーム状にして五人を包み隠してしまう。
硬化すれば鉄壁の要塞だ。
その上に乗ってキリがしゃがみ、内部の者たちへ声をかける。
「まだしばらく危ないからそこに居てね。終わったらすぐ出すよ」
「あ、あの、ウソップさんは」
「大丈夫。ちょっと怪我してるけど元気だよ」
次にウソップへ目を向ける。怪我をしているが思いのほか元気そうだ。
クロはいまだ倒れたまま。
そのせいか彼は勝利を確信しているようだった。
「よぉし、これで大体片付いただろ。あとは坂に居る奴らを――」
「いや、多分まだだ」

キリが言った途端にクロがむくりと立ち上がった。眼鏡が壊れて地面に落ちてしまい、髪型が乱れているものの、意外に足取りはしっかりしている。むしろ、眼光の鋭さは増した様子だ。
爆発を顔に受けて立てるなど並みの精神力ではない。
仕留めたと思っただけにウソップは思わず身を仰け反らせて驚いた。
「ひぃっ!?　ま、まだ動けんのかよ、おれの火薬星が当たったのに！」
「案外しぶといね。そんなに鍛えてる外見じゃないのにね」
「のんきに言ってる場合か！」
慌てるウソップとは対照的にキリは相変わらずのほほんとして緊張感がない。
そこへシルクも駆けつけて、立ち上がるクロを見つけた。
「シルク、とどめよろしく。結構速いよ」
「うん！」
唇をきゅっと結んで剣を構えれば、それだけで戦闘準備は整った。
強く柄を握って攻撃を繰り出そうとした瞬間、クロが先程の構えを見せる。
上半身に力が入らず、肩を落として両腕をだらりとさせ、上半身が揺れ始める。独特の構えに見えなくもないが見ようによってはやる気がないようにも思えた。
流石にキレたのか、ぶつぶつと怪しげな呟きが聞こえる。
「おれの計画は、絶対に狂わない。ここですべて遂行してやる……」
「おいシルク、やるなら早いとこやっちまえよ！　動き出す前に決着つけちまえ！」
ウソップが叫んだ途端にクロがゆっくりと顔を上げ、冷静さを感じない血走った目がシルクを捉える。否、見ているようで見ていない。もはや思考というより本能で動いているだけの状態。ぶつぶつ呟いているのも使命感か激情か、自覚しているかどうかも定かではない。
さっきの一撃で様子が一変していたのだ。
こうなればもう考えることは無く、計画を遂行するためにすべてを

消し去るのみ。
傷ついた体を労わる気はない。むしろどうあっても敵を排除するため、無茶をしようとする節すらある。今の彼からは危険な凶暴性や狂気を感じた。
上半身が揺れる度、爪のような刀身がカチャンと音を鳴らす。
それが妙に恐ろしく感じられ、耳に残った。
そして彼は再び小さく呟いたのである。
「杓死」

ギガｐａｒａｌｙｚｅ（５）

クロの姿が消えた。
それだけを見ればさっきと何も変わらないというのに、なぜかシルクの表情が変わる。
素早く振り返る表情は驚愕を表していて、しばしキリもウソップも理由が知れなかった。
その口からは信じられない物を見たと言わんばかりの声が漏れ出す。
「えっ――!?」
直後、坂の中腹に突っ立っていた海賊の一人が、突如切り裂かれた。
命を奪うための一撃。刃は深々と肉を裂いて爪痕を残し、腹から胸にかけて肉が抉れ、大量の血が撒き散らされる。辺りは一瞬で騒然となった。その攻撃に覚えがあるらしい。
無音の高速移動に、速度を利用した強烈な攻撃。クロにとっての必殺技であった。
その姿を捉えることはできず、また止めることもできない。
辺りにある空気は明らかに一変していた。海賊たちの悲鳴が如実にそれを表しているのである。
坂の上に居る三人はそちらを見下ろして戸惑いを隠せなかった。
一体何が起こっているのか。シルク以外は認識さえできていない。
ウソップとキリにも見えなかった。
重なる悲鳴を耳にしながら、焦りを見せたウソップが叫ぶ。
「な、なんだ!?　なんであいつらが攻撃されてんだよ!」
「シルク、今のはあいつが?」
「う、うん。確かに向こうへ行った。でもどうして仲間をっ」
次に切り裂かれたのは岸壁だった。硬い岩を切り裂いて爪痕が残り、耳障りな音が鼓膜を揺らして誰もがそちらを見る。
この時すでに海賊たちは理解していた。
この技を知っている。クロが最も恐ろしくなる瞬間だ。
恐れおののき、悲鳴を上げ始めた海賊たちは口々に喚かずにはいら

れない。
一人残らず顔面に恐怖を張り付けており、冷静に振舞える者など一人としていなかった。
「しゃ、杓死だぁ!?」
「殺される……おれたち全員殺されるんだ！」
「おいおまえら、キャプテン・クロに勝てるんだろ！　助けてくれぇ！」
「おれたちまだ死にたくねぇよーっ！」
辺り一面、次々に爪痕が刻まれていく。
岸壁、木々や草むら、或いは人間も。目につくすべてが無慈悲に切り捨てられる。止める術はない。少なくとも海賊たちは怯えて立ち往生するのみだった。
三人もまだ平静を取り戻せない。
かなり速い。あちらが傷ついたと思えば数十メートルを駆けて次はこちら。とても目で追える速度ではなく、ますます加速していくかのよう。
ここは異常な光景だ。
あまりの恐怖にウソップは震え、暴れ回る風にシルクは息を呑んだ。
「な、なんなんだ。一体何が起きてんだよっ」
「あの人だよ。すごいスピードで走ってる……しかも、攻撃は滅茶苦茶。私たちを狙ってるんじゃないんだ。風の軌道が読み切れない」
「この技のこと知ってるみたいだ。一人残らず怖がってるね」
また一人、海賊が斬られた。元は部下だっただろうに血を噴いて倒れ込む。
周囲の物が斬られ、深く傷跡をつける耳障りな音が残るのに、足音は一切感じない。
激しい攻撃でありながら静か過ぎる。
ちぐはぐな状況が恐怖心を煽り、やはり彼は強者なのだと理解せざるを得なかった。再びその恐怖を思い出し、海賊たちの悲鳴はさらに大きくなる。

「杓死は、無音の高速移動から繰り出す無差別攻撃！　あまりにも速く走り過ぎて本人でさえ周りが見えてねぇんだ！　ただ触れた物を切り裂くのみ！　敵も味方も関係ねぇんだよ！」
「あの人はおれたちを殺す気なんだ！　頼む、誰か止めてくれぇ！」
悲痛な叫びを聞いてシルクとウソップの表情が歪む。
彼らは心から恐れている。死への恐怖に直面して子供のように泣きじゃくっていた。
その声が聞こえない訳もあるまいに、クロが止まる様子はない。
木々が切り倒され、草むらが潰れ、海賊たちが倒れていく。三人の周辺も決して無事ではない。森や地面、ありとあらゆる場所に爪痕がつけられて、当たっていないのは奇跡に等しかった。
表情が強張り、声が震える。
剣を握る手に力が入って、シルクは冷静に見ていられる状態ではなかった。
「ひどい……仲間を傷つけるなんて、どうしてそんなこと」
「最初から生かして帰す気はなかったんだ。自分の計画の足がつかないように、全部終わった後に殺す気だったんだろう」
「それじゃ、あいつら自分が死ぬのに協力してたってことか!?」
「本人には知らされずにね。だからあれだけ狼狽してる」
冷静に話していると紙のドームが切り裂かれた。
硬化して守りを固めていたはずが、一部が剥がされてしまい、衝撃は内部にまで伝わる。
誰一人として怪我はない。だが恐怖を与えるには十分だったはずだ。
「きゃあっ!?」
「お嬢様！」
「まずいっ」
慌ててキリがドームを作る紙を動かし、穴を塞ぐ。それだけで止まらずに手持ちの紙をすべて防御へと使った。厚みを増すために紙が独りでに宙を舞ってドームに張り付いていく。
ひとまず五人は守れるだろう。

ただ敵の迎撃には手が回りそうにない。
キリは真剣な眼差しでシルクを見る。
「紙は全部防御に使う。悪いけど手伝えない」
「それでいいよ。私がなんとかしてみる」
「お、おぉい、おれも乗せてくれっ」
身の危険を感じたウソップもドームの上へよじ登って、辺りを見回した。
凄まじい勢いで地形が変わろうとしている。崖の一部が斬られて岩が崩れ落ち、木々が倒れて、とても個人の力で起こっている光景とは思えなかった。
ウソップは改めて戦慄する。
ただ足が速いだけの男ではない。
岩や木を切り崩すだけの頑丈さを持った武器に加え、速度が合わさって威力が増しているのか。
こうなれば彼にもどうすることもできず、後はシルクに任せるしかない。
彼女は自ら坂を下り始め、ドームから少し離れた位置で足を止めた。
「ねぇキリ、そこに当たっても平気？」
「一撃だけなら」
「おいおい無茶すんなよ！　こん中にはカヤたちもいるんだからな！」
「一撃だけ。これで足を止めるから」
眼前に剣を構え、しばし目を閉じる。
まるで嵐だ。暴風があちこちへ駆け抜けていって、とっくに反応できる速度ではない。
ならば相手が避けられないだけの攻撃を放てばいいだろう。
咄嗟の判断でそう決めた彼女はタイミングを見計らって目を開く。
剣に風を纏わりつかせ、それを振るうより先に自身がその場で回り始めた。独楽のようにぐるぐる回数を重ねていき、一周するごとに剣に纏わせた風が強くなり、大きくなる気配がする。

いつ放てばいいか、慎重に考えた。ただし放つ時にはほとんど当てずっぽうだ。
今だと思った根拠も理由もないものの、彼女は回転した状態で風を放つ。
彼女を中心に周囲へ広がった風の刃はあまりにも強力。何より目には見えない暴力であって、そして強い。解き放たれた刃は確実に高速移動中のクロを捉え、斬り飛ばした。
どうやら腹を斬ったらしい。血を噴きながら力なく宙から落ちてくる。
それだけでなく、坂を走った風は岸壁をさらに細かく切り崩し、海賊たちの傍を通れば彼らの肌さえも切り裂き、軽傷とはいえ血をまき散らさせ、その先にあった炎の壁を吹き飛ばしてしまった。一方で反対側、坂道を通って上まで駆け抜けた刃はドームの一片を切り崩す。
突然外の光景が見えた五人は驚きを表情に張り付けていた。
ウソップも心底驚いている。
杓死が生み出す光景を見てビビっていたのに、それをあっさり止めたのは同年代の少女。しかもたった一撃。何をしたかも定かでない内にクロが倒れている。
目を見開く彼の隣でキリが笑っていた。
「やっぱセンスあるなぁ。ボクは能力手に入れたばっかりの頃あんなに使えなかったもん」
「と、止めちまった。あいつすげぇな」
「ウソップだって十分すごいよ。敵の幹部一人倒して、船長にも一発お見舞いしてやったんだから。自信持っていいって」
「レベルが違うだろ。これが、本物の海賊なのか……」
固唾を飲んで見守っているとクロが立ち上がる様が見える。
傷は深く、疲労は相当。もう立てそうにない風体でありながら諦める素振りはない。まさしく執念のみで立ち上がってくる姿は鬼気迫る雰囲気がある。
しかしそんな彼と対峙し、シルクはちっとも怯む様子はなかった。
使い慣れた剣を正眼に構える。

「ぐっ……お、おのれ……！」
「もう終わりだよ。あなたの負け」
「ふざけるなっ。どれだけ、手間をかけたと思ってる……」
上半身をだらりとさせ、腕から力を抜く。
「どれだけ、時間を使ったと思ってる……」
顔を上げ、シルクを見つめて、再び血走った目で睨まれた。
シルクは冷ややかな態度でそれを見つめ返す。
「おれの計画は、絶対に狂わないッ‼」
「無理だよ。あなたじゃどう転んでもルフィには勝てない」
足に力を込めて走り出そうとした一瞬。
数秒早くシルクが剣を振り抜いて、風の刃を飛ばしていた。
その刃が先程までとも少し違う。
厚みがあるとでも言えばいいのか、凝縮された風が小さな嵐となって、刃の形で飛んでいく。周囲へ放ったそれよりよほど強力で、まるでもう一振りの剣のよう。
だが風であるせいで目に見える物ではない。
クロにそれを見切れた様子はなかった。
「鎌居太刀（かまいたち）！」
「がぁぁっ――!?」
再び吹き飛ばされたクロの体は確実に切り裂かれており、更なる血が噴き出した。
地面へ落ちる頃には意識を失っていて、ずいぶんな距離を運ばれて、海賊たちの眼前へと落ちる。味方であったはずが彼らは背をのけ反らせて驚いた。
一人でクロを倒してしまったシルクに視線が集まる。
胸を張って怒った顔の彼女は全員を見回し、強い口調で言いのけた。
「さぁ、全員船に乗って出て行って。それともまだ戦いたい？」
「ひぃっ!?」
「言っておくけど私、ここから斬れるからね」
「し、失礼しましたぁ～！」

海賊たちは恐怖心から逃げ出し始め、船へ乗り込もうとする。しかしそれをすぐには許さなかったのが坂の下で待っていたゾロだ。刀を一本だけ抜いて全員へ威嚇を始める。
「おい、まだ忘れ物が残ってんだろ」
「ひぃっ!? こっちも!?」
「あれを持って帰らねぇんなら、おまえら全員おれが相手してやるが。どうする?」
くいっと顎で指し示されると、倒れたクロについて言っているのだと気付く。
本音であればおいて帰りたい。次に目覚めた時、自分たちの命の保証などないのだから。
だがここで異を唱えればまた自分たちが襲われると思い、彼らはすぐにクロの体を抱え上げ、這う這うの体で船へ乗り込むため駆け出して行った。
今度はゾロも阻止せずに見送る。
「し、失礼しましたぁ〜!」
「張り合いのねぇ連中だ。結局あいつら二人だけかよ」
動けない仲間を連れてドタバタ去っていく相手に物足りなさを感じ、不満そうな顔のゾロだったが刀を納め、大人しく彼らを逃がしてやる。
改めて辺りを見回すと相当な変化があった。
よっぽど相手が強かったか、それともシルクが暴れ過ぎたか。
今回ほとんど何もしていないゾロは退屈そうに腕を組む。
ニャーバンブラザーズより強い敵が居たのだ。少し早まってしまったかもしれない。
戦闘を終えて思うのは、もっと強い敵と戦いたかったということだけの様子。汗の一つも掻かずに、焦るどころか退屈で、これからは冷静に敵を選ぼうと思う。
彼がそうしていると敵船に乗り込んでいたらしいナミがどこかから近寄ってきて、手には重そうな袋が一つ、別段普段と何も変わらない様子だった。

「やっと終わったのね。意外と手間取ったみたいじゃない」
「んなことねぇ。楽勝だ。おまえこそどうだったんだよ」
「ダメ、不作。外見はああでも乗ってるお宝は少ないんだから」
「そりゃ災難だな。まぁ、こっちは一応無事に終わったらしい」
「一応？」
「おれも蚊帳の外だった。またあのバカが面倒だとか言いやがったせいでな」
「あ～……いつものことね」
「フン、納得し難ぇけどな」
合流するため二人は坂道を上り始めた。
坂の上ではドームの上からキリとウソップが降り、紙を回収している最中。不思議な光景に子供たちが驚くものの、今はそんな場合ではなく、怪我をしているウソップへ詰め寄っていた。
気まずいムードである。
一人は村を守るため体を張って止めようとした男で、五人は一時とはいえ彼を信じなかった。
カヤがウソップを見つめるが、いつもと様子が違っている。どことなく悲しげで、言葉もないようだ。申し訳なく想う気持ちが大き過ぎて普段通りに接するのが難しい。
メリーもまた、大きな後悔を抱えている。カヤを守るためとはいえピストルまで取り出してしまったのだ。彼が左腕に包帯を巻いているのは、その時の怪我のせい。
子供たちも妙に無口で戸惑っているらしかった。
辺りに会話が無く、静まり返って、逃げていく海賊たちを見ながらウソップが口を開いた。
答えるのは紙を回収し終えたキリである。
「終わったのか？」
「そうだね。これでもう大丈夫だ。多分戻ってくる気もない」
「そりゃ死にかけたわけだしな……よし。ふぅ」
息を吐いて額の汗を拭い、やっと落ち着ける。
自分が何をしていたのかが今頃になって受け止められるようで、今

すぐにも足が震えそうだった。しかしそうなればきっとみんなが気を遣ってしまう。気を張って全身の震えを止め、ウソップは腰に手を当てて胸を張ると、彼女たちの顔を見て笑顔になった。
声は大きく元気に。普段と変わらない姿で声がかけられる。
「わっはっはっはっは！　どうだおまえら、見事に騙されただろ！　おれが普段から嘘をついてるから、敢えて本当のことを言うことで村人全員騙してやった！　中々の高等テクニックだぞ」
「あの、ウソップさん、私……」
「いいんだ。もう全部終わった。おれはいつも通りに嘘をついて、村には海賊なんて来なかった。今日もいつも通りの朝が来て、みんな平穏無事な日々を送るんだ」
「キャ、キャプテン、それって」
「これくらいの怪我なら珍しいことじゃないしな。おまえらと冒険して何回もあっただろ？」
驚く面々の表情を受け止め、やけに晴れ晴れとした笑顔だった。上手く言葉にはできないが、以前とは明らかに違う雰囲気が感じられて、その姿が大きく見える。
臆病で逃げ足の速い小僧ではない。
そこに居たのは同一人物ながら、おそらく違う人物だろう。そう思わせるほどの変化があった。
「ここでは何もなかった。おまえら、それで話を通せるか？」
「なんで！　だってキャプテン、村を守ったんだよ！」
「そうだ、みんなキャプテンを見直すのに！　冒険よりよっぽど良い事したのに！」
「こんな時まで嘘つかなくたって……！」
「まぁー確かに気持ちはわからないでもない。でも終わったことをいちいち言いふらして不安を煽ることもねぇだろ。こんな小さい村、海賊が狙うこともねぇんだ。今まで通りそれでいい。それにな、おれはこれから次々と伝説を作っていくのさ。それに比べりゃこんな話は小さい小さい。どうせみんなに言うならもっともっと大きい話の方が自慢できるだろ」

笑顔で言うと、子供たちはぐっと唇を噛む。
やっぱりいつもの彼ではなくて、だけど嫌いになるような態度じゃなかった。
ウソップは彼らの顔を一つ一つ見つめながら伝えていく。
「おまえらおれの大事な仲間だ。そのおまえらが胸張ってウソップ海賊団で良かったって言えるように、おれは嘘じゃない本物の冒険で、おまえらが誇れる海賊になってやる」
「は、はいっ！　わかりました！」
「おれたち、このこと一生誰にも言いません！」
「ぼくらもキャプテンが誇れる仲間になります！」
「よし！　それでこそ誇り高きウソップ海賊団だ！」
満足気に頷いたウソップは、次にカヤへ目を向ける。不意に真剣な表情となった。
彼女も真剣に話を聞いていて、今の言葉から何かを感じ取った様子。
どこか儚げな微笑みを称えている。
「カヤ、おまえは辛いか？」
「いいえ……ねぇウソップさん」
「ん？」
「ありがとう。それと、ごめんなさい」
「謝んなって。いつも通りのことしただけなんだから」
ウソップがにかっと笑ったことで、カヤもくすりと笑う。彼の気遣いが温かくて心が安らいだ。一連の出来事も今の言葉も、感謝の念が止まらない。
ふと、カヤが視線の先を変える。
見たのは見知らぬ三人。眠りこけるルフィとその隣に座ったキリ、傍へ歩み寄ったシルク。口を挟まずに彼らのやり取りを見ている。知らない顔だがやけに穏やかな気質だった。
本当の冒険をするんだと言った。
今までカヤが数々聞いてきたホラ話ではなく、自分が体験する本当の冒険を。

その言葉だけで彼の覚悟が伝わるようで、嬉しいやら悲しいやら、複雑な胸中で口を開いた。
「行ってしまうんですか？」
「……ああ。もう決めたんだ。おれはこいつらといっしょに海へ出る」
力強く吐き出された言葉にカヤが目を伏せる。
メリーや子供たちは驚いている表情で、半ば信じられないといった様相だった。
「おれは海へ出て本物の海賊になる。理由は一つ！　海賊旗がおれを呼んでいたからだ！」
「えぇっ!?　キャプテン、海賊になるんですか!?」
「む、村を出ちゃうってことですか!?　どうしてそんな急にっ」
「勝手過ぎるよ！　ぼくら何も聞いてないのに！」
「おまえらにも世話になったな……村のことは任せた。みんなにはまぁ、上手く言っといてくれ。このまま何も言わずに去るつもりだから」
ウソップは子分とも言える子供たちの顔を眺めた。
にんじん、ピーマン、たまねぎと、一人ずつ目を合わせて笑顔を向ける。
涙はない。今まで見たことがない表情。やさしいのに頼もしくて、決意を感じる。
気付けばもうただの少年ではなく、いっぱしの男だった。
傍から見ていて、メリーとカヤは感嘆の溜息をつく。
「カヤと村のみんなを守ってやってくれ。血の繋がりがどうとか関係なく、この村の人間はみんなおれの家族だ。おれの代わりをおまえらに託すぞ！」
「はいっ！　誰が来たって守ってみせます！」
「キャプテン！　おれたち、離れ離れになっちゃうけど……一生ウソップ海賊団だから！」
「ぼくも！　キャプテンの仲間になれたことが誇りなんだ！」
「へへっ、そうか。そこまで言うなら、おれだってずっとおまえらの

キャプテンでいてやる」
鼻の下を指で擦って、冗談っぽく言えば声が震えそうになったが、それも抑える。
朗らかな笑顔でみんなを見回す。
こうして向かい合うのも最後でしばしの別れ。一生会えない訳ではないが長い旅路になる。言いたいことは次々溢れてくるものの、言葉にできたのはほんの一部でしかない。
「おまえら、夢はあるか？」
「はい！　酒場を経営することです！」
「大工の棟梁になることです！」
「小説家になることです！」
「おれは、ガキの頃からずっと夢見てた。勇敢なる海の戦士になることだ！」
堪えきれなくなって子供たちが涙を流し始めた。必死に堪えようと唇を噛むが、一度流れ出してしまった後ではもう止められず、大粒の涙が頬を濡らす。
それを見てもウソップは泣かない。
別れを惜しむ気持ちはある。しかし夢を叶えるチャンスを得た今、溢れる冒険心が全身に力を漲らせる。今すぐ叫んで走り出したいほどに歓喜を持っていた。
胸の内に広がるのは、寂しさよりも途方もない希望。
だからこそ決意は揺らがないものとなっていたようだ。
「それぞれの野望の火を絶やすことなく、己の道を突き進むことをここに誓え！　だけど忘れるなよ、たとえどれだけ離れていても、おれたちはずっと仲間だ！」
「はいっ！」
その場に居る全員へ聞こえるほど大声で誓いが立てられた。
出会ったばかりの麦わらの一味も、それを聞いて微笑んでいる。
ウソップという男、嘘つきだなんだと言いながら、案外頼りになりそうな男だ。それは誰もが認めるところ。今の一言だけでも信頼に足る覚悟があると言えるだろう。

納得する様子で座ったキリが傍に立つシルクを見上げると、目を合わせて笑い合う。
そんな時に、眠っていると思っていたルフィの声が聞こえた。
「なぁキリ」
「なんだ、いつから起きてたの？　こっちは色々大変だったってのに」
「いいじゃねぇか。全部うまくいったんだし」
からりと笑ったルフィは心底嬉しそうに呟く。
「いい奴だろ？」
「そうだねぇ。流石は船長、目の付け所がいいよ」
「しっしっし、そうだろ」
「でも肝心な時に寝ちゃってたのは減点だね。わざとならメシ抜きもあり得るよ」
「なにっ!?　それはだめだ、おれはメシを食わないと生きていけないんだぞ！」
「誰でもそうだよ、生物なら」
笑顔から一転、怒りながら猛抗議を始めるルフィを気楽に受け流し、今度はキリが楽しそうに笑って、普段と何一つ変わらない二人を見てシルクが苦笑した。
この村に立ち寄ったのは無駄ではない。
仲間を一人手に入れて、大変ではあったが、戦闘があったおかげでシルクも自身の能力に関する理解を深め、これからの目標も見えた。
小さいながらも確かに価値のある一歩を得たと言えるだろう。
楽しそうにじゃれる二人を見守りつつ、彼女は指先で微弱な風を遊ばせた。

ゴーイングメリー号

戦闘から幾ばくかの時を置き、すっかり習慣となった朝一のウソップのホラ話が聞こえないと知って、村人たちが驚いていた頃。出航の時は刻一刻と迫っている。

北の海岸には一隻の帆船が停められている。

羊の船首を持つ可愛らしい外見の船で、サイズはそこまで大きな物ではない。

海賊船と呼ぶには少々独特。しかし見せられた面々の反応は上々だった。

その船を用意した執事、メリーは目を輝かせる麦わらの一味を前に、丁寧に説明を始める。

「おほぉーっ、すんげぇ！　羊だ羊！」

「少々型は古いですが、私がデザインしました。カーヴェル造り、三角帆使用の船尾中央舵方式キャラベル船、名前はゴーイングメリー号と申します」

「ゴーイングメリー号……これがおれたちの船かぁ」

上機嫌に船を見つめるルフィは非常に上機嫌。溢れる冒険心を抑え切れない表情で以前も見たことがある。隣で苦笑するキリは肩をすくめて彼に問いかけた。

「どうだろ船長、気に入った？」

「ししし、おう！　やっと船見つかったな」

ルフィは大層気に入った様子で、一味の中でも一番彼の反応が良い。ナミやシルクもゴーイングメリー号を見つめて楽しそうに話しており、ゾロでさえ満足そうに笑みを浮かべている。

やっと船が用意できた。これで本格的な航海を始められそうである。

その船をくれると言ったカヤは皆の顔を眺めて微笑んでいた。

これだけ喜んでくれるなら譲った甲斐があるというもの。

後悔や迷いなど一切なく、船長だと名乗ったルフィへ声をかける。

「航海に必要そうな物はすべて積んでおきました。いつでも出航で

きますよ」
「ありがとう。踏んだり蹴ったりだな」
「至れり尽くせりだ、アホ」
腕組みしたゾロがルフィへ言う。難しい言葉を使おうとしたのはいいとしても使い方を間違えている。普段から抜けた場所があるもののそんな部分には呆れた様子だった。
和やかな空気が流れている。
戦闘から数時間。クロの裏切りを知った後でもカヤは微笑んでいて、気落ちした様子はない。
今はこの場に居ないウソップは家で荷物を纏めている最中。彼が島を出ることにも意見はしていない。大人びていると言えばそれまでだが、年齢に見合わぬ姿だった。
はしゃぐ麦わらの一味を見る目はやさしく、それでいて少しそわそわしているらしい。
この場に居ない彼を待っているためか。
それからそう時間も置かずに坂の上から叫び声が聞こえてきて、全員がそちらへ振り返る。
自分の体より大きなリュックを背負い、下敷きにされるウソップが勢いよく転げ落ちてきていた。荷物を詰め込み過ぎたのはわかるがそれでも驚くほど大きい。凄まじい勢いで坂を下ってきて、軌道はゴーイングメリー号へ一直線。その前に立つルフィが小首をかしげた。
「ぎゃあああああっ!? だ、誰か止めて〜ッ!」
「なんであんなにはしゃいでんだ？　あ、わかった。航海が楽しみでしょうがねぇんだろ」
「どう見ても助けを求めてるだろ。おまえの耳は天才か」
「止めた方がいいんじゃない？　このままだと船が大破だよ」
「むっ、それはだめだな。よし、止めよう」
前へ歩き出したルフィは自らウソップへ向かっているようで、転がってくる彼へ接近する。
真正面から接触する瞬間、右足を上げて前へ突き出した。

ドスンと大きな音。
回転の勢いは止まって、ウソップの顔面に蹴りが入れられた状態だったものの、なんとか止まった。草履の裏を顔面で感じながら彼が弱々しく礼を告げる。
「ど、どうもありがとう……」
「おう」
「あははは。騒がしい登場だねウソップ。掴みはバッチリだよ」
「笑ってる場合か。あれの下敷きになってよく死ななかったもんだぜ」
明らかに許容量を超えているのに破れていないリュックを見やり、呆れたゾロが溜息をつく。
母親が死んで一人暮らしをしていると言っていた。荷物を一つ残さず持ってきたのだろう。とても一人で持てる物ではなくて、仕方なく彼らも動き出す。
せっかくの出航の瞬間。
だらだらしてしまって気力が折れるのは避けたいところ。
一人で運べないだろうリュックをウソップから受け取り、まだ話があるのだろうと、キリとゾロが先に船上へと運び始めた。ただしキリは能力を使っており、自分の手では運んでいない。ゾロは目敏くそれを見つけてしかめっ面で文句を始める。
「これくらいてめぇの手で運べよ。横着すんな」
「運んでるよ、ちゃんと」
「そりゃ例の傀儡って奴だろうが。それがおまえの手か？」
「考えようによってはそうだと思う」
「ハァ。まぁ手伝ってるあたりまだマシか」
「あ、一人で運んだ方が鍛錬になるよね。手伝っちゃってごめん。やっぱやめとく？」
「いいから運べ。こんな程度で鍛錬なんて言うつもりはねぇよ」
「大きな偉業も小さな一歩からだよ」
「なんだそりゃ」
「誰かの言葉」

「へぇそうかい。だがてめぇがサボりたいからって使う言葉じゃねぇだろ」
いつもの調子でなんだかんだと言いながら協力し、二人が船へ乗り込んでいく。
彼ら二人に続いてシルクとナミも歩き出した。
どうやらナミは船の構造に詳しいらしく、キャラベルという言葉に反応していた。それを知っているシルクは興味津々に質問を始めている。
「ナミは船のこととか詳しいの？　キャラベルって何？」
「あんたね、そんなことも知らないで海賊になるつもりだったの？」
「う、だって教えてもらったことだってないし。初めて聞いたから」
「仕方ないわね。いい？　キャラベルってのは、操舵性に優れた小型の船で、特徴は――」
ナミの講義を聞きながらシルクは真剣に頷き、乗船する。
これで残っているのは二人。
ルフィはウソップへ振り返ると笑顔で誘う。ただ彼はすぐに動き出そうとしなかった。
「行こうぜウソップ。おれたちの船だ」
「ああ。でもちょっと待ってくれ」
「ん？」
ウソップはカヤへと向き直った。
互いに笑顔を向け合って、別れを惜しむ風でもない。笑顔で見送ろうとしているようだ。
思えば、こうして外で会うのは初めてだったか。
いつもは屋敷の中と庭とで話していた。こんな状況は初めてだったと今更気付く。
晴れ晴れとした笑顔のウソップを見つめ、カヤはやさしく微笑んでいる。そこに悲しさは感じられない。男の船出を見送ろうという健気な態度であった。
「わりぃな、船までもらっちまって。本当にいいのか？」
「ええ。みなさんなら大切に使ってくれそうだし、それにたまにし

か乗らなかったから、この子もきっとみんなといっしょに旅に出た方が喜ぶわ」
「へへっ、そうか」
照れた様子で鼻の下を擦り、ウソップが胸を張る。
何しろ気分が良い。
海賊となって航海に出る。これほど心が躍った瞬間があっただろうか。
今までホラ話として様々な冒険の話を聞かせたが、今度は違う。嘘にはならない。本当に自分が海賊となって様々な冒険を経験する。
決意も込めて、彼女を見やって言葉を向けた。
「じゃあおれ行くよ。でも心配すんな、ルフィたちといっしょに世界を一周して、勇敢なる海の戦士になったらまた戻ってくる。おれの故郷はここだけだからな」
「はい。待ってます」
「楽しみにしとけよ。今度は嘘よりウソみてぇな冒険譚を聞かせてやるぜ」
「ふふ、楽しみにしてます。体に気をつけてくださいね」
「おう！」
ルフィに続いてウソップも乗船し、甲板の上で途端に大声を張り上げる。
後悔はなく、あるのは溢れんばかりの冒険心だけ。
出航の時がようやく訪れた。
「よぉし野郎ども！　出航するぞ、錨を上げろォ！」
「おいウソップ！　なんでおまえが言ってんだよ！　船長はおれだぞ！」
「なにぃ!?　おれがキャプテンじゃねぇのか！」
「バカ言え、おれがキャプテンだ！」
騒々しい様は締まらないが、ゴーイングメリー号は動き出した。
船上はがやがやと賑やかで笑顔が絶えず、ウソップやルフィが欄干から身を乗り出して手を振っている。カヤも笑顔でそれに応え、ゆるりと手を振った。

ゆっくり遠ざかっていく船を見つめながら、ふとカヤが傍に立つメリーへ声をかける。
「メリー」
「はい。なんでしょうお嬢様」
「嘘をつくのって辛いわ」
「ええ……」
微笑みがわずかに崩れ、寂しそうな顔で呟く。
彼女は本心を隠していた。きっと止めてはいけないのだと知っていて。
メリーは納得した様子で頷いた。
「ウソップくんを、引き止めたかったことですか」
「……うん」
振っていた手を下ろして、きゅっともう片方の手を握る。
クロの計画を知った時には傷ついた。しかし今の方がよっぽど寂しいと思う。
そんな彼女の様子を知ってメリーが話し始める。
「そう言えば村人から聞いたことがあります。この村に住む、ある嘘つきの少年の話――」
そうしてメリーは昔話を始め、カヤは耳を傾けた。
同時刻、シロップ村ではウソップ海賊団の三人が集まっており、ウソップを見送ることもせずある一つの決意を固めようとしていた。
にんじん、ピーマン、たまねぎが集まって話しており、妙に緊張した顔である。
「ほ、本当にやるのか？」
「当たり前だ。おれたちはウソップ海賊団だぞ。キャプテンの後はおれたちが継ぐんだ」
「その通り。よ、よぉし」
村の入り口に立った三人は全くの同時に大きく息を吸い込み、駆け出しながら叫び始めた。
「海賊が来たぞーっ！」

＊

出航してしばらく。
離れたばかりの島が点になって見える頃、船上では騒がしく準備が進められている。
ルフィは当初、ウソップを歓迎するために乾杯しようと言い出した。そこへ待ったをかけたのがキリ。その前にゴーイングメリー号を立派な海賊船にしようとの提案があったのである。
前に帆船を乗り捨てて以降、海賊旗はアピスに託したままだ。
彼らが海賊を名乗るには黒い旗を掲げる必要があり、新しく作ろうと布とペンキが揃えられる。
甲板へ六人が集まって顔を突き合わせていた。
「ウソップ、絵は得意？」
「当ったり前よ。手先の器用さならこの中でだって負けないぜ」
「じゃあウソップに描いてもらおう。マークはもう決まってるんだ」
「どんなマークだ？」
キリが提案したことでウソップが頷く。
印の無い旗を前に説明が始まり、麦わら帽子をかぶったドクロマークだと伝えられる。すぐに納得した様子で頷かれた。早速ペンキを使って作業が始まる。
ルフィたちは安心した様子で任せていた。
工程を見ずとも信頼しきって、互いに顔を見合わせて話すくらいには船の入手を喜んでいる。
「いやぁーいい船だよなぁ。やっと海賊らしくなってきた」
「まだ出航したばっかりだろ。そう言うのは早ぇんじゃねぇか」
「そうだ、帆にも描こう。そしたらかっこよくなるぞ」
「帆にも？　大変だよ、かなりおっきく描かなきゃいけないもん」
「あんたたち相変わらず危機感ないわね。まだ次の航路も決まってないのよ？　せめてそういう話し合いは目的地決めてからにしたら？」

「目的地はグランドラインだろ。もう決まってるじゃねぇか」
「ほんっと能天気なんだから……」
「よし、全員でやろう。それなら早く終わるだろ？」
上機嫌なルフィが言いのけると同じ頃、顔を上げたウソップが声を上げる。
黒い旗を持ち上げて全員へ振り返る。
「よぉしできた！」
「え～！　ほんとかウソップぅ！」
「ああ、ほら！」
マークが見せられた。が、そこに描かれているドクロは明らかに以前と違っている。誇らしげな顔のドクロは鼻が長くて、後ろに描かれる交差した骨の一本はパチンコ。ご丁寧に頭にはバンダナを巻いて、誰がどう見てもウソップを模したマークだろうと思えた。
自然とルフィの腕が伸び、むっとした顔で頭が殴られる。
ゾロも呆れた様子で腕を組んでいて、ナミは絵の上手さに驚きつつも溜息をつき、シルクは困った顔で苦笑していた。ただその中でキリだけが楽しそうに笑っている。
「どうだ、この完璧なデッサン力！　おれ様にかかりゃあこれくらいは――」
「マーク違うじゃねぇか」
「おまえ、乗り込んで早々乗っ取ろうとするんじゃねぇよ」
「あっはっは、いいねウソップ。すごく上手いよ。ウソップのマークだ」
「笑ってる場合じゃないでしょ。まったくどいつもこいつも」
「まぁまぁみんな、落ち着いて」
彼なりのジョークだったようで、船上は良くも悪くも騒がしくなる。ルフィは怒った顔を見せながら描き直しを要求するものの、見守っていたはずのキリは大笑いしていた。
まったくもって個性的な面子である。
ウソップはルフィにせっつかれながら描き直しを始め、渋々といった顔ながら楽しげだ。

「まぁー今はキャプテンの座はおまえに譲っておくけどな。あんまり不甲斐無いようならおれが取って代わっちまうから気をつけとけよ」
「心配いらねぇよ。おれは誰にも負けねぇから」
「それいいねウソップ。ウチの一味所属で自分の船持てばいいんだよ。麦わら船団一番船船長、キャプテン・ウソップ。どう？　かっこよくない？」
「おぉっ、そういうのもいいな！」
「なんだよウソップ、せっかく仲間になったのにやめる気か？」
「別に今すぐじゃないよ。それに仲間をやめるって意味でもない。将来の展望を話してるのさ」
「おれは仲間と離れるなんて嫌だぞ。みんないっしょに居りゃいいじゃねぇか」
「でも人数増えるとこの船に乗れなくなるし。他の船を用意する必要もあるかもしれないよ」
「それもそうか。じゃあしょうがねぇな」
「いや今ので説得されちまったのかよ、おい。もうちょっと反論あってもいいと思うぞ」
二人と話しながらもウソップは今度こそ麦わら帽子をかぶったマークを描き終わり、見事な出来栄えで仲間たちへ見せる。こうして見ればキリの絵よりも上手だった。
一同ようやく納得した様子で頷き、笑顔になったナミがいの一番に声を出す。
「うん、上手い！　やればできるじゃないウソップ」
「へへっ、これくらいおれの手にかかりゃ朝飯前よ。おまえらおれを尊敬し、褒め称え、キャプテン・ウソップと呼んでも――」
「なぁウソップ、次は帆に描こうぜ。そっちの方がかっこいいだろ」
「せめて最後まで聞けよ」
出来栄えの良い海賊旗に気分を良くしたルフィは、ウソップの手を引いて帆を見上げられる位置まで移動し、二人で構想を考え始める。大事な海賊船の見栄えを決めるのだ。いつしか二人とも真剣になっ

て話し合い、指差してマークの大きさを決めようとしている。
そうして二人が傍を離れたことを機に、ゾロがキリへ歩み寄る。
腕を組んで厳めしい顔。普段より緊張感を持っている。
様子の違う彼の顔を見るとキリは笑みを称えたまま少し小首をかしげた。
「今のがおまえの企みか？」
「何が？」
「船団がどうのって言ってたろ。様子がおかしいと思ったらそんなこと考えてやがったか」
「まぁね。例のクロネコ海賊団だっけ。あれも脅して傘下にでもしようかと思ったけど、予想以上に弱くてやめちゃった。どうせ連れてくならもっと役立つ連中じゃないと」
「おれたちの傘下か……」
「いずれ必要になるさ。前みたいな状況なら特に」
シルクとナミも少し離れて、ルフィとウソップの話し合いに参加している。
聞いているのは彼だけ。
キリは笑顔で、ひどく穏やかに続ける。
「ルフィはその辺り無頓着だ。気に入った人を仲間にしようとして、楽しい冒険ができればそれでいいってタイプ。支配を望まない代わりに大きな戦力も望んじゃいない」
「まぁな。その分自分が強くなりゃいいって腹だろう」
「それだけじゃきっと足りない。成り上がるためには頭を使うのも必要だ。だけどルフィはその辺り深く考えてないだろうし、気ままに進めばいいって考えだろうね。ボクがやらないと。一味を大きくして、どんな敵にも負けない戦力を整える」
「一人で全部背負い込む気かよ……そりゃ重いだろ」
「失うよりよっぽどマシ。それにゾロが気付いてるから十分だよ」
「損な役回りだな。それでいいのか？」
「うん。これがボクらの在り方なんだと思う」
二人は楽しそうに話している面々を見つめた。

ルフィは今日も能天気に笑っている。それでいいのだと、彼が語る。
ゾロはキリの話を聞きながら複雑そうな表情となっていた。
自己犠牲。そんな言葉が思い浮かぶ。
それを苦としている訳ではないため止めようもないが、果たしてキリをこのままにしておいていいのか。ロストアイランドでの横顔が忘れられずに逡巡する。
また気付かずにキリが穏やかな声で言った。
「ボクは気に入ってるよ。すごくめんどくさい人だけど、ルフィはボクの中じゃもう王様だ。願いを叶えてやりたいって思うし、手助けしてやらないといけない」
「で、おまえがあいつに仕える騎士だってか？」
「騎士より軍師の方がいいなぁ。そこまで誠実じゃないから。騎士はゾロがやればいいよ」
「あいつが王様じゃ国民が可哀想だな」
「でも退屈はしないんじゃないかな。毎日が騒がしくなって」
冗談を言ってやっと空気が緩み始めた頃、安堵できた訳ではないがゾロも表情を柔らかくする。
あっちもこっちも、言って変わるタイプではない。
不安が消える様子ではないため見守るしかないのだろう。傍で見ている限り、水に弱いという弱点以外にもキリには目が離せない部分がある。それが仲間への執着だ。
古巣が全滅した話を耳にしている。だからこそ彼が何をしでかすかわからないと思う。
気をつけなければならないと再確認した。
密かにゾロが決意を改めると同時に、ルフィが二人へ手を振る。
何も考えていなさそうな気楽な笑顔。それを見た途端に二人とも苦笑して溜息をついた。
「よぉし決まった！　みんなで描くぞ！」
「待て待てルフィ、おまえ下手らしいじゃねぇか。頼むから何もしてくれるな。おれたちでなんとかするからよ」

「え～？」
「メリー号のためを想え。帆にペンキ塗って失敗したら最悪だぞ？」
「枠だけ作ってくれれば色塗るくらいはできるよ。ルフィもシルクもね」
「わ、私のことは言わなくていいから」
慌てふためくシルクへ注目が集まり、肩を揺らしたキリがペンキを持ち上げる。
大きなキャンバスにマークを描くのは時間も手間もかかりそうだ。しかしそれを嫌がる人物など船上に一人も居なくて、むしろ喜々として寄ってくる。
「さっさと終わらせて祝杯でも上げよう。新しい仲間とボクらの船に」
「おう！」
全員で作業に取り掛かる。
まずはウソップが大枠を描き、他の面子が色を塗っていく作戦。そうすれば絵が下手なルフィやシルクでも足手まといにならないだろうという配慮である。
作業は問題なく進められた。
ただしやはり騒がしさは変わらず、ただ色を塗るだけでも一同は大騒ぎをしていた。
トラブルメーカーはやっぱりルフィで、彼の些細な行動が事を大きくしてしまう。
「あぁっ!?　おいルフィ、ペンキひっくり返すなよ！　メリー号が汚れる！」
「あぁ～っ!?　やべぇ～!?」
「ちょっとルフィ、危ないからその手に持ってんの置きなさい！　こらっ、こぼすな！」
「みんな暴れちゃだめだって！　あ、危ないから！」
「相変わらずみんな楽しそうだね。飽きないの？」
「悠長に言ってねぇでおまえも止めろ！　全部ひっくり返しちまう

気か！」
ドタバタと騒がしく、落ち着く暇もない時間だった。
叫んで慌てて、体を汚しつつ、それでも作業は思いのほかスムーズに進む。
最初は怒っていた面々も時間につれて細かいことなど気にしなくなり、不思議と楽しくなって、童心に帰って騒ぎ始める。
描き終えるまでかかった時間はおよそ一時間。
帆に描かれたマークが完成した時、甲板は多少汚れてしまっていた。
同じく彼らの服や体もペンキに汚れて、しかしさほど気にした様子もなく帆を見上げる。
風を受けて前へ進む帆船。
海賊船、ゴーイングメリー号の完成だった。
横に並んで晴れ晴れとした笑顔。頬を撫でる風にも気分が良く、張られた帆を正面から見ることができて、疲労も手伝ってか最高の出来栄えに見えた。
「できた！　いやぁー、やっぱかっこいいなぁ」
「だろ？　やっぱおれが描いたからなんだぜ、実際」
「あんだけ騒いで完成形がこれってのはある意味奇跡だな。汚れずに済んだのは助かったが」
ゾロが甲板を見ると思わず唸ってしまう。
ペンキのせいで中々カラフルな様相だった。
改めてお互いを見てみれば、笑ってしまうような姿の者も少なくない。
「あっひゃっひゃ！　キリ、髪の毛が真っ赤だぞ。赤髪だな」
「ルフィこそ白くなっちゃってるよ。白髪だね、まだ若いのに」
「あはははは、バーカ。あんなにはしゃげば当然でしょ」
「もう、笑ってる場合じゃないよみんな。ナミも汚れちゃってるよ、せっかくきれいな髪なのに。あとでお風呂入らないとね」
普段は険の強さを感じるはずだったナミも朗らかに笑い、ひどく楽しそうにしている。

船上には笑顔が溢れていた。
これから汚れた甲板を掃除して、体を洗って、後片付けをしてとやることも多かったが、その前にやるべきことがある。キリとゾロが動き出し、用意していた酒樽とジョッキが運ばれてくる。
新たな仲間と新たな船に乾杯を。
全員の手に酒を注いだジョッキが渡り、酒樽を囲んで円になった。
麦わら帽子をかぶったドクロの眼下、互いの笑顔を向けられる。
「いやぁ長かったね」
「おまえらが騒ぐからだろうが」
「あんたも人のこと言えないでしょ。止めたいんだか騒ぎたいんだかわからなかったじゃない」
「とにかく、ほら、そろそろ始めよ？　ルフィ、号令お願い」
「よぉしそれじゃ改めて、ウソップとゴーイングメリー号に乾杯だァ！」
「よろしくおまえらぁ～！」
六人が掲げるジョッキが勢いよくぶつけられて、中身を飛び散らせながら乾杯された。
船上には再び笑い声が帰ってきて、しばし小さな宴が繰り広げられることになる。

ウーナンの黄金編

〝ウーナンの黄金郷伝説〟

一夜を海の上で過ごし、日が昇って航海を再開した後。

しばし船室で海図を描いていたナミは上機嫌にペンを走らせていた。

これまでの航海を一枚の海図に描き起こす。航海士としての役目でありながら、近頃はこの作業が彼女の趣味のようにもなっていて、いつか自分の手で世界地図を描きたいと思っている彼女にとって至福の一瞬だ。

軍艦島での戦いで多くが失われてしまったが、描き直す行為もまた不満ではない。

彼らとの航海で、自分の足で動き、自分の意志で海図を描くのは楽しいと思う。

朝食の後、女性陣に割り当てられた一室でしばらく籠って描き続け、一段落したところでようやく手を止めた。まだ惜しむ気持ちはあるものの十分だろう。ほんの一時間ほどだが作業はずいぶん進んでいて、一度止めてしまうのが嫌になるほど。もっと描きたいと思うのはずいぶん久しぶりで、もう何年振りかのことだった。

気が緩んでいるのだろうと自分で思う。

軍艦島での出来事に加え、シロップ村での戦いを見ていた。

彼女は船に忍び込んで宝を盗むだけだったが、彼らの戦いぶりを見ている。特にシルクの成長が目覚ましかった。悪魔の実を食べて以来の修練が形となったらしい。

一人で戦うことになったと気付いた時には心底心配したものの、結果はシルクの勝利。

単独での勝利にはほっとして、想像よりずっと喜んでしまったものだ。

それではいけない、と思う心がある。一味を心配し、共に居ることを望むのは。

出会った時はこうではなかった。一緒に居る内に彼らに絆されてしまったのか。自分では決して良い変化ではないと思っている。
居心地の良さを感じているのを自覚して、今更になってまずいと気付いた。
こうであってはいけない。だから疑おうと努めていたというのに。
頭を振って溜息をつく。
いずれ、別れなければならないのだ。あまり情を残さない方がいいに決まってる。
意識して笑みを消し、ナミは甲板へ出た。
今日も快晴。航海は問題なく進んでいる。
ただ甲板へ出た途端に前方へゾロとシルクの姿を見つけ、あっと声を漏らしてしまった。剣を抜いて向かい合っている二人に心配事が生まれてしまい、気付けば注意してしまっている。そんな些細な行動さえも彼らとの距離を縮めていることに、おそらく彼女は気付いていない。
「ちょっとあんたたち、何やってんの」
「え？　何って修行を……」
「あんたたちが暴れると船が壊れるでしょ。せっかく新しいの手に入れたんだから陸でやりなさい。戦闘でもないのに傷つけるわけにはいかないわ」
「あの、一応気をつけてるんだけど」
「だめよ。次の島まで我慢しなさい」
まるで母親か姉のようにぴしゃりと言いのけ、腰に手を当てるナミに叱られてシルクはしょんぼりと剣を下ろす。確かに拾い物ではなく大事な自分たちの船だ。傷つけるのは忍びない。
シルクがやめてしまったことでゾロも剣を納める。
本気でぶつかっていた訳ではない。
互いに手を抜いて動きの確認程度だったがそれもいけないようだ。
すっかりやる気が削がれてしまってゾロは座り込み、頭の後ろで手を組んで脱力する。いつもと同じで寝に入るのだろう。彼の行動と言えば昼寝か鍛錬か戦闘くらいのものだ。

同じようにシルクも剣を仕舞って、よしと表情を柔らかくするナミを目にする。
最初に比べれば態度は確実に軟化しているだろう。
こうして視線を合わせるだけでも以前との違いは明白で、ふとすれば顔が緩んでしまい、嬉しく想いながら何気ない会話を交わしていた。
「あんたたちはいつものんきねぇ。で、静かだけどルフィたちは？」
「ルフィならメリーの頭の上で寝てるよ。特等席なんだって」
シルクの言葉に従って顔の向きを変えれば、羊の船首の上に寝そべるルフィの姿が見える。
海に落ちる危険が付き纏う小さな場所で、うつ伏せになって眠り込んでいる。少し船が揺れただけでも落ちそうな姿であった。だが彼自身、起きる気配もなく爆睡しているらしい。
やれやれと頭を振ってしまう。
常人ならざる度胸を褒めればいいのか、危機感の無さに呆れればいいのか。
ナミが溜息をつくとシルクが苦笑する。
「まったく理解できない。なんで自分から一番危ない場所で寝るのかしら」
「あはは……私もよくわからないけど。でもルフィはあそこが気に入ってるから」
「変な奴ばっかり」
「うーん、否定できない、よね」
「もういいわ。それでキリは？　針路を見てるように頼んどいたんだけど」
「キリならウソップといっしょだよ。船の後ろで何かしてるみたい」
「針路は？」
「見てなくていいって。そういえばゾロが見てればいいって言ってた」
「はぁ？」

「舵なら見てるぞ。あのでかい雲に向かって進んでる」
欄干に背を預けてゾロが口を開く。視線は遠くの空。大きな雲が浮かんでいる。だがのんきな彼は雲の形が変わることも、動き続けることも失念しているらしくて、至って平坦な声だった。そんな返答が返ってくるとは思わず、能天気な反応にナミが頭を抱えてしまう。
加えてキリが言ったという言葉。針路を見なくていいとはなんたることだ。
スカートのポケットに入れていたコンパスを取り出す。
船首の向きは進んでいたはずの方向からずれている。やはり針路は変わっていた。
手を組んだだけの関係とはいえ彼女は航海士として頼られている。航海術を持つのはナミだけで、キリでさえ持つのは些細な知識のみ。にも拘らず彼女の決定に逆らいたいのだろう。
一体どんな理由があってそんなことを言うのか、聞いてみたいと思った。
この船に乗る者は皆が変わり者。
中でも特に目につくのがルフィとキリの二人。この二人を表すならば読みやすい人間と読みにくい人間。どちらも似ているように見えて対照的だ。
また溜息が漏れ出る。
仕方ないといった調子でナミが苦笑し、思い悩むのをやめてシルクを見た。
「ハァ、本人に直接聞くわ。あんたたちと居るとほんと疲れる」
「ごめんね。色々迷惑かけちゃって」
「まぁいいわよ。ちょっと慣れてきたとこだから」
そう言い残してナミは移動を始め、船の後方へと向かう。
船尾には座った状態でキリとウソップが向かい合っていた。辺りに色々な物を広げて何か作業をしているらしく、ウソップはどことなく真剣な顔で、キリはいつも通りの笑みだ。
歩いて来るナミにも気付かず会話を続けていた。
「戦闘なんてそう難しく考える必要ないよ。勝つために必要なこと

は一つ、敵の隙を突いて攻撃を当てる。これだけで十分」
「んな簡単に言われてもよぉ。その隙を見つけんのが難しいだろ」
「だから発想を変えるとさ、自分で無理やり隙を作っちゃえばいいんだ。能力者じゃない限り、構造上人体の弱点はそう変わらない。戦法さえ考えれば簡単だよ」
「う～ん、例えば？」
「そうだなぁ、例えば鍛えられない部分ってあるでしょ？　目とか鼻とか口とか。ウソップは狙撃手なんだし、その辺をズバンと捉えられれば相手の平静は崩し易い」
「おまええげつないこと言うな。目ってのはなんとなくわかるけど、鼻とかっつうのは……あ、そうか。コショーを弾に仕込んでりゃ敵はくしゃみが止まらなくなるぞ」
「あと味覚は鍛えようがないからね。辛味とか苦味とか甘味とか、尋常じゃないレベルならそういうので敵の動きが阻害できるかも。流石にルフィでも止められるよ」
「なるほど……」
「なに物騒なことしゃべってんのよ」
近付いて来たナミにようやく気付いて振り返った。
二人は彼女の顔を見上げる。
「やぁナミ。海図は描き終わった？」
「まだよ。そんなことより、針路を見といてって言ったはずでしょ。全然見てないじゃない」
「まぁね」
「あんた、やっぱりわざと？」
「別に急ぐ旅でもないし、遠回りだって立派な航路だよ。ボクらの場合仲間も探さなきゃいけないしさ。今からグランドラインに直行ってのも味気ないでしょ」
「だからって勝手にやる？　グランドラインを目指せって言ったのはあんたでしょ」
「言ったのはルフィだよ。それに邪魔しちゃ悪いかと思って」
「ほんっとにこいつらは……あんたとしゃべってる時が一番疲れる

かもね」
「海賊相手にする時は素直にならないのが身の為だよ。これからも泥棒続けるんなら余計に」
からから笑って平気で告げられ、ナミの表情が歪む。
やりにくい相手だ。彼を見て感じる自由とルフィを見て感じるそれは全く違う。ルフィは見た目にも分かり易い人間だが、彼は静かで考えていることがわからない。
底知れない何かを感じる瞬間が時折ある。
笑みはそのまま、多少真剣みを増したように見える顔で静かに続ける。
「海賊に勝つためにはそいつ以上の悪になることだ。こっちの業界には卑怯なんて言葉はないから、よく覚えといた方がいいよ」
「ふん……お気遣いどうも。それで？　グランドラインに向かわないならどこへ行く気？」
「さぁ」
「さぁって。じゃあこの船はどこに向かってるのよ」
「たまには海に任せてみるってのもいいんじゃないかな。イーストブルーの海は穏やかだし」
「呆れた。あんたくらいはちゃんとした人間かと思ってたのに」
嘆息するが強く反発はしない。彼女とて真の目的は金を集めること。それだけ集められるようであれば、グランドラインでない場所だとしても抵抗はない。
二人のやり取りを作業の合間に聞いていたウソップは首をかしげる。
常識的な二人だと思っていたがどうにも仲は良さそうではない。そこが気になった。
「ひょっとしておまえら仲悪いのか？」
「そんなことないよ。多分」
「別に悪くはないけどね、私は呆れてるの。あんたらに」
「ボクも入ってる？」
「当然。むしろあんたとルフィが一番の問題よ」

「だってさ」
「いまいち関係性がわからねぇよな。仲間じゃねぇ海賊専門の泥棒といっしょに旅するってよ」
コショーの瓶を置き、作業を続けながらウソップが言う。
ある程度の事情は耳にした。ナミは正式な仲間ではなく手を組んだだけ。大金を掻き集めるために協力しており、優れた航海術を持つため航海士の役割を任せていると。
ルフィの言によれば、ルフィが船長。キリが副船長で、シルクとゾロは今の所は戦闘員。パチンコが得意なウソップには狙撃手を任された。
立派な船を手に入れた今、いつまでも大砲が撃てない一味ではいられない。
ウソップにかけられる期待は大きく、そこは彼自身も受けて立つといった様子だった。
お調子者らしい気楽な発言だが、これで意外にやる男。皆も心配していない。
「しっかし考えてみりゃどこに辿り着くのかわからねぇってのは恐怖だな。なぁキリ、とりあえずの目的地だけ決めといた方がいいんじゃねぇか？」
「まぁねぇ。でもボクらイーストブルーの地理に詳しくないし」
「実はおれも」
「だから私が居るんでしょ。それなのに無視してくれちゃってさ」
「心配しなくてもどこかには着くよ。海は広いって言っても陸はそこら中にある」
「ハァ……ほんっとにもー」
ナミが溜息をついて額に手を触れた。
ちょうどその頃、船首の上で唐突にルフィが起き上がり、ガバッと顔を上げて海を見る。
突然の行動に気付いたシルクとゾロの視線が集まった。シルクは海に向かって能力を使う練習をしていて、ゾロは眠りかけていたようだが突然の挙動に反応している。

どうやらルフィは鼻を動かして何かの匂いを嗅ぎ取っているらしい。
首を動かして海を見回す素振りは明らかに何かを探していた。
不思議に思うシルクは彼の下へ向かいながら声をかける。
「どうしたのルフィ？　何かあった？」
「ん～……なんかいい匂いがする」
「匂い？　何も匂わないけど」
「うまそうな匂いだっ。なぁシルク、これどこにあるのか探そうぜ！　きっとうまいものだ！」
「うーん、匂わないけどな……」
「おいキリィ！　ナミィ！　船動かすぞ！」
船首から飛び降りて甲板を駆けだしたルフィが大声を出す。
すぐに反応した様子で、後部に居た三人もメインマストが見える位置までやってきて、その近くに立つルフィを見つける。唐突な命令だ。何事かと疑念を持って視線が向けられた。
「どしたのルフィ。今度はどんな思い付き？」
「うまそうな匂いがしたんだ。あれ探そう」
「匂い？」
「いや、おれは何も匂わねぇけど」
「私も」
「あの人だけ動物並みだからね。信憑性はあると思うよ」
尚も上機嫌に甲板を駆け、欄干へ寄ったルフィはゾロの隣から海を指差す。喜々とした笑顔は振り返った先に居る三人へ向けられ、特に航海士のナミを頼っているようだ。
「多分あっちの方からだぞ。間違いねぇって、絶対なんかある」
「で、それを食べに行きたいってわけか」
「まだ島には近付いてないはずだけど」
「あっち行こう！　おれ腹減ったぞ！」
「もう聞く耳持たなそうだね」
苦笑したキリが言えばナミも呆れた表情、ウソップも困惑して、他の二人は慣れた表情。

ルフィのわがままに付き合って船の針路が変えられた。
全員が動き出してそれぞれ作業を始める。
不思議なのは不満らしき物が一切感じられないことだった。ただの思い付きで針路を変え、他のクルーが認識できずルフィだけがわかる匂いを頼りに海を進もうとしているのに。
多少驚きながらも、ウソップもまた操船を行う。
明確な目的もないため、不満がないのは確かだ。きっとこれがこの船の雰囲気なのだろう。
船首の向きが変わり、メリー号の進むべき道が変えられる。
「全速前進！　目指すはうまい匂い！」
「その匂いってのがわからねぇんだけどな。なんでルフィだけわかるんだ？」
「ウソップ、望遠鏡持ってる？　海に何かあるのかも」
「ん？　持ってるけどよ、あったとしても海にある美味い物ってなんなんだ？」
がま口の鞄から望遠鏡を取り出し、ウソップが前方を眺め始める。
探そうとせずともすぐに何かが視界に入った。レンズに映ったそれはいまだ遠くにあり、小さく見えるため、まだかなりの距離があると思わせる。それでもすでに見える範囲にあった。
ウソップは驚きを露わに呆然と呟いた。
「あった……」
「ほんとかウソップ！　ほらみろ、だから言っただろ！」
「物は？」
「ありゃ船だな。小せぇけどただのボートじゃなさそうだし……店？」
「うまい物売ってる店か。よぉし寄ってこう！　ちょうど腹減ってきたとこだし！」
声高らかに宣言するルフィにつれられ、メリー号は真っ直ぐに進む。
奇妙なほど帆に風を受けるためスピードはどんどん上がり、やがてその場所へ到着した。

辺りに島の姿がない海の上。
見つけたのは小さな船だった。
掲げられたのはおでんと書かれた暖簾と小さな旗。どうやら海上のおでん屋らしい。
ルフィは目を輝かせて喜び、他の者たちも珍しい船に興味を向ける。
海賊船が近付いて来たとあって、船に居た子供は驚いていたが、店主の男は動じていない。頭にタオルを巻き、むっつりと厳めしい顔で冷静にメリー号を見ていた。
小舟の傍に寄ると帆を畳んで足を止める。
ルフィはメリー号の船首の上で胡坐を掻き、その店の店主、岩蔵へ喜々として声をかけた。
「おっさん、おでん売ってんだろ。おれたち六人なんだけどいいか？」
「おめぇらは海賊か？　それとも客か？」
「海賊で客だ。金なら払うからおでん食わせてくれ」
「金を払うんなら海賊でも客だ。で……注文は？」
「しっしっし、全部くれ！　おれ腹減ってんだ」
そう言ってルフィがおでん屋の小舟に飛び移り、一足先に席へ座った。
すぐさまキリも欄干へ寄ってルフィを見るのだが、制止の声を遮るように口を開きながら、ゾロもおでん屋へと飛び移って椅子へ腰掛ける。
「ルフィ、こっちの貯金のことだってあるんだからさ、全メニュー制覇とかそういうのは――」
「おでーんっ！」
「おいルフィ、一人で全部食っちまうなよ。それと酒はあんのか？」
「ああ。物は限られるがな」
「へっ、そりゃいいや」
「おーい。誰か聞いてくださーい」
二人は話も聞かずに、目の前の物にのみ集中している。

無視される形となったキリはやる気を失くして制止を止めた。金の心配はあるもののルフィを止めるのは容易ではない。要するにめんどくさがったのである。
キリがやる気を失くしてしまったことでルフィの食事は始まった。客と知って岩蔵はすぐにおでんを皿へ乗せ、彼の前に置く。警戒心はない。相手が海賊であったところでケチる様子もなくおでんを提供していた。隣へ座ったゾロにも一皿渡し、次に酒瓶を持ち出して彼へ寄こす。無愛想ながらサービスは上々だった。
「うまほ～っ！」
「おまえら食わねぇのか？」
「流石にそのサイズで全員は乗れないでしょ。六人だよ」
「なら皿だけ運んでやる。トビオ、持ってってくれ」
「あ、うん」
岩蔵が呼びかけると呆然としていた子供が我に返ったかのように表情を変える。まだ十歳前後の男の子だ。岩蔵の親類らしく、彼に呼ばれると働き始める。
お盆にいくつかの皿を乗せて、メリー号まで歩み寄った。
横付けしているとはいえ高低差はある。そのままでは渡しにくいだろうとキリが手を伸ばし、差し出してくるトビオからお盆を受け取った。危うく落としかけるところだったが無事に船上へ運ばれる。湯気が立つ皿には美味そうなおでん。思わずウソップが喜びの声を上げた。
「ど、どうぞ」
「ありがとう。美味しそうだね」
「う、うん……あんたたち、本物の海賊？」
「そうだよ。ドクロを掲げてる船はみんな海賊だ」
笑顔でキリに告げられ、トビオはメリー号のメインマスト、その天辺を見上げる。
風にはためく旗はドクロ。麦わら帽子をかぶっている。
それが海賊であることの証明。
彼らは本物の海賊だ。

トビオの顔に笑顔が生まれ、初めて目にする海賊に好奇心が堪えきれなかった様子だ。
「すげぇ、本物の海賊なんだ」
「海賊に何か思い出でもある？」
「おれも海賊になりたいって思ってたんだ！　だって海賊の伝説っていっぱい聞くだろ！」
受け取ったお盆からそれぞれの手に皿が渡される。
皿を受け取りながら、ウソップはトビオに笑顔を向けた。彼もまた海賊に憧れていた男だ。子供とはいえ同じ想いの人間を見つければ嬉しさが込み上げてくる。シルクもおそらく同じ気持ちであって、二人より少し後ろだが微笑んでいる。
対照的に困った顔をしたのはナミだ。ここのところ出会うのは海賊に憧れるか、好意的に見る人間ばかり。長らく培われてきた固定概念に反対されてばかりで納得いかない。
「そうか、おまえも海賊が好きなのか。海賊はいいぞぉ。なんたって冒険にお宝にロマンがある。海賊ってのはこの世で最も楽しい人種さ」
「そうだろ！　おれもいつか、海賊になって冒険してみたいんだ」
「海賊に憧れる子って、意外と多いんだね。ルフィもウソップもそうだし、私もどっちかと言えばそっちだったから」
「無責任なこと言うんじゃないわよ。おじさんいいの？　自分の身内がそそのかされてるわよ」
肯定的な二人に対してナミだけが苦言を呈する。
海賊が関わるとなれば無事に暮らせる保証もない。従って我が子を海賊にしたくないのは市民にとっての当然だと考えていた。きっと岩蔵も否定するのだろうと思っている。
岩蔵は答えない。
しばらく黙ったまま調理を続け、代わりにウソップがナミへ振り返る。
「別にいいだろ。こいつは子供かもしれねぇけど男だ。自分の生き方くらい自分で決めるさ」

「そうさ、自分で決める！」
「家族に迷惑かけてでも？　おじさん、止めるなら今の内よ。悪い大人が言いくるめない内に」
「別にいい。てめぇの生き方くれぇてめぇで決めりゃいいさ」
「ほらみろ」
「なんであんたが得意げなのよ……」
カウンターの向こうから岩蔵が平坦に告げる。
不思議とこの一瞬、一同はその言葉に釘付けとなった。
「自分の生き方は自分で決めればいい。海賊でも、おでん屋でも。だがなトビオ、これだけはよく覚えとけ。黄金は笑わねぇ。どんな道に生きても金に憑りつかれねぇようにすることだ」
「え？　あ……うん」
妙に真剣な声色だった。トビオは虚を衝かれて言葉を失ってしまう。
普段岩蔵とは喧嘩ばかりしているものの、そんな声色や、そんな言葉は聞いたことがなかった。初めての経験に驚きが隠せていない。
不思議としばしの沈黙があって、ただおでんを食べる時間が続いた。
ルフィは全く気にしていないが他の面子は同じではなく、今の言葉を噛みしめているらしい。
時間にして数十秒の沈黙を置いて。
再びトビオが笑顔を浮かべて話し出す。戸惑いは消し切れていないが、せっかく本物の海賊に会えたのならば、聞いてみたいことがあった様子だ。
「な、なぁみんな、ウーナンの伝説、知ってるか？」
トビオの言葉にウソップが喜色を表し、同じくシルクやゾロも反応した。あいにくその他の面子、ルフィやキリやナミは知らないといったばかりにきょとんとした顔になる。
真っ先に答えたのはキリだった。
「ウーナン？　知らないな」
「ほんとかよキリ。イーストブルーじゃ有名な話だぜ」

「そうなんだ。しばらくイーストブルーにいなかったからさ」
「そういやそんなこと言ってたか。いや、でも確かウーナンは一時期グランドラインにも入ってたはずだけど」
「へぇ」
「ウーナンは伝説の海賊なんだ。数えきれないほどの黄金を集めて、夜になっても黄金の輝きで海が昼みたいに照らされたんだって。だから黄金の海賊って呼ばれてた」
楽しそうに語るトビオの目は、その海賊に憧れているのだと分かり易く伝えている。
自然と彼らもその話に興味を持ち始めた。
黄金の海賊、ウーナン。
残念ながらキリはその名を知らず、伝説についても聞き覚えはない。相当な有名人なのだろうか。その場の数名の反応を確認する限り、決して無名ではなさそうだ。
気になって試しに尋ねてみる。
「シルクも知ってる？　そのウーナンって海賊」
「うん。さっきウソップも言ってたけど、一時期グランドラインに入ってて、確か懸賞金は六千万ベリーくらい。イーストブルーに戻ってきたって噂になった時はすごかったんだよ」
「ふぅん、黄金を集めた海賊か。今も生きてるの？」
「数年前から行方がわからなくなってる。生きてるかどうかはわからないよ」
「生きてるよ！　ウーナンがそう簡単に死ぬわけない！」
感情的になってトビオが答える。どうやら憧れの念はかなり強いようだ。
夢中でおでんを食べていたルフィも思わず振り返る。
海賊に憧れていた子供時代と言えば彼も同じ。赤髪のシャンクスに憧れて海賊になった。
思うところあってか、穏やかな目でトビオを見つめる。
「そりゃ、ウーナンに関する話はどこにも流れてないけど」
「そのウーナンって奴、強いのか？」

「さぁな。噂が聞こえねぇんでとっくに死んだんじゃねぇかって話だ」
「うっ……」
口を動かしながら呟いたルフィに応じ、ゾロが答える。おでんに舌鼓を打ちながら酒を煽って上機嫌。しかし場の空気を感じて些か真剣な表情だった。
ゾロの一言にトビオの表情が曇る。
そちらから目を離して、口の中の物を呑み込んだルフィがにかっと笑った。
座る向きを変えて仲間たちに向き直って、いつもの楽しそうな態度で告げられる。
「よし、そのウーナンって奴を探そう。いい奴だったら仲間にするんだ」
「はぁっ!? おいおいルフィ、そりゃマジか!?」
「ウーナンを仲間にって、そんなことできるわけないだろ！ ウーナンは大海賊なんだぞ！」
「そうか。でもおれは大海賊で止まる気なんかねぇし」
「え……？」
ルフィの笑顔はトビオに向けられる。
訳が分からないと表情で表す彼に対し、至って自信満々に告げた。
「おれはさ、海賊王になるから」
「か、海賊王？」
「そのウーナンって奴がどんな大海賊か知らねぇけどよ、誰が相手でも負けるわけにはいかねぇんだ。だから大海賊だからって頭を下げんのは嫌だな」
神をも恐れぬ不遜な態度である。堂々と言われた言葉はトビオにとって衝撃的で、訳がわからないと思う一方、自信満々で常人とは違う姿から初めて彼を海賊らしいと思った瞬間だった。
ただ、反応したのは岩蔵だ。
今まで興味がなさそうにしていた彼が急に口を開き、静かな声で尋ねられる。

「おまえたち、ウーナンに会いたいのか」
「ああ。おっさん知ってんのか？」
「え？　じいちゃん？」
「ウーナンの生死については知らん。だが、奴がアジトにしていた島なら知ってる」
岩蔵の言葉に全員が注意を奪われた。
特にトビオは初めて聞かされる言葉を耳に驚愕している。知っていてなぜ教えてくれなかったのか。海賊になりたいという話は前からしていたし、ウーナンに憧れていることも知っていたはずなのに。そんな話は今日まで一度もされたことがない。
それについて語ることもなく岩蔵が続ける。
さっき以上に真剣な顔つきになっていて、何やら茶化せない雰囲気が漂っていた。
「おまえたち海賊だろう。海賊と戦うことはできるか？」
「当たり前だ」
「なら一つ頼みたいことがある。おれは、ウーナンがアジトにしていた島に行きたい。だが今その島はある海賊たちの根城になっている。ウーナンが隠したと言われる財宝を探すためだ」
「黄金ね」
目を光らせたナミが鋭く質問する。すると岩蔵は素直に頷いた。
「黄金があるのかないのかは知らんし、興味もないが、海賊が居たんじゃ近付くこともできん。そこでだ。おまえたちおれをその島へ連れてってくれ。代わりに今食ったおでんの代金はいらん」
「おでんをタダにするだけで海賊を倒す？　条件が見合ってないわよ、交渉にもなってない。それになんか怪しいわね。ひょっとしたら私たちが黄金を手に入れた後で横取りしようって腹なんじゃないの？　最近は海賊じゃない相手も信用ならないから」
「いいじゃないか、おでんタダ。ルフィを抱えるボクらには魅力的だよ」
「お黙り海賊。そんな安い条件で頷いてどうするのよ。主婦かあんたは」

異論を口にするナミだったが、真剣に考えたルフィは勝手に決断する。
仲間たちの意見も聞かずに笑顔で頷いた。
「いいぞ。要するに海賊をぶっ飛ばせばいいんだな」
「ちょっとルフィ」
「心配するな。黄金に興味はない。見つけりゃ全部おまえらにくれてやる」
「それなら、まぁ……」
渋々頷くナミだったが、そう言った岩蔵に疑念が隠せない。なぜ黄金を必要としていないのに伝説の海賊を求めるのか。おそらく全員が疑問に思っていたことだろう。
聞いてみたい気もするが、その前に岩蔵がぽつりと呟いた。
「おれはただ知りたいだけだ。あいつがどんな答えを出したのか」
「じゃあ決まりだ。その島に行ってウーナンを探そう。その前におっさん、おかわりくれ。ケンカするなら今の内に腹ごしらえしとかねぇとな」
「あ、そう言えば言い忘れてましたけど、ルフィの食い放題ほど怖い物はないと思いますよ。約束ですからお代の方は、ね」
真剣な空気もルフィとキリの態度によって台無しにされてしまう。
結局真意は聞き出せぬまま、一行はウーナン探しの航路に乗り出すこととなった。
その中でも特に戸惑いの色を強めているのは、トビオ。
自身の祖父とウーナンにどんな繋がりがあるのか。
全く読み切れない状態で彼らとの航海が始まってしまった。胸中はもやもやするばかりである。

探し物

岩蔵が駆るおでん屋のボートに導かれ、ゴーイングメリー号はおよそ二時間ほどで島の姿を確認した。無人島ではあるがそれなりに大きな島だった。

望遠鏡で眺めればその島の特徴がいくつか目につく。

まず北に位置する島で最も高い山。岩肌がむき出しで緑の姿はない。

そこから離れた場所、ちょうど島の中央辺りに位置しそうな場所に、大きなクジラの像。

さらに島の中央から見れば真東に城の姿が垣間見れる。

少し変わった環境の島らしい。

メインマストの上から望遠鏡を覗いたウソップが甲板へ降りる頃、すでに島の陸地へ近付いている。ちょうど上陸できそうな砂浜があった。メリー号は船底が浜にギリギリ触れる位置で止め、上陸する際には足を濡らすことになるだろう。船はすでに停泊する準備に入っている。

すぐ隣にはおでん屋の船。こちらは砂浜に上がっても問題なさそうなサイズだ。

ゆっくりと船が停まって作業が終えられる。

降りてきたウソップが手を止め始めた皆を見回して言い始めた。

一番に反応したのは笑顔のルフィである。

「地図に載ってた特徴は大体見つけられたぞ。クジラってのも何かわかった」

「ほんとかぁウソップ！」

「島にでっけぇ像があるんだよ。高い場所にあるからすぐ見つけられたぜ」

そう言ってウソップはルフィが持つ古びた地図を受け取り、手の中で開く。

岩蔵から受け取った物だ。多少の汚れは見受けられるものの、大事に保管されていたようで描かれた景色は判別しやすい。

特に目を引くのは端っこに記された文字。
宝は眠る。南の丘より、クジラが西向きゃ尾は――。
最後の部分は掠れていて読めず、判別が不可能な状態となっている。だが明らかにこれは宝の地図だ。海賊が作って所持しているような物をなぜおでん屋の岩蔵が持っているのか。島の位置や特徴を確認した後で、改めてウソップが首をかしげ始める。
「しっかしなんであのおっさんがこんなの持ってんだ？　こりゃどう見たって宝の地図だぞ。おっさんが海賊なわけはねぇし」
「お店に来た海賊が忘れていったとかじゃないかな。ほら、海賊もお客さんとして扱うって言ってたし」
帆を畳み終えたシルクが彼らの下へ歩み寄ってきて呟く。
岩蔵が海賊でないことは誰も信じて疑わない。おでん屋一筋で今日まで来たらしく、興味も無ければ敵意もない。おでんを食いたいと言うならば味方にもなるが深入りはしないとのこと。
怖い顔でも清廉潔癖な人格のようだ。それでいて海賊を忌むべき物としている訳でもない。
だからこそ地図の入手経路が気になるものの、その疑念を晴らすかのようにキリが口を開く。
「あの人が海賊じゃなかったとしても、海賊と知り合いだったって可能性はあるかもね。ウーナンの話になると顔色変わってたし」
「知り合い？」
「ってことはウーナンと顔見知りだったのか？」
「でないと多分ボクらを使おうとはしないよ。わざわざおでんタダにしてまで」
「なんであんたはおでんタダを神聖視してるのよ。そんな大した報酬じゃないでしょ」
ナミが苦言を呈してくるものの笑顔で回避し、キリは島を眺めて続ける。
確かにクジラの像が見える。方角的には西を向いているようだ。
地図の存在は有難く、またそれをどうやって入手したかは漠然と聞いている。

ある海賊が届けてくれた。
それがウーナン本人か、或いはその部下だった可能性は高く、岩蔵が海賊の知り合いだった説は有り得るだろう。なにせ本人の口から情報が漏れたのだから間違いない。
「海賊に頼んでまで探そうとするあたり、何か事情がありそうだ。ひょっとしたらウーナンはもう死んでるのかも。噂も流れてるわけだしね」
「んなことない！　おまえ勝手に決めつけるなよ」
「そう？　どしたのルフィ、気でも障ったかな」
「おれたちが何のために冒険すると思ってんだよ。生きてるか死んでるか、それを確かめるためでもあるじゃねぇか。生きてるって信じる奴が一人でも居るなら、ほんとに生きてるかもしれねぇってことだ。冒険の前に決めつけるのはだめだ」
「なるほど。確かにそうだ」
「冒険はそのためにあるんだ。何も知らねぇ方が面白いだろ」
腰に手を当てて笑うルフィにつられ、キリも肩をすくめながら笑う。
いつになってもぶれない人だ。それだけ付き合い易いとも言えるがこうも変わらないと笑えてしまう。出会った瞬間以来、彼の自由さは相変わらずである。
ともかく目的地には着いた。
島に上陸してどう行動するかを決めなければならない。
笑顔のキリが仲間たちを見渡して、懐から数枚の紙を取り出した。
「ここは別行動といこうか。三人ずつで岩蔵さんたちの護衛チームと、海賊討伐チーム。どっちが見つけたとしても出会った敵は倒せばいいわけだ」
「うし。そうするか」
「待て待て待て！　ただでさえこっちは六人しかいないんだぞ？　確かにこの前は勝てたけどよ、たったこれっぽっちで一個の海賊団に勝とうってのは無理があるんじゃねぇかな」
話し合いを始めようとした一同を止め、異論を唱えたのはウソップ

であった。数秒前と違って表情に焦りが見える。かなり慌てている様子だ。
何があったのだとも思うが、彼は自分のことを怖がりでネガティブだと言っていた。
どうやらこの作戦に不満があるか、戦闘に関する不安があるらしい。
必死にも思える顔で不思議な説得が始まった。
「自慢じゃないがおれは海賊に会っても役に立てる気がしねぇ。援護ならできるが」
「壁になる人がいるから大丈夫だよ。援護だけで」
「いやいや、でも人数が違い過ぎるだろ。普通に考えりゃ海賊が十人より少ないって可能性はほぼないわけだ。六人しかいない奴らがさらに半分になるのは無理があると思わないか？」
「一人一人が強ければ問題ないって。期待してるよキャプテン」
「おまえらにはまだ言ってなかったかもしれないが、実はおれは持病を持っててな、島に入ってはいけない病なんだ……」
「うん、わかった。それじゃ引こうか」
「いや待てって!?　やっぱりもっとよく話し合おう！」
ウソップの叫びはあっさり受け流されてしまい、キリが丸めた紙を持つと各々が手を伸ばして触れた。恐る恐るウソップも一つに触れながらも、やはり表情は優れない。
「赤く塗ってあるのが護衛チーム。印無しが海賊討伐。異論は？」
「おれはあるって言ってんじゃねぇか！　なぁ考え直そうぜ。別行動する意味なんてねぇだろ」
「戦闘の前には情報収集だって必要だよ。それにウーナンの財宝がどこに隠されてるかも調べなきゃいけない。クジラが西向きゃ尾は、って奴も調べないと」
「尾は東に決まってんだろ。クジラが西向いてるんだから、尾は東を向いてる」
「そう思わせるために文字が消されてるのかもしれない。とにかく人手はあるんだし調べてみればいいよ。海賊を倒すだけじゃなくて

ね」
「人手は足りてねぇんだって！　全員で行動した方が安全だって！」
「イカサマは無し。せーので引くよ。せーのっ」
またも叫びが受け流されて、一斉に紙が取られる。
かくしてチーム分けは決定された。
赤い印がつけられた紙を取ったのが三人。ルフィ、ウソップ、ナミである。
気楽なルフィに対し、他の二人は途端に心配そうな顔になった。
「しっしっし。おれたちがおっさんたちといっしょだな」
「おぉぉおいっ！　心配した通りじゃねぇか！　はっきり言っておくがおれは強くなんかねぇんだぞ！　援護以外戦っちゃいけない病だ！　引き直しを要求する！」
「私だって嫌よ。戦う気なんてないからね」
「心配すんなって。なんとかなる」
能天気な言葉を吐くルフィの胸倉を掴み、焦りを募らせるウソップは猛抗議を始めるものの、激しく揺さぶられたところで冒険心に火を点けた彼は笑うばかり。対照的な二人を見て、ウソップと同じく不安を抱えていたはずのナミは嘆息してむしろ冷静になる。
白を取ったのは他の三人。
キリ、ゾロ、シルクと、ナミやウソップより先にルフィの仲間になった面々。互いの確固たる信頼を持つ安定したメンバーだった。
彼らは彼らで不満もあるだろうが、怖がるウソップよりマシだろう。
「一応聞くが、こりゃどっちの方がいいってわけでもねぇんだろ」
「そうだね。海賊と会うかは運頼りだし」
「なら納得しとくか」
「あの、ウソップのことほっといていいの？」
「いいんじゃないかな。やる時はやる男だよ、きっと」
慣れているのか、騒がしい彼を止める者も居ない。
話し合うルフィとウソップをそっちのけに、ナミが三人へ向き直っ

たところで、キリが彼女へ予定を告げる。本来ならばルフィが聞くべきだろうが彼では無視してしまう可能性もあるので都合が良い。やはりナミが居て良かったと思う瞬間だ。
「先にボクらが上陸してあのクジラを調べてくる。ウソップが言う通り尾は東だったら苦労はないかもしれないけどね」
「その通りじゃないってこと？」
「あまりにも簡単すぎる。あんな像まで造るとこを見ると何か細工がありそうだ」
島を眺めてそう言った後、キリがズボンのポケットから何かを取り出した。
「何かわかったら連絡する。ってわけで、これ」
ナミに手渡されたのは小さな電伝虫だった。
唯一と言っていい通信手段。見ればキリのもう片方の手にも同じ物が乗せられている。
「子電伝虫？　いつの間に」
「休暇の間にちょっとね。普通の電伝虫も船に乗せてあるよ。見てなかった？」
「そっちは知ってたけど、まさかこれまで用意してるなんてね。用意周到だわ」
「これがあれば別行動もやりやすくなる。ルフィから目を離さないようにね」
「はいはい。はぐれたら厄介なんでしょ？　それくらいわかるわよ」
「多分クジラを調べれば宝の位置もわかるはずだ。位置がわかったらすぐに連絡する」
笑顔で言ってキリが船首へ向かって歩き出し、ゾロとシルクへ振り返る。
それに気付いてウソップが彼を見た。
「ゾロ、シルク、行くよ。道に迷わないようについてきてね」
「うるせぇ」
「うん。私は大丈夫」

「おぉい待てキリ！　船番はいらねぇのか!?　メリーをこのままってのも危ねぇだろ！」
「じゃあウソップが一人で残る？　襲われたらそれこそ大変だろうけど」
「やっぱり援護は必要だよな。よしルフィ、おれが最高の援護でおまえを助けてやるぜ」
「おっ、そうか。頼んだぞウソップ」
新たな不安を聞かされて瞬時に表情が変わる。笑顔になったウソップはルフィのシャツから手を離し、急に親しげな態度で親指を立てた。それを見てルフィは嬉しそうである。
独特のやり取りに苦笑した後、キリは船首付近の欄干を蹴って思い切り跳んだ。
常人より軽い紙の体はふわりと飛び上がり、海に落ちる事無く砂浜へ立った。
距離はそれなりにある。しかし風に乗ってか、空中に居ながら前へ進む力が強まったようにも感じ、今日は弱った様子がない。危険性を考慮してふざける態度は無しだった。
ひとまず安心し、ゾロとシルクも船を下りる。
彼のような芸当はできないため濡れるのも致し方なし。小舟もないので仕方なかった。
足首までを海水で濡らして歩きつつ、ふと、あっとシルクが声を出す。
「そう言えば、風を操る能力なら空を飛んだりできないのかな？　ロギアじゃないけど、キリの動きを見てたら、ひょっとしたら高くジャンプすることはできるかもしれない」
「おまえの能力は攻撃専門じゃねぇのか？」
「でも自分の体に触れても斬れないんだよ。ずっと練習で指の周りに作ってたのに」
「まぁ、おれは能力者じゃねぇから詳しくは知らねぇ。試してみりゃいんじゃねぇか？」
「うん。そうだよね」

「だからって今はやめとけよ。海水が跳ね飛ばされるだろうが」
「あ、そっか」
今気付いたとばかりにハッと口を開けたシルクは、恥ずかしそうに頬を掻く。
そんな彼女にゾロは溜息を堪えなかった。
「そいつを手に入れてから注意力が散漫になってやがんな。熱中しすぎだ」
「えへへ……ちょっと、楽しくなってきちゃって」
「鍛錬に熱心なのは良いがな、少しは他にも気を回せ。近頃あいつらに似てきてるぞ」
「そ、そうかな。そんなことないと思うけど」
二人が砂浜に辿り着き、微笑んだキリがメリー号を眺める。
見送ろうと身を乗り出してくるルフィを見て軽く手が振られた。
「それじゃ先に行く。そっちも気をつけて」
「おう。また後でなー」
三人は歩き出して砂浜の先に居る森へと入っていく。歩みに淀みはない。どこを目指せばいいかもわかっているし、恐怖心もない様子だった。
キリを先頭にして二人が続いて、静かな森の中を進む。
「ねぇキリ、ちょっと考えたんだけど、この能力を使って高くジャンプとかできないかな？」
「移動に利用するってこと？　多分できるんじゃないかな。カマカマはボクの能力じゃないからわからないけど」
「また無責任な発言を」
「どんな風に進化させるかは能力者本人の考え方次第って場合もある。横から口出したって良い事ばっかりじゃないって。シルク、とりあえず試してみた方が早いよ」
「わかった。うーん、頑張ってみるしかないか」
和やかに話しながら行ってしまう三人を見送り、ウソップは戸惑いを隠せない。
彼らには恐怖心がないらしい。何が待っているかわからないとい

うのに堂々とした姿だ。
今でも不安に苛まれて態度に表してしまう彼は不安そうに胸を押さえた。
鼓動が速くなっている。
本物の冒険とはずいぶん緊張する物だった。想像していたよりも緊張している。
「ふぅーっ、む、武者震いが……この島に海賊が居るのか」
「心配いらねぇって。おれは強いからね」
「能天気に構えてる場合じゃないわよ。あれ見なさい」
メリー号の上、ナミが指差した先を二人が見る。
いつの間にか岩蔵とトビオが上陸しており、何を言うでもなく進み始めようとしている。片手に小さな鍋を持つ岩蔵は島で最も高い山を見ていてルフィたちに気付いていない。
どことなく不穏な空気だった。
ルフィは欄干の上に飛び乗り、しゃがんだ状態で岩蔵の背へと声をかける。
「おっさん、どこ行くんだ？　今キリたちがどこ行きゃいいか探してくれてるからさ、もうちょっと待ってくれねぇか」
「いや、悪いが心当たりがある。あそこしか考えられねぇ」
「ん？」
「あいつは昔から、宝を高い場所に隠す癖があった。きっとあそこに居るんだろう」
ぽつりと呟かれた岩蔵の言葉は何やら訳があるように見えて。
皆が表情を変える中で、ナミとトビオが疑問を言葉にする。
「おじさん、やっぱり何か知ってるのね。宝の地図を持ってたのも偶然じゃなかったんだわ」
「じ、じいちゃん、ウーナンの知り合いだったのか？　なんでずっと黙ってたんだよ」
「ああ……確かに奴のことは知ってる」
岩蔵が目を閉じ、小さな声で呟いた。
「あいつは、ウーナンはおれの幼馴染だった。ガキの頃同じ村で

育ったからな……」
どことなく寂しげに言って目を開く。
その目はやはり島で一番高い場所を眺めていて、まるで友の姿を見るようだった。

＊

「なんとなくじゃがここにルフィがおる気がする！　上陸するぞ！」
大きなクジラの像が見える島に近付き、ガープは堂々と言い切った。
上陸の理由は孫に会いたいがため。ただしその島に孫が居るとも限らず、情報を掴んだ訳でもなければ、自身の目で目撃した訳でもない。ただ航海の途中で目に入っただけ。ずいぶん島へ近付いているものの、海賊船の一つも見当たらなかった。
完全な見当違いの可能性は高いと感じる。
それでも軍艦の上は慌ただしく上陸準備を行っており、ガープは上機嫌に腕を組んで仁王立ち。
傍らでは溜息を呑み込むボガードが呆れた口調で声を出す。
「なぜあの島に居ると思ったんですか。私は全くそう思いませんが」
「じいちゃんの愛じゃ！」
「つまり根拠はないと」
「しかしそう間違えた考えでもない。軍艦島とここことはそう離れておらんじゃろう」
「それだけの理由では決定打に欠けると思いますが、まぁ、今更言っても無駄なんでしょう」
堪えきれずに溜息を一つ。
ボガードはかぶった帽子の位置を正しつつ、諦めの境地で言葉を続ける。
「今しがたセンゴクさんから通信がありました」

「また後でかけると言っといてくれ」
「そう言うだろうと伝えておきました。まったく、いつになったら本部へ戻れるのやら」
「孫の顔を一目見たら帰るわい。その時にはルフィも連れていくがな」
「支部の者たちも困っていますよ。突然補給させてくれと立ち寄るものですから準備がない。せめて事前に連絡していれば対応も別でしょうが」
「なら先に言っといてくれ」
「もうやめましょうと言っているんです。ゆくゆくはコングさんまで出てきますよ」
「ぶわっはっは！　なぁに、その時はその時よ」
甲板に仁王立ちで話す彼らの傍には、鍛えられた痕跡か、体に絆創膏や包帯を巻いたコビーとヘルメッポが立っていて、以前より少しは緊張が薄れた様子で不安そうにしている。
コビーにとってルフィは恩人。
ヘルメッポにとっては複雑な感情が消せないが、今は憎んでいると言えば嘘になる。
今ここでガープと出会ってしまえば、彼の野望が果たされなくなってしまう気がしてハラハラする。上官に逆らえない身分にありながら、できれば出会わない方がいいのではと思ってしまった。
願わくばこの島にルフィたちが居ないように。
ガープへ声をかける寸前、そう考えていたものの、我慢できずに言葉にしてしまう。
「あ、あの、ガープ中将。ルフィさんはぼくにとって恩人なんです。彼が居なければ海兵になる夢を叶えることができなかった。海兵として、恥ずべきことだとはわかっていますけど、できればルフィさんの夢を応援したいって思ってるんです……」
「お、おいコビー、バカやめろってっ」
「コビー。おまえがルフィに救われたのは結構。しかしそれとこれとは別の話じゃ。ルフィはわしの孫で、これは家族間の話になる」

「それはそうですが……」
「わしが目を離した隙に勝手なことをしおって。一度じっくり話さねばならん」
「センゴクさんに何度叱られても勝手なことばかりするあなたが言いますか」
ボガードの冷たい声が入ってくるもののガープは気にせず、すっかり注意は島へ向いている。
コビーとヘルメッポは不安げに互いの顔を見合わせた。
引き取られて以降、毎日行われる訓練によってガープの強さは嫌と言うほど思い知らされている。その片腕であるボガードも然り。あまりにも強い彼らの力は表現できる物ではなく、以前にルフィたちの強さも間近で見ていたが、とてもではないが敵わないだろうと想像するのが当然。
海賊と海兵に分かれても友達だという認識がある。情がある。
敵になったはずだが海賊を続けて欲しいと思っていて、できることならば止めたかった。
だが止められない。相手は上官であるだけでなく、血の繋がりを持ったルフィの祖父。やはり彼と似ていると思う強引さと身勝手さがあって、とてもではないが止め切れなかった。
長年付き合いがあるだろうボガードですら手を焼く状況。
もはや彼らに為す術はないらしい。
「ではこうしましょう。この島がもしはずれだったなら、大人しく本部へ帰る」
「ふむ。当たりだったら？」
「お孫さんを連れて本部へ帰る」
「わかった。ではそうしよう」
「ただし出会えたとして、万が一お孫さんに逃げられたとして、これ以上は付き合えません。何が何でもマリンフォードへ帰還してもらいます。いいですね？」
「それは頷けん」
「これが最大の譲歩です。もしこれ以上駄々をこねられ、捜索を続

けるおつもりなら、いよいよ軍法会議も免れませんよ。そうなれば孫がどうしただの言っていられなくなります」
「むぅ……仕方ないか」
渋々といった顔でガープが頷き、ひとまず話は纏まる。
しかしコビーとヘルメッポは妙な緊張感に苛まれていた。
恩人と師匠とがぶつかってしまうかもしれない。彼らは家族なのだから本来ここまで緊張する必要もないのに、どちらも武闘家気質で身勝手過ぎるため、出会ってしまえばタダで済むとは思えないのだ。果たして戦わずに終えることができるのだろうか。
「大丈夫かな……この島にルフィさんたちが居ないといいんだけど」
「あいつらには苦汁を舐めさせられたが、ガープ中将に狙われるとなったらなんとも言い難いな。色々あったのに気の毒になってくるぜ」
「だけど、居るって決まったわけじゃないよね」
「そりゃそうだろ。なんたってガープ中将の思い付きだからな」
「そうだよね。大丈夫、きっと問題なんて何も起こらないよ」
「それはそれで複雑だけどな。少しくらいはあいつらが苦しい目に遭うってのも……」
「もう、ヘルメッポさんってば。前のことは吹っ切ったって言ってたじゃないか」
考え方を変えたことで多少は安堵できたか、二人の顔に笑みが戻る。今や肩をすくめて冗談まで言い合える姿だ。共に雑用として働く内にすっかり仲良くなったらしい。
不安になっていたがよくよく考えればガープ中将の思い付きで立ち寄っただけ。
この島に居るはずがない。
安堵する二人へガープが振り返り、にっと口の端を上げて言われる。
「コビー、ヘルメッポ、おまえたちついて来い。他の者は休んでおっていいぞ」

「はっ」
「私も行きます。時間稼ぎをされても困りますから」
「そんなことせんわい。おらんかったらすぐに帰るわ」
「今回の船出の時もそんなことを言ってましたが」
軍艦は静かに島の岸壁へ寄り、足を止める。
一番近くに見えるのは古びた巨大な城だった。

探し物（2）

岩蔵たちは偵察に出かけたキリたちの連絡を待たず、歩き出していた。当然ルフィたちも共に行動し、海賊に襲われないようにと護衛についている。

勝手な行動を責める声はなかった。不満を露わにする二人をルフィが抑えたせいだろう。

彼ら三人はすぐに理由を聞くでもなく、ただ当たり前のように後へ続いていた。

島を歩いている分には何一つ目立った変化がない。

至って普通の無人島。争いごとの気配がない平和な景色だ。

森の中を歩きながらウソップは拍子抜けしたようで気楽な態度だった。

「海賊が占拠してるって割には普通の島だな。おっさん、その話本当なのか？」

「ああ。噂で聞いただけだがな」

「噂か……居るのか居ないのか微妙なとこだな。まさかどっかで待ち伏せしてるんじゃねぇだろうな、おい。や、やべぇんじゃねぇのか？　おいみんな、もうちょっと慎重に歩け」

「心配すんな。待ち伏せしててもおれがぶっ飛ばす」

「お、おう。一見頼もしい言葉だけどなルフィ、相手を見くびるのはよくない。ひょっとしたら弓矢とか銃とかでどっかから狙ってるかもしれねぇわけだし」

「おれ銃弾なら効かねぇぞ。ゴムだから」

「あっ、きったねぇ!?　ずるいぞおまえだけ！」

「んなこと言われてもしょうがねぇよ。ウソップも悪魔の実食えばいいじゃねぇか」

終始和やかな時間である。

別段緊張している様子も無く歩いており、表情も緩んでいた。

しかしそんな空気でもトビオは些か表情が暗く、どうすればいいのかわからない様子。

岩蔵のことが気になった。今まで一度たりとも幼馴染についてなど話さなかったというのに。それがまさか、大海賊のウーナンだなんて。

戸惑いは隠しきれず、だからといって岩蔵に聞くこともできない。

今日の彼はいつにも増して笑みが少なく、独特の雰囲気を纏っていた。その奇妙さが気になって取っ付きにくいと思ってしまう。以前から喧嘩も少なくなかったとはいえ、今日は何かが違う。

突然ルフィたちへ話を持ち掛けたのもそうだ。

海賊を信用する性質ではなかったはずなのになぜ彼らに護衛を頼んだのか。

気になることがあり過ぎて、頭が痛くなりそうだった。

仕方なくトビオは後ろを歩くルフィたちへ振り返り、気を紛らわせるためにも話しかける。

彼らは警戒心もなくあっさり対応してくれる。海賊らしいとは思わないが、そこらの子供とも変わらなそうな雰囲気が今は助けとなった。

「あのさ、おれが海賊の子分になるのって、無理なのかな」

「んあ？」

「なんだよ、いきなり」

不安そうな顔で問われてルフィとウソップが反応する。

海賊になりたいという話の続きだろう。突然ながらその表情を見ると無視する訳にもいかない。

歩きながら真剣な顔で問われたとあって、二人も自然と真剣に話を聞いた。

「やっぱり、おれなんてただのガキだしさ。海賊の仲間になったって役に立てるかどうかわからないし。ウーナンに会って頼んでも、無理なんじゃないかと思って」

「やってみなきゃわからねぇだろ。ウーナンがどんな奴かだってわかんねぇじゃねぇか」

「でも……」

「ウーナンがどうやって仲間を選んでるか知らねぇけど、少なくと

もおれは役に立つ奴を選んでるわけじゃねぇぞ。何もできないとしても弱かったとしても、傍に居て欲しいって思った奴らが今の仲間だ。それに今は何もできなくたって、冒険してりゃ強くもなるだろ」
「そんなのでいいのかな。海賊って」
「バカだなぁおまえ。海賊は自由なんだぞ、自分のやりたいようにやればいいんだ」
笑顔のルフィに言われてハッとする。
ルールに縛られないのが海賊。そのことをすっかり忘れていた。
自らがルールを作って、役に立つ立たないなど勝手な判断をしているのは愚かだと言いたいのだろう。表情といい態度といい、常々何も考えていなさそうだったので驚いてしまう。この瞬間だけはウソップやナミでさえ感心していたようだ。
一度前を向いて、俯いて考える。
海賊になりたい。そんな欲求は以前から持っていた。
家出をしたことだって何度もある。その度に海賊になってやろうと思っていたのだが、不思議と上手くいかずに今日になっていた。今、やれるのだろうかと改めて考えてみる。
逡巡するトビオの背へルフィが声をかけた。
「やりたいんなら好きにやりゃいいさ。でもな、海賊は誰にでもできるもんじゃねぇから覚悟しろ。覚悟がねぇ奴が海賊やったって死ぬだけだ」
「覚悟？」
「自分の命を賭ける覚悟だ」
トビオに向ける言葉でありつつ、傍で聞くウソップがごくりと息を呑む。
普段は能天気でバカに見えるルフィも、やはり海賊。笑みはそのままにそう言った彼の目は真剣で、言い知れない迫力を感じる。とてもバカな少年には見えない。
恐る恐るトビオが頷くと、途端にルフィがにかっと笑顔を変えた。
「でもおでん屋もいいと思うけどな。毎日おでん食えるんだろ？」
「あれは商売用で、おれたちが毎日おでん食ってるわけじゃないよ」

「そうなのか？　なーんだ」
「それに毎日じゃ流石に飽きるし」
「おれは毎日肉でも飽きねぇぞ」
「いやおまえ、肉とおでんをいっしょにすんなよ。肉は調理法が色々あるだろ」
ようやくウソップが口を開いて制止し、辺りの雰囲気は元に戻った。
静かな森の中を歩き、人の姿を見ることもなく、徐々に目的地へ近付いている。向かう先は島で最も高い山。緑は欠片も無く赤土の岩肌が晒されている。
岩蔵は黙々とそこを目指して進んでいた。
ふと気になってルフィが尋ねてみる。
なぜそこまで自信満々に動けるのか。行動だけでそこまでの自信を見せる以上、なんとなく事情は察しているが手持無沙汰となったのだろう。警戒していない声が出される。
「おっさん、この島来たことあんのか？」
「初めてだ。だが遠巻きに見たことがある」
「ふぅん。なんでおれたちまで連れてきたんだ？　黄金奪って逃げるかもしれねぇぞ」
「それならそれでいい。おれが興味あんのは黄金じゃねぇからな」
ルフィが頭の後ろで手を組む。
黄金が欲しくないとは珍しい。怖がりだと自称するナミでさえ黄金の話を聞けば目の色を変え、なんとしてでも手に入れると息巻いているのに、彼の言葉に嘘はなさそうだった。
ウーナンと幼馴染だったという話、嘘ではないらしい。
トビオ自身は今一つ信じられずに居たがルフィたちは疑っておらず、そういうこともあるのだろうという認識。なにせ彼らも他人が聞けば驚くような体験をしているのだ。幼少期に赤髪のシャンクスと共に過ごしたルフィと、父親が赤髪のシャンクスの一味に居るウソップ。名前が大き過ぎるために他人が聞けばおそらく信じないだろう話を持つだけに疑う様子はない。

今度はウソップが岩蔵へと声をかけた。
「でもよおっさん、おれたちに出会うまでにチャンスはあったんじゃねぇか？　その海賊がここに来たのってつい最近らしいし、どこ行きゃいいかわかるなら尚更」
「考える必要があった……今まで踏ん切りがつかなかったんだ」
「それなのにおれたちを連れてきたのか」
「海賊に襲われちゃ堪らんからな」
「おれたちだって堪らねぇっての」
表情を歪めてウソップが呟くものの足は止まらず。岩蔵は尚も前に進む。
複雑な事情があったのだろうか。
深く語らないのでまだ事情が読めない。
態度を見ていれば話す気もなさそうなので、不思議と誰も追及しなかった。
「まぁいいや。それより黄金楽しみだよなぁ」
「おまえは気にしなさすぎだろ。本当に黄金なんてあるのかねぇ」
「なかったら無駄足じゃない。何がなんでもあってもらうわよ」
「おまえはおまえで無茶なこと言ってるぞ……」
二人より後ろを歩いていたナミの声が突如割って入ってきて、それが妙に気合いの入った物だったからか、ウソップがげんなりした顔で肩を落とす。
その時、ナミのポケットの中で子電伝虫が声を出し始める。
キリからの連絡が来たと知ってルフィやウソップも彼女を見やり、取り出された子電伝虫はルフィへ渡される。一応とはいえ船長、話を聞くのは彼がいいだろうと思ったようである。
「きっとキリからよ」
「クジラ見つかったのかな」
通信が始まる。
目を開いた子電伝虫の口からはキリの声が聞こえてきた。
《こちらキリです。どうぞー》
「おれはルフィ。海賊王になる男だ」

《知ってるよ。クジラの像を調べてみた。やっぱり尾は東じゃなかったね》
「じゃあどこ行きゃいいんだ？」
《像から見て北側、一番高い山。尾は曲がって多分あそこを指してる。宝もそこだ》
「へぇ。あ、でもなキリ。おれたちもうそこに向かってんだ」
《どういうこと？》
キリの問いにウソップが声を返した。
当初の予定通りに進まなかったことを報告する。だがそれが功を奏したようだ。
「実はあのおでん屋のおっさんがウーナンの幼馴染だったらしいんだよ。高い場所に宝を隠す癖があったんだと。それで勝手に移動し始めちまったんだ」
《なるほど。まぁでも目的地に向かってたんならいいことだよ》
「それよりおまえら海賊は？　もう倒したのか？」
《こっちには居ない。周りを見回しても居そうにないし、本当に居るのかどうか微妙だね》
「じゃあこっちに合流しろよ。海賊っつってもどんな規模かもわからねぇわけだし――」
《いや、このまま近くの城へ行ってみるよ。あそこならお宝とか眠ってそうだしさ》
「なにィ!?」
危険を考慮して提案したのだがあっさり断られ。
再び不安に苛まれたウソップは自分でも意識せずに声を大きくしてしまった。しかしお宝と聞いて動き出したナミが歩調を速め、二人に追いつくとウソップを押しのけて言う。
「よく考えろよキリ、何度も言うがおれたちは六人しか居ないわけで、戦力はバラケさせない方がいいに決まってるだろ。いいか、もう一回言うぞ。今から全員合流して――」
「いいえ、合流なんてしなくていいわ。そのまま城へ行ってお宝を探して。だけどキリ、取り分についてはわかってるわよね？」

《わかってる。じっくり探してみるから、そっちは任せたよ》
「黄金についてもいっしょだから」
《はいはい》
再びルフィが話し始める。
ウソップは相変わらず不安から騒いでいるものの気にならず、喚き声は聞こえつつも、キリも慣れた調子でルフィの相手をしていた。
「なんか問題あったか？」
《ない。そっちは？》
「おれたちも問題ねぇ。いいか、敵を見つけたら暴れていいぞ。ウソップとナミのことはおれに任しとけ」
《はは、了解。こっちの二人にも伝えとく》
通信が切られ、子電伝虫は眠ってしまう。
それをナミへと手渡し、ルフィは笑った。
「そういうわけでおれたちだけで行くぞ」
「くぅぅ、やっぱり援軍は見込めねぇのか……」
「大丈夫だ。おれは強ぇから誰にも負けねぇよ」
「限度ってもんがあるだろ。どんな奴が相手かもわからねぇのに」
「森を抜けたぞ。ここだ」
前を歩いていた岩蔵が足を止める。ようやく森の中を抜けて山の麓に立ったらしい。だがそこは山というより巨大な岩壁のような様相だった。
高い。とてもよじ登れるような外見ではなさそうだ。
辿り着いたのはいいがどうやって登るのか。
足を止めた一同はひとまず岩壁を眺める。
「で、どこから登ればいいんだ？」
「おれに任せろ。一発で登ってやるぞ」
そう言ったルフィは一団の前へ出て、右腕をぐるぐる回して天辺を見た。
思い切りゴムの腕が伸ばされる。
天辺まで届くことはなかったが途中の岩を掴んだ。そこを起点に跳べば頂上に辿り着くなどほんの数秒の出来事だろう。ルフィは仲

間たちを見回した。だがナミもウソップも否定するように首を横へ振っており、岩蔵とトビオは異質な光景に目を丸々とさせている。
「行くぞ。掴まれ！」
「いやいやいやいや!?」
「無理言うんじゃないわよ！　どうなるかわからないじゃない！」
「そうか？　でもこっちの方が早いぞ」
「死んじまったら意味ねぇんだよ！」
「あんたと違って私たちはゴムじゃないんだから！」
「しょうがねぇなぁ。じゃあどうやって登るんだよ」
言いつつ、ルフィが腕を引き戻すと同時、トビオがある方向を指差す。
「なぁ、あそこからなら登れるんじゃないかな」
「お？　どこだ？」
よく見れば岩山には人間一人がようやく通れそうな道がある。かなり危険な様子だが、他には道もない。どうやらそこを通るしかなさそうだった。
ウソップとナミの顔が曇る。
跳ぶのも危険だが歩くのも危険そうだ。
行かない訳にもいかないため、二人は揃って肩を落とし、溜息をつく。
対照的にルフィは楽しそうだった。
「お～、あそこか。よし行こう」
「ほ、他の道は？」
「なさそうだしいいだろ、あそこで」
「ハァ～……これだから冒険って」
肩を落とす二人を連れて、ルフィが先導して細い道を登り始める。
岩蔵とトビオも後からついて来た。
いつ落ちるかもわからない危険な道。一同慎重に進み始めるも、ルフィだけはいつも通りに軽い歩調で、落ちることさえ恐れずにどんどん進んでいった。
緊張感からしばらく無言になる。

数分間は歩くことに集中していたが、壁に手をついて進みつつトビオが岩蔵へ声をかける。
「じいちゃんってウーナンの幼馴染だったんだろ？　おれ、そんな話初めて聞いた」
「ああ。あいつが海賊になる前の頃だ」
「どんな人だったんだ？」
「知りたいのか。そうか、おまえはウーナンに憧れてたからな」
「おれも知りてぇぞ、おれも」
トビオと岩蔵の話にルフィも興味を持ち、後ろ向きに歩きながら会話に参加した。しかし道を踏み外しかねないルフィの姿にウソップとナミが慌て、厳しい口調で注意するものの聞き入れられず、気にしていないのか岩蔵もそのままで話を始める。
「おでん屋になったのはな、あいつの親父さんがおでん作りが上手かったからだ。炭鉱で金を掘る仕事をしてたんだが、おでん作りが上手くて、ただのおでんでいつも仲間たちを笑顔にしていた。おれはそこに憧れてその味を引き継いだ」
「へぇ。おっさんが始めたんじゃねぇのか」
「商売として始めたのはおれだ。だが味は親父さんの物を引き継いだに過ぎねぇ」
「ウーナンのことは？」
待ち切れない様子でトビオが尋ねる。
彼の後ろに岩蔵が居た。焦る気持ちを理解してか、落ち着いて続けられる。
「ウーナンはそんな父親が好きじゃなかったようだ。毎日汗水垂らして働いて、掘り出せるのはほんの小さな金だけ。時には何も出ない日だってあった。それでも親父や仲間はおでんを食って笑ってる。ガキの頃のあいつは、そんな姿に反発していたんだろう。それまではおれもいっしょになって海賊旗を作ったりしていたが、その遊びを、あいつはいつしか本物の夢にし始めたんだ」
「それじゃおっさんも海賊が好きだったのか？」
ルフィの問いに岩蔵は頷いた。

嘘はない。幼少の頃、海賊に憧れる心があった。ただ今は違うというだけ。

「船出の時にはいっしょに来いと誘われた。だがその時にはおれはおでん屋を始めようと思ってた。世界一のおでん屋になろうとな。だからあいつの誘いを断り、喧嘩別れしてそのままだ」

「じゃあ、何年も会ってないんだ」

「ああ。イーストブルーに来たって話も聞いてたが、結局会わずじまい。今日までずっと」

岩蔵の声は深い後悔を表し始める。

今まで見られなかった感情。初めて聞く声にトビオはわずかに振り返る。

あくまでも岩蔵は前を見ていて、ともすれば山の上を眺めて物思いに耽っていた様子だ。

「おれはずっと後悔していた。互いに道を違えたのは仕方ないとしても、和解さえできなかったことを。チャンスが一度もなかった。今になって、できれば会って話したかったと思ってる」

「そう思った時には、この島に海賊が来てたってことね」

「ああ。ただただ情けねぇ話だがな。それともう一つ、あいつが一度もおれのおでんを食わなかったことだ。おれが親父さんに習って何度作っても、あいつはおれが魂を込めたおでんを食おうとしなかった。今はただそれだけが心残りなんだ」

岩蔵がナミの言葉にも頷く。

きっと語り尽くせないほど思い悩んだのだろう。今の表情がそれを物語っている。

不意に言葉の交流が止まる。

重苦しい空気が流れて数秒の頃、徐々に高い場所へ上っていくため、辺りに吹く風が強くなっていた。体が飛ばされないように気をつけながら、ルフィが笑顔で言う。

「今のあいつなら食ってくれるかもしれねぇと、そんなことを考えちまったのさ。だが」

「今日やっと話せるな。ウーナンはここに居るんだろ？」

「居たとしても、あいつはもう……」
「そんなの勝手に決めるなよ。まだ何も見つかってねぇのに。トビオ、おまえはウーナンが死んでると思うか？」
「え？　い、いや、そんなことない！」
「ほらな。生きてるって信じてる奴が居るんだ。何も見ねぇ内から勝手に諦めるな」
トビオとて、大体の事情は想像できている。ルフィに問われて出てきた言葉はただの願望であることには薄々気が付いていた。しかしルフィはおそらくそれを知って、それでいいと言いのける。
思わず岩蔵は言葉を失くす。
心のどこかで諦めていた。それではだめだと言うのか。
ルフィは前を見て歩き続けながら彼へ伝える。
「ウーナンだってきっと会いたがってるさ。友達だったら言いたいこと言って、謝りたかったら謝れよ。もう少しで頂上だ。きっとウーナンに会える！」
「ああ……」
前向きな言葉に岩蔵が苦笑し、トビオも笑みを浮かべる。
単純な思考だが、それくらいの方がいいのかもしれないと思う。彼の笑顔に押し切られるような形であるが、不思議と気分は悪くない。
それからまた数分、無言で登り続けた。
やがて頂上へ到達し、彼らは誰一人落ちることなく頂上の地面を踏みしめる。ウソップは崩れ落ちそうな姿で安堵の息を吐き、ナミはいよいよ黄金が見つかると胸を躍らせる。そしてルフィとトビオはウーナンに会えるのだと目を輝かせた。
頂上へ到着してまず見えたのは、中央にぽつんと置かれた小さな小屋。
「着いた！」
「あぁ？　おまえら一体どこの誰だ？」
そして強面で屈強な体格の海賊だった。

探し物（3）

子電伝虫の通信を終えた後、キリたちはクジラの東にある城へと向かっていた。

特徴的な建物だがおそらく外れ。黄金を隠された場所ではない。しかしだからといって何もないと決めつけてしまうのは居心地が悪く、一応調べておこうと決定されている。

彼らは歩いて移動するもすぐに城へ到達した。

足を止めて、皆で城を見上げる。

古びた外観で整備もされていない。やはり無人島にあって風化が進んだのだろう。はっきり言ってしまえば、壁にヒビが入った姿を見るといつ崩れるかもわからなかった。

「ボロっ」

「よく突っ立ってられたな。まるで幽霊屋敷だ」

「幽霊、出ないよね」

「出た方が面白そうだけどね。流石に昼間じゃきついか」

「出て欲しいのかよ」

「できることなら」

緊張感も無く会話して視線を下ろす。

扉はわずかに開いていて、片方は外れかけてもいる。侵入には困らなそうだ。

状況を判断し、三人は改めて向き直る。

皆の表情も大体いつも通りが決まってきているらしい。キリはルフィ同然に楽しそうに笑っていて、ゾロは多少呆れつつ、シルクは微笑みつつ彼らを見守る様子だ。

「とりあえず調べてみようか。お宝じゃなくても役に立つ物があればいいんだけど」

「具体的には？」

「なんかこう、役に立ちそうな物だよ」

「それがわからないから聞いたんだよ、キリ……」

適当な発言で微笑むキリに、慣れたとはいえシルクが困った顔を見

せる。
すでにゾロは歩き出していた。彼と話しているとある程度疲れてしまうと知っているため、最初から真面目に聞く気などないらしい。一足先に城の中へ入ろうとしている。
それに気付いて慌ててシルクが駆け出した。
ゾロを一人にしてしまうと迷子になる可能性が高い。こちらはある意味キリ以上の厄介さだ。
この二人と行動した場合、どうあっても彼女の負担が大きくなるらしく、それに気付いたのは今この瞬間。問題が起きないようにと奔走するのは真面目なシルクだけであった。
「あっ、待ってゾロ。一人で行動すると危ないよ」
「そうでもねぇさ。誰が来てもぶった切ってやる」
「そういう意味じゃなくて、迷子になっちゃうかもしれないってこと」
「ガキじゃねぇんだ。そういつもいつも迷わねぇよ」
「前もそう言ってたけど危なかったじゃない。私が目を離してたらはぐれてた」
「んなことねぇ」
「そんなことある」
「二人とも喧嘩はほどほどにね」
仲良く城の中へ入っていく二人を見送り、キリは石造りの階段へと腰を下ろした。
何もサボろうという訳ではない。多少はそういった思惑がないでもないが、今回足を止めたのは理由がある。ポケットの中で子電伝虫が震えていたからだ。
ルフィたちから連絡が来た。
そうだと知って彼は子電伝虫を掌に乗せて通信を開始し、のんきな声で応答し始める。ただ聞こえてきたのは予想と違い、慌てている様子のウソップの声だった。
「はいはい、こちらキリですどーぞ」
《こちらウソップですけどもぉ！　て、てて、敵に遭遇しましたどー

ぞ！》
「あーそうなんだ。おめでとう」
《全然おめでたくねぇよ！　キリ、今おまえらどこいるんだ！　た、助けてくれぇ！》
「ルフィに任せとけば大丈夫だよ。それにウソップは後方支援のエキスパートでしょ。大丈夫、落ち着いて狙撃すればそれだけでいいから」
《いやそれはわかってるんだけど……頭でわかってんのと実際やるのじゃ違うだろっ？》
「ほらウソップ、例の新装備。あれ試してみなよ。ちょうどいい機会だし」
《お、おおぅ……》
気楽な彼の声を聞いていると多少は変わる物があったのかもしれない。叫んでいたウソップの声が徐々に落ち着きを取り戻していく。
あと一歩とばかり、キリがやさしく呟いた。
「もう本物の海賊になったんだ。ここで逃げたら海に出た意味ないよ」
《うっ……そ、それはそうだな》
「ボクらみんな、ウソップならできるって思ってる。だから仲間に誘ったんだ。頑張って」
《……よしっ》
確かに気合いの声があった。
座ったままでくすりと笑えば、様子の変わったウソップの声が聞こえてくる。
ネガティブで後ろ向きな態度の彼も、決して弱い訳ではない。特筆すべきはやはり狙撃の技術。血筋か努力の結果か、事前に見せてもらった腕前は一海賊団の狙撃手を名乗って恥じないだけの技量を持つ。あとは自信を持ってそれを使いこなせればいいだけの話だ。
適当な応援ではなく、心から彼の成長を願って。
かけた言葉は無駄ではなかったらしい。ウソップは威勢よく答えた。

《お、おれだってやる時はやってやる！　いいかキリ、ルフィはおれが守ってやるからな！　おまえは安心してそこで待ってろ！》
「了解キャプテン。そっちは任せた」
《ただあくまでも援護でお願いします！》
「あはは、やっぱりそっちの方がらしいかな。深呼吸して、リラックスしてね」
通信が切れて子電伝虫を仕舞う。その頃には辺りに彼一人となっていた。
心配はしていない。彼らが死ぬ訳はないと知っているためだ。
立ち上がったキリは二人の後を追って城の中へ入ろうとする。急ぐ素振りもなくゆっくりと、周囲の景色を眺めて楽しみながら階段を上る。
物音が聞こえたのはそんな時だ。
城を囲む森、一角となる草むらが揺れる音がする。遠くから何かが接近している音。海賊たちはルフィたちの前に居るらしいので、振り返ったキリは野生動物か何かかと注目した。
さほど間を置かず草むらの中から人の姿が現れる。
その顔を見た途端キリの表情に驚きが生まれた。
海兵の制服に身を纏い、息を切らしながらやってきたのは桃色の髪の少年と金髪のひょろりとした青年。以前別れたはずの、コビーとヘルメッポだったのだ。
「コビー？」
「ハァ、はっ……あっ！　キ、キリさん!?　どうしてこんなところに！」
「あーっ!?　て、てめぇはあの時の！」
「どうしてこんなところにはこっちのセリフだよ。てっきりシェルズタウンで海兵やってるもんだと思ってたのに。まぁでも制服着てるとこ見るとクビにはなってないのかな」
唐突で不思議な再会を前にキリは笑顔で嬉しがり、何気なく彼らへ歩み寄った。しかしコビーの表情は明らかに慌てていて、喜びだけではないことがわかる。隣ではヘルメッポが複雑そうな顔だ。怒って

いるような、気の毒に思っているような、どちらもが入り混じっている。
様子がおかしいのは一目でわかった。
会っていない間に嫌われていた様子でもなく、素直に喜ばれない理由がわからず首をかしげる。
「どうかした？　慌ててるみたいだけど、もしかして誰かから逃げてるとか？」
「あぁっ、最悪だ。想像してた中で一番最悪のパターンですよキリさん！」
「んん？　何が？　ボクのせい？」
「キリさん、ぼくは今でもあなたたちのことを友達だと思ってます。だから、できることなら逃げてくださいっ。今、あなたたちを狙っている人が近くに居ます。特にルフィさんを」
「ルフィを狙ってる？　そこまで有名人になったつもりないけどな」
「それは、ちょっとした理由があって……とにかくすごく強い人ですから。多分みなさんでも勝てません。お願いですから急いでこの島を出てください」
コビーは必死に訴えかけてくる。友人だと思っているという言葉に嘘はない態度。キリは疑いもせずその言葉を受け取ったが、あまりに急過ぎて理解できていない部分もある。
それほど危険だという存在は一体何なのか。
訳が分からずに渋い表情になってしまった。
「とりあえず落ち着いてよコビー。一旦落ち着いて一から話し合おう」
「いえ、あまり時間がないんです。念のためにぼくらが先行してましたけど、もうすぐ傍まで来ているはずですから――」
「おいコビー、今聞こえたぞっ」
コビーが話している途中でヘルメッポが森へ振り返った。
確かに遠くから誰かの声が聞こえている。二人を探しているようだった。低くしゃがれた声で高齢だと感じさせる。ずいぶんな大物

が来たのだろう。
なんとなくの事情を察し、キリが二人へ呼びかけた。
「それじゃ、まずは隠れようか。何か事情があるみたいだし」
「そ、そうしてもらえると助かります。ほんとはぼくらもこんなことしちゃいけないので」
「ちくしょー、なんでおれがこいつらを助けるようなこと……あぁもういいっ。コビーに助けてもらった恩もあるしな。とにかく急いで隠れるぞ」
「二人ともこっちへ」
二人を連れたキリは素早く城の中へ入った。外れかけていた扉を無理やり閉じて、すぐに破られるだろう様相だったが、無いよりはマシだろうという判断である。
扉を抜けてすぐのスペースは広大なエントランスだった。
歪曲した階段が左右にあって二階へ移動でき、一階にはいくつかの扉が伺える。
三人は迷わず二階へ上がり、かろうじてガラスが張られている窓から外を眺めた。
つい先程コビーたちがやってきた方向を見つめて、しばし待つ。おそらく来るとすればその位置。三人揃って身を屈めながら外の様子を伺い、それでいて会話も続けられた。
「君って確かモーガン大佐の息子だよね。海兵になったんだ」
「ふん、おまえらのせいでな。まぁ今ならこれはこれでいいと思えるが……ちなみに名前はヘルメッポだ。バカ息子とは呼ぶなよ」
「実は色々ありまして……その件についても時間があれば話したいんですけど」
「今から何が来るの？」
「驚かずに聞いてください。ぼくら、色々あって本部のガープ中将に預けられることになったんです。今回もいっしょに行動していて、お供としてこの島へ上陸しました」
「英雄ガープの？　ってことはルフィのおじいさん」
「えっ!?　キリさん、知ってるんですか？」

「出会った時に聞いたんだ。ルフィはあんな性格だから大したことだと思ってないらしい。なるほど、ルフィを狙っててボクらじゃ勝てない相手……全くの正論だね」
戸惑うどころかキリは笑みを深めて窓の外を見回した。怖がっていない様子である。即座に理解する姿勢はもちろん、その落ち着き払った態度には動揺が隠せない。
コビーやヘルメッポは挙動不審で、落ち着ける素振りがなかった。
彼らの体には包帯が巻かれ、治療の跡がはっきり残っている。おそらくそれだけの何かを経験したのだろう。必死の訴えを嘘とは思えず、信じざるを得ない状況だ。
まだ標的の姿は見えない。
できるだけ息を潜め、静かな城内は不思議と空気も冷たく感じられて、緊張感はますます高まっていく。キリは余裕を失っていないが二人は徐々に息を乱しかけていた。
「おれたち、どうなるんだろうなぁ。これって明らかに命令違反だろ？　ただでさえ親父の件で失態見せてるってのに、今度こそほんとに処分されるかも」
「で、でも、ルフィさんたちをほっとくわけにも」
「二人とも危ない橋渡ったね。ウチにしてみれば嬉しい限りだけどさ」
「つーかおまえら、教えただけで逃げられるのか？　言っとくがあの人たちの強さは異常だぜ。ここ最近毎日特訓してるけどな、結果は見た通りさ」
「この怪我は全部、鍛錬中にできたものなんです。毎日すごくて」
「充実してるみたいでよかったじゃないか。ボクは海賊だからそういうの全然憧れないけど」
キリが窓から目を離し、城の中を見回す。
ゾロとシルクの姿がない。もっと奥へ行ってしまったのだろうか。
ルフィたちと違って二人は子電伝虫を持っていない。連絡を取ることはできず、現在地もわからない。逃げ出す前にまず二人を探さなければならないようだ。

逃げられるのか、という問いに対し、キリは笑顔でノーだと答えた。
「かなり難しいだろうね。戦って勝てない相手から逃げるのって結構骨が折れる。昔、それがきっかけで仲間が全滅したことがあるし」
「あ……す、すいません」
「謝ることじゃないよ。むしろ助かった。ありがとう」
「どうするつもりだ？　そりゃおれたちからすりゃ捕まえるのが普通なんだろうけどよ」
外を眺めるキリの顔つきが変わった。二人も気付いて覗き込めば、草むらを掻き分けて開けた場所へ出てくる人影がある。前に立つのが老年の男、二人目が目深に帽子をかぶった男だ。
「あの人ですっ。先に出てきた、犬の被り物の方がガープ中将です」
「ちなみに言うが、後ろの人はボガード少将だ。あの人もびっくりするぐらい強ぇからな」
「英雄ガープに少将か。かなりまずそうだ」
姿が見えるようになった頃、城内でも物音がした。
窓から顔を離して音の出所を探れば、二階にある扉からゾロとシルクが出てくる。手には役にも立たなそうな朽ちた鎧や刀剣類。引きずっているせいでガチャガチャとうるさい。
彼らはすぐに身を屈めるキリたちに気付いた。
「あん？　おまえそこで何やってんだ。それにそいつら――」
「コビーと、あの大佐の息子？　どうしてここに」
三人が一斉に唇へ人差し指を当て、静かにするように表情を厳しくする。これだけ静かな周辺では些細な物音が命取りになる。慌てているらしい雰囲気に飲まれて二人は運んでいた物をそっと地面に置いた。音を立てないよう気をつけつつ、姿勢を低く駆け寄ってくる。
同じように窓の傍で隠れ、彼らに近付いた。
なぜかそこに居るコビーとヘルメッポには驚いているらしい。
色々と尋ねたいと思うのだが、そんな状況ではないようで、さほど相手にしてもらえない。
後から来たゾロとシルクは首をかしげてしまう不思議な状況だった。ただ、キリまで真剣な顔をしているため不穏な空気は感じ取れて

いる。
何かまずいことがあったのだ。
ゾロが視線を厳しくして窓の外を見るキリへ尋ねる。
「敵襲か？」
「当初の予定と違って最悪な方のね。かなり強敵だ」
「へぇ、強敵」
「海軍中将、英雄ガープが来てる。ゴールド・ロジャーと渡り合った生きる伝説だ」
言葉を受けてすぐにゾロが好戦的な顔を見せた。怯むどころか望むところらしい。
反対にシルクは表情を歪める。
ガープと言えば知らない者は居ない有名人。勝てる相手ではないと考えるのも当然だった。
自然とゾロとは対照的な態度でキリへ問いかける。
「狙いは私たちかな」
「いや、どうやらルフィを探してるらしい。あのガープ中将が肉親みたいなんだ」
「ルフィのおじいさんが、海兵？」
「それで海賊になったのか、あいつ」
「まぁね。詳しい事情については後々。とにかくここにはいられない。バレない内に裏口から出よう。シルク、先行して。ゾロははぐれないように」
「わかった」
「はぐれねぇっつってんだろ」
指示を受けてシルクが動き出し、後からゾロが続く。
キリは油断せずに再び窓の外へ目をやった。
不思議とガープたちは最初に足を止めた位置から動いていなかった。そこに違和感が付き纏って、何やら嫌な予感を感じるものの、少なくとも現段階では見つかってはいないように思う。泳がされているだけと仮定しても、逃げ出すならば今しかない。ただ不安なのは、彼らが纏う雰囲気を見る限りそう簡単には逃がしてくれないのでは

ないかと想像してしまうこと。遠く離れていながら今まで触れたことのない妙な威圧感を感じている。
外の二人へ注意を向けつつ、キリが傍の二人へ言った。
「ボクらもう行くよ。ルフィたちを回収して島を離れないと」
「お気をつけて」
「言っとくが、おれたちだって命令違反しながら教えてやったんだからな。それを忘れんなよ」
「わかってる。それじゃまたどこかで会えたら――」
体の向きを変えかけ、移動を始めようとした瞬間。
外されかけたキリの視線に、ギロリと睨む目つきのボガードが目を合わせてきた。
全身に悪寒が走る。
言い知れない感覚はいまだかつて感じたことのない、恐怖に似た何かだった。
まずい、と思った時にはその場からボガードの姿が掻き消え。まるでクロの高速移動を見るようだと思いながら、キリは反射的にコビーとヘルメッポの首根っこを掴み、跳んでいた。
転がるようにして逃げ出すと同時に窓枠が両断される。ヒビが入りながらもなんとか残されていたガラスが、砕かれた瞬間に頭上から降り注ぎ、二人が思わず悲鳴を上げる。
怪我はない。だがどうあっても無視できない変化があった。
二階まで跳び上がってきたボガードは軽やかに城内へ侵入し、抜いた刀を納めてそこへ立つ。
想像していたより危険に感じる姿を目にしてキリの表情が歪んだ。
驚愕からか恐怖からか、コビーとヘルメッポは腰を抜かしてしまっているらしい。少なくとも今すぐ動き出すのは無理だろう。
それだけでなく気付いたゾロとシルクも武器を手に駆けつけてきた。
決して状況は良くない。
望んでいなかったはずが、正面から対峙してしまう。こうなってはならないと思っていた状況が目の前に来てしまい、何を想ってか、キ

リはコビーとヘルメッポから手を離さなかった。
呆れた様子でボガードが首を振る。
「なるほど、身を潜めるのは上手い。だが気配を読む術を持っている相手には隠れているだけでは足りないものだ。よく覚えておくといい。それにしても……君たちは何をやっているんだ」
「ボ、ボガード少将……!?」
「あ、あああの、こ、これは……!?」
「君たちが庇うということは友人なのだろう。つまり、モンキー・D・ルフィの一味だな」
ボガードは刀から手を離さずに彼らを見据える。
人数の差で言えば明らかな違いがありながら、容易には動き出せない雰囲気がある。
一目でわかる相手だった。この男は強い。
盾にするようにコビーとヘルメッポを前へ突き出し、キリは笑みを浮かべて口を開く。だがその顔に余裕はない。自分と敵との力量の差を理解している様子だった。
「参ったなぁ。見つかる予定はなかったのに」
「彼らは我々の部下だ。返してくれないか」
「返すとボクらが斬られるんでしょ？　嫌だよ、そんなの」
「罪を重ねない方が身のためだぞ。何も君たちを捕らえようという訳ではない。ただ君たちの船長に会わせてほしいだけだ」
「それで連れていくつもり？」
「……話したのか」
「大体わかるよ。英雄ガープの孫がルフィなんでしょ。とっくに本人から聞いてる」
またやれやれと頭が振られる。そう簡単に話は終わらないらしい。
渡す気はない、と言っているのだ。
このまま戦闘になりそうだとボガードが嘆いて、危険と知りながらもキリは撤回しなかった。
二人を捕らえる彼らは海賊。シェルズタウンで海軍に歯向かった一件も知っている。それだけではない、監査船を航海不能になるまで

破壊した件、第八支部の艦隊を壊滅させた件など、出航直後にして数々の事件を起こしている。流石はガープ中将の孫と言うべきか、嘆くべきか。
捕まえるための理由はいくらでもある気がする。
しかし彼らを捕まえるとは、ガープは一言たりとも言っていなかった。
おそらく捕縛する気などなくて、ルフィさえ引き渡せば見逃してもらえる状況であろう。それを伝えるべきかとボガードが落ち着いた声で話し始めた。
「あの人を怒らせない方がいい。拳骨一発で帆船を沈める男だ。それに人の話を聞かないし、一度言い出せば全く意見を変えないし、命令違反は当たり前、危険な状況でこそ目を輝かせる傾向がある。正面から相手にしない方が身のためだ」
「苦労してるんだね……」
「それに君たちのことは興味がないようだ。我々はモンキー・D・ルフィさえ渡してもらえれば何も言わない。これまでの罪もおそらくは不問となるだろう」
「へぇ。そう」
「渡す気はない、と言うつもりか？」
「そう言われて頷くくらいなら海賊なんてやってないよ」
ボガードがハァと溜息をついた。
ちょうどその時、城の入り口から大声が聞こえる。
「ぬうェいっ！」
大きな音を伴って扉が殴り飛ばされた。エントランスを転げ回ったそれは地面や壁に傷をつけ、石造りの城内にいくつもの傷跡を残し、やがて力なく横たわる。
その後で姿を現したのは件の英雄ガープだった。
入り口に立って腕を組み、笑みを浮かべて仁王立ち、二階を見上げる。
当然、全員の注目が集まっており、皆の顔を見回すことができた。
「小僧ども、わしの孫はどこにおる。案内してもらおうか」

派手な登場はそう驚くことでもない。何をするかわからない人間でありながら、隠密行動より正面から堂々と喧嘩を売るのが好きな海兵なのだから。
苦労しているせいだろう、これによってまたボガードが溜息をつく。
ほんの一瞬、顔を俯かせて肩をすくませ、戦闘への気配がわずかに消えた。
その気を逃すはずがない。敵は二人とも自分たちより強いと思っているのなら尚更。
ボガードの視線が外れた瞬間を機に、キリが仲間たちへ振り返った。
首根っこを掴んだままの二人を引っ張り、突然最も近い窓へと向かって、蹴破った。そのまま跳んで外へ飛び出してしまい、驚く二人を連れ去る。
「ゾロ、シルク、撤退だ！」
「うん！　ゾロ、こっち！」
「チッ、仕方ねぇな」
シルクとゾロも近くの窓を破って外へ飛び出し、地面へと降りた。
先にキリが着地して、悲鳴を上げている二人を引っ張ったまま駆け出す。すぐに後ろからゾロとシルクもついてきた。もはや後ろを振り向く気もなく彼らは森の中へと姿を消す。
驚くほど素早い行動だ。撤退するにも迷いがない。
決断は早く、彼らの行動には幻滅するより先に尊敬にも近い感心をしていた。
窓から冷静にその姿を見ていたボガードは、隠れた後で追おうと脚に力を入れた。
隙を突かれたが問題ない。その程度ならば今すぐにも追いつける。
彼もまた飛び降りようとした時、しかし一階のガープが声をかけて止めた。
「待てボガード。わしがやる」
「は？　しかし」

階段を使って二階に上がり、傍へ歩いて来る。
ガープは上機嫌に笑って被り物とコートを取った。それをボガードへ投げて寄こすと壊された窓から外を見る。すでに彼らの姿はない。どうやら探さなければならないようだ。
そう思いつつも、まだ彼らの気配はしっかり捉えていて。
楽しそうに拳を鳴らしたガープはこんな時を楽しんでいる節がある。
「中々元気のいい若造じゃな。ところでコビーとヘルメッポが捕まっとったが？」
「人質のつもりでしょう。私への牽制に利用していました」
「ふむ、少しは頭が回るか。ますます面白い」
素顔を晒し、ガープの口の端がにっと上がった。
比例してボガードの口から溜息が漏れ出てしまう。
「あれが監査役の嬢ちゃんの報告にあった小僧じゃな。確かにどこかで見た気がする顔だった」
「しかし麦わら帽子の少年は居ませんでしたが」
「なぁに、あいつに聞けばわかるじゃろう。久々に軽く運動してやるか」
そう呟いてガープが窓から飛び出し、怪我一つなく地面へ降り立つ。
喜色満面に駆け出していく彼を見てボガードは思わず頭を抱えずにはいられなかった。
やはり中将としての自覚が欠けているように思える。部下を制止して自らが倒そうとするとは。部下を気遣っての行動ならば理解もするが、今回のそれは完全に自分の好奇心を優先した結果だ。これだから彼の補佐は難しい。
あっという間に姿が見えなくなってしまい、放置しておけば何をしでかすかわからず、放ってはおけないだろう。仕方なくボガードも外へ飛び出した。

VOICE

山の頂上でルフィと海賊が対峙していた。
身長はおよそ二百センチ。獅子のような赤い長髪に、鱗を模した装飾がついた黄金の鎧を肩と腰辺りに装着している。黄金で作られた爪を装着しており、見るからに強そうな外見だ。
懸賞金は千二百万ベリー。
一味の船長を務めるエルドラゴという男は、怒りを露わにルフィを見据えていた。
「おまえら誰だ？　何しにここへ来やがった」
「黄金探しに」
「そうか。つまりわしの宝を横取りしに来やがったってことだな」
鋭い牙を剥き出しに言われる。
その言葉にルフィは小首をかしげた。
「おまえの宝じゃねぇだろ。おれたちはウーナンの宝を探しに来たんだぞ」
「同じことだ！　ウーナンの宝はわしが頂く。いや、ウーナンの宝だけじゃねぇ。世界中の黄金をわしの物にしてやるんだ。つまりてめぇはわしの宝を横取りしようとしてるってことだろ」
「横取りはしねぇよ。ウーナンの宝を探しに来たんだから」
「だから！　今説明したとこだろうがッ！」
二人の会話は今一つ噛み合っていないように思える。
後ろで見守るナミは岩蔵とトビオを背に庇いながら歯を食いしばった。
宝の地図がある場合、こうした状況は相応にあり得る。特にウーナンはイーストブルー最高額の海賊で、黄金を掻き集めたという逸話まであったそう。狙う者が多いのも当然だ。
それにしてもこうして出会うとは思わなかった。
敵は戦う気も満々で肩を怒らせている。
その上でルフィの言葉によって怒りが満ちていくのだから止めようもない。

気付かずのほほんと話すルフィのせいで、さらにエルドラゴの敵意が増大されていった。
「おまえライオンみてぇな奴だな。牙尖ってるぞ、牙」
「やかましい！　トレードマークだ！」
「あっ、おまえもう黄金持ってるじゃん。じゃあウーナンの宝くれよ」
「てめぇは何一つ聞いてねぇのか！　この世の黄金はすべてわしの物にすると言っとるんだ！」
「あいつは……なんでわざわざ怒らせるのよ」
不安そうな顔でナミが呟くもルフィの態度は変わらず。
時同じくしてキリへの通信を終えたウソップが戻ってきて隣へ並んだ。
援護はあるのか。すぐにナミが問いかける。
「キリはなんて？」
「ルフィに任せりゃ大丈夫だって。だが心配すんな、おれが援護してやる！」
「結局こっちには来ないってことでしょ。ほんとに大丈夫かしら」
「ルフィは強いんだろ。そりゃおれの村じゃ眠りっぱなしだったけど、あんなに強ぇキリがそう言うんだからなんとかなるんだろ」
「だけど敵は一人じゃないのよ。一斉に襲われるとまずいわ」
視線の先が変わって、言い合う二人の向こうに並ぶ十数名の海賊たちが見えた。
人数で言えば敵の方が多い。
ルフィが強いとしてもそれだけ居れば隙を突かれても無理はないだろう。
「あいつらが全員こっちに来たら……」
「ちょーこわい」
ウソップが呟くのだが海賊たちに動く気配はなく、むしろ船長から距離を取ろうとしているように見えた。不安から一転、二人の表情に訝しむ色が混じる。
突如エルドラゴが腕を振って部下を下がらせた。

やはり彼らには戦闘の意志がない。ただエルドラゴだけがその気になっている。
怒りで目を血走らせる彼はルフィを睨みつけ、声を大きくしていく。
「てめぇら下がってろ！　こいつはわしが始末してやる……！」
「うし、いいぞ。おまえをぶっ飛ばしたら黄金が手に入るんだな」
両方の拳を打ち鳴らしてルフィが待ち構え、対照的にエルドラゴが両の指を開く。
互いに構えていつ戦闘が始まってもおかしくない姿。
先に動いたのはエルドラゴだったが、それはおよそ攻撃とは思えない挙動で、ルフィは反応に遅れる。エルドラゴは攻撃ではなく大きく息を吸い込んだだけだったのだ。
息をぴたりと止め、挙動が止まる。
直後に彼は大声を出した。
それが攻撃とは思えず棒立ちである。しかしルフィの目に映ったのはエルドラゴの口から放たれる、不可思議にも質量を持った大声、まるでレーザーのような立派な攻撃だった。
「ゴアァッ！」
「いっ!?
咄嗟に地面を蹴って跳び上がった。目にも止まらぬ攻撃はルフィが居た空間を貫くように通り過ぎていき、余波だけで地面がわずかに削り取られている。見た目だけでなく攻撃力は常人のそれではない。明らかな異常は彼を能力者だと連想させ、しかしその実の力がわからなかった。
転がるように着地し、しゃがんだ状態で辺りを見る。
余波を感じる辺り、どうやら相当の威力らしい。触れてはまずいと思うのは当然だった。
少し離れた場所では仲間たちも驚愕していて、全身を硬直させている。
ゴエゴエの実。それがエルドラゴの能力である。
人体に大した変化は無く、ただ大声を出すだけの能力。

ただそれだけと思うのも無理はないが、彼が発した大声はレーザーとなって攻撃に転じる。ただの大声が立派な兵器となるようだ。
ルフィは実の名前さえ知らない状態で、ただ、彼は口からレーザーを出す奴なのだと理解した。口からレーザー。ひどく魅力的な言葉である。
一瞬戦闘を忘れて、ルフィは目を輝かせてエルドラゴを見た。
「すげぇ～！　ビームじゃ～ん！　今の口からビームじゃ～ん！」
「いや待てルフィ！　今のをビームと呼ぶのはおれは反対だ。だって吠えただけだろ」
「ハッ、そうか」
「必殺のポーズも無く飛び出すのが本当のビームか？　よく考えろ。今のをビームと呼ぶには圧倒的に足りない物がある。そう、発射するための装置と、必殺足り得るポーズだ！」
「どうでもいいわよ！　あんたは黙ってなさい！」
ウソップが口を挟むもののナミに制止される。話が脱線しかけたがルフィは素早く平静を取り戻していた。目の輝きが失せて、冷静にエルドラゴを見据えられるようになる。
「そうか、言われてみれば確かにそうだな……あれはビームじゃねぇ」
「あんたもなんで納得してんのよ！　いいから集中しろ！」
再び拳を構えて対峙する。
能力者であることは判明した。間違いない。ただ知れたのは能力の一部だけで気を引き締め直す必要があって、迂闊には動けないのは確かだろう。
しかしルフィは自ら動き出した。
待っていても埒が明かない。ならば自らの攻めで道を切り開くのみ。
恐れを知らずに真正面からエルドラゴへと向かって行った。
「おおぉっ！」
「フン、身軽なのはわかった。だがそう簡単に避けられると思うなよ」

エルドラゴが大口を開けて深く息を吸い込む。
走りながらもルフィは次の攻撃が来るのだと予測する。一瞬でいつでも避けられるよう、全身から余分な力が抜かれた。一瞬の判断で本能から敵の挙動を予測し、反応するのは彼の優れた感覚によるものだ。さしたる思考もなく決断できるのは動物並みに本能で動いているせいだろう。
彼の様子を見ながら、前のめりになって大口が開かれる。
エルドラゴはその口から再び大声を発した。
「ハァッ！」
今度は、しかし先程とは違っていた。確かにその口からは大声が発されたのだが、攻撃となるレーザーではなく、ただ単なる大きな声。だが常人の比ではない。距離に関わらず鼓膜を破りかねないほどの大音量が襲ってきて、思わず表情を変えたルフィは脚を止めて耳を塞いだ。
ルフィだけでなく離れていた四人にまで影響が色濃く出ている。
まるで音の壁。強烈な大声は鼓膜を震わせた彼らの感覚を狂わし、足元をふらつかせる。
直接的ではなく、それでいて体にダメージを与える、回避を許さない見えない攻撃。たとえ手で耳を塞いだところで防ぎ切れるような声量ではなかった。
無理やりにも明確な隙が作られてしまう。その一瞬で接近を許していた。
荒々しく近付いて来たエルドラゴは目を回すルフィを捉え、右腕を振りかぶり、黄金の爪で頬を切り裂く。鮮血が舞い、殴られたような衝撃から彼は受け身も取れずに倒れ込んだ。
「うぅっ!?」
「耳が痛ぇか？　そりゃ仕方ねぇ。力の差を思い知れ」
倒れたルフィへ爪が振り下ろされようとする。
耳を押さえながらそれを見ていたウソップが叫んだ。
「ルフィ、危ねぇ！」
ルフィには聞こえていない。聴覚が一時的に麻痺しているようだ。

振り下ろされかけた腕には己の目で気付いた。
考える前にごろりと転がって、鋭利な爪からなんとか逃げる。黄金の爪は硬い地面に突き立てられた。相当な強度で、欠けることもなくそこに確かな跡を残している。
何度か転がったルフィは軽やかに起き上がった。
耳の異常は治っていない。体にも明らかな不調が出ていて、妙に体がふらつき、浮遊感が消え切らない。それでも時間を置けば徐々に回復してくるだろう。
少なくとも今は視覚に頼るしかなく、苦しげな顔で拳を構えた。
エルドラゴはこの機を逃すまいとさらに突進を仕掛けてくる。
「逃がさんぞ麦わらァ！」
「うわっ!?」
「ズタズタに切り裂いてやる！」
風を切りながら両手が鋭く突き出されてくる。
鋭利な爪を装着しているのだ。触れれば頬を切られたようにただでは済まない。
後ろ向きに走ってルフィが逃げるものの、エルドラゴが追い縋って次々攻撃が行われる。避けるのも一苦労だ。避け切れない一撃で服が切り裂かれ、腕が切れて血が流れて、危うく帽子まで傷つけられそうになる。麦わら帽子が傷つきかけた一瞬、ルフィの表情が変わった。
突然足を止めてその場へ踏ん張り、右腕を振りかぶる。
「くそっ、おまえ……！」
「あぁん？」
「いい加減にしろォ！」
巧みに攻撃を回避し、カウンターとなるパンチを頬へ叩き込む。
歯を食いしばって受け止めたエルドラゴだったが、あまりの衝撃に足元がふらつく。
見ていたトビオや海賊たちが息を呑んだ。
あまりに強烈な一撃。エルドラゴの巨体が揺れる。
それだけでは飽き足らず、左腕を自身の後方へ伸ばされ、更なる追

撃が行われた。
この時初めて彼らは気付く。彼もまた悪魔の実の能力者なのだと。
ゴムの伸縮を利用された攻撃は急速に敵の腹へ向かって行った。
「ゴムゴムの、銃弾(ブレット)オ！」
腹を叩いた一撃で巨体が飛ぶ。勢いそのままに後方へ流れていく様は多くの者に大口を開けさせた。だが飛んでいる最中、エルドラゴは睨む目つきでルフィを見る。
不穏な空気に気が付いた。
反射的に動き出そうとした瞬間に、彼の口からレーザーとなる大声が発されたのである。
「ウォオラァッ！」
「うええっ!?　またアレだ！」
「ルフィ、避けろ！」
ウソップの応援も空しくレーザーがルフィの腹へ直撃する。
風を巻いて進むそれは逃げるのも難しく、圧倒的な威圧感を持って前へ進み続けようとしており、地面に着いたままの足が踏ん張ろうとしても効果がない。しかもどんな性質なのか、触れているだけで全身の内側が奇妙に揺れるようだ。
視覚で捉えられるようになっていてもそれは強烈な音波。
触れているだけで体中の水分が揺さぶられているのだろう。ゴム人間のルフィにとって衝撃は大敵ではないものの、人体構造自体は常人と変わりない。人体の水分が揺さぶられ、さらには脳まで揺すられて、普段あまり感じない気持ち悪さに囚われる。その上で途方もない衝撃があった。ついに彼は吹き飛ばされてしまい、勢いよく背中から地面へ落ちた。
山から落ちるギリギリの位置。
激しく咳き込み、視界が回っているのを自覚しながら必死に立とうとする。
だが脳を揺さぶられた結果だろう。体に力が入らず、何度も失敗して地面にへたり込んだ。ごろりと転がってうつ伏せになり、口からは少量の血反吐が吐かれる。

「げほっ、おえっ。なんだこれ……」
「おいルフィ、早く立て！　またあいつが来るぞ！」
「ウソップ？　何言ってんだ？　耳がキーンってしてて聞こえねぇな」
「敵が来るっつってんだよ!?　早くしろ！」
バッと跳び上がる影が頭上から飛来した。
気付いたルフィは必死の形相で地面を転がって回避する。
荒々しく両足を振り下ろし、着地したエルドラゴは彼の頭があった場所を踏みつける。しかし逃げられたと知るや、直後から攻撃に転じようと両腕を構えた。その前になんとかルフィが素早い動作で起き上がり、しゃがんだ状態で蹴りを繰り出す。
「ゴムゴムの鞭！」
「おっと」
足首辺りを狙った足払い。エルドラゴが軽くジャンプしただけで回避される。
着地の前に大きく息が吸い込まれた。
体を伸ばさずとも届くだけの距離。レーザーであれ、鼓膜を襲う大声であれ、繰り出されれば回避は不可能。どちらを取っても命の危険に関わる攻撃だった。
まずいと思って迷わず足が振り上げられる。
避けられないなら止めるまで。
ルフィの蹴りがエルドラゴの顎を捉え、開かれた口を無理やり閉じさせた。当然呼吸は中途半端に終わり、声も出せず、能力の使用も中断された。
一方でその攻撃は敵の怒りを買う物。慌ててルフィは一度距離を取ろうと後ろへ跳んだ。
背中から地面に落ち、すぐに立ち上がったエルドラゴは目を血走らせて怒りを表す。
「ぐぬぬ、この小僧……！」
「ハァ、舐めんな！」
一旦動きを止めて対峙するが、状況はどちらが有利とも言い辛い。

しかし傍から見ている分にはルフィの分が悪いと見えてしまう。敵は耳を壊すだけの力を持っているせいだ。
手に汗握って見守るウソップの隣、ナミが表情を強張らせる。
「よ、よぉしいいぞルフィ！　そのまま一気に倒しちまえ！」
「だめよ。相手はあの大声でルフィの動きを制限するのよ。正面からぶつかっても分が悪いわ」
「じゃあどうしろってんだよ。ルフィは器用なことできる奴じゃねぇぞ」
「あいつの能力を封じられれば楽になるんだろうけど……」
顎に手を当ててナミが考え始めた時、呟いた声に反応してウソップの顔つきが変わった。
キリと話したばかりではないか。戦闘で勝つには何が必要になるのかを。
「そうだっ」
ウソップは左手にパチンコを持ち、番える弾として新たに作った特殊弾を持った。
紐を伸ばして狙いをつける。
狙いは当然、エルドラゴの口。
彼の能力を封じるにはどうあってもその場所が狙い目で、唯一と言っていい弱点のはずだ。
彼は素早くそれを見切っており、緊張しながら動きを止める。
「何するつもり？」
「まぁ見てろ。狙撃に関しちゃ、おれはこの一味でトップだ」
構えた状態でチャンスを待つ。
エルドラゴとルフィは何やら話していた。
「おし。耳が元に戻って来たぞ。あーよかった、聞こえ無くならねぇで」
「それも時間の問題だ。この能力が好かねぇようだな、麦わら」
「うん。だってうるせぇし」
「わしはこの海の戦いで一度も負けたことがねぇ。なぜだかわかるか？　生物の弱点は皆同じだからだ。鼓膜をぶち破って前後不覚に

なりゃあ、どんな奴が相手でもわしの負けはない」
「んん？」
「今、決着をつけてやる」
エルドラゴが背を逸らせ、一際大きく息を吸い込んだ。
言わば必殺の一撃。途方もない大声で人体の限界を超える。その後で、立つことさえできなくなった敵を仕留めることなど赤子の手を捻るより簡単だ。
絶対の自信を持つからこその必殺。必ず敵を仕留めると知っている戦法だった。
些細な仕草でも決着をつけにかかったのは一目でわかる。
ウソップはこの機を逃さず、大口を開けたエルドラゴの、やはり口の中へ狙いをつけた。
そうして呼吸を整え、意を決して放つ。
「こいつをくらえ！　必殺！　タバスコ星！」
「おごっ!?」
放たれた弾丸は真っ直ぐに宙を飛び。
大きく息を吸い込んでいる最中に異物が口の中へ飛び込んできた。硬くて丸い物だが、口内に接触した途端にパンっと割れて、中身が飛び散る。本人には見えないものの赤くてドロッとした液体。舌へ触れた途端、辛味として強烈な痛みが口中に広がる劇薬だ。
辛味は痛覚で感じ取られる。言わば味ではなく痛みだ。
辛さのみを追求して製作されたそれは急ごしらえだったとはいえ、驚異の破壊力を持ってエルドラゴの舌を犯す。凄まじい痛みが口内へ広がり、汗が急激に噴出して、全身が熱くなった。
叫ばずにはいられない。だが能力を使用する余裕すらなくて、発されたのはただの大声だった。
「かっ!?　からぁ～っ!?」
「よぉし見たか新兵器の威力！　隙を生み出したぞルフィ！」
「しっしっし、やるなぁウソップ」
逃しようのない大きな隙を見出して、ルフィが駆け出した。
軽やかに跳んで首が後方に伸ばされる。異質な光景だったが、攻撃

の予備動作らしい。
縮む力を利用して思い切りの良い頭突きが繰り出される。
「ゴムゴムの、鐘！」
「おうっ!?」
辛味に囚われて呆けていたエルドラゴの額に凄まじい痛みが走る。喰らった勢いで体勢が崩れ、背中から転びそうになった。それを必死で耐えてなんとか転ばずに済む。
しかしだからこそか、ルフィの攻撃は続いていた。
「鞭！」
「ぐほぉ!?」
鋭い蹴りが胴体に刺さり、また足元がふらつく。
「銃弾（ブレット）！」
再び腹へ強烈なパンチ。
もはや立っているのも辛く、エルドラゴは今にも倒れそうだった。
「んん～……ガトリング！」
とどめとばかりに両腕による無数のパンチが与えられた。まるで嵐だ。息つく暇もない乱打は全身へぶつかり、耐えようと脚を踏ん張る時間さえ許してくれない。一方的なまでに彼を痛めつけ、極めつけにとどめの一発が顔面へ直撃して、全力で殴り飛ばされた。
今度こそエルドラゴは滑るようにして地面へ倒れる。ダメージは凄まじく、かつてないほどの疲労感が全身を包み込んでいた。
地に背中をつけて一時動けなくなるが、悔しさからか体は動いて、すぐに立ち上がった。
まだ終わっていない。血走った目がそれを物語っている。
諦めの悪い様子で彼は肩幅に足を開き、体に力を入れて、肉弾戦にて迎え撃つ素振りを見せた。
従ってルフィも応じて、両腕を後方へ伸ばして駆け出す。
馬鹿正直に真正面から真っ直ぐ。決着をつけるべく更なる力が込められた。
「うぐっ、ごふっ。な、なめるなよぉ……！」
「もう終わりだ！　ゴムゴムのォ――！」

「能力が使えなくとも、貴様なんぞにっ」
舌が辛味でやられたせいか、妙に舌足らずな様子で呟かれる。だが聞く耳も持たず。
急速に接近したルフィが全力でその両腕を突き出した。
「バズーカァ！」
「ごぁあああっ……!?」
胴体に直撃した瞬間に黄金の鎧が砕けて、耐え切れずにエルドラゴが意識を手放した。
力を失くした巨体はゴム毬のように地面を跳ねて飛んでいく。やがて彼の部下たちの下まで飛んでいくと、言葉も無く突っ立って居た部下たちへ当たり、下敷きにしてしまった。
その後、完全に沈黙した彼が立ち上がってくる様子はない。
ルフィも着地し、動きが止まる。
決着はついた。
敵の頭が負けた以上、下敷きになった彼らもこれ以上は向かってこないだろう。
誰もがそう思っていた。
そのせいか、戦いに熱中するあまり注意力が不足していたとも言える。
「ふぃー、終わった。軽く運動したら腹減っちまったなぁ。あとでおでん食わしてもーらお」
「す、すげぇ……あいつ、あんなに強かったんだ――」
「動くなァ！」
トビオの呟きを無視して大声が出された。
不審に思ってルフィが振り返ると、トビオと岩蔵の背後に二人の海賊が立っている。エルドラゴの部下だ。決着がつく前に移動して、船長の手助けをしようとしていたらしい。
エルドラゴが負けた今、苦し紛れの人質だった。
首筋にはサーベルを当てられて二人は動くことができない。
ルフィは慌てもせずにじっとその様子を見ていた。
「おい、おまえのことだ麦わら！　聞いてんのか！」

「聞いてるよ。だから動いてねぇだろ」
「よ、よぉし、それでいい……いいか、おれたちに逆らったらどうなるかわかるだろう。おまえはこれ以上戦うな。それと、おれたちに黄金を寄こせ」
「そうすりゃこいつらは無傷で解放してやろう」
「まーおれはそれでもいいんだけどな」
服を叩いて、転げ回った際に付着した砂を落とし、麦わら帽子からも砂が払われる。
のんきな仕草だ。海賊たちは歯噛みする。
それ以上の行動がある訳でもなく、睨み合った状態で、ルフィが再び帽子をかぶった。全く警戒心を持っていない。二人を見捨てるかのような表情は驚くほど落ち着いていた。
「でもそれだと怒る奴が居るんだよ。おまえら気をつけた方がいいぞ」
「へっ、何言ってやがる」
「おまえさえ始末できりゃ、こっちは別に怖い物なんて――」
言いかけていた片方の男が、唐突に背後から頭を殴られる。ゴンっと痛そうな音が響き、昏倒まで一瞬だった。彼はサーベルを取り落としてその場へ倒れてしまう。
もう一人の男が短い悲鳴を発して怯えるものの、同じく背後には攻撃が迫っていて。
ウソップが振り切るハンマーが彼の後頭部を思い切り叩いた。
「ウソップハンマー!」
「げふぅ!?」
こちらも痛そうな音を残して倒れてしまう。
スカートの下に隠していた三節棍を一本の棒として組み立て、構えるナミと、ゴーグルをつけて金槌を持ったウソップが海賊たちの後ろへ回り込んでいた。彼らはルフィを恐れ過ぎてその他の二人をすっかり失念していたらしい。なんとも間抜けな終末だった。
地力で敵を倒した二人は得意げに胸を張る。
「誰のお宝に手を出そうとしてるのよ。黄金は私がいただくんだか

ら」
「へへっ、キャプテン・ウソップ様を忘れてもらっちゃ困るなぁ。これで全部終わりだ」
　些細な出来事とはいえ仲間の役に立ったことは変わりない。二人は誇らしげだった
　岩蔵とトビオは放心した様子でしばし言葉が出せず、歩み寄ってくるルフィは上機嫌に笑っている。ともかくこれで全て終わったのだ。
　ようやく状況が落ち着いて、辺りには敵の姿が転がり、後は無人らしい小屋が立ち尽くすのみ。
　やっと探索を始められそうである。
「終わったな。おっさん、おでん大丈夫か？」
「ああ。問題ねぇ」
「お、おまえら、めちゃくちゃ強いんだな。あいつらも強そうだったのに、こんなにあっさり」
「そりゃおまえ、おれは海賊王になるんだからな。あんな奴に負けてらんねぇよ」
　にひっと笑って気楽な声。戦闘時の表情とはまるで違っていた。
　トビオはその顔から目が離せず、ただただ驚いて返事もなく見つめていた。
　振り返ったルフィはぽつんと立っている小屋を見る。
　辺りに黄金らしき物はない。ならばあるとすればそこだけ。
　全員の視線が同じ場所に集まっていた。
　もうすぐウーナンに会える。
　自覚した途端、戦闘の恐怖さえ忘れて、トビオが密かに息を呑んだ。
「あそこにウーナンが居るのかな」
「とにかく行ってみようぜ。ここがようやくゴールなんだ」
「さぁて、黄金はどれくらいあるのかしら」
　先に歩き出す三人の後ろへ続き、トビオと岩蔵はそれぞれ違った理由から鼓動を速めていた。
　出会いと再会。祖父と孫では状況が違う。
　しかし緊張する心は同じであって。

トビオは自分を奮い立たせるように拳を握って、岩蔵は片手に提げたおでんを落とさないよう持ち直し、今からウーナンに会うのだという心構えで小屋へ向かう。

扉が開かれた。

不思議と、中には何も置かれていない殺風景な景色だけが広がっていた。

ＶＯＩＣＥ（２）

五人は臆せず小屋の中へ入ったが、そこには何もない。
黄金どころか生活感の欠片も感じられず、目立つ物と言えば扉から見て正面の暖炉だけ。
他の部屋へ通じる道も無く、完全な密室である。
黄金などどこにも見当たらない。欠片さえ見つからない一室だ。
部屋に入った五人は立ち往生して辺りを見回した。
「なんだここ」
「何にもねぇとこだな……」
「黄金はどこよ。隠し部屋か何かがあるのかしら」
「ウーナンは？　ここに来れば会えるんじゃ」
困って立ち尽くす五人の中で、何も言わずに岩蔵が歩き出す。
奇妙なのは何もないこの部屋で暖炉だけが置かれていること。ここは比較的暖かい海域だ。いくら高い場所と言えども暖炉を使わなければならないほど冷え込むことも少なく、また他に必要な物が揃えられていないのにそれだけがあるのは不自然過ぎる。
おそらくナミが言った通り、どこかに道があるのだろう。
試しに岩蔵が暖炉を横から押してみれば、それは思いのほか軽く動いた。
いとも簡単に動いた暖炉が退いた場所、そこに新たな道を発見する。地下へ通じる階段だった。見ていた四人はあっと声を出して喜色を前面に押し出す。
「すんげぇ！　隠し通路だ！」
「つまり黄金もウーナンが居る部屋も地下に隠されてるってことか！」
「いいわよ。良い流れになってきた」
「やっとウーナンに会えるんだ……！」
「ここに、あいつが」
岩蔵もまた小さく呟き、四人と顔を見合わせると慎重に階段を下り始める。

巨大な山の内部を掘って空間が作られたのだろう。
階段は思いのほか長くて、道幅は狭い。一人ずつでなければ歩けないほどだ。
通路の中は薄暗い。
明かりが無ければ歩く事さえ危険で、外の光が届かない位置まで来ると流石に危険だと判断する。ウソップが皆の足を止めた。
「ちょっと待ってろ。今火をつけるから」
「ウソップはなんでも持ってんだなぁ。いやー助かる」
「まぁな。そこはほら、キャプテン・ウソップの頼りになるところよ。おまえらおれを尊敬したならキャプテンと呼んでもいいぞ」
「いや結構」
「間に合ってるわ」
「トビオ、どうだ？」
「ありがとな、ウソップ。助かったよ」
和やかなやり取りの間に簡易の松明を用意し、先頭の岩蔵へ渡される。
それからさらに下へ降りて行った。
さほど深く掘られていた訳ではないようで、数分とせずに到着する。
地下道の突き当り、木製の扉があった。
そこが一番奥だと感じて全員の表情に喜びが表される。いよいよその時が来たらしい。
「着いたのか？」
「あそこがゴールだろ。つまりこの扉の向こうに」
「黄金があるってわけね」
「いやそこはウーナンが居る、だろ」
緊張した面持ちで岩蔵が扉に手をかけた。だがその後は迷わずに押し開かれる。
軋む音がして、古臭い匂いに包まれた。
室内は暗闇。
そこに一つだけ影が見える。

松明を持って照らしてみれば、椅子に座る誰かの姿だった。
埃が溜まったコートと帽子。海賊然とした風貌の人物で、だがそこに肌と肉は無く、長い期間孤独に過ごしたのだろう、すでに朽ちて骨だけの存在となっている。
部屋に入ったトビオは絶句した。
座っていたのは確かにウーナンの旗印を帽子に刻んだ、おそらくその人だろう人骨だったのだ。
「こ、こりゃあ……」
「まさか、ウーナン……？」
「違うっ！　ウーナンが死ぬわけないだろ！　こいつは偽物だ！　それかただの人違いで、だって、ウーナンは伝説の海賊で、こんなところで死ぬわけが――！」
「トビオ」
取り乱す彼に静かな声がかけられた。肩にやさしく手が置かれる。
トビオが振り返ると沈痛な面持ちの岩蔵が居て、わずかに首を振られる。
間違いないのだ。間違えるはずもない。
そこに居るのは確かにウーナンで、変わり果てた姿になってもそうだとわかった。
伝えられて、トビオが俯いてしまう。
彼は伝説の海賊と呼ばれたはずだ。世界のほんの片隅、たとえイーストブルーでのみの話だったとしても、その偉業は広く伝えられていたのである。
こんな暗い場所で一人、死に絶えているなど。
憧れを持っていたせいか意識せずに涙がこぼれてくる。
重苦しい雰囲気の中、振り返ったウソップが壁に描かれた何かに気付いた。
「お、おいっ、これ見ろ」
「ん？」
全員の目がそこを見る。
壁一面、土を削って文字が描かれている。

火に照らされたそれを見て、岩蔵は呆然と呟いた。
「間違いない。ウーナンの字だ」
「最期のメッセージかしら。誰かが来た時に何か伝えようと思って」
「えっと、あそこが最初か……」
文面の一番最初の文字を見つけて、ウソップが声を出して読み始める。
小さな空間に声が反響し、不思議なほどその言葉が頭の中へ残った。
「黄金を求めてここへ来た者たちよ。我が名はウーナン。残念ながらここには黄金はない」
「なんですって!?」
「集めた黄金はすべて本来の持ち主の下へ返した。かつては命を賭けて追い求めたお宝も、今のおれにとって価値がある物とは思えない。ある一人の男の言葉を思い出したからだ」
驚愕するナミをも気にせず、ウソップは読み進める。
「黄金は笑わねぇ。石ころと同じだ」
「あっ……それって」
「あの時、おじいさんが言ってた」
「そうだ、おれが命を賭けてでも欲しいと思った物。それが黄金だと思って航海を続けていた。だがようやく違ったのだと気付いた。おれが欲しかった物、それは黄金ではなく、黄金を求める〝冒険〟その物だったんだ」
ごくりと息を呑みながら続ける。
文字は所々かすんでいて読み辛い。きっと最後の力を振り絞って描いたのだろう。
その想いに胸を熱くしながら、ウソップは表情を変えて読み切ろうとしていた。
言葉が進む度に皆の表情も変わる。
今やトビオも嘆こうとはしていない。一人の男の、最期を看取ろうとしている。

「ここにはもう黄金はない。だがそれよりもずっと大切な物がある。おれにとって生涯最高の宝だ。どうかこの場所を荒らさないでやってくれ」
「宝……？」
「おっさん、ウーナンの手。何か握ってる」
ナミが小首をかしげた時、ルフィがそう言った。
見ると確かに白骨の右手が大事そうに何かを握りしめていた。
何も告げずに岩蔵が歩み寄る。
持っていたおでんの鍋を置き、傷つけないようそっと手を開いて、それを受け取る。
黒い布だ。それだけで何なのかわかってしまった。
立ち上がった岩蔵はボロボロの海賊旗を両手で広げ、自身の眼前に掲げる。
それはかつて二人で作った唯一の旗。
二人の絆を表して、いつか一緒に海へ出ようと誓い合った頃の物。
胸が熱くなってくる。
まるで彼の声が聞こえてくるようだった。
喧嘩別れをしたあの日、互いに殴り合って、謝罪の一つも無いまま海へ出てしまったが、この旗を手放そうとした日はなかった。あの日からずっと、二人で同じ船に乗り、冒険した分だけ同じ経験をして、共に長い歳月冒険を続けていたのだ。この選択に、冒険に、人生に、欠片たりとも後悔はしていない。胸を張って海賊として生きたのだから。
もちろん、彼の言葉などではない。彼はすでにこの世を去った。
しかしこの時だけは掲げた海賊旗を目にして、彼の声が聞こえてくる気がする。
岩蔵の頬が人知れず涙に濡れた。
「おっさん、こっちにも何か書かれてる」
ウソップが別の壁、決して大きくはない字を見つける。
壁に手をつき、それを読み始めた。
「岩蔵。生涯最高の相棒へ最期の言葉を残す。おれは海賊、おまえ

はおでん屋、だがおれはおまえを下に見たことはない。おまえとおれは常に肩を並べていた。誇りの高さはいつも同等だった」
「ウーナン……！」
「世界一のおでん屋になれ。今なら、素直にその背を押してやれる……」
読み終えてウソップは立ち尽くした。
人の声とは違って、文字からは感情が伝わってこない。果たして彼が嘘をついているのか、心からそう思っていたのか、その文面を読んだだけではわからないだろう。しかし、それは本来ならばの話だ。文章を読んだ今思うのは、彼は本当に自分の人生に満足していたのだということ。
人生最期の言葉は友への激励だった。
この場所でどんな表情を浮かべ、沈黙したのか、知ってみたかった。今はもう確認することも叶わない。だがきっと笑顔だったのだろうと思う。
ウソップは鼻をすすって、鼻の下を指で掻く。
ルフィは真剣な顔でじっと壁面を見つめていて、ナミは悲痛な面持ちで俯いた。
しばし静寂の時が訪れる。
もう何年も前のことだろうに、彼の最期を感じ取ろうとするかのよう、そこにある空気を肌で感じる。ただそれだけでも言い知れない感覚に心が動き出していた。
一際大きく、鼻をすする音がする。
その時トビオはゆっくり動き出し、涙を拭って、岩蔵のズボンを掴むと今にも泣きだしそうな顔で言った。視線は下げられたままだが、岩蔵はやさしい目で彼に視線をやる。
「じいちゃん……ごめん。おれ、じいちゃんのこと知ろうともせずに、おでん屋のことバカにして、勝手なことばっかり」
「気にするな。謝ることじゃねぇ」
目元を腕で拭い、海賊旗は左手へ、右手を彼の肩に置いた。
しゃがみ込んで目線を合わせる。

岩蔵はとてもやさしい表情でトビオの顔を見つめ、やがて語り始めた。
「いいかトビオ、おまえはおまえの思う通りに生きろ。おれの友がそうしたように、人生に悔いを残さないようにな。おれはずっと見守っているぞ」
「うぅ、じいちゃん……！」
トビオが強く目元を擦る。
そんな彼の頭を撫でてやった後、トビオに背を向けて、岩蔵はウーナンの前に腰を下ろした。
胡坐を掻いて正面から彼の姿を見据える。
こうして向き合うのは、何年振りだろうか。
今はもう悲しみはない。涙を流す必要はなかった。
置いていた鍋を手元へ引き寄せ、それを自分の前に置く。
もう何年振りかで晴れ晴れとした表情。彼は笑顔で友へと声をかけ始めた。
「ウーナン、聞こえてるか。おまえとこうして話すのも何年振りだろうな」
返事はない。それでいいと思う。
海賊たちが見守って、孫がすぐ傍で見つめる中、岩蔵は言った。
今はもう目に光を灯さない、事切れた友の亡骸へ。
自分へ言い聞かせるような言葉を彼に受け止めて欲しいと願って。
「今に見ていろ。おまえが夢を叶えて黄金の海賊と呼ばれたように、おれも世界一のおでん屋になってやる。だからそっちへ行くのはしばらく先だ。はっはっは、悪いな」
笑顔で言いのけ、後ろを振り返らずにその名を呼ぶ。
「麦わら。さっき腹が減ったと言ってたろう」
「ああ」
「このおでん、こいつの代わりに食っちゃくれねぇか」
「いいのか？」
「もう食えねぇだろうからな。生涯おれのおでんを食わなかったことを後悔するくらい、美味そうに食ってやってくれ。当然それくらい

美味いんだがな」
「そうか。いいぞ」
呼ばれたルフィが岩蔵の隣まで赴き、同じく胡坐を掻いて座る。
鍋を取って蓋を開けた。
すっかり冷めてしまっている。店で見た時と全く同じという訳ではない。
気にせずルフィは手づかみでおでんを食べ始めた。
やはり、美味い。
感想はただそれだけでも十分で、他に言葉など必要ない。
無駄な装飾などせずとも言葉はそれ一つで十分。満面の笑みでルフィは言い切った。
「うめぇ！　やっぱりおっさんのおでんはうめぇなぁ」
「へっ、当然だろうが。伊達に何十年もおでん屋やってねぇよ」
「しっしっし。じゃあ世界一のおでん屋も心配いらねぇな。そん時はまた食わせてくれよ」
「ああ。おまえが世界を一周する頃にはな」
笑顔で食べるルフィを見やり、岩蔵は笑みを深くした。
ここへ来てよかった。心からそう思える。
そんな二人の背を見つめていたトビオもまた、笑みを浮かべて気持ちを変えている。
今は前と同じように思っている訳ではない。
トビオの背を、ウソップが強く叩いた。
「まったくすげぇ奴だぜ、おまえのじいちゃんは。伝説の海賊が生涯信じ続けた、たった一人の男だったんだぜ」
「うん……おれ、もうちょっと考えてみるよ」
「ん？　何を？」
「海賊になるのか、おでん屋になるのかわかんねぇけどさ、でも決めたよ。絶対後悔しない人生にする。じいちゃんやウーナンみたいに、誇り高い男になる」
「へへっ、おれも同じさ。いつか、誰よりも誇り高い、勇敢なる海の戦士になってやる！」

決意を声に乗せたトビオに続き、拳を握ったウソップも覚悟を口にする。
悲しみは消えて、今の気持ちは晴れ晴れとしている。これからの航海に希望が持てたようにも思え、不思議と力が漲ってくるようでもあったようだ。
狭い一室に声が木霊する時、ナミだけは暗い表情で俯く。
黄金は笑わねぇ。石ころと同じだ。
意味がわかってしまったその言葉が脳に刻まれて離れない。言って欲しくはないのに、気付けば何度も脳裏で反芻されていて、決して彼女を離してはくれなかった。
誰もが知っている当然の事実だ。黄金やお宝が笑った姿など誰も見たことが無い。
それだけに、辛くなる。
自分の体を掻き抱くように触れて、彼女は暗闇の中で身を小さくした。
忘れたことのない笑顔がまた蘇ってくる。
この時ばかりは彼女だけが彼らの輪へ入れず、一人立ち尽くしていた。
その時、ウソップのポケットから子電伝虫の声が聞こえてくる。先程慌ててキリに通信した折、ナミに返さず自分で持っていたのだった。
誰かに気付かれる前にナミの表情が元通りになる。
ちょうど直後にウソップが子電伝虫を取り出し、通信を開始した。
「おう、キリか？　ウソップだけど何か――」
《ル、ル、ルフィさんっ！　ぼくです、コビーです！　た、たた、大変なんですよ！》
聞こえてきた声はキリでもなければゾロやシルクでもない。ウソップにとっては見知らぬ人物だった。妙に慌てているらしく、明らかに落ち着きがない。
その声はルフィにも聞こえたらしく、素早くおでんを平らげていた彼が立ち上がる。

少し急ぐ風でウソップの傍へやってきて、子電伝虫を覗き込みながら返事をした。
「コビー？　コビーっておまえ、あのコビーか？」
《そ、そうです！　シェルズタウンまでお世話になった弱虫コビーですよ！》
「何やってんだおまえ。海兵になったんじゃなかったのか？　いやぁーでもなんかもう懐かしい感じが――」
《そんなこと言ってる場合じゃないんですよ！　早く逃げてください！》
久しぶりの会話だというのにコビーはやけに慌てていた。ルフィは首をかしげる。
「どうしたんだ？　なんか焦ってんのか」
《今ぼくら、キリさんたちと合流したんですけど、大変なんです！　実は、なぜかガープ中将に追われる羽目になって……あなたのおじいさんですよ！　ルフィさん！》
「ええ～っ!?　じいちゃんが来てんのかぁ!?」
大口を開けて驚愕するルフィに、他の面々が一斉に不審な表情を浮かべられた。
特に首をかしげたのはウソップとナミである。
ルフィの祖父の話。今まで聞いたことはない。
ただ見るからにルフィの態度は変わっておどおどしていた。
驚きは別として、彼がそれほど怯える姿は初めて見た気がする。なぜそこまで様子が変わってしまったのかがわからず、周囲の皆が疑問に思う。
洞窟内の空気は徐々に、だが素早く変わり始めていた。
「おまえこそどうしたんだよルフィ。顔が青いぞ」
「じいちゃんがこの島にいるのか……！」
《キリさんから伝言です、急いで船に戻って出航準備を整えてくれと！　狙われてるのはルフィさんですからすぐにこの島を離れるらしいですよ！》
「よし！　おまえら逃げるぞ！　急げ！」

間を置かずにルフィは出入り口へ駆け出した。今まで見たことがないほど怯えている様子で、冷静に説明しようとする気すらない。それより先に島を離れたがっているようだ。
当然ウソップやナミは困惑する訳で動き出せない。
逃げ出そうとしたルフィをナミが止め、事情を聞き出そうとする。
「待ちなさいよルフィ、なんで逃げなきゃいけないの？　あんたのおじいさんなんでしょ？」
「おれのじいちゃん海兵なんだっ。昔っから海兵になれってうるさくてよぉ」
「そんな程度で」
「あとじいちゃんの拳骨はめちゃくちゃ痛ぇ！　おれゴムなのにあれだけは効くんだ」
「ゴムなのに痛い？」
「とにかくルフィの様子からすると、めちゃくちゃ怖い人物みてぇだな。あれだけ強ぇルフィがここまですくみ上がっちまうとは」
かつてない異変に動揺が止まらない。不安が彼らにまで伝わるようだった。
居ても立っても居られない様子でルフィはその場で足踏みを続けている。一刻も早くこの島を離れたくて仕方ないらしい。
落ち着けそうにもないため、仲間の二人は仕方ないと首を振った。
「こりゃ島から逃げねぇと止まりそうにねぇな」
「どんだけ怖いのよ、こいつのおじいさん」
「仕方ねぇ。おれたちもう行くけど、おっさんたちはどうすんだ？」
ウソップが振り返って岩蔵とトビオを見た。
彼らは海賊ではない。このままここで別れることになりそうだ。
ここにはウーナンが居る。
椅子に座ったまま放置しておけないだろう。
予想と違わず岩蔵は彼に目をやった。
「おれはもうしばらくここに居る。ウーナンを埋葬してやらないとな。こんな暗い場所で座り続けてるのも辛いだろう。せめて陽の当たる場所に連れてってやりたい」

「それもそうだな。んじゃまた会おうぜ。いつになるかわからねぇけどよ」
「ああ。気をつけろよ」
いつの間にか子電伝虫は眠っていた。通信は切れているようでそれを仕舞う。
岩蔵が見送ろうとした折、トビオがルフィへ声をかける。
急いでいるらしい彼もその声には振り返った。
「ルフィ、ありがとな。おれみんなのこと応援するよ。おまえなら大丈夫だって思うから、絶対海賊王になれよな」
「おう！　当たり前だ！」
「それとじいちゃんとは仲良くしろよ。おれが言うのもなんだけどさ」
「お、おう……」
また緊張感が増してきたのか、ルフィが表情を強張らせるとトビオが肩を揺らす。
話し終えると待ち切れない様子でルフィが階段を上り始めようとした。その後ろからウソップとナミもついていく。岩蔵とトビオに手を振り、別れはあっさりしたものだった。
「じゃあな二人とも！　また会おう！」
「そっちも山降りる時は気をつけなさいよ。もう私たちの手助けはないからね」
「またおでん食わしてくれよ。できればまた無料でっ」
「フン、次に会った時はちゃんと金払えよ、この食い逃げ野郎ども！」
「みんなまたなー！　絶対また来いよー！」
洞窟の中で別れを告げ、三人は階段を駆け上がって地上へ出た。
高い山から島の全景を見渡す。
今になって気付いたが確かに海軍の軍艦が停泊している。ゴーイングメリー号が停まっている位置から見てちょうど対角線。最も遠い位置にある。
ひとまず船に危険が迫っている訳ではなさそうだ。

しかしすでに島内に海軍が入っている。連絡を受けた限りではそれが事実。
ガープについて深く知らずとも焦りを募らせるのは仕方なかった。
「本当だわ。海軍の船……」
「なぁ、今更なんだけどガープって、あのガープ中将のことか？　その人がじいちゃんってことは、ルフィはガープの孫ってことじゃねぇか？」
「そ、そういえば。あんたってどんな家庭に育ったのよ」
「じいちゃんとはほとんど会ってなかったんだ。仕事で忙しかったみたいだからな。たまにしか会ってなくて、ずっと兄ちゃんたちと暮らしてた。あとダダンたちも」
「まぁこいつが言うんなら嘘じゃねぇんだろうな」
「うん。嘘が苦手だからね」
ガープが祖父だという話をすぐさま呑み込んで納得する。ルフィの性格を考えれば、嘘をついた時には嘘だとすぐにわかる。事実、何度かそうした素振りを見たことがあった。
苦手意識も絶対に嘘ではないだろう。
この様子では本人に会えばどうなるかわからない。
嫌な予感を抱えながら、ひとまず彼らは山を下りようと歩き始めた。

海軍の英雄

森の中を走って進んでいたガープが、ぴたりと止まった。
迷い無く逃げ出した海賊を追う道中。その様は見事。恐怖に支配されて惨めに後ろを向くのではなく、何か確固たる意志を持った撤退に思えて、心では彼らのことを褒めてさえいた。
そしてその答えを見る時がやってきたようだ。
他の場所より開けた場所、それでも周囲は木々に囲まれているが、道の先にキリとゾロが立っている。二人で肩を並べ、意志を持って棒立ちになり、ガープを待ち受けていた。
戦意は十分。どうやらやる気らしい。
若いながらに無鉄砲で無茶をするものだ。
二人がかりとはいえ英雄とまで呼ばれた老兵を相手に正面から挑もうとしている。
海賊として、正解か否か、その答えを見せてもらうには面白いと思う状況であった。
ガープはゆっくり歩いて進み、広場へ入ったところで足を止める。
二人は真剣な顔でその挙動をつぶさに観察している様子だ。
「なんじゃ、もう逃げるのはやめか。ならルフィがどこにおるか教えてくれるんじゃろうな」
「それは知らない。悪いとは思うけど」
「フン、海賊め。息をするように嘘を吐くか」
「なんせじっとできない人だからね。一度動き出したらどこに行くのかボクらもわからない」
「それは自分たちに聞いても無駄だと言いたいのか？」
「理解してもらえるんなら早いよ。できれば無駄な戦闘は避けたいんだ」
「あいにくそれはできそうにない」
ガープが拳を確かめて佇まいを直した。
「敵に立ちはだかられれば、逃げることができん性分でな」
「大体わかってたよ。似てる人をよく見てるから」

「白々しい野郎だ。自分から追って来やがった癖に」
呟いたゾロが腕から取った手拭いを頭に巻く。
三本の刀に腹巻、黒い手拭い。イーストブルー勤務でないガープにも聞き覚えがあった。
近頃噂に聞いた男。
その人物に間違いないと確信を得る。
「そういえばこの海には高名な賞金稼ぎが居たそうじゃな。三刀流を使う海賊狩りとやらが」
「どっかの誰かが言い出しただけだ。おれにとっちゃどうでもいい」
「一人は剣士と、おまえは何をする気じゃ」
「やってみればわかるさ」
そう言って互いに黙り込んで、しばし静寂の時が続いた。
辺りを風が薙いでいく。
奇妙なほどの静けさに包まれる中、誰も動こうとはせず、緊迫した睨み合いが続く。
敵は敵わぬほどの強者だと知っている。しかし逃げたところで逃がしてくれるほど甘い相手ではないだろう。どの道向き合わなければならなかった。
逃げるための時間稼ぎが必要だ。
命を賭けて戦うことになるが、そうするしかない。
ルフィを連れていかれては一味が崩壊する。それでは海に出た意味がない。
示された意志は徹底抗戦。そして撤退。
それは二人に限らず一味総員の意志だった。
「行くぞ小僧どもォ!」
地面を強く踏みつけてガープが駆け出す。
迫力は壮絶。今まで出会った敵があまりにも小さく思える。
それは一個の強大な脅威となって、真正面から二人へ迫った。
武器となるのは握られた拳。ただそれだけを信じて向かってくる。
従って先にゾロが刀を抜いて前へ出て、両手に二本を持ち、自らも接

近しながら攻撃の機会を伺う。
接近の最中もガープの笑みは崩れない。
ビリビリと肌を震わす威圧感を受けながら、ゾロは歯噛みして一気に前へ出た。
「二刀流、鷹波！」
滑るようにしてガープの傍を低く通り過ぎながら、無数の斬撃が放たれる。波状となって繰り出されたそれらは広範囲に渡って地面を駆けたが、ガープは跳んで回避していた。
見切りの速度が半端ではない。
攻撃の軌道から性質までを読み取り、どこから襲ってくるかを一瞬で判断された。
結果は無傷。着地したガープはすべての斬撃を避け切っている。
顔には笑顔があって、余裕を崩すことさえできていない。さらにゾロは悔しげに舌を鳴らした。
「いい腕しとるのう。その若さでこれか」
「チッ、たったあれだけの動きで」
「なぁに、どこから来るかがわかっておれば大抵の攻撃は避けれる。まだおまえらには早い話かもしれんがな。ふむ、じゃが鍛えれば中々の物になりそうな――」
呟く最中、表情を変えたガープが首を仰け反らせた。直後に頭があった空間を鋭利な紙の矢が飛んでいく。一目見ればわかるほど異質な武器で、それが能力による物だとわかる。
振り返ったガープがキリを見た。
手には紙で作られた弓を持ち、凛とした構えがその目に映る。
パラミシア。紙を操る能力だろう。
一瞬で判断し、面白いと思ってか自然と笑みが深められた。
「ほう、能力者か。変わった能力を使う」
キリは答えずに、冷静に弓を番えてさらに放つ。今度は同時に三本。卓越した技術を感じさせる手腕で、一斉にガープへと襲い掛かった。狙いは的確で肩と腹と脚。ぶれることなくそれぞれの目的へと殺到する。ガープはそれらもまた、軽やかな動作で避け切った。

まるで攻撃の軌道が最初からわかっているかのよう。奇妙な動きである。
だがそれさえも予測していたかのように、紙の矢がガープの傍を通り過ぎようとした時、キリの右手が開かれた。瞬時に指令を受けて、全ての紙の矢がバラける。
形を失い、ただの紙に。
その挙動を見ていたガープは感心した。
自身の能力をよく鍛えているらしい。流麗な動きだった。
キリが人差し指を伸ばしてくるりと回せば、紙は空中で旋回し、独りでに飛び始める。
再び標的をガープとして、それぞれが一斉に殺到した。
「んんっ？」
「一定の範囲内なら自由自在に動かせる。指揮紙（しきがみ）」
攻撃力は無さそうだと判断したそれらは、やはり大した攻撃もせずただぶつかるだけ。
ガープの肌を撫でただけだった。が、そう思った直後に両目に紙が貼り付く。
当然視界を封じられてしまい、驚きの声を上げて、両手が顔へと運ばれた。
「むおっ!?　なんじゃ、何も見えん！」
「目が見えないなら避けられないでしょ」
「虎狩りィ！」
好機と見てゾロが三刀流で襲い掛かった。爪痕を刻むような軌道で刀が振るわれる。
その攻撃を、両目が隠されたまま、ガープは後ろに跳ぶことで回避した。
攻撃は空を切り、キリとゾロが同時に愕然とする。
まぐれで避けた訳ではない。
完全に捉えられる位置にまで接近できていた。
驚愕したゾロは動きを止めず、さらに追い縋る。だがやはりガープは縦横無尽に繰り出される彼の斬撃を、次から次に回避していき、服

の端にすら触れさせなかったのだ。
「くそっ、どうなってやがる！」
「目を塞がれたままで、あんなに……」
「甘い甘い。目が見えずとも戦える奴はおるぞ、この先の海にはな」
「これは無駄か」
舌打ちを一つ、キリがガープの目から紙を剥がした。
暗くなっていた状態から一気に視界が開け、目に太陽の光が飛び込んでくる。ちょうどその広場だけが木々によって光を隠されていない。これも一つの狙いであった。
強い光を受けてガープが一瞬目を細める。
視界が狭まっただけでなく、その行為は些細とはいえ怯んだ証拠だろう。
このチャンスしかないとゾロが全力で地面を蹴り、全身を躍動させて力を増し、突進するように攻撃へ出る。長期戦は不利。一撃で決める必要がると感じ、全身のバネを使って飛び出した後、己の筋力を十全に利用した攻撃が繰り出された。
「鬼斬り！」
「なんの！」
ガープはその場を動かず胸の前で腕を交差した。ゾロの刀はそこへ当たる。だが肉を斬るはずだった一撃は、硬い音を響かせて見事に止められ、不思議と防御されてしまった様相。白いスーツを傷つけることには成功したものの、体に傷をつけることはできなかったようだ。
驚愕したゾロの動きが止まる。
斬られたスーツのその下に、なぜか黒く染まっている腕が見え、鉄のような感触に注意が逸れた。明らかに普通の体ではない。攻撃が止められた理由はここにあったようだ。
反対にガープは笑顔で目を開け、反撃のチャンスが来たと知った。
「バカな……こいつも能力者か!?」
「ゾロ！　後退だ！」
数秒にも満たない一瞬の迷いは致命的なミスとなる。

ゾロが後ろへ跳ぼうとした時には、すでにガープの攻撃が迫っていた。
驚くべき速度である。能力など使っていない、ただ単に鍛え抜かれた筋力と長年の経験による動作。とてもではないが見切れぬ速度で拳が振り抜かれていた。
その刹那、圧倒的な威圧感が彼の拳を大きく見せ、時が止まったように体が動かなくなる。
気付いた時には腹へ触れられていて。
凄まじい衝撃を受けてゾロの体が殴り飛ばされた。
勢いよく宙を舞って受け身を取る暇もない。そんな程度の速度ではなかった。腹から響く痛みで意識が途切れそうになり、視界が高速で流れていく。
彼の体は広場を通り抜け、森の木々に激突し、勢いから木をへし折ってさらに飛ぶ。
結果三本の木を薙ぎ倒してから地面へ落ち、激しく転がった。
キリの立ち位置からは姿が見えなくなってしまう。しかしいつまでも心配しているのを許される状況ではない。牽制するよう、すぐにガープへ目が向けられた。
追撃はせず、彼はその場で腕組みをする。
「おまえたち中々筋がいいぞ。コンビネーションもいい。どうじゃ、わしの下で海兵やらんか？　今なら口利きしてやる。罪に関しても、まぁなんとかしてやろう」
「罪って？」
「監査船を破壊したのはおまえじゃろう。ウエンディから聞いておるわい」
「ボクらについて教えたのも彼女か」
「希望するなら奴の部隊へ配属してやってもいいぞ。ルフィはしばらくわしが預かるが」
ガープの言葉にキリが笑った。
油断なく身構えながら見つめ返す。一対一で戦って勝てる相手ではない。全力で戦ったとしても、どれだけ油断しなかったとしても、

相手は確実に格上。逃げることさえ不可能だろう。
そんな状況でも頭を垂れるのは嫌だった。
たとえ虚勢だとしても恐怖心を表したくはない。
子供のような気持ちを胸に、キリは微笑み、ガープとの対峙をやめなかった。
「ルフィが頷くならボクらも頷くよ。ま、あり得ないけど」
「どうかな。わしが言えば奴とて海軍へ入るに決まっとる」
「実の孫のこと、わかってないね。そんな人間なら最初から海賊になんてならないさ」
言って地面に落ちた紙を舞い上げ、自身の周囲へ呼び寄せる。そのまま宙を旋回させ、自身の周りに浮かぶ紙に囲まれながら歩き出し、キリが前に進み始めた。
所持している紙の量は決まっている。それらをやりくりして戦わなければならない。
敵の力は甚大。勝てる見込みはほぼゼロに近い。それでもゼロとは言わず、可能性がないとは思わなかった。どれだけ高みに居ようと敵もまた人間なのだから。
（特別なことをしたようには見えなかった。能力者か、でもあの口ぶりからして能力を持っている風にも思えない。カラクリがあるのは確かだろうけど……）
先程の攻撃、ただ単なるパンチだった。異常なほど鍛え抜かれたせいで避けるのが難しくなっているだけ。体の動かし方からしても能力の類ではなく、一つの境地に達しただけだ。
戦闘においてはそれこそが最も恐ろしい物なのだが、能力があるとないでは大きく違う。
少なくとも攻撃が通じない相手ではないと予想できた。
一方、腕で刀を受け止めたのは説明できない。
理由がわからず、彼を普通の人間だと思えない理由はおそらくそこにある。先程の防御を見た後では、どんな攻撃が通用するのかはわからなくなった。
ガープのことがよくわからない。目を閉じたまま攻撃を回避した

件もある。
それでも今すぐ逃げるのは無理そうだ。
敵の姿が不明瞭なまま向かわなければならないというのは思いのほかしんどい。
キリの目は鋭くなり、いつ振りかで精神が研ぎ澄まされ、今なら能力の使用も制限しない気概になる。いつものやる気に欠けた彼ではなく、一人の海賊となっていた。
「まぁいい。とにかくやってみるか」
「ふむ、中々の覇気を感じる。だが自分で操れんようでは意味がないぞ」
気になる言葉を発したが、キリは意図的にそれを聞き流した。
考察するにも情報が少なく、考えるのをやめて、戦闘を始めようと周囲の紙を集めて武器を作り出したのである。
両手に紙の剣を持ち、使わなかった分は装飾として鍔や柄に回され、普段の無骨なデザインとは違っている。能力によって硬化され、刀身は鉄にも等しい硬度を得た。
刀で戦って勝てないのはゾロを見て知っている。
ただ彼との違いは、これが鉄でできた刀ではなく紙で出来ていること。
危険性を想像するのか、ガープも気を引き締め直して対峙した。
「来るか。こっちはいつでもいいぞ」
構えられると同時、キリが走り出す。
芸も無く真正面から。気合いの入った姿とは違い、あまりに愚か。
拍子抜けしたとばかりにガープが嘆息する。
向かってくる速度に合わせ、拳を構え、カウンターに備えた。
いよいよという瞬間に、前方へ跳んだキリは右手に持った剣を振るった。それはガープの左腕によって受け止められ、再び接触の際に硬い音を発する。これだ、これが理解できない。人体を斬ったはずが傷一つつけられず、あまつさえ鉄を斬った時のような音が発せられる。
反撃が来ない内にキリが左手の剣を振った。

こちらも防御されようとしたが、接触するより前に剣がバラける。
意図された動作で、顔の前で多量の紙がばら撒かれてしまい、またしても視界が阻害される。多少の驚きは隠しきれず、思わずガープが背をのけ反らせた。
「うおっ!? くそう、またか」
突然の行動にもガープはすぐに冷静さを取り戻す。
腕を振って紙を払おうとした。
その間にキリが着地し、右手の剣で突きを繰り出す。それもまた、視界が悪い中で見切られている。ただし先程と違ったのは攻撃の最中に剣先の形が変わったことだ。彼の意志によって剣としての形状を失くし、まるでハンコの如く、紙が壁となってガープの顔へ押し付けられた。
打撃にもならない、ただ押し付ける行為。
一見すれば無駄に思える行動は、しかしガープの顔を紙で覆ってしまい、確かな効果があった。
「むおっ!? んんっ!」
今度は目だけでなく鼻も口も、呼吸に必要な器官がすべて覆い隠されてしまった。これによりガープは息苦しさを感じて驚愕し、全身が強張ったのが見て取れる。
すかさずキリが回し蹴りを放った。
ガープの腹へ直撃して、鈍い音が発される。
隙を突かれて回避はない。攻撃は確かに当たるのだ。
この機を逃してはならないと、懐からさらに紙が取り出され、周囲に散らばった物も集めて、手に握られるのは長大な剣。刃渡りが長く、刀身が分厚くて、紙でなければ持つことさえ苦労しそうな大きさだ。すぐに硬化されて鉄の如き武器となり、眼下にガープを見下ろす。
いまだガープは苦しそうに顔の紙を剥がそうと躍起になっている。だが簡単には取れない。強く張り付いてしまったそれは腕力では取りにくい物のようだ。
どう見ても隙だらけ。無防備な胴体に向けて大剣が振るわれた。

その刹那、気付いたガープが反撃に転じる。
硬化された大剣と拳とが激突し、凄まじい衝撃が腕に伝わる。紙の大剣は打ち負け、一瞬で破壊されてしまい、大量の紙がばら撒かれた。
やはり並大抵の拳ではない。おそらく彼の拳骨は鉄さえ粉砕するのだろう。
視覚、嗅覚に加えて、さらに聴覚まで封じられて、尚も的確に応戦してきた。
おそらく能力者ではない様子なのにその反応。疑念はまた深まった。
だが呼吸ができないのは相変わらずだ。彼は苦しそうにもがき始める。指先で引っ掻いて剥がそうとするのだが、一枚一枚がぴったり密着していて、妙に触りにくい。どれだけ確かめようとも切れ端さえ見つからず、力で破ろうにも硬く、殴って剥がれる形状でもないため混乱している。
この間にキリは余裕を取り戻し、笑顔で気楽に伝えた。
「剥がれないでしょ。どんな強い人間だって人体の構造は同じ。それこそ能力者じゃないなら逃れるのは難しい。そうなるように訓練したんだ」
落ちた紙を舞い上げ、集め、再び手の中で武器を作る。両手で握ったのは紙の槍だった。
巧みな様子でくるりと回して、構えた後にキリが駆け出す。
大きな穂先がガープの腹を狙い、きっと見えずともそれはバレているはずだった。
「そのまま窒息してもらえるなら楽だけど、それだけじゃ済まないよね。なら――」
ルフィの肉親と言うなら殺す気はない。しかし追ってくるなら容赦する気は皆無だ。
狙うのは無防備な胴体。動きを読んでいるというなら、おそらく回避なり防御はされるはず。それでいい。呼吸ができないまま、紙を剥がそうと躍起になる動きを一瞬でも止めることができるのだ。自分を助けようとする行動が、どちらを選んでも自身の危機につながる。

キリは油断なくガープへと接近する。
槍を突き出し、腹を貫くつもりで一撃を繰り出した時。
突如現れたボガードが割って入り、突き出された槍が刀で弾かれ、ガープの前に立ち塞がった。
表情が変わり、まずいと感じてキリは再度攻撃を行う。二度、三度と槍を突き出すが、力を受け流されて攻撃は無駄に終わり、それだけでなくわずかな合間でガープの顔に張り付いていた紙を切り裂かれた。彼は再び呼吸を取り戻し、大口を開けて息を吸う。
流石にまずいと感じて一旦後ろへ退いた。
思い切り跳んで宙返りをし、着地するとしゃがんだ状態で敵を見る。
ガープとボガード。二人が揃って状況はさらに最悪となった。
「ぶはぁっ!? ゴホッ、ハァ、危なかった。若造め、意外にやりおるわい」
「油断されるからです。気を抜かないでください」
「むぅ、確かに久々の戦闘で舞い上がっていたのは認めるが、あれも中々の腕じゃ。よく能力を理解しておる。相当鍛えられておるようじゃしな」
「それは認めますが、あまりテンションを上げ過ぎないで頂けますか」
「仕方ないじゃろう。おまえやセンゴクが口うるさく言うせいで機会が減ったんじゃ」
合間の一瞬で斬っただけだというのに、ガープの顔には傷一つない。紙は完璧に張り付いていた。薄さ数ミリの紙を切り裂いて無傷で済むとは、彼の手腕が伺える。
ガープ以上ではないとしても、明らかにイーストブルーに居ていいレベルではない。
彼らの前に立つキリが歯噛みする。
状況はさっき以上に悪い物となった。
もはや勝ち目はゼロとなったに違いないだろう。だが目的を勝利としないならば可能性はある。

思わず小さく嘆息した。
「もう少しだったんだけどな。また厄介な人が来た」
「君が監査船を壊した少年か。いい腕をしている。だが、ここまでだと理解しているはずだ。大人しくモンキー・D・ルフィの居場所を教えろ」
「嫌だね。勝負はまだ終わってない」
話していると状況に些細な変化が起こった。
荒々しく草を踏みつけ、広場へ人影が現れる。激怒した様子のゾロだ。
腹に受けた一撃で血を吐き出し、口の端が自らの血液で汚れている。ダメージは相当な物。しかし常人ならば意識を刈り取られる一撃を受けて尚立ち上がり、三刀流を持って現れた。ただそれだけでも感心してしまうほど、実力の差はあったはずだというのに。
空気を伝って感じる威圧感にガープが唸る。
最弱の海と揶揄されるイーストブルーにこれほどの逸材が居るとは。
ゾロの体から立ち昇る力に感心せずには居られず、同じくボガードも眉を動かす。
その時キリは体中に仕込んだすべての紙を表へ出し、何やら大事を始めようとしていた。
「勝負はそっちの勝ちでいい。だけどありがとう。頂点を見せてもらったおかげで、ボクらはまだまだ強くなれる」
「ボガード、奴らを逃がしてはならんぞ。あれは必ず伸びる」
「ええ……しかとこの身で感じました」
キリが勢いよく左手を上げた。それに応じて無数の紙が天へ舞い上がり、螺旋を描いて空を埋め尽くそうとする。数秒経ってキリも跳び上がった。紙の体は常人よりもよっぽど体重が軽く、それでいて跳躍力は常人以上、軽やかに数十メートルへ到達する。
離れた位置に立っていたゾロもそれを見て駆け出した。
これが最後の攻防となるだろう。彼らは決死の覚悟で向かってきている。

正面から応じるべくガープとボガードが言葉も無く身構えた。
この時の失敗を考えるに、てっきり彼ら二人だけが相手と思い込んでしまったことであろう。
突然、強風が吹き荒れた。
右手側の森の中から吹いて来た風はガープとボガードの体を通り過ぎ、驚愕している彼らの皮膚を裂いて、血を流させる。ほんの些細な軽傷だ。だが確実に彼らを負傷させた。
今の突風は何かがおかしかった。
わずかな痛みに気付いて不審に思うも、襲い掛かってくる敵を前に余計なことを考えている場合ではなく。駆けて迫ってきたゾロは、両腕を伸ばして二本の刀を回転させている。その姿を見て感じる気迫はまさに鬼。人ならざる物を連想させた。
強風のことさえ忘れて、思わずガープが前へ出る。
「三刀流奥義――！」
「下がれボガード、わしが止める！」
ゾロと対峙し、防御のために腕を交差させる。
腕で刀を受け止められるのは実践済み。今度も間違いなく受け止められるはずだ。
しかし先に見せてしまったせいか、再び風が吹く。
今度は全身を包む強風ではない。正確に、且つピンポイントに一点だけを狙った鋭利な風の刃が飛び、本体は森の中で身を潜めながら、見えない攻撃でガープの足が切り裂かれた。
軸足が揺れて、体勢が崩れる。
瞬時にボガードが二人の間に割り込もうとするが、同じく彼の右手も切り裂かれ、思わず刀を取り落とす。目で見える攻撃ではなかった。予測することもできただろうが、キリとゾロの存在がどうしても無視できず、彼らより遠い位置の彼女にまで気が回らなかったらしい。
思い切り地面を蹴り、撃ち出されるようにゾロが前へ跳んだ。
「三・千・世・界‼」
「うぬあぁっ!?」

素早く駆け抜け、ゾロは彼らの傍を通り過ぎた。
寸でのところで防御に成功する。狙われたガープの体は確かに斬られ、だがそこから金属を叩いたような音が聞こえた。切れてはいない。不思議にも防がれてしまったようだ。
それでも時間稼ぎは十分。
彼らの頭上には、紙で作られた巨大なドーム型の檻がある。
キリが両腕を振り下ろせば、それは凄まじい威圧感を放って落下してきた。
「意匠紙、〝十二単〟！」
二人を包み込もうと落下してくる檻を見上げ、ガープは無傷とはいえ転んでいて、せめて自分だけはとボガードが回避しようとした。速度ならば自信はある。逃げること自体は難しくない。しかしその一瞬、奇妙な風が辺りを駆け抜けていることを知って、反射的に動くのをやめた。
ズズンと音を立てて地面に落ち、かくして二人は檻に入れられる。
無数の紙が折り重なり、十二の層で構成される頑丈な壁。ドーム状のそれはご丁寧にも硬質化されており、鉄にも等しい硬度を持って、二人を捕らえていた。
ボガードが手で触れて確認する。
なるほど、やはり硬い。手触りは紙であるだけに不思議な心境だった。
転んでいたガープも立ち上がり、上手くしてやられたことに腹を立てつつ、周囲を見る。
太陽の光が完全に遮断され、薄暗くなっていた。
「閉じ込められたか」
「そのようです。彼ら、意外にやりますね」
「さっきの風はなんじゃ。あれも能力者じゃろう」
「もう一人隠れていたんでしょう。まったく、やってくれるものだ。こんな怪我をするのはいつ以来でしょうね」
切り裂かれた右腕を見てボガードが呟く。
油断しすぎていたかもしれない。奇襲とはいえ、肌を切り裂かれる

などいつ以来だろうか。強くなるにつれて戦闘で怪我をする機会が少なくなり、最近はめっきり無くなっていた。久しぶりの感覚に感心してしまう。彼らはまだ若いのに、自分たちを傷つけるなどずいぶんな戦果だ。

そんなことはどうでもいいとばかり、ガープが肩を回す。

面白くなってきた。彼らの実力を見て怒るどころかむしろ嬉しさすらある。

将来が明るそうな逸材が一気に数名も見つかったのだ。

これは是非とも海軍に入隊してもらい、ルフィの部隊で大事な孫を支えてもらおうと思う。

笑みすら浮かべて上機嫌に、右の拳を握り直した。

「いつ以来でもいいわ。とにかく是が非でもあいつらが欲しくなった。ルフィを連れていくついでに連中も捕らえるぞ」

「さて、ここまで抵抗されて素直に頷くとは思えませんが」

「ルフィが頷けばあいつらも頷く。それで万事解決じゃろう」

「そう簡単ではないと思いますがね……」

「まずはここから出るぞ」

試しに壁を叩いてみる。簡単に抜けられる物ではなさそうだ。

それも二人にとって大した脅威ではない。

慌てることも無く冷静な態度は崩れなかった。

「どうやって出ますか」

「一発で吹き飛ばしてやるわい」

拳に息を吹きかけて、腕をぐるぐる回して準備する。

直後に高速で拳が振り抜かれた。

接触の瞬間、十二層から成る檻に凄まじい衝撃が駆け抜け、破壊力は紙の結合を壊して吹き飛ばす。周囲三百六十度を囲む壁の内、たった一面だが確かに道が開けた。

ただし、壁が一面破壊されたため、間を置かずに天井が落ちてきたのである。

脱出する前に紙の雪崩に呑み込まれた彼らの姿は消えてしまい、しばし静かになる。

数秒後に勢いよく顔が出された。
ただの紙でも数えきれないほど大量にあって、のしかかられては非常に重い。
抜け出してきた二人も一苦労といった様子だった。
「重いわァ！」
「なるほど、二重構造か。一度は閉じ込めて、壁を破壊すれば他が崩れて呑み込まれると」
「面倒なことしてくれるわ。紙がこんなに重いとは」
「生き残るために色々と考えているようですね。甘く見過ぎましたか」
立ち上がって半ばほど紙に埋もれながら、周囲を見る。
敵の姿が無くなっていた。視線を走らせても彼らの姿がどこにも見えない。
どうやら逃げられてしまったようだ。
自然とガープの表情が曇る。
せっかく楽しくなってきたところだったのに拍子抜けだ。
「あいつらはどこへ行った」
「逃げられたようですね」
「チィ、腹立たしいのう。怯えて逃げたわけではないのが厄介じゃわ」
「追いますか？　まだ遠くへは行っていないと思いますが」
「無論。こっちは部下を取られたままじゃしのう」
ガサガサと紙を押しのけながら歩き出して、ガープの後にボガードが続く。
広場には彼らの姿もなければどこへ逃げたのかを示す痕跡もない。本来ならば後を追うのも一苦労といった状況だろう。しかしこの二人にとっては難しいことではない。
遠ざかっていく気配がこの場からでも読み取れる。
逃がさないと決定して、ガープは満足気にほくそ笑んだ。
「ルフィはいい部下を見つけたもんじゃ。これで海軍の将来も安泰じゃろうて」

「私はそうは思えませんがね……」

海軍の英雄（2）

一足先にゴーイングメリー号へ戻ったルフィたちは、そそくさと出航準備を進めていた。

祖父、ガープが来ている。ただそれだけの言葉が驚愕に値するのは必然。幼少期から付き合いのあるあの人物に、良い思い出は数えるほどしかない。逆に嫌な思い出は数えきれないほどある。

ルフィはすっかり怯えていて、仲間たちを急かす態度があった。

珍しい姿にウソップとナミは疑念を隠せず、今一つ急げないのは彼と違って、ガープという人物を知らないからのようだ。

「なぁルフィ、おまえのじいちゃんなんだろ？　そこまで怖がらなくていいんじゃねぇかな」

「そうよ。家族なんだから仲良くすればいいじゃない」

「おれだって別に嫌ってるわけじゃねぇけどさ。じいちゃんの拳骨はすげぇ痛ぇんだぞ。しかもおれが海賊になりたいって言ってるのに、いっつも海兵になれってうるせぇんだ」

「それで苦手意識が生まれちまったってことか」

「あんたでも苦手な物ってあるのね」

普段とは逆の構図になっていた。

ルフィだけ様子がおかしく、怖がっていたはずのウソップは気楽に作業を進めている。ナミもまた、初めて見る彼の表情がおかしくてくすりと笑う。

たった三人とはいえすでに準備は整っている。小型の帆船ということもあって作業は早かった。

いつでも出航できる段階。後はまだ到着していない仲間を待つだけだ。

やることがなくなってルフィは島を眺め、ウソップも隣へ並ぶ。

「キリたち大丈夫かな。連絡してきたのもコビーだったし」

「そのコビーって誰なんだ？　なんか緊急事態っぽかったから話聞いたけどよ」

「おれたちの友達だ。今は海兵になったんだけどな」

「海兵と友達なのか？　海賊なのに？」
「そうだぞ。変か？」
「いやそりゃまぁ変だとは思うけどよ」
「しばらく会ってなかったからなぁ。もう懐かしい気になるな」
ガープについて話していた時とは違い、ルフィに笑顔が戻る。
相当仲が良かったのだろう。まさか偶然訪れた島で再会できるとは、なんたる偶然か。
どんな人物なのだろうと島を見る。
そういえばルフィたちが今までどんな航海をしたのか聞いていなかった。友達の話を聞いて今更気になり、後で質問してみようと思う。
一方でナミは知っているのかと気になり、ウソップが振り返って尋ねてみた。
「ナミは知ってんのか？　ルフィたちの航海の話とか」
「ちょっとくらいはね。シルクに聞かせてもらったの」
「ふぅん。じゃ知らねぇのはおれだけか」
「また聞けばいいじゃない。今は慌ただしいから無理かもしれないけどね」
笑顔で言われて納得する。
これから時間はあるのだから、ひとまず海へ逃げてからでもいいのだろう。
腕組みして小さく頷いていると、森の中から砂浜へ駆けてくる人影が見えた。数は二つ。船上に居る三人は気になってそちらへ注目する。
どたどた走ってくるのは海兵の制服を着た二人組。
必死な形相のコビーとヘルメッポがやってきて、その顔を見たルフィが笑顔を輝かせた。
「あ～っ！　コビー！」
「ル、ル、ルフィさぁん！」
「おれはどうした、おれは!?」
海に入る直前に足を止めて、船を見つめて二人は手を上げる。

ルフィの反応から察するにヘルメッポのことを覚えていない可能性があったが、それについて怒っている暇もないらしい。平静を失くしている二人は声が大きくなっていた。
「みなさん無事でしたか。今、キリさんたちがガープ中将を撒こうとしてる頃だと思います。全員揃ったらすぐに出航できるようにしてくれって」
「心配すんな、いつでも行ける」
「それよりあいつら大丈夫なのか？　あの英雄ガープと戦ってんだろ」
「やられねぇ内にすぐ逃げるって言ってたが……っていうかなんでおれたちはこいつらに肩入れしてんだ！　おいコビー、これ以上はやべぇって！　バレたら海軍に居られなくなるぞ！」
「う、そうだけど、でもルフィさんたちを見捨てるわけには……」
「友達だか恩人だか知らねぇけどよ、もう敵同士になったんだから非情にならなきゃだめだろ。中将ならまだしも、新米のおれらじゃすぐクビになるかもしれねぇ」
「ん～、おまえどっかで見た気がすんだけどなぁ。誰だっけ？」
「ほらみろ！　やっぱり覚えてなかった！　なんでこんな奴助けてやんなきゃいけねぇんだ！」
「お、落ち着いてよヘルメッポさん」
欄干の上にしゃがんで首をかしげるルフィへ、ヘルメッポが必死の自己紹介を始める。
確かに顔を合わせたはずだろう。彼に殴られだってした。
怒りを持ちながら叫んだところで、とぼけた顔のルフィの様子は変わらない。
「おれだよおれ！　シェルズタウンのモーガン大佐の息子で！　ロロノア・ゾロを処刑直前まで追い詰めた！　ヘルメッポだ！　っていうか普通忘れねぇだろう！」
「うーん、居たような気がするんだけどなぁ……」
「だぁから！　偉そうにふんぞり返ってて何もできなかった口だけのバカ息子だよ！」

自らの口で語らせることのなんと残酷な展開か。
そこまで言われてルフィはパッと笑顔になって気付いたらしい。
確かに居た。ずっと何かが引っかかっていて気付けなかったのだがこれではっきりとわかる。基地の中で人質にした男ではないか。それとコビーに銃を向けたので殴った経験もある。
ようやくすっきりして彼を迎え入れられた。
以前よりずっと親しげな態度で声をかけられる。
しかし名前どころか存在すら忘れられた恨みはあって、ヘルメッポの険の強さはそのままだ。
「あぁ、おまえか。いやどっかで見た奴だと思ったんだよなぁ。わりぃわりぃ」
「くそぉ、だから嫌だっつったろコビー！　こういう奴なんだよ、こいつは！」
「まぁまぁ。落ち着きましょうよ」
苦笑したコビーがヘルメッポを押し留め、再びルフィに向き直る。
離れている間に、彼らは立派な船を手に入れていた。
それに仲間まで。以前にも会った三人に加えてさらに二人。順調に航海は進んでいるらしい。
今の今まで慌てていたはずだが、彼らの変化につい嬉しくなってしまい、コビーは嬉しそうに微笑む。相変わらずルフィは元気そうで、着実に前へ進んでいるようだ。
心配していたものの、顔を見ればほっと落ち着く。
久々の再会は確かに実のある物となっていた。
「ルフィさん、航海は順調ですか？」
「ああ。仲間も増えたぞ。これからグランドラインに行くんだ」
「そうですか……本当ならもっとゆっくり話したいんですけど、今は無理そうですね」
「別にいいさ。また会えるからな。コビー、おまえも早く出世してグランドラインに来いよ。ゆっくりしてたらおれたちが海賊王になっちまうからな」
「あ、それなんですけど。ぼくらガープ中将の船に居るのでこれか

らは――」
言いかけた時に突如割り込まれた。
三人が森から出てきた時、砂浜との境目に差し掛かった段階でキリが大声を張り上げていて、明らかにいつもと様子が違う。鋭い声はいつもの彼ではなかった。
「ルフィ！　出航だ！」
「おっ、みんなだ。戻って来たな」
「かなり慌ててるみたいだぞ。ひょっとして追われてるんじゃねぇだろうな」
走ってくるキリ、ゾロ、シルクの顔を見てウソップが不安に苛まれる。なぜあれほど緊迫した顔で向かってくるのか。敵が近いと知っているだけにできれば笑顔で来て欲しかった。
見ればゾロの口の端に血が付着している。
かの英雄を相手にたったそれだけと言うのなら褒められたものだが、よく見れば足取りも危うい。傍でキリが支えなければ今にも倒れそうだった。
二人の前をシルクが走って、心配そうにしながらも一刻も早い脱出を望んでいる様子。
緊張感が戻ってきた時、あまり時を置かずに森の中から絶叫が聞こえてきた。
「待たんか小僧どもォ！　絶対に逃がしはせんぞ！」
「いっ!?　あの声は……！」
確かに聞こえた声にルフィが声を漏らす。同時にコビーとヘルメッポの表情も変わった。
まだ姿は見えないが明らかに近付いてきており、見えるようになるまでほんの数十秒。
歯噛みしたキリはシルクの背へ声をかけた。
「シルク、先に船へ！　帆を張って海へ出るんだ！」
「えっ!?　だけどそれじゃ防御は」
「こっちでなんとかする。どの道このままじゃきっとだめだ」
「……わかった。無茶はしないでね」

波打ち際まで到達するとシルクが海水を踏みつけ、服が濡れるのも気にせず水を跳ね上げて、ゴーイングメリー号に乗り込む。
キリとゾロは砂浜で立ち止まり、コビーとヘルメッポの前に立つ。
再会はこんな時でない方がよかった。
互いにそう思うのだが疲弊した様子を見ているとそんなことも言っていられない。
振り返って視線は森の入り口へ。
姿が見え始めた頃、木の影の下でもガープの笑みが確認できるようで緊張した。
「弾の補充じゃ」
「どうぞ」
「うむ。それではもう一発」
ボガードに渡されたのは島の木々から手に入れたヤシの実。ただ蹴り落として拾っただけの、硬くて丸い、何の変哲もないそれだ。
しっかりと右手に持ったガープは投球フォームを取り、ヤシの実を全力で投げる。
誰にでも出来そうな行動が、誰であっても吹き飛ばす強烈な攻撃だった。
「拳・骨・隕石(メテオ)――！」
ただヤシの実を投げるだけの攻撃。だが速度は砲弾にも勝る。
真っ直ぐ向かってくる凶器を見ながら、コビーたちは両手を上げて絶叫した。間違いなく死ぬ。誰だってそう思う威容を放つヤシの実であって、慌てるのも当然だった。
今、防御ができるシルクは船へと乗り込んでいる。もうかまいたちは期待できない。
キリは手持ちの紙をすべて使ってしまった。
仕方なくゾロが前へ出て、痛みを堪えながら刀を振るう。
凄まじい音を立てて一閃。
ヤシの実は真っ二つに両断されて、誰にも当たらなかったものの、勢いもそのままに海面へ落ちた。そこで立つ水柱は驚くほど高い。まさに砲弾の如き一撃であった。

斬ったとはいえ右腕が異常に痺れている。
二度目はない。歯噛みするゾロはそう思わされてしまっていた。
「うぉおおいっ!? ありゃ一体何なんだ!?」
「ただヤシの実を投げただけだよ。それなのにあの威力……」
「嘘でしょ、あれがルフィのおじいさんなの!?」
「やべぇ、じいちゃんが来た!」
船上が騒がしくなっている。同時に砂浜でも二人分の悲鳴が響いていた。
キリとゾロは乱れた呼吸を整え、厳しい視線を森へ向けている。驚いていると、その隙に殺されるだろう。それだけの危機感を持って一息さえつけない状況だった。
やがてガープの姿が砂浜へ現れる。
真っ先に見たのは麦わら帽子をかぶったドクロを掲げる帆船。間違いなくルフィの船だ。探していた相手をようやく見つけることができて、喜色が表情へと表れる。ただ船はすでに動き出していた。仲間を二人島へ置いて、一足先に逃げ出そうとしている。
一点そこが気になったが、ひとまず目標を見つけて満足できた。
あとは連れ戻すだけである。
ガープとボガードはゆっくりと砂浜を歩き出した。
その時、キリがゾロへ手を伸ばす。
「ゾロ、一本刀貸して」
「仕方ねぇな。落とすなよ」
黒い柄の刀が一本投げて寄こされる。受け取ってすぐキリは右手に持ち替えた。
ゾロもまた一本だけ刀を抜き、左手に持つ。
ガープが砂浜へ一歩を踏み出そうとした瞬間。キリの鋭い声が響いた。
「動くな!」
言葉と同時に背後からコビーを捕らえ、首筋に刃が触れた。同じくゾロもヘルメッポを捕まえて刀を突きつけている。言わば人質にされてしまったようだ。

まさかの行動に二人が絶叫し、手を上げて抵抗はしない。
自然とガープとボガードの足が止まった。
キリの声は驚くほど冷たい。以前に出会っているコビーでさえぞっとする声色。加えて挙動も素早く、手拭いを巻いたままのゾロの目つきも恐ろしくて、緊張感が嫌が応でも高まっていった。人質にされたコビーとヘルメッポは心底震え上がる。
「えええっ!? ちょ、ちょっとキリさんっ!」
「静かに。大丈夫、本当に斬ったりしないよ」
囁き声でキリが言った。不安がるコビーを安心させようとしたのかもしれない。しかし状況が状況で、緊張感が全身を包み込むため、恐怖心からヘルメッポは顔をひきつらせる。
多くを語れる状況ではない。彼らも切羽詰まっていたのだ。
ヘルメッポはげんなりした様子で、ひどく怯えながらも文句を口にする。
「し、信用できるんだろうなぁ……」
「黙ってろ。本当に斬っちまわないようにな」
「ヘルメッポさん、信じよう。こ、こんなことになるとは思ってなかったけど」
ヘルメッポが不安を口にしてもゾロが窘める。
仕方なくコビーが同意を口にして、二人は黙り込む。
キリの鋭い視線はガープを捉えて離さず、微塵も刀身を動かさずに話し始めた。
「それ以上やる気ならこっちも容赦はしない。二人を殺されたくなければ一歩も動くな。何もするな。そこに突っ立ってボクらを見逃せ」
「フン、よく頭が回るな小僧め。話は聞いとるぞ。おまえたちは友人じゃと」
「だから殺せないって?」
「ただの脅しならやめておけ。罪を重くするだけじゃ」
「だったらこっちに来ればいいよ」
ガープの眉間に深い皺が刻まれる。

対照的にキリの顔には笑みがない。冷たい眼差しで、声色には感情が無く、言葉にできない危険性を感じる。最初に対峙した時とはまるで別人のようだった。
メリー号が徐々に離れていく中、空気が重くなっていく。
間近でその声を聞くコビーは冷や汗を掻かずにはいられなかった。
信用している。しかし恐怖心は一気に膨れ上がって、もしかしたらという思考が捨てきれない。ヘルメッポも同じなようで、口からは小さな悲鳴が漏れ出ていた。
沈黙がひどく痛々しい。
数秒の間を置き、もはや耐え切れない空気となったそこへ、キリが口の端を上げながら言った。
「ガキだからって理由ならそれでいい。甘く見てればいいさ。ただ、今ならもう殺せるよ」
ぞっとする声だった。
若者ながらガープをも戦慄させ、並々ならぬ気迫を感じさせる。
ガープ、そしてボガード、両者共にキリの姿を認め、絶句せざるを得なかった。
覇王の器を感じさせる。
いまだ未完にして、大成の気配が見て取れる威容。確かな逸材を発見した。ただそれだけに残念に思う。それが彼らの敵であり、海賊になってしまうだなんて。
二人は動くことをやめた。
彼なら本当にやる。コビーを殺せる。
そう思ったが故の何もしないという行動を取った。
「わかった。じゃがどうする。どちらも動けぬというなら、決着はつかんぞ」
「いいや。つくよ」
「どうやって？」
「あなたの孫が良い腕してるからね」
ようやくキリがふわりと力を抜いて微笑んだ。
その時、離れていくメリー号からルフィの両腕が伸ばされ、キリと

ゾロの首根っこを掴む。二人とも抵抗もしなければ驚きもしない。当然の物として受け止め、体から力を抜いた。勢いよく体が引っ張られて、両者とも人質の体から手を離さずに、四人でメリー号へ向かう。

ガープとボガードは身じろぎして驚愕した。

これを待つための脅しだったのだ。

もはや止める暇もない。勢いよく縮むゴムの腕で、彼らはあっという間に遠ざかる。

手を伸ばしても彼らには届かず。

キリとゾロ、そして連れ去られたコビーとヘルメッポは、無事に甲板へと投げ出された。

あまりに鮮やかな逃亡。打ち合わせなど一切していなかったが、それぞれが役割を理解し、言葉もなく実行へ移った。そして成功したのである。

その直後にルフィがメインマストの上へと立ち、遠ざかる砂浜へと大声を発した。

「じいちゃん！」

「ルフィ～っ！　待たんか、こっちへ戻って来い！」

「いやだ！　おれはもう海賊になったんだ！　海兵にはならねぇ！」

「何をっ。わしの気持ちも知らんと勝手なことばかり……！」

「おれはやりたいように生きるって決めたんだ！　人生に悔いは残さねぇ！　だからじいちゃんの言うことなんて聞けねぇよ！」

「貴様、じいちゃんに向かってその言葉遣いはなんじゃあっ！」

ガープがボガードへ手を伸ばす。すると即座に最後のヤシの実を手渡された。

振りかぶって投げる構えが見せられる。

咄嗟にルフィはメインマストから飛び降り、船の後部へと走った。

「おれは海賊王になる！」

「おまえは海兵になるんじゃあ！」

ヤシの実が投げられ、凄まじい速度で飛来した。

それをしっかり見切ってルフィが跳び、一気に腹の中へ空気を取り

込む。ゴムの腹が大きく膨らんで、まるで風船のよう。飛んできたヤシの実を受け止めて勢いそのままに跳ね返す。凄まじい速度を保ったまま、ヤシの実はガープへと向かっていった。
瞬時にボガードが前へ出てヤシの実を切り捨てる。
二つに分けられたそれらは木々を薙ぎ倒しながら後方へ飛んでいき、ただのヤシの実とは思えない轟音を立てて地面を削りながら、すぐに見えなくなる。
一連の動きも気にせずに、ガープは遠ざかる船を見つめていた。
「何度来たっておんなじだぞ！　おれは海賊やめる気なんてねぇからなァ！」
「くぅ、おのれ……！」
ルフィの叫びを残して船は沖へ進む。すでに人が泳いで到達できる地点ではない。追うためには船が必要だが、この場にはないため、今すぐ追いかけるのは不可能。
ガープとボガードは、もはや遠ざかる船を見つめるのみであった。
甲板の上ではキリとゾロがへたり込んでいる。
キリは脚を投げ出して座って、ゾロは大の字に寝転んでいた。
まだ平静が取り戻せない。
圧倒的な強者を前に逃げ出せたこと自体が奇跡。疲労は今までの戦闘の比ではなかった。特に精神への負担が大きく、緊張感から解放された今は微塵も動きたくない心地だ。
「ふぅ……なんとかなったか」
「ハァ、もうあいつの身内とやるのは御免だぞ」
「二人とも大丈夫？」
「おまえらよく無事だったな。あ、あれがゲンコツのガープか……」
シルクとウソップが駆け寄ってきて二人を介抱する。
ゾロは一撃とはいえ無視できないダメージを負っており、キリは無傷のようだが汗を掻き、普段の様子とはあまりに違う。どちらも初めて見る表情であった。
船上は島を離れるに従って落ち着きを取り戻そうとしている。
しかし以前との明らかな違いは、人質として連れてこられた二人組

だった。
放置されたままで放心しているコビーとヘルメッポもまた、緊張感から逃れることができておらず、鼓動が速くなったままで呼吸を落ち着けようと努力していた。
「び、びっくりした……あんな逃げ方するなら、先に言っておいてくださいよ」
「脅してごめんね二人とも。ああでもしなきゃ見逃してもらえなかっただろうしさ。でも本気で殺す気はなかったよ、ほんとに」
「は、はぁ……」
「あんな声で言われても信用できねぇよ。それより、なんでおれたちまでこの船乗せられてんだ!? 人質はもういらなかったはずだろ!」
「いやぁ、勢いで」
「手ぇ離すの忘れてた」
「ふざけんなよおまえら!」
ヘルメッポが吠えるも、キリとゾロは緩んだ笑みでさらりと受け流してしまう。すっかり緊張の糸が切れていつも通りだ。だがヘルメッポたちはそうもいかない。誘拐されて人質にされて、この状況を喜ぶことなどできないだろう。たとえ友人が相手でも、彼らはすでに海兵なのだから。
後部からルフィが戻ってきて、ちょうど二人の姿も見つける。
ガープの傍を離れた今、彼の笑顔もいつも通りに戻った。
「お? コビーたちも来たのか? なんだ、実はおれたちの仲間になりたかったんだろ」
「ち、違いますよ! ぼくらは人質として無理やり連れてこられただけです!」
「島に引き返せ! 今なら間に合うだろ!」
「えぇっ!? ふざけんな! そしたらじいちゃんにぶん殴られる!」
「おれたちだってクビがかかってんだよっ! 罰せられたらどうしてくれる!」

ぎゃーぎゃーと言い合いを始めてしまうヘルメッポとルフィだが、それもそっちのけにキリは肩をすくめ、傍らに居るコビーへ目を向けた。
目の色が違ってさっきとはまるで別人。
コビーが知る彼がそこに居て、それだけで不思議と安堵できた。
「まぁいいじゃないか。しばらく人質生活楽しんでいきなよ」
「そう言われましても、ぼくらついこの間失態をしたばかりですし……」
「ルフィのおじいさんならそう悪くはしないって。多分」
「そんな適当な」
「訓練もいいけどこれも経験だよ。心配しなくても次の島では降ろすから、そこで電伝虫使って仲間を呼んでくれるかな。それがボクらにできる最大限の譲歩」
「この船の電伝虫は、無理ですよね」
「うん、無理。通信が傍受されると見つかるから」
両手でバツ印を作るキリを見て、思わずコビーが溜息をつく。
いつも通りで安堵したが困る必要があったかもしれない。
良くも悪くも海賊で、そう簡単に逃がしてくれるはずもなかった。
メリー号は静かに島から離れていく。海軍に追いつかれぬよう、迅速な動きだった。

友愛

夕刻になりつつあった。
日は落ち始め、太陽に照らされて海の色も変わり始めている。
一日の終わりが近くなって、航海の終わりを感じつつあったゴーイングメリー号はそろそろ停泊を考え始めていた。前の島を出て以降、一度も足を止めることなく走り続けているのだ。船員も疲労の色を見せており、休みたいと考えるのも当然。
たった一日で様々なことがあった。
黄金郷を探して冒険し、お宝は見つからなかったが伝説の海賊の最期を見やり。
一方で他の三人は伝説の海兵と死闘を繰り広げて、殺されることなく無事に逃げ出した。
改めて考えれば騒がしい一日である。
しかも船上には人質として連れてきた海兵二人が乗っており、こちらも疲弊した表情。
まさかの展開に溜息が堪え切れていなかった。
「ほんとによぉ、なんでこんなことになっちまったのかねぇ……あいつらに出会ってから良い事なしだ。親父はぶっ飛ばされて捕まっちまうし、しかも逃げちまうだろ？　そうかと思えばガープ中将に捕まってぶん殴られて、その次はまた孫に連れ去られて人質で……」
「気を強く持って、ヘルメッポさん。頑張ってればいいこともあるから」
「ハァァ……疲れちまうよなぁ。とりあえず今日はゆっくり寝たい」
「そうだね。でもこのままだと船で寝ることになるかも――」
「島が見えたぞォ！」
コビーとヘルメッポが座り込んで話していると、頭上から大声が聞こえてくる。
メインマストの上に居たウソップが双眼鏡を覗いていた。船の前方に島を発見したらしい。ちょうど泊まれる場所を探していたため、

停泊するには絶好の場所だろう。
気の抜けていた一同もその一言で動き出す。
船から身を乗り出して前方を確認し、確かにその姿を視界に納めた。
羊の船首にルフィが乗り、胡坐を掻いて前方を眺め、目を輝かせている。
おそらく人が住んでいる。向かっている先に小さな港が見えていた。ひとまず今日は野宿や船で休むことにはならず、羽を伸ばせそうである。
船の前部にはキリもやってきてルフィに話しかけた。
「ここなら休めそうだね」
「じいちゃん追いかけて来ねぇかな？」
「ナミと相談して航路を決めたんだ。一応バレないように気を遣ったつもりだけど、どうかな」
「まぁいいさ。また会ったらそん時はそん時だ」
「戦う気？」
「ああ。海賊やり続けるためにはな」
ルフィは気楽に笑ってそう言った。勝てると思っているのか。わからないが、キリも頷く。
やめるつもりはない。海賊王になると決めたから。
「それにしてもおっさんのおでんはうまかったなぁ。また食いてぇな」
「また会えるさ。グランドラインを一周すれば」
「あ、おっさんを仲間にすればよかったんじゃねぇか？」
「多分断られてたと思うよ。ウーナンの誘いだって断ったんだし」
「そうか……じゃあおでん作れる奴を仲間にしよう。あと肉も」
「いよいよコックを仲間にするわけだ」
「ししし。いい奴探さねぇとな」
二人が言葉を止めるとコビーとヘルメッポもやってきて、彼らに近付く。どことなく不安そうな表情に見えなくもない。やはり自分の船でなければ落ち着かないのだろうか。

コビーが恐る恐るといった様子でルフィへ尋ねる。
「ルフィさん、今日はあそこで泊まるんですか？」
「ああ。町とかあるのかな」
「さぁ、流石にそこまでは……それじゃガープ中将への報告は明日になりそうですね」
「急ぐ必要もないんだし、いいんじゃないかな、今日くらいは」
「適当に言いやがるぜ。おれたちは規律だってあるんだぞ。海賊と違ってな」
呆れた顔でヘルメッポが腕を組む。
彼にとって海賊と航海する経験など初めてだ。コビーにしても、以前ルフィたちと少しだけ航海した経験を持つものの、あの頃はこんな立派な帆船はなかった。変化には多少の戸惑いを覚える。おそらくはこのままでいいのかという躊躇いが消えないのだろう。
困惑している様子の二人へ、またキリが軽口を叩いた。
「海兵として成り上がるためにはいい経験でしょ。海賊といっしょに航海すればもっと海賊についてよく知れる。将来この経験が役に立つって」
「おまえらはそこらの海賊とも違うだろうが」
「それって褒め言葉？」
「どこがだ！　おれたちはずいぶん迷惑かけられてんだぞ」
「まぁまぁ、キリさんの言うことも一理あると思うよ」
「フン。コビーは友達かもしれねぇけどな、おれは海賊の口車になんて乗らないぞ」
窘めるコビーと、本心を露わにするヘルメッポ。
初めて見た時は意外な組み合わせだと思ったが、意外と良いコンビネーションに見えた。
ルフィとキリが顔を見合わせて肩をすくめる。
「意外と良いコンビじゃないか」
「ししし。おまえら仲いいなぁ。前は殺されかけてたのに」
「むっ、あの時はまぁ……おれも尖ってた頃だった」
「ふふふ、ちょっと前のことでしょ。いいんです、もう謝ってもらい

ましたし」
「そっちの方がいいよ。航海してると大変だからさ、助け合ってる方がきっと楽になる」
ルフィが体ごと彼らの方へ向き、同じ頃にキリは欄干へ尻を置いて座る。
その姿を見ているとコビーの頬が緩んだ。
人質にされた時にはキリが別人のように思えたものの、今は違う。
目の前に居るのはやっぱり彼の知る二人だった。
「お二人は変わってませんね。仲間が増えて船を持っても、ぼくが知ってるお二人だ」
「そうか？」
「ルフィはそう簡単に変わらないよね。基本マイペースだし」
「キリさんもですよ。マイペースは同じでしょ？」
「そうかな」
「でもな、おれたち大冒険だってしたんだぞ。コビーと別れた後も色んな物見たんだ」
「へぇ。どんな冒険か、聞いてもいいですか？」
「当たり前だろ。あのな、まずたわしのおっさんに会ったんだけどよ――」
ルフィはコビーとヘルメッポを相手に、楽しそうに冒険の話を始めた。
まず最初に話そうとしたのはシェルズタウンを出てすぐの頃。珍獣たちが生息する島に住む、たわしのおっさんと呼ぶガイモンと、そこで出会った怪鳥（ルク）と少女の話。
二人は興味津々に話を聞いて、徐々にだがヘルメッポも話に惹き込まれていく。
キリは微笑んで彼らの様子を見守った。
彼のペースに乗せられる様はいつもながら天晴。無意識なのに鮮やかな手並みだ。
聞いているだけで落ち着く普段の光景だった。
徐々に島へ近付いて来る。

キリが静かにその場を離れて、仲間たちの下へと赴いた。
「上陸準備。やっと休めそうだね」
「海軍は来ねぇだろうな？　ちらっと見ただけだけど、あいつのじいちゃん、なんかしつこそうだったし。おれはそれだけが心配で心配で……」
「見つからないのを願うばかりだよ。一応ルートはわかりにくくしたつもりだけど」
「相手は長年海兵やってるんでしょ？　逃げ切れる可能性は低いわね」
不安を露わにするウソップを尻目に、冷静に判断したナミがぽつりと呟いた。
そのたった一言で彼の焦りは倍増される。
「お、おいっ、やなこと言うなよ。ひょっとしたらがあるかもしれないだろ」
「どうだか。これで逃がすようなら有名人にだってなってないだろうし」
「他人事みたいに言いやがって。おまえだって捕まるんだぞ」
「あら。私は捕まらないわよ。だって海賊じゃないもの」
「この船に乗ってりゃ海賊に見られんだろ。しかも海賊じゃなくても泥棒だしょぉ」
「心配されなくても上手くやるわ。その時はあんたたちを囮にして逃げればいいだけだから」
「おいおい、こいつ乗っけてて大丈夫なのか？　いつ裏切るかわかんねぇぞ」
ウソップが見回せば、肩をすくめたシルクが苦笑するのが見えた。
ナミとて、本気で裏切ろうという意志がどれほどあるものか。ただ、やはり海賊が嫌いだという状態が変わっていないため、ポーズもあって素直になれないのだろうと思う。
彼女を理解しているせいか、シルクは不安を抱いていない。
不安に苛まれるウソップを見る目も優しかった。
「大丈夫だよ。ナミは信用できる人だから」

「そうか？　まぁ後から来たおれが言うのもおかしな話かもしれねぇけどよ」
「心配しねぇでもシルクが責任取ってくれるってよ。おまえは気楽に構えてろ」
締めくくるようにゾロが言って、ウソップも額の汗を拭った。
そういえば思い出す。一個の海賊団を倒した彼らの強さを。
任せてしまってもいいのだろう。
彼らはこれほど頼もしいのだから。
「よし、もう着くよ。とりあえず宿を見つけて今日は休もう。色々あって疲れた」
「そうしよう。今日はコビーたちもいっしょだね」
ゴーイングメリー号はゆっくり島の港へ入っていく。
操船はすでに慣れた物。傷一つつけずに足が止まる。
船が停まってまず最初に、ルフィが興味津々で欄干から身を乗り出した。平凡そうなとでも言うのか、特徴がない代わりに平和そうで、争いは無さそうな島である。
ひとまず休息は取れそうだ。
最初にルフィが船を下りて港へ立つ。
ただその時には港付近に島民たちが集まっていて、何やら不安そうな表情。互いにひそひそ話している。決して、彼らを歓迎するようなムードではない。
他の者たちは異変にすぐ気付くが、ルフィは全く意に介さず。
辺りをきょろきょろ見回し、探すのはいつも通りの物だ。
「あのさぁ、どっかにメシ屋ねぇかな？　あと宿も欲しいんだけどよ。誰か知ってるか？」
話しかけてみるものの、並び立つ島民たちからの返答はない。彼らに怯えている様子だった。
無理もない。
メリー号に掲げられている旗はドクロ。つまり海賊。黒い旗だけでなく帆にまででかでかとマークが描かれているのだから、気付かぬはずがない。

島民たちは海賊の襲来に怯えているらしい。町が襲われると思っている様子だ。
そのため、町にある緊張感たるや、尋常な物ではなかった。
しかしそれを一切気にせず、ルフィは尚も問いかける。
「なぁなぁ、誰か知らねぇか？　うまいメシ屋。あと宿も」
「それは無理じゃないかなルフィ。怯えられてるよ。教えてくれっこないって」
船を下りたキリが一足先に駆けつけて、無謀な挑戦を続けるルフィへ伝える。彼もすぐに振り返った。流石に異変を感じ取って、話を聞く気になったのだろう。
「そうか？　でもおれたち何もしねぇぞ」
「ボクらはそれを知ってるけど、あの人たちは知らないでしょ」
「それもそうか。よし、それじゃ教えよう。おれたちは危なくねぇぞ」
「いや無理でしょ、それじゃ。危険な海賊がおれは危険だなんて言わないわけだから」
「じゃあどうすりゃいいんだよ。なんて言ったらメシ食わしてもらえんだ？」
「ボクらが危険じゃないってことを伝えれば大丈夫じゃないかな」
「どうやって？」
「うーん、どうやればいいんだろう……」
まるで慌てずに気楽なやり取りを見せていると、島民たちを掻き分けて前に出てくる人間が居た。二人の男性である。武器を持っているところを見ても只者ではなさそうだ。
片割れがサングラスをかけ、頬の辺りに刺青を入れた男で。
片割れが坊主頭でヘッドギアをつけた男。
島民たちの中で異彩を放って強さを感じる。彼らは腕を組んでルフィとキリを見据えた。
「あんたら、海賊か？」
「だれだおまえら？」
「フッ、おれが質問したはずが返ってきたのは質問か」

「いいだろう。先にあっしらが答えてやる」
頷いた男たちが答え始めた。
律儀というのか、それともバカか。ぽかんとするルフィとキリはその声を聞く。
「あっしら、泣く子も黙る賞金稼ぎ、ヨサクとジョニー」
「たまたま居合わせた都合で、この町を襲おうとした海賊を打ち払ったのはおれたちだ」
「つまりあんた方に居られるとあっしらが困る。この町の連中はまだ海賊への恐怖心を失っちゃいねぇからだ」
「色々事情はあるだろうが、何も言わずに出てってくれ。じゃなきゃおれたちは、あんた方を始末しなきゃならねぇ」
「いいよ。おれは強いから」
己をあっしと称するヨサク、そしてサングラスをかけるジョニーの問いかけに対し、ルフィは拳を鳴らすことで返答とした。負ける気がないが故の行動である。
この場においては決して正しい反応ではない。
自然と表情を険しくする二人組はその手に剣を持った。
まずいと感じてキリが前に出る。
戦闘の意志はない。ただ休みたかっただけなのにこれ以上の厄介事は御免だ。
やる気を見せるルフィの頬をぎゅっと押しやり、前に出た彼が空気を変えようとした。
「ちょっと待った。ボクら略奪に来たわけじゃないんだ、戦闘の意志はない。金だって持ってる。ただ一晩泊めてもらえればそれだけでいいんだよ」
「そう言って騙し討ちしてくる可能性もある」
「そんな海賊が、ここらの海で艦隊を作って暴れてるらしいからな」
「現にそっちの男はやる気なようだぜ」
「この人はちょっと、考えるより先に手が出る人だから。挑発されたら応じないわけにはいかないんだよ。だからあんまり話しかけないで」

むぎゅっとルフィを押しのけて手を振れば、ヨサクとジョニーの表情は変わる。
拳を握るルフィはともかくとして、確かにキリを見ると戦闘の意志があるようには見えない。そもそも、戦えそうな風貌ではないのだ。海賊だと思うのが難しくもある。
不思議と剣を下ろしかけた。
警戒はしながらも、一応話を聞いてくれそうな態度がある。
ほっと一息ついてキリが肩をすくめた。
ちょうどその時、後から船を下りてきた一同が二人へと追いつく。と言っても港に立っていたのだから大体の事情は察している。誰かに足止めされている、程度のことは。
先にゾロが二人の背後へ歩み寄った。
その彼に気付いて、ヨサクとジョニーの表情が変わる。
「おまえら何やってんだ？　宿に入るんじゃなかったのかよ」
「あ、兄貴!?」
「ゾロの兄貴ィ!?」
「あ？」
ゾロが気付いて二人を見る。するとすぐに思い当たったらしい。見覚えのある顔には自然と名前が思い浮かんできた。
「ヨサク、ジョニー。おまえらこんなとこで何やってんだ？」
「そりゃこっちのセリフですよ！　あんたがシェルズタウンで海兵に捕まったって聞いたから、おれたちゃ急いで助けに行ったのに！」
「辿り着いた頃にゃもう居なくて、町人に聞きゃ海賊になったと！」
「ああ。色々あったんだ。それに野望を果たすためにはそれなりの船も必要だしな」
立ちはだかる様子だったヨサクとジョニーは、明らかに様子を変えている。敵対心は掻き消え、表情は輝き、一瞬で親しげな態度となる。
あまりの変化にルフィとキリはついていけなかった。
多少の疑問を抱きながらゾロへと尋ねてみる。
「知り合い？」
「まぁな。海賊狩って生活してた頃に会った」

「ふぅん。賞金稼ぎ仲間ってわけか」
「そんなとこだ。知らねぇ内に妙に懐かれちまった感じもあるがな」
明らかに態度が変わって、二人は笑みを浮かべる。
ゾロ一人が居ただけですっかり警戒心は無くなり、町人たちに振り返るのも戸惑いがない。
「そうか、あんたたちゾロの兄貴の仲間だったのか。だったら心配はいらねぇ」
「おーいみんなぁ！　この方々は大丈夫だ！　敵じゃねぇ！」
離れた場所で心配そうに見つめていた面々に伝えてやり、彼らの恐怖感は徐々に薄れていく。海賊から町を守ったという話、嘘ではないらしい。二人を信用しているようだった。
それから彼らは一味へ振り返って頭を下げ、態度を改めた。
ゾロの知り合いならば心配はない。
ただそれだけの理由で、その仲間たちにも丁寧な振る舞いを見せられる。
「先程は失礼しやした。改めまして、あっしらはゾロの兄貴の子分」
「兄貴のお仲間ならあんた方もおれたちの兄貴だ。先の無礼をお許しくだせぇ」
「なんだ、いい奴らじゃねぇか」
「でも面倒そうだね」
「おまえが言うなよ。こいつらに失礼だろ」
思わぬ再会ではあったものの、一大事は無くて安心した。
一行は改めて宿を探すことを念頭に置き、先頭のルフィが二人へと尋ねる。
「おれたちメシ屋探してんだ。あと宿屋」
「どっちかと言うと宿が先だと思うけど。まぁいいよ、それで」
「そういうことならあっしらにお任せくだせぇ」
「ここ何日かこの町で世話になってるんで、もう庭みたいなもんでさぁ」
「そうか。じゃ頼む」

喜々としてルフィが歩き出し、道案内のためヨサクとジョニーが先を歩いた。
「さぁさ、どうぞこちらへ」
「せっかくなら一番うまいメシ屋に行きやしょうぜ」
「ししし、そうだな。どんなうめぇメシあるんだろ。おでんあるかな？」
三人が先に歩き出してしまい、見守っていた他の面子がキリとゾロの傍までやってくる。シルク、ナミ、ウソップに加え、コビーやヘルメッポも一緒だ。
「ルフィ、もう友達になっちゃったの？」
「ああいうの得意な人だからね。ボクらも行こう。今日はもう休みたいや」
彼らもまた歩き出して、塊となって町へ入っていく。
坂道の多い町だった。
小さい路地がいくつもあるため、気をつけなければ迷いそうになってしまう。特にルフィやゾロは危険だろう。目を離せば合流できるまで何時間かかるかわからない。
ヨサクとジョニーの案内に従い、比較的広い道を歩く。
町の中心部にある広場を通り抜け、さらに坂を上ろうとする頃、ルフィが足を止めた。
ちょうど酒場だろう店の前である。
唐突な動きに道案内の二人が驚いて振り返った。同時に後ろを歩いていた一同もそこで一度歩くのをやめる。ルフィは道端に置かれている広い掲示板を見ていたようだ。
「なぁキリ、これ見てみろよ」
「うん？」
町の催し物や祭りの案内。他には店を案内するチラシが貼られている。
指を指して示されたのはそれらではなく、海賊の顔写真を載せた手配書だった。
大小様々な金額が記されている。ただそこにあるのはイーストブ

ルーで活動する海賊の手配書のみ。グランドラインに居るような大物海賊のそれはない。
それでもルフィは興味を持っていたようだった。
「懸賞金かぁ……おれたちにもかけられるのかな」
「そりゃいずれはね。もういくつか騒動は起こしてるわけだし、遠い話じゃないよ」
「そうかな」
「うん。シェルズタウンで海軍に喧嘩売って、監査船を壊して、第八支部の艦隊を潰した。あれはまぁ千年竜の手柄だけど、一応ボクらがやったことになってるみたい。あの監査役がそうしたんだね。あと知られてるかどうかは別として、海賊団もいくつか潰してるし」
「おれたちにはいくらくらいつくかな」
「さぁ。そればっかりは海軍の判断だからね」
今度はキリが指を伸ばす。
示されたのは数枚の手配書。高額の賞金首ばかりであった。
「あの辺りを倒せば、イーストブルー最高額も夢じゃないとは思うよ。ウーナンには届かないけど。今のところイーストブルーの最高額はノコギリのアーロン。元タイヨウの海賊団所属で、魚人の船長だよ」
その言葉を聞いて、手配書を見て、密かにナミの表情が変わる。
変化に気付いていたのは隣に立つシルクだけだった。
「魚人か。おれ見たことねぇや」
「この海のどこかには居るらしいから、会えると思うよ。どこかは知らないけど」
「そいつ、強ぇのかな」
「懸賞金は二千万ベリー。そりゃ弱いって言えば嘘になるけど、ルフィが相手だとどうかな」
「今までの奴らと比べたら?」
「十中八九アーロンが勝つ。でもそこにガープ中将を入れるなら、間違いなくガープだ」
「じいちゃんより弱いなら安心だ。負ける気しねぇよ」

自信満々にルフィが言った。その時、思わずといった様子でナミが呟く。
「バッカみたい」
「ん？」
自然と振り返る顔が多くて、ナミに注目が集まる。
まずいとは思った。だが一度言い出した以上は何か続けなければならないと思い、咄嗟の考えから言葉を続ける。その時もシルクは他の者とは違う表情をしている。
「魚人は、海の中で呼吸ができるの。海が弱点なあんたじゃ引きずり込まれた段階で終わりよ。勝てるはずないわ」
「じゃあ引きずり込まれなければいいじゃねぇか。おれは伸びるんだぞ」
「伸びたところで、魚人の身体能力は人間の倍以上。あんたがどれだけ強くて、どれだけ伸びたとしても、そう簡単に勝てる相手なんかじゃない。わかったら手は出さないことね」
「よく知ってるね。なんか、自分の目で見てきたような言い方だ」
ぽつりと呟かれたキリの言葉にも反応せず、鼻を鳴らした彼女は歩き出す。
皆の視線を背に受けながら坂を上った。
目を閉じ、したり顔で。
まるで作ったような表情で全員の前へ出た後、一人で勝手に歩いていってしまう。どうにも様子がおかしいことは間違いない。何か違和感が付き纏う姿だった。
「この海でアーロンを知らない人間はいない。居たとしたらそいつはどうしようもないバカ。だって、イーストブルーで最も高い懸賞金をかけられた首なんだもの」
そうは言うものの、それだけではない気がする。彼女がその名を知っているのは。
違和感が付き纏ったまま、ナミが行ってしまった。
出会ったばかりで奇妙な空気を感じ、ヨサクとジョニーが表情を歪めて困った様子、同じくコビーとヘルメッポも顔を見合わせて困惑し

ている。船上での姿とも違い、ウソップもまた首をかしげて不思議に思っていた。しかし何がおかしいのかははっきりさせられずにいる。
そのせいか、疑念を言葉にする他なかった。
「なんだあいつ。何か嫌なことでもあったのか」
「さぁな。それより腹減った！　メシ食おう」
「あ、おいルフィ」
ルフィは大した反応を見せずに歩き出す。真剣な顔から一転、腕を伸ばして叫んだかと思えば、すでに食事への期待から笑顔となっていた。
いつも通りのマイペースさ。
呆れながらもウソップが続き、彼の隣で話しかけながらその場を後にする。道案内を務めていたヨサクとジョニーも慌てて小走りになり、二人より前へ出てナミの背に声をかけていた。
残ったのは海兵二人と、一行の古株が三人。
戸惑う二人へ振り返って、キリが微笑んで声をかけた。
「二人とも、先に行ってて。ルフィは危ないけどウソップについてけば大丈夫だ」
「あ？　なんだよ、おまえらは？」
「行こうヘルメッポさん。色々、僕らじゃわからないこともあるんだよ」
「お、おう」
コビーに腕を引かれ、ヘルメッポも歩き出す。二人の背もすぐに遠ざかっていった。
残った三人はふと掲示板を見上げる。
彼女が気にしたのは一枚の手配書。それは間違いない。シルクが気にかけていたため気付くことができた。そしてすでに他の二人も気付いている。
ノコギリのアーロン。イーストブルー最高額の賞金首。
すぐ近くにある手配書を見上げてしばしの沈黙。
キリは微笑みを称え、ゾロは無表情。シルクは心配そうに眉をひそめている。

三者三様の表情で、互いの顔を見ぬままに口を開き始めた。
「どうも色々見えてきた気がするね。嘘が得意かと思ってたけど、意外に激情家かな」
「うん……海賊が嫌いって、やっぱり理由があるんだよね」
「どうすんだ。助けてやるとでも言うつもりか？　おれたちもあいつの嫌いな海賊だぞ」
「ゾロの意見は？　まだ信用できない？」
「フン、仲間じゃねぇなら信用する気はねぇな。だが、まぁ、航海術は確かなもんだろ」
「そうだね。少なくともルフィは欲しがってる」
「私は、なんとかしてあげたいよ。まだ何があったのか知らないけど、ナミが心の奥で何を思ってるのか知らないけど。でも、なんとなく思うの」
シルクが俯き、ぽつりと言う。
「ひょっとしたら、心の奥底では、助けてって叫んでるんじゃないかな。私にはそう思えて仕方なくて……もうナミが嘘ついてる顔見るの、嫌だよ」
「うーん、微妙な問題だよね」
彼女の意見はもっともだが、あいにく船長はこの場に不在。
不在ということは、彼の意見がはっきりしているということだ。
すでに理解しているのだろう。腕を組んだキリは目を伏せて顔をしかめる。
「ルフィも同じ意見な気はするけど、まだ動く気はないよ。あの様子だと」
「どうしてだろう。もうわかってそうなのに、なんで」
「さぁね。何を考えてるかは船長にしかわからない。ふむ、ひょっとしたらナミが何も言ってないからじゃないかな」
「え？」
「全部ボクらの想像だ。ほんとはアーロンとは何の関係もなくて、ただ単に知ってただけかもしれない。助けてって叫んでるかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

「そんなこと……」
「ナミからのアプローチは何もないよ。だから動かないのかも」
笑顔ながら達観した様子でキリがそう言えば、シルクは地面を見つめて深く考え込んでしまう。ゾロは何も言わない。どちらの顔も見ず思案しているらしい。
結局はここで語り合っていても想像でしかなく、正確な答えは用意されていないのだ。
小さく溜息をつき、キリはポケットに手を入れて肩の力を抜いた。
今は流れに身を任せるしかない、ということだろう。
ルフィが自分たちに声をかけないのも、そんな意味がある気がして、一旦思考を捨てた。それさえも勝手な想像でしかないのだが、今はまだ、想像するしかやれることがない。
「まだしばらくはこのままで居よう。向こうが何も言わない限り、ボクらも何も言わない」
「だけど、キリ……」
「でも気になってるのは事実だ。何も言われなくても、気に掛けることはできるはず。シルク、ナミと一番近いのは君だから、頼むよ」
「え？」
「傍で支えてやって。まぁ言い方を変えれば監視になるけど、ボクらじゃできないから」
「……そっか」
にこりと微笑みかけられれば何かが胸の内にすとんと落ちてきた気がする。
彼女は静かに頷いた。
今は目の色が違っている。迷いより先に、納得した感情が読み取れた。
「彼女から目を離さないように。あの様子だと、何をしでかすかちょっとわからない」
「わかった。私、できるだけナミと一緒に居るようにするよ」
決意すると同時、ゾロがちらりと二人の顔を見た。
お節介にもほどがある。

海賊を名乗っていながら、彼らのそれは慈善事業とでも言うか、損得を無視した人助け。
そうかと思い出す。シルクが目指すのはピースメイン。
市民の安全を脅かす海賊を倒す、一風変わった海賊。
まるで正義の味方だと思った。
けれどきっと彼らにそのつもりはなくて、だからこそおかしいと思う。
ハァと嘆息して振り返り、歩き出す。行ってしまったルフィたちに追いつこうと思った。考え事をするのは好きな訳ではない。ただそうしなければならないだろうと思うだけで。
とりあえず今は酒でも飲んでぐっすり眠りたかった。
「ゾロ。そっち行くとまた迷うよ」
そう思っていると背後から止められた。
ぴたりと動きを止めたゾロは振り返り辛い心境で、どうせまた笑っているのだろうとキリの顔を想像し、歯を食いしばる。何も言わずに振り返ってみれば、やはり彼はにんまり笑っていた。
訂正。眠りたいだけではない。
そろそろこの男をぎゃふんと言わせた方がいいかもしれないと思い、猫か犬かを呼ぶように手招きしつつ歩き出すキリに続いて歩きながら、ゾロはどんな勝負で挑もうかと考え始めていた。

ＳＷＥＥＴ　ＥＳＣＡＰＥ

誰に起こされた訳でもなく、不意に目が覚めた。
室内が明るくなっている。気付けばもうすでに朝のようだ。白いシーツがはだけて、もそもそと動き出せば、同じ部屋で寝ていたナミが振り返る。
町にある宿の一室である。それぞれ別の部屋へ入って一夜を過ごし、朝を迎えた。
彼女は先に起き出して立っていたらしい。
窓辺に立ち、部屋へ差し込む日光を浴びて輝くような様相。普段よりも美しく見えた。
すでに身支度も整え、着替えも終えた後らしく、寝ぼけ眼を見せるシルクに振り返ってくすりと笑う。呆けている姿に笑ったナミは可憐で、不思議といつもとは雰囲気が違うように思えた。
「おはよシルク。あんたも意外と寝相悪いのね」
「ん……おはよう、ナミ」
ゆっくり起き上がって目元を擦る。力の抜けたシルクの姿は普段より幼く見えた。
それを見ているとほのぼのして、自然に頬が緩む。
ナミの顔に昨日の陰りはない。昨夜の騒ぎでストレスを発散したのだろうか。
昨日は凄まじかった。
ルフィが音頭を取って宴会が如きバカ騒ぎをし、町人を巻き込んで大騒ぎを続け、数えきれないほどの笑顔に包まれた。彼女が笑っていたのもよく覚えている。手配書を見た折、表情の変化に不安を覚えていたが、ひとまず心配は杞憂だったと安堵したものだ。
徐々に意識を覚醒させたシルクも微笑んだ。
騒いで発散できたのならそれでいい。
窓辺に立つナミは手を組み、日光に目を細めながらぐぐっと伸びをしてみせる。
「ん～いい天気。やっぱり船で寝るのと陸で寝るのじゃ違うわね」

「ナミ、機嫌良さそうだね」
「まぁね。色々あったけど、なんだかんだ言ってお宝は集まってきてるし、あんたたちとの航海も無駄じゃなかったみたい。大変だったけどね」
「海賊、やりたくなった？」
「まさか。それとこれとは話が別」
肩を揺らして笑うナミに安堵を覚えた。
良い朝だと思う。慌ただしい日々のせいか、何気ない日常が尊い物に感じられる。
一時とはいえ不安も消え、全てが昨日と同じではない。
再び振り返ったナミと目が合って、穏やかな時間を噛み締めた。
「朝ごはん食べに行きましょ。どうせ今日中にこの島出るんだろうから、今の内じゃないとね」
「あ、ちょっと待って。すぐ準備するから」
ゆったり休んでいたシルクも慌てて起き出し、準備する。服を着替えて歯を磨き、乱れた髪を整えて、寝起きの様相は一つずつ消されていく。
幾ばくもせず準備は整った。
すぐにいつもの彼女になって、二人並んで部屋を出た。
ひとまず危険なことはないだろうと剣を置いて部屋を出る。
ナミとシルクは宿の一階に降りて、そこにある食堂へと入った。
昨夜その場で行われた宴の名残はすっかり消されている。手早く掃除されたのか見栄えはきれいな物だ。そこで数人の人影を発見して、テーブルについて食事をしている三人を見つけた。
ルフィとヨサクとジョニーである。
彼らも朝食の途中だったのだろう。すぐに気付いて振り返り、彼女たちを見つけた。
「おーいナミ、シルク。こっちこっち」
ルフィが手を振って二人を呼んだ。顔を見合わせ、苦笑しながらそちらへ向かう。
空いていた席に腰を落ち着け、ルフィの隣に二人並んで腰かけた

頃、対面に座るジョニーが宿の女将を呼ぶ。それから適当に注文してしまい、女将はすぐキッチンへ引っ込んだ。
彼女たちの意見も聞かないのにはナミが呆れるも、シルクは気にしないと微笑む。
二人が座った途端、上機嫌なルフィが笑いかけて話し始めた。
「今こいつらからいいこと聞いたんだ。海の上にレストランがあるんだってよ」
「海のレストラン？」
「それって海上レストランのこと？」
シルクが首をかしげた後、ナミが呟く。
ルフィは少し驚きながらも顔を輝かせた。
「なんだ、知ってたのか。一流のコックが集まってるうんめぇ店なんだって。そこ行ってみよう。メシ食うついでにコック見つけるんだ。おれたちのコック」
「コックかぁ……そう言えば考えてなかったね」
楽しげなルフィの笑みにシルクが同意する。素直に納得している様子だ。
今日までの航海、料理に関しては大体がキリとシルクが協力して行っていた。しかし本職ではない。ただ器用だからなんとかなっていたというだけで、彼らでは一日に摂取する栄養までは気が回らないのだ。そろそろ探すべきだと、キリが料理中ぼやいていたのも聞いている。
海上レストラン、バラティエ。
イーストブルーでは有名な店で、味は抜群、料金は安い。人気店として広く名が知れていた。
ただ一方で粗暴なコックが多いとも、そのせいでウェイターがすぐ逃げてしまうとの噂もある。他にも、海賊に襲われても自分たちだけで撃退してしまうのだとか。
目的地としては面白いと思う。
海賊の仲間になってくれる人材を探すにも悪くない。
シルクは全面的に同意、笑顔で頷いた。一方ナミは我関せずとばか

りに興味なさげで、運ばれてきた水を飲んで一息ついている。
「うん、探そう。これからの航海にきっと必要になるよ」
「いい考えだろ。肉とおでん作れる奴がいいなぁ」
「よっぽど気に入ったんだね。一流のコックならきっと作れるんじゃないかな、おでん」
「いやぁー楽しみだなぁ。ヨサクとジョニーが道案内してくれるんだ」
「任せてくだせぇ」
「これでもこの海を航海して長くなるんで、位置はばっちりわかってますから」
初対面の印象とは違いすっかり仲良くなったらしい。宴に参加していたのも大きいだろう。親しげな彼らはぐっと親指を見せ、満面の笑みで得意げに言った。
次の航路は決定したようだ。
ルフィは楽しみにしているが、気になるのはこの場にキリが居ないこと。普段ならば船長の傍であれこれ考えを巡らせる副船長はどこへ行ったのか。
他にも姿が見えないメンバーが居るため、口を閉ざしていたナミが尋ねる。
「それはいいけど、キリは？　大事な話なのにいないじゃない」
「ああ、キリの兄貴なら昨日の酒が堪えてるみてぇでまだ寝てますぜ」
「なんせゾロの兄貴と飲み比べしてたからなぁ。あの人ザルだから、相手にするとやべぇんだ」
「そういえばそんなことしてたっけ。でも、お酒弱かったかしら」
料理が運ばれてくる間、シルクが隣のナミへ言う。
能力に関して話す機会があって、彼の体質についても聞かされていたのだ。
「キリもアルコールには強いよ。でもほら、紙の体だから、水分を取るのも一苦労らしいの。体が濡れた時みたいに、中から濡れちゃうからだめなんだって」

「あぁ、そういうこと……能力者ってめんどくさいわね。シルクはまだマシな方か」
「これもかなり変わってるみたいだけどね。体質の変化も分かりにくいし」
「それでも伸びたり、濡れると力抜けるよりマシでしょ。にしても水飲むだけでだめって致命的じゃない。普通の生活に支障が出てるわけだから」
「うん。だから普段キリがだらけてる時って多いんだよ」
「そういう理由？」
「本人が言うには」
「絶対それだけじゃないわよ、あの性格からして。ただだらけたくてだらけてるだけだわ」
ナミが呆れて言えば、シルクが肩を揺らす。
確かにそんな気はする。反論できないのは彼を知っているためだった。なるほどと思う一方でそれとは別に、ナミが同じくらい理解しているのが嬉しく思う。
口では厳しく言いつつも、距離は確実に縮まっている。少なくともそれだけは確かだ。
「ウソップは？　コビーたちも居ないけど」
「あいつら仲良くなったからな。ウソップが買い出しに行ったから手伝ってくれるんだとさ」
「ふーん。で、あんたはのんきに食事中ってわけ」
「実はもう一時間くらい食ってますよ」
「朝からなんつー食欲だ……しかも昨日の宴でめちゃくちゃ食ってたのに」
ヨサクとジョニーが呆れている目の前、ルフィは尚も食事を続けていた。それも今から食べ始めるナミやシルクより勢いは凄まじい。
彼ら二人にとっては初めてだろうが、仲間にとっては当たり前の光景。
特に反応もないまま、ナミとシルクは自身も食事を始め、軽食を口にし始める。

和やかな風景である。
のどかな時間をゆったり過ごし、朝らしい過ごし方。
しばらくまた海上レストランの話をしていると、二階からキリが降りてきた。あくびをしながら眠そうな顔。いつもより気が抜けた姿に見える。
彼を見つけたルフィは笑顔で手を振り、近くへ呼んだ。
ふらふらした足取りでやってきたキリが五人が囲むテーブルへと歩み寄る。
「おはようみんな。絶好調みたいだね」
「ああ、腹いっぱい食ったし、思いっきり寝たからな。それよりさ、いい話聞いたんだ」
「いい話？　いきなり景気いいね」
「海上レストランがあるんだってよ。コック探すのそこにしよう。うめぇメシ作るコックを仲間にして、その次はいよいよグランドラインだ」
ようやく食事を終えて、立ったままのキリを見上げてそう言った。
いよいよである。
当初から目的地に定めていたグランドラインへ、いよいよ向かう時が来たらしい。機は熟したとはキリも思う。戦闘員、狙撃手、航海士。クルーは着実に増えてきて、あとは長い船旅に必要な、栄養に関する専門的な知識を持ったコックを仲間にすればそれで準備は完了。
時は来たということか。
ルフィの顔には冒険心が溢れるようで、気楽に見下ろしたキリはへらりと笑う。
異論はない。ならば決定に従うまでだ。
「いいよ。それじゃ先に海上レストランに行って、その後グランドラインだ」
「しっしっし。楽しくなってきたっ」
「ところで海上レストランって何？」
「あんた、知らないで頷いたの」
「あはは……キリはイーストブルーのこと、あんまり詳しくないも

んね」
決断の後の質問でナミが表情を歪め、シルクが苦笑する。心配になるようなやり取りだったがすでに決定。今後の予定は固まったようだ。
不意に、シルクがナミの顔を見る。
キリの反応を見たのは別として、何やら様子が変わったように思えた。
「ねぇ、キリも何か食べる？　私たちも途中だから、いっしょに」
「そうだね。コーヒーだけもらおうかな」
「あんた水分取り過ぎると力抜けるんでしょ？　やめときなさいよ」
「大丈夫だって、ちょっとくらいなら」
気を利かせてシルクが口火を切ると、すぐに変化は消えてしまう。おそらく誰も気付いていない。注意して観察していたシルク以外は。
隠し事をされているような素振りには悲しくなる。
しかし今はこのままでいるしかないのだ。
キリがヨサクとジョニーが座る側へ回って、椅子を引いて座ろうとする。
その瞬間に室内へウソップが飛び込んできた。扉を開ける音も荒々しい。見るからに慌てている表情と走り方で、転びそうになりながらも彼らの下まで駆け寄ってくる。
「た、たたたっ、大変だァ～!?　海軍が来たぞルフィ！　おまえのじいちゃんが来たァ！」
「何イ～!?　じいちゃんが!?」
「コビーたちが言ってたんだ、間違いねぇ！」
その一言で空気が一変する。
眠たげにしていたキリが真顔になり、ナミとシルクに焦りが生まれる。ルフィは聞かされた途端から目を剥いて驚いていて、ヨサクとジョニーだけは状況が読めないものの、明らかな緊張感からまずい展開なのだろうことだけは理解できた。
テーブルを強く叩いてルフィが立ち上がる。

もはや悠長にしていられる状況ではない。焦るのも無理からぬことだった。
「キリ、どうしよう!? じいちゃんが来た!」
「ウソップ、距離は?」
「もう目の前まで来てる! おれたちが買い出ししてる間に近くまで来てたんだ! とにかく一旦外出てくれよ、そしたら早ぇから!」
慌てふためくウソップが駆け出し、全員が後へ続く。話についていけなかったヨサクとジョニーもひとまずついていき、一番後ろとなって宿の外へ出た。
山を使って作られた町は坂道が多く、長く、彼らが居る位置は山腹の半ばほどに近い。
広い通りに出れば海を一望できた。
確かに島へ近付いて来る軍艦が一隻ある。犬の船首を持つ特別な軍艦。ガープ中将の船だと言われて納得の外見で、あと十分もすれば島に到着するだろう。
つまり今からでは逃げられない。この距離感、あまりにも危険過ぎる。
動揺する面々の中で、キリが静かに歯を食いしばった。
「あれがじいちゃんの船か」
「くそっ、なんでここがわかったんだ? 前の島から結構離れたし、コビーたちは連絡してねぇって言ってた。この島の連中が通報したわけもねぇだろうし」
「勘で来たとかだったら最悪だね。ルフィの肉親だし、可能性あるけど」
「山勘でここに来ちまったってことかよ。そんなのありか」
途方もない緊張感に包まれる。
話は聞いていた。ルフィが無条件で恐れる相手で、キリとゾロが勝てないと認識した人物。それが、ルフィのみをターゲットに島へ近付いて来る。恐怖心を持たずにはいられない。
緊張感が増す中ルフィが振り返った。
傍に立つキリを見やり、真剣な顔つきで問われる。

「おれは海兵になるなんて嫌だぞ。海賊王になるって決めてんだ」
何とかしろ、と言いたいのか。
しばしの間キリは目を閉じ、考えた。
敵は海軍の英雄、ガープ。かつては海賊王ゴールド・ロジャーと互角に渡り合い、一国さえ滅ぼす彼を相手に生き残り、今も尚現役、伝説であり続ける人物。生半可な覚悟では勝てないことは以前の対峙で理解していた。もっと突き詰めて考えなければこちらが負ける。
この場における勝利はいらない。船長が望んでいないからだ。故に、必要なのは逃げるための手筈。ガープをやり過ごしてこの島を出る方法。
高速で思考が駆け巡る。今までにないほど速く、冷静に。
数秒の後にキリが目を開いた。
そして背後へ振り返り、仲間たちの顔を見回す。
幸いにも手駒は二つ増えていた。賞金稼ぎのヨサクとジョニー。まだ実力のほどは確認していないが、二人がかりとはいえ海賊団を潰せるほどの腕と、そして胆力があるのは間違いない。
彼は重々しく口を開いた。
「コビーたちは？」
「買った物を船に運んでくれてる。おれがこっちに来たから」
「それでいい。ヨサク、ゾロを起こしてきて。文句言うなら叩き起こしていいよ」
「合点だ！」
「ジョニー、この島の地図とかあるかな？　できるだけ道が正確に描かれてる物がいい」
「よし、とりあえず宿のばあさんに聞いて来る！」
言われてすぐヨサクが駆け出し、少し遅れてジョニーが走り出す。それぞれ違った目的のために二人が宿の中へと入っていった。
改めてキリが振り返る。
再び海を眺めるとウソップが焦って声をかけてきた。
「おい、ゾロが来たら急いでメリー号に戻ろうぜ。今ならまだ――」
「もう遅い。今からじゃどうやっても逃げるのは無理だ」

「そ、それじゃどうすんだ？」
「この町で迎え撃つ」
まさかの発言にウソップが目を剥いた。
てっきり逃げるものだと思っていた。だがキリは、彼らと戦うつもりらしい。
「正気か!?　おまえらが勝てねえって思った相手なんだろ！　戦ったって勝てる訳……！」
「定義の違いさ。何も相手を倒すことだけが勝利じゃない。この場においてボクらの勝利は、全員が生きて島を出ること。つまり正面衝突だけが戦いじゃない」
「どうする気？　作戦があるってことだよね」
シルクが問えばキリは頷く。
自然と全員の視線が集まって、真剣な顔で見つめられた。
「幸いここは坂が多いし、道も狭い。戦力の差は利点にはならないだけじゃなく、むしろその差をこっちが利用できる。戦略さえあれば負けるような相手じゃないはずだ」
「に、逃げるだけ、なんだよな」
「そうだよ。ただしその前に敵を港から遠ざけなきゃいけない。それに先手を打たれてメリー号が沈められればそれで終わりだけどね」
「じゃやばいじゃねぇか！　メリー号は港に堂々と停めてんだぞ！」
「まぁ、そうならないように願うしかないかな。ルフィの祖父ならその辺、雑にしてくれるとは思うけど、もしもの時はちゃんと止めに入るよ」
相手の行動や奇跡を待つしかないという、あまりにも悲惨な現状。やはり己と敵の間に実力の違いは大き過ぎる。しかしやらねば。この場をやり過ごせない男に、海賊王になる器があろうはずもない。また、その野望を持つ男に同行できるほどの価値などないはずだ。
「ヨサクとジョニーも含めて、ゾロが来れば全員の行動を決める。目的はあくまでも戦闘ではなくこの島から逃げること。それができれば、ボクらの勝ちだ」

「よし、やるぞ。相手がじいちゃんでも負ける気なんてねぇからな」
決意を固めるように呟かれる。
その時、またもナミの表情が変わっていたことに気付いたのは、シルクしかいない。
苦悩する表情。
悲しげで、辛そうで、なぜそこまで思いつめるのかと思える顔だった。当然心配しないはずもない。しかしこの場は敢えて問わず、シルクは唇を噛み、彼女に声をかけなかった。
船が近付いて来る。
言葉にできないほど大きく、不穏な気配が漂っており、それに気付く者も少なくはない。
ただ海を眺めながら、明らかに風が変わる瞬間を感じていた。

SWEET　ESCAPE（2）

港へ緩やかに停まった軍艦は慌ただしい様相を称えていた。
全海兵、戦闘準備を行っている。
以前の対峙から、麦わらの一味に対する警戒心が持たれていた。実際に敵と会ったのはガープとボガードの二名。対峙した末に戦い、まさかの展開ではあったが敵を取り逃がし、一度は姿を見失ってしまった。誰もが想像もできなかった事態で、緊張は驚くほど広まっている様子。
イーストブルーでこれほどの緊張感に包まれるとは誰一人として思っていなかった。
海軍本部、つまりはグランドラインから来た彼らは些かこの海を舐めていたということだろう。苦戦することなどあり得るはずがないと思っていたに違いない。
今はこの海へ来た時とは空気が一変していた。
どちらを見ても顔には緊張が張り付けられ、無駄口を叩く余裕すら無くなっている。
あのガープ中将の手から逃げた海賊。
噂にあった海賊王ではあるまいし、そんなことが可能な海賊が居るというのか。恐怖心も浮かびつつ、船上にある空気は重い。できることなら戦闘は避けたいところ。
ただ、ガープはやる気だった。
ルフィを連れ帰る。それだけでなく以前取り逃がした海賊たちの捕縛もせねばならない。
敗北したままでは退けずに、彼の決意は以前よりも固くなっていたようだ。
「もうじき島に到着します。……よろしいのですか」
「何がじゃ」
「雑用二人を迎えるのはいいとして、その他は本来約束にないこと。これ以上は蛇足です。無駄な戦闘は行わず、早急に本部へ戻るべきかと」

「フン、撤退のう。海兵が海賊を見逃してか」
「それをあなたが言いますか。……フーシャ村の、山奥の話。私が知らないとは思っていないんでしょう。本当に、今更な話だ」
ボガードの言葉にガープが口を閉ざして黙り込む。
それは罪。海賊と戦うべき海兵として、やってはならないことをした自覚はある。
部下が呆れるのも無理はない。
彼は誰よりも深い罪を犯し、それを知られぬままに今日を生きている。海軍の英雄として、数多の尊敬を集めて、これからもきっとそうであろう。
一度目を閉じ、しばしの時を置いて、再び目を開いた時には迷いが消えていた。
多くは語らない。今は目の前の標的を仕留めるのみ。
改めてガープが返答を出す。
「我が孫ルフィと、その一味を捕らえる。変更はなしじゃ」
「了解」
それ以上はボガードも追及しない。ただ命令に従う姿勢を見せた。
海兵たちの準備が整い始める中、まず最初にガープが船を降りていく。後ろにはすぐボガードが続く。他の海兵たちも、一つの部隊を残して島へと降り立った。
大型の軍艦に、百人を超える海兵が武器を持って町に現れる。
物々しい雰囲気を纏って訪れれば、港に立ってすぐその姿を拝むことができた。
彼らは進む足を止め、距離を取って対峙する。
誰もが真剣な顔になっている。油断もしていなければ迷いを見せる者とて一人もいない。そこに居たのはすでに聞かされていた風貌の男だったのだ。
赤いシャツにジーンズの半ズボン。そして草履と麦わら帽子。
待ち構えていた様子でルフィ一人、腕を組んで町の入り口に立ち、ガープを見据えている。
もう殴られることに怯えていた子供ではない。

覚悟を感じる強い眼差しを感じ、思わずガープが笑ってしまった。
「久しぶりじゃのう、ルフィ。今日は逃げんのか」
「なんだよじいちゃん、前にも言っただろ。おれは海賊やめる気なんてねぇって」
「この大馬鹿もんが。いいからじいちゃんの言うことを聞いとけ。海賊なんぞやっとっても百害あって一利なし。良い事なんぞ一つもないぞ」
「そんなこと、じいちゃんが決めんなよ」
会話もそこそこ。ルフィは早々に拳を構えた。
姿勢は低く、闘志は漲っている。演技でそうしている訳ではない。本気で戦うつもりだ。
鼻を鳴らしてガープが笑む。
己の孫であっても敵となるのなら容赦するつもりはない。向かってくる気だったとしたら、己の拳で迎え撃つまで。そこに家族の情は割り込ませない。
ガープもまた準備をしようとコートを脱ぎ捨てた。
「どうしても連れて行きてぇなら、力ずくでやってみろよ。それでもおれは行かねぇ」
「聞き分けの悪い奴じゃ。そうまで言うなら力を見せてみろ。覇気も使えんおまえが、この先の海で生き残っていけると思っとるのか」
「ハキ？」
「その存在を知らんまま手に入れられるほど、海賊王の名は安くないぞ」
「知らねぇからってなんだ。色々知るために冒険するんだ。じいちゃんは黙っててくれ」
「じいちゃんに向かって黙れとはなんじゃあ！」
「おれは、海賊王になる男だッ‼」
拳を握って雄々しく吠えた。
その声は海兵たちが震え上がるほどの迫力を持つ。船出したばかりで予想以上の力を感じさせ、まだ未完ながら凄まじい力を秘めていることを想像させる。

やはり血は争えないのか。
先の言葉を引っ込めて、密かにガープは驚いていた。
「操れてはいませんが、内に秘めた力は相当な物ですね」
「流石は我が孫。じゃが、容赦はせんぞ」
ガープが拳を握りしめてやる気を見せる。
必然的にルフィとガープのみが対峙する構図となり、海兵たちはどうすればよいかもわからず立ち尽くし、ボガードは敢えて静観するつもりで口を閉ざした。
緊迫した空気が港へ広がっていく。
その時、ボガードが気付き、視線を上げた。
突如として、町にある家屋の一つ、屋根の上から火の玉が飛んできたのである。敵の攻撃なのだろうか。それにしては狙いがあまりにも上過ぎて、誰かに被害を及ぼす様子でもなかった。
ガープも気付いている様子でその軌道を眺める。
目線で辿ればどこを狙っているかわかった。しかしそれはあまりにも想定外。
まさかの事態に彼ら二人が真っ先に驚愕し、目で動きを追う。
放たれた火の玉は正確無比、軍艦のマストに掲げられた旗にぶち当たった。当然、海軍所属を示すカモメマークを記した旗が燃え上がり、その場の海兵たち全員が見上げ、言葉を失う。
敵船が掲げる旗への攻撃。
それは宣戦布告を示す。
十人にも満たない小さな海賊団が、英雄ガープに喧嘩を売ったのだ。
「まさか……!?」
「わしらの旗を……!」
「じいちゃんっ!」
旗を撃った犯人が誰かを確認する暇も与えず、ルフィが叫ぶ。
大気の震えが増していた。
この時、疑念は確信に変わる。
彼らを野放しにしていてはいけない。必ずこの場で捕らえなけれ

ばと。
いつしかガープだけでなくボガードもそう思うようになり、刀を持つ手に力が入る。
「止めてぇんなら何回だってかかってこい！　何回でもぶっ飛ばして、おれたちは前に進む！」
「ひよっこがッ。偉そうに言いおるわ……！」
言い終えた途端、ルフィは踵を返し、坂道を駆け上がり始めた。
一見すれば逃げる仕草だ。だが彼らの船は港にあり、そこから遠ざかる挙動はあまりに愚行。逃走とは別の何かを考えているらしかった。だからと言って、向かわない選択肢はない。
覚悟を決めたのはガープが先。
即座に駆け出し、己が孫を追って町の中へと向かい始めた。
「待たんかルフィ！　貴様の性根を殴り直してやるわい！」
「ガープ中将、お待ちを……チッ、聞く訳ないか。仕方ない」
一人で走り出してしまったガープを止める暇もない。あっという間に行ってしまい、言うなればこれは、彼と分断させられたような状況だった。
ルフィを狙っている以上、挑発されればガープが見逃すはずもない。
上手くしてやられたのではないかとボガードの表情が歪んだ。
何やら嫌な予感がする。一手を間違えれば大損害を与えられかねない、近頃はめっきり感じなくなった独特の感覚だ。
ガープの単独行動を許し、ボガードの視線は先程の弾が放たれた屋根へ。
今はもう見えない。さっきはそこに二人分の頭が見えたはずだ。
何かが始まっている。宣戦布告から始まる、自分たちを迎撃するための何かが。
混乱した状況で冷静に思考を動かす。
とにかくこの場に居続ける意味はないとして、彼は部下に指示を出し始めた。
「敵の船を押さえておけ。怪しい者が来たら戸惑い無く発砲し、必

ず止めろ。ただし殺すな」
「はっ！」
「残りは私について来い。海賊たちを捕縛する」
十名ほどがゴーイングメリー号へと向かい、敵が来ないようにと警備を始める。
残りの九十名近い戦力がボガードを先頭に町へ歩き出し、そこからいくつかの部隊に分かれて、敵の捜索を開始する。まだ人数さえ定かではないが、そうするより他はない。怪しい者を見つけ、捕らえて、果たして海賊か否かを確認するより方法がないのだ。
事態は急速に動き始める。
海兵たちは町中へ入り、一部は港へ残って、いまだ海賊たちの総数知れず。
ルフィはガープを引き連れて町中を走り回り、とにかく坂道を上って山を目指して、港から離れようと速度を上げ続けた。ガープもそれにしっかりついていく。
作戦開始から、実に三分。
最初に動いたのは港付近に潜んでいた、ヨサクとジョニーであった。
「よし。敵の数は減ってる。そろそろいいはずだぜ」
「しかしまさか、海軍と戦う羽目になるとはな。おれたちの金づるだったはずなのに」
「おい、逃げる気じゃねぇだろうな。兄貴たちの頼みなんだぞ」
「わかってる。そんなつもりは毛頭ねぇよ。おれァゾロの兄貴についてくって決めたんだ」
港の端にある木箱の陰に隠れてしゃがみ、ひっそりと辺りの様子を伺う。
ひとまず目につくのは、ゴーイングメリー号の周囲を固める十名ほど。近くには軍艦が止められているため、そこに残った海兵が駆けつけてくる可能性もあるが、当初の数を見た後では少な過ぎるくらいだ。全く問題はないとして、二人が利き手に刀を持つ。
独特な刀身の包丁のような剣。

使い慣れた武器を手に、彼らは勢いよく飛び出した。
「しゃあっ！　行くぜ相棒！」
「おおともよ！　こうなりゃやれるだけ暴れてやる！　兄貴たちのために！」
突如現れた二人は真っ直ぐにメリー号へと走って行き、警備についていた海兵たちが驚愕する。武器を振り上げているのは明らか。おそらく海賊だろうと思い、瞬時に武器が構えられた。
襲ってきたのは賞金稼ぎ。だがそうと気付く者は居ない。
海賊として認識された彼らは、奪われたメリー号を取り戻すために戦いを始めた。
時を同じくして、別の場所では。
屋根の上を飛び移って移動するキリとウソップの姿がある。敵船の旗を燃やして、宣戦布告を行った後、彼らは海兵に見つからないよう気をつけて行動していた。
時折双眼鏡を使いつつ、敵の動きを確認したところ、人数を分けて行動しているのは明らか。
このまま見つからないならば密かに港へ向かってもいい。しかしウソップはともかく、キリは以前に顔を見られている。一度も見つからなければ敵の警戒心を高める危険性があった。ならば、何度か敵の前に姿を現し、かく乱した上で姿を隠して、逃げる。それが最も良い手段。
少しでも逃げられる確率を高めるため。
二人は最初の地点からずいぶん離れてから通りへ降り、すぐさま狭い路地へと入った。
「ほんとに大丈夫かよ……海軍に宣戦布告って、海賊だってやらねえぞ」
「なに、パフォーマンスさ。あれくらい派手にやらなきゃ敵の動揺は誘えない」
「だからってよぉ、今後のこと考えてるか？　おれたち明らかに目えつけられるぞ。本部の船に、しかもあのガープの船に覚えられちまったらどうなるか」

「残念ながらもう遅いよ。ウソップが乗り込む前から、ボクら本部の船に目をつけられてる」
「マジか!?　なんで！」
「しーっ。色々事情があるんだよ」
小さな路地から大通りを見れば海兵の姿はない。まだ近くには居ないようだ。
かく乱のための準備もある。
キリはウソップへ振り返り、緊張する彼に落ち着くよう促した。
「心配しなくたって上手くいくよ。ほら深呼吸」
「すーっ……はぁーっ。いや無理だ。全然落ち着かねぇ」
「まぁ緊張感は持ってた方がいいからね。じゃそのまま行こう」
「おまえ、軽く言いやがって。おれの臆病さを舐めんなよ」
「舐めてないって。ウソップはそのままが良いんだ」
いつもの微笑みであっさり言い始める。元気付けようとしているのか、それとも本音か。
どちらにせよ話していなければプレッシャーで押し潰されそうだ。
時間はまだあるらしい。ひとまずキリの話を受け入れる。
「はっきり言ってウソップは今までウチに居なかった新しいタイプだ。確かに正面切って戦えばボクらには勝てない。でもだからこそ他のみんなにはできない戦法がある」
「どういうことだよ。言っとくがおだてて強くなるほど単純じゃねぇぞ。おれのネガティブは本人も認めるほどのお墨付きだ」
「おだてる訳じゃない、本気さ。前に言ったこと覚えてる？　戦闘に必要な物」
「敵の隙を突いて、攻撃を当てる」
「その通り」
「だからそれができりゃ苦労はしねぇって……」
「それからもう一つ。戦闘に必要なのはここだ。これがあれば大抵の人間は強くなれる」
キリが自身の頭を指して言った。
頭を使って戦えと言いたいのだろう。

確かにそうだとウソップは思う。自分はルフィのように身体能力に優れる訳ではなく、ゾロのように刀を使える訳ではない。シルクやキリのように悪魔の実の能力も持っていない。戦う方法があるとするならば、頭を使って工夫するしかないのである。
それは自覚している。だがやはり言うのとやるのでは大きな違いがあるだろう。
やはりウソップの表情は暗いままで、さらにキリが言葉を重ねた。
「ウソップの武器は、狙撃と嘘と逃げ足、そして武器の多様さだよ。それだけあれば十分戦える。ボクらとは違った戦法で、ボクらを助けることだって」
「頭を使って、ってやつか……」
「特にこの町は地形が使える。坂道と狭い路地。これ二つだけで色々遊べるよ。だから、さっき打ち合わせした通りに。今やることはそれだけで十分」
「なるほど。わかった」
「まずは時間稼ぎだ。ルフィが目標地点に到着するまで、町中をパニックにする」
再びキリが通りを確認する。海兵たちの姿が見えた。
笑みが深まり、路地へ戻ってウソップを確認する。顔が強張っているがさっきよりはマシだ。
互いに頷く。
事前に決めた作戦通り。そうすれば人数の差など怖くない。
「そろそろ行くよ。準備は？」
「よよよ、よぉし。大丈夫」
「足震えてるよ」
「む、武者震いだっ」
「そうだと思った。それじゃ、先陣はキャプテンに」
キリが道を譲ったことで、ウソップが通りへ歩み出た。
足は震え、緊張で全身が硬くなっている。恥ずかしいほどに体の自由が利かなかった。
それでもやる。

仲間のために頑張ると決めたのだから、ここで足を止める訳にはいかない。
意を決して通りへ飛び出す。
するとすぐに海兵たちが彼の存在に気付いた。まだそれだけでは足りないだろう。ウソップが海賊だとは気付かないはずだ。
そのため、パチンコを使って鉛玉を放った。
「必殺鉛星ィ！」
「おごっ!?」
「なっ、こいつ……！」
「おまえらにはっきり言っといてやる！　さっき旗を撃ったのはこのおれ様だァ！」
一人の腹に鉛玉を当てたことで、警戒心は一気に膨れ上がる。
その直後に言い終えた途端、驚愕が伝染している間に先程の路地へ飛び込み、全力で駆け出した。これで追ってこないはずはない。
敵を信用する、それも戦闘に必要な要素なのだと聞かされていた。
すでにキリは居ない。準備のために動いているはずだ。
高速で路地を通り抜けて反対側の広い通りへ出る。
そこで一旦足を止めて海兵の到着を待った。
すぐに追ってくるはず。攻撃までして自分の存在感を叩きつけた。全身が熱くなって汗が噴き出し、さっきよりも足が震えているが、恥と思う余裕すらない。
待っているとすぐに海兵たちが追ってきた。流石に一団、一気には通りへ入れない。
一人ずつ向かってくることを確認したウソップは再びパチンコを構える。
「必殺！　火薬星ィ！」
「ぐはっ!?」
「あ、あの野郎……！」
「わーっはっはっはぁ！　ここまでおーいで！　べろべろばーっだ！」
言うだけ言って即座に駆け出す。今度は坂を上り始めた。

本当は敵を挑発する余裕だってない。しかしそんな自分を押し留めて言葉を選ぶのも嘘の一種。虚勢を張るのも立派な策略だと今なら思えた。

全力で走って敵との距離を保とうとする。自らが得意とする距離は遠距離。近付かれてはいけない。危険が一気に増してしまうからだ。

すぐに海兵たちが広い通りへ出て、ウソップを追うために走ってくる。

足の速さで言えば圧倒的にウソップの勝ち。

目標とする地点を通り過ぎた時、敵との距離に余裕を持ち、彼が叫んだ。

「おぉい！　頼んだぞぉ！」

直後に通りを挟む両側の屋根の上で、大量の紙が動き、大量の樽がばら撒かれた。

大きな音を立てて地面に落ちたそれらは坂道を転げ落ちていき、海兵たちを追い始める。形勢は逆転。唐突な展開に彼らの平静は崩れ、見るからに統率が乱れた。

最初の一人に樽が当たれば、後は連続して海兵たちにぶつかっていく。

殺傷力はない。だが急な坂を転げ落ちたそれらは立派な凶器となり得る。

大きな音を立てた結果、気絶した者はごくわずか。転んだ者はほぼ全員。

乱れた隊を置き、ウソップはさらに駆けていく。そしてたっぷり二百メートル以上は距離を置いてから振り返り、勇ましくパチンコを構え、新たな弾を番えた。

「追って来れるもんなら来てみろ！　必殺、煙星！」

一番前に居た海兵目掛けて弾を放つ。狙い違わずその眉間に激突し、衝撃から弾丸が割れて、中から大量の煙が発生した。未完成の試作品、強力な煙幕である。

視界が真っ白に染まり、海兵たちは咳き込んで動けなくなる。

もうしばらくはあの位置に留まり続けるだろう。
足止めは成功。ウソップは走って坂を上り始めて、屋根を伝ってキリもついてくる。これで時間を稼ぎ、敵の士気も下がるはずだった。
「よっしゃあ！　作戦成功だ！」
「ナイスだよウソップ。この調子で敵を混乱させていこう」
「おう！　おれならできる気がしてきた……！」
彼らは別の部隊を目指して走り出す。
ただ一点。酒屋から勝手に拝借した樽が転がされてしまったため、酒場の親父が彼ら二人へ怒鳴り始め、怒る店長から逃げる羽目にもなってしまった様子である。
「こらぁガキども、何しやがる！　うちの商品をよくも……！」
「あぁごめんおじさん。支払いならあっちのお兄さんたちにどーぞー」
キリが酒屋の店主へ返し、彼らは颯爽とその場を離れる。気持ちがいいほどの逃げ方、そして計算された撤退のタイミングだった。
人数が少ないが故のゲリラ戦法。並びに市民へ迷惑をかける戦法は海賊ならでは。彼らが困っているのなら海兵たちも無視はできないはず。その心理を利用する。
二人はタッグを組んで町中を駆け回り、あらゆる方法で海兵たちの士気を乱そうと奔走した。
さらに場所が変わり、港からの一本道で続く広い大通り。
ガープを追って町へ入ったはずだった部隊は足止めを喰らっていた。
まるでルフィの下へ行かせないと言うよう。狭い路地から出てきて彼らの前に仁王立ち。たった一人で道を塞ごうとしている男が居た。
ボガードを先頭に置く彼らは、頭に手拭いを巻く三刀流の男と対峙している。
「ロロノア・ゾロだな」
返答はない。
手拭いの下から鋭い眼光が覗き、すでに両手へ刀が持たれている。

凄まじい気迫だ。若者ながらその身から放つのは並大抵の闘気ではない。ルフィといい、以前見たキリといい、この一味は粒が揃い過ぎている。今の実力に怯えずとも、将来を想ってぞっとするほどに。ここで潰しておきたいと心から想う相手だった。
ハンドサインだけで部下の手出しを禁じ、ボガードのみが前へ出る。
逃げる素振りはない。ゾロは三本目の刀を銜えた。
「有能な賞金稼ぎまで海賊になったか。世も末だ」
「元々はそちらさんのせいだとは思うがな。おれも海賊に脅迫されたクチだ」
「シェルズタウンの一件」
「今となっちゃどうでもいいさ。おまえらに一つ、返してぇもんがあった」
「なんだ？」
にやりと口の端が上がり、禍々しい雰囲気を称える笑み。
あれは鬼か狂人か。海兵たちに動揺が走る。
異質な空気の中でもボガードだけは冷静なまま、彼の視線を正面から受け止めていた。
「おまえらんとこの大将に一発もらっててな。その借りが返せてねぇままだった」
「あの時、確かに一撃叩き込んでいたと思ったが」
「いやぁ、足りねぇさ。大して堪えちゃいなかったんだろ」
正解。ボガードはそう思う。
以前の戦闘でガープ中将にダメージはない。すべての攻撃を防御していた。
それでやる気になっているらしく、ゾロが構える。
世にも珍しい三刀流。そちらはいいとしても体から放つ闘気が気になった。
あれは間違いなく強くなる。
危機感は抑えられず、ボガードもまた構えを取り、迎え撃つ気で視線を鋭くした。

「おまえらに負けてるようじゃ、世界最強の大剣豪は遠いままだ。少しでも近付かせてもらう」
「投降する気は」
「へっ、見りゃわかんだろ」
ゾロが駆け出し、ボガードが迎え入れる。
両者の刀がぶつかって甲高い音が響き始めた。
こちらでは正面からの衝突が始まり、町は確かにいつもの平穏を失くしていく。昨夜の雰囲気とは一転して、恐ろしい戦闘が乱立し、着実に混沌が深まりつつあった。

SWEET ESCAPE（3）

激突の瞬間、言い知れない迫力を感じる。
ゾロは歯噛みして頭を振った。
敵の刀を受け止めた二本の刀を後押しするように、少し遅れて口の刀が叩きつけられる。鍔迫り合いは確かに押し切った。だがボガードは後ろへ下がり、腕を引いて衝撃を吸収する。
熟練の技。並大抵ではない技術を感じさせる挙動。
どうやら力で押し勝ったというより、自ら後ろへ退いて状況の変化を望んだらしい。
一時たりとも気を抜けない攻防の中での冷静な判断だ。今まで剣を合わせた誰よりも強く、一瞬の気の迷いで死を感じるほどの緊張感がある。
後ろへ下がった姿を見て、確かに迷いを感じかけた。
誘われている。そう思えない素振りでもない。
危機感を覚えないでもないが、それでもゾロは前へ出た。
押して押すこと、これが豪剣の極意。
自らの剣を理解し、信頼するからこその選択であった。力押しとは違う、だが鍛えた筋力を最大限に利用して、純粋なパワーで敵を斬る剣筋。それがゾロの最も得意とする技だ。
鋭く、素早く、強く攻撃を放つ。
ボガードは着実にそこへ剣を合わせに行った。
「ウェアァッ！」
甲高い金属音が連続する。
鬼気迫る姿から繰り出される攻撃は、流麗にして強靭、力と技とを組み合わせる一個の戦法。
三刀流とは初めて見るものの、名が売れるのも納得の戦いだった。
だがあくまでもイーストブルーのレベルである。
今まで止められたことがない全力の連撃を、ボガードは涼しい顔で全て受け流した。
「おおぉっ――！」

「末恐ろしい男だ……この若さでこれほどまで」
右手で刀を操り、ボガードが素早く後退する。
ゾロの攻撃は荒々しい剣だ。その場に留まるにはあまりにも勢いが強過ぎて危険性が高い。そういう意味では、彼の剣は攻撃力に優れ、現時点で突進力は常人の域を超えている。
早めに摘み取っておかねば、いずれは海賊たちの世に変革が起こるレベル。
十を超える攻撃を受け流して一瞬。思考は止まらない。
受け流して力を分断させているとはいえ、その腕力による強い力はボガードの腕にまでダメージを刻む。今は小さなそれも、戦闘が長引くようなら無視できない要素の一つとなるだろう。
今となっては数えきれないほどの訓練、戦闘の経験から、冷静に状況を考える。
敵は彼だけではない。他に異様な能力を使う者たちも数名。
早急に敵を仕留めるだけでなく、次の戦闘に備え、余力を残す必要があった。
故に、この場における出し惜しみはない。
考えるのは手を抜いて長引かせることではなく、全力を持って一刻も早く敵を倒すこと。
目の色を変えたボガードは突如としてその場から消えた。ゾロの剣が空を切り、目を見開く。動きが全く見えずに、しかしシロップ村での戦いによってその動きには覚えがあった。
（消えた――いや）
ボンッという奇妙な音がする。頭上、空の中で。
消えた訳ではない。まだその場に居て、ただ見えなくなるほどの速度で動いているだけだ。
証拠に気配は感じている。
格上の敵と戦うとあって、極限まで研ぎ澄まされた意識が敵の位置を伝え、即座に振り返った。ゾロの視界に刀を構えたボガードの姿が入る。やはり空中、落下するように向かってくる。一体どうやったのか、ともかく移動速度は明らかに彼の方が上だと判断できる状況だっ

た。
間に合うタイミングで目が合って、反撃のため腕に力を込める。
対するボガードは驚いていた。表情には出さない、あくまで心の内で。
速度は自身が上回っていると知っている。尚且つ、気配を読めたとしても彼の力量は大した物ではない。殺気もできる限り殺した。それでも気付いたというのか。
まるで獣。常人よりも優れた感覚を持っているらしい。
繰り出されるは鋭い突き。
ゾロはその一撃を口に銜えた刀で受け流し、無傷でもって右手の刀で反撃に出ようとした。
（この態勢じゃ避けられねぇ。捉えた！）
油断なく、チャンスだと思って刀を振り抜こうとする。
その刹那、確かに見た。
何かを蹴るように脚を動かしたボガードの体が、奇妙にも刃が届く範囲から逃げ出してしまったのである。空気を蹴るかのような所作とボンッという音。さっきの技に違いない。
見事に回避したボガードは一旦彼から距離を取る。
おそらくは空中を移動できる技。能力者だろうか。ゾロの中に逡巡が生まれる。
「チッ、どういうことだ。空中で避けやがった」
「上に行けば行くほど、海軍に所属する者はこの技を会得している。これは空気を蹴って空を飛ぶ技、〝月歩（ゲッポ）〟。悪魔の実の能力ではない。鍛え抜かれた身体から繰り出される、立派な技だ」
地面に足を着けて体勢を立て直す。
直後、またボガードの姿が掻き消える。月歩、その技とは別の技に違いない。
「〝剃（ソル）〟」
やはり見えない。だが似た技なら以前見ていた。
キャプテン・クロの抜き足より速く、速度だけで言えば杓死に近い技。それでいて暴走するだけだった彼とは違い、その速度を操ってい

る。
離れた位置から観察していたあの瞬間は無駄ではなかったようだ。
視認はできない。それでも性質はわかる。
攻撃の瞬間には姿が見えるのだ。
姿が消えたボガードを、ゾロは自身の左後方に振り返って発見した。
「何っ――!?」
「ンンっ!」
目が合い、驚愕し、咄嗟に左手の剣で防御される。ゾロの刀は強かにそれと打ち合った。
鍔迫り合いに持ち込んで動きが止まる。
してやったりといった顔のゾロは、凶悪そうに口の端を上げていた。
「大体考えることは一緒なんだよ、隙を突こうって考えてるならなぁ」
「フッ、意外に頭が回るらしい……しかし、あまり驚いていないようだな」
「いいや、十分驚いてる。空を飛ぶ人間ってのは初めてだ」
「剃のスピードは見たことがあると?」
「いや違った。見たことあったなぁ、空を飛ぶ人間。紙みてぇにひらひらしてるから」
全身の力を使った押し合いの最中、ボガードが眉をひそめる。
この男は一体何を見てきたのだ。
姿が掻き消えるほどの速度を持つ剃。脚力のみで空を飛ぶ月歩。どちらもイーストブルーで使える者など居ないはず。それを見て驚かないのは明らかに異質だった。
実力の差は大きい。この場で埋め切れないほどあったはず。にも拘らずゾロがボガードの動きを予測し、反応した末、数度止めたのは、いくつかの経験に基づく確固たる自信があったから。
敵の弱点を突こうとする人間の心理。或いは強者の技の影。
同程度の速度も、紙を使って空を飛んでみせる男も知っている。一

度見たなら、次に見た時は驚愕するほどではない。こういった人間が存在するのだと知れたからだ。
力ずくで腕を払って距離を取る。
少し離れてから対峙し、ゾロは冷静に思考した。
（身のこなしと構えから見て、こいつの主体は突き。さっきの移動技と組み合わせた戦法ってわけだ。まだ本領発揮って感じじゃねぇ。なら――）
ゾロが姿勢を低くして身構えた。
咄嗟にボガードが反応して防御の姿勢となる。
それを認めて駆け出し、三本の刀を利用した、強烈な一撃を彼の刀へと叩き込む。
「鬼斬りィ！」
「うぐっ……！」
この瞬間だけは技を捨てて、力任せの斬撃を入れる。片手で剣を構えていたボガードの表情が曇った。それでいい。そうして腕に疲労を蓄積させるだけで効果はある。
自分と相手の力量の差くらい、わからないはずがない。
この戦いにはどうあっても勝てないのだ。
だからゾロは、ボガードの刀へ一撃を入れ、交差した後。振り返らずに海兵の部隊へ突っ込む。
まさかの行動で海兵たちに動揺が走り、体が硬直している。
その中へ勢いよく突進を開始した。
「そこをどけェ！」
凄まじい気迫は本部で鍛えられた海兵の部隊を驚愕させる。無謀にも一人で突っ込んでくる敵を相手に、ピクリとも動けない。分かり易過ぎる隙は彼の動きを大胆にさせた。
斬り飛ばし、蹴り飛ばし、殴り飛ばす。
剣士というより荒くれ者の挙動で、次から次に海兵たちが傷つけられた。
驚愕して我を忘れたボガードは数秒動けず、信じられない物を見る目でその光景を見ていた。

元賞金稼ぎという情報で甘く見ていたかもしれない。彼も海賊の一人。何をしてもおかしくなかったということだろう。だがそう考えても納得できない。彼の目を見た時、卑怯な真似をする男には見えなかった。剣士として向き合ったなら正々堂々と一騎討ちで、決着が着くまで戦うのだろうと、そう思わせる凄みと覚悟があった。

事実、本来のゾロならばそうしているに違いない。

相手がどんな強敵であれ、否、強敵だからこそ、自らが強くなるために挑む。そんな性質は嘘偽りではない。彼は卑怯を好まぬ男だった。

ただそれも、自分勝手に動ける状況でのみ。

賞金稼ぎの頃ならまず逃げていない。今そうしないのは、海賊になったという自覚のため。

自分がボガードに勝てないのは知っている。そして事実を知りながら敵へ挑み、敗北するのは仲間たちの望む未来ではない。だからゾロはキリの策に乗った。

船長の意志に従い、未来を目指す。

そのために手段を選ばぬ決意をし、自らのポリシーを曲げてまで行動したのである。

混乱する部隊を跳ね飛ばして駆け出した。

敵に背を向け、小さな路地へ入る。敵の姿が見えなくなっても足は止めない。必ず追ってくるとすでに知っているためだ。

「待て！　ロロノアァ！」

やはり来た。

小さな路地を抜けてさっきとは別の広い通りへ出る。

通行人が多い。騒ぎを知りながら逃げ出さず、刀を抜いて現れたゾロに驚いている様子だ。

その通りで足を止め、空から降ってくるボガードを待つ。

五メートルほどの距離を置いて着地。

再度の対峙は一般市民が多い場所でとなった。

「なぜ逃げる。なぜ部下を襲った。おまえはそんな男ではないと感じ取ったが」

「勝手なこと言ってくれるねぇ。おれを知らねぇおまえが、おれがどんな人間かを決めるなよ。前々からおまえら海軍には言いたいことがあったんだ」
右手の刀の切っ先を突きつけ、にやりと笑みを浮かべて言う。
不遜な態度。
自信はないはず。しかし揺らぎはない。
「頭が高ぇってな」
「おまえも同じだろう……！」
少しはやる気になったらしい。ボガードの表情がわずかに変わった。
再びゾロから襲い掛かる。
一番の目的は死なないこと。今回の作戦で彼とルフィだけが単独行動を行っている。危険は最も高くて、且つ方向音痴なので不測の事態も多く考えられる。我を出している場合ではない。一味にとって何が最善かを考え、行動する。今のゾロにならばできるはずだ。
方向音痴もきっと良い方向に働くだろうとキリも太鼓判を押していた。その際も軽口を叩き合って顔をしかめたが、そこまで言うならば望むところ。
できるだけ町を走って敵をかく乱してやる。
そんな考えで剣を打ち合わし、するりと力を抜いて傍を通り抜け、また駆け出す。
戦いたいのかそれとも逃げたいのかわからない姿勢と行動。
珍しくボガードが歯噛みした。
「一体なんのつもりだ。何を考えてそうしている！」
「さぁな。知りたかったら追って来い」
そう言ってゾロはまた別の路地へと入り込んだ。選んでいる訳ではなく、ただ目についた道に入っているだけ。そうしていれば迷うのも当然であった。
しかしこれでいいのだろう。
現にボガードは自身の部隊を置き去りにしている。単独でゾロより強いとはいえ、ガープの部隊全体を考えた時に決して良い行動とは

思えず、状況が傾き始めていると予測する。
あとはゾロが死ななければ問題ない。
別の通りへ出てまた足を止めた。
ボガードはすぐに追いついてきて、再び上空から落下し、勢いそのままで切っ先を向けてくる。
「逃がさん！」
「三刀流――」
迷わず刀を構えて、体勢を整える。
逃げる素振りを見せながら迎撃の意志はある。
敵の動きに合わせて、瞬時に体が回転、強い風を生み出した。
「龍巻き！」
向かってくるボガードを迎撃する竜巻が起こり、その中へ彼が突っ込んでくる。
身を撫でる風が切り傷を生み出す。しかし軽傷に過ぎず、台風の目へ突入したためか、本来の破壊力は全く彼に届いていない。せいぜい服と頬をわずかに切り裂いたのみだ。
構えを変えて敵の攻撃を受ける。
甲高い金属音。すぐに跳ね飛ばして距離を取る。
今度はボガードから攻撃が繰り出された。
防御に努めていた先程とは違い、攻勢に出た彼の姿はまさしく異形。剣士であることは間違いないが並大抵の腕ではない。それは些細な仕草一つでわかった。
その刺突は撃ち出された銃弾の如く。
ゾロの防御を容易く掻い潜り、彼の左肩に鋭く突き刺さった。
「ぐおっ――!?」
速過ぎる。剃と同様、見切れなかった。
刺されてから抜くまでの所作も早く、油断がないのが恨めしい。肩にぽっかりと穴が開き、大量に血が流れてくる。それでも痛む挙動さえ許されない状況だ。
歯を食いしばり、痛みに耐えて刀を振るう。
これで心が折れないのも彼の強みだった。

「チィ。うおおおらァ！」
「凶暴な剣だ。よくもここまで――」
凄まじい猛攻が繰り広げられる。ゾロの刀が猛威を振るった。
金属音が連続し、通りに居る誰もが恐れおののいて、逃げ出す者や動けぬ者が多発する。
数え切れないほどの攻撃が襲い掛かり、尚もボガードは一太刀も受けずに受け流し続けた。
やはり強い。
偶発的に与えた軽傷以外は掠り傷一つつけられていないのだ。これが海軍本部の実力。これが、グランドラインのレベルなのは間違いない。
苦戦しているのだと感じる。その一方で嬉しく思いつつあった。
果てはまだ遠い。目指すべき位置は遥か彼方。
その苦難こそ自分が求めていた物ではなかったか。
ゾロは好戦的に笑い、攻防の刹那でボガードを戦慄させる。
「おい。おまえと世界一の剣豪、どっちが強いんだ」
「何？」
「おれはそれになりてぇんだよ」
強く刀を打ち合わせて後ろへ下がり、勢いをつけて敵へ突進する。
銜えた一本は使わず、二刀流にてゾロが滑るように地面を駆け抜けた。
「鷹波！」
這うように迫る斬撃の衝撃波。行動と共にゾロはボガードの傍を通り抜けて背後へ回った。
ボガードは刀を地面に突き立て、迫り来る衝撃波を受け止める。
攻撃の余波が消えた後、即座に剣を抜いて振り返った。
次の攻撃がすでに迫っていたのである。
「虎狩り！」
今度は三本の刀で襲われる。体に触れる寸でのところで防ぐも、力強さは異常だ。
斬られるというより殴り飛ばされる様相だった。

払いのけられたボガードの体は家屋の壁へぶつかり、止められることなくそこを打ち抜いた。壁が崩れて建物の中まで転がり込んでしまう。
ゾロは動きを止めて深く息を吐く。
攻撃から逃走、全てにおいて全力を出して動いている。感じる疲労は今までの比ではない。力を抜けば一瞬で死に至らしめられるため、常に意識を研ぎ澄ましていなければならなかった。
しかし動きを止められたのもほんの数秒。
崩れた壁の向こう側から何かが飛来する気配を感じ取って、反射的にゾロは刀を構えていた。刃にぶつかったのは目に見える衝撃。かまいたちではない、言わば刀から飛ぶ斬撃だ。
理解した頃には体が宙に浮いており、反対側の家屋へ突っ込む。
壁を壊してゾロも姿を消し、平静を保った状態で先にボガードが通りに戻ってきた。
不謹慎ながら楽しくなってきたのは彼も同じのようだ。
そのせいか、先の問いに対する答えが紡がれる。
「世界一の剣豪は私にも届かんだろう。だから世界一と言われている」
瓦礫を蹴り飛ばしてゾロが起き上がった。
防御はしたが受け止めきれず、余波を受けて頬と胸元に浅い切り傷ができている。痛みは大した物ではない。ただ、また新しい技を見たようで、そんなこともできるのかと感心した。
苦戦とあっても冷静なまま。ゾロも通りへ戻ってくる。
正面から対峙する。
どちらも意識は変わっていたらしい。
ゾロはふと口に銜えた刀を鞘に納めて、佇まいを直そうと首を回し始めた。
「それだけ知れりゃ十分だ。でなきゃ面白くねぇからな」
「大人しく投降しろ。今ならまだ間に合う」
「そう言われて大人しくする奴らだと思ってんのか？　諦めろ」
左腕を伸ばし、刀の切っ先を敵へ向ける。

その笑顔に迷いがないことは明白で、先程の戦慄は間違いではなかったと理解した。
彼を生かしておくのはまずい。
ボガードの意識もまた、研ぎ澄まされていく。
対峙する敵から感じる覇気はまるで、鬼神のそれ。今はまだ大したことがなくとも、今まで感じたことのない新たな可能性は、確実に海軍を脅かす物になるはずだった。
「そんな説得に乗るくれぇなら、最初から海賊になんざなってねぇよ」
「そうか……それもそうだった」
当初の作戦は覚えている。だがどうせ逃げられないのならば、少し遊ぶくらいはいいだろう。
ゾロは敢えて足を動かさなかった。
自身より格上、ボガードを目の前に、冷静に刀を構えたのである。

＊

「ぶはぁっ!? ど、どうしてっ！」
港では、ヨサクとジョニーの二人がメリー号を奪い返すことに成功していた。
しかしなぜか現在、彼ら二人は海に突き落とされていて、出航準備を終えたメリー号に乗っているのはナミ一人。聞いていた作戦とは違う。なぜ彼女だけ海へ逃げようとしているのか。
海面から顔を出し、心底わからないと問うてみれば、見下ろしてくる彼女は笑顔で答えた。
「あいつらには前に言っておいたの。仲間になるわけじゃない、手を組むだけだって。確かに良い仕事してたけどこうなっちゃったら終わりでしょ。英雄ガープと対決なんて、嫌だもん」
「そ、そんな……あの人たちは、あんたを信じてたのに！」
「バカな奴ら。私がどんな人間かも知らないで置いといたんだから、自業自得よ」

吐き捨てるように冷たく言い切り、以前とはまるで違う眼差しで二人を見下ろす。
彼女は動き出した船で徐々に遠ざかっていった。
海に浸かる二人はそれを見ていることしかできない。悔しく思って、彼らの役に立てないことを激しく後悔しながら、笑顔で手を振るナミを見る他なかった。
「あいつらに会ったらよろしく言っといて。じゃあねー」
「くそぉ、戻って来い裏切者ォ！」
「兄貴たちに謝れェ！」
彼らの声をほとんど耳に入れず、ナミは船尾から船の先端まで歩く。
後方には慌ただしくなる町。前方には広い大海原。
船首の傍にある欄干へ手をついて、深く息を吐いた。
笑顔は保ったまま。
遠くを見て一人で言葉を吐き出す。
「これでもう終わり……うん、大丈夫。今まで通りに戻るだけだもん。今の私にならできる。一人でやるって決めたんだから」
自分に言い聞かせるように呟く。
そうしている間にも頭の中には彼らとの航海が浮かび上がった。
「いい奴らだったなぁ……」
初めて会ったのはオレンジの町。
ルフィを利用しようとして、結果的には失敗して、それでも彼らが戦っている隙にお宝を盗むことができた。バギーたちが敗北し、町を救うこともできた。
ブードルとシュシュの叫びも耳に残っている。あれは紛れもない感謝。
海賊に感謝するなんてありえない、と思ったものだ。
「今度会えたら、また仲間に誘ってくれるかな……はは、無理か。こんなことした後じゃ」
次に訪れたのは軍艦島。
アピスを拾ったことがきっかけで、短い期間とはいえ大冒険をし

た。初めての海戦。彼らに指示を出して嵐の中を航海。勝利と敗北。そして激しい後悔と迷い。
死ぬかもしれない状況を体験して原初の想いが蘇ってきた。
まだ死ぬ訳にはいかない。死にたくない。壊れていく船の中で嫌というほどそう思った。
その直後の休息で、生きててよかったと本当に思えたのだが、そんな自分に後悔したのも覚えている。自分だけが良い想いをしているようで、彼らの傍に居るのが怖いと思ったのだ。
思い出す度、じわりと目に涙が浮かんでくる。
ナミは決して後ろを振り返らず、まるでメリー号が前へ進むのを拒むかのように、ひどくゆっくりと島から離れながら、努めて笑顔を絶やさなかった。
「また……逢えるかなぁ」
シロップ村でのことを思い出す。
海賊と戦って、ウソップを仲間にして、ゴーイングメリー号を手に入れた。
あの時は戦闘に参加しなかったが、それも一つの作戦であって、敵からお宝を盗むのは自分のためであり、一味のためでもある。だからキリも戦闘に参加させなかったのだと知っている。
たった五人、一人増えて六人になって、あの集団の中で自分の役割が出来上がっていた。
それに気付いた時にはもう遅くて。
最後に思い出すのは、あの言葉。
黄金は笑わねぇ。
知っていたはずだった。紙幣も、硬貨も、財宝も宝石も、黄金も。どれだけ集めても笑うことはない。一人で片っ端から集めている日々の中で、とっくに知っていたはずだった。
本当に欲しかった物はこれなのかと。胸を突き刺す何かから逃れられなかった。
ウーナンが人生最後に遺した言葉が今でも頭から離れない。
ついにナミは涙を流して、俯いてしまう。意識しないのに手に力が

入って拳が震え、唇を噛み、耐えようとするも今からでは止められず、体を小さくして肩が震え始めた。
「はやく、自由になりたいよ……ベルメールさん」
静かに涙を流し続けて、しばしの間、痛いほどの静寂に身を包まれる。
この場には一人。
堪えていた物が一気に溢れ出し、今だけは堪えずに放出する。彼らには見せないと決めていた。だから今になって表に出すことができたのだが、彼女の胸に残ったのは寂しさと切なさ。どうしようもない空虚感が大きな楔となって突き刺さっている。
涙は溢れ、止められない。
その時だった。
音を立てぬようゆっくり船室の扉が開けられ、中から人が出てくる。ナミは気付いておらず、足音を立てぬよう慎重に歩いたせいか、気付かれることなく距離が狭まった。
船首へ近付く階段を上り切った辺りで、初めて口が開けられる。
「ナミ」
背後から聞こえた声で瞬間的に涙が止まった。
咄嗟に濡れた頬を拭い、素早くスカートの下に隠した武器を取り出す。手の中にあったのは三節棍。慣れた手つきで組み立てて一本の棒とし、振り返って両手でそれを構えた。
しかしそこではすでにシルクが剣を構えて立っている。
真剣な表情、唇をきゅっと結んでいる。
今の今まで全く気付いていなくて、ナミは狼狽を隠せなかった。
「シルク……あんた、なんで」
「ナミの様子がおかしかったから。心配になって、ずっと見てたの」
「つけてきたってこと？　フン、真面目なあんたにしてはらしくないわね」
「ねぇナミ。もう、やめよう。いつまでもこんなことしてたって、何も変わらないよ」
その言葉が何を意味しているのか、ナミにはわかる気がした。

武器を向け合っていることか、それとも彼女たちを欺いていたことか、船を奪ったことか。
なんにしても今更やめられるはずがない。
慣れた挙動で瞬く間に感情を押し殺したナミは、厳しい目でシルクを睨んだ。
「やめるって？　私が何をやめればいいのよ。泥棒？　それともあんたたちを裏切ること？」
「ナミ……」
「バカにしないで。自分の生き方くらい、自分で決められる。ルフィだってそうでしょ？　おじいさんの言う事も聞かずに自分勝手に生きて、自分のやりたいことをやろうとしてる。……私はずっとこうしてきたのよ。嘘ついて、裏切って。誰も頼らずに一人で生きてきた。そうやってずっと戦ってきた……こうするしかないのよっ」
悲しげな顔のシルクを見ていると、押し殺したはずの感情が沸き上がってくる。
なんとか追い出さなければ。そう思う一方で、メリー号はどんどん島を離れており、今からでは島へ戻ることもできないし、もしシルクを海へ突き落せば、能力者となった彼女は泳げずに沈んでしまう。その行く末は溺死のみ。決断できないのもそこにある。
もしもの時はと考えていたはずなのに、今の自分は彼女を殺せない。
それが悲しくて、悔しかった。
ではどうすればいいかが考えられず。動揺はいつまで経っても止まらない。棒を持つ手が震えていて、おそらく襲い掛かられれば何もできないのもわかっている。
今まではどんな状況でも出来ていたことが、ここでは出来ない。
なぜか感情を操作しきれなくなっていた。
胸が熱くなって、上手く言葉を出せなくなっていた。
「私はっ――！」
声を大きくするが何も言えない。
視線を外してナミが俯いてしまって、重苦しい沈黙が広がる。

少し間はできたが、彼女の姿を見るのに耐えかねたのか、シルクが口を開いた。
「私、ナミのこと好きだよ。みんなもきっとそう。本当に仲間になって欲しいって思ってる」
「そんなこと……」
「もう、嘘つくのやめようよ。私、本当のナミと話してみたい」
カランと軽い音がした。反応してナミがわずかに視線を上げると、剣が捨てられている。
素手になったシルクは戦う素振りもなく、そのポーズすら捨て、ふわりとナミへ微笑みかけた。
身を守る術を捨て、無防備な状態で向かい合っているのだ。
その微笑みが、仕草がまた、彼女の心を苛む。迷いを大きくしてしまう。
「辛い時は言っていいんだよ。私だけじゃなくて、みんな受け止めてくれるから」
再び涙が溢れ出した時、ナミの足から力が抜けた。
その場へ崩れ落ちて動けなくなり、棒も思わず捨ててしまって、両手で顔を覆ってしまう。
決断できないと、そう自覚したようだ。
もはや涙が止められない。感情の波が押し寄せて溺れそうになっている。旅に出てからの八年間、ずっと押し殺していた物が弾き出されて、自分自身でも訳が分からなくなっていた。
ただ混乱して、涙がとめどなく溢れてくる。
シルクはそんな彼女へ歩み寄った。
傍へ膝をついて、肩へそっと手を置き、笑みを絶やさず優しく声をかける。
「私、もう、どうしたらいいのか……！」
「大丈夫。みんなで考えれば、きっと良い道も見つかると思うから」
子供のように泣きじゃくる彼女を抱きしめてやる。
ずっと不安に思っていたのだろう。いつからか見られた変化は彼女を苛み続けていたようで、一人で戦っていたに違いない。もっと早

く気付いていればと今更ながらに思う。
しっかり捕まえた今、離してしまわないように強く抱きしめた。
まだ間に合う。今からだってやり直せるはずだ。
シルクはナミの頭を撫でてやり、母親か姉のように彼女へ声をかけ続ける。
やっと彼女と仲間になれそうな気がした。
その手掛かりを手に入れ、共に歩むためにも話さなければならないことがたくさんあるだろう。でも今だけは言葉も必要ない。落ち着けるまでいつまでも付き合うつもりだから。
抱き合ったまま、静かな時を過ごす。
瞬間、船がぐらりと揺れた。
平穏な海原での突然の変化にシルクの表情が変わり、ナミもハッと我に返る。
何があったのだと辺りを見回せば、メリー号のすぐ傍から水を押し上げて大きな何かが浮上してくる。水柱を上げて現れたのは、海王類に匹敵する大型サイズ、巨大なパンダであった。
シルクは目を点にして驚き、気付いたナミも涙を忘れる。
可愛らしい顔ながら圧倒的なサイズのパンダは、興味津々に船上を眺めていた。

SWEET ESCAPE（4）

海軍のかく乱作戦に奔走するキリとウソップだったが、一旦屋根の上へ逃げた時、ウソップがふと海を眺めて気付いた。メリー号が動き出しているのである。

「おい、あれ見ろよキリ！　メリー号が動いてるぞ！」

「メリーが？　なんで」

続いてキリも海を見ると、やはり船が動いている。作戦にそんな展開はない。船に近付いているとすればヨサクとジョニーの二人だったはずだが、彼らが船を奪う理由もわからなかった。

何か異変が起きたのだろうか。

とにかく状況が変わっているのは明白。作戦通りに事が進んでいないらしい。

わからないなりにキリが頭を働かせていると、何かに気付いたウソップが呟く。

「ナミの野郎だ。あいつ、危ない時は自分だけ逃げるってはっきり言ってやがった。きっとあいつがメリーを奪って逃げたんだ」

「ナミが？　そんなはずは……いや、そうか。あり得ない話じゃないかもしれない」

「くそっ！　どうすんだよキリ、船がねぇんじゃ脱出なんてできないぞ。これじゃいくら相手が混乱してても意味ねぇって」

焦り始めたウソップが言葉を重ね、受け取りつつもキリが真剣に考える。

ナミの裏切り、可能性は高い。とはいえそれで全てが台無しになるかはまだわからないだろう。なぜメリー号が離れたのかを考えるより先、どうやって島から離れるかを考えなければならない。逃げることができれば島内での全ても無駄にはならないはずだ。

周囲への警戒も怠らず、キリは港の周辺を見つめて考える。

考えた末に答えを出した。

「大丈夫だ。ナミのことはシルクに任せてある。ナミが持ち場を離れて船へ向かったなら、絶対シルクも後を追ったはず。メリー号には

シルクも居る」
「もし、追ってなかったら？」
「いいや、間違いなくいっしょに居る。そう信じてるよ」
落ち着くよう促して、キリが屋根に座った。ウソップも同じく座るよう勧められる。仕方なくその場で尻をついた。次に双眼鏡を要求される。
鞄から取り出したそれを、キリへ手渡そうとするのだが。異変は起こった。
遠目に見ても海に大きな揺らぎが発生していたのだ。
何かが海中から現れようとしている。
ウソップの表情に変化があった瞬間にはキリも気付いていて、同じく海を眺める。
かくして、それはやってきた。
海から顔だけを出したのは海王類かと見紛うサイズの巨大なパンダ。海流を変化させるほどの体躯が海中にあり、顔だけを出して、つぶらな瞳でメリー号を見つけていた。
「な、ななな、なんじゃありゃ～!?　でっけぇ!?」
「ウ、ウミパンダ？　グランドラインの生物だ。しかもあんなサイズ存在するはずが――」
メリー号を見つめて数秒。
何を想ってか、突然機敏に動き出したウミパンダは、その巨大な手を持ち上げ、メリー号を抱え上げた。海中から水柱を立て、海流を荒れ狂わせて、あっという間に船底が海から離れる。
普段滅多に見れない光景だ。
ウソップは驚愕して大口を開け、キリもまた冷静ではいられない。
「はっ!?　も、持ち上げやがったぞ！」
「嫌な予感がするけど……」
ふんと鼻をひくつかせ、彼は全力でメリー号を投げ飛ばす。
抵抗する暇どころか驚愕する時間もさほど与えられず、まさしく空飛ぶ船と化したメリー号は為す術もなく島から離れ、どこかへと飛んで行ってしまった。

ほんの一瞬の、まさかの事態である。
その巨体にかかれば投げ飛ばされた船が彼方まで行って見えなくなってしまうのも必然。
呆気無く取り残された彼らは呆然としてしまい、しばし声を出すことさえできなくなった。
「……飛んでった」
「うん。凄い物見たって感じ……」
しばらく経ってから呟けたのは一言。
その後数秒もまた黙り、再び口を開いた時、今度こそウソップは驚愕から声を大きくした。
「うわぁぁぁ～っ!?　め、メリーがぶん投げられたァ！　シルクは!?　ナミは!?　あいつら大丈夫なのかよ、おい！　つーか何やっとんじゃあのパンダァ！」
「最悪だ……こんな展開思いつく訳ないだろ」
「ど、どどど、どうするキリッ！　向こうも心配だがおれたちも逃げられなくなった！」
視線の先でウミパンダは再び海中へ戻っていく。何がしたいのかわからない。まだそこに留まるつもりか、それとも移動するのかも読めなかった。
あの存在で不測の事態が起こったことは確かである。
メリー号が消えたことで彼らが脱出する手立てが消えた。しかも船上にはおそらくナミとシルクを乗せ、振り落とされてさえいなければ彼女たちも一緒に飛んで行ったはず。
何がどうあっても作戦の変更は必要となるだろう。
ひとまず二人と船を心配している余裕はない。その前に、この島から上手く逃げ出さねばならないのだが、船が無くなった問題だけでなくウミパンダの存在もある。
事態はより悪くなっていた様子。
狼狽するウソップの横でキリは冷静に考えようと努めていた。
「おれたちもう終わりなのかなぁ！　死んじまうのかなぁ！」
「大丈夫だから落ち着いて。そこまでひどい結果にはならない」

「うぐぐ、でも、あんなでかい奴居たんじゃ島から出られねぇって！
ナミとシルクはやられちまったしよぉ、カヤからもらったメリーまで……！」
「まだ死んだって決まった訳じゃないさ。きっと二人は生きてる。多分」
「うっ、どっちだよ」
口元に手を当てて必死に考え、屋根から島中を見渡す。
まだ島から離れる方法はあるはず。そう信じて考えなければやっていられない。
多少の時間は必要としたが、素早く視線を走らせ、一つ一つ要素を見つけていった。
まだ終わらない。
自分自身にそう言い聞かせて、キリは作戦の変更を決定しようとしていた。
「船ならまだある」
「は？　いや、メリー号はもう見えねぇとこまで投げられて……」
「メリー号じゃない。有難いことにボクらを追って現れてくれたからね」
「海軍の船を奪う気か!?」
港を指差して確認し、企みを聞いたウソップはまた狼狽した。
仲間になってすぐだというのに、次から次に大事件を起こしてくれるらしい。海軍を相手に旗への宣戦布告だけでなく、軍艦まで奪ってしまうつもりなのか。
顔色を真っ青にしてしまうウソップと違い、キリはいつも通り笑っている。
胆力が違う。彼はウソップが想像していた海賊ではなかった。
「英雄だかなんだか知らないけど、ボクらに喧嘩売ってきたんだ。これくらいの被害は覚悟しといてもらわないとね。ってことを教えるにはちょうどいいでしょ」
「おれ、これ以上驚いたら死んでしまう気がする……」
「ならとっとと島を離れよう。でもウミパンダを回避するためには

陽動が必要そうだね」
立ち上がったキリは決意を込めて呟き、慌ててウソップも立ち上がる。
彼らは屋根伝いに港へ向かおうと決めた。
敵を混乱させるために町中を駆け回っていて、現在地からは少し距離がある。だがそう遠い訳でもなくて素早く到達できるだろう。問題は敵に見つかるか否かだ。
ここからは迅速な行動が必要となる。
作戦は最終段階。船に乗って島を離れる時が来ていた。
できるだけ海兵を町中に取り残し、船を奪う間と島から離れるまでの間は大人しくしていて欲しいものだ。そのためには姿を隠したままがいいだろう。
そう思っている最中、どこかから屋根へ上ってきた海兵たちが二人を見つけた。
「居たぞ！　あいつらだァ！」
「ひぃっ!?　み、見つかった！」
驚いたウソップが肩をびくつかせる頃、振り返ったキリは一足先に動いていた。向かう先は港の方向ではなく敵が上ってくる場所。迎撃するつもりのようだ。
先頭に立っていた男へ接近すると、素早く紙の剣を作り、切り付ける。
鮮血が舞った瞬間には蹴りを入れていて、彼の体が屋根から落ちた。
ウソップがおぉっと呟く瞬間。先手を取ったキリが無慈悲に次々と敵を切りつけていく。あまりに容赦が無いと言うか、普段のやさしげな顔からは想像できない攻撃の数々だった。
突然の攻撃に動揺が走っている。
上手く反応できる者は一人も居なくて、あっという間に状況が変えられてしまった。
十人以上居た敵が倒されるまでかかった時間は一分にも満たない。
呆然と立ち尽くすウソップは言葉を失う。流石にここまで強いとは

想像していなかった様子だ。
「急いでるんだ。邪魔しないでくれるかな」
「つ、強ぇ……」
倒した敵が怯えるのを一瞥し、興味も持たずにキリが港へ振り返る。
呆けるウソップを呼び、即座に屋根の上を走り始めた。
「行くよウソップ。もう彼らと遊んでる暇ないよ」
「お、おう。しかし遊ぶっておまえ」
「ルフィの遊び相手に比べれば軽い軽い」
「おれは正直、海軍よりおまえが怖くなってきた……」
キリが屋根の間を軽く跳んで先行し、時折ウソップに手を貸してやりながら港を目指す。海軍の追撃はそれ以上なかった。姿を見ていた彼らでさえ、動き出そうとしなかったためだ。
そう時間もかからずに港へ到着する。
屋根の上から周辺を確認すれば、港では海兵が数名倒れており、ずぶ濡れになったヨサクとジョニーの姿も見える。騒ぎは起こっていない様子だった。
キリの能力を頼りに二人が地面へ降りる。
素早くヨサクとジョニーへ駆け寄り、狼狽する彼らへ声をかけた。
「ヨサク、ジョニー」
「キリの兄貴！　ウソップの兄貴！」
「た、たたた大変ですぜ！　ナミの姉貴が船を盗んで、その船が山くらいでけぇパンダに投げ飛ばされて、それで……！」
「落ち着いて。大体のことは見てたよ」
狼狽する二人は全て見ていたらしい。
見たことがないほど巨大なパンダを目にして、動揺するのは当然だった。
しかし戸惑っている場合はないと、キリが真剣に二人を見る。明らかに狼狽えていた彼らも雰囲気を感じ取ったようで、口を噤んで話を聞いた。
「すぐにこの島から逃げる。ヨサクは町に居るゾロを探してきて。

多分一人じゃ戻って来れないし、あとどこに居るのかもう予想もできないけど」
「お、おし。探してきます」
「ジョニーとウソップはボクと一緒に。船を手に入れる」
「また戦うのか……」
ウソップがげんなりするものの、決定は覆らず。
ヨサクが駆け出していった後、ウソップとジョニーを連れてキリが歩き出し、港に停まっている軍艦へと歩み寄っていく。
説明不足で二人が不安を抱えていても、キリは迷わず前へ進んでいた。
「船を襲うんすか？」
「そう。メリー号を追うにはこっちの方が速い。そういえばジョニーたちの船は？」
「ええ、あります。あっちの方に」
指で示した方向に小さなボートがある。あれで移動しているらしい。
軍艦の位置からは離れていて、町民のボートとも見分けがつかない様子だった。
「あれも使えそうだね」
「どうやって逃げる気なんだ？　海にはパンダが居るんだぞ」
「陽動するよ。上手く逃げられることを願うしかない」
「そ、そんなレベルなのか？　おれはますます嫌になったんだが」
「あれはボクらでどうにかできるレベルじゃない。逃げるのが精一杯だ」
軍艦の下まで辿り着き、三人で見上げる。
そこでキリが紙を広げて、両腕に纏わせると大きな両腕を作り出した。何をするのかと見ていると、彼は何も言わずにウソップとジョニーを掴み、ぎゅっと握った。
目を白黒させる中、まさかと気付く。
まさかこのまま投げるつもりではないだろうか。
「お、おいおいキリ、ちょっと待てよ。確かに急いじゃいるが時間は

まだあるんだ」
「キリの兄貴、せめて説明だけは……おれたち全部が全部いきなり過ぎて心の準備が」
「さぁ行くよ二人とも。戦闘開始だ！」
キリは全力で二人の体を天高く放り投げ、落下する軌道で二人を軍艦へ投げ込んだ。
同時に自身は脚力で跳び上がり、悲鳴を上げて落ちてくる二人が到達する前に甲板へ到達する。そうして見つけた海兵たちを瞬時に剣で切り裂いた。
鮮血が舞い、悲鳴さえ許さない。
頭上の悲鳴に気を取られる彼らが反応できぬほど素早く、一方的に攻撃が始められた。
突っ立って居た二人の海兵が切り裂かれた時、ようやく彼らが視線を下ろしてキリに気付く。すでに彼は動き出している最中で、剣を持って襲い掛かろうとしていた。
たった数秒、ほんの刹那。
数人の間を通り抜けただけで海兵たちが体を切り裂かれ、苦悶の声を発して倒れる。
甲板に居るのは総勢で二十名ほど。敵はまだ残っている。
さらに攻撃を加えようとして、表情を変えたキリはぴたりと足を止めた。
無傷で立っている海兵たちの中にコビーとヘルメッポが居る。どうやら部隊と合流を果たし、彼らは彼らの判断で動いていたらしい。それが今、襲撃中のタイミングで発覚した。
キリが背筋を伸ばして立ち、攻撃をやめる。
ちょうどその頃に空からウソップとジョニーが落下してきた。甲板で大きな音が鳴るも彼らは気にせず、動揺する海兵たちは今になって武器を構え始める。
「キ、キリさん……」
「てめぇは、またっ」
「どうも海兵さん。船、奪いに来ました」

簡潔に告げて、宣戦布告を終えた後。紙を操った彼は右腕に纏って巨大な腕を作り出した。
思い切り振って攻撃。ラリアットの要領で残る全員の体を捉える。
感じるのは強い力と浮遊感。
彼らは力ずくで無理やり船外へ弾き飛ばされ、宙へ放り投げられた。一瞬の出来事で何が起こったのかもわからない。気付けば海へ落ちようとしていて、いくつもの悲鳴が交わる。
十数名分の水柱が立って、船はあっさり強奪される。
場が落ち着いてから、冷静に動き出したキリは先に倒した海兵たちを運び、同じく海へ放り捨て始める。慈悲の心などない、冷淡な所業を笑顔で行っていた。
痛みを堪えてやっと立ち上がったウソップとジョニーは、そんな彼に異論を唱え始める。怒る理由は当然、自分たちを思い切り投げ飛ばしたことだ。
「おぉいキリ！　おまえは血も涙もねぇのか！　だから嫌だっつっただろ！」
「あんた滅茶苦茶だ！　一時は本当に殺されるのかと……！」
「まぁまぁ、こうして船は奪えたんだし、そんなに目くじら立てなくても」
「笑い事じゃねぇよ！」
怒る二人を諌めつつ、船上には三人だけとなる。
キリは素早く軍艦の状態を見渡した。
「急いで出航準備だ。落とした連中が来ない内にちょっと港から離れよう」
「何？　ルフィたちは」
「ルフィが居れば飛んでこれる。それよりまず敵を近付けないことだ。沖まで出ないように気をつけつつ、多少は港から離れる。ほら、急いで急いで」
指示を受けて先にジョニーが駆け出し、続いてウソップも慌て始める。キリ自身も大人数が必要な船の操船とあって、紙を操りながら作業を急いだ。

本来は三人で動かせる船ではない。
それだけに作業量は多く、また力も必要で、動かそうとするだけでも大変だった。
船を動かすだけならばいい。まだ敵が残っているのだ。
いつ襲われるともわからない状況では落ち着いている暇もなく、三人は迅速に行動する。
やがて船がゆっくりと動き始めた。
この時まで敵が船へやって来なかったのは奇跡に等しいだろう。軍艦から落とされた海兵たちは傷ついた仲間を助けるのに必死で、敵を倒そうとまで気を回せる者が居なかった。
彼らは無事に海へ出て、それでいて港から離れ過ぎないよう、速度に気をつける。
作業の手を止められるようになった頃、町を振り返りながらジョニーが口を開いた。
「みんな戻って来れますかね。特にゾロの兄貴は危ねぇからなぁ」
「ヨサクに賭けるしかないよ。正直に言えばルフィも同じだから」
「そりゃあ、ますます不安なんですが」
「なるようになるよ。それよりまずはこの船を守ることが先決――」
言い終える前に不穏な気配を感じた。
形相を変えて振り返ったキリが空を見上げれば、落下してくる人影が見える。
正義のコートを肩にかけ、帽子を目深にかぶって、鞘に納めた刀を構えた状態でやって来る一人の人物。見間違えるはずもない。以前の戦いで見事な腕前を見せたボガードだ。
言わばこの状況は再会である。
鋭い目つきで、隠しもせずに殺気を放って接近してくる。
咄嗟にキリが紙を放って臨戦態勢を取った。
ウソップとジョニーは反応できていない。ただ一人応戦できたのは彼のみ。
体の周囲を取り巻くように無数の紙きれが舞い、頭上から来る敵を

迎え撃とうとしている。真っ先に考えるのは船に乗せないこと。海に叩き落すつもりでキリも跳び上がった。
敵はすでに空中。移動はできないと推測する。
集めた紙で大きな鎌を作り、両手で持つと体ごと回転して斬りかかる。
確実に捉えた。そう思った挙動を、ボガードは宙を蹴ることで回避した。
「なっ」
ボンッ、ボンッと空気が破裂するような音が、彼の足の動きに合わせて連続する。聞いたこともない奇妙な音だ。それによって空中を移動している。
異様な光景だった。だがグランドラインを航海中、噂だけは聞いたことがある。
空を飛ぶ人間が居る、と。
その多くの目撃情報が海軍だったとあって、何かの技だろうかと思っていたが、確信を得た。
全員ではないだろう。しかし海兵の一部は奇妙な技を使うらしい。
攻撃が空振りに終わり、即座に鎌をバラケさせて紙をばら撒いた。
空中にばら撒かれたそれらはぴたりと動きを止め、落下することなく宙に留まる。キリはその上へ立ち、常人より体重が軽いことも要因の一つだろう、空中に止まって敵を見る。
予想外の姿に驚きつつも、ボガードもまた月歩で宙に留まる。
二人は空で対峙した。
「雲紙」
「空を飛ぶ、か……奴が驚かない訳だ」
「奴？　そうか、ゾロのことだね」
「おまえたちを見ていて、一つ決めたことがある」
両足で空気を蹴って滞空しながら、器用な様子でボガードが語る。
キリは両手に剣を持ち、いつでも反応できるよう待ち構えた。
「おまえたちを見逃す訳にはいかない。ガープ中将がなんと言おうと、将来のため、できればここで始末しておきたいものだ」

「あっそ。そう思うんならどうぞご自由に」
会話は少なく、たったそれだけ。
互いに胸の内では決意を固めていた。
こいつはここで殺す。
キリは一味のため、ボガードは今後の世界情勢を想い、すでに決めている。
敵を認めるからこその思考。放っておけば必ず大きな壁となり、どこかでぶつかることになる。そうさせないためには今この場で決着を着けるべきだ。
無言で睨み合い、やがて動き出す。
前へ出たのはボガードだった。ボンッと空気を蹴って飛び、正面から接近する。
それを迎え入れず、キリは足場を蹴ってさらに上へ跳び、跳んだ直後から足場とした紙を回収して周囲に漂わせた。ボガードも間を置かずに追い縋る。
（奇妙な能力だ。ロギアではないようだがパラミシアとしても異様に感じる。だが身のこなしは普通ではない。かなりの修練を積んでいるな）
最高点へ到達したキリの跳躍は終わり、後は落ちるのみという所。
下からボガードが襲い掛かった。
キリは両手に剣を持っている。接近戦は望むところという様子だった。しかし、移動方法は先程と全く同じ、にも拘らずボガードの速度があまりにも違っていて虚を衝かれた。
冷静に見つめていたはずが、見えない。
気付けばボガードはキリの間近を通り抜けており、頭上に居る。そしてその時には彼の体は縦横無尽に切り裂かれて、ほんの一瞬で、十を超える斬撃によって大量の鮮血が宙を舞った。何が起きたのかもわからぬまま、彼の体からがくんと力が抜ける。
軍艦から見ていたウソップとジョニーが大口を開けて驚愕している。
二人は咄嗟に声をかけるも、全身から力が抜けて落下してくるキリ

には聞こえていない様子だ。
「キ……キリィ!?」
「キリの兄貴ッ!」
もしや死んだのか。そう思えるほどキリの様相はひどかった。
全身が血に染まって全く力が入っていない。
落下していく彼を見下ろし、ボガードはさらに空気を蹴って追いかけた。
これで終わるはずがない。不思議とそう思う心があって、とどめを刺さなければと思う。
彼の判断は間違っていなかったようだ。
近付く最中、突如目を開いたキリはギロリとボガードを睨みつけ、全身に力を取り戻した。
やはりそうだ。見逃してはいけない。
些細な仕草からそう判断し、右手に持った刀を握り直す。
「海賊を選んだのはおまえだ。許せ」
冷徹に見据え、狙いは左胸の心臓。
構えられた刀が銃弾の如き速度で突きを放ち、風さえ置き去りに迫った。一部始終を見ていたキリは咄嗟に左腕を掲げる。そして、狙っていたのか、ただの偶然か、ボガードの刃は彼の左腕を貫き、半ば無理やりに軌道を変えられて左肩を穿つ。
反応されたことに驚いた。
一瞬目を見開いて、些細ながらも様子が変化した時、キリがにやりと笑う。
どうやらボガードという男、真面目な人間らしい。視線は嘘をついていなかった。
どこを狙っているかがわかれば反応も決して難しくはなく、全身が熱く、死の境地に立った彼は普段以上の力を発揮し、見事に反応して攻撃を防いだ。
そうして隙を与えず反撃に出るのである。
共に落下しようとしていた無数の紙が頭上へ舞い上がり、ボガードを捕らえようとした。

素早く全身に張り付いていき、行動を制限しようとしているらしいことがわかる。回避するべく咄嗟に離れようとした。だが腕を貫通して肩に刺さった刀が抜けず、ぐっと強い抵抗を感じ、再びボガードの表情が変わった。強く引っ張っても抜けないのである。

異質な戦法であっても彼はパラミシア。紙の体を持っている。皮膚も肉も内臓も血管も細胞まで紙で作られており、それを操作することができるだけの鍛錬を行った。

現在彼の体は、体の内側に刺さった刀身を捕らえるよう、腕と肩の紙がしっかり巻き付いて離れなくなっているのである。自ら肉を動かして凶器を捕まえているのだ。痛みは伴うが、敵の武器と行動を封じるのにこれほど役立つ状況もなく、むしろ喜々として受け入れる。

さらに周囲の紙がボガードの全身へ巻き付いて、防御どころか空を飛ぶことさえ許さなかった。

全ての紙を使って、左腕と両足を捕まえたその時。

キリは右腕を構えた。

紙を操る能力を手に入れて以来、彼はそれ以外を見せないようになった。敵がそればかりを気にして油断するからである。

ここぞという時、手の内が全てバレていては決定打に欠ける。

ならば奥の手は隠しておくべきだ。来るべき時、確実に相手を仕留められるように。

ざわざわと奇妙に動き出したキリの右腕は白く変色し、棘を持つように内側から紙が突き出して、五指の先端も鋭く尖る。ボガードの目にはパラミシアの証明が映っていた。

自身の能力で硬化され、硬さは鉄並み。

鋭く突き出された一撃は必殺の凶器となっていた。

「紙突(かみつ)き――」

繰り出された攻撃が無慈悲にボガードの胸を貫く。体の中央に腕が突き刺さり、大量の鮮血が飛び出して、攻撃を与えたキリの顔にも降りかかった。

思わず咳き込んで血を吐き出す。

刹那の攻防で攻撃を読み切ることができなかった。

やはり油断を誘われた要因が大きく、肉体の変化にまで気が回っていない。見る見るうちに変貌していった彼の腕に気を取られた結果であろう。
攻撃を受けた後、ギシッと鳴るほど歯を食いしばったボガードは考える。
左腕、両脚は紙が巻き付いて動かせない。完全に動きを封じられている。それでも状況を打開しようと思うならば、必然的に右手に持った刀を使わねばならない。
湧き出してくる力に任せ、筋力を頼りに思い切り刀を振るった。すると今度は拘束に打ち勝ち、刀身が動いてキリの腕が奇妙に皮膚を切られ、肩の一部が抉り取られると同時、腕の半ばほどが歪に引き千切られる。前腕から手首にかけて斜めに肉が裂け、千切れかけてだらりと揺れる。
さっき以上の血が雨のように降り注ぎ、痛みより先に驚愕が勝って、キリの顔が呆けた。
ボガードが手の中で刀を回す。
持ち方を変え、至近距離から突き刺そうと腕を振り上げ、切っ先が胸を狙っていた。
不利を感じるもののまだ諦めずに、キリがぐっと腕を引っ張って胸から抜こうとする。しかし抜けない。彼も同じように筋肉で腕を捕まえているらしく、動きが封じられた。
左腕はもう力が入らない。血に濡れているだけでなくダメージが大きい様子。
そうして、今度は真逆の光景となった。
「お返しだッ」
勢いよく胸に刃が突き立てられる。
すとんと軽い様子で刺さり、直後に背中から刀身が現れて、反応して口から血が漏れ出る。
一分にも満たない、わずかな時間の中での攻防。
ウソップとジョニーは言葉を失くしてただ見つめ、声一つ出せなかった。自分たちが敵うはずがない、と思っている。そのせいか、キ

リがやられる様をただ見ているしかなかった。
そのまま援護することもできず、二人の体が海へ落ちるのを見送る。
「キリィィィッ‼」
「あ、あの野郎、化け物かっ。びっくりするくれぇ強いキリの兄貴を……！」
急いで欄干へ駆け寄って海を見つめる。
二人はすぐに上がってきた。
ぐったりした様子のキリはボガードの左腕で抱えられている。すでに腕はボガードの体から抜けていた。血と海水で濡れたことにより力が抜け、今更抵抗はない。抱えられなければ自力で浮かぶこともできず沈んでいただろう。ボガードが信じられない物を見る目で彼を見やった。
余裕がないのは彼も同じだがそうせずにはいられない様子である。
怪我も厭わない決死の攻防。あの瞬間の覚悟が恐ろしい。まさに命懸けで殺しに来た。油断を誘われたとはいえ、ここまでの苦戦はここ数年でも覚えがないほど。
咳き込むだけで血が逆流して堪えられなかった。胸の傷は決して浅くはない。
ボガードは呆然と呟く。
「凄まじい戦いだった。私はおまえを見くびり過ぎていたようだ」
「てめぇ……兄貴に軽々しく触れんじゃねぇ！」
声が聞こえて顔を上げる。すぐ傍にある軍艦から、欄干を蹴ってジョニーが飛び出していた。右手には剣を振り上げ、食いしばった歯を剥き出しにして落下してくる。
怒り心頭といった模様。手負いのボガードへ襲い掛かった。
「命を賭けて戦った兄貴を、おれが殺させやしねぇよッ！」
冷静にそれを見たボガードは海面から跳び上がり、素早く着地点から逃げ出した。入れ違いになるようにジョニーが水面へ落ち、水柱を上げて海中へ消える。
傷は負ったがまだ動ける。体に纏わりついていた紙も濡れると剥

がれた。
キリの体を引き上げ、彼は再び月歩で空中へと出て、一息つこうと深く息を吐き出す。
「悪いがこれは我々の勝負だ。仲間であっても邪魔はしないでもらいたい――」
逃れたはずの空中で、強く腕を掴まれた。
水面から自身の左腕へ視線を走らせた瞬間に気付く。
血と海水に濡れて力が入らないはずの右手で腕を掴んで、キリが鋭い眼差しでボガードを睨んでいた。しかもその力は痛みを感じるほど強く、骨が奇妙な音を鳴らし始める。
あれでまだ死んでいなかったのか。
驚愕すると同時に伸ばされた彼の左腕が、先と同じように変色し、紙が突き出して、攻撃態勢に入った。千切れかけながら我が身を顧みずに、明確な脅威となり、凄まじい執念が見て取れる。
それを見てボガードは歯噛みした。
今ここで確実に仕留めなければ。
彼が攻撃を繰り出すより先に右腕を振り、刀の柄で顎を殴りつけた。一撃、強かな殴打を喰らって頭が揺れ、わずかに体の力が抜ける。
その一瞬で腹に膝蹴りを入れ、キリの体を飛ばした。
距離が開いて約一メートル。
落ちていく彼に狙いを定めて刀を構え、銃弾を撃ち出すが如く、突きを放つため息を整えた。
（今度こそ仕留める。脳を破壊すれば流石に動けないはずだ。こいつは、こいつだけは、確実にここで仕留めておかなければ……！）
意を決して右手に力を込めた。
全く同じタイミング。軍艦から飛来した弾丸がボガードの顔に激突し、小さな爆発を起こした。
ダメージを受けた状態で虚を衝かれた一撃。
驚愕した彼は、体勢を立て直す余裕もなく海へ落下していった。
「ジョニー！　キリを早く船の上に！」
「今すぐ！」

狙撃を終えたウソップが耐え切れずに叫んだ。
先に落ちたキリを拾い上げ、慌てて泳ぐジョニーが軍艦へ戻ってくる。
ぐったりして動かないキリを運び、甲板へ引き上げてすぐ不安に苛まれた。一見すれば死んでいるようにも見えてしまう姿。目は閉じられて動く気配はない。
ウソップがすぐに倒れたキリの呼吸を確認し、まだ死んでいないことを確認した。だが安心できる姿ではない。見ているだけでも流れた血が多過ぎる。
切り傷は全身に作られており、肩には風穴が開けられて、左腕は歪に肉を抉り取られている。
見たことの無い傷口に表情が歪み、見ることさえ躊躇われる様相だった。
よくぞここまで戦った。一味のためを想い、二人を守ろうとして。
自分がしっかりしなければと思い立って、頭を振ったウソップがジョニーを見る。ここに居る二人で、今度はキリを守らなければならないのだ。
「ジョニー、キリはもう動かせねぇ！　船の中にある医療道具全部持ってきてくれ！　早くしねぇとこいつほんとに死んじまうかもしれねぇ！」
「は、はい！」
急ぐジョニーが荒々しく扉を開き、船内へと姿を消す。道具が無ければ応急処置もできない。短い時間とはいえ、しばし待たねばならなかった。
この時間が辛い。
痛ましい彼の姿を見ているだけでも胸がざわつき、居ても立っても居られなかった。
まさかこのまま死んでしまうことはないだろうか。
努めて考えないようにしているのに、嫌な想像が頭をよぎって涙が溢れそうになる。
その時、うつ伏せに倒れたまま、キリが声を絞り出した。

「ウソップ……」
「な、なんだ？　大丈夫かキリ。痛えよな。もうちょっとだけ待ってくれよ」
息は絶え絶え、声に力はなく、いつもとの違いに声が詰まる。
触れることさえ戸惑われる彼に伸ばした手が震え、その体に触れることさえできなかった。だからせめてその言葉を聞き逃さないように、ウソップは土下座するような体勢で顔を寄せる。
キリは絞り出す声で、ゆっくりと言葉を紡いだ。
「ボク、まだ、生きてるかな？」
「あ、当たり前だろ！　今ジョニーが道具を取りに行ってんだ。いいか、絶対に死ぬなよ。おれたちが絶対に守ってやるから、絶対に死ぬな。すぐ助けてやるから」
「ありがとう……頼むよ」
胸に風穴を開けられたせいか、呼吸の音がおかしい。妙な音が聞こえていた。
黙っている方が傷に障らないのか、眠ってしまえば危なくなるなら話し続けている方がいいのか、医療の知識も無くてはそんなことさえわからない。ウソップには彼がどうしていればいいかを指示することもできず、ただ傍で励まし続けるしかできない。
熱くなる胸が、溢れ出す涙を止められなくなった。
死なせたくない。今はただそう思う。
周囲への警戒すらできずに、ずっとキリを見つめていた。
「悔しいなぁ……」
わずかに目が開いた状態で、どこを見ているとも分からぬおぼつかない眼差し。そんな状態でぽつりと呟かれる。
「強くなった気でいたのに、また役に立てないや。ウソップ……ごめん。もっと、上手くやれればよかったのにね。迷惑、かけるよ」
「な、何言ってんだよ。おまえが居なかったらおれたちあいつに殺されて終わりだったさ。おまえが居てくれたから助かったんだ。ありがとうってのはこっちのセリフだろ」
「うん……そうかな」

「そうだっての。だからよぉ……そんな寂しいこと言うな。おれたちにはおまえが必要なんだ」
ゴツッ、と背後で音がした。今にも消えてしまいそうな呼吸をかき消すように。
ウソップはゆっくり振り返る。
欄干の上にはずぶ濡れになったボガードが立っており、冷淡な目で彼らを見つめていた。
なぜ立っていられるのだろう。なぜ動けるというのか。
キリが胸に風穴を開けたはずだ。それでも動けるというのは、どれだけの強者でも、能力者だとしてもおかしい。それでも事実ボガードは動き、しっかりと背筋を伸ばして立っている。
恐怖を覚えるのも無理のない姿であった。
だがウソップは、逃げなかった。
背後にキリを庇い、パチンコ一つを持って立ち上がって対峙する。
彼の戦闘は今しがた見たばかり。自分が勝てないことは誰よりも理解している。だけど自分だけ逃げ出すのはとても選べずに、これから自分がどうなるか知っていてもその場を動けなかった。恐怖からではない、これは使命感だ。
キリを守る。自分より強い彼を背に、そう覚悟を決めていた。
すでにボガードはしゃべれないのか、何も言わずに刀を構える。
凄まじい執念。そして胆力だ。
今すぐ気を失ってもおかしくない、或いは命を落としてもおかしくない傷を受けて、自らの体を顧みずにキリへのとどめを刺そうとしているようだった。
「おれは、臆病だからよ。今にも気を失いそうなくらい怖くて仕方ねぇ……」
ぽつりと呟いて弾を番える。
視線を外し、俯いてしまって隙だらけの彼を、なぜか攻撃することができなかった。
おそらくは確かに抱えた尊敬の念。敵わぬと知りながら逃げない彼の、愚かな胆力を目にしてしばし待つという愚行を決断した。

ボガードは出会い頭にウソップを認めている。彼もまた強者の一人だと。
「でもよぉ、おれらのために死にかけてまで戦ったこいつを、見捨ててなんて行けねぇじゃねぇか……おれがなりたかった海賊はそんな奴じゃねぇ！　命張って仲間を守れるような、勇敢なる海の戦士になりたかったんだ！　そんな男になるためにおれは海へ出た！」
意を決して顔を上げ、パチンコを構える。
ウソップの動きに反応してボガードも刀を構えた。
「このおれの存在を生涯忘れんなよ！　おれの名は、キャプテ～ン・ウソップ！　未来の海賊王のクルーで、麦わらの一味の狙撃手だァ！」
叫ぶと同時に、海が爆発するような轟音を立てて水柱を立てる。
巨大なそれは雨のように海水を落とし、辺りに即席の豪雨を生み出した。
驚愕の直後、気付く。
一度見たはずのウミパンダが顔を出しており、つぶらな瞳で軍艦の上を見つめていた。

ＳＷＥＥＴ　ＥＳＣＡＰＥ（５）

二度目となるウミパンダの襲来。
すっかり忘れていたまさかの事態に、時が止まったような衝撃。ウソップは大口を開けて目が飛び出さんほど驚き、大きな悲鳴を響かせており、ボガードもまた平静を保てなくなっている。
ただでさえ予想外の激闘で胸に大きな傷を負い、声が出せなくなっている。呼吸さえ辛い危険な状態だ。今だけはそれほどの巨体に襲われて勝てる自信がない。
必然的に対峙をやめた二人は、気付けば体ごとウミパンダに向き直っていた。
「で、で、出たぁ～っ!?」
ウソップの絶叫が響く最中、ウミパンダは船上の人間を見つめる。
叫ぶウソップ。刀を構えるボガード。そして血まみれで倒れるキリの姿。
つぶらな瞳が確かに様子を変えた。
キリの姿を見つけ、血に濡れて赤く染まりながらも、わずかに確認できるくすんだ金色を目にして初めての反応を見せていた。
今やはっきりとはしていない彼の視界にも、ウミパンダの顔がおぼろげに映る。
この瞬間、確かに視線が交わったのだろう。
明確な変化にウソップが肩をびくつかせる。
ウミパンダの顔が分かり易く憤怒を表したのだ。
「ぎぃやぁぁぁ～っ!?　死ぬぅ～っ!!」
両手を上げて降参のポーズ、ウソップが全力で叫べば、ウミパンダの顔はボガードに向いた。
本能からわかる何かがあったのかもしれない。
水面を大きく揺らして持ち上げられた右腕が突然、ボガードへ向けてパンチを放っていた。思わぬ攻撃に彼は姿が掻き消えるほどの速度で回避し、欄干に立っていたせいで、軍艦の一部が轟音を立てて吹き飛ばされる。

たった一撃で頑丈な船が粉々になった。
恐ろしい光景にウソップは冷静さを取り戻すことなく、さらに声を大きくする。
「あああぁぁぁ～っ!?」
移動したボガードはマストの上へ立った。一秒たりとも見失うことなくウミパンダが彼の姿を捕捉し、今度は左腕を持ち上げ、容赦のないパンチを猛然と放つ。
即座にボガードが飛ぶと、マストは一瞬でただの残骸と化した。
頭上からマストだった物が降り注ぎ、悲鳴を上げたウソップはまずいことに気付く。
動けないキリに欠片でも当たればおしまいだ。
考える暇もないため、慌てた彼はキリの体を抱え上げ、咄嗟に走り出していた。
「やべぇ！　悪ぃキリ、ちょっと運ぶぞ！」
素早い判断で下敷きになることはなかった。
彼らは残骸の下から逃げ出し、急いで船室へと駆け込む。
その際、完全に姿が見えなくなる前に、キリがぽつりと呟く。
血が足りずにぼんやりする頭は不思議な考えを打ち出していたらしい。
頭の中に浮かぶのは一人の女性の姿。
かつて見た大きなシロクマ。
自分には他にも家族が居るという言葉。
そして今は、自分を見て激怒し、傷つけただろうボガードを襲ったウミパンダの挙動。
「こいつ、まさか――」
言い切らぬ前に船室へ姿が消える。
外ではその後も動物と人間の攻防が続いた。
あまりにも素早く的確な動きはどう見ても野生とは思えず、訓練を受けた物に見える。拳法と言われても疑いはしない。このウミパンダは何から何まで奇妙だった。
グランドラインに生息するはずがイーストブルーに居て、本来あり

得ないほどの体躯を持ち、ただ拳を振るだけでなくまるで追い詰めようとするかのような姿。どこを取っても普通とは言えず、空気を蹴って逃げながらも、体力の限界を感じるボガードは強く歯噛みした。
なぜこんな事態になった。まるで彼らを守ろうとするようではないか。
疑念を持ちつつも怒りを持ち、自らの命の危険を知りながら空中で刀を構える。
逃しはしないと決めた。故に諦めることはできない。
その刹那、ウミパンダが奇妙な素振りを見せた。
傍にある軍艦を両手で持ち上げ、頭上に掲げたのである。
守ろうとしたはずの人間が乗る船を、自らの武器にしようとしているらしかった。
虚を衝かれた一瞬の隙を見切り、ウミパンダが全力で軍艦を投げつける。ぐるぐる回るそれは威容を持って空を飛び、狙い違わずボガードへと迫った。歯噛みして空気を蹴って空を飛び、回避する。投げられた軍艦は勢いそのままに大海原へと飛んで行ってしまった。
攻撃を回避したかに思えた。だがそれさえも陽動の一種に過ぎず、行動の先を読んだウミパンダが待ち受けていた。まるでオーバーヘッドキックである。
驚愕するボガードへ蹴りが迫り、逃げる暇もなく激突する。
彼の体は凄まじい勢いで蹴り飛ばされて町へ戻り、港を越えて一軒の家に激突した。
姿は見えなくなり、安否は不明。ウミパンダは頭から海へ落ちる。
すぐに海面へ上がって辺りを見回したのだが、どうやらその時になって気付いたようだ。
軍艦がどこにも見当たらない。
自身が全力で投げ飛ばしたそれは三人を乗せたまま海の彼方へ飛んでしまい、早くも視認できない場所へ行ってしまった。
テンションが上がり過ぎて、気付いたのはたった今。
反省するかのように頭を掻いて、わずかに小首をかしげていた。
ボガードを倒し、軍艦を投げ飛ばしたウミパンダはそれ以上何もせ

ず、ゆっくり海中へ潜る。
結局、彼が何をしたかったなど、見ていた誰にもわからない。
コビーやヘルメッポを始めとした多くの海兵が見守る中、ウミパンダの姿は海へと消えた。

＊

「おおおぉっ――！」
「ふんっ！」
山中において、ルフィとガープが幾度目かで拳を打ち合わせた。
硬い物がぶつかる音が響き渡り、骨の髄にまで衝撃が伝わる。しかし殊更、痛みを感じている様子を見せたのはルフィだけだ。ゴムの体は打撃に強いはずなのに、気付いた時には無視できないほどのダメージが蓄積されている。それも刃物は使わず徒手空拳だけで。
おかしいと感じつつも理由がわからず、ぶつけた右手を振りながらルフィが下がる。
状況は明らかに不利。
ルフィが何度攻撃を放とうとガープはあっさり避けてしまい、逆に彼が繰り出す攻撃は狙い違わずルフィの体に叩き込まれる。もう何度拳骨を受けたかわからない。それでもルフィが動けたのは幼少期からの経験で祖父の拳に慣れていたことと、鍛えられた成果により、半ば無意識的に威力を半減させようと回避行動を取っていたせいだ。
ひとえにガープから鍛えられていたおかげで、数分とはいえ彼と戦うことができている。
真っ直ぐ山を目指して逃げた後、短い時間とはいえ戦って数分。
まだ体は元気で、ダメージも戦闘に支障をきたすほどではないが、まずいと感じる心はある。
引き際を見極めようとするルフィはガープから距離を取り、真剣な眼差しを向けていた。
「ハァ、やっぱ強ぇなじいちゃん。今のおれじゃ勝てねぇ」
「もう諦めろルフィ。わしと一緒に来い」

「いやだ！」
「ええい、話が通じん奴め。一体誰に似たんじゃ」
腕組みするガープはいまだ余裕を称えている。高齢でありながら一切疲労を感じさせない。
常人では反応することも難しいルフィの攻撃を見て、尚もそんな様子だった。
いよいよまずいと思ってルフィが意を決する。
作戦は時間稼ぎ。キリからうるさく言いつけられていた。ここで戦うのは本分ではなく、あくまで逃げるための時間を稼ぐだけ。だから時を選んで必ず逃げて来いと。
その言葉を忘れるはずもなく、彼はよしと頷いた。
もう十分時間は稼いだだろう。木々に囲まれたこの場所からでは町の様子を知ることはできないが、信頼する仲間たちはきっとやってくれている。その想いに迷いはない。
やる気を見せてぐるぐる腕を回し、ルフィは歩いて前へ進む。
訝しむ顔になってガープが口を開いた。
「なんじゃ、まだやる気か」
「当たり前だ。おれは海賊王になるまで諦めるつもりはねぇからな」
「フン、今のおまえがグランドラインに入っても死ぬだけじゃろうて。イーストブルーと同じと思うなよ。この先の海はおまえの想像など軽く超えておる」
「だから行くんじゃねぇか」
笑顔になってルフィが言う。
眉をひそめつつも、ひとまずガープはその言葉を聞いた。
「何があるかわからねぇから冒険は面白いんだ。だからおれは海賊になったんだ」
「グランドラインを航海したいなら海兵になってもできる。なぜ海賊に拘る」
「おれの夢を預かってもらったからだ。シャンクスに」
自分の帽子に触れ、覚悟を持って語られる。彼の目は驚くほど真っ

直ぐだった。
「この帽子を返すまで、おれは絶対に諦めねぇ。たとえ相手がじいちゃんでも」
「全く気に入らん！　やはり赤髪、奴のせいじゃ！」
ガープが怒りを表すと同時にルフィが姿勢を低くした。
一瞬で表情を変え、反応される。
気にせず駆け出して右腕を後方へと伸ばした。
「おおぉっ、ゴムゴムのォ！」
「何度やっても同じじゃ。愛ある拳に、防ぐ術なし！」
「ブレットォ！」
後方へ伸ばした腕を引き戻す勢いを利用し、常人では不可能なパンチを繰り出した。だが奇妙なことに、ガープのパンチはそれより速い。
ルフィの拳が届くより先に腹を殴られ、飛ばされた。
勢いよく木々の間をすり抜けていく彼は両腕を伸ばしてそれぞれ木を掴み、体を止めようとする。それを見るガープは上機嫌に笑っていた。
まるで孫と遊んでいるかのような表情であった。
「んぎぎっ……！」
「ぶわっはっは。まだまだ青いなルフィ。やはりわしが本格的に鍛えてやらねば――ん？」
木を掴んで両腕を伸ばし、体は後方へ。その様はまるでパチンコを連想させる光景だった。
ゴムは両腕、弾はルフィ自身。
何やら嫌な予感を感じ、ふとガープの笑みが消えてしまう。
「まさか……」
「ロケットォ！」
概ね、想像している通りであった。
ルフィは自らの力で勢いよく飛び出し、空へ身を踊り出す。凄まじい速度だ。自分に向かってくるなら反応もできただろうが、空に逃げられたことにより、ガープの手には届かない。

迷わず空を見上げた彼は、くるりと回ったルフィを見る。
頭を地面へ向け、にこやかな表情。大の字になって飛びながら彼は元気に言った。
「今日はここまでだ！　またなじいちゃん！」
「ル……ルフィ～っ‼」
逃げの一手とは思わず、止められもせずにあっさり逃げ出すことができた。ガープは置き去りにされ、空を飛んだルフィは町を見下ろしながら港へ向かう。
山を離れた後になって状況を窺い知ることができたのだ。
海にはなぜか、軍艦を持ち上げる巨大なパンダが居て、その姿に彼は目を剥き出しに驚いた。
「うわぁ～!?　なんだありゃ！　でっけぇ～！」
メリー号より大きな軍艦を軽々投げ飛ばしてしまい、その軍艦は彼方へ消えて見えなくなる。船を投げて剛速球とは恐れ入る。初めての光景に好奇心が沸き出した。
勢いが弱まって町へ落ちつつ、目はキラキラ輝く。
巨大なウミパンダを見つめていれば、さらにオーバーヘッドキックまで見せており、ますます目が惹きつけられる。今やあの存在が気になって仕方なかった。
「すんげぇ～！　あいつ仲間にしてぇなぁ～！」
今すぐ駆けつけなければ。
そう決めた後は町を見下ろし、仲間たちの姿を探す。
視線を下ろしてすぐ、さほど遠くない場所にゾロとヨサクの姿を見つけた。二人も港を目指しているようで、ヨサクが先頭を走っている。やはりゾロには任せられないらしい。
ルフィは笑顔になって腕を伸ばした。
瞬く間にゾロの肩を捕まえてしまい、ぐっと引き寄せて彼の下へ突撃する。
まるで攻撃のような挙動だったが彼自身は上機嫌で、対照的に振り返ったゾロは驚き、歯を食いしばって全身に力を入れている様子だった。

「ゾロォ〜!」
「ル、ルフィ、てめぇちょっと待て……!」
「兄貴たち危ねぇ!?」
ヨサクが警告するものの意味はなく。
空から降ってきたルフィはゾロへ激突し、強い衝撃を与えると共に吹き飛んで行った。近くの店先へ突っ込み、無視できないほどの轟音の後、並べられていた果物が坂道を転がっていく。
凄い物を見てしまった。
そう思うヨサクは立ち尽くして口をあんぐり開けており、二人は死んだかもしれないと思う。
しかしルフィとゾロはすぐに動け、壊れた台座や棚を跳ね除けて立ち上がった。ゾロは怒り心頭で拳を握っており、ルフィは気にせず口に突っ込んできたリンゴを咀嚼している。
危うく死ぬところだったのは間違いない。
ゾロがルフィの胸倉を掴み、がくがく揺らしながら文句を口にし始めた。
「てめぇいきなり何してくれてんだ、あ? 人を掴んで飛んでくりゃ危ねぇってのは考えなくてもわかることだろうが」
「どうもすみません」
「こっち見ろコラ。おかげでこっちは余計なダメージを――」
「ま、まぁまぁ兄貴たち、今は抑えてくだせぇ。それより速く逃げねぇとまずいんですって」
仲裁に入ったヨサクの言葉で、なんとかゾロが考え直してくれたらしい。ルフィのシャツからパッと手を離して佇まいを直す。
今ので傷口が開いたかもしれない。ボガードとの戦闘で、決して浅くはない傷がいくつかある。
新たに脇腹と脚にも傷が増えており、血も流れて服が赤く染まっていた。
しゃりしゃりとリンゴを食べ終え、ようやく彼の外見に気付いたルフィが笑みを消す。
ゾロの実力は知っているが、まさか怪我をするとは思っていなかっ

た。
少し不思議に思いつつ冷静な声で問いかける。
「怪我してんのか？」
「ああ、厄介な野郎が居やがってな。途中で中断されちまったんだが」
「わかった、迷子になったんだろ」
「違ぇよ！　向こうが退いていきやがったんだ！　誰が迷子だ、バカ！」
「いやぁ兄貴、正直おれが見つけるまでの兄貴は、その……」
「言うな。とにかくもう港に行きゃいいんだろ。急ぐぞ」
そう言ってゾロが先に歩き出すものの、即座にヨサクから止められる。
「兄貴、そっちは港と逆方向です」
「うっ……」
「あっはっは。ほら見ろ、やっぱり迷子だ」
「うるせぇ！　おまえだってそう変わらねぇだろうが！」
吠える彼をいなしつつ、ヨサクが先頭に立つと港を目指して走り始める。
緊迫した空気が一瞬とはいえ緩んだが、まだ油断ならない状況。誰もがそれを理解している。遊んでいる暇もなければ立ち止まる一秒さえ惜しいのだ。
走りながらルフィが隣のゾロへ声をかける。
やはり先程のウミパンダが気になるらしかった。
「なぁゾロ、海見たか？　でっけぇパンダがいるんだぞ」
「パンダ？　何言ってやがる」
「ほんとにいたんだって。あいつおれたちの仲間にできねぇかな」
「何でもかんでも仲間にしようとすんじゃねぇ、アホ。パンダなんか仲間にしてどうすんだ」
「だって楽しいだろ。海賊の仲間がパンダなんだぞ？」
「ふざけてるようにしか思えねぇな」
「お二人とも会話が弾んでるのは結構ですが、もうじき港に出ます。

ひょっとしたら敵が待ってるかもしれやせんぜ」
ヨサクが二人へ声をかけ、通りを駆けながら表情を険しくする。
戦いは終わっていない。今から港へ向かえば、待ち伏せを受ける可能性は大いにあるだろう。それを危惧していたのだが聞かされた二人はあっさりと答えた。
「別にいいよ。全部倒すから」
「ぶった切りゃいいだけだ。準備も何も必要ねぇよ」
「くぅぅ、流石おれが見込んだ男っ。そうこなくっちゃ！　やっぱりおれはあんたらについてきます！　たとえ地の果て海の果てであろうと！」
「勝手にしろよ」
「しっしっし。こいつも変な奴だな」
そう時間もかからずに、彼らは港へと到達した。
開けた場所へ出た途端ルフィが前に立ち、両側にゾロとヨサク。辺りを見回し始める。
この時、彼らが注目する場所はそれぞれ別だった。
状況の変化を理解し切れていないせいである。
ルフィとゾロはメリー号がないことに驚き、ヨサクは奪うはずの軍艦が消えているのに驚いた。どちらも見ていない内に起こった変化。彼らが知らないのも無理はない。
まず口を開いたのはルフィだ。
確かにあったはずのメリー号を探しながら首をかしげる。
「あり？　メリー号がねぇぞ。なんでだ？」
「そ、それには色々ありまして……とにかく今は軍艦へ。みんなと合流しねぇと。って、なんでか軍艦まで消えちまってるんだが、一体――」
「あぁ、軍艦ならパンダがぶん投げちまったぞ」
「ハァ!?」
「思いっきりぶん投げて海の向こうまで行っちまったんだよ。いやぁーすごかったなぁ」
見たままを語るルフィはからから笑うものの、ヨサクは血相を変え

て動揺する。
何から説明したものか。
冷静に考える余裕もなくて、慌てふためいた結果、順序も何もなく話し始めていたようだ。
「そりゃまずいっすよ！　あの船には確か、キリの兄貴とウソップの兄貴、それとおれの相棒が乗ってるはずなんです！　船を奪うっつってましたから！」
「なにィーっ!?」
「あの羊船もナミの姉貴とシルクの姉貴を乗せたまま、パンダに投げ飛ばされちまって、それでキリの兄貴が軍艦奪うって決めたんですが……！」
「じゃああいつ、おれの仲間をぶっ飛ばしやがったのか!?　ふざけんなァ！」
好奇心から一転、一気に怒りへ。
海へ向けられる視線は厳しい物となり、ルフィは拳を握って大声で吠えた。しかしウミパンダが顔を出す様子はなく、そこに居るのかさえわからない。静かな海原だった。
落ち着きを失くす二人の傍、ゾロは冷静に状況を見る。
港に海兵が居るのはすでに確認している。倒れている誰かを必死になって治療しているようで、堂々と立っている三人を狙う素振りはない。よく見れば倒れているのは、ボガードのようだ。
何が起きたのかはわからない。だがチャンスではあるだろう。
唯一冷静に考え、ゾロがヨサクへ目をやった。
「ヨサク、おまえらの船は？」
「え？　あぁ、あそこに」
「ならそいつで島を出るぞ。とりあえずここに居たってできることはねぇだろうからな」
「どうするゾロ、キリたちもメリーも……！」
「後で探しゃいい。そう簡単に死ぬ連中じゃねぇだろ。とにかく残ったおれたちがここで捕まっちまえば終わりなんだよ。しっかりしろよ船長、おまえがブレたら誰がついていけるんだ」

怒りを滲ませ、今度は真剣に問われた。
数秒の沈黙。
後にルフィは強かに頷く。
仲間たちの姿が見えないと不安になり、心配もする。しかしそれ以上に信頼しているのだ。彼らはきっと生きている。生きてまた合流できるはず。
そう信じてルフィは目の前の二人へ答えた。
「うん、よし。島を出るぞ。みんなを探すんだ」
「ルフィさんっ！」
三人が動き出そうとしたタイミングで強い声がぶつけられる。振り返った彼らの視線の先に、剣を持ったコビーとヘルメッポが立っていた。
前とは明らかに表情が違う。
ぶつけられる感情も、友達のそれではない。
何があったかを窺い知ることはできないが、ここで何かがあって、変化が起きたらしい。
二人は戦う気で剣を手にしており、皆が怯える中で敢えて前へ出てきている。
無視する訳にもいかないだろう。
真剣な顔でルフィが応じ、手を振って二人を先に行かせた。準備をした後、話を終えればすぐに出航する。意図は伝わったらしく二人はすぐにボートへと駆け出した。
「なんだよコビー。おれたち今急いでんだ」
「ぼくらの……ぼくらの仲間が、傷つき、倒れました」
視線を動かして彼らの背後を確認する。確かに誰かが倒れていて、怒号を発しながら治療している海兵が大勢。かなり緊迫した空気のようだ。
再び二人を見れば血走った目をしている。
体からは強い敵意が発されていた。
どうやら本気らしい。
向かってくる気は満々で、初めて見る表情のように思えた。

「そうか」
「ぼくらは、友達ですけど、もう敵同士です。仲間を傷つけられて黙ってられるほど、ぼくらだって弱くないつもりです」
同情などしない。
たとえ彼らの仲間が死にかけていたとして、これが彼らが生きる世界だ。命を賭けて戦い、勝てば先の海へ進み、負ければ海の藻屑となるだけ。それを覚悟して海兵になったはず。制服に袖を通したはずだ。ならば同情することは侮辱に値する。
ルフィは多くを言わず、じっと二人を見つめる。
謝る気などさらさらなかった。だから二人の決定を否定せず、その場を動こうとしない。
彼らから逃げるのは簡単だったが、それでは二人のためにならないだろうとも思っていた。
「来いよコビー、ヘルメッポ。おれはもうとっくに覚悟してるぞ」
「う……うわぁぁぁっ！」
「ち、ちっくしょおおっ！」
剣を振り上げ、二人同時に向かってくる。
意志の強い目で見つめ返し、ルフィもまた前へ飛び出した。
「ゴムゴムの、ピストル！」
「ぐほぉっ!?」
右の拳を伸ばしてパンチを放ち、まずヘルメッポの顔面に当たった。それだけで彼は跳ねるように地面を転がり、剣を手放して動かなくなる。
まだコビーが居る。
叫びながら向かってくる彼を見て、ルフィは左腕を後方へ伸ばした。
「んんっ！」
「う、おおおぉっ――！」
「ブレットォ！」
見切れないほど素早いパンチが迫る。
正面から顔面へ激突し、眼鏡にヒビが入って、あっさり殴り飛ばさ

れた。コビーの体もその場へ跳ねて動かなくなり、剣が力なく地面を転がる。
あまりの勢いに地面へ落ちた帽子を拾い上げ、かぶり直す。
ルフィはあっさり彼らに背を向け、ボートへ向かって歩き出しながら、小さく呟く。
二人は友達だ。しかし敵である。
冷たくも聞こえる声を発し、冷淡に、友へ送る言葉を残した。
「先に行ってる。いつでもかかって来いよ」
意識を失っていなかったコビーとヘルメッポは、悔しげに涙を流しながらその声を聞く。
敵わない。それも、命を奪われずに見逃されたのだ。
自分たちはまだ、彼らが立つステージには到達していないということ。近くに居ると思っていた友は遠く、手が届かないほど遠く、前に居る。
その時声をかけてくれるということは待ってくれるのかもしれない。
それがなんだか情けなくて、優しいと感じるより非情だと思えた。
「おれは海賊だ。止めてぇんなら止めてみろ」
端的に言ってすぐボートへ乗り込む。
ゾロとヨサクは腕を組み、一部始終を見守っていた。
送る言葉はない。もう十分だっただろう。
ルフィは仲間たちが消えただろう大海原へ見据え、右手で帽子を押さえて、静かに告げる。
「行くぞ。出航だ」
やがてボートは動き出し、果ての無い海へと漕ぎ出し始めた。
彼らの行動は逃走である。敵わぬ敵を前に逃げ出し、島を離れた。
しかし結果として痛み分けであろう。
互いの損害は大きく、怪我人の数では圧倒的に海兵が多い。一方で麦わらの一味は邪魔が入ったこともあり、三つに分断されてしまっている。
船を失くしたのは両者共に。

どちらにとっても良い結果とは言えない。
勝負には水を差し、勝負を望んでいなかったルフィたちにとっては願ったり叶ったり。ただ、仲間と分断されたのはウミパンダのせいとは言いつつ、ウミパンダの介入が無ければおそらく、敗北していたのは麦わらの一味だったはずだ。
祖父との望まぬ再会、そして戦いは明確な決着が着かぬまま終わり、互いに道を違えた。
少なくともルフィが捕まる事態にはならず、航海は尚も続けられることだけは確かである。

バラティエ編
Ｒｅ：ＳＴＡＲＴ

島を飛び出してから丸三日。ボートはいまだどこにも辿り着けずにいる。その上何の因果か、船上に居る彼らはぐったりとして、見栄えはどうにも遭難しているようにしか見えなかった。

元々が小さな船。そもそも載せられる荷物が少ない。

それだけでなく今回は買い出しをしている暇もなく、メリー号はともかくとして、彼らのボートには食料その他もわずかしか載せられていなかった。

丸三日で取れた食事はたった一回。

ルフィが想像以上に食べてしまったせいで、初日のたった一回だ。

その日以来、彼らは腹を空かせた状態で海を漂う羽目になり、どこへ行けばいいかもわからず、広い海とはいえどこかへ辿り着きそうなものだが、奇跡的な方向音痴によって島の一つにも立ち寄ることができずにいる。その結果げんなりして必要以上にだらけてしまっていた。

ルフィ、ゾロ、ヨサクの三人はボートの上で脱力して寝そべっていた。

今や誰一人として舵を見る者がなく、周囲を警戒する素振りさえ見られない。肉体は別として、すっかり精神的に疲れ切っているらしい。

「あぁ～、腹減ったぁ……」

「おまえが必要以上に食いまくるからだろ。三日分はあったはずだぞ」

「ゾロの兄貴も、根拠がないなら道決めなきゃよかったんすよ。従ったあっしが馬鹿だった」

語る声に力を入れることもできず、何気なくぼんやりと話している。

力なく横たわって、見上げるのは青い空。すでに太陽が高く上って

見下ろしており、燦々とした光が辺りへ降り注いでいる。本来ならば気分も良くなる気候だろうに、今日だけは笑えない。
空腹と迷子。自分たちではどうしようもない問題が間近にある。
この時ほど仲間たちを恋しく思ったことはない。
キリが居ればルフィが食べ過ぎないようにと見張っていたし、シルクに腹が空いたと言えば苦笑しながら軽食を作ってくれて、ナミが居れば道に迷うことがなく、落ち込んでいればウソップが励ましてくれただろう。今、そのどれもがないのだ。
仲間を守れるほど強いルフィとゾロだが、料理もできない、道もわからない彼ら二人だけではとても満足な航海を行うことなどできない。
同乗していたヨサクは二人に気を遣って強く言い切れない部分がある。
彼らだけの航海は前途多難で、今にも死んでしまいそうな悲壮感すら漂っていた。
「みんなどこ行っちまったんだろうなぁ。ここがどこかもわからねぇし、腹も減ったし」
「ぼやいてても始まらねぇだろ。まずはどっかの島に立ち寄って情報収集だな」
「でもどこにも着かねぇじゃねぇか。ゾロが迷うからだぞ」
「おれのせいかよ」
「だってゾロがこっちだって言ったし」
「おまえだって適当に指差してたろ」
「いや、あっしのせいっすよ。あんた方に任せようとしたあっしの……」
仲裁するのか、恨み言か、ヨサクが言うと同時に溜息が吐かれる。
とにかく打つ手がない。状況を変えたいとは思うものの、昨日も船を進める以外のことは何もできなかった。このままでは本当に遭難して死んでしまう可能性もある。
それでもやることがなくて、彼らはじっとしたまま動かなかった。
「腹減ったぁ」

「遭難しかけるとは不甲斐ねぇ」
「いや、むしろもう遭難しちまってるでしょう、この状況は」
脱力してしばしまどろむ。
のどかな時間だが独特の辛さがあるため落ち着ける訳でもない。
三人は苦悶の表情で目を閉じていた。
しばらくして、睡眠と覚醒の間でまどろんでいると、唐突に声がかけられる。
気付かぬ内に近くまで船が来ていたようだ。
「おいおまえら、こんなとこで何やってんだ？」
「うん？」
一斉に首だけを上げてそちらを見る。
近くまで小型のボートが来ていた。そこには金髪で左目を隠す、黒スーツの男が立っていて、銜えたタバコの煙を燻らせながら不思議そうな目を向けてくる。眉毛がぐるぐると巻いていて、奇妙な様は一目で覚えてしまい、三人はじっと彼を見返す。
空腹で力が出ないため、ルフィは寝転がったまま答えた。
「なぁ、なんか食うもん持ってねぇか？　おれたち今遭難してんだ」
「遭難してる奴が偉そうに遭難してるって言えるかよ」
「腹も減ったし、町にも着かねぇし、困ってたんだ」
「困ってる声とは思えねぇけどな。ただだらけてるように見えるが」
男はふーっと煙を吐き、ボートの縁に座った。ポケットに手を突っ込んで彼らに目をやる。
「どれくらいメシ食ってねぇんだ」
「んー、食ったのは二日前くらいか」
「このアホが必要以上に食いやがったんだよ。おかげで三日分がたった一食で終わりだ」
「自己管理がなっちゃいねぇな。自業自得だと言えばそれまでだが……ちょっと待ってろ」
そう言って男はボートの船室に入り、姿を消した。
訳も分からず三人は待つ。

おそらく助けてくれるのだろうという期待を持ちながら、再び会話もなく力を抜いて倒れる。
時間はかからず、少し待つと隣のボートから良い匂いがしてきた。鼻をひくつかせれば美味そうな香りが鼻腔をくすぐり、鳴くのも疲れていた腹の虫が声を上げ始める。
にんまり笑ってルフィが上体を起こした。
何か食べさせてもらえるらしい。
それを知れば一気に金髪の男への親近感が沸いてきたようで、喜色が全身から溢れ出る。
「うまそうなにおいっ！」
「あいつ、メシでも恵んでくれんのか」
「うんまそうな匂いっすよ！　あの人いい人だぁ」
いつしか心待ちにしてボートを見るようになり、やがて男が現れた。
器用に両手と頭に皿を乗っけて、その様を見たルフィとヨサクが待ち切れず声を出す。
「メシィ！」
「うまそーっ！」
「おら、食え。欠片でも残しやがったらオロすぞクソ野郎」
ボートを横付けにし、ルフィが素早く頭の皿を取ると残る二つがゾロとヨサクに手渡された。相当腹が空いていたようで三人ともすぐに食べ始める。
湯気が立つのは出来立てのチャーハンだ。
見た目にも一粒一粒の米がパラッとしており、香ばしい香りが嫌でも食欲を増進させる。
彼らの手は素早く動いて、我慢できずに喜々として食事を行っていた。
美味い。思わず驚いてしまうほどだ。
空腹だったことも手伝い、しかし確実にそれだけでなく料理人の腕が感じられた。普段あまり味にこだわらない彼らであってもその腕には驚きを隠せない。

ルフィは目を輝かせ、ヨサクは思わず感涙してしまったようだ。
そんな様子に、男は自分の船の縁に腰を下ろし、彼らを横目に見ながら笑っていた。
「うんめぇ～！　こんなうめぇメシ食ったことねぇよ！」
「うぅ、美味すぎる……あっし、生きててよかったぁ」
「クソうめぇだろ？」
ゾロは何も言わないものの、二人と同じようにがっついて食事をしている。
さほど時間もかからずに全て平らげられて食事は終わった。
皿には米粒一つ残らず、彼らも上機嫌になったらしい。
食事を終えてからルフィが笑顔で男を見た。
「いやぁーうまかった。おまえいい奴だなぁ。しかもめちゃくちゃメシうめぇし」
「コックをやってるんでな。そりゃ当然さ」
「へぇ、コックなのか？」
「ああ。今は買い出し中だ」
「あ！　ひょっとして海上レストランじゃねぇか？」
「そうだ。おれはそこで副料理長やってる」
煙草の煙を吐き出しつつ、男が言う。するとルフィは何かを想ってにんまり笑った。
「おれはルフィ。海賊王になる男だ」
「おれはサンジ。さっきも言ったが、海上レストランの副料理長だ」
「今からレストラン戻るのか？」
「そりゃ買い出ししたんだから戻るよ。まぁ、多少食材は減っちまったが、軽いもんさ」
「そういやなんで助けてくれたんだ？　せっかく買ってきたんだろ」
「あ？　そりゃおまえ」
金髪の男、サンジがルフィの顔を見やり、事も無げに言い放つ。
何でもないことを口にするような仕草と表情。それがやけに印象的だった。

「コックが腹減ってる奴にメシ食わせただけだ。何か理由が必要か？」
「ししし、ない」
「ならそういうことだ。おまえらも海の上で餓死しねぇように気をつけろよ」
サンジはわずかに笑ってそう言い、素っ気ない態度ながらやさしい気質に感じた。
ルフィとヨサクは彼に対して親しみを覚えて、すでに警戒心など持っておらず、ただ一人ゾロだけはまだ信用ならないと表情が硬い。サンジもそれに気付いている様子だ。
警戒心を持たずにルフィが口を開く。
話には付き合うようで、サンジも彼を見た。
「おれたちもレストランに行きたかったんだ。でも迷っちまってよ、連れてってくれねぇか？」
「ウチに用か？　それくらいなら別にいいが」
「もう大変なんだよ。ゾロがひどい方向音痴だからさ」
「おい。おまえにだけは言われたくねぇぞ」
サンジが頷いたことで同行が許され、案内役を手に入れることができた。ようやく道に迷うことなくどこかへ辿り着くことができるのである。
二隻の船は針路を変え、一路、海上レストランを目指し始めた。
到着までにかかった時間はおよそ二時間。
海賊だと名乗り、いまいち信用されないまま会話を続けて、バラティエについて質問し、さほど退屈を感じる間もなく時間が過ぎる。そうしてその場所へ近付いた。
その全貌を目にした時、ルフィとヨサクが目を輝かせて思わず唸った。
「おおっ」
「これは……」
「イカスぅ～！」
船首に魚の頭。舵に尾ひれ。

何とも独創的な外観を持つレストランが前方に現れ、一目見れば忘れない姿に二人は興奮した面持ちだ。間抜けにも見えるが愛嬌もあって、客引きには持って来いだろう。二人が惹きつけられたのも納得の船である。

どうやら繁盛しているらしい。

レストランの周囲には客が乗ってきただろう帆船がいくつも停められており、密集しているようにも見えて、中々異質な光景だった。

本来なら船がこれほど寄り集まることはない。

やはりレストランという性質上、海賊や海軍が操る船とは違った光景が広がって、そこがレストランなのだという認識がさらに強まる。バラティエは海上に浮かぶレストラン。客足が多いことも手伝って、ルフィは身を乗り出して声を大きくした。

「あれが海上レストランか」

「バラティエさ。料理長はクソジジイで、コックもアホばっかりだが不思議と上手く回ってる。おかげで近頃は客も多い」

「へぇ～。みんなおまえみてぇにメシ作るのうめぇのか？」

「まさか。おれに勝てる奴なんざいやしねぇよ」

「ししし、そうか」

二隻のボートは正面の入り口を避け、裏口の方面へと回って船に近付く。

隣へ停めるとすぐにサンジが買ってきた食材を持ち、バラティエへと渡った。しかし彼らを気にしているようで、振り返って声をかける程度には心配があるらしい。

高低差が出来たことで見下ろされ、三人へ声が降ってきた。

「おまえらどうすんだ？　おれはすぐに仕事に戻る。これ以上は面倒見切れねぇぞ」

「ああ、いいんだ。なんとかするよ」

「そうかい。おまえらがくたばったところでなんとも思わねぇが、店には迷惑かけんなよ」

「わかった」

「じゃあな。もう会うこともねぇだろう」

そう言ってサンジはあっさりその場を去っていき、三人からは姿が見えなくなる。
振り返るルフィはゾロに目をやり、座ったままの彼へ意見を仰いだ。
「なぁゾロ。あいつがいいんじゃねぇかな」
「あ？　何が」
「おれたちのコック。おれはサンジがいいと思う」
「そういうことか。また唐突に……」
「どう思う？」
「まだ会ったばかりだろ。おまえこそなんでそう思ったんだよ」
「いい奴だから」
「ハァ。言い出したってことはもう決めたも同然なんだろうが。好きにしろよ」
「しっしっし。あいつなら心配いらねぇって。なんとなくだけどわかるんだ」
「あぁそうだろうよ」
呆れた様子で首を振り、ゾロは溜息をついた。
何を言っても聞かない人間だ。尋ねられたのは意見を求めるというより宣言だろう。彼を仲間にしたいと伝えただけで、おそらくもう動く気だった。
それ以上待たずにルフィが飛び移る。
生き生きした様子で何やら始めるつもりらしく、辺りを見回し始めた。
顔をしかめるヨサクは不安を抱く。出会ったばかりで深く知らないとはいえ、喜々として船に乗り込む姿からは何をしでかすかわからないと連想させる。ゾロの溜息にも納得だ。
彼は自身が兄貴分と敬愛するゾロへ振り返り、恐る恐る尋ねる。
「いいんですか、ほっといて。ルフィの兄貴、なんか妙にやる気になってやすが」
「ほっとけよ。いつものことだ」
ゾロは動こうとせず、そのまま眠ろうとしている様子。興味は持っ

ていないらしい。
彼の姿を見て気付いた。
三日前の戦闘で怪我を負い、応急処置を終えて包帯を巻いているものの、きちんとした治療を行った訳ではない。医療に関する専門的な知識を持たない面子のため、とりあえずで血を止めただけの状態だ。このまま放っておくのはまずいと今になって思い出す。
ヨサクはルフィの背を見上げて声をかけた。
ルフィも歩き出そうとする動きをやめて振り返る。
「ルフィの兄貴、レストランに入るつもりなら、医者がいねぇか確認しちゃくれやせんか？　ゾロの兄貴の治療がまだ終わってねぇ。これはちゃんと看といてもらった方がいいと思うんです」
「お、そうだな」
「いらねぇ心配だ。こんなもん寝てりゃ治る」
「そういう訳にはいきやせんって。取り返しがつかなくなる前に治療しねぇと。ルフィの兄貴、頼んます」
「おう」
今度こそルフィが歩き出し、適当に道を決めて進み出す。
方向音痴の彼も広さのない船の上ならそう迷うこともない。すぐに正面の入り口を見つけ、そこからレストランへ入れるのだと知ればにんまり口角を上げた。
「ここから入れんのか。サンジいるかなぁ。あと医者も」
扉を開いて店へ入る。
現在は昼時。ちょうど人が多い時間帯なのだろう。どうやら店は満席で大盛況。落ち着いた雰囲気ながら賑わっており、大勢の人間の姿が見えた。
辺りを見回せばすぐにサンジの姿を見つける。
向こうも気付いたらしく、声をかけていた女性客に一言告げ、ルフィの下へやってきた。
決して喜んだ顔ではない。さっきと違ってタバコは銜えておらず、笑顔でもなくて、明らかに迷惑そうな顔で歩み寄ってきた。
正面に立ち、あくまでレストランの副料理長として向き合う。

サンジはルフィの目を見て口を開いた。
「いらっしゃいませクソお客様。ご予約で？」
「いいや、予約はしてねぇ。ついでに金もねぇんだ」
「ではお引き取りを。あいにく食い逃げ野郎は店に入れてはいけない決まりでして」
「えー？　さっきは食わせてくれたじゃねぇか」
「遭難者とお客様をいっしょにすんじゃねぇよ。いいから出てけ」
「おれの仲間が怪我してんだよ。ここに医者いねぇか？」
「居たとしても非番でメシを食いに来てんだ。わざわざ休み返上で働かせる奴がいるかよ。それに怪我人なんていたか？」
「ああ、ゾロがな。緑の髪の奴だ」
「あいつか……」
ポケットに両手を突っ込み、さっき見た顔を思い出す。むっつりしていて機嫌の悪そうな顔。ルフィと対照的だったせいで景気が悪い奴だと思ったばかりだ。
そこまで注意して見ていなかったが、怪我人だったのかと思い直す。
それでも意見を変えるつもりはないようだった。
「どうしてもって言うなら外に出た後で声をかけろ。この店に居る以上は食事を楽しむお客様で、せっかくの時間を使わせるな。わかったか？」
「んん、わかった。外に出てきたお客さまに聞いてみる」
「それでいい。わかったら出てけ」
「でももう一個用事があるんだ」
「ハァ、なんだよ。とっとと言ってさっさと出てけ」
「おれの仲間になってくれよ」
唐突な物言いにサンジは目を丸くした。しかしすぐに平静を取り戻し、そっと目を閉じて、今まで以上に顔をしかめて苦悩していた。
おそらく仲間になるかならないかではない。悩むのは彼の人間性についてだ。
あっけらかんと大事な話をするルフィに対し、再び目を開けると信

じられない物を見る目になっている。何から何まで、彼の想定を軽々超えてくる人物だった。
「仲間に……？」
「さっき言っただろ。海賊だって」
「おまえらが海賊だって話は聞いた。まだ信じちゃいねぇがな。だがなぜおれが仲間になる」
「おれたちの船、まだコックがいねぇんだ。だからいっしょに来てくれ。いっしょに冒険してさ、グランドラインを航海するんだ」
「断る。コックなら他を探せ」
思わず感じた不満からか、懐のタバコへ手を伸ばしかけ、店内であることに気付いて手を止めた。代わりにポケットへ入れて佇まいを直す。
多少様子が変わって、嫌がりもせずに向き合う。
伝えたいことがあるようでサンジの声は真剣だった。
「おまえらがこの店に来た理由は大体わかった。が、コックなら腐るほど居る。今すぐ海賊になってもおかしくねぇような気性の荒い連中がな。選ぶならそいつらからにしとけ。当然選ばねぇのもおまえ次第だが、おれは行かねぇ」
「なんで？」
「この店で働き続ける理由がある。ここを離れる訳にゃいかねぇんだ」
あまりに真剣で気圧される。相当な理由があるのか。
尚もルフィは食い下がるものの、意志は全く揺らがない。
「おれはおまえがいいと思ったから言ったんだよ。他の奴じゃいやだ」
「だったらこの店じゃねぇ場所を選べ。おれが頷くことはねぇよ」
「ここで働かなきゃいけねぇ理由ってなんなんだ？」
「働かなきゃいけねぇんじゃねぇ。働くと決めたんだ。おれ自身がな。だからおまえとは一緒に行けねぇって言ったんだよ」
ルフィもまた笑みを消し、真剣な表情でそれを聞いている。
並々ならぬ覚悟を感じるのだ。何かしら理由があるのだろうとは

すでに気付いていて、質問してみても明確には答えようとしない。言いたくないのかもしれなかった。
話し始めて数分もしない内である。
厨房から顔を出した強面のコックが大声を出し、サンジの背を睨みつけていた。
「おいサンジ、何サボってんだよ！　料理が冷めちまうだろうが、さっさと運べ！」
「うるせぇなクソコック。てめぇのまずい料理じゃどっちでも変わんねぇよ」
「んだとコラッ！　あ……どうもすみませんお客様。へボイモおそれ入ります」
強面の料理人が周囲の客へ頭を下げ始めた頃、サンジは深く息を吐き、踵を返して歩き出した。
話が終わった訳ではない。しかし伝えたいことは伝えた。
それ以上曲げる気はないと態度で告げ、ルフィも跡を追わずにその背を見る。
「何があってもおれはこの店を離れねぇ。悪いことは言わねぇから、他をあたれ」
「うん、よし。じゃあおれも決めた」
「あぁ？」
「おまえが仲間になるまで、おれはここを離れねぇ。もう決めた」
「何バカ言ってやがる。いいからどこへでも行けよ」
「理由だけでも教えてくれよ。なんでコック続けてぇんだ？」
「言いたくねぇな」
「じゃあ聞かん。おれも動かねぇぞ」
「チッ、勝手にしろ」
ウェイター業へ戻るべく、サンジがルフィを置いて去っていく。
強面でガラの悪いコックが追い出してしまったせいでウェイターが逃げてしまった。そのため副料理長の彼が代わりを務めていると聞いている。
ルフィはしばしそこに立って店内を見た。

盛況であった。猫の手も借りたいとはまさにこのこと。コックの数は多いようだが人前で動けるウェイターはおらず、またコックが出てくれれば問題になりかねないらしい状況。

得意ではないというのに、腕を組んで考えてみる。

考えてみた末、途中で面倒になり、とりあえず動き出してみた。

頼りになる仲間が傍に居ないため、自らの力でどうにかしようとしたようだが、やはり変化はなくいつも通りのルフィだったようである。

ただ一つ、何かいいことを思いついたと見せる笑みは、いつもとは違う姿だった。

海上レストラン〝バラティエ〟

それは唐突な出来事だった。

「おれはルフィ！　今から雑用で世話になる！　よろしく！」

非情に慌ただしく、荒げられた声が交差し、戦場のような厨房へルフィが現れた。

白いエプロンを腰に巻き、腕を組んで堂々とした立ち姿。頭には麦わら帽子をかぶって厨房の全員へ笑顔を浮かべている。しかしそこで働くコックたちは一切相手にしていない。全員が無視したままテキパキと働き続けている。

今日は客が多く注文が殺到するため、手を休める暇が一秒たりともなさそうだった。

怒号が響き、強面のコックたちが互いに怒鳴り合ってひどく騒がしい。

どこぞよりやってきたルフィなど視界に入らず、仮に見たとしても相手にしている時間はない様子で、海賊同然の荒々しい姿で熱心に料理を作っていた。

「おい八番テーブル上がったぞ！　誰か持ってってくれ！」

「てめぇで運べよ！　こっちは手が離せねぇんだ！」

「サンジの野郎は何やってんだ！　あの野郎ちっとも運びやがらねぇで！」

「どうせまた女口説いてんだろ」

「ああくそっ、どっかにウェイターは居ねぇのか！」

危機的な状況らしい。

叫んだコックが厨房内に目を走らせれば、いつの間にか部屋の片隅、座った椅子を傾かせて遊ぶルフィの姿がある。彼らにとって見知らぬ顔だ。しかも明らかにサボっている。

考える前に一人のコックが叫び、彼に声をぶつけた。

「てめぇ雑用に来たんじゃなかったのか!?　何遊んでんだよ！」

「お、仕事か？」

「料理がもう上がってんだ！　冷める前に運べ！」

「よしきた」
「なんでつまみ食いしてやがんだよぉぉっ!?」
ルフィに声をかけたことを機に、厨房の混乱はさらに大きくなる。
手が伸ばされて、運ばなければならない料理の一部が素早くルフィの口の中へ運ばれてしまい、どう見ても見栄えが変わったそれは客には出せない。コックが嘆くのも当然だった。
店へ出ようとするルフィが慌てて止められ、素早く皿がひったくられる。
「ちくしょう、やり直しだ！　わざわざ仕事増やしやがって……！」
「あり？　運ばねぇのか？」
「てめぇが食っちまったんじゃ出せねぇんだよ！　こりゃ客に出す料理だぞ」
「んん、それもそうだ。食っちまったら出せねぇよな」
「って言いながら食ってんじゃねぇよッ!?」
言った傍から別の皿に手をつけられ、またつまみ食いを許してしまった。
当然その様を見ていたコックたちは怒りを露わにし、彼を追い出そうと声を荒げる。
「もういい！　運ぶのはいいから注文取って来い！」
「えー？　おれ注文取ったことなんてねぇよ」
「そこにあるペンと紙持ってって、言われた通り書きゃいいんだ！間違えんなよ！」
「しょうがねーなぁ」
「しょうがねぇのはおまえだッ！」
怒鳴られながらも全く意に介さず、紙とペンを持ったルフィは店内へと足を運んだ。
店で働いた経験など皆無。知り合いが居ればまず止めていただろう。
できるはずがないと進言できる人間が居なかったせいで、彼はあっさり野に放たれ、店内を我が物顔で歩き出してしまっていた。
相変わらずの賑わいがある。サンジの姿もすぐに見つけるが、背を

見せる彼は女性客の一人と何やら談笑しているらしい。ルフィに気付く様子はない。
そうと知って敢えてルフィも声をかけず、辺りを見回して客を探す。
注文しようとしている客はどこだろうか。
新たにルフィが現れたことにより、パッと手を上げる人間が居た。黒いスーツを身に纏った老年の男性である。にんまり笑って、ルフィはそちらへ歩み寄った。
「ウェイター、注文をいいかな？」
「いいぞ。何にすんだ？」
「そうだね、まず――」
男はメニューを眺めつつ、難解なメニュー名をすらすら読み上げていくのだが、あまりに聞き覚えの無い言葉にメモを持つルフィの眉間に皺が寄り始めた。それも当然だろう。彼は山の中を走り回って育った幼少期を持ち、知人の店を訪ねた際にも注文の言葉など肉しかない。難しい名前のメニューなど知るはずもなく、またバラティエのメニューを見た経験もなかった。
言われた料理がどんな外見なのかも知らない。
難しい顔をするルフィに気付くことなく、男は注文を終えてしまった。前菜から始まるフルコースに加えてワインの銘柄まで。とてもルフィが覚えきれる量ではない。しかもメモを取ろうと思っても混乱してしまってペンの動きは明らかに遅れていた。
男がルフィの顔を見上げる。
わかっていない、と一目でわかる表情だ。
不安になった男は冷や汗を流すも、黙っていられずに恐る恐る尋ねる。ルフィはその時になって深く息を吐いて頭がパンクしそうになっているのを感じた。
「あの、わかったかな？」
「ふ～っ。おっさんの注文難しいな。紙とペンあるから自分で書いてくれねぇか？」
「は？」

「申し訳ございませんお客様。どうやら部外者が入り込んでいたようで。注文なら私がお聞きしましょう。お手数ですがもう一度お伝え願えますか」
「あ、ああ……」
ウェイターとしてあまりにお粗末なルフィを助けたのは、一拍遅れて発見したサンジだった。鮮やかな手つきでメモとペンを奪い、慣れた調子で注文を受けていく。
安堵する客など気にせず、ルフィは隣に来たサンジに笑顔を向けていた。
「あーっ、サンジィ」
「黙ってろ」
客には薄い笑みを向け、ルフィには素っ気ない態度。
すぐに注文を終え、恭しく礼をしたサンジは即座にその場を離れようとしていた。
「大変失礼致しました。すぐにお持ち致しますので、もうしばらくお待ちください」
「ああ、頼んだよ」
「おら来い、部外者」
「部外者じゃねぇよ。おれ雑用だぞ」
腕を引っ張られ、二人揃って店の奥へ移動する。
厨房に入った所ですぐに足を止め、サンジがメモをコックの一人に投げて寄こすと同時、ルフィへは厳しい視線を向ける。
一体何があってエプロンを身に着け、雑用を名乗っているのだ。
全く理由がわからず、眉間に皺を寄せて問いただした。
「おまえ何やってんだ。どこでもいいから行けっつったばかりだろ」
「おれだって言ったぞ。おれの仲間にするまでどこにも行かねぇって」
「だからって雑用として潜り込む必要がどこにある」
「店が忙しいみてぇだからさ、こっちが落ち着いたらもっと話せると思ったんだよ。いやーでも注文取るのって難しいなぁ。あのおっ

さんが何頼んでんのか全くわかんなかった」
「ったく、面倒なことしやがって……」
左手で頭を抱えているとコックが次々サンジへ言い始める。今しがたルフィから予想外の所業を受けたばかり。知り合いと見て多数の文句があったようだ。
サンジも一応、不機嫌そうにそちらを見る。
「おいサンジ、そいつは誰だよ」
「さっきつまみ食いしやがったんだ！　厨房には入れんな！」
「それとてめぇもサボってる暇ねぇぞ！　次々出来てんだ、さっさと運べ！」
「いつまで女口説いてるつもりだ！　このアホ！」
「うるせぇ野郎どもだ。文句があるならてめぇで運びやがれ」
「なぁサンジ、おれの仲間になれ」
「てめぇはてめぇでうるせぇんだよ！」
普段から騒がしい厨房にルフィ一人が入るだけでどことなく空気が変わっている。少なくとも良い状態ではなく、不必要に疲れる様相らしい。
頭を振ったサンジは考えを変えた。
このまま野放しにしておけない。厨房にも客の前にも出せない彼を放置して離れる訳にはいかないし、かといって仕事があるため留まれない。誰かに任せようにもそんな手はないほどの忙しさ。
どうにかしなければと頭を働かせた。
幸いにも他のコックより数倍機転が利く。
子供っぽいらしい彼の性格も考えつつ、外へ通じるドアを指差しながら言った。
「わかった、話なら後で聞いてやる。その前におまえは外の掃除でもしてろ」
「掃除か。それならできそうだな」
「言っとくが何も壊すなよ。余計なこともするな。むしろサボってろ」
「心配すんな。おれだって海賊だぞ、船の掃除くらいできるさ」

意気揚々と歩き出したルフィは善意のみを胸に、彼らの役に立とうと歩き出した。ドアを開き、外へ姿を消した後でコックたちは大きく肩を落とす。サンジもまた同じだ。

勧誘のために話し合いたい。

そしてその時間を作るために彼らの手伝いをし、少しでも負担を減らしてやろう。

そう考えたところまでは良かった。しかしあいにく彼は手先が不器用で、考えるより先に動いてしまうような性質。レストランでの仕事が務まるほどの繊細さは持ち得ない。

同行している二人に説明する暇もない行動力さえ悪い方向に動いていた。

ゾロとヨサクに助けを求める素振りもなく、ルフィは手ぶらで店の外を歩き始める。

掃除用具がどこにあるのかもわかっていない。

それでもなんとかなるだろう、とでも思っているのか、全く気にせずに笑顔で歩いていた。

どこを掃除するのやら、しばし歩きながら船の外観を眺める。

「いやぁーやっぱりいい船だなぁ。メリーもいいけどこういうのもカッコイイなぁ」

海賊船では見られない外観に思わず唸る。格好いいとは言えない間抜けさも、彼にとってはセンスのいい外見なのだろう。あちこちを見ては感心していた。

呟いてみた後、改めて思い出す。

メリーと言えば、はぐれた仲間たちはどうしているのだろうか。

今度は一転して困り顔になって悩み始める。

「そういやみんなどこ行ったんだろうな。ヨサクはどこ行ったか知らねぇって言うし、ゾロは方向音痴だし、キリとナミがいねぇとどっち行きゃいいかわからねぇしなぁ。サンジ仲間にした後どこで合流すりゃいいんだろ」

ぶつぶつ呟いている最中、ふと上を見て気付いた。

二階、欄干に肘を置いて新聞を読んでいる。やけに長いコック帽を

かぶった老年の男。何やら真剣な顔をしていて、独特の雰囲気を称える。
気になったルフィは腕を伸ばし、跳び上がって近付いた。
目立つ挙動だったため男も気付く。
軽やかに着地したルフィと目を合わせ、にこやかな笑みで先に彼が口を開いた。
「おっさん。帽子長すぎ」
「誰だおまえは」
「おれはルフィ。海賊で、今はこの店の雑用だ」
「雑用？　おれはおまえみたいな奴雇った覚えはねえぞ」
「あ、おっさんひょっとして料理長か？」
「海賊で雑用か。妙な奴が紛れ込みやがったもんだ」
バラティエの料理長、ゼフは呆れた様子で首を振った。
持っていた新聞を畳み、ルフィに向き直る。
どこから入り込んだかもわからない、勝手なことを言い出す不思議な少年。どうやら面倒な性格をしている。それなりに真面目に向き合わなければ厄介なことになりそうだ。
ルフィは楽しげにしている。
なぜ上機嫌なのか、笑みを浮かべたままで彼から話し始めた。
「ちょうどよかった。おっさんこの店で一番偉いんだろ」
「ああ、料理長だからな。だがおまえが質問する前に聞かせろ。海賊がなんで雑用なんぞやってやがる。しかもおれの許可もなく、だ」
「そのことを言いたかったんだよ。おれたちコックを仲間にしに来たんだ」
「ほう。海賊のコックか」
「一人いい奴見つけたんだ。サンジって奴なんだけどよ、連れてっちゃダメかな」
わずかに眉が動き、反応を目にする。
ルフィは気にせず肩を揺らした。
「仲間を探しに来たってのはわかる。だがそれと雑用は何の関係だ？」

「それがさぁ、サンジに仲間になってくれって言ったんだけど断られちまったんだ。詳しく話したかったけど忙しいって言うし。だから店が落ち着けば話ができるかと思ってさ」
「小僧、料理の経験は？」
「ない！　でも自信はあるぞ。昔サボに教えてもらったんだ。レストランに出す料理にはシェフが気まぐれで作るやつがあるって。おれの気まぐれ料理なら得意だ！」
「つまり全く腕はねぇって訳だ。それで雑用志願とはな」
話しているのも疲れる相手。しかし分かり易い性格は苦ではない。少なくとも無理に会話を中断しようとする素振りはなかったようだ。
それに気になる点もある。
ゼフはルフィを隣へ呼び寄せ、肩を並べて海を見ながら話を続けた。
「それでサンジの話だ。なんであいつだったんだ？　前から知り合いだったのか」
「会ったのはついさっきだ。でもいい奴なんだよ」
「会ったのがさっきでもういい奴だってわかるのか」
「おれたちさっきまで遭難してたんだ。メシも食えねぇし、船はどこにも着かねぇしですげぇ辛くてさ。そしたらサンジに出会ってメシ食わせてもらったんだ。しかも金もいらねぇって」
「そうか……あいつが」
「いい奴だろ？　あいつに会わなかったらおれたち死んでたかもなぁ」
楽観的に言ってルフィは笑っている。本当に自分が死ぬと思っていない顔に見えた。
その横顔を見てゼフは呆れる。
海賊と名乗るには些か危機感が足りない姿。あまりに子供っぽくて海賊らしいとは思えない。彼について知らずとも思わず心配になってしまうほどだった。
少しして彼についてはまぁいいだろうと考える。
それよりも今はサンジだ。バラティエの副料理長で、ゼフにとって

最も近しい人間について。むしろこちらをよく聞いておかねばならない。
再びゼフから尋ねた。
「あいつは、断ったんだな」
「ああ。この店やめる気はねぇってよ」
「チビナスが。大人になった気で居やがるのさ。つまらねぇことを……」
「なんかあんのか？」
「大人ぶってるガキほど可愛げのねぇ奴は居ねぇ。あいつは考え過ぎなんだ」
何やら重々しく呟かれる。含みを感じる言葉だった。
ルフィはふとした瞬間に笑みを消して真剣に見つめる。
誰とも知らない相手だが、頭が良さそうだと思わなかったことが原因かもしれない。初めてサンジを連れて行きたいと言った人間を前に、ゼフは静かに呟く。
詳細の説明はない。その一方、言葉にはない何かを感じた。
ゼフの問いがルフィへ投げかけられる。
「おまえはなぜ海賊になった。何を目指すにしろ、危険で困難な道だぞ」
「夢を預けた男が居るんだ。そいつにこの帽子を返した後、おれは海賊王になる」
「海賊王？　馬鹿げたことを。最も困難な道を進む気か」
「ししし、いいんだ。おれがやりたくてやるんだからな。後悔はしねぇし、諦めもしねぇ」
「フッ、そうか。あのチビナスにも聞かせてやって欲しい言葉だな」
ルフィの言葉を受け、ゼフが微笑む。
いまいち頼りになるかどうかわからない人物だったとはいえ、少なくとも懐は浅くないらしい。
気概は上等。そう思ってしまうのは自らの過去が関係するのか。
「なれると思ってるのか？　あの海はそうやさしくはねぇぞ」
「なるさ」

「フッ、バカは何を言っても治らねぇか。そういう奴は海賊に向いてる」
「ん？　おっさん海賊のこと詳しいのか？」
「さぁな」
ゼフが海を眺めて静かに語った。そこには確かな想いが込められている。
ルフィも同じ方向を眺め、少し考える素振りになる。
「おれは何も言わねぇ。連れて行きたきゃ勝手にしろ。あいつがなんと言うかだが」
「そっか。じゃあ説得する」
「本来ならおまえはおれの商売敵になるんだろう。何しろウチの副料理長を連れてこうってんだからな。ただでさえウェイターが逃げちまったってのに苦労することになる」
「なのに止めねぇのか？　サンジのこと嫌いじゃねぇだろ」
「この歳になりゃ好きも嫌いもねぇよ。言っとくがあれは頑固だぞ」
「いいよ。嫌だって言った奴も仲間にしたんだぞ、おれは」
再び笑ってルフィが体の向きを変えて、海に背を向けて欄干に座った。
ゼフの顔を見やり、急に話を変える。
「おっさん強ぇだろ。ひょっとして海賊だったのか？」
「なぜそう思う。見ろ。片足は使い物にならねぇ」
「でもなんとなく強い気がすんだよな。なぁ、サンジも強いのか」
「ありゃチビナスだ。まだまだな。連れて行っても役に立たねぇかもしれねぇぞ」
「んなことねぇよ、メシだってめちゃくちゃうめぇんだぞ。おれはあいつのメシに惚れたんだ」
「くくっ、そうか。単純な男だ」
戦闘ができるか否か、実力のほども知らずに勧誘するつもりだったようだ。
相手のことを理解していないということになる。思い切りが良い

とも言えるが、思慮が足りないとも言える。長所にも短所にもなる部分だろう。
しかし顔には不安の色が無く、全く心配していない。
変わった人間だ。その自信はどこから来ているのかは知れそうになかった。
しばらくそうしていると店の入り口から大きな音が聞こえてくる。彼らから見れば左手側、数人の悲鳴と共に物々しい雰囲気が伝わってきた。
ルフィがそちらを見て不思議そうにしており、ゼフは顔を険しくする。
「なんだ？」
「チッ、また面倒起こしやがったか。今日は誰だ。パティか、カルネか、チビナスか」
「行くのかおっさん。ケンカか？」
「かもしれねぇな。おれの船で勝手なことしやがって」
ゼフが苛立ちながら歩き出す。彼の右脚は義足になっており、独特の硬い音が木目の床から鳴る。多少動きの違いはあるものの歩きにくそうとは思わず、堂に入った立ち振る舞いだった。
背を見たルフィは、やはり強いと思う。
好奇心も手伝ってすぐにゼフの後ろへ続き、喜々として事件の匂いを感じ取っていたようだ。

客

その男が入って来たのは、昼時で客が多い時間帯だった。
なぜそうだったか、誰にもわからない。ただ前へ進んでいればその時間になったのだろう。
突然の来訪が多くの人間に驚愕をもたらしたことだけが事実だった。
上背が高く、身に着けた服はボロボロで頭に包帯を巻いており、力を感じない弱々しい表情。今にも倒れそうな危うい足取りで、体の震えもわずかに見えた。
顔を見て即座に気付いた者も多いだろう。
イーストブルーにおいて有名な海賊の一人。大男は〝首領(ドン)〟とも名高い、クリークなる人物。
広く悪名を轟かせた海賊で、気付いた時には凄まじい迫力を感じた。
大勢の客が慌て始め、席を立ち、悲鳴を発する。目の前に居るのが海賊とわかって落ち着いていられるはずもない。何をされるかわかったものではないからだ。
首領クリークと言えばあまりにも悪名が大きくなっている。
曰く、騙し討ちが得意で嘘を多用し、残虐な行為も厭わないという噂。海賊、海兵に限らず、市民が襲われた事件も少なくはなく、今この場でそれが起こらないとも限らない。
逃げ出そうと席を立つが、入り口が塞がれており、逃げ出せないようだ。
市民たちは混乱し、騒げば何かされるかと思い、固唾を飲んで立ち尽くしていた。
彼の姿を見てサンジが近付く。
怖がることもなく歩み寄って、顔を見上げて冷静に話しかけた。
「いらっしゃい。ご予約は？」
「頼む、食料をくれ……金なら、ある。いくらでもある。だから、食料を……」

「あいにく席はねぇんだ。だがメシなら用意できる。当然金はもらうが――」
「ちょっと待てサンジィ！」
快く受けようとした刹那、突如背後から声がかかった。サンジは冷静に振り返る。
厨房に続く扉を開き、大柄で強面の男が歩み出てきていた。コックの一人、パティは厳めしい顔をさらに厳しくして近付いており、何やら怒っている様子。明らかに空気が緊迫している。
サンジはまるで気にせず、冷静に彼を見た。
「おいサンジ、そいつが誰だか知ってんのか。あの首領クリークだぞ。騙し討ちで名を売った、海賊としても人間としてもクズみてぇな野郎だ」
「そうか。だったらどうした」
「だったらどうしただと？　ここまで言やぁわかるだろうが。そいつに食わせるメシなんざウチにはねぇ。丁重にお帰り頂け、そのクズ野郎にな」
「クズにクズだと言われたんじゃ、堪ったもんじゃねぇな」
「んだとコラァ！」
「おまえに指図される覚えはねぇよ。いいから戻れ」
「この野郎ッ……やっぱりてめぇは気に食わねぇ！」
パティは声を荒げて反対する。同時に気付けばサンジへの不満を口にしていた。
倒れそうなクリークをそっちのけに睨み合う。
どちらも意見を曲げる気はないらしく、日頃の状態そのままに言い合いを始めた。
「大体前々から気に入らなかったんだ。てめぇ、おれが追い出した金のねぇ客にタダでメシを食わせてたようだな。無償でメシを食わせるなんざ考えられねぇぞ」
「別におまえに迷惑かけた訳でもあるまいし」
「迷惑も迷惑、大迷惑だ！　いいか、レストランは金を払って料理を食すんだ。お客様は神様だが、金も払えねぇ奴は神様にはなれねぇ。

レストランの品位に関わる」
「こいつは金を持ってる。おまえの言い分じゃ神様だろ」
「そいつだけは別だ！　知らねぇのか、首領クリークの悪事の数々。そいつは、監獄から脱獄するために海兵に化けて海兵を大勢殺した挙句海賊になって、しかも海賊になった後も海軍の旗を掲げてたって話だ。騙し討ちのためだよ。今も弱ってる振りして襲撃に来てたとしたっておかしくはねぇ。おまえの判断でこの店を危険に晒す気か！」
「小せぇことでピーピー鳴いてんじゃねぇよ。その時はその時でいいはずだぜ」
「何ィ？」
冷静な声がぶつけられる。
友好的というより敵意をぶつけられるかのようで、パティの目つきがさらに鋭くなる。今やその二人が戦い始めたとしてもおかしくない空気が漂っていた。
それでも躊躇わずにサンジが言い切る。
「おまえら今まで何人追い返してきたんだよ。死にかけてるか嘘かは知らねぇが、たった一人の敵にビビるほど腰抜けだったのか？だったらこの店には向かねぇ。他へ行けよ」
「聞いてなかったのか、そいつは騙し討ちが得意なんだぞ！　仮に腹を減らして弱ってたとしても、メシを食えば襲い掛かって来るし、今は一人でもどこかに仲間が潜んでるかもしれねぇ！　よく考えろって言ったばっかだろうが！」
「だから、その時は返り討ちにしてやりゃいいだけの話だ」
「てめぇは、この店を守ろうって気がねぇのか……！」
「おまえとおれとじゃ考え方が違うんだよ」
緊迫した空気が流れている。騒ぎを聞きつけて厨房に居たコックたちも出てきており、パティの後ろに並んでいて、そこから少し離れた位置にはルフィとゼフの姿もあった。
気付いた様子はなく、パティにのみ注意を向けているらしい。
サンジは完全にクリークへ背を向けて話していた。襲ってくるならいつでもそうしろ。まるでそう宣言するかのように。

「海で腹減らしてる奴が居て、金があろうがなかろうが、そいつのためにメシを作ってやる。コックってのはそれでいいんじゃねぇのか。飢えで苦しんでる奴を見捨ててやれるほど、おれは大らかにできてねぇよ」
「ぬぐっ……！」
「襲われるのが怖ぇんならおまえら逃げてろ。おれが作って食わせてやる」
そう言ってサンジは緊迫した空気の中、厨房へ歩き出そうとした。
一番早く気付いたのはルフィである。
彼の背後で起こった変化に目を丸くして驚き、気付けば咄嗟に叫んでいた。
今まで沈黙していたクリークの体に力が入る。明らかに弱った人間の動きではない。
右手には硬く拳が握られており、それは素早く振り上げられていた。
「サンジ！　危ねぇ！」
ルフィが叫ぶと同時、振り返る。しかしタイミングとしては遅い。
振り抜かれたクリークの拳はサンジの腹へ突き刺さり、豪快な様子で殴り飛ばした。凄まじい筋力から来る一撃は気が遠くなるほどの衝撃を与え、軽く飛んだ彼の体はテーブルの一つにぶち当たり、ひっくり返して、置かれたままだった皿が飛ぶ。
サンジの行方を見ている暇もない。クリークはさらに動いていた。
驚愕していたコックたちは動けない様子。その中でルフィだけがゼフへ飛び掛かって、彼を守ろうと地面へ押し倒して即座に伏せた。
直後に、クリークの服が破け、その下から金色に光る鎧が現れる。
驚くほど速く、そして無慈悲な攻撃。
両手に銃を持ち、鎧が変形して両肩、両脇腹から銃口を露わに、一斉射撃が行われる。
たった一人の攻撃。しかしその一瞬で無数の銃弾が空を駆け、客が悲鳴を上げる暇すら与えず、コックたちへと殺到した。硬直していた彼らは銃弾によって体を貫かれ、即死した者は一人もいないとはい

え、大きなダメージを負ってその場へ転がる。
銃声が止まった直後。クリークは口角を上げて天を仰いでいた。
ほんの一瞬。十秒とかからずたった数秒で、状況は彼の勝利を謳っている。コックたちは悲鳴や呻き声を上げて動けずに、少なくはない血が床へ広がっていた。
その光景と声に客は顔色を変え、もはや多くの者が忘我の状態。
すでに空気は一変していた。
両手の銃を捨て、変形した鎧の形が戻った後。
佇まいを直したクリークは辺りを見回して、誰にでもなく呟き始める。
「大体わかった……荒くれ者のコックが厄介だと聞いて来てみりゃ、大したことはねぇ。お遊戯会でもやってんのか？　だらだらだらだらと、てめぇらが誰に勝てるって？」
辺りを見渡せば、動けなかった客が一斉に体をびくつかせる。
まさに蛇に睨まれた蛙。生殺与奪を握られた状態だ。
クリークの威容に歯向かえる者は誰一人として存在せず、この場は完全に支配されていた。
「おれは海賊艦隊提督、首領クリーク様だ。料理長〝赫足のゼフ〟が記したという航海日誌を頂きに来た。フン、ついでだ。この間抜けな船ももらっておくか」
今度こそ一斉に悲鳴が響き渡った。
店内に居た客は全員、黙っていられなくなって声を出し、逃げ出したい一心で体を動かすもののクリークが出入り口を塞いでいるため外に向かうことができず、結果として壁に寄って小さくなるのが精一杯だった。慌ただしい足音がいくつも重なる。
身を寄せ合って小さくなるも、それでも尚落ち着くことはなく。
悲鳴に苛立ったクリークは近くにあったテーブルへ歩み寄り、自身の拳で殴り壊した。
乗っていた皿が宙を舞い、破片となった木材と共に床へ落ちる。割れてしまったそれからは料理がばら撒かれてしまった。
明確な怒りを感じさせる動きを見て、再び沈黙が広がる。

言葉など必要ない。支配に必要なのは圧倒的な恐怖と武力。
一瞬で場を制圧したクリークは辺りを見回し、冷静な面持ちで口を開いた。
「次に騒いだ奴は、殺す」
端的な言葉。だからこそ分かり易い。
そこからは誰一人として言葉を発さなくなり、口に両手を当てて唇を固く結び、決して声を漏らさないようにと必死で鼻から呼吸をし始めていた。
傷ついたコックたちが呻き声を発しているものの、そちらには興味がないのか何も言わない。即死した者は居なかった。だがバラティエを守るべき彼らの負傷により、クリークを倒せる人間が居なくなったとは、客だった者たち全員が考えたことだ。
クリークはその場で背筋を伸ばし、倒れたコックたちに目を向ける。
死んでいないのは僥倖。やってもらわなければならないことがあった。
まるで小さな羽虫を見るかのような目で彼らを見つめ、冷徹な声で命令が発される。
「料理長のゼフを出せ。奴は元海賊で、グランドラインを航海した記録を日誌に残しているはず。そいつを渡して、何も言わずにこの船から出て行けば命は助けてやろう。もしそれができないのであれば、ここに居る全員を海の底に沈めてやる」
「ひぃっ」
誰かが小さく悲鳴を発するが、誰が言ったかまではわからない。牽制するようにクリークは客を見回した。それだけで怯え切った彼らの震えは大きくなる。
耳が痛くなる沈黙。
クリークの声だけが大きく響き、店内の全員へ伝えられた。
「さぁ、誰が答えるんだ？　誰が持ってくる。誰も動かねぇって言うならここに居る連中を一人ずつ殺していくぞ。命令に従うか、死ぬか、二つに一つだ。さっさとしろ！」

弱々しい印象など皆無となり、ひどく力強い声である。
今にも倒れそうな姿など嘘だった。嘘をついて敵の油断を誘い、最も簡単な方法で敵を倒す彼の戦法。繰り返す内に着いた二つ名が〝ダマシ討ち〟。
バラティエの制圧までかかった時間は、演技をしていた間も合わせてものの数分。
現在、主導権は完璧に彼が握っていたことになる。
しかしそれを良く想わない者が居た。
倒れたまま、懐から取り出した煙草を銜え、火を点ける。その後でゆっくり煙を吸い、吐いた。
些細な挙動ながらクリークも気付いてそちらを見る。
ゆっくり起き上がったのはサンジ一人。誰が動くより先に平気そうな顔で立ち上がり、一方で強く打った影響か、頭から血を流していて顔の右半分が赤く濡れていた。
左手で煙草を持って、右手はポケットの中。
クリークが睨む先でサンジは冷静に、しかし確実に怒っていた。
立ち上がった彼は何も言わず、クリークに向かうのではなく、自身がひっくり返したテーブルについていた女性客の下へ足を運ぶ。片隅でしゃがみ込んでいた彼女の傍で膝をつき、気遣う様子の微笑みを湛え、安心させようとやさしく声をかけた。
「大丈夫ですか、お嬢さん。先程は大変失礼しました。お怪我は？」
「え、え？　いえ、あの……大丈夫です」
「ドレスにシミなどはできていませんか？　あいにく男所帯の店なので代わりを用意する訳にはいきませんが、クリーニング代くらいはなんとかできます」
「あ、いえ、大丈夫ですから。お気遣いなく……」
戸惑う女性客がどう答えてよいものやら、悩みながら返答するとサンジがもう一度謝罪する。それは怖がらせてしまったことに対してだろうか。頭を下げた後で立ち上がる。
振り返り、紫煙の向こうにクリークを見た。
彼はバラティエの敵となった男を目指して歩き出し、語り始める。

「おまえは今、二度おれをキレさせた。一度目は麗しいレディに怪我をさせかけたこと。怖い想いをさせて、彼女を泣かせたこと、それだけで万死に値する」
「フン、何を言い出すかと思えば」
「二度目はおれの目の前で料理を粗末にしたこと。確かに大した腕でもねぇクソコックどもが作った料理だが、あいつらはお客様のために魂込めて作って、喜んでもらおうと必死だった訳だ。その想いを無下にして、尚且つ海の上じゃ他の何にも代え難い食材を無駄にした」
「話が長ぇな。要するに何が言いてぇんだ？」
「要するに――」
ぐっと力が入り、姿勢が低くなる。
突如サンジは前へ駆けた。その動きは唐突であると同時に常人とは思えぬほど素早い。
あまりに大きな変化で驚愕し、身が硬直する。
クリークの目の前で動きが止まり、左足が軸足となって力強く踏みしめ、右足で蹴りを放つ。鈍い輝きを見せる鎧越しにだが腹へと突き刺さって、耐え切れずに体が宙を飛んでいた。
サンジの蹴りは自分より体の大きい彼を軽々飛ばしたのである。
閉じられていたドアを突き破って破壊し、その向こうにあった欄干へ強かに背がぶつかる。
軋む音がするものの海へ放り出されることはなかった。そこで動きを止めたクリークは顔を上げて敵を睨みつけ、振り上げた足を下ろしたサンジもまた目つきを変える。
視線を逸らさずにクリークを睨みつけ、ドスの利いた声が出された。
「ふざけんなよクソ野郎。ってことだ」
とても一介のコックとは思えない姿だ。堂に入った姿は海賊と見紛うてもおかしくはない。
すぐにも壊れそうな欄干に巨体を寄りかからせたまま、クリークは笑う。楽しそうなという様相ではなく、凶悪そうな、悪巧みをするかのような笑みだった。

「よっぽど死にてぇと見える」
「やってみろよ。おまえ如きに負けるほどここは甘くはねぇんだよ」
「そう言っていられるのも今の内だ……見ろ」
顎で指し示すように動けば、出入り口から覗ける水平線に何かが見える。ずらりと並んだ無数の帆船。艦隊のようだ。
クリークが危険だと語られる要因の一つに、旗揚げから瞬く間に作り上げた艦隊である。船は総数五十隻。乗組員は五千人から成る大艦隊の長。それが首領クリーク〝提督〟なのだ。
その圧倒的な物量で潰した町は数知れず。
その圧倒的な武力に散った海賊団は星の数ほど。
イーストブルー最強と語る声も決して少なくない。彼らは海賊らしからぬ強みを持っていた。
バラティエを踏み潰すのに一日もかからない戦力差。
それを見てもサンジは表情を変えず、冷淡な目を向け続ける。
「これがおれの武力だ。粋がったところで所詮はコック風情。海賊艦隊と戦って勝てるほど腕が立つ訳でもなけりゃあ運がある訳でもねぇ」
「おーそうかい」
「多少は腕に自信があるようだが、無駄な努力に過ぎんと知ったはずだ。船と航海日誌を渡してとっとと失せろ。そうすりゃ命までは取らねぇよ」
「有難いお言葉をどうも。それじゃあ料理長に代わって副料理長として返答するぜ。今すぐ失せろ、雑魚野郎ども。こちとら仕事があるんでな、遊んでられるほど暇じゃねぇんだよ」
見ているしかない客が血相を変えて息を呑む中、クリークの額に青筋が浮かぶ。
激情。言いようのない憤怒だ。
確固たる意志を持って睨み合いを続けた挙句、どちらも折れることはなく、話は終わる。クリークは襲撃を決定し、サンジは徹底抗戦の意志を固めた。

踵を返しつつクリークが去ろうとする。彼は商船を装った船に乗ってバラティエに来ていた。だから誰も海賊が来たとは目視で気付かず、クリークが来るまで騒ぎが起きなかったのだろう。
一度この場を離れ、今度は海賊として乗り込む気のようだ。
「いいだろう。てめぇの選択を後悔するな。今から少し時間をやる……死にたくねぇ奴は今すぐ逃げろ！　おれたちが再びここへ来た時残ってる野郎は、全員磔にして八つ裂きにしてやる！　海賊に逆らったことを後悔するまで無残になァ！」
「口だけならどうとでも言えるがな」
クリークが去った後、客は一人残らず走り出した。一目散に逃げだして自分の船に乗り、食事や会計についてなど全く頭に残っておらず、ただ死にたくないとの想いだった。
店内から客の姿が見えなくなるまでほんの数分。
がらんとしたそこには傷ついたコックたちのみが残り、サンジは静かに煙を吐き出す。
背後で立ち上がったパティが肩を怒らせていた。
今はサンジに対する怒りではない。彼への文句もあったがそれ以上に、バラティエを乗っ取ろうとするクリークへ抑えきれないほどの怒りを向けている。
サンジに声をかけるものの、すでに彼は敵ではなく、目的を同じくする同志だ。
「ほら見ろ。あの時すぐに追い出してりゃよかったんだ」
「騙し討ちだったらどの道ここへ来たさ」
「チッ、ふざけやがって。あんな野郎に好きにされてたまるか。ここはおれたちの店だ！　やっと見つけた楽園なんだぞ！　料理すんのも喧嘩すんのも自由！　そんな良い店他にあるかよ！」
「なら死に物狂いで戦え。この船沈められねぇようにな」
パティと想いを同じく、大勢のコックたちが立ち上がって雄々しく叫び始めた。誰一人として逃げようなどと考えていない。店を守るために命を賭ける覚悟である。
そんな折になって厨房の扉が荒々しく開かれた。

向こう側から出てきたのはサングラスをかけたコックで、出てきた途端に大声を出し始めるも、店内の状況をよく理解していなかったためか一人だけテンションが違っているらしい。
コックのカルネは雄たけびを上げる仲間たちへ声を荒げた。
「おぉいおまえら何があった!? さっきからやけに騒がしいと思ってたが、敵襲は退けたんじゃねぇのか！ なんで客が全員逃げてんだよ！ ふざけやがって、おれが丹精込めたスペシャルローストビーフはどうなるんだよクソったれェ！」
「カルネ、おまえ……仕上げしてやがったのか」
「こっちは大変だったってのに」
「こっちだって大変だったんだよ！ このスペシャルメニュー考えるのに何か月かかったと思ってやがる！」
「何キレてんだよ」
「ちくしょう、食う奴が居ねぇ料理に何の価値が――」
気落ちした様子でカルネが肩を落とした時。横からぽんぽんと肩を叩かれた。
振り返ればにんまり笑うルフィの顔。
雑用だと叫んでいた時に確認していたが、知り合いとも呼べる間柄ではない訳で、カルネは不思議そうに彼の笑顔を見つめる。
ルフィは笑顔で自分を指差した。
「おれ食えるぞ、ローストビーフ」
一気に騒がしくなる店内。コックたちは武器を取るため、動き出していた。
その中で一人佇むサンジにゼフが歩み寄る。
「おいサンジ」
「なんだクソジジイ。居やがったか」
「面倒なことしてくれやがって。おかげで何人食い逃げしやがったと思ってる」
「じゃあ海賊に船明け渡した方がよかったか？」
「バカ言え。やるからには負けんじゃねぇぞ。何も知らねぇボケナス共にコックの恐ろしさを教えてやれ」

「へっ、誰に言ってやがる」
水平線を眺め、臆することなく呟く。
敵は五十隻から成る海賊艦隊。対するはたった一隻の海上レストランとコックたち。
敗北する気はなく、逃げもせず、彼らは敵の到着を待つことに決めていた。

海賊艦隊

艦隊が徐々に近付いて来る最中、コックたちは臨戦態勢で敵の襲撃を待ち受けていた。

手にする武器は槍のような柄のナイフやフォークやスプーン。コックらしいとも言える一方、どことなく頼りない様子に見えなくもない武器の外見だった。

店を守るため、船を傷つけずに戦う。

そう決めた彼らがまず最初にしたのは戦える場所を作ることだった。

「ヒレ出すぞォ！」

船内でレバーを引いて操作したことにより、海中に隠されていた船の〝ヒレ〟が展開され、船腹の両側へ木造の広い足場が設けられた。これで敵との戦闘で船が傷つくことはないだろう。

しかし一方で敵の砲撃を防ぐ術はない。

船を奪うと宣言していた以上、船を壊すような攻撃はないと予想しているものの、今後どうなるかまでは読めない。そのため予想に頼る行動だ。

コックたちはヒレに歩み出て敵船を見る。

肉弾戦なら何度も経験している。自信はあった。今回も負ける気など微塵も持ち合わせない。

表情を引き締め、会話もなくじっと動きを止めていた。

その少し後方にルフィたちが居た。

総大将のように店の入り口へ椅子を置き、腕を組んで座るゼフの傍ら、サンジが居て、彼らの目の前にルフィ、ゾロ、ヨサクの三人が座っている。

彼らはカルネが焼いたローストビーフを食しており、先程からフォークが止まらない様子。

緊張感のない姿にサンジは呆れ返っているが、ゼフはにやりと笑っていた。

「うんうん、うまいうまい」

「いやぁ～ここのコックはみんなレベル高いっすねぇ。こりゃ流行るのも無理ないわ」
「タダで食えるのは助かった。敵襲様様だな」
周囲が混乱している状況だというのに、呑気に話す彼らには溜息が隠せない。
思わずサンジはぶっきらぼうに言葉を投げた。
「言っとくがおまえら金はもらうからな」
「えーっ!?」
「そんなぁ!? あっしら金は持ってねぇんすよ！」
「なら皿洗いでもなんでもしろ。タダメシ食おうなんざ考えが甘ぇんだよ」
「んん、それもそうか」
口をもぐもぐ動かしながら納得したルフィが言う。
慌てるヨサクと全く聞く様子がないゾロをそっちのけに、視線はサンジに向けられた。
「じゃあおれたちがあいつらぶっ飛ばすよ。それでいいか？」
「できるんならな。この船に傷一つつけなかった時は許してやる」
「あとサンジ、おれたちの仲間になれ。いっしょに海賊やろう」
「ついでみてぇに言うんじゃねぇよ。当然断るが」
スペシャルだというローストビーフは大きな肉の塊だ。三人で食べてもそれなりに時間はかかり、また、ルフィが一気にかぶりつかないようゾロが牽制しているためすぐには終わらない。
ヨサクは口を動かしつつ傍らの二人を見る。
明らかな不利を知って内心穏やかではないようだ。
「しかしお二人、こりゃ厄介な事態ですよ。見てもらえばわかる通り、相手は艦隊を持つ首領クリーク。五十隻の艦隊は誰にも負けたことがねぇって噂ですぜ」
「そうだなぁ、やっぱりみんながいねぇと大変そうだ。数多いもんな」
「逆に言えば居なくてよかったってとこもあるんじゃねぇか。こういう不利な状況だとキリなら無茶しやがるぞ。あん時の敗戦が相当

堪えてるようだしよ」
「んん、たしかに」
「あんたらリラックスしすぎでしょうが……大丈夫かなぁ」
緊張感のない食事はほどなく終わろうとしており、こんな状況でもどこから持ち出したか、ゾロは酒瓶を煽って中身を飲み干していた。
再びサンジが口を開く。
敗戦濃い今この状況で彼らが命を賭ける理由は何一つない。なぜ逃げ出さなかったのか。
タダメシを狙っていた訳ではないだろう。それはあくまでついでであり、彼らが戦うために残ったことはわかっている。慌てていない姿でそれなりに強いのだろうとも思った。
それにしたって戦闘の意味はないはず。
気になってしまって尋ねずにはいられなかった。
「なんでおまえら逃げなかったんだよ。その時間はあったはずだぜ」
「ん？　んー……なんでってそりゃ、まだおまえ仲間にしてねぇからな」
「仲間にならねぇって言ったぜ」
「ししし、最初はゾロだってそう言ってたよ。でも今はおれの仲間だぞ」
「ありゃ脅迫だったじゃねぇか。よくもまぁ笑って言えるな」
げんなり顔した顔でゾロが酒瓶を置けば、サンジが彼へ目を向ける。
声をかけられると同時に視線が合わせられた。
「脅迫であれなんであれ、わざわざ海賊になる奴の気が知れねぇな。おまえらどうかしてるぜ」
「たまたま利害が一致しただけだ。別に海賊じゃなくてもよかった」
「利害の一致、ねぇ。それがウチの戦闘に関わる理由になるのか？」
「船長が決めたんなら従うさ。これでも一応海賊だ」
「死ぬかもしれねぇんだぞ」

「死んだらそれまで。その程度の男だったってことだろ」
三本の刀を抱え、座ったままでゾロが言う。不遜な態度で恐れを知らない。今から始まるだろう戦闘にも全く怯えていなかった。
「おれには野望がある。今はまだ届かねぇが、それを果たすまでは何があっても死ねねぇんだ。苦難上等、敵が来るのなら踏み越えるまで」
「てめぇもバカの部類だな……野望のためなら死ねるって腹か」
「バカとは心外だ」
ひどく簡潔に、理解を求めるでもなくただ己の意志を言葉にする。
「剣士として最強を目指すと決めた時から、命なんてとうに捨ててる。このおれをバカと呼んでいいのはそれを決めたおれだけだ」
「そうかよ。どっちにしろ分かり合えねぇ」
ゾロは、視線を外す寸前のサンジの変化に気付いていた。だが出会ったばかり、彼のこともよく知らない。指摘せずに視線の先を変える。
ルフィとヨサクでローストビーフを食べ終え、意気揚々と立ち上がっていた。
ゾロも続けて立ち上がり、近付いて来る艦隊に目を向ける。
距離は着実に埋まっている。衝突までそう時間はかからない。この位置からならば手は届かないが砲弾は届くだろう。いつ敵の攻撃が始まってもおかしくなかった。
笑顔を浮かべるルフィは戦闘を心待ちにしている様子だ。
「なぁサンジ、おれがあいつらぶっ飛ばしたら仲間になってくれよ」
「バーカ。それとこれとは話が別だ」
「ルフィ、大将首はおれにやらせろ。前の戦闘も中途半端に終わっちまった。疼いて仕方ねぇ」
「兄貴は怪我してやすから無理しないでくださいよ」
コックたちを前に置き、彼らも戦闘態勢に入った。
その時になってゾロが不可解な物に気付く。
全員がクリークの艦隊に注意を奪われているせいで見ていないが、バラティエから見て左前方、小舟としては奇妙な形の小さな船が浮か

んでいる。
一人しか乗れない船に乗っているのは一人の男。
椅子らしき物があるものの立っていて、手には長大な剣を持っている。
「おい、ありゃあなんだ？」
「棺桶か？　いや、人か」
「なんか艦隊の方を向いてるみてぇですが――」
状況を説明するようにヨサクが呟く最中、遠目で男が剣を振る。
瞬間、クリークの艦隊の数隻、スパンっと軽々しい様子で両断されたのだ。
「ハッ!?」
およそ全員が間抜けな声を発していただろう。壊れたのではなく、斬られたのだ。
バラティエより数倍は大きいだろうガレオン船は、船腹から縦に割られ、浮かぶことさえできなくなって崩れ落ち、斬撃によって起こった水柱と共に沈んでいく。
太刀筋は確かに見えていた。
その斬撃を放ったのは、間違いなく小舟に乗った男であった。
誰が察するより先にゾロがその男へ目を向ける。
つばの広い黒の帽子にコートを纏った姿。手の中にある長剣は見たことのない威容。
何よりその姿を見た時の圧迫感が、間違いないという確信を抱かせた。
言葉を失い、ゾロの喉が震える。
恐怖に近い感情に混じって確かに感じていた喜び。予想以上に早かったという想いはあるが、それでもやっと見つけたという感情は無視できずにいる。
腰に差した刀を握り、もはやその姿から目が離せなくなった。
「ふ、船が、斬られたァ!?」
「おい、あいつだ！　多分あいつがやりやがったんだ！」
「なんなんだあいつ、普通船なんて斬れねぇだろ！」

口々にコックが叫んでいた。動揺していてさっきまでの威勢もどこへやら、誰もが男を見つけて必死に目の前の光景を見つめ、信じられない想いで艦隊の最期を見ている。
一撃で数隻。二撃目でさらに数隻。
五十隻全てを沈めるまで剣を振った回数、たったの五回。
クリークの艦隊は一隻たりともバラティエに辿り着くことができず、海へ姿を消した。
その後で男は剣を納め、背に差して再び椅子へ座る。
コックたちは言葉を失い、ルフィやサンジも何を言っていいかわからなくてぽかんとする。
しかしゾロだけは堪えきれなくなって大声を出した。
「ヨサク、船をこっちに持って来い！　あいつがどっか行っちまう前に！」
「あ、兄貴、でもあいつは……!?」
「だから言ってんだろうが！　急げ！」
棒立ちになるコックたちを押しのけ、ヒレの先端にゾロが立った。今にも刀を抜かんとしていて明らかに平静ではなく、普段の姿とは何もかもが違っていた。
きっと自分を押し留められないのだろう。
声をかけるのを躊躇ったヨサクはぐっと歯を食いしばり、ひとまず言われた通りにボートを運ぶため、その場を離れる。自分たちのボートへ向けて走り出した。
ルフィとサンジはゾロの様子に違和感を覚え、呆然とその背を見る。
「ゾロ……？」
「あいつだ。おれが探していた男は」
待ち切れなくなって右手で刀を抜いた。
ちょうどその瞬間、何かに気付いたのかもしれない、男が首を動かし、ゾロの姿を捉える。
唯一無二の鋭い眼差し。気付けば知らぬ間に鷹を連想していた。
見据えられただけで圧倒的な力を感じるが、ゾロは冷汗を流しなが

らも凶悪な笑みを浮かべる。
間違いなく本物。剣技に加えて距離が開いたまま視線を交わしたことで理解した。
体が小刻みに震えている。その震えが、果たして恐怖によるものか、或いは武者震いのせいなのかは自分でもわからない。ただ、逃げようとする自分が居ないのは確かだ。
「世界最強の剣豪、鷹の目のミホーク。おれはあいつに勝つために海へ出た」
そう聞かされてルフィは改めて男を見やり、サンジは銜えた煙草を噛み潰して力を入れる。コックたちは驚愕したせいか一切反応できなくなって、ゼフは表情を険しくしただけだった。
ミホーク。その男の名前らしい。
鷹の目と言われるだけあって鋭い眼差しを持つ男だ。彼は何を想ってか、船が進む方向を変えてバラティエへと近付いて来る。正しく言えば、ゾロに。
ひどくゆったりと接近してきて、声が届くようになった頃。
およそ五十メートルの距離を置いて対峙する。
ゾロとミホークの視線が交わり、緊迫した空気が漂っていた。
「鷹の目だな」
「如何にも。そう呼ぶ者たちも居る」
「ここへは何しに来た。まさかあいつらが標的だったとは言わねぇよな」
「暇潰し。それ以上でも以下でもない」
「へぇ……それを聞いて安心したぜ」
右手に持った刀を振り、切っ先を突きつけ、ゾロは言った。
挑発的な態度と明確な攻撃性。宣戦布告であることは間違いない。
ミホークの表情はぴくりとも動かなかった。
「暇なんだろ？　勝負しようぜ」
「何を目指す」
「最強」
「愚かな」

腕から取った手拭いを頭へ巻く。
眼光鋭く、すでに戦意は全身から放出されている。それはコックたちにも伝わった。
まるで飢えた獣のような凶暴さ。冷静に見据えたミホークは、着実に船を前へ進めながら、自身は椅子から立とうともせずにゾロへ問いかけた。
重苦しい空気が場を支配している。誰も口を挟めない。
全員が見守ることしかできない状況だった。
「一端の剣士であれば剣を交えずともおれと貴様の力の差を見抜けよう」
「ああ、わかるさ……おれがおまえに勝てねぇことくらい、ここに居る誰よりもわかってる」
「ならばなぜ生き急ぐ。時を待てば貴様がおれを超える機会も願えよう。今この場で挑まねばならぬその心力は何故だ」
「おれの野望ゆえ。そして親友との約束のためだ」
小舟はバラティエへ達する。しかしミホークは降りようとしない。
まだ勝負を受けた訳ではなく、あくまで話し合いの場を設けたのみ。ヒレの上へ足を運ぶには決定的な理由が足りていない。組んだ腕も解かれはしなかった。
視線だけを合わせ、さらに続ける。
「手負いの獣が、敗北を知っておれに挑むか」
「なに、掠り傷だ。唾つけときゃ治るレベルのな」
「理解に苦しむ。敗北を知りながら勝利を望んで挑むとは。そんな男に出会ったことはない」
「あぁ、そうだろうな。自分でもバカだと思ってるよ」
手拭いの下、闘志を漲らせてゾロが呟く。
もはや誰にも邪魔できない。そこに居る者たちにできるのは、ただ彼の姿を見守るのみ。
「言葉で説明できるほど簡単じゃねぇんだ。どうしても知りたきゃ、剣を合わせろ」
「フン……誘い出すには十分な言葉か」

ようやくミホークが立ち上がり、彼らが立つヒレへ足を運んだ。
彼の登場にコックたちは怯え、わずかながらも後ろへ下がってしまう。
それを責めることもせず、むしろ好都合だとばかりゾロが口を開いた。
「ヒレっつったか、悪いがちょっと借りるぞ」
先にコックたちへ告げ、次の言葉はルフィへ向けたものだったのだろう。
視線を向けることなく言葉だけを彼に伝えた。
「海賊として動くなら、やるべきことはわかってる。あいつがここに居りゃあ挑まず逃げろって言うんだろう。船長に従え、ってな。おまえにとって不利になることは極力排除しろって言いやがるんだ。だが頭でわかってても今だけは抑え切れねぇ」
ルフィは真剣な顔でゾロを見つめている。止めようとする素振りはない。あまりにも微動だにせずに見つめているため、思わずサンジが止めに入ろうかと思ったほどだ。
強い熱にも似た衝動の中で、彼は船長へ話している。
それはすでに海賊の姿だっただろう。しかし同時に一人の剣士であった。
凄まじい覚悟を感じ、表情を変えずにミホークが惜しいと考える。
「命令してくれ。少しだけバカやっていいってな。そうすりゃおれは、こいつに勝てる」
どんな心情でそう言ったか、窺い知ることなどできはしない。
勝てないことなど理解しているだろう。一味のために自分が死んではならないのも理解している。それでも彼は敵に向き合うことを止めず、後ろを振り向いたりしない。
胸の内を察するにはあまりに複雑な心境だった。
何も言わずにルフィが頷く。それは事実上の船長命令であり許可だった。
見ていなかったはずだが、ゾロの笑みは深くなり、不思議とさらに迫力が増すよう。

三本の刀を抜き、構える。彼だけが使える三刀流の構え。
対するミホークも武器を手にした。しかし背中にある長大な刀ではなく、胸に提げていたペンダントであって、鞘を外せば、ほんの数センチでしかない小さなナイフ。それを手にして、これから始まる決闘のための自らの武器だとした。
「哀れなり」
端的にそれだけを告げる。
ゾロは不服を口にするようなことはしなかった。
時を同じくして、ボートを移動させるヨサクが戻ってきて、必要がないことを知るとヒレに隣接して停め、自身もヒレの上へ戻ってくる。
後ろへ下がって店の前に集結するコックたちからも離れ、一人だけ孤立。
そこで彼は半ば無意識的に剣の柄へ手を伸ばしており、膨れ上がる不安に打ち震えていた。
「兄貴……」
「ヨサク！　手ぇ出すな！」
ルフィの鋭い声が飛んで初めて気付く。自分が剣に触れようとしていたことを。
視線の先を変えてルフィを見つめ、真剣にゾロを見る彼を確認した。
襲い掛かる不安は同じだろう。
震えるほど握った拳は誰の目にも明らかである。
「これはゾロの戦いだ。邪魔する奴はおれがぶっ飛ばす」
「ルフィの兄貴……あんた」
それはヨサクへ言うように見えて、その場の全員へ伝える言葉。ゾロの覚悟を買い、勝敗が決まるまで絶対に手出しはさせない。そう告げている。
これにより動きかけていたサンジは冷静さを取り戻した。
馬鹿げていると思う。勝てないと知っていて挑むなど、ただのバカでさえやりはしない。

なぜそうしなければならないのか。野望のためとはいえ、何が彼をそうさせる。
思考は混濁し、得られない答えを探すかのように一瞬たりとも止まらない。ただ困惑していた。
艦隊が消えた海は静けさを取り戻す。
しかし先程以上の脅威を感じたことにより、静かに大きな波を生み出そうとしていた。

〝鷹の目〟

深く息を吸い、深く吐く。

何度か繰り返せば体の中にある熱が落ち着き、消え去る訳でもないが、冷静な思考が戻ってくるようだ。気を抜けない状況ならば尚のこと冷静さが必要になるだろう。手放す訳にはいかない。

肩に傷を負っていた。応急処置を行っているとはいえ完治していない状態。不安要素になる可能性も高くて、出来れば万全の状態で挑みたかったところだが、確かめるように腕を動かしてみると意外にも怪我のことなど忘れられるほど痛みもなく動いた。

この間だけでいい。

勝負の間だけこのままでいてくれれば十分だ。

視線を上げ、敵を見据える。

ミホークはナイフを掲げて構え、その時を待っている。すでに決闘は始まっていると言って過言でなかった。互いに武器を構え、睨み合い、出方を伺っている。たとえゾロが隙だらけな姿で深呼吸をしていたとして、それは相手にとって大した問題ではないのだ。

一瞬でも気を抜けばその瞬間に敗北が来る。

覚悟を決め、ゾロは自ら動き出す。

小細工を用いず真っ向から接近し、右手の刀を思い切り振り切った。ミホークも合わせるように右手を動かし、小さなナイフが刀とぶつかり、刀身同士が硬い音を発する。

力を込めた一撃があっさり軌道を変えられてしまって、ゾロはその瞬間に敵の実力を理解した。

（受け流された――！）

地面を強く踏みしめ、次いで左手の刀を振るう。

常人では腕一本で受け止めきれないほどの力。鍛えられた筋力から来るその一撃は非常に重く、全身の使い方も堂に入り、技として昇華された上で敵に迫った。

しかし、受け流される。

ギャンッと独特の鈍い音を発し、またもゾロの刃は空を斬る仕草と

なった。
敵には届かない。自身が標的と定めて狙っていた相手には、欠片も。
強く歯噛みし、ゾロは更なる猛攻へ出た。
「ウォオオアァッ！」
両手、口、三本の刀による連続攻撃。一撃でも受ければ斬り飛ばされる強力な一撃。それを一太刀も逃さずミホークが防ぎ、受け流していく。
その攻防、もはやコックたちに理解できる範疇ではない。
一瞬の瞬きさえ許さない素早い動きが連続し、受けられても気にせず攻め続ける。
ゾロの目からは闘志が消えていなかった。
攻撃は確かに届いていない。だが攻め手を緩めることは彼の流儀に反する。
攻めの姿勢、豪剣の使い手。
自らの得手を知るだけにそれを揺るがさず、己の全力を注ぎこんだ。勝てないと知っているからと言って勝利を捨てた訳ではない。彼は本気で勝つために己の刀に信頼を預けた。
攻めて攻めて攻め続ける。それこそが勝利を求める彼が選んだ道である。
どれだけ打ち込み、隙を窺おうともミホークの動きに隙は生まれない。見事な手腕で彼の攻撃を受け流し続け、尚且つ余裕を崩すことさえできなかった。
それでも、己の全てをぶつけた訳ではない。
剣の鋭さは増すばかりだ。
「なんと凶暴な剣か……」
呟くミホークは一歩たりともその場を動いていない。右腕だけを動かし、それどころか足を動かす素振りさえなかった。
動かずとも勝てると言うことか。
そうと知って歯噛みするのはゾロではなく、彼の強さをよく知るヨサクだった。

兄貴と仰ぎ見るゾロの強さはよく知っている。剣士としてはイーストブルーでナンバーワンとすら思っており、彼が誰かに負けることなどあり得ないと思っていた。

そんな彼にとってその光景は悪い夢を見ているようで。

意識せずとも全身に力が入り、応援する気持ちが言葉となって出そうなのを必死に堪える。

ゾロの勝利を望むからこそ、些細な邪魔さえしたくない。この場における声援など意味はなく、きっとゾロの集中にとって悪影響になってしまう。だから一切声を出さなかった。両手の拳を震えるほど握り、ぐっと力が入った立ち姿で、胸が張り裂けそうな想いで見つめていた。

ルフィもまた声を出さずにじっと堪えている。

自分は何もせず、ただ見ているだけというのがひどく辛い。自分で戦うのがどれほど楽か、今になって理解した。これならば自分で体を動かしている方がよっぽど居心地が良いだろう。

ゾロを失いたくはない。だが止めることはできなかった。

だから負けるなと必死に見つめ、戦いを最後まで見守ることしかできそうになかった。

一際強く刀身を叩きつけ、受け流された直後に後ろへ跳ぶ。

乱れかけた呼吸を深く息を吸い、吐くことで無理やり落ち着かせ、視線を落として思考する。勝負がどちらの分にあるかなど火を見るより明らかだ。

（なんてやさしい剣だ。どこから打ち込んでも軽く受け流しやがる。こんなにやさしい剣、今まで見たこともねぇ……）

体を止める時間は一秒もあり得ない。

即座に顔を上げて駆け出し、敵を鋭く睨んで刀を握り直した。

（迷うなッ！）

突きを放って受け流され、体勢を崩しながらもさらに前へ出る。

刀の攻撃範囲を無視した足運び。流石にミホークの表情が変わった。今まで荒々しいとはいえ剣術を用いていた彼の突然の行動は、剣術の常識を無視しようとしている。同時に一歩踏み込んだそこは、ミ

ホークの攻撃に晒される危険な位置でもあった。
気にせず首を狙って刀を振るう。
突然の行動にも動じず、ミホークは後ろへ足を運ぶことで攻撃を受け流し、無傷で彼との距離を保った。状況を変えようとする行動にしては考えが浅すぎると思考して。
ゾロはそれ以上の深追いをしない。足を後ろへ運んだミホークを確認した後、両腕を交差させて構え、三刀流の技を放とうとした。
剣術の距離感を作り出されたのは望むところ。
待っていたその距離を目に、ゾロが地面を蹴って前へ飛び出した。
「鬼……斬りィ！」
三本の刀による強襲。突進力だけで言えば彼の技でも随一。その構えを見たヨサクはよしっと拳を振って喜びを露わに、止められる訳がないと勝利を確信する。
一方、ミホークはあくまで冷静だった。
初めて膝を曲げ、両足でその場に踏ん張り、静かで鋭い突きを放つ。
接触の音は一度。
三刀流で押し切るその技はたった一撃でミホークに止められて、ピクリとも動けなくなった。
「う、嘘だろっ!?　兄貴の鬼斬りを止める奴なんて居るはずが……！」
ヨサクが驚愕するのも無理はない。ゾロの鬼斬りは己が筋力に任せ、人体すら軽々と斬り飛ばす必殺の一撃。その突進力を止めた人間は今まで一人としていない。
ただ一人、鷹の目のミホークを除いては。
完璧に止められたことに、しかしゾロは慌ててはいなかった。
思考は冷静なまま。それさえもあらかじめ考慮している。
腕を振って強引に鍔迫り合いを終了させ、たたらを踏んで後ろに下がり、冷静に考える。
この男は技術だけではない。細身に見えるが常人ならざる筋力を持ち、イーストブルーではお目にかかれない技を体得し、どんな攻撃にも怯えない頑強な精神力を持っている。

比喩ではなく心技体全てが揃っていた。
剣士としてあまりに完成された姿。
まさに究極。この男こそ最強の名に相応しい。
だからこそ負けたくなかった。
「相手がどうであれ、おれの剣は豪剣……押し通るッ！」
「焦るあまり己すら失くしたか。柔なき剣に強さなどない」
再び真正面から襲い掛かる。恐れはない。今はただ勝利しか見えなかった。
「鷹波！」
素早い剣の挙動から、地を這うような衝撃波が駆け抜ける。それをしかと見切ってミホークはナイフを振るい、一瞬の動作で三度の斬撃を放ち、正面から打ち破った。
飛ぶような斬撃は、イーストブルーでは見たことがない。
意に介さずゾロが続ける。
最初からそうだと思っていれば驚きも少ない。防がれるのは当たり前だ。
今度は直接ミホークへ斬りかかり、数度刃を打ち合わせた。
それでも彼の足を動かすことさえできずに、思考を変えて至近距離でぐるりと体を回転させる。何をするのだと一時はわからなかったが、彼の剣から生み出される風を感じて眉が動いた。
力の豪剣ではなく、全身を使ったそれは〝柔〟の剣にも等しい。
わずかに驚かされるものの、隙を生み出すほどではなかったようだ。
「龍巻き！」
やはり動かず、回避はなし。代わりに素早くナイフを振った。
迫り来る旋風は、確かにミホークによって切り捨てられ、服の切れ端にすら届くことなく消えてしまう。否、力ずくでかき消されたのだ。
ヨサクは驚愕し、開いた口が塞がらない。
尚もゾロは前へ出た。
二本の刀を背に背負うような構えで、力を溜めた後に三本の刀を爪

の如く、斬撃を放つ。相手に届けば獣に切り捨てられたかのような傷跡ができるはずだった。
それも、敵に届けばの話。
油断なく向かってくるゾロを目にして、初めてミホークが攻勢に出た。
「気概は認めよう。だが甘い」
「虎狩り――！」
一閃。ゾロの胸にナイフが突き刺さった。
油断したつもりはない。片時もミホークから目を離した覚えがないまま、気付けば刺されていた。彼の動きが速過ぎたのである。とてもではないが常人に反応できる速度ではなかった。
ヨサクがあっと声を漏らした時、力が抜けた両腕が攻撃をせずにだらりと落ちる。
つま先立ちになり、ゾロは胸に刀身を埋めたままで立ち尽くした。
痛みがじんわり広がる。血が腹から込み上げてくるのを感じて、刀を銜えたままだが、我慢できずに吐血した。白い鞘が赤く濡れて、ゆっくりと床へ滴り落ちる。
決着だと認めさせるには十分な一撃だっただろう。しかしゾロは退こうとしなかった。胸にナイフを埋め込み、痛みを感じて、勝ち目がないと知りながら尚も前へ進む力を込める。
異様な動きにミホークの眉が動いた。
彼自身は全く動かぬまま、思わずゾロへと問うていた。
「なぜ退かん。このまま心臓を貫かれたいのか」
「さぁね……なぜかなんて、おれにもわからねぇよ」
「退かねば死ぬぞ」
「ああ、そうだな……だが、ここを一歩でも退いちまったら、何か大事な、今までの誓いとか約束とか、色んなもんがへし折れて、もう二度とここには帰って来れねぇ気がする」
「そう、それが敗北だ」
ミホークの言葉を受け、にいっとゾロが笑った。
血を吐き、刃を受け、それでも尚心が折れないのか。

その姿は確かにミホークの記憶へと刻み込まれただろう。
「だったら尚更退けねぇな」
「死んでもか」
問うてみたくなった。だから言葉を紡いだのである。
すると彼は、一切の迷いを捨ててはっきりと答えを出した。
「死んだ方がマシだ」
尋常ではない覚悟と決断。誰にでもできることではない。
驚嘆、そして好奇心。
ナイフが抜け、ミホークは自ら退いた。
数歩後ろへ下がってゾロとの距離を置き、血に濡れたナイフを手に静かに問う。
いつしか場は彼らの姿に惹き込まれていた。
世界最強の剣士が自ら退くなど誰が想像していただろう。
その場に居た全員が固唾を飲んで決闘を見守り、その戦いの果てを目撃しようとしている。
「敗北より死を取るか……いいだろう。小僧、名乗ってみよ」
ゾロは再び構えを取り、力を失わない声で返す。
「ロロノア・ゾロ」
「久しく見ぬ強者よ、覚えておこう。貴様におもちゃでは不釣り合いだったな。剣士たる礼儀をもって、世界最強のこの黒刀〝夜〟で沈めてやる」
そう言ってミホークはナイフを仕舞い、代わりに背中の長剣を抜いた。
ガレオン船を五十隻両断した武器。それを見るや否や周囲からどよめきが聞こえるが、ゾロだけは動揺することもなく。ただ静かに、笑った。
心は微塵も波立っていない。まるで澄んだ水面。
一点の曇りもなく心は穏やかで、いつしか敵意は消えていき。ミホークを見据え、それでいて殺気は感じず、刀を下ろすこともない。彼らしからぬ静かな構えだった。
ただ己の心臓の鼓動だけがやけに大きく聞こえる。

ひどく、落ち着いた。
別人を見るかのような様相だった。
今だけは死が怖くない。恐ろしい物など一つもなかった。
ゾロは呼吸を小さく、自分でも気付かぬ内、無意識に心中で考え事をしていたようだ。
（ここで失敗すれば、おれは死ぬ。あいつが居りゃあ止めてたか？
一味の存続を考える奴だ。馬鹿なことしてねぇでさっさと逃げろくらいは言うかもしれねぇ）
考えながら気付く。きっと一人でこの男に出会っていればこんなことも考えなかった。気付きもしなかっただろう。穏やかな心は一人ではなかったが故に手に入れた物だ。
今の彼には仲間が居て、我が強く戦いを選んだ自分と、申し訳ないと思う自分が居る。
後悔はない。死ぬつもりもない。
勝って勝利を伝えなければならない相手が居る。現世にも、この世ではないどこかにも。
負けるつもりはなかった。
（いいや、ルフィが許したんだ。ぶつくさ言いながら止めなかっただろうな……だが、ここで死ぬのは、約束を違えることになる）
敗北よりも死を選ぶ。だが仲間のために死ぬ訳にはいかない。
ならば勝利以外はあり得ない選択だ。
もはや明鏡止水の極致に立って、彼の技は現段階での最高峰へ昇り詰める。
覚悟はできた。どんな結果であれ、これが最後だと。
両手で二本の刀を回し、予備動作に入った。ミホークは剣を構えて攻撃を待つ。逃げるよりも反撃を選び、正面から受けるつもりらしい。
分かり易い勝負は望むところだ。
全員が固唾を飲んで見守る中、ゾロが動き出した。
「三刀流奥義！」
回転する刀を持ち、全力で地面を蹴って前へ駆ける。

勝負は一瞬で決まる。
全身全霊をその一撃に込め、最強に勝つため、前へ跳んだ。
「三・千・世・界‼」
そうして、交差する。
結果は一目でわかる物となって現れた。
ゾロが両手に持つ刀は、刃を切り捨てられ、無残な姿となった刀身が宙を舞っている。口に銜える一本は無事だが、確かに相手へ届いたはずの攻撃はあっさり受け流されており、防御ばかりか、刹那の攻防でゾロの腹が一文字に切り裂かれていた。
ミホークは無傷。対するゾロは腹から出る大量の血をばら撒いた。
驚きはしない。冷静に両手の柄を捨て、口に銜えていた一本を手にする。
白い柄のそれのみを鞘に戻し、キンッと納刀。
すでにミホークはとどめを刺すため、背後で振り向こうとしていた。
（負けた……おれが負けるなんて、考えたことなかったな。これが世界最強の剣か）
離さぬようにしっかり左手に刀を持ち、両腕を広げて振り返る。ちょうどミホークへ体の前面を差し出すような恰好だ。もはや刀を抜く意志すら見せていない。
完全に振り返った後でミホークが止まり、訝しげな目を向ける。
「何を」
「背中の傷は、剣士の恥だ」
悔しさを滲ませるでもなく、晴れ晴れとした笑顔でそう言った。
ミホークもまた確かな笑みを浮かべ、彼を認めて剣を振るう。
「見事」
袈裟切りに左胸から刃が入り、右の脇腹へと駆けていく。
強かな一撃は一瞬。
更なる鮮血が舞い、衝撃でゾロが天を仰いだ。
壮絶な一撃である。
誰もが目を見張り、その瞬間から目が離せなかった。

ゾロの背が地面に触れた時、耐え切れなくなってルフィが叫ぶ。続いてヨサクが溢れ出る涙を堪え切れず、胸に突き刺さる喪失感に苛まれて叫んだ。
「ゾロォォォォッ!?」
「あ、兄貴イィィッ!?」
血ぶりをして、冷徹に剣が納められる。
再び黒刀を背負った時、ミホークは振り返らずに歩き出し、自らの船へと向かい始めた。
「生き急ぐな。若き力よ――」
「おまえェ！　よくもゾロをッ！」
怒りに支配された様子のルフィが駆け出す。ゾロへ駆け寄るより先、ミホークを目掛けて足を運んで、痛くなるほど力強く拳を握った。それを知っていながらミホークは前を見ている。
ヨサクも我慢できずにすぐゾロの下へ駆け寄った。
場は騒然としている。
動揺する者が多くなり、抑え切れないほどどよめきが起こっているのも不思議ではない。
その光景を見ながら、煙草を噛み潰したサンジは苛立った様子で呟いていた。
「どうかしてやがるぜ……負けるのを知っててなんで挑む。野望を捨てりゃあ、まだ生きれた。それくらいの頭はあったはずだろ。死ぬくらいなら、野望を捨てろよ」
わなわなと震え、耐え切れなくなって叫ぶ。
彼もまたゾロの姿に平静ではいられなくなっていたらしい。思いの丈をぶつけようとしていた。
「簡単だろッ！　野望を捨てるくらい！」
「うわあああぁぁ～っ！」
拳を振りかぶってルフィが跳び、背後からミホークへと襲い掛かった。だが後ろを見ずとも見えているらしい。伸ばされたパンチは一歩を横にずれるだけで回避され、攻撃はヒレへ突き刺さる。
その刺さった腕を起点に体を引き寄せ、左の拳を振り上げながら接

近していく。
今度こそミホークは振り返り、鋭い眼差しでルフィを捉えた。
「麦わらの男。貴様もまた、よくぞ見届けた」
「おおおおぉぉっ！」
接近と同時に殴りかかるが、軽く後ろへ跳ぶことで回避された。ルフィは勢いよく床へ突っ込んだ後、木目のそこが壊れて転げ回る。
すぐに体勢を立て直し、再び攻撃に転じようとした折。
ミホークは自身の船へ振り返りながら呟いた。
「安心しろ。あの男はまだ生かしてある」
「えっ……!?」
確かに聞いたその言葉を信じ、咄嗟にルフィが振り返る。すでにヨサクがゾロの下へと到着していて、床に膝をついて彼の状態を見ようとしていたところだ。
激しく咳き込んで血が吐き出される。
ゾロはまだ生きていた。
「ゾロッ！」
「兄貴ィ！　うぐっ、あっしは今、ほんとに死んじまったのかと……！」
「良い物を見せてもらった。貴様が死ぬにはまだ早い」
数歩進んでヒレの縁に立ち、ミホークは背を向けたまま語る。
決して大きな声ではないとはいえ、静まり返った辺りではひどく大きく聞こえた。
ルフィはその場を動かず、ふとミホークの背を見てその言葉を耳にする。
「我が名はジュラキュール・ミホーク。おれは先、幾何月でもこの最強の座にておまえを待つ」
細身であるが、それとは関係ない。
あまりに雄大で、あまりに大きな背。
ゾロだけでなくルフィもまた、その背を見て感じ入る物があったようだ。
「己を知り、世界を知り、強くなれ。そして猛ける己の心力挿して、

この剣を超えてみよ」
不思議と彼が話すだけで大気が震える。
面白い物を見た。これはその礼ということだろう。
腕を組んで海を見たミホークは、己が背に届かぬ強者へ向けて言葉を放つ。
「このおれを超えてみよ！　ロロノア‼」
重苦しい沈黙が辺りへ広がりつつある中で、その声が他の何よりも増して存在感を放った。
世界最強の剣を見せ、その男がたった一人の若者へ声を投げかけている。珍しい、というよりまずあり得ない光景を目の当たりにしていた。
息を呑んだ面々はもはや身じろぎ一つできずに彼の背を見つめていた。
その場を去る前、自身の小舟に乗ろうとしたミホークはちらりとルフィに目をやる。
見覚えのある帽子が気になった。
おそらくゾロの仲間だろうと思うからこそ、敢えて声をかけて尋ねてみる。まるでヒントを与えるかのようで、分かりにくいながら、彼にも期待をかける素振りだった。
「小僧。その帽子は赤髪の物か？」
「え？　おまえ、シャンクスのこと知ってんのか」
「やはりそうか。貴様は何を目指す」
「海賊王」
「険しき道ぞ。このおれを超えることよりもな」
「知らねぇよ。これからなるんだから」
わずかにほくそ笑み、視線を切ってミホークが小舟へ乗り込んだ。
ちょうどその時、ヨサクが狼狽する声が聞こえて動きが止まる。
「あ、兄貴！　動いちゃだめだ！」
慌ててルフィが振り返ればゾロが手を動かし、刀を抜いて、切っ先を天に向けている。
生きてはいる。だが意識を保つのもギリギリで、気絶していないだ

けでも異常な状態だ。本来であれば死んでいたとしてもおかしくない深手であり、もう動けるはずがなかった。
それなのにゾロは動こうとする。
視界は霞んで何も見えない。頭上にある青い空さえ映っていなかった。
そんな状態で、彼はルフィを求めていた。
「ルフィ……居るか」
「あ、ああ、いるぞ。ここにいる」
「聞こえ、てるか」
「ああ、聞こえてる。大丈夫だ」
少し離れた位置に座ったままルフィが答えた。
消え入りそうな声。今すぐに逝ってもおかしくないと思ってしまう。
喋るだけでも極限状態の体にとっては大きなダメージになるはず。ヨサクは必死に止めようとするのだが、そのヨサクをルフィが視線だけで押し留め、好きなように喋らせてやる。
息も絶え絶えに、普段の声量はない。しかし辺りの静けさが彼の声を助けるようで、気を失いそうなギリギリの状態で、天へ伸ばした刀は全く揺れずにその場に在る。
壮絶な姿はコックたちの血相を変えさせ、狂気さえ見出す姿に固唾を飲んで見守った。
ぽつぽつと、一言ずつ、ゆっくり語られる。
話す彼と同じく、ルフィも必死にその声を聞いた。
「不安に、させたかよ。おれが、世界一の剣豪にくらいならねぇと……おまえが困るんだよな」
「兄貴ッ……！」
大粒の涙を流すヨサクが見守ることにも気付けず、途切れそうになる呼吸を己の力で引き止め、ぐっと歯を食いしばる。それだけで喉を血が駆け上がってきたが、気合いで呑み込んだ。
「おれはっ……おれはもう……！」
ほんの一瞬、体に自由が戻る。

なぜかはわからない。痛みを忘れ、胸が熱くなり、こぼれる涙を抑えようと左手を顔へ伸ばす。しかしどうやら止めることには失敗してしまったようだ。
緊張から解き放たれた感情が一気に押し寄せ、溢れ出た涙をそのままに、彼は叫んだ。
「二度と敗けねぇから‼」
空まで響く声は、確かにその場の全員が耳にする。
ルフィは静かにその言葉を受け止め、ミホークはわずかに口角を上げ、サンジは、何を想うのか呆然とした表情で聞いていた。
ゾロの叫びは誓いとなって、己が船長と認める男へ伝えられる。
「あいつに勝って、大剣豪になる日まで！　絶対にもう……おれは敗けねェ！」
聞いている内からルフィは笑顔になっていき、終わる頃にはくしゃりと笑っていた。本当に嬉しそうな、心からの笑顔を浮かべて肩を揺らす。
それだけはわかったのかもしれない。
流れた涙はそのままに、ゾロの声色は多少変化していた。
「文句あるか、海賊王」
「ししししし。ない」
端的に告げて答えとする。
それ以上は限界だったのか、ゆっくり腕を下ろした後でゾロは気を失ってしまい、ヨサクが慌ててコックたちを呼ぶ。それだけ話せたのが異常なのだ。放っておけばあっさり死ぬ。
ヒレの上が騒がしくなる頃、小舟に乗ったミホークはその場を離れようとしていた。
どこからやってきて、どこへ行くともしれないものの、振り返ったルフィを見て小舟に立って声をかける。その鋭い眼差しには幾ばくかのやさしさも見えていた気がした。
「いいチームだ。また会いたいものだ、おまえたちとは」
「あ、おい。おまえシャンクスの知り合いなんだろ。シャンクスはどこに居るんだ？」

「まだおまえたちには早い話だ。が、覚悟は見せてもらった。教えてもよかろう」
腕を組んで真っ直ぐ見据え、ミホークからルフィへ伝えられる。
「新世界」
「シン、セカイ……？」
「グランドラインの後半をそう呼ぶ。先に行って待つ。おまえたちも必ず来い」
「おう！」
ゾロの治療のため慌ただしくなるバラティエを離れ、ミホークはその場を去った。
仲間を心配する気はあるが、誓いを立てた彼が死ぬはずないと思っている。そのためルフィはミホークから聞かされた言葉を脳内で反芻し、まだ見ぬ海に期待をかけた。
新世界。
その言葉は彼の中に深く刻まれ、きっとシャンクスとの再会の地になるだろうと想像する。
自分たちよりよほど強い人間を見たばかり。
海の果ては遠く、冒険はまだ始まってさえいないのかもしれない。
全ては、グランドラインに立ってから。
振り返ったルフィもゾロを心配して彼の下へ駆け寄り、騒ぎの中心に突入していく。
一度に色々な出来事が起こり、彼らは混乱し切っていたのだろう。
艦隊の全滅。
世界一の剣豪の一騎討ち。
そして命懸けで啖呵を切ったゾロの姿。
様々なことが一気に起こり過ぎた。
船を斬られたクリーク海賊団がどうなったかを調べる様子もなく、まだ彼らは興奮冷めやらぬ面持ちで怒号を放ち、治療と感想を言い合うので精いっぱいだった。

ファイター

倒れたゾロが店内に運ばれて、そこはしばらく騒々しくなっていた。
専門的な医療の知識を持つ者など居ないが、昔取った杵柄で多少なりとも怪我の処置に関する知識を持つ者がおり、チンピラ上がりの強面の男が彼の胸を縫合し終えたらしい。
それなりに時間はかかったが一命は取り留めた。
処置を終えた後、船上にはまだ独特の興奮が残っていて、先程の光景に関する感想は止まるところを知らない。やはり世界最強の剣豪と呼ばれるミホークはそれほどの存在なのだ。
艦隊をぶった切り、ゾロを完敗させ、そして堂々の去り際。
死に瀕しながら覚悟を見せたゾロに対する称賛の声もあって普段以上に騒がしい。
客が居ないとあって仕事もなく、彼らはしばし話を続けていた。
コックたちの輪から外れるサンジは新たな煙草に火を点ける。
煙を吸い込んで、ゆっくり吐き出す。子供の頃は苦手だったそれもすっかり慣れた。そうしているだけで見栄えはそれなりになるし、ぼーっとする際の助けになる。
彼自身、いつもと違うのは自覚していた。だがその原因まではわからない。
静かに一人で佇んでいると、やがて背後からゼフが歩み寄って来た。
「たまに居るんだ、ああいうバカが」
「あ？」
義足で独特の音を鳴らし、彼の隣へ立って海を眺める。
ヒレの縁に立っていたせいで他の者は近くに居ない。珍しいが、二人だけだ。
ゼフは何を知っているのか、穏やかな声で語りを続けている。サンジも不思議と無視することはできずに話を聞き入れ、自分の中の不調を明らかにしようとしていたようだ。

「信念、って奴か。一度こうだと決めたら曲げねぇんだ。それこそ死にでもしねぇ限り。世間の大半はそれをバカだと言うのかもしれねぇが、おれは好きだぜ。そういうバカは」
「……何の話だ」
「チビナスにはまだ早ぇ話か？　わかってねぇんならてめぇはその程度だ」
「なんだとっ。ジジイ、訳のわからねぇことを――」
言うだけ言ってゼフはその場を離れようとする。
ひどくあっさり背を向けて、深くは説明せずにサンジの傍を離れようとした。
「てめぇがそれを噛み殺してる限り、チビナスは卒業できねぇな」
食って掛かろうとして、やめた。きっかけはやはりその一言だろう。
何を言わんとしているのかはわかる。同時に、そのことに彼が気付いているのが悔しく感じた。今まで一度もそんな内容について話したことがないのに目敏い男だ。
舌打ちを一つ。
再び海に目をやって佇む。
入れ替わるように今度はルフィがやってきた。
ゾロは一応落ち着いたらしい。今は笑みが浮かんでいる。
対照的に複雑そうなサンジへ顔を見せ、ルフィは親しそうに話し始めた。
「サンジ、レストラン守れたな」
「ああ。まさかの事態だったがな」
「まぁ色々あったけどよ、おれの仲間にならねぇか？」
「どんな脈略で誘ってんだ。別におまえの手柄って訳でも――」
「あれなんだ？」
人の言葉を遮ってルフィが海を指差し、言われたサンジも何気なくそちらを見た。
小舟がある。エンジンでもついているのか、凄まじい勢いでバラティエへ向かってきていた。外見は木造、しかし用途のそれは確実に

モーターボートである。
大柄な人影が見えている。
嫌な予感を感じるのは当然であった。
二人が気付いた後、徐々にコックたちも高速で接近してくるボートに気付く。
多くの視線が集まる先、大柄の人影が何かを構え、発射した。
明らかに攻撃だと感じさせる挙動、そして宙を飛ぶ砲弾。驚愕が伝染するのは一瞬だった。バラティエ、特にヒレへ向けて弓なりの軌道で砲弾が迫り、その光景はひどく鮮明に映っている。
最初に反応したのはルフィだ。砲弾を目掛けて高く跳び、一気に息を吸い込む。
「ゴムゴムの――」
風船のように腹が膨らんで、ゴムの性質を持ったまま砲弾を受け止める。
反動を利用して慣れた様子で跳ね返し、砲弾は空へと打ち上げられた。
「風船！」
突然の攻撃にも驚いたが、ルフィの体にも驚いた。息を吸い込むだけで膨れ上がり、ふわりと一瞬とはいえ滞空して、あまつさえ砲弾を跳ね返したのだ。
彼が普通の人間でないこともこの瞬間に伝わっただろう。
跳ね返した後、また元通りの体に戻って落下してくる。
打ち上げられた砲弾は天高くまで到達し、やがて独りでに爆発した。ただの砲弾ではない。大砲から発射されるそれとは違い、そこに広がったのは爆炎ではなく奇妙な色の煙だった。
正体を知らずとも一つの言葉が頭に浮かぶ。
毒ガス弾。
おそらく砲弾よりも恐ろしい武器だったようで、その煙を見上げた人々は静かに戦慄した。
宣戦布告すら行わぬ攻撃に、その攻撃が毒ガス弾。
間違いないと判断した。

向かってくるボートを見れば、やってくるのがクリークだということが視認できたのである。
「あ！　あいつ！」
「まだ生きてやがったのか。艦隊をぶった切られたってのにしぶとい野郎だ」
なぜ死ななかったのか。詳しい理由はわからないが余裕の笑みを持ち、ボートに乗っていることから何かしらの策は用意していたらしい。ただ力押しするだけの海賊ではないようだ。
ヒレの上は騒然となり、コックたちが騒ぎ出す。
敵の襲来に毒ガス弾の使用。事態は急変しようとしていた。
やがてボートは速度を落とし、ヒレに横付けされる。
その船から三人の男たちが飛び移った。
たった三人と油断してはいけない。クリーク海賊団の主力が乗り込んできたのだ。
右に立つのは艦隊の戦闘総隊長を務める男、〝鬼人〟のギン。
左に立つのは第二部隊隊長、〝鉄壁〟のパール。
そして中央に構えるのが彼らを従える提督、首領クリークである。
雑兵を用意せずともバラティエを力ずくで奪えるメンバー。艦隊が沈められたとあって作戦を変えたらしく、威風堂々とその場へ立つ。
入り口の辺りで密集するコックたちを見やり、クリークが口を開いた。
「さて……色々あって船が無くなっちまった。てめぇらも見てたんならわかるだろう。わかってるだろうが改めて言ってやる。この船とグランドラインの航海日誌を頂きに来た」
何事もなかったように脅迫を始め、先の光景とちぐはぐな姿に疑念が浮かぶ。
真っ先にサンジが口を開いて質問を始めた。
「ずいぶん冷静に喋ってんじゃねぇか。あれだけの大敗の後でよく口が動くな」
「大敗だと？　負けちゃあいねぇさ。どこの誰だか知らねぇが、何

らかのトリックを使ったに違いねぇ。おれと戦っておれが負けたか？　ただ船が壊れただけなんだよ」
「へぇ、そうかい」
「わかるか？　おれはこの通りピンピンしていて、実際おまえらを殺せるだけの力と体力を持ってる。それにこんなこともあろうかと五十隻の艦隊とは別に、十五隻から成る部隊を後続に残しておいた。そりゃあ驚きもしたが、結果はおれの勝ちだ。おれを殺せちゃいねぇんだからな」
「口だけはよく回るみてぇだな。別におまえの感想なんざどうでもいいんだ。とっとと失せろ」
興味なさげにサンジが呟くと同時、クリークの眉間に皺が寄る。言ってはいけない一言を言ったのだろうか。怒りの念が放出されて見るからに態度が変わった。
「何か勘違いしてるんじゃねぇのか？　おれは頼んでるんじゃねぇ、命令してるんだ。おれが失せろと言ったらてめぇら何も言わずに船を下りればいいんだよ」
「あいにくおれはおまえの部下じゃねぇ。従う必要はねぇな」
「物を知らねぇ野郎だ。強者の命令は絶対。誰もおれには逆らうなッ！」
クリークが前へ一歩踏み出し、重々しい足音がする。
威圧的な態度にもサンジの表情は変わらず。短くなった煙草を携帯灰皿へ押し込む。
その態度にまた怒りを大きくした様子で、クリークは左側の肩当てを取り、手に持った。
「そこをどけ。聞かねぇ奴は全員殺す。この毒ガス弾でな」
「やってみろよクソ野郎。返り討ちにしてやる」
脅されても怯まず立ちはだかる。
クリークは苛立ち、両側の二人が姿勢を変えた。
「舐めやがって……おれはイーストブルーの覇者、首領クリークだ。いずれはグランドラインを制覇し、海賊王の称号を得る。たかがコックが千人集まろうが勝てる相手じゃねぇんだよ！」

「海賊王？」
ぴくりと反応し、ルフィが前へ出た。
サンジよりも数歩前まで歩を進め、クリークの正面に立って腕を組み、表情を厳しくして睨みつける。自然とクリークの視線も彼へ注がれるようになった。
異様な対峙である。バラティエの人間でない彼がなぜムキになるのか。
呆れてサンジが見守っていると、声色が変わったルフィはひどく端的に伝えた。
「おまえが海賊王になるって？　そりゃ無理だろ」
「何ィ？　誰だ、てめぇは」
「モンキー・Ｄ・ルフィ。海賊王になるのは、おれだ」
「ほう。見た目に違わずどうしようもねぇバカが来たらしい」
売り言葉に買い言葉。
挑発するようなルフィに対し、クリークは笑みを深めて答えた。ただ彼の想像と違ったのはルフィの言葉は挑発のための物ではなく、素直に自分の気持ちを伝えただけということだ。
それを言われては黙っていられない。
ルフィは海賊としてクリークを敵だと認識しており、もはやサンジの手伝いなど関係ない。自分のために彼を倒すのだと決断していた様子。
クリークもまた、目の前の男は礼儀どころか真理を知らないと評して、逃がす気はない。
最強は己。ならば海賊王になるのも自身なのである。
睨み合う両者は激突も辞さない様子、今すぐにも戦い始めかねない態度で対峙した。
「てめぇが海賊王だと？　つまらねぇ冗談はほどほどにしておけ。聞くが、海賊王になるために必要な物を知っているか？」
「知らん。ワンピースのことか？」
「いいや違う。武力だ。誰にも負けねぇ圧倒的な力だ。生半可な強さしか持たねぇ野郎に海賊の王を名乗る資格なんざありはしねぇ。

てめぇがおれより強いと思うか？」
「ああ、思う」
「クックック、なるほど。どうやらトンデモねぇバカだったようだ」
くつくつと笑うクリークを見つつサンジが言う。
どうも話の方向性が変わっている。バラティエのことなど無視するかのようだ。
「おまえは下がってろ。こいつはウチの問題だ」
「いやだね。こいつはおれがぶっ飛ばす」
「どういう了見だよ。いつの間にそうなった」
「こういう奴らには負けてられねぇんだ。悪いけどこのケンカおれがもらう」
「勝手にしろ。どの道おれはこいつらが消えてくれりゃ十分だ」
二人が敵の前に立ちはだかったことで、武器を持ったままのコックたちは動こうとしていた。
特に先頭のパティとカルネが、意気揚々とサンジの背へ声をかける。
「おいサンジィ、おれたちもやるぞ！」
「てめぇ一人にオイシイとこ持っていかせねぇぞ！」
「いらねぇよ。雑魚はそこで見てろ」
「何イ!?」
「足手まといだって言ってんだ」
仲間たちの加勢を押し留めて拒否し、振り返ることなく告げられる。
彼らでは力不足だと。
別段、やさしさから来る言葉ではない。心底そう思っているし、必要ないというだけの話。
少し前に立つルフィの実力は詳しく知らないものの、毒ガス弾に反応した動きを見る限りは相当の腕前。彼と自分が居ればそれで充分だろうと判断している。
店を傷つけず戦うために用意したヒレだが、使える範囲は限られている。むしろ人数が増えるのは彼らにとっても厄介で、少数で戦った

方が自由に使えるだろう。
止められたパティとカルネは悔しそうに武器を握るが、サンジの実力は知っている。彼らが武器を持ち、二人掛かりで挑んでも彼には勝てない。
渋々ながら引き下がることに決めたようだ。
二人は武器を下ろし、他のコックたちも静観を決めて熱心に二人の姿を見守る。
その中にはゼフも居た。腕を組んで戦いの行く末を見ようとしている。
戦闘の意志が辺りへ漂い、それだけで意志の疎通はできた。
二人だけで向かって来ようとする彼らにクリークは勝利を予感する。数的に有利な現状で逃走や中断をするはずもなく、勝ち誇る笑みは隠しきれない。
「好きなだけほざいてろ。強ぇ弱ぇは結果が決めるのさ」
「おれが勝つ！」
「別に止めはしねぇが、店は壊すんじゃねぇぞ」
応じるようにルフィが叫んだ途端、クリークが腕を伸ばして肩当てを構えた。
音を立てて変形したそれは何かを発射する形態となる。変形する様子にルフィの好奇心が掻き立てられ、思わず目を輝かせてしまうも、すぐに首を振って自制する。
今はそれどころではない。
先の言葉から毒ガス弾ではないかと予想できた。
ルフィは駆け出し、撃つ前に止めようと前へ出る。
「もう毒ガスは撃たさねぇぞ！」
「待て！　無暗に動くな！」
「フン。止められるもんなら止めてみろ」
狙いはルフィへ定められた。そして直後に肩当てが動いて発射される。
放たれたのはしかし毒ガス弾ではない。小さく、短い槍が無数に飛んで、まるで銃弾のようにルフィへ殺到した。銃弾ならばまだしも鋭

く尖る槍はゴムでは返せない。
必死に回避しようとして、勢いを止め切れずにルフィの体は槍を受ける。
防御のために顔の前で腕を交差したが、彼の体には数本の槍が突き刺さった。
「うわぁ!?」
「おいっ！　クソ、言わんこっちゃねぇ」
「ギン、やれェ！」
攻撃を受けて体勢を崩し、ルフィが地面を転がる。その隙を逃さずにギンが駆け出した。
両手に持つ奇妙な形のトンファーを巧みに回転させ、遠心力を利用した一撃を、ルフィの脳天へ叩き込もうと迫る。すぐにルフィも気付くが転がってしまって反応に困った。
迎撃か、回避か。どちらにしても余裕はない。
選んだのは迎撃だ。
転がったまま攻撃を返そうとして、きつく拳を握った。
「死ね――」
「いやだ！」
トンファーが振り下ろされた瞬間、迎撃しようとしたルフィがパンチを繰り出す前に、傍らから放たれた蹴りが視界に入る。球の形をする武器の先端が蹴られ、強かに蹴り返された。
ルフィが見上げればサンジが居る。
一撃を止められ、トンファーが吹き飛ぼうとする勢いを利用し、体ごと回転したギンが更なる攻撃を放とうとする。そちらにも反応してサンジが足を振り上げた。
標的を変えて狙うのはサンジ。
両者同時に攻撃を放ち、蹴りとトンファーの先端が勢いよく激突した。
寝そべったルフィの頭上で得物をぶつけたまま、二人の視線が交差する。
サンジは笑みを浮かべ、ギンは鋭い視線で彼を睨む。

「首領に勝てる奴は居ねぇ。今の内に逃げた方が身のためだぜ」
「弱い犬ほどよく口が回るもんさ。知らねぇのか？」
その一言に怒りが膨れ上がる。
己が船長を侮辱され、平静でいられるはずもなかっただろう。
咄嗟の動きで距離を作り、再びギンがサンジへ向かい、彼もそれに応じて足を振り上げた。
素早い攻撃に反応する身のこなしは凄まじい物がある。動きは軽く、武器を使わず蹴りだけを攻撃に用いるとはいえ、その力量は常人のそれではない。
ギンも、サンジも、明らかにそこらに居る人間のレベルではなかった。
彼らの攻防は見ているだけでも心が躍り、達人同士の激突だと思わせる様相である。
ごろごろ転がって彼らの下から逃げたルフィが起き上がり、改めて目にする。
戦う姿は初めて見るが、サンジの腕前は彼が嬉しくなってしまうほどだったらしい。
もっと仲間にしたくなったと、にんまり頬が上がる。
「おぉ～、すげぇなサンジ。おまえめちゃくちゃ強いじゃんか」
攻防の最中にふっと笑い、トンファーを蹴って後ろへ下がる。
動きを止めたサンジは新たな煙草を銜え、火を点けると同時に呟いた。
「当たり前だろ。海のコックを舐めんなよ」
「ししし、わかった。まぁ別に舐めてたわけじゃなかったけどな」
「多少はできるようだが、たかがコックだろう。海賊の戦闘を甘く見ねぇことだ」
呆れた顔で溜息交じりにギンが言う。
その一言は聞き捨てならなかったのだろうか。
佇まいを変えて肩をすくめたサンジが足先で床を叩いた。
「偉そうに言ってられるのも今の内だぜ。たかがコックに負けた後じゃ言い訳はできねぇ。なんなら今の内に聞いといてやろうか」

「おれたちは戦闘で負けたことがねぇ。だから首領は最強なんだ」
「卑怯な手を使って、ただ人数が多かっただけだろ？　自慢できるほどの腕かどうか」
「てめぇ……」
「ごちゃごちゃ言う前に来いよ。そういう口だけの奴らは今まで腐るほど見てきてる。全部蹴り返してやったがな。おまえはそうじゃねぇってんなら自分の腕で見せてみろ」
指に挟んだ煙草で指され、ギンは表情を険しくして武器を構えた。
相手も相当な手練れ。だがサンジが負けることはなさそうだと思える。
ルフィは安心してクリークへ目を向けた。
刺さっていた槍を抜き、三本ほど床へ投げ捨てる。血は流れたが傷は浅い。皮膚が裂かれただけで大したダメージもなく、戦闘に対する支障もなさそうだ。
指を鳴らして状態を確かめ、良いと判断する。
ちょうどゾロとミホークの一騎討ちを見てテンションが上がっていた。
相手が誰であれ負ける気などなく、暴れたいと思っていたところ。彼は好戦的に笑う。
「小僧。おれとおまえ、どっちが海賊王の器だ？」
「おれ。おまえ無理」
クリークの問いに端的に返して、ルフィが駆け出した。対するクリークは一切動かず、にやけた笑みで彼を見るばかり。迎撃も防御も考えてない素振りである。
何かされる前に殴る。
ルフィが拳を握り、腕を後方へ伸ばした時、クリークが呟いた。
「パール。出番だ」
「御意！」
素早く駆けて接近する最中、二人の間に残っていたパールが割り込んだ。
彼の外見は一言で言えば異様である。

頭には真珠を模した被り物を置き、両手に小さな盾を持ち、体の前後から挟み込むように巨大な盾を装備している。鎧ではなく盾だ。その姿は流石のルフィでも小首をかしげてしまう。
少なくとも防御に絶対の自信を持っているのは確かなようだ。拳を伸ばして向かってくるルフィを見て逃げ出さず、両手を交差させて彼の攻撃を待ち受ける。
気にせずルフィは跳んだ。
パールが邪魔になるため真っ直ぐ接近し、伸ばした腕を引き寄せ、強烈な一撃を放つ。
ルフィのパンチが鉄製の盾を殴り、パールの巨体は動かぬまま、硬い音が鳴った。
「ブレットォ！」
「ハッハー！　無駄だ！」
ただ鉄を殴った音が響く。
至近距離でその姿を見、ルフィはダメージを与えられなかったことに表情を変えた。
完璧に防御されてしまった。その異様な姿はふざけている訳ではない。
数歩後ろへ下がって、少し距離を置いて改めて確認する。やはり変な格好には違いなかった。
「ハーッハッハッハ！　鉄壁！　故に無敵！」
「変な格好」
「変じゃない！　いいか小僧、おれはこれまで戦闘において敵から傷をつけられたことがねぇ。ただの一度もだ。おれはタテ男で、ダテ男ってことさ」
「いや、意味わかんねぇ」
自信満々な顔のパールにまたも首をかしげ、ルフィはどう反応してよいやら困惑する。
この状況を見て気分が良くなったらしい。
クリークが口を挟んで、勝利を確信した声色で言葉を紡いだ。
「これでわかっただろ。こいつらさえ居りゃ兵力など無くとも制圧

は簡単。てめぇら相手に伏兵を使うまでもねぇんだ。これが武力。抗いようのねぇ力にひれ伏し、とっとと死ね」

「死なねぇよ」

クリークの言葉に真っ向から返して、ルフィは強い眼差しで敵を見据える。

二対三。構図としては拮抗している様子ではない。

それでも静かに、戦いの火ぶたが切って落とされた。

ファイター（2）

ルフィは自身の帽子を投げ、コックたちの間に立つヨサクへ届けようとした。
向かってくることを知ったのだろう、彼自身も手を伸ばして受け取る。
距離はあったが見事に彼の手の中に入り、ひとまず帽子が傷つく心配は無くなった。これで余計なことを考えず自由に動ける。鼻息を荒くルフィが両の拳をぶつけた。
「ヨサク、帽子頼む」
「は、はい！　兄貴、お気をつけて」
「心配すんな。負けねぇよ」
傷は数か所。血が流れている。
しかし体は至って元気なままで、彼の目にも闘志が漲っている様子だ。
対峙するクリークは小さく鼻を鳴らす。
負けるなどとは微塵も思っていない。布陣は完璧。なぜ隠し持っていた船団を呼ばずにボートだけを用意させ、彼ら二人のみを連れてきたのか。彼らだけで勝てるからだ。
攻撃において右に出る者が居ないギンと、防御において勝てる者がないパール。
彼らを手足のように使い、自身も手を下せば、相手が何人居ようが負けるはずがなかった。
腕を組んだクリークは自らの手出しをやめ、まず部下たちの戦いを見ることに決めたようだ。
「殺しても構わん。ゼフを残して、こいつらはとっとと始末しろ」
「御意」
「お任せを」
答えた二人は前方を見る。
帽子を返すためにルフィは多少店の方向へ移動しており、サンジと肩を並べる位置。一度リセットされた光景だ。二対二の構図で改め

て向かい合う。
戦闘が始まったとはいえぶつかったのはほんの数秒。
敵の手の内を知るほどではなく、ルフィが能力者であること、サンジが蹴りを主体とする戦法であることはバレたであろうが、言い換えればそれだけ。さらにギンが攻撃的な戦い方をする人物であり、パールが見るからに防御を得意としているのは理解できる。
ルフィとサンジは冷静に敵を見ていた。
互いに協力した経験などなく、さらに言えば打ち合わせをする様子もない。
それでも自然と自分のすべきことを理解しているようで、彼らは敵を見たまま言葉を交わした。
「いいか、あいつはおれがやるぞ。別にこいつらはおまえがやっていいから」
「好きにしろ。さっきも言ったが、おれにとっちゃどうでもいいことだ」
分かり合おうとはせず、ただそれだけ。きっとそれだけで十分だったのだろう。
言葉を止めた瞬間に辺りが静寂に包まれ、しばしの沈黙。互いに動かず四人は動きを止める。全く動く素振りを見せないまま、数秒時が止まったかのようだった。
何をきっかけにしたのか、やがて動き出す。
ルフィが前方へ駆け出すと同時、応じるためにギンが走って、二人は正面から向き合った。
ゴムの体と奇妙なトンファー。どちらも滅多に見れない武器が衝突するため接近する。
先にルフィがパンチを繰り出し、ギンは防御のために腕を引いた。トンファーの柄に拳が当たって衝撃が伝わり、そう簡単に受け止められる物でないと知るや、後ろへ跳んで衝撃を逃す。
回避されたと、ルフィが眉間に皺を寄せる刹那、左手にあるトンファーが振るわれた。
この男、戦闘に慣れている。

たった一瞬の挙動で見切って警戒せずにはいられず、ルフィもまた後ろへ跳んで回避した。
ギンの攻撃が空を切る。その直後、まさかの光景で目が見開かれた。
入れ替わるように飛び込んできたサンジの蹴りが、身構える暇すら与えず腹へ突き刺さったのである。凄まじい衝撃が腹を起点に全身へ駆け抜けていた。
「ギンさんっ!?」
「ゴムゴムのォ!」
パールが驚く前方でギンの体が飛び、その時にはすでにルフィが跳んでいる。
上空へ片足を伸ばし、落下と同時に攻撃が繰り出された。
あまりにも息の合った攻撃の連続。
その光景を見ながら動けず、ルフィの足がギンの腹を踏みつけた。
「斧!」
「ぐはぁ……!?」
背から落ちて床を砕き、一瞬意識が遠のく。倒れたギンは動けなくなり、まだ気絶してはいないものの、そうなってもおかしくない状態で弱々しく腹を手で押さえた。
二人揃って信じられない攻撃力だった。
特に後から来たルフィはとどめを刺すと言っても過言ではない一撃。これを受けて気を失っていないだけでもギンの強さが窺える。しかし今は襲い来る痛みから動けそうにない。
戦闘総隊長として、クリークを除けば艦隊ナンバーワンの強さを誇るギンのまさかの姿を見て、パールが動揺する。今まで彼が倒された姿など、一度たりとも見た覚えがなかった。狼狽し、隙が生まれるのも仕方ないこととはいえ、その瞬間を見逃すほど生ぬるい相手ではないらしい。
ルフィをギンの傍らに置き、サンジが駆け出す。
芸もなく真正面からの突撃。パールにとっては恐れるに足らない行動だ。

どんな攻撃であれ鉄壁の盾で受け止める自信がある。相手が疲弊するまで何発受けたってダメージは受けない。なんなら、攻撃の隙を縫って反撃してやればいいのだ。
向かってくるサンジを目にして余裕を取り戻し、にやけた笑みが浮かべられた。
「ハッ！　おれの鉄壁を崩せた奴は、今まで一人として存在しねぇんだ！　来てみろ！　どんな攻撃でも受け止めてやる！」
「言うねぇ。なら見せてもらおうか」
眼前で強く左足を床へ叩きつけ、軸足を作り、腰を捻る動作を加えて右足の蹴りを放つ。
腹を守る巨大な盾へ一撃。ゴォンと独特の音がした。
狙い通りに当たったのである。ダメージはない、はずだった。しっかり盾で防いだはずが、なぜかパールは顔色を変えており、盾を通して伝わってくる衝撃に息を詰まらせる。
サンジはしてやったりと笑んだ。
盾を持っていても生身の前に置いているだけ。触れているのなら衝撃は伝わるはずだと思ったがまさにその通り。鉄壁が聞いて呆れるほど簡単な攻略法だった。
一撃を受けても仁王立ちして動かず、続いて二撃目。左足で正面の盾を蹴る。
衝撃が伝わり、わずかに咳き込む。
まだ動かない。
さらに右足で蹴りを叩き込む。
流石にたたらを踏んで体勢が変わった。思いのほか早い。
とぼけるような顔を作って、ぽつりとサンジが問いを放った。
「その盾、重そうだな」
「ゲホッ、ゴホッ、な、何？」
「海に落ちたらどうすんだ？　溺れ死んじまいそうだが」
思い切り地面に軸足を置き、今度はもう少し力を入れて、一際強く蹴りつけた。すると盾を打つ音が明らかにさっきと違っており、盾で受けたのに、パールの巨体は地面を離れる。

まさかの光景に本人も仲間も目を剥いていたようだ。
しかし一度地面を離れてしまった後ではどうすることもできず、パールの体は海に落ちる。
鉄製の巨大な盾を体の前と後ろに提げ、両手に小さな盾を持つのである。普段は鉄壁となって信頼を置くその盾が非常に重くて、今は彼の命を奪おうとする凶器となる。
これをそのままにしておけば死ぬ。
海の底へ沈んでいこうとする最中にそう思い、彼は慌てて盾を取り外して捨て始めた。
慌てたせいで呼吸は苦しい。動きにくいこともあって多少手間取ったものの、全て捨てて身軽になる。それでも元々が巨体で重さはあり、混乱しながら必死に泳いだ。
海上に顔を出し、自力で泳いでヒレの縁に掴まった。
近寄ったサンジは彼の顔を見下ろして、別段喜ぶ訳でもなく、平然と声をかける。
「捨てちまったのか。ま、当然だな」
「ゴホッ、き、貴様ァ！」
「じゃあなダテ男。雑魚に用はねぇんだよ」
言い終えてすぐ、見切れぬ速度で顎が蹴り上げられていた。
パールの体が飛ばされて再び海に落ちる。水柱が上がり、重りを捨てたせいで今度は体が沈まず、気を失った彼は大の字になって海面へ浮かんだ。
勝負はサンジの圧勝。
その様を見たクリークの額に青筋が現れた。
「おぉ～、すげぇな」
「これくらいどうってことねぇよ」
「チィ……ギン！　何やってやがる！　さっさとこいつらを殺さねぇか！」
すでに起き上がっていたギンが、多少ふらつきながらも駆け出す。トンファーを回転させて準備はできており、いつでも敵へ打ち込める状態。狙っていたのは背を向けるルフィだ。

なぜかルフィは全く反応せず、無防備に突っ立って居る。
見ていたコックたちとヨサクが驚愕するものの全く振り返ろうとしなかった。
「死ねェ！」
いよいよ距離が詰まり、攻撃が繰り出される。トンファーはルフィの後頭部に迫ったが、やはり回避しようとせず、代わりにサンジが動いた。
迫っていたトンファーを蹴り返し、ギンの体勢が崩れる一瞬。
素早く反撃して腹に蹴りが突き刺さった。
全身に走る凄まじい衝撃。そして痛みが彼の精神を揺るがす。
気付いた時には体が宙を浮いていて、意識が遠ざかるのを感じた。
たった一撃。
それだけで決着は着いてしまい、ギンもまたパール同様海に落ち、力なく浮いて勝負が終わる。
彼に背中を向け、クリークを見たままルフィが笑い、呆れた様子でサンジが嘆息した。
「ナイス、サンジ」
「おまえわざとだったろ。めんどくせぇ野郎だな」
あっさりと二人を倒してしまい、状況が変化する。
今度はクリークが一人残されて苦境に立った。自然と彼の表情は険しくなり、肩を怒らせ、二人を睨みつける。強い殺意が彼らを襲うが、大して怯えもせずに受け止められていたようだ。
計算が狂い続けている。最初から現在まで何度も何度も。
すでに彼の我慢は限界を迎えていて、激しい感情は抑えようがなかった。
「てめぇら、調子に乗り過ぎたな……もう我慢ならねぇぞ！　生きて帰れると思うなァ！」
「へぇ、我慢なんてできたのか。そんな顔には見えなかったがな」
「なんでもいいよ。さっさと来い」
二人がなんでもないことのように言ったことで怒りが頂点に達し、両の肩当てを取ったクリークはそれらを合わせ、新たな武器を作り出

した。
手に持ったのは奇妙な形の槍である。
爆発する槍、〝大戦槍(だいせんそう)〟。
思い切り振るって地面を叩き、衝撃と同時に爆発を起こした彼は、それを威嚇として二人の顔を睨む。一方の二人は感心するもののやはり怯んではいない。
「世間知らずのバカどもが、このおれを誰だと思ってやがる！」
「誰でもいいさ。海賊王になる気なら、おれがぶっ飛ばす」
「小僧、舐めた口もここまでだ！」
槍を担いで、クリークが駆け出す。
瞬時にサンジは退避しており、迎え撃つのはルフィのみ。先の言葉通り一人で戦うつもりらしい。誰も助太刀する様子がなく、言い換えれば邪魔が無い。
ルフィにとっては有難いことだった。
広い場所で思う存分戦える。これだけで勝利へぐっと近くなるからだ。
「死ねぇ！」
「死ぬか」
槍を振りかぶるクリークが走ってくる。ルフィは待ち構えて動かなかった。
繰り出される攻撃に半ば反射的に反応する。
横薙ぎで思い切り振り回すも、彼はその場でジャンプして飛び越え、即座に拳を握った。軽い動きで回避した後、即座の反撃はクリークの顔へパンチを叩き込む。
正面から顔面へ一撃。
痛みと衝撃で背をのけ反らせ、明らかに隙ができる。
続けてさらに腹へ蹴りを加えた。金に輝く鋼の鎧に阻まれるとはいえ、衝撃は確かに伝わった。耐え切れずに彼はたたらを踏んで後ろに下がる。明らかに体が反応できていない。
誰が見ようとも実力の差は歴然である。
隙を見出してさらにパンチが叩き込まれて、今度こそクリークは背

中から地面へ転がった。
「うぐっ、おぉ……！」
「んん、調子いいぞ」
すぐに立ち上がったクリークが再び槍を振り回す。しかしあっさりと避けられてしまい、まるで猿のように軽い動きで跳び上がって、槍の上を越えてしまった。
問題なく着地。そして反撃のため拳を握る。
その素早い挙動をまずいと思った彼は槍から左手を離し、前方へ伸ばした。
クリークは恵まれた体格を持っている。だが彼の強みはその肉体から繰り出される強靭な攻撃だけではなく、それ以上に危険なのが全身に仕込んだ武器であった。
ここぞという場面で使う大戦槍。拳を強化するためのダイヤ製のナックルダスターや、多数のピストル。肩当てから発射する毒ガス弾と無数の槍。そういった多数の武器を、自身が得意とする騙し討ちと併用して使い、数々の強敵を討ち取り、自身の艦隊を作り出した。
左腕の手首に仕込んでいたのは、小型の火炎放射器である。
サイズの関係上、使えるのはたった数度。それをこの場で使った。
攻撃のため前へ出ようとしたルフィが炎に迎えられてまともに食らう。肌に触れる熱は我慢できるほど弱くはなく、体を小さくして慌てて飛び退いた。
それを隙と判断するのは当然のことである。
「あぢっ!?」
「ハッハッハ！　ただ殴るだけの猿とは違うんだ、このおれ様はなァ！」
幸い、素早く逃げたおかげで火傷を負うほどのダメージはない。ただし逃げる際に作られた距離があまりにもわずかだったことで、槍が届く範囲で体が縮こまっている。
振るわれた大戦槍がルフィを捉えた。
触れる直前に両腕を掲げ、防御するも、直撃と同時に爆炎に包まれる。

殴り飛ばされたルフィは勢いよく地面を転がった。体には黒煙を纏わりつかせ、炎を浴びた時よりダメージが大きいだろう。一瞬、視界が奇妙に揺らいだ。
見ていたヨサクが声を上げた。コックたちも同じく強かな一撃に驚愕している。
彼らより近い位置に居るサンジは、至って冷静に見ていた。
確かに直撃で、防御を無視する攻撃力とはいえ、ルフィはすぐに立ち上がる。
さほど大きな問題はない。
熱と痛みを感じつつ、彼は平気な顔で拳を構え直していた。従ってクリークの苛立ちは募り、舌打ちを一つ、その後にふと体の力を抜いて槍を下ろす。
「チッ、てめぇは化け物みてぇに強い奴だな……負けたよ。おれには勝てねぇ相手だった」
「ん？」
「ここは退いとくとしよう。実を言えばさっき艦隊を失くしたことが堪えててな。これ以上は戦えそうにねぇ。心が、折られちまった。大人しく帰るから見逃しちゃもらえねぇか」
「お、そうか。なんだ、なんか拍子抜けする――」
「騙されんな。もう忘れたのかよ、おれが騙し討ちでそいつに殴られたのを」
後ろからサンジの声が飛ぶ。そのためルフィは反射的に振り返った。
「そういやそうだった。じゃあこいつやっぱり嘘ついてんのか？」
「おい、バカっ。こっち向くな。隙を見せりゃそいつは――」
視線が外れたことでクリークが笑み、両手で持った槍を全力で振るう。当然狙うはルフィ。気付いて顔の向きを戻そうとする彼の姿を捉え、再び防御の上から思い切り弾き飛ばした。
爆炎と共にまたも転がり、今度はすぐ飛び起きた彼は歯を剥き出しに怒りを見せる。
ようやく騙し討ちだと気付いたらしく、今になって怒りが込み上げ

てくる。
騙され易いのは弱点だろう。
見ていて気付いたサンジは頭を抱えて溜息を抑えられなかった。
「アホだ。あんなバレバレの嘘に引っかかるか、普通……！」
「ふんがーっ！　おまえ、よくも騙したな！」
「騙される方がバカなんだ。おれはてめぇと勝負する気なんざ初めから持っちゃいねぇ。おまえを殺すだけなんだからなぁ」
余裕を取り戻したクリークはズボンから何かを取り出す。
左手の指先にあったのは小さな玉だ。
それを見せびらかしつつ、やはり勝ち誇った笑みが浮かべられている。
「いいことを思いついた。てめぇは能力者だろう。つまり絶対に克服できねぇ弱点がある」
「なにィ？　あるか、そんなもん」
「どうかな。今おれたちが立ってる場所は海の上だ。しかも足場はいとも容易く壊れるただの板。どっちが有利になる戦場かはバカなてめぇでも理解できるな？」
指が玉を弾いて飛ばした。
地面に落ち、ころころ転がるそれはルフィの足元まで到達する。
「吹き飛んで溺れ死ね。おれに盾突くからこうなるんだ」
地面に落ちた衝撃を受けて数秒、小さな玉は大爆発を起こした。当然間近に居たルフィは爆風で飛ばされて、地面もまた同じようにダメージを受けて跡形もなくなる。
クリークとルフィの間に海が出来た。
それだけでは止まらず、クリークはさらに小型爆弾を取り出したかと思えば、容赦なくそれらを放っていく。まるでバラティエ自体を沈めてしまおうかと言うように。
ヒレがどんどん破壊されていき、足場が小さくなっていく。
海に落ちれば必ず死ぬ。まずいと思ったルフィは爆発を受けて傷ついた体で必死に跳び、瓦礫を足場にしながらレストランへと戻っていく。

反対にサンジは怒りの形相となり、爆発を掻い潜って前へ駆けていた。
「全て海の藻屑になれ！　おれを舐めやがった罰だ！」
「てめぇ、いい加減にしとけよクソ野郎！」
残った足場を的確に選び、次々飛び移り、強く蹴ってクリークへ接近する。
跳んだ勢いからサンジは蹴りを放った。応じたクリークは槍の柄で攻撃を受け止め、力ずくで押し返して距離を設ける。流石恵まれた体を持つだけあって筋力は凄まじい。
海に落ちる事無くヒレの残骸に着地し、両者は向かい合った。
ヒレは至る所を破壊されてバラバラになっている。元々の浮力のせいか、沈みはせずに浮かんでいるため、いくつかの浮島が彼らにとっての戦場となった。
冷静だった先程までと違い、サンジは激怒している。
いち早く避難したルフィはコックたちと共にその様子を見ており、些か驚いている顔だ。
「この店は、クソジジイの宝だ。てめぇみてぇな野郎が壊していいもんじゃねぇんだよ！」
「フン、宝だと？　馬鹿馬鹿しい。そんなもんに拘るのは弱ぇ証拠だ」
「あ？」
「たかが船だろう。おれならいくらでも手に入れられる。五十隻ばかり沈んだなぁ……だからなんだ？　また掻き集めるのは難しくねぇのさ。ただ敵から奪えばいいだけなんだからな」
眼差しが鋭くなる。更なる力が加わっていたらしい。
気にせずクリークは続けた。
「こんなちんけな船を宝にするくれぇならもっとでかい船でも奪ったらどうだ？　まぁ、無理だろうがな。たかがコックにそんな度胸もある訳ねぇか」
「何から何まで勘違いして語ってるとこ悪いが、てめぇのオツムには驚かされる。どうやら話しても無駄なようだな。それ以上口を開

かなくていい」
「誰に命令してやがる。おれを誰だと思ってんだ！」
「たかが海賊が、海のコックに逆らうな。三枚にオロスぞクソ野郎」
距離があると見てクリークが槍を下ろし、鎧に隠した銃を取り出そうとした、その時。浮島を蹴って飛び出したサンジは予想よりも速く接近しており、驚愕から全身が硬直した。
空中で姿勢を整え、間近に迫った時には天を向いている。
その状態で、彼の蹴りはクリークの顎を捉え、重い体を一瞬で頭上へ飛ばしていた。
見事なオーバーヘッドキックである。
素晴らしい動きにルフィが感嘆の声を上げる。
サンジは海に落ちることなく、素早く体勢を整えて浮島に着地した。
それからルフィに目をやって短く告げる。
「いつまでサボってんだ。おまえも手伝え」
「おう！」
答えたルフィは伸ばした両腕を使って自らを撃ち出し、素早く空へ向かった。
上空高くまで飛ばされたクリークへと追いつき、両腕を伸ばして、降ってくる彼を上から叩きつけるように一撃を与える。凄まじい攻撃は彼の落下を急速に加速させた。
鎧は壊れない。だが衝撃は無視できないほどである。
「ゴムゴムのバズーカ！」
「おうっ!?」
クリークが急速に落下してくる。体の前面は空を向き、サンジが見るのは彼の背面。
自身も跳び上がって迎え撃つ。
まるでルフィからのパスを受け取るように、強烈な蹴りをクリークの頭へ叩き込んだ。
「首肉（コリエ）シュート！」
「ぬがぁっ!?」

後頭部への一撃で視界が弾け、星が散る。さらに彼の体は空へ打ち上げられた。
助かった訳ではない。上からは尚もルフィが落下してくる。
再び両腕が空へ向かって伸ばされており、落下の力に加え、サンジの蹴りによって与えられた上昇する力が合わさって、クリークの体に凄まじい衝撃が与えられる。
尚もルフィは彼の鎧へ攻撃を与えた。
その一撃は先程より強く、決して壊れぬはずの鎧が破砕されたのだ。
「バズーカァ！」
「がっ……!?」
「キリがねぇな」
打ち上げて落とす。そんな攻撃の連続に嘆息するサンジが呟いた。
鎧が砕かれ、クリークは限界の状態。ギリギリ気絶していないだけだった。
そろそろ決着を着けるべきだろう。
また急速に落下してくるクリークを見つめ、サンジは右足の爪先で浮島を軽く叩いた。
「もう十分だろ。いい加減寝てろ――」
落ちてきたクリークが自らの眼前へ達した時、くるりと回って、背面から繰り出される蹴りが鎧を失った巨体を捉える。見切れぬほどの速度で数度。様々な箇所に蹴りが当たった。
「羊肉（ムートン）ショット！」
強烈なソバットが意識を刈り取り、飛ばされたクリークは滑るように海へ落ちる。
水しぶきが走って、落ち着いた後に残るのは静寂のみ。
他の二人と同様、海に浮かんでゆらりと漂い、決着は着いた。
終わってみれば呆気ないものである。
佇まいを直したサンジは彼らの姿を見て不敵に笑う。
たかがコック、されどコックだ。
海上レストランバラティエのコックは普通などではない。それは

彼らの脳裏に叩き込まれたことだろう。完全勝利の結果に大満足だった。
店の前で見ていたコックたちからわっと歓声が上がる。普段は決して仲が良いという関係性でもなかったが、大事な店を壊そうとする敵を前に意志を同じくし、今だけは違った。誰もが敵の撃破を喜び、荒くれ者とは思えぬ無邪気な様子で喜びを露わにしている。
サンジもそれを知り、呆れた笑顔で振り返る。
ルフィが降ってきたのはちょうどその頃で、何やら慌てている声が聞こえてきた。
「うおおいっサンジィ！　危ねぇ！」
「あ？　おまっ、こっち降ってくんなァ!?」
ルフィが頭上から降ってきて、逃げられるような距離ではなかった。
狙ってか図らずか、あまりの勢いで浮島がひっくり返されて、サンジを巻き込んで二人揃って海へ落ちる。せっかくの勝利が台無しであった。
すぐにサンジが海面から顔を出す。泳ぎは得意な様子で、服を着たままでも溺れることはない。
立ち泳ぎで顔を出したまま、表情を歪めたサンジはやれやれと首を振った。
「クソ、何やってやがんだ。めんどくせぇことしやがって」
「ぎゃはは、何やってんだサンジ！」
「うるせぇクソども！　何もしてねぇ奴が笑ってんじゃねぇ！」
上機嫌に笑うコックたちに返していれば、不審なことに気付いた。ルフィが顔を出さない。
いつまで経っても上がって来ず、なぜだろうと首をかしげる。
気になって水面に顔をつけ、目を開いて中を覗いた。するとルフィは、脱力して沈んでいくのである。苦しげな表情が確認でき、どう見ても溺れている。
「何やってんだ!?」
驚愕してしまい、咄嗟に顔を上げて深く息を吸い、海中へ潜る。

沈んでいく彼に追いつき、体を抱え上げた。ルフィは全く抵抗しない。体力どころか気力すらないらしく、体のどこにも力が入っていなかった。
すぐに海面へ到達して二人同時に顔を出す。
ぐったりした様子のルフィは自力で咳き込み、飲んだ海水を吐き出した。
サンジが近くにあった浮島を掴み、彼の体を抱え直す。やはりルフィは動けない。彼にとってはそれが不思議で、能力者が泳げないことを失念していたようだった。
「そうか、能力者は海に嫌われて泳げなくなるんだったな……初めて見たぜ。本当だったとは」
「ゲホッ、オェ。はぁ、ありがとう……」
「別にいいよ。なんだかんだで手伝ってもらった訳だからな」
ぶっきらぼうに答えたサンジは少し物憂げに彼から目を逸らす。
気付いた時には助けようとしていた訳だが、なぜそうしたのかはわからない。他人が困ってるなら助けるのは当然だ、と言うほど善人なつもりではない。しかも今回は考えるより前に行動していて、尚更いつもとは違うような気がした。
そう言えばバラティエの仲間以外と共闘するのは初めてかもしれない。
今になって思い出し、希少な体験をしたものだと思った。
サンジはルフィを連れて泳ぎ、歓迎するような態度のコックたちの下へ向かう。ゾロはまだ眠ったままだが、ヨサクも拳を突き上げて二人の名を呼んでいた。
脅威は去り、場の空気も変わる。
その中で唯一ゼフだけが何か思案する顔を見せており、神妙な表情になっていた。

語らう

ルフィは眠りこけるゾロの顔を見下ろし、傍らで胡坐を掻いていた。

目を覚ます気配はない。普段から寝ていることが多い彼でもいつもの様子とは違った。今はまるで死んだように、いびきの一つも掻かずに目を閉じている。

思わず心配になるのも無理からぬ姿だが少なくとも呼吸はしていた。

ひとまず大丈夫なのだろう。ルフィに限っては目を覚ますと信じているため心配はしていない。

ルフィの目が近くに座るヨサクを見る。

彼はひどく心配そうにしていて、不安が隠しきれない表情だった。

「ゾロは大丈夫なんだよな？」

「おそらくは……でも傷はかなり深いですし、一度ちゃんとした医者に見せねぇ限りはなんとも。この人の生命力ならまず死ぬことはないと思うんですが」

「うん、やっぱ大丈夫だ。ゾロはこんなとこで死なねぇよ」

「兄貴……」

「約束したじゃねぇか。ちょっと寝たらまたいつも通りになってるよ」

いつもの笑顔でそう言うルフィに、ヨサクは涙が溢れてくるのを感じ、ぐっと歯を食いしばる。腕で目元を拭うと無理やり呑み込んだ。

心配しなくても彼は起きる。

ヨサクもぎこちない笑みを浮かべて、しばらくは様子を見守ろうと佇まいを直した。

ルフィ自身も怪我を負っていた。だがそこまで深い傷はなく、すでに手当ても終わっている。体の各部に包帯を巻いているものの痛々しさは感じない。

笑顔を浮かべる程度には余裕が保たれており、ゾロが死ぬとは微塵も思っていないようだ。

そうしているとパティとカルネが近寄って来た。店を守ったルフィに笑顔を向け、振り向く彼へ親しげに声をかけ始める。やはり先程の戦闘にはそれなりの効果があったようだ。
「よぉ麦わら、さっきは助かったぜ。まぁ正直に言えばおれたちだけでもなんとかなったが」
「仕方ねぇからスペシャルローストビーフはおごりにしといてやる。つっても次は金払えよ？」
「あいつらどうしたんだ？」
「ああ、ボートに括りつけて適当に走らせといた。あれなら戻って来ねぇだろ」
「誰かに拾われりゃ助かる方法もあるさ。ま、しばらくは自業自得で苦しんでもらいてぇな」
クリークたちはすでに店を離れたらしい。もう脅威は消え去った。これ以上の戦闘はない。
ルフィは小さく頷く。
「そっか。んじゃまた店やるのか？」
「とりあえず今日はもう無理だな。客は戻って来ねぇだろうし、今回みてぇなことがあるとしばらく客足が遠のいちまう可能性もある。ちょっとばかし暇になるかもなぁ」
「ここ最近は忙しかったからちょうどいいだろ。それならやっぱり暴れとくんだったぜ」
「サンジは？」
「あぁ？　あいつなら二階じゃねぇか。この辺にゃ居ねぇよ」
「あいつになんか用か？」
「うん。ちょっと話しとこうと思って」
立ち上がったルフィはヨサクに目をやり、一言を残して歩き出してしまう。
「ヨサク、ゾロのこと任せた」
「うっす。兄貴はまた勧誘っすか？」
「ん～、まぁ聞いてみるよ。あいつがうんって言わねぇと連れてけねぇし」

首をかしげるパティとカルネの間をすり抜け、ルフィは一旦外へ出た。
二階へ上がるには階段を使うのが当然であるが、あいにく部外者の彼では船内で迷う可能性がある。方向音痴だと自覚しているため最も手っ取り早い方法を使う気だった。
外に出てから腕を伸ばし、二階の欄干を掴んで飛ぶ。
ちょうど飛び上がった先にはサンジが居て、唐突に現れたルフィに驚きの声を発した。
見事に欄干の上へ着地。しゃがんだ状態で彼を見る。
サンジの顔には早くも呆れの色が浮かんでいた。
「よっと」
「何やってんだ雑用。人のレストランをアスレチックにすんじゃねぇよ」
「しっしっし。こっちの方が早かったんだ」
「妙な奴だぜ、能力者ってのは……」
小さく呟いてサンジはさっきと同じように、欄干へ腕を置いて姿勢を崩す。そうして休んでいたようだ。口には煙草を銜えて顔からもやる気が失せている。
ルフィはそのまま欄干に腰掛け、海に背を向けたままサンジを見る。
「こんなとこで何やってんだ？」
「見て分からねぇか？　サボってんだよ。どうせ客は逃げちまったしな」
「海上レストランって大変だな。海賊に襲われたりすんのか」
「そうでもねぇよ。ここに来る連中はおれたちだけで追い返す。大した奴らは来たことねぇし、それ用の装備も置いてる。第一ここに居る奴らが海賊みてぇなアホどもだ。それなりに使えるんで大変だと思ったことはねぇな」
「ふぅん。ここのコックって海賊だったのか？」
「いいや、海賊にもなれねぇチンピラどもがほとんどだ。料理長だけは元海賊だがな」

「あの長ぇ帽子のおっさんだろ。うーん、どう考えても長過ぎだな、あれは」
「会ったのか」
「海賊が来る前にな。そういやグランドラインのこと知ってるっぽかったな」
ふむふむと頷く彼に苦笑する。
戦闘を終えたばかりで驚くほど気楽だ。疲労も感じさせず、すでに思考が切り替わっている。
こうした状況に慣れているのだろう。海賊という話、嘘ではなさそうだった。
少し前とは空気が全く違う。隣に居るのは相変わらずルフィだが、気の抜けるような穏やかさは感じなかった物。さっきは見えなかった何かが見える。
ルフィは妙に親しげな態度で話しかけてくる。
今はそれが煩わしくなかった。
「サンジはなんでこの店で働いてんだ？」
「あ？　なんだいきなり」
「そういうの聞いてなかったろ。いっしょに居た時はおれたちが海賊だって話してて」
「まぁな……面白い話じゃねぇよ」
「面白さなんて求めてねぇぞ。おまえの話が聞きてぇんだ」
ふーっと多く煙を吐き、海を眺めて口を開く。
ぼんやりした声で彼は話し始めた。
「隠すほどのことでもねぇ。つまらねぇ話だ。死にかけてたところをクソジジイに助けられて、一緒に海上レストランを始めた。ここも元々は二人だったのさ」
「へぇ」
「最初はそりゃ散々だったぜ。客は来ねぇし、ジジイは片足、おれはガキで半人前。コック募集で来る連中は柄の悪ぃチンピラばっかり。せっかく客が来ても悪評が立っちまうし、それでまた客足が遠のくこともあった」

「でも楽しかったんだろ」
「んん？」
「そんな顔してるぞ」
わずかな時間ルフィと目を合わせ、邪気のない笑顔に負けて苦笑した。
そんなことを言うつもりはなかった。しかし指摘されたところで否定する気にはなれない。今の自分なら頷いてもいいのだろう。
リアクションはなかったが心の中では肯定して。
サンジの目は再び海を見る。ルフィもそれでよしとした。
「楽しいとか楽しくねぇとか、そんな簡単なもんじゃねぇけどな。おれはジジイに育てられて、色んな物を叩き込まれた。料理と蹴りもな。返しきれねぇほどの恩がある」
「うん」
「だから恩返ししなきゃならねぇんだよ。あいつが命懸けで救ってくれたように、おれも命捨てるくらいのことしねぇと割に合わねぇだろ。おまえの仲間になるってのは、まぁそれなりに面白そうではあるが、一緒には行けねぇんだ。悪いな」
「ふぅん……まぁそう言うんならいいけどよ」
納得しているのかしていないのか、ルフィは腕を組んで難しそうな顔をする。何かを考えているのだろうか。しきりに首をかしげる様はどう見ても納得できていない姿だった。
考えてもわからない。
ならば言葉にしてみようと、言い出し始める。
「たださ、おれが勝手に思っただけだけど」
「おう」
「命捨てることは恩返しじゃねぇぞ。そんなことのために助けたわけじゃねぇ」
「何……？」
「おれも昔、海賊に助けられたことあるんだ。シャンクスって言うんだけど知ってるか？」
その名前には聞き覚えがある。反応はしなかったがサンジは彼の

顔をじっと見ていた。
興味がないため詳しく調べようとはしなかった。しかしそれでも自然と耳に入ってくる名前。有名な海賊なのだろうということだけ知っている。
今まで話を聞いていたルフィも自分の話をし始める。
思い出すのは子供の頃。海賊になりたい、そう言っていた幼き自分だ。
今は本当に海賊になった。
思い出せば懐かしく、ふと笑みの様子が変化する。サンジはその様を見つめていた。
「他人を守ろうとするんだから死んで欲しくて助けるわけじゃねぇと思う。生きて欲しいって思って助けるんじゃねぇかな。少なくともおれなら絶対そうするぞ」
「そりゃあそうだが」
「それに恩返しのために助けたわけでもねぇぞ。シャンクスも長帽子のおっさんも、そんなことのために命賭けたんじゃねぇ」
ルフィは被っていた麦わら帽子を手に取り、見つめながら話し出す。
どんな思い出もそれと共にあった。
出会ってから。別れてから。自身の船出の後もずっと共にある。
懐かしく想う感情を抱きつつ、その笑みはひどくやさしい。
「シャンクスはこの帽子を預けて行ったんだ。いつか必ず返しに来いって。それは絶対に死ぬなって意味でもある。おれはこの帽子を返すまで絶対に死ねねぇ。約束破りたくねぇもんな」
「それがおれとどう関係あるってんだよ」
「おれはシャンクスから何か求められたことなんてないぞ。よくからかわれて遊ばれてたけど、死ねなんて言われたことねぇし、助けてやったから恩返せとかそういうのもねぇ。長帽子のおっさんもきっとそうさ。きっとそんなのどうでもいいって思ってる」
「どうでもいい、か」
「なぁ、サンジはやりたいこととかねぇのか？　ここで働くこと以

外にさ」
「……あるよ」
ぽつりとサンジが言った。
その声色に思わず振り向く。彼は海を眺めていて、視線は合わなかった。
「おれもいつかグランドラインに行こうと思ってる。まだ時期じゃねぇってだけでな。グランドラインに入って、オールブルーを見つけるんだ」
「オールブルー？」
「知らねぇのか」
彼に顔を向けたサンジは笑みを浮かべている。さっきとも違って子供のような、無邪気さが見えるそれだ。初めて見る表情はルフィの好奇心を刺激したらしい。
初めて聞く言葉に興味を持ち、やがて態度も変わり始める。
「オールブルーってのは海域の名前だ。ただし普通の海域じゃない、かなり特別のな。イースト、ウエスト、サウス、ノース、四つの海に居る全種類の魚が住んでる海。誰が語り出したか知らねぇが伝説の海と言われていて、そう簡単に見つけられるもんじゃない」
「へぇ～全種類の魚。食い放題じゃねぇか」
「そりゃコックにとっちゃ楽園だよ。だがおまえは食い意地しかねぇのか。その海の景観に想いを馳せるとか、そういうのがあってもいいだろ」
「けいかん？」
「伝説の海って言うんだから、そりゃあその海は美しく――」
サンジは朗々と語り、ルフィも興味津々に耳を傾ける。
面白い話だった。初めて聞くがあっという間に引き込まれて熱心な態度になり、気になったことはすぐに質問して、会話は自然な様子で弾んでいた。
しばし二人は時間を忘れて語り合う。
オールブルー。
その場所は一体どんなところか。

想像が膨らみ、言葉は止まらず、二人揃ってひどく楽しい時間が続く。
いつの間にか三階、気付かれていないがゼフが立っていた。階下ではしゃぐ二人の姿を目にし、微笑ましそうな、それでいて何かを思案するような顔になっている。
彼は敢えて声をかけず、静かに自分の部屋へ戻る。
二人はそのことに気付かないまま、その後もしばらく話していた。

＊

夕食時になった時、職員専用の食堂にはルフィたちの姿があった。
戦いは終わり、平穏を取り戻したがまだ出航せず、何やら二の足を踏んでいるらしい。
大声を張り上げるパティの隣でルフィが腕を振り上げていた。
「てめぇらメシだぞォ！　さっさと来やがれこの木偶の坊どもがッ！」
「メシィィィ～！」
「つーかなんでてめぇまではしゃいでやがる！」
急に顔を近付けられ、ゴスッと鈍い音を立てて頭突きをされた。ゴムの体にダメージはない。ルフィは平然と受け止め、額を触れ合わせたままパティが声を低くする。
「おまえ海賊だろ。しかもお客様ですらねぇ。まさかタダメシ食えるなんて思ってねぇよな？」
「ええっ!?　おれたちの分ないのか!?」
「ある訳ねぇだろ！　いいか、ここはバラティエで働いてるコックのための食堂だ！　お客様は一階の店内で食事を召し上がる！　そしててめぇはただ二階に来た侵入者でしかねぇ！」
「おれはこの店の雑用だぞ！」
「そりゃてめぇが勝手に決めただけだろうがっ！　いいから出てけ、海賊め！」
二人が言い争いをしている内に続々とコックたちがやってきた。

なぜ言い争っているのかはわからないものの、さほど興味も持たずに我関せずと席へつき、食事を始めようとする。
そうこうしている内にサンジも来た。
彼もまたいつもの席へつこうとしながら、ルフィと睨み合うパティへ声をかける。
「なんだ、また腹減ったって言ってんのか？」
「ああそうさ。まったく神経の図太い野郎だ。せめて金払うんなら食わせてやってもいいが、人様のメシをタダで食おうなんざ身勝手が過ぎるんだよ」
「金はない！　でも働けるぞ」
「てめぇに働かれるとこっちが損するんだ！　ついさっきだ、皿ひっくり返して割ったのは！」
「食わしてやれよ。そしたら静かになる」
サンジは冷静にそう言った。まるでルフィの味方をするようである。
不審に思ったパティは厳めしい顔を彼に向けた。
タダで食わすなどとんでもない。そう言いたいのは顔に張り付けてあるのでよくわかる。その彼を見ようとせず、すでにサンジは食事を始めようとしている。
「賄いだってタダじゃねぇんだぞ、店の売り上げから調達した食料で料理を作ってんだ。それをこの店の人間でもねぇ、しかも皿を割ってマイナスにしようとする奴に食わせるってか？　ふざけんじゃねぇ！　金か労働か、何かしらの見返りは必要だ！」
「コックは腹減ってる奴にメシを食わせるのが本分だろ。小難しいこと言ってんじゃねぇ」
「小難しいだぁ？　それが労働ってもんだろうが。それをこの海賊風情はわかっちゃいねぇ」
「肝っ玉の小せぇ野郎だな。そんなだから腕も上がらねぇんだろ」
「何ィ……!?」
徐々にヒートアップして、いよいよ喧嘩が始まろうかという時。
周囲の期待を裏切り、そこへゼフが現れた。食事の際には彼もよく

顔を見せる。普段の出来事とはいえ、今日ばかりは良くも悪くもタイミングがばっちりだったらしい。
「いい加減にしねぇか、バカ野郎ども。食卓で怒鳴り合うんじゃねぇよ」
「チッ……命拾いしたな」
「どっちが」
「おいパティ、食わせてやれ。寝てる野郎と看病してる野郎にもな」
自分の席へ向けて歩きながらゼフが言う。意見はサンジと同じだった。そのためパティは驚いてしまい、一度は引っ込めたはずの言葉を今度はゼフへと投げる。
「オーナー、しかしこいつは……！」
「労働なら例の海賊を追い払った、それでいいんじゃねぇのか」
「いやしかし、流石にそれだけじゃ甘過ぎるのでは」
「それにおれは、金も労働もいらねぇから食わせてやりゃいいと思ってる。おまえらは知らねぇのか？　飢えの苦しみが、どれほど辛い物なのか」
小さく呟かれた言葉が妙に重々しく、食堂の空気が一変する。
サンジも目を伏せて口を噤み、コックたちもまた面白がる態度をすっかり消していた。
そう言われては何も言い返せない。オーナーの意味のある一言だ。
渋々という顔だったがパティはルフィに目をやり、表情も険しく頷く。
「……用意してやる。ただし今日だけだからな」
「やったぁ！　ありがとなおっさん！」
ルフィが無邪気に喜ぶ。
量はそれなりに作っている。その中から仕方なくパティが彼らの分も用意し始めた頃、狙い澄ましたかのようにカルネが部屋へ入ってきて、彼の名を呼んだ。
「おい雑用、電伝虫で通信が入ってる。相手はおまえをご所望だ」
「おれ？」
「仲間だっつってたぞ。確か、うそ……なんて名前だったかな」

「ウソップ!?」
その言葉にルフィが驚愕して肩を跳ね上げさせた。あまりにも大きな変化にサンジやパティを含めたコックたちも思わず注目してしまう。
呟かれたウソップの名に、カルネがあぁと笑みを見せた。
「あぁ、そいつだそいつ。おまえがここに来てんじゃねぇかって言ってきてよ」
「どこだ電伝虫！　すぐ案内してくれ！」
「なんだよ、そう慌てんなって。こっちだ」
カルネが先を歩いてルフィがついていく。二人は部屋を出て行った。
逸る気持ちを抑えて歩調を緩めるのが難しい様子である。
すぐに別の部屋へ入って電伝虫を見つけた。
受話器が外されて置かれている。すぐさまルフィがテーブルに駆け寄り、受話器を取る。向こう側にウソップが居るのだろう。そう思って多少慌てながら声をかけた。
「もしもし、おれはルフィ。海賊王になる男だ」
《ルフィか！　こちらウソップ！　おまえ大丈夫なのか！》
「ウソップぅ！　おまえこそ無事だったんだな！　港に戻ったら居ねぇからびっくりしたよ」
《ああ、色々あったからな……》
元気な声で安心した。相手は確実にウソップだ。
ルフィも朗らかな笑顔になり、ほっとして声が柔らかくなる。
「よかった、とりあえず無事だったんだな。何があったんだ？」
《でっけぇパンダは見たか？　あいつに軍艦投げられちまって、おれたちにもどうしようもなかったんだ。おまえら大丈夫だったか？》
「ああ。おれたちが海に出た時はなんもなかったぞ」
《そういや船はどうしたんだ？　メリーはなかったはずだろ》
「ヨサクの船に乗ったんだ。でもどこに行けば会えるかもわかんねぇし、適当に進んでたらここの奴に助けてもらってさ。あ、そいつ仲間にしようと思ってんだよ」

《仲間？》
「おれたちのコックだぞ」
《そうか。まぁ何があったのか知らねぇけど、とにかく無事ならよかった》
ウソップは安堵した様子で嘆息する。
別れている内に何かあったのだろうか。ルフィたちが遭難し、救出され、戦っている間に彼が何をしていたのか気になった。少なくとも体調が悪いようには聞こえない。だがどこか様子がおかしいように感じられて、ふとルフィの表情が変わる。
今は誰と一緒に居るのだろう。
不思議にもまずそれが気になって、想像していながら問うてみた。
「なぁウソップ、今いっしょに居るの誰だ？　メリーにはナミが居たってヨサクから聞いてるけど、他のみんなはいっしょなのか？」
《いや、シルクはナミと一緒に居たらしい。だから一緒には居ねぇ……おれと一緒に居るのは、キリとジョニーだ》
「そっか。二人も無事なんだな」
《それが》
言い辛そうに言葉を詰まらせ、会話が数秒止まる。ルフィは小首をかしげた。
問いかけた方がいいのだろうかと思う頃、顔は見えないものの表情がわかるようで、恐る恐るといった様子でウソップが話し始める。
妙に緊張する一瞬だった。
《キリが怪我をして、まだ目を覚まさねぇんだ。おまえらとはぐれてからずっと眠り続けてる》
「え……キリが？」
傍から見ていて変化は明らか。
カルネが見る目の前でルフィの顔から笑みが消える。相当の衝撃を受けたようだった。
立ってはいるが全身から力が抜けて、奇妙な雰囲気を持っている。話を聞いていて受ける印象としても決して良い流れではなかった。
「キリが、なんで」

《……おまえのじいちゃんの部隊の、副隊長みたいな奴と戦って、おれたちを守るために》
「そうか」
《でも命に別状はねぇんだ。たまたま辿り着いた島で医者に出会ったし、無償で治療してもらってさ。もう峠は越えてる。死ぬことはねぇって。ただ……目覚めねぇだけで》
聞いた途端にルフィは黙り込んでしまい、何かを思案するような真剣な顔を見せる。さっきまでそこに居た人物ではない。少なくともカルネの目には別人の如く映っていた。
沈黙を苦しく思ったか、ウソップが声を明るくして言い出す。
《心配すんなって。あいつがそう簡単に死ぬ訳ねぇじゃねぇか。医者のお墨付きももらってるし、今はただすやすや寝てるだけで、おれとジョニーがちゃんと見てる。大丈夫だ》
「うん、そうだな。頼んだぞウソップ」
《それよりシルクと連絡がついたんだ。あいつはやっぱりナミと一緒に居た。メリーも無事で、今も一緒に行動してるらしい》
「ほんとか？　どこに行ったんだ」
《おれたちとはぐれてすぐ、ナミの故郷に戻ったそうだ。何か訳アリなんだってよ》
再びルフィの様子が変わる。気を持ち直し、仲間の安否に関わって真剣みが強まった。
一転して頼もしい姿。カルネは目を丸くする。
「場所は」
《ココヤシ村。色々厄介らしくてな、敵が居るみたいでナミの家で身を潜めてるってよ。おれたちにもすぐ来て欲しいって言ってた。ナミのことは、まだよくわからねぇ》
「おっさん、知ってるか？」
「ああ。ココヤシ村はここからそう遠くねぇ。真っ直ぐ向かえば一日もかからねぇだろうな」
「ウソップ、おれたち結構近くに居るみてぇだ。すぐ行ける。おまえらは？」

《できればすぐにでも動きてぇが、キリのこともある。せめて起きた状態でもう一回医者に見せてから出航してぇ。無理に動かすのは気が引けるしな》
「わかった。それでいい」
ルフィは頷き、一秒とかからず決心する。
「おれたちはすぐその村に向かう。やっぱり離れてちゃだめだ。仲間はいっしょに居ねぇと」
《こっちもできるだけすぐ動く。なぁに、キリが居るんだ。道に迷うことはねぇからな》
「あ、そうか。おれたちだけじゃちゃんと辿り着けるかわかんねぇな。ヨサクが居るけど、おれもゾロも方向音痴だし……それとよウソップ、こっちも色々あった。ゾロも怪我して倒れてんだ」
《何ぃ？　ゾロまでか。あいつに怪我させるなんてどんな相手だよ》
「会った時に話すよ。うーん、ヨサクに任せるしかねぇか」
《それがいいな。おまえに任せるのは不安過ぎる》
ようやく余裕を取り戻して冗談を混じらせられるようになってきた。
笑顔を取り戻したルフィはおそらく笑っているだろうウソップに向け、元気な声を届かせる。
「ゾロのことは任せろ。だからウソップ、キリのこと頼む」
《任せろ！　おれだっておまえらの仲間なんだからな》
「合流はココヤシ村で。全員生きて再会するんだ」
《おう！》
二人は別れを告げて受話器を置く。
手を離してすぐルフィは決意を感じる表情となって振り返った。
傍にはカルネが居る訳だが、いつの間にか閉じられた扉の前にサンジが立っている。腕を組んで真剣な顔つき。じっとルフィの顔を見ているのである。
視線を交わらせて数秒。沈黙したままどちらも動かない。
ルフィは敢えて言葉を発さず、彼をじっと見つめていた。果たして

それが何を意味するのか。それは視線を向ける本人と受ける当人しか理解できないだろう。
やがてサンジが溜息をつき、視線を切る。
「急いでるらしいのはわかるがな。出発は明日にしろ。ココヤシ村が近いっつっても夜の航海はそう簡単なもんじゃねぇ。今日はここで夜を明かせ」
「いいのか？」
「金は取らねぇよ。ウチは宿じゃなくてレストランだからな」
サンジが振り返って扉を開け、先に部屋を出ようとする。
背中を向けたまま静かな声で言われた。
「メシが冷めちまうぞ。さっさと戻って来い」
「おう。あったけぇ方がうめぇもんな」
続いてルフィが歩き出して扉へ向かい、二人は順番に部屋を出ていく。
その時カルネはわずかに小首をかしげた。
何が、という訳ではないが不思議に思う。
サンジの様子がいつもと違っているように思えて仕方なかったのである。

クソレストラン

朝日が上り、海が照らされる頃になるとルフィたちはすぐに動き出した。

合流の地が決まった。ならばすぐに出航を考えるのは必然である。

仲間たちのことが心配だった。一刻も早く駆けつけてやりたいと思い、キリを心配する気持ちはあるものの、そちらはウソップに任せた。話ならば後で聞く。

今はそれよりもナミとシルクだ。先にはぐれた二人がココヤシ村で待っているらしい。

すぐに出航をと考えるのだが、小舟とはいえそれなりの準備は必要だろう。そう考えてルフィはコックたちに食料をねだり、図々しくも必要以上の量を受け取っている最中だった。

三日分の食料でさえ一食で平らげる彼。それだけの大食漢だと自覚するため、要求は激しい。

コックたちは呆れながら一応ルフィに従っている。

その光景を見るサンジはやれやれと首を振っていた。

「まだ持ってくのかよ。一日かかんねぇ航路だろ？」

「でも何が起こるかわかんねぇのが航海だぞ。おれたち遭難して死にかけてたからな」

「そりゃおまえが食い過ぎたせいだろ。その辺でいい、もう渡すな」

「え～？」

「おまえら助けるためにおれたちが死んじまったら訳分かんねぇだろ。食料にも限りがあるんだ。多少はおれたちのことも気遣え、アホ」

近くでサンジが茶々を入れつつ、準備は徐々に進んでいく。

食料を詰めた袋を持って外へ出れば、昨日壊れたのとは逆側のヒレを歩き、縁にはすでにヨサクとゾロがボートに乗って待っている。出航準備は整っているらしい。

今日はゾロも目覚めていた。当分は起き上がれないほどの大怪我だろうに、一体どんな精神力か、平気な顔をして起き出して普通に動

いている。その姿には誰もが驚いたほどである。
後からやってきたルフィを見てゾロが顔を上げ、口を開いた。
やはりその手に持つ袋は必要以上に膨らんでいるように見えてしまう。
「そんなに持ってきてどうする気だ。この船にも定員ってのがあるんだぞ」
「大丈夫だって。そんなに重くねぇし」
「いやどう見ても重いだろ。おまえが重いと思うかどうかじゃねぇ、船の限界なんだ」
「んん、大丈夫だ。気合いでなんとかなる」
「こいつ……もし船が沈んでも助けねぇぞ」
「兄貴、気持ちはわかりやすが、それは助けましょうよ。ルフィの兄貴は泳げねぇんだから」
至っていつもの彼らだった。
文句を口にしつつもゾロは止めず、ヨサクが袋を受け取って積み込み、ルフィもまたぴょんと跳んで小舟に乗った。多少揺れるが転覆するほどではない。
日は出たばかり。航路も教えてもらってヨサクが覚えた。
準備は万端。
いつでも出航できる手筈となる。
コックたちは見送るために入り口へ集まり、彼らへ笑みを向ける。
その中には当然サンジの姿もあって、旅立つ三人を見送ろうとしていた。
「メシを食う時は食料の残りにも気をつけろ。今回みてぇに助けてもらえるとは限らねぇ。おまえらだって餓死なんて終わり方は嫌だろ」
「うん。いやだ」
「ならちょっとは考えて食え。いいな」
「サンジが来てくれりゃそんな心配だって無くなるんだ。ほんとに来ねぇのか？」
「言ったろ、おれはこの店でやることがある。おまえらとは一緒に

行けねぇ」
「……そっか」
寂しがる顔を見せたルフィだったが、パッと笑みを浮かべるとしつこく縋るのをやめた。
彼が決めたならそれでいい。心から仲間にしたいと思っているものの、彼の決定を無理やり覆させるのは何かが違って、それで喜べるとは思っていなかった。
サンジとはここで別れる。
けれど昨日の顛末から約束したのだ。いつか彼がグランドラインに入って、オールブルーを見つけた時には、海賊王になった自分に料理を振舞ってくれと。そう頼めばサンジは笑顔で頷いた。腹がはち切れるほど美味い料理を食わせてやる。
その約束を胸にしていれば別れも辛くはない。
いずれまた会うだろう。そう思って出航しようとしていた。
「じゃあなサンジ。おまえがオールブルーで作るメシ、期待してる。また会おう」
「ああ。そん時にはおれも今より腕を上げて、おまえが悲鳴上げるくらいの料理を――」
「待て」
二人が笑顔を向け合っていると制止の声が入った。
振り返ったサンジの目には、三階に立つゼフの姿が入る。仏頂面で普段より険が強く、せっかくの旅立ちの瞬間になんて顔だと思ってしまった。
「雑用、出航は少し待っちゃくれねぇか」
「ん？　なんで？」
「理由はすぐわかる。おいサンジ、おれの部屋に来い」
「あぁ？」
突然名指しで呼ばれて怪訝な表情になる。周囲ではコックたちもざわついていた。
言い終えたゼフはすぐに自分の部屋へ引っ込んでしまい、真意を問うこともできなくなる。

仕方ないと思った。
ルフィの顔へ目をやったサンジはバツが悪そうに謝り、すぐに歩き出す。
「悪いな。ちょっと待ってやってくれるか」
「ああ、いいぞ。すぐ終わるんだろ？」
「さぁな。突然何言い出しやがったのか」
「待ってる。多分、おれにとってはそっちの方がいいだろうし」
「ん？」
妙にやさしげに笑う彼の言葉はよくわからなかったが、一人歩き出して店内へ戻り、階段を上って三階へ赴く。店の人間は皆が外へ出ていた。内部に居るのは彼とゼフだけだ。
すぐに到達してノックをせずに扉を開ける。
彼は椅子に座って背を向けており、腕を組んで何やら様子が違う。
訳が分からず眉間に皺を寄せると同時、ゼフは簡潔に言った。
「おまえはクビだ。今すぐここを出ていけ」
「――は？」
全く身に覚えのない、欠片も想像していなかった冷たい言葉。
思考が停止したサンジはなんと答えれば良いのかわからず、しばし立ち尽くす。
しかし言い放ったゼフの態度に迷いはない。重ねるようにさらに言った。
「おまえに食わせるメシもねぇし、おまえを立たせるような厨房もねぇんだ。出てけ。この店にはもうおまえなんざ必要ねぇんだよ」
「な、何言ってやがる。意味がわからねぇ」
「意味ならわかるだろう。おまえの居場所はここにはねぇ。それだけだ」
そう言われて呆然と立ち尽くしてしまい、何も言い返せなくなった。
だがサンジは、自分でも驚くほどその言葉を聞いて焦りを抱いていなかった。
なぜそう言われるのか、理由はわからない。だがわかる気がする。

複雑な心境に困惑するものの、取り乱すようなことはなく、視線を落としてあくまで冷静に考えようとしている。それでもやはり困惑があって上手くはいかない。
自力で答えを見つける前にゼフが呟いた。
「バカが大人の振りなんぞしやがって。おれがそんなことを頼んだか」
「何を……」
「どこへでも行っちまえ。もう、自分に嘘をつくのはやめろ」
ぶっきらぼうに、それでいてどこかやさしく。
サンジはゼフの背を見つめ、聞き逃さないようにその声を聞いた。
「帰って来る場所はここにあるだろうが」
愕然として、言い知れない感情に支配される。不思議と足がふらつきそうだった。
何が言いたいのか、大体は伝わった。だからこそ思うが本当に分かりにくい男である。
銜えていた煙草を携帯灰皿へ押し込み、また沈黙する。
妙な感覚だ。
嬉しくもあるし、後悔が残りそうな気もする。きっと自分の本心はいつの間にか掘り起こされていたのだろう。自らの野望のために命を賭ける二人を見て、自分ならばと重ね合わせて。
無意識的だったが今となっては無視できるはずもない。
やはり自分は、海へ出たい。オールブルーを見つけたいと思っている。
逡巡し、必死に考え、顔を上げたサンジは口を開いた。
多くを語らないゼフへ向けて、最後の確認を行う。
「ここにおれの居場所はねぇんだな」
「そうだ」
「いいのかよ。副料理長を追い出しちまってよ」
「自惚れるなよチビナス。おまえが居ねぇくらいで潰れるような店じゃねぇ」
「どうだかな。ウェイターも居ねぇ、チンピラみてぇなコックしか

居ねぇ店じゃおれの存在は有難かっただろ。おれが居なくなっちまったらどうなるのか見物だな」
「どうにもならねぇよ。これから先もずっと続いてくだけだ」
心は驚くほど穏やかだ。だから冷静に話すことができる。
背を押されていると感じていた。きっと心の内まで理解されていて、強がりをやめろと言いたいのだろう。恩返しをしたいと思っていたのは嘘ではない。しかしルフィの話を聞いて、そんなことをして欲しいと思っていないと聞かされて、残念に思って、安心もした。
思えば、必然だったのかもしれない。彼に出会ってこんな気持ちになるのは。
もうやめようと思う。ここまで言わせてしまった後で逆らっては、それこそ料理長の顔に泥を塗ることになるだろう。それだけは絶対に避けたかった。
右手で髪を掻き、気分を落ち着けて深く息を吐く。
驚きは大きい。それでもサンジは瞬時に決断しようとしていた。
自身が海賊として旅立つ決心。長く過ごした、故郷を離れる決意を。
「あーそうかい。そこまで言うなら出てってやるよ。ちょうどおれもこんなクソレストランとはおさらばしたかったところだ。レディも居ねぇし、コックは口も手癖も悪ぃ連中ばっか。よくもまぁ今まで潰れなかったもんだな」
「残念だったな。この先もずっと潰れねぇよ」
「そりゃ残念だ。ならせめて売り上げが落ちることを願ってるよ」
「勝手にしろ」
長居をする気はない。そうと決めれば体はすぐに動き出し、振り返って扉を見る。
ドアノブに手をかけたところで動きが止まった。
表情が変わり、後ろを見ずに思案する。
互いに背を向け合っている奇妙な状況。
そんな光景でも自然な姿で言葉が交わされた。
「そういや、信念、って奴だったか……少しはわかったかもな。あい

つと話してたら特に。多少癪だが、確かにおれには欠けてたもんだったかもしれねぇ」
小さく呟いてドアノブを捻り、扉を開ける。
そこを潜る一瞬で達観した様子の笑みが浮かんでいたようだ。
「ま、それも昨日までだがな。後悔すんなよクソジジイ。止めたってもう遅えぞ」
軽く告げて扉を閉めようとする。その刹那、確かに聞こえた気がした。
「ようやくチビナスは卒業か――」
ぱたんと扉が閉まる。
サンジはしばしそのまま佇んだ後、落ち着いた心境のままで歩き出した。
部屋を移動して簡単に自分の荷物を纏める。
旅立ちを決めたのならば迷いは微塵も持っていない。手早く準備を進めていき、おそらく部屋に着いてから五分と経っていないだろう。
自室を出て、レストランへと移動する。
無人の店内を見回して思った。
この場所で色々なことがあった。まだ子供だった時分から働き始めて、毎日何かしらを学び、ゼフに扱かれながら必死に喰らい付いて成長していた日々。
確かにそうだ。思い返してみれば厳しくも楽しい、そんな過去だった。
ふと椅子に座って、だらけた姿勢で天井を見上げる。思い出はいくらでも蘇ってきた。
煙草を銜えて火を点けて、よくよく考えれば吸い始めたきっかけはゼフだったか。彼にチビナスと呼ばれることに腹を立てて早く大人になろうと吸い始めたような気がする。
確か、コック募集のチラシを出して一番最初に来たのはパティとカルネの二人組だったはず。当時は本当にチンピラのような恰好をしていて、妙な奴が来たと思ったものだ。けれどゼフは彼らを雇い、共

にコックとして働き始めて、それが今日まで続いている。
海賊と戦う機会も少なくなかったが、客を蹴ることも少なくはなかった。
口の利き方を知らない、程度なら見逃すものの、身内を悪く言う奴には特に容赦していない。それでいて本来彼を止める立場のゼフまで客を蹴るのだから、悪評が広がるのも当然だろう。
本当によく潰れなかったものだ。
煙を吐き出して、回想が終わる。
すっかり煙草が短くなっていた。それを携帯灰皿に押し込み、時間だと思う。
立ち上がったサンジは小さな荷物を一つ持ち、出口を目指した。
今生の別れでもあるまいし、何をセンチメンタルになる必要がある。
彼は迷いのない足取りで外へ出た。
荷物を持って現れたサンジを目にして、コックたちは何も言わない。おそらく気付いていたのだろう。きっかけが何であったにしろ、彼が旅立つことはなんとなくわかってしまった。
腕を組んだ状態で仏頂面。誰も言葉をかけようとしない。
視線の先にルフィが居る。おそらく彼もわかった上で待っていた。
誰にも声をかけることがないまま、サンジは小舟を目指して歩き続ける。
しかしある時、武器を持って襲い掛かる影が二つあった。カルネとパティの二人である。
「積年の恨みだ！」
「無傷で出ていけると思うなよォ！」
背後からの奇襲。彼らの間に実力差はあるがこれならば勝てると踏んでいた。
まず先にパティが武器を振り抜く。しかしサンジは目視せずにしゃがんで避け、頭上を大きなフォークが通り過ぎていく。そして即座の反撃が彼の顔面に叩き込まれた。
パティは倒れ、武器を取り落とす。

続いてカルネが上段からスプーンを振り下ろす。
こちらも横へ一歩動くだけで回避されて、明確な隙が見出されてしまっていた。
あっと驚く暇もなく、鼻先に靴の裏が当たる。
カルネもまたすぐに倒れた。
奇襲の甲斐なくあっさりと返り討ち。彼らは倒れたまま沈黙する。
呆れ返るコックたちが彼らに声をかけるが、聞こえているかさえ定かではない。
「いや無理だろ。おまえらじゃサンジに勝てねぇって」
「いつまで経っても懲りねぇな。これで何度目の負けだ？」
「う、うるせぇ……！」
「お、生きてるな。とりあえず心配いらねぇや」
軽口を叩いて助ける気もなく、多くの者がサンジの背を見る。
小舟の前に立ったサンジはルフィを見つめ、真剣な顔の彼へ告げた。
「レストラン、クビになっちまった。虫のいい話だと思うが行く当てがねぇんだ。よかったらおまえらの仲間にしちゃくれねぇか」
「いいのか？　海賊だぞ」
「海賊みてぇなコック共に囲まれてたんだ。今更大した問題でもねぇよ」
「ししし、それもそっか」
「オールブルーを見つけられりゃそれでいい。海賊でも海兵でも、おまえの仲間でもな」
「待ってたぞ。これからよろしくな、サンジ」
ひどく嬉しそうに笑うルフィにつられて柔らかい笑みを浮かべ、サンジは自身の荷物を投げた。先に小舟へ放り込んで、次に自分が乗り込もうとしたのである。
後ろを振り向こうとしない。コックたちへの挨拶はないようだ。
「行こう」
「ん？　いいのか、あいさつ」
「いいんだ」

簡潔に答えて一歩を踏み出そうとした瞬間。
その背へ声がかけられる。
「おいサンジ」
三階に居たゼフが外へ出てきて、欄干に肘を置き、何でもないことのように平然と告げる。
「風邪ひくなよ」
本当になんでもない言葉だった。
だがサンジにとっては、ただの言葉であるはずがない。
聞こえた瞬間に肩が揺れて、見ていたルフィはやさしく微笑む。
数秒、サンジは動かなかったが、何も言わずに歯を食いしばり、次に口を開いた時にはもう感情が抑えられなくなっている。
感情に突き動かされる形で、気付けば彼は叫んでいた。
「オーナーゼフッ!」
素早い動きで振り返り、その場で土下座をして床に額を擦り付けた。
溢れてくる感情は途方もなく、感謝してもしきれないくらいの想いがあって、言葉にするだけでもまだ足りない。それでも言わずにはいられなくなって、彼は声を震わせて叫んだ。
意識せずとも涙が頬を流れる。しかし今は、今だけはそれを恥とは思わない。
それよりも伝えたい想いがあって、それを恩人へと伝えたかった。
「長い間、クソお世話になりました!! このご恩は一生……忘れませんッ!!」
三階に居るゼフへ頭を下げ、思いの丈を伝える。長い付き合いの中で果たしてこんなことが一度でもあっただろうか。思い出す限りでは一度もない。
気付けばゼフも静かに涙を流していた。
コックたちも平静ではいられず、彼の言葉に感情が波立つ。
真っ先に反応したのは倒れていたはずのパティとカルネだ。
普段から喧嘩ばかりしていて、特にサンジと仲が悪いと思われていた二人が子供のように泣きじゃくりながら彼を見ている。これで周

囲のコックたちも我慢が出来なくなった。
大の男たちが揃いも揃って涙を流し、船上は騒がしい様相となる。
「ちくしょーっ！　寂しいじゃねぇかサンジこの野郎ォ！」
「さびじいぞ～っ！」
「悲しいじゃねぇか、ちくしょーっ！」
「かなじいぞ～っ！」
彼らの声にサンジが顔を上げ、涙を流しながら笑みを見せる。
騒がしい別れだ。みっともなくも思えるが、彼ららしいと言えばそう思えるだろう。
ゼフは自らの指で涙を拭い、一人ぽつりと呟く。
「バカ野郎が……男は黙って別れるもんだ」
喜びを噛みしめ、涙の向こうに居る彼らを見つめながら、サンジが決意を新たにする。
それはきっと彼のみぞ知ることだろう。
「また会おうぜ！　クソ野郎どもッ!!」
「出航！」
新たな仲間を乗せて、小さな船は海へ漕ぎ出した。
仲間たちの盛大な見送りを受け、船は一路、ココヤシ村を目指し始める。

スカイ・ブルー

「狙撃という物は、援護が花道。目立つような役割ではないかもしれない。しかしだからこそ仲間を助けることができて、皆が動きやすくなるよう、背を押してやることができるのだ」

とある島。そこでの一幕である。

島はさほど大きくはない。砂浜に二人の人影があり、その間近には小高い山が二つあって、その山を利用したコテージがいくつも設けられている。

島を丸ごと用いた広大なホテルのような姿だった。

たまたまそこへ辿り着いたウソップは現在、パチンコを構えて小さな的を狙っている。

標的は百メートルほど先。どこにでもある小さな空き缶だ。

傍らには壮年の男が立っており、どうやらウソップに指南している様子である。

島に居合わせた賞金稼ぎ、ダディ・マスターソン。

なぜか彼はウソップたちに親切な態度を見せ、まるで父親のように面倒を看ていたのだ。

「弾を放つ時、何も考えるな。邪念を捨てるんだ。当てたいとか、当てなければなんて思わなくていい。心を無にして弾を放て。それが最も集中できる」

「そ、そうか？　んなこと言われてもどうしたって考えちまうぞ」

「腕のいいスナイパーとは皆そういうものだ。忘れるな。おまえの一発が戦場を大きく左右することになる。当てれば味方を救い、外せば窮地に陥れる」

「うっ……」

「狙撃手は他の誰よりも後ろに居て安全だ。だからこの一発に責任を持たねばならない」

緊張した面持ちでウソップが顎を引く。

照準は定めた。後は手を離せば弾が放たれる。

何も考えるな。そう思っているのに不安が脳裏をよぎり、緊張が大

きくなる。
だめだ、と思ってしまえばどうしても手が離せなくなった。弾はいまだ放たれず、微かに呼吸が乱れ始める。射撃ならば経験がある。しかしたった百メートルとはいえ、ここまで本格的な狙撃は初めての経験。その違いに驚いて体が固くなっているらしい。
ダディの言葉を脳内で反芻する。緊張を解こうと深く息を吐いた。
ちょうどその時にダディがぽんと背を叩く。
的から目を外し、彼に振り返った時、ダディはやさしい微笑みでウソップを見ていた。
「心配するな。おまえならできる。私は、そう信じたからこそ力を貸した」
不思議と気分が落ち着く声だ。
肩の力が抜けたウソップは小さく頷き、再び的に目を向ける。
当たる。当てる、ではなくそんな確信があった。
深呼吸を数回。
そして深く息を吸い込んだ後、呼吸を止め、その一瞬で手を離す。
弾は宙へ放たれて、真っ直ぐに進む。そして射程距離ギリギリで空き缶に当たり、カコンと小さな音が鳴った。鉛玉が当たった空き缶は力なく宙を舞う。
当てた本人であるウソップは呆然としていた。
妙な自信を持って撃ってしまったが、まさか本当に当たるとは。
彼が使う武器はパチンコ。ゴムの張力を利用して弾を放つのである。確かに海賊になる前から何年も練習して、その扱いには誰にも負けないほどの自負を持っていたが、ピストルや狙撃専用の銃と違って射程距離は短い。実は密かに届くはずがないと思っていた。
結果は自分の目で見た通り。
弾は届いて、尚且つ当たった。自分自身驚きが隠せずに思わず声が大きくなってしまう。
「あ、当たった!?」
「流石だ。いい腕をしている」
ウソップは驚き、ダディは納得した様子で冷静に頷く。さほど驚い

ていない。
気になったウソップが振り返って問う。
出会った時からそうだったが、どこか疑問が残る言葉をいくつも見出していたようだ。
まるで初めから当てられるとわかっていたような。
その不思議な言葉に首をかしげる。
「流石ってどういう意味だ？　おっさん、どっかで会ったことあったっけ」
「いや、ない。だがおまえの父親を知っている」
「は!?　お、親父を？」
「おまえの父親、ヤソップは、おれを破った狙撃手だ」
そう言うとダディは歩き出し、倒した空き缶へ向かっていく。慌ててウソップも隣へ並んで歩き出した。話は二人で歩きながら続けられることとなる。
「もう何年前になるか。私は元々海軍に居た。狙撃手としてそれなりに名を知られていたんだ」
「海軍に？」
「ああ、その頃にヤソップと出会った。奴は海賊、私は海兵。当然敵対し、私から奴に決闘を申し込んだ。その頃は持ち上げられて天狗になっていたのだろう。負けるとも思わずにな」
「す、すげぇ……親父と決闘した男が、ここに居るのか」
「ああそうだ。だが結果は惨敗。勝負は奴の勝ちだった」
そう時間もかからず空き缶の位置に到達して、落ちたそれを拾い上げる。
中央に一発。狙いは的確だ。
ダディはその結果に満足しつつ、ウソップに投げ渡してやる。彼は慌てた様子で受け取った。
「決闘に負けた私は本来死ぬべきだった。だがヤソップは、私にとどめを刺さずに去った。娘が居たからだ。私の娘が我々の間に割って入り、命乞いをした。それで奴は銃を納めたんだ」
「そうか……やっぱり親父は海賊でも、悪い奴って訳じゃねぇんだ

な」
「その時、奴は言っていたよ。ガキは大切にしろ、おれのようになるな、と」
「え……？」
「海賊になる時に家族を置いて出て行ったと聞いたのはその後だった」
ダディがウソップに向き直る。
その時の彼の表情はやさしく、やはり先程同様我が子を見るような目つき。ウソップは呆気に取られて言葉を呑んだ。
「顔を見た瞬間にわかった。あの男が残していった息子だとな」
「そ、そうか？　おれは、ガキの頃に別れちまったからなんとも言えねえけど……」
「今の私は賞金稼ぎ。おまえが海賊と名乗るなら捕まえて、海兵に突き出さなければならないのだろうが……かつての借りを返そう。おまえは捕まえない」
「ありがてえ。そうしてもらえると助かるよ」
「ただし、忘れるな。それも今日だけだ。次に会った時はおまえをヤソップの息子ではなく、一人の男と認め、戦いを挑むだろう。手を貸すのは今回限りだぞ」
「お、おう……なぁ、一つだけ聞いていいか？」
「ああ」
「親父は、どんな海賊だった？」
ウソップが問いを投げかけ、少し考えてからダディが答える。
波の音が辺りの静けさを助長させていた。空は青く、山々は雄大にそびえ立ち、自然が彼らを包み込んでいる。騒音がない空間はひどく心を落ち着かせる。
落ち着いた声は素直に彼へ届き、考えさせる。
「出会ったのはもう十何年も前のことだ。だが私が知る限り、世界一の狙撃手だと思う。海賊だったのが惜しいほどな。もっとも、海賊だからそう思えたのかもしれないが」
「へへっ、そうか。おれの親父はやっぱり誇り高い海賊なんだ」

嬉しそうにウソップが肩を揺らす。
信じ続けた物はきっと嘘ではない。それを知っている人間に出会えたのだ。本人に会った訳でなくとも十分だと思えて、これほど嬉しいことはなかった。
ダディも微笑ましそうに彼を見つめる。
まだ若い少年だ。それでいて狙撃の腕前は伸びるだろうと想像する。
本人は当たり前のように行っていたが、弾を放つ寸前、弾道の計算や吹き付ける風の影響を考えてタイミングを見計らい、パチンコの性能以上の飛距離を出して弾を当てたのは、もはや才能などという言葉では済まされない。天性の勘の鋭さに加え、相当の修練を積んだのだろう。
ただの遊びだったかもしれないが、かなりの時間を使ったに違いない。
それ故にダディは彼の努力を称える。
確かに光る物を感じたのだ。彼は伸びるに違いない。
血は争えないのかもしれないと考えて、密かにほくそ笑んだ。それはそれで面白い。
「狙撃手の心得を忘れるな。敵から離れた位置に居るからこそ、当てると決めたら必ず当てる。仲間を守るために。狙撃手は決して臆病者に与えられる名前ではない。よく覚えておけ」
「臆病者に与えられる名前ではない、か……わかった。肝に銘じとく」
「ウソップの兄貴イ〜！」
二人が立つ浜辺に、慌てた様子のジョニーが駆け込んでくる。自然と二人は振り返った。
まだ距離がある内から足を止め、大声でウソップを呼ぶ。
余裕がないのはなぜだろう。そう思った瞬間に彼の一声を理解した。
「キリの兄貴が……目覚めましたァ〜！」
「な、なにっ!?　ほんとかジョニー！」

「早く！　まだ目覚めたばかりですから！」
「お、おう、わかった！」
手招きして呼ぶジョニーに焦り、ウソップは駆け出しながらダディに振り返る。
「おっさん悪い！　おれ行かねぇと！」
「ああ、行ってこい。私とは後ででも話せる」
ウソップは持ち前の足の速さを活かし、素早くジョニーの下へ駆けつけて共に走り出した。
キリが目覚めた。
その言葉だけで急ぐ理由にはなり、瞬く間に砂浜を離れて、あるコテージへと向かう。
砂浜から見て右側の山、中腹辺りにある木造の小屋。そこでキリが寝かされている。漂着してからおよそ五日間の間ぶっ続けて眠っていたのだ。心配しないはずがない。
辿り着くと同時に勢いよく扉を開けて中へ飛び込んだ。
キリはまだベッドに背を預けており、だが確かめるように何度か瞬きを繰り返している。全身に包帯を巻かれて痛々しい姿。かつてこんな姿は見たことがない。
目は覚めていたようだ。
二人が慌ただしく入ってくるとゆっくり顔を向けられ、目をしぱしぱ開閉させつつ、やがて彼らに焦点を合わせる。覗き込んでくる二人にへらりと笑いかけた。
「んん……ウソップと、ジョニー？　おはよ……」
「キリ、大丈夫か？　どっか痛いところは」
「体辛くないですか。おれらにできることなら何でもやりますよ」
ウソップとジョニーが切羽詰まった声で問いかければ、彼はわずかに身じろぎして答える。
目をぎゅっと閉じて、伸びをするような仕草と共にだった。
「んん～、寝すぎた。背中痛い」
「それだけかよ！　おまえ、おれたちがどんだけ心配したと……」
「傷の状態は悪くない。この子は怪我の治りが早いね。それでもし

ばらく包帯は取れんけどね」
気の抜けた声にがっくりするウソップへ、ベッドの脇から声をかけられる。
顔を向けてすぐに気付く。あまりに慌て過ぎていたとはいえ、この瞬間まで気付かなかったのが不思議なほど大きな存在感がそこに居る。
丸々と太った中年の男だった。なぜか虎の毛皮を着ていて、体が大きい事も相まって、やさしい顔立ちながら見ようによっては恐ろしい人物にも見える。
この島全体を使ったホテルのオーナー兼支配人、唯一無二の従業員である。
料理や掃除、建物の補修や食材の調達、金の計算ややり繰りまで、一人で何でもかんでも行う彼は医術にも明るいらしく、致命傷を負っていたキリを治療したのも彼だった。
今も状態を見に来たのだろう。小脇に抱えた箱から取り出すドーナツを食べて微笑んでいる。
ウソップとジョニーは仲間を助けてくれた恩人へ頭を下げ、思わず顔を綻ばせた。
「ありがとうおっさん。いやぁよかった、ほんとによかった！」
「あんたが居なきゃ、キリの兄貴は死んでたかもしれねぇ。なんて礼を言えばいいか」
「なぁに、こっちも仕事手伝ってもらったからね。気にせんでええよ。ドーナツ食べる？」
「いや、それはいらねぇ」
何かあればやたらドーナツを勧めてくるオーナーの誘いを避け、ウソップはキリを見下ろした。
気付けば彼は起き上がろうとしている。慌ててジョニーが手を貸して背を支えてやり、起こす手伝いをする。まだ寝ていた方がいいのかもしれないと思うものの、無理やり押さえ込みはしない。キリはベッドの上で背を丸めて座った。
ふぅと吐息が一つ。

表情は以前にも増して緩んでおり、妙に力が抜けた状態で辺りを見回す。
見覚えのある風景ではない。揺れがないことから陸地だとわかる。
ふむと頷いたキリはウソップを見て、穏やかな声で尋ねた。
「どれくらい寝てた？」
「大体五日くらいか。おまえ、本気で死にかけたんだぞ。失血が多過ぎてやばかったんだ」
「そっか。なんかもっと寝てたような気もするけど……死んでなくて何より」
「笑い事じゃねぇんだぞ。こっちは本気でビビッてたんだから」
「兄貴、五日も寝たきりじゃ腹減ったでしょ。とりあえず水を一杯」
「ん。ありがと」
支えてくれるジョニーがベッドの脇にあった小さなテーブルからコップを取り、水を注いだそれをキリへ手渡す。彼も素直に受け取ってゆっくり口をつけた。
喉を鳴らして、慎重に飲む。
いつ以来だろうと思うほど美味い水だった。
ぷはっと口を離し、安堵した彼はようやく眠気から逃れることができたらしい。
どこか異様な、まだふにゃりとした姿は変わらないが、少しは頭が回るようになったようだ。
「ここは？」
「わしがやってるホテルだよ。ドーナツ食べる？」
「ありがとう」
「いや食うのかよ。起きてすぐドーナツっておまえ」
「疲れた時は糖分だ。なぜって？　そりゃおいしいからに決まってる」
「おっさんほんとに医者か？」
オーナーが差し出してくるドーナツを受け取り、キリが少しずつ食べ始める。
右手で受け取り、右手で食べ始め、視線はふと自身の左手へ落ちた。

そこはしっかり包帯に包まれている。気を失う前のことを徐々に思い出してきて、そちらが重傷を受けたのを思い出す。
試しに動かしてみた。
問題なく指が動く。多少の痛みが伴うあたり、傷は完治していないが使えなくなった訳ではないのだろう。不幸中の幸いだった。これなら今後も使うことができる。
ドーナツを食べながら彼が呟いた。
「腕、落ちなかったんだね。よかったよ」
「正直見てんのも辛い状態だったけどな。おっさんに会えなきゃどうなってたか」
「わしが何かした訳じゃないよ。人体の神秘さ。少し手伝いをしてやったら体は自分で治療してくれる。わしがしたのは手伝いだけだよ」
「なるほど。やっぱり船医は必要だね。ボクらも早いとこ探さないと」
ドーナツを食べているとキリの様子が変わってくる。力は抜けたままで頭が回ってきて、冷静に考え出すのはいつもの姿に見えるようになった。
口をもぐもぐ動かしながら尚も話す。
思いのほか元気だった姿に二人も安堵し、答える声にも余裕が生まれる。
「ルフィたちは、一緒じゃないか」
「ああ。でも連絡はついたんだ。あいつら海上レストランに着いてたらしくてさ」
「方向音痴なのに？　やっぱり運がいいね、あの人は」
「ただ向こうもトラブったみたいで、ゾロが怪我したって話は聞いた。詳しくは会ってからだって言われたんだけど……そうだ。シルクとも連絡できたんだよ。メリーの電伝虫使ってな」
「シルクはなんて？」
「ナミと一緒に居るとよ。合流の場所も決めたんだ。あいつらが居るココヤシ村、ナミの故郷で集合する手筈になってる」

「そっか。ココヤシ村」
確かめるように呟くと、オーナーが眉間に皺を寄せる。
黙っていられない様子で彼らへ声をかけた。
「ココヤシ村は、やめといた方がいいんでないかな」
「ん？　どういうことだよ」
「あそこには良くない噂が流れてる。十年近く前からだ。なんでも魚人が村を支配したとかで、誰も出入りができないそうだ」
「魚人が、支配い？」
怪訝な顔をしてウソップが表情をしかめる。
キリは静かに聞いているものの、ジョニーはハッと気付いた様子で口を開いた。
「そういやおれも聞いたことあります。魚人海賊団を抜け出したアーロン一味が、あの辺りをナワバリにして好き勝手やってるって。でも、あれは嘘だって聞いたけどな」
「そのアーロンが狡猾なんだ。近くの海軍支部の人間に金を渡して、自分たちの情報を敢えて伏せさせてる。おかげで村人たちは圧政に苦しみ、誰にも手出しできないってな。そういう話をウチに来た客が話してるのを聞いた。まぁ噂だから、真実かどうかは知らねぇけども」
「おいおい、その話がほんとならやべぇんじゃねぇか？　海軍の不正で海賊が守られてるってことだろ。軍法会議と処罰は避けられねぇぞ」
呆れたウソップが呟く頃、ドーナツを食べ終えてキリが言う。
「なるほどね」
「どうしたキリ。何がわかったんだ？」
「ナミの故郷がその不正で苦しめられてる。海賊専門の泥棒とメリーを盗んだ理由はそこにありそうだね。それにアーロンの手配書に引っかかってたのはそういうことだったんだ」
「あっ。そういうことか」
「尚更行かなきゃいけなくなったね。それじゃ、行こう」
そう言ってキリはベッドを降りようとする。慌ててジョニーが

フォローに動くものの、足取りは意外にしっかりしていて、一応肩を借りているが問題はなさそうだ。
それにしても突然の行動である。
目覚めて数分、もう旅立とうとするのか。驚きを隠せない二人は慌て始めた。しかし一方でキリは決定を覆す気がなさそうで、すっかりその気になっている。
「兄貴、大丈夫っすか。無茶はしないでくださいよ」
「まだ起きたばっかりだろ？　そんなに慌てなくても一日くらい」
「ずっと寝てたから体が鈍ってるんだ。早く動かして回復したいし」
「いや、でも……どうします、ウソップの兄貴」
「仕方ねぇなぁ。こいつもこれで頑固なとこがあるし、行くか」
ウソップが認めたことで、三人は準備のために外へ出ようとした。
その時、オーナーがキリへ手を伸ばす。
「ドーナツ食べる？」
「ありがとう」
「まだ無理しちゃだめだよ。完全に治り切るまで可能な限り激しい運動は避けること。じゃないと腕が千切れて飛んでっちゃうから」
「気をつけるよ。まぁ千切れなきゃ多少の無茶は大丈夫だよね」
気軽に言って、また受け取ったドーナツを口にするキリに呆れ、ウソップとジョニーはやれやれと首を振る。これは言っても聞かないのだろう。
ただ一方で、いつも通りの姿に安心した。
今度は三人で歩き出し、出航のためにコテージの外へ出る。
時刻は朝の頃。
明るく照らす日光を浴びて目を細め、肌に当たる潮風に気を良くし、キリは頬を緩ませた。

＊

航海をするにあたってオーナーから小舟をもらうこととなった。

聞けばキリが眠っている間、ウソップとジョニーはオーナーの手伝いをしていたらしく、無償で日々の食事を世話になり、船まで譲ってもらえるらしい。
心の広い人間で良かった。
オーナーのやさしさに甘えることに決め、航海に必要な物までもらい受ける。
大事を取ってキリは小舟に乗り込んで海図を確認しており、ジョニーが荷物を積み込む。
その間にウソップは桟橋でダディと会い、その娘キャロルの手を引く彼と話していた。
「おっさん、色々ありがとうな。短い間だったけど教えてもらったことは無駄にしねぇ。今に見てろよ、いつかあんたや親父が驚くような狙撃手になってやる」
「フッ、期待しているぞ。私の立場上、それもおかしな言葉だが」
ダディがほくそ笑むその一瞬、パッと手を離したキャロルが、後ろ手に隠していたそれをウソップに渡そうと手を伸ばす。驚きながらウソップも思わず受け取ってしまった。
手の中で確認してみたそれはゴーグルのようだった。
少し変わった形をしていて、どう見ても普通の物ではない。
不思議に思いながらキャロルを見下ろせば、彼女は人形のような精巧な顔で、わずかに微笑む。
「これは？」
「あげる。ノースブルーの特別性」
「そ、そうか……いいのか？」
「もらっておけ。彼女もおまえを認めたんだ」
不思議そうにしながらもウソップはそれを受け取り、次いでダディが懐から何かを取り出した。
銃身が太くて長い、一風変わったピストル。
そちらも手渡されてウソップが驚き、取り落とさないようしっかり握る。
「私からも餞別だ、持って行け」

「ピ、ピストルなんて、おれ撃ったことねぇのに」
「おまえのパチンコでは射程距離に限界がある。百メートル先の標的に当てたのはほぼ奇跡に等しい。おまえの腕なら、こいつを使えば確実に当てられるはずだ」
真剣な言葉にウソップは手にしたピストルを真剣に見下ろす。
狙撃手に必要な物。それは五日間の修練で教えられたはず。
息を呑み、しっかりとダディを見つめ返した。
「狙撃にはそれなりの射程距離が必要になる。いずれ必要になるかもしれない。使うか使わないかはおまえ次第だが、一応持っておけ」
「お、おし。わかった……」
ウソップはその二つを大事そうに受け取り、二人に対して頭を下げた。
その様子を見ていたキリはくすりと笑って尋ねる。事情を知らないのだ、聞くのも当然だろう。
「ウソップ、そっちの人は師匠？　色々あったみたいだね」
「ああ。おれもただ休んでた訳じゃねぇからな」
笑顔になってウソップが小舟に乗って、荷物を積み込み終えたジョニーもやってくる。
オーナー、ダディ、キャロルの三人に見送られ、いよいよ出航しようとしていた。
ココヤシ村までそう遠くないらしい。海図を手に入れ、すでに航路も確認済み。最短距離で向かえば夜になる前には到着するだろう。つまり合流は今日中にできる。
船上の三人は見送る彼らに振り返って笑顔を見せた。
「それじゃお世話になりました」
「色々ありがとな。キャプテン・ウソップの名前を忘れんなよ！今に世界中にその名が轟くからな！　しっかりこのおれに注目しとけよ！」
「じゃあなおまえら、また会おうぜ～！」
手を振りながら彼らは出航する。
キリが目覚めた途端に忙しない、あまりにも素早いスタートだっ

た。

アーロンパーク編

Ｓｗｅｅｔ　Ｒｅｆｒａｉｎ

目を覚ましたのは、昼頃のことだった。

窓は締め切り、カーテンで日光を遮断して薄暗い部屋。どことなく寂しげな風景に見える一室で彼女は目覚め、ベッドの上で身を小さくし、しばらく動けないでいた。

気怠い感じがして動き出せない。そうなっているのはなぜだろうと考えるが、近頃無気力になっている彼女にはそれだけで重労働で、すぐに心が折れて考えることさえできなくなってしまう。

自分でも不調だと知っていた。

けれど自分ではどうすることもできなくて、体には力も入らない。

きっと彼らを裏切ってしまったからだ。

自分自身を責める声があって、本当はそうしたくなかったという後悔が彼女を苛む。

動きたくはないのだが、じっとしていれば嫌な考えで押し潰されそうになる。

仕方なくナミは起き上がった。

服も着替えずに部屋を出た。

ココヤシ村の近くにある一軒家は村から少し離れた位置にあって、普段そこには彼女の姉、ノジコが一人で住んでいる。そこに身を寄せて数日が経過した。現在は家の中には居ないらしい。なぜかシルクの姿も見当たらなかった。

ハーフパンツとタンクトップを身に纏い、左肩には白い包帯。

夢遊病者のような足取りで歩くナミは二人を探し、何気なく家の外へと出た。

「ノジコ、シルク……居ないの？」

家の前に広がっているのはみかん畑。立派な木がずらりと並んでいた。

眩しい光で目を細め、扉の前に立って辺りを見回す。

もう昼時だ。昼食のためにどこかへ出て行ったのか、それとも畑で仕事中か。
ぼーっと突っ立つナミは何を想うでもなくその景色を見ていた。
懐かしい、八年前は違う人物が管理していたみかん畑。今はノジコが後を引き継いでいる。彼女が世界で一番好きなみかんが採れる畑は今日も元気そうだった。
また少し物悲しい気持ちになって俯いてしまう。
その時、木々の向こうから顔を出したシルクがナミに気付き、パッと笑顔を輝かせた。
「あっ。おはようナミ。昨日はよく眠れた？」
「シルク……」
仕事を手伝っていたらしい。ノジコの服を借りて着替え、両手に軍手を嵌めて、手には収穫したみかんを一杯に詰めたバスケットを持っている。輝く笑顔で楽しそうだ。
彼女の顔を見た瞬間、ナミはほっと安堵する。
この数日間、混乱し切っていた彼女はシルクが居なければとても過ごせなかっただろう。最悪の可能性だってあった。今日まで無事で居られたのはシルクが傍で支えてくれたからに他ならない。
取り乱す彼女を抱きしめ、眠れない時は傍で手を握ってやり、核心を突くでもなく何気ない会話を続けていた。その時のシルクの声はとてもやさしくて、母か姉か、そのどちらにも似ていてどちらとも違う様子。心が安らいだのを覚えている。
シルクはバスケットを抱え、ナミの下まで歩いて来た。
軍手を取るとすぐにそっと頬へ触れて、少し汗ばんだ手が熱く、ナミの体調を気にし始める。やはりやさしい。ふと肩の力が抜けて目を閉じたナミは、甘えるようにその手を受け入れる。
「顔色、まだちょっと悪いかな。あんまり眠れなかった？」
「ううん、ちゃんと眠れたよ」
「そう？　辛いところ、ない？」
「うん。大丈夫」
「それならよかった」

深く追及せずシルクがにっこり笑い、頬に添えた両手に力を入れて、きゅっとナミの頬を挟む。おどけるようなその仕草に苦笑してしまい、目を開けたナミの顔にも笑みが戻る。

こうしている瞬間はひどく落ち着く。

抵抗するためにシルクの手を掴み、やんわり降ろせば、彼女も楽しそうにしていた。

「もう、やめてよ。私で遊ぶの」

「ふふっ、ごめんね。元気になるかと思って」

「はいはい、元気になりました。ありがとうございますぅ」

「よかった。やっぱりナミは笑ってる方が可愛いよ」

子供をあやすように頭を撫でられて、不思議な感覚に陥る。

むっとするような、嬉しいような。誰かに頭を撫でられるなど何年振りのことだろうか。

恥ずかしがった彼女はそっぽを向き、しかし手は振り払わず、不機嫌そうに呟く。けれどきっとシルクには伝わってしまっているだろう。本当に不機嫌になった訳ではない。

「何よそれ。そんなので機嫌取ろうとしたって無駄よ」

「ふふっ、そうだよね。あ、みかんはどう？　私もちょっとだけ手伝ったんだよ」

「ありがと。それじゃ一つだけもらおうかしら」

そう答えればシルクが嬉しそうにする。まるで子供みたいな姿だった。

バスケットに入れられたみかんを一つ手に取り、自分で皮を剥き始める。何から何まで過保護に甘やかされていて、流石に気恥ずかしくなってしまうほど。

シルクが剥いたみかんを、ナミの口元へ差し出された。

羞恥心はあるが今はそれ以上に肉体の疲労感もあり、抵抗するのも面倒で、何も言わずにそれを口にする。甘酸っぱい果汁が口いっぱいに広がった。

懐かしさを感じる大好きな味。

ナミの頬は綻び、対照的にシルクは様子が変わって苦笑した。

「ねえ、ナミ。一ついいかな」
「何？　美味しいわよ、あんたが採ったみかん」
「うん、ありがとう。でもそのことじゃなくて」
次の一つを差し出しながら、シルクは少しだけ言い辛そうにする。
ナミがみかんを口にして、咀嚼する時。ようやくそのことを言い出せた。
「さっき、電伝虫で連絡があったんだ。ウソップたちがこの島に来るって。多分、ルフィたちも向かってると思う。みんな合流できるみたいなの」
咀嚼する動きがゆっくりになっていって、やがて止まった。
ナミは驚いている顔で、ごくりと口内にあったみかんを呑み込む。
バツが悪い、と言ったところか。
表情には迷いが生まれて俯いてしまう。まだ割り切れた様子ではなさそうだった。
彼女はずっと悩んでいる。この五日間、否、きっとそれよりずっと前から。
「そっか……あいつらに会うのね」
「うん」
何を言えばいいのかわからない。だが俯く顔には口が裂けても頑張れとは言えず、彼女を非難する気もない。かと言って軽々しく大丈夫と言えるほど彼女を理解していない訳ではなかった。
決断はナミに任せるしかないだろう。以前からそう決めている。
ナミを傍で支え続けたシルクは、彼女が最も楽になる道を選ばせるべきだと考えていて、それが一体何になるのかまではわからず最終的な判断を任せるしかない。
俯くナミはしばし口を噤んだ。
ほんの数秒、沈黙が生まれて。
次に口を開いた時には以前の様子で、少し語調も強く言う。
「シルク、みかんちょうだい」
「え？　あ、うん。はい」
「ありがと――」

彼女が望むため、また一つみかんを食べさせてやる。もぐもぐ咀嚼して、やがて呑み込んだ。
決断したとは言い難い。それでも変化はあっただろうか。
ナミの目は真っ直ぐにシルクを見つめて、ひどく落ち着いた声で語る。
「シルク、お願いがあるの。ちょっとだけついてきて欲しい場所がある」
「場所？　うん、いいけど」
「ちゃんと決めるから。自分の意志で、選ぶから」
気丈に振舞っていたがわずかに声が震えた。
左肩に巻いた包帯の位置を掴み、まだ恐怖は捨て切れていない。それがわかって、けれど正直に伝えてくれたことが嬉しく、シルクは力強く頷いた。
受け止めてもらえてナミも微笑み、少し気が楽になる。
「ちょっと待ってて。すぐ準備してくるから」
「わかった。私、ノジコさんに言ってくる」
「すぐに来るから。もう、ちゃんと自分で歩けるからね」
「うん」
そう言って二人は離れ、ナミは一度家の中へ戻っていき、シルクは再びみかん畑へ入った。
バスケットは置いたまま。一時仕事を離れることになる。
その許可を得るため人を探し、そう時間もかけずに目的の人物を見つけた。
水色の髪で頭にリボンを巻き、晒された右腕と胸元には刺青が見える若い女性。
ナミとは義兄弟の関係。姉のノジコである。
彼女はシルクの声を聞いた途端、背後を振り返った。
「ノジコさん」
「あら、シルク。どうしたの？」
「すみません。少しここを離れてもいいですか？　ナミが、ついてきて欲しいって」

「ナミが？」
ノジコは驚いた顔でバスケットを置く。
ここ数日の様子を知っているだけに意外に思ったようだ。
「なぁにあの子は。ぐーたらしてるかと思えば私の相棒まで連れてって。勝手な子なんだから」
「あはは……でも元気になってきてる証拠ですよ」
「元気になったんなら仕事も手伝って欲しいもんだけどね。いいよ、行ってきな」
「すみません」
「あんたが謝ることじゃないよ」
頭を下げてシルクが振り返り、すぐに戻ろうとした。
咄嗟に、ノジコはその背中へ声をかける。
「ねぇシルク。悪いとは思うんだけどさ」
「はい？」
「あの子のことよろしくね。一人で抱え込んで無茶しちゃう子だから、助けてやって」
微笑むノジコは姉の顔その物。見ているだけで胸の内が温かくなる。
口では色々言いつつも、二人の絆が見えるようだった。
シルクは嬉しくなって自然と口角を上げる。
「あんたなら任せられるってわかったからさ。あの子のこと、頼むよ」
「はいっ」
元気に頷いてもう一度頭を下げ、振り返ったシルクは小走りで家に戻る。ノジコはそんな彼女の背をやさしく見守り、笑顔で見送った。
家の前へ戻るとすでにナミが立っていて、手には花束を持っている。
それを不思議に思いつつ何も聞かない。
二人は歩調を合わせて歩き出した。
「行こっか」
「うん」

さらに村を外れて、普段誰も近付かない崖へと足を運ぶ。

＊

そこに到着した時、まず最初に目に入る物があった。
崖の上に立った誰かの墓である。
シルクが足を止めた後でもナミはその墓へ歩み寄っていき、その前へ花束を置く。
腰を下ろして膝を抱え、墓を見つめて微笑んだ。
「お墓……？」
「私たちのお母さん。ベルメールさんっていうの」
ナミは静かな声で語っていた。
動揺はしていない。ここ最近で最も落ち着いているだろう。冷静な声で語りを始め、シルクはその声を聞き逃さぬように、神妙な面持ちで集中する。
「厳しくてやさしくて、喧嘩することもあったけど大好きな人。八年前に死んじゃった」
「そう……」
「考えたの。考えて考えて、嫌になるくらい考えた。だけどまだ答えが決まらなくて困ってる」
海を眺める崖に風が吹き抜ける。
ナミの声はひどく静かだった。
「だから、あいつらの所に行こうと思ってるの」
「行くって、もしかして一人で？」
「戦う訳じゃない。ただ確かめに行くだけよ。あいつが何を狙ってるのか」
声には力があり、いつの間にか決めていたのだろう。
ほんの少しだけ話したことがあった。彼女だけは事情を知っている。だからこそ、その確かめに行くという行動を冷静に受け止めるのは困難で、不安を抱いてしまいそうになる。
だがナミは朗々と語っている。

ほんの少し前まで忘我の状態で落ち込んでいた顔には見えない。
「前に言ってたわよね。一億ベリー集めて渡しても、素直に解放してくれるとは限らないって」
「うん。相手は海賊で、村を支配するようならモーガニアだよ。八年間も徹底的に管理してたんなら、そんな良い条件の土地、たとえ一億ベリーもらったって手放すはずない。どんな方法を使っても約束を破って、ナミとこの村をこのまま支配し続けると思う」
「尚且つ、私の抗議を跳ね除ける手段を考えてる、か」
「ナミの努力を裏切るようなこと、言いたくないよ。でもモーガニアはそういう人たち。頭が回る相手なら余計に考えないはずないよ」
「そうね……本当にそう。全部あんたの言う通り」
ナミは小さく溜息をつく。
「私がバカだった。どうしてあんな奴ら信用しようなんて思ったんだろ。そんな奴らだって、最初から知ってたはずなのに」
「仕方なかったと思う。ナミは、頑張ってたんでしょ？」
「ええ……ずっともがき続けてたわ。何度もあいつを殺そうとした。毒を盛ろうとしたり、寝込みを襲ったり。刺し違える気で何度も試した。でも全部無駄だった。何が何でも一億ベリー集めてやるって思ったのはその後。あいつから逃れるためには、お金しかなかった」
平然と語るナミの声に、シルクが唇を噛む。
辛い日々だったに違いない。八年前なら彼女も十歳だったはず。その頃から海賊を相手に戦いを挑み続けて、何度負かされても諦めず、それでも尚努力し続けたのだろう。
同情しないはずがない。
特に彼女は支え続けたとあって波立つ感情が止められなかったようだ。
小さな背中をじっと見つめ、その細身で頑張って来たのだと強く感じており、込み上げる何かを自覚している。しかしこの場で取り乱すのは違うだろうと必死に堪えた。
「ねぇ、もう少しだけ待ってくれる？　みんなが来るまでには決め

るから。あいつと会って、どうするのか決める。その後でちゃんと答えるから」
「うん。待ってるよ。みんなもきっと一緒」
「これで最後にするわ。ちゃんと……自分で決める」
ナミは自分の脚に顔を押し当て、小さくなって呟く。
それはきっとシルクへ言うのではない。自分自身に、或いはこの場に居ない誰かに。
その声もまた、彼女は傍で受け止めた。
「もう少しだけ、わがままを許して。もう少しで向き合えそうな気がするの。そしたら、私もみんなの傍で前みたいに……ううん。前より心から笑える気がする」
小さな声は消え入りそうで。崖に打ち寄せる波の音で消えてしまいそうだった。
「ベルメールさん。私、頑張ったよね。一人で頑張るの、もうやめていいかな」
シルクは目を伏せた。涙は飲み込むが、耐え切れない。
小さく呟くナミの姿は子供のように見えてしまう。気丈だった彼女はそこに居ない。
「私ね。初めて信じたい奴らに出会ったんだ」
まるで八年前に戻ったかのように。
ナミは自身の母へ、誰にも明かしたことのない心中を吐露していた。

集結

ココヤシ村に変化があったのは夕暮れに照らされ始めた頃。
いつもと違う出来事を目にした人々はざわつき、自然に集まってその光景を見ていた。
騒ぎに気付いた駐在のゲンゾウは自宅を出て村に面した海岸を見る。
かなりの強面ながら、なぜか帽子に風車を付けているという変わった風貌だ。駐在らしく村人たちを纏め上げるほど信頼を向けられる人物で、何が起こったのかを確認しに向かう。
海岸へ近付けば集まった村人たちも彼に振り返った。
「どうした。一体何の騒ぎだ」
「あ、ゲンさん」
「それが、妙な奴らが……」
「妙な奴ら？」
群がる人を掻き分けて前へ出て、その光景を目にしたゲンゾウは驚愕する。
そこには小舟でやってきたらしい四人の男たちが居た。
それは良い。普通、船に乗って現在のこの島へ近付くことは難しいが、それを差し置いても驚愕すべき光景がある。それは彼らの足元に転がっている。
四人の男たちは、村を支配しているはずの魚人たちを倒していた。
先兵として滞在していたのか、三人の魚人が彼らの足元で気絶している。倒したのはおそらく先に陸地へ渡っている三名。麦わら帽子の少年、上半身は包帯だらけの緑髪の男、そして黒いスーツに身を包んだ金髪の男だ。彼らは何事もなかったかのように倒した魚人を見ていた。
「なんだこいつら」
「そりゃ魚人だろ、どう見ても」
「魚人ってのも大したことねぇんだな。腕もねぇのに襲い掛かってくんじゃねぇよ」

あまりにも信じ難い光景だった。
普通の人間ならまず勝てないだろう魚人を、無傷で倒す人間。そんな人物は今の今まで存在すると思っていなかったため混乱してしまう。その村で住んでいれば尚更だ。
魚人は人間以上の能力を持つという通説がある。
水中での呼吸や魚以上の遊泳速度に加え、生まれながらに人間の十倍以上の腕力を持ち、さらに魚としての特性を持つため、戦闘その他においてその力は発揮される。
事実、ココヤシ村の人間は今まで一度たりとも魚人に対して歯向かえずにいた。
彼らがこの村へ来た際、その圧倒的な力で徹底的に敗北を思い知らされたためである。
しかし今、集まった村人たちよりよっぽど若い彼らが魚人を倒している。
言葉を呑んで見つめるのは当然で、気付いた当人たちは不思議そうに首をかしげる。
やはり大したことをしたという認識がない。それどころか魚人に対してさほど興味がある訳でもないようだ。視線を上げたルフィはいの一番にゲンゾウを見つけ、その帽子にこそ釘付けとなる。
「うおおっ、おっさんイカスぅ！　なんだその帽子、風車じゃん！」
「おまえたちは、一体……」
「その発想はなかったっ。なぁゾロ、風車持ってねぇか？　帽子に差したらかっこいいだろ！」
「別にかっこよくはねぇだろ。それにそんなもん持ってるように見えるか？」
「サンジ！」
「おれが一度でも風車を持ってたかよ」
「ヨサク！」
「ねぇっす」
ルフィが声を大きくしたことを機に、彼らは気楽な態度で会話を始めた。

村人にとってはどう判断すべき人物なのか。逡巡した結果誰も近寄れなくなる。
代表としてゲンゾウが歩き出そうとした。
しかし一歩を踏み出す直前、背後から肩に手を置かれ、振り返ってみるとノジコが居る。彼女のことは子供の頃から面倒を看てきた。我が子のように大切に思う人物でもある。
何やら様子がおかしい彼女の変化に気付いて、踏み出そうとした動きを止める。
「ゲンさん」
「ノジコか。どうした」
「あいつらってまさか」
「ああ、どうやら魚人たちを倒したらしい。あれは幹部ではないが傷一つ受けていないとは一体どういうことだ。まさか、魚人よりも強いというのか――」
「そうじゃなくて。ねぇ、ちょっと聞いて」
気をつけなければ興奮しそうになる姿を目にし、ゲンゾウの声は高ぶりかけている。それを押し留めようとするようにノジコが厳しい表情で声をかけた。
真剣な表情。何か言いたいことがあるのだと気付く。
冷静になることができて、瞬時にゲンゾウも話を聞く姿勢となった。
「実は黙ってたんだけど、今ナミが帰ってきてるの」
「ナミが？　それは知らなかった」
「島の裏側に船を停めたみたい。だけど知らない女の子を一人連れてて、詳しく聞いたら海賊の仲間だって。ねぇ、あいつらがその海賊なんじゃないかな」
「海賊だとっ。あいつらなぜナミに近付いた……！」
「落ち着いて。それが、ナミはあいつらのこと信用してるみたい。いつもと態度が違ったのよ」
ゲンゾウはナミを娘のように可愛がっている。そのせいで彼らが海賊だと知り、まさか傷つけに来たのではと怒りを露わにしたよう

だ。すぐに理解してノジコに止められる。
そうではない、と簡潔な説明で理由を伝えられた。
「一緒に航海してたらしいわ。ナミは多分あいつらと一緒に居たいって思ってる。それどころか、ひょっとしたら私たちを助けてくれるかもしれない」
「助けるだと？　相手は海賊なんだぞ。あいつらと同じだ」
「でも違う所が一つある。ナミが信用してるか、してないかよ」
目を見つめ返されてそう言われ、思わず押し黙ってしまう。
そう言われてしまえば確かにそうかもしれない。ナミは一方の海賊、つまりアーロン一味を信用してはいない。対して、ノジコやゲンゾウが知らない相手とはいえ、彼らのことは信用しているのだという。たったそれだけの言葉で多くを言えなくなってしまう。
ナミを助けてくれる人物なのか。
自分たちのことよりまずそれが気になったゲンゾウは、ノジコの手を振り払って歩き出した。
後ろから声をかけてくるノジコを気にせずルフィの前へ立つ。
彼らの視線はゲンゾウへと集まった。
「私はこの町の駐在、ゲンゾウという」
「おっさん、その帽子イカスな」
「少し話に聞いたのだが、君らは海賊かね。この村に何の用で来た」
「ああ、ナミに会いに来たんだ。シルクっていうおれたちの仲間といっしょにメリー号で来たと思うんだけど、どこに居るか知らねぇか？」
「海賊があの子に何の用だ」
問いかける声が思わず厳しくなってしまう。それもナミを想うためだ。
彼女は数々の重責を背負って戦っている。これ以上、一つでも重荷を渡したくないというのが正直なところ。生半可な覚悟で来たならば追い返すつもりで問うていた。
代表だろうと認識したルフィが答える。
ゲンゾウが滲ませる怒気に気付きながら、大して気にした様子もな

く平然とした態度だった。
「話をしに来た。あいつには聞きてぇことがある」
「私は、あの子とは血の繋がりがない。有り体に言えば赤の他人なのだろう。だが、幼い頃から成長を見守って来た。ナミは私の娘でもある」
「ん？」
「何の話だ。あの子にどんな用件がある」
「そりゃおっさんにだって言えねぇよ。おれはナミと話すために来たんだからな」
怒気はするりと避けられ、落ち着いた声で返される。
予想外の様子に眉が動いた。
慌ててノジコが駆けつけてくるがそれでもゲンゾウは退こうとしない。声を挟んでこない他の三人の視線を感じながら、ルフィの目を見て冷徹に問うた。
「ゲンさん、もういいじゃない。別に会わせてやればそれで――」
「知っているか。あの子は海賊が嫌いなんだ。憎んでしまうほどにな」
「知ってるよ。本人が言ってたからな」
「それを知って会いに来たのか」
「ああ」
「なぜだ」
「ん～理由は色々あるぞ。おれたちの船盗んで逃げたらしいし、仲間と合流しなきゃいけねぇし、聞いてねぇこともいっぱいある。それにおれは、おれの船の航海士はあいつがいいんだ」
「あの子を海賊の世界に引っ張り込むつもりかっ」
抑え切れなくなってゲンゾウが声を荒げた。
事も無げに言うルフィに冷静さを欠いたらしい。彼の落ち着きようが、これまで見てきたナミの焦燥をないがしろにしているように思えて、何も知らない彼に苛立った。
「あの子がどんな想いで生きてきたと思ってる！　海賊に人生を滅茶苦茶にされたあの子の気持ちも知らずに、そんな勝手な理由で引き

ずり回そうとしているのか！」
「やめてよゲンさん！　いいから落ち着いて！」
「ああ、知らねぇ」
「いいか小僧、中途半端な気持ちで来たなら今すぐに去れ！　我々のことはいい、だがあの子を傷つけようとする者は誰一人私が許さん――！」
「ゲンさん、落ち着いてよ」
叫ぶ途中、制止の声が聞こえてぴたりと止まった。ノジコではない。彼女ではない誰かであることは間違いなく、聞き覚えのあるそれは確実に彼女の物だとわかった。
ゲンゾウは慌てて振り返る。
視線の先に、シルクを伴ったナミが居た。
冷や水を浴びせられたように頭が冷え、佇まいを直して口を噤む。
ゲンゾウとノジコが脇へ逸れたため、ルフィたちの視界にも彼女らの姿が入った。
ルフィの顔がパッと輝き、時を同じく、サンジの顔がだらしなく緩む。目はハートになって、話に聞いていた外見に気分を良くしたらしい。
彼らは嬉しそうに声を発していた。
「あ～っ、シルク！　ナミィ！　よかったぁ、おまえら無事だったんだなぁ」
「な、ななな、なんつー可愛い子ちゃんだよおいっ！　おまえらあんな美人二人と一緒に旅してたのか！　クソ羨ましいぜこの野郎っ！」
「痛ぇ、いでぇ!?　てめぇ叩くんじゃねぇよ！」
「ちょ、サンジの兄貴！　ゾロの兄貴は怪我人ですから！」
ルフィは純粋に再会を喜んでいるが、どうやら女好きらしいサンジは二人の姿に惚れ惚れし、悔しそうにゾロの背を強く叩く。さっきまで緊迫した空気の手前、目の前のノジコに鼻の下を伸ばすのは堪えていたようだが、視界に入る女性の姿が増えて堪えられなくなったのだろう。
叩かれた痛みは胸にまで響き、ゾロは迷惑そうに顔を歪め、ヨサク

も慌てて止めに入る。
シルクも微笑んで彼らを見つめ、再会を喜ぶ。皆が無事で本当に良かった。
一方でナミは真剣な顔、怖いとも言える顔で彼らを見ている。
口を動かし、言葉を紡ぐのにはひどく苦心した。しかし黙っている訳にもいかず話し出す。しかしまず最初に話しかけたのはルフィたちではなくゲンゾウである。
「大丈夫よゲンさん。こいつらは私を傷つけに来たんじゃないから」
「いや、私は……」
「下手な演技なんてしなくたってわかってるわよ。ゲンさんが私を大事に想ってくれてるのは」
「むぅ……」
一応は疎遠な振りをしていたのだが指摘されてぐうの音も出ない。どうやら彼女を嫌ったかのような態度が嘘だとバレていたようだ。
ゲンゾウが口を噤んだ後、ナミは数歩前に出てルフィを見る。
目をハートにするサンジの隣、ルフィは心から嬉しそうに笑っていた。
唇を噛み、言い辛そうにしている。心細いのか右手で左腕を抱える仕草を見せた。
そんな彼女に背後からシルクが歩み寄る。
力の入っていなかった左手を握ってやり、隣から笑みを見せれば、少しは落ち着けたのかもしれない。ナミもまた苦笑して、深く息を吐いた後に言葉を吐き出す。
「ルフィ。メリー号のことは、ごめん」
「いいさ。おまえらもメリーも無事だったんだろ」
「ええ……ねぇ、もしよかったらでいいんだけど。私の話、聞いてくれる？」
「当たり前だろ。そのために来たんだ」
考える時間すら設けず、ルフィはあっさりと答えた。
器が大きいのか、ただバカなだけなのか。どちらにしてもその一言

は本人が思っている以上にナミの心を救っただろう。今にも泣きそうな顔でほっと安堵の息が吐かれる。
明らかに以前見ていた彼女の姿ではない。隣に立つシルクも嬉しそうだ。
きっと離れていた間に何かあったに違いない。
以前の彼女を知る者は、等しくそう思っていた。
大事な話をするには人が集まり過ぎているだろう。
ひとまず場所を移動すべきかと、まずナミが踵を返す。
「それじゃあ、こっちに来て。私の家で説明するから」
「わかった。それとよ、おれたちコックを仲間にしてきたんだ。一流コックのサンジだ」
「お見知りおきを、プリンセスたち。あぁ、おれは君たちの美貌で目を焼かれそうだ……こんなおれが貴方たちのお姿を見てしまうことをお許しください」
「おまえアホなのか」
「誰がアホだ！　失礼なこと言うんじゃねぇ！」
ルフィに紹介されたサンジは彼女たちを見ただけですっかり骨抜きになっており、女好きな一面が災いして場の空気は読めておらず、恭しく頭を下げて自己紹介を始める。
その時、ぽつりと問いかけたゾロの一声によって場の空気は変わり始めた。
どうもこの二人、船上に居た時から馬が合わないらしい。
あまりにも違い過ぎるせいか、それとも同族嫌悪か、ここに辿り着くまでも多少の言い合いを繰り広げている。これからの関係性が心配になるような小競り合いは後を絶たない。
今もまた始まってしまったようだ。
ナミとシルクはぽかんとしているが、止める気のないルフィは二人の姿に笑顔が絶えなかった。
「それを言うならアホはおまえだぞ。こんな美人を前にして見惚れねぇのはむしろ失礼ってもんじゃねぇか。おまえも男ならわかるだろ。わからねぇんならおまえはオカマだ」

「おれは男だ。おまえの価値観を押し付けてくるんじゃねぇよ」
「おまえといいルフィといい、男としてはどうかしてるぜ。頭おかしいんじゃねぇか？　普通はこう、胸に突き刺さるもんなんだよ。どうだヨサク、おまえはわかるだろ」
「わからなくていいぞヨサク。頭おかしいのはどう見てもこいつだ」
「なんだとコラッ」
「やるってのか」
「お二方、おれを挟んで言い合いすんのはやめてくれませんかね……」
至近距離で睨み合う二人をそっちのけにルフィはけらけら笑っている。
やってきたばかりの彼らの姿が異質過ぎたようで、村人たちはぽかんとした顔だ。
ルフィはナミとシルクに目をやり、喧嘩中の二人を指差しながら言う。
「おもしれぇだろ？　でもサンジの作るメシはめちゃくちゃうめぇんだ。せっかくならメシ食いながら話そうぜ。早くおまえらにも食わせてぇからさ」
「おう、それがいいな！　ナミさんとシルクちゃん、おれの料理を食ってくれ！」
「声がでかいんだよ、バカ」
「うるせぇぞアホ！　おれの愛の前でごちゃごちゃ言ってんじゃねぇ！」
騒がしい面子だ。まだ全員揃っていないのに騒がしさは増した気がする。
シルクは苦笑してしまい、気付けばナミも、先の暗さが嘘のように肩を揺らした。
「ふふふっ、変わった人だね。でもうちのクルーにはぴったりな気がする」
「どうかしら。また厄介な奴が増えたんじゃない？」

「それでもいいんだ。おれが選んだコックだからな」
「うおおおおぉ～っ!? 笑顔の二人も素敵だぁ～っ！」
「ヨサク、ちょっとこいつ斬ってくれねぇか」
「いやいや兄貴、仲間ですから。頼みますから少しは仲良くしてくださいよ」
これから移動しようという時にちっとも歩き出すきっかけがない。彼らは周囲の沈黙も無視して楽しそうにしており、その雰囲気はしばらくココヤシ村にはなかった物だ。
村人たちはぽかんとしている。
この村でこれほど大笑いする者など何年振りに現れたのだろう。
ゲンゾウやノジコも含め、明らかにいつもと違う空気に困惑が広がっていた。
さて歩き出そう、と思った時にはまた何かがやってくる。やはり移動さえ簡単にはできない。
海の向こうから近付いて来た小舟から大きな声が聞こえたのだ。
「おぉ～～いっ！」
「ん？ なんだ？」
一同が振り返って確認すると、手を振っているのはウソップとジョニー。同じ船にキリが座って乗っている。一味にとっては集合の瞬間が、思いのほか早くやってきたのだった。
彼らの姿を見つけてルフィが溢れんばかりの笑顔で跳び上がり、ヨサクと共に両手を振って三人を迎える。普段はクールなゾロも無事を知って微笑んでいて、見知らぬ顔ばかりのサンジは冷静に目を向けていた。少なくとも女性が乗っていないのはわかるためテンションは上がっていない。
彼らの登場にシルクも喜んで、ナミの手を取ると小走りで駆け出す。
ゾロとサンジの脇を走り抜けて、海岸へ寄って手を振った。
「キリ！ ウソップ！ ジョニー！」
「相棒ぉ～！ おまえも無事だったか！」
「お～い！ みんなぁ～！」

「ちょっとシルク、なんで私も……ハァ。もう、しょうがないわね」
まんざらでもない様子でナミが右手を持ち上げる。
その後はシルクと同様、笑顔で彼らに手を振った。それを見ていたウソップとジョニーが気分を害した様子はない。単純に再会を喜んで千切れんばかりに腕を振っている。
かくして、小舟はココヤシ村に到着した。
離れ離れの短い航海を終え、夕暮れの中、一味は再び一つになったのである。
「ルフィ～っ！　おまえらみんな無事だったかぁ！」
「ウソップぅ！　よかった、これで全員揃ったな！」
先にウソップが小舟から跳んで、勢いそのままにルフィへ抱き着き、ぐるぐる回って再会を喜ぶ。まるで子供だ。だがその姿には周囲を笑顔にする力がある。
続いてジョニーが船を停めて、キリに手を貸しながら上陸する。
キリの姿はひどい物だった。額に包帯、よく見ればシャツの下にも治療の跡があって、左腕は特に包帯をぐるぐる巻きにされていた。相当の怪我をしたのだろうと思わせる。
しかしそれは意外にもゾロも同じ。
彼もひどい怪我を負い、上半身には包帯を巻いて、青色のシャツをはだけて身に着けている。怪我をしたのだと確認するのはなんとも簡単な姿だった。
それでいてルフィにも怪我をした形跡があって包帯を巻いている。こちらは軽傷だったようだ。本人に辛そうな表情はないし、いつもと変わらない笑顔で皆を安心させている。
ウソップを解放したルフィはキリへ歩み寄る。
彼の怪我を無視できるはずもなく、心配しながら不思議そうに尋ね始めた。
「大丈夫かよキリ、おまえ怪我して目ぇ覚めないって聞いてたぞ。もういいのか？」
「この通りとりあえず死んでないよ。怪我は追々治していくさ」
「一時はどうなることかと思いやしたが、キリの兄貴のしぶとさっ

たらもう。普通の人間なら歩けねぇだろうに、あっさり自力で歩いちまうんだもんなぁ」
「ジョニーがどうも過保護なんだよ。そこまでしなくていいって言ってるのに」
「いやいや、おれは兄貴に守られて生きてますから。ほんの少しでもお力にならねぇと」
「しっしっし、そうか。まぁなんか知らねぇけど無事でよかったよ」
周囲を置いてけぼりに彼らだけは楽しそうだ。
それでも空気を読もうなどという態度を見せる者は一人もおらず、尚も会話を続ける。
話は新たに仲間になったサンジへ。ルフィが手で示して紹介する。
「あのな、おれたち海上レストランでコック仲間にしてきたんだ」
「サンジだ。おまえらよろしくな」
「お、仕事が早いねルフィ。ひょっとして狙って海上レストランに行ったの？」
「当たり前だ」
「兄貴、嘘はいけませんって。遭難してたらサンジの兄貴に助けられたんでしょ」
「まぁそりゃそうだよね。ゾロも居た訳だし」
「おい。そこでおれを巻き込むんじゃねぇよ」
ゾロが迷惑そうに眉間へ皺を寄せると同時、ウソップが彼の体を見て呻く。先に電伝虫で怪我をしたと知らされていたとはいえ、予想以上の大怪我だったようだ。
何があったのかを聞かずにはいられない。
「おいおいゾロ、おまえそれすげぇ怪我じゃねぇか。一体何があったんだ、海上レストランで」
「ま、色々とな」
「なんかお揃いみたいで嫌だね。包帯取ってよ、ゾロ」
「おまえは鬼か。そんな理由で人を殺そうとするんじゃねぇよ」
「ペアルックって奴だね」
「ただの包帯じゃそうは言わねぇんだよ。ったく、またアホが増え

やがって……」
口を挟んできたキリに呆れ、ゾロが我慢できずに嘆息する。またいつもの光景になっていた。
顔を合わせればそれだけで普段の空気に染まってしまい、誰一人としてそこから抜け出せないし、また抜け出そうという態度が無くなる。やはりこれがルフィの作った一味だ。
ナミはシルクの隣に立って、少し俯瞰から彼らを見ていた。
再会を喜ぶ一方、少し緊張する。自分が船を盗んで逃げたこと、そう簡単に許されることではないだろうと自覚している。ルフィは笑って許したが、キリとウソップが同じとは限らない。
そう思っている矢先にキリの視線がナミを見つけた。
ウソップもそちらへ歩いてきて、彼らも彼女へ声をかける。
「あ、ナミもいるじゃないか。調子はどう？」
「メリーはちゃんと無事なんだろうな」
「え、ええ。メリーも私も、大丈夫」
「だけど大変だったんだよ。みんなと別れた後、ナミがすっごく落ち込んじゃって。私がずっと頑張って元気付けてたんだ」
「ちょっとシルクっ」
「あはははは、そっか」
「まぁそっちも事情があったみてぇだしな。でももう二度とすんなよ」
彼らも厳しく追及はせずに、キリは笑顔でさらりと流して、ウソップは眉間に皺を寄せて注意しただけだった。それ以上ナミを責めようとする声はない。
驚きを隠しきれずにシルクの顔を見る。
彼女は最初からわかっていたように笑っただけだ。
「ね？　みんな同じ気持ちだった」
「うん……みんな、ごめん」
「気にしなくていいよ。ウチは船長があれだから」
「いや副船長のおまえも大概だからな」
他人事のように言うキリの頭をウソップが軽くはたき、大げさに痛

がり始めれば叩いたウソップが途端に慌て始める。自らの怪我を利用してふざけるあたり彼も十分性質が悪かった。
ナミはそんな彼らの姿を見て苦笑した。
なぜだろう。全員揃った姿を見ていると悩みなど吹き飛んでしまった気がする。
今なら、素直に話せるに違いない。
頭を振ったナミは待ち望んだ彼らへと言った。以前の彼女に戻ったようでいて、以前よりもやさしさが見える表情。何もかもが同じという訳ではない。
「あんたたちいつまでここで騒いでるつもりよ。いい加減きりがないから移動しましょ」
「ああ、そうだな。んじゃおまえら行くぞ、ナミの家へ！」
「ナミさんの家⁉　そりゃおまえ、心中穏やかじゃいられねぇぞ」
「じゃあ来んなよ」
「あぁ⁉」
多少の時間を要したが一行はようやく動き出そうとしていた。
その間際、ナミがゲンゾウとノジコへ駆け寄り、微笑みを湛えて語り掛ける。
二人は思わず言葉を失ってしまった。彼女のそんな顔を見たのは何年振りだっただろうか。
「ゲンさん、ノジコ、あいつら危険じゃないから大丈夫。あんな感じだからね。ちょっと私たちだけで話したいから時間もらっていいかな」
「あいつらは信用できるのか？」
「うん。大丈夫だって、わかったから」
ナミの右手がそっと左肩に触れる。何かを隠すような包帯を、期待と不安を込めて触れた。
ゲンゾウとノジコには、或いはココヤシ村の住人たちには何かが伝わったのか、俯いて微笑んだ彼女を見て複雑な気持ちになり、見守るしかないと判断する。
今日まで彼らは彼女を頼り、同時に行動や想いを尊重していた。今

更裏切ることはできないと、たとえ海賊と共に行ってしまうとしても、止めることなどできなかった。
「上手くいけば、この村が助かるかもしれない……私、あいつらに賭けようと思ってる。もうそれしか方法がないから。だけど上手くいく保証なんてどこにもない」
真剣な顔で視線を向けてくる彼らの顔を見回して、ナミは真剣に告げた。
「もしもの時は、みんな、私と一緒に死んでくれる？」
「もちろんだッ‼」
大声を出したのは一人ではなかった。
ゲンゾウもノジコも、見ているだけだった村人も、この時ばかりは声を揃えて答えを出す。
ナミは嬉しそうに笑って、小さく頷いた。
「ありがとう……」
視線を切って歩き出し、村人が開けてくれた道を進み始める。
後ろへ振り返って彼らを呼んだナミは、彼らと共に歩き始めた。

〝助けて〟

日が落ちて夜になり、ナミの家の前では海賊たちが小さな宴を始めていた。
盛大なバーベキューである。
すでにサンジが焚火の上で熱した網を使い、串に刺した肉や野菜を焼いており、焼き上がりを今か今かと待っている海賊たちは子供のように騒がしい。
特にうるさいのはルフィを筆頭として、その両側に座ったキリとウソップだ。
「サンジ、肉まだか！　肉ゥ～！」
「今焼いてるとこだ。もう少しくらい待てねぇのか」
「サンジ、お腹空いたぞ～。早く早く」
「サンジ、おれもう腹ペコだぞっ」
「ガキかてめぇら。いいから黙って待ってろ」
食事前にはしゃぐ三人を一喝し、呆れるサンジは冷淡に声を出した。
しかし一方で女性陣を見れば目の色が変わって声が弾む。
「んナミさぁ～ん！　シルクちゅわ～ん！　もうすぐ出来るから待っててねぇ～！」
「ありがとうサンジ。待ってるね」
「はぁ～いっ！」
相手にするのが男と女でこうも違う。嫌というほど非常に分かり易い人間である。
その様子を見ていて、今度はウソップとキリが呆れた様子で呟いていた。
「しっかしわかりやすい奴だな、こいつは」
「うん。びっくりするくらい扱い易そうで困るよ」
「単純さではルフィといい勝負っぽいよな。女に関しては」
「まぁこっちとしてはある意味助かるけどね」
軽口を叩いて落ち着く彼らはすでにサンジを受け入れているらし

く、互いの態度や雰囲気は決して悪い物ではない。早くも慣れつつあったようだ。
時折女性陣に熱い視線を送りながら、手早く料理が仕上げられていく。
その姿は初めて見るキリやウソップも感心してしまうほど鮮やかだ。
「何ごちゃごちゃ言ってんだ」
「まぁサンジの悪口と褒め言葉だよ」
「そうかい。そりゃありがとよ。おら、持ってけ」
「やった～！」
そして完成した時、いの一番にルフィが喜びの声を上げて肉を食し始め、キリとウソップも自分の手で串を取って食べ始める。無邪気というか、マナーの見られない姿だ。
それを目にしてサンジは溜息をつく。
レストランで働いていただけに思うところはあったらしい。
「まったく、マナーのなってねぇ連中だ。さて……ナミすわぁ～ん！　シルクちゅわぁ～ん！　恋の串焼きできたよぉ～！」
しかし女性陣に目を向けた途端には機嫌が最高潮にまで良くなる。皿に串焼きを乗せて駆け出すのだが、その様は異様で、有頂天になってくるくる回る姿はひどく間抜けだ。
出来たばかりの料理が届けられ、笑顔のシルクが受け取る。
「ありがとう。それとごめんね？　うちのクルー、ちょっと変わった人ばっかりだから」
彼女自身何でもないことのようにお礼の言葉を告げていたが、その一言はサンジにとって凄まじい衝撃で、さらに笑顔まで見せられたのでは込み上げてくる喜びが止められない。
両の拳を突き上げ、涙を流さんばかりの表情で天を仰ぎ、心からの叫びを発した。
「大好きだァ～ッ!!」
「うるせぇな。何叫んでんだ、あいつは」
絶叫するサンジの背を見てゾロが呟き、手に持ったジョッキをあ

おった。
彼にヨサクとジョニーを加えた三人は料理を口にする傍ら、酒を飲んでいる。すでに話も進んでいて、ヨサクがジョニーのジョッキへと注いでやり、酒も入って上機嫌になっていた。
「いや相棒にも見せてやりたかったぜ。ゾロの兄貴もサンジの兄貴もそりゃあかっこよかった。あれを見せられたら男なら痺れずにはいられねぇな」
「かっこよかった？　そういや兄貴、ひどい傷ですけどそれは」
「つまんねぇ話だ。んなことよりルフィ、いい加減話してもいい頃だろ。メシはいいとしていつまで待ってりゃいいんだ」
あまり話したくないのか、遮ったゾロがルフィへ振り返る。
口いっぱいに肉を詰め込んだルフィは咀嚼しながら言葉を発した。
「んーば。んーみーっぽう」
「そろそろ話そうかって」
「おまえ、よくわかるな……」
口内が物で溢れているせいでルフィの言葉はもごもごして聞き取れない。そこで目敏く解説したのが傍に居るキリだった。何が言いたいのかが大体わかっているらしい。
一秒と待たない内の言葉である。
鮮やかな手並みにウソップは呆然と彼らの顔を見ていた。
ルフィの目がナミへ向く。彼女もすぐに気付いた。
話を始めてくれ、と言いたいのか。しかしもごもごしているため言葉は出さず、言おうか言うまいかと逡巡する一瞬、空気を読んで先にキリが口を開いた。
「ナミ、話してよ。事情があるなら尚更さ」
「ねぇナミ」
キリがやさしく問いかけ、シルクが傍から名を呼んで促した。
多少の不安や戸惑いが消えないでもないが、ナミは少し俯いて、神妙な顔つきになる。
それでも意を決して口を開き、真剣に耳を傾ける面々に向かって話を始めた。

「何から話せばいいかわからない……でも、みんなに、これを見て欲しいの」
緊張で口の中がからからになっている。言葉にも詰まりそうになって、ひどく緊張していた。
ゆっくりと左肩の包帯へ手をかける。
ココヤシ村に着くまで、誰にも見せたことはない。同性のシルクでさえ。しかしこの島に来てからは彼女にだけは先に打ち明け、しかと話を聞き入れてもらっていた。そのおかげもあってか、今は打ち明ける勇気が出来て、彼らにも見せられると思う。
彼女にとって忌まわしい印。
包帯が解かれてそれが露わになり、彼らの前に姿を現した。
左肩に刻まれた刺青。海賊、アーロン一味のマーク。
旗にも描かれているそれは海賊の仲間だということを表しているのだろう。
沈黙が広がり、そこに視線が集まる。
ナミはぽつぽつと言葉を紡ぐ。
「私は、アーロン一味の人間……海賊の仲間」
簡潔に、分かり易く伝えられた。
いつの間にか食事の手も止まっている。今はナミの話に集中しているようだ。
夜の静けさも相まって静寂が強くなるのか、焚火が小さく鳴らすパチパチという音だけ残る。
「あいつらがこの村に来たのは八年前。突然現れてこの村を襲って、支配するって宣言して、それ以来みんなはずっと苦しめられてる。私のお母さん、ベルメールさんも殺された」
簡潔な説明だが表情を歪める者も居て、全てを窺い知ることはできないが彼女の顔を見れば伝わってくる何かもあったのだろう。
特に反応があったのはウソップやサンジ。そこに以前少しだけ話を聞いたシルクも加わる。
ルフィとゾロは真剣な顔で耳を傾け、ヨサクとジョニーも同じく。
キリは視線を外し、笑んでいるようにも見える顔で静かにしてい

た。
不安か、困惑か、整理しようとしても難しく、説明は決して巧みではない。しかし一度話し出せば言葉は選ばずとも出てくるようで、ゆっくりとだが進められる。
「私が海賊専門の泥棒になったのはね、あいつらと約束したから。一億ベリー払えば村は解放してくれる、って。だから八年間一人で色んな奴から盗み出した。海賊からね。危ない目にも遭ったし、いっそ逃げ出そうかと思ったことだって何度もある。だけど、やっぱり見捨てられなかった」
ナミの声色が少し変化する。
声は小さくなり、どこか沈んだ様子で、気落ちしているらしいのがわかった。
「でもシルクに話してみて、自分が間違ってたって気付いた。あいつ、最初から開放する気なんてないのよ。お金だけ回収して、この村も私も逃がす気なんてなかった」
「なんでわかるんだ?」
思わずルフィが質問する。するとナミは自嘲気味に微笑んだ。
「直接会って確認してきたの。はっきり聞いた訳じゃないけど、それとなく探りを入れたらちょっとだけ様子が変わってた。上手くはぐらかそうとしてたのがきっと良い証拠よ。あいつが海軍に賄賂を渡して繋がってるのは知ってるし、自分で手を下さなくてもそれをできる」
自分の膝を抱えて座り直して、遠い目になって語られた。
この八年間は何だったのか。救われることだけを欲して努力してきたのに、それが全て無駄になってしまうらしい。それを知ったのに努力を続けることは何とも難しかった。
ただ、だからこそ話そうと思えたのかもしれない。
彼らにも伝わっているのだろう。彼女が感じる空虚、そしてそれ以上の悲しみが。
求める物はただ一つ。
解放。支配から逃れることだけ。

強い女だと思っていたナミが見せる表情、声色、仕草の一つ一つが彼女の精神の限界を伝え、今までの姿とは遠い物に見える。強がらない彼女は至って普通の少女だ。
「色々手を尽くしたし、八年かかっても私じゃあいつを殺せなかった。だからお金を集めるしかないって思ってた。でもそれさえできなくなって、どうしようもなくなっちゃった」
小さな溜息がつかれる。そんなに疲れた表情を見せるのは初めてだった。
「ねぇルフィ」
「ん？」
「前に話した時、重くなったら言えって、言ってくれたわよね」
「ああ。言った」
「ほんとはずっと言いたかった。あんたにずっと、聞いてもらいたかった」
ナミの視線がルフィに向けられて、真剣に見つめられる。
ルフィは逃げずにそれを受け止めた。
「今まで誰に頼んでもあいつらには勝てなかった。海軍も、賞金稼ぎも、海賊も。だからあんたたちにも言いたくないと思ってたの。負けるかもしれないって思ったし、あんたたちが、死ぬかもしれないって思ったから」
感情が高ぶって声が上ずる。それを無理やり押さえ込み、冷静に語ろうとしていた。必然的に緊張感が増しているらしく皆が真剣な顔で見つめている。
ナミは薄く微笑んだ。
「私の本心、聞いてくれる？」
「うん」
間を置かずにルフィが頷く。
安堵した様子で、ナミが小さく息を吐いた後、座り方を変えて腰の裏にあった物を取り出す。右手に持たれたのは小さなナイフだ。
驚いてウソップとサンジが反応する。
何をしでかすかわからない彼女に持たせておくのは危険な物。慌

てるのは無理もない。
「ナミさん落ち着いてくれ！　早まっちゃだめだ！」
「おいナミ、おまえそれで何する気だよ！　妙なこと考えんな！」
ゆっくりナイフが掲げられ、切っ先は自分に向けられている。
ナミは驚く面々を無視して腕を振るった。
ナイフが突き刺さった先は彼女の左肩、アーロン一味のマーク。まるで怒りを伝えるように、彼らへの決別を告げるように激しく突き刺さる。
血が宙を舞い、腕を伝って落ちてくる。
呼吸を乱し、強い痛みを感じながら気になったのはそちらではない。
俯いたままで彼女が語る。
「誰にも頼れないと思ってた。あいつらに歯向かって生きて帰れた人間なんていないから。だから自分一人でなんとかしなきゃって思ってたのよ。今でもそう。あいつらに勝てる人間なんて居る訳ない。そう思ってる。あんたたちがどれだけ強くたって、グランドラインから来た怪物になんて勝てるはずがない。……でも」
ナミの顔が上がってルフィを見る。
「ルフィ……」
ひどく弱々しい姿で、ぽつりと一言だけ。
「助けて」
瞬間、一筋の涙が頬を流れた。
静かに、嗚咽さえ漏らさず、おそらく意識していない一筋。泣きじゃくるでもなくあまりにも静かだったことが彼らの脳裏に深く刻み込まれる。
何も言わずルフィが立ち上がった。
食事にすら興味を持たずに歩き出して、ナミへ近付くと無言で自身がかぶる帽子を持ち上げる。
目の前に立った彼が何をするのかとナミが見ていれば、乱暴な様子でそれをかぶされた。角度がついて少し顔を隠す様相。驚く彼女は手で押さえ、上目遣いに彼を見る。

ルフィは何も言わないまま彼女の傍を離れてしまい、背を見せていた。
数歩前へ出て距離ができ、その後で足を止め、大きく息を吸う。
そして吐き出す時、星が浮かぶ暗い空へ向けて、空気を揺らすほどの大声で叫んだ。
「当たり前だッ!!!!」
驚愕した直後、ようやく理解する。
その麦わら帽子はルフィがとても大事にする物。命と同等、或いはそれ以上だと言われても疑わないくらいに。関係する逸話だって聞かされていた。
自分の宝だと語る物を、託されたのだ。
意味を理解して目から大量の涙が溢れ出す。今度は我慢などできなかった。
先の言葉と態度があまりに分かり易くて疑いようがない。
彼になら任せられる。もし勝てないとしてもその時は一緒に死ぬことだって怖くない。彼らを選んでよかったと、出会えてよかったと今なら心から思える。
感情が溢れ出し、泣きじゃくるナミの肩をシルクが抱き寄せる。
彼女にも感謝しなければならない。先に話を聞いてもらって本当によかった。
ルフィは再び歩き出す。
誰も何も言わずに立ち上がり、小さな宴は中断して、残された物をそのままにどこかへ向かうようだ。どこへ行くかなど、教え合わずとも理解していた。
ナミの背を軽く叩き、シルクもまた立ち上がる。当然自身の剣を持って。
先頭を歩くルフィが口を開いて、後ろに続く面々が声を揃えた。
「行くぞ」
「おう」
短く、簡潔なやり取り。行先さえ告げていない。
しかしすでにやるべきことは理解していた。文句の一つも持たず

に家を離れる。
ナミは一人取り残された訳だが、みかん畑の向こうから葉を揺らし、ノジコが現れた。
密かに事の成り行きを見守っていたのだろう。泣きじゃくるナミへ駆け寄って肩を抱き、血が流れるそこを気にしつつ、顔を覗き込んで声をかけた。
「ナミ、あんた……」
「ふっ、うっ、ノジコ……肩に、包帯、巻いてくれるかな」
「え？」
「私もっ、行かなきゃ」
涙を流しながら彼女は笑っている。幸せそうで、喜びを噛みしめていた。
ノジコは思わず言葉を失う。
かつてこんな表情を見たことはなかった。
「あいつらと一緒に行きたいの。最後まで、傍に居たいから」
再びノジコは驚いて、なぜ、という言葉を見失った。
その一言を聞いて、言うべき言葉がまず脳裏に浮かぶ。けれど彼女の意志を跳ね除けてはいけないことだけはわかった。それを拒めばナミをより一層苦しめることになる。
瞬時に決意し、ノジコは医療道具を取るため家へ向かって走った。
ナミは今、確かに変わろうとしていた。子供の頃から続けていた強がりをやめて、他人を頼って自由を掴もうとしている。どんな結果であれそれだけは間違いない。
もしかしたら。そんな希望が彼女たちの中に芽生えていた。
夜は深くなり、静寂が村へ広がっている。
今、静かに戦いが始まろうとしていた。

賭け

歩き出した一味はココヤシ村へ辿り着き、尚も前進を続けていた。
ルフィが先頭となって五人が続いて、無人の町並みを通り過ぎていく。一度通っただけだが不思議と人気は感じられなかった。ほとんど出払っているらしい。
何が起こったのだと辺りを見回しつつ進んでいれば、やがて人が集まっているのが見えた。
彼らが来た方向とは反対側、村の入り口で何かが起こっている。
語る声も無く近付いていく。
集まっている村人たちの間を潜り抜け、驚く彼らを気にしながらも進んでいき、先頭が見える頃になれば異様な姿とゲンゾウが向き合っているのが見えた。
魚人である。
それぞれ別の種類だろう魚人が五人ほどやってきており、話を聞くゲンゾウを睨みつけていた。
どう見ても穏やかな雰囲気ではない。
脅迫にも等しい空気が感じ取れて、六人は様子を窺いながら歩み寄る。
近付くと同時に声が聞こえてくる。
五人は少し耳を澄ますものの、ルフィだけは一切意に介していなかったようだ。
「ウチの仲間を倒した奴らが居るな。村の連中じゃねぇってことはわかってる。おまえらが匿ってるんだろう。どこに隠した？」
「知らんな。ここには誰も来ていない」
「嘘をつくとタメにならねぇぞ。場合によっちゃてめぇらの命も危ねぇからな」
「知らん物を知ってるとは言えん。ただそれだけだ。嘘をつく理由もない」
「てめぇ……ふざけんじゃねぇぞ！」
激昂した様子の魚人がゲンゾウの胸倉を掴んだ。

人間以上の腕力によって、体が軽々持ち上げられる。今や片手で釣り上げられていた。
見ていた村人たちが小さく声を出すが見逃されるはずもなく。
そこへ、ルフィが全く表情を変えることなく接近していた。
「目を覚ました仲間が言ってんだよ。ココヤシ村の目の前で外から来た人間に殴られたってな。てめぇらこれだけ居ながら誰一人としてそいつらを見てねぇってのか、アァ!? おれらの怖さを忘れたって言うんならもう一度教えてやってもいいんだぞ！」
「ぐっ、だから、知らん物は知らんと言っただけで――！」
「おい」
棒立ちになっている村人の間を潜り抜け、気安く声がかけられる。
そちらを向いた魚人がルフィを見つけた。
見慣れない顔。村人全ての顔を覚えている訳ではないが今まで一度も見た事が無いのは確か。
こいつだ。
自然とそう思う。
投げ捨てるようにゲンゾウから手を離し、尻もちをつく彼には目もくれずルフィへ迫った。
限界まで顔を近付けられると流石にルフィも足を止め、至近距離から睨みつけられる。恐怖心はない様子とはいえあまりに近くて邪魔に思ったらしく、わずかに表情が歪む。
魚人は怒りを滲ませながらルフィへ言った。
「てめぇか。ウチの一味に手を出しやがった野郎は」
「どけよ。おれは急いでんだ」
「あぁん？ 舐めてんのか、小僧。おまえ誰に手ェ出したのかわかってんのか？」
「知らねぇ。どかねぇんならぶっ飛ばすぞ」
「アァ!? ふざけてんじゃねぇぞ人間風情が！ 誰に言ってんのかわかってんのかよ！ いいぜ、ぶっ飛ばせるもんならやってみろ――！」
瞬間、高速で振り抜かれた拳が魚人を殴り飛ばし、最後まで言わせ

ず勢いよく地面を滑った。
あまりにも素早い一撃で、耳に残る轟音だった。
見ていたはずの残る四人の魚人たちは何が起きたか理解できないまま呆然としている。ひとまず前方に居るルフィを見て、その後自分たちの後方に転がった仲間を見やり、指を鳴らすルフィをもう一度見てようやく理解する。きっと彼に殴られたのだろう。
顔色が変わって、恐怖心が半分、もう半分が怒り。
彼らもまた威勢よく拳を握ってルフィへ襲い掛かろうとした。
「て、てめぇ！」
しかしそれを許そうとせずにキリが動いた。
前方右手側に居た魚人へ接近し、右手に持つのは紙の剣。一切の躊躇なく腹に突き刺して、背が丸まったその直後、素早く引き抜いて更なる斬撃を繰り出した。
一瞬で与えられたのは五回の攻撃。
魚人は全身を切り裂かれて意識を失い、為す術も無くその場へ倒れた。
血に濡れた紙が力を失ってひらりと地に落ち、キリは残る敵に背を向けて笑顔を見せる。
突然の出来事が続いて上手く反応することができなかった。
それでもなんとか、仲間がやられたことだけは理解していて、今度はキリの背を睨みつける。
最も彼に近い場所に居た魚人が背後から襲い掛かろうとする。キリはなぜか敵に背を向け、気楽な様子で歩いて仲間たちの下へ戻ろうとしている。その背は隙だらけ。
攻撃が当たる、と思うのは当然。
しかし予想に反して、彼の背に届く前に体の前面が何者かによって斬られた。
剣を持った人間など近くに居ない。目の前に誰も居ないことは自分で理解していて、透明人間など居るはずもなし、だが確かに袈裟切りに斬られた傷が肌に残っていた。
血を噴き出しながらふと気付く。

離れた場所、シルクが鞘から抜いた刀をすでに振り切った状態で持っていた。
まさかと思うその瞬間。再び彼女が剣を振れば、見えない何か、かまいたちが再び魚人の体を切り裂いた。先の傷とは対照的になるよう袈裟切りの傷がつけられる。
今度は風圧も強く、切り裂かれると同時に体が飛んで、意識を失うと背から地面に落ちた。
一分とかからず二人がやられた。
人間よりも優れた生物であるはずの魚人が、二人も。
残った二人は恐怖心を掻き立てられ、思わず体を震わせる。
片方の魚人が耐え切れない様子で気付けば呟いていた。
「な、なんなんだよこいつらっ。一体何がどうなって……」
「見りゃ大体わかるだろ。海賊だよ」
返答が届くと同時、唐突にやってきたサンジのかかと落としが前に居た魚人の脳天を捉え、力ずくで地面へ転がす。それだけで攻撃が終わって肩の力を抜く。
凄まじい音がした一撃は確実に彼の意識を刈り取っており、また一人気絶した。
残った一人は狼狽して辺りを見回す。
五人居たはずだった。気付けば意識を保っているのは自分一人、仲間を倒したのは人間たち。魚人より弱い、下等種族だと判断していた彼らがやったのだ。
一切の笑みを消した、真剣な顔のルフィが一歩近付く。
たったそれだけで魚人は腰を抜かしてその場に尻もちをついてしまった。
「アーロンって奴、どこにいんだ？」
「ひ、ひぃいいっ!?」
冷たい声で問いかけられた途端、力が戻ったのか、突発的に立ち上がった魚人は転びそうになりながら走って逃げ出した。その背は夜の闇へ簡単に消えていく。
ルフィは敢えて追わず、じっとそちらを見続ける。すると隣へ並ぶ

キリが伝えた。
「多分逃げた方向に居るよ。道なりに進めば十分かな」
「そうか。じゃあこのまま進もう」
「了解。それじゃ行くよみんな」
歩き出したルフィの背を追うよう、キリが仲間を振り返りながら歩き出し、他の四人も続く。
ゾロはなぜか退屈そうにして仏頂面。すぐ後ろではサンジがシルクへ楽しそうに話しかけ、一番後ろに居るウソップは薄っすら掻いた冷や汗を拭っていた。
別段特別なことはなかったとでも言うような、微妙に緩んだ雰囲気。
彼らが語る声は至って普段通りの物だと、初対面の村人たちでさえ気付くのは簡単だった。
「いやぁ～、シルクちゃんって強いんだなぁ。今のって悪魔の実の能力？」
「うん、カマカマの実って言うの。かまいたちを起こせるんだよ」
「へぇ～そうなんだぁ。可愛い上に強いだなんて、美人ってのはやっぱり罪作りなんだね」
「か、かわいくないよ、別に」
「そんなリアクションまで素敵だァ～!!!」
「うるせぇよサンジ!?　おまえその大声で敵に気付かれたらどうすんだよ！」
頬を赤らめるシルクを見てサンジの大絶叫は止められず、夜空にまで届かんとする大声量はウソップを焦らせた。自身を怖がりだと称する彼は敵が戻ってくることを恐れているらしい。
彼の一声を聞いて、黙り込んでいたゾロが口を開く。
「もうとっくにバレてんだろ。さっきの奴は仲間を呼びに行ったんだよ」
「げぇ!?　マジで!?　お、おいルフィ、真正面から突っ込むってのはどうなんだろうな？　敵を倒すためにも作戦とかそういうのが必要になるんじゃ……き、キリ！」

「悪いねウソップ。今回の作戦は正面突破だよ」
「えええ～!? はい！ 作戦会議のやり直しを要求します！」
「却下。船長が止まる気ないからね」
恐怖心に負けて騒ぎ出すウソップの要求に対し、振り返って話すキリはあっさりと受け流した。
その間にもルフィはどんどん暗闇目指して歩いていく。
相変わらず止まる素振りはない。
自信満々に歩いて灯りのない夜道に彼らが消えていこうとした時、ようやく声を発することができたのは村人の中でゲンゾウだけだった。
突然のことで訳が分からず、危うく何も聞けずに見逃してしまうところである。
数歩前へ出て彼らを追い、足を止めて振り返った六人を見据える。
「待て！ おまえたちどこへ行くつもりだ！」
どこへ行こうと言うのか。何をすると言うのだ。
ナミの知り合いとは知っているが、だから何をしてもいいとは限らない。
困惑したままでゲンゾウが彼らに問いかける。無視していいとは思っていない。何をするにしてもナミを想えばこそ、このまま行かせてはならないと思った。
答えを出したのはルフィである。
「どこって、アーロンって奴のとこ」
「何をしに行くつもりだ」
「そんなのおれの勝手だよ。海賊だからな」
「おまえたちが海賊だろうと何だろうと、そんなことはどうでもいい。この村の状況は知っているか。今までナミがどれほど頑張ったか知っているか。不用意な行動はやめてもらいたい」
ルフィは何も言わずにじっとゲンゾウの目を見つめる。
ゲンゾウもまた、片時も逸らさず彼を見返した。
「ナミを仲間にしたいと言ったな。海賊の仲間に」
「ああ。言った」

「おまえがあの子の笑顔を守れるか？」
「当たり前だ」
帽子のつばを握り、少し俯く。
ゲンゾウは何かを思案するよう、しかしそう長くは悩まず、苦心しながら言葉を選んだ。
わかっている。理解している。自分たちの力で自由を勝ち取ることができないのは。
それでも耐え忍んだ。ココヤシ村はナミが帰ってくる唯一の場所だから、決して自分たちから諦めることはするまいと。何年も何年も痛みと苦しみに耐えて生きてきた。
その結果が海賊に頼ることだとすれば、情けなくも思う。
だがそれ以上に、もうナミを苦しめることは嫌だった。
歯を食いしばって。
ゲンゾウはわずかに頭を下げる。
「あの子を助けてやってくれ。我々にはもうどうすることもできんのだ……もう頑張る必要などどこにもない。我々のことだってどうでもいい。あの子を、自由にしてくれ」
その時の表情は誰の目にも入らない。夜の時間、暗闇、頭を下げていたことでどんな顔をしているのかは他人に知れることはなかった。言葉を紡ぐ本人以外は。
「ただ、一つだけ言っておく」
頭を下げたまま、ゲンゾウは言葉を重ねる。
今度は声に力が戻り、さっきよりもはっきりとした口調だった。
「ナミがおまえたちについていくと言っても、もしあの子が、おまえたちと一緒に居ることで涙を流した時は。その時は私がおまえたちを殺しに行く。それだけは絶対に忘れるな」
助けてくれと頼む相手に言う言葉ではない。だが他の何を差し置いてもそれを言わずにはいられなかった。自身の本音で、嘘偽りのない言葉で、悔しさを呑んだ一声である。
最後に一度、意志の強さを問うため彼の声が大きくなった。
「わかったなッ!!」

静かな周囲へ音が吸い込まれていく。
村人たちを見れば彼らも決意した顔を見せており、おそらく村人全員の総意。それだけナミを大事に想っているということだ。
ずっと動きを見せなかったルフィが笑う。
彼は改めてゲンゾウに向き直り、ひどく楽しそうに言った。
「おっさん、おれたちと賭けしねぇか？」
「何……？　賭け、だと」
「ああ。おれがアーロンをぶっ飛ばしたら、ナミはおれがもらっていく。おっさんたちがアーロン倒したら連れてくなんて言わねぇよ。ここで平和に暮らしたらいい」
「な、なんだと？　しかしあの子は――」
「おれたちは海賊だ。誰かに頼まれたからって動かねぇし、略奪だってするし、泣くかどうかなんてナミの勝手だろ。ナミが勝手に決めればいい。おれがどうこうすることじゃねぇよ」
呆然とするゲンゾウへルフィが続ける。
「海賊は自由に生きるんだ。だからおれは好きにやる。おっさんたちのためじゃなくて、おれがぶっ飛ばしてぇからアーロンをぶっ飛ばす。ナミがどうするかはナミが決めるよ」
「それはそうだが……」
「ただ、あいつがおれたちといっしょに来るんなら、絶対に死なさねぇってことだけは言える」
ルフィは腕組みをして、傍らに五人が肩を並べた。
彼らは一様に村人を見渡し、大胆不敵に告げる。
「おれたちはナミを助けに来たんじゃねぇ。この村から奪いに来たんだ。守りたかったら自分で守るしかねぇぞ。おれはナミを連れて航海に出る」
ゲンゾウが息を呑み、村人たちもその姿に見入った。
歳は若いが堂々としている。
頼みなど聞かない。どうにかしたいなら自分でやれ。
突き放すような言葉が笑顔で突きつけられた。
ナミの知り合いだと知って油断していたかもしれない。やはり彼

らも海賊のようだ。
村人たちがざわつき始め、ゲンゾウも頭を抱えて考える。
甘えは許さない。そう言いたいのだろうか。
重々しく溜息をついて、不思議と胸がすっとするようだった。
悔しさを覚えていたのは村人たちも同じ。ナミが利用されていた八年間、彼らも辛い日々を送って来た。そして今日まで、一度たりともリベンジを果たす機会などなかった。自らの力でリベンジできると言うのならばそれほど嬉しいことはない。
村人の顔つきが変わってくる。
覚悟は決まった、ということだろうか。
代表してゲンゾウがルフィへ言葉を返した。
「いいだろう……それならもう頼まん。ナミは我々の手で守る」
「しっしっし。ああ、わかった」
ゲンゾウは振り返って村人たちを見回す。誰もかれもが同じ顔つきをしていた。
武器ならば用意している。もしも村を支配する魚人たちがナミを傷つけ、耐え切れなくなった場合、刺し違えるつもりで戦おうと思っていた。
今、ようやくそれを使う時が来た。
「皆行くぞ！　武器を取って魚人に立ち向かうんだ！　これ以上奴らの好きにさせて堪るか！」
「おおぉっ!!」
村人たちが拳を突き上げ、声を張り上げた。
それを見て笑ったルフィは再び村から出ようと歩き出し、その間際、ついてきていた二人へ背中を見せたまま言う。答えたのはヨサクとジョニーだ。
「ヨサク、ジョニー、おっさんたちを守れ」
「合点だ！」
「命に代えても！」
「おれたちは先に行くぞ。おっさん、早く来ねぇと終わっちまうからな」

再び六人が歩き出して暗闇へ向かう。
沸き立つ村人が武器を手に取るためゲンゾウの家へ向かう頃、ゲンゾウはその背を見た。
ココヤシ村にとっての救世主か、それとも他と変わらぬ海賊か。
まだ判断することはできず、今は勢いに乗せられて動くしかないのかもしれない。
ゲンゾウは苦い顔で彼らの背を見送った。

＊

八年前、村の外れに建てられた巨大な塔、アーロンパーク。
そこには海賊アーロン一味が居て、コノミ諸島を牛耳り、八年間も支配している。ココヤシ村もその一つ。逆らった村の一つ、ゴザを滅ぼしたことも記憶に新しい。
懸賞金２０００万ベリー、ノコギリのアーロンはこの地における絶対的な支配者だった。
逆らう者は全て葬ってきた彼にとって、イーストブルーに敵など居ない。そのはずだった。
変化が起きたのは部下の一人が慌ててアーロンパークへ駆け込んできたことだ。
足をもたつかせる彼は勢い余って転んでしまい、椅子に座っていたアーロンへ声をかける。
「た、大変だアーロンさん！　例の奴らを見つけた、また四人やられたんだ！」
転んでしまった魚人の声を受け、アーロンは目つきを鋭く彼を見た。
その姿、ノコギリザメを人にしたかのような姿。
棘のあるギザギザの鼻が長く伸び、長身で大柄の体格は生まれた頃より恵まれており、青い肌は明らかに人間とは違う物。左胸には太陽を模した刺青が刻まれていた。
一睨みで凄まじい迫力を感じる姿である。

報告した魚人は思わず息を呑み、緊張から動けなくなった。
種族至上主義。魚人族こそ最も優れた種族と考える彼は同族に手を出すことはない。特に我が仲間には言い表せないほどの絆がある。手を出す訳がないと知っていた。
しかし知っていたところで恐怖を感じずにはいられない。
人間を嫌う彼が、人間に同胞をやられたと知って、怒らないはずがなかったのだ。
「ほう……それはつまり、おれたちに逆らう人間が存在したってことだな？」
「あ、ああ。村の奴じゃなかったようだが、人間だった。それは間違いない」
「フン、これはおかしな話だ。下等な人間がおれたち魚人に逆らうとはな」
周囲の予想を裏切り、アーロンは低く笑い出した。もっと大きな怒りを見せるかと思ったがむしろ静かなことが恐ろしい。それだけ怒りが大きい可能性もある。
くつくつと笑い、背もたれに体重を預けたまま。
やはり声には怒りを滲ませ、部下の問いに彼が答える。
「ど、どうする？　あいつら多分、ここに来る気だ」
「好都合だろう。おめぇら迎え撃ってやれ。ついでにココヤシ村も始末しろ」
彼の部下たちがわずかに動揺する。支配していた村からは税金を集めていた。村を一つ消すということはその収入が無くなってしまうことになる。
ただでさえゴザが無くなったばかり。これ以上の損害は許してよいものか。
幹部の一人でエイの魚人、クロオビが腕組みしながら尋ねる。
「いいのか？　また資金源が消えてしまうが」
「なぁに、ちょうどそろそろ支配領域を広げようと思ってたところだ。それと厄介なことになる前にナミも始末しておけ」
「ナミを？」

「奴はおそらくおれの企みに気付いた。優秀な航海士だったが、これ以上生かしておいていいことはない。悲しい別れだがここで死んでもらうとしよう。ココヤシ村の連中と共にな」
にやりと笑って鋭い牙が露わになった。
アーロンの凶悪な笑みを確認した後、クロオビが代表として小さく頷く。
「了解した。一人残らず息の根を止めて来よう」
「頼んだぜ同胞たち。シャハハハハハ！」
アーロンの高笑いの下、魚人たちは歩き出した。目的地はココヤシ村であり、村民たち全員の命であり、仲間だったはずのナミの首である。
暗闇の中、静かに行進が始まっていた。

Ｓｈａｋｅ　ｉｔ　ｄｏｗｎ

灯りも持たずに夜道を歩く六人は、思いのほか緊張していない様子で会話していた。
緊張しているのは最後尾のウソップだけ。
真剣な眼差しを変えないのがルフィだけだ。
他の面子は比較的肩の力を抜いており、歩む足取りも軽やかである。
「キリとゾロは怪我してるんだから、無理しなくていいよ」
「大丈夫だよ。まぁジョニーとウソップに左手は使うなって言われてるんだけど」
「問題ねぇ。こんなもんハンデにもならねぇよ」
「でも万が一ってことがあるから、今回は休んでた方がいいんじゃ」
「休んでていいってさゾロ」
「バカ、おまえに言ってんだ」
「二人に言ってるんだよ。もう、二人とも頑固なんだから」
「気にしなくていいよシルクちゃん。おれは野郎どもが死んでも全く問題ない」
煙草を銜えたサンジがだらしない笑顔でシルクに言い、彼女は呆れた様子で嘆息する。
どうも個性の強い人物だ。仲間になったこと自体に不満はない。女性にやさしい人格者であることは間違いないだろう。が、これからの航海にそれなりの不安があるのも事実だった。
「それよりおれはシルクちゃんの方が心配だ。きれいなその肌に傷でもついたらどうするんだ」
「大丈夫。私、これでも結構強いから」
「そうかい？　まぁ相手が誰だろうとおれが傷つけさせないよ。おれが君の騎士（ナイト）になる！」
「あ、ありがとう」
妙にやる気を見せているサンジにシルクは戸惑っていたが、悪い人ではなさそうだ。

それを聞いていた二人が前を見たまま話に割り込む。
「ナイト、道が暗いから燃え上がる恋の炎で照らしてくれない？」
「そりゃ名案だ。おいナイト、前歩けよ。ついでに燃えろ。灰になってもいいぞ」
「うるせぇぞてめぇら！　おれとシルクちゃんの会話に割り込んでんじゃねぇよ！　先に行ってとっとと死んで来い怪我人ども！」
からかうようにキリとゾロが肩を揺らし、当然サンジが怒って大声を出した。思わずシルクは困った顔で首を振る。今から戦闘が始まるというのに、まるで緊張感がない。
さらにその一言に反応してか、今まで怯えて縮こまっていたウソップが手を上げる。
反応したのはサンジで、声をかけられるとわずかに後ろを振り返った。
「おいおいサンジ君っ、おれには助けが必要だぞ！　危ない時は助けてくれよな」
「知るか。おれが守るのはレディだけなんだよ。野郎はてめぇで勝手に生きろ」
「何ぃ、おまえおれの弱さを見くびんなよ!?　一人だと絶対に魚人には勝てないんだからな！　絶対にだ！　おれが活きるのは誰かの後ろからの援護だけなんだぞ！」
「大声で言う自信かよ……」
「だから危ない時はぜひ助けてくださいっ！」
おどける訳でもなく真剣に言うウソップに溜息がこぼれた。底抜けにポジティブなルフィと正反対で極度のネガティブ。出会ったばかりということもあるが飽きない面子だ。
自信なさげなウソップへキリが振り向く。
いつもと変わらぬ柔和な笑顔で彼の心情を知ってか知らずか、気楽に言い出した。
「心配いらないって。ボクが寝てる間に狙撃の訓練したんでしょ？」
「頭でわかってんのと実際やるのじゃ違うんだよ！　怖ぇもんは

怖えだろ！」
「まぁそう言われるとそうか」
「負けんのかよ。言い負かせよ、自分で言ったんなら」
あっさり説得をやめたキリにゾロが呆れる。
緊張感がないのはいつものこと。怪我をしても緩い表情が変わらないのは流石とも言えた。
サンジもまたゾロと同様、呆れて彼らを見ている。ルフィに勝るとも劣らない個性的な面々が並んでいる。バラティエの面子も大概だが、彼らにだって負けていないだろう。
呆れが半分、頼もしさも半分あって、誰に言うでもなく呟いた。
「おかしな奴ばっかり揃いやがって。シルクちゃんとナミさんが居てよかったぜ。シルクちゃんは何があってもおれが守るからね。安心してくれ」
「むしろサンジが近くに居るのって一番怖いことだと思うけど。女性にとってはね」
「全くだな。おいラブナイト、シルクが怖がってるってよ。離れねぇと斬られるぞ」
「だからてめぇら入って来るなっつってんだ！」
軽快にやり取りを続けながら和やかに歩き、そんな最中にルフィが前方に何かを発見した。
松明の炎だ。
誰かが灯りを持って歩いて来る。それを見て全員の表情が変わった。
歩き続けながら前だけを見据えてルフィが口を開く。
前方の者たちにではなく背後のキリへ問いかけた。
「なぁキリ、あいつら」
「早速お出ましってとこだね」
「作戦はどうする？」
「正面突破。それ以外に必要ある？」
「ししし、ない」
やっとルフィが笑みを見せ、対照的に戦闘の気配が増していた。

魚人の軍団は彼らの姿を目にすると途端に走り出していた。武器を振り上げて雄たけびを上げ、荒々しい足音と共にたった六人への敵に殺到する。
堪え切れずにウソップが悲鳴を発するが他の者は動揺せず。
再び表情を引き締め直したルフィの隣で、微笑むキリが先に言った。
「ルフィも一応怪我してるんだし、総大将との戦いが残ってる。何もせずに真っ直ぐ歩いてくれればそれでいいよ。露払いはボクらがやる」
「お、そうか」
「そう簡単にウチの大将をやれると思ったら大間違いだ。ま、船長らしくどっしり構えてさ。こういう細かい仕事はボクらが纏めてやればすぐに終わるって」
「わかった。んじゃ頼む」
歩調はそのまま、ルフィは歩き続ける。
キリの言葉を聞き、笑みを浮かべた三人は彼と共に歩く速度を速めた。ただウソップだけは気合いを入れようと拳を握るものの、明らかにルフィより後ろを歩く。それだけは周囲の雰囲気に逆らって真剣みに欠けていたが気にする仲間は居なかった。
魚人たちの声が大きくなる。目を血走らせ、大きな怒りをぶつける様子だ。
理由はなんとなく思い当たる。彼らの仲間を倒したばかり。その意趣返しと言ったところか。
しかしそれなら、彼らにだって戦う理由がある。
ナミを泣かせた。理由はたった一つで十分。
その相手を見つけて明らかにルフィが纏う雰囲気が変わった。
変化を知りながら尚も五人が彼の周りで動き、迫る敵の姿を見据える。
真っ先に動いたのはシルクだった。
魚人の集団の前へ躍り出て剣を構える。
「見つけたぞォ！　あいつらだ！」

「殺せェ！」
騒がしい様子と凄まじい勢いで駆けてきた。
松明を数本持っているものの暗がりで、敵との距離は認識し辛い。
それでもシルクにとってはあまり関係のないこと。距離など一切気にせず剣を振るった。
刀身に集中した風が刃となって放たれる。
何も気付いていない魚人の集団へと接近し、認識されることもなくその体を斬り飛ばした。
「鎌居太刀（かまいたち）！」
先頭の数名が宙へ浮かび、血を撒きながら悲鳴を発した。
同時に、後ろに居た魚人たちは一斉に驚愕の声を出す。
何が起こったのか全くわからなかった。気付けば仲間がやられていて、しかも飛ばされている。
彼らの体が地面に落ちた後になって、ようやく状況が飲み込めた。
何があったかわからないがとにかく仲間がやられたのだ。
「なんだ!?　あいつら何しやがった！」
「あの女がやったのか！」
「まさかあいつ、悪魔の実の……！」
動揺が走り、わずかに行軍の脚が弱まる。
想像以上に勘が鋭く無駄な被害を抑えようとする。その様は見事。
戦闘に関して、特に集団戦に慣れている挙動が一目で見て取れた。
もう一撃放つか。シルクが逡巡した途端に大声が聞こえる。
集団の後方、二メートルを超える巨漢が発言していた。
「甲羅盾部隊、前へ！　隊列を整えろ！」
「アオカさん！」
その姿は六人の目にも映る。
白い肌と二メートルを超える大きな体躯を持つアオリイカの魚人だ。複数ある手の一本に長い槍を持ち、声を張り上げて周囲の者に命令を出している。おそらくは指揮官。
アオカと呼ばれた魚人は他の者とは何かが違う。
おそらく幹部級か、それと同等。その姿を確認したシルクは一旦攻

撃の手を止めた。
命令通りに素早く陣形が整えられる。亀の甲羅を模した盾を持った者たちが前へ来て、シルクのかまいたちに対応するため壁となる。後方にはずらりと他の者が並んだ。
無策で突っ込んで来ない辺り、今まで出会った海賊たちとは違うだろう。
統率の取れた集団は厄介であった。
「あれはおそらく悪魔の実の能力！　だが前方から飛んでくるのは確かだ！　鉄と同じ硬度の甲羅で防ぎ、隙を突いて一気に攻め込め！」
「おおぉっ！」
やはり見抜かれている。
シルクが放つかまいたちは大きく分けて二つある。攻撃範囲を広げれば攻撃力は弱くなり、ただの風にも等しいそれを避けることは難しくなるが決定打に欠ける。せいぜいつけられて掠り傷程度だろう。では攻撃力を高めるために風を集中させれば、剣を振る動きから軌道が読まれ易くなる。
現時点で二種類を使い分けられるが、どちらも一長一短だった。
範囲を広げれば当てられるが彼らの行進は止められず。逆に攻撃力を高めて敵を狙えばおそらく盾で防がれてしまう。アオカの分析は理に適っている。たった一度見ただけで良い判断だ。
攻撃を行うべきか、否か。
剣を構えたまま、にじり寄ってくる敵を見つめていると、傍らを駆け抜ける影に気付く。
煙草の煙で軌跡を残し、素早く前方へ駆けていくのはサンジだった。
シルクが苦戦と知って即座に動き出し、たった一人で甲羅の盾を持つ魚人たちへ接近していく。
「こいつらがナミさんを泣かせたクソ野郎どもか。性質の悪ィ顔してやがる」
「一人で突っ込んでくるぞ！」

「砲撃部隊、迎え撃て！」
アオカが槍を振って指示するものの、反応が間に合う前にサンジが盾部隊の前に辿り着いた。
左足で強かに地面を踏みつけ、高速で右足を振り抜く。
その一撃はあまりに強力。
蹴りつけられた甲羅の盾はたった一撃でヒビが入り、だがそれ以上に持っている魚人の体が衝撃に耐えられず、あっさり地面から足が離れて蹴り飛ばされてしまう。
本人を蹴らずに一瞬で彼の体が宙に浮いてしまった。そのまま為す術も無く背から落ちる。
その後も素早く動いて、残る盾部隊を次々蹴りつけてやった。甲羅ごと破壊しかねない勢いで魚人たちが宙を舞い、受け身を取る暇もなく地面へ落ちる。
陣形は瞬く間に壊れてしまい、砲撃部隊がバズーカを構えたのはその直後だった。
「ま、こんなクソ共に比べりゃこいつらの方がマシか」
「おぉ～、やるねサンジ」
「フン」
「あいつすげぇっ!?」
後方から男性陣の声が聞こえてくる。サンジはその声の直後に横へ跳び、道の真ん中を開けた。
剣を構え直したシルクがすでに振りかぶっている。
バズーカを構えたものの流れるような動きに驚愕し、攻撃のタイミングは遅く、再びシルクが攻撃力に秀でたかまいたちを前方へ飛ばしていた。
「ええいっ！」
「やべぇ!?　また来るぞっ！」
誰かが警告するが回避は間に合わず。また一斉に斬り飛ばされる。
魚人たちは平静を失いかけていた。特に一兵卒らしき者たちは動揺を隠し切れなくなり、落ち着かせようとアオカが口を開いても冷静に聞ける様子はない。

場は明らかに混乱していた。
混乱に乗じて、ルフィが変わらぬ速度で歩き続ける。目の前に魚人たちが居ると知りながら一切気にしようとしておらず、たった一人で向かってくる彼を目にして魚人たちの顔つきも変わる。
こいつならやれる。
彼の顔を見て思ったか、それとも間抜けにも一人で歩いて来る姿で判断したのか定かでない。
ただ、魚人たちが威勢を取り戻したのは確かだった。
「一人ずつやるぞ！　まずはこいつからだ！」
「一斉に襲い掛かれェ！」
気を取り直した魚人たちは呼吸を合わせてルフィに殺到する。最初に攻撃のタイミングを失っていたバズーカ部隊が引き金を引こうとして、サーベルや槍を持つ者たちは少し待ち、逃げ場を失くさせるため周囲を取り囲もうと彼の側面へ回り込んだ。
バズーカの引き金が今まさに引かれようとしている。
それでもルフィはまるで意に介さず、涼しい顔で前だけを見ている。
信頼は功を奏したか、歩みを後押しするかの如く、後方からバズーカ部隊より先にウソップが狙撃した。ゴーグルをつけてパチンコから弾丸を放つと同時、さっきと様子が違って雄々しく叫ぶ。
「必殺、火炎星！」
空中を駆けながら独りでに弾丸が火の玉へと変わり、自身が光源となって暗闇を切り裂きながら前へ進む。一撃は狙い違わず標的に当たって、バズーカの砲口から砲身の内部へ突撃した。火薬を詰め込んだ砲弾に火の玉が直撃して爆発が起こるのである。
一つとはいえバズーカが爆発し、持っていた男が顔面に爆炎を浴びた。
意識を失って倒れる彼を見た面々は見るからに動揺し始める。
状況さえ見切れば、狙撃手はたった一発で戦況を変えることも可能。ダディに言われた通りだ。
本来は要人や指揮官を撃つことで混乱させるという意味だろうが、

この場においては難しい狙撃をやり遂げた事実と、バズーカの爆発で仲間がやられたことがそれにあたる。
自分自身驚きながら、空気を変えたことを自慢するようにウソップが雄々しく拳を突き上げた。
不思議と自信満々に見える仕草がさらに彼らの混乱を促すようだった。
混乱する様を見てシルクが剣を振りかぶる。
精密射撃はウソップが得意とする物。だが彼女の攻撃は範囲で勝り、性質も違う。
放たれるかまいたちは横一文字に空を駆けた。
「まだいけるよ。鎌居太刀！」
「ウオッ――!?」
目には見える物ではないが強い風を感じた。その直後には体が斬られている。しかし前を歩くルフィが傷ついた様子はなく、悠々と歩き去る姿は変わらない。
一度で数人の魚人が吹き飛ばされて、混乱はさらに深まった。
指揮官でもあるアオカでさえ平静を失いかけており、吹き荒れる風に目を閉じる。さっきより強くなっていた。毎日続けていた練習の成果が出ているらしく、強弱まで思うがままらしい。
遠距離戦を得意とする二人が動くだけで敵は攻めあぐねている。当初の予定とは違い、思った以上に簡単に勝てる可能性もありそうだった。
しかしたたらを踏むアオカに変わって前へ出る魚人が一人だけ居る。
風に負けず前へ出て、顔の前で腕を交差すると次にやってきたかまいたちを受け止めた。
彼もまた巨体。
二メートル以上の長身でアオカより肩幅が広く、筋肉の盛り上がりも大きい。何より異質なのは体に纏った強固な鱗で、砲弾さえ切り裂くかまいたちを受け止めていまだ無傷。
分厚く硬質。鱗という天然の鎧を纏うピラルクーの魚人。

クルーラという名を持つ魚人は仁王立ちしてシルクの眼前に立ち塞がった。
「おれに任せろ。奴を踏み潰してやる！」
「止められた……攻撃に集中してたのに」
ぽつりと呟いてシルクが剣を引く。
広い攻撃範囲と予測されない攻撃を持つ彼女だが、デメリットとしてその攻撃は味方にも認識しにくいという物がある。風を受け止めることは難しい。剣の振り方を見ていない限り予測するのも一苦労で、彼女が前に出ると他の者が戦えない場面もあった。
そのため一度自ら下がり、距離を置いてクルーラを見た。
好機と見て彼は勢いよく走って前へ出てくる。
シルクさえ止めれば兵力で押し切ることは可能なはず。そう考えて彼女を仕留めるべく拳を握って猛然と距離を詰め、その細身を殴り飛ばしてやろうと考えた。
しかしそれを阻止せんと動く人物が居る。
攻撃の風が止んだことを知り、彼の前に躍り出たのがサンジだった。
「何シルクちゃんに絡んでやがんだ、クソサカナ野郎がッ！」
「むぅ！」
飛び掛かってきたサンジの蹴りを左腕で受け止め、クルーラは滑るように後ろへ下がった。
銜え煙草で不遜な態度。だが実力だけはありそうだ。
油断せずに敵を見据えたクルーラは自らの武器を拳と決め、ボクシングの構えを取る。
「遊びてぇんならおれが相手してやるよ。シルクちゃんには近付かせねぇ」
「フン、バカなことをしたな。アーロンさんに逆らった奴は生きて帰れねぇぞ。大人しくしておけば誰も死ななかったものを。おまえらもう終わりだ」
「いやぁ、案外そうでもねぇよ」
ずいぶん短くなってしまった煙草を手に取り、携帯灰皿へ押し込ん

で処分する。
それをズボンのポケットに仕舞った後、笑みを浮かべて答えられた。
「ウチの船長がクソ半魚人どもを始末してくれるってよ。なぁに、そう難しいことでもねぇさ」
「たかだか人間がっ、粋がるなよ……!」
「口の利き方には気をつけろ。魚がコックに逆らうな」
対峙した瞬間、二人の間をルフィが通り過ぎる。
全く警戒しておらず、サンジを心配することもなければクルーラに注意を向けることもない。
驚きから動けなかったため、その場はあっさりと通り抜けられてしまった。
しかしその先はそうもいかない。一人だけ様子がおかしいルフィを止めようと魚人たちが動き、今度はクルーラ同様、幹部のすぐ下につく実力者が飛び掛かった。
右からは長い首を持つウツボの魚人、ツウボが首を伸ばして噛みつこうとし。
左からはアオリイカのアオカが槍を突き出して仕留めようとした。
やはりルフィは反応せず、たとえ避けられたとしても見ようとさえしない。
彼らの間に割って入り、防御したのは本人ではなくキリとゾロだった。キリがツウボの顎を殴って口を閉じさせ、ゾロが白い鞘の刀を抜いてアオカの槍を受け止める。
二人は笑って敵を見ていた。
またもルフィはただ歩くだけで敵の間を抜ける。
「ガキども、邪魔するな!」
「アーロンさんの所へ行く気か!　そうはさせん!」
「まぁそう言わず。大将同士がぶつかって問題でも?」
「負けねぇって言うならこのまま通せよ。どの道すぐに終わる」
さらに先へ進んだルフィの前には、三人の人影があった。
おそらくそこが最後尾。混乱する一兵卒たちが持ち場を見出せず

に慌てているものの、彼ら三人だけは腕を組んで道の真ん中を塞ぎ、ルフィをじっと見つめている。
右にキス。真ん中にタコ。左にエイ。
今度こそアーロン一味の幹部たちが待ち構えており、ルフィは一人でそこに向かった。
「チュッ♡　何やってんだ。悪魔の実の能力者が居たからってたった六人になんてざまだよ」
「ニュ～、やっぱりおれたちがやるしかねぇか」
「なに、所詮は人間ども。そう時間はかからない」
真っ先に歩き出してルフィに向かったのはエイの魚人、クロオビである。
彼が得意とするのは肉弾戦。魚人空手を習得し、周囲にある水を利用する戦法は能力者が相手でも通用することは経験済み。過去のデータから見ても敵に効かないはずはないと思っていた。
ルフィを狙って正面から向かう。ルフィも向かう先を変えず、冷静なままで前へ進む。
今度こそ邪魔はないかと思われたが、やはり動く人物が居るらしい。
遠くからはウソップがパチンコでの狙撃を行っていた。
「三連火薬星ィ!!」
ほとんど変わらぬタイミングで三発の弾丸が放たれ、逸れることもなく標的にぶち当たる。当たったのは三人の幹部たちだった。彼らの顔面が小さな爆発に包まれる。
衝撃は上等。驚くのも無理はない。
体勢を崩すか、或いは転んでしまった者も一人居て、ルフィは悠々と彼らの傍を歩き去った。
今度こそ前方には誰も居ない。
道は仲間たちの手で作られ、そのまま真っ直ぐ進めば目的地に辿り着くという。
ルフィは振り返ろうともせずに歩みを止めなかった。
通り過ぎられて数秒。

クロオビとキスの魚人、チュウが倒れかけた姿勢から立ち直り、転んでしまったタコの魚人、はっちゃんが元気よく立ち上がる。
ギロリと睨む視線は当然弾を放ったウソップへ。
三人から同時に睨まれた彼は顔面蒼白の状態で呟いた。
「す、すみませんでした……」
「上等だ……チュッ♡　てめぇはおれがぶち殺してやるッ！」
「ぎゃああっ!?　ご、ごめんなさぁいっ!!」
怒り心頭のチュウがウソップを睨みつけて叫ぶ中、クロオビが気付いて背後へ振り返る。
ルフィがアーロンパークへ向かっていた。これを見逃していいはずもない。
即座に追おうと考え走ろうとする。
「待て！　ここから先には一人も通さん――！」
クロオビが止めようとしたところ、その彼を止めるために空からキリが降ってきた。
体の周囲にふわりと紙が浮かび、笑みを湛えて、右手を広げて道を塞ぐ。左腕はだらんとしたままで間抜けな姿だが、状況は逆転してしまったように見えた。
宙に浮かぶ紙を見て足を止めた。
この男も普通の人間ではない。おそらく能力者で、油断してはならない人物。
彼がルフィの背を守ったことでクロオビが正面から睨みつける。
「はい待った。ここから先には一人も通さないよ」
「人間、小賢しい真似を……！」
「怖い顔するなぁ、楽しく行こうよ。せっかくのお祭りだ」
右腕を前へ伸ばして、人差し指一本だけを空へ向けて伸ばし、それだけで周囲の紙が動き始めて不思議な光景を目の当たりにする。宙を漂って体の周りを旋回していた。
明らかに異質。能力者は二人居た。
クロオビは拳を構えて彼と対峙して、だがキリが動こうとしなかったことで場が硬直する。

気付けば空から雲が消え、月明りによって辺りが照らされていた。
いつの間にか戦闘は中断されており、荒れた戦場で怯えずに立っているのは三名の幹部と、さらに三名の幹部補佐が残っただけ。今も立っている一兵卒は混乱するばかりで動けない。
麦わらの一味が五名。
アーロン一味が六名。
ルフィを欠いた彼らは敵を逃さず、辺りに田んぼが広がるだけの道端で対峙した。

Ｓｈａｋｅ　ｉｔ　ｄｏｗｎ（２）

はしゃぐこともなくゆったりした歩調で歩き、ルフィはついに建物を見つけた。
海に面した位置にあるアーロンパーク。
五階から成る大きな建物で、屋根には鮫を模した像と旗。アーロン一味のジョリーロジャーは隠されることもなく堂々と掲げられている。
それを目にして、ルフィはそう時間もかけずに門の前へ到着した。
扉は閉じられている。しかし問題など一つも無い。
歯を食いしばって振り上げられた拳が強かに扉を叩き、木製のそれをいとも容易く破壊した。
轟音と共に吹き飛ばした結果、視界が開けて前方に道ができる。
ルフィの目に一人の男の姿が映った。
海と繋がる簡易的なプールを眼前として、椅子にだらしなく座った大柄の魚人。魚人の存在自体はつい先程見たばかりだが迫力が違う。船長と見て間違いないだろう。
扉を破壊されて尚も俯いたまま動き出さない。
アーロンはじっと佇んでいて、歩き出したルフィが敷地内に踏み込んだところで視線を向けた。
ただの人間、その中でも想像以上に弱そうだと思った。どこにでも居ると言ってもおかしくはない至って普通の外見で、特別長身である訳でもない。しかも人数はたった一人。
堂々と歩いて来る彼を見やり、アーロンが重々しく言葉を紡いだ。
「アーロンってのは、おまえだな」
「小僧、おまえは誰だ？」
「おれはルフィ」
「そうか、ルフィ。で、おまえは何だ？」
「海賊」
草履が奏でるペタペタという間抜けな音と共にルフィが接近してくる。

別段警戒する様子もなく、アーロンは間近にまで来た彼から目を離さなかった。
「海賊がおれに何の用――」
直後、気付けば殴り飛ばされていた。
左頬を打った衝撃は凄まじく、理解した瞬間には彼とは反対側の壁に体が激突しており、大きな音を立てて石造りのそれが崩れる。もうもうと土煙が立ち昇った。
衝撃だけでなく痛みも相当な物。飛んだ体が地面で落ち着いたせいか余計にそう思う。
地面に膝をつき、見上げるように睨みつける。
今、ルフィの顔には憤怒の表情があった。
「てめぇは一体……」
「うちの航海士を、泣かすなよッ」
一言だけで理解した。
この男はナミに関わってここに来たのだと。
思い返せば航海士としては優秀だが面倒な人間だった。何度も暗殺を企て、毒を盛ろうと試み、命令に従おうとしなかったことも数多い。始末しようと思えばいつでも出来たがそうしなかったのは海図のため。航海士としての能力を利用するためだった。
全ての失態を見逃してやろうと思っていれば調子に乗ったようだ。
人間に対する嫌悪感、憎悪。怒りがますます大きくなっていく。
アーロンの怒りが一気に膨れ上がる頃、ルフィは尚も悠々と歩いて接近しようとしていた。
拳は固く握られて、余裕を持ちながら微塵も油断していない。
厳しい表情は見るも明らか。小賢しいとアーロンが立ち上がった。
「ナミの差し金だな。人間風情が、魚人のおれに勝てるつもりか？」
「ああ」
「ふざけた野郎だ」
アーロンもまた前へ歩き出し、自分から接近を許す。
痛いほどの沈黙が広がっている。この場に居るのは二人だけ。月光に照らされて影が伸びる。

両者は慌てずに歩いて近付いていき、いよいよ手が届きそうだという時。
先にアーロンが拳を振るって殴りかかっており、だがそれに反応する形のルフィがさらに早く、アーロンの腹へパンチを叩き込んでいた。
予想外の動きに体が硬直する。
間を置かずに次いで顎が蹴り上げられ、思わずたたらを踏んだ。
さらに一撃叩き込む。
左の拳が腹を捉え、ルフィの身長を超える巨体が軽々飛ばされた。
アーロンの体は建物の壁に激突する。背中を強かに打ちつけて壁が崩れ、だが内部まで突き抜けることはなかったようだ。滑り落ちるように地面へ座り込む。
そこへ座ったまま、睨む視線はルフィを捉えた。
彼は肩を怒らせて鼻息を大きく、すっきりしない様子で視線を受け止める。
「てめぇ……」
予想以上の動きである。
身長は高く体つきも恵まれていたが、アーロンは決して鈍重ではない。振るわれる拳は決して常人に避けられる速度ではなくて、また放たれる威圧感は見る者を動けなくさせる力がある。尚且つ敵を捉えれば一撃で仕留めることすら可能な、まさしく必殺であった。
それを彼は軽やかに避けた。どころか、慣れた様子で反撃までしてくる。
確かに速い。だがガープの拳を見た後では止まっているのと大差ないと言っていい。
幼少期からの特訓が、或いは航海に出てからの戦いが、彼の実力を底上げしている。これまでの出会いと戦闘は無駄な物ではない。祖父との邂逅も意味があった。
構えもせずにルフィは余裕綽々で立っており、一方で怒りを滲ませていた。
立ち上がったアーロンは怒りを抑えて冷静に彼を見る。

攻撃を当てられて痛みを感じた。ダメージはある。
しかしそれ以上に面倒なのは反応速度と動きの速さ。今の数撃で攻撃を見た後に動いたのだと理解している。あのタイミングで動けるのは厄介だと分析し、思考は冷静に働いていた。
所詮は人間。勝てない相手ではない。
それでも無策で突っ込んでいくほど彼もバカではなく、平静を装った声を発した。
「おかしなことを言う奴だな。ナミはおれの仲間だぞ？　他人の仲間をウチの航海士とは、いくら海賊とはいえ少し身勝手が過ぎるんじゃねぇか」
「あいつが」
「んん？」
「あいつが本当におまえの仲間なら……なんであんな顔してんだッ!!」
ルフィの脳裏にナミの顔が浮かぶ。最初は強がっていた彼女は嘘を突き通そうとしたが、この島に辿り着いて涙を流していた。それを思い出して怒りが収まらなくなった。
辛い戦いを強いていたのは目の前の魚人で、涙を流させたのは間違いなく奴。
決意は揺るがず、迫力はアーロンに伝わって、眉を動かせた。
「あいつが、どんな顔をしていたって？　そりゃあ生きてりゃ辛いことなんて誰にでもあるさ。おれもそうだしおまえもそうだ。ナミだけが特別って訳でもねぇだろう」
「おまえがあいつを泣かせたんだ」
「ナミがそう言ったか？　一方の話を聞いて善悪を決めるのは身勝手ってもんだろう。それならおれの意見も聞いて欲しいもんだが」
言葉巧みに動揺を誘う。そうすれば隙ができるはずだ。
アーロンは語り始めるもののルフィの表情はぴくりとも動かず、またしても怒りが燻り出す。
「おれはナミを妹のように想い、奴が望むように尽くしてやったはずだ。多少意に反することもあったかもしれんが、メシを食わせ、服

を買い与え、仕事を与えた。それでなぜ泣く必要がある？　危険が迫れば守ってやって、怪我をすれば治療してやった。これ以上の何が必要だ」
「持ってねぇもんがある。あいつが欲しがって、それでもおまえらが渡さなかったもんが」
「ほう」
「自由だ」
一言一言でアーロンが考えを変えた。言い負かすのはなしだ。この男は揺らがない。
強い意志を見せる瞳は真っ直ぐに敵だけを見据え、動揺など微塵も与えられない。
ならば力で殺すまで。
静かに思考は形となった。
「おまえがあいつから自由を奪って縛り付けたんだ。おれはおまえを許さねぇ」
「で……どうするって？」
「おれがおまえをぶっ飛ばす。おまえになんか任せられねぇ。ナミはおれの仲間にする！」
「口だけなら、まぁ、なんとでも言えるがな……」
にやりと笑って恐怖心を煽る表情。一気に感情が爆発するようだった。
「シャハハハハ、ナミを仲間にする？　おれに勝つ？　やれるもんならやってみりゃいいさ。魚人族は至高の種族だ。人間如きがたった一人で勝てると思ってんのか！　下等種族が、舐めるのも大概にしろ！　出てこいモーム！」
叫ぶと同時、アーロンが右手を振り上げれば海から何かが飛び出してきた。
大量のしぶきを上げて顔を出したのは巨大な海牛、モームである。
可愛らしい顔つきをしているが他の海獣と比べても獰猛で、体長は三十メートルを超える。巨大さはそれだけで武器だ。尾びれがある以上陸の上を歩けないとはいえ強いだろうとは予想できる。

ルフィは驚かずに振り返り、その威容を見上げた。
表情は至って冷静なまま。
姿を確認するや否や、静かに右腕を振りかぶる。
「シャーッハッハッハ！　海中で呼吸すらできねぇ哀れなてめぇらじゃこんな芸当はできねぇだろう！　おれたち魚人族はこいつを従えることができる！　海牛モーム、こいつを踏み潰せ！」
「モォォォォッ!!」
「ゴムゴムの」
拳を握って、腕を引き、狙いを定めた。
モームは鋭い牙でルフィを食い千切ろうと顔を近付けてくる。狙うのならばそこがいい。
おもむろに突き出された右腕はゴムのように伸びて、高速のパンチがモームの頬を強く打った。
「ピストルッ！」
「モォッ!?」
三十メートルにも及ぶモームの巨体がたった一発で浮かび上がり、海から全身が現われて宙を舞った後、頭から海面へ落ちる。距離はさらに離れて高い水しぶきが立った。
雨のように降るそれを浴びながらルフィは佇み、アーロンは言葉を失う。
腕が伸びた。
モームを殴り飛ばす一撃にも驚くが、それ以上の衝撃はおよそ普通の人体とは呼べぬこと。
ゴムのように伸び、攻撃を終えて縮めば元通りの姿となって、それが悪魔の実を食べた結果であることは考えずとも理解できた。
能力者を見たのは初めてではない。驚きはするものの誰もが共通の弱点を持っている。それを知るアーロンはむしろ好都合だと笑みを深くしていた。
能力者が必ず持っている弱点、それは一生カナヅチになること。
魚人族が得意とする場は、彼らにとって死を意味するのだ。
魚人族は陸上と海中、両方での呼吸が可能な肉体を生まれながらに

持っている。
遊泳速度こそ人魚には及ばないとはいえ、魚に勝るとも劣らぬ速度で泳ぐことができ、人間が追いつくことなどまずあり得ない。その上で人間以上の腕力を持っている。
魚人族の真価を発揮できる場所は陸上ではなく海の中だ。
能力者が厄介と言っても海中に引きずり込めば彼らに勝てる者は居なくなる。少なくともアーロンは人間、人魚、海王類が相手でも負ける気などなかった。
今、はっきりと勝機を見たと悟る。
奴を海中へ引きずり込んで嬲り殺しにする。魚人を舐めた罰だとして考えが決まった。
モームを殴り飛ばしたまま背を向けるルフィを狙い、アーロンが瓦礫が散らばる地面を蹴った。
「図に乗るなよ小僧！」
明確な攻撃を当てる必要はない。ただ捕まえて海中に連れ込む、それだけで自身の勝利。相手は呼吸もできず、泳げない訳で、逃げる手立てなど一つも無かった。
「ゴムゴムの」
反応してルフィが振り返る。だが問題ないとアーロンは飛び掛かるのをやめなかった。
即座に足が振り上げられ、勢いよく蹴りが繰り出される。
その一撃はアーロンの腹へ突き刺さり、草履越しに衝撃が走った。
「スタンプ！」
「ぐおっ――!?」
それだけではない。蹴りの最中に勢いを利用して脚が伸ばされていて、見る見るうちにルフィとの距離が遠ざかっていく。彼が蹴った地面の位置さえ越え、建物の壁へ再び激突する。
ひび割れていた壁は今度こそ破れた。
アーロンの体は建物の内部へ飛び込み、背中を打って地面に倒れる。
まさかの事態だった。ルフィの反応は素早く、反撃も堂に入ってい

る。
油断し過ぎたか、或いはまぐれだろう。そう思うアーロンが頭を押さえながら起き上がると同時、壁が崩れて出来た破片を踏みつけ、ルフィが姿を見せる。
外と内、睨み合って対峙した。
「海に落ちたらおまえらには勝てねぇってのは知ってる。キリが教えてくれたからな。おれはカナヅチで泳げねぇし、魚人は海で呼吸できるってのも聞いた」
「チィ……！」
「でも陸の上なら負ける気がしねぇ。おれはおまえに勝てる」
「ふざけんじゃねぇぞ下等種族がァ！」
アーロンが荒々しく吠えた。
彼にとって最も許せないのは人間に舐められること、魚人族を軽んじて見られることだ。
魚人族こそ世界で最も優れた種族。彼の中には確固たる意志があり、それを崩そうとする者がたとえ誰であっても許せない。格上の相手であっても許せず挑みかかる気性があった。
たかが人間、泳げもしないし海中で呼吸もできない。
なぜそんな奴に負けなければいけないのか。
怒りが力となって全身を満たし、少々のダメージなどすでに忘れてしまった。
絶対に逃がさない。泣いて謝っても許すことはないだろう。
強い意志を持ってアーロンが睨みつけ、ルフィは涼しげな顔でその激情を受け止める。
「魚人族は最強の種族だ！　人間がどうあがいたところで越えようのねぇ壁があるんだ！　いいだろう、そこまで言うなら陸の上で殺してやる！　てめぇ相手に小細工なんざ必要ねぇんだよ！」
「どっちでもいいよ。おれはおまえを許す気なんてねぇから」
そう言ってアーロンは室内に視線を走らせ、壁に掛けられていた武器を手に取った。
刀の柄から伸びるのはいくつもの刃を付ける長大なノコギリ。

アーロン専用の武器、〝キリバチ〟である。
向かい合った二人は感情を隠さず睨み合った。
状態は万全。状況に有利も不利もなく、ただ強い者が勝つ。
両者は同時に動き出した。

Ｓｈａｋｅ　ｉｔ　ｄｏｗｎ（３）

雲が無くなり、晴れた空から月の光が降り注ぐ。
照らされるコノミ諸島はいつもより騒がしくなっていた。
ココヤシ村の村民が武器を持ってアーロンパークへ向かっている。先頭は護衛を務めるヨサクとジョニー。その後ろにゲンゾウが立って皆を引き連れている。
物々しい雰囲気はかつてなく、全員が揃いも揃って決意を滲ませる顔だった。
これから彼らはアーロンパークへ赴き、魚人たちと戦う。
そのつもりで歩いていたところ、アーロンパークに辿り着く前に戦場を見つけてしまった。
前方に六人の魚人たちの背。
アーロンパークまで続く道を塞ぐかのように五人の人間。
他の魚人は全員が意識を失って倒れていて、辺りの地面も多少影響が出ており、草が焼けている所や土がめくれ上がっている箇所もある。現場を見ていないとはいえ勝敗は明らか。幹部と補佐を残し、五人がダメージを受けることなく勝っていたのだ。
距離を置いた状態で足を止め、ヨサクとジョニーが喜びの声を出す。
少し後ろでゲンゾウや村民たちは声すら出せずに驚いていた。
「おぉっ、流石兄貴たち。ちょっと目を離した隙にもう勝ったも同然だ」
「あいつらは幹部か？　だが兄貴たちが負けるはずねぇからな」
喜ぶ二人はさも当然のように語っているが、今まで圧政の下に居た村民は信じられない心情だ。
魚人を倒せる者が存在したとは。
武器を集めていたとはいえ刺し違える覚悟だっただけに、ゲンゾウは低く唸る。
彼らならなんとかできるかもしれない。
そう思っているところに背後から声をかけられた。

「ゲンさんっ」
「ん？　ナミ、ノジコ」
麦わら帽子をかぶって三節棍を持つナミと、その後ろからノジコ。
ナミの左肩に巻かれた包帯に血が滲んでいることが気になったが、それよりも大きな衝撃があったせいか、呆然として質問することすら忘れてしまった。
待ち切れずに二人もやってきたらしい。
ゲンゾウへ駆け寄ると前方の光景に気付いて、どちらも驚きを露わにしていた。ナミより先に信じられないといった表情でノジコが呟く。
「これ、あいつらがやったの？」
「我々も今着いたところだ。だがおそらくそうなんだろう」
「……ルフィが居ない」
ナミがぽつりと呟くも、そのことについて議論しようとする者は居なかった。
一時は静止したものの戦闘は今にも再開されようとしている。
麦わらの一味に属する五人は余裕を失くしておらず、互いに会話する余裕もある。
雑兵は殲滅した。
残る幹部たちを倒せばひとまずこの場の戦闘は終わりとなるだろう。
「さて、誰が誰の相手をするか」
「全員おれでもいいぞ。リハビリには十分ってとこだろ」
「大怪我人は黙ってろ。全員おれが蹴り飛ばすんだよ」
「ウソップ、顔色悪いけど大丈夫？」
「お、おれはゼロでいいぞ。そりゃあ不服だが、今回はおまえらに譲ってやろう」
それぞれ表情は違うがいまだ健在。相手を選ぶ余裕もあった。
対するは幹部のキス、タコ、エイの魚人。
さらにそのすぐ下につくウツボ、アオリイカ、ピラルクーの魚人たちだ。

「部下がやられちまった……チュッ♡　こりゃいよいよ笑えねぇ」
「ニュ～ッ！　よくも同胞たちを！」
「奴らを甘く見過ぎていたか。しかしそれでも人間であることに変わりない」
「魚人のおれたちが負ける訳ねぇ！」
「それにこちらは幹部が残っている。ここからが本領発揮と言って過言ではない」
「おれたちが負けるはずがねぇ。さっさと終わらせて、逃げた一匹をやっちまおうぜ」
戦意を漲らせて立ち並ぶ彼らは敵を見据えて離さない。
いつ動き出してもおかしくない空気で、咄嗟にウソップが驚きの声を出した。
「おいっ、村の連中追いついてきちまったぞ。危ないんじゃねぇか？」
「あーほんとだ。でも先頭がヨサクとジョニーだから大丈夫だよ」
「心配ならおまえが助けに行けよ」
「む、無茶言うな!?　おれの弱さを見くびんなよっ！」
「だからその自慢はなんなんだ」
彼らのやり取りを聞いていたのか、それとも気配を感じたのか。
チュウが厳しい目で振り返る。
ただでさえ同胞をやられて怒りが抑え切れなくなっていたのだ。
そこへ武器を持った村人が現れて明らかに反逆の意志を見せている。
これで動じずにはいられない。
敵に背を向け、チュウが彼らを睨みつける。
その時ウソップが反射的に手を動かしていた。
「まずいっ」
「あいつら、ココヤシ村の連中じゃねぇか。武器まで持って偉そうに……チュッ♡　そうか、つまり全員殺されてぇってことだよなぁ」
「必殺鉛星！」
「うごっ!?」
村人たちを見ていたチュウの背にパチンコから放たれた鉛玉が激

突する。鈍い音がすると同時に転びかけて、なんとか倒れずにしゃがみ込んだチュウが痛みを堪えて背後を見た。
どう見ても発射したのはパチンコを構えるウソップ。
勇ましい叫びを聞いて尚のこと意志は固まった。
「おまえの相手はおれだろうが！」
「なるほど。やっぱりてめぇはおれに殺されてぇようだなァ！」
形相を変えて叫んだチュウを目にして、途端にウソップが全身に滝のような汗を掻き出す。
村の人間を守ろうと注意を逸らすために思わず動いてしまった。その後のことまで考える時間などない。そのため自分が置かれた状況を今になって思い知る。
ただ単純に怖い。
助けを求めるように仲間たちへ視線をやると、キリとサンジには意図など伝わっていなかったようで、かけられた言葉は彼が全く望んでいない物だった。
「ほぉ～、やるじゃねぇかウソップ。おまえが真っ先に選ぶとは思ってなかったぜ」
「いやいやいや!?」
「流石キャプテン・ウソップ。じゃ、あいつはウソップに任せるよ」
「違う違う違う!?　ただ注意を逸らそうと思っただけなんだよ、おれがやる訳じゃないって！」
「でも相手はそのつもりだし」
「代わってくれりゃいいじゃねぇか！　あっ、おい、お願いだから話聞いて！」
ウソップが騒ぐもののすっかり聞き流されてしまい、他の面々はすぐ自分の思考に集中する。
とりあえず選択肢は一つ減った。
敵もその気でチュウと戦う機会は無くなる。
あと五人。
敵はこちらより一人多く、誰かが二人を倒す必要がある。
果たして誰が担当になるのか。考える隙にはっちゃんが大声を出

した。
タコの魚人である彼は足が二本に、腕が六本。武器とするのは六本の腕に持ったサーベル。
まだ腕前は見ていないものの剣士であることは確定しただろう。
六本の腕に剣を持つ様を見て、ゾロが興味津々で笑っていた。
「ニュ～、おまえらもう終わりだな！　おれは魚人島ナンバーツーの剣士、六刀流のハチ！　二本腕のおまえたちには絶対にできない剣術を見せてやるぞ！」
「へぇ、六刀流……おもしれぇ」
抜き身の刀を肩に担いでゾロが前へ出ようとした。
それをシルクが止める。
「待ってゾロ。ゾロは怪我してるんだから、今回は無理しない方がいいよ」
「あぁ？　だから大丈夫だっつってんだろ」
「ダメ。大丈夫じゃなくても大丈夫って言う人なんだから、今日は戦わせない。あの人は私が倒すよ。ゾロはもう休んでて」
「必要ねぇっての。なんでおれだけ休まなきゃならね――」
「ダ・メ」
ずいっと迫られて強く言い返せなくなる。ここまで頑なな彼女を見るのは初めてな気がした。
ゾロは言葉に詰まり、渋々といった顔で唸るように呟く。
「おまえ、だんだんあいつらに似てきたぞ……」
「そうかな？　とにかく無理しちゃダメだよ」
「あはは、怒られてやんのー」
「キリもだよ」
「あれ？」
「普通わかるだろ。バカか」
シルクが気合いの入った顔つきではっちゃんの前に立ち塞がり、彼もそれに気付く。
互いに剣士。だが普通でないのはお互い様だ。
戦闘を始める機会を待ち、どちらも油断せずに視線をぶつけた。

傍らで聞いていたサンジは言い出さずには居られなかった。ほんの少しとはいえ彼女が戦う姿を見た。能力者で剣士、確かに強いのだろう。しかしそれと安心できるかは別である。
迷惑になるだろうと知りつつ、苦心しつつもシルクへ声をかけてしまった。
「シルクちゃん、やっぱりあのアホどもにやらせた方がいいんじゃないか？　おれはシルクちゃんが怪我したらと思うと心配で心配で……」
「ふふ、ありがとう。でもやらせて。練習したこと、全部試したいし」
「そうかい？　危なくなったら遠慮せずおれを呼んでくれ。何があっても絶対に――」
「くだらんな」
「あ？」
会話を遮るようにクロオビが呟いた。腕組みをして目を伏せ、サンジの態度をくだらないと吐き捨てる。これを聞いて黙っていられるはずもなかった。
サンジはシルクの傍を離れてクロオビの前に立ち、睨むように見据える。
目を開けたクロオビもまた、剣呑な雰囲気を纏って彼に目を向けた。
「騎士道のつもりか。そうやって女に甘い態度を見せるだけで、実力が伴わずに死んでいった奴らを山ほど知っている。所詮口先だけの騎士道。貴様に守れる物などありはしない」
「言ってくれるねぇサカナマン。おれが誰も守れねぇって？」
「当然だ。おれの手で引導を渡してやる」
「その言葉忘れんなよ。騎士道の何たるかを知らねぇ野郎が、偉そうに語るな」
どうやらサンジはクロオビを己の敵と定めたらしく、眼前に立って対峙する。
これにより蚊帳の外に置かれたキリとゾロが肩をすくめて会話し

ていた。
「やっぱケガするのってよくないね。なんか扱い悪い気がするよ」
「チッ。シルクの奴、勝手に決めつけやがって」
「まぁいいじゃん。三人は残ってる訳だしさ」
必然的に残された二人はあとの三人を見やり、敵も気付いた様子で構えを見せる。
右手の指を動かしたキリが紙を動かし、ゾロは溜息交じりに刀を握り直した。
「せっかくなら怪我人同士、タッグマッチでもやってみる？」
「サボりてぇんなら見ててもいいぞ。おれが全部斬っちまう」
「一刀流って苦手じゃなかったっけ？」
「修行くらいにはなるだろ」
「まぁそうか。でも悪いけど今回はやるよ」
キリが柔和に笑って言う。
「歴史的な大敗をしたとこだからね。もう一度自分の能力を見つめ直そうかと思ってさ」
「見つめ直せば変わるもんか？」
「そりゃもう。鍛えれば変化するのが悪魔の実の能力だ。考え直せば戦法だって変わるし、ボクの場合そもそも能力の応用力が高いからね」
「そうかい。ま、勝手に頑張れ」
「ゾロこそ三刀流だった方が修行になるんじゃない？」
指先の動きで紙を束ね合わせて、二本の剣が作られる。空中に浮遊するそれはキリが使う訳ではない。彼は仲間から左手を使わないようにと厳しく言われているため、右手しか使えなかった。
宙を動いたそれらはゾロの前に移動する。
ゾロは笑い、頭に黒い手拭いを巻いた。
タッグマッチ。適当に言い出しただけだろうが案外面白いかもしれない。
今まで一度も経験がなかった。
「ちゃんと斬れるんだろうな」

「本物に比べれば切れ味は悪いけど、ゾロなら腕力があるから十分使えるよ。あ、でも濡れたら紙が剥がれるから要注意。こればっかりは修行しても直らなくてね」
「敵を斬ったら弱くなるってことじゃねぇか。微妙な剣だな、こりゃ」
「でもないよりマシでしょ」
自身の刀を口に銜え、両手に紙の剣を持つ。
瞬く間にゾロの準備は整った。すでにキリも紙を浮かばせ、準備を終えている。
その空気を感じ取ったか、魚人たち三人も闘志を剥き出しにした。
「ふざけた連中が、おれたちに勝つ気だぞ」
「思い知らせてやる！　魚人族の力を！」
「皆、チームワークを忘れるな。仲間は助け合うものだ」
アオカが槍を構えて言えば、本当に聞いていたのか、ツウボが勢いよく飛び出した。
どうやら落ち着きのない性格らしい。
仲間を置き去りに単独で突出し、二人を同時に狙って大口を開き、飛び掛かった。
ウツボの魚人、体はぬるりと首が長く、鋭い牙が生え揃っている。噛みつけば決して離さず肉を食い千切り、人体であっても簡単に分解できる力を持つ。
さらに他の魚人より長い首は獲物を捕食するのが得意だ。
攻撃においては三人の中で最も危険性を持つ人物。大口を開ける様を見ても慣れているらしい。
目前まで迫ったツウボを見、突如キリが動いた。
能力を使わず右足で顎を蹴り上げ、無理やり口を閉じさせる。攻撃でありながら敵の攻撃を防いでもいる。顎から生じた痛みによって、ツウボはぐらりと視界が揺れるのを感じた。
為す術もなく地面へ落ちて転がる。
一時とはいえ動きが封じられ、眩暈が治まるまで動けなくなった。
着地したキリは笑顔で辺りを見回し、ゾロはつまらなそうにしてい

る。
「で、いつ始めるつもりなのかな？」
「もう始めてるつもりなんじゃねぇか。どうもそんな気はするがな」
ほんの一瞬でも、感じ取った実力は相当な物だと思われる。
ツウボを蹴った動きは想像以上に素早い。
離れた位置で見ていたクルーラが呟き、同意するようにアオカが槍を回した。
「あいつら、できるな」
「ああ……気合いを入れなければこちらがやられるぞ」
槍を構え、アオカがにじり寄り始めたことを機に、二人は敵を見回して話し合う。
敵は三人だがこちらは二人。
誰が誰をやるべきか。
「ご希望は？」
「とりあえずイカだな。槍ってのは戦ったことがねぇ」
「じゃ、ボクはとりあえずウツボにしとこうか。どうせ近くに居るし」
ゾロが数歩前へ出ると同時、一気に踏み込んだアオカが彼を目掛けて槍を突き出す。踏み込みの強い素早い一撃だ。しかしゾロは右手の剣を使い、あっさり受け流す。
一度引いて再び突き出し、二度三度と連続して攻撃を行う。
その場を動かず、ゾロは冷静に全ての攻撃を受け流していった。
「ぬおおぉっ！　我が槍を見よ！」
「ああ、見てるよ。修行はそれなりに積んでるようだな」
高速の突きを次々捌き、見事な光景だった。
アオカが繰り出す攻撃はゾロの防御を崩せない。本物の刀を使わずとも十分らしい。
キリは二人のやり取りを見てぼんやりと呟く。
「上手く受け流すねぇ。死にかけなのによくやるもんだ」
「くそォ、てめぇよくもやりやがったな！」

「あ、起きた」
彼の傍ではツウボが起き上がり、蹴られた顎を撫でながら怒ってキリを睨みつける。
普通は睨みつけてやっただけで相手が怯えるものだが、間近に居る彼は全く怯えた様子がない。不審に思って表情を変えれば、にこりと親しげに笑いかけられた。
ちょうどいい。
心の中で独り言ちて、彼は決意を言葉にし始める。
「なんだかんだ言ってこの間も油断してたのかもね。悪い癖だ、今日は久々に本気でやるよ」
「あァ!? 訳のわからんこと言いやがって！ てめぇが本気出したところでおれに勝てると思ってんのか！ ウツボ舐めんなよコラァ！」
「声大きいなぁ。わかったから普通にしゃべってくれない？」
凄んだところでさらりと受け流され、耐え切れなくなってツウボが首を伸ばした。宣言のない強襲で不意を衝こうとしたのである。しかしキリはしゃがみ込んであっさり避けた。
指を振って周囲に浮かぶ紙を呼び寄せ、能力を使役する。
ペラペラの実の強さとは何か。彼は改めて考えた。
ここのところ余裕ぶって何もしていないが、かつては強くなるため修行をしていた。紙の操作はその結果による物。そもそもは体質の変化こそ彼の強みであった。
紙を操って行う戦法において最強とは。
改めて考え、すぐに答えが出せるほど簡単な問いではないものの、すぐにわかることもある。
自身の強みは変幻自在の戦法にある。キリはそう思っていた。
ルフィのようにゴムの張力を利用した肉弾戦でもなく、ゾロのように刀を使った接近戦でもなく、シルクのように能力による遠距離でもなく、ウソップのように狙撃を主として多種多様の武器を使う戦法でもなく、サンジのように自らの肉体を頼りにする蹴りが主体でもない。

敢えて言うならばその全て。
殴打、斬撃、狙撃、蹴り、そして能力による独自の戦法。全て行えることこそ強味だろう。
紙という一見弱々しい物質を硬くして、折り重ねて強固にして、状況を見て使い分ける。紙の操作を手に入れた今、浮かせることも飛ばすこともできるのならば可能なはず。
今一度、自らの全力を知っておくべきだ。
敵との距離を作るため、地面を蹴って後ろに跳んだ。
すると即座にツウボが後を追って飛び掛かり、首を伸ばして彼の首に噛みつこうとする。
「ええい、逃がすか！」
「うわぁ～、こわ～い」
「ふざけてんのかてめぇはッ！」
やる気のない声で言えばツウボは怒りを倍増させて、ただでさえ持っていなかっただろう冷静な思考が欠片と残さず消える。想像通りの反応だ。こういった短絡的な思考を持つ相手は自身の船長で得意としている。平静を崩すのも非常に簡単だった。
敵はやる気だけが前に出て状況を判断できる思考能力を失っている。
牙が迫るものの笑みは崩れず、着地と同時にツウボはキリの首を狙って噛みつこうとした。
ガチンと音がして口が閉じられる。しかしキリはひらりと避けていた。
気付けばなぜか彼の全身は紙のように薄く、ペラペラになっていて、風が吹けば飛んで行ってしまいそうな姿。一瞬の変化にツウボが驚いて背をのけ反らせる。
「な、なんだそりゃ!?　体が紙みてぇになっちまいやがって……!?」
「そりゃボクは紙だからね。紙みたいにだってなるよ」
音もなく体に厚みが戻って元の姿になる。
驚いて動きを止めたツウボを狙い、キリは右手だけを紙に変え、腕が白く染まった。しかし今度は一枚の薄い紙の状態ではなく、何枚も

の紙が折り重なって構成されているような、厚みのある姿。腕の形それ自体は至って普通だが肌の色だけが変わっていた。
紙を硬化する力を習得した以上、その腕もまた硬化されて、鉄と同等の硬度を持つ。
肉体の変化と硬化を併用し、素早く動き出す。ツウボの頬を殴りつけた一撃はまるで鉄の武器で殴られたようでもあって、脳が揺れて足元がふらついた。
「ぐふっ……!?」
「悪いけど容赦はしない」
続けて裏拳で反対側の頬を殴り、腹へ突き刺さって、顎を殴り上げた。
ただ殴られている訳ではない。その硬度が凄まじい威力を発揮し、痛みを感じるだけでなく衝撃が肉体と共に精神までを揺さぶって、立っていることさえ辛くなる。
無慈悲に、容赦なく敵を殴り続けながらキリは想う。
強くなるために修行していた頃はもっと冷酷だったはずだ。
普段から紙の操作ばかりを使って、肉体を紙に変える力を隠していたのはここぞという瞬間まで油断を誘うため。しかし言ってしまえばそんな小細工はただの甘え。本当の強者には通用せず、意味のない物だと気付かされた。これもしばらく戦闘から遠ざかっていた影響だろうか。
理解した彼は考えを改める。
最初から己の能力を十全に使い、徹底的に追い詰め、撃破する。以前の自分はそうしていた。
冷酷に、無慈悲に、容赦なく倒す。その言葉をようやく思い出した。
仲間を失って強くなると決めたはずが、すっかり大事なことを忘れていたようだ。
過去の光景を思い返し、意識を研ぎ澄ませて、集中する。
ペラペラの実の能力とは、紙を操ること。
そして紙とは自身が持ち運ぶ物であり、己の体その物でもある。
今、改めて答えに辿り着き、全力で放ったパンチがツウボの体を殴

り飛ばした。
「ぶぉあぁっ!?」
「威勢は良かったんだけどね。ま、こういうの珍しくないから別にいいよ」
背中から地面に落ちたツウボは気絶寸前。だがまだ負けてはいなかった。
意識を失っていない限りはまた立ち上がる可能性がある訳で、仲間のためを思うならば放ってはおけないだろうと、思考を切り替えたキリは歩み寄ろうとする。
徹底的にやる。殺すほどの相手ではないとはいえ、意識を刈り取る必要があるだろう。
攻撃の手を緩めようとしないキリの前へ、クルーラが立ちはだかった。
おそらく動けないだろうツウボを守るため、最も硬い鱗を持つ彼が両腕を広げる。防御においては彼が誰よりも優れていた。ただ立ちはだかるだけで脅威となる。
キリも思わず足を止めた。
「それ以上はやらせん！　仲間はおれが守る！」
「おっと」
キリはふとゾロに目を向け、いまだに一太刀も受けずに攻撃を受け流している様を見た。
語る声は普段と何も変わらず、戦闘中にも拘らず肩の力も抜けている。
「ゾロ、遊んでるようならこっちもう一人もらっちゃうよ」
「何？　そりゃズルいだろ。もうちょっと待て」
「だって全然終わらせないじゃないか」
「槍の間合いを見てたんだよ。珍しいもんだからな」
「そうかなぁ。でも珍しいにしたってそんなに見て面白い物でもないでしょ」
「わかった、今終わらすからちょっと待ってろ」
緊張感のないやり取りを終え、キリは敢えて後ろへ跳んで敵との距

離を取った。話を聞いていたクルーラだがツウボを狙うのをやめたと知ったため追うことはしない。
一方、空気が変わったのはゾロとアオカの二人だ。
彼は何と言ったか。今終わらせると、事も無げに言い切ったのだ。本気で攻め続け、決して手を抜いていないアオカの猛攻を全て防ぎ切りながら、笑みを浮かべて視線を外してあっさりと。
ひどい侮辱である。怒りを見せるのも当然で、アオカの腕に尚更の力が入った。
「軽んじてくれた物だなっ。そう簡単におれに勝てると思っているのか！」
「ああ。おまえの槍は見せてもらった。もう十分だ」
「舐めるなッ！」
槍の穂先と紙の剣を打ち合わせ、両者が後ろへ跳んで距離を取った。
着地と同時にアオカが巧みな様子で槍を回す。
少しは違った物が見れる気がして、ゾロは姿勢を低く、眼光を鋭くした。
「我が槍の必殺はまだ見せていない！　大口を叩くならこれを避けてからにしてもらおうか！」
「いいぜ。待っててやるから早く来い」
「この一撃で……叩き潰してやる！」
そう言って全力の一撃がやってきた。
長身を生かして大上段から振り下ろし、高速で強靭な攻撃が降ってくる。ただ、ゾロは怯えるどころか自ら前へ出てそれに挑みかかっており、接触の瞬間、口に銜えた刀でするりと受け流した。
見よう見まねの柔の剣。
その一瞬で出来た隙はあまりに大きく、見逃してやるほどゾロはやさしくもない。
驚愕の一瞬。槍は強く地面を叩く。
ゾロは凶悪そうに笑って刀を構えていて、突進から繰り出す斬撃が襲い掛かって来た。

「鬼斬り!!」
「ぐあぁっ!?」
アオカの巨体が斬り飛ばされ、空中から血を撒き散らしながら落下してくる。彼はそのまま地面へ倒れて動かなくなった。どうやら一撃で気絶してしまったらしい。
体には三本の刀による刀傷。
血を浴び、濡れたことで力を失った紙の剣の一部が剥がれる。従って不服そうにして剣を手放すと、形を失って散ってしまったそれは地面に広がる。
口に銜えた自身の刀を手に持つ。
振り返ったゾロは、冷静とも冷ややかとも言える声でアオカへ告げた。
「悪いがおまえは眼中にねぇ。お遊戯がしたいなら他をあたりな」
「いいね。初めからそうしとけばいいのに」
ひどくあっさりとアオカが討たれた。
幹部たちには届かないものの、アーロン一味の中では実力者の一人。単純な思考しか持たずに暴走することもあるツウボはともかくとして、彼まで倒されるのは驚愕に値した。
クルーラは一人残された形となり、戦慄する。
二人が並んで彼を見ていたのだ。
「硬さはともかく水に濡れてこれじゃ脆いだろ」
「でも一撃に賭ければ使えないことはないよ。あと殴るとかさ」
「やっぱり新しい刀は必要だな。どっかで買えればいいんだが」
「せっかくなら良い物買った方がいいよ。これからずっと使うんだからさ」
敵を倒したことを手柄とも思わず、気楽に話している姿はまさしく異様。海賊であれば勝利に酔いしれてもおかしくない。そうならない彼らは、もっと高みに居る気がした。
血相を変えたクルーラは拳を握って構える。
鉄の鱗に一味で一番の巨体。肉弾戦には自信があった。
戦闘はまだ続いている。

クルーラが構えたことで二人も佇まいを変え、準備をするようにわずかな動きを見せた。
「一応、残りは一人だけど」
「確か鉄みてぇに硬い奴だったか。アホコックが倒せなかった奴だな」
「まぁ言い方変えればね。さっきまで乱戦だったからさ」
「鉄を斬る力か……ちょうどそいつが欲しいと思ってたところだ。おれにやらせろ」
「え～？　ボクもやっとノッてきたとこなのになぁ」
構えるクルーラを無視して一行に襲ってこない。
彼が緊張しているのも知らず彼らは悠長に話していた。
「ジャンケンで決めようか。試そうかと思ってたことまだできてないし」
「後出しすんなよ」
「ゾロこそ。大怪我してるんだから降りるのもありだよ」
「おまえが人のこと言える格好か？　いいから早くしろ」
呑気にジャンケンを始めて、クルーラは針の筵に座らされたまま待つことになった。
勝敗は一瞬で決まる。勝ったのはキリだ。
彼はピースサインと共に笑顔で前に出て、指を広げていたゾロは悔しげにその背を見送る。
「一分経って終わらなかったらおれが変わるからな」
「心配しなくてもそんなにかからない。あ、それだと残念ながらって言った方がいい？」
「わかったから早くやれ。まったく、貧乏くじばっかりだな」
「悪いね」
改めてキリがクルーラに対峙し、紙を操る。
宙を舞ったそれらは彼の右腕に纏わりついて、何やら鎧のような物を生み出した。
ペラペラの実の可能性。その一つに〝武装〟を見た。
自由に形を作り上げる〝操作〟と鉄の硬度にまで引き上げる〝硬

化〟。その両方を使って行える戦法が武器を作って敵を討つこと。ならば自らを紙の武器で武装する、それこそ彼独自の戦法。
キリの右腕には腕の数倍にはなるだろう籠手が装備されていた。
「鉛紙武装〝ガントレット〟。鉄が相手なら鉄で相手するまで」
「くっ……子供騙しだ！　うおおおっ――――！」
気合いを入れてクルーラが駆け出した。真正面からキリへ向かい、自らの剛腕で敵を叩き潰さんと接近する。それを見てキリも駆け出し、逃げずに立ち向かった。
だが動きはキリの方が早く、気付けば目の前に居て。
見切れぬほど素早く繰り出された手甲による拳が上半身を打っていた。
「うぐっ、おぉっ――――!?」
衝撃は凄まじく、体が飛びそうになる。だが必死に耐えてなんとかその場に踏ん張った。
足が滑って地面が削れるものの飛ばされまいと拳を両手で掴み。
まだ衝撃が消え去らない内にキリの涼しい声が聞こえた。
「あと言い忘れてたけど、ボクは結構嘘つきだよ」
「う、おっ」
紙で出来ていた手甲が一瞬で形を変え、まるで大口を開けて噛みつくように、クルーラの体を捕らえてしまった。その様子は何かの生物を思わせる。
動揺している間にキリは地面に足を着き、巨大な紙の塊から右腕を抜く。
軽く指を振って指揮をすれば、紙は独りでに空へ飛び上がった。
「魚人は空を飛べないよね」
動揺している間にクルーラを連れた紙の塊はぐんぐん空を目指し、天高くまで彼を連れていく。
逃れようともがくのだが、ある時ふと気付いた。
もしも今離されてしまえば地面まで落下、ただでは済まない。かと言って抵抗せずにいると何をされるかはわからない。どちらを選んでも良い方向などない状況だ。

言わば、絶対絶命。
クルーラは顔から血の気を失くして、怯えた目で地面を見下ろすが遥か遠く。
声を出したところで相手には届かずに、また相手の声も聞こえない位置に達していた。
「ま、待て!? おれが悪かった！ こ、降参するッ！」
「さて。鉄の鱗はこの高さから落とされて無事でいられるのかな」
右手の指は天を向いている。それが振り下ろされれば彼の体は真っ逆さま。
姿もよく見えず、声も聞こえぬ距離ながら、二人はそれぞれ言葉を止めなかった。
「や、やめろぉぉおおおおっ！」
「紙鳴（かみなり）――！」
そうして、腕ごと指が振り下ろされた。
彼の体を掴んでいた巨大な紙の塊は形を変え、クルーラの背を地面に向けた状態で、高速で落下してくる。重力さえも利用して速度は目で見るのも難しいほど。地面へ向けて空を泳ぐかのような紙の群れはまるで竜の姿を連想させて、同時に天から落とされる稲妻のようでもあった。
誰もが見上げる中でそれが落下してくる。
風を纏って轟音を放ち、止める者のない紙は地面に到達した。
奏でられる音はまさしく雷が落ちたかのような。大地を揺るがす衝撃と轟音が辺りへ広がる。
どうしても無視はできない一瞬。
皆が見ている前でクルーラは気を失い、陥没した地面の中央で白目を剥いて倒れていた。
紙を回収し、キリは笑う。
体の状態は上々。怪我による悪影響もない。
念のため陥没した地面を覗き込み、クルーラが気絶していることを確認して肩をすくめる。
「やっぱ耐えられなかったね。でもまぁ、死んでないようで何より

だよ」
気楽に告げた瞬間、足をふらつかせながら立ち上がったツウボが、背後からキリへ襲い掛かる。
しこたま殴られてひどい様相だった。だからこそリベンジのため大口を開ける。
首に噛みつき、肉を抉り取れば人間を始末するなど簡単。
隙を見つけて、勝機を悟っていた彼だが、静かにゾロが刀を手にしていた。
「よくもやりやがったなクソ人間！　おれに勝てたと思ったのが運のツキだ！」
「ゾロ」
飛び掛かるツウボへ素早く駆け寄り、刀が振るわれる。
余裕がないせいか本人はそれに気付いていない。
「死ねェ！」
叫ぶと同時、血を噴き出して倒れたのはツウボだった。
通り過ぎ様に一撃。元々余力も残っていなかったためあっさり決着が着いた。
村人たちは言葉を失くして立ち尽くした。
こんなに強い人間は、海賊でも海軍でも見たことがない。あれだけ強いと思っていたアーロン一味を、全く疲労も感じさせずに倒してしまった。
信じられない物を見る目で見て、けれど本人たちは大したことをしたと思っていない。
振り返ったキリはゾロに目をやり、肩をすくめて話しかけた。
「数的に言えば、ゾロが二人でボクが一人？」
「どっちでもいいだろ。数えるほどの相手じゃねぇよ」
「まぁね。なんか思ったほどじゃなかったかな」
「ザコの相手なんかもう二度とするか。次から幹部はおれがやるからな」
「はいはい」
「おまえも満足しちゃいねぇだろ」

「でもやっと昔の感覚戻って来た感じするよ。成長の余地あったでしょ？」
「ま、普通じゃねぇってのは改めてわかったがな。いっそ退屈ならおれとやるか？」
「なんか卑猥な誘いに聞こえるよね。別にいいけど笑顔で言うのはやめた方がいいと思う」
「斬るぞてめぇ」
苛立った様子のゾロと楽しげなキリ。
一足先に戦闘を終えた彼らは仲間を手伝う動きも見せなかった。
ひょっとしたら彼らなら。
村人たちの間で希望が生まれ、期待を持って彼らの姿を見守り始める。その様子は明らかに応援をしていた。今や賭けでさえも頭の中から弾き出されてしまっている。
敵はまだ残っている。今度は他の戦いに目が向けられた。

Ｓｈａｋｅ　ｉｔ　ｄｏｗｎ（４）

ウソップが臆病であることは自他共に認める周知の事実であるが、だからと言って彼が弱いと断じる要因になるとは限らない。彼は臆病でも、決して馬鹿ではなかった。

自分がチュウの標的になっていると知って今にも脚が震えそうになっている。

それでも自分が逃げれば村人が狙われると知っているため逃げ出さない。

彼は臆病だが根性がない訳でもなかった。

精一杯の虚勢を張り、彼はチュウの前に立っている。

表情は引き攣って余裕がなく、どう見ても顔色は悪いものの、逃げるチャンスなどとっくに失っていた。仲間たちが助けに割り込んでくる様子もなし。すっかり任されてしまっている。

傍から見れば勇敢にも見える姿。だが本人は動揺しっぱなしで、心中は穏やかではない。

（やべぇ……完璧に標的にされた）

彼の本分は狙撃。敵と距離を取って安全な場所からの援護にある。

というのが本人の言い分だ。

決して先陣を切って敵と戦うタイプではないし、ましてや幹部と一対一など望んでいない。そんなことをしたら死んでしまうではないかと叫びたくて仕方なかった。

しかし村人が見ている手前、彼らを狙わせないためには自分が的になるのも必要だとわかった。

一味と航海する中で、ルフィやシルクからピースメインという存在について聞かされている。

決して武器を持たない者を襲わず、自由と冒険を愛する気の良い海賊たち。世間から見れば自分勝手で悪だと語られても仕方ないが、抵抗できない町民を襲ったりはしない、そういう誇り高い海賊に憧れたのだ。父もきっとそうなのだと想って。

ココヤシ村の人間を見捨てて逃げるのは流儀に反する。

ウソップの足を縫い付けていたのはひとえにその想いだった。
ただやはり怖がりを克服した訳ではないらしく、何か奇跡が起きて助かりはしないかと考えてしまうあたり、良くも悪くもいつもの彼だった。
「ちくしょー……こんなつもりじゃなかったのになぁ。なんでおれなんて狙うんだよ、他にもキリとかゾロとか居るのに。うっ、おれ、もう死んじまうのかなぁ」
「何ぶつくさ言ってやがる」
「ハッ!?」
チュウに声をかけられただけで肩がびくつく。さっきまで威勢よく叫んでいた男が妙な素振りだ。不思議に思うチュウの眉間には深い皺が刻まれていた。
何かがおかしいと思う。
元々強そうとも思っていないがその念が強まった気がした。
こいつは、弱いのではないか。
様子が変わっていく様や態度を見ているとそう思えて仕方ない。ただそうなるとなぜ勇んで自分に挑んできたかがわからず、互いの実力差がわからないほどのバカとも違う気がする。怯えているのが良い証拠だ。勝てないと思っているらしいと表情を見てわかる。
不思議な人間を前にして彼はしばし逡巡していた。すぐに襲わなかったのはそのためだろう。
海賊としていくつもの戦闘を経験しているからこそ、考え無しに動くのは愚かだと知っている。弱そうに見せておいて実は勝つための策を持っている相手かもしれない。魚人の自分が人間を相手にその策を怖がる必要はないと思いつつ、用心するのは戦闘の慣れからだ。
敵の考えを知るため、敢えて手を出さずに居ると、ウソップはちっとも動かない。疑念はますます強くなり、まるで我慢比べになったのがまずかった。
先に動いた方が勝ちか、或いは負けるのか。
緊迫した空気はウソップの思惑とは裏腹にチュウを困惑させ、混沌とした空気を生み出す。

そのため彼らの沈黙は重くなり、完全に動き出すタイミングを見失った。
どちらも思考が深くなる。
必要以上に考え事が増えていって、敵への警戒心も大きくなっていたようだ。
ウソップとチュウは真剣な顔で睨み合い、それぞれ戦いを始める時を窺っていた。
（でも考えてみればこいつは他の奴より体は小せぇな。めちゃくちゃ力があるようにも見えねぇし、火薬星は確実に効いてたはず。上手く隠れて狙撃に持ち込めれば……）
ちらりと視線を外し、ウソップは近くの森を見る。
辺りには田んぼが広がって、その傍に大量の木々がある。つまり隠れる場所はあった。遠距離からの狙撃を考えるなら、必要とするのはその場所だろう。
上手く隙を突いて移動すれば勝機はあるかもしれない。
冷静になろうと努めて考えてみた結果、自分の負けが決まった訳ではなさそうだと気付いた。
（こいつ、さっきパチンコで爆発する弾を撃ってきたな。あれもかなりのダメージだった、何発も食らうのはまずい。つまりこいつは狙撃手。しかも体つきから見て肉弾戦は経験がねぇな……同じ狙撃手でもおれの方が上。敢えて遠ざからずに接近戦で仕留める）
対して、チュウも考えた。
ウソップの外見や手に持っている武器、先程の挙動から戦法を分析、戦い方を決める。互いに狙撃手のため狙撃勝負に持ち込むのも面白いが、相手が人間ならわざわざ付き合ってやる必要もない。腕力で勝る魚人は自らの拳で黙らせるのも簡単だからだ。
一発。接近のための一発があれば勝てる。
表情が緩まないようにと気をつけ、チュウは心の中で勝ちを確信した。
あとはいつ動き出すか。きっかけ一つで敵を倒せるだけの自信がチュウにはあった。しかし対照的にウソップにはそこまでの自信が

ないため、二の足を踏む。
嫌でも心臓の鼓動は速くなった。
その音ばかりが大きく聞こえ、辺りが静か過ぎることもあり、ウソップの頬を汗が伝う。
きっかけを待つ二人の下に、突如轟音が聞こえた。
キリがクルーラを落とした際に生じる地面への衝突音である。
ほんのわずかに大地が揺れたことを感じ、チュウとウソップは瞬時に気付いた。この瞬間に相手が動く。考えた直後に、半ば考えもせず反射的に体が動いていた。
ウソップが持っていた弾をパチンコに番えて、即座に放とうとする。
しかしそれより早く、唇を尖らせたチュウが背を反らし、自らの口から攻撃を放った。
コンマ数秒の差。
勝ったのはチュウ。放った水がピストルにも負けぬ勢いで、ウソップの体を貫いた。
「水鉄砲！」
「うわっ……!?」
弾丸のような水が脇腹を貫通し、肉体からは貫通した水と共に血が飛び出す。
痛みは相当な物。放とうとした弾を取り落としてウソップはゆっくり倒れていく。
見ていた村人が声を出した。
やはり、勝てないのか。一時とはいえ希望を抱いただけに胸を打つ喪失感が大きく、頑張れと握り拳を作る者も少なくない。
ウソップは倒れ込む前になんとか体勢を立て直した。
必死に痛みを堪えて目を開く。しかし気付けば目前までチュウが迫っていて。
彼が振り切った拳が顔面を叩き、ウソップの体は地面をバウンドしてダメージを受け、その後に地面へ倒れた。受けた衝撃から血を吐き出して意識が遠のく。

圧倒的な差。これこそが魚人と人間の違いだろう。
無様な姿を見下ろしたチュウはにやりと笑う。
「呆気無かったな。チュッ♡　最初のはやっぱり虚勢だったか。哀れな野郎だぜ」
「うぐっ、おぉ……！」
「今ので死んでねぇことだけは褒めてやるよ。でももう終わりだ」
急ぐでもなく歩み寄って拳を振り上げる。
わざわざ楽に死なせてやる必要もない。自身の特技である水鉄砲を使うまでもなく自分の拳で十分だと思っていた。従ってチュウは倒れた彼の隣に立って余裕綽々にウソップを見下ろす。
ゴーグルは無事だった。壊れていない。
装着したゴーグル越しにチュウを見つけて、強く歯噛みし、意識が変わるのを自覚する。
情けない。今の自分について思うのはただその一言。
命懸けで戦ったキリの姿を見たのではなかったか。強くなりたいとダディに教えを乞うたのではなかったのか。それなのにいつまでも逃げることばかり。戦わない選択ばかり欲している。それでは何も変わっていない、勇敢なる海の戦士はそんな姿ではないだろう。
意識せずとも脳裏に思い出す。血に濡れて倒れたキリの姿。幼き日に見た我が父の顔を。
海賊になるために海へ出た。それだけは絶対に嘘ではない。
いつかシロップ村へ帰った時、胸を張って嘘じゃない冒険の話を聞かせられるように。
今こそ変わるべきだと思った。
もう海賊ごっこじゃない、本物の海賊になって海を航海している。
ウソップはチュウを睨みつけ、絞り出すように声を発した。
「へへっ、そうだ……おれは、勇敢なる海の戦士になるために、村を出た。ハァ、こんなところでくたばれねぇし、おまえにくらい勝てねぇと、あいつらと一緒に居る資格なんてねぇ……！」
「なんだ、恐怖で頭がおかしくなったか？　まさか笑い出すとはな」
「ゴホッ、ゲホッ。んん、よく聞けよサカナ野郎……おれを本気にさ

せたこと、後悔するぞ。おまえは、眠れる獅子を起こしちまった」
「そのサカナってのは、二度と口にするな」
拳を使わず、苛立った顔のチュウは思い切りウソップの体を蹴りつけた。
腰の辺りから凄まじい衝撃が走り、体が飛んで地面を転がる。ダメージはさらに大きくなった。徐々に体へ蓄積していき、石で切ったのか、額が割れて血が流れ出す。
焦らすようにゆっくり歩いて近付きながら、チュウは明らかに声色を変えていた。
「おれたち魚人族は至高の種族だ。たかが魚でも、たかが人間とも違う。世界で最も優れた種族だということを覚えておけ。そしておまえはその魚人族の怒りに殺されるんだよ」
「ハァ、うぅ……殺されてたまるか。おれは死ぬのが怖くて仕方ねぇんだよ」
「だったらここに来るべきじゃなかったな。チュッ♡　バカもここまで来ると呆れちまうぜ」
「おれは、死なねぇためにここへ来たんだよ……！　おれ自身も死なねぇし、村の奴らだって殺させねぇ。メリーを盗んで逃げたとしたって、あいつはなぁ――！」
「もう十分だ」
最後の数歩は歩調を合わせるために勢いをつけ、もう一度ウソップの体が蹴り上げられる。腹に受けた痛みから血液が逆流してきて、体が宙に浮いている間に吐き出す。
そのまま体の前面から地に落ちて動かなくなった。
勝負は呆気無く終わったと、誰もがそう思っていた。
チュウはあっさり彼に背を向け、他の敵を仕留めようと視線を走らせる。
しかし、まだ終わっていないと信じていた者たちは倒れたウソップに目を向けており、キリが、ゾロが、ナミがまだ諦めてはいなかったようだ。
「チッ、やられちまってるじゃねぇか。おれの仕事を増やしやがっ

て。まぁいい、どうせあと二人やっちまえば終わる話だろ。とっとと終わらせて逃げた一匹を――」
「ま、待て」
声が聞こえて、眉を動かしたチュウが振り返った。
うつ伏せに倒れたまま、腕を突っ張ってわずかに上体を反らし、チュウを睨んでいる。
「おまえの相手は、おれだろうがッ!!」
その一言を機に再び怒りが沸き上がって来た。
チュウは厳しい目で彼を睨みつけ、改めて彼へ向かって歩き出す。
弱いくせに、口先だけは一丁前に動く敵。弱いなら黙って死んでいればいいものを案外しぶとく粘ってくる。本来なら相手にしてやるほどの格でもない相手だが、チュウは敢えて決意した。
きちんと命を刈り取る。適当に終わらせていい訳ではなかった。
どうやって殺してやろうかと考えながらチュウが近付いて来る。
それを良しと考えて、ウソップは素早くパチンコを構え、今度は待たずに弾を放った。
「必殺！　鉛星！」
「はおっ!?」
選んだのはただの鉛玉。ただしゴツンとぶつかったのは彼の脛で、魚人だろうと人間だろうとそこだけは非常に痛く、たった一発で表情が変わった。
チュウの立ち姿は腰が引けた物になり、即座にウソップは立ち上がって駆け出す。
がま口の鞄から新たな武器を取り出して、彼の目の前でそれを突きつけた。
「おまえにこいつが耐えられるか……！　ウソ～ップ・輪ゴ～ム！」
「なっ――!?」
親指に輪ゴムを引っ掛け、もう一方を右手で引っ張り撃ち出す体勢。子供騙しにも思えるが飛んでくると思えば反射で体が強張ってしまう。チュウは自分でも気付かぬ内に目を閉じていた。
それを見てウソップはさらに鞄から武器を取り出す。

脛を庇って目を閉じて明らかに隙だらけ。これなら誰だって攻撃を当てられる。
両手で持ったトンカチを猛然と振り上げて、自身が苦手とする接近戦で一撃を叩き込んだ。
「ウソップ・ハンマーッ！」
「おごっ!?」
ガツン、と顎が殴り飛ばされる。
体重差はあっただろうがチュウの体は一瞬浮かび、頭から地面に落ちて後頭部を打った。しかしダメージは顎への一撃の方が大きい。急所を狙ったそれはどうにも悪質だった。
顎を押さえながら頭も気にしつつ、痛みに耐えかねて地面を転がる。
そうする彼は子供のように必死になって、すっかり余裕を失っていた。
「ぐおおっ!?　ちくしょう、輪ゴムが飛んでくると思ったのに！　おのれ人間ンッ……！」
痛みに耐えられるようになった後、まだ痛みは続いているが、立ち上がったチュウは目を血走らせてウソップが居た場所を見た。だがそこには誰の姿もない。
気付けばウソップの姿は忽然と消えていた。
「野郎、どこへ行きやがった！　まさか逃げた訳じゃねぇよな腰抜けェ！」
冷静さを欠いて激情のままに周囲へ言葉を投げ飛ばす。しばし応答はないかと思われたものの、首を振って姿を探している内に返答があった。
声はおそらく森の中から。
どこかへ隠れたらしいウソップは威勢のよさを取り戻して、上機嫌な声を発していた。
「ハーッハッハァ！　どうだ見たかサカナ野郎ォ！　輪ゴムが飛んでくると思いやがったな、騙されやがってバァカめっ！　おれは嘘つきで海賊だァ！」

「チッ、森の中か……！」
「言われたくないなら何度でも言ってやるぞ！　サカナァ！　このサカナめ！」
わざわざ言われたくない言葉を教えてもらった。これ幸いとウソップはそれを連呼し、チュウの余裕を崩してやろうと叫び始める。同時に余裕があると装った高笑いも忘れなかった。
見る見るうちにチュウの顔色は変わっていき、全身が怒りに支配されていく。
それが作戦だと気付いているのか、それとも否か。どちらにせよ平静は失われていったようだ。
森の中の声はさらに続く。
武器は狙撃と嘘と逃げ足、そして武器の多様性。
覚悟さえ決めてしまえばこの程度の相手はどうってことない。自分自身にそう嘘をついて、彼の声はどんどん自信に満ちていくように感じられた。
「いいか、おれの名前をよ～く覚えとけ！　おれは大頭ルフィ親分の子分で、八千人の部下を持つ一番船船長！　キャプテ～ン・ウソップ様だァ！　おまえら魚人どもが束になったって勝てる相手じゃねぇんだよ！　逃げるんなら今の内だぞサカナ野郎！　もう逃がさねぇけどな！」
「そこかァ！　水鉄砲！」
「うおおっ!?　あ、危ねぇぇっ!?」
生い茂る木々に隠れても、注意して声を聞けばどこから言っているのかわかる。それだけ大声を出して長々としゃべっているのだ、それも無理はなかった。
反撃の水鉄砲を撃ち出したチュウは正確にウソップの位置を見抜き、しかし狙いがわずかに逸れて隠れていた木の幹を貫く。おかげでウソップにダメージはなく、驚かせただけになる。
見つかってしまった。そう知ったウソップは木の傍を離れてしまって姿が露わになる。
辺りが暗いとはいえそれを見逃すほどチュウはバカではない。

自身の視界にしっかり納めて、何を想ってかにやりと笑う。
「そこに居たのか」
「げぇっ!?　見つかっちまった！」
「野郎、ぶち殺してやるッ！」
「ぎゃあああっ!?　待て、待ってくれ！　さっきのは調子に乗っちゃっただけなんだよ！　は、話せばわかる！　ちょっと落ち着いて……！」
「落ち着けるかァ！　てめぇだけは許さねぇ！」
激しい怒りに囚われているせいか、チュウは何も考えずに走り出した。水鉄砲で狙おうという考えがない。自らの拳で仕留めたいと思っている可能性もあった。
暗い森の中へ、警戒心も持たずに入り込もうとしている。
ウソップはギャーギャーと悲鳴を上げ続け、涙すら流しそうな表情である。
「ギャ～ッ、やめろ!?　それ以上やめろ!?　森に入ってくるなぁ!?」
「バカめ、ただの雑魚が調子に乗るからそうなる！　後悔しながら死ね！」
「やめてくれぇぇぇっ――なんてな」
道を選びもせず、チュウが草むらを突き破って森に入った瞬間だ。表情を一変させてウソップがにやりと笑う。
走るために強く踏み込んだ右足の裏に、鋭い痛みが走る。一瞬でチュウの表情が変わった。足の裏という急所を衝く痛みに余裕を失い、飛び上がらずにはいられなかった。
反射的に右足を上げて跳ぶものの、焦ったせいか前へ出てしまって。
左足もその辺りを踏んでしまって同じように痛みが走り、悲鳴が重なる。
足には深々とまきびしが刺さっていた。
「いってぇ～っ!?」
「バカめ！　そこはすでにまきびし地獄だ！」
地面に広げられたまきびしを避けるためぴょんぴょん跳ぶ傍ら、サ

ンダルを貫いて足の裏に刺さったそれを抜く。そうしているチュウの姿は傍から見て間抜けだった。
明確な隙が出来ている。
ここを逃す手はなく、ウソップは素早くパチンコに弾を番える。
そして狙いを定め、怯えること無く発射した。
「必殺！　激辛タバスコ星！」
狙われたのはキスの魚人らしく、特徴的に突き出た唇、さらに言えばその内部。
難しいはずの目標を相手に狙撃は見事成功し、放たれた弾は飛び跳ねる最中のチュウの口内へ飛び込んだ。唾液へ触れて弾が溶け、その味は確実に彼の舌へ伝わる。
辛味は痛覚で感じる物。そして舌は鍛えようがない。
一気に襲い掛かった辛味が彼を叫ばせ、足の痛みすら忘れるほどの衝動に苛まれる。
「辛エェェ～ッ!?」
「おれが弱いのは本人が一番理解してんだっ。必殺、火薬星！」
加えて一撃。棒立ちになったチュウの顔面へ弾が当たって小さな爆発が起こる。
まきびし地帯に背から倒れ込み、熱を感じた直後に刺す痛みが強く襲い掛かって、彼の混乱は消え去らなかった。また絶叫して地面をごろごろ転がる。
強くなんてなくたっていい。
俯いたウソップは手応えを感じながら静かに思った。
狙撃手にとって援護こそ花道。
目立つ役割ではないかもしれない。けれどだからこそ、仲間の背を押すことができるのだ。
短い間だったとはいえ、師匠の言葉が脳裏に残っている。自分は目立たなくていい。気の良い彼らと共に航海して先へ進みたいのだ。
倒れたチュウを睨んでウソップが語り掛ける。
舐めるな、と思っているのは相手だけではなかった。
「ハァ、海賊には正義も悪もねぇんだ。これがおれの戦い方だぞ。

カッコよさなんかより、仲間のためになるならどんな汚い手を使ってでも勝利を選ぶ！」
「ふらけんなぁ！」
「うおっ!?　まだ死んでなかったのかよ！」
一度は沈黙したかに思えたチュウが勢いよく立ち上がった。辛さで唇を腫らし、爆発でわずかに髪を焦がしながら、尚もしっかりした足取りでウソップへ向き直った。
彼は立ち上がると同時に駆け出す。
あまりの速度と気迫に距離はみるみる埋まっていき、またもウソップが悲鳴を発していた。
「うわぁぁぁっ、待て!?　やっぱり降参するから見逃してくれぇ！」
「ころすっ！　へめぇはれったいにころすっ！」
「なんて言う訳ねぇだろうが！　特用油玉だッ！」
高速だが真っ直ぐ向かってくるチュウを狙い、ウソップが掌大の玉を投げた。
避ける暇もなく直撃してしまって玉が割れ、中から大量の油が飛び出す。ぶつかったチュウはそれを全身に浴びる格好となってしまい、わずかに怯んだ。
ウソップは逃げない。勝利を確信する。
体に付着した分だけでなく、地面に落ちた油がある。それを踏んでしまったチュウは足を滑らせて勢いよく転び、またしても後頭部を強かにぶつけてしまう形になった。
「はおっ!?　おおおっ……！」
「おまえもこれくらい知ってるだろ。油ってのはよく燃えるんだぞ！」
痛みに頭を押さえていたチュウが、その一言をきっかけに血相を変える。
目に油が入るだとか、そんなことは気にしていられない。即座に逃げ出そうともがくのだが油に包まれて足が滑り、上手く立ち上がれず、余計に混乱が強まって逃げる手段を見出せない。
新たな弾を番えて一呼吸。

覚悟は決まった。自分は海賊。
海賊ごっこはもう終わったのだ。
「必殺！　火炎星イ！」
「うぉぉおおおおあああっ!?」
パチンコから放たれた火の玉がチュウの体へ直撃。油へ引火し、火達磨となった。
その途端、絶叫したチュウは恐るべき力を発揮して立ち上がり、物凄いスピードで走り出す。森を抜け出るために坂道を下り、向かう先には田んぼがあった。
水で消化するつもりなのだろう。少なくとも近くに消火できる物はそれしかない。
「あぢぃぃぃっ!?　水！　ミズッ！　ミドゥ！」
「しまった、田んぼかっ」
まずいと感じてウソップが後を追い始めた。
しかしある時、ぴたりと足を止めて鞄の中に手を突っ込む。
取り出したのはダディから受け取ったピストルだった。
通常の物より銃身が長い特別仕様。狙撃のために作られ、射程距離を伸ばしたのだろう。
使い方は自分で調べた。だが実際に弾を放った経験は一度もない。
ぶっつけ本番になる。
自らの腕を試すには十分な展開で、逃げる敵を標的にピストルを構えた。
「ロングバレルっ。こいつの力を見せてやる……！」
地面にしゃがんで膝立ちになり、両手で持って狙いを定めた。
チュウの足は速い。火を点けられたことで余計にそれが顕著になっているようで、少し目を離した隙に早くも田んぼの目前まで迫っていた。
躊躇っている暇すら与えられていない。最後のチャンスはこの一瞬。
深呼吸して落ち着く数秒もなく、瞬時に照準を合わせ、引き金を引いた。

銃声を発して飛び出した銃弾が夜空を駆ける。
チュウは後ろを気にする余裕がなかった。その目には前方の田んぼしか映っておらず、銃声などと全く聞こえていない。回避行動を取れるはずもないだろう。
射程距離は確かに伸びていた。
弾丸は狙った通りの軌道で進み、チュウの左足、太ももを射抜いた。
鮮血が舞って体勢が崩れる。それでも水を求めてやまないチュウは地面に当たって体が跳ねた瞬間、無意識的に全身を動かして転がるように田んぼへ向かった。
「ミヅッ!!」
凄まじい執念である。
バシャンと勢いよく水の中へ飛び込んで、なんとか死ぬ前に消火することができた。しかし火傷も凄まじい。髪はチリチリになって肌の様子もひどく、田んぼに浮かんで動かなくなる。
ようやく動き出せた時、正常な思考が戻りかけてきて、彼の中に業火が生まれる。
これは怒りだ。自らに火を点けた、愚かしい人間への憤怒の炎。
生かしては帰さないと決めてゆっくり手をつき起き上がり、ウソップが居る方向へ振り返った。
「て、メェは……絶対に、ゆるさん。水大砲で、ぶっとばして――」
ひどくゆっくりと森へ目を向け、忌々しい人間を探そうとした。
ただ、その時にはもう遅く。
振り返った瞬間目に飛び込んできたのは、地面を蹴って田んぼへ飛び込むウソップの姿だ。
トンカチの柄を両手で握り、勢いよく突っ込んでくる。
今度こそチュウは悲鳴を上げたい心境で目を見開き、声を出す暇すら与えられずに、迫ってくるトンカチを最後の一瞬まで見つめ続けた。
やがて全力で振り切られた武器が彼の頭を殴り飛ばす。
「ウソップハンマーッ!!」
「ぶごぁぁっ!?」

さっきよりも大きな水しぶきを上げて倒れ、ウソップも着地のため勢いよく転がる。ただし気を失う寸前のチュウと違ってウソップが立ち上がるスピードは速い。

彼はまだ攻撃をやめず、とどめを刺すためチュウへ駆け寄り、トンカチを振った。

「ウソップハンマー！」

「がっ!?」

「ウソップハンマー！」

「ぐっ!?」

「ハンマー！」

「ぎゃっ!?」

「ハンマー！」

「でぇゃっ!?」

「輪ゴーム」

「……ッ!?」

「ウソップハンマー!!」

意識を失うまで執拗に頭を殴り、いくつものタンコブが出来上がるまで攻撃は続いた。

今度こそ動けなくなり、倒れてしまったチュウは田んぼに沈み、自らの醜態に涙を流しながら意識を手放す。対照的に気絶した彼の傍ではウソップが両手に拳を握って掲げていた。

「か、勝った……」

形はどうあれ、彼が自分で掴んだ勝利であることは間違いなかったのだ。

自分でも信じられないと思いながら、手を下ろしてから仲間たちが居る方向を見る。

キリとゾロはしっかり見ていた。それを知って、ぐっと親指を立てて見せる。するとキリは嬉しそうな笑顔で同じポーズを取り、ゾロはわずかに笑って頷いた。

瞬間、見ていた村人たちからわっと歓声が上がる。

魚人に勝った。幹部に勝った。

彼らの喜びが伝わってくるようで、称賛を受けながらウソップは子供のように頬を緩ませた。
「やったぜ！　ウソップの兄貴が勝ったぁ！」
「うぅ、あんた流石だぜ、ウソップの兄貴……修行した甲斐があったってもんだよなぁ」
「信じられん。まさか、こんな日が来るとは……」
「あいつら、すごい奴だよ。本当にアーロンを倒せるのかもしれない」
ヨサクが、ジョニーが、ゲンゾウが、ノジコが感嘆の声を出していた。他の村人たちも大きな希望を胸にして喜びの声を上げていて、辺りの雰囲気が一変している。
多くの称賛を一心に浴び、人々の歓声に酔いしれた。
同時にウソップは安堵していて、戦いが終わったことを知って体が震え出す。
今頃になって恐怖心が追いついて来た。田んぼに浸かったまま膝が笑って立っているのも困難。彼は思わず自分の膝に両手を置いて、笑みを張り付けたまま小さく呟く。
「へ、へへっ、今頃になって武者震いが……おれが、海賊の幹部に勝ったんだ」
倒れそうな足取りでなんとか道にまで辿り着き、耐え切れずにその場へ転がる。
呼吸が乱れていた。落ち着けようとしても身を襲う興奮がそれを許そうとしない。
全身が震えていた。おそらく喜びと恐怖心と。両方を浴びておかしくなってしまっている。
叫び出したい衝動があった。
何も考えず衝動に従うまま、道端で大の字に寝転んだウソップが天を見上げ、大いに叫ぶ。
「ハァ、ゼェ……おいナミッ！　おまえちゃんと見てたか！」
彼らに怯えていた人物へ声をかけ、必死に叫ぶ。自分が勝ったのだと自信を持って。

「おれだってなァ、やりゃあできるんだ！　見たかコノヤロー！
ナメんなチクショーッ!!」
「……はは」
ナミはその言葉を聞いて、今にも泣きだしそうな顔で笑った。
仕方なく麦わら帽子を目深にかぶって顔を隠す。
腹を割って話した時に、メリー号の件はもう忘れた。彼女のために戦おうと決めたからだ。
自身の狙撃は仲間を助けるための物。
ナミを助けるためだと決めて、逃げなくて本当によかったと今なら素直に思えた。

Ｓｈａｋｅ　ｉｔ　ｄｏｗｎ（５）

沸き立つ村人の声を聞きながら、シルクはわずかに笑みを浮かべる。

頼もしい仲間たちだ。空気はすでに変わっていた。

もう勝利したかのようなムードを味わいつつ、自らの相手を見定めて剣を構えている。負ける気はしていない。特訓した成果を今こそ見せようと思っていたからだ。

ウミパンダの強襲によって仲間と離れ離れになった後。ナミを元気付けながら自らの修行も欠かさなかった。時間だけはいくらでもあったのだ。考えることも多かったし、ココヤシ村の外れで実践する場所もあった。そこで海に向かって剣を振った回数も数え切れず。

能力を昇華させることは自身の思考と訓練で可能。

それを知っているからこそ自らの進化を求めて努力した。

二種類に分けたかまいたちの練度に加え、新たな戦法も考えた。

ようやく試せると思えば不謹慎ながら嬉しくもあり、すっかり海賊稼業に染まっていると考えればなぜか嬉しくもあって、余裕を湛えるシルクはまるで怖がっていなかった。

前方に立つのはタコの魚人、はっちゃん。

二本の足に六本の腕。それぞれに剣を持っている。

接近戦では不利を強いられるだろう。だからこそ彼女が相手するのが最も良い状況だと思えた。

「女ぁ、剣士じゃどうあってもおれには勝てねぇんだ。なんでかわかるか？」

「う～ん、私の腕が二本だから？」

「その通りだぞ。おれは六本、おまえは二本で、しかも剣は一つだけだ。おれの攻撃を受けられる訳ねぇだろ？　だからおれには勝てねぇんだ」

「そうかな。私、人間だけど、ただの人間じゃないよ」

タコの腕で滑らかな動きを見せられるものの、シルクの表情に変化はない。

剣を構えて真剣な眼差し。微塵も揺らぐことはなかった。
「さっき見てなかったかな？　六刀流のこと教えてくれたからお返しに教えるね。私はカマカマの実の能力者。かまいたちが起こせるの」
「ニュ～？　かまいたち？」
「だけどね、よく考えてみたらそれだけじゃない。かまいたちを起こせるってことは、もっと広い考え方で捉えると、風を起こす能力って意味になるんだよ」
シルクを中心に静かに風が吹き始めていた。
風その物は見えない。ただ、地面にあった砂が巻き上げられて動きを見せ、その動きから風の動きが伝わってくる。初めて目にする奇妙な光景であった。
風は今、シルクの周囲を取り囲むように淡く存在している。
それを生み出すのが彼女の能力だ。
格上の敵、ガープとボガードと遭遇した際、伏兵として用いられた彼女はキリから指示を受けていた。そうでもしなければ通用しないとの判断だろう。
かまいたちを二種類に分けろ。
軽傷しか与えられなくていい、ただの風でもいいから、範囲を広げて強風をぶつけろ。
もう一つは、敵の注意を惹きつけられるだけの攻撃力を持たせてくれ。
ぶっつけ本番だったがやってみた結果、それまでの練習の甲斐もあって成功したのである。
その時に気付いた。
一口にかまいたちとは言うが、そこにはいくつもの種類があると。
風には決まった形がない。それこそキリの紙よりも自由な形が生み出せる。掴むことができず、自由に形を変えられるこの能力には攻撃以外の使い道もあるはず。それを考察し、試した。
どうやら彼女は自分の能力への理解を深めたようだ。
目には見えない、形を持たない風を操る能力。

かまいたちを放てるというあやふやなその効果も理解すればできることはいくつにも増える。
風に囲われる彼女は縛った髪をたなびかせ、ひどく凛として見えていた。
「悪いけど負ける気はしないんだ。六刀流が相手でも」
「何をォ～！　そこまで言うなら見せてやる！　六刀流の強さをなァ！」
はっちゃんが雄々しく叫んで前方へ駆け出した。
走りながらも六本の腕を奇妙に動かし、人間には不可能な動きで剣を振るい始める。
目の前の光景を理解していないのか、恐怖心は無さそうだった。
シルクは笑みを消して戦闘に集中し始める。
「蛸足奇剣！」
両腕を広げて関節を気にせず妙な曲げ方をし、六刀による攻撃を始めようとする。しかしそれより先にシルクが剣を振って風を飛ばした。
周囲に存在していた風が、爆発するように周囲へ走るのである。
「繚乱・旋風！」
シルクの周囲を駆け回った風が向かってきたはっちゃんを吹き飛ばした。
堪えようという一瞬すら許さない。強力な風が全身を包んで軽々運んでしまい、敵を運ぶ様子でもありつつ、わずかに肌を切り裂いて軽傷を負わせている。ダメージと呼ぶほどの痛みもないが、状況だけを見れば先手を取ったのは間違いなくシルクだ。
「ニュ～!?　なんだこりゃあっ！」
「だから言ったでしょ。私の能力だよ」
驚愕するはっちゃんは受け身を取る余裕もなく、背中から地面を滑って転ぶ。剣を手放さなかったのは流石だ。だが持っていても使えない距離に達してしまった。
すぐに立ち上がるもののシルクとの距離は数十メートルにまで広げられている。

これは彼女が得意とする距離。
流石にはっちゃんもそれを理解して、さっと顔から血の気が引いた。
彼女が剣を振ってもその動きを止められず、繰り出される風を避けるのは至難の業である。
「今度は強いよ。繚乱・烈風！」
「ニュアァァッ!?　また風がぁ！」
さっきよりも勢いが強い風に全身を包まれて体を飛ばされてしまい、さらにそこへ加えて強い痛みを感じれば、刃のような風がいくつも彼の体に切り裂いた跡を残していた。
今度はただ飛ばすだけではない。刃のようなかまいたちを混ぜている。
噴き出した血すらも風に吹き飛ばされ、もっと距離を開けて地面へ落ちた。
さっきは耐えられても今度は恐怖を感じる風だった。
飛ばされるだけならまだしも攻撃が混じっている。しかしその攻撃の要たるかまいたちは強風の中にあるのかどうか、見極める術がない。風その物が見えないのだから。
攻撃は避けられず、自分の剣が届かない距離。
近付いてもおそらく敵を吹き飛ばして自身が得意とする距離を生み出せるのだろう。
地面に寝転んだままぞっとして、はっちゃんはのろのろと上体を起こしてその場に座った。
シルクは凛とした顔で剣を構えたまま。その場を動かないのは必要がないからに間違いない。
人間に恐怖を抱いたのは初めてだったか。思い出すのも困難なほど混乱して、とても強そうには見えない可憐な少女を見つめ、ずいぶん遠いなと愕然とした。
「どうかした？　やめたいなら、それでもいいけど」
「ニュ……ニュ～！　そういう訳にはいくか！　おまえェ、おれの剣を舐めるなよ！」

気合いを入れてはっちゃんが立ち上がるものの、勝機は全く見えていない。
一体どうすれば彼女の風を避けられるのだろうか。
そればかり考えているのが問題で、自らの力を活かせる状況を考えられないのが彼のミス。
シルクは自らの弱点を知っている。
カマカマの実は攻撃範囲こそ広いが、熟練度の影響か、風が届く範囲は決まっており、現状、風の強さを変えたところで物陰に隠れられてしまえば防がれるのが事実だった。
彼女が起こすかまいたちは真っ直ぐにしか進まない。途中で軌道を変えたり、物陰に隠れる人間だけを狙うといった細かいコントロールはできておらず、練習でさえ上手く形になっていない。今できるのは強弱を変えるだけ、対象を斬ることと敵を吹き飛ばすことだけだ。
もしはっちゃんがそこに気付くことができれば状況も変えられただろう。
しかし慌てふためく彼は正面から向き合うことしかできていない。それでは格好の的だった。
負けられないと思ったはっちゃんは真っ直ぐに走り出す。そして何を想ったか、まだシルクがずいぶん遠いと思ったせいかもしれないが、妙な行動に出た。
「おれを剣だけの男だと思うなよ！　こういうこともできるんだ！　たこはちブラーック！」
走りながら口からタコ墨を吐き出し、飛来するそれがシルクを狙う。
勢いよく噴き出したおかげで飛距離はあった。しかしすぐに直撃しないのなら反応はできて、冷静に剣を振って風を飛ばしたシルクは、そのタコ墨を吹き飛ばす。
返って来たタコ墨が全身に当たり、視界を遮られたはっちゃんが足を止めた。
「ニュアアッ!?　前が見えねぇ！」
「えっと、私のせいじゃない、よね？」

足を止めて激しく首を振り、墨を剥がそうとするはっちゃんは隙だらけ。
これを逃す手はないと判断して、悪い気もするが勝負を決めにかかったらしい。
刀身に風が纏わりつき、それが幾重にも厚さを増していった。
剣を振って繰り出すかまいたちは、範囲は広がるもののやはり攻撃力に特別な物はない。普通に刀でつける傷を遠くからつけられるといった程度だろう。
そこで彼女は考えた。もっと強い攻撃を繰り出すにはどうすればいいか。
能力を利用した必殺の一撃を生み出すために考えたのは、誰にも止められない突進力。
最高の突きを持って一撃で仕留める。
風を纏った剣はわずかに引かれ、構えを取ってシルクの動きが止まった。
「悪いけど続けるね。殺す気はないけど、一応、気をつけて」
「ニュ？」
手で目元を擦ってようやく前が見えた時。シルクの構えが変わったのが見えた。
見えた瞬間、彼女が剣を突き出して攻撃が行われる。
刀身を離れたかまいたちが螺旋を描いて真っ直ぐ飛び、しかしそれははっちゃんの目には映らぬまま、豪風と轟音を纏って接近した。
「繚乱・疾風！」
突きというより、かまいたちというより、凄く小さな台風だ。
周囲の風を巻き込んで、土が舞い上げられたことによりわずかながら姿が見える。規模は思いのほか小さく、せいぜいが拳程度の物。だが速度は見切れる物ではなくて。
気付けばはっちゃんの体に到達し、斬撃というより削岩機のようで、抉り取られるような螺旋に大量の血液が巻き込まれて飛ばされた。
彼の胴体には深い傷が残り、地面へ倒れて、一瞬で意識を刈り取っ

た。
「ニュア……!?」
放ってから当たるまで一秒もかからず。
想像以上の結果にシルクは口元に手を当て、殺していないだろうかと冷や汗を流していた。
「あっ……ちょっとやりすぎた？」
幸いはっちゃんは気絶しただけで死んでいない。ただしばらくは意識が戻らないだろう。
圧倒的な力で制圧され、シルクは無傷で勝負を終えてしまった。
傍らでその光景を見ていたクロオビは戦慄する。
能力者であることはわかっていたが、それにしても異常過ぎる。見た目には紙を操っていたキリよりも強いのではないかと思えた。
彼は倒れた仲間に視線を送り、動かないことを知ってぽつりと呟く。
「ハチ……バカなっ」
「強くて可愛いなんて素敵だなぁ。ますます惚れ直しちまうぜ」
同じく呟く声に気付き、クロオビが顔の向きを変えた。
対峙するサンジが懐から取り出した煙草を銜え、火を点けている。どうやらシルクの戦いを見て感想を口にしたらしく、別段クロオビを気にする様子もない。今はシルクに釘付けだ。
一方で煙を吸って吐き出した後、すでに思考は切り替わっている。
今はクロオビを倒すことに集中していて、おどけるように呟き始めた。
「エイを料理するなら、唐揚げか、煮つけか、ムニエルでもいい。そういやメシの最中に出てきたんだったな。早くナミさんとシルクちゃんにおれの料理を食してもらいたい。あぁ、それにナミさんのお姉様も居たんだ。すっかり挨拶まで忘れて失礼なことを――」
「何をぶつぶつ言っている。おれが残っていることを忘れたか」
睨みつけてくるクロオビに気付き、サンジが視線を上げた。
傍若無人とも思える目と態度で恐怖心など欠片もない。煙草を吸うのもそうだ。なぜこれから戦闘が始まるというのにそんな物を取

り出しているのか。
怒りが増してクロオビの形相が変わる。
仲間を倒され、彼一人だけが残って、もはや我慢の限界だった。
「どうやらおれが始末しなければならない奴が増えたようだ。おまえに構っている時間はない。さっさと終わらせて、この場に居る連中全員を地獄へ送ってやる」
「さっさと、ねぇ……自分の言葉には責任持てよ」
サンジは全く警戒せずに歩き出した。瞬時に身構えるクロオビを目指して、別段急ぐ様子もなくゆっくり歩いて、徐々に距離を詰めていく。
おかしな姿だ。舐められているとも感じる。
従ってクロオビは魚人空手の構えで拳を握った。
いつでも攻撃を繰り出せる。だがその態度が気に食わない。
思い知らせるためにも彼は饒舌に語り出した。
「魚人空手を知っているか？　おれは四十段の腕前。究極の一撃、千枚瓦正拳を受ければ貴様が生きていられる可能性はゼロだ。今更逃げたところで遅いぞ」
「受けなきゃいいんだろ」
「フン、避けられるとでも思っているのか？　無駄だ、おれから逃れることは――」
突如、サンジが強く地面を蹴って跳んだ。
前へ進んで一気に距離を詰め、驚愕するクロオビが理解できていない間に、右足の蹴りが来る。
全く動けず、クロオビの首へ叩き込まれた。
「首肉（コリエ）！」
衝撃に負けて地面へ倒れ込んだ。踏ん張ることさえできない。
驚きながらも立ち上がろうと地面に手をつくのだが、サンジの蹴りがさらに振り下ろされた。
「いっ――！」
「肩肉（エポール）！」
「うごぉっ!?」

立ち上がろうとしたところ、肩口を蹴られてそのまま倒れ、顔面が地面に激突する。自然と鼻血が出てしまった。だがそんな物、比較にならないほどのダメージがある。

サンジの蹴りは強烈だった。

一撃叩き込まれる度に全身が震え、動き出すための動作がわずかに遅れてしまう。

再び立ち上がろうとするクロオビを、今度はサンジが待っていた。傍らでポケットに両手を突っ込み、冷静な面持ちで煙草を吸っているだけ。彼が立つまで攻撃は行わない。

「どうしたサカナ野郎。さっき言ってたことと違うようだが」

「うっ、ぐぅ……！」

「さっさと終わらせるんじゃなかったか？　それともさっさと終わらせて欲しいのか」

よろける足でなんとか立ち上がった。

それを見てサンジは容赦なく、背筋が伸びると同時に蹴りを二発叩き込む。

「背肉（コートレット）！　鞍下肉（セル）！」

ドン、ドンと体内に響く衝撃を受け、鋭い痛みが奥まで広がる。

もはや悲鳴すら出ない。

続けてサンジは足を振り上げた。

「胸肉（ポワトリーヌ）！」

胸に靴底が当たり、倒れかけるのを堪えて地面を滑った。

まだサンジが止まらない。

「もも肉（ジゴー）！」

「ぎゃあっ!?」

鋭い蹴りが脚を捉え、立っていられなくなって思わず膝をついた。

否、つかされてしまったというのが正直なところ。自分では体の自由が利かなくなっている。

呼吸を乱して、意識を失わないよう必死に耐える。

かろうじて開けた目にサンジの姿が映った。

さほど急ぎもせずにくるりと回って背を向け、最後の攻撃に移ろう

としている所作。まずいと感じるものの体が重い。それでも必死に動き、クロオビもまた迎撃のために拳を握った。
「吹き飛べ」
「ゲホッ、おのれ！　千枚瓦正け――！」
「羊肉（ムートン）ショットォ!!」
攻撃はサンジの方が速く、目にも止まらぬ速度を持って連続で蹴りを叩き込まれた。凄まじい衝撃で体が吹っ飛び、勢いよく地面を滑って、耐え切れずに意識を失う。
この瞬間、いとも簡単に戦闘が終わってしまった。
サンジは銜えた煙草を指で挟んで口から離し、つまらなそうに呟く。
倒れたクロオビに振り返るのも面倒で、背を向けたまま薄く笑みを浮かべていた。
「おかわりは自由だぜ。ま、もう聞こえてねぇか」
無傷のままの勝利である。その卓越した蹴り技は見ていた者たちに衝撃を与え、少なからず感嘆の声を生み出し、そして勝負が決したと見るや歓声が沸き上がった。
シルクとサンジ、二人の勝負も勝利に終わる。
勝てるはずがないと思っていたアーロン一味が全滅したのだった。
この場に船長のアーロンは居ない。しかしそれでも、奇跡を見るようだ。
村人の喜ぶ声が夜空まで届き、辺りは先程とは違った騒がしさに包まれる。
結んだネクタイの位置を正した後、サンジは表情を変える。
勝利に酔う様子はない。
きりっと引き締め、仲間たちと合流するためあっさり振り返った。
「騎士道も理解できんサカナにおれが倒せるか。もう少し人間の世界を勉強してから出直すんだな。さて……んナミさぁ～ん！　シルクちゅわ～ん！　お姉様ぁ～！　おれ勝ったよぉ～！　ほ、ホレちゃったんじゃな～い!?」
目の色を変えて駆け出した彼はだらしない走り方でシルクの下へ

駆けつけ、緩み切った笑顔を見せる。見ていて呆れてしまう姿だったが本人が改善する様子はない。
勝利の余韻、というより自らの成長に浸っていたシルクは笑顔で彼を見る。
それがまたサンジを調子に乗らせ、声を高くさせるのだ。
「すごかったねサンジ。あんなにすごい蹴り技、見たことないよ」
「えへへ～！　いやいやそんなぁ、シルクちゃんに比べりゃおれなんてまだまださぁ～！」
「おいコック、またシルクにアホが絡んでやがるぞ。あ、すまん。おまえだったか」
「アァンッ!?　てめぇトリッキーな挑発してんじゃねぇぞマリモ！　せっかくの愛の時間を邪魔しやがって、海の彼方まで蹴り飛ばしてやろうか！」
喜びの声が次々上がる中、ゾロがサンジに声をかけると、途端に二人は喧嘩を始める。
早くもそれを日常の出来事にしようとしているらしい。
呆れている仲間たちを蚊帳の外にどんどんヒートアップしていくようだ。
「ハンッ……海のかなた、ねぇ」
「なに無理だろって顔してんだクラァ！　よぉしそこを動くな、今実践してやる！」
「まぁそう怒るな。悪かったよ、ナイト」
「てめぇが言っていいセリフじゃねぇんだよオオオ！」
「できるとは思うぜ。おれに当てられたらの話だがな。ただ当てられたら飛ばせるとしたって、当てられねぇんじゃ海のカナタとやらに辿り着ける訳ねぇし――」
「おぉし上等だ！　クソエイ野郎じゃ味気なかったとこだ！　次はてめぇをオロス！」
「やってみろグル眉！　大体てめぇはさっきからうるせぇんだよ！　少しは黙れねぇのか！」
「うるせぇのはどっちだ、藻！　アホのくせにおれとシルクちゃん

の時間を邪魔すんな！」
敵と向き合っていた時以上の迫力で言葉をぶつけ、本気で蹴りを繰り出し、刀で受けて斬撃を放つ二人はさしたる理由もない、必要のない戦いを始めてしまった。
喜ぶムードとは裏腹な雰囲気が漂っている。
見ていたシルクは腰に手を当てて呆れ、少し怒っているらしい表情で溜息をついた。
そこへキリが近付いて来る。
「もう、どうして喧嘩するんだろ、二人とも……せっかく勝ったのにぶち壊し」
「なんか相性悪いね、あの二人。アホなんだよ」
「ねぇキリ、止めてくれないかな？　私の能力じゃケガさせちゃうし」
「多少ケガさせた方が効果的だと思うよ。少々ケガしたところでへこたれるような人たちじゃないし、とりあえずぶっ飛ばしてみたら？」
「そうかな。うん、やってみる」
剣を振ったシルクは能力を使って、傷が付かないようにと気をつけつつ、暴風を起こす。
すると戦っていたサンジとゾロ、両方の体が吹き飛んだ。かまいたちを受けると同時に勢いよく地面を転がって多少の掠り傷を負ってしまうものの、やはりそんな程度で落ち込んでしまう性格はしていない。風が止むと勢いよく立ち上がってシルクに目を向けた。
「おいシルク！　おまえ急に何しやがる！」
「ひどいぜシルクちゃん、マリモはともかくおれまで吹き飛ばすなんて……」
「二人とも、喧嘩しちゃダメ。仲間なんだから仲良くね」
子供を叱るように彼女が言えば、サンジは諸手を上げて快い返事をし、ゾロはつまらなそうに腕を組んでそっぽを向く。どうも喧嘩を続ける雰囲気ではなくなったようだ。
シルクが居ることで一味の纏まりが強くなったように思う。

以前からリカやアピスに対して同じ視点で接し、壁を取り除こうという態度はあって、意気消沈するナミを励ましたり、喧嘩するゾロとサンジを押し留めたり。
頼もしくなった今、尚更船上の空気は気にせずに済みそうだった。
本当に強くなったと、キリがシルクの横顔を見てしみじみ振り返る。
初めて会った時を想えばずいぶんな成長だ。
そうこうしているとウソップが駆けつけてきた。
血を流しているが想像以上に元気で、手を振りながらやってきてひどく興奮している面持ち。敵の幹部を倒したことで喜びを噛みしめているらしい。震える拳を握ってキリに話しかける。
「おいキリっ、見てたか！　おれが幹部を、敵の幹部を、一人幹部を倒したぞ！」
「うん、見てたよ。最ッ高にクールだった。海賊的に言えばね」
「そうだろ、そうだろっ！　いやぁ～おれもあの瞬間は手に汗握ったね。しかしまぁ全て作戦通りでよぉ、やっぱりこう、おれの天性の勘がそうさせたって言うか……」
「啖呵の切り方もばっちりだったよ。いいね、ルフィ親分に一番船船長」
「なっはっはっは！　まぁな、まぁな！　本当になるのもそう遠くないけどな！」
上機嫌なウソップは背を反らせて高笑いしていた。ジャンゴを倒した経験に続いて二人目。単独で敵を倒したことによって気が大きくなり、混乱が消えれば大きな喜びと達成感が残っていた。これを分かち合わずにはいられず、大声を出して仲間たちと共有する。
彼らの周りには穏やかな雰囲気が漂う。
しかしケンカはまだ終わっていない。それを伝えるためキリが辺りを見回した。
「とりあえずこっちは終わったね。あとはルフィがアーロンを倒せばそれで決着だろうけど」
「そうだ、まだルフィが戦ってんだな！　行ってやろうぜ！　援護

はおれに任せろ！」
「でも倒した敵をこのままにしとく訳にはいかないか。縛り付けとけば安心かな」
ただその時間は惜しい。
そう言うように視線の先を変えれば、キリの目が歩み寄ってくるゲンゾウたちを見た。
言葉が無くとも意図が伝わる。
尋ねる前からゲンゾウが口を開いていた。
「任せてくれ。我々がやろう。流石に何もしないままでは気分も良くないのでな」
「助かるよ」
「全てが終わった時、改めて礼が言いたい……無事に戻ってくれ」
「心配いらないさ。あと残ってるのは殺したって死なない人だから」
笑顔で言いのけた後、あっさり背を向けて歩き出す。
他の者たちも同じようにしていて、意気揚々とウソップが先頭で導き、ゾロとサンジが手を出さずに睨み合いながら続いて、シルクとキリが並び合う。
喜ぶ皆を置いて彼らだけがその場を離れようとしていた。
「さぁ、行くよ。船長の決着を見届けよう」
「よぉしおまえらついて来い！　このキャプテン・ウソップが導いてやるぞ！」
「いつか決着つけてやるからなマリモ。ハンデはいらねぇ、その大怪我治るまで待ってやるよ」
「いいのか、後悔するぞ。おれに勝てるチャンスは今だけだったがな」
「ハァ、もう。二人ともまた飛ばすよ。ケンカしちゃダメだって」
五人が並んで静かに歩き出す。
まだ少年少女の域を抜け切らない年頃でも、その背は大きく、見ているだけで息を呑む。
有り体に言えば格好良かった。

村人たちは彼らを見送り、万感の想いで背を見続けた。
ただその中にはルフィの帽子を預けられたナミも居て、戸惑っている様子で立ち尽くしている。
ある時、キリが足を止めて振り返り、動かない彼女に気付いて声をかけた。
「何やってんのナミ。ほら、行くよ」
「え――？」
「決着は見届けないと。ルフィが待ってる」
何でもないことのように笑顔で告げられた。あまりにも自然で驚いてしまうほどに。
他の皆も足を止めている。彼女を見て待っていた。
些細なことでも、胸が熱くなる。
そうまで言われて後悔はない。迷いは消え、ただ強い意志だけが胸の内に残っている。
ナミは真剣な顔で頷いた。
「うん！」
小走りで彼らへ追いついてキリとシルクの間に入った。
今度こそ六人で歩き出し、ゲンゾウとノジコはその背をじっと見つめる。
自分から望んで肩を並べた。あれは彼女の意志であり本心。そう思わずにはいられない。
涙を堪えて、強がって、肩に刺青を入れて海賊の仲間になったあの日とは違う。
ナミは今、彼らの傍で笑っていた。
「あの子の笑顔を、久しぶりに見た気がする……」
「私たち、救われるんだよ。あの子が信じた奴らなんだ。この村は解放されて自由になる」
「ああ……」
信じられない想いで彼らが遠ざかる様を見ていた。
村人たちは倒れた魚人を縛るために動き出しており、ヨサクとジョニーも手伝っている。辺りは騒がしくて、今や遅しと自由がやって来

る瞬間を待っていた。
笑顔を堪え切れないノジコの隣で、ゲンゾウはふと夜空を見上げた。
雲は消え去り、真ん丸な月が見えて、数多くの星が負けじと輝いている。今日は満天の星空だ。
「ベルメール、見えているか……今日、我々の戦いが終わる」
身を襲う興奮と喜びを抑え切れず、彼も熱くなりそうな目を閉じる。
もう疑ってはいない。ナミの態度でわかった。
ココヤシ村は今日、自由を得る。

Ｓｈａｋｅ　ｉｔ　ｄｏｗｎ（６）

夜の静寂を破壊する轟音が連続していた。
起こる場所は一か所。広く、それでいて音が籠ったり、遠くまで響いたりと時折変化がある。
アーロンパークの一階で戦闘の音が鳴り響いていた。
ルフィとアーロンの一騎討ちは現在も続いている。
激突を繰り返してまだどちらも大きなダメージはない。いまだ探り合っているせいか、決定打は一つたりとも与えられていなかった。
攻撃を軽やかに避けるルフィは猛威を振るうノコギリを避け、またアーロンは生まれ持った強固な肉体により、拳を受けて尚も大きな影響を感じさせない。ダメージは与えているはずだ。しかし許容できる範囲なのか動きの変化は微塵も確認できなかった。
建物を破壊する激闘はここへきて膠着状態を見せる。
避けるルフィと耐えるアーロン。対照的だがどちらも余裕を保ったまま。
一度距離を取って一階で向かい合い、至る所の壁が破壊されたそこで睨み合った。
「ちょこまかと鬱陶しい野郎だ……！　人間の拳が通用すると思ってんのか！」
「ハァ、やってみなきゃわかんねぇだろ！」
予想以上に長引く戦闘に苛立ち、アーロンが長いノコギリを振り上げて走り出す。
キリバチと名付けられたそれはアーロンの剛腕に耐えられるよう作られている。刃は触れた壁を削り、破壊して、今でも刃毀れ一つしていない。
斬るのではなく叩き割る、そんな使用法が原因だろう。
当たればゴム人間の彼が耐えられるはずもない。
従って避けずにはいられず、迫り来る刃を見てルフィは跳び上がった。
アーロンの動きは決して遅くない。これに反応できない人間など

いくらでも居た。しかしルフィと比較すればやはり彼の方が速いため、回避にも反撃にも分があった様子。
近くにあったテーブルを斬り飛ばし、割れた木材が宙を舞うもののルフィには当たらず。
腕を振り抜いて隙を見せたアーロンは、伸びる足で繰り出された蹴りに胸を打たれた。
「ゴムゴムのスタンプ！」
「チィッ！」
ギリギリで防御が間に合い、左腕で蹴りを受け止める。しかし衝撃までは殺し切れず、体勢が崩れて後方へ滑った。これでまた距離が開く。
攻撃が可能な範囲を考えればルフィにとっては距離がある方が有利。
ただそれはアーロンにとっての不利にはならず、決して安堵できる立ち位置ではない。
伸ばした足を引き戻し、着地したルフィは冷静に敵を見据える。
普段の行いからは考え無しで突っ込むバカと思われがちだが、その実彼は頭が悪い訳ではない。思考を言葉にするのを苦手としていて、ただ自身の思考全てを伝えようとしないだけだ。
考えずとも判断を下すことができる。今、彼の目は真剣にアーロンを見ていた。
アーロンの動きと攻撃を見てわかったことがある。腕力は自分より上、武器とするのはキリバチのみならず拳や蹴りと、鋭い牙。あの牙は崩れた壁の破片、つまりは岩を噛み砕いて見せていた。つまり肉体を捕らえれば肉を食い千切ることくらいは簡単にできるだろう。
もはや全身が武器と言っていい。
全身に武器を仕込んだクリークとは違い、キリバチを除けば全て生まれ持った物。
ただの動作全てが凶器となる。
警戒心は大きくなって、油断など欠片も残されていなかった。
しかしルフィは勝つための方法など考えずに、ただ戦う相手に集中

するのみ。
それだけでいい。余計な思考は必要なかった。
元々考えるのが苦手なのだ。ならば最初から考えず、ただ思うがままに動いた方が良い。幼少期の修行中に兄たちから言われていたし、自身もそっちの方がやり易いと知っている。
拳を握り、足を開いて腰を落として、初めから小細工を捨てて正面から対峙する。
ただそれだけの姿勢が堂に入っていた。
それが気に入らない。アーロンの怒りはさらに大きくなっていった。
魚人に恐れを抱かず正面から向かってくる人間。生意気とも言える素振りで腹が立つ。圧倒的な力を前にした人間は怯えて動けなくなるものだが、今の彼にはそれがない。
あくまで勝利を求める目だ。
こういう相手こそ叩き潰したい相手である。
「クソ生意気なっ。おまえのような奴が魚人族のプライドをズタズタにする！」
「知るか。魚人も人間も関係ねぇ。おれはおまえをぶっ飛ばしてぇだけだ」
「できるとでも思ってんのかァ！」
素早く振り下ろされたキリバチが迫る。
ルフィは潜るようにその攻撃を避け、自身も拳を振るう。
「できなきゃ仲間は守れねぇだろ！」
腹を殴られ、足が地面を離れる。
アーロンは背から転がるが素早く起き上がった。動けなくなるほどのダメージではなくともそれだけで侮辱。地に背をつけられたことが怒りの火種となる。
落ち着く時間を与えずにルフィが攻勢へ出た。
地を蹴って宙に躍り出て、頭を振って後方へ首を伸ばし、攻撃の予備動作に入る。
起き上がったばかりで体勢が整っていないアーロンは、見えていな

がら反応できなかった。
「鐘ェ！」
「おうっ!?」
ゴムの張力を利用した頭突き。アーロンの額にぶち当たって、勢いから背を仰け反らせる。
続いてルフィは着地の寸前に蹴りを放った。
「鞭！」
胴体を強かに叩き、体勢が崩れた。しかし倒れることを許さずに目前まで迫る。
「銃弾（ブレット）！」
腹に強烈なパンチが叩き込まれて、アーロンの巨体は殴り飛ばされて壁に激突した。
逃さずにルフィが両手を動かす。
予備動作の後に繰り出される攻撃は無数の拳。嵐のような猛攻である。
「ガトリングッ!!」
全身を打った拳によってアーロンの体がさらに後方へ動き、壁が壊れて外へ放り出される。海に面したその場所だ。最初に出会った場所へ転がり、倒れてしばし動かなくなる。
腕を戻したルフィは深呼吸して息を整えた。
流れるような連撃。しかしこれで終わりのはずがない。
予想通り、アーロンはそう時間もかけずに立ち上がって、足取りはまだ平気だと訴えている。頑丈な体だった。ここまでルフィの攻撃に耐える人物も珍しい。
やはり生まれ持った種族の血によるものか。
恵まれた体格は虚栄ではなく、ルフィの眉間に皺が出来る。
殴った拳に伝わった感触は、まるで分厚いゴムを殴ったかのよう。生来からの体質だけでなく鍛え上げた筋肉がある。勝負は長引きそうだった。
「ふーっ。タフな奴だな。おれももうちょっと気合い入れねぇと」
「今……何かしたか？」

「うん。準備運動」
拳を鳴らして平然と。ルフィは嘘偽りのない言葉を吐き出す。
先程から先の怪我に巻いた包帯が邪魔だった。その感触に慣れるために体を動かして、そろそろ十分な頃だろう。ようやく全力で戦える気がする。
嘘は言っていない。だがアーロンにとっては挑発されているような気分だ。
大したダメージはないとはいえ、攻撃を当てられたことは認めている。だからこそ効いていないぞと伝えたつもりだったがあっさり受け流されてしまった。おそらく意味も理解していない。言葉の表面だけを受け取って答えたと思える表情を見せているのだから。
ますます、こんな人間に負ける訳にはいかないとの想いを強くする。
肩にキリバチを担ぎ、笑みを見せたアーロンもまた力を隠していたようだった。
「まだそんな軽口が叩けたとはな。おれも少し手を抜き過ぎたらしい」
「軽口じゃねぇよ、ほんとだ」
「好きなように言ってりゃいいさ。おまえはまだ魚人族の怖さを理解しちゃいない……」
勝ち誇るようで、警告するような。
動き出すのをやめたアーロンはルフィへと問いかける。
「小僧。おれとおまえの絶望的な違いはなんだ？」
「鼻」
間髪入れずに答える。しかしそうではないとアーロンの眉が動いた。
「ん～……あご？」
相手の姿をしっかり見ながら続けて答える。よく見れば見るほど違いはあった。
何かに気付いた様子で、ルフィがポンと手を打ちながら言う。
「水かき！」

「種族だ！」
怒り心頭といった顔でアーロンが動いた。両手で柄を持ち、全力で振り切ったキリバチが猛威を振るい、体ごと独楽のように回転しながら迫ってくる。
素早く動いたルフィは跳ぶことでそれを回避した。
空を切るが壁の残骸を殴り飛ばし、一部を削って硬い音が鳴る。心地の悪いそれが耳に残った。
着地して敵の姿を視界に捉える。
即座に振り返るアーロンは再びキリバチを振りかぶっていて、あれを素手で止めるのは難しい。たとえ肉体がゴムでも肉を削られる。選ぶのならば防御よりも回避だ。
ルフィは後ろへ跳び、敵との距離を取った。その後一秒とかからず降ってきたキリバチの刃が地面を抉り、陥没させてガリッと削って、深い傷跡を残した上で跳ね上げられる。
削った石が宙を舞ったがルフィには届かない。
騒音は起こるが静かな決闘。どちらも集中力を高めていく。
問いかければふざけているように見えるものの、戦闘に関してルフィは手を抜いていない。優れた動体視力がアーロンの動きを見切ろうと細かな観察を続けていて、ともすれば反撃の機会を窺っている。ただ、敵の武器が危険であるため無茶な行動が出来ないのは事実だった。
対するアーロンも激しい怒りに囚われながら、思考だけは冷静な状態を保っている。
確かに人間としては強いだろう。それでもそもそも体の出来が違う。猿のように軽やかに動く彼だが捕まえすれば攻撃に耐えられるはずはない。
「魚人の力、見せてやる」
アーロンが目を怪しく光らせて笑った。
その一言にルフィも訝しむ様子を見せる。
体ごと回転してキリバチを一閃。ルフィはさらに跳んで回避する。
その時、振り切った姿勢でアーロンは左手を離していた。

魚人族の特徴か、体内から肌を通して水滴が現れ、奇妙な様子ながら武装する。左手は水に濡れてわずかに滴り、それさえも彼の武器となるのだ。
「撃水」
左腕を振るって水滴を飛ばした。ルフィの目にも見えているが、果たしてそれが攻撃かどうか判断できず、動きを止めると共に首をかしげて見入ってしまった。
それが失敗だっただろう。
顔に当たった水滴はピストルから放たれた弾丸の如く、ルフィの体を跳ね飛ばす。
貫かれていないだけマシだ。しかしその一撃でルフィの体はぐるりと回転し、勢いよく倒れる。
スピードはそこまでではないと思っていた。ただ触れてみればその異常性が嫌でも理解できて、明らかに普通の攻撃ではなかったと判断できる。
血反吐を吐き、ルフィはゆっくり地面に手をつく。
その背後からアーロンが飛び掛かり、キリバチが唸りを上げて振り下ろされた。
「ウオラァッ！」
気付いた途端、地面を押してごろりと転がった。
わずかながら自分が居る位置を変え、かろうじて避けることに成功する。キリバチは再び剛腕の力を借りて硬い石の地面を削り、耳障りな音を奏でた。
ごろごろ転がって距離を開け、安全だと判断してから立ち上がる。
驚きはそれなりに大きく、やはりさっきの水が気がかりになる。
「ハァ、なんださっきの……ただの水なのにピストルみたいだった」
呟きが聞こえたところでアーロンは気にせず、キリバチを担いでさらに接近しようとする。
そんな挙動を見せた直後、ぴたりと足を止めた。
迎え撃つために構えたルフィは虚を衝かれた様子。なぜ止まったかがわからず表情が変わる。

「シャハハハハ。外に出たのは間違いだったかもな」
「ん？」
「おれたち魚人族は海でこそ真価を発揮する。海がある場所での敗北はあり得ねぇ」
トンッ、と小さな足音。
アーロンは後ろへ向かって飛んでいた。そのまま海へ飛び込んでしまい、水しぶきが上がる。
逃げた訳ではないだろう。様子を見ていれば戦闘を続ける気なのは理解できた。
ただどんな攻撃が来るかはわからない。
ルフィは拳を構えたまま海を眺めた。
夜の時間は静かだった。
わずかに聞こえる波の音。水面は穏やかでアーロンの姿は感知できない。
辺りは奇妙なほど静寂に包まれていて、普段なら当然のそれも、緊迫したこの状況では不安を煽ろうとしているかのよう。攻撃に移る一瞬に集中するより他はなさそうだ。
「どこ行った、サメ」
逃げたはずがないと思っている。必ずどこかから向かってくると。
泳げない以上は待つしかなく、不安も抱かずに海に視線を置いて待ち続ける。
そしてその時がやってきた。
海水を高く跳ね飛ばし、しぶきを上げて海面から飛び出す魚雷。それはアーロン自身で、鋭く尖った鼻を武器とするかのように飛び出してくる。
まるでトビウオ。或いはそれ以上の危険性を持つ。
認識できた時にはすでに目の前に居て、反応さえ許さないスピード。
かろうじて体を動かして反応するが、気付けばルフィの体は跳ね飛ばされていた。
「鮫（シャーク）・ＯＮ・ＤＡＲＴＳ！」

「がっ……いてぇ!?」
尖った鼻に刻まれ、肌が裂けて血が飛び出した。それだけでなく凄まじい突撃で体が宙に浮いて身動きが取れない。痛みと浮遊感、両方に襲われていた。
アーロンは自らが建てた建物に到達し、軽やかに体勢を変えて足で壁に触れる。
空中に居るルフィを見やり、落下速度から衝突する地点を計算。
壁を蹴って瞬時に自分を撃ち出した。
「鮫（シャーク）・ＯＮ・ＤＡＲＴＳ！」
「くそぉ、こいつ！」
狙うのはルフィを連れて海中へ潜ること。
この攻撃で即死させる必要はない。彼を海中に引きずり込めばそれだけで抵抗できなくなり、後で嬲り殺すことなど簡単だ。ひとまず無力化させてしまえば能力者など怖くない。
向かってくるアーロンを見てルフィも気付いた。
落とされる訳にはいかないと、落下しながら空中で無理やり体勢を変える。
幸いにも軌道は真っ直ぐ。敵は空を飛べる訳ではない。
身を捻ったルフィは右の拳を振るい、自身の眼前に尖った鼻が来た時点でアーロンの頬を殴りつけた。想像を絶する勢いだったが力比べで負ける気はなく、アーロンは自身の予想に反して大きなダメージを負い、無理やり軌道を変えられた。まるで撃墜されるかのようである。
ギリギリでなんとか攻撃を避けられた。
ルフィは腕を伸ばして建物の傍へと戻り、アーロンは再び海中へ落ちる。
深く息を吐いて生を実感する。今の一瞬だけは緊張感は倍増していたのだろう。
どっと汗が噴き出して、拭うことすら忘れてルフィの目は海を見る。
「危なかった。海に落ちたらどうしようもねぇからな」

呟くと同時、バシャンと水が跳ねあがってアーロンが飛び出してくる。
再度の射出。ルフィも応戦するためその場を動かなかった。しかしさっきと違うのは、無手ではなくてキリバチを持っていること。海中で一旦手放していたのだろうか。
武器を持っているだけで攻撃の種類は変わる。
考えもせずルフィは地面を蹴っていた。
高速で向かってくるアーロンから逃れるのは簡単ではない。反応できてもスピードの差は埋めようがなく、地面を蹴ったルフィだったが、回避できる距離にまで逃げられなかった。
海中で助走をつけ、弾丸が如く飛び出してきたアーロンは人間が出せる速度を超えていて。さらにそのスピードの中でも敵の動きが的確に見えている。
わずかに射線上から逃れたルフィを見て、体を回してキリバチを振るう。
スピードと広い攻撃範囲が揃ってしまってはルフィでさえ反応し切れる物ではない。
刃は確かに彼へ届いた。
「ぎっ……!?」
「オラァ!」
防御のために掲げられた腕を刃が捉え、ぐっと力を込めて振り切り、自らの着地も無視して全力で斬り飛ばす。ルフィが腕から血を流して壁へ激突し、自らも頭から突っ込んでいく。
もうもうと土煙が立ち込めて数秒。
先にアーロンが瓦礫を蹴って立ち上がり、敵を見つけようと視線を彷徨わせる。
ルフィもまたすぐに立ち上がった。
どうやら防御が利かなかったらしい。腕の肉が一部抉れて、傷は胸の辺りにまで達している。長い刀身のキリバチに狙われては仕方のない結果であろう。
傷は増えた。血が滴って床を赤く汚す。

まだ終わりではないとはいえ、表情が変わった姿を見てアーロンがほくそ笑む。
そうでなければならない。もっと恐怖しなければおかしい。
またもキリバチを担いで歩き出し、敵を威嚇するべく低くなった声を出した。
「確かゴムだと言ってたな、おまえの体は。おれとの相性はどうにも悪い。牙、キリバチ、または海を使った戦闘。哀れなおまえを殺す手段なんざいくらでもある」
「フン。そんなもんちっとも効いてねぇよ！」
「まだ強がれる気概は褒めてやろう。だがおれとおまえの間には越えようのねぇ壁がある」
アーロンが姿勢を変え、キリバチを持って低く構えた。
「身の程を知れ。魚人に勝てる人間なんざ居ねぇんだ」
「だったらおれが最初の一人だ！」
駆け出したアーロンが前へ出て、迎え撃つ形でルフィが拳を突き出した。
伸びる腕が彼の出鼻をくじき、パンチが頬に当たる。
「ゴムゴムのピストル！」
「むぅ!?」
衝撃は強く、痛みもある。だが飛ばされるほどではなく、踏ん張った足が後ずさった。
まだ止まらずにルフィが続ける。
両腕を後方へ伸ばしながら前方に走って、接近と同時に強烈な掌底を繰り出す。
「バズーカ！」
強かに腹を打って体がくの字に曲がる。
受けた衝撃はパンチよりも強い。歯を食いしばり、視界が揺れるのを感じていた。
わずかとはいえ隙が出来たのである。
これを逃さぬため、ルフィは彼の肩を掴んで跳び上がり、頭上に出てから両足の底を合わせ、眼下に居るアーロンの背へ蹴りを突き刺し

た。
両足で同時に繰り出す様は、槍の如く。
アーロンの巨体が地面へ沈む。
「槍！」
「ぐあァッ……!?」
うつ伏せに倒れて意識が遠のきかける。それを必死に繋ぎ止めて痛みを堪えた。
着地したルフィはすぐに振り返り、次なる攻撃に備える。
アーロンもゆっくり、ダメージを無視できていない様子で、なんとか起き上がった。やはり想像以上の威力に体がついて来なくなっている。長引かせるのはまずいと思った。
本当に、鬱陶しい相手だ。
なぜこんな奴が現れるのか。
極限まで膨れ上がった怒りで牙を打ち鳴らし、殺意は大きくなるばかりである。
「下等種族が、このおれに――」
「ん？」
「魚人のおれに何をしたァ！」
振り返り様にキリバチを振るう。懐へ飛び込んでルフィが避け、鋭く拳が繰り出される。
ドンッと腹に一発。
痛みで血反吐を吐く刹那、足を振り上げたルフィに顎を蹴り上げられ、背筋が伸びる。
一旦後ろへ下がって距離を作り、腕を後方へ伸ばしながら助走を取る。
接近してくる彼の姿をなんとか見て、アーロンはしかし反応するに至らなかった。
「ブレットォ！」
胸に一発、体が飛ぶ。
その瞬間に掲げたキリバチを振り下ろしていて、攻撃の直後だったルフィの肩口に突き刺さり、袈裟切りに胴体を引き裂いた。歯噛みす

る呼吸音が聞こえた直後、地面を滑っている。
ルフィもまた痛みを堪えながら足がふらつき、思わずその場へ膝をつく。
倒れたままで気付いた。
互いに体力を削り合えばそう遠からぬうちに決着がつくはず。
肉体的に優れているのは自分だ。消耗戦となれば負けるはずがない。事実、ルフィは流した血の量が多い。対してアーロンは殴打によるダメージこそ積み重なっているものの、決定打らしき外傷は作られていなかった。肉を切らせて骨を断てば、身軽な彼にも攻撃は当てられる。
自らの勝機は、そう遠からぬ所にある。
起き上がったアーロンはゆらりとその場へ立ち、笑みを浮かべてルフィを見た。
「何から何まで、てめぇに負ける物なんざねぇんだ。人間に生まれたことこそ後悔しろ」
「ハァ、別におれは、そんなもんどうでもいい」
「何？」
「おまえをぶっ飛ばすっつっただけだぞ」
頭から滴る血が顎に伝って、それを手の甲で拭いながら告げた。
ルフィは真っ直ぐアーロンの目を見つめている。恐れなど欠片も持ち合わせていない。
自然、彼の声も穏やかではいられなかった。
「ナミのためにか。バカな奴らだ、ヒーローにでも憧れてたか？
何も知らねぇてめぇらが割って入って何になる。ただ事態を混乱させるだけだ」
「おまえが決めることじゃねぇ」
「いいや、おれが決めるのさ。なぜならこの島はもうおれのナワバリ。おれの領土でおれの国だ。そこにどこの誰とも知らねぇ奴らが侵入して、仲間を助けるなどと好き勝手ほざいてやがる。正当性はどちらにある？　てめぇらは国を脅かす反乱分子でしかねぇのよ」
「それでいい。おれたちは海賊だ」

熱を帯びるアーロンとは違い、ルフィの声は静かだった。
限界まで感情を奥へ秘めたかのような、決して無感情ではないがひどく静かである。
「ヒーローになんかなりたくねぇし、この島の人間がどう思ってるかなんてどうでもいい。人助けなんかするつもりねぇ。おれは自分のためにケンカを売ったんだ」
「ますます馬鹿らしい。所詮は野望さえ持たねぇ人間の浅はかさよ」
「おまえがナミを泣かせたんだ」
拳を握る力が強くなる。意志の強さだけはその目に現れていた。
「言ったはずだぞ、ナミはおれの仲間だ。おまえがここに来さえしなければあいつは平和に過ごせた。あいつが守ろうとした村も破壊されることはなかったんだ。何も知らずに突っ込んだおまえが全てをぶち壊した。おれの計画も含めてな」
「ナミが、それを望んでたって言うのか」
「当然だろう。おまえらが居なけりゃあいつはずっと幸せだった」
感情が表情に浮かび上がり、目つきが変わる。
ルフィは激情を表に出して雰囲気を変えた。
想像以上の力強さを感じてアーロンの表情に変化が起こる。
(こいつ、まさか覇気を……?)
肌を刺すような威圧感に違和感を覚える。まさかと思わずにはいられなかった。
半ば急ぎもしたが、キリバチを振ってその命を狙う。
(あり得ん!)
ルフィは即座に反応した。しかしその反撃はアーロンの予想を超える。
振り下ろされるキリバチの刃に自ら拳をぶつけたのだ。
予想もしていなかった衝撃が柄を伝って腕へ響く。
ゴムでしかないルフィの拳により、刃の一つが破壊された。軽い音を立てて金属のそれが折られて宙へ飛ばされ、キリバチそれ自体は軌道を変えられて体には届かない。

当然、攻撃を受け止めた拳は刃が突き刺さって血が噴き出しているものの、本人は気にせず。
握り締めた拳は確かな痛みにも負けずに握られたままだ。
明確な隙が生まれていた。
ルフィがアーロンへ接近して、刃を折った右の拳で頬を殴る。
巨体が大きく揺れ、勢いよく倒れた。
地面に触れると同時に飛び起きて武器を握り直す。
自覚した後では身に感じる威圧感がそれだと思えて仕方ない。どうしたことか、かつてグランドラインで経験したはずの窮地を思い出している。
あり得ない、と首を振った。
イーストブルーにこんな奴が居るはずがない。そう思いながらキリバチを振るう。
「おれはノコギリのアーロンだぞ！　てめぇに負ける道理はねぇ！」
横薙ぎに振るわれる刀身を下から蹴り上げ、キリバチは空を切った。
その挙動を見た後でルフィが跳び上がり、体を一回転させた上で蹴りを放つ。ゴムの性質でしなる左足はアーロンの顔面を狙った。だが素早く反応し、大口を開け、アーロンは待ち構えた状態でルフィの左足に噛みつき、鋭い牙が深々と肉に突き刺さる。
痛みは相当な物。ルフィが目を見開いて歯を食いしばった。
すぐさま腰を捻り、右足で繰り出す蹴りをアーロンの側頭部へ叩き込む。
「いっ!?　ぎゃあっ……こんにゃろォ！」
強く蹴り飛ばして口は離された。脛の辺りにぽっかり穴が開いた左足は解放され、アーロンが倒れるのと同時にルフィも地面へ落ちてその場を転がる。
壮絶な戦いだった。
互いにダメージが蓄積されていき、余力は見る見るうちに削られていく。

二人はすぐに立ち上がるものの時を置こうとはせず。
決着をつけるべく、両者同時に自ら攻勢に切り出した。
「撃水！」
「ふんっ！」
手から飛ばされる水滴を殴って飛散させ、ルフィが接近しようとする。それを見てアーロンはキリバチを振り回して牽制し、仕方なくルフィが足を止めた。
頭上から振り下ろせば圧倒的な脅威となる。
再び跳んで逃げたルフィが近くにあった屋根の上へ飛び乗る。
逃がしはしない。アーロンがすぐに後を追う。
跳び上がってキリバチを振り上げ、振り下ろすそれで頭から割ってやろうと襲い掛かった。
防げないと感じてルフィは尚も頭上の屋根へ跳び上がり、ゴムの腕を伸ばして逃げる。
しばし追いかけっこが始まった。ルフィが屋根に乗って逃げればすぐさまアーロンが後を追い、キリバチで屋根や壁の一部を壊し、最上階まで外壁を上っていく。
やがて一番上に到達して逃げ場を失くしかけた時。
「うっ、やべぇ!?」
「終わりだァ！」
視界の端に小さな窓が映り、咄嗟の判断でルフィがガラスを割ってそこに逃げ込んだ。
直後にキリバチが激しく壁を削って、アーロンも後を追って窓の内部へ飛び込む。
二人の姿は外から見えなくなり、ちょうどそんな頃に六人が門の辺りに到着した。
大きな音に気付いていたウソップは窓の辺りを指差し、後ろに居る仲間たちへ語り掛ける。
「おい、今の見たか？　ルフィたちだ！」
「まだ終わってなかったのか。しかもずいぶん暴れてんなぁ」
「あいつが負けたらおれが代わるぞ。いいな？」

「ご自由に。どうせ負けないけどね」
サンジが辺りを見回しながら呟けば、うずうずした様子でゾロが言い、キリが肩をすくめる。
男性陣にはいまいち緊張感が足りない。
少し嘆息したシルクが隣に立つナミを見た時、なぜか彼女は、呆然と二人が消えた場所を見つめている。最上階の左側の部屋。何やらただ事ではなさそうな表情である。
「ナミ、どうしたの？　ルフィなら大丈夫だよ。誰が相手でも負けるような人じゃ――」
「最上階の、左の窓」
ぽつりと呟き、目はそこを捉えて離さない。
他の四人もようやく気付いた。
「測量室だ……」
ナミは思いを馳せるように、そこが自室だったことを告げた。

Ｓｈａｋｅ　ｉｔ　ｄｏｗｎ（７）

「小僧……ここまでだ。そろそろ終わりにするとしよう」
部屋に飛び込んだ後、ルフィは部屋の中央に尻もちをついていた。すぐ目の前までアーロンが迫っていたため、本来なら立ち上がるべきだろうが、なぜか彼はそうしない。
室内の光景に目を奪われて注意が逸れてしまっている。
彼はアーロンではなく部屋の中を見回し、そこに大量の海図が置かれているのを発見した。
「なんだこの部屋。紙ばっか」
「測量室さ。おれたちが集めた海に関するデータを、優秀な航海士が全て海図に記した。ナミが描いたのさ。つまりここはナミに与えられた部屋だ」
「ふーん」
殺風景な部屋だった。
大量の海図が部屋の大半を占め、ベッドさえ置かずに机と椅子、本棚がいくつかあって、ただそれだけ。年頃の少女が過ごす部屋とは到底思えない。あまりに無機質で、無感情な一室。
山の中で育ったルフィが世間一般の少女の部屋を知るはずもない。だがその部屋が異質なのは理解できる。そこにある空気がひどく寂しげなのだ。
何を見たからという訳でもない。ただ感覚で理解した。
ここは誰かが過ごしていたとは思えないほど寂し過ぎる。
「おまえが身勝手に暴れなきゃ、あいつは今もここで海図を描いてただろう。何一つ不自由なくな。メシも服もおれたちに与えられ、ただ渡されたデータを海図にするだけの簡単な仕事だ。不満を抱いてるはずもねぇだろう。先走っちまったおまえにはあいつも迷惑してるだろうぜ」
ふと、ルフィが机の下に落ちている物に気付いた。
手を伸ばして持ち上げる。羽根の付いた古びたペンだ。
ずっとこれで描いていたのだろうか。

アーロンの声を聞いているのかさえ定かではなく、手の中にあるペンをじっと見つめる。
「このペン、血がしみ込んでる」
「ここに居ればあいつは幸せだった。何不自由のない生活を送りながら海図を描き続けるのさ。おれたちのためにな。だがこうなっちまった以上もう見逃すこともできねぇ……」
持ち上げたキリバチをルフィの首に近付け、触れるか否かというギリギリで止める。
アーロンは胡坐を掻いて座る彼を見下ろして笑った。
「おれはこの海図を使って人間どもを駆逐し、やがて魚人が全ての主導権を握る魚人の帝国を作り上げる。ココヤシ村はその礎だった。人間どもも奴隷としてなら生かしてやろうかと考えていたのに、おまえが全てをぶち壊した。あの村もナミも、今日の内に始末しとかなきゃならねぇ」
「へぇ」
ルフィは俯き、ペンを見たまま動かない。
「てめぇも海賊を名乗っていたな。だがな、格が違う。ただ勢い任せのバカと違っておれなら効率よく人材を使える。優れた魚人も、下等種族の人間どもも。ナミもそうさ。仮におまえがあいつを連れ出せたとして、おまえにあいつが使えるか？」
「使う？」
「おれなら使える。八年間でこれだけの海図を描かせて野望への足掛かりを作らせたんだ。おれだけが最もあいつを効率よく使える存在だった」
静かに、ルフィがペンを置いた。
そして何を想ったか、首に添えられたキリバチの刃に右手を触れさせる。
血に濡れた手が触れた途端、キリバチが動かなくなる。
異変を感じたアーロンは訝しむ顔を見せ、ルフィを見る目にも違和感が混じった。
（なんだ……？　キリバチが、動かねぇ）

今の今まで自在に操っていたキリバチが押さえられただけで動かなくなる。違和感を感じて当然だった。感情を無視して彼に触れられたせいだと気付くのも無理からぬこと。
ルフィがゆっくり顔を上げ、アーロンの顔を睨みつける。
「使うだとッ」
その時、キリバチの刃に触れる指に力が入れられ、軽い音を立てて貫通した。
刃にヒビが入り、再び先程と同じ感覚に囚われる。
威圧。
言葉にしてみれば簡単だ。だが彼が放つそれは尋常ではない。
まるで王の資質を持っているかのような。
音が鳴るほど歯を食いしばり、アーロンの目に鋭さが増す。
「おまえあいつを、なんだと思ってんだ」
「優秀な航海士さ。いや、だったと言うべきだな。おれの企みに気付いて逆らった以上は生かしちゃおけねぇ。今までの罪を全て許してやったってのにバカな奴だ。自ら無駄死にを選ぶとは。もっとも、頭を下げて来たんなら許してやってもいいが」
「またこの部屋に閉じ込めるのか」
「それが幸せのためだろう？　なぁに、話せばわかる」
ぐっと力を込め、拳を作った瞬間に刃が壊れて破片と化す。これで二つ目。キリバチの刃が壊されて、冷たい床に破片が散らばった。
ルフィはのろのろと立ち上がる。
そして立ち上がった時、アーロンを睨みつけたまま、突如傍らの机を蹴り飛ばした。
「何っ……!?」
伸ばした足が壁ごと机を壊し、外に放り出す。
続けてルフィはくるりと振り返って腕を伸ばした。殴ったのは後方にあった本棚である。
それもまた壁を貫いて部屋の外へ出て行ってしまい、見送りもせず、尚もルフィは部屋にある物を壊そうとする。傍に居るアーロンになどまるで目もくれずに、今度は扉を蹴り破った。

何のつもりなのか。
動揺するアーロンはすぐには反応出来ていなくて、呆然と彼の行動を見ている。
ルフィは強く海図を殴りつけた。
「やめろォ！　てめぇ一体何の真似だァ！」
「おおおおォ！」
かつてないほど攻撃の威力が増していたようだ。彼の拳は壁を突き破り、蹴りは的確に狙った物体を捉えて、何かが破砕される轟音が外にまで響く。
アーロンパークの下にまで辿り着き、頭上を見上げていた六人はその様を外から見ていた。
次々に壁を破って何かが飛び出してくる。
机、本棚、海図。全て測量室にあった物で、ルフィやアーロンの姿は見えない。
状況が読み切れない彼らは表情を歪めており、何が起こっているのかを想像出来なかった。
「い、一体何が起きてんだ？　机やら本棚やら、なんでこう物ばっかり」
「かなり激しくやり合ってんのか。だが何か妙じゃねぇか？　あれじゃあまるで――」
ウソップとサンジが呟く間も轟音が続いている。
徐々に部屋は壊されていき、外からの見た目は次第に変化していった。
ナミはその部屋を見上げ、誰に言うでもなくふと口元に手を当てる。
（ルフィ……）
室内ではルフィが暴れ回っていた。アーロンが慌てて止めようとするも、せっかく作った海図まで蹴り飛ばされてしまい、外へ出てしまって風に煽られ飛んでいく。
皆が困惑する中、ナミだけは行動の意図がわかって、堪え切れなくなって静かに涙を流した。

（ありがとう……！）
部屋が次々壊されていく。
宙を舞った瓦礫が落下してきて、発される音だけは騒がしくなった。
ルフィは決してアーロンを狙わず、たとえ目が合おうとも攻撃が彼の傍を通り過ぎ、あくまでも部屋の破壊だけを行っている。ただそれがアーロンにとってもまずい状況だった。
八年かけて作った海図が無駄になってしまう。それを使って計画を進めるつもりだったのだ。
平静を欠いて、止めるためにキリバチを振り下ろす。
「何のつもりだ！　おれの海図だぞ！」
大上段から落とされた攻撃は避けられ、地面に刺さる。ルフィはその傍らを動いてまた海図の山を殴り、壁ごと外へ押し出す。無数の紙が風に煽られて散ってしまった。
一つずつ着実に計画を潰されている。
アーロンの焦りは募るばかりだ。
仕方なくキリバチを横薙ぎに振るった。
跳んだことでまたしても回避され、恐れていたことだが、キリバチによって海図の山が斬られてしまう。積んでいたのが仇となったか、何十枚もが一瞬で無駄になったのである。
「くそ、海図が……！」
「おおおっ！」
「て、てめぇ！」
尚もルフィは猛威を振るう。部屋を壊そうと攻撃を繰り出し続ける。
咄嗟にアーロンがキリバチを捨てた。狭い室内で使う武器ではないと判断し、これ以上の二次被害を防ぐため、無手となってルフィを捕まえようと駆け寄る。
荒々しく動く彼の首を掴み、力ずくで壁へ押し付けた。
「やめねぇかァ！」
「うぐっ……うあああっ！」

「んなっ!?」
捕まった状態で尚も手を伸ばし、拳が壁を殴りつけた。粉塵が立って壁が崩れ落ちる。
まずいと感じて、アーロンが大口を開ける。
全ての行動を止めるためルフィの首筋へと噛みついていた。
肉を突き破って牙が刺さる。瞬間、ルフィが目を見開いて絶句した。
今まで受けた痛みの比ではない。命さえ奪いかねない一撃で呼吸の調子が変化している。自分の死を非常に近く感じて、理由はわからないが全身が震えていた。
大量の血が噴き出して、それでもアーロンが力を込めて牙を埋め込む。
口からは噛み潰した悲鳴が漏れ出て、しかし抵抗する力を手放そうとはしていない。
「いい加減にしろ！　やり過ぎたクソゴム！」
「あっ、がぁっ……!?」
震える手がアーロンの鼻を掴んだ。鋭い棘を持つそこを掴めば、当然掌に刺さって血が噴き出す。痛みを感じるものの決して離さない。やっと敵を捕まえたからだ。
ルフィは全ての痛みに耐えて体を動かし、両腕に力が込められる。
「魚人がどう偉いとかっ。海図がどうとか、事情とか、そんなことはよく知らねぇけどな！　やっとあいつを助ける方法がわかった……！」
バキッ、と音がして、アーロンの鼻がへし折られた。
誰にも折られないはずの強靭な鼻が歪に曲がって、彼が悲鳴を上げながら口を離す。
痛みによって地面を転げ回ったアーロンに向け、表情を引き締め直したルフィが呟いた。
「こんな部屋があるからいけねぇんだ。居たくもねぇあいつの居場所なんて、おれが全部ぶっ壊してやる――!!」
「こ、のォ……！」

そう言ってルフィは右足を振り上げ、天井を突き破って天まで伸ばした。
「ゴムゴムのォ！」
「図に乗るなよ小僧！　てめぇみたいな下等種族に落とせるこのアーロンパークじゃねぇぞ！」
自身の手で無理やり曲がった鼻を元に戻し、即座にアーロンが床に四肢をついて構えを変える。
慣れた様子で高速回転を始め、狙いを定めるとルフィに向かって飛び掛かった。
勢いをつけて噛みつくつもりのようだ。
「思い知れ！　鮫（シャーク）・ＯＮ・歯車（トゥース）！」
ルフィはまだ足を振り下ろさない。ギリギリまで待ち続けた。
勢いよく飛び出したアーロンは速度を緩めずルフィの腹へ喰らい付き、その皮膚を突き破って牙が刺さる。そのまま回転を続けようとするためルフィの体勢も崩されそうになった。
しかし、その時こそ待ち続けたもので。
高速で振り下ろされた右足が、アーロンの体を強かに踏みつける。
「斧ッ！」
その一撃でアーロンの体が地面に沈み、尚も止まらず床を突き破って階下へ落ちる。それでも伸ばした足を引き戻さず、彼の体は次々床を突き破って落ちていった。
一階ごとに痛みが加算されていき、その度に気が遠くなる。
やがて一番下の床に到達し、轟音を立ててその身が叩きつけられた。
アーロンは動かなくなって沈黙し、それからルフィが伸びた足を縮める。
バチンと戻ってきてすぐ、穴を覗きながら膝をついた。
もう動きたくないと思うほどの疲労が纏わりついている。体の自由が利きそうにない。一度座り込んでしまった以上、次に立ち上がるのがひどく億劫だった。
乱れた呼吸が整えられない。大量の血も失って、これ以上は限界だ

ろう。
建物全体を貫く一撃を受け、アーロンパークは揺れていた。
今から崩壊しようとしているらしい。階下を見ても影響は感じられる。
すぐに逃げなければおそらく下敷きになるだろう。ただアーロンがどうなったかを確認できた訳ではない。最後まで白黒はっきりつけてから。まだ逃げ出す気になれなかった。
アーロンは一階に落ちて大の字に倒れていた。目は閉じられて、呼吸しているかはわからない。
決着はついたか。
そう思った瞬間、閉じられていたアーロンの目が開く。
瞳孔が細くなって爬虫類のよう。言い知れない感覚にルフィはぎょっとして声を出した。
「あいつ、まだ動けんのか……！」
「クソゴムッ……！　最後の勝負だ！」
考える間でもなくルフィは腕を伸ばしていた。
天へ向かって長く伸ばした後、腕を捻ってぐるぐる螺旋を描かせ、まるでネジを巻いたよう。
その状態になってから目の前の穴へ身を投げて、真っ逆さまに落ちていく。
対してアーロンは最後の力を振り絞って地面を蹴り、跳び上がる。
血走った目にはもはやルフィの姿しか映っていなかった。
天と地から飛び立ち、二人の距離は一気に埋まる。
「ゴムゴムのォ――！」
「何も知らねぇ人間がっ。魚人族の怒りを知れ！　鮫（シャーク）・ＯＮ・ＤＡＲＴＳ！」
「回転弾（ライフル）ッ!!」
捻った腕が戻る力を利用し、威力を高めた拳が回転しながらアーロンの顔面を打つ。
空へ向かっていた彼が、再び地面へ落ちていく。
腕が伸びきる前に地面へ到達して凄まじい衝撃を受け、それでもル

フィは力を込めた。
「うおおおおおおおおっ――！」
その時ついに、アーロンパークが崩れた。
中心部をぶち抜かれてすでに限界を超えていた建物はそれ以上耐えられず、内に二人の姿を残したままで脆くも崩壊していき、すぐに二人の姿を覆い隠してしまう。
破損を知って避難していた六人はとんでもない迫力の崩壊を目撃する。
まだルフィの姿は見えておらず、おそらく内部に残ったまま。
シルクに抱かれて制止されるナミが、必死の形相で叫んでいた。
「ルフィ～～ッ!?」
叫びは轟音によってかき消され、アーロンパークは完全崩壊する。
後には瓦礫が山となって積み重なり、動きが止まると同時に凄惨な姿で静寂が広がった。
辺りに沈黙が広がる。
崩壊は止まった。だがルフィの姿はない。まさか飲み込まれてしまったのか。
彼がどうなったかは誰にもわからず、しばし立ち尽くして言葉を失う。
どれほど経った後だったか。やがてぽつぽつ話し始めることが出来た。
恐る恐るといった様子でウソップが口を開き、皆もようやく声を出し始める。
「ど、どうなったんだ……ルフィは、一体」
「外に出た形跡はない。多分、あの中に」
「飲み込まれたか……」
ウソップの呟きにキリとゾロが続く。
まさかの決着であった。建物ごと破壊するとは誰も想像していない。彼らしいとも言える規格外の行動だったが、その本人の姿が見えないのでは果たして喜んでいいものか。
勝利か、敗北か。どちらか判断することも出来ない。

困った奴だと思う反面、心配する心もある。やはりウソップが心配そうに口を開いた。
「そんなっ。それじゃあいつ、死んじまったんじゃねぇよな？」
「大丈夫。ルフィはゴム人間だ。瓦礫に押し潰されて死ぬことはない」
「でも、それじゃあ、自力じゃ出られなくなってるのか」
「可能性はある。でも――」
答えるキリの声を遮るように、カランと小石が転がった。
瓦礫を押しのけて外へ出て来ようとしているらしい。
息を呑み、その時を待った。
ゆっくりとした動きで、今にも倒れそうだが、瓦礫の中から人の姿が現れる。しかしそれは彼らが待ち望んでいた人物ではなくアーロンの物だった。
全身が血に濡れ、意識を朦朧とさせて外に出て、ふらふらになっても彼はまだ立っていた。
「ア、アーロン!?　あいつ、あんなになってまだ生きてんのかよ！」
「おれは……魚人の、帝国を――！」
呟いた直後、巨体が倒れた。
意識を失ってしまったようで、再び動き出すことはない。今度は完全に沈黙していた。
倒れた瞬間を見ていた六人はまたも言葉を失っていたようだ。
その時またも瓦礫を押しのけるわずかな音が聞こえて、全員の視線が上を向く。
崩壊したアーロンパークの頂点に立つ人影がある。
月の光に照らされて、ひどく印象的な姿。それは血に濡れて壮絶な姿となったルフィであった。
安堵で胸を撫で下ろす前に、俯いたルフィが大声で告げる。
「ナミ!!」
名前を呼ばれて、ナミの目が片時も離さず彼を見る。
言葉は端的に。
ひどく分かり易い想いが伝えられた。

「おまえは、おれの仲間だ!!!」
それが全ての結果だった。
ナミの目から涙が零れ落ち、右手の指で拭いながら、彼を見つめて小さく頷いた。
「……うん!」
同時に、皆がわっと声を上げる。
ウソップが両手を上げて嬉しそうに跳び上がり、サンジは拳を握って喜びを露わにして、シルクもはしゃぐ様子で諸手を上げる。
キリが満面の笑みを浮かべ、ゾロでさえ笑みを浮かべていた。
しばし離れていた仲間たちの顔を見た後、ルフィも嬉しそうな笑顔になる。
今にも倒れそうな危うい足取りで瓦礫の山を下り始め、それを待てずにウソップが飛び出した。
「ルフィ～～っ！　おまえ、やりやがったなこんにゃろう！」
「しっしっし。ぶっ飛ばしてやった」
「へへっ、やったな！　おれたちの勝ちだ！」
ルフィに駆け寄り、自身も怪我をしているというのにすっかり忘れて、肩を貸してやりながら二人で降りてくる。足場はひどいが転ぶことはなかったようだ。
彼らが降りてくる間に他の者も喜んでおり、特にサンジは感情が高ぶっている。
海賊になって初めての戦闘、初めての勝利で、仲間と感動を分かち合うのも初めて。案外良い物だと判断している。何より、涙を流すとはいえナミが喜んでいるのだ。
冷静ではいられず、半ば無意識的に気付けば地面を蹴っていた。
「やったぜナミさん、あいつが勝ったぁ！」
「こら」
「ごふっ!?」
「ダメだよサンジ。急に女の子に抱き着こうとしちゃ」
思わず勢いで抱き着こうとしたのだが、ナミの隣に居たシルクに鞘で殴られ、撃墜される。サンジは勢いよく地面に顔を打ち付けてし

まって鼻血を流した。
戦闘では傷つかなかったというのに、惜しい姿である。
暴走するサンジからナミを守ったシルクは彼女の表情を見て素直に喜んだ。
やっと初めて本当の彼女と話せる気がする。
些細ながら如実な変化は、傍で見ていた人間にとっては明らかな物だったようだ。
「やったねナミ。私たちの勝ちだよ」
「うん……そうね。あんたたちを、信じてよかった」
「ふふ。もちろんだよ。だって私たち、もう仲間でしょ？」
シルクが笑顔で告げると、不思議と涙は止まって、ナミもまた満面の笑みで頷く。
彼らの姿を見ていたら涙もすっかり遠ざかってしまった。もう我慢する必要はない。無理に泣く必要なんてないんだから思い切り笑おう。
嬉しそうに頬を緩めたナミはがばりとシルクへ抱き着いた。
「ありがとうみんなっ。私……諦めなくて本当によかった！」
「うん！」
「んナミさぁ～んっ！　お、おれには!?」
熱い抱擁を交わす二人を見てサンジが跳び上がり、腕を広げてアピールし始める。
抱き合っていた二人はそんな彼を見てやれやれと苦笑していた。
騒がしく、どこか楽しい雰囲気。ルフィたちも降りてくる。
その場では比較的静かだったキリとゾロが言葉を交わしており、戦いの終わりに安堵している。これでやっと、本当に終わったのだ。
「何はともあれ、一件落着かな」
「ちょっとばかし退屈だったくらいだがな。もう少し骨のある奴が居りゃよかったんだが」
「イカじゃなくてタコなら満足できた？」
「ま、どっちでも変わらなかったもしれねぇな。あれじゃ期待もできねぇ」

「そうだね。タコには骨ってないらしいし」
「そういう問題じゃねぇんだよ」
彼らも肩の力を抜いて話しているらしく、ようやく安堵できる瞬間が得られた。
その場の空気は緩んでいた。
ルフィとウソップが瓦礫を下り終えて皆に合流し、二人同時に手を上げて大きく声を出した。緊張感など欠片も残っていない。ただ勝利に酔いしれる海賊たちの姿だ。
「おぉ～しおまえら、こっちに注目！　何を隠そうこの男が敵の船長、アーロンを一人でぶっ飛ばした男、海賊ルフィ親分で、おれはその部下の狙撃手、キャプテ～ン――」
上機嫌にウソップが語っている最中、海から何かが浮上してくるのが伝わった。
キリとゾロが最も早く気付いて振り返り、ルフィが首をかしげると、高い水しぶきが上がる。
海から顔を出したのは、怒った様子のモームだった。
「うぎゃあああっ!?　海から牛が出てきたぁ!?」
「モーム！」
ウソップの絶叫が辺りに広がった。
存在を知っているナミがその名を呼ぶ。だが怒り心頭のモームはすでに声など聞こえていないらしく、殴られた影響だろう、仕返しのことしか考えていないようだった。
すぐ近くに人間を見つけたのだからちょうどいい。
もはや誰でもいいと考え、相手を確認することなく喰らい付こうと頭を近付けた。
「モォォオオオッ！」
「いきなり来たァ!?」
ウソップが騒いでいるものの、狙われたのはおそらく咄嗟にシルクを庇ったナミ。
その瞬間、二人の女性しか見えていなかったサンジの目つきが変わる。女性に見惚れてハートになっていたはずの目に鋭さが現れ、モー

ム以上の怒りに燃える。
気付いた後では驚くほど動きが速い。
即座にモームの目の前へ躍り出て右足を振り上げ、猛然と接近する顎を蹴り上げていた。
「何しとんじゃクラァ!!」
「モォッ!?」
人間の数十倍の体長を持つモームが、一発の蹴りで弾き飛ばされた。背筋を反らせて体勢が変わり、必然的に顔面が遠くなる。
すぐにモームの目が眼下のサンジを睨みつけるものの、獰猛な巨獣ですら怯えるほどの熱い眼差しを受け、一瞬で怒りが霧散したモームには代わりに恐怖心が植え付けられる。
その男、まさに修羅だ。
女性陣を守るために鬼となって、眼前に居る誰よりも圧倒的な迫力を放っていた。
怯えて震え始めたモームに指を突きつけ、サンジは怒りを滲ませる声を出す。
「てめぇ今誰を狙いやがった。答えろ牛ィ！　てめぇは今、絶対に狙っちゃいけねぇ人に危害を加えようとした、そうだなッ！」
「モッ……！」
「騎士道もわからねぇエイに、女を傷つけちゃならねぇって全世界共通のルールさえ知らねぇ牛か。このクソ海賊団、てめぇ以外にも意識がありゃおれが全員蹴り飛ばしてるところだがッ。とりあえずてめぇに一つ教えといてやる！　骨の髄から魂にまで刻み込め！」
「モォ……!?」
「女は何があっても傷つけちゃいけねぇ存在だ！　そしてェ――！」
凄まじい音がするほど強く地面を蹴りつけ、サンジが飛んだ。
動揺するモームの首へ近付き、あまりに強力な、そして強烈な蹴りを叩き込もうとする。
「恋はいつでもハリケーンなんだよォ！」
「モォォッ……!?」

「猛進！　猪鍋シュート!!」
モームの肉体に深々と蹴りが突き刺さり、あまりに大きな衝撃と痛みは全身にまで響き渡って、その巨体は一瞬で空中に浮く。まるで夢でも見ているかのようだ。
空を飛んだモームの体は、角度の関係か、陸上に上がってズズンと大きな音を立てた。
そのまま完全に沈黙してしまい、荒みかけた雰囲気が元に戻る。
海に落ちることもなく見事に地面へ着地し、しゃがんだ状態からゆっくり立ち上がる。
そしてくるりと振り返った後、再び目の色は変わっていた。
「んナミすわぁ～ん！　さぁ、今度こそおれの胸の中に――！」
「アホか」
「藻?!」
しかしナミへ向けて放られたはずの言葉はゾロの溜息で流されてしまい、再び燃え上がる怒りを感じたサンジはおもむろにゾロへと飛び掛かる。
蹴りと鞘に納まったままの刀がぶつかり、彼らは懲りずに戦い始めてしまった。
「てめぇごときに用はねぇんだよ！　ケガ悪化させて死んでろ、アホめ！」
「死ぬか、バカ！　てめぇこそその辺で頭打って死んでろ！」
「二人とも、ストップ！　もう、ケンカしちゃダメって言ったのに……！」
常人とは思えぬ速度で戦い始め、明らかに手を抜いていない様子にシルクが慌て、剣を抜いて駆けつけていく。二人は風に飛ばされて勢いよく海に落ちてしまい、どうやら頭は冷えたようだ。
冷静さを取り戻したらしく二人揃って泳いで戻ってくる。
騒がしい彼らを見てくすくす笑いつつ、キリは歩き出す。
モームの一件で呆然としているウソップの傍を通り過ぎてルフィの前へ。
右手を軽く持ち上げて掌を見せれば、肩を揺らす彼も同じく右手を

上げて、パンとハイタッチ。緩んだ空気の中で笑顔を向け合ってようやく安心できる。
「お疲れ、キャプテン。大怪我人が一人追加だね」
「まぁ大したことねぇよ。それより腹減った。肉食いてぇな」
「どうせすぐ食べれるよ。もう全部終わったんだ」
からから笑うルフィは次いでナミに目をやり、親しげに声をかける。
以前と何一つ変わらない。
初めて出会った時のままだった。
「なぁナミ、宴やろう。村の奴らみんな集めてさ、思いっきり騒ごうぜ」
「え？」
「いいだろ？　おれたちが勝ったんだから」
単純な思考で深く考えずにそう言われ、呆れてしまって嘆息する。けれど拒む気などない。言い知れないほどの大きな感謝の念があった。
肩をすくめ、苦笑し、小さく頷いた。
ナミの反応でルフィは上機嫌に肩を揺らす。
「あんたっていつもそればっかり。でもいいわ……やっとみんなも笑えるようになるから」
「だろ？　幸せになるにはな、肉食って思いっきり笑えばいいんだ」
「あはは、バーカ。ねぇルフィ」
「ん？」
「ありがとう」
穏やかな微笑みを湛えて告げられ、直後に麦わら帽子を乱暴にかぶせられる。
片手でそれをかぶり直し、彼はそれもまた笑い飛ばした。
「いいさ、気にすんな。おれは肉食えればそれでいいんだ」
おどけるようにそう言って、ルフィは歩き出してしまう。
同じくキリも微笑んで目を伏せながら傍らを通り抜け、どことなく誇らしげな顔で鼻の下を擦ったウソップも、静かにナミの傍を離れ

た。
背後では皆がぎゃーぎゃー騒いでいる。
子供っぽいと言うのか、海賊らしいと表現すべきか。退屈しない面子ばかりだ。
背中で声を受けながらナミは崩れたアーロンパークの前で立ち尽くす。
ふと月を見上げた笑顔は、いつの間にか頬を濡らしていて。
嬉しそうに、穏やかに、ここには居ない誰かへ伝える。
「ベルメールさん……終わったよ。私、自由になれたんだ」
空には数えきれないほどの星が浮かんでいた。

生ハムメロン

アーロンパークが崩壊した。
これはアーロン一味の支配が崩れたことを意味し、それを知ったココヤシ村の人間はコノミ諸島の村々へと走った。同じく苦しんでいた人々に情報を伝えるためである。
支配は終わり、自由がやって来た。
人々はこれを大層喜んで笑顔を浮かべ、いつ振りかで感じる自由に胸を躍らせる。
支配を逃れてまず最初にしたこと。それが盛大な宴を行うことであった。
何も気にせず大いに騒ぎ、笑いたい時に笑って、腹いっぱいになるまで食べ、寝たい時に寝て、盛大な祭りは休みを入れずに一昼夜を通して行われた。
その中で、人々に感謝された麦わらの一味はと言えば、彼らもまた好き勝手に振舞っていた。
まず最初に怪我を治療し、体力を回復させるため一度眠りに就いて、朝を越えて昼を迎える頃に起き出す。宴に参加したのはそれからのことである。
特にひどい怪我を負っていたルフィ、キリ、ゾロの三人はもう一度Ｄｒ．ナコーの下へ赴いて治療された後の参加だが、これから何日も続くだろう宴を前に慌てることはない。
ココヤシ村の小さな診療所では現在、ゾロの悲鳴が聞こえていた。
「いでででででっ!?」
「まったく、素人のくせにいきなり傷を縫いおって。しかもこんなに荒いのに動いとったのか」
「仕方ないよ。彼アホなんです」
「おれじゃねぇ！　海上レストランのコックがやったんだっ」
ミホークにつけられた胸の傷を縫い直し、その痛みで声が出ているらしい。施術中、隣のベッドではキリが寝そべってだらけており、やる気に欠けた顔で彼を見ていた。

戦闘が終わってようやく空気が緩んでいるのである。
先にルフィとキリが治療を終えているが、動くのも億劫だとばかりにキリは寝転んだまま起き上がろうとせず、眠る気もなくごろごろしている。
まるで冷やかしだ。
痛みを我慢しながらゾロは彼を睨みつけて低く唸った。
「おまえはそこで何やってんだよっ。終わったんならさっさと出てけ……ううっ！」
「一回寝ちゃうとダメだね。なんかもう動ける気がしなくてさ」
「だからってなんで見てる必要が……ぐうっ！」
「あーだるくなっちゃった。もう眠くないのにな」
痛みに耐えている横でだらだら喋られるのは中々怒りを募らせる状況だった。
後で絶対に斬ってやる。
そう決めたゾロは縫合の痛みに耐え抜き、やがてナコーが施術を終えた。
外からは宴の音が聞こえてくる。
どこからか音楽が流されて、至る所で会話が盛り上がっているらしく、初めて来た時とは対照的な騒々しさが広がっている。キリは寝返りを打ってうつ伏せになると窓に目を向けて微笑む。こういった楽しい雰囲気は非常に好みだった。
すっかり海賊好みの楽しい町に様変わりしていて居心地が良い。
仲間たちも今頃は楽しんでいる頃だろう。
起き上がってシャツを着たゾロは縁に腰掛け、子供のようにパタパタ足を動かして窓を眺める彼を見た。緩い表情はいつにも増して緩んでいる。幼く見えて呆れて溜息をついてしまった。
怒る気力さえ失い、荒っぽく頭を掻いた彼は怒るのをやめる。
別に外へ行ってもいいが、なんとなくそんな気も失くしてしまった。
ナコーが壁際の椅子に座って落ち着く頃。
二人して何という訳でもなく窓の外を眺めて、ぽつぽつと話し始め

る。
「そういやその傷、あの海兵にやられたんだってな」
「うん。あんまり強過ぎるから負けちゃった」
「悪かった」
「謝る必要ないよ。正直あの時は色々奇跡が重なってた。普通なら全員捕まってるよ」
寝返りを打って仰向けになり、左手を掲げたキリはそこを見つめる。
医者も驚く回復速度で今やほぼ完治しているらしい。念のためにと包帯は巻いているものの、あと数日もすれば完治と言っていいだろう。
今となってはいい経験だった。
一度は死を覚悟し、命を捨てた気で戦って、結果は敗北。今も五体満足で居られるのが奇跡なほど力の差はあったが全員が揃えた今ではそれも有難い。
敗北を知って、自分たちはもっと強くなれる。
特にキリやウソップにとってはボガードとの決戦に大きな意味があり、感謝すらするほどだ。
「人間あそこまで強くなれるってわかったんだ。それだけで収穫だしグランドラインのレベルもわかった。まだまだ強くならなきゃね」
「ああ……こっちも色々あったんでな」
「会ったんでしょ？　鷹の目に。ヨサクが言ってたよ」
「あいつ、ペラペラしゃべりやがって」
「目標が見れたのはよかったね。航海が始まるのはきっとまだこれからなんだよ」
互いに傷は負い、そのおかげで手に入れた物があったようだ。
キリは何度か左手の指を動かし、問題なく動くことを再び確認する。
頂点を目指す道筋は見えた。遥か先にある偉大な背を見たからに他ならない。
今は届かずともいずれは。

そう思う二人には期待と野心が生まれていて、今や不安など微塵も持ち合わせていなかった。
「これから楽しくなりそうだ。コックも航海士も手に入れてそろそろグランドラインだしね」
「もう向かうのか？」
「良い頃合いでしょ。頼れる仲間が居るから今なら大丈夫だと思うし」
「ようやくって感じもするな。ルフィは最初から向かうっつってたぞ」
「ボクが遠回りさせたんだ。向こうはイーストブルーほど甘くないから」
笑みのままで目を閉じ、気楽に話すキリを見てゾロはふと思い出した。
彼が経験した以前の航海の話は少しだけ聞いている。ただし仲間との航海については聞かされたものの、仲間が死んで、一人になった後の話は聞いていない。あまり話したくないのか、何気なくはぐらかされてしまったことを思い出した。
別に知らなければならないという訳でもないが、気にはなる。
思い出したことを機にゾロが試しに尋ねてみた。
「そういやおまえ、グランドラインに居たんだよな」
「そうだよ。意外に長くね」
「仲間が死んだのはもうずいぶん前だろ。その後何やってたのか聞かされてねぇぞ」
目を閉じたまま、ふっと笑みを消した。
気分を害した様子とは違う。何か思い悩むような、考え込む仕草だ。
「う～～ん、それ聞く？」
「やっぱり話したくねぇのか」
「別に話したくないってほどじゃないけどさ。う～ん……」
「そんなに悩むことかよ。どんな悪事働いてたんだ」
珍しい姿だと思った。

今まで彼がそこまで悩んでいるのを見たことがあっただろうか。
歯切れの悪さも異質だと思う。軽口や無駄口ならよく出てくるというのに、本音で話すのを嫌がっている可能性がある。しかし普段も本音を口にする姿は頻繁に見せていた。
嘘をつくこともあるがそれはからかうためだけ。真面目な話で人を騙そうとしたことはない。
何かがおかしい。何も話さないのが良い証拠となってしまった。
しばらく唸って悩んでいたキリは目を開き、困ったように笑いながらようやく話し始める。
「まぁ、いずれ話すよ。どうせグランドラインに入ったら無視できなくなるだろうしさ」
「あ？　そりゃどういう意味――」
「さて。それじゃそろそろ宴に参加しますか。ルフィもとっくに行っちゃったし」
ベッドを降りて元気よく立ち上がったキリはそう言い、無理やり話を打ち切った。追及したところで話す気はないのだろう。仕方なくゾロも立ち上がる。
壁際で椅子に座るナコーへ目を向けた。
彼の処置はやはり本職だけあって頼りになる。笑顔で礼を言えば、呆れた顔で返された。
「ドクター、ありがとうございました。もう大丈夫ですよね？」
「安静にしてればな。あんまり無理するんじゃないぞ。最低でもあと三日は大人しくしとけ」
「ゾロ、わかった？　三日だよ」
「おまえも同じじゃ」
「あれ？」
「だから、普通わかるだろって」
またいつもの調子に戻って歩き出し、ナコーに手を振って別れた後、診療所を出る。
外に一歩出ればそこは宴の真っただ中。
騒がしい様子で笑い声に溢れ、村人たちが自由を謳歌していた。

辺りを見回してから、先頭に居たキリがゾロへ振り返る。
目的も違えば行動も違う。仲間だからと言って四六時中一緒に居なければならない訳でもない。
キリが彼にこれからの行動を尋ねるのである。
「ゾロはこれからどうする？」
「とりあえずメシ食って酒飲んで寝る。おまえは？」
「ちょっとナミに話したいことがあってね。探してくるよ」
「話したいこと？　悪いことじゃねぇだろうな」
「良いことだよ。また後で合流するかもしれないけど、とりあえずじゃあね」
「おう」
軽く手を振って行ってしまう。
ゾロは群衆に紛れて遠ざかるキリの背を見送った。
何やら訳ありの顔をしていた。彼も何か秘密を抱えているのだろうか。
一味の中ではそれなりに早い段階に出会い、二人で居る時間も多かった気はするが、案外知らないことがある。特にあれほど話したがらない時期については。
現在のキリが十七歳。
仲間を失ったのが十二歳の頃で、イーストブルーに戻ったのがつい最近。
空白の時間が出来ている。その間に彼が何をしていたのか、おそらくルフィでさえ知らない。
素直に話せば驚きもしないだろうに、妙にはぐらかすため気になって仕方なかった。
頭を振って考えるのをやめる。
どんな過去であれ、彼はルフィに心酔している。再開した海賊家業を心から楽しんでいた。きっと裏切ることはないだろうし、仮に裏切ったとしてそれも作戦なのだろう。緩い笑顔であっさり帰ってきそうな気がするのだから心配はしていない。
思い悩む必要はない。放っておけばいいのだ。

考え直したゾロは自分がお節介になっている気がして、それがあまり嬉しくない。
頭を掻きながら歩き出し、ひとまず酔うまで美味い酒を呑もうと決めた。

＊

「ハッ!?」
両手に骨が付いた肉をいくつも持ち、棒立ちになったルフィが驚愕した。
現在、彼の前には食事を終えたサンジが居る。たまたま見かけたので近寄って声をかけようとしただけ。しかしほんの数秒前、彼が信じ難い物を食していて心臓が大きく跳ねた。
切り身のメロンにハムが乗っていたのだ。
そんな料理は見たことも聞いたこともない。なぜハムとメロンが出会う必要がある。
訳がわからない、と彼の顔には分かり易く書いてある。
サンジはネクタイを緩めつつ、腹がいっぱいになるまで食事して満足そうに息をついた。
傍らにまでルフィが来たことには気付いていて、彼に話しかけるように呟く。
「ふぅー、食った。たまには食うだけってのもいいもんだな。ナミさんとシルクちゃんにおれの料理を食べてもらいたかったとこだが、まぁこれから毎日食ってもらうことになるからいいか」
「お……おい、サンジ。今、おまえが最後に食ったの、なんか乗ってなかったか?」
「そりゃ乗るさ。生ハムメロンだから生ハムが乗る」
「生ハムメロン!?」
その名称を聞いてルフィの目が輝き始めた。
あらゆる場所を巡って肉料理を食べている最中だというのに、すっかり興味が移ったらしい。口の中にある物をもぐもぐ噛み続けなが

ら生ハムメロンに心が奪われる。
「なんだそのうまそうな物はっ！　おれ聞いたことも見たこともねぇぞ！」
「まぁ初めて聞いたんなら驚くかもな。生ハムのほのかな塩加減がメロンの甘さを引き立たせるのさ。一回食っといて損はないぜ」
「どこにあったんだ?!」
「さぁどこから持って来たんだったか。島中宴で立食パーティーだからな――」
「探してくる！」
我慢できずにルフィが駆け出した。肉は持ったままで口の中が空になればまた放り込み、食事を続けながら生ハムメロンを探し始める。あまりのマナーの悪さにサンジは眉を顰めるが、どうせ海賊なのだから言っても無駄なのだろうと敢えて追わなかった。
「あいつはいつまで食ってやがんだ。本当に底なしの胃袋だな」
マナーの悪さは引っかかるものの、コックにとっては嬉しい姿だろう。作った料理を欠片も残さず食べ切るのは確実にルフィの良いところだった。
バラティエでの様子を見ていてサンジはそう思っている。
いずれある程度のマナーは教えなければと思うが、今はいい。
それより今はやることがある。
宴のために持ち出された、道端に置かれたテーブルと椅子についていたのだが、ついさっきまでここに居た他の面子はそれぞれ思い思いに自由行動を始めてしまった。
少し遅れて立ち上がった彼は辺りを見渡す。
宴を楽しむ人々がそこら中に居て笑っていた。当然、女性も。
聞けば、海賊は港ごとに女を作って航海するという。なんて素敵な連中だと子供ながらに思ったものだ。どうやらこの男、幼少期から女には目がないようなのである。
感動を覚えながら改めて辺りを見回す。とても美しい笑顔を持つ女性たちが数知れず。
覚悟を決めた瞬間に目の色が変わり、堪らずサンジは駆け出した。

「食事は終わった。よし、おれはレッツナンパだァ～！　アイニードレディ～っ！」
どたどた騒がしく走り出した彼はとにかく女性を求めていた。
明らかに妙な様子で大声を出しているのだが、村中が歓喜に染められた今の状況では誰も不審な目で見て来ない。彼も喜びの声を上げる一人だと見られていたようだ。
走り出したルフィはサンジの傍を離れ、生ハムメロンを探していた。
確かに村中、島中が宴を行って騒がしくなっている。通りには数え切れないほどのテーブルを並べられて、村人が協力して作った料理がいくつも並べられている。
まだ見つからない。
生ハムが乗ったメロンはどこにも置かれていなかった。
「ん～っ！　どこだ、生ハムメロンは！」
笑顔に包まれる村の中で一人だけ必死な形相。ルフィは肉を食べながら目を血走らせていた。
そんな折、一際大きな声が聞こえてくる。
聞き覚えがあるので視線を上げれば、簡易で作られたやぐらの上にウソップが立っていた。メガホンを口に当てて大声を出しており、宴を盛り上げる一役を買って出ているらしい。
「え～、一番ウソップ、歌います！」
「ウソップ、生ハムメロン知らねぇか？」
「んん？　おぉ誰かと思えばルフィ親分じゃねぇか。生ハムメロン？」
「メロンの上に生ハムが乗ってるんだぞ。ほのかな塩分が甘さを引き立てるんだ。村のどっかにあるらしいんだけど、どこにあるんだろうな」
「悪いが見てねぇな。それより、せっかく来たんなら歌の前に一つおれのすげぇ話を――」
「そうか。じゃ後でな」
「って聞かねぇのかよ！」

ウソップの話には興味がないらしく、ルフィは再び走り出して去ってしまった。
やぐらの上で嘆息したウソップは仕方なくその背を見送る。
まったく彼はすごい奴だ。強そうな相手にも怯えず立ち向かい、どれだけ傷を受けても決して諦めず、終わった後には遺恨を残さず笑って過ごす。
仲間になって共に航海して、離れる時間もあったが彼の凄さは誰より理解しているつもりだ。
そうだと思い付く。
彼は武勇伝には興味がない。自身が行ったことを何一つ他人に自慢しようとしない人間だった。
ならば自分が語ろう。
自らの船長が海賊として歩んだ軌跡を、嘘を交えず事実だけ話せば、それだけで嘘のような冒険譚。聞いた者たちは嘘だと思うかもしれないとはいえ、それはそれで意味がある。
「よぉ～し、アーロンパーク崩壊のついでに我が船長の話を聞いてくれ。魚人の幹部を一人倒した男、このキャプテン・ウソップがあいつの仲間になった時の話だ。ある小さな村に――」
歌う前に、ウソップは自身の仲間がどんな海賊かを語り始める。
村人たちは興味津々にその話を聞き入れていた。
尚も走るルフィは目的の物を見つけられず、ついに苦心し始めていた。
まだココヤシ村しか探していないため、可能性は他の村にまで広がっている。しかし手に持つ肉はだんだん減ってきている訳でなぜか焦りも大きくなってくる。
すでに誰かが食べ尽くしてしまっていたら嫌だ。
そんな光景は想像するのも苦しくなって、ルフィの足は慌て出す。
しばらく走ると、またココヤシ村の中で仲間を見つけた。今度は小さな鞄を抱えるシルクだ。
当然ルフィは立ち止まり、笑顔で手を振る彼女へ近付くと質問を始める。

「シルク、生ハムメロン知らねぇか？　メロンに生ハムが乗ってて
ほのかな塩分が甘味を引き立てるんだぞ。どっかで見なかったか？」
「生ハムメロン？　ううん、見てない」
「くそぉ～、どこにあるんだ。だんだん肉よりそっちの方が食いた
くなってきた……」
「そんなに持ってるもんね。ルフィ、野菜もちゃんと食べなきゃだ
めだよ」
「おう！　でも今は生ハムメロンだ！」
からりと笑うルフィにつられ、シルクも肩を揺らす。
その後に気付いて鞄の中からみかんを取り出し、ルフィへ差し出し
た。
ちょうど肉を食べ続けて右手が空いている。ルフィもすぐに受け
取った。
「はいこれ」
「ん？　みかん？」
「ナミとノジコさんからお礼。いっぱいもらったんだよ」
鞄の中身を見せてシルクが笑う。ぽかんとした顔でルフィは受け
取ったみかんを見つめた。
「二人のお母さんがみかん畑で働いてたの。二人にとっての宝物だ
よ」
「そっか。じゃあ大事に食わねぇとな」
少ない説明でも理解したのだろう。ルフィは嬉しそうにそれを
握って、後で食べようとポケットに入れた。大事に扱う手つきでシル
クも安堵する。
海賊ではあるが少年然として、彼は他人を思いやれる人間だ。
彼女たちの想いをくみ取り、たかがみかん、しかし宝と称するそれ
を大切に受け取ってくれる。
出会ったのが彼でよかった。
或いは、彼に出会えてよかった、だ。
心底嬉しそうに微笑むシルクはみかんが詰まった鞄を抱きしめる。
「まだ探すの？　食べ過ぎないようにね」

「しっしっし、大丈夫だ。おれはまだまだ食えるぞ」
「だから、それを心配してるんだけど……」
ルフィは笑顔でまた会おうと告げ、走っていってしまう。
苦笑しながらシルクも歩き出した。
金には代えられないお礼が手の中にある。これをみんなに配ってやろうと思った。
それでまたナミがみんなと近くなればいい。
彼女はもう、麦わらの一味なのだから。
シルクと別れてすぐ、数分と経たずにルフィは見知った後ろ姿を見つけた。それだけでなくその前にはもう一人仲間の姿がある。
多少慌てて走りながら駆け寄る。
近付いたのはキリとナミであった。
「キリ！　ナミ！　生ハムメロン見なかったか！」
「お、意外な登場だね。生ハムメロンってそれのこと？」
「おほぉっ!?　あるじゃねぇか生ハムメロン！」
二人は通りの小脇に立って話していたようだ。当然近くにはいくつもテーブルがあって、声をかけられたキリはその中の一つを指差す。すると確かにあったのだ。
切られたメロンの上に生ハムが乗っていて、輝くような、今までの人生で見た経験がない姿。
ルフィは驚き、ようやく出会えた歓喜で声を大きくした。
「これが食いたかったんだよ！　にっしっし、やっと見つけた！」
「ちょっと目を離した隙にずいぶん楽しそうだね、君は。そんなに怪我してるのにね」
「うんめぇぇぇぇ～～っ!?　ヤバうまっ！」
「聞いてないし。もう食べてるし」
持っていた肉をテーブルに置いて、念願の生ハムメロンを食し、涙さえ流しかねない表情でルフィが喜ぶ。自由気ままな彼の姿にキリは呆れ顔で物も言えなかった。
自身もそれなりに自由気ままだと自覚しているが彼には劣る。
しかし他人の気分を害する訳ではないので、特殊な才能だと微笑ま

しく見ていた。
ナミもまた呆れつつ、今は柔らかい笑顔で彼を見ている。
何も変わらない。良くも悪くもいつも通りだ。
不思議と心が落ち着く気がして、彼女は穏やかな声をルフィに投げかける。
「あれだけの戦いの後でもう料理に夢中なのね。ほんとあんたって変な奴」
「おっ、ナミ。みかんありがとな。あとで大事に食うからよ」
「いいわよ、お礼なんて。大した物じゃないんだし」
「でもおまえの宝なんだろ？　だったら大した物じゃねぇか」
何でもないことのように言うルフィに少し驚き、直後にナミは照れた様子で苦笑した。
「そうね……まぁ、別にどっちでもいいんだけど。好きにしなさい」
「しっしっし。じゃあそうする」
本心とは違うだろうがそっぽを向いて。ナミの様子にルフィが肩を揺らす。
微笑ましいやり取りをする二人に表情がやさしくなり、キリは彼らの雰囲気に心が温かくなるのを感じつつ、空気を壊して申し訳ないと思いながら切り出した。
「ちょうどよかった。ナミに話があったんだけど、ルフィにも聞いて欲しかったから」
「ん、なんだ？　うまいメシの話か？」
「違うよ。これからの航海の話」
キリの目がナミを捉え、真剣な空気を感じてわずかに表情が変わる。
「嫌ならもちろん断ってくれていい。これに関しては、決定権はナミにある」
「何？　そんなに大事な話？」
「まぁね。ここから先はいよいよグランドラインを目指すことになる。だから――」
そうして宴の中、キリは周囲の雰囲気にそぐわない話を持ち掛け

た。
当然とばかりにルフィとナミは驚いて、全く想像していなかっただけに驚愕に値する。しかしルフィはキリを知るためすぐ冷静になり、説明される内にナミの表情も変化していった。
話を聞き終えた時。ナミは覚悟した顔で頷く。
これによりキリの考えは実行されることになったようだ。

海賊の流儀

戦いに敗北し、夜の間に捕縛された魚人たちは村から外れた、山近くの道端に転がされていた。

海の近くではもしもがあっては危険だ。しかし村に入れることもできない。そう考えられて人の姿のない、陸の上に放置されることになったのである。

後に海軍を呼んで引き渡し、全てが終わるはずだった。

ただし、昨夜のうちに海軍への通報は待って欲しいと言ったのが、キリだった。

訝しむ村人を納得させられるだけの理由を彼は持っていた。そもそもアーロンは海軍に賄賂を渡して自分の悪事を伏せさせたのである。八年間、迫る敵は倒したとはいえなぜ本部が動かずに状況が変わらなかったか、ひとえに彼が策を巡らせ海軍内部の膿を使ったためだ。

海軍にはそんな人間が居て信用できない。通報しても無駄に終わるだけ。

半ば強引にそう話をつけ、放置しておくように言ったのも彼である。

そして一夜が明けて。

眠って、怪我を治療して、再び彼らは現れた。

麦わらの一味が総出で捕縛されたアーロン一味の前に立ち、ノジコとゲンゾウも立ち会うためにその場へ姿を現す。何やら奇妙な雰囲気が漂っていた。

事情を聞かされているのはナミとルフィのみ。他の人間は何も知らずにここへ居る。

緊張も当然で、戦闘時とはまた違った緊迫感が漂っていた。

主導で話を進めたキリが一歩前に出てアーロンの目の前に立つ。

魚人たちは関節という関節を縛られ、得意の腕力が使えないよう、万が一がないように縛られている。座ったままのアーロンにはどうすることもできず、ただ敵意を込めて睨みつけた。

キリは緩い笑顔で彼の感情を受け流して話し始める。
「やぁ。ご機嫌はどうかな？　ベッドも無くて辛かったかもしれないけど」
「このままただで済むと思うなよ……魚人族の怒りは消えちゃいねぇ。おれはいつか必ずてめぇらを八つ裂きにし、魚人の恐ろしさを思い知らせてやる！」
「怖いねぇ。そう怒らずにさ、もうちょっと落ち着いて話そうよ」
そう言ってキリは地べたに座り、アーロンと目線を合わせて話そうとする。
奇妙なのは、そうしながら決して友好的な態度という訳でもなさそうなのだ。親しげに話すような声色の一方、どこか冷徹な、恐怖心を掻き立てる何かを感じる。
笑顔を浮かべながら冷静に。
キリの声は温かく思えながら冷たい。
「一つ、提案をしに来たんだ」
「てめぇらの要求を呑むことはねぇ」
「そう言わずにまずは聞いてよ。そっちにとってもこのまま終わりじゃつまらないでしょ」
「フン……人間の施しを受けるようなら牢屋の方がマシだ」
アーロンの態度は頑なで、ちっとも話を聞こうという気がない。
それも当然だろう。彼は極度の人間嫌いで、尚且つ話そうとしているのは自分たちを破った相手。野望を阻止した人間たちだ。
片時も目を離さず睨みつけ、怒りをぶつけるのは決しておかしなことではない。
負けた後でも人格が変わる様子はない。
仲間たちは緊張した顔で見守っているが、一体何をするつもりなのか。
キリだけは彼らの態度もまるで気にしておらず、尚も冷静に話を聞いてもらおうとする。
放った一言は、いきなり核心をつく物だった。
「その縄を解いてもいいと思ってるんだ。ずっとそのままじゃ窮屈

でしょ？　旗も奪わないし、建物は壊れたけど船もそのままだ。ちゃんと確認してきた。今まで通り自分たちの船で海賊やっていいし、アーロン一味の名前はそのままでいい」
「何の話だ」
「だけど当然条件はある。簡潔に言えば一つだけ、かな」
「何度も言わすなッ。てめぇらの要求なんざ受ける気がねぇと――」
「自分たちの旗の上に、麦わら帽子のマークを掲げるんだ。それだけでいいよ」
薄く微笑んで端的にそう言い、キリはそれだけを突きつけた。
途端にアーロンは言葉を失う。
意味なら、わかる。
己の旗のみならず他人の旗を船に掲げる。それはつまり、恭順の意味。
彼らの傘下に入るという意味だ。
とんでもないことを提案してきた。アーロンのみならず後ろに居る部下たちも顔色を変える。やはり目の前のこの男はどうかしているようだ。
麦わらの一味の傘下に入る。
たかだか七人、人間の海賊団の下につくなど考えただけでおぞましい。
アーロンが声を荒げて拒否したのも無理からぬことだった。
「ふざけるんじゃねぇ！　おれたちが、おまえらの部下になるってのか！」
「部下って訳じゃない。敢えて言うなら志を同じくする同志、ってやつかな。言い方はなんでもいいけどとにかく仲良くしましょうってだけ。他意はない」
「嘘をつけ！　てめぇらの旗を掲げりゃ、傘下に入ったことを証明するだけだろ……！　なぜおれたちが人間なんぞの傘下に！　舐めてんじゃねぇぞガキども！」
「考えてもみなよ。理由や経緯はどうあれ、勝負に勝ったのはボク

らだ。むしろ命も取られずに交渉しようっていうんだからこれは恩赦だよ。ずいぶんやさしく接してる方さ」
「侮辱しやがって……！　本気でそんな条件を呑むとでも思ってたのかァ！」
凄まじい怒りを感じさせる気性でアーロンが叫んだ。
しかしキリは笑みを深めるだけである。
「そうだね。正直に言えば、素直に呑むはずがないって思ってた」
「当然だ……！」
「たださ。舐めてるのはどっちだよ」
不意にキリの顔から笑みが消える。
見ていた者たち、アーロンでさえ表情を変えてわずかに驚く。
迫力を感じた。なぜかはわからない。
ただ驚くほど空気が凍り付いているのは確かで、先にはなかった威圧感が辺りを占めていた。
魚人たちだけでなく後方に居た仲間やゲンゾウとノジコも気付いている。
キリの姿が、今までとまるで違っている。
「お互い海賊やってるんだ、どんな生き物かくらいわかってるだろ。自分は好き勝手やっときながら、いざ負けて脅迫されたらただの好き嫌いで嫌がるばかり。そんな程度の覚悟で海賊やって今までよく生きてこれたもんだ。べらべらしゃべるのは勝手だけど、こっちは政治家やってる訳じゃない。言葉だけで通用するかどうか、それくらいもうわかるだろう」
「何をッ、生意気な……」
「海賊舐めんなよ。覚悟もできないクズどもが」
キリは静かに立ち上がり、前方に居る面々を見下ろす。
明らかに目の色が変わっていた。笑みなど欠片も残していない。
声色はやさしさを演出することさえやめ、ただ静かで暗い色を孕んでいる。
「海賊になった以上、どう生きるのも自由だけど、どう死んだとしたって文句は言えない。こっちは泣き言も甘えも許されない世界だ。

生き残った奴が正義で負けた奴が悪。ただそれだけのルールでやってる。負けた上にピーピー泣きわめく連中は総じて海賊にすらなれないクズだって言われるんだよ。ちょうどおまえみたいな奴さ」

「うるせぇ！　昨日今日海賊になったようなガキが知った風な口を――！」

突如、アーロンの顎が殴り飛ばされた。仲間たちの体に衝突して地面を転がり、視界が霞むほどのダメージがあって、だが悲鳴さえ出せない空気に包まれている。

彼を殴り飛ばしたのはキリの手から伸びる紙の拳だった。

その場を動かず、身じろぎ一つせず能力で殴り飛ばし、黙ったことで続きを話す。

「ボクはガキの頃からグランドラインで海賊やってる。向こうの海から来たんだって？　だったら知ってるはずだろ。海賊島でおまえみたいな泣き言漏らす奴は島民全員から八つ裂きにされる。海賊の恥だってね。これ以上自分の格を下げるなよ」

「ぐっ、おぉっ……!?」

必死になって痛みに耐え、地面に転がったまま動けなくなる。

キリは緩慢な動作で歩き出した。

魚人たちの間を歩き、怯える彼らを無視してアーロンへ近付く。そして再び見下ろした。

冷徹な目に感情はない。対象を人とも魚人とも思っていないような、恐ろしい目がそこにある。

アーロンは心がざわつくのを感じながらその目を見つめて逃げられなかった。

「死にたくもない、他人の言うことも聞きたくないなら強くなれ。誰にも負けなきゃ海賊は自由に生きられるんだ。その努力もできない奴が海賊になんかなって、しかも命を捨てる覚悟さえできていない。お笑い草だ。おまえに海賊を名乗る資格なんてない」

左手に纏わりついていた紙の束が力なく地面へ落ちた。

代わりにキリは懐からピストルを取り出し、右手で持って照準を定める。

微塵も揺れずにアーロンの眉間へ。
引き金を引けば、たった一発で彼の命を奪うことが可能な状況だ。
「命令した訳じゃない、選択肢を与えたんだ。ボクらの下で海賊を続けるか、それとも今すぐここで死ぬか。海軍に引き渡すなんて選択はない。そこをはき違えるなよ」
引き金に指がかけられる。
いつ撃ってもおかしくない。そんな危険な姿。
「海賊やる覚悟もないなら今ここで死ね」
ぐぐっと指に力が入った。
撃たれる。アーロンだけでなく誰もが自然とそう思っていた。
その時、ナミが声を発する。
「待ってキリ。ちょっと落ち着いて」
「待つって、何を」
「あんた、本気で殺そうとしてるでしょ」
緊張した声が背後から聞こえる。それでもキリは振り返らなかった。
ナミは唇をきゅっと噛んで返答を待つ。
これでは当初の予定と違うではないか。
グランドラインでの航海は危険だ。戦力は多いに越したことはない。水中での戦闘を得意とする魚人は作戦の幅を広めることができ、特に海戦においては比類なき力を発する。
一味が生き残るための重要な力となるはず。
だからアーロン一味を傘下に加えて連れて行こうと言い出したのは彼だ。
それで彼らがココヤシ村を遠く離れ、戻って来ないのならとナミも承諾した。しかし今のキリはとても演技でピストルを持っているようには見えない。
普段の姿を知っているだけに動揺してしまう。
その冷たさは今まで感じたことがなかった。
初めて見た気がするが、理解する。
やはり彼も海賊なのだ。

「さっきの話、無しでもいいよ。始末するんならボクがやる」
「待ちなさいって。何熱くなってんのよ」
「ガキの頃から海賊やって全てをそこで学んできた。ただのチンピラが海賊名乗って好き放題やりやがって。おまえら海賊の面汚しだよ。生きてる価値もない」
「待ってよ！　いいから、落ち着いて。私が決めたことよ」
ナミがなんとかキリを押し留め、ピストルは構えたままでも、話を続ける。
少し距離はある。ナミはその場からアーロンを見つめ、厳しい視線で捉えたまま言葉を紡いだ。
「私があんたを許すことはない。今回だって別に助ける気なんてさらさらないわ。でも、あんたが海軍に捕まったからって安心できる訳じゃない。だから私たちがグランドラインへ連れていく。あんたが望む望まないに限らず、二度とココヤシ村には手を出させない」
「くっ、ナミ……」
「もうわかったでしょ？　敗者になったあんたたちは二つのどっちかしか選べないの。生きてルフィの下で海賊をやるか、ここで死ぬか」
ナミの声には力がある。有無を言わさぬ態度があって、凛とした声が空気を震わす。
ゲンゾウは、ノジコは、もはや口を挟む瞬間を失っていた。
なんて覚悟の強い。
きっと今から何を言ったところで、たとえ彼女を心配する一心でも、きっと答えは変わらないだろう。彼女は自分たちが居ないところで決めてしまったのだ。海賊の仲間と共に。
「八年間、私はあんたたちに利用されてきた。だけど今日からは違う。私があんたたちを逃がさない。どれだけ悔いても反省しても、死ぬまで私のために働きなさい」
毅然とした態度でそう言う彼女はもうただの村人ではなく、海賊。
覚悟を決めて彼らと同じステージに立った人間だった。
アーロンは歯噛みして言葉を出せずにいた。

怒りが全身を支配したせいか、冷静な思考が取り戻せず、この場を切り抜けられるだけの作戦が浮かばない。彼らの良いように動かされるかのような感覚だ。
ここからは意味のない発言など繰り出せない。
大口を叩く彼らを黙らせるには、それ相応の力がある言葉でなければならなかった。
しかし彼が何かを告げる前に。
黙って生ハムメロンを食べていたルフィが静かに口を開く。
「おいアーロン。おれもおまえは嫌いだし、手下とかそういうの興味ねぇけどな」
顔には感情を表さずに淡々と言葉だけが投げられた。
「ナミが連れてくって言ったんだ。だからおれがおまえを抑える。もうどっかの村を襲わせたりなんかしねぇし、悪さするようならすぐに飛んで行って止めてやる」
ちょうど一皿食べ終えて、口内にある物を呑み込んだ後、ルフィはにやりと笑った。
まだ少年の域を越えないとはいえ海賊らしい姿。
勝ち誇ったような笑みはアーロンの神経を逆撫でするには十分だった。
「自由になりたいならおれに勝てよ。そん時はなんにも言わずに解放してやる。その代わりおまえが勝てねぇ限りはおれが船長だ。おれのマークに傷をつけることは許さねぇ」
ひょっとしたら普段の彼らしからぬ発言だった。自由を好む海賊は他人の束縛さえ許可しない。しかしルフィは確かに自分の言葉でそう言い切った。
アーロンは悔しさを無理やり押さえ込み、思考する。
勝ちさえすればいい。たったそれだけで自由は手に入る。
逡巡する一瞬で再びキリの声が聞こえてきた。
「生きてる限りはチャンスがあるよ。死んだら全部終わりだ」
今まさに考えていたことを言葉にされた。これによりアーロンは強く歯噛みし、決断する。

プライドをズタズタにされる行為だ。
しかし、このまま終わる訳にはいかない。死を選びたいほどに屈辱的だが目の前の人間たちに一泡吹かせるためには死ぬ訳にはいかなかった。
生きて、何としても地べたを這い回らせなければ。
悔しさを飲み込み、決断したアーロンが口を開いた。
おそらくその決定は皆の総意だっただろう。軽々しく死にたいと考える者は一人も居なかった。
声は怒りで震えるものの、血走った目は決して揺らがなかった。
「いいだろう……この場は一度、頷いてやる。だがなッ、よく覚えておけ！　おれはいずれてめぇらを血祭りにあげ、魚人が天に立つアーロン帝国で全世界を征服してやる！　このままで終わらせやしねぇ、真の勝者になるのはおれだァ！」
「ああ、いつでもかかって来い。おれは一度だって負けねぇからな」
ルフィが挑発的な笑顔で応え、決意はその場の皆に伝わった。
途端に刺々しい空気が霧散する。
先程までとがらりと様子が変わって、キリはいつも通りの緩い笑顔を見せていた。
「それじゃ、話は纏まったってことで」
上機嫌に弾む声を発して、驚く暇もなく引き金を引く。銃口はアーロンに向けられているため、魚人たちはあぁっと驚愕の声を発するものの、放たれたのは小さな豆が一つ。ぽろっと落ちるようにして銃口から出てきてアーロンの左胸の上に落ち、銃声一つなく発砲が終わってしまう。
行動が終わった後で辺りの顔が呆然とする。
キリはしてやったりといった顔で微笑み、そのピストルを掲げて肩をすくませた。
「最近のおもちゃ事情って凄いね。外面はまるで本物なんだから。気に入った？」
「てっ……てめぇぇっ!?」
それを投げて寄こしてやり、振り返った彼はくすくすと肩を揺らし

た。
まるで別人のような姿で、いつもの姿で仲間たちの下へ帰っていく。
仲間たちも半ば呆然としている様子。
事情を聞いていたナミとルフィは別として、シルクとウソップは本気で怖がっていたらしく言葉が発せなくなり、ゾロとサンジは呆れた調子で溜息をついている。
彼の初めての顔を見た。一体どちらが本物なのか。
今の笑顔を見比べて、そう思ってしまうほどに衝撃は大きかったようだ。
「そういうのは先に言っとけよ……」
「敵を騙すにはまず味方からってね。ゾロ、シルク、連中の縄切ってやって。これから色々準備しなきゃいけないし、忙しくなるんだから早速働いてもらわないと」
「あ……う、うん」
「おまえがやりゃいいだろ」
「抵抗する奴は一刀流の修行相手にしていいから。それでどう？」
「それならいいか」
声をかけられてゾロが動き出し、まだ落ち着いていない状態でシルクも後に続いた。
辺りにはまだ心臓の鼓動を速めるような雰囲気がかすかに残っている。
ウソップはキリをじっと見つめて、心臓に悪いと深く息を吐きながらやっと肩の力を抜いた。
「び、びっくりしたぁ……おれは今本気でキリを怒らせちゃいけねぇんだって思ったよ」
「嘘もハッタリも海賊の常套手段だよ。ウソップも使い方知ってるのに」
「だからっていきなりあんな感じになったら！　どえらい空気だったんだぞおまえ！」
「あはは、ごめんごめん。今度からは説明するよ」

安堵するウソップの傍ら、サンジもまた煙草を吸いながらキリを見直す。
その態度は発言からも表れていたようだ。
「人は見かけによらねぇってことか。大したタマだよ、おまえも」
「海賊やってればみんなこうさ。女好きはいいけどサンジも女性には気をつけた方がいいよ。特に進んで海賊やるような女の人とかね」
「バァカ、レディが相手なら話は別だ。おれは世界中の女性を疑わねぇ。もちろんナミさんもシルクちゃんもォ〜！」
「はいはい」
声を大きくしたサンジをおざなりに回避し、ナミがキリを見る。
事前に話は聞いていた。しかし雰囲気に呑まれたのは彼女も同じ。
あの瞬間、確かに恐怖を感じていた。
「本気で殺すかと思った」
「別にそれでもよかったんだよ？　もうちょっと手こずるかと思ったし、本気で断って揺らがないようなら始末したさ。何人かはね」
「それは、仲間から先にってこと？」
「脅迫と交渉のやり方はみっちり仕込まれてる。絶対にうんと言わせる自信はあったんだ」
ナミがキリを見る目を変える。
この男、そこらに居るような海賊ではない。
前までは少々頭の切れる変人だ、くらいにしか思っていなかったが、今はまるで違った人物のように見えた。柔和な笑顔や立ち振る舞い一つでも油断できない。
今まで見てきた姿さえ嘘の可能性がある。
一体どこからが演技で、どこまでが本心なのだろう。
そう思わずにはいられず、前より彼という人間が分からなくなってしまっていた。
周囲の目が変わり始めていることなど気にせず、キリはルフィへ目を向ける。
すっかり持ってきた生ハムメロンを食べ尽くした彼は頭の後ろで手を組み、何やら脱力している様子。緊張感の欠片もない姿に笑いな

がらまずは謝罪をした。
「悪いねルフィ。ポリシーまで曲げてもらっちゃってさ」
「いいさ。ナミがそうしてぇって言ったし、おまえが仲間のためを考えてるの知ってるからな」
「ありがとう。まぁいずれ役に立つよ」
「ん～、でもやっぱりおれはアーロンのこと好きになれねぇけどな」
「それでいいさ。仲良しこよしでやろうって訳じゃないし」
腕を組んで思い悩むルフィの頭をぽんぽん撫で、苦手なことはしなくていいと告げる。
思い悩むほど頭を使うのは副船長である自分の仕事だと、キリは考えていた。
多少の緊張感を残しながら和やかに話している間、ゾロとシルクは魚人たちの縄を切って解放していった。中には不服を抱いて暴れ出す者も居るかと予想されたが、キリに威圧されたばかり。アーロンが殴り飛ばされた光景も見ている訳で、今更暴れ出す者は居ない。
ゾロが不服そうにしているが、解放された彼らは項垂れて座り込んでいた。
すっかり縄が解かれてしまって、ゲンゾウとノジコは複雑な想いでそれを見ている。
心配するのは魚人たちが再び村を襲わないかということと、ナミの今後について。海賊になったと知っていてルフィが面倒を看ると言うが果たして大丈夫なのか。
心配しているとナミが歩み寄って来た。
「ナミ、おまえ……」
「大丈夫なの？　あいつら、ただで言う事聞くはずないのに」
「心配してくれてありがと。でも大丈夫よ。だって……私も海賊の一員だから」
彼女は笑っていた。迷いなど一切持たず、かつてとは違って心から晴れ晴れと。
これから忌まわしい一味と共に一緒に居ることになってもそんな風に笑っていられる。

二人は言葉を失くし、強くなった彼女を見つめた。
「もしもの時があってもあいつらはルフィが止めてくれるわ。みんなも一緒に戦ってくれるし、私も逃げない。一度乗りかかった船なんだもの。ココヤシ村は私が守る。ルフィたちと一緒にグランドラインまで連れて行くから、もうみんなが怖がる必要なんてない」
「おまえは、また一人で背負い込もうとして……！」
「好きにやってるだけよ、いいでしょ？　私はもう海賊で、海賊ってのは自由なの」
朗らかな笑みを向けられて、ゲンゾウは感情を抑え切れずに俯いてしまう。
自分たちではどうすることもできなかった。
彼女の笑顔を取り戻したのは海賊たちだ。
止める術などなく、資格もない。
そう思ってゲンゾウは声を震わせ、しかし同時に彼女の成長を喜んでもいる。
「すまない……また、おまえにばかり迷惑をかける……！」
「やめてよ。そんなんじゃないの。ただ好きにやってるだけなんだから」
「ねぇナミ。あいつらと一緒に行くんでしょ？」
ノジコが薄く微笑んで尋ねると、ナミは悪戯っぽく、まるで子供の頃のように肩を揺らした。
「もちろん。あいつら私が居なきゃ道に迷って仕方ないの。長い航海になるだろうけど、目的地までしっかり連れってあげなきゃね」
ナミがそう言ったことでノジコの中で心配は消えた。きっと彼女は大丈夫だ。もう二度と感情を偽ることはないだろうし、心の中でだけ助けて欲しいと叫ぶことはない。
助けて欲しければ仲間を呼べばいいのだ。
やっとこの時が来たんだと知って、晴れやかな笑顔で送り出せそうだった。
「よし。それじゃ早速最初の仕事だ。みんな忙しくなるよ」
「ん？　なんかやんのか？」

パンっと手を叩いてキリが場を仕切り、皆の視線が一身に集める。
首をかしげたルフィが問いかければ、無邪気に笑うキリは何やら生き生きしている様子だった。
「まだ決着がついた訳じゃない。とりあえずアーロン一味との戦いは終わったけど、この村を苦しめてたのはそれだけじゃないでしょ」
「そうだっけ？」
「あっ……ひょっとして、海軍？」
縄を切った剣を納めたシルクが聞く。するとキリはそちらを向いて頷いた。
次いでアーロンを見る。
彼は不貞腐れたように動かなかったが気になる何かはあったらしい。
「アーロン、君らは利用してたつもりだろうけど向こうだって同じだ。賄賂をもらえるから黙ってただけで、決して魚人を素晴らしいと思ってた訳じゃない。みんな人間に利用されてたんだよ。どう？殴り返してやりたくなってきたかな？」
「まず真っ先に殴りてぇのはてめぇらだが……フン。奴らを仲間だと思ったことはねぇ」
「なら話は早い。まずは全員怪我の手当てをして、準備の後でいよいよ決行だ」
辺りの顔を全て見回し、キリが上機嫌に告げる。
何を考えているのかずいぶんと楽しそうなのが気になった。
仲間たちは心配も抱える中、何かを考える彼だけが感情のままに笑っていた。

ＡＮＴＩ―ＨＥＲＯ

ココヤシ村を始めとして、コノミ諸島では三日三晩宴が続いた。
自由を勝ち取り、アーロン一味の支配を逃れた人々は笑顔に包まれ、大いに自由を謳歌した。
笑い声が途切れることはなく、喧騒は以前のそれとは全く変化している。
彼らはようやく生きている喜びを思い出したのだ。
海軍の軍艦が島に現れたのは、その宴が落ち着いた頃だった。
理由など決まっている。村人ではなくアーロン一味からの呼び出しを受けたため。
そも、アーロン一味の支配が続いたのはひとえに海軍の協力者が居たためだ。
連絡はいつもと違っている。納められた年貢の一部を渡したいのと、少しトラブルがあった。話したいことがある、と通信した相手が語っている。
何か問題があったのだろうと、船長室の椅子に座るネズミ大佐はひどく仏頂面であった。
「まったくアーロンめ、勝手な都合で呼び出すとはどういう了見だ。なぜ私がわざわざあんな野郎の話を聞きに行かなきゃならん」
ぶつくさ文句を言いつつ金の束を数えている。
受け取った賄賂は数知れず。彼は海兵である前に金に頓着する人間だった。
アーロン一味との関係も金の上に成り立っている物。別段仲が良い訳でもなければ良くなりたい訳でもなく、むしろ毛嫌いしている相手とも言える。
イーストブルーでは珍しい魚人族。なぜあんな奴らが偉そうにしているのか。
協力し始めた頃から常々そう思っており、今でもその想いは変わらない。
今回の呼び出しにしても決して乗り気ではなく、金の受け渡しがあ

ると聞かされていなければきっと来なかっただろう。そんな程度の間柄でしかないと本人でさえ思っている。
ただ面倒で気が乗らない。
そんな航海がようやく終わろうとしており、報告のために海兵が室内に入ってきた。
「ネズミ大佐、到着しました。アーロンパークです」
「フン、ようやくか」
「ただ、少し奇妙なことが……」
「なんだ？」
「建物が、その」
「悪趣味だとでも言うのかね。そんなことは前から知ってる」
苛立った様子でネズミが席を立ち、歩き始める。
言い淀んでいる海兵を押しのけて部屋の外へ出た。
見知った道を歩けば甲板へ辿り着くのもすぐのことで、そこから見慣れた島の形を眺める。
その時に気付いた。以前と同じ景色で、以前はあったはずの建物が消えている。在るはずの場所にアーロンパークが存在していなかった。
わずかに表情が変わり、そちらを見たまま後ろの海兵に問いかける。
「どういうことだ」
「わかりません。ただ崩れて、瓦礫の山になっているとしか……」
「トラブルとはこのことか。アーロンめ、厄介事など持ってくるなよ」
忌々しげに呟いて辺りを見回す。
海には何の姿もない。
こちらも在るべきはずの物が見当たらなかった。
「タコはどうした。いつもは迎えに来るはずだろう」
「それが、行方が知れなくて。電伝虫も通じませんし」
「忌々しい限りだ。もういい、小舟を下ろせ」
「はっ」

「この作業分も料金を要求するとしよう。チチチ、金づるが居ると儲かって仕方ない」
ネズミの指示によって部下の海兵たちが動き出し、海に数隻の小舟が降ろされた。
そこへネズミが乗り込み、他にも約二十名ほどが乗り込む。
船はいつも島から少し離れた場所に停止される。誰かに目撃された時、海兵と海賊が悪巧みをしていると気付かれないためだ。自分たちはあくまで無関係、そう主張しようとしている。
そのため小舟で島へ近付き、波に揺られながらゆっくりとアーロンパークへ入っていった。
ひどい様相である。
雄大に立っていた塔は完全に崩壊し、今そこに在るのはただの瓦礫の山。以前の名残など微塵も感じない。必然的に落ちぶれた物だと思ってしまった。
アーロンは瓦礫の山の目の前に座っていた。かろうじて無事だったらしい白いチェアに腰掛けて、思い悩むように頭を抱えている。どうやらそれなりに参っているらしい。
傍らには人間の女が立っていた。オレンジ色の短髪、ナミである。
他には誰の姿も見えない。部下の魚人たちはどこにもいない様子だった。
「一体何があった。こいつと組んだのは失敗だったかな……」
船上で呟きつつ、小舟は三隻ほど陸地へ近付いていく。
やがてアーロンの前で船が停まり、一人ずつ降りる。
ネズミは背面で手を組んで背筋を伸ばし、項垂れるアーロンを見て笑顔を浮かべた。
「やぁ、アーロン君。ご機嫌如何かね？」
「来たのか……見りゃわかるだろ。気分は最悪だ」
「一体何があった。君のご自慢のアーロンパークが全壊じゃないか」
「クソ忌々しい海賊どもが来やがったのさ。そこまで言えばわかるだろう」

アーロンは体の至る所に包帯を巻いており、治療の跡が窺える。相当の戦いがあったのだろう。人間より優れた身体能力を持つはずの魚人がひどい有様だった。
ネズミは笑い、へらへらしながら言う。
心配などしていない。ただ金で繋がっただけの関係だからだ。
「おいおい、最強のはずの魚人族がずいぶんな姿になったじゃないか。せっかく建てた君の城まで無くなってしまって。金はちゃんと無事なんだろうね？」
「チッ、他人事みてぇに……まずは話だ。金は後にしろ」
「いいや、金が先だ。悪いがいつまでも船を停めている訳にもいかんのでな。受け取った後で金を数えながらゆっくり話を聞いてやることはできる」
「悪いが金はねぇ。こいつを壊した海賊が奪っていきやがったからな」
「何ッ!?」
アーロンが呟いた直後に、ネズミが目を見開いた。
金が無いのならなぜこんな奴と話しているのか。そう思うと同時に他人の物を奪った海賊に腹が立ち、つい数秒前までは他人事だったが、自らの問題だと怒りを滲ませ始めた。
アーロンパークなどどうでもいい。だが金の問題だけは無視できなかった。
「どこのどいつだ、私の金を奪いやがったって奴は！　絶対に逃がさん……！　取り戻してその海賊野郎を牢にぶち込んでやる！」
「おれだよ。おれがやったんだ」
「アァ!?」
声が聞こえてそちらに振り返る。門の向こうからやってきただろう人物が居た。
相手はたった一人。麦わら帽子をかぶった、ルフィだけが一人で立っていた。
まず最初に、こんなガキが、と思った。
アーロン一味の強さは一応とはいえ知っている。海中で呼吸でき

る彼らは海戦において絶対的な力を誇り、たとえ歴戦の戦士を乗せた海軍ですら打ち壊す可能性がある。
その魚人たちを負かしたのが、こんな若造。全身に包帯は巻いているが足取りは軽やか。おそらくアーロンと戦っただろう後でも気分が滅入っている様子は皆無。
信じられないとばかりに目を剥いて驚愕する。
しかし相手が若造だったからと許せる問題ではない。大事な金が取られたのだ。
怒りを露わにしたネズミはルフィに向かって声を荒げた。
「貴様がその海賊か……悪いことは言わん。盗んだ金を返したまえ。あれは私の物だぞ」
「違ぇよ、ココヤシ村のもんだろ。おまえアーロンから金もらってたんだってな」
「チチチチ、だからどうした。金も受け取らねぇでこんな薄汚ぇ魚人どもと付き合うかよ！　いいから黙って返せばいいんだ！　牢屋に放り込まれたいのか！」
「いやだ。返さねぇ。どうしても欲しかったから取り返してみろよ。おれは海賊だぞ」
「チィィ、偉そうにしやがってクソガキが……！　おいアーロン！　てめぇもさっきから何黙ってやがる！　アーロンパークを壊した奴がここに居るんだ、さっさと殺さねぇか！」
ネズミは怒鳴り散らしながらアーロンへと顔を向けた。その瞬間はたと気付く。
俯いていたアーロンの様子が何やらおかしい。
妙に静か過ぎないだろうか。
それから自身の失言を思い出した。
魚人を侮辱する発言。彼が最も嫌う言葉。
気付いたネズミは取り繕うように笑いながら声を落ち着かせる。
「いやぁ、今のは……カッとなってしまってつい心にもないことを」
「どこがよ。思いっきりつい本音が出ちゃったんじゃない」
「黙ってろ女ァ！　なぁアーロン、今のを本音と思ってくれるなよ

？　私と君は良いパートナーさ。二人で組めばイーストブルーの支配だってお手の物に違いない。なぁ？」
アーロンは俯いたまま何も言わない。傍らのナミも厳しい表情だ。
ネズミの表情が変わり、不穏な空気を感じる。
思えばおかしな状況だった。なぜ自身が所有する建物を壊した海賊が居ると知って見逃している。なぜこうもタイミングよく敵が現れ、しかも黙ったままで俯いている。
疑念が生まれ、それが一瞬で膨れ上がった。
そしてようやく理解する。
この男は裏切ったのだ。
協定を組んだ自分を騙し、他の誰かと手を組んで潰そうとしている。
そのことに気付いて顔色が変わり、ぐっと歯を食いしばった。
「そういうことか……アーロン！　てめぇ裏切りやがったな！」
「言っておくが、てめぇの部下になった訳じゃねぇんだ。どうしようがおれの勝手だろう」
「チィ、所詮はクズの集まりだったか……！　おれを騙しやがって！」
「もうてめぇは用済みだ。これ以上そのムカつく面を見る気はねぇなァ」
アーロンもまた立ち上がり、牙を見せ始める。鋭利なそれがきらりと光るように威圧感を感じさせて、巨体は怪我をしているとはいえ威容を失っていなかった。
ネズミは思わずその姿に怯んでしまう。
後ずさって怯えた目を見せ、明らかに弱そうな体勢になってしまっていた。
彼は現在大佐の地位に居るが、日頃の鍛錬を怠ったせいか、それとも元々の素養か、自身が戦闘に参加して部下を引っ張る海兵ではない。アーロンを倒すだけの実力は持っていなかった。
従って彼は頭を働かせる。そちらの方が得意なのだ。
何のために軍艦に乗って来たのか。当然、こういった状況に陥った

時のため。
彼は威嚇するべく、胸を張って沖に浮かぶ自らの軍艦を指差した。
「偉そうなこと言いやがって、おまえたちに何ができる。あれを見ろ！　私は海軍大佐のネズミだぞ！　命令一つで軍艦が砲撃を開始する！　おまえたちなぞ一捻りだ！」
自信を持って意気揚々と告げるものの、三人はなぜか全く反応せず。
得意げになっているネズミは気にせず尚も続けた。
「おまえたち海賊のクズどもとは訳が違う！　私に手を出せば海軍本部、ひいては世界政府への反逆罪となり、誰一人として逃げられん！　それに私が今ここから命令するだけでおまえたちも、娘、おまえが大事にしているココヤシ村だって滅ぼせる！　いいか、何もせずにこのまま――」
ネズミは勝ち誇った笑みで語る。
しかし、語っている最中の出来事だった。
突如爆音が聞こえ、軍艦から火の手が上がったのである。
「――は？」
思わず振り返って呆然とする。軍艦には火が点き、黒々とした煙が天へ昇っていた。
意味が分からずに思考が停止してしまう。
すっかり言葉を失った彼は何もできず、ただ突っ立ったままで爆発した軍艦を眺めていた。
一方、軍艦の内部では当然混乱が巻き起こっている。
突然の爆発。明らかな異変だ。
原因を知るため海兵たちが至る所を走り回り、船内は慌ただしい様相となっている。
「どうした、何があった!?　報告しろォ！」
「報告します！　どうやら火薬庫が爆発したようで、船の後部が大きな損害を受けています！」
「なんだとっ。くっ、なぜそんなことに。理由はわからんのか!?」
「わかりません。誰も近付いていないはずだったんですが……」

「はーい通りまーす。すいません、失礼しますよぉ」
騒がしい船内で動揺する会話の中、明らかに一つ、のんびりした声が通り過ぎた。
話していた二人の海兵がその少年に振り返る。
制服を着ていない。どう見ても海兵ではない誰かが船内に忍び込んでいた。
後姿を確認し、まずくすんだ金髪が目に入ると、彼が何やら大きな鞄を肩から提げているのが見える。そこから丸くて黒い物を取り出し、体の前に持って行くと、導火線に火が点いている。驚きのせいで数秒気付くのに遅れたが、彼が持っているのは爆弾だった。
海兵たちは驚愕した。
すると侵入者はぽいっと自身の後方に爆弾を投げ、二人へ近付いて来たそれにさらに驚愕する。
軽い音を立てて地面に落ち、導火線は火が点いているためどんどん短くなっていって、爆発の瞬間が今まさに目の前まで迫っていた。これで冷静に振舞えるはずがない。
考える前に海兵たちはその場から跳んで逃げ、慌てて地面に伏せた。
「伏せろォ！」
直後、大爆発。
船内からの衝撃で船が揺れ、轟音が船上に居る全ての海兵を驚かせる。しかし投げた当人であるキリは全く驚いた顔をせず、あらかじめ耳栓をしていて、笑顔で次に火を点けていた。
船内は混乱している。現在彼が居る階層には黒煙が充満し、視界も悪い。
気楽に歩くキリはさらに爆弾を投げていくのである。
「え～、爆弾いかがですかー。爆弾いかがですかー」
「お、おい貴様ァ！　そこで止まれ！　今すぐ武器を捨てろ！」
「え？」
先の海兵かはわからないが、後ろから声をかけられ咄嗟に振り向き、声の主を見つける前に持っていた爆弾を投げつける。驚くふりを

してどう見てもわざとだ。
またしても悲鳴が響き渡った。
「な、投げるなァ!? それをすぐに捨てろォ!」
「だから捨てたのに。言ってること滅茶苦茶だなぁ、もう」
宙を飛んだ爆弾は何度か床をバウンドし、再び爆発を起こして轟音を生み出す。
爆風が煙を吹き飛ばすもののまた船内に火が点いて、やはり火災は免れていない。おまけに船の一部を破壊していて、二発も受けたそこはひどい姿になっていた。
嬉しそうに頷くキリは振り返って歩き出す。
どことなく楽しそうな顔で一つ導火線に火を点けては、目についた扉の内側へ爆弾を投げ込み、扉を閉めて、直後の爆発で壁ごと扉が飛んでいく。
そんな光景を、遊ぶように次々生み出していった。
「爆弾いかがですかー。今日は出血大サービスですよー」
彼は敵船への破壊工作を得意としている。たった一人で帆船を破壊するのは特技とさえ言ってもいい。火薬庫の爆破から始まり、事前に用意した爆弾による船内からの攻撃。どちらも経験と知識に基づいており、非常に手慣れている。妙に楽しそうな姿に見えるのはそのせいなのだろう。
鼻歌混じりで悠々と歩き。
混乱する船内で彼は唯一の笑顔を見せており、その様を見た者は死神かと見紛うてしまった。
キリが襲撃の合図を出したことにより、海では新たな動きが始まっていた。
まず最初に、最初から海中で待機していた魚人が動き出す。
船を襲うため待機していたのは幹部のチュウとクロオビの二人だ。彼らは海中に居ながら爆発音を聞いていて、それと同時に動き出す。
人間の指示に従うのは癪だ。だがアーロンが決めた以上言われた通りにやらねば。
「チュッ♡ 仕方ねぇ、やるか」

「フン。人間の命令に従わなければならんとはな」
「おい、間違えるなよ。おれたちはアーロンさんの命令に従うだけだ。チュッ♡」
そう言ってチュウが浮上していき、海面から顔を出した。
目の前の軍艦からは悲鳴と怒号が聞こえており、現在も尚船内が爆発に包まれている。凄まじい様相は外から見ても迫力があった。耳が痛くなりそうなほど轟音も続いている。
見ていたチュウまで恐ろしくなるほどだ。
キリという人間、一味の中でも特に奇妙な人間で容赦がない。注意した方がいいだろう。
考えを打ち消し、チュウは勢いよく海水を吸い込み始める。
腹が膨らむほど水を飲み、背を反らせた後、大量の水を吐き出して攻撃とした。
「水大砲！」
ただの水鉄砲ではなく、巨大な水の塊が撃ち出された。空を飛んだそれは軍艦に向かって一直線に進み、やがてメインマストに直撃する。
爆発音とは違う轟音。
船の中央にある太いマストは一発で折れてしまい、更なる混乱が軍艦を襲った。
「メインマストがッ!?」
「なんだ!?　一体どこから攻撃が……この攻撃はなんなんだ！」
マストを破壊した水が雨のように甲板へ降り注ぎ、走り回る海兵たちが動揺する。
その後もチュウは海水を吐き出して狙撃を続け、船の外板を破壊してまわった。
同じ頃、いまだ海中に居るクロオビは苦い表情のまま、自らの仕事を遂行しようとしていた。現在眺めるのは軍艦の船底である。
船を沈めることは決して難しくない。
特に魚人の彼は水中で呼吸ができて、弱点を突くのも簡単。
船底に接近し、拳を握って、彼は攻撃を繰り出した。

「仕方ない、やるか。この辺りで十分だ……エイッ！」
魚人空手の正拳突きを一発。ただそれだけで船底に大穴が作られる。
船体はぐらりと揺れていた。
クロオビはさらに攻撃を叩き込み、どんどん船の様子が変わり、沈んでいこうと形を変える。
それだけでなく、ネズミを乗せた船が遠ざかった後、見つからないよう岩場に隠れていたメンバーが動き出す。人間が乗れるサイズの大きな蛸壺が海を走り、軍艦へ迫っていた。
蛸壺を引っ張って移動させるのは魚人のはっちゃんで、乗り込んだのがゾロとサンジ。船の破壊ではなく海兵を一人も逃がさないため、船上へ侵入するため動き出したメンバーだった。
瞬く間に変貌していく軍艦の外見を眺め、感心するように頷く。
不思議とわくわくするような、これまで見たことの無い景色であった。
「派手にやってんな。一人で忍び込んだ時は何する気かと思ったが」
「あいつはあいつで妙な奴だなぁ。ペラペラ紙みたいになるとは」
ゾロとサンジは戦闘を前にうずうずしており、一刻も早く参加したいと笑みが語っている。
「おいタコ、急げ。早くしねぇとあいつが全部終わらせちまう」
「ニュ～、これでも全力だ」
はっちゃんが蛸壺を移動させて、やがて彼ら三人も軍艦に到着する。
ひらりと甲板へ乗り込み、三人同時に海兵へ襲い掛かった。
海賊らしい蛮行はあまりに危険で容赦がない。理由のわからない襲撃には全ての海兵たちがただ慌て、応戦するために武器を取ったが誰一人として敵を止めることができなかった。
略奪ではなくただ破壊する行為。それが余計に恐怖心を煽る。
言い換えればそれこそが目的だっただろう。
彼らはただビビらせるために敵を襲っていたのだ。誰一人殺すこ

となく、しかし誰一人として逃がさずに打ち倒し、圧倒的な力で恐怖を植え込む。
彼らの仲間を泣かせた。
たったそれだけの理由で動き、襲撃は数分の間に終わる。
数分経った後に軍艦は完全に轟沈していた。
自らの船が、力が海に沈んでいく様を目の当たりにし、ネズミは面白いほど驚愕していた。表情は以前の見る影もなく、あんぐりと大口を開けて目をひん剥いている。
力の象徴が壊されていく。それも分かり易いほど明確に。
魚人の力を舐めていた。或いは見知らぬ海賊たちにしてやられてしまった。
船を失くした彼らにもはや逃げる手段はない。
全身が硬直して立ち尽くす彼は一言さえ吐き出せなくなって、代わりにナミが声をかける。
「このまま、なんだっけ？」
「はっ!?」
肩をびくつかせてそちらを見れば、棍を肩に担ぐナミの姿。両脇には従えられるようにしてルフィとアーロンが立っていて、その威容はネズミを震え上がらせる。
まだ終わりじゃない。まだこちらには部下が居る。
咄嗟に考えた彼は連れてきた海兵二十名に指示を出し、武器を構えさせた。
「う、動くなァ!?　いいか、まだおれが不利になった訳じゃねぇ。こんなこともあろうかと二十人の部下どもだ！　おまえらたった三人で勝てるはずねぇだろう!?」
動揺しながらそう叫んだ直後、否定するかのように攻撃が来た。
ネズミの真後ろに立っていた五人の顔に小さな弾が当たり、直後爆発に包まれる。全く同時という訳でもないがほとんどタイムラグもなく、五秒とかからず五人に攻撃が当たって、あっさり意識を奪われ倒れた。顔面への爆発にはそれだけの威力がある。
さらに全く同じ瞬間、二十名の内、一番後ろに立っていた五人が突

如吹き荒れた暴風によって体を浮かせられ、他の者は全く風など浴びていないというのに、海へ落とされる。
ネズミは表情まで硬直させて動けなくなった。
残る十名の海兵たちも見るからに動揺して、慌てて攻撃を放った人間を探す。
二人はすぐに見つかった。
アーロンパークの残骸の上、毅然と立つ二人の人間。
狙撃手ウソップとかまいたち人間シルクである。
「ま、まだ仲間が……!?」
「これだけじゃねぇぞ」
ぽつりとアーロンが呟く。彼もネズミへの怒りを露わにしていた。
するとアーロンの言葉に従うかのように、海からバシャンと大きな音が立ち、大声で叫びながら武器を振り上げる魚人海賊団が現れた。
二十名など軽く超える数だった。
先に海へ落ちた海兵はなぜか意識を失って、二人ずつをアオカとクルーラが、残る一人をツウボが肩に担いですでに敗北している。
それを見た瞬間、ネズミは涙を流しながら笑っていた。
何も言うことができず、何も考えることができない。彼は呆然と笑い声を発し続けた。
「あんたには色々言いたいことがあるの。不正は働くわ、村のお金は盗むわ、魚人を調子に乗らせるわで良い事なんて一つもない。でもまぁ、全部許してあげてもいいわよ」
ネズミの顔とは対照的にナミは笑顔を浮かべる。
ただし可憐だと感じるより先に威圧感を感じさせて、恐怖感を与える顔だ。
「時間はあるから、ゆっっっくり話しましょうか」
「ひぃっ!?」
海賊たちに囲まれた状況で、海兵たちが恐怖する。
その後の展開は当然彼らの予想を大きく外れることはなく。
今までも怒りをぶつけるように、男たちの悲鳴が天高くまで響き渡った。

ＡＮＴＩ―ＨＥＲＯ（２）

「もう少し寄ってくれぇ。やっぱり全員は入らねぇぞ」
「じゃあ主要な面子だけでいいからさ。中央がしっかりしてればいいよ」
「おいルフィ、押すなって。おまえはもうちょっとそっちだろ」
「あり？　そうだっけ」
崩壊したアーロンパークでは現在、写真撮影が行われようとしていた。
昨日の内に連絡を取り、島に駆けつけたカメラマンが構図を決め、指示に従う海賊たちがそれぞれ思い思いに並んでいる。そして中央には、ボロボロにされたネズミが座らされていた。
麦わらの一味、総勢七名は構図の中にしっかり入り込み、思い思いのポーズ。
そこには同じくアーロン一味の幹部の姿があって、特にルフィとアーロンはキリの指示もあって隣り合わせに座り、脇をウソップとはっちゃんが固めている。
アーロンを始めとして魚人たちの一部は不服を態度で感じさせるものの、少なくともはっちゃんは柔らかい態度を持つようだ。彼だけは一足先にナミへ謝罪し、頭を下げている。
口が裂けても仲が良くなったとは言えない彼らだが、一枚の写真に写ろうとしている。わざわざ倒したばかりのネズミを連れ、海賊らしさをアピールするように。
カメラマンが手を上げた。
全員の注意がそちらに向けられる。
「は～い撮りまーす。笑って笑って～」
パシャ、と音が鳴って作業が終わった。
撮影はつつがなく終了し、写った一同は安堵してその場を動き始める。
殊更先に動き出したのがキリだった。撮影を終えたばかりのカメラマンへ駆け寄り、妙に親しげな態度で話しかける。

「それじゃ打ち合わせ通りに。ちゃんとした記事書いてよ。事実と違ってたら会社を襲撃しに行くからそのつもりでね。壊せるのは証明してるんだから」
「ああ、任せてくれ。そんなヘマしねぇよ。おれもこれに命賭けてるんでね」
「それなら安心だ。後はよろしく」
カメラを片付けた男は颯爽と去っていく。何やらうきうきした様子だった。
呼び出された割に用事はすぐ終わってしまっている。それなのにいいことでもあったのか。
事情を知るキリは肩をすくませ、笑顔で見送った。
その直後に振り返るのだが、すぐにルフィの姿が見えて首をかしげる。
なぜかもう一人居たカメラマンがルフィに写真を求めており、彼も快く受けているらしい。
「おっさん変な帽子だなぁ。ちょっと触っていいか？」
「ファイア！」
「あっひゃっひゃっひゃっ！　なんだその掛け声、いいなーそれ」
妙な掛け声と共に写真を撮られて笑っている。呆れるほどのどかな光景だった。
苦笑するキリは彼らの下へ近付いていく。
不思議に思う。呼んだのは一人だけだったはずだ。
見知らぬ男が仕事か趣味でカメラをぶら下げているのかさえ彼には判断できない。ただそこまで害のある人間ではないだろうと思って怒ることもしなかった。
「キリも撮ってもらえよ。ファイアって言うんだぞ。かっくいーじゃねぇか」
「別に掛け声はいらないと思うけどね。その写真は何のために？」
「記事を書く時の保険ですよ。あなたもいいですか？」
「ボク？」
「撮ってもらえって。ファイアって言われた方が気分いいんだぞ」

「まぁいいか。どうぞ」
深く考えずに承諾する。
小柄なカメラマンは答えるように小さく頷き、カメラを構えた。
「では……ファイア！」
「あっひゃっひゃっひゃ！」
腹を抱えてルフィが笑う中、キリも微笑でカメラを見て写真を撮られる。
今度こそ撮影は終わったようだ。カメラマンはお礼を言って頭を下げた後、急ぐ様子でその場を去っていく。あちらも仕事熱心なのか、何やら熱意を感じる背中だった。
ただ、一人で済むはずのところを二人も来たのが、やはり不思議な状況だったのである。
とにかく必要な作業は終わった。
振り返った二人はその場の風景を見る。
ネズミは全身傷だらけで他の海兵同様縛られており、もはや口を利く気力もない。気絶しているのかとも思える姿だが一応意識はあるらしい。乾いた笑い声が発せられていた。
彼の行いはこれから明らかにされる。後は海軍に任せておけばいいだろう。
ちょうど海軍内部の不正を暴く船がグランドラインから来ている。彼女に任せておけばいい。きっとこの島へ来てネズミを捕らえ、根掘り葉掘り話を聞き出すはずだ。
ようやく戦いが終わったのだ。
晴れやかな顔になってナミは仲間たちへ振り返ると共に、心から嬉しそうな笑顔を見せる。
「みんな、ありがとう。みんなのおかげでほんっとに助かった」
仲間たちは笑顔で応える。
もう俯いていた頃の表情はない。今なら皆が晴れ晴れとした気分で向き合えた。
調子に乗って、ウソップとサンジが声も大きく答えている。
「いやいやそれほどでもねぇけどなぁ！　そりゃおまえ、おれは幹

部を一人倒した男だけどもよ！　仲間を助けるためなら全力出すのだってそりゃ不思議じゃねぇって話だ！」
「笑顔のナミさんも素敵だァ～！」
「うるせぇ奴らだなこいつら。すぐ調子に乗りやがる」
「まぁまぁ。ふふ、本当によかった。ナミが笑ってくれて」
雰囲気は和やかで、戦いの終わりを感じさせる。
ココヤシ村には平穏が戻り、諸悪の根源を断って、やっと自由を手にしたばかりだ。
これからは村には問題もなく、平和に暮らせることだろう。
ちょうどそんな空気が流れていた時にアーロンが口を開いた。
ネズミは倒した。それはいい。手は組んでいたが前々から気に入らない相手でもあったため、共通の敵という認識もあったから協力した。しかし彼らを認めた訳ではない。
血走る目でルフィを睨みつけ、再び敵意をぶつけ始める。
その時、彼に言葉を返したのはルフィではなく毅然とした態度のナミだった。
「おれはてめぇらの下につくのを認めちゃいねぇ。好き勝手に話を進めやがって。このまま海に出るなんざまっぴらごめんだ」
「あんたまだそんなこと言ってんの？　いい加減理解しなさいよ。あんたは敗者で、私が勝者。いつまでもうじうじ言ってんじゃない！」
「黙れ小娘ッ！　調子に乗りやがってクソガキが！」
「ええそうね、調子にだって乗るわ。私は昔からあんたらが大嫌いだったし、仲間になったつもりもない。私はルフィの航海士！　勝った以上はもうあんたの顔色気にする必要もないのよ！」
「チィ……！」
アーロンは厳しい顔で歯噛みし、彼女を見るのをやめる。
今度こそルフィを睨んで声を放った。
「おい麦わらァ！　てめぇ言ったはずだよな、いつでもかかって来いと！」
「ああ、言ったぞ」

「だったら……今！　ここでおれと勝負しろ！」
叫び声は静かになっていた辺りへ広がり、静寂が強まる。
緊張する者たちは多い。誰にとっても予想だにしていない展開。人間にしても魚人にしても、再戦は必ずあると思いながら怪我が癒えた後ではないかと思っていた。
ルフィもアーロンも全身に包帯を巻いた状態。他と比べて明らかに怪我が多い。
「ま、待ちなさいよ！　なんでそんな話に……！」
「うし、いいぞ。やろう」
「ちょっとルフィ!?」
「下がってろナミ。おれなら大丈夫だ」
守ろうとしたナミを押しのけ、怪我をしないよう下がらせてやり、ルフィが前に立つ。
意外なほどあっさり受け入れられたことでアーロンが笑った。
「てめぇを殺せば全て丸く収まるんだ。ココヤシ村もてめぇらも皆殺しにしてやる！」
「やってみろ。言っとくけどおれは強いぞ」
「フン、弱点ならもうわかってる。いくらゴムでもおれの牙は止められねぇ！」
そう言って突然アーロンが駆け出した。大口を開いて鋭い牙を露わに、素早く接近して噛みつこうとしている。確かにその攻撃ならゴム人間にも通用する。
ただ、ルフィは冷静だ。
迎撃はアーロンが反応できないほどの速度で行われた。
「ゴムゴムのスタンプ！」
「うおっ!?」
素早く伸ばした右足がアーロンの顔面を蹴り、前へ進もうとしていただけに衝撃が強く、無理やり顔の角度を変えられて天を仰いでしまう。痛みだって無視できなかった。
痛みを堪え、慌てて顔の向きを戻せば、気付けばルフィは懐に飛び込んでいる。

捻じった腕を勢いよく引き寄せ、強烈なパンチが螺旋を描きながら腹を打つ。
「ライフル！」
「ぐおぉぉ!?」
「んんっ！」
腹にパンチが叩き込まれた直後、止まらずルフィは彼の顎を蹴り上げた。
顔の向きが再び変わり、痛みを感じながら仰向けで倒れそうになる。そうならないようにと片足で地面を蹴って、なんとか体勢を整えようとするものの。
またしても素早くルフィがその場でジャンプし、視界の中へ現れた。
天へ足を伸ばす姿は前に見ている。理解するが止めようがなく、また強く腹を踏みつけられる。
「斧ッ！」
もはや声すら出ない。
大の字に倒れたアーロンは血反吐を吐き、肉体がダメージを思い出して動けなくなった。
勝敗は明白となる。
ルフィはずれた帽子をかぶり直して、彼を見下ろした。
「終わったな」
「うぅ、くそぉ……まだだ。おれはまだ、こんなもんじゃ……」
「アーロンさぁん、もうやめよう！　あんた本当に死んじまうぞ！」
「またいつでもかかって来い。陸の上なら勝負してやる。おれはカナヅチだから泳げねぇしな」
「ぐぅ、うおおっ、くそぉ……！」
はっちゃんが止めたせいか、それともルフィの言葉を受けたせいか、アーロンは天を仰いで目を閉じる。必死に悔しさを噛み殺して自分の不甲斐無さを思い知った。
認める他ない。負けたのだ。
実力の差があって彼には勝てない。二度目の敗北はそれを自覚さ

せていたらしい。
見ていたキリはふむと頷く。
アーロンの態度は予想していた通り。そう簡単に心を開く訳がないし、仲良くしましょうと言うはずもない。つまりこれは想定の範囲内だ。
それとは別に、気になったのはルフィの動き。
彼が逃げずに戦うのも知っている。気になったのは彼の戦法だった。
「なんかルフィの動き、前より良くなってるような。なんかあったのかな？」
「そりゃ色々あっただろ。てめぇの祖父だが海軍の英雄と殴り合って次が海上レストラン、それに今回があいつだった。島を一つ越える度、あいつも強くなってる」
腕組みするゾロが答えるとキリは納得するように頷いた。
そして視線は次にウソップへ向けられる。
「うん。頼もしい限りだよ。ウソップもすっかり頼もしいしね」
「いやいやいやそんなことはねぇって！　そりゃまぁ幹部を一人倒しちまったけどな！　光るセンスが止められなくなっちゃってるけどな！」
「野郎……！」
ウソップが笑顔で自慢する度、彼に負かされたチュウが顔を赤くして怒りを堪えていた。しかしウソップは気付かずに大声で笑ってキリの背を叩いている。
キリも笑顔でそれを受け入れていた。
周りを見回して一件落着だろうと判断する。
そろそろいい頃合いだ。島を離れても問題はない。
いよいよグランドラインへ挑戦する時が来た。
キリが口火を切って皆の注意を引き、号令を出し始める。
「さぁ、海軍に手を出したから事態が動き出すよ。準備して出航しよう。誰かに見つかる前にできるだけここから離れないとね。英雄が来たら大問題だ」

「そ、それは確かにまずいな。よぉしみんなぁ！　急いで逃げるぞ！」
「なんだよウソップ、ビビってんのか？」
「び、ビビるかァおれが！　おれは、そう、おまえらの心配をだなぁ……！」
一同は歩き出し、一旦村へ戻ってから準備を始めようとする。ただし麦わらの一味はココヤシ村へ向かうが、アーロン一味は村には入れないためすぐに自身の船へ向かっていった。
歩きながらナミはふとルフィに声をかける。
「ねぇルフィ、ちょっと時間もらってもいい？」
「うん？　なんかあんのか？」
「お別れだけ言おうと思って」
「ああ、いいぞ。んじゃ待ってる」
「うん。必ず行くから」
そう言ってナミだけは途中で別れ、一人でどこかへと向かった。
彼女は必ず来る。
仲間の誰も彼女を心配せず、安全な村での単独行動を許し、追うこともしなかった。

＊

海を眺める崖の上。
ベルメールの墓の前に花束を置いて、膝を抱えるナミは微笑んでいた。
前に来た時とは何もかもが違う。我が母を見る目も、心にある穏やかさも、その顔にある薄い笑みも違っている。すでに彼女は自由を手に入れていた。
後方、少し離れてゲンゾウとノジコが立っている。
これから旅立とうというナミを止めはせず、今や送り出す心境になっているらしい。
「ねぇノジコ……ベルメールさんが生きてたら、私が海賊になるの、

止めたかな」
「さぁねぇ。あんた、止められたところで言う事聞くの？」
「べっ。絶対聞かない」
「ふふっ、だったらそれが答えだよ」
舌を出して言い切ったナミは、まるで子供の頃に戻ったようだ。
きっとベルメールさんは止めなかった。ノジコはそう思い、ゲンゾウも同じことを思う。彼女なら案外笑って送り出しそうだから怖いものだと。
ナミは誓うように呟き、ベルメールへ、後ろに居る二人へ声を聞かせる。
「私、泣かないよ。これからずっと笑って生きてやる。あいつらと一緒に」
「それはいいわね。最高の復讐」
「ナミ、アーロンたちが何かすればすぐに私を呼べ。海の果てまでも駆けつけて殺してやる」
「あはは、心配いらないわよ。私にはもう仲間がいるから。アーロンはルフィがなんとかするし、みんなと一緒なら何も心配いらないわ」
晴れやかな笑顔でそう告げて、ナミは遠い海の果てを見つめた。
「ベルメールさん、行ってくるね」
笑顔で簡潔に。
ナミはかつてとは違う心境で出発を告げた。
しばらくは帰って来れない、長い航海になるだろう。しかし寂しさは抱いていない。
ルフィは海賊王になるため世界を一周すると言っていた。必ずまたここに戻ってくる。
しばしの別れになるだけ。
必ずまた会いに来ると自分勝手に決めて、それこそが自由なのだと笑った。

Ｂｅｌｉｅｖｅ

ココヤシ村の近くにある岸辺に集まり、村人は妙にざわついていた。

村の傍にゴーイングメリー号が移動させられていて、荷物を積み込み終え、今は出航の時を待っている最中。しばらく経っても動き出さないのはまだクルーが揃っていないからだ。

ナミが来ていない。ベルメールへ挨拶に行った後しばらく姿を見せておらず、ゲンゾウとノジコが一足先に見送りのため到着しているのに、彼女だけがまだ現れない。

村人たちはどことなく心配そうにもしていて、不安も窺える。

まさか来ないつもりなのか。

いつしかそう語る声も少なくなくて、囁き声での会話も多くなっていた。

「ナミはどうしたんだ？　もう準備は整ってるんだろう」

「すいぶん待ってるぞ。まさか来ない気なんじゃ……」

「まさか。彼らはナミを助けたんだぞ。今更嫌うはずもないだろうし」

「一体ナミはどこへ行ったんだ」

どことなく不穏な空気が漂っているようにも感じられ、村人たちの喧騒は大きくなっていく。

あまりに到着が遅く、ゲンゾウやノジコまで表情を変えていたようだ。

一方、メリー号の上ではさほど緊張感がある様子ではない。

ナミは来ると信じている。そのためか、きっと用事があるのだろうと考えているらしく、取り乱す者は皆無でのんきに会話を続けていた。ただしその中でもウソップだけは動揺しており、ナミが来ないこととは別の心配事を抱えているらしい。

これからの航海にはアーロン一味が同行する。だが彼らが裏切らないとは限らない訳で、むしろいつ海中から襲ってくるかわかった物ではない。航海の途中は特に危険だ。

それを心配する彼は仲間たちを見回すものの大して相手もされず。
気楽に笑うキリに受け流されてばかりだ。
「あいつらほんとに大丈夫かなぁ。魚人ってのは水中で呼吸できるんだろ？　航海してる途中にいきなり襲われたらおれたちにはどうしようもないぞ。やっぱり危険だって」
「そうならないようにプレッシャーかけといたよ。陸でルフィに勝てない限り魚人族が最も優れた種族だとは証明できないって。だから大丈夫じゃないかな」
「んなこと言ったって相手も海賊だぞ。無視して襲ってくる可能性もある訳だしさぁ」
「その時は対処のしようがないね」
「ええっ!?　た、対策は！」
「してない。だって泳げないし」
「それ用の装備は！」
「思い付きもしなかった」
「機雷とかなんとかあるだろ！　この村で手に入るかは知らねぇけど！」
「あぁ、そういうのもいいね。でも今からじゃもう遅いよ」
慌てるウソップの声をさらりと受け流し、キリは肩を揺らして笑っている。周りを見ても特別警戒しているクルーなど居ない。心配しているのはウソップだけだ。
ますます不安が募ってきて、ネガティブな彼はついに挙動不審になってしまっていた。
辺りをきょろきょろ見回していつ来るとも知れない襲撃を警戒し始める。
アーロン一味の船は先に沖へ出て足を止め、今はメリー号から見える位置に停まっていた。
後で合流してしばらくは共に行動する。少なくともグランドラインに入るまでは別行動はないらしい。考えたのはキリで、決定したのはルフィだ。アーロンは聞かされるだけになる。
その船を見つめて、ウソップは足を震わせながら呟いた。

「おいおいほんとに大丈夫なんだろうな。この後どうなっても知らねぇぞ」
「その時はウソップに頼るよ。幹部も倒せるんだからどうにかできるって、絶対」
「な、ななな、舐めんじゃねぇぞキリ！　自慢じゃねぇがおれはすごく弱いんだ！　援護じゃないと活躍できねぇ自信がある！　だからもうサシで戦うのなんて無理だ！」
「そうなの？　せっかく勇ましかったのに」
「何回もあんなことできるかよ！　おれはあくまで語り部なんだ、生きなきゃならねぇんだ！」
妙な自信で怖いと言って、仕方ないとキリが肩をすくめる。
おそらく当面の心配はないだろう。それを言っても落ち着かないのだから怖がるのはどうしようもない。従って話を受け流しただけで解決策らしい物は何も提示されなかった。
その後もウソップは不安を口にするものの軽く聞き流し、キリもまた船の後部へ近付いて並び立つ村人を眺める。その中にはヨサクとジョニーも居た。
彼らとはここでお別れだ。短い間だったが共に航海して世話になった。
傍に居るルフィやサンジ、シルクと共に別れを済ませる。
「兄貴たち、おれたちゃここまでだ。あんた方について行きてぇって気持ちはあるが、おれたちじゃきっと役には立てねぇ。気持ちはあっても足手まといにゃなりたくねぇんだ」
「せめてこのイーストブルーからあんた方の活躍を願ってやす。ただ、忘れないでください。たとえここで別れたとしてもおれたちゃあんた方の一の子分だ」
「ありがとう二人とも。色々お世話になったよ」
「寂しくなるなぁ。でもまた会おう」
「一生会えない訳じゃないよ。またね」
「はいっ！」
笑顔で言うシルクのやさしさには涙が禁じ得ず、二人は声を揃え、

同じ瞬間に泣き出した。
別れは辛い。だが再会する時を思えばどこか楽しみにも思えた。
仲間たちの傍には居なかったが、ゾロもふと彼らに声をかけた。
一味の中では最も長い時間を共に過ごした。しばし会えなくなることもあり、子分だと思っていた訳ではないが、近しい友に対する言葉を送る。
「何をするのかはおまえらの勝手だが、どうせまた会うんだ。鍛錬は怠るなよ。次に会った時は大剣豪だぞ。せめて一太刀くらいは浴びせられるようになっとけ」
「もちろんでさぁ兄貴！」
「たとえどこで何をしようと！　おれたちが剣を捨てることはねぇ！」
「へっ。んなこたぁ知ってるよ。達者でな」
「アニギィィッ！」
「絶対大剣豪になってくれよ！　そんでまた会いましょォォォォ！」
泣きじゃくる彼らに笑みを見せ、彼らしくない屈託のない笑みが印象に残った。
ヨサクとジョニーはおいおい泣く。
仲間たちも別れを惜しみつつ、遠い未来での彼らとの再会を誓った。
村にはまだナミが現れずに船が停まったまま。
心配していなくとも気にはなってサンジが呟く。
「しかしナミさん遅いな。生活のための荷物は積み込んだんだろ。みかん畑の一部も船に移してるし、あとなんか足りねぇもんでもあったか？」
「別にいいさ。急ぐ旅でもねぇし」
「もし何か運ぶならおれが手伝って差し上げてぇって話だよ。シルクちゃん、何か聞いてる？」
「ううん。必要な物は揃ってるはずだけど」
まだナミは現れず、村人たちのざわめきも大きくなる。
その中には不服を唱える声もあった。

ナミが八年間で集めた約一億ベリーにもなる大金。それを村に置いていくのだという話を聞いたからだろう。どんな事情があって集めたであれ、あれはナミが死の物狂いで集めた金だ。村を守った上に金まで恵んでもらうというのは村人たちにとっても至れり尽くせりで申し訳ない。
本人がいつまで経っても現れないため、不服の声は自然とノジコに向けられていた。
「ノジコ、ナミが金を置いていくのは本当なのか？」
「あれはあの子の物だろう。いくらなんでも我々が使うっていうのは――」
「それなら散々あたしらが言った。でも聞かないんだもん。今更止めたって無駄よ、どうせベルメールさんが言ったって置いていくに決まってるんだから」
後ろから声をかけられたことでノジコが振り返り、答えた時だった。ちょうどその時に通りの向こうにナミの姿が見えるようになる。
ノジコは微笑み、みんなに教えてやろうとする。
しかし、ナミはなぜか俯いたまま鋭い声を出し、妙な態度で緊迫した空気を纏っていた。
「船を出して！」
「来た、ナミさんっ」
「でもなんか変だな、あいつ。船出せって」
ナミは走り出した。見送りに来た村人たちと向き合わず、一直線に船を目指す。
奇妙な動きと決断だったが、ルフィはすぐに仲間たちに振り返った。
「船出すぞ。なんか考えてるみてぇだし」
「あいあい船長。みんな急いで船出すよ」
「いいのか、こんな別れ方させちまって」
「別れ方くらいあいつが決めるさ。おれたちには何も言えねぇよ」
村人が驚愕の声を上げ、止めようとする間にメリー号は動き出してしまう。

ナミはやはり止まらなくて、村人たちの間を走り抜けていた。
その姿にゲンゾウは焦りを募らせる。
「あいつ、まさか我々に礼も言わせず、別れも告げさせずに行ってしまうつもりかっ!?」
皆も同じことを思っていただろう。慌てて彼女を止めようとする。だが滑らかな動きと素早いスピードで捕まえられずに、軽やかに傍を通り抜けてしまっていた。
「待ってくれナミ！　おれたちまだ言いたいことがあるんだ！」
「ナッちゃん、止まってくれ！　せめて一言だけでも！」
「こんな寂しい別れ方ないだろ!?」
「ナミィ！」
必死に声をかけ、手を伸ばすが聞き入れられることはなく。
桟橋まで辿り着いて跳んだ。
離れていくナミの背に手が伸ばされ、届く者はおらず、悲嘆に暮れる者がいる。こんな別れ際はあんまりではないか。彼女への愛があるだけに寂しさが胸を打った。
海に落ちる事無く出航したメリー号に着地。直後、なぜかTシャツの裾を持ち上げる。
背を向けたまま、肌を見せるような挙動だった。
訳も分からず見つめていれば、服の中から大量に財布が落ちてくる。少し距離はあっても見間違うはずもない。村人たちが携帯していた物が船上で姿を現したのだ。
「あ、あれ!?　ない！　おれの財布がないぞ！」
「おれもだ！」
「わしのも！」
「私も！」
「おれのも！」
不審に思った村人が自身の体に手を伸ばした。ズボンのポケット、鞄の中、ジャケットの内側、財布を入れていた場所を探し出すものの目当ての物は見つからない。
まさかと思って、船に目を向ける。

ナミは服から手を離し、気付けば指先に紙幣を一枚挟んでいて、ゆっくり振り返った。
いつか見たはずの、心からの笑顔。ただし今は悪戯っぽい様相を持っていて。
してやったりで笑う彼女はようやく皆に別れを告げた。
「みんな元気でね♡」
「やっ……!?」
やられてしまった。そう言えば幼少期の彼女は知らぬ者はないほど悪ガキだった。
村人は声を揃えて大声で叫ぶ。
「やりやがったあのガキャーッ!!!」
心配などして損した。何も変わっていなかったのではないか。
村人は過去そうしたように、またナミへ怒りの声を向ける。親が子を叱るような、怒りを見せるようで愛情が感じられ、いくつもの声がかけられた。それどころか次第に財布を盗まれた怒りすら感じさせず、またいつでも帰って来いと叫ぶ者ばかりになっていく。
それを聞きながら仲間たちは呆れと共に嘆息する。
ずいぶんな別れ際だ。海賊らしくて非常にいい。
「おい、こいつ何も変わってねぇぞ」
「またいつ裏切ることか……」
「ナミさんグーッ」
「だっはっはっは！」
「いい感じだね。最高に盛り上がった」
「あ、あはは。仲が良い証拠だよね。うん、よかった」
村人の温かい声を受けながら遠ざかり、しかしその声はいつまでも届き。
「いつでも帰って来い泥棒ネコめェ！」
「元気でやれよ！」
「風邪ひくんじゃねぇぞコラァ！」
「おまえら感謝してるぞーッ！」
いくつもの声に背を押され、不思議と力が溢れるようで。

「小僧！　色々すまなかった！　……ナミを頼むぞ!!」
「おう！」
深呼吸した後、ナミは皆に向けて、最高の笑顔を見せた。
「じゃあねみんな！　行ってくる!!」
大きく手を振って皆の声に応えながら、メリー号は静かに村を離れていった。
その後になって多くの者が予想外の行動にへたり込む。
まだナミに声をかける人間も居る一方で、先頭に居たノジコが苦笑しながら呟く。
「やられた。わが妹ながらやってくれるわ。まったくあの子は、楽しそうに笑っちゃって……楽しくやれよっ」
少し前に見た表情の陰りなど微塵も感じさせない。ただ幸せそうで楽しそうだった。
彼女もまた妹へ大きく手を振り、その出航を快く見送る。
ゲンゾウも同じく呆れながら座り込んでいた。
不思議と昔を思い出す。
あの頃も今のようにナミを叱ってばかりいた。それも愛情があって彼女のためを想えばこそだが、しばらくあの子を叱りつけるようなことも無くなっていたと思い出す。
今やあの子を叱るのは自分くらいのもの。次に会った時、また叱ってやらねばと密かに決めた。
「まったく、悪ガキぶりは変わらずか……これでは先が思いやられるが」
「ほれ、ゲンゾウ」
「ん？」
「おまえまだこれを見ておらんかったじゃろ」
隣に座っていたナコーが小さな紙切れをゲンゾウへ渡す。
それには見たことも無いマークが記されていた。
あいにく覚えはない。不思議そうに首をかしげているとナコーが説明を始める。
「アーロンのマークを消して、新しい刺青を入れていきよった。あ

の子が考えた物じゃよ」
「ほう……一体何のマークだ？」
「わからんか？　みかんと、風車だと」
呆気に取られ、直後には微笑む。
ゲンゾウはその紙を大事そうに持ち、遠ざかっていくメリー号に目を向けた。
「あれ？　そういえばゲンさん、風車どうしたの？　落としちゃった？」
「フフッ、いや。もう必要あるまい」
彼の帽子からは風を受けて回る風車が消えている。
今はもう、ベルメールの墓の前で風を受け、共にメリー号を見送っている。
元々は赤ん坊だったナミに気に入られたい一心で身に着けた物だった。顔が怖いせいか懐いてくれず、笑顔を見ようと近付けば泣かれてばかりで、そこで思いついたのが帽子に風車を挿す方法。周囲の者には呆れられたが赤ん坊だったナミだけは笑ってくれた。
今はもう必要ない。そんな物が無くても彼女は心から笑える。
きっとその笑顔を失うことは無いのだろう。今、彼女の傍には心から信頼する仲間が居た。
彼らもまた晴れ晴れとした気持ちで船を見送って、小さな海賊船は海の果てを目指す。

＊

「急げ急げっ」
「合流はもうすぐなんだからね。あんたたち急ぎなさいよ」
「あ～いナミさんっ！　おらマリモ、さっさと運べ。ナミさんとシルクちゃんを働かせるんじゃねぇよ。ほんっとにてめぇは気の利かねぇ」
「今やってんだろうが！　いちいちうるせぇぞグル眉！」
「二人ともケンカしないの。それと、キリはサボらない」

「サボってはないよ。ほら、傀儡で手伝ってるし」
「いやぁ～キリの能力は便利ですなぁ。おれもそういうの欲しいなー」
アーロン一味との合流を前に、ゴーイングメリー号の甲板は騒がしかった。
七人全員で協力してテーブルや椅子を運び、酒樽を運んで、サンジとゾロはキッチンを行ったり来たりして皿に乗せられた料理を運んでいる。
どたどたと慌ただしく、それでいて楽しそうな光景。
何かの準備を行っているようだった。
決して善意で話を持ち掛けた訳ではなくて、ナミにとっては因縁があり、生涯かかっても許せないだろう大敵。それでもこれからは互いに利用し合い、この先の海を航海しなければならない。
言わばこれは決意の一つで、海賊として生きていく覚悟の証明。
言い出したのはナミだ。最も彼らに遺恨がある彼女の提案で行動が始まっていた。
アーロン一味の船にメリー号が近付く。
それに気付いて彼らの船も動き始め、襲撃はなく、肩を並べて進み始めた。
その後でルフィが隣を走る船へ声をかけ、アーロンの名を大声で呼んだ。
「おーいアーロン！　おまえらも早く準備しろ！　ジョッキと酒樽持って来い！」
「ニュ？　準備？　アーロンさん、何か言ってるぜ」
「宴だァ！　急げ急げェ！」
拳を突き上げて楽しそうにルフィが言い、腕を組んで動かないアーロンは忌々しそうにしていた。命令を聞く気はない、と態度と表情が告げている。
そうだろうとは想像していた。
仕方なくはっちゃんが周囲の仲間へ声をかけ、準備を始めようとする。

「おまえら聞いたか？　宴やるんだってよ、準備するぞ」
「おいハチ！　てめぇ人間どもの命令なんぞ聞くつもりか！」
「でもよアーロンさん、ありゃ命令じゃねぇよ。おれたちを許して仲良くしようって言ってくれてんだ。いつまでも意地張ってねぇでさ――」
「誰が意地なんぞ張ってやがる！　おれァ認めねぇぞ、あんな奴ら……！　もういい、騒ぎてぇ奴は勝手にやってろ！」
そう言ってアーロンは船室へ消えてしまった。
残った者たちはどうしていいかわからないという顔をしており、まずい空気だと感じたはっちゃんがやはり指示して、この空気を変えるためにも酒を飲もうと提案する。
「ニュ～、酒を酌み交わせば少しは考えが変わるかもしれねぇ。アーロンさんには申し訳ねぇけど試さないのはだめだ。みんな、こっちも準備しようぜ」
はっちゃんが言ったことで、彼の人柄か、渋々動き出す者は多い。
彼らもまた与えられた酒樽を甲板へ運び出し、ジョッキを手にして中身を注いだ。
二隻の船は前へ進み続けながら準備をする。
そう時間もかけず、やがて全ての準備が整い、いよいよという時が来た。
隣同士に船が並んで、アーロン一味の船には二つの旗。鮫を模した自身のそれと、麦わら帽子をかぶるドクロ。肩を並べる理由はある。
船のサイズは違ってメリー号の方が小さい。
ただ乗組員が欄干へ寄っているためよく顔が見えた。麦わらの一味には笑顔があり、アーロン一味には戸惑いと迷いが表れている。
いよいよ宴を始めようという瞬間が来る。
ウソップが危なげなく欄干へ飛び乗り、口上を始めた。
その隣にはルフィが並んで、最も大事な瞬間を受け取るべく、わくわくしている。
「え～、コホン。それでは、麦わらの一味に改めて我らが航海士ナミが加わったことと、色々複雑な事情はございますが、決して雪解けと

いうことでもありませんが、アーロン一味が傘下に入ったことを祝しまして、ささやかとはいえ、我々だけの宴を始めたいと思います」
歌うように朗々とウソップが語り、ルフィに手を差し出して続きを促す。
「それではルフィ船長、ご挨拶を」
「おし」
ルフィは右手にジョッキを持って話し出した。
まだ仲間とも言えない関係の魚人たちをぐるりと見回し、細かいことは忘れる。
「おまえら、色々あったしおれはまだ好きになれねぇけど、海賊の宴に好き嫌いはなしだ。今は人間も魚人も関係なくメシ食って酒飲んでとにかく騒げ！」
その一言を聞いて魚人たちは驚いた。
なぜか彼らは予想外の言葉を聞いたとばかりに表情を変え、思わず敵意を消してしまう者も少なからず存在しており、時を忘れてじっとルフィを見つめる。
ルフィは我慢できないといった笑顔で体を縮め、飛び出すように叫んだ。
「細けぇことは無視して今は宴だ！　かんぱーいっ!!」
続いて麦わらの一味も揃って叫び、互いにジョッキをぶつける。遅れて数秒、慌てて魚人たちもジョッキをぶつけて、傾けて中身を飲み始めた。
それからはすぐに大騒ぎである。
ルフィやキリやウソップは彼らの船に乗り込んでジョッキをぶつけて回り、何度となく乾杯して戸惑っている彼らをその気にさせようと促した。酒の場とあってはそれを拒む訳にもいかず、魚人たちも戸惑いつつジョッキを合わせ、徐々に空気が変わってくる様子。
酒を手にして細かいことなど言っていられない。
いつしかそう考えるようになったらしく、彼らも次第に大騒ぎに参加していった。
そうなれば壁が無くなるのはすぐのこと。

共に酒を飲み、サンジの料理に舌鼓を打ち、特に意味がある訳でもないが気分が良くなって大笑いすれば、それだけで海賊の仲間入り。気まずい空気など忘れてしまった。
今は細かいことなどどうでもいい。
ただ食って飲んで騒いで、海賊らしく振舞うのが自分たちの海賊らしさだ。
二隻の船は大きな笑い声がいくつも重なり、後先を考えない笑顔に包まれる。
ナミもまた、その中で心から笑っていた。
ルフィに手を引かれ、シルクのやさしさに癒され、キリの頭脳に感謝し、ゾロの覚悟で守られ、ウソップの明るさに元気付けられ、サンジのいやらしさで空気が和んだ。
彼らと一緒に居れば魚人だって怖くない。
今日からは仲間が居るからアーロンの前でだって笑えるのだ。
鬱屈とした感情など笑い飛ばしてやればいい。彼らの生き様がそれを物語っている。
人間と魚人。違う種族だが同じ釜の飯を食ったら大した違いなどない。どちらも世界に生きる一匹の生物で、どこまで続くかわからない大海原に比べれば非常に小さな物だ。
彼らはただ笑い、今この時を大いに楽しんだ。
海賊たちだけで行う宴は、晴れた空の下、高らかに声を響かせたのである。
最初の一歩は今ここから。
彼らはやっとグランドラインへ挑戦するだけの戦力を手に入れ、海を進んだ。
本当の冒険が始まるのはきっとここからなのである。

幕間2
断章　動き出す海軍

1

海軍本部。
それはグランドラインにあるマリンフォードという島に存在していた。
和を基調とした一室に勢揃いしたのは揃いも揃って海軍の実力者。元帥を始めとしてその下には大将、中将、少将が並び、海軍トップの者たちが会議に参加している。
皆が見える位置に立って説明するのはブランニュー少佐。
彼はサングラス越しに並み居る英雄たちを眺め、朗々と語っている。
今この場で報告すべきは、つい最近イーストブルーで起こった事件についてだ。
「イーストブルーに赴いていた監査役から報告が届いています。すでに皆さんもご存じの通り、先日の新聞に載った一面、〝麦わらの一味〟について調査していたらしく、イーストブルーの支部を監査する傍ら情報を集めていたようです。そちらをご報告しましょう」
報告のため壁際に置かれた黒板に張られているのは数枚の手配書。
それらに目をやり、ブランニューは細かに説明していく。
「まずこのルフィという少年。一味の船長を務めるようで、アベレージ３００万ベリーのイーストブルーにおける大物、１０００万を超える海賊を次々撃破しています。〝獅子閃光〟エルドラゴ、１２００万ベリー。道化のバギー、１５００万ベリー。首領クリーク、１７００万ベリー。そして現在のイーストブルー最高額、２０００万ベリーのノコギリのアーロン。これらの海賊を単独で、しかも短期間の内に打ち負かしています」
新たに作られた手配書、モンキー・Ｄ・ルフィは誰にも知られていない海賊の名。

顔はあどけなさを残して、その名にはどうしても聞き覚えがあるものの、まだ若いのに凄まじい快進撃と言える。特に名のある海賊を次々倒した事実は無視できる物ではなかった。
もしこれが本当ならば厄介な芽が出てきたことになる。
続けてブランニューは別の手配書を指し示す。
「彼をサポートした人物として名を上げられているのがこちらの副船長、〝紙使い〟キリ。すでに能力者であることは確認されており、紙を使うパラミシアであると。彼は頭脳労働に長けて船長ルフィを導き、さらに自身は海軍の軍艦を破壊することを得意としています。先にあった監査船の破損、第８支部艦隊の全滅、第１６支部の軍艦を破壊し、大佐を捕まえた事件。記者を呼んで記事を書かせたのも彼の指示によるものだと報告されています」
どちらも船出したばかりとは思えないほど大胆な行動を取っている。
海賊を倒す船長に、海軍の軍艦を壊す副船長。
むっつりと黙り込む将校たちは二枚の手配書に厳しい視線を向けていた。
「さらにそれだけでなく、海軍内部の不正を堂々暴き、新聞記者に記事を書かせるという所業。これにより我々海軍の信用に少なからず影響が出たことでしょう。加えて、新聞の写真をご覧頂ければわかる通り、彼らはノコギリのアーロンと共に写っています。情報によれば彼らはアーロンの一味を傘下に加え、麦わらのマークを掲げさせているらしく」
ううむと唸る声が聞こえた。頭を抱える人物が居る。
海軍元帥、つまり海軍で最も高い地位に就く人物、仏のセンゴクであった。
「まだ若いですがこれだけ話題性に長けた海賊を無視することはできません。すでに新聞によって先んじて世界中に存在が知れ渡っています。そこで、麦わらのルフィに３０００万ベリー、紙使いキリに２０００万ベリーの懸賞金をかけると共に、ノコギリのアーロンを３０００万ベリーに引き上げます。初頭手配で３０００万は世界的に

見ても異例の破格ですが、これでも決して低くないと思っています。こういう若い芽を早めに摘んで、ゆくゆくの拡大を防がねば」
手配書を叩く音が聞こえた時、センゴクは俯いて、何やら苦悩する表情となっていた。
頭の中には古い付き合いになる友の言葉が残っている。孫が海賊になった。そいつを連れ戻すために戻るのが遅れる、そう言ってまだ帰ってきていない。
重々しく溜息をつく。
やはり彼はトラブルメーカー。よくも厄介な問題ばかり生み出せるものだ。
（エースの件といい、今回の孫といい、ガープの身内はどいつもこいつも話題性に欠かん。奴め、おれに黙って鍛えていたな。でなければここまで急成長を遂げるはずがない）
嫌な予感がする。この感覚は前にもあったと思い出していた。
あれは確か、友が世話をしていた子供が海に出て、海賊として名を上げ始めた頃のこと。瞬く間に世界中の海に名前を売り、七武海への勧誘を蹴って、今となってはその名を知らぬ者が居ないほどの大物に成り上がった稀代のルーキー。
そして今や誰も手を出せない皇帝の息子となっている青年が今もグランドラインに存在する。
彼が急成長を遂げていた時期、同じような胸騒ぎがした。
嫌な予感がして仕方ない。
まるでノイローゼにでもなりそうで、センゴクは再び低く唸る。
（ガープの血縁か。何事もなければいいが……それにガープの孫を補佐する男は誰だ。新聞を使って海軍の名を落とし、自分たちの名を売るとは考える。すでに世界中に名前が知れたはず。あれも見逃していいものではなさそうだ）
頭が痛くなってくる。
そんなセンゴクの様子にブランニューが思わず声をかけ、会議が一時中断した。
「センゴク元帥？　どうかなさいましたか」

「いや、なんでもない。続けてくれ」
「はっ。彼らはイーストブルーで名を上げた者たちですが、ほぼ同じ時期に他の海でも急速に名を上げている海賊たちが居ます。続いては彼らについての報告を――」
会議に戻ってブランニューが次の報告を始める。名を上げる海賊は他にも居るようだ。
センゴクはその間、じっと一枚の手配書を見つめていた。
（あの髪の色、気になる……だが、まさかな）
嫌な予感がするのは果たして、友の孫が海賊になったからか。それ以外の要因もあるのか。
今度はバレないよう、センゴクは苦労を感じて溜息をつく。

2

先日配られた新聞を読み、今朝出されたばかりの手配書を眺める。どちらも話題性には事欠かず、巷はすっかり注目して話題に上がることも少なくない。
ここの所イーストブルーでは麦わらのルフィの話で持ちきりだった。
初頭手配から３０００万の懸賞金をかけられ、若くして傘下の海賊団を持ち、しかもそれがイーストブルー最高額だと語られていたノコギリのアーロン。
これほど面白い話はそう見つからない。
ただし当然、それを面白いと思わない人間も居る。
とある海軍支部。
病室でベッドの上に居るボガードの傍ら、ガープは厳しい表情になっていた。
「う～む……」
「これではっきりしたでしょう。我々との交戦は漏れていないようですが、海軍に手を出し、海賊として名を上げようとしたのは明白。すでに手配書も出ました。彼を連れ戻して海兵にするのは、とてもで

はありませんが不可能です。特にセンゴク元帥は何を言うか」
「おのれルフィめ、なぜそこまで嫌がる。あの頑固さは一体誰に似たんじゃ」
「あなたですよ。私にはそれ以外考えられません」
胸に腕を突っ込まれ、風穴を開けられたはずのボガードはすでに平気な顔で話している。どう考えても再起不能な傷だったはずだが、回復は着実に進んでいた。
とんでもない回復力である。今や自分の足で歩くことさえ問題ではない。
彼はベッドに座り、服だけは怪我人らしく身軽な物に替えているが帽子は目深にかぶったまま、納得いかない様子で唸るガープに厳しい視線を向けていた。
「海軍第１６支部の軍艦の破壊に、ネズミ大佐を捕まえて傷だらけにした挙句、彼が海賊と繋がっていたことを大々的に報じさせたんです。これは海軍への宣戦布告と取っていい。事実彼らは我々の船の旗を焼いた訳ですし、これが知れれば元帥だけでなくその上も黙っていませんよ」
「むぅ、流石に説得は難しいか。わしの孫だからって言ってもダメか？」
「ダメです。通用しません」
「くぅぅ、やはり憎きは赤髪。奴が誑かしたせいで……！」
「本部に戻りましょう。これ以上はどうしようもありません」
ボガードが進言してやっと納得したらしい。
新聞を置いて肩を落としたガープはぽつりと呟いた。
「仕方ないのう……手配書が出てしまってはどうしようもできん。あれもいっぱしの海賊か」
「ええ、その通りです。心配する気持ちはわかりますが、あとは祈るしかできません」
「立派な海兵になっていれば、落とさずに済んだ命もあるというのに」
寂しげに呟く声を聞き、ボガードはわずかに俯く。

理解はしている。彼はただ心から孫を心配しているだけだ。先に海へ出た兄が爆発的なスピードで名を上げていき、今やもう戻れなくなった。もしも世界に真実が知れてしまった時、世界はきっと彼を許さない。それを恐れているに違いない。
弱気なガープの姿を見て、同情しないほど短い付き合いではなかった。
せめて血の繋がった孫だけは。そう思っていたことだろう。
しかし理想は現実とはならなかった。もう起こってしまった以上、今からでは手立てがない。
諦めるしかないだろう。彼とはすでに道を違えた。
しんみりした空気になって少し言葉が止まる。
ちょうどそんな空気を破るように扉がノックされ、失礼しますの一声と共に扉が開けられた。
現れたのは同じ部隊のコビーとヘルメッポだ。
彼らも怪我をしていたがすっかり治って、しかしガープとの特訓でまた別の怪我を負っている。包帯や絆創膏は至る所にあってひどい外見だった。
「失礼します。ガープ中将、何か用があると聞きました」
「おぉ来たか。二人ともこれ見ろ、わしの孫。初頭手配で３０００万ベリーになりおった。凄いじゃろ？　流石我が孫、やりおるわい！」
「え――？」
「ガープ中将、あなた落ち込んでいたのではないんですか」
妙に明るく元気な声が聞こえてきたと思えば、彼ら二人に振り返ったガープは笑顔で上機嫌に言っていたようだ。落ち込むどころか自慢するような声色に聞こえる。
ボガードは呆れて叱りつける声を出すも、ガープは意に介さず。
手配書を見せられた二人は驚愕し、次に慌て出すとその手配書を受け取って見始めた。
「うえぇぇえっ!?　ル、ルフィさんが賞金首に!?　しかも３０００万!?」

「おいマジかよっ、イーストブルーは３００万が平均だぞ！　ほらみろ、やっぱりあの新聞がそうなんだって！　しかしいきなりそんな高額か!?」
「ぶわっはっは！　流石我が孫、よくやった！」
「中将、あなたという人は……」
コビーとヘルメッポは手配書を眺め、興奮した面持ちで声を大きくする。
その様子にガープは胸を張ってどこか誇らしげだった。
従ってボガードは恨めしい声で呟いて、海賊を褒める海兵に溜息をついてしまう。
病室が少し騒がしくなった頃。
再びノックする音が聞こえ、扉が開いて別の人間が入って来た。
短髪の女性である。メガネをかけて刀を持っていた。
彼女を見つけるや否や、ガープは二人から手配書を受け取り、見せながら嬉しそうに教える。その仕草に再びボガードの声が厳しくなるも、まるで聞こうとしていない。
「失礼します。あの――」
「おぉ曹長。確かたしぎという名前じゃったな。これ見てくれ、わしの孫。初頭手配で３０００万ベリー。どうじゃ、中々のもんじゃろ？」
「は、はい？　ガープ中将のお孫さんが、海賊……？」
「君、気にしないように。中将、それはほいほい教えていいものではありません」
「なんじゃい、事実じゃろ。むしろ隠すほどのことか」
「隠すほどのことです。海兵の身内が海賊だなんて、あなたじゃなければ大問題です。ただでさえモーガンを逃がしてしまったのに、英雄と呼ばれていなければ軍法会議ものですよ」
「ぶわっはっはっは！　むしろわしは軍法会議にかけられるつもりで動いとるわい。いつまで過去に拘っとるんじゃ。わしを裁けもせん海軍ではあまりに頼りない。とっとと捕まえるでも追放するでもできんようではいつまで経っても新しい力が育たんぞ。なぁボガー

ド」
「やれやれ……」
なんだか知らないが盛り上がっているらしく、眼鏡の女性はぽかんと立ち尽くす。
しかし用件を思い出し、慌ててガープへ話しかけた。
会うのは初めて。海軍の英雄を前に緊張する気持ちがある。
ただ予想以上に柔らかい態度で、部下に気を使わせない人格はむしろ尊敬に値するものだと思っていた。それもボガードに言わせれば遠くから見ているから、と語られるのであるが。
「あの、ガープ中将。本部から通信が入っています」
「え～？　どうせセンゴクの奴じゃろ。面倒じゃな、すぐ帰るから安心しろと言っといてくれ」
「そ、そういう訳には。必ず応答させろと言われていますし」
「ちっ、バレとるか」
「早く行ってください。明日、出航しますと」
「おまえは大丈夫か？」
「ええ、歩くくらいはできます。それでも流石に今回は深手を負いましたが……」
「仕方ないのう。んじゃちょっくらしゃべってくるか」
ガープは女性に連れられて病室を出ていき、驚くコビーとヘルメッポが残される。
あまりにマイペースな姿には振り回されてばかり。彼ら二人も思い知っているところだ。
これを長年経験しているボガードは頭を抱え、さらに深く帽子をかぶってしまった。

3

広げた新聞の一面を目にして、ふふふと含むような笑い声。
ひどく上機嫌だったウェンディに対し、副官は小さく嘆息した。
決して喜んでいい記事ではないだろうに。それを喜んでしまう彼

女は厄介な人物だった。
「やるわね、あの子たち。してやられちゃった」
「それを喜ぶのはどうかと思います」
「喜んでないわよ。これでもショック受けてるんだから」
「とてもそうは見えませんが」
「ふふっ。わざわざ自分から記者を呼んで書かせるなんて。そりゃ名前も売れる訳だわ。考えついたとしてもよく実行したものよね」
「やはり喜んでいるように見えます」
ここ最近でも一番にこにこしている。
近くで見ているからこそ理解できるため、副官は再び溜息を抑えられなかった。
「ここのところ目に余りますよ。彼に執着していることに加えて、つい先日はあなたの家族がガープ中将の船を大破させたようですし。どれだけご迷惑をおかけしたか」
「ガープ中将だって似たような物よ。自分の孫のために走り回ってたんだし」
「それにしたってボガード少将を蹴り飛ばしたのは目を瞑れません。彼は味方です」
「だってシャオは私の言うことも聞いてくれないんだもん。おじいちゃんが躾したんだから責任の取り様だってないわ。あの子に直接言ってくれないかしら。もしくはおじいちゃんに」
「あなたの家族でしょう」
「そうだけど、言うことは聞かないし」
「ハァ……まったくもう。なぜ海軍にはこうも問題児が居ますか」
頭を抱えてしまう副官に目をやり、新聞をテーブルに置いた彼女は微笑む。
「これくらいならまだマシよ、不正を働く海兵に比べればね。ねぇ大佐殿？」
彼女が目線を向けた先、テーブルの向こう側に顔面蒼白になったネズミが座らされている。
本部の監査役に目を付けられた以上、もう言い逃れはできない。

もう終わりだ。
気付いた時には自分で判断していたらしく、ガタガタ震える彼はぐうの音も出なかった様子。
「今まで散々甘い汁を吸ってそのツケが回ってきたわね。これだけ大々的に報道されちゃったんじゃもう元通りにはならないわ。あなたも下手打ったものね」
「わ、私は、その……」
「と言っても前々から報告は受けていたから、いずれは私たちが調べるはずだった。先を越されちゃったわね……なんだか手柄も彼らの物みたいだもん」
「みたい、ではなく事実そうなんです、大佐。あなたが寄り道するからですよ」
「む、今日は妙に厳しいわね。怒ってる？」
「当たり前です」
目の前では和やかに話されるものの、ネズミにとっては生きた心地がしない。
破滅だ。その言葉ばかりが頭に浮かぶ。
実際、やさしく微笑むウェンディはそのつもりで眼前に座っていた。
「まぁとにかく、言い訳なら全部聞いてあげるわ。こっちはもう調べもついてるし、村人の声も集め終わったところだから。当然嘘をつけばバレるからよぉく考えてしゃべってみて」
口元は笑っているが目は鋭い眼光を持っている。
これが彼女を監査役たらしめる証明。若くして今の地位に就いているのは決してコネではない。それは彼女自身の過去の功績が何よりも物語っていた。
海軍内部で不正を働き、彼女に、或いは彼女の一族に隠し通せた試しはない。
ウェンディは楽しげに呟いていた。
「ま、どうせ逃がす気はないけど。お姉さんがしっかり搾り取ってあげるわ」

またしても顔色を真っ青にして、精神の限界か、ネズミはがくりと気絶してしまった。

断章　蘇る者たち

イーストブルー、とある港町。
無料でばら撒かれていた新聞を読んで、バギーは忌々しげに歯噛みしていた。
まぐれか偶然かたまたまとはいえ、自分を破った海賊がとんでもないことをしでかしている。新聞を使って海軍の不正を暴き、自分たちは海賊だぞと大きく名を売ったのだ。
まるで宣戦布告。こんな事件を引き起こす奴も珍しい。
明らかに名を売るための行動で、目立ちたがり屋の海賊など世界中どこにでも居るが、彼らのこれはどう考えても海軍に狙われ易くなる一件。安全を求めるならまずやるはずがない。
新聞を使ったことで世界中に彼らの顔と名前が知れ渡っただろう。
悔しい反面、羨ましいと思う気持ちもあって、感情のままに新聞を破り捨てた。
港で木製の椅子に座り、テーブルにつく彼の姿は町民たちも目撃しているものの、さほど怖がる様子でもなくおかしな人間をちらりと見ただけだった。
「チクショー！　おれの居ぬ間にドハデなことしやがって、麦わらめェ！」
ビリビリに破かれた新聞が風に舞って飛んでいく。
肩で息をしていたバギーだがすぐに落ち着かせ、表情を変えるとにやりと笑った。
「だがおれが予想していた通りになったな。やはり麦わらは大きく名を上げてきた。こいつを利用しねぇ手はねぇ。おまえの名が大きくなればなるほど、それを踏み台にした時おれ様の名が世界中に轟き、バギー勢力が拡大されるのだ！　ギャーッハッハッハ！」
辺りに人の姿はなく、一人で大笑いしているバギーは些かおかしな姿に見える。
しかしさほど時間も置かず、彼の下に数名の人間がやってきた。
港には停められたばかりの帆船が数隻。

続々とどこかで見た顔ぶれが降りてきている。
「船長、まずこいつらです」
「おぉ来たか。よぉし、話を聞こう」
モージが連れてきたのは武器を持たない細身の男、キャプテン・クロである。
かつて海賊として処刑されたはずの人間だが、その処刑は偽装だったらしく、昔と変わらぬ姿でそこに現れた。眼差しは厳しく、執事が身に着ける服を纏っている。
報告は聞いていた。
バギーは頼もしいと感じて快く迎え入れる。
「まぁ座ってくれ。我が連合に参加する動機を聞かせてくれるか？」
「フン。貴様らなんぞ信用しちゃいないが、ある男のせいで全てを失った。計画も台無しだ。もう行く当てもないから海賊に戻るしかなかったが、それなら奴らを始末しておきたい」
「結構。強力な力がおまえに与えられるぞ。ここにサインを」
テーブルに置かれた羊皮紙を指し示し、分かり易くペンが置かれている。
クロはそこに自らの名前を書き、署名した。
バギーは笑顔で頷き、それを見届ける。
「よぉし、それじゃもうしばらく待ってもらおう。他にも戦力が待ってるんでな。次」
クロが席を立ち、代わりにカバジが連れてきた人物がバギーの前に座る。
獅子のような鬣と浅黒い肌を持つ巨体。
黄金の鎧を失ったエルドラゴである。
「参加の理由を聞こうか。なぜ麦わらに恨みを持つ」
「奴はわしの黄金を奪って逃げた。あれはわしの物だった！　奴が邪魔しなければ莫大な黄金はわしの手に入るはずだったんだ！」
「なるほど。その気持ちは痛いほどわかる。おれ様も同じさ」
「だから奴を殺してわしの宝を取り戻す！　正義はわしにこそある

ぞ！」
「よぉし、十分な理由だ。ここにサインを。おまえも思う存分大暴れできるぞ」
エルドラゴもまた羊皮紙に署名する。
席を立ち、続いて別の人間に入れ替わって席に座る。
次にやってきたのはバギーの眉をひそめさせる外見だった。
囚人服を着て、右腕には大きな斧。噂に聞いた人物が目の前に現れた。
ほぅと頷き、その顔を見て、斧手のモーガンには些か驚きの視線を向ける。
「こりゃ意外な客人だぜ……まさか斧手のモーガンか？」
「麦わらに負けて全てを失った。地位も、名誉も、金も力も。おれには何も残っちゃいねぇ。だから奴を殺して全てを取り戻す。そのためなら海賊になってもいい」
「ほほう、こりゃ面白れぇ。ならサインを。おまえも連れてってやるぞ、歓迎するぜ」
左手でペンを持って署名し、モーガンは幽鬼のような佇まいでふらりと離れていった。
想像以上の人物まで紛れている。元海軍も海賊に身を落とすほど追い詰められたか。
次の人間が席について向き合う。
これもまた意外。懸賞金はバギーより上。
海賊艦隊の首領だった、今は鎧さえ纏わないクリークが厳めしい顔で座っている。
「理由を聞こうか。麦わらとは何があった？」
「思い出したくもねぇ……奴をぶち殺す。それだけだ。海賊王はおれにこそ相応しい。色々あって戦力が減っちまったんで、おまえらを利用してやろうってだけの話さ」
「ふむ、おまえは十五隻ばかり引き連れているようだが？」
「元は五十を超える艦隊だった。それが今じゃこの様よ」
「なぁにそう悲観することはない。互いを利用し合って生きていこ

うじゃねぇか」
手で指し示して署名を促し、クリークもそれに従う。
十五隻の艦隊を持つ海賊。これで大きな力が仲間に加わった。
クリークも他の者に倣ってすぐその場を離れていく。
署名を集めた羊皮紙を見つめて、バギーは笑った。
そこへアルビダもやってきて彼の背後から肩に手を置き、妖艶に微笑む。
「予想以上の出来栄えじゃないか。どれだけ集まるもんかと思っていたけど、これだけ大物ばかりが顔を揃えて、しかも艦隊まで手に入るとは」
「どうやら風はおれに向いて来たようだぜ……」
そうそうたる顔ぶれが揃っていた。
死んだはずの策謀家、キャプテン・クロ。
懸賞金１２００万ベリー、獅子閃光エルドラゴ。
元海兵にして海軍１５３支部元基地長、斧手のモーガン。
十五隻から成る海賊艦隊の提督、首領クリーク。
そこに加えて連合の立役者、金棒のアルビダ。
そして盟主、道化のバギー。
イーストブルー最高峰の海賊たちが揃っていた。
集まった戦力に気を良くし、バギーは勢いよく席を立つ。
幹部と成るべき男たちは港に勢揃いして立っていた。その後方には彼らの船。連合を作る戦力たちが港に熱い視線を向け、今や遅しとその時を待っている。
バギーは彼らの前を歩きながら演説を始める。
遠くに居る者にも聞こえるように声を張り上げ、物々しい雰囲気が強まっていた。
「いいかてめぇら！　おれたちは志を同じくする者……おれたちの間に上も下もありはしねぇ。仲良くなりてぇ訳でも、誰もが信用してる訳でもない。しかし！　どうあっても倒さなければならない共通の敵が居る！　そいつは今、このイーストブルーで大手を振って歩いてやがるんだ！　生意気にもおれたちを足蹴にしてご機嫌な笑顔で

なァ！」
オォッ、と勇ましい声。船上から味方が応じていた。
「信用しろとは言わん。だが奴を倒すためには必要な関係だ。これよりてめぇらは互いを利用し合い、同じ目的のためにこの海を航海する！　目的はただ一つ！　憎き麦わらの首を取るのだ！」
声が大きくなり、敵を威嚇するように武器で地面や船の腹を打ち、ガンッ、ガンッとリズミカルに音を立てる。港には海賊たちが醸し出す空気で一気に様相が変わっていった。
それを見て恐ろしいと思わない人間など居ない。
数え切れないほどの海賊たちが一斉に声を出し、バギーの言葉に乗って気分を高めていくのだ。もしこの場に海軍が現われようと、おそらく彼らならば逃げずに立ち向かい、木っ端微塵にするまで敵を破壊し尽くす。そんな空気を漂わせている。
バギーは両腕を広げ、幹部たちの前で勇ましい声を轟かせた。
「行くぞォ！　麦わら討伐連合の旗揚げじゃあッ!!」
「ウオオオオオオッ!!」
大地が揺れ、大気が震えて、水面に波紋が生まれるほどの大合唱。
武器を掲げた海賊たちは威勢よく天へ向かって吠え、今この場に居ない麦わらのルフィを想う。
必ず倒す。
全員の意志が一つになっていた。
その光景を見てバギーは上機嫌に笑う。
心の中では別のことを考えていて、何やら楽しそうなのはそのせいだ。
（ぷぷぷっ、単純な奴らめ。思った以上に上手くいきやがった。これだけの戦力が揃えばそんじゃそこらの奴が手を出してこれるレベルじゃねぇ。こいつらを利用すりゃあ、別におれが動かずとも金銀財宝が懐に飛び込んでくるんじゃねぇか？　そうなりゃ文句なし、むしろグランドライン制覇も夢じゃねぇかもしれねぇ。夢が膨らんできやがったなぁ、おい！）
麦わらのルフィへの復讐も考えつつ、それでいて彼らを従えていれ

ば何もせずとも名を上げられるという算段がある。彼は一切抜け目がなかった。
参加する海賊団に上も下も無いとは言った。嘘ではない。
ただし連合を指揮する盟主バギーだけは別格で、それを詳しく説明した訳ではない。
（バカな海賊どもめ、てめぇらを使って名を上げてやる。いずれこのイーストブルーにゃおれに歯向かえる奴なんていなくなるぜ。なんせおれは！　連合盟主バギー様だ！）
天を見上げて、誰よりも大きな声で楽しげに笑う。
バギーの悪巧みはまだ始まったばかりだった。

断章　世界の甲板から―３０００万の男―

1

グランドライン、とある島。
ふらりと立ち寄っただけ。そんな足取りで鷹の目のミホークは島に上陸していた。
報告のために走った男は今頃到着しているだろう。
さほど急ぎもせずに歩き、すぐに島の内陸部、蒸し暑さを感じる環境の中で彼らを見つけた。
木陰の下に、見覚えのある海賊団。
どこか凄まじい覇気を感じさせる様相で、彼らは客人を迎え入れた。
「よう、鷹の目。こりゃ珍客だ。おれは今気分が悪ィんだが……勝負でもしに来たか」
「フン……片腕の貴様と今更決着をつけようなどとは思わん」
真っ先に口を開いたのは赤い髪の男だ。
かつて死闘を演じた頃とは違い、左腕を失くして黒いマントに隠されている。しかし姿が変わってもやはり凄まじい覇気。腕は落ちていないと見える。
ミホークは肌を刺すような威圧感を受けて微塵も表情を変えず、冷静さも失わないまま。
懐から取り出したそれを右手に持つ。
「こんな島に居るところを見れば、どうやらまだ知らんようだな。世話焼きついでに持ってきてやった。貴様は興味があるだろう」
「あ？　何の話だ」
「まずは読め。そうすればわかる」
一定の距離を置いたままそれを投げ、わずかな音を発して地面に新聞が落ちた。
赤い髪の男は動かず、代わりに副船長、ベン・ベックマンがそれを手に取り、読み始める。
一面を見てすぐに気付いた。確かにそれは一味が興味を持つはず

だ。
「こりゃあ……お頭」
「なんて書いてある。読んでくれ」
「イーストブルーである大佐が海賊にボコられたようだ。海賊とつるんでたらしい。それはいいが問題なのはやった奴ら。フッ、懐かしいな……あんたの帽子をかぶって笑ってる」
ベックマンの言葉に他のクルーたちが一斉に動いた。
赤い髪の男は俯いたまま、まだ動かない。
そこでミホークがさらに懐から手配書を取り出し、それを広げて見せてやった。
「先日、これを受けて政府は新たな手配書を出した。そこに写っている者たちの内二名のな。昔貴様が話していたのを思い出した。ある小さな村の、面白いガキの話……」
「おいっ、まさか！」
「中々面白い小僧だ。資質はあると見ている」
赤い髪の男、シャンクスが顔を上げて笑みを浮かべる。
「来たか……ルフィ」
待ち望んでいた時だ。約束を果たすため、友が航海に乗り出した。
これを知って一味は大いに盛り上がり、特別騒ぎたい気分になったらしいシャンクスが声を張り上げる。それに乗る者、困った顔をする者、仲間たちの反応は様々だ。
「おまえら飲むぞ！　宴だ！」
「飲むってあんた、飲み過ぎで苦しんでたばっかだろ」
「バーカ、こんな楽しい日に飲まないでどうすんだよ。おい鷹の目、おまえも飲んでけ」
今の今まで酒を飲み過ぎてぐったりしていたが、再び元気になって酒盛りを始めようとする。
そんなシャンクスに仲間たちも付き合い、同じく笑い始めた。ミホークまで巻き込まれて本人は迷惑そうにしているものの、上機嫌なシャンクスは気にしていない。
喧騒を耳にしながら、ベックマンは注意深く新聞に掲載された写真

を見ていた。
大きくなった友人は昔と変わらぬ笑顔を浮かべている。見間違えるはずもなかった。
気になるのはその隣。肩を組んで楽しそうに、どことなく見覚えのある顔。
ベックマンがちらりと近くを窺えば、やはり彼に似ている少年が写っていた。
「ヤソップ。おまえ、ガキが居たって言ってたな」
「あぁ？　おいおいなんだよ、あんなに話してやったのに忘れちまったってのか？　勘弁してくれよ、おれの宝だぞ」
「ガキは今いくつだ」
「そりゃルフィと同じくらいだから、それなりにはなってるだろうさ」
「ルフィの隣にな。おまえによく似た男が写ってるんだ」
「……な、何ィ？」
慌てて立ち上がったヤソップが新聞を受け取る。
見てみれば確かに、自分に似た顔立ちで鼻の長い十代の少年が写っていた。
顔には見る見るうちに喜色が浮かび、笑みが深くなっていく。
間違いない。そう思って彼は声を張り上げた。
「お頭ァ！　おまえら！　見てくれ、おれのガキが写ってる！　ルフィと一緒に来やがった！」
跳び上がって心底嬉しそうに叫ぶ。
それを聞いてまたシャンクスや仲間たちが笑顔で喜び、大騒ぎは止められなくなった。
ベックマンはやれやれと首を振り、苦笑して彼らの様子を見回す。

2

グランドライン、とある島。
人気のない酒場で食事していた青年は、店主が持つ新聞を見ると目

を見開いて驚いた。
今の今まで食事中に眠ってしまっていたため気付かなかった。昔からの悪い癖だ。店主に起こされなければもう少し寝ていただろう。
店主が読むそれには大きな見出しがあり、写真がでかでかと張られている。
その中に一つ見覚えのある顔があった。
否、見覚えがあるどころではない。それはもしや己の弟ではないか。
オレンジ色のテンガロンハットをかぶった半裸の男は期待を込めながら店主に尋ねてみる。
「なぁおっさん、その記事なんだ？」
「んあ？　あぁ、イーストブルーで起こった事件だよ。なんでも海賊が記者を呼び出して書かせたらしくてな。海賊が島を支配してた話に海軍が絡んでたって話だ。世も末だよな」
「へぇ。で、その海兵がぶっ飛ばされたってことだろ？」
「ああ。やったのはルーキーみたいだぜ。初頭の手配で３０００万だとさ。確か手配書が――」
新聞をカウンターへ置き、店主が少し席を外す。
その間に青年が新聞を手に取って改めて確認する。
大きな写真に笑顔で写る少年少女たち。
中には魚人も居るが、中央に居るのは間違いなく自身の弟。
にやりと口の端が上がって、写真の中に居る彼へ伝えるように呟いた。
「そうか、やっぱりおまえだなルフィ。ついに海に出たのか」
成長しても幼き日と変わらぬ笑顔を見やり、思わず安堵する。弟を案じていたのか、彼もまた子供のように心からの笑みを浮かべていた。
店主が戻ってきて一枚の手配書を手渡す。
青年は新聞を置いてそちらを受け取り、眼前に掲げて確認した。
顔のアップで、カメラに手をかざそうとした仕草も写って、誰かの後頭部も入っている。非常に上機嫌そうな、楽しそうな笑顔だった。

「おかしな世界になったな。こんなガキが３０００万とは」
「へへっ。おっさん、こいつおれの弟なんだ。ガキの頃に海賊になるって誓い合った」
「んん？　弟ぉ？　あ……おい、ちょっと待て。あんたよく見りゃ、手配書で――」
「ああ、おれのことなんてどうでもいいさ。それよりこいつは、ガキの頃は弱っちくてよ、泣き虫だったってのに今は仲間を見つけて海賊になったんだ。信じられるか？　つっても知らねぇからなんとも言えねぇか。とにかくすげぇことなんだ」
「あんた、弟って」
「あのルフィに懸賞金がかけられたか。時間が経つのは早ぇもんだな」
店主は驚愕した顔で呆然と立ち尽くし、何も言葉が見つからなくなり。
ちょうどその頃だった。
店の扉を蹴破るように入って来た男たちが数名。厳めしい顔で青年の背を睨みつける。
その背に描かれた誰かのマーク。世界中に名を知られる大海賊のジョリーロジャーだ。
同じくその青年は世界中の人間が知る大海賊の幹部。
一斉にピストルが構えられて、叫ぶと同時に引き金が引かれていた。
「火拳のエース！　討ち取ったァ！」
弾が尽きるまで銃声が鳴り響き、驚愕した様子で店主がカウンターの下へ伏せた。
彼の体を貫通してカウンターに銃弾が突き刺さる。木製のそれから破片が飛び散って、壊れる音が連続して続き、しばらくすると弾が切れる。
青年はまだ生きていた。
ピストルが貫通した背には穴が開いて、不思議なことに炎が灯っている。そうかと思えば炎が穴を塞いでしまい、やがて彼の体は全く傷

ついていない状態へと戻った。
肩で息をする男たちは失念していたと思い出す。こんな武器が通じる相手ではなかったのだ。
余にも珍しいその姿を見つけたことですっかり舞い上がってしまっていた。挑むべきではなかったと気付いたのは今になって。もう遅いだろう、このタイミングのこと。
手配書を見たままわずかに体勢を変え、背後の彼らに腕を伸ばして指先を向ける。
まるで銃の形を模すよう。
指先から拳大の炎が飛び出して宙を駆け、並び立った男たちの体へ激突し、弾き飛ばした。
凄まじい熱と衝撃を受けて彼らは外へ放り出される。
そのまま地面に転んだ状態で悲鳴を上げ始め、炎に巻かれてジタバタと転げ回っていた。
それからようやく店主が起き上がることができて、悲鳴を耳にしながら青年の顔を見つめた。
背中のマークに火の体。まず間違いない。
気付いた後では間違えるはずのない、いつだったか手配書で見た悪名高い人物。
そばかすの残る顔にはひたすら嬉しそうな笑みが浮かべられていた。
「今はまだイーストブルーだな。早く来いよルフィ。海賊の高みへ」
青年の言葉を聞き、ただ驚くばかりであった。

3

イーストブルー、どこかの海域。
海を行く帆船の欄干から海を眺め、新聞を読む男が居た。
厳めしい表情だがそこにある写真をじっと見ていて、感情は窺えない。ただ何かを感じ取っているらしいとは立ち振る舞いから想像す

ることはできた。
珍しいこともあったものである。
そっと歩み寄った少女は邪魔してはいけないと思いつつ、思わず問うてしまった。
「珍しいですね。そんなに気になる記事ですか？」
「フッ、面白い連中だと思ってな。自ら新聞に売り込むとは考える」
「そうですよね。まだ名前も知られてなかったのに、この一件ですっかり有名人になっちゃいましたし。まぁそのための行動とも言えますけど」
「どちらにしてもこのままじっとしている人間ではなさそうだ。おそらく荒れるぞ」
少女は先程受け取った新聞に挟まっていた手配書を取り出し、前へ掲げて見せる。
こちらにも同様の人物の顔が写っていた。
「手配書も出てましたよ。今、イーストブルーに居るらしいですね」
「ああ……少し様子を見に行くか」
「え？」
「用件は終わった。少しくらいの寄り道も許されるだろう」
「そりゃそうですけど……」
男は手配書を確認した後、海に目を向けてから言う。
「時期を見てローグタウンに立ち寄ろう。あそこはグランドラインにほど近い。海賊たちが足を止めるには十分な位置にある」
「彼らも来るかもしれませんか？」
「ああ。運が良ければ一目見れるかもしれん」
「うーん、やっぱり珍しいですね。ドラゴンさんがそこまで誰かに興味を持つなんて」
男は薄く微笑んだだけで答えず、それを見た少女は肩をすくめて振り向いた。
少し離れた位置に座っていた青年へ手配書を見せ、興味本位で尋ねる。
「ねぇ、君は見た？　最近話題のルーキーくん」

「そいつは……」
「えーっとね、確か名前は――」
「ルフィ」
ぽつりと呟かれる。
少女はわずかに驚いて小首をかしげた。
「あれ？　知ってたの？　あ、そっか。名前はここに書いてるもんね」
「いや……」
名前自体は手配書に書いてある。だがそれを見て言った訳ではないらしい。
戸惑いを感じさせる青年は俯いてしまい、何やら普段と様子が違った。
「どうかした？　そういえば、イーストブルーの出身なんだよね。何か思い出したの？」
「おれ、なんで名前がわかったんだ……？　なんでかわからないけど、でも」
ゴーグルを付けたシルクハットを指で動かし、わずかに目深にかぶって。
迷いが生まれた声が出された。
少女と男は初めて見るその表情をじっと見つめる。
「なんか、懐かしかった」
自分でも理由が分からぬまま、迷い、青年はただ素直な感情だけをそう表した。

断章　世界の甲板から―２０００万の男―

1

グランドライン、とある島。
そこは外界とは隔絶された地下の空間だった。
部屋と呼ぶには広大な一室で、高価そうな調度品がいくつか置かれているものの生活感とは無縁な空間。あくまで仕事のために立ち寄る場所で、決して住むような場所ではない。
何かから隠れるような仄暗さがあり、ひどく寂しげな空気がある。
ソファの一つに女性が座っていた。
白いコートを身に纏って、同じ色の帽子をかぶっている。その下にはへそを出すような色っぽい衣装があって、女性としての魅力を見せつけるような外見であった。
顔には微笑みを湛え、手には新聞を持ち、しなやかな指が紙に触れてカサリと音を鳴らす。
不思議と気分が良かった。
果たしてそれはなぜであったか、本人も理解していない。
おそらく理由はいくつかある。
見覚えのある顔を見たから。面白いことをしているから。また会うのだろうと思ったから。
そしてもう一つに、彼が言った通りだったと思うからだ。
「あなたが言った通りになったわ。彼が来る」
女性がぽつりと呟き、同じ空間に居る人間へ声をかける。
数十メートルは離れているだろうか。広大な空間の中で壁際に立ち、わずかに光を放つような水槽の前に立って、彼女に背を向けたままぴくりとも動かない。
返答は期待していない。再び視線を新聞に落とす。
手配書が出たことも聞いていた。額は確か２０００万ベリー。
初めてにしてはずいぶん高く見積もられているだろう。
それも当然だろうかと、くすくす笑って肩を揺らす。
「まだこっちには来ないのかしら。迎えを用意しなくてもいいの

？」
聞いてみるもののやはり返答はない。期待もしていないのだからそれでよかった。
言わばそれは、どんな反応が返ってくるのだろうと試す言葉。
想像通り、彼は何一つとして言葉を発しなかった。
水槽の中でワニが泳いでいる。頭にバナナに似た突起を持つ奇妙な大型のワニ。
男はそれを見ているのか、はたまた見る振りをして何かを考えるのか。
女性は予想することもなく新聞を置いて、テーブルに置かれていた手配書を手に取る。
そこに置かれているのを見ると先に見ていたに違いない。
くすんだ色の金髪を持つ柔らかい笑顔の少年。
不思議と以前より楽しそうな顔に見えてしまって、だから怒っているのかもしれないと、またくすくす笑い声を出した。
彼が来る時を楽しみにして、今はただ静寂に包まれて待つ。

2

グランドライン、霧の海域。
「ギャアアアアッ!? 骸骨が海の中から覗いてるッ!?」
今にも崩れかねないほどボロボロになった帆船が一隻、どこへ向かうとも知れず漂っていた。
「なーんちゃって！ 実はあれ私の顔なんですけど。ヨホホホホッ！」
人気のない船の上には奇妙な存在が一人。
全身から肉が無くなり、骨だけになった骸骨が、アフロヘアーだけを残して動いている。
死者ではなく、生者でもない。
しかしそれでも、世界の常識を覆す奇妙な存在は確かに生物には違いなかった。

「いやぁーしかし、こんなに大声で独り言言ってて誰かに聞かれたら恥ずかしいですねぇ。あんまり滅多なことは言えないかも……ひょっとしたら誰か聞いてるかもしれないし」
きょろきょろ辺りを見回し、誰も居ないことを確認する。
辺りは霧に包まれて静寂だけが広がっていた。
骸骨は、一人だった。
「まぁ誰も聞く人なんていないんですけどね！　ヨホホホホ！」
両手を上げて大げさなポーズを取りながら叫ぶ。
ひどく大きな声だったが反応する者は誰も居ない。ただ霧の向こうにある闇に吸い込まれて消えていき、今日は静かな海原が、船底に波をぶつけて小さな音を作っていた。
耳が痛くなるほどの静寂がある。
心を苛むほどの沈黙がある。
言い換えればそれ以外には何もない。
何もない海を、誰も居ない船で、骸骨だけが漂っていた。
どこへ行くのかは彼にも知ることができず、ただ波に任せるまま。
「最近は人が乗る船なんて見かけないですねぇ。生きた人に会えたのはもう何年前でしょうか。見かけたとしても無人の船かただの残骸。やっぱり死体狩りの影響なんでしょうね。彼らに会ったのがもうずいぶん昔のことに感じられます」
誰も居ないのだが、誰かに聞かせるように。
どこかおどける態度を残して、楽しげに見えるよう、声を弾ませて一人で語る。
「あれから何年経ったんでしょう。あの子は無事にこの海を抜け出せたんでしょうか。無事に外へ出られていたらいいけれど」
ただ、気をつけなければ陽気さは薄れてしまう恐れがあった。
ふとした瞬間、孤独なせいか、やはり感情は沈んでいく。
「無事に出ていて欲しいものです。私と違って太陽の下で生きれるのだから、私とは違って一日でも長く生きて欲しい……そりゃあ、辛い想いはするでしょうけど。死にたくなるくらい辛かったでしょうけど。今も生きているのでしょうか」

頭の中で過去を思い出せば、当然考える物がある。
陽気さを心掛けていた声は徐々にしみじみとした物に変わっていって。
「あぁ、でも、もし出られたのなら、せめてこのトーンダイアルだけでも彼らの下に」
言いかけて、咄嗟に口を噤む。
もはや唇のない、歯がむき出しになった口を閉じて、無理やり呑み込んだ。
表に出さないよう努めていたはず。
今出してしまえば胸が張り裂けるほどの苦しみに苛まれる。
どうあっても孤独から逃げられない彼が精神を保って生きるためには、気楽に、笑って、何も思い出さないことこそが肝要。無理やりにでも想いを秘めていなければならない。
本心を口にしてはいけない。嘆いてはいけない。
何を語っても現状は変わらないのだから。
「――何を馬鹿なことをッ」
自らを叱責するよう呟いて、杖に仕込んでいた剣を抜く。
片手で細身のそれを振り、鋭い突きを繰り出して、空気を切り裂いた。
邪念を捨てるべく、同時に強くなるべく剣を振るう。
服はボロボロ。骨もアフロも薄汚れている。どうにかする術もこの船には残されていない。
今できることは強くなるための努力を続けることだけだった。
「自分で渡すと決めたんでしょう。私はもう、死んで骨だけ。肉も神経も細胞も失くして、これ以上体が老化することはなくなった。殺されでもしない限り、きっと死なない。アイランドクジラも長命。これから何年、何十年、何百年経ってもチャンスは残っている。必ずまた会いに行く。影を取り戻して、必ずラブーンに〝最期の歌〟を届けなければ……！」
繰り出す突きは見る見るうちに鋭くなり、空気さえ巻き込んで音が鳴る。

頭を使って強くなろうとした。何度も修行を繰り返して力を蓄えた。
全ては自由を得るために。
「待っていてくださいラブーン。もう少しだけ、あとちょっとだけ。必ず届けますから、みんなの〝声〟を。何年かかっても必ず戻ります。ですから、待っていてくださいっ」
やがて突き出した剣が止まり、腕から力が抜ける。
深い喪失感に襲われていた。
「あぁ、でも」
がくりと膝をついて、忘れようとしていた光景が脳裏に蘇る。
骨だけになって脳さえ失ったはずなのに、それは忘れた日などなく、今でも鮮明に思い出す。
この船に仲間は居ない。
霧の中で出会った気のいい海賊たちも居ない。
友は遠く、舵の利かない船では辿り着けぬ場所。
忘れようとした心を苛む辛さは、ずっと彼の傍に居た。
「寂しいなぁ……」
その声に応える者は居ない。
あるのはただ巨大過ぎる孤独だけだ。

3

グランドライン、とある島。
美しい女性が海辺に立っていた。
肩ほどまで伸びた髪を海風に揺らし、身に纏うのは白いワンピースで、裸足で砂の上に立ち、打ち寄せる波に足首まで濡れて佇んでいる。
遠く、果ての見えない海原を眺めて楽しげな微笑。
彼女は一人、大好きな海を見ていた。
「ゼナさ～んっ！」
その浜辺へ、彼女を呼ぶ人物がやってきた。
海軍のコートを肩にかけた小さな少女。何やら慌てた様子で走っ

てくる。
女性は振り返って笑みを向けた。
「ねぇ、これ見てっ！　新聞と手配書！」
「どうしたの、そんなに慌てて。なんで手配書？」
「新しいのが出たの！　でね、これ見てこれ！」
「も～そんなにがっつかないでよ。せっかちなんだから」
ケラケラ笑いながら膝を折って、少女が掲げる手配書を覗き込む。
ふと女性の表情が変わった。
「どう？　ゼナさんそっくりでしょ？　髪の色とかも一緒だもん」
「あらほんと。ん～、これはひょっとしたらひょっとするのかしら。いや、でも……」
「知ってるの？　あ、わかった。生き別れた弟とかじゃない？」
「あー違う違う。だって私一人っ子だし、生き別れる状況なかったもん」
「でもこんなに似てるのに。ただの赤の他人なの？」
「いやぁ～どうかなぁ。それより可能性があるとしたら」
「うんうん」
「私の子供かなぁ？」
考え込む仕草を見せながらそう言えば、少女は目をぱちくりと開閉させた後、大声で叫んだ。
「えええええ～っ!?　ゼナさんの子供!?」
「うん。私だってこれでも出産経験あるんだよ。むふふ、でも見てほら、全然そうは見えないでしょ。奇跡のボディって言われてるんだから」
「そんなの言われてるなんて知らないけど。だってゼナさん今いくつ？　この人もう大人だよ。ゼナさんの年齢で産んでたらこんなに大きくなってないよ」
「あ、嬉しい。それって私が若いってことよね。まぁーそれも当然なんだけどねぇ、んふふ」
「え？　ゼナさんって結構おばさんなの？」
「失敬な。おばさんじゃなくてお姉さんなの。大人のレディに年齢

の話はご法度よ」
「う、ごめんなさい」
女性が満面の笑みを浮かべておどけるように言う。
「でもちょっとだけ種明かしすると、実はねぇ……お姉さんは魔女なのだ！」
「ええっ!?　魔女!?」
「どう？　すごいっしょ？」
「ウソでしょ」
「なっ、失敬な。ウソじゃないよ、ほんとだもん」
「ほんとの魔女は自分から魔女だなんて言わないもん」
「そんなことないわ、自分からだって言うわよ。だってほんとのことだもん」
「絶対言わない」
「いーえ言います～。だって私が本物だもん」
「証拠は？」
「んん？」
「本物だったら魔女っぽいことできるんでしょ。証明してよ」
「むむ、そう来たか。そう言われると困っちゃうんだけどなぁ～……」
そう言われて女性は笑みから一転して困った顔になり、少女が攻勢に回ったようだ。
「やっぱり証明できないじゃない。ウソだったんでしょ？」
「違うの。ウソは言ってないけど、それはほら、証明しようがない気もして。むしろこの美貌が証明っていうかさ、この若々しさが全てを物語ってるっていうか」
「へ～」
「あぁっ、冷たい目!?　そんな目しないでよヨーコちゃん！　今まで仲良くしてたのに！」
「美人のそういう言葉ってふざけてても罪が重いよ。あんまり言わない方がいいと思う」
「そう？　事実なのに。う～ん、じゃあどうやって証明しようか

……」
「もういいよ。ウソだったって認めて謝ってくれれば」
「やだ。だってウソじゃないもん。いや、別にウソって言ってもいいけどさ」
「ほらウソじゃない」
「違うもん。ちゃんと証明できるもん」
「ゼナさんって、ほんとに子供だよね……」
呆れる少女の視線を気にせず、女性が辺りを見回し始める。
砂浜に落ちている小さな木材があった。
よし、と気合いを入れ、彼女はそちらに歩き出しながら少女の手を引く。
「ふふん、見てなさいヨーコちゃん。私が魔女だってとこ見せてあげるわ」
「別にもういいんだけど。それよりこの手配書の人のこと――」
「いいえ、その前にこっち。はっきりさせないとちゃんとしゃべれなくなっちゃうもん」
「めんどくさいなぁ……ゼナさん、大人になった方がいいよ」
「もうなったわよ。どこからどう見ても大人でしょ」
「例えば？」
「胸とかお尻とか。あと腰も」
「あぁ……」
「ま、またバカにする目を!?　もうっ、絶対認めさせてあげるからね！」
二人は木片に歩み寄り、女性がしゃがんで手を触れた。
「見ててね。すっごいことが起こるから」
そう言った後に立ち上がった途端、木片は独りでにふわりと浮いた。
少女はおぉっと声を漏らす。
「ほらほら、フワフワ～。どう？　すごいでしょ」
「わぁっ、なにこれ！　ひょっとして魔法？」
「うーん違うんだなぁ。でも当たらずとも遠からずってやつ？」

「ねぇねぇ、私も浮かせてよ！　空飛んでみたい！」
「あ、それは無理。だって人は浮かせないもん」
「え～っ!?　なんで！」
「誰にだってできることとできないことがあるの。むしろできることを褒めてよ」
「あんまりすごくない」
「あっ、ずるい！　さっきすごいって言ったのにもう変えた！」
「だって私が飛べないんだもん。魔女ってそんなにすごくないんだね」
「むむむ、そこまで言われたら仕方ない！　じゃあ一番すごいやつ見せちゃうからね！」
いよいよ女性が怒り始め、少女が嘆息するのも無視して海に一歩近付いた。
独特の構えを見せて右腕を振りかぶる。
その姿勢で静止し、少女が見つめていると、右手に握った拳が白い光を放ち始めた。
あれはなんだ。
そうして見ていると女性は目にも止まらぬ速さで右腕を振り抜き、大気を叩く。
白い光によるものか、見る見るうちに空中に亀裂が入った。ビキビキと何かが割れるような音も響いていて、少女の全身に今まで感じたことのない感覚が走る。
背筋を震わせ、凝視することほんの一秒足らず。
亀裂から放たれるように凄まじい衝撃波が轟音を立てて走り、海水が巻き上げられて一瞬の内に荒れ狂い、女性の前方にあった海が一直線に割れた。
言葉に出来ぬほど強烈な一撃を受け、荒れた海を見ながら少女は立ち尽くす。
何も言えなくなってただ信じられなかった。
波が落ち着く前に少女が女性を見上げて、悪戯っぽい笑顔を確認する。

「す、すごい……なにこれ」
「ん～？　魔法」
いつも通りの彼女だった。
少女は肩を揺らす女性を見る目まで変えて、呆然としたまま言葉を絞り出す。
「んふふ～どう？　見直した？　お姉さんのこと尊敬したんじゃない？」
「う、うん。ほんとだとは思わなかった……」
「えっへん。ブイっ」
ピースサインを見せて無邪気に笑う女性。とてもさっきの威容を見せた人物とは思えない。
少女はしばしぼんやりしたままだった。
「だからお姉さんの年齢については聞いてはいけないよ、少女よ。まぁ種明かししちゃうと老化が遅いだけなんだけどね。だからほんとはそこそこになってるの」
「へぇ～……」
「子供を産んだのもほんとだよ。愛するダンナさんがいたし、子供と別れる時はそりゃもう泣きじゃくって嫌がって大変だったんだから。あ、ちなみに泣いたの私ね」
「なんで、別れちゃったの？」
「危ないから。私、これでも結構有名人だからさ。子供は元気に育って欲しかったの」
女性は少女の隣に並ぶとしゃがみ、手を掴んで、その手に握られた手配書を二人で覗き込んで静かに語る。妙に遠い目で、どことなく寂しそうな笑顔だ。
「うーん、私に似ちゃったかぁ。ダンナさんに似たらかっこよかったのになぁ。ダンナさんラブの私としてはそっちの方が嬉しかったかも……えへへ～、でも私に似てもかわいいね」
「また自慢」
「だってほんとのことだもーん。会いたいなぁ……」
少女は女性の顔を見つめて尋ねた。

「いいの？　海賊になったんだよ」
「うん、いいよ。だって私も海賊だったし。血は争えないってやつかな。仕方ないよね、きっと私の子なんだもん。顔も髪の色もそっくり。かわいいし」
「会いに行かないの？　会いたいんでしょ」
「うーん、でも向こうは私のこと知らないかもしれないの。だって自分で育てなかったお母さんなんだよ？　嫌われたりとか拒絶されちゃったら立ち直れなくなっちゃうもん」
「ゼナさんでもそんなの気にするんだ」
「あれ？　それってどういう意味よちょっと。ヨーコちゃん」
「だって、いつもの感じ見てたら」
「この子は失礼な子だなぁ。どうしてそうなっちゃったんだっ」
女性が力を入れて少女の頭を撫で、どちらも笑顔でじゃれ合う。
少しそうして遊んだ後、立ち上がった女性が海を眺めて言う。
遠い空の下、息子が居るかもしれない。
こちらの海に来ればいいなと自然に思っていた。
「もしあの子がここまで来たら、その時は自分から名乗るわ。私があなたのお母さんだよって。かっこいいダンナさんの話もしてあげなきゃいけないし、まぁ私も色々ありましたから？　海賊の先輩として武勇伝の数々を聞かせてあげてもいいと思ってる」
「私も聞きたい、私も！」
「え～そう？　でも結構過激だよ？　丸くなるまで時間かかったもんなぁ」
「どんなことしたの？　相当のワルだった？」
「そりゃもう、ワル中のワルよ。ロジャーはイーストブルーの誇りって言われたりしたけど私はイーストブルーの恥って言われたもん。なんていうか、うん、若気の至りってやつ」
「興味あるっ。ねぇ、聞かせてよ」
「じゃあちょっとだけね。子供のためにとっといてあげなきゃ」
女性は少女に笑いかけた後、海を見ながら言葉を紡ぐ。
「私はね、物心ついた頃に海賊になったの。最初の航海は――」

風が薙いで、彼女の髪を遊ばせた。
少し独特なくすんだ色の金。
彼女の声は涼やかに風と混じっていった。

ローグタウン編

休息の後で

ココヤシ村を出発してから一週間が経った。
麦わらの一味とアーロン一味の交戦で怪我をしている者が多く、まずは皆の傷を治そうとの提案があり、時間を休暇に使ったのである。その結果として七日間が過ぎた。
無人島とあまり人が立ち寄らない小さな町を行き来すること数日。
世間から身を隠しながらの休暇には効果が見え、しばらく包帯が解けなかったキリも元通りの姿になって、ゾロも胸の深い傷跡を気にせずともよくなった。
傷ついた魚人たちも怪我を治療し、人間である彼らとの日々を過ごした後。
どことなく空気は変わりつつあって、まだ全員ではないが、協力しようとする態度を見せる者は着実に増えていた。これも彼らが友好的に接し続けた結果であろう。
ただし、彼だけは。
アーロンだけは頑なに人間と親しくしようとはしなかった。
彼が他とは違うところは不服を態度に表すだけでなく、実際に異論を唱えて自由を勝ち取ろうとする部分にある。他の魚人と違ってアーロンは船長。その自覚もあるのだろう。
自身がルフィに勝てば、一味は自由を勝ち取る。
すでに約束されているためそれを利用しない手はなかった。
怪我を治療するための一週間、彼は毎日ルフィへ挑み続けた。
キリやナミが時間やタイミングを制限したため、徐々に怪我は治っていき、今やルフィにもアーロンにも戦闘の名残は残されていない。包帯は取れて完治している。
ただ、それでも毎日のケンカがやめられることはなく、すっかり習慣にすらなっている。
手加減せずに本気で殴り合う姿は恒例行事となっており、仲間たち

はいつの頃からか緊張感すら持たず楽しげに応援し始め、ぶつかる二人を遠巻きに眺めて止める様子はない。
勝者はいつもルフィ。そのせいで賭けにもならない。
だが関心はあるようで、いつも観戦者が居て盛り上げられるのが通例だった。
アーロンはそれを望んでいないものの、ケンカに集中するためか止めようともせず。
今日もまた、いつも通りに行われている。
イーストブルーの名もつけられていない小さな無人島。
ビーチでは最後の休暇を楽しむ海賊たちの姿があり、妙な盛り上がりを見せる集団があって、彼らの視線の先では二人の船長が殴り合っていた。
「ウオラァ！」
「んんっ！」
振り下ろすようなアーロンの拳をルフィが頭突きで受け止めて、一瞬動きが止まる。
その一瞬で素早く動き、軽やかな動きで回転して、回し蹴りを腹に叩き込んだ。
凄まじい衝撃。内臓にまで響く痛みが一瞬とはいえ体の自由を奪う。
体をくの字に曲げたアーロンが動けないと見てさらにルフィが拳を振りかぶり、振り向く勢いで強かに頬を殴りつけた。強烈な一撃でアーロンが倒れる。
砂を巻き上げて地に伏した一瞬。
ルフィがとどめとばかりに両腕を後方へ伸ばした。
「ゴムゴムのォ……バズーカ！」
「ぐおぉっ――!?」
起き上がろうと上体を跳ね上げた瞬間だった。追撃としてルフィの掌底が胸を叩いて、重いはずの巨体がふわりと宙を舞う。そしてアーロンは再び背中から砂の上に落ちた。
これでまた決着だろう。観衆たちがわっと声を出す。

ビーチでの一戦はいつも通りルフィに軍配が上がり、それを伝えるべくウソップが叫ぶ。
「それまで！　勝者、麦わらのルフィ！」
「うおおぉ～！」
両の拳を突き上げてルフィが雄々しく叫んだ。
今だけはただの観客となっている魚人たちも同じく叫んでおり、上機嫌で騒いでいる。
それを見たアーロンは歯噛みし、表情を歪ませてゆっくり起き上がった。
仲間たちの姿を、今更怒ったりはしない。種族至上主義である彼は人間を嫌うが、魚人族に対しては比較的友好的に接しており、仲間との絆は非常に強固な物を築いている。また、自らの怒りの原因を知っているため無暗に八つ当たりをするほど浅はかでもない。
彼らに怒鳴ったところで怒りが消えることはないのだ。
今日まで一度たりとも、笑顔を見せる仲間に怒りをぶつけたことはなかった。
ケンカを終えた彼らから少し離れた場所。そこでは穏やかな光景がある。
まだ朝だが焚火を作って、その上ではサンジが手早く料理を作り、香ばしい匂いが辺りを漂う。傍らではゾロが一部の魚人たちと酒を酌み交わし、こちらも和やかに過ごしていた。
そこからほんの少しだけ離れると、美しいビーチの雰囲気に合う白いチェアが置かれていた。
片方にはビキニ姿で寝そべるナミが居て、隣には水着の上からTシャツを着るシルクの姿。
和やかな辺りの風景に心を癒しつつ、騒がしいルフィたちを見て少し呆れた表情だった。
「あいつら飽きないわねぇ。毎日毎日よくやるわよ」
「うん、そうだね。アーロンも、もう少し仲良くしてくれればいいのに」
チェアに寝そべるナミはサングラスを外し、雄たけびを上げるル

フィの背を見て呆れる。さほど興味を持っている風でもなく溜息をついていた。
シルクは座った状態で彼らを眺め、少し寂しげな顔をしている。
魚人と人間、もっと仲良くすればいいのに。
そう思う彼女はアーロン一味の魚人たちとの交流を図る機会も多く、親しい態度で接している。
アーロンの態度を見ていて何か想うところがあるようで、ナミの過去や事情を知りながら、そう呟かずにはいられなかったらしい。反応するナミはやれやれと首を振っていた。
「ほっときなさいよ。今まで散々好き勝手やってたツケが回ってきたんでしょ。それにあんたは誰にでもやさし過ぎ。転んでもタダで起きるタイプじゃないんだし、もっと痛い目に遭うくらいでちょうどいいのよ。気にすることないわ」
「うん……ごめんね。ナミの前で言うことじゃなかったよね」
「別にいいわ。あんたのことはわかってるつもりだし」
申し訳なさそうにするシルクに苦笑し、ナミは肩を揺らす。
かつての陰りは無い。仇敵を傍に置いてひどく楽しそうにしているのは間違いなかった。
「それに自分が動かなくても物が来るのは楽だしね。ハチ、ドリンクまだ？」
「ニュ～、持ってきたぞナミ」
ナミが少し声を大きくすれば、手にお盆を持つはっちゃんが近付いて来た。
サンジが用意した二人分のコップを彼女たちへ手渡してやり、自身の仕事を終える。
近頃、アーロン一味の中で最も友好的な彼が雑用を行う機会が多くなっている。誰に言われた訳でもなく、ナミに対して悪いという気持ちがあるのか、常に自主的な行動だ。
いまだ不満を抱える者たちを抑えつつ、アーロンを抑えるのも彼。
気付けばはっちゃんは二つの海賊団を繋ぐ存在となっていた。
特製のドリンクを渡した後、はっちゃんが申し訳なさそうな顔を見

せる。
先程終わったばかりのケンカを目にしての感想らしい。視線はナミへ向けられ、六本もある腕の一本で頭を掻きながら、発されたのはもはや習慣となりつつある謝罪の言葉だった。
「悪いなぁナミ。おれもアーロンさんを説得してるんだけど、あの人は極度の人間嫌いだから。おまえらには迷惑かけるよ。まだおまえにも謝ってねぇんだろ？」
「いいわよ、最初から期待してないから。それにあんたは昔からマシな方だったし」
「ニュ～、すまねぇ。みんな色々あったからな。魚人島の悪ガキばっかり集まったんだ」
再び頭を下げてはっちゃんが謝る。
その様子を見たシルクが少し表情を変えて尋ねた。
「はっちゃんも、人間のことは嫌い？」
「う～ん、微妙なとこだ。おまえらのことはもう怖くねぇけど、人間全部を好きになったってわけじゃねぇ。おれは他のみんなほど嫌ってるってわけでもねぇけど……」
「みんなは、嫌いなのかな」
「色々あったからな。でも、だからってナミにしたことが許されるわけじゃねぇだろう。本当にすまなかったと思ってる。みんなも説得して、なんとか謝ってもらうからよ」
「無理しなくていいわ。言葉じゃなくてこれから体で払ってもらうからね」
悪戯っぽくナミが笑ったことで、はっちゃんも少しは救われたのか。肩の力が抜けて彼の笑顔が見れた。その様子を見ていると本当に悪いと思っていたのだと伝わってくる。
気にしていないと言えば嘘になるかもしれないが、彼が悪い訳ではないのだ。
ナミは平気な顔で笑いかけていた。
ナミがいいとしてもやはり種族の違いを越えて仲良くするというのは難しいことらしい。一部の者たちはすでにルフィたちと騒げる

ほどになっているが、アーロンを始めとした一部はいまだに強い敵意を感じさせる目を見せている。そして諦めに近い感情の者が一部だ。
少なくとも麦わらの一味とは和やかに話せる者。アーロンの勝利を願い、時を待つ者。そのどちらでもなく流れに身を任せようという者と、今や一味は三分していた。
決して良い状態ではない。どんな意見であれ、せめて一丸となっていて欲しかったところだが。
シルクは今のアーロン一味を見てそう思い、今後を憂いて、表情はわずかに曇っていた。
「やっぱり、素直に仲良くするっていうのは難しいのかな……」
「ニュ～……そうだ、モームにも餌やらねぇと。悪ぃな、おれもう行くよ」
「あ、うん」
複雑そうな顔ではっちゃんが離れていく。
航海に際して連れてきたモームへの餌やりは良い口実だっただけで、本心は上手く言い表せられないほど動揺していただろう。去っていく背は戸惑いを隠し切れはいなかった。
その背を見送ってシルクは嘆息し、ナミは心配し過ぎだと気楽に構えている。
視線は自然な様子で騒いでいる集団へと向けられた。
「はっちゃんも迷ってるのかな。なんか、辛そうだった」
「無理もないわね。アーロンがあんなだから板挟みなんでしょ」
「うん……もっとわかり合えればいいのに」
視線の先ではちょうどアーロンがルフィたちに背を向ける瞬間だった。
騒ぐ一同を意に介さず、だが悔しげに歯を食いしばり、彼らの下を去ろうとする。
アーロンは特にそうして離れていることが多かった。毎日ルフィへ挑みかかって決闘を行う以外に目立った反抗は起こさないものの、態度を軟化させないと伝えるよう、輪に入ることはない。
今日もそうしようとしたのだろう。

ただ今はサンジが料理を振舞っている最中のため、ルフィは気軽にアーロンへ声をかけていた。
「おいアーロン、今からメシだぞ。どこ行くんだ？」
「うるせぇ。くっ、おれに構うな……！」
「なんだよ、せっかく教えてやったのに。魚人だってメシは食うだろ」
そう言ってアーロンは歩き去り、砂浜を離れることはなかったが距離は相当離れてしまう。かけられる声を拒否して、近しくなろうというそれにも否定的だ。
見送ったルフィは憮然とした顔で呟いた。
「おれやっぱりあいつ嫌いだ。全然話聞こうとしねぇし」
「まぁまぁいいじゃねぇか。今のとこ反乱起こす感じもねぇしさ。それよりメシにしようぜ」
背後から気楽に言うウソップに連れられ、表情を変えたルフィは周囲に居た魚人たちと共にサンジの下へ赴き、ようやく食事を始めた。その後はいつも通り宴にも等しい大騒ぎとなる。
自身の仲間がそうしていると知りつつ、怒鳴る気さえ持っていなかった。
ビーチの端までやってきたアーロンは流木に腰掛けて落ち着く。
殴られた体の痛みに耐えて、ただ悔しいと考える。
なぜ勝てないのか。
どれだけ考えてもわからない。実力の差があるのか、悪魔の実を食べたからか、或いは覚悟や決意といった精神面の違いがあるのか。たかが人間と思う相手に、一度たりとも勝てない。
どうすれば勝てるのかを幾度も考えた。
修復したキリバチを使い、魚人ならではの鋭利な牙を使い、或いは純粋に殴りつけた。
だが試行錯誤したところでルフィから勝利を奪うことはできないままだ。
人間と仲良くする仲間を見て何も言わないのは、そういった時間が多いからかもしれない。

静かに海をじっと見つめ、物思いに耽る。
近頃、アーロンは自らの怒りを抑え込み、冷静に考えようとする傾向が強くなっていた。
腹が立つから殺す、ではだめだ。
忌まわしい敵に勝つためには陸で自らの力を十全に使う戦法と、如何なる場面でも余裕を失わない冷静さが必要だ。怒りに支配されているままではいつまで経っても勝てない。忘れた訳ではない魚人族の怒りを、自らの意志で支配できるようにならねば。
ある時からそう考えるようになったアーロンはすっかり口数を減らし、一人で海を眺める時間が多くなった。誰も寄せ付けず、背中は寂しげにも見える姿でひたすら考える。
まるでそれこそが修行だと言うかのよう。
結果こそいつも同じだが、怒りの念は徐々に抑えられるようになっているらしかった。
そこへ、いつも彼が現れる。
サンジが作った料理を皿に乗せ、二人分を持って隣にキリが座った。
片方を掲げてアーロンへ見せてやり、うざったそうに見てくる視線を受け止め、いつも通りの柔らかい微笑みを返すばかり。その場を離れる気はなさそうだとすぐにわかる。
追い返してもその場へ来る彼に気分を悪くして、伝わっているだろうに声をかけられた。
「ほい、ごはん。相変わらず頑張るねぇ。涙ぐましい努力だよ」
「向こうへ行け」
「なんで。せっかく持ってきてあげたのに」
「てめぇらと慣れ合う気はねぇ……向こうへ行け！」
「やだ。海賊は自由なんだよ。どこで食べようが勝手でしょ？」
好き勝手にのたまう彼はその場を動かず、睨まれたところでにこりと笑いかけるのみ。
自身とアーロンの間、流木の上にアーロンの皿を置き、先に自身の料理に手をつけ始めた。

忌々しい。
そんな風に思いながらもアーロンは手を出さず、舌打ちした後で再び海を眺める。
キリも同じ方向を見ながら静かに語り掛けた。
「ナミは事情が事情だし、ルフィはああだから仕方ないけどさ。ボクは別に嫌ってないよ」
「あぁ？」
「君のこと。多分似たタイプだと思うんだけどなぁ」
食事をしながらぼんやりと語られる。
その意味がいまいち理解できず、険しい顔をするアーロンは彼の横顔を見た。
緩い表情だ。海か空か、少なくともアーロンを見ずに話している。
返答を出す気などなかったが、気付けば彼も口を開くようになっていた。
「初めて聞いた時から思ってたけど、やり方が悪かっただけじゃないかな。そもそもナミみたいな反乱分子を生んでいなければこんな結果にはならなかった。ボクにやらせてくれればもっと上手くやる自信はあるよ。まぁボクも人間だけどさ」
「なんだと？」
「一番良い状態の支配って、自分が支配されてることを相手に理解させないことだと思うんだ。その点君たちは分かり易過ぎるくらい支配してることを知らしめてた。それじゃ反抗的になるのも当然だよ。本気で魚人の帝国を作りたいなら、村人と仲良くして魚人のイメージを良くしつつ、何かしらの対価として金を集めた方が得策だった」
「人間と仲良くだと？　フン、なぜおれたちがそんなことを……」
「ほら、そこが弱点。プライドに拘ってるようじゃまだ本気になり切れてない証拠だよ。そういう奴を突き崩すのは簡単だ。ボクの考えではね」
肉の切れ端を刺したままのフォークで指され、アーロンの表情が曇る。

キリはそれをぱくりと口にして咀嚼しながら続きを語った。
「人間好き嫌いが分かれば弱点も自然と見えるもんだよ。魚人も同じく。だから今日まで君は本気でボクらを殺そうとしなかった。海戦になればボクらじゃ魚人には勝てないのに、そうしようとしなかったのは陸で勝たなきゃ魚人が最強だって証明できないからでしょ？」
「それで十分だったからだ。今までは運が悪かった」
「思ってた通りだ。理解しててもやっぱり素直に頷かない。分かり易い奴だね」
ぐっと歯を食いしばった。
見透かされているとでも言うのか、キリの笑みが深くなっている。彼の言う通りアーロンは理解していた。海の上で戦えば勝てると知っていて、敢えて陸の上での決闘に拘った。それもおそらく以前キリから釘を刺されていた通り、魚人が最強だと証明するためだけに。
本気になり切れていない、という言葉に頭を金づちで殴られたような衝撃が走る。
もしも自分が本気になっていればすでに彼らと共には居なかったのだろうか。では不満を抱きながら一緒に居るこの状況はなんだ。
自分でも驚くほど動揺して逡巡する。
それを言われたということは、おそらくキリなら海で襲っていたのだろう。約束など無視して、否、約束があるからこそ敵は油断するのだ。
自身の甘さを思い知らされるかのような衝撃。
微笑むキリは食事を止めず、アーロンを見て呟く。
「ボクがそっちの側なら初日に落としてるよ。自分の船だけ沖に置いといて、メリーが島を離れた時を見計らって襲い掛かる。そうすれば陸地には帰れない」
「てめぇは、おれたちの裏切りを警戒してたってのか」
「そりゃもちろん。だからその時はその時でなんとかしたよ。流石に結果がどうなるかまではわからないけど、海にさえ落ちなきゃやり直すことはできただろうしさ」
アーロンが視線を外して海を見る。

全ては彼の掌の上。抑えようとしていた怒りが燃え上がり、だが同時に、なぜか自分が冷静な思考を失っていないことに気付いた。
どちらにせよキリは反応してきたようだ。ならば過去を悔いても仕方ない。
問題は次に自分がどうするか。
隣に居る彼を先に殺すか。今まで通りルフィを倒し、正々堂々と自由を勝ち取るか。
優先すべきは一味か、魚人としてのプライドか、或いは己の意志か。
思考はスムーズに動いていた。
「一番殺さなきゃならなかったのはてめぇってことか」
「水に濡らしたら一発で弱るよ。なんなら今日は甲板で寝ようか？」
「いいや……必要ねぇ」
明確な答えは告げずにそれっきりだった。
口を噤んだ様子を見てキリが苦笑し、手早く食事を終えて皿を空にする。傍らに置いて佇まいを直すとどことなく嬉しそうに同じ方向を見た。
言葉を止めると後方から楽しげな声が届いて、打ち寄せる波の音が心を落ち着かせる。
しばらく静寂に包まれて体の力を抜く。
思えばこれほど穏やかに肩を並べていたのは初めてかもしれない。
再び話を始めたのはキリだった。
「話戻るけどさ、ボクはそっち寄りなんだ。多分一人だけ浮いてる」
「意味がわからねぇな」
「改めてそう思ったのがナミから事情を聞かされた時だった。みんな君らに怒ってたよ、なんてひどいことするんだって。でもボクは、支配する方法に問題があるって思っただけだった。みんなみたいな感想は持ってなかったよ」
キリの声色は少し変わって静かな物。
聞かずに居ようと思っていたアーロンもいつの間にか聞いてしまっていた。

「ウチの連中はやさしいんだ。ルフィに感化されたのか、元々なのかはわからないけど。ほんと海賊には向いてないんじゃないかって思うくらい」
「てめぇはやさしくなさそうだな」
「まぁね。ああいう状況下で熱くなるより先に、冷静に考えようと努めてる。今となってはもう癖かな。多分傍から見ててやさしくない人間だよ。自分でもわかってる」
キリが目を伏せた。
「でもそれでいい。そういうのはルフィがやる。仲間はルフィを信頼してるから」
そして静かに目を開き、穏やかな海を見た。
共に船出してから一体何度覚悟しただろう。
小さな小舟で出航した時。軍艦島で海軍の艦隊に打ちのめされた時。自分より格上の敵と戦い死にかけた時。そして再び全員で合流した時だって。
一つ苦難を乗り越える度に、徐々に思考が変わっていく。
或いは、戻っていく、だろうか。
口調は柔らかく。仕草は幼い物で、声は静かに。
ただ表情だけはどこか陰りを見せて。
キリが呟いた。
「ルフィは一味にとっての太陽。ボクは闇だ。光が当たらない方がいい。ルフィに出来ないことをやるためには、誰にも気付かれない方がずっといい」
ひょっとしたら負い目があったのかもしれない。
しかし彼は確かな口調でそう告げ、アーロンは押し黙って受け止めていた。
何を返答するでもなく沈黙が続いた後、キリの笑顔がパッと元に戻る。
「ああいう人だからね、周りがフォローしなきゃいけないんだよ。本人も言ってたし。だから無理にでも好きになれなんて言わないけど、助けてやってくれないかな。魚人族の力でさ」

「ふざけるな」
間髪入れずに答えたアーロンは置かれていた皿を持ち上げる。
自身の分だろうそれをフォークを使って食べ始め、唐突にそうしながら自分の考えを告げる。
「おまえが何を考えてようが知ったことか。おれは必ずあいつを殺す。自由を勝ち取って魚人が天に立つ世界、アーロン帝国を作り上げてやる。今はそのために力を蓄えるだけだ」
「あれ？　この雰囲気だと任せろじゃなかった？」
「フン、誰が。いずれおまえも始末してやる。おまえが考え付かない方法でな」
掻っ込むように平らげると皿を置いて立ち上がる。
アーロンは再びルフィへ向かって歩き始め、微笑むキリに見送られた。
「麦わらァ！」
「ん？」
大きな肉にかぶりついていたルフィが振り返って気付く。
真っ直ぐ向かってくるアーロンを見つけても動きを見せる訳ではない。今は食事にばかり注意が向けられていて全く動こうとしていなかった。
そうと理解するからこそ、挑発のためアーロンが歩きながら声を大きくする。
「あの程度でおれが諦めるとでも思ったか？　休憩は終わりだ。もう一度おれと勝負しろ！」
「え～？　今おれメシ食ってんのに。おまえも食えよ、肉」
「受けねぇってんならそのまま食ってろ。代わりにおれはココヤシ村を滅ぼしに行くぞ」
「しょうがねぇ奴だな」
食べかけだった肉を置いてルフィが立ち上がる。
先に足を止めたアーロンを見据えるものの、歩き出す前に周囲のウソップや魚人に言う。
「うし、相手してやる。おれの分も残しといてくれよ」

「いやむしろ他人の分まで食ってんのおまえだからな。おまえこそおれたちの分残しとけよ」
ウソップに苦言を呈されながらもルフィが前へ進み、再びアーロンと対峙する。
確かに決闘は一日に一度と決まっていた訳ではない。挑戦は常にアーロンからだったがルフィが断ったことはなく、常に逃げることなく勝利を奪ってきた。それが船長としてできることだと自覚している節すらある。彼らを傘下に入れた以上は無視することはできない。
もはや恒例。ウソップもすぐに動き出して彼らの間に入る。
命を賭ける真剣勝負とはいえ、どこか催し物のように。
審判代わりに手を上げ、振り下ろした。
「それでは二回戦参りましょう。アーロン選手ＶＳルフィ選手！
ファイッ！」
意気揚々と告げられた結果、二人は同時に駆け出した。
「オオォ！」
「んんっ！」
両者真正面から激突し、どちらも全力を出して戦い始める。決闘であってケンカであり、己のプライドを賭けた一瞬であって、決して手を抜ける状況ではなかった。
激しい攻防によって生み出される音が場を盛り上げ、また魚人たちが騒ぎ始める。
それを見ながら、皿を二枚持ったキリは彼らの横を通り抜け、集団の下へと戻ってきた。
騒ぐ魚人たちを横目に調理を続けているサンジへ歩み寄る。
「サンジ、おかわり」
「自分で取れ。おれは今忙しい。んナミさぁ～ん！　シルクちゃ～ん！　今日の料理はどう？　お腹いっぱいになったぁ～？　おかわりはいかがでしょうか！」
「ありがとサンジくん。でももう満足だから大丈夫」
「あ～いっ！　デザート作るから待っててねぇ～！」
「なるほど。確かに忙しそうだね」

簡易で作られたキッチンに皿を置いてキリが微笑む。今日も彼の仲間たちはいつも通りだ。
近くに置かれていた椅子に座り、サンジの横顔を見る。
女性陣のためにデザートを作る彼は幸せそうに頬を緩めているが、キリが声をかければ少しは引き締まった様子。たまに視線を向けながら会話が始められる。
「傷も癒えたし良い頃合いだ。そろそろ出航しようか」
「お、いよいよグランドラインか」
「でもその前に最後の準備だけして行こう。グランドラインは最初の航海が大事だからね」
「そうだな。魚人どもが獲った魚ならあるが野菜を買い足しときたい。ナミさんとシルクちゃんが栄養失調にでもなったら大変だ。慎重に栄養バランスを考えねぇと」
「ボクらは？」
「海藻でもしゃぶってろ」
「ほんと分かり易い性格してるよね。ウチのクルーは厄介なのばっか」
「鏡見てから言えよ。おまえも十分大概だぞ」
手を止めないままサンジが尋ねる。
何かを察していたのか、どことなく真剣な様子も入り混じっていた。
それを受け流すかのようにキリが笑みを緩くする。
「さっき、アーロンと何しゃべってたんだ？」
「内緒」
「言えねぇようなことだったのか」
「人間誰しも秘密の一つや二つあった方が深みが出るんだよ。サンジにはないの？」
「さぁな」
「ちなみにだけど教えてよ。誰にも言わないから」
「バーカ。言ったら深みが無くなんだろ」
女性へ向ける笑みとも違って、少しばかり無邪気さを感じる屈託の

ない笑顔。
笑ったサンジは出来上がったばかりのデザートをキリに渡し、肩をすくませる。
明確な答えは返ってこなかった。だが追求しようとしない。
言わば彼はキリの理解者でもあるのだろう。
敢えて多くを語らなかった彼をそのままにして、いつも通りの態度で接していたのだ。
「何にせよ一味のためってやつだろ？　マリモが心配して仕方ねぇんだ。ガキじゃねぇんだから別に黙って何やってようが構わねぇけどな、あんまり無茶はすんなよ」
「ありがとう。サンジってやさしいんだね」
「おまえに褒められたとこで嬉しくはねぇけどな。必要なのはレディの声なんだよ」
「代わりにキスでもしてあげようか？　ボク男だけど」
「ふざけんな、死んでもごめんだ。いいから黙ってそれ食ってろ」
笑顔から一転して顔をしかめたサンジが吐き捨てるように言い、キリはからからと笑う。
調理を終え、デザートも作り終えたようだ。
皿を二枚持ったサンジは会話を終えてナミとシルクの下へ向かう。妙に軽い足取りでやはり男を見ている時とはあまりにも態度が違っていたが、これもすでに見慣れた物だ。
「ナミすわぁ～ん！　シルクちゅわ～ん！　デザートできたよぉ～！」
「女好きはいいけどよくあそこまで変貌できるなぁ。変な人だ」
他人事のように呟いてデザートに手をつけ、口に含む。その後で気付いた。
「あ、そういえばおかわり欲しかったんだっけ……まぁいいか」
一口食べてから気付いたものの、口の中に広がった甘味に気を良くして頷く。
周囲の騒がしい声を聞きつつ、細かいことを忘れて、キリはデザートに舌鼓を打った。

友ではなく、仲間ではない

コツ、と小さな音を立てて石を積み上げること数段。もはや十に届こうかという頃であり、凄まじい集中力で掌大の石が乗せられ、微妙なバランスで立っていた。

ふーっと息を吐いて落ち着く。

異常なほど集中しているせいか、大して動いていないのに体が熱くなり、汗が流れる。

男は上半身を裸で行為に勤しんでいた。

言わばこれはただの遊びでしかないものの、集中力を鍛える訓練としては抜群。それぞれ形が違うためバランスの取り方が違っており、これらを積み重ねようと思えば、たとえ慣れていようと中途半端な気持ちではやれない。繊細な手つきと心を無にすることが重要だ。

やがてもう一つ乗せられた。おそらくこれで新記録になる。

石の塔は揺れ、危険な状況を見せるもやがて揺れが止まった。

記録は更新されたようで、男が深く息を吐く。

その直後に部屋の扉がノックされた。

視線はそちらへ向けられ、口に銜えた二本の葉巻が煙を揺らして、返事をする。

「入れ」

「失礼します」

果たしてそれは声が原因か、扉を開けられた衝撃だったか。

途端に石の塔が崩れてしまい、せっかく積み上げたそれがバラバラと地面に落ちる。当然二人の海兵もそれを見ていて無視はできなかった。

扉を開けた海兵がまずいことをしたとばかりに表情を引きつらせる。

しかし積み上げた男は、別段何を想うでもなく散らばった石を見ただけだった。

「ぷはっ。だめだ、こういうのはやっぱり性に合わねぇ。おれには細かい作業がだめらしいな」

「も、申し訳ありません。お邪魔でしたか」
「気にすんな。ちょうど終わる頃だった」
男はそう言って肩の力を抜き、自らのジャケットを裸だった上半身に身に着けた。
海軍本部大佐、スモーカーである。
本部の大佐でありながらイーストブルーの派出所に勤務し、自身が守る町に来た海賊は誰一人として逃がしたことはない。ただし、それだけの実力を持ちながらグランドラインの勤務を外されているのは、上官からの命令にさえ従わない一面があったからだ。
付いたあだ名が〝海軍の野犬〟。世間的には〝白猟のスモーカー〟として知られている。
見た目にも恐ろしい強面で、力のある目は自身の部下でさえ緊張させ、物腰が柔らかくとも気が抜けない雰囲気がある。一方で部下想いな人物であることは知られていた。
傍らに置かれていた長大な十手を持って準備は万端。
自室を出る準備を終え、彼は部下からの報告を待った。
「で、何があった。海賊どもが攻めてきたか？」
「いえ、大佐にお会いしたいという方が来られてまして。監査役のウェンディ大佐です」
「ウェンディ？　チッ、あいつか。うちの監査にでも来やがったのか」
「それが、ただ話がしたいだけだと。ここを調べる気はないようです」
「面倒だな。それなら監査してもらった方がよっぽどマシだったぜ」
報告を聞いた途端スモーカーは歩き出した。
向かうべき場所は理解している。
報告に来た海兵を後ろに従え、部屋を出て迷いなく廊下を進んだ。
おそらく客人が待っているだろう一室を目指しつつ、さらに尋ねる。
「確か軍艦が壊されたっつってたな。そっちはどうだ？」

「修繕するにもあまりにひどい状態だったそうで、新しい物に乗り換えたそうです」
「例の海賊どもだろう。要するにその話ってことか」
「さぁ、そこまでは……」
「どっちにしろ面倒には違いねぇ。さっさと帰ってくれりゃいいんだが」
広い基地内であっても迷うことは一度もなく。
扉が開かれ、スモーカーはすぐにその一室へと辿り着いた。
足を踏み入れて最初に見えたのは、背を向けて座る女性の姿とその副官。
見知った人物だと判断して前へ回り、自身も椅子へと腰掛け、正面から見据えた。
もう何年振りになるだろうか。グランドライン勤務のウェンディ大佐である。
久しく見る顔は以前と変わっておらず、相変わらず人を喰ったような笑顔が確認できた。
「お久しぶりね、スモーカー大佐。相変わらず怖い顔で何より」
「用件はなんだ」
「ふぅ、男の人ってどうしてこうつれないのかしら。世間話にも付き合ってくれないの？」
「相手が悪いんでな。おまえじゃなけりゃ多少は考えてやったんだが」
「そう。変わってないようで安心したわ」
微笑みを湛えるウェンディは紅茶が入ったカップを手にしており、スモーカーの副官が出したのだろう。室内に居た彼女はスモーカーにも同じ物を持ってくる。
机にカップを置くのは短髪の女性だった。
たしぎ曹長はスモーカーの右腕として知られる人物だ。
時に鈍感な部分を見せるものの、基本的には聡明で気遣いができるやさしい人格で、剣士らしく刀を使う戦闘は女性と思えないほどの腕前。海賊が立ち寄ることが多い町でも引けを取らない。

上官であるスモーカーとは対照的に真面目なのも褒められた部分。
ウェンディは大層彼女を気に入っている様子で、視線に捉えるとふっと微笑んだ。
「スモーカーさん、紅茶です。どうぞ」
「たしぎちゃんは良い子よね。海軍の野犬にはもったいないくらい」
「うるせぇ。余計なお世話だ」
「ねぇ、私の部隊に来ない？　今の副官さんが怖くて怖くて。たしぎちゃんとなら上手くやれるんじゃないかなって思うんだけど。有能そうだしやさしそうだし」
「い、いえ、私はそんな」
「大佐。その怖い副官がすぐ後ろで聞いていることをお忘れなく」
雰囲気は和やか、とは言い辛い。おそらく原因はスモーカーとウェンディの副官だろう。たしぎとウェンディには敵意がないが、他の二人は思いのほか緊迫感を醸し出している。
特にスモーカーは突然の来訪に警戒していて、本題ばかりが気になっている様子だ。
「おまえと茶を飲んで落ち着く気はねぇんだ。ここへ来た理由を聞かせろ」
「せっかちね。でもそう来ると思ってたから、まぁいいわ」
カップをテーブルに置いて佇まいを直し、ウェンディが背筋を伸ばす。
少しは真剣になったのだろう。微笑みこそそのままとはいえ、どことなく空気は変わりかけた。
「イーストブルーの勤務はどうかしら。あなたには退屈過ぎるんじゃない？」
「どこに居ようがおれの職務を全うするまでだ。退屈なら結構。おれが真面目に働いてるって証明になるだろ。この町から逃げ出せた海賊は居ねぇ」
「そうね、おかげでイーストブルーからグランドラインに入る海賊はすっかり減ってるわ。飛ばされた甲斐はあったってことよね」

「言ってろ」
「グランドラインに戻りたいとは思わないの？　私から掛け合ってもいいと思うんだけど」
「結構だ。たとえ戻るとしてもおまえの手は借りねぇよ」
「あらそう。残念ね、友達だと思ってるのに」
くすくすと笑い、底が見えない様子にスモーカーの表情が険しくなる。
「そんな話をしに来ただけか？　ならさっさと仕事に戻れ。余計な寄り道をしたって噂だぞ」
「余計じゃないわ。ある海賊について調べてたってだけ」
「おまえが海賊に興味だと」
「珍しいと思う？　今回ばかりは特別でね。他の人には任せたくないの」
「例の新聞か」
スモーカーが呟いたことでウェンディの笑みが深くなった。
穏やかな様子はそのまま、目の色だけが変わり、彼女の本性を垣間見た気がする。やはりこれが彼女だとスモーカーがわずかに鼻を鳴らした。
「察しがいいわね。ええ、そう。ちょっと興味を持っちゃってね」
「おまえの軍艦が壊されたって話だった。あれは」
「本当よ。たった一人にボロボロにされちゃった」
「一人？」
「捕まえていた海賊だったの。もしもの時は私が抑える気だったけど、してやられたわ」
「フン……腕が鈍ったか。サボり癖が悪い影響に出たな」
「確かにそうかもしれない。でも、それだけじゃなかったことが証明されたわ」
スモーカーの眉間に深く皺が刻まれる。
新聞のことを言っているのだとすぐにわかった。新聞記者を呼び出し、海軍の不正を暴くと共に自分たちの名を一気に売った海賊の行い。大々的なパフォーマンスは確かに話題になっている。あらゆる

海の様々な町で、面白いルーキーが現れたと語る声は多いのだ。
問題なのはそれを彼女が面白がっているようで。
面倒だと感じて自然に声も厳しくなる。
「まさかそれを良しとしてるわけじゃねぇよな？　おまえがたった一人の海賊を逃しただけで大事になっちまった。どう責任を取る」
「もちろん捕まえるわ。いずれは、ね」
「いずれ？」
「私たちはこれからグランドラインに戻る。再会は向こうでってことになるわね」
妙な物言いにスモーカーは疑念を持った。その言い方では含みを感じる。何かを敢えて分かり易く隠しているような、そんな気さえした。
当然スモーカーが気付かぬはずもなく、真意を問われることも彼女は理解している。
「穏やかな発言じゃねぇな。それじゃあまるで、奴らがこれからグランドラインに入ると、そう言ってるように聞こえるぞ」
「そうね。多分間違いじゃないわ」
「おれがこの町に居たとしてもか」
「予感がするのよ。彼らはこれから世界を揺るがすほどの存在になる。きっとね」
「ただの予感でそこまで言うとはな。おまえも勘が悪くなったんじゃねぇのか」
その返答にくすっと声を出し、肩をすくめてウェンディが問う。
「あなたは聞いたことがない？　〝Dはまた必ず嵐を呼ぶ〟」
「D……？」
「あの船にはDの名を持つ人間が居る。一人は船長、モンキー・D・ルフィ。ガープ中将のお孫さんらしいわ。私の船にも情報を求めて会いに行ったくらいだし」
「ああ、そりゃおれも聞かされたよ」
「だけどもう一人。私が興味を持ってるのはそっち」
ウェンディが静かに問うた。

「リンブルの名に覚えは？」
「……忘れるはずがねぇ。世界政府と天竜人にケンカを売った大罪人だ」
「世間に知られていないけど、彼女にはダンナさんが居たの。つまり結婚していた」
そう聞かされた瞬間、彼女が言わんとしていることが全て理解できた。
スモーカーは視線の先にウェンディを置いたまま、傍らに立つたしぎへ叫ぶ。
「たしぎ、手配書を持って来い！　２０００万の方だ！」
「え？　は、はい」
あまりの剣幕に違和感を覚え、しかし命令とあってたしぎは部屋の隅へ走って手配書を探す。
幸いすぐに見つかった。
手渡された手配書を見つめ、スモーカーの顔に動揺が浮かぶ。
「髪の色は気になっちゃいた。だがあり得るはずがねぇと」
「これは秘密よ。お友達だから教えたの。外には絶対漏らしてはいけない……今はまだね」
指を唇に当ててしーっと、楽しげにウェンディが伝える。
興味があると語るだけあって何かを考えているらしい。その何かが恐ろしい気もする。
だが触らぬ神に祟りなし。
敢えて興味を見せなかったスモーカーは質問をやめ、ただ彼女の言葉に納得することにした。
葉巻の煙を吐き出し、頭を振って手配書をテーブルへ置く。
「一体何を考えてやがるんだか……まさか海軍を裏切ろうってわけじゃねぇよな？」
「それはないわ。私、これでも意外と真面目なのよ」
「フン、まぁいい」
疑問は残るが深く追求せず、背もたれに体重を預けてスモーカーが会話を打ち切った。

軽々しく動くような人間ではない。それを知っているからこそ、信用している訳ではないが心配はしていなかったようだ。これ以上聞いても無意味に終わる。
スモーカーが口を噤んだのを見てウェンディは佇まいを変える。
表情を引き締め、声色は真剣な物になった。
「用件を言えって言ってたわね。ここからは単刀直入に言うわ。スモーカー大佐、グランドラインに戻ってきなさい。あなたはこの海に居るべき人間じゃない」
「ほう……唐突だな」
彼女の一言に、スモーカーは嘆息しただけだった。
気にせず続けてウェンディが語る。
「イーストブルーは平和の象徴よ。あなたの尽力もあって近年この海からグランドラインへ入る海賊の数は減っている。だけど、この海にあなたを置いておくのは海軍にとっての損害よ。もったいない。上の命令に反発することがなければ今頃大佐の地位じゃなかったかもしれない、それだけの実力はある。それがイーストブルーの支部だなんて」
「大きなお世話だ。おれは不満を持っちゃいない」
「素直じゃないのはわかってる。あなたがこんな程度で満足する人間なはずないでしょ」
「ずいぶんおれを知ってる風に語るもんだ。人間、時間が経てば変わるもんだぜ」
「だけどあなたは変わるようなタイプじゃない。そんな人が野犬だなんて呼ばれる?」
「おれが望んだ名前じゃねぇ」
スモーカーは憮然として反発するが、そんな態度こそ彼が変わっていないことを証明している。昔を知る者にとっては懐かしいとも、彼らしいとも思う表情だ。
直属の部下であるたしぎはハラハラしているものの、ウェンディは上機嫌だった。
経歴で言えば、スモーカーはウェンディより先輩になる。

歳は彼の方が上。入隊も数年早いためウェンディは後輩のはず。それでも敬語を使うこともなければ気を使う素振りもないのは、家系の関係で彼女が幼少期から海軍に近くあったことと、入隊直後の若かりし日のスモーカーと出会ったからに他ならない。

成長した部分はあるだろうが根っこの部分は何も変わっていなかった。

数年ぶりにそれを再確認し、過去を思い出して思わず笑ってしまう。

海軍の野犬は、自身が間違っていると感じればたとえ上官の命令だろうと受け入れない。感情のままに反発し、理性で相手を言いくるめてしまう厄介さがある。

実力は本部も認めるほど。

自らの戦闘能力に加えて部隊の指揮能力、部下を始めとした海兵の訓練にも定評があり、彼が居る町で海賊による乱暴が行われないのはひとえに海兵の働きが目覚ましいからだ。

部隊はイーストブルーだけで言えば間違いなくトップに位置する実力と実績を持つ。

また、スモーカー個人を言ってもグランドラインで大活躍できるほどの力は持っている。

それなのにイーストブルー勤務となっているのはやはり命令に従わないため。実を言えば今までクビにされかかったことは何度もある。その度に同僚や部下が必死に訴えて残っただけのこと。

力はありながら、自分にも他者にも厳しい態度のせいで損をしている逸材。

前々からウェンディは彼がもったいないと嘆いていた。

「ちょうど今、海軍の中で遊撃隊を組織しようって話になってる。海賊の行動に対して全般的に対処することになる部隊よ。当然戦闘が主な仕事になってくる。私たちのようにグランドラインを駆け回って、次から次に海賊を倒すことになるでしょうね」

「初めて聞いたぞ、そんな話は」

「まだ組織中なのよ。そこで、私はあなたを推したいと思ってる。

いいえ、あなた以外には考えられないと言った方が正しいわね」
副官が持っていた鞄から資料を取り出し、ウェンディに手渡した。
彼女はそれをテーブルへ置いて話を進める。
「こんな退屈な庭、あなたには似合わないわよ。多少危険でも前線に立って戦い続ける方がずっとあなたらしい。自分でもそれを望んでるはず」
「遊撃隊、か」
「すでに耳に入ってるでしょうけど、何もこの海の事件だけじゃないわ。イーストブルー以外の三つの海でもこれから先、波乱を呼ぶ可能性を持つ逸材が出てきてる。グランドラインでもね。海軍だって四の五の言ってられる場合じゃなくなるわ。上もそれをわかってる」
テーブルに置かれた資料を手にすることなくじっと見つめ、スモーカーは動きを止めていた。
真剣に考えているのだろう。彼は頭が良い、自分で答えを決められるはずだ。
今はその背を押すため、必死に見えようとも真剣に声を発する。
「この先、グランドラインは大荒れになる。あなたの力が必要なのよ。上もそう思ってるから多少のことは目を瞑って判断するはず。チャンスは今だけだと考えて」
「なぜおれなんだ。他にも使える奴は居るだろう」
「あなたが適任だと、私が思ったからよ。こんな所で羽伸ばしてる場合じゃない」
ぴしゃりと言って、同僚と言うよりまるで身内が説教するようだった。
「自分の正義を貫き通したいならそれ相応の力を手に入れなさい。腕っぷしだけじゃなく、地位や発言力もその内に数えられる。今のあなたに足りないのは自分を貫けるだけの地位」
それはおそらく、監査役として数多の海兵を見てきたが故の発言だっただろう。
だからこそ信頼できた。
「今の海軍にはあなたが必要なの。グランドラインへ戻ってきて。

海賊を倒して、市民の安全を守らなくちゃ。監査役の私にはそれができないから」
「この町はどうなる」
「もちろん後任の人間が来る。心配しないで、腕の良いのを選ぶから」
「果たして、その言葉をどれだけ信じられるもんか……」
肩をすくめて溜息をつき、だがスモーカーは拒否しなかった。
今はそれで満足だとウェンディが微笑む。
彼は海兵でありながら、今の海軍の在り方に不満を持っているはずだった。不正を行う軟弱な海兵も然り、七武海制度を用い、海賊の手を借りて勢力の均衡を考えるのもそうだ。
上昇志向がある分、決して平和の象徴であるイーストブルーに居ていい存在ではないだろう。
当然彼が居なくなった後の海に心配は残るが、それも今しがた方々を巡って海軍内部の膿を除去してきたばかり。少しはマシになるはずだった。
偶然か、それとも必然か、海賊の時代が変わりつつある予感を得ていて。同じように海軍も変わらなければならない。変わらない物は時代に取り残されるだけだと知っていた。
海軍が変わるためには彼が必要だと、ウェンディは本気で思っている。
スモーカーならば信頼できる。彼が変えた海軍を見てみたい。
願いが叶えばいいと思いながら話を終え、彼女は唐突に席を立った。
「それとも彼らに会えば決断も速いのかしら。一度会って欲しいものね」
「どうだかな」
「気をつけて。あくまで噂だけど、今この辺りを革命軍がうろちょろしているらしいわ。あちらさんも腕の良い幹部を従えて活発になってるらしいし、海賊と同じくらい戦う羽目になるかも」
「関係ねぇ……おれはおれの正義に従うだけだ」

「フフ、今も昔もね」
席を立った後、たしぎに向き直って声をかけた。
すぐ傍には副官が控えるのだがさほど気にしておらず、いつも通りの態度に戻る。
「ねぇたしぎちゃん、スモーカー大佐が嫌になったら私のところに来てね。歓迎するから」
「は、はぁ……ですが私は、まだ大佐の下で学びたいことがありますので」
「私も大佐よ。しかも監査役だから色んなところに行けちゃう」
「い、いえ、あの、スモーカー大佐のことですっ」
「ウェンディ大佐、いい加減にしてください。あまり人様を困らせないように」
「あら怖い顔」
「当然です。他の部隊の者までからかうのはおやめください」
副官に怒られてしまい、困った顔で肩をすくめると彼女は歩き出した。
未練は残さず、心配もしていない。
スモーカーに背を向けて、ウェンディは部屋を後にしようとした。
その一瞬、言葉を投げ渡す。
「用は済んだからそろそろ行くわ。次はグランドラインで会いたいものね」
「フン、こっちはもう二度と会いたくねぇがな」
「あらそう。でも、出会う確率は高くなるんじゃない？」
くすりと笑って部屋を出ていき、困らせてしまったたしぎに謝罪した後、副官も続く。
二人の姿が廊下の向こうへ消えていく様を見ながら、残った二人が小さく呟いた。
「なんだか、すごい人ですね。今まで会ったことがないというか……」
「面倒なバカなんだ。気にすんな」
そう言った後でようやくスモーカーが、テーブルの上に残されて

いった資料を手に取る。
それを見つめてぽつりと言った。
「遊撃隊か……退屈せずには済みそうだがな」
自分へ問うように言われた言葉を聞き、振り返ったたしぎが彼を見ると、なんとなくウェンディの気持ちが分かる気がした。彼女もスモーカーの部下、それなりに人となりを理解している。
彼はグランドラインへ行くだろう。
納得した心地でそう思っていて、一度思えば疑えなくなっていた。
一方、海軍基地を出た二人は港へ向かって歩いていた。
用は済んだ。これからグランドラインへ戻る。当初の予定よりずいぶん滞在が長引いたが、思い出せば様々な出来事があって、不思議とウェンディは楽しそうに笑ってしまう。
それを知りながら敢えて指摘せず、隣から副官が尋ねた。
「来るでしょうか。スモーカー大佐は」
「来るわよ。きっと」
平和な町並みを歩きながら人々の顔を眺める。
海賊の襲撃に怯える必要がないため、人々の顔には笑みがあった。誰もが日々を謳歌している。
確認して、やはりあの男には似合わないと思った。
「これから荒れそうね。私たちも忙しくなるわよ」
「元々忙しいんです。余計な寄り道が多くてむしろ忙しさは増したほどですよ」
「そう？」
「そうなんです」
「まぁいいじゃない。ゆっくりやっていきましょ」
「そんな暇はありません。すぐに戻って次に取り掛かりましょう。仕事は山積みですよ」
「ふぅ、海軍の不正って多いのね。そんなに忙しいなんて」
「あなたのせいでスケジュールが押してるんです。いい加減現実逃避はやめてください」
「ひょっとして怒ってる？」

「当然です」
怒られてしまってもウェンディの笑顔は変わらず、代わりに副官が溜息をついた。
歩きながら空を見上げ、彼女が呟く。
「次はグランドラインで会いたいわね。いつ会えるかしら」
期待するような表情と瞳に、目敏く気付いた副官が顔をしかめる。
「誰と会うのを期待しているんですか」
「さぁ、誰かしら」
「ハァ……仕事は疎かにしないでください。スモーカー大佐のことは言えませんよ」
「大丈夫よ。私、結構真面目だし」
「流石に私も手が出ますよ」
「怒った？」
「当たり前です。私が今日までどれだけ苦悩してきたことか……」
副官からお小言を受けつつ、ウェンディは軍艦へ向かっていく。
その笑顔は晴れ晴れとしていて、この先に起こる何かを期待している様子だった。

ローグタウン

海を行く船が二隻ある。
どちらにも麦わら帽子をかぶったドクロが掲げられており、片方には鮫を模したマークの旗も掲げられている。麦わらの一味とアーロン一味であった。
航海は順調に進んでいるらしく、今日は快晴。
皆の調子は良いままだった。
のどかな空気が流れる甲板の上で、ある時大きな声が出される。
メリー号の船首に座っていたルフィが前方に島を発見し、嬉しそうに声を上げたのだ。
「島が見えたぞぉ～！」
嬉しそうな声に全員が気付き、隣を走るアーロンの船にも届く。
皆が前方の島を確認し始めたことにより、船上は一気に騒がしくなった。特にそれが顕著なのが麦わらの一味である。それぞれ思い思いに過ごしながら会話が弾むようだ。
「ほんとに見えたぞ！　真正面だ！」
「当たり前でしょ。真っ直ぐ進んでたんだから」
「ナミはすげぇなぁ～。おれなら絶対着かなかったぞ」
「でしょうね。そうだと思うわよ。ま、自慢することじゃないけどね」
ルフィの声に反応して船首まで足を運んだナミは、能天気な発言にやれやれと首を振る。
今回の航海は大して難しい物ではない。気候は穏やかなまま、人並みの航海術があれば誰であっても辿り着くことができる。できないのはルフィやゾロくらいだろう。
そのため自慢する様子もなく、呆れた顔で苦笑するのみだった。
振り返ったルフィは喜色満面の笑みでひどく楽しそうにしている。
ナミを見つめて無邪気に話しかけた。
「なぁ、なんて町だっけ」
「ローグタウン。始まりと終わりの町よ」

「あそこにあるんだよな。海賊王が死んだ処刑台」
「当然。イーストブルーじゃ一番ってくらい有名よ。見に行く？」
「うん」
間髪入れずにルフィが頷いた。
海賊王を目指す者として、その場所だけは逃せないのだろう。そこも考慮してローグタウンへ立ち寄る計画になったのかもしれない。発案したのはいつも通りでキリだった。
船長に対しては過保護な彼の事、事前に考えてそうだと思って苦笑する。
そう言えば彼の姿は見当たらなかった。シルクとサンジも甲板に居ないため、共に船室だろう。
ゾロはいつもと同じで欄干に背を預けて昼寝。
ウソップはメインマストの傍で物を広げ、武器の作成に余念がない。
いつも通りのメリー号は今日も上機嫌な様子だった。
扉が開いて船の中からキリが出てくる。
右手にはルフィの麦わら帽子を持ち、以前と違って首にかけられるよう紐が付けられていた。
「今日も船長が騒がしいね。そろそろ到着かな？」
「お、キリ。帽子できたか？」
「ご注文通りに。失くさないように頑丈にしといたから」
「しっしっし、サンキュ。これで安心だな」
船首から降りて腕を伸ばし、離れたままキリから帽子を受け取る。
頭にはかぶらず、紐を首にかけて背に垂らしてみた。すると初めてなせいか多少の違和感はあるものの、かぶっている時とは違う感触。少なくとも帽子を失くす心配はなさそうだ。
これに機嫌を良くして、ルフィはもう一度キリに礼を言う。彼も笑顔で受け取った。
続いてすぐにシルクがお盆を持って出てきて、次はサンジが出てくる。
二人の手には人数分以上のクレープがあり、どうやらおやつの時間

のようだ。
「みんな、おやつできたよ。今日はクレープ」
「おれとシルクちゃんの愛の結晶だ。欠片も残すなよ」
「おほぉ～！　やったぁ～！」
それを聞いてルフィが跳び上がり、急いでシルクから一つ受け取る。嬉しそうに食べ始めてすぐに食べ切りそうなほど豪快な姿だった。
肩を揺らして嬉しそうに、次にシルクは他のみんなにも配る。
同じくサンジも手渡すために移動していた。
「シルクちゃん、先にナミさんに渡してもらってもいいかな？　アホどもはおれがやるから」
「あはは、わかった。でもサンジが作ったのじゃなくていいの？」
「おれの料理はいつも食ってもらってるから。シルクちゃんのお手製も味わって欲しいだろ？」
今日のおやつ、クレープにはシルクが一人で作った物も多い。シルクが持っているお盆に乗せられている物がそれだ。すでにルフィが一つ美味そうに食べており、しかしまだまだ数がある。彼が大食漢なことを考慮した上で多く作っていた。
男とは違い、女性同士の友情もある。そう考慮した結果の気遣いだろう。
サンジの言葉に微笑んだシルクは子供っぽく肩をすくめ、素直に頷く。
「うん。ありがとうサンジ」
「いやいやお礼を言われるほどのことではぁ～！　あとルフィ！　シルクちゃんのばっか食うんじゃねぇよ！　ナミさんの分が無くなる！　こっちもあるからちっとは考えろ！」
「ふんがっ！」
言われて見てみると、いつの間にかルフィは頬が膨らむほどクレープを詰め込み、口の周りにはクリームが付着していた。
よっぽど美味しかったのか。シルクはくしゃりと笑って怒りはしなかった。

大食漢なルフィはサンジに任せ、移動したシルクはナミにも一つ手渡す。
お手製なだけでなくそれなりに自信がある。
ここのところ彼女はサンジの手伝いをしていて、料理の腕は着実に上がっている。丁寧で的確な教え方によってどんどん自信が増していき、おまけに女性とキッチンに立てるサンジも上機嫌。メリー号のキッチンは以前とはすっかり様変わりしていた。
受け取ったナミも期待して口をつけ、広がる甘味に頬が緩む。
反応は上々。安堵したシルクも一つ手に持った。
「おいしー。これもシルクが作ったの？」
「えへへ……サンジには敵わないけど」
「そんなことないわ。また違ったおいしさがあるのよ。いつもありがと」
「そう言われると嬉しいな。ねぇ、ナミも料理できるんでしょ？やってみる気ない？」
「私は遠慮しとく。あんまり柄じゃないし。料金ありでいいならやるけど」
「あはは、変わらないね」
変化はないと言うが、やはりココヤシ村の一件があってから彼女の態度は柔らかくなった。今は気兼ねなく笑っていて、嬉しくなってシルクもクレープにかぶりつく。
女性らしさより海賊らしさ。
がぶりと勢いよく噛みつけば口の端にクレープが付着し、ルフィと似た様相。やる人間が代われば不思議と印象も変わる。彼女のそれは子供っぽくて可愛らしいものだった。
ナミは苦笑し、指摘してやりつつ、二人して顔を見合わせ笑う。
他の面子もサンジから受け取り、おやつの時間を始めていた。
すでに甘く柔らかいクレープにかぶりつきながら、作業の手を止めたウソップが口火を切る。
「そういやそのローグタウンって海軍基地があるんじゃなかったか？」

「うん。休養中に確認したから間違いないね」
同じく食べながらキリが返答し、瞬間、ウソップの顔が忘れていたかのようにさっと青くなる。
つい先日、彼らは大きな事件を起こして新聞に載った。
時を同じくしてルフィとキリの両名が賞金首になっており、新聞に挟まっていた手配書も確認している。それがイーストブルーでは規格外の高額だとも知っていた。
そんな一味が海軍基地のある町へ入っていいのか。否、いいはずがない。
メリー号の上でずば抜けてネガティブな彼だけが不安に苛まれ、近くなった後で疑問を口にし始めた。すっかりおやつの手が止まってしまうほどの狼狽である。
「お、おいおい、まずいんじゃねぇか？　うちにはもう賞金首が居るってことを忘れんなよ。このまま普通に行ったら普通に見つかって普通に捕まるだろ。やめた方がいいんじゃねぇか？」
「そんなこと言ってたらこれから二度と補給できなくなるよ。大丈夫、って信じるしかないね」
「信じてたって現実は現実なんだぞ。なぁルフィ、せめて基地のない町とかよぉ。そりゃ確かに処刑台はあるかもしれねぇけどこの町じゃなくたって」
「シルク！　おかわり！」
「こっちにもあるよ。どうぞ」
「聞けよ！」
ルフィは全く聞いておらず、興味はクレープにのみ向いている。手に持っていた物を食べ切ってしまったのでシルクの下まで赴いて再び食べ始めた。
船長がこうなら話す相手は自然と副船長になる。
こちらはこちらで厄介とはいえ、少なくともきちんと話は聞いてくれるはずだ。
ただ、聞いたところで意見をのらりくらりと避けられるのも知っている。必然的にウソップだけが休息の一時ではなく本気になって

いった。
「今日まではなんとか無事だったけど、どこに危険が潜んでるのかわからねぇんだ。慎重になり過ぎて損になることはねぇ、そうだろ？」
「ごもっともな意見。全く異論はないよ」
「そうだな。でだ、海軍の基地がある町に入ると見つかる可能性も高いわけだ」
「うん。そうだと思う」
「だからおれは別の町へ行った方がいいと思うんだ。前に行ってたとこじゃダメなのか？」
「でもあそこは処刑台がないし」
「処刑台を見たって海賊王に会えるわけじゃないんだぞっ。それにおれたち海賊にとっちゃ不吉の象徴だ。海軍は自分の威厳を示すために海賊を捕まえて首を切っちまうんだからな」
「お、ウソップにも海賊の自覚ができたんだね。良い事だ」
何気ない口調でさらりと言えば、本気になっていたはずのウソップがぐらりと揺れる。
不意に彼の表情が緩んでしまっていた。
「そりゃおまえ、おれは魚人に勝った男だからな。新聞の一面にも載ったんだぞ！」
「村を出た時よりずっと頼りになったよ。今も強くなるための研究中でしょ？」
「ふふ～ん、当たり前だろ？　おれがしっかりしねぇで誰が仲間を守るんだよ」
「そうだね。キャプテン・ウソップに任せておけば大丈夫だ。船長と肩組んでる写真が全世界の人間に見られたわけだし、あれだけでも注目されてるよ、きっと。もちろん良い意味で」
「なっはっは！　まぁな！　今はまだ手配書がおまえとルフィだけだが、世界中の人間がおれに恐れを抱く時だってそう遠くねぇさ！」
「シロップ村のみんなも海賊になったって知っただろうし」
「ああ、あいつらに恥じねぇ姿を見せねぇとな……」

「ウソップが居れば心配なんてないさ。ってことで、ローグタウンでどう？」
「そこしかねぇな！　わっはっは、万事おれに任せろ！　矢でも鉄砲でも持って来ォい！」
親指をぐっと立てて笑い出す彼は巧みに篭絡されてしまったようだ。
高笑いが辺りに響いて食欲も戻り、キリは楽しそうに彼を見る。
そう珍しい光景ではない。仲間の特徴をよく知るキリならこういった事態がよくあった。
周囲に居た面子は至って普通だと普段通りに過ごしている。
立ったまま片手にお盆を持ち、片手でクレープを食べるサンジはどこか憮然とした顔で呟く。傍では座った状態でゾロも食しており、同意するように口を開く。
「大体おれはあの写真に納得いってねぇぞ。カメラマンの腕が悪いんじゃねぇか」
「違ぇねぇ。次はもっとマシな奴に頼むとするか」
「二人が写真写り悪いだけだよ。笑顔の練習でもしとけば？」
彼ら二人は自身の手配書が出なかったことを不満に思っているらしい。普段は文句を言うこともないが、ちょうどその話が出たため思い出した様子だ。
声をかけてきたキリを見やり、サンジの眉間に皺が寄る。
「大体おかしいだろ。ルフィの手配書はまだわかる、船長だからな。だがなんでおまえまで手配書が出るんだ。しかもいきなり２０００万」
「これでも一応副船長だよ」
「だからってだけで説明できるか。クソ、なんでおれの手配書が……」
「まぁいいじゃんか。新聞に載っただけで美女は口説けるよ」
「おいキリ、見くびるなよ。別におれは美女を口説くためにこんなこと言ってんじゃねぇ」
「そう？　もったいないね。せっかく注目されてるのに」

「いや、だが自然な流れでその話が出てきた時は仕方ねぇ。口説くためじゃねぇが気付かれたとしたって仕方ねぇだろう。写真はもう出回っちまったわけだからな」
「サンジは良い男だからね。女性がほっとかないよ、きっと」
「やっぱりそうかなぁ！　困っちまうなぁおいっ！　レディがおれを見つけちゃったかぁ！」
サンジもウソップ同様、理由は違えど、新聞に対する周囲の人間のリアクションを期待して舞い上がってしまった。どちらも分かり易い姿である。
傍から見ていたゾロはクレープを食べつつ嘆息する。
キリはからからと笑うだけだ。
「アホか」
「楽しい一味だね。みんな幸せそうで安心したよ」
「どいつもこいつもおまえの掌の上でな。ったく、先行き不安だぜ」
「まぁなんとかなるよ。ウチの船長は出たとこ勝負好きだし」
「だから不安だっつってんだろ。これでグランドラインに入って大丈夫なのか？」
「今の今まで寝てたゾロが言ってもねぇ」
人のことは言えないと言われ、睨むようにゾロがキリを見る。しかし怯えた様子はない。上機嫌に笑うだけで表情を変えることさえできなかった。
何とものどかな風景が広がっている。
海も穏やかで、しばし目を離した程度では船の向きも変わらない。のんきにおやつを食べて落ち着いているだけで徐々に島へ近付いていた。
目的地であるローグタウンが近くなったことにより、甲板に座る面々を見たナミが切り出す。
クルーもこれだけ数が居ればそれぞれ欲する物も違うだろう。グランドラインを航海するための準備をするには、それぞれ違った店に赴かなければならないはず。
それを思い出し、一番話がわかるだろうキリへ目が向けられた。

「そろそろ各自の行動を決めましょ。お金も無限にあるわけじゃないからね。ちゃんと計画して使いなさいよ。とりあえずキリ、何が必要？」
「えっと、サンジは食料の調達。ゾロは刀を買わなきゃいけないし、ナミは航海に必要な物を揃えなきゃいけない。あとルフィは処刑台だっけ？　他のメンバーは手伝うか自由行動だね」
「だって。それじゃ一人ずつ決めていきましょう」
ナミがその場を仕切って決めていく。
こういった場合、常にほにゃほにゃしてやる気に欠けるキリよりナミの方が頼りになった。頭脳労働はどちらも得意としているところだが非常時以外は本気にならないキリの態度は知れている。
テキパキ進めようとナミが一段高くから皆を見回し、考えながら言葉にしていった。
「まず私は、キリに教えてもらったログポースっていうのを用意しなきゃいけない。あと海図を描くための道具もある程度揃えなきゃ。せっかく大きい町に来たんだし、あんたたちのも含めて服もね。シルク、付き合ってくれる？」
「あ、うん。手伝うよ」
隣に居たシルクがすぐに頷き、文句もなく決定する。
続いて目を向けられたのがゾロだった。
「ゾロの刀は必要だろうけど、一人で歩かせたらいつまで経っても帰って来ないかもしれない。ウソップ、あんたがついて行って迷わせないようにして」
「おれか？　おれも買おうと思ってたもんがあるんだが」
「刀の前でも後でも好きにしなさいよ。どうせ時間が限られてるわけじゃないし」
「おれは一人でいい」
「あんたの意見は却下。あんなに小さいココヤシ村で迷う奴なんか信用できるかっ」
奇跡的な方向音痴で知られるゾロはウソップに任せ、問題児はもう一人。

すっかり少なくなったクレープを頬張るルフィを見て、次いで視線はキリへ向かった。
「ルフィはキリが見ること。保護者なんだからよろしくね」
「あいあいさー。慣れればそう難しくもないんだよ」
「それじゃ慣れるまではあんたに任せるわよ。サンジくんは一人になるけど、大丈夫よね？」
「それって信頼されてるってこと？　だったら何も問題ないさ」
「よし、仕分け完了。これで決定ね」
ちょうどルフィが口の中の物を全て飲み込んだ。
クレープも無くなった頃で、ナミが問えばすぐに返答が返ってくる。
「滞在はどうする？　まだ日は高いし、補給してすぐに出航するか、大事を取って町で休むか」
「んん、そうだな。すぐに出よう。早くグランドラインに行きてぇし」
「それじゃ、自由行動は二時間を目途にしましょ。最終的にメリーに集合」
「おう！　それで行こう！」
ルフィが元気よく答えたことで最終的な決定が下され、肩をすくめたキリが動く。
欄干に寄って見るのはアーロンの船だ。多くの者が甲板で寛いでおり、メリー号とは違ってさほど浮かれている雰囲気でもない。物静かで退屈そうな雰囲気がある。
身を乗り出したキリが声をかければ、反応したのはアーロンではなくはっちゃんだった。
「アーロン、そっちはどうする？　町に行く用事は？」
「ニュ～、おれたちは行かねぇんだ。船番してるよ」
「じゃあメリーも頼むよ。誰も居ないからって沈めないように見張ってて」
「大丈夫だ。みんなアーロンさんが麦わらに勝つまで手ェ出すなって言われてる」

「余計なこと言ってんじゃねぇぞハチ！」
甲板へ持ち出した椅子に座って、腕を組んで不機嫌そうにしているアーロンが怒鳴りつけたことにより、はっちゃんは焦った様子で口を噤んだ。
聞かれたくはなかったのか。
口や態度は不満を訴えるのに存外素直な態度に笑いつつ、手を出さないと安心して任せられる。
船は彼らが居れば大丈夫だろう。残る人間を選ばなくて済む。
だんだん島も近付いて来た。比例してルフィやウソップが楽しそうにしている。
身を乗り出してそのまま島の姿を眺めたキリは、大きな町に想いを馳せる。
「問題なのは噂に聞いた白猟のスモーカーか。何事もなく済めばいいけど……まぁ無理か」
「うおいっ!?　無理なのかよ！」
背後からウソップの驚きがぶつけられ、笑顔で振り返る。
仲間を見回してキリが気楽に告げた。
「とりあえず行ってみよう。なんとかなるよ、多分ね」
「よぉし野郎どもォ！　町に入るぞ！　その次はやっとグランドラインだ！」
左右の拳を突き上げてルフィが叫び、同意するように皆が勇ましい声で応えた。
かくして、メリー号は港から多少離れた位置にある岩場の岸辺に辿り着き、ゆっくりと足を止めて航海を終える。短く簡単な航海で疲れも見せていない。
イーストブルーで立ち寄る最後の島になるだろう。
始まりと終わりの町、ローグタウン。
東西南北四つの海で最も有名な町へ辿り着いたのである。

三刀流の復活

船の動きが止まってすぐ。真っ先に動いたのはルフィだった。
町を眺めて好奇心が抑えられなくなり、メリー号から飛び出して一足先に陸地へ降りる。
自身がキリと行動すると知っているため、待ち切れない様子で呼んでいた。
「よーし着いたァ！　行くぞキリ！　処刑台だ！」
「はいはい。それじゃみんな、またあとで」
キリも同じく飛び降りて、二人揃って行ってしまう。歩いてはいるが思いのほか速く、脇目も振らずに去っていく背は瞬く間に町へ近付いていった。
すっかり置いていかれた形で、呆れた様子でナミが肩をすくめる。
いつも通りと言えばそれまでだが相変わらず恐怖心を持たない姿だ。
あれでは騒動を起こすのもそう遠くないだろうとして、自分も急ぐべく振り返る。
「ルフィの調子が良い時は危ないわね。私たちもさっさと済ませましょ」
「うん。行こっか」
「町の入り口までお供しますよ、レディたち。まずはお手を」
「ありがとサンジくん。でもそれは大丈夫だから」
先に行った彼らのように飛び降りはせず、ゆっくり地面へ降りて隣の船へ目をやる。
ナミが船上のはっちゃんを見つけて声をかけた。
「ハチ、メリーのこと頼むわよ。掠り傷一つつけさせないで」
「了解だぞ。みんな楽しんで来いよぉ～」
親しげに手を振る彼に対して手を振り返し、ナミとシルク、そして町に入るまでは同行するサンジも歩き出した。和やかに談笑しながらメリー号を離れていく。
残っていたのはウソップとゾロだけだ。

ウソップは何やら買う物をメモに纏めていたらしく、少し遅れて船の中から出てくる。
待ち切れない様子でゾロは先に船を降りていて、どこか呆れた顔でもあった。
「おいウソップ、まだか？」
「待て待て、もう準備できた。おまえこそ買う物わかってんのか？」
「おれが買うのは刀だけだ」
「楽でいいよなぁ。武器屋に寄ったらすぐ用が終わるんだし」
ウソップも船を降りて、ゾロと並ぶと歩き出す。
黒っぽい色の硬い岩場を歩き、転ばないよう足場を選びながら進む。かなりデコボコしていて危なげな場所だった。慎重になる必要もないがどうしても視線は下を向く。
歩きつつ、ゾロがウソップへ尋ねる。
どうやら彼が行きたい店は一つだけではないらしい。
一体なぜそれほど目的地が多いのか、聞いておきたかった。
「おまえはどこに行く気なんだよ。武器が欲しいんじゃなかったか？」
「その武器を作るためには色々と必要なんだよ。おれの手先の器用さにかかりゃスーパーだって宝庫になるんだぜ？　色んな店に行きゃもっと精度は上がる」
「そうかい、なんとなくは理解できるが。今は何作ってんだよ」
「そうだなぁ。これは聞くだけでも恐ろしいだろうが、ウソップ輪ゴームを強化させるべく割り箸と強いゴムを使って作られる、ウソップ輪ゴーム銃なんてどうだ？」
「ただのおもちゃじゃねぇか」
「おもちゃじゃねぇよ。おまえは知らねぇのか？　目の前で輪ゴムを飛ばされる、その構えを見せられた時の恐怖を。知らねぇんなら試してやってもいいぞ」
「いや、いらねぇ」
「ウソ～ップ――！」
「いらねぇっつってんだろ」

和やかに話しながらすぐに町の入り口へ辿り着く。そう離れた距離ではなかった。
客人を迎えるための門があり、アーチのようなそれにローグタウンと記されている。
目前に見えるだけでものどかな空気で、少し前まで立ち寄っていた町よりずっと大きく、人の数も多い。言ってみれば海賊とは無縁の平和な町だ。
漠然と見ただけでもいくつかの店が確認できる。ただすぐ近くに武器屋はないようだ。
ほーっと口を開けて感心するウソップは、今まで見た中で最も規模が大きい町に驚いていて、隣では別段感動もなくゾロが歩き出していた。
先に行ってしまおうとする彼を見つけ、ウソップはまた違った驚きを与えられる。
「おいおい待てよゾロくん！　なんでおまえが先頭になる!?」
「あ？　問題でもあったか？」
「問題しかねぇだろ！　いいからおれについて来いって、危ねぇから！」
「別に敵の姿はねぇが」
「意味が違ぇんだよ！　おまえが先行くと迷うだろうが！」
彼の戦闘の腕に関わらず、道に関しては任せておけないとウソップが必死になる。このまま行かせれば同じ道をぐるぐる回る可能性すらあった。しかし言われたゾロは納得していないのか、なぜかそう簡単にはウソップの後ろに回ろうとせずに、尚も進んでいってしまう。
慌ててウソップが小走りで追い始めた。
「待てってっ。おまえいい加減自覚した方がいいぞ」
「ここに来んのはおまえだって初めてじゃねぇか。そう変わらねぇだろ」
「いや変わるだろ。今までおまえを一人にしてよかったことがねぇんだぞ」
「んなことねぇ」

「実はバカなのか？」
「誰がバカだ。失礼なこと言うな」
「強がるのはやめて、なぁ？　もう認めろって。その方が楽になれるぞ」
「うるせぇ」
あくまでも認めないため、結局は肩を並べて歩くことになった。
むっつりした顔のゾロをなだめながら、ウソップがやれやれと溜息をつく。
町はかなり広そうだが、真っ直ぐ歩いているだけで武器屋はすぐに見つかった。
考えてみれば平和に暮らす町人には武器など必要ない。それを求めるのは外からやってきた人間、海賊か賞金稼ぎくらいの物だろう。町の入り口から比較的近い場所に存在していて、目立つように、尚且つ分かり易く剣を模した看板が掲げられていた。
見つけた以上はここを先にすべき。
二人は言葉を交わすこともなく同じことを考え、そちらへ向かう。
流石のゾロもそこから迷うほどひどくはないだろう。
からかうようにウソップが笑いかけた。
「よかったなゾロ。これじゃ流石に迷えねぇだろ。先頭でもいいぜ」
「てめぇ、斬るぞ。なにへらへらしてやがる」
人の数もそれなりに多いが進むのに苦労するほどではなく。
歩行者の間をすり抜け、二人は武器屋へと入って行った。
店内はこじんまりとした様相だった。奥が自宅を兼ねているのか、外観よりも小さいという印象を受け、それでも店内には多種多様の武器が並べられている。
棚がいくつか並べられており、店の隅には数個の樽が置かれ、刀がたくさん置かれていた。
ここならばそれなりの物が揃うだろうとの判断。
先に入ったゾロがカウンターの向こうに居る店主へ声をかけた。
「悪ぃ、邪魔するぜ」

「へいっ、いらっしゃい！　お客様今日は何をお求めで？」
独特な髪型の小柄な男だ。
店主の名はいっぽんマツ。
客と知って両手を擦り合わせながらにこにこと接客用の笑顔を浮かべ始めた。
どことなく胡散臭い人間だと二人同時に考えた。しかし物が揃えばそれでいい。ゾロは気にせず店内を見回しつつ、いっぽんマツへ説明する。
「刀を二本欲しい。だがあいにく持ち合わせがなくてな」
「それじゃいくらぐらいのご予定でしょう？　ウチは上から下まで色々ありますからねぇ」
「使えんのは十万だ。これで頼めるか」
「十万ベリー？」
それを聞いていっぽんマツの様子ががらりと変化する。
笑みは消え、不服そうな態度を微塵も隠さなくなってしまい、だらしない姿勢でカウンターにもたれかかってしまった。どう見ても客商売の態度ではない。
あからさまな姿にはウソップも呆れ、気にしていないゾロの後ろで思わずツッコむ。
「ハンっ。一本五万じゃ大した刀は揃わねぇな。良い武器を使うには金が必要なんだよ」
「こいつ分かり易い奴だな。一気に顔変わったぞ」
「久々に客が来たと思ったら貧乏人かよ。ったくついてねぇなぁ」
「ひどい言われようだぞ。客なのに」
すっかりやる気を失ってしまったいっぽんマツは頬杖を突いて溜息さえついてしまう始末。
呆れてしまうほどの身代わりの速さだった。思わずウソップが呟くが反応もせず、態度を改める気もなくて投げやりな接客になってしまう。
「あぁ、一本五万か？　そっちの樽に突っ込んでんのがそうだよ。どれでも持ってきな」

「悪いな」
「しかし刀三本とは変わってるな。まるでどっかの海賊狩り――おぉ？」
刀が置かれている樽を目指そうとしたゾロを見て、ふといっぽんマツの表情が変わる。
彼の腰にはすでに一本の刀があった。その上で二本も欲しがるとは変わった奴だ、と思って見ていれば、その刀が妙に目に付く。
白塗りの鞘と柄。どうも普通の物ではなさそうだ。
長く武器屋をやっているため、武器に関しては目利きに自信がある。
いつの間にかわなわなと震え始め、彼は恐る恐る口を開いた。
「よ、よぉ……その腰にある刀、ちょっと見せちゃくれねぇか？」
「なんだ、急に」
「いやその、い、一応査定してやろうってことさ。そいつの銘は知ってんのか？」
「いや。普通の刀だろ」
「そ、そうか。まぁ見せてみろよ。悪いようにはしねぇからよ」
緊張から脂汗を掻き、明らかに挙動不審な様子でいっぽんマツが誘う。見ていて怪しかったがゾロはカウンターまで戻って手渡す。銘を知るくらいは問題ないだろうと思っての行動だ。
その刀を手に持ち、触れた瞬間、一本松は驚愕する。
それは凄まじい出会いだった。
（こっ……これはっ!?）
触れた瞬間にわかってしまった。これは本物。感動を覚える一本だ。
動揺がひどくなって目を見開いて驚く。
間違いない。尚且つ、初めて見た。
全身が震えるほどの衝撃に包まれてしまい、傍から見ていれば危なく思えるほどの変貌っぷり。見ていた二人は当然不思議そうにしている。
驚き、動揺したいっぽんマツはすぐに考え始める。

これほどのお宝、価値も分からない素人に持たせたままなのはもったいない。というよりそんな理由云々を考えるより先に、ただ純粋に欲しいと思った。
この一本が欲しい。武器に携わる者としてそう思わずにはいられなかった。
ではどうするか。簡単なことだ、自身は武器屋なのだから。
交渉すればなんとかなるかもしれない。
いっぽんマツは動揺を抑え込み、涼しい顔になって刀を置いた。
「だめだ、こいつはナマクラだ」
「なんだと？」
「ひぃっ!?　すいません、嘘ですっ」
一言呟いた直後にゾロが胸倉を掴み、いっぽんマツがまた血相を変えた。慌てて謝罪すれば許してくれたようで、手は離されるが、さっきより幾分顔つきが険しくなっている。
慎重に言葉を選ばなければならない相手らしい。
今度は考えながら、なんとか穏便に話を進めようと話し始める。
「まぁ聞け。ナマクラではねぇが、こいつよりランクが高い刀はウチにもある。そこで……おれがこいつを買い取ってやろう。十万ベリーでどうだ？」
「あぁ？　何言ってんだよ」
「そうすりゃおまえの持ってる十万ベリーと合わせて二十万。刀三本買っても一本五万ってことはねぇだろう。少しはマシなもんが揃えられるんじゃねぇか」
「必要ねぇよ。一本五万で十分だ」
「ま、待て待て。なら二十万出そう。そしたら一本で十万使える」
「だから、必要ねぇって」
「ええいっ、なら三十万出す！　これでどうだ！」
何やら必死の形相になっていることに違和感を覚えるも、ゾロはきっぱりと言い切る。溜息交じりで呆れた顔、そんな気はさらさらないと表情が告げていた。
「どれだけ積まれても譲れねぇんだ。こいつは――」

「あぁっ!? これはっ!」
その時、見守るウソップの横を通り抜け、カウンターへ駆け寄る人物があった。
バンッと勢いよくカウンターに手をついて前かがみに、置かれた刀を見つめている。短髪で眼鏡をかけた女性だ。突然の行動にゾロといっぽんマツも驚いた。
だが驚きはすぐに別の物に変わる。
いっぽんマツは名前を言うなと心の中で叫び、ゾロは、その容姿に度肝を抜かれた。
刀を抜いて、眼鏡を外して刀身を眺める姿、顔、表情まで。在りし日に見た、親友の姿その物。
幼き日に死んだ彼女、くいなが、成長してそこに居るかのよう。
目を見開いたゾロは我を忘れ、時を忘れた。
やがてその女性、たしぎが刀身に見惚れて幸せそうに微笑み、ぽつりと呟く。
再び時が動き出したのはそれからだった。
「これ、和道一文字ですよね」
「……和道?」
(あああああっ、言っちまったぁぁあああっ!)
笑顔と呆然と悲痛な叫び。三者三様で奇妙な空気が店内を包む。
少し離れて俯瞰で見ていたウソップは肩をすくめ、我関せずとばかりに店内の棚を見始めた。
カウンターではいくつもの驚きが折り重なっている。世に知られた名刀をその手にしたこと。名刀だとバラされてしまったこと。死んだ友人にそっくりな人物を見つけたこと。
事態は困窮を極めているらしかった。
だが、たしぎは心から嬉しそうにゾロの刀を見つめており、その自覚がない様子。
好奇心のままに呟けば、それだけで周囲の空気が変わる。
「きれいな直刃……よく手入れされてる。こんなに美しい刀があるなんて」

「あ、あぁ、まぁ、それなりだな。大体十万くらいの価値だが――」
「十万？　とんでもないっ！　これは時価一千万ベリーはくだらない名刀ですよ！　大業物二十一工の一振りで、喉から手が出るほど欲しい人なんて数え切れないほど居るくらいの！」
「なっ、ななっ――」
「それじゃおっさん、ゾロを騙そうとしたってことか？　態度悪い上に最悪だな、おい」
たしぎの叫びを聞いて、棚にあったピストルを手にしていたウソップが言う。それを聞いていたいっぽんマツもこれ以上の言い訳はできず、悔しそうに歯噛みする。
一時とはいえ商売を忘れてしまった。それは事実だろう。
ただそれを言った相手が相手で、素直に謝るのも癪らしく、直後には感情的に開き直った。
「だぁーくそっ！　余計なこと言いやがって疫病神が！　せっかくの商談を邪魔しやがって！」
「開き直りやがったぞ」
「どの道渡す気はねぇっつってんだろ……」
「あ、あの私、何か余計なこと言いましたか？」
「もういい！　てめぇはこの〝時雨〟を取りに来たんだろ！　もう磨き終わってるよ、代刀置いてとっとと帰りやがれ！」
そう言っていっぽんマツはカウンターの裏に置いていた刀を持ち出し、投げつけた。たしぎは危なげな足取りでそれを受け止め、よろよろと姿勢が流れていく。
しかし受け止めきれずに勢いを殺さず棚に突っ込んでしまった。
「あっ、わっ……あぁっ」
「何やってんだてめぇ!?　店ん中荒らすな！」
棚を倒して武器が散らばる。大きな物音が立ってたしぎはその中心で転んでいた。怪我はないようだが無視できないほど騒々しい様子である。
何やら面白そうだとウソップがゾロの傍に戻り、同じく彼女を見つめる。

ただ、ゾロだけはどこかぼんやりしている顔だった。
「すげぇなあいつ。シルク以上にドジだぞ」
「ああ……」
「ん？　どうしたゾロ、なんかあったか？」
「いや。昔の知り合いに似てただけだ。大したことじゃねぇ」
「似てる？　あぁ、あの姉ちゃんか」
がちゃがちゃと武器の下から這い出て、慌てて頭を下げたたしぎがいっぽんマツに怒られながら武器を拾い始める。それを見てウソップが駆け寄り手伝い始めた。
ゾロはまだぼんやりしているようで、駆けつける余裕はなく。
その間にもいっぽんマツが小言を言うようにぶつぶつ言葉を吐き出していた。
「まったく、あのスモーカーって野郎が来てからこっちは商売あがったりだぜ。海賊も賞金稼ぎもめっきり近付かなくなっちまった。今じゃ海兵様の刀を磨くだけの商売とはなぁ」
「そんな、スモーカーさんの尽力でこの町は平和になったんでしょう？」
「それじゃこっちの商売が困るっつってんだよ！　おかげで家計は苦しくなる一方だ！」
いっぽんマツの言葉にたしぎの表情は曇り、棚を立て直しながらウソップもそれを確認する。
スモーカーという名には覚えがある。キリが言っていた有名な海兵。会わないことが肝心だとアドバイスされたことはよく頭に残っていた。
どうやらあまり好かれていないらしい。
町が平和になったことで苦労する稼業もあるのだと、一つ勉強になった瞬間だ。
「たまに客が来たと思えばたかだか十万ベリーの買い物。ここはスーパーじゃねぇんだ、武器にしてみりゃずいぶんな安物だぜ。未来はちっとも明るくならねぇな」
「そう腐るなよおっさん。頑張ってりゃ良いこともあるって」

「ふん、どうだかな。おう、おめぇもさっさと刀選べよ。樽に入ってる奴だ」
顎で指し示されたことでゾロがそちらを見た。すでに分かっているが樽の位置を教えられ、店の隅にあることを確認する。安物とはいえ数はかなりあることはわかった。
ちらりと見れば、ウソップとたしぎは簡単に片付けを終えていた。もう手伝う必要はない。やっと動き出したゾロが樽へ向かい、刀を選ぼうとする。
ウソップがたしぎに尋ねたのはそんな時だ。
「しっかしゾロが持ってる刀がそこまで価値があるとはな。あんた、刀に詳しいのか？」
「は、はい。と言っても少しだけですけど」
「ちょうどいいじゃねぇか。なぁゾロ、この姉ちゃんに選んでもらおうぜ。同じ五万ベリーなら少しでも良いやつ選んだ方がお得だろ？」
「まぁ、そりゃそうだが」
ゾロへ問いかければなんとか頷かれる。するとウソップがたしぎに向き直った。
「あいつ今から刀を二本買うんだけどよ、あの樽から良いやつ選んでくれねぇかな。おれはそもそも剣士じゃねぇし、あいつは腕こそあっても知識はなさそうだからさ」
「そういうことなら、いいですよ。私で役に立つならご協力します」
「よし、決まった。おいゾロ、強力そうな助っ人が見つかったぞ」
「ケッ。五万で大したもんがあるかよ……」
つまらなそうにいっぽんマツが呟くものの、相手にはされていない様子。
ウソップとたしぎもゾロの傍へやってきて樽を覗き込み始めた。
一つ一つ手に取り、少し抜いてみて確認していく。そうしながらたしぎは、腰に和道一文字と呼ばれる刀を提げるゾロに興味を持っていたらしく、笑顔で声をかける。
「すごい刀をお持ちですね。家宝か何かですか？」

「いや、元は友人のもんだ。まぁ今となっては形見さ」
「そうですか……すみません、余計なことを」
「気にすんな。もう昔のことだ」
二人の会話を聞きつつ、そう言えばそんな話は聞いたことがなかったとウソップも驚く。
思えばゾロの過去について話したことなどあっただろうか。自分から話すタイプではないし、今まで質問するタイミングもなかった。初めて聞くのも当然だろう。
新たな発見をして、邪魔をしないよう二人の会話を耳にする。
「でも、失礼かもしれませんが、珍しいですね。刀を三本も持つなんて例の海賊狩りみたい」
「海賊狩り、ねぇ」
「知りませんか？　元は有名な賞金稼ぎで、今は海賊になった男です」
知らないはずがない。それはこのロロノア・ゾロを指して言う異名である。
静かに慌てたウソップは念のため誤魔化そうと、声だけで二人の間に割って入った。
「ま、まぁこいつは、その海賊狩りのファンみたいなもんさ。どうしてもやってみてぇって聞かなくてよ。おれまで買い物に付き合う羽目になっちまったんだ」
「誰がファンだよ」
「バカ、恥ずかしがるなよ。言ってたじゃねぇか」
「ファン、ですか」
ウソップの言葉を聞いてたしぎがわずかに俯き、真剣な顔つきになる。誤魔化したつもりが妙なことを言ってしまったらしい。何やら雰囲気が変わっていた。
顔を上げたたしぎはゾロを見つめ、海賊狩りに憧れているだろう男へ告げる。
様子の変化から自然にゾロも彼女を見ていた。
二人の視線が合わさり、やけに真摯に伝えられる。

「余計なお世話かもしれませんけど、賞金稼ぎになりたいならやめておいた方がいいです。剣を使って人の役に立ちたいなら海軍はどうでしょうか？」
「唐突だな。思い入れでもあんのか？」
「ありますよ。私は、これでも海兵の端くれですから」
真剣に伝えられて、まず先にウソップが驚愕した。
とてもそうは見えなかったが、相手は海兵。とんでもない人間に声をかけてしまったものだ。もしここに居るのが先日新聞に載ったばかりの海賊だとわかれば、簡単に逃がしてもらえるはずもないだろう。彼女もまた自身の刀を受け取ったばかりなのだ。
戦闘になれば厄介だ。ゾロが居るもののウソップが慌て出す。
そんな彼を背後に置いてたしぎと見つめ合い、ゾロは静かに耳を傾けている。
「刀をお金稼ぎの道具にするなんて、許せません。私は海兵ですけど、海賊だけじゃなくて賞金稼ぎにもあまり良い印象は持てないんです」
「よっぽどの刀好きか。あんたも珍しい奴だな」
「そうかもしれません……どうしてこの時代、悪が強いんでしょう。名のある剣豪たちはみんな海賊だったり、賞金稼ぎだったり、世界中の名刀が彼らの手にあるんですよ。刀が泣いてます」
「さぁな。それぞれ理由ってもんがあるんだろ。あんたがそう思うのと同じさ」
ゾロが不敵に笑って言ったところでたしぎは納得できていない顔つき。
視線を外し、俯いた後、次に顔を上げた時は自分に言い聞かせるように言った。
「だから私は、悪人の手に渡った世界中の刀を回収することを誓ったんです。作られた刀は罪のない人を斬りたいなんて思ってない、そう思うから」
「へぇ……なら、こいつも奪うのか？　和道一文字っつったか」
宣言を受け取り、笑みを深めたゾロが自らの刀に手を伸ばした。

一千万ベリー以上の価値が付く名刀。回収するには十分な代物だろう。
そう思って言ってみれば、慌てた様子でたしぎが両手を振る。まるで否定するかのようで、事実彼女の口から発されたのは否定するための言葉だった。
「い、いえ、私は別に刀が欲しいわけじゃないので。ただ悪人が持っていることが許せないだけですから、あなたから回収する必要なんてありませんよ」
「そうか。そりゃ安心だな」
「それに、大事なお友達の形見なんでしょう？」
「ああ。こいつは渡せねぇんだ。相手が誰であってもな」
ゾロが次の刀に手を伸ばし、柄を握って抜こうとする。しかし柄に触れた途端気付いた。何か妙な感じがする刀であると。
見た目はそう特別ではない。質が悪い訳でもなさそうだ。
それなのに手から伝わる感触は覚えがなく、なんとなくではあるものの理解する。
時を同じく、その様子を見ていたたしぎも何かに気付いていた。
彼女は触れた感触ではなく外見を見て判断する。戸惑いを抱き、知りたいという欲求から自作のメモを取り出してページを捲り、自身が綴った文字を見つけた。
こちらも本物。しかも、そうお目にかかれる物ではなかった。
「あ、あれ？　これってやっぱり……」
「妙な感じがする。普通じゃねぇな」
「なんだ？　どうかしたか？」
後ろからウソップが覗き込む時、たしぎがじっと注目して呟く。
その時にはいっぽんマツも状況を理解し、腕を組んだまま冷や汗が流れるのを自覚していた。
「三代鬼徹！　これも業物の一本です！　普通の相場なら百万ベリーくらいするはずなのに、五万ベリーなんておかしいですよ！」
「百万？　なんでそんなのが五万ベリーの樽に入ってんだ。おっさん、間違えたのか？」

「い、いや、それは……」
「こ、これ！　これにするべきですよ、絶対！　いえ、本当に五万ベリーで買えるならですが、状態も良いですしこんなに良い物を眠らせておくなんてもったいない！」
ゾロの手によって鞘から引き抜かれ、刀身が現れる。
光を受けて怪しく光るかのよう。素人目にも普通の刀には見えない。
ウソップがごくりと息を呑み、ゾロは何かを感じ入るよう静かに見つめて、しかしたしぎだけはその刀身にうっとりしていた。まるで見惚れる様子である。
「うわぁ、逞しい乱刃ですね……やっぱり本物は迫力が違う」
「妖刀か」
誰に聞くでもなく理解してゾロが呟いた。
それを耳にしていっぽんマツが重くなった口を開く。汗を掻き、緊張しているらしい顔つきに変貌していて、ゾロが持つ刀を複雑そうな顔で見ていた。
「知ってたのか？」
「いや。わかる」
「ああそうさ、おまえが言う通りそいつは妖刀だよ。鬼徹って名はな、初代を始めその悉くが妖刀だったんだ……腰にぶら下げた奴は一人残らず悲運の死を遂げちまう。今の世の中、鬼徹を好んで使おうなんてバカは居やしねぇ。使えばこの世に居られなくなっちまうからな」
「も、持ってるだけで死んじまうってことか。呪いとかいうレベルじゃねぇだろ」
顔を真っ青にしたウソップが呟いて後ずさりするが、なぜかゾロは手放そうとしない。
角度を変えながらじっくり眺め、入念に吟味している姿だった。
「ご、ごめんなさい！　私、そんな物だとは知らなくて……！」
「何やってんだよゾロ、早く戻せって！　どんだけ価値があっても死んだらそれまでだぞ！　他のにしとけって、こんだけ色々あるんだ

から！」
「そいつの言う通りだ。やっぱりそいつは売れねぇ。おれだってさっさと処分してぇけど、呪われそうでよ。中々手放せなくて困っちゃいるが、おれが売って死なれちゃ寝覚めが悪ぃ」
「要するに死ななきゃいいわけか」
売れないと語るいっぽんマツに目を向け、機嫌を良くしてゾロが笑った。
「気に入った。こいつをもらう」
「バッ!?　バカなこと言ってんじゃねぇ！　死ぬ気か、おまえ！」
「あいにく呪いだの神だのってのは信じねぇ性質でな。なら勝負しよう。おれがこいつに勝ったらもらっていく。負けたらおれは、それまでの男だったってことさ」
驚愕する面々をそっちのけに、ゾロはウソップとたしぎの傍を離れた。
そして店の中央で抜き身の三代鬼徹を投げる。
天井付近まで上がった後、回転しながら落ちてくる刀の下へ自身の左腕を伸ばす。
三代鬼徹の切れ味は抜群。もしそのまま当たってしまえば腕一本など平気で落とせる。それが妖刀たらしめるだけの理由であり、恐ろしさである。
そうでなくとも異常な行動にしか見えない。
見ていた三人は同時に声を上げ、馬鹿な真似をするゾロへ叫んだ。
「バカ野郎ッ!?　冗談じゃねぇんだぞ、腕が無くなる！」
「ゾロォ!?　おまえやめろォ！」
「危ないっ！」
誰もが危険だと思い、目を逸らさなかったのが不思議なほど。降ってくる鬼徹が腕に迫る。
しかし、果たして予想された光景だったのか。
鬼徹はするりとゾロの傍を通り抜け、腕には傷一つつかず、木目の床にストンと突き刺さる。見た目通り腕は落ちていない。怯えて引くこともなく、左腕は真っ直ぐ伸ばされたまま。

呪いを気合いで押し返した。そう見えなくもない一瞬だった。
腕を伸ばしたままゾロが笑う。
「もらっていく」
勝負は、彼の勝ちだった。
たしぎはへなへなとその場に座り込んでしまい、ウソップは大量の冷や汗を拭って、いっぽんマツは思わず尻もちをついて驚愕する。
こんな男は見たことがない。そもそも、刀と勝負するなど考える人間が居るだろうか。
鬼徹を床から引き抜いたゾロはたしぎを指差して声をかけた。
「おい、もう一本選んでくれ」
「え？　あ、は、はい！」
「アホォ！　このアホォ！　おまえマジでびびったじゃねぇかくぬやろーがっ！」
「痛ェ！　本気で叩くな、バカ！」
あまりにも驚いてしまったらしく、泣きそうな顔になってウソップがゾロの背を叩く。体は鍛えても痛く感じて迷惑そうだ。ゾロは彼を睨んで必死に止めようとする。
そうしている姿はまだ歳も若い、至って普通の青年。
本気になればこれほど違うのか。
座り込んだ状態から、たしぎは呆然と眺めていた。
同じくカウンターの向こうからゾロを見ていたいっぽんマツは息を呑み、やがて立ち上がる。
何を想ったか店の奥へ走り出し、完全に姿が消える前に慌てて叫んでいた。
「ま、待て！　おまえらちょっと待ってろ！」
「ん？　なんだよ」
ゾロが振り返ってそちらを見ること数十秒。ドタバタ騒がしい足音が奥から戻ってきて店内に現れる。当然いっぽんマツが走って来たのだ。
その手には一振りの刀がある。
カウンターに置き、威厳を込めて腕を組んで、ゾロを見据えて静か

に話し始めた。
「造りは黒漆太刀拵。刃は乱刃小丁字。良業物、〝雪走(ゆばしり)〟。斬れ味はおれが保証する。うちは大した店じゃねぇが……これがおれの店の最高の刀だ」
「へぇ、大した刀じゃねぇか。だがあいにく金がねぇんだ。そんな上等なもん買えねぇ」
「金はいらねぇ。鬼徹の分もな。何も言わずにもらってやってくれ」
唐突に態度が変わってやけに真剣な顔になった。
従ってゾロも真剣に話を聞き、笑みを消して向き合う。
自身の家宝とも言える一本を持ち出して、いっぽんマツは覚悟を決めている。
雪走というその刀、五万ベリーの樽に突っ込まれたそれらとは明らかに見栄えが違う。かなりの一品であることは間違いない。故に、それを持ち出してくる真意を知りたかった。
まさかお得意様になれと言う訳もあるまいに。
決意した声で伝えられる想いを受け取るとでもいうのか、いっぽんマツがゾロへ語る。
「さっきは騙そうとしてすまなかった。おれァ、そんな自分に恥じちまったよ……刀は持ち主を選ぶという。あんたは久しく見ねぇ良い目をした剣士だ。こいつを連れてってやって欲しい」
「いいのか？　見ず知らずの男に託してよ」
「そうさせてくれ。今のおれに迷いはねぇ。男が男に夢を託して何が悪い」
「へっ……なら、断るわけにはいかねぇな」
薄く笑って、カウンターへ歩み寄ったゾロは雪走もまた手に取った。
腰の右側に刀を三本差し、以前と同じ状態になる。
三代鬼徹、雪走、そして前からあった和道一文字。全て腰に納まった。たったそれだけでいっぽんマツの体がぶるりと震えて、感動に近い何かを感じ取っている。たしぎもまた、彼の姿を見て同感できるほ

ど体の震えを感じていた。
この男はいずれ大成するだろう。不思議とそう思わされた。
彼の覇気に気圧されて、二人は同じ感想を抱いていたようだった。
「うし。やっぱり三本あると落ち着く」
満足した様子で呟き、歩き出したゾロは後悔もなく店の出口へと向かい始める。
「行こうぜウソップ。用は済んだ。次はおまえの用事だろ」
「お、おう。でもタダってのはすげぇ話だな。いいのかよ？」
「断った方が無礼になる。有難く頂戴しとこうぜ」
「んん、そうだな。男と男の誓いの一瞬だよな」
「何言ってやがんだ」
二人は軽い足取りで外へ出て行ってしまい、いっぽんマツはその背を見送った。まるで自分の息子を送り出すかのように万感の想いを持って。
果たしてそれは雪走に向けられる物か、或いは向けられているのはゾロなのか。
それを知るのはいっぽんマツ本人のみであった。
へたり込んで座っていたたしぎは、二人の背が見えなくなってからぽつりと呟く。
顔には薄く微笑みがあり、まだ動揺から立ち直れていない様子だ。
「すごい……腰が抜けて立てないや」
凄い物を見たと心から思う。自分とは違うとも、自分以上だとも思う刀との向き合い方。まさか勝負するだなんて発想に至るとは。自分では考え付かなかった思考だ。
腰に三本差している姿もひどく似合っていて、かの海賊狩りにも勝るほど。
そう思った時、はたと気付いた。
失念していたとばかりに表情が変わり、一瞬で焦りが心の中を満たす。
「あ、あれ？　三本の刀に、腹巻……それにあの人、ゾロって呼ばれていたような」

明らかに気付くのが遅れていた。
これも彼女が、刀を目にすると我を忘れてしまうほどの刀剣マニアであったせいだと言える。和道一文字を見たその瞬間から感動に打ち震え、続けて三代鬼徹、雪走と、驚くほどの名刀ばかりを見たせいで考える暇さえなかったようだ。
冷静になって考えればおかしい点はいくつもある。
海賊狩りと同じ名前だったこと。三本刀を必要としていること。
そして何よりも、新聞に載っていた男が二人、そっくりそのままで目の前に居たこと。
慌てた彼女は腰が抜けていたことすら忘れて立ち上がり、もつれる足で必死に店を飛び出した。一度盛大に転んでしまったが気にしている暇もなく通りを見回す。
すでに二人の姿は見つからない。どこへ行ってしまったのか。
愛刀〝時雨〟を手に呆然と立ち尽くす彼女は、しばらく混乱したままで冷静さを取り戻せず、その場から一歩も動くことができずに立ち尽くしていた。

グランドラインへの準備

ある店で、ナミは左手首につけた腕輪をじっと見つめていた。
丸い形の透明のガラス、その中に指針があって、今はわずかに揺れている。
正式名称は〝記録指針（ログポース）〟。
グランドラインを航海するためには欠かせない物で、これがなければ島を見つけることさえ奇跡に頼るしかないらしい。事前にキリから教えられていた。
それを腕につけ、ううむと唸る。
使ってみなければわからない。少なくともイーストブルーで役に立つ物ではなさそうだった。
「それがログポース？　大事な物なんだよね」
「ええ。キリが言うには、グランドラインの島々は特殊な磁気を放っていて、それをこのログポースに記憶させるらしいわ。磁場が凄いから普通のコンパスだと狂わされちゃうらしいし、方向を見失ったら航海は一巻の終わり。絶対に持っておかないと」
「なんだか難しそうだね」
「平気よ。システムはわかったからあとは試すだけ。それに意外と単純そう」
隣から覗き込んでくるシルクに説明してやり、ナミは微笑む。
顔を見ればよくわかるがまだピンと来ていないようだった。
グランドラインではこのログポースこそがコンパスとなる。航海には必要不可欠で、普通のコンパスが方向を見失うという性質上、失くしてしまえば死を意味するとまで語られる。
イーストブルーとは違い、グランドラインは特殊な環境が数多い。
島自体が特殊な磁場を持っているのが今や通例とされていて、航海のためにはこの磁気を利用するのが常套手段。一定期間島に滞在して、ログポースに〝記録（ログ）〟を溜め、一つずつ島を辿っていくことで前に進むことができるのだ。
初めて見る品物だけに難しくも感じるだろうが、ナミはむしろ生き

生きしている。新たな航海のための手法を知って純粋に喜んでいるようだ。
これが無ければ何も始まらない。
慎重に慎重を期して念のために二つ購入し、一つはナミの腕につけられ、もう一つはひとまず鞄に入れて運ぶ。戦闘などでもしもがあっても大丈夫だろう。
「とりあえず航海に必要な物は揃えたわね。シルク、忘れてる物ない？」
「えっと、海図を描く紙も買ったし、ペンとインクもあるし……うん、他の物も揃ってる」
「これで一段落ね。次は服を買いに行きましょ」
道の端に寄って予定を決め、嬉しそうにナミが言う。
シルクも反発する理由がなくてすぐに頷いた。
「お店、どうしようか。ここに来るまでいくつかあったよね」
「いっそのこと全部見て回りましょうよ。目標は十軒。どう？」
「そんなに？　もう少し少なくてもいいんじゃ……」
「せっかくこんな大きな町なんだもん。次の機会がいつあるかわからないし、グランドラインに入れば航海も危険になるわ。今の内に楽しんどかないと」
「そうだけど、時間も限られてるよ」
「さくさく見ていけばなんとかなるって。とりあえず行きましょ」
ナミが先導して歩き出し、シルクがすぐ隣へ並ぶ。
町を歩く人の数は多かった。喧騒もまた今まで歩いた町とは比べ物にはならず、特に少し前に立ち寄ったのが小さな町だったため、あまりの違いには驚いてしまう。
新聞に載ったとはいえ、手配書が出ていない二人は笑顔で紛れれば気付かれない。
ただ可愛らしい少女が二人、仲睦まじい様子で歩いているだけだ。
「うちの男どもはファッションに興味がない連中ばっかりだからね。サンジくんは気をつけてるけど、買い物になると自分の仕事に集中するし。私たちがなんとかしなきゃね」

「海賊だからね。みんな動きやすい恰好が好きなんだよ」
「あんたも他人のこと言えないわよ？　いっつも動きやすい恰好で気にしてないでしょ」
「う、うん。あんまり女の子らしい恰好って苦手で……子供の頃から男の子と遊んでたから」
「それなら私も変わらないわよ。まぁいいわ。私がプロデュースしてあげる。せっかく元が良いんだから可愛くならないとね」
「別に、可愛くはないけど……」
照れた様子でシルクが自分の髪を弄り始める。
やはりこの手の褒め言葉には慣れていないらしい。動揺がすぐに伝わった。
妹を見るような目でナミが微笑み、してやったりと肩を揺らす。
「まったく、あんたって子は」
「う、笑わないでよっ」
「はいはい、ごめんごめん。一軒目見つけたわ。ほら、気を取り直して行くわよ」
「もう……」
しばし歩いて店を発見した。
拗ねた顔をするシルクの背を押してやり、おどけたナミが少し歩調を速くする。
ファッションに興味のない男性陣の分も含め、自身の楽しみのためもあって服を買わなければならない。しかもこれから長くなるだろう航海に備えてそれなりの量を予定している。
時間がもったいないと店の入り口に辿り着いた。
その時になって変化に気付く。空気の重さが変わったというのか、言葉では説明し難い、気候が変化する際に感じる独特の感触。それをナミが感じ取る。
今、天候が変わろうとしていた。
背を押すのをやめ、空を見上げたナミの様子に気付き、シルクが振り返る。
「どうかした？」

「気圧が変わった……一雨来そうね」
「雨降るの？　それじゃキリが困っちゃうね。水に濡れるとだめになっちゃうから」
「あいつは本気になってない時は常にダメになってるでしょ。ま、心配いらないわ。航海士はこの私よ？　どんな荒波でも航海してみせる」
「ふふ、頼もしいね。そう言えるナミが好きだよ」
事も無げに言うシルクに驚き、今度はナミが照れる番だった。
どちらにしろ素直に褒められては照れてしまうらしい。
急にナミが気まずげにしたのを見て、シルクが勝ち誇ったように微笑み、互いに顔を見合わせればくすくすと笑い合った。
シルクにとっては、これほど親しくなった女性の友達は居ない。
ナミにとっては母ベルメールや姉のノジコとも違った関係。
信頼するこの人物と過ごす一時はなんとも楽しい物だ。姉妹のようだがそうではない、不思議な関係だとは思うものの、これこそが仲間なのだろう。
「二人して何やってんだか。行くわよシルク、むしろここからが本番だからね」
「うん。ナミに任せるからよろしくね」
今度こそ二人揃って入店し、楽しみにしていたショッピングを始める。
そう時間がないとはいえ急ぐ素振りはない。だからこそ二人は楽しもうと意気込んでおり、笑顔が絶えない時間となっていたようだ。

＊

一人で市場を歩いていたサンジは、あらゆる物に意識を奪われながら進んでいた。
知識としては知っているが、肉眼で見たことはない食材、知識にも無かった食材も数多くある。そして何よりついつい目を奪われてしまうのは通り過ぎていく美女たちだ。

あらゆるタイプの女性が居て、顔立ちから服装はそれぞれ違い、そのどれもが美しい。
彼の目を奪ってしまう誘惑がいくつもある。
やはり大きな町は良い。そう思いながらサンジは悠々と歩いていた。
左手には袋が提げられていて、先に買った調味料が入っている。あとは何か良い食材があればいいと探しているのだが、どうにも気が散って仕方ない。
上機嫌な彼は女性を見ることこそ楽しんでおり、やけに歩調もゆっくりだった。
「はぁ～、でけぇ町はいいなぁ。もう少し時間がありゃ声かけるんだが」
先程からずっとうずうずしているが、時間がないと判断して我慢している。楽しくもあるし辛くもある状況。もっと時間があればと思わずにはいられない。
流石に大きな町だけあって様々な人間が居る。
アイスを買ってもらって喜ぶ子供と父親。ハンガーのような髪型をした店員。手下らしき小男を二人連れた、燃えるような逆立つ髪を持つ美女。
市場へ歩いて来るまでだけでも色んな人間を見ていた。
そして今、またしても変わった人物を見つける。
前方を横切るように歩き去って行った男は、人混みの中でも目立つほど背が高く、その右腕は義手らしい。目を引くのはその義手が大きな斧だったことだ。
「うおっ、すげぇ腕。あれ本物の斧じゃねぇのか？」
思わず呟くがその頃には男が遠ざかっていく時だった。路地へ消えてすぐに見えなくなり、感心した様子で溜息をつくものの届くはずがなかった。しかし男なら興味もないためすぐに忘れる。
再び食材を探すために方々へ視線を向け、店先に並べられた食材を見る。
どれを見ても興味が沸く。自然と頭の中でレシピを思い出し、或い

は即席で考え、表情は柔らかくなってひどく楽しそうだった。
その中で一つ、一際彼の興味を引く物があった。
魚屋の前を通りかかった時、店先に置かれていた巨大な鮮魚が目に飛び込んでくる。
見たことがない種類だ。思わずサンジは足を止めてしまい、目を奪われた。
「こりゃすげぇ。おいおい、なんだこのファンキーな魚は」
「らっしゃい」
パンと手を叩いた店主に迎えられ、正面からその魚を見てみた。
体長は人間の二倍ほどあるだろうか。明らかにサンジよりも体が大きく、ヒレが普通の魚よりも長く伸びて垂れていて、象にも似た長い鼻と牙を二本持っている。
特徴的で一度見れば忘れないだろうその姿。
しかし奇抜過ぎて本当に美味いのだろうかと思ってしまう。
店先に並んでいる以上はそれなりの物なのだろう。
あいにく知識がないため、サンジは興味を持って店主へ尋ねた。
「ちと悪ぃんだが、こいつは売り物だよな？　初めて見た」
「そうだろうな、この辺りじゃ見ねぇ魚なんだ。こいつァエレファントホンマグロ。どうやら南海から泳いできたらしいんでェ。そこをおれが一本釣りよ！」
「おまえが釣ったのか。大した腕してやがる」
「どうだいあんちゃん、興味があるなら切ろうか？」
問われたサンジは顎に手を当て、じっと魚を見つめる。
未知なる巨大魚、エレファントホンマグロ。
非常に興味をそそられる。
「いや、丸ごともらう」
好奇心を抑え切れずにそう告げた。切り身を一部だけもらうだなんてもったいない。それほどのサイズなら全部丸ごと自分で調理してみたいというのがコックの本音だった。
気前の良い発言に店主の機嫌も良くなる。
商談成立。再び手を叩いて店主がエレファントホンマグロに手を

伸ばそうとした。
「まいど。あんちゃん気前いいねぇ。ひょっとしてコックかい？」
「ああ。しかも一流のな」
「だっはっは、それなら丸ごと買いたいってのも納得だ」
「しかしこいつを一人で運ぶのは大変だな。悪いが船まで運んでもらえるか？」
「あいよ。うちの若いのを使ってくれよ。今すぐ行けるかい？」
「まだ買いたいもんがあるんだ。一通り回って来るからその後でいいか？　船まで案内するよ」
「よしきた。それじゃ後で寄ってくれ。こっちはいつでもいいからよ」
「悪いな」
まだ買い物を続けるため預けたまま。
約束だけしてサンジは歩き出し、再び買い出しへと戻っていった。
通りがかる様々な店を眺めながら、次は何を買おうかと考える。
一味の仲間は度を越えた大食漢が一人居て、他の面子も思いのほかよく食う。欠片も残さず食べ尽くされるのはコック冥利に尽きるというものだがこれが続けば日々のやり繰りも難しい。おそらく規格外のエレファントホンマグロだけでは足りないだろう。
魚は手に入れたが他にも必要な物だってある。
他の食材は何がいいか。考えながら視線はあちこち彷徨った。
「良い相手だな、エレファントホンマグロ。あれだけで何食分かはできるだろ。あとは野菜と、フルーツも欲しい。ルフィがうるせぇから肉も買ってやらねぇと」
文句を言うかのような口調で呟くが、忘れていないところを見ると嫌とは思っていないらしい。
女性にしかやさしくないと思われることが多く、それもある意味間違っていないとはいえ、彼は仲間に対する気遣いを忘れる男ではなかった。
仲間が体調を崩さないよう栄養のバランスを考えなければならない。

尚且つ、ルフィは肉が好物で頻繁に催促してくる。
彼らの要望をある程度は満たしつつ、自分の役目を果たす。中々難しいことに思えてやりがいがある。一流コックにとってみれば面白いとさえ感じる仕事だった。
今日の昼食、そして夕食は何にしようか。
買い物の最中から考えつつ、さらに視線を彷徨わせる。
すると彼の目は人混みの中から的確に美女を見つけ出し、特別光る人物を見つけた。
「おほぉっ、なんつー美女！　美しいだけじゃなく神々しい！」
思わず声にしてしまうほどの衝動。あれほどの美女を見逃すはずがない。
気付けばサンジだけでなく近くに居る人間はほとんど彼女に振り返っている。男のみならず女性までも魅了する美貌。どう見ても一人だけ雰囲気が違っていた。
手に金棒を持って担いでいるのが気になるものの、そんなことさえどうでもよくなる。
一瞬、サンジは逡巡してしまう。
買い物を続けるか、それとも思い切って声をかけてみるか。
ほんの数秒の思考に集中し、判断しようとしたまさにその一瞬に声をかけられる。背後から、しかも振り返らずともわかる男。有頂天だったサンジの機嫌は急激に下落していく。
「お～いサンジ！」
「また鼻の下伸ばしてんのか」
「アァン？　なんだ、このちっとも嬉しくねぇ声は」
振り返ればやはり見知った顔。ゾロとウソップが近付いてくる。
サンジはあからさまに嫌そうな顔をして彼らを迎えた。
「おまえらかよ。ナミさんとシルクちゃんならよかったのに」
「悪かったな、男で。もう用事終わったのか？」
「まだだ。さっきでけぇのを見つけたが、ルフィが居るんじゃ足りねぇだろ。それに魚人どもは買い出しなんてしてねぇだろうし、念のために考えてやらねぇとな。おまえらは？」

「あぁ、ゾロの方は終わって、おれはあと何軒か回ろうと思ってるとこさ」
ウソップが答えて、見ればゾロの腰には三本の刀がある。対してウソップは両手にいくつかの袋を抱えているもののまだ終わりではないらしい。
女性でないことにはがっかりしたが、良いタイミングではあるだろう。
気を取り直してサンジが表情を柔らかくした。
「ならちょうどいいか。おいゾロ、ちょっと手伝え。荷物運びくらいできんだろ」
「なんでおれが」
「暇そうにしてっからだよ。食いっぱぐれたくなきゃ仕事しろ」
「酒は」
「てめぇで運べばあるかもな」
やれやれと嘆息するも、いつものように喧嘩を吹っ掛けることはなかった。意外にも手伝う気持ちはあるらしい。ゾロは納得した様子で何も言わなかった。
同行する相手がルフィならば道に迷う危険もあって承諾できないが、サンジならば心配もないためウソップも納得する。任せておけばいいだろう。
話は纏まったのだがすぐに動き出そうとはせず、ウソップは辺りを見回して神妙な面持ち。
今まで一人で行動していたサンジへ呟くように伝えた。
「やっぱり例の新聞があったからおれたち注目されてるみてぇだぞ。なんかさっきからひそひそ言われてる気がすんだよな。妙に視線感じるし」
「へぇ。せっかく注目されるならレディの方がいいな」
「んなこと言ってる場合かよっ。この町、めちゃくちゃ強ぇ海兵が居るみてぇだし、おれたちも実は海兵に会ったんだ。なんとかバレなかったけどさっさと逃げた方がいいぞ」
「心配したって見つかる時は見つかるもんさ。もっとどっしり構え

てろよ」
「お、おまえ、おれのびびり具合を見くびんなよ!?　怖ぇ物は怖ぇんだ！」
「はいはい」
煙草を手に持って煙を吐き、肩を揺らして笑ったサンジは気軽に背を向ける。
そうまで言うなら急いでやった方がいいだろう。やさしさでそうしてやったつもりだが、何やらウソップは慌てているらしく、すっかり恐怖心から平静を失くしている。
いつも通りと言えばそれまでだ。
あまり気にせず、ゾロを呼んで歩き出す。
「それじゃ、さっさと買い出し終えて出航しようぜ。行くぞゾロ」
「おいウソップ、海兵に見つかるかもしれねぇが上手くやれよ」
「ハッ!?　よく考えりゃこれって、一人になるのまずくねぇか!?　ちょ、待った！　やっぱりおれも一緒に行動した方がいいと思うんだ！」
「今更何言ってんだ」
「船で合流しようぜ」
「だから待てって！」
普段は喧嘩ばかりしていてもこんな時ばかりは呼吸を合わせ、そそくさと去っていく。
ウソップが背後から声をかけるが別れ際はあっさりしたものだった。
珍しい姿だが肩を並べて歩き、市場を進む。
目の前にある風景を眺めて、思いのほか和やかに話している。
顔を見合わせはしないが声も穏やかだ。
「あいつはいつまで経ってもうるせぇ奴だな。そんなにびびるこたァねぇだろ」
「ま、気持ちはわからんでもないぜ。そういやさっき変わった奴を見たんだ」
「変わった奴？」

「でっけぇ斧を義手にしてる男だ。ありゃカタギの眼じゃなかったな」
「斧だと？」
サンジが伝えた言葉を受けてゾロの眉間に皺が寄る。
それを目視で確認したせいか、わずかにサンジが訝しむ顔を見せた。
「おまえも見たのか？　まぁやけに目立ってやがったからな」
「見ちゃいねぇが……前にそんな男と会ったことがある。あいつは海軍に捕まったはずだ。まさか同一人物ってことはねぇだろうな」
「別にどっちでもいいだろ。同一人物だったら困ることでもあんのか？」
「めんどくせぇって思っただけさ。腹いっぱい食ってさえいりゃ負ける相手じゃねぇ」
「へっ、そうかい」
ポケットに両手を突っ込んでサンジが笑う。
なんとなくそりは合わない人間だが実力は認めている。確かにそう簡単に負ける人間ではない。
斧の男はすぐに忘れ、それ以上に強烈な印象を与えられたのが金棒を持つ美女だった。
「しっかしあの美人はすごかった。おまえらが来なきゃ見失うこともなかったのによ。せっかくなら声かけとくべきだった、惜しいことしたな、ありゃ……」
「どうせ話したとこで結果は同じだろ。気にすんな」
「そりゃどういう意味だ」
「てめぇに口説かれるような女なんざ居るわけねぇだろ」
そう言われて即座にサンジの顔色が変わった。
和やかにしていたと思ったらいつもの攻撃である。反撃しないという選択肢はなかった。
「カッチーン……！　どの口が言ってんだ、レディファーストすら知らねぇヘボ剣士が！　なんならナンパ勝負でもしてみるか？　勝つのは間違いなくおれだ。男としての魅力なら段違いでおまえに

差アつけてんだよ。格の違いってやつを教えてやる！」
「知るか、一人で勝手にやってろ。おれは興味がねぇ」
「はは～ん。さては負けるのが怖ぇんだな？」
「何？」
一度火が点けば当人同士では止められず、さらに苛烈な様相となっていく。
ついに二人は足を止めて睨み合いを始めてしまった。
「おれがおまえに負けるわけねぇだろ」
「ほほう、ずいぶんでかく出たじゃねぇか。言っとくがそりゃこっちのセリフだ」
「後悔すんなよ。逃げるなら今の内だぜ」
「そりゃおれに勝てた時の話だろ。あり得ねぇ。発言には気をつけた方がいいんじゃねぇか？」
「おまえ相手じゃそれも必要ねぇな」
周囲の視線も感じず睨み合って、数秒経って同時に顔を逸らす。
荒々しく歩き出し、買い物を急いで、決着は後回しになりそうだ。
「とにかくまず買い出しだ。船に運んでから始める。いいな？」
「参りましたの練習でもしてたらどうだ？　すみませんでしたでもいいぜ」
「んだとコラ？」
「正論を言ったまでだろ」
二人の歩調はますます速くなっていく。その姿は周囲にある雰囲気とは程遠い。
彼らにとっては当然のことでも、周りの視線は驚いていたようだ。
全く気付かない二人は凄い剣幕で買い物を続けていった。

処刑台

「いやぁ～食った食った。やっぱり肉食うと違うなぁ」
店を出たルフィの一声目がそれだった。
隣ではキリが呆れた顔で彼を見やり、溜息交じりに声をかける。
「さっきクレープ食べたばっかりなのによく入るよね。人一倍食べてたよ」
「甘い物は別腹だって言うじゃねぇか。あれ食ったから肉が食いたくなったんだ」
「そういう意味だったかな？　まぁいいけど」
ローグタウンへ来て二人が初めて入った店は飲食店だった。
普段と変わらない様子でルフィが肉を求め、それをキリが承諾したためである。とはいえ若干渋々であった。彼自身が腹が減っていなかったことも関係していただろう。
それでも断らないところは彼に対して甘い態度があるからだ。
ルフィの食事を終え、店を出て向かうのは当初の目的地。
海賊王が死んだ処刑台を見る。
すでにそこにはゴールド・ロジャーの姿などないが、何か感じ入る物はあるに違いない。強く興味を持って楽しみにしていたのはルフィの方だった。
キリは以前、イーストブルーを旅立つ際に見た経験がある。
従って気にするのはルフィのことだけらしい。
「思ったより時間かかったよ。あとは真っ直ぐ行こう」
「そんなに急がなくていいんじゃねぇか？」
「急がなくてもいいけど、後々寄り道する可能性もあるからさ。事前に考えて動かないと」
「そっか～。キリは頭がいいんだな」
「ルフィが考え無さ過ぎるだけじゃないかな。しっかり頼むよ船長」
「しっしっし、大丈夫だ。キリが居るからな」
訪れたのはもう何年も昔の話。だが町の構造を考えればどこにあ

るのかは予想できる。
キリの歩みに迷いはなく、軽やかな足取りでルフィを先導していた。
大通りを歩いて前へ進むだけでおそらく目的地へ着く。
処刑台は、海賊を公開処刑にして世に知らしめるために存在している。どこぞにひっそり隠されているはずもなく、町で最も目立つ場所に設けられているのが当然。
歩いていると前方に目立つ広場が見えてきた。
あそこだろうと当たりをつけ、ルフィがおぉっと声を出す。
初めて話を聞いた時からずっと興味があった。
また語り部となったキリの言葉が印象に残っているのである。
自然と好奇心は大きくなり、ルフィの笑顔は輝く様相となっていった。隣を歩くキリは苦笑し、徐々に近付いて来る物を見ると、過去の記憶を思い出しつつあることに気付く。
仲間との離別を機に過去の記憶に蓋をしていたが、近頃はそれを思い出す機会が多い。
処刑台を見た日のことも映像として脳裏に蘇ってきた。
「あれが処刑台か」
「そうだよ。やっと着いたね」
広場へ入って少し前へ進み、まだ距離がある位置で足を止める。
二人の目には処刑台が映っていた。
広場に入った人間なら誰でも見えるよう、高い位置にあって、不思議とどこかしら寂しげな風景に見える。今まで何人の人間がそこで死んだのか。
かの海賊王、ゴールド・ロジャーもその一人。
真剣な顔で見つめるルフィは、微笑むキリへ言葉を投げかけた。
「ここから始まったんだな」
「そう。この町が始まりと終わりの町って言われるのは、ロジャーが生まれて、処刑されて、死んだことで新たな時代が幕を開けたから。海賊王として一つの時代を作っただけじゃなく、死んだことで新時代を作り出した。彼は終わりの瞬間に始まりを生んだんだ」

「新時代……」
「ロジャーが海を駆け抜けた時、そして彼が死んだ時。世界はたった一人の人間に二度も大きく動かされた。彼を知る者は口を揃えて世界最高の海賊だったって言うよ」
「キリも知ってんのか？」
海賊王を、と言いたいのだろう。キリは肩をすくめて首を振った。
「まさか。ボクが生まれる前にロジャーは死んでる。だけどその逸話は多いんだ。海賊やってれば自然と耳に入って来ることがあっただけだよ」
「どんな奴だったんだろうな」
「さぁねぇ……案外ルフィに似てるんじゃない？　自由を好んで支配を嫌ったらしいから」
「そうか」
やけに気の無い返事でぼんやりしている。
不思議と雰囲気が変わって、ぽつりと小さく呟かれた。
「海賊王はここで処刑されたんだ。世界最高の偉大な海賊が死んだ場所」
キリも同じく処刑台を見上げる。
かつて、彼も同じようにその場所を見つめ、未来に想いを馳せた。
夢と希望に満ちた未知なる海、偉大なる航路（グランドライン）。
ロジャーは歴史上ただ一人、その海を制覇した男。誰にも見つけられなかった最後の島、ラフテルへ到達し、海賊王の称号を得て、この処刑台で人生を終えた。
感動とは違い、得られる物は情熱などというものではない。
しかし見ているだけで得られた何かは確かにあって、ルフィもキリと同じ物を得ていたはずだ。
拳を握る。
まるで在りし日の王を見るかのように、ルフィの視線は一点を捉えて動かなかった。
「海賊時代の、始まりの場所だ」
ひどく静かな呟きだった。

ここへ連れてきてよかったと思う。彼はきっと何かが変わる。
キリはそう思って、ふと目を伏せた。
かつては自分もそうだった。処刑を想えば時代が終わったことを知り、始まりを感じ取って、現在の大航海時代はこの場所から始まったのだと強く実感する。
そうしてかつては決意した。自分も最高の海賊になると。
ただし、そう誓った海賊たちは数多く居るだろう。その中で生き残れるのはほんの一握り。多くは何かしらの要因で海へ散って、名を残すことなく死んでいく。キリの仲間たちもまたそうだ。決意とは裏腹に、彼らは志半ばで死んでいった。
時が経ち、もう一度海へ出た。海賊を再開させることを決めた。
決めた以上は今度こそ。
新たな決意を胸にキリが目を開く。
「おそらく時代はまた変わる。その要因が何なのかはわからないけど、多分そう遠くない。まぁだからイーストブルーに帰ってきたってのもあるんだけどさ――あれ？」
目を開いてから隣を見れば、なぜかルフィの姿がない。
辺りを見回してすぐに発見する。
気付けばルフィは処刑台の上に立っていた。
「いやぁ～絶景だなぁ！　これが海賊王の見た景色っ！　そして死んだのかぁ～!!」
「聞いてないし。乗ってるし」
目を離してたった数秒。ずいぶん離れた場所に立って笑っており、高い場所から景色を見渡し、海賊王が見た風景を目にして上機嫌になっているらしい。
キリは呆れた顔でじとっと見つめ、小さく溜息をつく。
唐突な行動ですでに周囲はざわついていた。
それも仕方ない。今や観光名所となった処刑台に上ることは禁じられている。その処刑台に上る人間が居れば注目されるのは当然で、感想を言う声も大きいため、無視する方が難しい。
ルフィは広場に居る全員に姿を見られていた。

そのルフィが今や賞金首。
嫌な予感がする。しかし彼を責めることはできない。
こうなるかもしれないとわかっていたのなら、責めるべきは止められなかった自分自身だ。
肩をすくめたキリは歩き出し、処刑台に近付きながら表情を険しくする。
「相変わらず自由だなぁ。今そんなことしたら気付かれるっていうのに。いや、言ってもしょうがないな。上手く対応できなかったボクが悪い」
「おぉ～い！　キリぃ～！」
「はいは～い。なんで楽しそうかな、船長は」
大きく手を振ってくるので手を振り返し、ゆっくり近付いていく。
海軍基地がある町だ。あまり長くそうしていればおそらく気付かれてしまう恐れもある。急ぐ必要はあるだろうが、気楽さは彼も同じか、そう急ぐ素振りは見られない。
別段焦らず、穏やかな微笑みのまま広場の中央まで足を運んだ。
何気なくざわついている周囲を見た時、不審な影があることにキリが気付いた。
外套を纏った怪しい人物が複数。一人や二人ではない、十人以上、或いは数十人が怪しい様子で広場の中に揃っていた。
嫌な予感の正体はこれかもしれない。キリの中に違和感と危機感が生まれる。
ウソップではないが、有名になった分、慎重になり過ぎてもおかしくない状況だ。
歩調が速くなってキリが急ぐ。
ルフィは現在、最も目立つ場所に居る。どこから襲われても不思議ではない。
徐々に怪しい人影が増えている気がして、余計に違和感は大きくなっていった。
「ルフィ、そろそろ行こう！　あとそこ登っちゃだめだから早く降りて！」

「ん？　そうか？」
処刑台に向かっていくキリの前へ、突如、大柄の男が割り込んだ。
こちらも外套を纏ってフードをかぶり、顔を隠している。だが隠し切れず露わになった右腕、大きな斧手はなんとも分かり易く、即座に気付いて表情が変わる。
腕を確認して顔を見上げた。すると視線が合って、その人だと認識する。
キリは咄嗟に叫ぶのだがルフィには顔が見えておらず。
状況が理解できていないため、処刑台の上で突っ立ったままだった。
「ルフィ！　そこから離れるんだ！」
叫んだ直後、ルフィの体は真上からの衝撃を受け、倒れ込む。
処刑台でうつ伏せになり、首と両手首を処刑用の器具で押さえつけられてしまう。
咄嗟の出来事で訳も分からず、気付けば動けなくなってしまっていた。
目を白黒させるルフィはやっと理解できてから声を大きくする。
これではまるで、彼が処刑されてしまうかのような状況にしか思えない。
「はっ!?　なんだこりゃ！」
「ふっふっふ、よぉし、上手くいったな……ローグタウンへようこそ、麦わらのルフィ。歓迎してやるぜ。おれ様たちがドハデになぁ」
「ん？　誰だ？」
気付けば傍らに一人の男。外套で顔と姿を隠し、だが下から見上げれば赤い鼻が特徴的ですぐ目についてしまう。人の顔を覚えるのが苦手なルフィでも見覚えがあるとわかった。
ルフィを捕らえた後になって、男は勢いよく外套を脱ぎ捨てた。
そして道化のバギーとしての素顔を露わにした上で、上機嫌で声高らかに叫ぶ。
露わになったのは自らの勝利を確信して勝ち誇った笑顔だ。
「ぎゃーっはっはァ！　待たせたな麦わら、ここで会ったが百年

目ェ！　今日こそてめぇの首を刎ねてやろうと待ちわびていたこのおれはそう、道化のバギー様よ！　観念しろォ！」
「なんだバギーか」
「よぉし、ふざけんなこのすっとんきょーがッ!?　てめぇ今の状況がわかってんのかコラァ！」
前に大柄な男が立ち、視界を塞がれた状況でも、騒がしい声はキリの耳にも届いてくる。ただしどうやらルフィは慌てていないようだ。
彼らの姿を確認できないまま緊張感が増していき、声は尚も騒ぎ続ける。
まるで芝居を見るかのように、広場に居た町民までもがその様子を見守っていた。
「やはり来やがったな、この町へ。ここはグランドラインに最も近い町だ。その昔はグランドラインへ入る海賊たちがこぞってこの町へ立ち寄っていた。てめぇも必ずそうするだろうと踏んでた甲斐があったぜ。おれ様の目論みは見事に的中した！」
「なぁ、おまえなんでこんなとこにいんだ？　おれがぶっ飛ばしたのに」
「その体勢でまだわかんねぇのかアホが!?　その仕返しに来たに決まってんだろ！」
「あぁそういうことか。いやいきなりでよ、びっくりしたとこだった」
「フン、余裕ぶっこいてられんのも今の内だ。今に処刑が始まる。だがその前に……我が連合の力を見せつけてやろうじゃねぇか！待たせたな野郎どもォ！　ドハデに騒げェ！」
バギーが高らかにそう言った直後、広場に居た大勢の男たちが外套を投げ捨てる。
武器を掲げ、ピストルを空に向けて発砲し、大いに叫んで存在感を知らしめた。どうやら広場はすでに包囲されていたらしい。町民まで巻き込まれる形で逃げ場がないことを理解する。
当然町民たちは悲鳴を発して逃げ惑い、広場全体が大混乱となった。

辺りの状況を確認してキリが歯噛みした。
もっと警戒すべきだっただろう。海兵の存在だけを気にしていたが、まさかリベンジを誓う海賊たちが現れるとは夢にも思っていなかった。
尚且つ、目の前に立った男。
元海兵で捕まったはずの人物、斧手のモーガンもまた外套を捨て、驚愕せずにはいられない。
「モーガン大佐……どうしてここに」
「生きる理由を失くした。おまえらのせいでな。だから理由を見つけただけだ」
「それが復讐？　否定はしないけど、わざわざ海賊になるなんてね」
「今となってはなんでもいいのさ。おまえらを殺せるならなんでもな」
以前にも増して威圧感を感じる。吹っ切れたことで余計な邪念が消えているのか。服装は違えど外見は以前のまま、しかしまるで別人のように思えてしまう。
人知れずキリはまずいと感じていた。
後ろへ数歩下がって距離を取ってから処刑台を見る。
ルフィは相変わらず能天気な顔。騒ぐ海賊たちを盛り上げるバギーはうるさいほど笑っている。
彼らは彼らで話していたらしいが、海賊たちが大騒ぎして町民へ威嚇するため聞き取れない。そのせいで彼に声をかけることさえ無駄に終わりそうだった。
狙い通り、状況はバギーたちの思う通りになっているのだろう。
そうとは知らず、ルフィは能天気にバギーへ話しかける。
「おれ、死刑って初めて見るよ」
「てめぇが死ぬ本人だよ!?」
「なにィ!?　ふざけんなーっ!!」
「てめぇがふざけんなァ!!!!」
状況を理解したのは今だったようだ。
ようやく自分が殺されると知って騒ぎ出し、海賊たちの雄たけびに

も負けずルフィの絶叫が響き渡る。しかし首と両手を封じ込まれてしまった今は逃げることができない。
気分を良くして、バギーが両腕を広げて高らかに宣誓した。
「これより、ハデ死刑を執り行う!!」
「いやだぁ〜!」
ルフィは動けない。それは目視で理解した。
従って死なせないためにはキリがなんとかするしかない。
懐から無数の紙が独りでに出てきて、キリの手の中で小さな槍となる。サイズだけを見れば矢と言っても相違ない。限界まで空気抵抗を失くすため、何も装飾の無い姿で硬化された。
それを投げつけようと腕を振りかぶる。
しかしそうはさせまいと、一足早くモーガンが接近して腕を振り上げていた。
右手の義手は鋭利な刃を持つ斧。
素早く振り下ろされてくる様を目にして、咄嗟に反応して槍で受け止め、軌道を変えさせる。衝突の瞬間にかなり衝撃があった。腕がビリビリと震えて歯噛みする。
モーガンの斧は地面へ落ち、石畳を叩き割って欠片を散らばらせた。
無視していい一撃などではない。
いつ振りかでその強烈な一撃を目の当たりにして、油断してはいけないと思い知らされた。
「何をするつもりだ。おまえは黙って見ていればいい」
「悪いけどそうはいかない。死なせたくない人なんだ」
町民が動揺する中、モーガンは再度斧を振るった。
横なぎに迫るそれを見て背を反らし、紙一重で回避する。そうしながら同時に更なる紙を取り出して操り、手に持っていた槍に重ねることで、剣を作り出した。
長く付き合う気はない。大事が起こる前にルフィを助けるため、すぐに回避する気だった。
体勢を整えたキリが剣を振り、モーガンの斧手に打ち合わせて足を

引かせる。
それだけで十分だと判断した。
今はモーガンよりもルフィの救出。バギーを倒して助けなければ。
そう思って素早い動作、隙を衝いてモーガンの隣を通り抜け、処刑台へ向かおうとする。
彼を回避することは成功したはずだった。身の置き方による一瞬の攻防で完璧に抜き去り、視界が開ける。しかしそれすらも予期していたのか、予想外の攻撃が迫った。
視界が開ける一瞬、耳に響くのは途方もない大声。
あまりの声量で聴覚を麻痺させるそれに驚き、声の出所を探すことすら難しくさせ、瞬時に辺りを見回せば迫ってくる光線がある。相手は素早く、避け切れる距離ではなかった。
驚愕する一瞬、キリの腹に光線が直撃して、常人より軽い体があっという間に吹き飛ばされる。
「キリッ!?」
処刑台から見ていたルフィが叫ぶ。この瞬間だけは自分の心配などしていられず目を剥いた。
キリは勢いよく地面を転がり、呻きながら腹を押さえる。
貫通はしていない。
ダメージは大きかったが、直撃したまま運ばれて壁に激突することはなかっただけマシだろう。
周囲の町民への配慮すらない、無慈悲な一撃である。幸い被害はなかったようだが、今の一撃や大声だけで町民たちは大きく取り乱し、逃げ出そうと騒ぎ始める。だが広場自体が大勢の海賊たちによって囲まれているため、それは叶わぬ願いとなった。
立ち上がったキリが今度こそ声の主を見つけた。
燃えるような赤い髪を持つ偉丈夫。金の鎧ではなく、銀の鎧を身に着けているが、話には聞いていた男だ。ルフィが交戦したというエルドラゴが彼の視線の先に立っている。
声を使った能力者だとは知っている。だが問題はそこではない。
バギー、モーガンに加え、エルドラゴ。

賞金首が二人に支部とはいえ元海軍大佐が一人。異様な三人組だ。同時に現れていることから彼らが協力関係であると察するのは難しいことではなく、考えてみれば部下の海賊たちも数が多い。
仕返しに来たと言っていた。
彼らは手を組んだのだ。自分たちを始末するため、立場の垣根を超えて。
「バギー海賊団にエルドラゴ一味。それにモーガンか……厄介なことしてくれる」
「それだけじゃないよ紙使い。ここにはアタシも居るからねぇ」
忌々しそうに呟くと返答が出された。人垣を越えて処刑台の前へ出てくる人間も居る。
ひどく美しい女性だった。
均整の取れた肉体に整った容姿、涼やかな声。どれを取っても完璧だと思える見栄えで、ただ異質だったのはあまり似つかわしくない金棒を肩に担いでいることだった。
見覚えのない顔だ。キリの眉間に皺が寄って考え込む。
顔を覚えるのは早いほうだと自負していたが、どれだけ考えても思い出せない。
知らなくて当然。そんな顔で笑った女性は処刑台へ向き直ってルフィを見た。
美しい顔には笑顔がある。
やけに親しげな笑みには違和感も覚えるが、彼女は愛しい人を見るように微笑みかけていた。
「知らなくても無理はないさ。でも、あんたは覚えてるはずだよねぇ、ルフィ。アタシの顔を初めて殴った男なんだから。あんたの拳……感じたわ」
自らの頬を撫で、うっとりした声で語られた。
その美声は慌てふためいていた町民たちさえも魅了し、呆然と見入らせてしまって、すでに魅力を知っている海賊たちまで声を漏らして感嘆する。
しかしルフィは誰だかわかっていない様子。

見下ろす彼女を認識しているのだが表情は冴えなかった。
「誰だおまえ？」
「わからないのかい？　それも無理はないかもしれない。アタシは少し変わったのさ。あんたと別れた後にスベスベの実を食べてね」
「スベスベの実？　おれと会ったことあんのか」
「仕方ない男だね。アタシの名は、アルビダ。これで思い出せたんじゃないかい？」
「アルビダ？」
拘束されたままルフィが首をかしげる。
脳裏に蘇る顔があった。アルビダならば覚えている。だが明らかに彼女ではない。
疑念は余計に強まってしまい、そんな訳がないと首を振った。
「嘘つけよ。アルビダはおまえみたいな美女じゃねぇぞ」
「そう、前まではね。アタシはスベスベの実を食べて変わったと言っただろう？　前と今の大きな違いはあんたが気付いた通り、そばかすが消えたこと」
「いや、そこじゃねぇ」
いやいやと手を振るが取り合ってもらえず、悦に入ってアルビダは上機嫌にしている。
かつては丸々太っていた彼女はスリムになって帰ってきた。あまりの変貌ぶりにルフィが全く気付けなかったほどである。まるで別人、同じ人物とは思えない。
しかも彼女自身は大して変化がないと思っているらしく、それもまた厄介だった。
離れた位置から見ていたキリは、やり取りを耳にしながらさほど気にせず、密かに子電伝虫を取り出す。眼前に居たモーガンとエルドラゴはしかし気付いていただろう。
周囲を敵に囲まれた状況。ルフィは人質に取られ、処刑寸前で絶体絶命。
一人で打開するには難しい状況だ。
仲間を呼ぶために番号を入れ、子電伝虫から声が出る。

モーガンはそれをじっと見ながら止めない。
一方エルドラゴは苛立つ素振りを見せるものの、こちらも止める素振りはないようだった。
「仲間を呼ぶ気か？　どうせ無駄だ。てめぇらとは戦力が違う」
「わしの黄金を返せ、コソ泥どもがァ！　ただでは済まさんぞォ！」
「まずはルフィの救出。こいつらの相手は面倒だ……さっさと撒いてお開きにしよう」
子電伝虫の口からがちゃりと聞こえたことで、通信が繋がったことを知る。
キリは仲間へ簡潔に状況を告げ、すぐに処刑台前の広場へ集まるよう告げた。

〝海賊王になる男だ〟

ざわつく町並みを素早く歩き、通り過ぎていくスモーカーは険しい顔をしていた。
部下からの報告で海賊が騒いでいると聞かされた。
場所は処刑台前の広場。かつて海賊王が死んだ場所。
海賊にとっては特別な想いもあるだろう場所だが、昔と今で違うのは、ローグタウンにはスモーカーが居ることである。彼と出会って町を出られた海賊などまず存在しない。その彼が居ると知りながら騒ぐというのは中々の度胸だった。
報告してくる軍曹を隣に置き、急ぎ広場へと向かう。
すでに部下への指示は終えている。一等部隊は港へ行って警戒を強化。二等部隊は武装して広場へ急行し、広場を隠密に包囲。残った者たちは射撃できる距離で待機を命じられている。
敵は町民までも巻き込み、包囲しているという。これを無事に助けなければならない。
視線まで険しく、態度も厳しい。
軍曹は久しく見る姿に怯えながら口を動かしていた。
「現在確認されているのは道化のバギー、獅子閃光エルドラゴ、そして以前取り逃がしたと報告があったモーガンまで居るそうです」
「元海兵が海賊に協力か。嘆かわしいもんだ。しかも高額賞金首が手を組みやがるとは」
「それから、手配書にない美女も確認されているそうで。金棒を持っているそうですが」
「敵であることは間違いないだろう。見逃すなと言っておけ」
「はっ。それと、処刑台には例の海賊、麦わらのルフィの姿もあります」
「奴も手を組んだってことか」
「いえ、それが……」
速い歩調で歩きながら、軍曹が言い淀み、スモーカーが振り返る。
視線を受けて黙っている訳にはいかない。

彼は意を決して報告した。
「麦わらはその、処刑寸前の状態でして。バギーに命を狙われている模様です」
「海賊同士の潰し合いか。他所でやりゃあいいものを、迷惑な話だ」
「麦わらの右腕と噂されている紙使いの姿も確認されています。現在モーガンとエルドラゴを相手に交戦中。苦戦しているようです」
「紙使い？　あいつか」
呟いた直後、脳裏に手配書で見た顔が浮かんでくる。
良くない名前を聞いていた。故にその名前と顔だけは忘れられない。
舌打ちを一つ。スモーカーは前方に広場を見渡せる監視所を見つけた。
「たしぎはどこに行った。まだ見つからねぇのか」
「申し訳ありません。武器屋へ時雨を取りに行ったきり、戻ってきていないようで」
「チッ、のろまが。まだ緊張感がねぇのか」
素早く監視所へ入り、階段を上って家屋の屋根より高い位置へ達する。そこから処刑台がある広場を一望できた。大勢の人間もすぐに確認することができる。
処刑台の上に二人。道化のバギーと捕まった麦わらのルフィ。
広場の中央に三人。紙使いキリが軽やかな様子で舞い、エルドラゴとモーガンが二人がかりで仕留めようと奮闘している。勝負は中々決まらないようだ。
かなりの数の海賊たちが広場に集まった町民を包囲していて、現在は実害がないものの、危険がない訳ではない。真っ先に彼らを排除しなければならないだろう。
町民が人質にされてしまっているだけに、一手間違えれば大損害となる。
無実の人間が犠牲になることを良しとしないスモーカーは苦々しい顔で考え始めた。
「こりゃあまずいな。こっちが手を出せば奴らは市民に手をかける

つもりだろう」
「どうします。敵の数はこちらよりも多いですが」
「だがチャンスはある。混乱を待て」
「混乱？」
「これから麦わらのルフィの首が落ちる。海賊どもはそれを見たがってるはずだ。奴が仕留められたと同時に一斉に襲い掛かって無力化しろ。いいか、市民に手を出す暇を与えるな」
「了解しました。すぐに命令を伝達します」
周囲に複数居る海兵の中で軍曹が駆け出し、命令を伝えるためその場を離れた。
葉巻の煙を吐いて嘆息しつつ、スモーカーは唸る。
「少し待つしかねぇか。安全のためだ、我慢してもらう他ねぇな」
今すぐ手を出しては敵の思う壺。そうさせないためにはチャンスを待つ必要がある。
迅速に判断してスモーカーは腕を組んだ。
状況の変化を見逃さないよう、広場の光景をじっと見つめる。
いつの間にか空は曇天に変わっていた。分厚い雲の色は黒く、天を覆い隠してしまっている。天候が崩れるまでそう時間はないだろう。
それを知ると同時に広場の戦闘に舌を巻いた。
キリの動きは常人とは違った物だった。
攻撃にしろ回避にしろ、動作の一つ一つが軽快で体重を感じさせない。そして手に持つ武器や周囲で動く物はおそらくただの紙切れ。遠目に見ても異質な姿だ。
納得したように呟き、あらかじめ得ていた情報を思い返す。
「パラミシア、能力者か。紙使いとはよく言ったもんだ」
「すみませんスモーカーさん！　お、遅れました！」
「たしぎィ！　てめぇ刀取りに行くだけでいつまでかかってんだァ！」
監視所へたしぎが駆け込んできた途端、スモーカーは激しく叫んだ。
叱られたことによって自然とたしぎの身が縮こまって、深々と頭を

下げる。
「す、すみませんでした！　あの、スモーカーさん、ご報告したいことが」
「なんだ。言ってみろ」
「は、はい。この町に麦わらの一味が居るらしくて、ついさっき海賊狩りが――」
「そんなことくらい知ってる。あれを見ろ」
「え？」
顎で示されてたしぎが広場を見る。真っ先に見つけたのがルフィの姿だった。
「あっ……麦わら!?」
「海賊どもが馬鹿騒ぎしてやがるんだ。市民が近くに居て今すぐには手が出せねぇ。隙を窺って一気に突入するぞ。おまえも合図を待て」
「わかりました。でもよりによってあの処刑台を使うなんて……」
「海賊王が死んだ処刑台、か」
腕を組んだスモーカーが呟いて、たしぎは真剣な様子で口を噤む。
一体何の因果か、海賊王が死んだ場所で一人のルーキーが殺されようとしている。しかも話題になっていたばかりで、ウェンディから警告されたばかりでもあった。
彼らはこの町を出てグランドラインへ入る。
その言葉を思い出し、機を窺う目は真剣な物に変わっていった。
広場では今も尚戦闘が続いている。
当初の予定とは違い、キリは攻めあぐねていたようだ。
敵は二人。上手く立ち回れば回避できると予想していたものの、考えていたよりずっと難しい。それもひとえに片割れであるエルドラゴの能力が厄介だからだった。
ゴエゴエの実の能力で強化された大声が面倒だ。
光線にして飛ばす能力も面倒だが、それ以上に手間を取らせるのが声量を大きく底上げし、大気を揺らすほどの大声で平衡感覚を奪われ、集中力を乱されるのが手に負えない。紙を耳に張り付けて塞いだ

ところで遮断しきれず、隙を見せればモーガンが襲い掛かってくる。
なぜモーガンは無事なのだと見てみれば、彼は耳栓をしていて、特別性なのかそれだけで平気な顔をしている。従って苦しいのはキリとルフィ、そして市民たちだけだった。
事前に準備していたに違いない。自分たちだけを標的に待っていたのだ。
コンビネーションもそれなりの形にはなっていて、モーガンにしても以前出会った時より実力が上がっているような気さえする。修行でもしていたのかもしれなかった。
エルドラゴの大声で肉体に変化が生じ、その隙を狙ったモーガンの猛攻が迫り、何とか避け切るが状況の進展は見られない。無傷のキリだが自分が苦戦していると感じ取っていた。
せめてあの口さえ閉じられれば。
忌々しそうにエルドラゴを見たキリは大口を開けられた瞬間、右手から数枚の紙を投げ、開かれた口を閉ざすために紙を張り付けた。これにより口での呼吸は不可能となって動きが止まる。
即座にモーガンを睨んで牽制すると、やっと足を止める時間が作られた。
「ハァ、これで能力は使えないだろ。あの大声さえなければ――」
「ゴァァッ！」
再び大声が聞こえ、だが性質が違い、振り返ればエルドラゴの口から光線が放たれていた。
鉄にも等しくなるほど硬化していたはずだが、光線によって貫かれたらしい。気付くのが遅れて姿勢も悪く、咄嗟の判断でキリは転ぶようにして回避し、なんとか直撃せずに済んだ。
だが避けられたところで喜んではいけない。真っ直ぐ進んだ光線は町民を襲っていた。
数多の悲鳴。そして壁まで到達して大きな破砕音。
広場はかつてないほどの混乱に支配された。
敵は海賊。市民への攻撃も辞さない覚悟があり、それでも敵を倒そうとしている。

油断していたと言わざるを得ない。
これを見たキリは罪悪感を覚えずにはいられず表情を変える。地面を転んで起き上がり、的確な動作で自身の行動が制限されてしまったことを知った。
町民を傷つけないためには、自分が敵の光線を止めなければならないようだ。
「くそ、やりたい放題だな」
「また避けよったっ。おのれェ！」
怒り心頭といった顔でエルドラゴが駆け出して、それを見てからモーガンも前へ駆ける。
二人同時にキリへ襲い掛かり、エルドラゴは黄金で作られた鋭い爪を、モーガンは斧手で切りかかった。まずいと感じて両腕に紙を纏わせ、手甲を模り、硬化して攻撃を受け止める。
体重差があって姿勢を崩されてしまい、殴り飛ばされるような光景で背中から地面を転がる。歯を食いしばったキリは自ら後転し、しゃがんだ状態で顔を上げた。
追撃のため二人は眼前に迫っている。
体勢が悪く、防御と回避は間に合わない。
この判断により彼は両手を振って紙を飛ばし、無数に散らばった紙切れで敵の視界を阻害した。
「むおっ!?」
「チッ、小賢しい……！」
向かってくる紙の群れに驚いて足が止まった。それだけでなく一瞬体が硬直している。
地面を蹴って跳び出したキリがエルドラゴの顔面に蹴りを叩き込み、あまりの勢いで背を無理やり反らさせて、そのまま押し切るように蹴り抜いた。
エルドラゴはたたらを踏んで後ろへ下がり、その瞬間にキリは空中でモーガンを見る。
着地はまだ。モーガンは斧手を振り上げている。
しかしそうなると予想していたキリは攻撃の最中に紙の剣を握っ

ており、迫り来るだろう攻撃を想定して自らも剣を振っている最中。ただやられるだけの気概ではない。
問題なのはやはりモーガンではなくエルドラゴだった。
たたらを踏んだ彼は体勢を整えるより先に大口を開き、大声を発する。
耳にキンと来る衝撃。
一時的な物とはいえ音が一切聞こえなくなった。
当然集中力も持続できなくなって、紙の剣がただの紙に戻ってしまう。視界が揺れて着地の姿勢もままならない。その一瞬を待っていたモーガンの攻撃が目の前まで迫っていたようだ。
考えるより先に左腕を差し出した。腕が服ごと真っ白に染まって、紙になった上で硬化され、奇跡的なタイミングでモーガンの斧を受け止める。
硬化していたおかげで切られはしなかったらしい。
思い切り殴りつけられたような衝撃で体が飛ばされ、勢いよく地面を転がる。
まさに九死に一生を得たと言っていいだろう。
起き上がったキリは冷や汗を掻き、今度は自分から後ろへ跳んで距離を設けた。
「危なかった……やっぱりあの能力がだめだな。くそ、せめてあいつさえ居なければ」
「おのれ、しぶとい奴め！　モーガン、貴様手を抜いてるわけではないだろうな！　なぜ腕の一本も切り落とせねぇんだ！」
「うるせぇ。おれに指図するんじゃねぇよ」
どうやら仲が良いという訳ではなさそうだ。二人は厳しい顔で声をぶつけ合っている。
付け入る隙はありそうだが、やはり警戒すべきはエルドラゴの能力。敵の力を軽んじて動けば敗北する可能性もある。そのため、キリは思考に囚われて動けなくなっていた。
目に見える位置に居るルフィが驚くほど遠い。相対する敵はたった二人、されど自身が思うよりずっと苦戦していて、対抗策を考えよ

うにも連携が邪魔をして上手くいかなかった。
このままではまずいとわかっている。
視線は普段よりも厳しくなり、どうしようもないもどかしさを感じて苛立ちが増していく。
「何やってんだいあんたたち。仕方ないね。手こずってるようだからアタシも手伝ってやるよ」
「おぉ、アルビダ！　貴様のスベスベの能力があれば百人力だ！」
「どいてろ。こいつはおれが殺す」
冷静になろうとした時、アルビダが近付いてきて参加する。
これで敵は三人。聞けば彼女も能力者だという。
キリの表情はますます険しくなり、佇まいを正して再度彼らへの攻撃を始めた。
処刑台の上から見ていたルフィは仏頂面になって彼らの戦いを見ていた。
傍らではバギーが勝ち誇り、勝利を確信して上機嫌。余裕綽々の状態でルフィに言う。
「案外あっけねぇもんだぜ。おまえを殺すために集めた戦力だが、ほとんど使わずに勝っちまったなぁ。どうだ、せっかく見物人が居る。言い残す言葉があるなら聞いてやるが？」
サーベルを持つバギーは首に刃を突きつけた。
それでもルフィはつまらなそうにするばかりで何も言わない。
「だんまりか。まぁそれもいい。哀れな海賊一匹死んだところで世界は変わりはしねぇ」
「おれはッ」
そろそろ処刑を。
剣を持ち上げかけたところでルフィが口を開いた。
よく通る声で町民、海賊、海兵たちまでその声を耳にし、当然キリにも届く。
ルフィは勇ましい様子で大いに叫んだ。
「海賊王になる男だ!!!」
空気を震わす絶叫。死の間際にして度肝を抜く言葉が吐き出され

た。
多くの町民たちがその一言で絶句し、海賊たちは薄ら笑い、バギーは頬を引きつらせて怒った。
「てめぇ……言うに事欠いて何言ってやがる！　海賊王だと？　笑わせるな！　かつてその名を手にした男の名を知らねぇわけじゃねぇだろう！　ロジャー船長は偉大な海賊だった！　ちんけなてめぇがあの人と同じ場所で死ねるだけ感謝しろよクソゴム！」
両腕が掲げられ、剣が構えられる。
目には見えないがルフィにも気配でそれが伝わった。ぐっと歯を食いしばり、もがくために全身へ力を込める。だがやはり拘束器具は外れずに徒労に終わってしまう。
危険な雰囲気を感じてキリが叫んだ。だが目の前の三人に阻まれ、手は届かない。
「ルフィ!?　くそ、おまえらどけェ！」
「ぎゃはは、よく見ておけ紙使い！　てめぇの船長の最期をなァ！」
「その処刑、待て！」
「あん？」
鋭い声が聞こえてバギーの動きが止まる。振り返れば広場へ走り込んでくる人影が二つあって、片割れのサンジには見覚えがないが、頭に黒い手拭いを巻いて刀を持つゾロには覚えがあった。
船長を助けたいのだろうがそう簡単にはいかない。
勝ち誇るバギーは彼らを見て笑った。
「来たな、ロロノア・ゾロ。止めたきゃ止めてみろ！　間に合えばいいがなァ！」
「あの処刑台さえ斬り倒せば……！」
「クソ、どけェ！　ザコに用はねぇんだよ！」
広場を包囲していた海賊たちが反応して迎え撃つ。
圧倒的な数の利を持ちながら彼ら二人は止められない。実力の差により前進が続いていた。
それでも処刑台には届かない。あまりにも数が多過ぎて普通に歩くより時間はかかる。

キリもまた、幹部級の三人に止められて立ち往生していた。
時同じくして、広場を見渡す家屋の屋根に、三人が到着していた。
先行するシルクが手すりの傍へ駆け寄って足を止める。
広場を見回すと混乱している様子が理解できた。怒号が響いて戦闘が繰り広げられ、処刑台には動けない状態のルフィの姿。それだけで漠然と事態を理解する。
すぐに追いついたウソップとナミに振り返り、シルクは焦った顔で告げた。
「あそこ！　ルフィが捕まってる！」
「す、すげぇ数の海賊じゃねぇか!?　何がどうなってこうなってんだよ！」
「まったくもう、ちょっと目を離した隙に問題起こすんだから！」
三人が手すりから身を乗り出して処刑台を確認する。
かなりの距離があった。
しかしできることはあるはずだとシルクが剣を抜いて、隣に立つウソップへ視線を送る。
「ウソップ、ここから狙撃できる？」
「流石にこの距離は無理だ！　ピストルでも弾が届かねぇぞ！」
「大丈夫、私が風で後押しするから。飛距離は伸ばせるよ」
「そ、そうか。よし、ならやってみよう。このままルフィが死ぬなんてごめんだ！」
促されてウソップもパチンコを手に持ち、意を決する。
長距離狙撃で難易度は高いが、ルフィの処刑を黙って見過ごすなどできるはずがない。この一発は間違いなく成功させなければ。自分に言い聞かせて弾を番える。
シルクもまた剣を構え、能力を使用した結果、剣に風が纏わりつく。
それを阻止しようと声がかけられた。
背後からの声は冷たく、聞こえた瞬間に三人の肩が震える。
「そこまでにしておきたまえ。君たち自身の寿命が縮まる」
驚いて振り返れば声の主が見つかった。
猫の手を装備し、肩にコートをかけたキャプテン・クロが視界に入

り、掌で眼鏡の位置を直す素振りまでそっくりそのまま。本人なのだと理解するのも不思議ではなかった。
シロップ村での戦いで見た相手だ。当然見覚えがあって三人は驚愕する。
なぜここに居るのか。
考えさせる暇もなく屋上には続々と海賊たちが現れた。
ニャーバンブラザーズを始めとしたクロネコ海賊団の面々が雄たけびを上げながら三人を包囲してしまい、逃げ場のない屋上で追い詰められてしまう。
ウソップとナミが悲鳴を上げ、咄嗟にシルクが二人を背に庇って剣を構えた。
自身を倒した相手である。クロは冷徹に彼女を見つめる。
「この辺りの屋根は我々が手中に収めている。ウソップくん、君が狙撃を試みるだろうと予想していたからね。無事に帰りたいなら何もしないことだ」
「キャ、キャプテン・クロォ!?　なんでこいつがこんなとこに！」
「ちょっと待ってよ!?　私たち三人しか居ないのよ！　大勢で囲むなんて卑怯じゃない！」
ウソップとナミが動揺していて、もはや落ち着いて狙撃している場合ではない。
シルクはクロを見つめて表情を険しくする。
「何もしなければ、無事に帰れるってこと？」
「もちろん。手は出さないと約束しよう」
「嘘。海賊はそうやって敵の油断を誘うんだよ。私たちも海賊だから、よく知ってる」
「そうか。では嘘をついたことを謝ろう」
クロが両腕を広げ、部下たちも武器を振り上げた。
「一味全員、ここで死んでいけ」
「ギャアアアアッ!?　こ、こっちも大ピンチじゃねぇか!?」
助けに来たはずが自分たちまで窮地に陥ってしまった。これによりウソップは耐え切れずに叫び出し、呼応するかのように状況は悪化

している様子である。
全ては計算済みの行動。好転する兆しは見られない。
攻めあぐねる麦わらの一味を見渡したバギーはひどく上機嫌だった。
これで復讐が終わる。あとは麦わらのルフィの首を切り落とすのみ。仲間たちは自らの船長を救うことができず、失意の内に敗北することとなるだろう。
再びバギーの剣が振り上げられた。
「さぁ、フィナーレだ。別れの挨拶は済んだか？　麦わらァ」
「ふざけるな！　まだ終わってない！」
その一言が聞こえたか、咄嗟にキリが叫んでいた。
入れ代わり立ち代わりで繰り出される猛攻に耐えながら、彼の目は処刑台を睨んでいる。息もつかせぬ攻撃の中で生きているのも異常だが、それでも彼の意識は処刑台にのみ向けられていた。
初めて見る表情と声色にルフィが息を呑んだ。
じっとキリの姿を見つめ、静かな様子で表情から感情を消す。
「これからだって時に、ハァ、こんなところで終わってたまるか！
ルフィ！　必ず助ける！」
「……だそうだが、何か返答は？」
にやりと笑ってバギーが問えば、ルフィが視線を上げて広場を見渡す。
そこには怒号が広がっていた。いくつもの音と声があった。
処刑台から全てを見つめ、やがて静かに語り出す。
「ゾロ。サンジ」
次々海賊を倒し、前進してくる二人だがいまだ届かず。
強いと知って集まってくる敵に阻まれて微塵も休む暇がない。
「ウソップ。シルク。ナミ」
処刑台から見て真正面の建物、屋上には三人の姿が見えた。
辛い足場で戦っているようで落ち着きがなく、危なっかしくも動き回っている。
「キリ」

そして最も近い位置。届きそうで届かない距離。
自身が選んだ一人目を見つめた後、ルフィはにっと口の端を上げた。
後悔など全くしていない笑顔で、いつもの声色で告げられて。
騒がしい広場の中でも、不思議とその一言はしっかりと仲間たちに届いていた。
「わりぃ。おれ死んだ」
驚愕。直後にバギーが剣を振り下ろす。
その一瞬はやけに遅く見えて、誰もが彼の笑顔と、最期だろうという瞬間を見つめる。
刃を止める物はなく、バギーの行動を止めるものはなかった。
だからこそルフィの最期だと感じる者は多かったのだ。
しかし、天がそれを許さなかったか。
突如空から落ちた一筋の雷が処刑台に直撃し、閃光と轟音が辺りを包み込んだ。

新時代

処刑台が崩れ落ちた。
前触れもなくやってきた雷に打たれ、ほんの一瞬で倒壊。雷鳴の直後にガラガラと崩れる音が響いて瓦礫と成り下がり、しんと静まり返った辺りで、誰もがその場所に注目していた。
どさりと落ちたのは黒焦げになったバギーの体。どうやら気絶しているらしい。
それから数秒の間を空け、ひらりと落ちてきたのは麦わら帽子だ。
平気な顔で歩み寄って右手で持ち上げ、頭へかぶる。
ルフィはその後、変わらぬ笑顔を見せて楽しげに笑った。
「しっしっし。やっぱ生きてた、もうけっ」
ローグタウンに、雨が降り始めた。
言葉を失った人々は呆然と立ち尽くし、ルフィの笑顔に驚く。怪我一つせずに元気な姿で立っている。気絶しただろうバギーとはあまりにも違う姿だった。
見ていた全員が言葉を失い、驚愕してから平静を失くしたまま、動くどころか声すら出せない。耳が痛いほどの静寂を切り裂くのはルフィの能天気な笑い声だけである。
その中で最も早く、心から安堵してキリが地面に膝をつく。
全身を襲った疲労感はひどい緊張状態から解放されたせいでようやく感じられたのだろう。
力が抜けて幼くなった微笑みは、彼の精神状態を色濃く表していた。
「はぁ、ほんと……心臓に悪いなぁ」
ぽつりと呟いて肩の力を抜いた。
まだ近くには敵の幹部も居るが全く動いていない。平静を取り戻せる様子も皆無だった。
キリを除けば最も早く正常な判断を下せたのは、監視所から見ていたスモーカーである。
ルフィが生きていた。これを見ただけで表情が変わり、動揺するよ

り先に判断する。
彼は周囲に立っていた部下たちへ鋭く指示を出し、明らかに普段とは違った様子で声を荒げた。
「今すぐ待機させていた兵を突入させろ！　あいつだけは絶対に逃がすなァ！」
「は、はっ！」
肩を震わせた一人の海兵が駆け出し、部屋を出ていく。
動揺は海兵たちにも広がっていた。誰もが終わりだと思っていたのに、奇跡的な出来事で助かってしまった海賊。まさかあの状況から生還するとは思っていない。
状況を理解して青ざめている者も多い様子。
特に焦りを見せていたのがスモーカーだ。隣に居たたしぎが尋ねずにはいられないほどだった。
「ス、スモーカーさん、大丈夫ですか？　なんだか顔色が――」
「笑ったんだよ」
「え？」
「おれァ、ガキの頃に見たことがある。二十二年前、あの処刑台で死んだゴールド・ロジャーと全く同じだった……あいつは死の間際に笑いやがったんだ！」
声を荒げるスモーカーもまた動揺しているのだろう。その顔からは余裕が消えていた。
「あいつだけは逃がすわけにはいかねぇ。何としても捕らえるぞ！」
「は、はい！」
スモーカーはたしぎを連れ、急ぎ監視所を後にする。
その後も監視所の中は慌ただしく動き、息つく暇もなくなってしまったようだ。
雨が降り注ぐ広場が再び動き出したのは、潜んでいた海兵が海賊捕縛に乗り出した頃。
武器を持った海兵たちが一斉に現れたことにより、海賊たちが応戦して一気に騒がしくなり、町民が逃げ惑って大混乱となる。この状況

はもはや誰にも治められない。
空気は一変する。
その間にルフィがキリと合流。笑顔で気楽に声をかけた。
「キリ、大丈夫か？　濡れちまったらだめなんだろ」
「まぁね。でも走るくらいならなんとかなるよ」
「おし。んじゃ逃げるか」
「そうだね……ふぅ。しかしまぁ」
へたり込んでいたためルフィに肩を借り、なんとかキリが立ち上がる。すると彼はじとりとした目でルフィの顔を見やって、拗ねた顔で頬を引っ張った。
「なんであんなこと言うかな、この男は」
「ししし、まぁいいじゃねぇか。結局生きてたし」
「そういう問題じゃ……ハァ、もういいや。それより危なくなってきた。すぐに逃げよう」
「おう！」
肩から手を離して自身の足で立つ。
全身が雨に濡れてしまって体の力が抜け、これ以上の戦闘は不可能だが自分の足での移動くらいはできるらしい。ふらりと揺れたキリの体はもう倒れなかった。
ルフィは心配する素振りを見せるもあっさり手を離す。
大丈夫だと言うなら大丈夫なのだろう。無理に手を貸すことはしない。
混乱する広場の中。二人が走り出そうとする前にゾロとサンジが駆け寄ってきた。ゾロは手拭いを外して腕に巻き直しており、サンジは火が消えた煙草を携帯灰皿に押し込む。
二人の前にやってきてすぐ嘆息する様子だった。
「おまえら、神の存在って信じるか？」
「バカなこと言ってる場合じゃねぇぞ。海軍が来た。とっととずらかった方がいいぜ」
「逃げるぞ！　今度こそグランドラインだ！」
ルフィが宣言して四人が走り出そうとする。

至る所で戦闘が始まり、大騒ぎになっているが、だからこそ彼らへ向けられていたはずの注意が逸れている。今ならば簡単に逃げられるはずだ。
気付かれない内に移動を始めたその瞬間。呆けていた面々が背後から声をかけてくる。
振り返った彼らが見たのはキリと戦っていた三人の幹部だった。
邪魔をされたことで足が止まり、特にサンジはアルビダの姿を見て目の色が変わってしまい、強く睨まれているところを確認すれば簡単には逃げられないようである。
「待ちなルフィ！　アタシから逃げるつもりかい！」
「あの時のきれいなお姉様ァ～!!」
「アルビダか。まいったなぁ、キリはもう戦えねぇのに」
「ほっとけ。先を急ぐぞ。おいアホコック、盾になるなら止めねぇぞ、行ってこい」
声をかけられるが気にせず逃げ出そうとする。
それを見てエルドラゴが大口を開け、攻撃のために思い切り息を吸った。
「逃がさんぞコソ泥めェ！　わしの黄金を返せ！」
「まずい、またあの攻撃だっ」
咄嗟にキリが呟くも、防ぐ術はなく。
エルドラゴはその口から眩い閃光を吐き出した。
薄暗い中で一際輝いて攻撃が迫る。四人はその様をじっと見つめ、回避のために身構えた。
しかし接触の前に誰かが間に割り込んできた。
見知らぬ男は四人に背を向け、閃光を見据えて胸の前で両腕を交差させ、奇妙に指を絡める。
なぜか閃光は男の眼前へ到達すると、何かにぶつかるようにして掻き消えてしまい、一瞬で消滅してしまった。どうやら男は四人を守るために割り込んだらしい。
トサカのような特徴的な髪型を持つ、体格の良い青年。
あいにく見覚えは無い。誰かの知り合いという訳ではなかった。

名も知らぬ彼はエルドラゴの攻撃を無力化させた後、ゆっくり振り返り、その顔を見せる。
四人は眉間に皺を寄せて驚いてしまった。
理由は知らないが、なぜか彼は泣きじゃくっていたのだ。
「おぉ、おぉぉぉ……！　あ、あんた方、すげぇ人だっぺ……！」
「なんだ？　誰だこいつ」
「なんで泣いてんだよ」
「しかも号泣だね。知らない顔だけど」
「お、お、おれは、今、猛烈に感動してるんだべ……死を恐れずに啖呵を切ったお姿！　仲間を救おうという熱いお心！　そして天から落ちた奇跡の雷！　すげぇ衝撃だった。おれはあんた方、いや！　あなた方がここで死ぬのはいやだと思った！」
男は大粒の涙を流しながら熱っぽく語る。
混乱する戦況の中で異質だと思いつつ、四人もなぜかそれを聞いていた。
「おれらこの町のギャングで、海賊じゃねぇけども、微力ながらお手伝いさせて頂きてぇ！　こいつらはおれに任せてくんろぉ！　みなさんを傷つけさせたりはしねぇっぺ！　そ、それとみなさんを先輩とお呼びしてぇんだどもよろしいでしょうか！」
「えっと、味方？」
「とりあえず害は無さそうだが、どうすんだルフィ」
「別にいいんじゃねぇか？　おい、おまえ名前なんていうんだよ」
「はっ!?　お、おれのようなもんに名前を聞いてもらえるだなんて恐れ多い！　で、でもここで答えなきゃ一生名を呼んでもらえねぇかもしれねぇ……おれは一体どうすればっ！」
「いいから早く言えよ。めんどくせぇな」
ゾロとサンジが苛立っているらしく、キリはただ戸惑い、ルフィはからからと笑う。
不思議と出会ったばかりの男は感動が止まらない様子だった。尚もエルドラゴが大声による閃光を放って攻撃するのだが、男の前にあるバリアのような壁が防いで遮断する。男はまるで気のない素振り

なのに全くダメージを与えられていない。
泣きじゃくる顔はルフィを見つめている。
「お、おれの名前、バルトロメオって言いますぅ！」
「ばる、ろめ？」
「バルトロメオ」
「バルトロメオ！」
首をかしげるルフィへキリが囁いてやり、教える。するとルフィの顔がパッと輝いた。
名前を呼ばれたことでバルトロメオはさらに大量の涙を流す。
「ありがとな！　ちゃんと礼言いてぇけど今はだめだ！　また会おう！」
「はっ、はいぃぃぃっ！」
「急ぐぞ。かなり騒がしくなってきた」
別れを告げると改めて走り出し、広場を離れようとする。彼らが動けば当然アルビダやエルドラゴやモーガンが反応するも、やはりバルトロメオが立ち塞がった。
彼が作り出すバリアが全てを阻み、攻撃は無効化され、追撃は行えなかったようだ。
「そこをどけ！　わしはあいつらから黄金を取り戻すんだ！」
「うるせぇー！　てめぇら如きが麦わらのルフィ先輩の邪魔すんじゃねぇ！　あの御方はいずれ海賊王になられるんだべ！」
後続をバルトロメオ、或いは彼の仲間だろうギャングたちに任せ、四人は駆ける。
広場の混乱が深まっていたのはどうやらギャングたちの乱入があったからだ。最初からそこに居たのか、それとも途中から参加してきたのかは定かではないが、バルトロメオの指示に従ってのことだろう。今や海賊と海兵がぶつかる戦場に陸のギャングが参入している。
さらに逃げ惑う町民たちも彼らにとっては味方と成り得た。
混乱が深まったことで注目される機会がめっきり減り、四人はすぐに広場の出口まで到達する。
濡れたことで疲弊した顔のキリを気遣いつつ、騒ぎの中心を抜け出

すと同時、前方からは逃げ出してきたらしい他の三人も合流できた。
ウソップは安堵した様子で涙を流して、ナミとシルクの顔にもほっとした笑みが浮かぶ。
「ルゥ～フィ～!!」
「ウソップ！　シルク！　ナミ！　おまえら無事だったか！」
「てめぇこの野郎ッ！　寂しいこと言ってんじゃねぇぞ、バッキャロー！　海賊王になるならまだまだ死ねねぇじゃねぇか、コンニャロー！」
「あっひゃっひゃ！　わりぃわりぃ、いやぁ～ほんとだめだと思ったんだよなぁ」
まだ騒ぎに近い場所で足を止め、互いの顔を見合わす。
一時はどうなることかと思ったものの一人も欠けていない。いつもの面子が揃っている。
次に考えるのはローグタウンから逃げることだ。
素早く判断したナミが口火を切り、参謀たるキリへ意見を求める。
「安心するのはまだ早いわよ。すぐにこの町を離れなきゃ。キリ、それでいい？」
「うん、急ぐよ。ただしまだ待ち伏せの可能性もある。できるだけバラケてメリーに戻ろう」
「もう海軍も動いてるよ。急がなきゃメリーも危ないかも」
シルクが皆に促したことでそれぞれ頷き、意志を統一する。
まだ危険は去っていない。メリー号に乗り込んで海へ出るまでは、否、今は嵐が来ている。海に出てからも気を抜くことができない状況だった。
本当に助かったと安堵できるのは、町を抜け出して嵐の下を抜け出した時。
目を見合わせて全員が理解し、やがて行動に移される。
動き出すのは早かった。
まず先にゾロが駆け出して、先頭で行こうとする彼を見てシルクが慌てた。
方向音痴の彼を放っておく訳にはいかない。自分で道を選んだな

ら尚更のこと。
考えるより前にシルクがゾロを追いかけていた。
「とにかくおまえら、油断すんじゃねぇぞ。ゆっくりしてる時間はもうねぇんだ。全員メリー号まで足を止めるな、いいな！」
「ちょっと待ってゾロ！　一人で行くと危ないよ！　道に迷うから！」
遠ざかっていく二人を、殊更シルクの背を見てサンジが手を伸ばすが、止め切れず。
残念がるような素振りの彼は頭を振って考えを変え、自身もまた走り出す。
その際、声をかけたのはナミだけだった。
「あっ、シルクちゃん！　おれが守ってあげたかったのにマリモなんかのために……！　言ってても仕方ねぇか。ナミさん、こっちへ！　ナミさんは必ずおれが守る！」
「お願いよサンジくん！　か弱い私を怪我させないように！」
「あ～いっ！」
「おぉい待ってくれサンジくぅん!?　か弱いおれも守ってくれぇ！」
駆け出したサンジとナミに続き、ウソップもまた二人と共に去っていった。
残ったのはルフィとキリだけである。
ゾロとシルクが右手の道へ駆け出して、左手にはサンジとナミとウソップが向かった。ならば自分たちは正面の道だろうとルフィがキリへ振り返る。
「行けるか？　無理ならおれがおぶってやるぞ」
「流石に走るだけなら大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」
「そうか。うし、急ぐぞ！」
「メリーが無事とも限らない。アーロンたちが上手くやってくれてるといいけど」
ルフィとキリが駆け出して人の姿がない大通りを走っていく。
背後にあった喧騒はどんどん遠くなっていった。

嵐はさらに激しさを増していく。
ただ彼らにとって幸いだったのは、風は西へ向けて吹いていて、グランドラインを目指す船には追い風となること。まるで天候まで彼らの背を押すかのようだ。
突如現れた嵐に見舞われ、ローグタウンの混乱はより一層深まるばかりであった。

トランス・トラップ

嵐によって大きく荒れる海で、首領クリークは悔しげに歯噛みしていた。
彼の仕事はもしもの場合に備え、敵の退路を断つこと。つまりは敵船の破壊だった。
当初は簡単だと予想して、手を抜くことなく十五隻の艦隊を引き連れて、頃合いを見計らって沖から姿を現したのだが、結果はどうだ。全く彼の予想通りには進んでいない。むしろ、最悪の結果として目の前にある。それは見たくもない光景だった。
十五隻の艦隊は、たった一隻を残して全て海の藻屑と消えていた。
やったのは魚人の集団、アーロン一味だ。彼らは敵が近付くと知るや船を動かさず、自らの肉体のみで海へ潜り、圧倒的な強さで敵の艦隊を屠っていったのである。
どれだけ人数が多くとも水中では呼吸できない人間ばかり。
海中から一方的に船を破壊し、海へ引きずり込めば人数の差など関係がなかった。
戦況はあまりにも一方的。それだけに屈辱を感じてクリークが余裕と平静を失っている。
こんな話は聞いていなかった。
麦わらの一味に魚人が居るなど聞いておらず、海中に居る敵への対抗策がない。
反撃のできない状況はただただ悔しく、憎らしく。
自然にクリークの全身は怒りに包まれていた。
「首領！　これ以上は無理です！　今すぐ撤退を――！」
「黙れェ！　このおれが敵前逃亡だと!?　おれを誰だと思ってやがる！」
「し、しかし……！」
撤退を促すギンに対して厳しい言葉を返すほど、クリークは冷静さを欠いている。本来ならば撤退しなければただ全滅するのみ。だが狼狽する彼はそれを恥だと思って承諾しようとしない。

戦場、或いは海の上は、完全にアーロン一味が支配していた。
残った一隻に乗る海賊たちもすっかり怯え切っており、戦闘が継続できる心境ではない。
クリークが舌打ちをして、そう時を置かず、海から飛び出す人影があった。
突如船上にアーロンが乗り込んでくる。
敵は一人。舐められているのだろう。
当然クリークは怒りを露わにし、自らが前に出て武器を手にした。
以前に壊れた金色の鎧の代わりに、同じ形で水色に光る鎧を装備している。
両肩の肩当てを手に持ち、全く同じ造りで用意した大戦槍を用意して、クリークが立ち向かう。
それを見るアーロンの目はひどく静かな様子だった。
「てめぇ……！　ふざけた真似しやがって！」
「おまえが一番強ぇ奴か」
アーロンがクリークを見据えて小さく呟いた。
態度としては素っ気なく、見ているようでさほど注目していない。
異様な雰囲気だ。
当人が気付けたかは定かではないが、有り体に言えば、眼中にないのである。
向き合ったとはいえアーロンに気はなく、足を止めて待つ余裕すらある。
妙な態度を見てギンが焦りを抱いた。
この敵は普通ではない。魚人であることを除いてもイーストブルー最高額の賞金首だったことには気付いており、額はクリークより上だったと理解している。
立ち会うにはまずい相手だろう。
ギンが止めようとするのだが、しかしクリークは武器を構えて自ら対峙し、譲らず。
アーロンもまた肩に担いでいたキリバチを握り直した。
「首領！　落ち着いてください！　こいつは――！」

「どけぇギン！　おれが負けるとでも言いてぇのか！」
「い、いえ、しかし危険です！　ここは一旦体勢を整えた方が……！」
「おれが居ればどうとでもなるんだ！　誰もおれには逆らうなァ！」
そう言ってクリークが走り出した。
芸もなく真正面から向かい、対するアーロンはじっと見つめて冷静なまま。
武器を振り上げるのは全く同時。互いに距離が埋まったことを理解して攻撃の準備を行い、そして全力で振り切って攻撃とした。
キリバチと大戦槍が激突して、大戦槍の性質から小さな爆発が生じる。
武器の機構に驚いたアーロンは爆風でキリバチを押し返され、わずかだが体勢を崩した。
これ幸いとクリークが笑う。たたらを踏んだアーロンを見て一歩を踏み出すと武器を振り上げ、次の一撃で勝負を決しようとした。大戦槍にはそれだけの威力があると自負している。
浮かべられた笑みを見れば意志は伝わったのだろう。アーロンは自らキリバチを捨てる。
大上段から振り下ろされた軌跡を見、敢えて前へ出て体の向きを変えた。
アーロンの正面を大戦槍が通り過ぎて、直後には床を叩いて爆発を起こす。体勢を崩していたはずが見切った上で避けられた。巨体とは思えぬ身のこなしだった。
クリークは驚愕し、血走った目で彼を見る。
別段特別なことをした意識はないらしい。アーロンは涼しい顔で右腕を伸ばすと、クリークの首を素早く掴み、優れた腕力で無理やり地面へ押し倒した。
後頭部を強かに打ちつけ、視界にパッと星が散る。
どれだけ強固な鎧を身に纏おうと生身に受けたダメージは防げない。痛みで体が強張っていた。

「ぐおぉ、てめぇ……！」
「それで全力か？　おまえの力はそんな程度なのかよ」
首を握る手へ徐々に力が入っていく。片手とはいえクリークを絞め殺せるだけの握力があり、苦しさを感じる彼自身、自分が死ぬのではないかと思わされてしまったようだ。
アーロンの目に怒りが灯り、見る見るうちに激情が現れる。
彼は何かに怒っているらしかった。
「ここは海の中じゃねぇ、船の上だ。てめぇら人間にも呼吸ができるだろう。それで全力か？　もう終わりなのかよ。これじゃちっとも足りねぇだろうが！」
魚人族は人間の十倍もの腕力を持つ。その力を使い、軽々とクリークの体を持ち上げてしまい、首を掴んだまま甲板の床へ思い切り叩きつけた。
再び後頭部への強い衝撃。クリークは耐え切れず意識を奪われる。
鎧が通用しない戦法で敵を倒し、あっさり手を離したアーロンは立ち上がって歯を食いしばる。
疲労からではないが肩で呼吸をして、沸き上がる怒りが抑え切れず、ただ自問自答する。
足りない。まるで嬉しくも無い。
敵を倒して尚も渇き、彼は更なる力を求めていたようだ。
「おまえに勝ったところで嬉しくもなけりゃ自慢もできねぇ……もっと強ぇ奴は居ねぇのか！」
「首領！　てめぇ、首領から離れろ！」
甲板に居る敵を見回して言ったことで、トンファーを持ったギンが応え、駆け出した。真っ直ぐアーロンへ向かって怒りのままに攻撃を繰り出そうとしてくる。
少しは楽しめるのかと思った。だが距離が詰まり、敵の攻撃を目にした途端、絶望する。
遅い。全く話にならない。
脳裏にはここ数日を毎日戦い続けた男の姿と速度。
こんな程度ではない。もっと速く来なければ、来れる者に勝たなけ

れば意味がない。
目の前に居る敵に勝ってもあの男には勝てないではないか。
苦悩し、考えるのはそればかりだ。アーロンは自らより強い敵を、脳裏にある男よりも強い誰かを欲していた。その敵を倒せば自分は忌まわしい相手にも勝てるはずだと。
一撃目を後ろに跳んだことで避けて、素早くキリバチを拾う。
迎撃のために直後には体勢が悪いまま振り切っていた。
脳裏に居る男なら軽く跳んで回避するはずである。
そう思っていた矢先、ギンの胸元がキリバチの刃で削られ、悲鳴と同時に鮮血が舞う。
「ぐあっ!?」
「チッ。てめぇも弱ぇ人間か」
再度の失望、そして絶望感だ。
やはり話にならない。これでは相手にしている意味がない。ただ時間を無駄にするだけで、これから強くなるための糧にさえならなかった。
苛立ったアーロンは大上段までキリバチを振り上げ、怒りに任せて振り下ろす。
ギンの肌を捉えたそれは袈裟切りに、深々と肌を切り裂いた。
「弱ぇ奴がッ、おれの前に立つんじゃねぇよ!」
「ぐあぁっ、あぁっ!?」
「他には居ねぇのか! おれを止められる奴は! おれを殺せる奴は居ねぇのかァ!」
倒れたギンなど全く意に介さず、アーロンは船上に居る全員へ聞こえるように叫ぶ。しかし今、怯え切ってしまったクリークの部下たちは答えることなく、震え上がって立ち尽くすばかり。
更なる怒りに見舞われてアーロンが動きを止めた。
相手にする価値もない。そう判断して攻撃さえやめてしまったようだ。
時を置かず、船が揺れる。
大きな揺れは船底へ攻撃を受けたのだろうと知っているが、アーロ

ンは突っ立ったまま大して反応を見せずに動かない。すでに勝利は決まったのに喜びもしなかった。
海から飛び出したはっちゃんが船の上へ乗り込んでくる。
アーロンの姿を見つけ、いつも通りに声をかけた。
「アーロンさん、この船も終わりだ。これでおれたちの船を狙う敵は居なくなったぞ」
「ハチ。おれは弱ぇか」
「ニュ？　いいや、そんなことねぇ。アーロンさんはおれたちの中で一番強ぇ人だ」
「だったらなぜあいつに勝てねぇ。十隻以上の艦隊を潰して、人間どもを倒せるおれが、なぜ軟弱なゴム人間のあいつを始末できねぇんだ」
「そ、それは……」
沈みゆく船の上で曇天を見上げ、憎らしげに言葉を吐き出す。
その時の彼ははっちゃんの目から見ても今までとは何かが違っていた。
「こんな程度じゃ足りねぇんだ。奴にはおれ自身の手で思い知らせてやらねぇと気が済まねぇ。もっと強くなる必要がある。麦わら、あいつを始末するために……！」
言い終えた直後に船体が真っ二つに割れ、海底から頭突きを行ったモームの顔が飛び出す。
中央から破壊された船は耐え切れずに海へ散らばり、荒波によって呑まれてしまう。しかしその上に居たはずのアーロンとはっちゃんは海中に落ちたところで平気な顔。悲鳴を上げて落ちていく人間たちとは違って、荒波の中でも溺れる心配がなかった。
海上での戦いにおいて魚人は最強。十五隻の艦隊を潰して、それを証明したと言える。彼らの仲間である海牛モームの力も加わって最強に相応しい完全勝利である。
しかしアーロンは満足していなかった。
彼らとの戦いなど全く関心がなかったようにも見える。
あくまでも勝たなければならない相手は麦わらのルフィただ一人。

海中に落ちた後も、アーロンの表情は険しいままで決して緩むことはなかった。

＊

厳しく雨が降り注ぐ町の中を走ってゴーイングメリー号を目指す。

先頭にサンジを置き、その後ナミ、ウソップと続く集団は敵に出会うことなく進んでいた。

ここまでは順調。

今のところ敵と遭遇することがなく、かなりの戦力差があったはずだが嵐の影響が出ているのかもしれない。ここまでスムーズに進めたからには船まで無事に逃げ帰りたいところ。

特にウソップとナミは無人の通りを見てそう思い、安堵する様子すらあった。

「この辺は全然敵居ねぇな。やっぱり広場に集まり過ぎてたみてぇだな」

「まだ安心できないわよ。この嵐じゃかなり航海は厳しくなる」

「うっ、でも町に残るのは無理そうだし……」

「行くしかないわね、グランドライン。危険だけど」

「はぁぁ、結局危険じゃねぇ時なんてねぇんだよなぁ……」

ウソップが溜息をついて顔を伏せた。

その間も急いでいて足は止めず、殴りつけるような雨に耐えて足を動かす。

最後こそ騒動に巻き込まれているが準備は終わっている。キリに呼び出される前に、他の面々は全員が一度メリー号へ戻っており、手に入れた荷物も積み終えていた。

あとはクルーが船へ戻ればいつでもグランドラインへ向かうことができる。

やっとここまで漕ぎつけた。今更捕まることなどあり得てはならない事態なのである。

先頭に居るサンジがわずかに振り返り、ナミへ目を向ける。

心配するようでいてやはり目つきは彼女に見惚れるばかりの様子だった。
「ナミさん、疲れてないかい？　限界ならおれがおぶってあげるから」
「はいはい、ありがと。心配しなくても大丈夫よ」
「なぁサンジくぅん、おれはもうだめかもしんねぇ。おぶってくれるか？」
「知るか。その辺で転がってろ」
「あっ、ひでぇ奴だなおまえは！　仲間を心配するやさしさはねぇのか！」
「うっせー！　おれがおぶるのはか弱いレディだけだ！　どうしてもってんなら性転換でもしてみやがれ、長ッ鼻！」
「きぃぃ～っ！　あなたがそんな人だとは思わなかったわよ！　いいわ、絶対きれいになってやるんだから～！」
「何よウソップ、意外と余裕あるじゃない」
おどける余裕まで出てきたか、後ろを走るウソップの声にナミが苦笑して肩をすくめた。
敵の姿がないことがそうさせているのだろう。
サンジは至って迷惑そうだが冷静さを欠いているよりずっとマシだ。
気が緩みかけた頃、チャンスを窺っていたかのように背後から声がかけられる。
ウソップよりもさらに後方。仲間ではない誰かの声。
嫌な予感がしてふと振り返ってみれば、追ってくるのは敵だろうと思う派手な格好の海賊たち。怒っているらしいとは一目でわかって、ナミとウソップの表情が変わった。
一方でサンジは面白いと笑い、咄嗟に足を止めて二人を先に行かせる。
「待て貴様らァ！　そう簡単に逃げられると思うなよ！」
「ここまでやっといて逃がして堪るか！」
追ってきたのはバギーの部下たちだ。

先頭には一輪車に乗るカバジと、ライオンのリッチーに乗るモージの二人。
サンジにとっては初めて見る顔ぶれであり、異質な二人に興味も沸いたらしい。
「お、ライオンが居るじゃねぇか。上に乗ってんのは人間か？　変な着ぐるみ着てんな」
「着ぐるみじゃない！　これは地毛だ！」
「嘘つけよ。だとしたら相当珍種だぜ、人間の」
「やかましいわ!?　ほっとけ！」
余裕のある言葉を放ればモージから怒りの声が返ってくる。
サンジは敢えて立ち止まり、彼らを迎え撃つ気でいた。
無視して逃げてメリー号まで追って来られては厄介な状況になる。ならばこの場で仕留めてしまう方がよほど効率が良い。尚且つ、彼の後ろにはナミが居た。彼女に良いところを見せようという腹で、敵の数は少々多いものの、その方がむしろ良いとさえ思っているらしい。
敵の到着を待って身構えた。
しかし彼の予想とは違い、急に細い路地から両者の間に飛び込んでくる影がある。
黒い外套を身に着けフードをかぶり、顔は見えない。姿さえもわからない。だが身のこなしと外見から直感で女性だと気付いたサンジは驚愕して目を見開いた。
大勢の海賊たちの前に立ちはだかったのだ。冷静ではいられなくなる。
振り返って同じく足を止めるナミとウソップには気付かぬまま、咄嗟に走り出し、気付けば見知らぬ女性を助けるべく急いでいた。
サンジはその人へ声をかけ、届かぬと知りながら手を伸ばす。
「おい君、危ないぞ！　そいつらは海賊だ！」
声をかけるが応答はない。海賊たちを見据え、腰を落として身構えている様子。
「そこに居ちゃだめだ！　早くこっちへ――！」
「邪魔だ！　どけェ！」

手を伸ばしても届かない距離があって止められずに、海賊たちは女性へ迫る。
その時、サンジの視線の先で、女性が拳を構えた。
まだ敵まで距離がある状況の中、慣れた挙動で鋭く拳を突き出し、攻撃を繰り出す。
届かないはずだった。しかし拳から見えない攻撃が飛ぶ。
当たらないと思っていた攻撃は大気を揺さぶり、空気中の水分を振動させて衝撃を走らせ、前方に居た海賊たちの体内にある〝水〟を揺さぶる。拳を当てずに衝撃だけを届けていたようだ。
屈強な男たちの体が宙を舞い、受け身も取れずに地面へ落ちた。
たったの一撃で意識が奪われている。彼らはすでに気絶していたようだった。
ゆっくり足を止めて、サンジは呆然とその背を見つめた。
一週間の休暇を過ごす内に、何度かクロオビと手合わせをした結果、彼は魚人空手に関する知識を得た。おそらく女性だろうその人物が使ったのはまさしくそれ。
人間でありながら魚人空手を使っていた。
ハーフという可能性もあったが不思議な状況で、思わずぽつりと呟く。
「今のは、魚人空手か……」
「もう大丈夫だよ。君たちは先を急いで」
「あっ、君」
小さな声は女性にも聞こえたらしい。
振り返る彼女の顔がわずかに窺うことができ、まだ年の若い、可愛らしい少女だとわかった。
途端にサンジが鼻の下を伸ばしてだらしない顔になる。
駆け寄ってきたウソップとナミも彼女を確認して、驚いている様子で問いかけた。
「うおおっ、すげぇ美少女じゃねぇか！　なぜこんなところにっ」
「い、今のどうやったんだ？　まさか能力者？」
「あんた何者？　私たちの味方？　それとも敵？」

「うーん、一応味方、かな。私たちのリーダーがみんなを助けたいって」
「リーダーって」
「安心して。何も危害は加えないから」
わずかに見える顔がにこりと笑い、親しげな態度で接してくる。
二の句を告げられずにナミが黙った。
得体の知れない相手だが悪い人間には見えないから不思議だ。邪気の無い可憐な笑顔は不思議と信じてしまいそうになる。
とりあえず危険はないだろうと判断して、三人は肩の力を抜く。
後続の敵がまだ迫ってくるらしい。雄々しい声が聞こえて振り向けばすでに敵は近かった。
再びウソップが悲鳴を発し、まずい状況だと判断した。
「しゃべってる場合じゃねぇぞ⁉　また来た！」
「君たちは行っていいよ。ちょっとだけ私も手伝うから」
「そんなっ、君のような可憐な少女を一人残してなんて行けねぇ！」
嫌がる素振りでサンジが叫ぶものの、少女は取り合うことはなかった。
ゆっくり歩き出して離れていき、敵の前に立つと再び拳を構え、突き出す。
行う動作はそれだけだった。
「鮫瓦正拳！」
「うおっ――！」
水を伝って衝撃が駆け抜け、敵の一団へと接触する。
迎撃はたった一発。それだけで複数の大男が宙を舞って意識を失い、地面へ倒れる。
圧倒的な力の差があった。
彼女は並みの男にも負けない力を持っており、やってきた敵を一瞬で倒してしまっていた。これではサンジと戦ったとして結果がどうなるかわからない。
今度こそ三人は呆けてしまい、言葉を失う。
少女は振り向き、笑顔を見せた。

にこりとやさしい表情。そのままの様子で言葉を差し出す。
「処刑台の出来事、見てたよ。なれるといいね。海賊王に」
そう言って少女は走り出してしまい、また小さな路地へ入って姿を消してしまった。結局誰かもわからぬまま。素性が知れない相手に助けられたらしい。
しばし呆然と立ち尽くしていた三人だが、やがてナミがこのままではいけないと気付く。
誰に助けられようが今はメリー号へ急がなければならない。
驚くウソップと少女に見惚れるサンジに声をかけ、正気に戻させた。
「ぼけっとしない！　サンジくん、ウソップ、行くわよ！　今は急いでこの島から出なきゃ！」
「ハッ、そうだった！　これ以上ナミさんを危険な目に遭わすわけには！」
「お、おぉし、急ごうぜ！　嵐も本格的になってきやがった！」
駆け出した三人は町を出るために急ぐ。もう振り返ることはなかった。
誰が味方で、誰が敵か。今はそんなことを言っている場合ではない。
目的はただ一つ。
町を出ること。
そのためには余計なことなど考えていられず、濡れた髪を掻き上げて暗闇の中を走った。

トランス・トラップ（2）

無人の通りを走り、頬に張り付く髪を払って、シルクは周囲の静けさを不安に思っていた。
待ち伏せがないのは良い状況のはずなのに、ここまで敵が見えないと異質さが際立つ。敵は自分たちよりよほど数が多かったはずだ。それがなぜこれほど敵の姿が見えないのか。
ただ単に広場へ集中し過ぎたという可能性もある。
しかし別の可能性も捨てきれなくて、特に策謀家のキャプテン・クロを見た後なら尚更だった。
「敵、居ないね」
「つまらねぇな。せっかくならもう少し抵抗してもらった方がよかったが」
後ろからついてくるゾロへ声をかければ、彼は戦闘がないことを退屈に思っている様子。ルフィを救出する時は焦りばかりが大きく集中する暇もなかった。だが今ならば思考も変わる。
まだ刀の試し斬りが終わっていない。
手に入れたばかりの刀を使ってみたかったが、敵が居なくてはそれもできなさそうだ。
報復のために現れただろうに逃げ道さえ塞いでいないとは。
呆れたゾロが嘆息するものの、シルクの意見は別だった。殴りつけるような雨を物ともせずに前方を見つめ、やがてその影を見つける。
「うん……だけど、それもここまでみたい」
「へぇ。ようやくお出ましか」
走っていた二人は徐々に速度を落とし、完全に足を止めた。
彼らの前にある道を塞いでいたのはキャプテン・クロが率いるクロネコ海賊団である。
先頭にクロが立って背後に部下を背負っており、厳しい視線で二人の姿を見ていた。
逃げると知って先回りしたらしい。
先程も包囲したはずだが海軍の乱入を許してしまい、その結果、ウ

ソップが煙幕を使ったことで屋上はさらに混乱。上手く敵に逃げられてしまった。
今度は逃がしはしない。
強い意志が伝わるようで、シルクとゾロは静かに剣を抜いた。
「あの時の執事か。怖ぇ顔で睨んでやがる。シルク、おれにやらせろ。新しい刀を試したい」
「いいの？　あの人、かなり速いよ」
「この程度で負けるようじゃ話にならねぇ。おれはもっと高みを目指してんだ」
「そっか。でも、私もあんまり譲りたくないかな。休暇の間も練習してたもん」
二人揃って得物を構えて対峙する。どちらも我が強く譲る気がない。
そんな敵の姿を見てクロは癖を見せ、掌で眼鏡の位置を正した。
「おれが何も考えずにここへ来たと思っているかね。君たちへの対抗策は考えてある。物量で押してもさほど意味がないことは知っているんだ。ならばおれが両方始末すれば早い」
「対抗策、ねぇ。たったそれだけの策か？」
「まずロロノア・ゾロ。君ではおれのスピードにはついて来れない。銃弾が放たれた後に動いても避けられるこのおれを捉えられるとでも思っているか？　そしてもう一人、以前おれを斬ったそちらの少女は、おれが移動する際に生じる風を感知しているんだったな。今はどうだ？」
クロに尋ねられたシルクは眉間に皺を寄せる。
現在、嵐によって強い風が吹いている。悪魔の実を食べたことで彼女は常人以上に風の動きを察知できるようになったが、細かな識別はできず、この中からクロの移動で生じる風は判別できる訳ではない。今回ばかりは彼の動きを先読みすることはできないようだ。
表情が変わったことでクロがほくそ笑む。
海賊らしいとも言える凶悪な笑みが浮かび、勝ち誇った様子で猫の手を構えた。

「この風の中ではおれを捉えることはできん。嵐は計画になかった物だが、どうやら天はおれに味方したようだ。即刻貴様らを排除してやろう」
「言ってろ。口だけなら簡単だからな」
ゾロの挑発に表情がぴくりと反応するも、冷静さは失っていない。
背を丸めて膝を曲げ、全身にぐぐっと力が入った。
緊張感が飛躍的に増した一瞬。
突如、近くの屋根から一人の人間が飛び降りてきた。
地面に溜まっていた水が跳ねあがり、着地したのは黒い外套とフードで顔を隠した青年。クロと対峙するように現れ、ゾロとシルクには背を向けている。
驚愕の雰囲気に包まれる状況下で、彼は何も告げずに駆け出した。
真っ直ぐ向かってくる誰かを目にして、咄嗟にクロは抜き足で移動する。目にも止まらぬ無音の高速移動術によって一秒とかからず姿が掻き消えた。当然青年もクロを見失う。
だがまるで意に介さず、彼は突っ立ったままの部下たちへと襲い掛かった。
クロを挟むようにして立っていたニャーバンブラザーズの片割れ、ブチの顔面に鉄パイプが叩き込まれ、長いそれがバットのように振り切られる。常人以上の巨体はぐるりと回転した。
「ブチィ!? て、てめぇ――!」
相棒がやられたことに怒ったシャムも、油断した一瞬で脳天から鉄パイプを叩き込まれて、視界に火花が散る。体の自由はたった一撃で奪われて膝が笑った。
直後に素早く蹴りつけられて二人の体が飛ぶ。
地面を滑った二人はすでに意識を手放していて、受け身を取ることさえできていない。
集団は一気に混乱する。
幹部であるニャーバンブラザーズを一瞬で倒してしまい、その後も猛攻を続けて襲い掛かってくる青年から逃げ惑って、いくつもの悲鳴が重ねられた。

その技量は常人ではなく、目にするだけで恐怖を覚えるほど。
必要最低限の動きだけで敵を殴り飛ばし、投げ飛ばして、まるで木の葉のように人が飛ぶ。
見ているだけとなったゾロとシルクは信じられない物を見る目つきとなっていた。
次々やられていく部下たちを見て、当然クロが黙っているはずもない。
顔に憤怒を貼り付けて抜き足で移動すると、猛然と青年へ襲い掛かった。
「何をやっているんだ貴様はァ！」
気付いた青年が振り返ろうとする。その挙動を見てまた素早くクロが移動した。
振り向き様に左手で振り切られた鉄パイプが空を切り、目標を見失った様子で動きが止まる。
青年の背後にクロの姿が現れた。
今度こそ当てられる。猫の手が掲げられ、鋭い爪が怪しい輝きを放った。
だが、それすらも見透かしていたかのように。
視線を外したまま半身になり、伸ばされた右手だけがクロの首を掴む。
その一瞬で驚愕したクロの全身が強張って動けなくなってしまったようだ。
その手が異常だった。人差し指と中指、薬指と小指がくっ付く独特の形。
何の変哲もない人間の手だが、竜の手を思わせるような形でクロを掴み、何より異常なのがその指の力。掴まれた首は一切の呼吸を許されず、苦しくなって精神が荒れる。
指、或いは爪か。
もがこうとしても上手く動けないため逃れることができない。
掲げた腕を振り下ろすことさえ許されていないようで、振り返ることなく青年が呟く。

「どれだけ速くても、どこから来るかわかっていれば反応は難しくない」
「おぉっ、がっ、がぁ……！」
「頼むからじっとしていてくれ。守れって言われてるんだ」
ぐんと持ち上げられ、クロの体が頭上へ投げ飛ばされる。
手が離されたことで呼吸が可能となった。途端に大きく息を吸って酸素を取り入れ、霞みかけていた思考を取り戻す。やっと生きた心地を取り戻せた気がした。
しかし空中に居ては落下するのみ。得意の機動力は使用できない。
理解した直後、クロは目を見開いた。
「竜爪拳――〝竜の鉤爪〟」
一瞬、姿が掻き消えたように見えた。
眼下を見つめるクロだけでなく離れた位置に居たゾロとシルクにさえ見切れない。
気付けば竜の爪を思わせる手がクロの腹を捉えており、強かに引き裂くかの如く、強烈な一撃を与えて落下中の体を突き飛ばす。
吹き飛ばされたクロは石の壁すら破壊し、家屋の中へと姿を消した。
これだけで場の空気が変わる。
一味で最も強い男がやられた。誰も敵わぬほどと思っていた技量を持つのに、こうもあっさり。
部下たちは臆病風に吹かれて怯み、もはや戦闘続行は不可能らしいと伝わる顔になっていた。青年はちらりと彼らの方を見やり、肩を震わす姿に苦笑して、思いのほかやさしく声をかける。
「まだやるか？」
「ひぃいいいっ!?　い、いえいえ、滅相も無いっ！」
敵うはずがないと知って海賊たちは逃げ出した。慌てた素振りでクロとニャーバンブラザーズの体を抱え上げ、足がもつれて転んでしまうほど急いでその場を離れていく。
全てが終わった後、青年が振り返った。
フードをかぶっているが顔はわずかに窺い見ることができる。

ゾロとシルクにとって知らない顔だ。それも当然。あれほど強い人間ならば一度知れば忘れるはずがないだろう。今日初めて会った人間に間違いない。
青年は二人に柔和な笑みを向け、自分たち以外誰も居なくなった通りで向かい合う。
「大丈夫そうだな。これでおれの仕事は終わりだ」
「あの、あなたは？」
「心配するな、敵じゃない。かと言って今は、味方でもない」
「ならおれたちともやる気か？」
「いいや。そいつは命令に含まれてねぇからな。おれはおまえらを逃がしに来ただけさ」
肩をすくめて笑う姿に毒気を抜かれる。
それでもゾロは警戒心を消し切らず、戸惑うシルクの隣で彼に尋ねた。
「目的が見えねぇな。おまえ何者だ？」
「さて、教えてやりてぇが言えねぇんだ。こっちも札付きでね。ま、悪いようにはしねぇよ」
「かなりの腕前らしいな……あいつのスピードをどうやって見切った？」
「ははっ、こりゃすげぇ。魔獣みてぇな気迫だな」
「答えろ。それとも一戦交えて確かめた方が無難か？」
「悪いがその気はないんだ。ただ敵の動きが先読みできただけ。そう珍しい力じゃない」
フードが風に吹かれて外れてしまい、その下にあった顔が露わになる。
金色の髪に、左目の辺りには火傷の跡。誰かを思い出させる顔つきだった。
容姿自体が似ている訳ではない。
だがこの感覚には出会った覚えがある。
「グランドラインに行けばわかる。この力は、鍛えさえすれば誰でも使える物だ」

「へぇ……おれでもか？」
「おまえはむしろ見込みがある方だ。おれが保証する。つっても、初対面じゃ信用できねぇか」
にかっと笑った顔を見て、思い当たったシルクが小さく声を漏らした。
ルフィに似ているのだ。
なぜかルフィを思い出してしまう人物で、なぜだろうと首を捻った。しかし答えは出ない。謎なままで別れの時が来たようだった。
二人の後方に目をやった青年が表情を変えたのである。
少しばかり驚く素振りをして、同じ方向を見た二人へ言った。
「お、海軍が来たか。あいつらに見つかるとまずいんだ。ここからは自分たちで頼む」
「待て。まだおまえには聞きたいことが――」
背後に目をやって追ってきた海軍を確認した後、再び青年を見るためゾロが顔を動かした。しかし振り返った時には青年の姿が消えていて、ゾロが眉間に皺を刻む。
驚いている暇もない。海軍はすぐにやってくる。
逃げようにも先頭の人間が気になってしまい、そのせいかゾロは海軍へ向き合った。
走り出そうとしていたシルクはそんな彼に驚いて足を止め、動かぬ彼を動かそうとする。早く逃げなければならない。それなのに返ってきた言葉は予想外の物だった。
「ゾロ、急ごう。このままじゃ追いつかれる」
「先に行け。野暮用がある」
「野暮用って、そんなっ」
「すぐに終わる。どうやら言いてぇことがあるらしいからな」
向き合ったことで海兵たちの足が止まった。
中でも険しい顔をしているのが、先頭を務めて部下を率いるたしぎ。
愛刀の時雨を強く握り締め、仇敵を見る目でゾロを捉えた。
「ロロノア・ゾロッ！」

「よう」
「やっぱりあなただったんですね。凄い剣士に出会えたと思ったのにっ」
直情的な性格なのだろう。表情は分かり易く感情を伝えてくる。
今にして思えば、初めて彼女を見た時の自分も心が揺れて隙だらけだったに違いない。
先程の男やキリを思い出す。
彼らは冷静で心の底を見せない。それこそが肝心だと気付いていた。
今、ゾロもまた驚くほど冷静な状態にあり、親友に似ている彼女が相手でも、二度目の対面で動揺することはなかった。
「私を騙していたんでしょう。許せない！」
「騙したつもりはねぇ。ただ聞かれなかったから答えなかった。それだけだ」
「そんな屁理屈みたいに……！」
「もう大体わかってる。前言撤回ってことだろ。奪わなきゃならなくなったな、こいつを」
「ええ……そのために来ましたから」
先に抜いていた和道一文字を右手で掲げて示し、左手では三代鬼徹を抜く。
両手に刀を持つとたしぎも時雨を抜いた。
美しい所作で中段に構え、凛とした雰囲気を湛えて言葉で伝える。
「名刀〝和道一文字〟、回収します」
「やってみな」
「ゾロ！」
自ら前に駆け出し、敵とぶつかってしまう彼にシルクが言葉を投げた。聞き入れてもらえない。一体どんな関係があるのか、ゾロはたしぎと戦い始めてしまった。
刀を打ち合わせ、動きが止まるのは一瞬。
ゾロが鋭く攻撃を繰り出して、驚愕したたしぎが半ば無意識的に後ろへ下がった。

誰も手出しをしない。狙い合わせた訳ではないが、これは決闘だった。
シルクと海兵が見守る前で、たった二人で戦っている。
シルクの目から見てすぐにわかった。
ゾロは本気だ。本気で彼女とぶつかっている。その証拠とでも言うべきか、たしぎは防戦一方で手が出せず、二刀流での連撃を受け続けるばかり。
凄まじい気迫が込められた攻撃だった。真面目な性質から日々の訓練を欠かさず行い、常に自らの剣の腕を上達させようと努力してきた彼女を嘲笑うかのような、圧倒的な差。決して弱くはないたしぎに恐怖すらさせる。敵は、一人で挑んでいい相手ではなかったようだ。
まるで、鬼。
彼の背後に見えぬはずの何かさえ見えた一瞬、たしぎは全身を強張らせた。
動揺すれば剣は乱れる。故に、強くなるための道筋の一つが、心を強く持つことだ。
冷静に敵の隙を見つけたゾロは、その機を逃しはしない。
力強くも的確な動きで彼女の手から時雨を跳ね上げ、金属音が鳴ると刀が宙を舞っていた。
ただ呆然として力が抜けた。
膝から崩れ落ちると同時、時雨が地面へ落ちて、和道一文字の切っ先が首へ突きつけられる。
勝敗は決した。
「はっ、はっ、はっ……」
「悪ぃが、渡せねぇんだよ。こいつだけはどうあっても」
笑みを浮かべてそう言い、ゾロは刀を納めて背を向け、歩き出してしまった。
とどめを刺さなかったのである。
こんな侮辱があっていいのか。決闘に負けた相手を見逃し、とどめさえ刺さない。これをこのまま見逃してしまっていいはずがないだろう。

悔しげに歯噛みしたたしぎは思わず叫んだ。
「なぜ斬らないッ！」
ゾロの足が止まった。
激情に任せて考える前に言葉を放つ。普段の彼女らしくない姿だが今だけは。この状況だけはそうせずにはいられなかった。
「私が、女だからですか」
振り返ったゾロと視線が合う。勝手に出てくる言葉は尚も止まらない。
「女が男より腕力がないからって、真剣勝負で手を抜かれるのは心外です。私は海兵になる時に覚悟を決めました。死ぬことだって怖くない」
「へぇ。そうかい」
「……いっそ男に生まれたかったなんて気持ち、あなたにはわからないでしょうけど。私は遊びで刀を持ってる訳じゃない！」
冷静、というよりも冷徹に見つめ、ゾロはしばし答えなかった。
地面を殴る雨が騒がしい音を発するものの、辺りは驚くほどの静寂に包まれている。
やがてゾロが口を開き、たしぎへの返答を発した。
「おまえが何を思ってようが勝手だが、自惚れるなよ」
「なっ――」
「おれが何度挑んでも勝てなかった相手は女だ」
たしぎの表情が変わっても言葉は止めずに言い切る。
いつになくゾロは真剣な顔つきだった。
「鍛錬を積みさえすりゃ男に勝てる女なんざいくらでも居るだろ。ウチの剣士もそうだ。おまえがおれに勝てなかったのはただ実力の差があった。それだけだ」
「くっ、そんなこと……！」
「てめぇの腕の無さを性別のせいにするなよ。そういうのは弱い奴がするもんだ」
ぐっと歯噛みして、ぐうの音も出ない。
たしぎは言葉を返せなくなって彼を一心に見つめ、かつてないほど

の悔しさに耐える。
言いたいことを言い終え、ゾロは簡単に背を向けた。
相手にするまでもない、ということか。
敵に背を向けて去っていく様を見て平静でいられるほど、彼女は完成されていなかった。自らの無力を嘆き、悔しさに耐えかね、ついには涙まで浮かんでくる。
「そんな程度の覚悟なら刀なんざ捨てろ。わざわざおれが斬るまでもねぇよ」
「くそぉ、馬鹿にしてっ！」
叫ぶものの立ち上がれないたしぎは彼を見送るしかなく、背中はどんどん離れていく。
ゾロは見守っていたシルクへ駆け寄った。
「おい、行くぞ」
「うん。ねぇ……ゾロはやさしいね」
「あ？　何言ってんだ」
「ふふ、なんでもないよ」
二人は走り出して遠ざかり、後悔もなくその場を離れる。
その姿のなんとあっさりしたことか。敵を目の前にして背を見せ、戦うことなく去る。剣士としては間違っていると思わずにはいられない。
しかしゾロはもう振り返ろうとはせず、シルクも剣を納めて行ってしまった。
重苦しい空気に包まれ、海兵たちは緊張した面持ちで口が利けなくなる。それでも敵を見逃してはいけないだろうと判断するため、跪いたたしぎへ声をかけた。
彼女は敗北に打ち震えていて冷静ではない。まず我に返す必要があったようだ。
「曹長……たしぎ曹長！」
「は、はい」
「どうしますか。早く奴らを追わなければ」
「え、ええ……そうですね」

声をかけられてようやく平静を取り戻せたらしい。その頃には二人の姿は見えなくなっていた。
肉体よりも精神的な影響か、ふらつく足でなんとか立ち上がる。
たしぎは彼らが消えた道の先を見据えて唇を結んだ。
逃がす訳にはいかない。
処刑台での出来事を見ていた時点でそう思ったが、今はさらに想いが強くなった。
たしぎの標的は決まった。海賊狩りのロロノア・ゾロただ一人。
自らを負かした相手を、名刀を持たせたまま自由にさせておくつもりはない。今こそ覚悟を決める時だ。もう弱音を吐いたりはしない。
強く自分に言い聞かせて時雨を拾う。
鞘に納めず手に持ったまま、彼女は部下へ指示を出した。
「麦わらの一味を追います！　急ぎましょう！」
「はっ！　了解しました！」
遅れて彼女も部下を連れて駆け出し、今度こそ覚悟を決めてゾロに対面すると決意した。
ここまで海賊を捕まえたいと思ったのは初めての経験である。
表情はすっかり変わってしまい、以前までとはまるで別人のようになっていた。

トランス・トラップ（3）

雨の勢いが強くなり、雷鳴が轟き、徐々に環境は悪化しているらしい。
町中を走るルフィとキリは空の状態を確認して、危険が迫っていることを知った。
「雨強くなってきたな」
「今頃海は大荒れだね。せっかくグランドラインに挑戦する日なのに」
「いいじゃねぇか。盛り上がってきた」
「気楽だねぇ。危ないかもしれないのに」
「ししし。危なくても大丈夫だぞ、おれは。そっちの方が面白そうだろ？」
「まぁ、そう言えなきゃ処刑台なんか登らないよね」
相変わらず上機嫌で笑うルフィに溜息をつきつつ、キリもまた苦笑する。
敵が現れないため順調に進んでいる。
キリが案内すれば道に迷うこともなく、着実にメリー号へ近付いていただろう。そのキリが雨に濡れたことで弱っているが速度としてはそう遅過ぎる訳でもない。
このままなら逃げきれる。そう思うのも不思議ではなかった。
変化が見えたのはちょうど安心した頃だ。
前方、向かう先に、人影が立って待っている。傍には大型のバイクが止まっていて何やら物々しい雰囲気。身に着けている服からしておそらく海兵だった。
待ち伏せていたらしいスモーカーを見つけて二人の表情が変わる。
明らかに普通の海兵ではない。それは一目でわかった。
ふてぶてしい態度といい、背負った七尺十手といい、雨で火が消えているとはいえ葉巻を二本銜えている姿といい、何から何まで目に付くほど特別な物だ。
嫌な予感を感じてキリがルフィへ声をかける。

「なんか危なそうな人だね。もしかして白猟のスモーカー？」
「誰だそれ？」
「この町で最強の海兵。本物だとしたらまずいけど……」
道を塞がれているため足が止まり、一定の距離を置いて相手を見つめる。
彼は厳しい目で二人を見ていた。明らかにこの二人を待っていた風貌であって、無視することも気軽に挨拶して素通りすることもできそうにない。
先に口を開いたのはスモーカーだった。
二人を見据え、重々しく口を開く。
「来たな。麦わらのルフィ」
「おまえがスモーカーってやつか」
「ああ、そうだ。おまえを捕まえる男の名を覚えておけ」
「ルフィ、この道はだめだ！　回り道しよう！」
スモーカーが答えたことでキリが焦りを見せた。考えるまでもなく逃走の意志を固めてルフィに進言する。しかしルフィ自身はそのつもりがなさそうだ。
今はキリが弱っている。守らなければという気持ちが強い。
前に立って拳を構え、自らスモーカーと向かい合った。
「いいや、ここでいい。こいつに勝てなきゃ海賊王にはなれねぇだろ」
「だからってあれはそういう次元じゃない……！　あいつには――」
「ゴムゴムのォ！」
考えるより先に動き出してルフィが拳を振りかぶった。
思い切り伸ばしてパンチを放ち、離れた位置から攻撃を行う。
「ピストル！」
「だめだ！　それじゃ当たらない！」
伸ばされた拳は真っ直ぐ進み、狙い通りに顔面へ迫る。そして避ける素振りが見られず、回避行動を行う気さえ持たずにそのまま顔へ直撃した。

確かにスモーカーへ当たったはず。
不思議だったのは接触の瞬間、手応えがなかったことだ。
触れた直後に驚愕する。
ルフィの拳はスモーカーの顔面を貫き、消し飛ばしてしまった。
周囲には煙が漂い、肉片すら飛び散らない。まさかの感触と光景にルフィは絶叫するが、その様子を目にしたキリは噂通りだと判断し、思わず歯噛みする。
やはり、触れてはいるが当たっていなかったらしい。
「うわぁぁ～っ!? か、顔がぶっ飛んだぁ!?」
「違う、当たってないんだ。奴にダメージはない」
「え? どういうことだ?」
「奴は、白猟のスモーカーはモクモクの実の煙人間。ロギアの能力者だ」
首を失ったスモーカーの体は立ち続け、辺りにあった煙が動き出す。
徐々に体へ集まっていく煙は顔の形を模り、やがて元通りの姿となる。肌の色も以前のまま。パラミシアとは明らかに性質が違う光景をその目にしていた。
敵の攻撃が当たってもダメージを受けない異様な体。
白い煙が体から噴き出す様から見ても能力者には間違いない。
ただ、ルフィにとって自然系(ロギア)の能力者を見るのは初めてだ。
ロギアは悪魔の実の中で特殊な種類にある。同じ悪魔の実の能力でも、あくまで人間の形を基に特異な能力を持つパラミシアと比べても異質だった。
ロギアの能力者は肉体その物が自然界の力を得る。自然のエネルギーで体が構成され、攻撃は実体を捉えることができなくなり、弱点をつかない限りはダメージを全て受け流してしまう。このことから三つの種類に分けられる悪魔の実の中で最強種と呼ばれていた。
モクモクの実はその中の一種。
全身が煙で構成され、殴られたところで実体を捉えられなければ痛みは感じない。

ゴム人間のルフィに殴られた場合でも同じだ。直撃はしてもただ煙を殴っただけであり、それだけではダメージを与えられずに、何一つ悪影響がない様子で立っている。
スモーカーは相も変わらず厳しい目で二人を見ていた。
「効いてねぇのかな」
「だから言ったのに……あいつから逃げるのは難しいよ」
「どの道逃がしはしねぇよ。おれから逃げられるとは思うな」
そう言ってゆっくりと両腕が持ち上げられた。
簡潔に告げてスモーカーは身構え、腕を突き出し、そこから凄まじい勢いで煙を吐き出す。
攻撃は突然。何より避けようのないほど広範囲に広がる一撃である。
煙とは思えぬほどのスピードで迫ってきて、二人は驚愕して身を硬直させた。
「ホワイトアウト！」
「うわっ、煙出た！」
「やばっ」
二人は地面を蹴ってその場を離れ、かろうじて迫る煙から逃れることができた。だが回避のために離れ離れになってしまい、スモーカーはそれを見逃すほど馬鹿ではない。
まだ放たれた煙が滞空する中、スモーカーが元に戻した右腕を構え、パンチを繰り出す。
煙の推進力を利用して拳が飛び、キリへと襲い掛かった。
「ホワイトブロー！」
「うっ――!?」
普段ならばいざ知らず、弱った彼に避けられる速度ではなかった。
直進してきた拳を腹に受け、キリの体が飛ばされる。素早く壁まで運ばれて背から激突した。
衝撃で呼吸が詰まったらしい。
崩れ落ちた彼を見てルフィが目の色を変え、スモーカーを睨む様子が一変する。

「キリ!?　おまえ、おれの仲間に何してんだ！」
「気合いだけは一端か。だがおまえじゃおれには勝てねぇ」
「ゴムゴムの！」
怒りを見せてルフィが素早く蹴りを放った。
「スタンプ！」
勢いをつけて伸びた足は回避しようとしないスモーカーの腹へ突き刺さり、だが煙の体を捉えることはできずに、勢いが弱まることなく通り過ぎただけである。
驚いて反応するも遅く。
スモーカーの左手に足を掴まれて捕まった。
足を引こうとしても引っ張り合いになって逃げられない。
苦心するルフィを冷徹に見やり、素早く動いたスモーカーは先程同様右腕を飛ばした。
噴き出す煙の推進力で攻撃は素早い。見えていようがそう簡単に避けられる物でない様子。
今度は殴らず、首を掴むと力ずくで引っ張って、地面へ引き倒す。
ルフィは抗えずにうつ伏せに倒れてしまった。
「うわっ!?」
「おまえらが３０００万と２０００万だと？　海軍の基準はどうなってんだ」
冷たく告げてスモーカーの全身が煙に変わって、素早く飛んで移動する。
気付けば倒れたルフィの背へのしかかり、胡坐を掻いて座っていた。
「ぐへぇ!?　くそ、降りろおまえェ！」
「フン、悪運尽きたな。終わりだ」
動けないらしいルフィの上でスモーカーが十手を握る。
勝敗は決した。もうこれ以上の番狂わせはない。そう判断する。
どこか漠然と、不思議な失望感を味わいながら彼に最後の鉄槌を下そうとした。
その時、背後から誰かに十手の柄を掴まれる。

振り返る前にぐっと違和感が生まれて、スモーカーの顔が強張った。
「そうでもなさそうだが」
「何ッ……!?」
気付かれることなく背後に立つとは、相当の腕前。
あくまで冷静さを崩さずに、とはいえ、多少焦りを抱きながら振り返れば、外套に身を包む高身長の男が立っている。フードをかぶって顔を隠すが、下から見上げるせいでその顔はよく見えた。
スモーカーの目が驚愕に染められる。
出会ったことはないが写真で見覚えのある人物だったようだ。
「てめぇは――!?」
「海賊か。それもいいだろう」
「なんだ!? 誰だ!? なんだぁ!?」
その顔を見つめて我を忘れたほんの一瞬。
突如、突風が吹き荒れた。
まさに神風。耐えることを許さない圧倒的な勢いで多くの物を飛ばした。
道端にあった看板、木箱、樽、或いは強度が弱まっていた家屋の一部でさえ運んでしまう。
当然人間に耐えられる規模ではなかった。煙であるスモーカーの体が飛び、その下に居たルフィでさえも飛ばされ、常人より体重が軽いキリもあっさり空中へ放り出されている。
全ての物が空を飛ぶ状況下、突如現れた男だけが冷静にその場で突っ立っていた。
ルフィとキリが地面を転がる頃、すでにスモーカーとはかなりの距離が離れており、状況だけを見れば彼ら二人を逃がすかのような風だった。
不思議だとは思うものの、何にしても逃げるチャンスが巡ってきたのだろう。
二人は迷わず立ち上がって走り出し、その場の状況を確認する余裕もなく逃げ出した。

「ルフィ、行こう！　あれを相手にしてたら島から出れなくなる！」
「なんだったんださっきの風！　まぁいいや、おれもまだ冒険してぇし！」
一瞬で二人と引き剥がされ、逃げ出す彼らを見たスモーカーだが動揺を隠し切れていない。
不思議と彼らを追うより先に自分を止めた男に目を向けた。
男は笑って二人の背を見送る。或いは、片方だけなのか。
「なぜだ！　なぜ奴らを逃がそうとする！　ドラゴン！」
「男の船出を邪魔する理由がどこにある」
ドラゴンと呼ばれた男、自身を睨むスモーカーなど意に介さずに腕を伸ばした。
去っていく新たな風に道を示すかのよう、手向けの言葉を持って送り出す。
「さぁ、行ってこい。それがおまえの選んだやり方ならな」
走る二人の姿はすぐに見えなくなり、背を押す風に身を任せてぐんぐん速度を上げていく。
肩を並べてはぐれないよう気をつけて、目的地は見る見るうちに近くなった。
その途上、道端で二人の男女とすれ違う。
どちらも外套を着て顔を隠して怪しいが気にしていられない。キリはちらりと目で確認し、危険ではないと判断して無視することにした。相手もこちらには注目していないらしい。
ただし、ルフィだけは違っていた。
すれ違ってしまった先程の人物へ振り返り、完全に足を止めてしまう。
慌ててキリも足を止めた。
なぜか彼は呆けている様子で去っていく二人を見つめている。いつもと表情が違っていた。
まるで何かを思い出そうとしているようにも見える。
キリが声をかけるまで、彼はぼんやりしたまま動こうとはしなかった。

「ルフィ、また敵が来るかもしれない。急がないと」
「ああ……わかった」
「どうかした？　今の、知り合い？」
「いや……でもなんか」
ぐっと唇を噛んで、そんなはずがないと知りながら寂しげに呟かれる。
「懐かしい感じがしたから」
「懐かしい？　知り合いじゃないのに？」
「う～ん、よくわかんねぇ。わりぃ、急ぐぞキリ！　みんなも待ってるかもしれねぇ！」
「あ、うん……」
普段滅多に感じない、胸の中にもやもやした何かを感じるが気にしないことを決め、ルフィは振り返って走り出した。戸惑う素振りのキリもすぐに続く。
走り出す直前、ちらりとすれ違った二人を確認した。
嵐の中を急がず歩く二人の内、青年もわずかに背後を見て何かを確認している。
果たしてそれが何を意味するのか。
視線の意味には気付けぬままキリも走り、ルフィと共にその場を離れた。
町を出て岩場に到達し、すぐにメリー号を発見することができた。
錨を上げて、強風で破れる危険性も顧みず帆を張っている最中。おそらくナミの指示だろう。慌ただしくクルーが動いている様は遠目でも確認できた。
視界に入ってすぐルフィが声を上げ、手を振りながら仲間を呼ぶ。
強風の中でも聞こえたのか、ウソップやシルクがすぐに手を振って反応していた。
「お～いみんなぁ！　全員居るか！」
「ルフィ、キリ、急げ！　おまえらで最後だ！」
「早くこの島を出よう！　敵が追ってくる前に！」
「わかった！」

ルフィが手を伸ばしてメリー号の欄干を掴み、左手をキリの腰に巻き付けた。
しっかりと抱き寄せて地面から足を離す。
腕が縮む力を利用して一気に船へ接近。激突さながらの勢いで甲板へ滑り込む。
これで全員が揃った。
指示を出していたナミが船上を見回し、仲間の姿を確認すると声も高らかに出航を告げる。
幸いにも追い風。これを利用すれば海軍の追手が差し向けられる前に逃げられる。
機は熟した。
今こそグランドラインへ向かうべき最高のチャンス。吹き荒れる風に乗って行くことを決める。
「船を出すわ！　ルフィ、このまま行くわよ、グランドライン！」
「おう！」
キリと共に転がったままだったルフィが答え、クルーの操船によってメリー号が動き出す。
アーロン一味の船と肩を並べ、荒れ狂う海へと漕ぎ出した。
向かうべき地は定まっており、海図も持っている。
吹き付ける風や嵐などなんのその。なぜかはわからないが恐怖心など欠片も無い。
ナミは上機嫌に海を眺めていた。
「天候最悪。でも行けるわ。どんな海でも私が航海してみせる」
「でもよ、この嵐だぞ。本当に大丈夫なのかよ。方角だってわかんねえし……」
「見て」
不安に思ったウソップが尋ねれば、ナミは前方を指差した。
示されたのは灯台である。嵐の中でも見失わない光が彼らの目にも映っていた。
「導きの灯よ。あの光の向こうにグランドラインの入り口がある」
「そ、そうか……いよいよなんだな」

納得した様子で頷き、ウソップは緊張した面持ちで喉を鳴らした。
今まではどこか夢物語のように思っていたのかもしれない。
船が前へ進み、転覆することもなく灯りの方へ向かっていれば、急激に実感がわいてくる。いよいよ目的地へ到着するのだ。世界で最も危険な海、グランドラインへ。
実感した途端ウソップがぶるりと体を震わせる。
「きゅ、急に武者震いが……」
「頼もしいなウソップ。せっかくだ、偉大なる海に船を浮かべる進水式でもやるか」
「お、いいなそれ。やろう！　キリは動けるか？」
「今ならまだなんとか～」
船内から樽を持ち出したサンジが皆に声をかけ、船首付近までそれを運ぶ。
快く答えたのはルフィだ。ただの験担ぎだが面白そうだとは思って、クルー全員を呼ぶ。ずいぶん弱っているらしいキリは限界が近く、シルクに肩を借りて近寄ってきた。
七人全員が集まり、円になって樽を囲む。
そしてその後、一人ずつ誓いを掲げて樽の上に足を置いていく。
「おれはオールブルーを見つけるために」
「おれは海賊王！」
「おれァ大剣豪に」
「この一味を、海賊王の物にする」
「私は、世界一のピースメインになる」
「私は世界地図を描くため」
「お、お、おれは勇敢なる海の戦士になるためだ！」
全員で息を合わせて足を上げ、そして振り下ろした。
「いくぞ！　偉大なる航路（グランドライン）!!」
ガコォンと大きな音が鳴り、それをきっかけに誓いが立てられた。
その直後、高らかなルフィの叫びは雨風にも負けずに空へ響き渡る。
傘下を引き連れ、嵐の中、ゴーイングメリー号は進んでいく。

後方にはローグタウン。置き去りにした数多の視線を受けて偉大なる航路へ向かい、やがて辿り着くことになる。ルフィにとっては待ち望んでいた海だ。

シャンクスと再会する場所。そして海賊王になるための航路。

胸が高鳴り、期待と希望を抱いて、彼らは導きの灯を目指した。

偉大なる航路突入編

リヴァースマウンテン

大荒れの波を乗り越えて進む船。海は尚も嵐で荒れていた。

決して簡単な航海ではないはずだが、航海士の腕によるものか、船は問題なく進んでいる。

二隻の内、先頭を走るメリー号の船首にはルフィが居た。

波が荒れ狂っていることなど意に介さずに、どれだけ揺れようが羊の頭の上に座り、帽子が飛ばされないよう手で押さえて楽しそうにしている。

そのせいだろう、船首の近くに立ち、船の状態を常に確認するナミは心配そうにしていた。

「ルフィ、そんなとこ居ると危ないわよ！　早くこっちに来なさい！」

「ん？　なんで？」

「なんでってだから、危ないから！」

「あ、わかった。ナミもメリーに乗りたいんだろ。でもだめだ。おれの特等席だぞ」

「誰が乗りたがってるか!?　海に落ちたらどうする気よ！」

「落ちねぇから大丈夫だよ」

「あんたがそう思ってても私はそう思えないの！　心臓に悪いから戻ってきなさい！」

「え～？」

能天気な彼は海に落ちかねない危険な姿勢で居たが、注意しようと戻ってくる気がない。

泳げないのになぜ自ら危険を望むのか。思わず呆れてしまうものの、思い出せば彼は危険こそ好んでいた気もして、そんな注意も今更かと嘆息してしまう。

荒れ狂う海では泳ぎが得意でも溺れてしまうだろうに、厄介な状況だった。

結局彼を引き戻せぬまま、ウソップがやってきたことで会話の方向が変わる。
メインマストの上から望遠鏡を使い、前方を眺めていたばかり。そうして見つけたのが巨大な山、というより壁だ。
グランドラインの入り口を探していたはずが行き止まりを見つけてしまっていたらしい。
嵐の中では声を張り上げても聞き取り辛い。そこで直接ナミへ報告に来たようである。
「おいナミ、前方になんかあるぞ。でっけぇ岩壁みてぇのだ。道間違えたんじゃねぇか？」
「いいえ、それであってるのよ。私たちの目的地は山」
「山ぁ？　だってグランドラインに向かうんだろ？　山に向かったってよ」
「だからその山に入り口があるの。しょうがない、説明してあげるわ」
話を理解できずに首をかしげるウソップと、船首に座ったまま興味津々に見つめてくるルフィを相手に、ナミが現在向かっている航路の説明を始めようとした。
ちょうどその時、甲板の中央から鋭い叫び声が聞こえてくる。
暴風にも負けずにずいぶんな声量だ。どうやらサンジが騒いでいるらしい。
自然と三人はそちらに注意を向け、話が一度途切れてしまった。
「おまえ何やっとんじゃキリィ！　なにシルクちゃんに抱き着いてんだコラァ！」
「抱き着いてるんじゃなくて肩借りてるだけだよ。力抜けてるし」
「その腰に回した手はなんだ!?」
「いや掴まってないと危ないから。別にいやらしい意味じゃないって」
「嘘つけェ！　いやらしい意味もなくレディの腰に手を回すはずがあるかこの野郎ッ！　仲間の立場を利用して気安く触ってんじゃねぇぞクソ野郎ォ！」

「嫉妬からのヒートアップが凄いね、今日は。シルク、サンジが怖いんだ」
「よしよし」
「ぐぉおおおおっ!?　おれも紙になって弱りたい！　いやそれよりも！　今すぐシルクちゃんから離れろキリィ！　おれが海の底まで蹴り沈めてやる!!」
シルクを巡ってキリとサンジが言い合っているらしい。取り合う、という状況とは違うがふざけた二人のせいでサンジが怒り狂っているのは事実だろう。
強烈な嵐にも負けない勢いと熱意を感じる。
遠目にその姿を見たナミはだからこそ溜息をつき、呆れ返って肩をすくめる。
「何やってんだか。この緊迫した状況下でよく遊んでられるわね」
「いやルフィもおんなじようなもんだぞ」
「しっしっし、サンジはおもしれぇやつだなぁ」
このまま放置する訳にはいかないだろう。
堂々巡りになって終わりそうにない予感がして、気遣ったナミが声をかけてやった。
サンジは男にこそ厳しいが、女性には例外なくやさしくなる。キリが冗談交じりで反論するのとナミが注意するのでは全く効き目が違うはずだった。
「サンジくん、バカやってる場合じゃないわよ。船が転覆しないように注意しなきゃ」
「止めないでくれナミさん！　おれはどうあってもこの紙みてぇに軽薄な野郎を蹴り飛ばさねぇと気が済まねぇ！　立場と弱点を上手く利用しやがって！」
「失敬だなぁ。言っとくけどボクはサンジほどエロくないよ」
「ふざけんな！　エロくねぇ男が存在するとでも思ってんのか！」
「ルフィとか」
「あいつはまだガキなだけだ！　おまえくれぇ頭が回る奴が考え付かねぇはずがねぇだろ！　合法的にレディの体に触れる方法を！」

「すごいイメージダウンを狙われてる気がする。シルクはどう思ったのさ」
「私？　えっと、別に嫌だとは思ってなかったけど」
「ちくしょうっ！　あいつの分厚い面の皮を剥いでやりてぇ！　純真無垢なシルクちゃんのやさしさを利用しやがってド外道め！」
「これボクが悪いのかな」
「あーもう、めんどくさい」
四肢を床について地面を叩く彼は嫉妬で狂っているらしい。言っても聞かなそうだ。
キリは困った顔で首をかしげ、ナミは頭を抱えてしまう。
無理もないと思うのは、シルクに肩を借りるキリが元々の性質故か、妙に甘えている素振りに見えているのが問題なのだろう。また、予想外にシルクが鈍感だった。
親しげな態度も絵になっている気がして悔しくなる。
嘆くサンジには同情するが、彼自身ある程度大袈裟過ぎてキリが呆れるのも当然。
なんにせよ一段落した様子になった。
ナミがやれやれと首を振って二人への説明に戻ろうとする。
その前にシルクが声をかけてきて、抱えたままだったキリをどうするかで困っていたようだ。
「ねぇナミ、キリがもう限界だよ。どうしようか」
「部屋の中に捨てときなさい。船から落ちられても困るから」
「うん、わかった」
「シルクちゃん、邪魔だったら海に捨ててもいいからね」
「みんなひどいね。扱い悪くない？」
「ったりめぇだクソ紙野郎。おまえはあとで絶対オロス」
「やめなさいよサンジくん。嫉妬する男なんて私嫌い」
「そりゃ誰にでも得意不得意はあるよな。気にすんなよキリ。おまえはよくやってる」
「う、うん……それ、やってて恥ずかしくないの？」
いい加減面倒だと感じたナミが適当に言い、たったそれだけでサン

ジの表情が変わる。あまりの変貌ぶりに加え、簡単過ぎるほどあっさり切り替えた様子にキリが困るほどだ。
サンジの追及が終わったことでやっと動き出せる。
キリはシルクに運ばれて船内へ消えて、動けないため回復まで休むことになった。
再び二人に向き直ったナミは説明を始めるため、些か真剣な顔で話し始める。
「ハァ、もう。山に向かう理由だったわね。それはね、山にある運河がグランドラインの入り口になってるからなの。キリにも確認したから間違いない」
「山が入り口？　まさか船で山登りしようってんじゃねぇよな」
「船で山登りか！　おもしろそぉ～！」
「そのまさかがあるみたい」
「マジか！」
驚くウソップとルフィが声を上げ、頷いたナミが続ける。
自身の想像をキリに話して確認していた。彼はせっかくなら自分の目で見ればいいと口にしつつ一度も否定はしていない。つまり正解しているはず。
確認する時は遠くないと考え、自分自身で再確認するためにも語った。
「あれは赤い土（レッドライン）の大陸の一部で、リヴァースマウンテンって呼ばれてる。今のところグランドラインへ入るために一番簡単に入れる場所よ」
「なんで？　他に入り口はねぇのか？」
「ないわね。グランドラインは凪の帯（カームベルト）に挟まれてて、理論上はこのカームベルトさえ越えればどこからでも入れるって言われてる。だけど問題もあるわ。カームベルトは大型海王類の巣。船が入って無事に出られることなんてまずあり得ない」
「へぇ～、危険なのか」
「おいルフィ、興味持つな」
危険と聞いて目を輝かせたルフィをウソップが押し留め、もしもの

展開を阻止する。
ナミは気にせず話を続けた。
「四つの海の海流があの運河に集まって、グランドラインへ入る道筋になるみたいね。説明するより見た方が早いけど、レッドラインを越えるにはあの山へ向かうしかない」
「要するに不思議山ってことだよな」
「まぁ、そうなると思ったからやっぱりいいわ。答えは自分の目で見なさい」
「おう！」
話しても理解しないだろうと思っていたのか、説明は適当にやり過ごされ、あとは自分で見ろと言う。ナミもすっかり船長の扱い方を覚えてきたらしい。
船は徐々に天まで届こうかという巨大な大陸、レッドラインに近付いている。
巨大な影は徐々に見えてきて、近付くにつれて嵐も弱まっている様子。
メリー号とアーロンの船は着実に目的地へ接近していた。
いよいよ緊張も高まってきた頃、ウソップは後方に目を向けて呟く。
メリー号の後ろへ続くようにしてアーロンの船があった。彼らも元々はグランドラインから来たと聞いている。ならばリヴァースマウンテンを越える航海は経験しているのか。
色々と気になるが今更だ。今まで真面目な話をしようとはしていなかった。
試しにナミへ聞いてみることにしたものの、彼女も肩をすくめるだけである。
「ナミ、あいつらには説明しなくていいのか？　まぁおれたちもいまいちわかってねぇけどさ、後ろのあいつらちゃんと知ってんのか？」
「さぁ」
「さぁって、おまえ」

「心配しなくてもついて来いって言ってるんだから大丈夫よ。メリー号が上手く運河に入れればあいつらもついてくる。それに向こうはモームが引っ張ってるからこっちより簡単に動けるし、むしろ自分たちの心配してなさい。失敗したら海の藻屑よ」
「ま、マジかっ!?　おまえ、そういうの先に言えよ!」
「言っても同じでしょ？　大丈夫よ、成功するもん」
「そんな能天気なっ」
「今更よ。ルフィを見なさい」
言われてウソップがルフィを見れば、すでに彼は船の前方を見ていて聞いていない。
拳を握って体を震わせ、出てくる声は期待に満ち溢れた物。
表情が見えなくてもわかる。この先の航海を楽しみにしているのは明らかだった。
「不思議山を越えてグランドラインか。ししし！　おもしろくなってきた！」
「ね？　もっと能天気」
「ハァァ～……そういやそうだったな。ウチの船長が誰よりもこうなんだもんな。心配するだけ無駄ってことか」
「諦めなさい。気持ちはわかるけど」
波の変化によるものか、船の揺れは小さくなり、徐々に弱まった雨が止んだ。
ウソップが溜息をつく頃、楽しそうに微笑んだナミは甲板へ振り返った。
すでにシルクも戻っている。ゾロが舵を取ってサンジは周囲に目を光らせていて、全員服が濡れたまま。一度着替えたいとは思うが今はその時間がない。
赤い土で構成された大陸が近付いてくる。
そして船上に居た者は巨大な山をその目にした。
「あれが、リヴァースマウンテン……」
「でっけぇ！」
「いやそれよりも、本当だったじゃねぇか、あれ」

目を輝かせるルフィを諌めるようにウソップが呟く。
「本当に海が山を登ってやがる……」
リヴァースマウンテンをその目にした。
巨大な運河が凄まじい勢いで水を運んでおり、その水は山の頂上を目指している様相。水流は天を目指そうとしているかのようである。
常識外れの光景に言葉を失くし、じっと見つめる。
船はそこへ向かっている。間違いではない。これからそこへ入るのだろう。
レッドラインへぶつかるようにして波が荒れている。
海賊たちの多くがグランドラインへ入る前に全滅してしまうのは、この地の航海を失敗するからに他ならない。それだけ難しい場所だ。見るだけでもその危険性が伝わる。
自然とナミも表情を引き締め、仲間たちへの指示は的確に行われた。
「ゾロ、しっかり舵取ってよ！　みんなも集中して！　ここが正念場よ！」
「あ～いナミさぁん！」
「よっしゃ～！」
船上は一気に慌ただしくなり、操船に余念がない状態となる。
今からでは船を停めることもできず、海の状況を見れば速度を緩められる余裕もない。このまま行くしかなかった。
だがナミの航海術が長けているためか、波乱も起きずにメリー号は運河へ入る。後続のアーロン一味の船も同じだ。二隻は一列に並んでリヴァースマウンテンへ突入した。
「入ったぁ～！」
拳を突き上げてルフィが叫ぶ。
思いのほかあっさりした様子だったが喜びは一入。
ウソップやサンジもまた喜びの声を上げ、シルクとナミも諸手を上げて笑顔になる。
勢いは凄まじく、海流に乗っただけで見る見るスピードが上がっていく。

やがて船は頂上へ到着し、海流の勢いそのままに空へ飛び出す。
四つの海から来る海流が一所でぶつかり、必ず決まった方向へ船が進むのである。
船は再び運河を走る海流に乗った。
その時、すでに彼らはグランドラインへ入っていたのだ。
「いやっほぉ～！　グランドラインだァ！」
「すげぇ～！　山を越えたぞ！」
「さぁ、あとは下るだけ。もうこの航海は成功ね」
二隻の船は運河を下り、長い下り坂を終え、やがてグランドラインの海を視界に入れる。
ついに運河を抜けて海へ出た。
坂を終えて勢いよく着水し、高く水が跳ね上がる。
同時にルフィは跳び上がって喜び、他の者たちも同様に歓喜を露わにしていた。
「着いたぞ！　グランドライン！」
「っておい!?　キリ居ねぇよ！　せっかくグランドラインに来たのにまだ船の中だぞ！」
「それはだめだろ！　キリにも見せてやらねぇと！」
「キリは前までグランドラインに居たんでしょ。今更じゃない」
「んなことねぇって！　キリだって見たいだろ！」
到着して早々、うきうきした様子でルフィがキリを呼びに行こうとする。
それほど最初の海は穏やかな様相を湛えていた。空は快晴、波はリヴァースマウンテンを越える前とは違ってひどく穏やかであり、余裕を持って肩の力を抜ける。
危険な海だと聞いていたのだが予想と違って拍子抜けした感覚すらある。
誰もルフィの行動を咎めようとはせず、笑顔で見送ろうとしていた。
そんな頃に海へ変化が起こる。
巨大な何かが海水を押し上げて浮上してくる。目にした途端、海王

類かと予想して身構えるものの違っていたらしい。頭を出したそれは、外見だけはそう目立った物ではなかった。
勢いよく顔を出したのはクジラだった。ただしその巨大さは知識として知る物とは大きく違い、まるで山のようなサイズ。海面から現れただけで海が荒れるほどの外見であった。
当然海だけでなく船もまた一瞬で大荒れになり、様相が一変する。
メリー号の上では複数の悲鳴が重なった。
「クジラだァ！」
「で、でででで、でっけぇぇっ!?」
「なにこのサイズっ!?　あり得ない！」
レッドラインには遠く及ばないが、それでも規格外の巨体。
メリー号を踏み潰すにはほんの一瞬で終えられる大きさにしか思えず、アーロン一味の船を引くモームですら一口で丸呑みにされてしまうだろう。
かつて見た事が無いクジラに驚愕し、魚人たちでさえ声を抑え切れていなかった。
波が荒れて船体を大きく揺らす。その様は直前まで感じていた嵐よりもずっと大きい。あわや転覆というところでなんとか立て直すことに成功して、二隻はクジラの傍を離れる。
クジラは天を見上げて、突如咆哮を始めた。
鼓膜だけでなく全身を震わす絶叫。無視できないほどの迫力だ。
間近で見ていた二隻に居るクルーは耳を押さえ、言葉を失くしてただ見つめる。
それ一つでグランドラインの異常性を知れたと言っていいだろう。
額に無数の傷跡を持つ、山より大きなクジラ。
ルフィは驚いた表情から徐々に笑みを浮かべていき、未知なる世界に来たのだと、恐怖心を抱く前に喜んでいる様子。喜んでいるが佇まいは穏やかでじっと立ち尽くしている。
その傍ではウソップが尻もちをつき、不意に視線を動かした拍子に何かに気付いた。
「すげぇ……ははっ。やっぱグランドラインはすごいとこなんだ」

「お、おいっ、あの灯台！　なんか出てきたぞ！」
クジラの咆哮によって船体がビリビリ震えている中、声を張り上げて仲間へ伝える。すると彼らも気付いてウソップが指し示した方向へ顔を向けた。
灯台から誰かが出てきている。おそらくは人間。
ただし思いのほか奇抜な外見だったようで、サンジが驚いた顔で思わず言い出していた。
「花だ！」
「は、はなっ!?　歩いてるのに!?」
「いや違う、人間か……紛らわしい髪型しやがって」
リヴァースマウンテンの麓には人が上陸できる場所があり、灯台が設けられていた。
船を寄せれば上陸できそうな足場で、その上をすたすた歩くのは一人の老人。花に見間違えるのも無理はない特徴的な髪型をしているが人間だ。間違いはない。
老年の男は赤い土の陸地を歩いて移動し、クジラへ向かっていく。
そしてあろうことか、巨大クジラに襲われる危険性を考慮せず、戸惑う素振りもなく海へ飛び込んだのである。水柱を立てて彼の姿は海中に消えてしまった。
「おぉいっ!?　おっさんが飛び込んだ！」
「なに考えてるのよ、死ぬ気!?　助けなきゃ」
ウソップとナミが叫び出すがあまりの威容に近付けず。
徐々に海の状態は治まったところで軽々しく助けに行ける光景ではなかった。
クジラが鳴き続ける状況で、時が止まったかのように動きが消える。
麦わらの一味とアーロン一味はクジラに圧倒され、その姿に、その声に、天へ向かって吠える光景に何か感じ入る物でもあったのか、ぴくりとも動けなくなっていたようだ。
しばらくの時が経って変化が起こる。
クジラの咆哮は驚きを含む様子で止まり、すぐに静かになってしま

う。
落ち着いた、とも言えるだろうか。
どことなく不自然な姿には見えたものの海には静寂が戻った。クジラは落ち着きを取り戻して海の中へと沈んでいき、やがて姿が見えなくなってしまう。
驚きは大きく、平静を取り戻せないまま。
しばし全身が黙り込んだ状態で海を眺めていると、先程飛び込んだ男が陸の上へ戻ってきた。
怖がってはいない。驚いてもいない。
怪我もせずに平気な顔で戻ってきた後、彼は灯台の近くにある小屋へ足を運んだ。
おそらく彼の家だろう。
置かれていたタオルで簡単に体を拭いて、小屋の前に置かれた椅子へ腰掛け、新聞を手に取る。
海賊旗を掲げる船に気付いたのはそれからだった。
「海賊がまた来たか……」
「おっさん、さっきのクジラなんだ!? すんげぇでけぇな! あいつおっさんの友達か!」
小さな呟きだったが海が穏やかとあって聞き取れた。
真っ先に反応したルフィが欄干の上へ飛び乗り、男へと声をかけ始める。男は冷静な面持ちで彼の目を見やり、新聞を広げながらルフィを見つめて返答を出した。
「フン、名乗りもせんのか。質問の前にまず自ら名乗るのが礼儀じゃないのか?」
「ああ、悪かった。おれは――」
「私の名はクロッカス。双子岬の灯台守をしている。歳は71歳。双子座のAB型だ」
「おいっ!? 先に名乗れって言ったのおっさんだろっ! なんで自分からしゃべってんだ!」
苦言を呈した割に自ら名乗り始め、出鼻をくじかれたルフィが怒気を露わにする。

真面目な顔をしてふざけた態度だった。思わずウソップもずっこけており、ナミやシルクも毒気を抜かれたらしく、力が入らなくなって転びかけている。
状況を見たサンジが歩き出す。欄干へ歩み寄り、男を見て話しかけた。
「まぁ待てルフィ。落ち着け。こういう時は相手のペースに乗せられずに話すべきだ」
「おっさんが言えって言ったのにっ。おれの話聞かねぇで」
「だから落ち着け、冷静に話を進めろ。おいおっさん、いくつか聞きてぇことがあるんだが」
「海賊か……略奪でもするつもりか？　やめておいた方がいい。死人が出るぞ」
「へぇ、興味あるね。誰が死ぬって？」
男は、睨みつけるような視線だった。
威圧感を感じて自然とサンジの面持ちが緊張していく。
そして男は、静かにその一言を放った。
「私だ」
「おまえかよっ!?」
聞いた途端にサンジもまた冷静さを失って気付けば叫んでいた。
ペースは男の物である。
先程の緊張感とは裏腹な空気が漂っていた。
深く溜息をつき、頭を抱えたナミが空気を変えるためにも話し始める。
入ったばかりで何もかもわからないが、一度仕切り直して、せっかく出会えた人間に質問したいこともある。この場はすぐに出発という訳にはいかないだろう。
グランドラインの航海は危険だと聞いている。慎重になり過ぎて損はない。
その前にまず着替えだ。嵐の中を越え、休む暇もなくリヴァースマウンテンを越えた。いまだに服が濡れたままで気分は良くない。変えるならばまず服からだ。

キリが弱って倒れている今、指揮を執るのは彼女の役目のようだった。
「あぁもう……よくわからないけど、とにかく一旦着替えましょ。あのおじさんに話を聞くのはそれから。まずは落ち着かないとね」
「そうだな。キリにも教えてやらなきゃいけねぇし」
ナミの一言にルフィも同意し、船上の雰囲気は些か変化したらしい。
二隻は陸地へ隣接して足を止め、その後麦わらの一味は船内へ入り、着替えを始めたのである。

置き去りの仲間

メリー号の男子部屋では男性陣が集まり、濡れた服を着替え終えた頃だった。
ルフィやゾロ、ウソップとサンジは問題なく自身の手で着替えた。問題なのが水に濡れてだらけているキリである。彼は全く自分で動く気がなくて、仲間の手を煩わせていたようだ。
自身はさほど動かず、悪戯するつもりのルフィとウソップに着替えさせてもらって騒がしい。
その様を見ていたゾロは腕組みをして溜息をつき、やれやれと首を振っていた。
「面倒な奴だな、おまえは。いい加減その弱点どうにかできねぇのか」
「自分でもどうにかしたいんだけどねぇ。二年くらいもらえれば克服できそうな気がする」
「まだ先は長ぇな。期待しねぇで待つしかなさそうだ」
「そうしてよ。それまで迷惑かけることになるけど」
「なぁキリ、早く外行こうぜ。おもしれぇもんあるんだぞ」
キリもなんとか着替えを終え、上機嫌のルフィが笑顔で語り掛ける。
彼にはまだ外で見た光景を話していていない。大きなクジラに花みたいな髪型の男。きっと見れば驚くだろうと思い敢えて黙っていた様子だ。
長い間グランドラインに居たのならすでに見た可能性もあるが、それはそれで面白そうだろう。
どうやらキリの反応を楽しみにしている様子だった。
「そうだね。でもボク動けないからおぶってよ」
「しょうがねぇな。キリは甘えんぼなんだな」
「ありがとせんちょー。愛してるよ」
ししし と笑って戸惑いもせず、ルフィがキリを背負ってやる。
体重が軽いせいで苦にもならない。不思議と彼にだけは甘い態度

があったようだ。
男同士なら顔を険しくしてしまったらしく、その様を見ていたサンジはぽつりと呟く。
「今のセリフをナミさんとシルクちゃんが言ったら、おれがすぐおぶって差し上げるのに。なんでこいつなんだ、ちくしょう」
「おい、残念な声が漏れ出てんぞ。それは心の中に隠しとけよ」
呟きを聞いたウソップが言い、先に扉を開けて甲板へ出ていく。それから間を置かず他の面々も外へ出ていき、今度こそ乾いた服で太陽の日差しを受け止めた。
リヴァースマウンテンの麓で運河を傍に置き、赤い土で構成された陸地へ上陸する。
そこは双子岬という場所だった。
船が一つ通るのが限界だろう運河を挟んで二つの灯台があり、片方には先程見た老年の男が居る小屋が建っている。一行はそこを目指していた。
女性陣はまだ着替えているようだが先に灯台の近くへと足を運ぶ。
同じく船を停泊させたアーロン一味は上陸する気がないらしい。
傍を通り過ぎて騒がしい様子だけを窺って、今はまだ慌てて声をかける必要はないと判断する。
五人は老年の男、クロッカスが居る場所へ辿り着いた。
「おっさん、来たぞ。まだ二人着替えてるけどな」
「そうか。別に待ってはいなかったが、まぁいい。それより私に何の用――」
読んでいた新聞を下ろしてクロッカスの目が彼らを捉えた。
その途端、声を発したルフィを見て、その背に乗って大人しくしているキリもまた視界に入り、不意に表情が変わった。変化は自分で思う以上に大きく、誰の目にも明らかになる。
それは見覚えのある顔だった。
くすんだ色の金髪はかつて見た物。忘れるはずがない。
顔立ちもよく似ていて、子供の頃に会ったことを覚えている。今よりずっと背丈が小さく、あどけない様子で、多少生意気だった少年が

成長した姿でそこに居た。
リヴァースマウンテンを越えてやってきた時にもひどく驚いた物だった。
言わば今は、その時の感覚をもう一度味わっているかのよう。
まさかと思って見つめていれば、徐々にキリの表情も変わってくる。
心の奥へ押し込めていた記憶が蘇り、かつてこの地へ来た当時を思い出す。
確かに仲間とやってきた。
そして彼とも出会っていた。
蘇る記憶に驚き、彼も目を大きくして驚いていた様子である。
「クロッカスさん……？」
「おまえ、キリか？　大きくなったな。だが、なぜここに……ビロード海賊団は、もう」
クロッカスは動揺している。先程見た際のおどけた素振りは一切見られなかった。
複雑そうな目でキリを見つめ、きつく握った拳が彼の心境を表していた。
同じくキリも見るからに平静を失っていて、唐突に真剣な顔でルフィの肩を軽く叩き、下ろしてもらう。まだ体の力が抜けている。おかげで自分の足で立てば体がふらついた。
すぐにルフィが肩を貸し、俯く彼の顔を覗き込む。
ほんの一瞬だが顔色が変わっている。明らかに青ざめていて呼吸が荒れかけていた。
思い出さないようにと封じ込めていた記憶が脳裏を支配して、クロッカスを、この地に居た巨大なクジラを、そしてグランドラインの先で見た物を思い出す。
目は見開かれて指先が震え、見ていて心配せずにはいられない姿だ。
「そうか……そうだった」
「キリ？　大丈夫か、おまえ。体調悪いのか？」

「ラブーン、大きいクジラは？」
「あ、やっぱ知ってたのか。そうなんだよ、ここ山みてぇなクジラが居てさ。さっき――」
ちょうどルフィが話していた時に、大量の水を押し上げてクジラが顔を出す。
怒るような乱暴な素振りは消えており、比較的穏やかな顔で陸地を見る。
目線は初めて見る五人を捉えていたらしく、クジラを見た途端、キリがひゅっと息を呑んだ。
そのクジラの名前を憶えている。
ラブーン。
ウエストブルーからグランドラインへ入った海賊たちが付けた名前で、海賊たちが当時はまだ小さかった彼を仲間として迎え入れて、だが危険な航海を前に別れを告げたのだ。以来、ラブーンはずっとこの地で仲間たちを待ち続けており、再会の時を待っていた。
教えられずとも理解している。否、理解していたはずだった。
仲間が死んで以来、グランドラインでの記憶の多くは頭の奥へ押し込み、大半を思い出さないようにと努めていた。それでも仲間が死んだ瞬間はフラッシュバックする機会もあったとはいえ、長らく彼らのことを思い出さなかったのも事実。
ラブーンの目を見て全てを思い出した。
その頃になってナミとシルクも上陸して、近付いてくるとキリの様子がおかしいと気付く。
彼は今、これまで見たことがないほど呆然としていたようだ。
ルフィの傍を離れ、一人で歩き出す。
キリはラブーンだけを見つめて前へ進み、危なげな足取りでゆっくり近付いていった。
「霧の海域。生きる骸骨。なんで忘れてたんだろう……君のことも覚えてたはずなのに。でも、そうか、忘れようとしてたんだっけ。あの頃のことは、思い出せば辛くなるから」
仲間たちは静かにその背を見送る。

普段の冷静さなどまるで見られない、言ってしまえば異常な姿。足取りはおぼつかない物で今にも転びそう。語る声もなぜか空虚で、それなのに悲しげだと感じられた。
止める術を見つけられずに見送るしかなかった。
キリは海へ落ちる寸前、陸地の縁で足を止め、ラブーンを見上げた。
顔に笑みが張り付けられているが今にも泣き出しそうで。
脳裏に浮かぶ光景を見つめ、揺れ動く心が落ち着く暇もなく、やさしく話しかけた。
「ラブーン……ブルックのこと、覚えてるかな」
つぶらな瞳でキリを見ていたラブーンは、たった一言で佇まいを変えた。
山のように大きな体がびくりと反応し、彼にとって些細な挙動で海が荒れて、高い波が起こる。
反応は確かな物だ。彼は憶えている。
それだけに後悔が大きくなり、キリは自らの行いを後悔する。
現実逃避をして、自分だけ逃げようとしていた。ラブーンがずっと待ち続けていることさえ忘れてしまい、自分だけ楽になろうとするなど愚かしいことだ。なぜ今まで気付けなかったのか。
思い出した以上は無視することはできない。今一度、最期の時を見なければ。
数秒目を伏せ、呼吸を整えてから目を開いて語り出す。
その名を聞いて驚いていたのはラブーンだけではなかった。クロッカスも同じだ。もう聞くことはないだろうとさえ思っていた名を耳にし、思わず身を乗り出してしまっている。
しかし背後を気遣う余裕もなくて、キリはあくまでもラブーンへ語り掛ける。
「おまえ、なぜその名を……!?　あの時にも教えたことはなかったはずっ」
「霧の海域で、舵が壊れた幽霊船を見つけた。今から五年前のことだ。その船にはヨミヨミの実を食べて、一度死んだのに生き返った男が居て、白骨化したのにトレードマークのアフロは生きてる時のまま

でさ。ここに来ることを何よりも願ってた。仲間がみんな死んで、約束を破ってしまったことを謝りたいって」
ラブーンが震えて、海が荒れる。
いつしか彼は目に涙を溜めていて、感情が高ぶっているようだった。
それを見てキリも強く拳を握りしめる。
微笑みを消さぬよう堪えているが、彼にも込み上げる何かはあったらしい。
「ブルックのことだよ。彼はずっと、一人で生き続けていた。ラブーンにもう一度会うために、何十年も孤独に耐えて、自分の口から謝りたいって言ってたんだ」
感情が抑えられず、ラブーンが空を見上げて咆哮を上げた。
今だけは先程打たれた鎮静剤すら関係なく。今は喜びと悲しみと、その両方を噛みしめて叫ぶ。
仲間は死んで、だけど生きていた。
ラブーンはひどく混乱し、それでも必死に理解しようとして、叫び声を上げ続けた。
信じられないという顔をするクロッカスが前に出て、慌てた素振りで尋ねる。
ルフィたちは混乱したまま、何も理解できていないが彼だけは違う。その名に覚えがあって自分の足で探しにも出た。それでも見つけられなかった人物だ。
「どういうことだ、ブルックは生きているのか？　だがルンバー海賊団は、カームベルトを抜けてグランドラインから逃げ出したはずでは……！」
「それは一部の話です。船長が伝染病にかかって、一味を守るために船と一部の仲間を連れて、危険を承知で脱出を試みることになったと」
「ブルックが、そう言ったのか……？」
「はい」
「なんてことだ――」

クロッカスは呆然と呟き、叫ぶラブーンの姿を見つめる。
待ち望んでいた。以前にも仲間たちは死んだと教えて、その時は受け入れられないと聞く耳を持たなかったが、たった一人でも生きていたのだと知ってやっと受け入れられたらしい。
様々な要因で驚きが大きく、クロッカスもまた言葉を失っていた。
彼ら二人は理解しているようだが他の面々は理解できていない。
困惑は大きくなるばかり。自然にウソップが口火を切って質問を始めた。
「お、おいおい、おまえらだけで話進めんなよ。おれたちには何がなんだかさっぱりだ」
「そうよ。私たちにもわかるように説明して」
「キリ、大丈夫？」
ナミとシルクも口を開いて尋ね、答えたのはクロッカスだ。
ラブーンを見つめてぼんやりした声。
まだ驚きが引かず、半ば信じられない心地である。
「ラブーンはアイランドクジラと呼ばれる種類で、主にウエストブルーに生息するクジラだ。ある時、海賊たちと共にリヴァースマウンテンを越えてやってきたのだが、この先の航海は危険だと判断して、必ず再会すると約束してラブーンを残して行ったのだ」
「へぇ、リヴァースマウンテンを越えたのか」
「だがいまだに海賊たちは戻っていない。もう五十年になる」
「ご、五十年!?　それじゃこのクジラは五十年間も待ち続けてんのか！」
驚いてウソップが声を大きくする。だが空へ向かって叫ぶラブーンの声には到底及ばなかった。
五十年も仲間との再会を待ち続けた一匹のクジラ。それも仲間は同じ種類のアイランドクジラではなく、おそらくどこかで出会っただろう人間の海賊たち。
どこで出会い、どんな関係で、どれほど寂しかったのかは知らないが、胸が熱くなる話だ。
そう聞かされれば叫び声も不思議と先程とは聞こえ方が変わる気

がした。
言葉を失くす面々の中でふとシルクが気付く。
ついさっきキリが語った言葉を思い返せば違和感を感じる。
彼女は静かにラブーンを見つめるキリの背へ声をかけた。
「ちょっと待って。それじゃ、キリは五十年前に生きてた人と会ったってこと？　そういえば、ヨミヨミの実って言ってたけど」
「ラブーンの仲間はみんな死んだんだ。その中で唯一、一人だけ、悪魔の実の能力で死んだ後に生き返った人間が居る。それがさっき言ったブルック。海賊で船長代理、音楽家だった」
ゆっくり振り返ったキリは微笑んでいた。
寂しげで、心を苛まれていたのかもしれない。今では鮮明に過去を思い出している。
脳裏には陽気な声で語る骸骨と、彼と別れる瞬間の風景があった。
「グランドラインには〝魔の三角地帯（フロリアン・トライアングル）〟って呼ばれる海域がある。深い霧が立ち込めているせいで方向がわからなくなる特徴があって、遭難者が後を絶たない。優れた航海士も技術より勘と運に頼るしかない海域さ。ブルックは五十年、そこで彷徨い続けていた」
「五十年も……一人で？」
「なんでそんなこと知ってんだ。まさか、おまえ」
「そうだよ。ボクの仲間が死んだのもその海だった」
Tシャツの胸の辺りをぎゅっと掴んだシルクが呟き、悲痛そうな表情を浮かべる。五十年間一人で生き続けていたのだ。想像するだけでも恐ろしい。
直後に顔をしかめたゾロが尋ねる。
彼はあまりにも知り過ぎている。出会って話したのだろうと思っていたが、予想通りだった。
それは彼にとって忌まわしい思い出でもあったのだ。
ふぅと息を吐いて、キリがわずかに俯く。
話しにくいことだっただろう。忘れたいと思っていたほどだ。しかし彼は再び顔を上げると迷わず告げて、疑念を表す皆に説明した。
「やったのは七武海、ゲッコー・モリアの部下が率いる〝死体狩り

〝って部隊。もっと詳しく言えば襲ってきたのはその隊長だけだったけど、圧倒的な強さだった。仲間が次々殺されていく状況でボクを逃がしてくれたのがブルックだったんだ」

「そうだったんだ……」

「一緒に居たいって駄々をこねたけど、命は大事にしろってさ。一度死んだ人がそう言うんだ。ハハ、今にして思えば、説得力のある言葉だよね」

視線を落としてぽつりと告げられる。渇いた笑い声が印象的だった。

無理に笑ったところで表情は暗く、顔色は悪い。

やはりキリには思い出すことさえ辛い記憶だったようだ。

初めて見る顔に仲間たちの表情が歪む。同情するのか、気付けば悲痛な面持ちとなっていた。

その中でルフィだけは眉間に皺を寄せていて、何やら様子が違っている。

歩き出した彼はキリへ歩み寄り、足を止めた後、幾ばくかの距離を置いて向かい合う。真剣な顔でじっと見つめて話し始めた。

「そのブルックって奴、もう死んだのか？」

「さぁ、どうだろう……ボクを小舟で逃がした後、船は海へ沈んだ。どうなったかまでは」

「おまえはどう思うんだよ、キリ。ブルックが死んだと思うか？」

いつの間にかラブーンの声が止まっている。

冷静になったらしく、大事な話だと知って真剣に聞いていたのだろう。今も尚涙が溢れ出てくる目はキリの背と、向かい合うルフィを見ていた。彼は人間の言葉を理解している様子だ。

少し悩む素振りを見せ、やがてキリが答える。

冷静に考えたつもりとはいえ、それは大いに彼の希望を含んだ意見だった。

「モリアの狙いは人間の死体だ。ブルックは生き返る時に事情があったから、白骨化して利用できる肉体を持たない。そういう意味じゃ連れ去られたとしても殺される心配はないと思うけど」

「ちょ、ちょっと待てよ。色々聞きたいことがあるぞ。死体狩りとか、白骨化とか」
「モリアの能力が関係してる。奴はゾンビを作って私兵にしてるらしい」
「ゾンビを作る!? そんな奴が居んのか、この海に!?」
怯えた顔でウソップが悲鳴を発した。
今は反応する余裕もなく、ルフィはキリだけを見つめる。
「ブルックを利用するとすれば、影を奪う方がよっぽど効率的だ。死んでない可能性もある」
「ずいぶん詳しいな。それもその頃知ったことか?」
「……しばらくした後に調べたんだ。結局、復讐には走らなかったけどね」
サンジに問われて首を振り、その頃の知識ではないと否定する。自分の意志で情報を集めたのはずっと後のことだ。しかし今日に至るまでその情報を利用しようと思ったことはない。
ルフィに出会うまでのキリは人生を諦めていた。
命を落とすことはなかったが空虚な日々を過ごし、心が摩耗していく感覚に耐えかね、自身の死すら望むほどにどこかが壊れていた。記憶を封じたのもそのためであろう。
死ぬな。そう言われて逃がされたことは彼の選択肢から自殺を奪い、呪いのように作用する。
だから今日まで生きていたのだと今更になって理解した。
もう一度溜息をつく。
意識せずとも気分が沈むよう。精神からの影響で体調にまで変化をきたしそうだ。
そんなキリを見てよしと頷いた後、ルフィは人知れず覚悟を決めた。
「わかった。それじゃブルックを探そう」
「え?」
「おいラブーン」
大人しく話を聞いていたラブーンへ声をかけ、前へ進んだルフィは

キリの隣へ並んだ。
辺りは緊迫した空気に包まれている。真剣な目でルフィがラブーンを見据えて、キリも疑問を抱いて彼の横顔を窺い、先の発言の真意を問おうとしていた。
しかし問いかけるより先にルフィがラブーンを相手に話し始める。
「おまえ、ブルックに会いたいか？」
待つ暇もなくラブーンは頷く。何度も何度も、熱望してやまないと言うように。
「そうか。でも今も生きてるかどうかわからねぇんだよ。だからおれたちが探してくる。キリの恩人みてぇだし、おまえに会いたがってんだ。おれたちが探して見つけてくる」
見た目にも明らかにラブーンは喜んでいる。
大粒の涙を流して、そうしてくれと伝えるべく力強く頷いた。
「おれは海賊王になってこのグランドラインを一周する。もう一度このリヴァースマウンテンの向こうから飛んでくるから、その時はブルックも一緒だ。約束する」
「ルフィ、でも、そんな約束……」
「なぁキリ。そいつってさ、音楽家なんだろ？」
ラブーンとは対照的にキリは戸惑っている顔だった。
そうしてくれるのならば有難いが、自身の個人的な用事に巻き込んで迷惑をかけるのでは。
心配する彼に向かってルフィはにかっと笑みを見せた。悩む必要はないと言うように。
「おれずっと音楽家欲しかったんだ。いい奴だったら仲間にしよう」
「はは……」
あくまでも自身が欲しいから。そう言っているのだろう。
余計な心配はするなと言外に告げられて、小さく笑ったキリは思考を変える。
余計な考えだった。
ルフィは誰かに命令されて動く人間ではない。確かに仲間のため

に動くことはあっても、やりたくないことははっきりとそう言う性格。嫌だと思うならそんなことは言い出さない。
キリは心配することをやめ、申し訳なかったと心中で謝る。
どうやらルフィを軽視してしまったようだ。
ラブーンは再び咆哮する。今度は喜びに満ちた声だ。希望は再び戻ってきた。
一方、待ったをかけたのがクロッカスである。
彼は冗談を許さぬ気迫でルフィに問いかけ、その覚悟を見極めようとし始めた。
「小僧、本気で言っているのか。ラブーンをからかうつもりなら私が許さん」
「からかったりしねぇよ。本気だ」
「ビロード海賊団も約束していた、必ず帰ってくると。だが結果は聞いての通りだ。この海はそれほど危険な場所だぞ。絶対に約束を破らないとなぜ言える」
「おれは海賊王になるって決めたんだ。逃げもしねぇし諦めもしねぇ」
「根拠もなしに軽々しい言葉を――」
言いかけたクロッカスが不意に言葉を止め、ルフィがかぶる麦わら帽子に気付いた。
見覚えのあるそれに一瞬で表情が変わる。
「小僧、その帽子……まさかシャンクスの物か」
「え？　おっさんシャンクス知ってんのか？」
「そうか、あいつが言っていた子供はおまえだったんだな。以前聞いたことがある」
腕を組んでううむと唸り、知らない人間だとも言えないため、それだけで思い悩む。
不思議と警戒心は薄れるが念を押すように言った。
「ラブーンは二度、約束を破られてしまっている。これ以上あいつを失望させる気はないな？」
「当たり前だ」

「では多くは言うまい。シャンクスが認めた男だ、信じる価値はあるかもしれん。どうにも頑固そうな男で、何より、ラブーンが信じるようだしな」
応じるようにラブーンが鳴いた。
彼はすっかり信じ切っているようで疑う素振りがない。
苦笑したクロッカスはラブーンを見やり、呆れた口調で注意した。
「それならラブーン、待っている間はもうレッドラインに頭をぶつけるのをやめろ。これからまた何年か待たなければならないんだ。怪我をしている場合ではないぞ」
「怪我？　頭のあれか」
首をかしげたルフィがラブーンの頭を見る。そこには無数の傷跡が刻まれていた。
「待ち続けたラブーンはいつの頃からかレッドラインへ吠え、頭をぶつけるようになった。まるで自分を責めるようにな。いつまで経っても戻らない仲間たちの行方は理解していたのだろう。おそらくそうしなければ耐えられなかったのだ」
「うん、わかる気がする……頭で理解しても、心が受け付けない時があるから」
「ふぅん」
キリの呟きにルフィが頷き、数秒もすれば何かを思い付いた様子。パッと笑顔が輝いてウソップを呼んだ。
「ウソップ、ペンキ取りに行こう！」
「は？　ペンキ？　そんなもん何に使うんだ？」
「いいこと思い付いたんだ。やってみりゃわかる」
「しょうがねぇな」
うきうきした顔で走り出す彼にウソップが連れられ、二人はそそくさとメリー号へ向かった。
それを見送ってからキリがクロッカスへ向き直る。
前に会ったのはもうずいぶん前。確か十歳にもなっていない小さな頃だ。
まさかもう一度会うことになるとは思っていなかった。気まずい

気分になるのも仕方なく、無視はできずに複雑そうな顔で頭を下げる。
今更頭を下げたところで何も戻ってこない。だが忘れるための努力をしていたのは事実だった。
「すみませんでした、クロッカスさん。報告もしないで、今日までずっと――」
「謝るな。一応とはいえ私も船長を失った身だ。理解しない訳でもない」
「本当はもう、戻らないつもりでしたから。自分はあの日に死んだものだと思って」
「……仲間はいくつで失くしたと言っていた」
「十二の頃です。忘れもしない」
「幼い時分に失くしたな」
クロッカスも溜息をつき、やれやれと首を振って嘆かわしく思う。
彼は灯台守であり、医者でもあった。一時は海賊の船に乗っていた経験もある。
そのせいか、キリの表情や仕草を見て状態が理解できたようだ。
「心に負った傷は肉体のそれよりもずっと治りにくい物だ。ましてや子供、依存していたならその傾向はより強くなる。その様子ではまだ克服していないだろう。それなのにまた挑むのか？　仲間を失ったこの海へ」
「仕方ないんです。無理やり連れ出されちゃいまして」
「止めはしないし、責めもしない。だがそんな状態で本当に行けるか？」
クロッカスはひどく真剣な顔つきで問いかける。
心配の色が濃くなり、顔見知りとしてというより、医者としての意味合いが強い。
思い出すだけで指先を震わせた彼の姿は、決して大丈夫だと言える状態だとは思えなかった。
「そんな状態で旅を続ければ、いずれどこかで壊れてしまうかもしれん。この海の恐怖を知っているのなら尚更だ。傷ついた心を治す

のは容易ではないぞ」
キリは何も言わずに両手をポケットへ突っ込んだ。
そしてにこりと笑って答える。
「なんとかしますよ。幸い、これでも意外と我慢強いんで」
欲したはずの答えではない。だがそれ以上キリは何も言おうとしなかった。
クロッカスは静かに目を伏せる。
ルフィとウソップを除き、仲間たちはその様相を目にしていた。

最初の航路

「んん！　よい！　よいよ！　よく描けた！」
身の丈ほどはある大きな筆を持ち、至る所がペンキまみれになったルフィが叫ぶ。
彼は今、傷跡だらけのラブーンの頭を見ていた。
時間をかけて山のように大きなそこへ描かれたのは麦わら帽子をかぶったドクロだった。ルフィが主導でウソップは手伝っただけのせいか、思いのほか下手くそで、旗に描かれたマークとは些かの違いがある。良く言えば個性的で味のあるルフィらしい作風だ。
完成した絵を眺めて満足そうに頷く。
筆を置き、腰に手を当てて仁王立ちしたルフィはラブーンを見上げて語った。
「これが約束の証だ！　おれたちはまたここへ帰ってくるから、その時まで元気で居ろ！　頭ぶつけてそのマーク消すんじゃねぇぞ！」
描いたマークを約束の証として、ルフィが笑うとラブーンが鳴き声を発して応じた。
答えはイエスに違いない。
涙が消えた彼の目は晴れ晴れとしている。
これからまた数年待たなければならないだろう。しかしブルックの話を聞いて希望が持てた。もう誰も残っていないと思っていただけに、生きる理由を見つけられて嬉しさを感じているらしい。
早く会いたいと心が躍る。
今や以前とは違った喜々とした様子が窺え、見ていたルフィも楽しそうに笑った。
ルフィとウソップが作業している間に時間が経ち、夕刻が近くなっている。あと二時間もしない内に夕日が見れるようになるだろう。島を目指すにはすぐ出航しなければならない。
その場で一夜を過ごす選択肢もあるだろうが、ルフィが望んでいないようだった。
出航するため、クルーたちは準備を行っている真っ最中。

ナミは席についてクロッカスと向き合い、グランドラインの航海に関して説明を受けていた。
「グランドラインの航海にはログが必要不可欠になる。これを見失えば方角はわからず、島に辿り着くには奇跡を頼るしかない。コンパスでさえ狂わされる海だからな」
「うん。仲間に言われて用意してきた。これのことでしょ？」
「そうだ。島に滞在しているだけでログは自動的に溜まっていく。指針が定まった時が溜まった合図になるだろう。ただしログが溜まる期間は島ごとによって異なる。注意することだ」
「長くてどれくらいになるかしら」
「年単位でかかる島もあったな。住民が居るようなら尋ねてみるといい」
「ログを溜めるだけで何年もかかるの？　そんなの待てないわよ。特にルフィが」
「そういった人間に重宝される道具もある」
クロッカスはナミが身に着けるログポースを指差して言った。
「ログポースは島から島へ移るごとにログを書き換えるが、〝永久指針（エターナルポース）〟という一つの島のみを指し続ける道具が存在する。ログが溜まるまで数年かかるようであればこれを使って脱出するのが得策だ。行く所へ行けば売買されている」
「なるほど」
「事前の準備を怠らぬことだ。ログの選択はこの海で生き残るために最も重要な物だからな」
クロッカスの呟きにナミが頷き、深く心に刻み込む。
四つの海とグランドラインは全く別物。噂は聞いたことがある。
今まで培った航海術が通用しない可能性さえあり、気を引き締めなければと考える。しかし未知の海域を前に、不思議と不安よりも好奇心が沸いてくるようだった。
ルフィに似たのかもしれない。彼女は思わず苦笑した。
「最初の航海は七つの磁気から一本を選ぶことになる。どれを選ぶかはおまえたち次第」

「最初だけ選べるってわけね。でも、そうしたら最後の目的地はどうなるの？　それぞれ別の場所に辿り着くんじゃないの？」
「いや、最終的に辿り着く島はただ一つ。……小僧は海賊王になると言っていたな」
「ええ。ルフィは本気よ」
「ならば目的地は決まっている」
腕組みをしたクロッカスは、厳めしい顔になってその名を告げた。
「ラフテル。それが誰にも見つけられぬ島で、唯一海賊王だけが辿り着いた島。海賊王の称号を欲する者は皆がその島を目指している」
「ラフテル……」
「それじゃあ、その島にワンピースがあるんですか？」
ナミの隣に座って静かに話を聞いていたシルクが尋ねる。
するとクロッカスは一瞬目を伏せ、再び開いてから答えた。
「それは自分たちで確かめてくればいい。最も、ロジャー以外は誰にも辿り着けていないがな」
「そうですか……本当にあるのかな。ワンピース」
「どうかしら。まぁ嘘だとしてもルフィなら探すだろうけどね」
ナミが目を向けた先ではルフィとウソップが片付けを始めている。使った道具を集めて運ぼうとしているところであり、暇そうにしていたゾロまで駆り出されていた。
本来は船長が聞くべき話だろうに、マイペースな姿である。
その時ふと、キリが居ないことにようやく気付いた。
ルフィが話を聞かないのは驚かないとしても、副船長たる彼は比較的話がわかる相手。今のような場面では真剣に話を聞いているのが常だったがいつの間にか姿がなかった。
狙った訳ではないだろうが、ちょうどサンジが紅茶が入ったカップを運んでくる。
不思議に思ったナミは彼に質問してみた。
「お飲み物ですレディたち。あまり根を詰め過ぎないように」
「ねぇサンジくん、キリは？　なんか居なくなってるんだけど」
「さっきまで船の中でなんか探してたみたいだぜ。今アーロンの船

に居るよ」
「アーロンの？」
ちらりと見れば確かにアーロン一味の船にキリが立っていた。
何やらアーロンと話しているらしい。彼女たちにその声は届かなかった。
キリは椅子に座るアーロンの前に立ち、手に持った手配書の束を見せている。
微笑んでいるが真剣な様子。
どうやら大事な交渉をしているようだった。
「全部で百枚。グランドラインに居る賞金首百人の手配書リストを作っておいた」
「で……それをおれにどうしろと？」
「解放の条件を変えようと思って。一対一の決闘でルフィに勝つか、或いはここにある百人の海賊を倒して海賊旗を奪ってくれれば自由にするよ。それでどう？」
言い切るキリに眉が動き、アーロンが顎を動かすとクロオビが手配書の束を受け取った。
数枚めくり、そこにある顔をいくつか確認する。額は様々、数百万ベリーも居れば数千万の賞金首も居て、中には億超えの賞金首も用意されていた。
ざっと確認すれば確かに百枚ほど用意されているようだ。
標的は百人の賞金首。彼らの海賊旗を奪って力を証明すれば解放されるという。
アーロンはキリの顔をじっと見つめて動かない。
確認を終えたクロオビが話しかけるとやっと口を開いた。
「確かに百人。ランクの差はあるがどれも賞金首だな」
「こいつらを仕留めりゃ、おれは自由になれるのか」
「そうだよ。ただし市民への攻撃はなしだ。君らの悪評が立つようなら、ボクらが駆けつけて無理やりにでも抑え込む。作戦を立てておびき寄せたいなら敢えて攻撃するのもありだけど」
「フン。そんな必要はねぇよ」

クロオビから差し出された百枚の手配書を受け取り、ちらりと確認してからアーロンが言う。
目つきこそ睨んでいるが分かり合えない様子ではない。
「まずはこいつらを仕留めてやる。その次におまえらだ」
「意外に素直だね。あっさり受け入れるとは」
「おまえに従うわけじゃねぇ。誰でもいいからぶちのめしてやりてぇと思ってただけでな」
「あっそ。まぁそれでいいよ」
素っ気ない言葉を吐きながら、手配書を見たアーロンは良い機会だと考えていた。
今のままではルフィに勝てないことを理解している。必要なのは更なる力。そのためには百人の海賊を相手に武者修行というのもいいかもしれない。
人間を守れと言われるより、狩れと言われた方がよほどマシだ。
アーロンは静かに決意して火を灯していた。
その様を見たキリは安堵する。これなら裏切ることはなさそうだ。
話はまだ終わっていないようでその場を動かず。
キリは尚もアーロンへ声をかけた。
「ここからは一旦別行動にするよ。それぞれで動いて情報のやり取りをする。別々に動いた方が手に入る物が変わってくるからね」
「好都合だ。いつまでもてめぇらのケツを追う気はなかったからな」
「その代わり呼び出す場面があるから応じてよ。あくまでこっちが本船だから」
「フン」
鼻を鳴らしてそっぽを向くが否定はしなかった。分かりにくいが肯定なのだろう。
肩をすくめ、キリが苦笑する。
「念を押すようだけど今の君らは麦わらの一味の預かりだ。市民への攻撃は許可しない。海賊と海軍が相手なら何も言わないけど」
「ならてめぇらを襲おうが問題ねぇわけだな」

「警戒しとくよ。この先の海はイーストブルーほどやさしくないし、魚人島出身ならそれはみんなも知ってるはず。情報のやり取りはこまめにしよう。ハチ、連絡の時は頼むよ」
「わかったぞ。おれに任せてくれ」
船で一番話がわかるはっちゃんに声をかけて、承諾を受けたことで安堵する。
電伝虫での通信は彼に任せておけば安心だろう。アーロンその他一部の魚人では話す気もなさそうな素振りが見えるものの、はっちゃんならば安心できる。
当初の予定よりずっと良い状態で航海を始められそうだった。
「助かるよ。情報をもらえるだけでも大きな手助けだ。この海は特に不思議が多い」
そう言ってキリは海を眺め、微笑みはそのままでわずかに寂しそうな目をした。
懐かしき海へ帰ってきた。
もう二度と来ることはないと思っていたが、これからはここで生きていくことになる。
不意に海を見た時、人の姿が二つ見えた。
島が見える位置ではないというのに泳いでいる。
岬の方向へ向かってきているようで、海上で船が壊れたのかもしれない。体力はあるのか、見るだけでわかるほどかなりのスピードで迫ってきていた。
とはいえ、一応溺れているらしい人間である。
キリは表情を変えて咄嗟にはっちゃんへ叫んでいた。
「ハチ、人が溺れてる！　あの二人の救助を！」
「ニュ～、任せろ！」
勢いよく船を飛び出して海へ飛び込む。
はっちゃんは人間よりも速いスピードで海を泳ぎ、素早く二人の下へ辿り着いた。
どうやら男女のコンビだったようだ。
二人を抱えたはっちゃんが戻ってきて、海から飛び出すと陸地へ上

がった。
気になったキリもすぐに船から飛び移ってそちらへ向かう。
仲間たちも歩み寄ってきていた。
はっちゃんが手を離し、ようやく確認できたのは二人の人間。
地面にへたり込んだ男女は奇抜な格好をする変わった人物だった。男は派手なスーツを着て王冠をかぶり、女性はぐるぐる模様の服を着て水色の髪をポニーテールにしている。
どちらも必死な姿で乱れた呼吸を整えようと努めていた。
その二人を見た瞬間、キリは目を見開いて驚愕を露わにする。
しかし集まってくる仲間の中で彼の反応を知ったのは、目敏く気付いたゾロだけだった。
「ゲホッ、ゴホッ……ハァ。いやすまねぇ。船が壊れちまって」
「ハァ、あなたたち海賊ね？　私たち町へ帰る途中だったの」
「よければ乗せていっちゃくれねぇだろうか」
「いやいや、いきなりだなおまえら。まだ名乗ってもねぇぞ」
唐突に話し始めた二人にウソップが呟き、眉間に皺を寄せる。
二人が名乗ったのはそれからだった。
「すまねぇが訳あって名は明かせねぇ。おれを呼ぶ時はＭｒ．９と呼んでくれ」
「私はミス・ウェンズデーと」
「おい、怪しいぞこいつら」
「そうね。名前は明かせない、船が壊れてここまで泳いできた？すっごく嘘っぽい」
正座するような二人に対して、ウソップとナミが腕を組んで疑えば、途端に二人は肩をびくつかせて狼狽した。あからさまに怪しい挙動である。
ひょっとしたら自分たちでも無理があると感じていたのかもしれない。
気付けば冷や汗をだらだら流しているようだった。
ますます信じられる話ではなくなり、ナミがジト目で彼らに詰め寄る。

反射的に二人は背をのけ反らせてしまう。
「完ッ璧に怪しい。あんたたちまさか、私たちをカモにしてお宝奪おうって魂胆じゃないの？」
「まままさかっ!?　そ、そんなことするはずがないだろう！」
「そ、そうよ！　それに私たちは船まで壊れて……！」
「それじゃなんで壊れたの？　理由は？」
「え、ええっと」
「岩礁に乗り上げて……」
「この辺りには岩礁はない。海流を見ればわかるわ。それなのに岩礁に乗り上げたなんて、あんたたち一体どこから泳いできたのかしらねぇ。まさか何キロも泳いだとか言わないわよね？」
「うっ、ぐっ」
どうやら嘘が苦手なようだ。
Ｍｒ．９はぐうの音も出ずに硬直してしまい、ミス・ウェンズデーは顔面蒼白となっていた。
対照的にナミは勝ち誇った表情。彼らの企みを未然に防いだと感じており、事実彼女の詰問が一味を守る結果を生み出したのだろう。ルフィが相手ではこうはならない。
出会って早々、奇妙な雰囲気が漂っていた。
出鼻を挫かれた姿の二人は見るからに動揺しており、やはりただ溺れただけではない。
ナミの疑念は確信へ近付き、今度は海を眺めてみる。
近場で船が壊れたというならその残骸の一つも見えていいだろうに、海にはそれがない。至って平穏な姿があって異物など浮かんではいなかった。
或いはラブーンに探してもらってもいいかもしれない。きっと何も見つからないだろうが。
ここへ来て逃がさないとばかりに、ナミの追及は一層強まった。
「それじゃ壊れた場所はどこなのよ。その辺で壊れた割には木材一つ浮かんでないし、もっと遠くで壊れたんならこんな場所まで泳いでこれるはずない。この岬に海賊が来ることを知っていて、見えない位

置で船を停めて、溺れてると見せかけて泳いできたならまだわかるけど」
「ぎくぅ……!?」
「グランドラインへ入るにはこのリヴァースマウンテンを使うのが常識よ。それさえ知ってれば待ち伏せするのなんて難しくないし、下調べしておけば船を隠せる場所だって見つけられる」
「ぎくぎくぅ……!?」
「つまりあんたたちは、溺れたふりをして私たちを騙しに来た、何らかの悪人。違う？」
「ぎくぎくぎくぅ……!?」
顔を青ざめさせるばかりか体まで震え始めた二人に厳しい視線が突き刺さる。
ナミは笑みを浮かべているが目は笑っておらず、腕組みをしたウソップも呆れた表情。シルクは戸惑っている様子だが、困惑した表情をしていても奇襲に備えて身構えており、サンジも同意しているらしく助け舟は出さない。たとえ相手が美少女でも茶化したりはしなかった。
ルフィは何を考えているかわからず、二人をじっと見つめる。
いつも通りでなかったのが残る二人だ。
ゾロは表情を険しくして口を噤み、キリはあろうことか彼らの意見を受け入れる。
「そこまでにしときなよナミ。怯えちゃって可哀想だ」
「なんでよ。憶測だけど多分間違ってないわ。私のお宝を狙って来たのよ」
「そうだとしても目的がわかってれば対応のしようはある。とりあえず聞いてみようよ」
「危険な目に遭うのは嫌よ。待ち伏せされそうだし」
「相手が悪人なら逆に奪ってやればいいさ。ボクらは海賊だ、儲け話になる」
「とりあえず聞いてみるわ」
「変わり身早っ!?」

自分の意見を急旋回させたナミにウソップが驚き、思わず叫ぶ。キリに説得されて気付けば彼女の目にはベリーしか映っていなかった。
ナミの追及が終わったことでルフィが二人の前に立つ。
予想外に静かな表情でじっと見つめていた。
「んで、おれたちにどうして欲しいんだ？」
「町まで乗せてってもらえればそれで十分です、はい！　それ以上は何も望まねぇ！」
「もちろん騙し討ちなんてしません！　私たちは町に戻れればそれでいいんです！」
「そうか。じゃいいぞ」
返答はあっさりしたものだった。頭を下げた二人だけでなくウソップまで驚愕する。
「ルフィ～!?　おまえよく考えろって、明らかに怪しいんだぞ！　こいつら何か狙ってる！　おれもナミの意見に賛成なんだ、危険な目に遭うのはごめんだぞ！」
「危険かぁ……やっぱりウソップもそう思うか？」
「当ったり前だろ！　じゃなきゃ出会った直後に船乗せてくれなんて――」
「やっぱり危険な方がおもしろそうだよなぁ～」
にかりと笑ったルフィの顔を見て、ウソップは目が飛び出しそうなほど驚いた。
危険だと言われてさらに興味を持ったらしい。
想定外の状況でウソップはすっかり怯え切っていた。
「お、おまえ、危険だと知ってて行く気かよ!?　おまえのことはある程度理解してたつもりだがそれはいけねぇ！　そんなことしてたら命がいくつあっても足りねぇぞ！　いいか、船長は仲間の命を預かる立場なわけだから、ある程度は危険を回避する方向性を――」
「そうかぁ、危険なのかぁ～。冒険の匂いがするなぁ～」
「お願い船長、話を聞いてっ!?」
ルフィはやさしげな笑い声を発して歩き去る。すでに今から楽しみにしている笑顔だ。

その態度が何とも恐ろしく、不安に駆られたウソップは尚も必死の説得を続ける。
どうやら船長の方針に従って、Ｍｒ．９とミス・ウェンズデーを受け入れることになったらしい。
サンジは美少女と行動を共にすることで上機嫌になっており、ナミは大金を手に入れるチャンスかもしれないと目を輝かせ、二人を見たシルクは困った様子で苦笑していた。
「鬼が出ようが蛇が出ようが関係ねぇさ。よろしくミス・ウェンズデー」
「ねぇあんたたち、貯金はいくら？　その町って裕福なのかしら」
「ナ、ナミ、その質問はちょっとどうかな……」
親しげとも宣戦布告とも取れる言葉を受けて二人は困惑していた。
しかし余計なことを言えば失敗する可能性もある。咄嗟の判断で口を噤むのも無理はない。
一度はその場を離れようとしたルフィが踵を返して戻ってきた。後ろからは説得中のウソップがついて来るのだが一切気にせず、Ｍｒ．９とミス・ウェンズデーを見る。
聞き忘れていたのだ。
自分たちが向かうべき場所はどこなのか。
「そういやおまえらが住んでる町ってどこなんだ？」
「ルフィさんってば、おれの提案も聞いて――！」
「あ、あぁ……ウィスキーピーク。別名、歓迎の町さ」
Ｍｒ．９がにやりとした顔で告げた。するとルフィの顔はパッと輝いて喜びを露わにする。
「歓迎の町っ。おもしろそぉ～！」
「か、歓迎？　なんか想像してたのと違うな……案外危険じゃねぇのか？」
「危険なんてまさか。ウィスキーピークは音楽と酒が有名な町だ。海賊たちもよく立ち寄る」
「へ、へぇ……それなら大丈夫そうに聞こえるけど、いやでも」
ウソップが悩む素振りで考え始め、ルフィは心底楽しそうに肩を揺

らす。
それから彼らはウィスキーピークについて、同時にこれからの航路について話し始めた。
集団から少し離れた位置、キリは敢えて遠ざかって俯瞰的に見ていた。
いつの間にか笑みが消えている。
普段見たことがない、感情が見えない無の表情。目にすれば印象に残る様相だった。おそらくは仲間たちが見ていないと知って変わったに違いない。
気付いていたゾロは彼の隣に並び、敢えて顔を見ずに声をかける。
「おまえあいつらのこと知ってたのか？」
「なんで？」
「あいつらの顔を見た瞬間に様子が変わった。名前も聞いてねぇのにな。あの速度で気付くってことは事前に知ってねぇと無理なタイミングだろ」
キリは表情を変えずに応じた。
ゾロの目つきは鋭く、以前にも味わったような雰囲気に包まれる。
「グランドラインに長く居たんだろ。だったら知ってるんじゃねぇか」
「そういうゾロは何か知ってそうだね」
「まぁな。で、どうなんだ」
「さぁ、どうだろうね」
「何を隠してやがる」
厳しい声で問いかけた。いつになく真剣な表情である。
それでもキリは多くを語らず、肩をすくめてようやく柔らかい笑みを浮かべる。
「今にわかるよ。ウィスキーピークに行けば」
「あ？」
「グランドラインにはもう来ないつもりだった。でももう一度来ると決めた時から、こうなることはわかってた。どうあっても無視することはできない」

「話したがらなかった例のアレか」
「ボクが居れば面倒になる。捨てていくなら今の内だよ」
儚げに笑ってそう言われた。
キリの視線がゾロの横顔を見るが振り向かず、前を見たまま彼が答える。
憮然として薄ら怒りさえ感じさせた。
「アホか。くだらねぇこと言ってんじゃねぇ」
「そう」
キリが頷く。小さな動きでそれ以上の反応はなかった。
「なら行ってみるしかない。話さなきゃならない時はすぐに来るよ」
「……そうか」
頭を振ったゾロは嘆息し、それ以上の追及をやめる。
やめはしたがその場を動こうとはせずに、腕を組んで厳しい顔、遠くを眺めた。まるで何かを思案するような素振りである。
いまだグランドラインに入ったばかり。それなのにキリの様子は一変している。
仲間が死んだことを思い出して動揺。何かを隠す素振り。
イーストブルーではなかった物だ。
果たしてこれは良い変化か。彼の表情に陰りを見たゾロは嫌な予感を覚え、以前気付いた通り、あの時の嫌な予感さえ間違いではなかったと思わざるを得なかった。

ウィスキーピーク

夜になるまで時間がない。
急いで準備をした一行はそう時間を置かずに双子岬を離れようとしていた。
船に乗り込んだ後になって、ルフィはラブーンに手を振って別れを告げている。
「またなラブーン！　いいか、おれは絶対海賊王になる！　世界を一周したらブルックを連れて山の向こうから来るから、その時までおれたちのこと忘れんなよ！」
ラブーンは大きな鳴き声を放って答える。忘れはしない、と言うかのようだ。
ししし と笑ってルフィが肩をすくめた。
出航準備は万端。
全員が船に乗り込み、ログも溜まった。ナミが指針を確認し終えている。
次の航路が決まっていて、すでに出航できる頃合いだった。陸の上を見るクルーたちは見送ろうとするクロッカスの視線を受け、笑顔で別れを告げようとしていた。
「無理にとは言わんが、いいのか？　知らない顔ぶれだろう」
「ん？　あぁ、こいつらか」
「指針を自由に選択できるのはこの場所だけだった。後悔するかもしれんぞ」
「そん時はもう一周すりゃいいさ。細かいことは気にすんな」
「フッ、そうか」
メリー号には出会ったばかりの怪しい二人組、Ｍｒ．９とミス・ウェンズデーが乗り込んでいる。
言ってみれば彼らを町まで送り届けるための航路と言ってもいい。選択の方法として決して褒められた物ではないとはいえ、ルフィは後悔せずにからから笑う。
信用できないと知った上で、見ず知らずの人間のために動く。思慮

が浅いとも取れる行動だがクロッカスはそう考えなかったらしい。むしろルフィを気に入った様子すらある。
「おまえが選んだ道だ。好きにするといい。そして海賊なら思う存分好きにやれ」
「おう！」
拳を掲げて言葉を受け取り、ルフィは笑顔で応えた。
それから仲間たちが動いてメリー号が出航し、同時にアーロン一味の船も動く。
クロッカスとラブーンにもう一度手を振る。
彼らの出向を見守ったクロッカスはどこか晴れ晴れとした笑顔で呟いていた。彼らに届けようとはしておらず、その声はこの場に居ない誰かに問いかける物だったらしい。
「あいつらは……我々の待ち望んだ海賊たちなのだろうか。なんとも不思議な空気を持つ男だ。おまえはどう思った？　ロジャーよ」
小さな呟きはルフィたちには届かずに、やがて宙へと消えていった。
鳴き声を空へ響かせるラブーンに見送られて、ずいぶん距離が離れた後。
ルフィが欄干へ駆け寄り、隣を走る船を見てアーロンに話しかけたのはその頃だった。
「アーロン、おまえあんまり悪さすんなよ。なんかあったらおれたちが行くからな」
「うるせぇ。おれに命令するな」
「心配すんな麦わらァ。アーロンさんは海賊を狙うから、略奪には興味ねぇって言ってた」
「余計なこと言うなハチ！　うるせぇぞ！」
「ししし。そっか」
七つから選べる指針の内、アーロンはルフィたちとは異なる指針を選択した。そのため出航してすぐメリー号の傍を離れていく。心配していない顔のルフィはそれを快く見送った。
いまだに仲良くなったとは言えないもののきっと大丈夫だろう。

別段根拠がある訳ではなくそう思い、甲板に居る面々へ向き合った。
新たに乗せたＭｒ．９とミス・ウェンズデーを加え、それぞれが思い思いに過ごしている。
グランドラインは最初が大変だと聞いていた。しかしまだその兆候は見えず。
一行は自然と落ち着かない様子の二人に注目していた様子である。
特に目立つのは頬が緩み切っているサンジであり。
彼は何やら奇妙な足取りでミス・ウェンズデーに近付き、浮かれた声で語り掛けていた。
「あぁ、なんてお美しい人なんだ、ミス・ウェンズデー。さながら君は春の野に咲く美しい花。僕は草原を駆ける風。この出会いを奇跡だとは思いませんか？」
「は、はぁ」
「けれど二人の出会いは必然だった。野を駆ける風は一輪の花を見て立ち止まってしまい、あまりの美しさに見惚れてしまう。そう、立ち止まったのは必然。僕は君に会うためにここへ――」
「アホか」
「アァッ!?」
浮かれたサンジの耳にゾロの呟きが飛び込む。
直後に二人が喧嘩を始めてしまって、刀と蹴りとが激突し、眉をひそめたシルクが声をかけて止めようとする。しかし熱くなった二人はしばらく止まることはなかった。
「二人ともケンカしちゃだめだって。メリーが傷ついちゃうよ」
「ほっときなさいよ。何も本気で殺したりしないでしょ」
「もう……」
「それより問題はこいつらよね。人の船に上がり込んだ以上は何が目的か教えて欲しいけど」
ゾロとサンジを止めようとしたシルクを止め、ナミは全く意に介さずＭｒ．９たちを見る。
どうやら追及の手を止めた訳ではないようだった。

危険を回避できる手立てがあるのならそれを使わない手はないだろう。彼女は自分自身で怖がりだと語る通り、わざわざ自分から危険へ飛び込んでいく人間ではない。
厳しい視線で二人を眺め、詰問を始めようとする。
それを止めたのがルフィだった。
「別にいいじゃねぇか。そんなの行けばわかるよ」
「あんたねぇ、こいつらを信用できるの？　針路も勝手に決めちゃうし、危ないわよ」
「そうか？　何が来てもおれは大丈夫だぞ」
「あんたはそうでしょうけどね。私は怖がりなの。危険なことなんてごめんだから」
「心配すんな、おれが守ってやるから」
「あーもう。はいはい、そうよね。あんたは説得したって聞かないのよね」
一切意見を変えようとしないルフィに頭を抱え、先にナミが音を上げた。
話していても埒が明かなそうだ。溜息をついて意見するのをやめ、無理やりにでも今回の決定を納得することにする。今なら普段キリが見せる緩い態度の理由がわかる気がした。
サンジがゾロと喧嘩し、ナミが追及を諦めたことで、チャンスと見たのか。Ｍｒ．９とミス・ウェンズデーが顔を向き合わせて小声で話し始めた。
身の危険を感じていたのである。
当初の予定通りに事が進んだとも言えるが、企みがバレていることは予想外。
確かに拙かったかもしれないが出会ってすぐバレてしまったこともあり、今後どんな展開になるかが読み切れなかった。詰まる所二人は動揺していたらしい。
「どう思うＭｒ．９？　このまま彼らと居て大丈夫かしら」
「ううむ、やむを得んだろう。超重要指令だと言われたからには無視する訳にはいかん。しかも失敗さえも許されない。最優先事項だ

からな」
「ええ、そうね。失敗すればおそらく私たちの命もない」
「とにかく何がなんでも成功させるぞ。町へ着けばなんとかなる。ここが我々の正念場だ」
「何こそこそしゃべってんのよ」
「ハッ!?」
顔を突き合わせて話していると、目敏くナミが警戒してきた。
半ば反射的に離れた後、二人は恐怖する顔で彼女に頭を下げていた。
「い、いえいえなんでもありません！　決して皆様を危険に晒すようなことでは！」
「どうかしら。やっぱり信用ならないわね」
「おいナミ、見ろよ。雪降ってきた」
安心できないが成果はなく、仕方なくナミは諦めた。
弾む調子のルフィの声に従って空を見れば、確かに雪が降り始めている。少し前まで晴れていたというのに急な変化だ。空には厚い雲がかかっていた。
思わずナミは表情を険しくして呟く。
「さっきまで晴れてたのに……なんで急に雪が？」
「あなたたち、グランドラインは初めて？」
空を見上げるナミへミス・ウェンズデーが声をかけた。
ナミは気を取り直して微笑を湛える彼女を見やり、警戒しながら返答する。
「ええ、そうだけど。それが何？」
「それならよく覚えておいた方がいいわ。グランドラインにはあなたの常識を当て嵌めない方がいい。何年も時間をかけて慣れた人間ですら心を許すことができないのがこの海。固定概念に囚われたままだと危ないわよ。できるだけ自分を信用しないことね」
「フン、有難い言葉を受け取っておくわ。と言ってもあんたに心配される必要はないけどね」
「ちなみにこの船、今は真っ直ぐウィスキーピークを目指してるの

かしら？」
余裕たっぷりの態度でミス・ウェンズデーが呟けば、ナミは鼻息も荒くログポースを確認した。
「当たり前でしょ。さっきだって確認したから――え？」
指針を確認して驚愕する。わずかに揺れる針は一点を指しているようだが、現在、自分たちが進んでいる方向とは異なる場所を向いていた。
いつの間にか道を間違えていたらしい。
自信があっただけにまさかの展開となり、狼狽したナミが見るからに表情を変える。
「嘘でしょ、どうして……!?」
「言ったでしょう？　この海は全てが予測不能。海流も気候も一瞬で姿を変える。特にこの最初の海域はそれが最も顕著なの」
「ナミさん、どうかした？」
「舵を切って！　いつの間にか左に逸れてる、これじゃ島には着かないわ！」
船上は一気に慌ただしい様相となる。
的確に指示を出すナミによって見事な操船が行われて、メリー号はすぐに向かうべき場所を矯正した。しかしこれでも安心できない。周囲の環境は常に変化し続けている。
それを発見したのは海を眺めていたウソップだ。
雪が降り始めていたはずだが風が変わり、肌に感じるそれは明らかに違う。
「おいナミ、風が変わったぞ！　雪が無くなった！」
「嘘……さっき降り始めたところでしょ！」
「お、春一番か」
「のんきか!?　そんなこと言ってる場合じゃないわよ！」
腕組みをして能天気に呟くゾロに怒鳴りつつ、ナミは状況の確認を急ぐ。
しかしその場は異常気象が巻き起こる海。
慌てている内に次々状況が変わってしまい、如何に判断が早い彼女

でも対応しきれなかった。それもこれも仲間たちから聞かされる報告が多過ぎたせいでもある。
「ナミ、前方から強風が来るよ！」
「急いで帆を畳んで！　風で破られちゃう！」
「んナミさぁ～ん！　急な集中豪雨です！」
「見ればわかる！」
「大変だ！　また濡れてキリが倒れちまった！」
「部屋に放り込んどきなさい！」
「おいナミ！　うまそうな魚が居たぞ！　捕まえよう！」
「あんたは黙ってろォ!?」
船上は一気に騒がしくなり、船員が慌ただしく走り回る。その中にはいつの間にか客人とも言えるＭｒ．９とミス・ウェンズデーも含まれていて、すっかりこき使われていた様子だった。
時間は刻一刻と進み、夜が近い。
徐々にではあるが太陽も沈み始めていた。
暗くなっていくことも合わせて想像以上に危険な航海となってしまったらしく、彼らの焦りは次第に大きくなっていき、グランドラインに入って最初の航海は大騒ぎのまま続けられたようだ。

＊

時刻は夜になっていた。
数時間の激闘を終え、最初の航海を乗り切った彼らはついに町の明かりを発見する。
サボテン島にある町、ウィスキーピーク。
島には巨大なサボテンがあり、異様な存在感を発揮している。町は港に面した場所にあって、最も目立つサボテン岩からは幾分離れていた。遠目に見ても何やら活気を感じられる風景。
船首の上で胡坐を掻くルフィは感嘆の声を漏らした。
「あれが歓迎の町かぁ。なんか楽しそうなとこだなぁ～」
わくわくした様子を抑え切れず、すでに体は疼いている。早く上陸

したいと思っていた。
上機嫌なルフィは甲板へ振り返って仲間たちを見る。
そこには慌ただしい航海で疲弊したクルーが倒れ、ぐったりしているのだ。
「おまえら着いたぞ、歓迎の町！　今から宴だぁ！」
声をかけるが応答はなし。そんな元気もないらしい。
倒れたままで話し始め、一人元気なままのルフィには疑念が尽きないようだった。
「なんであいつは元気なのよ……しっかり働いてたんでしょ」
「あいつを一緒にしちゃいけねぇぞ。バケモノなんだ、ありゃ」
「でも、みんな無事に乗り切れたね。今日はゆっくり休もう。夜になっちゃった」
呆れたナミが恨めしい声で言い、ウソップが疲れ切った様子で言った後、締めくくるようにシルクが呟いた。これ以上の無理はできない。町での一泊は決まっていたようなものだ。
傍らでは同じく疲弊したＭｒ．９とミス・ウェンズデーが倒れている。
輪の中に加わってはいるがゾロとサンジは比較的余裕がある顔のまま。やはり体力があるのか、ようやく見えた町並みを眺めて口を噤んでいた。
少し前とは違って船上には静かな雰囲気がある。
船室への扉が開いて、中からキリが現れた。
彼は雨が降った折に無力化されてしまい、回復する今の今まで船内で倒れていた。荒波のせいで船が大きく揺れたことにより、ごろごろ転がって壁に激突しながらも無事だったのだろう。
完璧に回復という訳ではなさそうだがしっかりした足取りで歩いてくる。
倒れた面々を見下ろす位置で笑顔を見せ、頑張った仲間たちへ労いの言葉を放つ。
「みんなご苦労様。悪かったね、手伝えなくて」
「まったくよ。あんた、その弱点早い内になんとかしなさいよ」

「できればそうしたいけど、中々難しくてね」
「キリ、見ろよ！　歓迎の町だぞ！　宴だ！」
「ルフィはいつも通りか。すっかりその気みたいだし」
ナミのじとりとした視線を受け流し、軽やかに移動を始めて仲間たちの傍を離れる。
船首まで赴いたキリは欄干に手を置いて前方を眺め、ルフィと同じ風景を眺めた。
町の明かりは暗闇を切り裂いて輝くよう。
夜になっていることが余計に嬉しさを倍増させるのか、大変な航海を終えたばかりの身には嬉しさも表現しきれぬほど大きい。
ルフィとキリは疲労も感じさせず平気な顔で、笑顔を持って楽しそうな姿だ。
「すげぇなあれ。でっけぇサボテンがあるんだぞ」
「あれが一番の特徴さ。島を見つけて最初に目に入る物だしね」
「キリはこの島に来たことあんのか？」
「んー、来たことはないけど、知ってるって感じかな。ボクらの時は別の島を選んだから」
「そうなのか」
今日のキリはどことなく様子がおかしい。ルフィもすでに気付いていた。
ただ、なぜか本人にそれを指摘しようとはせずに、あくまでいつも通りに話す。
そんなルフィに気付いていて、キリは肩の力を抜いた。
自然な様子で話し出せる。おそらく相手がルフィだからだろう。
どこか静かな、以前とは違う姿で切り出される。
「ねぇルフィ。多分この島、面倒が起こるよ」
「ん？　なんで？」
「色々あるからさ。でも大丈夫、対処はゾロにしてもらうよ。刀を試したいんだって」
「ふぅん」
「歓迎はしてもらえるだろうから、楽しく過ごしてくれればそれで

いい。他のみんなには言わないつもり。普通にしてくれたら雑務はこっちでやるよ」
「わかった。んじゃ任せる」
にっと口の端を上げて笑いかけてくるルフィを見て、キリはわずかに目を伏せた。
微笑みはそのまま。しかしどこか寂しげな雰囲気を纏う。
「ルフィ」
「ん？」
目を開いて夜の海を見下ろし、やがてぽつりと尋ねられる。
「ボクは……ボク個人としては、ルフィの仲間になったつもりだよ」
「何言ってんだ。当たり前だろ」
「うん。そうだね」
顔を上げ、視線が合う。
不思議とルフィは笑みを消した。彼が真剣に話していると理解したのである。
微笑を湛えるキリはその実、真剣な目をしていて、思い返しても初めて見る気がした。
「でもボクを船に置いておけば、これから危険な目に遭うかもしれない。普通なら逃げ出すような相手に狙われる可能性もある。それでも、ここに居ていいかな」
「いいぞ。おまえはおれが選んだ仲間だ」
考える素振りさえ見せない。
問いかけた直後に答えが返ってきて、ルフィはいつもの笑顔で笑いかけた。
それを見たキリは苦笑し、小さく頷く。
徐々に近くなる町を眺めて一呼吸。
もう後ろ向きな言葉を吐くことはなかった。けれど気遣いはあるらしく言葉は止めない。それでも詳細を語ろうとしない姿には違和感も付き纏ったが、ルフィは追及しようとしなかった。
きっとまだ迷いがあるのだろう。
理解を示し、何かを隠しているキリに直接尋ねようとはしない。た

だ話を聞くだけだ。
「それならボクもルフィのために動く。この一味を守るよ」
「おう」
「状況が落ち着いたら、ちゃんと全部話すよ。その後きっと迷惑をかけることになる。それでもボクを連れてってくれるのなら……その時こそ、仲間にしてもらってもいいかな」
今度は笑みさえ消してしまって、息を呑むような表情で問われた。
彼の言葉が何を意味するのかはわからない。まだ詳細を伝えようとはしていない。
ルフィは数秒口を閉じ、やがて彼の目を真っ直ぐ見つめ返して答えを出した。
「おまえが何を考えてて、誰が何を言ったって、キリはおれの仲間だ。あの時約束しただろ。仲間にするとかしねぇとか、もうそんな話じゃねぇんだ」
「あはは……それもそうだね」
「でももし、おまえが誰かの仲間なんだったら」
視線を外したルフィは町に目をやった。
すでにメリー号は到着目前。帆を畳んで海流に身を任せる頃になっている。
「そいつをぶっ飛ばしておれがもらっていく。絶対諦めたりしねぇ」
「……うん。わかった」
最後にふっと笑い、キリは静かにその場を離れた。
甲板へ戻って立ち上がった仲間の傍を通り、ゾロへ歩み寄る。ウィスキーピークから聞こえてくる陽気に笑みを見せる面々へ聞こえぬよう、何かを耳打ちしていたらしい。
それから幾ばくもせずメリー号は足を止めた。
港へ到着して停泊すると、船体を傷つけることなく航海を終える。
まず真っ先にルフィが跳び出した。船首の上から港へ飛び降り、活気を見せる町の全貌を眺め、そうしているだけでも笑顔が抑えられなくなった。

歓迎の町と呼ばれるだけあって人々は笑顔でメリー号に歓声を送る。
何が楽しい訳でもない。しかし客が来ただけでこの活気。
港には出迎えるための人の波ができていて、先頭には特徴的な男性が立っていた。
黒いスーツに蝶ネクタイ。やさしげな笑みと紳士的な態度だ。
人格者だろうと思わせる雰囲気を湛える男性は、かなり特徴的な巻き髪を持っており、ルフィの目はまず最初にそこへ釘付けとなる。名乗るより先、質問するより先に、吐き出す言葉は出会った瞬間から気になって仕方ないその髪型に対する感想だった。
「ようこそ、旅人の皆さん。私の名はイガラッポイ。ウィスキーピークの町長です」
「おっさん、髪巻きすぎ」
「この町は宴が好きでしてね。理由を見つけては大騒ぎするという、私からすれば少し困った部分もあるんですが、客人は立場を選ばず歓迎する習慣がありまして。よろしければ皆さんも、冒険の話を肴に宴の席などいかがでしょうか？」
長身の彼ににこりと微笑みかけられ、ルフィは間を置かず拳を突き上げる。
迷う気など一切ないまま答えは出されたようだ。
「乗ったぁ～！」
空まで届きそうな声量で簡潔に告げられ、仲間たちも同意している様子。
異論はない。ちょうど疲れ切っていたところだった。
一番後ろに居たキリとゾロを除いて、一行は町民に歓迎されて柔和な笑みを浮かべる。
ルフィに続いてすぐさまメリー号を降りていたＭｒ．９とミス・ウェンズデーはそそくさと建物の陰に駆け込んでいた。その様子は明らかに怪しく、何やら余裕がない姿にも見える。
視界から逃れてようやく安堵し、深呼吸を数度。
疲れた体などまるで気にせず、今しがた離れたばかりの麦わらの一

味を確認して呟く。
「フゥ～……何はともあれ、第一段階は完了だな」
「ええ。彼らをこの町へ誘い込むことに成功したわ」
「あとはタイミングを見計らって」
「上手く捕まえればいい」
「バレずに眠らせてくれよ、Ｍｒ．８」
二人はその場を離れて移動を始めた。次の行動に備えなければならない。
ひとまず報告しなければと、自分たちのアジトへ戻っていくのだった。

月下の宴

静寂が強くなる夜の時間。しかしその町はいまだに活気を失っていなかった。
外からやってきた海賊たちを迎えて盛大な宴が行われている。
町で一番大きな酒場には町に居る人間のほとんどが集まり、互いに食料や酒を持ち寄って、終わることのない馬鹿騒ぎをさらに盛り立てていたらしい。
突如現れた麦わらの一味は、今やヒーローのような扱いだった。
彼らはそれぞれが思い思いに過ごしている。
それどころか騒ぎの中心になっている者が多かったようだ。
ウソップはジョッキを握ってやけに上機嫌な顔つきとなっていた。町民を聞き手にして得意のホラ話を繰り広げ、自らの英雄譚を語り、表情が緩むのを抑えきれない。
聞く者たちの反応が良いため、調子に乗ってしまうのも無理はないだろう。
朗々と語られる彼の話は躊躇することがなかった。
「そこでおれは言ってやったんだ。おれの仲間に手を出すな、ってな」
「おぉ〜。それで？」
「まぁ勝負は圧倒的だったが、そこは卑劣な魚人ども。降参するふりをして急に襲い掛かってきやがったのさ。しかし英雄キャプテン・ウソップは全てお見通し。向かってくる敵をひらりと避けて得意の狙撃でズドン！　勝負は一瞬でついた」
「すげぇ！　流石はキャプテン・ウソップ！」
「ふふん。まぁそう大したことじゃねぇがな。そうそう、ちょうどその後におれが倒した魚人どもを傘下に引き入れることになるわけだが、この時の話がまた――」
今宵のウソップは絶好調らしい。
意識せずとも自然に動く口からは次々言葉が飛び出していき、わくわくしている面持ちの人々へ手に汗握る話を聞かせて、すっかり注目

の的となっていた。
しかし注目されていたのは彼だけではない。周囲の騒がしさは仲間たちによる物も多かった。
ウソップとは別の席、テーブルへ勢いよくジョッキを置いたゾロは町に住む男と飲み比べをしている。すでに対戦相手は十人目。男が先に限界を迎えて倒れてしまったようだ。
周囲で観戦する面々はどよめき、ゾロの勝利を盛り上げる。
十人を倒して顔色一つ変えない様子には大層驚き、面白くなってきたと笑顔が咲いた。
「うおおっ！　すげぇぞあの兄ちゃん、十人抜きだ！」
「よぉし次だぁ！　今度こそ勝てるぞ！」
「どんどん行けぇ～！」
ゾロは黙して多くを語らず、酒を味わいながらもただ淡々と飲み進める。
また次の対戦相手が隣に座った。仏頂面でジョッキをぶつけ、さらに酒を通して喉を鳴らす。
そこからそう離れずに、同じく飲み比べをしているのがナミだった。
初めての航海で得たストレスを発散するかのように、彼女の方がペースは速い。対戦相手は女も男もやってくるのに一歩も退いていなかった。
景気よく飲み干し、ジョッキを掲げる。
こちらはゾロよりよっぽど楽しんでいる顔だ。
「おりゃ～！」
「こっちのお嬢ちゃんは十二人抜きだぁ！」
「しかもすげぇハイペースだぞ！」
「さぁ、次は誰？　どんどんかかって来なさい！」
心底楽しんでいるらしい彼女は尚も手を休めず、次々対戦相手を望んで飲み比べを楽しんだ。
酒が好きなだけでなく負ける気のない勝負である。
一つずつ勝利を重ねた結果、機嫌は良くなる一方だった。

酒場の中央ではルフィが凄まじい大食いを見せつけていた。
もはや数えるのも億劫なほどの皿を空にし、尚も手は止まらない。笑顔で両手を動かし続ける。
「おかわり～！」
「うおおっ、すげぇ！　もう二十人前は食ってるぞ！」
「しかもまだ余裕だ！」
「一体どんだけ食えるんだぁ!?」
こうなればもうコックとの勝負だろう。ルフィは一切手を抜く気が無い。倒れるまで食ってやろうという気概さえ感じるが、果たしてその限界を本人が自覚しているのかすらわからなかった。
とにかく彼は料理が運ばれて来れば即座に平らげ、次を待つ。
勢いは衰えることなく笑顔は楽しげなままだ。
さらに町民を驚かせるのが、いくつかソファを寄せ集めた空間で、数多の女性を侍らせるサンジであった。活気ある健全な騒ぎの中でそこだけが色っぽい様相を持っている。
酒や料理など興味もない。
緩み切った笑みを浮かべるサンジは傍に置いた女性たちに見惚れて、ひどい顔つきである。
笑い声すら普段とは変貌していてだらしない物だ。
「こっちの兄ちゃんは二十人の女を一斉に口説こうとしてるぞ！なんて勇者だ！」
「一体なんなんだこの一味は！」
町民たちの声が彼らの行動を後押ししているのか。
五人は何を気にするでもなく、言わば海賊らしさを発揮して、自由に宴を楽しんでいる様子。
少し離れてカウンターの席。
酒が入ったグラスを持つシルクはそんな五人に呆れた目を向け、少し困った顔をする。その隣ではキリが五人に背を向けて座り、自身もまたグラスで酒を口にしていた。
「みんな羽目外しちゃって。怪しいって思わないのかな」
「怪しいと思いながら付き合ってるんだよ。まぁ一部は心から楽し

んでそうだけどね」
「そうかな。ねぇ、キリはどう思うの？　出会ったばかりの海賊といきなり宴なんて。何かあるんじゃないかなって思うんだけど」
「う～ん、どうだろうねぇ」
心配そうにシルクが尋ねるのだが、キリは緩い笑顔でさらりと受け流すのみ。
普段ならばいの一番に警戒していそうな物なのに今日は違ったらしい。
どこか様子がおかしいのではないか。妙に肩の力が抜けているキリの横顔を見てシルクが思う。緊張感がない姿はいつも見ているはずなのに何かが違うと見えてしまったのだ。
しかし当人はどこ吹く風。彼女の疑念に答えない。
グラスを揺らして氷を鳴らし、頬杖をついて目を伏せる余裕さえあった。
「もしそうだとしても心配する必要はないよ。ゾロが警戒してる。任せておけばいい」
「そう？　でも一人じゃ大変なんじゃないかな」
「本人はやる気だよ。新しい相棒と出会ったばかりだからね」
「あ、そっか。刀のことだね」
シルクがちらりとゾロを見る。
一応腰から刀を外しているものの、遠くには置かず、誰にも盗まれないようにと警戒している。やはり何かがおかしいと感じている様子だ。剣士の本能だけではない所作を感じる。
視線を戻してキリを見る。
彼は気付いているのではないか。その上で敢えて言葉を濁している。
なぜ。隠さなければいけない理由があるのかもしれない。
シルクは眉間に皺を寄せてしまい、もやもやとした物を胸に抱えてしまう。
「ゾロに任せておけば大丈夫なの？」
「多分ね」

「それが、キリからの指示？」
「そうだよ」
微笑みもそのままに軽く返事をされる。見せつけられるような余裕は崩せなかった。或いは崩さないようにと努めているのか。
キリは彼女を見ずにぽつりと告げる。
「この町にはゾロに勝てる人間なんて居ないよ」
「そりゃ、ゾロは強いけどさ」
「町の人間が束になっても勝てないね。断言する。まぁ任せてみなよ」
「うん……」
「シルクももっと羽目外してみたら？　航海で疲れてるんだ。それくらいしたって罰は当たらないだろうし、次のために英気を養わないと。みんながやってることは理に適ってるとも言えるよ」
顔の向きを変えたキリに見つめられ、余計にシルクの顔が曇る。
彼とはそれなりの付き合いになる。けれど何と言っていいのかわからない、気色の悪い感覚が胸の中に生まれて、おそらく隠し事のせいだろうとは思う。
きっと聞いても答えない。それがわかって寂しかった。
シルクは答えず、ふと喧騒の中心に居る仲間たちを見る。
十三人目を倒したナミが意外にしっかりした足取りで近付いてきた。
苦笑したシルクが応じ、朗らかな笑みの彼女と対面する。
「なぁによシルク、退屈してんの？　しょうがないわね、今日はもう飲みなさい。ぱーっとやるわよ！　疲れた時はこれが一番！」
「ナミ、ストレス解消は良いけど、飲みすぎちゃだめだよ。体に障らないようにね」
「何言ってんの、こっちは自由が資本の海賊よ？　飲みたい時に飲むのよ！　変な天候の海と変な船長の相手してるんだから、これくらいしたって怒られないわ！」
「えっと、ひょっとしてスイッチ入ってる？」
「ほぉら、あんたも飲みなさい！　今日は朝まで行くぞ～！」

「わっ、ちょ、ちょっと――！」
ずいぶん飲んだのだろう。足取りこそしっかりしているが、酒に酔って止め切れないほど上機嫌なナミに連れられ、シルクがカウンターを離れていく。
半ば無理やりとはいえ相手が仲間ならば問題はない。キリは彼女を見送った。
わずかに振り返って仲間たちを眺める。
ウソップは身振り手振りでホラ話を披露し、ゾロとナミは飲み比べ。シルクは仕方なくナミの傍で付き合ってやり、ルフィは尚も大食いに挑戦。サンジはナンパに余念がない。
騒がしい光景を俯瞰的に見て、思わず苦笑する。
キリの笑みはひどくやさしい物に変わっていたようだった。
いつの間にか個性的な仲間が増えたものだ。
最初はルフィと自分だけだったのに、一つずつ島を訪れる内に肩を並べる人間が増えてきた。
笑顔で楽しんでいる姿を見ていると肩の力が抜けてくる。
守らなければならない。今はもう一人ではないのだ。
そうして一人で佇んでいた時、見知らぬ女性が歩み寄ってきた。
キリは何気なく笑いかけ、彼を目指してやってきたらしい女はそっと隣へ腰掛ける。
「お邪魔してもいいかしら」
「どうぞ。ちょうど寂しくなったとこだから」
「ふふ、ありがとう。正直な人なのね」
女は魅惑的なドレスを着ていた。サンジが集めた美女たちにも負けぬほど整った容姿を持ち、些細な仕草一つさえ美しく、まるでキリに甘えるかのように距離が近くなる。
男であれば無視できない状況だろう。
気付けば肩が触れそうな距離。キリは彼女の目を見て笑みを深める。
二人して酒場の風景に背を向けて、寄り添って話し始めた。
「あなたは騒がないの？　みんな楽しそうにしてるのに」

「十分楽しんでるよ。案外こういうのでいいんだ」
「そう？　さっきは寂しいって」
「まぁね。でも今は寂しくない。君が来てくれたから」
「あら」
嬉しそうに笑った女が静かにキリの手を握る。気付かれるか否かという、自然な動作だった。
きゅっと握ってくる力に気付き、二人の視線が合わさる。
「意外に積極的なのね。真っ赤になって照れるかと思ってた」
「そっちの方がいいならそうするけど」
「ふふ、そのままでいいわ。男らしい人は好きよ」
自然と距離は近くなり、声は小さくなる。
周囲の者たちは気付いているのかいないのか、邪魔されることはない。
女はしなだれかかる姿でキリへ寄り添った。
「ねぇ、あなた海賊なんでしょう？　宝探しとかしたことあるの？」
「あるよ。その時は財宝を見つけたりもした」
「本当？　船乗りは嘘つきだって話も聞いたことあるわよ」
「本当だよ。残念ながら証拠はないけど」
「どうして？」
「海に沈んじゃったんだ。その頃は小舟だったから、乗せすぎてだめになって」
「うふふ、そう。なんだか面白そうな話ね」
振り払われなかったからだろう、女はさらに大胆になってキリの肩に頭を寄せた。やはり彼は抵抗せずにそれを受け入れて微笑んでいる。
「もっと詳しく聞きたいわ、あなたの話」
「ボクでいいの？」
「あなたがいいのよ。一人で居る姿を見て、ほっとけなくなっちゃった」
その時になってキリが彼女の手を握り返す。
女は気を良くした顔だった。

「寂しさを埋めてあげたいの。今夜だけでもいいから」
「有難い提案だね。こんな美女に誘われたら、断る理由はないよ」
「うふふ。ありがとう。ねぇ、来て」
女が彼の手を引き、席を立った。
その後二人は人知れず酒場を抜け出して外へ出る。
夜は深まり、晴れた空には月が浮かんでいた。
酒場を離れれば辺りはひどく静かで、どことなく寂しさを湛えるほど。そもそも住んでいる人間が少ないのかもしれない。人の姿が見えないどころか人気すら感じなかった。
女に手を引かれて、キリはされるがままでついていく。
少しばかり風が冷たく、薄着も相まってわずかに体が震える。キリは細身で、数年間鍛えた成果もあって筋肉質な体つきをしており、脂肪が少ないため寒さには強くない。
繋いだ手に力を入れれば女が嬉しそうに笑った。
「寒い？　そろそろ冬が近いの。もう少し我慢してね」
「我慢すればどうなるのかな」
「もちろん、あたためてあげるの。もうわかってるくせに」
「一応聞いておいた方がいいかと思ってさ。勝手に勘違いしてるだけじゃ恥ずかしいでしょ」
笑顔を向け合って手を繋ぎ、やがて二人は一軒の家の中へ入る。
すぐに見つけた階段を上って二階の一室へ足を踏み入れ、前方にはベッドを見つけた。二人が寝転んでも余裕がありそうなサイズである。それだけで想像力が掻き立てられた。
ようやく手を離してキリはベッドへ座るよう勧められる。
彼女は何かしらの準備があるようだ。
「ワインはいかが？　ちょうど良い物が手に入ったの」
「お酒はなんでも好きだよ。飲み過ぎるとまずいけど」
「あら、好きなのに弱いの？」
「酔いはしないけど力が抜けちゃって。気をつけるようにしてるんだ」
「そう。なんだか不思議な話だけど、少しくらいなら大丈夫なんで

しょ」
先にキリがベッドの縁へ腰掛け、女の背を眺める。
彼女は部屋の隅へ向かい、ワインセラーから一本のワインを取り出してそれを見せた。
再び背を向け、グラスの準備をする。
その際、用意したのは一人分だけで二つは持たず。
ワインの瓶とグラス一つを持ち上げる直前、胸の谷間に手を突っ込んだ彼女はそこから小さなカプセルを取り出して、自ら口に含むと舌の裏へと隠した。
振り返った時には妖艶な笑みが見せられていた。
女はキリの下へ移動し、目の前に立ってグラスへワインを注ぎ込む。
「そのままで居て。飲ませてあげる」
「ありがとう」
彼は心底嬉しそうにしている。分かり易い笑みだ。
それに気を良くした女はグラスを傾けて自分の口にワインを含み、少し転がした後、飲み込まず口に含んだままキリの肩に両手を置く。
太ももの上に座って正面から見つめ合い、微笑みを持ったまま静かに顔を近付ける。
躊躇いを持たずに二人の唇が合わさり、わずかに口を開いて。
二人はそのままベッドへと倒れ込んでいった。

＊

数時間続いた宴は深夜になる頃、ようやく落ち着いていき、町は静寂に包まれた。
散々騒いだ後で麦わらの一味が眠りに就いたのである。
町民たちが落ち着けたのはそれからであり、あまりにもパワーのある宴ですっかり疲弊した表情が多い。人々は一味を残して酒場を後にし、一度外へ集まった。
ウィスキーピークの町民、総勢百名といったところか。

何やら先程とは表情が違って冷徹な雰囲気すらあり、怪しげな雰囲気が漂う。しかし彼ら自身はそれをおかしいと思っていない。皆が意志を同じくしていたようだ。
町長、イガラッポイが集まってくる皆を見回し、辺りの静けさを確認する。
麦わらの一味が気付く様子はなかった。
「やっと落ち着いたな。ここまでは作戦通りだ」
「うっぷ……よく飲み、よく食べる。めんどくさい作戦だよ」
イガラッポイの呟きに反応したのは大柄な肉体を持つシスターだった。男顔負けの巨体で筋肉が大きく盛り上がっており、非常に力強い印象を受けるが女性のようだ。
彼女は頭巾を取ってその場へ捨てると、うんざりした顔でイガラッポイを見る。
「あんなガキどもにここまでする必要があったかい？　港に着いた時点でたたんじまえばよかったんだ。あの程度の連中ならそう時間もかけずに殲滅できただろう」
「そう言うな、ミス・マンデー。これも最重要任務のため。それに奴らを甘く見ない方がいい」
イガラッポイが声をかけた大柄な女性、ミス・マンデーはふんと鼻を鳴らす。
納得した様子ではない。それを見てイガラッポイは説明を重ねた。
「どうだか」
「手配書は見たか？　あの麦わら帽子は３０００万。金髪は２０００万ベリーの賞金首だ」
「３０００万？　あいつが？」
「例の新聞に載った海賊だ。何をしでかすかはわからん。何より奴は無傷で捕らえろとの命令だからな。大事を取って損はない。ターゲットは？」
「首尾よく誘き出した。今頃はお楽しみなんじゃないかい？」
「とにかくこれで我々の任務も無事終わる。他は好きにしていいらしい。３０００万ベリーは海軍に引き渡して賞金をもらうとしよう」

嘆息したミス・マンデーは短い髪の頭を掻き、真剣な目で問いかける。
それに対してイガラッポイ、コードネームＭｒ．８は冷徹な表情と顔で答えた。
「他の連中はどうする」
「奴らに用はない。殺せ」
「了解……」
ミス・マンデーが小さく頷き、ちらりと見た方向にはいつの間にかＭｒ．９やミス・ウェンズデーの姿がある。彼らもまた頷いて同意する様子だった。
事態は終焉を迎えるかと思われた。
辺りには剣呑な空気が漂い、すでに全てが終わったという思考すらある。
そこへかけられた声は、どうやら家屋の屋根から降ってきたようだ。
「悪いがもう少し寝かしてやってくれねぇか。昼間の航海で疲れてんだ」
「何ッ――!?」
Ｍｒ．８が真っ先に反応して声の出所を見上げる。
半月を背負い、刀を掲げて胡坐を掻く男、ロロノア・ゾロが居た。
彼は今しがた酒を飲み過ぎて眠っていたはずだ。しかしそこに居る姿からは酔いなど微塵も感じない。平静を装っている訳でもなく、至って平然とその場の面々を見回している。
Ｍｒ．８に続いて動揺は一気に広がっていく。
当然視線はゾロ一人に注がれて、物々しい雰囲気が辺りを包み込んだ。
歓迎の町に似つかわしくない雰囲気である。これを感じ取ったゾロは凶悪そうに微笑み、うずうずしている様子で彼らの視線を全て受け止めた。
驚いている素振りはない。むしろ喜々とした佇まいを感じる。
数多の視線を受けて彼は上機嫌。

刀を抜いている姿から見ても、嫌な予感ばかりが静かな町へ広がっていた。
「貴様なぜそこにっ。酒場で寝ていたはずでは……!?」
「剣士たるもの、如何なる時も酒に呑まれる馬鹿はしねぇもんさ」
「くっ、おのれ……!」
想定外の事態にＭｒ．８が舌打ちし、彼に対して忌々しそうな視線を向ける。
同じく周囲では、ただの町民だと思っていた者たちが年齢、男女を問わず武器を手にしていた。
「つまりこういうことだろ。ここは賞金稼ぎの巣。意気揚々とグランドラインへやってきた海賊たちを出鼻からカモろうってわけだ」
「黙っていれば楽に逝けたものを……よもや自力で気付くとは」
「賞金稼ぎざっと百人ってとこか。相手になるぜ、〝バロックワークス〟」
穏やかな声で何気ない一言。だがその声で全員が驚愕する。
狼狽した人々は口々に声を漏らし、大きなどよめきが生まれていた。
それを見下ろすゾロは言葉を止めずに続ける。
「なぜ、わが社の名を……」
「大した話じゃねぇ。昔おれも似たようなことをやってた時、おまえらんとこの下っ端にスカウトされたことがある。当然蹴ったけどな。その時ある程度知ることはできたさ」
視線を厳しくする一同を気にせず、ゾロは朗々と語った。
「社員たちは社内で互いの素性を一切知らず、コードネームで呼び合う。ミスターなんちゃらってのがそうだろう。もちろんボスの正体も謎。どこに居るのかさえ知らされていない。ただ忠実に指令を遂行する犯罪集団、バロックワークス。へっ、秘密だったか？」
「よくもまぁそこまで……その下っ端とやら、余計なことをしたものだ」
「良い機会だ。ちょうどこいつらを試してぇと思ってたんでな。全員おれが相手してやる」

笑みを深めたゾロは立ち上がると刀を抜いて両手に持った。
右手には雪走、左手には三代鬼徹。彼らのデビュー戦を飾る相手に犯罪組織の構成員が百名。獲物としては十分だろう。質はともかく数はそれなりに満足できそうだ。
秘密犯罪会社、バロックワークス。
並び立つ構成員は彼が放つ危険な雰囲気に反応し、慣れた挙動で武器を構える。
もはや隠すつもりもなく、全員の敵意がゾロの一身へぶつけられていた。意識が切り替わって戦闘を覚悟したらしい。その方が好都合だと彼も肩を回して準備する。
自らも覚悟を決めて、Ｍｒ．８は彼を見上げて口を開いた。
不遜な態度は結構。しかし百人を相手にするのはたった一人。負けるつもりなど微塵もない。
「いや、お見事だ。身内の不手際があったとはいえ、我々の秘密をそこまで知った外部の人間はおそらく君くらいの物だろう。是非とも君を称賛したい、海賊狩りのロロノア・ゾロくん」
「おれたちの情報も入手済みってわけだ」
「しかし我々は秘密結社。知られた以上は消さねばなるまい」
拍手の後、冷たい眼をして彼へ告げる。
「また一つ、サボテン岩に墓標が増える……」
Ｍｒ．８がそう言ったことで、ゾロはふと島の特徴とも言えるサボテン岩へ目をやった。
常人より視力が良い彼でも肉眼では捉えられないが、サボテン岩とは大きな岩に無数の墓標が立てられた物。そこにあるのはサボテンの針ではなく、この町で始末された者たちの墓だ。
ゾロを始末し、今まで通りにそこへ埋葬する。
そう決意してＭｒ．８が叫んだ。
「やれェ！」
一斉にバロックワークス社員たちが動き出す。
それを見てからようやくゾロも動き出し、ひどく楽しそうに屋根を蹴った。

月下の再会

血ぶりをした後、納刀し、ゾロはそれなりに満足した様子で頷いた。
「うし、終わり」
辺り一面、彼に斬られたバロックワークス社員が倒れている。総勢およそ百人。一太刀も受けず圧倒的な光景で倒し続け、勝負はそう時間もかからず終わってしまった。
屋根の上から辺りを見下ろす。
多勢に無勢という状況で最初は心も躍ったが、結果は無傷の勝利。刀を試すことができただけマシという程度。当初の期待ほどは楽しめなかった。
反面、手にした刀は素晴らしいと認識する。
雪走は通常の刀よりよほど軽く、以前持っていたそれより扱い易い。
三代鬼徹は驚くほどの切れ味を誇る。今まで出会ったことがないほど凶暴で、考えようによっては御し切るまでに慣れが必要かもしれない。
それがわかっただけでも僥倖。立ち向かっただけの甲斐はあった。
ようやく落ち着いて酒が飲めそうだ。
ゾロがそう思った時、背後に倒れたＭｒ．８が呻くように声を絞り出した。
「うぅ……まさか、たった一人の剣士に我々が負けるとは」
「まだ意識あったのか」
「だが、ここまでの強さであれば、或いは……！」
胴体を切り裂かれて倒れ、這う這うの体でＭｒ．８は意識を保っていた。手放してしまうギリギリで繋ぎ止めたらしく、呼吸は乱れて、いつ気絶してもおかしくない危うい状態だ。
何やら真剣にゾロを見ていた。
不思議なのはその視線に敵意を感じないことだ。どこか懇願する素振りすらある。
振り返ったゾロの表情は歪み、疑念を抱く。

今の今まで殺そうとしていたはずなのになぜそんな顔になる。
「待ちなさいＭｒ．ブシドー！　まだ勝負は終わっていないわ！」
倒れたＭｒ．８を見下ろしていると、横から声をかけられてそちらを向いた。
いつの間にか二人が居る屋根にミス・ウェンズデーが立っている。傍には黄色い羽を持つ大きなカルガモが居て、呑気な顔で首から提げたドリンクを飲み、やけに緊張感がない。
Ｍｒ．９とは別のパートナーらしい。
人間と同サイズのカルガモの名前はカルーというようだ。
彼女たちは攻撃を仕掛けようとして駆け出し、狙いを外して屋根から落ちたはずだった。
間抜けなコンビだと見送ったばかりでもう戻ってきたらしい。
再び現れた彼女と一匹を見るゾロはどことなく呆れた目つきである。
「さっき落ちた奴らか」
「私はまだ負けていないわ。さぁ、覚悟なさい！」
「もう負けたようなもんだろ。さっきのもう忘れやがったのか」
「あれは、この子が少し焦っただけで……！　次は同じ結果にはならないわよ！」
「わかったわかった。いいからさっさとかかって来い」
「くぅ、舐められているわね……あなたのせいよカルー！」
「クエーッ！」
当人たちは真面目なのだろうが、カルーのせいなのか、どこか緊張感に欠ける。
彼女たちの相手をしなければならないらしく、ゾロはやる気のない顔で向き合おうとした。
それを止めたのがＭｒ．８である。
倒れたままで表情を変え、態度は急変して敵意が消えている様子。どこか余裕が消えているようにも思えて必死な姿に見えた。
Ｍｒ．８は突如ミス・ウェンズデーを制止する。
「待て、ミス・ウェンズデー。少し話がしたい……」

「え？　Ｍｒ．８？」
「剣士殿、あなたの腕を見込んで、一つお願いしたいのだが」
「あ？　いきなり何言ってんだ」
話しかけられてゾロが怪訝な顔を見せ、決して友好的な態度ではない。しかし切羽詰まった表情を崩さぬ彼は退かずに言い切る。相当の理由があったらしい。
仕方なくゾロはそれを受け止めてやることにした。
「我々は協力者を探していたのだ。腕の立つ協力者を」
「協力だと？　散々殺そうとしといて何を今更」
「これには、深いわけがあった。できれば我々を助けて欲しいのだが――」
「流石ね護衛隊長。あなたの目利きは確かよ」
Ｍｒ．８の言葉を掻き消すように、涼やかな声が割り込んできた。出所を探せばすぐに声の持ち主を発見する。
ゾロが右側を向いた時、広い道を挟んで屋根の上、足を組んで座る美女が居た。
屋根の縁に腰掛けて足を投げ出し、へそを露出する紫色の衣装と帽子を身に着けて、柔らかい微笑みを湛えている。視線はどうやらＭｒ．８とミス・ウェンズデーを捉えていたようだ。
どこかミステリアスな空気を纏った、不思議な雰囲気を持つ麗人である。
少なくともつい先程の戦いには参加していなかった人物だった。
二人は彼女の姿を目にした瞬間、ひどく驚いた様子に変わっている。おそらく知り合いだったのだろう。目にした途端には表情が緊張していたようだった。
ミス・ウェンズデーが動揺した様子で思わず背をのけ反らせる。
「ミス・オールサンデー!?　ど、どうしてあなたがここに……！」
「あら、いけない？　私がここに居ちゃ」
「い、今、なんと……まさか私を、護衛隊長と呼んだかっ」
「間違ってはいないでしょう？　護衛隊長イガラム。それにビビ王女」

ミス・オールサンデーと呼ばれた美女は事も無げに言う。微笑みは一切崩れない。
しかしその一言を聞いた二人、Ｍｒ．８とミス・ウェンズデーは硬直し、身動きできないほどの驚愕に包まれている。たった一言で明らかに空気が変わった。
バロックワークスの社員は必ずコードネームを名乗っている。そこから考えるに、先程呟いた名前は彼らの本名だと推測できた。何やら仰々しい呼称は付いているが間違いないだろう。
気のない素振りで聞いていたゾロは静かに二人を確認した。
ビビ王女、と呼ばれたのは間違いなく女性であるミス・ウェンズデーである。ならば護衛隊長と呼ばれたのがＭｒ．８、もといイガラムなる人物。
どこかの国の重要な人物なのだろう。
そんな立場の人間まで紛れ込んでいる辺り、バロックワークスの異常性を知った気がした。
足を組んで頬杖をつき、ミス・オールサンデーは穏やかな口調で話す。
「なぜ、その名を……!?」
「彼が本当に気付いていないとでも思った？　アラバスタ王国の王女と護衛隊隊長、国民が知らないはずがないあなたたちが組織に潜入したことを。彼の気まぐれで見逃されていただけよ」
「そ、そんなっ。それじゃ最初から？」
「おかしいとは思わなかったのかしら。サンディ島周辺で任務に就いていたあなたたちが揃ってこのウィスキーピークへ来る指令を与えられた。王女と護衛隊長と知っているのにね」
「何が言いたいっ」
「あなたたちすら利用するつもりだったんでしょうね。今は潜入していても、いずれきっとアラバスタへ帰らなければいけない時が来る。その時には足が必要になるわ。頼りになる護衛がついて来るのなら尚のこと嬉しいはず」
悔しげな顔でイガラムが歯噛みする。

最初から全てバレていたようだ。これではただの道化ではないか。
「最初から我々が負けると知っていたのか。その後で彼らに協力を頼むことも！」
「聡明なあなたを信用してのことよ。あくまでも敵としてね」
「あなたたちは、どこまで……！」
「そうそう。私を尾行してボスの正体に辿り着いたようだけれど、あれも指示があったの。敵が誰かを知っていた方が行動力が増すだろうって」
「バカにして！」
正面から堂々と真実を明かされ、ビビが肩を怒らせて声を荒げた。
ひどい侮辱だ。知った上で見逃されるだけでなく、知らぬ内に利用までされていたとは。
ミス・オールサンデーはわずかに首をかしげて呟く。
「だからあなたたちの任務は終わり。今までご苦労様。退職金は出せないけど異論はある？」
「なぜ我々を見逃そうとする。そこまで知っていてなぜ始末しようとしない。バロックワークスのボス、Ｍｒ．０の正体を知ったビビ様の存在は、おまえたちにとっても弱点と成り得るはずだ」
「ならないわ。だから見逃すの」
突然、ミス・オールサンデーは彼らから視線を逸らして別の方向を見た。
彼女から左手、ゾロから見れば右手。
「彼の目的は二つ。一つはあなたたちが察知しているように〝王国乗っ取り計画〟。もう一つはすごく個人的な用事。あなたたちを使って呼び寄せたかったのよ。いつの間にか誰にも気付かれず姿を消したバロックワークス社員、〝ＮＡＭＥＬＥＳＳ〟を」
そこには気付けば、パーカーのポケットに両手を突っ込んで立つキリの姿があった。
彼を目にして、ミス・オールサンデーふっと笑みを深くし、ゾロは眉間に皺を寄せる。イガラムとビビもまた相手が誰か気付いているだけに困惑している表情だ。

キリ自身、いつもの笑みを浮かべて立っている。
「仰々しい名前だね。ただのお手伝いさんだよ」
「フフフ、そうだったわ。お久しぶりねキリ。いつ以来かしら」
「まだそんなに時間は経ってないはずだけどね。まぁでも、それなりに時間はあったか」
呑気というのか、彼は和やかに話している。おそらく敵だろうと思う相手とひどく親しそうに。これだけでも想像できる物はあった。
以前過去について尋ねた時、すぐにわかると言われた経験がある。
なんとなく想像できた後になって、ゾロはキリを見つめて小さく呟いた。
「どういうことだ……」
「ネームレス、その名は聞いたことがある。バロックワークスの中で唯一コードネームが与えられていない人間。ミス・オールサンデーとは別の、もう一人のボスのパートナー」
同じようにキリを眺めたイガラムが呆然と呟いた。かなり驚いている顔である。
ゾロは彼を見下ろし、咄嗟に続きを促す。
「おっさん、説明しろ。そのネームレスってのはなんなんだ」
「意味はそのまま、コードネームがないことを表している。存在こそ社内に知られていたが、あくまで噂が流れるだけで誰も見たことがない謎の人間。性別さえ知られていなかった。しかし存在だけは伝わってきて、社内の人間はネームレスと名付けるようになった」
「ボスのパートナーってのは」
「バロックワークスは秘密主義。ボスの素性すら秘匿されている。それ故、ボスからの指令は原則ミス・オールサンデーが渡すのだが……表の仕事をするのがミス・オールサンデー、裏の仕事を遂行するのがネームレスだと言われている。奴だけは二人のパートナーを持つそうだ」
「その片割れがあいつってことか」
「しかしまさか、あんな若者だったとは」
キリはミス・オールサンデーと視線を合わせ、静かに佇んでいる。

異様な雰囲気だった。
不思議と三人は彼らのやり取りを見守る。
気になるというだけでなく、なぜか口を挟めない何かがあった。
「やっぱり捕まえるのは無理だったようね。最初から予想していたけれど」
「あれだけ分かり易く近付かれたら誰でもわかるさ。あ、でもウチのコックなら引っ掛かったかもしれないね。ボクよりよっぽど女好きだから」
「あなたと一緒に居たあの子は？」
「今頃一人で寝てるよ。悪いとは思ったけど薬はあの人に飲んでもらったんだ」
「そう。あなたの弱点は知らなかったのね」
「だって初めて会ったし。王女も隊長もボクのこと知らなかったくらいだからね」
やはり彼もビビやイガラムについて知っていたらしい。
驚いた拍子にビビが思わず割って入った。
「それじゃあなた、あの時もう……！」
「見た瞬間に気付いたよ。まぁ、そういうことなんだろうなって」
「理解が早くて助かるわ。ボスからあなたに伝言がある」
ビビに構う暇さえなく、キリがミス・オールサンデーに向き合う。
大事な一瞬だ。
「わざわざ副社長が来るくらいだからそうだと思った。なんて？」
「一言だけ。〝アルバーナで待つ〟と」
「へぇ、なるほど」
小さく頷き、その言葉を受け取った。
キリは多くを語ろうとせず、ミス・オールサンデーも勝手に納得している様子で、必然的に話を聞いていた三人は置いていかれるような感覚に陥る。
まだ全てを理解できた訳ではないというのに、二人は尚も言葉を掛け合う。
「あなたがなぜ組織から逃げ出したのか、その理由は教えてくれな

いのね」
「そんなに大それた理由じゃないよ。ただ社風に合わなかっただけかな」
「それだけ？」
「詳しく知りたいならボスに聞けば早いと思うけど」
「聞いても教えてくれないのよ」
「じゃ諦めた方がいいね。あれも中々面倒な人だから」
「わかったわ。忠告ありがとう」
肩をすくめて笑うキリは何かが違っている気がする。ゾロはふと違和感を覚えた。
表情も佇まいも普段のまま。別段特別だとは思わない。それなのになぜか別人に見えてしまうような気さえして、何とも言えない心地に囚われた。
ミス・オールサンデーが立ち上がる。
用は済んだのだろう。後悔も残さずにその場を立ち去ろうとする素振りだ。
「伝えたかったのはそれだけよ。王女様、もう心配しなくていいわ」
「え？」
「彼らがアラバスタへ連れてってくれる。どのみちそこを目指す理由があるの」
向けられる疑念を込めた視線はまるで気にせず。
振り返る寸前、再びキリへ目をやり、ミス・オールサンデー親しげに微笑みかけた。
「また会うことになるんでしょう？　楽しみにしてるわ」
「あんまりいい予感はしないね。まぁでも、手を抜くつもりはないよ」
「フフ……彼に何か言いたいことはある？」
「あぁ、それじゃ、お手柔らかによろしくって」
「了解」
クスッと笑って彼女は振り返り、無防備な背を見せて去っていく。屋根の上から降りれば建物の向こうに消えてしまい、視界で捉えるこ

とはできなくなってしまった。
後には奇妙な沈黙が残され、場の動きが消えてなくなる。
気配が消えた後になってゾロがキリへ視線を注いだ。
何を言いたいかはわかっているのだろう。振り返った彼は視線で制し、先に二人へ目をやる。
サンディ島アラバスタ王国、王女のビビと護衛隊長イガラム。
まずは彼らと話さなければならない。
軽々と屋根を飛び移って三人の前に現れて、何一つ変わらぬ笑顔でひとまず見回す。すでに三人が彼を見る目は変化していた。動揺と緊張、さらにそれ以外が色濃く見える。
気付いていながら敢えて無視して、キリはビビとイガラムに目をやった。
「そういうわけだから、ボクらなら協力できる。バロックワークスを止めたいんじゃない？」
「え、ええ……でも」
「まだ不可解なことがある。本物のネームレスならなぜＭｒ．０に敵対を？」
「ん～、説明してあげたいのは山々だけどさ、聞かせる相手はあと何人か居るんだ。あとにしてもらえると助かるんだけど。って言っても今のままじゃ信用できないか」
困った顔で頭を掻く。そうする姿は平凡そうな青年だった。とても秘密結社の内側に居た人物とは思えず、思わず二人は顔を見合わせてしまう。
キリは尚も詳細を語らない。
「まぁ気に入らなければ適当なところで降りてくれればいいよ。とりあえずボクらはアラバスタに行くことになるだろうし、そこまで送ってから別行動になってもいい。だからまずは一緒にこの島を出よう。説明は船の上で全員にするからさ」
「イガラム……」
「やむを得ません。ビビ様、ひとまず彼らと行動を共にするべきです」

「心配しなくても騙し討ちなんてしない。立ち向かう敵は同じだろうからね」
肩をすくめる彼を見てただ困惑するしかなく、ビビとイガラムは口を噤む。
信用できる相手と決まった訳ではないが勢いのままに決定し、協力する関係となったらしい。自覚もそこそこにビビはイガラムへ駆け寄って傷ついた彼を助け起こす。
キリがちらりとゾロを見た。彼もまた事情を深く知らないため、表情は厳しいが多くを語ろうとせずに、今は待ってくれている様子。首を振って嘆息し、すぐに思考を切り替える。
伊達に同じ船に乗っていない。扱い方は互いにわかっているらしかった。
ゾロが先に口を開いてキリが答える構図となる。
「で、どうすんだ？」
「そうだね、もうこの町に居る理由がない。今すぐ島を出よう」
「今すぐ？　大丈夫なのか、例の……ログってやつは」
「考えがある。長くこっちに居れば見えてくる航海術ってのもあるんだよ」
歩き出して視線の先を変えたキリは、倒れているＭｒ．９とミス・マンデーを見た。
「Ｍｒ．９、ミス・マンデー、さっさと起きなよ。頼みたいことがある」
「な、なぜおれたちが起きていることをっ」
声をかけられてすぐＭｒ．９ががばりと起き上がり、舌打ちしたミス・マンデーも立ち上がった。
どちらも比較的傷は軽かったらしく、ミス・マンデーは女性だったこともあって体を斬られてはおらず、峰打ちで一時的に気絶してしまっただけのようだ。
彼ら二人を見たキリは屋根から飛び降り、通りへ立って警戒心もなく近付く。
ダメージが残る姿で立つ二人を見つめて話しかけた。

「真剣に話聞いてるとこ見ると協力は期待できそうかな？　二人は今後どうする？」
「ど、どうするって」
「手を貸すか貸さないか。今ならまだ忘れることはできると思うけどね」
「そりゃあ、なぁ……」
「乗りかかった船だ。それなりに長く組んだからね、友達を助けてやりたいって気持ちはある」
覚悟した表情のミス・マンデーが答えたことで、Ｍｒ．９も納得した顔で頷く。
話を聞いている内に覚悟を決めたらしい。二人の顔はすでに迷いを捨て去っており、頷いて理解したキリは彼らに微笑みかけて言葉をかける。
「それじゃ手伝ってもらおうか。先にアラバスタへ向かってて」
「アラバスタへ？　でも、どうやって向かえばいい。エターナルポースだって持ってないぞ」
「自分でなんとかしてよ。本気でやる気があるならさ」
「はぁ!?　そんな無責任な！　手伝えって言ったのはおまえだぞ！」
「逃げるのは自由だよ。現地集合。現れないならそれはそれだ」
「お、おい……本気か？　作戦会議はもう終わり？」
簡潔に話し終えてキリは傍を離れてしまい、まだ屋根の上に居た三人を見上げる。またしても指示は簡潔で有無を言わさぬものだった。
「ゾロ、みんなを連れてメリーへ行こう。寝てるようなら運ぶよ」
「めんどくせぇな。叩き起こしゃいいんだ」
「夜だから寝るのは当たり前さ。二人もこっちへ」
ビビとイガラムを呼んで彼は歩き出そうとした。Ｍｒ．９とミス・マンデーは困惑しているようだがそのまま放置され、あっさり背を向けられてしまう。
多くの人間が倒れ、静まり返った通りを歩く。
ふと見回せば突っ立って居る二人が視界に入った。

ナミとシルクである。ゾロが酒場を出る時には眠っていたはずだったが、演技だったのかもしれない。二人とも両手には盗み出してきた金品を手にしている。
ブレない姿勢にはキリも苦笑する。しかし二人はどこか寂しげな表情だった。
理由は理解している。そのため説明を急いだりはしない。
他の三人は心底安堵して眠っているのだろうと判断し、すぐに視線を逸らして笑みを深める。
「さぁ行こう。これから忙しくなる」
歩き出して彼女たちの傍を通り過ぎ、酒場へと入っていく。
キリの背を見送った面々は複雑な心境で、声をかけることさえできなかった。

NAMELESS

目を覚ましたのは、波の音が聞こえたことがきっかけだっただろうか。
陸では感じないはずの揺れも感じて、すでに見知った感覚であるそれは船が波を乗り越えることで得る物だと知っている。そうとわかれば疑問に思わずにはいられなかった。
意識が浮上し、ふと目を開いたルフィは寝ぼけ眼で辺りを窺う。
大の字で寝転んで視界には空。徐々に白みつつある朝の光景が目に入った。
もう夜が終わって朝の時間帯になっていたらしい。空を舞う海鳥が近くで鳴いていて、爽やかな風景だと感じられる。波の音も静かで穏やかな一瞬だ。
むくりと起き上がって甲板を見回す。
頭を掻きながら声がする方を見てみれば、何やらサンジとウソップが喚いているようだった。
「なんで島を出ちまってんだよ！　せっかくあんなにいい町だったのに！　今後あれだけ歓迎してくれる町なんてあるかどうかわかんねぇんだぞ！」
「そうだぜ、早く戻ろう！　美しいレディがおれを待ってる！」
「あんたたち、うるさい」
騒ぐ二人をナミが拳で制し、一旦騒ぎが治まる。
それからルフィは自身がメリー号の上に居ること、すでに出航していることを知った。
目がぱっちり開いて驚きを露わにする。もう船を出しているとは思わなかった。船長の決定なしに航海を始めることは今まで経験がなく、怒りはしないが驚いてしまう。
立ち上がったルフィは殴られて倒れたウソップとサンジを見た後、すぐにキリを見つける。
まだ寝ぼけているせいかテンションは低く、船の前部で一段高い場所に居る彼へ声をかけた。

「なぁキリ、船出したのか？」
「あ、起きたんだ。おはようルフィ」
「なんかあったか？」
「まぁね。用ができたんだ。それから」
「ん？」
キリが視線の先を変えたのに気付き、ルフィがそちらを見るとビビとイガラムを見つけた。
事情を知らない彼はミス・ウェンズデーと町長イガラッポイだと思っているのだろう。首をかしげるのは当然で、腕組みして考え出すのも不思議ではなかった。
肩をすくめてキリが苦笑する。
「なんであいつらが居んだ？」
「今から説明する。みんなが起きるの待ってたんだ」
「へぇ」
甲板には全員が揃っていた。
いじけている様子のウソップとサンジを始め、ゾロ、ナミ、シルクに加えてビビとイガラムも仮眠を終えて集まり、ようやく状況が整って説明を始められる。
一段上でキリが欄干へ腰掛け、甲板に居る全員を見回した。
微笑みを湛え、見上げてくる全員に向かって口を開く。
「さて、何から話したものか……とりあえずこれからの目的について話すよ。ルフィ、事後報告になるけどいいかな」
「いいぞ。キリは副船長だ」
「ありがとう。それじゃ、一つずつ話していこう」
佇まいを直した後、改めて話し始める。
彼はまずビビとイガラムを見て、仲間たちに紹介した。
「先に言っといた方がいいかな。アラバスタ王国のビビ王女と、その護衛イガラムさん」
「ミス・ウェンズデー、王女様でしたか！　道理できれいなわけだ！」
「いやきれいなのは関係ねぇだろ。しっかし、王女だって？」

「正真正銘のね」
彼女へ振り返ったサンジが目の色を変えて喜び、船に乗ったことを嬉しく思っているらしい。一方でウソップは半信半疑な目を向けていまいち信用できない様子。
注目されたビビもどこか居心地が悪そうだ。
「なんでその王女様がここに居るかって話だけど、微妙に面倒でね。ウィスキーピークって町は海賊を狩るためのアジトなんだ。ある組織が、資金稼ぎのために賞金首を狩ってた。二人は訳あってその組織に潜入、構成員としてあの町に居た」
「ある組織？」
「組織の名前はバロックワークス。秘密主義で外に情報を漏らさない。そのバロックワークスがアラバスタ王国を狙ってて、彼女たちは阻止するために情報を求めて潜入した」
「へぇぇ、そんな話が現実にあるんだな」
「狙ってるってのはどういう意味だ？　大体は読めるが」
「最終目標は理想国家の建国。そのために、アラバスタ王国その物を乗っ取るつもりだよ」
キリは平然と語っていた。
迷うことなく朗々と語る様は少し異質だ。あまりにも事情を知り過ぎているように思える。
事情を察していない者でさえ表情を強張らせて違和感を覚え、ウィスキーピークでの顛末からなんとなく察している者は確信を強めていく。
船上はいつしか無視できないほどの緊張感に包まれていた。
その中でキリは微笑み、ルフィは真剣に彼を見つめる。
「ボクらはこれから、アラバスタへ向かう。と言っても現在地から行ける場所じゃない。まずはアラバスタへ続く航路を手に入れよう」
「王女の護衛ってことか？　でもよぉ、なんでおれたちが」
「おれとしちゃビビちゃんを守ることは大賛成だが、確かに理由は知りたい。それにキリ、おまえ妙に詳しいみたいじゃねぇか。一体どういうことだ？」

「ふぅ。まぁそうなるよね」
ウソップとサンジの問いが飛んでくる。その質問は当然で、来るだろうと予想してもいた。
小さく息を吐いた後、一度心を落ち着けてからキリが話した。
この状況では話さなければならないと覚悟している。そのため今は躊躇いもない。
「ボクはバロックワークスについてよく知ってる。それこそ誰も知らないはずのボスの顔と名前まで。どんな人間かもよく理解してる」
「なにぃ？　誰も知らないはずなのになんで」
「バロックワークスを指揮するボスは、王下七武海、サー・クロコダイル」
静かに目を伏せ、それから意を決して呟かれた。
「クロコダイルはボクの……命の恩人なんだ」
そう呟いた直後、辺りはしんと静まり返る。
まず先に、王下七武海の名前が出たことに驚いた。
七武海は世界でたった七人しか居ない、政府の味方をする海賊。その実力と名声は世界に轟くほどであり、名前を聞くだけで怯える者も珍しくない。
その名前が組織のトップだと知り、おそらく自分たちと敵対することになることを予想する。
つまり自分たちは七武海と戦わなければならないのだと気付いた。
そしてその次に、命の恩人という言葉に言葉を失う。
彼の過去については聞いていない情報も多かった。その一つがこのタイミングで、まさかの情報と共に明かされた。ブルックに関する話よりも驚きは大きい。
バロックワークスの構成員で、クロコダイルに命を救われた。
仲間たちは硬直してしまい、誰もが沈黙してキリの姿を見つめている。
「仲間を失って、死にかけてたところを気まぐれで助けられて、それからボスの下で働いてた。拾われたのは十二の頃。その時から鍛えられたし、元々体を紙にするだけだったペラペラの能力に紙の操作を

可能にさせたのもボスだ。あの人は悪魔の実の能力に詳しいから。他にも色々教え込まれたよ。脅迫の方法、情報の扱い方、グランドラインの航海の仕方もね」
重苦しい空気に包まれ、キリが目を開く。
「今のボクはボスに作られた。あの人に拾われなかったら多分今頃生きてない」
キリの小さな呟きに息を呑む音さえ聞こえる。
やがて視線を合わせたルフィが口を開いた。
「七武海ってなんだっけ？」
「いやそこかよっ!?　おまえ覚えとけ、それ！」
「簡単に言えばすごく強い海賊さ。認識としてはそれで十分」
「お、そうか」
「それで納得か!?」
能天気なルフィの発言でウソップが声を荒げるが、キリが苦笑して言えば納得したらしい。雑過ぎる説明でまたしてもウソップは厳しく叫ぶ。
だがこのやり取りで少しは空気が緩んだようだ。
わずかに空気が軽くなって、仲間たちやビビ、イガラムの表情から強張りが薄まる。
それでも緊迫した状況には変わりないが少しは肩の力を抜けるようになった。
「それでその強い奴がキリの仲間だったってことか？」
「だった、っていうのが微妙なとこでね。だからアラバスタに向かわなきゃならない。ビビたちを乗せていくのはボクにとってはついでとも言える」
「んん？」
「アーロンに言った言葉は覚えてる？　あれは元々ボクがボスに言われた言葉だ」
言った途端にルフィの表情が歪んだ。嫌な予感を感じたのだろう。
それを知りながらキリが続ける。
「まだ決着がついてない。現状、ボクはボスの預かりってことにな

る。もちろんボクの意識としてはルフィの仲間になったからついて来たんだけど、向こうはそれを許す気が無いみたいだし、無視できる相手でもない。この海に戻ったんなら決着をつける必要があるんだ」
「そんなの、わざわざ相手にする必要ある？　逃げればいいじゃない。あんたがイーストブルーに居たってことはそういうことでしょ？　前みたいに上手く逃げれば……」
困惑した顔でナミが尋ねるも、キリは首を振ってそれを否定する。ひどく真面目な姿で、嘘じゃないらしい。
それだけで理解してしまう。できないのだと知ってナミはぐっと唇を噛んだ。
「前は逃げたんじゃない、見逃してもらっただけさ。捕まえようと思えば簡単だったし、連れ戻すこともできたけど敢えてそうしなかった。ボスがそう決めたから」
「七武海の預かりってことは、キリは……私たちの仲間じゃないの？」
「状況から言えばそうなる」
シルクが寂しそうに告げれば、キリは頷く。
これに異を唱えたのがルフィだった。歯を剥き出しにして感情を露わに、出会った頃に交わした自身との約束を思い出したのか、強く否定し始めた。
「そんなことねぇ！　キリはおれの仲間だろうが！」
「――そうなるためにもアラバスタへ行かなきゃならない。もしみんながそう認めてくれるなら嬉しいし、そうなりたいけど、ボスに話をつけない限りはボク自身が認められないんだ。みんなの仲間だって胸を張って言えるようになりたい」
「どうすりゃいいんだ。そのクロコダイルって奴をぶっ飛ばせばいいのか？」
「うん。話をつけるには、それしかない」
「わかった。それならおれがクロコダイルをぶっ飛ばす！　キリはおれの仲間なんだからな」
拳をぶつけてルフィが決意を固める。鼻息も荒く今から興奮して

いる様子だ。
それを見てキリは苦悩する顔を見せて、声色が変わる。
「ただし、相手は七武海。強さはボクが誰よりも知ってる。衝突すれば必ず命を落としかねない戦いになるはずだ。今までみたいに勢いだけで勝てる相手じゃない」
彼はどこか寂しげな顔で仲間たちを見渡した。
それを言うのは自身も覚悟が必要だが、言わざるを得ない。仲間を心配するが故に。
「今ならまだ逃げられる。このまま航海を続けるなら、ボクは――」
「キリ。おまえつまんねぇこと言うなよ」
口にしかけた時、制するようにルフィが言葉を遮った。
真剣な表情を見て思わずキリが息を呑み、自らの発言を後悔すらした。
すでに気付かれてしまっているだろう。だから彼は怒気を発しているのだ。たとえ相手が誰であれ仲間を諦めるような人間ではないと、ナミを助けた一件で知っていたはずなのに。
ルフィはキリを見つめて宣言する。
堂々とした声で迷いなど微塵も持ち合わせてはいない。
「おれはおまえを選んで仲間にしたんだ。昔何やってたとか、そんなもん興味ねぇ。敵が強くてもおれがなんとかしてやる。だからこれからはずっとおれの船に居ろ」
「迷惑、かけることになるよ」
「いいさ。いっつもおれが助けてもらってるからな」
「はは……それもそうだ」
言い切ったルフィがにかりと笑う。
見渡してみれば仲間たちもやっと笑顔を見せていた。誰一人として欠けずに彼を見つめて笑顔を持ち、ルフィに同意する意思を見せ、彼を見捨てる気はないと言う。
苦笑したキリは飲み込んだ言葉を消し去った。
もう二度と口にすることはない。自分自身にそう言い聞かせて、すぐに思考を切り替えた。

仲間の同意を得られた以上、考えるべきはどうやって敵に勝つか。よく知るからこそ勝利を得るのは非常に困難だと理解できる。今のままではあまりにも危険だ。
勝つためには何が必要で、何をすべきか。
瞬時に考えながらもキリはビビへと視線をやった。
「クロコダイルに、バロックワークスに勝つのは簡単なことじゃない。だからアラバスタ王家の力を借りる。ボクらの目的は同じだ、敵の計画を未然に防ぐ。王国乗っ取り計画を失敗させた時こそボクらの勝利。というわけで、ぜひ協力してもらいたいんだけど、どうかな？」
「え、ええ……だけどあなたたち、信用できるの？」
「それは自分で決めてもらうしかない。ただよく考えた方がいいよ。クロコダイルもボクらも海賊だけど、七武海は政府が認めた海賊。ボスが計画を立てられたのも政府の味方だという世界共通の認識があったからだ。この一件には政府の責任も重くのしかかってる」
「そ、それは……」
「少なくともボクが居れば、ある程度のアドバンテージは得られるはずだ。バロックワークスの情報を持ってる。それこそ君たちが調べた以上の物を」
答えられずにビビは口を噤む。その通りだと思ったのだろう。
潜入したとはいえ一社員とボスの側近では立場が違った。得られる情報にも当然違いはある。
彼女が困っていると見てイガラムが口を開き、やさしくも的確なタイミングで進言する。
「ビビ様、ここは彼らに力を借りた方が良いでしょう。幸い目的は我々と同じです」
「ええ……わかったわ」
「助かるよ」
心中がどうであれ、ひとまずは頷かねば仕方ない。そういった理由もあっただろう。まだ信用できなくて当然だと誰もが思っていた。
しかしビビは、皆を見回し毅然として言った。

「みなさん。潜入のためとはいえ、数々の無礼をお許しください。その上で失礼ながら、私は国を守りたいのです。お力添え願えないでしょうか」
「なんか難しいこと言う奴だな。もっと簡単に言えばいいじゃねぇか」
「え？　もっと簡単にって」
「お願いなんかすんな。おれたちは海賊だから好きなようにやるだけだ」
ルフィが笑顔で言ってビビが困惑する。
助け船を出すようにキリが微笑む。
「協力するってさ。ルフィの都合で動くだけだから、お礼はいらないって」
「ししし」
「え、ええ」
「それはわかったけど、これからどうするの？　だってログが溜まってないわ。コンパスは使えないし、このままじゃ航海なんてできない。大丈夫ってどういう意味？」
話が一段落しようとしたところ、困惑した様子でナミがキリへ尋ねる。
ウィスキーピークの滞在時間が短く、半日の滞在で溜まるログがまだ溜まっていない。これではグランドラインを航海することは不可能であろう。
正しい知識を持つために焦りを抱いたのだ。
彼女の判断は決して間違ってはおらず、小さく頷いたキリはあっさり答えを出した。
「普通ならまずやっちゃいけないミスだけど、今回の目的地はそれでいいんだ。ログが必要ない場所へ行く。そこでエターナルポースを手に入れよう」
「どこ行くんだ？」
ルフィが尋ねたことで笑みが深まる。
どこか上機嫌に見える表情でキリが答えを出した。

波は穏やかで、辺りは凪のように静まり返っている。
従ってその声はよく耳に届く。
全員が見上げる顔は、ひどく楽しそうに見え、前とも違う生き生きしている様子が窺えた。
彼は懐かしき風景を脳裏に思い浮かべて、皆へ告げる。
「海賊島へ」

デッドエンドの冒険編

〝海賊島〟ハンナバル

ログを捨てた航路に出て、次の島へ到着するまで、実に三日の時間をかけた。

島に近付く頃には時刻は夜。

メリー号は屋根を持つ小舟に先導を頼み、深い霧の中を進んでいく。徐々に島の姿が見えてくる頃にはクルーたちは好奇心を露わにしていて、その奇妙な全景に心を奪われた。

まるでリヴァースマウンテンを見るようだ。

島にはいくつかの運河があるらしく、高い山の頂点から海へ向かう水流がある。山は高く、頂点付近は皿のようになっており、そこから水が湧き出ているのだろう。

麓には大きな町。

距離があっても活気が伝わってきて、何やら騒がしい様相が窺える。

メリー号から見たルフィは目を輝かせて喜んでいた。

騒がしい風景は海賊が好む物で宴を彷彿とさせる。姿勢だけでなく気持ちまで前のめりになって今すぐにも上陸したくなっているらしい。他の者も同様に興味を持っている様子だ。

ようやく見えた島を眺め、キリは頬を緩めている。

説明は上機嫌な彼の口から始まった。

「グランドラインには数か所、海賊の楽園と呼ばれる場所があるらしい。海賊島って呼ばれるのも一つじゃないって噂だ。ここはその一つ。海賊だけが辿り着くことができる島」

「なんで海賊だけなんだ？」

「この島に辿り着くには、水先案内人の助力が必要不可欠なんだ」

「あぁ、あのばあさんか」

「そしてこの島の水先案内人が案内するのは原則海賊だけ。まぁ海賊船に密航すれば島に入れるだろうけど、海軍や賞金稼ぎが奇跡的に

見つけられたとしてもここには来れない」
「へぇ～」
船首の上に座るルフィが納得した顔で頷き、本当に理解しているか否かは不明だが、キリは苦笑しつつも敢えて指摘しようとはしない。漠然と理解してもらえればそれで十分だ。
彼の説明に反応したのはナミである。
航海士として、やっと疑問が晴れそうだと質問を始めていた。
「それじゃ、ログの話は？　別に案内人が居なくてもログを辿れば来れるでしょ」
「ところがそうもいかない。この島にはログがないんだ」
「え？　ログがない？」
「そう。それに島その物が常に移動し続けていてね。昨日と同じ場所にはないから、海図を描いたとしたってそう簡単に辿り着ける場所じゃない。ここだけはログでの航海は通用しないんだ」
「そんな島まであるなんて……滅茶苦茶ね」
キリの微笑を見てナミは困惑した顔になる。しかし説明はまだ止まらない。
「方法を考えればログを使わず、案内人を使わずに到着することもできるけど、それはここじゃ絶対にやっちゃいけない方法だ。覚えといた方がいいよ」
「やっちゃいけないって、そっちの方が簡単じゃない。お金払わなくていいし」
「水先案内人は島まで案内するだけじゃなくて、同行していることこそが島に入るための条件なんだよ。案内人が傍に居ない船は、確実に沈められて海の藻屑にされる。島の守り神にね」
「守り神って、神様が本当に居るわけでもないでしょ。そんなの別に気にしなくたって……ちなみに、本当なの？」
「さぁね。守り神の正体を知る人間は少ない。見た人間は必ず始末されるらしいから」
ぞっとする話であった。
質問したナミだけでなくウソップまで顔色を変え、背筋を震わせ

る。
正体不明の存在というのは恐怖心を掻き立てる物だ。キリは二人を確認した後で尋ねる。
「なんなら試してみる？　海に住む守り神に勝つ気があるなら」
「い、いえいえ！　丁重にお断りしておきます！」
「そそそ、そうだな！　まぁこのキャプテン・ウソップ様が居れば心配なんてねぇんだが、今はそんなことしてる場合じゃねぇわけだしさ！」
「そう言ってもらえてよかったよ。はっきり言って勝てる気がしなくてね」
二人が勢いよく顔を振って否定したことで話は一段落。
守り神とやらの説明は終えたが、島に関する説明はまだ終わっていないらしい。
「そろそろ近くなってきたからこの島での過ごし方を注意しとくよ。基本的にルールはなし。島民全員が海賊だからそもそも法がなくてね。それだけ危険はあるよ」
「さらっと言ったなおいっ!?　なんだよ危険って！」
「そりゃまぁやっちゃいけないことがない場所だからね。強盗、強姦、殺人、思い付く限りは全部咎められないと思うよ。自分の身を守れる奴だけが足を踏み入れることができる島だ」
「すぐに引き返すことを提案しますっ！　そんな危ねぇ島入れるかぁ!!」
ウソップが右手を上げて叫ぶものの、キリは間髪入れずに答える。
「却下。色々用事があるんだ。それに今からじゃ遅いよ」
「ちくしょーっ!?　おれまだ生きてたかったなぁ！」
「死ぬって決まった訳じゃないから大丈夫だって。それと全員に聞いてもらいたいのが、基本そんな感じの島でも、三つだけ破っちゃいけない暗黙のルールがある。他はいざ知らずこれを犯せば島民全員が敵になるらしいから注意しといてね」
「ぜ、全員って、この島海賊しか居ねぇんだろ？」
「その通り。言い換えればリンチだね。だから気をつけた方がい

い」
指を一本ずつ立てて説明が始まった。
皆がその動きを見ながら熱心に耳を傾ける。
「一つは水先案内人に危害を加えてはいけない。要するに攻撃するなってこと」
「まぁばあさんを襲う奴なんか居ねぇよな」
「二つ目は特にナミには聞いといて欲しいけど、他人の船に手を出してはいけない。港にはいくつも海賊の船が停まってて、攻撃を加えたり、食料や金品を盗んじゃいけないんだ」
「聞いてたかナミ」
「私にだけ言わないでよ。わかってるわよ、それくらい」
怯えた様子のウソップが厳しくナミへ言い聞かせる。怖がっているのは彼女も同じだがどことなく不服そうに、渋々という様子を隠し切れずにそれを受け取っていた。
普段通りの姿に気を緩めること数秒。
三本目の指が立てられてキリが説明する。
「三つ目は、島の深部に足を踏み入れてはいけない。ボクも聞いただけでこれが何を意味するのかはいまいちわかってないけど、島には立ち入り禁止の場所があるらしい」
「そこに入るとどうなるんだ？」
「どうなるかはボクにもわからない。まぁ、番人が守ってるらしいから簡単には入れないと思うけど、要はその番人の言うことを聞いとけってこと」
「そうか。まぁいいや」
自分から尋ねたルフィは町に視線を戻し、上機嫌に笑みを深める。
細かいことはわからずともいい。実際自分で行けばいいと思っているようだ。キリの忠告を聞いてはいただろうが湧き出てくる好奇心には抗えずに、今やすっかり冒険を楽しむだけの表情。
霧を突き抜けて島へ近付く。
町の明かりは夜とは思わせないほど強かった。先にも増して喧騒が伝わってくる。

海賊たちが集まる島。それを見てルフィの体はうずうずしていたのだ。
「おもしろそうな町だなぁ～。しっしっし、わくわくしてきたっ」
「トラブルの予感がする」
「おいルフィ～！　頼むからあんまり暴れ過ぎんなよ！　海賊どもが山のように居るんだぞ！」
「そっかぁ、山のように居るのかぁ……」
「あぁっ、だめだ、目が輝いてる!?　おれもトラブルの予感がしてきたぞキリ！」
「止めようがないよ。諦めた方がいいんじゃない？」
「そんなぁ～!?」
聞く耳を持たない様子のルフィはひどく危ない。島に到着してすぐ騒動を起こしそうなほどには上機嫌になっていた。大人しくしているはずがないと知るからこそ、ウソップの声も大きくなる。
身の安全を心配して、ウソップは必死にルフィへ注意を促し始めた。
それを傍らに、仲間へ振り返ったキリは話を変える。
目的地には辿り着いた。
次はどう行動するかを決めなければならない。
幾分の緊張感を持ち、真剣に見つめてくる仲間たちを見回して平然と声をかけた。どうにも彼だけは妙に余裕を見せていて、やはり古巣に帰ってきた自覚があるのか、生き生きしている姿だ。
「この島でアラバスタへのエターナルポースを手に入れる。専門で売ってる店があるんだ。トラブルがなければ多分手に入ると思うんだけど」
「島に入ったら別行動か？」
「うん。ボクもちょっと用事があるからさ。ルフィのお供もつけなきゃいけないし、三つくらいに別れるかもね。今の内に決めとこう」
サンジの問いに頷きつつ、選定のため仲間の顔を見渡す。
考えていても埒が明かない。こうした場面ではいつもの方法がある。

懐からくじを取り出し、キリの手から皆に向けられた。
「くじで決めようか。赤がルフィのお供、白がエターナルポースの入手。ボクは一人でも大丈夫だけど、ゾロがついてきてよ」
「おれが？」
「ま、色々あるからさ。他のみんなでくじを取って」
用件があるらしくゾロだけはくじ引きに参加せず。
他の面子がくじを握る中、ビビとイガラムは困惑した顔で立ち尽くしていた。
「あの、キリさん。私たちは……」
「もちろん参加。せっかく国の外に出たんだから何事も経験しといた方がいいよ」
「しかし海賊たちばかりの島など、ビビ様の身に危険が迫るかもしれないというのに！」
「その時はうちの仲間が守るさ。大丈夫、心配いらない」
「何を根拠に！」
「ボクはこの島をよく知ってる。見た目と違って意外に良い人も多いよ」
「しかし全員という訳では――！」
危険だと知ってイガラムは神経質になっているらしい。三日間の航海でわかった彼の人物像は、ビビに対してひどく過保護だということ。必要以上に心配している傾向がある。
ルフィに連れられてメインマストへ上れば、大怪鳥に攫われるかもしれないと騒ぎ。
ウソップやサンジと釣りをしてみれば、巨大魚に連れ去られるかもしれないと騒ぎ。
ナミやシルクと甲板で寛いでいる時でさえ、スナイパーに狙われるかもしれないと騒ぐ。彼はそれほど心配症で、やかましいほどビビを気遣っていた。
これまでバロックワークスの潜入で危険な状況に居たことも関係しているのだろう。
すでに慣れた様子でビビが苦笑し、彼のそんな姿を見ると不安さえ

消え去った。
「大丈夫よイガラム。この人たちは信用できるようだし、私だって任務の中で鍛えられた。何も心配なんていらない。自分の身くらい自分で守れる」
「しかしビビ様、もしもの場合という物が……！」
「あのね、あんたはビビを心配し過ぎ。それじゃ信用してないように見えるわよ」
「そうだよ。心配するのもわかるけど、もっとビビを信じてあげて？」
それぞれ表情が違ったがナミとシルクに苦言を呈され、イガラムはぐうの音も出なくなる。
彼女を心配するということは、その実力を信用していないも同義だ。信用していないから自分が守る、と言っているようにも見えてしまう。それはイガラムの本意ではない。
そうまで言われては否定する訳にもいかなかった。
苦心するイガラムは渋々納得した顔になる。
しかし譲れぬ物もあるらしく抗議は止まらなかった。
「ぐっ、仕方ありません……しかしせめて私が護衛することはお許しいただきたい！　くじ引きは理解しますが、私とビビ様を同じ組にしていただけませんか！」
「だめ。くじは公平にしないと意味ないし」
「それでは護衛としての私の立場が……！」
「運に頼るしかないね。さぁみんな持って。せーので引くよ」
笑顔でさらりと受け流すキリに促され、ビビとイガラムも慌ててくじを掴んだ。
掛け声に合わせて一斉に引かれる。
直後に結果が明らかとなった。
先端が赤い紙切れ、ルフィのお供に決定したのはウソップ、ナミ、ビビの三人である。すでに彼の性格を知っている二人は絶望した顔になり、ビビはそんな二人に驚いている。
三日間の穏やかな航海を経て、彼女がルフィに持った印象は少年然

としているという物だ。
なぜそれほど顔色が変わるのだろうと不思議に思っていたらしい。
「こ、これは、ルフィのお供は良い方に考えればいいのか？　それとも悪いのか……」
「悪いに決まってんでしょ。ルフィと一緒に居て何も起こらないわけないじゃない」
「うっ、急に胸が苦しく……！　実はおれ、島に入ってはいけない病なんだ――」
「そ、そうなのウソップさん？　大丈夫？」
「嘘よビビ、ほっときなさい。そんなこと言いながらいっつも元気そうなんだから」
突如ウソップが胸を押さえて呼吸を乱し始め、心配したビビが彼の背を撫でる。しかしそう珍しいことでもないためナミの対応は冷ややかだった。
先端が白い紙切れを取ったのはシルク、サンジ、イガラムの三人だ。
シルクはいつものこととして平気な顔をしており、サンジはナミやビビと共に居られないことを悔しく思いつつ、シルクと行動することを喜んで忙しい顔つき。
中でもイガラムが絶望した顔でくじを見つめていて、今にも泣きださんばかりに心配していた。
「私たちがエターナルポースを買ってくればいいんだね。了解」
「ナミさんとビビちゃんは別チームか……仕方ない。でもシルクちゃんが一緒で安心したぜ。心配しなくていいぜシルクちゃん、何があってもおれが守るからぁ～！」
「あああっ、恐れていたことがっ。これではいかん！　頼む、私をビビ様の護衛に！」
「うるせぇな。諦めろよおっさん。心配しなくてもルフィが居りゃ問題ねぇよ」
喚き出すイガラムをサンジが諌めて、シルクが苦笑する。
ビビの身を案じて不安に苛まれるイガラムには心配が残るものの、シルクとサンジに任せておけば問題はないだろう。一味の中でも特

に冷静に動け、単独行動を許しても心配がない人材だ。
残るゾロはキリと共に行動し、ルフィはお供を連れておそらく自由に動く。
徐々に島の姿が近くなっていた。
「おまえら、島に到着するぞ！　上陸準備！」
「船長命令だ。みんな動くよ」
船首で立ち上がったルフィが叫んだことで、船員が一斉に動き出す。
順調に航海を終えたメリー号は港へ到着。
船体をぶつけることなく停泊させることに成功する。
ルフィはうずうずしている様子だがキリに押し留められ、なんとか足を止めて。
ビビへ振り返ったキリがおどけるように言った。
「〝海賊島〟ハンナバルへようこそ、プリンセス」
手を貸してやり、一番最初に島へ降り立ったのはビビだった。
目の前の光景に驚いて呆然としつつ、辺りを見回す。
大勢の人の姿があった。彼女が生まれ育った国、アラバスタとは何もかもが違う世界。道も建物も石造りの大きな町で、男は酒と女に溺れ、女は男をあしらって金をせびり、中には暴力による怒声と悲鳴も入り混じって聞こえて、どこかでは何かが爆発する轟音さえ聞こえてくる。
暴力と欲望に支配されながら、しかしそれだけではない世界。
そこは彼女に大きな衝撃を与える場所だった。
アラバスタでは滅多に見れなかった海賊という存在。
見渡す限りに居る全てがそれなのだ。
狂気さえ感じる乱痴気騒ぎを間近に見て、ビビは言葉を失うほどの驚きを抱えていた。
仲間たちも続々船を降りてくる。
ルフィやキリやシルクは独特の騒々しさを耳にして笑顔を深めており、ナミやウソップは些かの不安を隠し切れない顔で、サンジは自由を謳うにふさわしい光景に安堵して女性に見惚れ、戦闘の可能性は

高いと判断したゾロが凶悪そうな顔で微笑む。
あまりにも騒がしい状況だ。イガラムは更なる不安を募らせていたが相手にする者は居ない。
すでに注意は町中に集中している。
今にも駆け出しそうなルフィが居て、心配する声など相手にしている場合ではなかった。
「こんなに野蛮で荒々しい町などビビ様には危険過ぎる！　やはり私が護衛せねば――！」
「おんもしろそぉ～！　よし、まずメシにしよう。どっかいい店ねぇかな？」
「それならこの町で一番大きい酒場が良い。ナミ、地図書いといたからこれで」
「いやいや君たちっ!?　それより私はビビ様の護衛を――！」
「いよ～し行こう！　行くぞビビ！　肉だぁ～！」
「え、あ、はいっ」
ルフィがビビの手を掴み、颯爽と歩き出す。歩くというより小走りといった調子だ。
ナミとウソップも見失わないようにすぐ後を追う。
イガラムは去っていくビビの背を見つめ、ついに涙を流しながら叫んでいた。
「ビビ様ぁ～!!?」
「うるせぇおっさんだな。キリ、おれたちはどっちに行けばいい」
「ちょっと待ってね。今案内する人を探してるんだけど……あ、居た」
辺りを見回していたキリは港の一角、放置された樽の上に座る人物を見つけて手を上げた。
ボロボロの服を着て目深にキャスケットをかぶる子供である。
「アニタ」
「あれ？　キリ兄ぃじゃん」
親しそうに声をかければ樽から降りて近寄ってきた。
桃色の短髪を持ち、可愛らしい容姿をしていて、どこか小生意気な

雰囲気を感じる。少年然とした立ち振る舞いに見えるものの声は比較的高め。少女に見えなくもない中性的な外見だった。
どうやらキリの知り合いだったらしい。
仏頂面だが不思議と態度は嬉しさを噛み殺すようで、そそくさとやってきた。
正面に立ったアニタの頭にキリが手を置く。帽子の上から軽く撫でれば恥ずかしそうにしながら受け入れたらしく、それなのに唇を尖らせて不満そうにする。
キリはそんな姿に笑みを深めた。
「なんでここに居んの？　しばらく来なかったのにさ」
「色々あってイーストブルーに居たんだ」
「知ってる。手配書と新聞見た。一人で楽しそうなことしてんじゃん」
「あれ？　なんか怒ってる？」
「べっつにぃ～」
「あはは、ごめんごめん。文句なら後で聞くからさ、ちょっと仕事頼むよ」
「仕事？」
キリが振り返って三人を見る。
アニタも彼らの姿を確認し、わずかに表情を歪めたようだ。
「ボクの仲間だよ。航路屋まで案内してくれるかな」
「……もう海賊やらないって言ってたくせに」
「あ、やっぱり拗ねてる？」
「拗ねてない」
「事情があったんだ。その話も後でね」
「んぅ……」
機嫌を取ろうとぐりぐり強めに撫でてやり、それでもさほど機嫌は直っていない様子のまま。
わざとらしく溜息がつかれる。
アニタはあっさりキリの傍を離れ、三人に視線をやって仏頂面を見せた。

「こっちだよ。ついて来て」
「キリ、あの子は？」
「友達。態度は悪いけど心配はないよ」
「うっさい」
「生意気そうなガキだな。度胸はあるみてぇだが」
アニタが歩き出したためサンジが騒ぐイガラムを引きずり、シルクと共に後を追う。
去ろうとする彼らへキリは最後に声をかけた。
「生意気だけどサンジ、一応女の子だから」
「は？」
「一応ってゆーな」
「ただし強いから守ってあげる必要はない。この町に住む人間は全員強いからね。ほっといても死なないからその辺は安心してよ」
「こんなガキなのにな……ま、確かに海賊の島に住むならそれくらいじゃなきゃ無理か」
アニタに連れられ、三人も港を離れていく。
町に入れば人の姿があまりにも多いため、すぐに姿が見えなくなった。
残されたのはキリとゾロのみ。
黙って待っていたゾロは腕組みして退屈そうに、キリの視線を受けても表情は変わらず。
やっと彼らが歩き出す順番が来て、そう言葉を交わすでもなく足を動かし始める。
「ボクらも行こうか」
「どこ行くんだ？　まだ行先聞いてねぇぞ」
「欲しい物があるんだ。行きつけがあるからそこに行こうと思って」
「行きつけ、ねぇ」
「昔はこの島によく来たもんさ。顔見知りも多いよ。紹介して欲しいならするけど」
「いや」

適当に首を振って断り、話は一時終えられる。
その後はキリが島に関する事柄を聞かせてやり、和やかな雰囲気で歩を進めていく。
それぞれ別れた麦わらの一味は夜になって一層騒がしくなる海賊島へと突入していった。喧騒は増すばかりであり、夜の静けさがそれを助長するかのよう。
彼らが姿を消した町には笑顔ばかりが溢れ返っていた。

Ｃｒａｚｙ　ｇｒｏｕｎｄの王様

喧騒に包まれる島内は非常に騒がしい様相である。

騒がしいだけでなく、今まで訪れた島では見たことがないほどひどい光景だ。

酒を頭から浴び、喉を鳴らして頬を緩めて。女の腰に手を回して笑い声が高らかに響き。道には料理だった物がぶちまけられて、よく見れば掃除する人間が居るが、驚くほど荒れていた。

海賊に似合う風景と説明することもできる。

ルフィは心躍った様子で生き生きと歩いているものの、いつ襲われるかわからない風景は緊張感を漂わせてもおかしくはない。

ウソップは不安そうな表情でルフィの背後に続き、ナミとビビも周囲の風景に驚いている。

やはり彼ら全員にとって初めての体験だったようだ。

ビビは目を白黒させて周囲を窺っている。

今まで培ってきた倫理観が一変するかのような光景だった。

「こんな世界があったなんて。なんだか信じられない……」

「確かに。私だって見慣れないわよ。これは絶対一人にならない方がいいわね」

「カルーは大丈夫かしら。こんなに騒がしい場所なのに一人で船番なんて」

「それは大丈夫なんじゃない？　キリが言ってたでしょ、停泊してる船に手を出したら目の敵にされるって。よっぽどのバカじゃなければメリーには手を出さないわよ」

「そうだといいけれど……」

ナミに諭されるもののビビの表情は優れず。

それも無理はないほど町並み、或いはそこに居る人々の姿は荒れていた。

感心がないのか、ここまで声をかけられることはなかった。

渡された手書きの地図を見ながらナミが案内しており、先頭のルフィはそれに従って歩いているらしく、迷いもせずに町の奥へ進ん

で、目的地に近付いてきているのだろう。
山を登るようになだらかな坂道を歩き、やがて大きな建物が見えてきた。
ナミが前方を指差し、目的地である酒場を見ながら言い出す。
「あれが酒場みたいね」
「しっしっし。まず肉食おう。にしても楽しい町ですなぁ～」
「いや楽しくねぇよ。かなり荒れてるし、いつ襲われてもおかしくねぇし」
「ほんと、かなりの荒れようね。耳が痛くなりそう。ビビは大丈夫？」
「ええ。なんとか」
ナミが気遣えばビビは苦笑し、多少気疲れした様子だが笑みを見せる余裕はあるらしい。
バロックワークスへ潜入するほどの度胸を持っていても、これほど密接に海賊という存在を見た経験はなかった。そのため驚きもひとしおといった様子である。
三人は戸惑いが消えていない表情ながら、ルフィは意気揚々と歩き続ける。
そうして島で一番大きな酒場へ辿り着いた。
「着いた！　ここが一番でけぇ酒場か！」
「あんまりでけぇ声出すなって！　注目されちまう！」
勢いよく扉を開いて中へ足を運び、開けた場所が視界に飛び込んだ。
地上五階建て、それだけでなく地面を掘って地下のフロアまで設けられているようで、一階から見れば上だけでなく下にも伸びて壮観である。
店の中央が吹き抜けになって大穴が開けられ、縁には欄干、一番下まで眺めることができた。
多くの人間、当然海賊だろうが、酒場らしく騒いで酒を飲んでいる風景だった。
真っ先にルフィが欄干まで駆け寄り、吹き抜けから天井や一番下ま

で眺める。
心が躍る風景だ。
喧騒を耳にしながら初めての光景を目にて、彼の笑顔はさらに上機嫌になっていく。
「うっはぁ～！　すんげぇでけぇなぁ！」
「こ、これが酒場か？　なんちゅーでかさだよ」
「すごい……海賊って、私の想像を遥かに超えてるわ」
「海賊がって言うか、これは普通じゃないわよ。なんて規模なの……」
四人で辺りを見回し、巨大過ぎる酒場に感嘆の声を出す。
しかし笑顔で居れたのもほんの一瞬。
一通り見回した後、突如悲鳴が聞こえてきたのだ。
「ぎゃあああぁ～っ!?」
「なんだ？」
「悲鳴だろ今のはっ。まさか早速トラブルか？」
声の出所を探して視線を走らせれば、二段下のエリアで騒ぎが起こっているらしい。
あまりにも悲痛な声だった。感情を我慢しようとしないそれを無視することなどできない。必然的に興味を惹かれ、ルフィを除く三人は緊張するも、船長と同じく身を乗り出して覗き込んだ。
蝋燭が数本立てられて、壁の窪みを利用した薄暗い一角で悲鳴が起こっている。
向かい合うのは二人の男。どちらも当然海賊だが、風貌はあまりにも違う。
木製のテーブルを挟んで対峙しており、大柄の男が手の甲にナイフを突き刺され、テーブルに縫い付けられていた。表情は歪んで脂汗を掻き、強面の顔が今にも泣き出しそうになっている。
当然右手からは血が流れてテーブルの上に広がる。
それを行ったのは逆立った赤い髪を持つ青年だ。
額にはゴーグルをつけ、上半身は裸で厚手のコートを羽織り、胸の前にはベルトでピストルを提げていて、今しがた使ったナイフも元は

そこにあった物なのだろう。
口元を緩め、その笑みはあまりにも凶悪。
自分より体の大きい男を睨みつけて、青年は怒りの念を放ちながら笑っていた。
ユースタス・〝キャプテン〟・キッド。
それが彼の名前である。
「どうした？　別に笑ってもいいんだぜ。ほら、笑えよ」
「ひぃっ、ひぃいいいいっ!?　わ、悪かった！　もう笑わねぇ！　頼む、助けてくれ！」
右手を貫かれた痛みが平常心を崩し、一瞬で恐怖に囚われ、支配される。
男は命乞いするようにして叫んでいた。その声は酒場中に聞こえるほどの大きさで、気付けば喧騒は落ち着き始めて彼らに集中している様子。
静けさが広まって、距離はあっても彼らのやり取りは聞こえてくるようだった。
キッドは名前さえ知らない男の口を右手で掴み、無理やり黙らせる。
その上で危険さを感じさせる声で呟いた。
「おれの声が聞こえてねぇのか？　どうした、笑えよ。面白かったんじゃねぇのか」
「むごっ、がっ……!?」
「それとも何か。こんな程度でびびっちまうくせに他人の野望を笑いやがったわけだ」
徐々に怒りの念が増してくる。最初は静かだったそれが燃え上がるように巨大になり、いつしか目にも明らかなほど形相が変わっていく。笑みは浮かべているのに恐怖を感じさせる顔だった。
左手でナイフを握ったまま、敵を逃がさないため捕らえた状態。
キッドは唐突に右腕を掲げた。
それだけで周囲の状況が変わってしまい、多くの人間が奇妙な光景を目にする。

近くにあった金属がふわりと宙を舞っていた。
まるで操られるようにキッドの右腕へ纏わりつき、ナイフや剣や銃、或いはフォークやスプーンでさえも彼の体にくっ付き、やがて金属の塊によって大きな腕が作られる。
これから何が行われるかなど誰が見ても理解できる。
捕まったままの男が涙を流して体を震わせた。
「何の覚悟もしてねぇ野郎が……」
「た、助けっ――!?」
「舐めてんじゃねぇぞォ!!」
巨大な腕が掲げられて、拳を握って勢いよく振り下ろされる。迷わず男の体を捉えると、下敷きになった木製のテーブルが破壊され、硬い石造りの床さえ陥没させてしまった。
倒れた男はすでに意識を失いかけている状態だろう。
それでも許さず、手からナイフを抜いて胸元へ仕舞い、左手で男の首を掴んで持ち上げる。
注目を浴びるキッドの姿は明らかに異常だった。
異様なほど攻撃的で並み居る海賊たちの中でも奇妙に光る。
首を掴んで男を吊り上げ、再び金属の腕が拳を握り直す。
辺りはいつの間にか彼らに注目して静まり返っていた。
それを知るのか知らぬままか、キッドは気絶寸前の男を睨みつけて言った。
「くだらねぇ。覚悟もできねぇ半端な野郎がケンカなんか売ってんじゃねぇよ。拳を突き出す勇気もねぇなら、陸の上で暮らしてろ」
酒場中央の大穴へ近付き、欄干の向こう側へ放り捨てる。
だがそれだけで許す気などない。
高速で振り切った巨大な金属の腕が、まるで砲弾のように撃ち出された。
「てめぇみたいな奴が一番ムカつくんだ。消えろ！」
悲鳴すら出せずに拳が当たり、男は無抵抗に運ばれ、壁に激突した。
拳に押し潰されて壊れた壁に磔となる。気絶した男の体は無数の金属によって支えられて、一部は肉体を貫いて石の壁へ突き刺さって

いるらしい。
その様を見ていた大半が顔をしかめ、一部は面白いと笑みを浮かべる。
身を乗り出して眺めていたルフィたちは顔をしかめた部類だ。
つまらなそうに腕を降ろすキッドの呟きが彼らの下まで届いた。
「チッ。つまらねぇ野郎だ」
苛立った声色で呟かれた一言に、思わずぞっとしてウソップが背筋を震わせる。
今目にしている海賊は紛うことなく危険人物だ。何がきっかけで襲い掛かったか知らないが、どんな理由であれ殺す気だっただろう。現在地からではやられた男の生死さえわからない。
逃げた方がいいのではないか。
気付けばそう考え、迷わずルフィに問いかけ出す。
「よし、帰ろう。この店はだめだなルフィ」
「なんで？」
「なんでも何も今見たとこだろっ！　なんなんだあいつ!?　海賊なのはわかるけどよ、明らかにやべぇ奴だろ！　絶対関わっちゃいけねぇ人間だ！」
「そうか？　別におれ負けねぇよ」
「おいおいおいっ、妙なこと考えんなよ！　トラブルはごめんだ！　おれたちはアラバスタへのエターナルポースを手に入れに来ただけで、それ以上のことは必要ねぇんだから！」
「あいつ強そうな奴だなぁ」
「興味を持つなぁ～!!　そうだ、肉食おう！　おれの小遣いで奢ってやるぞ！」
ルフィはすでにキッドへ興味を持っている顔だった。見つけたばかりの彼を強者と認めて、普通ではない力を見て好奇心が掻き立てられたようだ。
そんなルフィを見つめ、こちらにこそ興味を持った人間も居たらしい。
入り口の傍ら、窪みを用いた一スペースには複数のテーブルとイ

ス、そこには一つの海賊団。
前かがみで座っていた男が唐突にルフィへ話しかける。
「あいつが気になるか？」
「ん？」
「名はユースタス・〝キャプテン〟・キッド。懸賞金はおまえより上。近頃じゃ頭一つ抜きんでた実力と凶暴性で名を売ったルーキーの一人だ。もっとも例の新聞で話題性じゃ敵わねぇがな」
「誰だおまえ？」
その男、白い豹を思わせる柄の帽子をかぶり、細身で目の周りには濃い隈。見た目からして危険な雰囲気を纏っていることがわかる人物だ。傍らには身の丈ほどもある長刀が置かれ、背後に居る部下だろう者たちは皆が揃いのツナギを着ている。中にはなぜかシロクマも居た。
ナミが気付いた様子で短く息を呑む。先頭でルフィに声をかけたのは手配書で見た顔だった。
近頃急速に名を上げている海賊の一人に違いない。
確か名前は、トラファルガー・ロー。
〝死の外科医〟の異名を持ち、起こした事件は数知れず。知名度で言えば先程聞かされたユースタス・キャプテン・キッド、或いは麦わらのルフィにも匹敵する。
彼は何やらルフィに興味を持っている様子で、問いには答えず自らが尋ねた。
「麦わら屋……おまえ、何人殺した？」
「ひぃっ。な、なんだこいつ、薄気味悪ぃ……！」
「〝死の外科医〟トラファルガー・ローね。なんでこの島にっ」
ウソップとナミが呟くものの意に介さず、あまりの迫力にビビが硬直していることにさえ興味を持とうとせずに、ローはにやりと笑ってルフィを見つめていた。
対して、ルフィも彼を見つめ返して唇を結ぶ。
異様な空気である。
沈黙が重苦しく、傍で見ていた三人は息を呑む。だがローの仲間は

リラックスしたままだ。
その時、空気を切り裂くようにして大絶叫が大気を揺らす。
声を出したのはキッドであった。反応してルフィがそちらを見やり、つられて三人も、ローも大穴の下へ目を向け、三段下にある姿を見つめる。
キッドは天井を見上げ、両腕を広げた姿。
広大な酒場に居る全員へ聞かせるために声を張り上げていたのだ。
「ここに居るてめぇらに宣言しておこう！　おれはいずれ、海賊の王になる！」
耳にした途端にルフィが眉間を動かした。
直感で感じ取ったウソップが血相を変える。
「文句がある奴は前へ出ろ！　一人残らずこの場で始末してやる！　さっきの奴みてぇになりたい奴は居るか！　それともここに居んのは根性無しばかりかァ！」
更なる戦いを求めて挑発するかのように。
高らかに声を響かせたキッドは辺りを見回して叫んでいた。目つきは鋭く、狂気を感じさせるほどの強さを映し、まだ満足している様子ではない。
気付けば彼の周囲にある金属が揺れていた。
ルフィはじっと彼を見下ろし、いつの間にか真剣な顔に変わっている。
まずいと思ったウソップが彼を止めようとするのと同時、ローがキッドを見下ろして呟く。
「フッ、噂通りの凶暴性だな。焦りやがって」
「お、おいルフィ、わかってるよな？　あんなの無視しときゃいいんだ、無視無視。わざわざ答えなくてもおまえが海賊王になるってことはおれたちがわかってる――」
窘めようとしたのだろう。しかしルフィがウソップの声を聞き入れたようには見えない。
ウソップに加え、ナミとビビも揃ってあっと声を出した。
ルフィはひらりと欄干の上に立ち、絶妙なバランスを保ったまま

キッドを見下ろす。
「おいおまえェ！」
「フン、少しは骨のある奴が居たか」
欄干の上で腰に手を当て、堂々と立つ。
その瞬間、声を出したことによって酒場中の人間から注目されていたようだ。多くの視線が向けられるのだがルフィ本人は一切気付かず、今はキッドにのみ集中している。代わりと言わんばかりにウソップやナミが動揺を深め、目まぐるしく変わる展開にビビは全く対応できていない表情。
きっかけはただ一つ。聞き捨てならないセリフを聞いた。
目の色を変えたルフィが、キッドへ向けて言い切る。
「おまえ、そりゃ無理だろ」
「アァ？」
「おぉいルフィくんっ、だから待てって――!?」
「海賊王になるのはおれだぞ」
心底呆れた、という表情だった。
先程仕留めた男もそうだが、大抵は壮大な野望を語れば笑い出してしまうもの。今まで彼は何度か笑われた経験がある。しかし今、初めて笑わなかった男が現れた。
そいつは確かに、おまえじゃ無理だと呆れていたのだ。
キッドの顔つきが一瞬で変化して怒りに染められる。
悲鳴を上げるウソップとナミがルフィを下ろそうとする中、静まり返った酒場にはその声もまた響いていた様子。その場に居る多くの者があっけらかんとした決意を耳にしている。
新聞で見た顔だと気付くのも無理はない。一部の者たちはちゃっかり反応していた。
彼らより一段上に居た海賊団は、船長が欄干に近寄ってルフィを見ていた。
体格のいい体に黒い帽子と服装。顎には×型の傷。
新聞で一躍話題となったルーキーの登場に沸き立つ酒場の中で、やけに冷静な面持ちのまま彼を見据え、事の次第を見守ろうとするかの

ような海賊が居る。
「船長、あいつは例の……」
「そうだな。海軍の不正を暴いた海賊」
海賊、X（ディエス）・ドレークはどこか複雑そうな面持ちでルフィを見つめ、決して手を出すことなく行く末を見定めようとしていた。
そこからさらに二段ほど上がり、入り口から見れば三段ほど高い位置にはスーツ姿の海賊たち。
テーブルマナーを守って食事する小柄な中年の男が居て、部下が彼に報告する。
「頭目（ファーザー）、麦わらです。例の新聞に載っていた」
「騒々しい奴らだ。まぁいい、お手並み拝見といこう」
煩わしそうに答えつつ、布巾で口を拭った小柄な男が立ち上がる。
ファイアタンク海賊団の船長、カポネ・〝ギャング〟・ベッジもまた、傍観に徹することを決めたらしい。大穴へ歩み寄って眼下に見える二人の姿を視界に捉えた。
多くの海賊たちが注目している。
対象は二人、何かを始めそうなルフィとキッド。
自然な様子で二人の間には剣呑な空気が流れ、当人のみならず周囲の者もそれを理解している。ついさっきの出来事から考えても戦闘が始まると見るのは当然だった。
長らく二人は見つめ合い、言葉を止める。
沈黙の後、やがてキッドが攻撃的な笑みを浮かべた。

UNLOCK

がやがやと喧騒が続く町中を歩いて、周囲の光景は圧巻である。
航路屋と呼ばれる店を目指す三人はアニタに先導されていた。
普通に見ればひどく荒れた町中にしか思えない。汚らしいと言えるほど地面や建物の壁が汚れている。酒、残飯、或いは誰かの血がこびりついているようだ。
死体が転がっていないのが不思議なほどの様相だろう。
ただ歩いているだけでも殴り合いをしている人間や、或いは剣をぶつけて殺し合っている人間さえいくらでも目にすることができた。そのせいで新鮮な血液が地面に滴りもする。
今やすっかり戦闘に慣れ、血にも慣れたはずのシルクでさえ眉をひそめる光景。
まだ歳も若く、これほど濃密な海賊の風景に慣れていないビビは、今頃どれほどの衝撃を受けているだろうか。イガラムを筆頭に二人まで心配するのは不思議ではなかった。
「えげつねぇ場所だな。島民全員がこれか」
「うん。一度来たら忘れないだろうね……キリはここに慣れてるのかな」
「あぁっ、ビビ様、今頃恐怖で言葉も出なくなっているのではないだろうか。まさか海賊たちの島がこれほど危険な場所だったとはっ。やはり私がお傍でお守りした方が……！」
「いい加減腹括れおっさん。そりゃおれだってビビちゃんを守ってやりてぇが、今更何言ったところで遅いだろ。ルフィに任せときゃ大丈夫だ」
やはり心配するなというのは無理なのか、相変わらずイガラムは嘆いてばかりだ。サンジもそろそろ嘆きの言葉に飽き飽きしている顔。雰囲気は決して良くはない。
変わるきっかけを与えなければと、シルクが前を歩くアニタを見た。
彼女は一定のペースで進み続けており、背後のやり取りに興味を示

さない。
打ち解けたいとの思いもあってやさしく声をかけてみる。
「アニタちゃん、だよね。キリとはどういう関係なの？」
「別に。ただの知り合い」
「確かキリ兄ぃって呼んでたよね。仲良いんでしょ？」
「仲良いって言うか、変な人だよ。よくわかんない。ふらっと来てふらっと帰るだけだし」
アニタの態度は決して友好的な物ではなかった。単純に興味を持たないのだろう。
仲間の話題とあって気になった様子でサンジも耳を傾け始める。
シルクはめげずに笑顔で話しかけた。
「キリとはどうやって知り合ったの？」
「ミー姉ぇとマー姉ぇが知り合いだったんだって。昔は生意気だったらしいよ」
「へぇ。アニタちゃんと会った時は？」
「もう今の感じ。ふにゃふにゃしてるし、本心は見せようとしない。本人も小さかった時とは変わったって言ってた」
「そっか……アニタちゃん、お姉さんが居るんだね」
「血は繋がってないけどね。あの二人よりはキリ兄ぃの方がめんどくさくないよ」
やれやれと首を振ってアニタが嘆息する。
姉が居る、との言葉に反応したのはシルクだけでなく、サンジも同じだった。明らかに目の色が変わって期待感が表情に表れている。想像するだけですっかり頬が緩んでいた。
そのことに気付いてシルクもまた、呆れた調子でやれやれと首を振って溜息をつく。
「お姉さんが居るのか。どんな人なんだ？」
「ただの変人だよ。ミー姉ぇは根明で、マー姉ぇは根暗。どっちもバカが付くほど本好き」
「そうか……一度会ってみたいな」
「あっそ。会ったらがっかりすると思うけど」

あくまで感情を感じさせない様子で話していた。
道案内を頼まれただけ。そんな態度で歩くアニタはつまらなそうな顔である。
可愛い顔をしているのだが態度は素っ気なく、服もボロボロで薄汚れている状態。もったいないとシルクが思うのも当然だろう。せっかくの素材が生かされていない。
気になった彼女は素直に問うてみた。
自身も人のことは言えないとはいえお洒落に興味がないのは少女らしくないと思う。
「そういえば、どうしてボロボロの服着てるの？　他に持ってないのかな」
「持ってる。家に帰ったら着替えるよ」
「え？　それじゃなんでその服を？」
「見た目が弱そうだった方が敵が油断するってキリ兄ぃが言ったんだ。小奇麗な格好してるよりこういう方が相手に舐められるし、もしもの時襲い掛かるなら油断させた方がいいから」
「そ、そうなんだ。そんな理由で」
「悪影響だな。あいつの言葉は」
聞いていたシルクが苦笑してサンジが眉をひそめる。
話を聞いていればやはり仲が良いのだろう。
微笑ましく思うシルクは肩をすくめ、振り返ろうとしないアニタに笑いかけた。
「本当にキリを慕ってるんだね。それとも、好きなのかな」
「そんなんじゃない。あの人もめんどくさい人だし、それに……あたしを置いて行ったしさ」
背を向けていて見られなかっただろうが、わずかに顔が曇って俯く。そう言ったアニタはどこか寂しげな表情に変わり、多少とはいえ声色も変化していた。
何やら事情がありそうだ。
シルクやサンジのみならず、冷静さを取り戻したイガラムも空気の重さを知る。

かくして、細い路地へ入り込んでついに目的地を発見した。
アニタが指し示して説明する。掲げられた看板は砂時計のような形であった。
「あれが航路屋だよ。エターナルポース専門で売買してる」
「そんな店まであんのか」
「探せば変わったお店もありそうだね」
「シルクちゅわ～ん！　あとでデートがてら回ってみなぁ～い！」
「あはは。面白そうだけど、用事が済んだらみんなと合流しないとね」
若干空気も変わって和やかになりながら、扉を開けて店へと足を踏み入れる。
こじんまりとした店内だった。
薄暗い店内の明かりは壁に掛けられた数本の蝋燭。小さな火が店内を照らしている。店内には四つの棚が置かれていて、そこには砂時計型の物、エターナルポースが無数に並べてある。
入り口から真っ直ぐ伸びた通路の先にはカウンター。
そこに一人の老人が座っていた。
アニタが先頭となって棚の間を歩き、カウンターへ足を運ぶ。サンジ、シルク、イガラムも後ろから続いた。店主の男は声もかけずにじっと彼らを見ている。
最初にアニタが到着し、手を上げて声をかけた。
それからようやく店主が口を開く。
「じいちゃん、客連れてきたぞ」
「いらっしゃい。うちなら大抵の航路は手に入るぜ。どこへ行きたい？」
「はい。我々はアラバスタ王国へ向かいたいのですが、サンディ島へのエターナルポースは」
「ない」
イガラムが前へ出て口を開くと同時、店主が簡潔に返答した。
その一言で三人の表情が変わる。
「ない？　それは本当ですか？」

「本当だ。嘘なんかつかねぇ」
「な、なぜ」
「あいつだよ。例の七武海のせいだ。クロコダイルがサンディ島に拠点を置いてからエターナルポースの流通がダメになった。近頃は一つも見てねぇな」
「どういうことだ？」
イガラムが動揺する一方、事情が知れずにサンジが首をかしげる。
反応したのはシルクだった。海賊になる前から新聞を読んで世界の動きを知っていた彼女は、高名なクロコダイルに関する噂も耳にしている。多少は情報も持っているらしい。
「クロコダイルは七武海として、拠点にしているサンディ島に来た海賊を狩ってるんだよ。だからここ数年間、アラバスタ王国が海賊の被害にあった回数はゼロ」
「まるで英雄だな。その話だけを聞いてりゃ、だが」
「そうだ。クロコダイルは国を守ることで英雄の仮面を被り、自らの素性を隠したのだ」
後を追うようにイガラムが説明する。バロックワークスに潜入して情報を集める内に理解した。かの男は狡猾で、計画のために敢えて海賊ではなく英雄になろうとしたのだろう。結果から見ればそれが功を奏している。バロックワークスは、海賊島にすら知られていないようだ。
イガラムの言葉を聞いた店主は訳が分からないと首をかしげている。
その表情から見ても情報は届いていないらしかった。
話を理解したサンジが顎に手を添え、真剣な顔で頷く。
理解の早い彼は言葉を受け取って、確かめるため呟いた。
「なるほど。この島は海賊しか居ない場所だ。狩られると知ってて行くバカも居ねぇし、売れもしねぇならわざわざ用意する気も起きねぇか」
「そういうこった。今のアラバスタじゃ商売ができねぇ」
「そ、そんな……なんとかなりませんか店主」

「ねぇ物はねぇんだ。どうしようもねぇな」
「でしたらせめて、アラバスタに近い島のエターナルポースを頂きたい。急を要するのです。それならばあるのではないですか？」
「まぁなくはねぇが」
店主はカウンターに頬杖をつき、やる気のない態度であった。しかし何かを考えている素振りはあるようで、すぐには返答を出さずにしばし黙り込む。
イガラムを見て、次いでサンジとシルクを見やり、ふむと頷く。
口を開いた彼は初めて笑みを見せた。
海賊島に住む以上、彼もまた海賊。
すでに海に出ることは無くなっていたが生き方は変わっていない。
正面から頼んで素直に頷く人間ではなかった。
「どうだいあんたたち。取引しねぇか？」
「取引、ですか」
「何だってんだ急に」
「おーいばあさん、客人だ。例のあれ持って来い」
店主が背後を振り返って言う。すると幾ばくもせず扉が開いて老婆が現れた。
身長は低く腰は曲がり、歩む速度も遅い。だが足取り自体はしっかりしている姿。皺くちゃの顔には眼鏡があり、白髪は頭の天辺でお団子を作っている。
老婆は眼鏡の位置を直し、客人の顔をざっと確認する。
それから店主を見た。
「なんだい、この子たちに任せる気かい？」
「ほれ、新聞で見ただろ。ビロードんとこの紙坊主と写ってた奴らだ」
「あぁ～そうだったね。それなら腕のない連中よりはマシかね」
顔を見回してすぐの言葉である。
まさか気付かれているとも思わず、シルクとサンジは驚いて顔を見合わせた。
「知ってたんですか？　私たちのこと」

「知られたくないなら情報の取り扱いには気を付けなよ、かまいたちのお嬢さん。世界中どこにでも目と耳があるもんさ。特にこの島は情報の坩堝だからねぇ」
「シルクちゃんの能力まで知ってんのか？　あんたら、何もんだよ」
「なぁに、今はすっかり枯れちまった元海賊だ。おかげで海に出るのも億劫になっちまった」
低く笑う店主が言い終え、奥の戸棚から何かを取り出した老婆がカウンターへやってきた。
そこへ置かれたのは一通の手紙とエターナルポース。
頼みがある、と彼女が話し始める。
「私らもう操船なんざ厳しいからね。ある島に私の古い友人が居るんだけど、何がきっかけか、殺し合いを始めちまった。やめろと言ったけど掟だの誇りだの言ってちっともやめようとしない。多分今頃はまだやり合ってる頃だろうねぇ。そいつらにこの手紙を渡して欲しいんだ」
「そうすりゃアラバスタ付近の島のエターナルポースをやる。代金はいらねぇ」
「どうか届けてやってくれないかねぇ。ついでに言ってやっておくれ。親友同士で殺し合うのはいい加減やめろ、海賊にとっちゃ掟なんざクソ食らえだってね」
店主と老婆、夫婦揃って頭を下げた。
三人は顔を見合わせて困惑し、答えに詰まる。
大した用事だとも思わないため良い提案だろう。普通に考えれば受けるべき。しかし忘れてはならないのは彼ら二人も海賊であって、その言葉の裏に何が潜んでいるかわからないということ。
危険な可能性はある。尚且つ急ぐ旅の中で寄り道がどれほどの影響を生むかわからない。
最も問題視すべきだったのは三人の中に決定権を持つ者が居なかったことだ。この話をルフィかキリが聞いていればすぐに決断するだろうが、サンジとシルクはその二人に対する気遣いがあって即決しきれず、イガラムはビビの意見を知りたいと逡巡した。

伸るか反るか、二つに一つ。
迷う二人を見て真っ先に口を開いたのはサンジだった。
「わかった。しっかり送り届けてやるよ」
「サンジ、いいの？」
「他に方法がないようだしな。ルフィとキリが聞いても多分同じ決断をするさ」
「うん。私もそんな気がしてた」
「わかりました。では私も同意しましょう」
前に出たサンジが手紙とエターナルポースを受け取ると、すぐに店主が新たなエターナルポースをカウンターへ置いた。そちらはシルクが手に取る。
彼らが受け取ったのを見て店主と老婆が笑う。
友好的で、一方では危険な何かを感じる笑みだった。
「いいかい、受け取ったからにはやり遂げなよ。約束を違えれば良くないことが起こるからね」
「その場に居なくても確認できるって意味か？」
「そういうことさ。海賊の世界舐めんじゃないよ。こっちはもう百年近くやってんだ」
「おっかねぇな」
煙草の煙を天井へ向けて吐き出し、サンジが苦笑する。
おそらくハッタリではない。初めて会ったシルクの能力まで言い当てたのだ。どんな方法で誰に聞いたのか、すでに麦わらの一味に関する情報を掴んでいると思われる。
この先、常に気をつけなければならない。それを教えられたようだった。
サンジは表情を引き締め、笑みを浮かべたままでひやりとした物を背筋に感じる。
砂時計に似た台座の中に透明な球体があり、その中に指針があるエターナルポース。これには必ずどこを指しているのか、島の名前が台座に刻まれている物だ。
シルクは自身が持つ物の行先を見た後、サンジが受け取ったそれを

ちらりと見る。
老婆の友人が居るという島。
一体どんな場所なのか。気になった彼女が老婆を見て尋ねた。
「おばあさんの友達が居る島、なんて名前なんですか？」
「名はリトルガーデン。なぜそう呼ばれたのかは行けばわかるよ。あの二人に会えばね」
笑みを深めた老婆の姿にはなぜかぞっとするものの、シルクは頷くことで反応した。
行けばわかる。結局はいつも通りということだ。
アラバスタへ直行できるエターナルポースは手に入らなかったが、近くまで行ける航路はなんとか手に入れることができた。用を終えた三人はアニタを連れて店を出る。
自らの役目は済ませて、次はどうしようかと店先で足を止める。
まずは目的の物が手に入らなかったことを仲間たちに伝えなければならないだろう。そう提案したシルクは三人の顔を見回した。
「アラバスタの前にちょっと寄り道だね。みんなに教えないと」
「受けちまった以上は仕方ねぇか。ルフィは確か酒場に向かったはずだな。アニタ、この島で一番でかい酒場の場所、わかるか？」
「また案内？　そりゃわかるけど」
「どうかした？」
サンジの問いにアニタが渋い顔をしたのを見て、思わずシルクが尋ねる。すると彼女は頭の後ろで手を組み、出会ってから初めて笑みを浮かべたというのに、それが妙に悪そうな顔だった。
「あそこは行かない方がいいと思うけどね。今の時期は特に」
「どうして？」
「だって荒れてるから」
にやりとした笑みを見て、咄嗟にイガラムの顔色が変わる。
「荒れている？　ハッ!?　ビビ様っ!!」
やっと落ち着いたというのにアニタの一言で再び火が点いたらしく、焦りを抱いたイガラムはまたしても大袈裟にビビを心配し始めた。

これにより他の三人は必要以上にせっつかれ、一行は酒場を目指し始める。
なぜ荒れるのか。特に今の時期が最も顕著なのだという。
当然道中その質問はされた。
答えたアニタは悪戯っぽく笑い、元来の性質が現れたのか、物おじせずに言い切った。
明日には島中が楽しみにするほど大きなイベントがある、と。

＊

「ゾロには話しておこうかと思って」
人目に付かない細い道を歩きながら、キリが隣を歩くゾロへ話しかけた。
喧騒は遠くになり、彼らが居る道は薄暗く、広い道に居た頃よりもずっと静かになっている。おかげで声も聞き取りやすい。二人は会話に集中していたようだ。
緊迫した空気を感じ取っている。ゾロは厳しい表情であった。
キリの過去を知り、変化を感じたのはつい最近のことだ。
時にはこうして二人になる瞬間もあったとはいえ、過去について説明されたことはなく、本人の了承があって明かされた今では以前までの雰囲気とも違う。居心地が良いとは言えない。
真剣な声に耳を傾け、微笑をそのままに語るキリの言葉を受け止める。
「この先は正攻法だけじゃ生き残れない。ボスの件だけじゃないんだ。ボクはこれから、この一件が終わった後のことを考えて動くよ」
「具体的には」
「まだ決めてない。チャンスがあればって感じかな。でもこの島に来たのはそういう意味合いもあるんだ。ここなら名のある海賊に会うのも簡単だ。その中で話のわかる奴を見つければいい」
「海賊に会う気だったのか？　何するつもりだよ」
「生き残る術を見つけようと思って。使える人間が居ればね」

「使える人間、か」
含みのある言い方だ。すでに何か考えている。
伊達に傍で見てきた訳ではない。ゾロは尋ねずとも理解している顔だった。
「この先、状況次第によってはボクが船を離れることがあるかもしれない。その時はゾロとサンジに任せるよ。ルフィを支えてやって欲しい」
視線を感じてそちらを見れば、呑気に見せて真剣な視線だと思った。
しかし承諾して良いものか。
不思議と嫌な予感を覚えて柄にもなく心配してしまい、舌打ちの後で苦々しい顔になる。
「そういうのはおまえの仕事だろ。あいつの傍に居んのが役目じゃねぇのか」
「もちろんそのつもりだけどさ。未来がどうなるかなんて誰にもわからない」
「おまえ、妙なこと考えてねぇよな」
「心配しなくても危ない橋なんて渡らないよ。ボクだって命は惜しいんだ。ただ、支えるために敢えて離れなきゃいけない状況があるかもしれないでしょ？　もしもの話だって」
「おれとコックに任せるってか」
「二人はうちの二枚看板だ。サンジは女好きが玉に瑕だけど頭が回るし、冷静に最善策を選べる判断力を持ってる。仲間のバランスも取ってくれるしね。サンジがみんなを指揮する分、ゾロは一歩下がったところから状況を見てくれればいい」
「……そこまで考えといて、なんで」
また舌打ちを一つ。がしがしと乱暴に頭を掻く。
吐き出しかけた言葉を飲み込み、ゾロは大きく溜息をついた。
「ルフィは信頼してるかもしれねぇがな、おれはおまえを信用しきれねぇ。バカな真似するつもりならぶん殴って止めるぞ。忘れんな」
「あはは、ありがと。ぶった切るって言わない辺りやさしいよね」

「うるせぇ。斬るぞ」
「うん、そっちの方がらしいや」
歩を進めて目的の場所を見つけ、軽やかな足取りで扉の前に立った。
人間一人がやっと通れるだろう道の半ば、曲がりくねった壁に木製の扉がある。目立つような看板は掲げておらず、人が住む家屋にも見えない。ひどく異質な光景であった。
当然の反応としてゾロは訝しむ顔つきになる。
しかしキリはその扉を見て足を止めた。
「着いたよ。ここだ」
「店に行く予定じゃなかったのか。こりゃ店じゃねぇだろ」
「普通の人にとってはね。入るためには癖があるんだ」
そう言ってキリは扉をノックし始めた。
最初に二回。次いで三回。最後に五回。リズミカルに、且つはっきりと間を空けて叩く。それが終わると先に左側へドアノブを捻り、すぐに右側へ捻った。
本来なら開かないはずの扉が開き、二人の前に薄暗い空間が現れる。
視界に入ったのは地下へ向かう階段だった。
「開けるにはコツがあるんだよ。覚えた？」
「隠れた名店ってやつか」
「そんな感じ。暗いから足元気をつけてね」
一人通るのがやっとという細い階段を、キリが先頭になって降りていく。
その後ろからゾロが続いた。
明かりがないため通路は暗い。足元を確認することすら困難なほどだ。
体感では二メートル程度の距離を降りて次の扉に辿り着く。
慣れた動作でキリが扉を開けて、一気に視界へ光が飛び込んだ。
狭い店内だ。
入り口から見てすぐの場所にL字の形でカウンターがあって、人が

座れる席は九つ。いくつかの照明があるがやはり薄暗くて雰囲気はある。店内には蓄音機による音楽が小さく鳴っていた。
どうやらバーのようだ。
カウンターの後ろに置かれた棚に酒瓶が並び、その前に妙齢の美女が立つ。
ドレスを身に纏い、金髪をボブカットにしており、男なら誰もが見惚れるほど美しい。しかし彼女の正確な歳を知る者はおらず、また本名も知られていない。
謎に包まれた人物はマダム・ナンシーと呼ばれていた。
扉が開いてキリが現れたことに気付いた彼女は、少し驚きを含んで微笑む。
「あら、いらっしゃい。話題の男がやってきたわね」
「こんばんはマダム。久しぶり」
軽く手を上げて挨拶する。その程度は当然と言えるほど顔見知りだったらしい。
促したことで先にゾロが席へ着き、その隣にキリが座る。入り口に近いのはキリになった。
腰を落ち着ければすぐにナンシーが声をかけてきた。
どことなく嬉しそうな笑顔で、二人を歓迎する態度がある。店の状況や入店条件を考えればよほど暇だったのかもしれない。早くもグラスを準備する動きさえあったようだ。
「しばらく見ないと思ったらイーストブルーに居たのね。どうやって戻ったの？」
「政府の人間がレッドラインを越えるって聞いたんだ。ちょっと忍び込ませてもらったよ」
「そう。それだけで大冒険だったでしょうに。ふふ、まさかまた戻ってくるなんて」
「今度は海賊としてだよ。前みたいに放浪の身じゃない」
背筋を伸ばして座るキリは笑顔でそう言う。
ゾロはちらりと彼の横顔を見た。放浪の身と発したからには、おそらくバロックワークスに所属していたことは知らせていないと予想

される。やはり秘匿されているのだろう。
敢えてバラしてやる必要もないと考え、視線を切って口を噤んだ。
グラスを二つ持ったナンシーは二人へ振り返る。
ただのバーに来たかったのか。そう思ってしまうほど普通の光景だった。
「何か飲む？　時間はあるのかしら」
「いや、今頃仲間が暴れてるだろうからね。早い内に合流したいんだ。早速で悪いんだけど本題からでいいかな？」
「久しぶりなのにつれないわね。仲間って麦わら帽子の彼よね？」
「うん。中々危険な人なんだ」
「そっか。できればゆっくり話も聞きたいけど、仕方ないわね」
苦笑して肩をすくめれば納得してくれたらしい。
話を聞く準備ができて、カウンターに両肘をついてキリが問いかけた。
「ロギアに対抗する術が欲しい。できれば急ごしらえで使える物」
「ロギアねぇ……何かあった？　あれは希少種だから、食べた人間なんて限られるけど」
「うちの船長が海賊王になる。そのために邪魔する奴は排除しないと」
「大きく出たわね。あなたはそれを承諾したの？」
「でなきゃわざわざここに来ないよ」
「フフ、それもそうかしら」
ナンシーもまたカウンターに手を置き、彼の顔を覗き込む。
「あるにはある。だけど何の能力者であれ、実力者たちは対抗策を持っていたとしても仕留められるとは限らないわ。彼らはそういう次元じゃないの」
「だろうね」
「ここを頼るのはその場しのぎ。本気で王を目指す気なら考えを改める必要があるわよ」
「噂で聞いた、覇気って力のこと？」
「ええ。〝新世界〟に居を置く海賊の大半がその力を使える。言い

換えれば覇気を操れない者が彼らを倒し、王になるなんて絶対に不可能。そのこと、ちゃんと理解してる？」
「時間ならある。今は前に進む力があれば十分」
いつしかキリの目の色が変わっている。笑みはそのまま、空気が張り詰めていた。
狂信的。或いは狂気的と言えばいいのか。
ゾロは静かに目を伏せ、数々の海賊を見てきたナンシーも思わず笑みを消す。
「必要になるならいずれ手に入れるさ。とにかく今はルフィが前に進むって決めてる。それならその道に立ち塞がる奴をどけるのがボクの仕事だろ？　七武海だろうが海軍大将だろうが、四皇だろうが、全部排除してルフィを王にするって決めてるんだ」
「あなた……変わったわね。すっかり私好みの海賊になって」
ナンシーも一瞬目を伏せ、改めてキリの姿を見て笑みを浮かべる。
理解しているのならば多くは言うまい。正直に言えば今の彼らを見ても脅威とは感じない。それを本人が理解しているのならばまだ伸び代はあるだろう。
手を貸してやることを決めた顔つきだった。
「ちょっと待ってて」
そう言ってナンシーは店の奥へ姿を消す。
店内に沈黙が降りた。音楽は流れているが空気の重さがあり、今まで通りではない。
ゾロは腕を組んで目を閉じたまま。
その隣でキリは自身の口元に手を当て、元に戻る努力をした。
感情を露わにするタイミングは考えなければならない。すぐに熱くなってしまうようでは武器としては使えないと理解している。これではまだ半人前だ。
しばしの沈黙の後、再びナンシーが戻ってきた。
その手には古びた木箱が握られていて、それがキリの前に置かれる。ナンシー自らが蓋を持ち上げて中身を見せ、その頃になってゾロも目を開けて二人揃って覗き込む。

入っていたのは一丁のピストル。
しかしそれ以上に大事だったのは、脇に置かれた小さな袋。弾丸にこそ意味があった。
「裏のルートで通ってきた。海楼石の銃弾よ」
「海楼石？　あれは政府しか扱えないはず」
「つまり、政府も海軍も一枚岩じゃないってこと。政府しか扱えないってことはそれだけ希少性が高いってことよ。必要な場所に流せば高値で売買される」
「いくら？」
「宝払いでいいわ。あなたの船長が本当に海賊王になれたら返しに来て」
ナンシーは胸の下で腕を組んで朗らかに笑った。
拒否はせずにキリが笑みを深めて箱の中身を受け取る。当人たちにとってはその行動自体が決意の表れとなったに違いない。その後多くを語ることはなかった。
「でも気をつけて。海賊王はそんなに簡単な道じゃない。苦労するわよ」
「上手くやるさ。もう諦める気はないから」
「応援してるわ。これは投資。いつか倍返しにして返してね」
「覚えとくよ。なんなら三倍返しで約束する」
「フフッ」
ちょうどキリが懐へピストルと銃弾が入った袋を仕舞った直後。
店の扉が開けられ、チリンとベルが鳴った。
新たに店へ入ってきた人物が居たらしい。目を向ければ髪の長い女性がヒールの音を響かせてカウンターまで歩み寄ってきて、キリのすぐ傍まで来た。
手に持っていた手配書が置かれる。
それから間を置かず、唐突にナンシーへ質問し始めるのである。
「人を探しているの。彼を見たことはある？」
「あら珍しい。ジョーカーの部下がわざわざここへ来るなんて」
ナンシーが呟いたことでキリが顔を上げた。改めてまじまじと女

性を見る。
整った顔をしている。しかし気になるのはそこではない。
今しがた耳にしたジョーカーという一言。
他を差し置いてもそれだけは聞き逃すことができなかった。
女性は煙草の煙を燻らせ、取りつく島もない態度。
ナンシーが会話を試みようとしても聞く耳を持たないのか、声は冷ややかな物だ。
「質問に答えてくれるかしら。この島に彼が来ているはず。調べて欲しいの」
念を押すように手配書を持ち上げ、ナンシーへ見せる。
彼女が何かを言うより先にキリがそれを覗き込んだ。当然名も知らぬ女性もそれを見、今まで興味を持たなかった彼の存在に気付く。
見せられた手配書は〝死の外科医〟トラファルガー・ローの物だ。
見覚えのあったキリは思わず口を開いて尋ねる。瞬間、女性は眉を動かした。
「ノースブルーのトラファルガー・ローか。へぇ、グランドライン入りしたんだね。それは知らなかった。つい最近だったのかな」
「何、あなた……」
「ねぇ、ここ座りなよ。君の話が聞きたいんだ」
自らの隣の席を軽く叩き、座るよう促す。唐突なのは彼の行動も同じであった。
意味が分からず、だが浮かべた笑みと態度から何か考えているらしいと気付いたゾロは、厳しい表情で彼に声をかけた。気を使って声は小さくなっている。
「おい、今度は何するつもりだ」
「ジョーカーって名前、ちょっと気になってね。知ってる？」
「いいや、知らねぇが」
「裏の世界じゃ有名だよ。これを無視する訳にはいかないでしょ」
「よくは知らねぇが面倒なことになるんじゃねぇのか」
「それはそれ。使える手は使っておかないと」
顔を突き合わせてひそひそしゃべり、話し終えると再び女性に顔を

向ける。
にこりと笑いかければ、なぜか彼女は固まっていたようだ。
手配書を持つ手がわずかに震える。
一瞬のそれも観察しながら問題ないとして指摘せず、あくまで友好的に声をかけ、自身に危険性はないことを暗に主張しながら座るよう促した。
「一杯奢るよ。無理にとは言わないけど、時間あるならどうかな？」
「あ、あなた……私を必要としてるのね」
「そうだよ。君がいいんだ」
些細な反応であっても見るからに挙動不審だ。視線は忙しなく動き、しかし確実にキリを意識して見つめて、理由はわからないがなぜか目は潤んでいるらしく、頬も紅潮してくる。
どうやら男に対する免疫がないのだろう。
好機とばかり、歯の浮くような科白を吐いた上で、そっと彼女の手を握る。
びくっと反応した女性はそれでも振り払おうとしなかった。
「君の名前は？」
「え、えっと、あの……ベビー5、です」
「ボクはキリ。よろしく」
「は、はい……」
変わった名前ではあるものの、ベビー5と名乗った女性はしおらしくなって席に着く。
物腰の柔らかい態度でキリが話しかけ、ベビー5はどこか心ここに在らずの姿で耳を傾ける。
情報を欲した故だろうがサンジのことは言えない光景だ。
頭を抱えたゾロはやれやれと溜息をつき、ナンシーは海賊らしくなったキリの成長を目にして、微笑ましそうに見守っているのだろう、まるで母親のような顔になっていた。

Ｃｒａｚｙ　ｇｒｏｕｎｄの王様（２）

螺旋を描いて突き出された拳と、巨大な金属の塊でできた拳が激突する。

時を忘れるほどの絶句。

衝突の際に生じた轟音が耳に残り、見ている距離など関係なく、大気が揺れる瞬間を感じた。その一撃はまさしく酒場中の目を奪うには十分過ぎるほどの力を持っていたのである。

正面から衝突したルフィとキッドは拳をぶつけて睨み合い、一瞬の拮抗で停止する。

直後には弾かれたようにルフィが後ろへ跳び、二人の間に距離ができた。

「ハッ！　言うだけあるってことか。おれの攻撃に耐えるとはな」

地面を滑りながら着地するルフィを視界の中心に捉え、金属を纏わせた右腕を振ったキッドは口の端を釣り上げて笑う。ひどく上機嫌なその笑顔は悪魔にも等しく見えた。

キッドが居たフロアでぶつかって数秒。再びルフィが駆け出したことで再開される。

突如始まった戦闘は、当人たちが予想していた以上に長引きそうだ。

実力は拮抗していると最初の一撃で理解した。この相手に勝つのは簡単ではないとすでに両者が認識しており、闘志は膨れ上がって、今や当初よりも表情が引き締まっている。

どちらも退くつもりはなかった。

前へ駆けるルフィは高速で両腕を動かし、予備動作を行う。

動きの性質からおそらく連続攻撃。腕が伸びたことを理解した上、一瞬で判断したキッドはその場で仁王立ちになって敢えて待ち、迎撃のため腰を捻って拳を握った。

「ゴムゴムのォ！」

「オラァ！」

敵が何かする前に叩き潰す。

そう決めて巨大な拳が突き出された。
迫る姿を見てルフィの表情が変化した。
あまりにも巨大過ぎる。彼自身の肉体ではなく金属が寄り集まっている物とはいえ、腕の大きさはルフィの全身よりも大きい。その拳による一撃は凄まじい迫力だ。
素早く繰り出す拳を連続で叩き込むものの、その程度では止められず。
キッドの拳が正面から彼を捉えた。
体が浮遊し、無理やり運ばれる。駆けた分をあっという間に帳消しにされた。
それだけに留まらず、拳の勢いは止まらない。
殴り飛ばされたルフィは壁に激突するまで殴り飛ばされた。
「うっ、いてぇ……!」
「余所見すんじゃねぇぞ!」
激突した衝撃で壁さえも壊れ、半ば埋まるようにしてルフィの動きが止まっていた。それを見逃さずキッドが飛び出して追い縋る。
巨大な腕を掲げて振りかぶっている。
目にしたルフィは当然回避行動を取り、壁から抜け出して即座に地面を蹴った。
轟音。キッドの拳が壁を破って突き刺さる。
しかしルフィには当たらず、間一髪で避け切っていた。
地面を転がって体勢を立て直し、すぐに駆け出してキッドへ迫る。
彼の体は打撃によるダメージを受けない。だがキッドの腕は様々な金属の集合体で、ただ単純な打撃とはそもそも性質が違う。現在ルフィの体は殴られた拍子に、サーベルやナイフの刃先が皮膚を突き破って血を流させていた。
敵の攻撃は通用する。それを知った上で尚も前へ出る姿勢は変えなかったようだ。
腕は巨大で、尚且つ壁に刺さっている。
すぐには動けないだろうと判断して地面を蹴って跳び上がった。
「こんにゃろっ、ゴムゴムの!」

「どうやら腑抜けじゃねえらしいな。だが！」
体を捻って腕を引き、金属の腕が素早く振るわれる。どうやら壁に刺さっていた部分だけ捨てたらしかった。そのため壁から抜くための労力を捨て、反応は予想よりずっと早い。
まずいとは気付くが跳び上がったルフィに選択肢などないだろう。
当初の予定通りに右足を振りかぶり、勢いよく伸ばして蹴りを放つ。
「スタンプ！」
「そんなもんが効くかァ！」
蹴りは素早かったはずだが、タイミングが悪かったのか間に合わず。
迫ってくる足ごとルフィの肉体を捉え、まるで裏拳を叩き込むが如く、長大な腕で殴り飛ばす。再び軽々と飛ばされた彼の肉体は酒場中央の大穴を越えて、同じフロアの反対側へ運ばれた。
窪みを利用した空間に滑り込み、多数置かれたテーブルや椅子をひっくり返す。
そこに居た海賊たちは悲鳴を上げて逃げ惑い、被害を恐れてあっという間に逃げ惑う。
見物するだけならまだしも巻き込まれたのでは堪ったものではない。そう思う程度には二人の激突は凄まじく、長年海賊をやっていても驚愕せざるを得ない迫力があった。
しかも勝負はまだ終わっていないのだ。
転がったテーブルを跳ね飛ばしてルフィが立ち上がる。
帽子を首の後ろに提げ、目は憤りを表す。一方的に殴り飛ばされたのを快く思っていない。
視線を受け止めたキッドは対照的に笑っていた。
立ち上がってくる姿を見て苛立つどころか喜んですらいる。
珍しく楽しい戦闘だ。ついさっき黙らせた男とはあまりにも違い過ぎる。これなら本気でやっていいだろうと考え、不意に金属を纏わせた右腕を掲げた。
「３０００万がどれほどのもんかと思ったが、予想以上じゃねえか。

頼むから簡単には潰れてくれるなよ。こっちも退屈してたんでなぁ」
「よぉし、おまえ覚悟できてんだろうな」
「ヘッ、そうだ。まだ折れるなよ……」
壁に突き刺さっていた金属片が、それ以外の至る所にある金属が、カタカタと揺れ出す。
独りでに宙へ浮かんだそれらは不思議と、キッドの右腕へと集まり始めた。
「ハァァァ……！」
「こいつ何の能力者だ？　わけわかんねぇな」
ルフィは窪みの中に立ったまま腕を伸ばし、両手で欄干を掴んだ。
自らを撃ち出す準備を終えてキッドの異変を目にする。
ただ腕を上げただけで金属を集めた彼の腕は、さっきの倍近くまで大きくなっていた。
それを見ながらもルフィは迷わず飛び出す。
ゴムの体質を使って銃弾の如く。真っ直ぐキッドへ向かった彼はすぐに腕を戻して拳を握る。
「ゴムゴムのロケット！」
「バカ正直な野郎だ。撃ち落としてやる！」
「落とされるかァ！」
真正面から向かってくる姿を目にして、キッドは掲げた腕を振り下ろした。
軌道上にルフィが居る。当たって落とせばいいだけだ。そう思っていたのだがルフィは宙返りするように空中でくるりと回転しており、真上を見上げていた。
関係ない。そう判断してキッドの動きは変わらず。
ルフィは足を伸ばして振り切った。
「ゴムゴムの鞭！」
頭上から落ちてくる腕の横っ腹を蹴りつけ、無理やり軌道を逸らす。
わずかとはいえ回避する可能性が見出せただろう。ただし尖った物が多いその腕を蹴って、そう浅くはない傷が彼の右脚に刻まれる。

それでも構わないと歯を食いしばった。
すぐさまキッドの傍にある欄干へ腕を伸ばし、掴む。ぐっと引き寄せるようにしてそちらへ移動すれば今度こそ回避できる位置だ。金属の腕は誰も居ない場所を通り過ぎようとしている。
一方でルフィはキッドへ迫っており、間近にまで来ていた。
接近してくる様は高速。常人ならば怯む物だが彼は決して動じない。
振り下ろしかけた金属から右腕を抜いて、自らの肉体のみで迎え撃った。
「ピストル！」
「フンッ！」
ガチャガチャと騒々しい音を立てて吹き抜けに落ちていく金属を無視して。
ルフィが繰り出した拳は勢いよく伸びてキッドへ届き、だが掲げられた左腕に受け止められる。影響はほんのわずかに後ずさらせたのみ。ダメージが入った様子はない。
吹き抜けからフロアへ戻り、腕を戻して再度向かい合う。
どちらも仕切り直しは選ばずに、視線が合えば自ら走り出して接近した。
「おおおおっ！」
「ウオオオラァ！」
接近すると両者同時にパンチを繰り出し、クロスカウンターの要領で互いの頬に突き刺さった。
背をのけ反らせても拳は引かない。
足を踏ん張り、その場に縫い付けた上、次なる打撃を送り出す。
そこからは純粋なる殴り合いである。
頬を殴って体勢が崩れ、姿勢が崩れかけるもその場で踏ん張り、敢えて逃げずに攻撃を受ける。この瞬間だけは意地だ。技術や冷静な振る舞いなど二の次で、ただ感情をぶつける姿。
殴られる度に血が熱くなり、キッドはついに笑みを消して血反吐を吐いた。

だがルフィはゴム人間。打撃には強く、ダメージはない。
攻防の中でそのことに気付き、舌を打ったキッドは自ら後ろへ跳んだ。
初めて退く素振りを見せたことでルフィが好機と見る。
改めて両腕を高速で動かし、追撃のため連続で拳を突き出した。
「ゴムゴムのォ……ガトリング！」
「チィ――！」
猛然と襲い掛かって、全身を叩く無数の拳。
鍛え抜かれた屈強なキッドの肉体が宙へ浮かんだ。
想像よりもダメージが大きい。先の殴り合いも加え、決して無視できる攻撃ではなかった。しかしキッドは地面に背が着くと同時に体を跳ね上げ、起き上がり、その場へしゃがむ。
顔を上げた直後に目を見開く。
すでにルフィは目前に迫り、後方に伸ばした腕を捻って、回転する拳を突き出す寸前だった。
「ライフルッ！」
強烈なパンチが腹を打ち、今度こそ勢いよく殴り飛ばされた。
キッドの体はテーブルをひっくり返して地面を転がる。その場に居た海賊たちが驚き、迷惑そうにしていて、咄嗟に生まれた怒りのあまり武器を手にする者も居る。
だがそれら全てを振り払い、勇ましく立ち上がったキッドは周囲の人間を弾き飛ばした。
彼らが手にした武器が独りでに宙へ浮いてしまい、彼の周りで旋回するのである。
悪魔の実を食べた、何らかの能力には違いない。ただその詳細は知れない。
わかることは、何の変哲もない金属が反応しているという状況。
ゴム人間であるルフィを切り裂くことは容易な相手だ。
「妙な体しやがって。てめぇも能力者だな」
「そうだ。ゴムゴムの実を食ったゴム人間だ」
「ゴム？　なるほど、道理で妙な感触しやがる訳だ。肌もゴムって

訳か」
「打撃なら効かねぇ！」
ルフィが駆け出して正面から接近する。
それを見たキッドは引き寄せたサーベルを両手に持った。
「打撃は効かねぇか。だが腹の傷を見る限り、刃を受け止めるのは無理なんだろ？」
「うん。無理」
素直に頷きながら右腕を後方へ伸ばした。ルフィは尚も接近してくる。
堪らずキッドも前へ出た。彼は剣士ではない。剣を使って敵を斬るよりも殴る方がよっぽど得意だろう。それでもこの場においては剣を使う方が有効だと判断した。
剣と拳。互いに敵へダメージを与える方法だが、方法の慣れは違う。
素早い接近と同時、ルフィが後方から引き寄せた腕を勢いそのままに前へ突き出す。握った拳はキッドの顔面を狙い、風を切って猛然と進んで、尋常ではない迫力だ。
しかと見つめ、キッドはその一撃を完璧に見切って避ける。
「ブレット！」
「フン――」
体は前に進んだまま、首だけを傾ければパンチが頬を掠って、少し皮膚を裂いて血が流れる。
受ければただでは済まなかった。しかし現状、直撃はせずにダメージはない。
好機を目にして今度はキッドが腕を振り上げる。
両手に握った剣を使った連撃が繰り出された。
彼の動きは剣士のそれではなく、ただ剣を握っただけの人間といった姿。そこに卓越した技術は感じない。それでも腕力や動きの速さ、これと決めた決断力は並みの人間の比ではない。見ているだけで迫力は相当の物。敵の命を奪うために容赦ない攻撃が行われていた。
ルフィは避けられた腕を引き戻しながらも、慌てて後ろへ飛び退

く。
乱暴に振るわれるサーベルを全て紙一重で避けていく。
キッドの動きは凶暴でいて的確。腕のない者なら最初の一撃で仕留められていた。この場においては彼の剣の腕が拙いのではなく、一瞬の判断で最善の動作を行うルフィが優れているのだろう。
剣の動きによって生ずる風に頬を撫でられながら、ルフィの顔は冷静だった。
頭を狙った一撃を倒れ込んで避け、転がるようにして地面に両手を着く。
反撃を試みたルフィは逆立ちに近い体勢から鋭い蹴りを放った。
「ふんっ！」
「チィ、ちょこまかと……！」
腕を使って防御して、攻撃の切れ目を選んでルフィが一度距離を取った。重力を感じさせないほど軽やかな動きは猿を連想させる。身体能力はキッドより上だ。
「鬱陶しい野郎だ。猿みてぇに動きやがって」
「うるせぇ！　猿を舐めると痛い目見るぞ、燃え頭！」
「ちまちまやってたんじゃ分が悪ぃ。ならこういうのはどうだ」
ルフィが足を止めたのを見て、キッドはなぜか両手のサーベルを手放した。しかし重力に従って地面に落ちるはずの二本は、空中でふわりと動きを止める。
切っ先は二本ともルフィを見ている。
不思議な光景に首をかしげる彼へ向け、指揮するようにキッドが右腕を振った。
「ブッ刺してやるッ！」
突如、サーベルが空を飛んでルフィへ迫った。
まるでピストルから放たれた銃弾。腕力で投げる速度より数倍は速い。
目を丸くしたルフィは反射的に反応し、その甲斐あってかギリギリで避けることに成功する。一方で直撃は免れようと脇腹や腕を掠り、更なる少量の血が宙を舞った。

「うわっ!?」
「避けやがったか。だがいつまで避けられる?」
右腕を持ち上げたキッドはさらに金属を浮遊させた。
サーベル、ナイフ、ピストル、フォークやスプーンまで。海賊たちの得物、或いは最初から店に置かれていた物まで彼の支配下に入り、空中からルフィに狙いを定めるようだ。
悪魔の実の能力による物とはいえ、やはり奇妙な光景である。
見上げたルフィは険しい表情で額に浮かんだ汗を拭った。
「くそ、変な能力だなぁ。今勝手に飛んできたぞ」
「てめぇにだけは言われたくねぇよ。せいぜい刺さらねぇように注意しろゴム人間ッ!」
腕が振り下ろされて一斉に金属が宙を駆ける。
その様は圧巻。自らに迫る光景は驚くほどの迫力と圧迫感を感じた。
しかしルフィは足を動かし、逃げるどころか前へ出て、嵐のようなその群れの中へ飛び込んだ。
跳躍に近い様子で地面を蹴って、一歩、二歩、三歩と着実に前へ進む。服に触れ、肌を裂き、体の傍を通っていく物体は肉体にダメージを残して通り過ぎる。一歩間違えれば取り返しのつかないことになる危険な状況だ。それを知りつつ、動きに迷いはない。
見開かれた目は理屈ではなくただ見たままを理解し、物体の着弾点を予想する。
その軌跡を避けて足を置く場所を選び、ルフィは奇跡的な前進を行った。
見ていた大半の海賊が驚愕する。
自ら飛び込む度胸と技量は年齢など関係なく、彼の実力を感じさせ、尚且つ認めさせる物だ。
能力を使役していたキッドもまた驚いているが、その程度で冷静さは失われていない。
彼もまた目を大きく開けてつぶさに観察していた。敵を仕留めるための一瞬を。

そしてその時を発見する。飛来する金属を潜り抜け、攻撃の機会を見つけたルフィが両腕を動かし始めたその瞬間、わずかに足が止まり、キッドはおもむろに笑みを浮かべた。
「ゴムゴムのォ！」
「そこだ！」
キッドの頭上にあった数本のサーベルが撃ち出された。
攻撃の雨が止みかけ、真っ直ぐ走るルフィの体に刃が突き刺さる。左肩、右脇腹、左太股、さらに高速で予備動作を行っていた右の拳。痛みと衝撃で一瞬表情が強張った。
だが強い一歩を踏み出して、自らの体を顧みようとしない。
迎撃を受けて尚ルフィは攻撃を行う。
「ハッ、捉えたァ！　こいつで――！」
「攻城砲（キャノン）!!」
動かした両腕の反動を使い、両手で突き出した掌底は予想だにしない威力を孕む。
キッドの腹を捉えた一撃は意識を失いかけるほど強烈だった。
受け身を取る余裕もなく、数十メートルは宙を飛んで壁に激突する。
衝突の瞬間に凄まじい轟音が起こった。
そこにあった空気が一変するほどの一撃。にやけた顔で観戦していた者たちはキッドの勝ちだと予想していたようだが、その予想を裏切ることができたらしい。
息を乱して立つルフィは体に刺さった剣を抜き、足元へ捨てた。
大量の血が流れ落ちて床に溜まる。ダメージは相当な物だ。
そうとは感じさせずに表情を引き締め、深く息を吐いて毅然として立つ。
崩れ落ちるように壁を離れ、しゃがんでいたキッドは床に手を着き、俯いている。そうしていたのはほんの数秒のこと。ゆっくりと顔が上げられる。
憤怒を表す表情は、敵を見定めた途端に笑みへ変わった。
気付けば瞳の中に狂気が生まれている。良くも悪くも彼の中から

余裕が消えている様子で、並々ならぬ破壊衝動に突き動かされるような、今までの比ではない何かを感じた。
キッドはゆっくり立ち上がり、笑みを浮かべたまま、込み上げてきた血が吐き出される。
「ゴホッ、ゲホッ……てめぇ」
「海賊王になるのはおれだ。おまえなんかに負けてられっか」
「上等だ。その言葉、後悔すんなよ」
緩慢な動作で両腕が広げられた。直後、異様な空気の動きを感じる。
先程と同じく、酒場の中で多くの金属が動いているらしい。だがその規模や数は今までとはあまりにも違う。まるで酒場中の金属が集められるかのような強さだ。
押さえていなければ飛んで行ってしまう。今回はそれほど強烈だった。
今や無数の金属がキッドの下へ集まり、両腕へと纏わりついて新たな武装を作っていたのだ。
以前に見せた物より大きな両腕と成る。
自身の本気を見せた後、キッドは静かに身構えたルフィを睨んで口を開いた。
「おまえはおれが潰す！　今、この場でっ！」
「だったら、おれはおまえをぶっ飛ばす。海賊王は一人で十分だ」
「抜かせェ！」
駆け出したキッドが猛然と挑みかかり、ルフィもまた地面を蹴って拳を振りかぶる。
今となっては空気も変わって息を呑む人々に見守られた衝突の一瞬。
突如、二人の間に割り込む人影があった。
「そこまでだ！」
両腕に付けた手甲、右手のそれから鎌が飛び出し、振り抜かれたキッドの腕を側面から叩き、狙いを逸らした巨大な金属の腕が地面を抉って凄まじい轟音を立てる。それだけでなく全く同時の瞬間に、鎌

を仕舞った左手ではルフィの拳を受け止めていた。
たった一人の男が二人の攻防を止めたのである。
突然の乱入に二人の視線が変わり、それどころか酒場の空気が再び一変してしまった。
二人の間へ華麗に着地したのは、仮面を着けた男だ。
ボサボサの長い金髪が後部から飛び出して、両腕に取り付けた武器もひどく異質と、風貌は見るからに怪しい。奇妙な仮面が人間性を感じさせないのも大きいだろう。
キッドの右腕、キラーという。
彼は船長の暴走を止めるために割り込んだようだ。仮面はすぐにキッドを向く。
「キラー！　てめぇなぜ邪魔しやがった！」
「落ち着けキッド。おれたちは小競り合いを起こしに来たのか？目的を忘れるな」
荒ぶるキッドを制止するべく冷静な声で問いかけられる。しかし気性は治まらず、歯を剥き出しにする彼は分かり易いほど怒りを露わにし始めた。
一方、ルフィはと言えば様子がおかしい。
なぜか目を輝かせてキラーを見つめ、いつの間にか力が抜けて少年然とした顔に戻っていた。
「うおおっ!?　お、おまえ、仮面じゃ～ん！　いいなぁそれ！　かっくいぃ～！」
「ん？」
「アァ？」
「それどこで買ったんだ？　おれも欲しいなぁ～！」
妙に親しげな顔で話しかけられていた。
雰囲気が変わったことにキラーが驚いているらしく、キッドも怒気を霧散させる。
どうやら戦闘を続ける空気ではない。
狙った通りか否か、どちらにしても彼ら二人を止めることができたようだ。

キラーは動きを止めたキッドを見て再度忠告する。
それはまるで、ルフィとキリの姿を見るようでもあった。
「麦わらは手を引くそうだ。おまえもここまでにしておけ。決着をつけたいなら、レースで」
「チッ……興が削がれたぜ」
腕に纏っていた金属が全て落ち、その場に山となって広がる。ガチャガチャと騒がしい音を響かせていた。その場に留まれなかった物は吹き抜けから階下へと落ちていったらしい。
身軽になったキッドは肩を動かした後、ルフィを見た。
さっきよりも落ち着いているが敵意は感じる。中途半端な中断でフラストレーションが溜まってまだ満足できておらず、不満は強く感じる。
それはルフィも同じとはいえ、敢えて口には出さず。
今はキッドが伝えてくる言葉を受け取った。
「おい麦わら。このままじゃ終わらせねぇ、てめぇとはきっちり片を付けてやる。ここに来たからには目的はレースだろう」
「ん？　レース？」
「ゴール地点で待つ。決着はそこでつけてやるよ」
そう言うとキッドは迷わず背を向け、歩き出した。
キラーもルフィをちらりと確認してから後へ続こうとする。
気付けば彼らが向かう先、仲間だろうと思われる面子が立っていた。
「必ず来い。言ったはずだぞ、おまえはおれが潰すとな」
酒場を出るため、彼らは歩き去る。
レースとは何だろう。そう思うため尋ねてみたかったが、聞く前に行ってしまった。しかしまた会うだろうと察してそれでいいと思い直す。
ルフィは血に濡れた手で麦わら帽子をかぶった。
ひょんなことからしばらく続いた戦闘がようやく終わりを告げた。
上のフロアで見ていたウソップとナミは胸を撫で下ろして安堵しつつ、怪我をしたルフィを心配し始めて慣れを感じさせる。その傍で

ビビは今も混乱したままだ。
ウィスキーピークでゾロと戦った時、なんて強い人間だと思ったのが数日前。これならクロコダイルにも勝てるのかもしれない、とさえ思っていた。
しかし今見た景色はどうだ。
賞金稼ぎ百人を打ち破ったゾロの姿を忘れさせるほど、異常な強さと覚悟を見せる激闘。ゾロが本気だったかどうかもわからないが、やはり彼が船長と仰ぐルフィの強さは本物らしい。キッドの強さと合わせて言い表せないほどの驚愕と感動で声を出すことができなくなっていた。
自分はまだ世間知らずだった。
今になって強くそう思い、高鳴る胸の鼓動だけを感じて静かに立ち尽くす。
「お、終わった、よな？」
「滅茶苦茶よあいつら……ルフィと互角に戦うなんて普通じゃない」
「とりあえずルフィのとこに行こうっ。あいつ怪我してるし、できるならさっさと出ようぜ」
「そうね。ビビ、行くわよ」
「え？　あ、は、はい！」
文句を口にしながらも慣れているらしい二人に連れられ、ビビは合流のため駆け出した。
端にある階段を目指して移動し、入り口の傍を離れる。
三人が行ってしまった後で、入り口付近の窪みに居たローは刀を持って立ち上がる。
視線は眼下。突っ立っているルフィを見下ろす。
面白い物を見たという感想を抱いている。周囲の人間と違って驚きは少ない。話題性のある人物なのだからこれくらいはやるだろうと想像していたからだ。
この場は十分だろう。
冷静に判断して店を出る決断をした。

彼が動けば同じスペースに居た仲間たちが席を立ち、文句も口にせず後ろについて来る。
「見物は終わりだ。行くぞ」
「アイアイ。キャプテン、あいつらどう思った？」
「それなりに面白ェ奴らだ。いずれまた会うだろうな」
それは彼らを認める発言でもあった。
何を考えるのか、薄く笑みを浮かべるローは小さく呟き、仲間を連れて酒場を出た。

Ｃｒａｚｙ　ｇｒｏｕｎｄの王様（３）

パチパチと拍手の音が聞こえた。
背後で起こった音に気付き、警戒せずにルフィが振り返る。
視線の先には一人で立ち、手を叩くベッジが居た。
彼もまた賞金首として手配書が出ているものの、当然ルフィが知るはずもなく。見知らぬ顔を見つけて首をかしげる。どうやら拍手はルフィに向けられていたのだ。
視線が合った後も数度手を叩いた後、拍手を止めたベッジは笑みを浮かべて口を開く。
「やるじゃねぇか。良い見世物だったぜ」
「おっさん誰だ？　海賊だよな」
「ああ。おれはベッジってもんだ。まぁ余裕がありゃ覚えててくれ」
「ふぅん」
興味がなさそうな素振りでルフィが声を出す。
分かり易い人間だ。キラーの仮面には興味を示して、スーツ姿のベッジには素っ気ない。それも悪気がある訳ではなく思うがままにやっているのだろう。自由を謳う海賊らしいが、表情や態度から人となりが読み易いのは弱点とも思われた。
少なくともベッジは冷静に分析し、自らの手で葉巻を銜える。
どこぞよりやってきた部下がライターを使って火を点けたことで、静かに煙を吐き出す。
笑みを浮かべたベッジはルフィへ歩み寄り、そっと手を差し出した。どうやら握手をしようというらしい。警戒心を感じさせない挙動である。
「ここで会ったのも何かの縁だ。まぁ、仲良くやろうや」
「ししし。ああ、いいぞ」
ルフィは笑顔でその手を握った。あまりにも警戒心がない。まるで数年来の友人に対してするような態度を見せられ、呆れたベッジは思わず笑ってしまう。

がっちり手を握って握手が交わされた。
それを問題だと言うかのように、握ったままでベッジが言い出す。
「ずいぶんあっさり手を取ったもんだな」
「ん？」
「おれがこの手に何かを仕込んでりゃ、握った瞬間に襲われても文句は言えねぇんだぜ。今の内にライバルを潰しとこうとした可能性だってある。なぜこうもあっさり握った？」
ルフィはぱちくりと瞬きした後、再び笑顔になって答えた。
「そん時はそん時だ。おっさんをぶっ飛ばせばいいだけだろ」
「ほう、えらくあっさり言ってくれたもんだ。それじゃおれが何か仕込んでるかもしれないと理解した上の行動だったってわけか」
「しっしっし」
「意外に食えねぇ野郎だ。ただのバカじゃねぇらしい」
静かに離してベッジがポケットに手を突っ込む。
何事もなく離れた。攻撃がないため拍子抜けする様相だがルフィは大きな反応はせず、何気なく腕を下ろしてその場へ立ち尽くす。
全身が傷ついて中々壮絶な姿だ。
鼻を鳴らしたベッジは背後に集まってくる部下へ振り返った。
「こいつを手当てしてやれ。ちょうどキャプテン・キッドの席が空いたとこだ」
「はっ」
「助けてくれんのか？　ありがとう」
「面白ぇもんを見せてもらった礼さ。どうやらてめぇは見込みがありそうなんでな」
命令を受けてベッジの部下がルフィを連れ、窪みを用いた空間へ、テーブルや椅子が置かれたそこへ入っていく。彼を席に座らせて手当てを始めたようだ。
ベッジもまた彼の傍へ赴いて席に着く。
何をしようと言う訳でもなく話し始めようとしていた。
そこへ慌てて駆けつけたウソップ、ナミ、ビビが姿を現す。
「ルフィ！」

「お～ウソップ。おまえらも来たのか。ちょうどいいや、メシ食おう」
「呑気に言ってる場合かよ!?　おまえ大丈夫なのか！」
血相を変えたウソップがルフィを見て叫ぶも、まだ少しばかり距離があった。
そこにスーツ姿の厳つい男たちが居ることは目視で気付いて知っている。何か奇妙な雰囲気を感じ取ったのだろう。ルフィを心配しながら警戒する目つきになる。
彼らの顔を見回し、ベッジを見つけたナミも表情を変えた。
先程見たキッドに加え、彼もまた手配書で見た海賊だ。
「ギャング・ベッジ……!?　うそっ、こっちも高額賞金首じゃない……！」
「こ、高額っ!?　おいルフィ、そいつから離れろ！　危ねぇぞ！」
「心配すんな、何もしねぇよ。少し興味があっただけだ」
見るからに狼狽する二人へ向け、椅子に座って腕を組んで、厳めしい顔でベッジが答える。
確かに攻撃の意志はない。
それどころか慣れた素振りでルフィに手当てしている。状況が読み切れず、駆けつけてきたばかりの三人は緊張した状態とはいえ、顔を見合わせて困惑した。
意図は読めないが本当にやり合う気はないらしい。
ベッジの一声により、彼らにも席が勧められることとなった。
「おまえらこいつの部下だろう。まぁ座れ。こっちに戦闘の意志はない」
「信用できんのか、こいつら……おいルフィ、おまえ大丈夫か？　何もされてねぇよな？」
「ん？　大丈夫だぞ。普通に手当てしてもらってるだけだ」
ルフィ自身は呑気な顔で包帯を巻いてもらっている。その様はどこにも問題がない。
信用できないとはいえ、船長の言葉を無視してごね続けても良い展開にはならない気がした。何より今はルフィが手当てをされている

一方、いつ彼が襲われてもおかしくない状況と言える。
事を荒立てたくないと考えて、三人は戸惑いながら椅子に座った。
深く息を吐いてベッジが改めてルフィを見る。彼の顔はやはり新聞と手配書で見た物だ。
「こうも早く話題のルーキーに出会うとはな。この時期に来たってことは、おまえも例のレースが目的か？　フッ、いや……聞くだけ無駄だったか」
「レース？　そういやあいつもそんなこと言ってたな。レースってなんなんだ？」
「あ？　知らねぇで来たってのか」
「うん」
「たまげたな。この島に来る方法を知ってる癖にレースを知らねぇのかよ」
呆れた顔でやれやれと首を振られる。
キッドも言っていた。決着はレースでつけると。
どうやら彼は知っているようだ。ルフィは腕に包帯を巻いてもらいながらベッジへ尋ねる。
「教えてくれよ、レースのこと」
「仕方ねぇ野郎だ。まぁいい……この島じゃ何年かに一度、島の環境を利用した大きなイベントが行われる。ルール無用、非合法の海賊レース〝デッドエンド〟だ」
「デッドエンド……ビビ、知ってる？」
「いいえ。聞いたことないわ」
ナミがビビを見ればすぐに首を振られる。
グランドラインで生まれ育った彼女ですら知らない情報だ。海賊たちのみが知るレースらしい。それだけでも危険な雰囲気を感じ取り、ウソップとナミが緊張する。
対照的にルフィは早くも目を輝かせ始めていた。
「やることは簡単だ。事前に渡されたエターナルポースに従ってゴールに辿り着く。ただそれだけの簡単なレースだが参加者は全員海賊。生きて帰れねぇ奴は多い」

「ど、どうして？」
「言っただろう、ルール無用だと。もう想像はできてるはずだ」
にやりと笑うベッジの顔を見て、途端にウソップが顔を引き攣らせる。
しかしルフィは笑顔で興味を持っていた。
もはや当然の反応であり、ウソップとナミの反応も自然な物である。
「なんかおもしろそうだな、それ」
「待て待て待て！　そんなことしてる場合じゃねぇだろ、おれたちは！」
「そうよルフィ、私たちはアラバスタへ急がないと。ビビとキリの問題もあるのに――」
「優勝者には賞金が出される。今年は確か三億ベリー」
「出るわ」
「早っ!?」
何気ないベッジの一言でナミの目の色が変わった。賞金と聞いて明らかに様子が変わり、金に憑りつかれた目をしている。内に秘めた欲望が丸出しになっていた。
あまりにも早い身代わりにウソップが目を剥く。
賞金が出るとは予想外だった。
考えてみれば確かに、そうでもなければ参加者など集まらないとはいえ、今回に限っては有難くない展開である。賞金と聞いてルフィに反対する人間が減ることは間違いなし。
ウソップに話しかけられ、振り返ったナミは早くも恐怖心など捨て去っていた。
「賞金なんかに目ぇ眩んでる場合かっ。おまえウィスキーピークで宝盗んできたばっかだろ。金にだってそう困ってるわけじゃねぇし、ここはスルーすべきだ」
「何言ってんの、ウチにはルフィが居るのよ？　どれだけお金があったって足りないわ。しかも三億ベリーなんて大金逃すバカ居ると思う？」

「だからって死んだらお終いだぞ！　地獄で金が使えるならまだしもよォ！」
「大丈夫よ、今までだって死んでないんだし。きっとなんとかなる」
「そんな雑な考えじゃ死ぬぞ！　ここはグランドラインなんだから！」
喚き出すウソップもそっちのけにナミがビビの肩を掴み、顔を覗き込んだ。
その目は明らかに金に憑りつかれており、彼女は思わず怯えてしまう。強い熱意を感じる様には言い知れない恐怖さえ感じてしまったらしい。
「ビビ、ごめん。ちょっと寄り道することになるけど、でも航海にお金は入用よ。こういう機会に手に入れておかないとアラバスタまで辿り着けないわ。わかってくれるわよね？」
「は、はい……」
「おまえそりゃ脅迫だろ!?　負けんなビビ！　祖国のためだぞ！」
ビビを含めた三人が騒ぎ始める一方、気にせずルフィがベッジへ言った。
「しっしっし。おれたちも参加するぞ」
「なら一番上に居る胴元のとこへ行け。参加資格のエターナルポースがもらえるだろうよ」
「ありがとう。おっさんは参加すんのか？」
「いや。おれたちは参加しねぇ」
「なんで？」
「別件で立ち寄ったからな。まぁ、せいぜい楽しめ」
にやりと笑って簡潔に告げられる。
その後、彼は酒場の中を見回して言った。
広大なその場は喧嘩が終わった後も騒がしく、むしろ騒がしさは増したかのよう。彼らの戦闘によって刺激されたのか、至る所で盛大な喧嘩が始まっていたらしかった。
「だが気をつけた方がいいかもな。なんせ何年かに一度の大規模なレースだ。こいつを狙って集まった実力者たちがそこら中に居やが

る。この酒場でも何人かは確認できるぜ」
「へぇ」
「詳しく知りてぇか？」
「なんかおもしろそうだな。頼むよ」
「説明してやれ」
部下の一人が進み出てルフィの前に立つ。
次々応急処置が進められていき、やがて治療を終えた。
ルフィは椅子の上で胡坐を掻いて耳を傾ける。
「デッドエンドには賭けが付き物だ。誰が優勝するのか、この島の人間も大半が予想している。賭けに参加する人間も数え切れないほどだ。すでに賭けも始まって優勝候補も挙げられている」
「ふぅん。おれの知ってる奴か？」
「さっきおまえが戦ったキャプテン・キッドは二番人気だ」
「あの燃え頭か。そんなすげぇ奴だったんだなぁ」
感心した様子でルフィが大口を開ける。意外にも真面目に話を聞いているらしい。
それを確認してから部下は続けた。
「レースは明日。大体名前が挙がり終わった頃だ。五番人気がボビーとポーゴのコンビ。巨人族の二人組でビッグ・ランナー号を駆る、意外に足を使える奴ららしい」
「巨人？　へぇ～グランドラインにはそんな奴らも居んのか」
「巨人族を知らないのか？　こちらではそう珍しい連中でもない。さっきまで最下層に居たはずだが……まぁいいだろう」
部下の男は懐から手配書を取り出し、それを確認しながら説明しているようだった。
ベッジは腕組みをして目を伏せ、時を待っている様子。
敢えて彼には注目せず、ルフィはあくまで部下の男の話に集中した。
「四番人気が魚人海賊団のウィリー一味。元は七武海ジンベエの部下だったそうでアーロンのライバルとも噂されていた。最も今は独立しているそうだが」

「アーロンのライバルかぁ。あいつ今頃何してんだろうな」
「そういえばおまえはアーロンと写っていたな」
「ああ、今おれが預かってんだ。キリに言われて」
ふむと頷き、納得した上で次へ移る。
「三番人気が〝死の外科医〟トラファルガー・ロー。さっきまでここに居たな。ノースブルー出身で狡猾に動く策謀家らしい。奴に潰された海賊や海軍の船がどれだけあったか」
「あ、くまといっしょに居た奴だ。あのくま仲間なのかな？」
「そして二番人気がさっきも言ったキャプテン・キッド。気性の荒さじゃナンバーワンだろう。殴り合ったおまえなら理解しているだろうが」
「んん、あいつとはいつか決着つけねぇとな」
聞き漏らさずに理解しているらしい。腕を組んだルフィがふむふむと頷いていた。
そこで一呼吸。今度ばかりはほんの少し間を空けられた。
「最も優勝に近いと言われている海賊が、ガスパーデ。懸賞金は９５００万ベリー。〝将軍〟と呼ばれる海賊だ」
「え？　ガスパーデ？」
声を聞いたナミが反応して声をかけた。即座にルフィが振り返る。
「知ってんのか？」
「ええ……〝将軍〟ガスパーデ。海軍最大の汚点って呼ばれる海賊よ。あいつは権力を手に入れるために海軍の軍艦を乗っ取って海賊になった、元海兵なの。勝つためならなんでもするような奴らしいから、あいつを忌み嫌ってる人間も多いって聞いたことあるわ」
「９５００万ベリーだとっ？　一億近いじゃねぇか!?」
「そんな、七武海加入当時のクロコダイルより上よ。あいつは、８１００万ベリーだった」
「げぇぇぇっ!?　七武海より上なんてあり得ねぇだろ！　無理だ無理だ、おれたちは絶対に参加しねぇぞ！　そんなバケモンが居て生きて帰れるかァ！」
話を聞いたウソップが先程以上の熱量で拒否し始めた。よほど怖

いのか全身を使って訴えて、絶対に参加しないとまで言い始める始末。ナミは溜息をついて、ビビも否定はできず緊張する。
彼の叫びを聞いて口を開いたのは部下ではなくベッジ本人だ。
聞き捨てならなかったらしく、部下には任せず自らの口で訂正する。
「七武海より上ってのは違うな。七武海は加入した瞬間から手配書が撤廃される。外れねぇ限りは懸賞金が上げられることはねぇんだ。クロコダイルが加入したのは今から何年も前の話。あの男がずっと８１００万程度の実力のままだとでも思ってんのか？」
「そ、それじゃあ、今はもっと強い……？」
「億はくだらねぇな。奴は白ひげとやり合った海賊だぞ」
「うおおおおっ!?　そんな奴に勝てるかァ！　そうだビビ、ここは海賊どもの巣窟だぞ！　協力してくれる奴を探し出そう！　いくら七武海でも大軍で攻めりゃなんとかなる！」
「だけどその場合、協力した海賊たちが国を襲う可能性があるわ」
「そうだった！　普通は海賊なんざ信用できねぇよな！」
感情の赴くままに叫び、ウソップはビビを相手にあれこれ提案を始め、アイデアをぶつけては一味が死なない方法を考え始める。ビビも真剣に、ナミは呆れながら話し合いに参加していた。
ルフィだけはベッジを見ている。
彼に聞けば良さそうだと、やけに真剣な目で尋ねられるのだ。
「クロコダイルとそいつ、戦ったらどっちが勝つんだ」
「さて、おれはクロコダイルをこの目で見たことはねぇんだが――」
ふぅと息と共に葉巻の煙を吐いた後、ベッジは笑みを深めて答える。
「十中八九、クロコダイルだ。ガスパーデとは格が違う」
「へぇ」
言い切った途端、ルフィは好戦的に笑った。
ウソップの反応やビビという少女へかけた言葉から、彼らが狙っている相手が誰かは簡単に予想できる。その上での質問だっただろう。まさか怯えもせずに笑うとは思っていなかった。

やはり普通ではなさそうだ。
面白いと感じてベッジもまた気を良くする。
「何をしようがおまえの勝手さ。腕試しがしてぇなら受付を急いだ方がいいんじゃねぇか？」
「そうだな。よし、一番上に行くぞ」
「レースに参加するわけね。締め切られる前に急がないと」
「待てっておまえら！　参加については話し合おう！」
「ウソップさん、多分もう止まらないんじゃないかしら……ナミさんの目が、ね」
彼らは席を立ち、次の目的へ向かうことを決めたようだ。
ベッジは止めようとせずに椅子へ座ったまま。
ルフィが振り返って彼に笑みを向けた。
「おっさん、手当てありがとう。おれたち受付行ってくるよ」
「そうしろ。ま、何事もなく行けるかどうかだが」
「おっさんはいいのか？　優勝したら三億ベリーもらえるんだろ」
「なぁに、レースに出なくても金は手に入るさ」
葉巻を手に持って口から離し。
ルフィへ目をやったベッジは忠告するように言った。
「勢いで動くのも結構だが、おまえも船長なら頭を使って生き延びる方法を覚えろ。聞けばそっちの鼻の長ぇ男は正しい判断力を持ってる。見習った方がいいんじゃねぇか？」
「ししし、いいんだ。おれが考えねぇからウソップが考えてくれる。どっちか片方じゃなくて両方の意見が必要だってキリも言ってたしな」
「フッ、なるほど。臆病な仲間と副船長に感謝するんだな」
「おう。言われなくてももうしてるぞ」
言い終えれば用は無くなったのだろう。一番最初にルフィが歩き出し、仲間たちがその後へ続いていく。騒がしさは周囲の海賊と変わらないがどこか変わった一団だ。
ベッジは彼らを見送り、その場を動かずほくそ笑む。
今回のレースも荒れそうだ。

キッドの存在とルフィの佇まいを思い出して、彼はひどく楽しそうだった。

ＵＮＬＯＣＫ（２）

「ぎゃ～はっは！　懐かしきかな海賊島！　相変わらず騒がしい島だぜ！」

大勢の部下を引き連れ、騒いでいる男が居た。

騒がしい町の中でも目立つ風貌は真っ赤な鼻を持っており、傍らには手配書も出ている賞金首がずらりと勢揃いしている。大声を出しているせいか周囲から注目を集めていた。

大通りを歩きながら通り過ぎ様、ハートの海賊団もまた彼らを確認する。

「キャプテン、あれ道化のバギーじゃない？　ローグタウンを襲った海賊同盟だ」

「グランドラインに入ったんだなぁ。あれからそう日も経ってないのに」

新聞で取り上げられていた顔ぶれを見て平然と会話を続ける。

つい最近、いくつかの海賊団が同盟を組んだと話題になったばかり。確認すれば確かに幹部が全員揃っているらしく、戦力の余裕からか、周囲の視線を受けても堂々としている。

部下の言葉が指す一団をちらりと確認し、興味を持たずにローはすぐ視線を外した。

数は多いが一人一人の額は高くない。さほど脅威とは思わなかったようだ。

特に今しがたルフィとキッドの戦いを見たばかりで、自身と額の近いルーキーの実力を知り、今後が期待できそうだと満足したところだ。興味を向けるような相手ではない。

普段物静かな彼も、今夜ばかりは上機嫌だった。

まだ発展途上とはいえ強者を見た。珍しく血が滾っていたらしい。

道化のバギーを素通りしたことで背後の部下は首をかしげる。少しも興味を惹かれない姿に違和感を持ったらしかった。

「あれ？　いいの？　あいつら興味ない？」

「大した奴らじゃねぇだろう。今すぐ潰す必要もねぇはずだ」

「ふぅん。それじゃさっきの麦わらは？」
「あれはいずれぶつかる。急ぐ必要は――」
フッと笑って視線を落とし、再び顔を上げた時。ローは奇妙な物を見つけた。
通りを歩く人の群れを物ともせず立ち止まっている人物が居る。
手配書で見た、紙使いキリの姿だ。
ハートの海賊団は足を止める。
前方に立ち塞がる彼の目は自分たちを見ていた。正確に言えば船長であるローを。その首にかけられた懸賞金だけで言えば彼以上の海賊もちらほら見えるというのに、一切興味を示さずに。
見るからに異質だった。自然と部下たちは口を噤んで緊張感を醸し出す。
その中で唯一、ローだけは冷静にキリを見据える。
どちらも動かなくなって見つめ合う。
周囲の喧騒も不思議と遠く、緊張する部下すら置き去りに、彼ら二人だけが周囲の空間から切り取られるかのよう。奇妙な感覚に囚われていた。
ただそれだけで相手を理解するような、そんな普通ではない一瞬だった。
やがてローが口を開く。
静かな声色で言葉が紡がれ、その場を動かずキリへ問いかけた。
「おれに何か用か」
「うん。少し話したいことがあって」
「フッ……いいだろう。興が乗った。聞いてやる」
そう悩む素振りも見せずにローが頷いた。再び部下たちが驚いて思わず口を開く。
まさかそれほど簡単に頷くとは思っていなかった。
この男は危険だ。
噂を聞く限りその意見は無視できず、船長の身を案じるからこその制止である。
「ちょっと待ってくれキャプテン。こいつを信用するのはまずいん

じゃねぇかな」
「そうだぜ。例の新聞を書かせたのはこいつだって噂だ」
「何よりあの麦わらの片腕」
「騙し討ちがないとは限らないって。キャプテン」
部下たちは止めようとする。しかしローは薄く笑みを浮かべ、軽い挙動で一歩を踏み出した。
「問題ねぇさ。その時はその時だ」
「ハァ～、やっぱそう言うよな」
「おまえら先に戻ってろ。向こうも一人だ。おれ一人でいい」
もし騙し討ちするようなら自ら始末する。
言外にそう告げてローが進み出て、仲間たちは苦笑しながら見送った。
負けるとは思っていない。もし敵が襲ってきても即座に対応し、返り討ちにして切り捨てることくらいは軽くやり遂げる男だ。
敢えて止める理由はないだろうとあっさり見送られた。
長刀を肩に担ぎ、脇道へ逸れたローは顎で路地を指し示す。
キリは笑みを深めてそれに従った。
大通りを離れて細い路地へ入る。明かりが届かないため暗く、ボランティアで掃除をする人間も立ち寄らないため汚らしさが目立つ。人の姿もぐっと減った。
誰かから隠れるようなそこに居る人間は、暗がりで絡み合う男女か、悪巧みをする人間。
彼らは後者になる。
周囲から完全に人の気配が消えた時、二人は壁に背を預けて向き合った。
「聞かせてもらおうか。おれに何の用だ？」
「面白い話を聞いたんだ。本当か嘘か確かめようかと思って」
「ほう。それだけでよく見つけられたもんだな」
「この島で隠れるのは難しいよ。目はどこにでもあるから」
「だろうな」
ローは納得した様子で笑う。

彼自身見つかることを疑問視していなかったようだ。情報のやり取りが生死を分けることをすでに理解しており、だからこそ自身の居場所が見つけられたことも不思議には思っていない。滞在して数日、海賊島はそういう場所だと理解していた。

頭の悪い人間を相手にするのは面倒だが、彼はそうではないのだろう。

互いに細かな説明を必要とせず話し始める。

先に言ったのはキリだった。

「君に興味を持ったんだ。ジョーカーの知り合いらしいね」

ぴくりと眉が動く。

身に纏う雰囲気と表情は明らかに変わった。笑みは消えて視線の鋭さが一瞬で増し、暗い路地裏に肌を刺すような空気が広がる。

ただの威嚇ではない。この先一歩でも間違えれば殺すと目が伝えている。

果たしてそれは本人の意識するところであったか。

剣呑な空気に包まれたローはおそらく意識していない様子で、冷たくなった声を出す。しかしその反応こそキリの確信を強めるための材料となった。

反射的に殺気が漏れ出るほどの理由があるのだ。

彼は本当にジョーカーの関係者だった。

「……誰に聞いた」

「さて、誰だったかな。なんせここは人が多い」

「答える気はないってことか」

「そう焦らないでよ。別に脅迫したい訳じゃない。むしろ協力しないかって話さ」

「協力だと？」

「うん、協力。ジョーカーの下に居たなら理解してくれるんじゃないかって思うんだけど」

ピリピリとした何かが肌に刺さる。だがここで折れる訳にはいかない。

キリは笑みを浮かべたまま、強く刀を握りしめるローへ言う。

「実はボクも倒さなきゃならないターゲットが居る。直接力を貸してくれとは言わないけど、情報を集めるにはそれなりに多くの手が必要だし、もしもの場合だってある。できればしばらくの間手を貸して欲しいってのがボクの要求だよ」
「それが本題か……見返りは？」
「ジョーカーの情報。必要なら、だけどね」
小さく鼻を鳴らして理解する。どこで調べたのか、ずいぶん詳しいようだった。
彼の声を聞いている内に徐々に冷静さが戻ってくる。
確かに脅迫の意志はない。出される要求と見返りも興味を惹く力もあった。
「奴は今や裏社会を牽引する存在だ。おまえに調べられるのか？」
「その手の話は得意だよ。経験がある」
「どうだかな。今ここで信用することはできねぇが」
「今すぐ信用してもらおうなんて考えてないさ。それとも何か必要な物でも？」
「おまえは麦わらの右腕だろう。奴の差し金か？」
鋭い眼光で見据えられて、常人では息を呑むだろうと予想する。ただし彼はこの手の脅しに慣れていた。ローもまた慣れている手合いだと理解しながら気軽に肩をすくめる。
相変わらず笑みを崩さずに気楽な声が出された。
「いいや、船長は知らない。ボクの勝手な判断で動いた。個人的な契約ってやつだよ」
「それもそうか。ちょうどおまえの船長が暴れてるのを見てきたとこだ」
「んん、やっぱりじっとしてなかったか。いつものことなんだ。気にしないで」
「なぜ奴に教えない。独自の判断で動く理由はなんだ」
数秒、キリは口を噤み、考える素振りを見せてから答える。
「簡単に言えば、ボクの独断で決めたからかな。知っていた方がいいことと知らなくてもいいことがあるかと思ってね。少なくともボ

クはルフィを裏切るつもりはない」
「おれと通じて奴を討ち取る気はないと」
「ないね。君がそれを促すなら、ボクが君を始末する」
「解せねぇな。そこまでの忠誠心があって、独断でおれと繋がろうとするのか」
「これもルフィを海賊王にするためだ。彼は前だけを見て進んでくれればいい。横は仲間たちがなんとかしてくれるだろうし、それなら後ろに目を光らせるのがボクの役目でしょ」
「フン。どうやら使えない訳じゃなさそうだな」
そう判断したローは、しかし逡巡していた。
ジョーカーの名と正体を知る者は少ない。情報統制は徹底的に行われ、ジョーカーの名を知って利用している者たちでさえ、その名が誰を指すかを知る者は数えるほどしか居ないのが現実だ。それほど世界の闇は広く、暗く、深いのである。
彼はどこまで知っているのか。
判断材料の一つとするため、嘘は許さないと目で告げ、ローが問いかけた。
「おまえはジョーカーについてどこまで知ってる」
「それが誰のことかは知ってるよ。気付いてる人間の近くに居たから」
「同じ穴の狢、ということか」
そこらでバカ騒ぎしている海賊とは違うらしい。立ち振る舞いや自身の殺気に対する反応、そしてその笑みを見る限り、そう判断せざるを得なかった。
受けるか、蹴るか。
同じ海賊であるだけに信用はできず、即決できる相手でもない。
考えるローは目の前に居る彼を警戒している様子だった。
一つだけ尋ねたいことがある。
聞いたところですぐ信用するとはならないだろう。
それでも、確認しておきたいことがあった。
「おまえのターゲットってのは、誰のことだ」

その答え如何によっては決断できる。
おそらく生半可な相手ではないだろうと思っていた。ジョーカーの名だけでなく正体まで知っているばかりか、彼の口ぶりを考えれば麦わらのルフィ以外の誰かとの繋がりを感じる。
大物の名が出てくると考えるのも無理はなかった。
問われたキリは一瞬考える。
自らの手札を晒すのは一種の賭けだ。よほど信用していない限り避けなければならない。
だがここで自分の身を案じて退いてしまえば、いつまで経っても前には進めないだろうと思う。
教えか、自らが信じる船長か。
天秤に掛けた結果、彼は瞬時に決断した。
「七武海、サー・クロコダイル」
自分でも驚くほどあっさり告げる。教えを守るなら告げるべきではないだろうと考えていた。しかし今はルフィの姿を見倣い、考え過ぎないことを務めて動いたのだ。
この場は信用を得ることこそ最重要。
秘匿してばかりでは逆効果だと判断した結果だった。
その名を耳にしてすぐ、ローは静かに目を伏せる。
怯えた様子はない。いとも容易く受け入れ、理解していた顔つきだ。
「それでか。興味を持ったってのは……」
何やら納得した顔で呟き、ほんのわずかに目が開かれた。
いつの間にか笑みを消していたキリは、彼の表情を見て驚く。
不思議と寂しげな色が濃くなっていた気がした。
一秒と経たぬ内に元の姿に戻り、今度こそ目を開いてキリの顔を見つめたローが口を開く。
覚悟は決まった。ひとまず決断することを決めたようだ。
「わかった。だが一つ条件がある」
「いいよ。何かな」
「おまえを信用する訳じゃねぇんだ。どれだけ使えるか、確かめる

必要がある」
「それはそうだよね。で、方法は？」
「ちょうど明日はレースがある」
その時ローはにやりと笑い、悪そうな表情が戻ってきた。
対照的にキリが苦笑する。
嫌な予感と言うのか、先程とは違う何かを感じていた。
「船長のために命を賭けるって腹だろ」
「その通り」
「なら覚悟を見せてもらおうか。その〝個人的な契約〟とやらでな」
どうやらルフィとは違った厄介さを持つらしい。
望むところだとキリは頷いた。

＊

アニタの案内で町一番の酒場へ到達した時、中がやけに騒がしいことに気付いた三人は思わず顔を見合わせる。特にイガラムはビビの身を案じて今にも叫び出さん表情だ。
島に住むアニタの言によれば、そこが騒がしいのはいつものこと。そう慌てる状況でもないと考え、サンジとシルクは落ち着いており、至って穏やかな足取り。
騒がしくなるのはイガラムだけであった。
「こうしている間にもビビ様はっ!?　お二方！　ここは急ぎませんと！」
「うるせぇなおっさん。心配しすぎだって言ってんだろ」
「そうだよイガラムさん。ビビのこと信じてあげて」
「しかしそれでは護衛である私の立場が！」
「おまえの立場なんざ知るか。おれら海賊には関係ねぇ話だな」
「そんな殺生なっ!?」
荒れるのが当然だと聞かされてから彼の声は大きくなった。いい加減耳障りだとアニタが顔をしかめていて、さらに機嫌が悪くなって

いる様子。
もはやシルクが歩み寄るのも躊躇ってしまうほど眉間の皺が深かった。
喧騒の中でも一際目立つ姿のまま、酒場から出てくる人間もそう少なくないことに気付く。
中にはイガラムにも負けぬほど騒ぐ女性と、それを制止する大男が居た。
「離してよバッファロー！　私は彼のところへ行かなきゃいけないの！」
「ま～た男に騙されたんだろ。どうせまた若に殺されるだけだすやん」
サンジがそちらを見れば途端に目の色が変わる。それほどの美女が大男に手を引かれて見るからに嫌がっており、だが誘拐とは違って仲は良いらしく、襲われている風ではない。
言わばいつもの光景。そんな姿に見えた。
「そうさせないために私が傍に行くのよっ！　とにかく離して！」
「無理だすやん。デッドエンドが始まる前に離脱しろって若が言ってた。面倒になるからな」
「私は帰らないわ！」
「またそんなことを。そいつもおまえを利用しようとしてるだけだすやん。だからいつも若に消されちまうんだ」
「そんなことない！　彼は言ってくれたの、私が必要だって！」
「いい加減その頼まれると断れない性格直した方がいいなぁ。今にこの島まで消されちまうぞ」
「離せぇ～!!」
仲の良い兄妹に見えなくもない二人は酒場から遠ざかっていく。
その背を見送ったサンジだけ足を止めていて、他の三人はそそくさと扉へ寄っていた。
「な、なんて美しいレディだ。あんな奴と付き合ってんのか？　羨ましい……」
「サンジ、早く来ないと置いてくよー」

「はぁ～いシルクちゃ～ん！　おれには君が居るから大丈夫さぁ～！」
「うるさい奴。バカみたい」
鼻を鳴らして呆れるアニタが扉に手を伸ばした時、内側から開けられ、動く扉に危うくぶつかるところであった。咄嗟に避けたアニタは中から出てくる新たな人影を見る。
見上げた人物はあまりに長身。
傍らに立つ彼女に気付いて視線を下げ、軽く会釈をしたX・ドレークだった。
「失礼。怪我はなかったか」
「うん、大丈夫だけど」
「ディエス・ドレーク？　元海兵の海賊……こんな有名人まで居るんだ」
彼の顔を見たシルクが呟いていた。
ちらりとそちらを確認して、ドレークはふと目を伏せた。
帽子を目深にかぶって足早に歩き去ろうとする。
「昔の話だ。あまり事を荒立ててくれるな」
「あ、うん……」
彼を先頭とする一味は颯爽と行ってしまい、会話する機会さえなかった。声をかけたシルクは呆然と見送り、サンジは冷静な顔で隣へ並んでドレークを見る。
「元海兵で海賊か。訳アリなのはどいつも同じらしいな」
「うん、そうみたいだね」
「なんでもいいから早く行くよ。ほら、もう着いたから」
「ビビ様はご無事だろうかっ。何事もなければ良いが……！」
アニタの声に従ってやっと歩き出し、全員で酒場へ入る。広大な酒場で目を奪われる光景だ。
かなり騒がしい場所である。
至る所で喧嘩が巻き起こっているらしく、屈強な男たちが殴り合う光景が目に入り、何があったのか驚くほどの熱気に包まれていた。まさに海賊らしい混沌とした空間がある。

その空気を浴びたイガラムは分かり易く取り乱した。当然ビビを心配しての態度だろう。
彼一人だけが欄干まで急いで駆けつけ、即座に辺りを見回し始める。
その際、冷静だった三人はその傍、ゾロが腕を組んで立っているのを見つけた。
「ゾロ？　おまえ何やってんだこんなとこで」
「ん？　おまえらか」
サンジの呟きに反応して振り返る。ゾロも今になってイガラムに気付いたようだ。
シルクとサンジが彼へ歩み寄り、この場に居ることを不審に思う。
「どうしたのゾロ。キリと一緒じゃなかったの？」
「まさかまた迷子か」
「うるせぇ。色々あるんだよ、こっちも」
「へぇそうかい。だがおまえ一人でここに来れるはずねぇよな。どうやって来た」
「あ？　ガキじゃねぇんだ。これくらい当然だろ」
「てめぇ……ココヤシ村の騒動をもう忘れてやがんのか」
どことなく剣呑な空気を醸し出す二人に呆れ、シルクは腰に手を当てて嘆息していた。やはりどこへ行って環境が変わっても彼らの関係は変わらないらしい。
その頃のイガラムは大声でビビの名を呼び、騒々しくて声が掻き消されようとも叫んでいる。
俯瞰的に見ていればおかしな集団だ。
これがキリの選んだ仲間か。
アニタはどこかつまらなそうに頭の後ろで手を組み、むすっとした顔で荒々しく鼻息を漏らす。
その直後、酒場の上部から大きな物音が聞こえた。
視界で捉えられる位置ではないため、ゾロを含めた五人はそちらに注意を向けるも、そこで何が起こったかを知ることはできず。ただおそらく戦闘だろうということだけは理解できた。

喧嘩ならば至る所で行われている。今更驚くことではないかもしれない。
しかし考えてみれば、それだけ騒々しい場所で一際目立つ音というのもおかしな物だろう。
先程の音は爆発によって生じた音だろうと気付くのに数秒。
はっとした顔になったイガラムは瞬時に顔を青ざめさせていた。
「ビビ様ッ!?」
嫌な予感がしたのか、目視で確認した訳ではないのにそこにビビが居るだろうと気付く。
咄嗟に彼は駆け出して酒場の最上段へ急いだ。
残されたゾロ、シルク、サンジも溜息をつきつつ、無視はできずに彼を追い始めた。向かう先に仲間が居るとは限らないが一人にするのも面倒に思ったらしい。
アニタは、頼まれた用事を終えた以上は同行をやめてもよかったのだが、わずかに逡巡する。
別段興味はないものの、もう少しくらいなら見てやってもいいかもしれない。
なぜかそんなことを想い、彼女もまた三人の後ろへ続いた。

〝海賊処刑人〟

怒り心頭といった面持ちのナミが、バンっと強く音を立てて机を叩いた。
「参加料五十万ベリー!? ふざけんじゃないわよ!」
「別にふざけちゃいねぇよ。それがレースに参加する条件だ」
広大な酒場の最上階、その一番奥。
幅広のテーブルを挟んで向き合うでっぷり太った男は、葉巻を吸いながらそう答えた。
レースの胴元である彼は参加者を募り、参加料を徴収しているらしい。それを聞いた時点でナミは不服そうにしていたものの、耐えられなくなったのは額を聞いてからだ。
デッドエンドに参加するには五十万ベリー支払わなければならない。
そう言われた瞬間には目の色が変わって、我慢もせずに異論を唱え始めたのである。
彼女の後ろでは他の三人が困った顔をして見守っていた。
レースに参加したいルフィはそれくらい構わないだろうという表情で、ウソップは参加を回避するチャンスかもしれないと喜色を表し、ビビはただただ困惑している。
「五十ベリーにまけて」
「ハハハ、おもしれぇお嬢ちゃんだ。だがこれは海賊の中の勇者を募るレースだぞ。おままごとならお母ちゃんと家でやりな」
「参加料なんて納得できないわ。だってレースにも参加しないあんたが得するだけじゃない」
「そりゃあそうだろう。おれたちゃ海賊、金にならねぇことする訳ねぇだろ。レースの参加者は賞金を求め、観戦する奴は賭けのために金を出し合って賞金を作り、おれたち主催者は参加者から参加費を集めて懐を潤わせる。長年そうして続けられてきたんだよ」
「だからって五十万ベリーなんて!」
「ねぇならエターナルポースは渡せねぇな。レースにも参加させ

ねぇ」
にやけた顔で胴元が告げるため、苛立つナミが表情を険しくする。
とにかく感じの悪い男だ。レースには参加したいが、今はそれ以上にこの男の鼻を明かしてやりたいと思う。彼女の頭脳はそのために使われていたらしい。
いじわるそうに笑って、こちらも黙っていないとナミが告げる。
「フン、それならこっちにだって考えがあるわ。エターナルポースだって必要ない」
「果たしてそう上手くいくかな」
したり顔で胴元が言う。
何も言わずとも彼女の考えがわかったのか。ナミは不意に表情を歪めた。
「おまえの考えは大体わかる。他所の船を追うか、エターナルポースを盗もうって腹だろ。大体の奴がそうするのさ。こっちもそうさせねぇために護衛を雇ってるんだがな」
「ぐっ、えっらそうに……」
低く唸るが強く出ることはできなかった。腹に隠し持っていた策を言い当てられてしまって、対策までされているのなら考え直さなければならないと思ったところだ。
こういう場合、海賊らしくぶっ飛ばしてやりたいと思うものの、深呼吸して心を落ち着ける。
それではそこらの海賊と同じだろう。確かにそのしたり顔はムカついて、思わず歪めてやりたくなるが、ルフィが目指すのは海賊王。世間一般で居ていいはずがない。
冷静に対処しようとナミが必死で落ち着こうとする中、ウソップは対照的に笑顔だった。
輝きを放たんばかりの上機嫌さは恐怖心が和らいだせいだろう。このまま参加できなければ危険なレースに参加せずに済む。それを喜ぶ素振りがあった。
「だっはっは、まぁ金がないんなら仕方ないな。こりゃ参加は無理だぞルフィ、諦めてアラバスタに急ごう。ほら、うちにはビビも居る

わけだしよ」
「えぇ？　おれは嫌だぞ。絶対参加するんだ、海賊レース」
軽快な足取りで歩み寄った後、ウソップの腕はルフィの肩に回された。
妙に上機嫌な様子で笑いかけられるのだがルフィの表情は優れず、参加を心待ちにするため、彼の言葉には素直な疑問と異論で応えることとなった。
その間もナミは考え続けており、何やら譲れない一線があるらしい。
「つってもナミは参加料払いたくねぇみたいだし……なぁ？」
「ナミ、払ってくれよ。三億ベリーだぞ。おまえだって欲しいだろ」
「ちょっと待ちなさい。そりゃ欲しいけど、それとこれとは話が別なの」
「なんで」
「だって払いたくないでしょ、こんな奴らに」
「それだけか？　金がないとかじゃなくて？」
「お金はそれなりにあるわよ。でも参加料だけで五十万ベリーなんて癪じゃない。いくら三億ベリーのためだからって、私の五十万は返ってこないのよ？」
「え～!?」
「それだけのために……おまえ」
あっけらかんと言うナミの顔を眺め、驚かずにはいられない。予想外である一方、子供のような意見にはルフィだけでなくウソップでさえ開いた口が塞がらなかった。
金銭的に困窮している訳ではなく、ただ単純に払いたくないだけだという。
それなら払ってくれてもいいのではないかとも思うのだが、彼女なりの拘りがある様子。
すぐさまルフィは支払いを頼み始めて、しかしやはりナミは納得していない顔だった。
「なぁ～ナミ、払ってくれよ。あとで三億ベリーもらえるんだから

いいだろ」
「確かに払うしかなさそうだけど……やっぱりムカつくのよね、あいつの態度とか」
「そんなの気にすんな。明日はレースなんだぞ。おもしろそうじゃねぇか」
「う～ん、三億ベリーのための投資か……でも」
頭を抱えてしまったナミは苦い顔で考えていたようだ。
これはまずいとウソップが慌て始める。このままならば参加を避けることもできる可能性はゼロではない。しかし彼女が考えを変えてしまったら参加することになる。
できる限り平静を装い、考えを変えさせないよう、ウソップが意見を口にし始めた。
「ま、まぁでもいいんじゃねぇか？　別にここで三億ベリー手に入れなくてもよ、ビビは王女なんだから、アラバスタに着きゃ王様からお礼とかあるかもしれねぇし」
「わ、私？」
「そうだよなビビ？　頼む、ここは穏便に進めるためにも……」
「そ、そうね。国のお金のことは今すぐ決められないけど、私個人の貯金ならなんとか」
「だそうだ。だからここは先を急いでだな――」
なんとか注意を引いて、この場を立ち去ろうと考えていた。すると振り返ったナミはきょとんとした顔でウソップとビビを見る。
「何言ってんの、そんなの当たり前じゃない。そこに関しては心配してないわ」
「ええっ!?　すでに考慮済み!?」
「わ、私にも言ってなかったのに……」
「王女を送り届けるんだからそれくらいあって当然よ。それとこれは別問題。三億ベリーを見逃すっていう手は絶対にない」
「だったらもう払えよ、おまえ……五十万ベリーくらい」
期待が裏切られて肩を落としてしまう。
力の抜けてしまったウソップは溜息をつき、投げやりな態度で呟い

た。
ビビもまた自身が知らなかった企みをあっさり明かされ、どことなく困った顔で俯く。
二人にとっては残念なことだが、意見を聞き入れられることはなさそうだ。
話は停滞しかけていた。
そんな頃を見計らい、どこぞより近付いてきた人影が彼らへ声をかけたのである。
長身の青年だった。黄色いジャージを身に着け、七分丈の黒いズボンの真下には同色のブーツを履き、コツコツと足音を立てている。
黒のシルクハットをかぶり、髪はわずかに赤みがかった色。
鋭い目つきは一心にルフィを捉えていて、周囲の者とは纏う空気が違っていた。
「金がないならおれが立て替えてやろうか？」
「ん？」
何気ない一言。警戒心を感じさせず気楽にルフィへ問いかけた。
嫌な予感がしたのか、即座にウソップが割って入って青年の前に立つ。まるでルフィの姿を隠そうとするような素振りは、間違いなく答えがイエスになるだろうと予想したからだ。
「うぉおおいっ!?　いきなり出てきて何言ってんだてめぇ！　余計なこと言わなくていいぞ！　こっちはやっと話が纏まりそうなんだよ！」
「ただしその代わり条件がある。レースの間、おれをおまえらの船に乗せろ」
「話聞いてんのかてめぇ!?　おれを無視すんな！」
「おまえが払ってくれんのか？　しっしっし、いい奴だなぁ」
「やめろ～ルフィ！　おまえはおまえで疑わなさすぎだろ！」
ウソップの必死な叫びにも耳を貸さず、ルフィと青年は視線を合わせていた。
いつも通りと言えばそれまでか。
全く疑わずに彼の提案を受け入れようとしている。

「じゃあとで返すからよ、貸してくれよ」
「船に乗る件は？」
「ああ、いいぞ」
「ちょっとルフィ、こいつが誰かもわからないのに、そんな条件……！」
「そうだぞルフィ～！　よく考えてから答えろって！」
慌ててウソップだけでなくナミまで止めようと肩を掴む。
海賊だらけの島で、明らかに雰囲気が違う人物。これを警戒しないのはルフィくらいのもの。常人ならば何か裏があると思うのは当然だった。
外見を確認しただけでもどこか威圧感のような何かを感じる。
しかし手配書で見た覚えのない顔だ。
警戒するのはそのせいか。
全く知らない相手だからこそ、手配書で見た顔と出会う時とは違った緊張感を覚える。
少なくともこの風貌で弱いとは思えない。自分一人で近寄ってきたところを見てもそれなりに胆力はあるのだろう。だが、一人で来たと確証を持てた訳でもなく、どこかに仲間が隠れているかもしれない。二人は騙し討ちを警戒していたようだ。
仲間たちの警戒心も知らず、ルフィは笑顔で問いかけた。
「おまえ名前は？」
「いやいやだから！　乗せねえぞ!?　こんな怪しい奴メリーに乗せるっておまえ！」
「シュライヤ……シュライヤ・バスクードだ」
帽子を手で押さえつつ、含みを感じる笑みと共に告げられる。
その一言を聞いて周囲ではわずかに動きがあった。
明らかに顔色を変えた者たちが居る。
近くのスペースに居た海賊が飲食の手を止め、聞こえていた胴元も笑みを消してしまい、一瞬で音が消えてしまったかのような状況となる。言わば空気の重みが増していた。
先にルフィ以外の三人が気付いて、危険を感じたのはそれからだ。

見れば数多の海賊たちが武器を手に取り、席を立って歩いてきていた。
すでに薄れたはずの戦闘の気配を感じたのは、彼らの目が血走っていたからか。
三人はそそくさと身を寄せて縮こまり、素早くルフィの背へ隠れる。
「シュライヤ・バスクードォ？」
「そいつは有名な賞金稼ぎの名前じゃねぇか」
「確か、〝海賊処刑人〟とか呼ばれてたか？」
「五千万ベリーの賞金首を一人で討ち取ったっつってたなぁ。ありゃ本当なのかねぇ」
「しっかしおかしな話だよなぁ。海賊の島になんで賞金稼ぎが紛れ込んでんだ、おい」
「まさかおれたちを〝処刑〟しに来たとかぁ？」
「ハハハッ、笑える」
ぞろぞろ集まってきて二十人近くは居ただろう。
瞬く間に青年、シュライヤが取り囲まれてしまい、ついでにルフィたちまで囲まれた。
一人の男がサーベルの腹でシュライヤの顎を撫でて、脅すように呟く。
「ヨゥ、答えろよ。どういうつもりでこの島に来てんだ？　自殺志願じゃねぇよな」
「うるせぇな。おれがどこに居ようとおれの勝手だろ」
「ところがそうでもねぇのよ。海賊の島にゃ海賊しか入っちゃいけねぇ決まりなんだ。おまえは海賊か？　違うよな。じゃあここに居ちゃいけねぇ人間だろうが」
「正規のルートで入ったんだ。文句を言われる筋合いはねぇ」
「チッ、どこぞの船にでも忍び込んでやがったか。それならよう」
二メートルを超える大男がサーベルを握り直した。
一度手元へ引き寄せ、筋肉が一層盛り上がる様相を見せる。
力を入れて、シュライヤ目掛けて振り下ろそうとしていたらしい。

間近で見ていたビビやナミ、ウソップは小さく息を呑んだ。しかしルフィは敢えて反応せずに表情さえ変えない。涼しげな目で見つめている。
「おれが判断してやるよ。てめぇはここで、死ぬべきだろうが！」
大上段から振り下ろされる。
サーベルはシュライヤの脳天を割ろうと迫り、思わずビビが目を瞑る。
誰もが同じ結果を予想したのだが、男たちの視界にはそれらを裏切った光景が映った。
サーベルを振るった男の体が宙を舞ったのである。
二メートルの巨体が細身のシュライヤに負けたらしく、鋭い回し蹴りが腹へ突き刺さって、気付けば地面を転がっていた。
流石に意識を失うほどではなかったようだが、それにしても本人でさえ驚く状況だ。
ぱちくりと瞬きを繰り返し、蹴られた男が腹を押さえながら起き上がる。
シュライヤの姿勢が変わっていた。男を蹴った仕草の後、右足は伸ばされたまま、嘘ではないのだぞと伝えるような姿。その足を下ろして、ポケットから両手を出す。
敵に囲まれた状況下で彼は笑っていた。
やっと状況が理解できたようで、武器を掲げて吠える音に包まれた。
取り囲んでいたはずのルフィたちさえ忘れ、彼らはシュライヤにのみ注意を向けていたようだ。
「この野郎……図に乗ってんじゃねぇぞ」
「てめぇ誰を相手にしてんのかわかってんのか？　あ？」
「おれたちゃ泣く子も黙るガスパーデ海賊団だぞ」
手に手にサーベルや棍棒、斧を持つ男たちを周囲に置き、シュライヤは少し俯いてほくそ笑む。
「へぇ、そりゃ好都合」
「この島に来たのを後悔しろ！」

また別の男が右側から襲い掛かってきた。
これを認識したシュライヤは軽やかに跳び、背後に居た男の肩に手をついて、バック転の要領でその場から大きく飛び退く。包囲すらも易々と飛び越えてしまった。
誰も居ない場所まで逃げ、無傷で着地する。
彼は自ら帽子を脱いで手に持った。薄く赤を感じさせる髪が露わとなる。
端正な顔立ちをしていた。
精悍で意志の強さを伝える目つきだ。複数の敵に対して怯えていない。
何を想ったか、彼はルフィ目掛けて帽子を投げた。回転するそれは軌道を変えることなくルフィまで届き、その手へ納まる。
受け取ったはいいものの意味がわからず首をかしげた。
敵が肩を怒らせているのを知りながら、シュライヤはルフィへ言う。
「悪いな、持っててくれ。話を続けるにはこいつらが邪魔だろ」
「わかった。いいぞ」
「余裕ぶっこいてる場合かコラァ！」
同じフロアに居た男たちまでもがぞろぞろ集まってくる。
その数、百人はくだらないだろう。
もはやガスパーデ一味だけではない。シュライヤに恨みを持つ者、生意気な態度に腹を立てて割り込もうという者、或いはただ喧嘩に参加したいだけの者。それぞれ思考は違っていたが、武器を手にする以上はシュライヤの命を狙う人間ばかりであった。
続々と集まってくる人の波を確認して、肩を回したシュライヤは笑みを深める。
盛大な喧嘩は望むところか。
怯える素振りも見せずに集団の視線を受け止めていた。
「この野郎、調子に乗りやがって」
「てめぇに相棒をやられた」
「せっかく来たんだ。楽しんで帰れよ」

「へへっ、面白そうだな。おれにもやらせろ」
武器を担ぐ男たちが歩み寄る最中、突発的にシュライヤが膝を曲げて力を溜めた。
その瞬間に無数の海賊がどっと押し寄せ、戦闘が始まる。
「やっちまえェ！」
酒場中に怒号が響くほどの迫力だった。
前後から迫る人の姿はもはや壁のように感じられ、逃げ場を見つけられる隙などない。しかしその場で軽く跳ねたシュライヤは、地面を低く駆けて前へ走った。
自分から敵へ駆け寄り、地面に手を着く姿勢で足が跳ねあがる。
先頭に居た男が顎を蹴り上げられてたたらを踏んだ。
意識を失うほどのダメージではなかったようで、姿勢は崩れかけるがなんとか立て直す。ただし気付いた時には手に持っていたはずのサーベルが奪われていて、それはシュライヤの手の中に。
左手に逆手で持ち直して構える。
尚も海賊たちは猛然と襲い掛かってきて、彼はその全員に立ち向かった。
蚊帳の外となった位置から見るルフィは好奇心から思わず唸った。
彼の動きは身軽の一言だ。長い腕や脚を活かして敵を寄せ付けないばかりか、必要があれば地面を転がり、予備動作もなくバック転をして、軽やかに敵の攻撃を避けている。
それだけでなく周囲の環境さえ利用していた。
敵は大勢、味方はゼロ。そんな絶望的な状況さえ自らの武器としたらしく、数多の海賊団が入り混じるせいで連携が取れない敵を置き去りに、次々居場所を変えて移動していく。
大勢の人間を倒すことに慣れている戦い方だった。
一人で賞金稼ぎとして生きてきた経験だろう。逃げながら戦う、奇妙だが確かに有効的だ。
広い場所に居ては不利だと判断し、シュライヤは敵の間を駆け抜け、つい先程まで宴が繰り広げられていたスペースへ飛び込み、料理やグラスが並ぶテーブルを飛び越える。

直後、一面に並んだ海賊がピストルを構えていた。
これを回避するためテーブルをひっくり返して盾とする。発砲はその直後だった。
「撃て撃てェ！　殺せェ！」
「いやっほ～っ！」
即席ながら協力して攻撃のタイミングが合わせられた。
銃弾を放つ軽やかな音が連続して、辺りには硝煙が漂い、放たれた弾はテーブルを貫通する。
隠れていたシュライヤは危うく当たりかけて、冷静な表情だが幾分肝を冷やしていた。
「おっと。流石に数が多いな」
左手にはサーベル。
使い慣れていないが唯一の武器。何もないよりはマシだろうと考えて握りを確かめながら、発砲音が消えた瞬間にテーブルの陰から飛び出す。
気付けば眼前には三メートル近い大男が立っており、すでに斧を振り上げていた。
「うおっ、でけぇな」
「死ねコラァ！」
両手で柄をしっかり握り、全力で振り下ろされてくる。強固な斧はテーブルを叩き割って、ついでと言わんばかりに陶器の皿さえ両断してしまっていた。
それでもシュライヤの体には傷一つない。
素早く身を回転させた彼が斧を握る手首を切り付け、鮮血が舞うと同時に男の体が反射的に斧を手放した。肉体の反射を利用している様子である。
小さな悲鳴。しかしそれさえ最後まで聞かず、顔面に蹴りが叩き込まれる。
斧を手放してしまった男は無様に地面へ背をつけ、転がってしまった。
「ぐおおっ!?　痛ええェっ!?」

「バーカ。ザコは引っ込んでろよ」
倒れた大男に代わるよう、地面を蹴った小男がシュライヤへ飛び掛かる。
両手には短刀。使い込まれた様はボロボロの刀身から伝わった。
身長こそ低く、脅威と感じようもない姿だが、奇妙にも両腕が長い。まるで関節が二つあるような外見をしていて、その不気味な小男は素早く腕を振るった。
「ヒャオッ！」
「へぇ、手長族か」
逆手に持ったサーベルで刃を受ける。
軽快な音を立てて通り過ぎていき、受け止めるまでもなかったらしい。
間を置かずに次の攻撃が来て、体は遠いのに腕だけが伸びてくる。妙な感覚だった。存在こそ前々から知っていたが、初めて対峙する人種〝手長族〟に多少の困惑を抱き、シュライヤの体は後ろに下がりつつ警戒心を抱く。
二度、三度と刃を受け流し、表情が歪む。
細く長い腕は見た目に反してかなりの筋力だ。片腕で受けていては感じる疲労感が凄まじい。
防御すらまずいと感じたのはその時だ。
周囲の環境を見やり、判断するのは一瞬。
シュライヤの体を挟み込むように両腕が振るわれた瞬間、彼はサーベルを順手に持った。
「ヒャオォ！　もらったァ！」
瞬時の判断で地面から足を離した。自身の判断で背中から地面へ倒れていき、手長族の男はまさかの回避行動で目が点になり、反対にシュライヤは笑みを浮かべていた。
倒れ込む最中、左腕を振ってサーベルを投げつける。
体勢は悪かったが、くるくる回るそれは空気を切り裂いて宙を駆け。
一秒と経たず標的の肩へ突き刺さって悲鳴を発させた。

「ぎゃあっ!? な、な、投げっ……!?」
狼狽したせいで背中から地面へ倒れ込む。
その隙にシュライヤは先に倒れ、素早く立ち上がり、駆け出した。
敵へ向かう前に先程の大男が落とした斧を拾い、それから手長族の男を目指す。
彼もすぐに起き上がってきた。しかし時を狙ったかのように、起き上がった瞬間の彼へシュライヤが駆けつけてきて、両手で持った斧を振るおうとしていた。
避けようとは考える。だが体が言うことを聞くほどの時間はない。
男の体は分厚い刃で切り裂かれて、バッと勢いよく血が噴き出した。
悲鳴さえ噛み殺して意識を失う。
その傍を通り過ぎ、ふぅと一息つくシュライヤは前方を睨みつけて敵を牽制した。
かなり戦闘に慣れていなければできない芸当だ。一端の海賊として航海を続ける面々は一連の動作で彼の実力を感じ取り、認識を改めて表情を引き締め直す。
多くの者がそうする中、先に倒された大男が起き上がっていた。
鼻を押さえて鼻血を流しているが、意識は失っていなかったらしい。シュライヤの背後で立ち上がり、おそらく気付いていないだろう彼を睨みつけ、思い切り拳を振りかぶった。
「この野郎っ、それはおれんだろうが!」
「なんだ、もう起きたのか? 寝てりゃよかったのに」
全力で拳が振り抜かれるものの、軽い様子で屈んで避けられ、完璧に見切られていた。
あっさりした様子でシュライヤが斧を捨てる。
重い武器が手に合わなかったのだろう。無手になった直後、地面に落ちていた酒瓶を拾った。
しゃがみ込んで頭上を拳が通り過ぎ、カウンターの要領で腕を振り上げる。
顎を捉えた酒瓶が砕け、凄まじい衝撃が体を襲い、今度こそ意識を

失って背から倒れた。
中身が入っていなかったのが幸いだった。割れた瓶の破片が頭から降り注ぐが、彼の体が傷つくことはなく、冷静な面持ちですんなり立ち上がる。
右手には割れた瓶の飲み口の部分。
鋭利な先端は武器の代わりにもなると考え、今度は敢えて捨てず。
二人同時に向かってくる敵の姿に目をやった。
「ハ～ッハッハ！　そんなもんで戦えんのかァ！」
「止めれるもんなら止めてちょ～だいよ！」
棘が付いたナックルダスターを装着する細身の男と、槍を構える小太りの男がやってきた。
冷静に見据えるシュライヤは即座に対処する。
手に持っていた瓶を投げつければ、真っ直ぐ飛んだそれが小太りの男の顔に当たった。
尖った先端によって皮膚が裂かれて鮮血が飛ぶ。重症と呼ぶほどではないが身を仰け反らせずにはいられず、当然隙を生む結果となり、シュライヤはそこを狙った。
敵から素早く槍を奪い取ったのである。
「あっ、相棒――ぶおっ!?」
奪った槍をバットのように振り抜き、柄の部分で細身の男が顔を殴られた。勢いに負けて体が一回転し、浮遊感を感じたかと思うと、後頭部を地面に打ち付ける。
どうやら彼は気を失ってしまったようだ。
手で顔を拭った小太りの男もそれに気付いて、狼狽すると同時に怒りを露わにした。
「なんだぁてめぇ！　ふざけた真似しやがって――おぼぉ!?」
文句を口にした途端、槍の石突が顔面に激突した。
めり込むようにして男にダメージを与え、膝から力が抜けてしまい、倒れ込む。
小太りの男も気絶した様子で、シュライヤは肩に槍を担いでほくそ笑んだ。

大した脅威とは思っていない顔だ。ほんの数秒の攻防でも余裕を感じさせ、身軽で素早く、的確な行動により多を相手取っている。敵に対して全く遅れを取ってはいなかった。
まだ続々と敵が迫る。だが彼は慌てずに迎え撃とうとしていた。
傍観していたルフィは目を輝かせて見つめる。
武器を選ばず、その場にある物を使って攻撃を繰り出し、その身軽さは驚嘆に値する物。
かつて見たことがない戦法は好奇心を掻き立てる物だったらしい。
ルフィは今にも飛び出しそうな姿で呟いた。
「あいつすげぇな、めちゃくちゃ身軽だ。賞金稼ぎっつってたな」
「ええ……海賊処刑人よ。有名な賞金稼ぎ。五千万ベリーの賞金首を一人で倒したって」
ルフィの問いに答えるよう、ナミが言葉を吐き出す。
苦々しい表情で不安が色濃く見える姿だった。
同意すべくウソップも口を開く。
「そいつなら聞いたことあるけどよ、あんなひょろい奴なんだな……てっきりもっと大男だと。でもほんとに強えぞ」
「この辺りでは最も有名ね。私も姿を見たことはなかったけど」
ビビも続けて言う。グランドラインで暮らし、一時的にとはいえ賞金稼ぎとして身分を偽っていた彼女でさえ実物を知らなかったようだ。
高名な賞金稼ぎ、尚且つ実力は本物。
迫り来る敵の波を受けて次々と倒しており、武器さえ選ばなかった。
見ていたルフィはいよいよ動き出そうとしている。何かを考えているらしく、持っていた帽子をウソップに預けたのが良い証拠だった。
「ウソップ、これ頼んだ」
「待てぇい！　まさかおまえ、いやまさかとは思うが……」
「しっしっし、おれも行ってくる！」
楽しげに言ったルフィは颯爽と走り出そうとした。その挙動にあ

らかじめ嫌な予感を感じていたのか、素早くウソップが腕を掴む。しかしゴム人間である彼は掴まれた腕が伸びてしまい、距離はどんどん開いていってしまう。
止めるのは難しく、叫ぶウソップの声は届いてはいなさそうだった。
腕を伸ばしながらもルフィの足は前を目指し続けて、全く影響はなさそうだ。
「なんでそういう展開になるんだよ！　おまえが加わったらまためちゃくちゃになるだろ！」
「だっておもしろそうじゃねぇか」
「そんな理由だけで混乱させんなって！　いいからやめとけ！」
「まぁ心配すんなよ。すぐ戻るから」
そう言って喧嘩に参加しようとする彼を止め切れず、ついには手が離れてしまう。
ウソップの声も空しくルフィは駆け出していった。
大立ち回りを見せるシュライヤを眺めつつ、さてどこから始めるかと辺りを見回した。
遠くでバズーカを構える人影を見つける。標的としているのは当然シュライヤ。別段彼を助けようというつもりもなく、ただ興味があったというだけの理由で、そちらに目をつけたらしい。
笑顔になったルフィはバズーカを持つ男を目掛けて走る。
「バカな奴らだ、一気にぶっ飛ばしちまえば終わりだろ」
体格の良い男が引き金に指をかけた。
その頃に気付いた大勢の人間が騒ぎ始め、巻き添えを喰らうのを恐れて声を出す。
「おれがぶっ飛ばしてやる！　死にたくねぇ奴ァ逃げ出せよ！」
「バカッ、おれたちまで巻き込む気か!?」
「おいやめろっ！　余計なことすんじゃねぇクズ野郎！」
「あとでてめぇもバラされてぇのか！」
一気に騒がしくなる野次も気にせず、引き金が引かれた。
バズーカからは特大の砲弾が飛び出し、火薬の詰まったそれはシュ

ライヤを目指して空を進む。
「そら行けェ！　ぶっ飛ばせェ！」
「ゴムゴムのォ～……風船！」
直進する軌道上へ、突如ルフィの姿が現れる。軽くジャンプした彼は体の正面で砲弾を見据え、素早く大量に息を吸い込むと腹を膨らませ、砲弾を受け止めた。
ゴムの体にダメージはなく、力を溜めるように受け止める姿は多くの者を驚愕させる。
後に、砲弾は跳ね返され、全く同じ軌道を通って元の位置まで帰っていった。
バズーカを持つ男に直撃すると、盛大な爆発と共に轟音が鳴り響く。
悲鳴を上げて男が倒れた。
直後にルフィが着地し、突き刺さる視線を受けながら、にかりと笑って拳を握る。
「にっしっし！　楽しくなってきた！」
ただ純粋に楽しそうな笑顔で、一見すれば子供のようだ。しかし多くの者が知っていた、彼はつい先程までキャプテン・キッドと互角に殴り合っていた人物だと。
興味が半分、警戒心が半分。
彼もまた敵として迎え入れられ、騒ぎの中心地へ降り立った。

乱闘騒ぎ

心底楽しそうに駆け出したルフィが敵として見定められた。
今となってはガスパーデ海賊団だけでなく、数多の海賊が彼を睨みつけ、倒して名を上げようという欲求に駆られている。
酒場の最上階は暴動にも似た様相となっていた。
怒号が響き渡って騒がしさが増し、階下の者たちにまで影響を与えるほどである。
ルフィは笑顔のままで脚を振り上げて、前方で壁のように連なる男たちへ振り抜いた。
「やっちまえェ！」
「ゴムゴムの、鞭！」
伸びる足による一撃が、一斉に敵の姿を捉え、軽々と蹴り飛ばしていく。勢いは止まらず、蹴られた男たちが後ろに居る者たちを押しやって飛ばされた。
伸びた足を引き戻し、さらに駆け出す。
今度は両腕を高速で動かして予備動作を行い、走りながら拳を繰り出した。
「ゴムゴムの銃乱打（ガトリング）～！」
「ぎゃああっ!?　伸びてきたぁ!?」
「野郎、やっぱ強ぇぞ！」
「おもしれぇじゃねぇか３０００万！　そうじゃねぇと楽しめねぇ！」
次々伸びるパンチが連続して敵を捉える。
屈強な男たちが宙を飛んでいき、辺りに悲鳴が響き渡った。
しかしそれでも途切れない。向かってくる敵の数は増える一方で、ルフィが敵を弾き飛ばす度、歓声と共に楽しんでいるらしい野次がどちらからも聞こえてきた。
流石は海賊の島。喧嘩一つ取っても異常性が伝わる。
酒も入っているらしいとはいえ、どうやら怯えている者は居ないようだ。

むしろ望むところだろう。びびっている敵を倒すよりかは、楽しげに、それでいて全力で襲ってくる敵を倒した方がよほど気分が良い。
命を賭けていながら、不思議と楽しい喧嘩だ。これが海賊島の雰囲気かもしれない。
殺到してくる敵は数が多く、どれだけ精神的に余裕があっても物理的な苦戦はあった。そこで地面を蹴って高く跳んだルフィは空中から無数の蹴りを放つ。
「ゴムゴムのォ～……スタンプガトリング！」
「うおっ!?　上だ！」
「うるせぇなこの野郎っ！　見りゃわかるだろうが！」
怒号が多く、出会ったばかりの海賊団が肩を並べる環境も多いため、口汚く罵り合う声も決して少なくはなかった。今は大半がルフィを敵として認識しているが、時間が経てばただの乱闘と化す時間もそう遠くはないだろう。
シュライヤにとっては僥倖だ。
敵から奪った棍棒で大男を殴り倒した後、彼は苦笑してルフィを見る。
「まったく、騒がしい野郎だ。なんでおまえが割り込む必要がある」
呆れるものの敵の数は減っていた。多くがルフィの乱入を喜び、キャプテン・キッドとの決闘を見た後で血が滾っていたばかり。その張本人を討ち取れるとあって歓喜していた。
力試しに加えて航海によるストレスの発散のようだ。
話題のルーキーらしく、多少形は歪であるものの、ルフィの人気は凄まじい物だった。
「こっちの数が減ったな。まぁ全部任せる気もねぇが――」
「おらおら、どけどけェ！　裏で仕入れた迫撃砲様だァ！」
棍棒を担いでシュライヤが足を止めた時、またしても大声が聞こえて注目が集まる。
見れば日に焼けた肌を持つ筋骨隆々の男が、大きなバズーカを担いで立っていた。つい先程見た記憶のある光景である。多くの者がそう気付いたようで、慌てる声も少なくない。

「死にたくねぇ奴はどいてろ！　こいつでまとめてぶっ飛ばしてやるぜ！」
「おいバカやめろ!?　さっき跳ね返されたの見てなかったのか！」
「おれたちまで巻き込むんじゃねぇ！」
「発射ァ！」
ズドン、と音がして弾が発射された。砲弾のようなサイズであった。
放たれた弾はルフィを目指して進んでいき、敵を殴っていた彼も視線を向けて気付く。しかし動じない。即座に息を吸い込んで腹を膨らませた。
ゴムの体に銃撃は無効。
瞬く間に膨らんだ体は風船のようで、真正面から弾を受け止める。
「風船！」
「なにィ!?」
「ほら見ろ、言わんこっちゃねぇ！」
ぐぐぐと受け止め、勢いよく跳ね返した。
空中を駆ける弾丸は放った男の下へ戻っていき、為す術もなく、大男に直撃する。
凄まじい音を立てる爆発は一瞬で彼の意識を奪ってしまった。
戦闘は激化する一方。そこへシュライヤも飛び込んでいく。
喧嘩が好きなだけの海賊とは違うが、その方が早いと踏んだらしい。海賊たちと遊んでいる場合ではなく目的はルフィに話をつけること。それ以外にない。
手に持った棍棒で近くに居た海賊を殴り飛ばし、彼にもまた男たちが殺到する。
混乱は深まるばかりだった。
いつの間にか階下に居た海賊も最上階へ来て参加している。ただ騒ぐためだけに。
圧倒されるウソップとビビは大口を開けてその光景を見ていて、なぜこうなったのだろうと頭を抱えたい一心ながら動き出せずに、唖然として立ち尽くすままだった。

一方、普段なら怯えているはずのナミはと言えば、レース目前のためか拳を握っている。怯えるどころかルフィを目標に檄を飛ばし、熱心な声で応援していた。その姿は普段を知っていれば違和感が拭えない。が、言葉を聞いてみれば納得もできる。

「ルフィ！　そいつら全員のしちゃいなさい！　臨時収入で五十万ベリー払えるからね！」

「盗む気だ……倒れた奴らの財布から奪う気だ」

「私も、そんな気がしてきた……」

「これだけ居れば五十万どころじゃないわね。一人も逃がしちゃだめよ！」

拳を突き上げて応援する彼女は邪な想いに囚われていた。傍から見ていてよくわかる。

ウソップとビビは揃って肩を落とし、どうしたものかと溜息をつく。

もはや二人に止められる状況ではなさそうだ。

「ほら、何やってんのよキャプテン・ウソップ！　ルフィを援護！」

「ええっ!?　いやいやいや、今手ェ出したらこっちに来るだろ、敵が！　援護は得意だが誰がおれを守ってくれるんだよ！」

「大丈夫よ、大騒ぎになってるし。いいから一人でも多く倒しなさい」

「悪魔か、おまえは。この騒ぎの中で気付かれたらどうなると……」

「じゃあ気付かれないようにそっと倒しなさい」

「ナミさん、それはちょっと無理があるような……」

困り顔のビビが助け舟を出したところで聞き入れる気はなさそうで。

結局ウソップは恐る恐るパチンコを取り出し、乱戦となった状況下で援護を始める。

気付かれないようにと必死な努力を続け、しかし放たれる弾丸は着実にルフィの周辺に居る敵にダメージを与えていった。

ルフィの戦いやすさは増したようで、一太刀も受けることなく殴打を続ける。

キッドから受けた傷があるとは言っても行動に支障はない。
身軽な動きは止まることがなかった。
少し離れた場所ではシュライヤも身軽な動きで敵を倒している。必要に応じて武器を持ち替え、的確な動作で敵を打ち、倒れていく男たちは後が断たなかった。
更なる怒号が増して、混沌と化す現場は凄まじい様相に変わっていた。
少しでも騒ぎに参加すべく階下から上がってくる人影は多い。彼らもそうだった。少し前まで入り口の前に居た、他の麦わらの一味の面々も、何があったのかと見学にやってくる。
正直なところ想像はできていた。
そのため、上がってすぐに暴れるルフィの姿を見つけたのである。
先頭に居たゾロが腕を組んで呆れるのだが、その横からサンジとイガラムが飛び出す。
「やっぱりあいつか……ちょっと目を離した隙によくもまぁここまで――」
「あぁ！　んナミさぁ～ん！　ビビちゅわ～ん！」
「ビビ様ぁ～!?」
ドタドタ走る男たちを物ともせず、サンジとイガラムの目の色が変わっていた。
二人が持つ感情は違っており、サンジは仲間の女性陣を見つけて喜び、イガラムはビビが殺伐とした状況に置かれていることを嘆いている。しかし感情がどうあれ、どちらも今すぐに駆け出しそうな様子で前のめりになっており、傍に居たゾロは表情を歪めた。
「このクソ外道どもが！　ナミさんとビビちゃんを怖がらせるとは言語道断！　おれが全員オロしてやろうかクソ野郎ども！」
「ナミは怖がってねぇだろ、あれ」
「うん。なんか、煽ってるよね」
「ビビ様ぁ～!?　やはり私が傍を離れるべきではなかった！　今すぐ参ります！」
「おい待ておっさん！　ビビちゃんを助けるのはおれだろうが！」

冷静に状況を見れば気付けることもあっただろう。ゾロとシルクは立ち止まり、なんとなくとはいえ状況を読み取ることができた。しかしその二人に限ってはそんな余裕すらないようで、一方的に騒いで止める暇もなく走り出してしまう。
止めるのも億劫で引き止めはしなかった。
ゾロとシルクは揃って溜息をつき、走り去る二人の背を見送る。
「アホが二人になると一気に疲れるな」
「イガラムさんは、普段は良い人なんだけどね。ちょっと心配性だから」
「アホコックは女を見るとああなるしな」
「悪い人じゃないんだけど、張り切っちゃうからね」
全く心配はしていないが心労は感じる。
暴れるルフィも然り。なぜかナミは雄々しく拳を突き上げていて、ウソップはパチンコを使って援護しているのが見え、遠目から見てもビビは困惑している。
いつも通り、おかしな状況だ。
そう珍しい状況ではないため二人は慌てず、呑気に呟く。
「仕方ねぇ。行くか」
「うん。早く止めてあげた方がいいかも、ウソップとビビのために」
急がず歩き出してゆっくりそちらへ向かう。
騒ぎ続ける仲間たちは心配する必要がなさそうに見える。ルフィが怪我をしているらしい風体には多少の違和感も伴うが、元気そうなので危険視はしていない。
先に行った二人も加勢するだろうし、さほど問題はないだろう。
走っていったサンジとイガラムは、素早く仲間たちの下へ向かっていた。
目的は一つ、自身の大事な女性を守ること。
脇目も振らずに真っ直ぐ駆けて、通り過ぎる海賊には目もくれず、非常に素早い。
一足先に到達したのはサンジだった。
足を止めず、全力で地面を蹴りつけて、ナミに最も近い位置に居た

男へ跳び蹴りを放った。
「てめぇ、誰に許可を得てナミさんに近付いてんだコラァ！」
「おふっ!?」
走るままの勢いで頬が蹴りつけられたことで、気付けば全身が宙を飛んでいた。足をつけて耐えることすらできずに、意識さえも遠ざかって、肩口から地面を滑っていく。
巧みに着地し、しゃがんだままでポーズを一つ。
すっと立ち上がった彼は煙草を指に持って煙を吐いた。
その後、ナミに顔を向け、穏やかな笑みを見せる。
「お待たせ、ナミさん……あなたのナイトが到着しました」
「いいわよサンジくん！　近くに居る奴は全員倒して！」
「あ～いっ！　お任せあれ～！」
凛々しい顔を見せたのも一秒足らずだった。ナミに名前を呼ばれただけでサンジの表情は一瞬で緩んでしまい、軽いステップで敵へ躍りかかる。ふざけた態度だが強さは見事。乱入に驚く敵は次々蹴り飛ばされていった。
しかし慣れているのか対応の動きも早い。
サンジにも注目が集められて、すぐさま乱闘の規模は大きくなる。
イガラムもまた素早くビビの前へ到達していた。
おそらく今までで最も足が速かっただろう。多少息を切らしながら、彼女を背にして無数の海賊たちに立ち向かい、誰にでもなく勇ましく吠えた。
「おまえたち！　私の目が黒い内は、ビビ様には指一本触れさせんぞ！」
「イガラム！」
「ビビ様！　お待たせしました！　これよりこのイガラムめが護衛致します！」
少し前とは打って変わって意気揚々と。
仁王立ちした彼は首元のタイに指をかけた。
「砲撃準備～！」
威風堂々と言い放てば、どこからともなく妙な音楽が奏でられ、彼

の独特な髪型に仕込まれていた小型で筒状の砲台が現れる。
見ていた者たちは驚かずにはいられなかった。
一体どこから出てくるのだと、感想は皆が同じだっただろう。
横目で確認したルフィでさえ釘付けになり、目が飛び出さんばかりに驚いていた。それどころか周囲に居る好奇心旺盛な男たちまでもが、戦闘をそっちのけに声を出し始めた。
「うおおっ!? なんだそれおっさん! イカスぅ!」
「おいおいすげぇファンキーじゃねぇか! どこで仕入れた!」
「つーか普通そこは選ばねぇだろ!」
敵味方を問わず一斉に騒ぎ出す様は呑気にも見え、その中でイガラムは真剣な顔つきだ。
狙いを定め、発射しようとしている。
その挙動に気付いた一部の人間が動き出し、発射の前に止めようと向かい始めた。
「チッ、貴族みてぇな髪型しやがって。偉そうにしてんじゃねぇぞおっさん」
「それ全部剃ってやろうか」
「私のことはなんと言われても結構。しかしビビ様を傷つけさせはしない!」
壁となって襲ってくる敵に対して言い放ち、ぐいっとタイが引っ張られた。
「イガラッパッパ!」
轟音。そして一斉に弾が発射される。
放たれた弾丸は小さな砲弾でもあって、敵の姿を捉えた瞬間に大爆発を起こし、酒場の中に更なる黒煙を漂わせる。髪や肌を焦がす嫌な臭いが辺りに充満していた。
どうやって放ったのかは、傍から見ていても理解できない。
ルフィを始め、イガラムの装備に興味を持っていた者たちは、またしても一斉に騒ぐ。
「すげぇぇぇっ!? どうやって撃ったんだ今の!」
「いやあり得ねぇだろ! なんでそこ引っ張って弾が出る!?」

「あのおっさん、アホなんだな……」
「ああそうか、アホじゃなきゃあんな戦い方思いつかんわな」
口々に呟きながらも喧嘩は続けられて、辺りに漂う黒煙が少しばかり邪魔になる。咳き込む者も少数は居て、ようやく晴れかけたかと思った時にはイガラムが次弾を放ち、また爆発。それだけでなく別の誰かもバズーカを乱射しているらしかった。
至る所から煙が上がって、乱雑に飛ばされていたテーブルや椅子も燃え始めて、半ば火事にも近い状況である。戦闘の熱量は尚も増していた。
人が集まる熱気だけでなく、辺りでちらほら見える火による熱気が肌を撫でる。
だからといってやめようなどと言い出す人間は誰もおらず、協力して火を消すどころか、次第に攻撃を仕掛ける相手はルフィやシュライヤだけではなくなっていた。
今となっては目に見える全員が敵になっていたようだ。
黒煙はさらに広がっていく。しかしある時、風が吹いてそれらが飛ばされた。
急に視界が開けて、喜びながらも驚く者たちが見たままを口にしている。
「おっ、なんだ？　風？」
「春一番か」
「んん？　いや待て……風吹いてるが、なんか、切れてねぇか!?」
強い風の音が聞こえた直後、誰に斬られる訳でもなく、肌が裂かれて鮮血が散る。屈強な男たちが数人纏めて斬り飛ばされていた。
場所を選びながらも、酒場の中でかまいたちが吹き荒れている。
剣を構えるシルクは微笑みを湛え、他の海賊に違わず楽しげに剣を振るった。
「前の島じゃ、活躍できなかったからね。練習の成果はここで見せなきゃ」
ビュン、と剣を振れば、同じ軌道で風が走る。
目に見えない刃は遠く離れた位置に居る男たちまで切り飛ばした。

そこからは少し違った場所。
人々の間を縫うように走り抜け、一歩も足を止めずに進み続ける影がある。
影が通った後には血を噴き出す人間だけが残され、無事に済んだ者など一人もおらず、訳も分からぬ内に次々誰かが倒れていく。
両手に刀を持ったゾロだった。
素早い動作と力強い斬撃で敵を捉え、一瞬の攻防で敵を倒し続けている様子だ。
彼もまたストレスを発散するかのよう、口の端を釣り上げている。
「数だけは上等だな。次から次によくやりやがる」
「おい小僧ォ！　ここを通れると思うなよ！」
「ん？」
駆けるゾロの前方に長刀を持った細身の男が立ちはだかる。
視線を交わらせたのは一度。
それだけで十分だった。
「来やがれ！」
「おう。じゃ遠慮なく」
走る最中に姿勢を低くしてさらに速くなった。小細工はせず真っ向勝負。男もそれを待ち受けて仁王立ち、刀を大上段に振り上げた。
一瞬の交差。飛び出した血が一直線に空を走る。
敵を斬ったゾロは振り返りもせず、結果も見ずにその場を去り、さらに前を目指していた。
別段感想はない。その程度の相手だったのだろう。
勝ちを誇るでもなく前へ進んで、やがて彼はナミたちのところへ到達した。
「おいナミ、どうなってんだこりゃ」
「色々事情があるの。レースに出るわよ」
「レース？」
「とにかくまずそこら辺の奴倒してきて。参加料が必要なんだから」
「待てゾロ！　おまえはここでおれたちを守れ！　いい加減こっち

も危ねぇっての！」
ナミとウソップ、ビビの三人は胴元が座る椅子の後ろにまで避難していた。胴元自身が屈強なボディガードに守られているため、その環境を利用した安全地帯と考えているらしい。本人は迷惑そうにしていたが三人が動く気配もなさそうだった。
レースに出るとは、耳慣れない言葉だ。さっぱり意味がわからない。
ただ状況を考えればこのままで終われそうにない。戦いは避けられないだろう。
溜息をついて頭を振り、やれやれと納得することにしたようだ。
「落ち着いて話し合ってる場合でもねぇな。まぁいい、気晴らしにやなるだろ」
「待ちなさいゾロくん！　お、おれたちは⁉」
「何言ってんだ。おまえが居りゃ十分だろ、キャプテン」
「おまえまでそう言うのか⁉　おれを過大評価し過ぎるのはいけないんだぞ！　おぉい待て、まだ話は終わってねぇってば！　た、助けてぇ～！」
「それだけ騒げてりゃ十分だ。王女様をしっかり守れよ」
言うだけ言ってゾロは離れてしまい、戦場へと飛び込んでいく。
そこでは彼だけでなく、数多の人間が大声を上げていた。
船長のルフィが先頭となって大騒ぎをして、伸びる腕や足で敵を打ち払い、体中に包帯を巻いた姿だが新たな傷も作らずに大立ち回りを繰り広げる。
シュライヤも無傷で一人ずつ海賊を倒し、今も息を切らさず走り回る。
サンジは張り切る姿で数多の男を蹴り飛ばしており、近くをゾロが通れば反射的に挑発的な言葉を投げつけ、それを聞いたゾロは一太刀で数人の敵を斬り飛ばす。そちらに近付きながら剣を振るシルクは一人だけ悠々と歩き続けて、イガラムはビビを守るため仁王立ちのまま。
どこを見ても、誰を見ても普通ではなかった。

窮屈さを感じるほど密集して戦う人々は、百や二百ですら軽々超える数だろう。
それだけの人間が戦う様はまさに異常の一言である。
バロックワークスに潜入して、エージェントとして活動を続け、強くなった気で居たビビは言葉を失ってしまう。自分がそこへ飛び込んでも生き残れるのだろうか。
凄まじい戦いを目にして、胸の内にある感情が生まれる。
今度はキッドとルフィの戦いを見た時とは違う。人々の姿を見て連想した光景があった。
祖国の危機。国王軍と反乱軍が衝突する姿を幻視した。
もしもバロックワークスの企みを阻止できなければ、祖国に住む人々がそうして戦い合うのだ。血を流し、倒れて、無慈悲に国を乗っ取るための手伝いをしてしまう。クロコダイルの企み通りになってしまう。祖国が、傷つけられてしまう。
それだけは絶対に避けなければいけない。ビビがそう思うのも無理はなかった。
迫力のある光景を見ると改めて決意が生まれ、表情からは恐怖心が消えた。
わずかに振り返ってそのことに気付いたナミが、口元を緩める。
「どうかしたビビ？　やる気になってるみたいだけど」
「ええ……私、怖がってる場合じゃなかった。私が止めなきゃいけないんだ。アラバスタは絶対に傷つけさせない。そう思ったの」
「あっそ。それはわかったけど、今の内にしっかり見ときなさいよ」
「え？」
「あそこで戦ってるの、今はあんたの味方だからね」
指で示した方向には麦わらの一味の姿がある。
わかっていたつもりなのだが、なぜそんなことを言われたのかわからずに呆然としてしまう。目を合わせて呆然としていると、くすりと笑うナミは肩をすくめて言った。
「あんた一人で戦ってるんじゃないんだから、もっと楽にしてなさい。思いつめた顔ばかりじゃせっかくの美人が台無しよ」

「あっ……でも、国のことは、あなたたちに任せてばかりじゃ」
「それはそうよ。でもだからって全部一人で背負い込む必要なんてある？　ほら、あいつらあんなに強いんだし、どうせ一緒に行くなら利用しない手はないでしょ」
気楽に笑ってずいぶんなことを言う。ビビは呆気に取られていた。
ナミは心底楽しそうに、頼もしい姿で、笑顔で話している。それが妙に印象に残った。
「ルフィが認めたんならあんたも仲間よ。いいから、私たちも頼りなさい」
「は……はい」
思わず頷いてしまったが、いまだ呆然としたままだった。
ちょうどその頃、敵の顔を踏み台に高く跳び上がったルフィが彼女らの方へ来て、胴元の前に置かれたテーブルに着地する。途端にボディガードが身構えるが一切気にしない。
首にかかっていた帽子を頭へかぶって、どれだけ荒んだ空間でもやはり笑顔。
ルフィの目はビビを見ていた。
「なぁビビ、おまえも行くか？　強くなりてぇんだろ」
「え？　私も……？」
「危ねぇ時はおれが守ってやるからさ。一緒に行こうぜ」
唐突な誘いだったが、彼は先程の話が聞こえていたのだろうか。
疑ってしまうほどにはタイムリーな言葉だったと思う。
だがそれを耳にして黙っていられない人間も居る。護衛役のイガラムだ。ビビを守るために居る彼を差し置いて、ビビを危険な場所に連れて行くなど、許容できるはずもない。
当然とばかりにイガラムの声がルフィへ飛んで、反対する言葉が聞こえてきた。
「んなっ!?　何を言っているんだルフィくん！　ビビ様を戦闘に巻き込むなんて！」
「ビビも結構強ぇんだろ？　たまには動かねぇとストレス溜まっちまうもんな」

「そんな理由で！　危険ですビビ様、私がお守りしますのでどうかその場を動きませぬようお願い致します！　こんな野蛮な喧嘩はあなたにふさわしくない！」
「おっさん心配しすぎだって。なぁビビ、ビビも体動かしてぇよな？」
散々戦った後で驚くほど澄んだ目だ。思わず吸い込まれそうになる。
不思議と言い返せない力がある気がして。
何と答えていいかわからなかったとはいえ、なぜか、すんなり決められた気がする。
一歩を踏み出し、ビビは頷いた。
やってみようと思ったのだ。考えてもわからないから、動いてみようと。
視線はビビを捉えていたイガラムからは悲鳴が上がるものの、彼女は自らの意志で決める。
「うん。私も一緒に連れて行って」
「ビビ様ぁ!?　危のうございますぅ！」
「大丈夫よイガラム。私だってフロンティアエージェントの一員だったんだから。それに、誰かに任せるだけじゃだめだって思うから」
そう言ってビビは懐から武器を取り出した。
小指に装着したリングから糸が伸び、先端にはアクセサリーのような小さな刃がある。彼女が最も得意とする独特な装備、孔雀（クジャッキー）スラッシャーだ。
武器を取り出したからにはやる気は十分。ビビはルフィを見て笑顔で頷く。
それを受けて彼も声を漏らして笑い、その場から跳び上がると再び戦場へ向かった。
「うし、行くぞ！　ついて来いビビ！」
「ええ！」
「あぁぁ～っ!?　お待ちください、それなら私もぉぉっ！」

駆け出す二人にイガラムも加え、三人は安全地帯を離れて中心部へ乗り出してしまった。
果たしてあれは正解だろうか。
見ていたウソップはげんなりした顔で見送り、その隣ではナミがやれやれと首を振る。
「あいつ勇気あるよな。しかし普通誘われたところで行くかね？」
「肝が据わってんのよ、あんたと違って」
「んん、もっともだ」
でなければ敵の組織に潜入などしていない。
そう納得したウソップは小さく頷き、反論の言葉はない様子。苦笑したナミは彼から視線を外して遠ざかるビビの背を見る。
これで少しは変われればいいと思う。
同性であり、共に時間を過ごすことも多かったからそう思った。
どうやら自分の問題が解決して以来、困っている人間が気になって仕方ないらしい。国について憂う彼女の顔を見ていて心配だったのはそういうことなのだろう。相手の心情を気にしながら、声をかけずには居られなかった。かつては自分も同じだったから。
ルフィが気付いてくれたのも有難く、戦闘はどうかと思うが、運動は良いことだろう。
見送るナミの視線は驚くほどやさしかった。
「そこかァ！　さっきから鉛玉ぶつけてくる奴はァ！」
「ひいぃ!?　み、見つかったぁ!?」
「反撃よウソップ！　近付けさせないで！」
「よしきた――っていうかおまえも戦えよ！」
「いやよ。だって怖いもん」
「おれだって怖ぇよ!?　男だってなぁ、あんだけ強い奴ばっかじゃねぇんだ！　わかってんのかコンニャロー！」
「私に言わないでよ」
とりあえず今はこちらに向かってくる敵をどうにかせねばならないようで、ルフィを行かせるんじゃなかったと二人揃って後悔する。
ナミが武器である棒を手にして構え、ウソップは逃げ腰ながらパチ

ンコを構える。
こちらへ来るか、と走ってくる巨体を眺めていた時、それより先にボディガードが動いた。
声を出した男が止められて、拍子抜けした二人はぱちくりと瞬きを繰り返す。
「おまえら、いつまで人の背中で隠れてるつもりだ。いい加減そこを離れろ」
「あら？　マケてくれない上に文句まで言うの？　男ならこっちがびっくりするくらいの懐の深さを見せて欲しいもんだけどね。うちの船長みたいに」
「フン、ぬかせ。ああいうバカは道半ばで死ぬもんさ」
酒瓶を傾けつつ言う胴元を見やり、ナミは勝ち誇る笑みで返してやる。
「いいえ、死なないわ。ルフィは海賊王になる男だもの」
その言葉を聞いてわずかに眉が動いた。
今度はナミがふふんと得意げに胸を張り、してやったりと胴元を見下ろした。

それぞれの思惑

活気が失われない町中を歩いていると、道中、怪我をしている人間が多いことに気付いた。
どこで何が起こったのか、治療もせずに血を流したまま、這う這うの体で町を移動している人間の数がやたらと多い。何か事件があったのだろうと思う。
まさかうちの一味ではないだろうな。
一人歩くキリは人々の姿を見ながらそう考えていた。
「ルフィたちかなぁ、ひょっとして。あり得そうだなぁ」
相変わらず通りに人の姿は多いが、様子は明らかに変わっている。怪我人ばかりがぞろぞろと群れを成して歩いて、手を貸し合う者も少なくはなく、喧騒の種類が違っているような。少なくとも俯瞰的に眺めるキリは以前とは違う風景だと認識している。
そう言えばやけに人が多い。
怪我人もそうだが以前もこんなに活気があっただろうか。
歩きながらふと考えた彼の耳に、一際大きい声が聞こえてきた。
「が、ガスパーデ様ァ！」
「ん？」
細い路地を挟んで向こう側の通り。モヒカン頭で細身の男が狼狽していた。
道が細くて見辛い。
それでも聞こえた名前とわずかに見える姿から、有名な海賊が居るのだとわかった。
懸賞金９５００万ベリー、〝将軍〟ガスパーデ。
体の前面だけ見える巨体とむっつりした顔が垣間見れた。
キリは途端に微笑む。
何か面白い話が聞けそうだ。
咄嗟に壁へ身を寄せ、隠れながら覗き込むようにそちらを眺め、聞き耳を立てる。どうやら彼らは気付く素振りもなく話を続けようとしていたようだ。

モヒカン頭の、おそらく部下だろう男が必死になって声を発している。
ガスパーデは身じろぎ一つせず聞いていた。
「すいません、ちょうど援軍を呼びに行こうと思ってたところで……酒場で小僧が暴れてやがるんです。ほら、例の新聞のルーキー。ちっとばかし腕が立つもんで、もう少し人を――」
「てめぇは誰だ？」
「へ？」
口を開いたガスパーデは真っ先にそう言った。
冷淡に、感情がなく、何とも思っていないかのような声。
違和感を禁じえないキリが眉を動かして、全く同時にモヒカンの男が冷や汗を垂らした。
「い、いや、おれはあんたの船の、乗組員で……」
「他人に負けるような弱者は、おれの部下には居ねぇ」
突然、モヒカンの男が全身から血を噴き出した。背後から誰かに襲われたようである。
武器は見えない。姿も攻撃の方法も。
ただ一瞬で全身を切り裂いたその傷は目にすることができて、只者でないとは一目で気付いた。ガスパーデではない。別の誰かが背後から襲ったのだ。
飛来した血しぶきを見ても表情は変えず、やはりガスパーデは身じろぎしない。
その異常性を感じたキリは笑みを消していた。
「ゴミが。てめぇの汚ぇ血で服が汚れちまった」
冷たく言いのけて歩き出す。
感情を乗せない、冷たい声だ。人間性を感じられないとも言える。今まさにそこで死にかけた人間が倒れたというのに、一切興味を示さないどころか、居なかった物とする素振りすらある。
覗き込むのをやめて壁に背を預け、佇まいを直したキリは嘆息した。
名を上げただけはあるが好みのタイプではない。海賊らしくはあ

るとはいえ、どうやら仲間を使い捨てにする船長なのだろう。
ルフィとは対極に位置する海賊だ。
気は合わなそうだと断じ、肩をすくめる。
「ルフィが一番嫌うタイプの人間かな。顔合わせたら厄介なことになりそう」
しばしその場で突っ立って時を待ち、やがて壁から背を離して歩き出した。
向かう先は小さな路地の向こう側である。
敢えて行先を変更し、細い路地を抜けて男が倒れる場所へ出た。
暗い道から明かりのある場所へ出て辺りを見回した。すでにガスパーデの姿はない。少し時間を置いてから来た甲斐はあったらしく、人混みに紛れて行ってしまったようだ。
これで怪しまれる心配はない。
キリは血にまみれて倒れた男を観察し始める。
「後ろからざっくりか、容赦ないな。武器は……かなり大きいか。ガスパーデがやったんじゃないだろうけど、その右腕ってとこかな」
しゃがみ込んだ彼はモヒカンの男の状態を確かめ、小さく呟いた。
考えるのは敵の姿。
厄介なのか、そうでないのか、それだけを思考している。別段彼に対する気遣いもなく、死ぬかどうかの瀬戸際も注意していない。言わば興味がなかった。
そのことに気付いたのか、男は蚊の鳴くような声を絞り出した。
「た、たすけてくれ……」
「まだ生きてたんだ。案外しぶといね」
よろよろと持ち上げられた手を冷静に見て、数秒。
にこりと微笑むキリはゆったりとした話し方をする。
「助けて欲しい？」
「た、たのむ……」
「だけど、こっちは聖人じゃない。等価交換くらい理解できるよね。役に立てる？」
「な、なんでも、はなす……だから」

「その言葉、一度言ったからには違えないようにね」
懐から取り出す紙で男を持ち上げてやり、運び始める。血がしみ込んで力を失いかけるものの、大量に重ねれば落とすこともなく、周囲の視線を集めていた。
それらを一切気にせず歩き、突発的ながら、中々良い判断かもしれないと考えた。
自画自賛ではあるが、ガスパーデの噂を頭の片隅に置いていた自分に笑みがこぼれる。
「例の将軍様が相手じゃ警戒しといて損はない、か。悪巧み好きそうな顔だもんなぁ」
先程ちらりと確認した実物を見て呟く。
考えてみれば面白い。そちらの方が楽しめそうだ。
珍しく好戦的に笑う彼は、前方に目を向けながら違う場所を見ているようだった。

＊

掻き集めた紙幣を束にして、テーブルの上に荒々しく叩きつける。
ナミは勝ち誇った顔でにんまり笑っていた。
差し出したのは言われた通りの五十万ベリー。しかし彼女の背後には紙幣や硬貨を大量に入れて膨らむ袋が、十個ほど置かれている。現在はゾロやサンジに守られているらしく、羨ましげに見てくる海賊たちは疲弊していて、襲い掛かっては来なかった。
全て彼女の物、だそうだ。
盛大な喧嘩の最中、倒れた男たちから盗み取られた金が山となって彼女の懐へ入っていた。
その中からたった五十万ベリー。
もはや痛くもかゆくもない。色を付けてやってもいいくらいだろう。もっとも、そんなことをすれば胴元を調子に乗らせるだけだと判断しているため、ナミは態度も大きく笑うだけだった。
「はい、五十万ベリー。きっちりあるから確認してね」

「分かり易い奴だ。ま、海賊としちゃ正解だがな」
紙幣の束を持ち上げた胴元は一枚ずつ数え始める。
金の扱いには慣れているようで、慣れた動作で即座に確認されていく。
五十枚数え終わった時、それを手元へ置いて、顔には納得の笑みがあった。
「確かに。参加料は受け取ったぞ」
「それじゃ」
「ああ。こいつが参加資格のエターナルポースだ。ゴール地点を指してる」
テーブルの下から取り出された物がナミの目の前へ置かれる。
一つの島だけを指し続ける指針、エターナルポース。砂時計に似た形のそれはすでにどこかの島を指しているらしく、手に取ったナミは板金に刻まれた島の名を読み取る。
パルティア。確かにそう書かれていた。
「このパルティアって島がゴールね」
「そうだ。レース開始は明日の朝、グランドフォールをきっかけに全員が一斉に走り出す。せいぜい船が壊れねぇように注意しとくんだな」
「グランドフォール？　それ何？」
「なぁに、見りゃわかるさ。数年に一度の事象だ、まずはその身に体感してみな」
何か含みを感じる物言いだったが、詳細を教える気はなさそうだ。
せっかく勝ち誇っていたものの、少々気分を害されたらしく、ナミは唇を尖らせて不満そうな顔になる。しかしそれ以上の追及は無駄と感じてすぐに踵を返した。
胴元に背を向け、大金を守る仲間たちの下へ赴く。
何であれ、とにかく参加資格は受け取った。これでレース参加は確実である。
ナミが持つエターナルポースが気になったルフィは目を輝かせていた。

初めて見る物に興味を持っている。それだけでなくレースに参加することが確定されたのだ。
好奇心を刺激されるには十分過ぎるだろう。
彼は当然のように質問していて、ナミも上機嫌に快く答える。
「なぁナミ、それなんだ？」
「レースに必要な物よ。この指針を辿ってゴールを目指すの」
「そんで優勝したら三億ベリーか」
「そういうこと。参加するからには絶対勝つわよ、みんないいわね？」
「ししし。楽しくなってきた」
近くに転がっていた椅子を起こして、その上にしゃがみ、ルフィは肩を揺らして笑う。戦闘の後だが疲労感は全く感じさせず、新たな傷も負っていない。
集まった面子の中で最も元気そうだと言って過言ではなかった。
仲間たちは同じ場所に集まり、戦闘が終えられ、ひどい有様の最上階に居た。
傷だらけで去っていく者たちが多い中で、彼らだけは無傷で立っている。
戦いはすでに終わった。誰が勝者ともなく、いつしか自然と手が止まったのである。
皆、いまだ余裕綽々といった顔色だったが、その中で一人だけ表情が暗かった。
元気なルフィに比べ、心労から疲弊した様子のウソップは大きな溜息をつく。
一難は去ったが、明日には更なる一難がある。ルフィの調子が良い時にはこれを止めることなどできないのだろう、とはこれまでの航海で嫌というほど思い知った。従ってもはや反論の言葉も自然と出て来なくなり、ただ危険が来ないようにと願うばかりだ。
「ハァ、海賊レースか……何も起こらず終わるなんてこと、あるわけねぇよなぁ。今日だけでこれだけの問題があったってのに、本番の明日は一体何があるってんだ」

「まぁいいじゃねぇか。色々あったけど参加できるんだしよ」
「大体だなぁルフィ！　おまえが考え無しにどこでも首突っ込むから――！」
「そういやあいつは？　賞金稼ぎ」
抗議している最中に視線が外され、椅子から降りたルフィは辺りを見回す。
シュライヤは少し離れた位置に居た。
落ちていた酒瓶を拾い上げ、中身を口にして喉を潤し、乱暴に口を拭って息をつく。
彼を見つけたルフィは平然と歩き出し、ウソップの抗議を背にして離れていった。
「おまえおれたちの船に乗るんだろ？」
声をかけられてシュライヤが振り返る。
鋭い目だ。誰も信用していないかのような、強い感情が見えた気がする。
なぜか初めて会った頃のゾロを思い出してしまって、そう言えば当初は信頼されていなかったなと思い返す。しかしその頃も今も、ルフィは相手の心情に合わせようなどとしなかった。
腰に手を当て楽しげな笑顔で、彼を迎え入れるように声をかけていた。
「五十万ベリー、もう払ってもらわなくてよくなったんだ。ありがとう」
「別に礼はいらねぇ。どうせおれも同じ方法を考えてたからな」
「そうなのか。それで、おれたちの船に乗るのってレースに参加するからだよな」
「ああ……」
「でもおまえ賞金稼ぎだろ。なんで狙われるのにこの島まで来たんだ？」
シュライヤの目は、敵意を隠している。一目では気付きにくいだけだ。
中身が残っている酒瓶を捨て、高い音がして転がる。赤い液体が地

面に広がり、転がった瓶が遠ざかる間に、彼は考えながら答えを出した。
「本当のことを言えば、目的はレースじゃなく別にある。おまえらの船に乗るのは可能性が高そうだと思ったからさ。途中で沈まねぇ可能性がな」
「沈むのか、船」
「何でもありなんだ。そりゃ沈められることもある」
「なにィ～っ!? ほら見ろ、やっぱり危険なんじゃねぇか！ やめとくなら今だぞルフィ！ おれたちには先を急ぐ旅もある！」
話の内容が聞こえていたらしく、血相を変えたウソップの叫びが聞こえる。
ルフィはそちらに目をやった。
「いやぁ、別に急いでねぇよ」
「アラバスタの件は!?」
「キリが大丈夫だって言ってたぞ。なんとかなるだろ」
からからと笑い飛ばして、またウソップががくりと肩を落とす。
根拠はない。だがキリが急ぐ必要はないと言っていたのだ。彼はそれを信じている。
再びルフィの視線はシュライヤへ戻って、こちらは全く警戒心のない目だった。
思わずシュライヤは呆れ返る。
ウソップの方がまだ船長に向いている。そう思うほどルフィの無警戒さは問題だったようだ。
賞金稼ぎとして海賊と戦った経験がある。敵を見る目も鍛えられて、一目見て危険かどうかを判断できるようになるくらいには、たった一人で戦い続けた。
ルフィの実力はすでに見ている。大乱戦と、キッドとの一騎討ち。
どちらも驚くほどの強さだと感じて、その点に関しては疑問などない。問題はその後だ。こうして話している時にはまるでどこにでも居る少年だ。
危機感がないにもほどがある。

或いは、普通過ぎる。
こんなにも毒気を感じない海賊に会うのは初めての経験で、それだけ警戒心が強くなっていたらしい。嘘つきはそうして油断させた後で行動に出ると知っているからだ。
一方、ルフィは何も考えていなさそうな顔で笑っていた。
「レースのこと詳しいんだな。ひょっとして海賊だったのか？」
「いや。今も昔も賞金稼ぎさ。これから先もな」
「そうか。おれの仲間に――」
「ならねぇ。海賊なんざこっちから願い下げだ」
直接拳を交えた訳ではないとはいえ、共に大騒ぎして情が移ったか。ルフィは気軽に仲間へ勧誘してみようとしたものの、素早いシュライヤの拒否によって遮られた。
その言い方から特別な感情が伝わった気がする。
不敵に笑うシュライヤは胸中を隠すかのよう、髪を掻いて背筋を伸ばした。
「おれの帽子は？」
「あ、そうだった。ウソップ、帽子くれ」
「ったく、人の話は聞かねぇってのに。ほらよ」
問いかければすぐに返してくれた。
まず預かっていたウソップが帽子を投げ、ルフィが受け取り、それをルフィが投げる。
くるくる回って宙を飛び、黒い帽子はシュライヤの手に戻った。
指先で多少毛先を動かしてからそれをかぶる。
目深にかぶり、少しだけ俯いて顔を隠したのか、視線を外して呟いた。
「だがレースの間は世話になる。問題あるか？」
「いいや、ねぇ」
「なら明日の朝、港へ行く。少しの間厄介になるぞ」
そう言って彼はその場を後にしようと歩き出した。
唐突な行動にルフィが目を大きくして、咄嗟に止めようとする。
「待てよ。せっかく同じ船に乗るんだからさ、朝までおれたちと居

りゃいいだろ」
「悪いがそのつもりはねぇ。海賊と仲良くなる気が起きなくてね」
行ってしまう直前、振り返ったシュライヤは敵意を滲ませてルフィを見ていた。
「おれの目的は一つだけだ。それを果たしたらとっとと降りるよ」
言い終えるとすぐに行ってしまう。
島に居る人間は海賊のみで、名と顔が知られてしまった以上は危険も多いだろうに、仲間を求めようとしない態度には頑なな物がある。言葉にしないだけでよほどの決意があるのかもしれない。シュライヤはそのまま振り返りもせずに行ってしまった。
自然と見送る形となったルフィは何も言わずその背を見る。
協力を申し出た割には素っ気ない態度だった。
何かが気になるのか、彼はしばしの間、言葉を失くして突っ立っていた。
その背へナミが声をかける。
やっとで用事を終えたところだ。もう酒場に用はないらしかった。
「さぁルフィ、そろそろ行きましょ。色々あったんだし、明日に備えて船で休みましょうよ。これ以上のトラブルは勘弁だからね」
「え～？　肉は？」
「戻ってからでいいじゃない。少なくともここに居るのはもうこりごり」
「そうだ、それがいい。いつまでもここに居たら、次はどんな奴が近付いてくるかわかったもんじゃねぇ。船は襲っちゃいけねぇらしいし、一番安全なら一刻も早く戻ろう」
ナミの意見にウソップが同意して、肉が食えるならとルフィも頷いた。
移動を始めようとしてナミの手早い指示が始まった。
ゾロとサンジが大金が詰まった袋を二つずつ持ち上げて、重いそれに動じず、イガラムも手伝うために二つ持ち、シルクとビビが協力して一つ持ち、ウソップは必死の形相ながら一人で一つの袋を持ち上げた。そして当然とばかりにナミは持たない姿勢らしい。

ルフィも両腕で二つを運び、それでもまだ袋は余っていた。
盗んだはいいがあまりにも多過ぎる。
大金を捨てるのは頂けないとは言っても、限度があるだろう。ウソップが提案を始めた。
「持てねぇ分は置いていった方が――」
「だめよ。これ全部私のなんだから」
ぴしゃりと言ってナミが拒否する。
せっかく手に入れた大金をむざむざ捨てるなどもったいない。如何なる手段を用いても持って帰らなければ気が済まないようだ。
袋を一つしか持っていないウソップを見る彼女は、平然とした顔で告げる。
「ウソップ、もう一つくらい持てるでしょ」
「持てるかァ！　おまえこれどれだけ重いと思ってんだよ！　むしろ自分で持て！」
「いやよ、か弱い私に持てるわけないじゃない」
「おれだってごくごく普通の人間だっての！　こいつらと一緒にすんな！」
「しょうがない……ねぇ～サンジくん？　私、これを全部持てるくらい逞しい男が好きなの」
「は～いナミさんっ！　おれにかかればちょろいもんさぁ！」
「ちょろいのはおまえだろ」
声を大にして回り出すサンジに、周囲に居る多くが呆れていた。
特に仏頂面のゾロは呟かずにはいられなかったらしい。
「アホか。いつまで体よく利用されてる気だよ」
「なんだとコラマリモォ！　恋のハリケーンは誰にも止められねぇんだ！　恋のなんたるかを知らねぇくせにいちいち口出ししてくんな、アホめ！」
「鼻血出し過ぎて死んでみたらどうだ。少しはマシになるだろ」
「アァ!?」
「二人とも喧嘩しないの。ちょっと目を離すとすぐこれなんだから」

肩をすくめるシルクが諌めるものの、二人の睨み合いは止まらない。もはや聞いているのかどうかさえ定かではなかった。いつものことである。
注意したシルクをそっちのけに、言葉による小競り合いは終わっていなかった。
「ま、おまえは二つ運んで満足してりゃいいさ、貧弱剣士め。おれは三つだ」
「アホのおまえじゃ無理に決まってんだろうが。おれなら四つは軽い」
「ならおれは五個」
「六個だ」
「おい、考えて物言ってんのか？　物理的に無理だって気付かねぇらしいな、このボケナスは」
「その言葉そっくりそのまま返してやるぜ。おまえとおれとじゃ体の出来が違うんだ」
「あぁ……？」
「やるってのか」
「二人とも、いい加減にしないと飛ばすよ」
あまりにも目に余ったのか、剣は腰にあるベルトへ納めたまま、右腕に風を纏い始めたシルクが声だけで割って入る。彼女自身はビビと共に袋を持ったままだったが、その場から二人を吹き飛ばすくらい簡単なのは誰もが知っていた。
サンジはシルクの言葉に従い、応じたゾロも睨みを利かせたまま身を引く。
少なくとも大喧嘩にはならなかったようで、剣呑な空気は霧散する。
「やさしいシルクちゃんに感謝しろ、クソマリモ。六つも持ってりゃ腕が抜けてただろうにな」
「感謝すんのはおまえの方だろ。ボロが出なくてよかったな」
「んだとコラ」
「あ？」

「いい加減にしないと――」
「は～いシルクちゃん！　やめます♡」
「ったくめんどくせぇ野郎だ」
シルクの一喝によって制止され、今度こそ喧嘩は止められた。
サンジは笑顔で応じ、ゾロはやれやれと首を振る。
見ていたルフィは止めようとせず、楽しそうに笑っていた。
「しっしっし。ゾロもサンジもアホだなぁ」
「おまえが言うんじゃねぇよ」
「しかしどうすんだ、こんなに運べねぇぞ。キリが居りゃ運べたかもしれねぇけどよ」
やはり運ぶのは無理だと判断したウソップが呟く。少し前から皆も思っていたことだ、一斉に反応していた。この場に唯一集まっていないのはキリだけなのだ。
少し表情を変え、疑念を表して、ルフィの言葉は誰にともなく質問を飛ばす。
真っ先に反応したのはゾロだった。
「そういやキリはどこ行ったんだ？　誰かいっしょじゃなかったのか」
「まぁ、色々あるんだろ、あいつも。心配はいらねぇと思うが」
「も～、肝心な時に何やってんのよ。あいつが居なかったら誰が運ぶわけ？」
「よければ、私たちがお手伝いしましょうか？」
苛立つ様子でナミが腕を組んだ時、割り込むように声が飛んでくる。
首を捻って振り返れば、見知らぬ女性が立っていた。
清廉でやさしげな声。ウェーブがかった長い金髪と、プロポーション抜群の若々しい女性で、愛嬌のある顔には柔らかな微笑があり、緑を基調とした服、足首辺りまであるロングスカートだ。
誰もが美人だと称する美貌と雰囲気でたおやかにそこにある。
彼女は麦わらの一味を眺めて、やけに親しげな態度だった。
隣には小柄な人影、アニタが立っている。

ポケットに両手を突っ込み、そっぽを向いて少しつまらなそうな顔。
それに気付いたシルクが小さく声を漏らした。
「アニタちゃん」
「誰？　知り合い？」
「キリの友達なんだって。私たちを案内してくれたの」
尋ねたナミに答えてやると、シルクとビビは抱えた袋を一度下ろした。
他の面々も一度荷物を置いて彼女たちに集中する。
視線は自然と金髪の美女に集まっていた。
「えっと、あなたは……」
「め、女神!?　いやいや違う、人間の女性だ。しかしこんなにも美しいレディが居るなんて。名前も知らないのに失礼。どうやら僕は君に恋をしてしまったようだ――」
「サンジくん、邪魔」
目の色を変えて浮かれ始めたサンジはナミによって耳を引っ張られ、排除される。
余計な茶々を入れる人間が居なくなって、代表としてシルクが質問した。
「あなたは、ひょっとしてアニタちゃんのお姉さん？」
「はい。ミシェールと申します。アニタちゃんがお世話になったみたいで」
「違うよミー姉ぇ、私がお世話したの」
「あらそうなの？　じゃあ、アニタちゃんがお世話したみたいで」
「は、はぁ」
微笑を湛えながら、どこか抜けた人物らしい。
なんとなく力の抜ける話し方を受け、シルクは少し困った顔をしてしまった。それも仕方ないとでも言うかのように、ミシェールの隣に立つアニタは溜息をつく。
姉妹と言うには如何せん似ていなかった。顔立ちから態度、髪の色まで違っている。

それでも仲が良さそうなのは間違いではなくて、多分聞かない方がいいのだろうと考える。
少なくとも悪い人間ではなさそうだ。
盛大な喧嘩で死屍累々といった最上階に平然と立ち、血や怪我人がそこら中にある環境下でにこにこ微笑んでいるのは疑問も抱くが、そうでなければ海賊島に住むのは不可能なのだろう。
言いようのない感情は抱くものの口には出さず。
シルクがミシェールへ質問しようとした時、先に彼女が口を開いていた。
「アニタちゃんから事情は聴きました。みなさん、キリちゃんのお友達なんでしょう？　よかったら私たちの宿で泊まっていきませんか？」
「はい！　ぜひ！」
「サンジくん黙ってて。宿って、あなたたちが？」
「はい。と言っても私たちだけじゃなくて、みんなで切り盛りしてるんですけど」
「どうして私たちを……」
「だって、キリちゃんのお友達でしょう？」
最後まで言わせず、言い切った。
答えになっているかは定かでないが、迷わず言い切る姿には感化されてしまいそうになる。
キリの友人という話、信じる要素はない。実際に彼と話している姿を見ていない以上、彼女もまた他の海賊たちと同じように何か考えていてもおかしくないだろう。なにせこの島、海賊しか生息しない海賊島だ。すぐに信じることは難しい。
警戒するナミやウソップは言葉を呑んで立ち尽くす。
しかし何も考えていない素振りでルフィが一歩前へ出た。
ミシェールを見つめ、普段と変わらぬ顔で尋ねる。
「その宿、肉は食えんのか？」
「もちろん。特別料金でお安くしておきますよ」
「ほんとかぁ？　ししし、じゃあ行こう、その宿に」

なんともあっさりした決定だ。驚くナミとウソップが素早く彼へ駆け寄る。
「ちょっとルフィ、本気？　信じていいとは限らないわよ」
「おまえついさっきまで何してたか覚えてんだろ。海賊が束になって襲ってきたんだぞ。おれたちを騙して、寝込みを襲われるかもしれねぇってのに、本当に行く気か？」
「心配いらねぇよ。キリの友達だ」
笑って告げて警戒心など欠片も無い。理由としては弱い気もするが振り返って確認すると、サンジだけでなくシルクやゾロまで同意している様子。ビビとイガラムは困惑した顔で口を挟む余地もないらしく、彼らの決定に従うつもりで居たようだ。
重苦しい溜息。ついに二人も諦める。
ナミとウソップを懐柔したルフィは袋を持ち上げ、ミシェールに案内を頼もうとした。
「宿まで案内してくれよ。キリも呼んでやらねぇとな」
「そうですね。でもそれならご心配には及びません。私の妹のマギーちゃんが探しに行きましたから、きっと二人で来てくれますよ」
「まだ妹居んのか？」
「三姉妹なんです、私たち」
「そっか。おれも三兄弟だからおんなじだ」
上機嫌に笑い、笑みを向け合って話は纏まったらしい。
ついに歩き出そうとしていた。
喧嘩からすでに数分、思えばずいぶん足を止めていたように思う。人の姿も大抵は消えているが元気な者はまだ同じフロアにおり、大金を持っていればいつ襲われるともしれない。
一同は慌てて荷物を持ち上げる。
ただ、いまだに人の手が足りないのは変わっていなかった。
再び困り始めることになるのだが、それを見計らってミシェールが歩き出した。
「大変でしょうから私も手伝いますね」
「あ、待ってくれミシェールちゃん。か弱い君に重い物を持たせて

しまうなんて男のプライドが許さねぇ。そんなのクソ剣士と長っ鼻に持たせるから気にしなくていいよ」
「っておい、おれかよっ」
「何勝手に決めてんだよ……」
「うふふ、大丈夫です。これでも結構力持ちですから」
持つ者がなかった荷物へ歩み寄り、むんずと掴んで、腕を上げる。
大方の予想を裏切って軽々と持ち上げられてしまった。日頃鍛えているはずのシルクでさえ苦戦するそれを、彼女は片腕に一つずつ持ち、二つを一気に運ぼうとしていた。
想像よりずっと軽々と、しかも微笑みを絶やさないため、皆があんぐりと口を開ける。
振り返ったミシェールは意気揚々と先頭を歩き出した。
「案内しますね。みなさんついてきてくださ～い」
「可憐だ……そして素敵だぁ～！」
「仕方ないわ。何かあってもこいつらが居れば大丈夫か。ただしあんたたち、私のお金が盗まれるようなことがあったらただじゃおかないわよ。絶対に守って」
「おう！」
「あと無駄な出費は抑えること」
「んん、肉食うだけだから大丈夫だ」
「それが心配だって言ってんのよ」
彼らもミシェールの後に続いて歩き出し、酒場を出ようとする。
歩き出してからだが、ビビがようやく口を開き、少し前に居たナミへ言った。
「ナミさん、船で休まないなら、留守番してるカルーを呼びに行きたいの。いいかしら」
「そうね、一人で待たせるのも可哀想だし。でも一人で行くのは危ないから――」
「無論私が護衛を！」
「おれがエスコートするぜビビちゅわ～ん！」
「ゾロとシルクがいいわね。あんたたちはうるさ過ぎ」

「ええ～っ!?」
「おれじゃないのぉ!?」
「当然よ。もうトラブルは要らないんだから、静かに行って静かに帰ってきなさい。誰かと喧嘩しないように注意するのよ、いいわねビビ」
「あはは……うん。わかったわ」
喧嘩が終わっても騒がしさは相変わらず。全く肩に力が入っていないやり取りが行われる。
苦笑するビビはその空気に慣れつつあった。
これが彼らの生き方なのだとすでに理解している。
少し不思議で、基本的に騒がしく、だけど嫌味が無い。
自由を謳歌する生き方を教わるようだ。
階段を降り、外を目指す一団はミシェールとアニタの案内に従い、一路彼女たちの宿へ向かう。

弱者の覚悟

空に浮かぶ月が見下ろす海。
そこにある一隻の船の甲板で騒ぐ声があった。
甲高く、感情を隠そうとしない子供の声である。激情に駆られた誰かが傍に居る人物へ抗議しているらしい。その影は小さな物で、大人の男を相手に食って掛かっている態度だった。
「頼むよ、じいちゃんに薬を買ってくれ！　最近ずっと病気で苦しんでるんだ！」
「知るかよ、おれに言うな。どうしてもってんなら船長に言え。どうせ無駄だろうが」
ズボンを掴んで、ウザがられようと子供は決して離そうとしない。
その姿は見るからにみすぼらしい格好をしていた。
ボロボロの作業着を身に着け、キャスケットの帽子をかぶり、肌まで薄汚れている。服と肌を汚しているのはどうやら石炭だろう。手には作業用のグローブもあった。
どことなく疲れているような顔色で、しかしそれを隠すほど清潔さとはかけ離れていた。
薄汚れた子供、アナグマに纏わりつかれて男は面倒そうな反応を繰り返すばかりだ。
船の見張りをしていたようだが、普段滅多に甲板へ来ない存在に詰め寄られて、見るからに扱いに困っている。邪険にするのも問題があって、それで追い返すような物言いだった。
明確に仲間という訳ではない。しかし同じ船に乗る一員だ。
暴力を振るう気はないらしく、なんとか言葉で説得しようとしていた。
ただ、何を言われようとやめる素振りがない。
アナグマは必死な態度で訴える。薬をくれ、じいちゃんを助けてくれと。
それが何を意味しているのかは男もわかっていた。
ボイラー室を管理する老人、〝モグラ〟のことに違いない。

「仕方ねぇだろ、みんな出払ってんだ。おれにはどうしようもねぇんだよ」
「なぁ頼むよ。じいちゃんはずっとボイラーを守ってきたんだ。同じ船の仲間じゃないか」
「バカ言え、あいつはただこの船について来ただけだろ。海賊になったわけでもあるまいし」
「それでも仲間だろ！　じいちゃんが居なきゃ、この船は進まなかったんだ！」
「諦めろ。もう寿命だったってことだよ」
「嫌だ！　病気さえ治ればじいちゃんはまだ生きれる！　こんなことで諦めたくない！」
「このっ、うるせぇガキだな。だから、おれに言ったところでどうしようも――」
「何の騒ぎだ」
唐突にかけられた声に背筋が震えた。
男が振り返った時、町の方角からやってきたのは見るも巨体、ガスパーデの姿だった。
大柄な肉体は鍛え抜かれ、筋肉という天然の鎧を纏い、素肌の上に白いコートを身に着けて、首元には紫色のスカーフを巻いている。顎が大きく突き出た顔で、その目つきは自身の部下でさえ震え上がらせるほど冷たい。
船長であるガスパーデは、同じ船に乗る人間にすら恐れられていた。
男は見るからに怯えた様子で後ずさりを始める。
対照的に、アナグマはチャンスとばかりに彼の傍を離れた。
ガスパーデの足元へ行って顔を見上げる。
必死の形相で懇願するよう、子供ながらに頭を下げた。
「お願いだ、じいちゃんの薬を買ってくれよ。病気で寝込んじまってるんだ。じいちゃんが居ないとこの船は動かない、そしたら困るのはあんたたちだろ？」
「おいバカっ、船長に馴れ馴れしく話すんじゃねぇ」

「じいちゃん？　何の話だ」
言葉の意味が伝わらなかったらしい。浮かんだのは純粋な疑念だ。
視線を向けられたのはアナグマではなく傍らの男。
緊張しながら、彼は平身低頭して答える。
「へぇ、ボイラー室で働いてるじじいのことです。船を奪った時から住み着いてるらしくて……滅多に見ねぇんで、おれたちゃモグラって呼んでるんですがね」
「ほう。そのじじいが死にかけてると」
「薬を買ってくれたらそれだけでいい。他のことは何も望まない！　医者に見せたいけど、金がかかるなら薬だけでもいいから！　だからじいちゃんを助けてくれ！」
「この船が動かねぇとなると、そりゃおれにとっても損害だな」
「そ、そうだろ！　それじゃあ――！」
「だがだめだ。おれには関係のねぇ話だな」
冷たく言った後、平然と歩き出したガスパーデは真っ直ぐ進み、アナグマにぶつかって後ろへ押しやり、自身の部屋へ向かおうとする。
一切の慈悲を感じさせない動きだった。
その事実に愕然とし、アナグマは咄嗟に叫んでいた。
「ど、どうしてっ!?」
「なぜおれがそんなじじいを助けなきゃならねぇ。関わり合いのねぇ人間だろう」
「じいちゃんはずっとこの船を動かしてたんだぞ！　誰よりもボイラーを大事にして、誰よりもボイラーのことわかって、ずっと守ってきたのはじいちゃんだ！」
「代わりならいくらでも用意できる」
感情がない声色にアナグマの態度が揺らいだ。
恐ろしい。ぶつけられた直後、純粋にそう思っていた。彼には人の心がないのかとさえ思ってしまって、自身でも理解できない恐怖感に包まれていく。
それでも退く訳にはいかない。助けるためには協力が必要なのだ。
「そんな……そんなことない。じいちゃんだけだ。あのボイラーを

動かせるのは、じいちゃんだけなんだ！　他のやつになんか動かせるもんか！」
「試してみたのか？　腕の良い技師なんざそこら中に居る。若くて、病気にならねぇ奴もな」
「そ、そんなっ」
「死にかけのじじいに同情する奴は居ねぇよ。たとえ金を持ってても」
はっきりと告げられてしまい、アナグマは肩を震わせて俯いてしまった。
どんな理由であれ、モグラはボイラーを管理して彼らに協力してきたのである。その仕打ちがこれではあんまりではないか。
悔しくて、痛いほど拳を握るが、殴りかかっても勝てないのは知っている。
そんなアナグマを見てにやりと笑い、振り返ったガスパーデが正面から向き直った。
「じじいを助けたいか？」
「助けたい。でも、おれには金もないし……」
「だから他人に助けてもらうか？　甘えるな。助けたきゃてめぇで助けろ」
わずかにアナグマの目つきが変わる。
そうとは知らず、俯いたままの視線の先へピストルが投げ落とされた。
「この島には賞金首が腐るほど居る。どれでもいい、一つ首を取って海軍にでも引き渡せ。そうすりゃ薬なんて山のように買えるほどの金が手に入るぞ」
「おれが……海賊を？」
「一応とはいえ海賊の船に乗ってるんだ。それに仲間とも言っていたな。仲間として認めて欲しけりゃ手柄の一つも立ててみろ。そうすりゃじじいを医者に連れてくくらいわけねぇよ」
拳が震えた。膝を曲げてピストルを持ち上げ、両手で胸に抱える。
「おれが賞金首を仕留めたら、じいちゃんは助けてもらえるんだな

？」
「ああ、約束する」
やっと希望が見えた気がした。
誰も助けてくれないのなら、自分でやり遂げる。それでいいと思った。
与えられたピストルを抱きしめ、顔を上げたアナグマの目に迷いはない。自らの手でモグラを救うと決めて、証明するかのように言葉にした。
「やってやる。じいちゃんはおれが助けるんだ」
踵を返して走り出す。
颯爽と船を降りて、小さな背は町へ向かい、夜の暗闇へと消えていった。
一連の動きを見送ってからガスパーデがほくそ笑む。
面白いことになった、程度の認識なのだろう。心配もしていないし、結末を予想するでもない。さほど興味を持っている姿には見えなかった。
傍らに居た男は思わず尋ねてしまう。
「い、いいんですか？　あんなガキに賞金首がやれるとは思いませんが」
「できなきゃじじいが死ぬだけだ。おれにとって損はねぇ」
「しかし……」
「これはゲームだ。敵に勝てねぇ海賊なんざ生きてる価値もねぇ。もしあのガキが本気で誰かを殺そうってんなら、寝込みを襲うでも体を売るでもなんでもして、隙をついて銃弾を叩き込んでやりゃいい。ナイフを渡すよりよっぽど楽だろう。これはおれのやさしさなんだ」
「はぁ」
「海賊になりてぇなら流儀を教えるまでだ。弱者に用はねぇ」
気のない返事をしてしまう。男は呆然としている様子だ。
船室に戻ろうとする直前、ガスパーデはそんな彼に睨みを利かせた。
「それともおれのやることに異論でもあるのか？」

「い、いえいえまさかそんな!?　まったくもって同感です、はい！」
しばし動きを止めて、結局は何も言わずにその場を後にする。
男は一切その場を動けず、生きた心地さえしなかった。
ようやく息を吐き出せたのは扉が閉まった音がしてからだったようだ。
ガスパーデは仲間にさえ容赦がない。強者が絶対、弱者は死刑。
そんなポリシーを知ってか知らずか、おそらく知らぬまま、アナグマは飛び出してしまった。
船の近くにあった林道を抜け、息を切らしながら走り、目指すのは海賊しか存在しない町の中。誰に狙いをつけるでもなく、賞金首の顔など一つも知らない。それでもやる気だけが全身に力を与えていて、絶対にやれるという確信さえあったのだろう。
落とさないようピストルをしっかり抱えて、目は以前より輝いていた。
ただそれでも、そこに濁った光があるのは禁じえないままだ。
誰かを殺せば、モグラを助けられる。その言葉に疑いを抱いていない。
疑うこともなければ抵抗感を感じることもない。
殺せば助けられる。
ただそれだけを信じ、胸の中には希望だけが広がっていた。
やがて町へ到着した時には、多少の疲労感を感じながらも輝かんばかりの笑顔があった。
辺りを見回し、人の姿が多いことに気付く。活気は相当な物だった。しかしその中でどれが賞金首で、誰を殺せばガスパーデが満足するかはわからない。
とりあえず情報を集める必要がある。
どこかで誰かに聞いてみるしかなさそうだ。アナグマはまた走り出した。
短く息を吐いてリズムよく足を動かして、曲がり角に差し掛かった時だった。
向こう側からやってきた誰かにぶつかってしまい、アナグマの体は

地面に打ち付けられる。
栄養が足りていないのか、年齢の平均に比べて小柄な体が災いして、怪我すら負ってしまいそうな様子である。ぶつかった相手は反射的に傍へ膝をついて抱き起こした。
「いっ、た……!?」
「大丈夫か？　角には注意して走れよ」
誰かの掌を感じて、ぶっきらぼうながら心配されて、久しく味わっていない他人の思いやりに動揺した。痛みに堪えて目を開けると、視界には目つきの鋭い青年の顔がある。
シュライヤ・バスクードだ。
見知らぬ人に抱きかかえられている状況に驚き、アナグマは動きを止める。
なぜか、知らぬはずの人間に既視感を覚えてしまったのも驚きだった。
一瞬とはいえ思考が停止し、ハッと我に返って気付く。
首を動かして視線の先を変えれば、地面にピストルが転がっていた。ぶつかった衝撃で落としてしまったらしい。表情が変わって、気付いたシュライヤもそちらを見る。
「……おまえのか」
「ッ――――！」
咄嗟にシュライヤの腕から抜け出して、転がるようにしながらピストルを拾う。
胸に抱え、彼には背を向けて、傍からは隠す素振りに見えた。
子供が銃を持っている状況など普通ではないだろう。ボロボロの服と薄汚れた肌からしても、何かしらの事情があることは察することができて、小さく嘆息する。
それを指摘するほど空気が読めない訳ではない。
立ち上がったシュライヤは敢えて多くを語ろうとせず、放り投げた自分の鞄を拾った。
海賊の島だ。自ら選んでそこへ来た。
どんな光景を見ても驚かないと決めていたとはいえ、想像よりずっ

とひどいかもしれない。
それでも無暗に手を差し伸べようとはしなかった。他ならぬアナグマのために。
「見られたくねぇもんはしっかり隠しとけ。今回は見なかったことにしてやる」
唇を噛んでぎゅっとピストルを抱きしめる。
不思議と心細さが沸き上がっていた。一瞬とはいえ人の体温に触れた。思い出してしまった。まだモグラに出会う前、家族と共に暮らしていた頃のことを。
自身が何をしようとしていたのか、改めて冷静に理解してしまい、ぞっとしてしまった。
自分で決めたことなのに、ひどく恐ろしいと動揺せずにはいられなかった。
シュライヤは肩を震わすアナグマに、見て見ぬふりをする。
声をかける資格はない。
自身もまた、同じ道を辿って今に至るのだから。
ここはお互い何も知らずに別れるべきだ。
荷物を肩に担いだシュライヤは歩き出そうとして、背中越しにアナグマへ声をかけた。
振り向こうとはせず、まるで何かから目を逸らすかのように。
「そこでじっとしてていいのか？　早く行け。知られたくない何かがあるならな」
「うっ……くっ」
よろける足で立ち上がり、先にアナグマが走り出す。その速度は先程までより速く、一秒でも早くその場から離れようとしているかのようだ。
ついさっきまで座り込んでいた地面に、わずかな滴の跡があったことには、気付かぬ方がいい。
振り向くことなくシュライヤも歩き出す。
しかしやはり、脳裏にこびり付いた小さな姿は忘れようがなかった。

「嫌な時代だ。海賊って奴に関わると、みんなあんな目になるのかね……」
別れたばかりの子供を想って呟く。
だがすぐに振り切らなければならないと考え、余計な思考の一切を消し去った。
すでに慣れている。目を背けたくなる光景にも、余計な思考を消し飛ばすことにも。今までの経験が糧となり、すっかり大人になって、いつでも非情さを出せる人格になった。
余計なことは考えていられない。明日には大事な仕事がある。
何よりも大事な一瞬のため、しっかり休息を取るため宿を探す彼の姿は、夜の闇に消えた。

〝宴へようこそ、プリンセス〟

夜が更けてきた。
頭上を見上げ、浮かぶ月を眺めてやっと気付いたキリは苦い顔をする。
少し集中し過ぎたのかもしれない。もっと早く帰る予定だったのに、予定が狂ってしまった。今頃になってみんなはどうしているだろうかと思いを馳せる。
現在、彼の傍には血を流して倒れる男が複数居た。
「まずいな、思いのほか時間経っちゃった。これじゃルフィやゾロのこと言えないな」
呑気に呟いて手の中にあるエターナルポースを眺める。
指針は一つの島を指している。正常に機能している証だ。
満足げに懐へ閉まって、その頃になってようやく背後へ近付く気配に気付いた。
振り返った先に、長身の女性が立っている。
黒髪でツンツンした髪型が目につき、男より高い長身であることもあって、一目見ただけでは女性というより男性だと考えられてもおかしくない体型と服装。おっとりした顔をしているが、どこか覇気に欠けていて、なんとなく間の抜けた印象を与えられる。
以前から知っている顔だった。
キリは多少の驚きを露わに、即座に彼女の名を呼んだ。
「キリさん」
「マギーじゃないか。久しぶり」
「どうも……」
感情の起伏が無い平坦な声。
背は丸まっていて、身長は高いが弱気な様子が伝わってくる。
それを見てキリは気分を害すことはなく、変わらぬ性格に苦笑した。
ミシェールの下でアニタの上、三姉妹の真ん中、マギーという女性である。

引っ込み思案で人付き合いが苦手。照れ屋な一面もある。久々に会ったキリに対しても恥ずかしそうに赤面しており、何も変わっていないところを見ると安心できた。
声が小さく、ぼそぼそとしゃべるのも普段通りで、立ち上がったキリは彼女の方を向く。
こうして向かい合うと懐かしさが込み上げてきた。
「どうしたの、こんなところまで。あっ、アニタに聞いたのか」
「えっと、姉さんが探してて……キリさんの仲間を、宿に招待したいからって」
「あーなるほど。ミシェールさんね」
「あの、案内するんで、ついてきてもらえれば」
「わかった。みんなもう今頃着いてるんだろうなぁ」
素直に頷かれて安堵したのか、ホッと息を吐き出して、先にマギーが歩き出す。二階建ての建物の屋上から飛び降り、身軽な様子で地面に降り立った。
キリも続いて飛び降りる。
どちらも怪我することなく通りに立って、人混みの中を歩き始める。
先頭をマギーが行き、後からキリがついて来た。
位置は大体把握しているとはいえ、案内してもらえるならそれでいいと思ったのだろう。
歩きながら街並みを眺め、改めて感想を抱く。
用を全て終えてやっと落ち着ける頃合いだ。仲間たちも同じだと思う。
肩の力を抜いたキリはマギーの背中へ語り掛ける。
「ここは何も変わらないね。言っても前来た時からそんなに時間経ってないけど、初めて来た頃からずっとこのままだし。良いんだか悪いんだかわからないや」
「みんな、思い思いに過ごしてるだけですから」
「まぁね。君らもそんな感じだった」
「まぁ、その……姉さんが」

「みんなは変わってない？　アニタとはちょっとだけしゃべったけど」
「はい、大体は。でも……アニタ、寂しがってました」
周囲の喧騒の中でもマギーの声は聞こえていた。
その言葉に少し申し訳なさそうにして、わかっていたのかキリが頬を掻く。
「やっぱりか。予想はしてたけどさ」
「私も、あんまりわからなくて。どうして、海賊に復帰したんですか？」
「イーストブルーに行ってたんだ。帰ったつもりだったんだけど、あの船長に出会っちゃって」
「やっぱり、原因はあの人なんですか」
うん、と素直に頷かれる。
「軽くなった気がするんだ。些細なことだったけど助かった。すごく感謝してる」
「だから、一緒に海賊を……」
「だってさ、海賊王になりたいって言うんだよ？　しかも自分だけじゃ無理なんて言って、しつこいくらい誘ってくるし。根負けしたのもしょうがないってくらいだった」
少しだけ振り向いてキリの顔を確認する。
彼は微笑んでいた。以前会った時の姿とは全く違う気がする。
些細なことでこれほど変わるものかと、無表情ながらも彼女は少し感心したようだ。
「また、航海するんですね」
「うん。今度はラフテルまで行くよ」
「そうですか……」
よっぽどの自信だと思って、言葉を呑んだ。
思い起こせば、ここまではっきりと物を言うキリは久しぶりだったかもしれない。
幼い頃は直情的な、割と分かり易い性格をしていた。それがビロード海賊団の全滅が噂となって囁かれる頃、再び姿を現した時、すでに

のらりくらりと自分を見せない人間になっていたのを覚えている。幼い頃を知っていたマギーとミシェールはずいぶん驚いたものだ。
出会っていない空白の期間に何かがあったのだろうと思っていた。けれど今この瞬間、その一言だけは、あの日の彼を見つけ出せた気がする。
マギーが黙ってしまったことをきっかけにして、しばし無言のまま歩き続ける。
懐かしい風景の中を飄々と歩き、誰に気を取られるでもなく、ただ真っ直ぐ歩くだけ。普通ならつまらないとも思うだろう時間は二人にとって苦ではない。
坂道を歩いて山を登るような道へ入り、宿の位置を思い出してきた。
しかしキリは敢えて何も言わず、自分が先を行くこともせずマギーに従う。
今はマギーが案内役だ。
何も追い抜いてまで宿へ向かう必要はないと思った。
およそ十分ほど歩いて目的地に到着する。
山の斜面に作られた、外観からは大きな洋風の屋敷にも見える宿屋であった。
マギーが扉を開いて先に入り、次いでキリが宿の中に入る。すると一秒も経たずに慌ただしい足音がやってきた。お盆に大量の皿を乗せたミシェールである。
慌てて走る彼女は二人にも気付かず、別の部屋へ向かおうとしているらしい。
相変わらずの様子でキリがくすりと笑う。
それを止めようとしてマギーが控えめに声をかけた。
「あー忙しい忙しいっ。急がなきゃ」
「あの、姉さん……」
「あら？　マギーちゃん？　いつの間に帰って――」
勢いよく足を止めた彼女の両手でガチャンと音が鳴り、奇跡的に空の皿は落ちなかったようだ。

ミシェールの目はすぐにマギーとキリを見つける。
途端に顔中が喜色に染まって、嬉しそうに口元に笑みが描かれた。
「あ～っ、キリちゃ～ん！」
「どうも。久しぶり」
「まぁまぁまぁ、どこに行ってたのよも～。みんな心配してたのよ。また海賊になったりして」
「色々あってね。話すと長くなるんだ」
「姉さん、お皿、危ないから……」
身じろぎする度にガチャガチャと危険な音が鳴って、今にも皿が落ちてしまいそうだった。苦笑するキリの傍らマギーが心配そうに身を乗り出して、それでもミシェールは気付かない。
結局、彼女にも幾分手渡して二人で持つことになった。
喜ぶミシェールはうずうずと話したそうにしていたものの、急いでいるため時間もない。
空にされた大量の皿を見ればなんとなく想像できる。キリから先に彼女へ言った。
「まぁ、積もる話はあとでもできるし」
「そ、そうね。それじゃあっちの食堂に行って、みんな集まってるから。みんなすごい食欲でもう戦争なの。あ、マギーちゃんは手伝ってね」
「うん」
「キリちゃんも毎日大変ね」
「あはは。だから楽しいんだよ」
朗らかな笑顔を見てミシェールが驚いた。
それは彼の心からの笑顔。嘘偽りのない素直な感情。
考えるまでもなく久しぶりに見た気がしてしまい、動揺はそのためなのか。
心底幸福そうに微笑む彼女は、小さくよかったと呟いた。
「キリちゃん、今、楽しいのね」
「楽しいよ。最高さ」
「そう……うん。そっちの方が、お姉さんは好きだな」

くすくす笑ってそう言われ、少し居心地の悪さを感じたようでキリが肩をすくめる。やり取りを見ていたマギーはいまいち理解できず、困惑して眉がへの字になっていたが、当人たちは満足しているらしく、あまり多くを語ることはなかった。

ミシェールが踵を返して、弾む足取りで歩き出す。

名前を呼ばれてマギーも慌てて後ろへ続き、二人してその場を離れていく。

「行きましょマギーちゃん。まだまだ忙しいわよぉ」

「う、うん。わかった」

「あとでねキリちゃん。落ち着いたらみんなで話しましょ」

「りょうか～い」

手を振って見送ってやった後、広大なエントランスに一人になる。

二人が見えなくなってからようやく彼も歩き出した。

示された一室へ赴き、扉を開けた瞬間、騒がしい音がいくつも聞こえてくる。怒声、会話、食器が触れ合う音や、椅子が倒れたり皿が割れたり、数多の音が重なっている。

呆れ返るほどの大騒ぎだった。

見ている人間は決して良い気分にならないかもしれないが、それでも楽しげに過ごしている仲間たちの姿を見て、入り口に立ったキリはしばしそこから皆を眺める。

部屋の中央に長い机が一本。

そこに人数分の椅子を置いて皆が座っている。

机から落ちそうなほど料理が乗った皿を置いているとはいえ、まだ足りていない様子だ。

騒がしい理由の一つにやはりルフィが居た。

長い机には無数の皿が置かれており、その全てに腕を伸ばして、口いっぱいに料理を放り込む彼の姿は下品の一言。いつも通りだが食事に関してはやはり人一倍執念を感じる。

しかしこれで被害を受ける者も居るのは当然で、今はウソップが叫んでいる最中だった。

「おぉいルフィ!?　おまえまたおれの皿から取ったな！　そっちか

ら取れよ、こんだけあるんだからよぉ！　いやむしろ自分の皿から食え！」
「んーばっ！」
「うおっ、飛ばすなぁ!?」
文句を口にするウソップと、反論の際に口から食べかすを飛ばすルフィ。
二人のやり取りは普段の宴と何も変わらず、むしろ騒がしさは増すばかり。
楽しんでいるな、と見てしまうのは、付き合う時間が長いせいか。
気付けばルフィの魔の手はゾロの皿にも伸びていて、手に持ったフォークが勢いよくステーキに突き立てられる。しかし反射的にゾロのフォークもステーキを刺し、それぞれ違った力の入れ方をして、ルフィは奪おうと全力を尽くし、ゾロは必死に押さえていた。
多少の怒気を醸し出し、ゾロの目はルフィを睨みつけている。
負けじとルフィも肉を奪うべく死力を尽くしていたようだ。
「てめぇ、そう毎度毎度奪えるとでも思ってんのかよ……！」
「んがぁっ！」
「いいから離せ！　散々食ってんだろうが！」
「よし、今の内だ！　今の内にできるだけ腹に入れとかねぇと……！」
ルフィとゾロが肉の奪い合いをしている最中、チャンスとばかりにウソップが猛スピードで食べ始める。ますます戦場と呼ぶに相応しい雰囲気が強まってきていた。
楽しげにも見えるが面倒そうでもあり、キリは思わず苦笑してしまう。
喧嘩しているような三人を心配することもなく、不意に視線の先を変えてみる。
戦場の雰囲気を醸し出すテーブルの一角、和やかな場所もある。やはりそちらもルフィたちの騒がしさには参っているようだが、少なくとも落ち着こうとはしているようだ。
その最たる例がナミとシルク、ビビの三人である。

男たちの騒ぎを無視するようにして、比較的落ち着いた食事はできていたらしい。
「あいつら、またくだらないことやって。少しは落ち着けないのかしら」
「あの、止めなくてもいいの？」
「大丈夫だよビビ、いつものことだから。みんなこっちの方が慣れてるの」
「そう、なのね……あ、カルー。慌てなくていいから。まだいっぱいあるから大丈夫よ」
比較的穏やかだが、時折余波が来ることも少なくはなく、食べかすが飛んできた時にはナミが隣に居るルフィの頭を殴る。しかし効いていないのか反応はない。
シルクはそれを見て苦笑するも、止める素振りはなかった。
ビビは隣に座るカルーが慌てて食べるため、心配や世話をしたりと気を抜け無さそうだ。
食事時になんという騒がしさだろう。
改めて俯瞰的に眺めてみるとその異常性が理解できる気がする。
部屋の中、或いはキリの隣を通って、宿で働く女性たちが給仕に忙しそうだ。
次から次へ料理が平らげられ、追加の料理を運ばねばならず、調理に給仕にと常に全力疾走を続けているような物。彼女たちの苦労には涙を禁じえない物がある。
それでもキリは笑って眺めていた。
しばし合流せずにその光景を見つめ、今一度噛みしめてみるのだ。
昔とは違う、新たな仲間。
今やすっかりこれが当たり前になって、胸を張って海賊島に来れたのもそのせいかもしれない。
突っ立ったままで居ると後ろからサンジの声が聞こえた。振り向けば料理を盛りつけた皿を両手と頭に乗せ、給仕の手伝いをしているらしい。さらに後ろにはイガラムも居る。
いつの間にか現れていたキリを見て驚いた表情。

それも一秒経てば笑顔に変わり、穏やかに受け止めてくれる。
応じてキリも朗らかに笑った。
「ようキリ、おまえどこ行ってたんだ？　さっさと食わねぇと無くなるぞ」
「相変わらずすごいね、ここは。ちょっと気圧された」
「よく言うぜ。いつもはおまえもあの中に居んだよ。ほれ、無くならねぇ内に食え」
「はいよ」
「いやしかし、海賊の宴とはなんと凄まじい……ビビ様はよくあの輪に入れるものだ」
「美人だからな。そりゃ慣れも早いさ」
「それって関係ある？」
「あるさ」
軽快なやり取りを行って共に部屋へ入り、次第に騒ぎながらも仲間たちがキリに気付いた。
反応は明らかである。
ルフィは咀嚼を続けながら両手を上げて喜び、ウソップとゾロはその隙に料理へ集中し、一気に頬張って、呆れるナミが溜息をつく一方でシルクとビビが苦笑する。
見ていて楽しい面々だ。
軽く手を上げ、給仕をするサンジやイガラムとは別に、キリは空いてる席へ歩いた。
「キリッ！　おまえどこ行ってたんだよ！　んぐっ、さっき、もがっ、おまえの友達に――」
「話はあとでいいから、とりあえず食べるかしゃべるかどっちかにしなよ」
「ん～ばばっ」
「やれやれ」
苦笑したキリも入り口から一番近い席に着き、ひとまず食事を始める。
再びルフィが数多の料理を掻っ攫い、騒動が起きるも、慣れた様子

の彼は自分の分だけ確保するのも慣れていた。料理を口に運ぶのは席に着いてから早かった。
目の前にはビビが座っていて、料理を運んできたサンジが皿を置くついでに話しかけている。
どこか戸惑った様子ながら、彼女もこの雰囲気を拒んではいないようだった。
「大丈夫かいビビちゃん。あいつらうるせぇだろ。もし嫌だったら蹴り飛ばしてくるけど」
「ううん、平気。すごいのね……みんなはこれが日常なんでしょ？」
「船長があれだからかな、すっかり慣れちまった。今となっては文句を言う奴も一人も居ない。ナミさんやシルクちゃんも楽に過ごしてるし、まぁ、ビビちゃんも慣れるよ」
「ええ……」
確かに今まで体感したことの無い騒がしさではある。しかしそこに参加する人間に、給仕する女たちも含めて、辛そうにしている顔など一つもなかった。皆がその騒がしさに愛着を持ち、いつの間にか引き込まれてしまっている。これを楽しいと思ってしまっている。
どうやらルフィには、或いはこの一味には、そんな不思議な力があるようだ。
心が動くままに生きる彼らは誰よりも自由を体現していて、ただそれだけで周囲の人間にまで笑顔を生み出す。この場で再認識させられた気がした。
「国を心配する気持ちもわかるが、少しはおれたちにも預けてくれ。なぁに、こんな連中だ。軽く持って運んであげるからさ」
「え？」
「もう仲間だってことさ」
食事時とあって煙草を銜えておらず、にこりと笑う彼の顔を見た。
ビビはしばし言葉を失くす。
そう言えばルフィやナミにも気遣われた気がする。ようやくその時の言葉を思い出したのだ。
子供のように叫んで、騒いで、遊んで。

笑って、怒って、料理の取り合いなんて小競り合いをして、けれど彼らは子供ではない。ただ自分に素直なだけで、他人を気遣うだけの余裕があった。

やっと理解できたと思う。

みんな、ビビに肩の力を抜けと伝えてくれていたのだろう。

国を心配する気持ちは当然。それとは別に余裕を持っていなくてはいけない。

自分の身一つで、精一杯感情を表す彼らの自由に、今なら気持ちの整理ができる。

くすりと微笑むビビは騒がしい宴を眺め、やっと肩の重荷を下ろせたらしかった。

目の前にあったわずかな変化を見て、ふと目を伏せたキリは考える。

女好きなサンジは、女性の前では腑抜けになっていると思われがちだが、決してそうではない。女性にやさしい彼は誰よりも素直にその人を見ているし、迷っているのなら導き、困っているのなら助け、悲しんでいるのなら笑わせようとする温かさがあった。

時には素直過ぎて下心を見せてしまうこともあるものの、そこも愛嬌だろう。

聡明で気遣いのできる彼は、一味で最も紳士的で、尚且つ頼りにできる人物なのだ。

少なくとも、緊張しているビビを安堵させたのは誰よりも早く気付いた彼の功績。

他の男たちではできないことを率先してやってくれた。

キリはサンジの気遣いに感謝し、視線をくれてやると少し勝ち誇るような笑み。どうだと言わんばかりに笑っていて、意図が違っていたのか、不思議とビビを取り合うかのようだった。

やはり下心は消し切れないのだろう。それさえなければ完璧なのだが。

苦笑したキリが食事を続けようと手を動かし、自身の皿に目を落とした。

「私も、海賊船に居る今は海賊かしら」
「そうさ。祖国の人間なんてどこにも居ない。いずれは王女にならなきゃいけなくても、今はおれたちの仲間の海賊。少しくらい羽目を外したって構わないだろ」
「あのぅ、私はここに居るのですが……」
「クエー」
ビビは何かを決意したような顔で俯く。
その背を押してやるため呟いたサンジの言葉には、イガラムとカルーが揃って反応するが、すでに何かを考えているらしいビビの耳には聞こえていなかったかもしれない。
パッと顔を上げ、彼女は騒々しい面々を見る。
席を立ってしまい、驚くナミやシルクには目もくれず、戦場のようなそこへ近付く。
相変わらずルフィが数多の料理に手を伸ばして暴れていた。応戦するウソップとゾロも手を止める暇がなく、次第に激化していく様相は凄まじい。
ビビはその中へ突入したのだ。
にこっと笑ってルフィに笑いかけ、唐突にその名を呼ぶ。
「ルフィさん」
「ん？　なんは？」
「えいっ」
思い切って身を乗り出し、精一杯手を伸ばして掴んだのは、骨の付いた肉の塊。
ルフィの目の前に置かれていたそれを奪い、大口を開けてかぶりつく。
まさかだった行動で彼の目が大きく開かれて、咀嚼の最中だった口からは悲鳴が漏れ出た。同時に別の場所からはイガラムの野太い悲鳴が発せられる。
「あ〜〜っ!?　もいぴぴっ、おはえなにすんらっ!!」
「ビビ様っ!?　なんとはしたないっ！」
「えへへ……これがこの一味のルールでしょ？」

「よ～しいいぞビビっ！　そのまま一気に攻め込め！　形勢逆転だ！」
「おいおい、おまえもかよ……」
ゾロは呆れた顔で呟くものの、ウソップは誰よりも先に好意的な声を飛ばし、指示を送る。
猛威を振るう敵はルフィだけだ。彼さえ大人しくなれば食事は平穏無事に終わる。
そのためビビとウソップが協力してルフィの皿を奪おうと動き出し、ゾロも意趣返しのためか時折協力し、イガラムがそんなビビを止めようとする。そしてルフィは前にも増して料理を口へ放り込んでいき、喧騒はさらに大きな物となっていった。
最初こそ驚いた。だが数秒もすればナミとシルクは苦笑して見守り、サンジは頬を緩める。
海賊なのだからこれでいい。
少々ビビがはしゃいだところで、品が無いと怒るのはイガラムを除けば誰も居なかった。
たまにはそんな経験をしてみるのも大事だろう。そう思えただけで僥倖だ。
楽しくて仕方ない、といった顔で笑うビビを見て、ついにはカルーもそこへ飛び込んでいった。
その光景を見ることはきっと特別だったに違いない。
まだ若い少女が心を殺し、敵と見定めた組織に潜入して、祖国のためだけを想って孤独な戦いを続けてきた。傍にはイガラムが居たとはいえ、その心労は計り知れない物である。
きっとその笑顔こそ彼女の本当の顔だ。
キリはサンジに目をやり、手を止めて称賛する。
「良い顔になった」
「バーカ、元々良い顔なんだよ。可愛いし美人で可憐だ」
「あはは、そうだね。でもあっちの方がずっと良い。気を使って笑ってるよりは」
「そりゃ警戒すんのも無理ねぇさ。それでも傍に居りゃ伝わるもん

はある」
「そうだとしたら助かるよ」
「おまえもビビちゃんに悪いと思ってるなら、信頼に足る働きをするしかねぇな」
「ま、ぼちぼちやるさ。多分先は長いから」
彼自身も肩の力が抜けた気がして、再び食事を始めようとする。
ルフィやビビ、ウソップやイガラムが騒ぐ声が不思議と耳に心地よく、やはりこの空気こそ肌に合っているようだ。どんな音楽よりも顔が緩む気がする。
フォークを持ち上げる前に、最後にちらりと彼らの姿を眺めた。
その時、唐突に飛びついてくる影があった。
「あなたっ!!」
「は？」
右側から抱き着く人影。
思い切り衝突して両の腕に捕まり、動けないまま椅子と共に倒れていく。
訳も分からずキリが倒れると、真上には目を潤ませる女性が居た。
少し前に別れたはずのベビー5だ。
ゾロを酒場まで案内するよう頼んだ後、もう会うこともないかと思っていたがどうやら違っていたらしい。彼女はどこか悲しそうに、同時に嬉しそうに、しかとキリを抱きしめている。
胸に顔を押し付け、ぐりぐりと顔を擦り付ける様は見ようによっては恋人のようだ。
しかし彼女の言葉はそれ以上の意味を持っていて、聞いていればそれは簡単に伝わる。
まずいと気付いたのはその時だ。
「ひどいわあなたっ、あとで絶対会えるからって言っていたのに！」
「あ、あなたって。その呼び方はちょっとどうかなぁと思うんだけど……ほら、誤解されるし」
「どうして？　私が必要なんでしょう？　なんでも言って、あなたのためなら命も惜しくない。だって私……あ、あんなに強く求められ

たのは、初めてだったから……♡」
「いやいやいや、その言い方は語弊があるし、ちょっとここではそういう話は――」
困惑した顔で冷や汗を垂らし、ますますまずいと感じる。
話しながらもキリはなんとか彼女を引っぺがそうとしていたものの、彼の物より細い両腕は万力のような力でキリを捕らえて離さず、性別の差があっても全く勝てる見込みを感じないほど。そのせいで焦りはさらに大きくなり、室内にある異様な空気が肌に痛かった。
いつの間にか一室は沈黙に包まれている。
穏やかに話していたナミやシルクは仕方ないとしても、大騒ぎしていたルフィやビビやウソップまで動きを止めて、床に倒れて折り重なる二人を見ている。
何とはなしに事情を知っているゾロは頭を抱えて我関せず。溜息だけはっきり聞こえる。
もはや動物のカルーでさえ空気を読み、鳴き声一つ発さずに硬直していた。
それよりもっと恐ろしいのが、気付けば俯いているサンジの姿。
一切の言葉を失って異様な雰囲気を醸し出しており、ありありと怒りの念が伝わってくる。
美女に抱き着かれている現状では、仕方ないと判断するしかなかった。
顔を上げた彼の目は嫉妬で狂っている様相。
あぁ、と小さく声が出て、ついベビー5の背に回した腕へ力を入れてしまった。
「キリィ、てめぇ……！　一体どこで何してやがったァ！　おれたちが航海の準備してる間に、一人だけ抜け駆けでナンパしてやがったわけかゴラァァッ!!」
「まぁ……普通そうなるよね」
「はぅぅ、こんなに強く抱きしめられるなんて。そんなに私が必要なのね……」
サンジの怒声をきっかけにして、室内は一気に騒がしくなった。

どこの誰だ。どうやって知り合った。何がどうなってる。様々な質問がキリにぶつけられ、げんなりしている彼は何から答えたものかと戸惑うばかり。
ゾロも助け船を出すつもりがなく、しばし彼が答えに詰まるという珍しい光景があった。
再び騒がしくなるが先程とは種類が変わり、給仕の女たちも混乱している様子だ。
宿屋の食堂は喧騒に包まれ、一時食事の手が止まる。
そのため給仕と料理人の女たちもわずかな休憩が得られた。
いつの間にか食堂の入り口に立っていたアニタは、そこにある光景を見ていた。
怒る人、戸惑う人、からかう人、笑う人。
色々な人が居る中にキリも居て、前とは違ってよく笑う。
やさしくてクールで、どこかふざけていて、でも遠い。そんな彼の姿ではなかった。
彼女の後ろからマギーとミシェールがやってくる。
心ここに在らずといった姿で、無感情にキリを見る目は何を想うのか。予想することもできず、ただなんとなく感じることはできる気がして、三姉妹が寄り添って室内を眺めた。
「キリ兄ィ、楽しそう」
「うん」
「きっと色々あったのよ。ここに来るまで色々」
「海賊やめるって言ってたのに」
「理由があったんだ。彼に、救われたって言ってたから」
「彼？」
「船長さん」
マギーの呟きに反応し、ルフィの顔を見る。
能天気そうな顔で、驚いたり怒ったり、笑ったり、忙しそうに表情を変えている。
なぜ彼なのだろうと思わないでもない。
アニタは難しい顔をしてわずかに唸った。

「よくわかんない。やっぱりキリ兄ィって変な人」
「そうね。結局それが一番彼らしいのよ」
「うん」
ミシェールが後ろからアニタを抱きしめ、肩にはマギーの手が置かれる。
よくわからない。不思議な人たちだ。
でも否定し切れる人たちではないらしくて、それが悔しかった。
「あとでたくさんお話しましょう。その前にお客様にご奉仕しなくちゃ」
「う～い」
「大浴場、準備しなくちゃ……」
「さぁみんな、頑張るわよ。三しま～い、ファイッ、オーッ！」
ミシェールが元気よく拳を突き上げたことで、反応は薄いが、三姉妹が動き出す。
一応とはいえ彼女たちの宿。
給仕や料理人は雇っているとはいえ、本当に信頼できるのはこの三人で、協力して動き出せば誰にも負けないだけのチームワークがある。とはミシェールの言だ。
客人が騒がしいなら彼女たちは姦しく、それぞれ違ったテンションで仕事へ向かった。
一方、食堂では尚も騒がしくなるばかり。
いつもとは違って、いつも通りだが、やはり彼らのペースに変化はなく。騒ぐサンジを諌めるのはナミで、けれど新たに騒ぐのは決まって仲間の誰かだった。
「表に出ろキリィ！　不埒なおまえの性根を叩き直してやる！」
「それ、サンジにだけは言われたくないなぁ」
「やめときなさいよサンジくん。男の嫉妬は見苦しいわよ」
「そうだよねぇナミさん。おれにはナミさんが居るわけだし……♡」
「そういう意味じゃないから、勘違いしないでね」
「おいキリ、おまえ船長に断りもなく結婚すんのはだめだろ。そう

いうのはまずおれに言え。おれはメリー号の船長なんだぞ」
「いやいや結婚してないから」
「えぇっ!?　してないの!?」
「そ、そんなに驚くとこかな。別にそれっぽいこと言った覚えもないんだけど」
「なんだ？　結婚しねぇのか？」
「これからしますっ」
「そんな勝手に……はぁ。とにかく、一回ゆっくり話そう」
決着のつけ方もわからず、まだ食事すら終わっていない段階。
混乱も完全に消えてしまった訳ではなく、説明を求める声もいまだ多かった。
明日があるとはいえ、一日を終えるにはまだ早く、夜が更けても彼らの時間は続くようだ。

レース開始の朝

騒がしい夜を終えて、喧騒もさほど変わらず朝がやってきた。
海賊島の人々はいつも通りに動き始めて、でもいつもよりどこか浮足立っているような、多少の期待や興奮を思わせる様相で穏やかな一時を過ごしている。
島中が馬鹿騒ぎしていた昨夜に比べてずいぶん落ち着いた風景だった。
今日はレース当日である。
そのため今日を心待ちにしていた人々の顔には、至極嬉しそうな顔があった。
レースに参加する者は野心を見せ、賭けに興じる者は誰が勝つかと予想で盛り上がり、どちらにも属していない者でさえレースの話題に目を輝かせていた。
デッドエンドの勝者は誰か。
あちらが上だ、こちらが強い、などと語る声は一晩経っても尽きることはなく、レース開始の時間が近付くにつれて声は大きくなってすらいた。
一方で麦わらの一味は全く緊張していない様子だ。
起き出した宿でのどかに過ごしており、昨夜とは打って変わって落ち着いた風景。
騒ぐことなく食事を終えた今、彼らはエントランスで向かい合っていた。
「これからについてだけど、ボクは一旦船を離れる。ゴール地点で会おう」
そう言い出したのはキリだった。
唐突な提案は仲間たちに衝撃を与え、言葉を失くさせる。
決して肯定的な雰囲気ではなかった。誰の顔にも驚きが見えて、中には途端に不安を色濃くする者もおり、特にルフィは嫌そうな顔をする。
口を開いた時、誰もが彼と同じ想いだったはずだ。

「離れるってどういうことだ？　キリもいっしょに来るんじゃねぇのかよ」
「色々事情があってね。レースの間だけさ」
分かり易く不満を訴えてくるルフィを見てキリが苦笑し、肩をすくめた。
そう言われるのも想定の範囲内。疑問を持つのは当然だろう。
ただ、全てを明かせる状況ではないため、彼は人知れず言葉を選ぶ。
「欲しい物があるんだ。個人的に動いて手に入れたい。直接的にはレースに参加しないし、今回メリーには乗らないけど、最終的な目的地は同じ島だ。向こうで会えるよ」
「いや、急過ぎてわからねぇんだけどよ……向こうで会うって船は？　それに目的もよくわからねぇし、ほんとに別行動すんのか？」
「そうだよ。まぁ今回だけさ」
ルフィに同意するようウソップが尋ねて、答えは相変わらず同じ。キリは微笑みを絶やさずに彼らの疑問をさらりと受け流し、態度を変えようとはしなかった。
人となりは理解しているが、狙って船を離れるなど初めてのことだ。
当然質問したくもなる。
次に口を開いたのはサンジだった。煙草に火を点け、煙を吐き出しながら彼を見る。
「まぁ、こっちとしてもおまえが裏切るなんざ思っちゃいねぇが、それにしたってわからねぇことばかりだ。わざわざ船を離れてまで欲しい物ってのは？」
「ないしょ」
「っておい、教えねぇのかよ」
おどけて口を閉ざしたキリにウソップが思わず言った。尚も詳しい説明をしない。
続けて、サンジが問いかける。
「言えねぇことをしようってのか？　そもそも、てめぇベビー5ちゃんに手ェ出しといてさらに単独行動だと？　今度はどこで何す

る気だ……！」
「物凄い嫉妬の念を感じるね。別にいやらしいことはしないよ」
「ええ。私が居るから必要ないわ」
「いやそういう意味じゃないんだけど」
「ええっ!?」
キリの隣に並んで立っていたベビー5が大声を出す。何があったか、どうやらすっかり彼のことを気に入っているらしく、肩が触れるほど寄り添う姿は恋人にも見える。そして彼の発言に驚く姿は片時も離れたくないとでも言うかのようだった。
昨夜から彼女は明確にキリへ好意を寄せている。
常に傍を離れようとせず、どんな時も彼の隣で役に立とうとしていた。
今もそうだ。
無防備に立つ彼に腕を絡めて、不満を訴える目はわずかに潤み、何かを懇願するようである。愛らしい表情は年齢や外見よりも彼女を幼く見せ、サンジなどは目の色が変わっていた。
キリも含めて仲間たちは困惑している様子だ。
今や当然のようにそこへ立っているものの、本来彼女は部外者である。
そんな周囲の反応すら一切気にかけず、ベビー5はキリの顔を見上げて言った。
「私が必要なんでしょう、あなた。私ならいつでもＯＫよ」
「チクショー!?　おれも美女にあんなことを言われたい！　ベビー5ちゃん、君のことはおれの方がよっぽど必要としているんだ！　キリよりもずっと！」
「え!?　そ、そんな……私にはもうこの人が居るのに！」
突然サンジが口を挟んだことにより、場の空気は一変してしまった。
本題には関係のない話である。
目をハートにしたサンジが彼女を口説き始めたことにより、ベビー5は頬を赤く染め、しかしその一方でキリの体に身を寄せ、肩に頭を

預けた。
甘える素振りにキリは小さく嘆息する。
気分が悪くなる訳ではなく、むしろそれほどの美人が相手では良くなりもした。ただそれとは別として、場が引っ掻き回されたことに少し頭が痛くなる想いらしい。
「やれやれ。なんだか上手くいかないね」
「わ、私が必要なの？　あぁでも、キリが私を必要としているのに、一体どうすれば……」
「おれの方が君を愛せるさ！　さぁベビー５ちゃん、おれの胸の中においで！」
「そ、そんな、そこまで必要としているの？　うぅ、私、どうすればいいの――」
「ベビー５」
その時、こちらも唐突に、今まで突っ立っていたキリがベビー５の肩を抱いた。
サンジの目には嫉妬の炎が生まれ、周囲では呆れた溜息。
頬を赤らめるベビー５の目はキリの顔に釘付けとなっていたようだ。
「後で話そう。とりあえずそれまで静かにしててもらえるかな」
「はい、あなた♡」
「なぜあいつばっかりあれほどの美女に!?　おれは悔しいぞちくしょうっ!!」
「サンジ、ちょっと静かに。まだ大事な話の途中だから」
「は～いシルクちゃ～ん！　静かにします♡」
キリとシルクが諌めたことで再び空気が引き締まる。
それを確認した後で、改めてキリが皆の顔を見回した。
「必ず戻る。全員無事で会おう」
多くを語らず、それだけを言われた。
あまりにも説明不足。本来なら疑心暗鬼になっても無理はない。
しかし仲間たちは彼のことをよく知っていて、真剣な声を聞けば不思議と説得されてしまいそうになった。それだけキリが裏切るという

状況が考えられないということでもある。
誰よりも先にルフィが頷いた。
深く聞かずに送り出すことを決めたらしい。皆の視線は驚いていた。
「わかった。ゴールで会おう」
「ルフィ、いいの？」
「キリが言うんだ。心配いらねぇさ」
シルクの問いにも、振り返って軽く答える。その笑顔には全く心配が含まれていない。
他の面子は少し不安そうにしているが船長の決定に逆らう者は居なかった。
わずかだが室内の空気は変わりつつあり、独特の緊張感が生まれるかのようだ。一時的にとはいえ仲間の一人が自発的に船を離れるのは初めての事態。数人、顔色も変わりつつある。
仲間たちの内、何名かの顔を見たキリが口を開いた。
理解し合った彼らにかける言葉は忠告であって、決して心配ではない。
一人ずつに目を止めて簡潔に伝えていく。
「サンジ。この中で一番冷静に状況を見れるのは君だ。もしもの時は頼むよ」
「あ？　ああ」
「シルク。この連中不協和音も多いから、上手く取り持ってやって」
「あ、うん」
「ナミのことは心配してないけど、戦闘だけは他の連中に任せていいから。ウソップはネガティブなのも良いところだけどさ、もうちょっと自信持っていいと思う。援護はよろしくね」
「よ、よし。任せろ」
「ちゃんとわかってるわよ。心配いらないわ」
どこか戸惑っている様子もあったが、一人も欠けずに返事が返ってくる。
それに気を良くして視線の先が変わった。

「ゾロ、あとよろしく」
「……おう」
腕を組んで不機嫌そうに頷かれる。彼は比較的理解してくれている方だろう。それでも全てを理解している訳でもなくて、あとは彼の感覚に任せるしかない。
最後にキリの目はルフィへ向けられた。
「それと、ルフィ」
「おう」
「思う存分楽しんで」
「しっしっし、当たり前だ！」
間を置かず即座に返事が来た。
ルフィは上機嫌そうな姿で彼の行動を認め、送り出そうとしているらしい。
どうやら皆も不安や不満といった感情を消し去ったらしく、徐々に表情は変わっていく。笑みを浮かべられる程度には安堵できたのだろう。
傍から見ていて、ビビやイガラムには理解できない時間がある。それもどれだけの時間を共有したかによって変わるのかもしれない。
少し離れた位置に立つ三姉妹にしても、彼らを見ていて不思議な感覚に囚われている。
言葉を必要としない関係。よほど信頼していなければそうはならない。
まだ若いのにずいぶん達観しているなと、多くの海賊を見てきただけに思った。
よし、と頷いてルフィが振り返る。仲間たちを眺め、船長として決定は素早かった。
「そろそろ行くか。キリ、おれたち先に出るぞ」
「気を付けてね。生半可じゃないから」
「負けねぇよ。海賊王になるからな」
「くくっ、そうだった。あぁそうだ、忘れるとこだった」
「ん？」

キリが懐から取り出した物をルフィへ投げ渡す。宙を飛んだそれは右手の中に納まった。
「なんだこれ？　エターナルポースか？」
「困った時は使って。デッドエンド、甘くないよ」
「んん、よくわかんねぇけどわかった」
ルフィは受け取ったエターナルポースをズボンのポケットに入れる。
その時すでに仲間たちは入り口へ向けて歩き出しており、待つ様子はない。やり取りを見てすらいなかったようだ。慌てることもなくルフィがそちらへ歩き出す。
ベビー5を伴ったキリも外へ出て、皆を見送ろうと背を見つめる。
不思議な気分だ。横に居るのではなく一人だけ残ろうとする自分に違和感を持つ。
かつての光景を思い出しそうになる。
しかしそれでもキリは彼らの傍を離れ、自分だけその場を動かなかった。
外へ出てから一行が振り返り、足を止めたキリを見る。
表情は様々。先頭のルフィは笑顔で彼に向き合っていた。
「ゴールで再会だ。絶対来いよキリ」
「もちろん。案外こっちの方が早いかもね」
「いいや、おれも負けねぇよ。またあとでな」
「うん。あとで」
軽く手を振ってやると、歩き出した一行は港を目指して遠ざかっていった。
しばらくその背を眺めた後、大きく息を吐いたキリはようやくベビー5に向き直る。
問題は彼女だ。
様々な危険性を持っている人物。好かれているらしい事実は決して損ではないが、不確定要素が多過ぎる。まだ完全に信頼してしまうだけの材料は揃っていない。
それを差し引いても妙に好かれてしまっているため、扱いに困る、

というのが正直な意見だ。
ただし、キリは仲間たちが思う以上に彼女を受け入れている節がある。
戸惑う態度は素直な反応であるものの、冷静な思考は失われていないようだ。
彼女を味方にするのは悪くない展開だと思っている。
海賊王への道筋を考えた時、避けられないであろう障害がいくつか。
それは海の皇帝と呼ばれる〝四皇〟の存在であり、海賊を捕縛すべく襲ってくる海軍本部であり、海賊を狩る海賊、七武海である。これらは長らく海の覇権を得るべく争っていて、世界情勢を見れば今でも続いていた。そう簡単に終わるものではないのだ。
つまりこれらの存在を乗り越えるにはそう簡単でないということになる。
そして海賊王になるには、これら全てを超えなければならない。
その内の一角、七武海。
これから敵対するサー・クロコダイルもそうだが、厄介な敵は他にも居る。
言わばベビー5との出会いは奇跡であり、彼女の存在はキリの言葉次第で如何様にも変わる。
敵を穿つ矛か、或いは自らの身を滅ぼす刃か。
まだ扱い慣れていないのは事実。しかし友好的に接していれば悪い人間とは思えず、或いは、状況次第によっては本当に仲間になるかもしれない。全ては可能性であった。
試してみる価値はある。
冷徹に考え、決断し、最善の手を選ぼうとしているらしい。
微笑みを湛えながらキリは嬉しそうなベビー5を見つめていた。
「さて、あとは君の問題だ。とりあえず一旦帰りなよ」
「そんなっ!? 私は必要じゃなくなったの!?」
「そういう意味じゃないけどさ。ボクもこれから忙しくなるし、ちょっと事情があって一緒にはいられない。仲間のところへ帰った

方がいいよ」
「私はあなたの役に立ちたいの！　なんでも言って、なんでもするから！」
「はぁ……もう」
キリは疲れた顔で頭を抱えた。
これである。頼み事は断らないという彼女だが、それでいて強く主張することも少なくない。昨日出会ったばかりだというのにこうしてわがままを言うことも一度ではなかったのだ。
まるで拒絶されるのを、捨てられることを恐れるかのような。
そんな素振りに違和感を覚えたが意見は変えず、キリは提案をやめない。
「別に今生の別れじゃないんだ。また会えるって」
「うぅ、でも……」
「仲間は大事にした方がいい。いくらジョーカーの身内でも、この海じゃ何があるかわからないから。色々あるかもしれないけど仲良くしときなよ」
そう言って髪を撫でられた。
ベビー5は少し困惑した顔になる。
なんて儚げな顔をするのだろう。仲間を大事にしろと言い、彼女の頭を撫でるキリの顔は、微笑んでいながらひどく悲しげにも見えてしまった。
意識していないのか、あまりに無防備すぎる。
思わず胸が痛んだ。
急にベビー5が右手を動かし、服の胸の辺りを掴んだのを見て、ハッと気付く。
すぐにキリはくしゃりと笑うのだが、余計に分かり易かっただろう。瞬時に笑みを緩めたということは隠したかったという行動に他ならない。
何か嫌なことを思い出していたのか。
今度は自分の気持ちを優先せず、ベビー5が頷いた。
「わかったわ。あなたの言う通りにする」

「悪いね」
「でも、お願いがあるの」
「何？」
「欠片でいいから爪をちょうだい。そうすれば仲間の下へ帰るから」
「爪を？」
いまいち要領の掴めない要求だ。しかし大した頼みではない。
キリは頷き、右手を差し出す。
途端にベビー5の笑顔は輝くようだった。
彼女の右手の人差し指が姿を変えて、鋭い刃に変化する。
事情は聴いていた。彼女はブキブキの実を食べた全身武器人間であり、自身の意志で全身を武器に変化させることができるらしい。それも完璧に操っている部類の能力者だ。
戦えば強いと、些細な挙動で感じ取った。
しかし今は敵対していないため、敢えて手を出さずに見守る。
ベビー5の指がキリの爪を欠片だけ削り落とし、自らの手に握る。
まさに至福の表情。心底嬉しそうに笑った。
「ありがとう。これならあなたとずっと一緒に居られるわね」
「あ、ああ……そうだね」
幸せそうに言う笑顔には末恐ろしい物を感じたが、それで満足なら言うことはない。否定もしないし、気味悪がったりもしない。キリは即座に同意した。
そっと体を離して正面から見つめ合う。
動き出したベビー5はしかしまだ歩き出そうとせずに、まだ言いたいことがある様子。
無理に促さずキリが待つ。
「もう一つだけ、わがままを言っていい？」
「聞けることなら」
「次に会った時は、あなたの話を聞かせて。もっと深く知りたいから」
「……そうだね。じゃあ、次に会った時の約束だ」

「ええ。必ずよ」
軽い足取りでベビー5が歩き出した。
キリはその場に残って見送る。
「もう行くわ。きっと仲間のバッファローが私を探してる。すぐに行かなきゃ」
「うん。道中気をつけて」
「また会いましょう、あなた♡」
「いや、あなたって呼び方は変えないかな、やっぱり」
勢いよく手を振りながら小走りで駆けていく。身体能力が高いのか、ベビー5の背は見る見るうちに遠くなっていった。その背中に溜息をつきつつ、顔には苦笑がある。
残されたのは彼一人。だがこれこそ望んでいた状況だ。
両手を天へ向けて体を伸ばし、ぐぐぐと筋肉が伸びる感触。
腕を下ろして、一呼吸。
ようやく準備は整った。
ここからは仲間のためであり、同時に彼個人の戦い。失敗は許されない。
再び一人になって覚悟は決まった。
キリは歩き出す直前に後ろへ振り返る。
宿の入り口の前、三姉妹が立って見送りに来ていた。
それぞれ違った表情。ミシェールは微笑み、マギーは無表情だが少し眉をへの字にして、アニタは仏頂面でそっぽを向いていた。
「ボクも行くよ。ありがとう。お世話になりました」
軽く頭を下げて伝える。
頭を上げて、彼の笑みは三人に向けられた。
ミシェールとマギーが頷き、穏やかな表情で返答する。
「体に気をつけてね」
「あまり、無理しないように……」
「また来るよ。みんな揃ってね」
「ふふ、楽しみにしてるわ。またみんなで宴しましょうね」
肩を揺らすミシェールがそう言った時、そっぽを向いていたアニタ

がわずかにキリを見た。
彼もそれに気付いて視線を合わせる。
「キリ兄ィ」
「うん？」
「……死なないでよね」
「はは、わかってるさ」
言い終えてすぐ振り向いた。彼女たちに背を向け、歩き出す。
今生の別れでもあるまいし。
そう思うのだが、なぜか不安は胸の内にあって、何とも言えない心境である。信用しているが心配もしている。特に彼の様子を見た後では。
昨夜、様々な話を聞いた。
イーストブルーで出会った海賊に勧誘され、共に生き抜くと誓い、再びグランドライン制覇を目指すことになった経緯も。東の海だけでなく世界に衝撃を与えた航海についても。
楽しそうに冒険の話をする彼を見て安堵した。
けれど同時に、危険性を孕んでいることにも気付いている。
キリはルフィに依存し過ぎている。
離れていく背を見つめる三人は無事に再会できることを願ってやまない。
いつかどこかで、何かが起こらなければいいが。
完璧に自身の感情を隠して見せた彼にはそう思って仕方なく、不安は消え去らなかった。
歩き出したキリは港に向かうことなく、港から見て右側にある一帯、普段滅多に人が立ち寄らない岩場を目指していた。間違えた訳ではなく目的地に定めていたのである。
誰も居ないはずのそこになぜ向かうのか。
待っているからだ。そこに船を停めている者たちが。
健常な足で歩いてものの数分。半ば小走りのような足取りだった。
高い岸壁から海を見下ろした時、谷間になったそこには水面に浮かぶ潜水艦があって、そこに目的でもある海賊が居た。

ちらりと岸壁の上を見上げ、彼らも気付いた。
腕を組んで立っているのは船長トラファルガー・ロー。
背後には航海士ベポや、ペンギンやシャチ、他の仲間たちも居る。
潜水艦ポーラータング号の甲板にずらりと並び、一味勢揃いで待っていたらしい。
笑みを浮かべたキリはそのまま崖から飛び降りた。
紙の体は軽く、重力の影響を受けながらも常人とは違った様相で落ちてくる。ハートの海賊団に所属する船員たちはおぉっと声を揃えたが、ローだけは反応せず。
すたんと軽い音が鳴る。
キリはポーラータング号の甲板に立ち、真っ先にローに目を向けた。
「行くぞ」
「あいあい、キャプテン」
平坦な声におどけた様子で答える。
先にローが扉をくぐって船内へ入り、次にキリが続いた。
他の面々も次々船内へ入っていく。
甲板から人の姿が消えてから、ものの五分も経っていなかっただろう。
エンジン音を立てて動き出した潜水艦は、瞬く間に潜行を開始したのである。

海賊レース〝デッドエンド〟

朝日が昇ろうかという頃。
港で出航準備を整えていたメリー号は多少の戸惑いを抱えていた。
特に表情が優れないのはナミである。
胴元から受け取ったエターナルポースの指針を眺め、ミシェールに確認した話を思い出す。
レースの出発点は現在地、ハンナバル。つまり町から出発することになる。だが指針が指し示す目的地は島の向こう側にあるらしかった。
島の向こうにゴールがあるというのならなぜ町からのスタートなのか。
これではそもそも船を出すことができないと考え、ナミが嘆息する。胴元やミシェールにも確認したのだが、スタート地点は間違えていないそうで、全く訳が分からなかった。
「う～ん、おかしい。指針は山の向こうを指してる……」
「それって、スタートは島の向こう側からってこと？」
「でもミシェールもここで合ってるって言ってた」
問いかけてくるサンジに返しつつ、ナミが語る。
「この島にはたくさんの支流があって、何年かに一度、本流に合流するんだって。だけどその本流はあの山から流れてくる……これってまさか」
「あの山を登るってことか？　リヴァースマウンテンみたいだな」
「状況が違うわよ。リヴァースマウンテンには大きな海流があった。ここにあるのはせいぜいが川よ？　あの規模の水流を登るなんてこと――」
「可能だ」
疑問を明かし合うナミとサンジの声を遮るよう、堤防から声がかけられた。
出航準備を続けていた面々も手を止めてそちらを見る。
堤防を蹴る音の直後、軽い動作で船に飛び込む人物がある。シュラ

イヤだ。ひらりと甲板へ降り立った彼は荷物を担いだまま、ナミへ目を向けて説明を始めた。
「普段ならまずあり得ねぇだろうが、何年かに一回ってのはそういうことだ。あるメカニズムによって決められた時期にだけ、大きな潮の逆流と強い風が来る。それを使って山を登り、そこがスタート地点になる。他の連中も他の支流で待ってるはずだ」
「やっぱり本当なんだ。理屈ではわかるけど、そんなこと……」
「まぁ、何が起こっても不思議じゃねぇ海だ。納得しとこうよ」
シュライヤが来たことは驚きもせず受け入れられる。
わずかに微笑んだサンジも作業へ戻った。
彼らの話は聞こえていたのだろうが、理解できず、朗らかに笑うルフィが言う。
「要は不思議スタートってことだな」
「いやわかってねぇだろ、おまえ」
ウソップが彼の頭を軽く叩いたことで空気は緩和され、緊張感は少し薄らいだ様子。しかしまだ不安に苛まれているらしいウソップはナミを見て言った。
「確かに山登んのは二回目だけど、ほんとに大丈夫なのかぁ？　あの時だって一歩間違えればメリーが大破するとこだったんだぞ。しかも今はキリも居ねぇし」
「あの時もキリは船ん中で居なかったじゃねぇか」
「いやそうだけどもだ」
「だいじょ～ぶ。なんとかなるって」
ナミに言ったはずだったがルフィが答え、気楽に笑い飛ばされてしまった。
いつも通りと言えばそれまでである。
大きく溜息をついたウソップは返す言葉を失くし、納得するよりなかったようだ。
「結局いつもこうなるんだよなぁ……」
「よぉし野郎ども、準備急げ～！　もうすぐレースが始まるぞ！」
大声を出すルフィにつられ、皆の準備も慌ただしくなる。

やはり慣れているためか作業は早く、瞬く間に帆が張られ、錨が上げられた。
メリー号は少しだけ動いて島から海へ流れる川の前へ。
ミシェールとシュライヤの話が嘘でなければ、その川を上って山の頂上まで行く。果たして本当なのかと誰もが島の全貌を眺めていた。
そうして次第に空気も変わっていく中、作業を終えたビビはぽつりと呟いた。
「本当に始まるのね……海賊たちのレースが」
「危険な旅路になりましょうなぁ」
隣に立つイガラムが神妙な面持ちで言う。彼女の身を案じるためか、できれば参加などさせたくはなかったが、今二人が乗っているのは海賊船。客人である以上強くも言えない。
せめて何も起こらなければいいがと願うしかなく、苦悩する顔になる。
そんな二人を見て、昨夜とは様子が変わっている二人を気遣い、不意にシルクが声をかけた。
「怖い？　ビビ」
「え？　あ、うん……どうだろう。自分でもわからないわ」
「心配ならいらないよ。みんなが居れば大丈夫だから、もう少し楽しんで」
シルクに微笑みかけられ、少しビビが驚いた表情になる。
直後にはくすりと笑って肩の力が抜けたようだ。
「そうね。もう少し楽しんでみる」
「うん。ビビは笑ってる方が可愛いよ」
「うーむ、危険はあるだろうが仕方ないか。その分私がビビ様をお守りせねば」
彼らが安堵していた頃、しばらく待ってついに変化が現れた。
メリー号が浮かぶ海面が揺れ出したのである。
この変化にいち早く気付いたナミが表情を変えた。
水面を見た訳ではない。それよりもっと確かなのは、肌に感じた風の変化。突発的に彼女は船の後方に目を向けて小さく叫んだ。

「来るッ」
予兆がある。これは間違いない。
聞いていた話は間違いではなかったのだ。
「みんな位置について！　風が来るわよ！」
「おっ、レース開始か？」
「野郎ども、ナミさんに従え！　急がねぇとオロすぞ！」
ほんの些細な変化に仲間たちは気付いていない。そのため反応が一歩遅れるが、誰よりも早く理解したサンジが告げたことで船上は慌ただしくなった。
どたばたと騒がしく駆け回り、航海のための立ち位置へ着く。
全員の動きが止まった瞬間がその時だった。
予兆、強い空気の揺れを感じて、船の後方から風が来るとわかる。
海から山へ向けて駆け上がる強風。
それは間違いなく突発的に起こる物ではない。だがそれは、突如として現れた。
「来たわよ……！」
「おっ、おおおっ――！」
「振り落とされんなよてめぇら。あ、レディたちはいつでもおれのこと頼ってね」
かくして、風は吹いた。
転覆しかねないほど船体を傾かせ、帆が風を受け取って船が進む。同時に、時を見計らったかのように潮の流れが一変しており、その様は彼らを導くかのよう。
島を登る川へ突入し、天然のトンネルを抜けた先、町の中へと出た。
数え切れないほどの人間がレースの始まりを見ているのである。
世にも盛大なパレードスタート。活気のある声援が山を登る船に向けられていて、数年に一度しかない大きな賭けに心を躍らせ、野次も数え切れないほど存在している。
町どころか島中の人間がレースに注目していたのだ。
もはや怒号とも呼べる声量に鼓膜を揺らされて、船上の人間はぶるりと震える。

凄まじい迫力であった。
天が割れるほど叫び声で溢れ、感じ入らずにはいられない。
麦わらの一味は胸に秘めた期待から笑みを浮かべ始める。
「す、すげぇ。おれたち結構注目されてんじゃねぇか？」
「ししし、楽しくなってきたっ」
普段は怖がってばかりのウソップでさえ武者震いして、ルフィは楽しそうに笑う。
海流に乗って山を目指し、その途上は好奇心と希望に満ちた物だったようだ。
登る道は一つではなく、いくつかの川が山頂まで伸びている。そのどれかのルートを通ってスタート地点である山頂まで辿り着くのだろう。
当然、レースの参加者は彼らだけではなかった。
町を挟んで向こう側、別の船が見える。
見ていたサンジが確認していた。
様々な形の船が存在する中、一際目立った海賊船が一隻。かなり大きなサイズで、帆には海軍のマークが描かれ、塗り潰すようにバツ印が描かれている。元々海軍の船だったのだろうとはそれを見れば明らかだ。ただ異質だったのは、船にある煙突から黒い煙が吐かれているのだ。
蒸気船だろう、と当たりをつけた。
初めて見たサンジは感心した様子で呟く。
「へぇ、蒸気船か。珍しいもん持ってんな」
「蒸気船？」
「蒸気機関っつーもんで動く船さ。おそらくあの中には石炭を燃やすボイラーがあるはずだ」
「帆があるのに火で動くのか？　変な船。不思議船だな」
「まぁそれでいいよ」
質問してくるルフィに返答しつつ、全員がその船を見る。
真っ先に気付いたのはナミだ。
妙なマークを確認して誰より早く気付いたらしい。

「あれはガスパーデの船だわ。サラマンダー号よ」
「蒸気船か。そんなのまで海賊船になってるとはなぁ」
「元は海軍の船だしね。あいつは海軍を裏切って海賊になった男だから」
「性質が悪そうだな。できれば関わり合いになりたくねぇや」
ぼやくウソップにナミが苦笑している。
気持ちは同じだ。何事もなく終われればそれが一番良いに決まっている。もっとも、ルフィを始めとした仲間たちが同じ展開を求めているとは思えない。たとえ平和を望んだとしても、結局は大事になりそうだと思うのは二人とも共通の想いであった。
他の船にも目を向けると、有名な一団は他にもある。
船も個性的なため見ているだけでも感嘆の声が漏れていた。
進むにつれて道は広くなり、他の川と合流して、最終的には一本になるようだ。
当初はメリー号しか居なかったはずの道に、数多の船が横並びになる。
ルフィの目が輝き出し、次から次へ視線を移していた。
「ナミ、あれは？」
「〝縛り首〟のビガロよ。懸賞金１４９０万ベリー。一対一じゃ強いらしいけど」
「うほぉっ、すんげぇ船首の船だ」
「あれがアーロンのライバルっていうウィリー一味ね。海の上だと厄介みたい」
「色んな海賊が居るな～。わくわくしてきた！」
近くにやってくる船を見て、ナミに解説を頼み、次第に興奮が高まってくる。
拳を握ったルフィは待ち切れない様子で肩を震わせ、その笑顔は輝かんばかりに好奇心を露わにしていた。いわゆる冒険のにおいというやつを感じ取っていたのだろう。
海賊だけが参加を許されるレースには胸が躍って仕方なかった。
斜面の角度も上がってくる頃に、最も大きな船が視界に入る。

気付いたのはウソップで、後方から猛追してくるその姿に度肝を抜かれた。
「な、なんじゃありゃあ!?　でけぇ！　船っていうか船員がでけぇだろ！」
見えたのは巨大な船をボートのように操る、巨大な二人の人間だった。その体格は明らかに常軌を逸しており、他の船など自らの足で踏み潰せそうな巨体である。
あぁ、と納得した様子でナミが声を出した。
事前に情報を仕入れていた結果、彼女は彼らのことがわかったようだ。
「あれが巨人族よ。グランドラインじゃそんなに珍しくないみたい」
「マジか……あんなのが普通に居るのか、グランドライン」
「にっしっし、巨人かぁ。いいなぁ」
次第に山頂が近付いてくる。それに従って多くの海賊船が集まっていた。
そこを越えればいよいよレースが始まる。
ルフィは拳を握って身震いした。
「いよいよだ！　みんな行くぞォ！」
威勢の良い返事を耳にし、前には数多の船があるものの、ついにメリー号は山頂へ到達した。そのままの勢いで水流に身を任せ、山の向こうへ躍り出る。
そこで予想外の事態が起こった。
リヴァースマウンテンの航海を経験した彼らは、その時と同じく、てっきり水流に乗って山を下る物だと考えていた。しかしそうではない。山頂へ登った船は前方で忽然と姿を消すのだ。
その光景を見た面々は表情に疑問を浮かべ、直後自らの体で体感する。
船は、道が途切れたことで宙へ投げ出されていたようだ。
水路は山頂で途切れていた。
斜面を登っていた水は滝となって降り注いでいる様子。

そのため、登り切った船は山頂から落ち始め、いくつも悲鳴が重なっている。
これこそが海賊島の特徴、グランドフォール。
水流が山を駆け上がり、滝となって反対側の町の水路へ降り注ぐ。
数年に一度しか起こらない珍しい現象で、メカニズムもいまだ不明。わざわざその現象を調べようなどという輩は海賊の中になど存在せず、ただ珍しいことだけは理解して、これを利用して始められたのが、デッドエンドのパレードスタートだ。
すでに歴史も長い。この現象を知らぬ者は島内には居なかった。
しかし、別の航海で自信をつけていた彼らは別だったのだろう。
まさかの事態に目をひん剥いて驚愕し、口からは自然に悲鳴が漏れ出て、動揺も大きい。
口々に驚きの声を発して、船体にしがみつく余裕もない様子だった。だがそのままではまずいと気付ける者も数名居て、船上は浮遊感を感じた途端に騒ぎ出す。
「道が、ねぇ……!?」
「うそっ……!?」
「全員船にしがみつけェ！」
「落ちるぅぅぅぅっ!!?」
他の船に続くようにしてメリー号も落下を始めた。
強い風が吹き上げる。しがみついていなければ空に放り出される衝撃を感じ、まるでこの世の終わりを感じるかのような、絶望を味わう長い一瞬である。
時間にしてたったの数秒。だが体感ではもっと長い。
メリー号は麓にある川に着水した。
長い滞空時間ですっかり恐怖を味わったが、これで終わりではないのだ。
へたり込んで放心している仲間たちへ、心底上機嫌なルフィが叫ぶ。
「いやっほ～！　始まったぁ～！　海賊レースだぁ～！」
叫んだ直後、大砲の砲撃音が木霊する。

前方に居た海賊船が一斉に砲撃を始めていて、互いの船を狙っているらしい。直撃する音、爆音が響き、壊れた船の残骸が水路へ飛び散って水しぶきを上げた。
その後も砲撃は止まらず、次から次に轟音が鳴り響く。
デッドエンドにルールはない。一番先にゴールへ辿り着いた者が勝者だ。
敵船への攻撃など当然の妨害で、着水と同時に他の船へ襲い掛かる海賊団も少なくなかった。
大砲による攻撃はそこかしこで行われ、中には自らの船を敵船に横付けし、直接乗り込んで襲う一味も居る。船上での戦いは水路を駆け下りながらで忙しない様子だ。
放心していた麦わらの一味もようやく我を取り戻し、その光景に目を大きくする。
「おおっ、やってるやってる。元気だなぁ～あいつら」
「っていうかいきなりかよっ。まだ島も出てねぇってのに」
「ま、無理もねぇな。ルール無用なんだからいいじゃねぇか」
「呑気に言ってる場合じゃないわよ！」
呆けていられる状況ではなかった。
先程まで顔面蒼白だったナミだがなんとか気を持ち直し、冷静になって指示を出し始める。
今はキリが居ない。それだけ自分がしっかりしなければという自覚があったようだ。
「サンジくんとシルクで後方の確認！　ウソップとイガラムは大砲の準備！　ゾロ、針路は私が見るから舵取り任せた！　ビビは左右から敵が来ないか見張って！　ルフィは今すぐメリーの頭から降りろォ！」
素早く、的確に指示を出し終え、仲間たちが即座に動き出す。しかしルフィだけはいつの間にかメリー号の船首の上に座っていて、前方で起こる戦闘に肩を揺らしている。危機的な状況であるのは間違いなさそうなのだがまるで緊張感がなかった。
ナミの怒号が飛ぶものの彼だけはその場で振り返る。

「いやぁ～早速おもしろいですなぁ。ナミ、一番前に行くぞ！　優勝するのはおれたちだ！」
「だったらあんたも手伝いなさい！　この先道が曲がりくねってるわよ！」
「おう！」
ようやくルフィも甲板へ戻ってきて操船を手伝い始める。
メリー号の上は一気に騒がしくなり、攻撃を受けないためにと船体を動かした。
その頃になってシュライヤが口を開いた。
今まで黙り込んでいた彼はナミへ視線を送って、何やら緊迫した様子を醸し出す。
レース開始と同時に想うことがあったらしく、その声色は重苦しい。
「おまえら、ガスパーデは見逃すなよ。あいつを常に注意しとけ」
「え？　何よ急に」
「あいつが正攻法で勝ちに来るわけがねぇんだ。必ず何か策を隠してやがる」
やけに真剣みを帯びた口調だった。
何かを知っているような、事実知っているのだろうが、強い意志が感じられる。
見られたナミは思わず止まってしまう。しかし今はそうも言っていられない状況であり、まずは安全を確保すべきだろうと即座に判断した。
「そうしたいのは山々だけど、先に沖へ出るのが先決でしょ。船の安全を確保しなきゃ何も始められないわ。そこまで言うならあんたも手伝って」
「チッ、仕方ねぇな」
「ヤードを保って！　絶対に船体をぶつけるんじゃないわよ！」
ナミの指示が飛んで再び仲間たちが動き始めた。
周囲では今も変わらず船が沈められていき、いつ自分たちがそうなるともわからない。

そんな中でひどく楽しそうに、ギャーギャーと騒がしく駆け回っていた。
水路は狭く、前へ進めば進むほど距離が近くなり、戦闘は激化する一方である。
その中で生き残るため、麦わらの一味はメリー号を駆って前へ出た。

不正

レースが開始されて活気がある町の中、薄暗い一室に光が差していた。

比較的こじんまりとした一軒の宿である。

二階建ての二階にある大広間、中央に堂々椅子を置き、偉そうにふんぞり返った胴元はにやりと笑って部屋の入り口を見ていた。

「やはりそう来たか……例年そういう輩が出るもんさ。だから準備が必要になる」

現れたのは招かれざる客だ。しかしまるで動じてはいない。最初から誰かはそう来るだろうと予測して、事前に準備をしていたからであった。

入り口に立った人物はたった一人。恐れる相手ではないだろう。

部屋には大勢のボディガードが立っていた。

手には武器を携え、厳めしい顔で胴元を護衛している。

それなりの広さとはいえ室内の人数は三十名近い。

果たしてこの人数を相手に悪事を働ける者かと、余裕を持って笑みを向ける。胴元は自身が負けるとは微塵も思っていない様子で、全く動こうとはしなかった。

胴元はこの状況を待っていたようだ。

カポネ・〝ギャング〟・ベッジ。部下も連れずに来たらしい。

その愚かさを笑って、上機嫌な声で語り掛けた。

「レースをすりゃ必ず出て来るのさ、おまえみたいなバカがな。大方、おれが集めた金を分捕ろうって気なんだろうが……残念だったな。こっちには備えがある」

「ああ、そのようだ」

ポケットに手を突っ込み、葉巻を銜えて、ベッジは表情を変えない。

無表情のままでその場を動こうとしなかった。

攻撃のために現れたのは間違いない。

ただ、現状ではまだ動きは見れず、部下の姿がどこにもないことが違和感にも通じる。彼の一味は人数も多かったはずだがなぜ一人な

のだろうか。
考えもするが心配はない。
なぜなら、金に物を言わせて雇ったのは腕に覚えのある海賊ばかりだ。
敵は一人。負けるはずがない。
伏兵が居たところで兵の練度を考えれば決してまずくないだろう。
胴元の余裕は尚も崩れる気配がなかった。
一方でベッジは一切動かず、攻撃の気配さえ感じさせない。
部下を連れていないところを見ても、何やら異質な状況に思えて仕方なかった。
ベッジの余裕は異質ではあるが、それでも胴元は席を立たずに、ふんぞり返ったまま。次第に護衛の男たちが彼へ武器を向け始めた。
「さぁて、どうする。今ならまだ帰ってもいいんだぜ」
「その必要はねぇ」
「ハハハッ、だったらどうする気だ？　たった一人でこの人数に勝つつもりか？」
「いや。おれが動く必要はねぇな」
呆れるかの短い溜息。
「観念しろ。兵力が違う」
そして全く身じろぎしないままで、ベッジが周囲に居る男たちへ向けてそう言った。
不可解な言葉に胴元の眉が動く。
この状況下でその言葉はあまりにも似つかわしくないからだ。
「何言ってやがる。状況がわからねぇのか。これだけの兵士が見えねぇとは思わねぇが。それともおれの兵力には敵わねぇとでも言いたいのか？」
「逃げ出すなら今の内だ、ってのは、むしろおれの言葉だぜ」
「あ？」
まるで態度を変えようとしない言葉に怒りが表れる。
笑みさえ浮かんで、その自信の根拠が理解できずに胸の内側がざわつく。

「ここに来たからにはおれの要求を理解してるはずだ。何も言わずに出せば見逃してやろう。そうだな、あと十秒くらいは待ってやってもいいが」
「口の利き方には気をつけろ。てめぇ一人で何ができる」
「十……九……八――」
「馬鹿馬鹿しい」
苦々しく言った胴元だが攻撃を指示しようとはしなかった。せっかくだから待ってみる気になったのだろう。何が起こるのかを見てみたくなった。
そこに居るのはベッジ一人。
強がってはいるが大したことはない。そう決めつけて笑みを浮かべていた。
雇った男たちさえ居れば負けるはずがないと考えていた様子だ。
ベッジは尚も数を数える。
五秒を過ぎ、四秒を過ぎて、それでも胴元は動かない。
ついには残り三秒を切った。
ただのハッタリだ。そう信じて疑わない。
胴元が改めてにやりと笑った。
「ゼロ……終わりだ」
葉巻の煙を吐き、やれやれと首を振ると呆れた仕草。
「砲撃開始」
彼は静かにそう呟いた。
直後、ベッジの体に異変が起こる。胸の辺りでいくつもの扉が開き、そこから小さな大砲が顔を覗かせていて、人間の騒ぐ声も小さくだが聞こえてくる。
まるでミニチュアのような小さな大砲、そして人間だった。
ベッジの体内に大勢の人間が存在していた。
見ていた胴元たちは理解できずに首をかしげる。
なぜ人体に扉ができるのか。なぜ大砲があるのか、人間が入っているのか。
訳も分からず見ていると、ベッジの命令に従い、砲撃が始まる。

パンっと小さな物音。それが砲撃音だとはすぐには気付けなかった。
ベッジの胸から飛んだ砲弾はあまりにも小さ過ぎて、殺傷能力があるようには見えない。そのせいなのか、誰も避けようとはせずに見てしまっていた。
確かにそのままのサイズでは痛くない。だが、そうではないのだと直に理解する。
ある一定の範囲を越えた時、砲弾は元来の大きさまで急激に巨大化したのだ。
気付いた時にはもう遅く、避けられる速度と距離はなかった。
室内は一瞬で爆撃によって埋め尽くされた。
放たれた砲弾はおよそ二十発。爆発と同時にボディーガードごと壁を吹き飛ばし、ベッジを除いて室内の全てを爆炎に巻いて、部屋の悉くを破壊した。
一目瞭然。とても数秒前と同じ部屋とは思えない。
悠々と立つベッジだけがその室内を見回し、冷静に手で近寄ってくる煙を払う。
「ちっとばかしやり過ぎたか。まぁいい。現物は無事なようだしな」
もはや焼野原とも言うべき室内に、辛うじて残っていたのは大小様々な宝箱。
それを見たベッジは笑い、今度は腹を開いた。
砲門よりよほど大きい、吊り橋型の扉が開けられた。
そこからはスーツ姿の男たちが大勢駆けてきて、ベッジの腹から飛び出すと同時に元のサイズまで大きくなり、慣れた様子で室内へ立った。
即座にベッジが命令を下し、乱雑に置かれた宝箱へ目をやった。
「さて、思った以上に簡単に終わっちまった。とっとと運び出すとしよう」
「はっ」
「頭目（ファーザー）、船へ運びますか？　それとも頭目（ファーザー）の中へ？」

「船に運べ。邪魔が入るようなら排除しろ」
「はっ」
動き出す部下たちが束になって宝箱を運び出す。
数が多いだけに人数も必要で、次々ベッジの腹から人員が出てきた。
運び出すのは胴元がレースの参加者から集めた金、一つの海賊団につき五十万ベリーであり、全て合わせればまるで違う額にまでなる。
それら全てを運び出すことが彼らの狙いだった。
金を手に入れることは決して難しくない。特にこのレースにおいては。
今まで何度か行われてきたデッドエンドであるが、こうして胴元となった人間が襲われるケースは決して少なくない。なぜなら、それが最も簡単に大金を手に入れる方法だからだ。わざわざレースに参加せずとも大金を手中にすることができる。
それを知っていたから護衛を雇っていたものの、敵わなければ意味は為さず。
所有者が変わった宝箱はファイアタンク海賊団の手によって外へ運び出されていた。
制圧した室内を見渡してベッジは静かに想う。
レースに参加するのも一つの手だった。それも悪くはない。
だがガスパーデが関わる以上、例年通りのレース展開となるはずもなく、その一部分を考慮した上での作戦であった。警戒はしていないが面倒にはなる。だから簡単な手を取っただけのこと。
そう思いながら別のことも考えようとしている。
今回の参加者の中に光る逸材。麦わらの一味、キッド海賊団、ハートの海賊団の姿もあった。彼らがどう動くのかだけは気になっている。
どちらにせよ荒れることは決まっていたに違いない。
ほくそ笑み、振り返った彼は部下が言うよりも先に入り口へ立った男を見た。
「で、おまえはおれと同類だったわけだ」

宝箱を運び出すファイアタンク海賊団を意に介さずに、X（ディエス）・ドレークが立っていた。
部下も連れずにただ一人。ベッジと同じ能力を持つはずもないため本当に一人なのだろう。武器を手にするでもなく警戒せずにベッジを見ていた。
冷たく厳しい視線が互いにかち合う。
ベッジの部下たちはその異様な雰囲気に思わず息を呑んだ。
敢えて戦う手段を取らず、何もせずに突っ立った姿は異質の一言。一体何をしに来たのだと動揺するのも仕方ない。ドレークは何もしようとはしなかった。
数秒の間を置いた後、ようやく口を開き出す。
戦う素振りは見せないのに視線だけは厳しいまま。
ベッジだけに向けて言葉が吐かれた。
「戦闘の意志はない。金も必要ない。おれが欲しいのは別の物だ」
「ほう。何を欲しがってるのか、興味があるな」
「胴元が持っているエターナルポース。それさえ受け取ればここを去ろう」
「エターナルポース？」
訝しげに眉を動かしたベッジが振り返る。
胴元は大の字になり、服も肌も黒焦げになって倒れていた。
「ウチが吹き飛ばしちまった後だからな。今頃割れちまってるかもしれねぇが」
「確認させてくれ。おまえたちの手は煩わせない」
「ふむ……おい、調べてやれ」
ドレークの言葉を無視する形で部下に指示を出した。ドレークは何も言わない。
部下の一人が胴元の服を確認し、確かに内側の胸ポケットにはエターナルポースがあって、幸いにも無事だったそれがベッジの下まで運ばれてきた。
彼は受け取ってすぐに指し示す島の名を確認する。
レースのゴール地点は〝パルティア〟。しかしそこに刻まれた名

は違う場所。
どうやら目的はレースではないようだった。
「必要なのはこいつってわけだ。ここで何をしようってんだ？」
「語るつもりはない。何も言わずに渡してくれ」
「嫌だと言ったら戦いも辞さないってか。ま、仕方ねぇな」
渋る様子など一切見せず、右手に持ったエターナルポースを投げ渡す。
ドレークは確かに受け取った。
視線は厳しく、動き出す唇は感謝の言葉を紡ぐ。
「すまない。恩に着る」
「礼を言うほどのことじゃねぇよ。ただ取ってやっただけさ」
素っ気なく告げれば、ドレークはすぐに踵を返してその場を後にする。
愛想のない男だ。
海賊を相手に愛想など求めてはいないが拍子抜けする様相。本当に戦わずに行ってしまった。周囲には大金が入った宝箱を運ぶ部下たちが居るというのに。
鼻を鳴らして、忌々しそうに呟く。
「つまらねぇ野郎だ。麦わらの方が幾ばくかはマシだな」
「よろしいんですか、渡してしまって」
「ほっとけ。おれにとっちゃ用のねぇ指針だ。それに――」
部下の問いに言いかけた言葉を止め、ベッジはにやりと笑った。
その笑みは楽しそうな物で、胴元と対峙した時よりよほど上機嫌だ。
「ありゃあ……強いぞ」
去って行ったドレークの背に称賛を向ける。
戦わずともわかる。もし正面からぶつかっていれば、狭い一室など簡単に破壊され、互いに全身に怪我を負う羽目になっていただろう。その上で決着はどちらに転ぶかわからない。ただの予想とはいえおそらくベッジの部下たちも大勢が倒れるはずだ。
少なくとも今この場でぶつかっていい敵ではない。

決着をつけるのならまた後で。
然るべき場所で戦う相手だと判断しての見送りだったのである。
「さぁ、用は済んだ。とっとと金を運べ！　出航するぞ！」
「はっ！」
ベッジも歩き出して宿を後にする。
部下たちは大量にあった金を一つ残らず運び出し、その後へと続く。
海賊レースが一度始まれば、混沌とした状況などいつものこと。天下の往来を堂々と歩くファイアタンク海賊団を止められる者はおらず、挑みかかる者は一人残らず吹き飛ばされた。
その歩みは淀みなく、一心不乱な様子を隠さず。
ベッジの指揮の下、彼らは新たな航海へ漕ぎ出した。

＊

海賊島とは異なる島で、事件は起こっていた。
一人の海兵が見上げるのは、巨人の物とも思える巨大な腕である。しかしその腕の異質さは想像もしなかったもので、数多の金属が集まり、腕の形となっていたのだ。
天を隠すように指を広げている。
そして何より、それは彼らの頭上にあった。
自らの死を幻視する。
思い切り振り下ろされたその手は重力を利用し、恐るべき迫力を持って彼らの上へ落とされた。
轟音。そして悲鳴だ。
多くの海兵がたった一撃で気を失い、気絶しない者も皮膚を食い破った刃に血相を変える。
あまつさえ巨大な軍艦さえも叩き潰され、甲板がへこみ、瞬く間に沈没させられた。
気付けば島は地獄のような有様だ。
一夜をかけて行われた攻撃によって町はほぼ廃墟の状態に変貌し

た。無事な建物を探す方が困難なほど破壊し尽くされ、辛うじて一軒か二軒だけ家が残っている状況になっている。
逃げ遅れた町民たちはその廃墟のそこかしこで倒れたまま。
焼け焦げた匂いが漂い、昨夜の活気が嘘のようであった。
それだけでなく、黒煙が上がる港の近くには今しがた沈んだ軍艦を含め、壊れた海軍の船が五つは残骸となって散乱している。
それでいて無事な船が一隻だけ。ジョリーロジャーを掲げていた。
全ての戦闘を終えてようやく一息つけるようになった頃。
港に戻って木箱の一つに腰を落ち着けたキャプテン・キッドは、つまらなそうに呟いた。
「くだらねぇ……結局は口だけでこのざまかよ」
死屍累々といった状況に動揺する様子は欠片もない。
それも当然だ。そこにある全ては彼の命令で、彼の一味によって引き起こされた惨劇であった。
町を攻撃し、呼ばれた海軍を滅ぼし、明確な勝者となった姿。
凶暴な力は海賊の中でも強烈な物だった。
キッドの傍らにはキラーが立つ。
腕を組んで背筋を伸ばし、仮面を着けているため表情はわからないが、どこか呆れているかのようにも感じる姿だった。
「少しやり過ぎたんじゃないのか。これでは海軍の増援がいつ来るかわからないぞ」
「その時はまた叩き潰してやるまでだ。他に手があるか？」
「あまり敵を増やし過ぎると、今後の航海が困難になるぞ」
「望むところさ。用があるならかかって来ればいい。障害になるような奴が居ればの話だがな」
キラーの忠告を受けて尚、好戦的に笑い、キッドが考えを改める様子はない。
彼の首にかけられた懸賞金が跳ねあがったのは、こうして民間人への攻撃を辞さないからだ。今回に限っては本当の意味での民間人ばかりではなかったとはいえ、一見平穏な町を攻撃し尽くした荒々しさはおよそ普通ではない。

攻撃を終えた今、目の奥にはまだ燻る炎が灯っており、その異常性は誰の目にも明らか。
言っても聞かない彼にはキラーもやれやれと溜息をつく。
これまで何度も忠告してやったが聞いた回数の方が少ないかもしれない。
それだけ彼を御するのは難しく、たとえ仲間であっても言うことを聞かない人物だった。
過程がどうあれ、ひとまず戦闘を終えて一息つくことができるのは確かであろう。
軍艦の残骸が浮かぶ海を眺め、キッドはキラーへ問いかけた。
「なぁキラー、こいつらをどう思う」
「こいつらとは？　今おまえが潰した海軍か、それとも民間人を装った海賊か？」
「両方さ。つまらねぇとは思わねぇか？　おれはこいつらの思考に呆れて反吐が出そうだ」
キッドの足元にはアタッシュケースが三つ置かれている。
それをちらりと見た後、視線はキラーの顔へ。
どうやらキラーもそれを確認した様子だ。
「たかだか三億ベリーのために大の大人が不正だなんだと騒ぎ立て、しかもそう言ってる連中が海賊と来たもんだ。海の覇権を争う海賊が、仲良くお手て繋いでレースごっこで満足か？　こんなくだらねぇ連中が伝説の海賊島の住民だと思うと、おれァ悲しくて泣けてくるよ」
「確かに、情けない話ではあるか」
「海賊ってのは勝つか負けるか、生きるか死ぬかだ。ルールなんざ必要ねぇ。勝った奴だけが栄光を手にすることができる。なら勝者であるおれが決めても間違いじゃねぇだろう」
立ち上がったキッドが好戦的に口元を歪め、狂気すら表し、海を睨んだ。
「レースの結果なんざ知ったこっちゃねぇさ。ここで改めて勝者を決める。賞金を手に入れるのは誰か、殴り合って決めりゃいいだけの

話だ。オッズの通り〝将軍〟ガスパーデか、あのクソ生意気な〝麦わら〟か、それとも別の誰かか。辿り着いた奴から潰してやる」
現在、彼らが居るのはデッドエンドのゴール地点である〝パルティア〟という島だった。
レースに先んじて関係者が入っており、結果が決まる瞬間を見ようと訪れていた海賊も多く、それなりの賑わいを見せていた。しかし昨夜、突如強襲したキッド海賊団によって壊滅。見るも無残な姿となってもはや大会本部も機能していない。
反抗した者は悉く地べたを舐めることとなった。
賞金はすでにキッドの足元。言わばキッドがレースを乗っ取ったとも言える。
最初から海賊レースになど興味はない。やりたいことなど一つだ。
果たしてこの盛大な催し物にどれほどの猛者が集まるか。
やっと心が躍る展開になりそうで、キッドの上機嫌さは留まるところを知らなかった。
一方でキラーは物憂げに考えていた様子である。
果たしてそう上手くいくのか、と考える。
一癖も二癖もある海賊ばかりがこの島を目指しているのだろう。しかしその内の何割が島へ辿り着くことができて、何人の海賊が納得して戦うというのか。
下手をすれば、敢えて両手を上げてしまう敵が居るかもしれない。
好戦的なキッドはそんな人間が居るとは考えていないらしく、そこが引っ掛かる。
ともかく、激しいレースを生き残らなければゴールには辿り着けない。
今は何を考えようと無駄で、今の彼らにはひとまず待ってみることしかできなかった。
「さて、どうなるか……」
「なぁに、悲観的になる必要はない。時間が来れば結果は自ずとわかる。今はただ、ここで胡坐をかいて待ってりゃいいだけの話だ」
誰かが来るのを楽しみにしているのだろう。そう言ってキッドは

笑みを消さぬまま、戦闘の余波で転がっていた酒瓶を持ち上げ、少量残っていた中身を煽る。

その様子にキラーは思わず無言で心配を募らせた。

今はまだ沖に誰の姿も見えない。

一番乗りは誰か。興味はない訳ではないが、やはりすっきりしない予感があった。

侵入者

グランドフォールを乗り越え、ハンナバルを抜けた船は一心不乱にゴールを目指していた。
一時に比べて戦況は穏やかになり、メリー号は先頭集団を離れ、敢えて後方に陣取っている。危険な戦闘をできるだけ避け、ゴール間近でスパートをかける算段だ。
そのため以前に比べれば穏やかな航海が可能となる。レース中とはいえ船員たちの表情も明るくなっており、普段臆病なナミやウソップも意気揚々といった様子が強い。
いずれはまた激しい戦闘争いに加わるとはいえ、今はまだ砲撃の音も遠く。
やっと一息つけた面々は肩の力を抜いていた。
「さて、この先が正念場ね。準備するなら今の内よ」
「また戦闘にならねぇ内にメシと行くか。おまえら何が食いたい？」
「肉ぅ～っ!!」
「そればっかりだな、おまえ」
食事の準備に入ろうとしたサンジにはルフィが叫び、いつもと変わらぬ様子に苦笑する。
サンジは一人船室へ赴き、普段通り料理を始めた。
レースの最中とは思えぬほどのどかな一時だ。
波間も穏やかで景色も美しい。
辺りの美しさに見惚れる余裕もあって、仲間たちも肩の力を抜いている。
ようやく普段通りの航海ができそうな状態に戻っていたようだ。
その中に一人だけ険しい表情がある。客人として乗り込んだシュライヤだった。
彼だけは平和ボケする面々の中で、唯一現状に納得していない様子を見せており、思わずナミに声をかけるほど。客人とはいえ忠告を止める気はなかった。

「おい、ガスパーデの件はどうなった？　奴から目を離すなと言ったはずだぞ」
「大丈夫よ。これだけ離れてればあいつが何してきたって対処できるし、ミシェールさんにゴールまでの距離も確認したから、私の計算通りにルートを進めば一位は間違いない」
「そういう意味で言ったんじゃねぇんだが……」
「何よ、まだ文句あるの？」
「おまえらはあいつを甘く見過ぎてる。何か、裏をかかれなきゃいいんだが」
帽子を目深にかぶって独り言ち、シュライヤはそれでも胸の内を明かそうとしなかった。
はっきりしない態度なのは間違いない。しかし決定的な意見がないならばいいかと考えて、深く尋ねはせずにナミは彼から視線を切った。
ガスパーデの企みを知っているなら別だが、彼自身も何が待っているか理解していない様子。
それならこの場で言い合っても仕方のないことだ。
今は先に確認すべきことがある。
キリの代わりにナミが指揮を執り、それぞれに指示を出し始めた。
「とりあえず船の損傷を確認しましょう。それぞれ部屋の中を確認してきて。もしさっきのごたごたの間に誰かが密航してたらなんとか対処するように」
「おまえは行かねぇのかよ」
「うん。だって怖いじゃない」
「そんな理由かっ。それならおれだって怖ぇよ」
「男でしょ。しっかりしなさい、キャプテン・ウソップ」
「くそぉ、こんな時だけ上手く使いやがって……」
文句がない訳ではないのだが、仲間が動き出してナミは甲板に残る。
歩き出しながら各自が確認する場所を決め、扉を潜って船の中へ消えていった。

「ゾロは浴室の方を見てきて。私は女子部屋を確認してくる」
「おう」
シルクに言われ、ゾロは面倒そうにしながら言われた通り浴室へ向かう。
風呂とトイレが兼用されるユニットバスだ。今は風呂に入る時間でもなく、誰もトイレに入っていないことは甲板で顔を見渡して確認済み。何気なく扉を開けた。
損傷はない。それだけを確認してすぐに出ようとする。
しかしその寸前、背を向けた瞬間に違和感を感じた。
改めて室内に向き直ったゾロは表情を険しくする。
視線の先には水の溜まっていない浴槽。
自然に手が伸びて刀に触れていた。
違和感の正体はおそらく殺気。そして何者かの気配だ。
人が隠れるスペースは一つしかないため、もはや視線は動こうとしなかった。
「潜り込む船を間違えたな。相手は選んだ方が身のためだぜ」
もう遅いが、と付け加えて、顔も見えない誰かに話しかける。するともう逃げられないと悟ったようで、ゾロが動き出す前に浴槽から人影が飛び出してきた。
コンマ数秒の動作で見えたのは両手に持ったピストル。
ゾロは素早く刀を抜き、一連の動作の中でその武器を弾き飛ばした。
右手の刀でピストルを弾いた直後、左手で敵の首を押さえ、壁へ押し付ける。
勝敗はそれだけで決まった。
しかし驚愕したのはその時だ。
薄暗い一室で、捕まえた相手の姿をまじまじ見たゾロは表情を歪めて動揺する。
首元を押さえられて呻いていたのは、まだ小さな子供。
薄汚い服を身に着けた無力な存在だったのだ。
「うっ、ゲホッ……！」

「ガキ――!?」
鍛えているとは言っても片腕で持ち上げられるほど軽い体。
両手を彼の腕に持ってきて必死にもがくのだがあまりに無力。まるで影響はなく、そこから逃れることはできなさそうだった。
呆然としたゾロは思わず自ら手を離す。子供の体は再び浴槽の中へ落ちた。
激しく咳き込み、子供はへたり込んだまま動かない。
「おまえ……」
不意に呟けば子供はキッと睨んできた。
気概は上等だが動きは明らかに素人。身なりからしても海賊の類ではないだろう。
そうでなくとも子供を斬るほど人間を捨てたつもりはない。かつてウィスキーピークで子供の騙し討ちに会った時も、そのパートナーである女性も含めて峰打ちで勘弁してやった。
ゾロは何も言わずに刀を納めた。
その後すぐに子供の首根っこを掴み、暴れる様子を意にも介さず運び始める。
判断を委ねるならば船長が良い。なんでも自分一人で決めていては一味の崩壊に繋がる。彼はそうして律儀に考える人物だった。
子供を連れたゾロは甲板へ戻って、その際に生じた驚愕の声は仕方ない物だろう。

＊

メリー号のラウンジに全員が集まっていた。
サンジが隣接するキッチンで料理をする一方、皆が注目するのは先程の子供、アナグマ。
部屋の隅で縮こまり、目を血走らせて睨んでくる姿を眺めていた。
「子供相手にひどい男ねぇ。もう少し手加減ってものをできないのかしら」
「仕方ねぇだろ。ケガさせなかっただけまだマシだ」

「ゾロひど～い」
「子供相手に暴力振るうなんて最低よね～」
「てめぇら……！」
重苦しい空気を切り裂き、口火を切ったナミに続いて皆が話し始める。
ルフィとウソップはふざけ始めてゾロは少し困った様子。ただし二人に対しては厳しい視線を飛ばしており、決して怯んではいない。
そんな平穏な空気が徐々に緊迫感を塗り替えようとしつつあった。
だがアナグマは、全く安堵できそうになかった。
体を小さくして座り込んで、彼らを見る目には敵意しかない。
よほどのことがあったのだろうと想像させるには十分な外見だ。
シルクやビビ、イガラムといった面々が心配する中、声をかけるのはナミである。
自身の前にあるテーブルへピストルを置き、さながら尋問するようだった。
「確かに仕方ないかもね。こんな物振り回されちゃったわけだし。ねぇ、どういうつもりだったのかしら？　こんな物持って海賊船に乗り込んできたら、殺されたって文句言えないのよ」
叱るような、強い語調で諭すような言葉ではあるものの、アナグマの表情は優れない。視線の厳しさは増していく一方で敵意は揺らがなかった。
それを見て溜息をつきつつ、ナミは続けて問いかける。
「目的は何？　誰に指示されたの？」
ぐっと拳を握りしめる様が見て取れた。
気の毒に思ったのだろう、ビビが思わず助け舟を出そうとする。
「ねぇナミさん、この子、体調が悪いみたい。せめて温かい食事を取ってからでも――」
「殺すためだ……」
「え？」
「おまえたちを殺して金を作るためだ！　だからここに来たんだ！」

意を決した様子でそう叫ばれる。
アナグマは気が逸ったのか息を切らし、肩を怒らせて主張していた。
その目は誰一人として信用せずに、まるで抜き身の刃のよう。子供らしさは微塵も見られない。まじまじと観察していたビビは悲しそうな顔になってしまう。
事情がありそうだ。しかし敵船の中でその反抗的な態度は問題であろう。
ナミは敢えて厳しい表情を作って言った。
「お金ね。ストレートで分かり易いけど、他にも船はあったでしょ。どうしてこの船に？」
「そりゃおまえ、おれたちゃ天下を賑わせた麦わらの一味だぞ？いくら子供でもおれたちのことを知らないはずが――」
「そんなもん知らないよ。ただこの船が一番弱そうだっただけだっ」
「あぁ～そうですか。はい笑うとこ」
「だっはっはっは」
「笑うなァ！　おれは真剣だぞ！」
口を挟んできたウソップによってルフィが笑うが、アナグマが落ち着く様子はない。むしろ笑われたことでより一層険の強さが増した気すらする。
呆れるナミはやれやれと首を振って、一方ビビは心配そうに見つめていた。
さほど興味を持っていなかったルフィが進み出てきたのである。
彼は椅子に座らず立っていた。
アナグマへ数歩近寄り、幾分距離を取ったまま向き合う。
至極楽しそうに笑っている。この場の空気にはそぐわないほどに。
しかし改めてビビが周囲を窺ってみれば、仲間の空気も彼とそう変わりないことに気付いた。おどけて空気を和ませようとしたウソップも、努めて厳しい態度を取るナミも、腕を組んだまま語らないゾロも、微笑みを浮かべて料理に集中するサンジも、心配そうにしていた

シルクでさえ。
気付けば何とは言えない空気感が漂っていた。
その最たる例がルフィだったというだけなのだろう。
ルフィは腰に手を当て堂々と立ち、アナグマをじっと見つめて口を開いた。
「海賊が命狙われるのなんか当たり前だ。理由なんてどうだっていいよ。おまえ、本気でおれを討ち取る気か？」
「あ、当たり前だ！」
「じゃあ試してみろ。ほら、これ使えよ」
ルフィがテーブルに置かれたピストルを取って投げ渡す。
アナグマは危なげな仕草でそれを受け取り、取り落としかけた銃を両手でしかと掴む。
呆れたのはナミだ。取り上げた武器をわざわざ返すなんて、と言いたげな顔をしている。
「ルフィ、いいの？」
「心配いらねぇさ」
「ハァ、もう……言っとくけど、こっちには向けさせないでよね」
「わかってる」
笑顔を浮かべているがいつになく真剣な姿だった。
ルフィはアナグマへ言った。
「おれの首を取れば３０００万ベリーもらえるぞ。試しに取ってみろ」
「さ、３０００万？　それだけあれば……」
「その代わりおれとおまえの一騎討ちだ。いつでも来い」
身構えようともせずにそう言われた。いつもと違って拳を握る素振りさえない。だがアナグマは彼の戦法を知らないため、深くを考えずに言われたままを受け取った。
彼を殺せば大金が手に入る。薬を買っても有り余るほどの金だ。
自らの意志でピストルを握り直し、両腕を持ち上げてゆっくり構えた。
手が震える。

想像より力が入り過ぎているのか、震えはいつまで経っても止まらない。
見ていてみっともない姿だろう。
それを自覚するため、心の中で止まれと想うのだが、体が言うことを利かない。
心の中で焦りは大きくなるばかり。動揺は見る見るうちに大きくなり、汗を掻き始めた。
室内にある緊迫した空気は再び重く、大きくなり、誰もが感じられるほど。
その中でルフィはアナグマから片時も目を離さなかった。
「半端な覚悟なら今すぐ捨てろ。それは脅しの道具じゃねぇんだ」
「バッ……バカにするなァ！」
挑発とも取れる言葉に、突発的に反応していた。
「うわぁあああああっ!!」
自分でも気付かぬ内に腕の震えが大きくなっていて、それでも引き金を引いていた。
銃声が一度。銃弾は確かに発射され、室内に音を響かせて宙へ躍り出る。狙った通りか偶然か、放たれた銃弾はルフィの腹に突き刺さっていた。
その瞬間、アナグマは顔色をさらに悪くする。
ただでさえ青かったその顔が奇妙なほど変化し、表情が強張り、硬直する。
そうなっていたのもほんの一瞬。直後には驚愕していた。
ルフィが腹に受けた銃弾を跳ね返したのである。
ゴムの体は受けた銃弾を倍程度の速度で送り返して、再び宙を駆けた銃弾はアナグマの間近を通り抜け、ラウンジの壁を突き破って外へ出ていった。
もはや悲鳴すら出せずに硬直してしまい、その手からピストルが力なく落ちる。
してやったりのルフィの笑顔。しかし後ろからウソップが頭をはたいた。

「しっしっし、どうだ。効かねぇぞ」
「おい。メリーに傷つけんじゃねぇよ」
「な、なっ、なんだよそれぇ!?」
彼らの言葉を受けてやっと反応できたらしい。
アナグマの絶叫は室内に木霊して、いまだ動揺は止まらない様子。
数秒経ってようやくその異常性に思い当たったようだった。
「あ、悪魔の実……?」
「そうよ。知ってる？　食べれば悪魔の力を手に入れられる不思議な木の実。ウチの船長はね、ゴムゴムの実を食べたゴム人間なの」
「ゴム、人間……」
「おんもしれぇだろ。こんなに伸びるんだぞ」
説明するナミの言葉に乗り、ルフィの両手が頬を引っ張って思い切り伸ばした。確かに常人ではあり得ないほど皮膚が伸びている。見ていていっそ気持ちが悪くなるほどに。
足が震えて、今更になって恐怖心が沸き上がってきた。
その勝負は初めから勝つ方法など与えられていなかったのだ。
観念したのか、アナグマはその場に座り込んで胡坐をかく。
頭を垂れて強い口調で話し、逃げる素振りもない。その場で死ぬつもりなのだろう。潔いとも言えるが違う言い方もできて、ナミの眉根が動いていた。
「殺せよ……もう殺せ！　こっちは覚悟だってしてるんだ！　今更命乞いはしねぇ！　さっさとやれよ！」
「いい覚悟してるわね。と言いたいところだけど、ずいぶん命を軽く見てるんじゃない？」
「海賊になんて説教されたくねぇ！　構うもんか。希望もないのに生きてたって意味ねぇし、どうせおれなんて、生きてたところで無駄な存在なんだからよ」
諦めている一方、他の意見を寄せ付けない口調だ。
その発言を聞いてナミが唇をきゅっと結ぶ。
突如席を立ち上がり、長椅子の上に乗ってしまい、隣に座っていたゾロの跨いで歩き出した。跨がれた彼は少し背を反らしつつも、呆れ

た表情で目を閉じる。
「ゾロ、刀借りる」
「……人を跨ぐな」
腰から外して壁に立てかけていた和道一文字を手に取り、ナミがアナグマへ近寄った。
何を想ってか、驚くビビの前で刀を抜くのである。
「わかった風な口利くんじゃないよ。そこまで言うなら言う通りにしてやるわ」
「ちょ、ちょっとナミさん!?」
「まぁまぁナミ、落ち着いて」
「邪魔しないで！」
すぐにビビとシルクが割って入って止めようとするが、彼女は止まらず。怒りの形相で刀を振り上げ、抱き着いて止めようとする二人をそのままに怒鳴り始めた。
あまりの剣幕にアナグマは動揺してしまい、座り込んだまま背を反らした。
「こういうのが一番腹立つのよ！　生きていける状況があるなら四の五の言ってんじゃない！　辛い目に遭ったって、どんなことをしてでも生きようとする人間だって居る！　それを覚悟って言うのよ！
全部わかった気でいるだけの奴が偉そうに言うなァ！」
「ナミさん、相手は子供だから！　ね？　もう少し落ち着いて――」
「その甘ったれた考え方をぶった切ってやる～！」
「お、落ち着いてってば!?　ねぇちょっと、ナミさんっ！」
ついにはアナグマも後ずさりを始め、心底怯えている様子だった。
否、どうやら怯えているだけではないらしい。彼女の言葉に動揺が大きくなって混乱している。
瞳は狼狽し、反論する言葉を失ってしまった。
ただそれだけでもアナグマにとっては苦しい状況だっただろう。
あいにくこの場に助けはない。
ビビとシルクは必死にナミを止めようとしているが、言い換えれば彼女たちだけだ。

ルフィとウソップはいつの間にか呑気にお茶など飲み始めていて、普段は大人としての振る舞いを忘れないイガラムでさえも表情を歪めただけ、止めに入ろうとはしていない。ゾロは相変わらずだらしない姿勢で座ったまま、サンジは料理の仕上げに入っている。カルーは混乱しているが助けられるだけの余裕はなく、鳴き声を発して騒ぎ続けるだけ。

そしてシュライヤは、壁に背を預けて腕を組み、俯いて表情を見せなかった。

誰も助けに入らないまま女性陣だけが暴れ続けており、異様な空間である。

それでいてシルクもまた、表情は心配するだけではなく、何か違和感を感じる物。不思議に思いながら止めなければいけないと焦るビビは皆へ振り返った。

「みんなも止めて！」

「メシできたぞ。ナミさんたちもほどほどにしといてね」

「メシだァ～！」

「腹減ったぁ～！」

「ちょっとみんな！　本当にこのままでいいの!?」

暴れるナミと狼狽するビビはそっちのけで、サンジがテーブルへ料理を運び、ルフィとウソップが純粋にその瞬間を喜ぶ。尚更ビビの動揺は強まるようだった。

感情が高ぶったか、立ち上がったアナグマは出口へ向かって駆け出した。

途中シュライヤの足にぶつかるも、転がるようにして甲板へ出る。

息を切らしてラウンジから離れ、階段を降りたところで足がもつれて、今度こそ転ぶ。受け身を取るのに失敗して鼻をぶつけてしまった。その痛みには目に涙さえ浮かぶ。

しばし転がったまま動かず、やがて時間をかけて起き上がる。

膝立ちになって目の前にある光景を眺め、愕然とした。

思えば、すでに海へ漕ぎ出したその船上には、どこにも居場所などなかったのである。

逃げ場を絶たれ、居場所がない船で、自分はどうすればいいのか。その上で死ぬことさえも許されないのか。一つずつ状況を理解していく度、驚きが胸の内を占めていく。

自分の覚悟とは何だったのだろう。何のためにここへ来たのだろう。

ただ救いを求めてやってきただけだったのに、成果は何もなく、逃げ帰ることもできずにいる。ならばなぜ、ここへ来てしまったというのか。

自分はなぜ生まれてきてしまったのだろうか。

なぜあの時死ぬことができなかったのだろうか。

そう考えた時、アナグマの目からはらりと涙が零れ落ちた。

不意に体から力が抜けて、強い虚無感が身を包み、空虚感が沁みていく。

床に手をつけば、もう堪えることはできなかった。

「うっ、ふっ……うぐっ」

歯を噛んで声を抑えようとするのだが、それでも漏れ出てしまう物があって。

這うようにして移動したアナグマは階段の傍へ身を寄せ、小さくなって膝を抱える。

膝に顔を埋め、それきり静かになってしまう。

いつの間にか気候が変わって、厚い雲が空を埋め尽くし、雪が降り始めていた。

「お、雪か。さっきまでいい陽気だったのになぁ。グランドラインってのはよくわからん」

気楽な声が聞こえてくるが反応せず、アナグマは蹲ったまま。

近寄ってきたのはサンジだった。

膝を抱えるアナグマの前にいくつかの皿を置き、自身は階段へ腰掛けて、取り出した煙草を銜えると火を点ける。話しかけたのはそれからだ。

「とりあえず食え。腹が減ってりゃ悪い考えばかり浮かぶもんさ」

煙を吐いて空を眺める。曇天だが美観が損なわれる訳ではない。

むしろちらほらと振り続ける雪は独特の空気を演出してすらいて、これもまた味のある景色だろう。
雪を見たのはいつ振りだろうか。ふとそんなことを考えた。
相変わらずアナグマは動かず、食事にも手を付けない。このままでは冷めてしまう。
だからという訳でもないが、サンジは静かな声で話し始めた。
「ナミさん――さっき刀ぶん回してた美女のことだが、悪く想わねぇでやってくれ。ついカッとなっちまったのさ。彼女もヘビーな過去を持っててな、海賊に親を殺されてる。しかもつい最近までその海賊に道具みてぇに扱われててよ。クソみてぇな八年間だったらしい」
聞いているかいないかわからないアナグマへ向け、思いのほかやさしい声色。
手に煙草を持って煙を吐き出し、今はこの場に居ない人間を思い浮かべる。
「今この船には居ねぇ仲間も過去に辛いことがあったそうだ。まぁ、深く聞いたことはねぇが他の連中も似たようなもんだろ」
再び煙草を銜えてわずかに口元を緩める。小さなそれは確かに笑みだった。
「生きていこうと思うとよ、結構辛いことばかりだったりするんだよな。それこそ生きてんのが嫌になるくらいに。死にてぇって思うことだってきっと間違いじゃねぇさ」
顔の向きを変えてアナグマを見る。
膝を抱えたままだがきっと聞いているだろう。
そう信じて、彼は穏やかな声で問いかけた。
「それでも、生き抜けば見える明日ってのがあるんじゃねぇの？」
にっと笑って子供のように。
アナグマには見えていないだろうがそう言って笑いかけた。
「ま、チビナスが言ったところでわかんねぇか。とにかく食えよ。冷めちまうぞ」
その時、ほんのわずかにアナグマが反応する。

顔が動いて、表情を見せようとはしないものの、少しだけ視線を上げたのだ。
しばしの沈黙があったがサンジは待ち、聞かされる言葉を受け取ろうと耳を傾ける。
待ち続けた結果、アナグマは彼に質問した。
「おまえも……」
「んん？」
「おまえも、死にたいって思ったこと、あるのかよ」
「そうだなぁ……昔はあったかもしれねぇ。でも歯ァ食いしばって必死に生きてよ、今はもうどうでもよくなっちまった。楽しいんだ、あいつらと居ると」
服を掴む手にぎゅっと力が入る。
沁みる物はあったのかもしれない。はっきりした何かでなくていい。たとえ些細な物でも変わるきっかけにさえなればそれでいいのだろう。
緩慢に動き出した手は、甲板に置かれた皿を持ち上げる。
スープが入ったそれを持ち上げ、スプーンを手にせず両手で顔まで持ち上げた。
すぐに食べ始めようとしなかったがそれもいい。
サンジは肩をすくめて笑い、背を押すかのように声をかける。
幸いまだ湯気は立っていた。気温が下がってきたところであり、ちょうどいい一品でもある。
その魅力に取りつかれたのか、今度はアナグマも素直にサンジの言葉を受け取れたようだ。
「まずはスープからだ。ゆっくり腹に入れろ」
戸惑いを感じる手の震えがあった。しかし言われた通り、ゆっくり皿を傾け始める。
皿の端に口をつけ、中身はアナグマの口へ運ばれていった。
ごくごくと喉が鳴る。よほど腹が減っていたらしく、一度も口を離そうとしないまま、全て飲み干すまで傾けてしまった。スープはきれいに飲み干され、皿だけが床へ置かれる。

サンジが目を伏せて、些細な物音を耳にする。
アナグマは別の皿を持ち上げ、スプーンを手に取り、炒められて色づいた米を持ち上げた。
ばくりと一口。強過ぎもせず、薄過ぎもしない、絶妙の塩加減が舌を喜ばせる。今まで食べた中で一番と言っていいほど美味い炒飯だった。
ぼろぼろと大粒の涙が零れ落ちていく。
しかしそんなのはどうでもいいとばかり、アナグマは食事に集中していた。
泣きじゃくりながら炒飯を掻っ込む子供から顔を背け、再び視線は空へ。
音もなく雪が降り続けて次第に甲板へ積もろうとしている。肌を刺すような寒さがあり、雪が音を吸い込むせいか、不思議な静寂が辺りを包み込んでいた。
その中でカチャカチャと食器の音。
食事時には決して良い天候ではなかったが、涙を隠すにはちょうどいいかもしれない。
「う〝まい……！」
「クソうめぇだろ？」
してやったりの笑顔で告げてやる。
嗚咽は聞こえないふりをしてやって、しばらくサンジはその場を離れようとしなかった。
ビビとウソップ、それから少し後ろに居たルフィは、隠れてその様を眺めていた。
寄り添うような姿ではないがそれも一つのやさしさだろう。アナグマの涙とサンジの態度に感じ入る物があって、ビビは人知れず感動していたらしい。
だがなぜかウソップは納得できていない表情で疑問を口にしていた。
「なんだぁ、サンジの奴。相手が女ならまだわかるけど、なんであんなにやさしいんだ？」

「そんなの別にいいじゃない。サンジさんがやさしいのは変わらないでしょ」
「ビビはあいつを知らねぇんだよ。男が相手だと悪魔みてぇになるんだぞ。ガキだからって態度を甘くするような奴じゃねぇんだ」
「そうかしら。私は素晴らしいって思ったけど」
話す二人の後ろで、ぶちっと肉が千切れる音がした。
小さな物だが間近に居る二人にははっきりと聞き取れる。
振り返った先でルフィは肉を頬張りながら笑っており、その顔は妙に嬉しそうだった。

将軍の策略

予定通りに航海を進め、そろそろ追い上げるかと船が進む速度を増した頃だった。
時間は進み、早くも夜が近付いている。
曇天のため辺りはすでに暗くなっていて、どこか空気の重みも変わってきたように感じる。なぜかを考えていると、前方に奇妙な物を見つけて気付いた。
何かがおかしい。
メインマストの天辺に居たウソップは望遠鏡を覗き、ようやくそのことを知ったのだ。
「お、おいナミ！　前方に島がある！」
「何言ってんのよウソップ。予定よりまだ早いわ。そんなはずが――」
「しかも、なんか海賊船が山ほど沈んでるぞ！　一体どうなってんだこりゃ!?」
甲板でウソップの報告を聞いていたナミは表情を歪ませる。
理解ができない。今回の航海はミシェールに協力を仰ぎ、計算ずくの航路だ。これまで大きなミスもなく順調に進んできた。予定では朝を待たずに一位を奪えるはず。
つまりウソップの報告は彼女の計画を完全に狂わせる物だった。
そもそも、まだ到着する時間ではない。距離はそれなりにあるはずだ。
その一言だけで異常事態を理解する。
咄嗟に船の前部まで駆け寄ったナミは自身が持つ双眼鏡を覗いた。
前方、確かに島がある。だが島の形は聞いていた物とは違っている。明らかに違った目的地を目指して進んでいたらしい。
ではナミが指針を見間違えたかと言えば、そうではない。
ここまで彼女は指針の通りに進み、一度のミスもしなかったのである。確認できるのは航海士のナミしか居ないものの、自慢でも自惚れでもなく、間違えていない自信があった。

まさか、と今になって気付く。
この状況下で思いつくミスは一つだけだった。
そもそも最初から間違ったエターナルポースを握っていたのだとしたら、その指針の通りに進んでパルティアに辿り着けるはずもない。異なる島を見つけるのも当然だ。
ナミは懐から取り出したエターナルポースをじっと見つめだした。
「このエターナルポース、まさか……」
「ナミ、ひょっとしてまずい状況？　どうなってるの？」
「シルク、ナイフ持ってない？」
「あ、今は持ってないけど、取ってこようか？」
「お願い。もしかしたらまずいかもしれない……」
声をかけてきたシルクに頼み、一旦離れた彼女はすぐに船の中へ入って、ナイフを持って戻ってきた。慌てた歩調でナミへ駆け寄り、それを渡す。
受け取ったナミはそのナイフで目的地が書かれた板金を剥がそうとする。
さほど苦労せずに板金は剥がされた。
そして彼女たちは驚愕する。
〝パルティア〟と書かれた板金の下から現れた真の目的地は、〝ナバロン〟。あまりの鉄壁から〝ハリネズミ〟の異名を持つ海軍要塞である。
渡されたその時からすでに細工がしてあったのだ。
今になって気付いたことでナミは悔しげに歯を食いしばって、自らの愚かさに苛立つ。
「やられた……！　何か変だと思ってたのはこれだったのね。まさか偽物掴まされるなんてっ」
「これ、どういうこと？　確か主催者から直接受け取ったんだよね。それじゃあ私たちを陥れたのは、レース関係者の人間ってこと？」
「違うな、ガスパーデだ」
唐突にシュライヤが声を出し、全員がそちらに注目を向けた。
彼は怒りを滲ませる顔で静かに語り出す。

「まさかこんな手に出るとは思わなかったが、あいつの仕業に間違いない」
「ガスパーデがこれを？　だって私たちは胴元から受け取ったのよ。一体どうやって」
「つまり、その胴元がグルだったってことだろう。さしずめ金を握らせて協力体制だったってとこか。そこまでして勝ちを取りに来るとは予想していなかった」
「そんな――」
「これが、ガスパーデが名を上げた理由だ。勝つためならなんでもやる」
事情を知っているかのようにそう語り、シュライヤは忌々しげに表情を歪めていた。
噂の通りだと納得する。
本物のガスパーデに接したのは初めてだったため、まさかレースの概念その物を覆してくるとは予想できなかったが、こうなったところでおかしくはないと考えていた。
ただ、やはりしてやられたという想いが強い。
遺憾に思うのは誰もが同じだったようだ。
重苦しい空気が漂う。
予想外の事態に沈黙が続き、どうすべきか逡巡する。
船上にはかつてない雰囲気があった。
帽子を深くかぶったシュライヤが口火を切る。なんとかこの状況を変えなければならないと焦る心があるようで、声色は厳しい物に変わりつつあった。
「偽のエターナルポースが配られたか。これでゴールには迎えなくなったってことだ」
「なんで？」
「グランドラインの航海には普通のコンパスが使えねぇ。目的地に到達するにはログポースか、エターナルポースが絶対不可欠だ」
ルフィの問いに答えた後、シュライヤの言葉に反応したのはナミである。

「でも、ハンナバルはログが溜まらないし、この船には他のエターナルポースもない……」
「そ、それじゃ、ガスパーデを追っかけることも」
「できねぇってわけだな」
煙草から口を離したサンジが後を告げる。
今のメリー号には、ナバロン以外の島を目指す方法がない。
改めて現状を理解してから、冷や汗を流す者も少なくなかった。
「どうしよう……このままじゃ要塞に突っ込んじゃう。他に行く当てなんてないし」
「指針を無視すればっ。別に真っ直ぐ進む必要もねぇだろ」
「ルートを外れたところで、その後どこにも行く場所がないわ。適当に進んだって島へ辿り着ける保証なんてない。指針を見失うことは、グランドラインじゃ死を意味するのよ」
「それじゃ――」
呆然としたウソップが呟く。
ナミはこくりと頷いた。
「私たちは指針を見失った。奇跡に頼らない限り、もうどこにも辿り着けない」
船上の空気がより一層重くなる。
航海に関する知識は誰よりもナミが長けていた。そのナミが言う以上、もはや異論を唱えられる者は一人としておらず、ただそうなのだろうと理解することしかできない。
だが、それでは納得できないのも事実で。
狼狽する声はそこかしこから上がった。
「どうにかできねぇのかよっ。このまま終わるなんておれは嫌だぞ」
「それに、どっちにしろ要塞に突っ込むってのは無しだろ。難しいにしても針路を変えねぇと、おれたち死んじまうだけじゃねぇか！」
「ねぇナミ、針路を変えよう。あそこにだけは向かえないよ」
「わかってる……けど、今の私じゃ、ここからどっちに行けばいいのかさえ」

ルフィが、ウソップが、ナミが自分を頼っている。何とかしてやりたいと思う。だがどうにもできない自分に苛立ち、ひどく後悔する声で返答が出された。

どうやらナミも平静さを掻いているらしく、それを見た仲間たちはさらに混乱してしまった。

この状況を打開するにはどうすればいいのか。

判断できる者がおらず、空気が停滞する。

その時を感じ取って、いつの間にか甲板へ来ていたアナグマが言った。

「ガスパーデがやったのは間違いないよ。あいつの船で、大量のエターナルポースが積まれてるのを見た。多分それだろ」

「アナグマ。あんた、ガスパーデの船に？」

「望んで乗ったわけじゃない……たまたま助けてくれたじいちゃんが、あいつらの下で働かされてただけだ。あんな奴ら、仲間じゃない。じいちゃんが苦しんでるのに、あいつら……」

ぎゅっと拳が握られる様を目撃した。

気になったビビが一歩近付き、顔を覗き込むようにして問いかけた。

「おじいさん、体が悪いの？」

「治らない病気じゃないんだ。でもあいつら、仲間じゃないからって薬も買ってくれない」

「それでこの船に……」

「もう遅いよ、すべてが遅いんだ！　今からじゃガスパーデにも追いつけない！　もう何もかも遅すぎる……どうしようもないんだよ」

俯いてしまうアナグマに視線が集まり、何と声をかければいいかもわからず。

そんな時、ルフィは前方に見える島へ目を向けた。

航海の細かな知識は持っていない。全てナミに任せてきたからだ。それでもまだ負けたくない、終わりにしたくないという想いがあって、何をすべきかを必死に考える。

こんな時、キリが傍に居ればどうしただろう。

居ないことを悔いても仕方がないが、彼ならばなんとかできただろうか。
そう考えて思い出す。
出航の前に交わした彼の言葉があった。
ルフィは慌ててズボンのポケットに手を突っ込み、それを取り出す。
エターナルポース。困った時に使えと言われていた。
唐突に取り出されたそれを見て、表情に驚きを表したナミがすぐに尋ねる。
「ルフィ、それエターナルポースじゃない」
「ああ。島を出る前にキリからもらったんだ。困った時に使えって」
「あいつ……まさか気付いてたの？　だったらなんで言わないのよっ」
「ちょっとそれ見せてみろ」
動揺しているのはナミだけではない。この状況においてはこれ以上ない助け船であったが、だからこそ違和感も付き纏い、どういうことだと皆が不安を抱く。
思わず歩み寄ったサンジがエターナルポースを受け取った。
台座に刻まれた目的地の名は、彼らが本来目指すはずの場所だった。
「パルティア……これがゴールまでの道筋か」
「やっぱり、あいつ」
「最初から気付いてた？」
「どういうことだよ。そういやキリの奴、昨日ほとんど居なかったよな」
パルティアと刻まれた台座に視線が集められ、動揺する声が疑念の言葉を生む。
なぜ知っていたのか、と言うよりもなぜ教えなかったのか、こちらの方が気になる。その時間と機会はあったはずだ。わざわざエターナルポースを用意する時間があったのなら確実に彼らをゴールへ導

くこともできたはず。今この場に居ないことも改めて疑問だ。
キリへの不信感が募っていくかのようであった。
不穏な空気が漂いつつある甲板を見回し、唐突にゾロが口を開く。
「この際理由はどうでもいいだろ」
腕を組んで厳しい表情。しかしキリを非難する様子はない。
一身に集めた視線に対して、彼はきっぱりと言った。
「なぜ言わなかったかより、今はこれからどうするかだ。ゴールまでの指針はある。ルフィ、このまま見逃す気はねぇんだろ？」
「当たり前だ。ガスパーデを追うぞ」
「なら今はそっちに集中しろ。今回は相手が相手なんだ。油断すればやられるのはこっちだぞ」
毅然とした口調で告げられたせいか、仲間たちの表情が変わる。それと同時に、仲間を疑う揺らいだ気持ちが薄れて、この状況をどうすべきかを優先して考え始めた。
そのエターナルポースは希望だ。
今はこれに頼るしかなく、事情はどうあれキリに救われた気がする。
エターナルポースはサンジの手からナミへ渡った。
直後にルフィが強い眼差しで彼女を見つめる。
「ナミ、追えるか？」
「うん。これさえあれば大丈夫」
「それじゃあ出航だ！　ガスパーデをぶっ飛ばしに行くぞ！」
ルフィが雄々しく叫んだことで、仲間たちは大声で応え、針路を変えるため操船へ動き出す。一気に船上がドタバタと騒がしくなり、あちこちで指示を飛ばす声が聞こえる。
その中で唯一、ルフィだけは動いていなかった。
顔の向きを変えて視界に入れるのは小さな影。
俯いたまま突っ立っていたアナグマに目をやって、ひどく静かな表情だった。
歩き出す彼はゆっくり近付いていく。
気付いたアナグマが顔を上げ、やっと彼の顔を見た。

約一メートルほどの距離を置いて向かい合い、視線がかち合って、騒がしい甲板で彼らだけが妙に静かな空気に包まれている。
やがてルフィがアナグマへ言った。
「おまえどうすんだ？」
「え？　どうするって……」
「欲しいんなら小舟やるよ。あそこは海軍の基地らしいから、助けてくれって言ったら助けてもらえる。もう海賊にこき使われなくてもいいぞ」
「うっ……」
歯を食いしばってアナグマが呻いた。
思わず顔を伏せてしまいそうになるが、必死に耐えてルフィから目を離さない。
尚も彼の追及は続く。
「半端な覚悟で向き合えるもんじゃねぇぞ、海賊は。死ぬことは恩返しじゃねぇんだ」
「そんなことわかってるよ！　でも、おれはガキだし、大人には勝てねぇから、死ぬ気でやらなきゃじいちゃんは助けられないと思って……！」
「だったら生き抜いてみせろよ。そんくらいの覚悟があるなら、薬がどうとか言う前に船から助け出すくらいのことしてみろ。やりもしねぇのに口だけで命賭けるなんて言うな」
「おまえなんかに、言われなくたって……！」
痛いほどに拳を握って、心底悔しげに、アナグマは瞳を潤ませて唸った。
その表情を見てルフィはふっと笑う。
「おれはガスパーデをぶっ飛ばしに行くぞ。来るか？」
「行く！　連れてけ！」
今度こそ子供っぽく笑ったルフィはその叫びを受け取った。
これなら船から降ろす必要はない。たった一言でそう判断したのだろう。
アナグマへ背を向け、彼もまた操船の作業を行うため歩き出した。

そんなルフィへ声をかけて、シュライヤが近付いてくる。
不思議と苛立っているらしい様子の彼は以前とは別人のようになっている。一目でわかるほど身に纏う雰囲気が違うのだ。そうと知りながらルフィの表情は変わらず。
足を止めて向き直れば、シュライヤの声は厳しい物に変わっていた。
「追いつけるのか、あいつに」
「なんとかするよ。おれの仲間に任せとけ」
「今の内に言っておく。おれの目的は最初からガスパーデだ」
帽子の下から覗く双眸は危うげな感情を灯していて。
「おまえが一番可能性が高そうだと判断したから話を持ち掛けたんだ。だからその首を取らねぇで放置してやった。もしこれで取り逃がすようなことがあれば……」
「いいぞ。そん時はおれも負けねぇさ」
「フン」
視線を切り、そっと歩み出すシュライヤの背を見送って、しばし口を紡いだ。
ルフィの目にはシュライヤの中にある激しい感情が映ったらしく、それを見て思い出すのは自らの右腕。今は船に居ない副船長。
復讐。
おそらく目的はそれなのだろう。
推測はしたが多くを語らず、彼もまたシュライヤに背を向けて歩き出した。
目的の人物を理解したならば理由も納得できる。彼らの船に乗ることを望んだのも、今まで戦闘を行おうともしなかったのも、自らの目的を果たすため。仄暗い感情に支配されて、それだけが彼を突き動かしているに違いない。
ただ、ルフィの脳裏にはその道を選ばなかった人物の顔があって。
何も言うことができないのか、はたまたその気がないだけか。敢えてこの場では声をかけることはせず、ルフィもまた船を動かす作業を手伝う。

一方でそちらとは別の位置。
船首の向きを変え、メリー号が進む方向を変える途中、作業の手を止めずにサンジがゾロへと声をかけていた。やけに真剣な顔にも見えて、彼の方を見ようとはせず声だけが向けられている。対するゾロも普段とは違って喧嘩を吹っ掛ける様子ではない。
「正直意外だったな。キリのことは責めねぇのか」
「あ？」
「おまえは船長を立てる性質だろ。何かしら事情があるにしても、ルフィを船長として扱う奴なんじゃねぇかとは思ってたが、副船長には甘いらしいな」
「そんなつもりはねぇ。だが」
珍しく言い淀み、一瞬口がきつく結ばれる。
それを気取られまいとすぐに口を開いて、ゾロもまた言い返した。
「ああいう奴だ。誰かは理解してやらねぇと間違いが起きかねねぇだろ」
「へぇ。そういうもんかい」
足早に、面倒だと言わんばかりの様子で遠ざかるゾロの背を見て一言。
本心であるか誤魔化しであるかは本人にしかわからない。
それでもサンジは煙草の煙を吐き出し、暗くなった空に呟いた。
「それが甘いって思ったんだが、てめぇはそう思ってないのかねぇ」
浮かぶ笑みは何を意味してか。
どちらにしても彼の行動を否定しなかったのは事実だ。
メリー号は確かに針路を変えた。知らず知らずの内に差し伸べられていた救いの手によって。
しかしその一手を皆に隠していたのも事実。
混乱が収まった船上には、一方で動揺も走っており、万事解決という風でもない。
今、一味には不明瞭な、しかし確かな火種が生まれようとしていたようだ。

＊

ガスパーデが駆るサラマンダー号は蒸気船であり、船内の下部には船を動かすエネルギーを生むボイラー室がある。明かりもほとんどなく、薄暗い一室で、ボイラーにある大きな火だけが辺りを照らすような寂しげな空間。

そこを管理する人間は〝モグラ〟と呼ばれる老人だった。

モグラ、そのあだ名をつけられたのはビエラという小柄な男である。

薄汚れたツナギとシャツを身に着け、手袋や靴まで所々が煤けており、禿げあがった頭には普段帽子を被っているものの、今は傍へ置いているだけ。

ひどく顔色が悪くて、血色の悪さが身の危険を感じさせた。

毛布に包まって動けない彼は今、病に苦しんでいたのだ。

以前から兆候はあった。自身も気付いていた。それでも治せなかったのは金がなかったからだ。

病を治す薬を買うことができずに、死を受け入れたくはないがどうすることもできない。

その結果が、苦しみに耐えて尚も生き続けるという愚かな方法。

根性だけでどうにかできる物ではないが、金のない彼にはそうすることしかできず、また金を稼ぐ術を持っていないため贅沢も言っていられなかった。

朦朧とする意識の中、自分はもうだめなのだろうかと考える。

その時心配するのは自身が死ぬことに関してではない。まだ幼い子供を、血が繋がっていないとはいえ、今日まで育ててきたアナグマはどうなるのだろうと案じていたようだ。自分がこのまま死ぬことはまだ許せる。だがあの子だけは死んで欲しくないと、胸の苦しみに耐えて思った。

この船に居たのではきっと未来はない。一人だけでも逃げてくれれば。

そう考えながら昨日から姿を見せないアナグマを案じ、逃げたのだ

とすれば安堵もできて、ただひたすらに状況を知りたかった。
寝転がったまま大きく咳き込む。
轟々と火が焚かれる音があるものの、ボイラー室は静かだ。
咳き込む音さえ妙に耳へ残り、嫌でも悪い想像ばかりを掻き立ててしまう。
休む間もなく思い悩むビエラが眠れずにいると、何か奇妙な音が聞こえてきた。火の音だけではない、石炭をシャベルで掬い上げる独特の音。長年ボイラーで働いているビエラが聞き間違えるはずもなかった。誰かが燃料を投じている。
たとえ海賊の船にされたとしても、ボイラーは彼の宝。血を分けた子供と言ってもいい。
誰が勝手に触れているのだと、そう考えるだけで怒りが沸き上がった。
「誰じゃ……わしのボイラーに、勝手に触れおって」
震える手で体を支え、よろけながらなんとか立ち上がった。
危なげな足取りで歩き出す彼は壁に手をつきつつ、ボイラーを目指して広大な部屋を進み、隅にあった居住スペースから部屋の中央へ赴く。
やはりボイラーに石炭を放り込む輩が居た。
数は三人。ガスパーデの船なのだから、彼の部下であることは間違いない。
咳き込みながらも必死に声を出し、ビエラは三人へ怒りの声を向けた。
「やめろ！　素人が迂闊に手を出すもんじゃない。わしのボイラーに触るな」
「なんだじいさん、まだ生きてたのか。てっきり死んだかと思ってたが」
三人はすぐに振り返った。
死にかけているビエラを見ても表情を変えず、冷静に返事をする。そこには感情などない。目の前の小さな老人に何の感想も持っていない証だった。

普段滅多に人が降りてこない場所へ三人も。
何が起こったのかわからず、ビエラは彼らへ問いかける。
「一体、どういうつもりじゃ」
「ガスパーデ様の命令だよ。もうゲームには飽きたからゴールへ向かうとさ」
「ゲーム？」
「ああ、おまえは知らねぇのか。今日海賊レースが始まったんだよ。しばらくはゆったり進んで追いついてくる船を待ってたんだが、そんな連中は居なかった。戦闘がないんでつまらねぇとよ」
「フン、くだらんことを……うぅ」
「まぁモグラのジジイにゃ理解できねぇか、海賊の遊びは」
「動けねぇんならそこで寝てな。要するにこいつを放り込めば加速すんだろ」
男の一人がそう言う。
地面に散乱していた石炭をシャベルで拾って、乱暴にボイラーへ投げ込むのだ。
その様を見たビエラは血相を変えて叫ぶ。
「やめろっ!?　手荒に扱うなと言ったじゃろうが！」
「うるせぇな。こっちも命令で動いてんだよ。やらなきゃ船長に殺されんだろうが」
「それなら、わしがやる。おまえたちは手を出すな。上へ行っておれ」
「おっ、話がわかるな。そう言ってくれりゃ早いんだよ」
「じゃあなじいさん。せいぜい死なねぇようにおれらの代わり果たしてくれや」
代わりを務めると言えば、男たちはあっさりシャベルを放り投げてしまった。最初からやる気などなかったらしい。にやけた笑みを浮かべて一切の迷いがなかった。
それでいい。素人が居ても邪魔なだけだ。
ビエラは自らの誇りにかけて、大事なボイラーへ向き合おうとする。

痛む腰を曲げ、シャベルを拾い上げようとした時、ふと思った。
アナグマはどこへ行ったのか。
心配から彼らへ問いかけていて、三人も声に気付いて足を止めると平然と答えた。
「待て。アナグマは……ここに居た子供を知らんか？　昨日からずっと戻っていない」
「あ？　あぁ、あのガキか。あいつなら出てったよ」
「出ていった？　なぜ」
「海賊の首を取りに行ったのさ」
「なんじゃと……!?」
驚愕して一瞬胸の苦しみを忘れる。
背を伸ばしたビエラは自身の不調の一切を忘れ、目を大きく見開いた。
「海賊のところに行ったのか!?　一体なぜそんなことに！」
「ガスパーデ様の言うゲームだよ。あいつが賞金首を捕まえたらおまえの薬を買ってやるとよ。ついでにあのガキを仲間にするらしいぜ、海賊のな」
「なんてことを……アナグマ、今どこに」
「知るかよ。ま、戻ってくるわけねぇがな。ガキが賞金首に勝てるはずねぇ」
「あのガキはもう終わりだ。残念だったなじいさん、薬は届かねぇってよ」
大きな笑い声を響かせながら三人はボイラー室を後にする。
嘲笑であろうそんな声すら届かず、ビエラは呆然とその場に座り込んでしまった。
彼らの言う通りだろう。特別鍛えられた訳でもない、悪魔の実も食べていない、どこにでも居る普通の子供でしかないアナグマが海賊に勝つことなど不可能。もし本当に賞金首に直面してしまったのならば生きて帰れるはずがなかった。
そう考えて、目の前が真っ暗になった。
何のための人生だったのか。

あの子を拾ってやって、何をしてやれたというのか。
汚い手袋を付けた右手で目元を覆い、彼はしきりに後悔の言葉を吐く。
「くぅっ、すまん。わしが病になどならなければ、こんなことには……！」
目頭が熱くなり、胸の苦しみが増していた。
後悔したところで遅く、今からでは何をしても間に合わないだろう。
最悪な想像ばかりが頭の中に広がって、尚更彼の心を苛んだ。もうだめなのか、アナグマの顔を思い浮かべてそればかりを考えている。
顔から手を離した時、不意に地面のシャベルが目に入った。
その時、ふと考えつく。
ビエラとサラマンダー号は、ガスパーデがある町を襲った時、たまたまそこにあったから力尽くで奪われただけだ。ビエラ自身はガスパーデに対する忠誠心など持っておらず、自らが世話をしていたボイラーが心配だから船を降りなかっただけである。
自分が海賊に抗えるはずもなく、今日まで命令に逆らったことはない。
しかし病に侵され、アナグマを失ったと思い込む今、その限りではなかった。
ガスパーデへの報復の方法が一つだけある。
それは彼にとっても苦しい道だが、ガスパーデを道連れにできるなら本望。
いつしか決意は固まっており、ビエラの手がシャベルを持ち上げた。
「アナグマ、すまんかった。ボイラーに拘ったわしがここを離れなかったせいじゃ。本当ならおまえが命を賭ける必要などなかったのに。全てわしの責任……ならばせめて、わしはガスパーデを連れて地獄へ行こう。天国のおまえとは会えんかもしれんが」
石炭を持ち上げ、ボイラーへ放り込む。
次から次に投入していき、許容量を気にしない様は本来のプロの手

腕ではない。
彼は敢えて許容量を超えようとしているらしかった。
ガスパーデの命令通りに加速して、しかしその後はきっと、タダでは済まないだろう。それでいいと判断していて、もはや決意は揺らがなかった。
ボイラーと死ねるなら本望。
もしもボイラーが暴走して爆発してしまうと、船上に居る海賊たちも無事ではない。
これは戦いだ。ビエラにとって人生初の、彼流の戦いを始めていた。
「これで最期……わしと一緒に、死んでくれ」
そう呟くビエラは火によって照らされ、笑っていた。
応じるように炎が大きく燃え上がり、辺りへ強い熱風が走る。

将軍の海戦

すっかり日が沈み、夜が来る頃。空は厚い雲に覆われていた。
気候が崩れる予兆はないが嫌な予感がする。
エターナルポースの指針を見ていたナミは空気の変化を敏感に感じ取っていた。
イーストブルーにはなかった空気の重さである。
本を読んで勉強してはいたが、突如現れる異常気象とやらが近付いているのかもしれない。
「この感じ……まずいわね。このまま真っ直ぐ進むのはやめた方がいいかしら」
「ナミさん、何か問題でもあった？」
たまたま傍らに居たビビが尋ねてきて、ナミの視線がこれ幸いと彼女を捉える。
ビビはグランドラインで生まれ育った人間。アラバスタを出てウィスキーピークまで移動していたところを見ても、多少なりとはいえ航海の経験はあるはず。
尋ねるならばこの人しかない。
緊迫した表情でビビへ尋ねてみた。
「ねぇビビ、グランドラインには確かサイクロンがあるのよね。予兆がないってほんと？」
「ええ。船乗りなら誰もが苦悩する気候よ。誰もその姿を見るまで気付けない」
「それじゃ変化を具体的に説明できる人は居ないってわけね……」
何を言いたいかがわからず、首をかしげるビビから目を離し、ナミはルフィの背を見た。
彼はまたメリー号の船首の上に居て、真っ直ぐ前を向いていた。
「ルフィ、このまま進まない方がいいと思う！　迂回しましょう！　なんだか嫌な予感が――」
「船が見えたぞ！　ガスパーデのマークだ！」
ナミが進言しようとしたその瞬間、メインマストの展望台に居たウ

ソップが声を上げる。
「だけど……一隻じゃねぇぞ。あの中にサラマンダー号は居ねぇ！」
その一言で船上の空気が一変する。
緊張感が漂い、焦りを禁じえない妙な感覚だ。
甲板へ戻ってきたルフィがマストを見上げたことで、それはより顕著な物となる。
「どういうことだよウソップ！　ガスパーデの船じゃないのか！」
「マークは多分あいつのだ。でも海軍の軍艦みてぇな船が四隻、こっちに向かってくる！　全部同じマークだぞ！」
「待ち伏せか。用意周到な野郎だ」
呆れた様子のサンジが呟き、全員が状況を理解する。
これもまたガスパーデの術中だったのだ。
仮にエターナルポースを持って本来のゴールを目指す船が居たとして、事前に配置していた艦隊が迎撃する。単調であるが、それ故に対処に困る作戦だろう。
メリー号一隻に対して四隻の軍艦。
不利と言わざるを得ない状況だった。
どうやら無視でき無さそうな船団にナミの顔が曇る。
今は別のことにも注意している。その上で邪魔が入ってしまった。
こんなことをしている場合じゃない、という予感があるようだ。
すでにルフィは迎撃を行うつもりだったようだが、それを阻止すべくナミが口を開いた。船長へ進言し、意見を変えさせるのに最も優れていたのはおそらく彼女だった。
「相手にしてる場合じゃないわよルフィ。気候が変わった、何か来るわ。急いで離れないと船に被害があるかもしれない」
「どうした？」
「シルク、あんたは感じない？　いつもと風が違うって」
ナミの問いかけにルフィが止まり、シルクに注目が集まる。
彼女もまた険しい表情で、皆とは違う方向、遠くの海を眺めていた。
「うん……感じるよ。多分向こうの方。すごく大きな、風の塊があ

る気がする」
「そうか、シルクちゃんは能力で風を感じ取り易いんだったな」
「シルクが言うなら間違いないわ。やっぱり近くに異常気象がある」
「まさか、それがサイクロンってこと？」
「わからないけど、とにかくここに居ていいとは思えない。ルートを変更しましょう。心配しなくても指針があれば目的地には到達できる」
自信満々にそう言うナミを見つめ、ビビは絶句してしまった。
サイクロンはどこから現れるかがわからない脅威の一つ。グランドラインを航海する以上は決して避けられない事象だが、彼女は事前に予感してみせた。
これがどれほどの異常かはグランドラインに長く居るほど理解できる。
彼女の仲間たちは当然のように信用しているものの、本来ならばあり得ないのである。
驚くほど強いルフィに合わせて、どうやらナミもまた普通ではないらしい。
ビビは、或いは話を聞いていたイガラムは、彼らに驚きを持たずにはいられない。
そうとは知らず、話し合いは進み。
徐々に敵船が近付いてくる。時間はそう多くない。
それを理解しているサンジが皆の意見を取り入れて判断を下す。
「ナミさんが言うなら迂回した方がいい。だがあいつらもすぐに追いついてくるな。背を向けて逃げ出すにはちょっと遅そうだ」
「でもこのままじゃ……」
「つまり、連中を速攻ぶっ飛ばして、その後でルートを変えなきゃならねぇ。ここからは時間との戦いだ。一歩遅れれば何が起こるかわからねぇぞ」
ルフィの顔に目をやってサンジが一言。
行方を見守るかの如く静かに佇む彼へ提案する。

「それでどうだルフィ。今のおれたちが取れる最善の手だ」
「うし、それで行こう。野郎ども、戦闘だ！」
大声で告げて仲間たちも同意する。
敵船はすでに近付いており、早急な対応が必要だった。
早速船首へ赴こうとしたところ、またサンジがルフィを呼び止め、彼を振り向かせる。
「待てよ。今回はおれたちだけでやる」
「ん？　なんで？」
「おまえも船長ならたまにはどっしり構えてろ。後ろで見てればそれで十分だ」
そう言ってすぐに指示を出し始めるサンジに、ルフィはぽかんとした様子で。
「ウソップ、砲撃準備だ。ナミさんは航路の指示を。ビビちゃん、舵頼む」
「は、はい」
「それからシルクちゃんは敵の砲撃を防いでくれるか」
「うん、大丈夫だよ」
「それからナミさん、離脱の前に一度、奴らに近付いて欲しい。おれとゾロで片付ける」
「え？　あんたたち二人だけ？」
手早く指示を伝え、意図も全員に伝わっているが、おそらく全員に動揺があったらしい。
ナミは彼の提案をすぐに受け入れることができずにいたようで首をかしげる。
同時にルフィも異論を唱え始めて、見ていろという言葉が納得できなかった様子だ。
「おい待てサンジ、おれもやるぞ」
「さっき言ったろ。おまえは何もしなくていい。船長がそうホイホイ前線に立つんじゃねぇよ」
「え～？　待ってるだけか」
「元来指揮官ってのはそんなもんさ。いいからてめぇの仲間を信じ

ろよ」
「そりゃ疑ってねぇけどよ。退屈じゃねぇか」
あっけらかんと言う彼に苦笑する。
仲間を信じていながら任せないのはただ退屈だからだという。おそらく指揮官には向いていない性格だが、彼らしいとも言え、仲間を信じて裏切らない船長の存在は有難い。
サンジはひらひらと手を振って尚も念を押した。
仕方なくルフィも腕を組み、やっと納得して頷く。
「とにかく任せろ。すぐ終わる」
「んん、じゃあ任せる」
ルフィが認めたことで全員が指示通り動き出す。
時間はそう多くない。
すでに敵は見る見るうちに距離を詰めてきており、砲撃の準備も行われているのだろう。活気のある声がメリー号にも届いていた。
久々の海戦である。
一同は幾分の緊張と共に持ち場へ着いた。
軍艦が四隻。決して簡単に勝てる相手ではない。
それでも船上の空気が悪くなることはなく、至って平然とした表情のまま。
ついに戦闘開始の時が近付いていた。
重々しい動きで接近してくる様は圧巻。しかし以前の敵に比べれば脅威とは感じないようだ。
敵の姿が近付く中、メリー号もまた喧騒を増していた。
「左端の船から狙うぞ。ウソップ、外すなよ」
「なぁ～に任せとけ！　おれの狙撃は百発百中よ！」
「ったく、援護だけだとすぐ調子に乗るな」
「サンジくん、乗り込むのはいいけど無茶しないでよ。とっとと終わらせて戻ってきて」
「はぁ～いナミさん！　おれを心配してくれてるんだね！」
「はいはい、もうそれでいいから」
時には冷静に頭を働かせ、時にはいつも通り明るく振る舞い、サン

ジは全く緊張していない姿を見せている。その様子を見ていると仲間たちも取り乱さずに済んでいた。
やがて互いの距離が近くなった時。
先に砲撃を始めたのは敵船の方だった。
轟音が響き渡り、無数の砲弾が一斉に空を舞って、一直線に向かってくる。
直撃すればメリー号に耐えられる衝撃ではないだろう。
反応したのはシルクだった。
素早く剣を抜き放ち、間髪入れずに横へ振るう。放たれるのは風による斬撃。空を駆けた見えない力は砲弾が進むべき道を変えさせた。
「鎌居太刀！」
吹き荒れる風が敵の攻撃を防いだ。
これを見た敵船は動揺しているらしく、次の行動が少し遅れる。些細なこととはいえ、この一瞬が戦闘の結果を大きく変える。
一瞬のタイミングを逃さず、船内でウソップが声を上げた。
「来たぞ！　おっさん、カルー、一気にぶっ放せェ！」
「はいっ！」
「クエー！」
ウソップに加え、船内に居たイガラムとカルーが同時に行動する。
発射の合図で大砲に火が点けられ、装填されていた砲弾が勢いよく飛び出していく。ウソップが事前に狙いをつけていたため、複数の砲弾は的確に敵船へと襲い掛かった。
動揺していた彼らに回避の余裕などなく。
砲弾が船体を貫き、いくつもの爆発によって敵船が揺れた。
当たったのは先頭の一隻だけだが、先制攻撃としては十分だろう。敵側は見るからに驚いて、思わぬ反撃に戦闘自体を躊躇う素振りがあるかのよう。
これを利用しない手はない。
サンジの指示により、メリー号は大きく迂回を始めようとしていた。
先頭の一隻だけが突出している。

これを盾とするように左側へ移動し、先頭から見て右側にあった二隻の死角に入った。
流石に仲間を盾にされては砲撃もできず、しばし彼らは何もできなくなる。
その間にメリー号は孤立するような左側の一隻へ近寄り、再度の砲撃。船内で素早く動いていた二人と一匹によって平静を取り戻す前の奇襲に成功した。
放たれた砲弾が船体を叩いて大きく揺れた。
敵船からは数多の悲鳴が響いてくる。見た目以上の影響があったようだ。
さらに大きな隙ができて、メリー号は悠々と接近していく。
「おれたちが乗り込んだら、メリーはすぐに離れてくれ。ナミさんに任せる」
「あんたたちは？」
「上手く戻るさ」
明らかに次の一手が遅れている敵は、隣接したメリー号に対処する暇がなかった。
サンジとゾロは欄干を蹴り、高く跳び上がって敵船へと乗り込む。
船へ到着し、欄干を蹴って跳んで、甲板を見下ろした時のこと。
敵は対応できずに、呆然と空を見上げており、何が起こったのかをまだ理解できてさえいないらしくて、落下してくるゾロを見て武器を取ろうともしていない。
空中で二本の刀を抜き、両手に持って躍りかかる。
着地と同時に数名の敵を切り裂いていた。
気付いた時には目の前に居て、鮮血が舞うと斬られた男たちが倒れる。
突然の奇襲で大多数の人間が呆気に取られていた。
先に甲板へ立ったゾロはさらに動き出し、その場でぐるりと回転。
素早く反応しようとした敵へ対して、凄まじい斬撃で行動を制止したのである。
「フンッ！」

「ぎゃあっ!?」
「こ、こいつ、なんだいきなり……!」
狼狽しているがようやく手に武器を取り始める。
切っ先は全てゾロに向いていた。だがその時にはサンジも甲板へ到達する。
「いきなりもクソもあるか。吹っ掛けたのはそっちだろ」
「もう一人居るぞ！　二人だけだ、やっちまえ！」
「おういいぞ。やれるもんならやってみろ」
気付かれると同時にサンジも動き出した。
目の前に居た男の頬を蹴り抜き、勢いよく吹っ飛ぶと後ろに居た男へ激突する。
次から次に将棋倒しの様相で、これ幸いと前へ跳び、敵が密集する位置に飛び込む。その中には彼の動きに反応できる者がいなかった。驚くばかりの男たちが為す術もなく顔面を蹴られ、その場で堪えることもできず勢いよく倒れ込んでいく。
十数人は蹴り飛ばしただろうか。
足を止めたサンジが振り向けばゾロも同じ程度の数を倒したのが見える。
佇まいを直して立った二人は囲まれた状況のまま、余裕を湛えて話し始めた。
「時間はそうかけてられねぇぞ。ナミさんがおれの帰りを待ってる」
「アホか。時間かかるような相手じゃねぇだろ」
「一分必要か？」
「いらねぇな。十秒だ」
「てめぇら、舐めてんじゃねぇぞォ！」
たった二人の強襲だと気付き、冷静さを取り戻したらしい男たちが雄々しく叫ぶ。
それを見ても慌てることは一切なく。
サンジはにやりと笑い、ゾロは終始不機嫌そうに表情を歪めていた。

敵船への直接的な攻撃へ出た二人と離れ、メリー号は円を描くように移動を続ける。
二人が乗り込んだ船は終わりと考えていいだろう。残りは三隻、内二隻は現在も無傷であり、果たしてどう倒したものかと考える。
頭を巡らせるのはナミだ。
キリとサンジが居ない現状、指示を出すのは彼女しかいなかった。
勝利のためには敵が困惑している今の状況を使う他はない。
メリー号は向きを変えることにさえ苦戦している敵船を視界に入れていた。
「ウソップ！　すぐに次！」
「おっしゃあ！　発射ァ！」
更なる砲撃が行われ、爆音が辺りへ広がる。
放たれた攻撃は的確に敵船へ叩き込まれ、飛び散った残骸が海に落ちた。
戦闘は優勢に進んでいるらしい。
珍しく何もせず、自身は腕を組んで突っ立っているだけのルフィは笑みを浮かべていて、頼もしい仲間たちに喜びが抑えられない様子だった。
そうして眺めていたルフィへシュライヤが言う。
「こいつらに構ってる暇があるのか？　急がねぇとガスパーデに逃げられるぞ」
「わかってるけどよ、後ろから追われたら困るだろ」
「チッ、面倒な……」
「心配すんな。おれの仲間に任せとけば大丈夫だ」
苛立った顔でシュライヤが目を背け、強い眼差しで敵船を睨みつける。
かなり怒っている顔だ。感情がはっきりと伝わって、今までの素っ気ない態度とは何かが違っている。まるで心底から憎んでいるかのような、そんな表情だ。
まさか今襲ってきている敵船を憎んでいるはずもあるまいし。
考え付くのは当然、ガスパーデの存在だった。

聞くか聞かぬか、迷う素振りもなく、ルフィは彼へ尋ねてみる。
「おまえ、なんでガスパーデを追ってんだ？」
「あ？」
「おれたちはレースに負けねぇためだけどよ、おまえは多分違うだろ。海賊じゃねぇもんな」
「てめぇには関係のねぇ話だろ」
「あるさ。おれの船に乗ってるんだぞ」
「フン。話す気はねぇな」
拒む素振りでシュライヤが答え、今度はルフィを睨む。
彼はその視線を正面から受け止めた。
「なんでそんなに焦るんだ？　まだ負けたわけじゃねぇだろ」
「おれには目的があると言ったはずだ。ここまで来て逃がすわけにはいかねぇ」
「ふぅん。そっか」
何度目かで砲撃の音が鳴り響き、敵船が放った物も風に煽られ、海に落ちて、高い水しぶきが上がっている。彼らが話している間にも戦闘は徐々に激化していた。
その中でもあくまで冷静な表情。
不意に海を眺めたルフィは何気なく呟く。
「おれの仲間はそんな生き方してねぇけどな」
「……何？」
「何があったかなんて知らねぇし、興味もねぇけど、おれの仲間とおまえは違う」
眉を顰めて疑念を表すシュライヤを振り返り、にっと笑って簡潔に一言。
「前に進む覚悟をしたんだ。もう立ち止まろうとする奴なんていねぇよ」
「おまえに……何がわかる」
嫌悪感を示し、歯を剥き出しにしたシュライヤが静かに吠えた。
それはおそらく彼自身を支えてきた物だっただろう。
自らの存在意義を汚されたようで、怒りが噴出しており、ルフィを

睨むその目の力強さは先程の比ではない。今度ははっきりと殺意を持って彼を見ていた。
しかしそれでもどこ吹く風。
ルフィの表情は変わることなく、平然とシュライヤを見つめ返している。
「何も知らねぇおまえが、全部知ってるかのように言うんじゃねぇよ」
「そりゃ知らねぇよ。おまえ何にも言わねぇんだもん」
「ならこれだけは言っといてやる。おれは海賊を許さねぇ。それだけだ」
二人が口を閉ざしたことで、戦闘の音だけが鼓膜を揺らす。
続く砲撃。誰かの悲鳴、怒号。喜ぶ声もまた聞こえる。
メリー号と敵船は着実に状況を変えようとしていた。
いつの間にか敵船を奪ったサンジとゾロが舵を操り、敵が用いていた軍艦で敵船へと衝突しようとしている。横っ腹を狙われた彼らは対処が間に合わず、悲鳴が大きくなった。
直後には二つの船が激突する。
接触の瞬間、船体は大きく揺れ、敵には大きな動揺が広がる。その機を逃さずに飛び移ったゾロが素早く男たちを斬り倒し、混乱はさらに深まった。
全てが想定通り。
舵輪を手放したサンジもまた駆け出し、船首を蹴って跳び出すと敵船へ乗り込んだ。
結論から言えば、勝負は麦わらの一味の勝利である。
数の違いがあれど戦闘経験の差か、はたまた心意気か、彼らが苦戦することは一度もなく、待ち伏せしていたはずの敵は混乱している間に船を破壊されていた。
次に目指すはゴールの島。メリー号は急ぎ足で駆け出す。
しかし敵の待ち伏せ、悪天候と続き、彼らが島に到着するだろう時刻が遅れたのは事実である。
その点を考慮すればガスパーデの待ち伏せは決して無駄ではな

かったと言えるだろう。
ガスパーデ自身が知ることはないまま、メリー号がサラマンダー号に追いつける可能性はさらに低くなり、それはおそらく足止めを喰らった全員が理解していた。
それでも船長が諦めることはない。
前へ進むと決めたら人の話など聞かないのだ。
戦闘を終えても騒がしくなる船上は航海のために作業を繰り返し、操船に忙しなくなる。
狙いはあくまでもゴール。そして優勝と三億ベリー。
もはやガスパーデとのいざこざだけではなかった。
賞金を思い出したナミも目の色を変え、船長と声を合わせて高らかに叫ぶ。
目的地はまだ遠く、時間は限られている。
参加者の減ったレースはすでに終盤へと差し掛かっていた。

ゴール目前

サラマンダー号がパルティアの全景を遠目に捉えた時、すでに日は落ちた後だった。

波間は奇妙なほど穏やかで、辺りを走るのは一隻のみで、他の参加者の姿は見えない。

甲板からゴールを見たガスパーデはつまらなそうに嘆息する。

最短距離を全速で走ればもっと早く到着したかもしれない。この時間になったのは敢えて速度を落としていたため。勘のいい海賊が後を追ってくるかもしれないと思ったからだ。

結果として、そんな海賊はおらず、戦闘は一度もないまま終わってしまう。

これをつまらないと考える彼は残念がる様子だった。

大規模なレースでありながら、ゴールへ辿り着けそうなのは一隻だけ。

つまらないと思うし、だらしないとも思う。

失望したとばかりに険しい表情のガスパーデはこの結果に満足していなかったようだ。

「結局ついて来れる奴は居なかったな。海賊レースも大したことはねぇ」

退屈そうに呟いてしばらく。

近くにあった階段へ腰掛けて落ち着いた後、彼は傍らに居た男へ声をかけた。

「どうだニードルス。暇潰しにおれとやり合ってみるか？　今ならおれを殺せるかもな」

ニードルス、と呼ばれたのは長身の男だ。

黒い服に身を包み、腰の裏には爪のような武器を提げ、筋肉質な腕が露わになっている。背筋を伸ばして立っているのだがまるで幽鬼に見え、存在感はどことなく希薄な気がする。肌は青白く、目には生気が感じられない。言わば暗殺者然とした風貌だ。

彼はガスパーデの右腕として船に乗り込んでいた。しかしその眼

差しに尊敬の念は感じられず、押し殺してはいるが目の奥には殺気すら感じる。
ガスパーデもそれを当然としていた。
見るからに信頼関係など築いていない関係だ。
いつしか戦闘を感じさせる雰囲気が漂っていて、ガスパーデはにやりと口角を上げる。
ニードルスの手が、腰に提げていた武器を装着しようとしていた。
そんな折にメインマストの上から部下の声が聞こえてくる。ニードルスの手は止まり、ガスパーデの視線が上へ向かった。
「船長！　前方に船が！」
「何？　船だと」
「海の中からです！」
立ち上がったガスパーデが船の進行方向を眺めると、進路を塞ぐように船が現れていた。
海中から水を押し上げ、顔を出したのは潜水艦。側面にはジョリーロジャーが描かれており、それが海賊船なのだと一目で理解できる。
やっとガスパーデが嬉しそうに笑みを緩めた。
それこそ望んでいた物だった。
所詮レースはただのゲーム。自分が楽しむだけの余興に過ぎず、勝って当然。
自身の勝利は当然として、それまでの過程でどれほど楽しめるかが興味の対象だった。
身を乗り出す彼の視線の先、完全に浮上した船の扉が開いた。
中から一人の男が現れる。
甲板に立った顔には見覚えがあった。別段興味もなかったがレース参加者の手配書を確認し、その中でも特に話題性がある人物だと聞いている。
ハートの海賊団船長、〝死の外科医〟トラファルガー・ロー。
刀を肩に担ぎ、俯いた状態で船の先端まで歩いてくる。どことなくふてぶてしく、自身より懸賞金が上であるガスパーデを相手に恐れていない風だ。

相手にとって不足なし、といったところか。
驚きの声を発する部下たちへ振り返る彼はひどく上機嫌だ。
やっと巡ってきたチャンス、楽しまないという選択はあり得ない。
決して大きくはない声で命令を下し、耳にした部下たちが慌てて動き出した。
「総員戦闘準備。相手をしてやれ」
雄々しく吠えて準備を始める一同を見た後、視線は再び前方の船へ。
すでに甲板にはロー以外の面子が立っていた。
だがそれ以上に気になったのは、ゆっくりとローが左手を上げたこと。何でもない動きだが妙に気にかかる。ガスパーデは笑みを消してじっとその様を見ていた。
「ＲＯＯＭ」
甲板へ向けられた掌から異様な物が現れる。彼を起点に広がったのは巨大なサークルだ。
青い半透明の膜で半月状。
ローを中心におよそ半径百メートル。
ハートの海賊団の船、潜水艦ポーラータング号とサラマンダー号を包み込み、全く未知の空間がその場に姿を現していた。
おそらくは悪魔の実の能力なのだろう。
冷静に辺りを窺ったガスパーデは対処しようとせず眺めていた。
余裕の表れでもあったらしい。
まだその意味を理解できていなかった様子だ。
サークルを広げた後、緩慢な動作でローが刀を抜く。
身の丈ほどもある規格外の長刀、〝鬼哭（きこく）〟である。
抜き放たれた刀身は異様な雰囲気を纏っており、いわゆる妖刀と呼ばれる一品、見る者が見れば一目で気付く危険さがあった。
抜きはしたが敵船までは距離があって、どれだけ長かろうが届くはずもない。
それを理解した上でローは刀を振るった。
そしてガスパーデが驚愕する。

刃が届かない距離であったはずだが、スパンと軽々船体が両断されたのである。
サラマンダー号は真っ二つに切り裂かれて、それどころか海まで割れていた。縦に割られた船体は凄まじい音を立てて海に呑み込まれていき、轟沈してしまう。
辛うじて片側、ポーラータング号から見て左側はまだ沈んではいない。
しかしそこもまた青いサークルの内側であった。
刀を振り抜いた姿勢で静止し、船が壊れたことを確認してから鞘に納める。
背筋を伸ばしたローは冷たい眼差しでサラマンダー号を見ていた。その隣にはキリの姿があり、後方にはハートの海賊団の仲間たちがずらりと並ぶ。
「変な能力だね。ずいぶん派手にやったもんだ」
「おまえも人のことは言えねぇだろ」
へらりと笑うキリにローが答え、やけに気の無い声だった。
その後キリが背後を振り返る。
「シャチ、ペンギン、アレは？」
「おう、持って来たぜ。小麦粉」
「しっかしこんなもんで勝てるのかねぇ」
「情報通りならね。試してみるさ」
帽子を被った二人の青年、シャチとペンギンは大きな袋を運んで地面に置き、あらかじめ頼んで用意してもらった物のようだ。それを見たキリは満足そうに頷く。
一方で沈みかけているサラマンダー号の上では、ガスパーデの怒号が響き渡っていた。
辛くも海に落ちることを免れた彼だが、船が壊れては航海を続けるのは不可能。突然の事態が呑み込めない様子で喚いており、部下の大半が海へ落ちた甲板を見渡していた。
「クソっ、何があったァ！　誰か報告しやがれ！」
返ってくる声は一つもなく、代わりにそこら中で悲鳴が上がってい

る。
海に落ちた者たちが多いようで、辛うじて船の各所に掴まっていた男たちも、傾きが増していけば耐えられなくなって落ちていった。
かつてガスパーデの船にこれほどの危機があった経験はない。
部下たちは当然、今や船長でさえ狼狽し、冷や汗を掻いて顔色が変わっていた。
たった一瞬、訳が分からない間に終わってしまった。
彼らのレースはここで終わりだろう。もう一歩も前に進めなくなったのだ。
愕然として辺りを見回し、真横を向いてしまった船体でなんとか足場を見つけてよじ登り、冷静な思考を取り戻す前に気配を感じた。不意にそちらへ目を向ける。
いつの間にか、彼を見下ろす位置にその二人が立っていた。
ローとキリの二人が冷徹にガスパーデの姿を見据えていたのである。
「やはりてめぇらか……！」
「準備はいいか？」
「いつでもどうぞ」
憎らしげな叫びを受け流して、二人は互いに視線を交わした。
直後、ほぼ同時に能力を使用する。
「ＲＯＯＭ」
「またこれかッ」
一度は消えたはずのサークルが再び広げられる。
ローを中心として、傾いた船体の全てが包み込まれた。
時間にして一秒足らず。凄まじい速度で逃げ出す暇もない。すでにガスパーデの身はローが支配する空間の中にあり、その場に居る危険性をまだ正しくは理解できずにいた。
サークルが展開されると同じ瞬間、両手を広げたキリが空へ紙を飛ばしていた。
数枚の紙片が絡み合いながら飛んでいく様はあまりに奇妙。それらは手を触れずとも独りでに形を変えていき、気付けば折り鶴になっ

ている。
空に浮かんだ折り鶴は数え切れぬほど。
一つ一つは小さいが、辺りを取り囲んだ光景は恐怖するに値する物だ。
「百式武装〝千羽鶴〟」
辺りを取り囲む折り鶴を見てローがわずかに鼻を鳴らす。
対照的にガスパーデは信じられない物を見たという表情となり、辺りをきょろきょろ見回す。見るからに動揺した姿であった。
「なんだこりゃあ。一体何をおっぱじめようってんだ？」
「もう想像はできてるでしょ」
微笑むキリが右手の指を振ると、その動きに応じて滞空していた折り鶴が動き出した。
翼を広げて空を飛ぶ様はまさしく鳥その物。
その内三羽が速度を上げてガスパーデへ飛来した。
たかが紙だ。避ける必要はないと判断する。
ガスパーデの顔面と首筋、胸に三羽の折り鶴が強く激突する。しかし彼は呻きもせずに突っ立ったまま、まるでダメージを受けていなかった。衝突の影響で肉体が変化していたのである。
肌もその下にある筋肉も、瞬時に緑色で粘度の高い液体に変化した。
まるでスライムにも似た感触と外見。ぶつかった紙は硬度を失くしてひらりと落ちて、彼自身は勝ち誇る様子でにやりと笑っていた。
物理的な衝撃は全て奇妙な肉体に受け流されてしまったらしい。
ガスパーデもまた、悪魔の実を食べた男である。
アメアメの実を食べた水飴人間。彼の肉体は全て水飴で出来ており、ただ物体がぶつかった程度では痛みを感じることもなく、受け流してしまう。打撃や斬撃もまた然り、だ。
その特性を武器とするガスパーデは敢えて避けなかったのである。
一時は動揺もしたが、よく考えれば自身に攻撃を当てられる人間など居ない。そう思い直した彼は即座に冷静さを取り戻した。浮かぶ笑みには余裕も戻ってくる。

船は壊れてしまい、足場も悪く、敵は二人。しかしそれがどうしたというのか。
佇まいを直したガスパーデは足元に落ちた折り鶴を踏みつける。
奇妙ではあるがただの紙。恐れることはない。
「フン、無駄だ。そんな攻撃じゃおれには通用しない」
「どうかな」
不敵に笑って意にも介さず、さらにキリが指を振る。
再びいくつかの折り鶴がガスパーデへ殺到し、彼自身は冷めた目をしてそれを眺めた。
腕に、脚に、背に当たるがやはりダメージはない様子。当たった部分が水飴に変化して、一時は抉れるもののすぐに元通りの形に直る。
ガスパーデは勝ち誇り、次の折り鶴が迫っても動こうとはせず。
しかし今度もまた全く同じという訳ではなかった。
右手を掲げ、三本だけ指を伸ばしたローが小さく呟いたのである。
「シャンブルズ」
死角を狙ってガスパーデの脳天へ突進する折り鶴があった。奇妙な光景があったのはそこだ。
衝突まであと数センチという距離、突如その折り鶴が消えてしまい、代わりにキリの足元に置かれていた大きな袋が現れる。まるで位置が入れ替わったかのように、気付けばキリの足元にはそこになかったはずの折り鶴があった。
ガスパーデが気付き、見上げた時にはすでに遅く。
別の折り鶴が袋を突き破り、中に詰まっていた小麦粉が辺りへばら撒かれた。
真下に居たのだからガスパーデが頭からかぶるのは当然。
相当の量だったようで全身が白く染められてしまう。
落ちてくる粉に器官をやられ、咳き込んでもいた。だが目立った変化はそれだけだ。相変わらずダメージはない。苛立ちを露わにする目は二人を捉える。
「つまらねぇ真似を……てめぇらの能力か？　これでやれる気だったのかよ」

何も答えずキリが歩を進める。
周囲の折り鶴は使わずに、懐から取り出した新たな紙で武器を作った。右手に持つのは何の変哲もない棒。槍ですらなく、刃を持たない殴打のための物質だ。
くるりと手の中で回し、独りでに動く折り鶴の上に足を置き、足場とする。
笑みを浮かべて余裕を感じさせていた。彼は悠々と歩いてくるのである。
「多分刃物で切るより面を叩いた方がいいよね。特にその小麦粉が付着した部分」
「あぁ？」
「攻撃、効かないんだよね。試させてもらっていいかな」
「ハッ、馬鹿馬鹿しい。まだ理解できちゃいねぇのか。殴れんもんなら殴ってみろ」
折り鶴を蹴り、軽く跳んでキリがガスパーデへ襲い掛かる。
紙製とはいえ振り上げられた棍棒は鉄のように硬い。それを知らぬだろうガスパーデは避ける素振りを見せず、勝ち誇った笑みで迎え撃つつもりだった。
そして、強かに左頬が殴られた。
高速で振り切られた棍棒が確実に彼の肉体を捉え、衝撃で体が浮いてしまう。
想定外の状況だった。殴り飛ばされた体は為す術もなく甲板を滑り、鋭い痛みが顔にあって、しばし驚愕から動けなくなる。そのせいで海から落ちそうにもなったのだ。
マストに激突したことでその体は止まった。
海に落ちずに済んだのだが、そんなことさえどうでもいいのか、顔を上げたガスパーデは驚きを隠せぬ顔でキリを見やり、笑みを湛える彼に背筋を震わせた。
何が起こったのか理解できない。その体は肉弾戦において絶対の強さを誇り、実を食べてから痛みを感じたことは一度もなかった。カナヅチになったことは弱点として認識しているものの、言わばそれだ

け。戦闘における弱点は一つもないと認識していたというのに。
なのに、彼は。
出会ったばかりのキリは早くもガスパーデに痛みを感じさせていた。
何年振りかに感じた痛みで心が荒れる。
大した敵だと思わなかったキリの姿に恐怖してすらいた。
長年最強であった彼は、敗北を知らない。それだけに自分を脅かす存在と対面した状況を知らぬままだったようで、今この時がまさにその瞬間であったらしい。
ただ突っ立っているだけのキリが、なぜか恐ろしい存在に見えていた。
「物によって違えど、悪魔の実の能力には弱点がある。カナヅチになること以外にもね。アメアメの実の場合、それが小麦粉だ。固めてしまえば攻撃を受け流せない」
「なんだと……!?」
「情報は命を握る物だよ。能力をひけらかすべきじゃなかったね」
慢心が生んだ結果か、確かにガスパーデは自身の能力を隠すようなことはなかった。
敵の攻撃を正面から受け、驚く顔を見て気分を良くする癖がある。
勝ち誇り、力を誇示し、圧倒的な力で打ち負かす性質にあった。
そのため自らの保身を考えず、勝利を求めながら自身が考えたゲームを行うことも少なくない。
〝将軍〟ガスパーデの名が広がる度、無条件で彼らに降伏する敵も増えていった。その度に〝将軍〟の噂は世間を駆け巡り、その能力、異常性、強さは知れ渡ったのである。
その結末がどうなるかを考えることもなく、ガスパーデの快進撃は続いたのだった。
食べた実の名前がわかっていれば対策も立てやすい。
今や敵に勝ち誇る隙も与えず、キリの目は冷徹にガスパーデを見つめていた。
「悪いけど君を脅威とは感じない。さっさと終わらせよう」

「たった一発で、もう勝ったつもりか！　舐めるなァ！」
激昂したガスパーデが迷わず走り出した。
アメアメの能力を使い、右腕は飴状に変質して鋭く尖り、硬化して槍のようになった。
素早く近付いて刺し貫くだけ。今まで何度も繰り返してきた動作だ。決して負けるような相手ではないと考え直し、正面から真っ直ぐに接近する。
キリはゆっくり歩いて迎え撃つ。
足取りは穏やかで、全く緊張感のない姿だ。
腕が届きそうになる距離になると、ガスパーデが腕に力を込めた瞬間、棍棒を右手に持ってキリが左手を振るった。指を伸ばし、何かを指揮するように。
空を駆ける折り鶴がガスパーデへ殺到する。
狙い澄ました様子で地面に着こうとした足に当たり、その後も肩、腰、側頭に激突して、横から来る衝撃で体勢が崩れたのだ。彼はそのまま転びかけ、その姿を見てから棍棒が振るわれる。
転びかけたところに、顎への一撃。
下から掬い上げる軌道の攻撃は的確に脳を揺らした。
凄まじい衝撃を受けたガスパーデは受け身も取れずに転び、無様に地面を這いつくばる。
「ぐおぉ、おおっ……!?」
「寝てていいの？」
素っ気なく告げてさらに追撃。
倒れた彼の体を数度打ち、胸に、腹に、腰に、再び顎に激痛が走る。
耐え切れずに自ら転がって逃げ出し、ガスパーデは慌てて彼の傍を離れた。
久々に味わう激痛が体を驚かせている。当たった部位もそうだが体から力が抜け、視界が揺れて異様な景色を目の当たりにしている。今まで見たことのない世界だ。
立ち上がろうとするが力が入らず、しゃがみ込んでしまう。
攻撃は確実に当たっていた。もはや一撃たりとも受け流せていな

い。
脂汗を流す彼は自身の体を操れなくなっているのか、しゃがみ込んだまましばし動けず、能力を使って体を水飴にすることさえ難しかった。
尚もキリは歩を進め、膝をついて動かないガスパーデへ迫る。
「能力に頼ってるからそうなるんだ。もっと自分を鍛えるべきだったね」
「ぐっ……！　ガキが、舐めた口を叩きやがって――」
苛立つガスパーデの声も空しく、キリは表情を変えない。
その姿に腹を立てて唐突に叫び出した。
「ニードルスゥ！　てめぇいつまで黙ってるつもりだ！　さっさとこいつらを始末しろ！」
ガスパーデが叫ぶと同時、どこに隠れていたのか、唐突に姿を現したニードルスが猛然とキリへ襲い掛かった。両手には武器を持ち、狙いは首。一瞬の決着を望んでいる。
だが彼の実力が発揮されることは終ぞなく。
宙へ躍り出たニードルスの体は、サラマンダー号と同じく真っ二つに両断された。
「なにっ!?」
声を出したのはガスパーデで、ニードルスの姿に呆然とする。
上半身と下半身が分かたれていた。
見ればローが刀を抜いており、彼が斬ったのだろうと予測する。それにしても異質な光景だ。体が分かれたのに血が出ていない。切断面を見ても彼の体内を窺うことはできず闇に包まれている。
甲板へ落ちたニードルスはまだ生きていて、彼自身も驚愕していたようだ。
何から何まで奇妙な能力だ。
ローは再び刀を納め、あくまで手を出さずに傍観する姿勢。
だがこの時ガスパーデは勝機を見出していた。
ローがニードルスを斬る一瞬を見ていて、いつの間にかキリが背を向けている。ガスパーデに無防備な背を見せ、警戒していないのか身

構えてすらいない。
これ幸いと彼の顔に笑みが戻る。
顎を打たれた影響でダメージは大きいが、なんとか腕を変化させることはできた。
槍の穂先のように鋭く尖らせ、硬化し、突き刺すための武器を作る。
彼は走り出し、今度こそ逃げられないよう全力でキリの背へと襲い掛かった。
「死ねェ！」
その瞬間、キリの姿がパッと消え、代わりにその場には折り鶴が現れる。
気付けばキリは背後に居て、すでに棍棒を構えていた。
ガスパーデが振り返った時には頬を打たれる。凄まじい衝撃に歯が折れて口の中から飛び、鼻血が飛び出して地面へ倒れた。
今度は動きを止めることはなく、即座に起き上がって敵へ向かう。
立ち尽くして動かないキリを仕留めようと腕を伸ばした。
今度こそ仕留める、そう決めていたが先程見た光景だ。
伸ばされた右腕は折り鶴を一つ貫いただけで、またもキリの姿はなく。
驚く暇も与えず右側から腹を殴られ、気付けば棍棒が振り抜かれた後だった。
耐え切れずに背中から倒れ込む。もはや足が震え、体勢を立て直すことすら難しい。それでも死力を尽くすガスパーデは立ち上がって駆け出した。
こうなれば意地だ。自身の生命や勝敗より、単純に負けたくないという意志が強くなっていた。
腕を振るって体を両断してやろうとする。
当たれば仕留められるはず。それでもやはりキリの姿は忽然と消えて折り鶴だけが残された。
今度は背後から、脳天に棍棒が落とされて激突した。
全身にビリビリと走る電撃のような衝撃。死すら近く感じる一瞬だった。

力が抜けて意識せず膝から崩れ落ち、うつ伏せになって倒れる。
命の危険を感じて、急所への攻撃は着実に彼の動きを封じているに違いない。
倒れたままでガスパーデの目はキリを睨みつける。
冷たい視線を向けられ、侮辱と感じてさらに怒りが燃え上がった。
「て、めぇ……ふざけた、真似を」
力のない声にも反応はない。キリは冷淡に見つめるのみ。
必死に全身へ力を込め、腕を突っ張って起き上がった。
立ち上がるのには相当の力が必要だったが、まだ諦めるつもりはない。船は壊れ、部下は海へ落ちていき、自身の右腕たる人物はあっさり両断された。それでもまだ負けは認めない。
最後の力を振り絞ったガスパーデは全身の皮膚を水飴に変え、鋭利な棘を作り出した。
「ガキどもに負けるおれじゃねぇんだ！　殴れるもんなら殴ってみろォ！」
それは全身が武器となった姿。ただの体当たりに強い攻撃力を持つだろう。
駆け出したガスパーデは最後の特攻を行おうとする。
対するキリは棍棒を捨て、バラケた紙は彼の手を離れて辺りへ広がった。
前方から向かってくる無数の紙に、視界が阻害されるがどうでもいい。
ガスパーデは愚直にも一直線に走り続けた。
「オオオオォッ!!」
硬化した全身にダメージを与えられるものか。
そんな自負から鉄のように硬い紙の棍棒にも耐えられる自信があった。今となっては誰も自身に傷をつけることはできず、痛みを与えることはできないと。
妄信的な自信を頼りに速度を速め、彼は飛んでくる紙を跳ね除けてその先へ出た。
視界が開け、人物が見える。しかし居たのはキリではない。

前方に立っていたのはローであり、キリはさっきまでローが立っていた位置に居た。
一瞬の驚愕が二人のやり取りを変える。
素早く刀を抜いたローはおもむろに地面を蹴り、ガスパーデへ襲い掛かる。そして動揺と逡巡がこれに反応する動きを阻害し、回避の行動は奪われていた。
「ラジオナイフ！」
「ぐおおおおぉっ!?」
素早く数度の斬撃を繰り出し、硬化されたガスパーデの体がいくつかのパーツに切り裂かれた。
切り取られた断面図は緑色の水飴。血は流れず、そこから水飴が流れ出すこともない。だが異様だったのは、本来流動体となるはずのその体が、己の意志で接合できないこと。
バラバラになって地面を転がり、痛みを感じることなく動けなくなる。
まだ死んではいない。痛くもない。
一方で敗北が決まった瞬間だと自覚していた。
悔しげなガスパーデの前で、これ見よがしにローが刀を振り上げた。
「無駄だ。ラジオナイフは切断（アンピュテート）とは切り口が違う。たとえおまえが能力者でも、数分の間は如何なる処置でも接合することはできない」
「ば、バカな……！」
「こんなもんか。海賊の将軍とやらは」
縦に真っ直ぐ振り下ろし、刀身は届いていないものの、そこはサークルの内部。ローの動きによりガスパーデの顔が真っ二つに切り裂かれた。それで死ぬことはないし、本人は痛みさえ感じていないが、口も舌も喉も二つに分けられてしまったため、それ以上はしゃべれなくなったらしい。
死んでいないものの死体のような様相で、バラバラになったガスパーデが転がされたまま。

今度こそローは刀を納めた。
感慨はない。大した相手だと想わなかったからだ。
事前にキリが情報を集め、弱点を知っていたからとも言える。
今回はそれに加え、互いの能力による連携も効果があり、存外相性が良いことを知った。
ローの能力はサークルを生み出し、内部にある物を操作することに強みがある。
ガスパーデを翻弄した、位置の入れ替えはその一つに過ぎない。はっきり言って彼の能力の真価は別の部分にあるとはいえ、大量の紙を操り、如何なる場所にも移動できるようサポートするキリが居れば普段以上の有力性が発揮されるのだろう。
恐るべきは、船内で語った折、ただそれだけで勝機を見出した部分にある。
まだ彼を信用していないローは敢えて手の内を隠した。彼の能力が持つ特性はまだ他の部分にあると言っていい。だがキリはそれ以上を望まず、深追いしようとしなかった。
位置の入れ替え自体は回避と奇襲にしか使えないため、最も秀でた力とは言えない。
それでも彼のペラペラの実と連携した時、常に敵の死角を突くことができるのに感心した。おそらく話を聞いただけで理解したのだろう。自身が手を貸せば更なる強みになり得ると。
表情こそ緩んでいるが頭は回るようだ。
自身の力もあったとはいえ、少なくともローが見るキリの姿は些か変化していた。
動けないガスパーデから目を離し、ローは先程まで自分が居た場所、キリを見上げる。
何を見るのか、彼が居る方向は眺めず少し驚いた様子。
ローに目をやった時、キリは沈みゆくサラマンダー号の足元を指差した。
「ねぇロー、あれ」
「あ？」

示された方向に目を向ければ、海面を泳ぐ老人が居た。泳ぐ人間だけなら先に落ちた海賊たちも居るのだが、その中で明らかに異質。体中に浮き輪をつけて必死な形相をしている。
船が破壊された折、ボイラー室から外へ放り出されたビエラだ。
年齢や外見からしても海賊ではないだろう。それくらいは一目で理解できる。
その異質さに注目したキリがローへ提案した。
「海賊じゃなさそうだし、せっかくなら助けてあげようか」
「本気か？　関係のねぇ人間だろう」
「チャンスがあれば恩を売っといた方がいいよ。どこで恩返しがあるかわからないから」
「フン……」
そう言って彼は空に広がっていた折り鶴を能力で回収し、船の下部へ向かっていく。
気付いたガスパーデの部下が慌てて逃げ出すも彼らには興味がない様子だ。
自身が最も海を苦手としていながら、全く恐れずにビエラの下を目指す。
その姿を見てローは嘆息した。
正義や悪ではない。まだ彼を図り切れずにいた。
少なくとも今すぐ理解した気になっていい相手でないことはわかる。
用心しなければならない人間であることは理解した。今はそれだけでいい。
彼が敵になる事態があれば、或いは最も警戒しなければならない人物かもしれない。
帽子を押さえて俯いた彼は沈んでいく船の上、鋭い視線でキリの背を眺めていた。

パルティア

パルティアという島の港に、大きな焚火が設けられていた。
燃やすのは壊した家々を支えていた柱。そこら中に散らばった木材。どうせもう使えないだろうと積み重ね、闇夜を照らす明かりにしていた。
火は時間を増すごとに大きくなり、遠目から島を見ても一際目立つ様相だ。
大きな火の前に座るのはユースタス・〝キャプテン〟・キッドである。
その辺に転がっていた樽を椅子にして、腕を組んで一心に海を眺めていた。
しばらく退屈そうにしていたものの、ある時、にやりと頬が持ち上がる。
暗い海の向こうから一隻だけ船がやってくる。
待ち焦がれた存在と言っていい。普通の帆船とは違った明かりが灯されており、ゆっくり港へ近付いてくる様が窺えた。彼らが到着して初めての光景だ。
喜ぶキッドが立ち上がる。
「ようやくお出ましか。ずいぶん時間がかかったもんだ」
「沖合で戦闘があったようだ。ここからではあまり見えなかったが」
「誰でもいいさ。ちっとは楽しませてくれるんだろうな」
傍らに立つキラーが補足するかの如く呟き、キッドはひどく上機嫌そうに返す。
好戦的な彼はすでに細かなことなどどうでもいいらしい。
そうだと判断するキラーは頭を振って嘆息した。
「あのマークは誰だ？」
「死の外科医、トラファルガー・ローだろう。ノースブルーで名を上げた海賊だ」
「酒場に居た野郎か。まぁ、少しは楽しめるだろ」

「あまりやり過ぎるなよキッド。ただでさえ補給が面倒になった」
「相手の出方による。それなりの腕がありゃ保証はできねぇな」
ハートの海賊団の船、ポーラータング号は港へ辿り着いて足を止めた。
動きが完全に止まってしばらく。
船内から続く扉が開き、中から人が出てきた。
甲板に立ったのはトラファルガー・ローだ。
その姿を目にしてすぐキッドはそっと腕組みを解く。
仲間たちは遅れて彼だけが先に港へ立つ。
歩き出すキッドも仲間たちの傍を離れ、一人だけで前へ立ち、拳を握って意志は明確。笑みを湛えたまま道を塞げば、ローも鋭い眼差しで睨み返した。
どうやらすでに目的は伝わっているらしい。
武器を手にするローを眺め、先にキッドが口を開いた。
「遅かったな。待ちくたびれたぜ」
「ユースタス屋……おまえがやったのか？」
「なぁに、腑抜けたバカどもを少し撫でてやっただけさ。海賊がルールを強いる時代がいつやってきた？　違反だなんだと騒がしいんで、あるべき姿を思い出させてやったまでよ」
ローの呟きは町を眺めての感想だったようだ。
崩壊した町を見て、その光景を背負うキッドは両腕を広げて堂々と語る。
「海賊は力の象徴だ。勝者だけが自由を謳歌するルール無用の世界で生きてる。くだらねぇレースに牙を抜かれた元海賊、この島の全てがおれを苛立たせる」
「それでこの有様か」
「元々こいつらが知らなかったはずもねぇ。てめぇが過去にやってたことだ。散々てめぇが大暴れしといて、隠居した後でルールに従えとは、ふざけたことを言いやがる。落ちぶれた人間ってのは哀れなもんだな」
「フッ、おまえも相当のバカだがな。それで？　賞金を奪ったおま

えがなぜここに居る」
ローの問いかけにキッドが笑みを深める。
後方に居る仲間たちの足元には金属製の鞄が三つ。賞金の三億ベリーだろう。
視線でそれを確認した彼はローに目をやり、雄々しく答える。
「こいつは賞金なんかじゃねぇ。ただの金だ。奪った奴に使う権利がある」
「ならおまえが使えばいい。権利はおまえにある」
「それじゃつまらねぇんだよ」
キッドはさらに朗々と語る。
「レースにゃ興味がなかったがいいふるい落としにはなる。あのガスパーデの妨害を受けて尚この島に辿り着く連中は、将来性のある野郎だ。腕っぷしも立つはず。おれの目的は最初からそいつらだけだった。金なんざさほど興味もねぇ」
「力の誇示か？　つまらねぇ理由だ」
「いいや、ただ強ぇ奴を叩きのめしたかっただけだ。グランドラインのレベルを知るには持って来いだろ？　これは祭りなんだ。騒がねぇと気分が悪ぃ」
「どちらにしても単純だな。まぁ、理解してやっても構わねぇが」
「おまえも金に目が眩んだ口だろ。だが手に入れたきゃおれに勝つしかねぇぞ。さぁどうする」
すでに戦闘態勢に入っているキッドは今か今かとその時を待っていた。心構えと準備はできているため、奇襲があっても即座に反応できる体勢にはある。
対してローはいまだに考えていた。
金はあれば便利だが心底欲しいかと言われればそうでもない。正直なところ、この場において戦う理由が見つからないらしく、ともすれば面倒そうにも見える。
ならばやはり気になるのはキッドの態度だ。
「もちろん怖ぇんなら逃げてもいいが」
「ハァ……仕方ねぇな」

頭を振ったローは担いでいた刀の柄を手に持ち、抜く挙動を見せる。
眼光鋭く、闘争心を露わにするキッドを期待させた。
「別に金が必要ってわけじゃねぇが、口の利き方がなってねぇな。気に入らねぇ」
「ハッ、そう来ねぇとな！」
表情は違えど互いに睨み合い、剣呑な空気が漂い始める。
キッドの仲間たちが見守り、いつしかポーラータング号にはローの仲間も姿を現していた。
彼らが見守る中で二人の船長が戦闘の気配に包まれる。
ローが掌を地面へ向け、全く同じタイミングでキッドの周囲に金属が浮遊する。
互いに能力を使っていた。どうやら激突は免れない様子だ。
「行くぞオラァ！」
「ＲＯＯＭ」
青いサークルが展開すると同時、キッドが駆け出す。
すでにローは刀を抜いていて攻撃の準備を終えている。それを物ともせず、一直線に駆けるキッドの動きは素早く、およそ常人とは思えぬ速度で接近してきた。右腕には無数の金属が付着し、鎧を纏うかのように巨大な腕が作り出された状態である。
瞬きさえ許さぬ緊張感。
見る見るうちに距離が詰まり、どちらが先に攻撃を繰り出すか、その一瞬に注目が集まる。
しかし二人の激突は唐突に回避された。
二人の間に投げ込まれた紙で作られた一本の槍。空から降ってくるようにして地面へ突き立てられたことにより、反射的に二人が後ろへ跳んで距離を取る。
そこへキリが降ってきて、着地すると同時に二人を見回して緩く微笑んだ。
「ちょっと待った。血の気多いなぁ、もうちょっと冷静に話そうよ」
「てめぇは――」

「紙使いだな。確か麦わらの右腕だったか」
疑念を口にしたキッドを助けるよう、腕を組んで静観していたキラーが呟く。
ちらりと彼にも視線をやり、動く気配がないことに安堵して、キリは尚も冷静に話しかけた。
「ボクらは賞金いらないよ。君が好きに使えばいい」
「何ィ？」
「レースは君らの優勝だ。だから賞金を使う資格も君にある。それじゃ不満？」
「何を言い出すかと思えば……聞いてなかったのか？　おれは誰のルールにも従わねぇ。レースなんざクソ食らえだ」
「まぁそうだろうね。大人しく言うこと聞くタイプじゃないよ」
「なら話は早ぇだろうが」
「でもそれならボクらが君のルールに従う必要もないしさ。勝手にそう言われても困る」
「あぁ？」
ぶつけられる怒気をさらりと受け流し、微笑みを絶やさずキリは肩をすくめる。
通常、キッドに怒りをぶつけられて平常心を保てる人間など居ないはずだが、彼は事も無げに受け流して今もその場に立っており、怯える様子は微塵も見せなかった。
これだけでもキラーは感心した声を出す。
少なくとも口だけの弱者ではない。一目で看破するには十分な姿だった。
言外に、というより割かしはっきりと、おまえには従わないと言っているのだ。
これを聞いて短気なキッドが黙っていられるはずもなく、戦闘を求めていたこともあり、金属の腕が強く拳を握るのも不思議ではない。
「なるほど。つまりてめぇは敵の前で逃げ出す腰抜けってことか」
「そっちの方がイライラするんでしょ？　だったら逃げる価値はあるかと思って」

「減らず口だけは得意らしいな。いいぜ、逃げられるもんなら逃げてみろ。その代わり背中を狙われても文句は言えねぇぞ」
「ふむ、それは困るね。じゃあこうしよう。逃げなきゃいいんだ」
「そりゃおれとやり合うって意味か？」
「戦わないよ。逃げないだけ」
「てめぇイカレてんのか？　それともただのバカか？」
「どっちでもいいかな。勝手に決めといて。どうせ戦わないし」
「てめぇ……！」
「あれ？　イライラしてる？　あんまりストレス溜めない方がいいよ。発散するなら運動とかいいんじゃないかな。水泳とか……は無理か、能力者だから」
見るからにやる気のない表情と態度、そして声色。
目にするキリの全てに腹が立ち、キッドの形相はますます恐ろしくなっていく。こうなればいつ襲い掛かってもおかしくはなかった。
しかし一方でキラーは冷静に彼を見ることができていたようだ。
感心するのはよくキッドを理解しているという一点である。
実力こそ一流の彼を倒すのは難しいが、平静を崩すことに関してはさほど難しくない。右腕として最も近い位置で支えるキラーのお墨付きだ。気性が荒く短気な彼は怒りの沸点も低いため、簡単な挑発でも比較的効果が出やすい。
とはいえそれは諸刃の剣でもある。
一度怒りに我を忘れてしまえば、今回のように島ごと敵を殲滅することも厭わない危険性があることで知られているのだ。自ら怒らせようという人間が居ないのもまた事実。
キラーがキリに対し「上手い」と思うのは、キッドが暴れぬようやる気を削いでいる部分だ。
独特の口調に怒りが増しているものの、その実戦わないことを明言しており、事実彼は急に襲われても抵抗しない。それは見ていてわかる。そしてそれは今この場において、キッドが最も望んでいなかった展開だろう。
強者との戦いを求めていた者の闘志を避けるのはいっそ残酷とも

言える。
だがキリが望む通り、怒りながらもキッドは攻撃の手を出そうとしなかった。
彼の思考回路を考えた時、そんな相手こそ自らの力で、正面から打ちのめして勝ちたいはず。しかしこの場でそれができないと言うのなら考えることは一つ。
キラーは想像する。キリが次に吐き出す言葉は一つしかなかった。
「心配しなくても先は長い。決着はいずれつけるさ」
やはりそうだ、と仮面の下でほくそ笑む。
この場では戦わない。だがいずれ戦うと宣言しておけば、すぐに動き出さなかったキッドは必ず乗ってくる。無抵抗のままで打ちのめしたくはないからだ。
普段がどうであれ、少なくともキリだけは違う。
ふざけた態度の彼だけは正面からぶつかった上で倒したいと思うはずだった。
「いずれだと？　ふざけるなッ。おれは今ここで、てめぇをぶっ潰してぇんだよ」
「ウチの船長は海賊王になる男だ。いずれこの海の王になる」
その一言を聞いてキッドの眉が大きく動いた。
とどめとばかりにキリが畳みかける。
「今すぐここで決めなくても、どうしたってどこかでぶつかるさ。だから焦るだけ無駄。お互いそう簡単に潰れるようなタマでもなさそうだしね」
「ふざけた野郎だ。その名を口にするってこたァ覚悟はできてんだろうな？」
「もちろん。むしろそっちこそ準備はいいのかな？」
「ほざけ」
キッドの雰囲気が変わった。
全身から発するような怒気が鳴りを潜め、冷静さが戻ってくる。
最終的な目的を思い出したことで考えを改めたらしい。声色も落ち着いてきた。

短気である一面を持ちながら、冷静にさえなれば彼は頭を使える人間だ。考える機会さえあればそう猪突猛進に進む人物ではない。考え直すこともできただろう。
ようやく状況が動きそうだ。
静観するキラーは口を挟もうとせず、静かに成り行きを見守る。
わずかだが笑みを浮かべたキッドは右腕に纏っていた金属を全て地面に落とした。
能力の使用をやめたのである。つまりそれは戦闘の中止を意味していた。
「やめだ。そこまで言うなら試してやる。てめぇらがこの先生き残れるかどうかをな」
「助かるよ」
「いずれだ。必ず白黒はっきりさせる。その時までせいぜい死なねぇようにするんだな」
そう言ってキッドは背を向けた。
歩き出す直前、思い出したように口を開く。
「それともう一つ」
「何？」
素早く振り向いて自身のベルトからナイフを抜き、勢いを利用して投げつけた。真っ直ぐ飛来した刃はキリへ迫る。彼は慌てず、指先に紙を挟んで硬化し、それを弾いた。
腕の振り、能力の使用、突然の攻撃に対する反射速度。
どれを取っても勝負から逃げ出さなければならない実力ではないと思う。ならばやはり彼は怖くて逃げ出す訳ではない、別の理由から次に持ち越そうと言うだけだ。
不敵に笑うキッドは改めてキリへ言った。
「てめぇはおれが仕留める。麦わらにもそう言っとけ」
「うん、わかった。覚えてればね」
少年のようににこりと笑う様には腹も立つが、だからこそわかった気もする。
再び歩き出したキッドはもう振り返ろうとはしなかった。

ふと気になったキリが問いかけても背を向けたまま答えるのである。
「賞金は？」
「いらねぇ。好きにしろ」
「意外と心が広いんだね。どうも」
軽々しく礼を言うも、聞き入れることなく去ってしまう。
キッドの後ろにはすぐ仲間たちが続いた。一度歩き出せば振り返ろうとはしない。賞金が入っているであろう鞄を置いたまま、その姿は遠ざかっていく。
唯一キラーだけは違っていた。
彼はキリに顔を向けて、静かに問いかける。
「ウチの船長、と言ったな。それは麦わらか？　それとも今おまえの後ろに居る男か？」
「さぁね。どっちだろ」
「他所の船に乗っている理由がわからないな。何か考えがあってのことだろう」
「どうしてそう思うのかな」
「そんな人間に見えたのでな。理由はただそれだけだ」
キリは明確な答えを出そうとしなかった。嫌な予感、とでもいうのか。キッドと向かい合った時よりもキラーを相手にした時の方が居心地が悪い。
そうと知ってか、先にキラーから視線を外す。
はぐらかして答えようとしない。彼にとっては、それだけで答えを得られた気がした。
三つある内の鞄を一つだけ持ち上げ、キラーがちらりとキリを見る。
表情がわからないとはいえ、友好的であり、同時に敵対する意思を感じる不思議な情感。
「キッドはああ言うが、一つだけもらっていこう。おれたちにも航海の資金は必要だ」
「どうぞどうぞ。全部取るほどがめつくないから」

「残りはおまえたちで分配してくれ。ではな」
簡潔に告げてキラーも歩き去る。
颯爽と離れていって彼らは船に戻り、直に出航するだろう。別れ際はあっさりしたものである。
ひとまず戦闘の可能性はゼロになった。
ローが首を動かして指示すると、一足先に動き出したシャチとペンギンが小走りで進み、放置されたままの鞄へ駆け寄る。どうやら中身を確認しろとの命令だったようだ。
それを見てからキリも歩き出して、地面に刺さったままだった自身の武器を回収する。
紙に戻し、服の下へ隠せばいつも通りの姿になった。
足を止めたキリの傍にはローが歩み寄って、神妙な面持ちで声がかけられる。
「紙屋」
振り向けば真剣な眼差しがあり、しかしそこには警戒心も感じられて、決して信用し切った様子ではないとわかる表情がある。それをキリは当然の物として受け止めた。
すぐに信用する手合いではない。反応は想像していた通りだ。
「おまえが使える人間だってことは理解した。契約の件は頷いておこう」
「ありがと。嬉しいよ」
「だがとりあえずだ。使えないとわかったその時は――」
「わかってる。そうならないように気をつけるさ」
月明りに照らされた港で、静かな問いかけだった。
頷くキリにローが視線を逸らし、わずかに俯いて笑みを深める。
良い拾い物をした。
それが素直な感想である。
全幅の信頼を置くには早いが、利害が一致している限りは期待できそうな人物に思えた。ひとまず手を組むことは決まり、あとは期待外れでないことを願うばかり。
二人がやり取りを終える頃にシャチとペンギンが揃って声を出し

た。鞄の中身を確認して何やら嬉しそうな様子だ。おそらく中身は賞金に間違いなかったのだろう。
向かってくる二人を見て、キリとローは自然に肩を並べる。
「キャプテン、ばっちりっす。一億ずつくらいありますよ」
「一億減っちまったけど、無駄足にならなくてよかったよかった」
「シャチ、それを紙屋に渡せ」
「へ？」
唐突なローの言葉にシャチが首をかしげた。
彼ら二人で一つずつの鞄を持っていたのだが、その内一つをキリに渡すらしい。
同じく疑問を感じたキリがローを見る。視線は合わぬまま、説明するように呟かれた。
「いいの？　一億って大金だよ」
「手を組む以上、おれとおまえに上下関係はない。あくまで立場は対等だ」
「そう。それはありがたい」
「この関係はできるだけ伏せておきたい。誰にも漏らすなよ。麦わらにもだ」
「それが難しそうだけどね。まぁ言い出したのはこっちだし、なんとかするよ」
「問題なのはユースタス屋の一味だが……ぺらぺらしゃべる人間性でもねぇか。今は見逃しておくが問題が起これば始末するぞ。それでいいな」
「手を貸せって？」
「当然だろ。もしくは、おまえらの傘下でもいい」
「そうだね。それとなく説明しよう」
大きく息を吐いて頷くキリだがその顔には苦笑があった。
進み出てくるシャチから鞄を受け取り、ずっしり重いそれを右手に持つ。
「キャプテン気前良いな。よっぽどキリのこと気に入ったんだぜ」
「そうだと嬉しいけど」

「ほんとさ。あれで意外と楽しそうなんだから、期待してるんだって、きっと」
「余計なこと言うなよシャチ。聞こえてる」
「だってほんとのことでしょ？　見ず知らずの人間船に乗せるなんて普段あり得ないし」
「それにキリはいい奴だしなぁ」
上機嫌な様子のシャチが笑い、同意したペンギンもやってきてキリの肩を叩く。
船長とは違って楽しい仲間が多い。
ローの背後に居る、ツナギを着た白熊、ベポも少々変わっているが素直な性格をしている。すぐ落ち込んでしまう難点があっても話していて楽しい存在だった。
流暢に人語を使う熊。異質だが彼も立派な海賊であり、もう疑問は持っていないらしい。
小さく舌打ちするローに苦笑しつつも、気分は悪くない。
その場を去ろうとする面々にキリが笑顔を向けた。
「それじゃ一旦ここで別れよう。だけどみんな、これからよろしく」
「おう、よろしくな～」
「ちゃんと自分の仲間も大事にしろよ」
「キリ、またなぁ～」
シャチやペンギン、ベポも含めたハートの海賊団は口々に彼へ声をかけ、手を振りながら自身の船へ戻っていく。滞在の予定はない。麦わらの一味に出会う前に島を去るつもりだったのだ。
仲間たちが去る中、一人だけ残るローはキリと向き合っていた。
船の中で少しだけ話した。
全てを語った訳ではないのだが、その中でそれとなく伝わり、理解できたことがある。
互いに七武海と面識があって長く時間を共にした。そのために因縁があるところも同じ。この先もグランドラインを航海するのなら必ず乗り越えなければならない壁だ。
同族意識か、奇妙な感覚に囚われている。

仲間ではない。だが他人ではなく、友達ではなく、敵でもない。
自分でも飲み込み難い、初めての関係だった。
考えてもわからず、すぐにやめてしまい、困惑する様子のローが平坦な声で告げる。
「話を持ち掛けたのはおまえだ、途中で降りることは許さねえぞ」
「うん」
「覚悟があるなら十分か。……じゃあな」
「そっちも死なないようにね」
背を向けて去っていくローを見送る。
彼もまたすぐに船へ乗り込み、扉を閉めて、ポーラータング号は再び潜行を開始した。すぐに海中へ潜って見えなくなってしまう。
その後でキリは視線の先、港の先端に居たビエラに視線を向けた。
仲間の一人が降ろしたのだろう。病気であるらしい彼は医者であるローの診察を受け、治療に必要な薬を受け取っていた。今は濡れた服を乾かした後で毛布に包まり、歩くのも億劫そうで座り込んでいる。その顔は些か浮かない表情だ。
彼の下まで歩み寄ったキリは隣へ腰掛け、同じように海を眺める。
月が海の向こうに浮いていて、やけに脳裏へ焼き付く美しさだった。
「一度は死を覚悟したんじゃが、また生き残ってしまった……人生、何が起こるかわからん」
「生きてればいいこともありますよ」
「そうじゃな。わしもそう思って生きとったんじゃが、今は後悔しとるよ。命を投げ打ってでも救うべき命があったんじゃないかとな。老いぼれたわしより生き延びるべき命があった」
「そうですねぇ……」
視線の先を変えず、向こうを見たままぽつりぽつりと。
ビエラの声に力はない。深い後悔と悲しみに囚われ、不安に胸を苛まれていた。
その悲しみから逃れる術を、キリはまだ知らない。
仲間たちが傍に居れば違ったのだろうが、彼もまた寂しさを感じて

いるのかもしれなかった。
しかし、ふと想うことはあって。
足元にある水面を見たキリが微笑む顔で呟く。
「でも、もしそうなったら、助けられた方はどう思うんでしょうね」
「どう思う、とは」
「大事に想って、大事に想われてたんでしょう？　お互いに心配してるならきっと一緒に生きたかったんだと思います。だから、大事な人に庇われて自分だけ助かっても、それじゃ多分喜べないですよ。その人も今のあなたみたいになってたはずです」
「そうかもしれん。じゃが、あの子には未来があった」
「あなたにだってありますよ。だってまだ生きてるんだから」
その言葉を聞いたビエラは両手で顔を覆い、俯く。
小さな嗚咽が聞こえてきて泣いているのかもしれない。気付かぬふりをするキリは視線を上げて遠くを眺め、ひどく穏やかな声で静かに語った。
「諦めなければ希望もある。探しましょうよ。ひょっとしたらただの早とちりかもしれない」
「情けない……わしは、なんて」
「後悔ばかりしてても進めませんから、前を見ましょう。まずはその子を探してみないと結果はわかりませんし。今もどこかで生きてるかもしれないでしょ」
「くっ……そうじゃな。下ばかり見ていても仕方ないか」
目元を腕で拭い、ビエラも前を見る。
微笑むキリはその様子を確認して、気分も晴れやかだ。
「とりあえずボクの仲間に連絡を取ります。みんなが知ってれば楽なんだけどな」
「すまん。何から何まで世話になってばかりじゃな」
「別にいいんですよ。こっちもただ気分で動いてるだけですから」
薬を飲んだとはいえ病気の影響は大きい。
疲弊したビエラをそのままに、立ち上がったキリは町へ振り返った。

悉くを破壊された光景。その町を頼っていいとは思えない。ならば自らが動いて連絡の手段を見つけ、仲間たちをこの地に呼び寄せる必要があった。

ビエラの探し人についても聞かねばならない。

ローの診察の後ではあるものの、まだビエラは医者の手にかからねばならないだろう。果たしてその町の人間は信頼できるか、医者は生きているか、探ってみる必要がある。

どうやらやるべきことは多そうだ。

何から始めた物か、しばし考えた方がいいかもしれない。

そんなことを思いつつ、キリは力の抜けた笑みを浮かべて、脱力して肩をすくめた。

海軍要塞ナバロン編

Ｇｏ　Ｆｏｒ　Ｉｔ

電伝虫が鳴った時、ラウンジにはサンジとシルクの姿があった。
想定では夜通しの航海になると言われている。そのため交代で仮眠を取り、数名が甲板で見張りを続けて、二人は体力を持続させるため夜食を準備している最中だった。
ぷるぷるぷる、と電伝虫の口から発せられる声に気付き、自然な様子でシルクが手を洗う。
反応していたのはサンジも同じだが彼を制止するように動き出していた。
「あ、私出るよ」
「悪ぃシルクちゃん。頼む」
軽い靴音を鳴らして電伝虫の傍へ。
殻の上に乗っている受話器を持ち上げ、口元へ近付けた。
今まで目を閉じていた電伝虫はカッと目を開き、何やら見覚えのある風貌に変わる。通信相手の特徴を捉えて真似をする習性があるからだ。
「もしもし」
《シルク？　こちらキリです、どーぞ》
「キリ？」
その声に応じてシルクが目を見開き、聞こえたサンジも振り返った。
「無事だったんだね。連絡がないから心配してたんだ」
《んん、それは悪かった。そっちは無事？》
「うん。色々あったけど、今は大丈夫。こっちはキリにもらったエターナルポースでゴールに向かってるよ。キリは今どこ？」
《それがさ、もうゴールに着いてるんだ。パルティアっていう島》
あっけらかんと言っているが、中々に信じ難い言葉だ。
彼はすでにゴールへ到着している。

そもそもレースに参加しているかどうかさえ知らなかったのに、その事実だけを聞かされては驚きが隠せなかった。思わず漏れ出た声はキリにも伝わったようで、サンジも料理の手を動かし続けながら些か驚きを隠せず、時折シルクの方を窺っている。
素直に疑問を口にするシルクはキリへ問う。
彼が何をしていたかが知りたかった。
「ゴールって、いつの間に。キリ、何があったの？」
《まぁ色々とね。話すと長いから》
「そう……それじゃ、合流はできそうなの？」
《うん。こっちに来てくれればだけど》
「わかった。今向かってるところだから」
《待ってるよ》
顔が見えないため妙に胸がざわめくものの、声色や口調はいつも通りである。
何から聞けばいいかもわからず、話そうとしなかったこともあって、どうしていいものかわからなくなる。眉間に皺を寄せて少し困惑してしまっていた。
なんとなく聞いてはいけないような。
今までにない感覚に戸惑い、不思議と口を閉ざす自分に気付いた。
思えば、違和感の始まりは海賊島を出る時から。
これまで傍に居たはずの彼だけが一人で船を離れてしまい、行先も航海の方法も告げず去った。
些細なことだが大きな変化には違いない。指示を出す人間が居なくなってしまい、よくよく考えればなぜかゾロも難しい顔をしている瞬間が多く、口数も少なかった。
いつも通りに過ごそうとして、目に見えない何かは確かに変化しそうになっている。
そのことに彼が気付いているかは定かでないが、空白ができそうな一瞬にキリから質問した。
《ところで唐突なんだけどさ、アナグマって子供知らない？》
「え？　どうしてキリが知ってるの？」

《どういうこと？》
「アナグマならメリーに乗ってるよ。ルフィの首を狙いに来たんだって」
《ほんとに？　えっと、外見は……ツナギ着て帽子かぶってるって》
「うん、そうだよ」
《奇跡的だなぁ。一発目で探す手間が省けた》
唐突な質問。それも答えを受けて勝手に納得している。シルクには訳が分からなかった。
そうと気付いたのかキリは説明を始める。
彼が何をしていたのか、ますますわからなくなる瞬間で、それでも自身のことは語ろうとせず、ただアナグマに関する質問についてを語った。
《実はこっちでアナグマのおじいさんを助けてね。悪いんだけど確認のために代わってもらっていいかな。こっちも代わるから》
「ほんと？　おじいさんって、確かガスパーデの船に居たはずじゃ――」
《ガスパーデは倒した。だからゴールに居るんだよ》
言葉を止めてしばし呆然としてしまった。彼がメリー号を離れた理由の一つに、ガスパーデとの戦闘があったということだろう。これで余計にわからなくなった気がする。
なんとか返事を出したシルクは、ひとまず考えるのを後回しにして同意した。
どちらにしろアナグマにとっては良い事だ。
家族を助けたい一心で必死に動いていた以上、その報告は吉報以外の何物でもない。
声を聞けば落ち着くだろうと考えて、笑みを緩めたシルクが肩の力を抜いた。
「うん、わかった。待ってて。すぐに呼んでくる」
《頼むよ》
受話器を傍らへ置いて、通信を切らずにその場を離れる。
少々サンジが心配そうにしていた気がするものの、仕方ないことだ

ろう。
気付かないふりをした彼女はラウンジを後にして甲板へ出た。
長い時間の航海に備えて部屋で休んでいる者も居る。しかしアナグマはずっと甲板に居て、冷えるからと言ってもラウンジには来なかった。まだそこに居るのだろうと思う。
探してみればやはりまだ甲板に小さな影があった。
欄干に腰掛け、海の方向を向きながら俯き、肩が落ちている姿に見える。
隣には釣竿を持ったルフィが居て、しばらく一緒に居たのだろう。今はアナグマも逃げ出さずにそこへ座っている。ただ会話はないようだ。
シルクは階段を降りて二人の下へ近付いていく。
先にルフィが気付いて振り返った。
ちょうど餌を取り換えるタイミングだったらしく、糸を引っ張り上げる瞬間と同時だった。近くを通る釣り針にアナグマがわっと声を出し、シルクは苦笑して注意する。
「大丈夫？　気を付けなきゃだめだよルフィ」
「わりぃ。なんか勢いついちまった」
「もう、危ねぇな」
唇を尖らせるアナグマはルフィを睨むが、彼は笑みを見せて肩を揺らす。
それを見ても怒ったりせず、どうやら以前より険の強さは無くなった様子だ。
「ねぇアナグマ、ちょっと来てくれるかな。おじいさんが見つかったって」
「じいちゃんが!?」
「私たちの仲間の、キリが見つけたの。今電伝虫で話せるから」
「キリ？」
「ど、どこで！」
「こっちだよ」
話した途端、アナグマの目は喜色で輝き出した。希望を取り戻した

顔をしている。ひどく興奮した面持ちで欄干から降り、先導するシルクの後へ続いて足取りが弾んだ。
ルフィも二人と共に行く。キリの名を聞いたからだろう。
彼の連絡があったとなれば、気になるのも当然だった。
ラウンジへ戻ってすぐ、慌てて駆け出すアナグマが電伝虫の受話器を取る。
咄嗟に叫び、そこに居るだろうビエラを呼んだ。
「じいちゃん！」
《おおっ、アナグマか！　よかった、無事だったんじゃな！》
元気な声が返ってきて思わず安堵する。
同じくビエラも喜んでいる様子で、よほど心配していたらしいとわかった。
ラウンジに居た他の三人は静かに二人のやり取りを見守る。
「じいちゃんこそ大丈夫だったのかよ！　今もガスパーデの船に居るのか？」
《いや、船は沈んだ。海賊に助けられてな。命からがらなんとか逃げ出したよ》
「それじゃ……おれたちもう自由なのか？」
《そうだ、自由だっ。もうおまえが命を賭けて戦う必要はない》
弾む声でそう言われて、不思議とアナグマは目を潤ませた。
感情が抑えられなくなって歯を食いしばるも堪えきれず。
はらりとわずかに涙を流し、小さく嗚咽を漏らした。
「そっか……おれ、自由なんだ」
《泣くなアナグマ。新しい船出じゃ。もっと喜べ》
「うん、うん……！」
《おまえには悪いことをした。すまんかった。だがまだやり直すことはできる。これからわしらは目一杯自由を謳歌して生きるんじゃ》
「うん！」
涙を零しながら頷くアナグマは、今できる精一杯で笑顔を作った。
表情は電伝虫の向こうまで伝わらないが、それは決意でもあったように思う。少なくとも見ていた者はそう受け取った。

《生きていればいいこともある。諦めなくてよかったなぁ》
「おれ、もうちょっとで諦めるところだった。いつ死んでもいいって、思ってた」
《わしも一度は死を覚悟したよ。しかし案外死ねんもんじゃ、ハッハッハ！》
「あ、でもじいちゃん、病気は？　おれ、まだ薬を買う金も手に入れてないし……」
《それなら心配いらん。助けてもらったついでに診てもらったんでな。ちゃんと薬ももらった》
「ほんとに⁉　それじゃ」
《ああ、問題は全部解決ってことじゃよ》
してやったりといった声。アナグマは喜色満面で笑みを強めた。
「ほんとに、信じられないや。ガスパーデが負けるなんて」
《まったくじゃ。まぁ、色々話したいこともあるが、今はキリもおる。詳しいことは会ってから話そう。島で待っておるぞ》
「わかった！　あとでな、じいちゃん」
言った後で受話器が渡されたのだろう、電伝虫の目つきが変わる。発される声はキリの物になった。
《積もる話もあるだろうけどまた後でね。シルク、居る？》
「ちゃんと居るよ」
「おれも居るぞキリ」
《あ、ルフィ？　悪いね、色々迷惑かけて》
「ししし、いいさ。おまえ今どこに居んだ？」
《ゴールに着いたよ。みんなを待ってるところ》
話し終えたアナグマは電伝虫の傍を離れて、テーブルの前にあるイスへ腰掛けた。今までは自らそこへ赴こうとしなかったが、安堵した影響は大きいらしい。
サンジが近付き、完成したばかりの軽食をテーブルへ置く。
少々戸惑った様子を残しつつ、今度はアナグマもその厚意を受け入れ、素直に礼を言った。
アナグマへ渡し終えたサンジはシルクとルフィの傍へ向かう。

ルフィには先に皿を渡してやり、受け取った途端に嬉しそうに食べ始めた。
そうなって当然という顔。気にせずサンジもまた電伝虫に目を向ける。
《レースは終わりだ。ほとんど中断って形かな》
「何があったの？」
《ボクより先に島に着いてた海賊が居たんだよ。何かあったんだろうけど、町は崩壊。かなり強烈な攻撃があったみたいだね。ほら、ルフィが戦ったって言ってたキャプテン・キッドだよ》
「あの燃え頭か」
《でも色々あって、一億ベリーだけ手に入れた。ナミにはそう言っといて》
「町を攻撃した海賊に会ったのか？　よく無事だったな」
《戦わなかったからね。適当に喋ってたらやる気失くして帰っちゃった》
のほほんと言う口調はいつも通りだ。少しも緊張していない。
仲間が相手なら当然だが今は少し状況も違って。
サンジとシルクは少々緊張した様子を残して、受話器に向けて声を発している。一方でルフィは受け取ったばかりのサンドイッチを頬張り、こちらも全く緊張しない面持ちである。
《そういうわけで、もう急ぐ必要はないよ。もう連中も居ないし》
「こっちは結構急いでたんだがな。今も交代で船進めてるとこだぞ」
「どうしよっか。一旦停める？　やっぱり夜の航海は危険だよ」
「このままじゃナミさんもしばらく寝れそうにないしな。キリも居ねぇし、他の連中に針路任せていいとは思えねぇ。おれも停泊には賛成だ」
《朝になってから来ても平気さ。もうこの島に脅威はない》
「安全に越したことはねぇか。どうだルフィ？」
「んじゃそうしよう。一回寝て、明日の朝に向かうか」
この場に居ない仲間も居るがどうやら決定したらしい。

急な変更はキリの報告が無ければできなかった。
それは救いか、もしくは大差ないかもしれないとはいえ、休めるのならば休んだ方がいい。彼らは一日中航海を行い、海戦も経験して、ひどく忙しない時間を過ごした。できることなら休息を取りたいというのはおそらく皆の総意だったはずだ。
ルフィが決定したことにより予定は変更されそうだ。
話も纏まったと判断したのか、キリは通信を終えようとする。
《ボクもそろそろ休むよ。流石に疲れたしね》
「おう。そんじゃ明日な」
《また明日》
終わり方は素っ気なく、あっさり受話器を置かれてしまう。通信が切れて電伝虫が眠り始めた。一同は肩の力を抜いて小さく息を吐き出す。
想うところあってか、サンジがぽつりと呟いた。
サンドイッチを食べ終えたルフィは気にしないものの、シルクも同じような表情。
二人ともどことなく真剣な色を濃くしている。
「結局、詳しい説明はなしか」
「うん……」
「心配いらねぇよ。だってキリだぞ」
全く心配しないルフィに視線が集まり、発される声は異論を唱えるようである。
「だってって、ルフィは気にならないの？　キリが何してたか」
「うん」
「そんな簡単に」
「別にいいよ。どこで何してようがキリはおれの仲間だ。あいつは絶対裏切らねぇ」
簡潔に、素っ気なくも思えるがその実強い言葉であり、言い終えたルフィは踵を返す。
逃げる訳でもなく、気まずくなった訳でもない。ただ今日の航海は終わりだと認識して、他の仲間に教えてから自分も寝ようと思っただ

けなのだろう。そんな気軽さが足取りにあった。
しかし入り口に体を向けた彼はぴたりと足を止めてしまう。
いつの間にかシュライヤが立っていた。
入り口を塞ぐように直立不動で、ポケットに手を突っ込んで俯いている。
何やら今までと雰囲気が違っていて、否が応にも注目せざるを得ない。
正面に立ったルフィが不思議そうに尋ねた。
まるで気を使わない素直な様子で、相変わらずだと背後でシルクが苦笑する。
「どうした？　なんかあったのか」
「さっきの電伝虫は」
「ああ、おれの仲間だ。キリっていうんだよ」
「不穏な言葉が聞こえたが……ガスパーデが、負けたとか」
「そうらしいんだよ。キリがやったんだってよ。もうレースも終わっちまったみてぇだ」
「そうか」
力もなく呟いたシュライヤは入り口のすぐ傍、壁に背を預けて座り込む。
項垂れるかのようで。それを見たルフィは腕を組んだ。
「いやぁ～残念だなぁ。一位になりたかったのに負けちまった。んん、やっぱりあの足止めが痛かったかな。あれがなかったらなんとかなったと思うのに」
「そうかよ……」
ルフィの声に反応する声は小さく、覇気がない。
すっかり別人のようだった。
座り込んでしまった彼は動こうとはせず、むしろできないといった様子。
表情も暗くなって落ち込んでいる姿に見えて仕方ない。
「で、おまえどうすんだ？　ガスパーデをぶっ飛ばしたかったんだろ。結局間に合わなかったけどよ、やっぱりおれと戦うのか？」

「いや、もういい。そんなことしたところで意味はねぇ」
「そっか」
「あいつを殺すことだけを考えて生きてきた。おれの人生全てを捧げたんだ。奴を殺せりゃ死んでもいいとさえ思ってた……それがまさか、先を越されちまうとはな」
自嘲気味に笑い、俯いて視線を落とす。
がっくりと肩が落ちて全身に力が入っていない。まるで打ち捨てられた人形だ。
見ていたシルクは心配になり、割り込む形で彼へ尋ねてみた。
「そこまで思うなんて、何があったの？」
「……ガキの頃、奴に全てを壊された。おれが住んでた町、家族、友達、全部一夜の襲撃で失くしちまったよ。奴が乗ってた船はおれの町で作られた物だったんだ」
ぴくりと、アナグマの眉が動いた。
しかしシュライヤの話に集中していた一同はそのことに気付かない。
「あの蒸気船が目的だったのか、他のもんが目的だったのかはわからねぇ。金か、女か、宝か、人員か。海賊が欲しがるもんなんざいくらでもある。ただはっきりしてるのは、あいつは自分が欲しい物を手に入れるためだけに町に火を放って、徹底的に破壊し尽くした」
「ひどい……」
「おれには妹が居た。大事な、たった一人の妹だ。だがおれはあいつが海賊に斬られかけた時、助けようと思って強く押しちまった。川のすぐ傍だったんだ。海賊に斬られて死なずに済んだが代わりに溺れて、流されちまって、結局守ってやれなかったんだよ」
右手で帽子を押さえ、目元を隠して。
深い後悔を灯す声はやけに静かな物だった。
おそらく、失意の底に落とされたことから話し始めたのだろう。質問しても答えなかった過去を今になって朗々と語り始めている。
胸に詰まっていた物が取れたのかもしれない。
一度話し始めればとめどなく溢れてくる言葉があり、もはや自分で

も止められなくなる。
だがそれは、決して彼にとって幸せな状態ではなかった。
生きる目的を失った。もう仇敵は居ない。
そう知った男の姿はひどく空虚で見ていられなかった。
それでも彼には語るしかなく、シュライヤの声だけがラウンジに木霊する。
「家族はもういない。帰る場所もねぇ。生きる理由を見つけるためにはあいつを恨むしかなかったんだよ。それが愚かだってのはよくわかってる。だがわかってたってどうしようもねぇんだ。何かに縋らなきゃ、一人で生きるなんてのは無理だった」
シルクの顔が辛そうに歪み、Tシャツの胸元を強く掴む。
煙草を銜えたサンジはそこに火を点け、静かに煙を吐き出し。
そしてルフィは片時も目を離さず彼を見つめていた。
ただアナグマだけが、奇妙に腕を震わせ、驚愕している様子でシュライヤを見る。
「横取りされちまったんじゃ、もう生きてる理由はねぇ。あいつが居なくなって、おれはどうすればいい。自由になったって行く当てもねぇ。おれの生きがいは無くなっちまったよ」
「また探せばいいじゃねぇか。海は広いんだ。きっと何か見つかる」
「探すって、何を探せばいい。復讐しか知らねぇおれが何かできるとは思えねぇんだ。この手はもう血で汚れちまってる。今更カタギに戻れるわけもねぇし……」
「じゃあおれと一緒に海賊やろう。海賊は楽しいんだぞ。お宝探して、冒険して、そんで宴して思いっきり騒ぐんだ。つまんねぇこと考える時間だって無くなるさ」
「フッ、バカ言え。おれの人生を狂わせた海賊に、どうしておれが」
ルフィとシュライヤが話している最中だ。
カタン、とイスが揺れてアナグマが地面に降り、自分の足で立つ。
何やら目は大きく開かれて驚いている表情。明らかに顔色が変わっていた。

不審に思う一同の目を意に介さず、というより視界に入っていないのだろう。
アナグマはシュライヤだけを見て口を開いた。
「あんた……名前は？」
「あぁ、おれか？　シュライヤだ。シュライヤ・バスクード。賞金首として多少知られたが、もうその名を知ってる奴は誰も――」
「シュライヤ……妹の名前は、アデル・バスクード……」
アナグマの言葉に、シュライヤが驚愕して顔を上げた。
少し離れた位置に立つアナグマを見つめ、なぜ知っているのだろうとその顔をじっと見つめる。
数秒して、息を呑んだ。
なぜか問おうとした言葉が出てこなかったらしい。
「おまえ……」
メリー号に乗って初めて、アナグマがそっと帽子を脱ぐ。
パサッと、まず最初に長い髪が降りてきた。肩を少し越えて背に届く程度の、あまり手入れがされていない栗色の髪で、外見の印象が一気に変わる。
その様はまさに、女の子といった様相だったのだ。
確かによく見れば男にしては可愛らしい顔をしている。しかしそうではない。おそらくは帽子を被って女であることを隠していた。
シュライヤの目が見開かれる。
驚いていたのは彼だけではない。ルフィやシルク、サンジまでもが驚きの声を発し、今まで気付かなかった自分を恥じるほど、その姿は可憐な少女に変わったのである。
「うそっ!?」
「マジか!?」
「おまえ女だったのかァ!?」
「あ、当たり前だろ。誰も気付いてなかったのかよ」
少し恥ずかしそうにそっぽを向き、アナグマ――アデル・バスクードはそう呟いた。
呆然としていながら彼女を見ていたシュライヤは気付く。

間違いない。彼の妹だ。
死んだと思ったのは今から八年前。もうずっと昔の顔しか知らず、何の準備もせずに急に成長した姿だけを見たのだが、間違えるはずがない。確かに面影はあってあの頃を思い出す。よく後ろをついて歩いてきた妹が確かに目の前に居た。
喉が震え、声が出せなくなる。
驚きは凄まじい物で、この八年間で最も大きい。
嬉しいと判断する余裕さえ消え、今はただ正常な思考が取り戻せないほどだ。
しかし、確かにアデルなのだ。彼女は本物のアデル・バスクードだった。
体勢を変えて、彼女の方へ身を乗り出したシュライヤは恐る恐る声を絞り出す。
「本当に、アデルなのか……？　てっきり、死んだものだと」
躊躇いがちにではあったが、数秒見つめ合った後、こくんと小さく頷かれる。
その瞬間すっと全身から憑き物が落ちるかのようだった。
探す必要は無くなった。二度と戻らないと思っていた物が、ようやく見つかったのだ。

家族

港にあった大きな焚火の傍、人影は三つ存在していた。
火を囲むように横並び。肩を並べて暖を取っている。
少々冷える夜だがその火のおかげでなんとか耐えることができそうだった。
電伝虫の通信を終えた後、しばしビエラは昔話をしていた。
ガスパーデが町を襲撃した日、サラマンダー号と名付けられた蒸気船は彼らの手に落ちた。しかし彼らが乗り込むより先にボイラー室の管理を行っていたビエラは船を降りようとせず、勝手に住み着いて献身的な世話を続け、ボイラーを誰にも触らせず守り続けた。
そしてその日、川の上流から流れてくる子供を助け、それがアナグマだったという。
海賊の襲撃で混乱する町中では親を探してやることもできずに、悪いと思いながら他に手がないためどうしようもない。だから自らが育てた。
その思い出は今や遠い過去であり、だが昨日のことのように思い出せる。
色濃くも切ない一日。家族を失った代わりに新たな家族を得た。
そう語るビエラは疲れてもいたが嬉しそうでもあり、アナグマが無事だったことに安堵している様子。落ち着いた声色で語っていたのもだからなのだろう。
キリは火を見つめながらその声に耳を傾け、しばし肩の力を抜いた。
その隣に座っていたのは、町に残っていた医者だという老人だ。
ビエラにも負けず劣らずで細い体をしており、本人こそ不健康そうだが白衣を着ている。傍らには医療道具が入った鞄もあって、襲撃の後でも落ち着いてそこに座っていた。
しばらく静かな時間が続いている。
すぐ傍にある海も波間は穏やか。心が洗われるの如き一時。
不思議な三人組は妙にその一瞬を気に入っていた。

ビエラの話が終わった時、少しの静寂が生まれる。
沈黙は決して重苦しくはなく、彼らは辛いと思っている様子ではない。
次に口を開いたのは町医者だった。
「海賊ってのは身勝手なもんさ。この町も元海賊って連中が多かった。おかげで治安は悪いし、毎日いざこざは絶えないし、あんまりいい環境じゃなかったね」
「あんまり落ち込んでないのはそのせいですか」
「まぁね。正直私は少数派だろうが、ちょっとばかりスカッとしてるんだ。あの威張ったじいさんたちが悔しがってるかと思うとね。こんな時だけは海賊様様だ」
「場所や人によって評価は違うもんですね。ほんと人それぞれだ」
壊れかけた木箱に腰掛けるキリは笑みを絶やさずそう言った。
本来海賊は褒め称えるものではないが、人によっては称賛したり感謝したりもする。中には彼のように憧れる人間も居て、場所や環境が変わればその見方も変わり、絶対的な評価がない。だから人それぞれだ。海賊の捉え方は十人十色である。
壊れた町は無人だった。山の向こう側にも集落があるらしく、大半の人間がそちらへ移動した。そうでない者は島を出たか、どこぞで野宿でもしているのだろう。
辺りには人の気配がない。そのため会話の邪魔をする者も居なかった。
また少し沈黙が生まれかけて、今度はビエラがキリへ問うた。
彼もまた海賊。なぜそんな身分になったかが気になる。
「おまえさんはなぜ海賊に？」
「……初めは憧れから。気付いたらそこが一番居心地が良い場所になってて、他の生き方が馴染まなくなったからですかね。やめるチャンスはあったのに結局こうですから」
「ほう、やめるチャンスも」
「ボク自身は諦めようと思ったんですけどね。押しの強い男に引っ張られまして」

笑みを深めて目を伏せる。
自分でも知らぬ間に固執するようになっていた。もうこれ以外の生き方はできない。そのためには覚悟が必要で、そうなっていたのはいつからだったか。
旅の始まりを思い出してまた仲間に会いたくなった。
自分で選んで一人出てきたのだが、存外寂しいものだ。
朝が来るまでまだ時間がある。海の方向に目を向け空の色を確認すれば、まだまだ夜の時間は長そうだと感じる。星々も美しく天に浮かんでいた。
再会までにはもう少し時間がかかる。
少し寂しくもあり、仕方ないとも理解するため、キリはふと席を立った。
一日を終えて疲労感を感じる。休める時に休んだ方がいいと考えた。
二人にもそう告げ、移動を始めることを提案する。
港で一夜を過ごすのは流石に辛いだろう。せめて無事だった建物を探して屋根の下で休みたい。
同意する二人も立ち上がり、歩き出そうとした。
その寸前、海の方から奇妙な音が聞こえてキリが振り返る。
夜の闇に包まれた周囲だが辛うじて見える物がある。特に振り返った先にあった物はかなり大きな物体で、大きな火があることによって見逃すはずがない。
海の中から何かが顔を覗かせている。
よく見ようとそちらへ歩を進め、覗き込んでみれば、顔を出していたのは大きなワニだった。体長およそ二メートル。大きな口と鋭い牙が見え、灰色の硬い表皮を持ち、爬虫類独特の細い瞳が闇夜の中で光るようで、口を半開きに間抜けな顔でキリを見ていた。
驚く彼は思わず首をかしげる。
「ワニ？」
問いかけてみても答えが返ってくるはずもないが、ワニはじっとしたまま動かない。

明らかにキリだけを見つめていて、他の二人には気付いてさえいない様子だ。
嫌な予感がする。
それがどこの誰であれ、どう見ても視線はぶつかっており、少なくとも獲物として認識された気がしてならない。でなければそれほど長い時間見つめ合うこともないはずだ。
キリは気付かれないよう気をつけて一歩後ずさる。
それに反応してワニがわずかに前へ進んだ。
もう一歩下がれば、やはりワニは港へ近付き、ともすれば上がろうと狙っているらしい。
ますます嫌な予感が強くなって、無視はできなさそうだと理解するしかなかった。
ビエラと町医者もその威容には気付いており、当然の如く警戒している。だがキリにだけ注目していることには気付いていないようで、そこまでの余裕はなかった。
「な、なんじゃあれは。わしらを狙ってるのか？」
「あんな種類はこの辺りには居ないはずだが」
「二人とも下がっててください。多分さっきからボクしか見てないんで」
即座に判断してキリは自ら二人の傍を離れる。
傍に居なければ彼らには被害が及ばない。そう願いたいものだ。
淀みなく歩き出して、しかし港からはそう離れず、海を眺めながら警戒心は大きくなった。
ワニもまた彼を追って泳いでいた。
やはり他の二人には興味を示さずにキリだけを見ている。
十分離れたと思った位置で足を止め、いよいよその存在と向き合った。
そこまで分かり易く標的とされてしまっては逃げることもできないだろう。そう思うのは前にも似たようなことがあった気がすると思ったからで、あの時も突然の出会いで興味を持たれた。
少々恐ろしいがつぶらな瞳は外見こそ違えど誰かを思い出し。

人知れず戦うための準備をする彼は苦々しい表情だ。
「ボクに何か用、だよね。でなきゃそんなに見つめないか」
小さな呟きに応じるように、突如ワニが海中へ潜った。意図が伝わらない行動のせいかキリは少しだけ驚いて、かと言って止めるほどの行動でもないため、呆然と立ち尽くす。
潜っていたのはほんの数秒だ。
奇妙に頬を膨らませたワニは再び海面へ顔を出し、何を想ったか、口に含んだ海水を勢いよく吹き出してキリへかぶせようと狙うのである。
「うわっ!?」
反射的に地面を蹴って横へ跳ぶ。
転がるように着地すると同時、港へ吹きかけられた海水は地面を叩き、辺りを濡らす。
触れていればそれだけで動けなくなるところだった。回避は正しい判断だったが、冷静に考えれば何やら嫌な予想が立てられ、関わらない方がいい相手ではないかと思う。
ただの野生動物が、ペラペラの実の弱点を知っているだろうか。
これが他の二人を狙った攻撃であれば違った判断も下せる。しかしワニはキリだけを追い、彼の弱点である水で全身を濡らしてやろうと考えていたに違いない。でなければわざわざ後を追って、獲物を選んで、尚且つそんな面倒なことはしないだろう。
捕食したいのなら手っ取り早くその鋭い牙で噛みつけばいい。
そうしないところを見ると、目的は別にありそうだ。
避けられたと見るやワニは再び海中へ姿を消す。
小さく舌打ちした後、警戒するキリはすでに戦闘を行う心構えだった。
もう一度水を撃ってくるか。
ただ口から吐き出しているだけとはいえ、その勢いは鉄砲にも等しい威力を持つ。目視だけで理解した。あれは能力の有無に限らず当たってはいけないと。
そのため優先的に回避を考え、どこから来ても驚かないよう視界を

広く保っていた。
しかし予想とは違い、姿を現したワニは飛び出す勢いを利用して天高くまで跳び上がる。
水滴を撒き散らし、理解した瞬間にはキリを見下ろす位置。
彼はその場から水を吹き出した。
「マジかっ」
迫ってくる水流はレーザーの如く。
考えもせずに跳ばねば間に合わない速度で、辛くも回避したキリは地面を転がる。数秒前まで彼が居た地点には水流が走り、水とは思えぬ衝突の音を発した。
直撃を避けても跳ねる水滴があまりにも多い。
避けるキリは慌てふためき、必死になってそこから離れる。
空中へ躍り出たワニはそのまま港へ上陸し、ドシンと重そうに着地する。
威風堂々と仁王立ち。
そんな立ち振る舞いで素人のはずがない。
転がったキリが起き上がるのも待たず、素早く前へ駆け出して、跳ぶようにして接近してきた。
体を捻って長い尻尾を振り、凄まじい迫力にキリは大量の紙を盾にして防御する。
何層にも重ねた紙を腕で支え、回避が間に合わないため、尻尾を受けた。その瞬間になって後悔する。腕から全身へ走った衝撃はとても耐えきれる物ではない。
硬化した紙もなんのその、ダメージは大きく。
殴り飛ばされた彼は港のすぐ傍、倉庫だっただろう大きな建物へ突っ込んで姿を消した。
「キリッ!? 何が起こっとるんじゃ……大丈夫か!」
「ビエラさん、危ない。我々にはどうすることもできない。近付かない方がいい」
「そ、そうじゃが、しかしっ」
「下手に手を出しても邪魔になるだけだ。今は行かない方が得策だ

ろう」
狼狽したビエラの肩を掴み、町医者が冷静に押し留める。
彼の判断は正しかったと言える。慌てた状態で駆け寄ったところで危険に身を晒すだけ。それはきっとキリに迷惑をかけるだけだ。助けたいのならチャンスを待たなければならない。
全ての動きが見える訳ではない。まだ夜の闇も濃く、明かりが届かない位置へ移動している。
それでもその轟音は凄まじい物で無視できるはずもなく、彼の動揺も仕方なかった。
瞳を揺らすビエラは拳を握って待つ。
彼はガスパーデを倒し、ビエラとアナグマを救ってくれた男。
感謝しきれないほどの情がある。死なせたくはない。何かがあれば制止も振り切って駆けつけ、救い出すつもりであった。
今はしばし待ち、ただ願うことしかできないようで、悔しく想いながら闇の向こうを見守る。
キリはすぐに瓦礫を蹴り除けて姿を現した。
見た目のインパクトと違って大きな怪我はないらしい。変わった見た目は服の汚れだけだ。
口元を拭い、目つきが変わる。
どうやら本気で戦う意識に変化したようだった。
両手に剣を握って、いつでも動ける準備を整える。
本気でやらねば命を落としかねない相手だ。そう判断した以上は手加減できない。
観念した様子のキリであったが、直後には奇妙な音を聞いた。
それは羽音だ。どこからともなく耳に入り、やけに大きい物だと理解した時、考えるまでもなくまずいと感じる。目の前には巨大なワニが居るからだ。
この状況下で普通の生物が近付いてくるはずもないだろう。
背後にあったそれを見るため振り返れば、やはり巨大な何かが視界に映る。
闇に溶け込むような色は漆黒の羽。体長二メートルほどの巨体を

持つ鳥はどうやらカラスで、視認しにくい様は自然と脅威に感じさせた。
その姿を見てすぐ、ぎょっとした顔のキリが憎らしげに言う。
「カラス？　二対一ってことだね」
迫力のある鳴き声を発して、カラスは大きく羽ばたいて突進してくる。
常人では反応しきれない速度に硬い嘴。感じた風は背筋を凍らせる物で恐怖に値する。
咄嗟にキリは振り返り、剣を交差させて防御の姿勢を取った。
体感する姿は想像よりもずっと速い。視認できるほど生温くない。
驚く瞬間には目の前に居て、強かに剣を打ったのは嘴ではなく翼。伸ばされたそれが衝突と同時にキリの体を持ち上げる。足を踏ん張っていたのに効果も薄く、いつの間にか彼は空中に放り出されていた。
全身を襲う衝撃が体勢を立て直すことすら許さない。
吹き飛ばされるキリの体は、カラスが通り過ぎて上空へ移動しても止まらなかった。
空を飛ぶ体はあまりにも軽い。止めようがないのも仕方ないだろう。
だがそれとは別に、そのまま止まらなければどうなるか、想像するのは難しくない。
飛んでくるキリへ向かってワニが飛びついた。
思い切りジャンプした後、閉じたままの長い口を武器に見立て、上から下へ振り下ろす。
狙った通りに彼の体は叩き落とされ、地面へ強く激突する。背から落ちたことで息が詰まり、一瞬だが意識が遠ざかりかけた。かなりの激痛で動きが鈍るものの、じっとしてもいられない。追撃が来る前に起き上がるとキリは自らワニへ斬りかかった。
体を回転させて独楽のように剣を振る。
硬度は鉄、性質は刃。当たれば硬い皮膚さえ裂いてみせる自信がある。
ただ予想外だったのはワニの運動能力だ。彼は軽く跳ぶと後ろへ

回避してしまう。
タイミングは悪くなかったはず。敵の虚を衝いたことは間違いない。
それなのに避けられたのは経験の差か、動きを見切る目の良さか、或いは生物としての筋肉の違いかもしれない。何にせよ、攻撃を空ぶったキリの体は無防備に晒される。
愕然とした表情に変わり、想像もしていなかった状況に全身が震えた。
大きな隙を見逃すはずもなく、空からはカラスが接近してくる。
横を通り過ぎる瞬間に翼で打たれ、キリの体は受け身も取れずに地面を転がった。
「ぐっ……!? くそ、なんて強さだ。二匹とも速過ぎだろ」
苛立ちを隠し切れずに荒々しく吐き出す。
戦っていい相手ではない。わずかなやり取りで判断していた。
しかし相手は見逃してくれないようで。
上空を旋回するカラスと正面で仁王立ちするワニ。どちらも好戦的にキリを見ていた。
（まともに戦って勝てる相手じゃない。と言ってもあの連携だ。どっちかに集中しても必ず邪魔が入る。せめて一匹ずつなら……）
自身の不利を冷静に分析し、どうすればこの場を打開できるかを考える。今の彼は必死だった。ここで負ければ仲間に会えなくなるとさえ思っている。
その考えは正しかったようだ。
確信を得たのは、海から新たな巨体が現れた瞬間。
港に上がり、地に足を着けてすぐ体を振って水を飛ばす、一匹のシロクマを見つけた。以前海軍の軍艦まで彼を攫った経験があるドニーである。
その姿を見てようやく確信が得られた。
「あぁ、やっぱりそういうことか」
ぼんやり呟く声に力は入らず、呆れた様相すらある。
つぶらな目をキリに向けたドニーは嬉しそうに手を振り出した。

「それ以外ないかと思ってたけど、まさか当たるとは。何しに来たのかは一つだよね」
肩をすくめて問いかければ、ドニーもまた他の二匹と同じく身構える。戦闘の意志はありありと見えた。できれば違って欲しかったが想像通りの行動だったらしい。
溜息をつくキリはやれやれと頭を振る。
逃がしてもらえそうな雰囲気には思えない。
どうやら、自力で逃げる以外この場をやり切る方法はなさそうだ。
右足を引いて、どう動くかを見極めようとしたその瞬間。
急降下して背後を取ったカラスが猛然と迫ってきた。
キリは、迫る巨体を視界に入れるのが精一杯で、避けることは不可能だった。
硬い嘴が背に激突し、反応する暇もなく空へ運ばれる。
受け取ったのはワニだった。カラスに運ばれてくるキリの体を、自らの口の上に乗せ、勢いよく背を反らすことで空へ高く跳ね飛ばす。
その時にはすでにドニーが跳び上がり、空中で待っていた。
飛んでくるキリを受け止めてしっかり抱きしめ、くるりと天地が逆転し、頭から落ち始める。真下には海があった。脳天から共に落下していく。
「うわっ、ちょ、待った――！」
悲鳴を発するがすでに遅く。
高く水柱が上がって、彼らの姿は暗い海中の中へと消えていった。
全身が水に包まれ、力が入らなくなる。
必死に口を閉じて我慢するものの、やはり呼吸ができなくては限界があり、苦しさは紛れない。
限界を迎えたキリは口を開け、泡ぶくを吐き出した。同時に大量の海水を飲み込んでしまい、表情は苦しげに歪んで、徐々に意識が遠のいていく。
そうなってからドニーは海面へ浮上した。
足をバタつかせて上へ向かい、海面から顔を出すと即座にキリが呼吸を始める。

何度も咳き込み、ぐったりした様子だが九死に一生を得たようだ。
「ゲホッ、エホッ！　ハァ、ハァ……あーまたこれか」
水に浸かってしまったため力が入らない。紙の体には水が沁み込んでいき、そうでなくともカナヅチの体だ。こうなっては自分ではどうしようもない。
勝敗は決した。
改めてドニーはキリの頭を撫で始め、愛でるかの様子。非常に嬉しそうだ。
彼はそのまま海を泳ぎ始めて島を離れていく。
ワニも海へ飛び込んで傍を泳ぎ、カラスもまた同じ方向を目指す。
抵抗できないキリは向かう先を想像できていて、嫌そうな顔でげんなりする。
キリを連れた三匹は颯爽と島を離れようとしていた。
見守っていたビエラは思わず身を乗り出し、しかしどうしたものかと逡巡する。
一方で町医者は首を振り、もう諦めていた顔だ。
「キ、キリっ！　あいつら、一体どこへ……」
「やれやれ、一体どうしてこうなったのか。これではもう追いかけられん」
「そんな、助けてもらったばかりだというのに……そうじゃ！　電伝虫であいつの仲間に連絡を取れば――ええい、番号がわからんかっ！」
慌てふためくビエラが見る先で、辛うじて確認できる影はどんどん小さくなっていく。
もう手が届かない距離だ。助ける方法はない。
今や悔しげに眺める他はなく、病気とは異なる要因で、彼はその場を動けなかった。
ドニーの肩に担がれて運ばれるキリは空を見ていた。
目には普段の力がない。自棄になっている風体にも見える表情である。
「ねえ、どこ行くの？　これから仲間に会う予定だったんだけど」

問いかけても答えてはくれず、鳴き声さえ発されなかった。
少し寂しく、それ以上に物悲しく、海の冷たさを味わいながらさらに前へ進む。
「困ったなぁ……」
観念した様子の彼は目を閉じた。
抵抗ができない以上はぼやいても仕方ない。ならばせめて回復を望んで、運ばれながら不貞寝してやることを決めたらしい。
しばらく意識を手放し、キリは眠りに就き始めた。
目的地に着いたのはそれから三十分以上経った後だった。
唐突に揺れが大きくなったことに気付き、眠っていたキリが目を覚ますとそこはすでに船の上。軍艦に乗せられて甲板へ転がされたようだ。
重い瞼を押し上げ、大の字になった態勢から空を見る。
そこには嬉しそうな笑顔があった。
「いらっしゃい。歓迎するわよ、紙使いくん」
嫌味なくらいの上機嫌さで、苦い顔をしたキリは腹いせ代わりに再び目を閉じた。

海軍要塞ナバロン

深夜に差し掛かる頃だった。
手錠をかけられ、甲板に座らされていたキリは海の向こうに大きな光源があるのを見た。
そちらを向いたウェンディは彼に背を見せ、静かに語り始める。
「今回の仕事はね、とある基地で裏帳簿の存在が疑われるってことで、その存在を明るみにして欲しいって頼まれたの。基地の責任者からね」
「へぇ、そう。それってボクに関係ある？」
「フフッ、ないわね。でもあなた海賊じゃない」
「そりゃそうだけど、タイミングは考えて欲しいなぁ」
「なんだか今日は愚痴っぽいわね。何かあった？」
「ついさっきね。それと今この状況」
「大変ね。つい同情しちゃうわ」
彼の怒気を受け流すような微笑みは全く淀みない。
振り返るウェンディはキリの仏頂面を確認して肩を揺らす。
現在、キリは足を広げて座ったドニーに抱えられており、股の間に座らされている。
背後から大事そうに抱きしめられ、腕にはきゅっと力が入っていた。
非常に愛らしい様子である。だが彼本人は納得していないのがありありと表れ、普段が見る影もないほど不機嫌そうな表情。溢れ出る敵意も抑えようとしなかった。
だからこそ楽しいのか、ウェンディがくすくす笑う声は止まらない。
「ハリネズミって知ってる？」
「動物の、じゃないよね」
少し肩をすくめる動きを目にして、キリは視線を逸らして溜息をついた。
「海軍の要塞なら知ってる。堅牢堅固の造りで難攻不落。世界中に

その名が広まってる。でも確か辺境の地過ぎて誰も近付かないし、不要だって声も大きかったはずだけど」
「そう。どんな海賊団でも落とせなかった最強の砦。だけど島を丸ごと基地にしたからそもそも目指そうなんて考える人は居ない。だから不要だって言われてるの」
「別に興味はないけどね。近寄らなきゃ脅威じゃない」
「私もそう思うわ。だけど実際、あの基地が撤廃される動きは本格化されていない。調査して欲しいと依頼されれば断るわけにはいかないの」
やれやれといった顔のウェンディを見やり、難しい表情のキリは苦悩していたようだ。
話の方向性が上手く理解できない。
無理やり連れ去られてなぜ海軍の要塞について話しているのか。
海軍の要塞、ナバロン。
難攻不落と言われたその拠点には相応の歴史があり、数々の敵を討ち破った実績がある。しかし名が売れるにつれてその島を避ける海賊は増えていって、位置に関する情報も蔓延した結果、訪れる人間は同じ海軍の者ばかりとなった。
存在価値がない、と囁かれるようになったのはその頃からだろう。
一度戦えば敗北を知らない反面、あまりの危険性に誰も近寄らない寂しげな島。
それが海軍の〝ハリネズミ〟だった。
噂には聞いていたが来ることなどないと思っていた。
そのせいか、あまり情報は持っていない。集めようとしなかったし、時折耳にすることがあってもおそらく聞き流していた。これからその場所に向かうのだとしたらまずい事態だろう。
海の向こうの光源。どうやらその場所だと予想するのは難しくなかった。
しくじった、と考えるキリの表情は思わしくなく。
対照的な笑顔のウェンディは口調も軽く話す。
「監査役の仕事って大変なのよ。味方を疑わなきゃいけないし、時

には存在を感じ取られてはいけない場面もある。一番いいのは誰にも気付かれずに終わらせることね」
「あっそう」
「聞いてる？」
「あんまり」
「そう。別にいいんだけどね」
動じた様子のない彼女はキリの前にしゃがんで視線を合わせた。
「でも今回は特に大変そうなの。なんせ島ごと基地でしょう？　隠し金庫があるかもしれないって言われて、手掛かりはないようだし、どこにあるか見つけるのは簡単じゃないわ。全部見て回るだけでも一日かかりそうだし、それに兵士の数も多いから」
「あのさ。さっきから何の話聞かされてるの？」
「これ見て」
ウェンディは懐から薄い紙を取り出した。しかし折り畳まれたそれはかなり大きい。
広げられてみると地図のようだった。
話の前後から、ナバロンの物だと思われる。内部の構造全てが載っているようで、気のないふりをしながらキリはざっと全体に目を走らせた。
「こんなに広いのよ。どう？　一日で回れると思う？」
「時間かければいいでしょ。別に一日で見て回らなくたって」
「だめよ、私だって忙しいんだし。他にもやることは山積みだわ」
「お気の毒様」
やれやれと顔を逸らし、目を閉じて首を振るウェンディは地図を掲げたまま。
目の前にあるそれをキリは素早く覚えていった。
このままで終わるつもりはない。確かに捕まってしまったのは自らのミスだがまだ死んだ訳ではないのだ。上手く逃げ出し、パルティアに戻る覚悟があった。
地図を見せられたのは不幸中の幸いだろう。
不意にウェンディが地図を仕舞う頃には、彼は基地内の大まかな構

造を把握していた。
「隠し金庫なんて、一体どこにあるのかしら。ねえ、あなたはどこにあると思う？」
「知らない」
「素っ気ないわね。少しは考えてくれてもいいのに」
「興味ないんだけど」
「そう言わずに。どうせこれから暇になるわよ」
フンと鼻を鳴らしてそっぽを向き、少ない情報でキリは思考を巡らせる。
如何にして逃げるか。重要なのはそれだけだ。
牢屋に入れられてからでは逃げるのが難しくなる。だが手錠をかけられて全身も濡れている今、逃げるどころか派手に暴れることさえ不可能な状態。本当に助かりたいのなら今は耐え、体と服が乾いた時を狙って動き出す他なさそうだ。
基地に入れば牢屋に入れられることだろう。
今よりずっと逃げにくくなるが、そこで状況を見るしかなさそうだと考えた。
ひとまず体から力を抜いてドニーへもたれかかる。
どちらにしても力は入らない。今は抵抗するだけ無駄、嬉しそうにしている彼の柔らかい体毛と肉を肌で感じ、しばし不服そうに辺りを眺める。
彼女が家族だと語る動物は他にも二匹いる。
傍の欄干にはカラスが停まり大人しくしていて、ワニは船の傍を泳いでいる。
想定外の襲撃を受けて、衝撃は今も尚大きい。
逃げ出す場合、彼らに見つからないことが大前提だろう。巧みな連携を警戒するのは当然だ。
彼の視線に気付いたのか、ウェンディが視線を動かす。
近くに居たカラスへ目をやり、腰に手を当てて笑顔で言った。
「そう言えば知らなかったかしら。紹介するわ。カラスの方がヒュー、ワニがスーン。二人とも私の家族よ。おじいちゃんが現役

だった頃、一緒に仕事していたの」
「有難くない存在だね、海賊からすれば」
「大抵そう言われるわ。良い子たちなんだけど」
「さっき殺されかけたけどね」
「本気じゃなかったわよ。彼らの目的は海賊を捕縛することだから」
「ハァ、ほんと、めんどくさい……」
溜息をつくキリを眺め、ウェンディが呟く。
「もうすぐ着くわ。あなたは一度、あそこへ預けられる」
「一度？」
「あとで私が本部へ連れていくのよ。だけど以前船を壊されたし、逃げられないために用心して最強の砦に預けておくの。賢いでしょ？」
「あーそうですね。こりゃ逃げられなさそうだ」
「脱獄したい気持ちは山々でしょうけど、気をつけた方がいいわ。この要塞を指揮するのは海軍大将〝赤犬〟子飼いの将。そう簡単にはいかないでしょうね」
その一言を聞いてキリの眉が動いた。
目敏く観察するウェンディも様子の変化に気付く。
「耳にするだけでも厄介そうだね。赤犬の知り合いか」
「ええ。頭の良さじゃ中将の中でも群を抜いてる。でも上司よりよっぽどやさしいけどね」
「すぐに死刑はない？」
「大将に見つからない限りはね」
小さく嘆息。
ドニーに体重を預けたキリは天を仰ぎ、目を閉じた。
目的地が近くなっている。到着は時間の問題で、今更何をしようと結果は変わらない。ならば無駄な抵抗の一切をやめ、来るべき時に備えよう。
緊張感もなく、キリは眠ろうとさえしていたようだ。
その態度に驚いたウェンディは苦笑し、大した胆力だと判断する。

「寝る気？　もうすぐ到着よ」
「別にいいでしょ。ボクは海兵じゃないんだから」
「確かにそうだけど、もう少し話に付き合ってくれてもいいじゃない」
「いやだね。海賊は自由なんだ。好きな時に好きなことをする」
ふてぶてしくそう言われれば、ウェンディは肩をすくめる。
「そう。残念」
視線を外し、前方を見る。
海軍要塞ナバロン。その威容は徐々に近付いていた。
誰も見ぬ間の一瞬に、迫力あるそこを目にしたウェンディは不敵に微笑む。
この後、彼女が乗る船はナバロンへと到着する。
秘密裏の着港であったが捕縛した海賊は受け渡し、彼女だけは基地長の部屋へ向かった。

＊

ナバロンの基地は広大であった。
地上に設けた建物は四階ほど。普段海兵たちが過ごすのもここであり、大抵の物が揃っている。
広大と呼ぶべきなのは島の土壌を利用して穴を掘り、島中に要塞の設備を利用した、地下空間が存在しているからである。地下には何層もの空間が用意されており、そこもまた彼らの基地だ。
とはいえ、ウェンディが用があるのは基地長の部屋。
地下には下りず、地上にある建物へ赴く彼女は早くもその一室を見つけていた。
扉をノックし、静かに待つ。すると室内から渋い声がやってきた。
「入ってくれ」
「失礼します」
ドアノブを捻り中へ入る。
正面に幅広の机。椅子に座る中年の男性が居る。

赤茶けた短髪にしっかりとした口髭を蓄え、無感情にウェンディへ目を向ける。
彼女は真剣な表情で敬礼をすると、自ら口を開いた。
「海軍本部より参りました、監査役のウェンディです」
「ああ、来てくれたか。わざわざ来てもらってすまない」
「いいえ、これも仕事ですから」
笑いかけてくる彼へ微笑み返し、ウェンディは肩の力を抜いた。
海軍G―8支部基地長、海軍中将のジョナサン。
大将〝赤犬〟の下で多くを学び、直属の部下として知られる彼はナバロンの司令官として知られ、その名を広く世間に知らしめている。優れた戦略眼と指揮能力を持つ厄介な人物であった。
その厄介さは敵に対してだけでなく、時に味方にも作用する。
ウェンディが注意深く観察するのも当然だった。
そんな彼女の様子を眺め、どう判断するのか、ジョナサンは微笑みを崩さない。
緊張感のある室内で呑気に座っているようにしか見えなかった。
「もう話は伝わっているかね。このナバロンを調査してもらいたい」
「心得ています。裏帳簿の存在と、隠し金庫でしたか」
「そうだ。前々から違和感があったが調査し辛い環境でな。私が動くのには無理があった」
「と言うと？」
「こう言ってはなんだが……おそらく私に近い人間の誰かだろう。地位から考えても資金の流れを変えられる人間は限られる」
「つまり疑いはすでにバレているのですか？」
「可能性はある」
ジョナサンは海軍きっての知将で知られる。少なくとも中将の中では頭一つ抜きんでていてもおかしくはない。その彼が依頼してくること自体、おかしいとは思っていた。自分で見つけられるのではないかと考えたのだがどうやら理由があったらしい。
ナバロンの中に潜む犯罪者は、ジョナサンに近く、それなりの地位

にある。
近くに居るというからにはジョナサンが疑っているのにも気付いているかもしれない。自分で調べ始めれば間違いなく何かしらの動きがあり、秘匿する行為に走るだろう。
それでもやりようはあるかもしれないものの、あくまで平和的な解決を望んだのか。
ウェンディを頼ったのは、外部の人間がやるべきだと判断したからだ。
事情は理解した。だが知るべきことは他にもある。
彼は一体どこまで知っているのか。
頼りはするが焦ってはいない。のほほんと茶を飲む程度にはいつも通りの日常を過ごしている。
調べて欲しいとはいえ時間を気にする訳ではないのだろう。
多くの人間を見てきたウェンディはすでに判断していた。
おそらくジョナサンは、犯人に心当たりがある。気付いていながら黙っているのだ。
微笑を湛えて、優雅にティーカップを傾ける仕草。
心から落ち着いてそうしているのなら食えない相手だ。
口角を上げるウェンディは至って冷静に問いかける。
「ちなみに中将殿は誰だと予想しますか？　近くに居るなら尚更気付かないはずないでしょう」
「んん、難しい質問だ。こんな辺境の地で長く時間を共にしてきた仲でな。できれば疑いたくはないからかな、判断ができずにいるのだよ」
「お優しいんですね。部外者とはいえ尊敬しますわ」
「ありがとう。なに、君にも大事な部下は居るだろう。同じ気持ちだよ」
やはり食えない男だ。
心底嬉しそうに、と見せかけて笑うウェンディは面倒に想っていた。
「いきなり仕事の話ですまないね。本当ならユーモアのある話でも

したいのだが、いやはや、これが中々難しい。ここも閉鎖的で外部の人間と触れ合う機会がないのでね。もう少し色んな人間と話すべきなのだろうか。ふむ、演習でも企画してみるのもいいかもしれない」
「中将殿は十分ユーモアのある方ですよ。そんな必要はありません」
「そうかね？　うむ、だとすれば嬉しいのだが」
一体どんな腹の内でそう言えるのか。一度その中を見てみたいものだ。
そうは言わず、笑みを絶やさずおざなりに答え。
本題に戻すべきかと考えるウェンディへジョナサンが続ける。
「近頃、と言うよりもうずいぶん長くか。海賊と会う機会がないせいでここもずいぶん気が緩んでしまっている。部下たちも頑張っているのだが中々上手くいかなくてな」
「辛抱強くやるしかありませんよ。突発的に変わることは難しいですから」
「ふむ、確かに」
「ただ、そうですね。ここが海賊に襲われて窮地に立たされれば、少しは兵士諸君の意識が変わる可能性もありますが」
にこやかに言うウェンディに対し、ジョナサンは肩を揺らして笑った。
「ハッハッハ、まさにその通り。だが今日のことだ。何やら海賊が大挙してこの基地へ集まり、その全てを打ち負かした。今頃は牢屋に大勢の海賊が収監されているよ。だから窮地に立たされるというのも狙ってできることではないのだ」
「そうですね。人生、上手くいかないものです」
「しかし、そうだな。もしもこの基地にかつてない混乱が起これば、皆の意識は変わることになるだろう。それがたとえどんな形であっても」
瞬間的に笑みが薄くなり、ジョナサンの表情は真剣みが増す。
やはり中将の地位。生半可な覚悟で基地長の椅子に座ってはいないようだ。

どうやら彼は不測の事態であり、海軍にとって恥ずべきこの一件を好意的に見ているらしい。
その勝率とは裏腹に閑職とも言われるその場所で、革命を起こそうとでも言うのか。確かに彼の目は本気で、のほほんとした様子は消え去り、迫力を感じる。
ようやく腹の内の片鱗を見せた。
それでも全てではないだろうものの、ウェンディも静かに笑みを消す。
「ここは広い。苦労することになるかもしれないが、よろしく頼む」
「わかりました。精一杯の努力はします」
「しかしもう夜だ。ここまでの航海で疲れているだろうし、何より睡眠不足はお肌の天敵になるだろう。ひとまず今日のところは休んではいかがかな？」
思わずホッとする笑みを浮かべ、ジョナサンはやさしく語り掛けた。
ころころ表情が変わる。だが子供と違って可愛げはない。
それらを全て武器として使える辺り、彼も立派に厄介な人間だ。
「そうですね。実を言うと少し休みたいと思っていたところでした。では、せっかくなのでお言葉に甘えさせていただきます」
「そうしてくれ。大変な仕事になるだろうからな」
「明日の朝から仕事を始めます。ですが、できれば私の存在は内密に」
「うむ、わかっている。監査役は大変だな」
「自分でもそう思いますわ。けれど祖父の背を見て育ちましたから、これが一番肌に合っているんです。大変ではありますが、その分やりがいもありますし」
「どうやら見習わなければならないのはこちらだな」
きっぱり言い切る姿に感嘆し、そう言ったジョナサンは心からそう思ったのだろう。短いが、それは自分より若い彼女へ対する称賛だった。
ウェンディはその言葉を受け取り、踵を返して扉の前へ立つ。

そこでもう一度振り返り、退室の前にジョナサンへ向けて敬礼を行った。
「それでは失礼します。報告はまた後日」
「こちらはゆっくりやってもらって構わない。良い結果を期待しているよ」
「了解しました。では」
部屋を出て廊下に立ち、扉を閉める。
その瞬間にウェンディは聞こえないよう溜息をついた。
歩き出してから頭を働かせ、思考の内で様々な言葉を並べ始める。
面倒な男だ。協力する気があるのかないのかわからない。
ジョナサンに対する信用はない。彼女が監査役として優れているのは、相手の人柄によって意見が左右されない部分に表れる。感情論を持ち出しては公平に判断できない場面もある。海軍を正す者として、可能な限り公平に見ようと心がけていた。
特にジョナサンなどは頭が回る。何を考えるかを悟らせないのが恐ろしい。
彼が悪事を働くのは想像できない反面、注意しなければならないと判断していた。
一人廊下を歩くウェンディは考える。
しかし、自分もまた清廉潔白ではない、と。
正しいか、そうでないか、それを決めるのは己の判断基準だ。広い世界で統一することなど決してできず、また決して自分が最も正しいと思い込んではいけない。かと言って他人を信用してばかりでもいけない、疑い過ぎてもいけない。祖父の教えは難しかった。
ウェンディは公正であろうとしながら、その実絶対に正しくあろうとはしていないのである。
無人の廊下を眺めて、小さな溜息を一つ。
今回もまた大変そうな任務だと思う。
下手を打てば時間がかかりそうなものの、考えようによってはチャンスでもあり、上手くいけば早く済む可能性もある。今は、ささやかな希望に縋るしかないらしい。

「あーあ、めんどくさいなぁ。でも今は叱ってくれる人も居ないし、私がやるしかないのね」
少し後悔も含みつつ呟き、やれやれと首を振って嫌がる感情をアピール。
しかし無人の廊下では誰も声をかけてくれなくて、彼女は不承不承に足を動かした。

獄中の出会い

ナバロンの牢屋へ入れられたキリは、朝方日が昇る前、不意に目を覚ました。

彼が入れられたのは地上にある建物内部の牢屋。本来ならば牢屋は地下にあり、そちらは大量のスペースがあるものの、現在は使う隙が無い様子。つい昨日のデッドエンドの敗北者たちだ。捕縛された彼らが牢屋を埋め尽くしてしまったため、彼は上部の牢屋へ入れられたのだという。

そう聞いたのは昨夜、彼を運んだ海兵に質問したため。

しばらく時間が経って、眠りから覚めた彼の傍には誰も居なかった。

数えられる程度の牢屋が並ぶ寂しげな一室で、小さな物音がある。鍵を開ける音だ。

閉じられた扉を開けようと試みている音のようで、カチャカチャというそれが木霊している。

キリが入れられた牢屋の、二つは隣か。

体を起こした彼は鉄格子の傍まで移動し、そこを掴むと音のする方向を見ようとする。

それからすぐに鍵が開けられた。錠前が落ちる音がして、動いた扉が少し軋む音。誰かが外へ出てきたようだ。警戒心を感じる足音まで感じて、いよいよ音が近付いてきた。

覗き込もうとするキリの視界に入り込む人影。

一つだけのそれは警戒しつつ、だが堂々と、入り口へ向かおうと進んでくる。

「よぉし、誰も居ねぇようだな。ここまで待った甲斐があったぜ。あとは船をどうするか――」

「バギーじゃないか。何やってんの？」

「どおあっ!?　だ、誰だっ……って牢の中じゃねぇか！　しかもてめぇは!?」

「久しぶりだね。元気だった？」

横合いから聞こえた声に驚き、体をバラバラにして跳び上がったのは、見覚えのある顔だった。
海賊、道化のバギーである。
帽子とコートは奪われているが、真っ赤な鼻を始めとしたその姿はローグタウンで見た物。彼以外にあり得るはずのない鼻を見て間違えるはずもない。
キリが言い当てた通り、バギーは再び彼の前に現れたのだ。
「麦わらの手下の紙使いだなァ！　なんでこんなとこに居やがる！」
「それはこっちのセリフだよ。ボクだけかと思ったら意外と近くに居たんだね」
「フン、ミスっちまったのか、ザマァねぇな。悪いがおれはこの通り自由の身だ。哀れなおまえを置いてさっさとトンズラさせてもらうぜ、ギャッハッハ！」
「待った待った。もうちょっとしゃべろうよ、せっかくだから」
ともすれば走り出そうとする彼を気楽な声で押し留め、寝起きに騒がしい様子であった。
まだ日が昇る前。辺りは薄暗く、人の気配はない。
それでも大声を出すのは戸惑われ、キリは意図して声を小さくしながら話しかける。
煩わしそうにするバギーは早く逃げ出したいらしく、振り返りはするも好意的な表情ではない。
「何の用だってんだ。おれはこれから忙しくなる。こんなとこでじっとしてられねぇんだよ」
「ねぇ、なんでここに居るの？　捕まった？」
「なぜっておまえ、そりゃあよ……あの胴元のせいに決まってんだろ！　ゴールを指すはずのエターナルポースに従ってレースに参加したら、辿り着いた先はこの要塞！　噂も聞こえる海軍最強の基地だぞ！　誰が目指したくてこんなところに来る！　おれはあいつに騙されたんだ……！」
「あーそうだろうね。ちなみにあれ用意したのガスパーデだよ」

「ガスパーデ!?　あの野郎、よくもまぁのうのうと！」
「もう倒したんだけどさ。結局あいつも勝者ではないよ」
「倒したぁ？　おまえがか。あいつもほとんど一億の首だぞ」
「細かく説明するとめんどくさいんだ。とにかくガスパーデの一人勝ちじゃない」
「よぉし、それを聞いてスカッとしたぜ。それじゃ」
「だから待ってってば」
またも走り出そうとするバギーを止め、尚もキリは話そうとする。
「まだバギーが居る理由聞いてないよ。で、ここに来て船は沈められた？」
「チッ、しつけぇ野郎だな。船はおそらく沈んじゃいねぇよ。後ろの方に居たんで、先頭集団が攻撃を受け始めた時もおれたちの船は無事だった。逃げ出せるタイミングだったんだよ」
「じゃあなんでここに」
「おれだって知るか！　テンパってる内に突然わけのわからんシロクマに襲われて、海の中に引きずり込まれたんだ！　おかげで仲間とは引き離されちまうわ、要塞に連れて来られるわ、もう散々だ！　ちくしょうめ！」
「あーなるほど、被害者がここにも……」
地団駄を踏むバギーに同情しつつ、思わずキリは遠い目をする。
シロクマと言うからにはおそらくドニーだろう。どこで何をしていたのか知らないが、逃げようとしたバギーだけは捕まえたらしい。彼ならばそれも可能に違いなかった。
同じ敵に負けた同志とも言える。少々、キリの態度は彼に対して甘くなりつつある。
しかしそれ以上に良い展開だ。
見知らぬ基地の中、捕縛された自分に脱獄を考える彼。協力すれば確率は高くなるはず。
微笑むキリは言葉だけで駆け出そうとするバギーの背を止めた。
「それじゃあな。おれは忙しいんだ、もう行くぞ」
「ちょっと待ってよ、せっかちだなぁ。なんでそんな急ぐんだよ」

「決まってんだろ。逃げるんだよ。まだ時間も早ぇから基地内の警備も甘いはずだ。可能だとすればタイミングはここしかねぇ」
「確かにねぇ。でも難しいと思うよ、実際」
「トーシローは黙ってろ。能力を隠し通せたおれならやれるはずだ」
「やっぱり一人じゃ難しいって。だからさ、手を組もうよ。ボクも協力する」
「おまえがぁ？」
キリを見るバギーの目が猜疑心を露わにする。
正直な男だ。感情を一切隠そうとしない。
そんな目をするからには出てくる言葉は想像できて、耳にしたキリはつい苦笑してしまう。
「ノーだ」
「なんで」
「てめぇは麦わらの手下だろ。忘れちゃいねぇか？　おれは奴に恨みこそあれど仲良くする理由なんざねぇ。たとえ恩を売るとしてもごめんだね。ずっとそこに一人で居ろ」
「そんなひどいこと言わないで。今回を機に仲良くしようよ。肩並べてさぁ」
「するか。おれは一人で自由を謳歌するのさぁ～」
想像通りの言葉を吐かれて、上機嫌なバギーは背を向けると小走りで駆け出す。
その背へ、あらかじめ用意していた言葉をぶつけた。
「もったいないなぁ。それじゃ隠し金庫のお宝はいらないんだね」
バギーの背が、面白いほどぴたっと止まる。
駆け出す足は中途半端な形で止まり、右足は地に着いたまま、左足が上げられていた。
そんな奇妙な体勢のままで振り返るバギーの目は、動揺を露わにしながらこれでもかと好奇心を表に出し、どことなく輝いているように見える様子でキリを見つめる。
「か、隠し金庫？　お宝？」

「そうらしいんだよ。ここに居る海兵が裏帳簿を作って金を貯めてたんだって。それがどこかにあるらしいんだけど、ボク一人じゃ探せないし、全部運び出せるかどうか……」
「一応聞いておくが、その金ってのはいくらぐらいある。いや、一人で逃げるんだが一応な」
「さぁ、想像もできないけど。でもかなりの額にはなるだろうね」
キリが語る言葉には虚実が入り混じる。
隠し金庫があるらしいというのは聞いた話だ。おそらく本当なのだろう。しかしその中にある金が莫大だとは誰も言っていない。彼の想像、或いはその場で考えたものである。
真実は如何なる物か。今はそんなことどうでもいい。
バギーの注意を惹ければ十分で、実際その考えは成功したようだった。
金と聞いてバギーは目の色を変えている。聞けば彼は財宝その他に並々ならぬ興味を示す海賊。冒険を求めるルフィとはタイプが違う。
求める物が隠されていると知って、興味はどんどん増していく様子。
その顔を見ながらキリはほくそ笑んだ。
一人で逃げ出すには少々厄介な環境だろう。ならば実力の如何に関わらず協力者が欲しい。
彼は、能力者であることも多分に含め、キリにとって救世主とも言うべき存在だった。
「それに一人で逃げるにはちょっと広過ぎると思うけどなぁ。いくらバギーが能力者だからってここは人も多いし、何より構造が入り組んでる。無事に逃げ出すのは難問だよ」
「ぐっ、だがてめぇが居たところで状況が変わるか？」
「もちろん。実はここに入れられる前、基地内の地図を見たんだ。急だったけど大体覚えた。実際見ながら確認するしかないけど案内できるよ」
「地図だと？　そんなもんどこで」

「きれいなお姉さんに見せてもらったんでね」
肩をすくめるキリを見て数秒、バギーはいよいよ真剣になって考え始める。
確かに一人では難しい。彼が協力すると言うのならたとえその話が嘘であっても役立つだろう。
ただ、信用できないのである。
やはり憎きルフィの仲間であり、加えて言えば彼は一味の中で唯一、船長と共に賞金をかけられている。ローグタウンでの襲撃に際し、新聞も読んだ。噂も聞いた。なぜ彼らが世界中に名を広められたかと言えばキリの働きが大きかったからだという。
果たしてこの男、自らの力として傍に置くべきか、それともここに置いていくべきか。
逡巡するバギーは必死で考えた。しかしやはり、金と脱獄の両方が欲しい。
「てめぇが居れば隠し金庫は見つかるのか？」
「可能性は高くなるよ。必死で探すから」
「ふぅむ……確かに一人じゃ面倒か。それにどちらにしても時間はかかるな」
顎に手を当て、しばし真剣に思案する。
彼が居た状況での利点、不都合。自身が単独で移動した場合。
両方を考えた結果、苦心した彼は難しい顔で中空を睨んだ。
（地図を見たって話が本当なら使えるはずだ。それにもしも見つかるようなことがありゃ、こいつを囮にして脱出することも可能。最悪隠し金庫を諦めて逃げるにしても、一人よりかは海兵の注意をバラした方が得策だな。つーことはやっぱりこいつも連れていくべきか）
優先するのは自らの保身、そして金。キリの安全など二の次だ。
様々な考察から利用できると確信した彼はにんまり笑い、牢屋の中で座り込む姿を見下ろす。
その心中も知らず、キリはどこか緩い笑みを浮かべてバギーを見ていた。
やはり彼を連れていくことに決めたようだ。

「よし、いいぜ。それじゃおまえも連れてくことにしよう」
「サンキュ」
「その代わりこのおれ様が助けてやるんだ。しっかり役に立てよ」
「そりゃもうもちろん。有難きキャプテン・バギーに大きな感謝を」
「その感謝が形になりゃいいがな。むっふっふ、どんな大金が待ってるんだろうなァ」
上機嫌なバギーは口元を押さえ、今からすでに笑いが止まらない様子。来るべき時に出会う大金を想像して興奮しているらしい。海賊の鑑とも言うべき欲望にまみれた姿だった。
そうと決まれば早速キリを牢屋から出さねばならない。
バギーは腰の裏に手をやり、こっそり盗み出した鉤の束を持ち出す。
彼はバラバラの実の能力者だ。海楼石の錠をつけて能力を封じない限り、手錠をかけようが牢屋に入れようが簡単に抜け出せる。壁に掛けられていた鍵を盗み出すのも朝飯前で、その気になれば全身をバラバラにして鉄格子を抜けることも可能だが、今回は海兵の視線を恐れたらしい。
手錠の鍵は持っていないが扉を開けることはできる。
バギーはじゃらりと鳴らす鍵の束から目の前にある錠前に合う物を探そうとした。
それを言葉で押し留め、キリは必要ないと告げる。
「いいよ。鍵ならいらない」
「あ？　これがなきゃおまえ出れねぇだろうが」
「違うよ、出れるからいらないんだ」
そう言った途端、カシャンと音を立てて手錠が床へ落ちる。
あんぐり口を開けるバギーの視線の先で、キリの両腕はひらひらと紙になっており、薄っぺらい様相で手錠の下から抜けていた。そして直後には厚みができて元通りになる。
能力者だとは知っていた。否、だからこそ驚いた様子だった。
「海楼石の錠じゃなかったのか？」
「何の因果かね」

苦笑するキリは前へ進み出て、今度は全身を紙のように薄っぺらくして尚も歩く。
鉄格子の間を通り、人間には通れぬ細い場所を難なく通り抜けた。そしてその後で再び元通りの厚みを取り戻し、本来の人間の姿となる。
感心した顔で声を漏らし、バギーは一瞬考え直す。
彼の能力を知ったことで疑問が生まれた。
「おまえも隠し通せたクチか。なら最初からここに居る必要はなかったんじゃねぇか。考えてみりゃおれに助けを求める必要もなかったってことだろ。一体どういう了見だ？」
「そっちと同じで、タイミングを見計らってたのさ。敵は多いし逃げ道もはっきりしてない。誰か海兵が来るようならそれとなく探ってみようかと思ってたんだけど」
「ふむ、まぁいい。とにかくこいつはもう必要ねぇってわけだ」
盗んだ鍵の束を捨て、地面で硬い音が鳴る。
その様にキリは苦笑した。
もしバギーが頷かなかった場合について、彼本人が考えることはなかった。
キリは確かに捕まってはいたが、抜け出そうと思えばいつでも自力で抜け出せただろう。バギーに置いていかれた場合、そのまま黙っているはずもない。いずれは食事を運んでくる海兵もそこへ現れただろうし、キリから気軽に話しかけることもあったはずだ。
どうやら助かったのはキリだけではないらしい。
そこまで考えず、バギーは先頭となって歩き出そうとしていた。
キリも素知らぬ顔で後ろへ続こうとする。
彼らは決して仲間ではない。信用した上で協力関係を築いた訳ではない。
言わば仮初の友情。
何かが起こればどちらからともなく動き出し、状況が変化することは確約されていた。
二人はそれを告げぬまま、胸に秘めた状態で肩を並べる。

歩き出してからであったがキリが口を開き、バギーがそれに応じた。
脱獄の第一段階は終了した。一方でやるべきことはまだまだあり、隠し金庫を見つけて奪う、要塞の外へ脱出する、それらのためにも細々としたことが多い。
「まず何から始めよう。先に武器を手に入れないとね。多分バレるのは時間の問題だよ」
「戦う気か？　正面からやり合ってたんじゃ勝ち目なんざあるわけねぇぞ」
「だからこそ色々武器は必要でしょ。それにこの島を離れるには作戦も必要だ」
「具体的には」
「その辺決めてから動き出した方が良さそうだね。一旦止まろう」
足を止めた二人は牢屋が並ぶ一室から出る前に足を止め、向かい合う。
辺りには物が何もない。従ってメモを取ることもなく、言葉で脳裏に刻むしかなかった。
「地図があれば早いんだけどな。状況はかなり厄介だよ。敵の捜索を回避しつつ、道を確認しながら進まなきゃならない。今は武器もないし」
「金も探せよ。それがなきゃてめぇに用はねぇんだ」
「わかってるって。時間が必要かな……それと、外に出る可能性も高めたい」
顎に手を当てたキリはふむと頷く。
「デッドエンドの参加者ってみんなここに来たんだよね？　捕まってる人とか居ないかな」
「そうか、捕虜になってる連中を逃がせば大パニックになるぞ。海兵の連中、おれたちに構ってる暇も無くなる。そうすりゃこっそり船を盗むのも目じゃねぇな」
「ただリスクもある。逃がした連中がボクらに味方するとは限らないし、罪も重くなるよ」

「そんなもん今更だろ。一番はここから生きて出られるかどうかだ」
「まぁ確かにそうだけど」
「なんならそいつらに武器を渡して戦わせてやりゃいい。おれ様の負担も減るってもんよ」
悪い顔で企むバギーはひどく楽しそうである。やはり性に合っているのだろう。
彼の言っていることは間違っていない。脱獄の成功率を高めるには必要不可欠な展開で、地図を見せられた瞬間からキリはその考えを持ち、牢屋の位置も確認していた。
問題は順序だ。
いきなり逃がしてパニックを起こすのは果たして褒められた行為か。
先にするべきことがあるだろうと考えるキリは、今後の展開を冷静に組み立てようとしていた。
自分たちの動きだけではない。敵の動きを予測する必要もある。
その上で向かう場所、手に入れる物を決め、基地内に混乱をもたらす必要があった。
数秒黙った後、バギーを見るキリが口を開く。
作戦は決まったようだった。
「よし、順序良く行こう。多分脱獄自体はすぐバレる。でもよくよく考えればボクとバギーの能力は隠密行動に向いてるんだ。上手く進めればなんとかなるはず」
「隠密行動だァ？」
「ボクは紙になれるからどこにでも隠れられるし、バギーはバラバラになるから隠れやすい」
「そりゃそうだが、一度バレたら監視の目も多いぞ」
「時間をかければなんとかなるさ。長期戦を考慮してゆっくりやろう。一つずつ準備していけば後々有利になるのはきっとボクらの方だ」
「何を根拠に言ってやがるんだか……だがこうなったらやるしか

ねぇな」
溜息交じりではあるものの、観念したのかバギーも同意する。
そんな彼に今後の動きを丁寧に説明し、キリはいつしかこの時を楽しみ始めていて。
見知らぬ要塞の中、希望と絶望が入り混じり、そこを生きて抜け出すべく、二人は進み始めた。

崩壊した町

朝日が昇って、新しい一日が始まる。
朝食を食べ終え、身支度を整え、ゴーイングメリー号は出航した。
いつも通りの行程は経てはいたものの、普段より少し慌ただしく、全員に急ぐ動きがあった。
今日は別行動を取っていたキリと合流する予定だったからだ。
一体今までどこで何をしていたのか、全く読み切れなかった彼と再会する。聞きたいことはいくらでもある。中には怒っている風の面々も居て、いつもとは少し違う空気が流れていた。
船上には普段より重い空気がある。だがそれは決してキリに向けられる物ばかりではなかった。
原因は甲板に居ながら離れて座るシュライヤとアデルだ。
朝食の時からやけに気まずそうだった。おかげで周囲で見る者さえ気まずげにしている。
不思議と見ている方が緊張した。
甲板の隅で見ていたウソップは近くに居たシルクへ声をかける。
「あいつらいつまでああしてんだ？　兄妹だってことはわかったんだから、もうちょっとなんとかできねぇのかよ。どっちもずっと黙り込んだままでよ」
「無理もないよ。お互い死んだものだと思ってたんだし、突然の再会だったから」
「でもよぉ、血の繋がった家族だろ。それくらいどうにか――」
「それにシュライヤは、賞金稼ぎとして生きてきたでしょ。きっと良い事ばかりじゃなかっただろうし、負い目があるんじゃないかな。無理に促すのは悪いよ」
「やり切れねぇな。せっかく喜べる状況だろうに」
シュライヤもアデルも、それぞれ別の場所に座って海を眺めていた。
きっと互いに意識はしているだろう。だが接し方がわからない。家族として過ごしていたのは八年も昔の話、それからは生きているこ

とさえ知らなかった。
顔を俯かせるシュライヤにはシルクが語る通り、負い目がある。他人の血に濡れて生きてきた。
そしてアデルは、そんな彼に戸惑ってしまった。
すぐに向き合うことは難しそうで、少なくとも今は先送りにするしかなさそうだ。
ウソップとシルクは会話をやめ、ひとまずこのままでいるしかないと思う。船上はしばらく重苦しい空気にあるが文句は言えない。慣れるしかなさそうだ。
それも島に着く頃には状況が変えられるだろう。
パルティアにはビエラが居るはず。二人の間に彼が入ってくれればいいのだが。
船上にはしばらく沈黙の時が流れた。
各々が思い思いに過ごしていて、それぞれ居る場所も違っている。
しばらく経って、ルフィが大声を発した。
いつも通り船首の上に座っていた彼は船の進行方向を眺めて、その先に島の姿を見たのである。
やっと到着した。デッドエンドのゴール地点、パルティアだ。
「島が見えたぞぉ～！」
「お、ようやくか」
「思ったより時間かかったわね」
ルフィの声に反応したサンジとナミが呟く。
指針が指し示す通り、前方にある島は目的地だった。
ようやく航海が終わる。
騙された結果とはいえ航路を間違え、待ち伏せを受け、異常気象を回避した後にやっと見つけた一つの島。普段にも増して安堵は大きく、ナミは大きく肩を落とす。
「はぁ～、三億ベリーが一億ベリーかぁ……キリが最初から言ってればこんなことには」
「いいじゃないか。確かに減ったけど一億は手に入ったんだから」
「最初は三億だったのよ？　それが二億も減って一億だけなんて。

喪失感が半端じゃないわ」
「ハハ、確かに。でも一億だって大金さ。ゼロから考えりゃ儲けには違いない」
「それはそうだけど……はぁ」
航海の安堵と共に喪失感を覚え、ナミは重々しく溜息をつく。
傍で聞いていたサンジは苦笑せざるを得なかった。
お金が大好きと称するからには執着も大きかっただろう。だが冷静に考え直せば、様々な窮地に直面しながら命があるだけでも幸運だった。
気を取り直したナミは前方の島を眺める。
「まぁいいわ。あれだけ色々あって全員無事だったんだし。とりあえずあの島で休みましょ」
「だね。ビビちゃん、コーヒーのお代わりは？」
「大丈夫。ありがとうサンジさん」
「お安い御用さ」
笑って告げるサンジはその場を離れ、ラウンジへと戻っていった。
持ち出された丸いテーブルを挟み、椅子にはナミの他にビビの姿もある。
朝の一時を感じ入り、風を感じながらコーヒーを一杯。心を落ち着けるには十分だった。
そんな中で、ビビは少し沈んだ表情を見せる。
「ねぇ、ナミさん」
「ん～？」
「こんなにゆっくりしていていいのかしら。私がこうしている間にも、国には反乱の危機が迫ってる。それなのに私だけ、こんなにも落ち着いて……」
「気にし過ぎよビビ。キリが言ってたでしょ？　反乱はまだ起こらない」
「でも」
「そりゃ確かに、バロックワークスに居た頃のキリを私たちは知らない。だからなんでそんな自信があるのかとか、そういうのはわから

ないけど、でも」
不安を露わにするビビをじっと見つめ、ナミは邪気の無い笑みを浮かべた。
「私たちの仲間よ。あんたが困るようなことするはずない」
「ええ……」
「あんたはちょっと真面目過ぎ。ずっと肩に力入れてたんじゃ疲れちゃうでしょ。たまには考えるのやめて、あいつらみたいに能天気になった方がいいんじゃない？」
そう言ってナミが視線を向けた先では、ゴールに到着することを心待ちにして騒ぐ仲間の姿。
ルフィやウソップを中心にしてやけに騒がしい。彼らは至っていつも通りだ。
確認したビビが薄く微笑む。
傍らに居たイガラムは彼女を気遣って口を開くのだが、少しは余裕ができたのか、ビビが吐き出す感想は彼が想像していない物だった。
「無理もありません。ビビ様は祖国を救うため、覚悟を決めて海に出ました。全ての心配もアラバスタを傷つけさせたくないという一心。ご理解いただく他は――」
「そうね。少し、考え過ぎていたのかもしれない」
「ビビ様？」
言葉を止めたイガラムが彼女を見た。
視線を合わせたビビはくすりと微笑む。
「彼らを見習った方がいいのかもしれないわ。力が入り過ぎても疲れちゃうものね」
「そうそう。どうせまだアラバスタには直行できないんだし、到着は先になる。今からそのことばっかり考えててもどうしようもないわ。今できることだけ考えなさい」
「ええ」
「今はレースが終わったとこなんだから、とにかく休みましょ」
やさしく微笑むナミにつられてビビも肩の力が抜け、やっと表情が柔らかくなった。

これを見ていたイガラムは感心する。
海賊らしくない、人の血が通ったと言うべきか、思いやりのある言動だった。以前から感じてはいたものの彼女たちはビビを、イガラムを、カルーを仲間として扱っている。そこには王女に対する打算や計算、そういった邪知が感じられない。
イガラムもまた表情を柔らかくし、二人の傍をそっと離れた。
その直後に突然ナミが前のめりになり、テーブルに肘をつきながら怪しく笑う。
何やら嫌な予感がしたが、その発言は戸惑う素振りもなく発される。
「ところでビビ、あんた王女なのよね？　このまま国まで安全に連れて帰ったらそりゃあ私たちは大恩人ってことになるわけだけど……わかってる？」
「は、はい」
「うふふ、わかってるならいいの。まぁ最悪国王様に直接聞けばいいんだし、期待してるわね」
何やら怪しい言葉が聞こえて、ビビは困った様子。助けに入るべきか、敢えて聞かなかったことにすべきか、悩んだイガラムは密かにその場で立ち往生していた。
ちょうどその頃になって船の先端から大声が出された。
島は着々と近付いていて、前方に集まる面々がその全景を眺めているのである。しかし、想像した姿ではなかったせいか、発される声には動揺が混じっている。
どうやら皆が同じ気持ちで驚いていたらしく、誰かに答えを求めるかのようであった。
「お、おいっ、なんだあれ!?」
「町が……壊されてる？」
先にウソップが声を出し、次いでシルクが険しい表情を見せる。
同じくルフィやゾロ、サンジも驚きが隠せずに厳しい顔だ。
前方に見えた町、パルティアは、全てが崩壊していた。
おそらく数日前までは平和に過ごしていたであろう場所。海賊

レースのゴールになったからか、もはや以前の姿を想像することさえ億劫なほど破壊し尽くされ、瓦礫の山がそこら中にある。代わりに人の姿はそう簡単には見えず、少なくとも気配は感じない。
町として完全に機能を停止していると言ってもいいだろう。
そこには海賊の恐怖が刻み込まれていた。
言葉を失くす一行はしばし沈黙する。
信じられない、というのは表情に表れていた。
やがてナミやビビたちも駆け寄ってきて、その光景を見て彼女たちも口々に呟く。
「何これ、全壊じゃない……」
「ひどい……」
「海賊の仕業だよな。しっかしひでぇ。町中攻撃されてんじゃねぇか」
呟くウソップの隣に険しい表情のアデルが並んだ。
手すりを掴み、何かを憎むような目で町を眺めている。
思い出す何かがあったのだろう。彼女たち兄妹の町もまた、海賊に襲われて滅ぼされたという。冷静でいられないのも無理はないと納得できる状況だった。
「海賊って奴らはみんなこうなんだ。悪いことなんて何もしてない市民を襲って、好き勝手暴れて人だって殺す。自分さえ良ければいいって連中ばっかりだ」
「おいおい、おれたちまで一緒にすんなよ。そんな海賊だったらおまえたちのことなんかとっくに見捨ててるぜ。わざわざここまで連れてきたんだからな」
「おまえらが違うってのはもうわかったよ。でも、海賊がみんなそうなんじゃない」
「そりゃあまぁ……」
アデルの言葉に言い淀むウソップはぐうの音も出なくなった。
メリー号に居る者の多くが、海賊の被害を受けている。自分たちがどうであれ、その存在が世間からどんな目で見られているか、己が身を以て理解していた。

故郷を滅ぼされ、兄妹と生き別れになった彼女に何を言い返せるだろう。
アデルの言葉は真実を告げていた。
言葉を失った面々はしばし黙り込んで何も言えなくなり、辺りには沈黙が広がる。
シルクがアデルの傍へ移動し、膝を折って視線を同じにすると、彼女の肩へ手を置く。その表情は辛そうな物で、同情の念が抑えられない様子だった。
似た境遇でも結果が違う。
助けられたシルクと、最悪の結末を見たアデル。感情が動くのも仕方ない。
メリー号が徐々に島へ近付いていく。
到着は目前。ついにゴールの瞬間だがあまり嬉しそうな雰囲気ではなかった。
シュライヤは、船の前部に居るアデルを知りながら甲板を動かなかった。
壁に背を預けて腕を組み、物憂げな表情で一人佇んでいる。
思うところはあるのだろうが、煮え切らない様子の彼に、たまたま近くに居たゾロが言う。
「おまえはいいのか？　ここに居て」
「……おれが行ってどうにかなるもんでもねぇだろ」
「唯一残ってた肉親だろ。また手放す気か？」
「おれが掴むわけにはいかねぇんだよ」
自嘲気味に笑い、シュライヤの顔に影が差す。
そちらを見ようとはしないとはいえ、声色の変化から大体の事情は呑み込めた。賞金稼ぎだったという話も聞いており、ゾロは険しい顔で耳を傾ける。
「ガスパーデを殺すために何でもやってきた。この手は血で汚れ過ぎてる。八年も生きてること知らねぇままで迎えにも行かねぇで、今更兄貴面されちゃ、あいつだって迷惑だろうさ」
「あいつが、そう言ったのか？」

「いいや。だが聞かなくてもわかる。薄汚ぇ賞金稼ぎと一般市民じゃ住む世界が違うからな」
「そりゃおまえの意見だろ。あいつの意見を勝手に決めるなよ」
怪訝な顔をしたシュライヤがゾロを見た。しかし視線は合わず、前を向いたままゾロが続ける。
「てめぇが逃げたいがために他人を理由にするのは感心しねぇな」
「そうじゃねぇ。これがあいつのためなんだ」
「だから、そりゃてめぇが言ってるだけだろ。本人に聞きもしねぇで語んなってんだ」
堂々巡りのやり取りである。
思い空気を感じてシュライヤが口を閉じ、少し考え込む素振りを見せた。
変わらずゾロを見ていると不意に彼と視線が合い、顎を動かして船の先端を示される。
そちらに目を向ければ、いつの間にかアデルが振り返っていた。
改めて視線が交わる。
事実を知ってからつい逸らしがちだったが、意見を聞けと言われた今となってはそうもできず、自分でも自覚できないままにじっと見つめていた。
よく考えれば彼女と目を合わせるのは妹だと判明した時以来だと思う。
彼女は少し困った顔で、だが意志の強さを感じさせ、シュライヤから目を離さなかった。
「あっちはもう覚悟ができてるってよ。で、おまえはどうすんだ？」
そう言われてやっとはっきりした。
シュライヤは呆然とした顔で立ちすくみ、しばしの沈黙の後で視線を落とす。
今しがた見たばかりのアデルの顔は覚悟を滲ませる物。そこにゾロの言葉を合わせれば意図が汲み取れる。言葉にして聞かずとも彼女の決意が伝わった。
しかし果たして、それでいいのか。自問自答を繰り返す。

もう帰る場所などないと思っていた。
それなのにアデルは彼に居場所を与えてくれると言うのか。その意思を感じて自分がどう決意すべきか、多少の迷いや躊躇いがあって、つい言葉が出なくなった。
シュライヤの様子を見たゾロは静かにその場を離れる。
船が島に到着しようとしていた。
着港するため操船に動き出し、慣れた手つきで船員たちが船を動かす。
帆を畳み、港へゆっくり船を近付けて、錨を下ろす頃には完全に動きが止まる。
先にルフィが降り立った。
辺りに広がるのは破壊し尽くされ、荒廃した町の景色である。少なくとも心が落ち着く場所ではなく、しかし犯人らしき人影も無くて、それどころか人の気配も感じないため困ってしまった。これでは誰かに話を聞くことさえできそうにない。
表情を歪めるルフィは腕組みをして首をかしげ、ううむと唸る。
キリはどこに居るのだろう。港から見える景色に彼の姿はなかった。
先に到着したと言ったからにはどこかに居るはずである。
嘘をつくようなタイプではあるものの、道に迷うタイプではない。実力もそれなりな物で負けるとも思っていないため、心配はしていなかったのだが、姿が見えないと不安にもなる。
仲間たちも続々と降りてきて、同じくキリの出迎えがないことに違和感を覚えている表情。
そこに突っ立っていても変化がないままで、辺りを見回すルフィが呟いた。
「誰も居ねぇな。キリはどこ行ったんだ？」
「もう着いてるって言ってたんだろ？　まさか海賊にやられたってんじゃねぇだろうな」
「それはねぇだろ。だってキリだぞ」
「じゃあどっかに隠れてんのか？　まぁ確かに隠れる場所は多そう

だけどよ」
「そもそも一人で何やってたのかしら。そりゃルフィを一人にするよりは安心だけど」
先頭になるルフィの隣にウソップとナミがやってきて、同じ方向を眺める。
三者三様、思うことも違うようで、同じ物を探しながら町を見る感想は違っていた。
少しするとアデルが小走りでやってくる。近くには寄り添うようにシルクが居て、カルーを連れたビビも彼女を気遣っているらしく、できるだけ傍に居てやろうとしている。
ルフィの隣で足を止めた彼女は、きょろきょろ見回してビエラを探す。
そこに居ると聞かされていた祖父の姿も見えない。そのせいで心配が増していたようだ。
「じいちゃんは！　なぁルフィ、じいちゃん見つかった？」
「いや。誰も見てねぇぞ」
「そんな……どこ行っちゃったんだろ。ここに居るんじゃなかったのかっ」
「待て待て、落ち着けよ。まだ居ねぇと決まった訳じゃねぇんだし、探せばどっかに――」
取り乱しかけたアデルを落ち着かせようとウソップが言った時、少し遅れて到着したシルクが気付いて、近くの仲間たちに告げた。
「ねぇみんな、誰か来るよ」
「ん？」
少し目を離した隙に見覚えのない人影が現れていた。
港から町へ真っ直ぐ続く道を、一人の女性が歩いてくる。
その風景にあまり似つかわしくないと言うべきか、貴族が着るようなドレスを身に着け、どこか高貴な雰囲気を携えながら、お供も連れずにしずしずと一人でやってくるのである。どうやら港に見える彼らを目指しているようで、立ち尽くしているだけで距離が狭まってきた。

その場を動かず待っていた一行はその女性を見つめる。
肩に届く程度の金髪で、輝くような非常に美しい様相を湛え、端麗な容姿に眼鏡をかけている。
高貴な雰囲気を纏う麗人。
ドレスを着ていることを差し引いても、不思議と目を奪われる存在だ。
徐々に近付いてくる彼女を見つめてルフィたちは不思議そうな顔で動かない。その中で唯一、何やら喜び勇んだ様子でサンジが前へ飛び出した。
軽いステップで女性に近付き、緩んだ表情で声をかけ始める。
「あぁ、なんてお美しい。まさにこの荒んだ町に咲いた一輪の花。たおやかな貴女に水を差し、枯らさないようにずっと傍で見守っていたい」
「サンジが壊れたぞ」
「いつも通りだな」
サンジが急接近したことで女性が足を止め、ふわりとやさしげに微笑む。
その顔を見てサンジの様子がさらに変化して、見ていて思わず溜息をついてしまう姿だった。
「こんにちは。あなたたち、麦わらの一味ですね」
「いいえ、あなたの騎士(ナイト)です」
「サンジくん、邪魔」
「おまえおれたちのこと知ってんのか？」
ナミがサンジの耳を引っ張って退かしたことで、ルフィが正面に立つ女性へ尋ねた。
彼女はくすりと笑って答える。
優雅さや気品を感じさせる仕草を見せ、海賊に詳しいとすれば違和感が付き纏う。サンジを除いて向き合った大半の人間が警戒する一方で、彼女は海賊を相手に堂々とした態度だった。
「伝言を預かっているんです。あなたのお仲間から」
「キリか。そうかぁ、やっぱり無事だったんだな」

「おのれキリっ、またあいつだけ抜け駆けを……！」
「な、なぁあんた、じいちゃんのこと知らないか？　そのキリって奴と一緒に居たんだろ？」
ほっと一息ついてすぐ、慌てたアデルが女性へ聞いた。
外見からすれば彼女は全く怪我をしていないし、服が汚れている訳でもない。襲撃があったばかりだろうに海賊を目にしても恐れている様子もない。冷静に話せて、何やら事情を知っている風の人物だ。ビエラのことを聞くなら彼女しか居なかった。
尋ねてすぐに理解したのか、女性は微笑んでアデルに目を向ける。
「彼なら無事ですよ。ただ、病気だったんでしょう？　療養しなくてはいけないので、山の向こうにある町の病院へ移動しました。今頃は病室で安静にしているはず」
「ほんとかっ!?　よかった、無事だったんだ……」
「あなたのことを心配してましたよ。早く行ってあげた方がいいんじゃないでしょうか」
「うん！」
喜ぶアデルはようやく朗らかに笑い、傍に居たシルクやビビも頬を緩めた。
そんなアデルを確認し、次いでルフィが金髪の女性へ問う。
「んで、キリも居るんだろ。どこだ？」
「それが……残念ですが、ここには居ないんです」
「ん？　なんで？」
「昨夜のことでした。実は海兵に捕まってしまったんですよ」
「ええっ!?　海兵に捕まったぁ!?」
叫ぶ声が重なり、大声を発したのはルフィだけではなかったようだ。
驚きの表情を浮かべる面々は信じられないといった顔を見せるが、彼女の笑みは変わらず。
どうやら嘘ではないらしく、それ故余計に動揺が大きくなった。
身を乗り出すルフィが代表して尋ね、女性も冷静に応対する。
「キリが捕まったって、どういうことだ？」

「昨夜、突然海からやってきた動物に襲われて、彼だけが攫われてしまったんです。暗くて見えにくかったんですけど、確かシロクマでした。恐ろしく強くて……」
「シロクマって、ひょっとして」
「ああ。あいつだな」
思い当たったらしいシルクとゾロが声を出した。
彼らは以前対峙している。仲間と協力して立ち向かい、それでも勝てなかった強者のことを。
あの時も辛うじて逃げ出せた程度で、見た目の可愛らしさに反して実力は一級品、正面から戦うのはまずい相手だと知っている。その相手がキリを襲ったというならば連れ去られたのも納得はできるだろう。首をかしげる仲間たちとは違い、ルフィとナミを加えた四人はいち早く理解した。
この話、本当かもしれない。
まだ理解できていない者も多いがひとまずは話に集中する。
金髪の女性はなぜか笑みを絶やすことなく、重ねて彼らに告げた。
「シロクマ以外にもあと二匹居たと思います。とにかく彼は攫われてしまって、きっと近くの海軍基地に運ばれたんでしょうね。それから一度も連絡が取れなくて」
「近くの海軍基地ってどこなんだ」
「ここからだと、多分、ナバロンではないでしょうか」
「ナバロン!?　よりにもよってあんな場所……」
聞いた途端にナミが狼狽する。
ナバロンと言えば少し前に立ち寄って、凄まじい威容を眺め、レースの途中だったからという理由もあるとはいえ、すぐに踵を返して離れた地だ。
今はそこにキリが居る。できれば冗談だと思いたかった。
対海賊においては無敗を誇る海軍要塞。その強靭さから〝ハリネズミ〟と呼ばれて、誰も近付けない場所だと噂も流れている。捕まって逃げ出せた者も居ない。
その島に連れ去られてしまってどうすればいいのか。

困り果てるナミの視線は自然とルフィの顔へ。
真剣な眼差しに変わった彼はすでに決意しているように見え、それを見たナミは唇を噛む。
「どうするのルフィ」
「決まってる。助けに行くぞ」
「本気ですか？　ナバロンはこの辺りの海では負け知らずの要塞。一隻の海賊船が攻め込んだところで落とすことはできません。あなたたちの命も危うくなります」
「関係ねぇよ。キリはおれの仲間だ。見捨てるなんてあり得ねぇ」
そう言ってルフィはあっさり踵を返す。
傍に居たアデルが心配そうに彼の背を見つめ、思わずといった様子で声をかけた。
「ルフィ、本当に行くのか？　危ないんだろ。あの、おれ……」
「おまえはじいちゃんのとこに行ってやれ。これはおれたちの問題だ」
「でもっ」
「それでいいんだよ、アデル。自分にできることをやればそれでいいから」
焦りを募らせたアデルへ、やさしい声でシルクが言い聞かせた。
目を合わせれば彼女は柔らかく微笑んでいる。その顔を見るとつい言葉を呑んでしまった。
彼らの助けになってやりたい。だが自分が何の役に立てるかはわからなくて、冷静な思考が足手纏いになるのではないかと告げており、強く言えないのはそのためだ。
ビエラを心配する気持ちも嘘ではない。
この場は彼らを見送るしかないと判断したらしく、アデルは船へ戻る背を見送る。
すでに意識は切り替わっていた。
この際、キリが何をしていたのか、なぜ捕まったかはどうでもいい。
それよりも重視すべきはどう助け出すか。最強とさえ謳われる要塞を相手に正攻法で挑めるはずもなく、何かしらの策が必要になりそ

うだが、あいにく今は普段策を用意する人物が居なくなっている。これだけですでに由々しき事態と言えた。
全員でメリー号に戻ろうとする途中、不安そうにするウソップは早くも心配していた。
それが彼の美点でもあるがルフィは足を止めようとしない。
一旦立ち止まって考えるという考えはなさそうだ。
「なぁルフィ、おれもキリを助けに行くって考えは賛成だが、むやみやたらに突っ込んでも死んじまうだけだろ。ここは一旦冷静になって作戦を立ててだなぁ」
「じっとしてられねぇよ。おれは今すぐ助けに行く」
「いやそうだけどおまえ、それでメリーが沈んじまったら本末転倒で――」
「諦めろウソップ。こうなっちまったら梃子でも動かねぇよ」
何とか考えを変えてもらおうと進言するウソップへ、冷静になったサンジが言う。
ルフィが考えてから動く性格ではないと、ずいぶん前からはっきりしている。むしろ動き出してから考える、或いは動き出してからも大して考えないのが彼の常だ。
そう言われては諦めるしかなかったようで、大きく肩を落とすウソップが口を閉ざした。
彼らがメリー号へ乗船しようとした時、前方にシュライヤが立ち塞がる。
真剣な表情。視線はルフィを捉えていた。
彼は神妙になった声色で言葉を紡ぎ、同じく真剣なルフィへ質問する。
「おれにできることはあるか」
「いいよ。アデルの傍に居てやってくれ」
「このままじゃおれはおまえらにおんぶにだっこだ。何の役にも立っちゃいねぇ。恩返しなんてつもりでもねぇが、借りを作りっぱなしじゃ気持ちが悪ぃんだ」
「そんじゃ戻ってからにしよう。気に入らねぇんならおまえ、おれ

と戦えばいいだろ」
あっけらかんと言ってルフィは笑う。
シュライヤは言葉を呑み込み、自分でもわからないが彼の言葉を受け止めるのみだった。
「一緒に居てやれ。せっかく生きてたんだ、もう手放すなよ」
「……ああ」
何か言いたげではあった。それなのにシュライヤは何も言わず、静かに道をあける。
その道を通って麦わらの一味はゴーイングメリー号に乗り込んだ。
甲板へ立ってすぐに出航の準備を始め、船上は慌ただしくなる。
キリが連れ去られたのは昨夜。今頃はどうなっているのかわからない。
最悪の場合、死刑ということもあるだろう。
海賊にやさしくする海軍など、少なくとも彼らは把握しておらず、今も生きているかどうかさえ不安に思って、できるだけ急がなければという思考に囚われていたようだ。
慌ただしく動きながらルフィがナミへ声をかけた。
彼女はすでにナバロンのエターナルポースを持って指針を確認していた。
「ナミ！　行けるか！」
「ええ、もちろん。これがあれば迷うことなんてあり得ない」
「よぉし、出航するぞ！　キリを助けに！」
休む間もなく再び出航し、メリー号は海へと漕ぎ出した。
船を降りたアデルとシュライヤは、まだ少し距離があるものの、同じようにして遠ざかっていく船を眺め、心配するのか真剣な眼差しでメリー号を見送った。
そしてその近くではドレスを着た麗人の姿。
今の今まで笑みを絶やさなかった彼女は一味が離れた直後、やれやれと溜息をついていた。

ハリネズミの日々

朝日が完全に上り切り、海兵たちが基地内で朝食を取っている頃。
全ての海兵が一気に食堂へ集まる訳ではない。
時間制の問題でもあるが、空腹を多少我慢した後、食堂で朝食を取る者も居る。牢屋を見張る海兵などがそうだった。先日のデッドエンドで海賊が大挙して押しかけ、牢屋を満たすほど収監されている。これが暴れ出さないよう、見張っておく必要があった。
普段ならばまずあり得ない仕事である。
ナバロンに立ち寄る海賊が居ないために、見張りをするなど何年振りかのことだ。
当然、慣れない新兵の中にはその仕事を軽んじる者もおり、あくびさえ我慢できない始末。
牢屋の近くにある詰所に居る二人は、うんざりといった顔でそちらを見ていた。
「おいコラァ、開けろォ！」
「てめぇらこっち来いオラァ！」
「出さねぇとどうなるかわかってんだろうなァ！　いいから鍵寄こせよ、おい！」
島の土壌を利用し、地下に穴を掘って作った広大なスペースに、大量の牢屋が並んでいる。
収監された海賊たちはほぼ一日中騒ぎ続け、海兵に罵詈雑言を浴びせて、鉄格子を握って激しく揺らし、休む暇さえ与えることなく、彼らの精神を苛み続ける。
おかげで洞窟のような内部にはけたたましい音と声が鳴り響いていた。
数分ならば耐えられる騒音も、一日中続けば心を病む可能性さえ出てくる。そこに居る海兵は何度か交代しているものの、溜息が抑えられないのも無理はなかった。
ましてや戦闘経験のない新兵なら当然のことであろう。
ナバロンは近頃、海兵になったばかりの者たちを迎え入れたばか

り。
この場所なら楽に勤務できるだろうと思っていた者たちにとって、言わば絶望的な状況だ。
いつまで経っても静まらない海賊たちに苛立っている。だが言ったところで奴らは聞かない。
耐えるしかないのか。そう考えつつ、二人の海兵は厳しい表情が変わらなかった。
「くそ、うるさいな。いつまで騒いでやがるんだ海賊ども」
「ほっとけよ。マジメに相手をするだけ無駄だ」
「不謹慎かもしれないが、はっきり言って全員処刑してやりたい気分だ」
「おれも同じさ。ジョナサン中将はどうしてこんな奴らを生かしておいてやるのか」
「まったく、イライラする。早いとこ交代の時間になって欲しいな」
「まだ代わったばかりだろう。しばらくは耳栓でもして過ごすしかなさそうだ」
苛立ちを我慢しながら少しでも気を紛らわせようと、二人は雑誌や新聞など手に取り、それぞれ違うことをし始めた。見回りに出ようなどという態度は微塵もない。
それを見て動き出す影があった。
騒音に全身を包まれるような状況で、気を抜いていた彼らは全く気付かない。
二人の背後からふわりと浮いて近付くのは、手首から切られた右手である。
腕に繋がっていないそれが独りでに動き、気を抜いて座る海兵の一人に近付いていく。
同時に、地面を這うようにして動くのは人間ほどの大きさを持つ紙だ。
人の形をしたそれが無音で移動し、匍匐前進よりも静かに、もう一人の海兵へ接近する。
騒音が手伝って全く気付かれる気配がなかった。

宙を移動する右手が一足先に仕掛けた。
ぶつぶつ文句を言いながら雑誌を読む海兵の前へ回り込んで、その口を塞いだのだ。
それだけで終わらず、タイミングを見計らったかのように左手が急接近して、同じく腕も胴体もない状態で、宙に浮いたまま海兵の首を掴む。口を塞ぐ右手は少し位置をずらして、同時に鼻まで押さえ始めて、彼の呼吸を封じたのである。
驚愕と衝撃で急に暴れ出し、椅子もひっくり返して手足をばたつかせた。
しかし、胴体も腕もない相手。掴む場所が分からず両手は空を切り、強靭な握力に打ち勝つことができないまま、どれだけ暴れても離されることはない。
見る見る顔色が変わっていって、傍から見ていて恐怖を覚える光景だった。
隣に居た海兵は瞬時に気付くものの、椅子を蹴り飛ばして立ち上がって背を仰け反らせた。
その場には誰も居ないのに手だけがあって、見るからに異様な物である。
見たことも無ければ聞いたこともない、異常な光景。
苦しむ同僚を見ながら、思わず新聞を取り落とした彼はすぐに動き出すことができなかった。
その背後で、地面を這っていた紙がゆっくり立ち上がる。
「ど、どうしたっ!? なんだそれは――うぐっ!?」
人型の紙が右手を動かし、ペラペラの腕をもう一人の海兵に巻き付けた。
顔の半分、鼻も口も塞いでぎゅっと力を入れる。反射的に両手でその腕を掴もうとするのだが、薄っぺらい紙の腕では掴む場所がなく、引き裂こうと考えるだけの余裕もない。捕まった海兵は必然的にもう逃れられない状況に囚われた。
目を白黒させる彼の耳元で、掠れた声が怪しく囁く。
「ずさんな警備ありがとう。おかげで仕事がしやすくなるよ」

呼吸を封じられ苦しさを感じながら、彼は両目を見開いた。
やはり能力者。人間だったのだ。自然現象ではなくどこかの誰かに襲われている。
そう気付けたところで彼らは逃げる力など持っておらず。
二人とも息を吸えずに昏倒し、結局は為す術もなく床に転がった。
警備はたった二人だけ。すでに監視の目はない。
そこで侵入者である二人が姿を現した。
全身をバラバラに分解して物陰に潜んでいたバギーと、全身を紙状に変えていたキリである。
制圧した一室に現れた二人は倒れた海兵を見やり、一息つくと共にすぐ思考を働かせる。じっとしていられるだけの時間はない。迅速な行動が必要だ。
「基地の中は案外大したことないね。まだバレてないみたいだし、警備もかなり薄い。ひょっとしたら兵の練度が低いのかな」
「さぁな。敵の事情なんざどうだっていい。それより次だ」
「そうだね。鍵は多分それだよ」
「よぉし、運は確実におれに向いてる。おれなら上手くやれるさ」
上機嫌にバギーが動き出す。
壁に掛けられていた鍵の束を取り、おそらくは全ての牢屋を開けることができるだろうそれを手にして何を考えているのか、悪そうな顔をしていた。
まずは作戦の第一段階。ここで躓いているようでは脱獄など夢のまた夢。
足取りも軽く詰所を出たバギーが牢屋が並ぶスペースへ出て行く。キリはそれを見送った。
薄暗い空間を蝋燭の光が照らし、ともすれば圧迫感すら感じる場所へ立つ。
長く伸びる回廊に無数の鉄格子があり、おそらく視界が届かない位置にもあるだろう。
その全てにデッドエンドの参加者が押し込められていると考えれば、それだけで胸が躍る。

全て解き放った時、ナバロンは混乱に包まれること間違いなし。ここまでの緩い警備、士気の低い海兵たち、戦闘への不慣れを見て確信を得、チャンスはきっと生まれるはずだと考える。
誰からも見えるだろう位置に立ったバギーは高々と右腕を掲げた。
その手に握るのは鍵の束。皆を解放するための道具である。
気付いた者たちがおおっと声を出し、何やら始めそうな彼の姿を注視した。
「夢に破れた猛者ども、おれ様の声を聞け！　これが何かわかるよな？」
「牢の鍵か！」
「そいつを寄こせェ！　おれたちを解放しろォ！」
「おやぁ？　口の利き方がなっちゃいねぇな。誰に向かってそんな口利いてやがる、んん？」
にやりと笑って凄むバギーに、ふと海賊たちが口を噤んだ。
状況くらい理解できる。鍵を持つ海賊、捕まった自分。圧倒的な優位に居るのはどちらか。そして彼が何を言わんとしているのか、理解できぬほどのバカはこの場に居ない。おそらく同じ状況になれば皆が同じことをしでかすだろう。
お互いが海賊とあって、話はさくさくと前に進んだ。
鍵を揺らすバギーはしたり顔で声を大きくする。
今は聞くしかない海賊の群れは悔しげにしながらも耳を傾けた。
「明日のねぇお前らが自由を得るか、それともここで朽ちて死ぬかはおれの機嫌一つで決まる。それがわからねぇバカじゃないなら黙って話を聞け」
「チッ、偉そうに……」
不承不承といった様子も見受けられるが意に介さず、バギーは高らかに語り出す。
「今からおれァ、この要塞を離れるつもりだ。すでに作戦も立ててある。だが敵も多い上にこっちの兵力も足りてない。そこで、どうだ？　おれ様と一緒に夢を見てぇ奴は連れ出してやってもいいが……こんな辺鄙な場所で一生を終えたくねぇ奴は何人いる？」

自由になれるのか。
バギーの声を聞いていた海賊たちは見る見るうちに表情を変えていく。
脱獄したい一心だが手の打ちようがなかった彼らの救世主。大勢の人間が押し込められて狭苦しい牢屋を抜けられるのなら、多少の不自由など大した問題ではない。
バギーから命令されることさえ何のその。
身を乗り出す海賊たちが笑顔で彼を見つめていた。
それを見てバギーはしたり顔になる。
どうやら彼らを上手く使えそうだ。
仲間という意識などない。
出会ったばかりの彼らは脱獄するための重要な要素の一つであり、しかし実際、道中死にかけたところで助けようとも思わない間柄だ。
心配もせずバギーは朗々と語った。
「さぁ、おれの作戦を聞きたい奴はどいつだ。てめぇらを率いる男の名を言ってみろ！」
「おおおっ、キャプテン・バギー！　おれたちの救世主！」
「ここを出られるならあんたに従うぜ！」
「早く自由にしてくれェ！」
「慌てるな。こっちにゃ作戦があると言ったろう」
にやりと笑ったバギーが辺りを見回す。
その後ろからようやくキリがやってきて、同じく囚われた海賊たちを見て物色し始めた。
「いいかおめぇら、この要塞にはあの悪名高き〝赤犬〟が贔屓にしてる中将が居るようだ。如何におれ様が名軍師で、尚且つおめぇらの救世主であっても、協力し合わなければ外に出ることは困難になる。まずはここに居る連中を率いる指揮官が必要だ。誰がおれ様からの命令を聞く？」
「おう、それならおれにやらせろ。あんたに従う」
右側から声をかけられ、二人の視線はそちらを向いた。
とある牢の中、鉄格子の傍まで近付いてきたのはシャチの魚人、

ウィリーである。
顔を確認してからバギーがキリを見ると、彼は即座に頷いた。
「よぉし、ならお前に任せる。この鍵で全員を解放してやれ。だがタイミングはまだだ。おれ様が電伝虫でお前に命令を出す。抜け出すのはその後さ」
「なぜだ？　今すぐ逃げりゃいい話だろう」
「バカ野郎、この要塞に何人の海兵が居ると思ってやがる。今からおれがチャンスを作ってやるんだよ。おれが基地中を混乱に陥れ、お前らの脱獄によってさらに大きな混乱になる。そういう筋書きなら脱獄のチャンスがぐっと増えるって寸法だ」
「なるほど」
キリが牢屋へ近付き、すぐ傍の詰所にあった電伝虫をウィリーへ手渡す。
直後にバギーから受け取った鍵も渡して、その牢に居る者たちはすでに色めき立っていた。
アーロンに比べて比較的気性が大人しい様子である。少なくとも人間に対して明確な敵意を表しておらず、状況が状況なせいかもしれないが、近付いたキリに危害を加えようともしなかった。
演技か、本心からの服従か。
どちらにしても彼らが暴れ出せば遅かれ早かれ混乱は起きる。それを利用するだけだ。
渡し終えたキリが離れた後で、バギーが再び辺りに居る海賊たち全てを見回した。
近くに居るだけでも賞金首がごろごろ居る。奥へ進めば更なる強者も望めるだろう。
風は、確実に自分に向いてきていた。
頬が緩むのを抑え切れない。これで後は隠し金庫の宝とやらを手に入れて逃げるだけ。
拳を握る彼は力強く海賊たちへ訴えた。
「いいか野郎ども、時を待て。ハリネズミとまで言われた最強の要塞を、おれたちの手で掻き乱してやる。てめぇらの仕事は軍艦を奪

い、再び自由を手に入れて海へ出ることだ。数十分後か数時間後か、この場に居る全員がもう一度海賊人生を謳歌するのさ、このバギー様の下でなァ！」
「オオオオオォッ！」
目に見える位置の全員が叫んでいた。
拳を突き上げ、鉄格子を揺らして音を鳴らし、地面を踏みしめて大地を揺らす。
つい先程まで平穏に包まれていたはずの場所はすでに海賊一色に染められていた。これを新兵が見れば恐れおののいて言葉も出なかっただろう。そうなって当然の迫力がある。
予想よりずっと上手く進んでいる。これにバギーは満面の笑みで喜んでいた。
その背後で、普段と変わらぬ様子のキリがぽつりと告げる。
まるで船長に付き従う副官。ひどく落ち着いた態度で、バギーを立てるような姿だった。
「バギー、あんまり騒ぐと気付かれる。今はまだその時じゃないよ」
「おお、そうだったな。静まれィ野郎ども！　てめぇらが暴れ出すのはもう少し後の話だ！」
バギーの一声によって海賊たちは徐々に静かになっていく。早くも主従の関係だ。傍から見ていても分からないが彼にはカリスマ性でもあるのか、出会ったばかりの人間が従えられている。
好都合と考えていいだろう。キリはそれを見て何も言わない。
「今は力を蓄えろ。その電伝虫からおれ様の声が聞こえた時、自由を勝ち取る時だ」
海賊たちが笑っている。バギーもくつくつと笑っていた。
「くっくっく……ぎゃーっはっはっは！」
「さぁ、次に行くよバギー。まだこれだけじゃ外に出るのは難しい」
「おおそうだった。じゃあなてめぇら、最後の囚人人生を謳歌してろ、今はまだな。もうここには二度と戻って来れねぇぞ」
勝算を持ってにやにや笑う無数の顔に見送られ、二人は振り返って歩き出し、詰所に入った。

最初に来た時と違って静かな一室である。
格子型の窓があるため一応空間は繋がっているが、今は海賊たちが騒いでいない。しかも彼らの視線が届かない場所に移動できて、声の大きささえ気をつければ話を聞かれる心配もないだろう。今の二人にはこの環境が必要だった。
足を止めた二人は改めて向かい合う。
脱獄の可能性は高まった。しかしこれでもまだ完璧ではない。
何より、まだ隠し金庫とやらを見つけ出せてはいないのである。
命が惜しいと言いつつもバギーはお宝に執着している。隠し金庫の金を奪わなければ逃げないとさえ言いそうな態度であり、このまま逃げるつもりはないらしい。
キリが最優先とするのは無事に逃げ切ることであるものの、彼の協力なしではそれも難しく。
自分から言い出したこともあり、しばらくは付き合わなければならなかった。
「上手くあいつらを手懐けたぞ。次はどうすんだ？」
「まだ隠し金庫の位置がわかってない。おそらく脱獄もバレてないし、ここの海兵が焦ってる様子もない。ふむ、予想と違うな。練度の低さを喜ぶべきか嘆くべきか……」
「おいおい、こんなとこでじっくり考え込んでる場合か？　早くしねぇと見つかっちまうだろ」
「わかってる。でも金庫を見つけるのは簡単じゃないね。せめて誰が知ってるのかさえはっきりすれば話を聞くこともできるんだけど、隠されてるくらいだし、みんな知らないかな」
「ええい、どこのどいつだ、おれ様の金を隠しやがったのはっ」
悔しげに歯を食いしばるバギーを見て苦笑する。
こういった一面はナミに似た何かを感じた。まだ見ぬ金をすでに自分の物と考えているらしい。
気分を入れ換え、考え込むキリはぐるりと室内を見回す。
隠密行動に努めていたため、ここまで寄り道らしい寄り道はできなかった。どこかで基地の全貌を記した地図でも見つかれば楽になる

のだが、そう目に付く場所へ置いているはずもなく、悪用される危険性を考えて存在しているかどうかさえわからない。
ウェンディは監査官。特別に渡されていただけで、基地内に地図がある保証もなかった。
隠し金庫の発見は強奪のためだけではない。その存在が明るみになって海兵に知れれば、きっと海賊の暴動とは別の衝撃が走る。混乱がさらに大きくなるはずだ。
そう考えての協力でもあった。だが何の手掛かりもない現状では重荷にもなり得る。
どうやって探すべきか。或いはバギーに宝を諦めさせるべきなのか。
考えるキリの耳にけたたましい音が入った。
警報の音である。おそらく基地内の全ての場所に鳴り響いているのだろう。
予想できるのは二人の脱獄が露見したという状況だ。
音に気付いて頭上を見上げたキリは冷静に受け止めていたが、バギーはそうではない。
突然の警報に動揺し、見るからに肩をびくつかせて驚いていた。
「な、なんだぁ!? 何で鳴ってんだよ、どういうことだ!?」
「ボクらの脱獄がバレたのかな。牢屋は空になったままだしね」
「なにぃっ!? だとすりゃ冷静に言ってる場合か! どうすんだよおい!」
「大丈夫だよ。まだボクらの位置までバレた訳じゃない。まだやりようはある」
「ならさっさと考えろ。どこに隠し金庫があって、どうやって逃げるっ」
多少の焦りを感じさせながらバギーが詰め寄った。
彼を救世主と呼んだ海賊たちに見せてやりたい顔だが、今はそんな場合ではない。
キリは真剣に頭を働かせる。
二人が牢屋を抜け出したことは露見したようだが焦ってはいない。

警報を鳴らされること自体は予想していた。むしろ部屋を抜け出してからここに至るまで、予想よりかなり遅く、鳴らされないことに心配してしまったほど。
だがこれではっきりした。ナバロン要塞の海兵は決して脅威ではない。
問題はまだ見ぬ将校の実力だけ。それ以外は甘く見積もっても苦戦しない実力だろう。
噂が敵を寄せ付けなかったせいで、この基地の海兵はずいぶん態度が緩んでいる。いくら潜入に向いた能力を持つ二人とはいえ、一度も見つからずに牢獄まで辿り着けたのもそのせいだ。敵には注意力も能力者を倒す実力もない。
ならば多少大胆に動いてみる方法も使えそうだ。
もう一度部屋の中を見回して、キリの目は倒れた二人の海兵を捉えた。
わずかに笑みが浮かび、頭の中では着実にピースが組み合わさっていくかのよう。
「この基地、もっと混乱させた方がいいね。まずは武器庫にでも行って爆弾が欲しい。至るところ爆破してやれば、ここの兵士なら多分諸々対応できなくなる」
「その後で海賊どもが一斉蜂起って訳だ」
「上手くいけば、ついでに地図も手に入るかもね」
「あん？」
振り向くキリは非常に楽しげで、何かを思いついた様子だった。
先程まで見ていたのは気絶している、制服を着ている海兵が二人。
まさかと考えるバギーは嫌な予感を覚えつつ、仕方なく彼の提案に耳を傾けた。

ハリネズミの日々（2）

珍しいことにナバロン要塞で警報が鳴り響いてからしばらく経った後。

ジョナサンの執務室には二人の将校が立っていた。

先程から言い合いが止まらず、目を閉じるジョナサンは疲れた様子で黙り込んでいる。

帽子を被っている男がドレイク少佐。

細身でひょろりとした印象の男が、シェパード中佐である。

どちらもジョナサン中将の下で経験を積み、ここまで育てられたと言って過言でない海兵。能力や経験は申し分ない。基地を守るためには必要不可欠な存在だと言われている。

そんな二人だが、問題がない訳でもない。

ドレイクは異様なほど真面目で、シェパードは口と勤務態度が悪い。

どちらも一長一短。そりが合わないのは以前から噂されていたことだ。一度言い合いを始めればどちらも退かなくなり、譲れぬ物があるのだろう、徐々にヒートアップしていく。その光景はいつも通りであるがそれだけにジョナサンも止めるのを面倒に想っているらしい。

顔を突き合わせる二人はもうどれほど言い争っているのか。

海賊が逃げ出した。少なくともきっかけはそれだったはずだ。

今や責任問題にすら話が及び、両者は厳しい声を発し続けていた。

「なぜ海賊が逃げ出したのです！　シェパード中佐、一階の牢屋はあなたの管轄だったはず！　部下は海賊どもを見張っていたのではないのですか！」

「ええい、交代の隙を狙われただけだ。大体そもそもを言えば、貴様が新人どもを簡単に受け入れるせいで指揮系統が混乱しているんだろう。これだけ人が多くては各々の役割を把握するだけで一苦労だ。奴らにとってはただでさえ慣れない仕事だと言うのに」

「そのためにあなたが居るんでしょう！　部下の混乱を解いてやらねば！」

「人が多過ぎると言っとるんだ！　こっちまで混乱して指示を出すどころではない！」
「やめんか、見苦しい。責任のなすりつけ合いはもうたくさんだ」
はぁ、と重い溜息。
ジョナサンが割って入ったことで二人の言い合いはようやく止まった。しかし代わりに今度はドレイクがジョナサンへ詰め寄り、身を乗り出して言い出した。
「落ち着いている場合ではありませんぞ中将殿！　ただちに海賊を捕らえなければ！　ただでさえこの基地を不要だという声もあるというのに、こんな失態があっては……！」
「わかっている。だから少し落ち着いてくれんか。うるさくてかなわん」
「中将殿！」
「あ～もう、何回も言わなくても自分の肩書くらい知ってる。はいはい、中将ですよ」
熱くなるドレイクに反し、ジョナサンはやる気がないとも見える態度で力のない声を発した。
彼は普段からこうなのである。
今更珍しくもないが、状況が状況だけにドレイクの焦りが募り、顔を真っ赤にするほど怒っていたらしい。それを見てようやくジョナサンも考え始めたようだ。頭を掻きながら、やはり普段と全く変わらず緊張感のない声で二人へ言った。
「紙使いと道化のバギーか。どちらもローグタウンで騒ぎを起こしたそうだな」
「はい。仲間を捕らえることには失敗したらしく、一階に収監されていたのは二人だけだったようです。しかし気付いた時には手錠だけが残されていて……」
「まだ見つかっていないのか」
「全力で捜索を続けていますが、いまだ目撃情報はありません」
「広いとは言っても敵地で上手く隠れているらしいな。ふむ、中々の手練れらしい」

「感心している場合では――！」
「まぁ少し落ち着け。常に冷静でなければ良い判断を下せないぞ」
テーブルに肘をついて前のめりに、ジョナサンが話を主導し始めた。
ドレイクも半ば反射的に冷静さを取り戻して、シェパードはフンと鼻を鳴らす。
「ともかくまだ外へ出ていないのなら即刻見つけなければいかんな。後出しになるのもまずい。こちらも動き始めるとしよう」
「いかがいたしますか」
「敵の目的はおそらく脱獄だろう。それなら島を出るための方法を探すはずだ。まずドレイク少佐は港へ行って警備を強化。シェパード中佐は地下の牢獄を警備してくれ」
「牢獄を？　なぜあんな場所を」
「あれだけ大勢の海賊が居るんだ。もし解放されてしまったら大事だろう」
「確かに。しかしそこまで頭が回る相手ですかねぇ」
嘲笑するような顔でシェパードが答えた。
逃げ出した二人は懸賞金を懸けられているとはいえ、どちらも五千万を超えず、また捕縛されている時点で大した脅威には感じられない。そんな驕りがあったようだ。
その姿を見てジョナサンは嘆息する。
やはり、脱獄された理由はきちんと存在しているらしかった。
ナバロンは平和ボケしている。そう語る声は確実にあった。
戦闘を経験していない海兵も多く、演習の経験はあれど、近海に出ても海賊と遭遇する機会は驚くほど少なかった。今回の一件もそんな日常が悪影響となったのだろう。
敵はどこまで知っているのか。
そればかりが気になった。
もしも頭が切れる者だとして、現在の基地内の状態を知ったとして、敵陣の中で敢えて正面突破など考えようものなら、おそらくは止め切れない。本来ならば愚策のそれも、この基地ならば通用すると思

われる。正面から立ち会って実力で止められるのはこの場に居る三人、ジョナサンとドレイク、シェパードくらいに違いなかった。
本拠地であるはずのナバロンで、まさか自分が焦る日が来るとは思わなかった。
表情は気のない様子ながらジョナサンはそう思う。
此度の敵は如何なる相手か。その情報が欲しい心とは裏腹に、密かに期待する自分も居た。
ともかく警戒しておいて損はない。
シェパードとは違い、ジョナサンは慢心がない様子だった。
「一刻も早く敵の現在地を見つけてくれ。武器の携帯も許可する。見つけ次第発砲、ただし殺さず捕らえて欲しい。部下にもそう伝えてくれ」
「はっ！」
「私は即座に処刑してもいいとは思いますがね」
「そう言うな。海賊にも人権くらいやってもいいだろう」
にっこり笑うジョナサンにシェパードがやれやれと首を振る。
その態度にドレイクがまたしても突っかかりかけたが、先んじて止められたため事なきを得る。
この三人がナバロンを支える柱なのだ。
甘過ぎるほど態度が緩いジョナサン。
どんな時でも真面目が過ぎるほど真面目なドレイク。
不真面目な態度は目立つが意外と仕事はこなすシェパード。
三者三様、特徴があり、海兵として掲げる正義もそれぞれ異なるのかもしれない。しかし彼らが力を合わせた結果、今日までナバロンが不落の要塞だったのは事実であった。
今回もきっとそうなる。そんな想いがあったのも、或いは事実だったのだろう。
ドレイクが敬礼して、退室のために踵を返した。
同じくシェパードも形式として敬礼を行い、それに続く。
その時、自然な様子でジョナサンも立ち上がった。
「私も動くとしようか。あぁ、君たちはそれぞれの持ち場を頼むよ」

「は？　中将殿も動かれるのですか。流石にそこまでの相手ではないでしょう」
「まぁそう言わず。これでもやれることはあるだろうからな」
にこにこと笑みを崩さず、呆気に取られた二人の間を通り抜け、一番早く廊下へ出た。
いつも通りの制服で、腕まくりをして、腰には細い剣を一本。
散歩にでも出るような軽い足取りで歩き出した彼はドレイクの戸惑いの声すら聞き流し、歩きながら考え事を始める。
気になるのはやはり脱獄した二人。
経験が多くないとはいえ、海賊を捕縛した経験はある。だが脱獄された経験は一度もなかった。監査役に調査を依頼したこの大事な時期に、である。
少々、タイミングが良すぎるのではないか。
不意にそう考える自分に気付き、まさかと思って頭を振る。
今は身内を疑うより、逃げ出した二人を捕らえる方が先決なのは間違いない。そのためには二人の情報が欲しいと考えた彼はひとまず資料でも集めようかと考えていた。
グランドラインではまだ大物と呼べない程度の懸賞金。それなのに話題性はある。
彼らに関する情報が少なからずあるはずだと思い、まずは敵を知り、綿密な対策を取るのはその後の方が良い。楽しげな笑みはそう決めていた。
一人で廊下を歩いていて、正面から雑用らしき海兵が歩いてきた。
警報が鳴った直後で騒がしい基地内で、掃除道具が入ったカートを押している。
制服をきちんと着こなす一方、帽子を目深にかぶり、武器を携帯する様子はない。ここまで弛んでいるのかと驚きさえした。流石に見て見ぬふりはできず、足を止めたジョナサンが声をかける。
背は高くない、細身の少年だ。
声をかけられて彼は顔を上げて、ジョナサンだと気付いて即座に敬礼した。

「あ、お疲れ様です」
「こんな時まで掃除かね？　今は非常事態だ。君も脱獄した海賊を探しに行ってくれ」
「そのつもりだったんですけど、先輩に言われて、まずこれを片しに行くところなんです」
敬礼したままの彼を手で制し、やめさせる。
その後でまじまじと見れば想像していたより若い。まだ幼ささえ感じさせ、基地内で見るには珍しいほどの年頃ではないだろうか。見た目だけでそう判断してしまう。
ただ、よくよく考えれば間違ってはいない気がした。
発する声やジョナサンを前にしてまるで緊張していない態度、素人くさい佇まいから見ても、海兵としての経験はさほどではない。おそらく新兵なのだろう。
近頃、ナバロンにも新兵が入ってきたばかりだ。
緊張感の無さはそのためだろうと考えて、ジョナサンは苦笑する。
「君は新兵かね」
「はい。まだここの構造が理解できてなくて」
「ハッハッハ、それも無理はない。このナバロンは対海賊用に構成されているからな。外からの攻撃に対して強く、内部からは逃がさない。覚えるのは大変だが努力してくれたまえ」
「はぁ。地図とかあれば楽なんですけどね」
「それも一度は考えた。しかしもし海賊の手に渡ってしまえばせっかくの対抗策が台無しになってしまうだろう？　だから断念したのだよ。少なくとも基地の中には一枚も残していない。どうやら今回はその姿勢が役に立ちそうだな」
「あぁ、なるほど」
「本当は作るのが大変で断念したんだがね。何せここは複雑すぎる」
「そっちが本音ですか」
「ハッハッハ。まぁそんなこともある」
緊急時だというのにからから笑い、やけにジョナサンは上機嫌だっ

た。その様子は目の前の海兵が思わず困ってしまうほど。何が楽しいのか終始笑っている。
困った結果、肩をすくめる少年は自ら尋ねた。
このままでは埒が明かないと思ったのかもしれない。尋ねればジョナサンはすぐに答えた。
「あの、失礼ですけど、これどこに持って行けばいいですかね」
「あぁそれかね。少し手間だが一階まで運んでくれるか」
「一階ですね。わかりました」
「そこまで行けば誰かに聞けばわかるだろう。と言っても今は非常事態だ。君もすぐに部隊に合流して警備に努めなさい」
「了解しました」
最後に敬礼を行い、再びカートを押して少年が歩き出そうとした。
現在地は最上階である。一階を目指すには少々時間も必要で、すぐに動き出すのも頷ける。
しかし蓄えた髭を撫でるジョナサンは彼を呼び止めた。
「あ、それともう一ついいかね」
「はい、なんでしょう」
「君はどうやって牢から逃げ出したのかな？　紙使いくん」
その一言の後、両者は同時に動き出した。
目にも止まらぬ速度でジョナサンが腰の剣を抜き、風さえ切り裂く刃が空を駆ける。
少年は素早く地面を蹴り、後ろへ跳んでその一撃を見事に避けた。しかしあまりの速さで完璧に避け切ることは難しく、かぶっていた帽子のつばがスパンと切れてしまう。
滑るように着地してからすぐ、やれやれという顔で帽子が捨てられた。
完全に顔を晒したキリは笑みを浮かべ、同じく微笑むジョナサンと視線を交わらせる。
多少とはいえ距離ができて、一方が背筋を伸ばしたまま右手に持つ剣を突き出すと、一方は何をするより先にカートを引き寄せ、対峙する。

いつ気付いたのか。
上手く擬態したつもりだったがやはり将校はそこまで単純ではないらしい。
危険性について考慮し、敢えて大胆に動いてみたつもりだったが、キリは小さく嘆息した。
「流石にバレるか、これじゃ。自分じゃ意外とイケてると思ったんだけどね」
「ハハ、イケてはいたさ。ただ私もこの道長くてね。海賊の変装くらい見破れんでどうする」
「おかしいなぁ、ここまではバレずに来れたのに。まぁ、愚痴を言っても仕方ないけど」
言いながら指を伸ばして右腕を振り上げる。
掃除道具を跳ね除け、カートの中から大量の紙が舞い上がった。バサバサと音を立てるそれらは一瞬で視界を遮り、意志を持つかの如く独りでに動き、二人の間にある空間を埋める。
視界がゼロになり、一瞬とはいえキリの姿を見失いかけた。
逃がす訳にはいかない。警戒心を持ちながらジョナサンは剣を構える。
「ほほう、これが紙使いの所以か。ずいぶん面白い能力を持っているものだな――」
「指揮紙演舞・花！」
身の丈ほどもある紙の塊、花びらのような形のそれが、猛然とジョナサンへ襲い掛かった。
切る訳でもなく殴る訳でもない、体当たりにも近い攻撃。同時に視界を塞ぐ役割もある。素早く迫りくる姿は迫力があり、回避か迎撃か、どちらにしろ無視はできない。
真っ直ぐ振り下ろされた刃がいとも容易く紙の花びらを切り裂いた。
二枚、三枚と続けて迫るがあっさり切り裂き、その場から動かずに視界が開ける。
驚愕したのはその瞬間だ。

迫る紙が無くなって前方が見えた時、くるくる回って飛来する筒状の物体がある。
ダイナマイトであった。
当然火は点けられた状態であり、すでに導火線はミリ単位にまで短くなって、逃げる暇も与えないかとでも言うかのようにジョナサンへ向かってくる。
さらに向こうを見れば、キリはカートに乗って、紙の狼がカートを押して走っている。
不思議と永遠にも感じる刹那、遠ざかっていく彼の楽しげな笑みが目に焼き付いた。
思わずジョナサンも笑ってしまい、即座に後ろへ飛んだ。直後に間を置かず爆発。凄まじい炎が轟音と共に廊下へ広がり、強い熱風が辺りを駆け抜けた。
爆風に背を押されて走る力とし、キリはその場を素早く離れる。
自らは走ろうとせずカートに足をかけ、後方から能力で生み出した紙の狼が押してくれる。
小さなタイヤが大きな音を鳴らして危険な様相だが、今更止まる暇などなかった。
海兵の制服を身に着けたまま、平然とした顔でキリが廊下を爆走する。
その姿はどう見ても異様で気付かぬはずがなかった。
たまたま通りがかっただろう海兵が一人、前方の曲がり角から唐突に現れた。向かってくるキリの姿にはすぐ気付き、背を仰け反らせて驚愕する。
一方のキリは全く気にせずに進み続けるようで。
両者が接近する瞬間、カートの底に隠していたピストルを持ったキリが口を開き、再度の驚愕で身を強張らせた海兵へ急接近していく。
「はいは～い、清掃中ですよ～。どいてくださーい」
「な、なんだあれはっ!? 敵か!? 味方か!?」
動揺して動けずにいるところへ銃口を向け、即座に引き金を絞る。
銃声と同時に放たれた弾丸は真っ直ぐ飛来し、狙い違わず海兵の脇

腹を穿った。
鋭く短い悲鳴。鮮血が飛び散り、膝から力が抜けて、彼は敵前であるにもかかわらずふらりと足を揺らす。その傍を通り過ぎる間際、ピストルの銃口付近を持ったキリがグリップの部分で海兵を殴りつけた。側頭部に痛みを感じた彼の体は勢いよく倒れる。
あまりにも迷いがなく、その上強烈だった。
意識を失いかける彼は必死になって遠ざかるキリの背を見つめる。
「ぐっ、やはり、海賊……！　報告、しなければ……」
自身がやられたことはいい。見つけたのだと誰かに知らせなければならない。その一心で彼は薄れていく意識を必死に繋ぎ止め、誰かに伝えたいと考えながらキリが去った方向を睨んだ。
ちょうどその時、電伝虫を利用した館内放送が始まる。
あぁ、誰かが伝えてくれるのだ。安堵する彼の耳に聞き慣れない声が飛び込む。
《あーあー。え～報告します！　逃走中の海賊を一階西側の廊下にて発見！　外へ向かっている模様です！　みなさん今すぐ武器を持って外に向かってくださーい！》
「一階、西側だと？　どうなっている……ここは四階の北側だぞ」
安堵から一点、館内放送の報告に違和感を持って表情が歪んだ。
ついさっき見つけたキリについてではないのか。
放送を行うのは三階。質問しに行くことさえできず、彼は意識を失ってしまう。
「一体、誰なんだ、あの声は……」
《みなさん急いでくださーい！　敵は凶悪犯なので一人や二人じゃ足りませんよー！　さっさと全員で取り囲んじまってふんじばりましょー！》
三階の一室、報告を終えて電伝虫の受話器が置かれた。
嬉しそうな声で報告していたのはキリと同じく海兵の制服を身に着けたバギーである。
敵など見つけていない。思い付きの嘘の報告だ。
基地内を混乱させることが目的であり、上手くいったと微笑む彼は

次の一手を考え始める。
「いい感じで進んでやがるぜ。それじゃそろそろ次に行くとしようか」
四階で起こった爆発の音は聞こえていた。それをきっかけに動き出した様子だった。
室内には昏倒させられた海兵が一人。今は誰の視線もない。ゆっくり考え、心を落ち着ける時間も余裕もあり、焦る必要は微塵も感じられない状況だ。
バギーはあらかじめ入手しておいた子電伝虫を取り出し、通信を始める。
かける相手は地下で待っているはずの海賊たちだった。
「待たせたな野郎ども！　戦いの時は来た！　今こそおれたちが自由を取り戻す時だ！」
《待ってたぜキャプテン・バギー！》
「さぁおっぱじめるぞ。牢屋に入れられてる奴ァ全員連れ出して港へ向かえ！　軍艦を奪ってここからおさらばするんだよぉ！　ドハデに暴れろォ！」
《ウォオオオオオッ!!》
発破をかけられた海賊たちの雄たけびが聞こえる。
この勢い、たとえ相手が歴戦の猛者でも止められるはずがない。バギーは勝利を確信していた。捨て駒程度になればと思っていた彼らと共に脱出する気になっていたのだ。
（くっくっく、間抜けどもめ。てめぇらにどこまでできるかわかったもんじゃねぇが、もし本当に軍艦を奪えた時は一緒に逃げてやろう。できなきゃおれ一人で抜け出すか）
通信を切る頃には悪そうな顔でくつくつ笑っていて、恐怖心など一切ない。
腰掛けた椅子の背もたれに体重を預け、ふんぞり返る暇さえあった。
「さぁて、あとは隠し金庫を見つけて大金を奪ってやるだけだが、キリの野郎は本当に見つけられんだろうなぁ。せっかくこんなとこま

で来たんなら手土産の一つも欲しいが……最悪の場合、あいつを見捨てて逃げる必要もあるな」
誰も聞いていない空間で呟いて笑みを深める。
彼はキリを信用した訳ではない。
同じ脱獄仲間ではあるものの、やはり彼はルフィの右腕。恨みがある相手の仲間だ。もしもここで志半ばで倒れることがあったのなら、それはそれでルフィへの意趣返しになるのではないか。一人になって考えてみるとそんな考えも浮かんできた。
助けてやるか、見捨てるか、どちらに転ぶかは本人の働き次第。
どちらになるとしても心構えはできている。
席を立つバギーは自らも動き出すため、辺りに注意しながらひっそりと廊下へ歩き出した。

ハリネズミの日々（3）

地響きのような怒号がどこからともなく伝わってきた。
それは大地を揺るがし、大気を震わせ、耳だけでなく肌で感じる迫力がある。
地上、武装した状態で基地の外に出ていた海兵たちが驚きを露わにし、視線をあちこちへ飛ばして挙動不審になる。彼らは何か恐ろしい物を感じ取ったのだ。
部下を率いて地下へ向かおうとしていたシェパードは、その怒号に眉間の皺を寄せる。
その声は自身が向かうべき場所から聞こえているのではないか。
思わず足を止めてしまい、背後に並び立つ部下たちも不安そうな顔に変わっていた。
「シェパード中佐……これは、一体」
「地下には見張りが居たはずだな」
「は、はい。報告用の電伝虫もあります」
「ではなぜこんな声が聞こえるっ。なぜこうなる前に報告できなかった！」
激昂した様子のシェパードが叫んだ直後、基地内から再び爆発音が聞こえる。
もう何度目かわからぬ轟音だ。基地を見上げた海兵が恐る恐る呟いた。
「ちゅ、中佐、またしても爆発が……」
「ええい、どうなっている！　現状を確認し、的確に報告しろ！　脱獄した海賊は一階から外に逃げて行ったのではなかったのか！」
「そのはずなのですが、我々にも詳細は――」
「報告したのは誰だ！　まさか海賊は基地内に潜伏していたのでは。いやそれよりも、報告した男が海賊に手を貸していたのか。この基地の誰かが脱獄させたというのなら理解もできる」
憎らしげに歯を擦り合わせ、厳めしい顔で呟く間も爆音と怒号が続く。

冷静に考える時間すら邪魔をする騒々しい音。どちらも無視できるはずがなく、おそらくは基地を破壊してさえいて、一刻も早く動かなければならなかった。だが現状の正しい情報が集まっていないため、不用意に動き出しては更なる窮地に立たされる可能性もある。
その逡巡がシェパードの決断を遅らせ、足を止めさせた。
状況が変わったのはそれからすぐのことである。
地響きのような怒号が空気を伝わって間近に聞こえてきた。
シェパードだけでなく海兵たちもそちらを見、予想以上に早い動きに驚愕する。
やはり想像通りだった。デッドエンドで捕らえた海賊たちが脱獄したのだ。
今度は一人ではない。重なる声からその人数の多さがわかる。
おそらく全員が解放されたのだろう。表情を歪めたシェパードは拳を握りしめ、ジョナサンはこれを予見していたのだと理解し、今度は即座に指示を出した。
「全部隊、あの声を止めさせろ！　海賊が逃げ出した！　全員逃がさず捕らえるんだ！」
「はっ！　了解しました！」
「武器の使用は私が許可する！　抵抗するようなら殺してしまえ！」
兵が集まっていたことは不幸中の幸いだった。
シェパードの指示を受けた海兵は誰一人残さず駆け出し、声が聞こえた方向へ走る。
海賊たちが何を目指すか、想像するのは難しくない。島の外へ出るため船を探すだろう。ならば岸壁に挟まれた港を目指す。或いは、何を考えるでもなく海軍に喧嘩を売るかもしれない。
どちらにしても今すぐ止めなければならなかった。
ベテラン、新兵に関係なく、彼らはどんな結果であれ覚悟を決めていた。
しかし敵の姿を認識した瞬間、思わず怯んでしまう。
外気に触れて喜びの雄たけびを上げ、上機嫌な様子の彼ら。

振り返る目は血走っていて、海兵を見つけると同時にひどく嬉しそうに歪んだ。
背筋に悪寒が走る。
彼らの決意など甘い物でしかない。にたりと笑みを浮かべる海賊を前に、足が震え出した。
「キャプテン・バギーに感謝を」
「これでおれたちゃ、また暴れられるってわけだ」
妙にゆったり歩いて来るのがより恐ろしい。
怯む様子の海兵たちは意識せず、少しずつ後ずさりし始めてすらいた。
追いついてきたシェパードがそんな彼らを叱責して、ようやく向き合う表情に変わる。
「何をしている、さっさと捕らえろ！　一人も逃がすんじゃないぞ！」
「は、はっ！　全隊、攻撃開始！」
焦った顔で隊長らしき海兵が声を発し、彼の号令に従って多数の銃が構えられた。普段から訓練しているだけあってその動きは素早く、戸惑いがあろうと構える動きに躊躇いはない。
それを見て海賊たちが黙っているはずもなく。
雄たけびを上げる彼らは無手ながら前へ駆け出し、海兵より先に攻撃を始めた。その威容は凄まじい迫力。ただ走り出すだけが驚くほど恐ろしい。
中でも真っ先に目に付いたのは素早く攻撃を繰り出した男だ。
どこぞで見つけたのか、手にしたロープを投げつけるように海兵の首にかけ、全力で引っ張る。
捕まったのは一人や二人ではない。投げ縄の要領で数名の海兵が首を絞められて、苦しげな悲鳴を発するが発声器官を押さえられて声も出せず、為す術なく膝から崩れ落ちる。
そうする男には見覚えがあった。
海兵の一人が大声を出し、恐怖心に支配されて武器を取り落としてしまう。

「し、縛り首のビガロだ!?　捕らえた人間を港に並べて縛り首にするっていう、あの……!」
「首に気をつけろ!　奴の手にかかればただのロープが凶器になる!」
海兵たちの動揺が増していた。特に新兵は呆気なく気絶してしまった先輩を眺めて、顔面からは血の気が引いており、言葉さえ出ない様子。
再びロープを投げようとする長身の男を見て震えが止まらない。
辮髪で筋肉質な肉体、上背の高い男。〝縛り首〟のビガロだ。
彼が武器とするのは何の変哲もないロープや鎖、人間の首に巻き付けて絞殺できる物ならばなんでも得意としており、呼吸ができずに苦しむ顔を見るのが好きな、悪趣味な人間である。
懸賞金こそ高くないが市民への攻撃を辞さない海賊として名は売れている。
気に入らない奴は全員縛り首。その特徴から彼の名を知る者は多かった。
彼が操るロープは生き物のように人間の首に巻き付き、瞬時にきつく締め始める。
一度捕まれば逃げることはできない。
悪魔の実の能力ではなく己の経験から培われた技だ。
捕まった海兵が次々意識を失ってしまい、彼が進む道には気絶した人間が後を絶たなかった。
ビガロが先陣を切ったことで他の海賊たちも我先にと敵へ襲い掛かった。
勢いは増す一方で怯む様子は皆無。海兵とは対照的な姿だ。
大きな体で突進していくのはシャチの魚人、ウィリーであった。
並び立つ海兵が銃を構えたまま動けないのを良い事に、発砲の前に肩口から体当たりする。体の大きさが違っていた。当たった海兵は紙のように宙を舞って落ちてきた。
人間と魚人では身体能力に差がある。
地上では十全の力が出せない種族であるとはいえ、その腕力は常人

の十倍。
体当たりですら数メートル弾き飛ばすのに、彼が人間を掴み、投げつければ、それだけで立派な武器にもなる。一度に倒せる数は二倍になって、味方同士であれば撃ち落とすこともできない。笑みを浮かべるウィリーはそんな考えで海兵を掴んでは別の海兵目掛けて投げつけた。
軽々と人間が宙を舞う光景に開いた口が塞がらない。
先頭集団は完全に怯え切って逃げ出そうとし、後ろに居た者たちは呆然と立ち尽くした。
「うわぁああっ!? ウィリーだ! 突進してくるぞ!」
「奴には近付くなァ!」
「銃を使え! 先に奴を倒すんだ!」
戦場はすでに混乱していた。
別の海賊団の船長が二人、自ら先陣を切って海兵を蹴散らし、己の強さを見せつける。それだけで演習しか知らない新兵を、長らく現場を忘れていたベテランを、平和ボケしていたナバロンを怯えさせるには十分だった。
後方で見ていたシェパード中佐は強く歯噛みする。
これほど一方的になるとは予想していなかった。このままでは逃がしてしまう。
そんなことは許されないと、右腕を振って敵を指差し、苛立った声で叫んだ。
「おまえたち何をしている! 逃げてどうするんだ! 敵は目の前に居るんだぞ、戦え! ここで海賊を逃がすようなことになれば、ひいては市民の身の危険に――」
「ちゅ、中佐……あれは……」
近くに居た海兵が呆然と呟いた。
その声に気付いて視線を向ける先を変えれば、確かに異様な物が見えた。
崖下からのそりと姿を現す巨大な人影。それは、十メートルを超える背丈の人間、巨人族だ。

二人組の海賊、ボビーとポーゴ。
牢屋を抜け出したばかりで武器を持たない彼らだが、その巨体こそが最大の武器。他の海賊や海兵と同じ土壌に立てばさらに全身から発する威圧感が増して、本人たちは涼しい表情でも、ただそこに立っているだけで震え上がるほど恐ろしい存在だった。
二人は矮小な人間を見下ろし、笑みを浮かべて自身の頭を掻く。
辺りを見回して景色を見た。
何やら機嫌が良さそうな表情で、緊張感もなく二人で話し始める。
「あぁ～やっぱり空があるってのはいいなぁ」
「キャプテン・バギーに感謝しねぇと。あのまま牢屋に居たんじゃ気が狂うところだ」
「もっともだ。おれはあの男についていくぞ、ポーゴ」
「了解だボビー。あの男には未来がある。ここを出た後は一気に名が売れるぞ」
一歩を踏み出しただけで地面が大きく揺れる。
見上げる海兵たちは、もはや他の海賊たちにさえ気をやる余裕はなさそうだった。
「さぁて、まずは敵を一掃しようか」
「おれたちの力を見せつけてやるとしよう」
そう言って気のない様子で拳を持ち上げ、思い切り振り下ろした。
両者の拳が大地を叩き、どうやら海兵を叩き潰すことはなかったようだが、衝突の瞬間に生じた余波で人々が吹き飛ばされていく。まるで木の葉のようで信じられない光景だった。
ほんの一瞬で隊列が崩れ、海賊たちが進むべき道が作られたのである。
勢いを増すのは当然だった。
海兵たちが怯えて逃げ出す頃、脱獄者たちの勢いは最高潮に達する。
すぐ傍を海兵が通り過ぎて逃げていく中、立ち尽くすシェパードは顔面蒼白の状態だった。
どこで歯車が狂ったのだろうか。つい昨日まで最強の名を欲しい

ままにしていた砦が、ひょんなことがきっかけでかつてないほど混乱して、逃げ惑ってすらいる始末。このままではナバロンはどうなる。全身を包む絶望感で前が見えなくなりそうだ。

それでもシェパードは頭上を、前を見ていて、無数に居る海賊の姿を捉えている。

正面から見つめた結果、もう止められないと自然に思った。

並み居る海兵たちが逃げた一方、彼だけは逃げ出さずその場に立ち尽くしたまま。

しかしそんな彼を、解放された喜びに酔いしれる海賊たちが見逃すはずもなく。

猛烈な勢いで駆け寄ったウィリーの拳が彼の頬を打ち抜いた。

＊

度重なる爆音で多少耳を傷めつつ、それでもダイナマイトに火を点けるのをやめないキリは、また新たな一本に火を点け、扉を開けたままだった室内に放り込んだ。

何の部屋かもわかっていない。ただ扉を開け、中に人が居ないことだけ確認した。

そのためキリは快く見知らぬ一室を爆破し、轟音の直後に壁が吹き飛び、爆炎が室内の物を吹き飛ばして燃やし、黒煙が基地内へ広がる。

四階から三階、そして二階へ移動し、現在は無人の廊下を歩いていた。

相変わらずカートに乗ったまま、武器庫から奪ってきたダイナマイトを次々使用している。至る所で爆破させたため黒煙が漂って視界が悪い。海賊を倒すため複雑な構造だったはずの基地内は、今となってはただただ無残な光景だった。

紙の狼を操ってカートを押させて悠々と進みながら、無人の廊下を眺める。

混乱の原因はここだけではない。そのせいで敵の姿さえなかった。

敵も居ない廊下を進んでどこへ行くのか。それは彼自身さえいま

いちわかっていなかった。
探している物は隠し金庫である。
実在するのかどうかさえわからない、噂されているだけの物を探すのは簡単ではないらしい。
基地を破壊しながら目に付く部屋を回って、情報を探っているのだが、役に立ちそうな物はまだ見つかっていない。床を壊し、徐々に下へ向かっているのもそのせいだ。隠し金庫その物を掘り当てるのは難しいにしても、情報を納める資料くらいはあるだろうと思っての行動だった。
現在、収穫は何もないが諦めてはいない。
二階と一階が残っている。そのどちらかにはあるはず。確信に似た想いがあった。
キリはいまだ基地を離れる気がなくて、こうなれば絶対見つけてやろうと考えていたようだ。
とはいえ、手掛かりが何もない状態では探りようもない。
次の一室を爆破しつつ、困った顔で肩を落としたキリは小さく呟いた。
「資料室とかないのかなぁ。どうも隠し扉っぽいのはなさそうだし、正直更地にしても何もなさそうかな。と言っても資料も残してなさそうだけど」
そろそろ退屈を感じている。手掛かりだけでも欲しい頃だ。
まだ基地の爆破を止めないあたり、もはや陽動なのか気晴らしなのかわかったものではない。
爆風で髪を揺らしながら、キリは突き当りに気になる部屋を見つけた。
「一応調べてみるか。こうなったら破れかぶれだ」
さほど急ぐ様子もなくゆっくり進んで到達する。
扉を開き、カートごと室内へ入った。
散々暴れた後で隠れるつもりのようで、カートを止めると自らの足で部屋に立ち、扉を閉める。
一度能力の使用をやめ、紙の狼もただの紙に戻って地面へ散らばっ

た。
どうやらそこが探していた資料室らしい。
複数の棚と無数のファイルがあり、やっと手掛かりを探せる場所を見つけた。気を良くしたキリはいつも通りの笑顔になって辺りを見回す。
何から手をつけるか。
考えながらも適当なファイルを手に取り、中身を調べ始めた。
「さて、どこにあるのかな……直接的な物はないだろうけど」
半信半疑な状態で資料に目を通していく。
やはりそう簡単には見つからず、興味のない記述を見てはファイルを床に捨て、或いは能力で紙だけを取り出してカートへ入れ、武器を手に入れながら情報を探す。
しばらくは無言で手と足だけを動かし、基地内も比例して静かになった。
隠し金庫はここにある、などという資料があるはずもなく、徒に時間が経っていった。
しかし根気強く続けること数十分。
体感としてそれほど時間が経ったつもりもなかったが、ある時ふと手を止めた。
外から聞こえる怒号や轟音も気にならずに、視線はある資料を読み進める。
今だけは警戒心も薄れていた。
読んでいたのは島の地形に関する文章だった。
ナバロンは一つの島を丸ごと使い、要塞としている。その島の特徴さえも海軍の武器としているらしいことが書かれている。
中でも目を引いたのは一部分。
この島は潮の満ち引きが頻繁に繰り返されるようで、潮が満ちた時と引いた時では島の姿が多少なりとも変化する。海に面した部分にも基地の一部として使われる空間があること、そして別の文章には今はそこが使われていないことなども書かれている。
今は使われていない場所が、普段は海に隠されている。

それだけで興味が惹かれる記述だった。
笑みを浮かべたキリは確信に近い物を得、資料から手を離して地面に落とすと踵を返した。ようやく目的地が定まった様子である。
「特殊な環境に隠し金庫。やっと楽しくなってきた。お土産くらいはできるかな」
笑顔で呟いて部屋を出ようとする。
ドアノブを捻り、軽い気持ちで押し開けた。するとキリは不思議そうに首をかしげる。
目の前には数メートル距離を置いてジョナサンが立っていた。背面で手を組んでにこにこ微笑んでおり、どことなく上機嫌そうに見える笑顔で、背筋をピシッと伸ばしている。
周囲には数名の海兵。構えた銃をキリへ向けていた。
室内でじっとしている間に取り囲まれていたのだ。
「あれ？」
「やぁ、また会ったね。何か面白い物でも見つかったのかな？」
「ええ。一応は」
「そうか。実は私もだよ。脱獄したという海賊を探していたところだ」
「あぁそうなんですか。それは大変ですね。じゃあ邪魔しちゃ悪いし、ボクはこの辺で」
「ん？　そうかね？　探していたのは君だったはずなんだが」
ジョナサンの言葉を聞かず、キリはあっさり扉を閉めてしまう。
動揺した海兵たちがどよめくもののジョナサンだけは慌てていない。
動じていない足取りで扉の前に立ち、顎髭を撫で、目にも止まらぬ速さで剣を抜いた。鉄製の扉が至って普通の刃によって切り裂かれてしまい、ほんの一瞬で細切れになる。
その瞬間、予想だにしない物が襲い掛かった。
数え切れないほど大量の紙が雪崩のように飛び出してきたのである。
咄嗟に逃げようとするものの距離が近過ぎた。

剣を振り上げて切り付けるが、数十枚を一気に斬ってもさらに奥から無数に来る。
結局は呑み込まれてしまい、抵抗もできずに全身が紙に包まれた。
「おおっ、これは――」
「中将?! 危ないっ!」
海兵たちも叫びはするが対処のしようがなく、ジョナサンが呑み込まれる様を眺め、直後には自分たちの体さえ呑み込まれて遠くへ運ばれていった。
資料室の扉が遠くなり、それでも波のように動き続ける紙に埋もれて身動きが取れない。
それだけでなく、奔流の中で導火線に火の点いたダイナマイトさえ見つけた。
最初に気付いた海兵が悲鳴を発するも、取り除くだけの余裕がない。
伸ばした手が届く暇もなかった。移動を続ける紙の奔流の中、突如大きな爆発が起こって、辺りの物さえも巻き込んであらゆる物が吹き飛ばされる。呑み込まれた海兵の中には直撃した者も多いらしく、悲鳴を発する人間も居れば声すら出せなくなった者も居た。
爆発の余波でそこら中に散らばった紙に火が点き、凄まじい火災の様相となる。
いよいよ基地内は前例を見ないほどとんでもない状況となってきた。
ジョナサンは、先頭で呑み込まれたこともあって爆発に巻き込まれた様子はない。
傷こそついていないが廊下に立ち、炎に見舞われて黒煙が上がり、見るからに危険な状況で、尚且つ部下たちがのたうち回っていれば顔色が変わるのも当然。
ついに笑みを消して目つきが鋭くなり、細い剣を握り直して資料室を睨む。
キリはまだそこに居た。
扉の向こう側に立って笑みを浮かべ、緩い表情。

傷つき、倒れた海兵たちを見て動じる様子はない。言い換えればそれは彼らを侮蔑するようにも感じられてしまい、余裕のある様は今になってみると恐ろしい。いくら敵同士とはいえ彼は笑顔で他人を傷つけたのだ。年が若くともやはり海賊、甘く見るのが間違いだった。

歩き出すジョナサンは舞い上がる火の粉も気にせず、足元の炎さえ無視して前へ進んだ。

あれは他の誰かに任せていい敵ではない。自らの手で討ち取る必要がある。

油断も容赦も投げ捨てて、ジョナサンは久しく見せぬ姿を現した。

それを見てキリは嘆息。怯えた様子はない。

右手に持っていたダイナマイトに火を点けて、振り返って歩き出すと足元に落とした。

部屋の奥に向かう動きとはいえ、逃げる素振りを見せたのだ。

即座にジョナサンが追おうとして地面を強く蹴る。

半ば跳ぶようにして前へ駆け、キリの背中から片時も目を離さず接近を試みる。

入り口に落としたダイナマイトも気になってはいた。だが距離からして爆発したところで誰にも当たらない。今から接近するジョナサンは当然として、他の部下に当たりそうにもなかった。

それ故、爆発の直後に踏み込めばいい。ジョナサンは瞬時に作戦を立てる。

余裕を表す態度から見て、キリは油断しているのかもしれなかった。ならばその隙を衝かないという手はないだろう。部下をやられた今、ジョナサンもまた真剣だった。

目測通り、ジョナサンが到達する前にダイナマイトが爆発する。

轟音、爆炎。視界が塞がれて黒煙が上がる。そこまでは予想通り。

問題となるキリもまだ室内に気配を感じていた。何をしているのかは見えないがそこに居た。

飛び込むようにして地面を蹴り、剣を構えて入り口へ到達し、濃密な煙の中に身を投じる。

その瞬間、たった一度の銃声があり、右肩に鋭い痛みが走った。

自身が意図せず右手からわずかに力が抜け、剣を取り落としかける。
この時ジョナサンは全てを理解した。
入り口に落としたダイナマイトは攻撃でもなければ威嚇のためでもない。爆炎と煙によって視覚を封じ、爆音で耳を潰して、敵の油断を誘うこと。
よくよく考えれば部下たちだけが傷ついてジョナサンだけ無事だったのも異様だ。
誰よりも先に排除すべき男が無傷だったのは、もしや敢えて怒らせて平静を崩すためだったのではないか。右肩の痛みで冷静になったジョナサンはそんな考えに至った。
動揺。もしくは驚きと言うべきか。
不意にジョナサンは足を止め、左手で右肩を押さえ、動かなくなってしまう。
室内も燃えていた。ばら撒かれた資料に火が点き、こちらでも火災が起こっている。
キリは窓枠に腰掛けていた。
窓はすでに開かれ、体の前面を外に向け、すでに足などは外へ出ている。
そんな体勢で振り返り、ジョナサンを見つけるとにっこり微笑みかけ、気軽に指を振るった。すると室内で燃え盛る紙が独りでに動き出し、意志を持つかの如く互いを連結させ、蛇のように長大な姿を得る。轟々と音を立てて全身を燃やす数メートルの蛇だ。
誘い込まれた。そう考えるべきだろうか。
キリは窓から飛び降りる間際、笑みを浮かべたまま気楽に告げた。
「じゃ、失礼しま～す」
最後に指を振って、炎の蛇がジョナサンへ襲い掛かる。
思考は冷静に、素早く右手を振って剣で迎撃する。
特別な動きはなかったが炎の蛇には確実に届き、紙を繋いだだけの体はあっさり分断され、ただの火の塊となって地面に落ちていく。
そうなった後で、空中でくるくる回って飛来するダイナマイトに気

付いた。
おそらく飛び降りる寸前に投げつけたのだろう。再びジョナサンが驚愕して、今度は迷わず後ろへ跳んだ。ほぼ同時に爆発して、彼の体は爆風で勢いよく吹き飛ばされる。
炎が広がる廊下へ背中から転がり落ち、熱風に全身を包まれる。
なんとか体勢を立て直した彼はすぐに跳んで火の無い場所へ逃げた。
周囲では海兵たちが互いを助け合っている。悲鳴のような声がいくつも重なり、ジョナサンは荒く呼吸をしながらそれを耳にして、どうすべきかを見失っていた。
自身のダメージを顧みれば大した物ではない。大きな火傷もなく、すぐ逃げた甲斐はあった。
問題なのは基地、部隊としての機能。
キリの攻撃によって多くの海兵が傷つき、治療を必要として、それ以上に心を折られた。基地は爆発で至る所がボロボロ。その攻撃が自分にも向けられ、今や火事にもなって、またしても逃げられてしまっている。その上、外では別の海賊が暴れているのだ。
襲ってくる問題があまりにも多過ぎた。
冷静沈着で策士と呼ばれたジョナサンでさえ困り果て、基地や部下たちだけでなく、自身もまた腑抜けていたのだと自覚する。
この状況は自分の甘さが招いた物だ。そう思わずにはいられないほど完敗だった。
考えあぐねたジョナサンがフッと微笑む。
ここまでやられるといっそ清々しい気分にもなる。やはり期待は間違っていなかった。彼らの脱獄と攻撃全てが、ナバロンに漂っていた平和ボケの空気を壊してくれる。壊して、洗い流して、この地が新しく生まれ変わる刺激に変えてくれる。
敗北だと認識しても彼だけは心が折れていない。
むしろ嬉しく思う気持ちすらあって、背を伸ばして立った彼は晴れ晴れとした顔だ。
「ハッハッハ！　参った、やられたな。ここまで差があるとは思わ

なかったよ」
「中将……な、なぜ笑うのですか」
「なぜ？　決まっているだろう。完膚なきまでに負かされたからだ。さぁみんな、落ち込んでいる暇はないぞ。確かに負けはしたが、我々はまだ生きている。もう一度彼に挑んで勝ちを奪い取るチャンスがある。ここで立ち止まってしまっては、ただの負け犬に成り下がるだけだ」
にこにこ笑って嬉しそうに。
海兵たちにはその笑みの意味がわからないが、ジョナサンが諦めていないことだけは伝わった。
重症の者も軽傷の者も、よろよろと危なげな足取りで立ち上がる。
ジョナサンの言葉に応えたい。人望の厚さ故か、独特の雰囲気に包まれていた。
「さぁ行こう。ナバロンの誇りに懸けて、己が正義のため、我々は勝たなければならんのだ」
決して落ち着ける環境ではない。
燃え盛る炎が熱風を生み、立っているだけで汗を掻き、それどころか呼吸すら厳しくなる状況。そんな場所で問いかけられて、普通ならふざけるなと返しても不思議ではないのだが、その場に居る海兵たちは頷きさえしてジョナサンの意見に賛同した。
強制された訳ではない、誰もが自ら海兵に志願したのだ。
海賊を目の前にして逃げるだけの海兵に誰が憧れるだろうか。
かつては自分もそうではなかった。如何なる敵が相手であっても市民のために戦う、海兵のあるべき姿を夢見て訓練に臨み、強くなろうとしたはずではなかったか。
部下たちの顔に生気が戻り、精神へ受けたダメージが軽減されていく。
炎の中、立ち上がった海兵たちは武器を振り上げ、オオッと声を発して自らを奮い立たせた。
平和ボケしているとは言わせない。求めたのはその顔だった。
皆を見回したジョナサンは小さく頷き、早速キリを追うため歩き出

そうとする。
そこへ足音が近付いてきた。
気になって背後に振り返ってみると、涼しい顔で歩いてくるウェンディを見つける。
立ち昇る煙を手で払いながら、彼女はあくまで冷静なままジョナサンへ歩み寄り、声をかけた。
「お疲れ様です、ジョナサン中将。ずいぶんお忙しいようですね」
「ああ、幸か不幸かわからんがね。とりあえず消火と海賊の捕縛が最優先になりそうだ。それで私に何か用でも？」
「はい。調査に関して、ご報告したいことが」
「わかった。しかし後にしてくれるかね。今はとにかく忙しくて手が回らない」
「わかっています。ですが、今しかダメな理由があるんです。一緒に来ていただけますか」
「ふむ。何か見つけたのだね」
「はい」
瞳に強い意志を浮かべ、ウェンディは怯むことなく頷く。
その顔を見てジョナサンは考え込むように髭を撫でた。
「わかった。では私が行こう。他の者は消火を急いでくれ」
「感謝します。それと、できれば少佐と中佐のお二人にも来て頂けると助かるのですが」
「ドレイクとシェパードを？　そうか、やはりそういうことなんだな」
「念のためです。あなたたち三人がこの基地の要でしょう？　知っておいた方がいいかと」
「そうだな。わかった。我々で事の成り行きを見届けよう」
意識が切り替わり、喜びから一転、複雑な心境になる。
彼女の調査結果を聞くのは幾分勇気が必要だ。
だが、知らねばならない。ナバロンの問題を解決しなければ。
ジョナサンはウェンディの後に続き、一時とはいえキリのことを忘れ、歩き出した。

ハリネズミの日々（4）

ナバロンで起こった暴動が、ある時を以てぴたりと止まり、静けさを取り戻そうとしていた。

その理由を知る由もなかったとはいえ、今は考えている暇もない。

ウェンディの先導に従い、ジョナサンは岸壁の下へ降りて海の間近を歩いていた。

潮が満ちている時は海面の下にある場所。

そんな場所を訪れるのは基地長であるジョナサンさえずいぶん久しぶりだ。

淀みない歩調についていくと、しばらくして大きな洞窟を見つけた。すっかり忘れていた地下の牢獄とは別の空間、以前は軍艦を修繕していた場所である。まだ海賊が島の近くを通っていた頃、度重なる戦闘で傷ついた船を直すドックとして利用していた。

近付く海賊が減って戦闘が行われなくなって以来、長らく近付く者が居なかった。

言われてみれば確かに怪しい場所ではあり、思わずジョナサンも唸ってしまう。

「そういえばここがあったな。なるほど、確かにこの時間しか来ることはできない」

「とっくに気付かれていたのではないですか？　隠すならばここしかないと」

「いやぁ年を取ったせいかすっかり忘れていたよ。ここにはずいぶん来ていない。正直、君に案内されるまでどこへ向かっているのかもわからなかったくらいだ」

「本当でしょうか。私には敢えてそうしているように見えてしまいます」

おどけて言うようなジョナサンへ何気ない口調で言ってみる。

ウェンディには疑念があった。

彼は全て想像できた上で調査を依頼しているのではないか。海軍で指折りの策士だと言われていた男が部下の不正に気付けぬはずも

ない。何か理由があるのだろうと。
はっきりとは言わなかったがジョナサンには意図が伝わった様子である。
頭を振った彼は溜息を洩らし、やれやれといった顔で答えた。
「私をそう買い被ってくれるな。地上の様子を見ただろう？　捕らえた海賊の脱獄を許し、たった一人を相手に基地は滅茶苦茶。私も老いてしまったらしい。まさかここまで一方的にやられる日が来ようとは思ったこともなかった」
「そうですね……少し相手が悪かったのかもしれません」
「我ながら情けないことだよ。腕が鈍っているのかもしれん」
「ですが、やはりあなたならどうにかできそうだとは思うんですがね」
謙遜、或いは嘘と言ってもいい。
態度を変えないジョナサンへ振り返り、ウェンディは微笑みを見せた。
彼もにこりと笑ってその質問を受け流す。
「期待してくれるのは有難いがね、実際はこんなものさ。伝説とは事実より誇張されて伝えられるものだ。ハリネズミなどと呼ばれた要塞も今やこの有様。実情は大したことはない」
「人生、何があるかわかりませんね」
「だからこそ面白い。転落してみるのも案外気分が良い物だ」
洞窟の前に立って朗らかに笑う。今のジョナサンにはまるで邪気が感じられなかった。
本心から来る言葉に違いない。
無邪気な表情は子供に戻ったかのように見え、本来なら落ち込んで当然の状況を、彼は心から楽しんでいるらしい。海兵として異端と言わざるを得なかった。
肩をすくめるウェンディは苦笑する。
気落ちするどころか喜ぶとは。彼もずいぶんな変わり者のようだ。
しばらく待つと連絡を受けたドレイクとシェパードが駆けつけてきた。

どちらも慌てていて冷静さに欠け、所々に怪我をしてもいる。シェパードは頬に湿布を張り、顔を含めて至る所に包帯を巻いたドレイクは直前の戦闘を感じさせた。
疲弊した姿で余裕がない。
駆けつけた二人は狼狽した様子でジョナサンへ声をかける。
「ジョナサン中将ッ！　申し訳ありません、海賊たちが船を奪って海に……！」
「すぐに本部へ応援を要請しましょう！　奴らを逃がす訳にはいきません！」
ドレイクとシェパードが声も高らかに言うものの、不意に矛先が変わる。
意見の食い違いか、互いに顔を近付けて言い合いを始めてしまった。
「お待ちくださいシェパード中佐！　今本部に報告しては、このナバロンの名折れ！　我々の力だけで解決しなければなりません！」
「バカを言え、軍艦を奪われたんだ！　全てだぞ！　今更我々に何ができる！」
「しかしナバロンの有用性を示さなければ、このまま失態続きで終われますか！」
「こうなればこちらのプライドなぞくだらん物だろう！　逃げた海賊を捕まえなければそれこそ海兵の名折れ！　ナバロンがどうのと言っていられる場合ではないぞ！」
二人の言い合いは一瞬にしてヒートアップしていく。
ドレイクは自分たちで解決すべきだと主張し、シェパードは応援を呼ぶべきと主張する。
どちらも意見を引っ込めるつもりがないようで、言い合いが終わる気配は感じられなかった。
溜息をついたジョナサンは頭を抱え、ウェンディは苦笑して肩をすくめた。
「やめないか二人とも。今は仲間内で言い争っている場合ではない」

「しかし中将、落ち着いている場合でもありません！」
「わかっている。だがまずはこちらに集中してくれ。今は大事な話がある」
ぴしゃりと言われて自然と二人は押し黙った。
ジョナサンがここまで真剣な顔をするのは珍しい。尚且つ、隣には見知らぬ美女の姿があった。何かしら事情があるのだろうと理解するには十分な材料が揃っている。
再び歩き出すウェンディに導かれ、三人は洞窟へと入っていった。
人口の階段を上って少し上へ向かい、開けた場所に出る。
隔てる物がない広大な空間に巨大な金庫らしき物体が鎮座していた。
三者三様、反応はそれぞれ違っている。
ジョナサンはほうと頷き、ドレイクは押し黙って、シェパードは何やら焦りを感じさせる顔だ。事情を聞かされず、久方ぶりの場所であり、多少の違和感を抱かずにはいられない。
部屋の中央に立った彼らは何気なく辺りを見回した。
ウェンディが前方へ進んで立ち止まり、振り返って三人を見る。
やっと仕事を始める時が来た。
笑みを湛えたまま、真剣みを増した声で語り出す。
「改めまして、私は海軍本部より参りました、監査役のウェンディと申します。此度、ナバロンに見え隠れする不明瞭な資金の動きを調査しに来ました。その結果をご報告します」
「か、金だと？　横領か？　なんでそんなことを――」
「まず見て頂いてわかると思いますが、こちらにある金庫、ここに帳簿に載らない資金が納められています。鍵は開けていませんが中身は確認しました。間違いありません」
淡々と迷いなくウェンディが続ける。
やはりその反応は三人ともそれぞれ違った。目視で確認しつつ、彼女の声は続く。
「別の場所でここに納められている資金の帳簿も見つけました。照らし合わせた結果、およそ七年で二億三千万ベリー。表沙汰になって

いない資金の流れは確認できています」
「七年も……？　そんなに長く不正が行われていたとは、とても信じられないが」
「しかし事実です。残されていた資料から、間違いない物と思われます」
狼狽するシェパードの一方、ウェンディは冷静な面持ちだった。
辺りの静けさが増して、そう遠くない場所で打ち寄せる波の音が木霊する。
いつの間にか重苦しい空気に包まれていた。
棒立ちになる三人が片時も目を離さずウェンディに集中する。
「当然、一兵卒にできる芸当ではありません。それなりの地位の者が、部下の協力を得て行ったものです。つまりこの基地でそれが可能だったのは――」
「ちょっと待て！　貴様ァ、私を疑っているなぁ!?　私は何も知らんぞ！　こんな場所には来たこともないし、そんな金など使ったことどころか見たこともない！」
「あなたではありませんよシェパード中佐。ただ見届けて欲しかっただけです」
ふわりと笑って、ウェンディの視線は一人の男へ。
「なぜこんなことをしたのか、理由を教えてもらえますか？　ドレイク少佐」
「何っ!?」
驚愕したシェパードが隣に立つ男の顔に目をやった。
帽子を被ったまま、表情が窺いにくい姿でウェンディを見つめ、微動だにしないドレイク。
まさかと思う人物の名前を聞き、シェパードは思わず質問せずにはいられなかった。
「バカなことを言うな！　この男は口うるさいほど真面目な男で、決して不正をするような男ではない！　これは、何かの間違いなのでは……！」
「本人は心当たりがあるみたいですよ。ここに来た時からずっと」

「ほ、本当なのか……!?　なぜそんなことをっ」
ドレイクはしばしの間動かず、沈黙を守って視線を落とす。
シェパードはそんな彼の横顔を見つめ、不安そうな態度が隠せなかった。
一方でジョナサンは背面で手を組み、背筋を伸ばして、いつも通りの姿勢で無表情。全く動じた様子が感じられない。今この状況においては奇妙に見えるほど。
ウェンディはこの瞬間に確信を得る。
やはり知っていたのだ。初めから気付いた上で調査を依頼してきた。
なぜそうしたのかはわからないが、身近に居る者への配慮か、気遣いか、自ら尋ねることはしなかったのだろう。十年という長い時間だ。ずっと見過ごしていたのか、それともどこか途中で気付いたのかは計り知れない。しかしどちらにしろ、隠蔽も甚だしい。
混乱しているのはシェパードだけだったようで、彼だけは目を白黒させていた。
ジョナサンとドレイクが黙して語らず、重苦しい空気のままで時間が流れる。しかしいつまでもそうしてはいられず、やがて意を決したドレイクが大きく息を吐き出した。
顔を上げた彼の目に迷いはなく、観念した様子で話し始める。
「私は、裏切ったつもりなどない。ただこうしなければならないと思った」
「なぜそんなことをしたんだ、少佐！　中将の顔に泥を塗るつもりか！」
「全てはナバロンのためです。本部から不要だと言われているこの基地を存続させるためには金が必要だった。装備を整え、兵に食事を取らせ、遠征にも――数えだすときりがない。我々がこの基地を守るためには自分で動く必要があった。もう本部を頼ることはできません」
「ナバロンのため、だと……？」
呆然とするシェパードの呟きが妙に遠く聞こえる。

辺りが静か過ぎるせいで奇妙な状況だった。
今や逃げ出した海賊のことなど頭にない。それよりも大きな問題が目の前にあり、これを無視することはどうあってもできそうにない。
ドレイクの言葉を受け、ウェンディが真剣な顔で答えた。
「原因は資金難、ということですか。確かに近年、本部はナバロンの閉鎖を本格的に考え始めていますからね。トラブルがあっても不思議ではありませんけど」
「僻地と侮蔑されようと、ハリネズミと揶揄されようと、ここは我々が平和を勝ち取った場所。初めから平和だった訳ではない、ジョナサン中将の下で戦った結果、海賊たちを遠ざけることに成功した海域なのです。おいそれと手放すことなどできるはずもないでしょう」
「だからといって不正を働くなど！　お前らしくもない！」
「大事の前の小事です！　そうでもしなければナバロンは撤廃され、この海域に住む市民が危険に晒される。市民のためにこの身を焼く程度、大した問題ではありません」
きっぱり言い切った彼は強い意志を滲ませていた。
己が身を顧みず、市民のためだけにやったことなのか。それにしたって考えようもあったはずだと思うのだが、真面目過ぎる一面が悪く働いたらしく、彼は一人で決断してしまった。
今になって事実を知ったシェパードはぐったりと項垂れる。
ジョナサンは口を閉ざして何も言わない。彼の方も見ず前を向いたままだ。
そんな上司に頭を下げ、ドレイクは気落ちした声で呟いた。
「申し訳ありません。この一件であなたに多大な迷惑をかけると知りながら、それでも、私はこの基地を守りたかった。謝って許されることではありませんが……」
腰を曲げ、深々と頭を下げるドレイクにジョナサンが向き直る。
正面から向き合って、今まさに口を開こうとしたその時だ。
それより先に軋む音を奏で、巨大な金庫の扉が、ゆっくり押し開かれていった。

鍵は外れていない。ウェンディは自身の能力で内部へ潜入し、中身を確認したが、鍵を外す方法はドレイクしか知らないはずで、彼女さえ理解していない。
それではなぜ独りでに開くのか。
内側から押し広げられる扉は、彼らの目の前で完全に開き切った。
そして金庫の中に居た人物の姿を見つけたのである。
総額二億三千万ベリーだという金を持つ、海兵の制服を着たキリだった。
彼は外に居た四人を見やり、にこりと笑みを浮かべる。
「やぁ、どうも。ひょっとしてお邪魔かな？」
「あれは――」
「フッ、また会ったな紙使いくん。まさか、こんなところにまで来ているとは」
改めて笑みを浮かべたジョナサンが真っ先に彼と向き合った。
紙を操る能力により、金庫内部に置かれていた紙幣は一纏めに固められ、四角形となってキリの傍に浮かんでいる。まるでそれ自体が特殊な武器のように。
静かに剣を抜いて戦闘のため正面から見据える。
ジョナサンの様子にキリは涼しい顔で、状況を確かめるように辺りを見回した。
「もっと大勢居るのかと思ってたけど案外少ないね。みんな休憩中？」
「なぁに、私がここに居る。役者不足にはならないだろう」
「どうだろう。ボクとしては不足だった方が嬉しいけどね」
「悪いがこちらにも事情があってね。今君に逃げられるのは非常にまずい状況なんだ。というわけで、君を拘束させてもらおう」
「いやぁそれは勘弁。今から仲間と合流しなきゃいけないから」
そう言ってキリは懐から取り出した白い紙を手に持ち、同じく取り出したライターで火を点け、何も言わず天井へ飛ばした。ペラペラの能力によってそれは真っ直ぐ飛んでいく。
頭上には空ではなく天井。四人の視線がそちらへ向いた。

その結果、やっと気付いたのである。
数十メートル上にある天井には、紙で固定された大量のダイナマイトが見えたのだ。
「んなぁっ!? き、貴様、まさか――!?」
シェパードの驚愕をかき消すかのように轟音が響き渡った。
天井で起こった大爆発は分厚い岩盤を砕き、雨あられと巨大な岩を落として、真下に居た四人の海兵に命の危険をもたらす。
身の丈を超える岩が落下してきたことにより、四人は反射的に回避行動を取った。
ウェンディは能力を使って地面の中に姿を消し、ジョナサン、ドレイク、シェパードは咄嗟に後方へ跳んで、着地と同時に振り返って駆け出した。
ギリギリのタイミングだったが下敷きにはならず、なんとか事なきを得た様子。
その頃キリはすでに普通の紙で大きな鳥を作り出し、背に乗って空に飛び立っていた。
腕には紙幣の塊を抱いている。
落ちてくる岩を避けつつ、崩れたそこには外へ通じる大きな穴が開き、逃げ道ができた。予定通りの大穴である。キリは素早くその穴を目指して、眼下に見る三人を置き去りに、迷う素振りもなく洞窟内からの脱出を果たした。
全て計算した通りであった。
広範囲に落ちた岩を避けるのに必死で追手はない。彼は空高く飛んで島を見下ろす。
真っ先に港があるだろう位置を眺めた。
逃げるための軍艦は用意されているのか。唯一と言っていい心配事だったが、辺りを眺めたキリは小さく嘆息する。やはりこちらも予想した通りだ。
軍艦の姿は遥か遠く。すでに島から脱出を果たした後だった。
「ハァ、どうしようかな。流石に船がないと、このままじゃなぁ」
金を抱えたままで彼はううむと唸る。

使い方によっては空を飛べるペラペラの能力は、しかし万能ではない。
島から島への間を飛べるほどの持続力はないため、別の島へ逃げるには船が必要だ。
バサバサと翼をはためかせ、ナバロンの上空を旋回しながらキリは考える。
せっかく抜け出したのだから戻るという選択肢はない。だがいつまでも空に居続けることもできなくて、いずれは体力の限界が来て落ちてしまうだろう。その時海に落ちてしまったのでは一巻の終わりだ。島から遠く離れることすら難しかった。
「あのカラスって手懐けられないのかな。カラスの好物ってなんなんだろ」
ぶつぶつ文句を言いながら島中に目を向け、何かを見つけようと探す。
その最中にふと海を見た時、キリの表情は一変した。
見つめた先には一隻の船があった。
どれだけ距離があろうと一目でわかる帆のマーク。誰よりも見知った己の物だ。
心底嬉しそうな笑みを浮かべて、彼は即座にそちらへ向かい始める。
紙の鳥が海の上を飛び、遠くにある船を目指して進む。
驚くほど速い訳ではなかったが着実に距離は近付いていた。
そうして距離が近付くにつれ、その船から声が聞こえるようになった。甲板には複数の人間の姿が見えて、多くが手を振って近付いてくる鳥を見ている。
一人一人の顔が確認できるようになった頃にはキリの表情は緩んでいた。
「お～いっ、キリィ～！」
船首の上にはいつも通り船長が居て、バランスも取りにくいのに今日は立っていた。
笑顔で見上げて両手を振り、彼の到着を待っている。

キリも軽く手を振り返してゆっくり降下を始めていった。
甲板に到着した時、着地する前から紙の鳥が分解されて無数の紙が舞い、その中からキリの姿が現れて甲板に足を着けた。
直後に仲間たちがわっと殺到するのである。
多少の驚きを含みながらも歓迎するムードで、どこかほっとした一瞬であった。
「みんな、久しぶり。あとただいま」
「キリィ！　おまえ無事だったのかぁ！」
「心配かけやがって！　海軍に捕まって聞いてたのに、なんで自分で帰って来れんだよ！　いやそっちの方がよかったけど！」
「ごめんごめん。色々あったんだよ」
肩をすくめて笑うキリはいつも通りの姿で、安堵した仲間たちがそれぞれ安堵する。
変わった様子はない。大した問題でもなかったのだろう。
いの一番に駆け寄ったルフィやウソップも肩を落として息を吐き出し、緊張感から解放されて脱力してしまって、不思議と虚無感のような物まで感じていた。
ともかく、要塞と一戦交えることがなくてよかったのだ。
特にウソップを筆頭に数名が喜び、対照的につまらなそうにしている者も居た。
歓迎するムードの一方、不可解なこともあって。
気付いたシルクがキリへ尋ねる。
彼が大事そうに抱えている物体が気になったらしい。
「でもどうやって逃げ出してきたの？　あとそれって……」
「ああ、お土産。隠し金庫からちょろまかしてきたんだ」
「ちょっとキリ、凄いじゃないこれ！　全部お金？」
「うん」
抱えていた塊を床に置き、能力の使用をやめて無数の紙幣が辺りへ広がる。
あまりにも多過ぎて山となる金はナミの目の色を変えさせ、彼女の中にあった文句を殺した。

嬉しそうに膝をつく彼女はすでに金の亡者と化していたようだ。
「総額二億三千万ベリーって言ってたかな。ナミにあげるよ」
「素敵よキリ！　愛してる！」
「んなっ、ナミすわぁ～ん！　おれは!?」
喜ぶルフィやウソップだけでなく、ナミやサンジまで騒がしくなり、船上の騒々しさはより一層大きな物となっていた。そちらに苦笑しながらシルクが聞く。
「こんな大金、どうしたの？　海軍のお金？」
「まぁね。でも不正で貯めた金だからまぁいいでしょ」
「不正？　そういえばあのシロクマって、監査役の――」
「全部終わったことさ」
微笑むキリの言葉を受け、なんとなくシルクは自分の言葉を止める。
立ち入るな、という空気でもないが、何か含みを持たせる言葉だと感じた。
今度は尋ねる前にキリがルフィへ向き直ってしまい、彼女は不思議に思いながら口を噤む。
「とにかく今はここから離れよう。追手が来ないとも限らない。船長、迷惑かけてごめん」
「いいさ。みんな無事だったんだしな」
「そんじゃさっさと離れようぜ。キリが無事だったんだし、もう用はねぇだろ」
慌てるウソップに後押しされ、クルー全員が操船へ動き出す。
もうナバロンへ近付く必要はなくなった。ならばわざわざ危険なその島に上陸しようなどというつもりはなく、その場で踵を返してパルティアに戻ってしまえばいい。
今日ばかりは理由が理由で、冒険好きのルフィからも異論は出なかった。
普段と変わらずドタバタと騒がしくなる甲板で、ふと足を止めたキリは海を見る。
およそ百メートルの距離。

ぷかぷか浮いて海上に顔を出したシロクマ、ドニーがメリー号を見ていて、少しも動かずじっとしている。キリを捕まえようという素振りはまるで見られない。
視線が交わった気がした。
ドニーは海上まで右の前脚を上げ、軽く手を振る。バイバイ、とでも言いたげな姿だ。
それ見てキリはくすりと笑った。
なぜだろう、かつてとは心境が違う。不思議と敵意は沸かない。
彼もわずかに手を上げ、非常に小さくだが、同じように手を振った。
満足した様子でドニーが海中へ潜って姿を消す。
それと同時に背後からルフィに声をかけられ、気付かれない内に手を下ろした。
「どしたキリ？　なんか居たのか？」
「いいや。なんでもない」
振り返った彼も仲間たちを手伝うため歩き出す。
後悔はなく、迷いはない。もう振り返る必要はないのだ。
こうして彼らは、無事にナバロン要塞を脱出して、パルティアへと戻っていった。

ハリネズミの日々（5）

海を行く数隻の軍艦の内、一隻で高らかに叫ぶ声があった。
「ギャーッハッハッハ！　ざまあみろナバロンめ！　なぁにが最強の要塞！　どうだ見たか、このバギー様の手にかかりゃこんなもんよ！」
「流石バギー船長！」
「おれたちの救世主！」
「やったぞ野郎ども！　おれたちは見事最強の要塞を打ちのめし、脱獄を果たした！」
「ウオオオオッ!!」
ナバロンを離れる軍艦の姿がある。
その基地にあった船の全て、五隻ほどが並んでいた。
それら全てに海賊が乗り込み、海兵の姿は一人たりともなく、完全に奪われた形だ。
中央の一隻に乗るバギーが上機嫌で叫んでおり、彼らは大いに盛り上がっていた。
同じ船に乗る者たちだけでなく左右にある船まで。発する声は留まるところを知らなかった。
海軍との勝負は彼らの完全勝利。牢獄を抜け出し、船を奪い、結果を見れば一人も倒れることなく島を出ることができた。彼らが騒ぐ姿も不思議ではない。
脱獄の全てはバギーのおかげ。
そこに居る全員がそう考えていたらしく、今や誰一人としてバギーを疑う気がない。
彼と共に在ったから自由を手に入れた。
そう考えればバギーの部下になることがどれほど幸福かと思うのは当然だった。
船上は盛り上がり、進む先は海軍の居ない自由な海。
後方にあるはずの要塞も見えなくなって、気分は良くなる一方。
バギーの隣にあったはずの姿を思い出す暇もなく、彼らは宴の準備

に急いでいた。
今や彼の部下と呼んでもいい海賊たちの姿を眺めながら、バギーはほくそ笑む。
（大金を棒に振ったのはもったいねぇが、命あっての物種だしな。まぁ今回は泣いといてやるとしよう。悪ぃなぁキリ、おまえの犠牲は無駄にしねぇ）
悪いとは思っていない顔で笑い、ひどく楽しげな様子のバギーにもジョッキが渡された。
酒を注がれたそれ。見れば部下たちも揃って持っている。どうやら号令を待っているようで、快く応じたバギーは船首の上に立ち、全ての軍艦を見渡してジョッキを掲げた。
「おめぇら準備はいいか！　おれたちの勝利を祝い、ドハデに騒げェ！」
「おおおおっ！」
号令と共に互いのジョッキをぶつけ、心からの歓喜に満ちた宴が始まった。
牢獄から一転して空の下。
自由を謳歌するこの瞬間が愛おしく、今なら以前どんな船に乗っていたかなど関係なく、隣に居る誰とも知らない人間とも酒を酌み交わし、ただ笑顔を浮かべて騒ぎ続けた。
改めて見れば凄い面子が並んでいる。
それぞれ乗る船は違おうと、ウィリー、ビガロ、ボビー&ポーゴ、とんでもない顔ぶれが同じ男に率いられている姿は圧巻だ。
一際有名な彼らだけでなくかつては船長だった男たちも、今やバギーの部下。
数多の海賊団を吸収して、一個の海賊団が完成されていたのだ。
かつてない一団ができたのだと誰もが自覚していた。
この一味に勝てる敵など居ない。
そんな考えすら浮かんで、有頂天だった彼らは思うがままに行動した。
「まずはおれ様の仲間と合流することにしよう。それで新生バギー

海賊団、いやさ！　バギー海賊艦隊の誕生だァ！　これから忙しくなるぜてめぇら！」
「おおキャプテン！　我らがバギー船長！」
「ギャッハッハ！　まずは食って飲んで騒げ！　話はそれからだ！」
彼らの航海はひどく上機嫌なまま。
どこに居るのか、どこかには居るだろう仲間たちを探し、気ままに進み始めた。

＊

海賊が居なくなった島で、ジョナサンは海を眺めていた。
壮絶な状況である。
基地は半壊。捕らえた海賊は全員逃げてしまった。
怪我をした海兵は数え切れず、軍艦は全て奪われて、基地を存続させるための資金さえ全て奪われてしまった。不正をして貯めた金ではあるものの、あれがナバロンの肝だったのも事実。
たった数時間で多くを失ってしまった。
多くの海兵が項垂れ、ジョナサンの後ろで座り込んで動けなかった。
ドレイクが居た。シェパードも居た。
基地に居る全員ではないとはいえ数え切れないほどの海兵が途方に暮れている。
そんな彼らの前に立ち、ジョナサンはしばし口を開こうとしなかった。
「すみません……取返しのつかないことを、してしまいました」
深々と頭を下げ、土下座するような姿勢でドレイクが呟く。
自身が行っていたことは罪だと知っていた。その上で市民のため、ナバロンのため、仲間のために敢えて手を汚してきた。しかしそれも、全て無駄に終わる。
不正を働き、海賊に逃げられ、これではナバロンを不要だとする声

に抗うことはできない。
これ以上の失態はないというほど、完璧に打ちのめされていた。
目の前が真っ暗になる。師匠とも言うべきジョナサンに向ける顔がない。
ドレイクは顔を上げることさえできず、頭を下げたまま動けなくなっていた。
隣に座り込むシェパードも同じ気持ちである。
不正か否か、そんな問題ではなく、ここまでの完敗を喫して何も思わぬはずがない。ドレイクの気持ちは痛いほどわかった。
ジョナサンはしばらく無言を貫いていたが、やがて口を開いて語り出す。
やけに静かな声で、明らかに普段とは様子が違った。
その背を見つめる者は誰もが縋るような面持ちである。
「過ぎたことだ。謝る必要はない」
「しかし、私は……」
「正直に言おう。監査役を呼ぶ前から、私も大方の予想はついていた。知った上で敢えて気付かぬようにしていた。この基地に居たいがためにな」
予想だにしなかった言葉にドレイクとシェパードの顔が上がる。
驚愕する彼らに振り返りもせずジョナサンが続けた。
「自ら建造に関わった基地だ。愛着はある。それに長くここを任されていたのだ、数えきれないほど思い出があって、思い入れもある。上の命令でも早々簡単に手放したくはないさ」
「では、なぜ監査役を……」
「んん？　なぜだったかな。まぁいいじゃないか」
やっと振り返ったジョナサンはにやりと笑っていた。
子供っぽいとも言うべき、悪戯に成功したような表情。その意味は理解できない。
ただ、いつも通りの彼であるのは間違いなかった。
さほど落ち込んでいる様子も見せずに笑うジョナサンは、半壊した基地を見上げた。

「皆、見てくれ。これが我々の実力だ。最強の要塞などとおだてられ、海賊を逃したことがないという実績に傷がつき、実績も信頼も失った」
海兵たちが揃って基地を見上げる。
彼の声を聞き逃さぬよう、誰もが集中して耳を傾けていた。
「だが、だからこそわかったことがある。今になって得られた物がある。我々はまだ成長することができるんだ。今回の一件で多くを失ったが、このナバロンまで失った訳ではない。今回の反省を受け、ここからやり直すことだってできるはずだろう」
皆の視線が、ジョナサンに集められていた。
「下を向いていては何も見えなくなる。前を見なさい。失った物ばかり見るのではなく、自分が守れた物を数えて確認し、今度こそ失わないためには何をすればいいか、それを考えろ」
ぐっと拳を握りしめ、歯噛みしたドレイクが再び俯いてしまう。
言葉にし切れないほどの感情がある。それを上手く伝えることができない。
それでも彼は弱々しい声で必死に言葉にした。
「しかし、中将……私はもうここには居れません」
「ん？　なぜだ」
「なぜって、軍法会議にかけられるでしょうし、罰も逃れられません。罪を償わなければ」
「うーん、償うって言ってもなぁ」
「ひょっとしたら、二度とここには戻って来ないかもしれませんが」
気分が晴れず、思い悩むドレイクは悔しげにそう言った。
そんな彼に対しジョナサンは、困った顔になって自身の髭を撫で、わずかに言い淀む。
「しかしなドレイク、軍法会議も何も、証拠は何もないんだ。果たして議論になるかな？」
「は……？」
「怪しい金など一銭も残っていない。基地がこんな有様だから帳簿も全て燃えてしまった。燃えカスや灰なら提出してもいいが、果たし

てそれで不正だと判断できるかどうか……」
顎に手を当て、ううむと思い悩む仕草を見せ、彼はしばし黙ってしまう。
その素振りでドレイクは理解した。
金を持って逃げたキリを、ジョナサンが追えないはずがなかった。空気を蹴って空さえ飛べるはずの彼が逃げに徹した事実を、今の今まで問題視していなかったのである。
そしてその事実に気付いた時、振り返ればジョナサンの様子が普段通りでなかったと考えた。
全て彼の計算通りだったとしたら。
海賊に逃げられ、基地の内部が以前の姿さえ見えないほど破壊されたことは、よくよく考えれば有数の策士として知られる彼らしくない結果だ。
だが、こうなることを予見できていたとしたら話が見えた気がする。
恐ろしい。ドレイクは畏怖の感情を込めてジョナサンを見た。
見つめ返す彼はそんな感情すらさらりと受け流して、朗らかな笑顔で皆の顔を見回す。
「一からやり直すとしよう。今回の経験を忘れることなく、海兵として更なる躍進を遂げよう。そうすれば今日の失態は無駄にはならない。大事なのはこれからだ」
ジョナサンは笑い、海兵たちは言葉を失う。
だがいつしか活力が湧いてくるようで、確かに表情は変わりつつあった。
長らく平和ボケしていた基地だが、絆は失ってはいなかったらしい。
ここはいずれ変わる。
本来ならば捕まえるべき人間である。しかしジョナサンが言った通り、不正の証拠はどこにも残されていない。無事な物を探す方が億劫な状況だ。
それ故、ドレイクを捕まえようとはしなかった。

遠目に見ていたウェンディは静かにその場を離れる。
仕事は終わった。このまま帰っても問題ない。
副官が居たなら多少お小言があったかもしれないものの、今はこの場におらず。
そういえば迎えに行ってやらなければいけないと今更になって気付いた。
「すっかり待たせちゃったわね。ヒュー、行きましょう。いい加減怒られちゃうかも」
近くで待機していた巨大なカラスのヒューに呼びかけ、地に足を着く彼の背に乗る。
翼を広げ、ヒューが飛び立った。
目的地はすでに理解していて、指示を受ける必要もなくどこかへ飛んでいく。
背に乗るウェンディはひどく上機嫌だった。
普段にはない笑顔で、心から溢れる喜びを表すかのよう。
ただし、少し考えると気落ちしてしまいそうにもなる。
迎えに行くと言った相手が待ち惚けているとしたら、後で聞かされるだろうお小言が怖くて仕方ない。それさえなければ最高の一日だったのだろうがこのままでは終われなさそうだ。
それでもやはり、ウェンディの笑みは揺らがなかった。

〝人生は面白い〟

「ルフィ～っ！」
「おぉ～い、アデル～！」
港から大きく手を振る影があった。
パルティアという島、崩壊した町とは正反対の位置にある町だ。
反対側の町より幾分規模は小さいものの、栄えた様子がない訳ではなく、人口の建造物ばかりでなく自然の姿も見え、のどかな風景が広がっていた。
ゴーイングメリー号は桟橋へゆっくり近付き、大手を振ってアデルが迎える。風呂に入って体を清めた後、女の子らしい服に着替え、肩まで届く髪を下ろして、以前とは全く違う姿。笑顔で溌剌として以前の陰りは見えず、ルフィたちを迎える態度も快かった。
後方にはシュライヤとビエラの姿もある。
病院を抜け出したビエラも体を清め、病衣を身に着けて自身の足でしっかりと立っている。薬を飲んで休めたおかげか、多少は血色も良くなっていたようだ。
トラブルもなく着港し、メリー号の動きが止まった。
まずルフィが飛び降りて桟橋に立ち、駆け寄ってくるアデルに笑いかける。
ひとまずは無事だったらしい。
メリー号にも損傷はなし。彼らは元気な姿で帰ってきた。
要塞に行くと聞かされたからかなりの激戦を予想したのだが、さほど疲弊した様子もない。
「みんな無事だったんだな。どうやって逃げてきたんだ？」
「ししし、キリが勝手に逃げてきてたんだ。だから海軍とは戦わなかった」
「ふぅん。なんだ、もっと大冒険かと思ったのに」
「おれもそう思ってた。まぁいいよ、やっとみんな揃ったしな」
上機嫌に笑うルフィの背後から、次々仲間たちが桟橋へ降りてくる。

そこには見覚えのない顔もあった。
「あれがキリ？」
「ああ」
「頼りになるんだよな」
「そうだぞ。なんでも知ってるんだ」
「へぇ……」
続いて歩み寄ってくるのがキリだった。
平然とした姿でルフィと肩を並べ、アデルを見てにこりと笑う。
敵意の感じない顔だが妙にやる気を削がれる気がした。ふにゃりとして力が入っていない。子供のように朗らかに笑うルフィとは何かが違っている。
多少戸惑いはありつつ、アデルは彼と視線を合わせてわずかに頭を下げた。
「こんにちは。君がアデル？」
「あ、うん……こんにちは」
「色々あったみたいで大変だったね。まぁでも、問題はもう解決したのかな」
「う～ん、一応は」
後ろを振り返ったアデルは遠くで見守るビエラとシュライヤを見た。
ルフィとキリもそちらに気付いて、二人の様子がそれぞれ違っていることを確認する。
言葉で説明するのは難しいのだろう。
なんとなく事情を察して、気安い態度でキリがアデルの頭にぽんと手を置いた。
「家族は大事にした方がいいよ。色々あったんなら特にね」
「うん……みんなは？」
「ん？」
「そういえばみんなの家族は？　いいのかよ、勝手に海賊なんてやってて」
苦笑するキリは隣に居るルフィや、傍を通り過ぎて町へ向かう仲間

たちを見やり、少し困った顔で答える。この面子の家族については、どれもこれも話しにくい。
面倒見のいいシルクがアデルを気にして近くに来た。
彼女たちの顔を眺め、それからキリはアデルへ向き直る。
「みんなも色々あったからね。だからここに居る」
「そっか。海賊も人間だもんな」
「どうしたの？　何の話？」
「大したことじゃないよ」
問いかけてくるシルクに笑みを返し、キリの手はアデルの頭から離れた。
軽々しく触れる程度には仲が良くなったのだろうか。
出会ったばかりだが気まずさはさほど感じず、二人を見たシルクがくすりと微笑む。
「アデル、印象変わったね。もうすっかり女の子だ」
「あ、うん。おれは嫌だって言ったんだけど、町の奴らがさ」
「すごく似合ってる。可愛いよ。あとは話し方だね」
「え～、いいよ、このままで。今更変えるのめんどくさいし」
「そう？　せっかく女の子らしくなったのに」
慣れた様子で話す二人にキリは多少の驚きを抱く。
ずいぶん仲の良い姿だ。自分が居ない間の出来事が気になってくる。
容姿は似ていないが二人は姉妹のようで、見ていて微笑ましい。
シルクとアデルが話す様を見ながら、キリの目は再びルフィを捉えた。
からから笑う彼も真剣な声に気付いて首の向きを変え、キリの顔を見る。
「準備を整えたらすぐに島を出よう。海軍基地も近いし、追手が来たら厄介だ」
「そうか。じゃ全員揃ったしそうしよう。肉買おうぜ、肉」
「ナミに頼んできなよ。ちょうど今は機嫌良さそうだから」
「そうだな。お～いナミ～！」

元気よく駆け出したルフィを見送る。
彼は普段と何も変わらず、見ていて安心する姿だ。
不意に海を眺めたキリは空を飛ぶ影を目にする。
大きな黒い物体はカラスなのだと認識した。翼を開いて島に近付いており、だが目指しているのは港ではないらしく、当然キリを目指している訳でもないようだった。
いつかを思い出し、キリは決断する。
おそらく向かっているだろう地点を目視で予測し、歩き出したのだ。
唐突な彼の行動に気付いてシルクが呼び止める。
また何も言わずに行ってしまうつもりか。些かではあるが心配する表情であった。
キリは立ち止まらずに振り返り、回るようにしながら足を動かし続けて彼女を見る。
「キリ、どこか行くの？」
「すぐ戻るよ。出航準備よろしく」
「また一人で……いい加減にしないとみんな怒るよ」
「今度はすぐ帰るから」
振り返って小走りで駆け出す。
自由気ままなのはルフィだけではない。キリもそう変わらなかった。
呆れた顔のシルクは小さく溜息をついて、それでも無理に止めようとはせず見送る。
しばらく走り続けたキリは一度町の中へ入り、しかしそこで止まらずに、通り過ぎて町を出る。向かったのは町の傍にある崖の上だ。そこですでに羽を休めていた。
大きなカラスの傍に立つ美女の姿がある。
どちらも見覚えがあって、複雑な心境ながらキリが自ら歩み寄る。
「あら、奇遇ね。また会っちゃった」
「よく言うよ。わかった上で来てるくせに」
振り返るウェンディがヒューを撫でながら笑みを見せた。

まるで親友に会った時のような気安い態度。慌てもしなければ驚きもしない。初めからこの場に来ると知っていた風な気すらする。
そんな態度を見てもキリが驚くことはなかった。
以前もこうして会ったことがあった。ちょうど今と同じように海軍から逃げた後で。
今回の一件で疑念が強まっている。
確信は得ているが、直接聞いてみたかったからここに来たのだ。
ヒューの羽を撫でてやって動きのないウェンディへ、どこか気のないキリが言う。
不服そうとでも言うのか、仲間に見せる表情ではなかった。
「あの手錠、わざとだよね」
「何のこと？」
「ボクが能力者だって知ってる君が、海楼石と普通の手錠を間違えるはずがない」
初めからいくつも疑念があった。
わざわざ自分の仕事について説明し、基地内にはないはずの地図まで見せ、隠し金庫の存在を知らせる。本来なら隠して然るべしの海軍の汚点を、捕まえたばかりの海賊に教えるのだ。しかも濡れていた体が乾いた後には、手錠が鉄製であることに気付き、能力の使用にも制限がない。
何かしらの意図を感じてしまうのも当然である。
キリは、今回の出来事で気付くことがいくつもあった。
ここでの出会いは偶然じゃない。
彼女は嘘をついている。
そしてこの場で質問したところで、真実を言うはずもないことも予想できていた。
「そんなはずないでしょ？　ただ間違えちゃっただけ。どんなイメージ持たれてるのか知らないけど、これでも意外とそそっかしい部分があったりするのよ、私」
「島にある軍艦が盗まれたらしいね。君の船も？」
「いいえ、私の船は近くをパトロールしてたから助かったの。危な

かったわ」
「それって偶然？」
「もちろん。まさか盗まれないように離しておいたとでも？」
涼しい顔で答えるウェンディに嘆息した。
面の皮が厚いと言うのか、自身のことを棚に上げ、キリはわずかに険しい顔だ。
「ボクの母親、だっけ。おじいさんにずっと追われてたんだよね」
「ええ」
「それって、ほんとはどういう関係だったの？」
「おかしなこと言うわ。海賊と海兵の関係なんて一つじゃない」
平然と言うがそんなはずはない、と思う。
全て計算ずくの行動だった。でなければ自分の船だけ助かったなど、あり得ない。他の人間ならいざ知らず彼女が相手なら特に。
想像できたことがある。
以前聞かされた、自身の母と彼女の祖父の話。
ひょっとしたら自分たちはその二人の行いをなぞっているのではないか。
今まさにこの瞬間、対峙しているのに捕まえられない状況と、二度捕まったのに上手く逃げられた経験を考えて、突拍子もなくそう考えていた。
強く追及したところで答えないだろう。時間を無駄にするだけだ。
視線を外したキリの目は海を映した。
我ながら嫌な関係だ。傘下になったアーロンとも違う、過去をよく知るクロコダイルとも違う、歪で複雑な関係。一言で言い表すことは難しい。
きっと彼女は継続を求めていて、今後もなんだかんだと出会う機会はあるのだろう。
キリがどう思おうがおそらくは変えようがなかった。
しかし今回のことで興味が出てきた気もする。
家族を大事にしろ。アデルにそう言ったばかりだ。
すっかり忘れていたが、よくよく考えれば自分もまだ失ってはいな

いらしい。
海を眺める彼は誰に聞かせるでもなくぽつりと呟く。
「家族、か……」
「興味でてきた？　私で良ければ、昔話でも聞かせてあげるけど」
腕を組み微笑んで、ウェンディが嬉しそうに尋ねる。
聞かせたいのだろうと思う声色だったものの、その声はキリの心までは届かず。
結局は自嘲気味に笑って、晴れ晴れとした表情を見せた彼は肩をすくめた。
「いや、いいよ。流れに身を任せるさ」
「そう。ちょっと残念」
ウェンディが納得した様子で微笑んだ。
そちらを見ようとせずに背を向け、キリは来た道を歩き出す。
「ねぇ」
「ん？」
その刹那、足を止めて振り返ることなく、キリがウェンディへ問いかけた。
「また会うかな？」
「ええ。きっとね」
「そっか」
もう会いたくないなどとは言わない。
次に会った時は、その時こそ確信が得られる気がする。
それまで待ってみるのもいいかもしれないと思って、そう思える程度には心も穏やかだった。
キリがその場を去っていき、ウェンディがその背を見送る。やはり捕まえる気はない。
想像した通りいつかと同じような状況となった。
二人は別々の道を歩み、しかし交わることを恐れず、再会の瞬間から逃げるつもりはない。次はいつになるのだろうと考えながら、徐々に距離が離れていった。

＊

しばらく経った後、アデルは桟橋で手を振っていた。

出航したゴーイングメリー号がパルティアから離れていくのである。

停泊もほどほどに準備を終え、彼らは次の航海へ漕ぎ出した。レースが終わり、アデルの問題も解決できてもう留まる理由がない。そのため次なる冒険を求めたのである。

笑顔で見送るアデルとは裏腹に、少し離れた位置に立つシュライヤは複雑な表情だ。

腕を組んで表情は暗く、他者を寄せ付けない雰囲気がある。

そんな彼の隣にビエラが並んだ。

「浮かない顔じゃな」

「ああ……おれはまるで道化だな」

自嘲気味に笑みを浮かべ、目を閉じるシュライヤは静かに語り出す。

「ガスパーデを殺すためだけに生きてきた。全て投げ打ってそれだけを考えてきたが、結局、何もできずに終わっちまった。おれはこれから何のために生きればいい」

「何を言っとる。生きがいなんざそこら中に転がっとるさ」

「そうは言うけどな」

「試してみてからでも遅くないんじゃないか？　現にほら、残された物はまだある」

ビエラが見つめる先にはアデルが居る。

言いたいことはわかっている。真剣に考えてみた時もあった。だが触れる物全てを傷つけてきた過去を思い出さないはずもなく、近くに置いていいはずがないと思ってしまう。

その心情を知らずか、アデルは振り返って。

小走りで駆けてくる彼女があまりにも眩しくて直視できそうになかった。

「神様ってのは粋なことをなさる。わしはおまえさんに同意するこ

とはできんね」
「おれには、そんな資格なんて――」
「資格なんていうもんか。おまえたちは血を分けた兄妹だろう。家族が一緒に暮らすのに資格は必要ない。お互いに対する思いやりさえあればな」
やってきたアデルがシュライヤの前に立った。
真剣な顔でじっと見上げて、視線を逸らしそうになった彼も、彼女の目を見る。
ふとした一瞬。
彼女が意を決して呟いた。
「にいちゃん」
瞬間的に記憶が蘇る。
八年も前のこと、彼女にそう呼ばれていた日々が脳裏に浮かび上がった。あの頃の景色や匂い、町並みの喧騒や彼女の笑顔、全てが思い出された。
動揺したのも束の間、アデルがそっと右手を差し出してくる。
彼に向かって腕を上げて、握手を求めるように。
自分の感情が暴れ出すのがわかった。
強く歯を食いしばって、意識せず左手がくしゃりと髪を掴む。
おれでいいのかという想いがある。迷いがある。しかしアデルの顔には決意だけがあり、迷いもなければ嫌だという悪感情もなくて、全てを包み込むような愛を感じた。
いつの間にかシュライヤは目を潤ませていたようだ。
もはや尋ねることもできなくて。一方で確かに心は動いていた。
八年間ずっと感じていた孤独感が消えていく。
彼女に呼ばれただけで許された気がして、シュライヤの右腕が震えた。
戸惑いは拭いきれないほど大きかったに違いない。それでも彼は手を伸ばした。
自分より小さな手を、大勢の人間の血に汚れて、触れてはいけないと思っていた自分の手でやさしく握り込み、その感触に驚き、胸が

いっぱいになる。
肩を震わせる自分を情けないと思いながら、彼は妹の手を取った。
「人生は面白い。生きていればこそきっといいこともある」
やさしく微笑んで二人を見守るビエラが小さく呟いた。
アデルも年相応の可愛らしい様子で笑い、長らく続いた緊張状態から解放され、ようやく心からの笑顔を見せることができるようになったらしい。
一件落着といったところだろう。
少し離れて三人を見ていた人影はそっと港から離れていった。
町に入ってそう時間が経つ間もなく、ある人物に声をかけられる。
足を止めたウェンディは警戒心もなく振り返った。
そこには彼女の探し人、自身が信頼する副官が立っており、どことなく怒っているらしい表情。やっぱり怒られるのだなと思いながら保身のため、できる限りの笑顔を振りまいた。しかしそれを見ても副官の厳しい表情は変わらないのである。
「ずいぶん待たせてくれましたね、大佐。また遅刻ですか」
「あら素敵なドレス。やっぱりあなたは何を着てもきれいよね」
「他に言うことはありませんか？」
「ごめんなさい。ちょっとゴタゴタがあったのよ。これでも急いだつもりなの」
「ハァ、まったく。少しは私の苦労も感じて欲しいところですがね」
呆れた顔で溜息をつく彼女は普段にも増して不機嫌そうだ。
ひょっとしたら普段と違う服装がそうさせるのか。
ドレスで着飾り、別人と想えるほど外見が違うものの、本人的には気に入らないらしい。
不機嫌そうな副官は最も苦手とするもので、ウェンディは多少気を使いながら話す。
「気に入らなかったの？　せっかくきれいなのに。普段着にどうかしら」
「こんなに動きにくい服で休暇を過ごせと？　実用性に欠けますし、何より性に合いません」

「貴族に憧れたことはない？　少なくとも私は似合ってると思うけど」
「遠慮しておきます。それより話すことがあるでしょう。仕事は終わりましたか？」
どうやら無駄話は欲していないようだ。
ぴしゃりと言われてウェンディが身を縮め、笑みを絶やさず答える。
「ええ、しっかり終わらせたわよ。ただ想像通りかどうかはわからないわね」
「逮捕はしたんですか？」
「ううん。だって証拠がないんだもの」
「そうですか。まぁあり得る話だとは思いましたが」
「相手がジョナサン中将だからね。多分最初からそれが目的だったのよ。不正の噂はあるけど証拠は何もない、って私に報告させるつもり。確かにこれじゃ本部も疑いようがない」
「体よく利用されたわけですか」
「その代わり基地はめちゃくちゃだったけどねぇ～。どこまで計画通りかわからないわよ」
「唯一想定外の事態があるとすれば、彼の暴れっぷりですか」
何かを理解している様子で副官が頷き、少し困惑した表情になった。
「こんなことを続けていると、いつかあなたが足元を掬われますよ」
「その時はその時。大丈夫。私はおじいちゃんの背中を見て育ったから」
「もっと緊張してください。あなたは楽観的過ぎる」
「それだけじゃないってちゃんと知ってるでしょ？」
ふふっと小さく笑ったウェンディが歩き出して、仕方なく副官も続いて歩く。
大きな規模ではない町中を進んで、ヒューが待っている崖を目指す。
道中も二人は周囲を気にしつつ話を止めなかった。

「そういえば良い物見ちゃった。やっぱり家族って大切よね」
「なんですか、突然」
「彼がね、あの人に興味を持ったみたいなの。真剣な顔なんてそっくり。思い出したから、久々に会いたくなっちゃった」
「やめておいた方がいいでしょう。それこそ危険な賭けになります」
「わかってる。ほんと、いつになったら会えるのかしら」
町から離れ、山道を登りながらウェンディはスーツの内ポケットへ手を入れる。
手を出した時、そこには小さな紙が握られていた。
「でも今はこれがあるから」
微笑む顔は美しく、まるで慈しむかのよう。
深い情が感じられた。
それは、彼方の海賊を指す紙片ではない。少し前に別れたばかりの少年を示す物だ。
以前自分の船に招待した時、密かに爪を切り取っておいた。今回はそれが役に立った形で、またいつかは利用する時が来るだろう。だが少なくとも、用もないのに使うつもりはない。
使うべき時は心に決めている。だから、誰にも知られる訳にはいかない。
掌の上で紙片が動く。そちらの方向には海があった。
また出会うこともあるだろう。
その時を心待ちにして、ウェンディはビブルカードをぎゅっと握り締めた。

リトルガーデン編

太古の島〝リトルガーデン〟

レンズの向こうに島の姿を確認する。
徐々に近付いてくる影は確かな物で見間違うはずもなく、少し胸が高鳴りもしていた。
自身の変化を如実に感じているということだろう。
双眼鏡を下ろしたビビは、後ろへ振り返って仲間たちを見た。
航海に慣れている彼らはいつも通り。
ルフィとウソップはカルーと共に騒いでいて、ゾロは昼寝、ナミは椅子に腰かけて本を読みながら寛いで、他の面子は船内に居るらしい。
晴れ晴れとした日に穏やかな時間。
すっかりいつもと感じるようになった光景を見たビビはくすりと微笑んだ。
「ルフィさん、島が見えたわ。前方に次の島よ」
「なにぃ!? ほんとかぁ!」
「おいおい待てビビ、そういう時海賊は絶対にこう言うんだ」
「し〜ま〜が〜見〜え〜た〜ぞ〜!」
「こうやって大声で仲間に知らせるんだぞ。おまえも海賊なんだから、そろそろ慣れろよ」
「えっと、私、海賊……?」
苦笑しながらビビが二人を見ていると、声を聞きつけた面々が甲板へ出てくる。
また一つの航海を終えた。グランドラインは東西南北の海に比べて過酷な環境にあり、天候や波の動きが変わり易く、航海が難しい。また海に潜む生物の種類や体長も違っている。島が見えるまでにも様々な困難があって、ようやく一息つけるのかと皆が安堵していた様子だ。
ナミは自身が持つエターナルポースの指針を確認し、納得した顔で

頷く。
前方にある島は目的地に間違いない。
傍にサンジやシルクがやってきて、彼女の安堵を確認しながら声がかけられる。
「間違いないわね。あれがリトルガーデン」
「手紙、届けなきゃいけないんだよね」
「見たところ人気が無さそうな島だが……ほんとに人なんか住んでんのか？」
近付いてくる島の姿に気付き、多少の違和感を抱き始める。
最初に言葉にしたのはサンジだった。
見るからに巨大な木々が島の全景を覆い尽くし、港が見えずに人の気配を感じないどころか、見える木の形さえ奇妙に思えて不気味な様相を感じる。
少なくともこれまで見たことのある島とは異なる姿だ。
まだ少し距離があるとはいえ、どことなく不穏な空気を感じる。
特に臆病だと自称するウソップとナミは嫌な予感を感じ始めていた。
船上にある表情は様々で、それぞれその島に対する感想も違っているらしく、ただ純粋に楽しそうにしている者も居れば、何を考えているかわからない者も居る。
中でもキリは欄干に腰掛け、何を言うでもなく笑みを湛えていた。
しばらくすると不安そうなビビが近付いてきて、少し思い悩む声で彼に質問する。
「キリさん……前から思っていたんだけれど、私たち、このまま進んで大丈夫なのかしら」
「どういうこと？」
「だって、バロックワークスはこの一味の動向を探っているはずでしょう？　どこかで待ち伏せしているかもしれない。前の島では何もなかったけど、次はどうなるか……」
「それなら心配はいらない。待ち伏せも奇襲もないよ」
予想とは違い、キリは思いのほかはっきりと告げた。

不安そうにしていたビビだけでなく聞いていたサンジやナミでさえ首をかしげる。
「どうしてそう言い切れるの？」
「バロックワークスについて、よく知ってるからだよ。ボスの指令でオフィサーエージェントを集めたのはボクだ。戦い方も能力も知ってる。一組、二組来たところで害にはならない」
「え……!?」
「ボスもそのことは承知してる。だから手を出してこないんだ」
ビビの反応は大きく、はっきり驚愕が表れるほど。よっぽどの事実を知ったのだろうと想像するのも容易くて、傍から見ていて気付くのも簡単だった。
気になったサンジがビビへ尋ねる。
「ビビちゃん、何を驚いてるんだい？　そのエージェントってのは強い奴らなのか？」
「ええ……バロックワークスでは、Ｍｒ．５からＭｒ．１ペアまでをオフィサーエージェントと呼んで、組織ではトップクラスの実力者。Ｍｒ．０がボス、つまりクロコダイルだから、クロコダイルに次ぐ実力者たちが並んでいることになる」
「つまり幹部ってことか」
「Ｍｒ．６以下、フロンティアエージェントでも手が出せない案件にのみ指令を受ける、その多くが謎に包まれた人たちよ。まさかキリさんが集めただなんて」
「選別したのはボスだ。ボクは集めるよう言われて交渉しただけ、誰にでもできるよ」
涼しい顔でそう言う彼は笑っていて、近付く島を眺めていた。
「伝言があったでしょ。あれはボクらに追手が出されないことを意味しているし、同時に宣戦布告でもある。敵はボクらがアラバスタに到着するまで待ってるんだ」
「アルバーナで、待つ……」
「そこに全戦力が結集される。ボクらを叩き潰すためだけに」
背筋がぞっとした。

秘密結社であるバロックワークスの総力は知られていない。
それでも、内部から情報を集めていたビビやイガラムにとって、その言葉がどれほどの恐怖となり得るか、間近で聞いている海賊たちは理解できない。
同時に平然と語るキリにも驚きを隠せなかった。
おそらく彼はビビやイガラム以上に敵の規模や強大さを理解しているはず。しかし恐れる様子は微塵もなくて、その平常心こそが恐ろしくも感じられた。
「急がなくてもいいってのはそういう意味さ。ボクらがアラバスタに到着するまで絶対に内乱は起こらない。内乱が本格化するのは、ボクらと戦うその時だ」
「どうして、そう言い切れるの……？」
「ボクならそうするから。それとボクがそうするように指導したのが、あのクロコダイルだよ」
笑みを浮かべたまま肩をすくめる彼に言葉を失い、彼女たちは顔を見合わせる。
納得できるような気がする一方、少し複雑でもある。
敵対している相手の元懐刀。
彼が居るおかげで敵の手の内を知り、この先の行動を先読みして、作戦を予想することもできるとはいえ、やはりそれだけではすっきりできない何かがある。
アラバスタの出身であるビビやイガラムだけでなく、話を聞いていた仲間たちも同じらしい。
彼の強さの理由を知って、なんとも言えない気持ちを抱く。
それを理解しているのかキリは多くを語ろうとしない。
彼らの方へやってくるルフィやウソップを視界に捉えながらも、ふと笑みを薄めて呟いた。
「そういう訳だから、無理して急いだっていい結果にはならない。それなら多少時間をかけてでも着実に前へ進んで、こっちもその間に準備しとかないとね。急ごうが遅れようがどのみち反乱が起こるのはボクらが到着したタイミングなんだからさ」

「妙な状況だな。反乱を止めに行くはずが、おれたちが到着した時を狙って起こるのか」
「そんな……それじゃあ反乱を止める方法はないの？」
「いや、止める方法ならある。それこそボクらが止めないと」
話している最中にルフィとウソップがやってきた。
どこか真剣に話している顔ぶれを見て不思議そうにもしている。
しかしどちらにせよ、二人の表情はそれぞれ違っていて、到着と共に何気なく声をかけた。
「何の話だ？」
「これからのことさ。頑張らなきゃねって」
「ふぅん」
「それよりおまえら、あれ見たか？　なんかヤバそうな島だぞ……」
青ざめた顔になったウソップが恐る恐る言い出す。
隣に居るルフィが上機嫌な笑顔であるのを見るとあまりに対照的。
いつものことで、上陸前に怖気づいたといったところだろう。
「なんか見たことねぇ形の木とかよお、トカゲみてぇな顔した鳥とかよお、全体的な雰囲気とかにしてもよお、明らかにおかしいとこなんだ。あれは上陸しない方がいいんじぇねぇかなぁ……」
「サンジ、弁当作ってくれ」
「弁当？」
「ししし、海賊弁当」
笑顔で肩を揺らすルフィがサンジの名を呼ぶ。
振り返った彼の表情は何を伝えたいかが明らかで、サンジとウソップが同時に表情を変えた。
「冒険のにおいがするっ」
「やれやれ、了解」
「ちょっと待ってくれ！　みんなには黙ってたんだが、実はおれは不治の病と言われる〝島に入ってはいけない病〟で――」
「知ってるよ。でも死んだことなんてねぇだろ？」
「キリ！」
「もうどうしようもないね」

「そんなぁ〜!?」
怯えるウソップを尻目に、メリー号は着実に島へ近付いていく。
距離が近くなると島内へ続く川を見つけた。
舵を切ったメリー号は川へ侵入し、足を止めずに島の中まで進む。
鬱蒼と生い茂る深い森が間近に見えて、臆病でなくとも危険な雰囲気は感じられた。
そこは見るからに未開の土地、いわゆるジャングルであった。
幹が太い樹木が数え切れないほど立っていて、どこもかしこも緑で覆われ、耳を澄ませば数多くの鳴き声が聞こえ、大自然という言葉が嫌と言うほど似合う状態にある。
少なくともナミやウソップは危険を望んでいなくて、嬉しい風景ではないらしい。
それでも周囲の光景は彼らに恐怖心を与えているようで、確実に近くまで危険が迫っていると、そう考えずにはいられない心境に変わっていた。
うずうずしている様子のルフィは欄干から身を乗り出して、キッチンに姿を消したサンジを待っている。彼の弁当を受け取れば今すぐにも飛び出していくだろう。
彼ほどではないが楽しみにしている顔の者も居て、怯える者ばかりではなかった。
船を進めて、どれほど経った頃だろうか。
唐突にルフィが大声を出して、その声にさえナミとウソップの肩がびくついていた。
「あっ！　あれ見ろよあれ！」
「ひぃっ!?　て、てて、敵襲か!?」
足を震わせながら振り返るウソップの目に飛び込んだのは、体長三メートルはあるだろう巨大な虎だった。顔を見た途端に凄まじい迫力を感じて思わず絶叫する。
しかしどうやら様子がおかしかったようで。
ウソップが気付く暇すら与えず、虎はよたよたと数歩進んだ後、川の傍で倒れてしまう。

全身が血に濡れていて、もはや手の施しようがないほどの傷を負っていたのだ。
「んなっ、なっ、なんちゅうでけぇ虎っ!?　しかも全身血だらけじゃねぇか！」
「あり得ないっ。ジャングルの王者が倒れるなんて、この島、絶対普通じゃない！」
「あいつでっけぇなぁ～。食ったらうまいのかな」
「呑気なこと言ってる場合かっ!?」
「ルフィ、この島絶対危ないわよ！　舐めてかかると痛い目見るんだからね！」
二人の忠告も聞かずにルフィは島を見つめていて、もはや彼を止めることは不可能。
ナミとウソップはさらに悲鳴を大きくしていた。
とはいえ、どちらにせよその島に用があって来たのである。どれだけ危険な環境であろうが上陸しない訳にはいかず、自らの身を守るためにも頼み事は聞いてやらねばならない。
海賊島で受け取った、老婆からの手紙を島の住人に渡す。
それをしっかり覚えているシルクが言った。
「二人とも落ち着いて。この島に居る人を見つけて、手紙を渡さなきゃいけないから、どっちにしても上陸はしなきゃいけないよ」
「う、それはそうだけど……」
「確かに危険そうな島だよね。上陸するメンバーは選んだ方がいいかもしれない」
そう言って何気なくキリを見る。
頭を使う状況では大抵彼が指揮を執るものだ。信頼もしている。しかし視線に気付いた彼はシルクの目を見ると、苦笑して肩をすくめただけだった。
少し様子がおかしい気がする。今日に始まったことではなく、少し前から。
いつからとはわからないが感じ始めた違和感を覚え、シルクの表情はわずかに曇った。

空気が停滞しかけた時になってキッチンからサンジが出てきた。両手には複数の包みを持って、どうやら全員分の弁当を用意したらしい。
ぐるりと全員の顔を見回し、状況を確認してからである。
各々違った表情なのを確認した上で声をかけた。
「おら野郎ども、ご所望の弁当だ。有難く食え。ナミさんとビビちゃんとシルクちゃんには愛情が詰まったスペシャル弁当を♡」
「ありがとうサンジ」
「サンジさん、カルーにもドリンクを頂けるかしら」
「ああ、いいぜ。もちろんさ」
にやけた顔のサンジにビビが声をかけた。
朗らかな笑顔を見てさらに頬が緩むものの、一方でその発言にイガラムが顔色を変える。
嫌な予感を感じたようだ。
「ビ、ビビ様、カルーのドリンクを心配するのは構いませんが、何かお考えなのですか？　できれば早まったことは言い出さないでください。ここは危険が多そうですから――」
「ルフィさん、私も一緒に行っていい？」
「やはりそう来ましたかっ!?」
「おう、いいぞ」
イガラムの驚きもそっちのけにルフィがあっさり頷いた。
慌ててイガラムがビビの前に立ち塞がり、心配から熱心な説得を始める。
「お待ちくださいビビ様！　それにルフィくん！　護衛としてビビ様を危険な目に遭わせるわけには参りません！　ここは大事を取って船で留守番を……！」
「いいじゃねぇか、ビビが行きてぇって言ってんだから」
「なりません！」
「ねぇイガラム、心配してくれるのは有難いわ。だけどもう子供じゃないの。自分の身くらい自分で守れるし、バロックワークスにだって潜入した。守られるばかりじゃないわよ」

「しかし！」
心配性の彼を納得させるのは容易ではなく、それでもビビはにこりと笑って言う。
「大丈夫よ、カルーも一緒だもん」
「クエッ!?」
「あの、本人すごくびっくりしてるんだけど」
いつの間にか連れていかれる予定だったらしく、初めて聞かされたカルーが驚愕する。口をあんぐり開けて目が飛び出さんばかりの表情、明らかに怯えている顔だ。
ビビは気付いていないだろうが、見ていたシルクは苦笑した。
そう言われてはイガラムも少し考え込む。
カルーはビビの相棒。長く苦楽を共にしている。
戦いを好まない性格であることは知っていて、ビビに対する友情や愛情もあり、普段は臆病だが心の内には強い勇気も秘めている。超カルガモという種であるため足も速い。もしもの時は彼女を連れて逃げるだろう。そういう意味では信頼している。
だからと言って快く送り出すのも難しかった。
「ぐぬぬ、確かにビビ様のお言葉もわかりますが……！　しかし私は心配で心配で！」
「いいじゃないか。行かせてあげなよ」
しばらく黙っていたキリが口を開き、いくつかの視線が彼に向く。
イガラムを見るキリはそっと船の前方を指差した。
「そんなに心配なら自分で守ればいいだけの話さ。それに、船が安全とは思えないけどね」
「は？」
「ちょっと待てキリィ！　今のは聞き流せないぞ！　メリーも安全じゃないのか――!?」
動揺したウソップが大声を出したその時。
森の木々が次々倒壊していき、重々しい足音と共に、船の前方に巨大な生物が現れた。
メリー号にも劣らぬ体躯、二足歩行のトカゲ、と言うべきか。とに

かく巨大で獰猛そうな顔つきの生物が進行方向へ躍り出て、鋭い牙をギラリと光らせるのである。
当然、驚かないはずがない。
ウソップとナミが悲鳴を発して、ビビやイガラム、シルクが息を呑み、ルフィは笑顔で目を輝かせながらその存在に見入っていた。
「ギャアアアアアッ!? 出たぁ～っ!?」
「きょ、恐竜!?」
「恐竜!? すんげぇ～なぁ～!」
それぞれのリアクションは異なっていた。
初めて見る恐竜。絶滅したとも語られていたその存在は彼らに大きな驚きを与え、ある者には純粋な恐怖心を叩き込み、ある者には冒険心を刺激させ、皆の視線を一身に受ける。
大口を開けて、どう見ても彼らを餌と認識している様子だった。
名称さえ知れない恐竜を、そのままにしておけない。
身を守るためには排除する必要があるだろう。
怯えた様子もなくゾロが駆け出す。
手はすでに刀の柄を握っていた。敵は巨大だが、大きさなど気にしていないらしい。
甲板を蹴り、鱗にも近く硬質な皮膚を視認したところで、素早く刀を抜いた。
鮮血が舞う。
身を捩った恐竜は悲鳴のような声を発し、力が抜けてその場へ倒れ込む。
大量の水を跳ね上げて川の中に横たわった。
ゾロは倒れた体の上に着地、納刀する。一瞬の勝負だったが肝を冷やす一場面で、船上では静かに胸が撫で下ろされ、大きく息を吐く者も少なくなかった。
「こりゃあ……でけぇトカゲか? 食えるんなら大収穫だが」
「しっしっし、恐竜肉もうまそうだなぁ～。サンジ、晩飯に取っとこう」
「そうするか。だがその前に船を停めねぇと。船底に穴でも開いた

ら厄介だぞ」
「そりゃそうだっ。おぉいみんな、急いでメリーを止めるぞ！」
サンジの一言に驚いたウソップが冷静になり、全員へ指示を出して船を停める。メリー号は錨を下ろして川の真ん中で動きを止め、倒れた恐竜の間近にあった。
船体に傷が付くことは免れてウソップもほっと一息つく。
状況は整い、ひとまずの危険は去った。
海賊弁当を詰めたリュックを背負い、嬉しそうなルフィが皆を見回す。
「よし、そんじゃ早速上陸だ。行くぞキリ！」
「先に行ってて。後で追い付くよ」
「え～なんで？」
「手紙を取って来ないと。ちょっとだけさ」
呼ばれたキリは笑顔で躱す。
ルフィは不服そうにするものの、ほんの一瞬のことで、すぐに考え直して表情を変えた。
視線の先はカルーの背に跨ったビビへ向けられる。
「んん、わかった。後で絶対来いよ。ビビ、もう行けるか？」
「ええ」
「それじゃ行くぞ。冒険だ！」
「暗くなる前には帰るから」
ルフィとビビを乗せたカルーが飛び出し、陸地に降り立って元気よく駆け出した。
その様を見て、一歩遅れたイガラムが慌て出し、彼もまた急いで欄干を蹴って船から降りる。
「お、お待ちくださいビビ様！　私も行きます！　なんとしてもお守りせねば！」
「ふふ、イガラム早く」
イガラムも加わって三人と一匹、早くも鬱蒼と生い茂る植物の向こうへ姿が消えた。
残る者も考え始める。

船に残るか、上陸するか。全員が離れるのも考え物だが島の規模が知れない。遠目で見た限りではかなり広そうにも感じて、町も見当たらない、そんな島で人を探すには人数が必要になる。
シルクがちらりとキリを見るも、やはり彼は指示を出そうとしない。
彼は言葉通り手紙を取りに船内へ向かった。
己の判断で動いたゾロが恐竜の上から陸地へ飛び移る。
無事に着地すると首を回し、辺りを見回して呟いた。
「おれも散歩でもしてくるか。退屈はしなさそうだしな」
「あ、待ってゾロ。私も行くから」
咄嗟に言ってシルクが飛び移る。彼の隣へ追いつき、一緒に行こうとした。
大した反応こそないもののゾロに突っぱねる様子はない。
彼女が来るまで待ち、隣に並んでから口を開く。
「別におれ一人で大丈夫なんだがな」
「恐竜のことは心配してないよ。でも道がね」
「またそれか」
「いい加減自覚した方がいいんじゃないかな。もうみんな知ってるよ」
「うるせぇ」
軽口を叩きながら歩き出し、二人がジャングルの奥へ進もうとする。
その背へ手を振ってサンジが声をかけた。
「おい待て待てゾロ、おまえ散歩ついでに食料でも探して来い」
「あ？　肉ならそこにあるだろ」
「バカ言え、肉だけが食料じゃねぇんだ。とにかく食えるもん取って来い。あ、シルクちゃんもついでに見ててくれるかな？」
「うん。探してみるよ」
「仕方ねぇな。ボンクラコック君が見つけられねぇやつを取ってきてやるよ」
「ちょっと待てコラァ!?」

やれやれと言わんばかりに歩き出すゾロの背へサンジの怒鳴り声が飛ぶ。
また始まった、とシルクは頭を抱えてしまう。彼らはいつもこんな調子で喧嘩を始める。有事の際には力を合わせるが、それ以外は大体こうだ。
振り返ったゾロとサンジが睨み合い、気付けば剣呑な雰囲気が漂っていた。
「おれに何ができねぇって？　口の利き方には気をつけろよクソ野郎。むしろ食料確保に関しちゃおまえの方がお荷物じゃねぇのか」
「事実だろ。現におれは肉を獲った」
「おれならあの倍は獲れる」
「ならおれはその三倍だな」
「上等じゃねぇか。口だけかどうか、狩り勝負で決着だ」
「ちょっと、二人とも」
「本気でやってもいいんだろうな？」
「当然だ。負けた時の良い訳にはできねぇぞ」
「そりゃこっちのセリフだ」
シルクは嘆息する。
いつも通りと言えばそれまでとはいえ、こうも変わらないと尊敬さえできる。
島の危険な環境など顧みず、二人は我先にと歩き出し、その後ろからシルクが続く。どうやら監督役は彼女が務めるようで、別行動ではないことにひとまず安堵した。
妙な空気を纏って姿を消す三人を見送って、甲板に残っていたウソップとナミが溜息をついた。
同時に息を吐き出して、互いの存在に気付き、見つめ合うこと数秒。
気付けば自分たちしか残っていない。戦闘力に不安が残るメンバーが二人だけだ。互いにそう思っている上に自覚もあるため、瞬く間に不安に苛まれてしまう。
絶望した顔でウソップがナミを見つめ、泣きそうになりながら声を絞り出した。

「頼りねぇ～……」
「それはこっちのセリフよ！」
自覚はあるが、あまりにも失礼な一言にナミが怒鳴った。
直後に二人して重苦しい溜息を吐き出し、がっくり項垂れて脱力する。
少し黙り込むとその間にも何かの鳴き声が聞こえる。おそらくは遠い場所、近くはない。それでも聞いたことの無い声が多く混じっていて気が気ではなかった。
話していないと不安に押し潰されそうになる。
何か話そうと考えた時、ふと思い出す事柄があってナミの表情が歪んだ。
「そう言えば、聞いたことある。リトルガーデン」
「ん？　この島の名前か」
「うん。でもどこでだったかな、ちょっと前に……」
その頃になって扉が開き、船内へ入ったキリが戻ってきた。
振り返って彼の姿を見つけた途端、安堵する二人は泣き出さんばかりの顔で、慌てた歩調で彼の下まで駆けつける。応じるキリは緩い笑顔のままだ。
「キリィ～！」
「あんたは船に居てくれたのね！　ありがとう！」
「すぐに出るよ。手紙も取ってきたからね」
「あぁっ、そうだった!?」
「ちょっと待ってよ、私たちを置いていく気!?　今度襲われたら助からないわよ！」
「じゃあ二人も一緒に行く？　人間の居ない船を襲う恐竜は居ないだろうし、この島にはそもそも人が住んで無さそうだ。多分船番無しでも大丈夫だと思うけど」
「それはそれで……」
「恐怖心は増すと言うか……」
仕方なさそうに肩をすくめる彼はあっさり言った。
「自分で選ぶしかないよ。とりあえずボクはルフィたちを追うから

――」
「わ、わかった！　行くよ、行った方が安全なんだろ！」
「見るからに危なそうだけど……キリが居れば大丈夫よね。私を優先して守りなさいよ」
「おれは!?」
「自分でなんとかしなさい。男でしょ」
「男だって強い奴ばっかじゃねぇんだよ！」
騒がしい二人に苦笑した一瞬、ズズン、と地面が揺れた。
恐竜ではない。さっきの恐竜には感じなかった揺れである。
さらに大きな何かが現れる予兆だと認識して、素早く二人がキリの背に隠れ、辺りを窺った。
「な、なんだ今の？　地震じゃねぇよな？」
「足音、じゃないわよね。アハハ、まさかそんな大きい動物が居る訳――」
「そう言えばボクも聞いたことあるよ。リトルガーデンには近付くなって話」
辺りを警戒しながら唐突にキリが言い出した。
自然と二人の目は彼を見やり、気になる言葉の続きを無言で促す。
「この島に到着した人間は大半が帰って来なくなる。最初は過酷な環境だからと思ってたけど、人が住んでるって話を聞いて思い出した。昔読んだ、ある冒険家の本」
「あっ。そ、それ、私が読んだのも多分同じ」
「な、何が書かれてたんだ、その本に」
「〝リトルガーデン〟と名付けられた由来、それは――」
話す間に木々が大きく揺れ、その姿が現れた。
天から見下ろすかのような巨大な体躯。覗き込むのは人間の顔。
それは間違いなく巨人族の人間であった。
ナミとウソップは声なき声で悲鳴を上げて、キリは笑顔で見つめ返す。
対するは巨人族の男、鎧を身に着けている姿を見ればおそらく戦士。

遥か昔、この島を訪れたある冒険家が言った。
あの住人たちにとって……まるでこの島は小さな庭のようだ。
冒険家の名はルイ・アーノート。
巨人島〝リトルガーデン〟と名付けた人物は、彼らという住人に出会ったことで名を考えたのだ。

2015

小さな庭の住人

ルフィは目の前にある風景に目を輝かせていた。
鬱蒼と生い茂るジャングル。木々を薙ぎ倒しながら歩く巨大生物、恐竜。
動植物の全てすら規格外のスケールを誇り、目に付く全てに感動して、疼き出す体を押さえられそうにない。彼は今にも駆け出しそうだった。
前方にゆっくりと首をもたげ、木の天辺にある葉を食す恐竜が居る。
大きく、雄大で、思わず目を惹かれる存在。それは生命の神秘を感じるに相応しかった。
見上げるビビとカルー、イガラムは足を止めてピクリとも動けずにいる。だがルフィはそうではない。興奮を抑えられない彼は止める暇もなく動き出す。
両手を伸ばして木々を掴み、縮む勢いを利用して跳び上がったのだ。
「しっしっし！　恐竜ってでっけぇんだなぁ～」
「あっ、ちょっと、ルフィさん!?」
慌てたビビが声をかける頃には彼は恐竜の頭の上に着地する。
素知らぬ顔で食事を続ける恐竜の上で仁王立ちした。
本人よりも見ている方が悲鳴を上げる。
下手をすれば攻撃されてもおかしくない状況で、悠長に景色を眺めている場合ではない。一帯にはその一匹だけでなく群れが居たらしく、よく見れば近くにも数匹存在している。すでに頭の上に立っているルフィにも気付いていて、不安を抱くのも当然。
ビビとイガラムは心配からルフィへ声をかけていた。
「早く降りてルフィさん！　怒らせちゃだめ！　危ないわ！」
「ふざけている場合ではないぞルフィ君！　これは命に係わる！」
「いやぁ～いい眺めだなぁ。こいつらこんな風に見えてんだな」
「そんなこと言ってる場合じゃなくて……！」

「おまえらも早く来いよ」
「行けるかァ!?」
声を揃えて叫ぶ一方、やはりルフィに降りる気はなく、辺りをきょろきょろ見回して観察する。
そこからは島の地形が一望できた。
目に付く特徴がいくつか視界に入り、一つ一つ確認して小さく頷く。
「あれって火山だよなぁ。それになんか穴ぼこの開いた山まであるぞ。変な島だなぁ～」
「ルフィさんっ、いい加減にしないと――！」
「他の恐竜も気付いている！　早く離れないと危ないぞ！」
「なぁおまえ、メシ食ってねぇで向こうまで連れてってくれよ。草なんてうまくねぇだろ？」
「お願いだから話を聞いて!?」
恐竜の上でしゃがみ込んだ彼は、硬い皮膚をぺちぺち叩いて声をかけ始める。あまりにも軽々しい態度は友人と接するようにも見える様子だ。
痛みを感じるほどの力ではないとはいえ、それとは別に恐竜が反応してもおかしくない。
必死にやめさせようと騒ぐ二人の声を聞かず、ルフィは尚も恐竜に話しかける。
「物は相談だけど、おまえあそこまで連れてってくれねぇか？」
器用に上体を伸ばし、左手で帽子を押さえながらルフィが恐竜の目を覗き込む。
見えてもおかしくない位置に来たのだが、そもそも興味がないのか、恐竜はそちらを確認しようともせずに木々の葉を食すのに夢中だった。おかげでルフィはううむと唸る。
「そんなケチなこと言わずにさぁ、連れてってくれよ。あっちだよあっち」
無数の穴が開いた奇妙な山を指差し、呼びかけるも、やはり無視をされてしまう。

苦い顔になったルフィは伸ばした上体を戻して頭の上に戻った。
ぐらりと揺れる。
首を動かした恐竜は再び木の天辺にある葉に噛みつき、引き千切るようにして食べる。
やはり聞いてくれる様子はない。
仕方ないと、ルフィが頭を振った。
言葉だけでは聞いてもらえそうにない。それならと、両腕を伸ばして恐竜の首に巻き付け、力を入れてぎゅっと引っ張ったのだ。
当然恐竜は苦しげに息を詰まらせ、口の中にあった葉を吐き出した。
想像通りに動く人間ではないと知っていたが、流石にそこまでは予想外。
地上に居るビビとイガラムは怒りを滲ませて絶叫していた。
「そっちじゃなくて、ほらこっち」
「あ、あっ、アホかぁぁぁっ!?」
苦しそうだったことで咄嗟にルフィが手を離す。悪いと思ったらしい。
ただ、そう思った時には大人しいはずの種であるその恐竜は、苛立ちを感じていて。
ギロリと目つきが変わった瞬間を、地上に居た二人と一匹が目撃していた。
「あ、わりぃ。いやでも――」
「ルフィさん、逃げて！」
「すぐにこちらへ！　今すぐ逃げなければ！」
「クエーッ！」
必死に騒ぐその最中、恐竜が首を動かし、ポンとルフィの体を跳ね上げた。
突然の行動だった。為す術もなく空中へ放り投げられたルフィはおおっと声を漏らして、怯えるどころかワクワクした様子で笑みを浮かべ、落下する体が回転する。
そして一拍遅れて恐竜が大口を開けていることに気付き、直後に口

の中へ飛び込んだ。
呆気なくも一口で食べられたのである。
見ていてぞっとするだけでなく、背筋が凍る想いだ。
ルフィが死んだ。食われた瞬間を見たために恐竜を目にした瞬間以上の恐怖に囚われる。
どうすべきかと考えることさえままならず、反射的に彼の名を呼ぼうとした時。
一際大きい、地響きを聞いた。
ズズンと大地が揺れる感覚。自身とは違った誰かの足音。どこからか突如やってきたそれは圧倒的な存在感で二人と一匹を驚かせ、嵐か台風か、それ以上の恐怖を伴って現れた。
一足飛びで素早く接近。間合いに入ると同時に、全力で剣が振るわれる。
鈍く光る長大なそれは時を感じさせずに恐竜へ近付き。
瞬きさえ許さず、長い首を切り飛ばした。
鮮血が舞って首が飛ぶ。長いそれはくるりと回りながら地面に落ちようとしていた。
その中からルフィの姿が現れる。
食道を通り、滑り台を滑るが如く、帽子を押さえて平然と宙へ躍り出た。何が起こったのか本人はわかっていないようで、不思議そうな顔をしている。
落ちていくルフィを受け止めるべく左手が差し出される。
慌てる様子もなく彼を助けたその手は、切り捨てた恐竜すら遥かに凌駕する、巨人だった。
「ゲギャギャギャギャ！　久しく見ない活きの良い人間だな！　歓迎するぞ、客人よ！」
「でっけぇおっさんだなぁ～。人間か？」
「人間か、と来たか。ゲギャギャギャギャ！　おれを見て怯えん人間は初めてかもしれんな」
巨人は、兜を被り、右手には剣を、左手には盾を装備して、逞しい肉体の首元には青いマントを身に着けていた。まさしく戦士という

言葉が似合う外見である。
豪快に笑う姿は男らしさを感じさせ、言葉にはできない力強さがあった。
恐竜を超える巨体に加えて凄まじい迫力だ。
彼は肩に剣を担ぎ、左手の掌に乗るルフィを見て答えた。
「我こそはエルバフ最強の戦士、ドリーだ！」
「おれはルフィ。海賊だ」
「おおっ、海賊か。まぁそうでなければあの首長に盾突こうとは思わんか。チビ人間だというのに面白い小僧だ」
「おっさんもおもしれぇ奴だな。でけぇしイカス兜だ」
「ゲギャギャギャギャ！　正直な奴だ、気に入った！　ここまで恐れを知らぬ奴だとはな！」
掌の上だが堂々と背筋を伸ばして、腰に手を当てて立つルフィに何かを見出した様子。
天を見上げたドリーは豪快に笑った。
それを見たルフィも気負うことなく上機嫌にしていた。
突然の出会いながら彼ら二人は平然とした様子であっても、近くで一部始終を見ていた彼女たちは平静ではいられず、高鳴る心臓の鼓動が落ち着く様子すら見られないまま。
ビビは力が抜けてへたり込み、カルーはあまりの衝撃に気絶寸前で倒れ込んでしまった。
イガラムは咄嗟に冷静さを取り戻し、彼女の傍に膝をついて心配する。
「ビビ様っ、お気をしっかり」
「巨人族……噂には聞いてたけど、初めて見た」
「ええ、私もです。それも、あの恐竜を一太刀で両断するとは」
ルフィが無事だったことに安堵しつつも、驚愕の波が中々引かない。
二人はカルーを心配する一方、巨人のドリーとルフィの動向を気にしていた。
ずいぶん仲良くなっているらしい。焦りを募らせる二人をそっち

のけに彼らは悠長に話して、とても大きな笑い声が辺りに響き渡っていた。
襲われる心配は無さそうなのは嬉しいが、すぐに落ち着けと言うのも無理がある。
巨人族、特にエルバフの戦士という名は世界中に轟いている。
寿命は人間の三倍はあり、成長速度は二分の一。巨大な体は十数メートルにも及び、長い手足は辺りの環境を破壊するのも簡単で、特に名を上げた彼らは広く知られている。彼らエルバフの戦士の行いにより巨人族は野蛮な種族だと思われているほどだ。
今ここで暴れられたら敵うはずがない。そんな心配もある。
至近距離で向き合っているルフィがこの場に居る全員の生命線であった。
頼むからドリーを怒らせるなと、心配の目が向けられる。
「この島に来た客人は久方ぶりだ。お前たちおれの家に招待しよう」
「ほんとか？　じゃあおっさん、恐竜肉食おう。あ、でも海賊弁当もあるんだったな」
「んん？　海賊弁当？　美味いのか、それは」
「当たり前だ。おれの船のコックが作ったんだぞ、うまくねぇわけねぇじゃねぇか」
「ほう、それは興味があるな。ではどうだ、おれが取った肉を分けてやるから、お前の言うその海賊弁当、交換しちゃみねぇか？」
「そりゃいいな。よし、そうしよう！」
「お前たちも来い。どうせ人間には食い切れねぇほどの肉があるんだ、一緒に食え」
そう言ってドリーは上機嫌に笑って、ビビやイガラムに視線を落とした。
何もルフィにだけ言っている様子ではないらしい。
これから一体何が起こるのか。不安に駆られて思わずビビがカルーを抱きしめるが、彼はまだ先程の光景によるショックが抜け切らず、泡を吹いて倒れたままだった。

＊

その大きな焚火は、彼らにとっては火災のようで。
巨人にとっての小さな焚火を前にして、人間とはこれほど違うのかと、価値観の相違や改めて体の大きさを確認して、驚きも一入と言ったところだ。
キリ、ナミ、ウソップの三人は巨人の家へと招かれ、食事をご馳走になるところだった。
彼らの前に現れたのは巨人族の男、ブロギーと名乗った。
丸々としているが強靭な肉体にわずかな鎧を纏い、穴の開いた山に無骨な盾と斧を立てかけ、角のついた兜を被り、マントを身に着けている。
戦士然とした姿で、どことなく愛らしさも感じるがまさに強者。
ウソップとナミは心底怯えて、縮こまって先程から口を閉じたままだ。
ブロギーは現在、久しぶりに会う人間と語らうため、恐竜の肉を焼いている。
丸焼きにしただけのそれは料理とも呼べず、豪快な様。
緊張する二人の横に並んで、すっかり焼けた肉を眺めるキリはのほほんとした顔だった。
「そろそろいいだろう。さぁ焼けたぞ、客人。ぜひ食ってくれ」
「ありがとう。それじゃ遠慮なく頂こうかな」
「ん？　そっちの二人はどうした？」
「二人とも食べないの？」
「い、いえ、ちょっと食欲が……」
「もうちょっとしてからで……」
青ざめている二人は動き出さない。仕方なくキリだけが動いて、自身の数倍はあるだろう巨大な肉から一部分だけを切り取り、それにしても大きいが、肉の塊にがぶりと噛みついた。
多少硬い気もするが肉汁が一気に口内へ広がる。

これはこれで悪くない。頬を緩めるキリは幸せそうだ。
ナミとウソップが信じられないといった顔で彼を見るが、ブロギーは満足そうにしている。
彼はメリー号から譲り受けた酒樽を指先で持ち、ぐいっと煽って中身を飲み干した。
体が大き過ぎて量は少ない。しかしいつ振りかさえ忘れた酒の味は極上だった。
ぷはぁっと一言。にんまり頬が緩む。
たったそれだけで酔うはずもないとはいえ、久しぶりの酒に気分が良くなり、客人も気前が良いため何年振りかというほど上機嫌である。
ブロギーの目は心底嬉しそうに小さな人間たちを眺めていた。
ちらりと見上げたキリが気付いたらしく、口元に付いた油を拭いながら顔を上げる。
酒をくれと言うから分け与えた。その甲斐はあったと言っていいだろう。
食事の手を止めた彼から語り掛ける。
「美味しいんだね、恐竜の肉って。想像したこともなかったけど案外イケるよ」
「気に入ったか。この島にはいくらでもある。いくらでも食ってくれ」
「でもちょっと大き過ぎるね。ウチの船長ならまだしも、全部は食べられないや」
「ガババババ、それは仕方ない。お前たちチビ人間とは体のでかさが違うからな」
「だから悪い気もするよ。ボクらならその酒樽一つで結構満足だったりするからさ」
「ああ、確かに。だが久しく酒を口にしていなかった。ただ味わえただけでも嬉しいんだ」
空になった酒樽を置き、次の一つを持ち上げた。
ブロギーは遠くを眺めて静かに言う。

「この島に居るのはおれともう一人のみ。稀に外から人間が来ることもあるが、人間には過酷な環境らしくてな。大概は外へ出ることなく死んでいったよ」
「恐竜が居るくらいだからね。無理もないか」
「時折寂しくもなるし、特に酒は恋しくなる。この一杯がとても至福だ」
「そんな想いまでしてなぜここに？　イカダでもなんでも作って外へ出ればいいのに」
「ああ……」
ブロギーの目はキリを見下ろす。
「離れられない理由がある。おれはここで、決闘をしているのだ。もう百年にはなるか」
「ひゃ、百年!?　巨人の寿命ってどんだけあんだよっ」
「それじゃ、百年もここで決闘を？」
「そうだ。あそこに山が見えるだろう」
思わずウソップやナミも口を挟んだ。するとブロギーがある方向を指差す。
大きな山がそびえ立っている。
人間にとっては巨大なそれも巨人にとっては大したサイズではないのだろう。胡坐を掻いて座っているが大きな物を見る目ではなく、平然と話した。
「真ん中山だ」
「あれは、火山？」
「あの山はよく噴火する。それを決闘の合図として百年、この島で決闘を続けてきた。これまでで７万と３４６５戦、全て引き分けに終わっている。決着がつくまでは村に帰れない」
「どうしてそんなことを……」
「掟があるからだ」
「掟？」
「そう、戦士の掟だ」
いつしかウソップやナミも真剣に話を聞いていた。キリも表情が

変わっている。
ブロギーはそんな彼らへ語って聞かせた。
「我らの村、エルバフには掟がある。互いに引けぬ争いがあった時、エルバフの神の審判を受けるのだ。エルバフの神は常に正しい者に加護を与え、生き残らせるからな」
「神の加護を？　それと決闘にどんな関係が」
「神の加護を受けるために、決闘で勝負をつける。簡単に言えばそういうことだ」
ブロギーの言葉にナミは絶句した。どうやら理解を得られなかったようだ。
「どんな掟よ。ただの喧嘩で百年もこの島に居たの？」
「まぁ、理解はできんかもしれん。だがおれたちはそうして育ち、そうして死ぬ」
「戦ってる相手は？　知らない相手じゃないんでしょ」
「我が友であり、生涯最高の好敵手よ」
「どうしてやめないのよ、友達同士で殺し合いなんて。別にやめようと思えばいつだって――」
「いや……おれはわかる気がする」
戸惑う様子のナミに対して、呆然とするウソップが呟いた。
ブロギーを見上げてわずかに汗を掻き、上手く言えない感情の奔流が起こる。
その時、彼が真ん中山と呼んだ火山が激しく噴火した。
決闘の合図だ。
顔を上げたブロギーの様子が一変する。目つきが鋭くなり、温厚そうな顔が変わって、纏う雰囲気が今までとはまるで違っていた。
変化の様を見ていたウソップは体を震わせる。
「理由とか、そういうんじゃねぇんだ、戦う理由は」
「そう。誇りだ」
立ち上がったブロギーは己の斧と盾を持ち、ゆっくり歩き出す。
一歩踏み出す度に地面が鳴き、動植物が動き出して、辺りの風景が一変する。

見送る三人は圧巻とも言える姿に息を呑んだ。
向こう側からもう一つの人影が見える。
彼らが知らない、真ん中山を目指して進んだドリーがブロギーの正面へ立った。
島の中央で向かい合う二人。
どちらも戦士であり、誇りを胸に武器を携える者。
これまで決して手を抜いていた訳ではない。彼らは常に死ぬ気で、真剣に戦ってきた。それでも決着がつかなかったのは死力を尽くした結果が引き分けだったからである。
「理由など、とうに忘れた!!!」
同時に動き出した両者が武器を振るう。
ドリーが剣を振り下ろし、ブロギーが斧を振り抜く。
それらは真正面から互いの盾によって受け止められて、凄まじい衝撃が大気を揺らす。
再び、命を賭ける決闘が始まった一瞬だ。

決闘

最初の激突で、島が怯えているかのようだった。
駆け抜けた衝撃の波が見る者に驚愕を与え、体だけでなく心を震わせる。
それは巨人であるか否かを排除しても、余りある迫力を持った、誇り高き戦士の決闘だった。
見ていたルフィが背からゆっくりと倒れ込んでいく。
受け身も取らずに大地に倒れ、隣に居たビビが慌てて顔を覗き込む。
「ルフィさんっ!? ど、どうしたの?」
「いやぁ……まいった」
呆然とした顔で小さく呟き、それでも二人の戦いから目が離れぬまま。
海賊弁当に舌鼓を打っていた時とはまるで別人。何もかもが違っている。圧巻とも言えるその迫力には恐怖ではなく尊敬の念すら抱いていた。
ルフィは目を丸くして、純真なままに言葉を口にする。
「でけぇ」
たった一言。
ぼんやりしているだけでなく小さなそれはビビにだけ聞こえ、絶叫するイガラムやカルーの耳には届いていない。その前に二人が激突する音でかき消されていた。
振り下ろされた斧が盾に受け止められる。
姿勢を低くしたドリーが防御の一方、剣を握る右手に力を入れていた。
重い一撃を受けた左腕に途方もない衝撃が走り、常人ならばとっくに潰されている。体勢が崩れて地面へ転がり、次の一撃で勝負は決しているだろう。だが長年渡り合ってきたドリーは正面から受けきり、さらにその体勢から反撃へ出ようとしていた。
左腕を振って斧を弾き、直後に前へ踏み出して突きを繰り出す。敵

の急所、首を狙った一撃。当たれば間違いなく勝負は決する。
だがその攻撃を素早く構えた盾で受け流し、弾かれ、今度はドリーが体勢を崩した。
筋力は互いに同程度。ならば勝負を決するのは力ではなく技である。
全身のバネを使ってその場で跳び上がり、好機と見たブロギーが大上段から斧を振り下ろした。
受ければ死。その一撃を目にして、ドリーは敢えて前へ出る。
着地と同時に繰り出される攻撃。
大地が揺れ、凄まじい音がしていた。
剣を引く暇がなく、盾も間に合わない、そう判断したドリーは己の兜で斧を受けたのだ。頭突きの要領で正面からぶつかりながら、直後には上手く体を捩って力を逃がし、今まさに触れていた刃を受け流す。死を間近にした、刹那の判断による行動だった。
ブロギーの攻撃を回避したドリーは、止まらずに彼へ突進を仕掛け、決死の覚悟で突っ込む。
兜を着けたまま頭突きを叩き込む。しかも頭ではなく腹にだ。
倒れ込むようなその動きは受け止めるには少々重く、体をくの字にしたブロギーは倒れ、続いて転がるようにしてドリーも地面へ倒れる。
しかし寝転がっていたのはほんの数秒。
瞬時に起き上がった二人は同時に武器を振り、互いの得物を激しく激突させた。
「オオオォ！」
「ガババババ！　冴え渡るなドリーよ！　そう来なくては！」
「おう！　海賊弁当とやらを食って力が漲るわ！」
「なんの、おれも数年ぶりの酒で英気を養った！　今日こそは勝ちを頂く！」
「ぬかせ！　勝つのはこのおれだ！」
剣と斧が激突し、けたたましい音を発して、大気が揺れて衝撃波が駆ける。

重々しい音が見る者の心まで震わすよう。
素早く、的確に急所だけを狙う激闘は凄まじい迫力であった。
一撃を受ければ死に至る。そんな緊張感が戦う激闘。
繰り出される全てが必殺であり、些細な迷いで人生が終わるという時間が続いていた。
遠目に眺めていたウソップはぶるりと震える。
その衝撃に、一つ一つの轟音に、本能が刺激される気がした。海賊である前に男として生まれた意味を問われる気さえして、その姿にかつてない羨望を抱く。
これだ。これだったのだ。
膝を笑わせていたはずの彼の顔に笑みが浮かんで、畏怖と共に強い憧れがあった。
訳も分からず、ウソップは独りでに動き出す口から言葉を吐き出した。
「すげぇ……これだったんだよ、おれがなりたかった物は」
「ウソップ？　あんた、どうしたの？」
「全部の攻撃が急所狙いの一撃必殺も、兜で斧を受けて避けんのもどうかしてるけどよっ。でもそれ以上に、おれはあんな戦士になりたかったんだ。勇敢なる海の戦士に！」
両方の拳を握って、興奮した面持ちでそう語るウソップは子供のように純粋だった。
純粋に憧れ、自身もそうなりたいと考え、彼の目は輝きを取り戻していた。
同じ場所から眺めていてもナミには理解し難い考えだ。確かに二人の戦いには凄まじい迫力があるのは認める。しかし友と殺し合う感性には理解を示せない。
もっと平和的な解決策はないのか、と思うのはきっと自分だけではないはずだ。
ナミの目が座り込んだまま動かないキリを捉える。
キリは何も言わず、ただ静かに二人の戦いを見守るだけだった。
小さく嘆息する。

味方になる訳ではないようだと気付いて、彼女は呆れた顔でウソップへ問いかけた。
「つまり、巨人になりたいってこと？」
「違う！　お前何を聞いてたんだ！　何を見てたんだ！」
「何って、そのままを見たつもりだけど」
「これが真の戦いなんだ。おれが求めてた物だ。例えるなら、あの二人は自分の胸に戦士という旗を一本ずつ掲げてる。その旗は決して折られたくねぇもんなんだ。それこそ命より大事な」
「ふーん……」
納得していない顔のナミはつまらなそうに戦いを見るが、ウソップは対照的な表情。
心底嬉しそうにしながら腕を組む。
まるで自身も肩を並べるように胸を張って。
「だから百年間もぶっかり続けてきたんだ！　わかるか？　これは紛れもなく、誇り高き戦士たちの決闘なんだよ！　まさにこれなんだ。おれが目指していた物は」
そう呟いたウソップはナミの視線にも気付かず、巨人たちを見つめて弾む声で告げる。
「今になってようやくはっきりした形になった気がするよ。おれはいつかこういう誇り高い男になりてぇ。あの二人のような勇敢なる海の戦士に」
「勇敢なる海の戦士、ねぇ」
今一つピンと来ていない様子でナミがぼんやり呟く。近くに転がっていた丸太に腰掛け、自分の膝に頬杖をついて、退屈そうにしていた。
女性には賛同が得られない話なのだろうか。
やれやれと首を振ったウソップは呆れた顔になり、仕方なくキリへ振り返る。
「まったく、どうしてわからないんだ。かなり分かり易く教えてやったろ」
「べつに～。興味ないもん、私」

「キリ、お前ならわかるだろ、おれの言いたい事」
「ん？」
今までぼーっとしていたキリがウソップの声に気付き、彼の方を見る。
いつも通りに見えてどこかおかしい。そんな様子だったが二人とも指摘しようとはしなかった。
「いや、悪いけどあんまり同意できそうにないかな」
「キリも私と同じ意見だって」
「え～？　なんでだよ、男なら誰だって憧れるだろ。戦士の生き様だぞ」
「理解はできるよ。そういうのが好きな人が居るんだろうとも思ってる。だけどどうしても、もったいないなぁって」
「もったいない？」
「仲間同士で殺し合いなんてさ、そんなの、やっぱり羨ましいとは思えないよ」
そう言って苦笑する彼にハッとした。
キリには仲間を失った過去がある。その上で、ブロギーが言った言葉を覚えていた。我が友にして生涯最高の好敵手。心から認めた相手と剣を合わせる、その興奮と物悲しさ。どちらも理解できる気がして、だが彼にとっては虚しさの方が勝るらしい。
「ウソップは、ルフィと本気で殺し合うことになったらどうする？」
「いや、それは……考えたくもねぇけどさ」
「ボクにとってはそっちの方が大問題だ。誇りを捨ててでも守りたい物がある」
姿勢を崩して座り直して、また表情が緩くなった。
まざまざと変化を目にするが心配する心もあり、二人の表情がわずかに歪む。
「でもやっぱりもったいないよ。あんなに元気なのに殺し合うなんてさ」
「もったいないとか、そういう話じゃねぇんだよ。これは誇りの問題なんだ。きっとあの二人は誇りを捨てた瞬間に、自分が死ぬことよ

り辛い想いをするんだぞ」
「やめさせられないかな」
「そりゃ無理だろ。止めていいもんじゃねぇし、何より本人が納得しねぇ。男同士の決闘だぞ」
「エルバフの掟、か」
「百年も続いた死闘だぞ？　おれたちが何か言って止まるもんじゃねぇってことさ。そりゃ確かにおれだってあれほど偉大な二人を失うのは惜しいが、これは見守るしかないんだ」
「掟に従えばいいんだよね？」
少し弾むような声色で、様子が変わってキリが笑っていた。
彼がそうしている時は悪いことを考えている気がする。
何とも言いようのない不安に苛まれ、冷や汗を垂らしたウソップは恐る恐る尋ねてみた。
「なぁキリ、つかぬことを聞くけども、変なこととか考えてねぇよな？」
「変なことかはわからないけど、色々考えてるよ」
「ちなみに今は？」
「そうだね。巨人の怒らせ方とか、勝ち方とか」
「は？」
「決闘で物事全部決めてるなら、決闘で決めるしかないんじゃないかな」
軽々しい様子でひどいことを言っている気がする。
嫌な予感がしたウソップは焦り出し、味方だと思っていたナミまで顔色を変えた。
「お、おいおい、変なこと言い出さねぇよな？　そりゃわかる、お前の気持ちはわかる。あの二人が死ぬのを惜しいと思うのは至極当然のことだ。でもそれぞれ事情がある訳だからさ」
「そうよ、変に口出ししないのが一番。手紙渡すんでしょ？　あの二人にかどうかはわからないけど、とにかくこの島に住んでる人の話を聞いて、さっさと島から出ましょ」
「見てなくていいの？　盛り上がってきたよ」

キリが指し示して観戦を促した。
咄嗟にウソップはそちらに目を向け、恐る恐る二人の戦いを見るものの、心ここに在らずという顔をしていて。ナミもまた何かが始まる予感がして不安を募らせる。
その場においてキリだけが緊張感のない姿だった。
彼らがそうして話している間も二人の戦いは激しさを増す。
体を動かす内に、疲労が溜まって精彩を欠くどころか、さらにキレが増していたようだ。
強い踏み込みで身を沈め、溜めた力を一気に爆発させるようにドリーが前へ跳ぶ。鋭く突き出す剣がブロギーの腹を狙っていたのだ。しかしブロギーは正面から盾で受け止め、踏ん張った両足をわずかに滑らせるも、負けることなく押し留める。
動きの止まった一瞬ににやりと笑った。
お返しとばかり、横薙ぎに振るう斧でドリーの眉間を狙う。
生か死か、一瞬の判断で決まる。
危険なその刹那を好いているかのように、不意にドリーが笑う。
彼は迫る刃を目撃して、強く左腕を振り上げた。
「せぇいッ！」
「ぬうあァ！」
横から迫る斧を下から殴り、力ずくで無理やり跳ね上げさせた。これにより軌道が変わってわずかに兜を掠り、九死に一生を得る。そして次は反撃のチャンスだ。
即座に体勢を立て直したドリーは、振り上げる剣で姿勢の悪いブロギーの腕を狙った。
関節に目を付け、切断しようという狙いである。
気付いたブロギーは手の中で柄を動かし、刃の付け根を握った。
「もらうぞブロギー！」
「んんん、なんの！」
振るわれる剣に対して、すんでのところで斧が間に合い、刃で受ける。
まるで拳で受けるかのように、ギリギリのところで受け止めた。だ

が柄を短く持ったことで手に走る衝撃が凄まじく、耐え切れずに指が離れて宙を舞った。
攻撃を防いでも斧が飛んでしまい、再びの危機に見舞われたのである。
体勢が崩れて身の危険を感じる。
好機と見るドリーはさらに前へ進み、冷や汗を垂らしたブロギーは、敢えて前へ出た。
両者は互いに接近し、必殺の覚悟で腕を伸ばす。
ドリーの剣が顔を狙って振るわれた。わずかに首を動かしたブロギーは慌てず、冷静に見据えた上で動き、真似をするように兜でそれを受ける。金属同士が触れ合う耳障りな音の後、巧みな動作で兜の上に刀身を泳がせて受け流した。
ほんの一瞬、わずかとはいえ隙ができる。
今度はブロギーが左腕を思い切り振り抜き、ドリーの右手を殴りつけた。
「うおおっ――！」
盾を使って剣を持つ手に攻撃を与え、痛みによって表情が歪む。しかし剣は取り落とさない。勢いよく腕が振るわれたことで姿勢が悪くなり、たたらを踏む。
すかさずブロギーが硬く握った右拳を振り抜いた。
斧を手放そうとも戦意は折れず、むしろ負けん気が一層強くなった様子。
体勢の悪いドリーの頬を打ち抜き、彼の巨体を殴り飛ばした。
全体重を預けたパンチは半ば飛び込むようで、勢い余ってブロギーまで転んでしまった。
倒れ込んだ二人の体が多くの木々を薙ぎ倒していき、わずか数秒で地形が変わって、島の生態系において上位に位置する巨大な恐竜さえ尻尾を巻いて逃げ出していく。
その戦いは島の全土を更地に変えかねない、そうなってもおかしくない壮絶さだ。
ルフィとウソップがそれぞれ違った場所に居ながら拳を握り、強い

熱を感じながら見入る。
腕をついて起き上がり、ほぼ同時に相手へ飛び掛かった。
倒れた拍子にドリーも剣を手放してしまって無手となっている。
二人の戦いは肉弾戦へと移行していたようだ。
武器を手放した今となっても決闘は中断されず、決着を求めて拳を振りかぶる。
先にブロギーの拳がドリーの頬を捉えた。
全身を使い、上手く体重を乗せたパンチが左の頬を殴り飛ばし、わずかに姿勢を崩すものの、苦しげにしながら耐えた彼は強く地を踏みしめて反撃に出る。
今度はドリーの拳がブロギーの腹に突き刺さった。
ドスンと重みを感じる一撃で、低く呻いたブロギーは思わず息を詰まらせる。
しかしどちらもダメージは二の次で、一撃でも多く相手に叩き込むため、動きを止めなかった。
一進一退の攻防。その姿にはパワーがあり、スピードがあり、テクニックがある。
ただの殴り合いとは呼べぬほどの迫力と、美しさとは違う、比較的泥臭い印象だが、それでも見る者の目を釘付けにする魅力が溢れていた。
強く踏みしめた足を軸足にして、腰を捻りながら猛烈なパンチを繰り出す。
互いの肉体に突き刺さったそれは気が遠くなるほどの衝撃であり、両者に足を引かせた。
「うおっ、おおおおっ……！　す、すげぇ！」
「いけぇ～おっさん！　負けんなぁ！」
別の場所に居るウソップとルフィが同時に叫んだ。きつく拳を握る彼らは二人の戦いに興奮している面持ちで、今や片時も目を離せなくなるほど熱中していた。
見ているだけで熱くなるのだ。それぞれが自身と出会った人物を応援していた。

そうとは知らぬまま、不意にドリーがにやりと笑った。
殴られた箇所が痛んで、一瞬たりとも気を抜けない激闘で集中力が摩耗し、全身を鈍い疲労感が包み込んでいる。同程度の実力者と戦わなければこうはならないだろう。
同じくブロギーも心地良い疲労感に包まれ、静かに口の端を釣り上げた。
足を止め、拳を構えたまま見つめ合う二人は数秒のやり取りを始めたのだ。
「この戦いも長くなった……そろそろ決着をつけようではないか」
「おう。お互い、故郷が恋しくなってきた頃だろう」
「エルバフへ帰るのは、おれだ」
「いいや、勝利は譲ってもらう。故郷へ帰るのはおれの方だ！」
強く踏み出し、同時に駆け出した。
一瞬の内に距離を詰めて拳を突き出す。全く同じタイミングだが、結果は少し違っていて。
ドリーは辛くも迫る拳を避け、ブロギーは盾を使って拳を受け止める。
この差異がほんの少しの違いを生み出した様子である。
鍛えた上に慣れているとはいえ、正面から盾を殴る羽目となったドリーの顔に違和感が生じ、右手の拳に少なからずの痛みを感じる。
隙だと判断するには十分な時間だっただろう。
即座にブロギーが左腕を振るって盾を動かすと、振り払われるようにしてドリーの腕が動いて、体勢を崩したため明確な隙が生み出された。
その瞬間、両足で地面を蹴ったブロギーが頭を前にして飛び込んだ。
笑みを浮かべた状態でドリーに頭突きを喰らわせ、互いの兜が激突する。
ガツン、と大きな音だった。
ただでさえ巨大な体で彼の方が体積も大きい。とても受け止められる物ではなく、ドリーは激突の痛みを感じながら背から倒れ込み、

その上にブロギーが倒れ込んだ。
滑るように動いて木々を倒し、動きが止まると同時。
自身の真上に居るブロギーの肩を掴んだドリーは、倒れた状態から彼を投げ飛ばした。
巴投げの要領である。
足を使って重い体を押し上げて、勢いそのままに宙へ放り投げた。
巨人が自身の意志に反して宙を舞うのはまさに圧巻。ブロギーは驚きの声を発していた。
そして冷静さを取り戻す暇もなく背から落ち、密林が一部、景色を変える。
地震と間違えるほどの大地の揺れだった。
ブロギーが落ちた衝撃で観戦していた者が驚き、ルフィは手に汗握って笑うが、興奮していたはずのウソップを含め、ナミやビビは小さな悲鳴を発する。
人間の戦いなど比べ物にならない。それを見る目は素直な驚愕を示していた。
「ぬぅ……！」
「おおおおっ！」
背から落ちたブロギーが立ち上がる頃、先に駆け出したドリーが彼へ肉薄する。
拳を強く握り、これで決める心積もりだった。
反射的に目を光らせたブロギーが体を起こした時、両者は最後の一歩を強く踏みしめる。
攻撃のタイミングは全くの同時。
繰り出したパンチが顔へ突き刺さり、言いようのない痛みが全身を駆け巡る。
相手の顔に拳を触れさせたままで、わずかな静寂があった。
両者は沈黙し、立ったまま動かなくなった。
沈黙が途切れたのは数秒の後。
ぐらりと体を揺らしながら、二人の体はゆっくり倒れていく。
「７万３４６６戦――」

「７万３４６６引き分け、か……」
ドリーとブロギーは同時に倒れた。
疲労感から動く気が失せ、また決着がつかなかったことを悔しく思いつつも、不思議と晴れ晴れした想いもあり、気分は悪くない。
天を見上げて大の字に寝転んだ彼らはとても大きな声を響かせ、笑った。
「ゲギャギャギャギャ！　また決着つかずか！」
「ガババババ！　やはりしぶといな、友よ！　今日こそはと思っていたのに！」
今の今まで手加減無しで本気の殺し合いをしておきながら、決闘が終われば笑い合える。そんな関係がもう百年以上も続いていた。彼らにとってはこれが当たり前だ。
むくりと起き出し、その場に座る。
彼らが倒れたことで辺りは開けた場所に変わっていた。
二人は笑顔を向け合い、互いの健闘を称えながら、今は友として語り始める。
「そう言えば酒を飲んだと言っていたな。客人か？」
「そうだ。チビ人間に頼んで分けてもらってな。おれたちには小さいが、その一口は格別だぞ。まだ残っているからお前にも分けようと思うのだが」
「おお、それは有難い。実はこっちにも客人が居てな。海賊だそうだ。海賊弁当と恐竜の肉を交換したのだが、これが格別だった。まぁ量は少ねぇがな」
「ああ、同じ船の仲間だろう。こっちは船を見つけたんだ」
「そうだったか。いやしかし酒とは有り難い。もう何年口にしていないのだろうな」
「ガババババ、すぐに呑めるぞ。では一度こちらへ来てくれ」
「客人に感謝を。有難く譲り受けるとしよう」
慣れた様子で会話をして、立ち上がった二人は共に歩き出す。
いつ以来かは思い出せないが、かつてと同じく肩を並べ、ブロギーの家へと向かい始める。

仲が悪い訳ではない。かと言って一言に良いと言うほどの関係でもないのかもしれない。
彼らの関係はエルバフの者にとっては当然でも、異なる国で育った者には理解し難い物だろう。
それでも、命を賭けた戦いと、決闘が終われば肩を組むことすら躊躇わない姿が、ウソップという人間に与えた影響は計り知れないほど大きな物だったことは事実だ。

友の手紙

足音を響かせながら戻ってきたブロギーとドリーを、ウソップが大手を振って出迎えた。
呆れた様子だがナミはその場を離れてはおらず、一人で密林を歩くのは怖かったのか、退屈そうにしながらも近付いてくる彼らを見ていて。
その近くに佇むキリは決闘を終えた巨人たちをじっと眺めていた。
「おぉ～い師匠方～！　あれほどの戦いだったのにお二人ともご無事で！」
「どうしたウソップ、急に元気になったな。んん？　しかし師匠とは？」
「ゲギャギャギャ、弟子でも取ったのかブロギー。しかも相手が人間とはな」
「いやいや、おれが師匠と崇めるのはあんた方二人のことさ！」
「ん？」
大きく手を振って見上げてくるウソップに怪訝な顔をして、二人は静かにその場へ座る。
本当ならば酒を受け取ってすぐに自分の住処へ戻るつもりだったが、予想外の言葉を聞いて少し興味を持った。自分にも客が居るとはいえ聞いてからでも遅くないだろう。
座ったのだがやはり見上げることになる。
彼らを間近で見るウソップは拳を握りしめて、熱っぽい声で上機嫌に語った。
「おれが海賊になったのは勇敢なる海の戦士になるためだ。あんたたちみたいな奴のことさ！　さっきの戦いを見ておれは、いつかあんたらみたいになりたいと思った！」
「巨人にか？」
「ちげぇよ!?　なんでそうなる！　おれが言いてぇのは、どんな時でもエルバフの戦士のように誇り高く生きてぇってことだ！」
「そうか、誇りか。中々面白いことを言う人間だ」

出会ったばかりのドリーが嬉しそうに頬を緩める。
種族が違い、価値観も違うだろうに自分たちの生き様に理解を示す者が現れた。それもこの人が訪れる機会のない辺鄙な島で。これは嬉しい出会いだった。
腰を落ち着けた彼はウソップを見つめ、穏やかな声で答えた。
「おれたちはお前らよりも寿命が長い。その分余計にどう死ぬかを考える」
「ああ。所詮、財宝も人の命もいつかは失われる物だ。だがエルバフの戦士として誇りを失くすことなく死ぬことができたら、それはどんな財宝よりも価値がある名誉だ」
「誇りを捨てることなく生き、誇りと共に死ぬ」
「その誇りはまたエルバフの地に受け継がれる。永遠の宝なんだ」
嬉しげに語る二人を見つめ、表情を輝かせるウソップはその言葉を胸に刻み込んだ。
「誇りは宝か……そりゃいいなぁ。よし決めた！　おれはやっぱり、あんた方を師匠と呼ばせてもらうぜ！　いつか二人に恥じねぇ海の戦士になるためにも！」
「ガババババ、そうか」
「そりゃ面白そうだ。ゲギャギャギャギャ！」
上機嫌に笑う二人はすっかりウソップと意気投合したようだ。
種族は違えど、分かり合える。魚人族に出会った時とはまた違った光景であり、今回は得られる物もあった。心へ刻み込むほど大事な物だ。
決意を新たにするウソップは誰に言うでもなく心で誓う。
必ず、二人のように誇りを手放さない男になる。そう決めて強く拳を握りしめた。
そうして、彼らは上機嫌にしているが、近くには溜息をつく人物も居て。
やっと一段落したらしいと判断したナミが三人へ歩み寄っていった。
彼女の手には一通の手紙が握られている。海賊島で出会った老婆

から受け取り、今しがたキリから手渡された物だ。それを島の人間に渡すのが依頼された内容だった。
これさえ渡せばいつでも島を出られる。追われる心配はない。
おそらくその二人宛てだろうと考えていて、ナミは二人に問いかけた。
「ねえ、ちょっといいかしら？　聞きたいことがあるんだけど」
「なんだ娘。恐竜の肉は口に合ったか？」
「あぁいえ、私にはちょっと刺激が強過ぎるから口にしてないんだけど、そのことじゃなくて。この島に居る人間はあなたたちだけ？他に誰か居るの？」
「誰も居ない。おれたちだけだ」
「稀に外からやってくる人間は居るが、この島でログを溜めるには一年かかる。その間に大抵の奴は死んでしまうからな。誰も残っちゃいない」
「ああ、そう。そんな気はしてた。向こうに人骨がいっぱいあったし」
「そんなことを聞いてどうする。誰か探しているのか？」
首をかしげるブロギーを見つめ返し、右手にある手紙を見せながら答える。
「多分あなたたちにだと思うんだけど、手紙を預かってきたの」
「手紙？」
「海賊島で会ったお婆さんだって。私は本人を見てないわ。心当たりある？」
「ふむ、おそらく彼女だろう。我らの古い友だ」
「懐かしいな。おれたちほど寿命は長くないというのに、まだ生きていたのか。それだけでも良い知らせだな」
「私たちはこの手紙を渡すために来たの。でも、この大きさじゃ読みにくそうだし……」
手紙は、当然人間の手に納まる程度の物で、巨人の手では非常に読み辛い。指先で摘まむことさえ困難な大きさだ。とても自分で読むなど不可能だろう。

ドリーとブロギーはナミに手紙を読むよう頼んだ。
「すまないが娘、読んでもらえるか？」
「おれたちの手では苦労しそうだ」
「それが一番良さそうね。タダ働きは嫌だけどしょうがないか」
「この期に及んでまだそんなこと言うのか……」
呆れたウソップの呟きを無視してナミが手紙を開く。
中に仕舞われていた紙を取り出し、そこに書かれた文章を読み始めた。
手紙の内容は二人に対する追憶から始まっていた。
彼らは過去、友であった。
互いに今でも関係は変わっていないと認識しているとはいえ、最後に会ったのは数十年前。島の過酷な環境が災いして、こうして手紙を渡すことさえ簡単ではなかった。そのせいで長らく連絡が取れずにいたことを謝罪し、しかし一方で彼らを非難する声もある。
バカな喧嘩はやめて、二人で海賊でもなんでもやればいい。
そう語る一文があった。
手紙の主は彼らの決闘を快く思っていないようだ。
仲間同士で殺し合いをする物じゃない。かつて実際に会った時にも言われたことを思い出し、懐かしいやら、複雑な気分やらで二人は腕組みをしてううむと唸る。
理解を得られるとも思っていないが、特に彼女はそう言うことが多かった。
二人に死んで欲しくない、という想いが強かったのだ。
嬉しさと同時に寂しさも感じて、古い友人の言葉に様々な想いを抱く。
耳を傾ける二人は静かに全てを受け入れた。
やがてナミの朗読が終わる。
手紙を下ろして視線を上げた時にそれは伝わったはずだ。
しばし二人は腕を組んで考え込んでいた。
「ここまでよ。なんだか、あんたたちの誇りは理解されてないみたいね」

「う～む、まぁそれも仕方ないだろう。どれだけ話しても彼女の賛同は得られなかった。生まれも育ちも違えばこういうこともあり得る」
「我らは戦士の国で生まれた。それが最も大きな違いだ」
「無理もないね。ボクも理解はできそうにないや」
今まで口を閉ざしていたキリが唐突に言い出した。
気付いた面々が振り返る。
笑みを湛える彼は二人の巨人を見つめて、しかしどこか冷たい印象も感じる声色。明確な敵意ではない。だが不穏な空気は感じられた。
ナミとウソップは様子がおかしいことに気付く。
一方、出会って間がないドリーとブロギーは彼の言葉を素直に受け止めていた。
「せっかく拾える命を捨てて百年も殺し合いを続けてるんだ。ちょっと理解はできないね」
「んん、そう言われるのも仕方ない。だがこれが我らの生き方だ」
「ボクはお婆さんに賛成だ。この戦いは今すぐやめた方がいい」
「それはできん。我らはエルバフの審判に身を委ねなければならない」
「要するに死にたがりの意地の張り合いでしょ？　意味のない戦いなんてくだらない」
素っ気ない様子でつまらなそうにキリが呟く。その一言がきっかけだった。
ドリーとブロギーの表情が変わる。
その一言は決して触れてはならない、彼らの怒りに触れたようだ。
「おれたちを侮辱するつもりか？」
「言葉には気をつけろ。エルバフを軽視するつもりなら容赦はできんぞ」
「別に、思ったことを言ったまでさ。それを誇りと呼ぶならきれいだけどね。長寿だなんだと色々理由つけては仲間殺しを正当化してるだけじゃないかな」
「ちょっとキリ、あんたどうしたの急に。なんで喧嘩売るようなこ

と」
「いや、これは、今までの経験上嫌な予感が……」
普段とは異なる口調のキリにナミが違和感を持った時、目敏くウソップが気付いた。
明らかに様子が違っている以上は何か考えているのは明白である。
彼はルフィに比べて悪事を好む性格だ。
そう言えば島に到着した時、妙に口数が少なく、皆から離れようとしていた傾向があったように思う。さらにはメリー号の近くにブロギーが現れた際、船に誰も残さずナミとウソップについて来るよう言ったのも彼だ。
そして極めつけは巨人たちを挑発するかのような言葉。
この場にある雰囲気だけでなく、妙な何かを感じて二人は冷や汗を流した。
ナミとウソップが押し黙ってしまったことで止める者が居なくなる。
侮辱されたと感じている二人は怒りを滲ませるのみ。
エルバフの誇りにかけて、今しがた向けられた言葉を聞き逃す訳にはいかなかった。
「今すぐ取り消せ。おれたち自身のことならば聞き流せるが、我らが故郷の侮辱は許さん」
「聞き流せないってことは自覚してるんじゃない？　その風習は普通じゃないよ」
「貴様……」
「寿命を全うしようとせずに同族殺しを推奨するなんて狂ってる。ボクは手紙のお婆さんに同意するよ。決着をつける前にこの決闘はやめるべきだ」
目を血走らせ、強く歯噛みし、ドリーとブロギーは一目でわかるほど怒気を発していた。
しかしキリは怖気づくこともなく彼らの目を見つめ返す。
「それはできない。おれたちは掟に逆らうつもりはない」
「この島を出る時は決闘の決着がつき、生き残ったどちらかだけだ」

「ボクは反対する。決闘はやめるべきだ」
「そうはいかん。勝負が決するまでおれたちの意見は変わらないぞ。絶対にだ」
「意見が割れたね」
不意にキリが訝しんでいたウソップに目を向ける。視線が交わり、笑みが柔らかくなる。
「こういう時は、エルバフの掟ならどうやって決めるんだっけ」
「は？　そりゃ神の加護を受けるために決闘を――」
言いかける途中でまさかと気付いた。
嫌な予感が増した気がして、咄嗟に止めようとするのだが、すでにキリは楽しげになって二人を見上げており、そんな猶予など与えてくれそうにない。
「ちょ、ちょっと待てキリ君。この流れなんか嫌な感じがするんだけど……」
「それならこうしよう。エルバフの掟に従って、エルバフの神の審判を受ける」
「いやだからちょっと待って――！」
「ウチの一味から君たち二人、巨兵海賊団に決闘を申し込むよ」
「ほらやっぱり～!?」
ドリーとブロギーはきょとんとしている。態度も変わって唐突な話の転換についていけず、まだ上手く理解できていないらしい。呆然とした顔で身動きを止めていた。
ナミとウソップはそうではない。
二人は慌てた歩調でキリの下へ集い、感情のままに猛抗議を始める。
なぜそんな話になるのだ、と荒々しく尋ねずにはいられなかった。
「なんか話し出した瞬間からおかしいなと思ってたけどどうしてそんな発想になった!?　お前さっきの決闘見てただろ！　おれたちが敵う相手じゃねぇって！」
「そうよ、あんなに大きいのよ!?　普通の感覚なら戦おうなんて思うはずないでしょ、バカ！」

「まぁまぁそう言わず」
「あっさり流すなァ！」
「今すぐ謝りなさい！　やらないわよ、決闘なんて！」
「もうちょっと待っててよ。まだ交渉してる段階なのに、そう頭ごなしに否定しなくてもさ」
気楽な顔で言う彼は何の気負いもなく立っている。
その能天気さには腹を立ててしまうほど。二人は尚も必死に抗議する。
「ちゃんと説明しなさい。どういう意味があって決闘なんて言い出すのよ」
「今から言うよ。でも本人に言いたいからできればちょっと下がってくれないかな」
「その前にまずおれたちだろ！　って言うか悪いことは言わないからやめよう、な？　何考えてんのか知らねぇけど巨人と決闘なんてあり得ねぇ話だ」
「じゃ、今から説明してくるから」
「よぉしわかった、説明する前にまず落ち着いてくれ！」
制止する二人を掻い潜ったキリは再び巨人たちの前に立った。
奇妙なやり取りに彼らは怒りも忘れ、キリを見下ろす。
先程よりも些か冷静に向かい合うことができて、話し合いは少し形を変えて続けられた。
「トラブルはエルバフの神の下、決闘で解決する。君たちが言ったことでしょ」
「ああ、確かに言ったが」
「ボクらはエルバフの戦士じゃないけど、エルバフの戦士と揉めたんなら掟に従って話し合いの場を設けた方がいい。そうは思わないかな」
「むぅ……」
「それにこっちの要求は君らの決闘をやめさせるか否かだ。どっちの決闘が先かなら君たちの戦いよりもこっちの方が優先されるはず。それとも、掟に背いてボクらを無視するつもり？」

したり顔で語るキリに、一理あるか、と考え始める。
申し込まれた決闘から逃げてなぜエルバフの戦士と名乗れようか。
戦士としての本能が彼らの闘争心を呼び覚まし、互いに顔を見合わせ、同じことを考えているのを確認する。どうやら怒りは別として向き合う気になっていたようだ。
それからすぐにウソップが飛んできて、手でキリの口を押える。
彼の口を動かさせていたら何を言い出すかわからない。最も効果的なのは塞いでしまうことだ。まず先にキリを黙らせ、その後でドリーとブロギーを見上げて焦る口調で言う。
「すいません師匠たち！　こいつちょっとおかしな子なんです、悪い子じゃないんですけど！　これもなんかテンション上がり過ぎちゃったせいで何言ってんのか本人わかってなくて！」
「ふがふが――」
「もうほんと、色々すいませんでしたぁ！　できれば今までの失言は忘れて頂きたい！」
「いや、もう少し話させてくれ。興味を持った」
「へ？」
「この百年、奇襲を仕掛ける輩は居ても、正面からおれたちに決闘を挑んだ者は居ない」
「そいつの真意を聞いてみたい」
二人は冷静に考え、キリの発言に興味を持っていた。
今になって考えれば先の言葉は挑発。怒りを買うために敢えて口にしていたのだろう。
そうまでしてなぜ戦いを望むのか。
聞いてみたい気はして、ウソップが手を離したキリの顔を見据えるとドリーが静かに尋ねる。
「お前の一味全員で、おれたち二人に挑もうと言うのか」
「うん」
「理由は。何を求めてそうする」
「悪いけど命の取り合いに興味はない。それより欲しい物があるから、勝った方が負けた方の言うことを聞くのが条件だ。それでいいな

らボクらの要求を話すよ」
「聞かせてくれ」
「まず一つに決闘をやめることが大前提。もう一つ、二人にもう一度海賊をやってもらうこと」
「ふむ、海賊か」
ブロギーが顎髭を撫でて考えた。
それを見てキリがさらに笑みを深める。
「もう一度二人から巨兵海賊団を旗揚げして、今度は、麦わらのマークも一緒に掲げてもらう。要するにボクらの傘下になってもらうってことだ」
「ほう」
「なるほど……」
「そういう意味でも決闘ってのはちょうどいいでしょ？」
悩みもせずにあっさり告げるキリに、ドリーとブロギーは感心し、ナミとウソップは肝を冷やして止めようとする素振りさえできなくなる。
彼は、普段と一切変わらない表情のままだった。
予想だにしない言葉を聞いていた。
ドリーとブロギーは自身が想像するよりずっと穏やかに、それでいて面白いと考えている。
ただ、同じ船に乗る仲間である二人は彼ら以上の衝撃を受けていた。
アーロンの時とは状況が違う。彼らの場合、野放しにすることを危険視した結果、グランドラインへ連れてくるため傘下にすることを決めたのだが、その二人は違う。
百年続く決闘を邪魔してまで仲間にしようと言うのだ。
相談もなかったことに驚き、ただ二人を死なせまいとするだけでないと知って、眩暈がした。
ルフィはこのことを知っているのか。
真っ先にそう思うのだが確認する暇もなく話は進み、ドリーとブロギーが口を開いていた。

一転して上機嫌になった二人は好戦的な笑みを浮かべ、どこか乗り気に見える様子で尚もその話を続けようとしている。つまりそれは、受ける気があるとも取れた。
「面白いことを言う奴だ。おれたちと戦い、傘下にすると？」
「だが唐突ではあるな。なぜおれたちの力を必要としている」
「ボクらの船長は、いずれ海賊の王になる男だ。そのためには平凡じゃいられない」
「なるほど。理解はできる」
「それにエルバフの掟に従って申し込まれたのなら、これで逃げては生涯の恥だ」
ブロギーの呟きを聞いたウソップがぎょっとして、不安に苛まれたナミが小さな悲鳴を発した。
二人は突如立ち上がって背筋を伸ばす。
十メートルを超える巨体。下を覗き込んでそこに立つ人間を見れば、まるで屋根ができたかのように辺りを覆う影が生まれて、威圧感はさっきの比ではない。
三者三様、様々な表情で彼らの顔を見つめ返した。
「これがおれたちの生き方だ。挑まれれば逃げることを知らない」
「命までは取るつもりはない。だが決闘を挑まれたのなら、手加減することはできないぞ」
「そりゃこっちのセリフ。まさか、自分たちが勝てると思ってるの？」
「なんだ、その口ぶりでは自信ありということか」
「むしろ申し訳なくなるほどね」
「ガババババ！　そりゃ面白い！」
「よし、それでは我らも覚悟を決めるとしよう」
ドリーが口にしたことで、ブロギーもまた小さく頷いて同意した。
「エルバフの神の名において、お前たちの挑戦を受けよう。我ら二人を打ち負かした時、決闘の盟約に従い、お前たちの傘下となることをここに誓う」
「だがおれたちが勝った時は、そうだな……この島でログを溜める

のに必要な期間、一年。その間はこの島でおれたちと共に過ごしてもらおうか」
「い、一年!?」
「この島で一年も過ごすの!?」
「何分二人しか居なくて寂しいところだ。同居人ができるのならこれほど嬉しいことはないぞ」
楽しそうにブロギーが言うため、ウソップとナミは驚愕して思わず声を出した。
一方でキリは迷わず頷き、即座に返答する。
「わかった。条件はそれでいい」
「ちょっとキリ！」
「お前、せめてもうちょっと考えてから――！」
「ルフィはボクが説得する。大丈夫、勝てば悩む必要なんてないんだから」
「負けた時はどうすんだよ!?」
「今から勝負するっていうのに負けること考える奴なんて居る？」
「やべぇ～!? こいつ実は何も考えてねぇぞぉ～!!」
騒ぐウソップにおざなりな対応だけを渡し、キリは再びドリーとブロギーを見上げた。
「それじゃ話は纏まった。勝敗に関してだけど、相手を殺すのはなし。負けを認めさせるか、気絶させるか、そのどちらかで決めよう。開始の合図は真ん中山の噴火。一度島の中央に集まって、二人みたいにそれから改めて始めることにしようか」
「承知した。こちらもそれで異論はない」
「それでは次の噴火の時に」
「うん。こっちも準備を始めるよ」
承諾した二人から目を離し、キリが二人へ振り返った。
にこりと笑って敵意のない笑顔。
柔らかくやさしいはずのそれが今は少し怖かった。
「ウソップ、狼煙を。みんなを集めよう。作戦会議始めるよ」
「え？　お、おう……」

言われたウソップがパチンコで特殊な弾を空へ打ち上げる。黒煙とも赤い煙とも見える狼煙が天へ向かい、まるで蛇のようにその存在感を示した。

合図を見れば皆が集まってくるだろう。

その時を想い、キリは一足先に頭を働かせ始めていた。

Ｗａｎｄｅｒｌｕｓｔ

「というわけで、巨人二人から成る巨兵海賊団と決闘することになった」

ジャングルの中に集結したクルーの前に立ち、キリは平然とそう口にする。

説明は簡潔に伝えられていた。

ナミが朗読した手紙の内容、巨人たちとの会話、彼らとの勝負の条件に、勝てば傘下にすることまで。包み隠さずあらまし全てを伝えられた。

感想は様々。人によって表情も違っている。

しかし総じて、心から喜ぶ様子はなく、戸惑いの方が大きいようだ。

ルフィもまた例に漏れず、難しい顔をして静かに話を聞いていた。

彼の提案を喜んでいる様子はない。その姿を見たウソップやナミは黙り込んだまま居辛そうにしており、毅然とした態度のキリの様子を窺っていた。

どことなく重苦しい空気が流れているように感じる。

考え過ぎかもしれないとはいえ、ルフィとキリを見てそう思う日が来るとは思わなかった。

困惑する面々を見渡してキリが語る。

皆を説得すると言っていた。それがこの場なのだ。

不穏な空気を感じながら、彼はいつになく真剣な顔で口を動かした。

「相手は巨人族、しかも百年間本気の殺し合いを続けてきたエルバフの戦士だ。はっきり言ってそこらの巨人より強いだろうけど、だからこそ戦力になる。戦う価値はあるよ」

「そうは言うが、勝てんのか？」

「幸い、条件はこっちに有利なよう持ち込めた。全員で挑める以上は勝率も高いはず」

「あのでかさでもか」

「体のサイズは問題じゃない。それにでかいからこそ的になり易い

よ」
問いかけてくるサンジに答え、平常心は崩れない。
キリの姿に違和感を覚えるルフィは腕組みをして首をかしげた。
「作戦を立てて順序良く進めれば勝てない相手じゃない。だけど一人で立ち向かっても無駄だ。全員の力を合わせる必要がある――」
「なぁキリ、ほんとに戦わなきゃいけねぇのか？　おっさんたちの決闘邪魔してまでよ」
不服そうに疑問を口にするルフィに、ナミとウソップがわずかにひやりとした。
止め切れなかった責任は彼女らにもある。傍に居ながら止められず、最後まで言わせてしまったのはやはり間違いだったかもしれないと後悔していたところだ。
仲の良い二人が醸し出す空気に、不思議と表情も強張る。
二人が視線を合わせる。
その姿にいつもの悠長な態度など欠片もない。
独特な緊張感が漂い、ふざけることもなく真剣に向かい合った。
「おっさんたちは誇りをかけて戦ってるんだ。できればおれは邪魔したくねぇ」
「気持ちはわかるけどね。意見が割れた以上は、解決するにはこうするしかない。これもエルバフの掟に従った結果だよ。二人も納得済みだ」
「ん～……」
「それとも、一度やると決めた決闘から逃げてもいい？」
「それもだめだ。けどよ」
「勝手に進めたのは悪かったよ。だけどもう引き返せない」
珍しくルフィが腑に落ちない顔をしている。
不満。言いにくそうにしている気もするが明確に表れている。
そうと気付いているはずだがキリは手を引こうとせず、そのまま強行するつもりのようだ。そのせいで妙な空気を味わう面々は複雑そうにしていた。
「これは必要な戦いなんだ。傘下が云々だけじゃなくて、今後ボク

らがこの海でどれだけ成り上がれるか、この場で試されると言っても過言じゃない」
「どういうことだ？」
わからないという顔のルフィにキリが答えた。
「みんなに改めて確認しておく。現状、ボクらの目標はアラバスタに向かい、バロックワークスを倒すことにある。だけど、バロックワークスは社員数約二千人。しかも諜報や暗殺を得意とするプロを多く抱える犯罪組織で、王国乗っ取りまですでに王手をかけている。立ち向かうつもりなら今まで以上に全員の力を合わせなきゃならない」
キリはルフィだけでなく全員の顔を見回して伝える。
いつになく真剣な顔である。
特にバロックワークスについて語っているため聞き逃せない力があった。
平常心ではいられないだろうビビやイガラムを気遣いつつ、ナミは恐る恐る口を開く。
「だけど決闘なんてしなくても……ここで戦う必要なんてあるの？」
「無人島同然の島で百年決闘を続けてた巨人に勝てないようじゃ、クロコダイルには勝てないってことさ。巨人とはいえ相手は二人。国盗りのために動く二千人を相手にするのとは訳が違う」
そう言われて表情が変わっていく。仲間たちだけでなくビビも同じだ。
決して聞き逃して良い言葉ではなかった。
「言わばこれはボクらの今後を占う一戦だと考えてもいい。ここで勝てないならアラバスタを救うどころか、海賊王なんて夢のまた夢だよ」
「う～ん、そうか……」
「ボスは強い。今のままアラバスタに進むことはできないと判断した。ここに来ることになったのは偶然だけど、ボクは幸運だったと思ってる」

ルフィは真剣な顔で考え込んでいる。元々の性質からして考え事など苦手だろうに、今は得意か否かを無視しても考えずにはいられなかったらしい。
しかし冷静に事態を見れば、そうまでして考えるのはやはり違和感があって。
本人たちよりも周囲で見ている方が緊張して、しばしの沈黙が仲間たちに不安を与える。
「まぁ、どうしても気が進まないなら、やめたって構わないけど」
最後にそう付け足してキリは口を閉ざした。
妙に歯切れの悪い一言だった気がする。
口を開いたゾロが問うと、彼はそちらに目を向けた。
「もしやめた場合、お前はどうするつもりなんだ?」
その言葉に答えを出すことなく、キリはただ笑みを深めただけだった。
嫌な予感がする。答えなかったことが答えで、それは一種の脅迫にも近い気がした。
ルフィは首を捻ってううむと唸る。納得できる部分もあるがすぐに呑み込める訳でもなくて、つまりは異論があるのだろう。すぐに頷かないのは理由があった。
目を閉じて考えること数秒。
再び目を開いた時、ルフィは納得できていない顔で尋ねた。
「でもよぉ、海賊は自由なんだ。おれは別に傘下なんて欲しくねぇ」
「そう言うとは思ってたけど、こうでもしないとあの二人のどっちかが死ぬ。死なせるには惜しい人間だ。止めるには掟を使うしかなかった」
「そうなのか。でもなぁ……」
考え込むルフィはそれでもすっきりしない顔だった。
小さく息を吐き、肩をすくめて、キリはやさしい声で彼に問う。
「こう考えて欲しいんだ。彼らは良い人だからボクらの仲間になって欲しい。でもあの巨体じゃメリー号に乗り込むのは不可能。だから違う船に乗って同じ旗を掲げる」

「どういうことだ？」
「彼らは部下になる訳じゃない。違う船に乗る仲間だ」
「うん、そうか。じゃあわかった」
頷いた時にやっと納得した顔になった。
要は考え方の問題らしい。彼らを部下として扱う気が無いのなら理解もできる。
海賊は自由なのだと語る彼は、自由に生きる彼らを愛しこそすれ、その誇りを束縛する気にはなれなかったようだ。
悩んでいた時間は決して短くなかったことに違和感も残るが、指摘できる空気ではない。
ともかくルフィの理解が得られて状況は変わる。
場はいまだに重苦しい空気があった。しかし見渡すキリは気にした様子もなく語る。
やっぱり今日の彼は何かがいつもと違っていた。
「船長の同意は得られた。他に異論のある者は？」
皆の顔を見回して意志を問い、口を開く者が居ないことを確認する。
ルフィが納得したのならこれ以上は蛇足だろう。
黙り込む一同が真剣にキリを見つめ、先を促すかのような態度に変わっていた。
一味の心臓は船長であり、脳は副船長。
時には異論も口にするとはいえ、彼らが決めたのならば従うのが今や当然となった形だ。
意識が変わったことを理解してキリが頷く。
次はようやく本題に入らねばならない。これから彼が語るのは巨人との決闘に勝つための方法。時間は有限であり、準備を考えるのならば迅速な行動が必要だった。
皆の視線が集まっているのを確認して話し出す。
キリは、負けるなどとは微塵も考えていない顔だった。
勝って当然。そう考えているかのような自信さえ感じる。
それで少しは平常心も取り戻せたか、普段臆病なナミやウソップも

話に集中できた。
「これは全員で挑む戦いだ。誰一人欠ける事無く作戦に参加して勝つ。さっきも言ったように、これができないようじゃバロックワークスを止めるのは無理だ」
「アラバスタを守るため……そういう意味も含まれてるのね」
「ボクらも誇りにかけて戦う。あのマークは飾りじゃないから」
真剣な声が、全員の心持を変える。
「麦わらの一味と巨兵海賊団の決闘だ。ボクらの旗にかけて、負けは許されない」
キリの言葉で皆の意志が一つになっていたように思う。
一味として力を合わせる時。全員にとって大事な一瞬だった。
それからしばらく作戦会議が行われ、彼らは準備に動き出した。
全ては決闘に勝つため。
役目を理解した彼らはジャングルの中を駆け回り、ありとあらゆる方法で準備をして、真ん中山が噴火するまでの間に目まぐるしく動き続けた。
戦いの準備を急ぎ、決戦に備えて食事を済ませ、数時間の猶予はあった。
いつ来るとも知れない噴火は彼らに時間を与えるが、その一方で長時間の緊張を強いる。
気付けばいつの間にか、リトルガーデンは夕暮れに照らされていた。

＊

夕日に照らされる島の中で、その二人は胡坐を掻いて座っていた。
〝青鬼〟のドリーと〝赤鬼〟のブロギーである。
かつては海賊として名を馳せた戦士が二人、戦いをやめて肩を並べ、腕を組んで同じポーズ、同じ方向を見つめていた。
過去の情景が脳裏に浮かぶ。
昔は二人の船長としてこうすることも多かったが、いつの間にか遠

い記憶になっていた。
友の手紙をきっかけとして様々な記憶が蘇っていた。
特に思い出すのは海賊として航海していた頃。手紙をくれた友と出会ったのもその頃だったのではないかと記憶している。決闘を始めてからも何度か会いに来てくれたものだ。
その度にやめろと言われていたのも今となっては良き思い出。
年老いた彼女はおそらく自分の足で来れないだろうが、ひょっとしたら彼らは、彼女の意志を継いでこの島へ来たのかもしれないと考えると、中々面白くもある。
考える時間なら山ほどあった。
二人の顔にはいつしか笑みが浮かび、ぽつりぽつりと会話をする。
郷愁に駆られるのとは違う、昔を懐かしんで、喜びを噛みしめる表情だ。
「我らがこの島へ来て、百年は経ったか」
「ああ、そうだ」
「百年間、ずっと決闘を続けてきた」
「それ以外をしなかったと言ってもいい」
「どうだ、ブロギーよ。百年ぶりにおれと力を合わせるというのは」
「妙な感覚だ。ずいぶん懐かしい。だが……悪くない」
語り合う二人はかつての自分たちを思い出していた。
昔は気兼ねなくそうできていたのに、別々の場所に住み、決闘を除けば顔を合わせることもない生活に変わって、長過ぎるほど時が経った。
再び隣に並んでいるこの状況がひどく不思議で仕方ない。
ただ、一種の喜びも感じていた。
命を賭ける決闘を始めた以上、二度と肩を並べて戦うことはないと思っていたのに。
彼らには感謝しなければならない。こうしていられるのは今日が最後だ。
「引き分けばかり続いていたというのに、まさかこんなことになるとはな」

「妙なこともあるものだ。よもや、決闘をやめさせるための決闘をすることになるとは」
「しかし良い方向に考えれば、これもエルバフの神の思し召しなのかもしれん」
「んん？　どういう意味だ？」
「ブロギーよ、おれは、今までお前との決闘において手を抜いたことはなかったが」
海へ沈んでいこうとする太陽を眺め、ドリーは静かな声で言う。
「お前を憎く思ったことは一度もない」
「おう。それはこちらも同じよ」
ブロギーが答えた後で、沈黙が降りる。
重苦しくはない。どこか懐かしくも清々しい、独特の感触。
二人は麦わらの一味より譲り受けた酒樽を指につまみ、小さなそれを持ち上げた。
「挑発のためだっただろうが、同族殺しか……耳に痛い言葉だ」
「理解されないこともある。人間と巨人では考え方の違いもあるだろうさ」
「だが結局おれたちは、これ以外の生き方を知らない」
真ん中山が噴火する。
二人の顔に笑みが浮かんで、持ち上げた酒樽を眼前に掲げた。
「合図だ」
「ああ、行かねばならない」
「これが最後の宴になるだろう。巨兵海賊団の最期となるか」
「ではせっかくの機会だ。目一杯楽しむとしよう」
彼らもまた、負けるつもりなど欠片も持っていない。この戦いに勝ち、自分たちの決闘を行い、そして決着をつけて一人の勝者を生む。その一人だけが故郷へ帰ることができるのだ。
故にこの戦いは大事の前の小事。
宴でもあり、祭りでもある。
「エルバフの誇りに」
「乾杯」

彼らにしてみれば小さな酒樽を強かにぶつけ、ぐいっと中身を煽る。
飲み干すまで一秒と満たなかった。
二人は地面に酒樽を置き、叩きつけるような仕草だったせいで樽が割れ、立ち上がる。
武器を取り、目指すべき場所を見据えた。
不思議な感覚を抱きながら、ドリーとブロギーは覚悟を決めた顔で共に歩き出した。

Ｇｉａｎｔ Ｗａｒｒｉｏｒ Ｐｉｒａｔｅｓ Ｖｓ Ｓｔｒａｗ Ｈａｔ Ｐｉｒａｔｅｓ

真ん中山からもうもうと煙が立っている。
一度目の噴火があって少し。次の噴火が近いことを示しているのか、その様相は時間が経とうが少しも変化しようとしなかった。
その山が見える島の中央に二つの海賊団が集まっていた。
距離を置いて対峙し、戦いの直前、緊張感に包まれて静寂を感じている。
ドリーとブロギーは武器を携え、力を抜いてリラックスした状態だ。
対するは麦わらの一味。ルフィが先頭に立ち、数歩下がってキリが並んで、後方に仲間たちが立っている。皆が真剣な顔つきで程度は違えど緊張していた。
二人に立ち向かうのはカルーも含めて十人。
人数だけを考えればどちらが有利かは明白とはいえ、体長の違いが帳消しにしていた。
勝敗がどう転ぶのかは本人たちですらわかっていない。しかしどちらも負けるつもりはなく、自陣の勝ちを信じて疑わない様子さえある。
向かい合ってしばらく。
開戦の時を見計らっていた両者は静かに口を開き出した。
「エルバフの神の名の下に行われる決闘だ。覚悟はできているか」
「挑んだからには逃げ出すことは許されないぞ」
「ああ。覚悟ならもうできてる」
指を鳴らすルフィが答えた。
確かに表情には覚悟が窺えて、少し前に顔を合わせた時とは別人のよう。
納得済みの様子で二人の目を見つめ返していた。
ドリーとブロギーもそれを見て理解し、相手にとって不足はないと

判断する。
「よかろう。では命懸けでかかって来い」
「手加減はなしだ」
「よぉし、やるからには負けねぇぞ。おっさんたちも覚悟はいいな？」
「ガバババ、活きが良いな」
「言った通りだろう。やはり怯えるような小僧ではない」
やるべきことはわかっている。会話はそう多くなかった。
二人が先に身構え、辺りは一瞬にして重苦しい空気に包み込まれていく。
ぐっと膝を曲げて力を溜めた途端、真ん中山が再び噴火し、耳をつんざく爆音を生み出した。
まるで開戦の合図を出すかのようだ。
普段はそこまで連続することも珍しいが、彼らの戦いを見守るかのように噴火して、その瞬間に二人が動き出し、溜めた力を爆発させるが如く飛び出した。
高く跳んで武器を振り上げ、力一杯振り下ろそうとした。
眼下には当然麦わらの一味の姿。巨大な剣と斧が空から降ってくる。
見上げる彼らは背筋を凍らせ、だが一部の者は怯えず、しっかりとその様を眺めていた。
「行くぞォ!!」
「全員散開！　回避だ！」
腕を振ってキリが叫んだことにより、全員が反射的に動き出した。
自分の数倍は大きい刃が降ってくる光景を目に、互いに助け合いながらその場を離脱する。彼らの武器はあまりにも大きく、どこに居ようと当たりかねない危険性を持つものの、一方であまりの大きさから小さな人間を狙うことは苦手な様子だった。
幸か不幸か、体のサイズが違い過ぎることが彼らを助ける要因となる。
麦わらの一味を捉え切れず、強かに地面を打った武器は思いもよら

ぬ爆風を生み出した。地面が全てめくれ上がるかのような衝撃が風となって辺りを駆ける。
直撃はせずとも余波を浴びてしまう。
飛ばされた彼らは木の葉のように宙を舞い、着地もままならぬ状態で地面を転がった。
「うわぁあああっ!?」
「ガババババ！　軽いなお前たち！」
「戦いの腕はともかく、体のでかさは覆しようがないぞ。さぁどうする」
奇跡的にも今の一撃を受けた者は居ない。或いは手加減した可能性がある。
それでも吹き荒れた暴風によって皆が散り散りになり、否が応でも状況は変わった。
地面を打った武器を持ち上げた二人は、如何にして決着をつけようかと辺りを見回す。
その中で唯一、即座に動き出す影に気付いた。
特に距離が近かったドリーは反射的にそちらを向く。
吹き飛ばされたのを利用して森へ入ったルフィが両腕を伸ばし、二本の木を掴んでいる。それだけならば受け身を取るためとも考えるが、伸びきった腕は彼を発射するかの如く力を溜めており、ルフィの目は一切の恐れを感じさせずにドリーを捉えていた。
その目を見ただけで伝わる。
彼が逃げ出すはずがないと理解して、ドリーは即座に迎撃態勢に入った。
「ゴムゴムのロケットォ！」
縮む腕を利用し、自らを撃ち出す。
勢いよく宙へ飛び出したルフィはドリーの腹を狙って頭突きの姿勢となる。
ドリーは余裕を持って身構えた。
「ふんっ！」
「うわぁっ!?」

向かってくる彼はドリーにとっては弾丸にも等しい。体の大きさといい、速度といい、真っ直ぐ飛ぶ様からしてもそう見えて仕方なかった。
恐るべきは、戦士としての胆力。
銃で撃たれたかのようなその状況下で、彼は一切心を乱さず、冷静に観察する。
そして高速で動いた左腕がルフィを捉え、装備した盾で強烈に殴り飛ばしたのだ。
ルフィの体は真っ直ぐ地面へ落ち、凄まじい音を立てて激突すると、土煙を上げる。
その頃にはすでに仲間たちも作戦のため、あらかじめ決めていた予定通りに動いていた。
しかし背後ではルフィが地面へ激突し、死んだのではないかというほどの衝撃、轟音が響く。心配するのも当然で、振り向く者も少なくなかった。
ビビは心配そうな顔で振り返り、目的のために走りながら困惑した顔である。
「ルフィさんっ!? そんな……」
「立ち止まっちゃだめよビビ！ 私たちは自分の役目を果たすの！」
「そうですビビ様、我々はこの戦いに勝たねばなりません……！」
彼女たちは集団で走っていた。
向かう先にはジャングルがあり、姿を隠せる環境があった。
先頭を走るのはウソップ。その次にシルクが続き、ナミが居て、ビビとカルーが並ぶ後ろからイガラムがついて来る。
全員で木々の間に飛び込みながら、必死の形相でイガラムが叫んでいた。
「戦士の掟や彼らの事情はよく存じませんが、キリ君の言うことには一理ある！ 我々の悲願を達成するためには彼らの力を借りなければならない！ 皆で力を合わせなければ、バロックワークスを倒すことは叶わぬはずです！」

走りながらイガラムは覚悟した顔で伝える。
「生き抜きましょう！　生きて祖国に帰るのです！　国を救えるのは我々だけなのだから！」
「ええ……わかってる。わかってるわ」
「心配しなくていいわ。あいつらバカみたいに強いんだから、何があってもあんたたちをアラバスタへ送り届ける。それにね、七武海をぶっ飛ばす理由なら私たちにもあるの」
声をかけるナミに頷き返し、一同は同じ方向へ向かって駆ける。
ジャングルの中へ入ってその姿はすぐに消えた。
後ろをわずかに振り返ったシルクは不安そうに顔を歪める。
先程の広場に残った者を心配している訳ではない。もっと漠然とした、一味のあるべき形とでも言うべきか、以前とは何かが変わってしまった様子を不安に思う。
同意するのか、先頭を行くウソップが後方に居る全員へ言った。
「いいかお前ら、ルフィがやるって言ったんだ。もう考えてる暇なんてねぇ。とにかくキリの指示通りに動いて、この決闘に勝つぞ」
「だけど、ルフィは――」
「言うな。男が一度言ったことだぞ。もう取り下げられねぇんだ」
反論しようとしたシルクの声をぴしゃりと遮った時、ウソップもまた覚悟を感じさせる。ただついて来ただけの姿ではない。彼も決意した後だった。
この場で何か言うべきではないと判断したシルクはきゅっと唇を結ぶ。
後方には仲間たちを残してきた。
その方向をちらりと確認してから、彼女も思考を切り替えて前だけを見つめる。
戦いが始まった広場にはすぐに起き上がったルフィの他に三人が残った。
キリは紙を操ると鳥を生み出し、背に乗って翼をはためかせ、空中を飛び回っている。
地面にはゾロとサンジの姿があり、警戒しながらも戦意は揺らが

ず、ブロギーを相手に接近を試みようとしている最中。こちらは二人で力を合わせるようだ。
そしてルフィは、懲りずにドリーへ襲い掛かろうとする最中だった。
クルーの姿が減っていることには当然二人も気付いている。しかし追うつもりはない。
逃亡と作戦は別物だ。そう判断しているドリーとブロギーは去っていく一行を敢えて見逃して、向かってくる敵だけに集中する様子。
その小さな人間四人にも気を抜いてはならないと考えていたらしい。
木々を使って飛び、ドリーの視線に並ぶまで高く、ルフィが空へ身を躍らせる。
拳を強く握って腕を伸ばそうとする一瞬、ドリーの反応が間に合っていた。
後には退けない。ルフィは全力で右腕を伸ばした。
「ゴムゴムのピストル！」
「なんの！」
再び素早く左腕が掲げられ、前腕にある盾が拳を受け止める。
反撃まではコンマ数秒。
思い切り拳を弾くと同時に次は右腕が動いて、高速で振るわれる剣の腹が迫り、刃ではない部分がルフィを捉える。まるで壁が迫るような光景で、逃げる暇もなく激突した。
必死に防御しようと両腕を構え、身を縮めたが、そんな程度で防げる物ではなく。
凄まじい衝撃を全身に感じた彼は弾丸の如く宙を飛ぶ。
島の端まで吹き飛ばされるのではないか。そんな風にすら思える様子で飛んでいく彼を、ある時突如飛来した紙の鳥が受け止め、巧みに体を動かして背に乗せた。
激突の瞬間こそがくりと揺れたが損傷はない。ルフィの体はその上で落ち着く。
今度はドリーが驚く番だった。

先程から妙な人間が居るなと思っていた。それが今になって無視できない存在となる。
それが能力で作られた物と判断するまでにほんの数秒。
誰が操っているかを考えるのはそれよりも短く、辺りを旋回するキリを見てにやりと笑い、存外厄介そうなのだと気付いて剣先の向きを変えた。
「ほう、おかしな奴が居るな。あれは生物には見えんが空を飛ぶか」
「ルフィ、足場はボクが作る。気にせず戦ってくれていいよ」
「おう！」
短いやり取りを行い、即座にルフィが鳥の背を蹴った。
再び空中へ飛び出すと正面からドリーへ拳を向ける。
あくまで正々堂々戦うつもりだ。
彼らがそうしてドリーの注意を引いている間、ゾロとサンジはブロギーと対峙していた。
吹き飛ばされた距離を埋めるよう走りつつ、視線は敵の動きを警戒して、いつ仕掛けるべきかと考える思考もあったらしい。しかしそうしていたのもそう長くはない。
攻めなければ勝てるはずもないだろう。
恐れを知らぬ彼らは自ら仕掛けようとしていた。
「さっさと来いクソマリモ！　遅ぇぞ！」
「てめぇがいつまでも決めねぇからだろうが！」
ゾロは黒い手拭いを頭に巻いており、すでに両手に刀を持っていた。
前を走っていたサンジが急速に速度を緩め、ブロギーに背を向けてゾロを見る。足を止めたその瞬間に右足を掲げ、追いついたゾロが勢いを殺さず跳び、その上に飛び乗る。
体重や勢いに負けず受け止めたサンジは力を溜め、一瞬の後に蹴り出した。
「空軍（アルメ・ド・レール）パワーシュート！」
運ぶように蹴り飛ばしたゾロは空中へ身を置き、最中に最後の一本を抜いて口に持つ。

三刀流の構えでブロギーに向かい、顔に迫ろうという頃に反撃が来た。
「ガババババ！　やはり威勢がいいな、お前たちは！」
右手にある斧を振り下ろしてゾロを捉えようとした。
驚くべきことに、やはり彼らは、慌てる暇もなく反応してくる。その巨体で人間にも劣らぬ、或いは勝りすらする速度。重さも加えて脅威であった。
しかしゾロは刀を構えたまま飛び、回避を考える様子もなく斧と激突する。
三本の刀で自身の体よりも大きな刃を受け止めた。
当然受け止めきれるはずもなく、空中に居ては踏ん張ることもできずに、力で押し負ける。
ゾロの体は打ち返されるように吹き飛ばされ、体勢を整える暇もなく背から地面へ激突した。
重苦しい衝突の音を発し、滑るように数メートル移動する。
まるで地面を削るかのような動きで土煙が舞っていた。
当然の結果だとしてブロギーは笑みを浮かべた。戦士の決闘に手加減はない。力で彼を吹き飛ばしたことを勝ち誇り、斧を振り抜いた姿勢でゾロが消えた土煙を眺める。
その一瞬に、全力でサンジが駆けていた。
ゾロの体を撃ち出した直後からブロギーの足元を目指し、足の間を抜けて背後に出た。
踏み込みの動きが危険であったが注意を向けられていないことが幸いだっただろう。さほど危険を感じることもなく彼はブロギーの背面を眺める。
狙うべき場所は一つ。
地面を滑ってわずかに削りながら、なんとか勢いを殺すと足を止め、瞬時に目標を定めた。
狙いは関節。膝の裏。
全力で跳んだサンジは隙を見せるブロギーへ接近した。
「それも込みの作戦だよ！　もも肉（ジゴー）シュートォ！」

「ぬおっ!?」
膝の裏に強烈な蹴りが当たり、勢いに負けてがくりと折れる。
ダメージは相当なものでも骨や筋肉に異常はない。だがそれとは別で、自然と関節が曲がってしまい、自分の意志とは無関係に片膝をついてしまった。
ブロギーは自らの姿勢に驚くと、彼らに一瞬の猶予を与えてしまったようだ。
土煙の中からゾロの姿が飛び出す。
ギラリと光る眼がブロギーの目を捉え、あまりの迫力に心が動いた。
彼は素早く駆け、止める暇もなく地に着いた片膝に乗り、強く蹴って跳び上がる。
胴体、もしくは首だろうか。体格差があるだけに急所を狙うのは当然の思考で、跳び上がった姿と視線から狙いの場所を推測して、だが考える前に左腕が動いていた。
これは迎撃ではなく防御。
咄嗟の判断なのかブロギーの左腕が跳ねあがり、盾を構える。
一度跳んだからには狙いが替えられず、ゾロはそのまま構えた刀を盾に向かって振るった。
「鬼斬り!」
「そうはさせん!」
ガキィン、と金属音が響いた。
衝撃が伝わるものの、巨人の肉体を揺るがすほどではなく。
押しやるようにして後ろへ跳んだゾロは宙返りをして落ちていく。
どうやら一度地に足を着けて体勢を立て直すようだ。ブロギーは右手に力を込める。
今度はこちらの番だと言わんばかりに斧が振り上げられていた。
しかし振り下ろす直前、ゾロが着地した瞬間。後方に居たサンジが攻撃を繰り出す。
「反行儀(アンチマナー)キックコース!!」
「おうっ!?」

座り込んだままだった尻が蹴り上げられる。
片足で触れただけだが、強烈な攻撃は一瞬にして無数に叩き込まれただけでなく、巨人の体をあっさりと持ち上げ、ブロギーは一瞬の浮遊感を感じた直後に上半身から地面へ落ちていく。そして両手を尻へ運んでしまったため受け身も取れぬまま。当然尻へのダメージは地面に顔をぶつけた何倍もあった。
突然の事態を横目で確認したドリーは驚きを抱き、思わず笑ってしまった。
理由はいくつかある。自分たちを蹴り飛ばせる人間が居たこと、浮かせてしまったこと、尻を押さえるブロギーの姿が滑稽だったこと。
何にしても愉快だった。愉快な決闘だ。
代わり映えの無い毎日とは違った新鮮な光景である。
大笑いするドリーは構えることすら忘れ、密かに敵への称賛を抱かずにはいられなかった。
転んだブロギーの真後ろ、爪先で地面を軽く叩いたサンジは大きく息を吐く。
煙草は銜えていない。そんな場合ではないと判断したからだ。
彼の目は冷徹な色を携えてブロギーを眺め、勝ち誇ることもなく呟いた。
「こっちにおれが居るだろうが。忘れんなよ」
「ゲギャギャギャギャ！　ずいぶん間抜けな姿だなブロギー。油断でもしていたか？」
「ぐぬっ、うおっ……!?　やかましいっ、少し興奮し過ぎただけだ……！」
よっぽど痛かったのだろう。斧を持つ右手は離れるものの、左手は今も蹴られた尻を擦り、立ち上がりながらも痛みに耐える表情が印象的だった。
距離を置いたまま立ち、ゾロとサンジは眼光を鋭くする。
勝負はまだ始まってもいない。これで相手が本気になった。
本当の戦いは今から始まるのだ。
「流石、おれたちに決闘を挑んでくるだけのことはある。これだけ

の気概が無くては戦いにすらならぬだろうからな。むしろ有難いことよ」
「確かにそうか。しかしなんとういう蹴りだ、ドリーの拳に勝つかもしれん」
「何？　それは聞き捨てならんな」
「だが事実だ。まさか人間に転ばされる日が来るとは思わなかったぞ」
ブロギーはサンジを見て称賛の言葉を送る。
一方、ドリーは自身が負けたという言葉が引っかかり、ブロギーに振り返っていた。
その瞬間を見逃すはずもなく、キリが操る紙の鳥が動き、ルフィが宙へ跳ぶ。
「おれの拳が負けただと？　バカを言え、それはさっきのお前が惨めだったからそう思うだけだろう。おれの拳は誰にも――」
「ふんっ！」
「がっ!?」
急接近したルフィが拳を振るい、至近距離からドリーの頬を殴った。
巨体が揺れる。
脳震盪でも起こしたのか、足元がふらつき、危うく倒れかけた。しかしすんでのところで立て直すことに成功して、大きな足音を立ててドリーの体は再び背筋を伸ばした。
痛みを堪えながら頭を振って気を取り直そうとする。
その瞬間、右腕に無数の紙を纏い、巨大な右腕を持ったキリが強烈なパンチを繰り出した。
ほんの一瞬の視界の揺れだった。それがきっかけで顔の正面を捉えられる。
顔面に受けた一撃は重く、硬く、まるで鉄の塊が激突したかのよう。
今度こそ体勢が崩され、体重が踵にかかって後方に倒れかけた。
すかさずルフィが跳んだ。
彼の周囲ではキリが操作する鳥が居て、必要があれば足場となり、

危険と見れば傍を離れる。つかず離れずで足場となることに努めていた。
跳び上がったルフィは落下の勢いすら利用して両腕を後方へ伸ばす。
ドリーへ接近し、追撃を行おうとした。
しかしここでドリーの目に冷静さが戻る。
長年の経験がそうさせるのか、戦士の本能か、咄嗟に盾を構えていた。
「ゴムゴムの、バズーカ！」
「ぬぅあっ！」
突き出された掌底が盾に受け止められて、幾ばくもせず体勢も整えられた。
迎えに来た鳥の上に着地したルフィは、苦々しい顔でその場を離脱していく。
追撃が上手く当たらなかった。これが悪い方向に働く可能性もある。
やはりこの二人はそう簡単に勝てる相手ではないと再認識して、キリやゾロやサンジもまた同じ想いを抱き、姿勢を正して佇まいを変え、肩を並べる二人を見た。
ドリーとブロギーは苦戦を感じるどころか想像よりずっと楽しそうにしていた。
「ガババババ！　どうしたドリー、油断でもしていたか？」
「ああ……予想外に効く。お前のパンチより重いかもしれん」
「ふん、まさか。言っておくが力では人間に負けるつもりなどないぞ」
「そうかもしれんな。だがどうやら、おれたちは自分が思う以上に油断していたようだぞ」
「確かに。それはおれも思っていたところだ」
改めて武器の握りを確認した後、二人の目付きが変わる。
今までも手を抜いていた訳ではないが、相手の戦い方を知った今、全てが同じではない。

彼らの中から迷いが消え去り、敵に対する心構えが完成された一瞬だ。
「今までの我らは謝罪する。ここからはさらに本気を出そう」
「楽しくなってきたな。さぁ、次はどう来る?」
普通の相手であれば、このまま押し切れる流れだ。予想外の攻撃やコンビネーションで一時的に彼らは驚愕し、冷静さを失っていたはず。その一瞬で勝ちを取れてもおかしくない。
この二人が恐ろしいのは、即座にその迷いを断ち切れる部分にある。
体の大きさ、持って生まれた戦闘センス、そういったものも脅威だろう。
しかしそれ以上に磨き抜かれた技術が、もはや完成された戦闘に対する心構えが、自らの油断を数秒で殺し切る強かさが、彼らを最強たらしめていた。
彼らにとっての幸運はこのまま勝利を攫えることだった。しかしそう簡単にはいかない。
それならそれで動きようはある。
当初の予定を使うのみ。その場に居る四人もまた冷静さを失っていなかった。
腕に力を入れ、目視で気付けるのはわずかとはいえ、筋肉が盛り上がった。
斧を振り上げるブロギーは地面へ攻撃を向けつつ、姿とは裏腹に静かな声で言う。
「今度はこちらから行くぞ」
強く地面を打ち、直後には刃で地面を削りながら斧が移動する。
地面を這うようにするため土煙が上がり、明確な軌跡が出来上がって、辺りに漂った。
目くらましなどではない。ただ単純に、異様なほどの体格差が戦いにくいため、地面に居る敵を狙うならばこうした方がいいと考えただけだ。
狙われたサンジはすぐに後ろへ跳び、続いて狙われるゾロも後方へ

飛び退く。
一瞬で辺りの地形が変わってしまった。走って移動するのは困難なほど大きな溝ができている。
巨人にとっては大した窪みでなくとも人間には無視できない地形。
ゾロとサンジは舌打ちし、今度は彼らを狙って振り下ろされる斧から逃げ回る。
同じ頃、ドリーも剣を振り回してルフィとキリを狙っていた。
こちらの二人は空を飛び回る。そのため狙いもつけにくく、なかなか捉えることができない。
彼らの体格の違いは大きな影響を見せている。
幸いにも、巨人から見ればあまりにも小さな彼らは狙いにくく、攻撃を当てるのが難しい。
不幸にも、人間から見れば巨大な彼らはそう簡単には倒せず、攻略法が見出せない。
一進一退と言えば聞こえはいいが、要はどちらも攻めあぐねていたようだ。
海賊として暴れ回っていた頃の二人ならばいざ知らず、戦士の誇りを刺激され、戦士たれという想いで武器を振るう彼らは卑怯な手を使おうとしなかった。
それが勝負を長引かせている。
同じ程度の技量を持つ巨人とのみ戦い続け、おそらく腕は上がったが、経験は歪になった。
人間を相手にどう立ち回ればよいか、今やすっかり忘れてしまったらしい。しかし百年間に及ぶ決闘が彼らの技量を高め、心構えを完璧なものとし、常に冷静に動ける覚悟を与えた。これを切り崩すことは簡単ではないため、難しいのは相手も同じ。
しばしの間同じ状況が続く。
巨人の二人が攻撃に努め、矮小なる人間は回避行動に集中した。
状況が変わらずにどちらも決め手となる一瞬を窺っている様子である。
転機が来たのは、ドリーとブロギーがそろそろ動き出そうかと考え

た頃だった。
ウソップがカルーに跨って広場に戻り、大声を出した時だ。
「キリィ～！　こっちは準備できたぞォ！」
「クエ～ッ！」
ウソップとカルーの声が届き、縦横無尽に空を駆けながらキリがそちらを見た。
状況を判断する。現状、四人には余力があり、それは相手も同じだったが、先を考えれば良い状態だろう。今ここで一か八かの賭けに出るのは悪くない。
能力を使役する一方、キリがルフィに目を向けた。
気付いた彼もドリーから目を離し、キリに注意を向ける。
「合図だ。ここからはウソップがサポートに入る。問題は？」
「ない！」
「それじゃ当初の予定通りに。しばらく離れるけどすぐに戻るよ」
「わかった。キリ！」
ルフィが彼の名を強く呼んだ。真剣な視線が交わり、揺らがぬ覚悟を伝える。
「勝つぞ！」
「……うん」
力強く頷いて、二人はそれぞれ別の鳥に乗りながら同時に急降下を始める。
地面が近付くとルフィだけが飛び降り、確認するとキリは彼が乗っていた鳥をバラし、手元に戻しながら急上昇する。
向かうのはウソップが待つ方角だ。
「ゾロ！　サンジ！」
「ああ、わかってる」
「遅れんなよ！」
急旋回したキリが突如ブロギーへ接近した。
視線は同じ高さ。どうやら顔を狙っているらしい。
攻撃を続けていた彼が咄嗟に防御を意識する。その瞬間を狙い、地面ではゾロとサンジも彼への接近を始めていて、それぞれの位置から

攻勢へ出た。
盾を構えた瞬間に危険を感じ、雰囲気の変化を知った。
何か仕掛けてくる。
そう考えた時にはキリが迫っていて、自らの意志で迎撃を選択し、斧を振り抜く。
風を切る刃は猛然と襲い掛かるが、空中戦を得意とする彼は紙一重でその一撃を避け、傷一つ受けることなくブロギーの顔の横を通り過ぎた。
攻撃が来ると思っていた彼は虚を衝かれて目を見開き。
その時にはすでに足元にゾロとサンジが居て、彼らの攻撃が飛んできた。
「猛進！　猪鍋シュート！」
「龍巻き！」
「ぬうあっ!?」
両足の脛に強烈な一撃。耐えようのない痛みが走る。
彼らは鍛え上げた肉体を持っていたが、格闘家ではなく、部位ごとに鍛えた訳でもない。何より彼らの攻撃は鍛えられた人間の肉体にすらダメージを与える。
強烈な蹴りが骨に響く痛みを与え、斬撃を伴う衝撃波が螺旋を描いて肌を裂く。
この痛みに耐えることはたとえ戦士であっても難しい。
ブロギーは悲鳴を上げ、思わず逃げるように跳び上がった。
その隙に三人は踵を返し、ウソップが来た方角へと向かい始めたのである。
「いっでぇぇぇ～!?」
「ウソップ、ルフィを頼んだ」
「任せろォ！」
駆け出したカルーに乗って、ウソップがドリーへ向かっていく。そちらではすでにルフィが戦い始めていて一騎討ちの様相だ。
援護のため、今ばかりは怯える様子もなく駆けつける。
カルーが走る速度も気にせず、パチンコを手にして構え、弾を撃ち

出し始めた。
その間にゾロとサンジの二人がジャングルへ飛び込んだ。
キリだけは高度を上げてブロギーの目の高さにまで到達し、木々の上から彼へ振り返る。
来い、と言うかのようだ。
今しがた手痛い反撃を受けたばかり。見逃すという手はあり得ない。
ブロギーは彼らを追うことを決め、重々しい足音を奏でて走り始めた。
振り返ったキリが再び背を向けて空を飛ぶ。
この瞬間、想像通りだ、と彼は勝機を得ていた。
戦士という肩書を持ち、その誇りを抱く彼らはそこらに居る海賊とは生き方が違う。だからこそ次の行動が読み易い。敵を逃がさないからこそ誘き出すことも簡単だ。
誇りがあるから強くなり、だが時として弱点にもなる。
やると決めたならどこまでも冷徹に、冷酷に。
目を爛々と輝かせるキリは冷たい眼差しでブロギーへ振り返った。
突然翼を開いて振り向いた紙の鳥を注視して、何か来るのだろうとブロギーが警戒する。
まだ追いつけてはいない。彼は想像以上に逃げ足が速かった。
しかし立ち向かう覚悟ができたのなら十分。
正面からぶつかり、撃破する。その覚悟で斧が構えられた。
「ようやく反撃か！　さあ行くぞ！　薙ぎ払ってくれる！」
キリは動きを止めて滞空していた。
雄々しく叫び、ブロギーが真っ直ぐ駆ける。
すでに斧は構えていつでも攻撃を繰り出せる状態。距離が詰まれば一瞬で勝負を決められる。決して間違えてはいない自覚があって、勝負を決めにかかる動きだった。
その時、彼が目を離していた足元で変化があった。
ジャングルの中は視界が悪い。鬱蒼と生い茂る木々が視界を遮り、高い草むらが物を隠す。

そこに潜んでいたのは先に森へ入った面々だ。
ブロギーが彼らの前に足を置いた瞬間、突如地面が陥没し、がくんと全身が揺れた。
巨人の足を捉えるほどの大きな落とし穴である。
右足が嵌ったブロギーは呆然として、信じられないといった顔でまだ理解が追いつかない。もう百年以上生きているが、落とし穴に嵌った経験は初めてだった。
無理やり体勢を崩され、両膝を地面についてしまう。
まだ理解できていない様子の彼に、すかさずゾロとサンジが背後から接近した。
身を隠しただけの価値はある。もはや避けられる暇などない。
「羊肉（ムートン）ショット！」
「おうっ!?」
自らの脚力で跳び上がったサンジが、背中を連続で蹴りつけた。
形容し難い威力と衝撃にブロギーの体が倒れていく。
彼は思わず両手をついてしまい、一瞬動きが止まった。
続いてゾロが彼の背中に飛び乗り、さらに跳んで、頭にかぶった兜を狙う。
三本の刀を振り上げ、落下の勢いを利用しながら全力の一撃を叩き込む。
「虎狩りィ！」
「おおうっ!?」
ガィン、と奇妙な音がして、頭突きをするように額から地面にぶつかった。後頭部を殴りつけられたのである。そうなるのも当然で今度こそうつ伏せに倒れた。
頭をぶつけた拍子に地面についた両手も離れてしまったらしい。
彼の体は完全に地面と触れていた。
それを確認してからキリが飛来する。
自身が乗っていた紙の鳥も加え、隠し持っていた大半の紙を使い、ブロギーの首の後ろに巻き付けるようにして拘束し、両手首に枷のように巻き付け、端を地面へ突き刺す。

即席ながら拘束具だ。
硬化されたそれは簡単には抜け出せず、また無理やり押しのけるには姿勢が悪い。ブロギーは辛そうに歯を食いしばって、無駄と知りながら力を込めた。
右足は落とし穴に嵌り、首の後ろと両手首を押さえられた。
それだけでは終わらない。木々の間から現れた仲間たちが全員でブロギーに殺到したのだ。
ウソップとカルーを除いた代わりにゾロとサンジを加え、総勢六人。
互いに力を貸し合いながら巨大な丸太を、蔦を使って作られた長いロープを運び、巨大な彼の体を拘束し始める。体に巻き付け、地面に丸太を打ち付けて杭代わりにし、肘や膝、関節を捕らえて逃げられないようにきつく結んでいく。
まるで工事現場のような様相だった。
あらかじめ決めていた通りに素早く動いて、その光景は見る見る内に完成していった。
どんどん動けなくなるブロギーは不安を募らせ、表情を変える。
顔の正面には地面があり、周囲を見ることもできない。屈辱的な姿勢で押さえられていた。
そんな状態のまま、近くからキリの声が聞こえて、姿を見ることも叶わぬまま声を出す。
「自分が強いと自覚してる奴ほど、足元を掬い易い。君の敗因はボクらを恐れなかったこと。それともう一つ、一対一の決闘に慣れ過ぎて相棒を頼らなかったことだ」
「くそっ、なんという侮辱……！　討ち取られるならばわかるが、まさかこれで勝ったと言うつもりか！　それならばせめておれの首を取れ！」
「思い上がるなよ巨人族。理想ってのは実力が伴う者のみが口にできる〝現実〟だ。戦士の誇りを自慢したいなら敵に勝ってからにしろ」
「ぐうっ……！」

「負け犬は正義を語れない。ここはそういう海だよ」
どうやら顔の傍までキリが歩いてきたようだ。
近くなった声が平坦な様子で伝えてくる。
「ボクらは戦士じゃない、海賊だ。勝負事に卑怯なんて言葉は存在しない。毒を盛ろうが闇討ちを仕掛けようが、勝った人間だけが胸を張って生きられる」
より一層声が冷たくなる一方、彼は穏やかに微笑んでいた。
「今ここにあるものだけが事実。キミの負けだ」
ブロギーが強く拳を握る。
その頃になれば彼の拘束はほとんど完了していて、紙の代わりに両手や首まで蔦を巻き、今や全身が縛られている状態となっていた。
完璧に動きを封じられた状態のブロギーを置き、キリが歩き出す。
振り返ることもなく拘束のための紙を回収し、それでもブロギーは動けない。
勝敗は決していた。
負けた本人が何と言おうと、何を想おうと、今更動くことはできず、殺してはならないというルールがあるため死を乞うたところで無駄。
一行はその場を離れようとしている。
誇り高き決闘はどこへ行ったのか。
苦心する彼の脳裏にキリの言葉が刻み込まれ、悔しさに支配され、ただ自分の無力さを嘆き、這いつくばったままで後悔する他なかった。
己の力が、足りなかった。
敗北の味を思い出して、ブロギーは呻くことすらできなくなる。
敵に背を向け、先頭に躍り出たキリが歩き出す。
浮かぶ笑みは飄々としているが末恐ろしく、何を考えているのかまでは見透かせない。
それでも仲間たちは後ろへ続いた。
「さあ、もう一人だ。勝ちを取りに行こう。もうこの戦いに負けはない」
確信を得た様子で呟く彼に背筋が凍る。

一体どこまで見えているのか。
周囲にある顔は複雑に歪むものの、一部はすでに覚悟もしていて、彼の後ろに続くことも躊躇わない。キリの真後ろにはゾロとサンジが続いていた。
一行は来た道を急いで戻り、ドリーの下へ向かう。
そこではきっとルフィとウソップ、カルーが戦っているはずだった。
彼らを助け、勝利を得る。
そうなるまであと少しの問題。もはや迷っている時間さえない。
急ぐ一行はブロギーを置き去りに、ひたすら真っ直ぐ走り続けた。

Ｇｉａｎｔ Ｗａｒｒｉｏｒ Ｐｉｒａｔｅｓ ＶＳ Ｓｔｒａｗ Ｈａｔ Ｐｉｒａｔｅｓ（２）

真ん中山が見守る場所で、ルフィとドリーが激突していた。

何度跳ね返されようと跳び上がり、目線を同じく、正面からぶつかる。

ドリーはそんなルフィを存外気に入ったのか、何度かの直撃を受けながらも決して退かず、今や攻撃を受けることさえ厭わずに彼と殴り合っていた。

「オオオオォ！」

「んんっ！」

振り抜く剣の腹がルフィの姿を覆い隠し、逃げ場を失くす。避ける手立てもない。

ルフィは敢えて剣を蹴りつけた。

伸ばした足が激突しても勢いは全く変わらないまま。

押すような姿で吹き飛ばされ、ルフィの体は高速で宙を舞い、頭から地面に落ちる。危険だと感じるほどの轟音がして何度か地面を跳ねていた。

勢いが弱まり、ごろりと転がる頃。

追撃の危険を感じたウソップがパチンコを構え、瞬時にドリーの顔を狙った。

「待ってろルフィ！　必殺、コショウ星！」

「ぶっ、むおっ!?　ふぁっ、ふあっ……ぶあっくしょん！」

「悪ぃな師匠、これがおれの戦い方なんだっ」

鼻に弾丸がぶつかって破裂した。中からは大量のコショウが飛び出し、彼の鼻腔をくすぐり、体の反射で自然とくしゃみが出る。そのくしゃみすら巨人らしく、雄々しく勢いがある。直接降りかかることがなくとも傍から見ているだけで驚く強さだった。

巨人と言えど体の構造は人間と同じ。弱点も変わらなかった。

あらかじめキリから教えられていた意味はあって、上手くいったこ

とに彼は胸を撫で下ろす。
敵の足止めに成功して、ウソップはカルーに連れられルフィの下へ急ぐ。
辿り着く前に彼は勢いよく立ち上がった。ゴム人間であるとはいえ、何度となく地面や太い樹木に激突し、所々に擦り傷を負って、全身に傷を作った状態だ。
息は荒れ、自身より大きく、そして強い相手と戦うとあって疲労感は普段の比ではない。
だが彼は諦めようとせず、また戦い方を変えようともしなかった。
もう何度地に叩きつけられたのだろう。
ルフィの闘志は揺らぐ様子を見せぬまま、尚もドリーに立ち向かう意志が窺えた。
思わずウソップは心配してしまう。
なぜ彼はそこまで頑なになるのだろうか。
作戦は事前に決まっている。今この場でルフィが一騎討ちでドリーを倒す必要はない。仲間の到着を待って全員で挑めばいいだけの話だ。
ルフィに駆け寄ったウソップが彼の顔を覗き込む。
視線はあくまでもドリーへ。滾る戦意に任せて挑もうとしている。
違和感を感じずにはいられずに、思わず彼へ問いかけた。
「落ち着けよルフィ、何も焦る必要はねぇんだ。みんなが到着すれば全員で戦える。それまで時間稼いでよ、少しは逃げても――」
「いいんだ。これでいい」
「でもお前、傷だらけじゃねぇか。無理すると危ねぇって」
「おれは巨人のおっさんと決闘してんだ。おれはこれでいい」
声をかけるがルフィの意志は揺らがない。
ウソップの言葉を強く跳ね除けていた。
くしゃみが治まったドリーが鼻に触れながら佇まいを変える頃、戦闘の再開だと感じる。
ウソップはカルーに指示を出し、急いでその場を離れようとした。
彼が本領を発揮するためには敵との距離を保ち、援護に努める必要が

ある。
駆け出す間際、改めてルフィへ進言した。
「やべっ、おれたちもう行くぞ。でもなルフィ、あんまり無理し過ぎんな。キリが言ってたみたいにこれは全員で勝つための戦いなんだ。お前だけが無理したってしょうがねぇぞ」
「ああ、わかってる」
「おれたちが援護してやるからな！　あと危ない時は助けてくれよ！」
カルーが走って素早く離れていく。その速度は捉えることも難しいものだ。
彼らが離れた後、ルフィはその場に立ち尽くしたまま。
鼻を気にするドリーの視線を受け止め、口を噤み、凛とした顔で見つめ返した。
「くそぉ、まだ鼻が痒い……コショウを武器にしたのか。まったく厄介なことをしてくれる」
ドリーが口を開いても反応はない。
じっと見つめるルフィを見やり、ふと表情を変えた彼は素朴な疑問を口にし始めた。
「しかしわからん。なぜ出会ったばかりの我ら二人に拘る？　それだけ傷を受けて退かない理由は一体なんだ。なぜおれの前に立ちはだかる」
「それはキリが決めたことだ。おれが船長として認めたんだ」
「ふむ、傘下にすることをか、決闘をか」
「理由なんてよく知らねぇ。細かいことは全部あいつに任せてある」
「お前が船長なのにか。またこれは妙なことを言う」
ドリーは自身の髭を撫でながら考える。
話していた時とは何かが違う。
妙に真剣みを帯びていると言うのか、肌に感じる覇気が段違いで強くなっているのだ。
おそらく何かがあった。離れていた数時間で変化があったのだろ

うと感じ、ふむと頷く。
「お前は何を求めて海へ出た？」
「海賊王」
「そうだったな……噂には聞いたことがある。今の時代を作り出した一人の海賊を」
それはかつて島に訪れた友に教わった話。
海賊王と呼ばれた男は歴史上一人だけ、ゴールド・ロジャーという男。
グランドラインにあると噂され、幻だとさえ語られた島、ラフテルへ辿り着き、ひとつなぎの大秘宝（ワンピース）を見つけたそうな。
彼らの時代にはまだ語られていなかった話だ。
後にも先にもただ一人であって、それが簡単な道ではないと理解できる。
これまで興味はなかったが、ここへきて俄然興味を持った様子。
一時戦闘を中断したドリーは問いかける。
自身も知らない、想像の範疇。だが敢えてルフィへ問うてみたかった。
「険しい道だろう。本当にやれると思うのか？」
「当たり前だ」
「フッ、そうか。力のある言葉だ」
ほくそ笑むドリーが髭から手を離した時、ルフィは一際強く拳を握る。
「でもおれは、このままじゃだめだ」
「んん？」
「今のまま進んでも、この海は広くて、おれより強い奴もたくさん居る。おれが強くならなきゃ仲間が困るんだ。おれがあいつらを守るって決めたから」
「なるほど。それが船長の覚悟というわけだな」
経験ではない。想像の上でしかない判断ながら間違えてはいないだろう。
その顔に覚悟を感じて、ドリーは剣を構えた。

「キリはおれの仲間だから――」
大上段に振り上げられる。
ルフィはそれを見ながら自身も拳を握り、全身から余分な力が抜けていた。
それでいて自身の想いを叫び、瞬間、辺りの大気が震える。
「あいつが安心してここに居られるように、おれは、クロコダイルをぶっ飛ばすんだ！」
両手で柄を持ち、流れるように姿勢を変えて、全身を使った力が込められた一刀。
構えられた剣は全力で振り下ろされ、天を割るようにルフィの頭上へ迫る。
それを視認した後で地面を蹴り、即座にその場を離れて、紙一重でルフィは回避し切った。そのまま動きを止めず、転がるように駆け出してドリーの下へ向かう。
右足を軸足に決めて、ぐるりと体が回った。
地を打った直後に素早く引き戻された剣が辺りを穿った。剣先を地面に沈め、真っ直ぐ走るだけで爆ぜていく。もはや台風すら気にならないほどの荒々しい光景があった。
次々土や岩が舞い、猛々しい攻撃は地形を作り変え、ルフィの体をも吹き飛ばした。
しかし彼は諦めずに腕を伸ばし、何とかドリーの足を掴むことに成功する。
伸ばした腕を縮めて急接近。目視で気付いているドリーだが、自身の脚に触れられているとあって迎撃がしにくく、今度は接近を許してしまう。
足の間を抜けたルフィは即座に手を離し、次はマントを掴んだ。
見逃さないようドリーがその場で振り返るのだが、マントに捕まったままの彼は見つけられず、さらに背面を取られたままだ。
見逃した一瞬、ルフィがマントを利用して腕を伸ばし、縮める反動で跳び上がる。
気配に気付いた時にはすでに顔の高さに達していて、遅れて振り返

る彼と視線が合う。
素早く拳を突き出したルフィは、ドリーの顎を打ち抜いた。
「ピストル！」
「ぬぅう……!?」
「おおおおおっ！」
右腕を振り抜いた後、引き戻す勢いを利用して左の拳を突き出した。
繰り出した攻撃は眉間に直撃し、痛みが駆け抜けると同時にぐらりと視界が揺れ、妙な浮遊感さえ感じた。彼の巨体に大きな影響を及ぼすことに成功したのである。
それだけでは終わらず、更なる攻勢に出た。
両腕を伸ばして兜を掴み、接近しながら攻撃を重ねるのである。
「鐘！」
「おうっ!?」
「ロケット！」
「うおぅ!?」
首を伸ばして頭突きを一度。首を戻し、体ごと体当たりして頭突きをもう一度。
あまりの勢いと顔への打撃にドリーの姿勢が崩れかけた。
さらに押すためルフィは右腕を後方へ伸ばし、捻じることで力を溜める。
その頃にはドリーも反応できて、剣ではなく盾での迎撃を実行した。
「ライフルッ！」
「せりゃあっ！」
回転しながら突き出されるルフィの拳が頬を打つと同時、ドリーの盾が彼の全身を打って、互いの攻撃が強く相手へ叩き込まれた。
ルフィの体は再び激しい様子で地面へ激突して。
体勢を整えることすら考えずに反撃したドリーは、そのまま背から地面へ倒れた。
ほぼ同時の着地で地面が揺れ、ウソップとカルーは肝を冷やす。

巨人を力尽くで倒すルフィ。不可能と思えるタイミングで反撃するドリー。
一連の動きを見ていても理解しにくい戦いだ。
彼らにはどれほどの技量があるのか。恐ろしいと考える彼は顔色を変えていた。
援護の必要はあるのだろうか。
そう考えた時、先に起き出したルフィが上体を起こしたドリーへ飛び掛かる。
座り込んだ状態ではあるものの、ギラリと目が光る様を見て反応できそうだと判断した。
ここだ、とウソップがパチンコを構える。
おそらくルフィは止まらない。だから彼を助けるため、援護するため、ルフィを止めることなく自身が攻撃を加え、ドリーに隙を作り出す。
それが自分の役目だと理解して、ウソップは弾を撃ち出した。
たとえ卑怯と言われても、それこそが自分の生きる道。
たとえ前線で戦うことができずとも、自分にだって仲間を守ることはできる。
今、それを証明すべき時だった。
「必殺、赤蛇星！」
撃ち出したのは仲間を集める時に使用した狼煙。
斜めの軌道を描いてドリーの顔の前を通り過ぎて、視界を遮って天へ昇る。
確かに本来の用途は緊急時に味方を呼ぶための狼煙であった。しかし要は使い方次第。ただの狼煙が視界を塞げば、それだけで敵は虚を衝かれる。
事実ドリーは驚いていて、一瞬ルフィを見失った。
その一瞬を使って急接近すると、後方に伸ばした両腕を前へ突き出し、掌底が腹を打つ。
ウソップの援護により、ルフィの一撃がドリーへ届いた。
「バズーカァ！」

「ごうっ、がはっ……!?」
「よぉし！　行けルフィ！　一気に決めちまえ！」
「クエ～ッ！」
チャンスを見出したこともあって、熱くなり拳を握るウソップが叫んだ。
同じくカルーも翼を動かして声を発し、全力でルフィを応援している。
できることはそれだけでもいい。
その声は確かにルフィへ届いていた。
不思議と力が漲る。彼の動きはさらにキレを増し、恐れを知らぬ姿で前へ出た。
高く跳び上がるとドリーの体を見下ろした。
本来は自分を見下ろすはずの巨体を上から眺めて妙な気分に陥る。しかし、そうも言っていられない。ドリーはすでに反応しようとしていて腕が動き出していた。
それよりも先に、と思う。
高速で突き出されるルフィの両手は無数のパンチとなって降り注いだ。
「ゴムゴムのォ……ガトリング！」
顔の前で両腕を交差させたドリーはそれら全てを受け止めた。
防御したところで痛みは禁じ得ない強烈な攻撃。その一撃、一撃に途方もない力が込められているらしく、こうなれば体の大きさなど関係ない。拳が当たる場所に鈍痛が走った。
痛みを伴う強烈な雨はしばしの間止まず、押し切られたことで体が倒れる。
逃げるような素振りで再びドリーの体は倒れた。
「ぬぅ……!?」
「おおおおおあああっ！」
無数のパンチがドリーの体を殴り、打ち続け、ようやく切れ目が見えた。
落下してきたルフィが彼の上でさらに跳び、更なる猛攻へ出ようと

したのだ。
しかし一瞬の切れ目が命取りとなる。
倒れたまま、地に背をつけた状態でドリーが剣を振るい、刃ではなく刀身を使ってルフィを殴り飛ばす。すでに空中に居た彼は回避もままならず、防御はしたが、堪えきれずに宙を飛んだ。
激突した腕に痛みが走る。
着地の姿勢を整えなければならないのだが、そんな余裕もない。
ルフィは数秒、腕を交差させた姿勢で空を飛んでいた。
このまま地面に落ちる、と覚悟した瞬間、そうなる前に柔らかい何かに受け止められる。ボフッと上手く力を逃がすような、上手な受け止め方だった。
痛みを堪え、呼吸を乱し、目を開けたルフィの目に飛び込んできたのは白色。
大量の紙が球体となって彼を受け止め、傍には紙の鳥に乗るキリが居た。
「お待たせキャプテン」
「ハァ、キリっ。それじゃあ――」
「向こうは片付いた。あとはこっちの一人だけだ」
空中で動きを止めたまま、ルフィとキリの視線が合う。
同じくドリーも立ち上がって彼らの姿を視界に収めていた。
その場には続々と麦わらの一味が集まってきて、しかしブロギーの姿は見えない。
どこに居ようと姿が見えるような巨体である。ブロギーの姿が消えていた。彼だけがなぜかこの場に合流することはなく、状況は一気に変わってしまった。
相手側は全員が揃い、ドリーだけが孤立している。
表情を変えずにはいられず、嫌な予感が彼の精神を揺らした。
「これはどういうことだ？　なぜお前たちがここに……」
「想像してる通りだよ。今頃は動けなくて困ってるんじゃないかな」
柔らかい笑みを浮かべたキリの一言を受けて、ドリーの表情が一変

する。
信じられないという顔だった。だが事実この場に現れる気配はなくて。
瞳が動揺するその時を狙い、キリが視線を送ると同時、仲間たちが動き出す。
そうと気付かせない開戦の合図だ。
キリの目がドリーを捉え、魅入られるように視線が外せなくなる。
すでに彼らの弱点は見つけていた。当初はただの推測と想像でしかなかったものが、ブロギーを倒したことで確信を得ている。
百年間戦い続けた彼らは一人の戦士としては完成されていると言えるだろう。
だが海賊団として見た時には、完成度は全く別物のように低くなる。
長く一人で戦い続けた結果、二人のコンビネーションは決して良いものとは言えず、それぞれが自らの敵を討つという意志しか感じない。それで勝てる相手ならば問題ないが、仮に片方が敗北した場合、理解が及ばずに動揺するのも無理はなかった。
一人一人が強いからこその慢心、油断、そして不安があり得る。
彼らを強いと判断するからこそキリは弱い部分を見ていた。
今、ドリーは相棒が敗北した事実を受け入れ難く、自身が追い詰められる以上の不安に陥った。
故に、挑発の甲斐はある。
精神が乱れた彼ならば、言葉一つで如何なる感情をも引き出せそうだ。
「案外大したことないんだね、エルバフの戦士って」
「貴様ッ……！　我が友を侮辱するか！」
今の今まで冷静だったドリーが激昂する。
頭に血が昇り、極端に視界が狭くなり、武器を持つ手にも必要以上の力が入った。つぶさに観察すればよくわかる。それは戦闘時には必要のないものだ。
二人の絆が、弱点に変わった瞬間だった。

島には二人の巨人のみ。
百年間に渡る孤立は彼ら自身を強くする一方、弱くもしたらしい。
ドリーは駆け出した。
荒々しい姿で周囲を気にする様子は皆無だ。視界にはキリの姿しかない。
その間に彼の足下、先んじて仲間たちが動いており、ドリーの動きに合わせてその行動を本格化させた。やはりと言うべきかドリー本人に気付く様子はない。
気付いていないからこそ彼らの行動も大胆にできるようだった。
「特用油玉だッ！」
ウソップが投げつけ、地面にぶつかって割れた玉から油が流れ出る。決して規模は大きくないが奇妙に光る油が広がり、二つや三つも投げれば巨人が相手でも問題なかった。
気付いていないドリーが荒々しい一歩でその地点を踏みしめる。
瞬間、ずるりと右足が滑り、本人が驚くほど姿勢が崩れて後ろに倒れかけた。
右足が上がって一見間抜けなポーズになる。
待っていたとばかりにサンジが駆け出し、残る左足へ接近した。
「サンジィ！」
「おぉし任せろ。もも肉（ジゴー）シュート！」
「ぬああっ!?」
倒れないため必死に踏ん張ろうとした左足、ふくらはぎの辺りを強烈に蹴られた。
足がぐるんと持ち上げられてしまい、両脚が地面から離れ、驚きながらも一瞬浮遊感を感じた後に尻もちをつく。ここまでは自分自身、何が起こったかわかっていない顔だ。
唐突にその場へ座ってしまって、きょとんとした表情。
すかさずキリに運ばれたルフィが接近し、呆けたままの顔を蹴りつけた。
「ゴムゴムのスタンプ！」
「うごっ!?」

兜の額部分を蹴りつけられ、衝撃を受けて背が倒れていく。
ドリーは無理やりその場に寝かしつけられてしまった。
「よし、全員でやるぞ！　ロープを持て！」
ウソップが号令を取って即座に次の行動へ移る。
彼はカルーの足の速さを使い、倒れたドリーへ素早く駆け寄ると、投げ出された両腕にロープを巻き付け、適当な拘束ながらもそれを仲間たちに手渡した。
縛り付ける必要はない。少なくとも今はまだ。
集まった全員がロープを握った。
対してドリーは倒れたまま。訝しみながら起き上がろうとして強く引っ張られることに気付く。
どうやらそのロープ、一時でも彼を起き上がらせなければ満足らしい。
「引っ張れェェェェっ！」
「な、なんだ――？」
視線を上げる。
真上にはルフィとキリが居て、先程よりも高度を上げている。
彼らはすでに決着をつけるため動いていた。
翼を広げ、迷わず急降下を開始した紙の鳥に目を奪われる。
まずいと感じるのだが、両腕を押さえられて、今ばかりは冷静な判断も下せない。予想外の展開が続いて完全に動揺が深まっていた。逃げられる状態ではないのである。
彼は落下してくる二人を眺め、ただその時を待つしかなかった。
「ゴムゴムのォ――！」
ルフィの両腕が伸びる。天に向かって掌を見せ、限界まで伸ばした状態で落下してくる。
準備を終えた後、ルフィは紙の鳥を蹴ってさらに加速し、ドリーへ近付く。
落下の勢いを利用した攻撃は、届く前から彼に恐怖心を抱かせた。
二人の距離が近くなった時、目にも止まらぬ速度で攻撃がやってきた。

消えるかの如き速度で両腕が引き寄せられ、突き出される掌底が腹を捉える。
「バズーカッ!!」
地面に衝撃を走らせるほどの一撃が激突する。
ドリーの体はわずかに跳ね、脱力して明確な隙ができた。
落下してきたキリは自身が所持する紙を全て取り出し、辺りへ放ってドリーに降り注がせた。意思を持つかのようなそれらは彼の体に纏わりつき、拘束していく。
全身を捕らえて動けなくなった。
乱れた呼吸を落ち着けようとしながら、ようやく動けそうになった頃にはすでに遅い。
揺らぐ視界で空を眺めて、ドリーは呻く。
地面に身を横たえ、痛みが全身を駆け回り、力を入れても動けない。自由を奪われた状態だ。
ぼんやりする思考で、自身は負けたのかと考える。
こうして空を見上げる経験などいつ振りだろう。
少なくとも、この百年の間にはない。勝負は一度も決しなかったからだ。どちらも勝たず、負けもせず、引き分けばかり続いていた。そのせいですっかり忘れてしまっている。
勝利とは何か。敗北とは何か。
思い出せないほど久しぶりに地に背をつけた今、彼は驚くほど穏やかな心境だった。
体の上を歩いて顔の近くまでルフィがやってくる。
彼を見上げたドリーは、にやりと口角を上げて見つめた。
「どうするおっさん。もう動けねぇだろ」
「ゲギャギャギャギャ……ガフッ、ゴホッ。ああ、そうだな……」
不思議と悪い気分はしていない。
良い戦いだったかと言われればどう答えてよいものか、判断に困る気がする。
それでも、負けを認めず喚くような男ではありたくない。この戦いは良いものだった。いつ振りかの敗北を味わった今、そう考えた彼は

ふっと全身から力を抜く。
反抗するつもりはない。
自分はたった今、百年ぶりに負けたのだ。
「ずいぶん、長く戦った……もうそろそろいい頃かもしれん。きっとエルバフの神はそう考えたのだ。いつまでも終わらないおれたちの決闘に業を煮やして」
「しっしっし。そうかもな」
「だから、そうだな……おれの、いや」
ドリーが目を伏せ、静かな声で呟く。
「おれたちの負けだ――」
自身で認める最後の言葉。
それを聞いた麦わらの一味がわっと喜びの声を発した。
歪な形とはいえ、百年を超える長い戦いが終わりを迎える。
今回の戦いはそう長い時間はかからず、気付けば日が落ちて夜が始まる頃だったが、全ての決着がつくには風情のある景色だったかもしれない。
或いはドリーもそんな想いがあったのか。
空に浮かぶ星々が、少し早く彼らを見下ろしており、リトルガーデンに静かな夜がやってきた。

巨兵海賊団

拘束を解かれたドリーとブロギーが再会していた。
どちらも大きな怪我はなく、最初に戦闘が始まった場所へ集い、麦わらの一味も集結して、島に居る全員がその場に座っている。
戦闘が終わり、空気が緩んでいた。
事が終わればいがみ合いはない。彼らは冷静な顔で体を休めている。
「まさかこんな結果になるとはな……予想外だった」
「ああ。おれも同じ気持ちだ」
ブロギーの言葉に応じ、ドリーが呟く。
彼らは普段とは違う疲労感を感じている。ただ疲れた、というだけではない。決闘に敗北した事実が彼らに重くのしかかり、抗うつもりはないが、想像もしなかった事態に驚きを隠すことはできなかった。状況を受け入れることと驚きはまた別物らしい。
敗北は素直に受け入れる。否、受け入れさせられたと言ってもいい。彼らを打ち負かしたのは自分よりよほど小さな人間。決闘の結果が明らかだったのだ。
ようやく自由を得て、それはそれで複雑であり、清々しい気分でもあった。
ふとドリーが口を開く。
顔を上げたブロギーは彼の顔に視線をやった。
「考えてみれば、これもエルバフの神の審判なのかもしれん」
「どういう意味だ？」
「おれたちは長く戦い過ぎた。いい加減にしろと言われたのかもしれんな」
「ガババババ、そりゃ確かに。もしそうだとしたら笑い話だがな」
朗らかに笑ったブロギーは兜に手をやり、少し俯いて考えた。
「ひょっとしたらおれたちは驕っていたのかもしれんな。長く人に会う機会がなかった。己の力を過信し、負けるなどと微塵も思っていなかっただろう」

「ゲギャギャギャギャ、その通りだ。まさかと思ったのがその証拠」
「それではこの敗北も当然。強くなった気になって、おれたちはまだまだだった」
「ああ。まったく、恥と思うならまずそれからだな」
同意するドリーも笑い、憑き物が落ちた様子で肩を揺らす。
二人とも晴れやかな顔だった。
そこには後悔の念も感じ取れず、心からの感情が現れ、ただひたすらに上機嫌だ。
すっかり日が落ち、闇に包まれた世界。
地べたに座る麦わらの一味は一個に固まって二人を眺めていた。
二人の視線が下へ向かい、一同を見下ろして語る。
「とにかく結果は結果だ。エルバフの神の名の下、我らはお前たちに従おう」
「故郷へ帰るのは後回しとするか。約束だ。お前たちの傘下に入る」
「ん～、そうか」
胡坐を掻いて座り、腕組みをして目を閉じたルフィが考え始めた。
考え事は得意ではないものの、伝えなければならない言葉があるらしい。
数秒の後に目を開いて話し始めた。
「まぁ一応そういうことでいいけどな。おっさんたちにはおれたちの仲間になって欲しいんだ」
「うん？　仲間？」
「傘下ではなくか？」
「ああ。呼び方はなんでもいいよ。別に部下なんて欲しくねぇからさ、仲間になってくれたらそれでいいんだ。楽に行こう」
「そうか。当初とは言ってることが違う気もするが」
「おかしな奴だな。まぁいいだろう」
多少の困惑を含んでいたが納得したらしく、二人は頷く。
それから視線を上げて、暗闇に包まれた島を眺めて力の抜けた声で言った。

「この島を離れることになるのか」
「一世紀……長い付き合いになった」
「丸いおっさんと巨人のおっさん、昔は海賊だったんだろ？　二人とも船長だよな」
「ああそうだ。その頃は巨兵海賊団と名乗っていた」
「今となっては全てが懐かしい。仲間と共に数多の戦いを駆け抜けた」
尋ねるルフィに答えを返しつつ、彼らは過去の情景を思い出しているようだった。
百年以上前の出来事など覚えているのか。当人になってみなければわからないとはいえ、種族が違えば常識も違い、案外すぐに思い出せる物なのかもしれない。
話を聞いていたウソップは興味を持った顔に変わっていた。
彼らの話を聞いてみたい。
そう書いてある表情で好奇心を露わに二人を見つめる。
ついには誰かが気付く前に自ら尋ねたのである。
「師匠たちの栄光の時代かぁ。どんな冒険があったんだろうな」
「あ、おれも興味ある。おっさん、聞かせてくれよ」
「んん？　そうかそうか、そう面白い話でもないかもしれんが、なぁに、ちょうどあれこれ思い出してきたところだ。少し話してみるか」
「まぁ待てドリー、せっかくならメシにしよう。酒はないが恐竜の肉で乾杯はどうだ？」
ブロギーが一味にそう言った時、いの一番にルフィが立ち上がった。心底嬉しそうに口の端を釣り上げ、非常に分かり易い顔をしている。
答えは当然イエスであった。
「そんじゃ宴にしよう！　おれたちの決闘とエルバフに乾杯だ！」
「おおっ、そりゃいいな！　いつかおれもエルバフに行ってやる！　その前祝いで師匠たちと乾杯なんて最高じゃねぇか！」
「いいよな、キリ！」
「そうだね。英気を養うのも必要だし」

「よぉし決まった！　そんじゃお前ら、準備するぞ～！」
疲労さえ忘れて元気に叫ぶルフィにつられ、仲間たちもそれぞれの反応で立ち上がる。
ゾロとサンジはやれやれという顔で、ナミとシルクは苦笑し、ビビとイガラムは同意する様子。嬉しそうに鳴き声を発するカルーは心から賛成する姿だった。
当然ウソップはルフィと同じく大賛成。
唯一、キリだけが感情を理解し難い笑顔である。
ルフィの宴好きはいつものことだ。今更驚きはしない。
しかしこの島で宴をするならば些か準備も面倒で、船も離れた場所にあり、すでに夜になっているが今からあちこち移動して時間を使わなければならないだろう。
多少は面倒と思いながらも仕方ないと考え、手を叩くナミが指示を出し始めた。
「はいはい、それじゃあんたたち、さっさと準備するわよ。あんまり遅くまで起きてると明日の航海に響くわ。すぐに出航するんだから疲れは残さないように」
「え～っ？」
「何言ってんだよナミ、師匠の冒険譚を聞かなきゃなんねぇんだから、時間なんていくらあっても足りないんだぞ。なぁ今日くらいいいだろ？」
「あんたたちいっつもそんなこと言ってんじゃない」
「まぁまぁ。せっかくの機会なんだし、今日くらいは、ね？」
ナミは宴をさっさと切り上げようと考えていたようだが、即座にルフィとウソップから不満の声が上がり、感情のままに動く彼らには溜息さえ漏れ出た。
助け舟を出したのはシルクである。
いつもの調子で彼らに同意し、どこか甘やかす態度でもあって、呆れたナミが肩をすくめた。
「シルクは甘いわね。そんなだから調子に乗らせるのよ」
「いいじゃない。海賊は自由なんだから」

「はぁ、しょうがないわねぇ。まぁいいわ。とにかく準備するわよ」
ナミが指示を出そうとした時、ふむふむと頷く二人が口を開いて割って入った。
ドリーとブロギーもいつの間にか乗り気になっている。
宴をするなど気が遠くなるほど昔の話で、海賊の血が騒ぎ、無視できずにはいられない。
「おお、宴か。懐かしいな。昔はおれたちも仲間たちと大騒ぎしたものだ」
「ゲギャギャギャギャ、酒はあるか？　準備ならおれたちも手伝うぞ」
「酒ならメリーにあるよ。こうなったら全部持って来よう！」
「ちょっと待ちなさいルフィ！　全部はだめよ、ここじゃ補給もできないし！」
「いいじゃねぇか別に。だって宴だぞ」
「何の疑いもなくそう言えるあんたの基準が恐ろしいわよ……」
「まずメリーに行かねぇとな。ウソップ、巨人のおっさん、一緒に行こうぜ」
「おっし！」
「傘下の初仕事か。ゲギャギャ、いいだろう」
立ち上がったドリーがルフィとウソップを持ち上げ、自身の肩に乗せる。
彼らは島の全景を眺め、月に照らされるジャングルを目撃した。
「うっほぉ～！　絶景だなぁ～」
「流石ドリー師匠、でけぇ男だっ」
「ゲギャギャギャギャ。お前らとは体のでかさが違うからな」
普段見ることのない景色に子供のようにはしゃぐ。
二人を乗せて、ウソップの案内に任せてメリー号へ向かおうとした。
その間際、手を伸ばしたサンジが歩き出そうとするドリーへ声をかける。だが話そうとする相手は彼の肩に乗っているルフィとウソップだったようだ。

「おい待て待て、お前ら宴だっつうのに肉の丸焼きだけで済ますつもりか？　料理にはある程度の調味料と調理器具が必要なんだよ。おれも連れてけ」
「そりゃそうだ。おっさん、サンジも乗っけてくれ」
「構わんぞ。お前の仲間を全員乗せても軽いものだ」
「しっしっし、そりゃそうだ」
ドリーはサンジをも抱え上げ、肩に乗せて歩き出す。
必要な物を取るためにメリー号を目指し始めた。
その間に残った者は別の準備があるらしい。
指揮を執るのはナミだ。
先程ブロギーの家を訪れた時に見上げるほど大きな焚火があった。それがあれば猛獣や恐竜も近付かないだろうし、視界も確保できて安全になるだろう。
彼女は大きな焚火をご所望である。
自分たちだけでは苦労するが今はブロギーが居る。
ちょうど今しがた決闘が終わったばかり。協力するため、指示を出すための理由はあった。
ナミは仲間たちとブロギーに向けて指示を出す。
「それじゃこっちは火を用意しましょう。ブロギーさん、向こうにあったみたいな焚火が欲しいんだけど、力を貸してもらえるかしら」
「いいぞ。もう慣れたもんだ」
「ありがと。ウチの男どもなら好きに使ってくれていいから」
「おい」
「別にいいでしょ？　どうせやることもないんだし」
「そういう問題かよ……」
思わず反応したゾロを黙らせ、ナミは朗らかな笑顔になる。
不服そうにも見える顔だが反論がないところを見ると文句はないのだろう。分かり辛い男ではあるものの意外と分かり易かったりもする。彼の扱いにも慣れた様子だ。
立ち上がるブロギーに続いてゾロも動き出そうとした。
その時、座ったままのキリが目に入る。

いつにも増して静かであった。表情こそ何も変わっていないものの、やはり口数が違うだけで印象ががらりと変わってしまい、何とも言えない異質さを感じる。
ゾロは眉間に皺を寄せた。
右手でガシガシと荒々しく頭を掻き、どことなく困った顔だ。
歩き出す前にゾロは彼に声をかけ、呼び出した。
ついて来いという意図だったようだ。
「何ボサッとしてんだ。行くぞ」
「ん？　ボクも？」
「男だろ」
「そうだっけ？」
「お前……」
「わかったわかった。ちゃんと働くからそんな怖い顔しないでよ」
機嫌よく笑う彼も立ち上がって後ろに続く。
先に森へ向かっていたブロギーを追い、キリとゾロも広場を離れた。
歩きながら、不意にブロギーが振り返ってキリを見る。
「なぁキリよ」
「ん？　ああ、さっきのことなら、ごめん。別に本心じゃないからさ」
「いや、それは別にいいのだが」
ブロギーは穏やかな目で彼を捉えて、何かを感じ取ったか、冷静に言った。
「努力をするのは構わんがな、お前こそ一人で無理をしているのではないか？　これだけ仲間が居るのだ。あまり一人に慣れない方がいいぞ」
「……うん。気をつけるよ」
彼の言葉と佇まいを思い出して、違和感を感じていたのだろう。短くそれだけ言って頷き、再び前を見て歩き出す。
キリが纏う空気の変化には仲間たちも気付いていた。
しかし触れてはいけない気がして指摘する者はおらず、話している

間は今までと何も変わらないため、勘違いかと断じてしまうことも多い。
何気ない会話、宣戦布告、戦闘と、今日だけで様々な顔を見た。
一度冷静になれば不思議に思ったらしく、ブロギーはそう言ったようだった。
彼の後ろを歩きながらキリは微笑みを絶やさず、ゾロは黙して語らない。
奇妙な沈黙が生まれるが二人は特別な反応を見せることもなかった。
楽しげなブロギーの声だけが聞こえてきて、まずは焚火を作る木材を手に入れることと、ついでに恐竜の肉を手に入れようと彼らはジャングルへ入っていった。

＊

開けた場所に大きな焚火が設けられ、夜の闇を切り裂いている。
巨大な恐竜の肉を焼き、傍らには簡易的なキッチンが作られていて、船にあった酒樽も全て運び出され、静かな島内に大声が響いていた。
盛大な宴である。
決闘を終えて互いの健闘を称え、今はどちらも遺恨を残さず、笑顔になっていた。
それぞれが精一杯その時を楽しんでいた。
ドリーとブロギーは指先に酒樽を持ち、上機嫌に喉を潤している。
いつ以来か思い出せない宴に心が躍り、生の実感が得られて、とにかく楽しくて仕方ない様子だ。
やはり海賊の宴は性に合っていた。
意味もなくひたすら騒ぎ、酒を食ってメシを食らって、ただ素直に自由に生きる。
これこそが自分たちの生き方だった。
ルフィが肉を食らい、ウソップが酒を片手に歌って、ナミとビビは

笑顔でそれを聞き、時には茶化したり応援する声を飛ばしていた。
その傍らでは肉を食い過ぎたカルーがぐったりしており、苦笑するイガラムが介抱している。
サンジは慣れた手つきで次々料理を生み出し、時折女性陣へ向かって声をかけるが、どうやら雰囲気作りのために料理をやめないつもりのようだ。
宴は、楽しい。
彼らの輪に加わった二人はようやくその事実を思い出していた。
「ゲギャギャギャギャ！　今日は良き日だ！　もう一度こんなに美味い酒を呑める日が来るとは思っていなかった！」
「ガババババ、確かにそうだ。しかしサンジ、お前のメシは格別に美味いな。ちと量は少ないが今まで食った中で一番美味いかもしれん」
「ったりめぇだろ。味はもちろんだが、まぁ量のことは心配すんな。今に見てろ、お前らの胃袋に悲鳴上げさせてやるよ。一流コックの体力は伊達じゃねぇんだ」
「おおそうか。それなら遠慮はせんぞ」
「上等だ。ぶっ倒れるまでかかって来い」
料理に集中しているとはいえ、サンジもまた楽しそうにしている。
普段からルフィの相手で忙しいが、今日の苦労は倍以上になりそうだ。
しかし料理人冥利に尽きると言うのか、苦労を楽しいと言えるのは嬉しい事態だった。
上機嫌に笑うナミがウソップに声をかける。
酒樽はドリーとブロギーに渡しているが、酒瓶は数が多く、彼女もその一本を呑んで気分が高揚していたらしい。すっかり怯える気持ちを失くしていた。
丸太に腰掛け、隣に座るビビが少し戸惑いながら笑っている。
それでも以前よりずっと柔らかくなった笑顔だ。
「あはははは！　ほらウソップ、黙ってないで次の曲行きなさい！」
「オーケー、オーケー。それじゃファンの期待に応えて作詞作曲キャプテン・ウソップの一曲をお届けしようか。ウソップ応援歌！」

「ウソップさんは歌が上手なのね。それに自分で作れるなんてすごい」
「プロと比べるほどじゃないけどね。所詮は素人で海賊だから」
「うぉい！　聞こえてるぞそこォ！」
悪戯っぽい笑顔で言うナミに叫ぶも、気にせずウソップが歌い出し、さらに騒がしくなる。
それぞれが思い思いに過ごして統一感がないものの、少なくとも幸せそうなのは確かだ。
少し離れて、地面に倒れた樹木がある。
根本の方には太い幹を背にして地面に座るキリが居て、片手には中身の減ったグラス。柔らかい笑みを浮かべて騒ぐ一同を眺めている。
天辺に近い場所にはゾロが座り、キリに背を向ける形で酒瓶を傾けていた。
こちらはひどく静かで、すぐ後ろにあるジャングルの静けさに身を預けるかのよう。
しばし輪から離れていた二人の下へ、酒瓶を持ったシルクが歩み寄る。
彼女も食べ、飲み、歌を聞いて楽しんでいた。その一方で彼らのことも気になったのだろう。
倒れた樹木を前にして二人の間に立ち、両方へ声をかけた。
「お酒、足りてるかな？　瓶ならまだ少しあるよ」
「大丈夫。ボクは困ってないから」
「こっちにもらえるか？　ちょうど足りなくなってたとこだった」
「うん」
シルクに振り返り、ゾロが手を振った。頷く彼女は持ってきた酒瓶を渡してやる。
二人とも地べたに座っていた。
大きな木であるため距離があり、その間を繋ぐように、二人の間でシルクが木の幹へ腰掛ける。
「みんな宴が大好きだね。ドリーさんとブロギーさんも喜んでるみたい」

「船長があれだからね。みんなすっかり毒されてるよ」
「二人も？」
「そりゃもう。ただゾロさんは酒が少ないって怒ってるみたいだけど」
「言ってねぇだろ。怒ってねぇ」
「あはは。次の島までちょっと我慢だね」
「だから怒ってねぇって……あぁ、もういい」
やれやれと首を振るゾロが黙ってしまった。二人はくすくすと笑い声を漏らす。
こうしている限りは以前と何も変わっていない。
ただ、以前と違って今は少し気になることもあって。
笑みを消したシルクは、火に照らされる仲間たちを見ながら、左側に居るキリへ問うた。
「どうして、決闘しようと思ったの？」
「んん？　どうしてって」
「本当に必要だったのかな……」
キリは視線を落とし、グラスに残った酒をゆらりと揺らした。
「さぁ、どうだろう。少なくともボクはそう思ったかな」
「目的は何だったの？」
「それなら話した通りだよ。この先の航海で色々必要になる」
「そっか……だけど、ルフィは」
言いかけた瞬間、ぐっと唇を噛み、言い淀んだ。
一度呑み込みかけた言葉を吐き出し、シルクはどこをともなくじっと前を見つめる。
「ルフィは、納得してなかったと思う」
言えた、と思った。
きっと彼らなら気付いているだろう。他の仲間も、全員がそうかはわからないが、気付いている者は居るはずだ。だが指摘するのは今が初めてだった。
言わずにはいられない。あの空気を感じた後ならば特に。
シルクは幾分緊張した面持ちで、宴の最中ながら、彼の返答を待っ

た。
ゾロは酒を飲む手を止めて口を噤んでいる。
辺りに重苦しい沈黙があった。
キリは、なぜかすぐに答えを出そうとはしなかった。
何かを考えていたのかもしれない。
少し間があった後に、やはり笑みは崩れぬまま、静かな声で言う。
「そうだね。多分、本心じゃ反対だったかな」
「それじゃあどうして」
「ずるいこと言っちゃったからなぁ。クロコダイルの名前を出した」
おどけるようにそう語るが、少し疑問を持つ言葉だ。
シルクは思わずキリの顔を見る。だが彼女の疑問に答えたのは唐突に口を開いたゾロだった。
「ずるいって？」
「クロコダイルを慕ってるってことだろ。それが気に入らなかった、そんなとこじゃねぇのか」
ぶっきらぼうな言葉に驚きが隠せなかった。
その口調にではなく、内容にである。
振り向くシルクはゾロの顔を見るものの、彼は視線を外して背を向けたまま。そのため考えもせずすぐにキリへ視線を戻すと真意を問おうとした。
「そうなの？　でも、組織を抜けてきたって」
「あいつの話をする時、憎しみみてぇな感情は感じなかった。ルフィは勘だけはいいからな。おそらく最初から気付いてたんだろ」
「私はてっきり、逃げ出してきたんだと思ってた」
「それなら追手が来てるはずだ。敢えて見逃されたんじゃねぇのか？」
尋ねたゾロは背を向けたままキリの答えを待っていたのだろう。
困惑するシルクの視線が彼の顔を捉える。
キリは相変わらず宴の様相を見ていた。
「ボクは海賊になりたかった。政治家にはなりたくなかったしね。

国盗りの準備が大体終わったかなって頃に無理言って勝手に飛び出してきたんだ」
「キリも手伝ってたの？　その、アラバスタの暴動は――」
「全部じゃない。ちょっとだけね」
想像できなかった訳じゃない。しかし改めて本人の口から聞かされた今、同じ船に乗る面子の中にビビやイガラムやカルーが居て、動揺が心臓の鼓動を高鳴らせた。
キリ自身は涼しい顔のまま。
視線をグラスへ落としてさらに語る。
「ビビやイガラムには悪いと思ってる。もちろんカルーにも。でも詫びることはできない。過去の全てが今のボクを作ったものだ。今できることは、ボスの作戦を止めることだと思ってる」
「そう、なんだ……」
「ゾロの言う通りだよ。ボスは命の恩人だ。助けられなければ生きようとは思わなかった」
やけに澄んだ眼差しだった。
嘘はない。自分を見ている訳ではないがそれだけは伝わった。
「だけど今はルフィの仲間だから、決着はつけないと。もう迷いはないよ」
「うん……大丈夫、だよね？」
「もちろん。やるからにはちゃんと勝つよ」
そういう意味ではないと思いつつ、シルクは敢えて続きを口にしなかった。
上手く言えないのだが、今は彼が心配だった。
突然、タイミングを見計らっていたかのように、ルフィが彼らの下へ駆けてくる。
左手には肉を持って、頬を膨らませていて、無邪気な様子は子供のようだ。
楽しそうな笑顔でやってきた彼は三人の顔を見回し、弾む声色で誘った。
「お前ら肉食ってるかぁ！　うんめぇぞぉ～恐竜肉！　まだまだあ

るからな！」
「もうお腹いっぱいだよ。流石にルフィほどは食べれないって」
「そうか？　じゃあ歌おう！」
「急に話変わったね」
「だって海賊は歌うんだぞ。早く音楽家仲間にしてぇなぁ～。キリの仲間、ブルックだっけ？　早く迎えに行ってやらねぇとな」
「うん。でもまだ距離があるからさ」
「そっかぁ～」
いつも通りの気楽な会話。
なぜか安心してしまう。
彼らは何も変わっていない。色々あったが、それを忘れさせるくらい雰囲気は悪くなかった。
「じゃあやっぱり歌おう！　音楽家が仲間になった時のために練習しとかねぇとな」
「練習って歌の？　必要かな」
「んん、多分」
「自信はないんだね」
「まぁいいじゃねぇか。とにかく歌いたいんだ」
パッと素早くルフィがキリの右腕を掴み、ぐいっと引っ張って無理やり立たせた。
鮮やかな手並みで彼を連れ去る。
ルフィが先導してキリを引っ張り、戸惑う彼を皆の輪の中に引き戻して、強引だがひどく楽しそうに笑った。終いにはキリも苦笑してしまい、やれやれと首を振って観念する。
「おお～いみんなぁ！　歌うぞ～！　踊れ～！」
「よぉし、キャプテン・ウソップについて来～い！」
「ほら、ビビ」
「わ、私も？」
「当たり前でしょ。あんたも仲間なんだから」
ルフィとキリが戻ってきたことで騒がしさの様相が変わる。
今まで座っていたナミがビビの手を引いて参加し、倒れていたカ

ルーも元気よく立ち上がって、諸手を挙げて先頭に立つウソップは誰よりも大きな声を出していた。
イガラムは微笑ましそうにその光景を眺め、料理の手を止めたサンジが思わず参加する。
ドリーとブロギーは両手を叩いて喜んでいた。
喧騒はさらに大きくなった。
少し離れてその様を眺め、シルクは真剣な顔で考える。
今や自分たちにとって当たり前のその景色が、なぜかとても儚げなものに見えた。
「キリは、命の恩人と戦うんだね。嫌いなわけでもないのに、勝とうとしてるんだ」
「それがあいつの覚悟ってことだろ」
小さな呟きに反応したゾロがすぐに答えを出した。
酒瓶を傾けて中身を飲み干し、厳しい顔のまま彼は闇夜を睨みつける。
「もしかしたら試したのかもな」
「試す？」
「本当に船に乗せとくのかどうかをだよ」
「ルフィが、キリを追い出すって？　そんなの考えたこともないよ」
「うちの船長はどうしようもねぇほどわがままだからな。捨てられねぇんだよ。それこそ自分のポリシーを曲げてまであいつを手放そうとしねぇ。だから決闘を邪魔した〝汚名〟まで着た」
「……うん」
「だがあれでやっとルフィもわかっただろ。あいつが本気だってことを」
シルクは頷き、ルフィの心情を理解した気になる。
彼は子供のように純粋で、わがままで、これと決めたら他人の意見も聞かない。だからといって甘い考えでいる訳でもなかった。おそらく他の仲間たちよりずっと早く覚悟している。
キリを抱える危険性も理解しているはずだ。
それでも彼が傍に居ることを許し、手放さず、共に在ろうとしてい

る。
今、目の前にある光景は少し意味の違ったものに見えた。
ルフィに無理やり腕を取られ、仲間たちと一緒に踊るキリ。
子供のように純真に笑って、驚くほど楽しそうだ。
「みんな、変わろうとしてるんだよね。ずっと同じでなんていられないから」
「それが強くなるってことだろ。少なくともあいつらは前に進もうとしてる」
シルクは少し視線を落とす。
キリはこれまで何人かの人間に命を救われたことがある。
仲間たちが死んだ時はブルックに守られて。その後はクロコダイルに命を拾われて、しばらく経ってルフィに心を救われた。
そして選択を強いられた今、片方と共に進むことを決め、片方と戦う決断をした。
一人で勝手に決めてしまった彼は、どれほどの苦悩を感じたというのだろう。
空になった酒瓶を置き、ゾロが仲間たちの方を見る。
顔は真剣なまま、先程よりは少し柔らかくなっていたようだ。
しかし一方で強い意志を滲ませ、誰かに吐露する訳ではなく小さな声で言葉を吐き出す。
「おれは振り落とされるつもりはねぇぞ。何の因果かあいつらと一緒に海へ出ちまった。てめぇの野望を果たすまで、自分の言葉を裏切るわけにはいかねぇ」
彼の言葉は他人事ではない。
楽しそうに踊る仲間たちの姿を見ながら、シルクは少しだけ笑みを見せた。
「そっか……私も、強くならなきゃね」
どうすればいいのかはわかっていない。だが変わり続けようとしている二人の覚悟を目の当たりにして、このままでいればいい訳ではないと感じさせられた。
それが大人になるということなのだろうか。それとも少し違うの

か。
どちらにせよ、彼女もまた変わるきっかけを得たようだ。
「ゾロとシルクも来いよぉ！」
「お前ら何さぼってんだ！　歌って踊るのが海賊だろ！」
「シルクちゅわ～ん！　早くこっちにおいでぇ～！」
唐突に彼らを誘う声があった。話は聞こえていなかったはずだがずいぶんとタイミングが良い。
シルクの笑みが深まり、さっとその場から立ち上がる。
その時にはまだゾロが座ったままで、彼の背を見るシルクが名前を呼ぶ。
「ほら、ゾロも行こう。みんな呼んでるよ」
「おれはいい。そんな気分じゃねぇしな」
「そんなこと言わずに――あっ」
待ち切れなかったのか、伸びてきた手が二人の腕を掴んだ。
振り向けば満面の笑みを浮かべるルフィがしっかりと二人を捕まえていた。
嫌な予感がする。
ゾロがはっきりと表情を歪め、シルクの笑みが困ったものになり、二人は同時に危機を感じる。
「お、おい待て、お前まさか――！」
「ちょっと待ってルフィ、それはちょっと危ないかなって――」
「にっしっし！　お前らも来～い！」
「うおわっ!?」
「きゃあっ!?」
伸びた腕が急速に縮んでいき、二人の腕がぐいっと強く引っ張られた。
宙に浮いた体は素早くルフィの下まで連れ去られて、危険を感じるほど勢いよく、そしていざ彼のところへ到着しようとした時にはパッと手が離された。
あまりに無慈悲な行動である。
地面に落ちかけたシルクをキリが紙を広げて受け止め、ゾロは為す

術もなく地面を滑る。
相当な勢いで地面を転がるゾロを目撃して、どうやら自らのミスに気付いたのはそれからだったようだ。自分の横を通り過ぎて行った彼を見送り、ルフィが自分の頭を掻く。
受け止めてもらったシルクはほっと息を吐き、キリを始めとした仲間たちは爆笑している。
そんな中で起き上がったゾロは怒りに打ち震え、ゆっくりルフィへ振り返った。
「あっ……わりぃゾロ」
「てめぇおれに恨みでもあんのか？　あ？」
「す、すみません」
凄んだ顔で胸倉を掴まれ、至近距離で睨まれたせいで悪いと思ったらしい。
珍しく素直に謝るルフィは冷や汗すら垂らしそうな顔だ。
次は腹を抱えて笑っていた仲間にも怒鳴り声を発して、刀を抜こうとする仕草まで見せ、それでも本気で斬ろうとしない姿は彼もこの一味の仲間である何よりの証明であった。
しばしのいざこざはあったものの、全員が揃った。
盛り上げ隊長を自称するウソップが口火を切ると次の曲を考え始める。
「やっと全員揃ったな。でだ、次はどうするルフィ。あと何の曲があったっけな」
「あれにしよう。ビンクスの酒！」
「へぇ、そんなのよく知ってるね」
「昔シャンクスたちがよく歌ってたんだ。みんなで歌ったら気分いいじゃねぇか」
「いいね。それにしよう」
「おれァ知らねぇぞ」
「お前は知らなくていいんだよマリモ」
「あぁ!?　なんだとアホコック！」
「まぁなんとなく始めてみればいいさ。こういうのはやってみれば

掴めてくるもんだし」
ドタバタと荒々しく走り、大きな焚火を囲んで、二人の巨人がそれを見守る。
個性ばかりが際立って一向に揃わない踊りと共に、皆が一斉に歌い出した。
「それじゃ行きましょ～！　せーのっ！」
「ヨホホホ～、ヨ～ホホ～ホ～！　ヨホホホ～、ヨ～ホホ～ホ～ホ～！」
伴奏はなく、歌うというより叫んでいるかのような。
それでも彼らは酒瓶や調理器具、皿や骨、そこらにある適当な物を持ち寄り、音を鳴らして、手を叩いて、大声を発して音楽を奏でた。
音を楽しんでこその音楽。
技術は感じられずとも、誰もそれを拒む者は居なかった。
当初は適当に切り上げようと考えていた宴だが、想像以上の盛り上がりで結局朝まで続き。
心から宴を楽しんだ彼らは、眠る時まで幸せそうにしていた。

〝まっすぐ進め〟

朝日が島を照らし出してしばらく。
空が白んだ後で、リトルガーデンを出発する時が来た。
準備と言っても仕留めた恐竜の肉を切り出し、船に乗せる程度のことだ。早朝から慌ただしく動いていた彼らだがやることは意外に少なく、早くも船に乗り込んでいる。
ただその際にもいざこざはあったようで。
出航直前だというのに喧嘩をするゾロとサンジは、もはやいつものことだとして仲間たちからも問題視されておらず、二人だけでいがみ合っていた。
「勝負はおれの勝ちでいいな」
「ふざけんなよ、クソ野郎。決闘で中断された。こりゃ無効だろうが」
「事実仕留めたのはおれの一匹だけだろ」
「ありゃ船を守るために仕方なくだった。いいか、狩り勝負だ。条件をイーブンにして始めてりゃおれの方がでけぇ奴を仕留められた」
「へぇ。なら今からでもやるか？　勝つのはおれだけどな」
「上等だ。お前なんかに負けるわけねぇだろ」
鼻が触れそうなほど顔を近付けた両者は、怒気を滲ませながら言い合いをしている。
議題は狩り勝負の行方について。
巨兵海賊団との決闘に駆り出されたため勝負が中断していた。これにより、船の前方へ現れた恐竜を仕留めたゾロが自身の勝利を主張し、獲物と出会ってさえいないサンジは無効だと主張。勝利に拘る二人は呆れる仲間たちをそっちのけに離れようとしなかった。
すでに出航を決めているのにこの言い合いだ。
巨人を相手にした決闘が終わったばかりだというのに元気なものだと思う。
ただそれを褒める者は少なく、船の上から面白がって見ているのはルフィとキリだけであった。

勝手に終わるのだろうかと放置していたナミがついに動き出す。
いつまで経っても終わらないため、溜息交じりに二人へ声をかけたのだ。
「いい加減にしなさいよあんたたち。食料が確保できればあとはどうでもいいの。出航するからさっさと乗りなさい」
「もうちょっと待て。このアホがいちゃもんつけてきやがるもんだからよ」
「何がいちゃもんだ。ナミさん少しだけ待ってくれ、このマリモ理解力がねぇもんだから」
「グル眉」
「クソ迷子」
「エロガッパ」
「サボテン」
「シルク、頭冷やさせてやって」
「うん」
「うおおっ!? 待ってくれシルクちゃん! わかった、この件は後回しだバカ剣士!」
「チッ、逃げやがったか」
「あぁ!? 誰が逃げただと――!」
「いくよ〜」
結局、彼ら二人はシルクが生み出したかまいたちによって吹き飛ばされ、浅く少ないとはいえ多少の切り傷も負い、ごろごろと地面を転がった。
制圧もすっかり慣れた様子である。
すぐに納刀したシルクは何気なく笑顔で振り返った。
「もう一つのエターナルポースを使う時が来たんだね。次はどこへ行くんだろう」
「行先は〝ドラム〟って書いてあるわ。どんな島かしら」
「いやいやお前ら、あいつらぶっ飛ばしといてナチュラル過ぎるだろ」
手慣れた様子を見ていたウソップは冷や汗を垂らして呟いていた。

慣れとは怖いものだ。今やその風景を疑問視する者は一人として居なかった。
ナミの手の中には海賊島で入手した、もう一つのエターナルポースがある。
アラバスタへ近付くための手段として手に入れた物だが、行先である〝ドラム〟とは果たして本当に近いのかどうか、そこまでの情報を集めてはいない。
今後の航海にも関わるため、ナミはビビへ目を向ける。
彼女はアラバスタの出身。周辺の島にも詳しいのではないかと考えた。
ドラムがアラバスタに近いなら良し。でなければ別の手段を見つける必要がある。
問われたビビは真剣な顔で考えた。
「ねぇビビ、ドラムって知ってる？　アラバスタまで近いのかな」
「ドラム王国ね。それなら知ってる……けど、流石に位置や距離までは」
「そのドラム王国ってどんなところなの？」
尋ねたシルクに頷き、ビビが答える。
「ドラム王国は常冬で極寒の環境にある島。グランドライン一の医療技術で有名よ。少し前に王が変わって以来、あまり良い噂は聞かないけど……」
「現国王であるワポル殿には我々もお会いしたことがあります。傲慢で不遜、その噂も信憑性があると思えて仕方ありませんが」
「やめてイガラム。この場に居ない人を悪く言うのは良くないわ」
「はっ。申し訳ありません」
窘められたイガラムは頭を下げ、即座に謝罪する。
それを見た後、不意にビビは視線を落として、何やら物思いに耽る顔を見せた。
あまり良い思い出はない、ということか。
良い噂を聞かないという点も気になる。どうやら問題がある島らしい。

手の中にあるエターナルポースを見つめたナミは溜息をついた。
「ふ～ん、いわくつきの島ってわけ。あんまり気は進まないわね」
「でもこの島のログは一年かかるらしいから」
「ええ、私たちに選択権はない。ここに行くしかないわ。何も起こらないといいけど」
「そうだね。でもルフィが居るから期待はできないかも」
「はぁ～憂鬱。また危ない目に遭うのかしら……」
「大丈夫だよナミ。今までだって乗り越えてきたんだよ。今度もきっと大丈夫」
落ち込むナミの肩にシルクが手を置き、慰めようと軽く叩いた。
ルフィが居る限りトラブルはつきものだろう。それを悩むのも今更かと思い直して、頭を振ったナミは表情を引き締め直し、前を見た。
そろそろ出発の時が来たのである。
「まぁ、くよくよしててもしょうがないか……サンジくん、食料の積み込みは？」
「ＯＫですナミすわぁ～ん！」
「ウソップ、忘れ物はない？」
「おう！　ばっちりだ！」
「キリ、今から何か言うことある？」
「何も」
「準備は完了ね。ルフィ、そろそろ出航するわよ」
「おう！」
吹き飛ばされたゾロとサンジも戻って、全ての準備が整った。
甲板でルフィが両腕を掲げ、雄々しく叫ぶ。
「野郎どもォ、出航だぁ～っ！」
ルフィの一声によってゴーイングメリー号が出航する。
一隻通るのがやっとという川を進んで、とにかく前を目指した。
これは一時的に別れたドリーとブロギーに言われた通りだ。
彼らがメリー号へ向かう直前、二人は見送りをすると言って先に移動してしまった。
そういえばと口を開くウソップがそれを指摘する。

「師匠たちはどこ行っちまったんだ？　見送りに来てくれるんだよな」
「ああ。そう言ってた」
「きっと島の端で待っててくれるんじゃないかな」
ルフィの隣でシルクが言い、ウソップは船が進む方向を見る。
まだ見えない。彼らの大きな姿はまだ視界にはなかった。
それからしばらく進み、川の終わりが見えて島の向こう側へ出ようという頃、ようやくその姿を見つける。大きな背中がメリー号を待っていたのだ。
ウソップやルフィの顔に笑みが浮かび、嬉しそうな顔でその背を見る。
やはり雄大で偉大だ。改めてそう思った。
しかし、見送りにしては何か緊張した空気を感じて。
腕を組んで立つ二人はピクリとも動こうとしない。
真っ直ぐ前を見つめ、それは二人の間にメリー号が到達しても同じだった。
「お～いおっさ～ん！」
「師匠～！」
「おお……来たな、友よ」
「いや、今日よりは我らが船長。我らの大頭よ」
川を進んで海へ出ようとする。
その頃、二人は麦わらの一味へ聞かせようと語り始めた。
「この島に来たチビ人間が、次の島へ辿り着けぬ最大の理由がこの先にある」
「お前たちと数奇な運命には感謝している。故に我らも誇りをかけよう……」
「友の海賊旗（ほこり）は決して折らせぬ」
「我らを信じてまっすぐ進め。たとえ何が起ころうともまっすぐにだ」
静かながら強い力を感じる声だった。
彼らは、並々ならぬ覚悟を抱いている。迷い、困惑、怒り、悲しみ、

それら全てを捨て去って彼らを仲間と認め、自らの誇りに恥じぬよう、戦士としてそこに在った。
あまりの迫力にルフィが息を呑む。
返答するのに数秒遅れて、頭にある帽子を押さえ、小さく頷いた。
「うん。わかった」
「少し待っていてくれ。我らもすぐにこの島を出よう」
「巨兵海賊団の立て直しだ。いずれお前の下へ集うことを誓う」
メリー号が進む。
川を離れて海へ到達し、尚も止まらず前を目指す。
二人はそれを見送ろうとしていた。
不思議な心境だった。
前を見つめたままでブロギーがドリーへ声をかける。
「長く苦楽を共にした。この斧もその剣も寿命だな」
「未練でも？」
「未練ならあるさ。百年以上戦い抜いた。最高の相棒だ」
「確かにそうだな……だが今は惜しくない」
「ああ。おれたちも新たな船出に漕ぎ出さなければならない」
二人が剣と斧を持ち出し、眼前に構える。
「我らの誇りは永遠に共に在る。感謝するぞ」
「さあ、最後の戦いだ。仲間たちを送り出すぞ」
メリー号の上で不思議そうに首を捻る者も多い中、二人は決闘に挑む顔つきで、凛とした立ち姿で微動だにしない。何かが始まるのだろうか、と想像するのも当然だった。
ちらほらとだが視線が船の前方に向き始める。
その時、海水が盛り上がり、水中から何かが現れようとしていた。
あまりにも巨大なそれらは巨人すらも超えかねない大きさで、揺れる大波で船が揺れ、船上には一気に混乱が広がっていく。
しっかり制御しなければ転覆しかねない。
水面を荒らす巨大生物が、彼らの前に立ちはだかったのだ。
「な、何あれっ!?」
「出たな、〝島喰い〟」

「道は開けてもらうぞ。エルバフの名にかけて」
巨大生物の顔がはっきりと海上へ現れる。
それはあまりにも大きな、一匹の金魚だった。
島すら食しそうな巨体が立ちはだかり、比べるまでもなく一飲みされてしまう大きさ。船上からは大きな悲鳴がいくつも上がる。
「んなっ、なんか出たぁ!?」
「何なのよこいつは!?　海王類!?」
「でっけぇなぁ。金魚か？」
「きょ、巨大金魚？　どっかで聞いたような……」
ウソップとナミが悲鳴を発する一方で、ルフィは首をかしげて不思議そうにしていた。
彼らの前で島ほど大きい金魚が大口を開ける。ただそれだけの挙動で海が揺れ、波が普段の静けさを忘れて荒れ狂い、メリー号は吸い込まれようとしている。
こいつは船ごと船上の人間を食べるつもりだった。
悲鳴は大きくなるばかり。特にナミはすぐに針路を変えるべきと判断したようだ。
「ウソップ、急いで舵を切って！　逃げないと食べられちゃう！」
「だ、だだ、だめだっ。このまままっすぐ進む……！」
「何言ってんのよ！　だからそれだと食べられるって――！」
「まっすぐ進む、そうだろルフィ！」
「うん。もちろんだ」
驚きは大きく、見るからに危機的な状況。その中でルフィは笑った。
これを言っていたのだ。
ならば約束を違える訳にはいかない。彼らの言葉を信じてまっすぐ進むのみ。一瞬の判断でそう決めた船長は迷わず頷き、ウソップは怯えながらもぎこちない笑みを浮かべる。
だが今はまだ総意ではない。
焦る仲間たちの声が次々飛んで、すでに迷いのないルフィに問いかけずにはいられなかった。

「バカ言わないでよ！　早く船を動かさなきゃ私たちは……！」
「まぁそう慌てんなって。せんべい食うか？」
「食ってる場合かっ！」
「ナミ、諦めろ」
「おいルフィ、あいつら信用できるんだろうな！　後戻りはできねえぞ！」
「ああ！　このままっすぐ進め！」
ゾロに声をかけられたナミが諦めてしまうと、サンジが焦りを滲ませて叫ぶ。
それでもルフィは揺らがなかった。
決意を込めて力強く答え、あくまでもメリーは前を目指す。
「正気!?　本当にあの怪物に突っ込んでいくの!?」
「ビ、ビビ様、ご安心をっ！　何があろうと、このイガラムめがお守りいたします！」
「クエ～ッ!?」
「まぁ、今更じたばたしたところで無駄だよ。もう間に合わないし」
ビビやイガラムが狼狽して、カルーが叫ぶ一瞬に、キリが気合いの抜けた顔で呟いた。
直後にはメリー号が金魚の口の中へ突っ込んでいく。
そして、口は静かに閉じられた。
その様を眺めて尚、二人は冷静なまま。
にやりと口角を上げ、掲げた武器が下ろされた。
時は来た。
自らの誇りをかける一瞬だ。
仲間たちは自分たちを信じてまっすぐ進んだ。ならばその期待に応えなければならない。
その前に彼らは穏やかに語り合い、次の一撃に集中する。
「育ちも育ったり、島喰い。この怪物金魚め」
「驚くのはこいつのでかさだけじゃない。その辺の島を食いつぶして出すこいつのフンのでかさと長さよ。確か、何もない島という巨大なフン」

「ゲギャギャギャギャ！　昔大陸と間違えて上陸しちまったのを覚えてる」
「懐かしい冒険の日よ。奴らを見てると昔を思い出す」
「なに、これよりは我らもその一味だ」
「ああそうだった。ではこれが最初の冒険となるやもな」
ゆっくりと、だが確実に、力を込めて構えを取る。
己の得物を構えた二人は見る者を震えさせる迫力を醸し出していた。
「我らに貫き通せぬものは〝血に染まるヘビ〟のみよ」
「エルバフに伝わる巨人族最強の槍を見よ……！」
動きが止まり、準備は整った。
メリー号は金魚の中を尚もまっすぐ進んでいる。約束を違えることなく、まっすぐ。
仲間の言葉を信じ、この選択は間違っていないのだと信じて。
震えるウソップは目を閉じて、自分に言い聞かせるように呟いていた。
「まっすぐ……まっすぐ……！」
「何言ってんの！　もう食べられちゃったわよ！」
ウソップに呼応するようにルフィもまっすぐ前を見つめ、力強い声で叫んだ。
「まっすぐ！　まっすぐ！」
メリー号には様々な感情がある。
不安、動揺、恐怖、或いは余裕や冷静さを持ち合わせる者も居た。
様々ではあるが、誰もが総じて救いが来るのを待っているのは同じだった。
金魚の体内で叫び声が木霊し、何度目かで反響した声が戻ってきた時のこと。
突然、風を感じた。
背後では口が閉じられ、体の奥へ向かって進む道の半ば、どこからか現れた追い風がメリー号を押している。まるで彼らを出口へ導くかのように。

外では、ドリーとブロギーが武器を振り抜いた後だったのだ。
彼らが振り下ろした武器が目には捉えられない斬撃を生み出し、凄まじい勢いを誇る一撃が島喰いの体を捉え、一瞬の後にはその肉体を貫いていた。
視界が開ける。
彼らの一撃が道を作って、吹き飛ばされた肉体の向こうに大海原が見えた。
メリー号は追い風に乗って飛び出し、空を舞って外へ出たのである。
「覇国ッ!!!」
巨人族最強の槍は、島を食うほど巨大な生物を一瞬で切り捨て、さらに海まで割った。
想像もできぬほどの強烈な一撃である。その力をまざまざと見た彼らは心底驚き、だが一瞬にして景色を変えた事実に笑みさえ浮かび、喜んですらいたようだ。
メリー号が空を飛んだ。
たったそれだけでも喜びを噛みしめる理由にはなった。
全力を込めた一撃を終えて、長く苦楽を共にした武器が折れた。
剣は刀身が折れ、斧は柄が折れて刃を失くす。
それでもいい。ただ満足だった。
彼らの〝槍〟は仲間のために、誇りのために、確かに敵を貫いたのだ。
二人は折れた武器で道を示すと大声を発し、旅立つ仲間の背を力強く押した。
「さァ行けェ!!」
役目を終えた刃が地に落ちた。
同時にメリー号は海へ着水した後、振り返ることなく前へ進む。
ただひたすらにまっすぐ。
迷いのない彼らの動きに安堵した二人は、手の中にあった柄を放り投げ、その背を見送った。
いずれまた再会する。

その時まではしばしの別れ。
一仕事終えた彼らは船が見えなくなるまでその場を動かず、後にメリー号が姿を消すと、何を言うでもなくその場へ座った。
何やら、真剣な顔で話し始めるのである。
「なぁブロギーよ、おれにはどうしても気になることがある」
「んん？　奇遇だな。おれもずっと考えていた」
「あの二人が言っていた言葉……狩り勝負、か」
「何かがあった気がするんだが、なんだったかな？」
首を捻る二人は思い出そうとするのだが、なぜかどうしても思い出すことができず。
どうやら忘れてしまったようだ。
彼らが決闘を始めた理由は、狩り勝負と、ある少女がきっかけになった。
巨兵海賊団の船長、ドリーとブロギーが仕留めた二匹の大型海王類。果たしてそれはどちらの方が大きかったのか。素朴な疑問から負けず嫌いの言い合いになり、決闘へと発展したのである。
長い時の果てに、事実を覚えているのは一人だけ。
決闘の引き金を引き、彼らへ手紙をしたためた、件の少女だけだった。
考え込んでいる間に真ん中山が噴火する。今日も大きな音を立てて黒煙を舞い上げ、すっかり習慣となったせいで咄嗟に二人が振り返り、その様子を確認した。
互いに顔を見合わせてにやりと笑う。
しかしそれが間違いだったとは直後に気付いた。
「おっ、真ん中山が」
「まぁいい。それより今日こそ――っと、そうではないのだったな」
「ああそうだ。おれたちの決闘は終わった。もう一つの決闘の決着でな」
武器が折れたとはいえ、闘志は衰えず。気付けば殴り合いでも始めようかと拳を握っていた。
しかしそうではない。

すでに自分たちの決闘は終わった。島の外から来た者たちによって。
それを受け入れ難いと思う瞬間もあったものの、経験してみてやっと気付けたことがある。今は彼らに素直な感謝をして、島を出られる喜びを抱いていた。
百年、戦うことしか知らなかった二人が再び肩を並べた。
やはりこの方が居心地が良い。
誇りを捨てずにそう立てたことが嬉しくて、二人は開戦の合図を告げる真ん中山に背を向け、呆れるほど遠い記憶を思い出しながら共に海を眺める。
「長いエルバフの歴史があろうと、これほど奇妙な審判を受けた者は他にはいまい」
「ああ。時として神は粋なことをなさる」
「さて、何から始めればいいものかな。久しぶり過ぎて何から手をつけていいかわからない」
「まずは船だろう。この島から出なければな」
「イカダでも作るか」
「海賊島に向かうのもいいかもしれない。どうやらおれたちの友もそこに居るらしいし、ついでに船を造ってもらおう。おれたちに相応しい良い船だ」
「ガババババ、良い案だ」
「では始めるか」
落ち着いて話し合った後、二人は同時に動き出した。
今日からは生活も一変する。
考えてみればやらなければならないことは山ほどある。故郷へ帰ること、古い友人に会うこと、そしてそれ以上に優先すべきは自らの船長に力を貸すこと。あの小さくも勇敢なる一味は二人を打ち負かした勝者であり、これからは船長と仰ぐべき存在だ。
いつまでも住み慣れた庭で二の足を踏んでいる場合ではない。
彼らがそうしたように、決断して、勇気ある一歩を踏み出さねばならないのだ。

ひとまずは船が必要だろう。
島にある物で簡易的でもイカダを造って外へ出ようと考えた。
海賊として海へ出るのは百年ぶりになる。
自分で思っている以上に胸の鼓動が高鳴り、ワクワクして、子供のようにはしゃいでいる。
きっと彼らに影響されたのだろう。感情のままに生き、心から笑って、本気で戦って、どの瞬間を切り取っても精一杯だった姿を思い出し、躍る心で歩き出した。

ドラム編
アラバスタへ向けて≠緊急事態

穏やかな波の海をメリー号が進む。
空は快晴。心地の良い風を感じて気分のいい日和だ。
メリー号の船尾にはゾロの姿がある。
長い棒に分厚い重りを付けて、素振りをするように繰り返し振り下ろしては止める。自らの肉体を苛め抜き、さらに鍛え上げようと努力する様だった。
上半身は裸で、全身に汗を掻いている。
すでに数十分は降り続け、回数は二千回を超えていた。
真剣な眼差しは海に向いているが、見るものはそこではなく、ここではないどこか。
敢えて言うならばさらに先というところか。
自らの成長を望み、更なる強さを見据えるようだ。
（もっと強くならねぇと。それこそ巨人に勝てるくれぇに）
ゾロは静かに考える。あの決闘を勝利とは思えないと。
自分にもっと力があれば、一騎討ちで相手を斬り倒すことができたなら。
目指すのは世界一の大剣豪。
この程度では全く足りないと考え、彼は自分を責めるように厳しい鍛錬を続ける。
（まだまだ甘ぇ……もっと強くならにゃあっ）
彼は一人で黙々と鍛え続ける。
しかしそれはいつものことでもあって、仲間たちが敢えて邪魔するような事態はあり得ない。そのため他の仲間たちは甲板で自由に過ごす者が多かった。
はしゃぐ様子でルフィとウソップが駆け回っている。肩を組んで笑顔になり、先程見たドリーとブロギーの一撃が忘れられないのだ。
気付けば自作の歌まで歌い始めている。

彼らは偉大な戦士の姿に興奮し切っていて、今から夢を膨らませているようだった。
「よぉしいいかお前ら、おれはいつか絶対エルバフへ、戦士の村へ行くぞぉ！」
「お～！　行こ～！」
ドタバタと騒がしく、楽しげに、疲れもせず駆け回る彼らは元気だった。
マストの傍に居たシルクは微笑ましげにそんな二人を見ている。
ふと視線の先を変えた時、マストにもたれるようにして座っているナミが目に映る。
今日は特に静かだった。普段から騒ぐ人物ではないとはいえ、まだ出航してから幾ばくも経っておらず、航海に疲れたと言うには早いし、彼女は体力もある。
具合でも悪いのかもしれない。
その場へしゃがんだシルクはナミの顔を覗き込む。
やはり顔色が悪い。
よく見れば呼吸も荒いように感じられて思わず眉間に皺が寄った。
心配した顔のシルクはやさしく彼女へ問いかけ、視線が合った瞬間に確信が強まる。
「ナミ、大丈夫？　体調悪い？」
「んん？　あー……確かにちょっと熱っぽいかも。前の島ちょっと暑かったから、サンジ君がせっかく毛布持ってきてくれたのに起きたら蹴っ飛ばしちゃってたのよね」
「風邪かな。寒気はある？」
「そんなに心配しなくても大丈夫よ。少し寝れば治るから」
苦笑する彼女はそう言うが、素直に受け止める気にはなれなかった。
今まで軽く体調を崩すことはあっても、ここまで明確に顔色が悪くなったのは見たことがない。強がっているだけできっと辛いはずだ。皆に心配させまいとして我慢しているのかもしれないが、そう考えれば余計に心配が大きくなり、シルクは前のめりに彼女へ近付いた。

そっと伸ばした右手で額に触れる。避けようとしたらしいナミは逃げきれずに諦めた。
触れてみればより顕著だ。
掌ではっきりわかるほど熱い。これで大丈夫など、信じられるはずがない。
「やっぱり熱あるじゃない。大丈夫なんて嘘ついちゃだめだよ」
「別にこれくらい、どうってことないわよ」
「だめ。無理しちゃ体に良くないんだから、すぐ部屋に戻ろう。辛い時はゆっくり休まなきゃ」
「はぁ……シルクには敵わないわね。わかったわよ、わかりました。ちゃんと寝ますぅ」
「ちゃんと休めばすぐに良くなるから大丈夫。行こう」
「あ、ちょっと待って」
シルクがナミの手を引っ張り、力を貸して立たせてやる。
その次に歩き出そうとするのだがナミが止め、持っていたエターナルポースを取り出した。
海を眺めていたビビが心配して近付いてきたため、彼女に手渡すのである。
「ビビ、悪いけどこれ、キリに渡しといてくれる？　キリに任せれば大丈夫だから」
「わかったわ。こっちは任せてゆっくり休んできて」
「そうする。じゃないとシルクが怖いしね」
「ナミが無理しようとするからだよ」
「あはは、そうね……大丈夫、今から、ちゃんと――」
ふらりと、唐突に足が揺れた。
あっと思った瞬間にはシルクが手を伸ばしていて、すんでのところで受け止めた。
ナミは唐突に意識を失ったのだ。
狼狽する二人の声が辺りへ響き渡り、他の面々にも異変が伝わる。
「ナミっ!?」
「ナミさん!?　みんな来て！　ナミさんが！」

「どうしたんだ？」
「んナミさぁ～んっ！　何がありましたかぁ～っ！」
傍に居たルフィとウソップは当然として、彼らに負けず劣らずの速度で船内からサンジが現れ、慌てた歩調で近付いてくる。それから少し遅れて船尾からゾロが、船内からキリとイガラムが姿を現し、カルーも不思議そうな顔でやってきた。
全員の目に倒れたナミが映る。
シルクに抱えられた姿は普段と違って弱々しく、呼吸も荒れ、ひどい顔色だった。
次第に全員が気付き始める。ナミの体に異変が起こった。
特にサンジなどは心配から激しく取り乱し始めて、普段の冷静さをかなぐり捨てて騒ぎ出し、それにつられてルフィやウソップも大声を出さずにはいられない。
「ナミさんっ!?　そんな、一体何があった!?」
「熱があるみたいなの。今は、意識を失ったみたい」
「意識を失うほどの熱ってどんなだよっ」
「なんだ？　やべぇのか？　病気か？」
実感がないのか、ルフィが首をかしげていた。
どうやら混乱している者の方が多く、冷静に状況を見れる人間の方が少ない。それだけかつて経験したことのない状況だ。
とにかくナミの身が心配である。
このまま甲板に置いていていいはずがなく、速やかに移動すべきだった。
混乱する船上の空気を変えようとビビが口を開く。
彼女は比較的冷静な状態にあって、医学とは呼べないまでも、看病の経験もある。
こうした不測の事態にも耐性があり、どうすればいいかを理解している。そのためすぐにシルクと視線を合わせ、ナミを室内のベッドまで運ぼうと決めた。
「まずはナミさんを運びましょう。ここに置いておくのは危険だわ」

「うん、そうだね」
「ナミさぁ～ん!!」
「サンジ、大丈夫だから落ち着いて。水とタオルを用意してくれないかな。あと体温計」
「わかったァ！」
「お、おれも手伝う！」
シルクの言葉を受けたサンジが駆け出し、手伝いのためウソップも走る。
それからビビが不思議そうに覗き込んでくるルフィに目を向けた。
「ルフィさん、ナミさんを運ぶのを手伝って」
「わかった」
「それとキリさん、これを……ナミさんから預かっていたの」
「うん。針路はこっちに任せて、ナミを頼むよ」
「ええ」
ビビの手からキリへエターナルポースが渡る。
受け取った彼は深刻な顔で、ひどく心配している様子だった。
珍しい物を見た気がする。場違いとはいえそう思いながらもルフィに手伝ってもらい、ナミを運んで船内へ向かい、女子部屋へと入っていく。
ナミをベッドに寝かせて布団をかけた。
呼吸は荒く、頬は紅潮してひどく汗を掻いている。
見るからに辛そうな姿にはシルクとビビも困惑してしまう。
そう時間もかけずにサンジとウソップが部屋へ飛び込んできた。サンジが水の入った器を持ち、ウソップが体温計を持ってきたようだ。
荒々しい足音でドタドタと騒がしい。
思わずシルクが窘め、二人は瞬間的にぴたりと止まる。
注意しながら持ってきた物を差し出し、受け取った二人がすぐ動き出した。
「すごい汗……ただの風邪でここまで辛そうになるのかな」
「シルクぢゃんっ、ナミざん死ぬのがなぁ……！　なぁ、ビビぢゃ

んっ」
心配のせいか泣きじゃくり始めたサンジが声を揺らしていた。
本来ならば大丈夫だと伝えてやりたい。しかしなぜか、嫌な予感がしていた。
シルクが体温計を脇へ差し込んでやる一方、ビビが彼女の汗を拭いてやる。
顔色を見る限り、状況は決して良さそうではない。
「おそらく気候のせいだとは思うけど……グランドラインに入った船乗りが必ずぶつかる壁、それが異常気象による発病。どこかの海で名を上げた屈強な海賊でも、これによって死亡するなんてことはざらにある話よ。ちょっとした病状でも、油断が死を招く」
「うううぅっ、ナミざぁん……!」
「だけど今まで大丈夫だったのに。グランドラインに入って少し経つんだよ」
「確かに、年単位でこっちに居る人は慣れるかもしれない。でもあなたたちも含め、ナミさんが来てから一ヵ月も経っていないわ。慣れた人でも危険なのに、何があってもおかしくない」
「そっか……それにしても、こんなに急なんて」
気落ちした顔でシルクがナミを見つめる。
今朝まで元気だったのだ。それが急に倒れてしまい、その変化に驚かないはずがない。
命を落とす危険は、戦闘にだけあるのではない。今になってそれを実感したのだが、その時にはナミが危険な状態にあって、気付くのが遅過ぎたとも言える。
自分たちの弱点は船医が居ないこと。
専門知識もなくここまでやって来れたのが奇跡なほどで、改めて医者の必要性を理解する。
「この船に、少しでも医学をかじってる人は居ないの？」
振り返ったビビが尋ねる。
サンジは腕で涙を拭っているものの、ルフィとウソップの二人と目が合った。

彼らは全く同時に動き出して、寝込んでいるナミを指差す。どうやら医学を持っていると言えるのは彼女だけだったらしい。
思わず唸って俯いてしまった。やはり危機的な状況だ。
ビビが心得ているのは怪我の応急処置のみ。看病の経験はあっても病気を治す知識は持ち合わせてはいない。それはシルクも同じで、看病はできても他人を治療できるほどの腕はなかった。
希望が潰えた気すらして、室内に重苦しい空気が漂う。
その時、シルクがパッと顔を上げた。
「キリはどうかな？　キリなら医術の心得もあると思う」
「お～そうだな。キリならなんとかしてくれるさ。おれ呼んでくる」
シルクの問いかけにルフィが笑みを浮かべ、喜ぶ足取りで部屋を出て行く。
もはや最後の希望だ。
彼にどうにもできないなら他所で医者を探すしかないだろう。
沈黙に包まれる。
その中でシルクが体温計を手に取るが、結果を表示したそれを見て目が見開かれた。
「四十度……!?　かなり高熱だよ」
「本当にただの風邪なのかしら。突然こんなに熱が上がるなんて……」
「連れてきたぞ。これで治るかな」
元気のいい様子でルフィが戻ってきた。後ろからはキリが続く。
ルフィが途中で足を止めるのとは違いキリがベッドへ歩み寄って、傍らに座るビビとシルクを見つめる。状況を見れば仕方ないが緊迫した空気だ。
「ナミはどう？」
「熱が四十度あるよ。それにすごく辛そうだし……」
「原因は何かしら。キリさん、医学の心得は？」
「怪我の治療ならある程度できるけど、病気についてまでは学んでなかった。ボクも仲間も丈夫な方だったし、専門的なことは船医が

やって、手伝いしかしなかったから」
「そう……」
最後の希望も潰えた、といったところか。
ビビが俯いてしまったことで空気がさらに重くなった気がする。
彼は悪くないとはいえ、期待していただけにこの状況では気落ちするのも無理はなかった。
シルクがナミの額に濡れたタオルを乗せる。
目を覚ます様子はない。それなのに辛そうな顔で、見ている方も辛かった。
ベッドに近寄ったキリが彼女の顔を覗き込む。
医術は持たないが、状況を分析する能力は長けている。これまでの経験や、現在と少し前の状況を考え、これからどうすべきかを決めようとしていたのだろう。
突然の発熱。気になる一点はそこだった。
「だけど急だね。どうしてナミだけ熱を出したんだろう」
「それは、やっぱり航海の疲れが出たんじゃないかしら。グランドラインの異常気象は海賊だけでなく全ての船乗りを苦しめるわ。今までの疲れが出たとしか」
「ナミは強いよ。少し考えにくい気はするけど」
「それじゃどうして」
「気になるのは熱が四十度もあるってことだ。これだけを考えてもあまり普通じゃない。それに昨日や今朝まで元気だったんでしょ？」
「うん。いつも通りだったよ」
シルクが答えたことでキリが真剣に考え込む。
少しの間会話が止まったことがきっかけで、やけに重苦しい空気が醸し出されるため、ルフィは小声でウソップに言った。
「病気ってそんなに辛いのか？」
「いや、そりゃかかったことねえし……」
「実はおれも」
「あなたたち一体何者なのっ!?　今まで一度も!?」
「あ、みんなはちょっと普通じゃないから。人一倍元気なんだよね

？」
今までルフィがピンと来ていなかったのは病気にかかった経験がないからのようだ。それだけでなくウソップも自身の体では病気を知らないらしく、サンジも同意する。
本当に人間なのかと疑う事実にビビが狼狽していた。
初めて聞いたはずのシルクは平然としているが、やはり彼らはどこか普通ではないらしい。
口を閉ざして考え込んでいたキリが振り返る。
いまいち緊迫感のないルフィを見やり、教えてやるため言葉を吐いた。
「簡単に言うと肉を食べる気力も無くなって、むしろもう食べたくないとすら思うのさ」
「なにっ!? それは大変だ！ おいナミ、お前肉食いたくねぇのか？」
「お前の基準はそれか」
「まぁあながち間違いでもねぇが、そういうことじゃねぇだろ……」
即座に理解したらしいルフィが見るからに表情を変え、ナミを心配し始める。
すぐ隣でその様を見ていたウソップとサンジは呆れてしまい、言葉も出ないようだ。
キリが口を開いたことでシルクが彼を見る。
状況を理解したとは言ってもルフィはやはり間の抜けた返答であり、こうした事態で頼るのならばキリだろう。彼の考えが聞きたかった。
今は想像以上に由々しき事態である。
自然と顔に焦りが現れた。
「どうすればいいのかな……」
「考えられる可能性の一つとして、前の島がある。リトルガーデンだ。あそこは恐竜の時代の生態系がそのまま残されていた。ボクらが知らない病原体が居てもおかしくはない」
「そんな。それじゃあ、医者に診てもらったとしても治せるかどう

か――」
「えええええええっ!?　嘘だよなキリ！　ナミさんは助かるんだよな!?　なァ!?」
「ナミは死ぬのかァ～っ!?」
「ギャアアアアアッ!?　大変だアァァ!?」
「ちょっとみんな、落ち着いて！　助からないって決まったわけじゃないんだから！」
話の途中で焦りを募らせた三人が騒ぎ始め、止めるためにシルクの声も大きくなる。
一方、静かに考えていたビビは何かに気付いた顔だった。
視線はキリとぶつかる。
騒ぐルフィたちに負けぬよう、決して大きな声ではないが彼に問いかけた。
「医者を探すぞ！　ナミを助けてもらおう！」
「待てよ、その医者ですら治せるかどうかは微妙なんだぞ！　そうだ、師匠たちならどうだ!?　ずっとあの島に居たんなら何か知ってるかもしれねぇ！」
「ナミざんじなないでぇ～!!」
「みんな落ち着いてって！　もうっ、騒ぐなら外に――」
「ドラムなら……ドラム王国なら、助かるかもしれない……？」
「うん。可能性があるとすればそれだけだ」
ビビの呟きにキリが頷いて同意する。
それを聞いて室内の喧騒がぴたりと止まった。
助かる方法があると知り、冷静さを取り戻した彼らは詰め寄るようにして耳を傾ける。
「ドラム王国はグランドライン随一の医療技術を持っている。そこに居る医者なら、四十度の熱を出してようが謎の病原体にやられてようが治せるはずだよ。多分ね」
「最後の一言が不安だが……ナミさんは助かるんだな？」
「助けられる。奇跡的にエターナルポースもあるんだ。これが最後の希望になる」

「よっしゃあっ！」
「急ぐぞドラム王国～！　ナミを助けてもらうんだぁ～！」
「わかったから静かにして！　ナミが寝てるんだから！」
またしても三人が騒がしくなり、怒ったシルクがついに能力を使って彼らを吹き飛ばす。室内をごろごろ転がってようやく静かになりそうだ。
ふぅと息を吐いてシルクが席に座る。
すぐに起き上がる三人はまた戻ってくるが、今度は不用意に騒ごうとしない。
静けさを取り戻した後で改めて確認する。
現在の目的は一つ。ナミを医者に診せて病気を治すこと。
そしてそのためにドラム王国を目指さねばならない。
しかし不安もあった。
それを口にするキリは不安を募らせるようだった。
「エターナルポースがある以上、ドラム王国に辿り着けるのは間違いない。問題なのはそこに着くまでの道のりだ。目的地がわかってることと航海が上手くいくことは別問題」
「今はナミが居ないから」
「航海士が居ると居ないじゃ大違いだ。ここまではナミが全部やってくれてたけど、彼女が居ないことで出てくる影響は大きい。正直、ボクじゃ力不足だろうね」
「それでも行くしかねぇんだろ。それにおれたちの中じゃキリが一番任せられる」
ウソップの言葉に視線を落とし、手の中にあるエターナルポースを見る。
航海術を専門的に学んだ訳ではない。確かに一人で航海することもあった。だがそれはあくまで己自身を守ればいいだけであり、同時に、その頃は自らの命を捨てていいとさえ思っていた。
状況が違う。
今は仲間の命を守らねばならず、死にたがりの一人旅ではない。肩に重責がのしかかり、自らのミスが皆の命を危険に晒すことを実感す

る。
　それでもやらなければ。
　小さく息を吐き、顔を上げた彼は仲間の顔を見回した。
「やるしかないね。時間がどれだけ残ってるかはわからない。ナミの体力が尽きればアウトだ」
「その前にドラム王国に着く」
「医者を探して、ナミさんを助けてもらう」
「ついでに船医を見つけるのもいいかもしれない。ドラムの医療技術が常にあるなら安心だ。とにかくみんな、ここが正念場だよ」
「おう！」
　元気よくルフィが頷くと共に、他のみんなも力強く頷く。
　今こそ力を合わせる時。ナミを守り、助け、誰一人欠けることなく先を目指すのだ。
「看病はシルクとビビに任せる。協力が必要ならすぐに言って。誰を使っても構わないから」
「うん、わかった」
「任せて」
「他は全員船を動かすよ。全速前進、可能な限り早く到着しよう」
「よぉし！」
「任せろォ！」
「待っててくれナミさん、おれが必ず助けるからね……！」
　四人は勇む足取りで女子部屋を後にする。
　残った二人は苦しげなナミの顔を見つめた。
　いつになく緊迫した状況だ。これまで敵に直面して戦う機会も多かったが、相手が病魔では守ることも難しく、こればかりは医者に任せるしかない。
　見守るしかないというのは自分が病気になるより辛い気がする。
　今できることは限られているため、二人は慎重に彼女の看病へ全力を注ぎ始めた。
　その間に男たちが操船し、速度を上げる。
　ドラム島に着きさえすればナミを助けられるはず。

目的が定まったことで士気が上がり、彼らは忙しなく甲板を駆け回った。
「医者舵いっぱ～い！　ナミを助けに！」
「さっさと動けクソども！　ナミさんが苦しむ時間を一秒でも短くするんだぞ！」
病状がわからない以上、どれほど危険なのかがわからない。そのため急ぐ必要がある。
メリー号は全力で海原を駆け、まだ見ぬ医療大国を目指した。

奔走

昼を過ぎ、夕刻が近くなる頃になれば、いつの間にか気候が変わり始めていた。

急激な気温の変化があったのである。

辺りは防寒着を必要とするほど寒くなり、それでいて島の影はない。どうやら冬島の影響を受けるのとはまた別の要因で冷え込んできたらしかった。

ドラム島に近付いた影響と考えられなくもないのだが、少なくとも到着はまだ先になる。

日が傾くにつれ、クルーは頭を悩ませていた。

夜の航海は危険だ。本来ならば避けるべきであり、強行すべきタイミングではない。しかしナミにどれほどの体力が残されているかも心配で、一刻も早く前に進みたかった。

エターナルポースがあるとはいえ、具体的な距離はまだわからない。

無理をしてでも先に進みたいが、全滅しては元も子もなく、判断に困る。

島に近付いているのは確実だった。

問題はあと何日で到着するか、それまでナミが耐えられるか。

焦りが募る一方、冷静で居ようとする思考が確実な航海を求め、判断する必要がある。

思い悩むキリは小さく溜息をついた。

「流石に夜の航海はまずいか……仕方ない。日が落ちたらどこかに錨を下ろそう。無理な航海は逆効果だ。特に航海士が居ないときは慎重に動いた方が良い」

「でもよ、イーストブルーに居たときは夜間の航海もあったろ？あれじゃだめなのか？」

「グランドラインは向こうより危険だ。動ける人数にも限りがあるし、無理はできない」

「それもそうか……くそう、できるだけ急ぎてえのによ」

キリの隣で話を聞いたウソップがううむと唸る。
心配するからこそ先を急いでいた。だが冷静さを失えば全滅もあり得る。
これがグランドラインの航海。
その恐ろしさを今更知ったと言ってもよい状況で、彼女が倒れたことで学ぶこともあるが、それだけに先を急ぐという姿勢が変えられそうにないのも確かだ。
もうしばらく我慢してもらうしかない。
強く決断したキリは船長に意見を仰ぐため、船室へ向かおうと振り向いた。
「ルフィの意見を聞いてくる。ここは任せた」
「おう」
ウソップに後を託し、キリが女子部屋へと足を運ぶ。
現在も手厚い看病が続けられていた。
室内にはビビとシルクが居て、ルフィとカルーもナミの顔を覗き込んでいる。というより話しかけてすらいるようだ。返答が返ってくるはずもないのだが陽気な声が聞こえている。
「やっぱり腹空かしてんじゃねぇのかなぁ。だったら肉食ったらどうだ？　肉百人分食ったら病気なんかすぐよくなるぞ、ナミ」
「病気になるとお肉を食べる力も無くなるんだよ。キリが言ってたでしょ？」
「そうだったっ。う～ん、じゃあどうすりゃいいんだろうなぁ……水とかぶっかけてみたら治んねぇかな？」
「だめよルフィさん、それは絶対にだめっ。むしろ悪化するだけよ」
「そうか？　熱そうなのに」
自身が病気になったことがないルフィは能天気な意見を口にしている。
きっと本人はナミが心配で言っているだけなのだろう。心からの善意しかないはずだった。
しかしそれにしてもひどい意見である。
苦笑するキリは彼らの下へ足を運び、振り向く視線を受け止めた。

「あ、キリ」
「もう夜も近い。日が落ちたら錨を下ろそうと思うんだけど、どうかな？」
「急いでるんじゃねぇのか？」
「もちろん急いでるよ。でも夜の航海は危険だ。特にナミの意見がない状態なら余計に危ない。ここは無理をしないのが、ナミのためだけじゃなくて一味のためだよ」
「そうなのか。じゃあそうしよう」
あっけらかんと答えるルフィはナミの方へ振り返った。
「あのなナミ、夜は危険だから一旦止まるんだ。医者はもうちょっと我慢してくれよ」
さっきよりも少しやさしい声色だった。
聞いていた三人は微笑ましそうに、その一方で痛ましそうに眺める。
ルフィの隣ではカルーが小さく鳴き声を発し、まるで彼女を元気付けるようだ。
やはり彼女が倒れたことで船上の雰囲気は変化している。
決して少なくはない影響を感じ取ってから、ビビがキリへ声をかけた。
「ドラム王国に着くのはいつ頃かしら？　できるだけ早い方がいいけれど、無理もできないし」
「明日の日の出には船を出す。できる限り急ごう。ドラムは冬島だったはずだから、この気候だともう多少は影響が出てるはずだと思うけどね」
「明日には着けるかな」
「わからない。正確な距離まではなんとも」
質問するシルクに明確な答えを返せない。
気候の変化は感じ取れるがこれが確信を得られる情報ではないように思うのだ。
あとどれくらいの距離が残っているかは行ってみなければわからず、とにかく進む必要がある。

「ナミは、あれから一度でも目を覚ました？」
「いいえ、まだ……」
「眠ってるだけで辛そうなんだ。熱も下がらないし、すごく体力を使ってるんだと思う」
「寝てるだけなのにか？　病気ってそういうもんなんだな」
「病気はそれくらい辛いものなんだよ」
「ルフィには関係ない世界だろうけどね」
シルクとキリが苦笑する。全く未知の世界であってルフィは感心する様子がある。見ていると本当に子供のようで緊張感が和らいだ。
彼の存在は救いだろう。
重苦しい空気も少し柔らかくなり、物事を冷静に捉えられそうだった。
無暗に焦っても仕方ない。
冷静さを取り戻せた彼らは大きく息を吐き出すと心を落ち着ける。
大丈夫、前には進んでいる。
そう言い聞かせて今は時間を使うしかない。
踵を返すキリは部屋を出ようとした。
「二人も無理しないようにね。疲れたら誰かと代わって休んでよ」
「ええ。そうします」
「キリも気をつけてよ」
「わかってる。それとルフィは騒がしくしないように」
「当たり前だ！」
「その声が大きいんだって」
キリが部屋を後にし、甲板へ戻っていく。
夜は近い。
一日の終わりは不安に包まれ、仲間を心配するが故に普段とは違った疲労感も感じられた。

＊

不意に目を覚ました時、ナミは室内が暗くなっていることに気付

く。
どうやらすでに夜。
すぐには理解できずに混乱したが、自分が倒れたことを思い出して納得した。
頭が重い。まるで鉛を入れられたようで、考えるのが億劫だった。
体を起こそうとするのだが力が入らず、上体を起こすだけで一苦労。
ベッドに座って、ふと重い頭を抱えたナミは、室内にある寝息に気付いた。自身が起きたのに誰かが寝ている息遣いを感じる。しかも一つではない。
ゆっくりした動きで部屋を見渡す。
女子部屋には多数の影がある。
どうやら心配したせいで男たちまで雑魚寝しているようだ。
地べたに座り、ベッドに突っ伏すようにしてビビが眠っていた。
近くには毛布に包まったシルクが壁に寄りかかって小さな寝息を立てている。
部屋の中央で大の字になって眠るカルーが居て、彼にのしかかるようにしたルフィが大きないびきを掻き、最も扉に近い位置には壁にもたれて座るゾロが腕組みして目を閉じていた。反対側にはサンジが丸くなって毛布に包まり、こちらは静かに眠りに就いている。
クルーの多くがそこに居て、少しの驚きと感謝と、思わずナミは苦笑してしまった。
よほど心配させてしまったのだろう。
彼らの温かみを感じた気がして、少なくとも悪い気分ではない。
こうしてみんなで雑魚寝するという機会も少なく、盛大な宴の後なら経験もあり、状況も理解できるとはいえ、女子部屋に平然と集まっている様が少し不思議でもあった。
まだ体調は悪いまま。もう少し眠らなければならないはず。
そう理解していながら、ナミは甲板に出たいと思った。
夜風に当たりたい。そう思って、彼女はふらつく体を必死に動かしてベッドから降りる。

みんなを起こさないようにゆっくり歩いて、開けた扉もきちんと閉め、甲板へ向かう。
なんとなく悪いことをしている気分で少し気分も良かった。
甲板に続く扉を少しだけ開いた時、誰かの話し声が聞こえた。
女子部屋にはウソップとキリ、それにイガラムが居ないことはわかっていた。年上のイガラムは気を使って男子部屋に居たと考えられ、甲板にある声は他の二人のもの。
ウソップとキリが話しているらしく、特にウソップが近く聞こえる。
「お～いキリ、夜食どうだ？　一緒に食わねぇか？」
「夜食？　なんでウソップが」
「へへっ、サンジが寝てるんでちょっとだけ拝借してきたんだ。バレなきゃ問題ねぇよ」
「でもサンジは残りの食材全部記憶してるよ。ちゃんと計算してるからね」
「げっ、マジ？」
「バレるのは時間の問題じゃない？」
「その時はお前も共犯だろ？　な、一緒に食おう」
「しょうがないなぁ」
甲板に居るウソップの姿が見えた。
上を向いているということはキリはマストの上に居るのだろう。
確かに上から声が聞こえる。
いよいよ扉を開けて、ナミが甲板へ出た。すると即座にウソップが気付いて、あるはずがないと思っていたせいか驚愕し、妙な声が出た。
反応してキリもメインマストの展望台から下を覗き込むのである。
「ナ、ナミっ!?　お前起きて大丈夫なのかよ！」
「ナミ？」
「おはよう。ちょっと風に当たりたくて」
紅潮した頬を隠しもせず彼女が笑う。
明らかに体調が良くなった顔ではない。彼女自身は気丈だが普段との違いは明白だった。

呼吸も荒く、気温は下がって寒いというのに汗が止まっていない。
まだ熱が高いと見抜くのに一秒もかからなかった。
狼狽するウソップの一方、展望台から跳んだキリが落下してきて甲板に着地する。
彼は体重が軽い。それこそ女性であるナミよりも軽いだろう。ふわりと紙のように舞い降りて重力を感じさせず、自身の行動を気にすることもなく心配そうにナミを見つめた。
「まだ起きない方がいい。今無理すると余計に悪くなるよ」
「そ、そうだぜ。これ以上は危ねぇんだから完璧に治るまで大人しくしとけって」
「大丈夫、すぐに戻るから。だけどちょっとだけ。寝てるだけなのも案外辛いのよ?」
「いやでも……」
ウソップは反対という顔をしていたが、頭を振ったキリが嘆息する。
ナミは手すりに手を置いて海を眺め始めた。
少なくとも今すぐには戻る気がない。
「しょうがない。ほんとにちょっとだけだよ」
「おいキリ」
「言っても聞かないさ。それに気分転換は良い方向に働くかもしれない」
「ほんとかよ……」
「ありがと。それと、心配かけてごめんね」
ナミはにっこり笑っている。海に目を向け、なぜか楽しそうな表情であった。
その顔が不思議と印象に残る。
印象によっては、いつもより楽しそうな。
高熱で苦しんでいる最中だろうに、なぜそれほど楽しそうなのかが理解し辛いものがあり、二人は首をかしげるとまではいかずとも疑問を持ち、彼女の隣に立った。
少し気分転換すれば戻ってくれるだろう。

そう考えながら彼女の話に付き合うことにする。
「んなこと気にすんなよ。こればっかりはしょうがねぇだろ？」
「それに船医を用意してなかったこっちの落ち度もあるしね。こういう言い方するとナミに失礼だけど、これを機にボクらの船医を探すことにしたんだ。次の島で」
「そう。ならよかった。いいきっかけにはなったわね」
くすくす笑うナミの両隣に二人が並び、何気なく同じ方角を眺める。
夜の海は穏やかだった。
空には厚い雲。月を隠して光を遮り、真っ暗な海はどことなく恐怖心を掻き立てる姿に見え、とても大きく、だからこそ今は恐ろしく見える。
ナミが小さく息を吐き出した。
気温の低さから白い息となって宙へ消えていく。
パジャマだけでやってきた彼女を気遣い、キリが持っていた毛布を彼女の肩に掛けてやり、振り返る彼女はくすぐったそうに笑う。
本来、見張りはキリだけだったのだろうか。
展望台に居て毛布を持っているならそう考えられる。
ウソップは彼を気遣っていたらしくて、一人で無理をしないようにと来たのかもしれない。
女子部屋に集まった面々といい、あちらもこちらも仲間を気にするやさしい人々だ。
素直にキリへ礼を言ってほんのわずかな沈黙。
寒いということに気付いたのはどうやらそれからだった。
「病気で寝込むなんていつ振りかしら……子供の頃はあったの。必ずベルメールさんが看病してくれて、みかんを剥いてもらったり、眠るまで手を握ってもらったりした」
「へぇ。おれはそういう経験ねぇなぁ。そもそも病気にかかったことねぇよ」
「普通そっちの方が珍しいけどね」
「キリはあんのか？　病気とか、看病してもらったこととか」

「そりゃもちろん。船に乗り込んだ当初は船酔いもひどかったし、グランドラインに来てからは気候の変化についていけなくて、風邪もひいた。普通の子供だったんだよ」
「今とは大違いだな」
「そう？　そんなことないと思うけどなぁ」
肩肘を張らず、素直に話せるこの関係。有難いと思った。
妙に楽しそうにするナミは幸せそうに頬を緩める。
「看病かぁ。ちょっと憧れあるよな。みんなに心配してもらえるんだろうし、わがまま言っても聞いてくれるんだろ？　おれも一回してもらいてぇなぁ」
「でも病気は辛いよ。だから甘えさせてくれるんだし」
「そこが問題だ」
「やっぱり健康が一番じゃないかな。医者が必要ないならそれが一番良いんだよ」
彼らの会話が一段落した後、キリがすぐ近くの水面を見ながらナミへ言う。
「ベルメールさん、いいお母さんだったんだね」
「まぁね。いっぱい喧嘩もしたけど、自慢のお母さん」
「お母さん、かぁ……」
ウソップがぼんやり呟いて頭上を見上げる。
彼は幼い頃に母親を失くしている。それ以来、村から少しだけ離れた一軒家に一人で暮らしていたらしく、周囲の助けはあっただろうが、家族と過ごした期間は短かった。
看病に憧れるのもそういった経験があっての感情だろう。
体験のない話を聞く姿勢は興味津々でもあり、純粋な好奇心が窺えた。
「母親は強いって言うもんな。そりゃ我が娘が熱出してたら必死に看病もするか」
「経験ないんでしょ？」
「でも想像くらいできるさ」
明るく言うキリもからりと笑うウソップも、別段気まずくなる様子

はない。
至って平然と話して、それが妙に心地よかった。
ナミは、自分でも気付かぬ内に自然と言葉を発する。
「さっきね、夢を見たの。ベルメールさんとノジコと暮らしてた頃の夢。辛くて、すごくしんどいのにさ、あの二人ってばすっごい笑ってるの」
懐かしそうに言うナミの話を、二人は静かに聞く。
「はっきりそう言われたわけじゃないけど、〝生きろ〟って言われた気がしてね。それで起きたら部屋にみんなが居るでしょ？　なんか笑っちゃった。あぁ、みんなこんなに心配してくれてるんだなぁって、変に嬉しかったし」
「当ったり前だろ。おれたち仲間なんだから」
「大丈夫。きっと治せるからもう少しの辛抱だ」
「うん……疑ってなんかないわよ」
すーっと大きく息を吸い、ナミは快活に笑う。
急に体調が良くなるはずも無し。辛い状態なのはさっきと同じだろう。
それでも、彼女はいつもと変わらぬ明るさで二人に目をやった。
「いいわねあんたたち、絶対に私を死なせないでよ。もっともっとお宝を手に入れたいし、まだ世界地図だって描けてない。これで死んだら化けて出てやるから」
「おいおい、縁起でもねぇこと言うなよ」
「その時はこの船に憑りついたら一緒に航海できるね」
「お前はもっと不謹慎だ！」
いつも通りの雰囲気で無邪気に笑う。
体は熱く、ともすれば呼吸も乱れそうだが、不思議と胸につかえていた何かが取れるようだ。肉体的な意味ではなく、息苦しさが無くなった気がする。
無理して出てきた甲斐があったと、ナミは上機嫌に肩を揺らした。
そうして話していて、会話が一段落した瞬間。
静かに近付いたイガラムが穏やかな顔で三人に声をかける。

「みなさん、そろそろ休みませんか。明日の朝は早いんでしょう？」
「あ、おっさん」
「イガラムさん、まだ起きてたんだ」
「ええ。さあ、もう夜も遅いですから、体が冷えない内に部屋の中へ――」
やさしく笑うイガラムがそう言った時だった。
何かに気付いた様子でナミが海を見る。
「ん？　どうしたナミ？」
「風が変わった……」
「そうか？　おれは別に何も感じねぇけど」
「これは――」
ナミの顔が真剣みを帯びたものに変わっていく。
明らかに様子が違っていた。
何かまずいものを感じたのだと気付くキリが即座に表情を引き締め、動き出そうとする。
「ナミ、どうすればいい？　船を動かそうか」
「ここに居ちゃまずいわ……今すぐ船を動かして。舵を切って大回りで島に向かうの。できるだけ大きく膨らんで、直線状に進まないように」
「わかった」
「それから、帆は張っちゃだめ。多分風で引き裂かれる――」
言い終わらぬ内にがくりと膝が折れた。
突如としてナミがその場に座り込み、体力の限界か、一歩も動けそうにない状態となった。
ウソップが慌てて肩を押さえるも、瞬時に決断し、そちらは彼に任せたキリが駆け出す。蹴り破るような勢いで扉を開き、壁を叩いて大きな物音を発しながら叫ぶのである。
「全員起きろォ！　船を動かす！　全員甲板へ！」
バンバンと壁を叩いて音を出しながら、キリの叫びは女子部屋まで届いたはずだ。
勢いよく扉が開いて慌ただしい足音が近付いてくる。

その時にはキリが一足早く動き出し、錨を上げようと船の前部に走っていた。
真っ先に到着したのはゾロとサンジだった。
寝ぼける様子もなく緊迫した顔を見せ、素早く状況を理解しようと甲板に船を走らせる。
あらゆるものがあって一度に理解するのは難しい。
キリは錨を上げようとしていて、イガラムとウソップが心配するのはベッドに居たはずのナミ。明らかにぐったりした様子で脱力しているのだ。
冷静さを失っていないはずの彼らでさえ戸惑い、問いかけずにはいられなかった。
「おい何があった！」
「ハッ、ナミさん⁉　どうしてこんな場所に！」
「二人とも船を動かすよ！　サンジ、今すぐナミを部屋へ！」
「お、おう……しかし何の騒ぎだ、こりゃ」
指示を受けたサンジが急いでナミの下へ駆け寄る。
ウソップから受け取る形で彼女を抱き上げ、横抱きにして運ぼうとする。
その刹那にもウソップに尋ねた。
「なんでナミさんが甲板に居るんだ？」
「風に当たりたいって出てきたんだよ。それよりナミがなんか気付いたみたいなんだ」
「気付いた？」
「多分、嵐かなんか近付いてるってことだろ。今すぐメリーを動かさなきゃやべぇんだ」
ウソップがサンジの問いに答えている間に、シルクとビビ、ルフィが甲板へ駆けつけた。
先頭の二人は明らかに狼狽しており、目を白黒とさせている。
一方でルフィは寝ぼけ眼で、少し遅れてやってきたカルーが後ろから体当たりしてしまっても、避けるどころか気付くことすらできずに吹き飛ばされ、甲板を転がった。

「なんだ？　何が起こってんだ？」
「みんな大変なの！　ナミさんが居なくなってる！」
「一体どこに……！」
「あぁいや、大丈夫だビビちゃん。ナミさんならここに居る。どうやら風に当たるために自分から出てきたらしい。まったく、なんでそんな無茶を――」
「サンジとビビでナミを頼んだ！　シルク、ルフィ、船を出すよ！　今すぐに！」
「え？　わ、わかった」
キリの鋭い声に驚きつつ、シルクが転んだルフィに手を貸して引き起こす。
その間にサンジがナミを運び、ビビも状態を確認するため共に船内へ入っていった。
船上は一気に騒がしくなる。
まるで戦闘時のような慌ただしさで指示が飛び、全員が急かされていた。
それだけ大きな危険が迫っているのだろう。
「シルク、面舵いっぱい。限界まで倒して」
「わかった」
「帆は張れないらしいからオールを出そう。全員で漕ぐよ。今すぐここから離れないと」
「なぁキリ、何があったんだ？　なんか来んのか？」
「ナミが何かを感じ取った。今すぐ離れないとメリーが危ない」
「その何かはわからねぇが危ねぇって言うんだな？　だったら急ぐぞお前ら」
それぞれが互いに確認し合い、急ぎ操船の作業を始める。
シルクが舵を取って他の全員でオールを握る。
帆を張ることなく船を進め、急いだ甲斐や海流の動きもあってか、メリー号は素早く移動し、進む方向を変えて先程居た場所から離れた。
そのまま大きく迂回する形で再びエターナルポースの指針を見る

のである。
夜中に叩き起こされてオールを漕ぐというのも奇妙な体験だ。今まで一度も経験がない。しかしナミやキリが意味もなくそうさせるとは思えず、休む暇もなく必死に動いた。
その甲斐はきっとあったのだろう。
何が何やら、訳が分からない。
そんな空気が流れる中、ある時ウソップが大声を出した。
「お、おいっ、あれ見てみろ！」
彼が指差していたのはさっきまで自分たちが進もうとしていたルート。
静寂に包まれていたはずの大海原に、巨大な竜巻が生まれている。
前兆なく現れるサイクロンだ。
腕利きの航海士でさえ事前に気付くことは難しい事象が猛威を振るって海原を進んでいる。進行方向にはさっきまでメリー号が居た場所も含まれていた。
あのまま停泊していれば海の藻屑となっていたに違いない。
理解した瞬間、背筋に悪寒が走った。
「ナミが来なかったら回避する暇もなかった。またナミに救われたな……」
キリがぽつりと呟いている。
その小さな声は不思議と、甲板に居る全員が耳にしていた。
才能や技術とは違う、天性とも経験とも言える感覚。彼女のそれは奇跡に等しい。
突然現れて突然消える。グランドライン最大の敵、サイクロン。事前に起こることを誰も認識できないはずのそれに気付き、彼女は仲間たちを守った。
彼女が如何に優れた航海士かを強烈に理解した瞬間である。
絶対に死なせる訳にはいかない。
ナミはこの一味に必要不可欠な存在だ。
しばし言葉を失ったままだが想いは一つになり、メリー号は静かに海を進む。

元ドラム王国＝名も無き国

リトルガーデンを出て二日。
ナミが発病してから丸二日が経った。
現在も容体は変わらず、彼女は辛そうにベッドで横になっている。
そして三日目の昼頃、ついにメリー号はその場所を見つけた。
雪がちらほら振り続ける中、前方に島を発見したのである。
メインマストの展望台に上がっていたゾロが望遠鏡を下ろした。
小さいが、すでに目視で気付ける距離になり、望遠鏡で見てはっきり確認できた様子。
白くなる息を吐き、心は落ち着いている。
彼は甲板を見下ろし、仲間たちに声をかけた。
「おいお前ら、島が見えたぞ！」
「何ィ!?　ほんとか！　お～いルフィ～、島が見えたぞぉ～！」
ゾロの言葉を受けたウソップが大声で叫び、船内に居るルフィへ伝えようとする。
彼は女子部屋にてシルクと共にナミの看病に努めていた。とは言っても作業を任せると危なっかしいため、せいぜいが寝顔を見守る程度の役割である。
今日ばかりは大人しく椅子に座り、暴れ始めることもなかった。
島が見えたと聞いてパッと笑顔が咲く。
好奇心を刺激された彼は思わず武者震いが始まり、今にも動きたくて仕方なさそうだ。
「おいナミっ、聞いたか？　島だってよ。医者が見つかるんだぞ。どんな島なんだろうなぁ～」
目を輝かせるルフィはひどく嬉しそうな顔。
左足が激しく揺れて、その場を離れるのを必死に我慢しているのが伝わる。
本当は今すぐにも島を確認したいのだろうと思い、苦笑したシルクが彼に言った。
「ここはいいよ、私が見ておくから。ルフィは島を見てきて」

「わかったぁ！」
嬉しそうな声で答えたルフィが駆け出す。
どうやら我慢の限界だったようですぐに甲板へ向かった。
激しく扉を開いて甲板に到着すると足を止めず、素早くいつもの場所、羊の船首の上に飛び乗って前方を確認する。慣れた様子でバランスを取り、胡坐を掻いて座っていた。
確かに前方には島が見える。
笑顔を輝かせるルフィは意識せずに感嘆の声を漏らした。
一面が白く染まり、美しい銀世界。
棒状とも言える奇妙な山がいくつかそびえ立ち、天まで届きそうな高さ。
全てが雪に覆われた島はどこか寂しげでもある一方、だからこそ美しく感じられ、生まれて初めて訪れる冬島の景色に、ルフィは目を奪われていたようだ。
「うっはぁ～っ！　島だぁ！　雪島～！」
「おいルフィ、今回は医者を探すだけなんだ。ナミさんを診てもらうことが最優先。呑気に冒険してる暇なんかないぞ。おい、聞いてんのかルフィ」
「雪はいいよなぁ～。白いしなぁ～」
「だめだ、聞いてねぇ」
どことなくうっとりした様子のルフィは声をかけてくるサンジにも気付かず、目の前にある島の美しさに集中し、どんな場所なのだろうと胸を躍らせる。
冬島とは、その名の通り常冬の島だ。
気候が変化することはなく常に冬の環境にあり、その島は冬以外の季節を知らない。
雪が降るのも寒いのも当たり前。
グランドラインにはそうして常春、常夏、常秋、常冬の島が存在し、一つの季節に縛られている島も多い。ドラム島は中でも基本的と言えるほど気候が定まった冬島だった。
少しずつだが雪が降り、メリー号にも幾分積もっている。

島に行けばそれ以上の雪が地面を覆い隠しているのだろうとは遠目でもわかった。
ルフィはワクワクした顔で帽子を押さえ、早く足を踏み入れたいと考える。
一方でウソップは顔を青ざめさせていて。
寒さに耐えるため防寒着を身に着けているが、寒さとは別の要因で寒気を感じていたらしい。
「いやいや待てよ、おれたちこのまま島に近付いていいのか？　そりゃ王国ってくらいだから人は居るんだろうけどさ、何もおれたちを歓迎するとは限らねぇ。戦闘民族みたいな奴らが居たらどうする？
病気で苦しんでる奴らが助けを求めに来るのを待って罠を仕掛けてるかもしれねぇ。そんでその後は寄ってたかって一網打尽にするんだ。違うか!?」
「んなわけねぇだろ」
「なんでそう言い切れんだよ、お前はあの島に行ったことあんのか!?」
「現実的に考えてみろ。医療技術が発達した国が、わざわざてめぇで怪我人増やすか？」
「自衛のためだよ！　医者だって自分の身は守りたいだろ！」
「そんな荒々しい医者がいるもんかね……」
「絶対居るぞ！　世界のどこかには！　そしてそれがあの島だ！」
「へぇ～そうなのか」
「もしくは、雪に隠れてるバケモノとかが居るかも！」
「あぁ、それはあり得そうだ」
「ま、まずい。嫌な予感がする。持病の〝島に入ってはいけない病〟が……！」
「ちょうどよかったじゃねぇか。あの島で治してもらえ」
取り乱すウソップの声をサンジがあっさり受け流し、騒がしくなるものの船は進む。
島に近付いたメリー号は川に入り、上陸できそうな場所を探して上流を目指した。

徐々に船を停める準備が進む中、甲板に居たビビとイガラムが言葉を交わす。
「ドラム王国ですか……あまりいい思い出はありませんな」
「昔の話よ。今は違うかもしれない」
「本当にそうであれば有難いのですが、果たして人間そう簡単に変わるものかどうか」
「大丈夫、私たちの目的は医者を見つけることだけ。彼に会わなければいけない事情もない」
「それだけが唯一の救いです。もしもビビ様がこの国に来たと知れれば、何をされるかわかったものではありませんからな。こういうことを言うのも、心苦しいですが」
「ええ……」
苦々しい顔のイガラムはこの国に対して大きな心配事があるらしい。
事情を知るビビもまた、少しばかり気落ちする顔だった。
上陸できそうな場所を探して、全員で周囲の景色を確認する。
木々が多く、この辺りは森が近い。
川辺に停めることも可能だろうが近くに村がなければ意味がない。彼らはしばし人の気配を探して彷徨い、どんどん上流へ進んでいく。
その途上で、ウソップが船首に座るルフィへ声をかけた。
「ところでルフィ、お前寒くないのか、その格好で。この寒さと雪だぞ」
「ん？　あぁ……寒っ!?」
「いや遅ぇよ!?　早く気付け！」
興奮した面持ちのルフィだけが防寒具を身に着けておらず、いつものノースリーブのシャツ。寒いと感じるのは人間として当然であり、指摘された後でようやく寒さを感じる。それでもタイミングとしては遅いがルフィが相手だと考えれば不思議と納得できた。
寒い寒いと口にする彼は慌てて上着を取りに行く。
ルフィが赤いコートを着て帰って来た頃、ようやく良さそうな場所を見つけた。

船を停泊させ、錨を下ろして動きが止まる。メリーの傍には上陸しやすい川辺があった。
上陸するための態勢は整う。
あとは誰が行くかである。
甲板に居た者は船の中央に集まった。
全員が向かい合って話をする。
全員で動く必要はなかった。重要なのは医者を探し、ナミを診てもらうことにある。
迅速な行動が要求されるが島が安全かどうかもわからない。
限られたメンバーで上陸した方が確実性があるように感じる。
そう説明するキリに怯えた顔のウソップも同意すると、サンジは反対する意見だった。
「先に数人で上陸して、周辺を調べた方がいい。ウソップじゃないけど罠が仕掛けられてる可能性がないわけじゃないんだ。ナミに危険が及ぶ可能性は潰しておこう」
「その通りだっ。先に危険を確認しよう」
「ちょっと待てよ、ナミさんはもう三日間も苦しんでるんだぜ。いい加減体力の限界だ。これ以上無理はさせたくない。動ける奴ら全員で探索した方が早いだろ」
「急ぐのはわかるけど、無理をすればボクらも無事じゃいられないかもしれないよ」
「いいかキリ。おれはナミさんが助かるんなら、お前らが犠牲になっても一向に構わない」
「お前最低かっ!? ちょっとはおれらのこと気にしろ！」
「あはは。まぁそっちの方がサンジらしいけど」
普段と変わらない姿のサンジにウソップが怒り、キリが笑うが、意見は纏まらない。
全員で動くか否か。
最善策を取ろうと考えるのだがその話し合いでまた時間を使ってしまい、本人たちでさえまずいと焦りを募らせ、真剣に考え込む。
メリー号は、両側を小高い崖に挟まれていた。

その時になってその崖の上に人の姿が現れ、厳しい声がメリー号へ降りかかる。
「そこまでだ、海賊ども！」
「なっ、なんだ!?」
敵意を感じる声だった。
見上げれば大勢の人間がメリー号に銃を向けていて、警戒した顔で睨みつけている。
海賊ども、という言葉も合わせ、憎んでいると言っていいほどの感情がぶつけられるようだ。
咄嗟にウソップがマストに隠れようとするものの、両側から挟まれていては体を隠し切れず、マストに抱き着くようにしながら辺りをきょろきょろ見回す。
静かな環境であるせいか、感じる危険が余計に大きくなった気がする。
数多の銃口を向けられ、いつの間にか空気がピンと張り詰めていた。
どうやら彼らは兵士の類ではない。銃の構え方を見ても素人だ。
強い敵意が一方的にぶつけられ、戸惑いながらも彼らは正体不明の人間たちを見上げる。
「人だ。探さなくても見つかったな」
「でもやべぇ雰囲気だぞ……歓迎はされてねぇよなぁ」
「海賊どもに告ぐ。来た道を引き返してこの島を出たまえ、今すぐにだ」
一人や二人ではない。ざっと確認してもおそらく三十名は超えている。
その中から一人、特別体の大きい男が進み出て彼らに言った。
代表してルフィとビビが向き合うと、彼に対して答える。
「おれたち、医者を探しに来たんだ」
「仲間が病気で苦しんでいるんです。ぜひ治療を――」
「その手には乗らねぇぞォ！」
「薄汚ぇ海賊め！」

「ここは我々の島だ！　海賊など上陸させて堪るか！」
「すぐに錨を上げて出ていけ！　さもなくば、その船ごと吹き飛ばすぞ！」
両側から次々向けられる言葉は罵詈雑言ばかり。
話を聞こうとする姿勢など微塵も感じない。言葉だけでもただ一方的に攻撃するのみだ。
呆れた目で周囲を窺うサンジが口を開く。
警戒はしているがさほど緊迫感は見られない態度。彼らを脅威とは感じていない。有事の際には抵抗する心構えがあり、不作法に銃を向ける態度に怒りすらあった。
ふつふつと沸き上がる怒気を隠し、彼の声はつまらなそうに言葉を吐く。
「おーおー、ずいぶん嫌われたもんだな。初対面だってのに」
「口答えするなァ！」
逸った一人が思わず引き金を引いてしまった。
構えられた銃から弾が吐き出され、だが慣れていないらしく、衝撃に負けて腕が動き、狙いが逸れて弾丸はサンジの足下に突き刺さる。
素人なのは明白だった。
だが先に仕掛けてきたのは相手であり、咄嗟にサンジの目つきが変わる。
撃った男は思わず怯んで、彼の視線を受けると思わず後ずさりした。
「う、撃ちやがった!?」
「てめぇ……やりやがったな！」
「ひっ――!?」
「待ってサンジさん！　やめて！」
先に仕掛けた男を視線で捉えて、飛び掛かろうとしたサンジをビビが止める。彼の腕を掴み、抱き留めるようにして動きを制限しようというのだ。
そんな一瞬に、もう一度銃声が響く。
衝撃を受けたビビがその場に倒れ、痛みから顔を歪める。

その光景は全員にとって衝撃的なものだった。
最も早くキリが振り返る。
今度の銃弾は反対側から来た。わずかに上がる硝煙を見やり、撃った一人を素早く見つける。
その時の彼は普段とは違う、殺気を隠さない目をしていた。
指先に一枚の紙を挟み、小さなそれを硬化して、武器として放とうとする。
視界の中にはすでに怯えた顔が映っていた。
容赦はない。敵を仕留めるため、腕が伸びきって投げようとした瞬間。
ビビが大声を発して、コンマ数秒で次々反応する全員を止める。
「やめてッ!!」
飛び出そうとした全員の動きが、ぴたりと止まる。
完全に腕を振り切ったものの、キリも紙を飛ばしておらず、指に挟んだまま攻撃は中止される。
相手が身構えられたのはそれからのことだった。
倒れたビビが起き上がり、座ったまま左腕を押さえる。どうやら掠っただけのようだ。コートを破って血は流れていても大事には至っていない。
泣き叫ばんばかりの表情でイガラムとカルーが駆け寄る。
彼らの心配を受けながらも、ビビの注意は一味にこそ向けられていた。
「ビビ様ァ!?　あぁっ、そんな、お怪我を……！　私がついていながらっ」
「クエーッ！」
「大丈夫、心配いらないわ。掠っただけ」
「ビビ、お前……」
「みんな戦わないで。暴力に頼ればいいってものじゃない。私が話すから」
「でもこいつら、急に撃ってきたんだぞ！　お前ら、武器も持ってねぇ女に血ィ流させて、海賊と何が違うってんだよ！　おれたちがお

前らになんかしたのか！」
ルフィは心配するのみだったが、激昂したウソップが男たちへ叫ぶ。
その一言で彼らは歯噛みし、戸惑いを抱いた様子を見せながら、やはり武器は下ろせず。
冷静に振舞うビビがウソップを窘める。
「やめてウソップさん、彼らを刺激しないで」
「でもよぉ、言ってることとやってることが……！」
「少し誤解してるだけなの。話せばわかってくれるわ」
そう言ってビビは腕を押さえるのをやめ、甲板に正座する。
地面に両手をつき、深々と頭を下げたのだ。
「だったら上陸はしませんから、医師を呼んでいただけませんか？仲間が重病で苦しんでいるんです。お願いします、助けてください」
額を擦り付けようかというほど深々とした土下座であり、仲間たちも、銃口を向ける男たちも唖然としていた。一際、ルフィが隣で驚いている。
目で見なくともそんな彼の様子に気付いていたのかもしれない。
頭を下げたまま、ビビはルフィへ言う。
「ビビ……」
「頭を冷やしてルフィさん。無茶をすれば全て片付くとは限らない。この喧嘩を買ったらナミさんはどうなるの？　力だけじゃ、仲間は守れないのよ」
静かな、感情を隠した声が彼の心に突き刺さる。
彼女の言う通りだと思った。
素直に納得したルフィは男たちを見上げ、真剣でいながら怒気が消える。
「うん、ごめん。おれ間違ってた」
腕から血を流し、尚も頭を下げる彼女を見て気付いたことがある。
ルフィはその場で膝を折り、ビビと同じ体勢となった。
「医者を呼んでください。仲間を、助けてください」

甲板に額をぶつけてゴンッという音がした。大事な麦わら帽子が落ちて近くに転がる。
いつしか周囲から音が消えていた。
男たちは息を呑み、銃を構えることすら躊躇って、どうすればいいのかと視線を彷徨わせる。今や敵意は揺らいで薄れていた。困惑した末に決意を失ったのだろう。
迷う視線は全て大柄の男へ。
どうやらその男がリーダーらしく、皆の視線を一身に受け、一味を見下ろすと考え込む。
しばらく沈黙が続いた後、大柄の男が口を開く。
「わかった……上陸を許可しよう」
「ドルトンさんっ。でも」
「騙し討ちかもしれないんですよ！」
「一切の抵抗をせず、報復もせず、頭を下げた彼らを撃てば、我々はあの海賊たちと同じになってしまう。それでいいのか？　彼らを撃つ覚悟がある者は居るのか」
ドルトンと呼ばれた男、ただの町民だろう男たちを見渡して声をかけ、一瞬にして黙らせる。
そう言われて言い返せる者は居ない。誰一人として引き金を引けそうになかった。
反対意見が出なくなったのを機に、彼はビビたちを見下ろして再度言う。
「村へ案内する。ついてきたまえ」
そう言われたことを機にビビがパッと顔を上げ、隣に居るルフィを見た。
彼は甲板に頬をつけたままで彼女を見上げた。
「ね？　わかってくれた」
「うん。お前すげぇな」
ルフィの言葉にビビが朗らかに笑う。
ひとまず危機は去ったようだ。
一刻も早く上陸して医者を探したいところだが、気になることもあ

り、それぞれ話し始める。
最初にイガラムがビビへ駆け寄り、彼女の腕を心配した。
「ビビ様、止血だけでも今すぐに。お時間はかけませんので」
「そうね……お願いするわ」
「ご自愛ください。もしものことがあってからでは遅いんですよ」
「ええ、わかってる」
肩を貸して立ち上がらせ、手当てのために船内へ向かおうとした。
その際、ビビはくすくすと笑い始める。
「そういえば昔、ペルにぶたれたことがあったわ。誕生日のお祝いに花火を作ろうとして」
「ああ、そうでしたなぁ……」
「私、あんまり成長してない？」
「そんなことはありません。ビビ様は成長なさいました、それこそ私が驚くほどに。先程の行いも見事なものです。国王様もお喜びになられますよ」
船室へ向かいつつ、俯いたビビはどこか寂しげに微笑む。
些細な出来事で故郷を思い出したらしい。
郷愁に駆られ、少し弱った心に言いようのない感情が生まれ、腕の痛みが一層強くなった。
二人が船内へ移動した後、辺りを見回したキリは溜息をついた。
想うところがあったのだろう。ルフィへ声をかけ、振り返る彼に端的に告げる。
「ルフィ……ボクは、船に残るよ」
「え？　なんで？」
「怖がらせちゃったみたいだ」
困った風に笑いながら、先程殺気をぶつけた男を見上げ、改めて怯えた目を確認する。
この反応は信頼に係わるはずだ。これ以上の問題を起こせば今度こそ医者は探せず、ナミの命に危険が及ぶ。そうならないために考える必要があった。
一番強い敵意を示したキリは、彼らの傍に赴かないことを決めたの

である。
なんとなく事情を察したルフィは同じ方向を見上げて頷いた。
「そうか。そっちの方がいいんだな？」
「変に刺激しない方がいいだろうからね。ボクが一緒だとそれも難しそうだ」
「んん、確かに」
「あれ？　同意するんだ」
考えもせずに頷くルフィは彼の考えを認め、納得するつもりの様子。
話を聞いていたゾロとサンジも異論は無さそうだが、ウソップだけは不安そうな顔だ。
「キリが来ねぇのか……それはそれで不安なんだよなぁ」
「電伝虫がある。数は限られてるけど、それで連絡を取ろう。情報さえ寄こしてくれれば考えることは簡単だからさ」
「ま、あれだけ本気で殺そうとすりゃ当然の反応か」
「よく言うよ。サンジも結構本気だった」
「とにかく行くしかねぇだろ。ナミはどうする、連れてくのか？」
会話が停滞しそうになったのを見計らってゾロが先を促す。
その頃になると彼らは妙な協力を始めて、緊張感のないやり取りを行った。
「お前アホだなぁ～ゾロ。ナミを連れてかなきゃ医者に治してもらえねぇじゃねぇか」
「アホだなぁ～ゾロ」
「おれは連中を信用できちゃいねぇが、マリモがアホだってのには賛成だな」
「ゾロってアホだったんだね。忘れてたよ」
「てめぇら全員斬られてぇのか……？」
わなわなと震えるゾロが刀に手をかけてしまい、船上には先程以上の殺伐とした空気が広がる。
殺伐としているが仲睦まじい様子もあった。
町民たちは戸惑いがちに眺め、予想以上に普通な、どこにでもある

人間の会話に驚きを隠し切れない様子で、思わず武器を持つ手が震える者も少なくはない。

そしてドルトンは、何も言わずにじっと彼らのやり取りを見ていた。

唯一の医者

一行は斜面を登っていた。
先頭にドルトン。彼の案内に従い、ひとまず近くの村を目指している。
眠ったままのナミはサンジが背負っていた。いまだ呼吸は乱れ、油断を許さない状態。しかし島に到着した今は救いの手も期待できそうだった。
ある時、ドルトンが唐突に口を開く。
彼のすぐ後ろに麦わらの一味が続いて、さらに後ろを町民が歩いている。
やはり信用されていない状況下で彼がぽつりと呟いた。
「先に言っておくが、この島に居る医者は〝魔女〟が一人。あまり期待しないでくれ」
「魔女？　あの、ここはドラム王国ですよね」
聞き慣れない言葉にビビが疑問を口にした。
ドラム王国。その名前を聞いたドルトンは表情を険しく、苦々しい顔で告げる。
「その名前は捨てたのだ、他でもない自分たちの意志で。今この国に名前はない」
「名前が、ない？　それに捨てたって……」
「追々説明もしよう。君たちが来る前に様々なことがあった」
そう言うと口を閉ざしてしまう。
ひょっとしたら聞いてはいけないのかもしれない。
自然とビビも閉口し、しばしの間無言で歩き続ける。
幾ばくもせず巨大な動物が前方に現れた。
絶叫するウソップは目が飛び出さんばかりに驚いて皆に忠告する。
「ギャアアアッ!?　クマだァ！　全員死んだふりしろぉ！」
「ハイキングベアだ。害はない。登山マナーの一礼を忘れるな」
前からやってきたのは白くもこもこした毛を持つ、体長二メートルはあろうかという熊だった。

二足歩行で飄々と歩き、左の前脚には一本の杖を持って、まるで人間のように頭を下げる。登山マナーの一礼らしい。先頭のドルトンが同じように一礼するため、ルフィたちも続いた。
ただ一人、ウソップだけは身の危険を感じて雪に飛び込み、死んだふりをしていたようだ。
危機がないと知るや戸惑いながら立ち上がり、平然とすれ違っていった熊の背を見送る。
「クマなのに登山マナーを気にするとは……なんて礼儀正しい奴」
「おいウソップ、置いてくぞ」
「あっ、待てって！」
ゾロが声をかけた瞬間、慌てるウソップが駆け出し、彼らへ追いついた。
それからまた無言で歩いて、空気の冷たさを感じながら村に到着する時を待った。
さほど時間もかからずその場所へ辿り着く。
森を抜け、視界が開けるとそこはこぢんまりとした村。
雪の降る村、ビッグホーン。
見たことの無い動物が人間と共に闊歩し、少し変わっているが和やかな風景であった。
ルフィはおぉっと声を漏らす。
雪に覆われた景色は美しく、町の雰囲気も穏やかであり、何より珍しい動物が数多く居る。冒険をする暇がないとはいえ、好奇心を刺激された彼は妙に楽しげだった。
「ここが我々の村、ビッグホーンだ」
「なんか変な動物が歩いてんな」
「さっすが雪国だぜ」
「ナミさん、村に着いたよ。もうすぐ助かるからね」
到着しても武装した町民の顔色は変わらず。
振り返ったドルトンは落ち着いた態度で彼らを見回した。
「じゃあ、みんなご苦労さん。見張りの者以外は仕事に戻ってくれ」
「しかしドルトンさん、一人で大丈夫かい？」

「あいつらは海賊だぞ」
訝しげな顔をする町民たちに笑みを見せ、ドルトンは平然と答える。
「おそらく彼らには害はない。長年の勘だ、信じてくれていい」
「どうする……？」
「まぁ、ドルトンさんがそう言うなら」
「あの様子だしな」
町民たちは徐々に納得していったようだ。
よほどの信頼があるのか。
口々に別れの挨拶をしながらその場を離れていく。様子の変化に驚きつつ、ビビは去っていく町民たちをきょろきょろ見回し、不思議そうな顔をしていた。
彼らのドルトンに対する信頼は絶大なものと言えるだろう。
この男、それほどすごい人物らしい。
そしてそれ以上に、武器を持っていたのがただの町民だったと気付いた瞬間である。
「国の警備隊じゃなかったんですか？」
「民間人だ。君たち、ひとまず家に来たまえ」
ドルトンが先頭となって再び歩き出し、一味も後ろに続く。
この時点でいくつもの疑問があった。
国に医者が一人しか居ない。ドラム王国という名を国民の意志で捨てた。どうやら警備隊は存在しておらず、海賊への警戒は民間人が行っている。
上陸してすぐだが良からぬ何かを感じずにはいられない。
雪を踏みしめ、彼の家へ向かう。
いつまでもナミを極寒の環境に置いておきたくはない。歩調は先程より急いでいた。
多くの町民たちとすれ違い、彼らはひどく親しげにドルトンへ話しかけてくる。やはり人々から彼に向けられる信頼感は言いようのないほど大きなものだ。
ビビは、彼らの言葉を耳にして心底不思議そうにしている。

「あらドルトンさん、海賊が来たって聞いたわ。大丈夫なの？」
「ええ。異常ありません。ご心配なく」
「やぁドルトンさん、二日後の選挙が楽しみだね」
「みんなあんたに投票しようと決めてるんだ」
「と、とんでもない。私など……私は罪深い男です」
彼らの、この国の人々のやり取りが理解できない。
嫌な予感すらして安心できなくなっていた。
もう少し歩いて家に到着する。
別段特別ではない、周囲の建物とさほど違いのないこぢんまりとした一軒家だ。屋根は雪が積もらないよう工夫がされており、傾斜というより塔のように尖っていた。
扉をくぐって家の中へ入る。
ドルトンは背負っていた武器を下ろす一方、先にサンジへと振り返った。
「そこのベッドを使ってくれ。今部屋を暖める」
「ああ」
サンジがナミをベッドへ寝かせ、すぐに布団をかけてやる。
室内は冷え切っていた。外出してたため当然で、部屋を暖めるためドルトンが暖炉に近付く。
火を点け、ようやく一息つけそうだった。
「申し遅れたが、私の名はドルトン。この島の護衛隊長をしている。先程はすまなかった。我々の手荒な歓迎を許してくれ」
「護衛隊長、ねぇ……」
腕組みをしたゾロが呟く。
護衛隊、とは言うほどのクオリティはなかった。あれではただの有象無象だ。
まさかそれが分からぬ人物ではないだろうなと考え、彼の目は不信感を持ってドルトンを見る。だが彼は気にした様子もなくビビとイガラムに目を向けていた。
「一つ聞いておきたいのだが、私は、あなたたちに会ったことがある気がする」

「え？　き、気のせいじゃありませんか？」
「それより魔女についてお聞かせ願いたい。彼女はここ数日、四十度を超える熱にうなされているのです。一刻も早く医者に診せたい」
突然の質問にビビが驚くと、咄嗟の判断を下したイガラムが尋ねる。
今は世間話より医者。そう言われてドルトンも顔色を変えた。
「四十度だと？　なんという高熱だ」
「この三日間、熱が上がる一方でして」
「船を出る前に確認したら四十二度でした」
「そんなにもかっ。まだ上がるようなら死んでしまうぞ」
イガラムに続いてシルクが教えれば、ドルトンも事の緊急性を理解した様子。
そう聞いてからナミを見るとよく耐えているとさえ思ってしまう。
四十二度の高熱など、たとえ冬島であってもそう頻繁に聞くものではない。
「だけど熱が出た原因も対処法も、私たちにはわからないんです。専門的な知識を持つ人でないと彼女を助けることができない」
「君たちの船に船医は？」
「ああ、まだ見つけてねぇんだ」
「この島に医者がいっぱい居ると思ってたのに、まさか一人しか居ねぇなんて」
「むぅ、そうか……」
共に腕組みをして並ぶルフィとウソップがあっけらかんと告げ、ドルトンが苦々しい顔になる。
「この国にも様々な事情があった。医者が居ないのは我々にとっても良いことではない」
「まぁそりゃそうか」
「んなこたぁどうでもいいから、まず医者だ！　その魔女ってのはどこに居んだよっ」
業を煮やした顔でサンジが語気を強くする。
呑気に世間話をしている暇ではない。悠長にしているのも我慢の

限界だ。
いい加減にしろと言わんばかりの態度にドルトンが応じ、窓の外に目を向ける。
自然と彼らの注意もそちらへ向いた。
「この島で一番高い山が見えるだろう。ドラムロックだ」
「あれか。なんかでけぇ木みたいだな」
「垂直に伸びる山の標高はおよそ五千メートル。あの頂上に城がある。魔女が住むのはそこだ」
「あの上かっ」
全員の目がドラムロックと呼ばれる奇妙な形の山を見つめる。天へ向かって縦に伸びる様は木の幹にも等しく、通常の登山では登頂不可能なことは目視で理解できた。
道中厳しそうだが、あの上に魔女が居る。
一斉に唸ってしまうのも仕方なく、振り返るドルトンにサンジが詰め寄る。
「なんだってわざわざあんな遠いところに住んでんだ。じゃあとっとと呼んでくれ。こっちは急患なんだ、一分一秒を争うんだぞ」
「残念ながら通信手段はない。魔女は変わり者でな」
「なんだと!?」
「それじゃあ、この村の人たちは医者に診てもらうことはないんですか？」
「そういうことになる」
「なんだよそれ、それでも医者かよ！　一体どんな奴だ！」
ドルトンは暖炉の中にある火を見つめ、魔女と呼ばれた医者について話し出した。
「医者としての腕は確かだが、かなり変わっている。もう百四十近い高齢だ」
「ひゃ、百四十？　むしろそっちが大丈夫かよ」
「あとはそうだな、梅干しが好きだ」
「んなもんどうでもいいわっ!?　もっと重要なこと話せ！」
サンジの怒声が飛ぶものの怯えることもなければ慌てもしない。

あくまで冷静にドルトンが語る。
「この村について聞いたな。魔女は時折、気まぐれにどこかの村へ降りてくる。そして怪我や病気をしている人を治療しては、法外な報酬を要求し、半ば強引に分捕っていく」
「おいおい、性質の悪ぃ婆さんだな」
「まるで海賊じゃねぇか」
いつの間にかルフィとウソップが家の中にあった果物を食べていた。
誰よりもリラックスした姿で話に加わり、それでも一応真剣には聞いているらしい。
そちらは気にせず、ビビが尋ねる。
「だけどあんなに高い山、どうやって移動を？　降りたり登ったり簡単にはいかないでしょう」
「一応、各村にロープウェイが設定されているのだが、今は壊れて使えない。少なくともそれを使っているわけではないことだけはわかっている」
「魔法でも使ってんのかな」
「いや流石にねぇだろ、魔法は」
「そうとも言い切れん」
緊張感のない声で言うルフィとウソップの会話に、ドルトンが同意する。
彼はふと二人の方を向いた。
「妙な噂を聞いたことがある。月夜の晩に、彼女がソリに乗って空を駆け降りてくるところを数名が目撃したという話だ。それが魔女と呼ばれる所以でな」
「ほら、やっぱり魔法なんだ」
「それにしちゃ地味だろ。何かタネがあると見たね、おれは」
「魔法かどうかはどうでもいいんだよ。それで？」
「他にも奇妙な動物と一緒に居るところを見たと」
「ほらみろっ、やっぱりなんか居やがった！　雪男だ！　魔女と雪男のコンビなんて最悪じゃねぇか、そんな奴頼れるかァ！」

「黙ってろ長っ鼻！　さっきからうるせぇぞてめぇ！」
ナミを心配するあまり、焦りを募らせたサンジがジタバタするウソップを一喝する。彼の臆病さは知っていたつもりだが今は相手にしている場合ではない。それよりも重要なことがあるのだ。
医者の場所はわかった。ならばあとはどうやって向かうかのみ。
すぐさま頭を働かせるサンジはドルトンではなく仲間たちに向き直る。
「それじゃおれたちはあの山の頂上を目指さなきゃならねぇってことだ。さて、どうするか」
「ロープウェイを直せないかな？　それと、どこかの村に魔女が降りてきてるかもしれない」
「両方試してみた方が早い。一応キリに報告して意見を仰いどこう」
「あいつなら空を飛べる。直接向かった方が早いんじゃねぇか？」
「確かにそうだが、忘れたのかよ、あいつの弱点は水だ。ついでにここは雪だらけ。多少違っても触れれば濡れることに変わりはねぇんだ。期待はできねぇ」
「お、おい、君たち待ちたまえ」
サンジとシルク、それからゾロが中心となって考え始める。
そんな素振りにドルトンが焦った。
まだ話を終わらせたつもりはなかった。それなのに会議を始めるもので、先に渡せる情報を全て渡しておこうと考えたのだろう。でなければ何をするかわからない。
しかし振り向く彼らは態度を変える気が無さそうだ。
「こんなことは言いたくないが、はっきり言って厄介な婆さんだ。医者ではあるがこの島の者ですら関わりたくないと思っている」
「それがどうした。こっちは病人が居るっつってんだろ」
「そうだが、ドラムロックに向かうのは危険だぞ。とても病人を連れていける道ではない」
「ご忠告どうも。それに情報感謝する。だがこっから先はおれたちの問題だ。仲間を助けるためなら少々の危険、どうってことねぇよ」

素っ気なく言い、サンジはすぐに仲間と向かい合ってしまう。
ドルトンは半ば呆然と彼らのやり取りを見守るしかない。
「別れて行動するしかねぇな。いざ城に到着して誰も居ねぇなんてことになったら最悪だ。いくつか可能性を考慮して、下手な鉄砲でも当てに行った方が確実だろ」
「ロープウェイの修理と、他の町に来てないか確認。あとは？」
「徒歩で山に向かうって手はあるが危険らしいな」
「そうするくらいならキリに賭けた方がよっぽど可能性が高い。いちいち歩いてる時間ももったいねぇしな。とにかく一度あいつに連絡しよう」
「うん」
サンジの視線を受けてシルクが子電伝虫を取り出した。
数は限られている。別行動をするなら適切に振り分ける必要があるだろう。
ひとまずはキリに連絡を取らねばならず、シルクが小さなダイアルを回し始めた。
一方でサンジがぐったりした姿のウソップへ声をかける。
彼にしかできないだろうと思うことがある。それを頼むのだ。
「おいウソップ、お前ロープウェイの修理に行ってくれねぇか？うちで一番手先が器用なのはお前だ。そいつが直れば一番手っ取り早く城に行けるしな」
「んん？　修理？」
「村の中に居るから安全だぞ」
「よぉしこのキャプテン・ウソップに任せとけ！　小手先のことならこの海で一番さ！」
「ああ、そうだと思ったよ」
元気よく立ち上がる彼に笑みが浮かび、サンジはあっさり視線を外す。
ウソップが復活したことにより、不意にイガラムが自ら口を開いた。物々しい雰囲気を感じながら見守るように黙っていた彼も協力するつもりである。

「では私もウソップ君を手伝いましょう。ビビ様は看病を続けてください」
「ええ、わかったわ」
「それでいいですかな？」
「もちろんだ。ビビちゃんになら任せられるしな。それにすぐナミさんを動かせねぇんなら誰かはここに残る必要がある。一番の適任だろ」
「責任重大ね」
「信頼してる証さ」
おそらくはビビを気遣った発言だった。危険な目に遭わせたくない、やはり女性であるため同性ならではの問題に対処できる、と色々な面を考慮しての決定だろう。
イガラムの提案にサンジが頷き、またビビも納得する。
今は全員の力を合わせる時。
わがままを言っていられる状況ではなく、またそんなつもりもなかった。
そうして話している間に電伝虫が繋がったようだ。
シルクが顔を上げてサンジを見た時、子電伝虫はすでに通話中の状態。目では相手を確認できないがおそらくキリと繋がっていて、手渡されたサンジは躊躇わずに声をかける。
子電伝虫の口から聞こえたのはやはりキリの声だった。
「キリ、こちらサンジだ。ちょっと相談がある」
《待ってたよ一流コック。状況は？》
普段通りの余裕を湛える声色。
彼の知恵と能力に関する状態を確認するため、サンジは真剣な顔で話し合いを始めた。
ドルトンは、そんな彼らを見ていて不思議に思う。
海賊らしくない海賊だ。略奪に興味はないらしく、やはりというか騙し討ちの類もないまま、仲間を救うために全力を尽くしている。その態度や姿勢は好意的に感じるものだ。
それだけに自分たちの行動に後悔してしまい、申し訳なく思う。

人命救助に海賊も市民も関係ないのではないか。
ふとそう思った彼は居ても立っても居られずに颯爽と歩き出した。
ちょうど出発しようとしていたウソップたちが気付き、彼らの傍を通り抜けて外へ出る。
「お、おいあんた、どこ行くんだ？」
「町のみんなと話してくる。ロープウェイを直すなら我々も手伝うのが筋だろう」
「いいよ別に。おれたちゃこの町からすりゃただのイレギュラーで――」
「この国の備品が壊れている。それを外から来た者に任せておくことが正義とは思えない」
歩き去ろうとしたが立ち止まり、わずかに振り返るドルトンがウソップとイガラムの顔を見る。
「手伝わせてくれ。せめてもの罪滅ぼしに」
「お、おう……」
何の罪かを、おそらくウソップは理解していないだろう。あまりピンと来ていない顔だ。
しかしイガラムは忘れようもなく強烈に覚えていて、ビビを傷つけた一件だろうと想像する。状況が状況とはいえ、一国の姫を傷つけたのだ。場合によっては国際問題にさえなりかねない。
そう思ってはたと気付いた。
彼は自分たちに会ったことがある気がすると言っていた。
まさか、自分たちの素性に気付いたのでは。
本人が何も言わないため知り様がないものの、可能性は高いと思う。
イガラムにもまたドルトンに見覚えがある。かつての世界会議（レヴェリー）でドラム王国の王を護衛していた大柄な男。それが彼だと気付いている。
とすればこれは、お互いに気付いていながら黙っているだけなのかもしれない。
そちらの方がいいのかどうか、はっきりしていない。

とはいえ、敢えて明らかにするものでもないだろうと、イガラムはただ礼を言うだけに留めた。
「感謝します。ウソップ君、ここは有難く協力してもらった方が得策だろう」
「そうか？　まぁ確かにそっちの方がいいけどさ」
「ではついてきてくれ。ロープウェイまで案内する」
再びドルトンが背を向けて歩き出し、仲間たちの下へ向かう。
その背を確認してからウソップとイガラムも歩き出した。
事情があるのはどちらも同じだ。
両者は同じ、国の在り方について憂う者。
互いの状況は違えど、ただ国民のためを想う姿は変わらなかった。

ドラムロックへ

辺りはまるで、しんしんと降る雪に音を吸い込まれるかのようで。
船底に触れる波の音も穏やかに、否が応にも孤独を強く感じる一時。
甲板に居るキリはメインマストの下に座り、隣には羽を畳んで座るカルーが居て、彼に抱き着くようにして二人で毛布をかぶりながら島の風景を眺めていた。
白くなる息が宙に消えていく。
毛布に包まっても凍える気温であり、ただ座っているだけでも命の危険を感じかねない。
しかし見張りが船内に居る訳にもいかず、また外に居たい気分だったため、彼らはそこに居た。
島は、驚くほど静かだった。
どこか寂しげに、雄大であるが故に孤独を見出し、なんとなく寂しい気持ちになる。
静か過ぎるのも少し問題だろう。
誰も居ない甲板を見渡す彼は力を入れてカルーを抱きしめた。
「いつもはあんなに騒がしいのにね。やっぱり雪があるからかな」
「クエ～」
カルーは同意するように小さく声を出す。
言葉は通じなくとも意思の疎通はできている気がする。
分かり合うかのような彼らは身を寄せ合って、寒さに耐えながら仲間の帰りを待っていた。
静寂を耳にして、船に誰も居ない光景は少しばかり胸が痛んだ。
気にしないようにしても仲間の最期を思い出す。
一人になった寂しさを、なぜか今は鮮明に思い出していた。
やはり寒さと静けさが問題なのだろうか。
カルーの体に体重を預け、頭まで肩の辺りに預けると、彼は不意に寂しげな目になる。隠す必要はない、今は誰も見ている人間が居なかった。

カルーもおそらく気付かぬふりをしてくれて、今だけは全身の力を抜く。
この船はかつての光景と同じになって欲しくない。誰も居ない甲板を見て再びそう思った。
近頃の自分が焦っているのは自覚している。誰にも告げていないローとの密約、巨兵海賊団との決闘、ウェンディとの奇妙な関係もはっきりしていない。
特にグランドラインに入ってから自分勝手に動いているのはわかっていた。
そうしなければならないという自覚と責任、強迫観念もある。
改めてそう考えれば、やはり彼の言いつけが身に沁みついているということか。
キリはゆっくり目を閉じる。
船は着実に進んでいる。アラバスタに辿り着くのはきっとそう遠くない。
再会の時はすぐ近くまで迫っているはずだ。
「さむ……」
身震いして腕にぎゅっと力を入れる。
カルーは何も言わず、嫌がることもなくそれを受け入れていた。
また静寂の時間が続く。
少し黙ればそれだけで耳が痛くなりそうなほどの静けさに襲われた。じっとしているのも退屈だが今はやることもない。彼らは動こうとせずにただ時の流れを感じる。
そんな折に羽ばたきの音が聞こえた。
大きく、力強い、何か巨大な鳥が空を飛ぶ音。
目を開けたキリが空を見た。同じ頃にカルーも不思議そうに目線を上げ、船に近付いてくる巨大な鳥を見つける。と言ってもサイズは人間と同じ程度であった。
巨人を見て、傍には超カルガモのカルー。驚く大きさではない。
彼らの前にやってきたのは大きな鷲だった。
船の縁に止まり、何やら勝手に羽を休め始める。

唐突にやってきた割にはずいぶん身勝手な行動だろう。しかも許可を求められた覚えもない。
キリとカルーがぽかんとして見ていると、鷲は平然とした顔で彼らに目を向けた。
「よう。冷えるな、今日は」
「あ、しゃべった」
「クエッ!?」
カルーが思わず声を出して驚く。鷲が人語を操ったこともそうだが、何よりその不可解な事態を前にしたキリが驚きもせずに確認したことだ。肝が据わっているというより間の抜けた反応に、驚きどころか心配さえしてしまう。
そんなカルーに気付きつつ、鷲は相変わらず平坦な声で人語を操って。
キリも平然とそれを受け入れていた。
「正直おれ、こんなに羽の先が冷たくなると思わなかったよ。雪国って辛いんだな。これはちょっと住めそうにないわ」
「そりゃまぁ人間も辛いからね」
「こういうこと言うと悪いかなって思うんだけどさ、こんだけ寒いと布団ってすげぇなって思うわけよ。いや、確かに中には羽毛とかあるよ？　鳥からすりゃどうなのよとは思うんだけどな？　やっぱり寒いのはだめだ。一度知っちゃったら頼っちゃうね」
「ふむ、確かに」
「賛否両論あるんだろうが、自分の羽だけじゃやってけねぇのよ、実際」
妙に軽い口調で喋る鷲だった。
親しげな様子は長年の友人に接するのにも近く、馴れ馴れしいとすら言える。
声その物は少し低く、雄なのだろうと思えるものの、とにかく詳細が知れない。しかしカルーの戸惑いとは裏腹にキリは同じく友人のように話していた。
奇妙な空間である。

静けさを破る会話が人間と鷲の会話で、同じく鳥類であるカルーだけが疑問を持っていた。
「悪いんだがちょっと羽を休ませてもらっていいか？　長く飛んでると流石に疲れてな」
「別に構わないけど」
「一人旅ってのは気楽だけどたまに寂しいよな。あんたら海賊？　いいよなぁ、仲間って。気楽じゃねぇかもしれねぇが楽しいよな」
「経験あるの？」
「ないけど、想像で」
「そうじゃないかと思った」
キリは姿勢をさらに崩し、カルーに体重を預けて柔和に微笑む。
「しゃべる鳥なんて珍しいね。カルーも頭はいいけどしゃべれないのに」
「世の中広いからな。たまにはこういうのも居るさ」
「一人で旅してるの？」
「ああそうさ。結構楽しいんだぜ？　好きな時に起きて、好きなところへ行って、飽きたら寝てまた次の島。自由気ままな一人旅だ」
「そう」
「ひょっとして経験あるか？」
「少しの間なら。でも結構寂しいもんだよ」
「あぁ～それもわかる。でも独り身なんだ、町に行けば女にだって会えるだろ」
「まぁね。それを否定するほど初心じゃないから」
「でも仲間が居るんだな」
「今はね。ま、色々あったんだ」
鷲は穏やかな顔でキリを見ながら不思議そうにしている。
言葉を詰まらせることはなく、思ったことは素直に言葉にし始めた。
「君は変わった奴だなぁ。おれがしゃべると大抵は妙な空気になるんだけど、ここまですんなり受け入れられたのは初めてかもしれねぇ。いや初めてだ」

「そうだと思うよ。これでも驚いてるんだ」
「そうか？　そうは見えねぇけどな」
「顔には出にくいから」
「まぁどっちでもいいけどな。話し相手になってくれるならそれだけで嬉しいもんだ」
楽しそうに言う鷲はからからと笑っていた。
やはりというか、不思議な体験である。
どんな光景があってもおかしくはないグランドラインであっても、人語を話す動物は初めてだ。キリは冷静に見ているが、心中ではその生物を、決して友好的には見ていない。
人語を操る鳥。
下手なことを話せば足元を掬われる気がして、心の内を明かす気はさらさらなかった。
ふとした瞬間に、傍に置いていた電伝虫が鳴り始める。
仲間からの連絡だろう。
その時を待っていたのだが今は少々厄介な状況であって、キリはちらりと鷲を見る。
「いいかな？」
「もちろんだ。おれのことは気にしないでくれよ。気になる気持ちもわかるけどもだ」
「どうも」
念のために声をかけてから受話器を取る。
ぱっちり目を開いた電伝虫はサンジの声を発し始め、この場に居ない彼との会話が始まる。
《キリ、こちらサンジだ。ちょっと相談がある》
「待ってたよ一流コック。状況は？」
本来なら仲間との通信を見られたくはないものの、突然指摘して警戒心に気付かれたくはない。キリはその鷲を受け入れている。そう見えていた方が得策だ。
受話器を握って電伝虫に目を向けながらも、意識は半分以上鷲を気にしていて。

会話を始めたが集中し辛い環境だった。
《ちょっと妙なことになっててな。おれたちが来る前に色々あったみてぇで、この島には医者が一人しか居ないらしい。しかも結構な変わり者だと》
「変わり者か。うちの一味に言われちゃ終わりな気がするね」
《んなこと言ってる場合かよ。それでだ、今こっちじゃどうやってその魔女に会おうかって話になってるんだが、一番高い山見えるか？》
「うん。あの山っぽくないアレのことでしょ？」
《その天辺にある城に住んでるらしい。こっちじゃいくつか案を出して動いてるが打てる手は全て打っておきたいと思ってな。お前の能力であの城まで飛べねぇか？》
「あそこまでか……うーん、どうだろ」
一度口を閉ざして、キリはわずかに考えた。
その様子を鷲は静かに眺めている。
「雪が降ってなければいいんだけどね。このままじゃそれこそ途中で落ちかねない」
《やっぱり雪は弱点か》
「程度にもよるけど。危険は危険じゃないかな」
《お前が言うってことはよっぽどってことだな？　賭けはやめとけってか》
「おれなら飛べるぜ」
突然、二人の会話に割り込む声があった。
パッとキリが顔を上げ、多少の驚きを含めて見るのは目の前の鷲。
その声が聞こえたらしいサンジも疑問を持っていたようだった。
《誰だ、今のは。誰か居んのか？》
「ねぇサンジ、人間の言葉使う鳥って見たことある？」
《何言い出してんだいきなり。オウムかなんかか？》
「いや、もっとはっきりしゃべってくる。今そういうのが前に居るんだ」
《なんだそりゃ》

キリの目が改めて鷲を観察する。
その上で笑みを深め、事情を呑み込めないサンジに問いかける。
「ここに何人か乗せて飛べそうな大きい鷲が居るんだ。意思の疎通もできる。君なら、あそこまで連れて行ってくれるの？」
「ああ、いいぜ。どうせやることもねぇしな」
「そういうことだから足はできそうだけど」
《おい待てよ、よくわからねぇが、要するに他人の力を借りようって意味だろ？　そいつは信用できんのか》
「はっきり言ってできない」
《できねぇんじゃねぇか》
「でも他に用意できそうな物がなくてね。最悪の場合の一手としてはそれなりじゃないかな」
《他に手がないなら、ってことか》
「一刻も早く医者に会いたいんでしょ？　これも一種の賭けだよ」
誰のことを言っているかわからないため、サンジはまだいまいち理解できていない。だがナミを想えば多少の無茶は致し方ないかとも思えて、その一方で危険は冒したくないとも考える。
とにかく優先すべきはナミの安全。
果たしてどう判断すべきか、思い悩む彼は納得していない声でキリに問う。
《……本当に大丈夫なんだろうな？》
「判断はサンジに任せるよ。ボクは現場に居ない。船番がしゃしゃり出るのもどうかと思うし」
《人が乗れそうなワシだと……？　さっぱり意味がわからねぇ。だが、さっきの声はそいつのもんだって言うんだな？　誰か人間が居るわけじゃなく》
「そうだよ。ここに居る人間はボクしか居ない」
《チッ、ずいぶん難題だな。しょうがねぇ、一度会ってみる。こっちに寄こしてくれ》
「了解」
苦しんでいる様子だがサンジは決断し、キリも頷く。

「もし途中で降り落とそうとしてもルフィが居ればなんとかできると思うよ。この島、一面が雪で覆われてるし、ルフィは反射神経が良い上にゴムだから」
《その代わりあいつは雪に心を奪われてるがな》
「ナミに危険が及べば変わるさ」
《今が危険な時だろうが。まぁいい、とにかく急いでくれ。こうしてる間にもナミさんは苦しんでるんだ。おれは一刻も早く楽にして差し上げてぇ》
「わかった。説明しとくよ」
《なんでこんなことになったんだか……》
文句を口にするものの異論は出さず、通信が切られる。
受話器を電伝虫の殻に置いてキリが鷲を見た。
おそらく雄だろう彼はどことなく楽しげな様子で、準備をするように羽を動かしていた。
少なからず嫌な予感がしている。素性が知れないこの鳥が果たしてただの動物か否か、気にしてはいるが確認する手立てがない。
あとはサンジに任せればいいだろう。
仲間を信頼しているからこそ、彼らならば上手くやるだろうと思っていた。
彼を見ていた鷲がどう思っていたかはわからない。
ただ興味を持ってキリの前に止まっていたことだけは確かだろう。
再び視線が合う時、鷲は非常に上機嫌に見えた。

＊

ドルトンの家の前に立つサンジは、件の人物が来るのを待っていた。
キリの言葉には違和感や疑問も持っており、勧めた彼が信用できないという相手、果たして力を借りるべきなのだろうかと今から考えている。そうする彼はナミを助けることだけ考えていて、その他の考えは今や頭の中から消えている。

普段は頼れるはずのキリが居ないため、自分がしっかりしなければと思っているのだ。
仲間たちはすでに動き出している。
ウソップとイガラムは壊れたロープウェイの修理へ赴き。
ゾロとシルクは他の村に魔女が降りてきていないかと確認に向かっている。
時間は無限ではない。こうして別れて行動するのにもすっかり慣れた。
互いに心配することもなく、それぞれが上手くやっているのだろうと思っている。
待っていると家の中からルフィが出てきた。今は皆が出払ってしまって残っているのは彼とナミを看病しているビビのみ。
外へ出てきたルフィはサンジの隣に立つ。
いつになく静かな様子で些か真剣な感情も目に感じられた。
「なぁサンジ、ワシ来たか？　キリが言ってたでっけぇ奴」
「いや」
「そっか～。なんでワシがしゃべるんだろうな。普通鳥はしゃべらねぇだろ」
「そこはどうでもいいんだよ。問題なのはそいつに任せていいのかどうかだ」
「んん、確かに」
腕組みをして壁に寄りかかるサンジは、煙草を吸いつつ、ふと目を閉じる。
自分の役目については理解していた。
第一に一味のコックであること。その次に女性を守ることが来て、その次くらいには暴走しがちな仲間たちを諭して冷静に事を進めることにあると考える。
ルフィはどう思っているのだろうか。現在の船の状況を、一味の空気を。
近頃は二人で話す機会もなかったため、ふと聞いてみたいと思った。

どうせ今は待つだけだ。それくらいは許されるだろうとルフィに問いかける。
「最近のキリをどう思う？」
「ん？　何が？」
「何がじゃねぇよ、わかってんだろ。あいつが妙に焦ってることは」
目を開けたサンジは空に目を向け、煙草の煙を吐き出した。
寒い気候で息が白くなるため、これでは判別もできない。
「ビビちゃんが撃たれた時、あいつ、本気で殺す気だったぞ」
分厚い雲が空を覆い、ちらほらと雪が降っていた。
普通の人間にとってはさほど問題でもない、肌に触れれば少し冷たいといった程度のそれも、紙人間にとっては大問題なのか。悪魔の実の能力者も大変だなと思う。
ルフィはサンジの顔を見ていたが、視線を外し、何気なく前方へ視線を向ける。
どこを見るということもなく、少し考えていたようだ。
気付かないはずがない。最も長く一緒に居るのが彼なのだ。
それでも止めようとしない理由を聞いてみたかった。
一緒になって騒いでいたり、楽しそうに話しているのは見覚えもある。だが振り返ってみても彼らが真剣に語り合っている姿など見たことがない。それは、今やそんな時間すら必要ないほど理解し合っているということなのか。
だとしても近頃の彼は少々おかしくて、なぜ何も言わないのだろうとは思う。
きっかけはグランドラインに入ったことだったのか。
いつしか彼は一人で居ることが多くなり、気付けば少し離れて仲間の輪を見ていることが多い。
宴や食事、普段の会話にしても、いつの間にか距離が変わった気がする。
重要な会議でもなければ皆と肩を並べることがなくて、少し前から当然になりつつあった。
ルフィが一番に気付いていたはずだ。

それでも見逃していたというなら何を想うのだろう。
しばし口を閉ざしていたルフィは薄く笑みを浮かべて言った。
「キリはおれたちのこと考えてんだよ。心配する必要なんかねぇぞ」
「おれたちのこと、か……」
サンジがぽつりと呟く。
はっきりとした答えではないが、やはり彼は何かわかっているらしい。
「仲間が死ぬの嫌がってるみたいだからな。おれが全部守ればいいんだ。そしたらあいつも安心しておれたちと一緒に居られるだろ」
「あぁ……バロックワークスのことか」
「すぐに落ち着くさ。おれがクロコダイルをぶっ飛ばせば」
その言葉を聞くと複雑な想いだ。
彼は過去に囚われている。
良くも悪くも、心中穏やかではいられず、短くなった煙草にさえ気付けなかった。
過去を振り切ることは簡単ではない。いつしか自然とそう考えていた。
ルフィがあっと声を漏らした時、ようやく煙草が短いことに気付く。
携帯灰皿に押し込む頃には空から羽ばたきの音が聞こえてきた。
「おいサンジ、あれ見ろ！　キリが言ってたやつだ！」
「本当に鷲なんだな。嘘じゃなかったのか」
バサバサと翼を動かし、降りてくる巨大な鷲は彼らの体長すら超えていて、ゆっくりと近くの民家の屋根に止まる。羽を畳んで、すぐに視線は二人へ向けられた。
特にサンジを確認していたようである。
彼が目的の人物だと理解した後、気軽な様子で声が発された。
「よう。あんたが、一流料理人のサンジ？」
「しゃべった！」
「おかしな奴だぜ……ああそうだ、おれがサンジだ。キリが言って

たのはお前だな？」
「その通り。彼がキリって名前なのは知らなかったが、あんたとの通信は傍で聞いてたよ。旅の途中ふらりとこの島に立ち寄っただけの大鷲さ。よろしく」
まるで人間のように流暢に言語を操る大鷲。
ルフィは目を輝かせているがサンジは信用できず、怪訝な表情になる。
こんな不思議な生物が居ていいものか。
疑問に思う一方でルフィが上機嫌に話しかけていた。
「お前変な奴だなぁ。なんで鳥なのにしゃべるんだ？」
「そりゃあしゃべるさ。どうして鳥がしゃべらないなんて思ってる」
「だって普通鳥はしゃべらねぇだろ」
「その常識が通用しないのがグランドラインなのさ」
「あ、そっか」
「納得するとこじゃねぇよ」
楽観的なルフィはすぐ納得するが、彼の答えは理由になっていない。
サンジがさらに警戒するのも無理はないとはいえ、鷲は気にせず話し出す。
「あんたら、あの山の上に行きたいんだろ？　おれなら背中に乗っけて連れてってやれるぜ。二人くらいまでならな」
「二人だと？　ちょっと待て、なんで二人なんだよ」
「耐えれる重さがそれくらいなんだよ。確かにおれはしゃべれるくらいすごい鳥だぜ？　でもだからって何人乗っけても大丈夫ってほど頑丈じゃねぇし体力もねぇよ。運べるのは二人だ」
「二人ってことは、ナミさんともう一人ってとこか……」
苦々しい顔で考える。
サンジにとっての理想は、ルフィと自分とナミで移動すること。そうすれば片方がナミを守り、片方が危険に対処することができる。さらに欲を言うならばビビに一緒に来てもらい、看病だけでなく女性な

らではの問題にも対処してもらって、この場に残った全員で移動できるのが一番だ。
しかし実際、運べるのは二人だけ。
最も時間をかけずに城へ辿り着ける方法だがサンジは思い悩んだ。
この鷲を信用することは難しい。
何を目的に現れたのかがわからず、仲間の命を預けるほどの信用などなかった。
いっそのこと断ろうかとすら考えていた。
こうなればナミの心配だけではない。ルフィやビビ、自身も含めて誰かが死んでは意味がなく、それなら頼むと気軽に言うのはあり得ないとすら思っていた。
断るためにサンジが口を開いた時、それより先にルフィが言う。
「それじゃおれが行くよ。おれとナミを乗っけてくれ」
「おいルフィ!?」
「ん？　どうした？」
咄嗟に彼の肩を掴んで止める。
ルフィはその鷲の力を借りて山を目指すつもりのようだ。
それは危険だと伝えるべく、サンジは緊迫した表情で説明する。
「お前正気か？　どこの誰ともわからねぇしゃべる鷲だぞ。信用できると思ってんのか」
「でもキリが止めなかったんだろ。なら大丈夫だ」
「あいつはこっちで判断しろっつったんだ。信用できるとは一言も言ってねぇ。むしろ、こいつは信用できねぇとはっきり言ってたんだ」
「そうなのか。なぁお前、おれたちのこと騙してるか？」
「いいや。そんな理由もねぇしな」
「おっ、騙してねぇらしいぞ」
「ルフィ！　お前の頭はどんだけ幸せにできてんだっ！」
ぐいっと彼の肩を引いて正面から向き合い、顔を近付けて至近距離から睨みつける。
冗談を言っている場合ではない。今は生きるか死ぬかの瀬戸際だ。

「面白そうだからで決めていい場面じゃねぇんだ。よく考えろ。ナミさんが死にかけてんだぞ」
「だからだよ。急いだ方がいいじゃねぇか」
「こいつがお前を殺そうとしてたらどうする。いいか、忘れんな。すでにお前は賞金首。どこの誰が狙ってるかもわからねぇんだ。ナミさんまで危険に晒すかもしれねぇ」
「でも急がなきゃナミが死ぬ。早く行けた方がいいに決まってるだろ」
「そんなことくらい百も承知だっ。だがそれとこれとは……」
「おいおい、喧嘩はやめろって、なぁ。仲間同士なんだから仲良く」
口を挟んできた鷲の声に、二人の視線がそちらを向く。
「おれは別にお前らのことを恨んでるわけでもねぇし、たまたま居合わせただけだ。殺したところで得もねぇ、そうだろ？　そんなに言い合うことじゃねぇさ」
「嘘をついてるって可能性を無視してるだろ」
「嘘なんかついて何になるんだ。よく見ろ、ただの鳥だぜ？」
「ただの鳥はしゃべらねぇよ」
友好的に接しようとする鷲の言葉を払いのけ、サンジは警戒心を露わにする。
鷲はやれやれと首を振った。
ますます信用できなくなった気がする。
普通の鷲は人語を話したりしない。できるはずがない。こうして人間と話せるからにはそれなりの頭脳もあり、嘘をつくことだって簡単なはずだ。
話している内にどんどん信用を失ってきた気がする。
だがルフィはあくまでも先を急ぐ姿勢だった。
「なぁサンジ、ナミを助けてぇんだろ？　だったら早い方がいいに決まってるじゃねぇか」
「そんなことはわかってる。そうじゃなくて、こいつのせいでナミさんが危険に晒されるかもしれねぇから、キリはおれに判断しろって言ったんじゃねぇか」

「でもここでずっとしゃべってたって誰も助けてくれねぇよ」
「じゃあどうすりゃいいんだ」
「こいつのことは信用しなくていいから、おれを信用しろ。何があっても絶対ナミを守る」
そう言ってルフィは真っ直ぐにサンジの目を見つめた。
「こいつが何かしてきたっておれが何とかしてやる。ナミは死なせねぇし、医者にも診せる。どっかで落とされたら自分の足で山登るさ」
「正気か？　垂直の壁だぞ。もはや山なんて呼べねぇ」
「やる。ナミを助けるためだ」
決意した顔で力強く言われた。
呆気に取られたサンジは数秒言葉を失ってしまい、呆然とする。
如何に彼でもそんなことができるのか。ナミを背負い、鳥と戦って、さらに勝った上で五体満足のまま険しい雪山を登り、もはや壁とも言えるドラムロックの頂上へ辿り着く。
無茶だ、と考える。
素直に考えれば人間にできることではなく、止めようと考えるのは至極自然だ。
だが彼の目を見つめれば、反対する意見を口にできなくなった。
ルフィは本気だ。本気でナミを助けようとしている。
女にばかり弱いと思われがちだが、情に脆いサンジは意外にも彼のその目が苦手だった。
荒々しく頭を掻き、心を落ち着ける。
確かに一刻を争う状況であって、すぐにも行動しなければならない。
出会ったばかりの鷲ではなく、ルフィを信じる。簡単だが力のある言葉だ。確かに、と思わざるを得ない。それならば少しは納得もできる。
大きく溜息をついたサンジは苦々しい顔で、一歩後ろへ下がった。
「仕方ねぇ……時間も限られてる。だがいいかルフィ、お前は何があってもナミさんを守れ。掠り傷一つでもつけやがったら三日間メ

シ抜きの上に蹴り飛ばすぞ」
「しっしっし、心配いらねぇよ。サンジのメシは毎日食いてぇし」
「当然だ。おい鷲、てめぇもてめぇだ。もしおれの目が届かねぇとこで二人に何かしてみろ、絶対に捕まえて丸焼きにしてやる。その覚悟でナミさんを乗せろ」
「おおっ、怖ぇなぁ。わかってるよ、信用してくれ」
なんとか納得したサンジはルフィを連れ、一度家の中へ入る。
外の声は聞こえていたのか、振り返ったビビはどこか心配そうにしていて、ルフィが笑いかけると不意に苦笑する。安心とはいかないまでも、文句はなさそうだ。
まだベッドで眠ったままのナミへルフィが近付き、軽く頬を叩き始める。
見ていた二人は慌て始めるものの、止める前にナミの意識が浮上していった。
「おいナミ、起きろ。お～い」
「ちょっとルフィさん、何をっ……！」
「バカ、そっとしとけ。ナミさんは寝ててもいいんだ」
「ん……」
ナミの目が開き、ルフィの顔を見つける。
ぼんやりした視界、危なげな目つき。
意識が混濁してはっきりしない中、穏やかな様子でルフィが告げる。
「あのな、医者探したんだけど山の上にしか居ねぇんだってよ。今から山登るぞ。おれが連れてってやるから、もうちょっとだけ我慢してくれ」
「うん……よろしく」
ナミは頬を緩めてわずかに笑った。
力の入らない右手を必死に動かして、ルフィの前に掲げる。軽くではあったが彼はすぐにその手にハイタッチをして彼女の意志を受け取った。
これで後戻りはできない。

今すぐにも山を登って彼女を救う。見ていた二人も覚悟が固まった。
それからナミはすぐに眠りに就いてしまう。起きているのも辛いらしい。
気を失うような姿を心配し、急ぐ気持ちも強まった。
今すぐ出発を。
そう考えてルフィが防寒着を着せたナミを背負い、ビビが紐を使って二人の体を縛り付ける。
万が一にも落とすことなどあってはならない。もしそうなれば一巻の終わりだ。
着々と準備が進む中、サンジはルフィの正面に回り込んで真剣に言い聞かせていた。
「いいかルフィ、今は他のことなんて全部どうでもいい。ナミさんのことだけを考えろ。1にナミさん、2にナミさん、3・4もナミさんで5にナミさんだ。わかったか？」
「うん、わかった」
「おれはあの鳥野郎を信用しちゃいねぇが、お前のことは信用してる。何があってもナミさんを医者に診せろ。そして助けてもらうんだ」
「任せとけ。ナミは絶対に死なさねぇ」
笑顔で頷いた彼を信じ、サンジは道を譲る。
慎重に歩く彼は扉をくぐって外へ出た。
その時には鷲が地面に降りていて、彼らに背を向け、いつでも乗れと言わんばかりの体勢。何も言わずに微笑みを浮かべたルフィは彼の背に飛び乗った。
「行くぞ鳥！　ナミを助けに！」
「よぉし了解。しっかり掴まれ、振り落とされるなよ」
大きな翼をはためかせ、鷲が空へと飛び出った。
その大きさであれば迫力がある。二人の人間を乗せて少しも姿勢は崩れず、平気な顔をして徐々に高度を上げていく。もう一人くらい大丈夫ではないかと考えたが面積がないため厳しいだろう。

見守るしかない二人は心配そうに空を見上げ、姿が見えなくなるまで彼らを見送った。

ブリキング海賊団

メリー号が停泊する場所とは異なる岸辺。
そこに一隻の巨大な船が停まっていた。
王冠を被った白いカバの船首を持つ船であり、掲げる海賊旗もまた王冠を被ったドクロ。それだけでなくどことなく愛らしい様子で舌を見せているが、真新しい旗はつい最近作られた物だ。
旗揚げから数か月の船である。
海賊として活動した時間は短く、だが船はそれなりの年季が窺えた。
彼らは、自らをブリキング海賊団と名乗っていた。
見張りに立っていた町民たちが倒れていた。
多くの者が血を流し、赤く染まった雪原に気を失っている人間ばかりがそこに並んでいる。
その中で一人、気絶していない者が居た。
「ド、ドルトンさんに……知らせなくては」
血濡れの男は必死の想いで懐の子電伝虫を取り出し、連絡を取ろうとする。
今しがた起こったことを伝えなければならない。
口にするのはたった一言、〝ワポルが帰ってきた〟。
それを伝えようとする彼の耳にドルトンの声が聞こえる。
《こちらドルトン。何かあったか？》
「ドルトンさん……あいつが――」
《どうした、怪我をしているのか？　一体何があった》
「ワポルが……帰ってきた……」
一言そう告げて、男は気を失う。
その後もドルトンは声をかけ続けるが返答はなく、今が緊急事態なのだと理解した。
そこから少し離れた場所。
上陸した一団は雪道を移動し、ある村へ入っていた。村の名前はココアウィード。ビッグホーンの隣にある小さな集落であり、普段はの

どかな風景がある。
ブリキング海賊団はその村に到着した。
到着から数十分。村は、無残と想えるほどに破壊し尽くされていた。
最初のきっかけはおそらく、村人がワポルという人物に銃を向けた瞬間だった。
大きな白いカバに跨った男がそれである。
このワポルという男、ドラム王国と呼ばれたこの島の王であり、一度は逃げ出したとはいえ、世界政府加盟国のドラム王国を代表する人物であった。
そして同時に、民の心を理解しようとしない、自分勝手な王であった。
彼が部下をけしかけて村を破壊したのはただ腹が立ったから。それ以外の理由などない。
銃やバズーカ等、命さえ奪いかねない武器を使わせ、町の至る所が破壊されている。家屋は壊れて瓦礫の山と化し、村人たちは血を流して倒れていた。
つまらなそうにそれを眺めるワポルは呑気に鼻などほじっている。
「ふん、カバじゃな～い？　王に逆らえば死刑。そんなこともわからんのか」
傷つき倒れた村人を見る目は冷たい。興味はない、と言わんばかりだ。
彼らが死んだところで罪悪感を抱くはずもなく、むしろ当然と答えるのだろう。
そう感じ取った者は多く、倒れていたが気を失っていなかった村人が必死に声を絞り出す。
「ふざけるな……お前はもう、王なんかじゃない……！　国を捨てて、逃げたくせにっ」
「あん？　王じゃないだと？　カバなことを言うな、おれ様が王じゃなかったら誰がこの国の王だと言うんだ。おれ以外に居るわけなかろうがッ！」

一人が口火を切ったことをきっかけに、倒れたままの彼らが次々想いを語り始めた。
その声は厳しく、どれもがワポルを敵と見なす物ばかりである。
「ここはもうお前の国じゃない……」
「ドラム王国は滅びたんだっ」
「新しい王はおれたちで決める。お前の居場所なんて、どこにもないぞっ……！」
「ふぅ～、カバな国民の相手は疲れる。いや、そういえばもう国民でもなかったな」
やれやれと首を振ったワポルはより一層声を冷たくした。
「撃て」
「ワポル様、しかしそれでは――」
「おれの国にこんなカバどもはいらん。とっとと撃て」
「はっ……」
命令された部下たちは戸惑いながらも銃を構えて狙いをつけた。
血を流して倒れる男たちが何か言う暇さえ許さず、無慈悲に引き金が絞られる。
「ま、待てっ……!?」
制止の声を遮るように銃声が鳴り響いた。放たれた銃弾は口答えした男たちに向けられ、その場に居る全員が狙われた訳ではないが、新たに舞った血は多い。
見ていた者たちは思わず息を呑んでしまい。
ワポルはそれを見て表情を歪めることさえなかった。
「ドラム王国憲法第一条、王様の思い通りにならん奴は死ね！　他に異論がある者は居るか？」
倒れたままの面々を眺めてワポルが言う。
そうすると皆が言葉を失って何も言えなくなる。
口答えをすれば同じ結末だぞ。これ見よがしにそう言われては抗えるはずもなかった。
辺りが静まり返った後で、ホワイトウィッキーという種の巨大な白カバ、ロブソンから降りて、ワポルがのっそり歩き始める。

物色するように村の中を眺めているようだ。
倒壊した家屋を見やり、やっと興味を持った様子で目つきが変わる。
「まったく、とんだカバどもの相手で疲れたぜ。そろそろ腹ごしらえとするか」
舌なめずりをする彼は瓦礫の山へと歩み寄っていく。
当然そこには食料などない。攻撃によって壊れた家があるだけだ。
気にせず、ワポルは家の前に立つ。
「ちょうどこんがり焼けた家があるしなぁ」
そう言ったワポルは嬉しそうに大口を開けた。
瓦礫の山へ食らいつき、バリバリと音を立てて食し始めるのである。
彼はバクバクの実を食べた雑食人間。
普通の人間が食べられない鉄や木材といった物質でさえ食すことができ、さらに肉体に取り込んだ物を融合させて、武器として利用することも可能だった。
壊れたココアウィードの村はワポルによって次々食されていく。
逃げずに戦った男たちは今や倒れ、ただその光景を見ていることしかできなかった。
感想を言うこともなく食べ続けてかなりの時間が経つ。
その行動を止める者は居ない。部下たちは彼を恐れているのか、素直に従うのみ。
ようやく手を止めようかという頃には辺りはずいぶんと殺風景になっていた。
「げふぅ～。んん～いまいち。大した素材は使っちゃいねぇなぁ。これだから庶民は」
自身の膨らんだ腹を擦ったワポルは満足した顔で戻ってくる。地べたに座って待っていたロブソンの背に乗り、担ぎ上げられ、再び王として扱われながら移動しようとするのである。
彼は詫びることがない。自身が王だという自覚があるからだ。
王である自分は何をしても許される。

どうやらそんな自覚を持っているようで、周囲の臣下が止めることもなく、傍若無人に育った。
悪魔の実の能力による異様な食事を終えて、一団は進もうとした。
村を壊したこと、人々を傷つけたことに対する罪悪感を持たず、むしろ上機嫌な顔つき。
しかし表情が歪んだのは、遠方から向かってくる人影に気付いた時だった。
「むぅ？　あれは――」
「ワポル様、お下がりを！　奴です！」
「元護衛隊長ドルトンめ。やはりおれ様を殺しに来たか」
向かってくるのは黒い毛を持つ牛だった。四足歩行で勢いよく走り、雪を蹴り飛ばしながら一直線にワポル目掛けて走ってくる。その様は凄まじい迫力を放っていた。
ワポルの部下たちが一斉に銃を構えて彼の前に整列する。
王を守るため、自らの命を捨ててでも戦おうとしていたのだが、牛はまるで気にしない。目を血走らせ、服を身に纏い、背には武器。明確な殺意を持って動いている。
ワポルは軽く舌打ちする。
彼には見覚えがある相手だった。
元護衛隊長ドルトン。かつてワポルを守っていた男。
数年前に癇癪を起こして王の命を狙い、その任を解かれた裏切り者。
今は牛の姿になっているが、彼が動物系（ゾオン）の能力者であることはすでに知っていた。事前に来るだろうと予想していたことも合わせてさほど驚いた様子はない。
動物系（ゾオン）の能力者は変身能力を持っている。
ドルトンが食べたそれはウシウシの実、モデル〝野牛（バイソン）〟。猛々しい牛となって駆けてくる最中、さらに変身しようとしていた。
人型、獣型の中間にある形態は人獣型。
ドルトンの体は牛の特徴を残したまま人間に近くなっていき、やがて二足歩行になる。

何かを言う前に背にある武器を抜いた彼は、並び立つ兵士を睨みつけた。
「全員構えろ！　敵を射殺する！」
「元部下とて容赦はせんぞ！　そこをどけェ！」
「構わ～ん！　あのカバをさっさと撃ち殺せぇ！」
一列に並んだ兵士が一斉に銃撃を開始した。複数の銃声が一気に空へ木霊する。
しかしドルトンは逃げ出さなかった。
素早いフットワークを駆使して飛来する弾を全て避け、尚も前へ進み始めたのである。
動物系（ゾオン）の最も秀でた特徴、それは獣の身体能力を得ることだ。今の彼は人間以上の筋力を持ち、脚力は牛と同程度であり、頭脳は人間のまま。
どの位置へ、どんな姿勢で避けられるか、構えられた銃口から瞬時に推測していた。
姿勢を低く走った彼は銃弾を回避し、右手には刃の太い剣を持ち、素早く兵士へ肉薄する。
悲鳴が出そうになった時には逃げる暇など残されていない。
牛の筋力を持つ腕が大きく盛り上がり、力を溜めた後で思い切り振り抜かれた。
「フィドル野牛（バンフ）！」
通り過ぎ様にたった一撃。
ドルトンの腕が振り抜いた剣は複数の兵士を纏めて斬り飛ばし、宙を舞った男たちが落下して、自身の周囲だけ雪を赤く染め上げる。
荒く息を吐き出して、ドルトンが背筋を伸ばした。
残った兵士が怯える中、ワポルは忌々しげに彼を睨みつける。
「久しぶりだな、ワポル。やはり戻ってきたのだな、この島に」
「ワポル……？　おかしなことを言うな、ワポルさ・ま・だ!!　我が家来ドルトン」
ロブソンの背に跨り、腕組みをしたワポルが苛立った顔で答える。
対するドルトンも冷静さを窺わせる一方で怒りを滲ませた。

元は主従関係があったとはとても思えない。どちらも相手を好意的には見ておらず、すぐには動き出さないにしても敵意をぶつけて、仲が良い雰囲気など微塵も感じなかった。
彼らはすでに決別した関係である。相手に対する嫌悪は残っていても情など欠片もない。
村人には優しい顔を見せていたドルトンも、今や一人の戦士だった。
牛の黒い毛並みと鋭利な角を持ちながら、人間さながらに二本足で立つ彼は、かつて護衛隊長を務めただけあって戦闘の腕に自信がある。それはワポルも認めるほどの実力だ。
攻撃を受けずに済んだ兵士が怯えるのも無理はなく、辺りに重苦しい雰囲気が流れる。
「呼び方ならいくらでも変えてやる。さぁワポル、この国を出て行こう。我々はもうこの土地に居てはいけない。居場所などどこにもないんだ」
「ふん、カバじゃないの？　なぜおれ様が出て行かなければならん。この国はおれの物だ」
「ここはもうドラム王国ではない。お前が国民を置いて逃げ出したその瞬間から」
「ま～っはっはっは！　こりゃ傑作だ！　大カバ野郎だな！」
大笑いするワポルはふざけたつもりもなく、真剣にドルトンへ言う。
「そんなことで国が無くなるわけねぇだろうが。ここはおれの国で、おれの島だ。ドラム王国は無くなっちゃいねぇし、これからだって無くならねぇ。このおれ様が居るからだ」
「お前はもう、王ではない」
「あぁん？　偉そうに言うカバ野郎だな、なぜお前がそんなことを言える。裏切者め」
「ここにある景色を冷静に見てみろ」
ドルトンは怒気を発しながらワポルを見ていた。すぐに襲い掛からなかったのは彼が人格者であったためであろう。震える手を力で

押さえつけ、必死で体をその場に縫い付けている。
その一言をきっかけに、ワポルは辺りを見回した。
壊れた家々がある。怪我をした人々が倒れている。
それ以外目に付く物は無くて、再び目を合わせてから彼が答えた。
「ああ、おれ様に歯向かったカバ野郎どもが転がってるな。それがどうかしたか？」
「お前は、王でありながら国民を傷つけた。本来お前が守るべき人々をだ」
「それは違うなぁ。こいつらはおれ様の命令に従わなかったんだ。そんな連中を守るだと？　カバなことは休み休み言え」
「彼らがなぜそうしたのかわかっているのか」
「知らんなぁ。国民でもねぇカバどもの考えることなんて」
つまらなそうに鼻をほじりながら、ワポルは不真面目な態度だった。
それを見てドルトンの毛がざわめき出す。
暴れ出しそうになる感情は能力にまで影響を与えているらしい。
「やはり私が間違っていた」
苛立つ彼は武器を握り直して鼻息を荒くする。
「仮にもお前は私が世話になった先代国王の息子。いつの日かきっと目を覚ましてくれると希望を抱いていたが……無駄だった」
「ほ～そうか。まぁ別にお前の言うことなど興味はないが」
「もはや愛想も尽きた。国の危機に先頭切って逃げ出すような王が居る国など滅んだ方がよい。もう二度と、この国をお前たちの好きにはさせん」
「えっらそうに！　そんな大口叩いて無事で済むとでも思ってんのかァ！」
ワポルもまた激昂した様子で叫んだ。
両者は我慢できない目で睨み合い、見守っていた兵士たちに緊張が走る。
「ドラム王国憲法第一条！　王様の思い通りにならん奴は死ね！」
「そもそもそんな憲法は存在しない。以前に何度も言ったはずだ」

「やかましい～！」
「やはりお前を王にすべきではなかった。先代国王に代わり、私が責任を取る」
「何が責任だ！　責任から逃げたのがお前だろう！」
思わぬ叫びにドルトンの表情が歪む。
確かにそうかもしれない。護衛隊長の地位を捨て、如何なる経緯であっても王に背き、反逆を起こした。それは力尽くで彼を止めようとした結果だった。他の方法を探す最中での我慢しきれずといった行動だったが、今はそれが正しかったかどうかもわからない。
だがこのままではいられないと思ったことだけは確かだ。
この国は変わるべきであり、そのためにはワポルが邪魔だ。
そう思い直して覚悟を決めるドルトンの耳に、許し難い一言が飛び込む。
「国王様が言ったことは絶対に決まってるだろうが！　国民のことなんぞ知ったことか！　全員おれ様の命令に従ってればいいんだよぉ！」
「もはや何も言うまい……すでに覚悟はできている」
言い終えると同時に姿勢を低くしたドルトンは、驚くワポルを見据えて駆け出した。
「皆を守れるならこの命も捨てようっ。私と共に地獄へ行こう、ワポル！」
或いは、道連れ覚悟だったのかもしれない。
駆け出した彼がワポルに接近する途中、突如積もっていた雪がバッと宙を舞った。
雪の下から姿を現した二人がドルトンの側面を挟み込んだのである。
コンマ数秒、ドルトンは遅く感じる時の中でその二人を確認した。
どちらも見覚えのある男だったようだ。
片方は妙な頭巾をかぶり、弓矢を構えた男、チェス。
もう片方は黒いアフロヘア―が特徴的で、グローブを付けた拳を構える、クロマーリモ。

彼らはワポルの側近であり、かつてはドルトンも加えて〝三幹部〟と言われた者。実力は折り紙付きなのは知っていたはずで、なぜ今まで気付かなかったのかといえば、破壊されたココアウィードの町を見て頭に血が昇っていたのだろう。

気付いた時には彼らの攻撃は避け切れない位置にあった。

「雪国名物〝雪化粧〟」

「貴様が知らぬはずはあるまい、ドルトン」

（……不覚ッ……！）

クロマーリモが装着するアフロのようなグローブから鋭い刃が飛び出し、チェスの弓に番えられた矢は一度に三本、それらが同時にドルトンへ襲い掛かる。

体の両側から素早い動きだった。

三本の矢が肉を貫き、グローブから飛び出る刃が肌を切り裂く。

執拗な攻撃で血濡れとなった彼は為す術もなく地面へ倒れた。

視界が霞む。全身が重く、力を入れることさえできない。冷たい雪に埋もれて妙に熱かった。

肉体には矢が突き刺さったままだった。

遠くなる耳にはワポルの笑い声が聞こえて、それが悔しく、無力な自分を責め始める。

もっと早くに気付いておくべきだったのだ。

思い返せばドルトンの登場にワポルは驚いていなかった。来ると知っていて最初から備えていたのだろう。それに気付けなかったのはドルトンのミスにある。

村を破壊したことさえ作戦だったのかもしれないが、それでも冷静になるべきだった。

動かない体で必死に拳を握る。

ワポルの大きな笑い声は彼の心をこれでもかと苛んだ。

「ま～っはっはっは！　カァバめ！　お前如きがおれ様に触れられるとでも思ったか！　身の程を知れ、騎士崩れのカバ市民が！」

「残念だったなドルトン。お前の選択は間違っていた」

「今も護衛隊長を務めていれば死ぬことにはならなかっただろう

に」
ワポルはロブソンの上で笑い、傍ではチェスとクロマーリモが見下ろしている。
これは自らの罪だ。そう受け止めるしかない。
愚かな王を止めることができなかったのは自らの力が至らなかったから。もっとやれることはあったはずだと後悔し、目を閉じて彼らの嘲笑を受け入れる。
（なぜ……私は……）
彼らの声を聞きながら静かに想う。
全身を覆う熱や痛みに耐えながらも、心中は驚くほど静かな状態にあったようだ。
（こうなる前に、止められなかった……）
自らの無力を嘆く。
覚悟が足りなかった。先代国王に誓ってワポルを支え、ドラム王国を良くしていこうという決意をしたはずだ。だが結果は見るも無残なもの。もう取返しがつかないところまで来ている。
この王の下で国を作り直すことは不可能だとしか思えなかった。
願わくば、誰かにこの国を壊して欲しい。
こうなってしまってはそう願う他なく、自分の力ではどうしようもないと実感してしまった。
今この場で彼らを止めてくれる人間が来るのを強く願う自分が居る。
その願いが功を奏したのか、或いは運命だったかもしれない。
雪を踏みしめ現れたのは、偶然にも医者を探しに出たはずの二人だった。
「そこまでだよ」
声に気付いてドルトンが目を開く。
霞む視界では捉えにくいが、なんとか声の主を見つける。
彼が見たのはゾロと並んで立ったシルクがゆっくりと剣を抜いた瞬間であった。

ブリキング海賊団（2）

彼女たちの姿を見たドルトンは驚きを隠せなかった。
あまりにもタイミングが良過ぎるが、彼にとっては救いであり、ココアウィードの人々どころかこの島にとっての救世主にさえ見えてしまう。
別の村に向かったはずのゾロとシルクが現れた。
武器を携える二人に大きな期待を抱き、ドルトンはごくりと息を呑む。
「ゾロが方向音痴でよかった。そう思ったのは多分今日が初めてだね」
「方向音痴じゃねぇ、おれは狙ってここに来たんだ」
真剣な面持ちのシルクとは対照的にゾロは不機嫌そうな表情。
少なくとも眼前の敵に怯える様子はなく、期待してしまう自分が居た。
情けないとは思う。
自らの行いによって生まれた失態を、島民ですらない外海の者に任せて、尻拭いを期待してしまっている。本来ならばこれは自分が行うべきものであるというのに。
感謝の念は言葉にならないほど。
余計に後悔は大きくなるが、今はその時ではないと考え、二人が死なぬよう強く願う。
シルクが剣を抜いたことで彼らも敵と認識していたらしい。
チェスとクロマーリモが素早く構え、ワポルへの道を遮って、彼女たちの前に立ちはだかる。
やはり二人は怯えず、真剣な顔で三人を眺める。
残っている兵士はまだ数名居るが脅威とは感じていないようだ。
倒すべき敵は彼ら三人だと決め、動き出す準備のため体から余分な力を抜く。
警戒するワポルが口を開いたのはその後だった。
「なんだ貴様らは。まさかこのおれに逆らおうってわけじゃねぇよ

な？」
「こちらにおわすのが誰かわかっているのか？」
「ドラム王国の国王様であらせられるぞ」
その一言に驚いた反応だった。
シルクが先に口火を切り、ゾロはこれ見よがしに肩をすくめる。
「国王？　まさか」
「おれァてっきり海賊かと思ったがな」
「確かに海賊として行動していた時期はある。だがそれは身分を隠すためだ」
「ワポル様が汚らわしい海賊になどなるはずがあるまい」
にやけたクロマーリモの一言を受けてシルクの眉が動いた。
表情こそ真剣なまま、だが彼女に火を点ける一言は確かにあっただろう。
気付いているのはゾロだけ。面倒だと言わんばかりにやれやれと首を振る。
彼女は自分が思う以上に海賊を好きでいる。だがそれはあくまでルフィのような自由を愛する海賊であって、無抵抗の市民をカモにする悪党、過去にモーガニアと称された連中は好んでいない。むしろはっきりと嫌っているほどだ。
状況から見れば彼らがモーガニア同然の悪党であることは事実。
その上海賊という存在自体を軽んじ、侮辱する彼らを好きになれるはずもなかった。
顔をしかめた彼女は村を見回す。
家屋はほとんどが倒壊し、食されたせいか残骸すら残らず、武装しているとはいえ村民が多く倒れている。辺りに広がった血液も多かった。
ますます表情が険しくなり、再び彼らを捉える頃には敵意が隠し切れていない目だった。
「ひどい……どうしてこんなことを。あなたが王様なんでしょう？」
「そうだ。王様だから何をしても許される。それがこのドラム王国

だ！」
「やめとけ。話すだけ無駄だって言ってんだよ、あいつらは」
「うん、そうみたい」
ゾロに諭されてシルクは問いかけるのをやめる。
話し合ったところで理解できそうにない。おそらく話が通じない相手だ。
結果は結果。やるべきことは決まっている。
彼らをこのまま野放しにはできず、ここで仕留める、そう決めてゾロと共に剣を構えた。
明確な敵意をぶつけられたのである。
即座に反応するチェスとクロマーリモは勝ち誇るように笑みを浮かべ、自分が負けるとは微塵も考えていない。それは油断だ。その笑みを見てゾロはつまらなそうに鼻を鳴らす。
「所詮は趣味で海賊やるような連中か。こりゃ期待できそうにねぇな」
「貴様ら、本当にワポル様に牙を剥く気か？　土下座して謝れば許してもらえるかもしれんぞ」
「いいやだめだ、そいつらは死刑！　ドルトンの処刑を邪魔した罰だ！」
「だそうだ。残念だったな」
ワポルの一声によってチェスとクロマーリモが身構える。
応じてシルクとゾロも姿勢を変えた。
「弓と拳か。問題あるか？」
「全然。ゾロは？」
「むしろ物足りねぇくらいだ」
「他にも銃を持った人たちが居るよ」
「関係ねぇよ。全く怖くねぇのが申し訳なくなる」
余裕を窺わせる態度でゾロが頬を釣り上げた。その目はまさに獣。獲物を目にして喜ぶ様は常人であれば怯えてしまうのも当然であり、銃を構えた兵士が表情を強張らせる。
両手に刀を持ち、いつでも飛び掛かれるという前傾姿勢だ。

きっかけを作ったのはチェスだった。弓に番えた矢を唐突に放ってゾロを狙ったのだ。
飛来する一本の矢を斬り捨て、前へ駆け出したのである。
積もった雪が足を取るため動きにくい。だがある意味では修行にもなるかと思って上機嫌だ。
動き出したゾロはチェスではなく、自身に近いクロマーリモを狙う。
視線が合った瞬間に意図は伝わった。
クロマーリモが走り出してゾロへ向かい、両者は正面から激突しようとする。
ゾロが三本目の刀を口で持ち、三刀流を構えた一瞬、クロマーリモのグローブに刃が飛び出す。
「ビックリマーリモ！」
「牛針！」
両手に持った刀が牛の角のように構えられる。
素早く接近して互いに攻撃を繰り出しながら交差した。
その瞬間、クロマーリモは刃が飛び出すグローブでパンチを繰り出し、ゾロは三本の刀で目にも止まらぬ斬撃を連続させる。手数で言えばゾロの圧勝。そして結果もまた違わず、素早くも的確に敵の体を捉えた彼の攻撃はクロマーリモに無数の傷を残した。
通り過ぎた一瞬で血液が空を走る軌跡が生まれる。
結果は火を見るより明らか。
足がもたつき、姿勢を整える暇もなくクロマーリモが倒れ、その姿に味方が驚愕する。
ワポルとチェスは驚きを隠せず、分かり易いほど表情を崩して声を漏らしていた。
その一方でゾロは口の一本を鞘に納めながら、後ろに居る彼を振り返りもせず呟く。
「がっ、はぁっ……!?」
「手品は宴でだけにしときな。ここじゃ相応しくねぇよ」
「クロマーリモ!?　バカな……！」

咄嗟の判断でチェスが弓を構え、矢の狙いをゾロにつけた。
その瞬間に風が吹く。
剣を振り抜いたシルクの能力により、突如襲い掛かったかまいたちが彼の矢を切り裂き、攻撃とも思えない突然の事態にチェスは心底驚いていた様子だ。
「な、何ッ!?」
「鎌居太刀！」
再度振るわれ、横薙ぎの軌跡でかまいたちが走る。
雪原に多少の影響を与え、波が揺れるかの如く、雪の上に風が通った跡ができた。だがそれに気付ける者はおらず、やってきた見えない攻撃にチェスが斬られる。
気付けば腹を切り裂かれていて、痛みを感じた時には宙を舞っていた。
彼の体はぼとりと落ち、半ばほど雪に埋もれて動かなくなる。
能力者であるドルトンと同程度の実力を持つ幹部である。
そんな彼らがあっさり倒され、ワポルの絶叫も止まることなく、辺りは恐怖で支配されていく。
ついに兵士たちは恐怖心から後ずさりを始め、銃口を下げてしまっていた。
「えええええええっ!?　そんなあっさり!?」
「あとは大将と雑兵か」
「やっぱり許せないよ。さっさと倒しちゃおう」
「へいへい。そこまでキレたお前は初めてかもな……」
怒りを隠す気のないシルクと共に歩き出し、ゾロは溜息交じりに敵へ向かう。
急いだ様子がない姿が恐怖心を増させる要因となった。
兵士たちは怯えるのだが、逃亡はワポルが許さず、彼の命令が鋭く飛ぶ。
「撃てェ！　あのカバどもを近付けさせるなァ！」
「は、はっ！　全員構えェ！」
ワポルの声に驚きながら隊長らしき男が命令を下す。すると戸

惑っていた部下たちが動き、訓練された動きで素早く銃を構えた。
焦ることなくシルクが動く。
積もった雪に剣先を埋め、両手で柄を握ってぐっと力を込めたのである。
「はぁあああっ……！」
能力を使い、刀身に風が巻き付いた。
その状態で彼女は強く剣を振り上げると同時にかまいたちを飛ばす。
放たれた風は前ではなく上へ。空を目指した風は辺りの雪を巻き込み、大量に巻き上げ、一瞬視界は白く染まる。この瞬間、銃を構える兵士たちの標的が見えなくなっていた。
標的を見失って発砲のタイミングがわからなくなる。
舞い上がった雪によって視界が白くなり、兵士たちが狼狽する。
その中を駆けていつしかゾロが接近していた。
雪の壁を突き破るようにして彼が現れ、突然の接近に悲鳴がいくつも聞こえた。それを聞いても止まらずに前へ進み、迷わず振り切られた刀が敵を捉える。
止められる度胸がある者はおらず、一方的に蹂躙されるのみ。
ゾロが通るだけで鮮血が舞い、人がバタバタと倒れて、それでも手加減しているのだが彼らに気付く様子はない。一心不乱に悲鳴を上げて逃げ惑っていた。
ワポルはその様を眺め、自身もまた悲鳴を大きくする。
そんな彼の前にシルクが立ちはだかった。
「ギャアアアッ!?　よるなバケモノめ！」
「一つだけ聞かせて。あなたたちが海賊だった時、こんな風に町を襲ったりしたの？」
距離はあるが剣を突きつけ、シルクが尋ねる。ワポルは怯えながらも反応する。
「と、当然だろうが！　おれは王様だぞ！　どこで何しようが何食べようが貴様らに文句言われる筋合いはない！　王様の命令に逆らう奴は死ね！」

「あなたたちみたいな人が居るから――」
構えた剣を振りかぶり、風が剣に纏わりつく。
攻撃の気配を察したワポルは喚き始めるがシルクは止まろうとしなかった。
「何の罪もない人々が怯えながら暮らさなきゃならないんだ……！」
「ま、待てェ！　そんなことしたらどうなるかわかってるんだろうな！　ドラム王国は世界政府加盟国だぞ！　貴様政府に喧嘩を売るつもり――！」
「ここはもうドラム王国じゃないよ。あなたが捨てたから」
「あぁあああああああっ!?　殺されるぅぅぅ!?　死ぬぅぅぅぅぅっ!?」
シルクが剣を振り下ろそうとした一瞬、背後から声がかかって動きを止めた。
さっき斬ったはずのチェスだ。
傷ができた腹を押さえながら起き上がり、クロマーリモも足を震わせながら立ち上がって、二人は厳しい目でシルクとゾロを睨みつけている。
自然と攻撃の手を止めたシルクは彼らに振り返った。
すでに兵士たちは全滅している。
残る戦力は彼らのみ。ゾロも立ち上がった二人を視界に納める。
「ま、待て……！」
「ワポル様に手出しはさせんっ」
「まだやる気か」
「どうしてそこまで」
「わかっていないのは貴様らだ。国政に心は必要ない」
「重要なのはシステムだ。ワポル様の圧政には意味がある」
「私には、そうは思えないよ」
二人の意見に顔をしかめたシルクは再び剣を構え直した。
やはり彼らとは意見が合わない。国政を言い訳に暴論を振りかざし、王とは思えぬ立ち振る舞いで国民を苦しめ、挙句の果てには誰よりも先に逃げ出したのである。

彼らに国を導く資格などないと思い、ここで王の暴走を止めるべきだと考えた。
想いを強くするシルクに溜息をつきつつ、逃げる気のないゾロも彼らに刀を向ける。
人助けは趣味ではないが仲間は別だ。やる気のない表情だが決して油断はしていない。
彼らは驚くほどリラックスした状態だというのに、圧倒的な強さでワポルの部下たちを倒し、幹部でさえ敵わない力を持っている。唯一の脅威と考えていたドルトンでさえ一瞬で倒してみせた二人が、まるで赤子の手をひねるように吹き飛ばされたのだ。
今更立ち上がったところで敵うはずがない、というのがワポルの正直な感想。
彼がそう思っていると知ってか知らずか、チェスとクロマーリモは自身の主へ叫んだ。
「お逃げくださいワポル様！　ここは我々が！」
「こいつらは我々が仕留めます故、ひとまず安全な場所へ！」
「そ、そうか。それならおれ様は失礼して――」
起き上がった二人を見ていることで、ゾロとシルクは背を向けていた。これ幸いとワポルはその場から逃げ出そうとして、理解はしているが奇襲を警戒して振り返れずにいる。
その時、ワポルの指示でその場を離れようとしたロブソンの隣を何かが走った。
二人が見ている前でチェスとクロマーリモが目を見開く。
それは決して良い感情から来る反応ではなかった。
「なっ、なぜ……!?」
「お待ちを！　それは流石に我々でも――！」
彼らの反応で異変を感じ取ったが、その頃にはすでに遅く。
言葉を最後まで聞き取る暇さえ許さず、後方から迫った何かが背にぶつかり、風のようなそれに押されてゾロとシルクは勢いよく雪が積もる地面へ倒れた。
そしてそれはゾロとシルクだけでなく、チェスとクロマーリモにも

襲い掛かったようだ。
四人全員がその場に倒れて、周囲の景色が一変する。
ゲホッ、と思わぬ咳が出る。
妙な息苦しさを感じたゾロは顔をしかめながら顔を上げ、辺りを見回した。
何かが舞っているらしい。
雪とは違う何かが空気中を漂い、白銀の世界で紫色のそれがよく見える。
どうやらそれは胞子だった。
奇妙な色の胞子が辺りに散布され、倒れた四人は胞子を吸い込んでしまったのだろう。
息苦しさが増している。咳が止まらない。
よく見れば他の三人も苦しむ顔だ。
咄嗟に口元を押さえたゾロは自分の掌を見やり、目を見開く。
掌には自身が吐き出しただろう血がべっとり付着していた。
「あぁ……？　なんだ、こりゃ」
「んなっ、なぁにぃいいいいいっ!?　おいおいマジか、こりゃあ!?」
ワポルが大騒ぎしている。その声を半ば無視するようにゾロがシルクの様子を窺った。
いつの間にかシルクは見るからに顔色を悪くして、呼吸するのも辛そうに見え、起き上がるのはおろか目を開けることさえ不可能なほど苦しんでいる。
声をかけようと口を開いて気付いた。
大きく咳き込んだゾロの口から大量の血が吐き出されたのである。
どうやら毒だったらしいと理解したのはその後だった。
チェスとクロマーリモもまた力なく倒れ、ジタバタともがいている様子である。
確認した後、ゾロの腕から力が抜け、自身もその場へ倒れ込む。
毒の胞子を浴びなかったのはワポルだけ。彼だけは怯えた顔で騒いでいた。
ロブソンの後方から誰かが歩いてくる。

横に並び、やけに楽しそうな笑顔を浮かべるのは長身の男で、彼に気付いたことで驚きながらもワポルが慌てて呼びかけた。
「な、何やってんだよ兄ちゃん！　こんなとこで毒使うなんてよぉ！」
「いやぁ～わりぃわりぃ。こう寒いとトイレが近くなってなぁ。遅くなっちまった」
「そういうこと言ってんじゃねぇんだよ!?　おれに当たったらどうすんだ！」
現れたのはおかっぱ頭でピンク色の髪、長身で細身の男性、中年の域には達するだろうか。
男の名はムッシュール。
ワポルの実兄であり、長らく国を離れていた人物だ。
彼はノコノコの実を食べた〝キノコ人間〟。
体内で胞子を生み出し、肉体をキノコに変えるパラミシアの能力者だった。
今しがた四人に、或いは先に倒れていた兵士たちに降りかかったのは、彼が生み出した毒胞子。毒キノコが持つ胞子を生み出して体外に放出する技だったのだろう。
毒はかなり強力らしく、吸い込んだ者は一人も欠けずに苦しみもがいている。
辺りは一瞬にして痛々しい光景に変えられていた。
そうさせたのは子供のような笑みを浮かべるムッシュール一人の力である。
一人遅れていた兄が到着したのだがワポルは落ち着きを取り戻せない。
理由ならばある。確かに彼は三幹部より強いだろうが、育った環境のせいか思考は子供その物であり、良く言えば純粋で悪く言えば頭が悪い。危険な能力をあっさり使い、胞子を飛ばすという性質から考えても今のように味方を巻き込む危険性が高いのに、本人にその自覚がなかった。
弟を溺愛している様子なのはワポルにとって得とはいえ、危険人物

には変わりない。
ワポルが心配するのは放った毒胞子が自分に届くか否かだ。
すでに受けた者たちを心配する様子はなく、自身の兄に文句を言い始める。
「前にも言っただろぉ、風に乗って簡単に動くから簡単には使うなって！」
「お前めちゃくちゃ言うなぁ。簡単なのか簡単じゃないのかどっちなんだよ」
「簡単に飛ぶから簡単に使うなって言ってんだよ！　わかんねぇのかよ！」
「あーもう、うるせぇなぁ。別にいいだろ、とりあえず敵っぽい奴は倒したんだから」
「こうしちゃいられねぇ。ここに居たらおれまで巻き込まれちまうっ」
慌てたワポルは手綱を使ってロブソンの向きを変えさせた。
「兄ちゃん、早く乗ってくれ！　急いで城へ帰るぞ！　おれたちの城へ！」
「バカヤロー、お兄たまと呼べと言ってるだろうが」
ムッシュールがひらりとロブソンに飛び乗り、ワポルの後ろに座る。
直後には逃げるように踵を返し、ドラムロックがある方向へ走り始めた。
その場に残されたチェスとクロマーリモが必死で声をかけるものの、彼らの声が聞こえたところで足を止めようとはせずに、さらにロブソンを急がせてその場を離れる。
「お、お待ちください、ワポル様……」
「我々を、た、助け……」
「うるさぁい！　それくらい自分でなんとかして来い！　先に城に行ってるからな！」
「そんな……」
必死で持ち上げた腕が落ちて、彼らは気絶した。

二人を乗せたロブソンは素早くその場を離れていき、毒を受けることなく姿を消す。
一連のやり取りを耳にしたゾロが残る力で首の向きを変える。
シルクが倒れていた。
顔色が悪くなった彼女は目を閉じ、動かない。すでに意識はなさそうだ。だが黙っていられる状況でもないためゾロが呼びかけ、必死になって起こそうとする。
毒を吸い込んだ後に雪の上で眠るなど見過ごせる状況ではないだろう。
「おいシルク、生きてんのか、起きろっ。こんなとこで寝てる場合じゃねぇぞ」
そう言う彼だが、意識が遠のきかけている。
体内が異様な状態なのは自覚できた。妙な動きとでも言うのか、ただ横たわっているだけで呼吸がし辛く、胸のざわめきが止まる瞬間はない。
繋ぎ止めていたはずの意識が自分の意志に反して手放されそうになった。
重い瞼が完全に落ちる寸前、彼は悔しげに呟く。
「ちくしょう……不甲斐ねぇ」
意識がぷつりと途絶え、ゾロが意識を失う。
これで全員が気絶してしまった。
その場で動く者はおらず、胞子が風に流されて消えた後でも静寂に包まれたままである。
しかし数十分と経たず人がやってくる。
先程ムッシュールがやってきた方向から二十名ほどの人間が歩いてきたのだ。
現れたのは手術着を身に着けた男たちだった。マスクや手袋、サングラスまでかけ、皆が同じポーズで歩いてくる。
人々が倒れている光景を見ても落ち着いたままで、怯えた様子はない。
何を想うのか、彼らは互いに何も言わず、毒に倒れた者たちをじっ

と見ていた。

ドラム城へ

バサバサと翼をはためかせ、大鷲は空を飛んでいた。
いつの間にか雪が止んでいる。空にはまだ厚い雲が覆って、いつ降り出すともしれないものの、ひとまず視界は開けていた。
ドラム城は見るからに近付いていて、ルフィの顔に笑みが浮かぶ。
もうすぐ医者に会える。ナミを助けることができる。
喜びは抑え切れずに彼女へ伝えようと声を発した。
「着いたぞナミ。もうすぐ医者に会えるからな」
彼女は眠っているのか、返答はない。だが荒れた呼吸が聞こえて安心はできなかった。
長らく心配していたのだがやっと助けられる。
安堵し始めるルフィに大鷲が口を開いた。
「あんたら若いのに大変だねぇ。まぁでも助かりそうでよかったよ」
「運んでくれてありがとな。お前変だけどいい奴だよ」
「そりゃどうも」
気安い態度の大鷲には素直に感謝する。
結局、彼は裏切ることもなく城まで連れてきてくれた。確かに怪しい奴だとは思うが意外にも優しい性格のようで、ナミを心配する様子すらある。
とにかくドラム城へ来ることができた。
ゆっくりと地面に降り立つ鷲の背から飛び降り、ナミを背負うルフィは山の頂上に立つ。
ドラム城は、美しい景観でそこにそびえ立っていた。
周囲に物音はない。静寂だけが存在し、人の気配さえ感じない環境。
人々から忘れ去られたかのようにこの場所に在る。
しばし無言で見上げたルフィは、あまりの迫力に圧倒されたが如く、ぽつりと声を漏らした。
「きれいな城だ……」

造りといい、静けさといい、雰囲気といい、不思議な感覚だった。
素足に感じる雪の冷たささえ忘れ、彼はその風景に見入ってしまう。
誰も居ないのではないか。
そう考えてしまうほど城は寂しげであった。
まさか生きているはずもなし、建造物に対してそう感じるのはおかしいと彼自身も感じているものの、だからこそ不思議なのだと思う。今までそれほど寂しげな建物を見たことがない。時を忘れて見入ってしまったのはおそらくそんな理由からだ。
雪が積もりにくい工夫はされているのだろうが、所々が白く染められた外観。
冷たい、と感じる。
それはやはり人の気配を感じないせいなのだろう。
誰も居ない寂しさを思い出すような。
不意に、彼の顔が脳裏をよぎっていた。
突っ立ったまま動かないルフィを見やり、翼を畳んだ鷲が声をかける。
「いいのかい？　呑気に観光なんてしててても」
ハッと我に返ってそちらを見た。
確かにそうだ。これ以上ナミを待たせるのはまずい。
笑みを浮かべたルフィは素直に礼を言い、元気よく歩き出そうとする。
「ありがとう。急だったのに悪かったな」
「いいってことよ。たまには人助けも悪くないかな」
「お前、一緒に来ねぇのか？」
「歩くのは性に合わねぇしな。それに寒いのは辛い。そろそろ別の島に向かおうかね」
「そっか」
「あぁそうだ。一つ忠告しとくよ」
「ん？」
声の調子は変わらないが気になる一声で、ルフィが真剣に話を聞

く。
「あんた、人がよさそうだからな。あんまり他人を信じ過ぎちゃいけないぜ。さっきのグルグル眉毛の兄ちゃんを見習った方がいい。大事なものを失わねぇうちにな」
「心配いらねぇよ。全部守るって決めてるんだ。何があったっておれは何も失わねぇ」
「そうかい。あんたには必要ねぇ忠告だったかな」
表情こそ分かりにくいが大鷲は苦笑した様子だ。
言いたいことを言い終えてもう行くつもりらしく、両方の翼が広げられる。
最後に言葉を向けつつ、彼は飛び立った。
「まぁ、色々あるだろうけど頑張ってくれよ。おれは応援してるよ」
「ああ。ありがとう」
「また会うこともあるかな。じゃあな」
大鷲は空を飛んで離れていく。すぐにルフィも背を向けて城へ歩き出した。
城の外観で最も気になった部分をちらりと確認しながら、もう見惚れることはない。
なぜか天辺に掲げられた海賊旗を眺めた後、彼は城内へと入っていく。
エントランスへ続く大きな扉は限界まで開いていた。風に遊ばれた雪が城内へ入り込んでおり、広範囲に積もっているが今は気にしていられる状態でもなく、先を急ぐ。
扉を開けているために外も中も気温は変わらない。
ひどく殺風景な城内を見回して、ルフィは居るかもわからない医者へ呼びかけた。
「おーい、誰か居ねぇのか～？　医者や～い」
吹き抜けに声が木霊する。返答はない。
天井は高く、いくつかの階層に分かれて扉も多く確認でき、一階の端には階段もあった。
かなりの広さだと思い、反応がないようなら探すのは大変そうだ。

返答があったのはしばらく呼びかけた後である。
「何を騒いでるんだい、人の城で」
「あ」
「おやおや、これは妙な客人だ。ハッピーかいガキども？」
二階に位置する扉から一人の老婆が現れた。細身で妙に若々しく、ファッションまでもが彼女の歳を感じさせず、顔の皺は隠していないが年齢に見合わない力強さを感じさせる。
かけていたサングラスを頭に上げ、彼女は肉眼で二人を見た。
ルフィは多少驚きながらも彼女に答える。
「ばあさん医者か？　おれの仲間が死にかけてんだ。助けて欲しいんだよ」
「口の利き方には気をつけな。あたしゃツヤツヤの１３０代だよ」
「１３０？　やっぱりばあさんじゃねぇか」
「やれやれ、まだガキにはわからないようだね」
老婆は呆れた様子で首を振る。どうやら年齢にはあまり触れない方がいいらしい。
そうとは気付かないまでも、ルフィの本題は別のところにある。さほど長く取り合わずに深々と頭を下げ始め、背中に居るナミを気にしながら再び頼む。
「なぁ、頼むよ。三日くらい苦しんでるんだ。早くしねぇと死んじまうかもしれねぇ」
「さてどうしたもんか。口の利き方も知らない相手じゃ助ける気にもならないけどねぇ」
「ええっ!?　そんなこと言わずに頼むよばあさん！」
「まだ言うかい。まぁ、あたしがそうでも、あいつはどうかわからないがね」
笑顔ではあるが素っ気ない老婆は、不意に視線を外して自身の後方を見た。
そこから歩いてくる小さな影を見つける。
影は人間の物ではなく、老婆の足下に来た時にその姿を捉えた。
人間の子供程度の背丈だろうか。小さな人影はしかし人間のもの

ではなく、皮膚は毛皮に覆われており、ピンク色の帽子を被って、そこから二本の角が飛び出ている。動物に見える外見ながら二本足で立っていた。着ている服は下半身を覆うズボンのみで靴さえ履かず、足には蹄がある。

欄干の間から覗き込み、怯える目でルフィを見つめるのは獣だった。

二本足で立ち、可愛らしい外見とはいえ、人でもなければただの動物でもない生物。

おそらくトナカイなのだろう。鼻の色が青く普通ではないが、いくつか特徴は窺えた。

問いかけられた彼はじっとルフィを見下ろす。

決して小さくはない戸惑いが感じられる表情と目つき。怯える様子ながら敵意を持つようでもあって不思議な感情を灯している。

ルフィもまた見たことのない姿に見入っていた。

二人はしばし視線を交わし、少しの間言葉を失う。

「治してやるかい？　あんたの客だよ」

「……うん」

わずかに戸惑いを感じさせながら、彼が頷いた。

小さな動物は恐る恐るルフィへ声をかける。

人の言葉を流暢に使ったのだ。

「そいつ、どんな症状があるんだ？」

「ん？　えーっと、なんだっけな。熱がすごくて、肉が食えなくて」

「どうやら問診には向かない付き添いらしいね。あんたが判断した方が早いよ」

「うん。そうみたいだ」

ルフィの返答を聞いて不安に思ったのか、彼は一つの決意をした。

「こっちに上がってきてくれ。治療するよ」

「ほんとかっ？　ありがとう！」

「いいのかい？」

「だって、見て見ぬふりはできないから」

老婆に問われて彼は頷く。どうやら迷いは捨て去ったらしい。

笑みを深めた彼女がサングラスをかけ直し、ふと歩き出してその場を離れようとする。
その時になってルフィが疑問を持ったようだ。
奇妙な動物がしゃべっている。つい先程まで同様の鳥が傍に居たのだが、やはりそう簡単に納得するには異質過ぎて、気付くのが遅れたが驚きを抱く。
突然大声を発した彼は目が飛び出さんばかりに驚愕した。
「ええっ!?　タヌキがしゃべった!?」
「遅っ!?　しかもタヌキじゃねぇよ、トナカイだ！　角だってあるだろ！」
「ああ、そうなのか」
唐突な発言に驚いて思わず言い返してしまった。
ハッと我に返った彼は少し弱気な顔になるも、ルフィは気にせず親しげな態度で言う。
「お前、名前は？」
「おれ？　おれは……トニートニー・チョッパー」
「チョッパーっていうのか。おれはルフィ。海賊王になる男だ」
「えっ……海賊？」
その言葉にはかなりの驚きが伴ったらしい。
不思議なトナカイ、チョッパーは、海賊と名乗ったルフィをじっと見つめていた。

＊

ロープウェイを修理するウソップは苦々しい顔になっていた。
以前から修理を担当していたという機械工の老年の男が手伝っているのだが、ボケているとは言わないまでも物忘れはあるらしく、遅々として作業が進まない。
思い出せずにうんうん唸る男に困りつつ、二人は修理を急いでいた。
「思い出せたかじいさん」

「う～んこんな感じだと思うんじゃけどなぁ～」
「あんたほんとにプロなのか？　今まで壊れた時はどうしてたんだよ」
「長いこと使う人間がおらんかったからなぁ。国王はあれじゃし、国は崩壊したし」
「色々あったんだな、この国は」
試行錯誤という調子で手先を動かしつつ、ウソップがぽつりと呟く。
頷く老年の男は思い出しながら語り始めた。
「先代国王が死んでから何もかも変わっちまった。ワポルはめちゃくちゃするし、数か月前には海賊に襲われるしなぁ。医者狩りがあった頃からこの国も住みにくくなったよ」
「医者狩りって？」
「ワポルがやった政策じゃ。お抱えの医者に頼らせようって、国中の医者が国外追放にされた。イッシー２０とかふざけた名前をつけてな」
「ひでぇ話だな。自分の力を誇示するってことか？」
「自分勝手な奴なんじゃよ。血縁があるだけで王の器じゃない」
彼は侮蔑するようにそう吐き捨てる。堪えきれない感情があるようだ。
この島は彼らの想像以上に複雑な状況にあるらしい。
ウソップは難しい顔をして言った。
「どこの島も色々あるんだなぁ。しかも海賊に襲われたなんて」
「ああ、今までそんなことはなかったのになぁ」
「どんな奴らだったんだ？」
「あーなんつったか。確か……黒ひげ海賊団だったかな」
「黒ひげ？　知らねぇな。白ひげのパクリか？」
「詳しいことは知らんけど、いきなりやってきて襲われたんだ。実際見た連中はとんでもなく強かったって言ってるよ。初めはワポルが逃げ出したんで、救世主かと思ったんだがねぇ」
「でもそうじゃなかったんだな」

「ああ。奴らが来た村は破壊し尽くされたってさ。怪我人もずいぶん出たなぁ……」
老年の男がぽつりと呟く。
どことなく寂しげな顔を見たウソップは押し黙り、複雑な面持ちとなる。
当事者でしかわからないことも多いのだろう。特に海賊の襲撃を受けて傷ついているというなら尚更、無暗に忠告したり励ましたりは不作法に想えた。
少なくともワポルという王が最悪だったことは伝わる。
難しい顔で唸る頃、慌てた声がウソップの背にかけられた。
「ウソップ君！　た、大変だ！」
「ん？　なんだ、イガラムのおっさんか」
慌てた顔で走ってくるのはイガラムであった。
足を止める前から叫んでいた彼はウソップの傍にやってきて声を大きくする。
「すぐに来てください、大変な事態ですよっ」
「どうしたんだよおっさん。居なくなったと思ったら急に走ってきて。何があったんだ？」
「さっき、ドルトンさんが血相を変えて出て行ったでしょう」
「そういやそうだったな」
「気になって村の人たちと一緒に後を追ったんです。そうしたら破壊された村の中で怪我をして倒れていた！　しかも彼だけじゃない、多くの村人と、なぜかゾロ君やシルク君まで！」
「な、なにぃ!?」
仲間の名前が聞こえた瞬間、表情が変わる。
「ゾロとシルクがやられたってのか!?　誰だよ、あいつらに勝てる奴なんて！」
「詳しい話はこれからで、とにかく一緒に来てください。治療して助けてくれた人々が居るようなんです。まずはドルトンさんの家へ」
「おし！　じいさん、あと任せていいか？」
「お～、気いつけてなぁ」

ロープウェイの修理を本職に任せ、立ち上がったウソップはイガラムと共に駆け出した。
小走りで村の中を走ってドルトンの家を目指す。
そう大きな村ではないためすぐに目的地は視界に入って、彼らは家の前に居る人間を見つけた。
奇妙な集団である。揃いの手術着を身に着け、両手を胸の前にまで上げ、全員が同じポーズ。サングラスをつけた顔がぐるりと二人の方へ振り返った。
どこからどう見ても怪しい。
ざっと数えれば二十人くらいは居る。この不思議な集団の素性や目的が知れず、ドルトンの家を前にして思わずウソップが警戒してしまうのも無理はなかった。
少なくとも攻撃してくる気配はなさそうだ。
すでに会っていたらしいイガラムは警戒するウソップへ言う。
「彼らが治療してくれたんです。どうやらあそこに居た人は全員危ない状態だったみたいで、たまたま来てくれて助かりました」
「こ、こいつら誰なんだ？　見た目はすげぇ怪しいぞ」
「それが、どうも複雑な事情がある様子で……」
言い淀むイガラムに代わり、医師の集団の中から一人の男が歩み出てくる。
彼はサングラスを外し、戸惑うウソップを肉眼で見つめる。
「我々はイッシー２０。ワポル様の……いや、ワポルの私兵であり、ドラム王国生き残りの医師集団。医者狩りを免れた二十人だ」
「イッシー……？　変な名前だな。とにかく医者ってことだろ」
「彼らが通りかからなければ危なかったそうです。とにかく中へ」
話しかけてきた男、イッシー１に促されるように、イガラムとウソップは家の中へ入る。
室内にはすでにサンジとビビが居た。二人の存在を確認してから、寝かされた三人を見る。ベッドに寝かされたのは家の主であるドルトンで、体中に包帯が巻かれて眠っており、床に敷かれた布団には眠っているだけに見えるゾロとシルクが居る。

ドルトンはともかく二人は外傷が見られず、安堵したウソップは胸を撫で下ろした。
入り口に立つ二人の下へサンジとビビが近寄ってくる。
彼らは深刻な顔で、先に事情を聞いたのだろうが妙に重苦しい空気だ。
自然とウソップも緊張した面持ちになり、眠っている二人の容体を尋ねる。
「一体何があったんだよ。大怪我してんのかと思ったら別に普通だし、やっぱりあいつらが負けるとは思えねぇ。ただ寝てるだけじゃねぇのか？」
「それが……」
「厄介な野郎が居るみてぇでな。二人とも毒にやられたんだと」
「毒っ!?　大丈夫なのかよ、それ！」
サンジがさらりと言うが大変な状況らしかった。
目を剥くウソップに対し、困惑した表情のビビが答える。
「今はもう治療したから大丈夫だって。何年か前に薬が開発されていたみたいなの。だけど強力な毒だから、放っておけば明日には息を引き取っていただろうって」
「ワポルって元国王とその兄貴は能力者らしい。こいつは兄貴の能力だ。毒キノコの胞子を吸い込んで意識を失った。全部こいつらが教えてくれたよ」
「毒キノコ？　そんな能力者が居んのかよ……」
言いながらサンジがイッシー1を見たことで、ウソップもそちらを見る。
どうやら情報は彼らが渡したようだ。
頷いた彼が代表として口を開き始める。
「我々はワポルの支配下にあった。逆らえば死、そんな状態でどうやって奴を止められる」
「お前ら、そのワポルって奴の部下じゃないのか？」
「いや、自ら望んでそうしているわけじゃない。現に今、幸か不幸か、我々は奴らに歯向かっているような状況だ。これがバレれば後で

どうなるかわからない」
「なんだそりゃ。よっぽど嫌な奴なんだな、そのワポルってのは」
「そのワポルがこの国に帰ってきたの……おそらく目的は城よ」
予想ではなく、イッシー２０から聞いた話をそのまま伝えられて。
驚愕したウソップは瞬時に嫌な展開だと理解した。
「城って、山の上のか!? ルフィたちが向かった場所じゃねぇか!」
「ああ。しかも連中、民間人を傷つけることをなんとも思ってねぇような奴らだ。ルフィが居るから心配はねぇと思うが、ナミさんを攻撃しねぇとも限らねぇ」
「ゾロとシルクがやられたんだろ。放っておいていいのかよ」
「できれば情報だけでも伝えたいところだが電伝虫に出なくてな。すでになんかあったのか、それともただ忘れてるだけか、一向に連絡が取れねぇ。ったくあいつは何してやがんだ」
「ルフィのことだから死んではいねぇと思うけど、そういやあいつほとんど電伝虫使ったことなかったんじゃねぇか？ 多分存在を忘れてんだよ」
「クソッ、やっぱりおれが行くべきだった……」
後悔する顔でサンジが呟く。
向かった場所が険しい環境であり、同時に方法も危険が伴う。すでに何かが起こっていたとしても不思議ではない。心配するのはそのためだ。
連絡が取れない状況がさらに不安を募らせ、彼らの表情を曇らせた。
医師が近くに居ることもあり、彼らを信用するとして、ゾロとシルクについては安心だろう。
問題はワポルたちがまだ野放しのままで、そのことをルフィたちが知らない現状だ。
せめて連絡さえ取れれば。そう思って再びサンジが子電伝虫で通信を始めようとするも、やはりルフィは出ず、通信が繋がらないままに試みが終わる。
頭を振ったサンジは素早く考えを変えた。

「こうなりゃ仕方ねぇ。直接城に行くしかねぇだろ。間に合うかどうかは微妙だが上手く行けば援護くらいはできるはずだ」
「今からか？　でもどうやって」
「ロープウェイは」
「まだ時間かかりそうだぜ。じいさん、修理の手順忘れちまってるからさ」
「なら仕方ねぇな……キリに頼むか」
不安を滲ませる顔だったがサンジによってそう呟かれる。
ビビはすぐに納得して同意するよう頷くものの、ウソップは表情を険しくした。
「大丈夫なのかよ。あいつ水に弱いんだぞ？　雪だって触れれば濡れるんだしよぉ、いくら空飛べるからって、途中で落ちるとも限らねぇし……」
「今は雪が止んでる。少なくともさっきより死ぬ確立は低いはずだ」
「か、確率の問題だろ？　途中で力抜けたっつって落ちる確率はっ。あの山に登るんだぞ」
「ナミさんのためだ。ごちゃごちゃ言わねぇで腹括れ」
「しかもおれが行くのっ!?」
話の展開からして、お前が行け、と言われているように感じてウソップが動揺する。
当然仲間を心配する心はある。だがそれで自分まで死んでしまっては意味がない。
彼が瞬間的に顔色を悪くしていた一方、どこか覚悟した様子のビビが目の色を変えて、サンジの目を見ると強く訴えかけ始めた。
「それなら私が行くわ。体重が軽いからキリさんの負担を減らせると思うの」
「いや、ビビちゃんを危険な目に遭わせたくない。確かにルフィとキリが居りゃ大抵の敵はなんとかできるだろうが、弱点もある。もし吹雪になりゃ上空から真っ逆さまだ」
「おれは!?　おれだって真っ逆さまになったら死んじまうぞ！」

「なんとかしろ」
「お前こっちは適当か!?」
サンジは真剣な表情で冗談を言うような態度だったが、ウソップは多少本気で言っているだろうと考えていて、抗議するためにぎゃーぎゃーと騒ぎ出した。
表情一つ変えず、冷静に彼を見たサンジが言う。
「それにお前が行く意味はある。例の毒野郎、この国じゃ有名だからこそ弱点もわかってる」
「ん？　弱点？」
「火だ。胞子も本人も火に弱いらしいぜ」
促すようにサンジがイッシー1を見れば、頷く彼が説明を始めた。
「ノコノコの胞子は燃えやすい。火が近くにあると奴は本来の力を使えず、戦闘力も一気に落ちるはずだ。だから奴は火の国キラウエアに幽閉されていた」
「そ、そうか。弱点がわかってるならまだなんとか」
「おれたちの中で火を使う武器を持ってんのはお前だけだろ。キリが居りゃ手助けもあるしな」
「う～ん、確かに」
「だが奴らを甘く見ない方がいい」
納得しかけたウソップに不穏な言葉がぶつけられる。
真剣な顔のイッシー1は重苦しい口調で言った。
「ムッシュールは国外追放となった男。当時この国の王子だったが、先代国王によって火の国に渡され、長く幽閉生活を送ってきた。奴が大罪人だったからだ」
「国外追放って、王子なのに？　何すりゃそんな大事になるんだよ」
「聞いたことがありますな……確か、二十年前の毒殺事件」
ぽつりとイガラムが呟いた。彼に注目が集まり、思い出しながら語られる。
「空から島中に降り注いだ毒によって大勢の死者が出たという話です。詳細は語られていませんでしたが、諸外国は天変地異の類かとこの事件を恐れ、医療大国ドラムでなければ人々の命を救うことは不可

能だったと。一つの国が消えるかどうかという大事件だったのです」
「そう。その事件こそムッシュールの仕業。奴の能力が引き起こした」
話を聞いていた面々が息を呑んだ。
サンジとウソップは一人の人間が持つ力の恐ろしさに、ビビはまた別の要因に驚きを隠せない。
イッシー1が続ける。
「我々が知る限り、ノコノコの実の奥義と言ってもいい技、〝胞子爆弾（フェイタルボム）〟。体内に溜め込んだ猛毒の胞子を放つ技だが、さっき言っていた通り、年単位で溜め込めばたった一発で一国を崩壊させることすら難しくない。奴が人間兵器と呼ばれた所以だ」
「マジかよ……たった一人で国を落とすって？　普通じゃねぇ」
「当時１３歳だったムッシュールは、能力を試したいがためにこれを撃った。その結果は聞いての通り、諸外国を恐れさせるほどの猛威を振るって、ただの試し撃ちが一度この国を潰しかけた」
「そんな理由で!?　敵から国を守るためではなく、試してみたいなんて理由で大勢の人たちが死んでしまったの!?　それが一国の王子のやること!?」
激昂したビビが耐え切れない様子で叫ぶ。
彼女の胸に引っかかっていたもの、それが事件が起こった理由だ。能力を使わなければならない状況にあって起こってしまった事故と思いたかったが、どうやらそうではない。
祖国を愛する者として、ムッシュールのわがままを許すことができなかったのだ。
事情を知るサンジが、ウソップが、イガラムが深刻な表情で押し黙る。
数秒の沈黙があった。
その後で再び話を進めようとしたイッシー1が口を開く。
「我々には君たちを止める力も権利もない。この話を聞いてどうするかは君たちの自由だが、忠告はしたぞ。ワポルもムッシュールも強い。特にムッシュールの毒は強力だ。取り込んだ量にもよるが少な

かったとしても約二日、多過ぎれば即死する」
「ど、毒か……大丈夫かよ、ほんとに」
「心配すんな。骨は拾ってやる」
「不吉なこと言うな!?　気休めでいいから大丈夫とか言えよ！」
「大丈夫だ」
「信用できるかァ！」
「うるせぇな。お前の方がめちゃくちゃ言ってるだろ」
不安に苛まれて声を大きくするウソップに、ビビとイガラムが揃って声をかける。
頼みの綱は彼と言っていい。情報を伝え、仲間を助ける。
大勢で向かうことができない以上は任せるしかなさそうだ。
「ウソップさん、ルフィさんとナミさんをお願い」
「我々も向かえればお手伝いをするのですが、どうやらこうする以外に手はないようです」
「ま、そう心配する必要はねぇさ。お前が思う以上におれたちは心配してねぇ」
「おれ自身が心配してんだよ！　一番！」
「だろうな」
「ああもうっ、言ってても仕方ねぇか……わかったよ。こうなりゃ死ぬ気でやってやる！」
拳を握ったウソップはようやく覚悟を決めたようだった。
外へ出るべく歩き出しながら振り返る顔はサンジを捉えた。
「とりあえずおれはキリのとこに行くから、電伝虫で先に言っといてくれ」
「おし、了解」
「そうと決まれば急がねぇとな。おっさん、馬借りるぞ！」
駆け出した彼はドルトンの家を離れていく。
仲間たちは見送り、複雑な面持ちで口を閉ざした。
ウソップの背が遠ざかった後で、何気なくサンジが空を見上げる。
空には灰色の雲。またちらほらと雪が降り始めていた。
良くない展開である。現状での降雪は彼らの敵だ。無理はしない

方がいいだろう状況だが、あとはキリ本人に判断を任せるとして、自分はゾロとシルクを守ってやらねばならない。

少し遅れて、二人を連れた彼らもまたメリー号へ戻ることを決めた。

鼻の青いバケモノ

治療が終わったと聞かされた。
別室で待たされていたルフィはＤｒ．くれはに連れられ、ナミが居る部屋に通される。
扉を開けた瞬間、ベッドの傍に居たチョッパーがびくりと震えた。
部屋に入ってまず視界に入るのが彼の姿である。
見れば見るほど不思議な生物だ。トナカイの特徴は毛皮や立派な角に残るものの、小さな体躯はどことなく愛らしく、二足歩行で、手と言うべきか、蹄で医療器具を巧みに操る。
彼もれっきとした医者らしい。
不思議生物を見るルフィは思わず笑顔を浮かべていた。
今はナミのことがある。
チョッパーへの好奇心を押さえた彼はすかさずベッドへ駆け寄った。
ナミは目を閉じて眠っている。まだ顔色は悪いままだが、少なくとも楽にはなったようだ。乱れていた呼吸は先程よりも落ち着いている気がする。
ひとまず安堵できた。
傍らに居るチョッパーを見下ろしたルフィが尋ねる。
「ナミはもう大丈夫なのか？」
「まだしばらく様子は見なきゃならない。でも抗生剤は投与したから、良くはなるよ」
「そうか」
「ケスチアは珍しい、というよりもう絶滅したと思われてた病気だ。まだ油断はできない」
水で濡らしたタオルをナミの額に置いてやりながらチョッパーが言う。
そんな彼を見つめてルフィは頬を緩ませた。
「でもお前のおかげで助かったんだろ？　ありがとう」
「なっ……べ、別に、お礼なんて……」

驚いた様子で椅子から転げ落ち、慌てて立ち上がったチョッパーは後ずさりした。
「う、うるせぇよ！　そんなこと言われたって、嬉しくもなんともねぇぞ、バカヤローがっ！」
「嬉しそうだな」
褒められた影響なのか、チョッパーは唐突に踊り始めた。
ぎこちない動きは彼の心情を表していて、単純と言うべきか、どうやら素直な性格らしい。
にこにこと頬を緩める彼はひどく嬉しそうに笑みを浮かべていた。
ルフィはますます興味を持つ。
ナミはもう安全だとわかったため、今度はチョッパーに質問を始めた。
「お前変な奴だなぁ。トナカイなのにしゃべるし二本足だし、医者なんだもんなぁ」
「うっ……」
「なんでしゃべれんだ？」
素朴な疑問を持って何気なく問いかけてみた。するとチョッパーは笑みを消し、驚いた様子で背を仰け反らせ、どこか焦りを感じさせる面持ちでルフィから視線を逸らす。
なぜそうなったのか、彼にはわからない。
答えが出されずにいると部屋の隅に居たくれはが声を発した。
「見ればわかるだろう？　ただのトナカイさ」
「へぇ～」
「驚かないんだね」
「ん？　まぁ色々見てきたからな」
くれはの言葉にもルフィは涼しい顔を崩さなかった。
不思議なものならこれまでの航海でたくさん見ている。
魚人や巨人、千年竜という伝説上の生物も目にし、人語を操る鷲に助けられたばかり。二足歩行で鼻が青いトナカイを見たところで驚かないのは今までの経験があるからだろう。
そんな彼にくれはは感心した顔であり、チョッパーもまた少なから

ず驚いた様子だ。
肩をすくめるくれはが語り出す。
まるで動じなかった彼に興味を持ったようだ。
手にした酒瓶を傾けながら弾む声色だった。
「ひっひっひ、怖いもの知らずのバカってのは厄介だねぇ。今まで何を見てきたって？　喋るトナカイに匹敵するようなものだったのかい」
「ああ」
「そりゃ結構だ。どうやら本当に驚いてないようだしね」
「にしてもおもしれぇなぁ～」
ルフィの目は輝きを放ってチョッパーを見ている。
しかしチョッパーはその視線を受け止めるのに戸惑いがあるようだった。
「お前医者なんだろ？　おれたちの仲間にならねぇか。海賊の仲間に」
「えっ……？」
唐突な言葉に、チョッパーが目を見開いて驚愕した。
「お、おれが、海賊に？」
「ちょうどおれたち、仲間になってくれる医者を探してたんだ。お前が来てくれたらまたナミが倒れても治してくれるだろ。だからおれの仲間になれ」
「な、なんでおれなんか」
「だっておもしれぇじゃねぇか。しゃべるし、青っ鼻だし、トナカイだし、そんで医者だ」
「お前っ、おれのことバカにしてんだろ！」
鋭い声を受けてルフィがきょとんと表情を変える。
今の今まで怯えたような姿だったチョッパーが顔つきを変え、見るからに怒りを露わにした。どうやらルフィの言葉が癇に障ったらしく、冗談ではなさそうだ。
二人のやり取りを耳にするくれはが人知れず口を閉ざす。
「なんで？　バカになんてしてねぇよ。お前いい奴みたいだし」

「嘘つけ！　おれは青っ鼻だし、トナカイなのにしゃべるし、でも人間じゃねぇ！　それなのに仲間にしたがるわけないだろ！　お前は嘘つきだ！」
「なんで怒ってんだよ。言っとくけどおれは嘘つけねぇんだぞ」
「嘘だ！」
「嘘じゃねぇって。嘘つきはウソップだけだ」
取り付く島もない様子でチョッパーは声を荒げている。
なぜ怒るのか、理由がわかっていないルフィは心底不思議そうにして、退く気もない。
見かねたくれはが溜息をついて語り掛けた。
「そいつがただのトナカイじゃないとすれば、ヒトヒトの実を食っちまったってことか」
「ヒトヒトの実？　悪魔の実の能力者か」
「そうさ。人の能力を手に入れちまったトナカイ。人の言葉も動物の言葉もわかる。そういう奴を世間じゃ何て呼ぶか知ってるのかい？」
「そりゃ知ってるよ。能力者だろ」
「いいや。バケモノと呼ぶんだ」
わずかに笑みを浮かべてくれはが酒瓶を傾ける。
チョッパーが不意に俯き、帽子をきゅっと目深にかぶった。
そしてルフィは、笑みを消して、何を言うでもなくじっとくれはを見つめる。次いでチョッパーに視線を動かし、黙り込んだ彼を確認した。
バケモノ。不思議な力を持つ言葉である。
言葉を失くして室内が静寂に包まれた後で、くれはがさらに言葉を重ねる。
「トナカイの群れにも、人間からも認められなかった存在。両方の特徴を持っちまったせいか、たった一人で生きるしかなかった。今日出会ったばかりのお前が抱えきれるもんじゃ――」
「なんだ、それならおれも一緒だ」
にかっと笑うルフィは迷わず自分の頬を引っ張った。

「だったらおれもバケモノだ。おれはゴムゴムの実を食ったゴム人間だからな」
指を口の内側に引っ掛けたまま両手を伸ばすと、ゴムの肌は奇妙にも伸びていき、普通の人間では不可能な姿になってしまう。その上で彼は笑っていた。
チョッパーとくれはは目を大きくして驚く。
特にチョッパーは跳ぶようにして後ずさりし、勢いよく転んでしまっていた。
「お、おお、お前、なんだよそれっ」
「何ってゴムだよ。おれは全身ゴム人間なんだ」
「驚いたね。あんたも悪魔の実の能力者なのか」
「おれだけじゃねえぞ。ウチには紙人間も居るし、かまいたち人間も居るからな」
パッと指を離し、伸びた頬がバチンと戻る。
その音にびくつくチョッパーを笑顔で見つめ、再度ルフィは楽しそうに言った。
「トナカイだろうが人間だろうがいいさ。お前はナミを助けてくれたいい奴だし、仲間にしたかった医者だ。おれたちと一緒に海賊やろう」
「お、おれは……」
「海賊はいいぞ〜。冒険するし、歌は歌うし、宴もやるんだ。やってみりゃきっと気に入るさ」
「うっ――」
生き生きとした顔でルフィが誘う。だがチョッパーは戸惑うばかりだ。
彼には理解ができない。
なぜルフィはそこまで強く勧誘するのだろう。確かにナミは助けたかもしれないが、出会ってそう時間は経っておらず、見た目は普通ではないというのに。
ただの動物でもなければ人間でもない。
自身を世界の常識から外れた異物だと自覚するチョッパーは、迷い

の晴れぬ顔だった。
そうして勧誘されるのが不思議で仕方なくて、同時に、なぜか胸が高鳴っている。
まさか喜んでいるのか。
自分でもよくわかっていなくて、逡巡するチョッパーが思わず視線を外した。
ルフィは尚も笑顔で彼を見ていた。
「なぁチョッパー、おれの仲間になれよ」
「う、うっ、うるせぇ！　おれは、海賊になんかならねぇぞ！」
「あっ、おい！」
急に駆け出したチョッパーは部屋から逃げ出した。
慌てたルフィが追おうとするがその前にくれはが止める。
「待ちな」
「なんだよ、おれはチョッパーに用が――」
「そう簡単な問題じゃないんだよ」
くれはは、彼が思っていた以上に真剣だった。威圧感を醸し出してルフィを見つめ、サングラスを額に上げたため、強い眼差しは睨むように彼を捉える。
動きを止めると直立して向かい合う。
そこには敵意らしきものと優しさが窺えた。
「あんたがどういうつもりかは知らないけどね、おいそれと出ていけるほど簡単じゃない。あいつは自分の家族や仲間にも、名も知らぬ人間たちにも拒絶された」
「それなら聞いたよ。一人だったんだろ」
「わかった上で言ってんのかい？　とてもそうは見えないが」
ぐびっと一口、酒瓶の中身を喉に通す。
「あいつの傷はあたしでも治せない。心についた大きな傷さ。だがあいつ自身は何が悪いのかもわからず、何を恨めばいいのかもわからない。生まれた時から青っ鼻だったというだけで仲間を知らずに育った。自分自身をバケモノだと思ってる」
ルフィは真剣な目で聞いていた。

くれはが鼻先が触れそうになるほど顔を近付け、至近距離から言う。
「連れて行きたきゃ好きにしな。だが一筋縄じゃ行かない。お前らにあいつの傷を癒せるかい」
「知らねぇ。まだ試してねぇしな」
威圧するように言ったはずだったが表情は崩れず、ルフィは口の端を持ち上げる。
「一人が辛いのはおれもよく知ってる。だから仲間が必要なんだ。心の傷が癒えるかどうかなんてわからねぇし、そんなもんあいつ次第だろ」
「ずいぶん突き放すねぇ。それで仲間かい？」
「その代わりおれは、仲間はみんな守ってやるって約束できる。もう失わせたりしねぇ」
それは以前にも口にした誓いだった。
状況や事情は違えど、望みは同じ。
もしチョッパーが仲間を求めているのなら、自身は彼を仲間にして、二度と一人にならないように全員を守れると誓える。言葉は少なく、表情に決意が表れていた。
くれはは少し驚いた顔になる。
信じて疑わないという表情。ルフィが冗談を言っているようには見えない。
彼に対する印象を少し変えざるを得なくて、額にあったサングラスを目元に落とした。
変わっているというか、やはりバカだ。
迷いのないバカほど厄介な相手は居ない。そう考えてやれやれと首を振った。
「あんたには話が通じそうにないね……あいつも妙な奴に目をつけられたもんだ」
「しっしっし。あっ、そんなことよりチョッパー探さねぇと。お～いチョッパー！」
今度こそ駆け出したルフィが部屋を飛び出していく。

呆れながらも笑みを浮かべたくれはは彼の背を眺めてぽつりと呟いた。
「ああいう手合いは厄介だと知ってるからねぇ……妙な奴が来やがったもんだ」
その声にはどこか楽しげな、複雑な感情が宿っていた。
廊下に出たルフィはどこかへ消えてしまったチョッパーを探す。
暖炉の火で温められていた部屋から一歩出るとひどく冷える。城内は外の気温と変わらず、その証明とばかりに至る所が凍り付き、雪が積もっている場所も少なくない。
上着を脱いでいなかったのは気付かなかったからだが正解だろう。
彼は腕を擦りながら城内を見回した。
「うおっ、さみぃ～。なんで城の中なのにこんなさみぃんだ？」
走りながら辺りを見回し、内部に詳しくないため適当に進んでいた。すると偶然にも外へ繋がる大きな扉を見つけ、ふとルフィは立ち止まった。
扉が完全に開かれているのである。
そこから風と雪とが吹き込んでいて、それだけ寒くなるのも当然だった。
「なんだよ、扉開いちゃってるよ。さみぃわけだ」
上着は着ているが足は素肌を晒してサンダルを履くのみ。寒さを感じるのも当然だ。
階段を降りて一階へ降り、扉を閉めるために近付いていく。
その途上で扉の向こうに人影が見えた。
「おい、やめろ！」
「おぉっ、チョッパー」
「扉は閉めるなよ！　絶対に！」
強く言われるためなんとなく足を止める。
どうやら一足先に外まで逃げていたらしい。逃げ足の速さに驚いてしまう事実があるが、今は気にすることもできず、思いがけない真剣な顔つきにぽかんとした表情だ。
疑問を持つルフィは彼に歩み寄りながら質問する。

「だって寒いだろ。雪入ってきてるぞ。なんで開けてんだ？」
「と、とにかく、閉めちゃだめなんだ」
「だからなんで」
「閉められない理由があるから……」
緊張した面持ちのチョッパーは後ずさりを始めている。気にせずルフィはそちらに近付いた。
扉に近付いたところでふと見上げる。
何気ない仕草だったが何か気になったようだ。
閉められない理由を見つけた気がした。
開かれた扉の上に乗る物があった。
スノウバードの巣である。
真っ白な羽を持つ美しい鳥が、親鳥と雛鳥が数羽確認できて、仲睦まじい様子が見られた。
白くなる息の向こう側に一家の団欒がある。開かれた扉の上に巣が作られたため、閉めてしまうと彼らの住処を壊してしまうことになるだろう。
チョッパーは彼らのために閉めるなと言っていたようだ。
理解したルフィはにんまり頬を緩める。
視線を受けたチョッパーはびくりと肩を震わせた。
彼の優しさを感じて気分が良くなったらしい。
扉を閉めるのをやめ、外に出て隣に並ぶ。外は城内とは比べ物にならないほど雪が高く積もり、踏みしめると埋もれてしまって寒さを感じるが、今は気にならなかった。
ルフィとチョッパーは隣に並んでスノウバードの巣を見上げる。
「変なとこに作ったなぁ。なんであんなとこに」
「さぁ……気付いた時にはあったから」
「ふ～ん」
静かな時が流れる。
何を話すでもなく隣に立って、不思議とチョッパーも逃げようとしない。
しばらくすると親鳥が巣から離れ、空へ羽ばたく。動きに合わせて

首を動かした二人はスノウバードを見送り、ちらほら雪が降ってくる空を見た。
ルフィがあっと声を出す。
先程城に入る前にも気になった物が視界に入っていた。
城の天辺に掲げられたジョリーロジャー。黒い旗にドクロが描かれ、数枚の花びらが散る。それが桜の花びらであることはルフィも気付いていた。
昔、本を読むのが好きな兄から聞いた桜の話を思い出す。
桃色の花びらが舞い散る様はとても美しいのだという。
そんな話を思い出す一方、なぜその旗があるのだろうと思った。
ジョリーロジャーは海賊であることを示す旗。
まさかこの城に海賊が居る訳も無し、掲げられる理由がわからない。
視線に気付いていたのだろう。ルフィに問われたチョッパーは驚かなかった。
一際強い風が吹いて、積もった雪がわずかに舞い上がる。
「なんで海賊旗があるんだ？　お前ひょっとして海賊なのか？」
「違うよ。あれは……ドクターの旗だ」
「ドクター？」
「Ｄｒ．ヒルルク。おれに名前をつけてくれた、世界で最も偉大な医者だ」
ふぅん、と気のない声。
風ではためく旗を見ながらチョッパーが語る。
「ドクターは全ての病気にドクロを掲げたんだ。治せない病気なんてないって言って」
「海賊じゃねぇのか」
「海賊ではなかったけど……」
「うん、でもいい旗だ。おれは好きだぞ」
「そ、そうか」
俯いてしまうがチョッパーはどことなく嬉しそうだった。
照れた様子で帽子のつばを握り、大事そうに触れる。

ルフィの目はそんな彼を優しく見ている。
「そのドクターはどこに居るんだ？　さっきのばあさんじゃねぇよな」
「ドクターは……死んだんだ。その……」
「そうか」
多くを聞こうとはせずルフィが遮る。
言い辛い話なのだろう。チョッパーの声色は気落ちした様子になる。
「おれ、ドクターのことが大好きだった。だからドクターは助けられなかったけど、ドクターの夢はおれが継ぐんだ。どんな病気でも治せる万能薬になる」
「お前が万能薬か。しっしっし、いいな」
「なれると、思うか？」
「きっとなれるさ。お前が命賭けてやるんならな」
にかりと笑うルフィの顔を見上げ、ようやく肩の力を抜いたチョッパーが笑った。
「そうか……そうかな。エッエッエッ」
「お前変な笑い方だなぁ」
口元を手で押さえて笑う彼につられてルフィも笑った。
少なくともさっきよりは警戒心も薄れただろう。まだ全てではないとはいえ、少しずつ、一つずつチョッパーを理解していく自覚がある。
風に揺られて旗が動く。
二人はしばらく無言でその様を見ていた。
少し経って、ルフィが体を大きく震わせたのを見る。気付いたチョッパーは声を漏らした。
彼自身は厚い毛皮があって寒さに強いが、防寒着を着ようと人間にとっては辛い寒さ。ずっと外に居続けるのもまずいと思ったのだろう。
また少し緊張して、おどおどした態度になり、声をかけるか否かで迷う。

迷った挙句、チョッパーが意を決してルフィに言った。
「中に入ろう……ここは冷えるから」
「ん～。なぁチョッパー」
笑顔の彼は突然チョッパーの顔を覗き込む。
「おれの仲間になれよ」
再びの勧誘。唐突で、彼の発言など無視した無邪気な一言。
びくりと震えたチョッパーは咄嗟に後ずさりしていた。
「ま、まだ言ってんのかよ、それ。だから、おれなんか海賊になれないって……」
「いいじゃねぇか。おれはお前がバケモノでもいいし、面白トナカイでいい。ウチの船医はお前がいいんだよ。さっきそう決めた」
「どうして、そんなこと」
「お前がいい奴だからだ。それじゃだめか？」
邪気もなく、迷いもせず、そう言ってくる彼に驚きを隠せない。
そんな言葉を向けられたのは生まれて初めてだった。
経験がないせいか、反応に困るチョッパーはパッと視線を逸らした。しかし気分を害すどころかルフィは突然雪の上に寝そべり、彼の顔を覗き込んで話しかける。
「なぁチョッパー、一緒に海賊やろうぜ～」
「う、うるさいっ！　おれは、海賊になんか、ならないったら……！」
「え～なんでだよ～。海賊は楽しいんだぞ？　お前も一回やってみりゃわかるって」
「そ、そうなのか？　海賊って……楽しいのか？」
「当たり前だ！　だから一緒に行こう！」
「う、うぅ……」
頭を抱えて、悩む素振りのチョッパーだったが、絡みついてくる彼を突き飛ばして叫んだ。
「ならねぇよっ！　海賊になんて！」
「いやだ！　おれはお前を仲間にするって決めたんだ！」
「そ、そんなの知らねぇよ!?　おれはならないって言ってるんだぞ！」

「いやだ！　おれの仲間になれよ！」
「ならない！」
ついにチョッパーは駆け出し、慌てて城の中へと入っていった。
転がっていたルフィも起き上がり、即座に彼を追う。
二人は騒々しい声を発しながら城内を駆け回り始めた。
「待て～！　お前おれの仲間になれぇ！」
「ぎゃあああああっ!?」
「やれやれ、騒がしいねぇ。もう少し静かにできないのかい」
条件反射で逃げるチョッパーを追うルフィ。
そんな二人を確認したくれはは、呆れた声で呟いていた。

王の帰還

風が強くなってきた。
振り続ける雪を吹き飛ばすそれは吹雪となり、厳しい環境を作り出している。
その中を歩いてある男たちがドラム城へ到達した。
垂直の壁を登ったロブソンが城の前に立つ。
これにより背に掴まっていたワポルとムッシュールが眼前の城を視界に入れたのである。
「おぉ、懐かしき我が城！　ドラム城！　相変わらずの美しさだ！」
両腕を広げるワポルは雪の上に立ち、上機嫌に声を大きくしている。
しばらく離れていた我が家に帰ってきたのだ。その嬉しさは大きいらしく、どうでもいいと言いかねない顔をしているムッシュールとは正反対の姿だった。
彼の声を止める物はなく、辺りに広く伝わっていく。
「しかぁし！　なんだあの美観を損ねる旗は！　我がドラム王国の国旗はどこに行った!?　なんでわけのわからん海賊旗が掲げられとるんだァ！」
「ほう、本当だ。ということはここは海賊の国――」
「んなわけあるかよ兄ちゃん！　ここはおれの、おれたちの国だろ！　ドラム王国の国王はおれ以外に居るわけがねぇんだ！」
城に掲げられた海賊旗に気付き、ワポルが喚き始めた。
かつてそこには、ドラム王国の国旗が掲げられているはずだった。しかし今は見知らぬ海賊旗が風に揺られて存在しており、それを一種の宣戦布告と取っても不思議ではない。
一体誰がやったのか。
憤るワポルの隣ではムッシュールが呑気な表情を見せる。
彼は全く怒ってはいない。国を長く離れていたこともあってか、彼の立ち振る舞いには国に対する愛情や執着心は一切感じられず、なぜか弟のワポルに対する愛情はある。

怒ったワポルとは対照的に冷静な態度だった。
大きな声が聞こえていたのだろう。開かれたままの扉の向こうから人影が現れる。
やってきた人物を見つけ、睨みつけるワポルは忌々しそうに歯噛みした。
現れたのはＤｒ．くれはだった。
防寒着も着ずに身軽な格好で現れると、腰に手を当てて彼らの前に立ちはだかるのである。
ワポルは見るからに怒りを募らせていた。
敵意の込められた視線を受けて、くれはは怯むこともなく笑う。
「ひっひっひ。何かお探しかい？　ガキども」
「むっ!?　出やがったなババァ！　おれ様の城で何してやがる！」
「今はあたしの家さ。ついでに墓にしてやったんだよ。ここで死んだあのバカのね」
「なにぃ？」
「あんたも忘れちゃいないだろう。Ｄｒ．ヒルルクのことさ」
彼女がその名を告げた瞬間、ワポルが目を見開いた。
「あのヤブ医者の墓だと!?　このドラム城がか！　おれ様の城をあんな薄汚ぇドブネズミの墓にするとはどういう了見だ、カバ野郎！」
「仕方ないだろう。あいつの息子が、あの旗を掲げるって聞かなくてねぇ」
「そんなもん知ったことか！　いいか、この城はおれ様の物で、おれ様の許可なく荒したてめぇらはドラム王国始まって以来の大罪人！　即刻処刑してくれる！」
「やれやれ。相変わらず話の通じない奴だねぇ」
呆れた口調でくれはが言う。その態度もまた怒りを買うものだったらしく、憤慨するワポルはその場で地団駄を踏み、癇癪を起した子供のように怒り狂った。
ムッシュールはつまらなそうにしていて、ロブソンは我関せずといった顔。
笑い声を発するくれはに再び鋭い声が飛んだ。

「笑うなァ！」
「今更何をしようが無駄さ。ここはもうドラム王国じゃない。あんたの国は滅んだんだよ」
「ま～っはっはっは！　カバめ！　滅びるわけがあるか、王であるおれ様が帰ったからにはドラム王国は復活する！　このおれの力によって何度でも！」
「あんたにそんな力はないよ。いい加減自覚したらどうだい」
「うるさぁ～い！　おれに指図するなぁ！」
地団駄は止まらず、彼の足下の雪だけ踏み固められていく。
ついにワポルは怒り心頭となり、目を血走らせ始めた。
その頃になってくれはの後方から新たな影が現れる。
走ってきたのはチョッパーと、彼を追っていたルフィだ。
颯爽と現れた彼らの表情はそれぞれ違い、瞬時に状況を理解したチョッパーは厳しい顔をして、くれはが話している相手が誰かさえ知らないルフィはぽかんとしていた。
「ドクトリーヌ！」
「ああ、来たかい。あいつの息子だよ」
「息子だぁ？　なんだあのバケモノは」
人獣型のチョッパーは小さな体躯で、二足歩行であり、奇妙な外見をしている。
とても人間が息子と呼ぶ姿には見えずに、ワポルは眉間に皺を寄せた。だがムッシュールは珍しい生き物に興味を持ったらしく、素直に喜び始める。
「おおっ、なんだあの動物は！　いつの間にあんな珍妙な動物が住むようになったんだ？」
「呑気なこと言ってる場合かよ兄ちゃん！　おれたちの城だぞ！」
傍から見れば、彼ら二人も奇妙な兄弟である。奇抜な格好をしていて性格も独特。見ている者が首をかしげてしまう程度には変わった人間だろう。
特に注目を浴びるのは兄のムッシュールだ。
ルフィは二人とも知らないものの、チョッパーは以前ワポルを見た

ことがあるのだが、そんな彼ですらムッシュールについては知らない。今初めて見た人物だ。
昔は確かに居たはずの取り巻きはおらず、傍に居るのは兄一人。
くれははその兄を知っている。
かつてドラム王国に存続の危機を与えた人物。永久追放となった男だった。
ワポルが連れ帰ったのだと見た瞬間に理解できた。
状況を知ろうとするチョッパーが二人を見たまま彼女へ問いかける。
「ドクトリーヌ、あいつら……」
「ああ。ワポルとその兄、ムッシュールだよ。前に話したことがあったね、〝毒の雪〟の話は」
「毒の胞子が、雪みたいに国中に降り注いだって。まさかあいつが？」
「厄介な奴を解き放ったもんだ。ムッシュールはワポルにとっても頭痛の種だったはずだが、やはり黒ひげ海賊団とやらの襲撃があったからか。あいつは強いよ」
真剣に話す二人の後ろに立ち、覗き込むように前方を眺めるルフィはまだ首を捻っていた。
「誰だあいつら？　友達か？」
「その逆さ。ドラム王国最大の汚点。あたしらの敵だよ」
「海賊なのか？」
「そうだよ。しかも性質が悪い方のね」
「おいババァ！　勝手なこと言ってんじゃねぇぞ！」
ルフィへの返答を遮る声が木霊する。
ワポルの指がくれはを指し、厳しい声がぶつけられた。
「確かに海に居る間は海賊の真似事をしていたが、あんなもん所詮はお遊びだ！　おれ様は国王様だぞ！　誰が好き好んで海賊なんかになるってんだ！」
「おかしなことを言う。だったらなぜ海賊の真似事をした」
「おれ様が王様だとバレれば命を狙われるだろうが！　身分を隠す

ためにやったに過ぎない！　薄汚くてろくでもねぇ海賊になりたがる奴なんぞ、みぃんなクズだ！」
「あぁしまった、鏡を持ってなかったね。自分の顔を見せてやりたがったが無理そうか」
ワポルの発言を聞いてルフィは顔をしかめていた。
嫌悪感を感じたのだろう。どうやら意見は合いそうにない。
むっとした顔で腕を組んだ彼は荒々しく息を吐いた。
「おれあいつ嫌いだ。海賊をバカにしやがって」
「世間じゃそんなもんさ。海賊を良く想う奴の方がよっぽど変わってる」
「んなことねぇよ、海賊は面白いのに。なぁチョッパー」
「お、おれは、海賊じゃねぇから……」
何気ない素振りで声をかけられ、戸惑ったチョッパーは咄嗟に視線を落とした。
いつの間にか距離感が違っている気がして、くれはがフッと笑みをこぼす。
その笑みが気に入らなかったのだろうか。再びワポルが喚き出す。
「何勝手にくっちゃべってやがんだカバどもォ！　おれ様をコケにしやがって……王様の命令に従えん奴は処刑！　てめぇら全員処刑だ！」
「うるせぇ！　お前なんかに負けるか、バーカ！」
「なんだとこの野郎！　てめぇ、名を名乗れ、カーバ！」
「モンキー・D・ルフィ。海賊王になる男だ」
「海賊……王？」
ルフィの言葉に皆が驚く。
くれは、チョッパー、そしてワポルもまた驚きを隠せなかった。
それぞれ意味は違っていたが、この瞬間、ルフィに注目が集まっていたのは確かだ。
「海賊王だと？　ま～っはっはっは！　お前カバじゃないの～？
王様ってのは選ばれた人間にしかなれねぇもんなんだ。お前なんかが王になどなれるか！　たとえ海賊の王でもな」

「なる。絶対に」
「フン、カバには何を言っても無駄みたいだな。もういい、無駄口はもうたくさんだ」
唐突にワポルが両腕を広げる。
不審な動きにルフィとチョッパーが目を鋭くした。
「貴様ら全員、おれ様が直々に処刑してやる。後悔してももう遅いぞ！」
腕を広げた状態で、天を仰いで力強く叫ぶ。
「バクバク食（ショック）〝ワポルハウス〟！」
叫んだ直後に彼の体が変形を始める。バクバクの実の能力を使ったのだ。
人体が変質する奇妙な音が響き、肉と骨が動くと同時に、食べた物が血肉となっていく。見る見る変貌していくその様はおぞましい様相ですらあった。
息を呑んで見守るルフィやチョッパー、ムッシュールまで驚愕していたようだ。
「食った物はやがて血となり肉となる……これこそバクバクの真の奥義」
数秒経った後、彼の肉体は人の物ではなくなっていた。
全貌は家に見えてしまうほど変わっている。
頭の上から小さな煙突が伸び、胴体はブリキで、ドアまであり、両腕は大砲の砲身。体長は先程の倍ほどにまで大きくなって、丸々として見えるが強靭な肉体となっていた。
まるで別人。だが顔はワポルその物で、奇怪な姿でその場に立つ。
おそらくさっきよりも強くなるための変形なのだろう。チョッパーは歯噛みし、彼に対する敵意を強めて、厳しい視線でワポルを捉える。
その隣と、さらにワポルの隣。ルフィとムッシュールは驚愕の声を発した。
「すんげぇぇ～っ!?　家になっちまった！」
「んなっ、なんてこった!?　弟がひどく住みにくそうな家に！」

「兄ちゃん、これがバクバクの実の能力だ。そんなに驚くことでもねぇだろ」
ルフィは当然として、ムッシュールもその能力を知らなかったらしい。
驚く二人はどことなく似ているような、ほとんど同じ驚き方で大声を出していた。
チョッパーは言葉を失い、くれはは呆れて溜息をつく。
奇怪ではあったがワポルは攻撃の準備を終えていた。
両腕にある大砲。あれは飾りではないはずだと考える。
意識を切り替えたチョッパーの体がぐぐぐと動き始める。身長が伸び、体つきが変化して、毛皮があるとはいえ人間にそっくりな外見となっていく。
身長二メートルはあろうかという体格のいい外見だ。
ヒトヒトの実の能力で人型となったチョッパーはルフィよりも大きくなり、背を伸ばして立つ。
驚いたのはルフィだ。
さっきまで小さかったチョッパーが自分より大きくなっている。
声を大きくする彼を見やり、くれはが呆れた顔で解説した。
「うぇえええっ!? チョッパーがでかくなった!? お前ほんとはそんなにでかかったのか!」
「何言ってんだい、動物系(ゾオン)の能力者は三つの変身形態を持ってるんだ。これは人型、一番人間に近い形態に変わっただけさ」
「ああ、そうなのか。三段変形面白トナカイってことだな」
ルフィはにんまり笑って楽しそうにしている。チョッパーの変身能力に気を良くしたようだ。
背後で上機嫌になっているとは知らず、チョッパーは前を見たまま。
敵意を隠さない視線がワポルを睨みつけていた。
「お前たち、この島から出ていけよ」
「あん?」
「おれはお前を殴らねぇから、今すぐ島から出ていけ」

「おっとっと、もう一匹カバが居やがったのか？　何を言ってるのかわからんわァ！」
咄嗟にワポルが左腕を上げ、砲口がチョッパーを捉える。
脅しではない。それはおそらく本物で、能力を使って彼の肉体の一部となった。発射するかしないかはワポルの意志一つ。今すぐ撃たれてもおかしくない。
それでもチョッパーは退かなかった。
「ここにはお前たちの居場所なんてない。このまま何もせず出ていってくれ」
「カバめ。それはこっちのセリフだ。おれの国に貴様らは必要ない！」
チョッパーに向けられていた砲口が突如上へ向けられる。
「当然あんなヘボ医者の旗なんぞいらねぇわけだ！　偉そうに国王を見下ろしてんじゃねぇ！」
「あっ――!?」
気付いた時には、すでに砲弾が放たれていた。
止める暇もなく空を飛んだ一発の砲弾。チョッパーが見上げている前で、ヒルルクの旗が刺さる塔に激突し、小さな爆発と共に旗が宙を飛ぶ。
直撃はしていない。塔が壊れただけだ。
だがそれとは別の問題として、攻撃された旗が落ちたことは事実だった。
落ちる様をまざまざと見ていたルフィは咄嗟にチョッパーを見る。
彼は呆然として、言葉を失っている様子だった。
「チョッパー、あの旗……」
返答はない。
チョッパーは旗があった場所をじっと見つめたまま。
それを見たルフィは表情を変える。
「ま～っはっはっは！　清々したぜ！　二度とおれ様の城を汚すんじゃねぇ！」
「お前……何してんだよ！　ドクターのドクロマークに！」

「あ？　チッ、鬱陶しい野郎だぜ」
ワポルの笑い声をきっかけにして、チョッパーの中で何かが切れたのだろう。
人型の状態のまま、突然駆け出した彼がワポルへ迫る。
迎撃の意志が感じられぬままチョッパーが接近していた。ワポルは動こうとせず、だが代わりにムッシュールが二人の間に割り込んだ。
拳を振りかぶっていたチョッパーは反射的に拳を突き出そうとして、肩を押さえられる。
ムッシュールの両手が肩を押さえ、二人は力で押し合う姿勢になった。
動きを押さえられようとも怒りは収まらず。
子供のように笑うムッシュールではなく、視線はあくまでワポルを捉えた。
両者は全力で押し合い、縫い付けられたようにその場から動かなくなる。
「待て待て、おれの弟に何をするつもりだ？　んん？　その振り上げた拳で殴ろうってのか」
「くっ、ドクターは、お前たちだって救おうとしたのに！」
押し合う二人を眺めて余裕を持ち、ワポルはにやりと笑って言った。
「救う？　あのヤブ医者が？　ま～っはっはっは！　救えるわけねぇだろうが！　あんなヘボ医者に治療されたんじゃむしろ寿命が縮まっちまうぜ！」
「ぐっ、うっ……！」
「医者ってのはおれ様お抱えのイッシー２０みたいな奴らを言うんだ。そこに居るババァもてめぇの親父もクズだ！　医者だなんて名乗ってんじゃねぇよカバども！」
「お前ッ、ドクターを悪く言うなァ！」
パッと後ろに下がったチョッパーはムッシュールから距離を取った。

頭に血が上って突発的に、改めて拳を振り上げ、前へ走ると同時に振り抜く。ムッシュールの顔面を狙ったはずだったが、素早く背を仰け反らせると回避してしまい、紙一重で空を切る。
腕を組んでその場を動かず、余裕を湛えた表情。
二度、三度と腕を振るもののやはり完璧に見切られ、避けられてしまう。
三度目のパンチが空を切る頃になれば、ムッシュールからの反撃もあった。
気のない様子で蹴りが出され、チョッパーの腹に重く突き刺さる。
思わず彼は背を丸めて呻き声を発した。
「どうしたんだよ、当たってないぞ」
「殴らねぇんじゃなくて殴れねぇだけじゃねぇか！　ま～っはっはっは！」
「くそぉ、ちくちょうっ……！」
チョッパーはさらに殴り掛かる。
だがムッシュールは見事に彼のパンチを避け、今度は力を入れて反撃した。
空振りして体勢が崩れたところを、隙だらけの腹に膝蹴りが入り、直後に顎を掌底が捉える。力も入らずふらふら歩いた彼の頬に、全身を使った回し蹴りが叩き込まれた。
もはや一息つく暇もない。
軽々と宙を舞ったチョッパーの体は地面に倒れ、大の字になって雪に埋もれた。
流石にくれはが顔色を変え、思わず動き出そうとする。
その時、ワポルとムッシュールは揃って笑っており、彼らの大声だけが辺りに響いていた。
そしていつの間にか、ルフィの姿がどこかへ消えていたのだ。
「チョッパー!?　無茶するんじゃないよ！」
「ドクトリーヌ……こいつら、ドクターをバカにしたんだ。おれの命の恩人なのに」
「あぁわかってる。だからってあんたが死ぬ必要はない。ちょっと

下がってな、このガキどもはあたしがきつくお灸をすえて――」
「それじゃだめなんだ」
耐え切れずに前へ出ようとしたくれはが、その一言で足を止めた。
「おれがやらなきゃだめなんだ。ドクターの夢はおれが叶えるって決めたから」
拳をぎゅっと握って、痛くなるほど歯を食いしばる。
倒れたままでチョッパーが叫んだ。
「あの旗だけは絶対に折らせない！　あのドクロはドクターの信念なんだ！」
「やかましいぞバケモノォ！　てめぇ一人で一体何ができる！」
「おい、邪魔口！」
ワポルが倒れたチョッパーに大砲の腕を向けた時、上から声が降ってきた。
訝しむ顔で視線を上げる。
いつの間にか、城の天辺にルフィが立ち、落ちたはずの海賊旗が再びそこに立てられていた。
折ったはずの海賊旗は、ルフィの上着を使って先程と同じく存在している。
代わりに彼は上着を失っているものの、今だけは寒さなど感じず、それ以上に怒りを感じる。強い眼差しはワポルを捉えて離さなかった。
気付いたチョッパーがゆっくり起き上がり、城の上に居るルフィを見つめた。
「誰だ、あの麦わら帽子は……不敬な奴だな。おれの城に、またその旗を立てるのか」
「お前はウソッパチで海賊やってたんだろ。半端な覚悟で命も賭けずに海賊やってたお前らは、この海賊旗（はた）の意味を知らねぇんだ」
不意の一瞬、ぞくりと、チョッパーの背筋に何かが走る。
なぜかはわからない。だが今や彼の姿から目が離せなくなっていた。
「旗の意味だと？　そんな海賊どものアホな飾りに意味なんぞある

か！」
「だからお前はヘナチョコなんだ」
「何ィ!?」
「これは、お前なんかが冗談で振りかざしていい旗じゃないんだ」
「ふざけるな！　意味がわからんわ！　そんなヘボ旗、何度でも折ってやるぞ！」
チョッパーに向けられていた砲口がルフィに向く。
咄嗟にチョッパーが叫ぶが、ルフィは逃げず、ワポルから目を離さない。
「避けろ！　危ない！」
「お前なんかに折れるもんか。ドクロのマークは――」
「旗ごと死ねェ！」
砲弾が放たれ、発射の衝撃で大気が震える。
真っ直ぐに飛んだ砲弾は間違いなくルフィに迫っていて。
そしてチョッパーは、最後まで彼が逃げなかったのを目撃していた。
「〝信念〟の象徴なんだぞォ!!」
ルフィに砲弾が直撃する。
爆発が起こり、爆炎の中に彼とドクロの旗が消えた。
避けられるタイミングではなかった。避けなかったのも肉眼で確認していて、ごくりと息を呑むチョッパーは彼が死んでしまったのではないかとも想像する。
しかし、爆炎が消えて、黒煙が晴れた時。
ルフィは右手で旗を持ち、変わらずそこに立っていた。
その姿を見て総毛立つ。
攻撃を受けて尚も動かず、血を流しながらも彼はそこに居た。
驚くのはチョッパーばかりでなく、ワポルやムッシュールでさえも釘付けとなる。
「ほらな。折れねぇ」
あっさりと、簡潔な一言。
何かを感じ取ったのか、ワポルは無意識の内に後ずさる。

それと同時にルフィが顔を上げて彼を見た。
「この旗を作った奴がどんな奴だったのかはよく知らねぇけどな。これは命を誓う旗だから、冗談で立ってるわけじゃねぇんだぞ」
ワポルが悪寒を感じる頃、見上げるチョッパーは強く惹きつけられた。
「お前なんかがへらへら笑ってへし折っていい旗じゃねぇんだぞ!!!」
突然の絶叫に、気付けばワポルは心から悲鳴を上げて、チョッパーは大きく身震いしていた。
反応は様々。
くれはは穏やかな笑みを浮かべ、ムッシュールは好戦的に頬を釣り上げる。
少なくともルフィを海賊として認めない者が居なかったのは確かだ。
これが本物の海賊。
ルフィを見上げるチョッパーは言葉にできない感情を覚え、判断に困る。
かつて言われたことがある。
海賊はいいぞ。お前もいつか海へ出ろ。
ヒルルクの言葉を脳裏に、ルフィを見つめ、チョッパーは考えることすらできずにいた。
「チョッパー!」
「えっ……?」
「おれはこれからこいつらぶっ飛ばすけど、お前はどうする?」
「お……おれは……」
ルフィは手に持っていた旗を壊れた塔の天辺に突き刺し、そこに立てる。
腕をぐるぐる回すと準備は完了のようだ。
ワポルたちを見下ろし、すでに目の色が変わっていた。
海賊になれ、と追ってきた時とはまるで別人。あの時の彼は子供のように無邪気で、人の話を聞かないほど自分勝手で、とても海賊とは

思えなかった。
今は違う。
チョッパーの目から見ても彼は本物の海賊であり、強い人間だった。
お前はどうする。
そう聞かれて、すでに答えは胸の中にあった。
ただ口にするのを戸惑っていた一瞬、ムッシュールが前へ歩き出してくる。
不敵な笑みを浮かべて、彼はルフィだけを見ていた。
何やら危険な意志を感じ、チョッパーもまた表情を引き締め直す。
「おれがドクターの旗を守るんだ。一人でだって、ドクターの旗さえあればおれは――」
「もう一人じゃねぇぞ」
さほど大きな声ではなかったが、ルフィの呟きがチョッパーの耳に届く。
振り向いた時、笑顔で彼が落下してくるところだった。
「おれがお前の仲間だ！」
勢いよく落ちてきたルフィは地面に激突。大量の雪が舞い上がる。しかし本人は全く痛みを感じていない様子で立ち上がり、大事そうに帽子を被り直した。
ほっと安堵すると共に心配になる。
チョッパーは彼に近付き、その背へ声をかけた。
「お、お前、大丈夫なのか？」
「ああ、心配いらねぇ。ゴムだから」
「そうなのか……海賊ってすげぇんだな」
「そうさ。すげぇんだ、海賊は」
ししし と笑いながら振り返る顔は駆け回っていた時と同じで。
自分でも気付かぬ内にチョッパーも笑みを浮かべ、今度は怯えず彼と肩を並べた。
絶叫していたワポルがやっと冷静さを取り戻せたようだ。見るからに怯え切った顔の彼はルフィに怯えており、今は自分より小さい

ムッシュールの背に隠れようとする。
そのムッシュールは全く怯えていない。
ルフィを好敵手と認めるように、一心に彼を見つめていた。
「あ、兄ちゃ～ん！」
「おお可愛い弟よ、そんなに怯える必要はない。あいつはおれが仕留めてやるから」
「たたた頼んだぜ！　あいつこのおれに逆らいやがったんだよ！王様なのに！」
「そりゃいけねぇな。お前を怖がらせた罪は償わなきゃならねぇ」
ムッシュールが前でワポルが後ろ。
対するルフィとチョッパーは横並びで彼らに立ち塞がる。
戦闘の気配はさっき以上に濃く辺りへ漂っていた。
「行くぞ。準備はいいよな」
「うん」
「邪魔口は任せた。おれはあいつを止めなきゃいけねぇみたいだ」
握った拳をぶつけるルフィに言われ、チョッパーはちらりと彼の横顔を見る。
（仲間……）
不思議な感覚だった。
ヒルルクは家族で、くれはは師匠。
仲間ができたのは生まれて初めてだと思う。
自分の鼓動が高鳴っているのを感じながら、今は理由を考える時ではないと考えて。
チョッパーはルフィと共に自身の敵を見据えた。

GROWN　KIDZ

唐突なタイミングでムッシュールが歩き出していた。
眼前に立つ二人に怯えることもなく、後方にワポルを置いて一人で進む。
最も早くルフィが反応して、彼もまたムッシュールに向かって歩き出し始めた。
「ウチの弟をびびらせてくれたな。この分は高くつくぜ」
「知るか。あいつが臆病だっただけだろ」
ゆっくりとだが二人の間にある距離が詰まり、徐々に近付いていく。
「おいおい、おれの前で弟を侮辱する気か？　そりゃ許されねぇぞ」
「その前にあいつが海賊をバカにしたんだ」
「そうだったっけ？　まぁ別に謝る気はねぇけどな」
歩く途上で、唐突にムッシュールが膝を曲げた。これを見た瞬間にルフィが眉を動かし、彼が駆け出すと反応して、両者が同時に足を振り上げる。
互いの蹴りが激突し、衝突の余波で空気が弾けるように鳴る。
足を触れ合わせたまま、二人の視線が交わっていた。
衝突によってビリビリと足に衝撃が走る。
ぶつかった後も力を加えていたが、どちらも押し切ることはできずに後ろへ離れた。
地面を滑るように着地する。
動きを止めずにルフィが駆け出して、遅れずムッシュールも前へ出た。
再び素手で激突する。ルフィが軽い動きで拳と蹴りを繰り出す一方、ムッシュールは長い手足を上手く使い、ヒットアンドアウェイで的確に距離を作ろうとした。
どちらも戦闘に慣れた動きを見せ、実力はほぼ互角だ。
「おおおっ！」
「んんっ！」

腰を捻って繰り出される蹴りを屈んで避け、ルフィが拳を突き出した。
アッパー気味で顎を打ち抜き、直後の回し蹴りが腹に当たり、すぐに回転して頬を殴る。続けて三度の攻撃でムッシュールの足がふらついていた。
宙返りをしたルフィが一旦距離を開け、右腕を捻じりながら後方へ伸ばす。
回転を加える強烈な一撃が迫り、ムッシュールは目を見開く。
「ゴムゴムの――！」
接近しようとするルフィを目視して、咄嗟にムッシュールが右腕を掲げて前へ出した。
指を広げて掌を見せ、突き出される拳を受け止めようとするかのように。
気にせずルフィが攻撃を繰り出すとその手に変化が起きた。
「ライフル！」
拳は確かにムッシュールに当たった。だが彼の想像とは違い、接触の瞬間バフッと音がして、腕ではない柔らかい何かに触れていた。
彼のパンチを受けたのは大きなキノコである。
それはムッシュールの腕から生えていて、傘の部分が腕の先にあった。
毒々しい色のキノコを目にしてルフィの動きが止まる。
腕を引いた彼を追おうとはせず、笑みを浮かべるムッシュールは余裕を見せていた。
「なんだ!?　キノコ?　お前腕がキノコじゃねぇか！」
「おれはノコノコの実を食った全身キノコ人間。こうした変形は朝飯前よ」
受けた拳を強く押し返し、拳を止められたことより腕がキノコになった事実に驚くルフィは、そこにばかり目が行って注意力が散漫になっている。
その間にムッシュールの腕はさらに変化した。
一瞬にして傘の部分が変色した後、なぜか高速回転を始める。

見栄えはまるでドリルのようで、変色したのはキノコの種類が変わって硬くなったからだった。
甲高い音を立てて回転する腕は鉄にも等しい硬度を誇る。
自分で受けた訳ではないが危険性は伝わった。
同時に、悪魔の実の能力でドリルを実現させた彼に対する羨望の想いもあり、目を輝かせ始めるルフィはその腕を羨ましがって、身構えながらも集中力を欠いたようだ。
「スピンドリル！」
「すんげぇぇっ！　ドリルじゃ～ん！　お前の腕ドリルじゃ～ん！」
「ムッシッシ！　ただのキノコと侮るなよ！　こいつはお前の肉を抉る！」
振るわれるドリルが雪面を抉り、辺りに舞う。わずかとはいえ視界を遮るようだった。
ムッシュールは前に一歩踏み出して腕を突き出す。真剣な目に戻ったルフィは即座に見切り、その場から動かず背を反らすだけで回避した。
「死ねェ！」
「死ぬかァ！」
両者が同時に足を動かす。
ムッシュールが前に走ると、ルフィは横へ飛び退いて回避した。
何度となくドリルを当てようと腕が振るわれるが、どうやらルフィの方が素早い。
触れることは叶わぬまま大きく跳んで距離を取られた。
想像以上に素早い。ムッシュールは歯噛みする。
格闘戦に関しては彼も自信がある。長い手足はそれだけで武器であり、逃げようとしても追いつかれてしまう。ましてや今はキノコでドリルまで作っているのだ。
それなのにルフィは最小限の動きで素早く逃げていく。
人生初めての苦戦かもしれない。しかし、だからこそ楽しかった。
彼は今まで幽閉生活を余儀なくされていた。自分より強い人間を

知らなかった。
ムッシュールは笑う。
彼を倒すこと、それ自体を遊びのように楽しんでいたようだ。
ルフィが距離を取ったことで彼は足を引く。追うつもりはない。
敢えてルフィが退いたのを見送った後、口の端は上機嫌に釣り上げられていた。
ドリルの回転は尚も続いている。
右腕を振り上げ、雪面を見たムッシュールは戦法を変えるつもりでいた。
「やるじゃないの……だが本番はこれからだ！」
振り下ろされたドリルは地面を抉り、大量の雪が宙を舞った。
一時的に視界が白く染まる。ルフィは拳を構えたまま表情を歪め、ムッシュールの姿が見えなくなったことに気付き、舞い落ちる雪の向こう側を注意深く見つめる。
雪に乗じて襲ってくるか、と警戒したのだが、いつまで待っても攻撃は来ず。
視界が開けた後、ようやくムッシュールが消えたことに気付く。
そこには静かな風景があり、前方には誰もおらず、チョッパーが驚いている顔が見える。気になって周囲を見回してみたが誰も居ない。
彼はどこにも見当たらなかった。
「消えちまったぞ。またキノコの能力か？」
膝を曲げて両方の拳を握り、辺りを窺ってルフィが警戒する。
周囲は雪原。障害物は城だけ。隠れる場所はあるとはいえ距離がある。
逃げたのではない。どこからか攻撃してくるはずだ。
そう思って警戒しながら待っていると、チョッパーの鋭い声が飛んでくる。
「後ろだッ！」
咄嗟に頭を下げる。
その場へしゃがんだ直後、頭上をムッシュールの足が通り、蹴りが空ぶったらしい。

やはりどこかに潜んでいたムッシュールがそこに居て、反射的に振り返るルフィは彼の姿を間近に捉え、素早く反撃のため体を回転させる。
蹴りを外して隙だらけだった彼の軸足を蹴りつける。
落ちるように尻もちをついてしまい、さらに隙だらけの状態だった。
ルフィは軽く跳んで空に向かって右足を伸ばし、天高くから彼を踏みつけようとする。その予備動作は分かり易いためムッシュールが気付くのも当然だった。
座り込んだまま足を見上げて、表情に危機感が生まれる。
「ゴムゴムのォ――!」
「スピンドリル!」
再び右手がキノコの傘に変化し、高速回転を始める。
地面を削ってその上に乗っていた雪が舞う。
ルフィの足が降ってきたのはその直後だった。
「斧ッ!」
岩盤を踏み抜きかねない勢いで、草履を履いた足が地面を踏みつけた。しかし人間の体を踏んだ感触は感じられず、攻撃が当たらなかったことを理解する。
舞い上がる雪に紛れてムッシュールの姿が消えていた。
驚愕するルフィは咄嗟に首を振り、辺りを見回すが、やはり彼の姿は見えない。
「くそっ、どうなってんだぁ!?」
「雪に隠れて移動してるんだ! 気をつけろ、また来るぞ!」
離れた場所からチョッパーが助言する。
その瞬間、気配を感じてルフィが左側を見た。
気付いた時には再びムッシュールの蹴りが迫っており、今度は避けられず、防御する。
交差した腕に蹴りが当たる。
肉弾戦ではダメージにならないものの、耐え切れずに体が吹き飛んだ。ルフィは勢いよく地面を転がって雪にまみれ、全身を使って必死

に勢いを殺そうとする。
それを眺めるムッシュールは勝ち誇った顔で笑っていた。
「ムッシッシ！　雪国名物〝雪化粧〟！　どこから来るかわからんぞ！」
「ふん……どっから来たって効かねぇ。おれはゴムだから」
「果たしてそうかな？　試してみようか！」
上機嫌な様子で再びムッシュールが雪を巻き上げた。
非常に慣れた手腕である。長らく国を離れていようと、やはり祖国は肌に合っているのか、極寒の中で生き生きと動く姿には辛そうな様子など微塵もない。
どうやら寒さには強いらしく、肌に雪が触れても嫌とは感じないようだ。
雪国の戦法、〝雪化粧〟。
簡潔に言えば雪の中に身を潜め、奇襲を行うだけだが、これが厄介である。
雪国で育ったムッシュールは雪の中へ飛び込めば完璧に気配を消すことができ、移動をする最中も物音が生じない。雪が音を吸い込み、そう時間もかけず相手の死角へ移動できる。下手な人間にはできないが彼にとっては朝飯前だった。
また気付けばムッシュールが居なくなっており、ルフィは厳しい顔になった。
隠れながら戦われては長引くだけだ。
面倒に思ったのだろう。
隠れてしまうのならば無理やり引っ張り出す。
そう決めたルフィは集中して耳を澄まし、周囲を見回して、雪の中のムッシュールを探した。
ドラム城の前は静寂に包まれていた。物音を立てれば嫌でも耳に入る。
数秒、ルフィは耳を澄ましてムッシュールの存在を感じ取ろうとしていた。目視では気付けないことは先程試してみて気付いている。頼れるのは聴覚だけだ。

しかしそう考えていることに気付いたのだろう。
突然ワポルが大声を出し、さらに城へ向かって走り始めていた。
「ま～っはっはっは、カバどもめ！　今の内だ！」
「あ、待て！」
「あいつ、邪魔口、城に――」
「隙ありィ！」
どたどたと走るワポルに気を取られ、チョッパーが反応しようした瞬間だった。
雪を跳ね飛ばしてルフィの背後にムッシュールが現れ、ドリルを使い、彼の後頭部を狙う。当たれば間違いなく頭蓋骨を割って脳を突き破る。
完全に死角。避けられるはずがないと思っていた。
ルフィは、振り返ることなく横へ足を踏み出し、顔のすぐ横をドリルが通過する。
視覚に頼らず攻撃を回避したのだ。
「な、何ッ!?」
「おおっ――！」
さらに振り返ろうとせぬまま、ルフィが背面へ足を伸ばす。高速で伸びていくそれは間違いなく蹴りであり、攻撃であった。
攻撃を終えて動けなかったムッシュールの腹に当たる。
彼の腹を押すように蹴り、凄まじい衝撃を受け、足が離れて彼が地面を転がる頃になっても、顔は前を向いたまま。ルフィは城へ向かうワポルとチョッパーを見ていた。
逃げるワポルを追うため、チョッパーが獣型、本来のトナカイの姿になっている。
雪に足を取られることもなく走っていた。
それを眺め、ルフィは彼の名を呼ぶ。
「チョッパー！」
「え？」
走り続けてワポルを追いながらチョッパーがルフィに振り返った。
「城にはナミが居る！　あいつが悪さしねぇように、目を離さねぇ

でくれ！」
「お、おれが……？」
「任せたぞ！」
足を止めそうになりながら、必死に走ってチョッパーが息を呑む。
任せた。
些細な一言でひどく嬉しくなり、ぐっと歯を食いしばる。
「おおっ！　任せろ！」
前を向いてさらに速度を上げる。今度はもう振り返らない。
今も城内の一室で眠っているだろう彼女は、患者である。同時に今は、ルフィの仲間であり、任された相手でもある。死なせる訳にはいかなかった。
チョッパーの目には更なる強い光が灯り、ワポルを追っていく。
見送ってからルフィが振り返った。
腹を擦るムッシュールはすでに動ける体勢で、ギロリと彼を睨みつける。
「お～痛ぇ……なんでバレたのかねぇ。おれの位置が」
敵意をぶつけながら呟いた。
ルフィは応じようとはせず黙って拳を構えるだけ。
苛立った顔になり、ムッシュールは初めて怒気をぶつけ始めた。
「くそ、痛いのは嫌いだ。熱いのも嫌いだ。自由じゃないのはもっと嫌いだ」
「うるせぇ。おれはお前らが嫌いだ」
「おれはよ、王子に戻るんだ。ワポルが王になってドラム王国は復活、おれはその王子になる。暑くてうざったい火の国じゃなくて、この国で、おれたちのこの国で」
バッと両腕を広げ、ムッシュールは希望に満ちた目をする。
「おれは自由になるんだ。親父の呪縛から逃れて、ようやく自由な人生を得られる」
「お前らが言ってんのは自由じゃねぇだろ」
「いいや、自由さ。おれたちがそう決めた。だから自由なのさ」
暗い空を見上げていた目が降りてきて、顔の向きはそのままにル

フィを見る。
風が強くなりつつある。辺りは吹雪になりつつあった。
「そのためにはよぉ、邪魔しねぇでくれねぇか。ここでやめてもいいんだぜ？」
「いやだ。おれはお前らをぶっ飛ばす」
「ムッシッシ！　だったら仕方ねぇ」
佇まいが変わった気がした。
顔つきはさっきとは別人のようになり、感じる威圧感がまるで別物。
ルフィは表情こそ変えぬものの、違和感から一歩後ずさってしまった。それは本能から来る人体の反射であり、彼の意志に反した反応である。
これまで口を閉ざしていたくれはが口を開く。
チョッパーが去っても外に居て、腕を組んだ姿でルフィに忠告を行う。
「気をつけた方がいい。あいつの強さは肉弾戦とは別のものだ」
「なんか知ってんのか？」
「あいつはね、キノコの胞子を武器にする。それだけなら大したことじゃないが毒キノコまで扱えるようだ。死にたくないなら吸い込まないことだよ」
「毒か。そんな奴戦ったことねぇや」
両腕を降ろし、真っ直ぐルフィを見つめ、前傾姿勢で立つ。
底知れぬ何かを感じ、思わず眉間に皺を寄せてしまう。
本気になった彼は無邪気に笑う子供ではない。
自らの獲物をどう仕留めようかと考える、一匹の獣であった。
攻めるべきか、出方を見るべきか。
常人なら迷うところだがルフィは一切迷わなかった。
敵から目を離さずに前へ走る。ルフィが選んだのは特攻に近い攻撃だった。相手が動くよりも先に攻撃を叩き込もうと、全力で敵に向かって駆けていく。
くれはが小さな舌打ちをするが気付く様子はない。

対するムッシュールは笑みを深めて勝ち誇った顔だ。
そう来るのならば、負ける気はなかった。
「思い知らせてやる……雪胞子（スノウ・スポール）！」
迎え撃つムッシュールは両腕を前に伸ばしてルフィに掌を見せる。
その掌から紫色の胞子が飛び出し、吹雪の如く、壁のように連なってルフィに迫った。
「うわっ!?」
「こいつで滅んじまえェ！」
避けようとしたのは直感である。触れてはならないと感じて、考えようとする前に勝手に体が動いていて、気付けば自分から地面を転がって逃げていた。
放たれた毒の胞子は誰も居ない雪面を走る。
吹雪によってその軌道は変わるが、少なくともルフィやくれはが吸い込むことはなかった。
胞子は風の影響を受けやすい。吹雪いてきたのは幸いだっただろう。
起き上がるルフィは背筋に走った悪寒を無視できずにいる。
生物として強烈に感じた危機感は、辛くも彼の命を守ったようだった。
「ハァ、なんだあれ……あれが毒か」
「チィ、避けやがった。相変わらずいい動きしやがる」
「冗談じゃねぇ。ナミだってまだ起きてねぇのに、あんなの喰らってたまるか」
警戒しながらもルフィは走る。
毒が怖いといっても攻撃しなければ勝負にならない。毒の脅威を肌で感じながら、彼は退くことを考えずに、あくまでも自身が攻めることを選択する。
その選択はムッシュールにとって良いものではなかった。
胞子は無限に使える訳ではない。体内で作られた物だけを体外へ放出できる。
使えば使うだけ消費していき、種類にもよるとはいえ、連続使用で

きる物は一種とてなかった。言わばこのタイミングでの使用はただの脅しであり、仕切り直しのためでもある。
当たれば僥倖。即刻勝負を終わらせることができる。
避けられても敵は毒の脅威を感じて怯えるはず。
どっちになろうと自分が優勢になる。
そう思っていたが、細かく物を考えるタイプではないルフィはすぐ攻勢に転じてしまった。これは完全な想定外であり、ムッシュールは余裕を感じさせる笑顔に驚きを隠す。
彼もルフィと同じく、頭を使うのが得意ではない。
先の先まで読めないのは互いに同じ。本能で戦うのが彼らの特技だった。
走りながらルフィは両腕を高速で動かす。
予備動作を行って勢いをつけ、連続するパンチをムッシュールに叩き込もうとしていた。
とにかく攻撃が来るのだと思って、ムッシュールは右手をキノコの傘に変え、前に出した。
「ゴムゴムの！」
「無駄だ。おれの腕は衝撃を吸収するキノコにもなる――」
「ガトリング！」
敵のパンチを受け止めて流れを作り、攻勢に転ずる。そう考えたムッシュールが目を見開いた。
やってきたパンチは一発ではなく数え切れないほど多かった。
高速で突き出される拳が全身を打つ。何発かは防御のために構えた傘に当たるとはいえ、片手だけでは全身を覆い隠すことはできない。またそれほど大きなサイズでもなかった。頭から足先に至るまで、触れた箇所には強烈な痛みが走る。
何発入ったかは本人もわからず、何発打ったかさえ本人にもわからない。
ただ少なくともムッシュールは足をふらつかせていた。
好機と見るや否や、ルフィは後方に腕を伸ばし、前へ駆け出した。
鼻血を吹き出すムッシュールの顔を見据えていて、接近と同時に拳

を突き出す。
「おおおっ、ブレットォ！」
「ブガァッ!?」
顔の中心に拳が埋まった。
耐えることすらできずに地面から足が離れ、体が宙を飛ぶ。決して小さくはない肉体は雪面を滑って軌跡を残し、激しく転がって、ルフィからずいぶん離れた場所で止まった。
もう少しでドラムロックから落ちるという位置。
殴り飛ばしたルフィは大きく息を吐いて彼を見つめる。
「ハァ、ハァ……やったのか？」
呟いた直後に体が動く。
ムッシュールはすぐに起き上がり、痛そうに顔をしかめ、鼻先を撫でながら立ち上がった。
ダメージはあるはず。しかし彼の態度がそれを感じさせない。
攻撃を受けたこととは別に、ルフィに対する恐怖心は見られなかった。
子供のように笑って語り出す。
「ちくしょう、鼻血が出てきた。おれがこの国の人間を殺しちまった時でさえ、親父にもぶたれたことはないんだけどなぁ」
次の瞬間には目がつり上がり、明確なまでの怒気が溢れ出す。
「よくもやりやがったな！　すげぇイテェじゃねぇかバカヤロー！」
勢いよく両腕を広げ、背を丸めた。
ルフィはその背から何かが飛び出してくるのを目視する。
「クロスシェード！」
それは帯状に連なった毒の胞子だった。雪胞子（スノウ・スポール）とは別の種類、別の毒が、七本の槍となって背から飛び出し、ルフィへ向かって落下してくる。
目視で毒だと気付けないにしても危険であることには違いない。
地面を蹴ったルフィは一つずつそれらを避け、後退しながら全てを回避した。

怒り狂った様子のムッシュールはまだ止まらない。
今度は雪に隠れようとはせず、真っ直ぐ駆けてくる。
両手がドリルになっていた。攻撃性のみを重視して防御は考えていないのだろう。
荒々しい足取りで雪を蹴り飛ばしながら進み、ルフィが待ち構えるのを見ても策を用いようとする気配はなく、我武者羅に攻撃しようとしているのは明白だった。
「お前が能力者でもドリルは止められねぇよ！　おれの両手はドリルだぞ！」
「ゴムゴムのォ～……」
「ムッシッシ、下手に手を出せばお前の腕が――」
「ピストル！」
拳を突き出したルフィの腕は真っ直ぐ伸びた。
フェイントも入れない平凡な一撃はしかし速く、予想外のスピードに思考が止まる。
笑顔が固まったムッシュールは、笑い声を途切れさせ、気付けば左頬を殴られていた。両手のドリルを振るう機会もなく殴り飛ばされるのである。
「ぶぼぉっ!?」
「んん、ドリルは羨ましいけどな。でも使わなかったらだめだ、かっこよくねぇ」
雪の上をごろごろ転がるムッシュールを見て冷たい一言。
伸ばした腕を引き戻したルフィはすぐに走り出す。
決着をつけるなら今。
なぜかムッシュールの動きは遅く、元に戻った両手を地面につき、跪いたまま。
起き上がる拍子にルフィに背を向けた状態になった。
振り向かないのならそのまま終わらせる。ルフィはとどめのために接近を試みていた。
「このまま一気に終わらせてやる。ゴムゴムのォ！」
「ガフッ、ゴフッ……すげぇな。おれよりずっと速ぇ。こりゃ止め

られねぇな」
ぶつぶつ呟くムッシュールは振り返らず。
迫ってくるルフィの気配を背後に感じながら、ある時にやりと笑った。
「だったら、捕まえちまえばいいだけだよな。最初からこうすりゃ簡単だった」
「バズーーーえ!?」
「走菌糸(ラン・ハイファー)!」
雪の中を、真っ白な菌糸が走る。
同色であるためどこを移動しているのか見切ることはできない。
そしてルフィの足下へ到達した時、急成長を行い、ルフィの四肢を取り込んで地面に立つ。その姿はまるで隆起した真っ白い岩のようだった。
体の一部が取り込まれてしまい、ルフィは動けなくなる。
さらにこの菌糸、岩のように硬く、内部でどれほど力を込めようが壊れる気配がない。
必死にもがくルフィを見るムッシュールは今度こそ上機嫌に笑う。
自身が生み出せる菌糸に早く気付けなかったのは自らの頭がそう働かないからだと気付かず。
勝ち誇る彼はすでに勝利を確信していた。
「うわっ、なんだこれっ!? キノコか? 食えんのか?」
「雪化粧にはこんな使い方もあるんだ。これでお前は逃げられねぇ……」
想像以上に長引いていたのは彼に取っても利があった。
一度使ったはずの胞子が再び生成され、ムッシュールは両手を伸ばす。
「雪胞子(スノウ・スポール)!」
「いっ――!?」
両手の掌から毒の胞子が噴射される。
身動きが取れないルフィが逃げられるはずもなく、その姿は紫色の胞子の中へ消えていく。数秒は耐えられようとも、周囲を囲まれては

吸い込まずにいられるはずもなかった。
くれはは思わず顔をしかめる。
対照的にムッシュールは心からの笑みを浮かべていた。
「これで終わりだ」
「バカだね。忠告してやったってのに……」
胞子が風に流されて、少しした後にルフィの姿が見えるようになる。
やはり吸い込んでしまったらしい。見るからに肌の色が変わり、黒ずんだ様子で、力が入らず俯いてしまって表情は見えない。だその上、彼の目は焦点が合わなくなっていた。
かなり強力な毒だ。
ムッシュールが勝ち誇るのも当然であり、もはや手を出す必要はない。
勝敗は決した。それだけが事実。
とどめを刺そうともせず彼の顔を眺める。
毒の胞子を吸い込んでしまったからには助かる手はなく、拘束されたこの状況から逃げ出すことさえできないと考えている。よってこれ以上何かをする気はなかった。
腰に手を当てたムッシュールはくれはに振り返りもせずルフィを眺める。
この様をワポルに見せたい。勝利を誇り、考えることはそれだけだったようだ。

ＧＲＯＷＮ　ＫＩＤＺ（２）

城内へ駆け込んだワポルは見知った風景を確認し、迷わず目的地を目指す。
逃げるようでありながら足取りは勇む様子。確固たる目的を持って足を動かしていた。
「武器庫にさえ行けばあのカバどもを消し去れる。バクバク食（ショック）〝人間兵器〟で一発だ」
どたどた走って一階の奥へ進んでいく。
道には迷わず、奥にあった大きな扉を見つける。
ワポルは視界に入れた途端に笑った。
「ま～っはっは！　あそこにさえ行けばおれ様に敵う奴は居なくなる！　おれ様の勝ちだ！」
ワポルは扉の前に到達した。閉じられたままのその前に足を止め、にやりと笑い、自分の勝利を信じて疑っていない様子だった。
早速閉じられた扉を開くため、鍵を探そうと考える。
しかし自分が持っていただろうかと想い、咄嗟に表情が曇った。
「いや、待て。鍵はどこに行った？　おいチェス、武器庫の鍵はどこに――」
振り返って普段居るはずの参謀が居ないことに気付いたワポルは、大口を開けて驚愕した。
「あぁっ!?　そういえばチェスは兄ちゃんの毒でやられたんじゃねぇか！　あのアホ兄貴め、余計なことをしやがって！　だから能力を使う時は気を使えとあれほど！」
憤慨して地団駄を踏み、ワポルは苛立ちながら振り返る。
鍵はない。ならば別の方法で開ける必要がある。
深く考えなかった彼は大砲の腕を扉に向けたのだ。
「ええい、ならば仕方ない！　こうなったら自力でこじ開けてやる！」
そこは武器庫。内部には大量の火薬もあり、引火する危険性も高いが、全く意に介さず。

砲弾を放ったワポルは扉を吹き飛ばし、幸い爆発もせずに武器庫の入り口が開く。
武器庫には大量の武器が保管されていた。
一つも動かされることはなく、全てが使う者を失って沈黙を保つ。
室内を見渡して、上機嫌になったワポルは今度こそ勝ち誇り、勝機を得る。部屋にある刀剣、銃火器を全て食せば彼自身が要塞と化して敵う者など居なくなるはずだ。
彼は喜び勇んで一歩を踏み出した。
その足が武器庫に入る前に、走ってきたチョッパーが体当たりする。
油断していたワポルの横っ腹に、獣型の彼が頭突きを繰り出して、強靭な角で弾き飛ばされた。接近に気付かず、また突然の攻撃に驚いたワポルは勢いよく地面を転げ回った。
「いでぇ～っ!?　な、なんだぁ!?」
「おれだ」
「き、貴様はさっきのバケモノ！　誰に向かって攻撃したのかわかってんのか、おい！」
起き上がったワポルが即座に砲口をチョッパーに向けた。
冷静な目でそれを見るチョッパーは恐れず対峙する。
「お前はもう王なんかじゃない。攻撃したって罪には問われねぇさ」
「いいや問われる！　決めるのはおれ様だ！」
「だったら怖くねぇ。おれは、ドクターをバカにしたお前を許す気はねぇんだ」
「ほざけェ！　お前なんか今すぐ処刑してくれるわ！」
そう言ったワポルはひとまず武器庫の全てを食そうと、攻撃する前に踵を返して急ごうとする。咄嗟に気付いたチョッパーは即座に駆け出して彼の腹へ再び突進した。
強烈な体当たりでまたしても体勢が崩れる。
悲鳴を上げるワポルはあっという間に転んでしまった。
「このっ！」

「ギャアアッ!?」
「お前にはもう何もさせねぇ。この城に手を出すな！」
「ふざけるなカバ野郎！　この城はおれの物だぞ！　中にある物も全ておれの物なんだよぉ！」
叫んだワポルが立ち上がり、向き合うこともなく逃げ出した。
向かう先には階段。上階を目指すらしい。
逃げ出したことに驚くチョッパーは一瞬虚を衝かれるが、理解すると慌てて駆け出し、後を追い始める。ほんの一瞬足を止めただけだったが開いた距離はそれなりのものだった。
「待てッ！　また逃げるのか！」
「やかましい！　貴様を処刑するための作戦だ、カバめ！」
全力で走って階段を上り、ワポルは脇目も振らずに上層を目指す。
その顔は必死であり、本人は逃げていることを否定していたが、誰がどう見ても逃げているようにしか見えない。今や両腕の大砲を使おうという気すら窺えなかった。
獣型のチョッパーは足が速く、跳ぶようにしながら追ってくる。距離はそう離れていない。
蹄が地面を叩く音を聞き、距離が近いことを知るワポルはさらに肝を冷やす。
「あそこに……あれさえ食っちまえば……！」
どうやら確固たる目的があって走っているようだ。
ワポルは城の天辺に伸びる複数の塔から一つを選び、内部へ続く階段を上っていく。
当然チョッパーも彼を逃がさぬように追いかけていた。
いよいよ扉が見えてくる。
二人の距離は近い。焦ったワポルは走りながら考えた。
本来ならば自分の城を壊すなどあり得ない。しかし今は急いでいて、尚且つ両腕は大砲になっており、ドアノブを捻って開けることはできそうにない。
そこで仕方ないと思い、大砲を構えた。
扉を吹き飛ばして勢いそのままに突入することを決めたのだ。

「どけィ！　このカバドアがァ！」
八つ当たりするように叫びながら砲弾を発射する。
砲弾は扉に当たった途端爆発し、木製のそれを粉々にして道を開いた。
能力を使った影響で体が大きくなってしまったワポルが通るには些か小さいだろう。だが足を止める余裕もない彼は頭から突っ込み、壁を破壊しながら室内へ入った。
あまりにも騒々しい行動に、チョッパーは思わず一度入り口で足を止める。
体当たりで壁の一部が崩れたことにより、もくもくと煙が漂っている。
目を細めたチョッパーはその向こう側を見ようとしていた。
やがて煙が晴れ、ワポルの姿が見える。
仁王立ちしてチョッパーに向き直っていた彼はなぜか笑顔で、今まで必死に逃げていた人間とは思えない風貌。疑問を持つのだがすぐにその背後に置かれた物に気付いた。
部屋の隅に巨大な物体がある。
それは兵器だ。
砲口が複数ある大砲であり、カバをモチーフとして、巨大化したワポルと同程度にも思える巨大さを誇る。見るからに危険そうな代物であった。
その前に立つワポルは自らの力を誇示するよう。
先程とは打って変わってチョッパーを好戦的に見つめ、足を止めている。
だが逃げ場を失くしたのも事実で、閉鎖された塔の中ではこれ以上逃げられないのも確かだ。
「まっはっは……さぁ、処刑の時間だ。貴様はこれから、このロイヤルドラムクラウン7連銃弾（ショット）ブリキング大砲（キャノン）で死ぬのだ！」
ワポルの大声が響き渡るが返答はない。チョッパーは敢えて黙ったままだった。
完全に怯え切っていると判断したらしく、鼻を鳴らしたワポルは右

腕を元に戻す。
砲弾を放つためのレバーに手をかけ、いよいよ攻撃を行おうとしたのである。
「さぁて後悔しやがれ。貴様はこの一撃で死ぬからだ！　消し飛べェ！」
掴んだレバーを勢いよく下ろした。これで砲弾が放たれ、七つの砲口から砲弾が飛び出し、逃げる隙を与えずにチョッパーをハチの巣にする、はずだった。
しかしブリキング大砲は全く動かない。
空撃ちをするような間抜けな音が鳴って以降、それ以上の変化は得られなかった。
ワポルは目を大きくする。
驚いているらしく、口を閉じてしまい、大口を叩くことさえできない。
試しに何度かレバーを引いてみるが、何度試してもやはり砲弾が放たれることはなかったのだ。
ワポルの思考は完全に停止している。
その様子を見て、呆れた表情のチョッパーが口を開いた。
「無駄だ。そいつの砲弾は全部抜き取られてる。ドクターの墓には必要ない物だったからな」
「んなぁにぃ!?　き、貴様のせいかァ！」
「もう終わりだ。これ以上逃げ場はないぞ」
「うるせぇ～！　そうだ、それならブリキングキャノンを食って、砲弾は別で代用を――」
思考を切り替えたワポルは大口を開け、傍にあるブリキング大砲を食べようとした。
まずいと感じたのだろう。駆け出したチョッパーが駆け出して、阻止しようとする。走る途中で獣型から人型へ変わり、地面を蹴って飛びついて、抱き着くように彼を止めた。
「そうはさせるか！」
「ギャアアッ!?　離せバケモノトナカイめ！」

一個になった彼らは勢いよく窓へ突っ込み、ガラスを破って外へ出る。チョッパーがワポルを捕まえたままで急斜面の屋根へと転がった。
雪を積もらせないための斜面を勢いよく転がる。
危うく屋根から落ちそうになったが、ある時パッと離れた二人は辛うじて落ちずに済んだ。
それぞれが必死に堪えて斜面で止まり、互いの顔を見る。
死にかけたとあってワポルの怒声は以前より大きくなっていた。
「あ、危ねぇ～っ！　なんてことしやがるんだカバ野郎！」
「もうお前の思い通りになんてさせねぇんだ。ここで決着をつけてやる」
そう言ったチョッパーが先に体勢を立て直して、斜面の上で上手く立つ。
ワポルは寝そべったままでそれを見る。
チョッパーは人獣型になり、自らの帽子に手を突っ込むと、小さな何かを取り出したのである。蹄の間に挟んで持ったそれは黄色い丸薬だった。
「これを使って三分間。その間にお前を倒す」
「倒すだと？　そんな飴玉でどうしようって言うんだ」
「飴玉なんかじゃねぇ。これがおれの研究の成果だ」
「戯けたことをぬかすなァ！　こうなりゃこの場で処刑してやるぞ、罪人め！」
起き上がったワポルはよろけながらその場に立ち、大砲を構える。
足場が悪いためそう動くことはできない。回避は思考から捨てる作戦のようだ。
対するチョッパーは丸薬を放り投げ、上を向いて落ちてくる丸薬を噛み、呑み込む。
「ランブル」
「死ねぇ！」
轟音を放って砲弾が飛び出した。
真っ直ぐ飛来する砲弾はチョッパーを目指し、狙いが逸れることは

ない。
やがて屋根に激突して爆発を起こした。当たった箇所がわずかに抉れ、粉々になったはずだろうとワポルは笑みを浮かべて勝ち誇る。
煙が立ち上り、チョッパーの姿は見えない。
確実に勝ったのだと笑い声を響かせてすらいた。
しかし彼の笑い声も空しく。
背を仰け反らせていたワポルは空から降ってくる異物に気付いた。
屋根に降り立ち、見事に着地したのは、間違いなくチョッパーだったのである。ただしその姿はこれまで見たことがないものに変貌していた。
動物(ゾオン)系能力者が持つ変身形態は三つ。そのどれでもない姿で現れた。
「うぎゃあっ!? なんだ貴様、まだ死んでなかったのか! それに……なんだその姿!」
着地したチョッパーは異質な外見となっている。
人間ではなく、獣でもない。その両方が入り混じった形。
顔はトナカイに近くなり、上半身は厚い毛皮を持つのだが指先は人間のもので、逆に下半身は毛皮が薄くなっている一方で蹄を残したまま。さらには頭の角が消えていた。
人型、人獣型、獣型、そのどれでもない。
新たな変形を行って彼はその場に居た。
本人はこの形態を飛力強化(ジャンピングポイント)と呼んでいる。
跳躍力に秀でた形態で回避能力に長ける。
速度もあり、攻撃こそ得意としていないが高速で迫る砲弾を避けることは難しくない。
本来は存在しないはずの変形点。
チョッパーはそれを我が物として操り、冷静な面持ちでワポルを見ていた。
正々堂々を志したのか、彼の疑問に答えてやるため、驚き絶叫するワポルへ答えてやる。余裕を失ったワポルは絶叫こそしているがその声は聞こえていたらしい。

決して大きな声ではなかった。
どことなく冷淡な様子も感じさせ、チョッパーは真剣な声で語る。
「ランブルボールは悪魔の実の変形の波長を狂わせる薬さ。５年間の研究で、おれは普段の３つに加えてさらに４つの変形点を見つけたんだ」
「波長を、狂わせる……？　そんなカバな話が……！」
「その代わり効力は三分間だけだ。悪いけど、あっという間に終わらせるぞ」
「ふざけんじゃねぇ！　おれ様は王様なんだ！　終わらせていいわけねぇだろうが！」
恐れおののき、ワポルは慌てて両腕を構える。
砲口は確実にチョッパーを捉えていた。間を置かずに砲撃が開始され、轟音を響かせながら無数の砲弾を放ち、それらが一斉にチョッパーへ襲い掛かる。
一発当たればもう逃げ出す暇はない。そんな砲弾の嵐だった。
チョッパーは再度地面を蹴って高く跳ぶ。
回避はそれだけで十分だった。
放たれていた砲弾の嵐は、確かに当たりさえすれば敵を仕留められる威力を持つものの、同じ場所しか狙っていなかったせいで、その場から逃げてしまえば当然当たらない。
砲弾が屋根を崩し始める頃、ようやく気付いたワポルは急いで両腕を空へ向けた。
「あぁぁ違う違う！　あいつを撃たなきゃならねぇんだ！」
ぐいっと両腕を上げ、大砲が空を向いて尚も砲弾を放ち続ける。
チョッパーは天高く舞い上がっていた。
常人ならざる跳躍力を持つとは言っても、所詮はジャンプ。一度跳んでしまえば後は落ちることしかできない。そう考えた通り、チョッパーは落下する最中だった。
無数に放った砲弾は今度こそ彼を捉えるはず。
勝機を確信したワポルは上機嫌に頬を吊り上げる。
ちょうど笑った時、なぜかチョッパーの体が小さくなり、普段の人

獣型に変化した。小さな体躯に変形したということはそれだけ的が小さくなったということだ。
放った砲弾が見当違いの場所を通り過ぎ、落下するチョッパーに一発も当たっていない。
「はっ!?」
「頭脳強化(ブレーンポイント)。診断(スコープ)」
頭を下に、真っ逆さまに落ちてくる。
チョッパーはそんな最中に両手の蹄を合わせ、その間からワポルの全身を眺めた。厳しい視線はまるで彼の弱点を探ろうとするかのようだ。
小さくなっただけで避けられてしまっては元も子もない。
苛立つワポルは今度こそ敵を仕留めるべく、さらに砲弾を放とうと両腕に力を込めた。
異常に気付いたのはその瞬間。
計算せずに撃っていたせいで早くも弾切れを起こした様子だった。
「えぇっ!? 弾切れ!? ちくしょう、なぜ誰も言わなかった!
……誰も居ねぇのか!」
「見えた。顎」
落下の最中、チョッパーが小さく呟く。
くるりと回転して上手く着地し、動きを止めたワポルを見つめる。
弾切れで戦意を失ったかと思えばそうではない。肩を怒らせ、見るからに表情を歪め、憤怒を全身で表す彼は何かを閃いたらしく、すぐさま行動に移す。
突然大口を開いて屋根を食べ始めたのだ。
食べた物を血肉として利用するバクバクの実。どうやら食べた屋根を砲弾代わりにするつもりなのだろう。今のところ彼の武器は両腕の大砲、推測するのは容易かった。
突っ立ったまま眺めるチョッパーは確信を強める。
ついさっき見つけた弱点は間違いではない。
もはや彼に迷いはなく、また敵に対する恐れもなかった。
バクバクの実の真髄は食べることにある。

何も食べなければ真の力を使うことはできず、言い換えれば、食べさせなければいい。
そして人間が物を食べるためには顎の力が必要であり、特にワポルのそれはなぜかブリキ製。今にして思えばここが弱点だと教えているようなものだ。
狼狽するワポルが屋根を食べるのを止めた時、チョッパーはまだ動かない。
じっと敵を見据えたままだった。
「ゲフゥ……よぉし、弾はできた。今度こそてめぇを吹き飛ばしてやる！」
「ただの石だろう」
「うるせぇ！　そんなのはこれを食らってから言えってんだ！」
構えられた大砲から弾が放たれる。しかし今度のそれは食べた屋根の欠片であり、材質は石、ただの岩石が飛んでくるのみだった。
それでも十分な威力は持っているが、砲弾とは違う。
チョッパーはその場を動かずただ変形した。
全身の毛量が一気に増え、丸々とした様子はまるで毛玉のよう。
飛来した岩石が勢いよくチョッパーに当たるものの、柔らかく大量の毛が跳ね返してしまい、彼自身の肉体には欠片もダメージが通っていない。
激突の衝撃でぽよんと屋根を転がり、四足歩行で屋根に立つ。
角もあり、四足歩行で、獣型に近い形態。しかしその毛皮は防御に適したもの。
当たったはずだが全く痛がらず、あっけらかんとその場に立ってしまうのだ。
視線が合った途端、ワポルはガタガタと震えずにはいられなかった。
チョッパーは冷ややかな声で言った。
「効かねぇ」
「な、なぜ……!?」
「毛皮強化（ガードポイント）は打撃を受け付けねぇ。石なんていくらぶつけても無駄

だ」
「こっ、このっ……！」
為す術も無し、といったところか。
チョッパーの言葉を受けたワポルはぐうの音も出ず、罵倒の言葉を投げることさえできない。
目を血走らせて、追い込まれたのか、ワポルは叫びながらさらに岩石を撃とうとした。
「うるせぇぇっ！　そんなもん関係あるかァ！　一気に押し潰してやるッ！」
「飛力強化（ジャンピングポイント）！」
ワポルは自身が持つ全ての弾を使い、無数の岩石で相手を押し潰そうと考えたようだ。しかし一足先にチョッパーが形態を変え、高く跳び上がってその場を離れる。
弾はすでに放たれていた。当然、無人の屋根を撃つだけ。
標的を失った岩石は屋根に当たって弾かれ、わずかに破壊するだけだった。
恐れを抱いた目でワポルが空を見上げる。
上空に居たチョッパーは彼が見ている前で変形していった。
「腕力強化（アームポイント）」
今度は攻撃力に特化した変形点だった。
顔は獣型、肉体は人間に近く、両腕の筋肉が普段以上に肥大化し、手の先は蹄。鉄をも砕くと称する蹄を強靭な腕力から繰り出そうという姿。
変身を終えたチョッパーは空から降ってくる。眼下には当然ワポルの体。
この時、反撃をすべきという思考を忘れ、ワポルは腕を広げてしまっていた。
開いた口が塞がらない。これから自分を襲う痛みが想像できるようだった。
ワポルは必死に悲鳴を上げ、見上げすぎるあまりに体重が踵に集まっていたようだ。

落下してきたチョッパーが右腕を突き出す。
硬い蹄は、全く動けないワポルの額を強烈に打った。
「このぉ！」
「ぐほっ!?　んなぁにぃいいっ!?」
背面に体重を寄せ過ぎていたせいで、頭を殴られたワポルは、強烈な痛みを感じながら体勢が崩れてしまったのを知り、屋根から転げ落ちていく。
着地したチョッパーはすぐにそれを追い、迷わず跳ぶ。
二人は屋根から投げ出され、地面に向かって落ち始めた。
「ギャアアアアッ!?　死ぬぅうううううっ!?　助けてぇえええええっ!?」
「いくらドクターがお前を許しても！　ドクターの生き方を笑ったお前を、おれは許さない！」
「やっ、やめっ――ぎゃあああああっ!?」
地面が近付く一瞬、二人の距離がゼロになった。
両腕を引き寄せ力を溜め、チョッパーはワポルの顎を狙い、右腕を突き出す。
目にも止まらぬ一撃は確かに彼の顎を打ち抜いた。
「刻蹄――〝桜（ロゼオ）〟!!」
「へぶぅ!?」
顎を殴られた衝撃で意識が遠のき、さらにその勢いが加わり、落下のスピードが速まった。
ワポルは頭から地面へ落ち、痛みを感じる暇もなく意識を失う。突き刺さるように頭から地面へ着地した直後、ゆっくりと仰向けに倒れていった。
同じく落ちてきたチョッパーだが、こちらは着地がしっかりしていた。
攻撃の直後に毛皮強化（ガードポイント）へ変形した後、地面に触れてぽよんと跳ねる。
本人には全く痛みはなく、恐怖心もない。
人獣型へ戻った直後、彼は自分の大事な帽子に触れ、その瞬間に薬

の効果が切れた様子だった。
「三分」
帽子をぽんぽんとはたいて雪を払い、疲労も感じさせずに呟く。
彼の目は倒れたワポルを捉えて、意識を失っているのを確認した。
それから城を見上げて、風に揺れる旗を見る。
あれだけの攻撃があってもドクロの旗は立っていた。
信念。確認するように心の中で呟いて、チョッパーはふと目を閉じる。
言いようのない想いが胸にいくつもある。数々の言葉が脳裏に現れ、海賊、信念、仲間と、彼がこれまで密に触れることがなかったものが確かに刻み込まれている。
彼との出会いで知ったこと、思い出したことが、いくつもある。
人知れずそう考え、目を開けたチョッパーは振り返った。
もう一人を引き受けたルフィはどうなっただろうか。
さほど心配もせず振り返った時、信じられないものを見て、表情が変わる。
地面から隆起した菌糸の壁により、ルフィは拘束されていた。
それだけではない。毒を受けたせいで一目でわかるほど顔色は悪くなり、意識を失っているのだろうかと思うほど脱力していて、動き出す気配が感じられない。
背筋がぞっとした。
彼が死んだかもしれないと考え、絶望してしまう自分に気付いた。
居ても立ってもいられず、咄嗟にチョッパーは駆け出す。
彼を救おうだとか、そんなことを考えていたのではない。ただその場で突っ立って見ていることができなくなって、気付けば勝手に体が動いて走り出していた。
しかしその道に、今まで視界には居なかったムッシュールが現れる。
「どこへ行く気だトナカイちゃん？　おれの弟を傷つけて」
振り上げたムッシュールの足が、チョッパーの顎を強烈に蹴り上げた。

ＧＲＯＷＮ　ＫＩＤＺ（３）

チョッパーが雪の上を跳ねるのを見て、ムッシュールは笑みを消した。

視線の先を変えればワポルが見える。大の字に倒れて、ぴくりとも動かないところを見るとすでに意識を失っているらしい。

なぜそうなったのかは知っている。その瞬間を見ていたからだ。

弟が助けてと叫んでいたのも聞こえたし、妙な姿のチョッパーが弟を殴ったのも見た。

最愛の弟が傷つけられたのだ。

ムッシュールの全身から怒気が放たれ、彼を許す気など欠片も持たない。

倒れたチョッパーが起き上がろうとしている。忌々しそうにそれを見つめて表情を歪め、ゆっくり歩き出した彼は、わざとらしく時間をかけて近付いていった。

ただでは殺さない。足取りからそんな意志が伝わった。

「弟はよぉ、昔から兄ちゃん兄ちゃんっておれの後ろをついて歩くような奴だった。おれにとっちゃ唯一の肉親なんだぜ」

「うっ、ぐぅ……」

「その弟がバケモノに傷つけられたんだ。絶対に許さねぇ」

「なにぃ……」

蹴られた顎がひどく痛む。

当たった箇所が悪かったらしく、視界が揺れて体の力が入らない。

それでも必死に起き上がろうとするチョッパーは片膝をつき、ムッシュールを見つめ返した。

怒りを持っているのはムッシュールだけではない。チョッパーとて彼らの振る舞いに怒りを抱いているのだ。それを一方的にぶつけられるのは心外でしかなかった。

頭を振って視界の揺らぎを取ろうとする。

必死に力を入れ、顔を上げたチョッパーは思いの丈を叫んだ。

「バケモノはお前たちの方だ！　何の罪もない人たちを傷つけて、

殺して！　また同じことをしようとしてる！　そんなことをして心は痛まないのか！」
「あぁ？　別に痛まねぇな。おれたちは王族、そもそもお前たちとは別物なんだ」
「別なもんかっ。王様だって人間だろ。お前たちだけが好き勝手に暴れていいわけがない！」
「ムッシッシ！　こりゃ面白ェ！　人間でもねぇお前が人間を語るのか！」
唐突に駆け出したムッシュールがチョッパーに迫る。
驚愕している間にどんどん近くなり、走る動作の中で足を振り上げる仕草も見えた。
振り切られた蹴りが頬に当たる。
チョッパーの体はあっさり宙を舞い、勢いよく地面を転がる。
視界の中で天と地が目まぐるしく回転していた。時には地面が上になり、下になり、空は常にその反対側にあって、跳ね飛ばされた雪が全身に触れている。
体が止まった頃、脱力した彼は頬の痛みに呻き声を発していた。
再び、体を起こそうと躍起になる。
そこへムッシュールが近付く足音が聞こえた。
雪を踏みしめ、追撃のためにやってくる彼から逃れるべく、チョッパーは顔を上げる。
彼とはまだ距離があった。拳や蹴りといった攻撃ならば届かないが、彼が能力者であることは少なからず聞かされており、安心はできない。
倒れた状態で変形し、獣型へ変わる。
体が変わってから四足歩行で立ち上がり、呼吸を乱しながらチョッパーは前を見た。
「ハァ、うぅ……負けるもんか」
「涙ぐましい努力だな。だがお前なんかがおれに勝てると思ってんのか？」
歩調を変えず、ゆっくり近付いてくるムッシュールは表情を険しく

する。
「後悔させてやる。お前はあの麦わらなんか目じゃねぇくらい苦しんで死ね」
数歩後ずさってチョッパーは怯んだ。
彼の雰囲気は少し前までと全く違っている。命の危険を感じるのは自然なことだった。
敵との距離を保ちながらチョッパーは考える。
どうすれば勝てるのか。正面からぶつかっただけでは勝てそうにない。かといって奥の手であるランブルボールは使ってしまい、連続使用はできない。
追い詰められたのはチョッパーの方だ。
（どうしよう……ランブルボールは劇薬だ。６時間に一度の使用が絶対条件。その前に使うと変形が上手く操れなくて戦力にならない。でも、こいつは――）
ムッシュールは自分よりも強い。そう思うからこその逡巡。
チョッパーは視線の先を変え、走り出した。
彼を迂回するルートを通ってルフィの下へ向かおうとしたらしい。最も足が速い獣型で雪面を駆け抜けて、素早くもムッシュールから距離を取っていく。
（おれ一人じゃだめだ！　あいつの力を借りれば、もしかしたら……！）
ルフィは毒を受けてぐったりしている。だが可能性はゼロではない。
チョッパーは自分でも気付かぬ内にそう考えていて、その場で見ているはずのくれはに助けを求めることもなく、一番にルフィの下へ向かおうと考えていた。
或いは、もう限界だろう彼を守ろうとしていたのかもしれない。
ムッシュールは遠ざかる背を睨みつける。
弟を傷つけたばかりでなく、対峙した自分を無視して逃亡。侮辱と受け取っても仕方ない。
額に青筋を立てた彼は激情を露わにして動き出した。

大きく振り上げた右腕を振り下ろし、指を広げ、掌で勢いよく地面を叩く。
ただ叩いただけではない。能力を使ったようだ。
「走菌糸(ラン・ハイファー)！」
掌から放たれる菌糸が地面を駆け、雪の下に隠れながら進み、チョッパーを追う。
彼の声を聞いた拍子に何かが来ると悟ったのだろう。チョッパーは咄嗟に横へ跳び、意識的にルートを変えながらさらに前へ進む。すると彼の真横に菌糸の壁が現れ、捕らえ損ねた結果なのだろうが、危なかったと思わせる様相で彫刻が出来上がった。
背筋がぞっとして、さらに脇目も振らずに走る。
ルフィはこれに捕まったのだと理解して、自分は捕まってはならないと思う。
捕まってしまえば身動きができなくなる。それだけはだめだ。
言い換えれば、自由を奪われることさえなければまだ戦いようはあるはず。
そう信じてチョッパーは足を動かし、そのためなら痛みなどいくらでも我慢できた。
一方、外したことに苛立つムッシュールはチョッパーの素早さに舌を巻き、更なる怒りに燃えて今度は自らが走り出す。舌打ちを一つ、雪を蹴り飛ばして駆け出した。
単純な走る速度ならチョッパーの方が速い。
それを理解しているムッシュールが単純なかけっこをするはずもないだろう。
走る途中にも彼は能力を使い、後方からチョッパーを狙う。
「クロスシェード！」
「くっ、またか!?」
ムッシュールの背から飛び出す七本の毒の槍。
空から降るようにして襲ってくるそれらを見上げ、チョッパーはできるだけ蛇行して、尚且つ跳ぶように走って狙いをつけにくくした。
功を奏したのか、幸いにも一本も当たらず全て地面に突き刺さる。

それでも余波は避け切れずに、吹き飛ばされた雪に巻かれて転んでしまう。
「うわぁ!?」
「チッ、避けやがった。意外にすばしっこい野郎だ」
転んだ勢いさえ利用してすぐ起き上がり、再び走り出す。
追ってくるムッシュールの追撃はまだ終わらなかった。
「逃がすか！　傘乱舞（シェードダンス）！」
桃色の髪のおかっぱ頭が、キノコに変わった。
その瞬間は見ていなかったがチョッパーが振り返った時、頭のキノコが高速で回転して、菌糸で作られた小さな弾丸が無数に放たれる。その数は数え切れるものではない。
まずい、と思った瞬間には強く地面を蹴っていた。
反射的な行動で人獣型に変化して体を小さくし、さらに地面を転がって雪に隠れようとした。
ムッシュールは弾丸を放ちながら頭を色んな方向へ向ける。
攻撃の方法の問題で、頭を下げてしまうため顔は地面を眺めてしまう。狙いはつけられない。
言うなれば勘に任せた攻撃であり、当たるかどうかは運に任せるしかなかった。
しばらく菌糸の弾丸を撃ち続け、攻撃をやめたムッシュールは顔を上げる。
少なくとも様々な場所には当たったらしい。雪が宙に舞い上がっているのを見てそう思う。
あとは標的に当たったかどうか。
確認のため歩き出そうとして、一歩を踏み出した瞬間、雪の下からチョッパーが飛び出した。
「あぁ？　チィ、雪に隠れてやがったか。だが無傷とはいかなかったようだな」
獣型で走り出すチョッパーは体に少なからず傷を負い、わずかとはいえ流血している。よく見れば彼が隠れている場所にもわずかに血痕があった。全て避け切るのは無理だったらしい。

その傷を無視するかのように走る。
痛みを堪え、今の彼はルフィを助けることに集中していた。
気付けばチョッパーはルフィまであと少しという位置にまで到達している。
もう少し。あと少し我慢すれば届く。
彼を助けることができれば。その先を考えず、とにかく今は助けることしか頭にない。
ムッシュールが苛立ちを募らせる。
徹底的に無視されている、まるで居ないとされているかのように。しかも自分を倒すためにそうしているのならまだしも、味方を助けることにのみ全力を注いでいる様子だ。
ここまで無視されていては気分が悪い。
生まれて初めての経験にも思えて、彼は肩を怒らせた。
顔の前で両腕を交差して力を溜める。
それを勢いよく開いた時、ムッシュールの全身から大量の胞子が放たれた。
「大増殖（ロット・スティフィン）！」
放たれた胞子は空気中を漂い、素早く形を模っていき、人間の形で四つに分かれた。
まるでムッシュールの分身だ。
彼と全く同じシルエットの人影が複数に増えている。
大声で叫ぶ彼自身は動かず、四つの分身だけが動き出す。
それらは走ることもなく宙を飛び、ムッシュールが走るよりよほど速くチョッパーへ殺到する。
「ハァ、ハァ、もう少し……」
「このバケモノがァ！　いい加減調子に乗ってんじゃねぇぞォ！」
「えっ――？」
殺気を感じて首だけ振り返ったチョッパーが、その瞬間、分身に頬を蹴り飛ばされた。
空を飛んできた胞子の塊。しかしそう思えないほど実体が感じられて、打撃の感触は本物と遜色がなく、ダメージは甚大。崩れた姿勢

を直すことすらできずにチョッパーは転ぶ。
頬が驚くほど痛くて熱くなっている。
その胞子には毒がないのは不幸中の幸いだった。だが攻撃はまだ終わっていない。
残る三体もほぼ同時の瞬間に追いついていて、倒れたままのチョッパーを見下ろす。そして全員が起き上がる前の彼に襲い掛かり、拳で、蹴りで、執拗なまでに全身を痛めつけていく。
チョッパーは意識を繋ぎ止めているのが精一杯だった。
リンチと呼ぶにふさわしい猛攻を受け続け、彼の体は傷つき、周囲の雪が赤く染まる。
一方的な展開を眺め、ムッシュールはにやりと笑い、くれはは思わず叫ぶ。
手を出さないと決めたのは自分だが、流石にそれはやり過ぎだと思ったようだ。
「チョッパーッ!?」
「ムッシッシ、おれを無視した罰だ。いい気味だぜ!」
しばらく続いた攻撃の後、分身を模る胞子は動きを止め、風に流されて消えていく。
その場には倒れたチョッパーだけが残された。
全身に激しい殴打を受けた結果、あらゆる場所が腫れ、裂けた末に血を流し、もはや傷がない場所を探す方が億劫なほど。自身の血溜まりに寝そべる彼は、温かい、と感じていた。
冷たい雪の中で血の海に浸かっている。
そのせいなのか、自分はまだ生きていると強く感じられた。
痛む体を必死に動かし、重いと感じながら立ち上がろうとする。
その時、彼は再び変形した。
今度は人型になり、雪を押し潰しながら這って進む。相変わらず目はルフィだけを見ていた。
もはや思考など形を成していない。
なぜ進むのか。気絶してはいけないと思うのか。今となっては自分でもわからない。

どうして戦っているのかさえ希薄になった。
ただ、それでも彼の体は進み、何も考えていなかったとしても、まだ諦めていなかった。
少しずつでも前へ進んで、ついにルフィの足下まで辿り着く。
首を動かすだけでも辛い状態。全身が痛んで、眠ってしまいたいと思う。
だがチョッパーは必死で彼を見上げ、そしてルフィは、わずかに目を開いていた。
「チョッパー……」
弱々しい声。今にも消えてしまいそうだ。
荒れる呼吸で聞こえなくもなりそうだがチョッパーは耳を傾ける。彼と視線を合わせ、一言一句を逃さないように全神経を集中させた。
「これ、どかしてくれねぇか。そうすりゃ、あとは、おれがやるから……あいつは、おれがぶっ飛ばす。もう、捕まらねぇから……」
毒にやられて、生気を感じない顔色だ。だが彼の目は死んでいなかった。
ほとんど動けない状態だろうにまだ諦めていない。まだ勝つ気でいるのだ。
ごくりと息を呑む。
やはり彼を助けに来たのは間違いではなかった。ルフィが居れば間違いなく勝てる。この瞬間、確信を得たチョッパーは脳で理解する前に強く頷いた。
地面に手をつき、震える腕で必死に上体を起こす。
腕だけでなく足まで震えていた。体中のどこもかしこもが痛く、何度か力が抜けて転びそうになるものの、歯を食いしばって耐える。
拘束されたルフィの前で、チョッパーは再び立ち上がった。
そこへ勢いよくムッシュールが飛び込んでくるのである。
「いい加減くたばれ！　死にぞこないがァ！」
走ってきた勢いを使って飛び蹴りを繰り出す。チョッパーの横っ面を仕留め、辛うじて立っていただけの彼はあっという間に吹き飛ばされ、肩口から地面を転がった。

着地したムッシュールはすぐさまその後を追う。
倒れたチョッパーに駆け寄り、その体を強く踏みつけ始めるのだ。
「このっ！　このっ！　このぉ！　よくもワポルに怪我させやがったな！　薄汚ぇバケモノ！」
「ぐっ、うぐっ、あぁっ……！」
「てめぇと違ってあいつは必要とされる人間なんだ！　部下からも、おれからもな！　誰からも必要とされてねぇお前が、偉そうにおれたちの前に立つんじゃねぇ！」
「ぐぅ、うぅぅっ……！」
チョッパーは身を縮め、腕で頭を庇いながら必死に耐える。
ムッシュールの足は彼の体中を踏みつける。頭を踏み、肩を蹴りつけ、憎らしいという感情をこれでもかとぶつけて攻撃を止めなかった。
一方的に与えられる痛みに耐えて、チョッパーは伏せていた目を開く。
その目にはさっきまでとは違う、強い怒りがあった。
「うおおっ、おおおおおっ――！」
「うるせぇ！　吠えたら強くなれんのかよっ！」
一際強く、ムッシュールの蹴りが腹を蹴りつけ、チョッパーがごろりと転がった。
ほんのわずかだが距離ができた。
ムッシュールは歩いてその距離を埋め、改めて持ち上げた足を全力で振り下ろそうとする。狙いは頭で、いよいよ踏み抜いて終わりにしようと考えていたようだ。
「さっさと死ね、このバケモノめェ！」
その時、空を見上げて大の字に倒れていたチョッパーは、無自覚に変形していた。
人型から人獣型になり、体のサイズが極端に小さくなって頭の位置が変わる。
当然ムッシュールの足は雪が積もった地面を踏み、彼の頭は踏み抜けなかった。

「何ッ!?」
「おおおおっ――」
それからすぐに人型へ戻り、横たわったままで振り下ろしたばかりの足を掴み、無我夢中で足首の辺りを握りしめた。人間を超えた握力が否が応にも彼に痛みを与える。
しかしそれだけでは終わらず、チョッパーは動く。
寝返りを打つようにして腕を振り、ムッシュールの体を振り上げたのだ。その勢いに乗ったまま地面へ叩きつけ、彼は体の前面をぶつけることになる。
雪が積もっているとはいっても衝撃と驚きは相当なものだ。
掴まれていた足が離されていることに気付き、焦りながら彼は起き上がろうとする。
その前に、跳び上がったチョッパーは両手を組み、全力で後頭部を殴りつけた。
「うおおおおおっ！」
「ぐほっ、がはっ……!?」
跳ねるように地面へ叩きつけられる。今度は雪が積もっているかどうかなど関係ない。
意識を失いかねない痛みと衝撃に襲われ、ムッシュールは驚きを隠せなくなった。
それでも攻撃は止まらず、雄たけびを上げるチョッパーが彼の体を跨ぎ、ひっくり返して、真上から見下ろす。固く握った拳はすでに振り上げられていた。
「ま、待て――!?」
「そうだ、おれはバケモノ！　強いんだァ！」
全体重を乗せた拳が彼の頬を打ち抜く。
食いしばった歯が折れ、血の味が一瞬で口の中に広がった。
さらに一撃。今度は左の拳が彼の顔面を殴り、鼻の骨が折れる音がする。
もはやムッシュールに抵抗できるだけの冷静さはない。
次の一撃に襲われ、頬というより口元を殴られても悲鳴さえ出ず、

ただされるがままだった。
「うおおおおおおっ!!」
両腕を振り抜き、全力を込めた拳を何度も彼の顔に叩き込んでいく。
一撃ごとに確実にムッシュールの余力を奪い、ダメージを与え、一体何本歯を折っただろうという光景だった。強烈で素早い猛攻は惨たらしさすら漂う。
怒り狂ったチョッパーの攻撃はそう簡単には止まらない。
自分はバケモノだ。そう認めた時、彼は今まで以上の力を発揮していた。
重いパンチが顔面を貫き、数十発は与えた頃。
生命の危機を感じ、底力を出したムッシュールがやっと動いた。
先程同様、おかっぱ頭がキノコに変わり、わずかに首を持ち上げて角度を変える。チョッパーの拳をキノコの頭で受け止めていた。
かなりの痛みを伴うが必死に耐え抜き、猛攻を止める。
その直後に押さえられない怒りを爆発させて叫んだ。
「ごっ、ごの野郎！　いい加減にじろォ！」
瞬間的に冷静になり、攻撃が来る、と察したチョッパーは背を仰け反らせた。
予想した通りムッシュールは頭から菌糸の弾丸を撃ち出した。
体勢が崩れたことを利用して、チョッパーは背中から転んで弾丸を避け、雪原を転がる。しかし素早く動いたムッシュールは先に立ち上がり、彼へ駆け寄った。
全力で振り上げた足を振り抜いて蹴りを放つ。
転がっていたチョッパーの腹が捉えられ、巨体が軽々と宙を飛んだ。
痛みに呻く彼は着地すらできず、転がるように落ちて、一瞬ぐったりと力が抜けてしまう。
その間にムッシュールは自分の顔に触れた。
鼻血が出ている。歯が折れている。鏡を見なくてもひどい有様だ。
弟だけでなく自分までも。

これを許しておく訳にはいかない。
何がどうなっても彼を殺そう。たった今そう決めた。
怒りのせいか、痛みのせいか、それとも疲労か、足を震わせながら歩き出す。
その時にはチョッパーも立ち上がって、向かってくるムッシュールを見ていた。
「こいつ、殺してやる！　全身バラバラにして、一番むごい殺し方で殺してやる！」
「ハァ、ゼェ、殺されるもんか。おれはお前なんかには負けないぞ」
「ふざけるなァ！　お前一人で何ができる！」
「おれはもう……一人じゃないんだァ！」
そう言ったチョッパーはくるりと振り返った。
その瞬間、ムッシュールが目を見開く。
途方もない怒りのせいで極端に視界が狭まっており、気付くのが遅れた。チョッパーが立っていた位置はルフィの目の前ではないか。
振りかぶられた拳は確固たる意志を持って握られていて。
意味も分からずムッシュールが激昂する。
「てめぇ、この期に及んでまだ……！」
「おおおおっ！　重量（ヘビー）ゴング！」
チョッパーの拳がルフィを拘束している菌糸の壁を破壊した。右半身が自由になり、力の抜けた腕がだらりと落ちる。後は左半身だけだ。
さらに怒りを燃え上がらせるムッシュールは全身に力を込めた。
両腕を前へ出し、掌を見せると同時、チョッパーがルフィの体を掴む。
「そんな死にぞこないを助けて今更何ができるってんだよ！　もう十分だ！　てめぇら二人まとめておれの毒で死にやがれェ！」
「ハァ、お前なら勝てるんだよな。頼むよ、起きてくれ。おれはあいつに負けたくない――」
チョッパーがルフィの体を掴んで引っ張ると同時、ムッシュールの掌から毒の胞子が飛ぶ。

そして、閉じられていたルフィの目が開いた。
「雪胞子(スノウ・スポール)！　全部消えちまえェ！」
「頼むよルフィ！　あいつをぶっ飛ばしてくれェ！」
「おおおっ……おおおおっ――――！」
毒の胞子が壁のように連なって迫っていた。
同時にチョッパーが引っ張ったことで、菌糸にヒビが入る。
そしてこの時、ルフィの体に力が戻ったことにより、彼はチョッパーの力を借りて、自身を捕らえる菌糸を破壊して、やっとの思いとは思えぬほど激しく吹き飛ばした。
「うおりゃあああ～っ!!」
「な、何ッ!?」
纏わりついていた菌糸だけでなく周囲の雪まで吹き飛ばして、強い風が起こっていた。そのせいで風に弱い胞子はあっさり流れてしまい、本来向かっていた場所とは違う方向へ進む。
二人の下へは届かなかった。
呆然とするムッシュールは腕を降ろすことすら忘れ、雪が舞い上がった前方を見る。
雪の向こうに影が見えた。
状況を理解することもできずにただじっと眺め続ける。
煙のような雪を突き抜けて現れたのはルフィだった。
肌は色を悪くしたまま、目には闘志が戻り、力強い光が灯る。
信じられないムッシュールは微動だにできず、今や声を発することさえできない。
全てが理解不能の事態だった。
自分より弱いトナカイに傷を負わされるのも、毒を受けて瀕死の男が動けるのも、いくら二人掛かりとはいえそんな連中に自分が追い詰められることも。
長く幽閉されていた彼は自分が住んでいた小さな世界しか知らない。
知識の浅さ、経験の足らなさから、素直に不思議で仕方なかった。
何をするでもなくぼーっと突っ立ち、接近する彼を眺めている自分

が居る。
この時、彼はまだ自分が負けるとは理解できていない。
対してルフィは、自分の死を近く感じようが諦めようとはせず、最後の最後まであがき、仲間を信じて疑わなかった。その証明が目の中にある光である。
彼らの間にはそんな違いがあったのだろう。
ムッシュールの前に辿り着いた時、ルフィは血反吐を吐きながら腕を突き出した。
「ゴムゴムのォ！」
「あれ？　これ、おれが負ける――？」
「攻城砲（キャノン）ッ!!」
全ての力を込めた一撃が腹を捉え、ムッシュールの体は紙のように軽く空へ飛んでいた。
一直線に飛んでルフィから離れていき、誰かに止められるような速度ではなく、見る見るうちに離れていく。そうして彼は先に倒れていたワポルに激突し、巻き込み、共にドラム城の外壁に激突して埋め込まれるような姿になり、すぐに落ちて雪の上で静かになった。
ようやく終わった。
ルフィはがくりと膝をついて、そのまま倒れ込んでしまう。
言葉も出ない。それほど強烈な一撃だった。
唖然とした様子のチョッパーはしばし動くことができず、ルフィが倒れたことにも気付けない。
やがて倒れている彼を見つけ、慌てて駆け寄っていく。その頃には痛みも忘れていた。
「お、おい！　お前、大丈夫か!?」
「ハァ……ハァ……あいつは？」
「もう大丈夫だ。あれじゃ起き上がって来れない。お前の勝ちだよ」
「そうか……」
ルフィの隣に膝をつき、顔を覗き込むチョッパーは驚く。ルフィは笑っていたのだ。

疲れ切って起き上がることさえできない。それなのに勝利を喜ぶ余裕を持って、毒を受けたこの状態になってもまだ笑うことができる。

少しばかり、彼を人間だとは思えそうになかった。

（おれと同じ、バケモノ、か……）

部屋で話したことを思い出す。

あの時彼は、同じ悪魔の実の能力者だから、という意味で言ったのだろう。けれど今、その姿を見たのであれば冗談には聞こえなくなるから不思議だ。彼の方がよっぽどバケモノだと思う。

チョッパーもフッと笑みをこぼす。

今になって全身の痛みを思い出した。少し顔を歪めて、それでも笑みは絶やさなかった。

ようやく終わったと思って気が緩んでいたのだろう。

二人とも彼らの方を見ようとはしておらず、そのせいで気付くのに遅れた。

唯一、くれはが見ていたのである。

空気を緩ませる二人へ鋭い声が飛ぶ。

彼らが知らぬ間に、いつの間にか、ワポルが動き出していた。

「あんたたち油断するんじゃないよ！　まだ終わっちゃいないんだ！」

「え――？」

「バクバク工場（ファクトリー）……」

チョッパーが振り返った時、すでに彼は動いていた。

立ち上がることすらままならず、地面を這って進んで倒れた兄へ近付き。

大口を開けて、ムッシュールを食べ始めていた。

GROWN KIDZ（4）

バクバクの実を食べた能力者は雑食人間となり、草でも岩でも、鉄でさえ食べられる。
それだけでなくその気になれば人間ですら食べられるようだ。
今、倒れていたはずのワポルが動き出し、彼らの視界の先でムッシュールを食べていた。妙な音が響いてどうやら咀嚼しているらしく、見ているだけで悪寒が走る。
人が人を食べるなど、あり得ない。
本来は動物であるチョッパーから見ても気味が悪かった。
そう時間もかからず食べ終え、背を向けていたワポルの体が変形し始めた時、悪寒が強くなる。
こちらもまた骨や肉が動く薄気味悪い音を立て始める。
体はさらに大きくなり、ワポルハウスに更なる要素が付け加えられる。
「これぞ究極の進化形態――」
変身終了を告げるのか、口から煙を吐き出す。
ゆっくり振り返ったワポルは笑顔だ。
「完成！　バクバク工場（ファクトリー）〝ムッシュワポール〟！　これが最強の変身だぁ！」
そう言った彼は両腕を広げ、大声で笑った。
大部分はワポルを基礎としている様子。
顔はワポルその物で、髪型はムッシュールのものに変わり、カバの毛皮を被り、さらに大きくなって見上げるほどの巨体。胴体はブリキで強固な造り。ワポルハウスを引き継いでいるらしい。
どう変わったかは今一つ定かでないものの、少なくとも食べた事実は確かなのだろう。
二人の人間が一つに融合したのである。
その恐ろしさは外見ではなく、二つの能力にこそある。
本来、悪魔の実は一人につき一つしか食すことができず、二つ食べれば死に至る。

しかしそのムッシュワポールは融合した結果、バクバクとノコノコ、両方の能力を持ち、単純に二つ食べた者とは違い、体が弾け飛んで消えることもなく、一人の人間として完成した。
完璧な融合は彼らに奇跡を与えたようだ。
まだそのことに気付いておらず、チョッパーはルフィの傍に膝をついたまま動かない。見逃していいはずがないと思っているが、微妙な変化に気付きにくかったせいだ。
呆然と見つめていると、上機嫌なワポルが笑い始めた。
「ま～っはっはっは！　最初からこうしておけばよかったんだ！　あのカバ兄貴じゃ能力は上手く使えねぇし、おれが利用してやった方がよっぽど効率が良い！」
胸を張る彼は疲弊した二人、遠くに立つくれはを眺めた後、にやりと笑って語り出す。
「ここまでおれ様をコケにしたカバどもは初めてだ。よって即刻貴様らは処刑！　もはや手段は選ばねぇぞ……おれ様の力で、一度この島をきれいに浄化してやろう」
「な、何をするつもりなんだ……」
「まっはっは、カバ兄貴の能力を使うのよ。かつてこの島を恐怖のどん底に陥れた、胞子爆弾（フェイタルボム）を打ち上げてやる。それでこの島は終わりだ」
勝ち誇った顔で言う彼に、チョッパーが驚愕して表情を強張らせる。
彼は今何と言ったのだ。
自分の国だと主張して執着していた国を、丸ごと壊すと言っていたのだ。
正気の沙汰とは思えない。
焦るチョッパーは思わず立ち上がり、肩を怒らせて叫ぶ。
「お前、本気で言ってるのか!?　この国には大勢の人間が居るんだぞ！」
「だからどうした！　どいつもこいつもおれ様に従わねぇ反逆者どもだ！」

「そんなことしても王として認められるわけじゃない！」
「この国の浄化にはなる！　おれに従えん奴は全員死ね！」
「無茶苦茶だ……やっぱりお前は、王様なんかじゃない……」
「黙れバケモノが！　お前にはそんなことを言う資格もない！　人間でもねぇバケモノが偉そうにしゃべってんじゃねぇぞぉ！」
言うだけ言って、ワポルは城を見上げた。
窓とその周辺が壊れた塔がある。そこにブリキング大砲があった。
にやりと笑い、再びチョッパーを見た時には彼に対する怒りなど感じない。
大事の前の小事というやつだろう。今となってはチョッパーに対する興味もなく、島ごと全てを滅ぼす気でいて、それ以外に興味がない様子だ。
「あと必要な物はブリキングキャノン。あれを食えば全てが終わる」
「ふざけるな！　お前の思い通りにはさせないぞ！」
「ま～っはっはっは！　バケモノが何か言ってやがる！　王様に向かってずいぶん偉そうな口を叩いてやがるが、いいぜ、許してやろう。どうせあと数分の命だ」
ワポルの両足、靴の底に、キノコの傘が生える。ノコノコの実の能力だ。
それを使ってその場で跳ね、人とは思えぬ跳躍力を見せた彼は高く空へと跳び上がった。
「止められるもんなら止めてみろ！　追いつけるならだがな！　ま～っはっはっは！」
「くそっ、ランブルボールで……飛力強化（ジャンピングポイント）さえ使えれば」
大きくジャンプしたムッシュワポールは頭から塔へ突っ込み、広い肩幅で壁を壊しながら、無理やり塔の中へ入っていく。
その姿を見送ってからチョッパーは思案した。
劇薬を再度使うべきか、否か。今使っても期待したほどの効果は発揮しない。それでも、彼を追って止めるためなら賭けてみる必要もあるのかもしれない。

逡巡する彼の腕を掴む手がある。
辛そうに呼吸を乱すルフィだ。
気付いたチョッパーが彼を見下ろした時、目が合った途端にパッと頭が真っ白になる。
今すぐ息絶えてもおかしくないとさえ思うが、力強い眼差し。限界と感じるほど顔色は悪いというのに彼は力を振り絞ってチョッパーを見上げていた。
「ハァ、チョッパー……」
「ど、どうした？」
「頼みが、ある」
小さな声で必死に頼まれた。
不思議と迷いを抱かず、チョッパーはその頼みに対し、頷くことで返答とする。
一方、塔の内部に入ったムッシュワポールはブリキング大砲の前に居た。
弾切れを起こしたそれを食せば、彼の体はさらに変形して〝ムッシュワポールキャノン〟と化す。そうなればもはや誰にも止めることは不可能。絶対最強の王になる。
その時を思い浮かべ、ムッシュワポールは大砲を撫でながら上機嫌だった。
「満足に敵も殺せねぇアホ兄貴にはもううんざりだが、胞子爆弾（フェイタルボム）だけは価値がある。こいつとブリキングキャノンさえあればもうおれに勝てる奴は居ねぇ。四皇も敵じゃねぇかもなぁ」
自らが手に入れた力に酔いしれているのだろうか。
うっとりした顔で呟く彼は余裕を誇り、一向に動き出さない。
「この力を使って、今度こそおれ様はカバな海賊どもには負けねぇ最強の王国を作ってやる。当然国民はおれ様の命令に素直に従い、逆らう奴は全員処刑、そんな理想国家を――」
理想を語っている最中だった。
突如外から窓を割って塔内に飛び込んできた物体がある。
ムッシュワポールは反射的に悲鳴を上げて部屋の入り口まで逃げ

出した。
「なんか来たァァァッ!?」
体の向きを変えることなく後ずさりで素早く離れていき、飛び込んできた正体を見やる。窓を割った勢いで地面に転がったのはルフィだった。
満身創痍で膝をつくことさえできず、ぐったりと倒れた姿。
もう動けないだろうと思われる彼はチョッパーに投げてもらい、ここまで来た。
やっと彼だと気付いたムッシュワポールは訝しみ、ルフィが動かないと知ると余裕を取り戻す。
意気揚々と歩き出し、倒れたまま動かない彼に軽い足取りで近寄っていった。
「誰かと思えば死にぞこないじゃねぇか。そんな体で何しに来やがった。ひょっとしてまさか、おれ様を止めようって？　ま～っはっはっは！　止められるといいな、その体で！」
歩く足取りはスキップ交じりである。
ルフィの傍にやってきた彼は笑顔で見下ろして、腰に手を当てて上機嫌に笑う。
それは彼を挑発するようで、侮蔑するための態度だ。
「よぉし決めた。せっかく来たんだから有効活用してやる。新ドラム王国建国の祝砲を上げる前に貴様の頭を踏み砕いてやろう。どうだ？　王様に引導を渡されるのは嬉しいだろう？」
上体を曲げて顔を近付け、これ見よがしに伝えた後は背を反らして笑い声を響かせる。
そうしてムッシュワポールは右足を持ち上げて、ルフィの頭に狙いをつけた。
「おれ様を舐めたツケはここで払っていけ！　さぁ、お別れだ――！」
力を入れて思い切り踏み抜こうとする。
その瞬間、倒れたままでルフィがギロリと彼を睨みつけた。
たった一睨み。動いてすらいない人間が睨んだだけだ。

それなのにムッシュワポールは心底怯え上がり、思い切り悲鳴を上げて、足を振り上げたままの状態で後ろに倒れていく。そして尻もちをついてしまった。
彼の目は死人のものではない。
死の淵にあって、尚も生きようとする強い瞳。
かつてワポルが見たことがない眼差しが、完璧に彼の心を折った。
理屈ではない。肌で彼の強さを、言いようのない覇気を感じている。
ムッシュワポールは慌てて立ち上がったが、もはや彼に対抗する力は持っていなかった。
震える腕で体を支え、ルフィが立ちあがる。
足はふらつき、激しく咳き込んでは吐血して、今にも倒れそうだ。しかし今のルフィは片時もムッシュワポールから目を離そうとはせず、強い眼差しで睨みつける。
歯を食いしばり、後ずさりする彼へ一歩を踏み出した。
振り上げた拳に力を込める。
腕が震えるが関係ない。逃がさない、と決めたのだ。
強く踏み出すと同時、彼は怯えるムッシュワポールへ強烈な一撃を放った。
「おおおっ、おおおおおッ！」
「ぶげぇっ!?」
腹に一発。鈍い音を発して直撃する。
「んん！」
「かぺっ!?」
頬にも一発。無理やり顔の向きが変えられ、痛みを感じて足がふらついた。
「うおおおおおっ！」
「ギャアアアアアッ!?　も、もうやめっ――どぶへぇっ!?」
そして最後に一撃。顎を下から打ち抜いて、彼の巨体を思い切り打ち上げる。
ムッシュワポールの体は軽々と上がり、天井を貫いて屋根に突き刺

さった。顔だけが外に出て体は室内に置いたまま。まるで生首のような姿で静止する。
痛みに耐えて、鼻血を流して。意識を失いかけた彼はハッと気付いた。
自身が居る塔の隣に風ではためく旗がある。
桜吹雪とドクロ。
バカにして、一度は折ろうとした旗が彼を見やり、無言でバタバタと揺れ動いていた。
表現できない恐怖を感じる。無言で感じる圧力がその旗から醸し出されるようだ。
彼が勝手にそう感じていただけかもしれないとはいえ、その目は恐怖に支配されていた。
今や言葉を発することさえできずに旗を眺めているその時、外壁を上り、ルフィが現れた。姿を見た途端に耐え切れない様子でムッシュワポールが叫び出して、怯え始める。
海賊旗よりよほど怖い。そんな相手だ。
ルフィはムッシュワポールの目の前で足を止め、両方の拳をゴツンとぶつけた。
「ギャアアアアアッ!?　来るなァァッ!?」
「ハァ、ゼェ……何の覚悟もねぇ奴が、人のドクロに手ェ出すな」
ルフィが両腕を伸ばし始める。自分の後方へ向かって限界まで。
それが最後の一撃になるとムッシュワポールも理解していた。
命乞いのためか、彼は半ば錯乱した状態で必死に口を動かし始めると、自らが助かる術を探して必死にルフィへ話しかけ始める。しかし彼はその声に耳を貸さない。
「ゴム……ゴム……」
「ま、待て!?　よく考えろ！　おれ様は王様なんだぞ！」
「ゴム……ゴム……の」
「ドラム王国は世界政府加盟国だ！　おれに手を出すことは世界的大犯罪だぞ！　政府も海軍も必ずお前らを見つけて始末する！　生きて帰れるとでも思ってんのかァ！」

ルフィの攻撃準備は整った。
その状態で彼は一度動きを止め、冷静な声で答える。
「関係ねぇんだぞ。王様だろうと神様だろうと、誰が偉くたって偉くなくたって関係ねぇんだ」
「な、なにィ!?」
ルフィは笑う。
「おれは、海賊だからな」
挑発的でもあり、子供のようでもあり、狂気さえ感じる笑顔。
その発言は常識を持つ人間にとってはあり得ないもの。
ムッシュワポールは驚きを隠せず、全身が震え上がってしまっていた。
いよいよルフィが攻撃のため腕を引き寄せる。
彼の攻撃が触れるその瞬間まで、ムッシュワポールは喚くのを止めなかった。
「おい、ちょっと待て！　お前に地位と勲章をやろう！　だから……！」
「オオオオオッ！」
「わかった、副国王の座を――あああああああっ!?」
数十メートル、かつて経験のない溜めから引き寄せられ、両腕が迫る。
彼の攻撃は限界を超え、凄まじい速度でムッシュワポールを吹き飛ばした。
「バズーカァ!!!」
塔の先端ごと捉え、空へ弾き飛ばす。
天高く飛び、島から離れ、空の彼方まで飛んでいく。巨体とはいえムッシュワポールの姿が見えなくなるのはすぐのことだった。
見送ったチョッパーは何も言わず、ただ彼が消えた方角を眺める。
戦いは終わった。諸悪の根源は国から弾き出されたのだ。
深く息を吐き出して、肩の力が抜けていく。
ルフィに気付いたのはそれからだ。
同じく脱力し、もはや立っていることすらできなかった彼は屋根を

滑り落ちてくる。
あっと声が漏れ出る。
気付けばチョッパーは反射的に走り出していて、受け止めようとしたのだろう。獣型になってまで急いで、彼の着地点に近付くと人型に変形する。
落ちてきたルフィに飛びつき、その体をしかと抱きしめた。
そのままの勢いで転んでしまうが敢えて自分が下敷きになり、必死にルフィを気遣う。彼はすでに意識を手放しているようで反応はなかった。
腕の中に居るルフィを見つめる。
ひどい顔色だ。毒が回ってまだ生きているのが不思議なほどひどい状態にある。
一刻も早く治療しなければ手遅れになってしまうだろう。
チョッパーは迷わず立ち上がって、城内へ入るため入り口へ走った。
入り口付近に居たくれはは、彼が近付いてきた頃になって声をかけた。
「いいのかい？　そいつを助けても」
「え？」
唐突な問いかけに足が止まる。今すぐルフィを助けたいが、その一言は無視できない。
チョッパーは不思議そうにくれはを見つめて立ち止まっていた。
「そいつはね、海賊なんだ。決して善人じゃない。自分勝手を自由と呼んで、必要があれば簡単に他人を傷つける。人を治す医者とは対極に居るような奴さね」
「うん……」
「現にこの国は海賊たちに傷つけられた。ワポルだけじゃない、黒ひげって奴にもね。こいつを治して同じことが起こらないとも限らないんだよ？　そいつは海賊だからね」
押し黙ったチョッパーはルフィの顔を見つめる。
彼は海賊。海賊がどんな連中かも大体は知っている。

出会ったばかりの彼の全てを理解した気にはなっていないし、そんな奴じゃない、と強く言えるだけの自信もない。ただそれでも、自分の意志が変わらないことだけは確かだった。
「だけどおれは助けたい」
「この国がまた危険に晒されてもかい？　また誰かが傷つくよ」
「こいつはそんな奴じゃないよ。それにもしそんな奴だったとしても、おれが倒す」
「口だけならなんとでも言えるさ。あんたも全身傷だらけじゃないか」
「そうだよ。確かに甘いかもしれない……だけど」
顔を上げたチョッパーが真正面からくれはの目を見つめた。
「助けられる命があるのに見捨てるなんてこと、おれはしたくない！」
くれはは、何も答えなかった。
唇を噛んで黙ったチョッパーは再び駆け出し、ドラム城の中へと消えていく。
彼の姿が完全に見えなくなった頃。
くれははやれやれと首を振って呆れた表情。
不意に空を見上げ、ぽつりと呟いた。
「親に似ちまったのかねぇ。まったく面倒な話だ」
そう呟く顔には薄い笑み。
いつしか吹雪が弱まっていた。徐々に雲は晴れつつあり、どうやら雪は止まなそうだが、今夜は月が見えるだろう。ちょうど満月の日だったはずだ。
晴れつつある空を見ながら、くれはは誰にでもなく声をかける。
「あんたのせいさ、ヤブ医者。あいつは立派に育ってるよ」
ちらほらと、徐々に速度が変わってゆっくり雪が降ってくる。
腕を組んでそれを眺めたくれはは小さく鼻を鳴らした。
そうしていると奇妙な物が視界に入る。
バサバサと羽音を立てて飛んでくる物体。鳥なのだろうが、形が崩れてひどい外見だ。羽を動かす度にひらひらと体から何かが離れ、今

にも墜落しそうなほど弱っている。
どうやら宙を舞っているのは紙だ。
鳥の背には二人の人間が居て、片方の少年が慌て、片方の少年はぐったりしていた。
「よぉ～しここまで来たぞ！　もう目の前だ！　ほらキリ、頑張れ！　もう着くぞ！」
「あー墜落しそう……」
「おい頼むぞ!?　ここまで来たんだからもうちょっとだけ頑張れって！　休むならあそこに着いてからでいいじゃねぇか！　ほら、誰か居る！　人だ！」
「ウソップ、ちょっと代わってくれない……？」
「何をどうやって!?　お前にしか動かせねぇんだから頼むよ！　ほらもう少し！」
「うっ、吐き気がしてきた……」
「医者が居るから大丈夫だ！　むしろ吐け！」
騒々しい様子で近付いてくる。
そして彼らはフラフラと危なげにドラムロックの頂上へ到着し、すでに限界だったのか、滑るように着地した。その衝撃で紙の鳥はバラバラになってしまい、二人も投げ出される。
ごろりと転がり、起き上がったウソップはいの一番に空に向かって手を合わせた。
よっぽどの感動だったようで涙さえ流し、生きる実感と共に感謝の言葉を口にする。
その横ではぴくりとも動かないキリが雪に埋もれて倒れていた。
「おお神よ！　おれたちを生かしてくれてありがとう！　生きてるって素晴らしい！」
「あー疲れた。急に吹雪くんだもんなぁ……」
「お前もありがとうキリ！　よく頑張った！　お前が諦めなかったおかげでおれたちは死ななかったんだぞ！　偉い！」
「どうも」
「いやぁ～しかし急に天気が変わった時は焦ったぜ。ちょっと降っ

てるくらいならなんとかなるかもしれねぇって言うから出発したのによ。最初から最後まで予想外――ん？」
しゃべっている途中でウソップがくれはに改めて気付いた。
先程も気付いたのだが、立派な城の前に立つ人間。そして年老いた女性。
噂の魔女ではないかと思うのは当然である。
くれはは驚いた顔のウソップを見やり、笑顔で自分から問いかけた。
「若さの秘訣かい？」
「いや、聞いてねぇ」
予想外にも親しげに声をかけられたことに驚く。
外見は若々しい老婆。さほど怪しい人物とは思えないし、襲ってくる気配もないため危険ではないのだろう。ウソップが安堵して話せるのも納得だった。
キリは倒れたまま、顔を上げることさえできず聴覚に頼って状況を知る。
「なぁばあさん、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ――」
「口の利き方には気をつけな。あたしゃまだツヤツヤの１３０代だよ」
質問しようとした瞬間、ぴしゃりと制止される。どうやら呼び方が気に入らなかったらしい。
ぽかんとしたウソップは何気なくキリを見下ろす。
「あー、なんか気に障ったらしいぞ」
「女性に年齢の話はタブーって噂だしね。触れない方が身のためだよ」
「だな」
突っ伏したままのキリから助言を受け、素直に頷いたウソップは態度を改める。しかし彼を起こしてやろうというつもりはないらしくてくれはに目を向けた。
彼女は腰に手を当て、距離を保った状態で彼の話を聞く。
「ここに麦わら帽子かぶった男が来てねぇか？　オレンジ色の髪の

女を背負って」
「ああ、来てるよ。今治療中さ」
「ほんとか!? よかったぁ～、ルフィもナミも無事だったんだぜ!」
「あいつらの仲間かい？」
「そうだ。同じ海賊団の仲間さ。船長はルフィだけどな」
「なら一応教えといた方がいいか。あの坊主も治療中だよ。毒を受けちまってね」
「な、なにっ!?」
ウソップが驚愕して目を見開いている頃、キリはずりずりと顔の向きを変えていた。
力が抜けて動けない彼も気にせず、ウソップはくれはに問いかける。
「それじゃあ、国王とその兄貴が……!?」
「心配しなくていい。麦わらの坊主があいつらを吹っ飛ばしちまったよ」
「ルフィが？」
「その時に受けた毒を今治療してる。これで心配事は消えたかい？あんたらの船長が死ぬことはないよ、あたしの弟子が診てるからね」
「そ、そうか。敵はルフィがぶっ飛ばして、毒も治るんだな。ならよかった……」
ほっと胸を撫で下ろしたウソップはキリを見る。
「全部問題は解決だってよ。なんだよ、一足遅かったな」
「ひょっとして喜んでる？」
「まさか。むしろ出遅れたことが悔しくて堪らねぇくらいだぞ、おれは」
状況を理解して、全ての不安が取り除かれた様子だった。
ルフィは治療を必要としているが、ナミは治療されていて、ここに向かっているという情報があったワポルとムッシュールはルフィによってすでに空の彼方。
ひとまず安全は約束されたと言っていい。

あからさまに安堵したウソップは涼しい顔でキリに答えた。
動けないキリは雪の冷たさに触れつつ、ふと思う。
脳裏に浮かんだ素朴な疑問を、冷静な声でウソップへとぶつけた。
「それはよかったよ。ところでさっきから思ってたんだけど」
「どうした？」
「そろそろ起こしてくれない？　全身が冷たいんだ」
「あ、それもそうだな。すっかり忘れてた」
「君は意外にひどい奴だよ」
悪い悪い、と軽く謝りながらウソップがキリの肩を掴み、体を起こしてやる。
多少面倒ではあったが座らせてやることに成功した。
頭の上や顔にも雪が付着しているため手で払ってやり、きれいになったところで彼もやっと安堵できた様子だ。ただし雪で体が濡れてしまったせいで体は動かせない。
ウソップにもたれるようにしたところで二人が落ち着いた。
ふぅと一息ついた時、キリとくれはの視線が交わる。
彼女は息を呑んでいたようだ。キリの顔を見た瞬間に佇まいが変わり、少なからずの驚きが表情へ表れて、しかし二人が気付く前に消してしまう。
おかしいと感じたキリは不思議そうに彼女を見ていた。するとなぜか微笑まれる。
「こりゃ珍客だ。どんな巡り合わせなんだろうね」
「え？」
「なに、ちょうどいいと思ってたところさ。あんたたちあの二人の仲間だろう？　一つ聞くがあの船長は金を持ってんのかい？」
「いや確実に持ってねぇと思うけど」
「ああ、治療費だね」
「やべっ。そういや金持たすの忘れてたな……」
どうやら今この瞬間、治療費を請求されているらしいとわかった。
慌てたウソップに対してキリは取り乱さず、妙に余裕がある態度を崩さない。

「キリ、お前金持ってんのか？」
「さっき使っちゃった」
「使ったってどこで？　店になんか寄ってねぇぞ……ま、まさか、あの鳥かっ!?」
「だってどんどん剥がれていっちゃうし、応急処置が必要で」
「もったいねぇ。で、残金は？」
「手元にはゼロ」
「マジか……」
「大丈夫だよ、ボクの小遣いだけだし。船に戻れば生活費はちゃんと保管してるよ」
「それじゃここの支払いは？」
「誰かに持ってきてもらおうか」
「お前、おれたちが何のためにここに来たと思ってんだ」
彼らの会話で金を持っていないことは伝わった。だがくれはも喉から手が出るほど治療費が欲しかった訳でもないため、溜息をつくとあっさり考えを変えてしまう。
金はそこまで必要ではないらしい。
その代わり、二人へ声をかける彼女は別のものを要求した。
「どうせそんなことだろうと思ったさ。それじゃこっちに来てもらおうか」
「え？　なんかあんのか？」
「代金の代わりだよ。人手が要るんだ、武器庫の大砲を外へ運びな」
「大砲？　なんでそんなもん」
「つべこべ言わずに働きな。それとも金は払えるのかい？」
そう言われ、押し黙ったウソップはキリと目を合わせる。
「……運ぶか」
「あ、ボク動けないんで、よろしく」
「はぁ!?　お前それはずるいだろ！」
「ここまで頑張ったのはボクなんだよ？　ちょっとくらい休ませてくれても」
「それとこれとは別問題じゃねぇか。あの時は緊急だったわけだ

し」
「でもどのみち動けないけどね」
「くそぉ、おれも能力者になりたい……」
くれはが歩き出したため、仕方なくウソップはキリを背負い、城内へ向かって歩き出す。
敵の脅威は去ったとはいえ苦難は続くのだろう。
ぐったりして動けないキリを運んでやる最中、ウソップは自分が貧乏くじを引いている気がして仕方なくなり、大きく溜息をついた。

治療のあとで

ドルトンが目を覚ましたのは、晴れつつある空から夕日が沈む頃だった。

さっきより晴れてはいるが薄い雲があるせいか、まだ少しずつ雪が降っていて、その向こう側には夕日もはっきりと確認できる。気候はすでに落ち着いていた。

目を覚ましたドルトンは村人に支えられながら体を起こし、ベッドの上で座った。

顔色は幾分悪いが呼吸は安定している。

疲労感を感じつつ、頭を押さえた彼は村人たちの顔を見回した。

「うっ、私は……そうか。ワポルたちに……」

「大丈夫かいドルトンさん？　まだ無理はしないでくれ」

「ワポルは、どうした？」

起き抜けにすぐ質問をする。内容はワポルについて。

責任感から自分の体さえ心配していないドルトンはまた無茶をしそうな勢いだ。

焦る村人たちは話していいものかと困惑するが、彼の真剣な目を見つめ、抗えない。彼には普段から世話になっており、村のリーダーでもあるためだ。

「チェスとクロマーリモは捕まえた。治療はしたが、今は倉庫で捕まえてある」

「ワポルは居ない。城に向かったらしいんだ」

「そうか……」

小さく呟き、突然ドルトンがベッドを降りようとする。

傍に居た村人たちは慌てて止めようとして身を乗り出した。

「だめだドルトンさん！　ひどい怪我じゃないか！」

「それにムッシュールの毒もある。イッシー２０が治してくれたがまだ完治じゃない」

「まだしばらく安静にしてくれ。そんな体で出て行っても――」

「私が、終わらせなければいけないんだ」

ベッドについた手が震える。
もう片方の手が胸元を押さえて苦しそうだ。
それでも、やはりドルトンの目は迷わず、絶対に意見を変えようとしない。
「ワポルがああなってしまった責任は私にある。先代国王の意志を継ぎ、いつかはわかってくれるだろうと甘い態度で接してしまった。もっと厳しく話すべきだったんだ」
「そんなっ、ドルトンさん」
「あなたの責任だけじゃない」
「そうだ。ワポルがああなったのはワポルの責任だ。そこまで思い込む必要は」
「奴とは決着をつけなければならない……私の手で終わらせなければ」
ドルトンは必死に力を込め、立ち上がろうと努力を続けた。
見ているだけで重苦しい空気が漂う。
彼の家に集まった村人は言葉を呑んで、いつしか止めようとする者は居なくなった。
ある時、一人の男がドルトンに肩を貸す。
ドルトンは驚いていたものの、それをきっかけに他の者も動き始めて、それぞれが協力して彼を連れ出そうとした。両側から肩を貸す者、武器を持つ者、扉を開ける者。事前に打ち合わせをした訳ではなく己の判断でドルトンを助けようとしていた。
それは彼の無茶を受け入れた瞬間に違いない。
驚くドルトンを見つめ、彼らは口々に笑顔で言う。
「それならドルトンさん、おれも行くよ」
「ああ、おれもだ」
「おれも！　ドルトンさんを一人でなんて行かせねぇ！」
「あんたが戦うならおれたちも戦うさ。ここはもうあいつの国じゃない、おれたちの国だ！」
「みんな……」
危険だからやめろ、などと言えるはずもない。最も危険なのは重傷

を負ったドルトン本人なのだから。従って意気揚々と動き出す彼らを止める術など持たなかった。
そのせいか、頭を垂れたドルトンは深く感謝をする。
彼らが居ればこの国はやり直せる。そう思った。
家を出た人々は駆け出し、出発のための準備を急いで、あらゆる方向へ向かっていく。
その後ろを、肩を借りたドルトンがゆっくり進んでいた。
「急ぐぞ！　ワポルとムッシュールが何かをする前に！」
「ロープウェイの修理は終わったか！」
「ああ、さっき終わったと報告が。かなり時間はかかったようだが」
「動ける男は武器を持ってロープウェイ乗り場へ。今日こそワポルを討ち取るんだ！」
村が活気を取り戻して、かつてとは違う空気が流れている。
これは新たな国の基盤だ。
辺りの風景を見回したドルトンは、不意に笑みがこぼれ、同時に込み上げる涙を感じた。

＊

夕日が沈み、空の色が変わって、いつからか満月が顔を覗かせ始めた頃。
ドラム城の一室で、ナミが目覚めた。
「ん……」
重さを感じる瞼を押し上げて、意識がぼんやり戻り、天井が視界に入った。
体はまだ重い。だが何がという訳ではなく、以前より楽になっている気がする。熱もあって気怠さが全身を綴んでいるが何かは違っていた。
持ち上げた右手を額へ運んでいき、その時初めて濡れたタオルが乗せられていることに気付く。
部屋は暖かい。寒気は別として寒さは感じなかった。

小さな物音がある。気になったのかナミは寝転んだまま首を動かしてそちらを見る。
ベッドの傍にあるテーブルに向かう背があった。しかし人間の物ではない。全身に包帯を巻いた小さな体はせいぜい人間の子供程度の背丈だが、全身が毛皮に覆われている。
蹄もある。角もある。その上で医療器具を使って薬を作っているようだ。
ピンク色の帽子は何の変哲もない物に見えるが、内側から突き破って出る角が気になる。
ナミはしばし声も出さずにその背をじっと見つめていた。
医者なのだろうか。
額にタオルを乗せられていることを考えるとそう判断することもできる。しかし外見は奇妙だ。
ナミは気になって仕方ないらしく、起き上がりながら口を開いた。
「誰？」
声が届いた瞬間、全身をびくつかせたチョッパーが跳び上がって机をひっくり返した。机の上に乗っていた物が地面に落ちて、本はともかく、瓶や医療器具のいくつかが割れる。
壁に背をつけたチョッパーがナミを見る。
彼女もやっと正面から彼を眺め、想像以上の驚きように目を丸くしていた。
「お、お前、起きたのか。熱は大丈夫か？」
「しゃべった!?」
「ギャアアアッ!?」
突然大きい声を出したせいか、悲鳴を上げたチョッパーは奥の部屋へ逃げ出した。
何かに激突する音、割れる音がしばらく続き、ナミは口を噤んでしまう。そこまでの反応になるとは思っていなかった。怖がらせたようで悪いとも思う。
動くことなく待っていると、部屋と部屋の境目の壁に隠れてチョッパーが顔を出した。しかし気になることが一つ。隠れ方が逆だった。

壁に両手をついているのだが体が丸見えである。
じっと見ていたナミともばっちり視線が合っているのだが、体勢を変えるつもりはなさそうだ。
仕方なく、ナミが恐る恐る指摘してやる。
「逆……なんじゃない？」
言ってみるとチョッパーがハッとした顔で気付いた。
素早くは動かずゆっくり移動する。
壁に体を隠し、顔だけをわずかに覗かせて尚も彼女を見る。ナミは困惑した様子だ。
少し間抜けというのか、常識を知らないのか、どことなく愛らしい様子である。
「遅いわよ……隠れ切れてないし」
「う、うるせぇ人間！　それと……熱はもういいのか？」
「ずいぶんマシよ、さっきよりはね。ところでここは？　あんたは誰？」
「ここは、ドラム――元ドラム城だ。今は、名前なんてない」
「へぇ、お城なんだ。それであんたは？」
「おれは……トニートニー・チョッパー。医者だ」
チョッパーが恐る恐る名前を言う。
やはり不思議だが意志の疎通はできる。ナミはもう驚かずに話を続けた。
「あんたが治してくれたの？　ありがとう」
「んなっ……べ、別にっ、礼なんかいらねぇよ！　バカヤロー！　コノヤローがっ！」
「その割には嬉しそうね」
「嬉しくなんかねぇよ、バカヤローが！」
人間とのコミュニケーションが得意ではないのだろうか。或いは経験が少ないのかもしれない。お礼を言われただけで小躍りを始めるチョッパーを見てそう思う。
隠れ方が下手なのも、考えてみればそんな気がした。
今まであまり人間と触れ合ったことがないから間違った隠れ方な

のかもしれない。
ともかく、危険ではなさそうだ。
ナミは肩をすくめて苦笑する。今やチョッパーへの恐怖心もなかった。
室内、及び城内は、驚くほど静かだった。
窓から外を見るとちらほら雪が降っており、天候の悪さが窺える。
気になるのは仲間がどこへ行ったのかという話だった。
「ねぇ、私をここに連れてきた奴は？　多分ルフィだと思うんだけど、ここに居るとしたら静か過ぎるし、どっかで迷子にでもなってるのかしら。ひょっとして外？」
「あ、あぁ、あいつか。あいつなら、今……寝てる」
「寝てるって、呑気な奴ねぇ。私が死にかけてるっていうのに」
「怪我をしたんだ。いや、厳密に言うと怪我じゃないんだけど……とにかく、治療を受けて」
「治療？　あいつ何やったの」
身を乗り出したナミは彼を心配している様子だった。
素直に答えればいいのだろうが、人と話すことに慣れていないチョッパーは何と言っていいのやらと言葉を選び、時間がかかると言い出せなくなって口ごもる。
少し沈黙ができてしまった。
そのせいでチョッパーは頭を振り、慌てながらも話題を変える。
「とにかくっ、あいつなら大丈夫だ。そ、それより、お前も人のこと言えないぞ。ちゃんと寝てなきゃだめだ、まだ熱が下がってないんだから」
「平気よ。前より楽になったんだし」
「だめだっ。まだ治ったって言えるような状態じゃない。特にお前がかかった〝ケスチア〟は油断するとまだ危険があるかもしれないからな」
「ケスチアって？」
「もう絶滅したはずのダニさ。多分、おれたちじゃなかったら薬なんて手に入らなかった」

「そんなにヤバい症状だったの？　着いたのがこの島でよかったわね……」
安堵したような、呆れるような表情を見せ、ナミは不意に遠い目をする。
寝ようとする意志を感じないので、仕方なくチョッパーが彼女の上体を倒して寝かせてやった。ベッドの縁に立ってひどく優しい手つきだ。
「寝てろよ。あいつなら心配いらないから」
「わかってるけどもう飽きるくらい寝たのよ？　少しだけ話し相手になってくれない？」
「うっ……でも」
「じっとしてるから」
仰向けで寝転び、枕に頭を預け、ナミはにこりと微笑みかける。
戸惑いが無いと言えば嘘になるだろう。
だがなぜか嫌とは言えず、頷いたチョッパーは近くに椅子を運んでその上に座った。
「お前、おれが怖くないのか？」
「怖い？　どうして？」
「だって、人間じゃないんだぞ。それなのにしゃべるし、角だってあるし、青っ鼻だし……だけどトナカイでもないんだ。中途半端な、バケモノだ」
「ふ～ん。あんたは自分のことそう思ってるのね」
寝返りを打って体を横向きに、彼を見るナミは悪戯っぽく笑っていた。
「自分のことをバケモノなんて、ずいぶん自信があるのね」
「ど、どういう意味だ？」
「うちの船にはあんた以上のバケモノがごろごろ居るわ。ルフィにも会ったんでしょ？　あいつなんて特にバケモノみたいな奴だもん」
「あいつか……ちょっと、わかる気がする」
「ん？」
「おれの敵をぶっ飛ばしてくれた。毒を受けて死にかけてたのに

……」
「なるほど。それで、あんたがその毒を治してくれた？」
こくりと頷く。
何があったかは理解できないが、なんとなく察することはできそうだった。
「あんたが思う以上にバケモノみたいな連中はこの海にたくさん居るわ。航海してると色んな出会いがあるの。あんたと出会ったのもその出会いの一つ」
「だから、驚かねぇのか……？」
「そりゃちょっとはびっくりしたけどね。でももう慣れちゃった」
ナミは朗らかに笑っている。邪気もなく恐怖心もない。彼を人間だと思っている訳ではないのだろうが、まるで人間と話しているように違和感を感じない姿だ。
チョッパーは言葉を失ってしまう。
戸惑いが大きかったらしく、視線は落ち、俯きながらぽつぽつと言い始めた。
「おれ、あいつに言われたんだ……仲間になれって」
「そうなの？　確かにうちの船には船医が必要だからね。私は賛成よ」
「え？　な、なんで」
「ルフィが選んだんでしょ？　なら何言っても聞かないしね。それに私とルフィを助けてくれたみたいだし、ちょっと面白そう」
にかっと、子供っぽくも悪い笑みでナミが言った。
「どうせうちには変な奴らばっかりだもん。しゃべるトナカイなんて最高じゃない」
「うっ……」
「ルフィじゃないけど、仲間にならない？　あんた話がわかりそうだしさ」
さらに寝返りを打ってうつ伏せに、両腕をベッドにつき、覗き込むように彼へ言う。
ナミの笑顔を見るチョッパーは言葉に詰まっていた。

反対するだろうと思って言い出したのに、予定が全く狂ってしまっている。こうなるつもりではなかった。てっきりルフィを止める側の人間だろうと思っていたのに。
彼は硬直して動かなくなってしまい、返答はしばらく出されず仕舞いだった。
直感的にでしかないが、嫌がってはいないと思う。
迷う素振りが良い証拠だ。彼は返答に困っているものの答えには困っていない気がする。
そう思うあたり、彼女もルフィに毒されているようだと自覚していた。
チョッパーは自分の意見を言おうと口を開きかけた。
その時、バンッと強く部屋の扉が開かれる。
「あっ、居たぁ～っ！」
「ひぃっ!?」
「ルフィ」
「チョッパー！　おれの仲間になれぇ～！」
「ギャアアアアアッ!?」
突然飛び込んできたのはルフィだった。
チョッパーと違って体に包帯を巻いている訳ではなく、本当に体調が悪かったのだろうかと思うほど元気な姿で、どたどたと荒々しく踏み込んでくる。反射的にチョッパーは逃げ出した。反対側の出入り口へ向かって駆け出し、勢いよく扉を開いて姿を消した。
勢いそのままに追おうとしたルフィだったが、またしても突然足を止めた。
視界にナミの姿が入ったのだ。彼女が起きていることに気付き、振り返って笑顔になる。
「あ～っ、ナミィ！　お前起きたのかぁ！」
「おはよ。で、何やってんのよ、あんたは」
「しっしっし、いい奴見つけたから仲間にしようと思ってな。もう肉食えんのか？」
「何の話よ」

「肉が食えるようになったら病気が治ったってことなんだろ？」
「どういう基準よ……」
心配しているのだろうが妙な判断基準だ。呆れたナミはジト目で彼を見やり、見られたルフィは彼女が目覚めたことを純粋に喜び、上機嫌さは揺らがなかった。
多少疲れはするものの気分が悪くなる訳ではない。ナミは溜息交じりに答える。
「肉なんて食べれないわよ。まだちょっとだるいし治り切ってないもの」
「ええっ⁉　じゃあだめじゃねぇか！　肉食えないんじゃ辛いだろうが」
「あのねぇ、あんたとは違うの。別に辛くないわよ」
「寝てろよ。その間におれがチョッパー仲間にしとくから」
「はいはい……任せるわ船長。肉を食べれるようになるまでは大人しくしとく」
「うん、そうしろ。そんじゃ」
「それと、助けてくれてありがとう」
ナミは大人しく寝ていることを決めたようだ。布団に包まって背を向けてしまう。
安堵したルフィがくるりと振り返る。
扉の陰に隠れていたチョッパーの体が大きく震え、またしても隠れ方を間違えており、頭を少しだけ隠して体は全貌が見えていた。当然ルフィが気付かないはずもない。
にんまりと嬉しそうな顔。
ハッと気付いたチョッパーが動き出すと同時に、ルフィも全力で駆け出していた。
「おれの仲間になれぇ～！」
「ギャアアアッ⁉」
先程と全く同じ様子で追いかけっこが始まり、部屋を後にする。
まるで風のような一時だった。
ベッドの上で寝転んだまま、布団をかぶり直すナミはやれやれと嘆

息する。
起きる前からずっとああしていたのだろうか。きっとそうなのだろうと思う。ルフィが仲間にすると決めた人間は必ず仲間になっているし、きっと今回も逃がすつもりがない。
もう少し頭を使った勧誘はないのか。
呆れ返るものの、それが彼だと知っているため、今更止めようとも思わなかった。
足音が遠くなるにつれ、室内は静かになる。
不意に窓の外を眺め、雪が降ってくる様をガラス越しに見つめる。
病気でベッドから動けないなど久しぶりのことだ。
どことなく懐かしい感じもして、一人になった瞬間を寂しく感じる。
起きた時にはチョッパーが、それから少ししてルフィが来た。今はどちらも居ない。部屋の中で一人になってしまい、布団に包まっても寒さを感じる。
それから何気なく視線を動かし、彼らが出て行った方向の扉が開いたままだったことに気付く。
扉が開けっ放しだったことも問題とはいえ、それ以上に気になったのが城内の風景である。
城の中だというのに雪が積もっていた。窓の外を眺めた時とは違い、上から雪が降ってくるという風には見えないが、吹雪いた時にでも入り込んだのかもしれない。
ナミは表情に驚きを表し、思わずゆっくりと起き上がった。
「雪？　城の中なのに……」
扉を閉めた方がいいだろうか。寒さを感じたことをきっかけに動き出そうとする。
その行動を止めるかのように背後から声をかけられた。
「騒がしいねぇ。あの麦わら坊主、もう起きたのかい。大したタフさだ」
振り返るとくれはが部屋に入ってくるところだった。
酒瓶を傾け、薄い笑みを浮かべ、余裕綽々という雰囲気を湛えて

やってくる。ベッドに近付いてくる彼女を見てナミは小首を傾げた。
「あなたは？」
「若さの秘訣かい？」
「ううん、聞いてない」
「あたしゃ医者さ。名はくれは。ドクトリーヌとそう呼びな」
「医者？　ってことは、さっきのトナカイは」
「そうさ、あたしの弟子だよ。全ての技術を叩き込んでやった」
「ふぅん。そうなんだ」
ナミは納得した顔で頷く。
その間にくれはが開けっ放しの扉を閉め、室内は再び暖炉の火で暖められていく。
戻ってきたくれははナミの額に右手の人差し指だけで触れた。押すでもなく、痛みが生じるほどの勢いだった訳でもない。本当にただ触れただけ。
困惑するナミが動かずに居ると彼女は笑う。
「３８度２分。んん、まずまず。熱は引いたようだね小娘。ハッピーかい？」
「今のでわかったの？」
「ひっひっひ、舐めるんじゃないよ。そこらのガキどもとは経験が違うさね」
くれはが椅子に座って脚を組む。
思いのほか笑顔は優しく敵意はない。
チョッパーの師匠だという話からしても警戒心を持つ必要はなさそうだった。
「あいつにしろあんたにしろ、おかしな連中だね。チョッパーを見て驚きもしないか」
「十分驚いたわよ。でもこの程度で驚いてちゃあの船長にはついていけないわ」
「そうかい」
「そういえば、助けてくれたんでしょ？　ありがとう」
「あたしじゃないさ。治療したのはあいつだからね」

酒瓶を傾けてぐいっと中身を喉に通す。その後でくれはは静かに問いかけた。
「あいつを連れ出そうって話だったかい？」
「あぁ、聞いてたの」
「聞こえただけさ。なに、別に怒るつもりはない。どうせしがないトナカイだからね。連れて行きたきゃ好きにしな」
「いいの？　あなたのお弟子さんなんでしょ」
「止める理由があれば止めるところだけどねぇ」
姿勢を崩し、少し俯いて目を伏せ、笑みを浮かべたまま。
妙に達観した様子だと感じる。
くれはは平坦な声であっさり告げた。
「ガキじゃないんだ。自分がどう生きるかくらい自分で決められる。というより、もう決めてるんだろうけどねぇ」
「すごい勢いで逃げて行ったわよ。断るってこと？」
「ひっひっひ、さぁねぇ。もうひと押しでもあれば素直になるんじゃないかい」
まるで全てを理解しているかのような言葉だった。
その一言にナミが笑顔になる。
「それなら心配いらないわ。ルフィの押しの強さはそんじゃそこらの奴には負けないから。一度決めた以上はなんとしてでも仲間にするはずよ」
「そうだろうねぇ……そう思ってたところだよ」
そう言った瞬間の表情に、ほんのわずかな寂しさを見つけた気がする。
しかしすぐに消えてしまい、気のせいだったのかと思うほどからりとした笑顔だ。ナミは一瞬眉間に皺を寄せるものの、別の問題を聞いてすぐに思考を変える。
「あいつがついていくようなら、ここを出ることを許可するよ。元々あたしの患者じゃない、あいつに責任があるからね。そうじゃなきゃ十日はここに居てもらう」
「十日も？　絶対仲間にしなきゃいけなくなったわね……」

「ひっひっひ。ま、せいぜい頑張ることだね」
豪快なくれはの笑い声を聞いた時、閉じられた扉が開かれる。
ルフィたちが出て行った方向とは反対側だ。
そちらを見ると疲れた顔のウソップと、その後ろに柔らかい表情のキリが居て、彼らは部屋に足を踏み入れた直後にナミが起きていることに気付いた。
どちらも笑みを浮かべ、安堵した様子を隠さずに表す。
「おっ、ナミが起きてる」
「おはようナミ。あと久しぶりかな。もう大丈夫なの？」
「ええ、なんとかね。流石にまだ肉は食べれないけど」
「肉ぅ？　何の話だよ」
「さっき大声が聞こえたけど、ルフィのこと？」
「変な基準だったからね。つい」
くすくす笑う彼女はすっかり元気そうだ。熱はあるのだろうがもう倒れるようなことはない。久しぶりだと感じる仲間との会話を素直に楽しんでいる。
彼らが来たことでくれはが席を立った。
どうやら部屋を出ることに決めた様子だった。
二人が居る方向を目指して歩き出す。
歩調は急がずゆっくりと。視線は不意にキリの顔を見た。
「さて、積もる話もあるだろう。あたしもまだやることがあるからね。失礼するよ」
「まだなんかあんのか？　大砲はもういいんだよな」
「あとはあたしがやるさ。なぁに、大した仕事じゃない」
げんなりするウソップを気にせず、足を進めたくれはは、キリの隣で立ち止まった。
彼の顔を見てしばしの間動かなくなる。
当然キリも見つめ返して、妙な空気が漂った。
「何か？」
「昔、あんたによく似た娘を見たことがあってね」
「え……？」

「顔はあんたで、性格はあの麦わらみたいな奴さ。島に来たと思ったら意味なく騒いで、まるで台風のような奴だった。ずいぶん懐かしい話だ」
それはまるで友人に対するような、ひどく優しげな笑みだった。
思考が止まったキリは、それでも必死に考え、答えるための言葉を選ぶ。
「知り合い、なんですか」
「ちらっと見かけただけさ。別に友人って訳じゃない。ただ気にはなってね」
くれはは歩き出す間際、キリの肩をポンと叩いた。
「気をつけな。きっとあんたも恨まれる。この先の海の大物たちからね」
それだけ言ってくれはは部屋を出て行った。扉も閉められてしまったため背すら見えない。
室内は静かになる。
彼女が言った言葉を理解しようとしているのか、ウソップやナミも押し黙って、言われた当人のキリもまた反応に困り、話し出すきっかけが掴み辛い。
中では特にウソップが先陣を切り、二人へかける言葉を発した。
「どういうことだ？　キリに似た奴？　知ってるか」
「いや……」
「キリによく似てて性格はルフィって、そりゃどんなバケモノだよ……」
「想像しただけで頭痛くなりそう。チョッパーでも目じゃなさそうよね」
「チョッパーって、ああ、あのトナカイか」
「会ったの？」
「いや、ちらっと見ただけ。なんか逃げられた」
「ふぅ～ん。まぁでも、あとでゆっくり話す時間はありそうよ」
「んん？」
含み笑いをするナミに首を傾げ、ウソップもキリも不思議そうにし

ていた。
何かを知っているらしい彼女の話に集中し始め、そうなればくれはの言葉も気にしない。今は不思議なトナカイ、チョッパーへの興味が勝っていた様子だ。
彼らは、想像することもしなかった。
キリはイーストブルーの出身で、両親はすでに他界。以前にその話を聞いている。
彼の関係者だとは微塵も思わない。
他人の空似もたまにはあるだろうという認識であって、判断材料もないため、疑うことすらしなかった。そしてキリもまた、受け止めきれていないその話を言いふらしたりはしない。
彼にとっての家族は、今は麦わらの一味だけ。
それ以外を欲する心も在りはしなかった。
三人が居る部屋とは別室。
そう離れても居ない、暗く寒い一室で、くれはは水色の小さなリュックを持ち上げた。
「生きていたのか。Dの意志は」
何かを思い出すような声が、誰も居ない空間へ広がっていく。

〝うるせぇ！　行こう！〟

ロープウェイは順調に上り、ドラムロックへ向かっていく。
乗っている村人たちは険しい顔で武器を持ち、何やら覚悟した顔で、山頂にそびえ立つドラム城を見ていた。否、見るというより睨むような目つきである。
その中には疲弊したドルトンも居て、息を切らしながらも自分の足で立っていた。
「ドルトンさん、もうすぐだ。到着するよ」
「ああ……」
村人の声を聞いて、思わず出かかった言葉を呑み込む。
城に着いたらみんなは隠れててくれ。
いくら危険だといっても、覚悟して同行してくれた彼らに言える言葉ではない。志は同じ、ワポルを許せないという想いも一緒だ。ならば一緒に行かなくてどうする。
守る。
みんなを逃がすことを諦めた代わりに、自分自身に強くそう誓う。
ドルトンの目に決意が浮かび、村人たちも同じ目をしていた。誰一人として今更逃げ出すような臆病者は居ない。居るのは国のこれからを憂う者だけだ。
ワポルの支配に打ち勝つのだと、決意の表れか、彼らはしばらく口を開かなかった。
ドラムロックに開けられた大穴へ入り込み、内部へ侵入する。
ロープウェイの停留所だ。
村人たちが一斉に下り始め、辛そうな顔をするドルトンには肩を貸し、突撃の準備は整う。
階段を上って、入り口を開けて、その先はドラム城の側面に出る。城の左側、正面入り口は見えない位置。警備が居ない限りはそう気付かれる場所ではないだろう。
慎重に歩いて階段を上り、入り口を開けられる位置に来て皆が足を止めた。

リーダーはドルトン。彼の指示に従って攻撃に出る。
振り返った彼らの視線に気付いたドルトンはすかさず頷いた。
ボタンを押して、入り口が押し上げられる。視界は一気に開けて雪が降る空が見えた。
全員が一斉に駆け出す。
外へ出て雪原を走り、途端に銃を構えて周囲を警戒する。
素人ながら互いを助け合う動きで、あらゆる方向に注意を向けていた。
しかし、誰も居ない。警備も居ない。
ワポルやムッシュールの姿はなく、彼らは訝しむ。少し後からドルトンが出てきたのだが感想は同じだった。これほど静かなのはどういう訳だろうと。
敵は城内に居るのだろうか。そう思った時だ。
城の裏側だろう方向から何かが走ってきた。
「誰か来るぞッ」
「人間じゃない！」
「お前、そこで止まれェ！　ここで一体何やってる！」
前に居た村人たちが全員銃を構えた。
その動作に、人が居たことに驚き、チョッパーは慌てて足を止める。
奇怪な外見。小さな体躯。人間ではなく動物でもない。
ワポルを見つけた時とは違った驚きが村人たちを襲っていた。
そして同じくチョッパーも怯えており、向けられた銃口と人間たちに恐怖する。
「おい……おい、やめろ！　やめるんだ！　すぐに銃を降ろせ！」
「ドルトンさん、どうして――」
「とにかく降ろせ！　彼は敵じゃない！」
嫌な予感がした。同時に思い出したこともある。慌てたドルトンが腕を振り、銃を構えた村人たちを止める。彼の声を受ければ従わない者は居なかった。
全員が銃を降ろす。
とりあえずの危機は去り、警戒しながらも村人たちは攻撃の意志を

消した。
チョッパーは、緊張感から呼吸を乱しつつ、彼らを見つめて動かない。
村人たちを押しのけてドルトンが一番前に立った。
彼は驚いた顔でチョッパーの姿を見つめている。だが、その反応は周囲と違っていた。
やはり見覚えがある。
かつて、この地でヒルルクという医者が死んだ時に現れた相手。涙を流しながら拳を握り、当時は護衛隊長だったドルトンは王を守るためぶつかった。
以来一度も出会うことはなかったが、今再びその姿を目にし、少なからず感情がある。
「君は……」
「居たぁ～！」
言いかけた瞬間、凄まじい勢いで走ってくるルフィがチョッパーの後方に現れた。
飛び跳ねるチョッパーは素早く振り返り、彼の存在にのみ集中する。
「まっ、また来た!?　しつけぇよお前！」
「お前が逃げるからだろ！」
「おれは、お前の仲間にはならねぇ！」
「いやだ！」
「ええっ!?」
「おれはお前を仲間にするって決めたんだ！」
「すごい勝手だ!?　そ、そんなの、おれは知らねぇよ！」
堪らずチョッパーも駆け出し、迷わず逃げ出す。
もはや村人たちのことなど欠片ほども頭に残っていない。彼から逃げる、そのことだけに集中して必死に足を動かして、自身の力を全て注ぎ込んだ。
村人たちは突然始まった追いかけっこにぽかんとしていた。
何が起こったのかも、何がしたいのかも理解できない、そんな顔で

ある。
「待てぇ～！　おれの仲間になれぇ～！」
「ギャアアア～ッ!?」
「お、おい」
「ん？　おぉ、おっさん。何してんだこんなとこで」
チョッパーが瞬く間に遠ざかり、思わずドルトンが手を伸ばした時、彼の前を通り過ぎようとしたルフィが急に止まった。勢いを殺すために大量の雪が跳ね飛ばされて宙を舞う。
完全に停止したルフィはドルトンに笑顔を見せる。
ドルトンは困惑した顔で、恐る恐るという様子で問いかけた。
「無事に着いていたんだな。仲間は無事か？」
「ああ。医者にも診てもらったんだ。さっきのトナカイだよ」
「トナカイ……そうか。彼はあの時の……」
「んで、おっさんたち何しに来たんだ？」
「あ、ああ。そうだった」
ハッとした顔でドルトンが気持ちを切り替え、彼に尋ねた。
「ここにワポルとムッシュールという男たちが来なかったか？」
「ん～？　あ、邪魔口とキノコか。あいつらならもう居ねぇぞ」
「居ないだと？　どういうことだ」
「おれがぶっ飛ばした」
その一言で村人たちが一斉にざわめき始めた。
目標の人物が居ない。ワポルとムッシュールはこの場に存在しない。しかもルフィがぶっ飛ばしたというのだから簡単には信じられなかった。
村人たちが口々に話す中、ドルトンは冷静になろうと努める。
必死に頭を働かせて考える。
彼が言っていることは本当かどうか。それだけでいい、それを知りたい。
見回したところ確かにワポルやムッシュールの存在は感じられず、現に彼ら二人は元気に走り回っていて、敵の脅威を心配する感情は皆無といっていい。

本当かもしれないと、徐々に信じ始める。
「本当なのか……？　もう、この島にワポルの脅威はないと……」
「ほんとだよ。どっか飛んでいっちまったからな」
特徴的な笑い声を発してルフィは自信満々に言う。
辺りが静まり返った。信じようとしなかった者たちも現状を理解し、声を呑み込む。
次の瞬間には全員が歓声を上げた。
どうやら彼の話を信じるつもりらしい。ようやく自由を得たのだと大声が響き渡っていた。
なぜ彼らが喜んでいるのかは正しく理解できていないものの、なんとなく楽しそうな雰囲気だと察してルフィは笑う。腰に手を当てて満足そうな顔だ。
ドルトンも彼の話を信じ、ルフィを見つめて、しかし笑みはなかった。
呆然とした顔で思考を働かせる。
どうやって勝ったのだとか、よく無事だったなだとか、言葉はいくらでもある。だがそんなことを言うよりも先に彼へ伝えなければならない言葉があって、涙が溢れそうだった。
その場に膝をつき、ドルトンはルフィへ向かって頭を下げる。
周囲の驚きや疑問の声を聞くこともなく、心からの感謝を告げた。
それはきっと、この場に居ない、先程去ってしまった彼へ対する想いも込められている。
「すまない……そしてありがとう。我々はこの恩を一生忘れない」
「ド、ドルトンさん……」
「ドラムはきっと変わる。いや、変えてみせるとも。我々の手で――」
雪にわずかな滴が落ちる。
その声は確かに村人たちの心を変え、強い決意を生み出した。
彼らもルフィへ頭を下げて口々に、大声で礼を言い始める。辺りはより一層の喧騒で包まれた。
「ありがとう麦わら！　恩に着る！」

「今日のことは忘れねぇ！」
「もしまたワポルが来たとしても、今回みたいなことにはならねぇさ！」
「そうだ、おれたちが守っていくんだ！　おれたちの国を！」
喜びを噛みしめる彼らの声を笑顔で受け、ルフィは全て聞き入れた。
楽しそうに、上機嫌な姿はまるで子供のようだ。
「しっしっし――あ。そうだ、チョッパーを仲間にしねぇと。じゃあなおっさん！」
「あ、おい……」
軽く言ってルフィは走り去ってしまった。やはりというかチョッパーを追っているようで、その理由を知らないドルトンは不思議そうにその背を見送るのみである。
とにかく危機は去ったのだ。
立ち上がった彼の表情も柔らかくなる。
そこへ、どこから来たのかくれはが現れた。
彼女は喜びで声を上げる村人たちへ言う。
「喜んでるところ悪いがね、このままじゃあんたたちは無駄足だよ。ワポルはもう居ない。その兄ムッシュールもね。どっちもあいつが吹っ飛ばしちまった」
「Ｄｒ．くれは。いつの間に……」
「せっかくだから仕事をやろうじゃないか。全員こっちへ来て手伝いな」
笑う魔女に唆され、彼らは首を傾げながら動き始める。
疑問はあったが抵抗はない。彼女の厄介さはよく知っていたからだ。
そこから少し離れた場所。
城の正面に回り込んだルフィは首を振って辺りを見回す。
ドルトンと少し話している間にチョッパーを見失ってしまった。
脚力そのものは互いにそう変わらないはずなのだが、それだけに一度離されてしまうと見つけるのが簡単ではない。

ルフィは険しい顔になって立ち止まった。
辺りを見回すのだが姿は見えない。
逃げられてしまったようだが諦める気にはなれず、それでも視線を走らせる。
彼は鼻息も荒く苛立った様子で呟いた。
「くそぉ～、どこ行ったんだ？　なんで仲間にならねぇんだよ」
「あ、居た居た」
「おぉ～いルフィ～」
「ん？　あっ！」
立ち止まって周囲を見回していると、城の正面にある扉をくぐってキリ、ウソップ、ナミの三人が現れる。三人とも防寒着を身に着けて、ナミもしっかりした足取りだ。
ルフィはパッと笑顔を浮かべる。
チョッパーのことも忘れていないが、仲間に会えたことが嬉しく、特にキリやウソップとはまだ会っていなかったらしい。突然現れた二人に驚いている顔だった。
「キリィ！　ウソップ！　お前らなんでこんなとこ居んだ？」
「後追い組でね。ルフィが寝てる間に来たんだ」
「大変だったらしいな。毒でやられたとか聞いたけど、ピンピンしてねぇか？」
「チョッパーに治してもらったからな」
「だからってそんなすぐ動けんのかよ。ナミはまだ完治じゃねぇんだぞ」
「私とルフィを一緒にしないでよ。こっちが普通なの」
キリやウソップは和やかに微笑み、心外だと言わんばかりのナミは少し拗ねた顔だ。
彼らが揃っているということは今すぐにでも船に戻れるという状況だろう。
なんとなく意志は察したが、ルフィは言われる前に彼らを止め、まだ行けないと言い出す。
「お前らちょっと待っててくれよ。まだチョッパーが逃げてんだ」

「まだなの？　やっぱり誘い方が悪いんじゃない？」
「逃げる相手を追っかけてる訳だからな。ほとんど狩りだぞ」
「非常食にされると思ってるんじゃないの？」
「んなことしねぇよ。そりゃちょっとは思ったけど」
「思ったのかよ!?　やめてやれ！」
「そりゃ逃げるのも当然よね……」
ウソップとナミが揃って溜息をつく一方、キリは苦笑するだけだった。
彼はルフィを見て肩をすくめながら質問する。
「事情は知らないけど、逃げてるんじゃ勧誘は難しいんじゃないかな。なんとかできる？」
「できるさ。お前らあれ見たか？」
「どれ？」
「ほら、あれだよ」
そう言ってルフィが城の天辺を指差す。三人が揃って見上げると、そこには風に吹かれて揺れるジョリーロジャー。桜吹雪が描かれた物だ。
旗を見ながらルフィは笑顔で語る。
「あれがチョッパーの旗なんだ。あいつは海賊がどういうもんか知ってる。命懸けで守ろうとしたんだしな。きっと行きてぇに決まってるさ」
「つってもよう、現実として逃げ続けてるわけだろ？　そりゃお前の願望じゃねぇのか？」
「んなことねぇ！　あいつだって海賊だ！」
「また始まったよ」
「こうなったら曲がらないからね」
「お気の毒に……」
自信満々に言うルフィを間近に見て、三人はそれぞれ違った反応を見せる。
ウソップは呆れて口を閉ざし、キリは苦笑して肩をすくめ、ナミはわざとらしく溜息をついて手を合わせる。なんにせよ彼らがチョッ

パーに対して同情しているのは確かだった。
そんな話をしている最中だった。
キリが気付き、控えめにそちらを指差して全員に教える。
姿を隠したはずのチョッパーが立っていた。
今度は隠れることもなく仁王立ちし、四人を視界に納めて冷静な面持ち。
ルフィは笑顔で彼を見るものの、周囲に居る他の三人は緊迫した空気を感じて、笑顔で迎えるという訳にもいかない。一緒に連れて行ってくれと言いそうな雰囲気ではないのだ。
むしろ断りに来たかのような。
そんな空気だと感じる。
上機嫌に一歩を踏み出したルフィを見やり、チョッパーは静かに口を開く。
その様は怖がって逃げていただけの先程とは別人のようだった。
「チョッパー！　おれの仲間になれよ！」
「お前、もうちょっと他の誘い方知らねぇのかよ」
「無理だよ……おれは一緒には行けない」
「無理じゃねぇよ！　楽しいのに！」
「いや意味わかんねぇから」
あまりにも一直線過ぎる勧誘が続き、時折ウソップが口を挟む。
しかしルフィの態度は変わらず、チョッパーも表情を変えようとしない。
そう思った時だった。
チョッパーが表情を変え、ぐっと歯を食いしばった後、戸惑いながらも声を大きくする。
「だって……だっておれは、トナカイだッ！　角だって、蹄だってあるし……青っ鼻だし！　おれは人間の仲間でもないんだぞ！　バケモノなんだ！　おれなんかお前らの仲間にはなれねぇ！　だから……お礼を言いに来たんだ……！」
思うままを叫び、俯いたチョッパーは声を落ち着かせる。だがどこか寂しげな様相だった。

「おれはお前たちに感謝してるんだ。誘ってくれて、ありがとう……」

顔を上げて、ルフィを見た。

三人は彼の顔を見て表情を変える。今にも泣き出しそうな、無理やり取り繕った笑顔があって、それが彼の本音だとはとても思えない。だが指摘する者は一人も居なくて。

ルフィはじっとチョッパーを見つめていた。

「おれはここに残るけど、いつかまたさ……気が向いたらここへ――」

「うるせぇ!! 行こう!!」

それは、突然の言葉だった。

拳を振り上げたルフィは大声で叫び、迷う彼の心を正すかのように、辺りに響き渡る。

うるせぇ。そんな勧誘はかつて聞いたことがない。

自分たちの時でさえもう少しはマシだったと三人は苦笑する。それでも彼を責める気になれないのはおそらく、チョッパーの反応を見たからだろう。

見る見るうちに目に涙が溜まっていく。

きっと彼は苦悩していた。隠していた本心があった。

一緒に行きたいという気持ちはあっても、彼らの邪魔になるのではないか、迷惑になってしまうのではないか、そんな迷いがあったのだろう。本心を隠し通してでも彼らに嫌われたくなかった。だがルフィの言葉が彼の迷いを一瞬にして吹き飛ばしたのだ。

涙が溢れる。

堰を切って出てきた感情が、もう自分でも止めることができない。

チョッパーは震える腕を空に掲げる。

ルフィと同じように突き上げて、感情のままに叫んだ。

「うっ、おおっ……おおおおおおっ!!」

明確な言葉ではない。関わりがない者が見ればただ叫んでいるだけなのかもしれない。

けれどそこに居る彼らには伝わっていた。

それは言葉ではなかったが明確な意志表示で、新たな仲間が加わった瞬間であった。

冬に咲く、奇跡の桜

チョッパーは走っていた。くれはを探していたためだ。

どこへ行ったのだろうと城内を駆け回り、しばらくいくつかの部屋を回って、彼女を探した。流石に知り尽くした場所であるためそれを続けていれば発見することはできる。

手術室とも呼ぶべき一室で彼女を見つけた。

入り口に立ったチョッパーは息を切らしながら彼女に言う。

「ドクトリーヌ。話があるんだ」

「ああ……そうかい」

振り返ったくれははなぜか冷ややかな顔をしていた。しかしチョッパーは海賊になるのだという興奮で気付かず、自分の話を始める。

弾む声は普段よりもひどく楽しそうだ。

「おれ、海賊になるんだ」

「何だって？」

「海へ出るんだよ。船医としてあいつらの仲間になって、世界を旅するんだ」

「バカを言うんじゃないよっ！」

突然くれはが叫び出した。

普段滅多に怒鳴らない彼女の大声を聞き、チョッパーは肩をびくつかせる。

これまで長く一緒に居たが怒鳴られた経験など数えるほどしかない。くれははそう簡単に怒る性格ではなかったはずだ。それが突然、理由もわからず声を荒らげている。

チョッパーが困惑するのも無理はない。

怒鳴られるにはいつも理由があった。気に入らないだとか、機嫌が悪いとか、そんな程度の理由で怒られたことは一度としてなく、チョッパーも反省すべき点に気付いていた。だが今日に限ってはそれがない。なぜ怒っているのかをすぐに理解することができなかった。

まさか、海賊になることを否定しているのか。
そう言われるとは思っておらず、表情は一変する。
てっきり応援してもらえると思っていたチョッパーは激しく動揺していた。
「海賊になるだって？　連中がどんな存在か知ってるのかい」
「し、知ってるよ。あいつらワポルとは違うんだ。いい奴らだし、おれを仲間だって――」
「何も理解しちゃいないさ。海賊ってのは人間のクズどもだ。ルールを守れない連中が真っ当に生きれずになるもんだよ。他人も傷つけるし殺しもする」
「あいつらはそんなことしない！」
「だが海賊がそんな連中なのも事実だ！　何も知らないお前が軽々しく語るんじゃない！」
くれはの声が大きく、さらに強くなる。
チョッパーの動揺は拭いきれなかったが、彼女に反抗して意志は強固になっていったようだ。
「お前に医術の全てを叩き込んだのはこのあたしだよ。恩を仇で返す気かいっ」
「そ、そんなつもりじゃ……」
「だったらここに居ればいい。これだけ立派な城に住めて何が不満だ。これだけの規模なら住みたいと思ってる奴がごまんと居ようが住むことなんざできないんだからね」
「でも、それじゃだめなんだ。おれは海賊になりたいから」
「海賊なんて碌なもんじゃない。あっという間に屍になるのがオチさね」
「それでもいいんだ！」
耐え切れなくなってチョッパーが大声を出した。すると反射的にくれはも叫ぶ。
「生意気言うんじゃないよ！　たかだかトナカイが海へ出るなんて聞いたこともないね！」
「そうだよ、トナカイだ！　でも男だ！」

「何も知らないお前が海へ出て一体何ができるっていうんだい！　仲間と呼ばれてのぼせ上っただけのガキが生き残れるほど、この海は甘くないんだよ！」
「何も知らなくたっていい！　あいつらと一緒にこれから知るんだ！」
「その前にあっさりおっ死んじまうよ！」
その時、くれはがズボンの腰の裏に挟んでいた武器を取り出して、右手で思い切り投げつける。
チョッパーの真横、扉へ素早く突き刺さった。
飛んできた物体は包丁だったようだ。刺さった後でそちらを確認し、見事に深々と突き刺さっている様を見たチョッパーは恐れ、思わず悲鳴を発する。
くれはは服の下からも包丁を取り出して指に挟む。
一本や二本ではなく、手慣れた様子で持たれたまま、彼女はさらに厳しい声を飛ばした。
「海賊になってお前に何ができる！」
「仲間の命を救うことができる！　おれが万能薬になるんだ！　みんなはおれが助けるんだ！」
「口だけで人を救えるほど医者は簡単じゃない！　お前もあのヤブ医者のように幻想に生きるつもりかい！」
そう言われてチョッパーはハッとした。
「違う……幻想なんかじゃない。ドクターの研究は完成してたんだ！」
チョッパーの足下へ新たな包丁が刺さる。
無意識に体がびくりと震えたが、彼は歯を食いしばってその場を動かなかった。
一端に男を気取ったその姿が気に入らなかったのか。
くれはは激情を表して、指に挟んで複数の包丁を持っていた。
「とにかくあたしゃ許さないよ！　そこまで言うならあたしを踏み越えて行きなァ！」
「ドクトリーヌ……なんで――」

「お前みたいな泣き虫が男だって？　笑わせんじゃないよ！」
勢いよく包丁が投げられた。
今度は当たる。飛んでくる軌跡を見たチョッパーは一瞬の内に確信した。
考えようともせず咄嗟に体が動いて、悲鳴を上げながら床を転がる。そんな彼を見ても一切の容赦はせず、くれはは次々と包丁を投げ始めていた。
これは完全に殺す気だ。
心の底から怯えたチョッパーは悲鳴を上げながら走り出す。
「待ちなチョッパー！　勝手は許さないよ！」
「ギャアアアアア～ッ!?」
チョッパーは全力で城内を駆け、必死にくれはから逃げようとした。しかし彼女も足が速く、年老いているとは思えないほどの健脚と体力で追い縋る。
彼らの姿は山頂にやってきた多くの村人が目撃した。
ちょうど大砲を動かしていたためか、彼らの間を縫うようにしてチョッパーが逃げる。
飛んでくる包丁には大迷惑といったところで、その中には怒りもせず、何かを思案するようなドルトンの姿もある。怪我を押してでも手伝っている最中だった。
一階に降り、エントランスを抜け、正面の扉から外へ出る。
だが真っ直ぐには走らず一度脇へ逸れ、彼は町へ降りる際に使っているソリを持ち出した。
獣型になって走り、ソリを引く。
もう迷わない。今度こそ仲間たちの下へ向かっていた。
背後には追い付いてきたくれはも感じ取っており、やはり怒声が聞こえている。
後ろは振り向かずに前だけを見ながら、チョッパーは心を痛めていた。
（どうしてわかってくれないんだドクトリーヌ……ドクターの言葉は嘘なんかじゃない。あの日ドクターの信念は形になったんだ。こ

の国を救うために！）
雪を跳ね飛ばしながらソリが雪面を走る。
自身の体でソリを引くチョッパーは速度を緩めず城の正面へ到達した。
それからそう遅れず、くれはも中庭へ続く大きな門をくぐる。
外では四人が待っていた。
ルフィやウソップは時間を潰すために雪遊びをしていて、キリは雪で濡れた足の力が抜けたのか座り込んでおり、その傍にナミが立っている。
遊んでいたせいで気付くのが遅れた。
最初にチョッパーに気付いたのはナミである。
「よぉ～しできたぞ！　空から降ってきた男、雪だるさんだ！」
「ふっふっふ、低次元な雪遊びだな、お前のは。見よ！　おれ様の芸術、スノークイーン！」
「おおっ！　すんげぇ～！」
「ねぇ、あれチョッパーじゃない？　なんか追われてるみたいだけど……」
違和感を持ちながら呟かれたナミの声により、遊んでいた二人がそちらを見る。
確かに城からチョッパーが来ていた。しかしその後ろから来るくれはが怖い顔をして、しかも包丁を投げ始める。ぎょっとしてしまうのも無理はない。
向かってくる最中に速度が緩められることもなく、チョッパーは真っ直ぐ近付いてきた。
「みんなソリに乗って！　山を下りるぞォ！」
「何ぃぃぃっ!?」
驚愕した三人が叫んだ。
速いスピードでチョッパーが近付いてくる上、止まる気配が感じられない。
飛び乗るしかないのかと考え、咄嗟に三人は急ぎ始めた。
「なんかよくわかんないけど言う通りに！　ルフィ！　私怪我人だ

から助けて！」
「おし！　あっはっは、逃げろ～！」
「おい待て待て、キリはどこ行った!?」
「あ、ここだよ」
「お前何寝てんだよ！　そんな場合かっ！」
「いやー力が抜けて転んじゃって。運んでくれない？」
「バカヤロォ～!?」
まず先にルフィがナミを抱えてソリに飛び乗る。
ルフィは振り返って即座に腕を伸ばそうとしたものの、ウソップがキリの姿が見えないことに気付くと、いつの間にか倒れていた彼は雪に埋もれていた。焦るウソップが彼の首根っこを掴み、伸ばされたルフィの腕がウソップの左腕を掴むと、チョッパーのソリは宙へ投げ出される。
ロープウェイに使われるロープの上を走っていたようだ。
細いロープの上を器用にチョッパーが駆け下りる。
ソリは辛うじてバランスを取り、決して安全ではなかったが、落ちることもなく進む。ただし乗り遅れたウソップとキリの体は完全に空中にあって悲鳴が絶えない。
ウソップの悲鳴が山に木霊する中、反比例するようにルフィの笑い声が響いた。
その姿は空を飛んでいるかのようで。
空を飛ぶという魔女の噂はここから生まれたのだろう。
月夜に浮かぶソリは幻想的な雰囲気を放っていた。
慌ただしかったが彼らはくれはから逃げることに成功する。
くれはは、遠ざかっていくソリを見ながら立ち止まる。
複雑な表情だ。喜んではいないが悲しんでもいない。憎んでもいないが、見送るでもない。素直に表現できない感情をそのまま表すかのように、彼女は口を閉ざして見送る。
もう危害を加えようとはしなかった。
ロープを切ることもなければ包丁を投げることもしない。もうその必要がない。

しばらくしてから、溜息をつくと同時にやれやれと首を振った。
「あんな別れ方でよかったので？」
痛む体を庇いながらドルトンが歩いてくる。
視線はくれはの背中へ。前へ回り込んで顔を見ようなどとはしない。
それが今できる精一杯の気遣いだ。
「なぁに。預かってたペットが一匹もらわれていくだけさね」
腕組みをして笑みを浮かべ、くれはは優しい眼差しで小さくなったソリを見つめる。
「湿っぽいのはキライでね」
その時、密かに、くれはの目から涙がこぼれた。
彼女は何も言わずにサングラスをかけ、背を向けたまま叫ぶ。大砲を運んでいた村人たちが外へ出てきたことには気付いている。あらかじめ動かしていたため、あとは並べるだけだ。
「準備を急ぎなァ！　ぐずぐずしてると出航しちまうよ！」
「は、はいぃ！」
激励に対して返ってきたのはわずかに怯えた声。
くれはは気を良くしたように不敵に笑う。
何気なく空を見上げた。
すでに月が浮かぶ時間帯。今日は満月だ。
一時はどうなることかと思ったが今も雪が降っている。それも、おあつらえ向きというべきか、穏やかな様子でちらほらと少しずつ。
吹雪いていない今は絶好のチャンスだった。
村人たちが城の前で大砲を並べている。
今頃、チョッパーは彼らの船まで辿り着いただろうか。
船出を祝うにはちょうどいい。何から何まで出来過ぎているほどに。
ある男の言葉を思い出す。
（聞け、くれは。この塵は――）
それはくだらない、腕もない、ある医者の人生。
生き様、と言ってもよかった。

（これがおれの３０年かけて出した答えさ）
「これでいいんだろう？　あんたが居たとしてもこのタイミングだったさ」
小さく呟いた後でわずかに背後を振り返る。
すでに準備は終わったはずだ。ならばやることは一つだけ。
くれはの鋭い声が辺りに響き渡る。
「準備はいいかい若僧ども！」
「へいっ！」
「撃ちなァ！」
くれはの号令に従って、大砲は一斉に轟音を鳴らした。内部に装填された物質が全て空へ打ち上げられ、攻撃のためではなく、ある現象を引き起こすために空中で炸裂する。
行動の意図が読み取れず、ドルトンは頭上を見上げながらくれはへ尋ねた。
彼女はすでに笑みを浮かべていた。
「Ｄｒ．くれは、これは一体何を……」
「黙って見てな」
砲撃音からしばらく。何かが炸裂する小さな音が響く。
島中に響いたその音は多くの者が気付き。
メリー号の前へ到着していた面々も、振り返ってドラムロックを眺めていた。
ソリから降りたチョッパーがドラムロックがある方向へ少し歩き、ソリに乗っていた四人はそんな彼を気にしつつ、何が起きたのだろうと見上げる。
船上にはサンジ、ビビ、イガラム、カルー。目覚めたゾロとシルクも居る。
皆が不思議そうに空を見ていた。
それは、一瞬にして起こる変化ではなく、徐々に景色を変えていく。
あり得ないはずの光景が生まれようとしていた。
「これがあんたの信念かい。なぁ、ヤブ医者」
（いいか……？　この赤い塵はただの塵じゃねぇ。コイツは大気中

で白い雪に付着して、そりゃあもう鮮やかな――）
「オオオオオッ！　オオオオオォ――！」
チョッパーが叫んでいた。
その目からは大粒の涙がボロボロとこぼれ、もはや押し込めることすらできなくなっている。
彼にはそれが何かわかった。
大好きだったヤブ医者が生涯をかけて開発した成果。
かつて言っていたのだ。山一杯の桜を見た時、治らないはずの自分の病が治ったと。それ以来、全ての病気にドクロと桜を掲げたのだと。
空がピンク色に染まっていた。
わずかに光るように見えるのは満月の力を借りているのだろうか。
大砲によって空へ放たれた赤い塵が、小さな雪に触れた時。
「ウオオオオオオオオオッ!!」
（ピンク色の雪を降らせるのさ!!!）
ドラムロックに、サクラが咲いていた。
ひらひらと舞い落ちる雪はピンク色に染まってまるで桜の花弁のよう。
咲くはずのない花が島中に降り注ぎ、その姿は島中の人間が目撃していて、あまりの美しさに目を見張って息を呑んだ。
この時、ドラム島の歴史は確かに変わる。
人々を困らせてばかりだったはずの一人の医者が、あり得ないはずの光景を生んだのだ。
ひょっとしたら彼がやったのだと知らない者は居るかもしれない。それでいいと思う。少なくとも彼が生きた証を心に刻み込み、生涯忘れないだろう者は存在している。
くれはが、チョッパーが、ドルトンがその生き証人だ。
歴史に名を残せなかったちっぽけな医者の、精一杯の医学をその目に焼き付けた。
大した医術も持っていなかった男だが、確かにその景色は人々の心を癒したのである。

くれはは不意にサングラスを上げる。
涙はない。今は晴れ晴れとした表情だった。
美しく咲いたサクラを見上げて、彼女は小さく告げる。
「さぁ……行っといで。バカ息子」

＊

出航したメリー号は海を行く。
後方にはドラム島に咲いた美しいサクラ。船上では月夜に浮かび上がるサクラを肴に、世にも珍しい冬島での花見と洒落込んでいた。
全員が甲板に出て、サンジが作った大量の料理が並べられている。
宴が始まればいつも通り。それぞれ好きなように騒いで盛り上がっていた。
ルフィとウソップは料理に舌鼓を打ちながら大笑いし、酒を飲むゾロに脱力したキリがもたれかかって、料理を運んできたサンジは笑顔でビビに話しかける。その傍ではイガラムがサンジに文句を言っており、気にせずカルーが料理にがっついていた。
チョッパーは、壁にもたれて彼らの姿を見ていた。
その隣にはシルクが膝を抱えて並んでいる。
どこかぼんやりした顔だった。
寂しがっているのか、考え事をしているのかもしれない。或いは感動を噛みしめているのかも。
彼の横顔を見たシルクは声をかけるか否かを考える。
チョッパーとて考え事くらいはするだろう。その邪魔をしたくないと思ったようだ。
しばらく黙っているところへナミが歩み寄ってくる。彼女は笑みを湛えたまま、チョッパーの隣へ腰を下ろすとすぐ、水色のリュックを手渡した。
受け取った彼はずいぶん驚いた顔だった。
「え……？　これ、おれのリュック……」
「ソリにあったわ。あんたのでしょ？」

「な、なんで」
「自分で用意したんじゃないの？　それじゃあ……そういうことね」
ナミは微笑む。
何を言わんとしているかは伝わって、チョッパーは両手で持っていたリュックを見下ろし、ぎゅっと強く胸に抱えた。
「あんたのことはお見通しってわけね」
「うん……」
きっと敢えて反対して、追い出すようにして送り出したのだろう。たった今それが伝わった。
俯いたチョッパーはしばし口を閉ざしてしまう。
そんな彼を見やり、優しく微笑んだシルクがジュースの入ったグラスを差し出した。
チョッパーの顔が上がり、彼女と目が合う。
「はい」
「え？　おれに？」
「うん。せっかくの宴なんだから、思いっきり楽しまないと。みんなみたいに」
シルクの笑顔にじっと見入り、チョッパーの手が恐る恐るグラスを受け取った。
膝の上にリュックを置いて両手で持つ。
試しに一口飲んでみる。甘い。そのオレンジジュースはナミの畑から取ったみかんを材料に作られており、サンジ自慢の一品であった。
思いのほか気に入ったらしく、再びシルクを見た彼は素直に礼を言う。
「ありがとう……これ、うまいな」
「でしょ？　ナミのみかんを、サンジが調理したんだよ」
「サンジっていうのは」
「金髪でぐるぐる眉毛の人。ちょっと女好きだけど、凄く優しくて仲間想いなの。ちょっとゾロとは喧嘩ばかりしてるんだけどね。あ

れもきっと仲が良い証拠なんだよ」
「ふぅん」
騒いでいる甲板の面々を俯瞰的に眺めてみる。
それぞれが思い思いに過ごしていて統一感がない。仲間とはこういうものなのだろうかと素朴な疑問を持った。彼はこれまで仲間を持ったことがないため、経験を伴う知識を持たない。
ただ、なんとなく楽しそうだということだけ伝わってきた。
何かの拍子に彼へ目をやったルフィが笑顔を輝かせる。
しばらくシルクと話していたようだったから声をかけなかったが、今ならいいだろう。
飛び跳ねて楽しむルフィとウソップは揃ってチョッパーに駆け寄った。
「おぉいチョッパー！　楽しんでるかぁ～！」
「楽しんでるかチョッパ～！　海賊と言えば宴だぞ！　盛り上がってるかぁ～！」
「う、うん」
「ふぅ～だめだな。それじゃ全然盛り上がってないぞ。そこでだ。やれば思わずテンションが上がってしまう宴の奥義を教えてやろう。準備だルフィ！」
「おう！」
近寄ってきた二人は声も大きく、上機嫌で、後ろを向いて何かを準備する。
くるりと振り返った時、壁に背を預けて座る三人は二人の変な顔を見た。短く折った割り箸を鼻の穴と口に突っ込み、見るからに妙な顔を作っていたのだ。
ナミは呆れ、シルクは苦笑し、チョッパーは少し驚いた顔。
自信満々の二人はその顔のままピースなど決める。
「こうだぁ！　これが宴の奥義なのだ！」
「あっひゃっひゃっひゃ！　おいチョッパー、お前も鼻割り箸やってみろ！」
「嘘教えるんじゃないわよ。奥義っていうより悪ふざけでしょ」

「あはは。でも面白いね」
「シルクは甘やかし過ぎ。調子に乗せない方がいいわよ」
頭を抱えてナミが溜息をつく。それでも上機嫌な二人の笑い声は変わらなかった。
最後には根負けした様子で、苦笑したナミはチョッパーに目を向ける。
「まぁ、こいつらはいつもこうだけど、あんたも早く慣れなきゃ――ってすんな！」
少し間を置いて彼の顔を見ると、いつの間にか鼻と口に割り箸を差し込んでいて、大口を開けて間抜けな顔をしている。それでいて目つきは真剣なのだから奇妙だ。
ルフィとウソップは歓迎するように手を叩いて大笑いし、シルクも笑顔で肩を揺らす。
そんな奴らばかりなのだから目くじらを立てていても仕方ない。
結局はナミも朗らかに笑った。
チョッパーは甲板の喧騒を一つ一つ見回す。
みんなが好き勝手に騒いでいて、統一感はなくとも、幸せな空気はある。
水に弱いというキリは雪にやられて力が入らないらしく、先程からだらけた姿勢だ。
わざとらしくゾロにもたれかかり、体重を預けて、彼が煩わしそうにしていることに気付きながら色々と頼みごとをしている。むしろ意図的に迷惑をかけようとするかのようだ。
「ゾロ、ちょっとそっちの皿取ってよ」
「自分で取れよ。それくらいできるだろうが」
「ほら、力抜けちゃってるから」
「知るか。あともたれんな。邪魔だ」
「でももたれないと倒れちゃうよ」
「倒れてろ」
「ひどいなぁ。ゾロは結構鬼畜だよね」
「うるせぇ。つーかてめぇにだけは言われたくねぇんだよ」

「なんで？」
「あ～めんどくせぇ……」
キリはずいぶんめんどくさい人間らしい。
ゾロは反対に、顔は怖そうだが、それだけめんどくさがりながら話し相手になっているあたり、外見よりずっと面倒見はいいようだ。
視線を動かして、今度はサンジとビビを見る。
サンジが鼻の下を伸ばしながら話しかけるのだが、怒った顔のイガラムが逐一邪魔している。
仲が良いのか、悪いのか。
ビビは少し困った顔をしているものの止めようとはせず、本気でいがみ合っているのではないのだとわかる。そしてやはり、カルーは我関せずという顔だった。
「いやぁ～ビビちゃん、きれいな桜だねぇ。でもおれの目には君の方がよっぽど――」
「サンジさん！　あなたには前々から言いたかったのですがビビ様にそんな軟派な言葉をかけないで頂きたい！　これは護衛隊長としての責任がありますので！」
「邪魔すんなおっさん！　おれはビビちゃんと話してんだ！」
「いいえ、邪魔させて頂きます！　ビビ様は王女だということを忘れていませんか！」
「海賊にゃ関係のねぇ話だぜ！　おれは恋に生きるのさぁ～！」
「ええい、そのようなことはさせません！　ビビ様は私がお守り致します！」
「ちょ、ちょっと二人とも……まったくもう」
「クエ～」
そこかしこで騒がしく、忙しない時間が続いていた。
まだ飛び込もうとできなかったのも事実であるが、チョッパーはその空気を存外楽しんでいる。
ナミとシルクの間に挟まれ、すぐ傍ではルフィとウソップが騒いで、ナミの怒声も飛んで。彼自身は鼻に割り箸を突っ込んで変な顔をしている。

彼が呟いた時、ナミとシルクはその声をしっかり耳にしていた。
「おれ……おれさ」
多少の戸惑いはあったかもしれないが、勇気を持って。
純真無垢な笑顔になってチョッパーは言う。
「おれ、こんなに楽しいの初めてだ」
子供っぽく、ひどく嬉しそうに頬が緩められた。
その声を聞いて、その顔を見たナミとシルクは微笑ましく想い、嬉しく思う。
彼もきっとこの一味に馴染むだろう。自然にそう思えば安堵できた。
大笑いしながら転げ回っていたルフィがすっくと立ち上がる。
一番近くにあったジョッキを持ち、突然大声を出して皆の注目を集めたのである。
「よぉしお前ら！　もう一回乾杯するぞ！　冬の桜と新しい仲間に！」
「また？　乾杯ならさっきもやったじゃない」
「いいじゃねぇか。そっちの方が楽しいだろ」
「おれは賛成だぞルフィ。さぁ～お前ら酒でもジュースでも肉でもいいから持って集まれ！　我らのキャプテン・ルフィ様が音頭を取ってくださるぞ！」
同意したウソップもジョッキを持ち、調子よく手を叩きながら皆を呼び集める。
仕方ないなと笑う者、面倒だと言いながら立ち上がる者、上機嫌にやってくる者も居た。しかしやはり副船長だけは倒れていて、それだけならともかく自分で動く気はなさそうだった。
「せんちょ～。ゾロに見捨てられたよ。肩貸してー」
「なんだ、キリはしょうがねぇ奴だな」
「いやお前が言うなよ」
「どっちもどっちよ。いいから早くしなさい」
気分を害した様子もなく笑ったルフィがキリに肩を貸してやり、やっと彼も立ち上がる。

これで大半が揃った。
クルーの輪に加わっていないのは座ったままのチョッパーだけである。
ルフィが振り返って彼を呼んだ。
「何やってんだよチョッパー。お前も早く来い」
「お、おれも？」
「当たり前だろ。お前だってもう仲間なんだから」
呼ばれたチョッパーはおずおずと立ち上がり、戸惑いを感じさせるものの、歩み寄ったシルクが手を引いて輪の中に入る。そうすると彼も躊躇わずに参加できた。
これで全員が揃い、手にはグラスやジョッキを持って準備が整う。
ルフィは心底嬉しそうな顔で笑った。
「それじゃあ冬の桜と新しい仲間に！　かんぱ～い！」
「かんぱ～いっ!!」
身長の低いチョッパーも含め、全員がジョッキをぶつけた。
中身が飛び散ろうが服が濡れようが今は気にしない。宴では些細な問題などどうでもよかった。とにかく食って飲んで騒ぐのが現在の仕事だ。
輪に加わったチョッパーは改めて海賊を知った気がする。
これが本物の海賊なのだと肌で感じ取った。
具体的な何かを知った訳ではない。しかし確かに感じ取った何かがある。
楽しいとは、こういうことを言うのだ。
まるでヒルルクと共に暮らしていた頃のように、心から笑い、無邪気に騒いで、時には怒ったり泣いたりもする。思うがままに、力一杯自由に生きるのが海賊なのだろう。
チョッパーは心から笑い、精一杯今を自由に楽しんだ。

珍獣島のチョッパー王国編

突然の苦難

ドラム島を出てから数時間。夜が過ぎ、新しい朝がやってきた。
いつもの如く、宴は朝方になるまで行われたものの、タフなクルーはもはや習慣となったその行動にも疲労を見せず、すでに起き出して活動している。
それぞれ思い思いに過ごす中、彼女もすでに目覚めていた。
女部屋のベッドにナミが座っている。
傍らには椅子の上に立つチョッパーが居て、どうやら彼女の熱を測っていたようだ。
受け取った体温計を見て、小さく頷いたチョッパーは笑顔を見せる。
「うん、よし。熱は下がったな。もう大丈夫だ」
「ほんと？　あ～やっと普段通りの日常ね」
「でも無理はしちゃだめだぞ。油断したらまたぶり返すかもしれないし」
「わかってるわ。ありがとねチョッパー」
手を組んで前にぐっと伸ばして、ナミは体を伸ばしながら笑みを浮かべる。
ようやくベッドから離れられる生活が送れるため、嬉しさは一入だった。
苦笑したチョッパーは自分の医療道具を片付け始める。使用した物をテキパキと自身のリュックに詰めていき、現在は保管する場所もなく、自分で管理しているようだ。
リュックを背負って、椅子の上で立ち上がる。
にこにこしている顔は初めて会った時より愛らしかった。
航海に出たというだけでとても喜んでいる節がある。
本物の海賊になったのだという自覚が、彼の笑顔を以前より増やしていた。

微笑むナミは心配しながらも上機嫌な彼の言葉を受け止める。
「ルフィもそうだけど、ナミも体が強いんだな。熱が下がるまでもっと時間かかるかと思った」
「そう？　一緒にされたくはないけどね」
「でも無理は禁物だ。数日は大人しくしてくれよ」
「了解。私は言うこと聞けるから心配しないで」
ナミがそう言って肩を揺らすと、チョッパーは溜息をついてやれやれと首を振る。
「ルフィは何度言ってもじっとしてないから……」
「じっとできない人種なのよ、あれは。苦労するだろうけど頑張って」
「うん……そうだな。今はおれがこの船の船医だもんな。よし、頑張るっ」
チョッパーは小さな手をぎゅっと握り締めた。
真面目な性格だ。仲間の一部には少しでも見習って欲しいと思う程度には、一つ一つの物事に対して一生懸命に向き合っている。これもきっと、初めて仲間を得た影響だろう。
これまでは辛い出来事もあったのかもしれない。
だが今の彼は目を輝かせ、未来に希望を持っている表情だった。
「それじゃおれ甲板に行ってるよ。ゾロとシルクもじっとしてくれないんだ」
「うちは大体そんな感じだからね。これから大変よ」
「そうかー……でもいいんだ。おれ楽しいからっ」
「ふふ。そっか」
弾む声でそう言って、チョッパーは部屋を出て行く。
扉が閉まる頃にはナミも起き出してクローゼットへ向かった。
パジャマを脱いで服を着替える。一応自分を気遣って普段より少し厚手の服を選び、着替えが終わると気分も変わって、彼女も甲板へ向かった。
女部屋を出た瞬間、全身に風を感じた。
数日振りにメリー号の上で太陽の光を浴びて、気分は最高の一言

だった。
ナミは俯瞰的に甲板を見渡した。そこにはいつもと変わらない日常がある。
それぞれが自由気ままに過ごして、休む者も居れば遊ぶ者も居る。
メインマストの近くではルフィとシルクが並んで座り、チョッパーと話していて、船の前部では他の男たち四人にカルーを加え、輪になってトランプで遊んでいた。
賑やかさは感じるもののうるさくはない。
皆が楽しそうにしていた。
キッチンへの扉が開いてビビが出てくる。後ろにはイガラムがついてきた。
二人ともお盆を持っていて、ジュースが入ったグラスが並んでいる。
まず先にビビがナミを見つけ、柔らかい笑みを浮かべた。
「ナミさん。もう体調はいいの？」
「うん。チョッパーにお墨付きもらってね」
「おっ、ナミが復活か」
「んナァ～ミすわぁ～ん！」
「ナミィ～！　肉食えるようになったか？」
「あのね。私はそもそもあんたほど肉を大事にしてるわけじゃないの」
そこかしこから聞こえてくる歓迎の声に苦笑しつつ、ナミは悪くない気分だった。
やはりこうでなければならない。
仲間に迷惑をかけるのも、自分だけベッドに隔離されるのももう飽きた。やはり彼らの傍で気ままに過ごしているのが居心地がいい。しばらく離れていた分余計にそう思う。
彼女の隣でビビは嬉しそうに笑い。
自分が用意したジュースを皆に見せて声をかけた。
「みんな、少し休憩にしない？　ジュースを用意したの」
「ええ～っ！　ビビちゃんが作ってくれたのぉ～！」

「お前のためじゃないけどな」
「サンジ、顔がひどいことになってるよ」
「元からだろ」
「黙れ野郎どもッ！　てめぇらの声は必要としてねぇんだよ！　ビビちゅわ～ん！　もちろんいただきまぁ～す！」
「サンジさんには、私が」
「げっ、おっさん!?」
船首の傍に集まってトランプをしていたサンジ、ウソップ、キリ、ゾロ、そしてカルーの下へはイガラムが赴いて、何かを警告するように怖い顔で丁寧に手渡していく。
苦笑したビビはその間にナミと、それからルフィたちの下へ向かう。
ルフィとシルク、期待しているチョッパーにも手渡し、全員の手に行き渡った。
別段乾杯する訳でもなく、礼を言いながら口に含む。
「うんめぇ～なぁ～これ。ありがとなビビ」
「ううん。これくらいしかできることないから」
「そんなことないよ。ビビがみんなを気にかけてくれるから助かってるもん」
礼を言ったルフィに笑みを見せるビビへ、グラスを傾けるシルクが言う。
目立つか否かではない。自由に動く人間が多いだけに、彼女が仲間たちを気遣ってくれることはシルクにとっても有難かった。素直に告げるとビビは恥ずかしそうにする。
「そんなことないわ……でも、そうだとしたら嬉しいけど」
「大丈夫だよ。ビビも私たちの仲間だから」
シルクの笑顔を見るとビビの表情も朗らかになる。
認めてもらえる嬉しさがあった。彼女も敢えて否定するようなことはしない。
二人がそうしている間にチョッパーとルフィは欄干の傍に移動する。帆に風を受けて進む自身の船を眺めていたようだ。

初めての帆船。初めての航海。
興奮したチョッパーの目は輝いていた。
「船ってすげぇなぁ～。どうして沈まないんだろう」
「そりゃ船だからな」
「船は沈まねぇのか？」
「当たり前だろ。だって沈んじまったら海賊できねえじゃねぇか」
「そっか～」
船体の側面や海を眺めながら呑気に話している。
あいにく口を挟む者が傍に居ないため、気楽に考えたルフィの適当とも言える説明が訂正されることはなかったが、チョッパーはひどく楽しそうにしていた。
ドラム島を出たのは初めてだ。
目に付く全てが新鮮に見え、雪が降らず晴れた青空も心地がいい。
海を眺めた後で空に目を向ける。
雲一つない晴天。美しいブルーに心を奪われる。
チョッパーの表情は好奇心に満ち溢れた。
もっと高い場所から眺めてみたい。
そう思ったチョッパーの視界にはメインマストが映り、試しに上ってみたいと思う。
「ルフィ、マストに上ってみていいか？」
「もちろんだ。おれに聞かなくてもメリーのどこに行ってもいいぞ」
「じゃあおれ、ちょっと上ってくる！」
「あ、チョッパー、グラス持っててあげるよ。気をつけてね」
「うん！」
飲みかけだったグラスをシルクに渡して、生き生きした様子でチョッパーがロープを上り、メインマストの天辺を目指していく。三人はそれを見送った。
いつの間にか彼の姿に気付いていた四人も、トランプに集中する一方で語り出す。
「エンジョイしてるなぁ、チョッパーの奴」

「島から出たことねぇっつってたからな。そりゃ物珍しいだろうさ」
「ダウト」
「あっ、クソ」
キリが呟くとサンジが苦々しい顔になり、場に置かれたカードを回収する。
続いてカルーが一枚カードを捨て、再びウソップが口火を切った。
「そういやあいつって人間で考えると何歳なんだろうな？」
「さぁな。トナカイの友達なんて居ねぇし」
「あの様子じゃガキって感じはするけどな」
「ダウト」
「チッ――」
「クエ～」
再びキリが呟いた時にゾロが舌を鳴らし、場のカードを取る。
先程からやけにキリが仕掛けていた。
展開が同じになりつつあり、呆れたウソップが話を変える。
「さっきからキリばっかりダウトしてねぇか？　そのくせ自分は減らしてるし」
「こういうの結構得意で」
「お前も嘘つきだからな。あと意外にカルーが減らしてやがる……」
「クエ～ッ！」
「おれらは鳥以下か」
「なんか腑に落ちねぇな」
手札を増やす一方のゾロとサンジは顔が苦々しく、一進一退を繰り返すウソップは真剣に考えながらも表情は柔和で、上手く減らしているキリとカルーは上機嫌だ。
時折そうして遊んでみれば互いの性格や特技がよくわかる。
たかがゲームとはいえ相手をさらに深く知るにはいい機会だ。
キリやウソップなどは手先が器用で嘘をつくのも上手い。頭を使うゲームでは特に力を発揮するため勝率が高かった。ゾロやサンジ

も頭が悪い訳ではないのだがどうにも運が悪い。ルフィが参加したこともあるのだがルールを守らないせいで問題外である。
彼らが白熱したゲームを繰り広げる中、チョッパーはメインマストの展望台に到着した。
空を見上げ、さっきよりずっと近くなるがまだ遠い。
彼は喜び、思わず身を乗り出した。
「うわぁ～、すげぇ～。空も海も広いんだなぁ～」
ドラム島から見た景色とは違う。
島の姿が見えず、水平線まで全てが海で、空はどこまでも広がっていた。
ヒルルクが言っていた通りだ。海は広い。世界から見れば自分なんてちっぽけな存在で、海へ出て世界を知れと言われた理由もこれならばよくわかる。
ついに自分は海に出たのだ。
改めて実感した彼は歓喜しており、マストの天辺を見上げる。
風に揺られてバタバタと音を立てる黒い旗。麦わら帽子を被ったドクロが描かれ、この船が海賊船だということを証明しており、自分たちは海賊なのだと表している。
不思議と嬉しくなった。まるで生まれ変わったかのような心境である。
「海賊かぁ……」
感じ入るように小さく呟く。
いつしか笑みも消え、真剣な眼差しで旗を見つめた。
不安はない。今あるのは好奇心と期待だけだ。
海賊として旅をしてもっと医者の腕を磨く。いつかは夢である万能薬になる。今は傍に居ない恩人のためでもあり、今や仲間たちのためでもあり、覚悟を新たにした。
その時、フッと影が差す。
頭上に何か大きな物体があるらしく、気になったチョッパーは即座に見上げた。
メリー号の真上に巨大な鳥が飛んでいた。体長は五メートルほど

もあって、妙にカラフルな羽を持った上に嘴は長く、歪に曲がっている。見たこともない種類だった。
あまりの大きさにチョッパーはあんぐり口を開け、感心する声すら失う。
下に居る者たちも気付いていた。
危険な動物かと警戒心が生まれて悲鳴も少なからず上がる。
「な、なんだァ!? でっけぇ鳥ッ!?」
「すんげぇ〜!」
「ちょっと、いきなり何なの!? まさか私たちを襲う気!?」
ウソップとナミが悲鳴を上げていて、ルフィが興味を持った顔で見上げている。
ゾロやサンジも見上げるのだが、キリはトランプに集中しているようだった。
「なんだ、でけぇな」
「あれが食材になりゃ数日は安泰か。いや、ルフィが居るんじゃ一日が限度かな」
「はい、キングね」
「ダウト」
「あ、やべっ」
「そんな場合かお前らっ!?」
「クエ〜っ!?」
初めて表情を変えたキリが場に出されたカードを回収する。
全く焦っていない彼らをウソップが叱りつけるものの、さほど相手にされず、指摘されても動じない彼らは手札の確認などしていた。その隣ではカルーがトランプを捨てて走り回っている。
脅威と感じるのも無理はないが、チョッパーはなぜか笑顔だった。
溢れてくる冒険心がそうさせるのかもしれない。巨大な鳥に手を振って友好的に声をかける。
「おぉ〜い! お前どこに行くんだぁ〜? どこか近くに島はあるのか?」
まるで友達のように話しかけ、鳥の目がちらりとチョッパーを確認

した。
徐々に高度を下げ、近付いてくる。
チョッパーは近くなっても大きく手を振る。
「おぉ～い――ん？」
そしてある時、巨大な鳥の足が、むんずとチョッパーの体を掴んだ。
軽々と持ち上げて連れ去ろうとしたのだ。
「ギャアアアアッ!?」
「ええっ!? チョッパーが食われかかってる!?」
「チョッパー!?」
連れ去られかけて咄嗟にチョッパーが必死に手を伸ばし、海賊旗を掴む。しかし引っ張る力が強過ぎるせいか、マストに括りつけられた海賊旗が破れ、頼みの綱が無くなる。
チョッパーは巨大な鳥に捕まってしまった。
メリー号からあっという間に離れていき、流石にクルーたちは全員が激しく狼狽する。
宣戦布告もなく、予兆すら見せずに連れ去ってしまった。
目的が読めないこともあり、そのまま行かせては危険と判断するのも当然。
即座にルフィが全力で腕を伸ばした。
鳥ではなくチョッパーを掴んで引き寄せればいい。目的は取り戻すことだった。
そう考える彼が動くと同時に、トランプに興じていた四人も動き出し、咄嗟に立ち上がる。
キリがルフィの下へ駆け出しながら指示を出し、指示を受けたウソップがパチンコを手にする。相手が巨大であるだけに協力しなければならない。彼らに迷いはなかった。
「チョッパー！ お前、おれの仲間に何してんだ！」
「ウソップ、狙撃だ」
「お、おし！ 任せろ！」
ルフィの腕が伸ばされたのだが、鳥は急に姿勢を変える。彼の腕を避けたのだ。

あっさりと空を掴んだ腕は目標を失い、引き戻された。
まさか避けられるとは想像もしていなかったウソップは狼狽する。
距離はあってもルフィの速度に反応できる鳥。これが普通であるはずがない。
パチンコを構えたウソップは迷わずに弾を放ち、鳥の翼を狙う。言うなればそこが鳥類の最大の弱点だ。大事な翼を傷つけられて飛び続けられないだろうと思っていた。
「必殺！　火薬星！」
ウソップが弾を放つと同時、鳥は再び奇妙な動きを見せる。
まるで見えているかのように体を回転させ、姿勢を変えて弾丸を回避した。結果的に巨大な鳥はルフィ、ウソップ両名の攻撃を避け、無傷で飛行を継続させている。
その動きに迷いはなく、メリー号が進む方向へ、メリー号より速く飛んで行った。
攻撃が当たらない。全て最小限の動きで的確に避けられている。
狼狽するウソップはぎょっとして目を見開いた。
嫌な予感がしていたためだろう。キリはすでに紙の鳥を作り終えており、その背に乗って、唯一空を飛べる彼が鳥への接近を試みようとしていた。
飛び立つ前にルフィを呼ぶ。
「ルフィ、追うよ。この距離じゃ多分何しても無駄だ」
「わかった！」
「どういうことだよあいつっ!?　なんで避けられるんだ!?」
「かなり普通じゃないね。頭の良さはルフィ以上かも」
「なにぃ!?　お前失礼だぞキリ！」
「んなこと言ってる場合じゃなくて早く行けって！」
翼を広げて空へ飛び立つ。
ルフィも背に飛び乗って二人で鳥を追い始めた。
どんどんメリー号から離れていく。それだけ鳥に追いつこうとしていた。
確かにメリー号よりも速いが巨大さが祟って速度はそう誇れるも

のではない。本来は飛行に特化していない能力でも十分に追いつくことができそうだ。
紙の鳥の背でルフィが準備するように指を鳴らす。
手を伸ばしてチョッパーを救おうと試みた。
「ル、ルフィ～!?　助けてくれぇ～!」
「待ってろチョッパー!　今助ける!」
高速で手を伸ばし、チョッパーを掴もうとする。だが再び素早く回避されてしまった。
やはりその鳥、視界に入っていない場所からの攻撃さえも予測している。
腕を戻したルフィとキリはまさかの事態に苦々しい顔になった。
「くそっ、また避けられた……!」
「どうやら当てるのは無理そうだね。チャンスを待とう。あれ見て」
「ん?　あ、島だ」
「あそこに向かってるみたいだ。巣に戻るのかもしれない。隙を見せる瞬間はきっとあるはず」
「そうか。よし」
空中戦を中断して後を追うことに集中する。いつの間にか前方には島が見えていて、巨大な鳥はその島を目指しているらしい。ならば着地の瞬間か、速度を緩めた時を狙った方が良い。
二人は油断することなく鳥に追いつこうと速度を速めた。
徐々に距離は詰まるのだが付かず離れずの状態が変わらず、決定的な瞬間は来ないようだ。
その間にもチョッパーの悲鳴は響き渡っていた。
島に近付いていく。
どう思っているのかは知らないが鳥は反応する気配を見せない。迎撃する動きがないのならひとまずついていくことに問題はなさそうだ。
ついに島の真上に到達する。
鳥はしばらく真っ直ぐ飛んでいたものの、突如急旋回して彼らに向

かい合った。
やる気の無さそうな目が二人を捉える。
顔つきこそ穏やかそうで敵意は感じないというのに、その動きは明確な攻撃性を感じた。
二人の表情が変化する。
速度を変えずに高速で接近してくる脅威を目にし、二人同時に反応していた。
「ルフィ、迎撃よろしく！」
「おう！　ゴムゴムのォ～ピストル！」
半ば反射的にルフィが右の拳を突き出した。腕が伸びて鳥の顔面に向かって接近する。
巨大な鳥はチョッパーを掴んだまま、くるりと回転し、回避した。顔の傍をルフィの腕が通り過ぎていって、その腕を辿るかのように接近していく。
キリが腕を振って紙の鳥が動きを変えた。
急速に落下を始め、翼を畳んで力を抜くと一瞬にして鳥の視界から消える。
危うくルフィが落ちかけたがキリが服を掴み、二人は急な突進を上手く回避した。次は攻撃に出る番だと視線を上げて、急な動きで目を回しているチョッパーを確認する。
敵を倒す必要はない。チョッパーを取り戻すことができれば良かった。
鳥の動きはさらに大胆なものになっている。スピードは想像以上で、体が大きいため小回りは利かないが、その分当たればただでは済まない。
敵をつぶさに観察する二人の表情は厳しいものだ。
特に空中では回避を一手に引き受けるキリは一瞬たりとも気が抜けなくなる。
「完全に見切ったか……」
「くっそぉ～、もう一回！」
「無理だよ。多分普通にやっても避けられる。ボクが注意を引くか

らその隙に――」
相手との距離を保って旋回しながら話していた時。
突如、紙の鳥がガクンと揺れ、下からの衝撃に突き上げられる。
二人は目を見開いて驚き、一際キリが驚愕していたようだ。
まるで砲弾でも撃ち込まれたかのような揺れを感じて、わずかに紙が剥がれて形が崩れ出す。
「なんだぁ!?」
「攻撃だ！　でもどこから……！」
言っている最中にもう一度衝撃が走った。
どうやら下から何かがぶつかっているらしい。それはわかったが防ぐ術がなく、回避しようとした動きに完璧についてきた。原因がなんであれ避けるのは簡単ではない。
さらにもう一度。攻撃を受ける度に紙が剥がれ、形を保つのが容易ではなかった。
その間に急旋回した巨大な鳥が向かってくる。
目視で気付いたルフィが慌ててキリに言うものの、彼自身も下からの攻撃に耐えることに集中していたのか、先程よりも反応が遅い。
「キリ！　危ねぇ！」
「掴まって！」
咄嗟にキリがルフィの腕を掴んで、鳥をバラシて、空中に舞った紙を集めて盾を作る。一直線に突っ込んできた鳥の嘴が激突し、硬化したおかげで貫かれることはなかったが、空中では堪えることもできずに勢いよく吹き飛ばされてしまう。
二人の体に直撃することはなかった。
だが少なくとも今から紙の鳥を作るのは不可能そうで、散らばった紙と共に落ちていく。
「ルフィ～！　キリィ～！」
頭上からチョッパーの悲痛な声が聞こえてくる。
助けられなかったことを申し訳なく想いつつ、今更体勢を立て直すことはできない。
二人の姿は森の中へ消え、木々が邪魔して目で追うことすらできな

くなり、チョッパーは完全に彼らの姿を見失った。
それでいて彼も抵抗はできず、島の中央へ向けて運ばれる。
どうやら鳥は明確な目的を持っていた。
やがて眼下の風景を眺めるチョッパーの視界に、岩山に集まる数多の動物の姿が見えた。
もしかしたら人が居るのだろうか。
そう思う瞬間、パッと体が離されて、彼は悲鳴を上げながら島の中へと落ちて行った。

島を守る者

空から二人が落下してくる。ルフィとキリは真っ逆さまに森へ突入していった。
バキバキと接触した枝が折れ、身の危険を感じた瞬間、二人はそれぞれ近くの枝を手で掴み、徐々に勢いを殺しながら落下していく。すると地面が近付く頃には危険を感じなくなっていた。
持ち前の運動神経で何とか勢いを殺し、無事に着地する。
そこは視界の悪い森の中。背の高い木々と草が周囲を取り囲んでいた。
ひとまず体に怪我はない。
周囲を見回した二人は警戒しながら口を開いた。
「くそぉ～、鳥め。ここどこだ？」
「ずいぶん飛ばされたみたいだ。チョッパーはどこ行ったんだろう」
「すぐに探そう！」
「いや、さっきの攻撃は下から来てた。でも空には何も居なかったし、多分、この森から攻撃してきたってことなんだと思う。そう簡単にはいかないだろうね」
チョッパーを心配するルフィは先を急ぎたがるが、キリがその足を止めさせる。
話している間も妙な視線を感じていた。
不意に口を閉ざした二人は周囲の音を聞き、森の中に潜む誰かの存在を感じ取ったのだ。
「何だろうな、あれ」
「わからない。人じゃなさそうだ」
「お前たち人間か」
頭上から声をかけられ、即座に二人が見上げる。
彼らの傍にある木の上に声の主が居たようだ。
太い枝に居たのは大きなオウムである。人間の子供程度の大きさがあるだろう。太った体は緑色の羽に覆われ、年老いた様子が伝わ

り、頭頂部だけが禿げていた。
人語を操るはずのない生物だ。
二人は驚くのだが、よく考えれば少し前にもしゃべる鳥や、或いはトナカイを見ているためにすぐ納得すらしてしまう。ハゲオウムを見上げた二人は冷静だった。
「誰だお前。チョッパー知らねぇか？」
「ここは人間が立ち入ることは許されぬ島。即刻出て行け」
「そうはいかねぇよ。おれたち仲間をさらわれたんだ」
「でかい鳥が連れてたトナカイだよ。見なかった？」
「トナカイ……ではやはり、〝選定の鳥〟が連れていたのは動物か」
ハゲオウムは唸るように呟いた。
その一言で何か気付いたらしくルフィが声を大きくする。
「お前なんか知ってんのか？　教えてくれ！　チョッパーはどこに居るんだ！」
「帰れ。島から出て行け」
「おい！　おれの話聞けよ！」
「仲間を連れ戻したらすぐに島を出るから。どこに居るかだけ教えてくれないかな？」
「お前たちに教えることは何もない」
ぴしゃりと断じる強さを感じた。
よほど嫌われているのか、取り付く島もないとはこのことだ。思わずルフィとキリは表情を歪めて言葉を止めるものの、黙ったままではいられず話し出す。
チョッパーを見捨てては行けない、その一心で口調も厳しくなった。
「じゃあいいよ。お前が教えてくれなくても勝手に探すから」
「待て！　人間はこの島に立ち入ることは許されんぞ」
「だったら教えてよ。何の説明もないならボクらは勝手に島に入る。チョッパーを探さないと」
「それはできんっ」
「ルフィ、行こう」

「そうだな」
「待て！　この島に入るな！　森の番人の裁きが下るぞ！」
怒りを露わにハゲオウムが叫ぶ。
その一言が気になり、流石に無視する訳にも行かず、二人は足を止めて振り返った。
「森の番人の裁き？　どっかで聞いたことあんな」
「脅しにしては基本的だけどね」
「嘘だと思うか？　わしはお前らのためを想って言っている。死にたくなければ奥に行くな」
「いやだ。チョッパーを助けねぇといけねぇんだ」
「それならお前たちは死ぬだけだ。森の番人の裁きでな」
「森の番人、ねぇ……」
キリが気の無い声で呟くと同時、ルフィが歩き出した。向かう先は当然森の奥。ハゲオウムの言葉など意に介さず先へ進んで、キリも当然だという態度で後ろへ続く。
ハゲオウムは驚愕する。
警告を無視して、死を恐れない姿は異常だと感じざるを得ない。
翼をバタバタと騒がしくはためかせ、さらに警告の声は止まらなかった。
「おい貴様ら！　正気か!?　本当に死ぬつもりなのか！」
「うるせぇ。おれたちは死なねぇし、チョッパーだって見捨てねぇ」
「止めたきゃ止めてみなよ。策はあるんでしょ？」
「くっ……仕方ない。どうなっても知らんぞ！」
ハゲオウムの声を無視して歩く。
木々の間を通り抜けようとした時だった。
突然脅威が接近していることを感じ、二人は素早い動きでその場から飛び退く。
どこからともなく、空気が激しく動く音が聞こえていた。そこに居ては危険だと判断した二人が何も言わずに跳んだ時、二人の間を猛烈な勢いで何かが通る。
地面に激突し、衝突の際に大きな音を発して、草を押しのけ土が抉

られた。
それだけでなく丸い物が破裂したのか、少量の液体が辺りに飛び散る。
着地と同時に振り返った。
二人の目は即刻木の上へ向かう。
細い枝の上、妙に手の長い猿が座っている。
態度も悪く見え、だらしない姿勢でくちゃくちゃと口を動かし、右手には成熟したリンゴ。どうやらそれを投げつけてきたようだ。
確かに直撃した地面を良く見れば粉々になったリンゴが散らばっている。
先程空に居た時もぶつけられたのだと今になって理解できた。
「なんだあの猿」
「リンゴ投げつけてきたらしいね。あれが森の番人か」
「こんにゃろ、やる気か？　急いでんだ。邪魔すんな」
相手を侮蔑するように笑い、テナガザルはリンゴを一口齧る。
それからすぐに右腕を振り上げて、齧ったばかりのリンゴを投げた。
手を離れた瞬間にはトップスピードに達している。人間以上の握力がそうさせるのか、腕の長さが良い結果を生んだか、まるで銃弾。凄まじい速度で真っ直ぐ飛んでくる。
狙われたのはルフィだ。
彼は大きく跳ばずに数歩横へ動くだけで回避し、拳を握る。
見上げる形で猿を睨みつけ、咄嗟に反撃を繰り出そうと動き出した。
「舐めんな！　ゴムゴムのピストル！」
突き出された右腕が伸び、高速で拳が迫っていく。
猿はその様を目視して別の枝に飛び移った。長い腕を使って素早く移動を終える。当然ルフィの拳は当たらず、すでに居なくなった場所を通過していった。
次々枝を掴んで移動しながら、テナガザルは嘲笑うかのように声を発する。

「キャッキャッキャッ！」
「くそぉ～、笑うなお前ぇ！」
「動きが速いね。止めようか？」
「手ェ出すな！　こいつはおれがやる！」
「単純だなぁ、もう」
怒ったルフィは能力を使おうとするキリを止め、自らがやると駆け出す。
テナガザルを追って地面を走るのだが、相手は再び木に生っていた丸い果実を手にした。
まるで人間が野球をする際の動き。
果実を両手で持ち、頭より高く上げ、腕を降ろすと共に足が上がる。左足を前に踏み込んで勢いをつけるとスムーズな流れで全身の力が腕に集められ、投球を行う。
野球のピッチャーのような鮮やかさだ。
あいにく山育ちのルフィは野球をよく知らないものの、その動きは非常に人間に近い。
決して太くはない枝で流麗な動きを行い、果実が投げられた。
再び剛速球が迫る。
正面から来る凶器を前に、彼は軽く跳んで胸を張り、大きく息を吸い込んだ。ゴムの体は見る見る膨らんでいき、果実が間近に迫る頃には丸々とした体になっていた。
「ゴムゴムのォ～……風船！」
膨らんだ体のど真ん中に果実が直撃する。回転するそれは常人が受ければただでは済まない勢いだったが、打撃が通用しないルフィにとっては大した攻撃ではない。
背を丸めて柔らかく受け止める。
その光景にテナガザルは勝ち誇った笑みを浮かべた。
回転は止まってはおらず、ルフィの目は余裕を見せるテナガザルを捉える。
腹に触れたまま回転していた果実が見事に跳ね返された。
勢いは殺さずに、むしろ速度は増すかの如く、一直線にここまで来

た軌道をそのまま帰る。余裕だったはずのテナガザルは目を見開いて驚愕した。
パァンと軽い音が鳴り響く。
テナガザルの顔面に果実が直撃し、果実が破裂した音だった。
たったの一撃。だがその一撃に込められた勢いは顔に受けていいものではない。
白目を剥いたテナガザルは木から落ちていき、受け身も取れずに背中から着地する。
流石に衝撃に耐えきれなかったのか、テナガザルは沈黙した。
ルフィは大きく息を吐き出して元の外見に戻っていく。
想像よりずっとあっさりした結末だった。
喜びを噛みしめるルフィは拳を突き上げて叫び、キリはハゲオウムに振り返る。見上げた先ではハゲオウムが驚いていて、言葉も出ない様子だ。
「おっしゃ～！　勝ったぁ！」
「さて、森の番人は終わり？」
「ええい、舐めた口を……勝負はこれからじゃ！」
激昂したハゲオウムが翼を広げた。
それに呼応するかのように木々の向こうから新たな影が現れる。
二人も当然気付いてそちらに目をやった。
「まだ来んのか」
「結構面倒だね。急いでるのに」
ルフィやキリより身長が高い草を掻き分けて、巨大な動物が姿を現した。
やってきたのは白い体毛を持つ二メートル超のゴリラである。厳めしい顔でのそりと歩いて、胸の辺りを指で掻きながらやる気の無さそうな様子だ。
二人は咄嗟に身構え、対峙する。
ゴリラは腕をぐるぐる回して気だるげだった。
だが目の前に来たということは戦うつもりはありそうだ。
「でっけぇゴリラだなぁ～」

「さっさと終わらせて先を急ごう。チョッパーが無事とも限らない」
「そりゃそうだっ」
「フン、そう簡単に倒されては森の番人とは呼ばれんわ」
自信満々というハゲオウムの言葉を受けながら、気にせず二人は攻勢に出る。
ルフィが駆け出して正面から立ち向かった。
確かに相手は体が大きい。人間とはそもそも筋力が違い、普通であれば太刀打ちできる存在ではないだろう。だがルフィは全く恐れてはいなかった。
平気な顔で見送るキリも同じくである。ルフィが負けるとは思っていない。
「ゴムゴムのォ～ライフル！」
接近する間から腕が伸ばされ、ぐるぐると捻じられていた。軽く跳んで勢いをつけると同時に後方へ伸ばした腕が前へ出される。それは回転を加えた強烈なパンチだった。
猛然と襲い掛かるそれを見てもゴリラは動かず。
しかし、腹に当たる、というその瞬間になってから素早く動いて、わずかな動きで回避する。華麗なステップで横へほんの少し動いただけだった。まるで人間のような動きでもある。
空振りに終わったルフィの拳はその向こうにあった木を殴り、幹を破壊してあっさり倒す。
驚愕したルフィは目を見開き、さらに素早い動きを見せるゴリラを注視する。
胸の前で両方の拳を構え、ゴリラが軽快なステップを見せている。
それはまるでボクシングの如く。横へ縦へと動く素早さは巨体に似合わぬスピードと、何より野生動物とは思えないテクニックを窺わせ、生来のパワーもある。
動物が技術を覚えた時ほど厄介な状況はないと、彼はその身で知ることになった。
背を丸めて姿勢を低くし、一瞬にして懐へ飛び込んでくる。

ルフィは腕を引き寄せている最中で行動が遅れていた。
そこへゴリラの大きな手によるパンチが目にも止まらぬ速さで飛び、ルフィの体を捉える。
重々しい音だった。
スピードのあるジャブが数発当たり、体勢を崩させ、それからストレートが頬に突き刺さる。
その巨大な拳に込められた力は人間など比べ物にならない。急所を打たずとも体が揺れ、ルフィのゴムの体にはダメージがないとはいえ、その場に踏ん張るのは不可能だ。
転んでしまった彼の体が勢いよく地面を滑る。
ゴリラは両腕を上げて勝ち誇るように声を発した。
「うげっ!?」
「ウッホ！　ウッホ！」
ぴょんぴょん飛び跳ねて喜ぶ様は可愛らしくも憎たらしくもある。
そんな一瞬、笑みを浮かべているかのような顔へ、突如、キリが振り上げた武器が迫った。
紙で組み上げたハンマーはゴリラの顔よりも大きく、気付いた時には目の前にあって、構えていなかったゴリラが避けられるはずもなかった。
顔面へ直撃。痛みが生じた直後、押し切られるようにして体がひっくり返った。
ルフィが起き上がる頃にはゴリラが倒れて、形勢はまたも変化する。
警戒するが故に後ろへ跳んで距離を取り、使ったハンマーを肩に担ぐ。
キリは薄い笑みを浮かべる。
ゴリラを見る目はどこか冷ややかでもあって、あからさまに呆れた口調で呟かれた。
「相手を転ばせた程度で喜んでるようじゃ強いとは言えないね。勉強し直しなよ」
「ウホォ～!!」

「こいつめ、もう当たらねぇからな」
拳を構え直したルフィが言うと同時にゴリラも起き上がり、怒気を発して腕を振り回した。
やはり動物。直情的で安い挑発にも簡単に乗った。これなら冷静に考えて動くことなど不可能だろうと、手の中でくるりとハンマーを回したキリは勝機を確信する。
確かに番人と言われる程度の力はありそうだが二人が苦戦するレベルではない。
一度ルフィも相手の動きを見た以上、負ける可能性はさらに低くなった。
ゴリラも闘志を漲らせて動き出そうとしている。
反応するため二人は膝を曲げるが、森の向こうから大きな足音が聞こえた。
どうやら相手は一匹ではないらしい。
「ルフィ、新手だ」
「またかっ」
「そっちは任せた」
「おう！」
ほんの数秒で自分たちの行動を決め、迷いはない。二人は互いに背を向けた。
草を押しのけて突如彼らの前に新たな動物が現れる。
黄色と黒、二色の縞模様を持つシマウマが跳んできて、勢いよく突進してきた。先に動いてそちらに向かっていたキリが迎え撃ち、同じタイミングで動いていたゴリラにルフィが接近する。
唐突な登場を果たしたシマウマだったものの、視界が開けると同時にキリの姿を捉え、その時には彼が持っていたハンマーを振り抜こうとしている瞬間で、しかも端々がバラケていた。
まるで虫網のようにシマウマの顔がすっぽりと包み込まれてしまう。
視界が白一色で染まり、驚いた彼は足をバタつかせて着地に慌てていたようだ。

それさえも明確な隙となってしまい、さらに別の紙を取り出したキリは彼の四足を拘束し、胴体を蹴りつけて地面に転ばせる。目、鼻、耳に加えて前後の脚まで押さえられ、動けなくなった。
シマウマとの勝負はあっさり決着がついた。
キリは肩をすくめてルフィたちの戦いを見る。
正面から向かい合い、手が届く距離に入ると同時に二人とも足を止めた。
縫い付けられたかのようにその場を動こうとせず、接近戦で決着をつけるつもりだろう。
両者が全く同じタイミングでパンチを繰り出し始めた。
「ウッホォ！」
「うおおおりゃあっ！」
両腕が目にも止まらぬ速度で繰り出される。
どちらも速いが、ルフィの方が上回っていた。
彼の攻撃は反応できないほど速く、狙いも正確で、的確にゴリラの体に叩き込まれていく。分厚い胸板はダメージを通しにくいだろうが並みのパワーではないのだ。直撃する数が多くなる度にゴリラの表情が歪められていった。
ではゴリラの攻撃はと言えば、時折当たるという程度のもの。
攻撃しながら回避するルフィは確実に彼を圧倒していた。
胴体に拳が直撃する度に、足が土を削りながら後ろへ下がっているのがわかる。
怒りを露わにしたゴリラは大きく振り上げた腕でパンチを繰り出した。だがルフィの反応速度があれば、それほど分かり易い動きはむしろ避けやすくなる。
振り抜いた拳を潜るように避け、カウンター気味のパンチがゴリラの顎を強かに打った。
視界が揺らぎ、頭がくらくらした。
ルフィが後方に腕を伸ばしながら跳ぶ。
それは勝負を分ける一瞬。ゴリラは避けられる姿勢ではない。
「おおおっ――ブレットォ！」

顔面に直撃。彼の巨体は殴り飛ばされた。
あまりの勢いで木の幹を壊して倒し、地面を跳ねて、それでも体は止まらない。その姿は鬱蒼と生い茂る草の向こう側へと消えてしまった。
ハゲオウムはあんぐり口を開けて物を言えなくなっている。
その間にルフィは大きく息を吐き出していた。
「ふぅ～。終わりか？」
「さて、どうだろう。知ってる人はあそこに居るんだけどね」
「ぐぬぬぬ……！　貴様ら一体何者だ」
「おれたちは海賊だ」
「海賊？　モバンビーが嫌いな奴らだ。尚更この島で好き勝手させる訳にはいかん」
怒っている顔のハゲオウムはバサバサと翼を動かす。
何の意味があるのだろうと思っていた時、またしても草むらが揺れた。
どうやら森の番人とやらは層が厚いらしい。
呆れながら見ていると、現れたのはこれまた珍獣、どこかの島を思い出す。
雄々しい鬣と胴体には白色の縞模様。漆黒の体毛を持つ動物は世にも珍しいライガーと呼ばれる生物だった。鋭い牙と爪を持ち、獰猛そうな顔つきで二人を見ている。
今度は威風堂々という雰囲気が伝わり、さっきほど簡単にはいきそうにない。
拘束されて地面に転がり、ジタバタもがくシマウマの傍でそう思う。
気付けばテナガザルやゴリラも起き上がって、今度は一斉に襲う気のようだった。
一匹ずつ冷静に対処すればそう問題もなく勝てるはずだ。しかし厄介なのは全員が力を合わせた時であることは想像も難しくない。
剛速球を投げるテナガザルに、ボクシング並みのテクニックを持つゴリラ。

シマウマは無力化したままだが今は新手のライガーも居る。
必然的に警戒心が増した二人は互いの距離も近く、敵の姿を見回す。
この場で最も恐ろしいのはライガーだ。
不思議とリーダーの風格すら感じ、彼を見ている時間も多くなる。
「森の裁きはそう簡単には抜けられん。再度言うが、島を出るなら今の内だ」
「いやだ」
「仲間を奪われたままじゃ出られないね」
「それならもう言わん……やれ！」
指示するためハゲオウムが叫んだ途端、真っ先にキリが動いた。
何度か腕を振って紙を複数飛ばし、ハゲオウムを狙ったのだ。
おそらく偉い立場に居るのだろうが、彼自身を脅威とは感じていない。それでいてこれだけの面子に指示を出せる存在。狙われたところで不思議ではないだろう。
ハゲオウムの嘴に紙が巻かれ、無理やり口を閉じた上に胴体も拘束された。
動けない彼は木の上からぼとりと地面に落ちてくる。
「しばらく黙ってろ。何も話せないなら尚更だ」
これで統率が乱れれば御の字だ。
冷徹に考えるキリの目には、動物たちが怒気を発した雰囲気が伝わってくる。
簡単とはいえ作戦は成功。彼らは冷静さを失った。
いの一番にライガーが動き出した。
キリの姿しか見えていないかのような動きで真っ先に狙い、唸り声を上げながら走ってくる。それを見たキリは後ろへ足を運びながら大量の紙を空へばら撒いた。
指で指揮される紙片たちは瞬く間に形を変え、独りでに折り鶴となっていく。
辺りには無数の折り鶴が浮いていた。
「百式武装〝千羽鶴〟」

「おおっ、すげぇ～」
呑気に言うルフィに剛速球の果実が迫るも、首を上げるだけで避けてしまう。地面にぶつかると破裂して果汁が辺りへ散らばり、苛立つテナガザルは舌打ちしていた。
それから間を置かずゴリラがルフィへ向かって走る。
ライガーは相変わらずキリを狙っていて、その空間は非常に騒々しくなっていた。
大口を開けて牙を剥き出しに迫るライガーを視界に納め、恐れもせずにキリが指を振る。
足が地面に着いた瞬間を狙い、右の前脚と後ろ足へ、横から高速で動く折り鶴が激突した。
耐え切れる衝撃ではなく、移動の油断を衝かれて姿勢はあっさり崩れてしまう。
キリの蹴りがライガーの顎を蹴り上げた。
無理やり口を閉じさせられ、さらに回し蹴りを顔の側面へ叩き込まれて地面へ転がる。
ルフィにもまた敵が迫っていた。
先程驚異的な一撃を叩き込んだはずだがまだゴリラはピンピンしており、大ぶりにはなるものの強烈なパンチを放ってくる。そしてそれを避けようとすれば、テナガザルが果実を投げてきた。今度は完璧なコンビネーションを見せて非常に厄介だ。
避け切れずにルフィの腹へゴリラのパンチが直撃し、彼の体は宙へ投げ出される。
「うえっ……!?　くそ、こんにゃろう！」
すぐに受け身を取って着地して、真っ直ぐゴリラに向けて駆け出した。
その時にはテナガザルが果実を投げようとして、咄嗟にキリが折り鶴を動かす。
ルフィのみを見ていたテナガザルはすでに投球モーションに入っていて、横から来た折り鶴に気付く暇もなく、側頭部を打たれて悲鳴を上げながら木から落ちた。

さらに右腕を振り上げたゴリラにも折り鶴が迫る。
しっかり踏ん張った足を狙い、膝の裏に激突した結果、力が抜けてかくんと曲がった。驚愕して間抜けな顔になった彼は拳が繰り出せず、そこへルフィの蹴りが伸びた。
「スタンプ！」
「ウッホォ!?」
またしても顔面を蹴りつけられて背を仰け反らせた。
驚くゴリラへさらに接近し、ルフィは両手で肩を掴むと飛び掛かる。
その頃には起き上がったライガーがキリへ襲い掛かっており、そちらに集中するキリからの援護が無くなるが、ルフィは気にせず攻撃を行う。
敵を拘束したまま、下半身のみをぐるぐると巻き始めた。
「ゴムゴムのォ～……」
巻いた下半身が戻る力を利用して、遠心力が使われた。
ルフィはゴリラを勢いよく投げ飛ばしたのである。
「ボーガンッ！」
「ウホォ～!?」
重い体が空を舞って、投げられた先にはテナガザルが居た。どうやらルフィは計画的に投げ飛ばしたらしく、驚愕する彼の体に激突して、二匹揃ってどこかへ飛んでいく。
上手く着地したルフィはちらりとそちらを確認し、すぐにキリの方へ目を向けた。
激しく、素早く動くライガーが所狭しと動き回って、キリは的確に反応して回避している。
時に折り鶴を当てて動きを阻害し、時に先を読んで動きを止めることはない。
周囲を取り囲んだ折り鶴は敵を攻撃する物であり、身を守る物であり、仲間を援護するための物でもある。周りを取り囲まれた時点で敵を思い通りに動かさないための技だ。一対一であろうが敵が複数居ようが関係なく、自身は常に優位に立つことができる。

確かにライガーは他の三匹に比べて強いが、生き残るだけなら脅威と思うほどではない。
両者の動きを見て、援護のためにルフィが駆け出す。
どちらも速い。常人なら割り込むこともできないだろうが彼ならできる。キリに集中しているらしく少しも目を向けないライガーへ接近し、攻撃を繰り出した。
鋭く突き出された蹴りが横っ腹を強かに打つ。
「んにゃろうがァ〜！」
「ガルルルッ!?」
腹を蹴られたライガーは驚いていたようだが、さほどダメージを受けた様子はない。
体はわずかに揺れただけ。想像以上のタフさだった。
血走った眼がルフィの姿を捉え、明らかに怒った顔をしている。
ぽかんとした彼は素直に感心している表情だ。
「重いなぁ〜こいつ。全力で蹴ったのに」
「感心してる場合じゃない。ほら回避」
「ガルルァッ！」
「おわっ!?」
即座にライガーが右の前脚を振り、反射的にルフィが後ろへ跳ぶ。
ダメージはあったはずとはいえ、全く影響なく動いている。
これは時間がかかりそうだとキリが舌を打った。
滑るようにルフィが着地する。
背筋を伸ばして立った時、不意に頭上で動く影が見えた。
「なんだ――あっ!?」
ルフィが悲鳴に近い声が発する。
素早い動きでパッと麦わら帽子が取り上げられたのだ。
わざわざ首にかかった紐を気にして、掬い上げるようにして取り、帽子を奪った小柄な動物は素早い動きで木に登っていく。よく見ればそれはアライグマだった。
枝の上に立つと両手で抱えた帽子を見やり、自分の頭にかぶってしまう。

当然ルフィが怒らないはずがなかった。
「あ～っ!?　何やってんだお前！　おれの帽子返せェ！」
「ルフィ？」
ライガーの攻撃を避けながらキリがそちらを見れば、もはや声は聞こえていない。
ルフィはアライグマに向けて右腕を伸ばしていた。
その場に居ながら腕だけが高速で接近してくる光景を見て、アライグマは軽い動きで別の枝に飛び移り、あっさりとルフィの手から逃げてしまう。
苛立ちはさらに増すばかりだ。
伸ばした腕で枝を掴み、地面から足を離したルフィは縮む勢いで木の上に跳び上がった。
慣れを感じさせる動作で枝の上にしゃがみ、怒る目がアライグマを見据えている。しかし相手は全く恐れていない顔で帽子を気にして、気に入ってしまったようだ。
そのまま盗まれる訳にはいかない。彼はまるで動物のように飛び掛かる。
「それはおれの宝だぞ！　返せェ！」
「ちょっと待ったルフィ。一人で勝手に動いたら――」
アライグマが帽子を持ったまま枝を飛び移って逃げ出す。ルフィはそれを追っていった。
キリの声が聞こえていない。
宝を奪われたのだから当然と言えば当然だが、はぐれるのはまずい。
決して良い状況ではなかった。
「流石にこれはしょうがないか。追うしかない」
ライガーが振るう腕を避け、一大決心したキリは考えを改める。
自身もルフィを追うべく、右腕を振ると今まで使った全ての紙を自身の下へ呼び寄せ、集まり切らない内から走り出す。もはやライガーの相手をするつもりなどない。
当然シマウマやハゲオウムも解放されることになるがそれでもい

いだろう。
そんなことよりもルフィを一人にする方が危険だと思った。
地面を駆けてルフィの背を見失わないよう注意しながら追いかける。
その後ろからはライガーが迫り、強靭な脚力によって気付けばいつの間にか背後に居た。
唸り声が近く聞こえる。同時に空を走る紙が戻ってくる。
キリは跳ぶようにしながら振り返った。
ライガーが大口を開けて目の前に居るものの、慌てずその手に紙を纏う。
倍ほどに大きくなった右腕でライガーの頭を殴りつけた。硬化された紙の腕は頭部に凄まじい衝撃と痛みを与えて、地面に叩きつけられた挙句、ライガーは数秒地面に倒れる。
まだ気絶はしていないが走り去る時間はあった。
キリは倒れた体を冷たい目で睨み、簡単に背を向ける。
「邪魔するな。もうお前と遊んでる時間はなくなったんだ」
全ての紙を回収し終えて、キリは再び紙の鳥を作って背に乗り、低空を飛び始めた。
ルフィとの距離は少し開いてしまった。しかし彼がアライグマを狙って暴れているのだろう、至る所で轟音が響いて木々が倒れている。その方向へ進めば見つかりそうだ。
彼が移動を始めて数秒経ってからライガーが立ち上がる。
怒りを露わにし、今にも走り出そうとしている。
その傍へ奇妙な色のシマウマと、ハゲオウムがやってきた。
狼狽した様子のハゲオウムは去っていった二人に怯える顔を見せる。
「まずいぞ、人間が島の奥に向かっている！　キリンライアンが死んだこんな時に……！　奴らにこれ以上の好き勝手を許してはいかんっ。すぐに追うのだ！」
ライガーとシマウマが同時に駆け出す。ハゲオウムも空を飛んで同じ方角を目指した。

現時点で次々木が倒されている。放っておけば何をされるかわかったものではない。

人間を警戒しているらしい彼らは、外敵を排除するために全力で急いだ。

空から降ってきた王

豊かな自然がある島の中で、岩肌が剥き出しになった一帯がある。
そこには数多の動物たちが集まり、ある大きな洞穴の前には特に大きな集団が存在した。
誰もが悲しそうな顔をしている。
それはまるでお通夜のように。一匹の動物が死んだことで起こっていた光景だ。
洞窟の中には一人の子供と、彼と同じくらいの背丈のカラスが居る。
半裸で腰布だけを纏っている子供は人間であり、胸には大きな傷跡があって、少し伸びた赤い髪を頭で一つに括っていた。野生児、という言葉が似あう風貌をしている。
その隣に立つカラスは黒色の羽を持つが、なぜか頭だけは逆立った上にカラフルである。
そればかりか目には透明で大きなサングラスをかけてもいた。
人間の子供がモバンビー。彼と同程度のサイズのカラスがカラスケである。
この島において数少ない人の言葉を使える動物だ。
そして彼らの前には、息絶えた巨大な動物が体を丸めて動かなくなっていた。
名はキリンライアンという。
日の光を浴びれば輝く黄金の毛並みを持ち、複雑な形だが立派で強固な角が自慢の、島の中では並び立つ者が居ない唯一無二の存在。その咆哮は動物たちに希望と勝機を与え、敵対する者には例外なく恐怖心を与える。自らの背を見せて先頭を歩く〝王〟であった。
彼こそが〝動物王〟。
王冠島を難攻不落と呼ばせた、歴代最強の王だった。
だが王は天寿を全うし、此度永遠の眠りに就いた。
確かに若かりし頃に比べ、近年はじっと動かず、平和な国を眺めていることが多かった。しかし歴史上最高と謳われた王が死ぬことを

誰が望み、誰が想像できただろうか。
島に住む動物たちは深い悲しみに囚われ、明日への希望を抱けずに悲嘆に暮れていたようだ。
彼らもまた同じだ。
キリンライアンの亡骸を見たモバンビーとカラスケは言葉を呑み、複雑な心境にある。
「キリンライアンが……」
「仕方ないよ。キリンライアンは十分長生きした。本人だって悔いはなかったと思うぜ」
力のない声を発したモバンビーを励ますようにカラスケが言う。彼は奇妙な風貌のカラスだが、そうして人間の言葉を話すことができた。なぜかなど気にした者は島の中には居ない。
そう言われてもモバンビーの表情は優れなかった。
王は誰にでも優しく、身分に差など作らず、誰が相手でも平等に、友のように話していた。当然モバンビーを相手にしてもその態度は変わらない。島で唯一の人間である彼を育て上げたのも、人間の国に対しても誇れる優しい王様だった。
言わばこれは王の死だけでなく育ての親の死でもある。
悲しみを隠せないモバンビーはぐっと唇を噛み、感情を言葉にできない。
その気持ちが痛いほどにわかるカラスケも多くを言うことは不可能だった。
これからこの島はどうなるのだろうか。
王が偉大であっただけに不安は大きくなっていて、彼が居なければ島の平和を脅かす者を追い出すことも難しく、島内のトラブルをどう解決するのかもわからない。
最近、問題が起こってばかりだった。その中での王の死は心が折れても不思議ではない。
「モバンビー、行こう。他のみんなも顔を見たがってる」
「……うん」
カラスケに言われてモバンビーが頷き、肩を並べて洞穴を出て行

く。
大きな洞穴だが順番があるらしく、代わって次の動物たちがキリンライアンの下へ向かった。
皆の顔を見回しても落ち込んでいるのは明らかだ。
気持ちがわかるだけに何と声をかけていいのかもわからず、傍を通り抜けた二人は開けた場所へと移動していく。その間にも不安が募って話さずにはいられなかった。
「長老たちが怪我をしたのに、キリンライアンまで……王冠島はどうなっちゃうんだろう」
「う～ん、わからない。森の番人たちが止めに行ったらしいけど、苦戦したらしいし」
「どうしてこんなことに……」
「やっぱり人間を島に入れるべきじゃなかったんだ。キリンライアンが若けりゃなぁ」
揃って溜息をつく。
今島に起こっている問題は人間が島に侵入したからだと判明している。
各村の長老たちが怪我をし、何を目的としているのか、命までは取られないが角だけを折られて奪われるという事件が連続して続いていたのだ。
島の動物たちは王に助けを請うためにキリンライアンの住処へ訪れていたものの、時を同じくして彼の寿命が尽き、その足で別れを告げることになってしまった。
かつて最強を誇った王は、問題を解決せぬまま逝ってしまったのである。
彼を責める声はない。だが彼が居なくなったことで嘆く者が多いのは確かで、なぜこのタイミングで逝ってしまうのかと後悔する声は少なくなかった。
洞穴を離れて白い岩の広場で足を止める。
周囲には多くの動物たちが居るが表情は暗い。
晴れた日には似つかわしくないどんよりした空気が漂っていた。

モバンビーとカラスケは高い山から島を眺めて憂鬱になる。
この島を守る王は居ない。新たな王を選ばなければならない時が来ていた。
果たして、キリンライアンの跡を継げる王など居るのだろうか。
島には屈強な戦士たち、〝森の番人〟が存在する。だが彼らでさえキリンライアンの足下にさえ届かず、全盛期の力を失った彼にさえ手も足も出ない。
長老たちは年老い、戦う力どころか臆病になっているのが隠せなかった。
やはり、偉大な王を超える逸材はこの王冠島には存在しない。
自身もまたその資格を持っていないと考えながら、モバンビーは表情を曇らせた。
「早く次の王様を決めなきゃ。一体誰になるんだろう」
「さぁなぁ。しかし長老たちが怪我をしてるし、あいつらが島に居る限りは難しいかも」
「そんな――ん？」
何かに気付いてモバンビーが空を見上げた。
いつの間にか巨大な鳥が真上にまで来ており、同じく気付いた動物たちも鳴き声を発する。
「〝選定の鳥〟だ！」
「まさか次の王を選んできたのか!?」
「見てカラスケ！　何か降ってくる！」
空高くから何かが離され、真っ逆さまに落ちてくる。
大音量の悲鳴だった。
心底死にたくないという絶叫は辺りに響き渡り、全ての目が彼を見ていた。
ドスンと大きな音を立てて地面に直撃する。
顔から落ちた彼はしばらく動かず、死んだのだろうかと心配するほど。
モバンビーとカラスケは、或いはその周囲に居た動物たちは、何も言えずに落下してきた奇妙な動物を見つめていた。ピンク色の帽子

を被り、なぜか海賊旗を握ったトナカイである。
珍獣ばかりの王冠島でさえそんな外見の動物は居ない。
珍しいものを見たと彼らの興味は尽きる様子がなかった。
数秒経ってようやく動き出す。
震える手を地面につき、ゆっくりと顔を上げていく。おそらくトナカイだろうが青い鼻だ。その場の全員に注目されながら、チョッパーはまず最初に痛めた顔を撫で始めた。
「いたたたっ……顔打っちゃった」
「き、君は――」
声をかけられたことでようやくチョッパーは周囲の状況に気付く。
数多の動物。半裸の少年。全員が自分に注目している。
びくっと飛び跳ねた彼は咄嗟に立ち上がって後ずさりした。
「な、なんだここ？　君たちは……？」
「君は今、選定の鳥に運ばれてきたんだよね？　ということは新しい王様なんだろう？」
「え？　え？　え？」
ずいっと顔を近付けてくるモバンビーに怯え、チョッパーはさらに後ろへ下がる。
「僕らの王様が死んじゃったんだ。だから君が来たんでしょ？　新しい王様になるために」
「ちょ、ちょっと……」
「お願いだよ、この島を助けて。長老たちも怪我をして、僕らの仲間が怪我してるんだ。外からやってきた人間たちがやってるんだ。海賊だよ」
「海賊が……？」
「君が王様なんでしょ？　そうだよね？　新しい動物王になるのは君なんだ」
「だ、だから、ちょっと待ってくれよ。おれは――」
モバンビーが詰め寄ってくるため後ずさりを続けていた。その結果、地面から生えるようにしてあった大きな石に気付かず、チョッパーは後ろを向いたまま躓く。

足が当たった直後、思わず石の上に座ってしまう。
その石の先端が鋭く尖っていて、勢いそのままに尻へ突き刺さり、チョッパーが目を剥く。
彼は知らず知らずのうちに人型に変身し、雄々しく立ち上がって絶叫した。
「おおおおおおおうっ!?」
「王？　王だって!?」
それは痛みを受けたことによっての悲鳴だったが、モバンビーは異なる意味で受け取った。
おそらく小さな彼が大きな人型になってしまい、驚いたのも理由の一つだろう。冷静に聞いていられる状況ではなかったことがその状況を生んでいた。
尻を痛めたチョッパーはばたりとその場に倒れてしまう。
その頃にはモバンビーの顔に笑顔が戻り、周囲の皆を見回して大声を発していた。
「みんな、聞いてよ！　僕らの新しい王様だ！　選定の鳥が選んだ次の動物王だ！」
「何ィ!?　ほ、本当なのかモバンビー！」
「間違いないよ！　だって……彼自身がそう言ったんだから！」
「おうっ、おおおうっ……」
涙さえ流しながらチョッパーは小さな声を発し、ぴくぴく震えて倒れたまま動かない。
半信半疑だった動物たちが確信を得る。
彼こそは王。キリンライアンと同じように、王冠島には二匹と居ない珍しい動物。なんせ小さな姿から人間のような大きな姿に変化してしまったのだ。
多数の鳴き声が重なり合って空まで響く。
島の住民たちは新たな王の誕生を祝福しており、同時に歓迎していた。
「やったぁ！　新しい動物王だぁ！　これで島は守られるぞぉ！」
「もう人間なんか怖くないや！　海賊だってイチコロさぁ！」

「おおうっ、おおおおうっ……」
聞こえていないチョッパーは痛みが引くまで呻き続ける。
周囲は歓声に包まれていることに、彼はいまだに気付いてはいなかった。

＊

船長と副船長を欠いたゴーイングメリー号は島に到着していた。
チョッパーが攫われ、彼を取り戻しに行ったはずの二人が帰って来ない。
これは船上において問題視されていたものの、船でも一、二を争うほど強い二人が戻らないのには何か理由があるはずだとして、捜索隊が出される運びとなっていた。
提案したのはサンジである。
船の前部に立ち、島を眺める彼は煙草に火を点け、煙を吐き出す。
副船長が居ない時、彼が指揮を執る機会が多くなっている。仲間たちは疑問を持っていないし、彼自身も嫌がっている様子はない。仲間のためを想うならば誰かがやらなければ。
だが事実、難しい役割であることは理解している。
ともすれば自由に動き出す面々だ。彼らを御し切ることは難しい。
さらにキリとは違い、彼は女性陣の安全を何よりも優先している節がある。
しばらく島を眺めて危険があると判断した後、振り返ったサンジが仲間たちへ言った。
「あいつらが戻らねぇってことはこの島に着いたんだろう。そしてトラブルに巻き込まれた」
「海に落ちたって可能性はねぇのか？」
「もしそうだとすりゃ助けるのは簡単じゃねぇが、真っ直ぐ飛んでったのはお前が見てただろ。直線状にあったのがこの島だ。だったらここに着いてる可能性の方が高い」
「そうだといいけどな……」

「それに島に入ってたとすりゃ、ルフィが冒険したくて帰って来ねえってのも理解できる」
「確かに。しかも一緒に居るのはルフィにゃ滅法甘いキリだしな」
腕組みをするウソップがやれやれと息を吐き出す。
彼から目を離したサンジはナミやシルクに目を向けた。
「メンバーを選んで二人を探しに行こう。ただしナミさんとシルクちゃんは病み上がりだ。万が一があっちゃいけねぇから船に残ってくれ」
「私は大丈夫だよ。もうすっかり元気だし」
「やめときなさいよシルク。甘えられる時に甘えときましょ」
「そうさシルクちゃん。できることならおれはずっとシルクちゃんに甘えられていたい」
「お前、話の主旨が変わって来てねぇか？」
凛々しい顔で話を脱線させるサンジに呆れてウソップが止める。
常に客観的な視点から冷静な判断を行い、頼りになる彼は女が絡んだ途端にダメになる。
そんな時にフォローするのは互いをよく知る仲間しか居なかった。
ダメになったサンジを他所に、仕方なく船番を了承したシルクが考え始める。
全員が甲板に集まっていて、顔を見ながら考えると普段より楽だった。
「それじゃ他のみんなで探しに行くの？　私たちは大丈夫だけど」
「いや、病み上がりの二人だけを残すのは忍びない。おれが残って二人を守る。危険かもしれないからビビちゃんも残ろう。レディはおれが絶対に傷つけさせないさ」
「待て。お前のそれは個人的な意見を詰め込み過ぎだろ」
「その意見には私も全力で反対しますな」
再びウソップの声が飛び、同意するイガラムが顔を険しくした。
「バカ言え。おれは個々の力を考えて言ってる。そんな証拠がどこにあるんだ？」
「鏡を見てから言えよ。だらしない顔があるはずだぞ」

「見るに堪えない顔だな。やめといた方がいいんじゃねぇか？」
「あぁ!?　んだこらマリモ！」
挑発するようなゾロに反応し、反射的にサンジが彼へ詰め寄る。
両者はいつもの如く至近距離で睨み合った。
「てめぇでかい口叩ける立場かよ。てめぇに任せられねぇからおれが残るんだろうが」
「あ？」
「背後から不意打ちで一発ＫＯだってな。情けねぇ話だぜ。おれなら先に阻止できた」
「なんだと……？」
「サンジ、それ私も一緒だったんだけど……」
「いやぁ～シルクちゃんは気にしなくていいのさぁ。そういうことってあるよねぇ」
後ろから声をかけてきたシルクには笑みを見せ、再び視線を合わせ、睨み合う。
「レディ一人守れねぇとは驚きだぜ。世界最強の野望が聞いて呆れるな」
「どの口が言ってやがる。てめぇにどうにかできるとは思えねぇがな」
「ほう、自分の不甲斐無さは認めてるわけだ」
「正面からやり合ってりゃおれが勝ってた。なんなら証明してやろうか？」
「負けた上に言い訳かよ。剣士ってのはそこまでプライドがねぇもんなのか？」
「チッ――」
小さく舌打ちする。
ゾロ自身、わかっているつもりだ。油断していたで済まされるほど甘い世界ではない。命を取るか取られるかの世界で、そんな言葉はあり得てはいけないと以前から思っている。
これは彼の弱さ。奇襲、多勢に無勢とはいえ、それでも勝てる男にならなければ。

険しい表情になった彼は自分自身で理解していた。
敢えてそれを指摘するサンジは彼を叱咤激励するかのようで。
溜息をついたシルクは、普段より幾分優しい態度で二人を止めようとする。
「そこまでにしよう？　今はルフィとキリを探さなきゃ」
「ああ、わかってるよシルクちゃん」
「フン……」
二人が視線を切って背を向け合う。
傍から見ているとハラハラするが嫌い合っている訳ではない、と思いたい。
心配していないかのようなシルクはあっさり空気を変える。
「何か問題が起こってるなら急いだ方がいいよ。この島、危険かもしれないし、サンジも行ってあげて。こっちは大丈夫だから」
「だけどシルクちゃん、おれは二人が心配で」
「それなら一ついいかしら。ねぇイガラム、あなたも船に残って欲しいの」
「ビビ様ッ!?　一体何を!?」
口を挟んだビビの一言により、イガラムが絶望を味わったかのように絶叫する。
護衛である彼を置いていくという発言に、その驚きは当然だった。
「ビビ様！　私はビビ様の護衛をしなければなりません！　確かにお二人を守ることも重要だとは思いますが、なぜ私がという気持ちもありますよ！」
「それはもちろんわかってるわ。だけどねイガラム、私だっていつまでも子供じゃない。守られてばかりじゃいけないの。それはバロックワークスに潜入した時にも言ったはずよ」
「しかし！」
「私も強くならなきゃ。大丈夫よ、この一味で鍛えられてるんだもの」
にこりと笑うビビの目には迷いがなかった。
バロックワークスへ潜入すると決めた頃とは違う。あの頃には確

かに緊張と、隠し切れない恐怖心を感じていたはずだ。だが今は表情からそれが一切見られない。
彼女はきっと変わっているのだろう。この一味と共に一つずつ島を越える度に。
確かに理解もする。応援したい気持ちもある。
そう思う一方、心配する気持ちにだって嘘はなかった。
元より心配性な彼は、ビビがどこかで怪我をするかもしれないと居ても立っても居られない。
イガラムは迷い、送り出したい気持ちと心配する想いで板挟みになる。
見るからに狼狽する姿は見ていられず、溜息をつきながらナミが助け船を出した。
「たまには意見を尊重してあげなさいよ。過保護が本人のためになるとは限らないわ」
「むぐっ、そうかもしれませんが……！」
「ビビを信じてるなら任せなさい。心配しなくてもあんたが思ってる以上に立派よ」
ナミに諭されてイガラムが口を閉ざす。
あまり心配し過ぎても失礼だ。改めて思ったことでぐうの音も出なくなる。
ここは黙って彼女を行かせるべきだと判断し、ちらりと目を向ければビビが微笑む。
「ありがとう、イガラム」
「ぐっ……お気をつけて。何かあればお呼びください！　どこだろうと助けに参ります！」
「うふふ、ええ。もちろんそうするわ」
彼をあやすかのようにそう答えて、ビビは肩をすくめる。
大体話が纏まってきたようだ。堂々とした態度でウソップが言う。
「よし、メンバーは決まったな。それじゃお前ら気をつけろよ。怪我がねぇように」
「バカ、お前も行くんだよ」

「おれも是非そうしたいところなんだが実は病気なんだ。重度の〝島に入ってはいけない病〟にかかっていてな。お前らには言ったことがねぇかもしれねぇが――」
「島に着く度に聞かされてんだよ。いいからさっさと来い」
必至に抵抗するウソップは、呆れた顔のサンジに首根っこを掴まれて引っ張られる。
先にゾロ、ビビが船を降りようとしており、振り返る彼女は騒がしい声の合間に言った。
「ギャアアア～ッ!? 待て待て待て！ 自慢じゃねぇがおれは足が震えてるんだぞ！ こんな文明もねぇような大自然の島で危険がない訳がねぇ！ ルフィとキリが帰って来ねぇんだぞ！ 絶対どっかで巨大危険生物に襲われてるはずだ！」
「ああ、おれもそう思う」
「殺されるぅ～!? 巨大アナコンダに怪物ハリネズミに殺されるぅ～!?」
「人間死ぬ時は死ぬんだ。早いか遅いかだけだと考えりゃ怖くねぇだろ？」
「おれの仲間に殺されるぅ～!?」
「カルー、一緒に行きましょう？」
「クエッ!?」
「あなたが居てくれるからイガラムが残れるの。来てくれるでしょう？」
「本人すごく驚いてるみたいだけど……」
「汗が止まらないみたいね」
さも当然とばかりにビビがカルーへ問いかけるのだが、言われた彼は大量の汗を流し、激しく狼狽している様子だった。その姿を見てシルクとナミは何とも言えない気持ちになる。
しかし嫌味もなく純粋な信頼感を向けられてはノーと言えるはずもない。
カルーは恐る恐る頷き、ひどく怯えながらも彼女と共に船を降りた。

かくして、船長と副船長を探す捜索隊が島に降り立った。
彼らは深い森の中へ入り、広大な島の奥を目指し始めることになる。
その道中は一人と一匹が怯えて騒がしく、敵襲を恐れつつ、決して楽ではない旅だったようだ。

動物王

白い岩山の中腹付近、歪な円形の広場にて、動物たちが集まってひどく賑わっていた。
輪になった彼らの視線には、モバンビーが持っていた服を着た新たな王が居る。
貴族のようにも見えて、インチキな王様にも見える微妙な服を身に着け、明らかに困惑している様子のチョッパーが自分の体を見下ろす。
正直、カッコいいとは思えない格好だ。
端が破れた海賊旗は首に巻かれてマントのように。
帽子の上から王冠が被せられ、ヘンテコだと思うそれを決して気に入っている訳ではなかった。
「なんでこんな格好しなきゃいけないんだ……？」
「だって君は新しい動物王なんだもん。それに相応しい格好をしなくちゃ」
彼にその服を着せたモバンビーが笑顔でそう言う。
やけに親しげな態度だが思い当たる節がなく、言っている意味がわからない。
首を傾げたチョッパーは素直に質問した。
「動物王って？」
「君のことだよ。君はこの島の王に選ばれたんでしょ？　〝選定の鳥〟に」
「せんていの……？　それってさっきの大きい鳥？」
「そうさ！　選定の鳥は長い間この島を守り続けてる。彼に選ばれた動物はこの島の王になるのが決まりなんだ。つまり君は新しい動物王だ！」
「動物王？　えっ？　そんなの、おれは違うよ」
戸惑うチョッパーはぽつりと告げた。
モバンビーを始め、驚愕した周囲の動物たちが目を見開く。
「ち、違うって、どうして違うのさ。君は選定の鳥に選ばれたんだろ

？」
「選ばれたんじゃないよ。船で航海してたらいきなり連れて来られただけだ。どうしてここに来たのかもよく知らなかったし……おれは動物王なんかじゃない」
「それじゃあ――」
「おれは海賊だからね」
「かっ、海賊⁉」
叫んだ瞬間、モバンビーは慌てて後ずさり、他の動物たちもチョッパーから距離を取る。
一体なぜそこまで怯えられてしまったのだろうか。
再びわからなくなり、思わず首を傾げると同時、怒った顔のカラスケが大声を発した。
「てめぇ、この野郎！　動物王の名を語った海賊だと⁉　ふざけたことしやがって！」
「みんなどうしたんだよ。なんでそんなに怒ってるんだ？」
「この島に海賊は入っちゃいけねぇ！　人間もだ！　選定の鳥に連れて来られたから動物王かと思ったら、一体この島で何をするつもりだよ！」
「ちょっと待ってよ、おれは無理やり連れて来られただけで、何もするつもりは――」
「そんな……嘘だよねチョッパー。君は海賊じゃないだろ？　次の動物王なんだろ？　でなきゃ選定の鳥が選ぶはずがない。君は何か間違えてるだけなんだ」
「そんなこと言われても」
怒られたり、泣きそうな顔になったり、勝手気ままに話を進められて訳がわからない。
チョッパーは困惑し、返答ができなくなって黙り込む。
動物たちは見るからに落胆している様子だった。
勝手に期待した上に、説明もなく失望するとは失礼な話だが、なんとなく事情は伝わる。要するに彼らの勘違いだったようだ。
それがわかっても答えは変わらないものの、チョッパーは悪いこと

をした気になる。
モバンビーもまたがっくり肩を落としていた。古びた服を持ち出し、誰よりも歓迎してくれた彼だからこそ深く落ち込んでしまったのだろう。その表情には心が痛んだ。
服を脱ぐ機会を失い、その格好のまま、チョッパーが彼へ問うてみる。
「おれが動物王じゃなかったら、みんなそんなに困るのか？」
「うん……僕らの王様が死んじゃったんだ。だからこの島を守ってくれる人が居ない。森の番人たちも頑張ってはいるけど、島に来た人間たちには困ってるんだ」
「どうして人間に困るんだ？」
「ここは動物たちの国だ。人間が島に入るのは昔から禁止されてる。島の動物たちを殺したり、食べたり、そんな連中ばかりだから、キリンライアンが追い払ってたんだけど……」
「そのキリンライアンっていうのが、動物王だったんだな」
「うん……優しい王様だった」
モバンビーが悲しげな顔で俯くと、動物たちも落ち込んだ顔を見せる。
よほど尊敬された王だったのだろう。重苦しい空気は何よりの説明になった。
死は慣れないものだ。チョッパーもまた寂しそうな顔をする。
「ねえ、君は本当に動物王じゃないの？　選定の鳥に選ばれたのに？」
「ち、違うよ。嘘じゃない。おれは海賊で、動物王にはなれないんだ」
「どうして海賊になんてなるんだよ。どうしてあんな奴らに……！」
「お前、海賊が嫌いなのか……？」
両手をきつく握り、妙に怒りを感じる表情だった。チョッパーに対して怒りをぶつけている訳ではなく、この場に居ない誰か、おそらく海賊に向けられている。

そんな顔をするということは海賊が嫌いなのだろうと思う。
なぜ嫌うのかがわからなくて、そう質問するチョッパーは素直に理解できなかった。
チョッパーを見ていた視線が再び地面へ落ちる。
暗い表情になったモバンビーは小さな声で、恐る恐る言い出した。
「海賊は嫌いだ……あいつらは人の大事な物を奪っていく。他人の気も知らないで、簡単に誰かを殺したりするような最低な奴らだ」
「確かに、そんな奴らもいるかもしれないけど、そんな奴ばっかりってわけじゃ」
「ねぇチョッパー、君には海賊なんて似合わないよ。君は人の言葉をしゃべれるけど動物だ。この島で一緒に暮らそう。動物王として僕らを守ってよ」
「そ、そんなこと、できないって」
「お願いだよ。新しい動物王が生まれなきゃこの島は人間に荒されるだけなんだ。現に今も外から来た連中が長老たちやたくさんの動物を怪我させてる」
懇願するようなその一言にチョッパーの表情が変わった。
「怪我？　この島で何か起こってるのか？」
「そうなんだっ。外から来た人間たちが変な動物を操って、色んな動物たちがやられてる。あいつら何の種類かわからないけどめちゃくちゃ強いんだ。森の番人でも歯が立たない」
「そんな奴ら、おれでも勝てないよ。おれだってそんなに強くない……」
「そんなことないさ！　だって君は動物王なんだから！」
モバンビーは拳を握って強く言う。同意するように動物たちも頷いていた。
この時になってようやく歪な何かに気付く。
どうやら彼らは〝動物王〟という言葉に対して並々ならぬ期待を寄せているようだった。動物王が居れば必ず勝てる、動物王が居ればそれだけで安心。そんなおかしな意味合いを感じる。
ただの妄信ではない。それは狂った価値観だ。

国とは王様が居ればそれだけでいいというものではない。チョッパーは自身が生まれ育った国を見てきたが故に、Ｄｒ．くれはの話を聞いたために、国がどういうものかを漠然と理解している。
彼らの言葉は決して国を想うものではない。
どちらかと言えばワポルの考えに近い何かを感じた。
半ば無意識的にチョッパーは後ずさりをする。
妙な感覚がして怖くなったのだ。
彼の心境には気付かず、モバンビーは一歩近付いて彼に笑いかける。君が居れば大丈夫。そういった意志が笑顔に表れ、揺らぐことはない。この世の真理とでも思っていそうだ。
周囲の動物たちも同じ様子。動物王を頼る態度があった。
「海賊をやめて動物王になってよ。君は選定の鳥に選ばれたんだ。すっごく強いんでしょ？　君ならあいつらを島から追い出せる。そうしたらこの島にも平和が――」
「それは、違うと思う」
心優しいチョッパーは、彼らを傷つけるような言葉を吐こうとはしなかった。
だがその考えには居ても立っても居られず、ついには行動に移してしまう。
「チョッパー……？」
「これ、返すよ。きっとおれが持ってちゃいけないものだ」
着せられた服を脱ぎ、帽子の上から被せられた王冠も取って、揃って地面に置いた。
首に巻いた海賊旗は一味にとって大事な物だ。置いて行ったりはしない。敢えて取る必要もないかとそのままにしておき、チョッパーは両手で帽子の位置を直した。
その行動を見るモバンビーは信じられないものを見たという顔で。
理解ができないらしく、気付けば声が震えていた。
「ど、どうして脱ぐの？　王様らしい格好した方がいいかと思って準備したのに」
「さっきも言ったけど、おれは王様にはならない」

「どうしてっ。君は選定の鳥に選ばれたのに、動物王になる資格があるのに！」
「おれがなりたいって言ったわけじゃないさ。勝手に連れ去られて、勝手に動物王になれって、そんなの王様を決める方法じゃない。お前たちは間違ってる」
「間違ってなんかないよ！　この島はずっとこうして守られてきたんだ！」
「そうか。だったら王様はこの島の動物から選んでくれ。おれは仲間のところに帰らなきゃ」
「チョッパー！」
振り向いた彼は辺りを見回し、船を探し始めたようだ。しかし広大な島は海が遠く、メリー号がどこにあるのか、島の終わりがどこなのかさえも見えない。
そちらを向いたまま、モバンビーに背を見せて言う。
やはり言わずにいられなかったのは、彼が初めて出会った動物たちを心配するからだろう。
「おれが生まれた国の王様は、身勝手で、わがままで、王様だと思えるような奴じゃなかった」
唐突な話を始められてきょとんとする。
真意を掴めないモバンビーは黙り、背を見つめてその言葉を耳にした。
「おれが知ってる王様は国中の医者を追い出したり、医学を自分だけのものにしたり、苦しんでる人を嘲笑って助けようとしなかったり、国が海賊に襲われると誰よりも早く逃げ出したり。とにかくそんなことをする、最低の人間だった」
「そっか、チョッパーも苦労したんだね。でもこの島に居ればそんなことはないよ」
「もっと良い王様が居ればいいって思ってたんだ。でもドクトリーヌは、良い王様が居ただけじゃ良い国にはならないって言ってた」
「ん？　どういうこと？　良い王様が居れば良い国になるでしょ？　だってキリンライアンが動物王だった頃はこの国はとっても幸せ

だった。島の外から来る敵はキリンライアンが追い払ってくれるし、困ったことがあったらキリンライアンが解決してくれる。そんな幸せな国が――」
「それって本当に幸せなのかな？」
チョッパーは真剣な顔で振り返る。ぽかんとするモバンビーの目を真っ直ぐ見つめた。
「王様って何だろうってずっと思ってた。幸せな国って何だろうって。その時ドクトリーヌが教えてくれたんだ。良い王様が居るだけじゃいけない。優しい国民が居るだけでもだめ。王様と国民が手を取り合った時だけ、国は幸せになれるんだって」
「王様と国民が、手を……？」
「どっちか片方だけじゃだめなんだ。信頼できる仲間が居なきゃ、王様だって何もできない」
それが長年考え続けた答え。
彼自身、己の祖国を憂い、なんとかできないのかと考えていた。ヒルルクが考えていたように国を救うことができたならどれほど幸せだろうかと。だからこそ考え、わからないことがあればくれはに質問して、自分なりの答えを出そうともがいていた。
彼らの話を聞いてようやく確信に至った気がする。
必要なのは仲間だった。
一人で足掻いていても幸せにはなれない。本当に必要なのは信頼できる仲間だ。
チョッパーの目に迷いはない。強い覚悟だけが映されていた。
その目をまじまじと見たモバンビーは戸惑い、恐れを為すかのように後ろへ足を伸ばす。
「なんとかしてやりたいと思うけど、仲間が心配してるから帰らなきゃいけないんだ。それにおれは王様にはなれない。おれには大事な、海賊の仲間が居るから」
「あっ……」
視線を切ってチョッパーが歩き出す。
ひどいことを言ってしまったかもしれない。

つい彼らを否定するようなことを言ってしまったが、これで少しは変わってくれればという想いもあって、複雑な心境ながらチョッパーは振り返ろうとしなかった。
この島の住民が変わらなければ国が変わることはない。
あとは彼らの問題だと、心を鬼にしてその場を去ろうとする。
少し歩いて、さてどこから岩山を降りようと考えていた時だった。
モバンビーが大きな声を出し、反射的にチョッパーが振り返る。
「待って……待ってよ！　しょうがないじゃないか！　僕らだってなんとかしたい、わかってるんだよ！　誰かに任せてるだけじゃだめなんだって！」
振り返ったチョッパーの目に、地面を睨みつけるモバンビーの姿が映る。
心を鬼にすると決めたばかりなのに。
彼の足は不思議と動かなくなってしまって、モバンビーから目が離せなくなった。
「だけど、僕らには力がないんだ……人間が持ってる武器には敵わないし、今までたくさんの仲間が死んじゃったり、攫われていった。どうしたらいいかだってわからない。だからキリンライアンがいつも助けてくれて、でも、キリンライアンも死んじゃって……」
「モバンビー……」
「動物王が居なきゃこの島で住むことはできなかった！　僕らは動物王が居たから今まで生きてこれたんだよ！　他の国がどうか知らないけど、動物王は必要なんだ！」
余裕のない顔でモバンビーが叫ぶ。
それからすぐ、乱暴な歩調で歩き出したモバンビーはチョッパーに追いつき、彼の手を握ると強く引っ張って歩き始めた。歩き去ろうとした方角とは逆の方向に向かう。
「来て！」
「ど、どこ行くんだよ」
「見せたい物があるんだ！」
ぐいぐい引っ張り、山を下りていく。

坂道を下ると森へ入って、迷いもせずに奥へ進む。
引っ張られている間、チョッパーは敢えて何も言わなかった。モバンビーの真剣な横顔を見ていると何も言えなくなり、止めてはいけないのだと感じている。
彼の歩調は速くなる一方。
必死について行って足を止めた時、彼の目の前には古びた廃墟があった。
「これは……？」
「僕の船だよ。この船に乗ってこの島に流れ着いたんだ」
半壊し、ほとんど形を成していない船が目の前にある。
小舟と呼んでも差し支えないほど小さな物で、屋根がある一室だけ存在し、中を覗き込んでみると外観と変わらず壁や床が崩れて、物が散乱しており、ひどい有様だ。
もうずいぶん長い間放置されていただろう。
人が乗れる状態ではなく、まさしく過去の遺物と化していた。
「父さんと一緒にこの船に乗って航海してたんだ。だけど父さんは殺された……海賊に」
「えっ？　海賊、に？」
「うん……」
じっと船を眺めながら、静かな声で語られる。
「嵐の夜に、突然海賊に襲われて、父さんが殺された。僕は何もできなくて、怖くて」
「そうなのか……」
「わかってるんだよっ。僕が強くならなきゃいけないんだってことは……でも」
モバンビーの手がそっと胸を押さえる。
そこに刻まれた深い傷跡はその時についたものなのだろう。
トラウマになっているはずだ。今よりも幼い頃に父親が殺され、その瞬間を目撃してしまった。子供が受け止められるほど簡単な出来事ではない。
チョッパー自身も、大切な人を失う痛みや苦しみを理解している。

そのせいか、他人事とは思えず、彼の小さな声に眉根が寄せられていた。
「怖いんだ……！　戦おうとしたけど、自分が死ぬのも、仲間が死ぬのも怖くて、結局何もできなかった。最低だよね。それなのにチョッパーには戦わせようとしてる」
「気持ちはわかるよ。おれだって戦うのは怖いし、できれば戦わないのが一番だ。島を出たのは初めてだから、怖いものなんてたくさんある」
「チョッパーも？」
「うん。だけど、ルフィたちに出会って、思ったんだ」
チョッパーはモバンビーへにこりと微笑みかける。
優しい表情を見て彼は驚きを露わにした。
「怖がってたって何も変わらない。でも勇気を持ってやってみたらさ、案外楽しいんだ。最初は怖かったけど今は心から海賊になってよかったって思う」
「だって、海賊は……」
「みんながみんなそうじゃないよ。ルフィたちはいい海賊なんだ」
「海賊に良い悪いってあるの？」
「う～ん、わからないけど、少なくともルフィたちは安全だ。確かに戦うことはあるけど、無暗に他人を傷つける奴らじゃない。みんな優しいんだ」
「そう……」
モバンビーは言葉に詰まるも、すぐに強い眼差しで訴えかけた。
「だけどチョッパーは動物じゃないかっ。それなのに人間と一緒に居ていいの？」
「それはそうだけど」
「この島には動物しか居ないんだ。チョッパーより珍しい動物だっていっぱい居るよ。僕らも仲間だろう？　海賊をやめてさ、みんなで一緒に暮らそうよ」
「そういうわけには……」
熱意を感じる口調だったが素直に頷く訳にはいかない。困った様

子のチョッパーは言葉に詰まるものの、意志ははっきりしており、どう答えようかと迷う。
そんな静寂の一瞬、奇妙な声が聞こえた。
「やっと見つけたぞぉ～……奴の船だ」
咄嗟に二人は森へ振り返る。
どこかから異質な感情を含む声が飛んできた。
おそらくは森の向こう。まだ姿は見えていないが近くに居る。
二人は怯えるように身構えて、周囲の森へ視線を走らせ始めた。

ヒカリへ

どこかから何かが爆発したような、大きな物音が聞こえた。
木霊するそれに気付き、白い岩山に居た動物たちは狼狽して騒ぎ始める。そう遠い場所での音ではない。そちらの方角に何があるのかも大体は予測できる。
顔を上げた動物たちはモバンビーたちが去った方を眺め、カラスケが代表して叫ぶ。
「モバンビーの船がある場所だ！　まさか人間が!?」
驚愕した声を発してカラスケが走り出す。その後ろに続いて他の動物たちもついて来る。集団で駆けて音が聞こえた方向に全力で走っていった。
爆発音は一度聞こえたのみでそれ以外は聞こえない。だが問題はありそうだ。
岩山の端に到着した時、崖下にその場所が見えた。
もうもうと煙が立ち上って、どうやら古びた船が破壊されたらしい。
チョッパーがモバンビーを背に庇い、崖を背にして険しい表情をしている。
対峙する位置に三人の男が居た。
一人はモヒカン頭の小柄な男で船の残骸を漁っており、手でバラバラになった木材を跳ね除けながら本の類を探し出し、確認しては捨てるという作業を繰り返している。
その彼を守るようにして、巨漢の男と長身の男がチョッパーたちを睨んでいた。
「モバンビー！」
「あっ、カラスケ！」
カラスケが崖の上から声をかけ、気付いたモバンビーが彼を見上げる。
互いに無事だった。だがこの状況はそれだけでは終わらなそうだ。
「やっぱりこいつらか……！　長老たちをやった奴だ！」

「ど、どうしようっ。父さんの船が……」
「この島の動物を傷つけたのはこいつらなのか？」
険しい表情をするチョッパーがモバンビーへ問いかけた。
船が壊されたことに動揺する彼は声を震わせる。
あの場所が唯一、すでに死別した父親との思い出が残る場所だった。自覚はなかったかもしれないが彼の心を支えるものであったことも事実。父との思い出が破壊されてしまった気がして、目に一杯の涙を溜めて恐怖心を覚えていた。
見るからに様子が変化したモバンビーを見やり、チョッパーは心配していた。
動揺の大きさは肌で伝わってくる。
彼を守らなければという気持ちが強くなって、恐怖心を持ちながらも前方の三人を睨みつけた。
妙な外見の三人で、何を目的としているのかわからない。
しばらくすると小柄な男、バトラー伯爵が顔を上げて、一冊の本を手に持っていた。ボロボロの船内にあったとはいえ雨風に晒されてひどい状態にある。しかし彼は邪悪な笑みを浮かべた。
見つけた本を持ち上げ、嬉しそうにページを開く。
やっと探し物を見つけた。
読み辛くはあったが喜びも大きく、彼の目は文字を追い始める。
「これかっ。〝王なる宝〟の在処を記す資料は！」
バトラーの声が大きくなる。
しかし彼が何を言っているのかを理解するのは難しく、チョッパーは顔をしかめる。呟いてしまったのは意識せずにだったものの、バトラーはその一言に反応した。
「王なる宝……？」
「そうだ。おれは長年の研究によってその〝王なる宝〟が動物の角であることを突き止めた。だが肝心の動物が見つけられずに困っていたのだが、こいつはやはり情報を隠してやがった。ようやくわかったぞ……この島に居る〝動物王〟がその角を持っているんだな！」
「バトラー様。こいつらにそこまで教えなくてもいいのでは」

「ハッ!?　しまった!」
「バトラー様は隠し事ができないお人なのじゃ。そんな目で見るな!」
バトラーの両隣に立った屈強な男たちが口々に言う。
高身長で膨れ上がった筋肉を持つ巨体、犬のような顔をしているのがホットドッグ将軍。
すらりと長身で特徴的な髪型を持つのがヘビー総裁である。
どちらもバトラーを心酔し、彼を守るために同行する護衛であり実力者であった。
おかしな奴らだと思いながらもチョッパーは警戒して眉間に皺を寄せる。朽ちていたとはいえ船を一瞬で破壊したのがホットドッグの蹴りだと知っていた。
かなりの強さだと推測でき、人知れず緊張感に包まれていく。
その背後でモバンビーが怯えていた。
島外からやってきた人間に慣れていないだけでなく、彼らは仲間を傷つけた張本人。暴力を振るう人間なのだと知っていて、海賊に違いないと思い込んでいた。
緊張が背中に伝わり、チョッパーの意識は確実に変わっていった。
彼を守らなければ。
いつの間にか自分でも気付いていない内にそう考えて、目つきはすでに以前とは違う。
バカ正直に説明してくれたおかげでわかっていることは一つだけある。
彼らは、動物王を探しているのだ。
前方の二人、おまけに崖の上には数多の動物たちを見つけ、本を捨てたバトラーはほくそ笑む。
モバンビーは人間で、チョッパーは人間の言葉を使える。知りたいことがあれば質問すればいいだけの状況があって、島の住人ならば当然知っているはずだ。
動物王はどこに居るのか。
それだけ知れれば用はない。嘘がつけない彼は素直に言い始めて

しまう。
「せっかくこれだけ集まっているのだから聞いてやろう。動物王はどこに居る？　なぁに、素直に教えてくれれば大怪我はしなくて済むぞ。どっちにしたって怪我はするんだがな」
「バトラー様、それは隠しておいた方がいいのでは」
「あっ」
「バトラー様は今冗談を仰ったのじゃ！　今の内に素直に吐けば誰も傷つかずに済むぞ！」
ホットドッグが指摘し、バトラーが間抜けな声を出すため、慌ててヘビーがフォローする。
そのやり取りを見ているだけで十分だった。
彼らは最初から動物たちを無事で帰すつもりなどない。素直に言おうが、隠そうが、どちらにしても傷つけられてしまう。これでは選択権がないのと同じだ。
確かに、出会ったばかりの彼らのために命を張る必要はないかもしれない。
そう思いながらもチョッパーは逃げる気など微塵もなかった。
「やめろ！　この島に手を出すな！」
「だから言ってるだろうが。素直に動物王の居場所を教えれば怪我はするけどしないと」
「しないと仰っているのだぞ！　お前たちわかっているのか！」
嘘をつけないことで分かりにくい表現になっている。しかし確信があった。このまま見逃していいはずがない人間だと考え、チョッパーの目は鋭くなるばかり。
恐怖心はある。素直に言えば怖い。だが守るための手段はすでに思い付いていた。
ある時、チョッパーは決意を固めて、彼らに向かって思い切り叫んだ。
「おれが動物王だッ!!」
「何？　お前が？」
「チョッパー!?」

それは突然の宣言だった。
自分自身、どうして言ってしまったのだろうと、震えそうになりながら思う。だが一度言ってしまった以上はもう引き返すことはできない。
バトラーは不審そうに首を傾げ、驚くモバンビーは思わず彼の名を呼ぶ。
崖の上で動物たちも鳴き声を発してどよめいていた。
「お前たちの狙いはおれだろう！　だったら他の動物には手を出すな！」
「チョッパー、どうしてそんなことを……!?　君は動物王じゃないってさっき――」
「そうか！　お前が動物王か！　だとすればその角こそが王なる宝……！」
「そ、そうだ！」
モバンビーの声は興奮したバトラーには届いていないようだ。
これ幸いとチョッパーが前に出て彼らと対峙する。
「約束しろ！　これ以上、島の動物たちを傷つけないって！」
「ああ、もちろん約束するとも！　そんな気はさらさらないがな！　さぁ、その角を寄こせ！　手に入れればとてつもないパワーが手に入るという〝王なる宝〟を！」
「お前っ、それじゃ約束になってないだろ！」
「やかましい！　貴様如きになぜ約束なんかせねばならんのだ！　おれ様は王なる宝さえ手に入れば他のことなんてどうでもいい！　無限のパワーを手に入れ、世界の王になるのさァ！」
「無茶苦茶だっ。これじゃ話にならない……！」
「さぁ寄こせ！　無限のパワーを！　王なる宝を！」
交渉で皆の安全を確保できるような相手ではない。
早まったかとチョッパーが焦り、動揺して思考が纏まらなくなる。
動かないチョッパーに苛立ったのか、突如バトラーが動き出し、服の下から何かを取り出す。背中に〝悪〟と書かれたコートの下からはバイオリンが現れた。

「出し惜しみする気か。それならこちらにも考えがあるぞ」
「何をするつもりだ！」
「どうせ最初から生かしておくつもりはないんだ！　だったら死体から奪った方が早いな！」
バトラーが優雅に、速いペースで曲を弾き始める。
それ自体に意味は無さそうに感じるも、数秒と経たず変化を感じる。地響きを感じたのだ。まるで大型の動物が集団で走るかのような、遠くに居ても存在感を無視できない地面の揺れがある。
そう時間も経たずに姿が現れる。
森の木々を倒しながら、辺り一帯を破壊する動物の群れが現れた。
それはまるでアルマジロのような、鎧にも等しい硬度を誇る黒色の外皮を持つ、ツノクイという珍しい動物である。獰猛で攻撃性が強く、同類でなければ全て敵とでもいうかのようだ。
真っ直ぐ走ってくるだけで木々を薙ぎ倒し、花を踏みつけ、ひどく荒々しい。
もはやそれを動物と呼ぶのもおこがましいだろう。
まるで存在自体が一種の兵器の如く、彼らは動くだけで数多の破壊を生み出していた。
どうやらバイオリンの音色によって操られているらしい。
目敏く気付いたチョッパーは逡巡する。
モバンビーを守るにはどうすればいいか。考えるのはそれのみ。
気付けば勝手に体が動いていて、彼は走り出していた。
「おぉい！　おれはこっちだぞ！　ついて来い！」
「フン、逃がすか。ツノクイども！　奴を殺して角を奪え！」
バイオリンを弾くバトラーが叫ぶとツノクイの群れが方向転換する。
獣型に変身して走り去っていくチョッパーの背を追い、三人はツノクイの背に跨り、すぐに追い始める。そうなればもう動物たちを狙う者は居なかった。
チョッパーによって助けられたのだと気付くのは当然だった。
呆然とするモバンビーは言葉を失くす。

敵の存在。庇ってくれたチョッパー。理解できても反応に困る。
とにかく助けなければと、そう思ってハッとした。
モバンビーは咄嗟に崖の上に目を向けた。
そこには島の住民、仲間たちが大勢揃っている。
多種多様の種類が居るが群れと呼んでも差し支えない。他の島には居ない珍獣ばかりだ。それぞれ得意なことも違っているし、助け合えばできることだってあるはず。
彼は希望を持って助けを求めた。
「みんな！　チョッパーを助けないと！　力を貸してよ！」
「助ける？　バカを言うなよモバンビー。あいつは本物の動物王じゃないんだぜ」
反応したのは唯一人語を操れるカラスケだった。
どうやらチョッパーへの不信感を持っているらしく、不服そうな顔でモバンビーを見ている。
「そんなっ。だってチョッパーは、僕らを助けるために嘘をついたんだよ？　あいつらが僕らを狙ってるってわかってるからここを離れていったんだ。それなのに僕らが見捨てるなんて……」
「モバンビー、忘れちゃいけないぜ。あいつは海賊なんだ。あいつらと一緒さ。どこのどいつかは知らないけどきっと悪い奴に決まってる。助ける必要なんてない」
「だけど……」
「海賊は嫌いだってお前が言ってたんだろ。海賊同士で潰し合ってくれるならその方がいいさ。その間にこれからどうするかみんなで対策を考えよう」
カラスケの言っていることはわかる。頭の良い者ならばそうするはずだ。優先すべきは仲間の命と島の安全であり、部外者にまで気にかけていては問題の解決には至らない。
しかしそれでいいのだろうか。
自分が死ぬかもしれない脅威を目の前にしながら、チョッパーは敢えて敵の注意を引いた。出会ったばかりの彼らを助けるために自分が囮になっている。

このまま見て見ぬふりをしてしまっていいはずがない。
そう考えて、モバンビーの必死の訴えは続けられた。
「本当にそれでいいの？　このまま見捨てて、みんなは何も思わないの？」
「そりゃ、ちょっと後味は悪いけどさ。だけどおれたちが行ったところで何もできないし」
「僕だってそう思うよ。思うけど、やってみたら案外できるかもしれない。やってみなきゃ変わらないままなんだ。この国はずっと海賊に怯えたままになる」
「でもやっぱりおれたちじゃ敵わないよ。あのツノクイどもは森の番人でも勝てないんだ」
「わかってる、わかってるけどさ……」
モバンビーは俯き、絞り出すような声になった。
「良い国は王様と国民が手を取り合わなきゃだめなんだ。全部王様に任せたままじゃ、この国は平和にもならないし、良くもならない……」
「モバンビー……」
「キリンライアンなら助けるって言うよ！　たとえ敵わなくても、仲間だからって、黙って見捨てるなんてできないって言うに決まってる！」
顔を上げた時、モバンビーの顔から迷いが消えていた。
その顔を見たカラスケや動物たちは答える言葉を失くす。
「僕らはキリンライアンに頼り過ぎてたんだ。何でもできたとしても、キリンライアンに手を貸して助けてあげるべきだった……このままじゃ何も変わらないよ！　今やらなきゃ僕らはずっと海賊に怯えながら逃げ続けなきゃいけない！　それでいいの!?」
「そんなのは嫌だけど、でも……」
「僕はチョッパーを助けたい！　みんなの力を貸してよ！」
必至の叫びは確かに聞こえていたはずだ。
動物たちは互いの顔を見合わせ、戸惑っている様子を見せるばかり。

どうやら、聞こえていても伝わってはいないらしい。
モバンビーは顔色を変える。
怒気を露わに走り出して、しかしチョッパーの方へは向かわず、岩山の坂を登り始めたのだ。
「もういい！　みんなが助けてくれないなら僕一人でやる！　もう頼まない！」
「あっ、モバンビー！」
彼らの横を通り抜けてキリンライアンの住処を目指した。
脇目も振らずに洞窟の中へ入り、息絶えた遺体を前にしてようやく足を止める。
呼吸が有れるが気にしてもいられない。
大きく、荘厳なキリンライアンの体を眺め、モバンビーは悲しげな顔になった。
「ごめんよ……僕には、これしか思いつかないんだ」
そっと手を伸ばし、美しく魅力を損なわない黄金の角へと触れる。
「だけど、仲間を助けるためなんだ。わかってくれるよね？」
返答がないことを知りながら問いかけてみる。
もうここに彼は居ない。だが不思議と彼の声が聞こえた気がして。
力強く頷いたモバンビーは、もう迷わなかった。

ヒカリへ（2）

どこへ向かうのかもわからず、チョッパーは走っていた。
島の地形を知らない。しかもその島は広大で、大半が森であるため見分けがつかずに、とにかく敵から逃げるため我武者羅に走るしかなかったのだ。
獣型になって全力で足を動かす。
森の中は足音が響き、だがそれは彼のものではない。
ちらりと後方に目を向ければ三十頭を超えるツノクイが追ってくる。ただ走るだけで木々が乱雑に倒されていき、凄惨な光景がそこら中に生み出されていく。
ツノクイは強固な肉体を持っている。
強靭な脚力を持ち、木にぶつかるだけで幹が折れ、次々倒れる様は異常であった。それも集団で肩を並べているせいで範囲は途方もなく広かった。
自身が逃げることで島の被害が広がっている。
そう思うと心が痛んだが、動物たちを見捨てる訳にもいかない。
彼らを守るにはこうするしかないのだと自分に言い聞かせ、彼は必死に走る。白い岩山からはずいぶん離れたように思う。徐々に景色は変わり始めていた。
森が途切れた時、思わずチョッパーは笑みを浮かべた。これ以上は森を傷つけずに済む。
ただ、それは彼にとって良い事ばかりでもなくて。
先程とは別の岩山を登り始めた時、障害物が少なくなった分、ツノクイの速度も増していた。
凶悪な足音はさらに大きくなっているように思える。疲労を感じて遅くなるならともかく、速くなるのは異常だ。どうやら彼らは普通ではないスタミナを備えているらしい。
対して、チョッパーは疲労を感じる一方だ。
今すぐ追いつかれることはないが限界は必ず来る。
その前に打開策を見つけなければ、結果は彼が角を奪われて殺され

るだけだった。
「なんとかしなきゃ……！　逃げてるだけじゃだめだっ。あいつらを倒さないと！」
「待あてぇ～！　王なる宝を寄こせェ！」
ツノクイに跨り、操作しているだろう三人が追ってくる。
おそらくツノクイを止めることはできない。可能だとしても簡単ではないだろう。ならば最も早くツノクイを止める方法は、彼ら三人を倒すことだった。
どこかで足を止めて立ち向かうか。しかしそれではツノクイに潰される。
方法はわかっても実行が難しく、チョッパーは真っ直ぐ前に向かうしかなかったようだ。
大小様々な岩が転がる地帯に突入していた。
着実に山頂へ迫っていて、そこに着いてしまえば逃げ道は限られる。
今の内に手を打ちたかったものの、追われている以上はそれさえ難しい。
そして彼は前方の道が無くなったことに気付く。
山頂に辿り着く前に崖へ直面し、驚いたことで思わず足を止めてしまった。
「あっ!?」
落ちるギリギリで足を止め、崖下を見下ろす。そう高い訳ではないようだったが、下は川。しかも激流で水の流れが速い。水深はそこまで深くなさそうだ。
だが浅い、深いにかかわらず、チョッパーは悪魔の実の能力者。
水中に身を沈めれば力が抜けてしまい、それだけで命を失う可能性が高い。
大地を揺らしながら響いていた足音が止まった。
チョッパーがゆっくり振り返ると、ツノクイが立ち止まり、跨ったバトラーが笑っている。やはりというか追い詰められてしまったようだ。

「ここまでのようだなぁ。さぁ、王なる宝を渡せ。その角を！」
「うっ……」
「ホットドッグ将軍！　ヘビー総裁！　奴から角を奪い取れェ！」
「はっ！」
ツノクイの上に居た二人が飛び出し、チョッパーの前に立つ。
右側にホットドッグ、左にヘビー。どちらも強そうだ。
どうやって逃げようかと考えるチョッパーは辺りを注意深く見回すも、良い手が見つからない。いっそ崖から飛び降りてみるかとも思い、死ぬだけだと思ってやめた。
まだ打開策が見つからず、表情は焦っていく。
「では私が仕留めてみせましょう。動かなければ楽に死なせてやるのじゃ」
「くそっ、殺されて堪るか。まだ冒険は始まったばっかりなんだ！」
「無駄無駄。私は狙った獲物は敵も女も逃がさない。私に出会ってしまった時点でお前はもう終わっていたのじゃ」
ヘビーは背にあった剣を抜く。
刃渡りが長く、いくつかの関節がある。それは刃を持つ剣であり、関節が伸びて鞭のように、蛇のようにしなる武器であった。
腕を振るだけで風を裂き、びゅんと音がして地面を抉る。
硬い岩があっさりと切り裂かれていて、チョッパーは背筋に悪寒を覚えた。
体の大きいホットドッグよりマシかと思ったがとんでもない。その異様な武器は確かな殺傷力を見せつけ、戦う前からチョッパーを怯えさせている。
恐怖心は体の動きを鈍らせる。
全く持たないのも問題だが、チョッパーのように戦闘に慣れていない状態では、判断力を鈍らせることによって戦いを楽に終わらせる方法になる。ヘビーはそれを経験で知っていた。
チョッパーが戦いに慣れていないことはすでにバレていた。
立ち振る舞い、仕草、目の動きや、彼の動きの全てで理解できる。
ヘビーは余裕を見せる笑顔で、剣を振りながらゆっくり彼へ歩み

寄った。
「怯えているのじゃな？　無理もない。私とお前の力の差を感じればそれは当然の反応じゃ」
「う、うるせぇ！　お前なんか怖くねぇぞ！」
「口と態度が合っていないぞ。虚勢を張るのが苦手なようじゃな」
にやりと笑い、突発的に動き出した。
ヘビーはチョッパーへ真っ直ぐ接近していき、彼はなぜか、咄嗟に人獣型に変形する。
鞭のようにしなる剣を振り上げながらヘビーが迫った。
その瞬間、轟音が鳴り響いて地面が揺れる。揺れた、と感じたのはほんの一瞬で、足場が粉々に破壊されていた。崖下から衝撃を与えられて足場が無くなったのだ。
二人の体が浮遊感を感じ、落下し始める。
「んなっ、なんじゃあっ!?」
頭から落ちていくヘビーは視界に川を納め、抵抗する暇もなく着水した。
流れこそ速いが水深が浅い。顔面を強かに打ち付け、立ち上がると水は足首までしかなかった。
痛む顔を押さえながら立ち上がると、前方にも同じく着地した人物が居る。
背を向ける彼を睨みつけ、ヘビーは怒りを込めて叫んだ。
「あ～クソ、湿気ちまったなぁ……」
「誰じゃ!?　貴様が何かしたのじゃな！」
濡れてしまって煙草の火が消え、捨てる訳にもいかずポケットに仕舞う。
その後で振り返り、サンジは冷ややかな目でヘビーを睨んだ。
「二つ、お前に確認したいことがあった。一つはおれの仲間を殺そうとしたこと」
「仲間だと？　そうか、アレの仲間か」
「口の利き方には気をつけろ。チョッパーはうちのクルーだ」
ギロリと睨みつけ、深く息を吐いてから続ける。

「二つ目。狙った獲物は逃がさないとか言ってたな。女もだと」
「ああ、もちろんだ。手に入れた女は星の数ほど。当然敵も一人として逃がしたことは――」
「嘘つけッ」
強く歯噛みし、激しい怒りが向けられていた。
もはやチョッパーを殺そうとしたこと以上に怒っている風にも感じるほど。
ヘビーが眉間に皺を寄せた時、サンジの怒りは最高潮にあった。
「てめぇなんぞよりおれの方がモテるに決まってる……！」
「何ぃ？」
どうやら、男のプライドとでも言うべきか、戦いの意味が変化している。
二人は一歩も引かずに睨み合いを続けていた。
サンジが崖を蹴り壊したことで、ヘビーは川へ落ちた。だが落ちるはずだったチョッパーはその場にはおらず、崩れた崖の下、出っ張った岩を掴むゾロによって抱えられている。
どこから来たのか、彼の危機を救ってくれたらしい。
涙さえ浮かんでくるチョッパーは彼にしがみつきながら笑顔になった。
「サンジィ……ゾロォ！」
「バーカ。男がそう簡単に泣くんじゃねぇよ」
存外優しい笑みを見せて、彼は簡潔にそれだけを告げた。
多くを説明する気などない。とにかく目の前には敵が居て、戦う術を持っている。ならば戦って障害を排除するだけ、理由などその後で聞ければ十分だ。
ゾロはチョッパーの首に巻かれている海賊旗をぐっと掴んで腕に力を込める。
えっと声が出た彼は少なからず驚いていたようだ。
「飛ばすぞチョッパー。上手く着地しろよ」
「ええっ!?　投げるつもりか!?」
「んんッ！」

「うおおおおおっ!?」
右腕で思い切り投げ、軽い体は放物線を描いて飛び、無事だった足場にべしゃりと落ちた。
その後でゾロが崖を登り、同じくバトラーたちの視界に入る。
すぐさま起き上がったチョッパーは地面で鼻先をぶつけており、振り返った直後にゾロへ文句を言い始めた。助けてもらったことには感謝しているが彼の行動は乱暴過ぎた。
「どうして投げるんだよ!? あのまま登ってればよかっただろ！」
「両手が塞がったら登りにくいだろ」
「じゃあ離せよ！ おれだって自分で登れたのに！」
「うるせぇな。どのみち無事だったんだ、忘れろ」
ゾロとチョッパーが戻ってきて、バトラーは表情を歪めて驚きを隠せない。
突然崖が崩れたのもそうだ。唐突な出来事でなぜそんなことが起こったのかさえ理解できない。しかし何にせよ王なる宝はまだ手に入っていなかった。
怒りが湧いてくる。
求めている物は手の届く場所にあるというのに、なぜこれほど時間がかかるのか。
待ち切れない様子だったバトラーは感情的に騒ぎ始めていた。
ヘビーが崖から落ちた以上、その場で命令を聞けるのはホットドッグのみ。
鋭い声を飛ばされながらも前へ進み出る。
彼の目は確実にゾロの姿を捉えていた。
「ええい、なんでここへきて邪魔が入るんだ！ ホットドッグ！」
「はっ」
「邪魔する奴は始末しろ！ 生かして帰すなよォ！」
「了解ですけん」
ホットドッグが歩いてくる様を見てゾロが手を振った。チョッパーに逃げろと伝えたらしい。一人で逃げていいものかと迷う彼は困惑していたが、任せることを決めて傍を離れる。

幸い、ホットドッグの目にはゾロしか映っていない。
二人は正面から対峙し、互いの得物へ手にかけた。
「お前は運が悪かったなぁ。おれは世界最強の戦士、ホットドッグ将軍！」
「へぇ、世界最強。そりゃありがてェ」
相手を怯えさせようとしたのか、そう言ってホットドッグは腕の筋肉を見せつける。
しかし彼に怯えた様子はなく、ゾロは好戦的に笑っていた。
闘志を向け合う二人を気にしながらもチョッパーはその場を離れようとする。
その時、バトラーは彼の動きに気付いていた。
当然見逃すつもりがなくて、バイオリンを構えながら叫んだ。
「待てェ！　どさくさに紛れて逃げられるとでも思ってんのか！」
「わっ、見つかった!?」
「当たり前だろうがァ！　こっちにはまだツノクイが居るんだ、逃げられると思うなよォ！」
見つかったと気付いた途端に体が跳ねる。
部下の二人がそれぞれ敵を見つけて離れたところで、彼はツノクイを操るバイオリンを持ち、本人の実力云々は抜きにしてもチョッパーを仕留める方法はあった。ツノクイはこの島において最強生物だと考えているため、撤退など考えるはずもない。
ただバイオリンを弾けばいい。それだけで敵を仕留められる。
バトラーは笑い、チョッパーもまた脅威だと感じて表情を引きつらせていた。
「必殺！　火薬星！」
右腕が動いて、今まさに弾かれようとした瞬間だった。
突如飛来した弾丸がバトラーの顔面へ直撃し、小さな爆発を起こす。
バトラーの体はツノクイの背から滑り落ち、バイオリンも手から離れて転がった。
見ていたチョッパーにも何が起きたかわからない。ツノクイたち

も突然の爆発に驚き、攻撃性の強さを表に出して動き出し、状況は慌てふためいた様相となる。
とりあえずバトラーが倒れたことは確かだ。
チョッパーは辺りを見回し始め、何が起きたのかを確認しようとする。
犯人はすぐにわかった。
カルーに跨ったウソップがパチンコを構え、チョッパーを呼んでいたのである。
「チョッパー！　こっちだ！　真っ直ぐ走って来い！」
「ウソップ！」
「いいか、真っ直ぐだぞ！　びびらずこっちまで走れ！」
ウソップが再びパチンコを構えた。狙いはツノクイの群れに向けられている。
「必殺、煙星！」
放たれた弾丸は一匹のツノクイの顔に当たり、破裂して、広範囲に渡って煙幕を張った。
真っ直ぐ走れとはこれを言っていたのだ。視界が極端に悪くなり、正面にはツノクイの群れ。敵がどこに居るかさえわからなかったが目的はわかった。
チョッパーは目つきを変え、覚悟を決めて足を前へ運び出す。
自ら煙の中へ突っ込み、ツノクイの体を避けてひたすら真っ直ぐ走った。
不安は大きい。すぐ傍に混乱するツノクイの存在を感じ、実際視界にも映っていて、いつ踏み殺されるのだろうという恐怖との戦いだった。
しかしそこを抜けた時、視界が晴れると同時にチョッパーは仲間の姿を見つける。
素早くカルーが駆け寄ってきて、背に跨るウソップが手を伸ばしてくる。
チョッパーは彼の手を取り、ぐいっと引っ張り上げられた。
カルーの背に乗って全力でその場を離れる。

煙が晴れればツノクイは追ってくるはず。現に今、煙がない場所へ出た数匹が彼らに気付いた。
数匹が気付くともう遅い。すでにツノクイは鳴き声を発して意思疎通を図り、反転してカルーへ向けて走り出す。すぐに怒号のような足音が轟いてきた。
ウソップの前に座らされ、後ろを振り返ったチョッパーは恐怖を覚える。
あれはカラスケたちとは違う。敵を破壊することしか考えていない動物だ。
彼らの声を聞いて顔色を変えてしまい、ウソップは慌ててチョッパーに声をかける。
「おいチョッパー、大丈夫か!?　一体何がどうなってんだよ！」
「あいつら、おれたちを殺す気だ……誰かを殺したくて仕方ないって言ってる」
「何イ!?　お前、あいつらの言ってることわかるのか!?」
「うん。おれは元々動物だから……」
カルー自身も怯えているが、振り返ろうともせずに全力で走る。彼は超カルガモという種だ。足の速さとスタミナには定評があり、性格的に逃げ足となればさらに速くなる。
ツノクイがどれだけ速かろうが追いつける速度ではない。
スピードに関しては絶対の自信があって、二人を乗せた今は余計に負ける訳にはいかなかった。
追ってくるツノクイを置き去りに、カルーは山頂を目指して駆け抜けた。
その背ではウソップとチョッパーが話している。
唐突な登場が気になり、状況を知りながら思わず質問していたようだ。
「みんな、なんで来てくれたんだ?　おれ、何も言ってないのに」
「遠くからお前があの変な奴らに追われてるのが見えたんだ。それで先回りしたんだよ」
「そうなのか……ごめん。おれのせいで、みんなに迷惑かけて……」

「何言ってんだ、仲間じゃねぇか。そんなことでいちいち謝るなよ」
にかりと笑うウソップを見て、チョッパーは目を潤ませる。
仲間という言葉をしみじみと噛みしめた。
追われる理由も知らずに駆けつけてくれたのだろう。さらに力を合わせて助けてくれて、こうして逃げている今も責めようとしたり、怒ったり、嫌気が差した顔をしたりもしない。
助けるのが当然。その態度が嬉しくて堪らない。
涙が浮かんだ目元を腕で荒々しく拭い、表情を引き締めてチョッパーが前を向いた。
「なんでか知らねぇけど、あいつらお前を追ってるんだろ？　考えがあるんだ」
「どうすればいいんだ？」
「もう少し行ったら坂がなだらかなとこがある。お前はそこから一人で逃げろ」
「一人でって……そんなことできねぇよ!?　ウソップとカルーが居るのに！」
「バァカ、先回りしたって言ったろ？　ちゃんとこの辺りを見てよ、作戦考えてあるんだ。あとはおれたちが引き付けるからお前は先に逃げろ」
「う、うん」
説明した直後だったが早くも目的地が見えてきた。
慌てるウソップは早速パチンコを構える。
「ほら、あそこから行け。おれたちは真っ直ぐ行くからな」
「わ、わかった。二人とも気をつけてくれよ」
「へへっ、お前もな」
ウソップは後方へ振り向き、追ってくるツノクイの群れを視界に入れ、番えた弾を放った。
「煙星ィ！」
見切るのも面倒な小さな弾は狙い通りに飛び、体に直接当てるのではなく地面で炸裂し、広範囲を煙幕で包み込んだ。これで真っ直ぐ走っても少しの時間は視界が阻害される。

それを確認した後でチョッパーがカルーから飛び降りた。
あらかじめ指示されていた小道へ入り、獣型になって走り去る。
見えなくなる前にちらりと振り返っていたものの、立ち止まろうとはせずにそこから去った。
ひとまず第一段階は済んだ。
ウソップはよしと頷く。
立ち昇る煙を突き破って駆けてくるツノクイたちは気付いていない。
さほど頭は良くないようだ。逃げるカルーとウソップを追うことしか考えておらず、或いは彼らに攻撃されたことに腹を立てているため、チョッパーには興味がないのかもしれないが、それにしたって芸の無い追跡だと思える。
いつの間にか曲がりくねった道を進んでいた。
左側は岩壁、右側はやや円形に近い岩が整列した小道に入り、まるで通路のよう。
ついにあらかじめ見つけていた場所へ辿り着いていた。
「もうすぐだぞっ。追いつかれるなよカルー！」
「クエ～っ！」
息を切らしながらもカルーは一切速度を緩めようとしない。常に全力で走っていた。
もう少しすれば目的の場所に到達する。そこへ辿り着ければ作戦は終わりだ。
最後の力を振り絞り、ツノクイを引き連れながら狭い通路を走る。
そしてやっとその場所が見えた。
「ウソップさん！　カルー！」
「ビビィ！　来たぞォ～！」
左側、崖の上にビビが立っていた。彼女に声をかけて通り過ぎ、さらに先を目指す。
前方は行き止まりだった。柵のように連なっている大きな岩が前方にもあり、その向こう側は崖になっていて道はない。それこそ望んでいた場所である。

目的地が見え、カルーの体には力が漲っていた。
少しでもカルーの手助けになればと、そして敵を逃がさないようにとウソップが振り返る。
パチンコを構え、今度こそ先頭のツノクイを目掛けて。
ゴールまでほんの数メートルという位置になってから撃ち出した。
「必殺！　火薬星！」
真っ直ぐ飛来してツノクイの額に直撃した。
小さいとはいえ立派な爆発。ダメージを受けた先頭の一頭が思わず転ぶ。
後続のツノクイはその体に躓いて転び、或いは無理やり踏み越えて進んでいき、脅威だったはずの隊列は一瞬にして崩れてしまう。
彼らは、自らの強みを自らで捨てたのだ。
岩を目の前にした時、カルーが跳ぶ。
強靭な脚力で岩の上に飛び乗り、そこでやっと足を止める。
ゼェゼェと息を切らしてやっとツノクイに振り返った。
今更ツノクイは止まることはできない。
先頭がどすんと岩に頭をぶつけ、少し揺れるが、破壊することはできなかった。その後ろからもどんどん突進してきて団子状態となり、彼らは勝手に動けなくなる。
そうなった直後、左側の崖から大岩が転がり落ちて、素早く退路を塞がれてしまった。
あらかじめサンジが蹴りで一部を砕いておき、土砂崩れが起きやすくしておいたらしい。
ビビの特異な武器によって岩壁に刺激を受けただけで多くの岩が落ちた。
狭い通路で前後左右を動かない大岩で塞がれて、すし詰め状態となったツノクイはもぞもぞ動くだけで本来の力を発揮できず、悲痛な鳴き声を発することしかできない。
彼らの無力化はこれ以上ない形で成功した。
ウソップとカルーがガッツポーズで喜び、崖の上に居たビビもほっと息をつく。

ひとまずこの場は誰も怪我をすることなく勝利を収めたのである。
柵のような岩の上を歩いて、ウソップを乗せたカルーはビビが近く見える位置まで移動する。
勝利を手にして彼らは心から喜んでいた。
不思議とビビも嬉しくなったらしく、まだ安心できる状況ではないが笑顔になった。
「よっしゃ～！　勝ったぁ～！」
「クエーッ！」
「やったわね！　二人とも大丈夫だった？」
崖の上と下で会話を始める。
動きを止めないツノクイから離れようと歩きながら、彼らは合流を急ごうとしていた。
「ウソップさん、トニー君は？」
「予定通りに逃げてったぞ。流石にその後どこ行ったかはわからねぇけど、流石にもう大丈夫じゃねぇかな。敵もゾロとサンジが止めてるしな」
「それじゃあ先にトニー君と合流しましょう」
「そうだな。そうなるとあいつがどこ行ったか探さねぇと」
「クエ～」
同意するためにカルーが頷く。彼らの次の目的が決まった。
ひとまずビビと合流を果たさなければならない。
互いに移動を始め、チョッパーを探すために森へ入る道を探し始めた。

ヒカリへ（3）

水深が浅いものの流れが速く、狭い川で対峙する。
サンジとヘビーは互いに睨み合っていた。
何やら剣呑な空気が漂い、敵同士と認識しているのだから当然と言えば当然だが、本来は関係ないはずの男のプライドを懸けて対峙している。それもどうでもいいプライドだ。
しかし二人は本気のようで、冗談を交えるつもりなど微塵もなかった。
流れる水が足首の辺りを濡らしている。
それさえも気にならず、ヘビーが口を開いた。
「貴様も多少は腕が立ちそうじゃ。だが私には勝てない。なぜかわかるか？」
問いかけたヘビーは素早く腕を振るった。
関節を伸ばした剣先が空中を駆け抜け、地面や壁に触れるといとも容易く削り、水を跳ね上げて美しいアーチを作り上げる。当然すぐに落ちるが彼の手腕は伝わった。
サンジは表情を変えない。
舞い上がった水や削られた硬い岩の痕にも興味を持たず、冷ややかな目で敵を見るのみ。
怖くて声も出ないかとヘビーがほくそ笑む。今までこの剣術に勝てた者は居ない。言わば絶対最強無敗の剣技。彼は自身の腕前に揺らがぬ自信を持っていた。
武器さえ持たないこの男に止められるとは思わない。
勝利は確実だと上機嫌に語り出す。
「私が貴様より強いからじゃ。今まで色んな剣士と戦ったが、私の剣を超える者は居なかった。誰一人としてな。今の内に謝るなら見逃してもいいと思うが――」
「そんなことはどうでもいいんだ」
濡れた髪を乱暴に掻き、サンジは静かな怒りを携えて呟く。
「てめぇがどれだけ強いなんてのはどうでもいい。おれが気になる

のは、てめぇみてぇな勘違い野郎がモテ男を気取ってることだ……！」
「何だと？　気取ってるだと？」
「蹴り飛ばす前にはっきり断言しといてやる。おれの方が色男だッ」
狙った女は逃がさないと、そう発言したことがきっかけだったようだ。
妙な対抗意識を持ち、サンジの目は燃えていた。かつてないほどの熱量だと思うほどに。
「気取る、とは聞き捨てならんのじゃ。事実私はモテ男。貴様よりもイカシている」
「どこがだッ。てめぇに負けるところなんざ一つもねぇな」
「まずそもそも顔立ちが１０対０で私の勝ちだろう」
「ふざけんなァ!?　１００対０でおれの勝ちに決まってんだろ！」
「自惚れるな！　そんな眉毛がグルグルしてる奴が女性の心を奪えるはずがないのじゃ！」
「てめぇこそ誇れるような顔じゃねぇだろうが！　何だその髪型！　顎が長ぇんだよ！」
「それでもモテる！　私の勝ちじゃ！」
「うっせぇ！　どうせ一人で自惚れてモテてると勘違いしてただけの寂しい人生の癖に！」
「なっ、なんたる侮辱!?　自分が変な眉毛でモテないからって！」
「おれの方がモテてるね！　あぁてめぇより断然モテてるさ！」
聞く者が聞けばどうでもいいやり取りだ。だが言い合いの末に、彼らは本気でいがみ合い、そもそもはチョッパーを巡ってのいざこざだったことすら忘れてしまう。
どちらがモテるかをこの場で決めるのは難しい。
ならばどちらが強いかで決着をつけるしかなかった。
「ええい、口の減らない奴……！　ならば実力でわからせるまで！」
「やってみろクソ野郎。てめぇにできるとは思わねぇがな」
ヘビーが巧みな様子で剣を振り始める。

その場に居ながら離れた位置に立つサンジを狙える武器だ。絶対的優位にあると自覚している。接近もせず離れもせず、そこに立ったまま刀身を伸ばした。
スピードはそれなりのもの。軌道も自由自在な様子だ。
ガチャガチャと妙な音を立てて剣が接近してくる。
真っ直ぐ正面から向かってくるため、サンジは軽く横へ跳んでそれを回避する。
避けられた、と思ったところで焦ることはない。
今までも一撃目を避けられる人間なら居た。だがそれでは避けたことにはならないのである。
ヘビーは即座に手首を動かす。
その蛇の如く首を伸ばす剣、些細な手の動きでさえ如実に反応が出て、刀身の軌道はぐねぐねと荒れ始める。真っ直ぐ伸びたはずのそれはサンジを追ったのだ。
先端から巻き付こうとするかのように迫ってくる。予測不能の攻撃こそ真髄。唐突な軌道の変化に反応できる者はそう居ない。一撃目を避けたという安心感が動きを遅らせるからだ。
サンジの目が蛇のような刀身を見た時、すでに触れる間際。
ヘビーは勝ち誇った笑みを浮かべる。
「ズタズタに引き裂いてやる！」
そう叫んだ直後。
サンジはその場で強く地面を蹴り、水を跳ね飛ばしながら跳び上がった。
体に巻き付けようと周囲から迫っていたため、頭上は空いている。一瞬の判断でそれを見抜き、高く飛んで逃げるスピードもお見事。ヘビーは一瞬驚愕する。
空中でくるりと回った彼は無事に着地した。
その一瞬を狙ってヘビーが薙ぐ軌道で剣を振る。
岩すらも軽々削る頑丈な刃。捉えさえすれば彼の勝ちは確実なのだ。
勝ちを急いだ動きだったのか、サンジはその場でしゃがむだけで回

避してしまう。避けられた後で刀身は壁を削りながら進み、ヘビーは慌てて手元へ引き寄せようとする。
慌てたその一瞬が命取りだった。
好機と判断したサンジが地面を蹴って前へ跳び、無防備なヘビーへ接近する。その速度は明らかに想像した以上のもの。これまで体感したことのないスピードだった。
ぎょっとした一瞬にはもう手で触れられる距離に居た。
硬直するヘビーから目を離さず、サンジの右足が振るわれる。
跳んできた勢いすら利用する跳び蹴りは想像を絶する痛みを与える。
触れた瞬間にそれがわかり、ヘビーは息を詰まらせるも、その時には遅い。
彼の体はいとも簡単に宙を舞った。
「腹肉（フランシェ）シュート！」
「どぶふぉっ⁉」
あまりの衝撃に受け身を取ることさえできなかった。
背中から勢いよく地面へ落ち、水を跳ね除けながら転がる。そうして何度か転がると止まった。
サンジの表情はいまだ優れない。
まだ本気ではない。彼の体感からすればほんの少し撫でてやっただけだ。
だが相手はそう思っていないらしい。
腹を押さえながらなんとか立ち上がるヘビーは、すでに足元をふら付かせていた。
「う、ぐっ……！」
「どうした。そんなもんか？」
冷たい眼差しがヘビーを貫く。舐められていると感じるのも当然だ。サンジは呼吸も乱さずに彼の攻撃を掻い潜り、あっという間に蹴りを当ててみせた。それが当然だと言わんばかりに。
動揺するヘビーは次第に警戒心を募らせ、逆に平常心を失くしていった。

焦りからか、ヘビーは時を待たずに攻撃を開始した。
風を切って唸る刀身が頭上からサンジを狙う。それでも冷静に見極め、そのスピードすら脅威ではないと判断した彼には届かず、軽いステップで避けられた。
すでにサンジは彼に対して、一切の恐怖心や怒りさえも抱いていないようだ。
失望したと言わんばかりの目で見つめられる。そんな彼に恐れを抱いた。
ヘビーの心はさらに荒れ、もはや無我夢中で剣を振り始める。
「うおおああっ！」
縦横無尽に振るわれる剣がサンジへ襲い掛かるが、やはり彼の心は揺らがなかった。
「そんなもんかって言ってんだ」
片時も目を離さなかったはずなのに、またしても反応できなかった。
荒れ狂う剣を潜り抜ける様さえ理解できぬまま。
いつの間にか、顔面の前に足があって、驚くことも許されずに蹴りが叩き込まれる。
「首肉（コリエ）！」
「おぶっ!?」
振り抜いた足の勢いに負けて、凄まじい力で顔面を蹴られた結果、地面に後頭部をぶつけるほど勢いよく倒れる。彼は水の中に倒れ、訳も分からず慌てて顔を上げた。
思わず咳き込んで呑み込みかけた水を吐き出す。
その傍ではサンジが足を振り上げている。
「肩肉（エポール）！」
「ぶっ!?」
次の一撃。
地面に手をついて四つん這いになっていたヘビーが、再び水の中に倒れる。今度もまた地面に顔面をぶつけてしまい、鋭い痛みが生じて鼻血を流していた。

たった二発ですでにグロッキーである。
今度は起き上がるまで待ってやり、サンジはつまらなそうに呟いた。
「負けたことがなかった？　要するにてめぇより弱い奴としか戦わなかったってことだろ」
「ぐっ、ふざけるな！　私の真の力はこれからだ！」
「だったら尚更悪いな。最初から本気で戦えねぇ奴が偉そうに語ってんじゃねぇ」
立ち上がったヘビーが刀身を引き寄せて、本来の剣術で挑みかかろうとした。
その攻撃が届く前にサンジの蹴りが彼を打つ。
「背肉（コートレット）！　鞍下肉（セルル）！」
「ぐおっ!?　おうっ……!?」
目にも止まらぬ速度で強かに二度蹴られて尚、まだ止まらない。
「胸肉（ポワトリーヌ）！　もも肉（ジゴー）！」
ようやく連撃が終わった時、ヘビーは辛うじて立っているという姿。意識も遠ざかってふらふらと危なげな姿になっている。
サンジはとどめを刺すため敢えて背を向けた。
有無を言わさず、強烈なソバットを連続で繰り出したのである。
「羊肉（ムートン）ショットォ!!」
悲鳴の一つも無い。
意識を失ったヘビーは防御すらできずに蹴り飛ばされ、岩壁の一部が崩れて突き刺さる。
彼の体は壁に埋め込まれて川にすら落ちなかった。
戦いを終えて、大した感慨もない。
勝って当然。そんな楽な勝負だった。
煙草を取り出そうとした時に全身が濡れていることに気付き、諦めたサンジは嘆息する。
「残念だったな。てめぇに比べりゃあの方向音痴のアホ剣士の方がよっぽどマシだ」
背を向けて歩き出しながら笑みを浮かべる。

比べるまでもない。そう思いながらもなぜか呟いていた。
「あと、おれの方が色男だ」
それだけ言ってもう興味は持っていなかった。
どこから上がろうかと考えながら辺りを見回しつつ、歩き出す。
大したことはしていないものの、不思議と先程より気分は良かった。

＊

向かい合っていたゾロとホットドッグは互いに動き出す一瞬を探っていた。
ホットドッグは腰の裏に差していた武器を取り出し、長い鎖とその先に棘鉄球が付いた物で、投擲による遠距離攻撃を主にするのだろうと推測できる。
しかし彼本人の体つきは近接戦闘のものに思えた。
考えた末、どちらでもいい、とゾロが断ずる。
どんな戦い方をするにしても負けるつもりなどないからだ。
左腕に巻いていた手拭いを取る。
その後でいつもそうしているように頭へ巻いた。
意識が集中していく。別段頭に巻かなくても集中はできるのだが独特の良い感覚があった。
相手の武器を見て嬉しく思う。そろそろ鉄を斬りたいと思っていたところだ。
試してみるには良い機会だろうと考え、彼は悪そうな笑みを浮かべる。
「お前何笑ってるけん。怖すぎて逆に笑えてきたか？」
「いいや。ただ、少し前に気に入らねぇことがあったもんでな」
すらりと刀を抜く。右手と左手、両方に持ち、三本目を口に銜えた。
今回は様子見などするつもりはなく、さっさと終わるようならそれでいいと思っている。
全身に力が漲り、まるで野獣のような、今すぐ襲い掛かりそうな危

険性があった。
「悪いが憂さ晴らしにしかならねぇかもな。そうならねぇように努力してくれ」
「舐められたもんだけん。おれの強さを知れば、そんな軽口は叩けなくなるぞ」
音もなく右足が後ろへ下げられた。わずかに姿勢を変えたのである。
目敏く気付いたゾロは攻撃が来ると気付く。
予想した通り、ホットドッグは振り回していた棘鉄球を投げ、唐突にゾロの頭を狙った。正面から来るのなら慌てる必要はない。彼は両手の刀を振り上げて弾く。
切り捨てるつもりで刀で弾いたはずだった。だが鉄球はわずかに傷がついたのみ。
防御に成功したというのにゾロは苦い顔をする。
「なんの！　まだまだァ！」
さらに大きく腕を振り、鎖を引っ張って棘鉄球を激しく振り回す。
凄まじい勢いで風が巻き起こっていた。当たれば当然無事で済むはずもなく、見ているだけで恐怖心を煽られかねない勢いではあるものの、ゾロは冷静にそれを見ている。
再び鉄球が投げられる。
芸もなく真っ直ぐ投げるだけ。表情一つ動かさずゾロはそれを弾き、上へ飛ばした。
その後も同じ行動が続く。
振り回した鉄球を投げつけ、弾かれ、また投げて弾かれる。ホットドッグは自信の表れか、考えるのが面倒なだけか、倒すためとは考えているようだが繰り返すばかり。
徐々にゾロは不機嫌そうな顔に変わっていく。
攻撃それ自体が単調だからという理由もある。しかしそれ以上に大きな理由があった。迎え撃つ動きは全て全力を込め、鉄球を切り裂こうとしているのだが上手くいかない。
鉄とは簡単に斬れないものだ。

当然のことを改めて実感しながら、彼は勝負ではなく修行として鉄球に向かい合う。
何度目かで弾き返した時にようやく動きが変わった。
突如ホットドッグが鉄球を捨て、自身が駆け出して前へ出た。
唐突な接近を行い、ゾロの目の前まで来ると思い切り右足を振り上げるのである。
ゾロの目は冷徹に敵を見据え、感情を示さず。
その一方で、やっと来たのかと喜んでいそうな態度でもあった。
「ぶっ潰してやるけん！　喰らえェ！」
真上から降ってくる踵落としだった。
即座に一歩下がったゾロはわずかな動きで回避し、空ぶった脚が地面に直撃、盛大に粉砕する。
それでも普段目にしているもののためか、大したことだとは思わなかった。
「おれの蹴りは鉄をも砕くけん！　喰らえば一巻の終わりだけん！」
「鉄を、ねぇ……」
呆れた声で呟きながらゾロはさらに回避する。連続して蹴りが繰り出されるが、さほど速いとも思わないし怖いとも思わない。体の大きさとは裏腹に大した迫力でもなかった。
避けるのに飽きてゾロが止まる。
ここぞとばかりにホットドッグが力を入れて跳び上がった。
回転しながら落下してきて、再度全力の踵落としを脳天に叩き込もうとする。
「これで終わりだけん！」
ほんの数歩。横へ動いただけで軌道から逃れることはできた。
落下してくる敵を見上げ、ゾロも跳び上がる。
二人は空中で急接近し、驚いたのはホットドッグだ。落下した勢いを一撃に利用するつもりが相手も空中に来てしまったため、今からでは攻撃の方法を変えなければならない。
逡巡した一瞬で勝敗は決した。

落下するホットドッグと跳び上がるゾロ。交差する瞬間、三刀による斬撃が放たれた。
「蟹獲(ガザミど)り！」
「ぐぁあああああっ!?」
胸の辺りを深々と切り裂かれ、鍛え上げた筋肉を物ともせず血が飛び散る。
姿勢が崩れたホットドッグは背中から地面に落ち、胸と背の両方に痛みを感じて、今は地面に居るのだと理解できた後でもすぐに動き出すことができなかった。
まさかの反撃で激しく動揺してしまい、冷静さを失っていたようだ。
激しく呼吸を乱し、死への恐怖を感じて表情から余裕が消え去っている。
少し後に上手く着地したゾロは彼に背を向けた状態で動かない。
別に意図した訳ではなく、ただ着地した時に彼が背後に居たというだけだ。
ホットドッグは当然彼の背を見て、隙ありだと考えるものの、ゾロは全く動く気配がなかった。
ゾロが気にするのは別のことだ。
鉄を斬るにはどうすればいいのか。今しがた本気で試しただけに疑問が残る。
やはり自分はまだ修行が足りていないらしい。
そう思っている間にホットドッグが立ち上がって、最後のチャンスを使うべく駆け出した。
「鉄ってのは、案外斬れねぇもんだな……」
「背中を見せたな！　死ぬがいいけん！」
「やめとけ。おれは今、最後のチャンスをやったんだぞ」
「もう何を言っても無駄だァ！」
ホットドッグは彼の背後で大きく足を振り上げた。
そうなった後に動いたというのに、ゾロの方が早く、彼の斬撃が繰り出される。

「龍巻き!!」
「ぎゃあああっ!?」
体を回転させて生み出した斬撃がホットドッグの体を切り飛ばした。彼の巨体は更なる血を噴き出しながら宙を舞って、今度こそ意識を失って落ちていく。
頭から地面に倒れ、その体は力なく横たわった。
ゾロは勝利を噛みしめる様子も見せずに刀を仕舞い、頭の手拭いを乱暴に取った。
「世界最強、鉄をも砕く。結構なことじゃねぇか。自分で言うのはタダだからな。だが世の中にはてめぇよりすげぇ蹴りをする奴も居るんだぜ。ムカつく野郎だが……」
取った手拭いを左腕に巻き、彼は颯爽と歩き出す。
もうホットドッグに言うことはない。言っても聞く相手じゃないだろう。
どうせ意識を失っている。ゾロは何の心配もなくきょろきょろと辺りを見回した。
「さて、ウソップとチョッパーを探さなきゃならねぇが、あいつらどこ行った？　また迷子か。まったくしょうがねぇ奴らだ。探してやるか」
呆れた口調で呟き、溜息をついてしまう。自分の状況を考えるつもりはなさそうだ。
「おれたちは南から来たから、とりあえず東を探してみるか。右だな」
そう言ってゾロは自分が向いている方向から右を目指し、歩き始めた。
だがこの時すでに、彼はあらゆるものを間違えている。
メリー号が停泊した場所は島の東側であるため、つまり彼らは東から来たことになり、さらに現在ゾロが向かっているのは島の北側であった。
何から何まで間違えていても彼は自分が間違っているとは微塵も気付かない。

極度の方向音痴であるゾロは、こうして日々迷子になっていくのだ。

ヒカリへ（4）

走り続けている内に日が傾きかけていたようだ。
太陽が沈みかけ、島が夕日に照らされる。
チョッパーはまだ逃げ続けていた。
「ハァ、ハァ……！」
「待てぇ～！　王なる宝を渡せぇ～！」
ウソップの狙撃を受けて倒れたはずのバトラーが追いかけており、多少顔や髪が爆発によって煤けていたが、意外にも元気に走っていた。
予想以上にしぶとい。
ずいぶん走り続けていたはずだがまだ倒れる様子は見られなかった。
彼らは今、島の中央にある草一つ生えない岩の丘を登っていた。
走り続けたチョッパーは疲弊しており、今や人獣型になって足下がおぼつかない。それはバトラーも同じだったものの、目的がある分彼の方がしっかりしている。
丘の天辺に辿り着きそうになった頃だ。
バトラーが自身の武器を投げ、それが足を引っかけてチョッパーが転ぶ。
「あぅっ!?」
「よぉし！　やっと追い詰めたぞ！」
ついにバトラーがチョッパーに追いつき、倒れた彼の首に手をかけ、押さえつけた。
歓喜した一瞬に疲労を忘れている。
ようやく目的の物を手に入れられる瞬間を迎え、バトラーは目と表情に喜びを浮かべていた。
「ゼェ、ハァ、手間取らせやがって。だがやっと手に入れたぞ、王なる宝を！」
「うぅっ、離せ……！」
「動物風情がおれ様に命令するな！　これさえあれば、おれ様に逆

らう者は居なくなる……天才の頭脳と無限のパワーで、世界征服の夢を叶えてやるのだぁ！」
心から嬉しそうに言い、バトラーの両手がチョッパーの角を掴む。
その時、狙い澄ましたかのように彼が追いついた。
「待てェ！　やめろォ！」
「あぁん？　誰だ……？」
振り返った先、彼らよりも高い位置にモバンビーが立っていて、手に黄金の角を抱え、多くの蔓を使って背中にも複数の黄金の角を背負っていた。
驚くバトラーに向かって彼が叫ぶ。
「それは王なる宝じゃない！　本物は……これだァ！」
「何ィ!?　だがこいつが動物王だと――偽物だったのか!?」
驚愕したバトラーはパッとチョッパーの傍を離れた。
チョッパーは疲弊しており、咳き込みながら這いつくばって彼らを見上げることしかできない。モバンビーが来たことにも驚いていて、なぜ来たのだと疑問を抱く。
何より、彼が持っている黄金の角。確かに本物の〝王なる宝〟とやらなのだろう。
これでは敵に奪われる可能性がぐっと高まってしまうだけだった。
恐怖を覚えながらもモバンビーは叫んだ。
足の震えを必死に押さえ、彼はチョッパーを助けようと無我夢中で行動する。
「お前はこれが欲しいんだろ！　来てみろ！　奪えるもんなら奪えばいいじゃないか！　だからチョッパーには手を出すな！　チョッパーは本物の動物王じゃないんだ！」
「おおっ、望むところだ！　貴様のようなガキに何かできるとでも思ってるのか！」
「うるさぁぁいっ！」
モバンビーは背を向けて駆け出す。しかしバトラーは走る前に武器を取り、すぐ投げつけた。
要領は得た。もう止められる。

角を抱えて注意力が散漫になっていたモバンビーは足を引っかけられ、その場に転んでしまう。その衝撃でキリンライアンの角が散らばってしまった。
ハッと気付いた時には遅く。
急いで駆けつけたバトラーが彼を見下ろし、片手に黄金の角を持ち上げる。
奪われてしまったことにも驚いたが、それ以上に彼の目を奪い、体と思考を硬直させたのは、もう片方の手に握っていた奇妙な形の武器だった。
形状はおそらく斧。しかしタンバリンのように鈴と皮が付いていた。
その武器には見覚えがある。
彼の中で最も忌まわしい思い出として忘れられなかった。
胸につけられた大きな傷も確か、その武器によってつけられたもの。
モバンビーの目が見開かれて、もはや動けず、声を絞り出すのが精一杯だった。
「そ、それは……」
「んん？　あぁ、その傷。我が友人の息子だったか」
「友人？　う、嘘つけ。父さんがどうして海賊の友達なんだよ」
「海賊だと。バカなことを言うもんだ。おれ様は海賊などではない」
「な、なんだって……!?」
驚愕するモバンビーの前で、バトラーは両腕を広げて仰々しく宣言した。
「おれ様の名はバトラー伯爵！　人類史上最高の超ウルトラ大天才にして発明家であり動物学者でありながら宝探しの大天才である！
この稀代の天才的頭脳を使って世界征服を成し遂げてやろうと思い立ったのだ！　世界平和を成し遂げるには天才の王が一人居れば十分！」
「海賊じゃ、なかったのか……！」

「バカなことを言うな！　天才のおれ様が、海賊になんぞなってたまるかァ！」
バトラーは左手に持った黄金の角を掲げ、うっとりと見つめる。
夕日を浴びて輝きを放つよう。怪しくも美しい魅力に満ちた物質であった。
「これを食えば無限のパワーが得られる。王なる宝は今、おれ様の手の中に……！」
「どうして……海賊じゃないなら、どうして父さんを殺したんだ！」
「あいつがこいつの在処を隠したからだ。動物の気持ちを尊重だと？　訳の分からんことばかりぬかす学者崩れのバカめ！　低能な動物どもにこれほど素晴らしい物を持たすなどもったいないとなぜわからん！　これは頭の良い人間こそが持つべき力だ！」
「それは、キリンライアンの角だぞ！」
「だからどうした。今はもうおれ様のものだ！」
そう言ってバトラーはバクリと角にかぶりついた。
モバンビーがあっと声を出しても遅く、強靭な歯がそのまま角を食していく。バリバリと音を立てて食べ終えると、彼はすぐに残りの角に目を向けた。
「まだだ。もっともっと、これら全てを食べ尽くした時に、おれ様の力になる……！」
「やめろォ！　これはお前のものじゃないっ！」
「やかましい！　アホは黙って見てろ！」
「うわぁっ!?」
「モバンビー!?」
彼の腰に飛びついて止めようとモバンビーが、バトラーに殴られて地面に転ぶ。
慌ててチョッパーが彼へ駆け寄り、その体を抱き起こした。
モバンビーに怪我はない。だがその時、バトラーはすでに行動を終えている。
バリバリと次から次に角を食し、着実に伝説の力を我が物としていく。狼狽する二人が見ている前で全ての角が食べられてしまい、彼が

大きく喉を鳴らした。
変化はその瞬間から起こった。
バトラーの肉体は見る見るうちに大きくなり、人とは異なる異形へと進化し始めたのだ。
異様な音を発して筋肉が盛り上がり、服が破けるほど体が巨大化していった。
その体は黄金色の体毛に包まれ、頭からは強固で鋭く尖った角が生える。
まるでバケモノ。
小柄だった体は二人が見上げなければならないほど大きく、でっぷりと太っているが動物ならではの強靭な筋肉を手に入れて、鋭い牙と爪までも見られた。
王なる宝の力は本物だと証明された瞬間である。
深く息を吐いて変身が落ち着く。
その時、彼はすでに意識までもが人間ではなかった。
体の内側から湧き上がるような力が全身へ行き渡り、恍惚としてしまう感覚があった。
今ならできないことは何もない。かつての脆弱な人間とは違い、漲る力は人智を超え、もはや自分の力だとすら信用できないほど。だがその疑念が彼の自尊心を膨れ上がらせバケモノとした。
「ハァァ……感じるぞ。凄まじいパワーだ」
実感しながら手を握る。鋭い爪が並び、今なら砕けない物だって無さそうだ。
その力、まさしく王。
いつからか抱いていた野望を叶えることなど簡単に思えてくる。
持ち前の天才的な頭脳と全ての動物を超えた身体能力。生物として完成された絶対的な存在。そんな自負がある。
天を見上げて雄々しく吠えた。
人ではなく、動物ですらない者の声が島中に響き渡っていく。
まるでこの世の終わりを告げるかのようだった。
「素晴らしい！　なんだこの力はッ！　たかが動物の角と思ってい

たが、これさえあれば、もうおれ様の障害になる奴なんて――！」
「待て」
己の掌を見つめながら、歓喜して吐き出された言葉はしかし、背後からの声に止められる。
何やら風貌が変わり、チョッパーが彼を見つめていた。
「何か用か、トナカイ……おかしなことは、言わねぇよな？」
「おかしなことじゃないさ」
きゅっと帽子のつばを握って位置を正し、それからチョッパーは迷わず言う。
「その角はお前のものじゃない。お前には相応しくないものだ」
「ほう。だが食っちまったもんは返せねぇな。ならどうする？」
「お前を王様になんかさせねぇ」
帽子の中に手を突っ込み、小さな丸薬を取り出した。
蹄に挟んだそれを前に出して彼の目は決意を窺わせる。
「お前みたいな奴が王様になったら、国民はきっとみんな困る。お前を見逃すことはできねぇ」
「だったらお前が戦うとでも言うのか」
「そうだ」
愕然と、失意によって俯いていたモバンビーが驚いて顔を上げて、チョッパーの背を見る。
声色からして嘘を言っているようには思えない。
彼は本気で戦うつもりのようだった。
「先に言ったはずだろ……今は、おれが動物王だッ！」
思わず絶句してしまう。嘘がバレて、角まで奪われた今、この期に及んで彼はまだ嘘をつき通そうとしているらしい。一体なぜ、そんな想いでモバンビーが目を見開く。
数秒もせずあっと声が漏れた。
きっと彼は守ろうとしてくれているのだ。この島を、或いは背後に居るモバンビーを。出会ったばかりでよく知らない相手のために命を投げ出そうとしている。
その背に、かつての王の姿を思い浮かべる。

キリンライアンもきっとそうした。彼は強かったとはいえ、たとえ自分が敵わないほど強い敵に出会ったとしても逃げ出さない。仲間のため、国のために命すら賭ける。
それだけに自分が情けなくなる。モバンビーは目に涙を溜めていた。
このままでは足を引っ張っただけだ。助けたいと思って、自分はまた何もできていない。
涙で霞む視界でせめてチョッパーの勇姿を見ようと目を凝らす。
その時バトラーも怒りを滲ませていた。
「そうだった。そういえば貴様には無駄な時間を使わされたんだったな。よし、それならまず貴様の体で実験してやろう。おれ様の力をな！」
「ランブル」
丸薬を噛み砕き、呑み込んだチョッパーはすでに動ける体勢だった。
ランブルボールの効力は三分。その間に決着をつける必要がある。
すぐに動き出そうとしたチョッパーは、突然のバトラーの咆哮を受け、思わず足を止めた。
「ゴアアアアアアッ!!」
動こうとした体が無理やり止められる。自分の意志で止めた訳ではない。その場を動かず、ただ叫んだだけで自身の死がイメージできてしまい、恐怖心が筋肉の動きを制止したようだ。
立ち止まったことでバトラーが動き出した。
一瞬にして彼に接近し、慣れない動作で思い切りチョッパーの体を殴り飛ばす。
防御する余裕もなかった。
人獣型で殴られた彼は多大なダメージを受け、勢いよく地面を転がる。
「チョッパーッ!?」
「黙ってろガキィ！　あいつを殺したら次はお前だ！　ウオオオオオッ!!」

そう叫んだ直後でバトラーが駆け出す。
かなり調子に乗っている様子だ。
今まで彼は運動を得意としておらず、反射神経も運動能力も悪かった。人を殴れば自分の拳を痛めてしまう程度には喧嘩に慣れていない。
それが今では、たった一撃で額を割って血を流させるほど力も強くなった。
喜びすら抱いている姿で豪快に走っていき、起き上がろうとするチョッパーへ迫る。
「まだまだだぞォ！　王なる力はこんなもんなじゃねぇ！」
「ハァ、飛力強化（ジャンピングポイント）！」
変形したチョッパーが高く跳び上がり、寸前まで迫っていたバトラーは彼を見上げた。
頭上でさらに変形する。
先程と同じ人獣型、強そうには見えない姿に敢えて変わったのである。
「頭脳強化（ブレーンポイント）。診断（スコープ）」
蹄を合わせ、その間から敵を見る。
バトラーは真下で待つことに決めて動きを止めた。落下してくるチョッパーを見て笑い、逃げ場などないと自身の勝利を確信する。
力が溢れてくる。かつてないほどの強さを得た。
この腕力を使って全力で殴れば、耐えられる奴など居ない。彼は本気でそう思う。
やがてチョッパーが真っ逆さまに降ってきた。
バトラーは全力で腕を振るい、固く握った拳で彼を捉えようとする。
事実として、凄まじい勢いのパンチはチョッパーの肉体を確実に捉えていた。殴り飛ばされた彼は異様なスピードで空中を駆け、飛ばされていくのである。
しかし結果は、地面に接触した途端あっさり勢いを殺してしまい、至って普通に立たれる。

接触の寸前、彼は毛皮強化（ガードポイント）に変形していた。殴られた衝撃は全て増大された毛皮で殺され、地面に激突した衝撃も肉体までは届かない。
毛皮が膨れ上がった奇妙な姿で立ち上がり、彼は冷静にバトラーを見る。
その表情を見てバトラーが顔を歪ませた。
「何ィ!? なぜ立ち上がれる！」
「無駄だ。どうせお前は、他人の力を奪っただけなんだろ。そんな奴が強いはずがない」
「ふざけるなァ！ おれ様は最強の力を手に入れたんだ！ 貴様なんぞにィ……！」
「弱点はわかった。おれがお前を倒す……！」
言い終えて脚力強化（ウォークポイント）に変形し、前へ駆け出す。
恐怖心を無理やり押し殺して真正面から向かっていた。
舐められていると感じ、怒りを露わにするバトラーは感情が赴くままに叫ぶ。
「おれ様を倒すだとォ？ できるわけがねぇだろう！ おれ様の力を思い知れェ！」
バトラーも自ら前へ走り、迎え撃つ。
距離が一気に近付くとチョッパーはすかさず腕力強化（アームポイント）に変形して接近戦に備えた。
踏み込みもそこそこにバトラーが拳を振り抜く。かなり大ぶりで、どんな軌道で、どうやって振るわれるのかがあからさまにわかる。言わば技術を感じない下手くそなパンチであり、彼が素人であることは明らか。元々の素養が動きに表れていた。
避けるのは簡単で、振るわれた腕を潜って避けてさらに進む。
いつの間にか目の前に膨らんだ腹があり、チョッパーは素早く攻撃を繰り出す。
鉄をも砕くという自慢の蹄が、強化された腕力によって強烈に叩き込まれた。
バトラーは息を詰まらせ、腹を引いて背を丸める。
その動きを見てチョッパーは即座にジャンプし、禍々しい形の角を

狙った。
「刻蹄――」
「ぐほっ、はおぉ……!?」
「桜(ロゼオ)！」
角の根元を蹄で殴りつけた。ギシギシと音は鳴るが、あまりにも強固で砕けない。
彼が見つけた弱点とは二本の角であった。
元々は人間。角などない。王なる宝であるキリンライアンの角を食べたことにより、彼は本来人間が持ち得ない力を得た訳で、その要が新たに生えた角だったようだ。
角さえ折ることができれば勝てる。
そう思うチョッパーの体にパンチが当たって、勢いよく殴り飛ばされた。
「クソォ！　よくもやってくれやがったなこの野郎！　とんでもなく痛かったぞ！」
「うわっ……!?」
「許さねぇ！　どいつもこいつも、おれを舐めるんじゃねぇよ！」
何度か地面を転がった後、立ち上がったチョッパーは間を置かずに敵を目指して走る。対するバトラーも自ら接近して追撃を行おうとしていた。
弱点はわかっている。何度か殴られようと、先に角さえ折ってしまえば。
彼は今や玉砕覚悟で突っ込んでいた。
「うおおおっ！」
「クァアアアッ！」
自分が強くないことは誰よりも知っている。
だから強くなりたいと思っていたし、誰かを守れるようになりたいと思った。
チョッパーの蹄がバトラーの体を捉え、痛みで硬直した隙に角へ打撃を与える。だが角が折れないことで隙が生まれてしまい、殴り飛ばされる。

そんな攻防が延々と続いた。
力の差はあれど、それぞれ一長一短がある。
チョッパーは敵の弱点を見抜き、最善の手で勝利を狙うことができるものの、予想以上に頑丈な敵の角が折れずに時間がかかっている。対してバトラーは、チョッパーなど比べ物にならないほど強い力を持っていながら、それを扱うだけの技術や戦闘経験がない。
長引いてしまう理由は宝の持ち腐れ。
せっかく手に入れた力をバトラーが上手く使いこなせいことにある。
それでも、同じ状況が続けばどちらが優勢になるかは明白。
ダメージはどちらの体にも蓄積していくとはいえ、それが肉体か角かの違いは大きい。
チョッパーは何度となく殴り飛ばされ、その度に皮膚が裂け、流血しながら尚も動き続ける。医者として自分がどれだけ危険な状態か理解できるが止まろうとはしなかった。
あまりの悲痛さに、見ていたモバンビーは目を背けたくなる。
だが何もできない上にその戦いから逃げたくはない。彼は絶対に目を離さなかった。
再びチョッパーが殴り飛ばされる。地面を転がって辺りに血を撒き、地面はひどい様相だ。
肩で息をするバトラーは疲弊している様子だ。実際の疲労がどれほどか、そんな話ではない。最強の力を手に入れたはずの自分に立ち向かい続けるチョッパーの姿に怯えているのだ。
なぜ奴は死なない。
その想いが恐怖を生み、徐々に、だが着実に彼の体力を削っていく。
よろよろと体を危なげに揺らしながらチョッパーが立ち上がった。
またこれだ。こうして何度殴り飛ばしても立ってしまう。いくらやっても終わりが来ない。
余裕を失ったバトラーは後ずさる。そうした動きさえ、彼が戦闘に慣れていない証明となった。
「な、なんだこいつはっ。なぜこうまでして立ち上がってくる……

！」
「ハァ、ハァ……おれは、偽物の王様だけど。助けたいって、思ったから」
「うぅっ、チョッパー……」
もはやモバンビーは涙を禁じえない。
今にも死にそうな姿で、それでもこの島を、自分を助けようとしてくれる彼を、偽物などとは思わない。たとえ一時でも彼はモバンビーの王となったのだ。
「見捨てることなんてできない……おれはただ、やっとできた仲間を守りたいだけだッ」
「てめぇが何を思ってようが知ったことかァ！　いい加減もう終わりだ！　てめぇじゃ絶対に壊せねぇこの最強の角で殺してやる！」
（これが最後……）
ランブルボールの限界が近付いていた。チョッパーは腰の辺りで両腕を構える。
怒り狂って冷静さを失ったバトラーは頭を下げ、二本の角で敵を刺し殺そうとしていた。
最後のチャンス。
両者が同時に走り出して、互いに小細工もなしに、正面から向かい合った。
「チョッパー!!」
思わず叫んでしまったモバンビーの声を聞きながら、やがて距離はゼロになった。
先にチョッパーが両腕を振り、同時に繰り出した蹄が素早く角へ打撃を加える。
「刻蹄……菱形（ダイアモンド）！」
二本ともに打撃を与えて、その瞬間、わずかだが両方へヒビが入った。
与え続けたダメージは決して無駄ではない。どれだけ強固でも破壊することができる。そう確信したのは彼が跳ね飛ばされるその瞬間だった。

殴った衝撃で突き刺さることはなかったものの、チョッパーの体は弾き飛ばされる。
空に舞い上がった途端、ランブルボールの効果が切れて、彼はいつもの人獣型に戻った。
チョッパーの体が落下してくる。
その体は、地面に辿り着く前にバトラーによって捕らえられた。
右手で彼を軽々と持ち上げ、にやりと笑った瞬間ようやく勝利を確信する。
「手間取らせやがって……これで終わりだ」
「あぁっ、そんな、チョッパー……！」
「うっ――」
もはやチョッパーは限界だ。意識が遠くなり、ランブルボールを使った疲労感に加え、度重なる打撃のダメージによって意識を保っているのが奇跡に等しい。
これ以上の抵抗は無理があった。
バトラーが鋭い爪を見せ、ひどく上機嫌な笑顔で彼に語り掛ける。
「バカなことをしたな。おれ様の部下にでもなれば命は助かったものを」
「やめろ！　チョッパーから手を離せ！」
「いいやだめだ。こいつはおれ様に逆らった。即刻この場で処刑！」
「お前にそんな権利があるもんか！　とにかく離せっ！」
「権利ならあるさ。世界征服の前にこの島を乗っ取り、王となってやろう。おれ様こそが本物の動物王にな。なぁに、ツノクイどもが居ればそれも簡単だ」
「そんなこと、みんなが納得するはずがない！」
「納得するかどうかじゃない。従わせられるかできないかだ。いいから黙っておれの言うことを聞いてりゃいいんだよォ！　どうせ物も考えられん低能な動物どもだろうがァ！」
「くっ、お前ェ……みんなを、バカにするなァ！」
いつの間にか震えは止まっていたようだ。

モバンビーは一歩前に踏み出し、バトラーを恐れずに言う。
「チョッパーから手を離せ！　お前なんか動物王にはなれない！　チョッパーこそ王様だ！」
「それならこいつを殺した次の王がおれ様だ……」
「やめろ！　やめろって――!?」
バトラーの腕が上げられ、その爪は確実に動けないチョッパーの喉を狙っていた。
「やめろォオオオオオオッ!!」
モバンビーの絶叫が周囲へ響き渡る。
その時、ズズン、と島が揺れた。

ヒカリへ（5）

島が大きく揺れていた。
地震ではなさそうだ。しかしそれではなぜ揺れているのかがわからない。
バトラーとモバンビーは互いに理解が及ばず、意識が途切れそうになりながらチョッパーもその異変に気付いていて、どこへともなく視線が辺りを彷徨った。
音の出所はすぐに判明する。
遠くから丘を駆け上ってくる者たちが見えた。
数え切れないほどの動物たちが全速力で丘を駆け上ってくる。多種多様の珍獣が肩を並べ、誰もが必死の形相で真っ直ぐ走って、向かう先にはモバンビーが居る。
彼らはきっと仲間を助けに来たのだ。
「モバンビー！」
「あっ……カラスケ！　みんなぁ！」
先頭集団の一角にカラスケが居た。
笑みを浮かべたモバンビーは不思議と安堵し、一瞬であっても緊張感から解放される。
丘の頂上付近、四方八方を囲んで彼らは足を止める。
総勢、数百匹では利かない、数千匹の島中の動物たちが集っていた。
その中にはハゲオウムや森の番人たちの姿もあり、見回せば頼りになりそうな顔つきで、以前とはまるで違う印象。モバンビーにも勇気が与えられる。
彼も先程とは顔つきを変え、自信を感じさせながらバトラーに向かい合う。
唐突な登場で、取り囲まれてはいた。
見渡せばおかしな動物ばかり。その中にバトラーの仲間は居ない。
それでも笑みが崩れないのは絶対の自信を持っていたからなのだろう。
吊り上げられるようにチョッパーの体が掲げられる。いの一番に

モバンビーがあっと声を出して表情を歪め、周囲で状況が分かっていない動物たちも厳しい顔だ。
その行動一つで敵対する意志を持つには十分。
バトラーは数多の敵意を一身に浴びながら笑っていた。
「貴様らの王は今から死ぬ。その次はおれ様が王になってやろう。従う者は居るか？」
問いかけてみて、返答は沈黙。誰一人鳴き声一つ発さない。
しばらく待ってみたがやはり何もなく、バトラーの笑みが消える。
そうなってからすかさずモバンビーが言う。
「お前に王様なんかできるわけがないっ。チョッパーを返せェ！」
「そうか……所詮は動物。天才の発想は理解できんらしい」
低く呟いてバトラーが怒りを露わにしていた。しかし今更その程度で反応する者は居ない。
この場に集った時点で全員が覚悟を決めていたようだった。
「みんな！　僕はチョッパーを助けたい、だけど一人じゃどうしようもなくて……みんなの力を貸してよ！　お願いだ！　チョッパーはもう、僕らの仲間だ！」
モバンビーが力一杯叫ぶ。
ドン、と動物たちが一斉に地面を強く踏みつけ、足音を鳴らす。
それぞれ特徴的な鳴き声を次々に発し、辺りは一気に騒々しくなる。
全てが肯定の意思。そこに居る全ての動物たちが同じことを考え、モバンビーに賛同し、見ず知らずのよそ者を助ける決意を固めた。
辺りは一瞬にして騒音に包まれる。
苛立ったバトラーはあらゆる方向に顔を向けて叫んだ。
「やかましいぞォ！　叫んだところで貴様らに何ができる！　文字すら読めねぇ低能どもが！」
耳障りだと喚き散らして、見るからに平静を欠いた彼は見方によっては隙だらけ。
開戦は唐突に。
意志が固まって何をすべきかわかった以上、黙っているつもりなど

ない。森の番人たちが一斉に動き出してバトラーへと殺到していく。
妙な色のシマウマ、肩にテナガザルを乗せたゴリラ、獰猛そうなライガーが敵へ向かう。彼らは島の中で比較的戦闘に慣れている様子を窺わせ、動きに迷いがない。
気付いたバトラーは接近してくる集団に振り返る。
まず最初にライガーが襲い掛かった。
チョッパーを吊り上げ、油断していた彼の首筋に噛みつき、鋭い牙を肉に埋め込む。
悲鳴が発されるのは当然だった。
その瞬間にテナガザルが彼の腕にチョップを当てて、チョッパーの体が離される。あらかじめそれを目的地に動いていたシマウマが彼を背に受け止め、即座に方向転換。モバンビーの下へ戻っていく。自身が受け止めたチョッパーを彼に任せたのだ。
これでひとまず救出は成った。あとは敵を倒すのみである。
首筋に噛みついていたライガーが頭を殴られ、思わず地面へ転がってしまう。
しかし次から次へ殺到し、素早く接近したゴリラが腹を殴って、テナガザルが石を投げた。
胴体にパンチを、頭に投石を受けて、堪らずバトラーが悲鳴を上げた。
「ぐぉおおおおっ!?　なんなんだ貴様ら！　社会の役に立たないゴミどもめェ！」
バトラーは大ぶりで腕を振り、ゴリラを殴ろうとするが軽快なステップで避けられてしまい、ただ苛立ちを募らせるのみ。それでまたしても隙を見せてパンチが叩き込まれた。
手が届かない位置からはテナガザルが石を投げ続け、彼の動きを邪魔し続ける。
非常に苛立つ攻撃だった。
だからこそ勝利のためには有効で、彼らは協力して攻撃を続ける。
チョッパーを抱きしめたモバンビーは仲間たちに促され、群れの後ろへ移動する。

全身に傷を負い、目を開けることすら億劫な彼はモバンビーが近くに居ると気付き、些か驚いている様子である。モバンビーは優しく声をかけ続けた。
「チョッパー、大丈夫!? ごめんね、僕のせいで……!」
「謝らなくていいよ……おれは、自分のやりたいようにやっただけだから」
力なく笑ってそう言うチョッパーに涙が溢れた。
ぎゅっと抱きしめ、モバンビーはさらに決意を強くする。
彼だけは絶対に死なせない。
自身が悪いと思うが故に意志は揺らがず、たとえ自分が死ぬことになっても守る気でいた。
「ごめん。もう君だけを頼ったりしないよ。この島は僕らが守るんだ!」
「みんな……気をつけて。怪我をしたら、おれが治してやるから」
「チョッパーっ」
自身が傷だらけになっているというのにまだ他人を心配する。彼はどこまで優しいのだろうか。死ぬのが怖いとか、痛いだとか辛いだとか、弱音は一切吐かない。
彼は自分が思うよりもずっと強い人物だ。尊敬すらできる。
モバンビーがそう思った時、一際大きい鳴き声、おそらくは悲鳴が聞こえた。
咄嗟に振り返るとやはりバトラーによる攻撃だった。
鋭い爪に脇腹を貫かれ、片腕でテナガザルの体が持ち上げられていた。
ぐったりした彼は腕が振るわれた拍子に投げられて地面に転がる。
仲間が傷つけられたことで鳴き声が一層大きくなっている。
中でもゴリラが怒りながら駆け出し、バトラーに向けて拳を振り抜こうとした。しかし、怒り狂っているのは相手も同じ。バトラーの動きにはもう慣れすら感じる。
拳を振り上げていたゴリラに頭の角を向け、自分から懐へ飛び込んでいった。

驚愕した一瞬、迎撃が遅れる。
角の鋭い先端がゴリラの腹を突き破り、彼の巨体すらを持ち上げて、テナガザルの時と同じように勢いよく投げられてしまった。その結果悲鳴も出さずに地面を転がり、動かなくなる。
着実に、一体ずつ仲間が倒れていく。
森の番人だけでなく彼へ襲い掛かる者、近くに居た者は次々傷つけられてしまい、抵抗しても大した邪魔にすらならず、血を流しながら倒れた。
やはり生まれ変わった彼はバケモノだった。
ダメージを与えられ、痛みを覚え、疲労は溜まっていくはず。しかし後から後から湧いてくる力がそれらを忘れさせるのか、いつまで経っても彼の動きは精彩を欠かない。
今度は妙な色のシマウマまで牙の餌食となり、倒れる。
怒ったライガーが他の動物を押しのけてバトラーへ襲い掛かった。
「何をやろうが無駄なんだ！　貴様らとは生物としての格が違うッ！」
再び首筋へ噛みつこうと飛び掛かったライガーだが、その体は両腕に捕まって止められた。
至近距離から見て異変に気付く。
先程噛みつき、抉り取ったはずの肉がすでに再生を始めている。ぐじゅぐじゅと気味の悪い音を立てて肉が蠢くと徐々に傷が塞がっていこうとしているのだ。
珍獣だらけの島であってもそんな生物は居ない。
ライガーは驚愕して、その一瞬は殺意を忘れて呆けてしまっていたようだ。
「このパワーがあればおれは死なない！　おれこそ最強だ！」
引き寄せたライガーの首筋に噛みつき、悲痛な叫び声が響き渡った。
肉を引き千切り、体を投げ捨てれば彼は倒れてしまい、危うく意識を失いかけて動かなくなる。
バトラーは噛み千切った肉をその辺りに吐き捨て、すぐ周囲の動物

に目を向けた。
森の番人たちが次々倒されている。
動物たちは怯み、それでも退く訳にはいかず、恐れを抱いたまま戦いを強いられる。
皆を激励すべくカラスケが空を飛びながら大声を発していた。
確かに被害は大きい。勝ち目がないことは最初から分かり切っている。だが、今はモバンビーが彼らの後ろに居て、傷だらけになったチョッパーも居た。
一度ならず二度までも彼らを裏切る訳にはいかないと思い、全員が必死になっていた。
「みんな、踏ん張れ！　あいつだって無敵じゃない！　ずっと動いてりゃ疲れてくるんだ、おれたちが勝てるチャンスがきっとある――！」
「そんなもんはねぇんだよォ！　おれに勝てる奴はもう存在しない！」
怒声を発したバトラーが首を伸ばし、天へ角を向けた。
何をするつもりだと見ていれば、なぜか角が発光を始め、力が溜まっていくらしい。
夕日とはまた別の光。輝き出した角を振り下ろしたバトラーは巨大な丘その物に攻撃する。
「カァァァァァッ!!」
岩を砕いて地面に突き刺さり、角から謎の光が迸る。
それらは広大な丘へ一瞬にして広がっていき、数多のひび割れとなって発光した。
次の瞬間、光の部分から爆ぜる。
それは丘全体が爆発したような衝撃だった。辺りに強い閃光が走り、砕けた地面が岩石となって宙を舞い、数千と居た動物たちも弾き飛ばされる。
モバンビーとチョッパーもまた気付けば宙に居た。
受け身を取る余裕もなく地面へ落ちて、辺りは土石流でもあったかのように荒れている。先程の丘とは思えないほど破壊し尽くされた

姿であった。
吹き飛ばされた動物たちは大小様々とはいえ傷つき、倒れ、顔を上げることすらできない状態。もはや敵を取り囲んでいるとは言えずに敵の獲物となるのみだ。
チョッパーを抱きしめたまま、モバンビーは苦しげに顔を上げる。どちらを向こうと、彼の目に映ったのは怪我で苦しむ仲間たちの姿だけだった。
丘の頂上でバトラーは笑う。
たった一撃で数千匹を一網打尽。その力は彼の大いなる自信となった。
「素晴らしい！　これだ！　私はこれを望んでいた！　今こそ世界の王となる時なのだァ！」
「そんな……カラスケ、みんな……」
立っている者は一人として居ない。
そこに立っていたのはバトラーのみ。
その様は、さながら彼が勝者だと告げるかのようで。
「ウオオオオオッ!!!」
夕日を睨んで笑顔で叫ぶ彼は、もはや人間であったことすら忘れたようだった。

二重奏

「ハァ、ハァ、ハァ……」

勝利を確信して、沈んでいく太陽に向けて叫んだ後、バトラーは奇妙なことに気付いた。

気配を感じたとでも言えばいいのだろうか。

何気なく振り返った時、彼は目を見開いて驚愕を表した。

なだらかな丘だったはずのその場所は地面を砕かれてひどい様相となっている。

瓦礫が散乱するような光景の中に動物たちが倒れ、動く者など一匹たりとも居ない。

そこに彼らが居た。

麦わら帽子を被ったアライグマを胸に抱え、傷ついてぐったりした彼を大事そうにそっとその場へ寝かしてやり、立ち上がるとゆっくり顔を上げる。

怒りもせず、恐れもせずに、真っ直ぐバトラーを見つめるルフィが居た。

数歩下がった場所にキリが立っており、同じように敵であろう怪物を眺めている。

「なんだ、貴様らは……なぜ立っている？」

問いかけるように呟くものの、返答はない。

二人はじっと彼を見つめたままで動こうとしなかった。

どことなく不気味な雰囲気を感じる状況である。

バトラーが困って見つめていると、比較的軽傷だったらしいモバンビーに手を借り、自分の足で地面に立ったチョッパーが二人へ声をかけた。

すぐに二人の視線がそちらへ向いて、存外優しい眼差しで彼を迎える。

「ルフィ、キリ……ごめん。おれが勝手なことしちゃったから、こんなことに……」

「いいさ。楽に行こう」

ルフィは屈託なく笑う。
その顔を見て涙が溢れそうだったがぐっと耐え、チョッパーはさらに続けた。
「ほんとならおれがやるべきなんだけどさ。あいつに、勝てないんだ。こんなこと、本当は言いたくないんだけど……おれの代わりに、あいつをぶっ飛ばしてくれねぇかっ」
「いいぞ。あとは任せろ」
考える暇も悩む素振りもなかった。
あっさり告げたルフィは腕を回しながらバトラーに目を向ける。
チョッパーとモバンビーが驚いていると、苦笑したキリが彼らにひらひらと手を振る。彼だけは全く驚いていない顔なのでいつものことなのだろうか。
とにかく、二人は揃ってバトラーに向き合った。
彼らよりも高い位置に居て見下ろすバトラーは笑顔を見せる。
「選手交代というわけか。だがまさか貴様ら、このおれに勝てると思ってるんじゃないか？」
「ああ」
「バカなことを……貴様らもこの動物どもと変わらんなァ」
侮蔑するような笑みで、バトラーは上機嫌に語る。
「おれは〝王なる宝〟を得た。その結果がこの景色、この風景だ。何が言いたいかわかるか？」
「いや」
「貴様らがおれを殺そうとしても、同じ結果にしかならんと言っているんだ。天才的頭脳と獣を超えた力を持つこのおれに勝てる生物など存在しない」
「そうか」
興味が無さそうにも思える口調で答えて、ルフィは小さく頷いた。
多少その態度を気にしながら、尚もバトラーは主張する。
「びびって逃げ出すなら今の内だぞ！　おれ様はこの力で世界の王になる男なのだ！」
「あぁ、そういうのはいいよ」

端的に告げ、ルフィは指の骨を鳴らし始めた。
「おれはお前をぶっ飛ばすだけだから」
「バカと話すってのは疲れるぜ。もうわかった。貴様は生かしておく価値がないことをな」
前傾姿勢になったバトラーは低く喉を鳴らし始める。自分が負けるとは夢にも思っていないが相手に対しての怒りもある。手加減するつもりは皆無だった。
ルフィはその場で右腕を回している。
間抜けな顔をして強そうには見えない。これなら森の番人の方がマシだったほどだ。
そう思う頃、彼が先に動き出した。
「ゴムゴムの――」
やる気がある顔には見えないまま、なぜかそこから攻撃しようとしているのか。
意味が分からず、バトラーはへらへら笑い出す。
瞬間、ルフィの腕が伸び、強烈なパンチはバトラーの頬へ叩き込まれた。
「ピストルッ！」
「はうっ!?」
今日受けた中で最も大きな痛みを感じた。
巨大になったはずのバトラーだがあっさり殴り飛ばされ、滑るように地面へ倒れてしまう。左の頬がじんじん痛んで倒れたままで彼は訳が分からないと首を傾げていた。
距離はあったはずだ。しかも、彼の腕が伸びてきた。
それだけでなく強くなったはずの自分にそれだけの痛みを与えるのも信じられない。
バトラーは激しく混乱し、取り乱しながらも慌てて立ち上がった。
やはりルフィはその場を動いていない。腕だけが伸びて殴ってきた。
この時、彼は敵が悪魔の実の能力者なのだと確信する。
理解さえしていればそれほど驚くことではない。平常心を取り戻

したらしく、冷静に対処すればそう苦戦することはないはずだと、一度は消えた笑みが舞い戻った。
対峙するルフィは一切表情を変えようとしない。
その隣にキリが並んで、懐に手を突っ込んで紙切れを取り出す。
どうやら二対一の構図となるようだ。
「ハァ、いきなりで驚いたが、それがどうしたァ！　結構痛かっただけだぞォ！」
「意外とタフみたいだね。面倒だし、さっさと終わらせようか」
「そうだな」
「援護するよ。ルフィは好きに動いてくれればいい」
「よしきた」
打ち合わせはさほど中身もなく、あっさりと終わってしまう。
突然ルフィが走り出して腕を自身の後方に伸ばした。
「ゴムゴムのォ～！」
「無駄だァ！　そんなもん、ちょっと痛いだけで痛くも痒くも――」
伸ばされた腕の先端、拳の部分に紙が纏わりつき、拳が倍近く大きくなったような形になる。当然能力によって硬化されて鉄と同じくらいの硬度だった。
違和感を感じたバトラーが直立していると、またも隙を衝いてパンチが突き刺さる。
「トンカチィ！」
腹に真っ直ぐ、直撃する。
バトラーの体は地面から離れてしまって受け身も取れない。
背中から落ちて慌ただしく転がり、彼は痛む腹を押さえながら倒れ、ジタバタともがく。先程も相当痛かったのに今度はそれすらも超えていた。
今になってやっと彼が普通でないことに気付く。
痛みが強過ぎて悲鳴さえ出せなかったバトラーは、さらにルフィが迫っていることに気付いた。
またしても腕が背後に伸ばされ、しかも今度は捻じれている。腕の先端には同じく硬化された紙が装備されており、攻撃力は全く同等

か、それ以上と推測できた。
青ざめたバトラーが逃げ出そうとするが、起き上がることも許さず攻撃が来る。
「トンカチ回転弾(ライフル)！」
「おごぉっ!?」
仰向けに倒れたバトラーの腹に、真上から一発。回転したパンチが強烈なダメージを与えた。
大量に空気を吐き出して、意識も遠のく一撃だった。
バトラーは動けない。すると落下してきたルフィは更なる追撃に出るつもりらしく、頭上に向かって右足を思い切り伸ばして、その先には素早く紙が纏わりついて硬化した。
恐ろしい物を見る目で動けないまま、バトラーに再度攻撃が加えられる。
「トンカチ斧(オノ)ォ！」
「ぎゃあああっ!?」
「語呂悪いね」
鉄の硬度を持つ紙の靴を履き、強かに腹を踏み抜かれたバトラーが悲鳴を上げた時、少し離れた位置から見ているキリは柔らかい笑顔で楽そうにしていた。ルフィを心配することもなければバトラーに対して同情もしない。それどころか楽しそうにすら見える。
さらに離れた場所で見ていたチョッパーとモバンビーはぽかんとしていた。
あれだけ皆が苦戦した相手がまるで赤子の手を捻るように苦戦している。
この二人の強さは理解できないほどで、まだ全力を出しているようには見えない。ルフィもキリも些細な態度から余裕を感じさせるのだ。
「す、すげぇ……」
「こいつら、こんなに強かったんだ……」
感心した二人は小さく呟く。
その間にもルフィは攻撃を行い、もはやバトラーは怯えて逃げよう

としていた。
「トンカチ銃乱打(ガトリング)！」
「ぐぉあああああっ!?」
両手に紙を張り付けた状態で連続して殴られる。
バトラーの体は耐えることすらできず、押されるままに後退していく。足先にある鋭い爪は地面を削るのだが止めることができていない。踏ん張る力も失っていた。
とどめに顔面へ一撃を受け、彼は再び殴り飛ばされる。
その際、噴き出した鼻血が空中でアーチを描き、彼の間抜けさをさらに助長するかのよう。
バトラーは呆気なく倒れ、今やその目は完全に恐怖で支配されていた。
彼は戦士ではない。元々は学者であり、戦いどころか喧嘩さえしたことがなかった。人を殺めたことはあるがそれも武器を持たない者を騙し討ちにしただけであり、彼自身の強さではない。
突然強い力を手に入れたところで、それが彼自身の強さとなるはずもなかった。
真の強者に会った時、バトラーは自らの死を感じ、狼狽した目が探すのは逃げ道のみだ。
バトラーが慌て出すもののルフィの表情は変化しない。
あくまでも彼をじっと見つめ、片時も目を離そうとはしなかった。
戦闘が少し途切れたその一瞬である。
唐突にチョッパーが大声を出し、近くに居たキリが反応した。
彼の弱点を知っている。二人に教えればきっと勝利へ導いてくれると思った。
「キリ！　そいつの弱点は角だ！　角さえ折ればきっと力を失う！」
「角？」
「そいつは、動物王の角を食ってその姿になった！　角が無くなればきっと……！」
「オッケー。了解」

後ろで控えていたキリも歩き出して前に立つ。
ルフィへ近付きながら気楽な声が発されていた。
「ルフィ、聞こえた？」
「ああ。角だろ」
「そっちはボクがやる。ちょっと適当に相手しといてくれればいいから」
「うし、わかった」
「クソォ！　舐めるなァ！　おれは強くなった！　おれが負けるはずねぇんだ！」
やけになったのか、突然立ち上がったバトラーが自ら二人へ向かって駆け出す。
何も考えず無策の特攻。脅威を感じる行動ではない。
反応したのはルフィであり、今度はキリのサポートを受けず、自分一人で迎え撃つ。両腕で素早い予備動作を行った直後、両手による掌底が繰り出された。
「攻城砲（キャノン）ッ！」
目視することすらできず、気付いた時には腹を打たれていた。
がくりと膝をついたバトラーは動けなくなる。
その一瞬、キリが勇む様子で跳び、ひどく楽しそうに彼の角を狙った。
「まず一本」
紙で組み上げた長大な斧を硬化させ、振り回し、左側の角を狙う。根元から両断しようと刃を激突させた瞬間、硬い感触があって振り切れない。
キリが表情を曇らせる。
よく見ればヒビが入っているその角は異様な硬さを誇っていた。彼の一撃を受けてもヒビの部分からわずかに欠片が落ちたのみで、両断には至らない。
キリが一旦下がって距離を取った。
注意深く観察すれば両方の角にヒビが入っている。チョッパーが入れたのだろうかと推測し、大したものだと考える。そんな感想と共

に打開策は徐々に構築されつつあった。
もっと強い衝撃が必要らしい。
となればルフィの力を借りた方が早く済むため、足を止めた彼は早速提案する。
「意外に頑丈みたいだね。ルフィ、ちょっといい？」
「いいぞ。なんだ？」
「刃はこっちで用意するから、思いっきりぶん殴ってくれる？　そしたら多分押し切れるよ」
「わかった。とにかく殴ったらいいんだろ」
頷くルフィを確認して、キリは紙で長い棒を模り、硬化して両手に握った。
彼の身長も超える棍棒である。
それを持つと突然駆け出し、見るからに疲弊したバトラーへ接近する。
膝をついて動かない彼の頭を全力で殴り、体は勢いよく倒れる。背が地面についてしまい、頭をぶつけて大の字になって寝転んでいた。彼が欲したのはこの体勢だったようだ。
持っていた棍棒も含めて大量の紙が動かされる。
素早く彼の両手両足を拘束し、端は地面に突き刺さって、完全に動けなくなってしまう。
バトラーはそうなってから怯える声を発した。
何をされるのだろうと喚き続ける声を聞きつつ、無視して、キリは別の物を作り上げる。
彼の頭部、特に角へ狙いをつけた断頭台を設けた。
たかが紙の集合体。しかしそれが鉄の硬度で、物を切れる刃を持つことは想像できた。
殺される。そう思ったバトラーは必死に体を動かすが拘束は完璧で、関節を押さえて上手く力を殺すようにできているため、無駄な労力に終わってしまう。
いよいよ執行という時、キリは非常に楽しげで、むしろルフィが心配してしまうほどだ。

「あああああっ!? 待て!? やめろ!? 考え直すんだぁああっ!?」
「準備完了。それじゃ刑の執行、どうぞ」
「なぁキリ、なんでそんな楽しそうなんだ?」
「別に楽しいわけじゃないけど、なんで?」
「だってすげぇ笑ってたぞ」
「こういう時は笑ってる方が相手をびびらせられるもんさ。精神攻撃だよ」
「ふぅ〜ん。そういうもんか」
「貴様らやめろォ! お、おれに何の恨みがあってこんなことを――!」
喚くバトラーの声には取り合わず、キリがルフィに攻撃を促す。もちろんいつも通り笑顔でだ。
「せっかくなら高い場所からどうぞ、船長」
「んじゃそうするか」
再びキリが棍棒を作る。
ルフィがその場でぴょんと跳び、本気ではない跳躍からキリが振るう棍棒に飛び乗り、彼が押し上げるように棍棒を振り抜いた勢いで空に向かって飛ばされる。
上空高くから落下し始め、くるりと回った彼は空に向かって右足を伸ばす。
「ゴムゴムのォ――」
「ぎゃあああっ!? この人殺し!? 悪魔め! 貴様ら人間じゃねぇ!?」
「人間やめてる君に言われたくないよ。それにひどいことしたんだから自業自得」
「あああああああああっ!?」
角を狙って静止しているギロチンの刃へルフィが落下してくる。
距離が近くなった時、ルフィは、伸ばした脚を縮めて刃を踏み抜いた。
「斧(オノ)!」
彼に踏まれた瞬間、凄まじい勢いで刃が落下して、狙い通りにバト

ラーの角へ直撃する。狙い通りにひび割れた部分だった。
チョッパーが攻撃した結果が残るその場所へ触れた途端、刃が深々と埋め込まれる。
しかし想像以上の頑丈さで中途半端に止まってしまう。
まだ両断とはいかず、仕方なくキリが跳んだ。
「ルフィ、とどめはよろしく」
「任せろ!」
「やめろォオオッ!?」
その場からルフィが退いたのを見計らい、落下の力を利用して再度作った棍棒を振り下ろした。
ギロチンを真上から叩いて限界まで下に降ろさせる。
後に力を加えられたことにより、今度こそ刃は角を切り裂いて、バトラーの頭から二本同時に離れていった。その瞬間に角があった部分から不思議な光が放出される。
どうやら奪った力が抜けているようだった。
キリはすぐさま拘束のための紙を回収してバトラーを解放する。
四肢が解放された途端バトラーは飛び起きた。
両手で頭を押さえ、角が無くなっていることを確認し、漏れ出る光を押さえようと必死に手を動かすが上手くいかない。彼の体は見る見るうちに変化していく。
黄金の体毛が抜け落ち、筋肉が失われてひょろりと細く、元の姿より弱々しくなる。
その様は見ようによっては恐ろしく、一瞬にして骨と皮しか残らない人間となってしまった。
「あああああああっ、消える!?　おれの力が……!?」
「ゴムゴム……ゴムゴム、のォ」
その時すでに、彼の目の前でルフィが限界まで両腕を伸ばしていた。
勢いをつけるため背後へ伸ばして、あとは引き寄せて撃ち出すだけの状態。必殺の一撃がすぐそこまで迫っているのだと気付き、バトラーは目を見開く。

驚いたところでもう遅い。
ルフィは容赦せずにその腕を撃ち出した。
「やっ、やめっ――!?」
「バズーカァ!!」
高速で突き出された両手がやせ細った腹を捉える。
強烈な掌底は彼の悲鳴すら許さず、凄まじい勢いで空へ運び、そのまま島の外へ吹き飛ばした。島の中心地に居たのだが彼が海の向こうへ飛んでいく様を見送る。
かつてのムッシュワポールと同じである。
バトラーの姿は一瞬にして見えなくなって、勝負はひどくあっさりと終わった。
バチンと腕が戻って、ルフィが佇まいを正す。
キリも使った紙をバラシて懐に仕舞っているところで、どちらも疲労感を感じさせない。
見ていたチョッパーは、自分とは格が違うと思わざるを得なかった。確かに弱点を伝えたのは自分だとはいえ、彼らはひょっとしたら、弱点を知らなくても勝っていたかもしれない。
自分を情けないと思う一方、彼らの強さに言葉が出て来なくなる。
とんでもない一味について来たのだと今更ながらに実感して、彼は開いた口が塞がらなかった。

またね

夕日に照らされた王冠島で一つの戦いが終わった。
今、その戦いの衝撃を受け止めきれない二人、チョッパーとモバンビーが呆然としており、味方であるはずの二人を眺めて恐ろしいとすら感じていた。
しかし当人たちは至って呑気なものである。
大したことはしていない。そう言いそうな態度で二人へ振り返った。
「チョッパー、お前怪我してんな。大丈夫か？」
「え？　あ、あぁ、うん。大丈夫。ちょっと疲れただけ」
「そっか」
ししし と特徴的な笑い声を聞かせてルフィは彼らに笑顔を向ける。
戦闘が終われば恐怖心は感じなかった。
子供のように無邪気に笑い、あっけらかんとしている彼を見て誰が怖いと思うだろう。それどころか海賊だと気付かれない可能性もある。それほど邪気が感じられなかった。
戦いが終わったことで、徐々に動物たちが立ち上がろうとしていた。
傷つき、疲弊していたが、状況を確認するために顔を上げる。中には起き上がれずに寝そべったままの動物も居たものの、顔を上げて目を向ける場所は同じ。
皆がチョッパーとモバンビーを見ていた。
王になるか、ならないか。その問答は皆が気にしていたものだ。
モバンビーは周囲の視線に気付きながらも、何を話すべきかを悩み、すぐ傍に居るチョッパーに声をかけられずにいた。彼はすでに肩を借りることなく自分の足で立っている。
チョッパーの視線はルフィとキリへ向けられていた。
さっきまで一緒に驚いていたはずなのに気付けば笑顔で、二人を頼もしく想い、今は怖いという感情は一切持っていない。むしろ誇らしく思っていた。

それだけに言い出しにくい。
言いたいことはあったがチョッパーの表情を見て言葉に詰まる。
モバンビーは俯き、どこか苦しんでいる顔だった。
チョッパーがモバンビーの様子に気付いた頃、遠くから新たな声がやってくる。
それはまたしても彼らの仲間であった。
「お～い！　お前ら無事だったかぁ～！」
「あ、ウソップたちだ」
「探しに来てくれたんだね」
ルフィとキリがそちらを向いて手を振り始める。
ゾロとサンジ、ウソップとビビ、それにカルーが走ってきて、二人の前で立ち止まった。
気になってはいたが、チョッパーは隣に居るモバンビーを気にして動けず、その場に残って仲間たちを俯瞰的に眺める。見つめて思うのは、これが自分の仲間なのだという再確認だ。
様々な感情を持つものの、彼らはひどく楽しそうに話していた。
「やっと見つけたぜ。あの地響きがなかったら迷いっぱなしだったかもな」
「Ｍｒ．ブシドーが散々迷うから……」
「おれのせいかよっ」
「お前以外に誰が居るんだっ。方角もわからねぇくせに一人で勝手に歩きやがって」
「つーかすげぇ数の動物居るけど……こ、殺されたりしねぇよな？　大丈夫なんだよな？」
「心配すんなって。こいつらは大丈夫だよ」
「多分ね」
「た、多分ってなんだ!?　やっぱり危険なのか!?　危ねぇぞお前らぁ～！　逃げろぉ～!?」
彼らが来た途端に一瞬で騒がしくなっていた。
ビビは呆れた顔でゾロを見ながら溜息をつくし、ゾロはその意見に不満を持つものの、すぐさまサンジが同意するため怒りは彼に向けら

れる。その間にウソップはキリの適当な発言を受けて大声で騒ぎ始め、ルフィは大笑いしていた。
ほんの少し前の緊迫した空気が嘘のようだ。
ただ話しているだけで空気が緩み始め、動物たちもその様子に驚く。
「で、敵は？」
「もう居ないよ。ルフィがぶっ飛ばしたから」
「ゾロが迷ってたせいだなぁ～」
「うるせぇ！　てめぇもそう変わんねぇだろうが！」
ルフィに言われたせいでゾロが怒り出し、それをきっかけに皆がふざけ始めていた。
ビビとカルーを除き、男たちは束になって彼をからかい始める。
「クソマリモ」
「アホマリモ～」
「迷子マリモ」
「三刀流マリモ」
「いや待てルフィっ、三刀流自体は悪口になってねぇぞ」
「四刀流マリモ」
「増やしてどうすんだよ。いいか、例えばナマコが居るだろ？　ナマコにナマコっつってもお前それは正解なわけで――」
「つまり、てめぇらはおれにぶった切られてぇってわけだな……！」
わなわなと震え始めたゾロが静かに刀を抜いた。
両手に握って何やら嫌な予感がする。
彼が叫んだと同時、四人はバッと勢いよく散って逃げ出した。
「そこに並べェ！　全員切り捨ててやるッ！」
「ゾロがキレたァ！」
「逃げろぉ～！」
まるで子供のようにはしゃいでわーきゃーと騒がしい。
とても海賊とは思えない姿であり、見ていた動物たちやモバンビーは呆然としていた。だがこの場においてはチョッパーも同じだったようで、彼らのやり取りに笑いながらも、仲間ながらに本当に海賊な

のだろうかと思ってしまう。
見ればビビも苦笑していて、カルーは翼で拍手をして喜んでいた。
目の前に居る海賊が悪い連中ではない、ということだけは伝わった。
そもそも、てっきり海賊だと思っていたバトラーが海賊ではなかったのだ。
モバンビーは自分の考えについて反省し、海賊に対する考えを改める。
それがきっかけとなってようやくチョッパーに話しかけることができた。
彼は真剣な顔で、寂しそうな顔になって呟く。
「ねぇチョッパー……あいつらと一緒に行っちゃうの？」
唐突な問いかけにチョッパーは振り返り、モバンビーは言葉を重ねる。
「海賊は悪い奴ばかりじゃないかもしれない。でも君は動物で、僕らの仲間だろ？　王様じゃなくたっていいんだ、ここに居たいならずっと――」
「モバンビー。それはできないんだ」
驚くほど穏やかな顔だった。
体毛が血に濡れたひどい姿のまま笑い、彼は迷いもせずに言う。
夕日に照らされたその時の笑顔は意識せずとも目に焼き付いてしまい。
モバンビーは、止められないのだと今度こそ理解する。
「おれはルフィたちの仲間だから。知らないことがたくさんあるし、もっと冒険もしたい。だからルフィたちと一緒に行きたいんだ」
「うん……そっか」
「でもさ、この島には居られないけど、おれたち、もう仲間だろ？この島を離れたってそれは変わらないよ。今日のことはどこへ行ったって忘れない」
「……うんっ」
モバンビーは目に一杯の涙を溜め、流れないようにと必死に唇を噛

みながら頷く。
その顔を見ているとチョッパーまで泣きそうになってしまって、無理やり笑顔を作って特徴的な笑い声を発した。エッエッエッ、と彼特有のものだった。
ついさっきまで騒いでいた彼らもいつの間にか二人のやり取りを見ている。
この島に来た意味はあったようだと、その姿を見て思う。
ルフィが立ち止まった時、ふと足を触られた。
見下ろしてみるとそこにはアライグマが立っていて、つぶらな瞳で彼を見上げている。
手には麦わら帽子を持っており、それをルフィへ差し出すと頭を下げた。言葉は伝わらないとはいえ謝罪したいということなのだろう。
ルフィは快く受け入れ、受け取った帽子を頭に被り、上機嫌に笑った。
これで全ての状況はクリアされた。
心配事は全て消え、島での目的も達成されたと言っていいだろう。
ルフィが頭を上げたアライグマに言った。
「しっしっし。ありがとな」
何も礼を言うこともないのだが、そうした方がすっきりするのだろう。
彼にはすでに怒りはなかった。心配していたのだが帽子に目立った傷はなく、アライグマの体には傷があるところを見ると必死で守ってくれたのかもしれない。それも含めた礼だ。
ともかく無事に返ってきて一安心である。
そうして帽子を被った頃、頭上から巨大な影が差す。
見上げればまたしても巨大な鳥が飛んでいた。
「あっ、でっけぇ鳥」
「あの鳥にチョッパーが攫われたから色々あったんだよなぁ……」
ルフィが呟いた後でウソップが溜息交じりに言った。終わってみれば全員無事だったが島中を走り回る大冒険となった。改めて姿を目にしたことで疲労感がどっと増す。

選定の鳥は彼らの頭上をしばらく旋回した。
しかしある時、唐突に足で掴んでいた物を落とし、それがモバンビーの頭に乗る。
すっぽりと被せられた物は古びた王冠だった。
彼本人も、麦わらの一味もどういう意味かわからなかったものの、一連の行動を見たハゲオウムが驚いた声を発する。必然的に皆の視線が彼に集まった。
仕事を終えて、選定の鳥は去っていく。
だからこそと言うべきか、ハゲオウムは確信を持っている様子だった。
「選定の鳥から王冠を授与された……つまりお前が選ばれたんじゃモバンビー。次の動物王にはお前がなるべきだと選ばれた！」
「え？　ぼ、僕が？」
「今ここに新たな動物王が誕生した！　動物王はモバンビーじゃ！」
ハゲオウムが勢いよく翼を開いて叫んだ瞬間、突如島の周囲から轟音が聞こえた。
海底火山の噴火である。
島を円形に連なって覆う海底火山が一斉に噴火して、海水が高く吹き上げられ、その様はさながら王冠の如く。海水が落ちても水蒸気がその場に残って形は尚も崩れなかった。
これこそこの島が〝王冠島〟と呼ばれるようになった特徴である。
ルフィたちは目を輝かせ、純粋な好奇心からその様を眺めて。
一方でハゲオウムを始めとした島の住民たちは、異なる意味で島を包む王冠を見つめた。
「おぉ～っ！　すんげぇ～！」
「王冠島の祝福じゃ。この島もまた望んでおる、モバンビーが動物王になることを」
「僕が、動物王に……」
「ひょっとしたら選定の鳥は、彼らの力を借りて新たな動物王を生み出すため、敢えて海賊をこの島に呼び寄せたのかもしれん。こんな

ことは初めてじゃが……」
「よかったなモバンビー」
隣からチョッパーがにこやかに笑いかけてくる。
それでもモバンビーは戸惑いが強く、表情は優れなかった。
「でも、僕なんかが王様なんて、そんなことできるのかな……」
「大丈夫だよ。今のモバンビーならきっと良い王様になる」
「どうして？」
「だって、命懸けでおれを助けに来てくれただろ？　それに他のみんなもモバンビーを助けに来てくれた。君一人のためにこれだけの動物が集まったんだ。この国はきっと良くなるよ」
「チョッパー……」
言われてモバンビーもくしゃりと笑い、今度は決意を込めて言い出す。
「うん。どこまでできるかわからないけど、頑張ってみるよ。だからさ、またいつかきっと、この島に遊びに来てよ。その頃にはチョッパーも驚くくらい良い国になってるから」
「もちろんだよ。それじゃあ、約束だ」
「うん、約束」
二人はどちらからともなく握手をして、たった一つの約束をする。
誓約書もないただの口約束。だからこそ守らなければならい。
数多の仲間たちが証人である。
それは、夕焼けに照らされて、オレンジ色の王冠に誓った一瞬だった。

＊

一夜を通して行われた宴が終わって数時間。
そう時間も経っていないというのに起き出した彼らは、朝日が昇ってほんの一、二時間で出航の準備を始めていて、それが常日頃の習慣であった。
王冠島は動物たちが住む島。その国において肉を食うことは敵意

を買う危険性があり、食事は島の豊かなフルーツのみで行われる。
出航の朝、彼らは大量のフルーツをもらって、船に積み込んでいる最中だった。
だが些かもらい過ぎた節があり、倉庫に入りきらない分が甲板へ無造作に転がされていて、これもいつもの如く大食漢のルフィが欲張り過ぎたからだと溜息が漏れていた。
陸地に立ってフルーツを適当に甲板へ投げ込みながら、ウソップは大あくびをする。
その傍では朝から元気なルフィが早くもバナナを食べていた。
「ったく、こんなに持ってく必要あんのか？　いくらなんでも多過ぎだろ」
「だってこの島の動物は食っちゃいけねぇってチョッパーが言うしさぁ。フルーツで腹いっぱいになるにはそれだけいっぱい食わなきゃいけねぇじゃねぇか」
「お前、腹八分目って言葉知ってるか？」
「知らねぇけど、聞きたくない」
「聞け」
「いやだ」
「腹八分目ってのはだ、腹いっぱいになるまで食うよりもちょっと足りねぇってくらいで食べるのをやめるとだ、健康とかにもいいって――こらっ、逃げんな!?」
ウソップの話に嫌な予感がしたのか、ルフィは唐突にメリー号へ乗り込む。
文句を言うものの彼は戻らず、やれやれと頭が振られる。
ちょうどその時にキリがフルーツを詰めた木箱を運んできたため、ウソップは彼へ言った。
「なぁキリ、お前の口からルフィに教えてやってくれよ。腹八分目って意味をよ」
「なんで？　ウソップが教えるんじゃだめなの？」
「教えようとしたら野性的な勘で逃げてったよ」
「じゃあ無理そうだね。ほんと食に関しての拘りは強いよ」

「だったら自分でこれ運んで欲しいもんだけどな……」
「興味があるのは食べることのみだからねぇ。それも言ったところで無駄そうかな」
苦笑するキリは日頃からルフィに甘く、これだけ言って注意する気配がない。
こちらにも呆れてウソップは溜息を我慢できなかった。
彼らがそうしている場所から少しだけ離れて。
海がすぐ傍にある岩場の岸辺で、チョッパーとモバンビーが向かい合っていた。
再会を約束したとはいえ一時の別れがある。昨夜の宴でたくさん話もした。別れを惜しむ気持ちはあるものの、多くを語ろうとはしない。
「チョッパー。おれ、絶対に良い動物王になるから。絶対また来てくれよな」
「うん。おれも次にここへ来るまでに、もっとすごい海賊になってるからな。約束だ」
「ああ、約束だ」
互いに言いたいことは昨夜の内に言い終えた。
もう一度固く握手をして、笑顔で別れを告げる。
心には一点の曇りもなかった。
「行くぞチョッパー！　早く乗れ～！」
「うん！」
手を離して、パッと振り返ったチョッパーは素早くメリー号に乗った。
一番後ろの欄干へ座り、岸辺へ振り返る。
「出航！」
ゴーイングメリー号がゆっくりと走り出す。
作業は行われていたようだが、その途中で一足先にルフィも後部へ駆けつけた。
そこには数え切れないほど多くの動物たちが集まっていた。中にはカラスケやハゲオウム、昨日はルフィたちと戦ったという森の番人

たちまで行儀よく整列している。怪我をしていた彼らはチョッパーの治療を受けて包帯を巻いており、今日は優しい顔をしている。
チョッパーは人獣型で大きく手を振った。
モバンビーも先頭に立って手を振り返していた。
様々な動物の鳴き声が聞こえ、モバンビーの叫びも聞こえて、別れは笑顔のまま行われる。
チョッパーにとって思い出深い一日となった。ドラム島以外の初めての島。初めての冒険に、初めてできた友達。またいつかの再会を強く熱望する。
今から次の航海が楽しみになっていた。
皆に手を振りつつ、チョッパーは微笑みを湛えてルフィへ言う。
「なぁ、ルフィ」
「ん？」
「海賊って……楽しいな」
「そうなんだ。楽しいんだ、海賊は」
しっしっし、と笑って、エッエッエッ、と笑う。
二人は互いに笑顔を向け合い、島が離れて、皆の顔が見えなくなるまでそこに居た。
しばらくすると島の姿も遠くなる。
それでもチョッパーはそちらを眺めて動かなかったのだが、ある時、甲板からウソップの声が聞こえてきて、真っ先にルフィが反応する。
彼が先に皆が居る場所へ行ってしまった。
「お～いルフィ！　チョッパー！　やっぱ積み過ぎ、朝飯にフルーツパーティーやるぞぉ～！」
「いやっほ～！　パーティーだぁ～！　行くぞチョッパー！」
「あ、うん」
ルフィがどたどた行ってしまうため、追わなければと欄干から降りようとする。
その直前、遠くなった島を眺めて、チョッパーはにこりと笑った。
「またね」

仲間たちに呼ばれて彼も急いで甲板の中央へ向かう。
すでにルフィが頬一杯にフルーツを詰め込んでいたらしく、触発されたチョッパーも大慌てで近くの物を口へ放り込んでいき、あまりに膨らんだ頬を見てナミやシルクが笑った。
途中で喉を詰まらせて死にそうになりながらも、彼はその直後には頬を緩ませている。
楽しい雰囲気で、笑顔が絶えない船上。
やっぱりここが自分の居場所だと嬉しくなる。
これが幸せなのだ。チョッパー自身も大いに笑い、初めて船に乗った時の緊張はもうなかった。
これは彼の最初の物語。
海賊として一歩目を踏み出した旅だった。

アーロン一味の航路編

戦いの日々

現在、グランドラインで流れる噂がある。
ノコギリのアーロンが海賊狩りを行っているという話だ。
かつてイーストブルーで悪事を企てた男がグランドラインへ舞い戻り、麦わらの旗を掲げ、自ら目に付く海賊を全て襲い、特に賞金首を目的としていくつもの船を沈めていた。
イーストブルーで起きた事件の記事と合わせて、彼らの名は瞬く間に広がっている。
すでに討ち取られた海賊は数十に達していた。
彼らは倒した相手の旗を奪い、燃やすこともなく持ち帰る。異常とも言えるその行動を疑問視する声はそこかしこにあり、何らかの目的を持っているのだろうとも言われていた。
アーロン一味が動くことで、同時に麦わらの一味に関する噂も広まる。その船は本来のマークに加えて麦わらのマークを掲げており、それが波紋を呼んでいるのだ。
アーロン一味は麦わらの傘下なのか。
たかだかグランドラインに入ったばかりの、少々変わった事件を起こしてほんの少し注目されただけのルーキーが、早くも傘下の海賊団を従えている。あまりに生意気。普通に考えればあり得ないその話を聞いて彼らに対する注目度を高める者も少なくない。
今や海賊たちの間では、アーロン一味に気をつけろ、との声もある。
中でも海戦となれば彼らは本来の力を発揮し、負けなしを自負するほどの自信もあった。
しかしその日、アーロン一味は敢えて陸の上で敵を襲っていた。
名も知らないとある無人島。
砂浜の近くに帆船が停められていて、それより沖合にアーロン一味の船がある。
彼らにとって戦闘はもはや日常と化しており、魚人が持って生まれ

た能力に敵う者もおらず、今更陸で戦うことにも恐怖心はない。
今日、彼らにとって一つの挑戦であった。
一味で唯一の賞金首、アーロンには３０００万ベリーの賞金が懸けられている。そしてこの日の獲物に決めたのは一億ベリーを越える賞金首だ。
懸賞金だけを見れば彼らよりも格上の海賊団。
戦い始めて数分。しかし彼らは敵を圧倒していたようだ。
砂浜には五十名を超える人間が気を失って倒れていた。傍には武器が落ちて流血も少なくない。
その周囲には無傷のアーロン一味がつまらなそうな顔で立っている。
「チュッ♡　これが一億の一味か？　大したことねぇ連中だ」
「ああ、全くだ。これでは前の奴らと何も変わらん」
「ニュ～、それじゃ船長が強ぇんじゃねぇかな。懸賞金かかってるの船長だけだぞ」
幹部三名が肩を並べて話している。
砂浜での戦いはすでに終わっていた。敵を全て倒したという訳ではないが、残りは砂浜近くの洞窟に潜んでいるらしく、そちらには一部の部下を連れてアーロンが向かっている。
彼らにしてみればこの戦いもすでに終わったものだった。
アーロンが負けるはずはない。
彼はこれまで、自分より懸賞金が上の海賊と戦い、その多くが無傷で倒している。
人間と魚人の間にある差はやはり歴然で、彼が負ける姿は想像できなかった。
あっさり終わってしまったことに、チュウとクロオビは表情に呆れを浮かべて、腕組みをしながら軽く溜息をつく始末。消化不良もいいところだ。
賞金首を一人討ち取る度、または海賊団を一つ潰す度に、自分たちが強くなった実感がある。
比喩ではなく彼らはルフィたちと戦った頃より強くなっていた。

懸賞金がアーロンより下か、或いは同等の海賊から討ち取り始めて、彼らはすでに９５００万ベリーの賞金首も討ち取っている。当然その旗も奪って保有していた。
確かに懸賞金が上がる度に敵も強くなっているが、それでもいまだ無敗。
部下を倒した段階では物足りないとすら思っていて、大したことはないというのが感想だ。
倒れた敵が呻いてはいるが砂浜は静かだ。
戦闘が行われているにしては洞窟の方からも音が聞こえてこない。
はっちゃんは思わずそちらを気にし始めていた。しかし隣のチュウやクロオビは手を出す理由がないと考え、動こうとする気は全くない。
「アーロンさん、大丈夫かなぁ」
「バカ、誰に言ってんだハチ。あの人が負けると思うか？」
「思わねぇけど、でも心配だなぁ」
「お前に心配されるお人じゃねぇよ。チュッ♡　あの人は強い」
「今なら麦わらにも勝てるかもしれん。あの人はそれを望んでいるんだ。おれたちは黙ってその時を待っていればいい。いずれ決着はつけられる」
「ニュ～……そうか」
はっちゃんは少し考え込み、にこりと笑って言い出した。
「でもおれ、あいつら嫌いじゃねぇんだけどなぁ」
「おい、お前はどこまで抜けてるんだ。あいつらはおれたちを力で従わせてるんだぞ」
「好きになるような要素がどこにあった。チュッ♡」
「きっかけはそうだったけど、そこまで悪い関係じゃなかっただろ？　それに、そもそもを言い出したらおれたちがナミにひどいことしてたからだ。自業自得じゃねぇかな」
「そもそもを言うならだ。おれたちには人間に対する大きな恨みがあったことを忘れるな」
厳しい顔でクロオビがはっちゃんへ指を突きつけた。

彼が何を言わんとしているか伝わって、思わずはっちゃんの脳裏に過去の情景が浮かび上がる。
「忘れるな。英雄フィッシャー・タイガーは人間への恨みによって死んだ。おれたちが戦い始めたのも人間どもが魚人を海の底へ追いやったからだ。違うか？」
「ニュ～、でも、それはあいつらのせいじゃねえし……」
「誰がとかいう問題じゃない。これは種族の問題だ。人間に肩入れし過ぎるなよ」
はっちゃんは甘過ぎる。彼はどこか人間を好んでいる節すらあり、一味の中には麦わらの一味との交流の際から、徐々に人間を好む者も増えていて、彼が橋渡しとなっていた。
全員が全員、彼のようになれる訳ではない。
歴史によって刻み込まれた嫌悪が、まだ根深く心の中に残っていた。それはアーロンも同じだ。
激しい怒りの矛先は〝麦わらのルフィ〟に対してではない。〝人間〟へ対してだ。
彼を殺して自由を手に入れたところで怒りは消えたりしないだろう。
それがわかっているのか、はっちゃんも口を噤み、顔を俯かせて押し黙った。
辺りの状況を変えたのはそんな折だった。
突如洞窟から轟音が聞こえ、内部から仲間たちが吹き飛ばされてくる。
「うわぁあああああっ!?」
「どうした！　何が起こった！」
「あっ、アーロンさん！」
吹き飛ばされてきた魚人の多くが地面を転がるものの、その中で唯一、同じく飛ばされてきたアーロンが姿勢を低く砂浜を滑り、洞窟の方を睨んでいる。
口の端からわずかに血が流れているようだった。
どうやら苦戦中であるらしく、久しく見なかった彼の血だ。

瞳孔は形が変わり、アーロンはルフィと戦って以来本気になっていた様子である。
「アーロンさん、怪我してるのかっ？　大丈夫――」
「うるせぇぞハチ！　黙ってろ！」
かなり気が立っている様子だ。
キリバチを肩に担いで立ち上がり、苛立ちから食いしばった歯がバリッと音を立てる。
洞窟からはゆっくり歩いて、大きな影が現れていた。
筋骨隆々の肉体で二メートルを超えた巨体。肩幅も広く、厳めしい男であった。
顔に鉄仮面を被って素顔が見えない。
異名は〝手甲のアラン〟。懸賞金１億１５００万ベリー。
その名の通り両腕に頑丈な手甲を装着し、格闘を得意とする海賊である。
たった一人で多くの敵を殴り飛ばして、洞窟の外まで運んだ様は見事と言える。他の仲間は倒されたが彼だけは突き崩せなかった。それで現在に繋がっている。
彼も攻撃を受けたらしく、肩から血を流していた。
鉄仮面のせいで表情がわからず、一体どんな精神状態であるのか想像しにくい状態にあり、それもまたいつものペースを崩される要因だったようだ。普段、圧倒的な力を見せつけるアーロンは敵の動揺すらも利用し、攻勢に出るが、彼が相手ではそれができない。
図らずも長期戦が予想される状況だった。
怒りを募らせるアーロンは荒々しい歩調で彼に向かっていく。
「おめぇらは下がってろ。こいつはおれの獲物だ……！」
アーロンから強い怒気を感じた。それほど怒っているのは久々に見る気がする。
今回の敵はそれだけ強いということだろう。
急がず、慌てず、一歩ずつ進んで距離を詰めながら、アーロンは正しく状況を判断した。互いにそう傷ついてはいない。戦闘は継続できる一方、相手は彼より強い可能性もあった。

どうやらアランは喋らないらしい。
それが理由があってのことか、それとも性格的な理由なのかは知らない。とはいえ、黙り込んだままの彼が肩をキリバチで削られても悲鳴を発さず、即座に反撃してきたことは覚えている。相当打たれ強いと考えるべきか、少なくとも強い痛みにも耐えられるのは確実だ。
敵の一発による痛みがまだ鈍く残っている。
何度も受ければアーロンが不利になることは目に見えていた。
アーロンに退く気はなかった。
自分より強いかもしれない、一億越えの賞金首を前にして、一切退かずに立ち向かっている。
厄介であることは確かであるものの、恐怖心はまるで感じていなかった。
相手が誰であれ海賊ならば倒す。
倒して、旗を奪い、約束通り百枚集めた上に麦わらのルフィを始末し、自由を得る。そう決めている彼は今更やめる気にはなれない。敵に出会ったのなら自分より強くても倒すだけだ。
すでにいくつかの海賊団を潰している。
一億の首を獲った程度で自慢する気もなく、その目が見ているのは目の前の敵ではなかった。
距離が近くなるとアランが両方の拳を構えた。
迎え撃つ気は満々で、やはり一声も発さないままアーロンを見つめる。
どうやって敵を倒すか。もはや考えるのも面倒だった。
もし自分が強くなっているのなら小細工など必要ないはずである。
アーロンは敢えて策を用いず、突発的に駆け出した。
「行くぞオラァ！」
キリバチを振り上げ、半ば跳ぶようにしながら彼の眼前へ到達して、すかさず振り下ろした。
アランは自身の手甲で受け止め、ノコギリのような刃がギャリギャリと音を鳴らして彼の装備を削ろうとする。わずかな傷はつくものの肉体までは届かない。

腕が振るわれ、弾き返された。
即座にアランが前へ出て拳を握り、着地寸前のアーロンは舌打ちする。
タイミングが悪かったということもある。空中に居たアーロンが地面に着地した瞬間、振り抜かれたアランの拳が腹に直撃し、凄まじい勢いで殴り飛ばされた。
内臓まで響く痛みで気が遠くなりそうになる。
受け身も取れず、背から落ちた彼は砂を舞い上げながら転がり、倒れた。
すぐに起き上がるのが億劫になるほどの痛みが腹にあって、危うくキリバチすら落としかけた。片膝をついたアーロンは血走った眼で敵を睨む。
「くそが――！」
アーロンが特攻を開始し、アランがそれに対抗する。
その戦いはかつてないほど苛烈を極めた。
互いに全力をぶつけ合って、アランは防御しようとするのだが、アーロンは攻撃のみに集中して自身の身を守ろうなどという考えを持っていない。何としてでも敵を倒す。ただそれだけの強い意志が感じられ、アーロンが行うのは攻撃だけだ。
あまりの迫力に見ていた仲間たちでさえ声を発することはできない。
鉄仮面を被って声を発さないアランは、そんな姿に恐れを抱いたのか、徐々に動きが悪くなる。
互いに攻撃を当て合うのだが、勢いに乗るアーロンは想像以上の力を発揮していた。
振り回されるキリバチは自身も刃毀れしながらも、防御する手甲を削っていくつも傷を残して、傷が増えていく度にアランを狼狽させ、彼自身の肉体も何度か削られた。
だが代わりにアーロンもまた何度となくパンチを受けて、血反吐を吐きながら戦っている。
ひどく悲惨な光景だった。

両者は血を噴き出しながら攻撃をやめず、目に入って視界が狭まろうが、足元がふらついて転びそうになろうが、全力で敵を傷つける行為をひたすら続ける。
アーロンが叫び、わずかにアランが後ずさりを始めていた。
どうやらアランのダメージの方が大きかったようだ。
アランは鉄の手甲で相手を殴り、確実にダメージを与えている。
対するのは鋭く尖ったノコギリで、それを振るうのは人間の十倍以上の腕力を持つ魚人。一瞬の隙を衝いて肉体に刃を突き刺し、腕を引いて、それだけで深々と肉が裂かれた。
打撃による痛みの蓄積と刃による裂傷。アランが焦るのも当然である。
ぱっくり開いた肉の裂け目から大量の血が流れ出していた。
それを見てもアーロンは止まらない。まだ彼の意識があるからだ。
勝利と言うならば完膚なきまでに倒さなければならない。
声こそ発さないものの、傷を庇いながらアランが逃げようとする姿を見て、怒りは倍増し、全身に漲る力はさらに強くなった。
「どういうつもりだッ。まさか逃げようってつもりじゃねぇだろうなァ！」
咳き込んだ瞬間に大量の血を口から吐きながら、アーロンはキリバチを捨てた。刃毀れしていてそれ以上は使えない。一瞬でそう判断しての大胆な行動だった。
荒々しく歩き出しながら右腕を振るう。
体内から分泌された水が飛び出し、まるで銃弾の如くアランの脚を撃ち抜く。
「びびって逃げ出すのが一億の賞金首か!?　ふざけた真似してんじゃねぇぞ！」
脚を撃たれたことで倒れ、それでも逃げようとするアランに追いついた。
アーロンは彼の体を跨いで鉄仮面を掴んだ。
左手で固定し、右腕を振り上げ、全力で拳を振り下ろす。殴られた鉄仮面はたった一発で形を拉げてしまい、内部では破片が顔面に突き

刺さった。しかしまだ止める気が無い。
何度となく殴って、鉄仮面が破壊されても尚止まらなかった。
「オラァァ!!」
破片が飛び散り、素顔が露わになる。
そんなことにも興味を持たず、アーロンは敵が気絶するまで殴り続けた。
人間を超えた腕力で殴られて顔の形すら原型を留めなくなったようだ。
砂浜に血が広がって水溜まりのようになる。
そうなった後でアランが気絶していることに気付き、息を乱しつつ、アーロンは立ち上がった。
倒れたアランは死んでいないものの、顔がぐちゃぐちゃで、元の形がわからないほど。血の海で倒れる姿は凄惨の一言だった。
だが、アーロンも鉄の手甲で殴られて続けていたのだ。
彼ほどではないが全身に傷を負い、至る所が裂けて血を流していた。
深く息を吐くと体の力が抜け、受け身も取れず倒れてしまう。
仲間たちが驚いて声を発し、一斉に駆け出した。
全員がアーロンの下へ駆け寄っていき、慌てふためいて顔を覗き込む。
「アーロンさんっ!?」
「アーロンさぁん!」
駆けつけた時にはすでに彼は気を失っていた。顔色もひどく、死の危険性が高い。
鋭い声で船医が呼ばれて、すぐに駆けつけて治療を始めようとするとはいえ、何もない砂浜では限界がある。最も良い判断は船に戻って治療を行うことだ。
素早くクロオビが指示を出す。
仲間たちは慌てながらもアーロンへ声をかけながら急いだ。
「治療するなら船でだ！　急げ！　衝撃を与えないように船へ運べ！」

「アーロンさん、少しの間耐えてくれ！　チュッ♡」
「ニュ～ッ、みんな急げぇ～！　アーロンさんを助けろぉ～！」
敵に勝ったという喜びを感じる暇さえない。
彼らは大慌てで船に戻り、アーロンの治療を急いだ。一時を争うほどのひどい重体。しかし、彼がたった一人で一億ベリーの賞金首を討ち取ったことだけは確かなのである。

はっちゃんの海底散歩

アーロンは一億の賞金首を討ち取った。
だがその激闘によって彼は深い傷を負い、全身に包帯を巻き、眠り続けている。
すでに一日が経過した。しかし彼はまだ目覚めず、船上では心配するのか重苦しい空気が漂う。
かつてない雰囲気にはっちゃんは顔をしかめ、困惑した顔で呟いた。
「ニュ～……みんな元気がねぇな」
「無理もない。アーロンさんが倒れちまったんだからな」
傍に立っていたクロオビが呟き、その隣ではチュウが溜息をつく。
彼らも普段ほど元気がない。幹部であるが故にアーロン不在の船上を取り仕切るのだが、やはり心配する心が大きく集中できていなかった。
このままでは一味はバラバラになってしまう。
甲板を見回したはっちゃんはなんとかしなければと考えた。
「このままじゃいけねぇなぁ。なんとかしねぇと」
「チュッ♡　なんとかってどうする気だ。そりゃなんとかできるならして欲しいもんだが」
「う～ん、そうだなぁ……」
「とにかくアーロンさんが目覚めることだ。士気の回復にはそれだけでいい」
溜息交じりにクロオビが言った。
確かにアーロンは仲間たちからの信頼を集める存在。気性の荒さで怖がられることはあっても仲間には優しい人物だ。彼が目覚めただけで彼らも笑顔を取り戻せるはず。
しばらく考えたはっちゃんが突然笑顔になる。
何かを思いついた様子だった。
「よし！　わかったぞ！」
突然の大きな声にクロオビとチュウが揃って顔を上げ、はっちゃん

の顔を見た。
「アーロンさんを目覚めさせるのは無理だけど、怪我を早く治すことはできるだろ。おれが精のつく物を獲ってくる。アーロンさんが起きたら食ってもらおう」
「精のつく物って」
「突然何を言い出すかと思えば……」
果たしてそれは現状の打開策なのだろうか。
呆れる二人だが幼馴染であるため強く否定もしない。
こうした状況は初めてではなかった。止めるよりもやらせてみればいいと考えていたのだろう。
「確かに、栄養のある物はあった方がいいとは思うが」
「チュッ♡　どうせアーロンさんは寝てんだ。好きにやってみたらどうだ」
「ニュ～、ありがとな二人とも。それじゃおれ、ちょっと海に潜って探してくる」
「一人で大丈夫か？　良い予感はしないぞ」
「大丈夫だ。すぐ戻ってくるぞぉ～」
そう言ってはっちゃんは欄干に駆け寄り、軽い動作で跳んで、上に飛び乗った。
直後には手を伸ばし、頭から海へ飛び込むのである。
魚人族は水中でも呼吸が可能。当然泳ぎは得意中の得意であって、彼らが海戦で異様な強さを発揮するのはこれが理由でもあった。
海中でぱっちり目を開けたはっちゃんは周囲を見回す。
とりあえず移動してみるか。そんな程度の気持ちで泳ぎ始めた。
海の中は穏やかで、心が安らぐほど静かだった。
陸や海上での戦いを忘れさせてくれる平和がある。世界がずっとこうならいいのにと思った。
はっちゃんは海を泳ぐこと自体を楽しみつつ、笑顔で辺りに目を向ける。
「ニュ～、アーロンさんが元気になる物はねぇかなぁ～」
当然ではあったがスイスイ泳いで、彼は見る見るうちに船から離れ

ていく。どうやって帰るのかを考えていなさそうな姿であり、幼馴染の二人が感じた不安は早くも的中していた。
帰り道も考えず、はっちゃんはどんどん海底へ、船から離れて前へ進む。
様々な魚とすれ違った。
別段はっちゃんを怖がった様子もなく、中には興味を持って近付いてくる魚も居る。
はっちゃんも彼らに目を付け、興味を持って観察したものの、アーロンの好みには合わなそうだと思って手を出すことはしなかった。
目的がはっきりしており、元々の性格が優しいこともあって無駄な殺生はしない。
彼はにこやかに魚たちへ挨拶し、先を急いだだけだった。
目的があっても目的地がないため、その泳ぎはどこを目指していたのか。
なんとなく気になる方向へ進んだり、海面近くへ上がったり、海底付近へ下がったり、規則性のない動きでしばらく気ままに散策を続ける。もはやどの方角に進んでいるのかすら曖昧だったが船が遥か彼方になっていることだけは確かだった。
そうとは気付かず、はっちゃんは呑気に泳ぎ続ける。
探し物ではなくただの散歩ではないのかとさえ思い始めた頃。
彼自身が知る方法はなかったが二時間近く経っていた。
それほどまでに何も見つからないと流石に困る。はっちゃんは眉間に皺を寄せる。
「ニュ～、困ったなぁ。何も見つからねぇぞ。早くアーロンさんのために美味しくて栄養のある物を持って帰ってやりてぇのになぁ」
溜息をつきながらまた少し海面に近付いた時だった。
はっちゃんの視界に、おかしな泳ぎ方をする一匹のパンサメが映る。
「ニュ？」
首を傾げながら泳いで近付いた。
パンダのように白黒の模様を持つパンサメは、くねくねと身を捩っ

て暴れている。周囲に獲物が居る訳でもなく一匹で勝手にそんなことをしているようだ。
訳が分からず、その前で泳ぐのをやめたはっちゃんは彼へ問うように呟いた。
「何やってんだろうなぁ。踊ってんのか？」
聞いてみるとパンサメは反応する。自身のヒレで口元を指したのだ。
よく見ると口に釣り針が刺さっている。
おそらく餌に噛みついたら針が刺さって、自分では抜けなくて困っていたのだろう。事情を理解したはっちゃんは笑みを浮かべ、もう少し彼へ近付くと手を伸ばした。
優しく声をかけつつ、針を取ってやろうというつもりのようだった。
「そういうことか。わかった、今取ってやるぞ」
そう言ってやるとパンサメは嬉しそうに頷く。
じっと動いて我慢し始めた彼に触れ、もう片方の手で釣り針を掴み、できるだけ痛みを感じさせないようにと配慮しながらもぐいっと引っ張る。すると針はあっさり抜けた。
その瞬間にパンサメはくるりとその場で回って、笑みを浮かべながらヒレで彼の手を取る。
少し照れながら後頭部を掻くはっちゃんも嬉しそうにしていた。
「いやいや、いいんだお礼なんて。おれもお前が助かって嬉しいぞ」
物凄く喜ぶパンサメにそう語り掛けると、いやいやと顔を振って、踵を返した彼はヒレで手招きしながら泳ぎ始めた。ついて来いと言っているらしい。
気になったはっちゃんは彼の後ろについていく。
どうやら現在地よりも海底に向かっているようだった。
海底に辿り着き、辺りが少し暗くなる。
比較的浅い場所のようだがそれなりに風景は変わっていた。
パンサメは海底にある大きな岩、そこへぽっかり空いた穴へ入っていく。

近付いてみればよくわかる。その場所には様々な物が置かれて、まるで住処のようだ。パンサメが日頃暮らしている場所へ案内されたのだろう。
はっちゃんは感心して置かれている物を眺める。
海上の物が多かった。人間が使う食器、ランタン、ボールや壺、錨や大砲まである。
中には巨大な冷蔵庫も置かれていて、パンサメは意気揚々とその扉を開き、中から大きな肉の塊を取り出してきた。おそらくは海獣の肉なのだろう。両手で持たなければいけないサイズである。
パンサメはそれをはっちゃんへ手渡した。
驚くはっちゃんだが彼の笑顔を見た後、嬉しそうに頬を緩める。
「いいのかぁ？　お前の食い物じゃねぇか」
パンサメは両方のヒレでどーぞどーぞと伝える。それではっちゃんは頭を下げた。
「悪いなぁ。それじゃあ有難くもらっていくよ」
せっかくの好意を受け取ることに決め、はっちゃんはパンサメにお礼を告げて泳ぎ始める。
家の前で手を振る彼に別れを告げ、ひとまずその肉を船に運ぼうと考えた。
とはいえ、帰り道を考えず能天気に泳いでいた彼である。
船に戻るのも簡単ではない。
ひとまず海上に出ようと考えて上を目指した。
「ニュ～、それにしてもなんで釣り針なんて刺さってたんだろうなぁ。猟師でも居るのか？」
海面から顔を出して辺りを見回してみた。
すでに興味は他の事柄に移っており、少しだけでも確認してみたいと思っている。
二本の腕で肉を抱えながら、バシャバシャとバタ足で進む彼は思いのほか近くに島を見つけ、思い切ってそこへ近付いてみることを決める。
「ん～？」

よく見るとそこはずいぶん小さな島だった。
全長にして十メートル程度しかないが一個の島であり、数本の木が立っていて、そのすぐ傍には難破船がのしかかるようにして海上へ顔を出しており、船の残骸で焚火が作られている。すぐに見つけられたのも空へ黒い煙が上げられているためだった。
その島に薄汚れた一人の男が居る。
彼は釣りをしているようで、気になったはっちゃんはさらに近付いた。
船が壊れて遭難したに違いない。
釣りに没頭しているらしい顔は疲れ切っており、腹が減っている可能性もある。
近くまで行き、はっちゃんは声をかけた。
「おいお前ぇ、ひょっとして遭難したのか？」
「んっ？　だ、誰だお前は」
「ちょうどでかい肉をもらったんだ。これ食いてぇか？　欲しいならやるぞ」
「ハッ!?　肉だとっ！」
疲弊した様子の男は突如表情を輝かせ、はっちゃんに笑顔を向ける。
両手で抱えなければならないほど大きな肉を見せるとさらに嬉しそうな声が聞こえた。
取引もせず、あっさりと彼に手渡してやる。
男は涙を流して喜びを表現し、はっちゃんには土下座せんばかりの勢いで頭を下げ、ともすれば涙でつっかえそうになる言葉を必死に絞り出して礼を言った。
「うおおおおぅ、お前はおれの救世主だ……こんなに美味そうな肉は今まで見たことない！」
「ニュ～、それはよかったぞ。火はあるみたいだからよく焼いて食ってくれ」
「ありがとう！　この恩は一生忘れない！」
「大袈裟だなぁ。別にいいのに」

「そ、そうだ、一緒に食っていくか？」
「いいよ。お前の方が腹減ってるだろ？　それは全部自分で食ってくれ」
「おおおおぅ……こんなに優しい奴ぁ、おれぁ、今まで会った事ねぇよぉ～。魚人っていい奴らだなぁ～。ありがてぇ、ありがてぇ……！」
「ほんとは助けてやりてぇんだけど、おれも仲間のために探し物があるんだ。これくらいしかできねぇんだけどな」
「いいや、十分さ！　おれは人生に絶望していたが、この肉があれば生きていける！」
男はよっぽど腹を空かせていたようで、受け取った肉を掲げると大声でそう言い切った。それほど絶望していなたら助けてやりたい気もするが、笑顔になったので良しとしよう。
はっちゃんは軽く手を振り、再び海中へ潜ろうとする。
「それじゃあ頑張ってくれよ。おれは応援することしかできねぇけど、無事を祈ってるぞ」
「ま、待ってくれ！　この島には何もねぇがせめてこれくらいは！」
去ろうとしたはっちゃんを止めて、男は慌ててポケットから何かを取り出し、差し出した。
それはきれいな指輪である。
「これは？」
「釣りをしてたら釣れたんだ。昔なら質屋にでも売ったかもしれねぇが、今のおれには何の価値もねぇ。本当に釣りたいのは魚だったわけだしな」
「ニュ～、それじゃせっかくだし頂いとくぞ」
「ありがとうタコ！　おれは一生お前を忘れないぞ！」
「おれははっちゃんっていう名前なんだ」
「ありがとうはっちゃん！　いつか必ず礼をさせてくれ！　それまでおれは生きてみせる！」
「それはいいなぁ。じゃあ今度会うまで絶対に死ぬなよ」
「もちろんだ！」

希望を見出して大きく手を振る男に見送られながら、はっちゃんは再び海中へ入る。
せっかくもらった肉をあげてしまった。だが代わりに指輪を受け取って、これは食べれないので別の食べ物を探さなければならない。
はっちゃんは次の獲物を求めて泳ぎ始める。
海中はまたも静かで穏やか。
二つの出会いによってなんだか楽しくなり、素直な笑顔で呟く。
「今日は色んな奴に会うなぁ。ひょっとしてまた誰かに会うのかな？」
手に指輪を持ちながら優雅に泳ぎ、辺りの風景を楽しみながら、今やまさしく散歩となる。目的は当然アーロンのためである一方でこの時を楽しんでもいた。
久しぶりに心が安らぐ一時で、やはりこういう時間がなければいけない。
できればアーロンを含む仲間たちにも、一時でもいい、戦いを忘れて昔のようにバカ騒ぎをする時間を感じて欲しい。それこそ、以前の一味に居た頃のように。
はっちゃんは笑顔で海中の風景を見回した。
すると、またしても海底付近に少し変わった誰かを見つける。
気になって近付いてみると多種多様な魚が集まっていることがわかった。
その中にさめざめと涙を流す金魚の姫を見つけた。
何があったのだろうと近付いて、一匹の魚に話を質問する。
「何があったんだ？　姫様はなんで泣いてんだ？」
問いかけてみると魚はパクパク口を動かし、何かを喋っているらしい。それは人間には聞こえない声だが、はっちゃんは彼の言葉を理解していた。
本来は人魚族が得意とする魚との対話である。
粗暴だと勘違いされ易い魚人には似つかわしくない能力であるものの、優しい性格がきっかけだったか、彼は昔からそうして魚と話すことを得意としていた。

ふむふむと頷いて理解する。
どうやら金魚姫の大事な指輪が無くなってしまったらしい。
あっと声を出して、はっちゃんは持っていた指輪を彼らへ見せた。
「それならおれ、さっき見つけた指輪があるんだ。これは違うのか？」
キラリと光る指輪を皆が確認して、一斉に喜びの声を上げる。
探していた金魚姫の指輪だったようだ。
涙を流しながら、しかし今度は嬉しそうにしている金魚姫へ近付いていき、彼女へ直接手渡してやる。金魚姫は大層喜んで深々と頭を下げた。
「いいんだ、いいんだ。おれももらっただけだから、気にしなくていい」
みんなが喜んでくれて嬉しいはっちゃんはそう言った。
しかし金魚姫を始めとして、ぜひお礼がしたいと多くの魚たちが言う。
その場でぼけっと待っていると、執事のような帽子を被った一匹の魚が近付いてきて、彼にお礼の品を渡す。それは見事な、黄金で出来た矛である。
やはり姫。お礼の品も素晴らしい物だ。
思わず受け取ってしまったはっちゃんは返すのも悪い気がして、有難く頭を下げる。
「これもらってもいいのか？　ありがとう。もう指輪失くすなよ」
笑顔で言って見送ってくれる彼らに手を振り、はっちゃんはまた旅に出る。
良い事をした後は気持ちが良い。
魚たちの声を背に受けつつ、またしても彼は当てもなく泳ぎ出した。
「海には困ってる奴が多いんだなぁ～。人を助けるのは案外気持ちがいいもんだ」
人助けは自分まで気持ちが良くなる。相手の笑顔を見るのが嬉しいのだ。

きっかけこそアーロンに美味しい物を食べさせたいという想いだったものの、これはこれで良い事をしている。たまには船を離れて散歩もしてみるべきだろう。
そんな想いで黄金の矛を肩に担ぎ、彼はどこへともなく進んでいた。
それはいいのだが、黄金の矛は食べられない。
これでまた何か美味しい物を収穫できればいいのだが。
気楽に考え、彼は視線を彷徨わせる。
それからしばらく泳いだ後のこと。
唐突に大きな影が接近していることに気付いて、咄嗟にはっちゃんは身構える。
なぜかは知らないが突然、向こうの方から猛スピードで海イノシシが泳いできて、その後ろからは大口を開ける海王類が彼を追っていた様子だ。
何が何とはわからないとはいえ、はっちゃんは海イノシシの悲しそうな顔を見る。
つい突発的に動いてしまって、黄金の矛を握り締めた。
その選択はつまり、海王類と戦うという意味である。
本来ならば選んではいけない選択肢。海王類に勝つことは簡単ではない。
しかしこの日、はっちゃんは困った人を助け続けていた。
その結果、海イノシシの悲しい顔を見て、そんな顔をさせたくないと思ってしまい、彼を笑顔にしたいと素直に思う。困っている顔を変えてみたかった。
「ごめんなアーロンさん、もうちょっとだけ待っててくれ……！」
二本の腕で矛を握り、全く気付いていない海王類へ接近した。
見た目はどことなくカメレオンに似ている気がしないでもないが、丸々とした歯が大きな口に並んでいて、その中には長い舌があり、長い尻尾が丸められている。
海イノシシを見るばかりで気付く気配がない。
はっちゃんは猛然と攻撃を開始した。

「ニュアアアアッ！」
頬の辺りへ矛をブッ刺す。
ずぶりと刺さった矛は確実に海王類に血を流させ、痛みで体をよろけさせた。
このままでは自分が狙われる。そこではっちゃんは矛から手を離し、反射的に拳を握った。
「タコ焼きパ～ンチッ！」
刺さった矛の柄をぶん殴り、勢いよくさらに矛先を埋める。ずぶりと入り込んだことで海王類はそれを無視できず、取れと言わんばかりにヒレをバタバタ動かした。
あっと呟き、悪いことをしてしまったと思う。
咄嗟の判断で、考えようとすらしていなかったが、そりゃ痛いに決まっている。
はっちゃんは矛を抜き取った。抜く瞬間にも痛みはあったが贅沢は言えない。抜かれた瞬間に海王類は踵を返して、その場を去ってしまう。ひどく悲しそうに逃げ帰る姿だ。
すっかり落ち込んでしまった海王類に謝りつつ、視線は先程の海イノシシへ。
彼もまた感謝している顔ではっちゃんへ近寄ってきた。
なんだか複雑な気もするがとりあえず感謝されているのである。
海イノシシは食われずに済んで、海王類に殺されることも殺してしまうこともなかった。
ひとまず一件落着だ。
「ニュ～、大丈夫かお前。すげぇ奴に狙われてたなぁ」
命を助けたことで仲良くなった気がして平然と話しかけた。
その瞬間に、海イノシシは苦しげな顔で口元を押さえる。
「なんだぁ？　どうした？」
唐突に苦しそうになった海イノシシは、なぜか腹の中の物を吐き出した。
はっちゃんは目が飛び出さんばかりに驚愕する。
海イノシシの口から、人魚とヒトデが飛び出してきたのだ。

「で、出れたぁ～！　外だぁ～！」
「やったぁ～！」
「ニュ～っ!?　人魚とヒトデ出てきたぁ～!?」
現れたのは人魚とヒトデ。助かったことを心底喜んで抱き合っている。
人魚は女性。緑色の短髪で、Tシャツを着てリュックを背負い、涙を零しながら笑っている。
もう一方のヒトデは一応男であるらしく、声は低くて、帽子を被り、そこらの魚とは違って人間が聞き取れる言葉を使っていた。それで人魚と喜び合っている。
はっちゃん自身も魚人で珍しいのだが、彼女らを見て驚きが隠せなかった。
魚人島出身である彼は人魚にも海の生物にも見慣れている。しかし海イノシシに食われてしかも吐き出されたそれらは今まで一度も見たことがない。
あんぐり口を開けて声を出すことすらできなかった。
そうして固まっていると人魚が気付き、彼に笑顔を向けてくる。
「あっ！　あなたが助けてくれたんだね！　ありがとう！」
「ニュ？」
「おおおぅ、お前はおれたちの命の恩人だっ。なんと礼を言ったらいいかわからねぇ……！」
「ニュ？」
別に助けたつもりはなく、勝手に飛び出してきただけだ。
今回ばかりはそのお礼の言葉を受け止めることもできずに、はっちゃんは首を傾げる。しかし二人は彼が命の恩人だという考えを変えなかったようだ。
「……ニュ？」
人魚の女の子に手を握られ、勢いよくぶんぶん振られながら、はっちゃんは不思議そうにする。
ともかく助かったとならよかったと、そう考えるしかなさそうだ。

はっちゃんの海底散歩（2）

助けた人魚とヒトデは愛想も良く、はっちゃんに対して笑顔を向けていた。
よくわからないがまぁいいだろうと判断する。
はっちゃんが名乗ると、彼女らは友好の証か自らも名乗り始めた。
「私ケイミーっていうの。よろしくね、はっちん」
「おれは新進気鋭のデザイナー！　ヒトデのパッパグだ！」
人魚の少女はケイミー。ヒトデはパッパグというらしい。
なんだか知らないが悪い人物じゃなさそうで、はっちゃんは警戒心もなく二人と話す。
「ニュ～。お前ら一体何してたんだ？　イノシシの腹の中で」
「それが、私ったらドジで、よく海獣に食べられたり攫われちゃったりするの」
「攫われること三十回以上、海獣に食われること二十回以上だ……」
「大変だなぁお前ら」
「えへへ……」
はっちゃんは黄金の矛を六本の内、下にある一本の手で持ち、穂先を地面へ向けていた。これによって二人が怖がることもなく、感情のまま嬉しそうに彼へ向き合えた。
何はともあれはっちゃんは命の恩人。
そう考えている二人はうきうきしながら彼へ言う。
「はっちんには何かお礼しなきゃね。何がいいかな？」
「なぁハチ、お前欲しい物はあるか？　お前は命の恩人だ。せっかくなら何か返してぇな」
「それならおれ、仲間が怪我をして寝込んでるんだ。精のつく物を食わせてやりてぇんだけど」
「う～ん、精のつく食べ物って何かな。あっ、ハマグリは？」
「ケイミー、ケイミー、それおれのメシだから」
「あ、そうだった。ごめんねはっちん、ハマグリはパッパグの餌だったよ」

「ニュ～、構わねぇぞ」
どこか緊張感のないやり取りである。
初対面のはっちゃんに対して恐怖心を抱くこともない。海獣に食われたり攫われたりする理由がわかる気もする状況であるが、呑気なはっちゃんはそんなことを想いもしなかった。
図らずも似たり寄ったりの三人が集まったと言える。
本人たちにそのつもりはなかっただろうが和やかな雰囲気の原因であった。
とにかくハマグリはもらえないようだ。
ハマグリが良いと言った訳ではないものの、それなら別の何かを探さなければならない。
腕を組んだはっちゃんは悩み始め、同じ姿勢になってケイミーとパッパグも頭を捻る。海にある精のつく食べ物とは一体何なのだろう。
「ニュ～、精のつく食べ物……」
「元気になる食べ物……」
「怪我が治る食べ物かぁ……」
あらゆる表現で考えるのだが思い付かない。無駄に時間だけが流れていった。
しばらくすると彼らへ近付く影が現れた。
ゆっくりはっちゃんの背後から近付いてくるのは三人組で、目を閉じた状態で考え込むために三人は全く気付いていない。真剣になるあまり目を開けることも忘れていたらしい。
結果的に接近はいとも容易く済んでしまって、しかしその時、接近した彼らが大声を発した。
「オウオウ、誰かと思ったおめぇ、ハチじゃねぇか！」
「ニュ？」
「きゃあ～っ!?　また来たぁあああっ!?」
「人攫い～!?　いや人魚攫い～!?」
ケイミーとパッパグが叫び出している一方、振り返ったはっちゃんは懐かしい顔を見た。

そこに居たのはかつての仲間、マクロという魚人だ。
懐かしい顔を見た途端に再会を喜び、諸手を上げて歓迎する。
「ニュ～！　マクロじゃねぇか！　久しぶりだなぁ」
「おめぇこんなとこで一体何してんだ？　アーロンと一緒に行ったんじゃねぇのか」
「そうなんだ。今アーロンさんが怪我しちまってよ、精のつく食べ物を探してるんだ」
「ハッ、ハチ、ハチ！　ちょっと聞いてくれ、そいつら――！」
パッパグが何かを言おうとした瞬間、はっちゃんと二人の間に残りの二人が割り込み、視界を遮ってしまう。さらにはっちゃんが不思議そうに振り向こうとした瞬間、マクロが彼の肩に腕を回してぐいっと引っ張った。まるで内緒話をするように少し離れてしまう。
その間も二人は何か言いたげだったが、マクロの仲間に睨まれて言い出せない様子だ。
「まぁまぁ待てよハチ。そういうことならいい話がある。まぁ聞け」
「ニュ？　なんか知ってんのか？」
「ああもちろん知ってる。ちょうどこの近くだ。おめぇたこ焼きは好きだよな？」
「もちろん好きだぞ」
「ならこの地図を見ろ」
そう言ってマクロは懐から、水中でふやけている一枚の地図を取り出した。
はっちゃんはそれを受け取って興味津々に聞く。
「この近くに〝伝説のたこ焼き〟が眠ってるって噂だ。金になるかと思って地図を持ってた。これをおめぇにやるからよ、ぜひアーロンに食わしてやってくれよ」
「ニュ～!?　伝説のたこ焼き!?　ほんとかぁ！」
「ああ、ああ、本当さ。でも誰かに先を越されないように急いだ方がいい。お友達はおれが保護してやるからよ、おめぇは先に一人で回収してきな」

「ありがとうなぁマクロ！　やっぱり持つべきものは仲間だな！」
「いいから、行け、行け、なぁ。急いだ方がいいんだ。この噂は有名だからな」
「わかった！」
はっちゃんは大事そうに地図を持ち、どちらへ進めばいいかを確認して泳ぎ始める。後ろを気にしないように上手くマクロが盾となって二人を見ることもなかった。
突然はっちゃんが行ってしまうためにケイミーとパッパグが騒ぎ始める。
しかし彼女たちをマクロに任せた彼はとにかく急いでいたようだ。
「はっち～ん!?　ちょっと待ってぇ～！」
「た、助けてくれぇ～！　違うんだ、こいつらは――」
「ヨウヨウ、静かにしとけよ。あのバカが気付いちゃったらどうするんだよ」
はっちゃんは全速力で地図が示す位置へ向かう。
航海術には詳しくないが地図の見方くらいは理解していた。ついにアーロンを元気付けられる美味しい食べ物が見つけられる。しかも伝説のたこ焼きというのだから彼も楽しみだ。
彼はにこにこと嬉しそうに、仲間たちが喜ぶ顔を想像しながら急ぐ。
辺りの風景はさっきまでより高速に後ろへ流れていった。
「これならアーロンさんも喜んでくれるだろうなぁ～。なんたって伝説だもんなぁ。今頃起きてるかもしれねぇから急がねぇと」
全力で泳いで近いと言われていた通り、想像よりずっと早くその泳ぎは止まった。
ついに伝説のたこ焼きが眠る場所へ辿り着いたのである。
しかし不思議なのは、地図が示す場所に居たのは海王類ほどもある大きなタコのみで。
伝説のたこ焼きを売っている店もなければ、伝説の宝が眠っていそうな遺跡もない。巨大なタコが不機嫌そうな目ではっちゃんを見上げており、はっちゃんは首を傾げる。

いくら周囲を見回しても伝説のたこ焼きらしき物は見当たらなかった。
この瞬間、顔つきを変えたはっちゃんは自分が騙されたのだと理解する。
一瞬にして燃え上がるような怒りが彼を支配する。
この怒りははっちゃん自身を騙したことに加え、ひいてはアーロンへの侮辱とも感じる。
ただアーロンに美味しいたこ焼きを食べさせたかっただけなのに。
今、彼の体にかつてない力が生まれていた。
「ニュ～、マクロ……許さねぇ……！」
はっちゃんはわなわなと震え始める。
それを見ながら、自分のナワバリに入られたことが気に入らなかったのか、巨大タコがのそりと足を一本持ち上げた。彼を殴り飛ばそうとでもしたのだろう。
それを見た瞬間にはっちゃんの怒りが爆発する。
「ニュァァァァァッ！　マクロォ～ッ!!」
迫ってくる巨大な足を掻い潜り、はっちゃんは猛然とタコへ接近する。
驚愕して目を見開く様を見てもなんとも思わない。
彼の全力のパンチがタコの眉間を殴りつけて、三本同時の衝撃が一瞬にして彼を沈黙させる。
たった一度の攻撃で三発のパンチ。予想外の攻撃力にタコはあっさり気絶したらしい。
この時はっちゃんは普段以上の力を発揮していた。
単純な腕力といい、移動する際のスピードといい、いつもの姿とはあまりにも違う。
本人はそれを意識したつもりもなく、そうしようとした訳でもなければ、自分がいつもと違うことにすら気付いておらず、ただ単にマクロへの怒りで燃え上がるのみ。
海王類クラスのタコを一瞬で殴り倒しても、怒りは全く収まらなかった。

「絶対許さねぇぞォオオオッ！」
来た道を急いで戻っていく。怒りのせいなのか、先程来た時の全速力よりも早く、周囲の景色がゼロになってしまうほどの速度で先程の場所を目指した。
ケイミーとパッパグはどうなったのだろう。
今となっては全てが信用ならない。はっちゃんの速度はどんどん増していく一方だ。
行った時よりも早く戻ってきた。かかった時間は五分にも満たない。
先程立っていた場所へ目を向けると何やらパッパグが泣いていて、ケイミーもマクロ一味の姿も見えなかった。やはり嫌な想像が当たったのである。
急いでパッパグの下へ駆けつけて声をかける。
はっちゃんを見た途端、パッパグは涙を流しながらも喜んでいた。
「パッパグゥ！」
「あっ、ハチィ～！　ケイミーが攫われちゃったよぉ～！」
「んなにぃ～ッ！」
パッパグの叫びを聞いてはっちゃんはまだまだ怒りを募らせる。
嘘をついた上に人魚を攫うとは。
これは流石に元仲間だとしても無視できず、彼は素早く決意をする。
マクロ一味を倒し、嘘をついたことを後悔させつつ、ケイミーを救わねば。
はっちゃんはパッパグの体を持ち上げ、自分の背中に掴まらせると急いで泳ぎ始めた。
「助けに行くぞ！　しっかり掴まれ！」
「うおおおおんっ！　お前男だ、ハチィ！」
最速の遊泳速度を誇る人魚族すらびっくりの、とんでもないスピードではっちゃんが泳ぐ。
パッパグが振り落とされないように掴まるだけで一苦労なほどだ。
そのスピードなら行ける。

マクロ一味に追いつくことができる。
パッパグは犯行がほんの少し前だと知っているため、彼らが去った方向を教え、少ししただけで海面に浮かぶ船底を見つけて、はっちゃんは鼻息を荒くした。
マクロの本業は〝人攫い屋〟である。
どうやらその船にケイミーが囚われているらしい。
一切スピードを緩めることなく、はっちゃんはその船底へ突進していった。
誰かを傷つけないようにと下げたままだった黄金の矛を構え、思い切り船底へ激突する。すると一瞬にして船が真っ二つに折れてしまい、はっちゃんは海上へ飛び出した。
あまりにも勢いが強過ぎて高々と空を飛んでいた。
一撃で粉々にされた船は早くも沈没しようとしていて、後部にあった水槽が傾いたことで中に居たケイミーが海へ逃げ出し、マクロたちは見るからに狼狽している。
状況は瞬く間に混乱の様相を見せていた。
「ケイミー！　ケイミー！」
「パッパグ！　はっち～ん！」
「ニュ～、マクロォ～！　よくもおれを騙したなァ～！」
「ハッ、ハチ!?　一体何の話だ！」
「とぼけるなァ～！」
ケイミーが逃げたことを確認したパッパグが海へ飛び降り、いち早く彼女の下へ向かう。
その最中も落下していくはっちゃんはマクロ一味の三人から目を離さず、落下の勢いのまま彼らへ向けて拳を握り、頭から海へ飛び込みながら攻撃を行った。
「この嘘つきめェ！　お仕置きだ、タコ焼きパ～ンチ!!」
「ま、待てっ――!?」
海面へ到達する一瞬で、三人の顔が全く同時に殴られていた。
彼らの体は海底へ向けて一直線に飛んでいく。
凄まじい衝撃が全身を駆け抜けて、痛みが意識を遠ざけ、心まで折

られてしまったのか海中で姿勢を立て直すこともできない。そのまま の勢いで彼らは海底に激突した。
はっちゃんが追いついた時、三人は尻から腰にかけてが地面に突き刺さって埋まっていた。
動けない上に意識が朦朧としている彼らへ近付き、はっちゃんがマクロの胸倉を掴みながら文句を言い始める。いまだに怒りは薄れず、せめて言いたいことは言ってやろうというつもりらしい。
「よくも騙したなぁ！　しかもケイミーを攫いやがって！」
「う、うぅ、嘘じゃないのに……」
「ニュ～？」
マクロはそれだけを言って意識を失ってしまう。すでに他の二人も気絶していた。
はっちゃんは不思議そうに首を傾げる。
嘘ではないと言っていたが本当だろうか。
あの辺りを見回したところでそれらしき物は見当たらなかったのだが、どういうことだろう。
パッと胸倉を探し、はっちゃんは考え始める。
その間に海中へ戻ってきたケイミーとパッパグは妙にはしゃいでいる様子だった。
はしゃぐ理由の一つに、まずはっちゃんがケイミーを助けてくれたことがある。騙されたとはいえ一度は離れてしまったが故に彼が傍に居る安堵はとてつもなく大きい。
二つ目に船が壊れて海中へ落ちてきた財宝だ。
マクロ一味の財宝を受け止め、腹いせ代わりに持っていくことにしたようだ。
怖い目にあった直後とはいえ二人は上機嫌そうに寄ってきてはっちゃんに礼を言う。
「ハチ～！　ありがとう！　お前はやっぱり良い奴だ！」
「ごめんねはっちん、また助けてもらっちゃって。でもありがとう」
「いいんだ。おれも騙されて腹が立っただけだ」
はっちゃんは笑顔で二人を迎え、ケイミーとパッパグも嬉しそうな

顔になる。
宝箱が二つと中身が詰まった大きな袋が一つ。
重そうなので受け取ってやり、その後はっちゃんが二人を誘う。
「おれ探し物があるんだ。せっかくなら二人も来てくれねぇか？」
「いいよ。だってはっちんにはお礼しなきゃ」
「一度ならず二度も助けてもらったからなぁ。お前にはもう頭が上がらねぇよ」
「気にすんな。それに場所はもうわかってるんだ」
そう言ってはっちゃんは泳ぎ始め、先頭になって先導を始める。
「ニュ～こっちだ。来てくれ」
「うん」
「どこ行く気なんだ？」
「見てくれればきっとわかるよ」
三人で移動を始めて、先程タコを仕留めた場所へ向かい始める。
今度はもう急いだりしない。奪った宝と黄金の矛を持ってゆっくり泳ぎ、穏やかな雰囲気を湛えて辺りの風景を楽しむ余裕も戻ってきた。
ケイミーとパッパグも落ち着いたようだ。
すっかり恐怖心を忘れ、マクロ一味のことも頭に残らず、二人ははっちゃんに話しかける。
彼についての方がよっぽど興味があったらしい。
「はっちんは強いんだね。ねぇ、どこから来たの？」
「魚人島の出身だぞ。でも何年かイーストブルーに行ってたんだ」
「あ、そうなんだ。私たちも魚人島で暮らしてたんだよ」
「何を隠そう、おれこそ魚人島発祥、クリミナルブランド社の社長兼デザイナーなんだぞ」
「なんか聞いたことあるなぁ、それ」
「パッパグは凄いデザイナーなんだ。私も将来はデザイナーになりたくて弟子入りしたの」
「魚人島に帰るなら一緒に行こう。お前はいい奴だし強い。無事に帰れたらうちの会社が総力を挙げてお礼するぞ」

ゆったり泳ぎながらはっちゃんが振り返った。
彼の一言に返答しなければならなかったのだろう。
「ニュ～、おれは魚人島には帰らねぇんだ。仲間と一緒に旅してるからな」
「そうかぁ。まぁでもしばらくはおれたちも一緒に行っていいかな？」
「いいぞ。きっとみんなも納得してくれると思う」
「やったぁ！　みんなで旅するの、なんだか楽しそうだね」
ケイミーが喜んでにこにこしており、パッパグも上機嫌にくるくる回っていた。
頼もしいだけでなく優しいはっちゃんとの旅は楽しそうだ。
喜ぶ二人を見てはっちゃんも嬉しくなって頬を緩ませる。
そうしてしばらくすると目的地が見えた。
彼らは気絶した巨大タコを見つけ、途端にケイミーとパッパグが驚愕する。
「きゃあ～っ!?　おっきなタコぉ～!?」
「食われるぞぉ～!?」
「大丈夫だ。もう気絶してる」
驚いて飛び上がる二人を尻目に、はっちゃんは再びその辺りの散策を始めた。
伝説のたこ焼きはやはりここなのだろうか。しかしどこを見てもそれらしき物は見当たらず、あいにく人も居ないため知っていそうな人物すら見つからない。
その時、タコの頭がわずかにズレているのが見えた。
はっちゃんは宝を置いてそこへ近付く。
気になったのでとりあえず頭頂部を掴んでぐいっと引っ張ってみる。すると蓋のようにそこが開いてしまう。それを見てまたしてもケイミーとパッパグが絶叫した。
はっちゃんはさほど驚かずに中を覗き込む。
中には大きな壺があり、しっかりと蓋がされていた。
一瞬にしてこれだと理解できたはっちゃんが笑顔を輝かせる。

「ニュ〜！　これだぁ〜！」
それこそ秘伝のタレなのだと理解し、壺を大事そうに持ち上げる。
〝伝説のたこ焼き〟とはつまり、〝伝説の素材〟である巨大なタコが〝伝説のタレ〟を隠し持ってるということを表現しているようだった。
何にせよ、伝説のたこ焼きを作るための素材は集まった。
はっちゃんは心から喜び、驚愕して叫ぶ二人へ満面の笑みを向けた。
黄金の矛、マクロ一味の宝、伝説のたこ焼きの素材とタレを手に入れて。
はっちゃんはケイミーとパッパグを引き連れ、自分の船へ戻ろうと泳ぎ出した。
これならアーロンも笑顔になってくれるだろうと自信がある。笑顔のはっちゃんはにこにこと上機嫌さが明確に表れていて、傍から見ていても気分が良くなるほど。
タコを引っ張るはっちゃんの顔をケイミーが覗き込む。
「はっちん、嬉しそうだね」
「ニュ〜、アーロンさんも喜んでくれそうだからな。やっと見つかって嬉しいんだ」
「よっぽど好きなんだね、そのアーロンさんって人のこと」
「おれたちにとっては兄貴みたいな人だからな。ちょっと怖いけど仲間には優しいんだ」
「そのアーロンって名前、どっかで聞いたんだけどな。どこだったかな……？」
笑顔で話すはっちゃんとケイミーの傍で、首を傾げるパッパグが呟く。
その名は彼らの出身地、〝魚人島〟において半ば伝説的とも言われる悪童の名前なのだが、すっかり忘れてしまったのか思い出せる気配がない。
はっちゃんの仲間ならまぁいいかと思い、結局は考えるのをやめてしまった。

とにかく今優先すべきは〝伝説のたこ焼き〟である。
素材は手に入れた。宝もある。
これから他の材料と調理器具を揃えてアーロンに食べさせるのだ。
ひとまず彼らは調理器具を求めているようだった。
大きなタコを引きずりながら進んで、いつの間にかまた景色が変わりつつある。
前方左側、ケイミーが大きな沈没船を見つけた。ボロボロになって海底に沈んでおり、大きなガレオン船だったため嫌でも目につき、気になる。
ケイミーが二人へ教え、ちょうど注目した時さらに気になる物を見つけた。
「ねぇはっちん、パッパグ、あれ見て」
「ニュ？」
「難破船か。しかもあれは……誰かの村か？」
よく目を凝らしてみると沈没船の周囲、或いは真下、ハチマキナマズたちの村があるようだ。上から落下してきたガレオン船によって潰されてしまって、皆が困っている顔である。
あれではまともな生活も送れないだろう。
気になった三人は荷物を持ってそちらに近付いてみることにした。
やはり村が押し潰されている。
ナマズたちの表情は暗く、ずいぶん気落ちしている様子だ。ひょっとしたら今日の出来事ではないのかもしれない。数日前に起こったのなら彼らの疲弊した顔も納得できた。
「ひどい……これじゃご飯を食べたり、安心して寝られないよ」
「難破船ばっかりは防ぎようがないからなぁ。海賊も海軍も商人だって居る訳だし」
二人の声を聞きながらはっちゃんはハチマキナマズの群れを見ていた。
小さな子供が腹を空かせて母親に泣きついている。
それだけが妙に頭に残ってしまい、じっと見つめる彼は押し黙った。

「はっちん、なんとかしてあげられないかな――？」
振り返ったケイミーが試しに聞いてみたその瞬間だった。
はっちゃんは引きずっていたタコを置き、タコの頭に乗せていた宝を持って全力で泳ぎ出す。
「ニュ～～ッ!!」
「え～～っ!? びっくりしたっ!?」
「どうしたハチ!? その行動に何の意味が！」
「はっち～ん！」
脇目も振らずに真っ直ぐ泳いで全速力で去っていく。
突然の行動で意味がわからず、焦るケイミーとパッパグが声をかけても止まらない。
彼はそのまま遠くなり、やがて背中すら見えなくなってしまう。
失意のハチマキナマズたちは気にする余裕もないらしく、彼らの叫びにも反応は見せず。
残された二人は、見捨てられたのだろうか、と不安になった。
はっちゃんは二度も、一度目は偶然だったとはいえ、二度目は確実にケイミーを助けようと力を貸してくれた。その人がなぜ逃げてしまうのだろう。
理由がわからずに二人はただ困惑するばかり。
「パッパグ、どうしようっ。はっちんどこ行っちゃったんだろう」
「わ、わからねぇよ、そんなこと。あいつ、帰ってくるのかな……」
「きっと帰ってくるよ。考えがあったからどっか行っちゃったんだよね？ そうだよね？」
「そうだと思う……そうだといいんだけど」
不安を募らせる二人は何を言えばいいのかもわからない。静かにその場で待ち始める。
帰ってくるかどうかもわからない彼を信じて、ハチマキナマズの村を動かなかった。

＊

待ち始めてから数時間は経っただろうか。
いつからか待ち疲れて海底に寝そべり、眠ってしまっていた二人へ声がかけられる。
重い瞼を持ち上げると、二人の傍にはっちゃんが居た。
「ニュ～。おはようだぞ、二人とも」
「あ、はっちん……」
「おおっ!? ハチ、どこ行ってたんだよ！ ケイミー、ちゃんと起きろ！ ハチだぞ！」
「あぁ～っ、はっちん！ 帰ってきてくれたんだね！」
「待たせて悪かったな。ちょっと二人に手伝って欲しいんだ」
はっちゃんはにこりと笑い、顔を見合わせた二人は訳も分からず頷く。
「じゃあおれは先に行ってるから、近くの小さい島に来てくれ。すぐ傍だから海面から顔を出したらすぐわかると思うぞ。それと、ナマズたちをみんな呼んできてくれ」
「みんなって、全員？」
「そうだ。準備して待ってるからな」
「う、うん」
何のことだかわからないままとりあえず納得する。
はっちゃんは海面へ向かって泳いでいき、その背はあっという間に遠くなった。
状況が理解できないものの、任されたので二人は動いてみる。
先にハチマキナマズの村へ立ち寄って、魚類と話せるケイミーがパクパク口を動かし、海上へ来るようにと意志を伝えた。彼らもぽかんとしていたが案外素直に従って移動を始める。
二人も急いで海上へ向かってはっちゃんの下へ向かう。
確かに海から顔を出すと近くに島が見えた。木が一本だけ立つ小さな島である。
驚いたのは、そこに店があったことだ。
海を眼前に台を置いて、そこには〝たこ焼き〟と書かれており、はっちゃんが慌ただしく六本の腕を動かしている。素早く手慣れた

動きでたこ焼きを作っているようだった。
ケイミーとパッパグは思考を停止させる。
しかし、直後にはにっこり笑い、顔を見合わせると大慌てで彼の下へ向かった。
「はっちん！」
「ハチ！　お前って奴はよぉ！」
「ニュ～、二人とも忙しくなるぞ。こっちで手伝ってくれ！」
「は～い！」
「任せろぉ～！」
海から飛び出したケイミーとパッパグも台の裏側へ回り、手伝い始める。
ケイミーは用意されていたバンダナを頭に巻き、パッパグは自分に良さそうな丸い足場に乗る。
それから三人は息を合わせて作業を始めた。
はっちゃんがたこ焼きを作る作業を一手に引き受け、出来上がったたこ焼きをパックに詰めるとパッパグへ手渡され、彼が伝説のタレやマヨネーズ、かつお節、青のりをかけて完成する。さらにそれらはケイミーへ渡されて、爪楊枝を刺すとハチマキナマズたちへ手渡した。
恐る恐る近寄ってきた彼らはその匂いを嗅ぎ、その見た目を確認して涎を垂らす。
もはや我慢することはできない様子で、皆がそれを受け取っていった。
ナマズたちは美味なるたこ焼きを食して涙を流した。
その味が、彼らの優しさが、空腹に幸せを与えて表現できないほどの嬉しさを得る。一度食べ始めればもう止めることはできない。必死になって食べ続けた。
もはや落ち込んでいる者は一匹も居なくなって、皆が笑顔に包まれる。
空腹だったハチマキナマズたちの食事は短時間で終わるものではなかった。
それでも、はっちゃんたちは笑顔を絶やさず、彼らの腹が満たされ

るまで作業を続ける。
ハチマキナマズたちはこの出来事を忘れずに深く感謝し、生涯忘れないだろう。
苦難の末に突如現れ、生きる喜びと希望を与えたたこ焼き屋は彼らの中で伝説となり続ける。
そうとは知らずはっちゃんは、ケイミーは、パッパグは充実感を感じて心から笑っていた。

アーロン一味二番船〝タコヤキ８〟

はっちゃんが船を飛び出してから一夜が明けた。
予想通りというか、やはりすぐに帰ってくるという展開はない。
彼について理解している仲間たちはさほど心配していなかったものの、多少面倒には思う。果たして船まで帰って来れるのだろうかと思うからだ。
そうスピードは出していないとはいえ、夜を除けば船は動き続けている。
移動し続ける船を上手く探し出すことはできるのだろうか。少なからずそう思った。
甲板から海を眺めるチュウとクロオビが苦々しい顔だ。
やはりこうなった。
腕組みをした彼らは一人で行かせるべきではなかったかと考えている。
「ハチが一人で行動してよかった試しがあったか？」
「チュ♡　少なくとも今すぐは思い付かねぇな」
「お供をつけるべきだったな。それならこれほど時間はかかっていないだろう。なぜこの歳になって迷子を心配してやらなきゃいけないんだ……」
「ああ、全くだ。チュッ♡」
どちらも厳しい顔をしていて、帰って来ない彼を待って海を眺める。
はっちゃんが外へ出ている間に、すでにアーロンが目覚めていた。まだ包帯は取れないが無理やりベッドを離れた彼は甲板に置かれた椅子に座り、今日も厳めしい顔をしている。
報告はしたが、はっちゃんのことを怒っているだろうか。
二人が面倒だと思うのもそこに一つ理由があった。
可能ならば今すぐにも帰ってきて欲しい。そう思っていた時だ。
甲板で双眼鏡を覗いていた一人が急に声を出す。
「船が見えたぞ！」

「チッ、こんな時に」
「海賊か？」
「いや、それが変なんだが……うちの旗が見えるんだけど気のせいかな？」
見えているのはその一人だけ。
チュウとクロオビが見ていた反対側だったため、すぐに移動して質問される。しかし双眼鏡を覗いている男はおかしなことを言い始め、聞いていた者が顔をしかめた。
アーロン一味の旗を余所者が上げていると言うのだ。
そんなはずはない。事実だとすれば無礼な行為であろう。
他者がアーロンの許可なく旗を上げたとすれば、悪ふざけにしても性質が悪い。
当然聞こえているだろうと思って数名が振り返る。アーロンは顔色一つ変えていなかった。
船が見えた上に勝手に旗を掲げているなら戦闘になるだろう。誰もがそう思っていた。
そうならなかったのは、再び報告の声が発されたからに他ならない。
注意して見ていると船上で誰かが手を振っているのが確認できた。攻撃するなという意志に感じられてさらに目を凝らすと、それが自分たちの仲間だと気付く。
見知らぬ船で手を振っていたのははっちゃんだった。
慌てた男が全員に聞こえるよう声を張り上げ、その一言がきっかけで安堵と拍子抜けが広がる。しかしやはりアーロンだけは全く反応しない。
「あの船に居るのはハチだ！　だからおれたちの旗だったのか」
「ハチが？　どこで手に入れた船だ。なんであいつがそんなもんを」
「おれに聞かれてもわからねぇよ。とにかくあの船にはハチが乗ってる。それだけは確かだ」
聞かれた男が困りながらも答えた。

その後も見ているとさらにわかったことがある。
「それに人魚も乗ってるな。あと、ありゃヒトデか？」
「人魚とヒトデ？　あいつは何を拾ってきたんだ」
「船ならまだしも、人魚とヒトデが何の役に立つんだよ。チュッ♡」
クロオビとチュウが揃って溜息をつく。
長く幼馴染をやっているが彼の行動が読めない。それに付随する意味も理解が難しかった。
報告を聞いた仲間たちはざわめき始めて、それぞれ仮説を立て始める。はっちゃんの行動の意味を理解するのは難しい。だからこそ好き勝手にあれこれ言っていた。
「ヒトデと人魚？　まさか食うわけじゃねぇよな」
「流石にそりゃあり得ねぇだろ。考えただけで気味悪ぃ」
「じゃあなんだ？　ペットかなんかか？」
「あいつ、結婚するとか言い出すんじゃねぇかな……」
「あのハチが？　それこそあり得ねぇって」
戸惑いながら話していると徐々に船が近付いてくる。
考えてもわからないため、彼らは思い切って待つことに決めた。
帆に〝タコヤキ８〟と書かれたおかしな船がやってくる。
アーロン一味と麦わらのマークを掲げているとはいえ海賊船には見えない。船首の代わりに船の前部には屋台のような〝たこ焼き屋〟があって、どう見ても商売用の船だ。
それが海賊旗を掲げているのはおかしいと思う。
迎えた彼らは複雑な顔で見つめていた。
やがてその船がアーロン一味の船に横付けされた。
甲板ではっちゃんが手を振っており、両隣でケイミーとパッパグが手を振っている。
微妙な顔で手を振り返すと、はっちゃんが彼らの船へ移動してくる。
「ニュ～ただいまだぞ、みんな。遅くなってすまねぇ」
「ハチ、お前どこ行ってた」
「ずいぶん遅かったな。もうアーロンさんは起きてるぞ」

「ニュ～、アーロンさん！　もう傷はいいのか？」
「ああ……」
アーロンが起きている姿を見てはっちゃんが嬉しそうにする。しかしアーロンの表情は優れず、怒っているようにも見える顔で反応も薄かった。
それを気にせずにはっちゃんが口火を切る。
やけに嬉しそうな顔でアーロンを含む皆の顔を見回した。
「遅くなったけど良い物が見つかったんだ。せっかくだからみんな食ってくれ」
「まさかたこ焼きか？」
「ニュ～、よくわかったな」
「船に思いっきり書いてある……あの船はどうした？」
「ナマズたちを助けてやったらお礼にもらったんだ。せっかくだからもらったんだけど」
「まぁいい。よくはわからんが、要するにアーロンさんのために見つけてきたってことだろ」
「そうだぞ」
「なら好きにしろ。保証はないが止めはしない」
呆れたクロオビにそう言って促され、はっちゃんは頷く。
ケイミーから出来立てのたこ焼きが入ったパックを一つ受け取り、アーロンの下へ向かう。
「アーロンさん、伝説のたこ焼きを見つけてきたんだ。作ったのはおれだけど、素材とタレは伝説の物らしいぞ。食べてみてくれ」
アーロンは黙り込んだまま動かない。
はっちゃんが彼の前に立ち、パックを差し出した時、ちらりと確認してから顔を見上げた。
不思議と言葉を発しないアーロンに笑顔を見せる。
「きっと満足してもらえると思うんだ。騙されたと思ってどうだ？」
「フン……」
おもむろに手を出されて、奪い取るようにパックが受け取られる。

輪ゴムを外して蓋を開けた後、爪楊枝を持って、その先にたこ焼きを一つ突いて持ち上げた。
アーロンは大口を開けてそれを放り込み、咀嚼が始められる。出来立てらしくまだ熱いと感じて思いのほかそれが良い。味も悪くない。確かに伝説というだけはあると思う。
アーロンはしばし無言でたこ焼きを食した。
美味いともまずいとも言わず黙ったままひたすら爪楊枝を動かす。
周囲は心配そうにしていたがはっちゃんだけは相変わらずにこにこしていて、心配はしていない様子に見える。感想を言わずとも彼の行動が何よりの答えだと思っていたようだ。
やがてパックにあった八個のたこ焼きは全て食され、パックだけがはっちゃんに返される。
全て呑み込んだ後でふぅーっと深く息が吐かれた。
背もたれに体重を預けたアーロンがついに言葉を発する。
「まぁまぁだな」
「ニュ～、そうか。おれもまだまだ頑張らないとなぁ」
彼から発せられた言葉の一方で、はっちゃんは嬉しそうに笑うばかりだった。
ひとまず妙な事態にはならずに済んだ。
安堵した仲間たちは一斉に大きく息を吐いて肩を落ち着ける。近頃のアーロンは機嫌が悪いし、笑みを見せることもめっきり少なくなっていたので心配し過ぎた。わかりにくいが、やはり彼は今でも同胞には優しいままだったのだろう。
アーロンが食べてくれたことで当初の目的は達した。
次は仲間たちの番だ。事前に準備していたはっちゃんは振り返って全員へ言う。
「みんなの分もあるぞ。いっぱい食べてくれな」
「みんなに配るよ～。一人五百ベリー頂きまーす」
「って商売かよ!?」
「あ～っ!?　間違っちゃった～!?」
同じくはっちゃんの船から移ってきたケイミーとパッパグがたこ

焼きのパックを配り始める。
下半身が魚である人魚は陸上で移動できない。そこでケイミーは特殊なサンゴからシャボン玉を生み出して浮き輪のようにし、自分の体を通して浮遊させている。尾びれで空気を蹴って進めば彼女でも多少は陸上の生活が行えるのだ。
シャボン玉の浮き輪で宙を泳ぐケイミーが一人ずつにパックを配っていく。
その間にパッパグは船に用意してあったパックをアーロンの船に運ぶ。
数が足りなくては困るとはっちゃんも新しい物を作るために移動し、船上は賑やかになる。
チュウとクロオビも受け取っていた。
独特のペースに眉間へ皺を寄せながらも、せっかくだと思って食べ始める。
「美味いな……」
「チュッ♡　そういえばハチはたこ焼き屋になるのが夢だったな」
「図らずも夢が叶ったということか。一体何をしていたんだ」
「まぁ、何事もなくてよかった」
チュウはたこ焼きを見ながらもアーロンを見る。
椅子に座って目を閉じ、休んでいる様子の彼が落ち着いているのを見てそう思う。
はっちゃんは良くも悪くもマイペースで、時には迷惑をかけられることもあったとはいえ、その心優しい態度で空気を和ませる力を持っているのも事実。
おそらくたこ焼きを渡したことでアーロンも肩の力を抜くことができた。
この辺りは幼馴染ならでは。上手くやったと二人は人知れずはっちゃんを褒める。
「アーロンさんもやっと休めそうだ。チュッ♡」
「その代わり妙な奴が二人増えているが」
「あれ？　この船って海賊船？　……ええ～っ!?　はっちんって海

賊だったのぉ～!?」
「あぁ～っ、思い出したぁ！　アーロンって奴は魚人島でも有名なワルじゃねぇか！」
「ニュ～？　言ってなかったか？」
クルー全員へたこ焼きを渡し終える頃になってようやく、海賊旗に、その船が海賊船であることに気付いたらしいケイミーとパッパグが絶叫していた。
彼女らが一体誰なのかはまだ知らされていない。
仮にこのままついて来るとして、そんな鈍さで大丈夫なのだろうか。
「まいっか。はっちんは命の恩人だもんね」
「ケイミー、ケイミー、それそんな簡単に決めていい問題？　そんなに簡単に決めるとすっごく大変なことになりそうな気がするんだけど……」
「え？　そうかな？」
「二人も一緒に来るのか？」
「うん！　はっちんに助けてもらったお礼しなきゃね。それにお店も手伝わないと」
「ニュ～、そうか。助かるよ」
和やかに話しているが何かを間違えている気がする。
チュウとクロオビは揃って溜息をつき、考えるのをやめて残りのたこ焼きを食べ始めた。
はっちゃんが作ったたこ焼きによって船上は以前にはない賑わいを見せている。
ここしばらくは緊迫した空気が続いていた。毎日を戦うためだけに使い、移動している時でもない限りは海賊を襲って、賞金首を討ち取ることと旗を奪うことに全力を注いでいた。
今日は違う。この瞬間だけはのどかで平穏な時間が流れていた。
クルーたちは笑顔でたこ焼きを頬張り、いつもより会話も弾んでいたようだ。
アーロンは目を閉じ、静かにその喧騒を耳にする。自身は誰かと話

そうとしない。だが普段よりも幾分表情が柔和になって、珍しく心身を休めているらしい。
この時間はそう悪いものではなかった。
体に残る疲労が徐々に溶けていくようで、彼は穏やかな呼吸を繰り返す。
そうしてゆったりした時間が流れて。
しばらくした後、不意にアーロンが目を開ける。
空からは一匹のニュースクーが近付いていた。
「こんな時間にニュースクーだと……？」
「確かに妙だな。朝刊でもなければ夕刊でもない」
小さな呟きにクロオビが反応して近付いてくる。
腕組みする彼は徐々に降下してくるニュースクーを見上げていた。
「あれは世経じゃない。ブルーベリータイムズだな」
彼らの船にやってきたのは、世界経済新聞を運ぶニュースクーではなかったようだ。
世経と称される新聞社のニュースクーは白い羽を持っているが、今やってきたのは青色の羽を持っており、空の色とも交わらずに独特の美しさを誇っている。
青い帽子を被り、胸には鞄を提げ、いつもならあるはずの新聞の束がない。
何やら普段とは様子が違った。
どうやら新聞配達に来た様子ではない。
船の欄干へ停まって、追い払うでもなくチュウが歩み寄る。
青いニュースクーは自ら鞄を開け、何かを取り出して彼へ手渡した。
一通の手紙と一個のエターナルポースである。
それだけを渡すと代金の請求もせずに一声鳴き、彼は再び飛び立ってしまった。
「なんだ……？　アーロンさん、手紙だ。どうやらブルーベリータイムズ社からだぞ」
「読んでみろ」

「ああ」
手紙を開けて、チュウが文章を読み始める。
アーロンはそちらを見ずに船が進む方向を眺めていた。
「え～、〝親愛なる海賊諸君へ。これを読んでいるということは、君たちは海賊の祭典へ招待されたということになる――〟」
チュウの声によって静かに手紙の内容が読み上げられる。
普段と様子が違ったのも納得だ。
それは、海賊たちの祭典へ誘うための招待状だった。

トレジャーバトル編
ニュースクーからの招待状

空は快晴で風は強め。波も幾分速い。
ゴーイングメリー号は王冠島で得たログに従って海を進んでいた。
船上にはのどかな空気が流れ、それぞれがいつもの如く、好きなように過ごしている。
ラウンジには現在三人居た。
サンジとシルクがキッチンに入って料理を行っており、テーブルの近くではウソップが何の変哲もない台に座って作業をし、それをチョッパーが傍で見ている。
彼は手先が器用であり、見ていて飽きない。チョッパーは興味津々に質問する。
「ウソップ、今日は何作ってんだ？」
「ん～？　ナミが新しい武器作れって言うからよ。まぁこの一味でそんなことできるのはこのキャプテン・ウソップ様だけだしな。しょうがねぇから作ってやってんのさ」
「ウソップは色んなことが得意なんだなぁ」
「へへっ、まぁな。じゃあこの話をしてやろう。あれはおれが七歳の頃だった――」
ただの台でしかない通称〝ウソップ工場〟にて、またしてもウソップはホラ話を始めて、目を輝かせるチョッパーは身を乗り出してそれを聞き始めた。
ウソップも大概だが、好奇心旺盛なチョッパーは楽しそうにしている。
作業を続けながらシルクは微笑ましそうに彼らを眺めていた。
そしてこちらも、彼女に声をかけられてサンジが鼻の下を伸ばして嬉しそうだ。
「チョッパー、もう慣れたみたいだね。前より楽しそう」
「前の島で吹っ切れたのかもな」

「うん」
王冠島で何があったか、島での宴に誘われた際に大体聞いている。しかしシルクは船番だったため現場を見ていない。チョッパーが変わっただろう瞬間を見ていない。
なんとなく仲間外れにされた気がして少し寂しかった。
「でも、やっぱり船番するのって寂しいね。今度は一緒に冒険したいな」
「おれもシルクちゃんと冒険したいなぁ～♡　次の島では一緒に行動しようねぇ～」
「またサンジがダメになってるな」
「そういえばおれ、サンジのダメに効く薬作るように頼まれてたんだった」
サンジのだらしない顔を見て二人が呆れる。
そんな時間が許される程度には平和な一時だった。
しばらく和やかな会話が続き、その間に料理が出来上がる。
良い匂いがラウンジを満たしてウソップとチョッパーは満面の笑みを浮かべていた。
昼食の時間である。サンジは二人に目を向け、シルクを見ていた時ほどではないが薄く微笑みながら言った。
「できたぞ、メシの時間だ。チョッパー、あいつら呼んできてくれ」
「うん、わかった！」
「それとウソップ、さっさとその台片付けろ。邪魔になるだろ」
「台って言うな。ウソップ工場と呼べ」
「意味は同じだ」
嬉しそうなチョッパーが甲板へ駆け出し、その間にウソップが作業を止めて台を片付ける。
サンジとシルクは完成した料理を皿に盛りつけていく。
チョッパーが戻ってくると同時に他の仲間たちがラウンジへ集まった。がやがやと室内は一気に賑やかになり、それぞれがいつもの席に座る。
座る位置は決められている訳ではないがいつからか習慣になって

いるらしい。
座ってすぐにサンジとシルクが料理を運んでテーブルに置く。
中でもルフィが一際嬉しそうにしていて、チョッパーやカルーも同じく料理を見ながらわくわくした顔。他はそこまで顕著ではないものの穏やかな表情をしている。
置かれた瞬間に手を出しそうなルフィをナミが叱り、少しだけ待った後。
全てが並んでサンジとシルクも席についてから食事が始められた。
「よし。ルフィ、もういいわよ」
「んまほぉ～っ！」
「いっただっきま～す！」
ルフィとウソップが声を揃えて言った後、全員が手を動かして食べ始めた。
いつも通りに文句のつけようがないほど美味。
誰もが頬を緩めて舌鼓を打つ、普段の食事風景だった。
「うんめぇぇ～っ！」
「当たり前だ。誰が作ったと思ってんだよ」
「サンジは料理がうめぇなぁ～。海上レストランってとこもこんなにうまかったのか？」
「ま、ほどほどじゃねぇか？　一番腕があったのはおれだがな」
「へぇ～」
騒ぐルフィの隣でチョッパーが質問しており、サンジはにこやかに微笑んだ。
島を出たばかりということもあって何にでも興味を持っている様子である。チョッパーは様々な物に興味を持ち、純粋な目で質問してくることが多かった。まるで子供のようで、大半が十代と二十代で構成された一味の中で末っ子のような感覚がある。
彼一人が食卓に入っただけでかつてとは空気が違っている気がした。
そんな中でビビだけが少し暗い表情をしている。
食べてはいるが手の動きは遅く、見るからに様子がおかしい。

気になったサンジが彼女の顔を覗き込んだ。
「どうかしたビビちゃん？　口に合わなかったかな」
「あ、いいえ。ごめんなさい。とても美味しいわよ」
「何か気になることでもあった？」
心配した顔でナミに問われ、視線を落とした彼女はぽつりと語る。
「少し、心配になって……アラバスタは無事かしら」
「そういうことね。確かにそれは仕方ないけど」
「わかってるの。今ここで焦ったってどうにもならない。だけど……」
心配で堪らない。ビビの顔にはそう書かれていた。
困ったナミは眉間に皺を寄せてしまう。
彼女がそう思うのも無理はない。ここまで祖国の情報を得ることはできず、得られるはずだったエターナルポースが手に入っていないため、いまだにアラバスタへ向かう手立てがない。
遅くなり過ぎれば手遅れになってしまうのではないか。
一度気になると心配せずにはいられない。
王冠島でログは溜まっている。現在、ナミの腕にあるログポースには次の島を指す指針があるとはいえ、これがアラバスタを指しているかどうかは行ってみなければわからない。
果たしてこのまま進んでいていいのか。
不意にそんなことを思ったのだろう。
今のところ、バロックワークスに関する重大な情報を持つのはキリのみ。
彼が大丈夫だと言うから今日までなんとか過ごしてきた。
ただ、考えてみれば彼の想像通りに事が進んでいるとも限らない。
困ったナミはキリに目を向ける。
彼もどことなく困惑していて、いつもの笑みは見られなかった。
「無事かどうかと聞かれると、多分無事としか言えないね」
「それって根拠あるの？」
「ないけど、ボクならそうするしさ」
「そんな適当な理由で……ビビは真剣なのよ。もう少しちゃんと考

えて」
「考えてるよ。でも現に新聞を確認しても続報はない。アラバスタが乗っ取られたなら何よりも先に記事になるはずだ。なんせ七武海が動いてるわけだし」
「それは……」
「ボスはまだ動かない。まず間違いなくね」
キリはあっけらかんと言って笑みを浮かべた。
よほど自信があるという口調である。多分という発言が嘘のようだ。
そこまではっきり言われてはナミやビビもそうなのだろうと口を閉ざしてしまい、強く言うことはできなくなってしまう。
その一方でキリは溜息交じりに呟いた。
「でもいい加減そろそろなんとかした方がいいかもね。このままログを辿っても辿り着けるっていう保証はないし、一番確実なのはエターナルポースだ」
「海賊島の人たち、アラバスタに着けるラインを選んでくれたんじゃ――」
「あぁ、あの人たちは信用できないから」
あっさり言われてかなり驚く。
思わず聞いていたウソップが彼へ問うた。
「信用できねぇって、商売だろ。エターナルポース専門の店じゃなかったのか？」
「海賊は基本信用しない方がいいよ。特に決闘を邪魔しろなんていう連中はね」
「嘘つかれたのかよ……ひでぇ」
「海賊しか居ない島なんだ、それが当然さ。それにウソップが言うのもおかしな話だけど」
「う、うるせぇよ。意外と信用できるんだぞ、おれは」
ウソップが慌てる姿にキリは笑顔で肩をすくめる。
おどけるように言っているがそこまで楽観視できる状況ではないように思う。

ではこの航路はどこを目指しているのか。
その話によってビビはますます不安を募らせてしまったようだ。
「どうすればいいのかしら。どこかでエターナルポースが手に入ればいいんだけど……」
「もう一回海賊島に、って行っても意味ねぇか」
「そういえば昨日の夜連絡があったよ。ドリーとブロギーは今海賊島だって」
「はぁ!? お前、なんでそんな大事なこと隠してたんだよ! 師匠たち島を出たのか!」
「隠してたんじゃなくてみんなが寝た後だったんだって。手紙が届いたんだ。本人が書いたんじゃないだろうけど、それこそ航路屋の友達に会ったんじゃない?」
「そうか……師匠たちも海に出たんだなぁ」
「今は二人の新しい船を造ってるんだって。かなり巨大になるそうだけど」
「それも大事だけど、その話じゃなくて」
脱線しかかったところでナミがぴしゃりと言う。
今はどうやってエターナルポースを手に入れるかという話だ。
これまではナミが病気になったり、突然チョッパーが攫われたりと忙しかったが、いよいよ真面目に考えなければならない。目的地はあくまでもアラバスタである。
「いくらクロコダイルがまだ仕掛けないからって悠長にしてる場合じゃないわ。急げるようなら急いだ方がいいと思う。こうしてる間にも国民は苦しんでるわけでしょ?」
「そうは言われても」
「打つ手がねぇか……」
キリとウソップが揃って溜息をつく。
真剣な話を続けて、いつの間にか食事時の雰囲気が変わってしまった。
ゾロとサンジも真剣な顔で聞いていて、手こそ止めていないがルフィとチョッパーも彼らの会話に注目しており、特にビビとイガラ

ム、カルーは複雑そうな顔をしている。
言った後で、ナミは自身が解決策を出せないことを悔しく思う。
言い辛そうに黙ってしまった彼女の代わりにシルクがキリへ尋ねた。
「キリ、なんとかできないかな」
「うーん、難しいね。流石にこればっかりは」
ついにはキリもお手上げという様子だ。
室内は重苦しい空気が漂い、普段とは些か違った時間が流れる。
ちょうどそんな頃、甲板から鳴き声が聞こえてきた。
「ニュースクー？　もうお昼なのに」
「お届け物ですって言ってたぞ」
扉に振り返って疑問を露わにするナミへ、チョッパーが言う。
すぐにチョッパーを見た彼女はつい先日聞いたばかりの話を思い出したようだ。
「そういえばチョッパーって動物と話せるのよね」
「うん。おれは元々動物だからね」
「それって凄い特技よね。今までこの船にはなかったし」
「そ、そうかなぁ……えへへ、そんなことねぇよ！　バカヤローがっ！」
「チョッパー、フォーク振り回すな」
「ボクが見てくるよ」
照れ始めたチョッパーがサンジに諌められる一方、キリが席を立った。新聞配達の時間帯でないのにやってきたニュースクーに会うべく、甲板に向かう。
彼はすぐに戻ってきた。
手には手紙とエターナルポースを持っていて、仲間たちの視線が集められる。
「お届け物ってそれか？」
「うん。ブルーベリータイムズだよ」
「なんだそれ？」
「基本的にグランドラインでのみ発行されてる新聞。海賊御用達な

んだ」
席へ戻ったキリは椅子に座り、持っていたエターナルポースを隣に居るナミへ渡す。
行先が書かれていた。アラバスタではない。聞いたこともない島だ。
書かれた名は〝ブルースクエア〟。
ログを辿ればその島に辿り着くらしい。
ナミはじっとその指針を見つめて考える。
ニュースクーが持ってきたというそのエターナルポース。良い予感はしなかった。
「ブルーベリータイムズがなんでエターナルポースを？　うちが取ってるのは世経だけだし、これだけ渡してくるなんてあからさまに怪しいじゃない」
「手紙も預かってるよ。今読むから」
「それがおかしいって言ってるの。だって配達員じゃなくて新聞社なのよ？」
「まぁ、それなりに理由があるってことさ」
キリが封筒から手紙を取り出し、広げて読み始める。
一同は食事を続けながらその声を聞いた。
「じゃあ読むよ。えっと……〝親愛なる海賊諸君へ。これを読んでいるということは、君たちは海賊の祭典へ招待されたということになる〟」
「海賊の祭典？」
「いい予感はしねぇな……まさかデッドエンドみたいな話か？」
読み始めてナミとウソップが怪訝な顔をした。
新聞社から手紙が来たというだけで嫌な予感がするのに、その内容までもが胡散臭い。
逆にルフィは〝海賊の祭典〟という言葉に反応し、口を膨らませながらさっきより興味を見せる。
「〝近年、世界政府による海賊への警戒は増していて、政府の検閲を受け、新聞社ですら正しい情報を載せることはできない。海賊の情報

は捻じ曲げられて伝えられている〟」
「まぁ、そりゃ悪いところは見せられねぇもんなぁ」
「世界政府の特権ね。海賊にはそんなことできない」
「キリはやったけどな」
「あぁ、アーロンの件ね。あれも書いた新聞社はどんな目に遭ってることやら……」
「〝海賊は悪だと考えている世間にも知って欲しい。全ての海賊が市民に害を及ぼす悪い奴ばかりではないことを。彼らは自由を愛する存在なのだと〟」
キリは静かな声で手紙に記された文章を読み進めていく。
「〝彼らのありのままの姿を伝えたい。そこでおれは考えた……遊びを通じてなら、海賊たちの活躍を世に広めることができるのではないかと〟」
一同の反応は真っ二つに分かれていた。
純粋な好奇心を覗かせる者と、怪しいと判断して怪訝な顔をする者。
キリが気にせずに続きを読み上げる。
「〝ブルーベリータイムズ社から君たちへ、トレジャーバトル大会の開催を告げる〟」
いよいよ訳が分からなくなってきた。
警戒したウソップとナミは嫌そうな顔をして眉を顰める。
「なんかやべぇ話じゃねぇのか、これ。聞かねぇ方がいいんじゃねぇか？」
「そうね。ルフィが興味持っちゃってるし、ここまでにした方がいいかもしれない」
「トレジャーバトル大会？　おもしろそうだなぁ～それ！」
「ほら来た」
「ねぇキリ、もうそこまでにしといた方が――」
「〝この大会は海賊たちが力を競い合う戦いであり、如何に優れた海賊であるかを競うために開催される。優勝者には望む物をなんでも贈呈する〟」

「やるわ」
「やっぱり速えなおいっ!?」
優勝賞品は優勝者が望んだ物。文面から考えれば何を望んでもいいらしい。
その言葉にナミの目の色が変わって喜色に包まれる。当然ウソップは恐怖心と驚きと突発的な反応から声を発するのだが、すでに彼女には相手にされなかった。
ルフィやチョッパーに加えてナミまで目を輝かせ始め、嫌な雰囲気があった。
まさか行くつもりではないだろうなとウソップが冷や汗を垂らす。
「〝諸君らの勇気とチームワークを称え、開催の時を待つ。参加の意思がある者は島へ集え。主催者兼ブルーベリータイムズ社記者、ロッキー・ハッタリー〟」
「やめよう。これは危険な匂いがする」
「行こう！　トレジャーバトル！」
「やっぱりそう来たぁ～!?」
手紙を読み終えると同時にルフィが笑顔で叫び、ウソップが頭を抱えて悲鳴を上げる。
彼らの反応は予想通りだ。周囲はさほど驚いてはいなかった。
「おい待てよルフィ！　こんなのおかしいだろ!?　ただの新聞社が海賊を呼び集めて大会を開催するとか言うはずがねぇ！　これは世界政府の罠だ！　甘い言葉と賞品でおれたちを集めて一網打尽にしようって腹なんだぜきっと！　行かねぇ方がいいに決まってる！」
「トレジャーバトルかぁ。どんな大会なんだろうなぁ～」
「ル～フィ～！　頼むからお前は疑うってことをもっと知ってくれ！」
粗方料理を食べ終えたルフィが嬉しそうに笑っており、もはや話を聞いていない。溢れる冒険心によって次の島への期待を募らせ、ウソップが彼の体を揺さぶろうと気にしなかった。
期待しているのは彼だけではなく、揺さぶられるルフィの隣に居るチョッパーも同じで。

彼はつぶらな瞳でシルクへ問いかけた。
「それって危険な大会なのかな？」
「うーん、どうだろう。私も聞いたことないし、海賊が集まるなら、結構危険かも」
「そうなのか。でも面白いのかな？」
「うん。きっと面白いと思うよ。ルフィも楽しみにしてるし」
「そうか！　じゃあおれも行ってみたいな」
「チョッパ～!?　お前は何もわかってない！　おれは経験で知ってるがルフィが楽しいっていうことは大概危険なんだぞ！　命の危機だ！」
微笑ましく笑い合うチョッパーとシルクへ、涙さえ流しかねないウソップが必死に訴える。
食事とはまた別の要因ですっかり騒がしくなっていた。
いつもの喧騒が帰ってきたことに安堵しつつ、ある時ビビが身を乗り出す。その目は手紙を眺めるキリを見て、どこか必死な様子もあった。
「ねぇキリさん、その賞品って……」
「そうだね。同じこと考えてると思うよ」
「もし私たちが優勝して、アラバスタへのエターナルポースが欲しいって言えば、賞品として用意してもらえるってことなのよね？」
「多分そういうことだと思うよ。それに相手は新聞社だからね。海賊と違って取材に行くこともあるだろうし、エターナルポースを所持してる可能性は高い」
「それじゃあ」
「ルフィの言う通りだ。ボクらも参加しよう」
「ええ～っ!?」
咄嗟にウソップが悲鳴を発するものの、一同の意志はすでに固められているようだ。
ゾロとサンジは何も言わずに笑みを浮かべ、イガラムは決意に満ちた表情をし、カルーは些か怯えているようでウソップに近い態度である。

それぞれ反応は違っていたが、ようやく希望が見出せたのも事実だ。
罠かもしれないし、騙し討ちの可能性もある。しかし彼らには希望が必要なのも確か。
たとえ罠だったとしても行く価値はあるだろう。
ビビは力強く頷いた。
「ビビ様、頑張りましょう。必ずや我々の手でアラバスタを救うのです」
「ええ」
「ねぇビビ、物は相談なんだけど、優勝賞品はアラバスタのエターナルポースと十億ベリーっていうのはどうかしら。多分危険な目に遭うんだし、それくらいはないと、ねぇ」
「は、はい……」
「ナミ、怖がらせちゃダメ。ビビに言ってもしょうがないんだから」
怪しく笑うナミにビビは幾分怖がった顔だが、すぐにシルクが助け舟を出す。その声もまた周囲の騒がしい声に紛れたものであった。
騒ぐルフィやウソップに、賞品を欲するナミとビビ。
この船だけでも様々な思惑が渦巻いている。
サンジは、本番は荒れることだろうと想像しながらキリへ声をかけた。
「海賊の祭典だとよ。危険だと思うか？」
「危険なんだろうねぇ」
「ちなみに、お前はこの大会のこと知ってたのかよ」
「いや、初めて聞いた。今回が初めてなのか、ただ知らなかっただけなのか」
「どっちにしろ人は集まりそうだな。賞品は何でもいいなんて言われちまった日には」
「そうだね。とりあえず大変なのは間違いなさそうだ」
聞けばキリも知らない祭典とやららしい。だとすれば安心はできないだろう。
海賊が集まるのはデッドエンドと同じだが状況が違っている。

サンジは苦笑し、しかし悪くないと思った。
宴が好きなこの一味だ。祭りも好きに決まっている。
船内の騒々しさはそれを表しているようなものである。
メリー号は一路、〝トレジャーバトル〟が行われるという島を目指すこととなった。

祭りの気配

ブルースクエアという島に着くまで、実に三日の時間がかかった。
遠方にその姿が見える前から一行は異変に気付く。
多くの船が同じ方向を目指し、島が見える頃には周囲に十を超える船があったのだ。
全員がトレジャーバトルを目的にしているのだと推測できる。
島の姿を目にした時には、その島には数えきれないほどの船が集っている風景が目に映った。
ついに見えたブルースクエアの町を見つめ、羊の船首で胡坐を掻いたルフィはわくわくしながら声を発する。風に揺れる帽子を押さえてひどく嬉しそうだ。
すでに多くの海賊たちが集まっている。果たして何が始まるのか。
待ち切れずに彼はうずうずと膝を動かしていた。
「見えたぞぉ～！　トレジャーバトル～！」
「こ、声がでけぇってルフィ!?　周りの奴らに襲われたらどうすんだ！」
彼の傍では怯えた様子のウソップが膝を震わせており、非常に不安そうな顔だ。
両極端な二人なのに仲がいいから不思議である。
少し後ろで見ていたキリはくすくすと笑う。
キリの傍、欄干に座って近くを走る船を見ていたチョッパーが口を開く。
どうやら島に集まっているのは海賊船のみではなかったようだ。
「キリ、あれって海賊船なのか？」
「あれは違うね。黒い旗にドクロを掲げてない限りは海賊以外の何かだよ」
「ふぅん。じゃあなんなんだろう」
「色んな連中が集まってるみたいだからね。ギャングにマフィア、貴族に王族、少しはカタギも混じってるかな。ひょっとしたら政府の関係者も潜り込んでるかも」

「でも海賊じゃない奴は何しに来てるんだ？　だって海賊じゃなきゃ参加できないのに」
「もちろん賭けさ。こういう大会だと誰が優勝するか、それを予想するだけで大金が動く。自分は努力せずに刺激を求める人間が多いみたいだからね」
「へぇ～」
チョッパーは興味を持って辺りを見回している。
あれは海賊だ、あれは海賊ではない、と船を数えては判断を始め、思いのほか海賊ではない船が多いことに気付く。皆が賭けを求めているのだろうか。
キリに向けられるチョッパーの疑問は多くなった。
「賭けってそんなに楽しいのかな」
「案外覚えない方がいいかもよ。身を滅ぼすことになるから」
「そうなのか？　じゃあなんでみんなやるんだろう。いっぱい来てるぞ」
「彼らは魅力に憑りつかれてるんだ。ああなると地獄を味わう日も遠くないんじゃない？」
「地獄かぁ……それは嫌だなぁ」
「知らないままの方がいいこともあるさ。チョッパーはそのままでいいよ」
「うん。おれ、賭けは知らないままでいい」
チョッパーが頷いたことでキリが彼の頭を撫でる。帽子越しだがチョッパーは嬉しそうに頬を綻ばせて彼の顔を見上げた。
船の前部にある喧騒を無視してそこだけを見れば和やかな風景だ。
徐々に島が近付いてくる。
そこはかなりの広さを誇る島であった。
ゴーイングメリー号を含め、多くの船が向かっている港は横一直線に伸びて、数キロにも及ぶ。それでも集まった船の全てが並ぶ余裕はなさそうだが、今まで見た島の中では最も広い。それ以上に目に付くのはやはり数え切れないほど集まった船であった。
あまりにも集まり過ぎて港に入りきらず、沖合で停めて小舟に乗

り、町へ入る者も多い。
さらにその島、不思議なのはその港や町の規模が大きいだけではない。
島全体が町になっており、その周囲はさらに四つの小さな島がある。ブルースクエアは巨大な町の四方を囲う春夏秋冬の小島が特徴の島だった。
彼らは小島の一つを通り過ぎて町へ向かう。
すでに数え切れないほどの船が港で停泊していた。
どうやらこのままでは進めなさそうだと、一行は甲板で難しい顔をする。
「これじゃ島に近付けねぇぞ。小舟で行くしかねぇのか？」
「そうするしかないわね。それじゃみんな、すぐに準備して町へ――」
ウソップとナミが顔を合わせて喋っている最中だった。
突然砲撃音が聞こえ、港に停まっていた船が爆発し、連続して砲弾を受けた末に木っ端微塵になるまで破壊されてしまう。どうやら海賊同士の諍いのようだ。
少し距離があっても怒号が聞こえてくる。
二人は嫌な汗を掻いて、ぎこちない笑みを浮かべながら小声で話し始めた。
「え、ええっと……これはどういうことかしら？」
「さ、さぁ？　なんかの手違いがあって爆発したとしか……」
「海賊同士の潰し合いが始まったみたいだね」
「スペース空いたじゃねぇか。あそこに停めりゃいいだろ」
「正気か!?　今まさに戦闘が始まったんだぞ！」
「そんなの無理よ！　メリーまで沈められちゃうわ！」
「いやナミさん、そうでもないみたいだ」
平然と話すキリとゾロに二人が文句を言うと同時、サンジが煙草を手に呟く。
彼に従って港を見れば、今まさに戦っていただろう海賊たちが謎の兵士たちに倒され、次々に沈黙していく。圧倒的な強さで暴動は一瞬

にして鎮圧されてしまった。
騒動は無くなったとはいえ、それはそれで問題だと思う。突然暴れ出すような海賊を圧倒的な力で押さえつけられる兵士がこの場に存在しているのだ。
たとえそれが自分たちに襲い掛からずとも、存在するだけで怖いと感じてしまう。
ウソップとナミはいつの間にか顔色を変えていた。
「わぁ～、すごく強いのねぇ～……」
「ほんと、頼りになるなぁ～……」
「せっかく空いたからあそこに停めようか」
「何かあってもあいつらが止めてくれるって話な訳だ」
「どこの兵士かは知らねぇがかなり訓練を積んでるな。メリーは任せて良さそうだ」
「やっぱり帰ろぉ～！　こんなの危ねぇって！　おれたちもメリーも！」
「そ、そうね、参加するメンバーだけ降ろしてあとはちょっと離れて待機でもいいじゃない！　何も全員であんな危険な場所に行かなくても……！」
「ダメだよ。勝率を上げるためにも一応全員参加じゃないと」
「そんなぁ～!?」
ナミとウソップはすっかり怯えてしまっているものの、メリー号は港へ近付いていく。
さっきまで船があった場所へ到着すると船の残骸が辺りに浮いている。それが余計に恐怖心を強くさせたが、船上に居た大半のクルーが怯えを感じさせない。
結局、彼らの意見は誰にも聞かれることなく消えてしまった。
メリー号が停泊の準備を終えると同時、動きが止まってルフィが飛び出す。
先に港へ着地し、石畳に草履で降り立ってペタンと間抜けな音を立てた。
帽子を押さえて顔を上げれば広大な町と凄まじい人の数。

太陽の光に照らされた町は想像以上に美しかった。
暴力と欲望に彩られた海賊島とは違う。そこには海賊もそれ以外の人間も入り混じり、以前見た風景よりも健全さを感じて、むせ返るような死臭がない。石畳の地面にも家々の外観にも、町を歩いている人間の外見にさえ、海賊ばかりの風景とは違って清潔感があった。
そして何より、その町にある賑わいは祭り特有のもの。
非常に楽しそうで、空気を浴びているだけでもわくわくして体が疼いてくる。
駆け出したくて堪らない様子のルフィは笑顔を輝かせた。
「うっひゃ～っ。ここでやるのか、トレジャーバトルは！」
「お、おいルフィっ、あんまり大声出すなって。誰が見てるかわからねぇんだぞ」
「いいじゃねぇか別に」
「バカっ。お前は賞金首なんだぞ。もうちょっと自覚を持てって」
「うわぁ～広いなぁ～。それにすげぇたくさんの人だ。これが祭りっていうのか」
慌てて降りてきたウソップとチョッパーが彼に並ぶ。
それからゆっくりと仲間たちも降りてきて彼らの背後に追いつく。
広大な港に立ち、前方には町へ続く大通りがあり、彼らが興奮するのも仕方のない光景だった。一行はしばし足を止めて周囲を見回し、あまりの広さに目を丸くしている。
「ようこそおいでくださいました！」
「ん？」
立ち止まっていると声をかけられた。
振り返ってみれば小奇麗な格好をした男がにこにこ笑っている。応対したのは先頭の三人。彼は親しげな態度ながら礼儀正しく一行へ頭を下げた。
「誰だおっさん」
「私は主催のブルーベリータイムズ社の者でして、この場にて案内を担当しております。あなた方もトレジャーバトルの参加者とお見受けしましたが間違いありませんか？」

「ああ。おれたちそのトレジャーバトルに参加しに来たんだよ」
「おいおいルフィ、ほんとにいいのか？　実は罠かもしれねぇぞ」
「ええっ、罠なのか？　トレジャーバトルっ」
「いえいえ、罠などではありません。我々はただ純粋に、このトレジャーバトルという大会を通して海賊のことをもっと世間に知ってもらおうと考えておりまして。発起人ロッキー・ハッタリーは中でも海賊が大好きな男でしてね、ええ」
「へぇ～、ハッタリさんはいい奴なんだな」
その男の顔さえ知らないがルフィは機嫌よく笑っている。
いつしかウソップも疲れ、やっと拒否することをやめようとしていた。
「トレジャーバトル開始まではまだ時間がございます。町には屋台なども出ていますので、ひとまずそちらをお楽しみになってはいかがですか？」
「屋台？　食いもんもあんのか？」
「ええ、もちろん」
「いやっほ～！　野郎ども、屋台に行くぞぉ～！」
「いや待て、その前に！　なぁおっさん、さっき船が爆破されてたろ。うちのメリーは大事な仲間なんだ。そんなことされたら当然困っちまう訳だが」
「ご安心ください。この港はツヨス・ギーナ国の兵士によって護衛されています。先程は海賊同士の言い合いが始まったので敢えて静観した次第でして、乗組員が居ない船は彼らが全力で守ってくれる手筈になっているのです。心配はいりません」
「ほんとか？　いまいち信用できねぇな……」
「大丈夫です。ツヨス・ギーナ国は近隣諸国で最も強い国。その強さは日々の厳しい鍛錬により強くなった兵士たちによるもの。彼らには海賊も手を焼きますよ」
「手を焼くだけか？」
「あまりに強過ぎては保証はできかねます」
「じゃあだめじゃねぇか!?」

男の発言にウソップが悲鳴を発した。直後に男は声を潜める。
「いやね、我々もあくまで祭りとして盛り上げるために色んなツテや協力者に頼って開催にこぎつけた訳ですが、それだけに観戦者の安全の確保等には尽力しておりまして、その分参加を募る海賊は厳選された面子だったはずなんです。しかし何をどう間違えたのか、街中にはちらほら億越えの賞金首も見られましてね……」
「お、億っ!? 例えばどんな奴が……?」
「それが、例の有名な――」
「行くぞチョッパー! 屋台にはうまいもんがいっぱいあるんだぞ!」
「お〜っ!」
「ってちょっと待てお前ら!? 少しは緊張感持てよ!」
ウソップが真面目に聞いている間にルフィとチョッパーが走り出してしまい、焦った彼も単独行動を許す訳にはいかず、慌てて後を追いかける。
後ろに居た仲間たちも様々な反応を見せながら歩き始めた。
全員で町へ入っていき、人で溢れ返る風景の中へ溶け込んでいった。
確かに案内役の男が言う通り、祭りの様相を見せる町は盛り上がっていた。
海にほど近い場所、四角形の広場へ到達した時、そこにいくつも屋台が出されており、それが十個や二十個でも足りないほど。多くの店が、ごった返す人を相手に商売をしていた。
人の波に呑まれそうになりながらも三人は目を輝かせる。
そこはかつてないほど楽しそうな風景に見えた。
「祭りってすんげぇなぁ〜! こんなにあんのか、屋台は!」
「つーかすげぇ人だ。一度はぐれたら中々会えねぇぞ」
「こ、こんなにたくさん人が居るんだな……祭りってすげぇや」
立ち止まる三人に仲間たちが追いついてくる。
大勢の人間が周囲で動くため、立ち止まっていることさえ難しい。
咄嗟にルフィが振り返り、一番にやってきたキリを見てにかっと笑

いかける。
「キリ、小遣いくれ。屋台で色々買うんだ」
「いいけどはぐれないようにね。ルフィは迷子になるんだし、もう見つからないよ」
「わかった」
「はいこれ。ウソップとチョッパーにもね」
「おう、ありがとな。いやぁ～しかし祭りってのはやっぱりテンション上がるなぁ。何から始めりゃいいかまったくわからねぇ」
「お、おれも何したらいいのかわからねぇや。ルフィ、どうするんだ？」
「そりゃお前、色々なもん食うんだよ。行くぞ！」
上機嫌にルフィが歩き出す。彼に触発されてウソップとチョッパー、一応念のためにと同行したキリが人の波を掻き分けて進んでいき、あらゆる場所に置かれた屋台を見た。
流石に人の数が多い。気をつけていてもすぐ傍にある背が見えなくなりそうだ。
ルフィは気にせずどんどん前進を続けて、その後ろに三人がぴったりくっついて歩く。しかし道中で右側にある屋台を見つけ、チョッパーがウソップへ問いかけた。
可愛らしい看板を立てたカラフルな屋台である。
何やら妙に惹かれる場所だった。
「なぁウソップ、わたあめってなんだ？」
「わたあめ知らねぇのか？　食っても美味い、作って面白い、甘い菓子みてぇなもんさ」
「へぇ。うまいのか？」
「そりゃもう。気になるんなら買ってみようぜ」
「うん！」
好奇心を刺激されたチョッパーを連れて、ウソップが右側へ移動していく。
その際にキリは前方にあるはずの背を探したのだが、すでにルフィの姿は消えていた。

はぐれることは予想していたとはいえあまりにも速過ぎる。彼のことを甘く見過ぎていたと後悔すらしてしまい、思わず自分を責めてしまう彼は溜息をこぼした。
「もう居ないし。流石にもうちょっとかかると思ってたけどなぁ……」
やれやれと首を振り、キリはひとまずウソップたちの下へ向かう。
彼らはすでに屋台の前に居る。ウソップがチョッパーを抱え上げて店主と話していた。
「おっさん、二つくれ」
「はいよ。ところでそりゃなんだ？　ぬいぐるみか？」
「ぬいぐるみじゃねぇよ。おれの仲間だ」
「よぉ」
「なんだ、タヌキか」
「タヌキじゃねぇよ!?　トナカイだ！」
「どっちでも一緒だろう」
「全然違う！」
チョッパーが喋っていることには一切驚かず、店主の男はわたあめを作り始める。専用の機械を動かしてザラメを入れ、割り箸を突っ込むとくるくる回し始めた。
おおっと声を漏らす。
機械から次々出てくる白い綿がくるりと割り箸に纏わりつき、どんどん大きくなっていくのだ。
不思議な現象に見ているだけでも楽しい。ウソップが言っていた通りだとチョッパーは身を乗り出してその様を眺め、やがて完成した頃には目が釘付けになっていた。
割り箸に白い繭のような物体が付着している。それが菓子なのだという。
不思議な見た目でふわふわしていそうだ。
ますます興味を惹かれたチョッパーは差し出されたわたあめを受け取ってすぐに口にする。
とりあえず恐々と舐めてみた。確かに甘い。想像よりずっと美味

しくて今度は思い切ってかぶりついてみると、ふわりと独特の感触で目を見開く。
それは彼に衝撃を与えるほど美味なる物体だった。
「うまっ!? 甘くてふわふわだ。なんなんだこれ」
「これがわたあめだよ。やっぱ祭りといったらこれだよな」
「すげぇうめぇ! サンジのお菓子もうまかったけど、これはちょっと違うな」
「そういえばチョッパーって甘い物好きだよね」
「あ〜、サンジの菓子に食いついてたのもそういうことか」
キリとウソップが納得したように話す最中もチョッパーはわたあめに夢中なまま。
こんなにも美味い物があったのかと驚きは隠せない。
二人は微笑ましそうに彼を見つめ、いつの間にかすっかりルフィとはぐれたことを忘れており、しばらくして先に思い出したキリがやる気の無さそうな声で告げた。
「そういえばさ、ルフィとはぐれたよ」
「何? もうか? 道理で声が聞こえねぇと思ったら」
「ゾロに負けず劣らずの方向音痴だからね」
「しかも人の話を聞かねぇときた」
「まぁゾロと違って騒がしいところを探せば見つかるよ、きっと」
「そうだな。それじゃどっかが騒がしくなるまで待って――」
「うんまそぉ〜っ!!」
「……早速だな」
「ほんと、分かり易くて有難いよ」
キリが苦笑し、ウソップが溜息をつく。その肩ではチョッパーが腹這いのような状態で乗ってわたあめを食してお り、早々に自分の分を食べ終えるとウソップが買った物を譲ってもらう。どうやら相当気に入ったようだ。
彼らははぐれたルフィを探して移動を始めた。
まだ広場の中には居たようで、人の波を掻き分ける必要はあったがすぐに見つかる。

至る所にある屋台の中の一つにルフィが魅入られている。
追いついた彼らが声をかけると、妙に嬉しそうな彼が振り返った。
「何やってんのルフィ」
「見ろよキリ！　たこ焼きだ！」
「いやその前に気付くことあるだろ、お前……」
「無理そうだよ。たこ焼きしか見えてないみたいだから」
「ん？　何が？」
言われたルフィはわからないらしく、改めて屋台を見た時、店員を確認した。
そこに居る人物が見覚えのある相手である。
ルフィがようやく店員、テキパキ働くはっちゃんに気付いて、思わずぽかんとしてしまった。
「あっ、ハチじゃねぇか。何やってんだお前」
「ニュ～、やっと気付いたのか。遅ぇなお前」
「なんでたこ焼き屋なんだ。海賊から足洗ったのか？」
不思議そうにしたウソップが尋ねると、はっちゃんはパックにたこ焼きを詰めながら答える。
「海賊はやめてねぇよ。ちょっと色々あって副業的に始めたんだ。せっかくなら食ってくれ」
「ちゃんと食えるもんなのかぁ？」
「ニュ～、当たり前だろ。おれは〝伝説のタレ〟を見つけたんだ」
「なんか美味そうだなぁ～」
「まぁとりあえず試してみるか」
「代金はいらねぇよ。お前らおれたちの親分だからな」
「ほんとか？　お前いい奴だな」
はっちゃんが笑顔で言うため、ルフィたちも表情を緩めて嬉しそうにしていた。
店長であるらしい彼はあっさり決めてしまい、少し振り返って屋台の裏へ声をかける。すると垂れ幕を潜って見覚えのない二人がやってきた。
「ケイミー、パッパグ、ちょっと手伝ってくれ」

「はーい」
「いらっしゃーい。お客さんか？」
やってきたのは人魚であるケイミーとヒトデのパッパグだ。ケイミーはシャボンの浮き輪に体を通した上でわずかに浮いて泳いでいる。
唐突な登場であり、同時に珍しい人魚である。
ヒトデが喋っていること自体不思議ではあったものの、それよりもこの場では彼女の存在が気になってしまい、四人は揃って驚きを露わにする。
グランドラインに居たというキリでさえ人魚を見たのは初めてだった。
本当に存在したのかとすら思い、身を乗り出すのも無理はない。
特にキリを除く三人の反応が大きかった。
「すんげぇぇ～っ！　人魚だ！」
「ほんとに存在したんだな……しかもそれ、浮き輪か？　陸でも生活できるんだな」
「ヒトデがしゃべってるぞ。なんでだ？」
「おれの友達なんだ。色々あってたこ焼き屋の手伝いしてくれてな」
「お客さん？　たこ焼き一パック五百ベリーになりまーす」
「ニュ～、こいつらはいいんだケイミー。おれたちの親分だからな」
「え？」
はっちゃんがそう言うとケイミーが首を傾げ、そろばんを弾いていたパッパグも手を止めた。
今日までの航海で色々な話を聞いている。彼らがある海賊の傘下であることも。
親分、といったからには彼らの傘下になっている様子で、まさか海賊だと思いもしなかった少年たちを改めて眺め、驚いた二人は声を大きくする。
「えぇ～っ!?　あなたたち海賊だったの!?」
「そんな風には見えねぇのにな」

「お前こそ変な奴だな。手袋か？」
「ヒトデだ!?　どう間違えたらそうなるんだよ！」
「まぁこいつらにもたこ焼き食わしてやってくれ。もう仲間だしな」
多少の驚きはあったとはいえ、二人はよしと気合いを入れて準備を始める。
出来立てのたこ焼きがパックに詰められ、パッパグがソースやマヨネーズを塗り、ケイミーがかつお節や青のりをかけて、完成した物に爪楊枝を刺す。
一人ずつ手渡して、彼らは一斉に食べ始めた。
たった一個ですぐにわかる。これは絶品、彼らが知っているたこ焼きではない。
特にチョッパーはたこ焼きを食べること自体初めてだったようで、涙さえ流しかねない感動を覚えると頬を緩ませ、ほぉぉと感嘆の声が漏れ出る。
同じく他の三人も感動を覚えていたようだ。
「うんめぇぇ～っ！　やばうまっ！」
「おおっ、確かにこりゃうめぇ！」
「んんほむっ、たこ焼きってうめぇんだなぁ～……！」
「言うだけあるね。これなら繁盛してるでしょ」
「ああ、結構みんな来てくれるんだ。おかげで材料の調達で忙しくてな」
熱さに戸惑いながらもルフィは早々に食べ終え、ウソップとチョッパーも次が待ち遠しくて堪らないらしく、口に入れるのが恐ろしい熱さでも気にせずがっついた。
一人冷静に食べるキリは、即座に次を求めたルフィを見て表情を変える。
「うめぇぞハチ！　おかわり！」
「ちょっと待ったルフィ。せっかく商売してるんだからタダ食いはまずいって」
「ニュ～、いいんだ。お前らは仲間だからな」

「そういう訳にもいかないって。商売は商売として成功させないと。このままだと全部食べ尽くしかねないし、一度酒場に行って肉でも食べない？　ボクが奢るから」
「え～？　屋台は？」
「その後でも時間はあるさ」
「んじゃいいぞ。やっぱり肉も食いてぇよな」
「そういう訳だから、資金稼ぎ頑張って」
「ニュ～……それはいいんだけどな」
唐突にはっちゃんが表情を暗くし、恐る恐るキリへ問いかける。
「その、ナミも来てるんだろう？」
「もちろん。流石にこっちに来るかまではわからないけど――」
「あぁっ!?」
話している最中に背後から大声が聞こえた。人混みの中で喧騒に埋もれてもはっきり聞こえる。
四人が振り返れば、やはりそこに居たのはサンジだ。
胸元を手で押さえて両足が震え、見るからにおかしな姿で立っている。
予想はできるが、彼の目にはケイミーが映っていたらしい。
「に、にに、人魚!?　ほ、本物か!?　なんという可愛らしさ、いやいや神々しさだ！　おれが君を見た瞬間の衝撃といえばまるで雷に打たれたが如く！　そう、この雷の名は、〝恋〟!!」
「おい、アホが来たぞ」
「今日も全力でアホだね」
「キリそれ食わねぇのか？　じゃあおれにくれ」
どうやらサンジの目にはケイミーしか見えていないらしく、素早い動きで彼女に近付く。
そっと手を握ってやけに凛々しい表情だ。
仲間たちが傍で見ていることにも気付かず、悦に入った顔でケイミーへ語り掛け、不思議とそれだけで幸せそうだ。声も普段より弾む様子を見せている。
もはや慣れているため、全く気にしないルフィはキリからもらった

たこ焼きを頬張っていた。
「この出会いは奇跡だ……おれは君に、恋をしてしまった」
「こい？　鯉ってするものなの？」
「ケイミー、ケイミー、それ多分コイ違い」
「まぁいつも通りだな」
「うん。想定内」
すっかり有頂天なサンジに冷めた目を向けつつ、見回すと他の仲間たちもやってきた。
ナミの姿が見えた時、はっちゃんは少し困った様子で笑みを浮かべる。
「ハチじゃない。あんた何やってんの？」
「ニュ～、ナミ……たこ焼き食わねぇか？　おれが作ったんだ。味は良いと思うんだけど」
どことなく緊張した空気がある一瞬。
その二人に関しては些かマシであるとはいえ、そもそもは因縁のある相手。久々の再会を経てはっちゃんは緊張してしまっているようでどこかぎこちない。
ナミは腰に手を当て、少しじとっとした目つきだ。
それだけで怯えているらしく、はっちゃんはさらに緊張した。
「ニュ～……」
「いただくわ。一つちょうだい」
「わ、わかったぞ」
慌てて彼自身で用意して、店の前に立ったナミへ手渡された。その頃になるとケイミーやパッパグも彼の異変に気付いており、なぜ冷や汗を掻いているのかわからないという顔をする。
たこ焼きが入ったパックを受け取ったナミはすぐに食べ始めた。
しばし無言で咀嚼し、はっちゃんが恐る恐る尋ねる。
「ど、どうだ？」
「……うん。美味しい」
不機嫌そうな顔から一転。笑顔でそう告げられた。
安堵と共に嬉しくなったはっちゃんはようやく肩の力が抜け、今度

は声を弾ませて話す。
「そ、そうかっ。好きなだけ食ってってくれ。お前らから金は取らねぇからよ」
「いいの？　あんたも一応商売でやってるんでしょ」
「いいんだ。お前らは仲間だからな」
「そう。じゃあせっかくだし遠慮はしないけど」
ナミが小さく肩を揺らして、はっちゃんも嬉しそうに笑っていた。
ひとまず危機感は遠ざかった様子である。
相変わらずサンジが騒がしいとはいえ見ていなくとも大丈夫だろう。今はこの場に他の仲間たちも集まっている。離れて良さそうだと判断したキリはルフィの手を引いた。
「それじゃ行こうか。もうはぐれないようにね」
「よし、肉食おう、肉」
目を離すから勝手にどこかへ行ってしまうのであって、それなら手を引いてやった方がよっぽど安心感がある。上機嫌なルフィの手を引っ張り、キリは町の奥を目指して歩き出した。
情報収集の基本は酒場。
きっかけはルフィの腹を満たすためであったが別の目的もある。
彼らは場所も知らぬ酒場を探そうとした。
しかし歩き出して数分とせずに。
周囲は人混みで視界も悪い中、唐突に現れた人影に彼は反応できなかった。
「あなた！」
「はっ？」
突然正面から抱きしめられ、よく見れば見覚えがあり、それがベビー5だと気付く。
海賊島で出会ってよくわからない内に好かれた相手だった。
途端にキリは困惑し、ルフィはあっと声を発して、ベビー5は嬉しそうに彼の胸へ頬ずりする。
「あぁっ、やっぱりここへ来たのね。会えて嬉しい」
「えっと、なんでこんなところに……」

「キリ、お前船長の許可なく結婚するなって言っただろ」
「いやだから結婚してないんだって」
「えぇっ!? してないの!?」
「なんで驚くかな、そこで……」
図らずも妙な二人に前後から挟まれ、キリは溜息を禁じえない。
がっくりと肩を落とした後に観念して呟いた。
「はぁ……とりあえず移動しよう」
背に両腕を回してがっちりホールドしているベビー5は離れそうにない。振り払おうとしたり撒こうとしても無駄なのだろう。なんとなくだがその後の展開が想像できた。
キリは力のない声で言い、二人を連れて歩き出す。

招かれざる男

とある大きな酒場で、小さな、しかし無視できない問題が起こっていた。
食事中に客が突然眠り始めたのである。
四角く切られた肉をフォークで持ち上げた瞬間、急にピラフの中へ顔を埋めてしまい、ぴくりとも動かずに座ったまま寝息を立て始めてしまう。そんな異常事態があった。
店内は彼の背に夢中になり、その背には、とんでもない物が描かれていたのだ。
大海賊〝白ひげ〟のマークである。
グランドラインにおいてもそう滅多に見ることのない半ば伝説的なマークが、目の前にあった。
恐れおののいた彼らは声を潜めて、今や彼以外の人間に注目することもできない。
その風貌、その外見、見れば見るほど覚えがあって。
毒殺でもあったのかと疑ってしまうほどには有名な賞金首だったようだ。だが事実、彼は寝息を立てて眠っているだけであり、まだ死んでいない。
突然寝るだけでも異常だが問題なのはその人物な訳で、店内の動揺は収まりそうになかった。
距離を置いて眺める者の中には静かに武器を握る者も居て。
不穏な空気が漂いつつあり、海賊でない客には怯え始める者も多い。
「あいつ……やっぱり、アレだよな？」
「ああ、間違いない」
「白ひげのマーク……本物は初めて見た」
「なんで前半の海に？」
「しかもいきなり寝やがった」
「寝ている間に討ち取れたら――」
「バカ、よせっ」

槍を手にした男が力を込めて柄を強く握りしめた。
今この瞬間、標的はテーブルに頭を預けて眠りこけている。このまま背後から一突き。心臓を貫いてやれば自分でも討ち取れるのではないか、そんな風に思う。
騒動を避けたがる周囲は止めようとするが張本人は混乱しているらしい。
彼らの声は聞こえず、ついに席を立って槍を構えてしまった。
「へへっ、あいつを仕留めりゃ、おれも大海賊の仲間になれる……」
「おい、やめろっ。成功するわきゃねぇ」
「仮に討ち取れたとしても、そうなりゃ次に出てくるのが誰かわかってんのか」
「構うもんか。おれはここに来るまでに仲間が海軍に捕まっちまった。正直もう死んだも同然なんだからよぉ、どうせなら最後くらい派手に散りてぇしなぁ……」
「お、おい、お前っ」
「やめとけ。もう目がイッちまってる」
話す内に彼を止める者は居なくなったようだ。
槍を構えた男は恐る恐るカウンターへ近付いていく。
「てめぇを仕留めりゃおれも有名人だ……大事なマークががら空きだぜェ！　火拳のエース！」
駆け出した男は持てる力を全て注ぎ込んで槍を突き出した。眠りこける人物は動かず、その背に勢いよく槍が突き刺さって、穂先はカウンターにまで達する。
男は、肉体の刺さったその場所と槍の柄が燃え始めたことに気付く。
なぜかメラメラと燃え始め、槍はあっという間に燃えカスになってしまった。
「う、うわっ――!?」
咄嗟に手を離した男が尻もちをつく。
周囲で見ていた客はいつしか身を乗り出していた。
これこそが自然系（ロギア）のメラメラの実。

食べれば全身が〝火〟になるという能力である。
噂は聞いていたが本物を見たのは誰もが初めてだった。そう滅多に見れる能力ではないため興味を持って傷が塞がっていく様を見つめて、同時に恐怖も抱く。
彼はただの武器で死ぬ人間ではない。
刺された場所が火に包まれて傷を失くし、刺した槍の柄の部分は全て燃え尽きてしまった。
その後でむくっと顔が上げられる。
彼はにやりと笑って後ろへ振り返り、尻もちをついた男に目を向けた。
「やめとけよ。お前じゃおれはやれねぇ」
「あ、あっ――」
左手が上げられる。掌を男へ向け静止した。
直後、その腕から炎が放射され、男の体を包み込んで吹き飛ばした。
男の体は酒場の壁を破壊して外へ飛び出していき、勢いよく地面に転がると同時に、全身を包む炎に苦しんで転げ回る。当然のことだが命の危険を感じていた。
ちょうどその頃、酒場の近くに来ていたルフィたちが目撃し、大変そうだと息をつく。
酒場を見つけたのもそれがきっかけだった。
「あぢぃっ!? あづいっ、あづいいいっ!!」
「うあちゃ～、焼けちゃってるよあいつ。何があったんだ？」
「何にしてもトラブルがあったことは間違いなさそうだね。大会前に喧嘩はやめてよ」
「んん、努力する」
「ほんとに大丈夫かな」
転げ回る男は一向に気にせず、ルフィとキリは酒場へ向かう。
キリと腕を組んでうっとりしながら頭を預けるベビー5も同行していた。
三人は酒場に入り、するとすぐにルフィだけが一足先にカウンターへ駆けていく。

「肉ぅ〜！　おっさん、肉くれ！　大盛りで！」
「あ、ああ。わかった」
驚いている顔の店主は頷き、すぐに料理を始めようとする。
その時、ルフィの隣には半裸の男が座っていて。注文を終えると同時、もらったおしぼりで汚れた顔を拭いていた男とルフィが目を合わせた。
「ん？」
「あ」
二人は小さな声を発してしばし動かなくなってしまう。
その姿は入り口に立ったキリにも見えていて、彼もかなり驚いていた様子だ。
「エース〜！」
「ルフィ！　お前、やっぱりここに来やがったか！」
「なんでエースがこんなとこに居るんだぁ〜!?」
ルフィは半裸でオレンジ色のテンガロンハットをかぶった男、〝火拳のエース〟に驚いている様子で思わず跳び上がった。しかしそれは有名人だからという驚きではない。幼少期を共に過ごした義兄弟であり、信頼する兄であるが故にそれは再会である。
二人は満面の笑みを浮かべて再会を喜ぶ。
どうやらエースはルフィを探していたようだった。
店内では先程以上のどよめきが起こっている。
麦わらのルフィだ。そう語る声は次第に増えており、話題のルーキーが来たことに驚きを隠せない様子で呟く声が多く、さらに火拳のエースと仲睦まじい姿であった。
それだけではない。ルフィは入り口に立つキリへ手を振った。
紙使いキリまでそこに加わって、豪華とすら言える光景になっている。
「キリ！　こっち来いよ！　おれの兄ちゃんだ！」
「お前の仲間か？」
ルフィが大声で言ったことでガタガタと椅子が倒れる音が連続する。

まさかエースのことを兄だと言ったのか。
もしそうだとするならとんでもない発言を聞いた気がする。
店内に居る全員が床に転がって、今や誰一人として彼らから目が離せなかった。
彼らの驚きも当然だろうと思いつつ、キリは彼らの下へ向かう。
左側にぴたりと寄り添ったベビー5だけが一切驚いておらず、全く聞いていないらしい。
二人の前にやってきた。
特にエースが快く迎えて、ルフィも揃って椅子に座るよう促す。そうしてエースの隣にルフィが座って、ルフィの隣にキリが、その横には当然ベビー5が腰を落ち着ける。
おそらくキリだけでなくベビー5までルフィの仲間だと思っているのだろう。エースの眼差しは思いのほか優しく、兄の顔なのだろうと思わせる。
店内の動揺も無視して彼らは話し始めた。
以前に話を聞いて、嘘ではないと思っていたものの、それとは別に驚きもある。世界的に名を売った大海賊の一人に、こうして本人に会う日が来ようとは思っていなかった。
柔和な笑みを湛えて冷静さを見せながら、キリは幾分緊張もあった。
なにしろ相手は懸賞金が五億を超え、さらに今や世界最強の名を欲しいままにする大海賊の一味に加わっており、その二番隊隊長を務めるほどの実力者。
ルフィの兄だったとしても冷静ではいられない。
「おれの仲間のキリだ。それと、前に話しただろ？　兄ちゃんのエースだ」
「どうも」
「いやぁどうも、弟が世話になってます。いつもすいません」
「いやいや、こちらこそ」
「噂は聞いてるぜ。ルフィ、いい仲間を見つけたみたいだな」
「しっしっし」

ルフィは仲間を褒められて嬉しそうだ。
気を取り直した後で彼は改めて自身の兄に問うてみる。
「それで、なんでエースがここに居るんだ？」
「面白ェ大会があるって噂を聞いてな。お前ならここに来るかと思って待ってた」
「おれに会いに来たのか？」
「ああ。例の新聞も読んだ。一度お前の顔を見とこうかと思ってな」
エースはルフィに負けず劣らず上機嫌にしている。
兄弟の再開に水を差す訳にはいかないだろうとキリは自然に口を噤んでいた。そのせいかはわからないがベビー5に向き合う時間ができ、密かに彼女と話し始める。
その一方で兄弟の会話も続いていた。
ズボンのポケットから小さく丸めた紙を取り出したエースが、それをルフィに渡す。
何の変哲もない紙にルフィは不思議そうな顔だ。
「ほら。これをお前に渡したかった」
「ん？　紙？」
「そいつを持ってろ。ずっとだ」
紙を広げて眺めるルフィにエースが言う。
「なんだ？　ただの紙だ」
「そうさ。そいつがいつかおれとお前を引き合わせる」
「ふぅ～ん……」
「いらねぇか？」
「いや。持っとく」
「そうか」
素直な返事に笑顔で頷き、互いに納得する。
深く意味を聞いたりしない。エースがそう言うからにはそうなのだろう。
ルフィには兄を疑おうという意識がなかったらしい。
「それでさ、エースもアレやりに来たのか？　トレジャーバトル」

「あぁ、例の大会か」
「おれたちも参加するんだ。なんかおもしろそうだし」
「おれは参加しねぇよ。別の目的がある」
「ん？　別の目的？」
「人を探してるんだ。重罪人さ」
エースは傍らにあった水を一口飲み、些か真剣な顔になって語り出す。
「最近は黒ひげと名乗ってるらしいが、元々は〝白ひげ海賊団〟の二番隊隊員。おれの部下だ。海賊船で最悪の罪……奴は〝仲間殺し〟をして船から逃げた」
「仲間殺し、かぁ」
「おれが片をつけなきゃならねぇ。そうでもなきゃこの海を逆走したりしねぇよ」
笑みを浮かべているがどこか寂しげで、緊迫した様子も感じられて。
パッと笑みを深めたルフィは彼の顔を覗き込む。
「でもいいじゃねぇか。おれたちと一緒に参加しよう。せっかくここまで来たんだしよ」
「おいおい、今言ったばかりだろ？　おれは先を急いでる」
「おれたちこの大会で絶対勝たなきゃいけねぇんだ。この後アラバスタに行って、クロコダイルをぶっ飛ばすからな」
ルフィがそう言った瞬間、またしても店内の椅子やテーブルが揺れる音がした。
またしても客の大半が地面に転がっているようだ。
会話に集中している二人は気にせず、ベビー5は耳にすら入らず、キリはそうなっても仕方ないと納得しながら敢えて無視していたとはいえ、あまりにもショッキングな話を聞いて店内の客は騒然としている。ルフィの発言はそれほど危険なものだった。
彼は王下七武海に手を出そうとしているのだ。
世界にたった七人しか存在しない実力を認められた海賊。政府の味方にも思えるのだが、一言にそうとは言えない危険人物。

彼ら七人を指して三大勢力の一つに数えられるほど、その実力は想像を絶する。
そんな相手に挑もうなど沙汰の限りだろう。
これには客と同じくエースも怪訝な顔をして、しかし驚きも少なく尋ねた。
昔からルフィをよく知るが故に大抵のことでは驚かない。どうやらエースは彼と話している時に何を言い出してもおかしくないと思っていたようだ。
多少の驚きはあっても取り乱すほどではなく、至って冷静な声色だった。
「クロコダイル？　七武海の一角じゃねぇか。なんでそんな奴を」
「うちのキリが昔あいつの仲間だったらしいんだ。ちゃんと仲間になるためには無視して通れないって言うからよ、おれがクロコダイルをぶっ飛ばさなきゃいけなくてさ」
「ほぉ～」
「でもアラバスタのエターナルポースが無くて困ってんだよ。だから大会に優勝してもらおうと思っててさ。エースが居たら絶対優勝できるだろ！」
「なるほど。まぁ、大体はわかった」
ちょうどその頃になって店主がルフィの前に肉料理を置く。詳細は聞いていなかったがとにかく肉なのだろうと分厚いステーキが用意された。彼は嬉しそうに食べ始める。
その間にエースはルフィの向こう側に居るキリの顔を覗き込む。
騒がしい弟とは対照的な人物だ。
普通とでもいうか、落ち着いた様子で、静かに水を飲みながら彼の視線に気付いて振り向いた。
「キリっていったか？　悪いな、こいつは手がかかるだろ」
「あはは、まぁね。もう慣れたよ」
「何があったのかは知らねぇがこいつはお前を気に入ってるみてぇだ。それに、お前も日頃からきっとルフィを助けてくれてるんだろう。ありがとう。恩に着るよ」

「そんな。別に大したことじゃ」
「ガキの頃から目が離せない奴だった。いい仲間を見つけたみたいで安心したよ」
エースの笑顔は優しい。
虚を衝かれた様子でキリは不意に笑みを消してしまう。
胸中にあったのは純粋な驚きだった。
「確かにお前がどれだけ強くなったか試すには良い機会だな。せっかくここで会ったんだ。それなら少しくらい付き合ってやるか」
「ほんとかぁ～エース！」
「いいの？　用があるって言ってたのは」
「構わねぇよ。弟に頼られてんだ、兄貴としては力も貸してやりたくなる」
傍から見ているよりも良い関係の兄弟らしい。
笑い合う二人を眺め、キリは、不思議な心境にあって再び笑みを浮かべた。
顔の向きを変えてもう一度彼女に向き合う。
にこにこと笑みを絶やさないベビー5は彼の肩に頭を預け、しっかり腕を絡めて離さない。
なぜ彼女がここに居るのだろう。
以前の出会いで海賊だとは知っているし、なぜだか懐かれてしまったことだって覚えている。しかしまた会う時が来るとは思っていなくて複雑な心境だ。
ベビー5は甲斐甲斐しく彼の世話をしようとする。
ルフィとエースが喋っている間に注文した料理が目の前のカウンターに置かれ、フォークを手にした彼女がパスタを巻き取り、恥じらいを感じることもなく嬉しそうに彼の口元へ差し出した。
困惑してしまい、キリはううむと唸って困り果てる。
「はい、あなた。あ～ん」
「いや、自分で食べれるから」
「うふふ、そんなに恥ずかしがらなくても」
「逆に君は恥ずかしくないのかな」

「いいえ、ちっとも。だって愛するあなたですもの♡」
「これはボクが悪いのかなぁ……」
そういえばこうなってしまった理由は自分にあった気がする、とようやく思い出して、少しばかり観念した様子のキリは差し出された料理を口にした。途端にベビー5が頬を緩め、うっとりした目で彼の顔を見つめる。ただ咀嚼しているだけでも嬉しそうだ。
どうもやりにくい。
騙そうとしているのなら対応のし甲斐もあるが彼女はそうではなかった。邪心もなくそうされては無暗に突っぱねるのも心苦しく、断り切れずにいる。
すでに素性を知っている。
このまま自分の近くに置いていていていいのだろうか。
利点と不安とが彼の中に存在し、逡巡している。無理に突っぱねないのはそうした打算的な考えもあってのことだろう。そうなるように教育されている。
海賊王を目指す道において、彼女の存在はいずれ大きなアドバンテージを生み出し、その代償として己の一味に大きな危機を及ぼす存在でもある。
果たしてどう判断すべきなのか、いまだ考えあぐねていた。
ひとまずこの場においては自分の手を使わずともパスタを食べられるので楽だ。
生来のめんどくさがりだろう、キリは彼女の手を借りて食事を続ける。
そうして食べさせてもらう内にあまり考え過ぎても無駄かと考え直した。
今は目の前の問題に集中すべき時。
つまりはアラバスタ、自身の古巣との決戦に備えるべきであり、そのために何としても大会で優勝しなければならない。それ以外のことを考えるのは単なる蛇足だ。
キリは緩い表情のまま考えを巡らせ始める。
「おいしい？」

「うん。結構イケるね」
「うふふ、よかった」
傍から見ていれば仲睦まじい恋人同士に見える。二人はそれを理解しているのか。
しばしの間、そうして話していると、突然店の外から拡声器を通した大声が聞こえてくる。
どうやらトレジャーバトル大会の開会式が行われるようだ。
町一番の広場へ。
そう呼ぶ声を聞いてルフィは笑顔でキリに振り返り、彼も視線を受け止める。いつの間にやら追加の料理を注文して両頬がパンパンに膨らんでいた。
苦笑し、怒る様子を見せずに彼は移動を促した。
「みりっ！　ほれしゃあはぽるっみめっぺんぽーおー」
「はいはい。口の中無くなってから喋ってね。開会式があるみたいだから移動しようか」
「トレジャーバトルか。一体何があるんだろうな」
気付けばエースも皿を何枚も積み上げていて、食べた量で言えばルフィにも劣らない。
似た者同士のようで呆れた兄弟だ。
「ところでキリ、物は相談なんだがな」
「何？」
「いやぁー実は手持ちがちょっとな。悪いけど立て替えてくれねぇか？」
「あぁ、そういうこと」
おまけにエースは頭を掻きながらそんなことを言ってくる。ルフィに比べれば常識人かと思っていたが意外に考える事無く行動しているらしい。
キリはやれやれと嘆息した。
しかし船長との日々ですっかり慣れており、嫌な顔一つせず承諾する。
「いいよ。うちも協力してもらう訳だし、火拳のエースを雇うため

と考えたら安いしね」
「悪いな。その分大会で結果出すからよ」
「しっしっし。エースは食い逃げが得意だからな～」
「それを言うならお前もだろ」
「教えたのはエースとサボだぞ？」
「それでも共犯者には変わりねえだろ。あとメシ食いてえって言い出すのは大概お前だ。おれとサボはお前のために危険な橋渡ってやったんだぞ」
「そうだっけ？」
「まったく。これだからお前は……」
エースが苦笑し、ルフィはからからと笑っていた。
そんな二人を横目に見つつキリは代金を払い、咄嗟にベビー５が声をかける。
「あっ、私が払うわ。あなたの役に立ちたいの」
「いいよ。想定内だったし、いつもより量は少ないからエースの分を合わせても問題ない」
「でも……」
「また別のことで頼るから。ね？」
そう言って微笑まれた時、ベビー５は顔を真っ赤にして彼に抱き着いた。
「……はい♡」
「あー、じゃあ移動しようか。詳しいルールも聞かなきゃいけないから」
「うお～！　大会だぁ～！」
「ルフィ、あんまりはしゃぎ過ぎるなよ」
支払いを終えて四人がぞろぞろと酒場を出て行く。
店内に居た客は彼らの姿を眺め、声が出せなくなったままで見送ることしかできない。
その姿は威風堂々と、恐れを知らぬかのような余裕を感じさせる。
少なくとも現時点でとんでもないチームが出来上がっていた。
五億を超える首〝火拳のエース〟に、初頭手配３０００万の男〝麦

わらのルフィ〟、何やら妙な話が聞こえてきた〝紙使いキリ〟。そしてキリに寄り添う謎の女も居る。
特に白ひげ海賊団の隊長が参加するという話だけで、否が応にも大会の注目度は増していた。
この大会は伝説になるかもしれない。
そんな言葉がどこかで呟かれた。

開会式

酒場を後にした四人は目的地だろう広場へ到達した。
人で埋め尽くされて地面さえ見えないその光景はひどく異様に見える。
凄まじい熱気。高らかに響く声。戦いを求める者たちがざわざわと絶え間ない声を発し、波のように見える人の動きは俯瞰的に眺めれば恐怖心すら芽生えた。
ルフィは目を輝かせて、エースは帽子を押さえて薄く笑みを湛える。しかしキリはあまりの人の多さに辟易としているようで、反対に人混みに乗じてさらに引っ付くベビー5は上機嫌だ。
彼らの姿も人混みの中に消え、遠目で確認することなどできそうにない。
町で一番大きい円形の広場は島の中央に位置している。
六つの大通りに通じており、どこへ行くにも利用されるほど有名な場所。
驚くべきはその広さ。
わざわざ数える人間など居ないが、すでにその場所には数万人の人間が集まっており、海賊だけでなく様々な国から人が集まり、広場を囲む建物から覗く者も合わせればさらに数が増える。参加者たる海賊、近隣諸国の貴族や王族、裏社会のマフィアやギャング、或いは商人。噂を聞きつけて観戦にやってきた一般市民も混じっている。
それほどの人間が町に来たのは初めてのことで、すでに大きな混乱があった。
ただ今は、これから始まるトレジャーバトル大会への期待が大きい。
海賊が混じっていても人々は争うこともなく広場で話を聞こうとしていた。
人を掻き分けてどんどん前へ進んでいくルフィに続いて、三人も広場の中ほどへ到達する。
ここで仲間に会えるかと思っていたがとんでもない。探す気にな

れない人数で、考えただけでげんなりしてしまう。合流は後回しだとキリが嘆息していた。
立っているだけで誰かの肩が当たる環境だ。早くもうんざりしてきた。
辛うじて目の前にルフィとエースが立っているものの、はぐれないのが奇跡に想える。
この状況では彼女が居ることが幸いだと思う。
キリはベビー5の腰に手を回し、ぎゅっと抱き寄せながら顔を覗き込む。すると彼女は心底幸せそうに頬を緩めており、全く辛そうには見えない。
「大丈夫？　ちょっとこの辺息苦しいけど」
「問題ないわ。あなたと一緒なら♡」
「あー、うん。まぁ色々気をつけてね」
上機嫌に胸へ頬ずりしてくるため、心配は必要なさそうだ。
凄まじい数の人で逃げ出したくなる状況の中、彼女だけが目の保養となった。
キリは気疲れした様子ながらしばしその場で待つ。
少しすると変化があった。
広場の北側、特別に作られただろうステージの一部がせりあがり、それと同時に町中に響くほどの大音量で激しいギターソロが流れ始める。
どうやら開会式の始まりのようだ。
揺れるスピーカーが発する轟音は嫌でも人々の注目を集めさせた。
塔のように伸びた特別ステージの上、一人の男がギターを弾いていた。超絶技巧でかき鳴らし、音色と呼べるかは疑問だがその音に感心する者が居るのも事実。
少なくとも演出としては成功していただろう。
突然演奏を止めた時、彼にはあらゆる場所から惜しみない拍手が送られる。
ブルーベリータイムズ社主催のはずが、記者には見えない風貌だ。
鮮やかな色の金髪を逆立て、赤いパーカーの上から黒いジャケット

を身に着け、青いジーンズ。肩にはギターをかけて、顔にはサングラス。非常に若々しい外見だが、ロックミュージシャンと言われた方がしっくりくる外見であって、どことなく不信感も集めやすい。
その場に現れた彼が主催者なのか。
疑問に思う者が増える中、彼はスタンドにあったマイクを掴んで叫んだ。
《イェーイッ!!》
拳を突き上げまさにミュージシャンである。
単純な者、ルフィも含めた一部の人間は応じてうおおおと声を発するものの、呆れた顔も多い。
戸惑いを表す人間が居る中でその男は気にせず話し始めた。
《海賊を始め多くの人に集まってもらったことを感謝するぜ！　おれが主催者兼ブルーベリータイムズ社所属の記者、ロッキー・ハッタリーだ！　よろしくゥ！》
「うおおおっ！　ハッタリさ～ん！」
主催者、ロッキー・ハッタリーの一言であっさりと広場が盛り上がる。
やはり海賊は単純なのか、感化され易い様子で意味もなく騒ぎたいらしい。
その中にはやはり感化され易かったルフィも混じっており、両腕を突き上げて思い切り叫んで、離れた場所、同じく広場に居たウソップやチョッパーも全力で騒いでいた。
総じて記者らしくない記者だが彼を止める者は居ない。
ハッタリーは弾む声で演説を続ける。
《ここへ来たということは君たちもすでにわかっているはずだ、これから何が始まるのか。ここから始められる大イベントは歴史に名を残すことになるだろう！　世界で初めて、おれたちの手で始められる！　君たちが歴史の生き証人だ！》
「おおおおおおっ！」
《おれは海賊が大好きだッ！　お前らも海賊は好きかァ！》
「大好きだァァァ～ッ!!」

耳が痛くなるほどの大絶叫である。
広場は先程の倍以上は騒がしくなって、気を良くしたハッタリーはひらひらと手を振った。
《ＯＫ、ＯＫ。君らの熱意は伝わってきた。ありがとう。だがここからは少しおれ個人の話を聞いて欲しい。それこそさっきも言った海賊が好きだという話だ》
海賊たちはなぜか従順に従い、聞いてくれと言えば静かに聞き始める。
一瞬にして広場は静まり返っていた。
その分有難く思うハッタリーが真摯な態度で伝える。
《おれは幼い頃から海賊に対する強い憧れがあった。それは今でも変わらない。だがなぜ海賊にならずに記者になったのかと言えば、君たちに届いた手紙にも記されていただろう、海賊の情報が世間に出る頃には捻じ曲げられてしまっている。果たして世間が言うほど海賊は悪なのか？　おれはそんな風には思わない……海賊とは自由を愛する存在だからだ》
うんうんと頷く者たちが非常に多い。
高い場所から広場を見渡すハッタリーの目には、大勢の人間が打ち合わせしたかのように揃って頷く異様な光景が見えていた。妙にタイミングが合ってもいる。
彼は自身も小さく頷いた。
《そこでおれは、海賊の本当の姿を知って欲しいと考えた。情報操作によって広められた噂話ではなく、その目で海賊を見て欲しい。確かに悪い奴も居るだろう。この場に集まった中にも極悪人が居るかもしれない。そんなことはわかっている。だから必死に考えた。遊びを通じて知ってもらえばどうだろうか》
ハッタリーの声に混じる熱が徐々に高まっていく。
《観客が傷つかないためのステージとルールを用意すれば、彼らの本当の姿を知ってもらえるのではないか。確かに自由な海賊をルールで縛ってしまうのは忍びない。だからこの場ではっきり言っておこう。殺しは厳禁！　参加者及び観客を殺めた者は即刻捕まえて海

軍へ突き出す！　しかしそれ以外の多少のズルは大目に見よう！
なぜなら君らは自由な海賊だからだ！》
おおおっ、とまたしても海賊たちが盛り上がり始める。
ハッタリーは声を大きくしていき、彼らと呼吸を合わせるかのようだ。
《この戦いに勝利した者には望む者をなんでも与える！　心配はしないでくれ、この島に集った観客の中には大富豪、王族、裏社会の要人となんでもござれ！　大会の成功のためには彼らも惜しみない援助を行ってくれると約束してくれた！　欲しい物があるなら優勝を目指せ！》
再び海賊たちが両腕を突き上げ始める。
優勝への期待値、勝利への渇望、未来への希望。あらゆる欲求に火が点いている。
もはや止め切れない様子で声が波となって広場を揺らし始めた。
《勝者には栄光と賞品を！　敗者に得られる物は何もない！　ならば君らが求める物はただ一つのはずだ、そうだろう！　大会で優勝したいか！　勝者になりたいかァ！》
ついに抑え切れずに怒号が広がる。
しかしそれでもまだ足りない。ハッタリーは核心をつく言葉をついに発した。
《今ここに！　トレジャーバトル大会の開会を宣言するッ!!》
瞬間、島が揺れたと思わせるような声が響き渡った。
島中の人間が拳を突き上げ叫んでいるかのような、そんなはずはないのだがそう思っても仕方ないほどの絶叫があり、町の様相は一瞬にして変化している。
ハッタリーの思惑通りに火は点けられた。
彼らは戦いを望み、勝利を望み、大会への参加を覚悟したのである。
ルフィが、ウソップが、チョッパーが拳を突き上げて叫んでいた。
エースは腕を組んでにやりと笑い、キリは困った顔でうるさいと両手で耳を塞ぐ。
反応はそれぞれ違えど、大会が始まるセレモニーとしては十分成功

だろう。
絶叫に合わせてハッタリーはギターを弾き、非常に嬉しそうな顔で広場を見渡す。
勢いよくマイクを掴んで、まるでライブのようにノリながら観衆たちへ言った。
《ＯＫ！　このままこの後の手順を説明するぜ！　みんなしっかりついてきてくれよ！》
怒号を聞きつつ、ハッタリーは声を大きくしたままで説明を続けた。
《まず最初に大事なことを伝えるぜ！　トレジャーバトルは二人一組のペアで行われる！　優勝者はたった一組、当初からかなりの人数が集まると予想されていたため、最初に予選を行うぞ！　誤解のないよう宣言しておこう……本戦に進めるのはたったの八組！》
そう言われた途端に広場がどよめき出す。
一体この島にどれほどの人間が集まっていると思っているのか。
参加者がたった八組のはずがなく、おそらく参加者は百組を超えると予想できる。それだけに早くもブーイングさえ始まっていた。
ハッタリーは手を振る。ブーイングにも全く動揺していない様子だ。
笑顔は変わらずに堂々と言ってのけた。
《まぁまぁ、そう怒らず。最終的に優勝できるのはたった一組。本戦を始める前にはまず数を減らさなければならないでしょう。予選は明日から始まるぜ！》
気を取り直して大きく告げた。
聴衆も意外にすぐ納得した様子だった。
《今から参加者を募って受付を行う！　場所は港だ！　ペアを組んでそこに来た者には予選会場へ向かうための船に乗船することが許可される！　その船を紹介しよう、モニターを見てくれ！》
ハッタリーの腕が振るわれると至る所に設置された大型モニターが映像を映し出す。
映像電伝虫が目に映した別の場所が映し出されていた。

映ったのはどうやら町のすぐ傍、海である。
水を押し上げて何かが現れようとして、それはすぐに海中から姿を見せた。
《この日のために生み出され、参加者だけが乗ることを許される豪華客船！　その名も――》
海水を跳ね上げ、一個の島ほどもありそうな規格外の船が現れた。その姿を見せると同時に張り付いていたシャボン玉が割れ、甲板が外気へと触れる。
聴衆が驚くと同時、ハッタリーの絶叫が響き渡った。
《ゴージャス・ハッタリー号だァァッ!!》
「うおおおおおおっ!!」
再び島中が揺れていた。
それは、戦いを望ませる象徴としては素晴らしい力を持っていただろう。あまりにも規模が大きい船の姿に、自分たちはとんでもないことをするのだ、と心を躍らせた。
事実今回の大会には様々な出資者や協力者が居る。
間違いなく話題性のあるイベントであり、賞品も嘘ではないと確信させた。
早くも海賊たちは戦いを望んでいる。足を踏み鳴らし、大声を発してそれが表れていた。
ハッタリーは彼らを上手く焚きつけたのだ。
逸る気持ちを抑え切れない海賊たちを見回して、あくまでも冷静に、彼らの心に宿った火を消させないよう配慮する。そして最も大事なことは市民に被害を及ぼさせないことだ。
ハッタリーは敢えて派手にマイクスタンドを回す。
そうすることによって彼らの注目は面白いほどに集まった。
《各自ペアを組んで港の受付で参加意思を表明してくれ！　締め切りは日没まで！　日が沈むと同時に船は出航し、予選のために近くの島へ移動する！　なお、観客の皆様には町に残って頂き、映像電伝虫を使ってモニターで観戦して頂きます》
いよいよ動き出す時が来ていた。

うずうずしている海賊たちは今にも走り出そうとしている。
そのきっかけはやはりハッタリーが与えた。
《それでは諸君！　戦う意志のある者は今すぐ港へ！　諸君らの健闘を祈る！》
「おおおおおっ!!」
《あと一般市民の皆様を傷つけないように！　自由といってもそこは一応分別のある対応を！》
まるで檻から解放された獣のように、凄まじい足音を立てて一斉に海賊たちが動く。
早くも市民にぶつかりながら彼らは我先にと港を目指し始めた。
荒々しく凄まじい光景の中、ルフィも例に漏れず勢いよく走り出していて、咄嗟にキリが彼の首根っこを掴んで無理やり止める。足は動かしていたが前に進んでいなかった。
やれやれと溜息交じりに彼を引きずりつつ、彼らは広場の端へ移動した。
「うおおおおぉ～っ！　勝つぞぉぉ～！」
「ルフィ、その前にペア決めだよ。一旦みんなと合流しよう」
「少しは落ち着け。そう急がなくても受付はできる」
キリとエースがルフィを連れ、ベビー5はキリに引っ付いたまま、広場の端で周囲を見回す。
この場に皆が来ていればわざわざ探す必要はない。最も手っ取り早い状況だろう。しかしまだ大勢の人間が勢いよく走っていくところで見つけるのは簡単ではなさそうだ。
うざったいくらいの熱気である。キリは面倒そうに頭を掻いた。
「これは探すのめんどくさいね。さてどうしよう」
「電伝虫は持ってねぇのか？」
「あ、そっか。別行動してなきゃいいんだけど」
エースの言葉を受けてキリが子電伝虫を取り出した。番号を押してウソップへ通信を試みる。
電伝虫が目を開き、通話は繋がったようだ。
「もしもし、ウソップ？　こちらキリです、どーぞ」

《こちらキャプテ～ン・ウソップ！　今最高潮にテンション上がってますど～ぞ！》
「それは何より。うちの船長も同じだよ。とりあえず全員で合流してペアを決めようと思うんだけどどこに居るかな。ボクらは広場の隅でじっとしてる」
《こっちはおれとチョッパーが広場だ！　他はハチのたこ焼き屋と、ナミたちはこの辺の店で休んでるとよ！　全員集めてそっち行こうか！》
「いいよ、こっちも移動する。それじゃハチのたこ焼き屋まで戻ろうか」
《了解！　ナミたちを呼んでそっち行くから先に移動してくれ！》
「わかった。それじゃ後で」
周囲の怒号が混じって非常に聞き取りにくい状況だったが、なんとか意志の疎通は図れた。約束をした後で二人は電伝虫を切り、懐に仕舞って顔を上げる。
とりあえず移動だ。ここは騒がし過ぎる。
立ち止まっているものの興奮している様子のルフィへ呼びかけ、彼らは移動し始めた。
「ルフィ、ハチのところに戻ろう。みんなも来るって」
「おう！　なぁなぁ、まだトレジャーバトル始まんねぇのか？　おれ早く戦いてぇよ」
「予選は明日って言ってたでしょ？　少なくとも今日はまだだよ」
「なーんだ……」
はっちゃんの屋台の位置を知っているのは、現状キリだけである。ルフィに任せる訳にもいかず、彼とベビー5が先頭となって歩き出す。
いまだ走っている人間が多いため来た道は使えない。そんな状況でも漠然と地理が理解できていれば迷わず目的地に行ける。彼は自信を持って来た時とは別の大通りへ入った。
町中が興奮して騒がしい。
デッドエンドとも様子が違う。あれは海賊だけだが今度は海賊以

外の観衆が非常に多い。むしろこの町に集ったのは参加者より観戦者の方がずっと多いだろう。
血を求める人間がそれだけ多いということか。
呆れながらもキリは周囲の賑わいを見回していた。
これから戦いが始まると知った上で、町には笑顔が溢れている。にこにこと和やかそうに話し、純粋に買い物を楽しむ客に紛れて誰が勝利するかを予想する者も少なくない。
海賊として育った彼にはさほど好ましくない風景だ。
世間の嫌われ者である海賊が批判されることが少なくない中、同じく血を求める市民は平気な顔をして呑気に暮らしている。自分は命を賭けることもなく、他人に安全を保障してもらい、少なくとも今ある風景の中では戦おうともせずに。
キリはのどかな町の風景を見回して苦笑する。
その様子に気付いたベビー5が彼の顔を見て質問した。
「どうかしたの？　何か嫌なことでもあった？」
「ううん。ただベビー5は可愛いなぁと思って」
「ええっ!?　そ、そんなこと急に言われても……！」
へらりと笑って言えば彼女は顔を真っ赤にして俯く。意外に初心な反応だと思った。
二人より後ろを歩くルフィとエースは会話に夢中になっているらしく気付いていない。
キリの手が軽くベビー5の頭を撫で、そんな状態ではっちゃんの屋台を目指す。
多少遠回りにはなったが無事に四角い広場に戻ってきた。
どうやらウソップたちの方が早かったらしく、海賊たちが港へ急いでもまだ人混みが消えていない広場へ足を踏み入れ、手を振る仲間たちの下へ到着した。
全員揃っている。早速話を始めることはできそうだ。
「よぉし、これで全員揃ったな。ん？　そいつら誰だ？」
「あ、海賊島で会った人」
「あっちの男は誰だ？」

出迎えたウソップ、シルク、チョッパーが不思議そうな顔をする。
それも当然だ。キリにぴったり寄り添ってベビー5が居て、ルフィの隣にはエースが居る。ついさっきまで見なかった顔があれば誰だろうと思っても仕方ない。
他の仲間たちもそれぞれ異なる反応で疑問を表している。
そんな彼らへ向けて、笑顔でルフィが告げた。
「みんなに紹介するよ。おれの兄ちゃんだ」
「どうも初めまして。弟が世話になってます」
「あぁ、兄ちゃん……ルフィの兄ちゃんっ!?」
代表するかのようにウソップが叫ぶと同時、仲間たちは全員が驚きの声を上げた。
なにせ型破りなルフィである。兄が居るという話は聞いていなかったし、予想もしなかった。
ぺこりと頭を下げたエースはそれだけで礼儀のある人に見え、そう言われなければまさかルフィの兄と気付けるはずもなく、じっと見つめてもまだ信じられない。
全員が頼る様子でキリを見た。
こうなればベビー5のことはどうでもいい。本当なのかと視線が聞いている。
すでに納得しているキリはあっさり頷き、それで皆が納得した様子だった。
それでも悲鳴に似た声は止まらずに動揺したまま。
ルフィとエースは揃って笑顔を見せた。
「ル、ルフィに兄貴が居たのか？　正直おれはそんな話初めて知ったんだが……」
「あれ？　それにこの人、どこかで見たことあるような」
「驚きついでに教えとくよ。この人、火拳のエース」
「火拳の、って……はぁっ!?」
「あの白ひげ海賊団の!?」
「嘘でしょ!?　超有名人じゃない！　えっ、ルフィのお兄さん……!?」

「火拳？　白ひげ？　有名なのか？」
世界の情報に疎いチョッパーだけが不思議そうにしていたものの、それ以外のほぼ全員が驚愕していた。少し離れていたナミまで慌て始めるほどである。
帽子を手で押さえ、エースはどことなく嬉しそうな顔だった。
「おっ、なんだ、お前ら親父のこと知ってるのか？」
「知ってるも何も白ひげは大海賊じゃねぇか！　いやいや、火拳のエースも有名だし！　最強と謳われる白ひげ海賊団の二番隊隊長だぞ!?　ほ、ほんとに本人!?」
「すごい、初めて見た……白ひげ海賊団って、実在するんだね……」
「しかもルフィのお兄さんでしょ……？　あぁもう、意味わかんないっ」
それぞれ理解が追いつかずに苦しげな顔になっている。
ウソップは目を見開いて口を開けたまま。幼い頃から海賊フリークだったらしいシルクは最強の海賊団のクルーを見て呆然としており、ついにナミは頭を抱えてしまう。
彼らの反応を見るのもほどほどに、唐突にキリが話し出す。
「でさ、ペアを決めようかって話なんだけど――」
「おい待てェ！　そんな簡単に進められるかァ！　ルフィの兄貴ってどういうことだよ!?」
「あり得ないでしょ！　ルフィのお兄さんが火拳のエースだなんて！　そ、そう、冗談よね！　たまたま出会って意気投合したから冗談言って私たちの反応を見ようと……！」
「ルフィが嘘つけないのは知ってるでしょ？　冗談だって滅多に言わないよ」
「そ、それは確かに……」
「じゃあ、本当に？」
「しっしっし。ほんとだ」
「ガキの頃はずっと一緒でな。こいつには色々手を焼いたんだ」
エースの手が麦わら帽子の上からルフィの頭を撫でる。それは非常に慣れた姿に見えて。

一同はやっと信じられる心境になったようで、ぽかんとしたまま何も言えなくなる。
全員が一斉に黙り込んでしまったため、再び口火を切ったのはキリだった。
「じゃ、ペア決めの話なんだけど」
「いやいや……お前はなんでそんな冷静なんだよ」
「前に聞いたからね。まだみんなと出会う前。その時はボクも驚いたんだよ」
「そ、そうか」
「頭痛くなりそう……ちょっと落ち着く時間が必要みたい」
「落ち着く前にペアだけ決めちゃおうか。受付もしないといけないしさ」
「今そんな元気あんのはお前とルフィだけだよ……」
ぐったりした様子でウソップたちが黙ってしまう。
それでもキリが話を進めようとするため、腕組みをしたゾロが促した。
「で？　どうやって決める」
「流石に負ける訳にはいかないし、今回はくじって訳にもいかないね。それぞれの実力等々を加味して勝率の高いペアを作っていこうか。異論がなければボクが考えるけど」
「そうしてやれ。こいつらにはもう考える気力がねぇよ」
「そうだね。サンジは人魚に夢中だし」
「お、ルフィたち来てたのか。それにいつかの可愛い子さぁ～んっ!!」
今日も全力で幸せそうなサンジが飛び跳ね、ベビー5を見つけたことでさらに幸せそうだ。どうやら彼は屋台を手伝っていたらしく、その合間にケイミーと話して頬が緩み切っていた。
はっちゃんが居ない。となれば受付に行ったのだろうと思う。
おそらくアーロン一味も参加するはずだ。
再確認しつつ自分たちも遅れを取らないよう、キリが先陣切って話を進める。

「それじゃ受付にも行かなきゃいけないし、サクッと決めようか」
「そんな簡単に決めていいのか？」
「みんなのことはわかってるつもりだよ。良いところも弱点も」
「まぁ、それもそうか」
「という訳で、勝てる確率が高くなるように、弱点を補えるペアを考えよう」
そう言ってキリは仲間たちの顔を見回した。
「まず、ルフィとビビ」
「え？」
「おっし！　頑張ろうなビビ！」
名前を呼ばれた二人はそれぞれ異なる反応を見せる。
最も扱いが難しそうな船長を任されたビビは純粋に驚いてしまって、対照的にルフィは待ち切れない様子でわくわくしていた。
「次。ゾロとウソップ」
「おう」
「よぉし！　ゾロとコンビか！　これは安全だ！」
ゾロは大した反応を見せずに頷き、ウソップは安堵した様子でガッツポーズを見せた。
「えっと、ナミとサンジ」
「よし、とりあえず安心できる組み合わせね」
「やったねナミすわぁ～ん！　おれが君を守るからぁ～！」
ナミもまた安堵した様子で、サンジはナミと一緒になれただけで有頂天になる。このように、彼を女性とペアにしておけばパートナーの安全は確保され、尚且つやる気も倍増する。男と並べるよりもよっぽど良い結果を残すだろうことは明確だった。
徐々にメンバーも少なくなり、今のところ一切不満もない様子である。
「あとは、シルクとチョッパー」
「うん。よろしくねチョッパー。緊張しなくてもいいから」
「わかった。おれも役に立てるよう頑張るからな」
シルクは柔らかに微笑み、チョッパーは拳を握ってやる気を見せ

る。
「エースとはボクが組むよ。まだよく知らないし、ルフィと組ませていいのか判断し辛いから」
「よろしく頼むぜ」
「ええっ!?」
キリがそう言った時、エースは快諾したのだがベビー5が悲鳴を発した。
目に涙を溜め、彼にしがみついて懇願するように言うのである。
「わ、私は？　あなたは私とペアになるんじゃなかったの？」
「いや、そうするのも問題があるのかと思ってさ」
「問題なんて何もない！　私はあなたの役に立ちたいのに！」
「こうなることまで考えてなかったなぁ……」
「あいつら一体どういう関係なんだ？」
「さぁ。サンジくんじゃないけど、ナンパでもしたんじゃない？」
抱きつかれて困るキリを見ながらウソップとナミがひそひそ話す。
助ける気は無さそうだ。
彼女の扱いにはまだ困っている。実力のほども知らぬまま、仲間たちに混じってペアを組んで良いと判断するだけの材料がない。信頼がない、と言い換えることもできる。
しかし本人にそう言えばきっと泣き出してしまうだろう。
絶望してやけになってしまう可能性も感じて、返答は考えなければならなかった。
キリは小さく嘆息し、彼女の目を見つめる。
優しく微笑んで彼女を安心させようとする傍ら、やはり意見を変える気は無さそうだった。
穏やかに動いた手がベビー5の頬を撫で、嬉しそうに目を細める一瞬に話を始める。
「気持ちは有難いんだけどさ、これはボクらの問題でもあるから、できるだけ自分たちの力でなんとかしたい。エースは船長の兄弟だけど、君はそうじゃないし」
「大丈夫。私とあなたの仲じゃない。もう他人じゃないわ」

「うーん、まぁ確かにね」
「折れてんじゃねぇか」
「否定するとまためんどくさくなるんでしょ」
「君は一人でこの島に来たの？」
「いいえ、仲間が一人一緒」
「それじゃこうしよう。その仲間とペアで大会に出場して、ボクを助けて欲しいんだ。そういうことならどうかな？　きっと君も本来の力を発揮できると思うから」
「それならあなたの役に立てる？」
「もちろん。ボクは君を頼りにしてるよ」
嬉しそうに頬を緩めたベビー5が表情を明るくする。
説得は上手く行ったようだ。彼女はパッと彼から離れてすぐ行動に移そうとする。
「わかったわ。今すぐバッファローに話をして、大会に参加してくる」
「うん。よろしく」
「私があなたを優勝させるから。少し待っててね」
「急がなくてもいいよ。ゆっくりでいいから」
そう言ってベビー5は彼の傍を離れ、仲間を探して走り出す。
キリは手を振り、彼女を見送った。
仲間の目から見ても妙な状況になっている。前にも思ったことだが一体何があったのか。想うところあったらしく、困った顔のシルクが彼に苦言を呈した。
「キリ、好意を寄せてくれる女性を騙すのは悪趣味だよ」
「嘘をついたつもりはないんだけどね。意外と素直に言ったつもりだよ」
簡潔に答えて肩をすくめ、キリは改めて全員の顔を確認した。
「アラバスタに行く前に最後の腕試しだ。これだけの海賊が集まったんならそれなりの苦戦もあるかもしれない。みんな気をつけて」
「これで勝てなきゃ、七武海にも勝てねぇってか……」
「まぁ、エースが味方に居る時点でかなり優位に立ってるとは思う

けど」
「お待ちください！」
咄嗟に声を出したイガラムがキリの前に飛び込んでくる。
何やら焦った様子で冷や汗すら掻いていた。
「予想はしていましたがやはりビビ様は参加なさるのですねっ。百歩譲って納得しましょう。しかし私の名前がまだ呼ばれていないのですが!?」
「あ、そうだね。忘れてた」
「キリさんっ!? ひどいっ！」
「冗談だよ。ほら、まだカルーが残ってるから」
「カルーと私が？」
「護衛コンビでしょ。ビビの傍で守ってあげるにはちょうどいいと思うんだ」
「な、なるほど。確かに」
ずいっと顔を寄せてきたイガラムに笑いかけ、キリは楽しげに言う。
「ペアを組んだ人しか守れない訳じゃないと思うよ。競技中、近くで見守ってあげて」
「そういうことなら、不肖イガラム、全力でビビ様の護衛を果たす所存です！ 超カルガモ部隊隊長カルーと共に！」
「クエ～っ！」
「あ、ありがとう二人とも」
気合いを見せるイガラムとカルーにビビは苦笑しながら礼を言った。
その一方でウソップはそっとキリへ歩み寄る。
彼に目を向けたキリの方から呟いた。
「ちょっと本気で忘れかけてたよ」
「ああ、そんな感じだと思った」
「色々忙しくて大変だね。しばらく考え事はしたくない気分だよ」
「気持ちはわかる。でも辛抱してくれ。お前がうちの頭脳なんだぞ」

ウソップが肩にぽんと手を置くため、キリは苦笑して溜息をついた。

大会が始まった後も一筋縄に行くとは思えない。

もう慣れたとはいえ、今回も大変な出来事が待っていそうだ。

大会前夜

島かと思うほど巨大な豪華客船、ゴージャス・ハッタリー号。
大会の参加資格を得た海賊はすでに乗り込み、日が落ちた直後、すでに移動を始めていた。
予選はブルースクエアとは別の島で行われるらしい。開始時刻は日の出と共に。それまでの間は英気を養っておけと、船内では異常な盛り上がりで宴が行われていた。
飲み食いは無料。
雇われた一流のコックが広い厨房で所狭しと動き回り、次々料理が表へ出される。
さらに広い食堂にはありとあらゆる海賊団が集まって会食していた。
荒々しい様相で辺りは汚れ、市民が見ていれば眉を顰める光景だろう。しかし彼らにとっては当然であり、注意する者は一人たりとも存在しない。
赤い絨毯に料理がこぼれ、ぶちまけられた酒が沁みを作る。
それが海賊の日常だと考えられていたようだ。
中には麦わらの一味も紛れていた。
比較的入り口に近い位置のテーブルを陣取り、騒々しい様子で食事を続けている。
その様は大の大人に混ざったところで埋もれない個性を発揮していた。
無暗に料理を粗末にしようとは思わないが、荒々しい様子で食事を続けるため、テーブルの上に敷かれた白い布はすっかり汚れ、ガチャガチャと食器の音が絶え間ない。
特に騒がしいのがルフィである。
彼の伸びる手はいつもの如く、周囲から料理を奪い取り、仲間たちを慌てさせていた。
「んんがっ！」
「おーいルフィ～！　てめぇまたおれの皿から取りやがったなぁ

！」
「は、早く食わねぇと無くなるっ」
「トニー君、慌てなくても量はあるから……」
猛威を振るうと表現してもいいルフィの動きにウソップが席を立って叫び、チョッパーが慌てて料理を口に詰め込む。ビビはそんな彼らに苦笑していた。
いつも通りと言えばそれまで。今日は周囲に似た状況がある。
喧嘩こそないものの海賊たちが暴れていて、気が気でないのも仕方ない。
イガラムは周囲に警戒心を露わにする視線を飛ばし、隣でゾロが呆れながら呟いた。
「あんまり睨むと逆効果だぞ。余計なことはしねぇ方が得策だ」
「しかしビビ様に何かあってはいけません。ここは海賊の巣窟なんですよ」
「だから余計なことすんなって言ってんだろ。お前の視線に気付きゃ、あいつら暴れるきっかけを得て途端に食って掛かってくるぞ。自分で王女の首絞める気か？」
酒瓶をそのまま傾ける彼の発言で、ううむと唸る。
確かに自らのミスでビビを危険に晒す訳にはいかない。護衛隊長として論外だ。イガラムは即座に周囲へ向けていた猜疑的な目を落ち着かせ、食卓の輪の中に戻る。
相変わらず騒がしいがビビは笑っている。
今はそれでいい。笑顔になるほどの余裕があるのは何よりだ。
一方で周囲を見回す視線は他にもあった。
シルクがやけに目を輝かせて他のテーブルに居る海賊を確認しているのである。
彼女は幼少期から海賊に憧れており、情報源は大抵新聞か船乗りの噂だったとはいえ、数々の海賊団に関する情報を持っている。その趣味は現在に至るまで続いていた。
どうやら、海賊フリークが見逃せない海賊団も多かったようだ。
隣に座るナミからすれば何が面白いのかわからない。

しかしシルクはきょろきょろと忙しなく、その笑顔は非常に嬉しそうだった。
「わぁ、すごい……億越えの賞金首があっちにもこっちにも。〝大連撃ユージーン〟に〝猛進のギュスターヴ〟まで居るよ。同じ部屋に居るなんて信じられないね」
「あんたは楽しそうねぇ」
「だって、こんなにすごい海賊が集まってるから」
「デッドエンドにも参加したじゃない。今更じゃないの？」
「そうだけど、あの時とは面子が違うもん」
「いまいちわかんない。あんたの趣味」
彼女らも十分この宴を楽しんでいるらしい。
顕著なのはシルクの方だがナミも酒が入ったグラスを傾け、上機嫌にしている。
さらに食事の最中で、同じく周囲を見回していたサンジは鼻の下を伸ばしており、中には女海賊も混じっていることを見抜いていて、目の色を変えていた。
ともすればフォークやナイフの動きが疎かになる。
味を楽しむ傍らで目の保養まで行われていたのだろう。いまいち集中できていない様子だ。
「いやぁ～祭りってのはいいなぁ。あんな美人海賊とお近づきになりたい……」
「やめとけ、相手は海賊だぞ？　どうせ金取られて終わりがオチだ」
「あぁ、あんな美女になら金をだまし取られたい……」
「だめだこりゃ。お前みたいな奴が真っ先に死んでいくんだぞ」
口をもぐもぐ動かしつつ、幾分落ち着いたウソップが言う。
彼に合わせるようにゾロも冷めた目で呟いた。
「アホか。一回女に刺されてみりゃいい」
「んだとマリモ。てめぇにゃ言ってねぇんだよ」
「へぇ、そりゃよかった。てめぇのアホ話に付き合わされた方が地獄だからな」
「レディのエスコートすら知らねぇ単細胞にゃ難しかったか？　て

めぇの方がアホじゃねぇか」
「斬られてぇのか」
「蹴り飛ばされてぇのか」
「二人とも、喧嘩しちゃだめ」
またいがみ合っている二人にシルクがぴしゃりと言い、自然と二人は口を閉ざした。
いつの間にかすっかり慣れた様相らしい。
二人はまた静かに食事を再開し、シルクは生き生きと周囲を眺め始めた。
ひとしきり食べた後、エースは彼らの様子を見て大笑いする。
非常に上機嫌そうであり、自身が周囲から注目されても全く関心を向けない。現在、この場において彼は最も懸賞金が高い有名人であるのだが、その自覚は無さそうだ。
隣に居るルフィが頬を膨らませているのを見て、彼はにこやかに言う。
「お前の仲間は面白い奴が多いなぁ。上手くやってるようで安心したぜ」
「ん～、んみぃ～っ……んぱっ。しっしっし、そうだろ。エースの仲間にだって負けねぇよ」
「そりゃどうかな」
エースは左手にジョッキを持ち、椅子の背もたれに腕を置きながら笑いかける。
「言っとくが親父は相当強ぇぞ。おれでも全く歯が立たねぇほどだ」
「エースが？」
「ああ。完敗だった。あの人はすげぇよ」
「エースが勝てねぇってことはめちゃくちゃ強ぇんだな。そんな海賊が居るのか……」
「昔はジジイともやり合ってたらしいぞ」
口の中の物を呑み込み、新たな肉を齧りつつ、ルフィは感心した様子だった。

そして彼らの祖父、ガープの話題が出た際、にこりと笑みを深める。
「そういやおれ、じいちゃんに会ったんだ」
「ん？　いつの話だ？」
「海賊になってからだよ。海賊やめろって追ってきてさぁ。仲間とはぐれるし、キリが大怪我したりして大変だったんだ。やっぱりじいちゃんに殴られると痛えしよぉ」
「ははっ、そりゃ仕方ねぇ。あれには理由がある」
「理由？」
「教えてやろうか？」
エースは楽しげだ。
彼を信頼しているからか、ルフィに疑う様子はない。素直に頷いて教えを乞うた。
その話に興味を持ち、キリもそちらに目を向ける。
「人間には眠ったままの力がある。それを呼び起こすことができりゃ、悪魔の実の能力者に打撃でダメージを与えることができるんだ」
「力？　なんだそれ」
「〝覇気〟って呼ばれてる。当然ジジイもこの力を操れるのさ」
握られた拳を見つめてエースが言う。
彼は本来常人には触れられるはずのない〝自然系（ロギア）〟の能力者。その力があればどの種類の能力者であろうと触れることが可能になり、ダメージを与えられるという。
ルフィはわからないながらも肉を食べながら真剣に耳を傾けていた。
「こいつを操るにはそれなりに修行と慣れが必要だ。だからとりあえずそういう力があるってことだけでも理解しとけ。特にお前は覚えるのが苦手だろ」
「うん、そうだな。不思議力があるってことだな」
「やれやれ……」
呆れた顔で苦笑しながらも、エースに気分を害した様子はなかった。

彼も弟には甘いらしいのだと理解できる。
傍で見ていたキリはそう理解し、グラスを傾けながら今の話を頭の中で反芻する。
覇気、という力があるらしい。エースの口ぶりからして特別だが使える人間は多いのだろう。
いずれは自分たちも習得する必要があるのかもしれないと思った。
しかし今は宴の最中。
つまらないことを考えている暇がないと考え、すぐに思考を切り替える。
彼の隣には相変わらず腕を絡めて頭を預け、寄り添っているベビー5が居た。やはりキリのために参加したようだ。気付けば当然だと言わんばかりに輪の中に存在する。
もう抵抗するのも面倒だと、キリは彼女が居ることに慣れていた。
しばらくして、キリがグラスを空にした頃、エースが彼を見て話しかけた。
「なぁキリ、少し外出れるか？」
「別にいいけど、何か用事？」
「せっかくパートナーになるんだ。少し話したいと思ってな。ここは騒がしいだろ」
「いいよ。甲板に出ようか」
キリが席を立つと当然ベビー5も一緒に動いて、同じくエースも立ち上がる。
まだまだ騒がしいが彼らの動きに皆が不思議そうな顔をした。
仲間たちに注目されるたところでキリがひらひら手を振り、笑顔でその場を立ち去ろうとする。
「なんだお前ら、どっか行くのか？」
「ちょっとね。みんなもほどほどにしときなよ。明日の朝には大会が始まるらしいから」
「お前に言ってんだぞルフィ」
「んーばっ!!」
いつの間にかまたルフィが両頬を膨らませていて、まだまだ衰える

様子を見せない。苦笑した後でキリとエースは歩き出して広大な食堂を後にする。
廊下へ出れば船内の異様な静けさを感じた。
大会が始まる前の乱闘は厳禁。即刻捕縛されて海軍へ突き出されると聞いている。
それを守ってか、何かしらの考えがあるのか、少なくとも今は誰も暴れ出そうとはしていない。
食堂で大騒ぎしている海賊はともかく、それ以外の参加者が気になる。
海賊ながら目先の欲求に囚われず、静かに部屋の中で待機している者ほど危険だと思う。理性と頭脳を持つ海賊が一番厄介だと、キリは判断しているためだ。
不思議に思うほどの静けさを感じながら、三人は甲板へやってきた。
空を見上げれば雲もなく、晴れた空に月が浮かび、辺りは明るく照らされている。
船の巨大さを改めて認識できる明るさだった。
帆船とは異なるため帆は存在しない。どうやらもっと機械的な構造のようだ。
興味もないから調べようとは思っていないものの、大した船だと思い、この大会のためだけに用意したと考えるならそのコネクションに興味を持った。
欄干の傍、海が見える位置で三人が足を止める。周囲に人気はない。
そろそろ話し始めようとしていた。
しかしベビー5が居る状況が良いとは思えず、一旦離れるべきだろうとは思う。
キリの肩に頭を預けて幸せそうにしているところを邪魔するのは悪い気もするが、そうしている最中ですら彼女が敵か味方かはっきりしていない状態なのだ。
苦笑したキリが優しい声でベビー5に語り掛けた。

「ちょっと二人にしてもらっていいかな」
「え？　私、もう必要ないの……？」
「そういうことじゃないんだけど。あー……そうだ」
困った顔になったキリはポケットから鍵を取り出す。
部屋番号が書かれたプレートが付いており、一人に一部屋ずつ用意されていて、それはキリに与えられた部屋の鍵だ。
ベビー5に手渡すと、彼女は顔を真っ赤にしながら手を震わせた。
「先に部屋行ってて。好きにしてていいから」
「そ、それって……」
「後ですぐ行くよ」
深くは言わずに微笑めば、ベビー5は動揺しつつも頷いた。嫌がっている訳ではなさそうだ。
キリが軽く背を押してやる。
歩き出したベビー5は潤んだ瞳でわずかに振り返り、キリは笑顔で手を振った。すると彼女も振り返しながらも歩いて船内へ向かう。
ベビー5は去った。
改めて二人だけになり、キリが海を眺め始めたところでエースが笑う。
「手慣れてんなぁ」
「昔取った杵柄でね。潜入は結構得意な方だよ」
「例の、クロコダイルのところに居たって話か？」
「うん」
キリは多くを語らず素直に頷いた。
ルフィと話している時に色々と聞いている。
エースは苦笑してわずかだが嘆息した。
「お前も色々あるみたいだな。ルフィから色々聞いたよ」
「まぁね。でもおかげでルフィに会えたんだ」
「ああ……あいつはずいぶんお前を信頼してるようだ。礼を言いたかった」
キリが笑みを消してエースを見れば、彼は少年のように笑った。
「あいつを支えてくれてありがとな。一人じゃ航海できねぇだろう

と心配してたんだが、ルフィは良い仲間を見つけたよ。あの一味はきっと伸びる」
「白ひげの隊長に言われると有難いね」
「なぁに、おれも仲間に迷惑かけてる方だからな。隊長なんて柄じゃねぇが」
自嘲気味にそう言ってエースは遠くの海を見た。
何か事情があるのだろう。確かに彼もルフィに似ている部分が多い。ルフィそのままとは思わないが仲間に迷惑をかけているという話もすんなり受け入れられた。
そんな顔をするということは何かしらのトラブルでもあったのかもしれない。
キリがそれを尋ねる前にエースが呟く。
「あいつの人生はあいつのもんだ。兄貴だからって口出しする気はない。だが、お前も知ってる通りルフィは目が離せねぇ奴だからな。これからもよろしく頼むよ」
やはり彼は兄なのだ。
弟を心配する気持ちに加え、その笑顔はひどくルフィに似ている。
出会ったばかりだが仲良くできそうだと自然に思う。ルフィを心配する想いはキリと同じで、それでいて彼自身ルフィに似ているのだから、不思議な感覚だ。
そう言われて断るための理由など持っていない。むしろ望むところである。キリは柔らかく微笑んで頷き、彼の頼みを快く引き受ける。
彼にしては珍しく、本当に警戒心を失くした表情だった。
「うん、わかってるよ。ルフィと一緒に航海を始めた頃から決めてるんだ」
「そうか。お前になら任せられるよ」
「精一杯やるさ。もう仲間を死なせるのは嫌だしね」
笑みを湛えたまま、少し視線を落として、しんみりした空気になってしまう。
見計らったかのように明るい声が聞こえた。

「アッパッパ〜！　こりゃ面白ぇ。まさか火拳のエースを見れるとは」
二人が振り返るとだだっ広い甲板に一人だけ男が立っていた。
奇妙な外見の人間である。
本来の人間とは異なり、関節が一つ多く、その分腕が長い。〝手長族〟の特徴だ。赤を基調とした服に身を包み、耳にはヘッドホン、眼鏡をかけて、長い辮髪が特徴的。
その顔はすでに懸賞金もかけられた有名人のものだった。
「〝海鳴り〟……スクラッチメン・アプーだね」
「おっと、オラッチのこと知ってくれてんのか。光栄だねぇ〝紙使い〟」
思わず呟いたキリと目を合わせ、長い腕がゆらりと動かされる。
〝海鳴り〟の異名を持つ海賊、スクラッチメン・アプー。
最近名を上げ始めたルーキーの一人だが、その名はすでに広まっている。何でも愉快犯のような男らしいと噂だ。彼について広まる噂は実力云々よりも誰に手を出したかという話。
正面切って戦うこともあれば奇襲を行うこともあり、特に彼を語る上で無視できないのは、自ら誰かに攻撃を行って、挑発しながら敢えて逃げ出してしまうという悪癖だ。
自身と相手の実力に関係なく、戦う気もないのに攻撃をしては逃げ出してしまうケースもある。
彼は強いという噂があるが、それ以上に人を怒らせる天才だとも語られているようだ。
以前その話を聞いたキリは奇襲に備え、表情は緩いままで警戒を始める。
アプーが二人の方へ歩み寄ってきた。
キリは一挙一動をつぶさに観察するものの、その隣でエースは肩の力を抜いたままである。
「あっちもこっちも有名人だがこりゃ特に目立つ。その背中のマーク、この船でもすっかり注目の的だぜ。火拳のエースが参加してるって全員が喋ってる」

「何か用？」
「そう警戒するな、ちょっと世間話に来ただけじゃねぇか」
「あまり良い噂は聞かないよ」
「アッパッパ！　そりゃしょうがねぇな。だがお前らをどうこうしようってつもりはねぇ。試合開始は明日からだしなぁ」
上機嫌に笑うアプーは信用できる人物ではない。
態度に表したつもりもなかったが、キリの肩にエースが手を置き、笑いかけるだけで落ち着くように伝える。彼は全く動じておらず彼を迎え入れるつもりらしい。
アプーは二人の前に立ち、腕組みをしながら楽しげに話しかけ始めた。
「そこまで警戒する必要はねぇぜ。オラッチはただの傍観希望者だ」
「傍観？」
「こんな大イベントなら色んな海賊が集まるだろうってよ、それを見に来ただけだ。別に優勝する気もねぇからどっかで適当に負けるさ」
「なるほど。愉快犯、ね」
「変な奴だな。優勝する気もねぇのに来たのか？」
「そういうお前らは優勝する気か？　だとすりゃ求めるもんが違うのよ。アッパッパ！」
やはり何かしでかすつもりなのではないか。キリの警戒心は増す一方だった。
そんな彼の様子に気付いてか知らずか、アプーは二人に顔を寄せる。
「だがな、まさかこの大会がただの競技大会だとも思ってねぇんだろ？　こんだけアホみたいに海賊が集まってんのに海軍も政府も動かねぇとはどういう訳だ」
「そういやそうだな。上手く情報を隠した、なんてはずはねぇか」
「お前はどうなんだよ紙使い。もうとっくに気付いてるんじゃねぇか？」

そう言ってアプーはキリを見つめる。わずかな笑みが、言外にある何かを感じさせた。
傍観者だと語る彼が何のためにこの大会に参加したのかはわからない。だが少なくともキリを警戒している様子なのはこの瞬間伝わった。
わざわざ声をかけてきたのは火拳のエースを見るためではない可能性がある。
まだルーキーの域を出ない、しかし新聞社を利用して話題を攫った、彼に興味を持っていた。
その目を見ればなんとなく目的はわかった気がする。
黙っているのも一つの手だが、これくらいならば問題ないだろうという考えもあった。
キリはアプーの目を見つめ返して頬を緩める。
「大会の主催者、もしくはブルーベリータイムズ社が政府と通じてるかもしれない。そういうことでしょ？　何が目的かはともかく、だから海軍が現れる気配がない」
「オラッチは怪しい奴らに目星をつけたぜ。ひょっとしたらサイファーポールも来てるかもな」
「サイファーポールが？」
サイファーポールは世界政府の諜報機関である。
海軍とは別に独立しており、政府の命令に従ってあらゆる情報が集められていると噂だ。世界各地に八つの拠点を置き、ＣＰ１からＣＰ８まで存在している。
どこのエージェントが来たにしても厄介なのは確実に思えた。
「確かに近隣諸国の王族まで来てるんだ。動いてるなら海軍よりサイファーポールか」
「周りはよく見とくもんだぜ。特にこういう怪しい大会はな」
アプーの目はあくまでもキリを中心に捉え、エースにはさほど関心が無さそうに見える。
この男は危険だ。
白ひげ海賊団に興味を示さずに、まだ名を上げるのはこれからとい

う一味の、参謀である副船長に対して並々ならぬ興味の見せ方である。しかも隠そうともしていない。
こういう手合いが一番厄介だろう。
キリは彼に対する意見を変えて、今まで以上にアプーを危険視していた。
おそらく彼は二人が知らない情報を手に入れた上で近付いて来たのだ。ひょっとしたらそれを開示して協力などを申し出るかとも思ったが、その素振りもない。ということはただの冷やかしか、自慢するかのようにただからかいに来ただけとも考えられる。
アプーは相変わらずにやりと笑っていた。
「気をつけといた方がいいぜ。大捕物にならなきゃいいけどな」
その発言を最後にアプーはパッと振り返って歩き去ろうとした。
咄嗟にキリが声をかけ止める。
「どうしてそんな話をボクらに？　まさか助けようってつもりでもないよね」
「んん？　ひょっとしてオラッチを疑ってるか？」
「信用してもらえるとも思ってないでしょ」
「アッパッパ～！　やっぱり気に入ったぜお前。心配するな、寝首は掻かねぇ」
去り際、アプーはひどく楽しそうに言って背を向けた。
「オラッチはただの傍観者。面白ぇのが見れたらサクッと負けて逃げるだけよ。だがお前らには期待してるぜ、チェケラッ！」
軽い足取りで半ば跳ぶように去っていく。
サクッと負けると言っていた。しかしそれは今回の大会に関してのみだろう。
次に会った時はそうなるはずもないと考え、キリは睨むように彼の背を見送った。
やれやれとエースが嘆息する。
自身の帽子を片手で押さえ、ふと空を見上げて小さく呟いた。
「海賊には色んな奴が居るもんだ。まぁ、退屈せずには済みそうじゃねぇか」

「そうだね」
簡潔に同意してキリは考える。
いずれは彼が敵になる時が来るかもしれない。
その想いだけは強くなり、今や彼も目を離せない人物となった。互いにまだ大海賊とは呼べないルーキー。しかしあの様子では一年後がどうなっているかは読めないのである。
キリの目は鋭さを増し、スクラッチメン・アプーを敵だと見定めていた。

予選一回戦　トレジャーハント

誰も予想していなかったことに、朝の一時はけたたましいサイレンの音から始まった。

起床を促す目覚まし代わりだったのだろう。

船内に居た海賊たちは耳を押さえながら目覚めて、気分が悪い状態で起き上がり、何があったのだと顔をしかめる者ばかり。

サイレンはしばらく続いた。そしてそれが終わった時、スピーカーから声が聞こえ出す。

《おはよう海賊諸君！　ついに待ちに待ったトレジャーバトルが始まるぞ》

苛立ちを隠せなかった粗暴な男たちも、その一言によって即座に顔色が変わる。

驚きを伴っているが待ちわびていた瞬間でもある。ついに戦いが許される時が来た。昨夜から体がうずうずしていたものをやっと発散できるのだろう。

必然的にハッタリーのアナウンスに集中し始めていた。

《外を見てくれ！　トレジャーバトル予選の島がすぐそこにあるぞ！》

その一言で数多の海賊たちが動き出し、部屋の窓から覗き込む者、身を乗り出す者、部屋を飛び出して甲板へ向かう者と反応は様々だった。

まだ日が出たばかりの時間帯。

太陽の光で海が輝くような光景の中、巨大な船〝ゴージャス・ハッタリー号〟のすぐ傍には、確かに広大な島がある。それも一つではなく二つだ。細く長く伸びた砂浜によって繋がれるように二つの島が隣接して大海原に立っている。

船はその内の一つに向かっている。あれが予選の舞台。

否が応にも海賊たちの士気は高まっていった。

早くも船上は騒がしくなりつつあり、興奮している者も少なくはない。

《予選第一回戦は題して、トレジャーハント！　今からルールを説明するぜ！》
甲板に居る者たちは伸びる影に気付いて視線を上げた。
実況兼解説、おまけに主催者で新聞記者であるハッタリーは船から見上げなければならない位置に居た。大きな鳥の背に乗り、その鳥は首からスピーカーを提げて、ハッタリーがマイクを握る。
移動可能な実況席、ということらしい。
船内及び甲板に居る参加者は全員がその声を聞く。
いよいよ大会が始まる。そのルール説明が行われるのだ。
島はすでに目の前にまで迫っており、体力のある者ならば泳いで辿り着くこともできるだろう。そうする利点が考え付かないために皆は大人しく待っているらしい。
この時、参加者の一部は早くも理解した様子だ。
すでにゲームは始まっていると言っていい。
予選の内容が如何なるものであれ、あの島を舞台にするのは明言されている。尚且つ、参加者の大半が寝ていただろう時間に無理やり叩き起こした。朝の準備を終えている人間が居るとも考えにくいのである。この事実に気付いただけでも内容を予想することができる。
つまりは勝ち抜け。早い者順で残っていくルールに違いない。
朝の準備を悠長に行っていては他の者が先に条件を満たし、勝ち残りとなってしまうだろう。
気付いた者は敢えて口にせず、黙って説明を聞こうとしていた。
《ルールは簡単！　島に隠されている宝箱を見つけ、予選終了まで守り切れば勝ちだ！　予選終了は全ての宝箱が見つかるまでとする！　もちろん見つからなければ予選はずっと終わらないから気をつけてくれ！　他の選手から宝箱を奪うのもありだ！》
ルールを耳にして、あとはいつ誰が仕掛けるか。
特に甲板に出ている者がそう考え始めていた。
《一回戦で勝ち残れるのは全７１４組の内、３００組!!》
その一言は闘争心を煽るのにこれ以上ないほど効果的だった。
参加者の顔つきが変化する。

一回戦で４００組以上が失格になる。これを聞いて冷静で居られるのはほんの一部だけだ。
《はっきり言っておこう、ここで生き残れるか否かが正念場だと！　７００組１４００人の海賊たちがたった３００個の宝箱を奪い合う！　早くも乱戦が期待されるぞ！　お互い命を奪うことなく、しかし死ぬ一歩手前くらいならペナルティは課さないので頑張ってくれ！》
ハッタリーの口調から、そろそろ戦いが始まるのだと予感する。
《早い者勝ちだ！　幸運を祈る！　それではぁ～……》
ぐっと体に力を込める者が居た。
船内ではすでにドタバタと荒々しい足音が鳴り響いており、甲板を目指すか、或いは小舟を手に入れようとあちこち奔走しているのだろう。
そんな戦いが始まる気配を感じながら、ハッタリーは大声で叫んだ。
《トレジャーハント、スタートォ!!》
船から花火が上げられる。
空で破裂したそれは轟音を生み出し、ついにトレジャーバトル大会の開始を告げた。

＊

「宝箱はどこだぁ～っ！」
島へ入ったルフィとビビは森の中を走っていた。
ハッタリーの説明によると、通称〝古代島〟と呼ばれる無人島らしい。広大であるばかりでなく多種多様な環境がその場にある。隠された宝箱を見つけるのは容易ではないはずだった。
どこに隠されているのか、渡されたヒントはゼロ。頼ることは許されない。自身の経験と知識を頼りに発見しなければならず、それが海賊としての能力を示す方法になる。
隠された宝を見つけるのは海賊の基本。

これができないのなら本戦に残るほどの価値はない。それが予選の目的のようだ。
ルフィとビビは、目的を決める訳でもなく走っていた。
厳密に言えば海賊ではない少女と考えるのが苦手な船長。
あまりにも風変りなペアである。
しかしキリはこれがベストだと判断していた。ルフィを任せるならビビが良い。それはビビを守るためでもある一方、方向音痴な彼を導けるからだと考えている。確かに海賊経験が無い事は不安要素にもなり得るが彼女の真面目さならばなんとか上手くやるだろう。
とはいえ、キリの考えが何であっても、ビビはいまだ緊張していた。
考えもせずにひた走るルフィの背を追いながら表情が戸惑いを表しているのだ。
「ちょっと待ってルフィさんっ。どこに宝箱が残されてるかわかってるの？」
「ん？　いや、知らねぇ」
「だったら闇雲に走らない方がいいんじゃない？　この辺りにないか慎重に探した方がいいわ」
ルフィが立ち止まったことでようやくビビも一息つけた。
エージェントとしての活動で鍛えられたとはいえ限度がある。
気遣ってくれたおかげで全速力ではなかったが、それでもルフィの足は速い。きっと全力を出していれば追いつけなかっただろう。ビビは荒れかけた呼吸を整えながらそう思った。
現時点でわかったことがある。戦闘においてはルフィに任せておけば心配ない。
その代わり、それ以外の場面では自分がしっかりする必要がありそうだ。
「んなこと言ってもよ、周り見てみろよ。あいつらだって宝探してるんだぞ。急がねぇとおれたちの分が無くなっちまうじゃねぇか」
「それはそうだけど、このままでもきっと見つからないわ。何か手を考えないと。多分この予選はお宝を見つける力を見るためのもの。何か法則性があるはず……」

「でもおれそんなの知らねぇぞ」
「私もそこまでの知識は……どうすればいいのかしら」
周囲には他の参加者たちの姿も確認できる。
焦りたくなるのは必然、おそらく競争を煽る効果も考慮されたルールに違いない。集まり過ぎた参加者に比べて宝箱はたったの３００個。見つけられなかっただけで半分以上が敗退になる。
誰よりも先に見つけたいと思うのは極々自然なこと。
それだけに冷静にならなければ、無駄に体力を消耗するだけだと思った。
行動力のあり過ぎるルフィが深く考えようとしないため、ビビは自分が冷静になって考えなければいけないと思い、必死に頭を悩ませるのだが打開策は思い付かない。
顎に手を当て、視線を落として真剣な表情のまま、苦しそうにすら見えてしまう。
そこへ頭上から声がかけられた。
バサリと翼を広げる音が聞こえて、見上げればすでに見慣れた紙の鳥が降ってくる。
「困りごとかな？　船長」
「あっ、キリィ！」
「キリさん！　どうしてここへ？」
紙の鳥がバラケて二人が落下してくる。
キリとエースは怯えもせずに楽々と着地して、二人に対して笑みを見せた。
周囲のあちこちで騒がしい声が聞こえているものの、彼らだけが足を止めて冷静に話し合う。
「なんとなくだよ。はぐれて喚いてるイガラムたちも見たし」
「あぁ……イガラムたちとは、船を降りる前から別々に動いちゃったから」
「見てたから知ってる。ルフィが飛んだんでしょ？」
「この辺に居る奴らも先行して出てきた連中だな。それなりの連中ってことだろ」

「問題はどうやって宝箱を見つけるか」
キリが森の中を見回しつつ、状況を考えながら話し出す。
「ヒントも何も寄こされてない。なら探すのは至難の業だね。適当に走りたがるのもわかる」
「それじゃ見つけられないんじゃ……」
「ただし今回はブルーベリータイムズが隠してるんだ。競技のためにね。無暗に探すよりかはその辺を考慮した方が良いと思う」
「具体的には？」
エースに問われた時、キリは辺りに視線を走らせていて、視界の端に映った何かに注目した。
それは視界の悪い森の中を高速で走っている。
「どっかその辺に適当に置かれてるか、海賊のセオリーに乗っ取って隠されてるか、もしくは島の動物が持ち運んでるか――」
「島の、動物？」
「ちょうど見つけちゃった」
音と気配に気付いて三人もそちらを見た。
草むらを抜けて岩を蹴り、高く跳んだりしながらも走るサギ。
ビビがあっと驚いて声を発した。
見覚えのある種、ワルサギ。それはアラバスタに生息する鳥類であった。
「ワルサギ!?　どうしてこんなところにっ」
「さしずめ特別ゲストってとこかな。案外ここから近いのかもね、アラバスタは」
「あ～っ！　宝箱持ってるぞ！」
悪そうな顔をしているワルサギは翼で宝箱を抱えており、ルフィたちと目が合った途端ににやりと笑って、これ見よがしに背を向けて走り去っていく。
なんとなく挑発された気分だった。
ようやく目的の物を発見し、迷わずルフィが走り出す。
「待てこんにゃろ～！　宝を渡せぇ～！」
「あっ、ちょっと待ってルフィさん！　一人で行っちゃだめよ！」

駆け出したルフィを一人にさせてはならないとビビも後を追う。
ワルサギを追って離れる二人に、キリとエースは歩いて追いながら話していた。
「おれも大概だが、お前も甘いな」
「ん？」
「ルフィにだよ。いの一番にあいつを探すくらいには気にしてるだろ」
言われて、少し呆けた顔になってしまった。
くすりと笑みがこぼれる。
キリはエースの視線を受けた後で目を逸らし、笑みを湛えたままで返答した。
「助けるって前に約束してるんだ。特にこういう細々したことはね」
「そうか。お前らを見てると安心できるよ」
二人を追って歩く道中、突然大きな声が聞こえてくる。
「あったぞ！　宝だ！」
何気なくキリとエースがそちらを見れば百メートル以上先、森の中で孤立したような大岩の上、宝箱を抱えて喜ぶ男が二人居る。ずいぶん分かり易い発言だった。
まさか海賊が宝箱を見つけて何もしないはずがない。
それは彼らとて同じだろう。
キリが笑みを深め、懐へ手を伸ばそうとした時、エースがそれを止める。
「大会ルールじゃ横取りもＯＫ」
「おれがやろう。準備運動もしとかねぇとな」
そう言ってエースが軽やかに動いた。
跳ねるように数歩歩いて、その全身が、一瞬にして炎に変化する。
炎が宙を駆けていた。規模は小さく森を傷つけないよう配慮しながら、その軌跡は瞬く間にキリから遠ざかっていき、標的に気付かせる暇も与えず背後を取る。
男たちの背後で炎が膨れ上がり、気付いた時にはエースの体が現れ

ていた。
所々をメラメラと燃やしつつ、火に包まれたエースは笑う。
彼らが気付いて振り返った時にはすでに拳が振りかぶられた後だった。
「悪いな。それ、もらってもいいか？」
「ひっ、火拳の――!?」
エースが両腕を振り下ろした。すると彼の腕から凄まじい勢いで火が走り、二人の体を一瞬で包み込み、痛ましい悲鳴が森に木霊する。
それでも手加減した一撃だった。彼らが死んでいないのがその証明。
男たちは大岩から落ち、地面を転がって必死に火を消すと、悲鳴を発して逃げていく。
その間にエースが宝箱を回収した。
「おっと危ねぇ。こいつは燃やす訳にはいかねぇからな」
片足で上手く跳ね上げて右手で持ち上げる。
高く掲げ、入手した宝箱をキリに見せながら声を大きくした。
「おーいキリ、手に入れたぞ」
「流石。楽ができて嬉しい限りだよ」
この時点で二人は早くも予選勝ち抜けの条件を満たした。
あとは予選終了の時が来るまで宝箱を守ればいい。それだけで次の段階へ進める。そして彼らから宝箱を奪うのは不可能だと相手に思わせる要因が、宝箱を持つ火拳のエースなのだ。
勝ちはすでに決まったも同然だった。
一方のルフィたちはワルサギを追っていた。
ワルサギも鳥類。本来は空を飛べるのだがおちょくるためなのか敢えて走り続けている。
ルフィはすっかり怒っている表情であり、冷静さは無い様子だ。
後ろから追いかけるビビは苦い顔で考えている様子。
ただ追うだけで捕まえられるほどワルサギは軟弱ではない。何か策が必要だろう。
「待てェ～！　鳥イ～！」

「ルフィさん、ただ我武者羅に追いかけてもだめかもしれないわ！
何か方法を考えないと！」
「よし、じゃあおれが腕伸ばして――」
「その前に、試したいことがあるの」
ビビは懐へ手を伸ばし、自身の武器を取り出した。
小指にリングを嵌め、そこから糸が伸び、先端には孔雀の羽を思わせる形状の小さな刃物。
まるでアクセサリーにも見えるがそれこそ彼女の武器であった。
手首を回して糸を回す。遠心力によってそれはすぐにさほど労力も使わず回転を始める。先端にある刃物が回転を手助けするかのよう。この状態で触れれば敵を切り裂く。
だがビビは航海の間、常々考えていた。
自分はもっと強くならなければならない。そのためにこの使い慣れた武器を改造することに決めたのである。そして今は力を試すのにちょうどよいタイミングだ。
「孔雀（クジャッキー）スラッシャー……」
ワルサギは余裕綽々で背を見せて走っている。
彼の体を狙い、ビビは回転する武器を素早く前へ振り抜いた。
「ショット！」
回転を止めて前へ伸びるよう、刃物が前方へ向けられた時、糸から離れて刃物だけが飛んだ。
本来は近接戦闘用の武器。それを自分の意志で刃物を飛ばせるように改造した結果、遠くに居る敵を狙えるようになった。
ワルサギは気付く暇もなく足を撃ち抜かれ、悲鳴を上げながら転ぶ。
アクセサリーにも見紛う脆弱な武器だが、だからこそ敵の油断を誘う。
狙った訳ではない。しかしビビは戦闘において役立つ武器を手にしていたのだ。
咄嗟にルフィが笑みを浮かべて腕を伸ばす。ワルサギは転んでいた。捕まえるならば今しかないと思い、思い切り伸ばして落とした宝

箱を奪おうとした。
しかしまるで狙い澄ましたかのように、そこへ乱入者が現れる。
「宝はもらったァ～ッ！」
「ああっ!?　誰だァ！　おれとビビの宝だぞ！」
ルフィの手が触れる寸前、突然飛んできた両手が宝箱を拾い上げてしまったのである。
木々が邪魔して視界が悪い。ただ宝箱が奪われたことだけはわかった。
慌てて二人はそちらの方向へ走る。
逃げ出していくワルサギを無視して、二人は宝箱を持った人物を目にすることができた。それはルフィにとってあまりにも見覚えのある、真っ赤な鼻を持った男だ。
「ギャ～ッハッハ！　ザマァねぇな麦わらァ！　こいつはもうおれのもんだ！」
「なんだバギーか」
「なんだとはなんじゃあハデアホがァ!?　他にリアクションはねぇのか！」
立っていたのは道化のバギーである。
何度かルフィと出会い、命を狙われていたはずの相手。その割にはルフィの反応はまたかと言わんばかりの呆れた顔で、怒りや憎しみは感じない代わりに驚きが無い様子に見える。
もはや慣れてしまった相手、ということか。
その表情が気に入らなかったらしくバギーは怒っている顔だった。
「やはりここに来たな。だが残念だったなぁ、優勝するのはこのバギー様よ。ナバロン脱獄大作戦からこっち、ますます戦力を増やしているこのおれ様に、もう恐れる物は何もない。たとえ相手が憎き貴様でもな、ギャ～ッハッハッハ！」
「お前なんでこんなとこに居んだ？」
「ハデにふざけた野郎だ！　てめぇを始末するついでに賞品を頂くために決まってんだろ！」
「そりゃ無理だろ。優勝するのはおれたちだから」

「黙れィ！　てめぇのその根拠不明の自信が腹立たしいんだ……！」
ガサガサと草を踏む音が聞こえ、バギーの隣へ、金棒のアルビダが並び立つ。
絶世の美女。妖艶に微笑み、特にルフィを熱っぽく見つめる。
肩に担いだ金棒は、本来ならば女が持つにはあまりにも無骨過ぎて似合うはずもないのに、彼女がそうしているとむしろ美しさを増すかの如く。
ビビはその二人に警戒心を持っていた。
特に気になるのはアルビダの存在。女でありながら海賊として堂々としており、己の美貌と実力に絶対の自信を感じ、まだ何もしていないその状態でも目を引く魅力に溢れている。
ルフィの反応は粗雑で全く相手にしていないかのような姿。だが彼ほど割り切れなかった。
彼らは強いと、ビビは判断していたようだ。
対するルフィはバギーが宝箱を持っている事実をしっかり確認しながらも、さほど危機感を感じていない。おそらく理由を聞けば「バギーだから」と返答が返ってくるだろう。
相手を甘く見ている訳でもなければ油断している訳でもない。
それ故に理由が「バギーだから」である。
仲間でもなければ味方でもなく、はっきり敵だと認識しているものの、かと言って不思議と以前ほどの嫌悪感はない。それだけ知ってしまったということか。
ビビから見ていて奇妙な関係だった。
互いに敵対心があるのにそれのみではない気がする。
どことなくやる気が無さげにも見えるルフィの表情にバギーが腹を立てる一方、アルビダの表情は優しく、ルフィもまた敵に向けるほどの感情を持たない。
こんな敵対関係は初めてだった。
「久しぶりだねルフィ。アタシを覚えてるかい？」
「ん？　ん～どっかで見た気がするんだけどなぁ……だれだっけ」

「やれやれ、相変わらず仕方のない奴だよ。前にも言っただろ？　金棒のアルビダさ」
「あぁ、思い出した。悪魔の実を食って細くなったんだった」
「ルフィさん、知り合いなの……？」
恐る恐るビビが尋ねるとルフィはにかっと振り返った。
「ああ。おれローグタウンでこいつらに殺されかけたんだ」
「ええっ!?　そ、そんな関係だったの？　それなのにこの雰囲気って……」
「あの時てめぇを始末してりゃ、数々の苦労をするはずもなかったんだ。だがまぁいい、本来なら今すぐ処刑してやりてぇとこだがルールがある。大会が終わった後がお前の最期だぜ」
「またアタシに奇跡を見せてくれるんだろう？　期待してるよ、ルフィ」
よくわからない二人だ。
バギーはルフィを殺したがっていて、アルビダは応援しているような気がする。
事情が呑み込めないビビは眉をひそめて困惑するばかり。
そのまま彼らが逃げ出そうとした瞬間に、ようやくルフィが宝箱の件を指摘した。
「それおれたちが見つけた宝箱だぞ。返せよ」
「お前らのだぁ？　なんだ、どっかに名前でも書いてんのか？」
「書いてねぇけど」
「だったらてめぇらのもんだとは言えねぇなぁ。奪った奴が勝者なんだ。いちいちてめぇの了解取ってて海賊なんざやれるかァ！」
「じゃあおれもお前から奪うだけだ」
左足を一歩前へ出し、腕が振りかぶられる。
その一瞬で見るからにバギーの表情が変わり、全身が硬直していた。
「ゴムゴムのピストル！」
「ぶぉへぇっ!?」
素早く伸びてきたパンチがバギーの顔面を殴り飛ばし、その拍子に

彼の体がバラバラになって辺りへ散らばった。どうやら驚きと衝撃から能力を使ってしまったようである。
宝箱は地面に落とされる。
回収しようとビビが動きかけたが、当然彼女より近いアルビダが先に持ち上げた。
「やっぱりあんたの拳はいいねぇ……今度はアタシに思い出させてくれるのかい？」
「お前またっ」
「欲しいなら追ってきな。これはただの戦闘じゃないんだよ」
「ちくしょ～っ！　よくもやりやがったなクソゴム！　だがてめぇの誘いにゃ乗らねぇぞ、宝を持って逃げ続けりゃそれだけで勝ちなんだ！」
体が浮遊してきたバギーがバラバラのままで叫ぶ。
彼の一言にアルビダが頷いたことでビビが一足先に気付いた。
戦うつもりがない。彼らは逃げる気だ。
「ルフィさん！　彼らは逃げるつもりよ！」
「逃がすかっ」
「バラバラフェスティバ～ル！」
ぶつ切りになったバギーの体が木々を避けて飛び回る。
ルフィとビビはその光景に驚き、一瞬とはいえ動きが止まった。
「ギャーッハッハッハ！　視界の悪い森の中、奪えるもんなら奪ってみろ！　アルビダ、宝箱をこっちに寄こせ！」
「はいよ」
「おい待て！」
バギーの手が宝箱を受け取り、宙を浮遊しながら森の奥へと移動していく。選択するのは逃げの一手のみ。戦おうという意志は全く感じられない。
先にバギーのパーツが離れていき、その時アルビダはサンダルを脱いでいた。
軽く跳んだアルビダが地面に着地すると同時、あまりにもスベスベなその素足は、地面にある障害を全てするりと受け流してしまい、摩

擦をゼロにして滑り始めた。
これが彼女の移動方法。
スベスベの実の能力者だけに許された、独自の全速力なのである。
「摩擦ゼロ！　スベスベシュプール！　追いついてごらん」
「くそぉ、待て！　宝を返せェ！」
「あっ、ルフィさん！　一人で行動しちゃだめ、私も行くわ！」
逃げ出した二人を追ってルフィとビビも走り始める。
視界が悪ければ足場も悪い。そんな中でも能力者である二人は上手く道を選び、自らの能力を有効的に使えるよう考え、行動していた。
ルフィと共に追いかけながらもビビは真剣な目で考える。
能力があるか否かではないだろう。どれだけ先を読めるかだ。
アラバスタに到着するまでにルフィほど強くなるのは不可能だろう。
それならば考え方を変える必要がある。今よりも強くなりたいと思うが正攻法では時間が足りずに間に合わない。必要なのは力ではなく新たな戦い方だった。
この大会はそのための良いチャンスだとも考えられる。
最後のチャンスだと考え、決意が改められる。
ビビは敵である二人とルフィの背を追いながら、表情は以前にも増して緊張していた。

トレジャーハント（2）

「待てって、ゾロ！　お前ちょっと待てって！」
「さっさと来い」
「そうじゃなくてなんでお前が先頭なんだよ！　そりゃやべぇだろ、方向音痴！」
「誰が方向音痴だッ！」
島に上陸し、林を抜けて、茶色い岩場に到達したゾロとウソップが走りながら叫んでいた。
辺りは足場も悪く、視界も開けている。それだけに誰かに見られている危険もあってウソップは不安を抱いており、さらに先頭はなぜかゾロ。このままただで済むはずがない。
ウソップは必死にゾロを止めようとして、ようやく足が止まった。
周囲にも敵の姿が見える。いつ襲われるかもわからず、不安は増す一方だ。
「大体いきなりめちゃくちゃ過ぎんだよっ。宝なんてどこにあるのかもわかんねぇし、いきなりスタートでどいつもこいつも大混乱だ。おれたち生きて帰れんのかなぁ」
「当然だろ。とりあえず宝を探すぞ。でなきゃ次に進めねぇ」
「いやそりゃわかってるけどもだ」
「方向がどうだの言ってられねぇ。とにかく走って宝を見つける」
「それ、バカの考えって感じしねぇか？」
「じゃあどうすんだよ」
「ひとまず安全な場所を探して隠れるとか――」
「行くぞ」
「せ、せめてリアクションしろよ！」
再びゾロの先導で走り出し、二人は移動を始める。
海賊たちは宝箱の捜索に必死で彼らを気にかける余裕もない。というよりそもそも興味がないのだろう。少し話題になったとはいえ所詮ルーキー、相手にする必要がないと思っている。ゾロにとっては退屈だがウソップにとっては有難い状況だった。

そこからそう移動する間もなく、彼らは広い川に到着する。
勢いも殺さずにゾロが足を踏み入れたところでウソップが怪訝な顔をした。
水深は浅いが当然靴もその中の足も濡れる。
川幅が広く、二十メートルほどはあるだろうか。
なだらかな坂になっており、山の頂上から湧き出る水が下ってきているようだ。
川の中を歩いて対岸へ渡ろうとウソップも足を踏み入れる。
改めて大変な競技だと感じて溜息が禁じえなかった。
「海はともかく、川なんて久しぶりだな。しっかし広い島だ……こりゃ宝なんて簡単には見つかんねぇぞ。ルフィたちはどうなったんだろうな」
「さぁな」
「キリが居りゃ頼りになるんだけど、ここに居るのがゾロじゃなぁ」
「てめぇはおれに斬られてぇのか」
わずかに後ろを振り返り、幾分苛立った顔でゾロが言う。しかし本気で怒っている訳ではないと知っているためウソップも大きく反応しようとはしなかった。
川の中ほどまで到達した時、不意にウソップが足を止める。
「お、おい、ゾロ」
「あ？」
ウソップの声を耳にして立ち止まり、気配を感じて上流に目を向けた時だ。
いつの間にか川の中に立って二人に敵意をぶつける相手が居る。
あいにく見覚えがある。
特にウソップは彼らから見て左側、キャプテン・クロは因縁の相手でもあり、以前にも再会を経験したが、何度会っても鳥肌が立つ。そんな相手なのだろう。
その隣には直接会ったことはない首領クリークが居て、にやりという笑みを浮かべている。
彼らが現在どういう立場にあるのか、すでに知っていた。

咄嗟に二人が身構えて武器を手にする。
このタイミングで現れた彼らが何もせずに立ち去るはずがない。
警戒するが故に反応は速く、そのせいで奇襲の手は消え、クロとクリークも武器を構えた。
「確か殺しはルール違反だったか」
「そうだ。海軍へ突き出すと言っていたが」
「おれたちゃ海賊。向かってくる奴は叩き潰すだけだ」
「そしてルールを破ることに抵抗もない。全ては計画通りに事を進める」
「おいおいおいっ、マジか!?　ここでやり合う気かよ！」
「そんなもん最初から予想できたろ。覚悟はいいかウソップ」
「良くねぇ！　何一つ良くねぇ！」
「じゃあ行くぞ」
「だから話聞けってお前ッ!?」
ゾロがすらりと刀を抜いて両手に持ち、慌てるウソップも鞄から素早くパチンコを取り出した。
すでにクロは両手に〝猫の手〟を装備して、クリークは〝大戦槍〟を思い切り振り回す。
どちらも迎撃の準備は十分。
宝箱とは関係がないとはいえ戦闘が始まろうとしていた。
彼らはこのためだけに大会へ参加したのだろう。一切の迷いがなく、宝箱を探そうともしない態度には確固たる意志があり、大会とは無関係だと感じられる。
衝突は必然だった。逃げたところで追われるのならここで止めるしかない。
「ちくしょー、なんでこんな目に……」
「気合い入れろよウソップ。こんな程度は今までいくらでもあっただろ」
「あって堪るか！」
「左はお前に任すぞ。もう手の内はわかってるだろうしな」
「ま、マジか……ああくそっ、やるしかねぇのか」

「こいつらに勝てねぇようじゃ先はねぇぞ。どうせ次はバロックワークスだ」
「ハァァ～憂鬱だ」
二人が話しているとクロが膝を曲げていた。
来る、と感じた瞬間、彼の姿が掻き消え、辺りに風が吹く。
ウソップがぎょっとして目を見開いた。それと同時にゾロは眉間に皺を寄せ、咄嗟にウソップの首根っこを掴んで引っ張り、突然の回避行動を行う。
「ウソップ！」
「おわぁっ!?」
ぐいっと引っ張られた瞬間、彼の傍を風が通り過ぎた。その時には頬がわずかに切れていて、少量とはいえ血を流し、ぞっとしながら目を向ければ背後にクロの姿がある。
無音の高速移動〝抜き足〟。やはりその速度は健在である。
反射的に怯えたウソップは声を発して、ゾロがパッと手を離すとその場に転びかけ、慌てて姿勢を正して彼の方に振り返った。反対にゾロはクリークと対峙する。
「よく避けたな。だが、君に止められるかね？　ウソップくん」
「ち、ちくしょう。いつまでも昔のままだと思うなよっ」
「その調子でそっちは任すぞ」
「フン、ガキども二人か。くだらねぇ。すぐに叩き潰してやる」
にやりと笑うクロの挑発に乗り、ついにウソップは覚悟を決めて目つきを変えた。
背中で変化を感じたゾロは好戦的に笑い、自身は背後を気にせずクリークへと駆け出す。
改めて向き合って、ウソップは深呼吸を繰り返した。
まず最初に考えるのは、自分一人で勝てるのだろうかということだ。
シロップ村での戦いではシルクが彼を倒し、ローグタウンでは逃げただけ。航海をする中で変わったものがあるとしても、一人で勝てるという絶対的な自信はない。

しかしやらなければ。
勝てないなら彼らと一緒に航海することはできないとさえ考える。
左手にパチンコを持ち、右手には鞄から取り出した弾丸を握っていた。
覚悟はできている。たとえ勝てないにしても逃げ出すことだけはあり得ない。
その強い眼差しを見てクロが小さく鼻を鳴らした。
「確かに以前とは違うかもしれんな。だがまさか勝てるとは思っていないだろう？」
「お、おれはもう変わったんだ。今は本物の海賊だ！」
「声が大きいだけでは海賊はやれん。本物が何かを教えてやろう……」
再びクロが動き出そうとした時、危機感を感じたウソップは素早くパチンコを構えた。
「海賊やるのが怖くて逃げ出した奴に言われたくねぇよっ！　必殺！　煙星！」
狙ったのは自身の足下。地面に弾が当たった瞬間、その地点を中心に広く煙幕が広がる。
クロはぴくりと眉を動かした。
彼の姿が見えなくなったことと、挑発だろう言葉を聞いたことが原因だろう。多少の変化は認めるが強くなったとは言い難い。彼はまだウソップを甘く見ていたようだ。
「それで隠れたつもりか？　無駄な足掻きだ」
抜き足を使ってクロの姿が消えた。
臆することなく煙幕へ突っ込み、ウソップが居るだろう位置へ向かう。しかし敵を狙ったはずの攻撃は煙を振り払うのみで手応えがない。
驚愕したクロが周囲に目を走らせながら足を止めた。
速度を殺すために強く地面を踏みしめるのだが、その際に違和感を感じる。
靴を貫き、足の裏に鋭い痛みが走ったのだ。

慌てふためいて足を動かせば、その辺りはどこに足を置いても足に痛みを感じ、何かが刺さる。
堪らずその場へ転んでしまった。
今度は背中にまで突き刺さり、地面に寝転んでからそれがばら撒かれたまきびしのせいなのだと気付き、川の水をバシャバシャと跳ねさせながら逃げるように転げ回る。
正面から戦って勝ち目がないことなど最初からわかっている。そしてそんな戦い方は自分らしくないことをウソップは誰よりも自覚していた。
欲するのは勝利。そのために敢えて姿を隠し、誘い込んだ上にまきびしをばら撒いた。
煙の中で身を潜めていた彼は苦しむクロから目を離さなかったのである。
「ぐおぉっ……!?　チィ、卑怯な手を――！」
「必殺！　三連火薬星！」
地面に伏せた状態で三発をほぼ同時に放つ。
ちょうどクロも近い体勢だった。そのせいで逃げることもできず、突如襲ってきた弾丸は彼の体へ直撃し、顔面と胸元、足に当たって爆発する。
大した衝撃だ。もはやまきびしのことなど気にならなくなるほど気が遠くなりかけた。
小さいとはいえ爆発している。体に走る痛みは尋常ではない。
好機と見てウソップが素早く立ち上がった。
パチンコを仕舞う代わりに鞄の中へ手を突っ込み、ハンマーを取り出す。
彼が接近する頃、クロはよろよろと起き上がろうとする最中だった。
「ウソ～ップ……！」
「がはっ、ま、待てっ……!?」
「ハンマーッ!!」
飛び込むようにジャンプをして、起き上がりかけた後頭部を思い切

り殴りつけた。衝撃でクロの顔面は地面へ叩きつけられ、先程の火薬星も合わさって今度こそ気を失う。
如何に実力が上であろうと、不意を衝かれて急所を殴られては耐えられない。
そもそも、クロは体を鍛えて打たれ強さを誇っている訳ではない。最も優れているのは脚力。細身で身軽なため打たれ弱さが目立つのが弱点だった。
卑怯と言われても仕方ない戦法。しかし結果だけを見ればウソップの勝ち。
誰に非難されようと結果が全てだ。それが海賊の生き方。
勝利を自覚したもののがくがく膝が震える。
少なからず忘れがたい因縁がある相手に自分が勝った。信じられないが確かに倒れていて、気絶しているらしく全く動かない。水の中で完全に伸びていた。
倒れた相手を見つめ、徐々に喜びが湧いてきて、ウソップは思わず跳び上がった。
「よ、よ、よっしゃあぁっ！　勝った！　キャプテン・クロに、こんなあっさり……！」
両腕を突き上げて歓喜に酔いしれ、上機嫌で振り返る。
嬉しさのあまり報告しようとしたのだろう、ウソップの目はゾロを捉えた。
「は～っはっはっは！　見たかゾロ！　おれ一人で見事敵を――」
「ぬぅん！」
クリークが振り下ろした大戦槍が地面を叩き、爆発を起こして水を跳ね飛ばした。
ゾロは後ろへ大きく跳んで距離を開ける。
あまりの迫力に言葉を呑んだウソップの傍で足を止め、苛立った様子で舌打ちしていた。
「チッ。斬れねぇな、あの鎧……」
「バカめ、当然だ。こいつはウーツ鋼で出来ている。そんなちゃちな刀で斬れる訳ねぇだろう」

「まだまだおれの腕が足りねぇな。こんな程度も斬れねぇんじゃ」
「減らず口を」
「よぉ～しゾロ、おれが援護してやるぞ！　前は任せた！　敵をおれに近付けるなよ！」
「ああ、わかったよキャプテン」
二人が肩を並べてクリークに立ち向かう。
ウーツ鋼の鎧に隠し持ったいくつもの武器。自由に走らせればクロの方が厄介だが、こうして川の中で対峙すれば、おそらく彼の方が面倒だろうと思った。
ゾロは苛立ちを隠して刀を握り直し、ウソップは意気揚々とパチンコを構えた。
その時だった。
突然川の上流から宝箱が流れてくる。
それだけならば大して驚きもしなかったかもしれない。問題はその次だ。
激しい走りで水を跳ね上げ、特徴的な巨体が走ってくる。
どうやら宝箱を追ってくるらしく、ずいぶん必死な形相だった。
「ウッキィ～ッ！」
「な、なんじゃありゃあっ!?」
奇声を発しながらやってきた大男は宝箱のみに集中していた。
水に流れる宝箱はクリークに向かっているのだが、全く気にした気配がない。
ウソップは驚愕し、ゾロとクリークはぽかんとした顔で彼を見ていた。
ようやく大男もクリークに気付き、大口を開けて叫び出す。
「あぁっ！　邪魔だ邪魔だ！　どけどけェ！」
「何イ？　てめぇ、誰に向かって生意気な口を――」
「おれの宝だ！　どけェ！」
宝箱がクリークの足下へ近付いた時、大男が勢いよく跳んだ。右腕を振り上げた状態でクリークへ飛び掛かり、彼が反応できないほどの速さでパンチを振り抜く。

拳は頬へ突き刺さり、クリークの巨体があっという間に殴り飛ばされる。
空中で数度回転した体は数メートル飛んだ末に地面へ落ち、川を出て陸地で動かなくなった。
殴った後に姿勢を正して、彼はそのまま宝箱を拾おうと狙っている。
絶叫するウソップはともかく、冷めた目で見ていたゾロの下へ宝箱が流れてくる。
大男の手が届く前に拾い上げてしまい、空を掴んだ彼は勢い余って地面を跳ねながら彼らの傍を通り過ぎていった。その度にバシャバシャ音が鳴り、トビウオのようである。
振り返る二人は呆れた様子で大男を見ていた。
「なんだ、あいつは」
「でっけぇなぁ。猿みたいな顔してたぞ」
「何ィ!? 誰だ、おれを猿だと言った奴は!」
「ぎゃあああっ!? 殺されるぅぅっ!?」
転んだせいで全身水浸しになりながらも立ち上がった大男は、怒っているかのような顔で叫び、即座に振り向くと二人を視界に納めた。
反射的にウソップが怯えるものの、なぜか直後に彼は頬を綻ばせて照れ始める。
「おいおい、バカ言うんじゃねぇよ。そんなにおれは〝猿あがり〟か?」
「は?」
「何言ってんだあいつ」
「ウッキッキ! そんなに褒めるんじゃねぇよ! いくらおれが〝猿あがり〟だからって!」
褒めたつもりはないのだが。
揃ってそう思う二人はふと彼から目を離し、互いに顔を見合わせた。
「こりゃ一体どういう状況だ」
「わからねぇけど、おれたちあいつを褒めてたらしいぞ。猿あが

りって何だ？」
「おれが知るか。あいつが猿みてぇなのは確かだがな」
「よせやい、褒めるなよ！　おれはそこまで〝猿あがり〟じゃねぇ！」
「だからなんだよ、猿あがりって」
その大男、猿やゴリラに似た外見で、腕は太く、額にはサングラス、耳にはヘッドホンがある。巨体は黄色いオーバーオールに包まれて、なぜか尻尾らしき物もあった。
確かに猿に見える。
猿という言葉は彼にとって褒め言葉なのか、口にする度に心底嬉しそうだった。
ピンときたウソップはあることを思いついた。
困惑して面倒そうなゾロを止め、彼が前へ一歩を踏み出す。
「なぁ、あんたに一つ確認したいんだけど……なんでそんなに〝猿あがり〟なんだ？」
「お、おいおい、よせよ！　猿あがりなんかじゃねぇって」
「いいや、おれはこんなに〝猿あがり〟な奴を見たのは初めてだ。あんたほんとにスターだよ」
「ウッキッキィ！　バカ野郎！　そこまで人を褒めるもんじゃねぇよ！」
「いや猿だろ、お前は」
呆れたゾロが呟くと同時、大男は両腕を上げると力こぶを見せつけ始める。
「おれは〝サルベージ王〟マシラ！　相手がファンなら宝箱を奪うわけにもいかねぇよ！　そいつはお前らにくれてやる！」
「誰がファンだ……」
「ははぁ～、ありがとうございますマシラ様。あなた様の〝猿あがり〟ぶりはこれからみんなにお伝えいたします。このご恩は一生忘れません」
「ウッキッキ！」
恭しく頭を下げるウソップを眺めて、大男、マシラは嬉しそうに歯

を剥き出しにして笑う。
何度かポーズを変えた後、自身が見つけた宝箱を二人に譲った彼は奪おうともせず、その場を離れることを決めたようだ。ゆっくり歩き出しながら川を出ようとする。
「さぁて、それじゃおれは別の宝を探さねぇとな」
「ありがとうございました。これからも頑張ってくださぁ」
「それじゃまた会おうぜ。今は忙しい。サインと撮影は、その時にな」
白い歯を一層強く輝かせて、マシラは地面を蹴って高く跳び上がった。
川の中から一瞬にして近くの木へ到達し、枝を掴んで次の木へ飛び移り、見る見るうちに遠ざかっていく。その速度や動作はまさに猿。動物その物と言っていい。
奇声を発しながら行ってしまうマシラを見送り、二人はなんとも言えない顔で呟いた。
「猿だったな」
「ああ。猿だ」
とにかくウソップの機転で宝箱は手に入れたのである。
おだてた結果戦闘は回避され、無駄な体力を使っていない。満足したウソップが笑顔になる。
「まぁ何にしても宝はゲットだ。あとはこいつを守れば一回戦はクリアだな」
「そう上手くはいかねぇと思うがな」
「だからさっさとどっかに隠れようぜ。こんだけ広い島なら隠れ場所はいくらでもあるだろ」
「おれはそうは思わねぇけどな」
宝箱を持つゾロが視線を逸らして別の方向を見た。
ウソップもそちらを向く。
明らかにこちらを目標に走ってくる海賊たちの集団が確認でき、状況を考えれば、どう頭を捻ろうとゾロが持っている宝箱を狙っているようにしか思えない。

「あったぞ宝箱ォ！」
「そいつを寄こせェ！」
「げぇぇぇっ!?　こっち来るなァ！」
「広かろうが参加者の数が多い。どこへ行こうが敵は居るぞ」
「呑気に言ってる場合か！　逃げるぞゾロォ！」
「へいへい。了解だよキャプテン」
水を掻き分けて走り出し、ウソップを先頭に二人は川を離れる。
後方からは数多の海賊。追いつかれれば戦闘は免れない。
怯えているウソップとは対照的に、ゾロは好戦的に笑って、その時を待ち望むかのよう。
唐突に宝箱を投げたかと思えばウソップへ渡した。
「ウソップ、これ持ってろ」
「は？　うおっ、投げんなよ！」
「あいつらはおれが仕留めてやる。そいつは任せたぞ」
「よぉ～し行ってこい！　宝はおれが死守してやる！　クロの野郎もぶっ飛ばしたしな！」
強い踏み込みで勢いを殺したゾロは、突然逆方向へ走り出し、敵の集団へ向かった。
ウソップはそこから少し離れ、立ち止まると観戦に努める。
もしもの状況に備え、宝箱を抱えた状態で彼らの戦いを眺めた。
やはりゾロは強い。
集団を相手に一人で善戦している。敵を斬り、時には殴り飛ばして、圧倒的な強さを誇る。
確かに方向音痴という弱点はあるものの、彼とコンビになったことは幸運だろう。今見ている強さがあれば優勝も夢ではないのではないか。
自身が一人でクロに勝ったこともあり、ここへきてウソップもわくわくし始めたらしい。
仲間と戦うことさえなければ優勝もできる。彼のやる気は今こそ倍増していた。

トレジャーハント（3）

シルクとチョッパーは砂浜を走っていた。
広大な島の中、今頃仲間はどこに居るのか見当もつかない。探している暇などなく、始まってしまえば頼れるのは自分と相棒だけ。
彼女たちも宝箱を探して、あちこちに視線を飛ばしながら走っていた。
島中の至る所で海賊たちが争っている。
宝を探す者、意味なく戦う者、どちらを向こうと戦いがあった。
獣型で走るチョッパーは複雑な心境で周囲を見ていた。
次々人が倒れていく。あまりにも荒々しい光景に、海賊という存在をさらに強く感じる。
少なからず心を痛めているだろうチョッパーに気付いたようで、隣を走るシルクが声をかけた。
「チョッパー、大丈夫？　油断しちゃだめだよ」
「う、うん」
シルクに怯えた様子はない。そうした景色にも慣れている顔だ。
これが今の自分と彼女の違いか。
正しく理解したチョッパーは顔つきを変えて呟いた。
「海賊って、凄いんだな……」
「そうだよ。みんな命を捨てる覚悟で来てる。私たちも頑張らなきゃ」
「うん。おれ、頑張るよ」
砂に足を取られながらも、気合いを入れて踏みしめる。
チョッパーは鼻息も荒く歩調を速め、シルクは笑みを浮かべながらそれに付き合った。
しかしそれから幾ばくもせず、仁王立ちで二人を待ち構えていた二人組と直面する。
慌てて足を止めるとシルクにとって見覚えのある顔だった。
明らかに彼女たちを標的にしている人物。左側に斧手のモーガン、右側にはエルドラゴ。かつてイーストブルーで戦った海賊が再び目

の前へ現れた。
「奴の仲間か」
「本人が居ねぇってのは不服だがまぁいいだろう。まずは仲間からだ」
「チョッパー、敵だよ。戦わないと」
「おう！　おれがシルクを守るんだ」
相手が誰かなど聞きはしない。誰が相手だろうと目の前に立ちはだかったからには敵であり、戦わなければ一方的にやられるだけだ。
獣型のまま足を広げ、力を溜めるように姿勢を低くした。
シルクも剣を抜き、肩の力を抜いて身構える。
身長の高い二人が並んで見栄えはそれなりだった。
モーガンは近接戦闘が得意で、エルドラゴは悪魔の実の能力を持って、遠近両方を得意とする。相手にするには厄介な二人組であった。
真剣な目で相手を見据えて対峙する。
周囲からの邪魔はない。今は目の前の敵にのみ集中できた。
先に動いたのはエルドラゴだった。
大口を開けると光が集まり、ゴエゴエの能力で力が溜められる。
その様にチョッパーは驚くが、シルクが声を発したことで即座に動いた。
放たれたのは砲撃のような大声。閃光となった声が浜の砂を吹き飛ばしながら一直線に駆け、回避のために動き出した二人の間を通り過ぎていく。凄まじい迫力。当たればただで済まないとその一度があっただけで素直に思い知らされた。
驚きながらも回避は上手く終えることができた。
直後にチョッパーが敵へ向けて走り出し、援護するためにシルクは剣を構える。
即席とはいえ、前衛がチョッパー、後衛がシルクと、すでに二人の間で役割が決まっていた。それ故にチョッパーは恐れることもなく前に出れて、シルクは自身の能力に集中できる。
二人の動きは迷いを持たず、一瞬にして呼吸がぴたりと合う。
地面を蹴りつけてチョッパーが真っ直ぐ走る。

モーガンとエルドラゴは迎撃の構えを見せ、再びゴエゴエの能力が使われそうだ。
援護のため、剣を振り抜くシルクは強風を起こして砂を巻き上げた。
「鎌居太刀！」
チョッパーを傷つけぬように、それでいて背を押すかのように走った風は、大量に砂を巻き上げて彼の姿を隠そうとする。モーガンとエルドラゴは驚愕して目を見開いた。
吹き飛ばされた砂が彼らに襲い掛かって一気に視界が悪くなった。
能力を使おうとしていたエルドラゴは口を閉じ、苛立った様子で能力の使用をやめる。
その間に砂に紛れてチョッパーが彼へ接近していた。
「ええい、小癪な……！」
「このぉ！」
「ぐほっ!?」
獣型で前へ跳び、瞬時に人型へ変化したチョッパーがエルドラゴの頬を殴る。
突然の攻撃。それも下から突き上げるような衝撃で、体格差もそうなかっただろう。
想像以上だった衝撃を受けてエルドラゴは背から地面へ倒れる。ズズンと大きな音を立て、その頃に舞い上がった砂も全て落ちて、彼ら二人の姿が露わになった。
即座にモーガンがチョッパーの背を狙う。
右腕の斧手を振り上げ、背を見せて隙だらけのチョッパーを切り裂こうとした。
当たれば再起不能もあり得る。しかしその動きはシルクにも見えていた。おそらく彼はその位置からでは止められないと思っていただろうが、彼女ならば攻撃も届く。
チョッパーを狙ったことで隙だらけだった背を狙い、素早く剣が振り下ろされる。
「繚乱・烈風！」

吹き荒れた風は再び砂を巻き上げ、風とはいえ目に見える脅威となってモーガンへ迫った。
その轟音、到底無視できるものではない。
思わず攻撃の手を止めて振り返った彼が見た物は、砂を吹き飛ばして直進してくる強風。
次の瞬間には斬り飛ばされて宙を舞っていた。強烈なかまいたちによって体を深々と切り裂かれており、地面へ落下してくる間にも鮮血が噴き出している。
エルドラゴが起き上がると同時、モーガンが地面に落ちた。
彼らにとって想像もしなかった事態であり、動揺は少なからず存在したらしい。
「おのれ、ガキどもめ！　調子に乗っていられるのもここまでだ――」
「ぐあぁっ!?」
「あん？」
ドゴン、と大きな音が聞こえ、エルドラゴが振り返ると、起き上がろうとしていたモーガンが陥没した地面の中心で気絶していた。驚いて思わず眉を動かす。
チョッパーやシルクも驚いていて、明らかに彼らのせいではない。
倒れたモーガンの傍に一人の男が立っている。
身長は百八十センチを超えており、筋肉質だが細い体でほどほどに若い外見だ。
短髪で色は黒く、ギラリと光る眼がとてつもない威圧感を放っている。
何より、エルドラゴの倍はあるだろうかという巨大なハンマーを肩に担ぎ、その外見には似合わないほど巨大な武器でモーガンを倒したようだった。
驚く面々の中で特にシルクの反応が大きかった。
昨夜も見た顔だがまさか戦闘になるとは思わなかったため動揺は大きい。
「〝大連撃〟ユージーン!?　うそ、こんなところに……！」

「なんだ貴様は。邪魔をするなァ！」
怒りに包まれたエルドラゴが叫んで能力を使った。
モーガンがやられた。それはいい。彼に対して別段愛着がある訳でもないのだ。彼がやられたからと怒ることはあり得ない。
彼が怒るのはただ単純に邪魔をされたからだ。
大きく開かれた口の奥から閃光が吐き出されて、真っ直ぐに敵を狙って突き進む。
「ゴアアァッ!!」
冷たい眼差しでそれを眺めた男、ユージーンは、両手で柄を握るとハンマーを振り回した。
彼の体よりも大きい武器はエルドラゴの咆哮を受け止め、それだけで終わらず、強く振り抜くと無理やり掻き消してしまう。悪魔の実の能力を純粋な腕力で破壊したのだ。
エルドラゴは驚愕し、シルクとチョッパーも大口を開けて驚いている。
くるりとハンマーが回され、直後には攻撃のために振り抜かれた。
一瞬にしてエルドラゴの体が捉えられて、強烈な勢いで殴り飛ばされる。
彼も体は大きいのだが、耐えることもできずにあっさり宙へ浮いてしまい、砂浜から森の向こう側まで飛んでいって見えなくなってしまった。
彼の姿を見送った二人は呆然として動けなくなってしまう。
やはり格が違う。
これが懸賞金２億２０００万ベリーの海賊。
エースと比べれば格下になるかもしれないが、二人にとっては敵うはずもない相手だ。
知らず知らずのうちにチョッパーは後ずさりを始めていた。
絶対的な強者に睨まれ、何かを考えることもできずに体が怯えていたのである。
「うわっ、わぁ……!?」
「すごい、なんて怪力……噂通りの人だ」

「それはお前たちの物か？」
「え？」
唐突に発せられたユージーンの問いに、訳も分からずシルクが聞き返す。
彼は右腕一本で肩に巨大なハンマーを担ぎ、左手の指で地面を指す。そこには地面に埋まった宝箱がわずかに顔を覗かせていて、おそらくシルクのかまいたちで掘り起こされたのだろう、やっと質問の意味が伝わった。
だがなんと答えていいかわからず、緊張で喉を鳴らして言葉に詰まる。
「お前たちが見つけたならお前たちの物だ。だが奪い合うのもルール……悪く思うな」
ユージーンは片手で巨大なハンマーを回し始める。
回転する度に風が吹き、凄まじい迫力で威圧されていた。
見ただけで恐怖心を煽られて、チョッパーは怯えてしまい、しかしシルクは両手で剣を構えた。
「チョッパー！　戦おう！」
「え？　シルク……？」
「逃げてばっかりじゃ強くなれないから、やれるだけやってみよう！　私たち二人で！」
「う、うん！」
高速で回転させたハンマーをぴたりと止め、しっかり握って構えられた。
右手一本で持ち上げて、前傾姿勢で二人を睨みつける。
「そうか。手加減はできんぞ」
「おおおおっ！　おれはバケモノ！　強いんだァ！」
「お前以上のバケモノなど、この海には数えきれないほど居る。見た目で判断しないことだ」
人型の状態で両腕を広げ、自分を鼓舞するように空へ向かって叫んだチョッパーへ、ユージーンは冷ややかな声で簡潔に告げた。
その言葉通り、少々チョッパーの姿が変わっていようが恐れてはい

ない。
素早く仕留めるため一歩が踏み出された。
どこからともなく音楽が聞こえてきた。
戦おうとしていた三人はつい動きを止めてしまう。
音が聞こえる方向を探って目を動かした時、森と砂浜の境目へ姿を現す男が居た。
それは複数の音が重なる、音楽。
不思議なことに男は楽器を持っておらず、自身の体が変化し、楽器になって音を奏でている。
楽しげで、しかしそれだけではない音の波。複数を同時に奏でながら歩いてくる。
三人は戦意を逸らされて彼が来るまで動けなかった。
頭はシンバル。腕は笛。歯はピアノ。胸は太鼓。
やっと足を止めた時、スクラッチメン・アプーは上機嫌に口を開き、自らの声で語り出そうとも音楽は止まらず、その目に映す三人を敵とも味方とも思っていない。
「ようエッビッバッリィィ〜！　楽しんでるかトレジャーバトル！　アッパッパ〜！」
「お前は……〝海鳴り〟か」
「相棒が見当たらねぇな〝大連撃〟。せっかくだから聴いてけ〝戦う音楽〟！」
「悪魔の実の能力か……」
「スクラ〜〜ッチ!!」
アプーは両手で自らの胸を叩き、そこから大きな太鼓の音が聞こえてくる。
「〝爆（ドーン）〟」
小さく呟いた瞬間、突如ユージーンの体が爆発した。
何をされたという認識もない。ただ音を聞いただけで全身が爆炎に包まれていて、気付いた時には凄まじい熱と痛みがあり、ユージーンの体はぐらりと倒れかける。
まず先にハンマーが手から離れて落としてしまう。

その直後、高く跳び上がったアプーがくるくる回りながらユージーンの真上から落下してきた。
「アパパパパッ！」
落下の勢いを利用して、両足で顔を踏みつけ、彼の体を無理やり倒す。すると勢いよく後頭部を地面に打ち付ける形になってユージーンの意識は刈り取られた。
見ていたチョッパーとシルクは愕然とする。
あれだけ強そうだったユージーンがほんの一瞬で倒されてしまった。鮮やかであり、同時に何が起こったかもわからない不思議な戦闘で、言うべき言葉が見つからない。
大の字に倒れたユージーンの顔の上に立ち、アプーがバッと長い腕を上げる。
着地成功と言わんばかりの表情で、二人はぽかんとしていた。
「ざ～んねん。居たな、お前以上のバケモノが」
「2億ベリーのユージーンが、一瞬で……」
「つ、強ぇんだな、あいつ」
感心する二人はしばし危機感も忘れて見入っていた。
アプーがユージーンの上から降りる。
二人に体を向けて見やり、瞬間的に二人も警戒して身構えるが、彼はもう音楽を奏でなかった。
「お前ら昨日見たな。麦わらの仲間だろ」
「そうだけど……」
「心配すんな。おれはお前らの副船長に期待してんだ。どうこうしようってつもりはねぇ」
アプーはちらりと森のある方角を確認し、そこから自身の仲間が出てくるのを見つけた。
「オラッチはもう宝も見つけてるからなぁ。そいつはお前らのもんだ」
「船長！　また勝手に行動して！」
「どうして、助けてくれたの？」
「どうしてかって？　そんなもん決まってるだろ」

駆けつけてくる仲間の方向へ歩き出しながらアプーはにやりと笑う。
「そっちの方が面白ェからだ。祭りは楽しくやるもんだろ？」
「あんたはいつも楽しみ過ぎですから！　こっちの身にもなってください！」
部下に叱られながらもアプーは軽い足取りで去っていき、二人は驚きを隠せない。唐突にやってきて唐突に去っていく。敵なのか味方なのかわからなかった。
少なくとも、彼が来なければ無傷で済まなかったことだけは確かだ。
ハッと気付いたシルクは慌てて埋まった宝箱を掘り起こした。
驚きを隠せないチョッパーが振り返り、彼女の行動の意味が分からずぼんやり見つめる。
「チョッパー、ぼーっとしてる暇ないよ。気をつけないと他の敵が来る」
「つ、次？　そっか。手に入れてもまだ終わりじゃないんだな」
「今度はこれを守らなきゃ。私たちも行こう」
「う、うん」
幸いと言うべきか、見晴らしの良さを警戒してか、いつの間にか他の海賊は姿が見えない。
シルクが宝箱を抱えて走り出した。
チョッパーは人型のまま彼女の後ろに続き、その場を離れる前にちらりと倒れた敵を眺める。
モーガン、エルドラゴ両名を一撃で倒した2億ベリーの賞金首、ユージーン。
そのユージーンをほんの数秒で倒したアプー。
世界は広い。
お前以上のバケモノは数え切れないほど居る、という言葉が嘘ではないのだと実感した。これはそう言うのも当然だと思える光景だったのだろう。
チョッパーは戦慄し、大きな不安を持ちながら森へ向かった。

＊

所変わって竹林。

まだ宝箱が見つけられずに居たナミとサンジは少しだけ焦り、必死に目を凝らして走っていた。

「んナミすわぁ～ん！　疲れてないかい？　おれがおんぶしてあげるから～！」

「バカ言ってないで早く見つけて！　このままじゃ失格よ！」

「あ～いっ！」

視界の悪い竹林の中を走り、葉が敷き詰められた地面を踏みしめて進む。

一回戦がスタートしてからしばらく経つ。

宝箱は３００個あるらしいのだが、まだ残っているのだろうか。先程まで居たはずの海賊が周囲に見えないことも不安を煽る。これで見つからなければ失格だ。

ここに至るまで数度の戦闘を行っているものの、相手になったのは宝箱を持たない者ばかり。

余計な時間を使わされた。そのせいでナミは苛立っていたようだ。

今から間に合うのかと、そればかりが気にかかる。

ビビが今日までどれほど不安に苛まれていたかを知っている。

この大会で必ずエターナルポースを手に入れなければならない。

普段怖がりな彼女が逃げようともせず覚悟を決めていたのは大事な仲間のためであった。

ただ、焦りや覚悟とは裏腹に宝箱は見つからず。

走り続けた疲労もあるというのに、息を切らしながらもまだ探さなければならない。

背の高い竹が日光を遮り、薄暗いというほどでもないが他の場所に比べて視界の悪さはある。

辺りを見回し、やはり目立つところに無さそうだと溜息がこぼれた。

「ハァ、まったくどこにあるのよ。この私が見つけられないなんて……」
「足止めされてる間に目立つ物は取られたのかもな。だとすれば残りは難易度が高い」
「まだ残ってるわよね？」
「終了の条件が全ての宝箱が見つかることだからね。まだ合図がない以上は残ってるはずだ」
「そうね……早くなんとかしないと」
見るからにナミの余裕が無くなっていることはサンジも気付いている。
体力的にではなくおそらく精神的に。負けることを恐れて余計な体力を使っているのだろう。
柔らかく微笑んだサンジは走りながらも彼女へ言った。
「大丈夫さナミさん。きっと見つかる、なんて軽々しく言うつもりはないが、仲間が居る。うちの連中はレディを除いて厄介な野郎ばかりだがやる時はやる奴らだ」
「それはわかってるけど……」
「全部ナミさんが背負い込む必要はない。それはビビちゃんも一緒だ。おれたちはおれたちにできることをやる。それだけでいい」
「うん……」
「なぁに、もしもの時はあいつらのケツを引っ叩いてやればいい。それも立派な協力さ」
「ふぅ……そうね」
足は止めなかったが意識を切り替えることはできて、ナミもようやく笑みを浮かべた。
「ありがとうサンジくん。やっと頭が冷えたわ」
「いやいや、そう大したことじゃ」
「でも私、別に諦めた訳じゃないからね。絶対見つけて二回戦に進むわよ」
「はぁ～いナミさぁ～ん！」
先程よりもやる気が湧いて、不思議と力が漲ってくる感覚。

二人は速度を速めて走る。
数分とかからずにナミがあっと声を発する。前方、ふとした瞬間にようやく宝箱を発見し、見上げれば竹の細い枝に引っ掛けられる形で宝箱がぶら下がっていた。
思いのほか見つけやすい状態で置かれているのである。
まさか罠ではないかと思うものの、逃す訳にはいかないと考えるのも仕方ない。
二人は笑みを浮かべ、そちらに向かう。
少々高い位置にあった。
サンジが跳ぼうとするのだが、それを押し留めたナミが自身の武器を組み上げる。
「やっと見つかった。これでおれたちもクリアできそうだな」
「待ってサンジくん。私がやる」
「え？　ナミさん？」
「ウソップが変な技ばっかり用意してたけど、これなら使える」
ウソップが作ったナミの新しい武器、〝天候棒（クリマ・タクト）〟。
水色の短い棒が三本。それらを様々な形に組み合わせて使用する武器らしいが、先程あった乱戦の中で説明書を見ながら試してみたところ、使える技はほんの数個。
ただしそれは、ウソップの説明に従えばの話だ。
三本にはそれぞれ役割があり、吹いたり振ったりすると、〝熱気泡（ヒートボール）〟、〝冷気泡（クールボール）〟、〝電気泡（サンダーボール）〟という性質の異なる気泡を生み出すことができる。
航海士として気候を熟知するナミにとってはこれだけで強力な武器になる。
使ったのはたった一度の戦闘。その間に数度使うだけで理解できた。
この武器の強みは、三つの気泡を操り、上手く組み合わせ、周囲の気圧や温度、湿度を人為的に操作することで天候を操作することにある。
他人が持てばただの宴会芸用の道具。

それをナミが持てば利用価値のある武器に変わる。
ナミは素早く二本の棒を十字に組み合わせ、最後の一本を柄のように取り付けた。
両手で柄を持ち、バットを振るように天候棒（クリマ・タクト）を振り抜く。
先端にあった十字の二本をブーメランのように飛ばし、真っ直ぐ宝箱へと向かっていった。
その二本は、振れば熱気泡（ヒートボール）と冷気砲（クールボール）を生み出すもの。
回転した結果、温かい気泡と冷たい気泡が空中で混ざり合い、気流を生み出し、天候棒（クリマ・タクト）が宝箱に接触して動きを止めた瞬間、爆発的な風を生み出した。
これも先程使って試してみた。強い衝撃を受けて枝が折れると宝箱が落下してくる。
サンジは嬉しそうに声を発して、この武器に手応えを感じたナミも笑みを深めた。
「おおっ！　ナミさんすごい！」
「よし、やっぱり使える」
ブーメランのように飛ばした二本が戻ってくる間、宝箱は高い位置から落下してきた。
その時である。
竹を掴んでは空を飛び、突如姿を現した大男が空中でその宝箱をキャッチしてしまったのだ。
「ウッキィ～！　捕まえたァ～！」
「あぁっ!?」
「ちょっと！　それ私のお宝！」
素早い動きでやってきたマシラはキャッチした宝箱を左手のみで小脇に抱えて、にんまり笑う。まだ二人には気付いていない様子で純粋に嬉しそうだ。
そうなると怒り狂うのがサンジである。
ナミの努力を無下にするような横入りを見て、彼の怒りはかつてないほど燃え上がった。
「てんめぇ～！　ナミさんの活躍も知らずに何やらかしとんじゃク

ラァ！」
「ウキ？　何言ってんだ、奪い合いもルールだろ」
「この猿野郎！　いいからそいつを返しやがれ！」
「猿!?　おいおい、お前もおれを〝猿あがり〟と呼ぶのか！　ウッキッキ！」
落下の最中、姿勢も崩さず落ちてくるマシラを目指し、サンジは強靭な脚力で高く跳び上がる。
空中において二人の距離は一気に縮まった。
「クソ猿野郎がァ！」
「そんなに褒めんなって！　だがいくらファンの頼みとはいえ、こいつは譲れねぇ。じゃねぇとおれたちが負けちまうからな」
着地を待たず、互いに空中で攻撃を行う。
サンジは跳んだ勢いを利用して強烈な蹴りを繰り出した。
右腕をぐるぐる回したマシラはパンチで迎え撃ち、正面から激突する。
「腹肉（フランシェ）シュート！」
「猿殴り！」
衝突した瞬間、互いの体に凄まじい衝撃が駆け抜ける。
とても耐え切れるほどの威力ではなく、互いに顔を歪ませ、次の瞬間には撃ち出されるように両者互いに後方へと吹き飛ばされた。
「うおっ!?」
「ウキィ～!?」
「うそっ、サンジくんと互角!?　なんなのあの猿……！」
サンジはナミの傍まで吹き飛ばされて地面を転がり、なんとか姿勢を立て直して膝をつく。
一方マシラは宝箱を抱えたまま、激突しただけで何本か竹を折りつつ、どこかへ消えてしまう。
角度が悪かったのか、一瞬にしてマシラがどこへ行ったのかわからなくなってしまった。しかしまだそう遠くないはず。舌打ちしたサンジは逃げられる前に追おうと立ち上がる。
駆け出した時、同じことを考えていたナミも走っていた。

「すまねぇナミさん、おれのミスだ……！」
「謝らなくていいわよ。まだ間に合う。一回戦が終わる前に取り返せば――」
走り出した瞬間、しかし、空に上がった花火が轟音を発した。
その一瞬は驚愕で包まれる。
二人で示し合わせた訳でもないのに立ち止まってしまい、見開いた目が空を見上げ、信じられないという顔でその花火が意味するものを探ろうと考えていた。
嘘であって欲しいと思ったところで、結果は変わらず。
スピーカーを通したハッタリーの絶叫が古代島に響き渡った。
《試合終了〜!! たった今最後の宝箱がゲットされた！ これで一回戦は終了だァ！》
「なっ!?」
「うそでしょ!? このタイミングで!?」
それは無情な宣言であって、彼らに絶望感を与える一言であった。
呆然と立ち尽くすナミとサンジは信じられず、しかし終わってしまった今、結果を変えることなどできはしない。一回戦は終わってしまったのだ。
素直に受け入れることができないのか、二人はしばらくその場から動けなかった。

予選二回戦　クロスカントリー

《試合終了～!!　たった今最後の宝箱がゲットされた！　これで一回戦は終了だァ！》

その声が響いた瞬間、声が聞こえた直前に手に入れた宝箱を掲げ、ルフィが笑顔で叫んだ。

「よっしゃ～！　間に合ったぁ～！」

「ハァ、危なかった……ルフィさんの勘が無ければ見つからなかった」

ルフィの背後でビビが呼吸を整えようと努め、顔や服の所々が汚れた様子で大きく息を吐く。

現在二人が居るのは島の中心にそびえ立つ、最も高い山の中腹辺りにある洞窟で、規模は小さく少し進むと行き止まりだったが、そこにぽつんと宝箱が置かれていた。急勾配の岩肌を登っただけの価値はあった。他人が近付かなかったそこに最後の一つがあったらしい。

そこへ導いたのは勘に頼ったルフィであり、改めて彼に従ってよかったと思う。

結局バギーとアルビダには逃げられてしまった。逃げに徹した二人の能力の使い方は目を見張るものがあり、懸賞金の額とは異なる実力を感じることだろう。

一度はもうだめかと諦めかけたが、ルフィが諦めなかったことでなんとかクリアできた。

再びビビはルフィに感謝し、走り続けてよかったと実感する。

落ち着いて呼吸を整えようとする、その時。

ハッタリーの実況は尚も続いていた。

《それではこれより、予選二回戦を開始しまぁす！》

「ええっ!?」

「そんな、今終わったばかりなのに……！」

《予選第二回戦！　クロスカントリー!!》

スピーカーで大きくなったハッタリーの声が聞こえる。

ルフィとビビは慌てて洞窟の外へ出て、山の上から島を見渡した。

大きな鳥の背に乗って島の状況を見ながらハッタリーがマイクを握って話している。その様を見ながらも驚きが隠せず、動揺しながらハッタリーを見つめる。
ルール説明はすでに始まっていた。
聞かなければならないと思い、動揺を押し殺して必死に耳を傾ける。
《島の北側に隣の島へ移るための細い砂浜が続いている！　通称〝アスレチック島〟へ移動し、様々な障害を乗り越えてゴールへ到達すれば勝ちだ！　この競技で残れるのは１００組！　ここから２００組が振るい落とされるぞ！　善は急げだ！》
「おいビビ、北ってどっちだ？」
「それならさっき通ったはずよ。それにここからなら多分見える。多分、あっち」
「あれか！」
ビビに指差してもらい、島の北側を見たルフィが目を輝かせた。
彼らが今居る古代島のすぐ隣、白く細長い砂浜で繋がった、縦に長い島があり、まるで蛇のような形で存在感を発揮していた。それが通称〝アスレチック島〟らしい。
《ただし絶対的なルールが一つ！　それは今見つけた宝箱を守ること！　当然次の競技でも互いに妨害が行われるだろうが、宝箱を失ったペアはその時点で失格！　ゴールに辿り着くことなくレースから排除されてしまう！　どうやって排除されるかはその時のお楽しみだ！　もちろん二人一組でゴールしなければゴールとは認められない！　二人一緒にゴールしてくれ！》
「先に辿り着いた１００組だけが残れる……ルフィさん！」
「行くぞ！　一番にゴールしてやる！」
方角はわかった。
決意したルフィは迷わず飛び出し、宝箱を抱えて山の斜面を駆け下りる。頷いたビビも遅れず彼へ続いて、二人揃って島の北側、アスレチック島を目指し始めた。
そこへ辿り着く前に深い森を抜けなければならない。

目を凝らして見ればすでに何人かの人間が砂浜へ到達していて、急ぐ必要があった。
バサリと翼を広げ、ハッタリーを乗せた鳥は細長い砂浜へ向かう。
眼下を眺めて笑みがあり、この状況をひどく楽しんでいる様子だった。
彼は上機嫌に語って、鳥が首から提げるスピーカーが島中に声を伝える。
《さぁて、残念ながら宝箱を手に入れられなかった諸君、敗者専用の船を用意している。君たちはそちらへ向かってくれ。もうゴージャス・ハッタリー号には戻れないぞ。もしこの言いつけを守れずに隣の島へ向かうことがあれば、きっと大怪我をしてしまうから気をつけてくれ》
笑顔で楽しそうに告げて、宝箱を手に入れた海賊たちは必死に走っている様を見やる。
彼らの本気が伝わってくるため見ているだけでも心が躍った。
山を駆け下り、森へ入ったルフィとビビは、先を急いで走りながらも話していた。
木々が視界を悪くして、草むらが道を隠して邪魔をする。それでも止まる訳にはいかない。ここで勝てなければアラバスタへの航路が途切れてしまう結果になるからだ。
改めてトレジャーバトルの辛さを思い知った気がする。それは単純な競技の過酷さのみでなく、休む暇を与えずに競技が続いたことではっきりした。
予選がいくつ用意されているのかは知らないが、次もきっと簡単ではない。
ビビは疲労感を覚えつつも、弱音を吐こうという意志は一切なかったようだ。
「一回戦が終わった時点で残っているのは３００組。その中からたった１００組しか残れない。次もきっと熾烈なレースになるはずよ。それに気になるのは途中にある障害物ね」
「関係ねぇよ。速く着いたらいいんだろ？」

「そんなに簡単なことじゃないわ。何か作戦はあるの？」
「とにかく急ぐ！」
「それは作戦とは言わないのっ」
呑気なルフィに苦言を言いつつ、ビビは不意に周囲を見回す。
森の中に数名、他の海賊が見えた。
知らない顔ならいくらでも見つかるが仲間の姿は見つからない。気にすることが失礼に値するとは理解しているものの、仲間たちがどうなったか、思わず心配してしまう。
「みんなは無事かしら……宝箱を見つけていればいいけれど」
「心配いらねぇよ。あいつらは自分でなんとかする」
「ええ……」
「なぁビビ。お前は何でもかんでも助けようとするだろ」
「え？」
「自分の国のこと考えて、おれたちのことまで心配してたらお前が疲れるだろ。おれたちのことは考えなくていい。全部自分で抱え込むな」
草むらを飛び越えながらルフィは笑みを湛えて気楽に言う。
ビビは走る速度はそのまま、彼の顔をじっと見つめた。
「作戦ならキリが考えてくれるし、航海のことならナミに任せりゃいい。メシはサンジが作ってくれて、怪我すりゃチョッパーが治して、落ち込んだらウソップが嘘ついて楽しませてくれるし、辛いことがあったらシルクに言え。強ぇ奴らが居たらおれとゾロでぶっ飛ばしてやる。そんでおれたちに言えなきゃちくわのおっさんとカルーに言え」
「ルフィさん……」
「お前が国を助けてぇなら何があってもおれたちが助けてやる。心配すんな。もう仲間だろ」
彼の言わんとすることが伝わり、ビビは笑みを柔らかくする。
一人で抱え込む必要はない。もっと仲間を頼れと言いたいのだろう。
にっと笑う彼の優しさに救われて、まだ油断できないとはいえ少し

気が楽になった。
「ありがとう。私一人じゃ、きっと何もできなかった。みんなが居てくれるから戦える」
「礼なんかいいよ。まだなんも終わってねぇしな」
「そうね。本当に始まるのは、これから」
「メシ食わせろよ」
「え？」
「クロコダイルをぶっ飛ばしたら、腹いっぱいメシ食わせてくれ」
あっさりとした要求にきょとんとする。足は止めなかったがその瞬間に体の力が抜けた。
王女に対する要求が、ただメシを食わせてくれというもの。
微笑んだ彼女は快く受け入れる。
「ええ、もちろん。約束するわ」
「しっしっし」
不思議と疲労も忘れるかのようだ。少なくとも心は楽になっていた。
「そうだ、やっぱり賞品にエターナルポースと肉もらおう。ビビも肉食いてぇだろ」
「いえ、私は別に……」
「アラバスタが幸せになるにはお前が笑ってなきゃだめだ。うめぇ肉食えば笑いたくなるだろ」
無邪気にそう言う彼は本当に子供みたいな人物だ。
ビビは頷き、くすくすと笑いながら答えた。
「だけど二つも望むなんてだめよ。賞品はアラバスタのエターナルポースをお願いして、お肉はサンジさんにお願いしましょう。彼の料理はいつも美味しいから」
「そうだな。じゃあそうしよう」
「その前に優勝しなきゃいけないわ」
「それなら任せろ。絶対勝つ！」
気合いを入れ直したところで森を抜け、視界が開けた。
ついにアスレチック島へ続く砂浜を目前にする。すでに他の海賊

が走っているのが見え、そこに居る人数だけでも多く感じる。
出遅れたと感じてしまう光景であり、二人の表情が引き締められた。
「見えた！　あれが次の島か！」
「もうかなりの人たちが渡ってるわ。急がないと」
「おう！」
砂浜へ入って細長い道へと走り出す。
前方には宝箱を抱えて走る他の参加者の姿があって、距離はそれなりにある。一回戦で散々走り回った後で追い抜くことは難しい。
さらに後方からも追ってくる者たちが居て、一瞬たりとも気が抜けない状況だ。
やはりまだまだ落ち着けそうにはない、慌ただしい環境だった。
先を急いでいるのだが砂に足を取られて、ある程度慣れているとはいっても速度は変わる。前の人間を追い抜こうと考えることさえ億劫になりそうだ。
それでも必死に足を前へ出し、残った体力を気にせず前を目指す。
細長い砂浜は左右を海に挟まれ、幅はせいぜい五メートル程度。
突如、左右で海水が跳ねた瞬間を、ルフィとビビは同時に目をやって気付いた。
それは、海から飛び出して砂浜へやってきた。
人間ではない。突然の登場ではあるが一目で外見は認識できる。
青い毛を持つ動物であり、彼らの前方を走っていた参加者へ襲い掛かり、数匹は高速で振り抜いた拳で屈強な男を殴り飛ばし、数匹は彼らから宝箱を奪って海へ潜ってしまう。
ぎょっとしてしまい、改めてまじまじと見つめる。
全身を覆う青い毛に兎のような長い耳。首の後ろと指の間に被膜があって、長い尾もある。
二人が見るのは初めてだったが、それはシーラパーンという動物だった。
「なんだありゃ。変な奴」
「ひょっとして参加者を襲うよう訓練された生物なのかしら……」

《奴らが姿を現したぞォ！　今回特別にブルーベリータイムズ社と契約してもらったレースの妨害者！　海を支配するのはシーラパーンの群れだ！》
「シーラパーン？」
《彼らは格闘が得意だから近付かれると厄介だぞ！　注意してくれ！》
頭上から聞こえるハッタリーの実況を聞きつつ、ルフィとビビは足を止めない。
砂浜には五匹のシーラパーンが仁王立ちしており、そのまま進めば当然鉢合わせになる。邪魔をするというのなら戦う必要があり、即座にルフィが目つきを変えた。
持っていた宝箱がビビへ手渡される。
どうやら彼が一人で戦うつもりらしく、その動きからシーラパーンにも意図が伝わる。
「ビビ、これ頼む」
「は、はい。ルフィさん、気をつけて」
「心配すんな。負けねぇよ」
渡した直後にルフィだけが速度を上げた。
両腕で予備動作を行い、一気に五匹を纏めて仕留めようとする。
「ゴムゴムの――」
その動きを見て嫌な予感がしたのか。五匹のシーラパーンが全く同時に地面を蹴り、自ら海の中へと飛び込んだ。左右に分かれて姿が消え、ルフィも驚いた顔で腕を止める。
どうやら逃げてしまったようだ。
しかしそう遠くには行っていないことがわかって、彼は歩調を緩めてビビを待つ。
「なんだ、あいつら逃げちまったよ。もう来ねぇのかな？」
「そんなことはないと思うけど――あっ、ルフィさん！」
「んっ」
進行方向に対して左側から、海水を跳ね上げてシーラパーンが飛び出してくる。

狙いはビビ。宝箱を直接狙ってきた。
瞬時に反応したルフィが地面を蹴ってそちらに跳び、着地する前から右足を伸ばす。ビビに向かって飛んでくるシーラパーンの腹を蹴りつけた。
何とか攻撃を止めて、シーラパーンは砂浜を転がる。
すぐに起き上がり、ダメージはさほどない様子であった。
彼らの後ろからやってきた海賊たちの道を塞ぐ状況となってしまい、後続の足が止まった。
シーラパーンは即座に判断を変え、跳び上がってそちらへ襲い掛かる。
必然的にルフィとビビを襲う脅威が無くなった形になる。前に進むならば今の内だ。ルフィが宝箱を受け取って前へ立ち、ビビを呼んで走り出す。
周囲の至る所でシーラパーンが飛び跳ね、海賊を襲い、阿鼻叫喚の様相である。
「行くぞ！」
「え、ええ」
想像以上に荒々しい光景でビビは恐怖心を抱く。
自由に海中を移動する動物。人間を呆気なく殴り飛ばしてしまう強さに驚きが隠せない。
彼らの存在があることで砂浜はひどい混乱状態にあった。
あちこちで参加者が襲われて、宝箱を奪われるか本人が気絶させられ、脱落者が増えている。この地点だけですでに十組以上が競技を続けられなくなっていた。
倒れた海賊の傍を通り抜けて先を目指す。
左右の海を見ればシーラパーンが顔を出して泳いでいるのが確認できて、今もまだ自分たちが狙われているのだとわかる。不安に思うビビにルフィが言った。
「ビビ！　心配すんな、前だけ見てろ！」
「前を？」
「何があってもおれが守ってやる！　まっすぐ進め！」

導きながらルフィが強く言ってくれるため、ビビは力強く頷いた。
彼が居るのなら迷わず進むことができる。
雑念を振り払い、覚悟を改めたビビは目つきを変え、踏み出す足に力を込めた。
左右の海で、波が変わろうとしていた。
シーラパーンが集団で泳いでいるらしく、その動きによって新たな波が作られている。
彼らが知る由もなかったが、シーラパーンの特徴の一つに、自らの泳ぎによって〝うさぎ波〟を作ることができるというものがある。
一匹では決してできない芸当だが群れが居れば簡単だ。
気になってどちらも確認したビビは冷や汗を垂らす。
海流が変わり、波を作った後、シーラパーンは一斉に海中に姿を隠す。
「何か来るわ！」
「ん？　何かってなんだ？」
潜ったシーラパーンが一斉に海上へ飛び出してきた。高いジャンプと共に海流が跳ね、両側から砂浜へと襲い掛かる。シーラパーンと海流が同時にやってくるのである。
ルフィとビビは驚愕の声を発し、逃げようとするのだが範囲が広い。
慌てて地面を蹴って跳ぶのだが逃げ切れず、滝のように降ってきた海流に呑まれ、押されるがままに地面を転がる。そして姿勢が崩れたところでシーラパーンが接近してきた。
優先するのは宝箱を持ったルフィ。
頭を振って水滴を飛ばす彼にシーラパーンの尻尾が振るわれ、思い切り殴り飛ばされた。
「ぶほっ!?」
「ルフィさん！」
頭を殴られて勢いよく転んでしまい、それでも宝箱は離さない。
勢いを利用してすぐさま起き上がって、攻撃したシーラパーンを睨んだルフィは迷わず動いた。

逃げられないのなら戦うまで。両手で宝箱を持って回転し、遠心力を利用して腕を伸ばすと、宝箱を武器にしてシーラパーンを殴ったのである。

「こんにゃろォ！」

胴体に当たり、飛んでいったシーラパーンは海へ落ちる。しかしすぐに海面へ顔を出して、外見から見てもダメージが大したことないのは分かり易い。

怯えるどころか驚いてさえいないようで、かなりのタフさが予想される。

同じくシーラパーンに襲われるビビが、自身に向かってくる一匹へ向けて攻撃を行う。

独特の武器を回転させ、相手のパンチを避けながらカウンターで腹へ一撃を入れた。

「孔雀（クジャッキー）スラッシャー！」

糸の先に付けられた刃物で胴体を切り付け、わずかに切り傷をつけた。

大したダメージではなかったが、警戒心を強めたシーラパーンはギロリとビビを睨み、素早くその場から退いて海へ飛び込んだ。

相手は強い。戦っていてはいつまで経っても進めないだろう。

戦わずに先を急ぐべきだ。

咄嗟に判断したビビはルフィへ振り向き、彼の名を呼ぶ。

ルフィは相変わらず襲ってくるシーラパーンを宝箱で殴り飛ばしており、彼女に呼ばれなければ動かなかっただろう。そういった意味でもビビが組んだ意味はあった。

途切れることのないシーラパーンの襲撃により、細長い砂浜の全域が混乱に包まれている。

他の参加者が次々脱落している。今が絶好の好機だ。

「先を急ぎましょう！　今なら追い上げられるわ！」

「おしきたァ！」

宝箱を頭の上に掲げて持ち、鼻息も荒く駆け出すルフィを先導してビビが走る。

至る所で海水が跳び上がって滝の如く降ってくる。それを避けながら、シーラパーンを警戒しながら、道中倒れた海賊たちを飛び越えて次の島を目指していた。
まだ競技が始まってさえいないというのに、凄惨な光景が広がっている。
一体この先にどんな試練が待つのか。想像するだけで表情が変化した。
海水で濡れた髪を掻き上げ、ビビは周囲の環境に注意し続ける。
再び海でシーラパーンの群れが泳いでいた。まだまだ攻撃の手を緩めるつもりはないらしい。
ぐっと歯噛みし、どうすれば避けられるのだろうと考えを巡らせる。少々濡れたところで気にはしないとはいえ、もし海に引きずり込まれればルフィは抵抗できない。それだけはだめだ。かといって海へ潜って戦おうとすれば敵の思う壺。
あいにく今は逃げるしかなくて、二人の表情は優れない。
シーラパーンたちが海中へ潜った。
海流と共に襲うつもりだろう。追い抜いてしまったため今は標的が自分たちのみ。
ぐっと海面が盛り上がり、直後、爆発するように海流が空へ跳び上がった。しかし今度は先程とは違う変化があり、飛び出してきたのはシーラパーンだけではない。
それは空中で身を捻り、手に持った長大なノコギリを振り回す。
周囲に居るシーラパーンの肉体を深々と切り裂き、一瞬にして数匹を倒した。
自身の右側にある海、二人はその存在を見上げていた。
ノコギリを振り回して落下してくる。
それは久方ぶりに見る傘下の頭、アーロンだった。
「シャーッハッハッハ！　麦わらァ！」
「あ！　アーロン！」
ドスンと重々しい音を立てて砂浜に着地し、立ち上がってルフィを睨みつける。ルフィもまた彼を見ていて気付かなかったが、ビビが左

側を警戒すれば、そちらからはっちゃんが現れて同じくシーラパーンを倒していた。四本の手に剣を持ち、一本に黄金の矛を、一本は宝箱を抱えている。
目的がどうであれ、助けられたのは事実だったようだ。
アーロンは笑みを浮かべてルフィの顔を見下ろしている。
不思議だったのは、これ見よがしに敵意をぶつけながら今すぐ襲おうという態度がないことだ。
彼は思いのほか冷静な様子で話し始めた。
「てめぇを潰す良い機会だ。おれが勝った時はてめぇが死ぬ時だ。忘れるな」
「いいよ。どうせ負けねぇから」
「チッ、相変わらずムカつく野郎だぜ……」
そう呟くとアーロンは目を逸らしてしまい、戦おうとはせず先を急ごうとする。
その態度に首を傾げたルフィは素直な疑問を口にした。
「ここでやらねぇのか？」
「せっかくなら衆人環視の中で殺してやる。どうせてめぇは本戦まで来るだろ」
「しっしっし、そうか。じゃあまた後でやろう」
にやりと笑うアーロンへ言い返し、ルフィも上機嫌そうに笑う。
「この大会が人生最後の娯楽だ！　せいぜい楽しんでろ！　シャーッハッハッハァ！」
アーロンは再び海へ飛び込み、人間には持ち得ない遊泳速度で先を急ぐ。
それを見てからはっちゃんも後を追って海へ向かった。
「ニュ～、待ってくれよアーロンさん。麦わらぁ、そういうことだからまたな」
「ああ。お前らも頑張れよ」
はっちゃんが海へ飛び込んで海中に姿を消した。
立ち止まっていた二人は見送った後で顔を見合わせ、再び出発する。

数匹のシーラパーンが倒されたとはいえまだ全滅した訳ではない。急がなければ他の場所からもまた集まってくるだろう。当然歩く余裕はなく走り出す。
「そういえばルフィさんって、傘下の海賊団が居るのよね……さっきの人たちがそう？」
「ああ。そうしようって言ったのはキリだけどな」
「まだルーキーの域を出ないはずなのに、凄いわ。ひょっとしたら、あなたたちなら本当に海賊王になれるのかもしれない……」
「何言ってんだ、ひょっとしたらじゃなくて海賊王になるぞ、おれは」
ししし と笑ってルフィは上機嫌そうだ。
傍から見ていると仲が悪いのだろうかと思ったものの、アーロンとの会話があっても不機嫌になる様子はない。それによって彼の器を見た気がする。
ビビは以前、ナミやシルクから聞かされていた。半ば無理やり傘下にしたアーロン一味はナミにとっては親の仇なのだと。
その頃にはナミがあっけらかんと話すため不思議に思ったが、彼を見て思う。
ルフィが居るから笑えるのだ。
本来なら心配すべき事柄や、憎しみで受け入れられないという提案も、この仲間たちが居るから受け入れることができてナミは笑っているのだろう。
或いはそれが王の風格なのかもしれない。
前々から凄い人だと思っていたが、ビビはこの時にルフィの見方を変えた気がする。
今は二人一組のペア。
自分は彼を頼るし、ルフィに頼ってもらわなければならない。それだけの力が必要だと思う。
些細なこととはいっても一つ試練を乗り越える度に成長できる気がする。
シーラパーンが全力で追ってくる砂浜を、ルフィとビビは弾む足取

りで駆け抜けた。

クロスカントリー（2）

古代島から続く砂浜を通り、参加者が続々とアスレチック島へ移動していく。
鳥の背に乗るハッタリーは島の様子を見ながら実況する。
アスレチック島は縦に長く伸びた形。その中に様々な環境があり、自然にできた一本の道が曲がりくねりながらも続いている。道中にある様々な障害は時に人為的に、しかし大半が島の環境その物が彼らの試練となって立ちはだかるだろう。
砂浜から島へ入った地点。そこに最初の試練がある。
すでに走っている海賊が存在して、ハッタリーは彼らを見ながらマイクを握って言った。
《二回戦が始まってからすでに数分。先頭集団はすでにアスレチック島に入っているぞ。島に入るとすぐに最初の試練が待ち受ける。第一の試練、名付けて〝トラップ街道〟！》
ハッタリーの声が興奮からか大きくなる。
参加者たちは彼の声を聞きながら走っていた。
しかしその街道、乾いた土の道は普通に見えるものの、そこに置かれた物は普通ではない。
《この街道には我々ブルーベリータイムズ社が罠を仕掛けさせてもらった！　といっても落とし穴などの危険な物はないので安心して欲しい。あるのはまきびしやトラバサミのみ。ただしさっきと同じで、ここにも妨害者は居るので注意してくれ！》
その声を聞きながら街道へ入り、シルクとチョッパーは罠の数々を見つけた。
確かに説明の通り、隠されることもなくまきびしやトラバサミが地面にばら撒かれていて、その存在感は異質な物だと感じられた。
これらを避けながら進まなければならないのが第一の試練なのだという。
人型のチョッパーが宝箱を抱えて、その隣に抜き身の剣を持ったシルクが走る。

二回戦開始の時点で砂浜の近くに居たため、かなり早い段階で渡り切ったらしい。
周りに他の参加者の姿も見える。だが前方に居るのはほんの数名だ。
第一の試練はそう難しいものではない。ただ罠を避けて進むだけ、さほど苦労はしないはず。
シルクとチョッパーは勝利する希望を持って進んでいた。
「罠があるぞ。いっぱいある」
「大丈夫。ちゃんと見て避けて歩けば問題ないよ」
「そうだけど、妨害者が居るって言ってた。さっきの奴らみたいに何かあるんじゃないかな」
「うん……その可能性は高いと思う」
小さく頷き、不安そうに表情を歪めたチョッパーへシルクが答えた。
「だけど生き残れる人数には限りがある。危険だとしても急がなきゃ」
「みんな、大丈夫かな」
「心配ないよ。みんなもきっと上手くやってる。私たちは自分のことに集中しよう」
「うん。そうだよな」
話しながら進んでいる内に罠が設置されている地点へ近付いてきた。
まきびしとトラバサミ、種類で見ればたった二つだが、おびただしい数が置かれている。これらを上手く避けなければ時間をロスするだろう。しかし足の踏み場を探すのが難しいほどに用意されていて、勢いだけで突破できるほど簡単な道ではない。
この先は絶対に集中しなければならない。
自分のためでもあり、それが仲間のためにもなる。
気合いを入れ直して二人はその地点へ足を踏み入れようとしていた。
「行くよチョッパー。足元と周りに注意してね」

「わかってる――シルク！　危ない！」
突然チョッパーが大声を出し、右手でシルクの腕を引いた。
その瞬間に彼女の足が止まって、目の前を拳大の石が通り過ぎていく。誰かが投げたとしか思えない速度と軌道で二人の前を横切っていった。
今度こそ完璧に足を止め、石が飛んできた方向を見る。
想像した通り、やはり妨害者である動物が石を投げてきたようだった。
《動き出したぞォ、今度の妨害者はラパーンの群れだ！　彼らの攻撃を上手く避けて進め！》
「びっくりした……ラパーン？　さっきのシーラパーンに似てるね」
「ラパーンはおれの故郷にも居た。獰猛で人を襲うこともある。だけどこいつら」
その場所は道が一本伸びているのみで、道の両側は至って普通の原っぱが広がっているだけで罠の類は置かれていない。しかし何もないのが逆に怪しいという環境だ。事前に落とし穴はないと言っていたが、もし道を外れることがあればそこにこそひどい罠が潜んでいるのだろう。
そんな地帯から多少の距離を置き、海に落ちるというギリギリの位置にラパーンが居る。
見栄えは大きな兎といった具合である。
怖そうな顔つきをしており、明らかに態度の悪そうな目つきで、丸々とした体に真っ白な体毛、長い耳などは愛らしさなども感じるとはいえ、手に握った石で遊ぶ様は不良のそれを感じさせる。
先程投げた石のスピードから見ても脅威なのは間違いない。それにきっと反撃も難しい。
二人は苦い顔をして、止まっている訳にはいかないと慌てて駆け出した。
「強いぞ。きっと野生の奴らより強い」
「私が能力でガードするよ。チョッパー、先に行って」

「わかった。頼んだぞシルク！」
覚悟を決めて前へ進み、チョッパーを先頭に罠が置かれた地帯へ突入する。
当然妨害のためにラパーンが揃って石を投げ始めていた。
瞬時に防御のためシルクが剣を振って風を起こす。彼らは海を背にして立っている。大きな怪我などさせなくとも海へ落としてしまえばいいと考えていた。
「ええい！」
剣の動きに従い暴風が吹き荒れる。
凄まじい速度で投げられた石は無理やり軌道を変えられ、二人には当たらず。さらに海へ叩き落とすためラパーンの群れへと襲い掛かった。
だが、想像通りにはならない。
ぐっと身を沈めた彼らは地面に爪を突き立て、風に耐え切り、冷淡にシルクを見つめた。
チョッパーが言う通り、彼らは野生とは違った頭の良さを見せつける。
ブルーベリータイムズ社と契約した動物。警戒しなければならない相手だと判断する。
一方で海に落とすことには失敗したとはいえ、投石を防ぐのは難しくないことが理解できた。二人はこれを好機と見て先を急ぎ、足元に注意しながら走る。
敵の攻撃に注意しながら、よく足元を見て罠にかからないようにすればいいだけ。
二人にしてみれば想像よりも簡単に乗り越えられそうな試練だった。
とはいえ、参加者はその二人だけではない。
後続の参加者も追いついてきて、その途端難易度は一気に上がる。
互いに邪魔をしながら先頭を目指す。それがこのレースの醍醐味でもあった。
「どけどけィ！　おれ様の前に立つんじゃねぇ！」

「あ、シルク。あれ……」
「ハデに死ね！　バラバラ砲！」
追い上げてきたらしいバギーが右手をバラバラにして飛ばし、指の間にナイフを挟んで二人への攻撃を行った。飛来してくる手が二人の背を狙う。
振り返って気付いたチョッパーが慌て始め、シルクも彼の存在に気付く。
足元に気をつけつつ立ち止まって、反撃のために剣を振り上げた。
「先に行って！　鎌居太刀！」
「うおおっ!?　なんじゃこりゃあっ!?」
斬撃を含む暴風が吹き荒れ、今度は飛ばした手も含めてバギーへ襲い掛かる。
彼の手や体に切り傷がつけられて後方へ飛ばされた。
バギーは転んでしまい、まだ罠が置かれていない位置だったのが幸いして、ただ地面を転がっただけだ。しかしすぐに全身をバラすと浮遊して起き上がる。
その二人が麦わらの一味であることは見た瞬間に理解していた。以前出会った時にシルクを見ていたからである。チョッパーに関する情報はないが隣に居れば仲間だと思うのは当然だ。
彼女たちは倒すべき敵。傍に居るアルビダが呆れることも知らず、敵意を剥き出しにする。
「おのれ麦わらの一派め！　どこに居てもおれの邪魔をしやがって！」
「仕掛けてきたのはそっちだよ」
「やかましいッ！　貴様らなんぞ優勝させて堪るかってんだ！」
全身がバラバラになったバギーは浮遊しており、その状態のまま向かってきた。
相手にするのも面倒だ。逃げた方が早いと二人は先を急ぐ。
混乱に乗じてラパーンが石を投げつけ始めていた。再び防御のためシルクが風を起こし、飛んでくる石を逸らしてチョッパーを守る。
バギーたちの乱入に加えて彼らの妨害が入ったことで、必然的に注

意力が散漫になったようだ。
シルクとチョッパーが困惑しながら進んでいると、その隙にアルビダが前へ出た。
左手で宝箱を小脇に抱え、右手では金棒を持ち、スベスベの素足で地面を滑って移動している。その速度は驚くほど速い。その上、まきびしやトラバサミが触れても滑ってしまい、ラパーンの投石が当たっても無傷で、物理的な攻撃では一切傷がつかなかった。
「あんたたちも中々やるね。流石はルフィの仲間だよ」
「あなたは？」
「ルフィに惚れてる女さ」
にこりと微笑む彼女はひどく美しい。
しかしその返答には困ってしまい、シルクは不思議そうに表情を歪める。
アルビダはあっさりと彼女たちに追いつき、速度を保ったまま追い抜こうとしていた。
「悪いね。先に行かせてもらうよ」
「あっ、待て！」
「いいよチョッパー。攻撃してこないなら行かせてあげよう」
「だけど」
「それより注意しなきゃいけないことはたくさんあるよ」
アルビダに追い抜かれたことを重要視せず、二人は焦らず自分たちの安全を優先する。地面には無数の罠、左右から石が飛んできて、注意しなければ大怪我では済まない。
後ろからドタドタとバギーもやってくるがそれもいいだろう。
ただ前へ進むことに集中し、敢えて相手にしようとはしなかった。
憤るバギーの大声が聞こえたのも束の間。
二人は振り返ろうとしなかったが新たな声が飛んできてバギーに激突したのである。
「待ちやがれてめぇら！　っーかアルビダ、なぜおれを置いていく!?　ええい、それもこれもあの麦わらのせいだ――！」
「ロケットォ！」

「おぶぅ!?」
突然ルフィが飛んできて、反応する暇もなく背中に激突し、共にまきびしの上に倒れる。
二人揃って痛みから悲鳴を発していた。
その声には反応せずにはいられず、シルクとチョッパーは走りながら振り返る。まきびしが刺さって転げ回っているルフィとバギーを見つけたのだ。
「ぎゃあああっ!?　いてええっ!?」
「ぎゃあああっ!?　刺さる刺さる!?」
「ルフィ。無事だったんだね」
「いや、無事じゃなさそうだぞ……刺さってる」
散々転げ回った後、なんとかまきびしから逃れて立ち上がれた。
斬撃には強いが一点を突く物体には弱かったらしい。バギーは怒り心頭という顔で仁王立ちし、近くに座っていたルフィを見下ろす。それから彼も気付いた。
「おのれクソゴム!　何しやがる!　てめぇはいつもいつもおれの邪魔をしやがって……!」
「ん?　なんだバギーか」
「ハデにふざけんなゴム野郎め!　いい気になりやがって、ここで始末してやる!」
「そうか。悪ぃけどおれ急いでるからよ。また今度でいいか?」
「おうそうか。じゃあしょうがねぇな、また今度に……して堪るかァ!!」
「相変わらずうるせぇなーお前」
怒気を発したバギーは両手にナイフを持ち、指の間に挟むため合計で六本をルフィへ向けた。
こうなればレースよりも戦闘だ。進むことを忘れてその場に立ち尽くしている。
「ここで会ったが百年目ェ!　今日こそはてめぇを倒して――おげぇ!?」
「お?　なんか飛んできた」

警戒せずに突っ立っていたせいでラパーンの投石が腰に当たり、体がバラバラになって地面に散らばってしまう。その一部がまたしても罠にかかって悲鳴が上がった。
ルフィは帽子を押さえながら視線の先を変える。
そのタイミングでラパーンの存在に気付き、好奇心のせいか目を輝かせた。
「うおおっ、なんだあいつら！　ゴリラか？」
「兎だよ。ラパーンっていうんだ」
「ルフィ、ビビは？」
「おーシルク、チョッパー。ビビも来てるぞ」
「ルフィさん！」
少し遅れて宝箱を抱えたビビが走ってくる。
思わず足を止めたシルクとチョッパーも安堵するものの、彼女一人ではない。
ほとんど同じタイミングで他の参加者がやってきた。
そちらは非常に見覚えのある相手で、陸上においても足が遅いという訳ではないらしい。キリバチを担いで走ってきたアーロンがビビを追い抜き、キリバチで地面を叩くと高く舞い上がった。
「シャハハハハッ！　どけどけェ！」
「アーロン！」
「ぎゃああっ!?　てめぇ何する気だこの野郎ォ！」
落下してきたアーロンがキリバチを振り抜き、ルフィとバギーを狙ったらしく、回避した二人が数秒前まで居た地面をガリガリと削り取った。その勢いを利用し、刃を地面に引っ掛けると自分の体をぐっと前へ投げ飛ばす。それで彼らの傍をすぐに離れる。
攻撃のついでであっという間に追い抜いてしまい、着地したアーロンが前へ出た。
「シャーッハッハッハァ！」
「ニュ～、今日はアーロンさん機嫌が良いなぁ。楽しそうでよかったぞ」
「あ、はっちゃん」

「よぉお前ら。止まってていいのか？」
非常に攻撃的な態度で走り去るアーロンに続き、宝箱を運ぶはっちゃんも彼らを抜いていった。
いつまでも立ち止まってはいられない。
どうやら彼に負けたくないと急いでいた様子のルフィは目つきを変え、即座に駆け出した。
「行くぞビビ！」
「ええ！」
「シルク、おれたちも行こう」
「うん。負けられないね」
ルフィとビビが駆け出した直後、シルクとチョッパーも急ぎ始める。
彼らに先を越された形で、ようやく元の姿に戻ったバギーが憤慨しながら叫んでいた。
「チクショー！　どいつもこいつもハデアホどもがァ！　優勝賞品はおれ様のもんだ！　てめぇらなんぞにくれてやるかァ！」
怒りながらバギーも駆け出し、ラパーンの投石が飛び交う街道はひどい混乱状態にあった。
皆が我先にと競い合い、先頭を奪い合う。
不思議と戦闘は起こらずレースの様相が強くなっていた。
その集団の先頭に居たアルビダは最初の試練の終わりを見つける。
進む先に道が途切れていた。
彼女たちが次の試練へ近付いたことを確認して、ハッタリーの実況が聞こえた。それまでも観客に向けて続けていたようだが再び試練の説明だ。
道の先にあったのは高い岸壁である。
垂直の岩の壁にまるで階段のように平たい岩が付いていて、それを使って登るらしい。原理は理解できるが一つ一つの足場にそれなりの距離があって登りにくそうに見える。
《街道を越えると第二の試練！　〝崖登り〟！　見た通りそのまんまだが足場を踏み外せば命の保証はできないぞ！》

高さおよそ二十五メートル。そう簡単に登れる高さではない。
崖の前で能力の使用をやめて足を止めたアルビダは、下から見上げて高さを確認する。
フッと微笑み、腰に提げていたサンダルを履き始めた。
「流石に足を滑らせる訳にはいかないねぇ。ここは注意しておかないと」
彼女が立ち止まったほんの数秒。
後続の参加者が続々と追いついてきて、先頭はアーロン。彼はアルビダを気にすることなく地面を蹴り、彼女の背後から頭を飛び越して岸壁の足場を目指した。
その様はまるで撃ち出された魚雷。金棒で叩き落とすこともできない迫力である。
「鮫（シャーク）・ＯＮ・ＤＡＲＴＳ！」
素早く跳び上がって数段上の足場へ到達し、彼は着地すると同時に振り返った。
他の面子がどんどん追いついてくる。
そこに居るルフィを睨みつけ、挑発するように叫んだ。
「来てみろ！　麦わらァ！」
「もちろんだ！　ビビ、おれに掴まれ！」
「え？　は、はい！」
すぐ後ろを走っていたビビから宝箱を受け取り、彼の背にビビがおぶさる。
宝箱は左手で抱え、右腕だけが勢いよく伸ばされる。アーロンより右側の足場を掴んで、彼に追いつこうという意思ではない。攻撃を仕掛ける様子は見られなかった。
「一気に追い抜いてやる！　ゴムゴムのォ～……ロケット！」
腕を縮める勢いを利用して自らを撃ち出す。ビビを連れた彼は高く跳び上がり、自身より上に居たはずのアーロンさえ抜き去って集団の先頭を奪い、岸壁の上に着地した。
今度はルフィが挑発的な笑顔で振り返る。
アーロンは小さく舌打ちして、先程と同じように強靭な脚力で足場

を飛び移り始めた。
「しっしっし！　見たか！」
「チィ、勝負はこれからだ……！」
アーロンの動きを見てから動き出そうとして、慌ててビビが背から降りた。
宝箱はルフィに託したまま、二人は同時に走り出して先頭を走る。
「おれたちが一番前か？　よぉし、行くぞ～！」
「だけど気をつけましょう。ここから先、何があるかわからないわ――」
目に付くところに敵は居ない。妨害者もない。試練もまだ少し先だろう。
ほんの少しとはいえ安堵しつつ、警戒心を持ちながら二人は進む。
その時、背後から独特の音が聞こえた。
咄嗟に二人が振り返った時、崖の下から空へ向かって飛んでくる炎の軌跡がある。
それは彼らの頭上で一瞬にして人の形となり、余裕のある笑みを見せていた。
「わりぃがルフィ、お前が一位ってのはなしだろ」
「エースゥ！」
空で完全な姿を取り戻したエースは、片手で帽子を押さえ、自身の弟に声をかけると両足が炎に変化して、噴射するように移動を開始する。自らの能力で空を飛んだのだ。
二人の頭上をあっという間に抜き去っていき、前を取られた。
驚く二人だが怯んではいない。
その光景を見ても速度は一切変わらなかった。
「くそぉ～、やっぱりエースはすげぇなぁ。でも負けねぇぞ」
「あれが世界に知られる大海賊の一人なのね。すごい……」
「ボクも居るんだけど」
「お？　あぁ～キリィ！」
バサリと翼の羽ばたきが聞こえ、聞こえた声に振り返れば、紙の鳥に乗ったキリを見つける。

胡坐を掻いて座り、宝箱を抱えて呑気に笑っていた。
途端にルフィは笑顔になり、ビビは驚いた顔で見上げる。
「お～いキリ、おれたちも乗せてくれ！」
「それはだめだよ。今はエースとコンビだもん」
「いいじゃねぇか、ちょっとくらい。船長命令だぞ」
「ズルいこと言うなぁ。競技は競技なんだから自分たちで頑張りなよ」
「ケチ」
「ケチだもん」
平然と話す二人を見ながらビビは改めて凄いと感じる。
ルフィにしろ、キリにしろ、エースにしてもそう。さっきまで近くに居た者にしても、予選一回戦の疲労感を全く見せない。凄まじい体力だと驚いてしまう。
それでいて彼らはそれを誇るような態度もない。
息を切らしながら必死に走るビビは、自分とはまるで違うと感じていた。
一回戦を終えた直後にすぐさま二回戦。しかしこれで終わりとも限らない。
拭いきれない不安を覚えつつ、考えても仕方ないと判断して、勢いよく首を振る。
何があろうとルフィについて行けばいいのだ。
ビビは表情を引き締め直して真っ直ぐ前を見据えた。

クロスカントリー（3）

《レースはどんどん進んでいくぞ！　第三の試練は〝飛び島〟だァ！　崖の間に立っている柱を飛び移って進んでくれ！　当然落ちると大怪我必至だ！》

ハッタリーの視線の先には、突然道が途切れた大きな崖があり、次の陸地に到達するまでおよそ五十メートルはあろうかという地形があった。ただし奇妙なのはその崖の間に直立する柱のような足場があり、その上を飛び移って先へ進むらしい。

人の脚力で崩れるような柱ではないが、跳躍力が要求される。

越えることは決して簡単ではない場所だった。

《妨害のせいかレースは乱戦模様！　順位が次々入れ替わる激しい様相となっているぞ！　一つのミスが大きな命取りになる！　頑張ってくれよォ海賊諸君！》

ルフィたちを追い越したエースが到着し、柱を飛び移ってどんどん先へ進んでいく。

その次はキリがやってきて空から楽々と次の足場を目指していた。

「よくもまぁこんなに変な地形ができるもんだね。アスレチック島とはよく言ったもんだ」

「あなた！」

紙の鳥の背に乗って悠々と進んでいると、突如背後からベビー5に抱き着かれた。いつの間にか追いつかれたようだがここは空である。キリは少し驚きながらも振り返る。

まず最初に見えたのは目を輝かせて嬉しそうなベビー5の笑顔。

その後方では、大の字になった姿勢で空を飛ぶ、奇妙な大男が居た。ベビー5の仲間、バッファロー。彼はグルグルの実の能力者である。

自身の髪や手首や足首に付けた装飾を回転させ、プロペラのようにして空を飛んでいる様子だ。

驚くキリが彼女を抱きとめてやりつつ、不思議そうにバッファローを眺めていた。

「あぁっ、やっと会えた。遅くなってごめんなさい。あなたの役に立ちたくて他の海賊を狩ってる間に一回戦が終わってしまったの。私が宝箱を見つけてあげたかったのに……」
「いやいや、いいよ。ボクらも見つけたし、問題はなかったしさ」
「うっ、それって、私はもう用済みってこと？　あなたの役には立てないの？」
「そんなことは言ってないけど」
ひしと抱き着き、瞳を潤ませるベビー5を見て、キリは苦笑しながら嘆息した。
そんな顔をされると邪険に扱えない。自分が悪者になってしまった気分だ。
そう考えた後、海賊なのだから悪者かと思い、それでも不思議と強く振り払えない自分が居てやり切れない気分になる。結局はまぁいいかと思ってしまった。
そんな振る舞いを見ていたからだろう。
すぐ隣を飛んでいたバッファローがキリへ声をかけた。
「お前どっかで見たことあると思ったら麦わらの一味だすやん。ベビー5に惚れられたか」
「まぁ、どうやらそうみたいで」
「そいつはやめといた方がいいぞ。利用しようとした男はみんな若に消されてるだすやん。そんなことしてるとお前もその内消されるぞ」
「変なこと言わないでよバッファロー！　大丈夫よ、彼は私が守るから！」
「消されるってのは、それはまぁ、あの人なんだろうなぁ……」
「心配しなくていいからね、あなた。大丈夫、バレなければ何も問題なんて起こらない」
キリがぼんやり呟き、脳裏にはとある有名な海賊の顔を思い浮かべる。消されるという話、冗談だとは思えない。きっと今まで何人も消されたのだろう。
その反応を見て捨てられると思ったのか、ベビー5が咄嗟に焦り出

した。
心配させまいと彼の頬を両手で挟み、じっと目を覗き込む。
ともすれば震えそうになる彼女の声は本気の意志を表すかのようだ。
「あなたの役に立ちたいの。なんでも言って。何かして欲しいことはある？」
「んー、そう言われても」
「あーあ、お前もう終わりだすやん。若がキレるな」
「黙っててバッファロー。密告したら許さないから」
「おれが言わなくてもどうせバレるに決まってるだすやん。そいつのビブルカード一日中眺めてたりするからな。ドレスローザに戻った時が終わりの時だ」
「じゃあ戻らないわ」
「戻れって言われてるだろ。またどやされるぞ」
「関係ないわ。私は彼の役に立ちたいの」
「めんどくせぇ奴だすや～ん」
仲間であるはずのバッファローまでそう言ってしまい、やれやれと首を振って黙り込んだ。
キリは苦笑し、多くは言わずに前方に目を向ける。
すでにエースは飛び島地帯を越えていた。向こう側にある陸地へ辿り着き、その辺りは足場が砂になっているようで、道を阻むように大小様々な岩石が転がっている。
彼を助ける必要性は感じないが、あまり離れ過ぎるのも問題だろう。
彼女らの存在があるとはいえ、先を急ごうと改めて考えた。
その時何気なく背後を振り返る。用事があった訳ではないが何かを感じたのかもしれない。
後方、まだ距離はあるが広い道を大きな人間が走っていた。
見間違えるはずもない。巨人族だ。
《さぁ～ここへきて猛烈に追い上げてくる選手が居るぞ！　巨人族のボビー＆ポーゴペアだ！　こいつらの一歩はでか過ぎる！　ここ

で一気にごぼう抜きかァ！》
「巨人族か。あいつらが本戦まで残ると厄介だな」
「あいつらが邪魔なのね。わかったわ、私が始末する」
キリの呟きに反応したベビー5が目を輝かせて彼に言った。
相変わらず挟み込むように頬へ手を置いたままで、その視線から逃れることはできない。
真摯な態度で告げてくるため、受け止めるしかなかった。
「できるの？」
「任せて。あなたのためなら仕留められない敵は存在しないわ」
「そうなんだ……じゃあお願いするよ。怪我はしないでね」
「心配してくれるのね。ありがとう。でも私なら大丈夫だから」
「そっか。それじゃ後で会おうか」
「はい！」
嬉しそうに笑って、首を伸ばしたベビー5がキリの頬へちゅっとキスを送った。
その後で照れながらバッファローの背へ飛び移る。
「行くわよバッファロー！　彼に一人も近付けさせないわ！」
「んに～ん、めんどくせぇだすやん」
「急ぎなさい！」
「いでっ!?　踏むなだすやぁん！」
張り切るベビー5がバッファローの背をヒールで踏むため、痛がるバッファローは嫌そうにしながらも方向転換して、崖へ向かってくる巨人の方を見た。
距離が離れてしまう前にキリがベビー5へ言う。
「あ、ボクの仲間は通していいからね。よろしく」
「わかったわ！」
「あーあー、なんでこんなことしなきゃいけないんだすやん……」
ぶつぶつ言いながらもバッファローが巨人に向かって飛んでいく。
ボビーとポーゴは二人に気付き、攻撃のためだと判断して瞬時に身構えた。
「なんだ敵襲か」

「相手は小さい人間だ。大したことはねぇ」
「時間はかけないわよ！　速攻で決めるわ！」
「へいへい。わかっただすやん」
ベビー5が跳び上がると同時に開戦の合図となった。
バッファローは落ちてくるベビー5を受け止めようとして、ボビーとポーゴが迎え撃つ。
落下してくるベビー5もまた悪魔の実の能力者である。落下中に能力を使用した。
ブキブキの実の全身武器人間。
その力が発揮された瞬間に彼女の全身が変化し、姿は全く違う物体となる。上半身だけが変身してしまい、黒光りするその体はミサイルだった。
彼女の足をバッファローが掴み、グルグルと体を回転させて投擲を行う。
「武器変貌（ブキモルフォーゼ）！」
「グルグル投射砲！」
「ミサイル女（ガール）!!」
遠心力を利用して投げられたベビー5は巨大なミサイルその物。
驚愕して動けない二人に急接近して、反撃のため振るわれた彼らの得物を、自らの意思で回避して尚突進を続ける。結果、彼らを一纏めにして激突した。
凄まじい規模の爆発が起こり、巨人の姿を爆炎の中に包み込んでしまうほどである。
飛び島地帯をゆっくり飛びながらキリはその光景を見ていた。
少なからず驚きを隠せない。ベビー5が能力者だと知ったのもこの時が初めてだ。
爆炎が消え、煙が晴れる頃、ボビーとポーゴはすでに気絶している。ベビー5とバッファローは後続の敵を襲い始めており、攻撃の手を緩める様子はない。
敵に回すと厄介な相手だろう。二人のコンビネーションも見た上で判断した。

「パラミシアか。それにしちゃ破壊力が凄いし、味方でよかったな……とりあえず今は」
敵か味方か、微妙な立場にあるものの、とりあえず知れてよかった。
キリは前を向き、今度こそ急いで飛び島地帯を抜ける。
エースはさらに前を行っていて、どうやらキリが来るのを待っているようだった。
「観戦か？　さっきでけぇ音が聞こえたな」
「向こうで乱戦になってるんだ。ルフィたちなら大丈夫だよ」
「だと思った。でもこっから大変みたいだぞ」
そう言って彼は自身の前方を眺め、待ち受ける試練に笑みを深める。
《お～っと、やはり火拳のエースが飛び出ているぞ！　パートナーの紙使いキリも紙を操って悠々と試練を回避している！　そして辿り着いた第四の試練は〝恐竜ロード〟！》
エースが目前にしている細い道は両側を丸い大きな岩に囲まれ、あまりにも巨大な恐竜が涎を垂らしながら参加者を待ち受けていた。
獰猛な肉食の恐竜であるティラノサウルス。数は十匹。
わざわざ細い道から出てこないのはそこへ誘い込めば勝利は確実だと考えているからだろう。その道を前にしてしゃがんでいるエースだけを見つめ、誰も襲おうとはしない。
周囲の環境。待ち受ける妨害者。ここまでで感じるはずの疲労感。
この競技を辛く感じる材料はいくらでも揃っていた。
ただ、エースが微塵も辛く思っていないことは大会主催者から見ても異常に想える。
岩が転がる砂地を飛び越え、追いついたキリは何を思うでもなくエースの背を眺める。
わくわくしている様はルフィに近い。まるでその物を見ているかのようだ。
《我がブルーベリータイムズ社と契約した恐竜たちが腹を空かせて待ってるぞ！　彼らを掻い潜って食われることなく通り抜けろ！　もし食われてしまったら、その時は自力でどうにかしてくれると有難

い！》
「無茶苦茶言うなぁ」
「それでいいさ。要は食われなきゃいいんだろ」
そう言って立ち上がり、エースは脇目も振らずに駆け出した。
恐竜が待ち受けている小道へ正面から向かっていく。
援護は必要か、と半ば反射的に考えたキリはその考えこそ失礼だと判断して、思わず上げてしまった右手をそっと降ろす。
小道に着地した瞬間、やはり恐竜たちは我先にと動いて襲い掛かってきた。
エースは笑みを浮かべたまま、全く恐れずに跳び上がる。
突進を仕掛けてくる恐竜の頭に飛び乗って、鋭い牙はあっさり回避してしまい、まるで遊んでいる姿にも見える。すかさず別の一匹が大口を開くが今度は彼の頭へ飛び移った。
そうして必死に食らい付こうとする恐竜を回避し、エースはどんどん前へ進む。
確かに道が狭くて動きにくさはある。だがそのスピード、その迫力、決して弱くはない。
エースは全く捕まる気配を見せずに恐竜の頭を蹴って飛び移っていた。
この動きに能力は関係ない。
先程少しだけ見せたメラメラの力は一切使わず、自身の身体能力を頼りに動き、自らの感覚で相手の動きを先読みして、最小限の力で自身を安全な場所へ運んでいる。
離れて見ているからよくわかる。
彼は強い。ルフィが一度も勝てなかったという話が納得できた。
メラメラの能力とは関係なく、恐竜たちを支配しているかのように攻撃が当たらない。
大海賊の風格。今の自分たちではどうあがいても届かないと思えるほど、現在地が違った。
「よっと。忙しないなお前ら」
後ろで乱戦が起こっていると知ったせいか、エースに急ぐ様子はな

い。恐竜たちと戯れるように動いているのは少し待っているのではないかと感じた。
疲労を感じた様子もなく動きの速さは変わらない。
冷静に相手の行動と目的を見極め、最小限の力だけを使う。
恐竜たちの方が疲弊していくように見え、キリは同情して苦笑する。
大口を開けて首を伸ばす恐竜から逃げるため、エースが地面へ降りた。
着地した直後、踏み潰されないようにすぐさま跳び、スライディングで一匹の足の間を抜ける。
その後もすぐに両足で地面を蹴り、高く跳び上がった直後に尻尾が地面を叩いた。
上手く攻撃を避けていたが、空中に躍り出たタイミングで三匹が同時に彼を食おうとする。
どうやら誘い込まれたらしく、思わず小さく声を出す。しかし怖がっている顔ではなくてむしろ感心しているようだ。
多少驚いてはいるものの、キリが心配するほどの出来事ではない。
跳躍の最高点に到達した後、エースは体を回しながら落下していく。
その下では恐竜たちが口を開けて待ち構えていた。
「おおっ。意外にやるなぁお前ら」
「助けは……要らないか」
「仕方ねぇ」
にやりと笑ったエースはそのまま落ちていく。
瞬間、ドクン、と大気が震えた気がした。
明らかにさっきまでにはなかった感覚を覚えて思わずキリが目を見開いている。今の一瞬、とんでもない強者に対面したような、凄まじい迫力を感じて背筋に悪寒が走った。
見れば恐竜たちが口元を震わせ、捕食を忘れて後ずさってしまう。
その結果、エースは至って無事に地面へ着地し、笑顔を崩さず自分の帽子に触れた。

「今のは……」
呆然とした状態で呟く。
理由や原因はわからない。ただあの一瞬、エースが恐竜たちを威圧したことだけは確かだ。
その結果として怯えてしまった十匹のティラノサウルスはエースに対して頭を垂れ、まるで自らの王は彼だと態度で告げているかのよう。
わからないとはいえ、キリは何かしらの力を使ったのだと推測する。
悪魔の実の能力ではないことはわかる。そこで思い出したのは彼が語った〝覇気〟という力。まだ自身が理解できていないその力である可能性は高い。
キリは真剣な目でエースを見つめる。
エースは、頭を垂れた恐竜の鼻先を穏やかな顔で撫でていた。
その姿にまさしく王者を見た気がする。キリが危機感を抱くのも無理はない。
（いつか海賊王の座を巡って、ルフィとエースが戦うことになれば、その時は――）
ただの推測から、わずかに殺気が漏れ出た。
気付けば目の色を変えていたキリにエースが振り返る。
心の内を読まれた気がして少し肩を震わせるが、エースはにこやかに笑っただけだった。
「さて、行くか。急ごうぜキリ。ちょっと遊んじまったしな」
「あ、うん……」
紙の鳥に乗っている彼へ告げ、エースは一足先に駆け出して先へ行ってしまう。
見て見ぬふりをしたに違いない。たった今、見逃されたのだ。
恐ろしい人だと改めて思う。
戦闘能力の話だけではなかった。
彼の生き方や覚悟を感じて自分たちより高みに居ることは理解できた。いずれ戦うことがあるかもしれない。そう考えたことでさら

に偉大さを強く感じられた気がする。
考えていたキリが紙の鳥を操作して、再び他の参加者を待ち始めた恐竜の頭上を越えようとした時だ。何やらドタドタと慌ただしい足音が聞こえてきた。
振り返って確認すると目立つ長身の人物が走ってくる。
キリは驚いて目を見開いた。
目立つ外見の人物は彼の知り合いだったらしい。
猛烈な速度で走ってきて迷いもせずに恐竜が待ち受ける小道へ突入する。その瞬間に先頭の恐竜が大口を開けて迫るのだが、一切の恐怖心を感じさせず。
迫ってくる恐竜を間近に置いて笑みを浮かべたまま叫んでいた。
「ジョーダンじゃな～いわよ～う！」
走る勢いをそのまま使って、素早い動作で跳び、目の前にあった恐竜の頬へ蹴りを叩き込んだ。
「なぁによトカゲェ、邪魔すんじゃないわよぅ！　オカマ拳法〝お控え・ナ・鞭打（フェッテ）〟！」
その動作、エースとはまるで違う。
しなやかな動きながらも強靭な力で恐竜の頬を蹴り抜き、あまりの勢いで姿勢その物が崩れる。蹴られた恐竜は勢いよく転んでしまい、歯も一本折れていた。
唐突な展開に他の恐竜まであんぐりと口を開けている。
軽やかに着地して、その人物はまだ止まらない。
「回る回る！　回るあちしは白鳥の如く！　オカマ拳法～……！」
バレエのように片足で回転し、回り続けながらも高くジャンプした。
近くに居た恐竜へ自ら襲い掛かって、急降下から蹴りを行う。
「〝あの冬の日の回想録（メモワール）〟!!」
強烈な一撃は脳天に叩き込まれてあっという間に意識を失った。
恐竜が地面に倒れ、地響きが鳴る。
その後もくるくる回りながら落ちてきて、大笑いしながら楽しそうだった。

「んが～っはっはっは！　ジョーダンじゃな～いわよ～う！」
見事に着地を決めて最後に一度くるりと回る。
「どんだけでかくてもトカゲ程度じゃあちしは止められないわ～ん！　なぜならあちしは男で女……オカマだからよぅ！」
その人物、見るからに奇妙な風貌だった。
白鳥を模した装飾を付けたコートを身に着けて、かぼちゃパンツのような奇妙な服で、コートの背には〝おかま道（ウェイ）〟と書かれている。
何より、騒がしい顔にはメイクを施し、独特の存在感を主張している。
彼は、或いは彼女は、いわゆるオカマというものだった。
オカマ拳法の使い手、Ｍｒ．２・ボン・クレー。
バロックワークスのオフィサーエージェントであり、キリにとっては知人以上の関係である。
両手で頭上に宝箱を持ち上げ、たった一人でゴールを目指し、走り出した。
「ま～だまだ行くわよーう！　どきなさいよあんたたちィ！」
強さを思い知らされたせいか、すっかり怯えてしまった恐竜たちは簡単に道を譲る。
Ｍｒ．２は残る八匹の間を通り抜けて小道を抜けた。
「びっくりした。何やってんだろ、こんなとこで。任務……って訳じゃなさそうだよなぁ」
紙の鳥で恐竜たちの頭上を通り過ぎながら、キリはＭｒ．２の後を追う。
やたらとうるさいその人は、男女のペアが当然のバロックワークスの中で唯一パートナーを持たない人物。理由は一つ、彼自身が男で女だからだ。
きっと二人一組が決まりのこの大会にも一人で参加したのだろう。相変わらずおかしな人だ。
なぜ彼がこの場に居るのかはわからないものの、少なくともわかったことは一つある。
このタイミングで外に居るところを見れば、アラバスタは現在地か

ら遠くない。
バロックワークスは最終作戦を前にしている状態。そう身勝手な行動はできないはず。
ゴールは以前よりも近付いているらしい。
クロスカントリーとは関係のない場所を思い浮かべ、キリは笑みを浮かべてゴールを目指した。

クロスカントリー（４）

恐竜が居る小道を抜けた先、またしても風景が変わる。
足場は広いが道はない。飛び島と同じだ。いくつかの足場がぽつぽつと点在して、その上を飛び移らなければ進めないらしい。
そこは一帯が泥沼で、足を捕らえて逃がさない環境だった。
《あれは誰だ!?　ここで一人の選手が集団を抜け出したぞ！　火拳のエースを猛追する！》
「んが～っはっはっは！　ちょろいもんねぃ！　一気に行くわよぅ！」
爆走するＭｒ．２が泥の沼を視界に捉えた。
一瞬たりとも表情を変えず、速度を変えることもなくそのまま走り続ける。
彼が誰なのか。映像電伝虫を通して見ている観客たちにさえわからずに、謎の参加者の台頭は賭けを大いに賑わせる。だがもちろん一番人気は火拳のエースであることは間違いない。
ここまでいくつもの波乱があり、ハッタリーの実況にも熱が入る。
《そろそろ後半戦！　第五の試練は〝泥沼地獄〟！　一度足を踏み入れれば二度と出てこれない底なし沼だ！　落ちないように進まなければ命の保証はないぞ！》
「関係ないわねぃ！　突っ込むわぁ～ん！」
Ｍｒ．２は泥沼の中に点在している歪な円形の地面を見ようともしない。
そのままの勢いで走り抜けるつもりで、先程以上の速度で両足を動かした。
「毎日毎日、レッスンレッスン……鍛えに鍛えたあちしのオカマ拳法、止めれるもんなら止めてみろやぁ！　オカマ拳法〝血と汗と涙のルルヴェ〟!!」
《あっ、あぁ～っと、これは!?》
Ｍｒ．２が泥沼に足を踏み入れた。

確かに泥の上に靴が乗ったのだが、沈まない。沈む前に次の足を出して前へ進み、人とは思えない速度で底なし沼の上を走っている。
今までの人生で想像もしなかった光景に、ブルースクエアに居る観客が歓声を発して、同じく興奮したハッタリーが強くマイクを握る。
これが見たかった。普通ならあり得ないはずのものが見たかった。
Ｍｒ．２はまさに人々が見たかったものを見せているだろう。
エースの動きを見た時とは少し違った興奮が生まれ、彼を応援する声が多くなる。
しかし、何が起こるかわからないからこそ海賊の祭典は楽しい。
ハッタリーの目論見通り、他人が前を走ることを許さない海賊が追いついてきた。
「ハデに死ね！　バラバラ砲ッ！」
しぶとく駆けて、恐竜の小道すら抜け出てきたバギーが右手だけを飛ばした。
ナイフも持たずに指を広げ、それ自体には大した攻撃力はないものの、走るＭｒ．２の足を掴む。
足首を掴まれれば当然、邪魔をされて走れなくなったＭｒ．２は勢いよく前へ転び、宝箱を持ったまま体の前面から泥沼にハマる。べちゃりと重々しい音を伴って姿が消えた。
「ぎゃあああああっ!?」
「ギャーッハッハッハ！　ざまぁみろオカマ野郎！　おれ様の前を走るからだ！」
「やれやれ。悪い奴だよ、あんたは」
バギーのペアであるアルビダも宝箱を持ってそこにおり、ひとまず周囲には敵の姿もなく、安全にその地帯を抜けられるだろうと思案する。
喜々として走る二人はＭｒ．２のようにはせず、泥沼に沈まない足場へ飛び乗った。
「行くぞアルビダ！　宝をこっちに寄こせ！　落とさねぇことが最優先だ！」
「了解したよ。ま、アタシはどっちでもいいけどね」

足場の上で宝箱をパスして、バギーが両手で宝箱を持ち上げる。
そして両腕だけが彼の体から離れ、宙に浮遊し、上半身もバラバラになって浮かび上がった。
体を軽くして跳躍力を上げるつもりか。
足先は浮遊することができないため、バギーの下半身はアルビダと共に足場を飛び移る。
このまま順調に進めるか。そう思った頃にまたも追いついてくる人物がある。
先程も互いに邪魔をし合った。やはり麦わらのルフィだ。ルフィが小脇に宝箱を抱えて、さらにビビを背負って全力で走ってくる。
「んががががッ――!」
「チィ、麦わらァ! まだ来やがんのかてめぇはァ!」
「流石だねルフィ。それでこそアタシが見込んだ男だよ」
「お前はどっちの味方だアルビダァ!?」
猛烈な勢いで走ってくるルフィは真っ直ぐ泥沼へ向かっている。足場は無視していた。
恐竜が居る小道を抜けるため、背におぶさっていたビビが瞬時にそれを指摘する。
「ルフィさん! 真っ直ぐ行っちゃだめよ! 動けなくなるわ!」
「掴まってろビビ! 飛ぶぞ!」
「飛ぶって、まさか……!?」
「ふんがァ!」
走りながらルフィが思い切り右腕を伸ばし、泥沼の向こう側にある、小さな崖を登るために組まれた木材の足場を掴んだ。ぐっと掴んで壊れないことを確認する。
パッと両足を地面から離せばあとは引き寄せられるのみ。
二人の体は空中を素早く移動し始めた。
「ううう――!」
「行っけぇぇぇっ!」
「なぁにぃぃぃっ!? 野郎、そんな手を……!」
「へぇ」

バギーとアルビダを追い抜く勢いで飛んでいく。
その途上で、突然前方の泥が爆発するように飛び散り、中から人が現れた。
沈んだはずのＭｒ．２が頭上に宝箱を掲げ、二人が飛んでいくその前方へ跳び上がったのだ。
「ジョーダンじゃな～いわよ～う！」
「うわぁっ!?　誰だこいつ!?」
「ぶつかるっ!?」
「アァン？　どぅっ!?」
図らずも頭突きをするような体勢で、突如現れたＭｒ．２の腹へ二人の体が激突した。
当たりはしたが勢いが殺されることはなく、彼らはＭｒ．２を連れた状態で対岸へ移動する。着地の姿勢を整える暇もなかったため、三人揃って地面を転がった。
宝箱を失わずに最短距離で試練を乗り越えたと言える。
その代わり転んでしまっていた間にバギーとアルビダが追い越し、彼らを傍目に先へ進んだ。
「ギャーッハッハッハ！　バチが当たったんだ、ザマァーみろ！」
「惜しかったねぇルフィ。アタシたちは先に行くよ」
「いででっ。あっ、待て！」
第二の試練とは比べ物にならないほど小さな崖、二メートル程度のそれに木材で足場が組まれてあり、二人は素早く上って行ってしまった。
すぐさまルフィが宝箱を持ち、ビビを確認すると彼女も立ち上がる。
二人ともＭｒ．２にぶつかったことで泥まみれになっていた。しかし気にしてもいられない。
なぜ急ぐのか。わからないがおそらく意地だ。
誰にも負けないためにこの場で全力を出す必要がある。
視線を合わせた二人が駆け出そうとした時、同じくＭｒ．２も宝箱を持って跳び上がる。

「んも～ジョーダンじゃな～いわよ～う！　さっきからなんだっつーのよう！」
「うわっ、おかまだ！　おかまがいるぞ！」
「なぁによう、悪い!?　オカマだって生きてんのよう！　あら？　でも意外にいい男」
「話してる時間はないわ。ルフィさん、私たちも急ぎましょう。優勝しないとアラバスタには辿り着けない……少しでも可能性を高めないと」
「そうだな。行くぞビビ！」
「ええ！」
「そうはいかないわぁん！　あちし、負けないッ！」
二人が駆け出そうとした時、それよりも早く全身泥だらけのＭｒ．２が走り出した。
瞬く間に足場を上っていく様を見送る形になり、ルフィとビビも次のステージへ向かう。
二メートルほどの崖の上へ上った時、一気に気温が上昇したことを認識した。さっきまでとはまるで別世界。その些細な段差が境界線になっていたようだ。
彼らの目の前にはボコボコと音を発する溶岩が広がっていた。
これが熱気の原因。落ちれば死は免れない。
唯一無事に進めるだろう細い道が両側をマグマに挟まれ、曲がりくねりながらも存在している。先に行ったバギーやアルビダ、Ｍｒ．２はそこを通っていた。
立っているだけで全身から汗が噴き出してくる。
今度は勢いで突破できる試練ではない。
一瞬で判断したルフィはその道を通ることを決めた。
《第六の試練は〝溶岩地帯〟！　落ちれば即死！　慎重に進め！》
「ここから行けるな。絶対落ちるなよ。落ちたら助けられねぇ」
「わ、わかったわ。慎重に行きましょう」
「よし！」
宝箱はルフィが運んで、彼が先頭になり、ビビはその後ろをぴった

りついていく。
一瞬の気の迷いで命を落とす。そんな環境だ。二人は急ぎながらも慎重に曲がりくねった細い道を走って、あまりの熱気で汗だくになりながら進んだ。
幸い、溶岩地帯はそう長くなかった。
妨害者も罠もなく、ただ道を進んだだけで抜けることができて、道も変わる。
一気に広くなって坂になっていた。バギーたちやＭｒ．２はすでに先を進んでおり、いつの間にか姿が見えない。それでも命の危険を感じた二人は慌てず行動することを心掛ける。
坂を走って上り、それもまたすぐに終わった。
そしてその次に待っていたのがまたしても厳しい大自然、すなわち試練だ。
《さぁ～第六の試練を抜けて、ここからが本番だぞ！　第七の試練〝雪原曲道〟！》
彼らの目の前には銀世界があった。
細く曲がりくねった道に高々と雪が積もっており、その両側は高い崖。足を滑らせれば上って来れないだろうと思うほど高く、掴めるような場所も皆無に等しい。
さらに最も辛いのがその気温差。
直前の溶岩と雪が降り積もる環境の違いが、辺りに強風を吹かせている。
《溶岩地帯との気温差のせいで襲ってくる強風に耐え、ツルツル滑る足場に注意し、曲がりくねった道を進め！　当然落ちても誰も助けてくれないぞ！　ここが正念場だ！》
「うおおっ!?　寒ぃ！」
「うっ、すごい気温差……汗が全部凍りそう」
吹き荒れる冷たい風が熱を発する二人の体を急速に冷やしていく。
こうなればもはや妨害する者など居ない。ここからは大自然との戦いだ。
環境の変化に適応し、ここまでに削られた体力の残りを使って、上

手く生存する。先程までとは形が違うとはいえこれも一種の戦いである。
この場へ到達した二人に諦めるつもりはない。
だが体力の限界を心配したのか、振り返ったルフィはビビの手を掴んだ。
「行けるか、ビビ」
「ハァ、ええ……大丈夫よ。心配いらないわ」
「もう少しだ。しっかりついて来いよ！」
ビビの手を引き、ルフィが歩き出す。
確かに急いではいるが失敗する訳にはいかない。ビビの体力も気にする必要がある。
生き残ることを最優先に考え、今彼女を守れるのは自分しか居ない。その事実もまたこの時の彼を冷静にさせた。この場所には他に頼れる人間が居ないのだ。
握った手を離さぬよう強く力を込めて、ルフィとビビは一歩ずつ進む。
雪が積もり、幾分凍っている地面は下手をすれば滑ってしまう。
すぐ傍の崖から落ちないようにと注意して、しっかり地面を確認しながら歩みを進める。
本来ならばそうして丁寧に歩かなければならないのだが、あまり時間をかけていられないことも二人はすぐに理解した。先程溶岩地帯で掻いた汗がすでに凍ってしまっている。
体温の急激な変化によって凄まじい疲労が襲い掛かっていた。
常人では倒れてしまうほどの気温差。ビビが苦しんでいることは誰も責めることはできない。
落ちないよう注意しながら、ある程度は急がなければならない。
ずっとここに居れば死ぬだけ。それが体感としてわかった。
ルフィはビビの様子を見ながら必死に声をかける。
「もうそんなに遠くねぇぞ。大丈夫だ。頑張れ」
「ごめんなさい……私、足手纏いに」
「んなことねぇ！　そんなこと気にすんな！」

あまりの冷気に体ががくがくと震えている。ただでさえ防寒着を着ていない。普段でも寒いというのに今は大きな気温差に驚いたばかり。
限界はそう遠くないに違いなかった。
焦る心を押さえつけ、なんとか冷静に足を運ぶ。
吐く息が多くなり、見るからに顔色が変わって辛そうだが、ビビはしっかりついて来る。
ここで諦める訳にはいかないのだ。
ルフィは尚も前を見続けて彼女を導いた。
多少の時間は使ったが、そう長くない道を歩き切る。
そうするとまたしても風景が変わり、気温も変わって温かくなっていた。
《おっと、ここで麦わらのルフィペアが第七の試練を突破した！
今度こそ最後の試練、〝空中庭園〟が待ち受けるぞ！　崖の上にそびえ立つゴールへ向かうため用意された複数の橋！　そこで待ち受ける妨害者を越えてゴールへ飛び込め！》
「これが最後だ！　行くぞビビ！」
「ハァ、ふぅ……はいっ！」
体の震えが止まっていない。疲労困憊で言葉にできないほど辛いだろう。
それでもビビはキッと前を向き、ついに見えたゴールを視界に入れる。
求めるものは優勝。その先にある祖国を求めて、思い出すだけで力が湧いてくる。
ビビは自らの足で真っ直ぐ立った。
ルフィの手に頼ることをやめ、彼と共に一本の橋を選ぶ。
「ルフィさん……ありがとう。あなたが居なければ私、途中で諦めていたかもしれない」
「いいよ、礼なんて。まだゴールしてねぇしな」
「そうね……もうすぐだわ。もうすぐ、ゴールできる」
泥に汚れて、凍った汗が溶け出して、二人ともひどい様相で橋を

渡ってくる。
進んでいくと彼らの前に最後の妨害者が現れた。
進む先で仁王立ちして待ち受けるのは、まわしを巻いて二足歩行の、スモーカピバラだ。疲労困憊で向かってくる二人を見据えて身構える。
「ルフィさん、敵が！」
「ゴムゴムのォ～……！」
ルフィがさらに速くなって前に出る。
両手で持った宝箱を振り上げ、そのまま攻勢へ出るらしい。
まさかの行動で虚を衝かれたスモーカピバラは目を丸くして驚いていた。
「生け花ァ!!」
空へ向けて思い切り振り上げた宝箱を、猛烈な勢いで振り下ろす。
驚いてしまって動けなかったスモーカピバラの脳天に叩き込み、凄まじい衝撃が肉体を駆け、それだけに留まらず古びた橋へも甚大なダメージを与えてしまっていた。
たった一撃でスモーカピバラを倒したが、その強過ぎる攻撃が橋を破壊してしまった。
二人は必然的に宙へ放り出される。
伸ばした腕を引き寄せながらルフィはビビへ振り返った。
そしてそれがわかっていたように、空中に放り出される直前、ビビは橋を蹴って跳んでいた。
空の上でルフィの下へと向かい、必死に腰の辺りへ抱き着くことに成功する。
瞬間、迷わずゴールを見上げたルフィは左腕で宝箱を抱え、全力で右腕を伸ばした。
「おおおおおっ――！」
届くか、届かないかというギリギリの一瞬。
ゴールから飛んできた紙の束がルフィの腕を捕まえた。
その瞬間にルフィは腕を縮め、勢いをつけてゴールを目指す。
「うおおおおりゃあっ!!」

ビビもしっかりルフィに掴まり、勢いに負けて離されることなく飛んでいく。
腕が元の長さになる頃、二人は飛んできたままの勢いでゴールと掲げられた旗の下を潜り、木材で作られた建物の内部へ飛び込んで地面を転がった。
二人同時にごろごろ転がり、二人同時に大の字に倒れた後。
ひょいっと視界に顔を入れてくる顔を見上げ、ルフィとビビは息を切らしながら口を開いた。
「ありがとう、キリさん……」
「この分は高いよ？　ルフィ」
「しっしっし。肉獲ってくるから勘弁してくれ」
にこやかに笑うキリに迎えられ、ほっと安堵の息を吐く。
ここまで来ればもう安全だ。そう思った瞬間に気が抜けてしまい、全身から力が抜ける。
彼らのやり取りを見ていたエースは口を出すこともなく笑っていた。
これまで自分も大概だと思っていたが、キリはそれ以上にルフィに甘いようだ。
先程の感想も含め、良いコンビだろうと思う。
どちらも欠点があり、ただ褒められるだけの人物ではないが、二人がそうして揃っている姿は見ていて微笑ましい。心配事はこの時完全に無くなった気がする。
弟は海賊王になるという夢も捨てていない。そのために海賊になった。
兄として安心し、彼も柔和に頬を緩めていた。

クロスカントリー（5）

クロスカントリーのゴールとして木造の大きな建物が設けられており、入り口は門のようで、ゴールと書かれた旗を掲げ、崖の上で異質な存在感を放っていた。

入り口になる部分は円形のエントランスとなっている。

建物自体は長く作られており、短い階段を降りるとどこかへ通じるだろう長い通路がある。

先に到着した参加者たちはそこで休んでいたようだ。

ルフィとビビはキリとエースと共にそこへやってきた。

彼らを含めて全てのペアが宝箱を持っており、まだ必要らしいので手放すことができない。

木造の長い廊下で所々に参加者が待機している。

中には先に到着していたバギーやアルビダも居て、彼らがやってきたのを見て反応があった。それぞれ表情は違っていて、バギーは怒りの形相を、アルビダは柔らかい笑みがある。

「やっぱり来たね、ルフィ。あんたなら残ると思ってたよ」

「おのれ麦わら、脱落しなかったのかっ。悪運の強い奴め……」

ルフィの顔を見て憤るバギーだが、キリの顔を見ると対照的にパッと笑みを浮かべた。

「おおっ、脱獄仲間のキリじゃねぇか！　どうだ？　ナバロンの隠し金庫は見つかったか？」

「見つかったよ。中身も頂いたし」

「マジか！」

「でも見捨てたよね？」

「うっ、な、何？　いやいや、あれは逃げると見せかけて近海の敵を倒してたわけだ。当然おれはお前を助けるために戻るつもりだった」

「だから分け前寄こせってことか」

「もちろんだ。結局お前が逃げられたのはおれ様が起こした混乱があったからだろ」

「でも逃げたよね？」

「いや逃げたわけじゃねぇんだが、それは様々な状況が邪魔をしてだなぁ――」
顔を突き合わせてキリとバギーが話している。どうやらナバロンを脱獄した際に手に入れた金について、分け前を渡すか渡さないかで揉めているらしい。
バギーにしてみれば是が非でも手に入れたいが、キリは渡せるはずがないと考える。
金はナミに渡してしまって彼が勝手に使える権利などないのだ。
ナミに話すと怒られると想像し、怒られたくないと頑張っている様子である。
彼らはさほど疲れを見せずに話していて、その間にビビは近くの壁に背を預け、座り込む。
想像以上に疲弊している。立っているだけでも辛かった。
ルフィだけでなく他の面々が平然としている様が信じられない心境だった。
ルフィはそんなビビの前でしゃがみ、顔を覗き込んで心配する。
本人がどう思おうと彼女はよく頑張った。それだけは確かだ。
「ビビ、お前大丈夫か？」
「ええ、ごめんなさい……私はだめね。ここに居る人たちはみんな平然としてるのに、私だけ体力がなくて……」
「んなことねぇよ。ビビはよくやった」
「ありがとう、ルフィさん」
力のない顔でビビは笑みを浮かべる。
ルフィも笑顔になって彼女の健闘を称えてやって、そうして目線を合わせているとすぐ傍に人が立ったことに気付き、見上げればアルビダが彼を見つめて微笑んでいた。
「久しぶりだねぇルフィ」
「お、アルビダか」
「あんたに会うのを楽しみにしてたんだよ。元気そうじゃないか」
アルビダは上機嫌そうな笑みを湛えてルフィだけを見つめている。
不思議と気になる人物だった。

同じ女性でありながら呼吸も乱さず立っていて、手には金棒、服装は胸元やへそを出す軽装であるのに疲れを感じさせない。気になったビビはルフィに尋ねた。
「ルフィさん、知り合いなの？」
「ん～まぁそんなもんだ」
「あんたがルフィのパートナーだね。アタシはアルビダ。関係を言うのなら、かつてアタシを殴ることができた人間が一人だけ居る。それがルフィだって話さ」
「ルフィさんが、あなたを……？」
「こいつすげぇんだ。最初に会った時は今と別人みたいだったんだぞ」
「スベスベの実を食べたからね。そう、あんたが言う通りまるで別人。そばかすが消えたから」
「いや、そこじゃねぇ」
いやいやとルフィが手を振るが一切気にせず、アルビダは得意げに笑った。
「あんたに会ったら言おうと思ってたんだ。どうだいルフィ、アタシと手を組まないかい？」
「ん？　お前と？」
「あんたはアタシが唯一認めた男。要は惚れてるのさ。今はまだ一介のルーキーに過ぎないかもしれないが将来性はある。唾つけとくなら今かと思ってね」
「おいおいアルビダ、お前何勝手なこと言ってやがる!?」
唐突な提案にルフィはぽかんとして、ビビは驚いていた。
その声が聞こえたバギーも驚愕しながら近付いてきてキリを置き去りにしている。
現在のパートナーは他ならぬバギー。詰め寄られて当然だがアルビダは涼しい顔をしていた。
「だってあんた、元々はルフィを倒すために手を組んだかもしれないけど、結局勝てなかったじゃないか。それにアタシはあんたと出会う前からルフィを買ってる。そんな気になっても別に不思議じゃな

いと思うけどねぇ」
「誰が負けただ、負けとらんわァ！　現にこのレースじゃおれの方が速かった！」
「今回はね。だけど正面から戦った訳じゃないだろ？」
「ぬぐぐっ……！」
「まぁまぁ。それならいい方法がある。アルビダだけじゃなくて、バギーもボクらと手を組めばいいんだよ。これで全部丸く収まる」
悔しげに唸るバギーの肩に手を置き、にこにこしながらやってきたキリが口を挟んだ。
やけに楽しそうな彼へ振り返るとバギーが感情的になって声を大きくする。
「あぁっ!?　おれが麦わらと手を組むだと!?　ハデアホが、考えて物を言いやがれ！　そんなことは絶対にあり得ねぇ！」
「残念だなぁ。そうなったら分け前も渡せると思ったのに」
「やっぱり麦わらほど気を許せる奴は居ねぇよな！」
「あ、でも全部使っちゃったかな？」
「クソゴムがァ！　ハデに地獄に落ちろ！」
「お前何言ってんだ？」
キリの言葉で一喜一憂するバギーにルフィが難しい顔をする。ルフィも単純だがバギーもかなり単純な人間だ。目先の欲望に暴走するのはそう変わらない。
そうなるとキリが動き出すのも納得である。
ルフィは呆れて見ているが、馴れ馴れしくバギーと肩を組んだキリが小声で話し始めた。
「でも実際、考えてみれば利点もあると思うんだよ。イーストブルーといい、ナバロンといい、キャプテン・バギーにはカリスマ性があるし、信頼を集めることができる。ボクらもグランドラインに来てからいくつか海賊団とかを潰したりしてた。つまりボクらが手を組めば、バギー船長の勢力はもっともっと大きくなると思うんだ」
「何ぃ？　つまりてめぇらが恨みを買って、その恨みでおれの部下にするってことか」

「そうそう。で、たまに戦力が足りないようならこっちに貸してよ。そうすればバギーは何の苦労もなく大船団の船長になれるし、お宝だってがっぽり。ボクらの生存確率も上がる。どっちにとっても利点のあるＷｉｎ―Ｗｉｎの関係でしょ？」
「ふむ、そりゃあまぁそうだが……」
「何か不服でも？」
「麦わらと手を組むってのが気に入らねぇ」
「仇敵を許すのも冒険だよ。確かに過去ボクらのせいで失った宝もあるかもしれないけど、要はそれより大きな利益があればいい訳だ。うちの一味は今が一番お買い得だよ？」
「大体てめぇらがこの海で生き残れるかどうかもわかったもんじゃねぇだろ。てめぇらのせいでおれたちが危険に晒される可能性もゼロじゃねぇんだぞ」
「それは信じてもらうしかない。ただ、今この場にはうちの一味から二組集まってるよ」
「むぅ……」
確かに、バギーの船団からも多数の船員が参加したものの、今のところゴールに辿り着いたのはバギーとアルビダの一組のみ。今も他の参加者が続々到着してくるが味方の姿はない。
悔しいが認めるしかない。
少人数とはいえ麦わらの一味は粒が揃っている。その厄介さはローグタウンでも知っていた。完璧な布陣を敷いたはずのあの時に逃げられたのは思い出したくもない。
ひょっとしたらこれは良い話なのでは。
バギーが悩み始めるとキリは畳み掛けるように囁く。
「それに一つ重要な情報がある。これを聞くと考えが変わるかも」
「フン、一応聞いといてやる。なんだ？」
「エースは知ってるよね？」
「知ってるも何も、マブダチよ。おれの船で宴をしたこともある」
「そのエースが、実はルフィの兄貴なんだ」
「何ッ!?」

「義兄弟でね。幼少期を共に過ごしてたらしい。二人ともその話をしてくれたよ」
驚愕したバギーが勢いよくルフィの顔を見た。彼は反応もせず二人のやり取りを眺めている。
「どうせこの情報は外部に漏れる。酒場でルフィが大声で紹介しちゃったもんだからね。だから話したんだけど、その点をよく考えた上で考慮してもらいたいな」
「ひ、火拳のエースは、白ひげんとこの隊長だぞ？　ってことはてめえら……」
「上手くやれば、その可能性はある。どうかな？　成り上がる覚悟はある？」
にっこり笑って言えば、今度こそバギーは熟考を始めた。
ルフィとビビにアルビダとエースを加え、見ていた四人は何と言っていいのやら。
呆然という顔のビビが傍に居るルフィへ呟く。
「キリさん、また悪いことを……」
「んん、いつものキリだな」
もはやルフィは驚いておらず、腕を組んで頷く程度には平常心を保っている。
苦笑し、代わりにエースが口を開いた。
「おれまでダシにすんのか。お前んとこの副船長はよく頭が回るな」
「しっしっし、そうなんだ。キリは頭いいし悪い奴だからなぁ～」
「それ、誇るところなの？」
「なぁに、海賊なんだ。誇ったところで不思議じゃねぇ」
勝手に話に盛り込まれたエースは怒りもせず、からからと笑って上機嫌そうにしている。ルフィと義兄弟であることは事実なのだ。隠す気もないらしい。
自身が有名であることを重要視していないのか、危機感を感じない態度だった。
今まさにルフィとエースが親しげに話している姿を見て、バギーは

愕然としていた。
とんでもない事実を知った。これを無視して考える訳にはいかない。
（麦わらと白ひげに繋がりが!?　エースは若いがすでに隊長として名前を知られてる！　何より白ひげが自分の息子を見捨てる訳がねぇ！　そして重要なのはエースと麦わらが義兄弟で、エースは白ひげの息子……つまり、白ひげと麦わらを繋げるパイプは相当太いもんだぞ!?）
理解したバギーは雷に打たれたかのような衝撃を覚える。
白ひげ海賊団。今や世界最強と呼ばれる海賊団の強さを、彼は自身の体で体感して知っていた。その一味を敵に回してしまうかもしれないという可能性を何よりも恐ろしく感じる。
そうなれば考える道は一つであった。
恐る恐るキリの顔を見る。
「改めて聞くが、お前らと手を組んで得られるものは？」
「一番は新しい戦力かな。数は力だよ」
「当然宝の分け前もあるんだろうな」
「それは別の話で。力を貸してもらう時にはそれなりに払うけどね」
「チッ、まぁいい。おれ様の地位が盤石になるなら、多少の問題には目を瞑ろう。白ひげか……考えてみりゃ懐かしい名前だ」
腕組みをしたバギーは不意に遠い目をする。
彼の心理を理解したキリが問うた。
「それじゃ、契約成立でいいかな？」
「フン、まぁ癪なことには変わりねぇがとりあえずだ。確かに利もありそうだしな」
「そう言ってもらえてよかったよ。よろしくねキャプテン・バギー」
「だが役に立たねぇようなら考えを改めるぞ。てめぇらが白ひげと手を組めるかどうかもはっきりしちゃいねぇんだ。失敗した時がてめぇらの最期だぞ」
二人は固く握手を交わし、その状態でキリが微笑んで肩をすくめ

る。
「まぁでも、うちの船長は海賊の王様になる人だから、いずれは白ひげも倒さなきゃいけないかもしれないけどね」
「しっしっし」
「ハァ!?　いきなり何言い出してんだてめぇは!?　手を組むって話じゃなかったのか！」
「当面はそのつもりで動くよ。でも未来がどうなるかはわからないじゃないか」
「このハデアホがァ!!　いいか、白ひげはなぁ、海賊王ゴールド・ロジャーと引き分けた生きる伝説だ！　あいつに勝とうなんて言った連中の末路を知らねぇからそう言えるんだ！」
「だから知ってそうな人と組むのがいいんじゃないか。そのために今から準備するんだよ」
「冗談じゃねぇ！　おれは降りるぞ！　そんな奴らに付き合ってられるか！」
「握手までしたのに」
「ただの口約束だろうが！　こんなもん無効だ無効ッ！」
慌てたバギーは勢いよく手を振って握手を続けるキリの手を振り払おうとするが、離されない。
キリにはまだ話したいことがある様子だ。
「ええ～いっ、離せこのォ！」
「しょうがないなぁ。じゃあ賭けようか？」
「アァン？　何をだ」
「ちょうど大会中なんだ。どっちが本戦に残って優勝できるか、それで決めよう。ボクらの一味から優勝者が出れば改めて手を組もう」
「ほぅ。じゃあおれの一味が勝ったら？」
「ナバロンの財産を全部あげるよ」
「まぁ多少は不満だがいいだろう。どうせ優勝はおれがもらうつもりだったからな」
互いに笑みを向け合い、やっと話が纏まったらしい。
話している間にどんどん参加者がゴールしてその場所へ辿り着い

ていた。
アルビダは溜息をつきながら苦笑する。
「やれやれ、一体どうしてこうなったんだか」
「あの、あなたが言い出したからだと思うんですけど……」
控えめにビビがアルビダへ言った頃、少し前に到着したらしい仲間たちがやってくる。
疲弊した状態であるものの、ルフィを見て真っ先に嬉しそうな声を発したのは人型になって宝箱を持つチョッパーで、そのすぐ後ろからシルクが歩いてくる。
「ルフィ～！　みんなぁ！」
「チョッパー！　シルク！」
「二人も無事だったのね。よかった」
二人が駆けつけてきたことでルフィは喜び、ビビは壁に手をつきながら立ち上がる。
シルクとチョッパーもかなり疲弊した様子だ。見るからに顔色が悪く、肩を落とした姿から相当の疲労感が伝わってきた。
それはビビも同じであるのだが、シルクは彼女を心配する。
「ビビ、大丈夫？　疲れてるよね」
「少しね。でも大丈夫よ。シルクさんこそ大丈夫だった？」
「うん、大変だったけどね。他のみんなは？」
「それがまだ……」
ビビが不安そうに呟いて周囲を見回すも、次々集まってくる参加者の中に仲間たちの姿を見つけられない。中にはアーロンたちの姿も見えるがどこにも居なかった。
そういえば走っている間も見当たらなかったのだ。
失格になってしまったのか。
敢えて言葉にできなかった不安を呆気なくキリが口にする。
「まさか失格になったのかな」
「そんなあっさり言わなくても……ちょっと手間取ってるだけかもしれないし」
「一番可能性が高いのはゾロとウソップだね。ゾロが迷ってたらこ

こまで来れない気がする」
「それは反論できないなぁ」
キリの呟きにシルクが同意してしまい、ナミとサンジ、イガラムとカルーが居ないのは不思議に思う心もあるのだが、ゾロとウソップに関しては居なくても納得できる気がした。やはりゾロは戦闘で役に立ってもレースになると足を引っ張る気がしてならない。
小さくだがシルクは思わず溜息をついてしまった。
徐々に人数が増えてくる。
仲間を探すためか、それとも単純に好奇心を刺激されたか、ルフィは周囲を見回していた。
その中で目立つ人間を数名見つける。
「うわぁ～猿じゃん。猿が居るじゃん」
「猿だと!? お前おれを〝猿あがり〟だって言ってんのか!?」
「ああ、〝猿マガリ〟だな」
「ウッキッキ! バカヤロー、そんなに褒めるんじゃねぇよ! 今日はやけに褒められるな!」
「オウオウ麦わらのチビよ、滅多なこと言うんじゃねぇよ。マシラがいきなり大声出しちまっておれの耳が痛くなっちまった。ハラハラするぜ」
「お前も猿みたいだな」
「それが出会って最初の発言かよ。ハラハラするな」
気付けばルフィはマシラとそのパートナー、ショウジョウと話していた。
ショウジョウはオランウータンのような丸い顔で、腹は出ているが腕と脚が妙に細く、マシラとは似ても似つかないが兄弟のように仲が良い。
そして少し話しただけでもルフィも仲良くなっていた様子だ。
笑顔で和気あいあいと話して楽しそうだった。
人も増えてきていた。
しばらくもせずに空へ花火が上がり、二回戦の終了が告げられる。
ハッタリーも全ての実況を終え、ゴール付近へ移動してきたのだろ

う。ゴールの建物内にもあらかじめスピーカーが設置されていて声が聞こえてきた。
長い戦いが終わり、ようやく心から安堵できる瞬間がやってきた。
《二回戦終了〜！　これで１００組の海賊たちが残ったぞォ！　その他の海賊たちはもうゴールには入れないのでご注意を！　速やかに敗者用の船へ向かってくれ！》
そう言った途端にゴールへ続く橋が全て爆破によって破壊され、道が無くなった。
橋の上に居た海賊諸共崖の下に落とし、その時ばかりは慈悲もない。
相手は海賊。甘い態度で接すればつけ上がると知っているため力を見せつけた瞬間だ。
外での爆音を聞いた後、一息ついていた参加者は周囲に居る敵を見回して牽制する。
それから即座にハッタリーが説明を始めた。
《それでは続いて予選三回戦へ移動しよう！　これがついに予選の最終戦だぞ！》
休む暇も与えない次の競技の宣告。
これには流石に疲弊しきっていた男たちが野太い声を発し、その無慈悲さに怯える者も少なくはない。だがその中には一切動揺しなかった者も少なからず居た。
《全員階段の下に降りてるな。そのまま廊下の端まで進んでくれ。そこに君たちを最後の予選会場に運んでくれる生物が待っている》
簡潔に言われるため、移動しなければならない雰囲気だろう。
あっさり動く者、戸惑いながら動く者、反応は様々だったが全員が廊下の奥へ歩き出す。
疲労感が伝染して重苦しい空気が漂っていた。
この場で乱闘を始めようと考える人間は一人も居ない。
黙り込んだまま歩く人間がほとんどで、元気に話す人間は一部だけだった。
その一部がルフィやキリ、エースといった面々である。

歩きながらもルフィはその場に集まった顔を確認し、興味を持って顔を覗き込んでいる。
同じくキリやエースにしても対戦相手は気になるようで確認は行っていた。
流石に名だたる海賊も残っており、疲れた顔を見せず平然と歩いている者も紛れているらしい。
「アーロンたちも来てたんだなぁ。なんだよ、声かけてくりゃいいのに」
「ああいう人をツンデレっていうらしいからね。素直になれないんだよ」
「そういやキリの女が居ねぇな」
「いやボクの女って訳じゃないからね。多分」
「結局ゾロたち来なかったなぁ」
「やっぱり迷子だね」
「うん、迷子だ」
平然と話しながら歩く彼らに驚きながらビビたちも後ろを歩く。
シルクやチョッパーもぐったりした様子で、周囲を見れば別段珍しくはない。
やはり彼らが特別な部類だったようだ。
長い廊下を歩き切って扉に到着した。
大きなそれを両手で開くと外に繋がっており、一気に視界が開ける。そしてその瞬間、彼らの目の前には巨大な蟹が待ち受けていて、扉から足を伸ばせば頭に乗れる位置で止まっていた。
この巨大な蟹、ヒッコシクラブに乗れば運んでくれるのだろう。
戸惑いながら頭の上に乗る参加者たちの中、その姿を目にしたビビが目を見開いた。
「ヒッコシクラブ？　アラバスタに生息する珍しい生物よ。滅多に人の前に現れないから見たことがある人なんて居ない、幻の生物とまで言われているの」
「幻の生物がここに居るのか？」
「この子もブルーベリータイムズと契約したのかな」

ビビの言葉にチョッパーとシルクが首を傾げていた。
彼らも大人しく待っているヒッコシクラブの頭、或いは背と呼ぶべきか、とにかく上に乗り、全員が乗ったところでゆっくりと走り出す。
参加者を運ぶため、徐々に速度を上げてどこかへと向かい始めた。
スピードは速いが頭を動かさないため少し休むことができる。
ビビ、シルク、チョッパーは座り込み、他の参加者のように項垂れて休み始めた。
同じくルフィも座って胡坐を掻き、自身が持っていた宝箱を膝の上に乗せて、中身は何なのだろうと興味を持っている。彼も含めて全てのペアが宝箱を保持していた。
失くせば失格と言うのだから何か大事な物が入っているのだろうと思う。
「なぁ、この中って何が入ってんだろうな」
「そろそろ種明かしでもするんじゃない？　次の予選にでも使うんじゃないかな」
「ふぅん」
「それよりも」
辺りを見回しつつキリが口を開く。
声をかけた相手はビビだった。
「ワルサギにヒッコシクラブ、やっぱりここはアラバスタに近いのかもしれない」
「私もそれを考えていたの。特にヒッコシクラブは希少種で他の島では見られないそうなの。だとすればアラバスタから連れてきたとしか考えられない」
「しかも、ボクはもう一つヒント見つけたよ」
「ヒント？」
キリが何を言っているのかわからない、とビビが首を傾げる。
視線を逸らした彼は歩き出し、ある人物に近寄っていく。
それが暇だからと片足でくるくる回っているＭｒ．２で、苦笑しながら気安く声をかけた。
「あー暇。とっとと次の戦いに着かないかしら」

「久しぶりだね、ボンちゃん」
「ん？　あら、紙ちゃんじゃないの。お久しぶりねぃ」
ぴたっと回転を止め、Ｍｒ．２は平然とキリに目を向けた。
「フーンフフ～ン――ええっ!?　紙ちゃん!?　なんでこんなとこ居んのよう！　二度見！　あちしびっくらこき過ぎて二度見！　オカマ拳法〝あの秋の夜の夢の二度見〟!!」
「それはただの二度見じゃないかな」
相変わらずテンションが高い人物であった。
キリは苦笑し、とりあえず認識されたようだと、安堵とも複雑とも取れる感覚を自覚する。
「なぁ～によ紙ちゃん、あんたもこの大会に参加してたのねぃ。あんたがイーストブルーで海賊になったって聞いた時はびっくりしたわぁん」
「ま、色々あってね」
「あんたが居ないからってミス・オールサンデーが大変らしいのよぅ。あちしにどうにかできることでもないけドゥ。あんたが出てったって聞いた時はそりゃあもう驚いて――」
「ちょっと待って！」
その会話が聞こえていたのだろう。突然大声を出したビビが彼らの傍へ移動した。
キリとＭｒ．２の二人を視界に入れ、信じられないという顔で問いかける。
「キリさん、まさかその人は……」
「そうだよ。これがヒントだ」
キリがＭｒ．２を見やり、笑みを湛えて言う。
「オフィサーエージェント、Ｍｒ．２・ボン・クレー。それが彼のコードネームだ」
「よろしくねぃ」
「Ｍｒ．２!?」
ビビだけでなくルフィとシルク、チョッパーも驚いていた。
さっき出会った時には気付かなかった。

その事実を覚えているルフィは思わずビビに問う。
「おいビビ、お前知らなかったのか？」
「ええ……残念だけど私はオフィサーエージェントには一人も会ったことがないの。情報を集めて少しは知ったつもりでいたんだけど……」
口元を押さえ、ビビは動揺した声で語る。
「私が手に入れた情報でのＭｒ．２・ボン・クレーは、大柄なオカマで、テンションが高くて、意味もないのにバレエの技術で回る癖を持ち、服の背中には〝おかま道（ウェイ）〟と……」
「気付けよ」
ビシッと、ルフィとシルク、チョッパーに加えてエースまで、思わずビビにツッコむ。
図らずも彼女のうっかりが露呈した瞬間だった。
Ｍｒ．２は独特のポースで大笑いし、キリは少し困った様子で苦笑していた。

予選三回戦　バトルロイヤル

予選の一回戦と二回戦を終え、失格となった参加者は６１４組。
行きは豪華客船ゴージャス・ハッタリー号で運ばれた彼らだが、一度負ければ扱いは変わり、敗者用のさほど費用もかかっていない帆船に目一杯詰め込まれて運ばれる。
彼らは帆船の上で映像電伝虫が映すモニターを見ていた。
競技の内容を見つめており、その過酷な様相にぞっとする者も少なくない。
現在、残った参加者はヒッコシクラブに乗って次の予選に向かうため移動を行っている。それもまたモニターに映し出されてハッタリーの実況が行われていた。
じっとモニターを見ていたゾロとウソップは何も語らずに口を閉ざしている。
長い間黙っていたのだが、ある時ついにゾロが口を開いた。
「不慮の事故だ」
「どこがだッ!?　お前が勝手に行っちまうから迷って間に合わなかったんだろ！　だから先頭になるなって口が酸っぱくなるほど言ってたのに！」
「てめぇがびびって走らねぇからだろうが！」
「び、びびってねぇよ、バカにすんな！　つーかおれは何度も方角は教えてたぞ！」
「やめなさいよあんたたち。今更そんなこと言ってもどうしようもないでしょ」
腕組みをして呆れたナミが二人を止める。
二人は渋々言い合いをやめて大人しくなった。
一回戦の時点でナミとサンジ、さらにイガラムとカルーが脱落。
二回戦になってゾロとウソップが脱落した。
現在、ルフィとビビ、キリとエース、シルクとチョッパーが勝ち残っている。だがモニターを眺めたナミは心配で堪らなかった。今回のゲームは過酷過ぎる。数々の強敵に命を狙われながら宝探しやレー

スを行い、しかも休息さえ許されない。
ルフィやキリは大丈夫でも、ビビとシルクとチョッパーには辛いはずだ。
敗退した今となっては見ていることしかできない。だが仲間たちが疲弊した顔をしていることは映像で見ても伝わってきて、ナミは居ても立っても居られなくなっている。
新たな武器を手にしても何もできていない。それがただ悔しかった。
悔しさならば敗退した全員が感じているだろう。
ゾロとサンジは本来の力を発揮できぬまま振り落とされ、言葉にすることもできない。
ウソップもまた責任を感じて、自身の無力さを嘆いていたようだ。
そしてそれ以上に落ち込んでしまったのが、ビビと会えぬままに敗退したイガラムである。
「ビビ様……申し訳ありません。護衛隊長イガラムはビビ様のお姿を目にすることなく敗北したとんでもない弱者です。私はただのちくわのおっさんですな、ハハハ……」
「おい、あそこに屍が転がってる」
「ビビに会うこともできずに一回戦が終わったからね。ほっときなさいよ。今更何言っても慰めにだってならないわ」
「ありゃ重症だな。まぁ、他にも似たような奴が居るが……」
ぐったりと倒れているイガラムは凄まじい負のオーラを発しているため、今や誰も近付けなくなっている。辛うじてペアとして参加したカルーが傍に居るものの立ち直る気配がない。
ウソップが思わず同情してしまい、ナミが溜息交じりに答えた。
その直後に腕を組んだゾロが視線の先を変えると、同じくらい落ち込んだ人物を見る。
瞳を潤ませ、涙を溜めたベビー5が自身の敗退を嘆いていた。
傍に座ったバッファローが話を聞いているらしいが、どうも鬱陶しそうにしているらしい。
「うぅ、敵を狩るのに夢中になっている間にゲームが終わるなんて

……最後まで彼の役に立ちたかったのに！　これじゃ彼を優勝させてあげられない！」
「んに～ん。これでやっとドレスローザに帰れるだすやぁん」
「バカ言わないで！　まだやれることはあるもの！　私はキリと一緒に居るわ！」
「またそれか。どうせあいつも消されるだすやん。たかだか２０００万の賞金首……」
「そんなことは私がさせないわよ！」
「っはぁ～そこに居たんだねベビー５ちゅわぁ～ん！」
突然目の色を変えたサンジが飛んで行ってしまい、彼女の目の前で着地する。
「君も敗退してたのか。でも気に病む必要はない。だってほら、おれたちはここで出会えたんだから。ひょっとしたらおれは君に会うために生まれてきたのかもしれない……」
「ええっ!?　私、必要とされてる……!?」
「ついでにアホが発動したぞ」
「あれはほっとかない方がいいかもしれないわね。まったく、キリもキリよ。敵か味方かもわからないのに連れ歩いてるんだから」
「あいつはあいつで絡まれてるって感じだったけどな」
敗退という言葉が脳裏に残って気分は悪いが、いつまでも落ち込んでいられない。
こうなれば必死に仲間を応援するのみだ。一足先に考えを変えようとしていたナミはウソップと話した後、鼻の下を伸ばしているサンジに振り返る。
「サンジくん、ちょっとこっち来て」
「はぁ～いナミさん！　君の瞳にフォーリンラブ♡」
「アホか」
「アァ!?」
飛んで戻ってきたサンジの耳にはゾロの呟きが聞こえて、また一触即発の空気が生まれる。
暇さえあれば彼らはこれだ。ナミとウソップは同時に頭を抱えた。

「なんか言ったか迷子くん。てめぇの哀れさを嘆いてたか？」
「なんか言ったか一回戦敗退」
「なんだとてめぇ……!?」
「事実だろ。おれは二回戦には進んだ」
「ふざけんな。それもてめぇの間抜けさでおじゃんにしたんだろうが」
「ハンッ。宝の一つも見つけられねぇ軟弱者の声は聞き取り辛ぇな」
「上等だ。今ここでおれの実力を思い知らせてやろうか？」
「やめとけよ。怪我するのはお前だけだ」
ゾロとサンジが至近距離で睨み合う。競技が終わった直後で元気なものだ。
今はシルクが居ないため、仕方なくナミが動いた。
多少の苛立ちも込めて彼らの後頭部を同時に殴ると一瞬で黙らせる。
「やめろッ！」
「おぐっ!?」
「はうっ!?」
「すげぇ、一番強ぇ……」
手荒だったが最も効果的だっただろう。二人は共に殴られた後頭部を撫で、サンジは相手がナミだということで無条件に表情を緩ませ、ゾロは不服そうに表情を歪ませる。
ひとまず喧嘩は止められたようだ。
その手腕に誰よりもウソップが恐れおののき、顔を青ざめさせながらナミを見つめた。
「今はそんなことしてる場合じゃないでしょ。私たちは負けたけど、希望はまだある。声が届かなくてもあいつらを応援するのよ」
「そりゃ確かにそうだな。でもルフィとキリが居るんだぞ？　しかもエースも居るし、今更おれたちが心配しなくても優勝は確実だと思うけどな」
「いや、そうとも言えねぇな」

心配しながらも笑顔で告げたウソップに、サンジが静かな声を発した。
煙草に火を点けて煙を吐き出す。
女性に見惚れた顔ではない。今は至って真剣に話している。
「確かにエースはこの大会で一、二を争う海賊だろう。懸賞金を確認したが５億５０００万ベリー。しかも世界最強の海賊団の隊長を務めてるそうだ」
「そうだろ。だから心配なんかいらねぇさ」
「お前ら二回戦まで残ったから試合の内容を知らねぇだろ。居たんだよ、そのエースより先にゴールした連中がな」
「え――？」
てっきりエースが一番だったのだろうと思っていたウソップが、思わず言葉を呑んだ。
「二回戦のレースは一回戦終了時点の現在地から隣の島へ渡り、ゴールを目指すもんだった。確かにそれを考えりゃ最初からハンデがある。着順だけじゃ実力は図れねぇ。だが中には画面を通してでもわかるほど腕のある連中も居る」
「そ、そいつがエースより強ぇってのか？」
「そうは言ってねぇ。だが何が起こるかわからねぇのが海賊の世界だろ」
「確かにな。実際、おれたちがここに居るのは傷を負ったからじゃねぇ。ルールの中で戦わされたからだ。最初から正面切って殴り合うような試合なら同じ結果にはならねぇ」
「ルールによっちゃあルフィやキリ、あのエースでもどうなるかは予測できねぇぞ」
サンジの言葉に同意するようにゾロが言う。
ウソップが押し黙ってしまい、今度こそ大きな不安が生まれてしまう。そんな事態は予想したくもないが言われてみればそんな気はした。
自分たちが無傷で敗者用の船に集まっていることがその証拠。
表情を険しくしたナミまで頭を抱えてしまい、大きく溜息をつく。

考えたところで今は何もできない。
この場から仲間たちを助けることは不可能なのだ。
「おれ、いつもはびびって逃げてばっかりだけどよ……見てるだけってのも辛ぇもんだよな。これならまだびびりながら戦ってる方がいくらかマシだぜ」
「お前は援護だろ」
「その通り！　おれが一番輝くのは援護の瞬間！　でも今はそれもできねぇしなぁ」
「頼むしかないわね、あいつらに」
再びじっとモニターを見つめて考える。
ナミは何よりもビビやシルクを心配しており、チョッパーもつい最近仲間になったばかりで、自分たちのペースを全て理解した訳ではない。信頼はしているがだからこそ不安もあった。
ルフィとキリは心配していない。だが二人がコンビを組んでいないのが不思議でもある。
このまま何事もなく優勝して欲しいと思うものの、そうなるとは簡単には言えない。
全てを見届けよう。冷静に考えてそう決める。
仲間の心配を他所に、ヒッコシクラブは三回戦への会場に近付く。
わずかとはいえ一時の休息。その間に体力を回復していれば心配もなくなるのだが。
直にハッタリーによるルール説明も聞こえ始めて、真剣に耳を傾け始めた。

＊

気付けば、気付かない間に輪を離れていて。
やけに真剣な顔をしているエースを見てビビが声をかけた。
「エースさん？　どうかしたの？」
「ん？　あぁいや……」
ビビに声をかけられた瞬間に緊張感が霧散した。

今、特定の誰かを見ていたはずだ。
視線を外した後は誰だったのかわからなくなっており、ビビは口を噤む。
「大したことねぇ。色んな奴が居るなと思ってただけさ」
それきり、彼は笑みを浮かべたが口を閉ざしてしまった。
ヒッコシクラブの頭の上はいつの間にか和気あいあいとした雰囲気で盛り上がっていた。
理由はおそらく、一部の海賊たちだ。
敵味方問わずに集まっており、騒がしいが上機嫌な様子は宴にも似ている。一時の休息で心身ともに休めるきっかけがあったが故にそうなったのだろうか。
騒いでいる中心メンバーにはルフィが居た。彼が猿のような外見のマシラとショウジョウと仲良くなり、さらにＭｒ．２も加わって盛り上がっている。
酒も食事も用意できず、会話だけでずいぶん楽しそうだった。
「あっひゃっひゃっひゃ！　おめぇおもしれぇなぁボンちゃん！」
「んが～っはっはっはっは！　ジョーダンじゃな～いわよ～う！」
くるくる回るＭｒ．２が何やら芸を見せていたようだ。
ルフィとマシラとショウジョウ、三人は手を叩いて喜び、歓声を上げる。
「ドゥ～なのよ。これがあちしの、マネマネの実の能力よぅ！」
「ウッキッキ！　顔も体格も声までおれになっちまった！」
「おいおい、マシラが二人居やがるぜ。しかも変な服着てるしよぉ。ハラハラするぜ」
現在、Ｍｒ．２の姿はまさしくマシラその物へと変貌していた。
悪魔の実の一種、マネマネの実の能力である。他人の外見をコピーし、完璧にその人になる。ただそれだけと言えばそれだけだが、容姿、骨格、声まで変貌してしまい見分けがつかない。一度能力を使えばＭｒ．２は全くの他人となって自らを偽ることができる。
変装など比べ物にならないほどの再現率だ。彼はこれで潜入と工作を得意とする。

呑気なルフィや、疲れているとはいえチョッパーも喜んでいるが、ビビは眉間に皺を寄せた。
余興代わりに能力を使用した際、ルフィ、シルク、チョッパーの外見も記憶されている。
それは、その気になれば仲間を装って接近される恐れがあるということだ。
本来であれば見逃していい行動ではない。
ビビは厳しい顔でキリの表情を窺うが、彼は笑顔で眺めて何も言わなかった。
彼の考えがわからない。バロックワークスに所属していた過去を持ち、ビビ以上に組織について詳しい彼が、警戒もせずに止めようともしないのは不思議だった。
何か考えているから言わないのか。
ビビは、尋ねたい気持ちをぐっと押さえて、その瞬間に隣に座るチョッパーの溜息を聞いた。
「大丈夫トニー君？」
「うん。おれまだ頑張れるよ。みんなの役に立つんだ」
「そうね……まだ頑張らないと」
疲労感は無視できないほど大きいものの、チョッパーは気合いを見せて表情を引き締め直した。
ビビはそんな彼を見て微笑む。
彼の態度に助けられるかのようで、自分ももっと頑張らなければと思う。祖国を救うまでは立ち止まる訳にはいかない。そう思った時、シルクが顔を覗き込んできた。
「ビビ。あんまり頑張り過ぎちゃだめだよ」
「え？」
頑張らなければと思った矢先、釘を刺されるように言われてしまう。
呆けるビビへシルクはにこりと微笑んで言った。
「一人で頑張り過ぎちゃどこかで辛くなっちゃうから。無理せずみんなを頼ってね。そのために私たちが居るんだから」

「シルクさん……ええ」
「チョッパーもね。仲間を頼ることは恥ずかしいことじゃないから」
「わかった。でもおれにできることはちゃんとやるよ」
「うん。そのつもりでいいと思う」
膝を抱えて座るシルクはそう言い、顔を上げると輪になって騒ぐルフィたちを見つめる。
キリは、少し輪を離れるように座っていた。遠くもないが近くもない。その距離感はなんとなく奇妙に思えて、先程の疑問も合わせてビビとシルクは彼について話し出した。
「キリさんは、Ｍｒ．２を知ってたのよね……どうして止めなかったのかしら」
「さぁ。何か考えてるのかな」
「時々キリさんがわからなくなる。もちろん仲間として信用してるし、みんなのことを想ってるんだろうけど、たまに怖く感じる時があって……」
「キリはあんまり説明してくれないからね。でも大丈夫。私たちのためにしか動かないよ」
ビビが驚いた拍子に、微塵も疑っていないシルクの笑顔が映った。
「だってキリはルフィのことが大好きだもん。全部私たちのためなんだよ」
「そう……」
「ちょっとわかりにくいだけ。ビビにだってわかるよ」
そう言われてビビは再びキリを見る。
柔和な笑みを浮かべて騒ぐ一同を、ルフィを見守っている。
その姿に少し安心した。
「そうね。私も、彼を信じてる」
「一緒に戦えるよ。みんなでバロックワークスに立ち向かおう」
「ええ。……ありがとう」
互いに笑顔を向け合い、肩の力を抜くことができた。
安堵を覚えたビビは深く息を吐く。

数秒目を閉じて、目を開けた時、いつの間にかビビの傍にアルビダがやってきていた。数歩近付いた後に足を止めた彼女はビビを見下ろして笑みを見せる。
ビビは困惑した顔だったが、そっと差し出された白いハンカチを見るとさらに困惑した。
「ほら、これで顔を拭きなよ。せっかくの美人が泥で台無しだ」
「え？　あっ――」
反射的に受け取ってしまってさらに困る。
思い返せば泥まみれだったＭｒ．２に激突した際、確かにルフィもビビも泥に汚れてしまっていた。当然今も彼女の顔はわずかとはいえ泥が付着している。
アルビダに優しく微笑みかけられ、ビビは受け取ったハンカチを見て戸惑う。
清潔なその白いハンカチを汚してしまっていいものか、逡巡が目に表れていた。
「あの、でも、これ……」
「気にしなくていいよ。毒なんて染み込ませてないから」
「そうじゃなくて。どうして私に？」
「決まってるじゃないか。同じ男に惚れたよしみさ」
思わずぽかんとしてしまう。
何を言われたのかわからなかったビビは妙に幼い顔で驚愕し、チョッパーはとりあえず聞いていたが理解はしていないようで、シルクもまた絶句している様子。
ほんの数秒で、ビビが顔を真っ赤にした。
抗議するように身を乗り出して彼女は声を大きくする。
「べっ、別に私は、そういうわけじゃ……!?」
「照れる必要はないさ。別に宣戦布告だなんて言うつもりはない。ま、勝負になるようならアタシも負けるつもりはないけどね」
アルビダはビビから目を逸らし、楽しそうなルフィを見て表情を柔らかくする。
「海賊なんだ、自由に生きればいいさ。そう思えたのもあいつに殴

られたせいかねぇ」
　眩しい物を見る目で語り、最後にちらりとビビの顔を見た。その時のアルビダは大きな器を感じさせて、流石に女性でありながら海賊として生きる強さを感じさせる。
　咄嗟に踵を返して歩き出す。
　アルビダは彼女に背を向けながら声をかけた。
「ただ、気を付けなよ。海賊はわがままなんだ。うかうかしてるとアタシが掻っ攫うからね」
　そう言って彼女は距離を取り、元居た場所へと戻っていく。
　呆然とするビビとシルクは何も言えず、チョッパーは不思議そうに二人の顔を見上げる。
　ちょうど、チョッパーが二人に質問をしようかというタイミングだった。
　ハッタリーの実況が頭上から降ってきて即座に反応する。
　ヒッコシクラブはついに予選第三回戦の会場へ到着したのである。
　ピタッと止まった場所は島の端。動植物の気配を感じない岬が眼前にあり、海で待ち受けるように歪な円形の巨大な岩があり、まるで闘技場のようにも見えた。
　この場所の名は〝ジュゴン岬〟。
　最後の予選を行うまさに闘技場だ。
《さぁ～て泣いても笑っても槍が降ろうとこれが最後！　予選第三回戦、バトルロイヤル！　小細工無しのガチンコバトルだ！》
　ヒッコシクラブが停止したことで参加者たちは地面へ降りる。
　岬を眺めつつ、鳥の背から実況を行うハッタリーの声に注目していた。
《現在残っている選手たちは全員宝箱を持っていることだろう！　その宝箱を開けてくれ！　中にはすでに抽選結果が用意されており、これから四つのブロックに分かれて戦ってもらう！　ただしこれは普通の試合ではない！》
　ハッタリーの実況を聞きつつ参加者たちが宝箱を開け始めた。
　鍵はかかっていない。簡単に開けられる。

中には確かに一枚の紙が入っているのみで、でかでかとアルファベットが書かれていた。
《Ａ～Ｄの四つのブロックに分かれ、前方に見える天然のリングの上で戦ってもらう！　ただし先程も言った通り普通の組み分けなんてしない。用意した宝箱全てにＡ～Ｄまでの抽選用の紙が入っていてどれが回収されるかわからなかった。つまり！　今ここに居る君たちは不平等に四つのブロックに分けられる！》
つまり残り１００組を四等分するつもりは最初からなかったということだろう。
運が良ければ有利にもなるが、不利になる可能性も低くない。
全ては運任せ。
参加者たちはどよめきながら自身の紙と周囲の紙を確認し始める。
《ここで残れるのは一ブロック２組のみ！　四ブロックでついに本戦出場の８組が決定する！　勝利する条件は相手を海へ叩き落とすこと！　たとえ怪我一つしていなくても海に落ちた時点で失格になるぞ！　生き残りたければ死んでも落ちるな！》
沖を見れば敗者用の巨大なガレオン船が数隻浮かんでいる。
見世物としては良い条件だろう。ブルースクエアではさらに多くの人間が見ているに違いない。宝探しよりレースより、こういった状況の方がよほど燃える。
戦意を燃やしているのは一人ではなかった。
参加者のほとんどが力を漲らせて岬を見つめていた。
《ただしここでも我がブルーベリータイムズ社と契約した妨害者が乱入する！　一筋縄じゃいかない連中ばかりなので油断してると一瞬にして海中に違いない！》
ハッタリーが声を張り上げる。
参加者の熱気を感じ取り、彼も興奮し切った様子だ。
《それでは三回戦、バトルロイヤルを開始する！　まずはＡブロックの試合だァ！》
そう告げられ、Ａと書かれた紙を持っていた者たちが笑みを浮かべた。

たとえ何組参加しようと生き残れるのは2組のみ。
ギャンブル的な要素を加えた戦いが、凄まじい熱気の中で始まろうとしていた。

バトルロイヤル　Ａブロック

ブルースクエアの観客が、ガレオン船に居る敗者たちが、こぞってその試合に注目していた。

宝探し、レースと続き、ようやく待ち望んでいたものが開始される。やはり観客が望んでいたのは海賊同士の戦いだ。小競り合いではなく正面から殴り合うところを見たい。

本戦を前にしてボルテージは一気に上がっていたようだ。

《バトルロイヤル、Ａブロック！　出場選手は２５組のようだ！ランダムな抽選だった割には平均的な数字だろう。この中でたった２組だけが生き残るぞォ～！》

岬にある天然の闘技場にはすでに参加者が集まっていた。

Ａブロックは２５組が参加。

足場は白く硬い岩で、半径五十メートルほどの円形。中々の広さだが、周囲が海に囲まれ、これから何らかの妨害があると考えればさほど広くは感じられない。

２５組、総勢５０名が生き残りを賭けるには少々狭いとも思えてしまった。

ハッタリーはさらに張り切った様子だ。

同じく観客たちも彼らに聞こえないと知っていて歓声を上げる。

参加するメンバーを見てかなり興奮していたらしいのだ。

《初っ端だが早速登場だぞ！　優勝候補筆頭、火拳のエースだ！相棒は麦わらの一味副船長の紙使いキリ！　伝説の一味と話題のルーキーが手を組んだこのコンビを一体誰が止められるぅ！》

ブルースクエアでわっと声が上がる。

当初は参戦予定のなかった選手とはいえ、それほどのビッグネームならば無視できない。当然優勝するだろうと誰もが注目していて、最も期待されているのがエースだ。

その隣に立つキリについては、足手纏い程度にしか思われていない。

白ひげの部下を支えるにはあまりにも無力。

従ってエース一人でやった方がいい、とすら語る声は多かった。
《さらに話題のルーキー、モンキー・D・ルフィも参戦だァ！　自分の右腕をエースに任せたということは白ひげと手を組んだのか!?　それとも傘下に加わったのか!?　どちらにしても今大会、この男が台風の目になる予感がするぞォ！》
「バカ言え！　おれは傘下になんかならねぇ！　おれが船長だ！」
ハッタリーの実況に怒るルフィの声も観客には届かない。
十分盛り上がったと判断したハッタリーはいよいよ試合を始めようと考えていた。
《そろそろ始めようか！　残れるのはたった2組！　片方が落ちても片方が残っていれば戦闘を続行することはできるが、一度海に落ちればもう戻れない！　カナヅチも安心してくれ、海にはすでに敗者回収のためシーラパーンが集まってくれている！》
見れば確かに海面から顔を出すシーラパーンが、少し距離を置いて闘技場を見ていた。溺れ死ぬ心配は必要ない、ということか。
戦闘が始まる直前、独特の緊張感。
顔つきを変えたAブロック参加者たちは力を溜めるように身構えていた。
《ルール説明はこれくらいにしてさっさと始めよう！　Aブロック、試合開始ィ！》
空に花火が上げられ、ドンと大きな音が鳴り響いた。
頭上で大気を揺らした瞬間、海賊たちは一斉に動き出す。
その場に居たほぼ全員が同じことを考えていただろう。ここで勝ち残るためには、まずエースを仕留めなければならない。そのためには敵との共闘も辞さないと。
しかし誰よりも速く動いていたのはエースだ。
開始の合図と同時に右腕が炎に包まれ、自らの前方に突き出した。
彼の異名、〝火拳〟は巨大な炎の拳を叩き込む技である。
パートナーのキリ、味方のルフィとビビが背後に居ることは確認している。そのため気兼ねなく攻勢に出れて、全力の攻撃を敵の集団へ繰り出した。

「火拳ッ!!」
「ギャアアアアアッ――!?」
轟音と共に屈強な男たちが一瞬で吹き飛ばされる。その勢いに耐えられる者は一人もおらず、全身が燃えてしまうため水が必要だった。攻撃を受けた者は一人も残らず海へ落ちていき、すぐさまシーラパーンに回収される。
たった一撃で半分以上が脱落する。
15組が消えて、残り10組。残った全員がエースの一撃に驚愕していた。
《おぉ～っと!? 開始直後、早速エースが動いたぞォ！ その結果生き残れたのはわずか10組程度のみで、他は全員が失格となった！
なんてことやらかすんだこいつはァ！》
「わりぃな。ちょっといきなり過ぎたか？」
「すっげぇエース！」
「はは、ここまでとはね」
「すごい……こんな人が実在するの……？」
驚かずに居ろという方が無理な話だ。
実力があまりにも違い過ぎる。同じ舞台に立てる格ではないのだ。
その一撃で残った敵はエースに怯えて動き出せない。
それを知りつつ、エースは握った拳を解こうとしなかった。
残った10組、全員が怯えている訳ではないらしい。見回してみれば数名エースに敵意をぶつける者が居る。その数名がマシラとショウジョウで、1億8000万の賞金首〝猛進のギュスターヴ〟だ。
だが他の者にしても、考え方を変えればまだチャンスはある。
残れるのは2組。必ずしもエースを倒さなければならない訳ではない。エースに1組の枠を与えてもう一つが自分になり、本戦にさえ残れば名は大きく売れる。こうなれば優勝を諦めるにしてもせめて大きく名を上げたいというのが最後の欲求だった。
狙うのはエースではなく、他の9組。
そう考える者も居て、逃げ出す者は一人も居なかった。
やっと全ての参加者が動き出して戦闘が始まる。

エースを除いて考えた時にまず誰を狙うべきなのか。全員が狙うのは女性のビビであり、外見を見て弱そうだと判断し、一斉に襲い掛かろうとした。
「まず女を狙え！　確実に1組は減らせる！」
「悪く思うなよ女ァ！」
「ゴムゴムの！」
ビビを狙おうと駆け出す敵を見据え、ルフィが両腕を高速で突き出した。
直後には無数のパンチが伸びて彼らの全身を打つ。
「ガトリングッ！」
「ギャアアアッ!?」
「な、なんだこいつ――げふっ!?」
襲ってくる4組、8人を一斉に殴り飛ばして海へ落とす。
ルフィはにっと笑って自身の拳をぶつけた。
彼の背後に立つビビは動揺しながらも口を開いた。
「あ、ありがとうルフィさん」
「にっしっし！　おもしろくなってきたなぁビビ！」
「麦わらァ！」
すぐにマシラの大声が聞こえた。彼も敵を殴り飛ばし、海へ叩き落としながら走ってくる。その目はビビではなくルフィのみを捉えているらしい。
迷わずルフィも彼に向かって駆け出した。
邪気もなく、お互い笑顔のままで拳を向け合う。
「いっちょ勝負といっとくかァ！」
「おおっ！」
互いの腕が届く距離に入り、両者が強い一歩を踏みしめて足を止めた。
腰を捻りながらパンチを繰り出し、攻撃は全くの同時。
真正面から拳が激突して二人の体に衝撃が走る。
「ブレットォ！」
「猿殴り！」

拳に凄まじい痛みが走り、押される力で姿勢が崩れ、両者は弾かれるように後ろへ飛ばされた。
慌てて着地し、体の状態を確かめて、問題は無さそうだ。
マシラは痛みに顔をしかめながら右手を振っていた。ルフィの一撃は彼を驚かせるほどの威力を持っており、正面から受け止めたせいとはいえ驚きを隠せない。
しかしマシラに怯んだ様子はなかった。
自身と互角に打ち合えると知ってむしろ喜んですらいる。
男の勝負は正面からの殴り合い。それが〝猿あがり〟への道。
喜ぶマシラは迷う暇も惜しいと駆け出す。
ルフィは逃げることなく笑顔で迎え撃った。
「ウッキィ！　拳が痛ぇな！　こんなに痛ぇのはグルグル眉毛の蹴り以来だ！」
「眉毛？　お前サンジと会ったのか？」
「おうともよ！　おれのファンだったが宝箱は譲れなかった！」
「んん、そうか。別に仇とろうなんて思わねぇけど――」
「おおおおっ！」
マシラのパンチが繰り出される。
ルフィは的確に見切ってその場で屈み、攻撃を避けた。そのまま流れるような動きで反撃のパンチを繰り出し、マシラの腹を捉えた拳が強烈な痛みを与える。
一瞬、彼の巨体が右腕一本で浮いてしまった。
それだけでは終わらずルフィは体を回転させる。
回転の勢いを使って腹に蹴りを叩き込み、さらに回って頬を殴る。
マシラが足下をふら付かせたところで右腕を思い切り伸ばした。
「ゴムゴムのォ～……回転弾（ライフル）！」
「はおっ……!?」
胸元を殴られ、耐え切れずに地面を滑って数メートルまで吹き飛ばされた。
その部分は痛むが、負ける訳にはいかず、胸元を押さえながら即座に起き上がる。

ルフィは指の骨を鳴らし、笑みを消して真剣な顔で呟いた。
「おれは優勝しなきゃいけねぇんだ。こんなところで負けてられるか」
「ぐふっ……そうか。そうこなくちゃ面白くねぇ！　ウッキッキ！」
同時に動き出して全力でパンチを繰り出す。
そこからは攻撃の応酬となり、二人は一歩も退かずに殴り合いを始めた。
実力者の激突を見て怯む者も居るが、確実に数は減っている。残りはたった6組。火拳のエースを相手にしないとして、決着はすぐに着く。
そんな思考が漂ったところで海面で水が跳ね上がった。
ハッタリーが事前に言っていた妨害者が今になって乱入してきたのだろう。
勢いよく飛び出してきて見事に着地したのは可愛らしい外見の動物。
数は二十匹以上は居るだろうか。小柄だがそれはジュゴンであり、正式名称をクンフージュゴンという。アラバスタ近海に生息する動物の一種だ。
嬉しそうに目を光らせたルフィが戦闘を中断していた。
ビビはそれ以上に驚いており、キリの傍に居ながら真っ先に警戒する。
《遅ればせながら出てきたぞ！　こいつらが今回の妨害者だ！》
「うっはぁ！　なんだこいつら！」
「クンフージュゴン!?　アラバスタ生息のジュゴンでとても強いの！　通行人に勝負を挑んで、負けると弟子入りしてついてくるわ！」
「うおおっ！　お前らなんかに負けるかァ！」
「だから勝ってもだめだって!?」
ルフィはマシラと戦いながらも襲ってくるクンフージュゴンの相手をし、強かに殴り飛ばして勢いよく地面を跳ねる。その場の様相は一気に乱戦となった。

腕のある者は襲い掛かるクンフージュゴンを負かせるが、腕がなければ海へ落とされる。
混乱していた参加者は次々落とされていき、数はさらに減っていく。
残り6組。
ついにはエースを襲うクンフージュゴンまで出てきた。
四方から一気に襲ってくる彼らを眺め、エースは薄く笑みを浮かべた。
「やれやれ……しょうがねぇな」
ドクン、と大気が揺れる。
再びの感覚にキリは目を見開いた。
そこに立ったまま微塵も動かず威圧する力。理屈は知れないが、彼がそれを使っているのに自分やビビが無事なのは敢えて見逃されているからだろう。
その証拠に明確な変化が現れる。
全てのクンフージュゴンたちが揃ってエースに頭を垂れたのだ。
「クォォ……クオッ！」
《こ、これはどうしたことだァ!? 何もしていなかったようにしか見えないが、クンフージュゴンが負けを認めているぅ!? 一体何をしたんだァ！》
「弟子入り？ そんな、何もしてないのに……」
「何かしたんだ。でなきゃクンフージュゴンが負けを認めるはずがない」
エースは、一匹たりともクンフージュゴンを倒していない。しかし全員が彼に頭を垂れる。先にルフィが倒して、ルフィに弟子入りした者まで掌を返している。
おそらくそれだけ実力の差があるということだろう。
とてもではないが信じられない光景だった。
キリは笑みを消して厳しい目をエースに向ける。
悪魔の実の能力者だからではない。やはりエースはこの大会に参加している誰よりも強く、得体が知れぬ力を持ち、そして危険であっ

た。
笑顔で振り返ったエースは警戒心を強めるキリと視線を合わせる。
「わりぃがおれは人に物を教えられるほどできちゃいねぇ。心配すんな、この海で生きてりゃ嫌でも知る時が来る。今は焦らず進めばいいさ」
キリが発する敵意に気付きながら笑ったのだろう。その胆力も含め、只者ではない。
まだ警戒しなければならない実力はないということだろうか。
いくらルフィの兄弟とはいえ、彼が見せる余裕には肝を冷やす。
クンフージュゴンが服従したことで戦い易くなったのは確かだ。
視界が開けたことでついに猛進のギュスターヴがエースへ戦いを挑む。
「火拳のエース！」
「おう。なんか用か？」
「手合わせ願おう！」
「いいぜ。来な」
《ここで懸賞金1億８０００万のギュスターヴが行ったァ！　エースと一騎討ちだ！》
ギュスターヴ、その男は手長族だった。
両手に短刀を持って素早く走り、フェイントを加えながら接近する。エースは一歩も動かない。策を弄さず迎え撃つつもりのようでその顔には笑みさえある。
好都合だとギュスターヴは跳躍した。
甘く見ているのならばその油断を利用するまで。
彼を仕留めて名を上げる。
それだけを考えて腕を振り抜いた。
エースは、攻撃を見た後で動き出す。
両側から挟み込むような短刀を跳んで回避し、彼の頭上を取る。
ギュスターヴの目は彼の姿を捉えていたが、唖然として声を発することすらできない。
片時だって目を離さなかった。それなのに動きだって見えなかっ

たのである。
驚愕するギュスターヴの後頭部が片手で強く掴まれた。
落下の力も利用して落ち、体重を預け、彼の顔面を強く地面に叩きつけた。衝撃で鼻血が噴き出して気が遠くなりかけ、その一瞬でエースはギュスターヴの傍を離れてしまう。
迫っていた敵は彼だけではなかった。
周囲の敵が居なくなったことで向かってくるのはショウジョウ。
ルフィとマシラが戦っている。ならば自分はとエースを狙ったらしい。
《強〜い！　やはり火拳のエースは只者ではない！　お前なら止められるのか！　懸賞金３６００万ベリー〝海底探索王〟ショウジョウ！》
「オウオウ火拳よ、おめぇの強さにはハラハラするぜ。おれの声を聞いてみなァ！」
「待て！　船長の邪魔はさせねぇぞ！」
「ん？」
エースとの間を遮るようにギュスターヴとペアの男が割り込んだ。こちらも手長族である。同じく両手に短刀を持って道を遮ろうとしていた。
ショウジョウは大きな反応を見せない。
手に持ったマイクを口元へ運び、それが戦闘開始の合図となった。
「破壊の雄たけび（ハボック・ソナー）！」
「うわっ、あああああっ――!?」
それはただの雄たけびだった。
間近で聞いた男がそう思えなかったのは、聞いているだけで衝撃波を感じ、体内の水分が震えて大きなダメージとなったからに違いない。
凄まじい音量の雄たけびが周囲の物を全て破壊しようとする。
頑丈なはずの足場にまでわずかなヒビが入り、一番近くで聞いていた男は倒れかけた。
《とんでもない大声で天然の闘技場が震えている！　クンフージュ

ゴンも苦しんでいる！　この大声を止めない限り勝ち目はなさそうだが――》

ある時、ピタッと叫ぶのをやめたショウジョウが動き、足を振り上げた。

前傾姿勢だった男の後頭部を踏み抜き、地面に顔面が激突する。

気を失う衝撃としては十分だっただろう。手加減したエースとは違い、ショウジョウは全力で彼の頭を踏み抜いた。男は武器すら手放して気絶する。

敗者はリング外へ。それがルール。

彼の脚を掴んだショウジョウは海へ向かって投げつけた。

「オウオウ、寝たいなら外だぜ。ここに居られると困るんだ。ハラハラするからな」

《またしても一人減ったぞ！　続いての脅威はショウジョウか!?

奴の大声は果たしてエースに通用するのか、注目の一瞬です！》

「バカ野郎。通用しねぇならやる訳ねぇだろ。ハラハラすること言うな」

再びショウジョウがマイクを構える。

エースはにやりとして膝を曲げた。

「破壊の雄たけび（ハボック・ソナー）！」

ショウジョウが叫び出し、地面が震えた瞬間、エースの全身は炎となった。一直線に宙を駆けた火の軌跡は目にも止まらぬ速さでショウジョウの懐へ飛び込む。

嫌な予感がしてショウジョウが目を開くと、すぐそこにエースの姿があった。

伸ばされた両足が腹へ突き刺さり、宙を駆けた勢いが全てその一点に集中される。

驚く暇もない。悲鳴を発したショウジョウは水切りをするように海面を跳ねて飛んでいった。

「ぶぉおおおおおおっ!?」

《あぁ～っ!?　ショウジョウの巨体が蹴り飛ばされた、まるで水切りをする石のようだ！　やはり強～い！　この男の本戦出場は確実

か！》
「ショウジョウ～！」
ショウジョウもリングアウトで失格。マシラが声をかけたところで遅かった。
視線を外したその一瞬はあまりにも大きな隙で。
懐に飛び込んで回転したルフィは強烈な蹴りを叩き込み、腹を押さえたマシラが後方へ跳ぶ。息が詰まって怒りが込み上げる。マシラの目は再びルフィの姿を捉えた。
強く地面を蹴って跳び出す。
ルフィは両腕を背後へ伸ばしており、これが最後の一撃に見えた。
マシラもまたその覚悟で右腕をぐるぐる回す。
正面からぶつかって勝つ。これこそ〝猿あがり〟。
ショウジョウが負けたからといって気合いは淀むことなく、彼も前へ出る。
「これが最後だァ！　全力で来ォい！」
「おおっ！　ゴムゴムの――！」
「猿殴り！」
「バズーカ！」
勢いよく突き出された掌底と拳が激突し、一瞬の静寂。
接触の瞬間、確実に二人の視線は合わさっていた。
吹き飛ばされたのはマシラであった。
「うぉおおおおっ――!?」
《ここで〝サルベージ王〟マシラが吹き飛ばされたァ！　麦わらの手でリングアウトォ！》
頭から勢いよく海へ落ちて、彼もまた敗退となる。
残り2組となるためにはあと一人。
すでに起き上がったギュスターヴが最後の力を込めてエースを睨みつけており、これで決着をつけるつもりで二本の短刀を回す。そしてエースも彼に向き直った。
「おのれ……おれはまだ、負けていないッ！」
「やめとけよ。お前じゃおれには勝てねぇ」

「黙れェ！」
ギュスターヴが駆け出した。芸も無く真正面から突進を行い、待ち受けるエースの命を狙う。感情的になってもはや勝機について考える余裕もなかった。
長い両腕が振るわれて、再び切り裂こうと狙った時、エースの体は炎になって宙を駆ける。
気付けば背後を取られていた。
辛うじて振り向けた時にはエースの拳が赤く輝いていて、ギュスターヴは呑み込まれる。
「火拳!!」
空気が破裂するような轟音があった。
視界どころか全身が炎に包まれ、気付けば空を飛んで、もう逃げることはできない。
ギュスターヴを呑み込んだ巨大な炎は海面を燃やし、百メートル以上を駆けた。その後になってようやく攻撃の残滓が消え、彼の体を海へ落とす。
素晴らしい一撃に観客は惜しみない賛辞を与え、ハッタリーは強くマイクを握りしめた。
《決まったァ～！　必殺の火拳で猛進のギュスターヴがリングアウト！　この時点で残っているのは2組のみ！　本戦出場決定だァ～！》
リング上に残った四人の姿が映像電伝虫によって映し出され、多くの歓声を生む。
《Aブロック勝ち抜けは、ルフィ＆ビビペアとォ！　エース＆キリペア～！》
わっと盛り上がるブルースクエアの町は騒がしい。
やはり大本命エースと、話題のルーキー麦わらの一味が上がってきた。
優勝するのは誰か。賭けは更なる盛り上がりを見せるものの大半がエースに賭けるらしい。
多額の金が動く一方、優勝はエースに違いない、という意見を覆す

者は居ないようだ。

バトルロイヤル　Bブロック

Aブロックの試合が終了した直後、敗者が集うガレオン船も色めき立っていた。
やはり話題に上がるのは火拳のエースの強さ。他の参加者とはまるで格が違うと、その実力を見て興奮せずにはいられず、優勝するのは彼だと語る声ばかり。
その一方で麦わらの一味はルフィたちが勝ち残ったことを喜んでいた。
モニターを真剣に見つめる一同は喜びを表して声を上げる。
「よっしゃあっ！　ルフィたちもキリたちも両方残ったぞ！　この調子で優勝だぁ！」
「ビビ様ぁ～!!」
「よかった。ビビも無事だし、今のでちょっと休めたみたい」
「それに本戦出場は決定だ。もう今日はこれ以上戦わなくていいだろう」
「フン。最初からこれにしときゃよかったんだ……」
満足に戦えなかったゾロは体が疼いているらしく、つまらなそうに顔をしかめているものの、他の面々は喜びと共に安堵で一息つく。
最も心配だったのは疲弊していたビビだったが、杞憂だったかと思えるほどあっさり終わった。
それもこれもエースの大立ち回りがあったからであり、その事実は無視できない。
「しかし火拳のエース、なんて強さだ。同じ人間とは思えねぇな」
「た、確かに今は味方だけど、あれが敵だったらと思うと恐ろしいな……あっ！　まさか本戦で味方同士潰し合うってことねぇよな!?」
「可能性はあるだろ」
「やべぇじゃねぇか!?」
サンジの言葉にウソップが狼狽する。
確かにエースは強い。いくら兄弟だとしても今のルフィでは勝てないだろう。もし本戦で潰し合うことになれば自分たちにとっては

不都合ばかりである。
しかし本戦が如何なる競技になるか想像もできていない。
焦り出すウソップにサンジは冷静な声で言った。
「心配すんな。もしエースが勝ったとしても組んでんのはキリだ。エターナルポースはおれたちの手に入る。ま、エースがごねなきゃの話だが」
「そっちの方が大問題だろっ。あいつが暴れ出したら誰も止められねぇぞ?」
「それも心配はいらねぇはずだ。そもそも参加のきっかけはおれたちが引きずり込んだからで、本人はさほど欲しいもんなんてねぇんだろ」
「なんでわかるんだよ」
「話してみてそんな感じだったってだけだ」
「できればそれが当たって欲しいな……」
不安を抱いている様子でウソップは頭を垂れてしまった。
いつものことなので今更誰も驚いていない様子である。
ひとまずルフィたちのことは気にしなくて済む状況になった。だが問題はまだ残っている。勝ち残ったメンバーの中にはシルクとチョッパーの姿もあった。
彼女たちは勝ち残れるか。或いは怪我をすることなく終われるのか。
この先の試合も目が離せず、ナミは不安そうな顔でモニターを見つめる。
ゴージャス・ハッタリー号から操作を行っているのか、モニターに映る画面が変わった。
次の試合、Bブロックに出場するメンバーの名前が映し出される。
ランダムに選ばれるため、参加する人数も不平等。今回はたったの8組のようだ。
画面を見たナミがあっと声を漏らす。
思わず指差し、そこに仲間の名前を見つけたのだ。
「あれ見て！　シルクたちだわ！」

「しかも８組だけか！　こりゃいけるぞ、絶対残れる！　チャンスだぞシルク～！　頑張れチョッパー！」
「シルクちゅわ～ん！」
「ビビすわまぁ～!!」
「クエ～ッ！」
「うるせぇなおっさん！　ビビちゃんは無事だっただろうが！　いい加減泣き止め！」
自身の無力さを嘆くイガラムは泣きじゃくってビビの名を呼んでいた。しばらくこんな状態なのでついにサンジが叱りつける。
今はシルクたちの試合に集中すべき時だ。
さらに画面が変わってジュゴン岬の様子が映し出される。
８組の参加者はすでにリング上へ移動し終えていた。
《Ｂブロックはなんと驚きの８組参加！　これが最小になる予感がプンプンするぞ！　この中から６組が脱落し、２組だけが残れる！　最後まで立っていられるのは誰だァ！》
調子よくハッタリーが告げることで観客は大いに盛り上がる。
参加選手たちも戦意を向上させ、試合が始まるのを今か今かと待ちわびていた。
そしてついに彼がその時を告げる。
《Ｂブロック、試合開始ィ！》
空で花火が破裂して、リング上の全員が身構えた。
参加するのは８組。人数にして１６人。
少ないが故に周囲に対する警戒心も乱戦の比ではなくて、上手く立ち回らなければチャンスをピンチに変えてしまわれる可能性もある。
彼らは誰が仕掛けるのかを警戒し、待つ姿勢を見せる者も少なくない。
シルクとチョッパーもまた、警戒するからこそ自分から仕掛けようとはしなかった。
そんな周囲を一切気にせず駆け出す一人の影がある。
「あちし待たなぁ～い！　さっさと終わらせるわよ～う！」
駆け出したＭｒ．２が一番近くに居た男の腹を蹴り飛ばし、彼は防

御も受け身も取れずに海の中へと叩き落とされ、周囲は冷や水を浴びたかのような衝撃を抱く。
この中に一人バカが居た。駆け引きを無視した行動で一気に均衡が崩れたのである。
Ｂブロック参加者８組。人数にして１６人。これは誤りである。
唯一ペアを持たずにたった一人で参加しているＭｒ．２が存在するため、人数にすれば１５人だ。
本来ならば二人一組でなければ参加できない大会のはずだった。
自らの意志で受付へ向かったＭｒ．２もその説明をされており、一人だけでは参加はできないと言われている。しかしその時彼は自らの持論、オカマは男で女、つまり二人分、と暴論を押し切って受付を黙らせており、一人だけで参加できたらしい。
唯一の例外。今の行動から見てもバカであることは間違いないだろう。
恐ろしいのはその強さ。
予選を一人で勝ち抜いただけでなく、現在も元気が有り余っている。
無駄な動きにしか見えないがくるくる回ったりする暇もあり、蹴り飛ばした男の相方に接近し、強烈なパンチを叩き込んで海へ殴り飛ばした。
開始数秒。
残り７組の１３人。
Ｍｒ．２の行動は確実にリング上へ衝撃を与えた。
《は、速ぁ～い！　試合開始と同時に一人が脱落！　その直後にもう一人脱落！　たった一人の行動によって緊張状態が崩された！　これは荒れそうだァ～！》
「んが～っはっは！　どきなさぁ～い！」
Ｍｒ．２は更なる攻勢に出て敵へ襲い掛かる。慌てて迎え撃ったが実力の差は大きかった。
シルクとチョッパーは狼狽して辺りを見回す。
彼につられて動き出す者が多い。リング上は混乱しているらしく、

冷静に自分の判断で動いていられるような状況ではなかった。
だが考え方によってはチャンスでもあった。
この勢いに乗じて敵を倒し、人数が少ないからこそ一気に決める。
そんな戦法も悪くない。
「シルク、どうする!?　おれはどうすればいい！」
「仕掛けよう！　あの人が動いてみんな混乱してる！　落ち着く前に決めるよ！」
「わかった！　それじゃおれも――」
恐怖心を感じながらも無理やり押し殺し、指示を受けたチョッパーは敵の姿を見据えていた。
帽子の下からランブルボールを取って一気に決めようと考える。
その時、崖の上から飛び移ってきた者がリング上へ乱入する。
ドスンと重そうな音が聞こえてチョッパーはそちらを確認してしまう。
やけに大きな、ラパーンである。
《さぁ～てここで乱入者だ！　ボスクラスのラパーンが五体！
たった五匹と思うなかれ、こいつらの戦闘力は通常のラパーンの倍はあるぞ！》
「で、でかい……！　こんなラパーン、初めて見たっ」
「敵に集中しよう！　Ｍｒ．２は放っておいて、他の参加者を倒す！」
「んが～っはっはっは！　おんもしろいじゃな～い！」
地面を蹴りつけたＭｒ．２が空中でくるくる回る。
着地の寸前、見えているが反応できず動けない大男の頬を蹴りつけ、体勢を崩す。
Ｍｒ．２は着地すると同時にぐるりと回った。
「アァン――」
回転して振り向いたと同時に拳が突き出される。
「ドゥ！」
腹を打って背が曲がった。
白目を剥きそうな大男は全く動けずにいる。

「クラァ！」
さらに回転して回し蹴りを叩き込んだ。
大男の体は軽々と宙を飛んでいき、地面を転がる暇もなく、頭から海へ落ちた。またしても参加者が減って自分が狙われる機会が多くなっていく。
Ｍｒ．２は一旦足を止め、次の標的は誰にしようと周囲を見回す。
「さぁて次は誰かしら。かかって来いやぁ！」
ドスンと音を立てて目の前にラパーンがやってきた。
Ｍｒ．２はにやりと笑い、独特の構えで迎え撃つ。
ブルーベリータイムズ社と契約しているとはいえ、ラパーンは野生動物である。獰猛で人を襲う気質は変わっておらず、技術を用いずに純粋な身体能力を武器としていた。
ラパーンが拳を握ってパンチを繰り出し、大ぶりとはいえ攻撃が迫る。
Ｍｒ．２は的確に間合いを見切って一歩下がるだけで回避した。
ふざけた姿に見えるもののＭｒ．２は武闘家である。
用いるのはオカマ拳法。一朝一夕では手に入らない技術を長い時間をかけて会得した。
間合いを見切り、些細な動作から敵の行動を予測し、最善の攻撃と回避を行う。
彼の強さは生半可なものではない。特にこういった敵が存在する状態での戦闘になれば、その強さは本来の力を発揮する。宝探しやレースよりよっぽど得意分野だった。
ぐっと膝を曲げ、撃ち出すようにＭｒ．２が前へ走った。
その速さ、強さは、自然界に存在する物とはまるで異なっている。
反応できぬほどの速度で目の前まで迫っており、見切れぬ速度で無数の蹴りが繰り出された。
「白鳥アラベスクッ！」
まるで全身を蹴られたような衝撃だった。
ほんの一瞬で顔や胸元、腹に至るまで複数回の蹴りを受けた。ラパーンは立ったまま地面を滑ると後方へ下がらされて、なんとか止

まった時には背後に海がある。
フラフラの状態でラパーンは更なる追撃を受けた。
「落ちなさいよデブチン！　あんた邪魔よぅ！」
ドンッと腹に蹴りを叩き込まれ、今度こそラパーンは海に落ちてしまった。
笑顔のＭｒ．２は片足と両腕を上げてポーズを決め、またしても上機嫌に回り始める。
《なぁ～んと！　お邪魔キャラのラパーンが海に落とされるというアクシデント！　一体誰なんだこの男はァ!?　とんでもない強さでこの試合を引っ張っている！》
「バカねぃ！　あちしは男であって女でもある……すなわち！　オカマよぅ！」
《あ、これは失敬。え～彼とも言えるし彼女とも言えるといいますか……とにかくこのオカマの人物を止められない限り勝機は無さそうだぞォ！》
ハッタリーに文句を言った直後、Ｍｒ．２の死角から敵が迫った。
彼に気付かれない内にと鋭いパンチが突き出される。
しかし、完璧に死角を突いたはずの攻撃は呆気なく回避されてしまい、いつものポーズでくるりと回りながら横へ動いただけで空を切った。
これは偶然ではない。彼は自分よりも速いのだ。
相手の攻撃を待ってからでも避けられるスピードは普通ではない。
驚愕したクロオビは慌ててＭｒ．２に反応しようと考え、それよりも速く頬を蹴り飛ばされた。
「ぐはぁっ……!?」
「ジョーダンじゃな～いわよ～う！　あんたも落ちなさぁ～い！」
地面を転がったクロオビが急いで立ち上がる。
即座に拳を構え、ペアであるチュウへ焦った声をかけた。
「チュウ！　援護しろ！」
「くらえ水鉄砲！」
「アァン――」

チュウが口から弾丸のような勢いで水を吐き出すが、くるりと回って避けたＭｒ．２は彼に接近し、回避するほどの暇を与えずに自身の攻撃を行う。
まるで銃で撃たれたような衝撃。
爪先が刺さるような蹴りが腹を打ち、チュウの体は勢いよく地面を転がる。
「ドゥ！」
「ぐぅあっ!?」
「チィ、おのれ……！」
チュウが受けたダメージは大きい。追撃させないようにクロオビがＭｒ．２へ接近する。
全く慌てずにＭｒ．２が彼に振り返って、両者は同時に攻撃を行った。
「エイッ！　千枚瓦正拳！」
「白鳥アラベ～スク！」
互いに激突する。だが結果は一方的なものだった。
クロオビが突き出した全力の拳は、Ｍｒ．２の蹴りによって正面から跳ね返され、さらにそれは複数回来る蹴りの一つに過ぎず、顔や胴体に更なる蹴りが突き刺さる。
一瞬にして気が遠くなりそうになる。
Ｍｒ．２はとどめのために拳を握った。
「どうぞオカマい拳（ナックル）！」
拳が胸を打った瞬間には体が空を飛んでいた。
距離はそれなりにあったはずだがたった一撃で海へ落とされてしまう。
すでに立ち上がっていたチュウはその光景が信じられず、呆然と立ち尽くす。
「てめぇ、一体何なんだ……？」
「何って？　見ればわかるでしょ？　あちしは男で女、つまりはオカマ。〝あやふや〟ねぃ！」
駆け出したと思った直後には左の頬を蹴られていて、チュウもまた

蹴り飛ばされる。体勢を立て直して耐える余裕もなく彼もリング外に弾き出されてしまった。
華麗に着地するとＭｒ．２は上機嫌に笑う。
「んが～っはっはっは！　楽勝ねぃ！　それじゃ次はぁ――」
《試合終了～！》
「アン？」
Ｍｒ．２が次の敵を探そうかと考えたところ、ハッタリーの絶叫が響き渡った。
試合は終了。幾ばくかの驚きを持ちつつ辺りを見回す。
四匹の大きなラパーンに囲まれて、シルクとチョッパーが立っていた。チョッパーはランブルボールを使用して腕力強化（アームポイント）に変形しており、本気の戦闘だったと窺わせる。
参加者はたったの８組だった。ならばそれだけ早く終わっても不思議ではない。
さらにラパーンが居るのなら納得せざるを得ないような状況だろう。
Ｍｒ．２は上機嫌に笑いながらまたしても意味なく回り始めた。
人数が少なく、決着が早かったとはいえ、見応えのある戦いだっただろう。
満足するハッタリーは勝者の名を叫ぶ。
《Ｂブロックを勝ち抜けたのはこれまた麦わらの一味、シルク＆チョッパーペア！　さらに……おや？　これは、えっと……え～不思議な点はございますが、Ｍｒ．２・ボン・クレー選手～！》
「んが～っはっは！　当然よねぃ！」
シルクは鞘に剣を納め、大きく息を吐き出す。
人数が少なくてよかった。一回戦のように２５組が参加する戦いだったならば、こうして最後まで立っていられたかはわからない。そう思う程度には疲弊している。
ランブルボールの効力が切れて、いつもの人獣型に戻ったチョッパーも思わずへたり込んだ。
特に彼はクロスカントリーの溶岩地帯で熱さにやられて、疲労はと

んでもないものがある。
元気に回っているＭｒ．２を見て信じられない想いだった。
彼がバロックワークスのエージェントだというのだから恐ろしい。
いずれは戦わねばならないのだろう。そしてそれが遠くないことはすでに知っていた。
「勝ててよかった、けど……私たち、本戦で勝てるのかな……？」
「おれも、正直そう思った。戦いながらあいつのこと見えた時に……」
呆然と呟くシルクに同意してチョッパーが本心を口にした。
Ｍｒ．２はバロックワークスのオフィサーエージェント。２のコードネームを与えられるほどの実力者だとは知っているが、それにしても強過ぎやしないだろうかと思ってしまい、バロックワークスと対面した時に自分たちは勝てるのだろうかと思ってしまう。
彼一人を知っただけで組織全体の力を思い知った気がしていた。
二人は黙り込んで何も言えなくなる。
この大会で勝利しなければアラバスタへは向かえない。しかし優勝すればすぐにアラバスタへ向かうことになるだろう。時間はもう残されていない。
今から修行をして強くなるための時間などあるはずもなかった。
自分たちは本当に勝つことができるのか。
三回戦を終えても全く疲労感を見せないＭｒ．２を眺め、そう思わずにはいられなかった。

バトルロイヤル　Ｃブロック

本戦出場が決定した参加者はゴージャス・ハッタリー号へ案内される。

千人以上の海賊が乗り込んでもまだ余裕がある巨大な豪華客船に、大会運営側のスタッフを除けばゲストとして乗り込んだのはたったの７人。

一回戦、二回戦の勝者が広大な甲板でモニターを前にしていた。

ルフィとエース、そしてチョッパーは大盛りの料理を床に置き、その前に座って食べていた。戦いを終えたばかりで消耗した体力を取り戻すべく、食事に没頭している様子。

そんな気分になれないビビとシルクは傍に座りながら手をつけない。

疲労感と試合が終わったという安堵で体が重い。ぐったりして動きたくなかった。

それはチョッパーも同じはずだが、彼はルフィの真似をするように食べている。

ルフィとエースは全く疲労を見せずに食事を楽しんでいる。

この二人は本当に人間なのだろうか。

呆れながらもそう思い、だからこそ頼もしい。苦笑したビビは不意に視線を動かした。

問題なのはそれよりも別のこと。

一所に集まる彼女たちとは少し離れた場所にあった。

片足でくるくる回るＭｒ．２の隣、モニターを見つめるキリが居る。先程からずっとそうして話しているらしく、表情は普段の笑みとは違っている気もした。

何を話しているのだろうと思いながら、近付けない。

彼らは声が届かない距離に立って肩を並べていた。

「なんでこの大会に参加したの？　任務ではないよね」

「ドゥーしてって、暇だったのよう。あちしたちに与えられる任務がなくって」

「今は、時期を見てる頃だろうからね」
「やっぱりあんたたちが関係してたってわけ？　そうじゃないかとは思ってたわぁん」
Ｍｒ．２が回るのをやめて、素直にその場へ立った。
モニターにはＣブロックの試合の模様が映っている。参加するのは１７組。Ｄブロックには５０組が参加する計算になりかなり偏った構成だ。
Ａブロックより人数は少ないが、エースのように大技を使う者が居ないため長引いている。
地道に一人ずつ落としていく展開が続いて、どうやら盛り上がっている様子だった。
「組織にとってあんたは切り札（ジョーカー）。全ての情報を握ってるおかげでボスと同じくらい重要な人物。ミス・オールサンデーはあんたほど組織のことを知らない。違う？」
「さぁね。彼女は頭が良いからよく知ってたと思うよ」
「んっふっふ、でも紙ちゃんほどじゃなかった。だってそうでしょ？」
Ｍｒ．２は腕を組み、にやりと笑って彼の横顔を窺う。
「組織の創設者はあんたとＭｒ．０。だからあんたが消えたって聞いてびっくらこいたのよぅ」
キリは笑顔でその言葉を聞き、何も言い返さなかった。
試合の展開を見つめて平然と言う。
「試合、長引かないだろうね。そろそろ終わるかな」
「んが～っはっはっは！　ちょっと変わったわねぃ紙ちゃん。なんだか凄く人間みたい」
「そりゃもちろん。ボクは人間だから」
試合は激しい乱戦の様相を見せていた。
１７組の海賊が互いを蹴落とし合うため激しい戦闘を続けている。
中でも特に目立っていた者が数名。
ハッタリーの実況がさらに熱を入れて行われていた。
《また一人落ちたァァ！　大立ち回りを見せるノコギリのアーロン

が止まらない！　凄まじい迫力で次々敵を落としていくぞォ！》
「下等種族がッ！　死にたくなけりゃとっととどけェ！」
キリバチを振り回し、敵を直接掴んで強靭な腕力で海へ投げ飛ばす。彼は一歩も退かずに敵へと襲い掛かり、あまりの迫力に恐れを為す者も居たほどだ。
同じくペアのはっちゃんが進化した六刀流を披露している。
五本の刀と一本の黄金の矛。柔軟な動きでそれらを振り回して敵が近付けない。アーロンほどの派手さはないが彼もまた着実に敵を倒していた。
《さらにこちらも凄いぞ！　正体不明の謎の選手！　巧みに十手を操り、襲い掛かる敵を全て返り討ちにしているようだ！　その選手の名は～……スモやん先生ェ！》
長大な十手で敵の腹を突き、跪かせた男がサングラスの下で苛立った目をする。
葉巻を同時に二本も銜えた状態で動き回っていた。
その男、サングラスと葉巻というアイテムを持ちつつ、身に着けているのは明るいアロハシャツと白いズボンという恐ろしいほどの軽装であり、明らかに苛立っているらしい厳つい顔が、どう見てもアンバランスな様相を強めている。
登録名は〝スモやん〟。本当の名前はスモーカーである。
海軍本部大佐が身分を隠し、バカ正直に海賊の祭典に参加しているらしかった。
「ふざけた名前だ……バカ弟子ィ！　二度とてめぇには考えさせねぇぞ！」
「そんなっ。これでも一生懸命考えて、スモー……やん先生が却下するからこうなったのに」
リング上に居る短髪の女性、眼鏡をかけて、帽子を目深に被っている人物が悲鳴のような声を発して悲しげにする。そうしながら手に持った刀で敵を斬りつけた。
彼女も本当はスモーカーの部下、たしぎである。
格好は動き易いもので、海兵とはバレない外見だった。

二人はペアを組んで身分を偽り、海賊として潜り込んでいるらしい。
幸い周囲の海賊たちは戦うことに集中して疑問を持ってすらいない様子だ。
ここへ来てスモーカーの注目度が上がっているものの、まだ問題らしい問題は起こっていない。
そう思った矢先だ。
リング上で奇妙な音楽が鳴り響き始める。
《なんだこれは？　突然音楽が鳴り始めたぞ。そして音の出所には一人の男が居る！》
多くの人間が音楽に注意を奪われた。突然始まったそれは妙に楽しげで、激しい戦闘にはとても似合わないような曲調。
見れば確かに一人の人間が演奏を行っている。
自身の肉体を楽器にして、アプーが音楽を奏でていた。
彼の目は特定の一人を捉えており、楽しそうに笑みを浮かべている。
振り返ったスモーカーがサングラスをかけたまま彼の姿を睨んだ。
〝海鳴り〟の噂は聞いている。一目見れば本物だと判断できる程度には知っていたつもりだ。そしてそのまま見逃していいはずがないとも思っている。
アプーもまたスモーカーを見ていたようで、いつの間にか視線が交わっていた。
ある時、左腕に違和感を感じる。
十手を持っていた方の腕がなぜか肘から切断されていて、スモーカーの視界に入った。
驚いた一瞬、アプーが小さく呟いた。
「スクラ〜ッチ……」
直後に体が爆発した。
スモーカーの肉体はバラバラに破壊され、体のパーツが四散する。
見ていたたしぎは絶句し、思わず手を止めてしまう。彼が何もされていなかったのは状況から見て明らかだった。突然の爆発の理由が

わからず、心が激しく揺れ動く。
「スモ……やん先生ッ!?」
《な、なんてことだ!? これは一体何があった!? ひょっとすると謎の選手スモやん先生は死んでしまったのだろうか! そうなればスクラッチメン・アプー選手が失格だが……いや! よく見れば死んだ訳ではなさそうだぞ!》
名前を間違えそうになりながら叫んだ時には、スモーカーの全身が煙に変化し始めていた。
アプーはにやりと笑ってその光景を見つめていた。
《なーんとスモやん先生、体が煙になって復活ゥ! まさか能力者だったのか!》
「アパパパッ……やっぱりこりゃおかしいよなぁ。なぁ先生?」
辺りを漂った煙がアプーの目の前で集まり、人間の形を作り出す。それがスモーカー本人の物。葉巻やサングラスまでそのままで、握った十手を強く突き出した。
避ける暇を与えない強烈な一撃。
アプーの腹に叩き込まれ、彼の体は軽々飛んでいった。
「ぐはぁ!? や〜ら〜れ〜た〜」
「あっ!? ちょっとあんた! 何やってんですか船長!?」
一撃を受けてアプーは地面を転がり、そのまま転がって海へ落ちてしまう。
見方によってはスモーカーが仕留めたとも思われるだろう。だがスモーカーは今の一撃が完璧に入った訳ではないと実感している。アプーは接触の寸前に後ろへ跳んでいたのだ。ダメージは半減してしまっておそらくさほど痛みもなかったに違いない。
それなのに奴は自ら海へ落ちた。
スモーカーは苦虫を噛むように表情を険しくする。
能力者は海に落ちれば浮かぶこともできずに沈むのみ。
彼らのような人間を助けるためにこの場にはシーラパーンが居る。
救助されたアプーはシーラパーンによって担ぎ上げられ、海上へ姿を現した。

先程の攻防、他にも異論を唱えたい者が居た。
アプーの部下が海に居る彼へ猛抗議を始めるのである。
「ふぅ～、いやぁ～まいった。ついついミスっちまったぜ」
「アプー船長！　あんた何やってんですか!?　今のわざとでしょ！」
「バカ、わざとな訳ないだろ。おれだって優勝したかったんだぞ」
「嘘つけ！　あんたそんな人じゃない！」
「わかったからちょっと待ってろ。オラッチだって言いてぇことがあるんだからよ」
そう言ってアプーが目を向けたのは他ならぬスモーカーだった。
完全に人の姿を取り戻した彼に怪我など微塵も存在しない。だからこそアプーが質問、というより確信をもって言葉を投げかける意味がある。
「やっぱりあんたおかしいよなぁ。オラッチが知る限り、煙になる能力者ってのは一人しか存在しねぇ。そりゃそうだろ。同じ実はこの世に二つと存在できねぇんだから」
笑顔で、ひどく楽しそうに言ってくるアプーを目にし、スモーカーは口を噤んだ。
こいつはわかった上で言っている。それがはっきり伝わってきたのだ。
「少し前にグランドライン入りした、有名な海軍の野犬……な訳ねぇよなぁ。いくら遊撃隊の別動隊隊長だからって、海賊の中に突っ込んでくるほどバカじゃねぇはずだし」
何を言われても答える気はない。スモーカーは彼に背を向けた。
「サイファーポールも来てるんだろ？」
ぴたりと、足が止まった。
他の海賊を海に叩き落そうとしたスモーカーはなぜかその場を動かなくなる。
その反応から考えておそらく知らなかったはず。ますますアプーは上機嫌になっていく。
「もしも海軍が来てるとすりゃあ狙いは海賊だろうなぁ。じゃあサ

イファーポールが来てるとすりゃ何が目的なんだ？　主催の新聞社が何か妙なこと考えてやがんのか？」
尋ねているところを考えるとおそらく彼もわかっていない。
今度こそスモーカーは歩き出して、背中越しにアプーへ言った。
「てめぇに答えることは何もねぇ」
「寂しいねぇ、アッパッパ！　まぁいいさ。じっくり見させてもらうしな」
話している間にアプーの部下も撃破されたらしい。頭から勢いよく落ちてきて、ちょうどアプーの目の前で水柱を上げて海中に姿を消した。
すぐに上がってきて顔を出す。
目の前だったのでアプーは気軽に声をかけた。
「ぶはぁっ!?」
「よう。残念だったな」
「ちょっと船長！　あんたが勝手にリタイアするから！」
「そりゃおれのせいじゃねぇだろ。あの大タコのせいだろ？」
部下の発言を受け流してリング上を見れば、足の先にグローブをつけた巨大なタコボクサーが周囲の人間を殴り飛ばしている。速い上に手数が多くて避けることが難しい。
妨害者のタコボクサーがどんどん参加者の数を減らしていた。
《参加者がどんどん減ってきたぞォ！　そろそろ決着だ！　果たして誰が残るのか！》
「おいアーロンッ！」
棘付きの棍棒を振り抜き、魚人のウィリーがアーロンへ襲い掛かった。
互いに武器を合わせて鍔迫り合いを始める。
至近距離で睨み合い、久々の再開でどちらも一気に殺気が膨れ上がった。
二人は魚人島で暮らしていた頃のライバルである。
そう言えば聞こえはいいが要するに反りが合わずに仲が悪かっただけの関係だ。

「間抜けな野郎だ、人間に負けて傘下になっちまっただと？
ちょっと会わねぇ間にずいぶん腑抜けになっちまったんだなぁ。なァサメ野郎」
「ケッ、はぐれ者のシャチの魚人。てめぇ如きがまだ生きてられたとはな」
「ここで会えて嬉しいぜ。一度てめぇの顔をグシャグシャになるまで潰してみたかった」
「ほざけ。てめぇじゃ百年かかっても無理だ」
同時に武器を振って後ろへ跳び、仕切り直した。
お互いの身体能力はほぼ互角。幼い頃から数え切れないほど本気の喧嘩を繰り返したが、いつも決着が着かなかったのはほとんど同じ実力を持っていたからだ。
海賊として航海を続けてどう変わったか。知るには良いチャンスだろう。
「いっそここで死ねェ！　ギザッ鼻野郎！」
「死ぬのはてめぇだろう！」
キリバチと棍棒が激突する。ギャリギャリと甲高い金属音が鳴り、叫ぶように響いた。
ぶつけ合うこと数回。
腕力はさほど変わらないため押し切ることができない。せめて体勢を崩せればと狙うのだが上手く受け流し、どちらも状況を変える一手が与えられなかった。
両者が歯噛みし、苛立った顔で睨みをきつくする。
そうして二人が戦っている間に、タコボクサーが、はっちゃんが、スモーカーとたしぎが海賊たちを海に落としていく。
ウィリーとペアを組んでいるビガロまで落とされた後、残る敵は1組だけとなった。
攻撃をやめたはっちゃんが二人の激闘を見守るように武器を降ろす。
そのまま二人へ状況を伝えた。
「ニュ～、久しぶりだなぁウィリー。それはともかくアーロンさん、

あと1組脱落で終わりだ。そのままウィリーが落ちたら終わるけど……」
「だったらすぐ終わらせてやる！　てめぇが最後の脱落者だ！」
「ほざきやがれ！　てめぇとハチを叩き落としておれが残るんだよ！」
ガンガンと武器をぶつけ合い、何度目かでアーロンが動いた。
キリバチでウィリーの棍棒を無理やり払いのけると、反撃を受ける覚悟で前に踏み出した。そしてウィリーもその行動から逃げなかった。
どちらからともなく武器を捨てて、自身の全力を込めて相手の頬を殴りつける。
純粋な殴り合いが始まった。自身の強靭な腕力を頼りに敵へ拳を当てていく。
荒々しい様相で血反吐が舞って、単調ながらも観客のボルテージは途方もなく上がっていった。
単調だからこそ人々は興奮する。同程度の実力を持っている者同士だからこそ熱くなった。彼らの戦いはAブロック、Bブロックを合わせても最高と言わしめる様子を見せた。
だが本人には盛り上げようなどという意思はない。
魚人たちが殴り合って決着を求める姿。それは見物客には極上のショーだったようだ。
いつしかゴージャス・ハッタリー号に居るルフィやチョッパーまで熱くなって応援していた。
二十発以上のパンチを叩き込んだ後。
口の中を切って血が出た。それを地面に吐き出して、互いに意志を同じくする。
そろそろ決める。そう考えて一歩を踏み出した。
「いい加減くたばりやがれェェッ！」
「くたばるのはてめぇの方だァァッ！」
《両者同時に駆け出した！　これで決着かァ!?》
アーロンとウィリーが同時に全力を込めた拳を突き出した。

全くの同時に互いの頬へ直撃し、相打ちの状態となって、凄まじい衝撃が肉体を駆け巡る。
しかし、勝負は確かに決着を見た。
思わず気が遠くなってがくりと膝から崩れ落ちたのである。
《ウィリーの膝が折れたァ！　残った！　アーロンは残っているぞ！　一対一の真剣勝負、勝利したのはノコギリのアーロンだァァ!!》
「ハチ、コイツを海に捨ててこい……シャハハハハ」
「ニュ～、流石だぞアーロンさん。あのウィリーに勝っちまうなんて」
武器を一旦置いたはっちゃんがウィリーの足を持ち、引きずりながら海まで連れていく。
彼の体が海水の中へ消えた時、ようやくCブロックの試合が終わった。
《試合終了～！　激戦を経て勝利したのは、アーロン＆はっちゃんペア！　そしてスモやん先生＆その弟子ペアだァ～！》
「シャハハハハ！　次はてめぇだ麦わらァ！」
「ニュ～、おれたちも本戦に残れるなんてなぁ。ケイミーたちも見てたかな？」
「やはりふざけた名前だ……気に入らねぇ」
「ま、まぁまぁ、先生。一時の話ですから、もう少し我慢してください……」
続々と本戦出場者が決定していき、試合は進んでいく。
思惑はそれぞれ違っていたが次の戦いは遠くない。
Cブロック終了。残りは５０組を残すDブロックの戦いのみとなった。

本戦出場者決定

Cブロックの試合が終わった直後、ルフィはゴージャス・ハッタリー号の船内に居た。
キッチンへ向かい、そこで働くスタッフに食事のおかわりをねだっていたのだ。
試合が終わった後でも、否、終わって疲れた時だからこそ腹が減るのか。まだまだ食べ足りない彼はコックの驚きもそっちのけに次の料理を待っていた。
「おばちゃん、急いでくれ。次の試合始まっちまうよ」
「そうは言うけどねぇあんた。突然言われてこっちも戸惑ってるんだ。そんなに急かさないでおくれよ。大体さっき大量に持ってったところじゃないか。もう全部食べたのかい？」
「うん、全部食った。まだ腹減ってんだ、おれ」
「とんでもない男だねぇ。でもそれくらいじゃなきゃ海賊なんてやれないか」
試合を見たいという気持ちを持ちつつ、やはり腹を満たしたいとも思う。
急ぐルフィはその場で駆け足をしながら料理の完成を待っていた。
Cブロック、アーロンとウィリーの真っ向勝負には久々に熱くなった。元は敵だった男を応援してしまうほど良い戦いだったと思う。嫌いだったはずなのに、今はそうでもないかもしれない。
気付けば本戦出場者の半数以上が麦わらの一味で固められている。
残っていたメンバーは出揃ったため、次はそうもいかない。
それだけにDブロックの試合が楽しみであった。
しばらく待って料理が完成する。
大きなおぼんに大量の皿と山積みになった料理を乗せ、コックは彼に笑みを向ける。
この船は本戦出場者に全力で奉仕する。そのため嫌な顔一つしなかった。
「はいよ、お待たせ。今度はゆっくり味わって食べるんだよ」

「うわっ、ありがとうおばちゃん」
「焦って喉に詰まらすんじゃないよー」
おぼんを持ったルフィは踵を返して長い廊下を走る。
モニターは甲板に設置されていた。皆もそこで待っている。急いでそこへ戻って次の試合を見なければならない。かなり待ってしまったことが唯一の気がかりである。
ルフィが甲板に戻った時、そこに居る全員がモニターを見ていた。笑顔になって仲間たちに声をかけながら急ぐ。
「お～い！　メシもらってきたぞぉ～！」
《試合終了～！　Ｄブロックの勝者が今決まったァ～！》
「ん……ええっ!?　もう終わったのか!?」
並び立つ仲間の背後で急停止したルフィは悲鳴のような声を発する。
一番近くに居たキリに声をかけ、早くも質問を行った。
「なぁキリ、もう終わっちまったのか？　いくらなんでも早えだろ」
「ちゃんと５０組がリングに上がって戦ったよ。正直言って五分もかからなかったかな……」
「何があったんだ？」
「それは――」
キリが答えようとしたところでハッタリーの実況が割り込んでくる。
彼は正確な情報を伝える立場にある者だ。聞いていればきちんと教えてくれるだろう。
必然的に彼らは静かになり、耳を傾け始めた。
《こんなことがあっていいのか!?　最も参加者が多いというのに、試合開始から最短の時間で終了してしまった！　それでは本戦出場者２組を改めて紹介しておこう！》
上空からリングを見るハッタリーが驚嘆しながらも口を動かす。
《まずはこちら！　存在感の薄さか、それとも実力か！　一度も戦うことなく本戦への切符を手に入れた海賊、道化のバギーと金棒のアルビダペア！》

「うるせぇー！　実力だ、実力！　おれ様を舐めんな！」
「やめときなよバギー。アタシらはただ突っ立ってただけだろ？」
「それで勝ち残れるのも実力よ！　ギャーッハッハ！」
どうやら2組の内1組はバギーとアルビダだったらしい。
彼らも本戦へ進むのかとルフィは素直に感心する。
その時、彼は気付いていなかったが、その場に居る誰よりも険しい顔を見せる人物が居た。ついさっきまで上機嫌にルフィと食事していたエースである。
Ｄブロックの試合を見始めてすぐに表情が変わってしまった。
それ以来、彼は今までに見たことがないほど険しい顔でモニターから目を離さない。
問題なのはもう一方。
二人とも黒いローブを着て体を隠し、フードを目深にかぶり、さらに仮面を付けて顔を隠す。
ただその片割れ、武器として使用した長い鉄パイプを手の中で回していた。
《そしてこの惨状を生んだ張本人！　正体不明の謎の実力者！　Ｍｒ．Ｓ＆Ｍｓ．Ｋペア～！》
素性どころか姿まで隠した怪しい二人組。彼らがあっという間に試合を終わらせたのだろう。つまりそれほど強かったということだ。
ルフィはふむふむ頷いてひとまずおぼんを置く。
どかっとその場に座り、積まれた肉を掴みながら隣に立つキリを見上げた。
「あいつらそんなに強かったのか。どうだったんだキリ？」
「強いなんてもんじゃない。抽選で残っていたのは５０組、人数にすると１００人があのリングに居たんだ。それをルフィがキッチンに行って戻ってくる間の数分で全部海へ落とした」
「すげぇな。ってことはめちゃくちゃ速かったんだろ」
「うん。あの二人だけ別格だ。実力を見ると一億、二億でもきっと足りない」
キリがそこまで言うのも珍しい気がする。

ルフィは感心した様子で肉を齧り、真剣な目でモニターを見ていた。
その時になってエースの異変に気付いたようだ。
「エース、メシ取ってきたぞ。食わねぇのか？」
「なぁルフィ。おれは……妙なもんを見ちまったって思ってる」
「ん？　何が？」
エースは腕を組んでモニターを睨み、微塵も動かなかった。
妙に緊迫した表情だ。周囲の皆も気付き始める。
「あそこで暴れてた奴の戦い方、いや、というよりも動きの癖か。見覚えがある気がして仕方ねぇんだ。それがあり得ねぇ話だってわかってんのにな」
「知ってる奴なのか？」
「わからねぇ。だからおかしいんだ。なんかすっきりしねぇ感じだ……」
珍しくはっきりしない口調だと思う。
そんなエースを見るのが初めてな気がして、流石にルフィも眉をひそめた。彼についてはよく知っているつもりだが普段と違って歯切れが悪い。
行って帰ってきたらこうである。間違いなく試合を見たからだ。
気になってルフィもモニターに目を向けた。
試合を終えたバギーとアルビダ、先程知ったばかりの、Ｍｒ．ＳとＭｓ．Ｋが小舟に乗る。
シーラパーンが小舟を引っ張って、これからゴージャス・ハッタリー号に来るのだろう。
ビビはやっと理解した。
今にして思えば、ヒッコシクラブの上でエースが見ていたのはあのＭｒ．Ｓという人物だった。
戦っている姿を見る前から何か違和感を感じていたのだろう。それがこのタイミングで、その人物の実力を知って確信を得た。エースだけが何かに気付いている。
戸惑っている様子の彼は、まだその迷いを言葉にできない。

胸中にあるのはもっと知りたいという欲求だ。もっと明確な何か、例えば自分がＭｒ．Ｓと戦ったりだとか、そういった状況になればもっとはっきりする気がする。
エースは敢えて口を噤む。
迷ったまま口にして、ルフィを混乱させてはいけない気がしていた。
少しするとＤブロックの勝者がゴージャス・ハッタリー号へ到着し、甲板へ現れる。
昨夜は千人以上乗っていた豪華客船に、ゲストはたったの８組。
これで本戦出場者が勢揃いした。
Ａブロックからはルフィ＆ビビ、キリ＆エース。
Ｂブロックからはシルク＆チョッパー、Ｍｒ．２・ボン・クレーが一人だけ。
Ｃブロックからはアーロン＆はっちゃん、スモーカー＆たしぎ。
Ｄブロックからはバギー＆アルビダ、Ｍｒ．Ｓ＆Ｍｓ．Ｋ。
揃いも揃って実力者ばかり。度重なる試練で海賊としての実力を認められた者たちだ。
全員が甲板に立ち、不思議とけん制し合うように互いの顔を眺めていた。特に一部の者は因縁があるのか、睨みつける目で強い感情が窺える。
せっかくならば決着は大会の中で。
今すぐこの場で戦おうとする者は存在せず、張り詰めた空気が辺りに漂う。
《これにて予選は終わった。本戦は明日行われる！　諸君らが乗る船はこれからブルースクエアの町へと戻り、試合は明朝より、その周囲にある島を舞台に執り行われるぞ！》
ハッタリーが空気を変えるように説明を始めていた。
まだ日が傾く前。連戦が続いていた彼らはほっと安堵の息を吐く。
《ひとまず明日になるまでは休息に全力を注いでくれ。諸君、勝者も敗者もお疲れ様。そして勝者のみんなはおめでとう。明日になればいよいよトレジャーバトルが始まるぞ。これこそが大会の目玉で、

優勝というたった一つの席を奪い合う激しい戦いとなることだろう》
トーンは落ち着き、声は穏やかで、それでもハッタリーの声には熱があった。
明日への期待は抱きつつ、ひとまず明日までは休むことができる。
ハッタリーは彼らへの労をねぎらい、静かに実況を終えた。
《それでは明日の決戦に備え、戦う者も観る者も、共に英気を養うとしよう。くれぐれも本番は明日のトレジャーバトルだ。みんなもその時を楽しみにしていてくれ》
その声も聞こえず、エースは仮面をつけて素顔を隠す人物を見ていた。
まさか、と思いながらも確信はなく。
それはただの願望なのではないか。そう思いながらも諦められない自分が居る。
ただ、そうであって欲しいと思っていた。

＊

夜になる頃には全ての船がブルースクエアに戻っていた。
戻ってすぐ、勝者、敗者を問わずに盛大な歓声によって歓迎されて、町中の人間が海賊たちに惜しみない賛辞を送っている。
船上では調子に乗った海賊たちが笑顔で手を振っていたようだ。
凄まじい歓声を受けてすでに有頂天になる者も多く、それも仕方ない。
その熱気はそう簡単に体感できるものではなかったのだ。
ゴージャス・ハッタリー号の甲板からも町の様子は見えていた。
ルフィやチョッパーは嬉しそうに手を振っていて、子供のようにはしゃいでいる。
なぜかその隣にはＭｒ．２がくるくる回り、バギーが欄干の上に飛び乗って大笑いしていた。
いつの間にかいがみ合っていたことさえ忘れ、まるで仲間のような仲睦まじさだった。

本戦出場者だけでなく敗者たちの船も港へ到着する。
港の辺りは人でごった返しており、とてもではないが降りれるような状態ではない。
周辺を見回したキリは船を降りることを諦めるつもりでいた。
せっかくこのゴージャス・ハッタリー号に乗船する権利を得ている。それを使わない手はないと思って、どうせならこの船で休めばいいと考えたらしい。
部屋は余っている訳で、休憩の間なら仲間たちを呼んでもいいだろう。
早速船長へ伝えるためにルフィの下へ歩き出した。
「ルフィ、どうせこの後は本戦出場祝いで宴でしょ？　ならこの船でやろうよ」
「そうだな、こっちの方が広いもんな」
「というわけでみんなを呼んで来ようか。アーロンとバギーも全員呼べばいいよ。これだけ広いんだし、みんなで騒いだってそう大した問題にはならないさ」
「アァ？　なぜおれがてめぇらと……」
「まぁまぁアーロンさん、せっかくならそうしよう。おれ、みんなを呼んでくるぞ」
「チッ……」
「しょうがねぇなぁ。まぁ～そうは言ってもおれ様はちょうど気分が良い。どうしてもっていうなら頷いてやらんでもないが？」
「ははぁ～。よろしくお願いします」
「よぉし、それじゃ部下を集めるか。どうせならハデな宴にしてやる！」
アーロンはともかく、本戦出場、及び町からの歓声を浴びて機嫌が良くなっている。
船で合同の宴をしようという提案はあっさり受け入れられた。
しかし、準備しなければならない物もある。
それぞれの仲間を呼び寄せ、食料や酒も足りないはず。あらゆる物を用意しなければならない。

そのためには人手も金も必要になるため、キリが手を叩いて注目を集めた。
「はいはい、それじゃ手分けして準備しないとね。それぞれの仲間は自分たちで呼んできてね。それと食料やら酒やら買わないと。バギー、お金出してよ。できれば全部」
「ふざけんなコラッ!?　そんなもんてめぇで負担しろ！」
「じゃあ半分でいいよ」
「優しく言えば通ると思うなよっ。てめぇがやってんのはカツアゲだからな！」
「だって色々要る物はあるしさ。うちだけで出すってことは、言い換えると君らもうちの傘下になったことになる気がするけど、それでいい？」
「うぐっ……仕方ねぇ。背に腹は代えられねぇか」
「そこまで嫌がるかな。案外認めてみると楽になれるよ？」
「黙れ！　てめぇらの部下なんかまっぴらごめんだ！」
「じゃあせめて同盟だけでも」
「やらぁん！　なぜならてめぇの考えがヤバ過ぎるからだ！」
「ケチ」
「誰がケチだ!?　むしろお前の方だろうが！」
バギーがキリに詰め寄ってギャーギャー騒いでいた。
彼は本気で怒っているのだろうがキリは笑みを絶やさず、そのせいかあまり危機感があるようには見えない。仲が良いという姿にも見えてしまう。
やはり怒鳴られようと全く堪えていない。逃げ出したキリはシルクたちを見た。
「シルク、チョッパー、休んでていいよ。疲れてるでしょ？　ボクがやるから」
「ううん、大丈夫。手伝うよ」
「おれもいっぱい休んだから大丈夫っ」
「そう？　じゃあみんなを探してきてくれるかな。食料とかはこっちで手配する」

「わかった」
「みんな、怪我してないかな。そしたらおれが治さなきゃ」
シルクとチョッパーが船を降りて仲間たちを探しに行く。
彼らがゴージャス・ハッタリー号に向かっているとすれば会い易いのだが、おそらくそう考えはしないだろう。集合するためにメリー号へ戻っている可能性もあった。
まずは彼らと会うため、自分の船に戻ることを決める。
二人の姿はすぐに人混みの中へ消え、メリー号を目指して移動を始めた。
振り返ったキリはルフィを見た。
彼は盛り上がる町を見て楽しそうにしており、うきうきした様子は分かり易い。
最も厄介なのは勝手に移動してはぐれることだ。キリは子供に言いつけるように言う。
「で、ルフィはここで待ってること。今あの中に行ったら十中八九迷うよ」
「え～？」
「だめ。みんなすぐに集まってくるから」
「しょうがねぇな。じゃあ早く戻って来いよ」
「あいあいさー。ビビ、ルフィが逃げないように見張ってて」
「ええ。でも逃げないようにって」
「キリ、お前失敬だぞ。失敬だな」
「すいませんね、どうも。育ちが悪いもんで」
くすくす笑ったキリも船から降りていき、ルフィとビビが船に残る。
他の面々も続々と船を降りて準備に慌ただしい。
港へ降りたはっちゃんは、さほど移動もせずに向こうから近付いてくる仲間に気付いた。それはたこ焼き屋に残った数名の同胞と、ケイミー、パッパグである。
見るからに珍しい魚人と人魚とヒトデが一塊になってやってきた。
周囲の人間から注目を浴びる中、ケイミーとパッパグが大きく手を

振っている。
攫われてやしないかと心配していたが無事でよかった。
人魚は陸上で珍しいからこそ狙われる危険性がある。特にケイミーは性格的に攫われ易い。
彼女たちと無事に合流して、安堵したはっちゃんはようやく肩の力が抜けた。
「はっち～ん！　すごかったよ試合！　すっごく大変だったけど、すっごく強かったね！」
「いやぁー手に汗握った。お前よく頑張ったなぁ、ハチ」
「ニュ～、おれはアーロンさんについてっただけだ。大したことはしてねぇ」
「でも明日も出るんでしょ！　おめでとう！」
「よくやったぜハチ！　お前はおれたちのアイドルさ！」
「ニュ～、ありがとうな二人とも」
二人もモニターから観戦していたのだろう。やけに興奮した面持ちで声が弾んでいる。
嬉しくなったはっちゃんも頬を緩ませていた。
「何も問題なかったか？」
「うんっ！　たこ焼きもいっぱい売れたんだよ！」
「まぁそうは言ってもハチが居る時ほどさばけなかったけどな」
「そんなのいいんだ。二人が頑張って無事だったらそれでいいんだ」
「はっちん……」
「ハチィ……」
彼の優しさに打ち震えている様子の二人へはっちゃんが言った。
「おれたちこれから宴やるんだ。麦わらたちと一緒だぞ。みんなも来てくれ」
「やったぁ！」
「それじゃもういっちょたこ焼き作るか！」
ケイミーもパッパグも喜び、他の同胞も喜んでいる様子だ。
彼女たちを含め、アーロン一味は本来宴を好んでいる。しばらく

アーロンが苛立っていたので騒ぐ時間は減っていたが、それでもケイミーやパッパグが仲間になって変わり始めたものがあった。
彼らはすぐにゴージャス・ハッタリー号へ戻ろうと踵を返す。
振り返った時、はっちゃんは少し離れた位置にDブロック勝者のMs．Kが居ることに気付いた。
仮面をつけているがじっと見られている気がして、はっちゃんは首を傾げる。
「ニュ～？」
「あ、あの……」
「あぁそうか。おめぇもおれたちと一緒に宴したいんだろ？　もちろんいいぞ。麦わらはいい奴なんだ、宴をすればみんな友達になっちまう」
「あっ……」
「さっきの船でやるんだ。案内するぞ。ほら、こっちだ」
黒いローブで隠しているとはいえ、小柄な外見と声からしておそらく女性。
はっちゃんは全く警戒せずに手招きで彼女を呼んだ。
同じ大会に出ている同志。一緒に騒げばいいではないかと思っている。
「どうした？　来ねぇのか？」
なぜかMs．Kは動こうとしない。些細な仕草から戸惑いが感じられる。
彼女は、迷った末、思わず伸ばしかけた手を無理やり引っ込めた。
「いえ……ごめんなさい。一緒には行けないの」
「ニュ～？　なんでだ？」
「まだ仕事があるから」
「そうなのか。じゃあ仕事が終わったら来てくれよ。あいつらのことだからきっと朝まで騒ぐと思うんだ。うちの大親分は宴が好きだからな」
「うん……」
寂しげで、一方でどこか嬉しそうで、決して簡単ではない感情を

持って頷かれる。
きゅっと自身の腕を抱いていた。
Ｍｓ．Ｋは迷うように俯き、すぐに顔を上げる。
今度こそ正面からはっちゃんを見つめていた。
「ねえ、はっちゃん……」
「ニュ？　おれ名乗ったっけ？」
「また、会えるよね？」
「当たり前だ。おれたち待ってるから、いつでも来てくれよな」
「……うん」
名残惜しそうにしながらＭｓ．Ｋは振り返って歩き出す。
はっちゃんに見送られて、何かを振り切るようにしながら小走りになり、狭い路地に入る。
Ｍｓ．Ｋが足を止めたそこにはＭｒ．Ｓが立っていた。
「どうした、知り合いか？」
「うん。昔、ちょっとね」
「ハックたちが集まってる。ブルーベリータイムズに怪しいところはないそうだが、問題はこの近隣諸国の王族らしい。祭りに乗じて取引が行われてるみたいだ」
「予想通りだね」
「それとサイファーポールも来てる。まだ見つかってないようだけど、やっぱりおれたちを警戒してるんだろうな」
「早く合流しよう」
「ああ」
二人は揃って狭い路地を進み、街灯の光が届かない闇の中へ身を沈めていく。
「できるだけ試合を盛り上げて長引かせるんだ。大会に注目が集まってる間にハックたちが必要な情報と証拠を回収してくれる。まさに本番は明日だな」
「わかってる。それより心配なのは君の方だよ。やり過ぎちゃダメだからね？」
「ああ」

「あの火拳のエースも居るけど、熱くなり過ぎないこと。わかった？」
「わかった」
「もうっ、ちゃんと聞いてるの？　今まで何回もそう言って――」
Ｍｓ．Ｋが叱るように言葉を続けていた時、Ｍｒ．Ｓはそっと自身の頭に指を触れた。
今日はなぜかひどく痛む。ズキズキと内に響くような強い痛みだ。
なぜそんなに痛むのかはわからないものの、気になることは一つあった。
火拳のエース。
麦わらのルフィの手配書を見た時のように、その名前を聞くと頭が痛んで仕方ない。

本戦　トレジャーバトル

祭りの様相はさらに強くなっていたようだ。
大会観戦で高揚した気分は落ち着くことがないまま、一夜を通して宴が行われていた。町はかつてないほどの活気が窺え、いつまで経っても休まる様子がない。
それは朝になっても変わらなかった。
今日はついに本戦の日。
大会の目玉が始まる一日だった。
朝から凄まじい熱気に包まれている。
試合が始まるのは今日の朝からだと伝えられていた。観客たちは町の至る所に設置されたモニターを眺めて興奮しており、その時が来るのを今か今かと待ちわびている。
ざわめく町の期待感はもはや誰にも止められない。
海賊とも市民とも判断できない雑踏の中、敗退した麦わらの一味もモニターを見ていた。
港に設置されている巨大モニターの前に陣取り、すでに落ち着いた様子だ。
いつ始まっても構わないという姿で、傍には、今日は店を休むと決めたケイミーとパッパグ、それからアーロン一味も周囲に座っている。
勝てばアラバスタ。負ければ別の方法を探さなければならない。今日が正念場である。ひとまず見ているだけとはいえ体が疼いて仕方ない。
ゾロやサンジは少なからず苛立ちを隠せない様子だった。
それとは対照的にウソップは安堵しているようだ。
「今日がいよいよ決戦ってわけだ……ルフィたちは大丈夫なんだろうな」
「大丈夫、って思いたいけど、昨日のアレを見ちゃうとね……」
顔をしかめるウソップの呟きにナミが嘆息する。
エースの強さを見た時も驚愕したのだが、今思い出されるのはDブ

ロックの試合。
アレは異常だった。
衝撃としてはＡブロックのエースよりも大きい。人数だけならＡブロックよりも多かったはずなのだが、１００人の参加者を五分以内に倒してしまったのだ。
あの人物に対抗できる人間など居るのかとさえ思え、最も期待できるのはエースだろう。
ルフィでさえ相手になるかは予想もできない。
仲間たちは心配している様子だった。
「賭けも盛り上がってるみたいだしよぉ、荒れそうだな……問題なのはシルクたちだぜ。残ってるのは強い連中ばっかりだし、まぁバギーはあれだけど、無傷でってのは無理そうだ」
「何も起こらなければいいけど……」
「心配いらないさナミさん。チョッパーもあれで男だ。体張ってでもシルクちゃんを守るよ」
「チッ、おれが残ってりゃ斬り飛ばしてやるもんを」
「そりゃお前が方向音痴だったせいだろ」
「何ィ？」
ウソップの言葉でゾロが厳めしい顔をするものの、周囲は気にするつもりもないらしい。
時刻は９時を回った。
長らく待ちわびた人々の前でモニターにハッタリーの姿が映る。
《イェーイッ!!》
ついに来た。
町中がわっと歓声を上げ、凄まじい迫力で町の在り方その物が変わる。押し込められていた欲望が一気に爆発するかのように、重なり合う声が轟音となって空へ響き渡った。
ハッタリーは島の中心にある広場、高くせりあがったステージの上へ現れた。
人々の歓声を一身に受けて立ち、堂々とマイクを握っている。
小型だが足の速い船に乗せた８組の出場者。彼らの試合がこれか

ら始まる。
その前に試合について説明しなければならない。
今日のルールは昨日とは違う。本戦はついにこの大会の目玉。本当に盛り上がるのはこれからだと思っていて、ハッタリーは昨日にも増して興奮しながら大声を発した。
《ついに来たぞ！　大会本戦、トレジャーバトル！　ここからが本番だ！》
町に居る人間が拳を突き上げて騒いでいる。
敗退した海賊たちも叫んでいた。
祭りが始まったのはむしろ今日なのだ。
海賊の祭典はついに開始され、賭けも大いに盛り上がり、これから昨日よりさらに面白いものが見れる。その興奮で町は絶叫によって揺れていた。
ハッタリーもその様子を受けて笑顔を輝かせる。
《まずは簡単にルール説明をしておこう！　トレジャーバトルとは！　その名の通り宝を奪い合うためのバトルだ！》
簡潔な一言にも聴衆は大きな反応を見せ、騒ぎながらも続きを促すかのよう。
《舞台となるのはブルースクエアの四方にある小さな島！　それぞれ春島、夏島、秋島、冬島と気候が違っており、当然地形も違う！　この島でたった一つの宝箱を奪い合い、自分の陣地へ持ち帰れ！　陣地に宝箱が置かれている間だけ回収用の船が動く！　先に回収用の船を島へ呼び寄せた方が勝ちとなる、宝を奪った者勝ちのゲームだぞ！》
聴衆は期待を込めておおっと声を出す。
かつて聞いたこともないゲーム。その光景が想像できずに期待値が増している。
ましてやあの面々だ。早く試合を見たいという欲求は抑えられなかった。
《試合はトーナメント形式で行われる！　それではこれから抽選を行おう！》

「トーナメントか。組み合わせ次第じゃ身内の潰し合いもあり得るな……」
「しかもうちからは４組出るんだもん。どっちにしたってどこかでは戦いそうね」
トーナメントと聞いて、ウソップとナミは不安そうに顔を歪めた。
ここから先は人数の多さなど関係ない。強い者が勝つ。周囲からは邪魔ができないためにそれぞれのコンビがどれだけやれるかが問題だった。
不安に思うのはそのせいである。
本戦へ進んだペアは麦わらの一味から３組、アーロン一味から１組。８組の内、半数が同じ勢力からの参加であり、それだけ優勝の可能性も高まるが、潰し合いの可能性も高い。
心配するだけ無駄だが気にせずにはいられないのだろう。二人は居心地が悪そうだった。
一方でゾロやサンジは心配していない様子でモニターを見ている。
やはりイガラムはウソップたち以上に心配していて、誰よりも不安そうな顔だ。
「ルフィ君……ビビ様を頼みましたよ」
「心配すんな。あいつだって守られるだけじゃねぇ」
腕組みをしたゾロが呟き、不安は消し切れないがイガラムも小さく頷いた。
《抽選は厳正にくじ引きで行う！　ただし先に組み合わせを決定してから諸君に見てもらうことにしようと思っている！　少しだけ待っててくれ！》
そう言って大会本部がくじ引きを行う。しかし結果はすぐには開示されない。組み合わせを知らされるのは全てが決定してからだ。
ウソップはごくりと息を呑み、内心ハラハラしていた。
「ハラハラするな」
「うおおっ!?　あん時の猿！　しかも一匹増えてるし!?」
「ウッキッキ！　よぅお前ら！　サインと写真は必要か？」
いつの間にかマシラとショウジョウが彼らのところまでやってき

ていた。
笑顔で挨拶を終えた彼らはどかっと地面に胡坐を掻いて座る。
先日は予選でぶつかった相手だ。ゾロとウソップに宝箱を差し出し、ナミとサンジから宝箱を奪って逃走して、ルフィによって敗北した。
全く恨みの無い顔で平然としており、そのため彼らも敵意を持たずに接する。
「昨日も思ったことだが……お前らほんとに人類か？」
「当たり前だろうが。人類じゃなきゃ猿にでも見えるってのか？」
「そうにしか見えねぇって言ってんだ」
「猿あがりってことか！　褒め殺しだな！」
「ハラハラするぜ」
「なんだか知らねぇが、お前らとは分かり合えそうにねぇな……」
呆れた顔でサンジが溜息をついた。
ともかく害は無さそうだ。そのまま傍に置いていてもいいだろう。
共に観戦することになった猿のような人間に驚きつつもケイミーが気にするのははっちゃんについてである。彼が試合に参加することは昨日から見ていて理解していた。
はっちゃんもアーロンも強い。信頼もしている。
ただ賭けの人気が二分されていることも知っていた。
一番人気は火拳のエースとその相棒キリ。
二番人気がＤブロックの試合を決めたＭｒ．ＳとＭｓ．Ｋ。
町に居る観客が気になっているのは間違いなくその２組だろう。
勝てないのならばそれでいい。だが怪我をするのならば心配になってしまう。
ケイミーは心配そうな顔で隣に座るナミへ聞いた。
彼女たちは簡易の椅子とテーブルを運んできてその場で広げており、軽食や飲み物もある。わざわざ港のモニターで観戦する者も少ないため比較的楽な姿勢だった。
ナミは真剣な顔でケイミーを見つめ返す。
「ねぇナミちん、はっちんたち大丈夫かな。他の人たちも強いんだ

よね」
「うーん……私は別にアーロンたちがどうなろうと知ったこっちゃないけど」
「そんなっ!?」
「どっちにしたって私たちにはどうしようもない。大丈夫よ、なんて言うのは簡単だけどね。無事で居られるかどうかはあいつら次第。ここに居る以上、信じることしかできない」
「うん……」
冷たく突き放すような言葉に思えるが、それこそ真理だろう。
今からではできることなど何もない。言葉をかけることすらできない。応援をしても声は届かないだろう距離に居て、無駄な徒労に終わる可能性の方が高かった。
それを知って欲しいからと敢えて真実を言ったのだ。
ナミの言葉を受けて、ケイミーは真剣な顔になり、考えた末にそれを理解する。
「じゃあ私、頑張って応援するよ。はっちんとアーロンさんが勝てるように」
「それがいいわね。何もしてないよりは気も紛れるし」
心配しても仕方がない、と考えて、いっそのこと何も考えず必死に応援することにした。
ケイミーは笑顔でモニターを見つめ、パッパグも彼女を気遣って笑顔で話す。
海賊と共に航海している以上はそういった覚悟も必要になる。昨夜の宴で話してみてわかったがケイミーは少し抜けているところがある。誰かが教えた方がよかった。
時には自分の力ではどうしようもないことだってある。
幼少期からそのことを知っている彼女は、自身の過去をケイミーに明かそうとはしなかった。
彼女たちがそうして話していることを知りつつ、今日のサンジは静かだった。煙草を吸いながらぼんやりモニターを眺めていて、くじ引きの様子を見ている。

ふと隣に立っていたゾロへ、彼の顔を見ようともせず尋ねた。
「誰が勝つと思う？」
「……ルフィとキリが組んでりゃ予想はし易かったろうがな」
「エースが居るのにか？　あいつはキリの天敵だ。それにあの仮面野郎も居やがるし」
「それでも、だ」
ゾロは腕組みしてはっきり言う。目を閉じてモニターを見ようとはしていない。
煙草を指に挟んで持ち、煙と共に深く息を吐いたサンジは薄く笑った。
「大した忠誠心だよ、お前は」
ほくそ笑んでいるが彼とて心中穏やかではない。
不安要素ならばある。
一味の最高戦力、ルフィとキリが分かれていること。ルフィのパートナー、ビビがどこまでできるか予想ができないこと。そしてエースと知り合ってたった二日程度、よく知らないことと、彼と同程度には強いと予測される謎の二人組の存在。
予想することは簡単ではなかったが、黙っていられるほど冷静でもいられなかった。
「ルフィはともかくビビちゃんが心配だ。彼女もバロックワークスの社員だったとしても、海賊ならではの泥臭ぇ戦い方をされちゃ判断に困るかもしれねぇ」
「ルフィにしても搦め手には弱ぇ。道も覚えねぇしな。島が小さいっつっても、あんまり広いと迷うぞ、あいつは」
「お前に言われちゃおしまいだけどな」
「うるせぇ」
ゾロが眉間に皺を作る一方、サンジは煙草を銜えながら海に振り返った。
「キリはなんでルフィと組まなかったんだろうなぁ」
「ビビと組ませるためだろ」
「それで海賊について知ってもらおうってか？」

「あいつはバロックワークスを恐れてる。正道だけじゃ勝てねぇって言いたいんだろ」
「本当にそれだけと思うか？」
思わずゾロが押し黙った。
サンジは、珍しく遠い目をして語る。
「あいつがどこまで考えてるかなんて、もうおれにはわからねぇよ」
くじ引きが終わったようだった。
モニターに映る映像は変化し、再びハッタリーがマイクを握って雄々しく動く。
組み合わせが決まった。今度こそ発表される時だ。
《さぁ～てトーナメント表が決定したぞォ！　こいつを紹介する前に本戦出場者をおさらいしておこう！　トーナメントに参加するのは全８組！》
ハッタリーの声に合わせて画面に選手の顔が映し出される。
すでに海に出ている彼らの顔をスタッフが映像電伝虫で映しているようだ。
《まずは優勝候補筆頭、エース＆キリペア！　白ひげ海賊団の隊長とルーキーの副船長！　懸賞金は天と地ほども差があるが実力は未知数！　キリはバトルロイヤルでも不動を貫いた！　実力を隠したまま本戦へ出場して、どれほどエースと呼吸を合わせられるのか！》
「どうせ足手纏いに決まってる！　んな奴居なくてもエースが勝つだろ！」
「てめぇに大金賭けてんだ！」
「邪魔だけはすんなよ紙野郎！」
観客からしてみればキリに対する期待はゼロに等しいらしい。
賭けは、大勢の人間が優勝するに違いないと思われるエースに偏っていた。それだけに実入りは期待できないが確実に金を手に入れる方法だとの予想があった。
大穴狙いでない限り、この口以外に賭ける必要性が感じられないのである。
《同じくＡブロックより勝ち抜いたルフィ＆ビビペア！　しかもこ

れは驚き、なんとこちらが入手した情報では、麦わらのルフィ選手は火拳のエースの義弟らしい！　バトルロイヤルの実力から見ても想像はできるが、やはりこの男が台風の目になりそうだぞ！》
「ま、マジかよ、火拳の弟だと？」
「んなバカな話があるか？　今まで一度も聞いたことねぇ」
「だが、もし本当だとすりゃ」
「火拳も流石に弟にゃ甘くなるか……？」
ハッタリーの言葉に町がざわついている。真偽を確かめる方法がなく困惑しているのだ。
しかし彼らが気にしているのは大会を使った賭け事のみ。
弟という立場でルフィが優勝する可能性はあるか、否か、それだけを考えていた。
《こちらはBブロック勝者、同じく麦わらの一味、シルク＆チョッパーペア！　悪魔の実の能力を食べた二人が地道に勝利を重ねてきたぞ！　持ち前のチームワークで優勝を狙う！》
「あの風起こしてた姉ちゃんか」
「それにゴリラになったりトナカイになったりするタヌキ」
「ここに賭けりゃ大穴だな。だが勝った時はすげぇぞ」
シルクとチョッパーの顔が映し出され、ナミは途端に表情を変えてしまう。わかっていても見ているだけなのは自分が戦うより辛い。
不安からなのか、冷や汗を掻いたウソップがぎこちない笑顔で彼女に言った。
「シルク……」
「し、心配いらねぇって！　半分は仲間だし、たかがゲームだ！　死にゃしないんだからよ！」
「ウソップ……足震えてるわよ」
「武者震いだ、武者震い！　あーおれも戦いたかったなぁ！　宝持って逃げるだけならあっという間だ！　逃げ足なら誰にも負けねぇのに！」
「わかってるわよ。ケイミーに言った手前、私もへこんでられないことくらい」

ナミもキッと目つきを変えて、事の成り行きを見ようとする。
すでにゾロもサンジもイガラムも不安を口にしない。
慌ててウソップも口を噤み、腕組みをしてモニターに集中し始めた。
勝つか負けるか、それはこれから結果が出る。慌てる必要はない。
ただ見守っていればいいだけだ。
《さらにBブロックから謎の新星！　まだ見ぬパートナーは一体如何なる人物か、男で女のオカマ格闘家！　Ｍｒ．２・ボン・クレー！》
「んが～っはっは！　やっと暴れられるわぁ～ん！」
船の上でＭｒ．２が回る。
ただの余興。だが決戦を前にした準備運動としては十分な舞台だろう。
《Cブロック勝者はアーロン＆はっちゃんペア！　近頃噂が絶えない彼らは因縁のある麦わらを狙っているようだ！　この大会中にリベンジは果たせるのかァ！》
「はっち～ん！　頑張れ～！」
「アーロンも頑張れー！　優勝したら店舗拡大だぁ！」
ケイミーとパッパグが大声で応援していた。
アーロン一味も声を張り上げており、港は特に盛り上がりを見せる。
ナミはじっと見つめていたが、何も言ったりはしなかった。
《さらにCブロック！　海賊にあるまじき格好で参加！　特に異彩を放っているぞ！　一体どんな試合を見せてくれるんだ、スモやん先生＆その弟子ペア～！》
「アパパパパッ。さて、どう出るか……」
出場者が紹介されている時、アプーは自身の船に居た。欄干に座って港のモニターを眺め、島に降りるつもりはなさそうな様子だ。
彼の部下でさえなぜそんな見にくい場所から観戦するのか、理解できないようだった。
アプーは楽しそうに笑っている。
《Dブロック勝者、バギー＆アルビダペア！　クロスカントリーは

先頭集団の一員として競っていたが、バトルロイヤルではなぜか不動！　今度こそ実力を見せてくれ！》
「よぉし、いいだろう……今日こそおれ様の真の実力を見せてやる」
「優勝すればお宝が手に入るんだろ？　楽しませてもらおうじゃないか」
バギーとアルビダは余裕を見せる表情で戦いの時を待っていた。
何やら勝機でもあるのか、一切怯える様子はない。
《そして最後に、素性、経歴、素顔さえ不明！　Ｄブロックの悲劇を生み出した張本人！　圧倒的な強さを見せたこいつらを止める者は現れるのか！　Ｍｒ．Ｓ＆Ｍｓ．Ｋペア！》
船上に居た二人は動かず、今日も素顔を隠して存在していた。
全８組の紹介が終わり、いよいよという瞬間。
人々は勝負の開始を待ち望んでいる。そのため次の言葉が待ち遠しくて仕方ない。
マイクをくるりと回して、ハッタリーは調子良く告げた。
《以上のメンバーでトレジャーバトルが行われる！　それではトーナメント表を発表しよう！》
おおっと声が発される。
直後には町中が静まり返って、一時の間を置いた後、ハッタリーは笑顔で叫んだ。
《一回戦！　ルフィ＆ビビペア　ＶＳ　バギー＆アルビダペア！》
「い、いきなりルフィたちかっ」
画面が分割されて両ペアの顔が映し出される。
ルフィとバギーは好戦的に笑い、ビビは真剣な瞳を見せ、アルビダは薄く微笑んでいた。
ウソップが声を震わせて呟いた。
大会最初の試合。早くもルフィたちから始まると知って動揺が隠せない。しかしよく考えれば半数が同じ一派から出ているのだ。それも不思議ではなかった。
《二回戦！　アーロン＆はっちゃんペア　ＶＳ　Ｍｒ．２・ボン・クレー！》

発表と同時に麦わらの一味とアーロン一味がどよめく。
上手く勝ち上がれば準決勝でルフィとアーロンが戦うことになる。
果たしてそうなるのかと否が応でも注目度が上がっていた。
《三回戦！　エース＆キリペア　ＶＳ　スモやん先生＆その弟子ペア！》
キリとエースはルフィたちと離れた。ひとまず決勝までは当たることがない。
しかしそうなると次の展開が予想される。
《四回戦！　シルク＆チョッパーペア　ＶＳ　Ｍｒ．Ｓ＆Ｍｓ．Ｋペア！》
予想できた通り、今大会で最も得体が知れず、警戒すべきペアとぶつかってしまった。よりにもよって最も戦いたくない者たちである。
シルクとチョッパーは無事に帰れるのか。
いよいよ心配せずにいられない。
改めてトーナメント表が画面に表示された。
勝ち抜け方式で上がっていき、最後には１組だけが残る。
残ったペアだけが優勝だ。
何の因果か、麦わらの一味とアーロンたちはそれぞれぶつかることなく分かれている。
ただしそれにより、苦労しそうなペアも居た。
Ｄブロックの戦いを知っているシルクとチョッパーが顔を青ざめさせていた。
５０組もの参加者を相手に無傷で、最速で撃破し、勝利した二人。戦った時間こそ短かったがどちらも強かったのは覚えている。警戒するのは無理もない。
思わずちらりと目で確認してみた。
二人とも仮面で表情がわからず、ぴくりとも動かずに立っていた。
「おれたちの相手が、あいつら……」
「やっぱり、一筋縄じゃいかないよね……」
緊張している面持ちで呟いていた。
その声が聞こえたからではないだろうが、エースも目だけで二人の

姿を確認していた。否、正しくはその内の一人だけ。
キリはそちらを見ずに尋ねる。
「知り合い？」
「いや、そんなはずはねぇが……その可能性も捨てきれねぇってところか」
「どういう意味？」
エースは腕を組んで視線を外し、海を眺める。
「死んだ人間が突然目の前に現れたら、お前、あっさり受け入れられるか？」
「無理だね。何度も夢に見たけど今まで叶ったことはない」
事情を理解したのだろう、キリは迷いなく答えて問うのをやめる。
トーナメント表を見て満足した。
彼らとは戦える。
その時を待つエースはふと目を閉じ、開戦を待っていた。
《それではトーナメント一回戦を始めよう！　早速選手たちが戦いの場へ移動するぞ！》
彼らを乗せた小型の船が海を走る。
いよいよ開戦の時。
ルフィが拳をぶつけて今や遅しと待っており、ビビは真剣な顔で船が進む先を見ていた。

トレジャーバトル　一回戦

選手が舞台となる島に入り、観客は早く始めろと言わんばかりに騒ぎ立てていた。
抽選を終えた後でハッタリーは昨日と同じく大きな鳥の背に乗っており、空から対戦が行われる島を見下ろして、マイクを握って叫んでいる。
島の中心にぽつんと宝箱が置かれている。
それを囲むように十字型に四人の選手が立ち、約十メートルほどの距離を保っていた。
《いよいよ来たぞ！　トレジャーバトル一回戦！　舞台は春島！
ルフィ＆ビビペア　ＶＳ　バギー＆アルビダペアの戦いだァ！》
常春島と称されるそこはポカポカと暖かい気候にあった。
他よりも少し広いその島の、港に位置する場所を利用するらしい。
戦場となる範囲が決められているらしく、木材とはいえ高い柵で区切られており、その内側には数軒の家が立ち並んで無人の港があった。
そしてその港の両端に、それぞれの陣地となる場所が設けられている。
それぞれの陣地はロープで仕切られた四角いリング。
地面がそれぞれ赤と青で分けられており、目印として同色の旗も立てられている。
そこへ宝箱を置けば回収用の船が移動を始め、島に到着時点で勝ちとなる。
ブルーチームがルフィとビビ。
レッドチームにバギーとアルビダと振り分けられていた。
いつ始まるのだろうとルフィがうずうずしている様子だった。同じくバギーもそう変わらない表情を見せていて、彼らに対して怯えた顔は見せない。
一方、ビビは幾分緊張していた。始まる前から手が震え、平常心が保てない。

そしてアルビダはそんな彼女の様子に気付いていたようだ。
《ルールは単純！　如何なる手段を用いても宝箱を自陣に運べ！　回収する船が島に到着した時点でそのチームの勝ちとなり、合図として花火が上げられる！　ただし船が動くのは陣地に宝箱が置かれている時のみなので、阻止したければ陣地から宝箱を奪えばいい！》
「ルフィさん、わかった？」
「うし、大体わかった」
「キリさんとも話したけど、何が起こるかわからないわ。注意しましょう」
「おう！」
ビビの忠告を受けてルフィは素直に頷いた。
良い予感はしていない。ルフィについてではなく、バギーという海賊についてだ。
試合のことで相談するため、事前にキリと話した時、彼は言っていた。
〝バギーは理想的な海賊だ〟と。
脅し、すかし、人を利用して自身の命を最優先に生き残り、向上心もある。同時に自分より強い相手にどうやって勝つかを考える頭脳もあって、復讐を実行できるほどの胆力もある。
時間と運とその気があれば、実力がなくても成り上がれる人間は居るという。
バギーはその典型だと言っていた。
自分が居るのは正道がまかり通らない世界。邪道によって成り上がる者たちが闊歩する。
ビビは改めて理解していた。
死ねば骨が残るだけ。何も残りはしないと言ったキリの言葉を思い出す。
何としてでも勝たなければならない。勝って祖国へ帰るのだ。
ビビは決意を固め、ぎゅっと強く拳を握る。
常春島の傍には選手が控える小型船が停止していた。船から降りて島に入ることは禁止されているものの、その他は目立ったルールは

ない。
最も近くで試合が見れるし、試合を映す大型のモニターもある。映像電伝虫も居る。
狭いが船内に行けば食事の類も用意してくれる。
待つには困らない環境だった。
甲板に立って島を見ていたキリとエースは肩を並べて立っている。
ルフィが負けるとは思っていないがやはり気になるのだろう。
エースは微笑を湛えて島に立つ弟の姿を眺めており、先程あったはずの緊迫感は感じられなかった。
そんな彼が、同じく余裕を窺わせる顔のキリへ尋ねる。
「キリ、この勝負どう思う？」
「ボクとしては先にエースの意見を聞きたいけどな」
「おいおい。おれがどう答えるかなんてとっくにわかってるだろ？」
「まぁね。そうだと思った」
ニッと頬を上げるエースを見て少し安堵する。
今は肌がビリビリ来るような感覚がない。彼が落ち着いている証拠だろう。
エースとは反対側、キリの隣にチョッパーとシルクが居る。
チョッパーは欄干に掴まるようにして島を眺めており、キリに振り向いて質問する。その一時をきっかけにシルクも気になったことを尋ねた。
「二人は勝てるかな？」
「多分大丈夫だと思うよ。多少は面倒かもしれないけどね」
「もしそうだとしても、ビビは大丈夫かな。ほとんど戦ってる姿を見たこともないし」
「それも心配ないとは思う。秘策を与えておいたからね」
「秘策？」
二人が同時に首をかしげてもキリは肩をすくめただけだった。
笑顔で躱されてしまった気もするが、再度は尋ねられず、そろそろ試合が始まるらしい。

実況を続けていたハッタリーがその一言を告げる。
《さぁそれでは行こう！　トレジャーバトル開始の時が来た！》
その声をきっかけに四人全員がぐっと膝を曲げて力を溜める。
直後の一言で戦いの火ぶたが切って落とされた。
《Ｒｅａｄｙ～……ＧＯ!!》
全員が一斉に駆け出す。
ひとまずは策を弄する暇もなく宝箱へ殺到する。
最も重要な物だと判断するため、誰もが迷いを持っていなかった。
そうなれば戦闘が始まるのは当然。
一瞬にして接近し、接触は免れない。
まず最初に接触したのはルフィとバギーだった。互いの足の速さがほぼ同等だったのか、宝箱を挟んで同時に身構え、相手への攻撃を真っ先に考える。
ルフィは楽しそうに笑って拳を握った。
対するバギーはナイフを手に持ち、こちらも笑顔で戦闘へと臨んだ。
「麦わらァ！　てめぇにゃ返し切れてねぇ借りがあるんだ！　覚悟しろ！」
「しっしっし！　来ォい！」
ルフィが攻撃するよりも早くバギーが跳び上がった。
下半身だけを切り取ってぐるりと回転させ、まるでブーメランのように飛んでいく。靴の先端からは仕込まれたナイフが顔を出していた。
それを見たルフィは素早く判断する。
「バラバラせんべいッ！」
「ふんっ！」
回転しながら飛来してくる下半身を眺め、それは一個の凶器だが、ルフィはまるで臆さない。
彼もまた軽く跳ぶと右足でその凶器を踏み抜いた。
太股の辺りを踏み抜き、地面へ落として力尽くで押さえる。バラバラになっていても痛覚は存在するためバギーの表情が変わった。青

ざめて悲鳴を発するのだ。
「ギャアアアアッ!?　てめぇ、クソゴム！　なんてことしやがる！」
「ゴムゴムのォ！」
「あぁ～ちょっと待てコラァ!?」
聞く耳を持たず、ルフィは右腕を伸ばしてバギーの顔面へパンチを叩き込む。
「ピストルッ！」
「ぶげぇ!?」
凄まじい威力で鼻血を噴き出しながら体が飛んだ。
衝撃を受けたせいか、上半身がバラバラになって地面に散らばってしまう。その瞬間は誰が見ても明確な隙ができていた。バギーはすぐには起き上がれない。
ルフィは即座に宝箱を狙う。
これを運べば勝ち。正しく理解しているためその判断は間違いではないだろう。
ただ、彼の動きに反応できる者はもう一人居た。
素早く駆け寄るアルビダが一瞬の隙を狙う。
彼女は少なからずルフィを知っていた。会ったのはほんの二度程度。その間に観察もしている。
敢えてタイミングをずらして、一歩遅く到達した。
その瞬間、ルフィは宝箱を両手で掴んだまさにその時で、アルビダが金棒を振り上げる。
気付けば手が届くその距離にアルビダが居た。それも走る途中でルートを変え、ルフィの右側、背後から接近している。バギーに気を取られた一瞬を利用されてしまった。
ルフィが気付いた時には膝も曲げて宝箱も持ち、抵抗はできないほんの数秒。
的確にその瞬間を生み出して、振り抜かれた金棒がルフィの顔面を殴り飛ばした。
アルビダの金棒には突起があり、それは以前にも増して鋭さを増し

ていた。
以前殴った時、鋭さが足りずにルフィの肌を裂けなかったことを記憶している。そのため再会を果たした時のためにと攻撃力は前より増していた。
肌に刺さり、血が流れ出す。
宝箱を置いて殴り飛ばされると同時に、飛び散った血が真っ直ぐの軌跡を作った。
「ぶへぇっ!?」
「ルフィさん!」
「残念だったねぇ。こっちはあんたへの対策は十分なんだ」
勢いよく地面を転がって、そのままの勢いでルフィは跳ね起きた。
その間にアルビダは金棒をくるりと回し、美しい笑みを湛えてルフィだけを見ていた。
チャンスだ、と思う。
ビビは自身の武器、孔雀(クジャッキー)スラッシャーを回してアルビダへ接近していた。
急ぎながらもできるだけ視界に入らぬよう左へ動きつつ、攻撃可能な距離まで進む。そして隙だらけの彼女の背を捉えた時、彼女は思い切って飛び掛かった。
卑怯などとは言わない。欲するのは勝利。
自身の覚悟と皆の優しさを無駄にしてはいけない。
意を決してビビが右腕を振るった。
「やああっ!」
ビビの攻撃は確実に当たった。服を切り裂き、肌へ触れる。しかしその時、想像もできなかった出来事が起こり、彼女の肌に触れた途端、つるりと滑ったのである。
孔雀(クジャッキー)スラッシャーは斬撃の性質を持つ。触れれば肌は切れるはず。
それがなぜかアルビダは無傷のまま、滑った拍子にビビが体勢を崩していた。
呆然とした顔で足をよろけさせ、その時アルビダと目が合った。

「無駄だよ。アタシの肌はスベスベなんだ」
振り抜いた金棒がビビの体を捉え、細腕とは思えぬ強さで彼女を吹き飛ばす。
ビビの体は高く宙を待ってから、激突するように地面へ落ちた。
「あうっ!?」
「ビビ！」
「そもそもアタシらはあんたへの復讐心で集まった連合だよ。能力のことは理解してるし、あんたの性格もよく知ってる。そう簡単に勝てると思われちゃ心外だね」
「よぉ～し、よくやったぞアルビダァ！　お手柄じゃねぇか！」
いつの間にかバギーも鼻血を拭き取った上に立ち上がっていて、上機嫌に語り出す。
宝箱は今、彼らの足下にあった。
状況から考えて簡単には取れないだろう。
ルフィはビビに駆け寄って彼女を助け起こし、一人ではだめだと判断した。
「ギャーッハッハ！　麦わらァ、今日こそてめぇに敗北の二文字を教えてやるぜ！　こっちはハナッから準備を整えてんだ！　って誰の鼻が準備万端だクラァ!?　一体何の準備だ!?　オォ!?」
「落ち着きなよバギー。誰もそんなこと言ってないさ」
「ビビ！　行けるな！」
「ええ。これくらいなんともないわ……！」
横腹の辺りが金棒の棘で裂かれ、服も切れてわずかに流血している。
ビビはそれを自覚しながら立ち上がった。
手で押さえようともしない。そうすることは負けを認めたも同じな気がして、まだ自分は負けていないのだと奮い立たせるため、敢えて気にしようとしなかった。
代わりに両手へ武器を装備して、いつでも反撃できる状態を整える。
バギーとアルビダは左右から宝箱を挟み込んで立っていた。

まだ持ち上げる様子がない。その姿に違和感を覚える。
口では何と言えず、不思議な状況だと感じる二人は動けずにいた。
《スタートと同時に激しい攻防！　しかし今はバギー＆アルビダ組が優勢か!?　ルフィ＆ビビペアは足を止めて動かないぞ！　さぁどんな作戦で来る！》
「宝はこっちが確保したんだ。とりあえず第一段階は完了したと言っていいな」
「それじゃ作戦開始と行くかい？」
「行かいでか！　バギーのドハデ大作戦開始じゃあッ！」
唐突にバギーが懐から掌大の丸い爆弾を取り出した。導火線に火を点け、敵に投げる訳でもなくなぜか空へ向けて思い切り投擲する。するとやはり爆弾は空にて爆発した。
爆音が周囲へ広がり、爆炎はすぐに消えてしまう。
何の効果があるのかはわからない。ルフィたちは呆然と見上げ、ハッタリーもまた意味がわからないとマイクに向けて伝えていて、彼の行動を理解できる者は居なかった。
バギーは上機嫌に笑っている。
その隣ではアルビダもまた勝ち誇っているかのような顔だ。
まだ宝箱を拾おうとしない。だが何かが起ころうとしている予兆は確かに感じられた。
ルフィは咄嗟に身構え、慌てて攻撃に移ろうとする。なぜそうしようと思ったのかは不明だがそうしなければならないと感じた。しかし、それよりも早く変化は来る。
突如、地響きを感じていた。
わずかとはいえ地面を揺らす何かが存在する。
それは彼らの予想を超えた形でやってきた。
群れと化した動物たちが戦場の中央を目指して走ってくるのである。
《おぉ～っとこれはぁ!?　一体どういうことだ、我が社と契約した動物たちが凄い勢いで走ってくるゥ！　ラパーンとシーラパーン！　予定にはない乱入者の登場だァ！》

「ギャ～ッハッハッハ！　試合が始まる前に買収しといたのよ！
今はおれの部下だ！」
《なぁ～んと道化のバギーが買収していたようだ！　これは多勢に無勢！　ルフィチームどう回避する気だァ!?》
「ちょっと待って、これはルール違反じゃないの!?　いくら彼らの意思とはいえゲームの最中に乱入なんて……！　そんなことが許されるの!?」
ビビが頭上を見上げて叫ぶが、見つめた先に居るハッタリーは頭を掻きながら答える。
《え～、ビビ選手からの抗議がありましたが、我々の判断でいえばペット、及びそれに準ずる動物たちもまた〝武器の一種〟として判断します。よってルール違反にはなりません》
「そんな……!?」
「来るぞビビ！　おれがあいつらぶっ飛ばすから、一緒に宝を取るんだ！」
狼狽するルフィがビビを背に庇い、駆けてくる動物たちの前へ立ちはだかる。
敵には勢いがある。簡単には止められない。しかしそんな程度で怯むルフィではなく、両腕を高速で動かして、無数のパンチでその集団を相手にしようとしていた。
「一気に襲え海獣ども！　一匹たりとも遅れるなァ！」
「ゴムゴムのォ～……ガトリング！」
高速で突き出されるパンチが、壁のように連なって走る動物たちを殴り飛ばす。
先頭はラパーン。重い体には苦労するが倒せないことはない。
だがそれで止まるほど弱い集団ではなかった。
あまりにも数が多過ぎて止め切れない者も居る。彼らはルフィの攻撃を抜け、そのままの勢いで走るとルフィへ接近。思い切り腕を振って殴り掛かった。
「うわっ!?」
「数は力だ！　戦況はこうやって変えるんだよォ！」

上手く避けたが体勢が崩れた。素早く接近した一匹のラパーンが拳を振り抜こうとする。その直前にビビが反応し、彼の胴体を浅くだが切り付けていた。
痛みを感じ、危険性を感じたことでラパーンが後ろへ跳ぶ。
その間にビビがルフィを助け起こして、再び二人で敵の集団を眺めた。
「わりぃビビ、ちょっと遅れた！」
「いいえ、私こそ……！」
「まだまだ行けぇい！　その隙にっと」
ラパーンとシーラパーンが群れを成して襲ってくるため、どうしても注意力は散漫になる。
その間にバギーが宝箱を拾い上げた。
気付かれない内に運んでしまえばあっさり勝利だ。バギーは思わずほくそ笑む。
「ザマァみろ、アホめ。戦争が戦場だけで起こってると思ったら大間違いだ。本物の策略家ってのは始まる前から戦ってるもんなんだよ」
「それはいいけどねバギー」
「ギャッハッハ！　やっと麦わらの野郎に一泡吹かせられるぜ！」
「あんたの持論は大したもんさ。だけど、あんたの思い通りに動く相手じゃないはずだろ？」
「あン――？」
アルビダの言葉に疑問を持ったバギーが振り向いた時、なぜか勢いよく飛んでくるルフィの姿が目に映って、その背にはビビが掴まっていた。
何が起こったかも理解できぬままに叫んでいた。
ロケットのように飛んでくるルフィが両腕を思い切り伸ばし、攻撃の姿勢に入る。
それを見たアルビダは一歩も動かず目を閉じ、敢えて接触の時を待った。
「ゴムゴムの大鎌ァ！」

「ギャアアアアッ――げふぅ!?」
勢いよく飛んできて、ただ真っ直ぐ伸ばしただけの両腕が確かに激突した。
顔面に一撃を受けたバギーは間抜けな顔で地面を転がり、しかし、アルビダにダメージはない。またしてもスベスベの肌に滑って無効化してしまったようだ。
全ての打撃は彼女の美しい肌に無力化されてしまう。
スベスベの力で攻撃を受け流した時、物理的に触れるせいか、大抵は相手が体勢を崩す。
だからこそアルビダは敢えて避ける攻撃と避けない攻撃を選別していた。
先程のルフィにしてもバギーには上手く当てたが、アルビダを捉えた腕が本来の動きにはないはずの方向へ動かされてしまい、空中に居る姿勢が崩れてしまう。
着地は転がるようになってしまい、背中のビビも含めて慌ただしく転がった。
二人は慌てて立ち上がった。
当然バギーも怒り心頭で起き上がり、バラバラになった体が宙に浮遊する。
「チクショー！　物を考えんアホめ！　なんとなく飛んで来やがってはた迷惑だ！」
「ビビ！　宝を頼む！　こいつらはおれが止めてみる！」
「わかったわ！　ルフィさん、後をお願い！」
宝箱を持っていたバギーが殴り飛ばされたことで、手を離れた宝箱が地面に落ちていた。
バギーが驚愕した時、素早くビビが拾い上げ、自陣へ向かって駆け出す。
「あああっ!?　お前何やっとんじゃこのォ――！」
「スタンプ！」
「ぶほっ!?　お、お前はもっと何やっとんじゃ……！」
顔面を蹴られてバギーの頭が力なく地面に落ちた。

くすくす笑い、アルビダは動じない。
優雅にも見える速度で歩き始め、唐突にビビを追おうとした。気付いたルフィが彼女を行かせてはいけないと判断し、考える前に攻撃を繰り出す。
女だから、と手加減する暇もなかった。
全力で伸ばされたパンチがアルビダの頬を狙って進んでいく。
「待て！　そっち行くなぁ！」
「おや、嬉しいね。またあんたの拳を受けられるなんて」
高速で迫る拳を視認してもアルビダは全く動じない。
「でも」
むしろ自分から頬を差し出す動作があった。
ルフィのパンチが右の頬に当たる。その瞬間、つるりとスリップしてしまい、やはり物理攻撃を受け流した。ルフィの腕は明後日の方向へ伸びてしまったのである。
スベスベな感触は彼の手にも伝わっていただろう。
驚愕したルフィは目を剥いて叫んでいた。
「えええええっ!?　滑ったぞ!?　なんでだ！」
「言っただろ？　アタシはスベスベの実を食べて生まれ変わった」
「くそっ……！」
「でも少し残念だね。アタシが認めたあんたの拳、もう受けられないなんてさ」
ルフィが優れている点の一つに切り替えの早さがある。
攻撃が効かなかったことはいい。それよりもビビを追わせてはだめだ。
驚いた直後には迷わずそう判断していて、アルビダに向かって駆け出している。その判断こそが恐ろしい。一瞬の迷いで勝敗を分ける勝負において、彼は迷いもしないのだ。
アルビダは笑みを深めていた。
攻撃を受け流せてしまったことは少し寂しくもあるものの、やはり彼は好ましい。
女だからと手を抜かずに全力で向かってくる彼が愛おしかった。

とはいえ、勝負となれば別。
海賊としての顔を見せた彼女は正面からルフィに向かい合う。
ただの町民、或いは遊女にでもなれば、違った形で愛することもあっただろう。だが野蛮な海賊である彼女が以前ルフィに殴られた時、そんな愛し方ではないと判断した。
自分はそんな愛し方ではない。
彼女の愛は、全てが金棒へ注ぎ込まれて、それをルフィに叩き込むのだ。
「おおおおっ！」
「おいでルフィ。愛してあげるよ」
「ゴムゴムの！」
後方へ伸ばされた右腕が凄まじい勢いで引き寄せられてくる。
当たればただでは済まない。そう判断した後で、アルビダは敢えて自らの胸元で受け止めた。
「銃弾（ブレット）！」
ルフィの強烈なパンチが胸に当たった。だが全く摩擦を感じさせずに滑り、上手く力を受け流されていて、全力を込めたが故に体が奇妙に流れる。
アルビダが金棒を振り上げていた。
慌てて回避しようとするルフィだが、逃げるより先に金棒に捉えられる。
咄嗟に両手を交差させて防御した。
常人ではそんな判断も、その行動が間に合う時間もない。
彼を殴り飛ばしながらもアルビダは感心し、ぞくぞくという感覚に喜びを見出す。
ルフィは背中から地面へ落ちて転がった。
しかしすぐに立ち上がり、両腕から血を流しながらも戦意は全く衰えていない。
「ハァ、くそ。お前こんなに強かったっけ？」
「アタシは変わったんだよ。ほら、そばかすが消えただろう？」
「いや、それはどうでもいいんだって」

いやいやとルフィが手を振った時、背後からラパーンが襲ってくる。振るわれた腕が当たる直前に気付いたルフィは素早く避け、低く跳ねて距離を取った。
いつの間にかバギーが復活していたようだ。
攻撃が再開されたのはそれがきっかけだったようで、彼の怒声が聞こえてくる。
必然的に前後を挟まれ、ルフィは表情を引き締め直す。
「だぁぁちくしょう！　相変わらず舐めた真似してくれやがるぜ麦わらァ！」
「お前が勝手に騒いでるだけだろ」
「アルビダ！　お前は小娘を追え！　こいつはおれが止めとく！」
「なら、そうしようかねぇ。そろそろ追わなきゃと思ってたところさ」
振り返ったアルビダは今度は走り出そうとしていた。
それはさせないとルフィも振り返ろうとするが、即座にシーラパーンが襲ってくる。
「行かせるかァ！」
「うわっ!?　くそっ、どけ！　邪魔すんな！」
「邪魔しねぇわけねぇだろうがアンポンタン！　てめぇこそおれの邪魔すんな！」
「邪魔してんのはお前だろうが！」
「いいやてめぇだァ！」
ラパーンとシーラパーン、同時に襲ってくる集団の向こうから、バギーも接近する。
呼吸をぴたりと合わせて一斉に動き、壁のように連なってくるラパーンを弾き飛ばすことは簡単ではない。距離が近かったのも悪かった。ルフィは咄嗟の判断で後ろに跳ぶ。
当然彼らは追ってくるためさほど距離は開かない。
ルフィはぐっと歯を食いしばり、思わず自分の不利を知る。
攻撃のため、一気に殴り飛ばそうと両腕を動かした。
その瞬間を狙ったかのようにバギーがナイフを持った右手だけを

撃ち出す。
「ゴムゴムの――！」
「バラバラ砲ッ！」
壁のように連なったラパーンの間を抜け、右手だけが飛んでくる。
一直線とは限らない。予想した場所からは来ず、死角を狙ってきた。
反応しきれず、ルフィの脇腹が切り裂かれ、ぐらりと体が揺れてしまう。
「やれェい！」
その時を逃がさずラパーンたちが飛び掛かってきた。
瞬時にルフィは大きく息を吸い、風船の如く腹を大きく膨らませる。
「ゴムゴムの風船ッ！」
「はぁっ!?」
バギーが驚愕するのも無理はない。
急接近したラパーンたちが、急に膨らんだ腹に押されたのか、跳ね飛ばされてしまうのだ。間抜けな技に見えるが防御としての効果をこれ以上ないほど見せつけていた。
ラパーンたちは一斉に地面を転がり、明確な隙ができる。
バギーまでの道ができていた。
ルフィは迷わず駆け出し、勢いよく前へ跳び出して、固まるバギーへ拳を突き出した。
「ゴムゴムのピストルッ！」
「ぶへぇっ!?」
顔面に直撃し、赤っ鼻を押し潰すように彼を殴り飛ばした。
全身がバラバラになってしまってあちこちへ散らばってしまう。
着地したルフィはよしと頷き、ぐっとガッツポーズを見せていた。

トレジャーバトル　一回戦（2）

宝箱を両腕で抱え、ビビは自陣を目指して走っていた。
ラパーンとシーラパーンの乱入があったとはいえ、道を阻む者はない。
家屋の角を曲がると港が見える。そこにぽつんとリングが置かれており、そこに宝箱を置きさえすれば船が動くことだろう。船が到着すれば勝ちだ。
その場所が見えてビビはさらに急ぐ。
リングの外から宝箱を投げ入れた。
それと同時に島から少し離れた位置に居た帆船が動き出す。
勝利を焦るビビは早く到着して欲しいと船を眺めていた。
集まった四人の中で自分が一番弱いことは理解している。それはおそらく、同じ女性であるアルビダに攻撃が効かなかった瞬間にわかってしまった。
これがルールのある戦いでよかった。
それならルフィの役に立てるはずだと、このまま船が到着して欲しいと考えている。
《先に宝箱をゲットしたのはルフィ＆ビビチーム！　ビビ選手が宝箱を置いたぞォ！》
（早く……早く……！）
彼女がリングの中に入らなかったのは敵を迎撃するためだ。
少し距離があるものの、わずかな足音が聞こえ、待っていたかのように素早く振り返った。
やってきたのはアルビダ一人。
さほど急いだ様子もなく悠然と歩いてくる。
肩に金棒を担いで、ただそれだけで妙に迫力を感じる。果たしてそれは他人が見ても同じだろうかと考えた時、ビビは自分が怯えているかもしれないことを自覚した。
バロックワークスの社員として任務を行った経験がある。戦闘は少なからず経験していて、生き残るためにイガラムを相手に特訓もし

た。しかし、その経験が生かせるかといえば、否。
彼女は悪魔の実の能力者であり、明らかにビビよりも戦闘に慣れていた。
敵になった人間の殴り方を知っている。
殴っても心を痛めない慣れがある。
それ以上に、彼女には敵を前にしても平常心を失わない強さがあり、ビビを見ても一切表情を変えないのはそのためだ。アルビダは今も艶やかに微笑んでいた。
港から伸びた桟橋に到達した時、ふと地面に触れた金棒が引きずられるように進む。
「一つ言っておくよ。あんたじゃアタシには勝てない」
「えっ……？」
「力がどうとか、武器がどうとかいう話じゃないんだ。アタシとあんたじゃ大きな違いがある」
ゴリゴリと先端がわずかに桟橋を削る。
ゆっくり歩いただけで威圧感を感じ、その言葉を否定はできない。おそらくは決定的な何かが違っているのだろう。なぜか体が上手く動かなかった。
「戦うのが怖いのかい？」
「そ、そんなことないわっ！　私だって、命を賭けて戦う覚悟はできてる！」
「ならどうして震えてるんだい？」
右腕がわずかに震えていた。
反射的に隠すように左手で抱える。
ビビの動揺は些細な行動からも明らかだった。
突如、アルビダが駆け出す。
戦闘に慣れていれば相手の呼吸を理解することができる。動揺した時、覚悟が鈍った時、弱みを見せる人間は武器を持っている者の中にも居る。
ビビは確かに武器を持ち、そこらの海賊を倒す実力もあったが、弱みもあった。

強者との戦闘経験が圧倒的に足りない。死に瀕するほどの死闘を経験したことがない。

一度ルフィに敗北したアルビダはすでにその境地を得ていた。

自身の力量を深く知り、勝てない相手を知れば、それだけ心の〝強さ〟を手に入れられるものだ。

立ち尽くして動けないビビにアルビダが迫る。

引きずるように下げられていた金棒は機を見て素早く振り上げられる。目では見えていて、回避しなければと思った。しかしビビは動くことができない。

下から掬い上げるようにして、彼女の体が殴り飛ばされた。

経験が違う。心構えが違う。

ほんの一言で動揺し、それを気取られた彼女に勝機はない。

欄干に激突して海に落ちることは免れたが、咄嗟に防御のため使った左腕から血を流し、棘が裂いたのか額にも小さな切り傷ができている。彼女の白い肌が赤く濡れていた。

低く呻いて動かなくなり、意識があっても即座に切りかかることはできない。

アルビダは悠々とその隣を歩き抜ける。

《クリーンヒットォ〜!! アルビダ選手のきつい一撃がビビ選手を殴り飛ばしたァァ! これは厳しいぞ、流石に立てないかァ!?》

「ビビッ!?」

「おぉい嘘だろ、ビビだって弱くはねぇんだぞ!」

「ビビすぁまぁ〜っ!!?」

港でナミやウソップ、そして誰よりも大きな声でイガラムが狼狽していた。

映像電伝虫のモニターは的確に試合を映している。ビビが殴られたその時も、流血して桟橋に赤い水滴が落ちるその時も、倒れた瞬間もしっかり見ることができた。

見ていても助けることはできない。口惜しい彼らは拳を握って必死に歯を食いしばっていた。

リングの中に入ったアルビダが左手で宝箱を持ち上げる。

床から離れた途端にぴたりと帆船が止まり、一秒の狂いもなさそうだ。
これでルールは理解できた。リング内に宝箱があっても床に触れていなければ船は動かない。安堵したアルビダは慌てることなくリングの外へ出る。
そして起き上がろうとしているビビを一瞥し、少し歩調を速めて彼女の前を横切った。
「腕がいいからって生き残れるもんじゃない。そういうのはリング上の戦いだけさ」
彼女は立ち上がるだろう。それを知りながらも少し歩く速度を速めただけ。
アルビダが慌てて逃げなかったのは自信があったからだ。
自身と相手との力量を見た。正しく理解するならば冷静に対処すれば問題はない。
彼女の背後でビビが立ち上がった。
ぎゅっと唇を結び、険しい表情である。
「待ちなさいっ！」
一言があってアルビダは立ち止まった。
左腕で宝箱を抱え、笑みを湛えたまま振り返る。
再び正面からビビと対峙した。
「まだ……負けてない……！」
「そうかい。でも負けてないだけだろう？」
宝箱を置くことすらせずに戦おうとする。しかし相手を舐めているからではない、そうした方が舐められていると感じたビビの心を乱すことができるからだ。
彼女は思いのほか分かり易い。
動揺が表情に表れ、緊張感が伝わり、おそらく本来の実力は出せていない。特にルフィの強さを目の当たりにした後ならばよくわかる。
彼の〝強み〟を彼女は持っていない。
アルビダは余裕を持って対峙する。
ビビは対照的に焦りを見せる表情で、とてもではないが冷静とは言

えないだろう。
仲間が居れば止めもしたが、残念ながらこの場に仲間は居なかった。
ブルーチームの陣地の目の前。宝箱さえ奪えば勝つ可能性が高いのは自分たちのはず。
そう信じ込ませ、ビビは自分の震えを無理やり抑えた。
《宝箱を奪取したアルビダ選手と！　それを阻止したいビビ選手！　麗しい美女たちが再び戦闘の構えを見せた！　すでに怪我をしているビビ選手に勝機はあるのかァ！》
「勝機がなくても、私は、勝たなきゃいけないんだ……！」
「気負い過ぎてるならやめといた方がいい。あんた、体は上手く動くのかい？」
怪我のことを言っているのではない。緊張状態で普段よりも筋肉が固まっているようだ。これをどうにかしなければ本来の実力を出すことは不可能とも言える。
昨日初めて会ったビビの顔色を見るだけでアルビダは見抜いていた。
脅威ではないと思うのはそのせいだ。
「私だって強くなった！　今ならもう戦える！」
「――その強くなった力が使えなきゃ、勝てる勝負も勝てないじゃないか」
「うるさいっ！」
ビビは右手に装備した孔雀（クジャッキー）スラッシャーを回転させる。
回転した勢いを使って、先端の刃物だけが飛ばされた。
「スラッシャー・ショット！」
小さいとはいえ飛来した刃物がアルビダに接近する。
確かな脅威だったがアルビダはその場を動かず目を閉じた。
孔雀の羽の形をした刃物は彼女の胸元に当たって、切り傷一つ与えられずスリップしてしまう。威力と勢いは十分だったはずだ。やはり彼女の能力が厄介である。
ビビはめげずに駆け出した。

腰の裏から新たな孔雀（クジャッキー）スラッシャーを取り出し、右手に装備して回転させる。さらに今度は左手に装備していたそれも回転させていた。
左右同時にさらに強力な一撃を叩き込む。
そう考えてビビは真っ直ぐ正面から接近を行った。
反撃しようと思えば簡単だったかもしれない。
アルビダはそうせず、左手に宝箱を持ち、高く掲げると敢えてその場を動かず待った。
挑発するような、敢えて待つ姿勢。わざわざ宝箱を上げてみせたのも彼女の心を揺り動かす。しかしここで退いては本当に勝てなくなってしまう。
ビビは彼女の肌を切り裂くつもりで攻撃を当てた。
「〝摩擦ゼロ〟」
「孔雀（クジャッキー）スラッシャー！」
両手の武器が彼女の体を切りつけた。だがやはり想像した通り、するりと滑ってしまう。そして力を入れていた分、その力が上手く逃がされた時、逃げる力に従って体勢が崩れた。
ビビは勢いよく転んでしまう。
それを気にせずアルビダは平然と歩き出してしまった。
「うっ!?」
「アタシの肌は摩擦する物を一切受け付けない。何度やっても同じさ」
転んだビビは素早く立ち上がってアルビダの背中を睨みつける。
桟橋を出て、港を離れた彼女はわずかに草が生えた土の地面を踏みしめた。アルビダの左手には無人の家屋。可愛らしい木造の家が寂しく立っている。
ビビは慌てて追いかけた。
それに反応したらしく、今度はアルビダがくるりと振り返って彼女を見つめる。
「言っとくけどさっきのは警告みたいなもんさ。アタシの肌でスリップした相手を殴るのはそう難しいことじゃない……次はないよ

？」
「私はっ、みんなを守りたいだけなんだ！」
その言葉に眉を動かすもビビは止まらない。
勝利のためには攻撃するしかないと考え、思い切り腕を振るった。
孔雀の羽がアルビダの肌に触れた時、全く間を置かずにスリップする。勢いのままに受け流されてしまってまたしても転びかけた。
今度は、転ぶのを待ったりはしない。
事前に振り上げられていた金棒が彼女を殴り飛ばしていた。
鮮血が飛ぶ。体が宙を舞っていた。
ビビの体は窓を割って家屋の中へ入り、勢いよく床を転げる。
辺りに置かれていた物をひっくり返した後、ビビは、今度はぐったり倒れて起き上がれない。
《強烈な一撃ィ～！　ビビ選手が家の中へ殴り飛ばされた！　本当に大丈夫なのかァ～!?》
「うぉぉいっ!?　今のはやべぇだろ！」
「ビビッ！　しっかりしなさ～い！」
「ビビすわまぁ～!!?」
観客の声も、仲間たちの声も届かず、ビビは脱力して動かない。
頭から血を流していた。なぜか体に力が入らず、薄暗い室内で一人寝転び、わずかに揺らぐ視界はぼんやりと天井を映し出している。
自分は無力だと、強く感じさせられる時間だった。
思えば、これまで戦った相手の中に、自分より強い人間がどれほどいただろう。
自分が甘やかされていたことに今更気付いた。
バロックワークスの策略、或いは制度のためとはいえ、傍には常にパートナーのＭｒ．９、或いはＭｒ．８として活動していたイガラムが居て、常に誰かに守られ、そして自分は助力をした。
守ってもらいながら強くなった気でいたのだろう。そんなもの、ただの愚かな小娘でしかない。
海賊として認められるはずもなかった。
（くやしい……）

挑発されたことより、殴り飛ばされたことより、気付かなかった自分が憎らしい。
本当に勝ちたいのならなぜ自分は床に転がっているのだろうか。
悔し過ぎて涙さえ出ない。ビビの目はぼんやりと天井を眺めていた。
（勝ちたい……）
拳をぎゅっと握る。
なぜか力が入ったことに彼女はまだ気付けていなかった。
（私だって、あの人たちの仲間なんだッ。たとえ本物の海賊じゃなくても、そうなれなくても、足手纏いにはなりたくない……ルフィさんたちの名前に泥を塗りたくない！）
ガチャリと音が聞こえたところで、不思議に思ったアルビダは振り向いた。
わざわざ家の扉を開けてビビが外へ出てきたのである。
頭から血を流し、呼吸も荒れ、決して無事だったとは言い難い姿。しかし先程とは目の色が違う気がして、ふとアルビダは顔から笑みを消してしまう。
立ったことは事実。そして見事。
気絶させるつもりで打った一撃を耐えた彼女に敬意を表し、アルビダは自ら対峙した。
《立ったぁ～！　ビビ選手は立ってバトルに戻ってきたぞぉ～！　頭から血を流して足下はふらついているが、戦闘を継続する模様だァ！》
「よぉっしゃぁあああっ！」
「ナイスよビビっ！　よく立った！」
「行ったれビビちゃん！　反撃だァ！」
「ビビすゎまぁぁああっ！」
不思議と今は、仲間の声が聞こえる気がした。
きっとみんな心配している。イガラムはひどい顔で泣いているだろう。それほど自分を想ってくれる仲間たちを持ちながら、何もできずに倒れていたくはない。

そう考えるとなぜか力が湧いてくる。
ビビは強い眼差しでアルビダの姿を見据えていた。
「目が変わったね。今のがいい気つけになっちまったかい？」
「私、間違ってた」
「さて、何を」
「あなたに勝ちたいって言いながら、本当は自分のことしか考えてなかった」
頭がズキズキ痛んでいることでむしろ冷静になれている。
確かにそうだ。アルビダの一撃が彼女の頭を冷やすことに成功した。
勝ちたい、優勝したいと言いながら、その実頭の奥で考えていたのは祖国のことばかり。自分が生まれ育った国を守りたいという想いが強過ぎるあまり、目の前の敵を見ようとしていなかった。周りの者に任せてばかりで守られていただけだったのだ。
彼女に殴られてやっと気付いた。
今、この瞬間に見るべき敵は、目の前にこそ居るのだと。
フーッと息を吐き、もう一度頭を冷やした。
相手への無礼を認める。これは自分が愚かだった。
キッと強い目でアルビダをビビは重く口を開く。
「ごめんなさい」
頭を下げて一言。
予想外の行動にアルビダはきょとんとしてしまった。
《あ、謝っているぅ!?　ビビ選手なぜか謝っているぞ！　降参の宣言か、それとも挑発か!?　誰も予想できなかった発言にアルビダ選手も動けない！》
「私、あなたを見ようとしてなかった。それなのに勝ちたいなんて言って、あなたと戦おうとするんだもの。あなたが怒ったのも不思議じゃない」
「別に怒ったつもりじゃないんだけどね。そうかい、それじゃ有難く受け取っておくよ」
アルビダは笑みを浮かべ、真っ直ぐに彼女の目を見つめ返して話し

た。
「でも言いたいことはそれだけじゃないんだろ？」
「ええ……これじゃいけないってやっと気付いたの。ちゃんと目の前の現実を見なきゃ」
ビビも微笑み、そっと上げた右手の、小指を口元へ運ぶ。
「今は、本当にあなたに勝ちたい」
「そう言えたんなら十分さ。あんたは強くなった」
武器を使おうとした訳ではない。曲げた小指を軽く歯で噛んだ。
突如ビビは空に顔を向け、指笛を鳴らすのである。
「来なさい！　カルー！」
ピィィィ、と指笛の音が周囲へ響いた。
アルビダは訳も分からずにいるが今更無駄な行動はしないだろう。おそらく何かのために指笛を鳴らしたのであって、攻撃か、その他の何かが来る。
しばらくと言わず、それはすぐにやってきた。
出場者用の船に乗り込んでいたカルーが猛然と走ってきたのである。
ドタドタと騒がしい足音で走ってきたカルーの姿を見て、アルビダは不思議そうにして、ビビは勝機を得たかのように穏やかな笑みを浮かべた。
真っ直ぐ走ってきたカルーはそのままビビの下へ。
そしてカルーが到着した時、ビビは自らの脚力で高く跳び上がり、華麗にその背に着地する。
「オーッホッホッホ！」
《なんとビビ選手の下にもペットらしき動物が現れたぞ！　バギーチームの策を見て自らも思い立ったのか！　なぜか鞍の上に立って高笑いだ！》
その姿は中々に衝撃的で。大人しそうな少女が高笑いする様は少々恐ろしくもある。
衝撃は麦わらの一味にも与えられていたようだ。
港で見ていた顔ぶれはビビの奇行に驚き、一部を除いて冷や汗を垂

らす。
「ビ、ビビがキレた……」
「いや、ありゃバロックワークスに潜入してた時と同じだろ。要は演技ってことだろうが……」
「ん～ビビちゃんもミス・ウェンズデーも素敵だぁ～!!」
「ビビすわまぁ～!!?」
「でも演技したからって強くなるわけでもないでしょっ。どうする気よ、ビビ……!」
心配するナミの言葉を知ってか知らずか、ビビは笑顔だった。
明らかに雰囲気が変わっている。大袈裟かもしれないが、まるで別人かと思うほど。先程の一声も決して意味がなかった訳ではないのだろう。
アルビダは驚いていない。少々変わったことは認めてもそれで負けとはなり得ないからだ。
問題なのはこれから彼女が何をしでかすか。
ビビは笑顔でアルビダを見ていた。
もう恐怖心などない。思考は素早く働き、仰々しい動きですっと彼女を指差す。
「あなたに言われた言葉をそのまま返すわ。あなたじゃ私には勝てない!」
「へぇ、ずいぶん態度が変わったもんだ。何か策でも思い付いたかい?」
「それは結果でお見せするわよ」
ビビは何もせずカルーの背から降りる。ただのパフォーマンスだったらしい。
さらに言えばアルビダに勝つための策などない。
言わばただのハッタリ。自らの意思で嘘をついたのだ。
海賊の世界は邪道こそ闊歩する。そしてそれこそが勝利への道。
自身に足りなかった物は勝利への執着だとビビは理解する。
勝ちたいと言葉にするだけでは力にならない。勝つためには力が必要であり、ただの腕力や身体能力で劣るのならば頭を、或いはそれ

以外の物を使う必要がある。
ナミは今までどうやって生きてきた。
キリは船に居る間、如何なる方法で皆をまとめた。
今までの経験が彼女の中にある。学ぶべきところはたくさんあった。
彼らと航海した日々を無駄にしないためにも負ける訳にはいかないのである。
その我武者羅さが、ビビの思考を柔軟にさせ、覚悟を決めるきっかけとなったようだ。
地面に降りたビビは自らシャツの前を開ける。下にはぐるぐる模様の奇妙な服を着ていて、見ているだけでも目が回りそうな格好だった。
普段は隠される彼女の体のラインがはっきり見える。
これが男を相手にしていたなら効果もあろう。だが相手は同性であるアルビダ。
まさか色香で勝負する気かと、アルビダは苦笑せずにはいられなかった。
「さぁ……私の体をじっと見て♡」
「見るのは構わないけど、それがアタシを倒す策かい？」
アルビダは誘われるままにじっと見ていた。色香ではどうにもならないと思うからである。
特徴的な服を見せ、ビビは独特のポーズを取ると、ゆらりと踊り始めた。
「魅惑のメマーイダンス！」
腰をくねらせ、妖艶とも言えるが怪しい動き。
じっと見ていたアルビダはその模様の動きをつい目で追ってしまい、ぐるぐる模様で目を回してしまったのか、不意に眩暈を感じ始めた。まずいと思って慌てて逸らそうとするも、彼女の怪しいダンスに目を奪われて逃れることができない。
不覚と思い知った時には膝から力が抜け、その場に跪いてしまった。

「うっ……!?」
「アーンド！」
跪いたアルビダを確認してビビはさらに動いた。
両胸に仕込んでいた武器を取り出す。
他と同じく小指にリングを引っ掛けて、普通の孔雀（クジャッキー）スラッシャーより羽根の刃が多く連結し、一メートル以上はあろうかという長い得物だ。
取り出されたそれを巧みに操り、鞭のようにしならせて前へ繰り出す。
両手で操って正面からアルビダへと殺到した。
「孔雀（クジャッキー）一連（ストリング）スラッシャー！」
それはまるで蛇のように、素早くも恐ろしい迫力で接近してきた。
しかしアルビダは微笑む。物理攻撃では滑ってしまうため無効化できる。
やはり想像した通り、連結した羽根は彼女の肌を滑って移動していく。
アルビダがほくそ笑む一方、ビビが叫んだ。
「狙いはこっちよ！」
そう言った直後、二本の武器がうねりを見せた。
攻撃が効かないことは想定通りだとでも言うかのように、滑って向かわされた方向に動いた上で別の物を狙う。彼女が持つ宝箱と金棒だ。
それら二つを絡め取った瞬間、両腕が勢いよく振り上げられる。
金棒と宝箱が空高く放り投げられて、ビビは思わず笑みを深めた。
「カルー！」
「クエ～ッ！」
落下してきた宝箱はカルーが受け取った。
両羽でキャッチした途端に走り出す。脇目も振らずにゴールを目指し始めたのだろう。
今は命の取り合いではない。あやふやとはいえルールが設けられている。

そのまま逃がしては敗北してしまうため、アルビダはまずいと焦り始めた。
ビビが持って逃げたのなら追えばいいだけだが、カルーが持って逃げたのならビビの手が空いていることになる。彼女の足止めを受けて時間を使われては厄介だ。
おまけに金棒は放り投げられてビビの後方に落ちた。
拾っている暇はないかもしれない。アルビダは真剣に考え始める。
気付けば眩暈が消えて動けるようになっていた。
即座に立ち上がったアルビダだったが、一瞬とはいえ迷った。
ビビを先に仕留めるべきか、彼女を放置して宝箱を奪い返すのか。
迷った時にビビが走り出していた。
なぜかカルーを追ってゴールへ向かっている。それではアルビダが望んだ通りの展開だが、或いは焦って判断を誤ったのかもしれない。
アルビダは今度こそ迷いを消して彼女たちを追い始めた。
金棒が無ければ戦えないだとか、弱体化されるなどということではない。
自らの肉体を武器にすればいいと考え、敢えて金棒を拾う手間を惜しんだようだ。
「アッハッハ！　やるじゃないかあんた！　見直したよ！」
「オーッホッホッホ！　勝負はまだこれからよ！」
ビビは走りながら振り返り、手に持っていた瓶を投げつけた。
家に放り込まれた際に見つけ、外へ出る前に入り口付近まで運んでいて、先程アルビダがわずかに逡巡した隙に拾って持ってきたのである。
投げたのは二本。くるくると宙で回る。
素早く左手を振り上げ、装備したままだった孔雀一連（クジャッキーストリング）スラッシャーで狙う。
パンっと軽く割れると中身が飛び散り、走ってくるアルビダも避けられない。
虚を衝かれたのか、走る勢いのまま全身にかぶせられてしまった。

一連の行動でペースが奪われてしまった。この状況は非常にまずい。
まずいと知りながらもアルビダは一旦退こうとはしなかった。
「くっ、これは……酒？」
「ええ。家の中に置かれていた物よ」
「これが一体なんだってんだい」
ただ放置されていた酒を浴びせて何の意味があるのだろうか。
アルビダは笑みを絶やさないが、ビビも何やら勝機を感じて笑っている様子。
意味が分からず、しばしそこに立ち尽くしたのが彼女のミスだろう。
「私ね、ウソップさんの武勇伝も聞いていたのよ。魚人の幹部を倒した話」
「魚人の幹部ねぇ。こうやって勝ったって？」
「いいえ、少し違うけど……あなたも知ってるでしょ？　お酒はよく燃えるってことをっ」
「なっ――!?」
意図に気付いた時にはもう両腕が振るわれていた。
連結された羽根の刃が体に迫り、両側から挟み込むように、彼女を捕えようと迫る。
「たとえ傷はつけられなくても、これは防げないでしょう――！」
彼女の体に絡みついた刃が激しく接触し、摩擦の結果、小さな火花を生む。
狙いはそれ。
小さな火花が彼女に付着した酒に触れ、その瞬間に大きな火となりアルビダを包んだ。ほんの一瞬の出来事で本人でさえ理解できず、混乱したアルビダは慌てて走り出す。
「キャアアアアアッ!?　水っ、水を！」
「危ないわ！　今すぐ海に飛び込んで！」
「水っ!?」
幸い海が近かった。ビビが慌てた口調で指示したため、アルビダは

何も考えず柵を飛び越える。しかしよく考えれば彼女は生涯カナヅチの能力者であって。
それに気付いたのはすでに空中へ跳び出した後のことだった。
「バイバイベイビー♡」
ビビの艶っぽい笑みに見送られ、アルビダは海へ飛び込む。
不幸中の幸いとして、すぐに火は消え、消火が速かったため被害は大きくなかった。
そして泳げない出場者を助けるべく契約されていた動物も海中に控えていて、消火の直後、海ネコという巨大な海獣がアルビダを助け出す。
落ちてきたアルビダを頭に乗っけて、勢いよく海上へ顔を出してきた。
これもまたアラバスタ近海に住む海獣であるためビビは驚いたが、さらに驚く。
助け出したはずのアルビダをポンとヘディングの要領で宙に浮かせ、無抵抗なのをいいことに、全力で殴り飛ばしたのだ。
アルビダは島の中央まで飛ばされていき、あまりにも乱暴な救助に度肝を抜かれる。
驚愕していたビビだが、ハッタリーの実況が耳に入って我を取り戻した。
《なぁ～んと番狂わせェ！　一方的かと思われた勝負だが、反対にビビ選手がアルビダ選手を海に落としたぞ！　もちろん我が社と契約した海ネコが救助しましたが、顔に似合わず意外とえげつないことするぞ、この子はァ!?》
「よぉぉし！　やったぞビビィ！」
「よくやったぁ！」
「ビビすわまぁ～!!」
まだ胸がドキドキしている。ビビはそっと胸元を押さえた。
自分でもほとんど考えずに行動していた。思い返せば残酷なことをしてしまったかもしれない。
しかしこれこそ本当に勝利を望む姿であって、後悔はなかった。

思い切り息を吸った彼女は、勝ち誇るように大きく口を開く。
「オーッホッホッホ！　……なーんてね」
陣地に宝箱を置いたカルーに振り返り、彼がぐっと親指を立てるのを見て表情が柔らかくなる。
ビビは今度こそ少女らしくふわりと微笑んだ。

トレジャーバトル　一回戦（3）

ハッタリーの実況は、目まぐるしく動く戦場の全てを言葉にしていた。
あちらを見ればルフィとバギーが戦っており、こちらを見ればビビとアルビダが戦い、さらに違う場所を見ればカルーが宝箱を運んでいる。そうして全域を見なければならない。
そのせいで数秒の遅れは仕方なかった。
それでも彼は必死に目と口を動かし、会場の状況を細かく説明していたのである。
《今！　再びブルーチームが宝箱をゲットォ！　カルガモが素早く運んで、その間にビビ選手とアルビダ選手が――な、なんとォ!?》
驚愕したせいでつい絶叫してしまった。
慌ててハッタリーは今見たものを言葉にして説明する。
《さ、酒だ！　家の中にあった酒を使ったのか！　ビビ選手によってアルビダ選手の全身が火に包まれてしまったぁ！　これは堪らない！　急いで海へエスケープ！》
「んなぁにぃ!?　アルビダは苦戦してやがるのか！」
実況を聞いてバギーは思わず空を見上げた。戦況が知れるのは彼の言葉のみだったからだ。
《なぁ～んと番狂わせェ！　一方的かと思われた勝負だが、反対にビビ選手がアルビダ選手を海に落としたぞ！　もちろん我が社と契約した海ネコが救助しましたが、顔に似合わず意外とえげつないことするぞ、この子はァ!?》
「ちくしょう、何が起きてやがんだ！　宝はどうなった！　おれたちも動くべきか……！」
「ゴムゴムのォ！」
宝箱が奪われたのなら今すぐにも奪取に向かいたい。だがここには彼が居る。
場所はそう変わらず、戦闘可能なエリアの中央。
ルフィは自分より多いラパーンやシーラパーンの集団に対して善

戦し、力任せに殴り飛ばしているだけだが、野生動物に対しては何よりも効果的だっただろう。
こいつには勝てない。
野生の本能がルフィを恐れ、いつしか彼らの動きは精彩を欠いていた。
その隙を衝いてルフィが集団を突破する。
振り向いたバギーの驚愕した顔が見えて笑みを深くした。
どうやら勝利を確信したようだ。
「ピストル！」
「ぶへぇ!?　おのれ麦わらァ！」
殴られたバギーがまたも地面を転がった。
腕を縮めたルフィは同じくハッタリーが居る空を見上げ、翼を広げて飛翔する大きな鳥を見た。そしてその行動がビビの活躍を決定付けるものとなったらしい。
空からアルビダが降ってきたのである。
髪や服が焦げたりはしているが存外無事な姿で、彼女は滑るように地面へ着地した。
「あうっ……!?　くそ、あの小娘、やるじゃないか……！」
「なぁにぃ!?　アルビダっ!?　なんでてめぇが降ってくるんだよ！」
「しっしっし、ビビは勝ったのか。これならもう怖くねぇぞ」
辺りを見回して、高く掲げられたブルーチームの旗を見つける。
ルフィはそれを目印に走り出し、自陣へ急いだ。
「あっち行きゃいいのか」
「待アてェ麦わらァ！　てめぇの思い通りにやさせぇぞ！　おいラパーンども！」
敵を追うため、バギーが鋭く声を発するものの、彼らはすっかり怯えていた。度重なる攻撃で威圧されて戦意を失ってしまったらしい。もう動きそうにはなかった。
チッと舌打ちを一つ、彼らを見限って自らが走り出す。
バギーはルフィのみを標的に全力で追いかけた。

「チクショー！　報酬も払ってやったっつうのにもうギブアップか！　こうなりゃ破れかぶれじゃあっ！」
時間はもう残されていない。
ブルーチームの陣地に二度も置かれている。それだけ回収船が近付いていた。
これが最後の局面。互いのチームがそれを理解している。
家屋を迂回することなく飛び越え、ルフィが港へ到着した。
前方、自陣の前にビビが、リング上にカルーが居る。
気付いたビビが大きく手を振っていた。怪我はしているが表情は元気そうである。同じくカルーもバサバサと翼を振り、彼の到着を喜んでいた。
ルフィもさらに速度を上げて走る。
その後ろからはバギーが迫っていた。
「ルフィさん！」
「ビビィ！　お前やったなぁ！」
「待ちやがれ麦わらァ！」
その声を聞いてルフィは急に足を止めて振り返った。
バギーが一人で向かってくる。
互いに正面から視線を交わらせ、気合いを入れ直した。
「よし、来い！」
「誰に負けても構わねぇが！　てめぇにだけは負ける訳にはいかねぇんだ！」
「おおおおっ――――！」
ルフィとバギー、両者が同時に攻撃を行う。
「バラバラフェスティバル！」
「ガトリングッ！」
全身がバラバラになり、襲い掛かろうとする一瞬、ルフィの方が素早く敵を捉えた。
無数に見える拳の乱打が全てのパーツを捉え、バギーに尋常ではないダメージを与える。
「ぶべががががっ――――!?」

「おおおおおりゃあっ！」
最後のとどめに顔面に拳を叩き込んで、凄まじい勢いでバギーが殴り飛ばされた。
先程ビビが放り込まれた家屋の、窓ではなく壁を壊して内部へ姿が消える。轟音が鳴り響いた時にはバギーの姿は見えなくなっており、ルフィは一瞬笑みを浮かべた。
回収船が到着間近。
落ちていた金棒を拾い、アルビダが地面を滑って急速に接近してくる。
先に気付いたのはビビであり、咄嗟に自身が迎え撃とうと走り出した。
彼女との間にルフィが居る。当然声をかけて警戒を促したのだが、ルフィは逃げない。
自らが迎撃すべくアルビダを見たのだ。
「ルフィさん、私が！」
「下がってろビビ。おれがやる」
ルフィの一声を受けてビビは止まった。
怒りを感じさせたり、威圧するような声ではない。その一言は驚くほど静かだった。しかしだからこそ彼の覚悟と本気を感じずにはいられず、止まったというより、止められたと言った方が正しいに違いない。
アルビダがさらに加速して真正面から向かってくる。
金棒が掲げられ、迎撃のためルフィが身構えた。
「来なよルフィ！　アタシを止めてみなァ！」
「おぉし！　ゴムゴムの～……」
腕を後方に伸ばし、ルフィもまた自ら前へ出て、急接近した二人が攻撃を繰り出す。
「星におなり！」
「ブレットォ！」
金棒にルフィの拳が激突した時、アルビダは目を見開いて自らのミスに気付いた。

なぜ自身がビビにやられてしまったのか。おそらく彼女は気付いたのだろう。スベスベの肌は物理的な攻撃をスリップさせて無効化するが、彼女が持つ物はそうではない。宝箱も金棒も、ただ持っているだけで衝撃を受け流すことはできないのだ。
今更能力の弱点を知り、甘く考えていたのは、自分の方だったと思う。
ルフィの拳を受け、衝撃に負けて金棒だけが殴り飛ばされた。
くるくると回った金棒はバギーの姿が消えた家屋の屋根を破壊し、その真下に居たバギーの体にドンとぶつかった上、やっと動きを止める。
認めざるを得ない。
やはり自分はルフィに負けたのだろう。
ハァと溜息をついて、静かに腕を降ろし、アルビダは目を伏せる。
ルフィも肩の力を抜いて子供っぽく笑った。
目を開いた時、アルビダは優しく微笑んでいた。
「まいったねぇ……やっぱりあんたには敵わないよ」
「しっしっし」
呟いた直後、空に上がった花火が大きな音を立てて炸裂した。
ブルーチームの陣地に回収船が到着したようだった。
《試合終了〜！　波乱あり！　激闘ありと見応え十分だった第一回戦！　勝者は！》
ごくりと観客たちが息を呑んだ瞬間、ハッタリーの絶叫が彼らを爆発させた。
《ルフィ＆ビビペア〜!!》
まるで優勝したかのような歓声だった。
ルールやどんな展開になるか想像ができなかったトレジャーバトル第一回戦。彼らは初戦に相応しい戦いを見せ、この先の試合を期待させるという役割は大いに果たしただろう。
試合の前から準備をして、策を弄して勝利を狙ったバギー。
策を一切弄さず、己の身一つで向かってくる敵を全て弾き飛ばしたルフィ。

海賊としての格を見せつけ、若輩の敵を焚きつけたアルビダと、見事それに答えてみせたビビ。
初戦、トレジャーバトルは大いに盛り上がった。
勝利を得たルフィは両腕の拳を突き上げて笑みを見せていた。
同じくビビが跳び上がり、カルーと抱き合って喜びを分かち合う。
「よっしゃ～！　勝ったぁぁっ！」
「やったわカルー！　私たちの勝ちよ！」
「クエーッ！」
また、ブルースクエアの港では仲間たちが笑顔で叫んでいた。
麦わらの一味は当然、ケイミーやパッパグも飛び跳ねんばかりに喜び、アーロン一味の一部も拳を突き上げて踊っている。そこに居たマシラやショウジョウも同じだった。
一時は冷や冷やさせられたが、結果として彼らは勝利をもぎ取った。
イガラムは大粒の涙を零しながらビビの勝利を喜ぶ。
「うぐっ、ひっぐ、ビビ様……お強くなられましたっ。なんと立派なお姿に……！」
「おいおっさん、いつまで泣いてんだ！　ビビちゃんが勝ったぁ！」
「いいぞいいぞぉ～！　強いぞル～フィ～！　強いぞビービィー！」
「へっ、一味の船長なんだ。これくらい当然だろ」
「よかった……ビビ、よく頑張ったわね」
サンジとウソップが肩を組んで踊り、腕組みをしたゾロは不敵に笑って、ナミはほっと胸を撫で下ろす。反応は様々、しかし喜んでいるのは確かだった。
まだたった一度勝ったのみ。大会は始まったばかりである。
しかし大会の今後を左右する初戦で勝利し、その二人は確実に大会の旗手となっていた。
出場者用の船でも喜びを露わにする者たちが居た。
肉眼で試合を見ていたチョッパーが欄干の上に立ち、興奮して両手を突き上げる。

その隣でエースが腕を組み、弟の成長を目で見て喜んでいた。
「うぉおおお～っ！　ルフィとビビが勝ったぁ～！」
「強くなったな、ルフィ。ピストルみてぇなパンチってのも、今じゃ冗談じゃねぇか」
彼らの傍ではキリとシルクが隣り合って立ち、同じく島の状況を見ながら話す。
どちらも穏やかな笑みを浮かべていた。
「キリが言ってた秘策ってカルーのこと？」
「そうだよ。バギーが宴を抜け出してこそこそしてるのはすぐわかったし、性格的に何かしてくるとは思ったからね。念のために呼んでおいたんだ」
「そうなんだ。とにかく無事に終わってよかった」
「でもまさかミス・ウェンズデーとはね。流石にそこまでは予想できなかった」
「ふふっ。あれがあったからビビも吹っ切れたみたいだったね」
シルクがくすくすと笑っていた時、勝利を喜ぶルフィとビビ、それにカルーがやってきた。
二人と一匹は岸に横付けされている船へと飛び移る。
すぐさまチョッパーがルフィの胸元へ飛び込み、彼を受け止めた。
「しっしっし！　勝ってきたぞ！」
「ルフィ～！　それにビビも、お前ら怪我は大丈夫か!?　すぐおれが治してやるからな！」
「おう、頼んだ」
「ありがとうトニー君。それにキリさんもシルクさんも……ありがとう」
ビビは柔らかい笑顔を見せ、彼らに礼を言った。
その直後にはルフィにも礼を言う。
「ルフィさんもありがとう」
「いいさ。楽に行こう」
「ボクらは何もしてないよ」
「いいえ、私はあなたたちに守られていた……だけどもう心配いら

ないわ。これからは私もみんなと一緒に戦うから。私にもみんなを守らせて」
晴れ晴れとした笑顔だった。
憑き物が落ちたとでもいうのか、妙に肩の力が抜けている。
キリとシルクは互いに顔を見合わせた。
直後にはくすっと笑い、迷いのない笑顔をビビへ向ける。
「じゃあお言葉に甘えて」
「ビビ、最初から一人じゃないよ。みんなで一緒に戦おう」
「ええ」
ビビも怪我をしている。
チョッパーは二人に座るよう促して治療を始め、次の戦いに影響がないよう手当てを急いだ。
その間、エースは敢えて二人に声をかけず、移動を始めた一人の人物を目で追った。
試合が始まった時から甲板の端で見ていた人物。Ｍｒ．Ｓだ。
相変わらず素顔を隠して怪しい風貌だが、時折俯いて頭を押さえる仕草が気になった。頭痛でも感じていたのかもしれない。些細なことだがやはり目に付いてしまう。
Ｍｒ．Ｓは船内へ移動していき、甲板からは姿を消した。
この大会、もはやエースは優勝に対して興味がない。
弟の成長と活躍も見れた。このまま優勝して欲しいとも思うが、その前に一つ。
エースはキリの隣に立って彼にだけ言った。
「この組み合わせになったのは、おれにとっちゃ幸福以外の何ものでもねぇ」
「どうも気になるみたいだね。あの人」
「ああ……絶対に負ける訳にはいかなくなった」
初めは、弟のために少し手を貸してやろうと考えただけだった。
それが今では、自分のために、同時にルフィのために確かめなければならないことがある。目を閉じて深く息を吐いた後、エースは海を眺めながら呟く。

「準決勝はあいつらが来る」
「うん……そうだね」
ルフィとビビの傍に居るシルクとチョッパーには聞こえていない。
それを悪いと思いつつも、キリは即座に頷いた。
「だがおれにとっちゃその方が有難い。もちろんおれたちの初戦に勝つことが絶対条件だが、準決勝に行ったらよ、あいつとは一騎討ちがしてぇんだ」
キリはエースの顔を見上げた。
「頼むよ」
じっと見つめてくるその目に迷いはない。冗談の類ではないのだ。
大海賊と呼ばれてどれほど前へ進もうとも、彼にだって退けない一線がある。
キリは力強く頷いた。
「ありがとう」
《さぁ～てそれではこの勢いのまま二回戦へ進もう！　舞台は変わり、常夏島へ移動する！》
出場者が乗る船が動き出し、別の島へと移動する。すでに気絶したバギーと疲弊したアルビダも乗せられていて、羽を休めるためハッタリーと彼を乗せる鳥も船の甲板に居た。
ブルースクエア北側の常春島から、東側の常夏島へ。
そこは常春島よりも小規模で、戦いの舞台は一層狭くなった印象であった。
島は楕円形。
中央が緑のある土の地面。それを囲うように砂浜が広がり、さらに波打ち際までもが戦いのための舞台となっており、足が着かなくなる海の地点から柵で一線を引かれていた。
その見栄えの通り、常春島ほどのイレギュラーは起こらない。家や港、無造作に置かれた荷物もなかった。先程と同じ展開にならない理由はきちんと存在する。
言わばここは実力勝負のために用意された島と言ってもいいだろう。

期待されるのは真っ向勝負で、次の試合に出てくる選手もそれを望む者たちだった。間髪入れずに次の試合へ移ったこともあり、観客たちの熱気は弱まるどころか倍増する。
《次に出てくるのは話題の魚人族、アーロン＆はっちゃんペア！そしてこちらも謎に包まれているが実力は確か！　Ｍｒ．２・ボン・クレーが参戦だァ！》
「楽しくなってきたわねぃ！　暴れるわよ～ぅ！」
移動距離はさほどないため、すぐに目的地には到着した。
アーロンとはっちゃん、そしてＭｒ．２も島へ降りる。
中央の盛り上がった土の台座に宝箱が置かれていて、その地点を挟んで両チームが対峙し、いよいよ試合が始まろうかという時、ハッタリーが妙なことに気付く。
ペアで参加することが絶対条件のトレジャーバトル。なぜかＭｒ．２は一人しか居ない。
昨日から気になってはいたが一夜置いて決定的となり、ハッタリーは彼へ声をかける。
《え～、Ｍｒ．２選手。あなたのパートナーは今どこに……？》
「なぁに言ってんのよぅ。受付にも言っといたでしょうが。あちしはあやふや、男で女、つまり一人で二人。パートナーは必要ないわぁん！」
《はぁぁ!?　いやいや、あんた一人じゃだめだっつーの！》
「なんでよぅ！　ここまで一人でやってんじゃないの！」
《だからそれがだめなんですって！　大会は二人一組を絶対厳守！今から失格ってのも興ざめなんで大目に見ますが、急いでパートナーを見つけてきてください！》
「まったく融通が利かない連中ねぃ。今からそんなこと言われてもぉ……」
《あんたがルールを守らないからでしょうがァ！》
「そもそも海賊にルール守れなんてナンセンス！　つってもあちし、海賊じゃないけどねぃ！」
昨日から堂々とルール違反をやってのけたＭｒ．２はいつも通り

に回って豪快に笑う。
しかし突然ピタッと止まって、なぜかハッタリーをじっと見つめ始めた。
《なんですか？》
「あらぁん？　でもあんた、よく見ると結構いい男……シャルウィーダ～ンス？」
《ワッツ!?　まさかおれですか!?　でもおれは主催者兼実況で……！》
「ぐずぐず言ってんじゃないわよぅ！　さっさと降りてこいやぁ！」
《えぇぇぇぇ～!?》
怯えた様子の鳥が自分の意志で下り始めてしまい、跳び上がったＭｒ．２がハッタリーの首根っこを掴んで力尽くで降ろしてしまった。
これで舞台に立った人間は四人になる。
即席だがＭｒ．２のペアが作られ、彼は上機嫌に笑っていた。
「これで役者は揃ったわぁ～ん！　トレジャーバトル始めましょうかぁ！」
「ど、どうしておれがこんな役回りに……」
《実況が出場するんじゃ仕方ねぇ。ここからはおれ様が実況してやろう》
新たな声が聞こえてきて、大会を見守っていた全ての人間が首を傾げた。
ハッタリーに代わってマイクを握ったのは、いつの間にか怪我も気にせず元気に動き出し、船内にあった予備のマイクを奪ったバギーだったのである。
《ここからの実況は道化のバギー様が務めてやるぜ！》
「あ、バギーが復活してる」
「しぶといなぁあいつは」
《うるせぇ麦わらァ！　いいか、おれはてめぇに負けたわけじゃねぇぞ。ほんのちょっぴり油断しちゃっただけなんだもんね～！》
「そんな子供みたいな。見苦しいよ？」

《黙れ紙め！　よっててめぇらと手を組むなんて話も無効だってわけだ！》
「残念だなぁ。ナバロンの隠し財産もあったのに」
《どうせハナから渡す気なんてねぇだろうが！　ってだ～れの鼻が手渡せるだぁ!?　こいつは取り外し可能な玩具じゃねぇぞ、自前なんだ！　なんか文句あんのかクラァ！》
「そんなこと一言も言ってないけど……」
《と～にかく次の試合行くぞてめぇらァ！　ついて来れねぇ奴は振り落としてくからなァ！》
観客たちの驚きや、ハッタリーの落胆もあったが、とにかく試合は始められる。
バギーの絶叫によって開戦の合図は出された。
《二回戦は魚人どもとオカマと実況が戦うぞ！　てめぇら、試合を開始しろォ！》
荒々しい言葉と共に花火が上げられ、破裂した瞬間に試合が開始された。

トレジャーバトル　二回戦

試合が始まってすぐ、観客たちは息を呑まずにはいられなかった。
港でモニターを見ていた者も同様で、まさかの展開に表情を歪めずにはいられない。
口を大きく開いたまま固まったパッパグが声さえ出せなかったようだ。
その隣、顔を青ざめさせるケイミーが隣に居るナミへ、助けを求めるように名を呼ぶ。
「ナミちん、これって……!?」
「あんたには悪いけど、私は正直、アーロンがどうなろうとなんとも思わない……でも」
ナミの表情に動揺が表れ、その声はわずかとはいえ震えていた。
「アーロンを弱いと思ったことなんて一度もないっ」
ドンッ、と胸元を蹴りつけられ、アーロンが憤怒の表情で無理やり後退させられる。
試合は一方的な展開で進んでいた。
笑顔で動き出したＭｒ．２が一人で彼らを圧倒し、一度の反撃も許さずに試合を進めていたのだ。
《んなっ、なんちゅう強さだこいつはぁっ!?　あのバカみてぇに強い魚人どもをたった一人で止めてやがる！　いや止めるってよりも遊んでるみてぇに攻めてやがるんだ！　こんなアホのオカマにアーロンたちが負けちまうってのか！》
「ふざけるなァァ!!」
血反吐を吐きながらアーロンが激昂する。受けた蹴りと拳は確実に彼の体を痛めつけ、ダメージを残していたものの、気合いでそれらを吹き飛ばして前へ踏み出した。
戦歴を重ねるうちに彼の強さ、或いは持ち前のタフさはさらに増している。
どれほどの不利に襲われようと凄まじい気迫で前進をやめないアーロンは強い。これまでもそうして自分より強い賞金首を狩って

きたのだ。
惜しむらくはＭｒ．２の強さが、それでも届かないレベルにあったこと。
堂々と無駄な動きを行い、能天気に回る彼はアーロンよりも数段上に居た。
戦闘は実力が全てではない。時と場合により、気迫と根性で勝利を呼び寄せることもできる。
しかし、Ｍｒ．２はその気迫が効かない相手だった。アーロンがどれほど怒り、殺気をぶつけて凄もうとも、Ｍｒ．２は笑顔でそれを躱してしまう。
アーロンにとっては天敵と言ってもいい部類の人間だった。
Ｍｒ．２は笑顔で、とても楽しそうに、やたらハイテンションで駆けてきた。
走り方も奇妙だが実に速い。長い脚がそうさせるのかもしれない。
そして反撃しようとしたアーロンより速く、敵の頬へ蹴りを食らわせるのである。
「ぐぅ……!?」
「ジョーダンじゃなーいわよ～う！」
今度こそアーロンは背中から倒れた。
彼らとて何もせずに蹴られているのではない。キリバチが届く範囲はＭｒ．２の足よりも長く、彼の速度を知った上で考えて攻撃を行っている。ただそれよりもＭｒ．２が速いというだけだ。
距離を問わず、戦闘において重要なのは間合い。
自らの力を最大限発揮できる間合いを守り、敵の間合いに入ることを警戒するのが常だ。
Ｍｒ．２とて例外ではない。ただそれ以上に特筆すべきが彼の〝速さ〟だ。
本来ならば腕や脚では届かない位置に居る敵へ攻撃を当てることができるのは、一足飛びにて瞬間的に敵の懐へ入り込み、最も力を振るえる位置で腕や脚を動かすからに他ならない。これは悪魔の実の能力でも特殊な力でもなく、多くの経験と鍛錬によって得られる一個

の〝技〟。
ふざけた外見と態度ではあったがＭｒ．２は一流の格闘家であった。
その力はもはや、アーロンが相手でも余力を残すほどに高められている。
特殊な力を使う訳でもなく、悪魔の実に頼った戦い方でもない。
人間の肉体を鍛えぬいて得られた純粋な強さ。
この事実がアーロンのプライドをズタズタに切り裂いた。
ルフィでさえ悪魔の実の能力者なのだ。彼をここまで圧倒できたのがただの人間など、信じたくても信じることができず、強くなったという自信さえ粉々にされる。
これは種族の問題ではない。だがアーロンは意外にも冷静にその事実を受け入れた。そして当然の如く湧き上がる怒りを、今この場で戦う糧としたようだ。
怒りに身を任せて凄まじい形相を見せ、その姿は人々を恐怖させた。
味方であるはずのはっちゃんでさえ背筋を凍らせ、思わず声が震えたほどだ。
「ア、アーロンさん……」
「ハチィ！　矛を寄こせ！」
「えっ？　で、でもアーロンさん、傷が――」
「いいから寄こせェェッ!!」
はっちゃんはパッと彼に黄金の矛を投げ渡し、左手で受け取られる。
もはや今の彼は誰にも止められない。
アーロンパークでの姿が可愛く見えるほどだと思えた。瞳孔の形を変えた状態、ギリギリと歯の音を立てて、左手には矛を、右手にはキリバチを持ち、全身から怒りの念を発する。キリの脅迫を見た時でさえこれほどの恐怖は与えられなかった。
アーロンは確実に変わろうとしている。
その姿はまさに鬼。魚人族の〝怒り〟を自称するだけはある。

だがこの時はっちゃんは、彼の背が遠くなることを実感していた。
「んが～っはっは！　祭りの醍醐味ってやつねぃ！」
試合開始から一歩も動いていないハッタリーでさえ言葉が出ない中、Ｍｒ．２だけは笑っていた。
両腕がゆらりと怪しく動き、片足が上げられ、独自の構えを見せられる。
「感情で急激に強くなることってのはそう珍しくないわぁん。でもね、あちしは毎日毎日厳しいレッスンに耐えて技を磨いてきた。その違いが出なきゃいいけどねぃ」
ピクリと、アーロンが眉を動かした。
「年単位の修行と一時の感情。どっちが強いかは結果が決めてくれるわぁん」
聞いてはならない。決断を揺らがせようとしているだけだ。
敢えて聞く耳を持たなかったアーロンは雄々しく吠えながら駆け出した。
そんな彼の頬に強烈な蹴りが叩き込まれる。
「ぐぉおお……!?」
「人間舐めんじゃないわよ～う！」
攻撃を受けて一歩を下がらされ、直後には更なる一撃が腹を打つ。衝撃は蓄えられるばかりで多大なダメージとなり、常人ならば一撃も耐えられない。
アーロンは必死に歯を食いしばって耐えていたが、その集中によって注意力が散漫になる。
後はＭｒ．２の猛攻が続くのみだ。
「どォきなさいよォ！」
頬を蹴り抜いた一撃で足がふらつき、体がよろけた。
直後に下から顎を蹴り上げられる。視界が揺らいで意識が遠くなりそうな衝撃。冷静さを取り戻す暇さえ与えられない連続攻撃は全てが重く、信じられない痛みが走った。
矛を持つ左腕を蹴られて体が一瞬宙を浮きかける。
必死に耐えて転ばず、吠えながら駆け出そうとした時、右頬にパン

チが突き刺さった。
アーロンが攻撃を仕掛けようとする度、その行動は封じられる。
Ｍｒ．２がわずかな機微を感じ取り、先に攻撃を当ててしまうからだ。
一方的に打撃を加えられるのはそのせいだろう。彼はアーロンの動きを予測している。そして策を弄さずそれだけで止められる速さと力を持っていた。
一撃が驚くほど重い。バトルロイヤルで受けたウィリーの拳が拳とは思えぬほど違った。
思わずアーロンは体をよろけさせ、意図的に強く地面を踏みしめる。
さらに怒りを。怒りを募らせて爆発させ、一時的でもいい、力を欲する。
凄まじい怒気を発したアーロンはさらに巨大になって見えた。はっちゃんやハッタリーはその姿に寒気すら感じるものの、しかしやはりＭｒ．２は笑みを絶やさない。
「あんたのことは大体わかったわぁん。確かにそこらへんに居る連中より強いみたいだけどぅ、残念だったわねぃ。修行したのは紙ちゃんだけじゃないのよぅ」
「下等種族がッ……！　てめぇこそ魚人を舐めるんじゃねぇ！」
「んが～っはっは！　それもそうねぃ！　いやぁ、スワンスワン」
片手を差し出して素直に謝った後、軸足を置いて回ればぎゅるっと音がして、地面を抉りながら蹴りが見舞われる。アーロンの額を突きのように蹴り飛ばした。
油断はしていなかった。しかし彼の体は勢いよく倒れ、驚愕しながら目線だけが上げられる。
「でもあんたじゃあちしには勝てない。ちょっと昔の話をしてあげようかしらん？」
「うぉあああああっ！」
アーロンは素早く立ち上がり、左手に持った黄金の矛で無数に突きを繰り出した。

どれも常人には避けられぬ速度。的確に相手の急所を狙う。
Ｍｒ．２は軽いステップでそれらを避け、一撃も浴びないまま笑顔で冷静に語る。
「バロックワークス全社員が社長のＭｒ．０を知らない。顔も形も経歴もねぃ。そのＭｒ．０が重宝してたのがあんたたちのとこの紙ちゃんよぅ。今よりちょっとちっこかったわぁん」
「知ったことかァ！」
矛が避けられたため、アーロンは続けてキリバチを振るった。
Ｍｒ．２は完璧に間合いを見切り、紙一重で回避する。
「紙ちゃんってばただにこにこしてるだけの子供だったからねぃ。よくただの小間使いのふりしてあちこち飛び回ってたもんよぅ。まぁ最初はあちしもそう思ってたんだけどぅ」
「どうでもいい話だ！　その口を閉じろッ！」
「あらん？　あんたたちの仲間でしょうに」
「仲間じゃねぇ……奴らはおれの獲物だ！」
「んが～っはっはっは！　そりゃいいわねぃ！　傘下に命狙われてるってわけ！」
舌打ちしたアーロンが強く踏み込んで矛を突き出した。
同じく前へ踏み込み、軽い動作で避けたＭｒ．２がアーロンの懐へ入る。視線は交わっていて、それがひどい侮辱のようにも感じられた。
厚い胸板へ一撃。正拳突きが直撃する。
息を詰まらせたアーロンは後退を余儀なくされ、気持ちとは裏腹に距離が開いた。
「だったら今はやめときなさい。あんたじゃ勝てないわぁん」
「なんだと……！」
体は痛み、呼吸は乱れて、確実に体力を減らすアーロンにＭｒ．２は語り掛ける。
「紙ちゃんはそのＭｒ．０に鍛えられたのよぅ。しかも修行と称してオフィサーエージェントと戦うことも多かった。それだけじゃないわぁん。修行が終わると紙ちゃんは必ずＭｒ．０からあちしらに

向けたアドバイスを口にする。つまり紙ちゃんを鍛えながらあちしたちまで鍛えられてたのよぅ」
「それが、なんだってんだッ」
「事情を知らなきゃわからないのも無理ないわねぇん。要するに紙ちゃんと出会う前と後じゃ、あちしらの実力は段違い――」
Ｍｒ．２の顔つきが変わった。
それだけで周囲の空気が変わってしまい、はっちゃんとハッタリーは寒気を覚える。
怒り狂っていたアーロンでさえ一瞬怒りを忘れてしまったようだ。
「あんたがこれ以上やる気ならあちしも手を抜かない。自分を強いと錯覚してる奴ほど早死にするもんよぅ。世の中上には上が居るわぁん」
もはやふざけた態度のオカマなどどこにも居ない。居るのは圧倒的な力を持つ強者。その風格に恐れすら抱き、底知れぬ力を己の肌で感じさせられる。
アーロンがバリッと歯を鳴らした。
そう言われて諦められるほど素直ではない。
見ただけでわかったのか、Ｍｒ．２はにこっと笑う。
「今の紙ちゃんはあちしより強い。まぁ今のあちしでもあんたより強いけどねぃ」
「ぐっ……！」
「それがわかってでもって言うならもう何も言わないわぁん」
再びＭｒ．２が笑みを消す。
その目にある光は決して濁ってはおらず、彼の姿が異様に大きく見えた。
「かかって来いや」
アーロンは咆哮した。
知らぬ間に己の体を支配していたはずの不気味な感覚を吹き飛ばし、前へ駆けたのである。
長々とした話などどうでもいい。今だけは勝負以外の事柄、自身を負かしたルフィやキリのことさえ気にはならない。この場は目の前

の敵を倒さねばならないと決意したのだ。
そのアーロンを容易く蹴り飛ばして、Ｍｒ．２は追撃を行う。
巨体を軽々と蹴り飛ばして、数メートルを飛んだアーロンが地面を転がって、勢いを利用して即座に立ち上がった。その時には目の前にＭｒ．２が居て側面から顎を殴られる。
急所への一撃に足がふらついた。
アーロンが身動きを取る暇を与えることなく、Ｍｒ．２はさらに彼を蹴り飛ばす。
遊んでいるのかと、観客がふとそう思えてしまうほどに、勝負とは呼べない光景だ。
行動に移す直前、アーロンが反撃の意志を匂わせた時点で蹴り飛ばされる。
何度も地面を転がって、それでも立ち上がる姿は痛ましいものだった。
ケイミーが涙を浮かべ、パッパグが狼狽し、アーロン一味が怒りと悲しみに支配される。
その時ナミもまた愕然としていた。
あれだけ怖がっていたアーロンがまるで相手になっていない。大人と子供、そんな言葉すら遠く感じられるほど、二人の間にある差は大きいだろう。
ついには耐え切れずに血を吐いていた。
そうなっても立ち上がって迎撃の意志を見せれば攻撃が与えられる。Ｍｒ．２の打撃によって歯は粉々に砕かれ、視界は揺らぎ、力が入らなくなるほど疲弊していた。
一撃を受ける度に気が遠くなり、本来ならば立っていられない。
それでもアーロンは立つ。
蹴られた拍子にキリバチと矛を落としたが、彼は自らの拳でＭｒ．２へと殴り掛かった。
「ウオオオオオオッ！」
常人が受ければ骨が折れるほどの一撃だろう。だがＭｒ．２は回避し、反撃に腹へ拳を突き入れた。

口から血を吐き、滑るように体が後ろへ押されてしまう。
尚もアーロンは拳を振り上げるものの、その瞬間に足に素早い蹴りを受け、姿勢が崩れてその場に跪いてしまった。
格闘の基本は姿勢。打撃へ上手に力を乗せるには上手な体の使い方が必要になる。
大したダメージがないように見える攻撃も、相手の力を殺す意味があったようだった。
跪いたアーロンの側頭部に、先程足を打ったものとは比べ物にならない蹴りが直撃する。もう何度見たのか、アーロンの体は宙を舞い、受け身も取れずに地へ落ちた。
思わずケイミーが両手で目を覆い、ナミが彼女の肩を抱く。
太陽の光を浴び続けた砂の熱さを感じながら、アーロンは震える体で立ち上がろうとしている。
凄まじい執念だろう。人間の中にもそれほど強い精神力を持つ者はそう居ない。
汗一つ掻かないＭｒ．２は笑顔で彼を見ていた。
強さとは別に、彼の生き様には尊敬の念を抱いたようだ。
「ふぅ～、呆れたタフさよねぃ。ここまでしぶとい奴は見たことないわぁん」
「ハァ……ゼェ……ハァ……」
「でもそんなあんたを見ても、あんたを怖いとは思わない」
Ｍｒ．２はその場で高速回転を始めた。
回転しながら前方へ進み、アーロンへと真っ直ぐ向かう。
「そろそろ決めるわぁ～ん！　死なないように気を付けなさぁ～い！」
片足を軸に高速で回転しながら、フェイントも入れずに真っ直ぐ向かう。
アーロンは霞む視界でその姿を捉えていたが、もはや自由にも動けず、その場で突っ立つことしかできない。しかしそれでも勝利を諦める様子はなかった。
「あの夏の日の回想録（メモワール）！」

高速の蹴りが振り下ろされて肩へ入り、アーロンの体は地面に叩きつけられて激しく転がる。
その勢いを必死に殺して、なんとか姿勢を整えたアーロンは地面に両手をついた。
勢いが止まった時、これが最後だと認識する。
蹴った後にふわりと舞って静かに着地したＭｒ．２は背を向けていた。
チャンスは最後。アーロンは強く地面を蹴って、回転を加えながら魚雷の如く宙を駆ける。
「鮫（シャーク）・ＯＮ・歯車（トゥース）!!」
当たれば死は免れないはず。そう思って無防備な背を狙う。
しかし眼前に迫った時、Ｍｒ．２は高く跳び上がり、アーロンは頭上に笑顔を見た。
「白鳥アラベスクッ!!」
見切れないほどの速度で無数の蹴りが、高速で回転しているはずの肉体を地面に叩き落し、今度こそ彼の意識を刈り取る。全身に蹴りを入れられたアーロンが無防備に倒れた。
その傍にふわりと着地して、Ｍｒ．２は笑顔。
結果も過程も、あまりにも一方的な試合だった。
Ｍｒ．２が笑顔で回っていた時、大半の観客は盛り上がっていたものの、一部の者は声すら出ない。
あれがバロックワークス。オフィサーエージェントの実力をその目で見た。だが彼ですら与えられたコードネームは2であり、その上にはＭｒ．１とそのパートナー、さらにＭｒ．０が存在する。
このとんでもない組織と戦わねばならない。
肝を冷やす者は多く、そうでなくとも笑みを浮かべる余裕はなかった。
倒れたアーロンを見やり、Ｍｒ．２の笑い声を聞き、はっちゃんが顔を青ざめさせていた。
手が震えている。その理由が何であるのかがわからぬほど彼は馬鹿ではない。薄情でもない。

五本の手に持った剣を強く握り、はっちゃんは激昂しながら駆け出した。
「アーロンさん……ニュァアアアッ！　お前、よくもォ！」
「なぁによタコ助、やめときなさいよ！」
「タコ助じゃねぇ！　おれははっちゃんだァ！」
「はっちん！」
モニターの前でケイミーが叫んだ。
その声も聞こえず、はっちゃんはＭｒ．２へ急接近する。
駆け出してからほんの数秒。
はっちゃんの顔面にＭｒ．２の蹴りが突き刺さった。
柔軟で奇妙な動きを見せる彼の〝蛸足奇剣〟は一太刀も相手に届くことがないまま、懐にまで敵の侵入を許してしまっており、強烈な一撃で頭がくらりとした。
アーロンはこんなにも重い蹴りを受けていたのか。
理解できた時、はっちゃんの腹に次の一撃が叩き込まれ、彼の体は遠くへ飛んでいた。
「怒りに身を任せて戦う人間って、実は大したことないのよねぃ。ん？　あっ、でもあんたたち人間じゃなくて魚人じゃないのぅ!?　んが～っはっはっは！」
はっちゃんが地面に落ちた後、もう動くことはできない。
見ていられなかったケイミーはナミの胸に顔を埋め、パッパグは口を開けて固まったまま。他の魚人たちにしても同じだ。信じられないという想いのまま、ただ見ていることしかできない。
パートナーとして参戦したはずのハッタリーは背筋を震わせていた。
ただの徒手空拳でこれほどの戦いを演じる人物。なぜ情報がないのかが理解できない。
決して弱くはない、むしろ予選を勝ち抜いた海賊二人をたった一人で撃破してしまった。
彼の存在はハッタリーの目には異常としか映らなかったようだ。
情報を取り扱う新聞記者にとって、未知なる物を見た時、調べたい

という欲求に満たされるのがほとんどであろう。少なくともハッタリーはそんな部類の人間だった。
彼は違う。今の彼を見ても知りたいとは思わない。ただ恐ろしくて仕方なかった。
「ちょっとハッタリちゃん！　なにぼんやりしてんのよぅ！」
「えっ!?　あ、お、おれですかっ」
「あちしが戦ってんだからその間にあんたが宝箱運びなさいよぅ！　チームでしょうが！」
「あ、あぁ確かに……！」
「もういいわぁん。二人とも倒しちゃったしあちしが持ってくわよぅ」
「どうもすいません……」
結局、敵の撃破から宝箱の運搬まで全てＭｒ．２が行い、彼が一人で参加した理由がよくわかった。
彼以外に必要ないからだ。
《試合終了だァァ！　結局バカの一つ覚えみてぇに特攻仕掛けたがＭｒ．２が勝ったようだな》
圧倒的な強さに観客たちが盛り上がる一方、麦わらの一味は悲痛な表情。
出場者用の船でも幾分緊迫したムードがあった。
島を眺めながら、腕を組んだルフィは真剣な表情である。
「強ぇな、ボンちゃん」
「ボンちゃんの能力はあまり戦闘向きじゃない。それよりも潜入や破壊工作の方が得意だ。だから彼は徹底的に自分の体を苛め抜いた。あの域に達するのは簡単じゃないよ」
よく知っている風の口調でキリが静かに語る。
その一言にチョッパーとシルクはそれぞれ違った心境で彼に目をやった。
「あのアーロンってやつも強かったんだろ？　でもあいつ、一回も攻撃当たらなかったぞ」
「普通の人間とは、思えないよね……」

「そう思うのも無理ないかもね。ボンちゃんはあれだけに没頭したんだ。半端に他の戦法を学ぼうとしなかったあたり、格闘家としては多分一流」
聞いてはいけないと思っているのに、シルクは思わず言葉にしてしまう。
「クロコダイルは、あの人より強いんだよね……」
「うーん、そうだなぁ」
キリは顎に指を添え、目を閉じて考える。
動揺しているシルクにはそれがわざとらしい動作だともわかっていなかっただろう。
彼は平然とした声で答えた。
「ボンちゃんが百人居たとしても、クロコダイルなら三分はいらないかな」
至っていつも通りの声だったのが尚更真実味を増す。
彼らはその後、しばらく黙り込んでしまった。

トレジャーバトル　三回戦

《さぁ！　実況に戻ってきたぞ、ロッキー・ハッタリーだ！　想像以上の苛烈さで二回戦が終わった後だが呆けている場合はない！　続いて三回戦を始める！》

安全な位置で見ている観客たちは大いに盛り上がっていた。

一回戦、二回戦と、舞台が違ったことも相まって趣の異なる試合展開を見せている。これなら試合が続いても飽きることなく観戦することが可能だ。

そして次は、いよいよ待ちわびていた優勝候補の登場だった。

《舞台は常秋島！　エース＆キリペア　ＶＳ　スモやん先生＆その弟子ペアの一戦だァ！》

歓迎するかのような怒号が町を揺らす。

Ｍｒ．２の活躍すら忘れた。それ以上の強者を彼らは知っている。

島に降り立ったエースの姿には、数えきれないほど多くの期待が寄せられていたようだ。

ブルースクエアの南側、常秋島。

そこは町の四方にある小島の中で最も広く、きれいな円形の島だが全体が町になっており、今は人の姿が消えて閑静な場所となっていた。

町や家を壊しても後で直すので存分に戦って欲しい。事前に言われていたため気は使わない。

やはり中央に宝箱が置かれ、そこを挟んで十字型に四人が立った。

キリとエースは微笑を湛えて、スモーカーとたしぎは真剣な目で敵を見ている。

ハッタリーが実況で観客を盛り上げる間、キリは彼らを見てにこやかに話しかけていた。

「うーん、やっぱり見たことある気がするなぁ。どっかで会わなかった？　例えばだけどローグタウンとかでさ」

「気のせいだ」

「わ、私たちは怪しい者じゃありませんよ」

「そう言われると逆に怪しいんだけどね」
「まぁいいじゃねぇか。それより大事なのは試合だ」
エースが仲裁したことでキリは追及をやめる。
その代わりエースに向けてのみ、二人にも声は聞こえただろうが少し小さく告げる。
「エースは〝先生〟を頼むよ。煙の能力者で腕は確かだ。海軍本部大佐くらいには強い」
「具体的だな。任せろ」
「その間にボクが宝を運ぶ。速攻で行ける？」
「おう」
作戦会議は筒抜けであったとはいえ、それで喜ぶほどスモーカーは単純ではない。
なぜ事前に決めておかなかったか。或いはまだ試合が始まっていない現時点でその場を動こうともせず、小声とはいえ聞こえてしまうその距離で話すのか。理由は単純だ、聞こえたところで止められないという自信を持っているに違いない。
そしてその自信は間違いではないとスモーカーも判断していた。
火拳のエース。この男が居るだけで勝利が驚くほど遠い。見えないとさえ思うほどに。
観客がキリの存在を必要ないとすら言っていたが、間違いではないだろう。
彼はきっと一人で参加しても優勝できる実力がある。
大会に参加した以上、勝たなければならない理由は彼らにもある。
最悪の状況の中で、スモーカーは尚も勝ちを奪うべく、絶えず思考を動かしていた。
この場がルールで支配されているのが不幸中の幸いだった。難しいとはいえ今やるべきことはそう多くない。彼らの攻撃を掻い潜り、宝箱を自陣に運んで守り切ればいいだけ。
これが驚くほど難しいのだがあの二人の命を奪えと言われるよりは簡単であろう。
試合開始の合図があるまでスモーカーは一瞬たりとも油断してい

なかった。
《よぉし、それでは全員準備ができたな！　試合を開始するぞ！》
その合図があるまで、四人は一切動こうという素振りを見せず、立ち尽くした状態を保つ。
《Ｒｅａｄｙ～……ＧＯ!!》
真っ先に動いたのはキリだった。
ポケットに突っ込んでいた両手を素早く振り、小さな紙を十数枚投げ飛ばしたのである。それらは意思を持つかのように敵である二人へと飛来していった。
それだけならば迎撃することもできただろうと思う。
武器で撃ち落とそうと考えなかったのは、同時にエースが動いていたからだ。
両手の指で銃を模すかのようにしながら腰だめに構えていた。
ただふざけている訳ではないことは行動で伝わる。
指先に火が灯り、そこから弾丸のような火の玉が撃ち出されたのだ。
「火銃（ヒガン）！」
それらは無作為にばら撒かれているように見えた。だがよく見れば違う。いくつかの弾が二人が迎撃しようと考えていたキリの紙に当たって火を点ける。
素早くキリが指を振るった。
操作の能力により燃える紙が軌道を読ませぬ奇妙な動きを見せ、どこから来るかわからない。即席ながらも彼らの協力した攻撃だった。
「指揮紙」
「チッ……ホワイトアウト！」
厳しい表情を見せたスモーカーが両腕を煙に変えて周囲へ伸ばした。
彼の体ならば燃える紙が当たってもダメージはない。しかしたしぎは違う。
自分のためというよりは彼女のために煙の腕を伸ばし、質量のあるその煙は燃える紙を捕まえ、燃え尽きて灰になるまで逃しはしなかっ

た。
その間にキリは紙を連結させ、ロープを作り出して宝箱に巻き付ける。
強く引いて空へ飛ばし、落下してきた宝箱を受け止めた時は、まだ彼は一歩も動いていない。
驚愕して、刀を抜くことはできたが、それだけだ。呆然とするたしぎは一歩も動くことができずに彼らの攻防を眺めており、次元が違うとさえ感じている。
キリの速さに、突発的に対応したエース、そして着弾の前に気付いたスモーカー。
能力者という事実に加えて、彼らの眼には何が見えているのか、理解が及ばなかった。
だがたしぎが驚いていたのはそれだけではない。
スモーカーとてすでに気付いている。
ホワイトアウトで燃える紙を防御した瞬間、頭上をエースに取られていた。
拳を構えたエースが笑みを作り、真下に居るスモーカーを見る。
両腕を煙に変えていた彼が回避することは難しいタイミングに思える。しかし全身が煙で構成されているスモーカーならばたとえ〝火拳〟を受けたところでダメージはないはず。
少なくともたしぎはそう思ってしまった。そのせいで次の瞬間には再び息を呑む。
落下していったエースは火を出さずに自らの拳でスモーカーへ殴り掛かった。
「なっ――!?」
「オラァ!」
「チッ!」
腕での防御が間に合わないと判断したスモーカーは、軽く跳んで蹴りを放った。
エースの拳と激突し、確かな肉体の感触があって、煙になって受け流すこともできずに両者の体へ衝撃が走る。本来、ロギアならばあり

得ない光景だ。
キリとたしぎは真剣にその一瞬を考察していた。
二人はさらに攻防を繰り広げる。
両腕を元に戻したスモーカーは十手を使ってエースへ突きを繰り出す。
火になって逃げることもできるはずだがそうせず、攻撃を見切って紙一重で躱していた。
どちらも能力者なのだが能力を使わない戦いを繰り広げている。それはロギアとは思えぬ戦闘に見え、ただ不思議に思えて仕方ない。
少なくともスモーカーが何かを警戒しているのは事実だ。
能力を使わず回避するエースに、あくまでも十手による攻撃を繰り返し続けた。
この瞬間はチャンスである。
用があるのは互いに準決勝と優勝賞品。ここは通過点でしかない。
宝箱を運ぶならば今が最も適した瞬間だろう。そう判断してキリが自陣へ向かって駆け出した。
「あっ!? 待ちなさい!」
「バカ弟子ィ! 動くなッ!」
キリが走り去る姿を見てたしぎが動く。その瞬間、スモーカーの制止と共に、たしぎの道を塞ぐように炎が壁となって地面を走った。
足を止めてぞっとする。止め切れずに突っ込んでいれば火達磨になっていただろう。
スモーカーの猛攻を避けながら、エースには周囲が見えていた。
冷静に判断してキリの退路を作り、自らがその二人を止めるべく残ったのである。
常秋島には町がある。小規模とはいえ見晴らしのいい常春島より視界は悪い。
すでにキリの姿は見えなくなっていて、おそらくは悠々と自陣に宝箱を置いている頃だろう。
放っておけば敗北は必至。今すぐにも宝箱を奪取しなければならない。しかしエースの相手をしてそれどころではないスモーカーは、

怒声と思える声で指示を出した。
「バカ弟子！　迂回して奴を追え！　宝を陣からどけてこい！」
「はっ、はい！」
指示を受けたたしぎは迷わず駆け出した。ここに居ても足手纏いになる。
火拳のエースをスモーカーに任せ、自身はキリを追う。
一際高く跳んで宙返りをし、帽子を押さえながら着地したエースは彼女の背を見送った。
止めることもできたかもしれない。敢えてそうしなかったのはキリならなんとかするだろうという考えがあったのと、スモーカーを警戒してのことである。
正しく判断するならば、スモーカーはエースの敵ではない。
それでも彼が油断しなかったのはスモーカーの判断力が優れていたからだ。
相手がロギアと知り、また格上であることを理解して、能力の使用をやめて十手のみを使った。この点から考察できることは一つ、十手に海楼石が仕込まれている。拳も使わず執拗なまでに十手に拘ったのはそんな理由があるからと見て間違いない。
エースは、白ひげ海賊団の隊長たちの中で最も若い。それ故に経験の少なさや、持ち前の性格がそうさせる勝つまで戻らないような勝手な行動も多いとはいえ、落ち着きがないのはあくまでも他の隊長に比べればの話。
隊長を任されるほどの男がその状況を理解できぬはずがなかった。
彼の判断によれば、スモーカーは覇気を使えない。だが知っているような行動がある。
何より今のキリでは太刀打ちできないロギアの能力者。
たしぎを行かせてでも、彼はこの場でエースが仕留めなければならない相手だ。
「しょうがねぇな」
笑みを湛えたままふーっと息を吐いて、彼の指に火が灯った。
急ぐ訳でもなく右手が上げられてスモーカーに掌を見せる。

ゆっくり、指先から徐々に右腕が燃えていき、異様な姿を見せながらエースは笑顔だった。
「一応おれも隊長だ。それなりの働きはしねぇとな」
「フン……一応、か」
スモーカーはしっかりと敵を見据え、動揺は最小限に抑えており、感情は揺らいでいない。そして普段とは違い、全く活路を見出せずにいたらしい。
表情こそ冷静なままだがエースに勝つ姿を微塵も想像できずにいる。その方法もわからない。
冷静に判断した上でその結果だ。
こんな経験は初めてであり、珍しく自分から攻めることができずにいた。
互いの能力だけを考えれば〝火〟と〝煙〟。相性はあってないものに思える。
むしろ脅威と感じるのは能力以外の何かがありそうだからだった。
上官に逆らうことが多くて僻地に飛ばされたとはいえ、スモーカーは本部の海兵。現在は海賊討伐を第一の任務とする遊撃隊、本体とは別の小隊を指揮していた。
その実力は一目置かれており、命令にさえ従えば良い海兵だとも言われている。
彼がまだ新兵だった頃、教官より話を聞いたことがある。
人間には秘められた力があり、操ることができればロギアにも触れることができるという。
一連の行動からエースがその力を持っていることは予想できた。
ならば自分は、彼の攻撃を全て避け、海楼石を仕込んだ十手で攻撃する。それが唯一の作戦だ。
エースは笑みを消さない。余裕がある、ということか。
それはその分の実力差があることを予感させた。
ハッタリーの実況が続く中、もはや二人の耳には入らず、敵の足止めにのみ集中する。
どちらが先に動いてもおかしくない、そんな一瞬。

沈黙を破ったのはエースだった。
「陽炎！」
突き出された右腕が火に変わって伸びてくる。
咄嗟にスモーカーは腕を変えて煙にして伸ばし、拳をぶつけて止めた。
「ホワイトブロー！」
その炎、おそらく十手では止め切れないと判断したのだが、効果のほどは微妙。
エースの体自体が火となり、軌跡を残して宙を走っていたようだ。その速度は速い。常人では反応できないスピードでいつの間にかスモーカーの目の前にまで到達している。
再び近接戦闘。互いに人型になって対峙した。
これを予測したからこそスモーカーは十手を残し、片腕で対処した。
相手よりも先に攻撃を叩き込む。スモーカーはこの対峙の一瞬、全てを忘れてその目的にのみ従事した。たしぎや宝箱を気にしていてはやられる、そう判断して一時全てを捨てる。
エースは全力で応えようとしていたようだ。
称賛。それ故に手を抜こうなどという思考を一切排除する。
「武装硬化――」
スモーカーの十手がエースの顔の真横を抜ける。首の動きで回避されてしまった。
帽子を落とすことさえできない。
悔しく思う暇もなく、なぜか皮膚が黒く染まっているエースの右腕を見つけ、理由はわからないがまずいと思った。だが逃げるだけの時間は与えられず。
エースの拳が、スモーカーの腹を打つ。
まるで鉄の塊で殴られたような感触だった。
打撃の衝撃のみならず、離れる間際に火が放たれていた。
それは彼の必殺。捉えた敵を逃さない一撃。
スモーカーの体は巨大な炎に包まれた。

「火拳!!」
巨大過ぎる炎の塊に呑み込まれたままで、彼の体は家屋の一軒を吹き飛ばし、向こう側へ消えてしまう。炎の残滓は辺りに漂って静寂が来た。
エースは穏やかな顔でその場に立ち、スモーカーが消えていった先を見る。
《す、凄まじい一撃ィィ！　やはり火拳は別格！　スモやん先生は生きているのか!?》
ハッタリーの実況が聞こえる程度には状況は安定した。
エースの視線の先、スモーカーが瓦礫を押しのけながら戻ってくる。
見逃すはずのない明確な変化があって、彼は驚愕と共に困惑している表情だった。
《あ、あれはっ、焦げているのか!?　スモやん先生は煙の体を持つ能力者のはず！　しかしなぜか焦げているぞ！　エース選手の火拳がそうさせたというのかッ!?》
理解が及ばないと、ハッタリーを始めとして観客たちは激しく混乱している。
火が煙を燃やしたというのか。
その真偽を確かめる方法さえなく、彼らはどよめきを発するのみで、正しい答えを持つ者はどこにも現れない。しかし気付く者は気付いていた。
あれは奇跡で起こったものではないと。
「おれに触れただけでなく能力まで……やはり何かカラクリがあったか」
「ああ。お前も知ってたんだろ？　だから能力を使わなかった」
「覇気って力か……」
唸るようにスモーカーが呟く。
この時、勝てない、とはっきり思わされてしまっていた。
《弟子は今動けない！　スモやん先生、早くしないと回収船が到着してしまうぞ！》

「向こうも終わってるみたいだな。でもゲーム自体が終わったわけじゃない。どうする？」
スモーカーはこの場を離脱してたしぎの下へ向かおうかとも思案した。だがもしそうなった時にエースが見逃すはずがない。
この場で対峙した時点でスモーカーは捕まっていたのだ。
「やめとけよ。お前はここから逃がさねぇ」
彼の言葉を聞いて確信する。最初からこうなることを予想していたに違いない。
「お前がここを動かなきゃキリは必ず宝を守る。おれたちの連携はせいぜいそんなもんだ。それだけできれば勝てる」
「ずいぶん奴を信用してるんだな……てめぇらどんな関係だ」
「弟の右腕さ。他に理由がいるか？」
「麦わらの義兄弟……嘘じゃねぇってことか」
スモーカーは大きく息を吐いて戦闘態勢を解く。
十手を肩に担ぎ、冷ややかな、それでいて熱を感じさせる目でエースを見つめた。
「もういい……疲れた。おれは次を目指すことにする」
「お、そうか。そりゃ有難いね」
「だがてめぇが奴の兄貴ならはっきりさせといてやろう」
「ん？」
「麦わらはいずれおれが捕える。必ずだ」
迷いのない口調に少なからず驚く。
熱の理由はそこにあったのだ。
エースは何の心配もしていない様子で、からから笑ってその言葉を受け止めた。
「お手柔らかに頼むよ。あいつはまだ発展途上だからな」
「フン、海賊の成長を待つ海兵がどこに居る」
「なんだ、やっぱり海軍だったのか」
「とっくに気付いてやがったんだろ。おれも好きでここに来たわけじゃねぇ。でなきゃわざわざこんなふざけた名前で参加したりしねぇよ」

《試合終了〜！　ブルーチームの陣地に回収船が今到着！》
ハッタリーの絶叫によって試合の終わりが告げられる。
空には花火が上がっていた。
《勝者はエース＆キリペア〜！》
「くっ、不覚……!?　これだけ時間を与えられて、何もできないなんてっ」
ブルーチームの陣地前、いくつもの紙のロープで全身を拘束されるたしぎの姿があった。
キリは港に用意されたリングの中に居て、地面に置いた宝箱に腰掛けている。そうしてにこにこと彼女の姿を眺めたまま、試合は終了してしまった。
侮辱にも思える状況にあり、たしぎは悔しさのあまり歯を食いしばる。
一方でキリにはそんなつもりはなさそうだった。
「やぁ、やっと終わった。拘束が破られるんじゃないかと思ってひやひやしたよ」
「馬鹿にしてっ！」
「バカにはしてないよ。実際、拘束が解かれたら面倒だった」
キリが指を振ったことでたしぎに絡みついていた紙が地面に落ちる。
彼女はその場を動かず話を聞き始めるのだが、刀を納めようとはしない。
「陣地には必ず向かわなければいけないけど、この後ろはすぐ海だ。能力者にとっては何よりも怖い場所。海ネコが助けてくれるとはいえ無力化は免れない。特にボクはだめだからね」
「それが私を恐れる理由だと？」
「他にも理由ならあるよ。〝白猟〟の右腕だし、紙の体なんて斬られたら一溜まりもないし」
キリは平然と語っていた。つまり全て考慮した上で動いていたのだろう。
何より彼女を驚かせたのは名を変えていたスモーカーに気付いて

いたことだ。
当然と言えば当然なのだが、自らが頭を捻って名前を考えたためか、その事実に狼狽した。
「き、気付いていたんですか。あの方がスモーカー大佐であることを」
「というよりわかりやす過ぎだよ。サングラスに葉巻でアロハって、上手く隠せてもせいぜいヤクザの休暇にしか見えないって」
「うぅ、時間がなかったので仕方なかったんです。直前も海賊討伐に出てましたし……」
「ほんとに隠したいなら、あの二人組みたいにやらないとね」
そう言ってキリは出場者が乗る船に目を向けた。
二回戦は見ていなかったはずの人物が再び甲板へ現れている。
エースが彼を気にするのと同じで、Ｍｒ．Ｓもまたエースを気にしているようだった。

トレジャーバトル　四回戦

試合が終わったその足で、別の船を使ってスモーカーとたしぎは町の港へ戻った。
判断は早く、素早く島を出るつもりらしい。
大会に敗退すればもう用はないという様子だった。
そんな彼らの前に大会関係者の老人がやってきて声をかける。
「いやぁ～お疲れ様でした。今回は相手が悪かったですね」
「余計な気遣いはいい。後は好きにしろ」
「ほほほ、そう言って頂けて何より」
彼らが大会に参加した理由。それはブルーベリータイムズ社が海軍と取引を行い、トレジャーバトル大会の開催を黙認させる運びとなり、海軍チームが大会に参加して優勝すれば島に居る海賊全員を逮捕してもいいと条件をつけたからだ。
スモーカーが優勝していれば、待機していた軍艦が島に集結するはずであった。
ただし敗退した時には黙認して、島の海賊には手を出さない約束。
敗北した今、約束を違えるつもりはなく、スモーカーは次の島へ急ぐ。
「では、この先の航海に幸運が訪れますよう……」
「うるせぇ。こっちはそんなもんハナっから望んじゃいねぇよ」
見送る老人の言葉を跳ね返した末、スモーカーは偽装した自らの船に乗る。
後ろにはたしぎが続き、この島の顛末をどうするつもりなのか気にしていたらしい。
恐る恐る、怒る訳でもないのに凄みを感じさせるスモーカーへ問うた。
「スモーカーさん、この大会のことは」
「ああ、疲れた。しばらくは何も考えたくない。後のことは他の連中に任せる」
「そうですか……」

「だがおれたちの標的ははっきりしてるはずだぞ」
スモーカーの目に迷いはない。明確な敵対の意志を感じさせていた。
背を見ただけでその強さを感じたたしぎは静かに頷く。
「第二ラウンドだ。アラバスタへ向かう！　出航するぞ！」
きっかけはルフィと組んでいたビビに間違いない。
すでにスモーカーは敵と見定めた男を追う覚悟を決めており、そのためなら少々の命令違反さえも辞さない性分を持っている。敗北した瞬間、もう大会に興味はなかった。
ビビ王女を発見したというだけだったが、確信に近い何かがある。
スモーカーは先を急ぎ、次なる舞台で今度こそルフィと見えることを願った。
密かに紛れ込んでいた海軍船が出航する頃、四回戦が始まろうとしていた。
選手はすでに島へ入り、宝箱を挟み、距離を置いて向かい合っている。
ブルースクエアの西側、常冬島。
形は常夏島と同じ。違うのは地面に高く雪が積もっていることと、中央付近の地面を囲うように海水が溜まっている地形。
島々の距離はそう遠くないというのに気温も低い。
そんな島に立っていたシルクとチョッパーは、言葉にできない重圧を感じていた。
対峙するは黒いローブとフード、さらに仮面で本性を隠した二人組。
Dブロックの勝利で話題を掻っ攫い、エースと並ぶ人気を得たチームである。
《トレジャーバトル四回戦！　この試合で準決勝へ進むペアが決まるぞ！　勝つのはすでに二組も進んだ麦わらの一味か！　はたまた謎の仮面選手か！　それではぁ～……》
試合が始まる。
この期に及んで緊張感が増して、シルクとチョッパーは身を固くし

た。
「Ｒｅａｄｙ～ＧＯ!」
開始と同時にシルクが剣を抜いた。
その時、彼女とチョッパーは揃って驚愕する。
動かない。相手は二人とも開始前から立っていた地点を動かなかったのだ。
舐められているのか、それとも策があったのかはわからない。ともかく数秒の猶予が与えられたことは事実。この先はあり得ない最初で最後の数秒だ。
いつ動くかわからないという恐怖を感じながら、シルクは必死に思考する。
勝つためにはどうすればいい。勝たなくてもいい、格上の相手を出し抜くには何が必要か。
そう考える彼女は恐怖心に支配されており、冷静とは言い難い状態であった。
それを感じ取ったせいかは定かではない。
今まで彼女を頼っていたチョッパーが自ら決断した。力のある声で叫んだのである。
「シルク！　行こう！」
「チョッパー……？」
「どうせ作戦を考えたってこいつらに潰されるッ！　それならもう、考えるのやめよう！」
それは策でも精神論でもなく、ただ無謀なだけの言葉だったはずだ。
しかしその一言を受けたシルクは、何も思いつかない自分に絶望していた。並びに、そちらの方がずっと海賊らしいとも考える。
シルクは笑顔で頷いた。
どうせ負け戦なら、華々しく散るのも面白そうだ。
「うん、行こう！　こうなったらとにかく前に！」
「おおおっ！」
二人の態度を見てから彼らも動き出す。

Ｍｒ．Ｓが長い鉄パイプを握り、Ｍｓ．Ｋは自身の手袋をきゅっと引っ張った。
「行くぞ」
「うん」
多くは語らず、ただ一言。少し呟いて即座に動き出す。
その時には二人は動いていた。
シルクが横薙ぎに剣を振ってかまいたちを飛ばし、吹き荒れた風が雪を舞い上げる。攻撃としては弱いが目眩ましにはなったはずだ。
舞い上がった雪に紛れてチョッパーが走る。
ルールは単純。宝箱を奪って守り切れば勝ち。それさえできれば勝機はある。
獣型になって宝箱の寸前まで到着し、チョッパーは人型に変身した。
宝箱を拾い上げようとした時、壁のように向こう側へ飛んでいった細かい雪を突き破り、Ｍｒ．Ｓの姿が現れる。彼は目眩ましにも怯まず真っ直ぐ突っ込んできた。
ここまでは予想できている。
人型になったチョッパーの頭を殴ろうと鉄パイプが振るわれていた。事前に予測し、構えていたチョッパーは瞬時に人獣型になり、肉体の変化によって回避する。
本来ならば当たっていたとはいえ、この一撃に賭けていたなら不思議ではない。
鉄パイプが紙一重で頭上を通り過ぎた後、チョッパーは再び人型に変わった。
まさか本当に一撃を叩き込めるとは思っていない。しかし意地がある。
ここでやれなければ仲間と一緒に冒険することなどできないはずだ。
固く握った拳が振り上げられ、この一撃に全てを込めるつもりで振り抜かれた。
「おおおおっ！　重力（ヘビー）ゴング！」

下から突き上げられる拳。Ｍｒ．Ｓはその拳を、ひどくあっさりと受け止めた。
受け止めて尚腕がぴくりとも動かず、チョッパーが呆然としてしまったほどだ。
指は広げられている。だが何やら奇妙で、人差し指と中指、薬指と小指を引っ付け、その外見はまるで竜の手を思わせるかのような形。
ぐっと指に力を込めれば、骨が軋むほど強い力が込められ始めた。
「うわっ、うわぁあああっ!?」
「チョッパーー!」
拳が離された。
直後にはチョッパーの胴を鉄パイプが打っており、Ｍｒ．Ｓよりも大きい体が吹き飛ばされる。
痛みで動揺した結果、正常な判断力など失っていた。反撃を考える前に殴り飛ばされてしまった理由はその一点が大きい。だがそれでも、避けられない速さだったことは確かだ。
シルクが助けようと剣を構えた時にはもうチョッパーは居なかった。
そして彼女の動揺もまた、相手の攻撃を生むきっかけとなる。
「魚人柔術〝水心〟」
ハッと気付いた時、Ｍｓ．Ｋがしゃがみ、島内の地面に溜まる海水に手を触れていた。
まるで水を掴もうとするような両手の動き。しかし確かにその手は水を掴む。
驚く暇もなく海水が持ち上げられ、その細腕によって投げられた。
「海流一本背負い！」
「鎌居太刀！」
そう多くないはずの海水を投げ飛ばし、空中で一本の大きな海流とした。
向かってくる海流に対してシルクは反射的に剣を振るう。
その判断が最善であったか、悪手であったか、シルクにはわからない。

ただ起こしたかまいたちは正面から海流とぶつかり、その塊を四散させることで攻撃を防ぐことには確かに成功した。吹き飛ばした海流は雨の如く小さな水滴となって辺りへ降り注ぐ。
しかし防御に努めたことでＭｓ．Ｋの行動まで目で追うことはできなかった。
ほんの一瞬目を離した隙に彼女が到達したのは、シルクまで五メートルの位置。
そこで左手を前に伸ばし、右手は腰に置いて構える。
空手の型で正拳を突き出した。
「鮫瓦正拳！」
「えっ――？」
拳その物は届いていない。それなのに振るったからには理由があり、その正拳突きは空気中にある水分を波紋の如く波立たせ、確かな脅威となって前進する。
見えない攻撃。その点においてはシルクとそう変わらない。
違っていたのは威力だ。
見えないまま進んだ攻撃が当たった時、シルクの体に外傷は与えられず、ただ耐え切れない衝撃を与えて彼女の体を吹き飛ばした。
魚人空手の真髄は辺り一面の水の制圧。
触れられる水も視認できないほどわずかな水分でも同じ。
Ｍｓ．Ｋの拳は空気中の水分からシルクの体内にある水へ衝撃波を伝えた。訳も分からず吹き飛ばされたシルクは海に落下するのを防止する柵にぶつかり、倒れる。
《つ、強～い!?　やはり常識知らずの強さだ！　攻撃を仕掛けたシルク選手とチョッパー選手があっという間に吹き飛ばされたァ！》
もう歩くような余裕はない。
全力で試合へ臨んでいるらしい二人は一切油断せずに行動していた。
先にチョッパーを殴り飛ばしたＭｒ．Ｓが素早く宝箱を持ち上げ、自陣へ向かって運んでいる。そちらを見ることもなくＭｓ．Ｋはフォローのために彼の背中を守った。

強いだけでなく油断をするような心の弱さもない。
シルクとチョッパーは即座に立ち上がったが、彼らの動きに一切の隙が見えなかった。
言葉を交わすことなく、二人の目標は宝箱に定められる。
戦って勝つのは無理だと判断した。ならば試合に勝つことに全力を注ぐ。
自分たちより強い二人に勝つのはそれしかない。
素早い動作で宝箱がレッドチームの陣地に置かれる。その直後、やはり油断はせず、Ｍｒ．Ｓはすぐさま二人を警戒するため振り返り、陣地の前で防御を始めた。
あれを抜くには二人の協力が必要だ。
シルクが改めて剣を構え、チョッパーはランブルボールを口にした。
その顔は明らかに先程までより凄みを増している。
「ランブル」
《回収船が動き出した！　さぁもう時間はないぞ！　急いで奪うんだッ！》
二人は同時に駆け出した。
予選を勝ち抜いた結果、今なら言葉による意思の疎通を図らずとも互いの動きがわかる。そんな気がしただけだがそれは決して間違いではなかったようだ。
真っ直ぐ敵陣へ向かおうとすれば当然まずはＭｓ．Ｋが立ちはだかった。
それを見たチョッパーが変身し、高く跳び上がる。
「飛力強化（ジャンピングポイント）！」
頭上を高々と飛び越えられて、Ｍｓ．Ｋは思わず見上げていた。
その瞬間を狙ってシルクが剣を縦に振り下ろす。
見えない攻撃はこちらも同じだ。隙さえ逃さなければ攻撃は当てられるはず。
「やああっ！」
かまいたちが雪を跳ね飛ばすように地面を駆ける。Ｍｓ．Ｋの体

を目指して一直線に進んでいた。速度は風で性質は刃。それは確かな脅威であった。
その一撃を、Ｍｓ．Ｋは大きく横へ跳ぶことで回避する。
驚愕したシルクはなぜ避けられたかがわからず、しかしここには雪がある。風が雪を吹き飛ばしながら進むせいで軌道が読まれたのだと判断した。
ならばと、今度は前方を薙ぐようにかまいたちを起こす。
横へ跳んだ程度では避けられない。読まれていても偶然でもこれなら。
そう考えたが、Ｍｓ．Ｋは地面を蹴って跳んでいた。
その動きは偶然ではない。明らかに見切った上で回避している。
一体なぜそんなことができるのだろうか。
呆然とした一瞬、ふと自身の剣を見下ろし、ハッと気付く。まさか剣筋。剣を振るう動作からかまいたちの軌道が読まれていたのか。
自らの弱点に気付いたシルクの洞察力は優れている。
だが戦闘中に見せた隙はどうしようもなく大きかった。
Ｍｓ．Ｋが再び両手で水を掴んで持ち上げていた。
一拍遅れた行動はそう簡単に取り戻せるものではない。シルクが我に返った時には目の前に大きな海流が迫っていて、彼女の体はあっさり呑み込まれた。
「あうっ!?」
《シルク選手が鉄砲水に運ばれるゥ！　一体なんだこの技はァ!?》
シルクの体は上昇する軌道を見せる海流に運ばれ、柵を越え、海へ落とされた。
すぐに海ネコが救助するために彼女の体を持ち上げるが、タイムラグがある。
背後でシルクがやられたことを知りながら、チョッパーは振り返らずに歯を食いしばった。
これは作戦。途中で諦めることは許されない。
また、迷うことも許されなかった。
チョッパーが変身する。

両腕が大きく膨れ上がり、強靭な筋肉によって七つの強化点で最強の攻撃力を得た。届くにしても届かぬにしても敵を倒すにはこれしかない。
Ｍｒ．Ｓも身構えていた。油断はない。
両者は正面から接近し、おそらくは最後の攻防を始めようとしている。
「刻蹄――！」
いつの間にか、目の前にＭｒ．Ｓが居た。
まだ五メートル以上は距離があったはずなのに、移動が見えない。
彼は鉄パイプを振り抜こうとしている最中で、なぜかスローに見え、チョッパーの腹を捉えた。
想像を絶する痛みを感じた上に、体がぐっと持ち上げられる。飛ばされる訳にはいかないと全身に力を込めようと思っても、そんな時間さえ与えてくれない。
チョッパーの体が高く空を舞った。
初めから狙い澄ましていたかのように海の方向へ飛ばされている。
空中に身を置いてしまってはどの変形点でも移動はできず、為す術がない。
チョッパーは海に落ちた。
《なぁんということだァ～！　シルク選手が戻ってきたかと思えば、今度はチョッパー選手が落水したぞ！　これでは宝を奪う時間がなぁい！》
助けた相手を殴り飛ばすという、海ネコの手荒な救助を受け、シルクは島内に戻っていた。
水に濡れた体が島内の気温で冷やされ、息を白くして震えている。
戦うために必死で剣を握り直した時、回収船が到着したようだった。
《試合終了～！　勝者はＭｒ．Ｓ＆Ｍｓ．Ｋペア～!!》
彼らの勝利がコールされ、海ネコに殴られて戻ってきたチョッパーがシルクの傍に落ちる。頭から雪に突っ込んでずいぶん苦しそうな様子だった。

海中に落ちたことで人獣型に戻っていたチョッパーを助けてやり、彼女は嘆息する。
結局、何もできずに終わってしまった。
決死の覚悟で挑んでも勝てない相手が存在する。その事実が二人の胸に残された。
実戦ならきっと死んでいたと思いながらも、船へ戻る二人の背を見送ることしかできない。
本戦を勝ち進んだ選手は先程と同じ出場者用の船へ乗り込む。バギーとアルビダも含め、敗者は別の船ですでにブルースクエアの町へと戻っていた。
よって試合が進む度、その船に残る人間は少なくなっていくのである。
今はルフィとビビ、キリとエース、そしてＭｒ．２が甲板から試合を見ていた。
キリが隣に立つエースへ問いかける。
「感想は？」
「今度ははっきり確認できた気がするな。やっぱりおれの知ってる奴に似てる」
エースはその試合、Ｍｒ．Ｓの動きを見切ることに従事していた。
戦い方その物はまるで知らない。少なくとも今までエースが戦ったことがない技だ。
ただし奇妙な技の節々、わずかな癖が見受けられる。例えばそれは回避の方法、慎重ながらも大胆な攻撃、或いは武器にしている鉄パイプを手の中でくるりと回す姿。
幼少期、間近で見ていた物だ。
同じく見ていたはずのルフィも困った顔で首を傾げている。
どこかで見たことがある。
あり得ないと思うせいでその答えには至らず、ルフィはひどく悩んでいた。
「ん～？」
「どうしたのルフィさん。お腹空いた？」

「いや、あの感じなんか見たことある気すんだよなぁ……」
ルフィも何かを感じ取っているようだった。ただやはり、先入観のせいか気付く様子はない。やるならば逃がさぬように試合の中でだ。
エースはすでに決意していた。キリに頼んだのもそのためである。
そして準決勝の出場者が揃った今、それはもう遠い出来事ではなかった。
《さぁ～て、ここまでノンストップで四回戦までを消化してきたが、ここで一旦休憩を取ることにしよう！　選手たちも英気を養い、万全の状態で準決勝に臨んでくれ！》
ハッタリーの一声によって休息が与えられることになった。
それぞれの思惑を胸に秘めたまま、トレジャーバトル大会は一時休止されることになる。

準決勝直前

休息に入ってモニターが消え、町に居る観客たちも休んでいた。とはいえやはり大会の熱気は簡単に冷めるものではなく、町中は大会の話題で持ち切りだった。

残る試合は三つ。

準決勝を執り行って勝者が決まれば、いよいよ決勝だ。

話題に上がるのはやはりエースとＭｒ．Ｓペアが激突することだった。

Ｍｒ．ＳとＭｓ．Ｋはバトルロイヤルにおいて確かな実力を見せたことに対し、キリは予選からこれまでほとんどエースにくっ付いてきただけの存在。大した活躍も見せず、それならチームとしてはＭｒ．Ｓペアが強いのではないかという意見と、エース一人で十分という意見に分かれていた。

今や島中が準決勝二回戦に注目しているようで、一回戦に注目する声は少ない。

それほど彼らの実力は圧倒的で魅力的だった。

港に居る麦わらの一味の下へシルクとチョッパーが戻ってきている。

傷つき、包帯を巻いたアーロンとはっちゃんも目覚めており、選手は全員戻っていた。

なぜか彼らの間には重苦しい沈黙が漂っていた。

「あいつらは、強いよ」

念のためにと腹に包帯を巻いたチョッパーが呟く。

表情は暗く、試合の敗北を引きずっている様子だった。

「おれたち、本気で戦ったのに何もできなかった。あんな奴らが居るなんて」

「うん……上には上が居るってことだよね」

同意するシルクも頷いていた。

モニターで見ていただけでも異常な強さは伝わってきた。しかし実際に対面して、己の目で間近に見てきた二人はそれ以上の迫力を感

じていたのだろう。
呆然とする二人を責める声は一つもない。
立ったままだったゾロが座っている二人へ言う。
表情こそ厳しいがそれはいつも通りであり、彼の言葉はそうきつくはなかった。
「恥じる気持ちがありゃ十分。お前らは次に備えてりゃいい」
「え？　次って？」
「おれたち試合はもう……」
「目的はこの島だったか？　そうじゃねぇだろ」
その声によってやっと気付くことがあったらしい。
今は、落ち込んでいる時などではない。
サンジは煙草を手にしながらもふと目を閉じて否定せず、ウソップやナミも唇を結んでゾロの言葉を聞き、シルクとチョッパーは当然集中していた。
彼の言う通りだ。一味の目的はこの島ではなかったはずだ。
「まだ戦いは始まってすらいねぇ。かといってアラバスタも通過点でしかねぇんだ。おれたちが目指してんのはさらにその先だろうが」
ルフィは海賊王になる男だ。
先はまだまだ遠く、途方もないと思えるほど。
「優勝はあいつらが取る。気合い入れろよ。次の島が、おれたちにとっては〝初戦〟なんだ」
それはおそらく海賊王になるための道程を意識した言葉。
初戦。その相手が〝王下七武海〟となる。
そう考えれば緊張感が増してきて、吹き飛ばすためにも気合いを入れなければならない。まさしく落ち込んでいる時間など少しもなかったのである。
シルクとチョッパーが気を取り直した頃、サンジは海に目を向ける。
出場者は町へ戻っていない。まだ海の上に居た。
異常な強さを持つＭｒ．ＳとＭｓ．Ｋ。本来ならば勝てないと思っても仕方ない実力がある。

心配していないのはなぜだろうか。
自陣にエースが居ることとは別だろう。不思議とサンジは焦ってはいなかった。
「幸い連中は先にエースと戦う。あいつまで手も足も出ねぇってことはないと思うが」
「パートナーがキリだしな」
「それもある。ビビちゃんには怪我して欲しくねぇが、ルフィならなんとかするだろ」
フーッと煙を吐き出し、心配する訳でもなく呟いた。
「決勝でうちのチームがぶつかれば、あいつはどうするんだろうなぁ……」
本人が居なければ質問することもできない。きっと本人ははぐらかすだろうが。
今は見守ることしかできないようだ。
出場者が乗る船では、甲板でルフィたちが昼食を取っていた。
船内のスタッフが大量に料理を作ったらしく、皿の上で山となり、それがいくつも並んでいる。
特にルフィとエースが勢いよくがっついて、ビビは慌てて口に詰め込むカルーを心配しつつも食事をする元気があり、なぜかその輪にＭｒ．２の姿もある。ビビにしてみれば複雑な心境だが、敢えて止めるようなことはしなかった。
そして勝手にやってきたベビー５も乗船しており、甲斐甲斐しくキリの世話を焼いていた。
苦笑する彼へ料理を差し出し、やけに上機嫌な顔だった。
「はいあなた、あーん♡」
「あぁありがとう。でも自分で食べれるしさ」
「そんな、あなたの役に立ちたいのに」
「っていうか選手以外乗っちゃだめなんだよ、この船。なんで来たの」
「あなたの役に立ちたくて」
「まぁそうだろうね」

反論する気を失くしてぱくりとフォークを口に銜えた。乗せられていた料理を咀嚼して味わうとベビー5が幸せそうに微笑む。聞けばその料理は彼女が作ってきたらしい。
どことなく不思議ではあったがのどかな風景だったことは確かだ。
準決勝を前にこれほど緊張感が無くていいのか。
ふと思案したビビがキリへ尋ねた。
「キリさん……準決勝のことだけど」
「大丈夫だいじょーぶ。なんとかなるって」
「なんとかって、私は真面目に」
「真面目過ぎるのも困りものだよ。硬い鉄でも折られたりするんだ。ゴムみたいにグニャグニャの方が良い方に進んでいく場合もある」
「ん？　呼んだか？」
「ルフィを尊敬してるって話さ」
にこやかに笑っている顔を見ると毒気を抜かれてしまう。ベビー5が少し気にして見つめてくることもあってビビはふぅと息を吐いて水を飲んだ。
話はわからなくもないが、彼はどうにもグニャグニャし過ぎている気がする。
ルフィも同様に心配もせず食べているとはいえ、キリとは少し性質が違うと思えた。
そういえばとキリが口を開く。
彼の目は気安くＭｒ．２へと向けられていた。
「ボンちゃん、ボクらアラバスタのエターナルポースが欲しくて大会に参加したんだ。持ってるでしょ？　それちょうだい。勝ちは譲ってもいいから」
「あらん、そうだったのぅ？　でもだめよぉん、あんたたちには渡しちゃだめって前々から言われてんのよぅ。それ用の任務もあったみたいだしぃ」
「やっぱり集めた？」
「多分ねぃ。大体あんたが出てった頃から」

「まぁ大体想像はしてたけどね」
ビビは彼らの会話に度肝を抜かれる。
話の方向性と〝集めた〟という発言により、アラバスタを指すエターナルポースは、ずいぶん前からバロックワークスが集めていたと言っているのだろう。
つまりはビビが麦わらの一味と出会う前から作戦は始まっていた。
今になって事の大きさを理解した気がする。
まさかクロコダイルはいつか彼らを迎え撃つと知っていたのだろうか。
恐怖に近い感覚を覚えると共に、なぜそこまでと考える。
キリがグランドラインに戻ることを確信していなければ実行されるはずのない作戦だ。
バロックワークス社員が会話している姿を見て、言葉にし難い疑念を持つ。
キリという男、改めて考えればとんでもない人物のようだ。
「じゃあエターナルポースはいらないから船引っ張ってってよ」
「いやよぅ。あんた島が見えたらあちしの船沈めるでしょう」
「そんなことしないよ。したことないし」
「いーやっ、あんたはそういうことするわよぅ。しかも絶対いい笑顔で」
「ボクに何か恨みでも？」
「恨んではないけどぅ、前は嫌味なくらいにこにこしてたじゃない？　はっきり言ってあん時のあんたは人間ってより人形みたいだったもの」
「そうかなぁ。ボクは印象良いと思ってたんだけどなぁ」
「でも紙ちゃん、なんか変わったわねぃ。あちしはそっちの方が好きよ」
「ありがとう。まぁこの子の方が好いてくれてると思うけどね」
「もちろんよあなた！」
ひしと抱き着いてくるベビー5を受け止めつつ、キリはやはり朗らかに笑う。

何も変わらないように見えて笑みの質が違っていた。
Ｍｒ．２も楽しげに笑っている。
「ところでさ、なんでボンちゃんが参加してるの？　指令？」
「ただの暇潰しぃ～。指令が無くなったから時間持て余してんのよぅ。だからわざわざ勝ちを譲られたって満足はできないわけぃ」
「あっそう。それは面倒だなぁ」
「っていうか、あんたこそなんでアラバスタなのよぅ」
「まだ聞いてない？　指令が無くなったってことは大きい作戦があるんでしょ」
「あら、よく知ってるわねぃ。流石紙ちゃん」
「またすぐ会うことになるよ。だから連れてって」
「だめよ。あんたは危ない奴だもの」
笑顔で語り合うもののＭｒ．２はキリを警戒しているらしい。関係が良好なのかよくわからない。ただ少なくとも見た目には悪くないと見え、ビビは困惑していた。
一方でルフィとエースは全く気にせず食べ続ける。
そんな彼らにも、他に気になることがあったようだ。
「んむんが……なぁエース、あいつらどこ行ったんだ？　メシ食わねぇのかな」
「ん？　さぁな、船の中で食ってんじゃねぇか。素顔を見られたくねぇみたいだしな」
「ふーん……」
肉にかぶりつきつつ、ルフィは船内へ続く扉に目をやる。
Ｍｒ．ＳとＭｓ．Ｋの姿が見えない。それが気になったもののエースはすぐに話を変えた。
「それよりルフィ、次が準決勝だぞ。大丈夫か？」
「しっしっし、大丈夫だ。負けねぇよ」
「んが～っはっはっは！　あちしだって負けないわよぅ！　このために来たんだからねぃ！」
「ベビー５、毒とか持ってない？」
「すぐ用意するわっ」

「ちょっとあんたたちィ!?　あちしの聞こえるとこで毒殺とか考えんてんじゃないわよぅ！」
賑やかではあったがエースは笑みを浮かべたまま目つきを変える。
それはルフィの覚悟を問うかのようであった。
「その次は決勝だぞ。多分おれたちと戦うことになる。勝てるか？」
「ああ。手加減なんかすんなよ。おれたちが勝つんだ」
間髪入れずにルフィは笑顔で答えた。
恐れる様子はない。ただ勢いで言った訳でもなさそうだ。実力云々は抜きにしても彼は本気で勝とうと考えていて、すでに覚悟も決めている。
エースは受け止めるように頷いた。
「わかった。とりあえずお互い準決勝を勝つぞ」
「おう！」
「ジョーダンじゃなーいわよ～う！　あちしだって負けな～い！」
「ボンちゃん、昼寝とかしない？」
「スパッと逝けるわ」
「殺す気でしょう!?　あちし絶対寝な～い！」
キリの背後に右手を鎌に変えたベビー5を見つけ、Ｍｒ．２が回りながら彼らの傍を離れた。
やはり仲は良くないのかもしれない。ビビは困惑して彼らを眺める。
騒がしいというのに妙に落ち着いた一時だった。
不安要素は少なからずある。それは個人によってそれぞれ違い、唯一不安を抱えていないのは能天気に笑うルフィやＭｒ．２だけだっただろう。
準決勝で事が起こる。
笑みを浮かべながらエースが想い、そしてキリはさらにその先、決勝にこそ目を向けていた。

＊

ブルースクエアからまだ少し距離がある海域。
海軍の軍艦が列を為して行き、ゆっくり、しかし着実に前進していた。
率いるのは桃色の髪を持つ女将校。この近海では名の知れた海兵である。
「大佐。先程電伝虫で連絡がありました」
「スモーカー君でしょ？」
「ええ。それが……試合には負けた。大会には手を出すなと」
「まったく。上官の命令には従わないのに約束は守るのね。不満よ。ヒナ不満」
「それも仕方ありません」
先行するのは〝黒檻部隊〟。海軍本部大佐〝黒檻のヒナ〟が指揮する部隊である。
その他の部隊までも引き連れて十隻の艦隊が海を進んでいた。
甲板では煙草を吸いつつヒナが曇った表情を見せている。報告に来た海兵もどうやら同じような心境らしく、決して快くとは言えない顔だ。
彼女の同期にスモーカー大佐が居る。
前々から話題を振りまく男だった。上官に逆らい、僻地へ飛ばされ、小規模だが遊撃隊の隊長としてグランドラインへ戻ってきたかと思えば、主催者との約束を律儀に守ろうとする。まさか海軍上層部が本気でそんな条件で納得したとも思っていないのに。
頭を抱えて嘆息してしまう。
またしても彼の尻拭いをさせられそうだ。
かつての新兵時代を思い出してしまいそうで、ヒナは決して機嫌が良くなかった。
「絶望よ。ヒナ絶望」
「胸中、お察しします。しかしスモーカー大佐が任を離れた以上、ここからはヒナ大佐に指揮権が移ります。やはり当初の予定通り動きますか」

「いいえ。時間を遅らせる。もう少し兵を集めて」
「如何ほどに」
「軍艦をあと二十隻」
「に、二十？」
海兵が思わず目を剥いてしまった。それほどの数は戦争レベルだとすら思う。
「いくらジョナサン中将の後押しがあったとはいえ、間に合いますか？　それほど集めようと思えば時間も物資も足りないと思われます」
「問題ないわ。スモーカー君が離れた場合を考えて準備していた」
「は？　い、いつの間に……」
「遊撃隊はスモーカー君の物じゃない。むしろ彼が使える力なんてほんの一握りよ」
その言葉を聞いて海兵は押し黙った。
海軍遊撃隊。近年、その名は大きく広まっている。そもそもは部隊が作られただけで、部隊を率いる人間があまりにも有名過ぎたため話題になったとはいえ、活躍が想像以上だったからだ。
ヒナがそう言うのならできるのだろう。
敬礼を行った海兵は命令通りに動くべくその場を離れようとした。
「了解しました。すぐに取り掛かります」
「よろしく」
「それからウェンディ大佐から伝言を預かっているのですが」
「聞きたくないけど、何？」
「聞かない方がいいとは思います」
「言いなさい」
「はっ……〝多分失敗するけど頑張って〟と」
「はぁ……いつも通りで安心したわ」
やれやれと首を振るヒナの傍から海兵が離れていく。
代わりに他の二人がやってきた。
「憤慨よ。ヒナ憤慨」
「ヒナ嬢！　ご気分が優れませんか！」

「では我々の求愛のダンスなどどうでしょう！」
「いらないわ。あなたたちにも憤慨よ」
そこには雑用ながら雑用とは思えぬ戦闘能力を持つ海兵が二人居る。
〝両鉄拳のフルボディ〟及び〝寝返りのジャンゴ〟である。
彼らは勝手に求愛のダンスを始め、苛立つヒナは再度重々しく溜息をついてしまった。

トレジャーバトル　準決勝一回戦

休憩が終わった直後、昼過ぎの時間帯に町は大いに盛り上がった。
トレジャーバトルの再開である。
次の試合は準決勝の一回戦。ここで勝った者は決勝へと駒を進めることができる。大事な局面に町中の人間が釘付けとなっていたようだ。
舞台は常秋島。幾分広い小島の町にて選手たちが向き合っていた。
《準決勝を始めるぞォ！　まずはルフィ＆ビビペア　ＶＳ　Ｍｒ．２・ボン・クレー！》
ハッタリーは鳥の背に乗り、実況を務めていた。無理やりとはいえその前の試合でＭｒ．２のペアを務めた男であったが、彼の実力を見て個人での参加を特別に許可したのだ。
彼は普通ではない。一人で戦うというならそれを認める価値がある。
必然的に二対一の試合となった。
ここへきて突然認められた変則的な内容に観客たちは注目する。
対峙した時、ビビは一際緊迫した表情を見せていた。
彼とは後にもう一度戦うことになるだろう。それはきっと避けられぬ戦いであり、またどちらも避けようとはしていない。言わばここが前哨戦。
逃げる訳にはいかず、負けることも許されてはいない。
ルフィは左手に右の拳をぶつけ、にやりと笑う。緊張はしていなさそうだ。
対するＭｒ．２もまたくるくる回って笑顔を見せていた。
これが彼らとの違い。ビビは唇をきつく噛む。
《抜群のコンビネーションで勝ち進んだルフィ＆ビビペアに対し、たった一人の力でここまで進んできた実力者、Ｍｒ．２・ボン・クレー！　果たして勝者はどっちだァ！》
「ボンちゃん、負けねぇぞ」
「んが～っはっはっは！　上等ォ！　あちしだって負～けない！」

戦闘が始まる直前、独特の空気や匂いを感じた。
その境地に立ったことを誇る暇もなくビビはわずかに汗を掻き、開戦の合図が出される。
《それでは行くぞ！　準決勝第一回戦、Ｒｅａｄｙ～ＧＯ!!》
ハッタリーの声によって両者同時に動き出す。
ルフィとＭｒ．２は宝箱へ向かい、その動きで戦闘を始めるつもりでいた。
一方、敢えてその場に残ったビビは曲げた小指を軽く噛み、真っ先に指笛を鳴らす。
「来なさいカルー！」
「おおおおっ！」
「行くわよ～う！」
ルフィとＭｒ．２が鋭く拳を突き出して、全くの同時に互いの体へ届く。Ｍｒ．２の頬へ強烈なパンチが入れられ、ルフィの脇腹に同じく凄まじい勢いのパンチが刺さる。
ここで違いがあったのは能力の質だった。
同じパラミシアでも全身がゴムに変わっているルフィに対し、Ｍｒ．２のそれは能力を使用しなければ外見の変化はない。つまりはただの人間である。
互いに殴り飛ばされて宝箱から遠ざかるとはいえ、ルフィの体にダメージは一切なかった。
どちらも地面を転がるが先に立ち上がったのはルフィ。素早い動きで再び駆け出し、宝箱ではなく数秒遅れて立ち上がったＭｒ．２へと向かう。
体勢を立て直したＭｒ．２は笑顔で構える。
正面からルフィを迎え撃とうとする意思が見えた時、ビビが彼への攻撃を開始した。
「孔雀一連（クジャッキーストリング）スラッシャー！」
「アァン!?」
それは予想外の行動だった。
勝利に必要な宝箱を狙うことなく、二人掛かりで攻撃を行ったので

ある。それもルフィの邪魔をせぬようにと立ち位置を考えて、タイミングを見極め、反撃が来ない距離から攻撃した。その攻撃自体に重傷を与える威力がある一方で、援護に努めた行動と言えるだろう。
瞬時に理解したＭｒ．２は向かってくる長く連結した羽根の刃を見て、跳び上がって回避する。
素早い動作により回避には成功した。ビビの武器は背後にあった壁を削る。
だがその行動はルフィの攻撃を回避できない場所へ身を躍らせたようだ。
「ガトリングッ！」
「んげぇ～っ!?」
跳んで回避したＭｒ．２の体をルフィの拳が襲い掛かる。
一度と言わず二度も三度も、可能な限りパンチを叩き込んでいく。
Ｍｒ．２は姿勢を捩り、両腕で防御するも到底防ぎ切れるものではなかった。全身に拳がぶつかって殴り飛ばされてしまい、石造りの建物へ激突する。
壁から離れて落ちた彼は、しかし倒れることもなく平然と両足で着地した。
「いいったぁ～い！　やるわね麦ちゃん！」
「当たり前だ。おれは海賊王になるんだ」
「んが～っはっはっは！　言うじゃなぁ～い！　だったらあちしも手は抜けないわぁん」
特異な構えを見せ、Ｍｒ．２は笑みを浮かべながらも雰囲気を変えた。
「オカマ拳法、見せたるわァ!!」
「しっしっし！　来い！」
再びルフィとＭｒ．２が接近し、視線を合わせたまま、ほんの一瞬の静寂を感じる。
先にＭｒ．２が動いた。長い腕によるパンチを顔面へ向けて繰り出して、常人には反応できない一撃を完全に見切ったルフィは潜るようにそれを避ける。

上背が違ったことが不利とはならなかった。
気付く暇も与えず懐へ飛び込んだルフィは彼の腹を全力で殴る。
思わず白目を剥いてしまうほどには強烈だった。
それで気絶するとまではいかず、Ｍｒ．２はルフィへ向けて肘を落とした。
ルフィは拳で敢えて受け、ゴムの自身は痛みもなく、彼の攻撃を押し返した上に痛みを与える。
この時点でＭｒ．２は正しく理解した。
ルフィはアーロンより強い。そう思った直後に腹に回し蹴りが入り、再び体が飛ぶ。
二人の大きな違いは体格の違いによる〝速さ〟。それでいて純粋な腕力はアーロンが上であるが、こと打撃に関して言えばルフィには慣れと技術と経験が多い。
小柄な体を精一杯使う分、懐へ入られた上にその腕力。明らかに普通ではない。
ゴムであることを差し引いても脅威だ。
Ｍｒ．２は地面を滑り、思わずバタッと倒れてしまった。
観客がわっと湧く。
たとえモニターで近く映しているとはいえ、その速さでは彼らの目にはほとんど何が起こったか見えていないだろう。それでも彼らの迫力が伝わって喜んでいたようだ。
《つ、つつ、強～い!? ルフィ選手の息もつかせぬ連続攻撃にＭｒ．２選手は堪らずエスケープ！ ビビ選手が手を出すまでもなく殴り飛ばしてしまったァ！》
「げふぅ……や、やるじゃなぁ～い」
「ああ。ボンちゃんもな」
《さぁ！ この時点でビビ選手のカルガモが宝箱を運んでいるぞ！ たった今ブルーチームの陣地へ置かれた！ 回収船スタートだ！》
ルフィが拳を握って笑っている。それを見て楽しいと思うＭｒ．２には実況が聞こえていなかった。
彼とて自分の力量は誇張なく理解している。

確実に一撃を入れたはずだ。決して軽くはない打撃を入れて表情も態度も変わらないところを見ればおかしいと思うのは当然。
おそらく効いていないと思ったのはこの瞬間だ。
しかしＭｒ．２はその事実を面白いと考え、悩まずに構えると彼との戦闘を継続させる。
勝てるか否かではない。この舞台は祭り、ならば楽しむことこそ第一であり、些細なプライドや勝利への執念など二の次だ。
今この場を楽しめるかどうか。そのためにＭｒ．２はルフィと対峙した。
「こっからよぅ！　こっから本気！　あちしの根性見て帰れやァ！」
《Ｍｒ．２選手の様子が変わったぞ！　仕掛けるか！》
Ｍｒ．２が地面を蹴り、撃ち出されるように前へ走った。
その瞬間、ルフィも同じく地面を蹴るが、後ろでも前でもなく空へ上がった。
予想外の行動にぽかんとしたＭｒ．２が見上げた瞬間。
ビビの攻撃が迫った。
「んがぁああっ!?　危なっ!?」
「おおおっ！　スタンプガトリング！」
「ほげぇぇっ!?」
長く伸びてくるビビの武器を辛うじて避け、直後に上に居たルフィが両足を素早く動かし、無数の蹴りで彼の体を捉えた。
一撃だけでも威力は相当なもの。それが複数襲ってくる。
咄嗟に防御の姿勢を取っていたＭｒ．２だが蹴り飛ばされ、またしても勢いよく地面を滑る。
とはいえ、すぐさま起き上がるまで二秒とかからなかった。
さらに気付いたことが一つ。
てっきりルフィも同類だと思っていたＭｒ．２は一騎討ちになるのではと想像していた。
間違っていた。ビビが参入することを念頭に置いて立ち位置を選んでいたのだ。

理解できないと思ったのはほんの一瞬のことであった。
彼の眼を見たＭｒ．２は理解する。
話していた時の感じからすればおそらく物を考えるのは得意ではない人間。こういった人物が本来の考えを曲げてまで行動するには相応の理由がある。
脳裏に彼の顔が浮かんでいた。
Ｍｒ．２はそれだけで優しく微笑む。
（麦ちゃん、あんた……）
直後には凄まじい形相となってルフィへ襲い掛かった。
（いい男ねぃ――！）
鋭く繰り出された蹴りは油断していなかったルフィの腹を突き、彼を後退させる。
地面に足を踏ん張ってすぐに耐えたものの、明らかに先程までとは異なる一撃だったようだ。
感情によって強さが変化する人間が存在する。
分類するならばＭｒ．２がそれであり、中でもルフィは典型であった。
Ｍｒ．２自身がその事実に気付いていたかはわからないが、少なくとも目を見ただけでルフィの覚悟を感じ取り、強い信念に共感したことは確かだろう。
その結果が彼の腹を蹴り飛ばした速攻。
痛みは感じていない。異なる理由からルフィはわずかに眉間へ皺を寄せていた。
「まだまだ行くわよ～う！」
《さらにＭｒ．２が敵へ向かう！　宝は取らない気なのかァ!?》
Ｍｒ．２の猛攻は、全てルフィへ向けられた。
隙を見ては攻撃を仕掛けてくるビビを敢えて放置し、攻撃が来れば必ず避ける。そうしながら自身の攻撃は常にルフィを狙い続け、拳や蹴りを次々繰り出した。
確かに彼は強いが第三者を意識しながら戦って勝てるはずもない。
注意力が散漫になるせいでルフィの攻撃が当たり、その度に後方へ

押し返された。
「ゴムゴムのブレット！」
「ぐへぇっ!?」
腹に強烈な一撃が入った。思わず息が詰まるがやはり倒れない。
音が鳴るほど歯を食いしばり、少なからず血も吐いていた。
あまりの迫力にビビが背筋をぞっとさせる。ただのゲームになぜそれほど本気で挑むのか。彼が戦う理由が知れずに肝を冷やしてしまうのも無理はない。
ただ時間を潰しに来たという言葉は嘘だったのか。否、そうではない。きっとその言葉は嘘ではなかったが試合の中で変わったのだ。
ルフィばかりを攻めている姿はそうとしか思えなかった。
援護はすべきだ。だがわずかにビビが逡巡する。
二人の戦いはさらに加速していた。
どちらも速さと力、加えて技を併せ持つ二人。得物も同じく己の体のみである。
単純な殴り合いに見えてミスが許されない一瞬の判断があり、時間さえ忘れる極限状態の中、最善の一手を読み合う戦いを繰り広げていた。
ルフィは本能で、Ｍｒ．２は経験で体を動かす。
その二人の戦いはビビが横から割って入れるものではなく、動きたくても動けなかった。
（すごい……この人たち、本当に……！）
同じ感想は観客たちにも与えられていた。
派手な能力を使わないからこそ、彼らの強さが如実に伝わる。
目で追い切れないほど速い動きと的確な攻撃。それでいて回避と防御までしている。
とにかくわからないが大きな歓声が上げられていた。
一方で麦わらの一味は静まり返っていた。
ルフィは船で一、二を争う力を持つ。その男を相手にＭｒ．２がどれほど対抗できるのか。注目するのはその一点であり、固唾を呑んで見守っていた。

どうやら戦況はルフィが押していた。
言い換えれば、決め切れずにいるということだ。
「ピストルッ！」
「んがっ……!?」
渾身の一撃が交差した両腕に防御された。
それでもＭｒ．２は地面を滑り、わずかとはいえルフィとの距離ができる。
逆に好都合。助走を取れた彼は大技を繰り出そうとする。
「なんの、まだまだァ！」
《試合終了～！　たった今回収船が到着したァ！》
「あらん？」
《勝者は！　ルフィ＆ビビペア～！》
勝者の決定に観客が湧く。
反対にＭｒ．２はぱちくりと瞬きを繰り返し、ようやく理解すると驚愕した。
「あぁ～っ!?　しまったぁ！　宝を取らなきゃいけないんじゃないのよう!?」
《おっとＭｒ．２選手、やはり戦闘に夢中で宝箱に気付かなかったのか。今頃驚いております》
「ちょっとハッタリちゃん！　何で言わないのよぅ！　教えなさいよう！」
《えぇ？　いえ、ルール説明はちゃんとしましたし……》
「そんなのちょっと集中したら忘れちゃうでしょうが！　その都度教えなさぁい！」
《そんなこと言われましても……》
観客の熱狂とは正反対に、ルフィとビビは喜ぶこともなくじっと彼を見ていた。
大きく息を吐き出し、Ｍｒ．２が心を落ち着ける。
それからやれやれと首を振って冷静に言い始めた。
「ぷぅ～っ、仕方ないわぁん。負けは負け。あちしはとっとと帰るわよぅ」

「帰るってまさか……」
「そうよぉん。アラバスタにねぃ」
思わず出てしまったビビの呟きにＭｒ．２が反応する。
去ろうとした彼だが足を止め、二人に振り返ってルフィを指差した。
「麦ちゃん」
「ん？」
「あんた強いわねぃ。ひょっとしたら本気でやったらあちし勝てなかったかも」
落ち込む様子もなくあっさり告げて、彼の顔には笑みがあった。
「でも今度はルール無用の世界でやりましょ。あんたたち、来るんでしょ？」
「ああ」
「んが～っはっはっはっは！　紙ちゃんが居るからそうかもとは思ってたけど、あんたと戦ってはっきりしたわぁん。あんたはもっと強くなる。死ななきゃね」
腕を降ろして、実況を無視してしばしの間を置く。
ルフィが何も言わずにいるとＭｒ．２が言った。
「あちしに勝ったから教えてあげるわぁん。あんたと一緒に居る紙ちゃん、昔より楽しそうよ」
それだけ告げるとＭｒ．２は背を向けて歩き出す。
「あの子もあんたもあちしのダチ。でも勝負の世界じゃ油断もしないし見逃しもしない。次はタイムアップで戦いが終わるなんてことはないわよ」
その言葉にビビは悲痛そうな面持ちで俯き、ルフィは背を見送る。
見えなかったが、Ｍｒ．２の笑みは少し変化していたようだ。
「できれば、紙ちゃんにはあのままでいてもらいたいけどねぃ」
そう言って彼は船に戻っていく。
出場者が乗る船の傍には町へ戻るための小型船が来ていて、彼が乗り込むのはそちらだ。
ふと、出場者の船の欄干の上、キリが座っているのが見えた。

Ｍｒ．２はフッと笑ってそちらへ足を伸ばす。
「負けちゃったわぁ～ん。紙ちゃん慰めてくれるぅ？」
「うん。よく頑張ったよボンちゃんは。でもちょっと熱くなり過ぎたね」
「んが～っはっはっは！　その通りねぃ！　あんたにアドバイスもらうのは久しぶりな気がするわぁん。そんなに時間も経ってないのにねぃ」
不思議と負けたＭｒ．２の方が機嫌が良さそうだった。
キリは苦笑し、敵意を持つ訳でもなく語り掛けている。
ただ遊びに来たと言わんばかりの気楽さだ。
「もうアラバスタに帰るんでしょ？」
「そうよぅ。大事な作戦があるらしいからねぃ。全戦力が待機中よぅ」
「ふぅん。そっか」
「他に聞くことはないのぅ？」
「どうせ聞いたってボンちゃん全部は知らないでしょ？　じゃあ聞いても意味ないよ」
「んが～っはっは！　冷たい一言だけどまさにその通りねぃ！　あちしまだ何も知らないもの」
「じゃあなんとか自分で考えるよ」
「でも相手があんたたちってことはわかったわぁん」
Ｍｒ．２は笑顔でキリを見ていた。しかしただ楽しげであるだけでなく覚悟を感じさせる。
「あんたの船長、中々よぅ。多分だけどねぃ」
「うん。ボクもそう思う」
「先に行って待ってるわぁん。その時には手加減しないからよろしくねぃ」
「ひどいなぁ。お手柔らかにってみんなに言っといてよ」
「んが～っはっはっは……」
歩き出したＭｒ．２は彼が乗る船の脇にある船へ移動しようとした。

しかし歩き出した後で立ち止まり、再び彼に体を向ける。
「紙ちゃん」
「何？」
「人生、楽しみなさいよぉ！　んが～っはっはっは！」
ズビシッと指差して叫んだ後、Ｍｒ．２は独特な走り方で敗者用の船に乗り込んでいった。
彼の言葉に驚きつつもキリはくすりと微笑む。
手の中にあった紙を操作し、宙に浮かせて手を触れることなく紙飛行機を作った。
「わかってるよボンちゃん。でもその前に、けじめはつけないとね」
できた紙飛行機を島に向けて飛ばした。
風に乗って、意外にも美しい弧を描いて陸地へ到達する。
時間を置かずにエースが傍へやってきた。
険しくもあるが笑みも見せ、彼はキリの隣に立つ。
そしてルフィたちが居る島を見ながら呟いた。
「いよいよだな」
「っていってもエースの戦いでしょ？」
「ああ。付き合わせて悪いが、この一試合だけは頼む」
「もちろん。元々こっちが引きずり込んだんだしね」
準決勝一回戦はルフィ＆ビビペアの勝利。
次の試合は、エースが標的と正面から見える一戦だった。

トレジャーバトル　準決勝二回戦

場所を変えて、常春島。
四人の選手はすでに舞台の上へと立っていた。
待ちに待ったカードを前にして観衆の盛り上がりは頂点を見せる。
これこそ頂上決戦。麦わらのルフィも確かに良い試合を見せたがやはり彼には敵わない。そして期待を一身に集めるエースに対抗できるのはおそらくＭｒ．Ｓだけだ。
この一戦が優勝を決めると言っても過言ではない。
それがわかっているだけでも人々の興奮は冷めやらなかった。
しかしエースは、そんな物には興味がないと一切関心を持っていなかった。
観衆も大会も関係ない。この試合だけは個人的な目的がある。
エースの眼は正面にＭｒ．Ｓを捉えていた。
《さぁ～観客が盛り上がるこの試合！　ついに始まるぞ！　勝つのは圧倒的な力でここまで駆け上がってきたエース＆キリペアか！　それとも謎の新星Ｍｒ．Ｓ＆Ｍｓ．Ｋペアか！》
「お前にはどうでもいいことかもしれねぇが」
試合が始まる直前、エースは静かに語り出した。
その直後に開始が告げられる。
「おれにはルフィの他にもう一人兄弟が居る」
《Ｒｅａｄｙ～ＧＯ!!》
開始と同時にキリが紙のロープを伸ばし、宝箱を絡め取って自身の下へ引き寄せる。そのまま彼は両手で受け止めると近くの家屋の屋根へ飛び乗った。
咄嗟にＭｓ．Ｋが追おうとする。
それを手を伸ばすだけでＭｒ．Ｓが止めた。
「コアラ、待て」
「Ｍｓ．Ｋだよ」
「おれに用があるらしい」
むっとした声が聞こえたが彼女も足を止め、視線はキリへ向ける。

自陣へ向かおうとしていない。迂回すれば彼の足なら簡単に辿り着けるだろうに、敢えてそうしていないのか、屋根の上から三人を見ていた。
Ｍｓ．Ｋはその姿に嫌な予感を覚えていた。
一方でＭｒ．Ｓも動けずにいる。
エースの一言で頭痛が激しくなっていたのだ。
《おっと、いきなりの膠着状態！　キリ選手を除いて全く動かず睨み合いが続いているぞ！　どちらも仕掛ける時を窺っているのか！》
「そいつはガキの頃からおれと兄弟のように育って、いくつか年下のルフィが来てからは二人の弟になった。どっちが兄貴という訳でもなく、兄が二人、弟一人。おれたちは三人で育った」
実況で掻き消えそうになる声がはっきり聞き取れていた。
その時異変に気付けたのはＭｓ．Ｋだけだったであろう。
Ｍｒ．Ｓの手が震えている。何かに耐えるように拳をきつく握り、それだけとは見えぬほどブルブルと震え続けていた。その姿は明らかに普通ではない。
思わずＭｓ．Ｋが振り向くほど、彼は様子がおかしかった。
「Ｍｒ．Ｓ？　どうしたの？」
「ダダンの酒を盗んで、盃を交わした時、おれたちは義兄弟になった」
「ハァーッ、ハァーッ……！」
「ちょっと、大丈夫なのっ？」
「だがそいつはおれたちが居ない場所で死んじまった……はずだった。教えてくれたのはダダンの仲間のドグラだ。あの日、そいつは海に出ようとして、天竜人の船の傍を通り――」
「うっ、ううっ――!?」
「Ｍｒ．Ｓ!!」
「撃たれた」
割れるように痛む頭を抱えて、Ｍｓ．Ｋの声も聞こえず、Ｍｒ．Ｓが背を丸めた時。
エースの一言で、記憶の一部が蘇った。

まだ子供だった自分。大きな希望を胸に抱き、何も知らない純粋な目で大海原を見つめ、あの日小さな舟で海へ出た。自作の海賊旗を確かに掲げて。

おそらくはただの偶然だった。

港には巨大な船が近付いていて、何もしていない、横をすり抜けようとしただけで砲撃された。

誰かの名前を呼んだ気がする。

助けて欲しいという想いと、死ぬなら最期に会いたいという想いで、誰かの名前を。でも結局は違う誰かに手を掴まれ、次に目覚めた時は、記憶にある通り。

なぜ忘れていたのだろうかと疑問を持った時、考えずとも答えが出た。

砲撃のショックで生死の境を彷徨った際に忘れてしまったのだろう。

再び頭痛が始まった。今度はズキズキと痛みが弱い。

思い出したことはいい。ここで深く考えている状況ではないと即座に判断する。問題はなぜその時の状況をエースが知っているかの方だ。

エース。ルフィ。ダダン。ドグラ。どれを聞いても頭が痛くなる。

まさか彼らを知っているとでもいうのか。

「天竜、人……ゴア王国か」

「そうだ」

「お前が、どうしてそんなことを……」

服の下ではひどく脂汗を掻き、仮面の下では辛そうな表情で歯を食いしばっていた。

少ない情報を正しく整理し、彼の状態を見た結果、Ｍｓ．Ｋは現在の状況を正しく理解する。

「まさか、記憶が……？」

「お、れは、何も覚えてなかった……家に帰りたくないって気持ち以外、何も……」

「だと思ったよ」

エースは平然とした声で答える。
「お前が生きてて、全部覚えてりゃ、どんな方法ででもおれかルフィに教えたはずだ。それがなくて今ここに立ってるなら覚えてねぇってのが答えだろ」
全く動じていない姿であった。
ビリビリと肌が震えている。自身が恐れているからではない、外からの力によって。Ｍｓ．Ｋはそれが凄まじい力であることを理解して、思わず一歩を後ずさった。
エースが静かに身構えたのである。
「来いよ。忘れたってんならぶん殴ってでも思い出させてやる。こればっかりはルフィには任せられねぇ、おれがやらなきゃいけねぇことだ」
能力を使用していない。まだ火を発していないのに凄まじい気迫を感じる。
流石にこれほどとは思っていなかった。
仮面の下、Ｍｓ．Ｋは動揺する。贔屓目に見てもＭｒ．Ｓと同格と考えていたが、今や勝負はどちらに転ぶかわからないと思うほど、何もしていない目の前の彼に怯えている。
Ｍｒ．Ｓも感じていたはずだ。
頭を抱えていた手を降ろして、彼は小さく呟く。
「下がってろコアラ。もう試合はいい……」
「そういう訳にはいかないでしょ。私たちは任務でここに――」
「悪いがこれはおれの戦いだ」
Ｍｒ．Ｓが手の中で鉄パイプを回す。振り返ってそれを見た時、Ｍｓ．Ｋは息を呑んだ。
彼は自分が知る相手だろうか。
そう思うほどには凄まじい迫力を感じて、言うべき言葉を無意識に呑んでしまう。
彼が銃弾なら彼女はピストルその物。
撃つべき時は選ばなければならないし、引き金を引かないならば銃弾を飛ばしてはいけない。

自身の役割を完璧に理解しているはずだったＭｓ．Ｋは、もはや自身が彼を止められないことに気付いた。すでに彼にはＭｓ．Ｋの姿は意識の中に入っていない。
うるさいほどの頭痛が精神を苛む。
まるで助けを求めるように、Ｍｒ．Ｓはエースだけを見つめていた。
「お前は、おれを知ってるんだな……」
「ああ」
「グッ、おれも……お前を、知ってる気がする……」
「当たり前だろ」
エースは薄く笑みを見せていた。それでいて本気の戦意をぶつけている。
肝を冷やすＭｓ．Ｋにキリが声をかけた。
「Ｍｓ．Ｋ。こっちに来といた方がいい」
彼は先程よりさらに遠く逃げていて、地面に宝箱を置いて休むようにしゃがみ込んでいた。
「死ぬよ？」
笑顔で言われた言葉を受け止め、Ｍｓ．Ｋは全力でその場を離脱した。
それは真理に違いない。この二人がぶつかった時、すぐ傍に居て無事で済むはずがなかった。
跳ぶように逃げたＭｓ．Ｋは考えもせずキリの傍へ。
その時にはＭｒ．Ｓが鉄パイプを構え、エースは応じる気で立っていた。
《ついに動くかッ!?　何やら話し合っていたようだがエースとＭｒ．Ｓの一騎討ちのようだ！　上空に居ても感じるプレッシャーは尋常ではない！　どちらが勝つのか全く読めないぞ！》
もはや実況の声は彼らに聞こえていなかった。しかし、観客にはきっかけに思えただろう。
二人が激突し、一騎討ちが始まったのだ。
エースの右腕が漆黒に染められ、握った拳を振るうと同時、Ｍｒ．

Ｓが鉄パイプを振るう。彼が持つ何の変哲もない武器も色を変え、エースと同じく漆黒に染まっていた。
鉄がぶつかったような音が生じて両者押し合う。
力はほぼ互角。ギャリンッと甲高い音を立てて二人とも離れた。
エースはまだ能力を使おうとしていない。
出し惜しみという訳でもなく、徒手空拳で本気で勝ちに行っている。
そこからは観客が理解できるような攻防ではない。
息もつかせず攻勢へ出たエースが凄まじい気迫であった。
鉄のように硬化された拳や蹴りを繰り出して、確実にＭｒ．Ｓの急所を狙って迫り、彼に後退を余儀なくさせる。その勢いは簡単に止められるものではない。Ｍｒ．Ｓは素晴らしい反射神経と的確な選択でそれらを全て受け止めていたものの、攻めないのではなく、攻められないようだ。
彼が持つ鉄パイプも漆黒に変わり硬化されている。これもまた覇気の力だ。
本来よりもかなり頑丈になっているため、簡単には破壊されない。それでもエースの攻撃を受ける度に腕が痺れるほどの衝撃が来て、一撃を受ける度に骨が軋む。
この時Ｍｒ．Ｓが異変を感じていた点は二つある。
一つは彼を不利にさせる変化。試合開始前からある頭痛だ。今も常に痛み続けている。
もう一つはしかし彼を有利にさせるとも言える異変だっただろう。普通の人間では受け止めることすらできないその攻撃をなぜ一つも漏らさず受けきれるのか。
Ｍｒ．Ｓの身体能力、判断力、経験が生きているのもある。
それ以上に、彼はなぜかエースの行動が予想できていた。体が勝手に動くと言ってもいい。
今まで一度もなかった感覚があり、考える前に腕が防御のために伸ばされ、足が相手との間合いを保ち、次はこう来るだろうと想像した光景とそう違わぬ攻撃が来る。

目まぐるしい展開の中、彼だけは予測できていた。
そしてその事実にＭｒ．Ｓ自身も驚いていた。
「うわー、予想以上に凄いな、あれ……ボクなら死んでる自信あるね」
屋根の上からエースの戦いを見ていたキリがのほほんと呟いていた。
Ｍｓ．Ｋもそう違わない感想を抱いている。火拳のエースはメラメラの実の能力があるからこその強さだと考えていたが、とんでもない。ただの格闘でＭｒ．Ｓが反撃できないほど攻め込まれて、それは彼の実力を知る彼女からすれば言葉にならないほどの驚愕がある。
しかし同時に、この場では更なる困惑もあった。
キリは相変わらず観戦していて、宝箱を運ぼうという気配が感じられない。運ばないだけなら理解もするものの、彼は今や自身の傍にある宝を守ろうとさえしていなかっただろう。
どこからどう見ても隙だらけ。だからこそ罠とも考えられる。
今はキリの考えが読めず、Ｍｓ．Ｋは自分がどう行動すべきかを逡巡した。
「宝箱、持っていってもいいよ」
彼がぽつりと言った時、先手を打たれた、とも思う。
そのまま受け取れば諦めたとも思える言葉だ。だがそう素直には受け取れない。
Ｍｓ．Ｋは屋根の上に居る彼を見上げる。
「どうして？　勝たなきゃいけない理由があるんじゃなかったの？」
「あるよ。でも今はエースの用事が大事みたいだからさ。ボクがさっさと終わらせちゃう訳にはいかないんだ。だから悪いけど、持っていくだけにしてくれない？」
「試合は終わらせるなってことね」
「じゃないと多分、ボクが止めなきゃいけなくなると思うんだ。それは面倒だなぁって」
「そうする理由がわからないよ。これは試合なんだよ？」

「そうかな？　もうわかってるでしょ。あの二人の様子見てて」
キリは彼女に振り返らずに喋っている。
エースとＭｒ．Ｓの激突はその間もずっと続いており、休む間もなく攻撃と回避を繰り返した。
Ｍｓ．Ｋはふと彼らの姿に目を向け、ぐうの音も出ない状態にあると自覚する。
「余計なお節介だけど、待ってた方がいいんじゃない？　その方が君も得すると思うよ」
彼の言う通りだ。二人のやり取りを耳にして確信に近い疑念がある。おそらくそのまま二人に解決させた方が今後の展開にとってプラスになるだろう。
そう考えるなら待っているのも悪くない。
そうなれば、次に気になるのは彼についてだ。
口ぶりとは裏腹に驚いた様子もなく観戦する彼を見て、Ｍｓ．Ｋは試しに質問してみる。
「ねえ、もし私が宝を奪って試合を終わらせようとしたら、君はどうするの？」
「ん？　うーん、どうしようかなぁ。そこまで細かく考えてなかったけど、まず宝箱を取り返さなきゃいけないだろうし、うーん、その後は……」
目を伏せる余裕すらあってキリは唸りながら考える。
途中で面倒になったのか、目を開けて振り向いた彼はにっこり笑っていた。
「まぁ、両腕もげば宝箱は運べないよね？」
笑顔でそう言った彼を見つめて確信する。
この男は危険だ。
実力の話は関係ない。明らかに彼はエースやＭｒ．Ｓとは異なる分類の強さを持っており、たとえ一対一で戦えばＭｓ．Ｋの方が強かったとしても、彼は何をしてでも先程の言葉を実行させるような、底知れない何かを抱えている気がする。
或いはそう感じさせることによって戦いその物を回避したのか。

それはそれで頭が切れる。
どちらにしろ、エースにもＭｒ．Ｓにも抱いたことのない感覚を、Ｍｓ．Ｋは彼に覚えていた。
ともかく二人が戦闘を始めず、黙って試合を見ていたのは事実である。
その間に試合は動こうとしていた。
重い一撃を防御の上から叩き込んで、エースは攻め込む機を窺う。拳、蹴り、さらに回転して拳を叩き込んで、反撃が来ないことを見極めて一度後ろへ跳んだ。
これまでＭｒ．Ｓの体に届いた攻撃はゼロ。一つも欠かさず防御されている。
本気を出していないとはいえエースが違和感を覚えたのも当然だった。
幸か不幸か、既視感なら彼も感じている。
全て受け止められたのは予想外だが、影響が全くない訳ではない。まだ全力で叩き込んでいない状態でこれならばこの先はどうなるか。それがわかっただけでも十分だろう。本領発揮はこの先にある。
エースは大きく息を吐いた。
《す、凄まじい戦いだァ～！　もはや我々には何が起こっているのかわかりませんが！　この試合が決勝並みに価値のある一戦であることは間違いない！》
「フーッ……覇気使いか。しかも昨日今日の練度じゃねぇな」
「ハァ、うぅ、くっ……」
仮面をつけているせいで分かりにくいがＭｒ．Ｓは今も辛そうだ。頭痛は相当なようで、距離を置いた一瞬に体がふらつく。それでエースの攻撃を止めたのだから驚きだった。
だが悪い反応ではない。
おそらくそれは彼が思い出そうとしているからこそ来る反応であり、エースは否定しなかった。
「お前を見てると、頭が痛くて仕方ない……！」
「そりゃおれのせいじゃねぇだろ」

「ハァ、だが、妙な感覚ならおれにもあった……」
Ｍｒ．Ｓが右手で鉄パイプを持ち、回転させながらも背面で構えた。
見るからに構えが変わり、右手は背後へ、左手は竜の手を思わす形で前へ出される。
おそらく攻撃のために思考その物を切り替えた。本番はここからだ。
笑みを浮かべたエースも足を広げて立ち、両腕を広げた。
「お前、おれを知ってるな。こっちの攻撃を潰しにきただろ」
「お互い様だ。ここまで当たらねぇってのも久しぶりだぜ」
外見からして攻撃主体の構え。
迎え撃つためではなく、自らも攻撃を仕掛けるため、エースの体の節々から火が現れる。
互いに戦闘が変わろうとしていた。
キリは楽しげに眺めていて動く様子が見られない。
二人を、特に苦しんでいる様子のＭｒ．Ｓを気にしつつも、Ｍｓ．Ｋは彼を警戒していた。
「長引きそうだね」
いつの間にか宝箱に尻を置いて座っている。
笑みを浮かべる余裕もあり、二人に対する恐怖心もない。おそらくどこかのタイミングで動き出すのではないか。そう思いながらＭｓ．Ｋは彼を無視する訳にはいかない。
この状況では援護はできない。従って彼らの戦いを傍観するしかなかったようだ。
今度はＭｒ．Ｓから攻撃を仕掛ける。
漆黒に変わった鉄パイプが高速で振るわれる。エースは屈むことで頭部への一撃を避け、その直後にすかさず追うかの如く、大上段から振り下ろされた。脳天を狙った一撃をエースは敢えて腕で受け止め、彼の右腕も黒くなっており、鉄がぶつかった音がする。
見れば見るほど不思議な技である。
鉄パイプはともかくエースの体は火でできており、防御する必要が

あるとは思わない。だが彼は迷うことなく防御のために腕を上げて、接触するとなぜか妙な音がする。
キリの目から見て気付いた不可解な点は二つ。
体や武器を鉄のように硬化させる技と、エースがそれを防御したことだ。
悪魔の実の能力について多少なりとも知っている者からすれば、それは不可解な行動である。
エースはさらに振るわれるＭｒ．Ｓの攻撃を全て避け続け、後ろへ跳んで距離を置いた。
ここまで彼は自らの最大の利点、ロギアの体を利用しようとはしていない。
ロギアの能力者は体まで自然界のエネルギーに変化するため、エースの体は全てが火で構成されているはず。わざわざ避けずとも攻撃は当たらない。
そう思っているのはキリだけではないのだが、エースの動きは迷わず決定されていた。
一旦離れて、Ｍｒ．Ｓがエースを追う。
それで十分だったのか、今度はエースも逃げない。
素早い動作で両腕を振り、気付けばエースの周囲で、地面に火のサークルができていた。
エースはしゃがんで地面に両手をつく。Ｍｒ．Ｓが鉄パイプを振り上げて飛び掛かり、先に行動を読んでいたかのようなタイミングで迎え撃った。
能力を使用し、地面に広げられたサークルが高く燃え上がったのである。
「炎戒――」
その兆候を認識した瞬間、すでに空中に居たＭｒ．Ｓは咄嗟に身を捩った。
「火柱ァ！」
巨大な火の柱がエースを中心に天へ伸びた。
事前に気付いた様子のＭｒ．Ｓだがどうすることもできず、空中で

できる最大限の回避を行い、壁のような火の柱に吹き飛ばされ、その際にマントに火が点いていた。
勢いよく地面に激突しながらも即座に跳び上がる。
激しい動きでマントの火を消し、滑るように着地しながら仮面はエースへ向けられた。
Ｍｒ．Ｓは足に力を溜めてエースの方へ飛び出そうとしている。着地の姿勢や力の入れ具合ですぐに予測できた。エースはその場を動かず両手を構える。
接近は許すが、リズムを崩すために牽制を行うようだ。
「火銃（ヒガン）！」
銃のように構えた両手から火の弾丸が撃ち出される。
一発受けただけでも体が吹き飛ぶ威力であるはずなのに、Ｍｒ．Ｓは鉄パイプで殴って掻き消しながら走ってくる。その姿には怯んだ様子など微塵も感じられない。
ここまでは予想通り。
エースは攻撃を止めると自分も駆け出した。
真正面から接近すると高速の蹴りを繰り出して、足が振るわれた軌跡に火が走る。直撃を避けても火が襲い掛かる危険な攻撃だ。Ｍｒ．Ｓは巧みに姿勢を変えて回避した。
蹴りを避け、パンチを繰り出し、鉄パイプで受け止められる。
予想していた以上に互角の勝負を繰り広げるためエースの表情は変わっていた。
しかしだからこそ、彼の確信を強める状況だったのである。
「グランドラインを逆走してて、ここまで苦戦するってのはなかったな……」
火を纏う蹴りが鉄パイプに受け止められた一瞬、エースは笑っているとも苦しんでいるともとれる表情で呟き、彼の武器を蹴って高く跳んだ。
空中で両手に火の槍を持ち、それらを全力で投げつける。
「神火・不知火！」
鉄パイプで打とうとした間際、異様な迫力を感じて咄嗟にＭｒ．Ｓ

が後ろへ跳ぶ。
回避した火の槍は地面に突き刺さって大きく燃え上がった。
Ｍｒ．Ｓが着地すると同時、全身を火に変えて宙を駆けていたエースが背後を取っていた。
即座に振り向いて鉄パイプを防御のために構える。
黒く染まったエースの拳が激突して、両者の動きが止まった。
互いに力を入れて押し合いながら、エースがそう大きくはない声で言う。
「だがこれが初めてとは思わねぇ。お前と戦って思い出すのはガキの頃のことばっかりだ」
「ハァ……ハァ……」
「お前は何も思い出さねぇのか」
仮面の下でぐっと歯を食いしばった。
Ｍｒ．Ｓが大きく鉄パイプを振ってエースを突き飛ばす。
敢えて抵抗せず距離を取ったエースは、強い意思で彼を睨んだ。
「思い出せねぇはずねぇだろ。それとも思い出したくねぇってのか？」
「ハァ、うるさい……！」
「どこで何やってたかは知らねぇし、言いたくねぇなら無理には聞かねぇがな。ここにはルフィが居るんだ。あいつがどんな想いで生きてきたか――！」
「ぐぅ、頭が……痛む……！」
「いつまでそんな仮面つけてやがんだ！　別人にでもなったつもりかよ！」
固く握った拳が黒く染まっていき、手首より上、エースの右腕が大きな炎に包まれた。
同じくＭｒ．Ｓが竜を思わせる構えを見せ、右手が黒く染められていく。
「竜爪拳――」
「いい加減目ェ覚ましやがれ！　サボ!!」
両者が地面を蹴って接近する。

この時、二人の視線はかち合い、互いの存在だけを認識する一瞬がある。
不思議とその場面だけは誰の目にもスローモーションに見えていた。
「竜の鉤爪!!」
「火拳!!」
そして今、覇気を纏った二人の右腕が激突した。

トレジャーバトル　準決勝二回戦（２）

攻撃が激突した瞬間、爆発するように巨大な火が辺りを包み込み、周辺が一切見えなくなった。
離れていたキリやＭｓ．Ｋですら凄まじい熱気を感じるほどの規模である。
観客は驚愕して言葉を呑み、さらに盛り上がりを見せる者も少なくない。
《エースの火拳が炸裂ぅ～っ！　Ｍｒ．Ｓ選手は生きているのか!?
空に居ても熱気を感じるほど凄まじいこの一撃で、まさか生き残っているとは思えないが……！》
パリン、と音が聞こえた。
気付いたビビは島から目を離して隣を見る。
「あ……ルフィさん、お皿が。それにお肉も」
おやつ代わりに肉を食べていたルフィが、大好物であるそれを地面に落としてしまっている。先に地面を見て音の出所を探ったビビは、その場へしゃがもうとしてやっと気付いた。
ルフィの様子がおかしい。
先程の笑みが消えてじっと島を眺め、呆然としている表情だった。
今までそんな姿を見た経験がなかったこともあり、ビビは思わず言葉を失う。
「サボ……？」
エースの叫びが聞こえて反応していたらしい。
どうすればいいかはわからないが、落ちた肉と割れた皿を片している場合ではないのだろう。
戸惑いながらビビは試合を見続けることを決めた。
轟々と火が燃えている。
草が燃え、家が燃え、辺りは火の音に包まれながらも不思議と静かだった。一時とはいえ生物の気配を大きな炎の中に包み込み、眺める人々を心配させた。
しかし二人はやはり生き残っていたようである。

エースが腕を振っただけで、周囲を包んでいた火が消えてしまう。
どうやら彼の能力は常人が考える技量を遥かに上回っているらしい。まるで完全な支配だ。
火が消えた時、遮る物が無くなってＭｒ．Ｓの姿も観衆に確認できるようになる。
身に纏っていた黒いマントが焼け落ちていた。
それだけでなく仮面が割れて、破片がパラパラと落ちていく。
そこに居たのは素顔を晒した一人の青年だった。地面に膝をついてしゃがみ込み、戸惑った表情でエースを見つめ、少なからず動揺していることが伝わる。
左目の付近に火傷の痕が窺える、金髪の青年。
精悍な顔立ちの人物である。
エースは懐かしそうにその顔を認めて、Ｍｒ．Ｓ――サボもまた、複雑な顔をしていた。
「ようやく、顔を見せたな」
確信に近い感覚があったものの、その顔を見た時、自分が何を思うかまでは想像できなかった。
いざサボの顔を見た瞬間、エースは自分でも驚くほど冷静だった。
やはり間違いない。彼が知る兄弟の姿である。
当然子供の頃とは見違えるほど成長しているが、その人物だけは間違うはずがない。
エースとサボは視線を合わせて黙ったまま。
短い時間だったとはいえ時が止まったかのような静寂が広がる。
素性を隠すマントと仮面を失って、本人より焦っていたのはＭｓ．Ｋ――コアラという少女だ。
彼女自身はまだ顔も外見も隠した状態。自分よりもサボを心配するところを見れば、素性を隠す理由もなんとなく想像できて、それなりの理由があるのだろうと思われる。
コアラは半ば無意識的に思わず動き出そうとしていたようだ。
その動きを止めさせたのはキリの声だった。
「まだだよ」

火拳の威力を見ても全く動じず、平坦な声で告げられる。
コアラは一気に冷静になって彼へ目を向けた。
宝箱に腰掛けて座り、自分の膝に頬杖すらついて冷淡に戦況を眺めている。その目には一切の恐れがない。それどころか柔和に微笑む余裕もある。
全身に冷や水を浴びせられたような衝撃があった。
仮面で見えにくいことすら忘れてじっとキリの顔を見つめて、コアラはそっと背を伸ばす。
「エースと互角に戦える人間がこんなところに居るとはね。ただいくらなんでも無名ってのはおかしいんじゃないかな？　海賊っぽくもないしさ」
「どうして、海賊じゃないと思うの？」
「手配書を見るの、癖になってるんだ。顔と名前を覚えるのもわりと早くてね」
キリが彼女へ振り返って笑顔を見せる。
邪気を感じないことが逆に怪しさを感じさせた。
「君らの顔は見たことがない。なら海賊じゃないよね」
「私の顔は見てないはずだけど」
「まぁね。でも見なくてもわかる。魚人空手を使える人間なんて珍しいし」
思わずしてしまいそうになった舌打ちをぐっと堪える。
可能性として、何も知らないからこそカマをかけている場合もあり得る。あれこれ喋ってはいけない相手なのだと判断して意識的に口を閉ざした。
それでもキリは気にせず言う。
「この島、色んな人が集まるからね。怪しいこともいっぱいあるのか」
「……何の話かな」
「サイファーポールも来てるって噂を聞いたんだ。でさ、あの人たちが血眼になって探す相手なんて限られてくると思うんだよね。例えば――」

そこで言葉を止めて、キリは再び試合に目を向けてしまう。
「もうちょっと待っててね。決着ならあの二人がつけてくれるから」
「それは、私を脅迫する気？」
「ううん。ただ気になったことを喋っただけ。あ、でも、こういうのって誰彼構わず言わない方がいいよね。ごめん、気をつけるよ」
改めて釘を刺され、いよいよコアラは戸惑う。
戦わずして勝つ。彼の態度にそんな意志が見えた気がした。
おそらくは推測で話している部分も多いのだろうが、それでも集めた情報を武器にする彼は末恐ろしいと感じる。
放っておけば大きな障害になるのではないかと思うほど、彼は底が知れない。
一方でサボが立ち上がり、エースと正面切って対峙する。
まだ頭痛は続いている。だが先程に比べれば幾分マシになったようだ。
フーッと息を吐いて、気持ちを落ち着かせてから顔を上げた。
戦闘の再開は時間の問題。
そんな状態でサボはぽつりと呟いた。
「名前まで知ってるとはな……どうやら本物らしい」
「当たり前だろ」
「なら」
手の中で鉄パイプをくるりと回して、改めて構えられた。
「この頭痛を止める方法はあるみたいだ」
仮面を失って顔が見えることで、さらに迫力を増した気がする。目と目を合わせたエースは彼の強さを如実に感じて気を引き締め直した。
油断ならない相手。元よりそう思っていたが今はその気持ちがさらに強い。
多くは語らず、どちらも身構えて戦意を漲らせた。
「行くぞ」
「来い」

サボが駆け出し、素早くエースへと接近していった。
正面からの芸の無い突撃であったが、スピードは速く、迷いがないためそれを見る者は動揺せずにはいられない。普通の人間なら、の話ではあるが。
エースは一切恐れずに彼を迎え撃った。
鉄パイプで攻撃しようと考えていたサボに対して、エースはそれよりも早く攻撃を繰り出す。自身の腕を振るうと火が鞭のように伸びて空中に軌跡を残し、敵を近付けさせない。
攻撃でありながら防御。これを見てサボは咄嗟に回避する。
幾重にも張り巡らされて襲ってくる火を避け、素早く的確に足を運び、迷わず前へ出た。奇跡的にも思える光景だが攻撃を掻い潜ってエースの下へ辿り着いたのだ。
鉄パイプが振り上げられ、攻撃の最中にも全貌が黒く変わっていく。
それを見てエースの腕も同様に色が変わった。
腕で鉄パイプを受け止めて、再び金属音が鳴り響いた。
エースは即座に右足を振り上げ、サボの体を蹴り上げようとする。内側から火を放つその一撃は決して軽くはない。だがサボもまた逃げずに攻撃を行った。
硬化された〝竜の爪〟がエースの腹を捉える。
同時にエースの蹴りがサボを捉え、強烈な熱を感じさせながら蹴り飛ばす。
両者は弾かれたように宙を飛び、しかし着地する前から姿勢を変え、地面に足が着くと同時に駆け出した。そうしてまた激突するのである。
それは、島の地形さえ変えかねない戦いだった。
エースの炎が迸る度、島にある物は一瞬のうちに破壊され、サボの爪が物を掴む度、島の大地が大きく抉り取られて姿を変える。
時間にすれば一分も経っていない。
彼らが飛び回るだけで観客たちは混沌と、決して敵わないという絶望を思い知る。

もはや人間ではない。誰もがそう思い、祭りの気分は吹き飛ばされて言葉を呑んだ。
一撃叩き込む度に、常人では耐えられない痛みと傷が与えられる。それでも二人は動き続けた。それが義務であるかのように、楽しいと言わんばかりに。
ルフィはそんな二人の戦いを、何も言わずにじっと見ていた。
「いやぁ、あれはすごいなぁ」
唐突に話し始めたキリの声を聞き、コアラは彼の顔に視線を動かした。
「相手になると死ぬね。全然勝てる気しないや」
エースの拳をサボが腕で受け止める。
拳か、或いは腕から放たれた炎が螺旋を描いて、サボの体を吹き飛ばす。炎に包まれた彼の服は所々燃え始めるが、素早く体勢を立て直した彼が大袈裟に回転して跳ぶことにより強風を起こし、あっという間に火を消してしまう。着地した時には冷静な表情があった。
今度はサボが攻撃を繰り出す。
素早く接近してエースの攻撃を掻い潜り、半ば強引に見つけ出した一瞬の隙へ、〝竜の爪〟による一撃を叩き込んだ。受け流すこともできずに実体を捉えられて大きく吹き飛ばされる。
当たった左肩は皮膚が裂かれて血を噴き出した。
それはエースが発する火によって呆気なく蒸発してしまい、気にする時間もない。
両者の攻撃が正面からぶつかる。
もはや考えている暇もない。とにかく手数を多くし、避けて、相手へ届かせる。
二人は同じ心境で相手だけを見ていた。
「エースのアレは相当レベル高いね。まぁ白ひげ海賊団の隊長だし、ボクが知らない覇気って力も使えるみたいだし、ルフィのお兄さんだし、当然と言えば当然なんだけど。ただびっくりしたんだけどさ、アレでもまだ覚醒してないみたいなんだよね」
エースが繰り出す炎が広がり、空が赤く染められる。

それほどの激闘。サボはまだ生きており、地面が爆ぜて崩れているのは彼のせいでもある。
二人は今も対等に戦い続けていた。
崩壊する島の中で、互いの存在全てをぶつけ合う。
遠く離れた位置に居る観客が逃げるべきかと考えてしまうそれを見てもキリは笑みを崩さない。
「もう少し離れようか。でないと死ぬよ。エリア外に出る訳にはいかないけど、せめて端の方まで行って死なないように頑張ろう」
「君は……驚かないんだね」
「ん？　驚いてるよ。あの二人にはどんな策を使っても勝てる気しないからさ」
あっけらかんと言って立ち上がったキリが宝箱を持ち上げた。
軽い足取りで二人に背を向け、被害が届いていない港へ向かおうとする。そうしなければ被害を広げ続けている戦闘に巻き込まれてしまう。
コアラはすぐに歩き出せず、キリの背を見て問いかけた。
「嘘。そんな風には見えない。サボ君をよく知ってる私でも、あれを、あの戦いを見ると震えが止まらない……だけど君は、さっきからちっとも表情を変えない」
「そうかな。案外顔に出にくいタイプなのかもね」
「君は一体何者なの？」
「ただの海賊さ。今は麦わらの一味の副船長」
屋根を降りようとする寸前で足を止めて、わずかに振り返る。
キリは二人の戦いを笑顔で見た。
「ボクじゃエースに勝てない。能力の相性じゃなくて、実力がそもそも違い過ぎる」
コアラへ伝えるためだったのか、迷いのない声がはっきりと告げる。
「だけどあれくらい強い人は見たことあるよ」
バキィン、と妙な音が鳴って、互いの頬へ拳が突き刺さった。
エースとサボは体勢を崩したまま地面を転がる。しかしすぐに立

ち上がって前へ駆け出すと戦闘を継続させた。また互いの全力を注いで勝利を狙う。
両者はすでにボロボロだった。回避と防御を行うとはいえ、実力が拮抗するせいか、全てを避けることは不可能。その結果、二人は至る所から血を流し、かつてない疲労を抱えている。
それでもエースは笑みを浮かべていた。
島を崩壊させかねない戦いの中で、昔を懐かしむ表情だったのだろう。
対するサボも、彼を殴り、殴られて、痛みを覚える度に頭痛が軽くなっていく。
脳裏には懐かしく感じる山の風景があった。
「オォ、オオオッ――！」
サボが唸り声を発しながら地面を蹴る。
エースも自身から彼へ向かい、大きな火を放つ拳を握る。
「エースゥウッ！」
「ハッ……！　やっとらしくなってきたんじゃねぇか！　サボォ！」
再び〝竜の爪〟と〝火拳〟が激突し、爆発するように巨大な炎が巻き起こされた。
サボは炎に巻かれながら吹き飛ばされて地面を転がる。一方のエースは腕が痺れるほどの衝撃を受けており、少なからず地面を滑り、後方へ押し戻された。
二人の実力はほぼ互角。だが能力者であるか否かという大きな違いはあった。
サボだけが吹き飛ばされた理由はその一点にのみ存在し、それでも二人の戦いは拮抗している。
すぐに跳ね起きてサボが飛び出した。
エースが迎え撃って近距離での格闘を行う。
こうなれば細やかな技術など必要ない。己の力を信じ、覇気を信じて、一瞬の安堵も許すことなく互いの体へ攻撃を叩き込む。当然どちらもただでは済まなかったがそれでもよかった。

まるで子供に戻ったかのような、ただの喧嘩にも見える。
ただその力が島を破壊しそうだというだけで、二人は懐かしさを感じていた。
きっかけはサボの一言。
エースの頬を殴りながら不意に笑みを浮かべて、瞬間的に目の色が違って見えた。
「ハァ、最終的な戦績は、どうなってたっけ……」
「アァ!?」
「それも忘れちまったみたいだ――」
殴り飛ばされたエースが崩壊した家の壁に激突して、しかし体が火であるためさほど衝撃も痛みも受けずに地面へ着地する。
その時にはサボが移動し終わっており、地面に硬化した両手を突き刺していた。
「物には必ず核がある。この大地ならここだ。今、それがわかった……」
《おぉ～っとあの構えはッ!? バトルロイヤルDブロック、天然のリングを一瞬で破壊し、参加者のほとんどを脱落させたあの技か!? そろそろ決着が決まる!》
「チッ……!」
「死ぬなよ、エース。竜爪拳」
ぐっと力を込めて、地面に突き刺さった両腕を起点に至る所が抉れた地面にヒビが入った。
「竜の息吹!」
直後、地面が爆ぜた。
試合のエリアとなっている大部分が消し飛ぶほどの衝撃が広がり、粉々に砕けた岩盤が無数に宙を舞って、土や草や建物の残骸も同じく。全てが爆発したように空へ吹き飛ばされる。
轟音が鳴り響く状況下、エースは高くジャンプしただけで、逃れられてはいなかった。
空中に身を置く彼の周囲には岩や土や木々など、様々な物がある。しかしそれらがぶつかったところで火の体にダメージはなく、目眩ま

し程度にしかならない。
本当の狙いは別にある。
地面を消し飛ばしたサボは、起点となったその場所に立っていた。
彼が居る場所だけが元の姿で足場を残しており、彼の体を支えている。
エースは全身を火にして空中を走った。
待っていたのだ。
最後の確認とでも言うべきか。サボは覚悟を決めているらしく、全力の一撃を繰り出し、これを最後にしようと決めている。それは目を見ただけのエースにも伝わった。
相手がそう考えるならばエースにも拒否する意思はない。
駆けてきた火がサボの目の前で大きくなり、エースの姿となる。
すでに拳は振り上げられている状態だ。
視線を交わして、意思も同じく、全ての力をその一撃へ注ぎ込む。
「竜爪拳――」
「武装硬化――」
接触はほんの一瞬の出来事。常人には見えない速さだった。
「竜王!!」
「火拳!!」
二人の腕が激突した瞬間、凄まじい衝撃が空気を伝わって走り、海にまで広がった。
エースの火拳によって二人の姿は巨大な爆発に呑み込まれて見えなくなる。
その時、激突の衝撃で海に生まれた波紋が大きな波を起こしたのか、船は揺れていた。ルフィはそれでも必死に目を開けて試合を見つめ、ビビとカルーも欄干に掴まりながら目を凝らす。
港へ退避していたキリとコアラは凄まじい強風を感じて海に落ちないよう力を入れている。
観客たちはモニターから一瞬の閃光を見、時が止まったかのような一瞬の静寂を感じていた。
ほんの一瞬の出来事だが永遠にも感じられる瞬間。

轟音が鳴り響いた直後に奇妙な静寂を感じて、実況すらも声を出せずに呑み込まれる。
そうして、激突の結果を見た。
燃え上がった巨大な炎が消え、視界が変わる。
荒れ果てた大地。家々は跡形も残さず、巨大なクレーターが大地に刻まれ、穏やかな元の姿など見る影もない。そこは試合が始まる前とは全く異なる様相に変貌していた。
それは一つの島が死んだとすら思える凄惨な光景だ。
その原因となった二人は、クレーターの中央で倒れていた。
脱力して大の字になって空を見上げ、互いの顔を見ることもなくぽつぽつと話し始める。
「おれは、革命軍に命を救われたんだ」
サボが話し始めたことでエースは静かに耳を傾ける。
「天竜人の砲撃を受けて船が壊れた。そのまま海に沈みかけたんだが、間一髪のところを拾い上げられたみたいでな。その時おれは、死にたくないって、お前ら二人の顔を思い浮かべて、周りで何が起こってるのかさえ理解できない状態だった」
流暢に言葉を紡ぐ様子から、もう頭痛が無くなっていることはすぐにわかった。
別段驚きはしない。子供のように殴り合う内、わかってしまったからだ。
こいつはもう大丈夫。
そう思った時、重くのしかかっていた物が消えて、彼も安心して息ができるようになっていた。
「ずっと違和感があったんだ。記憶は失ったけど仲間ができて、居場所もあって、だけど何かが足りない気がする。おれは一体誰なんだろうって……きっと心が欠けたまま生きてたんだ。仲間を手に入れてもずっと満足はできなかった」
「忘れたくなかったんじゃねぇか？　お前が持ってた大事なもんを」
「ああ……きっとそうなんだろうな。新しい物を手に入れても、代

わりになんてできないものをおれは持ってる。それをやっと思い出したよ」
フッと笑みを浮かべてエースが目を閉じた。
それを見た訳ではないのだが、サボも同じように目を閉じる。頬には安堵した笑みがあった。
戦いの余波を受けてか、いつの間にか彼らが居る島の上空だけ、ぽっかりと穴が開いたように雲の姿が消えている。晴れた青い空がよく見えた。
そこはどこよりも自由を感じられる場所だった。
「ありがとう、エース。おれはやっと自分の大事なものを取り戻せた」
「バーカ。礼なんか言うな」
エースが穏やかな声で語り掛ける。
「おれたちは仲間じゃねぇ。兄弟だ。いちいちそんなことで礼言う必要なんてねぇよ。これは当たり前のことだ」
「それもそうだな……だから、約束する」
答えるサボも心底落ち着いた声色だった。
「もう失わない。おれはお前とルフィの兄弟だ」
「おう」
「もしお前らに何かあれば、おれが必ず助けに行く。兄弟として当たり前のことだ。いちいち礼なんか言うなよ？」
「へっ、わかったよ」
ふとした瞬間、どちらも口を閉ざして静寂が生まれる。
試合は終わっていないが彼らの戦いは終わった。
その時、ハッタリーの絶叫が響き渡る。
《試合終了〜！》
彼の声が静寂を突き破り、再び音を取り戻す。
《勝者は！　エース＆キリペア〜!!》
コールされた直後に我を取り戻した観客たちがわっと歓声を発した。

決勝直前

全身至る所から血を流した状態で、エースは平然と立ち上がった。
久々に体が重くなるほどの疲労感を感じている。それほどサボは強かった。幼い頃に手合わせをした時でさえこれほどの疲労感はなく、互いに成長した証といったところだろう。
サボもまた平気な顔で立ち上がった。
こうして向き合うのも妙な感覚であるが、懐かしくもあり、二人は視線を合わせて苦笑する。
勝負はエースとキリの勝ち。
良いタイミングでキリが宝箱を運んだのだろう。
それを証明するかのようにコアラが二人の下へ駆けつけてきた。
「サボ君……記憶戻ったの？　革命軍やめるの？」
「いや、やめねぇよ。ただちょっと事情は変わったみたいだ」
焦げた服を叩いたサボはすっきりした表情で顔を上げる。頭痛も無くなって失った記憶を全て取り戻した。まるで生まれ変わったかのような感覚である。
向けられる笑顔は妙に晴れやかだ。
驚いたコアラも彼の変化を如実に感じる。
「うん、そっか……兄弟、なんだね」
「ああ。今の今までなんで忘れてたんだろうな。自分が情けねぇよ」
「ま、無事に終わったんならそれでいいさ。それに」
エースは帽子を被り直して視線を外す。
わずかに苦笑し、やれやれと言いたげな顔だ。
「おれなんかより謝んなきゃならねぇ奴がまだ残ってるだろ？」
居ても立っても居られず走ってくる影がある。
彼の姿を見たエースは驚きもしない。そう来るだろうと思っていた節さえある。
わからなかったのはサボの方で、振り向いた時、すでに目の前に姿があってわずかに驚く。

泣きじゃくってひどい顔のルフィが、思い切り彼へ飛びついてきつく抱きしめた。
「サボォォォ〜ッ!!!」
「うおっ。ルフィ……!」
恥も外聞もなく、涙も鼻水も垂らして、ルフィは感情のままに喜んでいた。激突するように彼を抱きしめて、もはや兄だと信じて疑わずに離そうとしない。
サボも心底嬉しそうに笑顔を見せ、ルフィの顔を見つめる。
「おまえばんばよっ!? イィえぱあんだな!! おえェきィひんがんがくおんおあいおあァあ!!」
「ありがとな、ルフィ。無事に会えてよかった」
サボもまたルフィを抱き留める。
優しい手つきで愛情を感じさせる姿。見たことのない表情にコアラも困惑する。
「傍に居てやれなくて悪かった。言い訳にもならねぇが、今まで記憶を失ってたんだ。お前らのことまで忘れてたみたいでよ……すまなかった」
「う゛ぅ、いいんだ……! ザボが生きでだから……!」
「ありがとう。もう何があっても忘れない。お前のそんな顔見ると余計にそう思うよ」
優しく笑う顔は覚えている通りのもの。ルフィは尚更大粒の涙を零す。
事情を聞いていないコアラだが、そんな様子を見ているだけで、相当の想いがあったのだろうと気付くことはできる。涙は流さずとも彼女も唇をきつく結んで感極まっていたらしい。
涙で喜ぶルフィを見てしばし口を挟めなかった。
エースはそんな彼らの様子を見守る。
試合が終わったとあって陣地からキリが歩いてきた。
いつの間にかルフィが居ることに驚きつつ、なんとなく察した様子。
唯一平然としているエースに歩み寄って質問した。

「えーっと、どういう状況？」
「やっと思い出しやがったんだよ。手間かけてくれるぜ」
「そうだねぇ。正直もう修復不可能なくらい島が壊れてるし」
「あー……悪いことしたな」
「まぁでも、問題は解決したんでしょ？」
微笑んで聞けばエースは軽く頷く。
ルフィはキリの存在にも気付けないほどサボに気を取られていて、平静を装っているがサボもわずかに目を潤ませ、内心は冷静でないようだ。
二人で彼らのやり取りを見守りながら話を続ける。
「サボはおれたちの兄弟なんだ。ガキの頃に死んじまったと思ってたんだがな」
「それで、実は記憶喪失だけど生きてたと」
「ああ。正直、またこんな日が来るなんて思ってなかったが……」
眩しい物を見るように目を細めて、エースはしみじみと言う。
「とにかくよかった。ルフィのやつはまた泣き虫になってるけど、流石に今回は同意したいところだな。死人が生き返るなんて、グランドラインはつくづく何が起こるかわからねぇ」
「そうだね……」
少し複雑そうな顔とはいえ、キリも同意して頷く。
その直後にふと気付いて言葉を返した。
「って、あの人は結果的に死んでなかったでしょ」
「いや、おれたちの中ではな」
ずいぶんな言い方でくすりと笑う。
しかし悪気もなくエースは笑っており、かなり機嫌は良さそうだ。
何やら話している様子のルフィやサボを見ても嬉しそうにしており、先程の激闘もどこへやら、和やかな空気が漂っていた。
なんとなく気が抜ける時間が少し続いた後。
実況していたハッタリーの声を聞き、キリが顔を上げる。
しばらく続いた死闘が決着を見せ、いよいよ残すは決勝戦のみ。
盛り上がりはまだ冷められては困るところで、実況によって観客の

気分を高めていたのだろう。町に居る観客は笑顔を取り戻して次の戦いを楽しみにしていた。
《ついに役者が出揃った！　勝つのはルフィ＆ビビペアか！　はたまたエース＆キリペアか！　泣いても笑ってもこれが最後！　いよいよ決勝戦だァ！》
「もう次の試合に行くみたいだね」
「おれらの出番もまだ終わりじゃねぇってことか」
「なぁに、あと一戦だけさ」
エースとキリが空気を察して移動を始めようとする。
当然、そこに居る面々へ声をかけるのを忘れなかった。
「おいルフィ、いつまで泣いてんだ。まだ大会は終わってねぇんだぞ」
「あっ、キリ！　見てくれ、おれの兄ちゃんだ！」
「革命軍のサボだ。ルフィがいつも世話になってるな」
「いえいえ、こちらこそ。副船長やってるキリです。よろしく」
快活に挨拶を行うサボにキリが頭を下げた。
辺りの風景は焼かれて砕かれた地面がほとんどであり、荒廃した様子を感じさせる。その中で呑気に挨拶をするのはどうかしていると本人たちでさえ思った。
サボは自己紹介の後、傍らに立っていたコアラを紹介する。
呆れた様子ながら仮面を取り、彼女は素顔を見せて二人と目を合わせた。
「こっちはおれの仲間のコアラだ」
「も～……やっぱりこうなるんだね、君は。あとでちゃんと説明してもらうから」
「ああ、わかってる」
「やぁ、さっきはどうも」
「どうも。本気で脅してくれたよね」
「いやいや、ごめんなさい。ただの冗談だよ。まさか本気で勝てるなんて思ってないしさ」
むっとした目で見てくるコアラに苦笑し、キリはひらひらと手を

振って謝罪する。試合が終わればいがみ合う必要はないのだ。やけにあっさりした態度だった。
コアラも小さく溜息を洩らし、敵意を消す。
彼ら二人がそうしたことでひとまず喧嘩になるのは避けられたようだ。
ルフィがやけに嬉しそうで、キリは苦笑して歩み寄った。
笑顔を浮かべる余裕はあるようだが相変わらず涙と鼻水でひどい状態だ。
「ルフィ、顔ぐちゃぐちゃ」
「いやぁーよかったなー。サボが生きててよかったなー」
「ははっ、泣き虫は治ってないのかルフィ」
「お前が出てくるまでそうでもなかったんだよ。誰のせいだと思ってんだ」
「そりゃまぁ、おれだな……」
「まったく、ルフィもルフィだがお前もお前だ。割食ってんのはおれじゃねぇか？」
「よく言うよ。ガキの頃はおれがよくフォローしてた」
「そうだったか？　んなことねぇだろ」
「お前らが自由に動き回るから、おれがどれだけ手助けしてやったか――」
キリが服の袖でルフィの顔を拭ってやり、彼は抵抗せずにしきりに笑う。
その一方でエースとサボは親しい様子で話していて、昨日の今日の関係ではない風体がこれでもかと表されている。見ていたコアラは不思議な心境だった。
記憶を失っていた頃に出会ったサボが、これほど嬉しそうな顔をするとは。
幼少期の記憶は彼にとってそれほど大事だったらしく、何を思うでもなくじっと見つめる。
彼らはそうして和やかにしていたものの、大会はその分停滞してしまう。

困った顔でハッタリーが島まで降りてきた。
マイクを使って注意するのも悪いだろうと近寄ってきて、自身の声で五人へ語り掛ける。すぐに振り返ったのがキリで呑気な顔で軽く手を振った。
「あのー、みなさん。盛り上がってるところ悪いんですが試合の方が……」
「はいはい。じゃあすぐ行きますんで」
「お願いしますよ。あ、それと敗退したチームは別の船に乗ってもらいますんで、Ｍｒ．Ｓペアには別の船に乗ってもらうのでよろしく」
「サボ、こっちの船乗ってけよ。試合見ていくんだろ？」
「あの、聞いてました……？」
うきうきした顔のルフィはサボを見ている。ハッタリーの声は聞こえていないらしい。
すっかり弟の顔で、サボも笑顔で答えた。
「いや、大人しく敗者用の船に乗るさ。勝ったのはエースたちだ。おれの仲間も来てるし、顔がバレた以上早く合流しないと」
「そっかぁ……」
「ちゃんと試合は見てくよ。せっかくやるんだ。負けんなよ、ルフィ」
「おう！」
「バカ言え、おれがルフィに負けるかよ」
サボが促したことで一同はようやく歩き出す。
焼け焦げた地面を踏みしめ、クレーターから這い出ると、海へ向かって移動した。
幸い船は出場者用も敗者用も無傷の状態。分かれる間際になってルフィが大きく手を振る。
「サボ！　またあとでなぁ～！」
「ああ。しっかり頑張ってこい」
手を振られて互いに見送り、船はそれぞれ移動を開始する。
敗者であるサボとコアラは町へ戻るためブルースクエアへ向かう。

勝者として残った四人とカルーは常夏島へ向かい、ついに決勝が行われる運びとなった。
船上では次に備えるため、エースが大会スタッフの手により怪我の応急処置を行っている。覇気で傷つけられた体は治療を必要としており、今頃はサボも応急処置を受けているだろう。
痛みや疲労も相当で、彼にとっては連戦となる。
とはいえ、上機嫌そうな彼は不利とも思わず戦う気だった。
何があったかわからず困惑しているビビにルフィがサボについて説明をしている。
それを眺めつつキリがエースへ問いかけた。
「傷の方はどう？」
「大したことねぇ、とは言えねぇが、まぁ大丈夫さ」
「そっか。ねぇ、次の試合のことなんだけどさ」
「ん？」
「わがまま聞いてもらっていい？」
早くもそれがいつも通りと思える柔和な笑顔でキリが振り返った。
表情は珍しいものではないのだが、何か感じ取ったのだろう。エースは即座に頷くのを敢えてやめたらしく、わからないふりをして質問する。
「先にこっちがわがまま言ってる立場だからな。別に構わねぇが、なんかあったか？」
「せっかくの兄弟対決だからさ。エースも楽しみにしてるのかと思って」
「そういうわけでもねぇよ。言っとくが、この状態でもルフィに負ける気はねぇ」
「うん」
兄貴として、ということなのだろう。
キリは素直に頷いた。
「好きにしろよ。おれの用は終わった。どっちが勝ってもお前らの優勝には違いないんだし、見届けることくらいはしてやれる」
「ありがとう」

そう言ってすぐルフィを見て、彼の名を呼んだ。
「ねぇルフィ」
「ん？　どうした？」
「もう優勝はうちの一味ってことは決まった。でもせっかくの機会だし、適当に流して試合を終わらせるってのももったいないでしょ」
「んん、そうだな」
「次の試合、ボクと一騎討ちしよう」
平然とそう言われた。
ルフィは少し驚いた顔を見せて、それ以上にビビとカルーが驚愕していた。
確かに賞品をもらえることが決まったからといって適当に試合を終わらせてしまうのは申し訳ないと思うものの、なぜ一騎討ちなどと言い出すのだろうか。堪らずビビが口を開く。
「一騎討ちって、どうしてそんなことを？　別にそんなことしなくても――」
「思い付いたのはトーナメント表を見た時だった。エースとＭｒ．Ｓが潰し合う展開になった時点で想像できたから。決勝は必ずこの２チームがぶつかるってさ」
「必ずって……わかったの？　何が起きるかわからないのに」
「わかったよ。こうなる以外考えられなかったしね」
キリは動じていない顔でつらつら語る。
本当にこれ以外の展開を考えていなかったのか。或いは考える必要がなかったのか。
ビビは口を閉ざし、真剣な目でキリを見るルフィの背を見つめた。
「もちろん大会の本分はチーム戦だし、そっちの方が良いなら無理強いはしないけど」
「いいぞ。おれとキリが戦うんだな」
「うん」
「ルフィさん……いいの？」
心配するようなビビの問いかけにルフィはすぐ頷いた。
「そういえば、ボクらが戦うなんて初めてだね」

「そうだな。ケンカもしたことねぇや」
「まぁ大体ボクが先に折れるし。そういう意味じゃルフィに勝てる気なんてしないよ」
「しっしっし。いつもわりぃなぁ」
「そう思うならもうちょっと考えてから動いてもらっていい？」
「考えてるぞ、おれは」
「ボクにはそれはできないって聞こえた」
真剣に一騎討ちだと言った割には和やかな空気だった。
ひょっとして自分が思うほど大変な事態ではないのだろうか。
彼らの会話を見たビビは困惑した表情でカルーへ振り返り、同じく心配している様子の彼と試合の展開を想像し、しかし全く読めないことに唇を噛んだ。
ハッタリーが観客を盛り上げ、船は戦いの舞台へ向かっていく。
エースは笑みを消して二人の姿を眺めていた。

トレジャーバトル　決勝戦

《ついに！　トレジャーバトル決勝戦～！》
町全体が震えるほどの歓声があった。
いよいよ大会の最後を締めくくる一戦。エースとサボの戦いを見た後では果たして見応えのある試合になるのかという不安もあるが、観客は楽しみにしている様子である。
すでに常夏島には選手が揃い、開戦の時を待っていた。
《勝つのは抜群のチームワークで大会を引っ張ってきたルフィ＆ビビペアか！》
紹介を受ける間、ルフィはじっと前だけを見て動かない。
いつにも増して真剣な顔にビビは戸惑いを隠せないようだった。
《それとも、人気ナンバーワンの男が率いるエース＆キリペアか！》
キリも今ばかりは笑みを消して、真剣な眼差しをルフィへ向ける。
治療を終えて包帯を巻き、腕組みをしたエースはそんな彼らを見守るべく、動く気を見せない。
《誰もが注目する最後の一戦！　泣いても笑ってもこれが最後だ！　準備はいいかァ！》
盛り上がる声を聞きながら港でモニターを眺めていた麦わらの一味は落ち着いていた。
一時はどうなることかと思ったが、結果だけ見ればどちらのチームも仲間であり、優勝はもはや間違いないもの。試合を見る目も穏やかである。
なぜルフィがサボに抱き着いて泣いていたのかはまだわかっていないものの、後で会った時にでも説明してもらえばいい。なんにしても優勝はいただきだ。
ウソップやナミ、シルクやチョッパーも、安堵した顔でモニターを見ている。
それとは対照的に厳しい顔をしていたのはゾロとサンジだ。
「いよーし、これでとにかくエターナルポースは手に入るな。いよいよアラバスタか……」

「ここで余計な力使ってる場合でもないしね。問題は次なんだから。適当に試合終わらせて、さっさとアラバスタに向かいましょう。ビビのためにも」
「うん。ビビ、心配してたもんね」
「それじゃあルフィたちは戦わないのか？」
「そりゃ少しは戦うでしょうけど、本命はここじゃないでしょ。そこまで本気には――」
「それはどうだろうな」
ナミの言葉を遮るようにしてゾロが口を開いた。
自然と腕組みをして眉間に皺を寄せる彼に注目が集められる。
「あいつらが適当に終わらせると思うか？」
「だって、アラバスタに行くのはビビのためでもあるけど、キリのためでもあるのよ？　ここで無駄な体力使うくらいなら次に備えた方がいいじゃない」
「ナミさん、今回ばかりはおれもこのマリモと同意見なんだ。あそこにキリが居るからこそ素直に終わらせるとは思えねぇ」
サンジまでゾロに同意したことで彼女たちは言葉を失くす。
珍しいことだ。しかしそれだけ意見を曲げられないという事態なのだろう。
まさか本気で戦うのか。
不思議に想った面々は顔を見合わせ、再びモニターを熱心に眺める。
《それでは参りましょう！　決勝戦、Ｒｅａｄｙ～……ＧＯ!!》
そうこうしている内に試合が始まってしまった。
観客の熱狂を裏切るように、歩き出したのは二人だけ。
宝箱が置かれた中央の台座を目指してルフィとキリが歩いていく。
そのため観客は首を傾げた。
急いで走る訳でもない。落ち着いて歩を進めている。
戦う気がないかのようにも見えてしまった。
台座の上に飛び乗り、二人が対峙する。宝箱を挟んで立ち、どちらも真剣な顔つきで、視線がぶつかると少し笑みを浮かべた。

思えば、こうして向かい合うのは初めてだろう。
手加減無しで戦うと決めているルフィとキリはその意思を微塵も揺らがせなかった。
「じゃ、やろうか」
「おう。手加減なんかすんなよ」
「もちろん」
どちらもあっさりした挨拶を終えて身構えた。
やはり彼らしか動かない。この時になるとハッタリーや観客も気付き始めて、反応は総じて期待外れと伝えたがる声ばかりだった。
求めていたのはエースの活躍であって、ここまでさほど活躍していないキリではない。
本人には届かなかったが町中には彼らを糾弾する声が溢れ出した。
《おっと、ルフィ選手とキリ選手、まさか準決勝二回戦を見習って一対一の決闘か!? 他の二人が動く様子はない! どうやら一味の船長と副船長で決着をつける気のようだ!》
「ふざけんなァ! 紙野郎に何ができるってんだ!」
「エースを出せェ!」
「引っ込めガキどもォ! お呼びじゃねぇんだ!」
観客の野次は届かず、届いていたとしても二人は相手にしなかっただろう。
キリが静かに目を閉じた。
体から力を抜き、思考が変わって、すぐに意識が切り替わっていく。
何が変わったという訳でもないというのに、見ただけでも雰囲気の変化は感じられた。
ルフィは笑みを消して真剣な顔を見せる。
(今持ってる紙はそう多くない……大したことはできないな。だけど)
それでいいと判断して、キリが目を開ける。
彼の体の至る所から小さな紙片が出てきて宙を舞った。
キリが武器とする紙はあらゆる場所へ携帯されている。服の下に仕込んだ専用のホルスターが数個に加えて、紙でできている体に直接

貼り付けていたりもする。
それらを周囲にばら撒いて、それら全てが彼の支配下にあった。
バサバサと音を立てて空中を動き、手の中で両刃の剣となる。
両手に紙の剣を持ち、硬化させ、ゴム人間にも通用する武器を手にした。
すでにキリは目つきを変えている。いくら仲間同士だからとはいえ、八百長のような試合をして終わるつもりはない。やるのならばどちらが勝つかだ。
ルフィもそれを了承していて、ぐっと拳を構えた。
手にした剣以外の紙は地面に落ち、唐突にキリがそこでわずかとはいえジャンプする。
高さ自体は大したことない。しかし気になったのはその軽さだ。ふわりと落下する様は本来の人間の動きにはあり得ないもので、重力に従いながらも軽さを感じる。
キリは準備をするように何度か跳び、ふわり、ふわりと上昇と落下を繰り返した。
《こ、これは?! まるで舞を舞うかのようにキリ選手がジャンプしている! 一体これから何が始められるのか! あの状態で戦うのかァ!?》
数度繰り返した後、音もなく着地して、突如動き出す。
キリは真っ直ぐ駆け出し、宝箱を飛び越え、風を切ってルフィの眼前へ到達する。
両腕を横へ伸ばした状態だった。そのまま勢いよく体を回転させる。まるで独楽のように回りながら剣を振るうため、その脅威はルフィが驚くほどであった。
咄嗟の判断でルフィが後ろへ跳び、台座から降りる。
ルフィが砂浜に着地するとキリも追って、台座の高さを利用して上から襲い掛かった。
キリの強みは速さでもなければ優れた筋力でもない。圧倒的な〝軽さ〟である。紙の体はそもそもが普通の人間より体重が軽く、さらに彼は紙を操作する能力を得た。

体を紙にさえ変えればそれさえも操作が可能。
皮膚や筋肉、内臓に至るまで、紙に変えればさらに軽くなることは難しくなかった。
しかしそれは人体が本来持つ機能を阻害してしまう行動で、長時間使えば体にとって害になる。
言わば諸刃の剣であった。
それでもキリが自身の体を軽くし、速さに拘ったのは、他ならぬルフィに勝つためだ。
普段より体重を軽くした彼は、一度地面を蹴るだけで凄まじい速度を誇って遠くまで進む。動きは直線的とはいえルフィが驚くのも無理はない。
体を回転させて振るう剣を避けるため、ルフィはその場でしゃがんで頭を下げた。頭上を紙の剣が通り過ぎていき、しかしすぐにもう一本が頭を狙って襲ってくる。
今度は即座に跳び上がる。
逃れるようにキリとの距離を離したものの、間を置かずに彼も跳んで後を追う。今ならその気になればルフィより高く跳べる。当然剣が振るわれて攻撃がやってきて、ルフィは空中で苦しげに姿勢を変えて回避しなければならなかった。
「ゴムゴムの――！」
確かに速いがルフィとて戦闘は数多経験しており、攻撃を見切れない訳ではない。
紙一重で辛うじて避け、必死に反撃の隙を窺う。
その頃には互いに落下の最中で、先に落ち始めたルフィが地面に背中を向け、頭上を取ったキリを見上げながら腕を伸ばす状況となった。
「ガトリング！」
両腕を素早く伸ばして素早いパンチを放った。
そこまで攻撃が当たらなかったのは、お互いについてよく知っているからという理由もあったのだろう。ルフィがキリの攻撃を掻い潜ったようにキリもルフィの攻撃では驚かない。

正面から顔面に拳が迫った時、キリの顔が厚さを失い、ひらりと紙の状態になった。拳は極端に薄くなった顔の傍を通り抜けて腕が伸びきる。

その直後にキリの全身が紙になって迫る攻撃の隙間を潜り抜けた。

狙ったところで紙を殴ることは難しく、またキリが意思を持って空中を動くため当たらない。

結局、どちらも一撃も受けずに地面へ落ちた。

先に着地したルフィが後ろへ跳んでバック宙のようにぐるぐる回り、直後にキリが着地する。

すでにキリが元の姿に戻っているため今なら当てられる。

ルフィは即座に駆け出した。

直接戦ったことがないとはいえ如何なる能力、如何なる戦法を用いるのかはそれぞれが理解しているのだ。それだけにこの勝負は決して簡単には終わらない。

少なくともルフィの直感はそう判断していたことだろう。

「ゴムゴムの！」

考える前に行動するのはルフィの良い部分でもあったが、そのせいか気付かなかったらしい。

常に全力で戦うルフィとは異なり、キリはこれまで本気で戦ったことなど数えるほど。

その分、ルフィがキリの戦闘を見た時間より、キリがルフィを見ていた時間の方が長い。

些細とはいえその違いは確かにあったはずだった。

キリはいつしか真剣な顔で一切の笑みを消している。

ルフィが左足を強く踏み込み、右足を振り上げていて、行動の全てを観察しようとしていた。

「鞭！」

伸びる足が大きく弧を描きながら迫ってくる。キリは敢えて前に走り、蹴りが自身に接触しようとした一瞬、がくんと転ぶように頭の位置が低くなった。

足先を残して、足首から腰までが紙に変化していた。

一見無理やりとも思える行動によってルフィの蹴りは空振りする。彼の攻撃を潜って避けたキリはぐっと足先に力を込め、自らを撃ち出すように前へ跳んだ。

能力を使って体まで改造したキリは軽く、速い。真っ直ぐ飛ぶとぐるりと回転する。

まるで大きな銃弾が飛んでくるようだった。

流石に驚いたルフィは伸ばした右脚を引き戻している最中で、残った左足で辛うじて跳ぶ。かなり無理な避け方だったがギリギリで触れずに済んだようだ。

ルフィは肩から砂浜を転がり、キリは剣を持ったまま両手で地面に触れ、宙返りをする。

どちらもすぐに立ち上がって正面から対峙した。

相変わらず言葉はなく、全力で攻撃を行う。

「フーッ、ハッ……」

「んん〜!」

キリが目線を落として深呼吸を繰り返し、今度はルフィが駆け出した。

単純なスピードはキリの方が速いかもしれない。しかし本能的に動くルフィは直感と視覚で彼の動きを見切り、上手く躱すことに成功している。

逆にキリはルフィを見続けた結果から行動を予想、回避を行う。

二人は対極の性質にあった。

ルフィが経験や常識に左右されず本能で動くのならば、キリは経験と情報を基に思考で動く。

対極に位置する二人の戦いは、しかし実力が拮抗しているため先の展開がまるで読めなかった。

ルフィは手足を伸ばすことをやめていた。キリは的確に攻撃を見極めて回避するため、不用意に伸びれば体が伸びきった瞬間を狙われると気付いたからだ。現在キリが手にする武器は斬撃に特化しており、彼がその気なら腕を切り落とされても文句は言えない。

故にルフィが選んだのは超接近戦。

伸びる必要もなく手足が相手へ届く距離。それだけ危険性も高いが確実だと思ったのだろう。
その距離は両手に剣を持つキリにとっても望むところだ。
だがこの時、キリは敢えて後ろへ跳んで逃げた。彼の呼吸を乱そうと考えたらしい。
敢えて追うのか、それとも体を伸ばすのか。
考える暇もなくルフィは前へ走った。
あくまでも狙うのは接近戦であり、それ以外の選択肢を一瞬の判断で捨てたようだ。この迷いの無さこそがルフィの恐ろしいところで、キリが警戒していた部分でもある。
いくつか可能性のある選択肢を考えていたが、ルフィが選んだのはキリが最もあり得そうだと思っていた行動。つまり迎撃の準備はできている。
キリは右腕を振って剣でルフィの頭部を狙った。
即座にルフィが頭を下げて避け、さらに一歩を踏み出す。拳はすでに握られていた。
それを振るわれるとまずいことは知っている。右腕を振り抜く勢いを使い、キリの左手が肩口から袈裟切りにルフィを狙って、堪らずルフィは横へ跳んだ。
赤いシャツを切り裂いて、その下にある素肌にも届き、わずかだが刀傷が刻まれる。
出血は少量。とはいえ初めて届いた瞬間でもある。
この機を逃すつもりはなく、キリが思い切って前へ出る。
「フーッ、ハァ……」
「くそぉ、こんにゃろっ！」
思う通りに進まないのか、ルフィが悔しげに迎撃の構えを取った。
キリが両腕を振り、剣で攻撃を繰り返す。可能な限りルフィの反撃が届かないだろう間合いを意識しつつ、できれば自分だけが攻撃できる距離を保ち続けた。
ルフィは必死に避け続けるしかない。
後退しても前進してもキリは距離感を変えない。非常に苦しい一

瞬だった。
「んんがァ！　ゴムゴムのォ！」
無理やりにでも状況を変えるためか、ルフィが空を目掛けて足を伸ばす。
頭上からの一撃。受ければ無傷とはいかない。
流石にまずいと感じてキリが後ろへ跳んで、その後でルフィの足が降ってきた。
「斧ッ！」
ドンッ、と強く砂浜を踏みつけて、素早く逃げたキリには舞い上がった砂さえも当たらない。
やっと一息つける距離ができた。ルフィは改めて駆け出す。
接近戦になればまた先程と同じ削り合いだ。
キリはルフィを牽制するように左手を振るい、剣先をぴたりと止めて彼の顔に向ける。
何かする気だと察したルフィが足を止めようとした時、音もなく、手が離されると剣が撃ち出されるように飛来してきた。回転まで加えてまるで銃弾だ。
今度こそルフィは目を剥いて驚愕して、大きく体を動かして避ける。
「うわっ!?」
姿勢が崩れた一瞬、キリがその隙を衝くべく足を動かしかけ、やめた。
妙な行動に気付きながらルフィが攻撃のため走り出す。
「フーッ……流石に苦しいか」
「おおおおっ！　ゴムゴムの――！」
「指揮紙」
拳を振りかぶって駆けてくるルフィを標的に、先程飛ばした剣が背後から襲い掛かる。
剣の形ではなく、一度バラバラになって、まるで背後から両手でするように彼の口と鼻を塞いでしまった。突然の行動で呼吸ができなくなり、ルフィは足を止めて驚愕する。

そうなれば今度はキリが攻撃する番だ。
見るからに動揺したルフィを仕留めるべく、右手の剣を思い切り振り上げる。
ゴムの体で刃を受け止めるのは無理。ならばとルフィは全力で地面を蹴る。
逃げるため勢いよく右側へ跳んで、苦しいのか、両手で口元を掻いて着地もままならない。
肩から滑るように地面に落ちて、ルフィはジタバタと転がった。
呼吸ができない。混乱も手伝って普段以上にすぐ息が切れて苦しくなる。そのまま耐えることなど不可能な話で、一刻も早く張り付いた紙を取らなければならない。しかし隙間なく張り付いた上に硬化までされてしまったそれは手で引っ掻いても剥がせそうになかった。
顔の下半分を覆われ、呼吸ができないルフィは焦る一方である。
対照的にキリは深く息を吐いて能力の使用を一部中断した。
肉体の変化を取りやめ、通常の状態に戻したようだ。これによって肉体への負荷が無くなり、少なくとも先程よりは体が楽になる。
窒息を待つ気もない。今こそ攻め時なのだ。
右手にある紙の剣を握り直して、キリは素早くルフィへと接近する。
彼もそれに気付いたのだろう。
倒れたまま苦しんでいたが唐突に飛び起きて、考えもせず地面を蹴った。
今度はキリが驚いて足を止める。
ルフィが逃げたのは波打ち際であり、浅瀬とはいえ自ら海へ頭から飛び込んだ。全身が海水で濡れると顔に張り付いた紙も剥がれ落ちて、口元が露わになって必死に呼吸を開始する。
「ぶはぁっ!?　はぁー、危ねぇ！　死ぬかと思った！」
波打ち際でぺたんと尻をついて座って、焦った表情で何度も深呼吸を繰り返す。
一時的にとはいえ戦闘が中断され、キリはくすりと笑った。
ハッタリーが反応できたのはその時になってからである。

《す、すっ、すごい戦いだぁぁぁっ!?　エース選手とＭｒ．Ｓ選手のような派手さはないが！　彼らもまた明らかに常人の域を逸脱しており！　これこそまさに決勝戦に相応しい戦いだろう！　両者全くの互角で勝負を進めているため、どちらが勝つかわからないっ！》

驚いたのか、静まり返っていた町中も彼の一言で爆発するように歓声を発する。

もはや彼らを野次る声などない。誰もがその戦いに魅入られていて、エースとサボのような派手さこそないとはいえ、静かな激闘に見惚れ、褒める言葉はいくら出しても足りないほど。

ブルースクエアは再び揺れるほどの騒がしさを取り戻していた。

一方でキリは笑みを浮かべたまま動かない。

静寂を楽しむかのように攻撃をやめ、座り込んだルフィを眺めて口を開く。

「やっぱりわかるか。昨日今日の付き合いじゃないもんね」

「しっしっし。キリは水に濡れるとダメになるもんな。危ねぇから風呂も一人で入るなって言われてるくらいだし、何回もダメになったとこ見たことあるからよ」

「うーん、そうなんだよねぇ。それさえなんとかできればもっと強くなれるんだけど」

「なんとかできねぇのか？」

「頑張ってはみたんだけどね。まだ実ってないって感じ」

「そっか。まぁでも、おかげで助かった」

ルフィが平然と立ち上がる。

頭から飛び込んだため全身が濡れており、それはキリに対抗する手段となるだろう。

二人ともすでに理解できていて、ここから戦況が変わりそうだった。

「うし。こんだけ濡れてりゃキリも困るだろ。こっからだぞ」

「そうみたいだね。じゃあスタイルを変えようかな」

「ん？」

「濡れて困るなら近付かなければいいだけさ」

そう言ってキリは後方へ跳んで台座の上へと戻っていった。
軽い動作でふわりと着地し、地面にばら撒いていた紙を全て回収する。そして宙に浮かす端から次々に異なる攻撃を生み出していた。
「指揮紙〝三獣奏(さんじゅうそう)〟」
キリの周囲に生み出されたのは三体の紙傀儡だった。
全て紙製。右側に狼、左側に大蛇、頭上には鳥。全て彼の意思によって従う、意思を持たない傀儡人形。しかしその動きは限りなく本物に近い。
紙を全て使った訳でもなく、残りはキリの周囲でふわふわと浮遊していた。
ルフィは興味を持ったと言わんばかりの表情で目を大きくする。
怖がる様子もなく、さほど疲労も感じさせずにキリへ話しかけていた。
凄まじい緊張状態での攻防を終えて尚平然としている。微笑みの下、キリはそのスタミナこそ厄介だと判断していた。
この戦い、やはり楽には終わらなそうだ。
「すんげぇ〜。やっぱりキリの能力は便利だなぁ〜」
「そりゃ鍛えてるもん。その代わり弱点もあるし」
「んん、それもそうだ」
髪から水を滴らせながら、ルフィが膝を曲げる。
いよいよ再開の時か。キリは一切油断せずに彼を見つめていた。
「うし、行くぞ!」
「いつでもどうぞ」
ルフィが勢いよく駆け出したことをきっかけに、キリが人差し指を伸ばして両腕を振るった。
まるで指揮者のように大きく振って、その動きに従う傀儡が動き出す。
右前方から狼が、左側面から大蛇が接近し、頭上から鳥が攻撃の機を窺う。
走りながらもルフィはそれら一つ一つに対処していった。
「おりゃ!」

最も早く接近してきた狼を蹴り飛ばし、力に負けてか、その体はバラバラになる。
次いで大蛇も首を伸ばして、鋭い牙を見せるが、素早く回転するルフィは顔を蹴りつけ、攻撃を受ける前に大蛇をもバラバラにしてしまう。
攻撃を受けた二体がただの紙に戻って砂浜にばら撒かれた。
キリは慌てず、右腕を強く振り下ろす。
頭上から狙っていた鳥が嘴を尖らせて落下してくる。気付いて見上げたルフィはその鳥に向き合って足を止めようとした。
その瞬間に鳥が自ら体をバラけさせる。
空から紙が降り注ぎ、ルフィはしばしぽかんとした顔を見せた。
何もキリがミスをしたという話ではない。彼は最初からそれを狙っていた。
ルフィを中心に四方八方へ無数の紙片がある。
キリは素早く腕を振るい、指先で以て操作する。
「紙砂嵐(かみずなあらし)」
大量の紙が巻き上げられる。それらは螺旋を描いて高く舞い上がり、群れを成して動くために強い風が起こり、まるで竜巻のようにルフィの体を包み込む。
困惑するルフィの体が突如切り裂かれた。
周囲を旋回している紙は硬化されているらしく、触れれば斬られる。だが逃げ出そうにも高速で飛び回るそれらを避ける手立てはない。彼は捕まってしまっていた。
気配に気付いた時、頭上を見上げた。
竜巻であれば中心部は少なからず風の影響も受けず、空洞のようになっている。
その部分へ、空に通じる部分からキリが飛び込んできて、長い槍を構えて落下してきた。
周囲にあるのも頭上から来るのも鋭利な刃。ゴムの体を傷つける。逃げ場はない。
その時ルフィは直感的な判断に従い、決意を込めて行動に出た。

「ゴムゴムのォ――！」
選ぶべきは回避ではなく反撃。彼も強く地面へ蹴って空へ跳び上がった。
空から降ってくるキリと正面からぶつかろうというのである。
キリは全く驚かず、冷静な顔で彼と向き合う。
「ライフルッ！」
捻じった腕が回転して放たれた。
それを見たキリは事前に準備ができていたかのように、長い槍をバラして瞬時に盾へ作り変え、自身の姿を隠すほど大きなそれを素早く構える。当然ルフィの拳は硬化された盾に激突し、水に濡れていたおかげか一瞬の抵抗を感じた後に貫いた。
キリまで届くか、と気になったが、その時キリは全身を紙の状態に変えており、ペラリと盾の横をすり抜けてルフィの眼前に躍り出て、すぐに元の厚みを取り戻す。
必要だったのは防御するための盾ではなく、姿を隠す壁だったのだ。
キリの蹴りがルフィの体を捉え、勢いよく吹き飛ばす。
彼の体は刃となった紙片が飛び交う嵐を抜けて、全身を切り裂かれながら外へ押し出された。
確かに閉鎖された世界から逃げることはできたが、その代償として、浅いとはいえ全身に切り傷を負い、吹き飛ばされる間も血液が辺りへ撒き散らされる。
ルフィの体は地面に激突してボールのように跳ねた。
覚悟を決めて見守っていたビビも口を開かずにはいられず、思わず叫んでしまう。
「ぐあっ、いてぇ……!?」
「ルフィさんっ！」
《あっ、あぁ～っと!?　ルフィ選手全身から血を流しているぞ！
仲間同士とはいえなんて容赦のない攻撃！　どうやら我々はキリ選手を見くびり過ぎていたようだ！》
ルフィを逃がしてすぐ紙片の群れによる嵐は止まった。

雪のように空から舞い降り、その中の数枚が空中に浮遊して、キリが足を乗せて立っている。
本来ならば一枚で人の体重を支えるなど難しいことだが、紙人間である彼だけは特別だ。
「ボクが食べたのはペラペラの実。本来の能力は体を紙に変えること。今はそれに加えて、紙の〝硬化〟と〝浮遊〟と〝操作〟が使える」
彼の体は、奇妙であった。
浮遊させたそう大きくはない一枚の紙片に左足を乗せて立ち、右足と左腕が紙のようにペラペラになっていて、人差し指を伸ばした右手を振るえば周囲の紙が生き物のように動く。
顔に笑みはない。真剣とも、冷淡とも言える表情でルフィを見ていた。
「人為的に〝覚醒〟へ至る実験としてクロコダイルに鍛えられた」
周囲にある紙は彼の意思に従う。それが彼の能力。
ビロード海賊団であった頃には持ち得なかったものだった。
「本気で行くよ」
そう言って、キリは目の色を変えて冷たくルフィを見つめた。

トレジャーバトル　決勝戦（2）

ひらひらと舞い落ちる紙がある。
ふわりと浮かび上がる紙がある。
それらは全てキリの意思に従っており、主の命令があれば如何なる命令にも応じる。
自由に空を舞って、キリ本人ですら浮遊する紙に乗り、宙に立っている。
ひどく美しく、今までに見たことがない幻想的な光景だった。
ルフィは唐突ににんまり笑う。
その表情を見てキリは驚き、むっとした顔になった。
「なに笑ってんの。せっかくシリアスに決めようと思ったのに」
「ししし、嬉しくなったんだ。おれの仲間は頼りになるなぁ」
「そう？　それは嬉しい言葉だけど、今のはかっこつけるところだと思ってたのに」
「んん、そりゃ悪かった」
ルフィが自分の頬を叩いて表情を引き締め直すも、今度はキリがくすりと笑った。
「あ、キリも笑ってんじゃねぇか」
「いやだって、律儀だなぁと思ってさ」
「お前が笑うなって言うからやめたのに」
「ごめんごめん。もう言わないから」
「キリ、お前勝手だぞ」
「それルフィにだけは言われたくないよ」
すっかり空気が和んでしまった。
ルフィは全身を裂かれて血を流しているが一向に気にせず、そうした張本人であるキリに怒りを向けようともしない。再び上機嫌に笑って楽にしている。
キリも真面目な顔をするのをやめていつも通りの緩い顔に戻った。
それでも二人が本気で戦っている事実は変わらない。
自陣の傍で見つめるビビは信じられないという顔をしていた。

特にルフィの姿は、傷その物は浅いとはいえ、ほぼ全身が赤く染まるほど血に濡れている。
仲間同士でそうなるほどに傷つけあう理由がわからない。しかも全く憎しみ合わずに戦いの最中でも笑い合える。改めて彼らが不思議に思えて仕方なかった。
一方でエースは何も言わず、腕を組んで戦いを見守ろうとしている。
そうまでして戦わなければならない理由がわかるのか。
彼は真剣な眼差しで二人を見ていた。
「うし、じゃあ続けるか」
「いいよ。ちょっと空気変わっちゃったけどね」
「そうか？」
「なんて言うか、緊迫感がない感じしない？」
「そうだなぁ……いいんじゃねぇか、別に」
「あ、せっかくなら条件でもつける？」
「おっ、面白そうだなそれ。どんなのだ？」
「例えばルフィがボクに勝てなかったら、しばらく肉禁止とか」
「なにぃ!?」
「やっぱり出費で一番痛いのはルフィの食費だからさ。普段より量少なくしたら助かるんだ」
「それはダメだぞキリ！　おれは肉を食わねぇと力が出ねぇんだ！」
「逆にボクに勝ったら、もう食べたくないってくらい肉食べてもいいよ。やる気出た？」
「おぉし！　絶対負けねぇ！」
「そう、よかった。でもボクはそんなルフィがちょっと心配だよ」
あまりにも単純な様子に、幸せそうに笑いながらもキリは言う。
そんな彼に対してルフィの返答は呆れるほど能天気なものだった。
「いいんだ。難しいことはもうずっと前からキリに任せてるからな。おれが仲間をみんな守ればあとはキリがなんとかしてくれるだろ？」

「やれやれ……面倒の見甲斐がある人で嬉しい限りだよ」
困ったように笑いながらキリが空から降ってきた。
ペラペラだった腕と脚が元の厚みを取り戻し、軽い様子で砂浜に着地する。
周囲にあった紙を手元へ呼び寄せて、そこからいくつか武器が作られた。斧と槍が一体となったハルバードと長大な柄と刃を持つ大鎌。さらには鳥や狼といった傀儡も周囲に現れる。
またしても戦法が変わり、微笑むキリにルフィが好戦的に笑った。
「じゃあそろそろ」
「おう。行くぞ！」
ルフィが駆け出してキリへ一直線に向かう。
迎え撃つ形で両手に持った武器が振るわれたことにより、再び開戦となった。
確かにエースとサボの戦いほど派手さはない。島の地形を変えるような攻撃はなく、どちらも能力者であるとはいえ、できることには限界がある。
更には障害物が何一つないフィールドだ。
必然的に自身の戦闘能力のみを頼りとする、ガチンコ勝負が展開された。
互いをよく知った仲。
攻撃、防御、回避の節々から自信と余裕、そしてわずかな驚きが窺え、一進一退で大きな変化はそう起こらない。実力は拮抗し、両者互角といった様相だ。
二人とも本気で闘っていた。
仲間だからという感覚は一時的に捨て、命を奪う覚悟すら持って挑んでいる。
港で試合を見ていた麦わらの一味は、それぞれ大きさは違うが驚きを抱いていた。
なぜそこまで、と思わざるを得ないのだろう。
一番最初に出会った仲の良い二人が本気で傷つけあっている。何もキリが一方的にルフィを痛めつけているのではない。徐々に、着実

に反応を良くしていくルフィの攻撃がキリへ届くのだ。その時彼は怒りや悲しみも見せずに甘んじて受け入れ、更なる攻撃を繰り出す。
一体何が彼らをそうさせるのか。
同じ土地にも立っていない彼らには想像もできない。
堪らずウソップが焦った声で疑問を言葉にした。
「あ、あいつら、本気じゃねぇか……何もそこまでしなくてもよ。決勝まで残ったんだから、どっちが勝っても賞品はもらえるだろ。なんでこんなタイミングで」
「こんなタイミングだからじゃねぇのか」
「え？」
煙草の煙を吐いたサンジが反応する。彼の目は冷たく、静かで、まるで感情を押し殺しているような様子も窺える。
いつになく真剣な態度でウソップの問いについて考えようとしていた。
「賞品がもらえると決まった時点で、おれたちの次の行先は決まったようなもんだ。つまりそれはバロックワークスと決着をつける時だってことだろ」
「だからこそだよっ。こんなとこで怪我してる場合じゃねぇんだぞ」
「そうでもねぇんじゃねぇか。あいつにとっては」
「あいつって……キリだよな、やっぱり」
サンジに目を向けていたウソップがモニターに視線を戻す。
海水を使って全身を濡らしたルフィは、様々な武器や傀儡を駆使するキリの攻撃を躱し、少なからずダメージもあったが、確かに彼の体まで届いていた。
限界まで近付き、最小限伸ばした腕がキリの胸の辺りを打つ。
もはや咳き込むだけとは言わず血を吐き出してもいて、キリは咄嗟に反撃を行った。
「キリにとっちゃバロックワークスってのは相当恐ろしいとこみてぇだ。それこそ巨人のおっさん二人に喧嘩売ったのも、アーロン一味を脅迫したのも、奴らに対抗する力を手に入れるためだと考えられ

る。あいつの中じゃそれくらいでかいもんなんだ」
「そりゃあまぁ、七武海だしな……」
「それにキリは、クロコダイルに命を助けてもらったって」
「いくら組織を抜けたって言っても、微妙な関係には変わりないわよね……」
ウソップにつられてシルクやナミも表情を暗くする。
その時チョッパーは疑問を持ち、事前に話を聞いていたとはいえ、知らないことは多い。傍に立っていたイガラムを見上げて問いかけた。
「クロコダイルって奴、強いのか？」
「ええ……彼は王下七武海の一人。世界政府が認めた〝強さ〟と〝名声〟を持つ。私自身、海賊討伐を行う彼を見たことがありますが……あまりにも圧倒的。私は、奴に勝てる人間というものがいまだに想像さえもできていません」
「そうか……ルフィはそんな奴と戦おうとしてるんだな」
緊迫した声を聞いてチョッパーも事情を察する。
まだ見ぬ敵はかなりの強さらしい。そして彼らはその敵に真っ向から立ち向かおうとしている。
しかしそれを知って尚、チョッパーには本気で戦う二人の心境は想像できなかった。
キリが振るう武器がルフィの肩を切り裂き、大量の血が巻き上げられる。血に濡れた紙は武器から剥がれて力なく地面に落ち、操作不能になったようだ。
反対にルフィも攻撃を行う。
鋭い蹴りが横からキリの腰を捉えて、妙な音を鳴らしながら蹴り飛ばした。
追撃のためルフィが駆け出し、体勢を崩しながらキリが迎え撃って、再び激突する。
あまりにも壮絶。
関係のない人間にすら息を呑ませる激闘。彼らをよく知る者ほど心中穏やかではいられない。

シルクやナミは痛ましそうな顔になって複雑な心境を表し、ウソップやチョッパーも動揺を隠し切れていない。今やはっちゃんやケイミー、アーロンたちですら心を動かしていたようだ。
彼らの心情を察したのか、サンジは冷静に言葉を紡ぐ。
その間も二人は息をつく暇もない死闘を演じていた。
「どんな理由で、何を想って始めたのかも、知ってるのはあいつら二人だけだ。ここに居る以上おれたちにできることはない。見守るしかねぇな」
「そうだけどよぉ。ここまでするか、普通……」
「おれたちは遊びで海賊やってるわけじゃねぇんだ。むしろ普通でいちゃいけねぇんだろ」
「そ、そうか……そう言われりゃそうだな」
そう言われてウソップが納得した様子で腕を組み、小さく頷く。
彼らは、特にルフィはいつだって本気だった。遊びや酔狂で海賊になったはずがない。
この場所では多くを知ることはできないが、きっと彼らは決意して決闘に挑んだのだろう。
冷静にそれを理解してウソップも怖がることなく試合を見始めた。
ルフィの額がわずかに斬られ、キリの腹に蹴りが当たる。
確実にルフィが速くなっているようだ。そのためどちらが勝つか全く読めない。
そんな時、唐突にゾロがぽつりと声を発した。
今まで黙っていたが彼は誰よりも早く覚悟を決めて見守っている。腕を組んで厳しい顔をして、周囲が混乱しても口を挟まなかったのに、気になったことがあるらしい。
「そう長くは続かねぇかもな」
「ん？　何が？」
「この試合がだ。前々から気になってたんだが、どうしていつもあいつがさぼってると思う？」
「さぼるって言ったら、まぁ、キリだよな。そりゃ性格の問題だろ」
「正直それも否定できねぇ」

大真面目な顔でそんなことを言うゾロに、皆が不思議そうにする。
それでも話は終わっていなかったため続きが告げられた。
「気になったのはあいつの弱点だ」
「あ、水だろ。濡れたら自分で歩けもしねぇからな」
「ああ。だが人間ってのは水分がなきゃ生きてけねぇ。どうしたって避けられねぇ問題がある。だから普段滅多に動かねぇんじゃねぇのか」
「どういう意味だ？」
首を傾げるウソップの方を見ず、モニターを見ながらゾロは言う。
「汗だ。自分で飲んだ水ですら多少体調に影響するって話だからな。てめぇで勝手に汗を掻いただけで水に濡れた状態と同じになるってことだろ」
「そういや確かに……」
「つまり、激しく動いて汗を掻けば掻くほど、力が抜けていく？」
「あいつに直接聞いたわけじゃねぇが、おそらく間違っちゃいねぇはずだ」
問いかけてきたシルクにも同意し、ゾロはそうして自分の意見を言い終えた。
確かにキリは普段からだらけている上にさぼっていることが多い。頭脳労働担当だから、などと言い訳しているがその傾向は顕著で、皆は不満を持たないほどすっかり慣れていた。
もしそんな理由があったのだとしたらルフィに分があるのでは。
辺りの空気は緊迫感を増す。
「現に今は敢えて接近戦を挑んで短期決戦を狙ってる。ありゃ完全にルフィの間合いだ」
「時間をかけるのは得策じゃねってことか」
「だから長くは続かねぇんだな。もうおれにはどっちが勝つかわかんねぇよ」
サンジが納得した後、ウソップは表情を険しく、眉間に皺を寄せる。
そんな時、シルクが呟いた。
「でも、さ」

モニターを眺めながら少し寂しげに、何かを思案するような声だった。
「どっちが勝ったとしても、またいつもみたいに戻れるんだよね？」
その問いに対する返答はない。
全員がそうに決まっていると思っている。しかし保証する何かがある訳でもない。
今はまだ、見ていることしかできなかった。
ルフィとキリは絶えず動き続け、一秒たりとも止まろうとはしない。
常に動き続けているため当然体は熱くなって、意識せずに肉体は発汗を促す。
ゾロの推論は当たっていた。
キリが汗を掻けば肌に水分が付着し、体内からではなく体外からの影響を強く受ける。
彼の体内にも当然水や血液といった物は存在しているが、長い年月によって慣れたのか、体内にある水分によって力が抜けるという事態は今やあり得ない。彼が水に濡れて力が抜けてしまう時は常に外からの影響があった時だった。
水分補給をした時、肌が濡れた時などがその典型。
そしてそれは自身の肉体が出した汗も例外ではなく、肌を濡らすと紙の体がふやけてしまう。
砂漠の国であるアラバスタで暮らした経験から、暑さには強くなっていた。だが発汗は人体にとって無くてはならない機能であり、暑さに慣れたからといって汗を掻かなくなる訳ではない。
ルフィとの戦いにおいて、もはや彼はなりふり構わぬ戦いを見せていた。
自らの体を顧みずに接近戦を行い、確実に汗を掻き、同時にルフィも彼の動きに反応できるようになっていて、戦えば戦うほど実力が近くなるどころか、離される気がした。
本能で戦うルフィは相手を分析することなどしない。
そのため戦っている内に気付くことがあり、時間がかかればかかる

ほど相手を理解していく。
対するキリは事前に戦う相手の情報を頭に入れ、どう敵を攻略するかを思考するタイプだ。
最も得意としているものは超短期決戦。一手、二手で勝負を決める戦いである。
二人が全く正反対の性質で、尚且つ、近い実力にあったことからその状況が生まれていた。
ゾロの推論は当たっていたが、唯一予想できなかったのは、キリがルフィに対抗するために思考を捨てて我武者羅に動いたこともある。
仲間たちも観客も、息を呑まずにはいられない。
二人だけで行う決勝戦は一時間を超える勝負となったのである。
最初はつまらないだろうと高を括っていた観客も、キリの能力を見れば顔色を変え。
十分を過ぎる頃には先程の空気が嘘のように盛り上がり。
二十分を過ぎると最高潮を迎えて。
三十分が過ぎた時にはあまりに長く続くせいでどよめきが生まれ。
四十分が経つと誰一人声を発さなくなり。
それでも二人が戦い続けて五十分が過ぎれば、もはや感動さえ覚えている。
一時間が経った頃には、ついに観客たちが総出で彼ら二人への称賛と応援の声を発し、この時トレジャーバトル大会は本来の目的から大きく外れて、最高の盛り上がりを見せていた。
《すっ、素晴らしい！　なんて戦いなんだ！　我々が求めていた戦いは、決勝戦は、まさしくこれだったのだろう！　二人に惜しみない応援の声が送られているゥ！》
キリが滝のような汗を掻き、素早く動く度に水滴が周囲へばら撒かれていた。
一方でルフィは紙人間である彼に対抗するため、何度となく周囲の海水で体を濡らして、今もまだ身じろぎ一つで水滴が落ちる状態。
こうなればもはや打算も作戦もありはしない。純粋に勝利だけを望み、考えもせず動いていた。

《こうなればどちらが勝っても文句はない！　かくいう私ももう涙で試合が見えません！　実況としては大いに間違っていますがどっちも頑張れェ！》
ハッタリーの声も聞こえないほど集中した二人は、ついに終わりを迎えようとしていた。
仕掛けたのはルフィだ。
後方へ両腕を伸ばすと同時に前へ踏み出し、強烈な一撃を叩き込もうとしている。
「ゴムゴムのォ！」
キリは呼吸を乱して、脚が震えるほど体に力が入らなくなっている。
手加減はしない。ルフィは全力で両腕を前へ突き出した。
「バズーカァ！」
しかしそれは、キリが全身を紙の状態に変え、地面を這って進んだことで回避された。勢いよく突き出された両腕は彼の頭上を通り過ぎ、幾分伸びてから引き戻される。
その一瞬の隙を狙ってキリが元の姿で立ち上がった。
右腕が白く染まり、バサバサと紙が折り重なった姿に変わり、硬化される。
指を広げてルフィの顔が狙われていた。
「紙突き……！」
全身全霊、最後の一撃。
鋭く繰り出された最高の攻撃は、しかし歯を食いしばったルフィが右足を振り上げ、下から力強く蹴り上げたことで狙いが外れ、キリは一瞬無防備な姿を晒す。
予想できなかった展開に彼は反応ができなくなり、ほんの数秒、呆然とした。
その一瞬で腕を引き戻したルフィは勢いが良過ぎたせいで両腕を使えず、頭を後方へ伸ばす。
歯を食いしばって、微塵も恐れず思い切り引き寄せ、全力でキリの体へと向ける。

「ゴムゴムの――！」
キリの目にもその攻撃は見えていた。だが体が思うように動かず、防御すらできない。
限界か、と悟った一瞬。
ルフィの頭が凄まじい迫力で伸びてきて、キリの軽い体は思い切り吹き飛ばされた。
「鐘ェ!!」
ゴツンと、とんでもなく大きい音が鳴り、二人の額が激突する。
凄まじい衝撃が頭から全身へ駆け抜けていき、止めようと考える余裕を失うほどの勢いで、キリの体は地面を跳ねながらルフィの傍を離れていった。
十メートル以上を一秒とかからず飛んで、最後には浅瀬とはいえ頭から海へ突っ込んだ。
全身が水に包まれて、完全に力が抜けて動けなくなり、それでなくても大量の汗を掻いてとっくに限界など超えていたのだ。今度こそ彼は脱力して水の中で静止する。
目を閉じて、口を必死に閉じ、このまま死ぬかもしれないという想いすら抱く。
ほんの一瞬だが呼吸が乱れていたこともあり、途方もなく長く感じた。
しかし結局は肩を掴まれて一気に体を持ち上げられ、彼は再び呼吸を始めることができた。
ぼんやりと開いた目に映るのはいつも通りのルフィの笑顔。
力が抜けた体を彼に委ね、キリは苦笑する。
「どうだ。おれは強いだろうが」
「ハァ、んっ……そうだね。ほんと、厄介な人だよ」
地面に両膝をついたルフィに抱えられ、半ば座るような姿勢でもたれかかり、熱くなった体には冷たい海水が心地良い。キリは乱れた呼吸を整えるため大きく息を吐き出す。
改めて海が好きだと実感した。
能力者にとっては恐怖の象徴とも言える存在だが、やはり彼は嫌い

になれなかった。
水は胸元にまで届き、打ち寄せては引いていく波を感じながら水平線を眺める。
何年経っても海は広く、その姿は変わることがない。故に彼の心の拠り所でもあった。
「ねぇ、ルフィ」
「ん？」
呼びかけてみて、何を言えばいいのか、わずかに動いた唇が躊躇った。
感激している様子のハッタリーがマイクを通して何かを叫んでいる。その事実はわかるが不思議と耳に言葉は入って来ず、すっかり力も抜けて、気も抜けてしまったようだ。キリは落ち着いた顔でぼんやりと海を眺め続けた後、結局何を言えばいいかわからないまま目を閉じる。
少なくともその顔には満足した様子と笑みがあったことだけは確かだった。
「負けたよ……やっぱり、ルフィはすごいなぁ」
「ししし」
ルフィもまた、至る所から血を流してひどい状態であった。海水に濡れているだけで痛みも感じていることだろうが、キリを支えてその場を動こうとはしない。
不思議な清々しさと穏やかさがあった。
これほど本気で戦ったことなどいつ以来だろう。
事前に観察して考察し、時に騙し、脅し、相手の動揺を誘って、短時間での決着を狙う。それが彼の本領であり最も得意な戦い方。生き残る方法、と言ってもいい。
今回はいつの間にかルフィにつられて無我夢中で動いてみた。
それがこの奇妙な感覚を生んでいるのかとも思い、彼の気持ちがわかった気もする。
考えてみれば、あれこれ考え過ぎていたのかもしれない。
海賊は自由を愛する生物だ。努力はそれなりに必要だが楽しむこ

ともまた重要。
息はすでに整っていた。
キリはぐいっとさらにルフィへ体重を預けてもたれかかる。
このところ心配し過ぎて気が休まらなかったのかもしれない。今になってやっと気付いた。
「ふぅ～……なんかどっと疲れた。力入らないし」
「キリは強かったなぁ。海がなかったら負けてたかもな」
「そういえばルフィ、ごめんね。かなり血ぃ流れてるよ」
「いいよ。キリも血ぃ吐いてただろ」
「口の中切れた」
「おれは全身切れてる」
「沁みない？」
「うん。すげぇ沁みるな」
「あぁ～、じゃあやっぱり早く出た方がいいかもねぇ」
「そうだけど、なんかキリが居心地よさそうだったからな」
「うん。気持ちいいからね」
「風呂はあんまり好きじゃねぇのにか？」
「だって暑いじゃん」
「ん～よくわかんねぇなぁ。でもおれも海は好きだぞ」
ルフィが立ち上がり、両脇に差し込んだ手でキリを引っ張り、砂浜へ上げる。
今やキリは自分で立てないため、その辺に転がしておくのも悪いだろうとルフィが背負った。ぐったりしたキリは完全に力を抜いて項垂れる。
「はぁ～疲れた」
「お前なぁ、おれだって疲れてるんだぞ。ずるいぞキリ」
「それはしょうがないよ。弱点があるから動けなくなるもん」
「うーん、そうか。おれの弱点ってなんだろうな」
「斬撃じゃない？」
「あ、ほんとだ。じゃあおれいっぱい斬られたぞ」
「でも歩けてるよ」

「ほんとだっ」
つい先程まで激闘を繰り広げていたというのに、今ではもう和やかに話している。
おかしな二人の姿にビビは思わず吹き出してしまった。
心配することなど何もなかった。命懸けで闘おうが何をしようが、彼らはいつも通りだ。普段船の上ではしゃいでいる姿と何も変わらない。
そうこうしていると、エースが宝箱が置かれている台座に移動して声をかけてきた。
ビビが反応してすぐに答える。
「どうやらこっちの負けみてぇだ。さぁ、宝を運んでくれ。この試合も終わらせようぜ」
「あ、ええ……本当にいいの？」
「なぁに、おれの用はもう終わってんだ。あいつらが決めたんならそれでいい」
「そうね。カルー、行きましょう」
「クエー」
ルフィとキリはもはや試合に関係ない話をだらだらと続けているため、苦笑したビビがカルーを連れて歩き出し、台座に置かれた宝箱へと向かう。
ちょうど台座の上へ登り、今から宝箱を運ぼうという頃だった。
《長く続いたトレジャーバトルがついに終焉を迎えようとしている！　今からビビ選手が宝箱を運んで回収船が到着すれば、優勝はルフィ＆ビビペアの――！》
《ハッタリーさーん！　緊急事態ですぅ～！》
実況に割り込むようにして、スピーカーを通した大音量の叫びが響き渡った。
出所はブルースクエアの町から。
ハッタリーが驚いて思わず町の方を振り返ると、姿は見えないもののきっと大会を運営するブルーベリータイムズの誰かなのだろう。
彼にとっては聞き覚えのある声だ。

予定にはない発言に疑問を抱いて咄嗟に口を閉ざす。
知り合いとはいえ顔も見えない誰かは焦った声で叫んでいた。
《沖から海軍の艦隊が接近中～ッ！　どうしてだかこの町に向かってきますぅ～！》
《はぁっ!?》
《通信も拒否されてますぅ～！　とにかくとにかく一大事～！》
その声は当然、ブルースクエア全土に聞こえていた。
海賊、裏社会の人間や王族、貴族、その島に居てはならない者たちが海軍の接近に怯えている。
報告が終わった直後には町は大パニックに陥り、もはや試合の結果を気にする者など一人も居なくなってしまったのである。

それぞれの航路へ

ブルースクエアに接近してくる船団がある。
集まった海賊を一斉に駆逐しようと集った三十隻以上の軍艦だ。
海軍の部隊としては異例のこの数、それだけ多くの海賊がトレジャーバトル大会に参加していただけでなく、中には億越えの海賊もちらほらと混じっている。決して油断のできない相手だと判断した結果、海軍本部は遊撃隊の協力を仰いでいたのだ。
率いるは先頭の軍艦に乗り込む〝黒檻のヒナ〟。
彼女は真剣に島を見つめ、集結している船の数を見ても動じなかった。
「ヒナ嬢！　海賊船が無数に集まってまぁす！」
「砲撃しますかぁ！」
「だめよ。市民に被害を与えては海軍本部の信用に関わるわ」
「げげっ!?　そりゃそうだ！」
「おいおい、海賊気分はそろそろやめとけよ！　踊るか！」
「もちろんだ！」
「邪魔よあなたたち。不服だわ。ヒナ不服」
騒がしいジャンゴとフルボディを適当にあしらい、徐々に島へ近付いていく。
ここから先は激しい戦闘も予想される。気が抜けない一時だった。
「アパパパパッ！」
その船団が見えた時、或いは大会の運営者が慌てて報告した時、アプーは笑っていた。
自分の船のメインマストに座っていた彼はひらりと甲板へ降りて、楽しそうに笑みを浮かべながら仲間たちへ指示を出す。当然戦う気などない。考えるのは逃走の一手だ。
「やっぱりこうなりやがった！　面白ェもんが見れたしもう用はねぇ！　船を出すぞ！」
「せ、船長、まさか最初からこうなるのがわかってたのか……？」
「だから出航準備しとけって言ってたんだな」

「わからねぇでこんな大会出るかよ。急げよお前ら！　囲まれたら逃げらんねぇぞ！」
一番先に島を離れたのはアプーが率いるオンエア海賊団だった。彼らはこうなることを予想して事前に出航準備を終えていたため、誰よりも早く逃げ出した。
当然他の海賊も逃げることを考える。
しかし呑気に町中で酒を飲んでいた者は多く、パニックは避けられないものだった。
この状況を憂い、悔しく思っているのは他ならぬハッタリーだろう。
大会のために様々なツテを当たり、周到に準備をして、わざわざ海軍とも取引をした。だが結果を見れば彼らは約束を守らず海賊討伐に乗り出した。
彼が元々海賊が好きだったこともある。
マイクを通す声は感情を隠さず、海軍に聞こえてもいいと海賊たちへ向けられた。
《くそっ、こんなの聞いてねーっつーの……!?　とにかく海賊諸君！　君たちがこのまま町に居れば全員牢屋行きだ！　はっきり言っておれもそれは本意ではない！　トレジャーバトル大会が途中で無理やり中断されるのは癪だが、ここは急いで逃げてくれ！》
ハッタリーは焦った声で絶叫し始め、その声を聞く余裕もなくすでに人々は駆け出している。
海軍に見つかってはならない者は全員だ。
大パニックに陥った町中では大勢の人が波となって走り出して、悲鳴や怒声がいくつも重なり、これまでになく騒がしい様相となっていた。
当然港に居た彼らにも動揺は伝わっていた。
麦わらの一味とアーロン一味も周囲と同じく慌てて自分の船へ乗り込み、出航の準備を急ぐ。
作業の傍ら、何やら怒り狂っている様子のナミは指示を出しながらも叫んでいた。

「ちょっと！　せっかく決着ついたのにこのタイミングで乱入って何よ！　せめてもうちょっと待ってくれれば賞品もらえたのに……！」
「しょうがねぇだろ、相手はこっちの都合なんて知らねぇんだし」
「捕まるくらいなら賞品は諦めるしかない。気持ちはわかるけど急ごう、ナミさん」
「私のお金はどうしてくれんのよー！」
「お金ってなんだお前⁉　賞品はアラバスタのエターナルポースのはずだろうが！」
ナミの怒りもウソップの絶叫も人々の声にかき消され、落ち着いている暇など一秒もない。海軍はすでに島から見える位置に迫っていた。
常夏島に居た彼らも例外ではないはずだが、不思議とそう慌てていない。
ルフィは楽しそうに船団を眺め、キリもさほど慌てず冷静にルフィの背でだらけている。
慌てるのはビビとカルーばかりで、エースも興味なさげに見るのみだ。
「おほぉ～。すげぇいっぱい来たなぁ」
「億越えもいっぱい居るみたいだからね。何よりエースが居るし」
「エースはすげぇんだな。エースが居るだけであんなに来んのか」
「そりゃもう、あれでも足りない可能性もあるくらいだから」
「ちょっと二人とも、落ち着いてる場合じゃないでしょう⁉」
「クエーッ⁉」
「あ、そういえばそうだね」
「じゃあ逃げるか」
ようやく彼らも駆け出して、出場者用の船へ飛び乗る。
準備を終えて待っていたスタッフが彼らを急かし、乗った瞬間に船が出た。ブルースクエアとその周囲を移動する用で速度は十分。数多の船が動き出す港へ向かう。
中でもクルーが港に居たためゴーイングメリー号は早くに沖を目

指していた。
二番船であるタコ焼き8も加えて、アーロン一味の船と共に向かってくるそちらへ急ぎ、横付けすると四人とカルーは飛び移る。
「お前ら急げぇ～！　海軍が来るぞォ！」
「ルフィ、キリ、傷見せてくれ！　おれが治療する！」
「おう！　頼んだチョッパー！」
「あ、そうだ。おーいアーロン。これから一緒に行動するから、勝手に離れないようにね」
「そんなことよりキリ！　私のお金は!?」
「だからお前の金はそもそもねぇって！」
ドタバタと騒がしい甲板を眺めてエースは嬉しそうに笑う。
ルフィの仲間は気のいい連中ばかりだ。
多少騒がしく落ち着きがない気もするが、それもまた海賊らしく楽しい気分になる。
しばし一人で航海することが多かったエースは久々の空気に気を良くしていた。
「おれの船お前らに預けといてよかった。普通海賊がこんだけ集まれば海軍は動くよな」
「あっ!?　そういやエース、サボは!?　おれあとで会えると思ってたのに！」
「ん？　そういやそうだな。まぁどっかで会えるだろ」
「ルフィ、あんまり動かないでくれ。包帯巻けないから」
甲板に座ったルフィの怪我をチョッパーが治療してやり、傍にはキリが転がされていた。
その状態で騒ぎ始めたためにいち早くシルクが辺りを見回し、そして気になる船を見つける。
「ねぇルフィ、前方にある船、あれがそうじゃない？」
「ほんとか!?　サボ居るのか！」
「おいルフィ～!?　まだ治療終わってないぞ！」
見るからに我慢できない様子でルフィが船首の上へと移動した。
あまりにも素早く、後方ではチョッパーが怒っていたが、今や彼には

聞こえていない。
確かにメリー号の前方、一隻の船がある。
ルフィの目には後部に立っている男の姿が見え、チョッパーが怒っている声はようやく聞こえるようになったがそれでも反応できず、笑顔で大きく手を振った。
「おぉ～い！　サボぉ～！」
「ル～フィ～！　まず治療だ！　お前いっぱい怪我してるんだぞ！」
前方にある船でサボが手を振り返している。
彼らより先に逃げ出していたのはこの事態が予測できたからだろう。
同じ船に、少し離れてコアラが乗船しているのが見える。すでに仮面とローブを脱ぎ去って可愛らしい素顔を露わにしていた。しかし、幾分緊張した面持ちである。
彼女の目線はアーロン一味の船にこそ向けられていたのだ。
メリー号がエース専用の小さな船を引っ張り、四隻がほぼ並んで島を離れる。
迅速な行動の結果、海軍と戦うことなくブルースクエアから脱出することができたようだ。

＊

ログにも従わずブルースクエアを離れて、安全だと判断した位置で三隻は静止していた。
急いだのが理由か、無視できない疲労感があり、試合に参加していなかった者までわずかだがぐったりしている。それ以上にぐったりしているキリが居るため目立たなかったが、船上は普段より少し重々しい空気が漂っていただろう。
大きな理由に賞品をもらう暇がなかったからというものがある。
あのまま海軍の乱入がなければ、間違いなく賞品を受け取ることができていた。仮にアラバスタへのエターナルポースが用意できずと

も何かしらを手に入れることはできたはずだ。
少なからず気落ちした雰囲気がある。
階段に腰掛けたビビの傍にシルクが立ち、彼女と話をしていた。
「残念だったね。せっかく決勝まで残ったのに」
「ええ……だけどいいの。学ぶことは多かったし、それに、楽しかったから」
ビビはさほど落ち込んでいないようだった。柔らかに微笑んで純粋な感情を表している。祖国を心配する気持ちがあるだろうに、それをおくびにも出さない。
シルクは微笑み、彼女も強くなったのだと思う。
そんな彼女らへサンジがコーヒーを運んできて恭しく手渡した。
「そうそう、落ち込んでいてもしょうがないしな。また別の方法を考えればいいさ。コーヒーをどうぞ、レディたち」
「ありがとう、サンジさん」
「ありがとう」
「お安い御用です。さぁ、ナミさんもどうぞ」
「全ッ然良くないわ」
ナミはまだふつふつと沸き上がる怒りを感じていたらしい。
素直にサンジからコーヒーは受け取ったが、やはり気にせずにはいられなかったようだ。
「あんだけ色々やらせておいて賞品は無しなんてムカつくじゃないっ。やっぱり運営側から取るもの取っとくべきだったかしら……」
「おい、やめとけ。バレたら大事になるとこだろそれ」
呆れた顔でウソップがせんべいを齧りながら言う。
隣にはチョッパーとカルーが座り、同じくせんべいを齧りつつ、いまだに動けないキリにも時折食べさせてやっているらしい。
海軍から逃れた今、徐々にだが普段の様子を取り戻しつつあった。
「しかしエターナルポースが手に入らなかったのは痛かったよなぁ。これからどうするよ」
「またどっか探すしかないねぇ」
「つーかキリ、また来たぞ」

「何が？」
「あなた！」
空から降ってきた影がズダンッと着地し、瞬く間にキリの下へ駆け寄る。
やってきたのはベビー5であり、空にはバッファローが浮かんでいた。
「肝心な時に役に立てなくてごめんなさい！　大丈夫だった!?　あぁっ、こんなにぐったりしているわ！　私が居なかったがばっかりに！」
「いや、こいついつもこんなんだから」
「しっかりしてあなた！　まだ式もあげてないのよ！」
「キリが式かぁ……想像できねぇな」
「キリは結婚するのか？」
「いやしねぇだろ。こいつが真面目に旦那やると思うか？」
「思わねぇ」
「君らボクがここに居るってわかってる？」
すぐ傍で好き勝手なことを言うウソップとチョッパーにキリが声をかけるも、びしょ濡れで倒れたままではさほど相手にもしてもらえず。
仰向けに倒れる彼をベビー5が心配そうに覗き込んで目に涙すら溜めていた。
「あー全然大丈夫だったよ。心配いらないから」
「そうなの？　うぅ、役に立ちたかったのに……」
「それはそうと、これからどうする気？」
「もちろんあなたと一緒に居るわ」
「仲間のところに帰った方がいいんじゃないかなぁ」
「ええっ!?」
何気ない言葉だったのだが彼女にとっては衝撃的で、見るからに狼狽し始めていた。
「ど、どうしてそんなこと言うの!?　ひょっとして私は役立たず!?　私はもういらない!?」

「いやいや、そういうわけじゃないけどさ」
「ならどうしてっ!?」
「んー……」
キリは、まだ体に力が入らない状態だったが、必死に右腕を持ち上げようとした。
ベビー5がすぐその手を握ったこともあり、彼女の頬へ触れる。
「君には、仲間が居るんでしょ？」
「ええ」
「ちゃんと会っておいた方がいい。何が起こるかわからないから、大事にしないとね」
まるで子供に言い聞かせるような、優しい声色で。
手に触れて目を見ていたベビー5は当然として、周囲で聞いていた仲間たちも言葉を失い、彼の笑顔を見つめて複雑な気持ちになった。
前の仲間にはもう会えない。
後悔を感じさせる一言に、ベビー5は抗う術を持っていなかった。
「ね？」
「……わかったわ。だけどこれだけは覚えていて。仲間と同じか、それ以上に、私はあなたのことを大事な人だと思っているの」
「うん。十分伝わってるよ。ありがとう」
ベビー5が抱きしめるように彼の手を握り、次いで動けない彼に覆いかぶさった。
影が重なったことで周囲からあっと声が発せられる。
時間にして一秒足らず。ベビー5はパッと離れ、今度は笑顔で立ち上がった。
「行くわよバッファロー！　ドレスローザに戻るわ！」
「ふぅ～やっとかぁ」
「また会いに来るわね！　あなた！」
バッファローの背に飛び乗り、大きく手を振りながらベビー5が去っていく。キリは辛うじて動かせた右手を小さく振りながら笑顔で見送った。
その際、凄まじく強い視線を感じて。

目を光らせて睨んでくるサンジに怯えつつ、あくまでも彼女には笑みだけを見せる。
「キリ……こいつ、なんて羨ましいことを……！」
「ウソップ、ボク仲間に殺されそう」
「自業自得じゃねぇかなぁ。おれに言われてもどうにもできん」
困惑した顔のウソップに見捨てられ、キリは諦めの境地で目を閉じる。
どうやら不貞寝でも始めるつもりようだ。
一方、先程から静かなルフィは、メリー号の前部において兄弟との会話に集中していた。
エース、サボと集まり、三人で会うのは十年以上経ってから初めてのこと。
ルフィは心底嬉しそうで、その笑顔を見る兄二人は呆れながらも楽しげにしている。
「サボはこれからどうすんだ？」
「革命軍に残るよ。命を助けてもらった恩もあるし、今じゃあそこがおれの居場所だ」
「そっかー」
「悪いな。でも海賊にならなくてもお前らと兄弟なのは変わんねぇよ」
「ししし。当たり前だ」
話す時間は多くなくとも、彼らはすでに兄弟の顔に戻っていた。
「おれたちもそろそろ行かなきゃいけない。まだ任務も終わってないからな」
「え～？　もう行っちまうのかよ」
「お前もアラバスタに用があるんだろ？　ずっと一緒にはいられねぇよ」
「うーん、確かに……」
「だからこれを持ってきた」
そう言ってサボは二人に一本の酒瓶と三つの小さな盃を見せた。
それぞれに手渡し、酒を注いでいく。

「物は違うが、まぁ代わりだ」
「こうすんのも何年振りだ？」
「しっしっし、懐かしいなぁ」
酒を注いで盃を持ち、三人が互いに胸の前へ掲げる。
ルフィは心底嬉しそうに、エースもまた上機嫌な様子だ。
サボが二人の顔を見て言葉を紡ぐ。
「昔みたいに一緒ってわけにはいかねぇ。だからもう一度この盃に誓おうぜ」
三人揃って盃を掲げて、互いに顔を見合わせる。
「この先どこで何をやろうとも、おれたちは兄弟だ！」
「おう！」
ガチャン、と盃をぶつけて、ぐいっと一気に中身を飲み干した。
誓いは再び立てられた。もう二度と忘れることはない。
再びこうして向き合えたことに深く感謝し、喜びを噛みしめ、サボは二人へ笑顔を見せた。そうすると彼の船からコアラの声が聞こえてきた。
「サボくーん！　そろそろ出航するよー！」
「ああ、わかった。それじゃ二人とも、気をつけてな」
「何言ってんだ。今となっちゃお前が一番心配なんだよ」
「ししし。サボも気いつけてな」
笑顔で見送る二人に対し、サボはルフィの頭を帽子の上から強く撫で、振り返る。
甲板に居るルフィの仲間たちへ向き合った。
行くのだろうと思っていた彼らもサボを見ていて、自然と彼に向き合う。
「ルフィのこと、よろしく頼む」
頭を下げた後、ゴーグルを装着した帽子を被る。
サボは自身の船へと飛び移り、それとほぼ同時に出航する。
「サボォ～！　またなぁ～！」
ルフィが大きく手を振っている。サボも答えて手を振り返していた。

その時、甲板に居るコアラは複雑そうな顔をしていたようだ。何かに思い悩む様子を見せ、いつもならば気付くだろうサボはルフィにかかりきりで気付いていない。
ずっと前から悩み続けていて、そしてついに、彼女は決意した。
欄干から身を乗り出し、メリー号ではなくアーロン一味の船へ向けて大声を出す。
「アーロンさん！　はっちゃん！　みんなァ！」
「アァ？」
「ニュ？」
「私、元気だよ！　また会おうね！」
溌剌とした声を発する少女を見ても誰だかわからず、皆がぽかんとする。
しかしはっちゃんがびくりと肩を揺らした。
「ニュアっ!?　あの声、あの顔、まさか……！」
はっちゃんが振り返った時には仲間たちも気付いていて、思わず声を揃えて叫んだ。
「コアラかァ!?」
驚愕の絶叫が辺りへ響き渡る。
その声はコアラ本人にも届いて、彼女は笑顔で手を振っていた。
慌てて欄干へ魚人たちが駆けつけるものの、彼女が乗る船は徐々に遠ざかり、悠長に話しているような時間もない。とにかく手を振って大声で叫び出した。
彼らがそうしている一方、エースも決意する。
軽い動作で欄干の上へ飛び乗り、ロープで引っ張る自身の小舟を確認した。
「それじゃ、おれも行くか」
アーロン一味が騒ぐ中、ルフィが彼に振り返り、麦わらの一味も彼に目を向ける。
欄干の上でしゃがんだエースは彼らへ頭を下げた。
「お前ら、こいつの世話は大変だろ？　昔から手のかかる奴だったんだ」

「いや、まったく」
「しっしっし」
「できのわりぃ弟を持つと兄貴は心配なんだ」
エースは驚くほど優しい顔で笑っていた。
サボに再会したことが大きく関係していたいのかもしれない。
ルフィが選んだ仲間たちに対して、笑顔で告げる。
「これからもこいつにゃ手ェ焼くだろうが、よろしく頼むよ」
サボにしても、エースにしても、本当にルフィを心配していることがわかる。しかも笑顔で彼を見送る上に礼儀正しいのだ。
その姿は仲間たちにとってかなり衝撃的だったのだろう。
エースが自身の船、ストライカーに降りた後も、彼らの動揺はしばし静まらなかった。
「嘘よ……ルフィのお兄さんが、あんなに礼儀正しいなんて」
「ルフィに輪をかけた身勝手野郎じゃなかったな……」
「意外と、って言うのは悪いけど、普通に常識ある人だったし」
「弟想いのいい奴だっ」
「兄弟って素晴らしいんだな……」
「わかんねぇもんだ。海って不思議だな」
「ちょ、ちょっとみんな」
口々に好き勝手言う仲間たちには目もくれず、ルフィは欄干から身を乗り出してエースの出航を見送ろうしている。彼の船、ストライカーはメラメラの実の火を原動力としており、エース以外には乗りこなせない代物であって、帆船よりもよほどスピードが出る。
それをわずかに動かしてルフィの前へ移動してから、エースは弟の顔を見上げた。
「ルフィ、今度会う時は海賊の高みだ」
「おう!」
「負けんなよ」
別れ際はあっさりしたものだった。
足先から火を発して船を動かしたエースは振り返らずに去っていく。

ルフィはそんな彼にも手を振って見送っていた。
「エース～！　またなぁ～！」
「はぁ……とにかく」
エースが去ったことで、甲板にはいつものメンバーのみ。
見回したナミが改めて現状を伝える。
「また振り出しに戻ったってわけね」
アラバスタへのエターナルポースは手に入らなかった。これではまだ決戦の地に向かうことができないため、再びエターナルポースを手に入れる手段を探さなければならない。
また重苦しい空気が戻ったように思う。
会話が停滞しかけた時、密かに匍匐前進でメインマストの根元へ到達したキリが口を開いた。
マストを背に座って皆を見やり、ふーっと息を吐きながら呑気に言う。
「まぁ、また別の方法を考えるしかないさ」
「そうね……とりあえずさっきの町で溜まったログがあるし、ひとまずここに――」
「おい、なんか近付いてくるぞ」
海に目を向けたゾロが言う。
確かにやたらと速いモーターボートがメリー号目指して接近してくる。エースではない。小型だが見たことのない形の船で、凄い勢いで接近してくるのだ。
慌てたウソップが騒ぎ出して、彼の言葉を真に受けたチョッパーも慌て始めた。
「敵襲ゥゥゥーッ!?　誰だァ、海軍か!?　それとも海賊か!?　砲撃準備だ野郎どもォー！」
「えええええっ!?　敵が来たのかぁぁっ!?」
「バカ、落ち着け。ありゃ違う」
「え？」
サンジが冷静に言ったことで二人はすぐに落ち着いた。
ボートはメリー号の隣へ横付けして止まる。

そこに居たのはハッタリーだった。
「よっ」
「お、ハッタリさん」
「なんだハッタリさんか」
「なんか用か、ハッタリさん」
「君ら言っとくけどハッタリーだからね、おれの名前」
呆れた顔で言うものの敵意らしきものはない。そこまで気にしていないのだろう。
「ほら」
「え？」
ぽんと投げられた物をビビが受け取る。
それは、〝アラバスタ〟と書かれたエターナルポースであった。
思わずビビは目を大きくして驚いてしまい、覗き込んで気付いたナミやシルクも同じで、そう時を置かずに他の面子も気付く。
欲しかった賞品がここまで運ばれてきたのだ。
「あ、あのっ、これ！」
「いい試合だった。それにどっちが優勝してもそれが欲しかったんだろ？」
「どうして……」
「なぁに、おれも新聞記者の端くれ。アラバスタの王女と内乱の話を聞いてれば予想はできる」
唐突な展開に皆が呆然としていた。
そこに背後からキリのくしゃみが聞こえて、ルフィが振り返る。
「お？　大丈夫かキリ」
「んー、大丈夫」
水に濡れて放置されたままだったので冷えたのかもしれない。
キリが鼻を啜った時、仲間たちはまだハッタリーとの会話に夢中だった。
「おれは前から海賊が好きだった。それに今回の大会ではあんたたちのファンになったよ。優勝賞品であると同時にこれはおれからのお礼だ。持って行ってくれ」

「ハッタリさん……ありがとう」
「そうか、真面目な顔して王女様からもその呼び方か」
名前の呼び方には多少の意見もあるものの、愛称だと思うことに決めたらしい。
ハッタリーは笑顔で言う。
「これからもあんたたちのことを応援してるぜ！　頑張ってくれよな！」
「ありがとうハッタリさん！　あんたいい人だなぁ！」
「いい人だぁ、ハッタリさん！」
「ＯＫ。もうその呼び方も慣れてきた。ところで紙使いくんだけ顔が見えないんだが……」
「ああ、キリなら水に濡れたからダメになってんだ。そこに居るぞ」
「いや、それならいいんだ。ずいぶん弱ってたから大丈夫だったのか心配になっただけで」
言うだけ言って、ハッタリーは再びエンジンをかける。モーターボートなど島から島への移動には適していない。給油が大変なだけでなく悪天候に耐え切れないからだ。おまけにグランドラインは様々な天候が襲うためいつ転覆するかもわからない。
用事が済んだらすぐに帰る必要があるのだろう。
彼らに向けて最高の笑顔を見せ、ボートは発進した。
「それじゃあ、武運を祈る！　これからもどんどん活躍してくれ！」
「おう！」
「はっはっはっは！　見てろよハッタリさん！　キャプテン・ウソップの名は今に世界中に轟くからなぁ！　おれの活躍にびびんなよ！」
ハッタリーもまた去っていった。
残ったのは三隻の船。
並ぶのはイーストブルー以来になる一味の本船と傘下の船だ。
メリー号の甲板でビビは、アラバスタへのエターナルポースを大事そうに握り締める。
ついに時が来たということだ。

仲間たちも理解している。その島へ行くということは、戦いが始まるということ。決して避けては通れない強者との決闘だ。
麦わらの一味とバロックワークス。一国を巻き込んだ戦争と言ってもいい。
緊張するビビを見つめ、イガラムは静かに問いかける。
「ビビ様。あの日の問いを、今一度確かめさせてください」
「ええ……」
「死なない覚悟は、おありですか？」
何とも重い一言。
勝利を誓う言葉ではなく、生きる覚悟を問う言葉。
ビビとイガラムは、カルーを連れて、とんでもない覚悟で闘ってきたのだろう。今、待ち望んだとも言うべきその時が近付いている。
目を閉じて深く息を吸って後、目を開いたビビは決意した顔で頷いた。
「もちろん。必ず、アラバスタを救うわ」
「それなら何も言うことはありません……私はあなたに付き従います」
彼女たちはすでに準備ができている。怖がりであるはずのカルーも目の色を変えていた。
その決意が伝染し、メリー号には緊迫した、しかし勇気に奮い立つ雰囲気が溢れる。
そんな一瞬、再びキリがくしゃみをした。
「へっくし！」
「お前、こんないいタイミングでなぜくしゃみを……」
「どうしたキリ？　大丈夫か？」
「んー、風邪ひいたかも」
「しかもこのタイミングで風邪ってお前」
「おれが診てやるぞ。風邪だってすぐ治してやるからな」
マストにもたれて座っていたキリの下へチョッパーが駆けてくる。
彼に微笑んで礼を言い、不意に空を見上げた。
「さて、いよいよか……」

小さな呟きは、不思議そうに首を傾げたチョッパーにしか聞こえなかったようだった。

アラバスタ編

Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　Ａｒａｂａｓｔａ：Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

そこは薄暗くひんやりとした空気が漂う一室だった。
地下にある一室なのだが、そうとは気付けず、壁一面が水槽と隣接しており、その中に大量の水があって巨大なバナナワニが泳いでいる。
わずかな光源となるのは水槽の上部から注ぎ込む光で、少しだけ室内が照らされていた。
それでも薄暗さは感じられて、まるで日の光を嫌うかのよう。
水槽の前に立ち、葉巻を吸う一人の男が居る。
彼の背後、少し距離を置いてベッドがあり、座っている少年が居た。
室内に存在したのはこの二人だけだ。
少年はまだ子供だろうと思える幼い外見であって、しかしそうとは思えない雰囲気を纏う。それはなぜか、彼が生気のない目をぼんやりとシーツに向けているからに他ならない。
真っ白い服に身を包んで、肩を落としてピクリとも動かなかった。
しばらくこんな状態だ。
何がきっかけであったか、唐突に男が口を開く。
水槽の方を眺めたまま背後の少年へ語り掛けたようだが、その声は冷淡なものであった。
「何も言わないのか？」
先程からずっと黙ったまま。目覚めてから一度も声を発さない。
男は待っていたという訳でもないとはいえ、その様子に興味を持ったのだろう。決して大人びているとは思わない子供が黙り込んだまま俯いているのだ。これが正常とは思わない。
よほどの物を見た。或いは体験したということか。
もしこれで目覚めてすぐ大泣きするようであれば興味は持たなかった。ならばなぜ興味を持ったかと言えば、泣きもしなければ怒り

もせず、一切の感情を失ったかのような姿だから。
生きる気力を失くした、まるで人形。今の彼を表現するならそんな言葉だろう。
少年は問われた後もしばらく口を開かなかった。しかしある時、ぽつりと呟く。
やはりその声も感情が抜け落ちたようなものだった。
「どうして……助けたんだ？」
「当然そう来るだろう。答えは簡単だ。お前の命令が気に入らなかった」
男がゆっくりと振り返る。
顔には笑み。シーツに目を向けて動かない少年を見て心配した様子など皆無である。
彼は水槽を背にして立って答えた。
「おれを誰だと思ってやがる。お前如きの裁量で動かせる人間じゃねえんだ。つまりお前の言葉に従う必要はない」
男の声が、静かに、重く室内に響いていた。
「だから助けた。その結果、お前はそこで苦しんでるわけだ」
少年は何も答えない。
反論する気も無ければ聞こえているかさえ定かではなかった。ひょっとしたら聞こえていても理解しようとする意志がないのかもしれない。それほど彼は動かない。
別に構わないと思っている。
男は気分を害した様子もなく口を動かす。
「そんなに死にたかったか？」
まるでこの空気を楽しむかのように言われる。
少年は何も答えず、視線は落とされたまま。室内には冷たい空気が漂っている。
砂漠の国とは思えぬほどだ。そう思ったのはこの施設を作ったその男である。
男は少年をじっと見つめていた。
「そうか。だが残念ながら、今のお前はこのおれに助けられ、拾われ

た。生殺与奪は全ておれに握られている。今から勝手に死ぬことは許さん」
怒るか、嘆くか、何かしらの反応はあるかと思った。
少年は無言を貫くのみだった。
「殺せとは言わん。どうせ今のお前じゃ不可能だ。だが一度でもおれに勝つことができれば自由を与えてやろう。どうだ？　少しはその気になったか？」
少年は答えない。顔を上げようともしなかった。
「それができないならおれに従え。この世の摂理だろう」
男は再び背を向ける。水槽を眺めて少年から目を外した。
怒った訳ではない。むしろ想像通りで上機嫌とすら言える。
先程と同じく背を見せた状態で、感情を隠した平坦な声で静かに語った。
「海賊に仲間を殺されたか」
ピクリと、初めて少年の指が動く。
表情は変わらず、その瞬間を見なければ変化には気付けない。だが男は気付いていた。
「この海じゃそう珍しくねぇ話だ。この世の全てをクソみてぇに思ってるその目を見りゃ大体わかるぜ。何もできずにお前だけ生き残ったってとこだろう」
少年が右手に拳を作る。しかし不思議と力は入らない。
「なぜ死んだと思う？」
「おれは……みんなに逃がされて……」
「違うな」
「敵が……あまりにも強過ぎて……」
「それも違う。答えは一つだけはっきりしてる」
男が振り返った時、少年の空虚な瞳を見て、初めて視線が合った。
「お前が弱いからだ」
あくまでも笑みを見せ、どことなく楽しそうに見える様子で告げられた。
初めて、少年の表情が動く。

「仲間を守る力がなかったからだ。そんなに大事ならなぜてめぇで守らねぇ。そいつらが死んだのは全てお前が弱かったせいだ。それ以外に理由はない」
「お、れは、おれだって、戦おうとして……」
「だが今ここに居る。仲間と共に死ぬこともなくな」
涙は出ない。だが少年が動揺しているのは明らかだ。
彼自身、気付いていたのだろう。もし自分が皆を守ることさえできれば、今になってこれほど落ち込むことはなかった。ならば恨むべきは他の誰かではなく己の力の無さに違いない。
改めて言葉にして気付かされた。
少年は項垂れ、男はそんな彼を見つめる。
「お前に力があれば誰も死ぬことはなかった」
「おれが、みんなを……殺したのか」
「弱ェってのは罪なのさ」
不意に少年が自分の手を握る。
少しの間、室内はふと静かになり、耳が痛くなるほどの静寂に包まれた。
男は彼を気遣うことなく再び声をかける。
「今から強くなったところで死んだ人間は戻ってこない。お前は一人のままだ」
間髪入れずに言葉を続ける。
「さっき言った通り、おれに勝つまで死ぬことは許さない。自由が欲しいならおれに勝つことが条件だが、今のお前にそれほどの力はなさそうだ」
「どうでもいい……」
少年が口を開く。
弱々しく、中身のない空虚な声。必死に絞り出しただろうそれは非常に小さなものだった。
「おれにはあそこが全てだったんだ……みんなが居ないなら生きる理由なんてない。だから死にたかったのに。あのまま海に沈んでれば全部終わったのに」

「クッハッハッハ。それであの発言か」
「摂理とか、ルールとか、自由とか、そんなものどうでもいい。……殺してくれ」
初めて会った時と同じ言葉。
殺してくれと、彼は言う。
だから男は笑顔で答えるのだ。
「嫌だ」
それは決して、命を粗末にしてはいけないだとか、彼を死なせるのが惜しいだとか、そんな理由があっての返答ではない。ただ単純に気に入らないのだ。頼むような口調で命令してくる彼の態度や言葉が素直に気に入らなかった。
だから、嫌だと答えるのは彼のためではない。
むしろ彼を苦しめる言葉だと知っているからこそ、敢えて口にしていた。
少年がぎゅっと手を握る。
それでも泣かないところを見ると、すでに心は壊れているのかもしれない。
ふと考えた時、それもいいかもしれないと思った。
空っぽの器。中身のない人間。新しく作るには都合がいいではないか。
なぜ助けたかと問われればただの嫌がらせとも言える些細な理由。助けてどうするか、そんなこと助けた場面では考えていなかった。しかし彼の命を拾った今、せっかくなら有効活用するのもいいかもしれないと今になって思い付く。
一度リセットされたからこそ、使えるか否かは彼次第。
男は静かに歩を進める。それでも室内には小さな靴音が鳴った。
俯く少年はそちらを見ようともせず音を聞く。
ベッドの脇に立たれても顔を上げる気配はなかった。そして彼の傍で、男が言う。
「言ったはずだぞ。おれを誰だと思ってやがる。お前の言葉に意味はない」

「じゃあ、おれは、どうすればいい……」
「生きる理由が必要か？」
作ると決めたならば最高傑作を。
最も使える優秀な武器を。価値のある頭脳を。集を作る個を。
「おれに仲間はいらん。だがついてくれば何か見つかるかもな」
少年がゆっくりと顔を上げる。
男は笑って言った。
「おれならお前を強くしてやれるぞ」
「強くなったら……何か、変わるのかな……」
「お前次第だ、と言っておこう」
再び少年が項垂れる。
それを肯定と受け取ったのだろう。どちらにせよ彼は大した反応は見せない。
歩き出しながら男が勝手に説明を始める。
「まずはその口調を変えろ。弱ェ奴が自分を強く見せることに意味はない。これからは自分を弱く見せることに努めろ。口調と態度で弱く見せ、油断した敵の隙を衝け」
部屋の隅にあるテーブルへ向かいつつ、朗々と語られる。
「それが弱者の戦い方だ。自分より強い奴を殺す方法ってのはいくらでもあることを覚えとけ」
「それで、誰かを守れるのか……？」
「どう使うかはお前次第だ。守る相手が居ればの話だがな」
テーブルの上にあった一枚の紙を取る。
振り返った彼は少年にそれを見せ、右手を掲げる。
「お前は運が良い。おれに会えたことと、その能力だ」
にやりと笑うその笑みに、その問いかけに、疑問など一片も見当たらない。
「〝覚醒〟について教えてやろう――」
その言葉が何を意味しているのか、今はまだわからない。
だが少年にとっては救いとも、悪魔の囁きとも感じられて、聞き流せなかったのは確かだ。

この日を境に、少年は変化していった。

白と黒

バタバタと翼を羽ばたかせて、一匹の鳩がメリー号から離れていく。

いまだアラバスタを目指す航路の道中である。

甲板ではウソップが喜びの声を上げ、手の中には一通の手紙があった。

「おいルフィ～！　ドリー＆ブロギー師匠から手紙だァ！　返事が来たぞぉ～！」

「ほんとかウソップ～！」

ドタバタと騒がしい二人に仲間たちが目を向ける。

専門家業だという伝書鳩を使い、海賊島に居るだろうドリーとブロギーに手紙を出したのがつい二日前のこと。早くも返事が来たことに驚きを隠せず、ウソップの下へ集まる者も多い。

彼らへ出した手紙は、傘下として集まるようにという招集状だった。

果たして如何なる返答が来たのか。甲板に居た全員が注目する。

ウソップの隣にルフィが立ち、その肩にチョッパーが飛び乗った。

すぐにシルクも駆けつけ、ナミやビビ、サンジやイガラムも集まってくる。

ゾロとカルーは少し離れた位置で座っており、目をそちらに向けていた。

一身に視線を集めながら手紙を開いたウソップは、文面を読み進めて簡潔に伝える。

「師匠たちは間に合わないみてぇだ。船がまだできてねぇんだってさ」

「そっかー。おっさんたち来ねぇのか」

「そりゃあの二人はスケールが違うからな。足伸ばして寝れるような船っつったらめちゃくちゃでかいんだぜ、きっと。作るのも時間かかってんだろうなぁ」

ウソップが誇らしげに笑顔で言うと、ルフィの肩にしがみつきなが

らチョッパーが尋ねた。
「めちゃくちゃでかい船ってどれくらいでかいんだ？　メリー号よりでかいのか？」
「そりゃお前、メリーが何隻も乗せられちまうようなでかさに決まってんだろ。なんせ巨人の中でも誇り高い二人が乗り込む船なんだぞ」
「メリーが何隻もか？　すげぇ！」
「そうさ、それだけすげぇ男なのさ、ドリー師匠とブロギー師匠は」
「でっけぇ船かぁ。ししし、早く見てぇなぁ」
二人の近況を知ったウソップと同様、チョッパーは目を輝かせ、ルフィは楽しそうに笑う。そこに危機感は感じられずにいつも通りの呑気な様子だ。
一方、緊張した表情を見せる者も居る。
シルクは不安そうに、ナミは眉をひそめて周囲を見回す。
「あの二人が来れないと、ちょっと大変そうだね……」
「仕方ないとはいえ、やっぱり戦力不足は否めないわね」
「ええ……」
ビビが俯いて視線を落とす。
敵はおそらく千人以上の戦力を有している。一部はウィスキーピークで倒したが、決戦を前にして戦力を集めていないとは思えない。そもそもバロックワークスの社員数は二千人を超えている。ならば準備を終えた今も二千人の敵が居ると考えた方がいいだろう。
それに対し、麦わらの一味はカルーも含めて11人。
メリー号の隣を進むアーロン一味が居るとはいっても五十人にも満たない。
戦力の差はあまりにも大き過ぎる。
巨人である二人が味方になればかなりの戦力となっただろうがそれも失敗した。
現状を理解し、サンジは煙草の煙を吐きながら仲間たちを見る。
「間に合わねぇんなら仕方ねぇ。船長もこれ以上は待つ気もなさそうだからな。このままおれたちでなんとかするしかなさそうだ」

「やっぱそうなるのか……」
「ウソップ、もう逃げられないわよ。あんたも早く覚悟決めなさい」
「わ、わかってるっての。おれだってこの状況で逃げようなんて思ってねぇよ」
すでに決意したナミが言う。するとウソップも深く息を吐いてそう答えた。
船上は重い空気に支配されており、個人差はあれど、少なからず緊張感が漂っている。誰もがその時がもう目の前まで来ているのだと感じ取っていたからだ。
全てが普段通りにとはいかず、その雰囲気を感じながらシルクが首を振り、呟いた。
「そういえば、キリは？」
「部屋に籠ってる。色々考えることがあるんだろ」
その頃、キリは一人、ラウンジの席に座ってテーブルを前にしていた。
いつにも増して深刻な顔である。
前にはチェス盤と、そこに並べられた白の駒。黒の駒は一つも並べられていない。それをじっと見つめて考え込んでいるようだった。
敵を知るからこそ勝つことは簡単ではないとわかる。
この戦いは彼の今後を決める重要なものだ。
いくつもの状況を想定し、思い付く限りの展開を頭の中に置いていた。
キリの目は動かないチェス盤を見つめて、ここに居ない相手を想う。
そこへルフィが現れて声をかけた。
「なぁキリ、巨人のおっさんたちから手紙来たってよ。まだ来れねぇって言ってた」
いつの間にかキリの隣に座っていて、笑顔で顔を覗き込んでそう言われる。没頭していたキリは幾分驚いて目を見開き、すぐにふわりと笑みを浮かべる。
他の者が近寄り難いと思っても、彼だけはすぐに懐へ飛び込んでし

まう。
キリは少し嬉しそうにしながら答えた。
「そうなんだ。それじゃあボクらだけでやらなきゃね」
「作戦できたか？」
「いや、まだ。でもいつまでもこうしてられないからね」
そう言うとキリは席を立ち、甲板へ向かおうとする。当然ルフィも続いた。
甲板へ現れた二人を見た瞬間、船上の空気は一変してしまい、更なる緊張感に襲われる。
「さて、作戦を決めようか。そろそろ到着も遠くないだろうし」
全員が集まり、円を描いて座る。
緊迫した表情が並び、一人も欠けずにキリの言葉に集中していた。
キリは持ってきた地図を広げ、見知ったアラバスタ王国の地形を確認しながら口火を切る。
「まず最初に、今回最も重要なことは二点ある。これを全員に覚えておいて欲しい」
指を二本立てて全員へ見せる。すでにキリの表情は真剣なものに変わっていた。
「一つは反乱について。ビビとイガラムの目的はここだ。だけどはっきり言っていつ本格的な戦闘が始まってもおかしくない状況にある。これを止めるには、反乱軍と国王軍を会わせない。この一点に尽きることを覚えてて」
「それはわかるけど、簡単にできることじゃないわ」
「そのためにできることはある。それも込みでの作戦さ」
不安を口にしたビビを律するようにしてキリが強く言う。
何か考えがあっての発言なのだろう。ビビは素直に頷いて続きを促す。
「もう一つはバロックワークス、というよりクロコダイルについてだ。彼らを倒さない限りは国盗りは終わらない。特にクロコダイルを止められないならアラバスタの王が代わる」
「い、言うのは簡単だけどな……」

「この点について、クロコダイルはルフィに任せる」
地図を見下ろしながらキリがぽつりと告げた。
わかっていたこととはいえ、それでも驚かずにはいられない決断。
不安を露わにしていたウソップが特に大きな反応を見せている。
「エージェントはボクらがなんとかする。だからここに居る全員、クロコダイルには手を出さなくていい。もし出会ったとしても逃げに徹して、自分の役目を果たしてくれ」
「本気か？　相手は七武海なんだぞ。いくらルフィだからって」
「いいんだウソップ。おれなら心配いらねぇ」
ルフィがウソップを見やり、彼にだけでなく他の全員へも伝える。
力強い眼差し。笑顔であるが一方で覚悟を感じさせ、有無を言わさずに納得させる。
「負けねぇよ」
その一言で反論は無くなった。
キリは地図を見たまま顔を上げることなく続きを語る。
人差し指で海岸を指し、そこにある町を示して説明を始めた。
「アラバスタに着いたその瞬間から勝負が始まる。もっと言えば相手はこっちの到着を待たずに始めてるはずだ。一秒も無駄にできないよ」
「まず、何が必要だ？」
「覚悟と目的を。全員の力を合わせなきゃだめだ」
腕組みをしたゾロの問いかけに、キリは全員の顔を見回す。
「全部一人でやる必要はないんだ。それぞれが自分の役割と目的を把握して、自分の仕事にだけ集中してくれればいい。そうすれば全員の働きが繋がって最良の結果が生まれる」
「その代わり誰かが途中で倒れりゃ総崩れか」
「そうならないために自分のことにだけ集中するんだ。一蓮托生でしょ？」
そう言ったキリは少し頬を柔和に崩したが、すぐに視線を外す。
メリー号の隣を進むアーロンの船に目を向けて、少し跳べば届くだろう甲板へ声をかけた。彼らも話を聞いていたようで、反応はすぐに

返ってくる。
「アーロン、やって欲しいことがあるんだ。こっちに来てくれないかな」
「ニュ〜、キリ。アーロンさんはちょっとアレなんで、おれが――」
はっちゃんが身を乗り出して答えていた時だ。
最後まで言わせず、ドスンと重い音を立て、アーロンがメリー号の甲板へ降り立った。
凄みを感じさせる顔でゆっくり歩き、彼らの輪へ近寄ってくる。見る者数名が緊張するものの、何も起こることなくアーロンは輪の外側で立ち、キリを睨みつけた。
彼も物怖じせずに見つめ返した後、アーロンからビビに視線を移して問う。
「ビビ、悪いけど手荒なこともするよ。反乱を止めるために」
「ええ……正直、納得したくないけど、必要なことなのね」
「誰も殺させないって誓う。それに反乱軍と国王軍がぶつかれば死者は免れない」
キリの言葉を受け、ビビは数秒目を閉じて沈黙する。
大きく息を吐いて覚悟を決め、キリの目を見ると真剣に問いかけた。
「それで、誰も死なせずに戦いを終わらせられる……？」
「善処はするよ。確実だとは言えない。だけど間違いなく犠牲者は減る」
「選ばなければいけないのね。何も傷つかないなんて不可能だから」
「建物は壊れてもまた作り直せる。だけど人はそうもいかない」
「……わかったわ。キリさんに任せます」
「ありがとう」
再びキリが地図に向き直り、アーロンへ伝える。
「上陸する場所は港町ナノハナ。アーロンたちにはここで暴れてもらう。家を壊すくらいなら派手にやっていい。とにかく注意を引いて、海賊が来たことをカトレアまで伝える」

「カトレア？」
「反乱軍は本拠地をユバからカトレアへ移した。海賊の襲撃に遭ってクロコダイルが現れないとわかったら、コーザなら必ず助けに来る」
「キリさん……リーダーの名前まで」
「反乱軍をナノハナまで引き寄せる。その時点でアーロンたちは撤退。一人も殺すな。その後は海上で海賊や海軍を島に近付けないようにしてもらう」
キリの視線が、イガラムに向けられた。
その瞬間、本人だけが誰よりも早く理解する。
「説得はイガラムに任せる。ボクらはその間にアルバーナへ向かう」
「イガラム一人で？　キリさん、私も――」
「いいえ、ビビ様、私一人で向かいます。お任せください」
心配するビビの言葉を止めさせて、イガラムは彼女を見ずにキリを見ていた。
意図は伝わっている。何も考えずにそう言い出すはずがない。
イガラムは彼に感謝すらして、恐れもせずに問いかけた。
「危険が伴うということですね？」
「危険じゃない場所なんてないさ」
「確かに……しかし、国王軍と反乱軍の説得では状況が違う。二つを比べた時、あなたはこちらの方が危険だと考えた。だから私に任せるのでしょう」
「そんな、危険なら尚更一人でなんて……」
「感謝します。私に任せてくれたことを」
イガラムは胸に手を当て、ビビが戸惑うことを知りつつ、全員へと伝える。
「国王様のため、ビビ様のため、祖国のため、私はいつでもこの命を捧げるつもりです。そのためならば怖いものなどありませんとも。ビビ様、どうかご心配なく」
「……ええ。あなたに託すわ、イガラム」

「先にアーロン一味を潜伏させておく。こっちの動きに気付けば相手は必ず接触を阻止しようとするはずだ。出てくる人間が誰かにもよるけど、ビリオンズ程度なら問題はないはず。ただ問題はそれだけじゃない」

話が進むことで仲間たちの意識も変わる。

キリが語る声に集中し、もはや笑みの欠片もなく彼を見つめていた。

「反乱軍と国王軍の両方にバロックワークスの社員が潜り込んでいる。きっかけ一つでいつでも戦いが始まるような状況で、一番きっかけを作り易いのはこの潜入した社員だ。誰かが一発の銃弾を放っただけで必ず戦争は起こる。もう長らくそんな状態が続いてた」

「でも、今日まで戦争にならなかったんでしょ？」

「それもバロックワークスが仕組んだことだ。正直に言えば、ボクが組織を抜けようとした時点でいつでも国を盗ることは可能だった。そんなつもりはなかったけど、ひょっとしたらボクがここに戻ってくるのを待ってたのかもね」

何気ない発言にビビとイガラム、それにカルーがぞくりとする。

いつでも盗ることができた。彼ら自身が気付かない間に事態はそこまで進んでいて、キリもおそらく止めるために組織を離れたのではないのだろう。

たった一つだけ何かが違っていれば、今頃はアラバスタの王は代わっていたのかもしれない。

今日の今日まで首の皮一枚で繋がっていただけなのだ。

戦慄する彼女たちを気遣うこともせず、キリは呟く。

「さっき言った反乱軍と国王軍を会わせないことの重要性はここにある。会ってしまった時は必ず戦争になると考えておいていい。潜入した人間はその時を待ってる。そこでボクらがやるべきことの一つに、両軍に潜入した社員を倒すことも含まれる」

「どうするんだ？」

「社員のデータは全部記憶してる。メンバーが変わってない限りはボクが言い当てられるさ」

そう言うとキリは懐から二枚の紙を取り出した。
「顔も名前もはっきり覚えてればリストを作ることもできる。両軍のリーダーに真実を伝えて、彼らの素性についても教える。戦闘が始まる前ならこれで少しは状況も変わるはず」
「だがおれたちを信用しねぇなら話も聞かねぇぞ。わざわざ潜入までしてるんだから期間も短くねぇはずだ。今頃とっくに仲間として認められてるんだろ？　そいつらを仲間だと言い張って信じない可能性もある」
「わかってる。それだけに交渉は慎重に進めなきゃならない。基本はビビが国王軍を、イガラムが反乱軍を止める。もしそうできなかった場合はボクらだ」
「海賊の話じゃますます信じねぇな」
「その時は実力行使でいい。どうせ海賊なんだ、殺しさえしなければ手当たり次第に攻撃して多少は傷つけたっていいよ」
「ま、確かにその方が楽だな」
にやりと口元に笑みを浮かべて、サンジが納得した様子で頷いた。
手段を選んでいる場合ではないのである。
二人のやり取りを聞いていてきっと他の皆も理解したはずだ。
キリがアーロンへ目を向けた。
視線を真っ直ぐ受け止め、彼は睨む目つきで応じる。
「アーロン」
「アァ？」
「もしイガラムが失敗したら、反乱軍を襲ってくれ。ナノハナの町がもう一度襲われるようなら彼らもアルバーナに集中することはできない。ただしさっきも言ったけど、誰一人殺さずに」
「確約はできねぇなァ。人間ってのはすぐ壊れやがる」
「お前の怒りはこんなところで使うものじゃないだろ。今は抑えておけ。どうせこの戦いが終わればそこら中から海軍が来るんだ。思い切り暴れるのはその時でいい」
フンッと鼻を鳴らして、アーロンは凶悪そうな顔で笑う。
「本気でおれがてめぇらに従うとでも思ってんのか？　てめぇらが

離れてる間に船を壊し、町の人間を殺し尽くして反逆を始めるとなぜ考えねぇ。疲弊したてめぇらを皆殺しにするってのもいいかもしれねぇな」
「そんなことしないよ」
「なぜそう言い切れる。おれはてめぇらの味方になったつもりはねぇんだぞ」
「なら敵として信頼するまでさ。そのつもりなら今頃とっくにやってる」
「チッ……」
「ボクらは内陸深くまで移動する。メリーのことも含めて、海の方は任せた」
アーロンはそっぽを向いて黙り込む。肯定も否定もしないところを見ればきっとやってくれるのだろう。誰一人殺さずに任務を終わらせようとするはずだ。
キリは彼を信頼し、わずかに苦笑して視線を外す。
その後は確証もないというのに微塵も心配しようとはしなかった。
「本来の作戦名は〝ユートピア〟。Ｍｒ．２が国王に化けて市民と反乱軍を扇動する予定だった。だけどそれを知るボクがここに居る以上、全く同じ作戦で来るはずがない。敵もこっちの作戦を一つずつ潰そうとしてくる。イレギュラーは必ず起こる」
妙に力強さを感じさせる声。
緊迫した状況であることを伝えさせるには十分だ。
「クロコダイルはルフィに任せる。それ以外のエージェントは全部ボクらが倒す。特に厄介なのがオフィサーエージェントだけど、フロンティアエージェントもそれぞれ得意としていることが違うスペシャリストだ。放っておけば必ずどこかで問題が起きる」
キリは、紙を組み合わせて白いチェスの駒を作り、それを地図の上に置いた。
「これから全エージェントの情報を伝える。外見、性格、癖、戦法、弱点。それから戦況がどう動くかわからないから、あり得るだろう展開と、あり得ないかもしれない展開も。使う使わないは別にしても、

知ってるだけでずいぶん変わってくるはずだ」
「誰とぶつかるかはわからねぇってわけだな」
「そうだ。誰に出会っても戦えるよう、そして勝てるように伝える。それと最も重要なことは、一度アルバーナに入れば狙って集まることは難しい」
置かれた駒は11個。
二千人を超える組織を相手にするにはあまりにも儚い。
しかしたったこれだけでやらねばならない。
「アルバーナに入った後は、各々がそれぞれの判断で行動するんだ。自分に何ができるか、考えるのはそれだけでいい。一人一人の行動で結末は変わる」
皆が真剣に聞いている。自然とキリの声も重くなった。
勝てば旅は続く。負ければおそらく全てが終わる。
「もう一度全員で集まる時は勝った後だ。一人も欠けることなく会おう」
そう言ってから、キリは自身が知る限りの情報を吐き出し始めた。

＊

最初の言葉は、〝殺してくれ〟だった。
全てを捨てた目を見た瞬間に敗者となった海賊なのだと気付いた。グランドラインの敗者。広い海ではそう珍しくない存在。
本来なら拾う必要もない命。
わざわざ掬い上げたのは、見えない何かがあったからなのか。
現在、彼の前には物言わぬチェス盤と黒の駒。
相手は居ない。あるべき場所に白の駒は置かれていない。
それを不思議に思うことはないようだ。
目の前に相手が居なくとも、戦況を見極めることは難しくない。少なくとも彼らは、お互いが敵である現状ではそれを当たり前と考えている様子だった。
悲しくはない。むしろ心が躍る気すらする。

なぜそう思うのかなど、理由は一つしかない。
互いを知り尽くした相手だからこそ勝負は面白くなる。確かに厄介だが、それでも彼が笑うのは自身の勝利を疑っていないからなのだろう。
「Ｍｒ．０、全員揃いました」
暗闇に光を差し込ませる扉の向こうから声をかけられた。
ミス・オールサンデーに呼びかけられ、クロコダイルは席を立った。
無人のテーブルを離れて光のある方へと向かう。
果たしてそれは決別だったか。はたまた止まった時を動かすためなのか。
彼が何を想うのかは、クロコダイル本人しか知らない。

最終作戦

サンディ島、アラバスタ王国。
夢の町と呼ばれるレインベースは、近頃反乱の危機に脅かされるこの国において、唯一といっていいほど和やかな空気を醸し出している。
理由の一つとしてカジノ〝レインディナーズ〟が盛況だったことが考えられる。
クロコダイルが経営するカジノがあることによって、この町は常に安全だと思われていた。
そのレインディナーズの地下。
関係者ですら一部の者しか知らない空間がある。
豪華な調度品が置かれた広大な一室。長い机と複数の椅子が置かれている。
そこに並んだ者たちが居る。
バロックワークス社員の中でトップクラスの実力を誇る、オフィサーエージェントの面々だ。
揃いも揃った実力者たちが戦いの時を待って落ち着いている。知る者からすれば圧巻だろう。
ただし素性を隠す彼らの存在を知る者は少ない。
Ｍｒ．１からＭｒ．５まで、男女一組のペアが全員その場に集結している。これはバロックワークス始まって以来の光景であり、それだけ重要な任務が始まることを意味していた。
「あー暇。いつまで待ってればいいのかしら。あちし回るわ。暇すぎて回る」
招集に応じたＭｒ．２はすでに到着しており、待つことに飽きたのか、わざわざ椅子の上に立ってくるくると回り始めていた。さらには声も大きく、周囲に居る数名が表情を変える。
一応味方ではあるが、普段滅多に顔を合わせない。
決して仲良しという訳ではなくて、怒りを表すことに躊躇いはなかった。

バンッと机を叩いたのはミス・メリークリスマスだ。
彼女は短気で怒りっぽい。何度か顔を合わせたことがあるＭｒ．２とは相性が悪い。
Ｍｒ．２の動きが目障りだったようで、バンバンと何度も机を叩きながら抗議を始めた。
ミス・メリークリスマスの対面に座るＭｒ．４はそのやり取りを見て大笑いしている。
大きな腹を両手で押さえて、ひどく緩慢な笑い声を発していた。
「うるッッさいんだよ、このバカ！　〝バッ〟！　この〝バッ〟！　少しは静かにできねーのかおめーは！　腰に来るんだよ、おめーの声は！」
「なーによオバハン！　あちしと闘る気!?」
「フォ～～フォ～～フォ～～～……！」
「おめーもうるせーんだよＭｒ．４！　のろいんだよ笑い声が！　のろま！　〝ノ〟！　〝ノ〟が！」
バンバンと飽きずにミス・メリークリスマスが机を叩いている。Ｍｒ．２もまた怒りを返して、それを見ているＭｒ．４は笑い続けた。
そんなやり取りを見てくすりと笑う女性が居る。
Ｍｒ．１のパートナー、ミス・ダブルフィンガーが腕を組み、彼らを見ながら柔らかく笑う。
「少し落ち着いたらどう？　そう焦らなくてもすぐに仕事は始まるわ」
「緊張感のねぇ奴らだ……これでプロのつもりか？」
嘆息するＭｒ．１が呆れた声で呟く。
つまらなそうな一言も二人の騒ぎにかき消され、それを良しとして彼も再び沈黙する。
紅茶が入ったカップを優雅に持ち上げる、特徴的な髪型の男が居る。
Ｍｒ．３は周囲の喧騒に気分を害す一方、特に反応することもなく静かに口を開いた。返答するのは彼の対面に座った女性、というよりは少女という風貌の、ミス・ゴールデンウィークである。

「しかし不可解だガネ。我々が集められることなどそうないというのに」
「ひょっとして、大変な仕事？」
「ああ。それもかなり大規模であることは間違いなさそうだガネ。でなければそう仲良くもないこの面子が集まることもない。もしやこれが最後になるか？」
「バロックワークス無くなるの？」
「それはどうかわからんが、何かが変わるのは確か。それほど重要な任務に違いないガネ」
カップを置いたＭｒ．３の発言に反応し、Ｍｒ．５が口を開く。
彼の対面にはにこにこと楽しそうな笑顔の女性、ミス・バレンタインが座っていた。
「フン、どうせ大したことはねぇさ。いつも通りに終わるだろう」
「私たちが失敗した任務なんて今まで一度もないし。キャハハ」
「わからんカネ。今までとは格が違うから全員集められているのだ。我々だけではない、下位エージェントたちまで総動員されているようだガネ」
「Ｍｒ．３の言う通りよ。今までの任務とは質が違うわ」
呆れた口調で言うＭｒ．３に同意して、一人の女性が室内に入ってくる。
ボスのパートナー、ミス・オールサンデーである。
彼女はテーブルの傍までやってくると、椅子に座ることなく傍に立ち、全員の視線を受けながら一席だけ空いている状況を確認した。
まだ来ていない人物が居る。
Ｍｒ．１ペアの向こう側、そこに座るべき人物を知るのはこの場でミス・オールサンデーのみ。
少し前にはもう一人居た。オフィサーエージェントだけは顔も名前も知っている少年。彼がこの場に居ればもっと早く作戦も始動しただろうに、とも思う。
ミス・オールサンデーは柔らかく微笑み、彼らの顔を見回した。
「長旅ご苦労様。あなたたちが話していた通り、これから始まるの

はバロックワークス始まって以来の重大な作戦。言わば集大成よ」
「やはりそうか」
「お久しぶりねぃサンデーちゃん！　最近ドゥ～!?」
「うるせーっつってんだよオカマ！　〝オ〟！　この〝バッ〟！」
また一部が騒がしくなる。
決して仲良しと呼べるほどの間柄ではないが、そうする姿だけは仲間と称することができそうに見えてしまう。ミス・オールサンデーはくすりと笑い声を漏らした。
「これだけの面子が揃うと流石に盛観。みんな仲良くというわけにはいかなそうだけど」
「ここはどこなんだ、ミス・オールサンデー」
「そういえばあなたたちは、バンチに引かれて裏口から入ったのよね。町はわかると思うけど、ここは〝夢の町〟レインベース。その中のカジノ〝レインディナーズ〟の一室よ」
「レインディナーズ？　なぜカジノに……」
「良い予感はしないガネ。このカジノのオーナーが誰か知らぬはずもあるまいに」
「その辺りを説明するためにも、集合はここが良かったのよ」
Ｍｒ．１が渋い顔をする一方、Ｍｒ．３はすでに嫌な予感を感じていたらしい。しかしよく見れば誰もがその場所の危険性を理解しているらしく、砂漠の国の英雄を気にしているようだ。
レインディナーズのオーナーにバレたら生きて帰れるかわからない。
そんな思考に囚われる面々を見つつ、ミス・オールサンデーはあっさりと告げる。
「そろそろ説明を始めてもいいかしら」
「そうさ、前置きなんざどうでもいい。それ始めな。やれ始めな」
「ウフフ、慌てないでミス・メリークリスマス。その前に紹介したい人が居るの」
ミス・オールサンデーの呟きに、全員の緊張感が高まったのが伝わった。

「今までは私が彼の〝裏の顔〟としてあなたたちに働きかけてきたけれど、もうその必要は無くなったわ。そろそろ会っていい頃だと思うの。あなたたちの社長(ボス)に」
「まさか……」
「そこに居るわ。気付かなかったかもしれないけれど」
ミス・オールサンデーが一つ残っていた空席に目を向けると、全員がそちらを見る。
そして椅子がくるりと回った時、その姿が視界に入った。
一人も欠かさずに驚愕の表情を示し、室内の空気は一変してしまう。
「諸君らの働きによって全ての準備は整った」
椅子が止まった時、その目に入ったのはアラバスタ王国の英雄、サー・クロコダイル。
英雄であると同時に政府に認められた海賊。
想像もしなかった人物の登場に全員が息を呑み、身を乗り出さずにはいられない。そうせずにはいられないほどの大物、それほどの強者。
誰にも気付かれずに現れたその男は、間違いなく彼らの想像を絶するほど強かった。
数秒前とは空気がまるで違う。
エージェントたちは血相を変えてクロコダイルの姿を認めた。
「……こいつはえらい大物が出てきたもんだね」
「なぜ七武海の海賊がッ。政府側の人間でしょう?」
「あちしたちは海賊の手下だったってわけなの!?」
「これは流石に予想できなかったガネ……まさか砂漠の英雄が悪事を働くとは」
「あんたがおれたちのボスなのか?」
口々に言葉を発する中、クロコダイルはほんの一瞬、表情を変える。
「不服か?」
凄まじい覇気を感じて全員が同時に黙り込む。
腕を組み、視線を落として服従の姿勢を見せた。誰一人欠けること

なく、クロコダイルには敵わないとこの一瞬で感じ取った結果だろう。
ミス・オールサンデーは小さく笑い、流石の威圧感だと他人事のように考えていた。
一度は黙り込んだミス・ダブルフィンガーが、聞かずにはいられず口を開く。多少の戸惑いはまだ現状を受け入れ切れていないからだろう。
答えるクロコダイルは至って冷静だった。
室内の空気は驚くほど重くなっている。
それだけ彼らがこの会話に集中していたという証明だ。
「不服とは言わないけど、七武海といえば政府に略奪を許された海賊。なぜこんな会社を……理由や目的がわからないわ」
「おれが欲しいのは金じゃない。地位でもない。〝軍事力〟だ」
「軍事力……？」
「この島にはある巨大な〝力〟が眠っている。或いはその位置を示す物がな。おれの目的は国を奪い取り、その圧倒的な〝力〟を手に入れることにある」
クロコダイルは懐から取り出した葉巻を銜えて、ライターで火を点けた。
煙を吐き出しつつその場に居る面子の顔を見回す。
「国を盗ることはついでと言ってもいい。だが作戦が成功し、国と〝力〟を手に入れた暁には我々の理想郷が完成することを約束しよう」
「国盗り、それに軍事力か……」
「なんだかとんでもない話ねい。あちしゾクゾクしてきたわ」
「つまりこれまでの任務はそのための準備といったところカネ」
「そういうことだ。お前たちが遂行してきた全ての任務がこの作戦に繋がっている。そしてこの作戦が終わった時、アラバスタ王国が終わる」
クロコダイルが初めて笑みを見せ、しかしそれでも威圧感が消えることはない。

「作戦名〝ユートピア〟。この最終作戦によって国盗りは成る……はずだった。少し前までではな」
「どういうことだ？」
「諸君らも理解しているだろうが、今この場に居ない人間が一人居る」
「そうようゼロちゃん！　紙ちゃんでしょ？　あちしこの前会ったとこよう！」
Ｍｒ．２が大声を出したことによって反応せずにはいられない。
一人足りないことは全員が気付いている。
ボスのパートナーであり、組織で唯一コードネームが与えられなかった男。この場に居る者たちには存在が知られ、決して浅い関係でもない存在。
彼が組織を離れたことは噂として全員に伝わっていた。
忘れた訳ではないが敢えて触れようともしなかった話題。それがＭｒ．２の口から出され、またクロコダイルが言いかけた言葉もあって、なんとなく事情を察する。
クロコダイルは薄く微笑み、言った。
「国王軍と反乱軍、今更こいつらが何をしたところで作戦の失敗はあり得ない。だが本来の作戦にはなかったイレギュラーも存在する……それがネームレスの存在だ」
「組織を抜けたという話、本当だったのか」
「なに、ただ休暇を取っていただけだ。じきに戻るが、この作戦で敵になることは間違いない。最も厄介な障害となるだろう」
「それはまずいわね」
「紙ちゃんってばあちしたちのこと熟知してるからねぃ！　ってことは作戦も全部バレちゃってるじゃなーい！　ジョーダンじゃなーいわよーう！」
「だから作戦を変更する必要がある。ユートピア作戦だけでは足元を掬われるだろう」
一瞬の静寂があった。
その静寂を打ち破ってクロコダイルが声を発する。

「作戦名〝ディストピア〟」
それは、彼が出した一つの答え。
「本来ならば反乱軍と国王軍をぶつけさえすれば簡単に終わるはずだった作戦だが、奴はこれらの衝突を止めようとする。阻止してもいいが……そちらに兵力を分散させることも目的の一つだ。敢えて乗ってやる必要もあるまい」
「ということは？」
「反乱軍は捨てる。一応火を点けておくがな」
「そーいや扇動してたのは紙ちゃんだものねぃ。ちょっと扱い辛いわね」
「もっとも、捨てたところで問題はない。反乱軍は作ることができる」
腕を組んで話を聞いていたＭｒ．３が、ぴくりと眉を動かした。
利用するのではなく作る。
頭脳明晰な彼であっても即座に理解することができず、真剣な声で尋ねた。
「どういう意味だガネ？　反乱軍は捨てると言ったはずなのでは」
「ミス・オールサンデー」
「あなたたちに最後の指令書を渡すわ。それとＭｒ．３、あなたの疑問に関してだけど」
ミス・オールサンデーがヒールを鳴らしてテーブルに近寄り、微笑みを湛える。
「サー・クロコダイルは海賊からこの国を守る英雄（ヒーロー）。そして内乱が続くこの国は海賊たちにとっては良い標的よ。ここまで言えばわかる？」
「なるほど……戦力としては不安も残るが、腕は申し分なさそうだガネ」
「どういうこと？」
「じきにわかる」
首をかしげるミス・ゴールデンウィークが尋ねるものの、Ｍｒ．３は敢えて言おうとしない。

その間にもミス・オールサンデーの手によって全員へ指令書が配られる。
たった一枚の紙に、自分に求められる指令だけが書かれていた。他の者がどう動くのかは記されていない。自分の仕事だけ完璧にこなせ、ということだ。
それを見て難しい顔をする者は居ない。これまでも自身の仕事にのみ従事し、その他の余分な情報は与えられないことが当然。
今更驚く内容ではなく、素直に指令を受け入れる。
読み終え、理解した後で、全員がそっと腕を伸ばした。
テーブルにある燭台、蝋燭の火で指令書を燃やして、証拠を消す。
「大した敵ではない……が、指揮官が有能であればどんな雑兵もほどほどに使える。我々の敵となる連中の顔を知っておいた方が賢明だろう」
再びミス・オールサンデーが動き、映像電伝虫によって、壁一面に複数の写真が映し出された。
麦わらの一味、及びビビとイガラム、カルーの写真だ。一人も欠かさずに映されていて、エージェントたちは彼らの顔を瞬時に記憶する。
その中には当然キリの顔もあった。
「これがバロックワークス社最後にして最大の作戦。失敗は許されん。決行は明朝7時」
「そこに彼らもやってくる……」
「武運を祈る」
クロコダイルの一言に、了解、と声が揃った。
決行は明朝7時。
明日になれば敵がこの島に来ることは、その一言で理解できる。そしてその敵が、秘密主義を貫いた自分たちを誰よりも理解していることは間違いない。
どうやら明日は長い一日になりそうだ。
全員がその覚悟を決めていた。

一日の始まり

サンディ島、アラバスタ王国。
今日も平穏な一日を始めようとするその土地で、ある男が呟いた。
「今日は、なんだか……」
「んん？　どうした」
首都アルバーナの町並みで、中年の男が空を見上げていたようだ。
近くに居た男が怪訝そうな顔をして声をかける。
今日の空は雲一つなく晴れ渡っており、とても美しい、鮮やかな青に染められていて、しかし見上げる男はその様子に何かを感じていたようである。
「いつもと違う気がするなぁ……」
「そうか？　晴れてるのはいつものことだろ」
「確かにそうなんだが、そういうことじゃなくてだな」
「そういや近頃、雨が降らんなぁ。昔からこの町だけはたまに降ってたのに」
「ああ……」
「アラバスタ全域に降ってくれりゃ、反乱なんて起こらなかっただろうになぁ。世の中そう上手くはいかねぇやなぁ」
話しながら男は仕事のために樽を運ぶ。
背後の動きを確認しようとはせず、もう一人の男は空を見ていた。
「やっぱり、何か違う気がするんだがなぁ……」
「おい、さぼってる場合じゃねぇぞ。今日も仕事だ。昨日と今日が違うのは当たり前で、今日は今日で精一杯仕事しなきゃいけねぇのよ」
「うーん、それもそうか。何か違うってのは当たり前なんだよな」
「そりゃそうさ。今日には今日の空模様があるってなぁ」
そう言われて、空を見ていた男も仕事のために動き出した。
所変わって王宮。
今朝はいつもより騒がしく、町並みはいつも通りの様相でも、王宮内だけが慌ただしい様子を見せている。兵士が廊下を走り回り、召使

いが右往左往していた。
廊下の一角、腕を組んで厳めしい顔をする男が居る。
他の兵士とは異なる服装をした彼は護衛隊の副官である。
隊長であるイガラムが居ない今、王宮に居る二人の副官がしっかりしなければならない。
チャカは険しい表情で兵士からの報告を待ち、ひどく落ち着かない様子だった。
「チャカ様！」
「国王様は？」
「やはり見当たりません！　くまなく探したのですが……！」
一人の兵士が報告のため駆け寄ってきたが、やはり望んだ結果は得られない。
チャカはさらに表情を厳しくして、思わず頭を抱えてしまう。
今朝起こったばかりの大事件。それは、寝室から国王の姿が突如消えてしまうという、不可解且つアラバスタ王国にとって一大事であった。
昨今、内乱で揺れる国内の状況を考慮して国王の部屋の前には警備が居た。
それでなくても城内は常に侵入者を警戒している。国王に近付く者を必ず調べる。しかし昨夜、怪しい者を見た者は一人もおらず、城内のどこにも怪しい痕跡さえ残っていない。
本当に国王だけがきれいに消えてしまっている。
これを異常と言わずして一体なんだと言う。
国王の身を案じるチャカは焦りを募らせ、いくつもの可能性を考慮して犯人へ辿り着こうとするものの、あいにく思い当たる節も実現可能な手段も思いつかない。
国王が自ら部屋を出てどこかへ行ったという可能性はあるだろうか。
それなら部屋の前に居た警備の兵士に声をかけるはず。黙っていても気付くはず。やはりそれは考えられない。ならば最も可能性が高いのは誘拐ではないか。

できるはずがない、と思うことこそ思考の罠だと思えてくる。
城内の警備を潜り抜け、一切痕跡を残さずに国王だけを連れ去る。
可能か否かはこの際置いておくとして、それならばこの状況も納得できそうだ。
「まさか反乱軍が……？　いや、それでも誰にも気付かれずにというのは考えにくい。しかし国王様はいまだ見つからず……一体何が起こっているのだ」
「チャカ様、無礼を承知で申し上げますが、まさかコーザの奴では？
彼は幼い頃にこの城へも頻繁に出入りしていましたし、我々が知らない秘密の通路などがあっても不思議ではないかと」
「バカを言え。コーザはもう大人だ。そんな通路があったところで城内に入って警備の者が気付かないというのはやはり違和感がある。子供の頃と同じようにできるものか」
「しかし、国王様が黙って城を離れるとは思えませんし……」
チャカは報告に来た兵士と話し、現状を正しく理解しようとする。しかしわからない。この不可解な現状を上手く理解することができずにいる。
国王はどこへ。またその手段は如何なるものを。
考えれば考えるほど答えから遠ざかる気がしてきて、チャカは厳しい顔をした。
「ええい、考えていても仕方ない。とにかく国王様をお探ししろ。昨夜抜け出されたとしてもそう遠くまでは行けない。アルバーナ中を探すんだ」
「ハッ！」
敬礼をした兵士がその場を去っていく。
チャカも慌ただしい足取りで廊下を歩き、どこへともなく移動を始めた。
どこへ向かえばいいのかがわからない。
状況が状況であっても、国王が居なくなっただけでこの体たらく。自らを情けないと思う。
国を守る者として、如何なる事件が起ころうとも忠義を尽くし、国

を守らなければ。そんな考えとは裏腹に今の自分は焦るばかりで何もできていないと感じた。
このまま何も起こらないで欲しい。ただの悪戯であってくれれば幸いだが。
そう思う一方、突然の異常事態でなんとなく察するものがある。
今日、この日に、何かが始まろうとしているのでは。
チャカがそう思った時、廊下の向こうから走ってきた兵士が大声で叫んでいた。
「チャカ様ッ！　た、大変です！　すぐに広場へお急ぎください！」
「国王様を見つけたか!?」
「は、はい！　しかし……とにかくお急ぎを！　ペル様も向かっておられます！」
「わかった！」
簡潔に答えるとチャカは全力で駆け出した。
あの慌てぶり。国王はきっと見つかったのだろうがやはり問題が起こっている。最悪の想定すらしながらもチャカは自身が持てる力を全て振り絞り、王宮から近い場所にある広場を目指す。
かくして彼は集った町民を押しのけて広場へ辿り着いた。
そこで見たものは、おそらく想定したよりも悪い光景だっただろう。
広場を見下ろす高い位置。建物の屋根にはアラバスタ国王、コブラの姿があり、猿ぐつわを噛まされた状態で、頭から血を流しながら跪いていた。
その隣には武器を振り上げる犯人だろう男。
見上げたチャカは背筋に悪寒が走ったことを知る。
そこに居たのは見間違うはずもなく、成長したコーザの姿だったのだ。
「愚かな王はいくつもの町を捨て！　自分が住むこの町だけを守り！　国民の命を無暗に奪った大罪人だ！　この王が人の痛みを知っていたのなら、救える命はいくつもあった！」
「コーザ……そこで、何をしている……？」

「チャカ！」
怒りか、悲しみか、恐怖か、絶望か。握った拳を震わせるチャカへ一人の男が駆け寄った。
護衛隊の副官としてチャカと肩を並べる男、ペルという人物だ。
彼もまた激しく動揺しており、しかし今、そう遠くない場所で自身が守るべき王が傷つき、拘束されている。この状況を見て現状の打開を考えているらしい。
どうすれば人質に取られた王を傷つけずに救えるのか。
必死に考えながらも相棒へ声をかけて、心から王を心配していた。
「すまない、おれが着いた時にはもう……！」
「謝る必要などない。それよりも今は、これ以上の怪我をさせずに助けることが重要だ」
「ああ、わかっている。だがこちらが動けば奴も動くぞ」
「コーザめ、自分が何をしているのかわかっているのか……！」
腸が煮えくり返りそうになるほどの怒りを覚え、二人はコーザを睨んで怒気を放つ。相手がそれに気付いた様子はないが、もし気付いていれば最悪の結果にもなっただろう。
二人は冷静になるよう努め、一時とはいえ怒りを押し殺そうとする。
その間にもコーザは叫んでいる。
国王コブラは王の器ではない。こいつこそ人殺しだ。王が愚かだから人が死んだ。
思い付く限りの言葉を並べて王の尊厳を傷つけ、その姿を汚そうとしている。その場に集まった人々、その声を聞く者にとってはそんなコーザの姿こそ狂気のものに見えたが、本人はそれでも構わないようだ。徹底的に国王を攻撃する。
チャカとペルの表情は見る見るうちに変わっていった。
主君をけなされて黙っていられるはずなどない。
今にも動き出そうとするが、おそらくそれを狙っているのだろうと、必死に我慢する。
二人は血が流れるほど強く唇を噛み、救い出すチャンスを探ってい

た。
「耐えろ、チャカ。ここで動けば思う壺だぞ」
「わかっている。だが、一体なぜ、あの方がこれほど辱められなくてはならない……！」
「コーザっ、なぜこのような凶行を……！」
「たとえ敵同士になったとしても、貴様のことは認めていたというのにっ」
感情のままに怒鳴るコーザが、右手に剣を持ち、左手でコブラの肩を掴んだ。
瞬間、チャカとペルは背筋を凍らせる。
剣を高々と掲げ、ついにコーザはやってはならない選択をしたのだ。
「もはやこの王に国を治める価値などない！　人々を傷つけた王には傷つけられた人々の痛みを与える！　この男は処刑だ！」
「なっ!?」
「ペル……もはやおれは我慢できんぞ……！」
チャカの姿がゆっくり変化していく。
黒い体毛が生え、牙や爪、頭に耳などが現れていき、動物と人が混じった姿になる。
イヌイヌの実、モデル〝ジャッカル〟。一瞬にして戦闘用の姿となったチャカは、自身にしか扱えない長い剣を抜き放ち、膝を曲げて力を溜める。
その様子を見るや否や、ペルもまた変身した。トリトリの実、モデル〝隼（ファルコン）〟。空を飛ぶことができる動物（ゾオン）系能力で、彼はこれでアラバスタ最強の戦士と呼ばれる。
素早く剣を持ち、翼を大きく広げた。
「コーザッ!!」
「それだけはやらせんッ!!」
チャカが地面を蹴り、ペルが空を飛んでコーザへ向かう。
その速度は、とてもではないが常人に反応できるものではない。
二人に気付いた時、コーザは一瞬にして眼前まで迫った二人を呆然

と見上げて、そしてなぜか、驚異的な二人を目にしてにやりと笑みを浮かべていた。
それは確実に彼らしからぬ表情だ。
「あ～ら大変。あちしってば大ピンチ？」
緊迫した状況に似つかわしくない呑気な声。
この時、二人は瞬時に理解する。
自分たちは嵌められたのだ。
その時物陰から飛び出した二つの人影があり、気付いた時にはチャカとペルへ襲い掛かって、一瞬の交差の後に二人が全身から血を噴き出していた。
まるで鋭利な刃で切り裂かれたかのような、鋭い棘で串刺しにされたような傷だった。
建物を見上げていた町人たちの前で、王国最強の兵士が敗れる。
力なく落下しようとした二人をＭｒ．１ペアが首根っこを掴み、捕えた。
観衆が呆気に取られたのを見てコーザが叫ぶ。
パフォーマンスは成功だと言っていい。
コーザに化けたＭｒ．２は開戦を告げる大事な役目を担う。この時、この瞬間、アルバーナは確かに戦場と化し、大きな混乱へと包まれていった。
「悪政の時代は終わった！　今こそ我々の国を守る時！　市民よ、立ち上がれ！　今日この日からアラバスタは変わる！　今度こそ、人が人として生きられる国を！」
人々の顔が変わる。
抱えきれないほどの恐怖。自分にも無関係ではない事態だと理解せざるを得ない。
「反乱軍……なんてことを……!?」
「悪しき王族は根絶する！　国民に自由を！　国家に平和を！」
時を同じくして、広場に居た者たちにもわかるほどの変化が町に起こっていた。
アルバーナの各地から火の手が上がったのである。

黒々とした煙がいくつも見られて、轟々と建物が燃えている。現場を見に行かずとも状況から考えて反乱軍の仕業であることは簡単に想像できた。何せリーダーのコーザが王を捕え、護衛隊の二人を倒してそこに居るのだ。

恐怖が伝染していく。一か所だけならばまだしも複数の煙が確認できた。

まるで国家の終わりを見ているようにさえ感じられて、人々は呆然と立ち尽くすのみ。

それから幾ばくもせず、広場にも反乱軍が武器を持って駆け込んできた。大抵は銃や剣を持った者たちだが、中には火を点けた松明を持っている者も居る。

最初の一人が悲鳴を上げた時には、松明が投げられて家に火が点けられていた。

呑気に立ち尽くしていた人々は突然駆け出し、我先にと逃げ始める。

彼らが本物の反乱軍か否かなど確認する方法はない。

武器を持ち、コーザの命令で町を破壊する。その姿だけあれば反乱軍だと判断される。

本当はバロックワークス社員、ミリオンズだとしても、そう判断できる者は居なかった。

攻撃開始の騒動に乗じてすでにコーザは姿を消している。チャカとペルを捕えたＭｒ．１ペアもその場を離脱しており、混乱する観衆の中でその事実に気付いた者は居ない。

指揮官を失って混乱する兵士たちもまた、突如現れた反乱軍に対応できなかったようだ。

目的を持って殺到してくる反乱軍の攻撃を受け、一人、また一人と兵士が倒れる。逃げる市民に紛れて突然やってくる攻撃は、いくら訓練を受けていても避けようがない。それは戦闘というよりも一方的な虐殺に思えた。

騒ぎが起こった広場を遠くに眺め、数本の大通りを挟んだ一軒の家。

屋上のテラスに他のオフィサーエージェントが集っていた。
双眼鏡を覗いて開戦の瞬間を見ていたミス・ゴールデンウィークがぽつりと呟く。反応したのは傍にある席で紅茶を飲んでいたＭｒ．３である。
「簡単に成功しちゃった」
「それも当然。一体何年反乱が続いてると思っているのカネ。むしろいつこうなってもおかしくないと考えていなかった市民に驚きだガネ」
「うん。みんな慌ててる」
「これで第一段階は終了。この後、反乱軍はアルバーナ内でゲリラ戦を展開し、国王軍との戦闘が本格化することもなく時間が経過。反乱軍〝本隊〟の到着を待ちつつ町を破壊する。恐怖に支配された市民はあちこち逃げ惑い、やがて助けを求める」
紅茶を口にして喉を鳴らすＭｒ．３へ、ミス・ゴールデンウィークが双眼鏡を降ろして言う。
「砂漠の国の英雄」
「そうとも。そして混乱に陥ったこの町に到着した時、英雄が反乱軍〝本隊〟を倒し、国を救ったならば……単純な思考能力しか持たない市民は何を想う？」
「英雄こそが王に相応しい」
「そうなる前には当然、王が死んでいる必要がある。ボスの目的の代物を発見した後でな」
遠くから聞こえてくる悲鳴を耳にしつつ、二人は冷静に会話する。
同じテラスに居た味方もその会話は聞いていた。
割って入るように参加したミス・メリークリスマスが簡易ベッドの上に寝そべり、Ｍｒ．４に腰をマッサージしてもらいながら尋ねる。
「そう上手くいくもんかね。向こうにゃあのガキが居るんだろ？」
「もちろん阻止するために動いてくるだろう。彼はこちらの思考を理解している。臨機応変に作戦を変えるために私が居るのだガネ」
「本物の反乱軍が動くって確証もないはずだろう？」
「なぁに、動くさ。Ｍｒ．２が一声かければな」

「そっちも抜かりはねぇってことか」
納得した様子でミス・メリークリスマスが口を閉ざす。
今度はＭｒ．５とミス・バレンタインが参加した。
「それでおれたちの目的は敵の排除か」
「キャハハ、楽勝ね。一番簡単な任務だわ」
「敵を甘く見ない方がいい。こちらの情報は全て筒抜けだガネ。君らの弱点も全てバレた状態で楽勝と言っているのなら安心だが、わかっているのか？」
「いらん心配だ」
「敵の弱点を知ってるのは相手だけじゃないでしょう？　キャハハハ」
Ｍｒ．３がテーブルにカップを置き、笑みを消して真剣に告げる。
「この作戦で最も大きな障害となるのはキリであることは間違いないガネ。しかし逆を言えば奴を止められたのなら後は終始こちらが有利になる。数の利を覆す頭脳を持つのは奴一人。たとえここに居るメンバーが倒れようとも、反乱を止めることは不可能だガネ」
「おいおい、おかしなこと言ってくれるぜ」
「私たちが負けるとでも思ってるの？　キャハハ、面白い冗談」
「むしろてめーが一番可能性高いだろうが！　この〝バッ〟！」
「フォ～～フォ～～フォ～～……！」
「Ｍｒ．３、総スカンね」
「ええい、戦局を読めんバカばかりだガネ。しかし奴らの勝利は万が一にもあり得んとも。何せ作戦総指揮を執るのはこの私なのだから」
Ｍｒ．３は指で眼鏡の位置を正しながら笑う。
その他のエージェントも自分の実力に自信を持っており、負ける気など一切ない様子で余裕綽々に笑っている。決戦を前にして緊張する者など一人も居なかった。
それでも戦いの時が近付いていることは感じている。
各々が異なる姿勢、異なる方法で敵を迎え撃つため準備をしていた。

コーザが着ていた物に似た服を着たまま、Ｍｒ．２は部下を引き連れて爆走する。最初の仕事は終わったとはいえ彼にはまだ次の仕事が残されていた。
素早く取り掛かるため移動の最中に着替えすら始めていたようだ。
周囲で反乱軍に扮した部下が手を貸し、彼らは混乱する町の中心部を離れていく。
「あー忙し忙し！　急ぐわよアンタたち！　映像電伝虫は準備できてんのぅ!?」
「はい！　すでにナノハナに到着済みです！」
「合図があればいつでも！」
「じゃあ急がなきゃね～い！　今度はコブラちゃんにならないとぉ～！」
「Ｍｒ．２・ボン・クレー様、次の角左です！」
ドタドタと騒がしい彼らは、それ以上に騒がしい町の中で密かに姿を消す。
その頃にはＭｒ．１とミス・ダブルフィンガーがチャカとペル、さらにコブラを連れ、王宮へ到着。
指揮官を失ったとはいえ、突如現れた反乱軍に対抗するため、多くの兵士が出て行ったその場所へ悠々と侵入を果たし、彼らより先に入っていたミス・オールサンデーに出迎えられる。
「ご苦労様。奥で王様がお待ちよ」
「あら、王様なら私たちが運んできたはずだけど」
「ウフフ、言葉が足りなかったわね。新たな王が待っているわ」
その言葉からすでにクロコダイルが到着していることが伝わる。
チャカとペルを引きずりながら、Ｍｒ．１が尋ねた。
「ゴミ掃除は？」
「必要ないと思うけど、一応探してくれる？　ほとんどは始末されたわ。私とアンラッキーズの手によって」
平然と言っているが、それは、城内にはすでに敵が居ないことを示していた。
確かにほとんどの兵士が町へ出たのだろうが、どんな危機的な状況

でも城の中が空になることなどあり得る話ではなく、さらには兵士とは異なる召使いも存在する。しかしミス・オールサンデーは今、城内にはもう敵が居ないと言っていた。
鮮やかな手腕に感心し、ミス・ダブルフィンガーはキセルを銜える。
「あなたたちが動いたんなら討ち漏らしはないわね。新たに入ってきたならともかく」
「しばらくは待機か……」
「心配しなくてもすぐに忙しくなるわ。それと、その人たちはアンラッキーズが見てくれる。彼らが到着するまで優雅な一時を楽しんで」
「そうするわ」
彼らもまた淡々と話して、次に備えるため動き出す。
出番は少し先のことになりそうだと自覚しながら、その場を離れた。
そして王宮の奥。
一足先に唯一の玉座へ座っていた男が居る。
彼は笑い、ひどく楽しそうにまだ見ぬ敵を見ていた。
「さて……決着をつけようか」
今、彼の目にはただ一人の男が見えていた。

ナノハナの一件

アルバーナで煙が上がってからそう時も経たず。
海に近い位置にある町、カトレアにて、一人の男が走っていた。
比較的近いとはいえ、到着まで数時間かかるアルバーナの異変を感じ取った訳ではない。空に上がった黒煙を視認できるような距離ではなかった。
男は隣町であるナノハナで起こった異変を耳に入れたのである。
まだ自分の目で見た訳ではない。しかしその話を聞いてじっとしていられなかった。
反乱軍の一員は、自分たちが拠点としているテントへ急ぎ、飛び込むようにしてそこへ入った。中には当然仲間たちが居て幾分驚いた顔で彼を迎え入れる。
差し出される水筒も受け取らず、彼は奥に座ったリーダーへと叫んだ。
「ハァ、ゼェ……コーザ！　大変だ！　今すぐ来てくれ！」
「どうした？」
「ナノハナに映像電伝虫が……国王が喋ってる！」
ガタッと大きな音が鳴った。
リーダーであるコーザが身を乗り出して椅子を倒しかけたらしい。彼だけでなくテントに居る他の者たちも驚愕していたようだ。
コーザは入ってきた男を見つめ、冷や汗を垂らしながら恐る恐る報告を聞く。
「国民から雨を奪ったのは自分だと言ってた……！」
「なんだとっ!?」
思わず立ち上がって椅子を倒す。コーザの顔色は見るからに変わっていた。
「それを、国民に聞かせたのか!?」
「今まさにだ！　ナノハナに居た奴らから連絡が入って、わざわざ人を集めて話してるって！」
「馬鹿げてるっ！　コブラ、一体なぜそんなことを……！」

じっとしてはいられずコーザが駆け出した。
慌ててテントから抜け出し、仲間の制止も聞かずに馬のところへ向かう。
「待てコーザ！　今から行ってももう遅い！」
「見過ごせるか……！　お前がそれを言っちゃならねぇはずだぞ、国王っ」
馬の背に飛び乗り、素早く駆け出す。
向かう先は隣町のナノハナ。一度砂漠に出なければならないが距離はそう離れていない。
間に合うかどうかは微妙だろう。話が始まっているのなら全てをもみ消すことなどできるはずもなかった。だがそれでも、その凶行を無視していいはずがない。
コーザは険しい顔で馬を急がせる。
胸の内を占めるのは巨大な怒りのみ。かつては王に向けていた尊敬などゼロに等しい。
しかしそれでもゼロになっていないのは、幼い頃、彼と話した時間を忘れていないからだ。
今までにないほど早くコーザはナノハナへ到着する。
町中を馬で走り、問題が起こっているだろう場所を探して走り続けた。
町の中心へ近付けば近付くほど、もう久しく聞いていない声が届いてくる。その声が何を語っているかが理解できる頃には痛いほどに歯を食いしばった。
角を曲がって港へ通じる大通りへ入る。
すぐに映像電伝虫を連れた国王軍の兵士たちが見えた。
設置されたスクリーンにはでかでかと国王コブラの顔が映し出され、怒りはさらに燃え上がる。
「国王ッ!!」
足を止めていない馬から飛び降りて、コーザはスクリーンの目の前へ立った。
武器を持った兵士たちが振り返るものの、気にしていられない。

今、いつ振りかでコブラと目を合わせていた。記憶にあるより少し老けた顔を見て、コーザは静かに怒りながら冷静に話そうとする。
「今……何を話していた」
《コーザか。ちょうどよかった。お前にも聞いて欲しいと思っていた》
「おい、バカなことを考えるな。お前は、お前だけはそれをやっちゃいけねぇはずだ」
《コーザ、私は――》
「やめろって言ってるんだ！」
《この国から雨を奪った。その結果、多くの国民が死んだ。全て私の責任だ》
コーザの絶叫も空しく、言葉は再び吐き出された。そして多くの国民が聞いている。
その言葉だけは口にしてはいけないはずではないのか。
《ダンスパウダーを使って、エルマルやスイレンが枯れて――》
「やめろッ！　性質の悪い冗談だ！　皆聞くな！」
《アルバーナでは今も変わらず雨が降り続け》
「お前が認めていいことじゃない……！　たとえ真実がどんな形でも！　お前だけはそれを口にしちゃいけねぇはずだ！」
《一時の感情でこの国を滅茶苦茶にしてしまったのは……》
「おれは、心の底では、あんたのことを信じてたッ!!」
《他の誰でもない。私だ》
血が滲むほど拳を握りしめたコーザは、映像電伝虫を止めようと走り出す。しかし構えていた兵士が即座に彼を止め、二人の兵士が腕と肩を掴み、拘束する。
大通りに居た人々が息を呑んでいるのが伝わった。
コブラの表情は一切変わらず、反対にコーザは我を忘れるほど激昂していた。
「枯れた町に倒れた奴らがどんな気持ちで死んだか、お前にはわからねぇのか!?　お前に怒りや恨みを持ってた奴なんていやしない……！　〝王様のせいじゃない〟、〝あの人は立派な人さ〟と……ど

いつもこいつもお前を信じたまま死んでいったんだ!!」
《わかっている。だからこうして謝罪を――》
「お前がやってることはあいつらを侮辱するだけだ！　真実がどうかじゃねぇ、せめてウソでもお前が無実だと言わなきゃ、彼らの気持ちはどうなるんだ!!」
必死に前へ進もうとするコーザを見て、コブラは目を閉じて小さく嘆息した。
《一時の感情による暴走だったと反省している……もう二度とこのようなことは起こらないよう努めるとも。死んでいった者、生きている者に、心から深く謝罪したい》
「トチ狂ったのか……!?　そんなことが誠意だとでも思ってるのか、お前はァ!!」
《今回のことは私の汚点だ。長い時間をかけてすまなかった。考えて考えて、考え抜いて、そしてようやく決心することができたんだ》
目を開いたコブラが淡々と告げる。
その一言に、コーザは背筋が凍り付く感覚を覚えた。
《私の汚点を、このまま残しておきたくはないのだ》
「なっ……!?」
《ひょっとしたらこの出来事を知っている者が国内に居るかもしれない。誰かが話してしまうかもしれない。国外にまで悪評が伝わってしまうかもしれない。それがひどく恐ろしい》
「何を言ってるんだ、国王……？」
《よって全てを無かったことにしようと思う》
突然の発砲。コーザの肩が撃ち抜かれた。
国王軍の兵士が放った一発は国民たちの悲鳴を生む。
それは果たして痛みのせいか、それとも信じられない言葉を聞いたからなのか。体の力が抜けて倒れていくコーザは何も考えられなくなっていた。
《この町で見つかった、あの忌々しいダンスパウダーの事件を忘れるために、この町を消し去ろうと思う。皆、すまない。私のために死んでくれるか》

十数名の兵士が一斉に銃を構えた。
向けた先に居るのは武器すら持たない市民。一切の躊躇いもなく引き金が絞られる。
「やめろォ!!」
《やれ》
いくつもの銃声が重なった。
それよりも多く悲鳴が発せられ、町は人々が逃げ惑う様相となり、血を流した人間が倒れる。穏やかな日常が一瞬にして崩れ去った。
隠れていた兵士がぞろぞろと姿を現し、次々発砲を行った。倒れる人々は次第に増え、町が血に汚れていく。老若男女を問わず目に付いた者は撃たれてしまう。
まるで地獄のような光景であった。
肩の痛みすら忘れ、うつ伏せに倒れたままだったコーザは頭を抱える。
目頭が熱くなるのは決して勘違いではない。
こんな結末を望んでいた訳ではなかったはずだと、後悔や絶望に苛まれる。
「なぜ……どうしてこんなことになった……」
何の罪もない人々が悲鳴を上げている。為す術もなく傷つけられて倒れていく。
コーザは何もできずにその光景を見ていた。
己の無力さが恨めしい。自分たちの覚悟や行いが、今までの犠牲が、全て無駄になってしまった気がしてならず、心の中は言いようもないほど荒れている。
「国が……本当はみんなが……その答えを知りたかったから……！だからおれたちは戦ってたんじゃなかったのか!?」
銃声は止むこともなく鳴り続ける。
全てを諦めたかのようにコーザが視線を下げた時、反乱軍の兵士も到着する。ナノハナに居た者ばかりでなくカトレアからコーザを追ってきた者まで。皆が武装し、町の状況を見て即座に戦闘を開始していた。

その結果、ナノハナの町と国民たちはさらに傷ついていく。
「大丈夫かコーザ!?」
「くそっ、国王軍の奴ら、町に火を……！」
「少なくとも、おれはそうさ……」
駆けつけた仲間たちがコーザを起こすが反応がない。
その間にも町の被害は広がっていく。
兵士たちが建物に火を点けて回り、至る所が燃え始めている。不思議と火の回りが早く、まるで最初から油か何かを撒いていたかのように、町は一瞬にして炎に包まれた。
逃げる者、戦う者、消火しようと試みる者など様々だが、皆は一様に泣いていた。表情や涙が流れているかという話ではない。皆の心が泣いているのだ。
不思議とその声が全て聞こえてくるようで、コーザは自らの足で立ち上がる。
「国王……それがお前の答えなんだな」
スクリーンにはまだコブラの顔がある。
コーザの鋭い眼差しが彼を捉え、コブラもまた彼の視線に気付いた。
「お前は、お前を信じた国民を裏切った。お前はもう王なんかじゃない……」
《コーザ、本当にすまないと思っている。だが私にはこうするしかない》
「この国を、終わらせよう」
今までになかった力が湧いてきていた。
途方もない憤怒。全てを壊したいという衝動。同時に彼に裏切られた全ての国民を救いたいという慈愛までもが生まれている。
コーザは肩の痛みを忘れて、自らが傷つくことを厭わず大声で叫んだ。
「武器を取れ反乱軍ッ!! もはやこの国に王など居ない！ これまで血を流し倒れた同胞たちのためにも、おれたちが終わらせる必要がある！ 兵士を倒せ！ 国民を救え！ おれたちは今日、アルバーナ

を攻め落とすぞ!!」
「待て、コーザッ!!」
拳を突き上げ、声を張り上げ、混乱する町中で人々を導こうとした時だ。
新たな声が乱入したことに気付き、それと同時に状況が変わる。
港から走ってきた一団が突如国王軍に襲い掛かったのだ。
白いマントを身に着け、フードを被り、素顔を隠した者たちが兵士たちを倒していく。隠してはいるが彼らは魚人であり、人並み外れた身体能力で敵を圧倒していた。
目的をしっかりと定めた迅速な行動。組織的な動きである。
ただの旅行者にはあり得ないその動きに、戦闘中だった反乱軍は驚いて手を止めた。
それと同時に、振り向いたコーザの視線の先、懐かしい顔を見つける。
行方不明だと聞いていた。なぜここに居るのかわからない。
コーザの前にイガラムが立ち、その向こうに見えるコブラに動揺することもなく口を開く。
「イガラム……あんた、なぜ」
「武器を納めろ反乱軍！　この者たちは国王軍ではない！　そして国民よ、今しがたお前たちに言葉を発したあの男は本物のコブラ王ではないのだ！」
周囲でフードを被った魚人たちが国王軍を制圧する一方、イガラムは真剣に語る。
嘘を言っている様子はないが、あまりにも唐突過ぎて理解ができない。
それでもコーザは話を聞こうとしていた。今日の今日まで数年間姿を消していたイガラムが何を語るのか、純粋に気になっただけでなく、この状況を打開する何かを言ってくれるのではないか。そんな淡い期待を持っていたのかもしれない。
国王の乱心に理由があるのだとしたら。
熱くなった頭と体でも、コブラを信じたいというわずかな心が彼を

冷静にさせた。
「どういうことだ……本物だと。あれが偽物だと言うのか」
「そうだ。この反乱は最初から仕組まれたものだった。コーザ、お前が――」
語ろうとした瞬間、イガラムの胸に銃弾が突き刺さり、彼の体が派手に飛ぶ。
大量の血液が胸から飛び出し、その軌跡を目にして再びコーザの心が怒りに支配された。
即座に振り向き、犯人を探す。
大通りに居る国王軍は全員魚人たちに倒されている。今となっては立ち上がる者は居ない。そして彼らはサーベルや槍こそ持っているが、銃は奪われて一人も持っていない。
犯人は別に居るはずだ。
コーザが建物の上を見た時、マントを翻して逃げる人影を発見する。
その体に着ているのはどう見ても国王軍兵士の鎧。
やはりコブラ。国王軍がやったことなのだ。
イガラムが地面へ倒れる。コーザを始めとして、戦闘を中断していた反乱軍の兵士が彼の下へ駆け寄った。慌てて傷を見るが、どうやら弾を防ぐほど頑丈な服をスーツの下に着ていたようだ。それでも皮膚にまで届いているとはいえ、命を落とすほどの傷ではない。
だからといって許せる行いではないだろう。
倒れたイガラムの傍に膝をつき、コーザはスクリーンに映るコブラを睨む。
《イガラム、唐突なことですまない……真実を知られたくはないのだ。お前も私に忠を尽くすのならば、悪評を広めることなく死んでくれ》
「自分を支えた臣下ですら切り捨てるのか……！　コブラッ、貴様は人ですらないッ！」
「ちがっ……コー……たたか、てはっ」
必死に喋ろうとするイガラムだったが、なぜか口が上手く動かな

い。口だけでなく腕や足もだ。体が麻痺して思うように動かない。
真実を伝えなければ。そう考えて口を動かすのだが荒い息だけが出ていく。
（なぜだ、力が入らない。喋れないっ。伝えなくては、Ｍｒ．２の能力を……国王様はこんなことをするお方ではないと。コーザ、間違えるな！　頼む！　戦いを止めてくれ！）
必死に喋ろうとしても無駄な努力に終わってしまう。
真実を伝えることができずに、コーザが大きな怒りに呑み込まれていくのを止められなかった。
イガラムは霞む視界の中、必死に彼の顔を見つめ、何とかして真実を伝えようとするものの、やはり言葉が無くては意図を汲み取れず。コーザは医者に彼を任せて傍を離れてしまう。
そんな光景を、すでに逃げ出した二人は確認しようともしていない。
国王軍兵士の格好をした二人の男女は素早く町の外へ出てＦ―ワニに乗り込んでいた。
「ゲロゲロゲロ、ねー聞いてＭｒ．７。あたしのスペシャルな弾は当たった人間の筋肉を痺れさせて動けなくするの」
「オホホホホ、そういうスンポーだね。あれに当たったイガラムは喋れないってスンポーだね」
「つまり真実は闇の中ってことね。ゲーロゲロゲロゲロ」
「もう誰にも止められないってスンポーだね。もうすぐ反乱が始まるよ。我々も早くアルバーナへ向かって次の作戦に移らなきゃってスンポーだ」
誰に止められることもなく、彼らは混乱するナノハナを離れていく。
辛うじてその姿を見ることができた、というよりも敢えて見せられたコーザは、コブラが命令したのだと信じて疑わない。
国民だけでなく忠誠を誓った護衛隊長まで。
度重なる裏切りに、もはや彼を止める術など無くなっていた。
「コブラッ!!　おれは今からアルバーナへ行くぞ……貴様の首を獲

り！　この国に真の自由と平和を取り戻す！　首を洗って待っていろ!!」
《それは困ったな。そうなれば我々も黙ってはいられない》
「上等だ。長かったこの戦いを今日で終わらせる！」
（コーザ、戦うな……！　奴らの思い通りになるな……！）
「カトレアに居る全ての反乱軍へ伝えろ！　武器を取れ！　アルバーナを目指せ！　最後の戦いを始めるぞ!!」
ナノハナに立つ全ての国民が吠えていた。
反乱軍が、武器を持たない市民が、国王軍を倒せと叫んでいる。
この時、少なくともこの場所では戦いを望む者しか居ない。狂った王を倒すべしと、武器を持つことを、暴力を認めて、戦いに行けと望んでいる。
イガラムの耳には励ます医者の声すら聞こえず、彼らの嘆きだけが聞こえていた。
とんでもない結果になった。
すぐ傍で成り行きを見ていたアーロン一味の一部は狼狽している。戦いを止めるべく町を襲えと言われていたが、どうやら彼らが想定していた状況ではない。
フードで顔を隠したまま、はっちゃんは呆然と狂気に魅入られた町を見る。
国王を殺せ。国王を殺せ。国王を殺せ。
人々の叫びで胸が痛くなる。耳を塞いでしまいたくなる。
国を傷つけた痛みをわからせろ。人を殺した罪を償わせろ。この世で最も辛い苦痛を。想像を絶する絶望を。怒号が辺りに響き渡る。
大勢の怒りが一つに混ざり合って、今や町の全てを包み込んでいた。
この時はっちゃんは、初めて人間を恐ろしいと感じていた。
だからだろう。すぐ隣に居たチュウの声が聞こえず、彼に肩を叩かれて初めて気付く。
「ハチ！　ぼけっとすんな！　電伝虫を繋げ！」
「ニュッ!?　わ、わかったぞ……アーロンさんにだな！」

「違う！　そっちじゃねぇ！　紙使いの方だ！」
「キリに？　え、えっと……」
「奴にこの状況を伝えろ！　全てだ！　急げ！」
はっちゃんは慌てふためいて子電伝虫を取り出し、ダイヤルを回す。
時を同じくして、確かに動き始めていた反乱軍を止めるかのよう、砲撃が始まった。海から飛来した砲弾はナノハナの町へ落ち、火に包まれた家屋を強引に吹き飛ばす。
アーロン一味本船から攻撃を開始したのである。
指揮を執るのは当然アーロン。
遠目に確認していたのであろう。町に異変が起こったことを知ってそれでも作戦通りに動いた。
「町を壊せ！　向かってくる奴ァ薙ぎ払って構わん！　ただし殺すな！」
「オオオッ!!」
キリバチを振り上げて指示を出した後、アーロンを先頭にクルーの一部が海へ飛び込む。少々の距離なら船で接近するより泳いだ方が速い。
少数精鋭。イガラムの護衛とは別に攻撃用のメンバーを選んでいた。
また、船からは今も絶えず砲撃を続けて、反乱軍の注意を引いている。
予想していた通り、突然の攻撃に反乱軍は気圧される。市民も再び恐怖のどん底に落とされた。
市民を見捨てることはできないと、アルバーナへ向かおうとした彼らは足を止めてしまう。
アーロンたちはすぐさま港へ到着した。
武器を振り上げ、大声を発し、攻撃的な姿勢をわかりやすく見せて走り出す。
市民は悲鳴を発して逃げる一方、武器を持つ反乱軍は反射的に身構えた。

「行くぞォ！　金品を奪え！　手あたり次第に壊せェ！」
「海賊か!?　なんでこんなタイミングで……！」
「チッ、少しの間でいい、耐えろ！　海賊が相手ならきっと砂漠の英雄が――」
「クロコダイルなら来ねぇぞォ！」
港の近くに居た反乱軍の兵士が、アーロン一味と戦い始める。
国王軍との決戦を前に無駄な犠牲は出したくない。彼らは敵を倒すためではなく、時間を稼ぐために戦おうとする。しかしそう覚悟を決めた時、どこかから声が聞こえた。
おそらくは建物の向こう側。家々が燃える音にも負けずに声が届く。
戦いながらも兵士たちは、或いはコーザはその声を聞いた。
「クロコダイルはここには来ねぇ！　みんな逃げろォ～！　海賊に殺されるぞォ～！」
「なんだ……誰が言ってる？　クロコダイルが来ないだと？」
走り回っていたのはチュウに子電伝虫を渡したはっちゃんだ。
自身が魚人であることがバレないよう気を付けつつ、逃げ惑う人々の間を駆け抜け、叫ぶ。
どれだけ粘っても助けは来ない。その真実を伝えれば反乱軍がどう動くのか、彼にはもはや想像もできない。ここで時間を稼いでもきっと反乱軍はアルバーナを目指すだろう。それでも、ほんの少しでも時間を稼げれば何かが変わるかもしれない。
子電伝虫の通信を切ったチュウは表情を歪める。
いつの間にかはっちゃんにつられた仲間たちが同じく叫びながら走っていた。
正体がバレればどうなるかはわからない。そう考えれば確かにこの混乱は吉だろう。
なぜ自分たちがこれほど従順に作戦を守らなければいけないのかわからない。しかしこの時の彼らはアーロンに言われたからではなく自分の意志で動いていた。
プライドを傷つけないためか、それとも負けたくないのか。

誰に負けないためかはわからないが、チュウもまた彼らと同じように駆け出す。
建物が燃えて黒い煙が視界を遮り、砲弾が家を壊して、ナノハナはひどい状態にある。
いつ死んでもおかしくないような町中を走りながら、チュウははっちゃんの後を追った。
「バカ野郎、ハチ……おれたちが言ったって誰も信じやしねぇよ。おれたちゃ魚人で、こいつらは人間。一体誰が信用するってんだ」
そう呟きながらもなぜか落ち着かず、終いには彼も叫び出した。
「とっとと逃げろバカ野郎どもォ！　チュッ♡　海賊に殺されちまうぞォ！」
国王に傷つけられた町が、さらに海賊に壊されていく。
なぜこうなってしまったのだろう。
立ち尽くすコーザは燃え盛る町並みを見ながら呆然としていた。
「何がどうなってんだ……おれたちが何か間違えたのか？　神様ってやつがよ、おれたちに罰でも与えたがってることなのか？」
「どうするコーザ！　応援を呼ぶか!?　本隊はまだカトレアだぞ！」
「だとすりゃ、おい、神様よ。罰を与える相手を間違ってんじゃねぇのか……？」
「おいコーザ、しっかりしろ！　呆けてる場合じゃねぇ！　クロコダイルが来るか来ねぇかは置いとくとしてもだ！　このまま見過ごしていいはずねぇだろ！」
「よーくわかったぜ、神様。お前もいつか殺してやる」
仲間の一人がコーザの肩を掴んで、顔を覗き込んだ時、思わずぞっとした。
怒りに支配された彼は以前とはまるで別人。
国王軍の兵士が落としただろう銃を手に取り、全身から怒りの念を発していた。
「町の連中を逃がせ！　一人も見捨てるな！　反乱軍、海賊どもを叩き潰せェ!!」

「おおおおっ!!」
少数でしかないとはいえ、反乱軍は本格的な姿勢でアーロン一味へと挑みかかる。アーロン一味は彼らを殺さぬように戦闘へ臨んだ。
業火に包まれたナノハナで、また多くの血が流れる。
誰が、なぜ始めたかもわからない戦い。その中で人々は怒り、悲しみ、平和を求めて叫ぶ。
それら多くの叫びを、イガラムは耳にする。
応急処置を受けた後で医者が運んでくれているらしい。目を閉じた彼は想像していた。
体は痺れているが思考は止まらず、自らの無力を嘆きながら想いを馳せる。
(なんと情けない……彼らの暴走を止められないどころか、私がやられたことで反乱の意思が強まってしまうとは。もはや私にできることはない……あまりにも、不甲斐無いっ)
涙を流したい気分であるのに、痺れた体はそれさえもできない。
彼は今傍に居ない仲間たちの顔を思い浮かべる。
(あとは君たちに任せるしかない。ビビ様、どうかご無事で。ルフィ君、必ずクロコダイルを倒してくれ。キリ君、皆を守ってくれ……)
今はもう願うことしかできない。
(皆、どうか無事でいてくれ……)
イガラムは強く願い、心の中で仲間たちを応援する。
一日はまだ始まったばかり。
早くもナノハナの空の色が変わっていた時、仲間たちは、すでに砂漠を走っているはずだった。

＊

ヒッコシクラブという、巨大で足の速い生物が居る。
これはアラバスタでも珍しい種類で、見つけることがひどく難しいことから〝幻の生物〟とまで語られているほどだ。

現在、麦わらの一味はこのヒッコシクラブの頭に乗り、アルバーナを目指していた。
ナノハナで国王の演説が始まる少し前、声が聞こえる前に砂漠へ出ている。
それもこれも、アラバスタ到着と同時に、先に到着していたＭｒ．９、ミス・マンデーとの合流を果たしていたからに他ならない。彼らがヒッコシクラブを捕まえていたようで、詳しい説明をする暇もなく頭の上へ乗り、誰よりも早く駆け出していた。
そして少しの時間が経ち、ナノハナからの連絡。
子電伝虫の通信を終えたキリは難しい表情で眉をひそめた。
「やられた。Ｍｒ．７ペアか。まさかあの二人を町から離すとは」
「イガラム……」
「大丈夫。頭を抜かれて即死じゃなかったんなら死ぬことはないよ。どこから攻撃があってもいいように防弾チョッキを着てたんだ」
通信の声が聞こえていたのだろう。心配そうなビビへ安心させようと告げる。
しかし気になるのは狙撃されたイガラムの容体ばかりではない。
ウソップが恐る恐るキリへ質問した。
「なぁキリ、Ｍｒ．７ペアってのは確か……」
「狙撃手ペアだ。アルバーナで重要な任務があるから前線に出てくる可能性は低かった。読み切れなかったボクのミスだ」
「ひょっとして、まずいのか？」
「いや、彼らが出てきたことによって不安要素の一つが隙だらけになってるはず。アレは大勢に知らせていいものじゃない。先にボクらが出てる以上、相手より遅く着くとも思わない。それならひとまず不安要素は一つ消せるはず……」
「その不安要素ってのは？」
「それはボクがやる。みんなはエージェントの排除に集中して」
多くは語らず、キリはそう締めくくった。
さらに聞くべきか、終わらせるべきか。迷いはしたがウソップは素直に頷いた。

キリを仲間として信頼している。任せろと言うのなら任せて構わないはずだ。逆に深く聞き過ぎることが彼を信じていない行動になってしまう。

アルバーナまでの道のりは長い。

ラクダの脚ならおよそ8時間。ヒッコシクラブはそれより速い。

なんとしても王国軍と反乱軍の接触を防がなければならない。そのために準備できる時間はそう多くないだろう。どれだけ時間を稼いでも、必ず反乱軍はやってくるからだ。

その上、バロックワークスの邪魔は必ず入る。時間はいくらあっても足りない。

イレギュラーは必ず起こるとキリは言った。

誰もが緊張している。意識していなくてもつらつらと考え事をしてしまい、到着までの時間、全く心を休めることができない。

この緊張感を持ったまま数時間の移動を行うのか。

ウソップは深く鼻息を出した。

「みんな緊張してんな……よし！　ここは元気の出る〝ウソップ応援歌〟で！」

「やめとけ。無駄な体力消耗すんぞ」

「そもそもお前の歌で元気付けられたことがあったか」

「何をーっ!?　おれはよかれと思って……！」

「はいはい、わかったから叫ばないでよ。ただでさえ暑いのに疲れちゃうでしょ。本番はこれからなんだから、できるだけじっとしてなさい」

サンジやゾロの軽口を跳ね除け、ナミが場を引き締めるように言う。

全員、紫外線に耐えるためマントを身に着けている。それでも熱に耐えられる訳ではない。

特に辛そうだったのは毛皮を持つチョッパーだ。大量に持ってきた水があるため、頻繁にそれで喉を潤し、シルクが団扇で扇いでやりながら心配する。

「砂漠って暑いんだな……おれ暑いとこダメだ」

「大丈夫チョッパー？　アルバーナまで距離があるから、頑張って」
「うん。おれ、頑張るよ。ビビのためだもんな」
ぐったりして舌をだらしなく出したまま、チョッパーは諦めようとはせずそう言った。
その声を聞いたビビは俯き、わずかに表情を変える。
キリがＭｒ．９とミス・マンデーに目をやった。
彼らもまた砂漠の縦断に耐えるためマントを身に着けている。それでも相変わらずＭｒ．９はキラリと光る王冠を被っていて、暑そうなスーツを着ていた。
普段ならば軽口の一つもあるだろうが今はそんな余裕もなさそうだ。
真剣に二人を見るキリは笑みを見せずに伝える。
「二人はビビの護衛だ。常に彼女と行動を共にして、守ってくれ」
「了解。それはいいけどよ、おれたちはお前らの作戦ってやつを知らないんだが」
「細かいことはこっちでやる。とにかくビビを守ってくれればそれでいい。彼女が死んだらそれこそ全て水の泡。ボクらの負けだ」
「わかった。私たちの命に代えてもあの子を守るよ」
「そ、それはだめっ！」
ミス・マンデーが決意を固めて言った時、咄嗟にビビが止めるように言う。
大きな声だったせいか、全員の注意が彼女に向いていた。
「全員、生きて戦いに勝つの。そしてその後は、みんなで思いっきり宴して騒ぐんでしょ？　命に代えてもなんて言わないで」
「宴？」
「そう。何も考えずに思いっきり騒ぐの。楽しいのよ、海賊の宴は。二人は海賊じゃないけど協力してくれるんだもの。参加してくれなきゃ寂しいわ」
ビビは笑顔を見せ、ぎこちなさを感じさせたが、努めて明るくそう言う。
きっと心中は不安でいっぱいだろう。どうにもできない恐怖心が

あるのだろう。
仲間が、国民が、家族が、誰かが死ぬかもしれない。そんな恐怖と向き合い、無理にでも心の奥へ押しやって笑おうとしている。戦おうとしている。
ミス・マンデーとＭｒ．９はそんな彼女を見つめ、一緒に居た頃とは違う何かを感じた。
「あんた……変わったね」
「え？　そうかしら」
「ＯＫ、わかったぜミス・ウェンズデー。いや、今はビビ王女か。おれは海賊じゃないが王族でもないしな。下品に騒ぐことには全く抵抗感はない」
「ミス・ウェンズデーでいいわ、Ｍｒ．９。今更王女なんて呼ばれるの、くすぐったくて」
今度こそビビの笑顔からぎこちなさが消える。
仲間たちも安堵した様子で、元は仲間であった三人の会話を見守った。
機を見て、キリがルフィへ話しかける。
ルフィは振り向き、彼と正面から向かい合った。
どちらもいつになく真剣な顔で、そう大きくはない声で話し出す。
「ルフィ、これ」
「ん？」
手渡したのは樽型の小さな水筒だった。
首から提げられるようになっており、ルフィは不思議そうに受け取る。
「なんだこれ？　水か？　水なら樽で持ってきてんのに」
「飲む用じゃないよ。もしもの時のために緊急用としてね」
「ふーん……わかった。持ってく」
簡単な説明を受けて深くは聞かず、ルフィは首に紐をかけて水筒を提げる。
「ルフィ」
「なんだ？」

「アルバーナに入ったら、常にボクが傍に居る訳じゃない。というより多分、ほとんど傍には居られないと思う。クロコダイルは任せた」
「わかってる。見つけてぶっ飛ばせばいいんだな」
「それから」
「うん」
キリは一度目を閉じ、言葉を区切った。
数秒を置いてから目を開く。
「約束する。何があっても生き残るよ。だから心配はしなくていい」
「しっしっし、当たり前だろ。それならおれもおんなじだ」
「これが終わったらやっと、胸を張って君の仲間だって言える」
キリが右腕を伸ばして、ルフィに向けて拳を掲げた。
「生きて会おう。宴、楽しみにしてるからさ」
「おう！」
ルフィも拳を掲げてキリのそれに軽くぶつける。
約束は交わされた。
絶対に死なないと彼は言う。しかし逆を言えばそれは、わざわざ言葉にしなければならないほど重い覚悟であることを告げており、それほど危険な戦いであることを示している。
聞いていた仲間たちにとっても聞き流していい言葉ではなかった。
それからしばらく無言の時間が続く。
緊張感は増す一方で、アルバーナへ近付くにつれて明らかに空気は変わっていった。
ヒッコシクラブは全速力でアルバーナへ向かう。
到着した時、仲間とは一時的に別れて、戦いが終わるまで会えないかもしれない。
それを理解しながら、仲間が死ぬかもしれないとは疑わず、彼らは前へ進む。

Welcome to the Black Parade

アルバーナで事件が起こってから数時間。
あちこちを駆け回った兵士たちにより、なんとか鎮火に成功し、煙こそ昇っているがひとまず火災は町から消し去ることに成功したようだ。
町はひどい状態にある。
焼け落ち、崩れ、今朝までの平穏さが嘘のようだった。
逃げ惑っていた市民はすでにアルバーナを出た。事態が終結するまでは砂漠に身を置き、反乱軍との戦闘に巻き込まれないよう気をつけているのだろう。
その間、国王軍が町を襲った敵を排除しなければならない。
しかし彼らは苦心していた。
火を放った後、どこかへと逃げた反乱軍が一向に見つからないのだ。
時間ばかりが過ぎていき、焦りは募っていく。
ひとまず町の破壊は無くなったようだが、それでもいまだ連れ去られた国王や護衛隊副官たちが見つかっていない。今頃、どこでどうなっているか想像もできない。
兵士たちは慌てて町中を駆け回る。
門の辺りを捜索していた兵士たちが、ふと砂漠の方を見た時だ。
大きな砂埃を起こして走ってくる大きな物体がある。
そちらをじっと見始め、一人の兵士がついに気付いた。
「あれは……ヒッコシクラブか？」
「珍しいな。自分から町に近付いてくるなんて」
「おい、そんな悠長なことを言ってる場合か!?　まだ国王様が見つかっていないんだ！　カニを見てる暇があるなら急いで探せ！」
「わ、わかってる……いや待て、誰か頭に乗ってるぞ」
「何？」

「まさか国王様ではっ！」
一人が気付いて足を止めると数十人が同じように注目した。
人の居る土地には近付かないはずのヒッコシクラブだが門へ向かってくるらしい。
ひょっとしたら連れ去られた国王様では。
望みは薄いと知りつつ、ここまで希望が無くてはそう思わずにはやっていられない。門へ急いだ彼らは重い鎧を着たまま走り、ヒッコシクラブが接近してくる先へ向かう。
アルバーナは周囲を砂漠で囲まれた、高い台地の上に設けられた町。
砂漠から町へ入るには長い階段を登らねばならない。
階段へ続く門に辿り着いた時、兵士たちはヒッコシクラブの頭から降り、早くも階段を駆け上がってくる者たちを見つけた。
敵か味方か、わからない。
咄嗟に持っていた槍を構えて出迎え、正体不明の彼らに対して大声を発した。
「止まれェ！　貴様ら一体何者だ！」
「反乱軍の兵士か！　だとすればここからは一歩たりとも通さんぞ！」
「いいえ……私たちは反乱軍ではありません」
先頭を走ってきた少女が被ったままだったフードを降ろす。
息を切らすその表情は国民ならば誰もが知るもの。
数年前に失踪したはずの王女ビビが、唐突に現れたのである。その顔を見て気付いた兵士たちは慌てて槍を降ろし、腰を抜かしそうになりながら見つめた。
「ビ、ビビ様⁉」
「ご無事だったのですか⁉」
「一体なぜこんな時に……！　危険です！　今は町の外へ避難を！」
「危険は承知よ。何があったのか全て話して。私はこの国を守りに来たの！」

ビビの隣にはカルーが、背後には見知らぬ者たちが居る。
強い言葉と意思は間違いなく本人ものとはいえ、事件が起きたばかりのアルバーナに入れていいはずがない。そう逡巡する兵士たちは何も言えない。戸惑ってしまって、助けを求めるように互いの顔を見ては無意味に唇を動かすのみだ。
いつまでもじっとはしていられない。
焦っているのは兵士だけではなくビビも同じだ。
痛くなるほど拳を握り、彼女はさらに強い口調で尋ねる。
「今は一刻を争うの！　この町で何があったのかを教えて！」
「は、はいっ！　反乱軍のコーザが突如国王様を攫って、町に攻撃を……！」
「ご覧の通り、町は反乱軍によって焼かれました。突然の襲撃でどうすることもできず……市民は砂漠へ逃げたのですが怪我人も多く、国王軍にも被害が出ています」
やっぱり、とビビが唇を噛む。
キリが予想していた展開はそう間違っていない。
コブラとコーザ、両陣営のリーダーの外見を能力で記憶している彼は、その姿を使っていつでも戦争の火種を作ることができる。そして事態は一度動き出せば彼本人ですら止められない。
少ない情報でも事態は大まかに理解できた。
町が攻撃を受け、コブラが攫われ、国王軍は混乱中。それだけわかれば十分。
もうキリに言われなくても何をすべきかはわかる。
決意したビビはパッと顔を上げた。
今、国王軍を導けるのは自分しか居ないと気付いたようだ。
「現在我々は国王様を捜索中で――」
「ここからは私が指揮を執ります。国王軍を一か所に集めて！」
「ビビ様が、我々の指揮を!?」
「しかしビビ様、今この町は非常に危険でっ。どこに反乱軍が潜んでいるかわかりません！」
「じゃあ黙って国を奪われるところを見ていろと言うのっ!?　私は

敵の正体を知っている！　本当の敵を倒すことができる！」
気持ちが昂り、思わずビビは先頭に居た兵士に掴みかかった。
彼のマントを強く握って、自然と大きくなる声を周囲の兵士全員へ聞かせようとする。
「あなたたちが戦っている敵は反乱軍じゃない！　その姿を借りた別の相手よ！　このままあなたたちが本物の反乱軍と戦ってしまったら、この国が壊れてしまう！」
「ビビ様、一体何を……」
「真実を知っているのは私たちだけなの！　お願い、力を貸して……！　アラバスタ王国を守れるのは、この人たちしかいないっ！」
焦っているのか、すぐに理解できる説明ではない。
しかし、かつてないほど熱く、表情を歪めて叫ぶビビを見て何も思わないはずがなかった。
マントを掴まれて、彼女の眼差しを最も近くで受けていた兵士が息を呑む。何が正しいのだとしても自分が守るべき人物を疑うことに意味などあるだろうか。
一番早く判断したのは彼だった。
狼狽しながらも振り返り、他の兵士へ指示を出した。
「……ほ、他の部隊へ報告！　全部隊、広場へ集まれ！　ビビ様が指揮を執られるぞ！」
「し、しかし町は危険だというのに……！」
「黙れ！　我々がビビ様を信じなくてどうするんだ！　これからはビビ様の命令に従って動くと全部隊に通達しておけ！」
「は……はっ！」
兵士たちが一斉に駆け出した。ビビの護衛のため全員ではなかったが、一刻も早くこのことを伝えようと全力で足を動かしている。
その様子を見てビビもようやく冷静さを取り戻せた。
掴んでいたマントを離し、思わず頭を下げる。つい熱くなり過ぎて息も切れ、必死に落ち着こうとしながらの言葉だった。
「ごめんなさい……乱暴な言い方をしてしまったわ」
「いいえ。おかげでビビ様のご意思が伝わりました。我々にはわか

らないことが多過ぎますが、ビビ様だけは我々がお守り致します」
「……ありがとう」
「それよりビビ様、彼らは？」
明らかに兵士ではない、護衛ではなさそうな集団に目線を向けられる。
ビビは笑みを浮かべて彼らに振り返った。
「仲間よ。私と一緒に命を賭けてくれるの」
「はっ……そうでありますか」
残った兵士は何と言えばいいかわからないという顔で、彼らの顔を眺める。
それから、キリが一歩を踏み出した。
彼に続いて全員同時に動き出し、その場を離れようと歩を進める。
「ビビ、ボクらは行くよ。Ｍｒ．９とミス・マンデーはここで」
「おう」
「こっちは任せな」
「ボクらのことは心配しなくていい。自分の役目を果たすことにだけ集中して。全員がそうすれば必ず結果は思い描いた通りのものになる」
「ええ……みんな、気をつけてね」
ビビの傍にカルーとＭｒ．９とミス・マンデーが残り、それ以外が彼女の傍を通り抜ける。
火で破壊された町並みを前にして、駆け出す。
一切振り返ろうとせずに大通りを進んでいった。
その背を見送り、ビビもすぐに思考を切り替える。
心配することだけが仲間ではない。今はそれを理解している。
「私たちも行きましょう。お父様は攫われてしまったのね？」
「はい。それにチャカ様とペル様が敵の攻撃を受けて同じく……」
「そう……大体想定した通りよ。大丈夫、まだ負けじゃない」
兵士を安心させようとしたのか、それとも自信に繋げるためか。
歩き出したビビは兵士やカルーたちに囲まれながら呟き、落ちそうになる視線をしっかりと前へ向けて、唇を噛んで前に進んだ。

ビビたちと別れた後、そう多くの時間を共有せず、麦わらの一味も分かれようとしている。
それぞれの目的は似ているようで違う。
異なる敵を倒し、敵を倒した後を考えて、目的はあくまでも反乱の阻止。
海賊としては些か風変りとはいえ、今はこの作戦を成功させることにのみ集中していた。
先頭はルフィとキリ。
わずかに振り返ったキリが声をかけ、やっと別行動の時が来る。
「ここからは各々の判断に任せる。全員、生きてまた会おう」
「当ったり前だァ！」
「縁起でもねぇこと言ってんじゃねぇよ」
「おれも頑張るぞ！　怪我した時は言ってくれ！」
「ゾロ、あんたは迷わないように気を付けなさい」
「うるせぇ！　ガキか、おれは！」
「ルフィ、キリ、二人も気をつけて」
「うん」
「よし、行くぞお前ら」
ルフィが笑みを浮かべて、前を向いたまま仲間たちへ声を発する。
「思いっきり暴れていいぞ！　野郎どもォ！　戦闘だァ!!」
「おおォ!!」
そう言った途端、二人一組になって一斉に分かれる。
別々の道に入って路地から違う通りへ向かったようだ。
同じ大通りを走るのはルフィとキリのみ。彼らは真っ直ぐに王宮を目指しているらしく、その視線がぶれることすらない。
「ルフィ、あれが王宮だ。あれなら迷わず行けるよね？」
「当たり前だろ。お前おれをバカにし過ぎだぞ」
「ごめんごめん。でも、ひょっとしたらこの先、ボクは一緒に居られないかもしれない」
破壊された町並みを見ながら思う。
これはおそらく宣戦布告。国王軍が反乱軍を迎え撃つ理由を作る

と同時に、邪魔にしかならない市民を外へ逃がし、暗殺ではなく、正面から一味を叩き潰すという予告だ。
キリは相手の意図を読み取っているつもりだった。
それを証明するように王宮を見ながら説明する。
「クロコダイルは多分あそこに居る。逃げも隠れもしないよ」
「なんでわかるんだ？」
「この作戦が終わった後、彼は王になるつもりだ。それなら居場所は決まってる」
「ああ、王様の家だもんな。あそこ」
「きっとルフィを待ってるよ。見てないけどわかる」
走りながら息を切らす様子もなく、彼は真剣に告げる。
ルフィは隣に居るキリの顔を見て笑顔で言った。
「待ってるんならそっちの方がいいや。探す手間がいらねぇだろ」
「うん」
「おれの心配はすんなよ。お前が言ったんだ。自分の役目だけ果たせって」
ルフィも王宮を見上げる。
かなりの巨大さ。内部のどこにクロコダイルが居るかなど想像もできない。だがそこに居るということだけわかっていれば十分だろう。
能天気にも見える笑顔で彼は余計な心配などしていなかった。
キリは小さく頷く。
徐々に王宮が近付いていた。全力で走っているだけに時間はかからない。
到着はもうすぐ。
そんな時、突然目の前に真っ白な壁が現れた。
待っていたとばかりにキリが地面を蹴って空へ跳び上がる。
「キャンドルウォール！」
「うわっ!?　なんだぁ!?」
「ドルドルの実、Ｍｒ．３だ！」
道を塞ぐほど大きな白い壁が視界をいっぱいに埋めた。おそらく

敵は向こう側。鉄の硬度を誇るその蝋は、決して簡単に壊れるものではない。
キリの判断は素早く、全く恐れてはいなかった。
相手が向こう側に隠れていると気付き、宙に浮かべた紙を蹴り、高く飛び上がっていく。
壁を飛び越えるだけならルフィにもできるが、それでは待ち伏せを望む相手の思う壺。キリのように空を自由に移動できる能力が必要だろう。
道を作るため、相手の思惑を潰すため、キリは単独での攻撃に出た。
壁を見下ろせる位置に到達し、高さは六メートル以上にもなる。
巨大な蝋の向こう側を見て、少なくとも道にはＭｒ．３の姿は見えなかった。
おそらくは小さな路地か家の中。姿を隠したまま道を塞いだのか。
周囲に無数の紙を浮かべ、攻めるか退くか、キリはほんの一瞬思考する。
相手は力で勝とうという性格ではない。Ｍｒ．３、〝姑息な大犯罪〟がモットーの策謀家。戦闘能力よりも緻密な作戦と優れた頭脳を買われてＭｒ．３の称号を手に入れた男。
深入りすれば思う壺なのでは。
対峙する相手がわかるだけに迷いがあったのは事実だ。
時間にすれば一秒もない一瞬。小さな迷いは、確かにその後の展開を変えた。
頭上からフッと影が差し、目を見開いたキリは即座に頭上へ目を向ける。
大きな鳥が翼を広げ、彼を狙って真っ逆さまに降下していた。
イレギュラーは必ず起こる。
そう思っていたからこそ、キリは一切慌てない。
自身の周囲を旋回していた紙を集めて、剣として手に持ち、迎撃の準備を素早く整える。
おそらくＭｒ．３は最初からこうなることを狙っていて、キリが壁を越えようとすることすら予想していたに違いない。そして彼の知

らない戦力を投入し、頭上からの強襲。明らかにキリだけを標的にして仕留めにかかっている。
ルフィは道に立ったまま、大口を開けてキリの行動を見ていた。
キリも自身が作った紙の足場を蹴り、自ら空へ向かって敵へ接近する。頭から落下してくる大鷲と視線を交わらせ、正面からの激突を望んでいた。
しかしこの時、読み切れなかったことが一つ。
その大鷲が人獣型であることから能力者であるとわかった。とはいえ、特殊な装備を持たず、両手に短剣を持っていることから近接戦闘を行うと考えてしまったのである。
二人の距離が近くなった時、唐突に大鷲の肩辺りから勢いよく水が飛び出したのだ。
虚を衝かれ、あまりにも距離が近く、キリは反応できずに頭から大量の水を被ってしまう。
当然体の力が抜けて、驚く暇も与えず大鷲が手に持った短剣を振り下ろした。
「悪いね。君のことは知ってんだ」
刀身がずぶりと肌に差し込まれ、肉を裂いて、血が噴き出す。
一瞬にして数度の斬撃。キリは無数の攻撃を受けて全身から血を撒き散らし、悲鳴を発する余裕すらなく、姿勢を崩して頭から落下しそうになった。
見上げていたルフィの下へ、大量の血と能力を失った紙が落ちてくる。
気絶したかのようなキリの体は大鷲の能力者に掴まれ、宙づりにされた。
「キリッ!?」
「君の居ない間にメンバーが代わってね。Ｍｒ．１２の科学ペア。手を使わないで水を弾丸のように吐き出せるシステムはどうだい？
それに状況を確認するために空へ飛ぶっての、癖になってるそうだから直しといた方がいいよ。まぁちょっと遅いけどさ」
服を着た大鷲、彼は人と鷲が混じったような姿をしている。

砂とよく似た淡い色のコートを身に着け、頭には同色のバンダナを巻いていた。
トリトリの実、モデル〝鷲（イーグル）〟の能力者。
少なくともキリの在籍時にはバロックワークスに存在しなかった、言わば彼を狩るために用意された新戦力であった。笑みを浮かべて、自身が捕えたキリに声をかける。
左腕の手首の辺りを掴まれ、キリは目を閉じてぴくりとも動かない。
心配するな、と言ったとはいえ、その姿には冷静さを欠いたのか。怒りを露わにするルフィが咄嗟に腕を伸ばそうとした。
「お前ェ！　おれの仲間に何やってんだッ！」
「おっと、怖い怖い。そんなに怒るなよ。おれだって仕事でやってんだぜ？」
ルフィが勢いよく伸ばした右腕を、大鷲は少し動くだけで回避する。バサバサと翼を羽ばたかせ続けて降りてくる気配は一向に見られない。
降りてきたとはいえ高度は高く、すぐに捕まえられるほど遅くもなかった。
腕を引き寄せたルフィは歯を食いしばるが、大鷲は余裕の笑みでそんな彼を見る。
「おれはこいつを連れて行きたいだけさ。大丈夫、殺したりしない」
「キリを返せ！」
「そりゃできない相談だね。失敗すればおれが殺される世界さ。だから――」
その言葉を言い終わらない内に、突然キリが目を開いた。
腕が真っ白に染まり、紙を重ねた姿に変化した右腕を硬化させ、指を開いて大鷲へ突き出す。まるで心臓を抉り取ろうという強固な意志も、しかしなぜか届かない。
彼が動き出す直前、大鷲が手を放していたのだ。
落下を始めていたキリの攻撃は空振りに終わって、大鷲は武器をピストルに持ち替える。

発砲に戸惑いはない。
銃声が鳴り響き、何度も、何度も放たれた銃弾がキリの体を貫いた。
避けられないと判断し、防御しようと胴体を紙に変化させ、硬化した上で受け止める。だがすでに切り裂かれていたその体で耐え切れる衝撃ではなく、努力も空しく風穴が開く。
銃弾が届くことはなかったが、降ってきた血がルフィの頬にも付着した。
落下しそうになったキリは再び大鷲に捕らえられ、今度は左足首を掴まれる。
だらりと力が抜けて今度こそ動かない。
見上げていると血が雨のように降ってきて、いよいよルフィは怒りに支配された。
目を閉じたキリは、死んでしまったかのように見えていた。
「最後の一撃、だろ？　それもちゃーんと聞いてる。勝ったと思って油断してる奴を不意の一撃で仕留めようっていやらしい手だ。でもあいにく、こっちにゃそれを教えた張本人が居てね」
「お前ェェェッ!!」
「あー、でもこっちはどうしようもねぇかな」
強く地面を踏みしめ、再びルフィが腕を伸ばす。
大鷲は右手で脱力したキリを吊り下げながら、もう片方の手でぽりぽり頬を掻く。
そんな様子すら怒りを買ったが、不思議と大鷲には焦る様子は皆無だった。
「いい加減にしろォ!!」
「キャンドルロック！」
勢いよく伸ばされた右腕が、大鷲に届く前に蝋に捕まり、そのまま通りにあった建物の壁へ貼り付けられた。痛みは全くないがルフィの腕は縫い付けられてしまう。
視界が極端に狭くなっていたのか、道を塞いでいたはずの壁が消えたことに今気付いた。
そこにＭｒ．３が立っており、奇妙な髪型だと思う余裕もなくル

フィが吠える。
「誰だお前ェ！　邪魔すんな３！」
「そういうわけにはいかんガネ。彼はスペシャルゲストだ。そのまま黙っていてもらおう」
「このっ――！」
「キャンドルロック！」
反射的に構えた左手も、あらかじめ狙っていたＭｒ．３によって拘束される。
右手は蝋を使って壁に貼り付けられ、左手は地面に繋ぎ止められてしまった。
荒々しく動くルフィはそれらに翻弄されて、どうやらキリを運ぼうとする大鷲を追えない。それを確認した後で大鷲は王宮の方へ向かおうとする。
その際、何気なくＭｒ．３に声をかけていた。
Ｍｒ．３はその場に居るルフィは気にせず、歩いてその場を離れようとする。
「助かったぜ。それじゃあおれは運んでくる」
「気をつけた方がいいガネ。ボスを怒らせれば生きてはいられんぞ」
「わかってるっての」
「おい待てェ！　くそっ、これほどけェ！」
必死に動こうとするが動けないルフィを置き去りに、大鷲はどんどん遠ざかっていく。
血濡れのキリを連れて、彼が手を伸ばしても届かないところへ行ってしまった。
悔しげに歯を食いしばるも状況は変わらず。
「キリィィィッ!!」
声すら届かなくなり、ルフィだけが取り残された。
彼の声を聞きながら路地を歩くミス・ゴールデンウィークはわずかに振り返った。
前を歩くのは一仕事終えたＭｒ．３。

仕留めるチャンスを見逃すとは彼らしくない、と思っていたようだ。
「いいの？　放っておいて」
「構わんガネ。奴はボスが直々に相手をするそうだ」
「どうして？」
「さぁ……なぜかは知らんが殺しては問題があるらしい」
二人は荒れ果てた町の中を平然と歩く。
ずいぶん待った。ようやくこれから彼らの仕事が始まる。他のエージェントたちもすでに動き出しており、彼らの到着を心待ちにしていたはずだ。
見たところ、彼を見逃しても問題はないだろうと判断していた。
ここで生き残ったとしてもクロコダイルと戦えば生き残れるはずがない。
思考はすでに切り替えている。ルフィについて心配する様子など微塵もない。
戦況を動かすのは彼の頭脳と指示一つ。
それは果たすべき自分の役目であり、一種の楽しみでもあったようだ。
キリの在籍時、彼とはチェスを始めとして様々なゲームで頭脳を競い合った。この一戦は言わばその戦いで一つ勝利を奪ったともいえ、機嫌が良くなったらしい。
通算で言えばキリの勝利が多い。
だからこそ熱くもなり、個人的な感情もあってＭｒ．３は静かに燃えていた。
「信用ならん男だと思っていたが意外に使える。我々も次に向かうとしよう」
「キリを捕まえるの、あの人の仕事だったよね。どうして手伝ったの？」
「その方が効率がいいからだよ。奴が居なければ勝利はぐっと近くなる、ということだガネ」
「ふぅん。負けたのが悔しかった？」

「君は何を聞いていたのカネ」
二人は人知れず姿を消す。
彼らには彼らの思惑があり、他のエージェントと協力するかといえば、それもまた微妙な話。結果を求める人間は過程を軽んじることもある。
姑息な大犯罪。それが彼のモットー。
最後に勝てればいいというのが今回の彼の心情。そしてそれを知るのは彼のみだ。

ＢＵＲＮ　ｔｈｅ　ＦＬＯＯＲ

東西南北に分かれたアルバーナの町。
その東ブロック、対峙している四人の姿があった。
短くなった煙草を手に取り、携帯灰皿に押し込んだサンジは、冷静に敵を見据えた。
隣に立つウソップは必死に膝の震えを抑えて、手にはパチンコを握る。
彼らの前に立つのは敵。それだけは間違いない。
外見的特徴とキリから聞いた情報を照らし合わせて誰であるかを確認しようとしていた。すでに持っている情報を利用すれば、勝利の確率はずっと高まるからだ。
サンジは特に必要としていた訳でもないが、ウソップには必要不可欠だろう。そういった考えもあって戦う前の会話に付き合っている。
敵はまだ動く素振りを見せない。どうやら余裕の態度という様子だった。
「黒のモジャ毛、サングラス。それと黄色い服のミニスカートで脚が眩しく、愛らしい帽子を被っていて、優雅に傘を持ち、まるで太陽にも負けないほどの美しく輝く笑顔が特徴的な美女だ。ウソップ、情報だと誰になるかわかるか？　残念ながら男の方はおれはわからん」
「お前情報量が偏り過ぎだろ。多分Ｍｒ．５って奴だ。その隣はミス・バレンタイン」
「ミス・バレンタイン……恐ろしい。なんて可愛いんだ。あの笑顔で見つめられただけでおれの膝は震え出し、今にも崩れ落ちそうになっている。あぁ、おれは恋をしてしまったようだ……」
「安心しろ。お前はいつも通りだ。それと男の方は？」
彼らの前に立っていたのはオフィサーエージェントでは最下位ナンバー。
Ｍｒ．５とそのパートナー、ミス・バレンタインの二人だった。
一番下のナンバーとは言ってもそれはオフィサーエージェントの中での話。バロックワークス全体で見れば彼らは十分強者として判

断されており、厄介な能力を持っている。
キリの情報を聞いていて正解だった。
対峙している二人が悪魔の実の能力者だということは理解している。如何なる能力か、どんな使い方をするのか、弱点は何か。それらも全て理解していた。
一時は驚きもしたが、キリが味方でよかったとこれほど思ったことはない。
初戦が最下位ナンバーだったことも幸運に思え、ウソップは歯を食いしばって覚悟を決める。
「よ、よぉし……こいつらを倒さねぇと色々引っ掻き回されるんだな。つまり逃がす訳にはいかねぇし、逃げちゃいけねぇってことだ」
「つたりめぇだ。今更何言ってやがる」
「わかってんだよ、そんなことはっ。か、確認だ。一応な」
ウソップがゴーグルを装着して戦闘態勢になる。
それを見たサンジも笑みを浮かべ、爪先でトントンと軽く地面を叩いた。
対峙して、二人の様子を見ていたＭｒ．５とミス・バレンタインは余裕を醸し出している。
「聞いたか？　おれたちを倒すんだと」
「キャハハ、バカな考え。さっさと逃げればいいのに。どうせ逃げられないけど」
「あーミス・バレンタイン。君に一つ言っておきたいんだが、僕のハートは君を一目見た瞬間から幸せと恋のビートを――」
「うおいっ!?　おめぇこそいい加減にしろ！　こいつら敵なんだぞ！」
戦う前とは思えないほど妙な雰囲気でも、その時が来れば空気は緊張する。
Ｍｒ．５が身じろぎした時、ふざけた態度だったサンジや怯えていたウソップの表情が変わった。
「金髪の方は蹴り技を使う。鼻のなげぇのは狙撃手だったな」
「地の利はこっちにあるわ。二人でやる？」

「いいや、そう時間もかからねぇだろう。おれが金髪だ」
「じゃあ私が長鼻ね。キャハハ」
彼ら二人を見てあらかじめ知っていたかのような発言。
当然ウソップとサンジの警戒心は増して、すでに知られていることを理解した。
そう不思議でもない。彼らは広い情報網を持つ秘密結社であり、キリが居ることによって当初からマークされていた。ここまでの航路で調べられたのだろう。
人の居ない島もあれば数え切れないほど人が居た島もある。
どこで調べられていてもおかしくない、と改めて考えた。
「お互い様ってことか。こっちが有利って訳でもねぇな」
「くそ～、やっぱそう簡単じゃねぇか……」
「となりゃ実力勝負だ。おれはあの爆弾野郎をやる」
サンジも腹を決めたようで、指名された通りにＭｒ．５と交戦することにした。
「だからウソップ、お前はあの可憐なミス・バレンタインを、掠り傷一つつけずにそっと優しく倒すんだ。できるな？」
「できるかァ!?　アホなのかお前はッ!?　ただ勝つだけでも難しいっつうのになんでより難しくなってんだよ！　しかもおれだけ！」
「いいかウソップ、おれはレディを蹴ることができない。それに、ビビちゃんのためにお前が死ぬならおれは後悔しない」
「おれがするわァ!?　死ぬこと前提で進めんなッ！」
「それじゃあ行くぞ」
「待てっ、それならせめて危険な時は助けるという約束を――！」
歩き出したサンジはポケットに手を突っ込んだまま顎を動かし、Ｍｒ．５を呼びつける。
意図は伝わっただろうが気に入らないのか、Ｍｒ．５はわずかに眉を動かした。
「てめぇの能力でミス・バレンタインを傷つけたくねぇ。相手してやるから来やがれ」
「ほう。自分の死に場所くらいは選びたいか」

「言ってろ。ザコにゃぴったりのセリフだぜ」
「いいだろう……お前は五体バラバラにして始末してやる。おれのボムボムの能力で」
「上等だ。三枚にオロされてなきゃいいがな」
相手を挑発しながらも戦わずに、二人は歩いて大通りを離れていく。
ぼけっと見送っていて残されたのはあとの二人。
傘を差したミス・バレンタインがウソップに視線をやり、気付いた彼が肩を震わす。
「それで、あなたが私の相手ってこと？」
「ハッ!?　そ、そそそ、その通りだコノヤロー！　おれの名はキャプテ～ン・ウソップ！　麦わらの一味の狙撃手で、魚人の幹部を倒したことがあるんだぞ！」
「ふーん、そう。それで？」
ミス・バレンタインが歩き出したのは二人の背が見えなくなってからだった。
あっさりと一歩目を踏み出し、迎撃があるかもしれない、という恐怖心を一切持つことなく正面からウソップへ向かっていく。
唐突なことでウソップが後ずさるものの、一歩目の後に踏みとどまった。
ここで逃げれば仲間が死ぬ。
そう考えた時、自分の意思など無関係に体は止まった。
気付けば震えもなく、強い眼差しでミス・バレンタインを睨みつける。
少しは骨のある男だと判断したのだろう。
しかしミス・バレンタインの歩みが止められることはない。正面からゆっくり接近する。
「怖いのを無理やり我慢してるってわけ？　キャハハ、無駄な努力ご苦労様」
「無駄なんかじゃねぇぞ……おれはスロースターターなんだ。その気になるまでちょっとばかし時間がかかるんだが、おれが本気を出す

前に仕留めるべきだったな。本気になったおれは誰にも止められねぇ！　そう、おれの名は！　キャプテ～ン――！」
「ウソップって言うんでしょ？　もう聞いたわよ」
そう呟いた時、ミス・バレンタインはすでに目の前に居て、ふわりと軽い姿で低空を跳んでいるらしく、振り上げた右脚がウソップの顔を蹴ろうとしていた。
急に風を感じてウソップが絶句する。
ミス・バレンタインはくすくす笑っていて、さらに能力を使用した。
「加重２０００キロ」
ぐるりと腰を捻って繰り出される蹴りが繰り出される最中に、体重が一気に重くなる。
埋め込まれるように顔面への一撃を受け、ウソップの体は軽々宙を舞い、着地した直後に勢いよく地面を滑った。ごろごろ転がって土煙を上げ、自然に止まるまで数メートル移動する。
鼻の骨が折れたのではないかとすら思う重い一撃だ。
彼女は、移動の際には自分の体重を限界まで軽くして、地面を蹴ってジャンプするだけで高速移動を行った。その後、攻撃の瞬間にのみ全身を重くしている。
まるで砲弾。それ以上かもしれない。
鼻血を流すウソップは仰向けに倒れたままミス・バレンタインに目を向ける。
これで最下位など、笑えない話だ。
自分の体重を操作するキロキロの実の能力の使い方や、戦い方まで聞いて、さほど戦闘が得意なタイプではないと聞かされていたのに、とんでもない。キリは自身の能力を使った勝ち方を見つけているのかもしれないが、初めて見る人間からすれば十分驚異的。
女だからといって彼女は戦闘が苦手な訳ではない。
たった一撃でもそう判断して、ウソップは戦慄する。
顔の痛みに耐えながら必死に立ち上がる。
それほど重い一撃を受けても気絶しなかったのはきっと、ウソップも強くなっているから。

確かに殴り合いは得意ではない。だがその分、他人に誇れる武器がある。
キリと何度も話して、打ち合わせをして、勝機は得た。彼は全く怯まない。
「あら、意外にすぐ立ち上がるのね。今ので終わるくらい弱いと思ったけど」
「ありがとよ……今の一撃で、やっとおれの本気モードが見せられそうだ」
「何それ。ダサっ。本気になったら私に勝てると思ってる？」
「ああ思ってるね。なぜって、こっちにゃ頼りになる仲間が居るからよ」
唇まで流れてきた鼻血を腕で拭い取り、その後弾を握ってパチンコに番える。
戦うための姿勢を見せながらウソップは焦らず語った。
「仲間が、キリがおれを強くしてくれた。もうそんなに時間はかけねえぞ」
「あんたムカつくっ。完全に舐めてるわよね！」
再びミス・バレンタインが体重を軽くして、軽い動きでその場で跳ねる。
キロキロの実は自分の体重を1kgから1万kgまで変化させることができる能力。今、1kgまで軽くなった彼女は常人には不可能な動きすら実現させる。それも能力の鍛錬を続けた結果、瞬時に自分の体重を操作し、全体重を利用する蹴りまで慣れていた。
女でありながら人体を骨まで粉砕しかねない格闘術。
ここで逃す訳にはいかないと考える。
幸い、ウソップは自分が弱いと判断しているからこそ、全てのオフィサーエージェントの情報を頭へ叩き込んだ。そして余裕を見せているミス・バレンタインには油断を感じる。
勝機はある。
相手が自分より強いからこそ、ウソップは自分が勝てると判断できた。

「あんたなんか全く怖くないの。せっかくなら一瞬で決めてあげようかしら。それともじっくり骨を折って欲しい？　私の能力ならどっちでも簡単なのよ」
「お前はよ、確かに強そうだからさ……だからわかんねぇんだろ」
「はぁ？」
「強ェ奴の天敵は、臆病で弱い人間なんだぜ」
ミス・バレンタインがムッとした顔を見せる。
彼の発言を不愉快に思ったのだろう。もはや待とうとはしなかった。
「何それ。意味わかんない。あんた、ムカつく」
「へへっ、怖がってんのはお前の方じゃねぇのか？」
「ハァ!?　バカじゃないの！　びびってんのはあんたの方じゃない！」
「そうか？　なんでだろうな、おれにはもうお前が怖く見えなくなってんだが……」
全て、ハッタリである。
本当は膝が震えるほど怖いが口先だけは自由に動く。
弱いと決めつけた相手にこれだけ言われるのは屈辱でしかないだろう。簡単な挑発だが確実に効果は出ているようで、ミス・バレンタインは見る見るうちに顔を赤くして怒り出した。
平静を失えば失うほど良い。
ウソップは空元気とバレないよう気をつけ、大声で笑った。
「ハ～ッハッハァ！　どうやらやっとキャプテン・ウソップの真の恐ろしさに気付いてきたようだなァ！　そう、おれこそが！　難攻不落のナバロン要塞を攻め落とし！　あの伝説の巨兵海賊団を傘下に納め！　島を喰っちまうほどバカでけぇ金魚を倒した！　キャプテ～ン・ウソップ！」
「うるっさい！　どうせそんなの全部嘘でしょ！　バカバカ、バ～カ！」
嘘は大きければ大きいほどいい。
ミス・バレンタインは見る見るうちに怒りを募らせていく。冷静さ

を欠き、油断と合わさって隙が生まれてくれれば御の字だ。
「減らず口はもう十分！　あんた、とっとと死になさいよ！」
ただ、恐ろしいのは冷静さを欠いても強いことだ。
地面を蹴って真っ直ぐ接近してきたミス・バレンタインは驚くほど速い。体重の軽さが影響しているらしく、風に乗って空を飛べるほど軽い彼女は常人のスピードではない。
気付けば目の前に居て、反応する暇もなく足を振り上げていた。
ウソップは驚愕し、防御もできずに蹴り飛ばされた。
爪先が頬に突き刺さって、体全体が浮かび上がり、首が折れそうになるほどの衝撃。滑るように地面を転げ回り、受け身さえ取れない。
やはり攻撃の瞬間だけ一気に体重を重くしていた。
その程度の冷静さは残っているようで、弱くなっている訳ではない。
ゴロゴロと転がり、起き上がる前にミス・バレンタインがウソップに追いつく。
体重を軽くしてふわりと跳び上がり、彼の体が止まったところを狙って真上から落下する。
その際、攻撃力を高めるため、彼を押し潰そうと一瞬で体重を重くした。
「グチャグチャのミンチにしてあげる！　一万キロプレス！」
「ギャアアアアアッ!?」
高速で落下してきたミス・バレンタインを見やり、ウソップは慌てて転がることで回避した。
なんとか逃げることに成功して、彼女は落下を止め切れず、一万キロの重さであるが故に地面を陥没させ、自分が開けた小さな穴の中に消えてしまう。
その間にウソップは立ち上がり、慌てて距離を取った。
策ならばある。どんな相手でも上手くいけば一撃で仕留められる必殺が。
問題は失敗させる訳にはいかないということ。チャンスを待つ必要があった。

ミス・バレンタインは穴に埋まってしまっている。
今がその時か。
パチンコを構えようとした時、しかし彼女は勢いよく跳び上がった。
「必殺――！」
「チョーシ乗ってんじゃないわよ！」
体重を軽くし、ミス・バレンタインは身軽な動きで天高く舞い上がった。これが厄介だ。それほど素早く動かれてしまっては避けられる危険性がある。
チャンスはそう多くない。
見極めが肝心だと、冷静に判断したウソップは駆け出した。
「うぎゃあああっ!?　こええええええっ!!」
「ハアッ!?　逃げんなァ！」
向かった先はミス・バレンタインとは全くの逆方向。
簡単に彼女へ背を向け、一目散にその場から走り去ろうとする。その姿を見たミス・バレンタインは強い怒りを持ち、即座に追いかけようと地面を蹴った。
「このクズ野郎ッ！　どこまで腰抜けなのよ！　言うだけ言ってあっさり逃げる気!?」
「うおおおっ！　もう知るかァ！　こっちは命が大事なんだよ！　こんなとこで死ねるかァ！」
「なんて最低な奴っ。あんただけは絶対逃がさないわよ！」
限界まで体重を軽くしてミス・バレンタインが跳んでくる。一度、二度と地面を蹴っただけでふわりと宙を飛び、早くも追いつかれようとしていた。
わずかに振り返って確認したウソップは素早くパチンコを構える。
走りながら地面に狙いをつけ、一発の弾を放つ。
「なんつって煙星！」
「何ッ!?」
自身の足下で煙玉を破裂させて、あっという間に彼の姿が煙の中に消える。

すでに跳んでいたミス・バレンタインは止まることができず、煙幕の中へ飛び込んでしまう。
視界が一気に狭くなるが、ウソップの姿は見えない。
小さく舌打ちをして彼女はさらに先へ進んだ。
足を止めず、一瞬にして煙を突き破る。
あれほど弱気だった男が立ち止まるとは思えない。必ず逃げている。真っ直ぐ走り続けていると判断して追いかけようと思っていた。
結局接触せぬまま煙から抜け出した。
視界が開け、通りを見たミス・バレンタインは驚愕せずにはいられない。
すぐ傍を彼女が通り抜けたことを確認したウソップは、煙幕の中で叫ぶのである。
「ウソ～ップ呪文(スペル)！」
「しまった、あの中に隠れて……！」
「想像してみろ……爪と肉の間に針が深く刺さった！」
「なっ、いやっ!?　考えただけですごく痛いっ」
ウソップはその場で叫んだだけである。ミス・バレンタインはいまだ煙幕に片足を突っ込んでいるような位置で、そう遠く離れていない。だがそれは立派な攻撃となったようだ。
その状況を想像してしまった彼女はぞわっとした感覚に肌を震わす。
想像するだけで痛い。非常に嫌だと感じた。
動揺を誘うという目的ならば攻撃は成功したと言えるだろう。
「この技だけは使いたくなかったが、仕方ねぇ。もし全てを聞いちまったらお前は立っていられなくなるだろう……それほど恐ろしい精神攻撃(スピリチュアルアタック)だ」
「ふ、フン、何よ。そんなのただ聞かなければいいだけ――」
「口内炎が歯茎に五個できた……」
「うっ!?」
「つまづいてサボテンの上に手をついた」
「ううっ……」

「靴を履こうと思ったら中からゴキブリが飛び出した～!!」
「いやぁあああああっ!?」
言えば言うほどミス・バレンタインは動揺する。
まだ煙幕が漂っているため、互いに姿は見えないのだが、それなら狙いはつけられる。
ウソップは敵を視認せずにパチンコを構えた。
「今だ、くらえ！　黒光り星！」
絶叫が聞こえた方向へ放つと、上手く彼女へ当てることができた。それは拳大の大きな黒い風船であり、勢いよく飛んできてミス・バレンタインの体にぶつかると呆気なく割れる。
痛みはない。ダメージは皆無だ。
しかし風船が割れた瞬間、中から大量に何かが飛び出し、辺りへばら撒かれた。
黒く小さな物体。虚を衝かれたミス・バレンタインはすぐには理解できない。
それらが地面に落ち、自身の上からも降り注いだ時、やっと判別する。
どうやら、無数にあるその全てがゴキブリだったようだ。
「い、いっ……!?」
思わず掌で受け止めてしまった一匹を見て、彼女は我も忘れて立ち尽くす。
体は小刻みに震えており、帽子や肩に乗っていたゴキブリがカサカサ動くとそれは余計に顕著なものとなる。そして彼女の目の前では、掌の上でゴキブリが走っていた。
今度こそ気絶しそうな勢いで、ミス・バレンタインは絶叫しながらゴキブリを放り投げる。
「いやぁあああああっ!?　気持ち悪～いッ!!」
「お前の弱点だ。女は大概、ゴキブリを嫌う」
「ひぃいいいっ!?　取って取って取ってェ！　気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い～！」
実際のところ、ウソップが放った〝黒光り星〟とは、ただのゴキブ

リの玩具である。確かに動いてはいるが数秒もすれば動かなくなってしまう仕組みだ。だがそうとは知らないミス・バレンタインは本物だと信じて疑わず、冷静さなど欠片も残されていない。
頭に、肩に、脚についたゴキブリに怯えてバタバタ暴れている。
今すぐ取りたいが自分の手では触れられない。そのせいで奇妙な格好で動き回っていた。
こうなればもはや能力など使えない。冷静に戦うことなどできない。
ゆっくりと煙幕が晴れていった時、パチンコに弾を番えるウソップは堂々と仁王立ちしていた。
ジタバタしていてもその場は動いていないのだ。
標的としてこれほど当てやすい状況も珍しい。
パチンコのゴムを伸ばし、彼は一切の容赦なく追撃を行った。
「これでお前は逃げられねぇぞ。くらえェ！」
「いやぁ～っ!?」
「必殺！　眠り星！」
放たれた弾は真っ直ぐミス・バレンタインの顔へ。
鼻先に接触してパンっと割れ、少量の煙が辺りに散布される。それを吸い込んだ彼女はほんの数秒で意識を失い、受け身も取らずにその場へ倒れてしまった。
〝眠り星〟はチョッパーと共同開発した新兵器にして必殺技。一度吸い込めばたちどころに眠ってしまうという強力な睡眠薬。しかも煙にして散布するため呼吸している限り逃げられない。
初めて実戦で使用したが上手くいった。
サンジの要望通り、掠り傷一つつけずに勝利したのだ。
「よ、よよ、よぉ～し……寝たか？　寝たよな？　ふぅ～……」
ウソップは大きく息を吐きながら額の汗を拭う。
今頃になって足が震え出して、周囲を見回し、敵が居ないことを確認して安堵した。
「へへっ、弱点さえわかってりゃお前なんか怖くねぇんだ。見たかコノヤロー！　おれだってちゃんと強くなってんだ、バカヤロー！」

スヤスヤ眠るミス・バレンタインにか、それともその場に居ない敵に向かってか。
思い切り叫んだウソップは冷静になって思考を巡らせる。
再び荒れた町並みを見回して、すぐに行動しなければならないことを悟った。
一人倒せば終わる戦いではない。
事前にキリと綿密な作戦を練って、あらゆる状況を想定して話していたおかげで、次に自分が取るべき行動はすでにはっきりしている。
イレギュラーは必ず起こると、彼は言った。
おそらくキリの助けはないだろうと考え、ウソップは遠くを見る。
目を向けていたのは王宮ではなく砂漠がある方角だ。
最初から彼は、自分にしかできない重要な仕事を頭の中に置いていた。それ故、迷わない。
「敵の幹部は一人倒したぞ……お前ら、他の奴らは任せるからな」
ウソップはひとまず町の中心部に向かって駆け出し、緊迫した面持ちで歯を食いしばった。
「おれは反乱軍を止めねぇと……！」
最悪の事態は想定している。そしてアルバーナへの道中で必ず来ると確定した。
だからウソップは走る。
君にしかできないとキリに託された。彼の信頼を裏切る訳にはいかない。仲間たちを心配する気持ちを押し殺し、仲間の下ではなく、ウソップは一人戦うために準備を始めた。

ＢＵＲＮ　ｔｈｅ　ＦＬＯＯＲ（２）

場所を変えて、別の通りに入り。
改めてサンジはＭｒ．５と対峙していた。
彼の能力は聞いている。ボムボムの実の爆弾人間。自身の体、或いは体から出した鼻くそや息までも爆弾に変えてしまう驚異的な人物らしい。
能力の性質上、どうしても目立ってしまうため暗殺よりも破壊工作を得意としている。
本人は冷静で冷酷。決して油断はしないし、敵の実力を見誤ることもない。それでも５の地位に就いているのはそれ相応の実力だからということだ。
確かに厄介な能力ではあるものの、単純な実力ではサンジに分がある。
少なくともキリから与えられた情報で判断するならそれが正しい。
ただ、無傷で勝つことは不可能だろう、とはサンジ本人もすでに覚悟していた。
サンジは新しい煙草を口に銜えて火を点ける。
Ｍｒ．５は手を出すこともせず、ポケットに両手を突っ込んだそれを見ていた。
「おれのことは知ってるようだな。その上で正面から向かってくるとは、策があるのか、よっぽどのバカか」
「どっちか知りてぇか？　教えてやってもいいぞ」
「必要はねぇな。敵の情報を握ってるのはお前らだけじゃない」
サンジが息と共に煙を吐いた。
Ｍｒ．５はその様子を警戒しながらポケットから手を出す。
「世の中、どこで誰が聞き耳立ててるかわかんねぇもんだ。これからは気をつけた方がいいぜ。大鷲に化ける人間なんて特にな」
「ワシ……？」
「ここに居るのはあいつが知ってるメンバーだけじゃねぇってことさ」

それを聞いてもサンジは多くを語ろうとはしなかった。
ひょっとしたら色々と問題が起こっているかもしれない。だが助けに向かう気はない。
キリは勝手にどうにかするだろう。
それならこちらは、自分の敵を倒すことに集中すればいいだけだ。
「仲間の心配してる暇はねぇぞ。お前もすぐ死ぬことになる」
「へっ、最初から心配なんざしてねぇよ。バカはそう簡単に死なねぇもんさ」
「口では何とでも言えるがな」
そう言うとＭｒ．５はおもむろに指を突っ込み、鼻をほじり始めた。
「聞いてた通り、クソ下品な野郎だな。それで戦おうってんならお前もバカの部類だな」
「ならおれが死ぬ心配はなさそうだ」
「ああ、そうだな。だが死ぬのと負けんのは別だろ」
「本当に勝てるかどうか……試してみりゃいい」
鼻をほじった彼は、指先で鼻くそを丸くこねる。
見るからに顔をしかめるサンジは別段止めようともしない。気分を害しながらも彼の準備を微動だにせず眺めていて、慌てる様子もなかった。
やがてＭｒ．５が準備を終えて、右腕を伸ばして鼻くそを飛ばそうとする。
「一瞬だ。粉々にしてやる。鼻空想砲（ノーズファンシーキャノン）！」
指でピンと弾いて鼻くそが飛ばされる。真っ直ぐ飛んでくるのを見極め、慌てずサンジは身を屈めて前へ駆け出した。
飛来する鼻くそを潜るように避ける。
彼の傍を通過した直後、何かに接触することもなく爆発するが、サンジには届かず。
爆風だけが彼の背を押して、走る速度を速めてＭｒ．５へ接近していく。
「何ッ――!?」

「てめぇの話は聞いてるっつったろうが」
「チッ……！」
咄嗟にＭｒ．５が身構える。サンジは素早く接近しながら頭を働かせていた。
彼は全身爆弾人間。体に接触しただけで爆発するため、攻防ともに優れた能力と言える。おまけに近接戦闘、遠距離戦、どちらもこなすことができる。
もしサンジの蹴りが当たっても爆発されてしまい、ダメージを与えられてしまう。
と、普通ならば考えるはずだ。
敵の情報を持つサンジは冷静に思考していた。
素早く迎撃態勢を整えるＭｒ．５を見ながら、待ち構えている様子に確信を得る。
（全身どこでも爆発できる能力。だがそのためにはきっかけが必要。外部からの衝撃と、自分自身の意思……！）
右脚を振り上げ、頭部を蹴ろうと動いた。
その動作に合わせてＭｒ．５が防御の姿勢を取る。
やはり想定していた通り。腕や脚、防いだ体勢でも衝撃を受けた部分を爆発させ、接触した足にダメージを与えようという魂胆らしい。
振り上げられた脚は伸びきる前にピタリと止まり、Ｍｒ．５は表情を変える。
フェイント。直後に鋭い蹴り。
左足を軸に回転したサンジはＭｒ．５の腹に強烈なソバットを叩き込んだ。
「羊肉（ムートン）――」
「お、おおっ……!?」
「ショット!!」
ほんの一瞬で数度の蹴り。腹に重い衝撃を受けたＭｒ．５は蹴り飛ばされて地面を転がる。驚愕したせいで受け身すら取れずに無様な様子だった。
爆発はない。右脚は無事だ。

サンジはこの時点で確信を得る。
素早く起き上がるＭｒ．５を視認しながら、尚もサンジは接近を試みた。
体勢を立て直したばかりで鼻をほじる暇もない。ここは格闘で打開すべきだろう。そう考えたＭｒ．５も蹴りでの応戦を考えた。
接触さえすれば爆発することができる。単純な攻撃力なら自分の方が勝っているはず。
右足を振り上げたＭｒ．５は自分から攻撃を行う。
「足爆（キッキーボム）！」
思わず反射的に頭部を狙ってしまったが、サンジは素早く屈んで回避した。
彼の懐へ飛び込み、明確な隙。
がら空きの腹へ、と見せかけて、小さなフェイントの後に軸足へ蹴りを入れる。
「もも肉（ジゴー）！」
「ぎゃあっ!?」
体重を支えていた軸足を払われ、Ｍｒ．５は無様に転んだ。しかもその間近ではサンジが次の攻撃を繰り出そうとしており、冷静ではいられない。
軽く地面を蹴ってサンジが跳び上がる。
右足を天に向け掲げ、左足は地面に向けられたまま。
そんな体勢で回転するとＭｒ．５の頭を踏み抜こうと落下してきた。
「串焼き（ブロシェット）!!」
「うおおっ!?」
もはや受け止めて起爆、などという思考はなく、Ｍｒ．５は慌てて転げると回避した。
一旦彼から距離を取って、立ち上がって改めて対峙する。
サンジは余裕のある笑みを浮かべており、見るからに優位に立っているのは彼の方だ。
「なるほどな。大体わかったぜ、その能力」

「チッ、くそ……！」
「条件が揃えば全身どこでも爆発することができる。だがお前の判断があればこその話だ。反応できねぇほど速く蹴れば、爆発もできねぇし、ダメージも通る」
悪魔の実の能力は様々な種類がある。
常時体質が変化する超人系（パラミシア）は中でも奇妙なものが多く、それだけに使いこなすのも困難。
ゴムや紙といった性質に変化するならばともかく、Ｍｒ．５のそれは爆弾。起爆するためには必ずきっかけが必要であり、一つが打撃を主とした衝撃で、能力者自身が起爆しようという意思。能力を上手く使いこなそうとするからこそ、無駄な爆発を抑えてそうした条件が生まれている。
爆発しよう、と思って爆発しなければ、余計な被害が生まれ、本人にも周囲にも害となる。
ましてやプロの殺し屋など夢のまた夢であろう。
彼の能力には条件がある。攻防どちらも優れているが決して万能ではない。
ならばＭｒ．５の判断力すらも超えるスピードで攻撃を叩き込めば。
身を守るためには退くのではなく攻め続けることだ。サンジは勝機を見出して笑い、対照的にＭｒ．５は多少の焦りを感じさせていた。
「能力者ってのは無敵じゃねぇらしい。ボカボカ爆発してるだけなら困ったが、どうやらお前に勝つのは難しくなさそうだぜ」
「フン……思い上がるなよ。おれの力はこれが全てじゃねぇ」
「ならとっとと見せとけよ。すぐに終わっちまうぞ」
「減らず口を……」
眉間に深い皺を刻んだＭｒ．５が、懐へ手を突っ込んだ。
取り出したのは怪しく光る銀色のリボルバー。それこそが彼の必殺であり、必ず標的を仕留めてきたという究極の能力。
当然サンジはキリから情報を得ていて、一層の警戒が必要だと判断

した。
挑発を止め、些か表情を引き締めて彼を見つめる。
「こいつは南の海（サウスブルー）の新型、フリントロック式４４口径６連発リボルバー。すでにご存じのはずだろう？　これがおれの十八番だ」
「減らず口はどっちだよ。いいからとっととかかって来い」
「後悔させてやる。あっさり死ねると思うな」
Ｍｒ．５は弾倉を開き、弾の入っていないそこへ息を吹きかけた。
爆弾人間は吐き出す息さえ爆弾に変わる。
弾倉を閉じ、Ｍｒ．５が銃を構えた。
その頃にはサンジは、崩れた家屋へ近付き、地面に転がっていた壁の破片を見下ろす。
「そよ風息爆弾（ブリーズ・ブレス・ボム）!!」
「オラァ！」
引き金を引き、〝爆発する息〟という目には見えない弾丸が放たれた。当然サンジにはいつ接触するか目視することができないものの、彼は迷わず地面にあった石ころを蹴る。
両者は一瞬の内に接触し、二人の間で爆発した。
石ころはバラバラに破壊され、だが、見えない攻撃がサンジに届くことはなかった。
やはりそうだとＭｒ．５は苛立ちを露わにする。
この敵は自分を知っている。戦法、弱点、多くを理解した上でここに居る。
教えたのは間違いなくキリだ。
誰にも軌道が見えない攻撃、〝そよ風息爆弾（ブリーズ・ブレス・ボム）〟は、初見の相手ならば間違いなく避けられない、何度か見ても避けるのが難しい攻撃だ。当たれば大爆発を起こすため、一度受けるだけでも気絶してもおかしくない攻撃力だってある。
これを攻略するのは、本来ならば難しい。
だが仕組みを知っている者からすれば、実は止めるのは難しくはないのだ。
Ｍｒ．５の攻撃は、何かに接触した時点で起爆する。

対処法は標的にぶつかる前に別の何かをぶつけてしまえばいい。それを知っているのはＭｒ．５ペアを除けばただ一人、その能力を知っているキリだけだった。
「たとえ見えなくても銃口の向きで攻撃が来る軌道はわかる。そこに何かしらぶつけてやりゃ、おれに届く前に爆発しちまう。だろ？」
「よくわかってるじゃねぇか……だがその程度で攻略した気になられちゃ困る」
「今更何しようがそう変わんねぇよ」
「どうかな」
再びＭｒ．５が鼻をほじり始めた。
右手に銃を、左手には鼻くそを。
素早く攻撃の準備を終えた彼は敢えて遠ざかるように後ろへ一歩を踏み出した。
「そもそもおれは能力の性質上、暗殺以上に破壊工作を得意としている。派手にやればやるほど強さを増すって意味だ」
「へぇ……」
「〝見えねぇ〟ってのはお前が思う以上に厄介なんだぜ。鼻空想砲（ノーズファンシーキャノン）！」
指で弾いた鼻くそは狙い通り、彼らの間に落ちた。地面で大きな爆発を起こして、土を掘り返して粉塵を撒き散らし、二人の間に簡易的な煙幕を張る。
そうなれば自然と行動は決まっているだろう。
Ｍｒ．５は素早く銃を構えて引き金を引き、サンジは再び瓦礫を蹴って前へ飛ばした。
両者が接触。大爆発を起こす。
もはや鼻くそなど比べ物にならない威力。当たれば大怪我程度では済まない。
リボルバーは六発装填できる。連続して引き金を絞り、今度は二発連続して撃ち出した。
立ち昇る砂を突き破り、空気の塊が真っ直ぐ前方へ向かって飛んでいく。確かに粉塵がある場所では軌道が読まれ易い。だがそれでも、

弾その物が見えないことの利便性はあるはずだ。
辺りに舞い上がった砂が邪魔して見えにくいが、爆発音が二度。何かには確実に接触した。果たしてそれがサンジであるのか否かが重要であって、Ｍｒ．５は警戒する。
ここで前へ出るのは素人。無事であったなら敵は間違いなく接近を望むからだ。
そのため怯えた訳でもなく、Ｍｒ．５は敢えて後ろへ下がる。敵の狙いを潰すと同時に自身が最も戦いやすい位置をキープしようとしたようだ。
視界が悪い前方を注視し、足を止めてしばし待つ。
爆発の余韻が消えれば幾分かは状況を読み取ることができるだろう。
銃を構えたままでＭｒ．５は足を止めた。
待ちの姿勢など自分らしくないが、こればかりは仕方ない。
（生きてりゃこっちに向かってくるはず。さぁ、どう出る）
そうして周囲を警戒しながら待っていると、煙が晴れる前に敵の行動を感じる。
左手側、廃墟同然の家の中から物音が聞こえたのだ。
素早く反応したＭｒ．５がそちらに銃を向け、咄嗟に後ろへ跳びながら撃つ。
「そよ風息爆弾（ブリーズ・ブレス・ボム）！」
放たれた直後に到達。大爆発は家屋の上半分を吹き飛ばし、粉々にして瓦礫をばら撒いた。必然的に家の中が見えるようになったがサンジの姿はない。
今の物音は囮。ここに隠れているのか、それとも別の場所か。
逡巡したＭｒ．５は敵の襲撃が始まっていることを感じて、リロードは間に合わないと判断する。
視界を広く保ち、どこから来てもいいように構えながらわずかに心は焦っていた。
一手読み間違えれば敗北を喫する緊張感。
先程蹴りを受けたからこそ、そう何度も受けてはいられないと思

う。
爆発という能力というならば、一撃。一撃与えれば勝つことは難しくない。
（残り一発。ここで決めにくる気か……）
Ｍｒ．５が破壊された家屋に目を向けていた時、薄れていた粉塵を突き破ってサンジが現れる。
突然の事態にＭｒ．５は驚愕して、半ば考えず反射的に銃をそちらに向けた。それを見てもサンジは止まらず、むしろ速度を増して向かってくる。
その様子は思わず恐怖心を抱いてもおかしくないほどの迷いの無さだ。
辛うじて反応できたＭｒ．５はサンジに向けて引き金を引く。
当たれば勝利。そう思って弾丸を放った時に、彼はプッと銜えていた煙草を吐き出した。
見えない弾丸と煙草が激突して、大爆発を起こす。爆発ではダメージを受けないＭｒ．５も爆風によって体勢を崩しかけ、必死にその場で堪える。一方でサンジは顔の前で腕を交差させ、ダメージ覚悟で敢えて前へ駆け出していた。
その結果、二人の距離は一気に近くなる。
爆炎を突き抜けてやってきたサンジがＭｒ．５へ飛び掛かり、驚愕する彼に脚を振り下ろした。
「捕まえたぞクソ野郎ッ！」
「ぶごぉっ!?」
落下と同時に振り下ろした右脚がＭｒ．５の頬を蹴り飛ばす。耐え切れなかった彼は地面を滑り、銃を取り落としそうになるほどのダメージを受けて転がる。
それでも攻撃は止めず、さらにサンジが駆ける。
必死に上体を起こした彼へ追撃を行った。
「三級挽き肉（トロワジェム・アッシ）!!」
「うおおっ!?」
ドロップキックの要領で飛び掛かり、両足で素早く連続の蹴りを繰

り出す。
顔面、胴体、場所を選ばず突き刺さって、彼の体は耐え切れず再び地面を転がった。
決着をつけるなら、今。
ここでまた距離を取られれば不利になるのは自分。そう考えたサンジはとどめを刺すべくＭｒ．５へ駆け寄ろうとする。しかしその時、嫌な予感がした。
自ら仰向けに倒れた彼の全身に力が入ったように見えたのだ。
「ゲホッ、ガフッ……クソっ。何もかも粉々にしてやる……！」
「チッ、そういうことか――！」
「全身起爆で全て消え去れ！」
何をするかを先に読んだサンジは、迷う素振りも見せずに彼から距離を取ろうと走り出す。
直後、Ｍｒ．５の全身が強く発光し、今までにないほど巨大な爆発を起こした。
規模にして数十メートルにまで及ぶ爆発。周囲にあった建物の残骸を消し飛ばし、凄まじい爆風があらゆる物を吹き飛ばす。サンジもまた堪えられなかった。
吹き飛ばされたサンジは勢いよく地面を転がり、両足で必死に踏ん張ろうとする。強風に身を晒されながら、彼の目はいまだ爆心地に居るＭｒ．５を見ようとしていた。
爆炎が消え、ゆらりと立ち上がる影がある。やはりＭｒ．５だ。
その攻撃力は凶悪その物。ボムボムの実の奥義と言って過言ではない。
だが、制限があることもまた事実だった。
（〝全身起爆〟は強力な技だがリスクがある――）
サンジは駆け出した。
二度目があれば避けられるかはわからない。
決めるならば今すぐに。
（爆発した直後、五秒間は全ての能力が使えない……！）
強靭な脚力で地面を蹴り、跳ぶようにしながら前へ進む。

Ｍｒ．５の姿はどんどん近くなっていき、彼は苦しげな表情で立ち尽くしていた。
「ハァ、この五秒に賭ける気か……？」
「能力さえなきゃ、てめぇは怖くねぇからな！」
たったの五秒。しかし、サンジの行動は速い。
素早く接近して彼への攻撃を行った。
すでにダメージを受けているＭｒ．５は反応できずに、防御しようとしても間に合わずに攻撃を受けてしまう。身体能力に差があり過ぎるようだった。
「首肉（コリエ）！」
「ぐはっ!?」
側頭部を蹴り抜き、Ｍｒ．５は勢いよく倒れる。
次いでサンジが右足を振り下ろした。
「肩肉（エポール）！」
「ぐおおっ!?」
振り下ろした蹴りでＭｒ．５の体が地面に叩きつけられ、弾んで跳ね上げられた。
「背肉（コートレット）！　鞍下肉（セル）！　胸肉（ポワトリーヌ）！　もも肉（ジゴー）！」
「ぐっ、おっ、おおおっ……!?」
たった数秒で次々蹴りを叩き込んでいく。Ｍｒ．５が見る見るうちに余裕を失っていくのに対して、攻撃しているサンジもまた余裕を失っていた。
もう時間はない。
Ｍｒ．５は倒れず、血反吐を吐きながらも戦闘を継続しようとする。
格闘戦では勝ち目がないと知っての防御に集中した姿勢。耐え切ることのみを考えた彼はすでに五秒間を生き抜いたことを自覚した。
いい加減反撃の恐れがあると考え、それでもサンジは攻撃を続ける。
ここで退けば相手の思う壺。
やはり決着は今すぐに求めるべきものだ。

「ガフッ……さぁ、もう五秒は経ったぞ……」
「おおおっ！　羊肉（ムートン）ショット！」
「足爆（キッキーボム）！」
両者の蹴りが正面から激突し、小さいとはいえ強烈な爆発を起こした。
サンジの右脚は爆発に晒されてダメージを負い、脛の部分だけ服が破れて、血が噴き出す。だが蹴りの衝撃だけで言うならＭｒ．５が受けたものの方が大きく、脚に痛みを感じながら倒れた。
どちらにもダメージがある。しかし違いは大きい。
「クソっ、しぶてぇ野郎だ！」
「ハァ、お互い様だ……！」
倒れたＭｒ．５へ飛び掛かり、踵落としを繰り出す。だがＭｒ．５は地面を転がって避け、サンジの脚は地面を強く叩いた。
転がって逃げ、Ｍｒ．５は起き上がる前にリボルバーへ息をリロードする。
その行動はサンジにも見えていた。しかしこうなればどちらが速いかのみ。
地面を蹴って足を振り上げる。
接近する最中、Ｍｒ．５が銃を構え、迷わず引き金を引いた。すでに目の前にまで迫っていたが自分が巻き込まれることも厭わず、見えない弾丸はサンジに当たる。
二人とも爆発に巻き込まれたものの、それでダメージを受けるのはサンジのみだった。
サンジは背中から倒れ、Ｍｒ．５は幾分平気な顔で転がり、即座に起き上がる。
形勢は逆転。確実に流れは変わりかけていた。
「ようやく当たったなっ。次で仕舞いにしてやる！」
勝機を得たＭｒ．５がサンジに接近した。
とどめは銃ではなく、より確実な〝全身起爆〟で。〝足爆（キッキーボム）〟と〝そよ風息爆弾（ブリーズ・ブレス・ボム）〟でダメージは蓄積しているはず。もう逃げる余裕はない。

倒れたままのサンジに駆け寄り、勝てる、と歓喜に酔いしれた。
「死ね――！」
その瞬間、サンジの脚が体ごと跳ね上がり、Ｍｒ．５の顎を蹴り上げる。
まるで逆立ちをするように、蹴ると同時に平然と立ち上がった。
一方、顎を蹴られたＭｒ．５は視界が揺らいでいるのを感じ、なぜか体からも力が抜ける。
「がっ、はぁ……!?」
「要するに能力を使わせなきゃいいんだろ」
「ま、待てっ……！」
「もう待てねぇよ――三点切分（さんてんデクパージュ）!!」
首筋、胸、腹へほぼ同時に叩き込まれる三度の蹴り。右脚の痛みも気にせずに、強力な攻撃が突き刺さったＭｒ．５は一瞬で意識を刈り取られ、瓦礫の山へ頭から激突した。そのまま動かなくなってしまい、勝負はようやく決着を見る。
サンジは深く息を吐き、懐から出した煙草を一本口に銜えた。
やはり無傷で勝利とはいかなかった。
単純な実力差では結果が出せないのが能力者との戦い。相手が自分より弱かったとしても、悪魔の実の能力を使われてはその差が覆される可能性がある。
右足に火傷。一度は全身を爆発に包まれ、怪我はひどくないとはいえスーツもひどい状態だ。
肌も薄汚れて、転げ回って髪も汚れている。サンジは鬱陶しそうに髪を掻いた。
「ハァ、ボムボムの能力者相手にこの程度で済んでよかったと考えるべきか。キリの情報がなかったらと思うとぞっとする相手だぜ」
そう言って煙草に火を点けながら、念のため気絶したかどうかを確認しようとした。
おそらく起きてはいないと思う。だが起き上がって他の仲間が襲われでもしたら大変だ。
サンジが半ば瓦礫に埋もれるＭｒ．５へ歩み寄ろうとした時、急に

あらぬ方向へ振り返る。
「ハッ!? この感じ、まさか……!」
その時にはすでにＭｒ．５のことなど頭にない。
駆け出した彼は異なる場所を目指していたようだ。
「レディがおれを呼んでいる～っ!!」
焦りすら感じさせてサンジは走り去る。
何かを聞いた訳でも見た訳でもない。言ってみれば勘。どこかでレディが助けを欲している。それなら自分が行かずして誰が助けられるというのか。
すでに倒したＭｒ．５が動けるかどうかなどどうでもよくなったらしい。
そんな確認をしている間にレディが傷ついたらどうするのだと、彼は必死になっていた。
「うおおおおぉ～っ！ 待っててくれ、今すぐおれがそこに行くゥ～!!」
休む暇もなくサンジは次の戦いへ向かった。
戦況がどうなっているのか、他の仲間がどうなっているのかを知るのは簡単ではない。
だがそれでも、彼が女性を守る騎士（ナイト）だという事実は変わらないようだった。

ＢＵＲＮ　ｔｈｅ　ＦＬＯＯＲ（３）

広場へ向かう道中、ビビは荒れ果てたアルバーナの町並みに心を痛める。
以前は美しい景観であったはずだ。バロックワークスに潜入していた期間が長く、見たのは久しぶりである。しかしまさか、こんな姿を見ることになるとは。
動揺する彼女は思考を改めようとしていた。
落ち込んでいる暇はない。常に考え続けなければ勝利が手に入るはずもないだろう。
歩きながらビビが傍に居た兵士に尋ねる。
護衛に就いているのは五人足らず。
同行するのはカルー、Ｍｒ．９、ミス・マンデー。
戦力は決して多いとは言えないものの、援軍を期待することはできない。このメンバーでやるしかないのだ。国王軍を導き、反乱軍ではなくバロックワークスを倒す。
「あなたたち、名前は？」
「いえ、我々の名前など、王女に覚えて頂くほどのものでは」
「教えて。必要なことなの」
「はい。では――」
兵士たちは一人ずつ名前を言っていく。
全員の名前を聞いた後、ビビは再び質問した。
「兵士全員の顔と名前が分かる人は居る？」
「全員、ですか。流石に全員ともなると一人では難しいかと思いますが」
「国王軍の内部に敵が居るの。私たちと反乱軍が戦うのを望んでいる人間よ」
「えっ!?　我々の中に、ですか？」
ビビの隣を歩いていた兵士は目を見開いて驚愕する。試しに聞こえていただろう他の兵士の顔も見てみるが、彼らも同じように驚いていた。

こういった問題にはＭｒ．９やミス・マンデーは口を挟めない。
真剣な様子のビビを気にしつつ、彼女らの話を耳にする。
「何年も前に正しい手順で潜入した工作員なの。あなたたちが知らなくても無理はない。名前のリストを手に入れているから、この人達を探してほしいの」
「そんな……しかしビビ様は、なぜそんなことをご存知なのですか？」
「敵の情報をよく知る仲間が居たから。彼が居なければきっと対等に戦うことはできなかった」
兵士たちは動揺を隠せない。
ビビのことは信じたいとはいえ、理解が追いつかない部分も多くなる。
とにかく彼女の言う通りに従うことしかできなくて、彼らは戸惑いながらも頷いた。
「わかりました。それぞれの部隊長であれば名前もわかるでしょう。確認を急ぎます」
「彼らを拘束して。だけどここにある名前の人以外にも、いつ誰が敵になるかはわからないわ。十分注意してね」
「ご心配なく。ビビ様の御命は、我々の命を捨ててでも――」
「それがダメなのっ。簡単に死のうとしないで。私も自分の身くらい自分で守れる」
焦りを感じさせるビビの声を聞き、発言した兵士は虚を衝かれた。
彼女は真っ直ぐ前を見て歩きながら決意を露わにしている。
その姿はか弱い少女とは思えず、独特の強さを感じさせていた。
「あなたたち一人一人が国を作るのよ。簡単に命を捨ててはいけないわ」
「しかし……」
「大丈夫。私だって、今まで遊んでたわけじゃないの」
自信を見せてビビはどんどん前へ進んでいく。
兵士たちは、近年の彼女を知るＭｒ．９とミス・マンデーは、少なからず驚きを隠せなかった。彼らが知るビビとはどこか違っている

気がするのである。
以前とは違った強さを感じさせ、ビビを先頭に広場へ向かう。
到着するとそこにはすでに大勢の兵士が集結していた。先に報告へ向かった兵士の迅速な行動のおかげか、それともビビが戻ったという報告で士気が上がったのかもしれない。
ビビは促されるままに集団を見渡せる位置へと移動する。
「ビビ様！」
「本当にビビ様が……！」
「ビビ様、よくぞご無事で！」
兵士たちは歓喜に身を震わせている。
国の宝とも言うべき王族、その一人娘が帰ってきた。これほど嬉しいことはない。
だが今はそんなことを言っていられる状況でもなくて、皆を見渡せる場所へ到達した彼女は真剣な顔を見せ、集まった兵士たち一人一人の顔を見つめた。
「みなさん、今までごめんなさい。本当にご迷惑をおかけしました」
「そんな……我々はビビ様がご無事ならそれで」
「だけど感傷に浸っている時間はありません。今、この国にはまだ危機が迫っています。私たちの敵はこの国を混乱に陥れ、乗っ取るつもりでいるんです」
「まさか、反乱軍が……」
「違います。この反乱は全て仕組まれたもの……反乱軍はこの国の崩壊を望む人々の手によって踊らされていただけ。私たちが戦わなければならない相手は反乱軍ではないんです！」
兵士たちにどよめきが生じる。これまでの事件や紛争は何だったのか、そう思ってしまうほど衝撃的なことを言われて、自分たちの苦労すら振り返ってしまった。
しかしその動揺はおそらく必要なこと。
ビビは躊躇わずに言葉を重ねた。
愛する祖国を守るためには、彼らの協力が必要不可欠なのだ。
「私はこの国を守りたい……だけど私一人の力じゃどうしようもあ

りません。みなさんの力を貸してください！　私と一緒に、この国を陥れようとする本当の敵と戦ってください！　反乱軍も騙されているだけ、彼らも救わなければ！」
「し、しかし、あの時居たのは、確実にコーザで……」
「おい、やめろ！　あのビビ様が嘘なんかつくもんか！」
「そうだ！　おれはビビ様を信じる！　一緒に戦います！」
「おれの力で良ければいくらでも使ってください！」
「この国を守るんだ！　おれたちの手で!!」
どよめきから一転、兵士たちの士気は上がって、雄たけびを上げながら武器を掲げる。
やはり王女ビビが直接声をかけた影響は大きいのだろう。黙って見ていたＭｒ．９とミス・マンデーは改めて彼女が本物の王族であることを認識する。
「みんな……ありがとう」
「ミス・ウェンズデー、本当に王女様だったんだな……」
「わかりきってたことだろ。私たちがやることは変わらない。友達のために一肌脱ぐだけさ」
「お、おう。当ったり前だ」
彼らがその光景を眺めていた時、進み出てくる四人が居た。
屈強な男たちは地面に膝をついて、ビビに対して恭しく頭を下げる。
「ビビ様」
「ツメゲリ部隊……！　あなたたちも無事だったのね」
彼らは、ツメゲリ部隊と呼ばれる四人から成る極小の部隊。皆が一流の腕を持っており、戦いにおいてアラバスタ最強の戦士たちに次ぐ実力者だ。
彼らの協力は何よりも頼もしい。チャカやペルが敗北した今なら尚更だった。
「我らの力及ばず、チャカ様、ペル様が連れ去られたこと、お許しください」
「しかしこれよりは決して後手には回りませぬ」

「我ら四人で」
「ビビ様の御身は絶対にお守りします」
「ええ……ありがとう。だけど無理はしないで。みんなで生き残ることが私たちの勝利よ」
「御意」
ツメゲリ部隊が頭を下げると同時。
まるで狙い澄ましたかのように、広場の入り口へ大勢の人間が詰めかけた。
「ビビッ!!」
兵士たちが一斉に振り返り、ビビたちもそちらに目を向けていた。
声色からして相手が誰なのかはわかっている。
広場に集まった全員がそちらを見ると、やはりコーザが立っていて、その後ろにはずらりと反乱軍の兵士たちが集まっていた。
否応なしに緊張感が高まる。
コーザは厳しい目でビビを見ていた。
だがビビはあくまでも冷静に、決意した顔でじっと彼を見つめ返す。
「まさかお前も居たとはな……」
「ええ……」
「もう止められないぞ。おれはこの国を落とす。そして前よりもずっと良い国を――」
「下手な演技はやめてＭｒ．２。私にはそんな嘘通用しないわ」
距離はあるものの声ははっきり聞こえる。
コーザの声を遮って、ビビは凛とした声で話していた。
国王軍兵士も、反乱軍だろう男たちも、押し黙って二人のやり取りを眺める。
「あなたの能力はマネマネの実。他人の姿をコピーして、この国をかき乱した。お父様の姿を借りて反乱軍を利用したのもあなたでしょう？」
「何を言ってるんだ。おれは――」
「あなたたちは反乱軍なんかじゃない。なぜなら本物の彼らは、私

たちの仲間がナノハナで足止めしてるから。到着にはまだ少しの猶予がある」
説明するようにビビが言った途端、コーザが自ら口を閉ざし、少し黙った後に肩を落とした。
「ぷぅ～っ……ゼロちゃんの言ってた通りね。本物の反乱軍は使えないわけだわ」
「まさか、本当にコーザじゃなかったのか……!?」
「ならあれは一体誰だ――？」
「仕方ないわねぃ。それじゃプランを変えるわぁ～ん」
そう言ってコーザ――彼の姿に化けたＭｒ．２が勢いよく右手を上げた。
全く同じタイミングで国王軍の兵士たちが悲鳴を発し、なぜか仲間同士で傷つけあい、血を流して倒れていく。どうやらすでに潜入していたバロックワークス社員が攻撃を始めたらしい。
見栄えは完全に同士討ち。
動揺した国王軍は隊列を乱して逃げ惑い、混乱するばかり。
その姿を見たビビは悔しげに歯を食いしばる。
先手を打たれた。彼らはこの状況も考慮してここへ来たようだ。
「お、おいっ、何をする――ぐわっ!?」
「目的はビビ王女の排除……あんたたち！　思いっきり暴れなさ～い！」
「はっ！　Ｍｒ．２・ボン・クレー様！」
反乱軍に変装したバロックワークスが動き出す。
最も優先すべきはビビの始末。彼女を失えば国王軍は総崩れとなること間違いなし。駆け出した男たちは武器を掲げて彼女へ殺到しようとした。
この時、国王軍は突如寝返った風に見える兵士たちの攻撃を受けて混乱している。彼らも同じくバロックワークス社員で、初めから敵なのだが、それを説明している時間もない。
統率が乱れたまま戦闘が始まってしまう。
国王軍は早くも大打撃を受けており、早く立て直さなければ全滅も

あり得る。
困惑するビビは戦況を見ながら必死に頭を悩ませていた。
辺りで怒号が響いている。大声を出しても混乱している彼らに聞き取る余裕がない。
敵は二種類。国王軍の格好をしている者と、反乱軍に扮している者。
その両方から同時に攻撃を仕掛けられれば混乱するのも当然だ。どうすれば兵士たちを導き、この戦いに勝利することができるのか。
悩むビビには部隊を指揮した経験などない。
それでもやらなければと焦る一方の彼女に対し、迷わずツメゲリ部隊が声をかける。
「恐れていたことが……！　国王軍にも敵が潜んでいるの！　彼らをどうにかしないと、誰が敵か味方かわからなくなる！」
「ビビ様、我々にお任せを！」
「兵士を集め、向かってくる者のみを討ちます！　一時この場から離れますが……」
「お願い！　彼らを見捨ててはいけないわ！　こっちは大丈夫だから！」
「申し訳ありません！」
素早く確認してツメゲリ部隊が動き出す。
ビビとは違い、彼らには兵の指揮経験がある。
四人がそれぞれ分散し、混乱する兵士たちに向かって怒声を発した。
「皆、一塊になって警戒せよ！　姿形に囚われるな！　攻撃してくる者は全て敵だ！」
「味方にも敵が紛れ込んでいるぞ！　だが恐れている暇はない！己が目で敵を見極めろ！」
すぐさま指示に従った者、従わなかった者が居る。判別ならばそれだけで十分。互いに背を任せて己の敵を見定めた兵士たちは、即座に目つきを変えて戦闘を開始した。
ツメゲリ部隊もまた先頭に立って反乱軍にぶつかり、敵の攻勢を食

い止めようとする。
戦闘は一瞬にして激化した。
ビビの周囲では十名程度の兵士たちが身構え、Ｍｒ．９やミス・マンデー、カルーが警戒する。
敵も味方も入り乱れての激しい戦い。
この様相ではもはや敵がどこから来るかわからない。
大将が討たれることだけは注意しなければと、彼らの警戒心は高まり、だがどれほど警戒していようと敵の接近を未然に防げるほど簡単な相手ではなかった。
「Ｍｒ．９」
「ああ、わかってるぜミス・マンデー。見覚えのある顔だな」
ビビの背後を守ろうとしていた二人の声を耳に入れ、思わずビビは振り返る。
小さな路地を抜けて広場に入ってくる男女の二人組が居た。
この二人、暑い気候だというのに甲冑を身に着け、剣と盾を持って近付いてくる。
兜だけは脱いでいて、どう見てもダラダラと大量の汗を掻いていたが、本人たちは至って真面目な様子でビビを狙って歩いてきた。
Ｍｒ．１０とミス・テューズデーである。
顔見知りであるＭｒ．９とミス・マンデーは、自ら彼らへ近付いて足を止めさせる。
「王女を殺せば国王軍は機能停止……存外、楽な仕事になりそうだな」
「だけどＭｒ．１０、彼ら邪魔するつもりらしいわよ。裏切者ね」
「ああ、それじゃ仕方ない。彼らの始末は僕らがつけるとしよう」
「そうね。さっさと殺してビビ王女を仕留めなきゃ」
「フン。舐められたもんだね」
「言っとくがおれは前よりずっと強くなってるぜ。バイバイベイビー？」
武装した二人の前に立ち塞がり、Ｍｒ．９は両手に金属バットを持ち、ミス・マンデーは拳にナックルダスターを装備し、Ｍｒ．１０ペ

アに立ち向かう。
いつまでも心配していては彼らを信頼しているとは言えないだろう。
任せると決めたビビは戦況を見回し、すぐに表情を変えた。
「アァ～ンドゥ～……クルァッ!!」
「がっ……!?」
「ヒョウタっ!?」
素顔を露わにしたＭｒ．２が、高速の蹴りでツメゲリ部隊の一人へ突き刺す。
首元に当てたその攻撃は凄まじい威力を持ち、屈強な大男を跪かせて黙らせる。
その直後、大きく足を振りかぶり、凄まじい勢いで今度は脳天へと落とした。
「ど～きなさいよ～う!」
頭にかかと落としを喰らい、ヒョウタは今度こそ気を失った。
武器を手放してその場に倒れ、コーザの服を脱ぎ捨て、いつも通りの格好のＭｒ．２が怪しく笑う。
ビビは、仲間がやられるところを見ながら何もできなかった。
わかってはいるつもりだ。兵士たちが戦うことができるのは彼女が居るから。王女を守るためという理由があり、指揮官が存在し、国の象徴として彼らを導いているから。不用意に動いて自分が倒れようものなら、この場に居る兵士たちだけでなく国全体が負けてしまう。
それだけは避けなければならない。敢えてその場を動かなかった。
それでも悔しげな顔を見せるビビに視線をやり、Ｍｒ．２は辺りを見回す。
戦況は確かに変わりつつあるが、あくまでも有利なのはバロックワークスの方。
やるべきことを見抜いて、Ｍｒ．２は駆け出した。
「ま～ずは邪魔者からよね～い」
たかが一社員。変装を得意とする工作員であっても、彼の目は確

か。自らの部下を率い、集団の心理というものを理解している人物である。
それなら、この集団を潰すことは難しくない。
Ｍｒ．２は真っ先にツメゲリ部隊を標的に決め、彼らを一人ずつ倒すべく、正面から接近を始めた。

再会

アルバーナが騒がしくなっている。
広大な王宮の中で窓を閉め切っていても、それは城内にまで伝わっていた。
玉座に座らされたコブラは両腕を拘束され、頭から血を流している。厳しい表情で目を閉じて、何かに耐えるようにきつく歯を食いしばっていた。
彼から見て左側、こちらは四肢を縛られて猿ぐつわまでされた、跪くチャカとペルが居る。
武器も自由も奪われ、目の前に居る王を守ることもできない。護衛隊でありながら惨めな姿を晒す己自身を恨み、ひどく憎んだ。
しかしそれ以上に憎らしいのが彼らの前に立った男。
国を守る英雄の名を騙り、その実裏では国盗りの準備を進めていた海賊。
砂漠の英雄、サー・クロコダイルが、本性を表して彼らの前に立っていた。
「この時が来るまでずいぶん時間を使った。慎重に準備を進め、機を待ち、ようやく手に入れることができる……おれの望む理想国家を」
「国はそう簡単ではない。たとえお前の目論見が成功しても、きっと国民は過ちに気付く。お前を王として認めることがあろうか」
「クッハッハッハ。相変わらずの理想論者だな。それが真理ならなぜここまでの事態になった。おれにはむしろ国を動かすのは簡単だと言われてるように聞こえるぜ」
反論するコブラに対してクロコダイルは笑みを浮かべる。
余裕を見せる彼は上機嫌にも見えた。
「お前とおれでは見てきたものが違うんだ。国政が変わるのは当然。何よりお前の失敗を見た後なら国民もきっと満足してくれる国家となるだろう」
「今のお前がそんなことを考えるとは思わない。求めているのは国

政などではなく支配だろう」
「ほう、よく気付いてるじゃねぇか。人を見る目はあるってことか」
「そんなことをしても、理想国家になどなり得ない。必ずどこかで綻びが生まれる。そうすればどれだけ時が経っても必ず崩壊するだけだぞ」
「だからなんだ？　国盗りを止めろと言うか、国民を大事にしろとでも言うつもりか」
クロコダイルの態度は変わらず、またコブラも毅然とした態度で彼の目を見返す。
「聡明なコブラ王ならそんな言葉で事態が変わるとも思っていないだろう……言うべき言葉が違うんじゃねぇか？　あいにく無駄話をする気は無くてな」
「何が望みだ」
「それでいい。なぁに、そう大それたもんじゃねぇさ」
一歩、クロコダイルがコブラに歩み寄った。
見ているだけでも全身が震える。彼の迫力は並大抵のものではなく、少なくともチャカとペルは絶対に勝てない相手として認識してしまい、抵抗の二文字を思考から奪われている。本来は強固な意志を持つ歴戦の猛者をそうさせるのは、彼が常人でない証明に他ならない。
その中でコブラだけは強い眼差しで見つめ返して、彼の言葉を聞こうとしていた。
自身が死ねば国が荒れることを知っている。それ故に覚悟を持って向き合わねばならないのだ。
自身が生き残り、尚且つ国民を守る。
言うは易し。だが実現など不可能と言っていい。少なくとも自分の力だけではどうすることもできない状況にあって、分かっていながら諦めることだけはしなかった。
奇跡を待つしかない状況で、尚もコブラは戦う意志を持ち続ける。
その時、静かに部屋の扉が開かれた。
何気なくそちらに振り返って、その瞬間、クロコダイルは表情を変える。

入ってきたのはミス・オールサンデー、それに彼女に案内されてきた一人の男だ。
薄手のコートにテンガロンハット。その下には同じ色のバンダナ。薄汚れた格好をして髭まで生やしている。年齢もそこまで若くはなく中年といったところだろう。細い体とはいえ鍛えているらしくかなり筋肉質であり、常人以上の筋力を持っている。
そんな彼は肩に一人の男を担いでいた。
水に濡れたキリが、目を閉じた状態で担がれている。
ミス・オールサンデーは案内を終えると静かに、しかし迷わず彼の傍を離れた。
その後で男、賞金稼ぎのニックという彼が、キリの体を地面に投げ捨てる。
「お届けの品、ただいま到着したぜ――」
言い終わるか終わらないかというタイミングだ。空中を走った素早い攻撃が彼の首を刈り取ろうとして、紙一重のところでその場にしゃがんで回避する。
背を逸らしていなければ首が無くなっていたに違いない。
それほど本気の攻撃だった。
ニックは落ち着いて姿勢を直し、落とした帽子を拾って頭に被る。
ある程度は予想していたがまさかここまでとは。
今、彼の目に映るのは憤怒の顔を見せるクロコダイルの姿であった。
「おっとっと、危ねぇな。おれァ今、あんたに雇われてるんだぜ？言わば味方だ」
「契約と違うじゃねぇか……！　おれは無傷で連れてこいと言ったはずだッ」
「まぁまぁそう言うなよ。言っとくが、こうでもしなきゃ殺られてたのはおれの方なんだぜ？　連れてこようと思ったらこうするしかなかった。あんたが強えって言うもんだからさ」
「御託は聞きたくねぇな……！」
クロコダイルが右腕を砂に変え、刃のように伸ばして彼の首を斬り

落とそうとしたらしい。
あらかじめ予想していなければ避けられなかっただろう。
怒りで冷静さを失ったように見える姿は想像以上で、しかしわざわざ外部から賞金稼ぎを雇うだけはあると思った。かなりの執着があるようだ。
ニックは〝紙使いの捕縛〟を命令されただけだ。関係性は知らない。
それでも今のクロコダイルの表情を見ればなんとなくは察することができた。
地面に転がったキリの傍を静かに離れ、ニックは不敵に笑う。
勝てるはずがないと思っていた男の弱点を初めて見た気がする。同時に激しい怒りを買うことになることも理解したとはいえ、なぜか満足そうな顔だ。
「とりあえず落ち着けよ。役目は果たしたんだ。で、おれは次に何をすればいい？」
「勝手に話を進めてんじゃねぇよ。死にてぇのか」
「怖いなぁ。そう怒らないでくれよ。そこまで大事な奴だなんて知らなかったんだ。てっきりあんたは人の心なんて持ってねぇのかと」
右腕だけでなく体の節々から砂が舞い始める。
これ以上はまずい。下手をすれば本当に殺される。おそらく一瞬も持たないだろう。
ニックは両手を上げて、笑みを浮かべながらも降参の意思表示をした。
「オーケー、わかった。謝るよ。下手な真似して悪かった」
笑みを消さずとも、知らず知らずのうちに冷や汗が流れた。それほどの脅威、それほどの迫力、そして殺気である。もはやこの広大な一室に安息の地などあろうはずがなかった。彼がその気になってしまえばそこに居る全員を惨殺するのに数秒も要らない。
本当に恐ろしいというのはこういった存在を言うのだ。
久しく会わなかった、というより、初めて会う本物の強者にニックは機嫌を良くする。

本当に殺してしまうのか。
そんな緊張感が漂っていた時、いつの間にか室内に居たミス・オールサンデーが口を挟む。
「今彼を殺すのはもったいないんじゃなくて？　利用価値はあると思うけど」
クロコダイルの目が彼女を見る。しかし殺気が消えることはなかった。
「戦争中よ。彼を消すのは後でもいいけど、あまり悠長にしていられる状況でもないと思うわ」
「おれに意見するか……ずいぶん偉くなったな。ミス・オールサンデー」
「気に障ったなら謝ります。でも、彼も虫の息よ？」
ミス・オールサンデーの視線がちらりとキリを捉えたところで、重苦しい沈黙に包まれ、しばらくすると宙を舞っていた砂が消える。
全てがクロコダイルの体へと集まり、ようやく室内の雰囲気も戻った。
不意に背を見せ、彼はミス・オールサンデーへ言う。
「すぐに手当てしろ」
「よろしくて？　今は敵だけれど」
「ミス・オールサンデー。お前は死にてぇのか？」
それは、無駄口を叩くな、という意味なのだろう。とにかく気が立っているらしい彼は一瞥もせずに彼女へ殺気を叩きつけて、ミス・オールサンデーは汗一つ掻かず肩をすくめる。
その顔には穏やかな笑みがあり、颯爽と倒れたキリへ歩み寄った。
「お帰りなさい、キリ。こんな再会になるなんてね」
「うっ……ミス・オールサンデー……」
彼女が別の部屋へ連れて行く際、小さな声が聞こえた。
扉が閉められるまでクロコダイルは動かず、閉まる音が聞こえてやっと口を開く。
「麦わらの一味を消せ。働き次第じゃ生かしといてやる」
「お優しいこって。それじゃ、愛するボスのために頑張りましょう

かね」
そう言いながらニックは外へ向かうが、心中では命令に従う気などなかった。
クロコダイル、バロックワークス、反乱、国盗り。何一つ彼の心を惹きつけるものはない。彼が求めるのは如何に自分の心が躍るかという刺激だけだ。
国がどうなろうが構わない。ただその過程が面白いか否かだ。
戦場に出れば少しは面白いことがあるだろうかと、ニックは外へ出て行く。
一方で、自身の標的の中にはクロコダイルの名もあった。
その場に残ったクロコダイルは大きく息を吐く。
形相は凶悪その物。不思議と今は感情が揺れ動き、冷静さを取り戻すことができていない。
それでも数秒もすれば己の心を操り、落ち着きを取り戻して、コブラへ向き直る。
想定外の事態はあった。しかし予定通りでもある。
ここからが本題。威圧感は隠さぬまま、玉座の前へ立つ。
「悪いが予定が変わった。ゆっくり話し込んでいる暇はねぇ。質問に答えてもらおうか」
「国民を、傷つけないと誓ってくれるか」
「お前の態度次第、と言っておこう」
信用はできない。だが今の彼には頷く以外の選択肢が与えられていなかった。
コブラは目を伏せ、クロコダイルの言葉を待つ。
「〝プルトン〟はどこにある？」
そしてその一言で目を見開いた。
「なぜそれを……!?」
「やはり知っているようだな」
「馬鹿なことを考えるな。あれが何かわかっているのか」
「当然だろう。でなければわざわざこんな真似はしまい」
笑みはなく、感情はなく、ただ事実だけを口にする。

淡々と事を進める彼はひどく恐ろしかった。
「プルトン。一発放てば島一つを跡形もなく消し飛ばすと聞く……神の名を持つ世界最悪の古代兵器。この国のどこかに眠っているはずだ」
「そんな物を手に入れて何をするつもりだっ。まさか、この国を――」
「質問してるのはおれだ」
冷徹に言ってクロコダイルが歩き出す。
玉座の左側、拘束されたチャカの前に立ち、何も言わずに首を掴んだ。それだけでコブラは血相を変えて身を乗り出す。
「やめろッ!!」
「質問には簡潔に答えろ。あとはもうわかるな?」
クロコダイルの右手がチャカの首を掴んでいる。すると、なぜかチャカの体に異変が起こり、ゆっくりとやせ細っていった。速度は決して速くないが、通常ではあり得ない事象である。
抵抗しようとチャカが体を揺するものの逃げられない。
人の体が徐々に痩せこけていく光景。明らかな異常はコブラを焦らせた。
「この国を乗っ取ること自体は難しくねぇんだ。今からお前にできることは如何に犠牲者を減らせるかのみ。なんなら国民全員の首を並べてやろうか?」
「わかった、話す! 知っていることを全て!」
「言え」
チャカがくぐもった悲鳴を発する。まだ進行は止まっていない。
コブラは臣下を助けたい一心で叫んだ。
「〝歴史の本分(ポーネグリフ)〟がある! 葬祭殿だ!」
「よし。案内しろ」
パッとチャカから手が離される。
もう痩せることはない。しかし短い時間ながらすでに彼の体格は激変しており、苦しげな顔で地面に横たわった。傷をつけられた訳ではないのにひどい衰弱ぶりだ。

まるでミイラにでもされかかったような。
傍で見ていたペルは慌てて彼の顔を覗き込み、コブラは血が出るほど唇を噛む。
この場でできることは何もない。何一つ存在しない。
現状、この空間を支配しているのは絶対的な強者であるクロコダイルただ一人のみ。
敗北した彼らは、愚直に生きることを諦めないことしかできなかった。
「アンラッキーズ。ここを見張れ」
部屋の隅に居た二人組へ声がかけられる。
そのどちらもが人間ではなく、片方はサングラスをかけたラッコ、Ｍｒ．１３。その隣に居るのが同じくサングラスをかけたハゲタカ、ミス・フライデー。彼らを指して〝１３日の金曜日（アンラッキーズ）〟と呼ばれる。
時に任務の伝達人、時に不手際を起こしたエージェントを始末する特殊なナンバーだ。
彼らにその場を任せて、クロコダイルは部屋を出た。
今も尚表情はピクリとも動かず、振り返りもせずに別の一室へ向かう。
なぜか迷うことはなかった。
扉を開け、一歩踏み込んだ時点で空気が変わる。
椅子に座らされたキリがミス・オールサンデーに包帯を巻かれている最中だった。
失血か、疲労か、眠たげな目のキリが横目でクロコダイルの姿を視界に入れる。

ｏｕｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｂｌｕｅ

飛来する野球ボールを目撃して、ナミは唖然と立ち尽くしていた。

「ナミ！　危ない!!」

間一髪のところで横から抱きしめるようにして跳ばれ、直撃は避ける。

人型になったチョッパーの腕の中で、乾いた砂の地面に倒れながら、彼女は頭上を通り抜けたボールの軌道を目で追う。チッチッチッと鳴っていたのはきっと勘違いではない。その音が妙に耳の中に残って、気になって仕方なかった。

そして二人の傍を離れた後、ボールは空中で独りでに大爆発を起こす。

避けられずに直撃していればきっと体がバラバラになっていたに違いない。その威力を確認して背筋に悪寒が走り、青ざめる。

しかし驚いている暇すらないようだった。

「止まっちゃダメだ！　動き続けないと！」

「な、何が起きたのよ!?　チョッパー、これって……！」

グイッとチョッパーに腕を引かれ、ナミも動揺しながら立ち上がる。

「あいつらが近くに居るッ！」

そう叫んだ途端、地面に穴が開いて、突如地面の下から人影が飛び出してくる。

その姿、人間のものではない。

両手足が大きく、鋭い爪が並んで、小柄ながら威圧感を感じる。人間の外見にモグラが混じった奇妙な外見。モグモグの実のモグラ人間。

鋭く長い爪が並ぶ右手を振りかぶって襲い掛かってくる。

咄嗟にチョッパーがナミの体を押し、拳を握りながらその前へ躍り出た。驚くナミは再び転んでしまうが文句を言える状況ではなく、慌ててチョッパーの背を見上げる。

突然の攻撃はチョッパーの拳を跳ね飛ばして、自らの攻撃のみを彼

に当てる。
見かけはただの平手打ち。しかし爪が皮膚を裂き、チョッパーの体は殴り飛ばされた。
「土竜平手打ち(モグラバナーナ)！」
「うわぁ!?」
「チョッパー!?」
皮膚が切れたことなどどうでもよく感じるほどの衝撃。脳が揺れる。
チョッパーは勢いよく倒れ、受け身すら取れずに転がった。
反射的にナミが一本の棒に組み合わせた天候棒(クリマ・タクト)を構えるものの、殴った人物は攻撃を終えるとその場で穴を掘り、反応できないほど素早く地面に消えてしまった。
奇襲。そして一時撤退。明らかに素人ではない。
立ち上がったナミは背後にチョッパーを庇い、武器を構えながら辺りを見回す。敵の姿はない。その代わり地面にはいくつもの穴が開いていた。
チョッパーも頬に手を触れつつ、膝立ちになって辺りを警戒する。
「これって、つまりそういうことよね……？」
「うん。キリの情報だと、Ｍｒ．４とミス・メリークリスマスだ。さっきのボールはお供のラッスーが吐き出していて、強力な時限爆弾らしい」
「よりによって変な二人が相手なんて……チョッパー、傷は大丈夫？」
「大したことないよ。もう動ける」
チョッパーはしっかりした足取りで立ち上がった。問題はない。戦闘の継続は可能だ。
辺りは静かで、一切気が抜けない。その状況に二人は顔色を変える。
二人が居るのは大通りの一つ。南ブロックのポルカ通り。壊れた家々がずらりと並び、通りの視界自体は開けている一方、障害物は意外に多い。

そこで地面に穴を開けて、隠れる場所はさらに多くなっている。
今や敵を探すのは簡単なことではなかった。
敵に関する情報は把握している。特にその二人は真面目に記憶した方だ。
自らの実力を考慮した上でキリの助言は必要だろうと考え、真剣に話を聞いた。
だが、いざ敵を前にすると、本当にそれだけで勝てるのだろうかと思ってしまう。
最初の接触では完全に相手が上手だった。
次はどうする。今度はどう来る。警戒心が増すとはいえ、焦りが募り、静寂が続けば続くほど冷静さが失われていく感覚すらある。徐々に恐怖心は大きくなっていった。
敵の行動を待っている状態となってしまった二人は動き出すきっかけが見出せない。
それがさらに恐怖心を煽るのである。
「作戦を立てなきゃ。こいつらはチームワークが凄いんだ。なんとか引き離せれば一番良いと思うんだけど……」
「考えはあるの？」
「こいつらには弱点がある。それが上手く利用できれば」
「何をしようが無駄なんだよ」
声を聞いて、直後に地面に穴が開いて地下から何かが飛び出した。
二人とはおよそ八メートルの距離を取り、現れたモグラ人間、ミス・メリークリスマスが堂々と姿を現す。さらに別の穴からはＭｒ．４、そして拳銃のような胴体を持つ犬、ラッスーが顔を出した。
これが今回の敵。二人と一匹によるチームだ。
その迫力は只者ではない。いくつもの修羅場を潜り抜けてきた雰囲気がある。隠れ続けるのではなく敢えて姿を見せたのも自信の表れだろう。
ナミとチョッパーは表情を歪めてしまい、動揺は隠しきれなかった。
「敵を知ってるのが自分だけだと思うんじゃねーよ。おめーら、あ

の一味でも弱い連中だな。どこの誰かもわからねー賞金稼ぎが調べたんだよ」
「う～～～ん～～～～」
「あー面倒だ。おめーらみたいな弱い奴の排除なんて。よわ、〝ヨッ〟、〝ヨ〟だ。腰が痛くなるからさっさと殺して終いにしよう」
挑発するためではなく、ただ事実を伝えるためだけに。
呟いたミス・メリークリスマスは怪しく両手を動かした。
緊張した面持ちの二人を、特に人型のチョッパーを視界に入れて、彼女はにやりと笑う。それは明らかな余裕を見せつけるようだった。
「おめーゾオンだね？　丸薬を使って変形するんだ。そっちの小娘は変な棒を使うんだったか」
「お、おれ達のこと、知られてるみたいだ……」
「何よっ。それで挑発してるつもり？」
苦心するチョッパーとは異なり、ナミは鼻息も荒く睨み返した。
勝気な様子でクリマ・タクトを構えて大声で言う。
「こっちもあんた達を倒す準備ならできてるのよ！　いくら私がか弱くてきれいだからって甘く見ないでくれる!?」
「きれいとは言ってねぇ」
「そんな態度でいられるのも今の内よ。今に見てなさい……」
ナミが怪しく笑った時、思わずミス・メリークリスマスは眉間に皺を寄せた。
「さあ！　行くのよチョッパー！」
「おれだけかッ!?」
「さっきも言ったけど私はか弱いの。パパッとやっちゃって」
「無理だよ!?　相手はコンビネーションを武器にするんだ！　おれ一人で勝つなんて無理だ！　ナミの力が必要なんだよ！」
「しょうがないわねー。貸しになるわよ？」
「こわっ。こんな時まで金のこと考えてる……変態だ！」
「バカなこと言わないで。変態じゃないわよ。私は戦うのが怖いだけなの」
よっぽどのことを言うのかと思ったら肩透かしを食らってしまっ

た。どうやらナミは彼女達を怖がっているらしく、その態度を見て脅威とは思わない。
嘲笑するように口角を上げたミス・メリークリスマスはそろそろ攻撃を始めようとする。
その会話にはせっかちな彼女を止めるだけの力がなかったようだ。
「ハンッ。何かするのかと思えば結局口だけかい。Ｍｒ．４、いつまで突っ立ってんだい！　さっさと殺しちまわねぇかよ！　それ殺しな！　やれ殺しな！」
「う～～ん～～～」
「おせーんだよ返事がよ！　〝ノッ〟！　〝ノ〟が！」
怒ったミス・メリークリスマスはＭｒ．４に叫びつつ、自身が開けた穴に飛び込んだ。
「他にも始末しなきゃならねー奴らは居るんだ！　遊んでる暇はねーんだよ！」
「わ～～かっ～～た――」
「おせーんだよおめーはよ!?　〝バッ〟！　この〝バッ〟！」
二人の姿が穴の中に消える。続いてのそっと動いたラッスーも穴に入った。
眼前から敵の姿が消えて音もなく、二人は先程以上の緊張感に包まれる。おそらく地中を移動しているのだろうが物音がしない。これではどこから襲われるかわからなかった。
しんと静まり返った周囲に恐怖を覚える。
ナミもチョッパーも些か余裕が感じられない表情に変わっていた。
「ふざけてる場合じゃないわね……」
「ふざけてたのか!?　変態だ！」
「変態じゃないわよ。とにかくチョッパー、こいつらを倒さなきゃ私達の仲間まで狙われる。協力してここで倒しましょう」
「おおっ！」
表情を引き締め直して言うナミの姿にチョッパーの戦意が高まった。
怖さなら感じている。しかしビビの努力を見てきたからこそ、役に

立ちたいと思う。ここまで来て逃げるという選択肢は持ち合わせていなかった。
二人は駆け出して、至る所に開いた穴から離れるように移動し始める。
「そのためにはまず止まらないこと！」
「わかった！　あいつらはどこから来るかわからないから気をつけないと……！」
死角からの奇襲を恐れて、走りながら周囲を警戒する。これなら少なくとも突然背後から攻撃されても避けられる可能性が高くなるはずだ。
走りながら二人は対抗策を講じようとする。
敵は二人と一匹。しかしおそらく実力はこちらより上。増援は見込めず、自分達の力だけで勝たなければならない状況。焦りを感じながら考え出すのも無理はない。
事前に聞いた情報を思い出して有効的な策を考える。
先頭を走るナミは戦闘経験自体が少ない。最も得意とするのは敵から逃げることであり、正面から戦う機会などそう多くなかった。そしてチョッパーも決して多いとは言えない。
正面で向き合って戦うのは得策ではないだろう。何かしら作戦が必要不可欠だった。
幸い、周囲には焼け焦げ、崩れ落ちる寸前の物も多いとはいえ、家々という遮蔽物もある。
何もない砂漠で戦うよりは優位を作り易い環境だ。
「ねぇチョッパー、何か作戦ある？　あいつらの弱点ってなんだっけ？」
「あいつらのコンビネーションの中心はさっきのモグラが作るトンネルだ。あれで自分の姿を隠しながら敵に近付いたり逃げたりできる」
「それで？」
「だけどあの穴は全部繋がってる。それにあいつらが連れてる犬は――」

穴からどんどん遠ざかっていった時、突如前方に穴が開いた。
勢いよくミス・メリークリスマスが飛び出してきて、慌てて足を止めようとするナミを待ち構えており、空中に居ながら腕を振るう。
「バナーナ！」
「きゃあああっ!?」
焦った結果、我を忘れてスライディングしていた。するとナミはミス・メリークリスマスの平手打ちを躱していて、偶然とはいえ彼女の手は頭上を通り過ぎて無傷で逃れる。
危うく穴に落ちそうになったがギリギリで止まって。
ミス・メリークリスマスが着地した瞬間、二人は背中合わせで、それを見て咄嗟にチョッパーが拳を振りかぶって急接近した。
「こんにゃろ！」
思い切り右腕を振り抜くが、ミス・メリークリスマスは軽い動きで宙返りをして避ける。
一度跳んだだけで距離を置かれ、もう拳は届かない。
改めて睨み合い、肉弾戦を始めるには仕切り直しという状況になった。
「そんなのろいパンチじゃ当たらねーんだよ。のろ、〝ノッ〟が」
「くそ……！」
「チョッパー！　ダメっ！」
挑発の言葉にチョッパーが乗ろうとした。その時咄嗟にナミが叫ぶ。
彼女は起き上がりながらも駆け出して、チョッパーの背後を見ており、彼の体に飛びつく。
いつの間にか、数メートルの距離を置いてチョッパーの背後、一つの穴が開いていて、そこからラッスーが顔を出していた。そして間抜けな顔で大きなくしゃみをする。
口から吐き出された、というより発射されたのは一見普通の野球ボール。
その攻撃は一度見ていた。だからナミはチョッパーを押し倒してその場へ伏せる。

ボールは二人の頭上を通過した。
その際、やはりチッチッチッと小さな音が聞こえる。
永遠にも感じる一瞬の中で、回避した、と密かに安堵を覚えた。
視線で追うと、つい先程ミス・メリークリスマスが出てきた穴に、Ｍｒ．４が居る。
彼はバットを振ってボールを捉え、二人に目掛けて打ち返してきたのだ。
「えっ――？」
「ナミッ！」
気付けば眼前にボールがあって愕然とした。
咄嗟にチョッパーが獣型になり、ナミが着る外套を噛んで無理やり引きずり、その場を離れたことで事なきを得たが、直撃していればただでは済まなかっただろう。
しかし回避しても無事とは言えず。
二人の背後でボールが爆発し、直撃を逃れた二人は爆風を受けて地面を転がる。
地面に体をぶつける痛みすら生温い。
避けられなければ全身がバラバラになっていたかもしれない。
ナミは倒れた状態のまま、チョッパーに深く感謝し、肝を冷やして腕を震わせた。
「ハァ、ハァ……ありがとうチョッパー。大丈夫？」
「うん、問題ないよ。それよりアレが厄介だ。さっきのでもギリギリだったなんて……」
「イッキシ！　イッキシ！　イッキシ！」
大きな存在感となって立ちはだかる爆炎の向こうから、再びラッスーのくしゃみが聞こえた。
当然そう時間を置かずに三つのボールが飛んできて、二人は慌てて走り出す。
「走って！」
「楽しんでいきな。縄張（テリトリー）の名は〝モグラ塚４番街〟」
低空で飛来するボールを回避するため、半ば跳ぶようにしながら

走って、ナミとチョッパーは壊れかけた一軒家へ飛び込む。
寸でのところで回避して、三つのボールは道の真ん中で大爆発を起こした。
家の中へ転がり込んだ二人は反対側の壁へ飛びつきながら顔を見合わせる。
想像よりずっと強い。情報を聞いていても見るのと聞くのでは大違いだ。
正攻法で戦うのはもちろん、厄介なのが奇襲。どこから現れ、どこへ消え、またどこからくるかわからない彼女達の戦法は戦う相手の精神を揺らがせた。
早急に対策を考えなければと口を開く。
そうしながらも家の中は危険だと考えて、来た方向とは逆の方角から家を出ようとした。
「何なのアレ!? アレも悪魔の実だっていうの!?」
「そうだよ。ラッスーはイヌイヌの実、モデル〝ダックスフント〟を食べた〝銃〟……物が悪魔の実を食べて生まれた存在なんだ」
事前に聞いた情報を反芻する。
Ｍｒ．４ペアの攻撃の起点となる存在、それが犬のラッスー。特殊な技術で悪魔の実を食べさせられた元々は銃だった存在。犬の特性と意志を得た物なのである。
吐き出したボールは時限爆弾で、時間が来れば大爆発を起こす。
発射のタイミングがくしゃみとなるため、わかりやすくもあるが、見切るのは容易ではない。
壊れていたことで家から出るのは難しくなかった。
敵に見つからないよう姿勢を低くしながら、崩れた壁の間を通って別の道へ出る。
「あり得ないっ。なんで銃がボールを撃ってしかも爆発するのよ。悪魔の実って何？　もうなんでもありなわけ？」
「原理はわからないけどそうなってるんだ。そういうものだと思うしかないよ」
「納得したくないけど、そんなこと言ってられる状況でもないわね」

道に出た瞬間だった。
背後の家屋が内側から爆発し、空に瓦礫を吹き飛ばしながら跡形も無くなる。
ラッスーの爆弾が家の中で爆発したらしい。出るのが遅れれば逃げ場を失って爆発に巻き込まれていた。驚いた二人は呆然と空から落ちてくる残骸を見上げる。
その直後、突っ立っていると下敷きになると気付き、慌てて逃げ出した。
「いやぁぁぁ～!?　何なのよも～！」
「うわぁぁぁ～!?」
ナミと獣型のチョッパーが全力で走っている。その通りに、ボコッと穴が開いた。一つだけでなく二つ、三つと瞬く間に増え、前方にも後方にも数個が並ぶ。
落下する瓦礫を回避した二人だが、気付いた時にはすでに多くの穴がある。
慌てて急ブレーキをかけると全く同時に、前方でラッスーがのそりと顔を出した。
「嘘ォ!?　またぁ!?」
「避けようナミ！　あのボールは重いんだ！　おれ達じゃ打ち返せない！」
「バウッ！」
ラッスーがボールを吐き出した。二人は反射的に逃げようとする。
その時、ナミの体がガクンと揺れ、足が動かせない。
咄嗟に下を向くと、ミス・メリークリスマスの手だけが地面から出て彼女の足を掴んでいる。しかし攻撃されないためにその手すらすぐ地面へ潜ってしまった。
ほんの一瞬の静止。
その数秒が結果を分ける。
再び顔を上げた時にはボールが目の前まで迫っていて、逃げるための時間は残っていない。爆発は規模も大きく回避が難しかった。
少々の努力では巻き込まれるだけ。

意を決したチョッパーがナミの外套を噛んで引っ張り、回避行動を行う。
ボールが爆発する。
巨大な爆炎が辺りを包み込み、爆風が広い道を通り抜けた。
爆発の瞬間を終えて数秒、Ｍｒ．４とミス・メリークリスマスが穴から顔を出した。
二人が立っていただろう場所へ目を向け、結果がどうなったかを確認しようとする。とはいえ、本人達はすでに勝った気で歯応えがなかったと思っていた。
「あっけねー。こんなに早く済むとは」
「フォーー……」
おそらく死んだだろうと立ち昇る爆炎を眺めていた。
ふと、違和感を感じてＭｒ．４が自分が入っている穴の中を見る。気配を感じた気がした。しかし日頃から動きの遅い彼はゆっくりと覗き込む。
やっと屈んで顔を穴の中に向けた瞬間、拳が飛んできた。
顔の正面に拳が突き刺さる。重く、全体重を乗せるような一撃だ。
鼻血が飛び出して、狭い穴の中で体勢が崩れた。
すかさず懐へ飛び込むチョッパーが至近距離でＭｒ．４を捉え、強烈なアッパーを顎に叩き込む。
「うおおおりゃあっ!!」
「フォ～～!?」
「なっ!? なんだいＭｒ．４！ 何があった！」
まるで穴から追い出されるかのようだった。
顎を殴られたＭｒ．４の体が飛び、穴の中から地面へ追い出され、受け身も取れず背から倒れる。
悲鳴を聞いて数秒後、ドスンと重い巨体が落ちて、ミス・メリークリスマスは驚愕した。彼を追い出した穴から人型のチョッパーとナミが姿を現したのである。
「おめーらいつの間に……！ まだ生きてやがったのか！」
「こいつらの弱点は、穴が全て繋がってることだ」

「そうか……隠れられるのはあいつらだけじゃない。その気になれば私達も利用できる」
再びチョッパーに助けられた形のナミは半ば放心状態で座り込んでおり、先程自身が体験したことも考慮して、チョッパーが言わんとしていることを理解した。
地面に穴を掘れるのはミス・メリークリスマスだけ。
Ｍｒ．４とラッスーは彼女が作ったトンネルを利用しているに過ぎず、それなら同じことができる。
決して恐ろしいばかりの能力ではない。使い方さえわかればナミ達の武器にもなり得た。
「アタシが作った穴に入りやがったね……！　姑息なことしやがって！」
「穴を掘れるのはモグラ人間だけだ。あいつが居なければ奇襲もできない」
「なるほど。そういうことね」
ようやく冷静さを取り戻したナミが立ち上がる。
顔には笑みが浮かび、まだ小さいとはいえ勝機を見出した。
ただの殴り合いなら勝てる気がしなかった。しかし敵から逃げ、頭を使って戦える状況ならば得意とするところ。伊達にたった一人で泥棒稼業をしていたわけではない。
クリマ・タクトを手の中で回し、両手で持って構えた。
この武器は工夫が必要なもの。直接的な殺傷力は無いが価値はある。
チョッパーもすでに腹を決めていた。
この戦いに勝つ。強い意志を新たに持った二人は並び合って敵を見据える。
ミス・メリークリスマスはそんな彼女達に表情を歪めた。
「ありがとチョッパー。つまりあいつを狙えばいいってことね？」
「うん。って言っても簡単じゃないけど」
「心配いらないわ。逃げることにかけてはウソップにだって負けないから」

ナミはミス・メリークリスマスを挑発的な笑顔で見つめていた。
「私と追いかけっこでもする？　言っても私の方が若いし可愛いし、追いつけないと思うけど」
「〝バッ〟なこと言ってんじゃねーよ！　アタシの能力をわかった気になるなよ！」
ミス・メリークリスマスが穴の中に姿を消した。
その様子に警戒するチョッパーは思わずナミの顔を見下ろす。
「平気なのか？　あんなこと言ったら怒らせるんじゃ……」
「ええそうよ。怒らせるの。冷静さを欠いた相手ほどこっちの思う通りに動いてくれるもんよ。むしろ冷静でいられた方が困るわ。私達より強いんだから」
「そうなのか。じゃあおれも言った方がよかったかな」
「そうね。今からでもいいからどんどん言ってやりなさい」
話しながらも身構えて周囲を警戒する。
そうは言っても地中を移動するスピードは段違い。尚且つ彼女は自由に動ける。用意された穴の中を動けるだけの二人とは全く事情が違っていた。
そのタイミングでようやくＭｒ．４が動き出す。
倒れたままで殴られた顎を撫で、のんびりした声で言った。
「い～～～たぁ～～～」
「遅っ!?　今頃かよ！」
「ちょうどいいわチョッパー！　先にこいつを倒すのよ！　今なら絶対大丈夫！」
「あっ、そうか！」
倒れたままだったＭｒ．４を見つけてチョッパーが拳を握りながら駆け寄った。ミス・メリークリスマスばかり気にしていたが彼も十分に脅威なのだ。
思考や動きが遅いとはいえナンバーは４。決して弱くはない。
その事実をチョッパーはその身で知ることになる。
起き上がる素振りの無いＭｒ．４へ向けてチョッパーが拳を振り下ろそうとした。

それを視界に入れた途端、一切表情を変えず、左手に持っていたバットが跳ね上がる。
拳を下から掬い上げて、押し返した。彼のバットは４トンの重さを持つ。たとえチョッパーの拳が岩をも砕く力を持っていても、競い合うことすらできない。
妙にあっさりした様子でチョッパーの拳が砕かれ、骨が折れて流血し、だらりと力が抜けた。
ナミはもちろん、本人でさえ何が起こったのか理解できない。
気付いた時には右手に激痛が走っていて、反射的に左手で庇いながら絶叫した。
「うわっ、あああぁっ!?」
「チョッパー!?」
「舐めるんじゃねーよ。アレでも一応オフィサーエージェントだ」
ミス・メリークリスマスの声が聞こえて、ナミが反応しようとした時には背後を取られていた。
完全に振り返ることもできず、視界の端に彼女の姿を捉えた瞬間に、強烈な平手打ちがナミの頬を打つ。殴られた衝撃で体が吹き飛び、鋭い爪で浅く皮膚を切り裂かれた。
「ナーナ!」
「あうっ!?」
突然の攻撃でナミが倒れた。
必死に歯を食いしばって痛みに耐えようとするチョッパーは、守らなければ、と転んだナミに駆け寄ろうとする。だが敵はいつでも次の攻撃を行える状態だ。
振り返った先にはミス・メリークリスマス、背後にＭｒ．４。遠くにはラッスーも居る。
言わばここにあるのは勝機が見出せない絶望的な状況だった。
「口だけは達者だけどねぇ。結局この程度で終わりかい？」
「フォ～～……」
知らぬ間にチョッパーは立ち止まっていた。
全身に冷や水を浴びせられたような感覚。恐怖が、彼の体を限界ま

で硬くしていた。抗ったところで勝てるはずがないという迷いが体の自由を奪ってしまっている。
逃げるか、戦うか。どちらにしても敵わない。
チョッパーが立ち尽くしてしまった一方、ナミは息を乱しながら体を起こす。
怖いと言っていた彼女だが逃げる素振りは無く、ミス・メリークリスマスを睨みつける。
「ほう、態度だけは一端かい。だが実力が伴ってねーんじゃ意味がねーよ。どっちにしろおめーらは〝ヨッ〟なんだ。とんでもねー〝ヨッ〟だ」
「ハァ、ハァ……本当にそう思ってる？　私がさっき何もしてなかったとでも？」
「あん？」
「準備ならできてる……チョッパー、伏せて！」
突然言われて迷ったが、言われた通りにチョッパーが人獣型になって地面に伏せた。
反対にナミは体を起こして空にクリマ・タクトの一本を振り、電気泡（サンダーボール）を飛ばす。
直接的な攻撃ではないため意味があるとは思えず、ミス・メリークリスマスとＭｒ．４はその場に突っ立ったまま空を見上げた。
おそらくはミス・メリークリスマスが姿を消して再び出てくるまでの短い時間。なぜか空にはドーナツ型の黒雲が生み出されおり、中心に立つナミとチョッパーを除いて、Ｍｒ．４とミス・メリークリスマスを見下ろすような格好だった。
先程生み出した電気泡（サンダーボール）が黒雲に触れる。
その瞬間、眩い光が落下した。
それはクリマ・タクトで狙って生み出した攻撃。
どこから来るかわからない。だが彼女は必ず接近戦を行うはず。
そう考えて迎撃のために用意した技であった。
「サンダーボルト＝テンポ!!」
きっかけを得て落ちた雷はドーナツ型に地面を打ち、中心で抱き

合って伏せるナミとチョッパーを見逃すものの、Ｍｒ．４とミス・メリークリスマスの体を確実に捉えた。
全身に走る衝撃。激痛。髪を焦がすほどの熱。人体に浴びていい強さではない。
雷撃はほんの一瞬のものだったとはいえ、直撃した二人の服や髪を焦げさせ、ほんの一瞬とはいえ気が遠くなる感覚を味わわせた。
ふら付いた体が崩れかけた時、ナミは即座に行動する。
人獣型のチョッパーを抱き抱え、決着をつけるのではなく、その場を離れようとしたのだ。
「逃げるわよチョッパー！　一旦距離を取る！」
「す、すげぇナミ……でも今の内に倒した方がいいんじゃ」
「ダメよ。あいつらもそれを狙ってた。バカ正直に殴り合っても負けるのはこっち。時間をかけてでも逃げてでも、慎重に戦わなきゃダメなの」
ナミが言う通り、Ｍｒ．４とミス・メリークリスマスはいつでも動けた。
確かに雷を浴びて気が遠くなった。だがそれは一瞬の話。体がふらついて倒れかけた時、もし二人が殴りかかってみれば思考を必要としない反射で反撃していただろう。彼らは暗殺や戦闘のプロであり、能力を開発するための鍛錬を積んでおり、いくつもの経験がある。
とはいえ、あまりにも大きなダメージを受けて一呼吸置きたいのは彼らも同じ。
一旦距離を取って命拾いしたのはお互い様だったようだ。
「ゲホッ、ガフッ……おめーアタシらを怒らせたね」
「ちゃんと作戦を練るのっ。私の攻撃は効いてる。油断させれば殴ることだってできる。一番大事なのは冷静さを失わないで、尚且つ死なないこと……！」
「う、うん。わかった。おれももっと慎重に動く」
一心不乱に遠ざかるナミの背を見つめて、ミス・メリークリスマスは大きく息をついた。
「見せてやるよ……アタシらの十八番、〝モグラ塚四百本猛打（バンク）ノッ

ク〃」
「フォ〜〜……」
この場は敢えて見逃し、二人は去っていく敵の背を見つめる。
もう相手を舐める甘えはない。ここまでは彼らの油断もあった。
しかし次はそうはいかない。
やっと本気になった二人の目に、もはや一切の甘さも油断も残されてはいなかった。

ｏｕｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｂｌｕｅ（２）

走って距離を取った後、ナミとチョッパーは家屋の陰に隠れていた。

いつ襲われても回避できるよう、家の中や狭い路地は避ける。あくまでも身を置くのは大通りであって、すぐに目視されないよう陰でしゃがんでいた。

チョッパーが自身の右手を治療している。じっくり診察する時間も余裕もないが骨折は間違いなかった。少なくともこの戦いでは使えないだろう。

左手だけで包帯を巻いて固定しながら先程の攻防を思い出す。

Ｍｒ．４は、普段の言動はともかく決してのろくない。近接戦闘は彼より上だ。

攻撃は相手に届く。勝てない訳ではない。問題なのは如何にして相手へ当てるか。

周囲を警戒してあちこちに視線を飛ばしつつ、ナミが深く息を吐いた。

「腕は大丈夫？」

「骨が折れてるよ。あんな体勢で、片腕一本で振ってたのになんて奴だ……」

「本当に化け物ね。ルフィやゾロくらい強いって考えてた方がいいみたい」

「ごめん……足手纏いになっちゃって」

常に警戒していなければいけないとわかっているのについ視線を落としてしまう。

気落ちした様子のチョッパーは俯き、船医である自分の怪我は簡単に許せそうになかった。自分が仲間を治療しなければいけないのにその腕が使えなくなってしまうとは。このままではみんなの役に立てないかもしれないと、思わず想像してしまう。

彼の横顔を見て、落ち込んでいると悟ったのだろう。

表情を引き締め直したナミがチョッパーに語り掛けた。

「いい、チョッパー。これからは〝ありがとう〟も〝ごめん〟も言わなくていい」
「え？」
「だってそうでしょ？　あんたは私を守るし、私もあんたを守る。仲間なんだもの、それが当然で何も不思議なことじゃないわ。いちいちお礼なんか言う前に別のことを考えて。どうすれば敵を倒せるかとか、どうすれば仲間を守れるか」
驚くチョッパーだが、クリマ・タクトを握る手がわずかに震えていることに気付いた。
彼女もきっと不安なのだ。
果たして自分達は生きて帰れるのか、気をつけていても考えてしまうほど強い相手。これまで戦闘をできるだけ避けてきたことも関係している。
そんなナミが、彼を元気付けるために目を覗き込んでいた。
ぐっと歯を食いしばってから、涙が浮かびかけた目元を腕で擦って、顔つきを変える。
チョッパーの様子を見たナミが力強く頷いた。
弱音は吐いていられない。何があってもナミを守る。すでに彼も海賊となって、彼女は大事な仲間の一人だ。そして彼女だけでなく他の仲間も守りたい。
腕が折れたからなんだ。まだ足は動く。頭は使える。左腕で戦える。
今は隣にナミが居て、力を合わせることができる。
改めて考えれば驚くほど力が湧いてきた。恐怖心も無くなり、チョッパーが頷く。
「うん、わかった。もう謝らねぇし、お礼も言わない。助け合うのは当たり前だ」
「そうよ。さあ、それじゃあいつらを倒す作戦を――」
言いかけた瞬間に追いつかれる。
元々は家の壁だっただろう瓦礫を背にした二人の前方、一瞬にして六つの穴が開けられる。素早く地下を移動してきたミス・メリークリ

スマスだ。
そのスピードがあまりにも速過ぎて、二人が立ち上がることすら待たない。
「来たッ！」
「もう、ちょっとも休めないわね……！」
その場に留まれば危険であることはわかっている。そのため二人は慌てて立ち上がり、咄嗟に逃げることを考えるが、彼女達を取り囲むように穴が掘られていた。距離はバラバラで半円としては形も歪。一定の法則がある訳ではない。
背後には壁。それだけに包囲を抜け出すのは簡単ではなさそうだ。
どの穴から来るか、逡巡が行動を遅くした。
駆け出そうとした頃には穴の一つからラッスーが上半身を出す。
鼻水を垂らしながら間抜けな顔で二人を見て、またくしゃみをする。
口からボールが飛んでくるのはさっきと同じであった。
「イッキシ！」
「来たぞ！　避けよう！」
「言われなくても！」
くしゃみを見ると止まってはいられない。二人はボールから逃れようと駆け出した。
右前方から飛来するボールを回避するために彼女達は左前方へ。速度にはやっと慣れてきた。顔の向きを見ていたこともあって避けること自体は問題ない。
ボールが傍に来る前には離れていて、少し離れた位置で二人の後方を通り過ぎる。
その時、新たに穴が開けられた。最初から想定していたかのように、ボールが向かう方向で穴が開き、Ｍｒ．４が上体を出す。
全力で振るわれるバットが強振でボールを捉えた。
完全に背後を取って、打球は二人の背を狙って飛ぶ。
わずかに背後を振り返ってその光景を見たチョッパーは、反射的に人型に変身した。

声をかける時間すらない。抱きつくようにナミの腰に腕を回し、地面を蹴った。
地面に伏せた直後。頭上を打球が通り過ぎる。
それからさらに数秒。二人から二メートル程度しか離れていない位置で爆発した。その距離では回避したとは言い切れず、余波を浴びて地面を転がされた。意識せずとも体が動いてしまい、二人は地面の砂を巻き上げながら至る所をぶつける。
「うぅ……!?」
「ハァ、まだ来るぞ！　走り続けなきゃ！」
「イッキシ！　イッキシ！」
チョッパーがナミを助け起こして、ラッスーのくしゃみを聞きながら走り出す。
さらに二個のボールが吐き出されるも、今度は二人を狙った様子は無く、待機しているＭｒ．４へ向かっていく。彼はすでにバットを構えて待っていた。
打ち返した音が二度。チョッパーは足を動かしながら後方を見る。
一発はライナー。二人の背を目標に真っ直ぐ飛んでくる。
「ちょっと、嘘でしょ!?」
「くそォ！」
彼は４番バッターである。長打は当然として、如何なる変化球にも対応し、意図して様々な打球を生み出すことができた。
狙って打ったライナーは二人を驚かせ、必死の回避行動を取らせる。
咄嗟の判断は二人を左右に分け、離れた状態で地面に伏せて、二人の間を打球が通り抜けた。
爆発。そして爆風に襲われる。
体を小さくして堪えていたナミは打開策を見出そうとしていた。
このままでは一方的に攻撃されるばかりだ。なんとか状況を打開しなければならない。そう考えるのは無理もないことだが、あいにくその方法がわからなかった。
とにかく爆風が過ぎ去るのを堪え、状況が落ち着くと顔を上げる。

チョッパーも同じく体を起こそうとしていた。
ただ、一つだけ違ったのは、滑るようなゴロが地面を這ってチョッパーに迫っていたことだ。
「えっ――？」
気付けば目の前にあって、直後に爆発する。気付いた時には遅かった。
人型だったチョッパーの体は轟音と共に爆炎に呑み込まれて、ナミが冷静さを失って叫ぶ。
「嘘……!?　チョッパーッ！」
「まだまだ続くぞ。四百本猛打（バンク）ノック」
突然声が聞こえて右側を向けば、地面から上半身を出したミス・メリークリスマスが居た。
余裕のある笑顔。勝ち誇っているらしい。
実力に差があることは初めからわかっていたことで、これがあるべき結果とも言える。それでも悔しさを感じたナミが唇を噛んだ。
「アタシらの手を煩わせたんだ。ただで死ねると思うなよ」
「うるさいわね！　こっちだって生半可な覚悟で来てないの！　見てなさい、あんたなんか今にギッタンギッタンに……！」
「ナミ！」
膝立ちになってクリマ・タクトを構えていると、チョッパーの声が聞こえた。すぐさまナミはその方向に目を向け、轟々と煙の上がる地点を眺める。
さっきと変わらず元気な声だ。どうやら無事らしかった。
「チョッパー！　無事だったのね！」
「小さくなって逃げたんだ！　それより、考えがある！」
「そうか、あいつもゾオンだったねぇ……」
呟くと同時にミス・メリークリスマスの姿が地中に隠れる。
立ち上がったナミが即座にチョッパーへ警戒を促した。
「少しだけ時間をくれ！　上手くいけばあいつらを一気にやっつけられる！」
「気をつけて！　あのオバハンがそっちに行ったかも！」

「わかった！」
煙の中から人獣型のチョッパーが走り出てきた。
爆発する寸前、人型から人獣型に変身し、咄嗟に回避しようと地面を転がったのである。体の大きさの違いで彼は軽々飛ばされ、爆発に直撃することはなかった。遠く飛ばされた後、咄嗟の判断で爆炎を避けて煙の中で身を隠していたようだ。
相変わらず右腕は使えないが、先程の攻撃で死ななかったのは僥倖。まだ戦える。今こそキリから事前に聞いていた作戦を実行する時。
動物と話せるチョッパーが戦うならＭｒ．４ペアが良い。
誰に出会うかわからないため運に頼るしかないとはいえ、彼はそう言って秘策を渡していた。だからこそチョッパーもＭｒ．４ペアの情報を頭に叩き込んでいたのである。
走るチョッパーが目指すのは穴から顔を出しているラッスー。
他には目もくれず進み、一切迷わず正面から近付こうとしていた。
「ラッスー！　お前に言いたいことがあるんだ！」
新たに穴が開いて、彼の正面にミス・メリークリスマスが現れる。
驚きはするが今更足は止められなくて、平手打ちがチョッパーを強襲した。
振るった左腕に対し、チョッパーの右腕は使えない。防御は間に合いそうになかった。
「〝ナッ〟！」
「うわぁぁ!?」
小さな体は軽い様子で飛ばされて地面を転がる。
それを見て助けに向かおうとナミが駆け出していた。
「ちょっとオバハン！　あんたいい加減にしなさいよッ！」
「続きと行こうか。四百本猛打（バンク）ノック！」
「バウッ！　バウッ！　バウッ！　バウッ！」
「フォ～……」
再びミス・メリークリスマスが穴を掘って地中へ逃れる。それと同時にラッスーがボールを吐き出してトスを行い、その全てをＭｒ．４

が打った。
四球打って全てフライ。回転をかけて落下してくる。
それらは起き上がろうとするチョッパーの頭上から落ちてきて、思わずナミが血相を変えた。
「逃げてチョッパー！　危ないッ!?」
「うぅ、うっ……」
慌ててチョッパーがすぐ傍に開いていた穴に逃げ込む。
ちょうど目の前でミス・メリークリスマスが姿を消したところだ。九死に一生を得て、彼の姿が見えなくなったところでボールが地面に触れ、爆発する。
四球分の強烈な爆風が大通りを駆け抜けた。
堪えていたナミも転びそうになったがなんとか耐え、次の行動を考える。
時間をくれとチョッパーは言っていた。何か考えがあるのだろう。それを信じて、少しでも時間を稼ぐ方法を考える。
できることは多くない。だが仲間を守りたいのは彼女も同じだった。
ラッスーがＭｒ．４にボールを吐こうとする素振りを見て、咄嗟にクリマ・タクトを組み替えた。
「Ｍｒ．４！　これを見なさい！」
「フォ～～……？」
「ファイン＝テンポ！」
三角に組み合わせてボタンを押すと、中央から二匹の鳩が飛び出す。手品の一種だった。
飛び立った鳩はどこかへ行ってしまい、全く意味がない。攻撃であるはずもない。しかしそれが妙にＭｒ．４の興味を惹き、彼は目を輝かせていた。
なんとかなったか、とナミは冷や汗を垂らす。
「フォ～～～……！」
「どう!?」
「イッキシ！」

ラッスーがボールを出す。興味を惹かれていたせいで少し手元が狂うものの、Ｍｒ．４は体に染みついた反射でボールを打ち返した。放物線を描く打球はナミを狙う。
今のでミスして直撃でもしてくれればと思っていたが、それは無理があったらしい。
ナミは迷わず背を見せて逃げ出した。
しかし手元が狂った効果はあって、避けることは難しくない。
「あーもうっ！　いつまで続くのこれ～ッ！」
「そりゃお前らが死ぬまでだよ」
「えっ!?」
ボール自体はあっさり避け、ずいぶん離れた場所で爆発する。
小さな安堵を覚えながら泣き言を口にした時、またしても足が動かなくなった。見ればやはり先程のようにミス・メリークリスマスが両足首を掴んでいる。地面からは右手だけ出して、本体は地面の下。ついずるいと思う状況でナミを捕まえている。
地面の下とはいえ手を出す小さな穴から声が聞こえて、背筋に悪寒が走った。
「特別サービスだ。喰らっていきな！　モグラ塚４番交差点!!」
「いやっ、何する気!?　離しなさいよオバハン！　モグラ！」
足を掴んだ状態で、ミス・メリークリスマスが地中を泳ぎ始めた。
高速で移動するため抵抗もできずに、ナミは磔にされたような姿で移動していた。
「モグラ塚ハイウェ～イ！」
「い～やぁぁぁ～!?　ちょっとやめてよ!?　あんた達何する気なの!?」
「ハハハッ！　安心しな、頭の骨が砕けるだけさ！　用意しなＭｒ．４！」
「ふざけんじゃないわよ！　可愛い私の顔にそんなことしたら、ただじゃ……！」
向かっている先でＭｒ．４が完全に穴から抜け出て、バットを構えようとしている。先端で地面をコツコツ叩き、ルーティーンを済ませ

て構えた。
このまま進めば、打たれる。ボールでは無くナミ自身を。
焦る彼女は抵抗すべく、クリマ・タクトを異なる形に組み替える。
「ただじゃ死んでやらないわよ……！　まだまだ生きたいし、お金も欲しいし、海図だって描きたいんだから……！」
「フォ～～～」
「さぁ行くよ！　構えなＭｒ．４！」
グングン近付いていく。恐怖心に体を震わせながら、ナミは武器を握りしめた。
Ｍｒ．４の目はナミに向けられている。
その一瞬の隙を利用して、穴を這い出たチョッパーが突如Ｍｒ．４の背後に現れ、人獣型のまま彼の背後に立つと足の間へ飛び込む。そしてそこで人型に変身した。
「うおおおおおおォ！」
「フォ～～!?」
Ｍｒ．４の巨体は驚くほど重い。しかし変身によって一気に体を大きくしたチョッパーは、肩車するように彼の体を持ち上げ、無理やりひっくり返した。彼自身も体に大きな負担を感じたものの、Ｍｒ．４は頭から地面に落ちてゴツンと音を立て、そのまま動かなくなってしまう。
その光景を見てナミは嬉しそうな笑みを浮かべる。
地中に居るミス・メリークリスマスには見えていない。Ｍｒ．４が立っていた地点を通過してもナミの足が離れず、それからようやく違和感を感じた。
「ん？　何やってんだＭｒ．４！　まさか空ぶったのか!?」
「ナイス、チョッパー！　あんたいつまで掴んでんのよ！」
「いでっ!?」
いつまでも離さないミス・メリークリスマスの手をクリマ・タクトで殴る。
痛みはそれなり。だがそれ以上に驚きが大きく離してしまう。
放り出されたナミの体は地面に落ち、肩に痛みが生じるが、先程の

攻撃を思えば耐えられた。
Ｍｒ．４が倒れたことで、ミス・メリークリスマスが穴を掘って顔を出した。
倒れている彼を見つけると怒りを露わにし、攻撃の失敗を改めて認識している。
その間にチョッパーは再び人獣型に変身して、他の誰でもなくラッスーへ駆け寄っていた。
「あァ!?　何やってんだよＭｒ．４！　お前はほんとにグズだね！
〝グッ〟！　〝ノ〟が！」
「ご～～め～～」
「ああイライラするッ！　さっさと喋れって言ってんだよ！」
度重なる失態にミス・メリークリスマスが苛立っていた。
実力だけを見れば彼女達の方が圧倒しているはず。それなのにしつこい抵抗を受けてまだ決着がつかない。プロとしての誇りを傷つけられる状況だった。
二人が気を抜いている間にチョッパーがラッスーに接触する。
リュックを降ろして、左腕一本のため手間取るが、中に入れていた食べ物を取り出す。
持ち出したのは何の変哲もないヨーグルトだ。
見た途端にラッスーが目を輝かせる。彼の好物だった。
「お前これが好きなんだろ？　ちょっとおれの話を聞いてくれ」
「ん？　おいおめー、何してんだ！」
「あんたの相手はこっちよ、オバハン！」
チョッパーの行動に気付かれるが、すでにナミが武器を振りかぶっていた。
怒るミス・メリークリスマスに向けて振り、距離がある状態で十字に組んだ先端のみを飛ばす。まるでブーメランのように回転しながら接近して、脆弱な攻撃だと鼻を鳴らされた。
「なんだこりゃ。ブーメラン遊びのつもりかよ」
避ける価値すらない。そう思って軽く爪で小突いてやった。すると触れた瞬間、クリマ・タクトが暴風を生み出し、彼女の体を吹き飛

ばす。
直接的なダメージは皆無だが驚きは大きかった。
おまけに座り込んで見ていたＭｒ．４の方へ飛んでしまい、二人は頭をぶつけて共に倒れる。
「ぎゃああっ!?」
「フォ～～!?」
「よしっ。やり返してやった」
爆風の影響で戻ってきた二本を回収して、即座にナミは距離を取る。
その間にチョッパーがラッスーとの対話を終えていた。
目的は告げずに頼み事だけをして、ヨーグルトを舐めさせた後で、穴に顔を突っ込ませている。そこでラッスーはくしゃみをしていた。
吐き出されたボールが全て穴の中へ。
倒れていたＭｒ．４とミス・メリークリスマスはそれを知らず、起き上がるとナミを睨む。
「おめーふざけたことしてくれるじゃねぇか！」
「ナミ！　できるだけ穴から離れてくれ！」
「えっ、うん！　もうやってる！」
くしゃみが終わるとチョッパーがラッスーの背に跨った。
その姿はまるで友達のように。
声をかけるとラッスーは走り出し、チョッパーを乗せたままナミの方へ向かう。その姿には違和感を感じずにはいられずミス・メリークリスマスが驚く。
「おいラッスー！　お前何やってんだ！　裏切るつもりか!?」
「おーい！　おれ達が逃げるぞ！　追いつけるもんなら追いついてみろ～！」
「チッ、ふざけやがって……追うよＭｒ．４！　これ以上あいつらをいい気にさせるな！」
「フォ～～……！」
二人があらかじめ作られていた穴へ飛び込んだ、その瞬間。
周辺のほぼ全ての穴から爆炎が飛び出し、強烈な爆発が細いトンネ

ルの中を駆け抜けた。距離を置いて背後にしても感じる熱風。遠ざかる二人の背は否応なしに押される。
ナミは、思わず足を止めて振り返った。
轟々と炎が天へ昇っている。
凄まじい破壊力だ。あんなもので狙われていたかと思うとぞっとする。
それが今や敵を襲ったらしく、驚きながらも人獣型のチョッパーを見下ろした。
隣に居る彼はラッスーの背にちょこんと乗っていた。
味方になったのだろうか。まだわからない。今のところ害は無さそうに見える。
偶然で起こったはずがない。彼はこれを狙っていたのだ。
もう一度巨大な爆炎を見ながら問いかけると、彼は真剣な眼差しで同じ方向を見ている。
聞かずともなんとなくは察している。その目は、その態度は、決着を見ていない。まだ終わっていないのだろうと考えていた。
「すごい……よくこんなの思い付いたわね」
「あいつらの弱点ってのはこれのことなんだ。全ての穴が繋がってるから、もし爆発が起これば逃げ場がない。どこに居ても、絶対に当てられる」
「もう、終わったってことでいいのよね？」
「いや……」
褒められているのに照れる様子もない。それだけ緊迫していたのだ。
ゆらりと動く影を見つめ、チョッパーは小さく呟く。
「生きてる」
「うっ……まだ動けるの？」
一歩ずつ地面を踏みしめる歩き方で、重圧を感じさせながら、Ｍｒ．４が現れる。
全身に火傷を負って服はボロボロ。かなり疲弊している危険な状態とはいえ足取りそのものはしっかりしている。まだ決着とは言え

ない。
最後のとどめが必要なようだ。
接近戦では圧倒的な実力を持つ彼に、あと一撃、或いは二撃、必要だ。
まだ終わらない。まだ倒れない。
もはやナミは泣き出しそうな顔になっており、精神が揺らいでいる。
弱気になってはいけないと頭を振り、もう一度気を引き締め直そうとするものの、手は小刻みに震えていた。身体的なダメージより精神の影響が強い。
傷だらけになって迫力を増したＭｒ．４が一歩ずつ近付いてくる。
恐れたナミが一歩下がり、確実に気圧されていた。
「あれでもダメなら、どうすればいいの？　も、もう一回やれば……」
「いや、多分もう効かない。避けられるよ」
「それならその犬にボール吐かせて……ああでも、あいつが相手じゃ打ち返されるわ。せめてあのオバハンだけでも犬の爆弾で」
「そりゃ無理な話だ。ラッスーはこれでも味方に攻撃はしねーんだ」
またしても声が聞こえた。ミス・メリークリスマスがどこかに居る。しかし周囲を見回しても姿は見えず、いまだ地中。プレッシャーだけを与えられる。
先にＭｒ．４に集中すべきかとも考えるが、有効な策は思い付いていない。
何か一つでも状況の変化があれば。
こうなれば考えていられる余裕も無くて、与えられるプレッシャーのせいか、チョッパーはダメ元でラッスーにボールを吐かせようと考えた。
Ｍｒ．４本人に撃てば打ち返される。そんなことはわかっていた。
それならせめて周りに撃ち、煙幕代わりに使えれば。
「ラッスー、もう一度ボールを吐き出してくれ！　好物ならあとで

――」
鋭い音を発して地面からミス・メリークリスマスが飛び出してくる。
ジャンプするようにチョッパーの側面を襲い、鋭い爪で彼の胴体を切り裂いた。
「〝ナ〟！」
「うわぁぁ!?」
「チョッパー!? くっ、このオバハン……！」
ラッスーの背からチョッパーが落ちる。大量の血を流して地面に倒れた。
地面に着地するミス・メリークリスマスを間近に見て、表情に怒りを見せたナミが反射的に武器を振る。勝てると思った訳ではなく彼女を殴ろうとしていた。
しかし地力が違う。
簡単に爪で受け止められ、反対に左手で繰り出す平手打ちが胴体を叩いた。
「そんなもん効くわけねーだろ！ この〝バッ〟！」
「きゃあっ!?」
背中から勢いよく転んで息が詰まる。
起き上がらなければ、とすぐに思うのだが、体が上手く動かなくて、もたもたして一向に起き上がれない。ナミは明らかに動揺した目でミス・メリークリスマスに振り返った。
勝ち誇る彼女はすぐ傍に立ち、しかしすぐに手を出そうとはしない。
チョッパーも起き上がろうとするものの、腹に受けた傷はナミより深いようだ。
そちらにはＭｒ．４が向かっていて、まだ距離はある。それもまた恐怖だった。
「ラッスーを手懐けたね。キリの奴に聞いたか。まったく面倒なことしてくれたもんだよ」
「ハァ、残念だったわね……私達の仲間になっちゃって」

「いいや。実はそう思えなくてね」
ミス・メリークリスマスは動こうともがくナミを見つめてにやりと口角を上げる。
「バカな奴さ。あいつが裏切ったのは七武海のクロコダイルだよ。あのまま組織に居れば殺されることはなかったが、もうダメだ」
「あいつは死なないわよ……バカでも、気の良いバカだから」
「おめーら何にも知らねーんだな。七武海のレベルってやつを。いくらあいつがクロコダイルの関係者でも、あのレベルに逆らって生き残れるはずがねぇ」
気の強い様子でナミの目つきが変わった。
それをきっかけにミス・メリークリスマスが顔を寄せる。
「なぜって、あいつが選んだ仲間がこれじゃないか。多少は抵抗したが、もう動けもしない」
悔しいが言う通りだ。目の前に彼女の顔があって、殴ることすらできやしない。
チョッパーは歯を食いしばり、立ち上がろうとしていた。
ナミもまた必死に立ち上がるために、ミス・メリークリスマスを睨みながら全身に力を入れた。そんな二人を彼女は笑う。
「おめーらの船長もなんだいありゃ。よほどつえーのかと思ったらたったの３０００万！　そんな身の程知らずのルーキーがアタシらに逆らおうってか！」
「ルフィは、海賊王になる男よ！　クロコダイルでも七武海でもぶっ飛ばすに決まってるわ！」
「んん？　海賊王？　クッ……ハハハハハッ！」
ナミの必死の叫びを聞いて、ミス・メリークリスマスが笑い出した。
彼女だけでなくＭｒ．４も腹を抱えて笑っており、おかしくて仕方ないという顔をしている。
ナミとチョッパーから表情が消え、どうしようもない怒りを感じていた。
「海賊王！　カイクオ、カクオ、〝カ〟！　〝カ〟になる男だってさ！　アハハハハッ！」

「フォ～～フォ～～フォ～～～……！」
「なっ、何がおかしいのよ！」
「何がおかしいって？　おかしいに決まってる！　３０００万ぽっちの賞金首がなれるわけねーだろ〝カ〟なんかに！」
「ルフィはグランドラインに来たばっかりよ！　懸賞金なんてこれからいくらでも……！」
主張しようとするナミに顔を近付け、鼻先が触れそうな距離でミス・メリークリスマスが先程よりも低い声を出した。それだけで威圧感が変わる。
全身が緊張し、しかし、怒りがさっきにはなかった力をナミの体に与える。
それでもまだ動けなかった。
「だったら尚更無理だ。この海を知らねー奴がアタシらを倒せるわけねーだろ」
「違う！　そんなことない！　ルフィは海賊王になるんだ！」
「夢を語るだけなら誰でもできる。おれは必ず〝カ〟になる、そう言って死んでいった奴が何人居ると思う？　数え切れねーよ、この海にはそんな〝バ〟ばっかりだ！」
ミス・メリークリスマスが地面に潜った。
ナミの両足首を掴み、壊れた家へ向かって高速で進み始めた。
「身の程も知らねーそんな〝バ〟は死んで当然！　どーせクロコダイルに殺されちまうよ！　お前らがアタシらに殺されるみたいにさァ！」
「うっ……!?」
「ナミィ！」
真っ直ぐ壁に向かっている。このままでは正面から激突してしまう。
足首を掴む手に攻撃はできない。。体が鉛のように重かった。
それならせめてもの抵抗をと、ナミは必死に両腕を上げ、顔の前で交差した。
「この国を守る!?　〝カ〟になる!?　本気でそんなこと言ってんの

か！　できもしねー理想を語るのは夢じゃなくて無謀だって言うんだ！　ただの〝バッ〟だ！　現実も見れねーならとっとと死んじまえよ！　〝カ〟になるんだって言いながらなァ！」

「うるさいっ……あんたに、何が……！」

「モグモグ玉砕（インパクト）ッ!!」

ナミの体が硬い壁に激突した。正面からぶつかり、体が回転して頭の上下が逆になって、もはや本人にも何が起こっているのかわからないほど混乱している。

激しい痛みは全身を襲っていた。

血反吐を吐き、普段は簡単な呼吸すら難しく、力なく地面へ倒れる。

ミス・メリークリスマスが地上へ現れても、ナミは動けなかった。

「終わりだ」

「ナミッ!?　くそっ、お前ェ！」

「フォ〜……」

辛うじて立ち上がることができたチョッパーは、背後で声を聞いて振り返る。

その瞬間、Ｍｒ．４のフルスイングが彼の胴体を捉えて、凄まじい衝撃で体を吹き飛ばした。

ナミが消えた方角とは真逆へ、家の壁を破壊しながら消えていく。チョッパーの姿はすぐにＭｒ．４の視界には入らなくなり、呑気にバットで肩を叩いた。

ミス・メリークリスマスがＭｒ．４の下へ戻ってくる。

確かに、想定していた以上に手こずった。しかしそれだけだ。

今や敵の姿は彼女達の前には無く、悠々と歩いてその場を離れることができる。

「おめーらとは格が違うんだよ。この〝バッ〟が」

そう呟いてあっさり背を向け、二人と一匹は次の獲物を求めて歩き出した。

ｏｕｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｂｌｕｅ（３）

思わず足を止めたのは、背後から音が聞こえたからだ。
小さな石が瓦礫の上から落ちる音。
大したことではないとはいえふと気になり、振り返った時、ミス・メリークリスマスは壊れた家の内部に立つナミの姿を見つけた。
数度の平手打ち。壁への激突。数々の攻撃で服は破れて、肌は切れて、多量の血を流しながら俯いて立っている。息は乱れているようで体は力なく揺れていた。
それでも、震えはなかった。
手にはしっかりとクリマ・タクトを握っていて、どこよりも力が入っている。
まさかまだ戦う気なのか。
その姿を見てもさほど脅威と感じなかったミス・メリークリスマスは冷静に振り返る。
やるならやるでいい。とどめを刺すだけ。
彼女は再び鋭い爪を構えた。
「まだ生きてたのか。思ったよりしぶとい」
「あんたに、何がわかるのよ……」
ぽつりと小さく呟いた。
その声に注意を引かれてミス・メリークリスマスは耳を傾ける。
「死にたくなるくらい辛くて、苦しくて、それでも生きて生きて生き抜いて……やっと出会ったのがあいつらなのよ。どうしようもないくらいバカで、迷惑ばっかりかけられても、それでもあいつらがいいの。あんな奴ら、他にはいないもの……」
「なんだ。また泣き言かい？」
「あんたが」
大きく息を吸って顔を上げ、強い輝きを持つ目でナミが敵を見つめた。
もう恐怖心はない。迷いもない。
力強く武器を握って、初めて勝ちたいと思いながら敵の前に立っ

た。
「何も知らないあんたが、勝手なこと言わないで！　あいつはねぇ、ルフィはやると言ったら必ずやる男よ！　海賊王になるって言ったら本当になるの！」
「フン、所詮口先だけだ。何の証拠もねーじゃねぇか」
ミス・メリークリスマスがナミにとどめを刺すべく歩き出そうとしたところ、左手側からもわずかな物音が聞こえた。同じく小石が蹴られたような音。
そちらを向けばチョッパーが立っていた。
毛皮は自身の血で濡れ、右腕はだらりとしていて力が入っていない。さっきの一撃であばら骨も折れていた。なぜ立っていられるんだという風体に見えるが、目は死んでいない。今までになく強い光を持っている。
蹄の間に黄色い丸薬を持ち、それが情報で聞いた薬なのだと気付いた。
背中合わせでＭｒ．４が彼の方を向いて、それぞれが対峙する。
「おれも思ってる。ルフィは絶対海賊王になるって」
「そりゃおめーが〝バッ〟だからそう思うさ」
「違う。ルフィには絶対折れない〝旗〟があるんだ。ルフィが諦めない限り、おれ達も絶対に諦めない……おれ達の船長を、誰にもバカになんてさせない！」
「旗ぁ？　海賊旗のことか？　何を言い出すかと思えば……」
ミス・メリークリスマスは再び嘲笑する。
二人はもう乱れない。ようやく覚悟が決まった。
ここで勝利することはビビとアラバスタのためだけではない。自分達のためでもあり、ひいては海賊〝麦わらの一味〟のためでもある。もはや逃げることは許されなかった。
体力は限界。ダメージは許容範囲を超えている。
ただでさえ戦闘が得意な二人ではなかった。
それでも退くことはできない。仲間を侮辱した彼女達を、嗤った相手を、このまま見逃すことだけは絶対にできなかった。

ボロボロの体で、ナミとチョッパーは同時に前へ一歩を踏み出した。
心意気だけは買ってもいい。しかし気合いだけでは勝てないのが裏の世界。
その世界で生きてきたＭｒ．４ペアに迷いも恐れも存在しない。ナミ達が何を語り、何を成し遂げようとしても、彼女達は自らのやるべきことをやるだけだ。
今は任務がある。
そろそろ次に行こうと考えてミス・メリークリスマスは素早く穴を掘った。
「言いたいことはそれだけかい？　遺言は受け取ったよ。安心して死んでいきなァ！」
ミス・メリークリスマスが、海へ潜る魚のように地面へ潜った時、まずナミが動く。
家の中にあった樽をクリマ・タクトで殴って壊し、中に入っていた水をぶちまけたのだ。足元の床が水に濡れるものの、外見的な変化はそれだけである。
その直後に彼女は三本のクリマ・タクトを両手と頭に乗せ、手品のように水を出した。
「レイン＝テンポ！」
「今度は水芸かい？　アタシには効かないけどねぇ」
岩もレンガも掘り進んで、ナミの正面に現れたミス・メリークリスマスが腕を振るう。強烈な平手打ちで彼女を仕留めようとするが、すでに何度も見ているナミは咄嗟に横へ跳んで回避した。
反応はまずまず。優れている訳ではないが悪くもない。
長年海賊から逃げ続けた経験がそうさせるのか、彼女の回避技術は悪くなかった。
回避は上々。だが攻撃しなければ結果は変わらない。
ミス・メリークリスマスはナミの攻撃の威力が大したものではないと気付いている。姿を見せたまま敢えて退かずに地面を走って追い始めた。

地上で正面切って対峙した。多少驚きはするがもう怯まない。
ナミはしっかりした足取りでさらに後方へ移動する。
「ハハハッ！　結局口だけじゃねぇか！　おめーに一体何ができるって！」
「スプリンクラー！」
「水芸はもういいっつってんだろうが！」
辺りに水を撒いた後、三本の棒を合わせて一本にする。
時を同じくしてミス・メリークリスマスが前へ跳んで追いつき、ナミの体を今度こそ捉えた。
「土竜平手打ち（モグラバナーナ）！」
「あうっ!?」
クリマ・タクトで防御したが力で押し切られた。
ナミの体は勢いよく倒れ、家の中に散乱していた物を巻き込んで大きな音を立てる。
それだけで終わりにはせず、ミス・メリークリスマスがさらに距離を詰めた。このまま二撃目でとどめを刺す。そうすれば戦いは終わりだ。
ナミは自らの意思で地面を転がり、その途中、落ちていた物を拾う。
同時に左手ではクリマ・タクトの一本を取り外し、ミス・メリークリスマスに向けて振った。
「電気泡（サンダーボール）！」
クリマ・タクトから出たのは静電気程度の電気を帯びた気泡。ミス・メリークリスマスの手が触れるが、チクッとした程度で大して痛くもない。
攻撃は続行。迷いすら生じなかった。
続けて、立ち上がりながら右手で取った瓶を投げつける。
即座に反応したミス・メリークリスマスは鋭い爪で瓶を割るものの、衝撃で中身が飛び散って全身に浴びる羽目となった。どうやら酒瓶だったようだ。
今度は多少の苛立ちが生じて、歩む足取りに力が入る。
大口を叩いた割には逃げてばかり。ナミは家を出ようとしていた。

せっかちなミス・メリークリスマスがこれに苛立たないはずがない。
早く次の任務へ、異なる標的へ向かおうとしているのに、そんな時に限っていつまで経っても彼女は目の前に居続ける。今も本気で生き延びようとしている。徐々に苛立ちは増していき、余裕があるからこそ冷静さを失いかけていた。
だからだろうか。ナミが壊れた窓へ駆け寄った時、ミス・メリークリスマスは飛び掛かる。
待っていたナミはすでにクリマ・タクトの形を変えており、素早く迎撃した。
「いい加減にしろよてめー！　いつまで逃げ回るつもりだァ！」
「サンダー＝テンポ！」
Y字型に組み替えたクリマ・タクトの先端から、ボクシンググローブが飛び出した。
ミス・メリークリスマスの顔面に直撃する。しかし痛くはない。当たった衝撃は微々たるもので逆に驚いてしまうほど。彼女は思わずぽかんとしてしまった。
その隙にナミは割れた窓をさらに壊して外へ飛び出る。
遅れたミス・メリークリスマスが驚き、慌てて地面を蹴った。
「て、てめー、なんだそりゃ!?　真剣に戦う気はあんのか！」
「失礼なこと言わないで。これが私の戦い方っ」
狭い窓を通り抜けて、先に出たナミが下に、後から来たミス・メリークリスマスが上を取って腕を振りかぶる。それを見たナミは咄嗟に自分の外套に手をかけた。
本来は砂漠の熱に耐えるための物。しかし今は必要ない。
華麗に脱ぎ捨てて腕を振り、ミス・メリークリスマスの視界を疎外すると同時、上手く腕に絡ませてぐいっと引っ張る。まるで巴投げの要領でミス・メリークリスマス自身を投げ飛ばしたのだ。
「おりゃあっ！」
「ぎゃほっ!?　くっ、小娘がァ！」
「フン。伊達に海賊やってないのよ」

外套の下の服も所々破けていたが、むしろ彼女の妖艶さを助長するかのよう。
立ち上がったナミはミス・メリークリスマスから距離を取り、移動しながらクリマ・タクトを振り始める。何か目的があるようだ。
一連の行動を見ていて、Ｍｒ．４は動かなかった。
従ってチョッパーも静観していたものの、ナミが通りへ出てきたのを見て動き出す。
これ以上のダメージを受けるのは危険だ。もう一撃も受けられない。船医として、仲間の治療を優先したいと考えている彼は倒れる訳にはいかないと思った。
ここから先は今まで以上に気を使う。一方でかつてない感覚に悩まされてもいた。
倒すべき敵を見据えて、今までになく力が漲ってくるのがわかる。
「効果は三分……ランブル」
丸薬を噛み潰す。
独特の感覚が全身を走った。
今から三分間、能力の変形点が増える。
右腕は使えない。腕を使わず、いくつの変形点で戦えるのか。
考える暇も無くチョッパーは早速変身した。
「とっておきの変形点を見せてやる。角強化（ホーンポイント）」
その姿は他の変形点とは些か様子が異なる。
体のサイズは人型に近く、普段よりも大きくなり、両手は人型、しかし四足歩行。そして何より特筆すべきは巨大化した立派な角。更には背中の毛が極端に多くなってふさふさしていた。
獣と人の狭間。そしてトナカイの特徴である角が強化された姿だ。
チョッパーは無事な左手と、折れたはずの右手で地面に触れて立つ。
痛みは感じる。本来なら動かせるはずもない状態だった。
しかし怒りのせいか、意志のせいか、今はどうなってもいいという想いで庇おうとしない。
視界に捉えるのはＭｒ．４ではなくミス・メリークリスマス。彼は

性格的に抜けている。自身に危機が迫らない限りは中々機敏な動きを見せない。
すでに作戦は決まっていた。
話し合った訳ではなく、二人とも自分がやるべきことがわかっている。
チョッパーは四肢で強く地面を蹴り、ナミを狙うミス・メリークリスマスに背後から接近した。
幸いと言うべきか、距離を取ろうとするナミに集中していて気付かれることはなかった。
背後から迫り、その大きな角で彼女の体を捕まえる。
「桜並木（ロゼオコロネード）！」
「ぐほぉ!? な、なんだこりゃ……!?」
「フォ～……」
掬い上げるように激突して、ダメージを与えた上でミス・メリークリスマスの体を運ぶ。
強固な角は人体を運んでもびくともせず、軽々とした様子だった。
ミス・メリークリスマスを運んで向かうのはＭｒ．４そのもの。呆然と見つめる彼に真っ直ぐ正面から接近し、そのまま体当たりすることを狙っていた。
向かってくる敵。だが角の上には逃れられない味方の姿。
敵に対しては考えずとも反撃の手が出るＭｒ．４だが、今はそれができそうになかった。助けるか、迎撃か。迷った挙句に思わずバットを構えようとして彼女に怒鳴られる。
「おい〝バッ〟、アタシが居んだろうが!? 早く助けるんだよ！」
「フォ～～……」
「は、早くしろ――ぎゃああっ！」
「フォ～!?」
結局どうすべきかを逡巡したまま、愚直な体当たりを許してしまった。ミス・メリークリスマスを抱えた角がＭｒ．４の胴体を強く叩いて、彼の巨体はミス・メリークリスマス諸共倒れる。
チョッパーの右腕が血を噴き出して震えている。

素人の目から見ても重症。もう一切力が入らなくなり、これ以上は無理をしても動かない。しかしそこまで無理をした意味はあったと本人は思う。
「飛力強化（ジャンピングポイント）！」
素早く変身して高く飛び上がる。その動作で無事だった家の屋根に着地した。
目的は運ぶことであって、体当たりで倒すことではない。
今、走りながら雲を作っていたナミが二人を射程に捉えて、大きな雷雲の下にＭｒ．４ペアの姿があった。ちょうど起き上がろうと二人で慌ただしく動いているところだ。
「ええいクソっ！　しぶてぇ奴らだな！」
「う～～ん～～～」
「おめーがトロトロしてっからだ！　この〝バッ〟！　〝ノッ〟！」
「いいわよチョッパー。そこで十分」
焦りが生まれているのか二人が気付く様子はない。
そこでナミは落ち着いて雷を降らせるきっかけを宙に放った。
電気泡（サンダーボール）が黒雲に吸い込まれ、その影響で雷が活発化し始める。
「んあ？　なっ、しまっ――!?」
「サンダーボルト＝テンポ！」
凄まじい強さの雷が二人の頭上から降り注いだ。逃げることも許さない速さで捕まり、全身が痺れて激痛に包まれ、視界がゼロになる。
攻撃を受けていたのはほんの一瞬。しかし二人の体は黒焦げだった。
ガクガク膝が震えている。だがミス・メリークリスマスは気を失わなかった。
必死に意識を繋ぎ止め、そう遠くない位置に居るナミを強い眼差しで睨みつける。
これが最後。
次に意識を失うことすら考慮に入れて、彼女は地面を蹴ると腕を上げてナミへ飛び掛かった。

「こ、のっ――〝バッ〟ヤローがァァァ!!」
「きゃあああああっ!?」
平手打ちではなく爪で体を貫くように。
素早く接近して思い切り右腕を突き出した。その爪は確かにナミの胸を貫く。しかし驚くほどに手応えを感じずに、何の感触も得られない。
そう思っていると驚愕した顔のナミの姿は霞のように消えてしまった。
「なんちゃって」
「な、にっ……!?」
「本日は湿度の上昇により、町中でも蜃気楼を見ることがあるでしょう。そして急激な気候の変化があり得ます。トルネードに……ご注意ください」
何が起こっているのか、目の前を見ているミス・メリークリスマスにすらわからなかった。
胸を貫かれたナミは笑顔で語りながら近付いてきて、決して急がず歩いて、ミス・メリークリスマスの前に立つとクリマ・タクトを構える。
蜃気楼と言っていた。自分が刺したのはまさしくそれだったらしい。
あり得ない、と思いながらも、彼女は体から力が抜けるのを感じていた。
先程の雷によるダメージが大きい。蓄積していた分もある。
手数は決して多くなかったはずだが、その分一発一発のダメージが大きかったのだろう。
手が届く距離に立っていて手が出せず、悔しげに歯を噛み鳴らしたミス・メリークリスマスは、背後に居るＭｒ．４に振り返ろうとして、許されなかった。
「こ、こんなことが――！」
「トルネード＝テンポ!!」
Ｔ字型の両端からワイヤーに繋がれた鳩が飛び出し、二匹が同時に

鳴き声を発した。
なんて間抜けな光景。
てっきり攻撃が来ると思っていたミス・メリークリスマスは拍子抜けして笑ってしまう。
「ハ、ハハッ。なんだそりゃ。つくづくおめーは戦い慣れてないな」
間抜けな声で鳴く鳩が、グルグルと回り出した。
正面にはミス・メリークリスマスが居るため、有無を言わさず巻き込まれてしまう。ワイヤーが体に巻き付き、回転を繰り返す度に彼女の体をしかと捕まえていく。
何度も何度も回転して、回転し続け、恐怖心を感じた頃になってナミが笑った。
「なっ、ああっ、あああああぁっ――!?」
「バイバイ♡」
そうして、銃弾のようにT字に組んだ二本のクリマ・タクトが発射され、ミス・メリークリスマスを捕まえたまま飛んでいく。その後方に立っていたMr.４の体に激突し、巻き込みながら。二人の姿は驚くほど速くナミの前から遠ざかっていった。
それだけではなく、突っ立っていたラッスーにまで激突して。
勢いは止まらず回転しながら直進していく。
その先に、屋根を降りていたチョッパーが待ち構えていた。
すでに変身を終えて腕力強化（アームポイント）となり、半身になって左腕を引いている。
右腕はだらんとさせたまま、凄まじい勢いで飛来する二人と一匹を見つめていた。
「刻蹄――」
距離が近付き、前へ駆けた。
鋼鉄をも砕くという自負を持つ蹄で、大きく膨れ上がった筋肉から力を発揮し、一つになって飛んでくる二人と一匹を殴りつけた。
「桜（ロゼオ）ッ!!」
ナミのトルネード＝テンポと、チョッパーの攻撃が一つになった。
両者に挟まれた二人と一匹は耐え切れずに意識を失い、がくりとそ

の場に倒れた。
呼吸を乱すチョッパーが人獣型に戻り、危うい足取りでナミが居る場所へ歩き始める。
少し離れた後のことだった。思い出したかのように倒れたラッスーが咳をして、ボールが一つ地面に転がされた。そして時間が来ると爆発する。
背後で起こった大爆発を気にせず、チョッパーは倒れ込んだナミに歩み寄った。
ナミはすでに眠そうな顔で硬い地面に倒れていた。
柄にもなく頑張ったと自分でも思う。
疲れ切ってはいるが晴れ晴れとした彼女の顔を見て、チョッパーも堪らず隣に寝転んだ。
「あ～疲れた。もう動きたくない……」
「おれもうダメだ。立つこともできねぇ」
「汗も掻いたし、お風呂入りたい。体も痛いし、服も破けちゃったし、お金も欲しい……」
「あー……治療しなきゃ。このまま放置すると危ない……医者～」
「それあんたのことでしょ」
「あっ!? そうだった」
ぐったりした様子で寝返りすら打てない。だがそこに寝ていても自分達が勝ったことだけはわかっていた。苦しい戦いだったが敵を倒したのだ。
まだ内乱は終わっていない。早く仲間を助けに行かなければ。
そう思っているのに体が動かない。応急処置すらできずにいるのである。
二人はそれぞれ別の方向を見ながら、重くなる瞼と戦いつつ話を続けていた。
「みんな、大丈夫かな……」
「大丈夫よ。一番心配だったのが私達なんだし」
「早く、助けに行かなきゃ……」
「そうね……でも、なんか、すごく眠い――」

意識を失ってしまう。

二人は穏やかな顔で寝息を立て始め、死んだ訳ではないが、しばらくは動けないだろう。体力の限界を迎えたナミとチョッパーはそこを動けず、時間はただ静かに過ぎ去っていった。

再会（2）

城の外から騒々しい声が聞こえている。
きっと広場の戦いだろう。城までは多少の距離があるとはいえ、数えきれないほど多くの人間が集まって戦っている。命を削って、感情を爆発させながらの激突だ。遠くまで物々しい声が、連続する爆音が、戦いの音が聞こえるのは何ら不思議ではない。
城内のとある一室。
クロコダイルとキリは長い机の端と端に座り、対面していた。
応急処置を受けたキリは体に包帯を巻き、水分も幾分か拭われて、全快とは言わないまでも動く分には支障はない。しかし拘束されている様子は一切なかった。
海楼石の錠もつけられずに座っている。穏やかな顔で俯き、沈黙していた。
対するクロコダイルもまた、口を閉ざして動かない。
外とは違い、静かな時間が続いていたようだ。どちらも焦ることなくそこに身を置き、まるでそれ自体が会話であるかのように、戦いであるかのように、相手を前にして動かない。
その一方でいつまでもそうしていられる訳ではなかった。
クロコダイルが葉巻を銜えて火を点ける。
最初に口火を切ったのはクロコダイルだった。
キリは正面に彼を見据え、全く動じない。
静かな対話はかつてとは異なる様相で始まって、クロコダイルの声が鼓膜を揺らす。
「お前はもう少し頭の切れる男だと思っていた」
感情が見えない声で端的に言う。呆れているのかつまらなそうな、けれどそれだけでは無さそうな態度で、他の人間ならそう思わずともキリはそんな風に受け取った。
クロコダイルは冷静な面持ちで語っている。
初めから感情を持っていないかのような、そんな冷たさが表れていたものの、そうは感じていないキリは冷静に彼の言葉を受け止めてい

た。
「組織を離れることは、まぁいい。お前が〝海賊〟に固執しているのはわかっていた。こうして秘密結社の真似事をしている限りはいずれ離れるだろうとも予測できた。それ自体は構わん。問題はその次の行動だ」
怒りではない。近いもので言えば失望だろうか。
キリの目を見たクロコダイルはハッキリと言葉に乗せて伝えた。
「なぜ奴を選んだ。船出したばかりのルーキーを拾うとはお前らしくもない。目的のためなら使える物は何でも使えと、そう言ったはずだぞ。わざわざ使えねぇ人間を選んだ理由は何だ？　おれに言わせりゃお前の選択は悪手だ」
「ずいぶん詳しいんだね。嫉妬？」
「まさか。正当な評価を下したまでだ」
「確かに国家転覆を目論む秘密結社のエージェントなら、最初から使える人間を選ぶさ。だけどあの時ボクは海賊になりたいと思った」
苦笑しながら隠さずに答える。
彼は武器を選ぶ時に迷ったりはしない。有効的に使える物を利用する。
剣でも銃でも、たまたまあったフライパンや鍋でも、仲間の親を殺した魚人や、誇りをかけて戦う巨人達。素性が知れない海賊と繋がることにも抵抗はない。感情に左右されることはないし、誰かを言いくるめるだけの技量もあれば胆力もある。
如何なる手段を用いても目的を達成する。その態度は、クロコダイルの下で身に着けた。
グランドラインに戻るならばバロックワークスは避けられない障害だと知っていた。誰も居ない無人島で初めてルフィの誘いに頷いた時から頭の隅にある。
海賊になった当初は喜びのあまり、少々考えが甘くなっていた時もある。
それも軍艦島での敗戦を経験して引き締め直すことができた。
クロコダイルの発言との相違はハッキリしている。

彼を倒すために仲間を選んだ訳ではない。選んだ仲間と一緒に彼を倒すため、必要な物を揃えるべく行動した。二つはそれぞれ似て非なるものである。
バロックワークス構成員としての自分と、海賊としての自分。
生き方は確実に違っていて、たとえかつての上司が否定しても、それを恥じる気はなかった。
「海賊としての生き方ならもっと昔に叩き込まれてる。〝自由に生きろ〟って。一緒に航海したい仲間を選ぶし、その仲間と生きる方法を考える。考え方の違いだね」
「フン、自由か……お前の船長は頭のイカレた奴だったがな」
「それでも、海賊だったことは間違いないさ」
「結局お前は、この海の生き方を知らねぇガキのままだ」
フーッと葉巻の煙を吐き出す。
思い返すのは幼少期の彼。グランドラインにコテンパンに負かされた愚かなガキを、将来使えるように教育したつもりだったが、どうやら根底にある物までは変えられなかったらしい。
その結果がこれだ。
二人は敵として再会し、今もまだ戦おうとしている。拳ではなく、戦場全てで。
勝敗の条件はこれ以上なく明確である。
国を盗るか、それとも守るか。
どちらかの結果が出た時、それが二人の戦いの決着となる。拳で殴り合う必要などない。
いずれは戦うことになると思っていた。海賊という存在に心を奪われている彼ならいつか再び海賊になる日が来るだろうと。
考えてみれば奇妙な状況である。
グランドラインでの生き方を全て叩き込んだ人間が自らの敵になり、最大の障害になるとは。
「そういうボスこそ、実は上手い生き方なんてできてないんじゃない？」
「アァ？」

「ボクの怪我を治すとこなんてまさにそれだ」
包帯を巻かれた自分の体を見下ろしてくすりと笑う。
仲間など必要ないと語る人間とは思えない態度。指摘されてクロコダイルも眉を動かした。
彼らしくないのか、それとも彼らしいと言うべきなのだろうか。
人となりを深く知っているはずのキリは多くを指摘しようとしない。ただ落ち着いた笑みで彼を見つめて、その一方で恭順しようともしていなかった。
目的はあくまでも勝利。それ以外を欲してはいない。
今この時だけはアラバスタの存続すら忘れ、一人の海賊として望んでいた。
「ガキならガキのままでいい。この体には大事な人にもらったものが詰まってる」
キリはにこやかに笑い、挑発的にクロコダイルへ言った。
「海賊としての生き方ならビロードに学んだ。グランドラインでの生き方はボスに習った。そしてルフィには捨てたはずの夢を掬ってもらった。楽しい海賊生活ももらったしね」
確かに、かつてとは違う。
与えられた命令に従うだけの、退屈そうな顔はそこにない。心から今の生き方を楽しんでいる表情が笑みとして現れ、以前とは違うことを如実に感じさせられた。
「もう手加減はしないって決めたんだ。利用できる物は何でも利用して勝つ。あんたに勝つためなら王女も一国も利用して戦う。敵だって使う。仇だって利用する。誰を足蹴にしても、今度こそ見るって決めたんだ。自分の船長が海賊王になるところを」
「フン……本気で言ってるようだな」
「ただしあくまでも海賊としてだ。御社の社風は退屈でつまらないんで、もっと楽しそうなところで生きるよ。自由と野望がある広い海でね」
「クハハハハ」
初めてクロコダイルが笑った。

キリの顔から目を離さず、彼を認めるように口元を緩める。
それとは対照的に覇気が強まった様子があった。
「一度外へ出した意味はあったようだな。着実に覇気も強まってやがる」
その言葉にキリが訝しむ顔を見せるが、敢えて多くは伝えず、クロコダイルが席を立つ。あっさり彼に背を向けて部屋を出ようとした。
扉の前に立った辺りで足を止める。
改めて彼の方に顔だけを向け、笑みを浮かべて問いかけた。
「お前の望みなら心配せずとも叶う。目の前に居る人間は違うだろうがな」
「へぇ。やっぱりまだ諦めてなかったんだ。もっと早く行動してくれればよかったのに」
「ククク、遅くはない。この国を手に入れた時が開戦の合図だ」
言い残して扉に手をかけた時、クロコダイルの背に声がかけられる。
「ルフィは強いよ。今は敵わなくてもこの戦いの中で必ず勝つ」
「策士ってやつは最悪の事態まで想定して頭を使うもんだぜ。実現不可能な状況を望むのは策とは言わねぇな」
「これはオリジナルさ。譲り受けたものじゃない。策すら超える信頼がある」
「ならその信頼をぶち壊してやるまでだ」
クロコダイルは部屋を出た。その場にキリ一人を残し、拘束もせず、見張りもつけず、簡単に遠ざかって玉座の間へと戻る。
一足先に部屋を出たミス・オールサンデーもそこに居た。
相変わらず拘束されたままのコブラ、チャカ、ペルが座っており、興味も持たずに一瞥した後、コブラに目を向けて冷淡な声をかける。
「案内してもらおうか。プルトンの秘密が眠る場所へ」
「わかった……国民は、助けてもらえるんだな」
「ああ。この国はおれが頂くんでな」
簡潔に言ってミス・オールサンデーを見れば、彼女がコブラを立たせる。

先に二人を歩かせ、後ろからクロコダイルが続いた。
広大な部屋に倒れたチャカとペル、それに見張りのアンラッキーズを残して後にする。
廊下を歩きながらミス・オールサンデーが口を開いた。
キリのことが気になったのだろう。前を向いたまま背後のクロコダイルへ尋ねる。
「彼はいいの？　拘束した覚えはなかったけれど」
「お前が気にする必要はねぇ。どうせもう部屋には居ねぇよ」
「そう。ふふ、やっぱり彼には甘いのね」
「余計なこと言ってんじゃねぇよ。お前は黙って任務を遂行しろ」
「ええ。心得ているわ」
長い廊下を歩く。向かっているのは正面の出入り口ではなく城の裏手にある出口だ。葬祭殿に向かうならばそちらの方が近いらしい。
コブラの案内で裏口を目指し、しばらく黙って歩き続けた。
廊下を終えると広い場所へ出た。そのまま真っ直ぐ進めば裏口である。
いくつもの扉が並び、吹き抜けで二階をも目視できる、少し開けた空間。
そこへ到達した時、クロコダイルが足を止めた。
この場にはない何かを感じ取った。コブラやミス・オールサンデーが気付かなかったものだ。
彼が足を止めたことに気付いて二人も立ち止まる。微笑みを湛えて不思議そうにミス・オールサンデーが振り返るものの、核心的な何かを告げることは無く。
クロコダイルは左手にある窓へ目を向けた。
待つこと、たったの数秒。
豪快に窓をぶち破って飛び込んでくる一人の人間が居た。
騒々しくも勢いよく転がって着地し、帽子を押さえながら素早く立ち上がる。
気合いに満ちた目を正面に向けたルフィは、三人の視線を一身に受け止めていた。

「クロコダイルはどこだァァァ!!」
開口一番、感情的になって叫ぶ。
城の中に木霊したその声は彼らを唖然とさせて時を止める。しかし実情として、状況が読み取れずに呆然としていたのはコブラのみで、ミス・オールサンデーは楽しそうに微笑み、ルフィへ冷ややかな視線を向けるクロコダイルは全く動じていなかった。
Ｍｒ．３によってつけられた蝋の手錠を強引に破壊し、無我夢中で到達した場所。
そこで見つけた人間をまじまじと見て、ルフィはピンときた。
「お前……なんかワニっぽいなぁ」
「あらあら。私達はどうします？」
「先に行け。すぐに済む」
「了解」
そうであろうと思いながら確認を取って、ミス・オールサンデーがコブラを歩かせて先にその場を離れる。誰に止められることもなく裏口から外へ出て行った。
その後になって対峙する二人だけの空間になる。
ルフィとクロコダイル、両者が睨み合い、室内の空気は極端に刺々しいものに変わっていた。
「お前がクロコダイルかッ」
「そういうお前は、麦わらのルフィだな」
戦う相手は当初から決まっていた。
今、ようやく自身が倒すべき相手と対峙し、それは両者が待ち望んでいた状況である。
ついにルフィとクロコダイルは一対一の空間で向かい合った。

Ｃａｌｌｉｎｇ　Ｏｕｔ

広場での戦いは熾烈を極めていた。
集結したアラバスタ王国の兵士は突然の襲撃に対応し、至る所で戦闘を始めている。敵の数も決して少なくはない。それだけならまだしも、先んじて敵が軍に潜入していたのが厄介だった。前の敵に集中している間に後ろから味方の姿をした敵に襲われる。これによって全体が混乱していた。
四、五名から成る分隊を複数作ることで対応しようとしていたが、これも完璧ではない。
もはや一部の話ではなくアラバスタ王国軍全体が押されていた。
なぜこれほど苦戦するのか。理由は一つしかない。
指揮官が次々に消されているからである。
本来軍を指揮すべきチャカやペルがこの場におらず、代わりを務めようと真っ先に動いた四人が存在した。ツメゲリ部隊である。彼らならば実力も実績も指揮官に相応しい。
もし無事だったならば、もう少し状況は変わっていただろう。
あらかじめ彼らの存在を知っていたＭｒ．２が次々に襲い掛かって、彼らを倒していたのだ。
一人、二人と着実に地面へ倒れて。
ツメゲリ部隊の一人、バレルは、突如右前方から長い脚が視界に入ったことに気付いた。
「アァン！」
「ぐわぁ!?」
顔面に強烈な蹴りを受けてその場へ転ぶ。
たった一発で視界が揺れ、鼻血を出して体の自由を失いかけた。だが彼も日夜厳しい鍛錬を行う屈強な戦士。頭を振ると反射的に地面を転がって距離を取った。
改めて顔を上げ、立ち上がる。視界に入ったのは一人の人物。
王女ビビが、奇妙な服装で彼の前に立っていた。
「バレル！」

「なっ、姫様!?　危のうございます！　なぜこんな戦場のど真ん中へ……！」
「味方のふりをしている敵が居るの！　放っておくとみんなが傷ついてしまう……早くなんとかしなきゃ！」
「ええ、十分承知しています……！　そこで我々が敵を迎え撃つ陣形を――」
バレルは咄嗟に周囲を警戒した。今ここに居るビビが襲われてはひとたまりもない。仮に自分が討たれたとしても彼女を守らなければ。
そう思って周りに目を向けた後になって、違和感を感じる。
冷静になればおかしなことだらけだ。
「姫様、その格好は一体……」
問いかけながら再び彼女へ振り返ろうとする。
後ろを見た時、すでにビビの姿は無くて。代わりに同じ服装の長身の男が居た。
鋭い蹴りがバレルの腹を突き刺す。
「ドゥ！」
「がふっ……!?」
一杯食わされたようだ。
そう気付いたのは地面に膝をつき、血反吐を吐いた時だ。
「きさ、まッ……！」
「だ～から困るのよねぇ。あんた達に好き勝手されてると」
見せつけるようにゆっくり右足を振り上げる。
バレルは必死に抵抗しようとしたが、先程のダメージが思いのほか大きい。何より、ビビの姿を見たことで動揺していた。その動揺が消えるまでの時間は与えられない。
武器を持ち上げる暇すら無く、Ｍｒ．２の蹴りが彼の側頭部を蹴り抜いた。
「クラァ!!」
声すら出せず、意識を刈り取られる。
蹴り飛ばされたバレルは地面に転がって、大の字になって動かなく

なった。
これでツメゲリ部隊は全滅。
正面からの決闘。能力を使っての騙し討ち。どちらにしても簡単な仕事だった。
一度も苦戦することなく四人を仕留めたＭｒ．２は、これで戦場を支配したと認識しており、腕のある指揮官を失った集団は混乱したまま敗北すると判断する。
ここまでは簡単に想像できた。残る問題は当初のターゲットの存在。
麦わらの一味はどう動くか。
他のエージェントとは違ってＭｒ．２は自分の目で彼らを見ている。それ故に期待もあった。
「ぷぅ。さぁ～て、あちしは見てるだけかしら？　それとも誰か来るのかしら？　来ないならとっとと王女をやっちまうだけなんだけども」
混乱する戦場の中で、バレリーナのようにくるくる回る。
そのまま前へ進む彼は余裕のある笑みを浮かべていた。
ツメゲリ部隊の敗北は、まだ伝わってはいなかった。
だから兵士は戦い続けられたとも言えるが、一方ではだからこそ敵に対する次の策が用意されることがなく、一方的に押し込まれる展開になったとも言えるだろう。
国王軍は明らかに押されていた。
俯瞰で見れば人数こそ勝るものの、勢いが違う。士気はバロックワークスの方が高かった。
ある一人の兵士が、反乱軍に見える格好をした男に押し負けた。
剣と槍でかち合っていたのだが振り払われて尻もちをついてしまう。
敵はそのまま剣を振り上げ、思わず死を覚悟し、つい口から悲鳴が漏れた瞬間。
突如飛び込んできたビビが孔雀（クジャッキー）スラッシャーを振り、敵の胴体を切り裂いた。

男が倒れた後、肩で息をするビビを見て先程以上の驚きに包まれる。目の前に居るのはビビだ。王族であり、今は国王軍の総司令官とも言える存在。
彼女に助けられた兵士はあんぐりと口を開け、慌ててその場に膝をついて頭を下げた。
「ビビ様ッ!? なぜこんなところに！ 危ないですから早く安全な場所へ……！」
「ハァ、ハァ……安全な場所なんて、この国のどこにもないわ」
緊張で訳が分からなくなっている兵士へ、ビビが膝をついて手を差し伸べる。
視界に入った手に反応して、顔を上げてみると、彼女の表情を見た。
気付いた時には、こんなにも強い人物だったのかと素直に驚いていた。
「さあ立って。まだ諦めるのは早いわ」
「し、しかし、裏切者がどこに居るやも知れません……」
「確かに目で見るだけじゃわからないかもしれない。だからといって焦ってはだめ。あなた達はこの国で共に育ってきたんでしょう？」
立ち上がる勇気のない兵士の手を掴んで、ビビは力強く引き上げる。
彼はよろけながらもようやく立ち上がった。
「敵か味方かはあなた自身で判断してください。迷っていては更なる被害を生むだけです」
「ビビ様……」
「大丈夫。この国で育ったあなた達だからこそ、本当の敵が見えるはず」
そうして話していられるのも、ほんの一瞬の出来事だった。
「ビビ様ァ!? どちらへ！ バレル様が……ツメゲリ部隊がやられましたァ！」
どこかで誰かが叫んでいる。
そちらに緊迫した表情で振り向いた直後、どこからか武器を持つ人間が駆け寄ってきた。

バロックワークスの構成員がビビの背後から飛び掛かり、振り上げた剣で彼女を狙う。その様子に気付いた兵士だが咄嗟のことで反応はできなかった。
「ヒャッホウッ！」
「ビビ様ッ!? 危ないっ!!」
突然の攻撃に二人とも反応出来ない。乱戦の中ではそれも仕方なかった。
そんな危険な一瞬、辛うじて間に合ったらしい。
どこからともなく飛んできた男が、ビビを襲う男の頬を蹴り、凄まじい勢いで蹴り飛ばす。
「ビビちゃんになにさらしとんじゃクラァ!!」
「ぶぼぉっ!?」
歯が折れるほど全力で蹴りつけ、紙のように飛んだ男は激しく地面を転げ回る。知らぬ内に血を吐いていて意識など保てるはずがなかった。
驚きの光景を見せた後に着地。
これ以上ないという絶妙なタイミングで、ビビの前にサンジが現れた。
煙草の煙を吐いて息を落ち着ける。
ゆっくり振り向き、優しく微笑む彼はビビに声をかけた。
「お待たせしました、プリンセス。あなたの騎士（ナイト）です」
「サンジさん……！」
「お怪我は？」
「いいえ。ありがとう」
ビビの顔から緊張が消える。心から安堵している様子だ。
傍に立っていた兵士は、彼が味方なのだと理解した。
見覚えのない人間。しかし彼がビビを守ったのは己の目で見ている。すぐ傍に居た兵士が反応できなかった状況で、よほど離れた位置に居ただろう彼の方が先に反応したのだ。
開いた口が塞がらず、戦うのも忘れて二人の様子を見守る。
「状況はどうなってる」

「キリさんが言ってた、国王軍に潜入していたバロックワークス社員が戦況をかき乱してるの。見つけようとした頃には敵の攻撃を受けて……」
「まぁ、向こうもキリが居ることは知ってんだ。早めに潰しに来るのは当然だな」
「それに指揮ができるツメゲリ部隊はやられてしまったみたいで、チャカとペルはお父様と一緒に捕まってしまったまま。このままじゃ兵が混乱してしまうわ……」
「全部計算済みってことか。チッ、仕方ねぇ」
戦場を見回したサンジは何やら覚悟を決める。
まだその意図が掴めていないビビは唐突な表情の変化に戸惑う。
「ビビちゃん、君は国王を助けに行ってくれ。護衛は何人連れて行ってもいい。その間にここはおれがなんとかする」
「そんなっ。私も一緒に」
「悪いがおれは海賊だ。兵士としての訓練は受けちゃいねぇし、兵士を指揮して戦争したことだってねぇ。おれ一人なら誰が来ようが百人が相手だろうが負けねーが、こいつらはそうもいかねぇだろ。この戦場で勝つためには兵を動かせる人間が必要だ」
サンジは真剣な顔で戦場を見渡す。何もビビを気遣っての発言ではない。戦いに勝つため、彼女を危険に晒すと知った上で提案していた。仲間として信頼して送るのである。
そこまで聞けばビビも理解した。
兵士を助けるだけではない。国王やチャカやペル、そして残ると言ったサンジを助けるためだ。
「お父様を救って、チャカとペルを助ければ、あいつらに勝てるのね」
「ああ。それくらいの時間は稼げる」
ビビは今度こそ迷わずに力強く頷いた。
自分のやるべきことをやる。事前に全員で決めていた。だから命を賭けることを躊躇わない。
目的を定めたビビは強い眼差しで王宮を見た。

「居るとすれば、あそこかしら……」
「できるだけ早くしてくれると助かるな。おれは大丈夫だが、あいつらがいつまでもつか」
「わかったわ。大丈夫、カルーが居ればそう時間は――」
カルーに振り返ろうとした時、ちょうど彼の鳴き声が聞こえた。慌てた顔で走ってくる。今までどこへ行っていたのかと気にすると、その後ろからキリが走ってきた。
茶色いマントを身に纏って、サンジとビビを目指しているらしい。
まず最初に、怪しい、と思った。彼がこの場に居るとは思えなかったし、おそらく先程からＭｒ．２を探しに行っていたのだろう、カルーが焦っているのが何よりの証拠。
ビビは瞬時に武器を手に身構えようとする。
一方、その人物に気付いたサンジは表情をピクリとも動かさなかった。
「クエーッ!!」
「気をつけてサンジさん！　言い忘れてたけどあいつは――！」
「サンジ！　ここに居たのか！　ちょうど言いたいことが……！」
駆け寄ってくるキリに、目にも止まらぬ速さでサンジが地面を蹴って接近する。
迷わず足を振り上げて頬を蹴り抜いた。
キリの体は地面を滑って、慌ただしくゴロゴロ転がって倒れた。
「ゴホッ、ゲホッ……な、なんで……」
ビビは唖然として突っ立っていた。
蹴り飛ばされたキリが腕を突っ張って上体を起こし、サンジを睨む。
「なんでわかったのかしらぁん……！」
「そんなもんで騙されるほどマヌケじゃねぇよ。どんだけ見かけを変えようが、演技しようが、おれには効かねぇ。それにたとえ本物でもおれは蹴った。てめぇの持ち場を離れてのこのこやってくるような奴ならおれが叩きのめしてやる」
「それにしたってひどいじゃなぁ～い？　仲間の顔面蹴り飛ばすな

んて」
サンジは冷静な顔で煙草を手に持ち、キリの顔を見やった。
「どんな外面だろうが騙されねぇよ。人は、心だろうが」
「フッ、ククク、んがっはっはっは……流石は紙ちゃんが選んだ仲間ねい。気に入ったわ～ん」
俯きながら立ち上がって、左手で左の頬へ触れる。
その瞬間に外見が変化して、キリではなく、Ｍｒ．２がその場に立っていた。
彼は顔を上げ、サンジの目を見て笑みを見せる。
「それじゃあちしの能力はもうご存知ってわけ？　でも残念でしたぁ、あちしもあんたのこと知ってるわ～ん。蹴り技が得意な海の一流コックさん」
「そりゃありがてェ。自己紹介の手間が省けるぜ」
対峙した二人を見て本人以上にビビが緊張する。
どちらも退く気はない。ここでやる気だ。観戦していられるほど余裕のある状況ではないが動き出すタイミングを見失ってしまい、困惑するビビを気遣ってか、サンジが声をかける。
「行ってくれビビちゃん。ここは大丈夫だ」
「ええ……気をつけてね、サンジさん。必ず戻るから」
「ま、軽く仕留めるさ」
ビビが先程の兵士とカルーを連れて、その場を離れていく。他の兵士も集めて王宮へ向かうつもりだろう。安全が気がかりではあるがそれはどこに居ても同じだ。
今はこの場の平定を真っ先に考えなければならない。
眼前にＭｒ．２。マントを捨てた彼は騙し討ちという手段を捨て、正面から戦おうとしている。それを受けるつもりでいる一方、サンジには他にもやるべきことがあった。
気になるのはビビだけではない。広場で戦っている兵士達のことだ。
指揮官を失っている彼らの士気は下がる一方。ツメゲリ部隊が倒れたことでそれはさらに顕著となっている。このままでは長くない。

本音を言えばそんなこともしたくなかったが仕方ない。
サンジは腹から声を出して、周囲に居る兵士達へ向けて言った。
「気合い入れろよテメェら!! テメェらが死んだらビビちゃんが悲しむ! ウジウジしてる暇があるなら向かってくる奴は全部ぶっ飛ばせ! テメェに敵意持って襲ってくる奴は全員敵だ!」
あまりにも大きな声は味方の兵士を驚かせる。
「言っとくがおれはビビちゃんに心配されるお前らが大っ嫌いだ! もしぶっ倒れやがったら蹴り飛ばしてても目覚めさせてやる! 痛い想いしたくねぇなら死ぬ気で生きろ!」
「んが〜っはっはっは! それってば矛盾してない? 一流コックちゃ〜ん!」
声を聞いていた兵士達は、動じながらも目つきを変える。
ビビが悲しむ。
些細な言葉だが愛国心を持つ兵士にとってこれほど影響が大きい言葉はない。声が届いたのはほんの一部でしかなかったかもしれないが、奮起した兵士達は敵を押し返そうと前へ出た。
その一方でＭｒ．２がサンジへ襲い掛かり、彼も即座に反応した。
両者が足を振り上げ、繰り出された蹴りが空中で激突する。
「海賊風情が兵隊の真似事でもする気? あんたが何を言ったところで所詮は海賊。この状況を丸ごとひっくり返すなんて無理な話よ〜う!」
「ああ、こっちも最初からそんな気はねぇよ。おれの仕事は時間稼ぎだ」
「アァン?」
互いの足が離れると同時に、Ｍｒ．２は次の蹴りを繰り出そうと体を回転させ、しかしサンジはその行動を見もせずに大袈裟なほど距離を取った。
バック転をしながら一瞬で遠く離れてしまったサンジを、Ｍｒ．２は不思議そうに見る。
逃げたのかと思った直後。彼の目的を理解する。
Ｍｒ．２からあっという間に離れてしまったサンジは、唐突に自ら

バロックワークス社員の集団へ突っ込んでいき、素早い蹴りで十数人を一気に蹴り飛ばす。
敵を排除し、国王軍を助けたのだ。
これに驚いたＭｒ．２は口をあんぐりと開ける。
彼との対決より雑魚の排除を優先するあたり、どうやら本気で戦場を救うようだ。
「あ～っ!?　ちょっとあんたァ！　あちしを無視すんなっつーの！」
「来てみろ、オカマ野郎」
「上等じゃな～い！　逃～がさないわよ～う！」
怒り心頭といった様子で駆け出したＭｒ．２がサンジを追う。彼は笑顔でさらに離れようと走った。
また別の集団へ飛び込み、国王軍の兵士に代わって敵を蹴り飛ばす。
その速度や威力は並みの人間に止められるレベルではなくて、誰一人として反応できず、またしても大勢の人間が勢いよく宙を舞った。
「パーティーテーブルキックコース！」
「ぐぎゃああっ!?」
「ふんがぁぁぁ～!!　逃がさなぁぁ～い!!」
多数の人間を蹴り飛ばしたことでサンジの動きが一瞬止まる。なんとか追いつくことができてＭｒ．２が強く地面を蹴って跳び上がった。
着地したサンジは彼の姿を見上げ、冷静に体を反転させる。
「アァン！　ドゥ！　クラァ～!!」
伸ばされた右足を回避して、バック転をしてその場から離脱する。
サンジは、敢えて相手にしようとはしていない。
避けられたことはおろか、逃げようとする彼の姿に驚愕してしまい、ぽかんとするＭｒ．２を置き去りに別の集団へと向かっていった。
またしても、サンジによって多くの敵が蹴られて地面に倒れた。
一連の行動は敵の数を減らすだけでなく、国王軍に強い味方が現れ

たことを示して、少なからず士気の回復に繋がっていたらしい。間近でその強さを見た兵士は顔色を変えて、奮起し、誰かは知らないが自分達も負けていられないと雄たけびを上げる。
兵隊の指揮など執れない。だが、野蛮ながらもそうして彼らを率いることはできた。
怒ったのはＭｒ．２である。
正面から戦うならばまだしも上手く逃げられ、引っ掻き回されている。
この瞬間、確かに彼を野放しにしておくのはまずいと判断していた。
「ムガーッ！　ジョーダンじゃな～いわよーう！」
Ｍｒ．２が大声を出したのをきっかけにサンジがにやりと笑った。
「どうした？　ずいぶん足が遅いみてぇだな。まさかもう疲れたのか？」
「ふざけんじゃなーいわよ～う！　あんた、逃げずに戦いなさいよ！」
「やなこった」
その後もサンジは戦場を駆け回り、一人でも多くのバロックワークス社員を蹴るため、Ｍｒ．２の追撃を避けながら止まらることなく動き続ける。
少しずつ、徐々にではあるが状況は変わり始めた。
おそらく味方だろうという人物の援護を受け、国王軍は戦う意志を取り戻したのである。
至る所から大声が聞こえてくる。その中にはサンジの叫び声もあった。
自身の敵と対峙しながら、彼らは不意に笑みを浮かべる。
Ｍｒ．９とミス・マンデーは互いに背を預けて呼吸を整えようとしていたようだ。
「どうやら、おれ達には強力な味方が居るようだ」
「フン……一時は殺そうとしてた奴らだっていうんだから、不思議な縁だね」

「ああ。そういう意味じゃ、あの時殺しておかなくてよかった」
「あの時殺しておいたら、こんなところで必死になって戦うこともなかっただろうけどね」
彼らが視線に捉えるのはＭｒ．１０とミス・テューズデー。身に着けた鎧が暑いのか、絶えず大量の汗を流し続けながら、それでもＭｒ．９とミス・マンデーに食らいついている。
ビビの傍を離れてしまったのは不覚だった。しかしこの二人は放っておけない。
考えるのは早急な決着とビビを追うこと。二人は気合いを入れ直す。
「悪いが友達を一人で行かせちまったんだ」
「あんたらを仕留めてさっさと追わないといけないんでね」
「バイバイベイビー？」
Ｍｒ．９がバットを持ったままバック転を繰り返し、Ｍｒ．１０へ接近していく。
同時にミス・マンデーが拳を振り上げながらミス・テューズデーへ向かって走った。
混乱する戦況は絶えず変化し続ける。
それを知りながらビビは振り返ることなく広場を後にした。
目指すのは王宮。そこにきっと囚われた国王と臣下、そして倒すべき敵が居る。
決意を表す表情は変わることなく、ただじっと王宮を見つめていた。
「ハァ、ハァ……お父様、待ってて……！」
「クエーッ！」
カルーや数名の兵士と共にひた走る。
ビビはすでに一切の恐怖心を捨て、目的のみを持って行動していた。

Ｃａｌｌｉｎｇ　Ｏｕｔ（２）

数度の蹴りを上手く避けられて、その度に味方が倒される。
怒りは溜まる一方であり、その度に強くなる感覚があった。
ついにサンジを捉えたＭｒ．２は、思わず大笑いしながら蹴りを繰り出していた。
「んが～っはっはァ！　捕まえたわぁ～ん！」
素早く反応したサンジの蹴りと激突する。互いに右足をぶつけ合い、相当な衝撃が足から全身へ駆け抜けた。特にＭｒ．５の爆発を受けて怪我を負っていたサンジは眉を顰める。
蹴りの強さは互角。どちらもその場で着地する。
その直後の行動はそれぞれ違っていて、Ｍｒ．２は次の攻撃を行い、サンジは後ろへ跳んだ。
「そう簡単に捕まるか」
「んなぁ～にをぉ～！」
長い脚による蹴りを跳んで回避して、再びサンジが別の敵を襲う。
素早く力強い攻撃で数多の男達が宙を舞い、少しずつとはいえ確実に戦力が減っていた。国王軍との戦いも当然影響しているが、これほど早く削られているのは彼の行動を許しているせいだ。
Ｍｒ．２が悔しげに歯を食いしばる。
何よりも優先してサンジを止めなければならない。
早くもビビに逃げられてしまったこともある。この戦場で敗北する訳にはいかない。全ての鍵となるのは今やツメゲリ部隊などではなく、一介の海賊、そのコックであった。
地面をわずかに抉るほど強く蹴りつけて、Ｍｒ．２が全力でサンジを追いかけた。
「逃がさな～い！」
「さっきからそう言ってるが、全然ついて来れてねぇな」
「んなぁ～にぃ～!?　オッケー、わかったわ！　そこまで言うなら見せたらァ～!!」
逃げるために跳びつつ、サンジは得意げに挑発した。それを見たＭ

ｒ．２は呆気なく乗り、更なる怒りを燃え上がらせて足の回転を速くする。
そこまで言われて黙っているのはオカマに非ず。
変化は一目瞭然。一瞬にしてぐんぐん近付いていった。
「オカマデャーシュッ!!」
「へぇ……」
凄まじい迫力で接近してくるＭｒ．２を冷静に眺めて、ふとサンジがその場に立ち止まる。
ようやくまともに戦える状況になった。
俄然闘志を燃やすＭｒ．２であったが、如何せんサンジの挑発に乗ってしまった状態であり、幾分冷静さを欠いていたらしい。
「死になさぁ～い!!」
突き出した右脚は驚くほどあっさり回避され、一瞬にして懐に飛び込まれる。
思わずぽかんとしてしまうほど鮮やかな足運び。おそらく予めこうなることを予想しての挑発だったのだろう。冷静さを取り戻した時にはすでに遅かった。
真っ直ぐ伸ばした脚がＭｒ．２の腹に突き刺さる。
体がくの字に曲がり、胃の中の物が逆流しそうになって慌てて口をきつく閉じた。
滑るように地面へ足を着ける。
突然の反撃には驚いたが、近付きさえすればこちらのもの。しかも至近距離に居る。
迷わずＭｒ．２が拳を突き出そうとした。しかしその動きを見て判断するのではなく、攻撃を終えた直後にサンジが後ろへ跳び、拳が伸びきった時には目の前に居ない。
またしてもサンジは離脱しようとしており、Ｍｒ．２は表情を険しくした。
「こいつ、あくまで逃げ回る気か……！」
「どうしたオカマ野郎。おれが逃げるぞ」
別の敵を狙おうとするサンジは、しかし本気でＭｒ．２から距離を

取ろうとしている訳ではない。常に追いかければ届くだろうと思わせる距離を、意図的に一定の距離を保っている。それは彼から逃げるためではなくて、彼を逃がさないための距離だ。
もしＭｒ．２が国王軍を狙うようならすぐに止めに入る気でいる。
それでいて敵の力を削ぐため、敢えて正面から向き合おうとはしない。
どうやら猪突猛進のバカではないらしい。
軍の指揮官としてはあまりにも力不足とはいえ、己のやり方で立て直そうとしている。
海賊流、とでも言うべきか。少しは頭が使えるようだと思った。
「なるほどね。流石に紙ちゃんが選んだ仲間……タダじゃ勝たせてくれないってわけ？」
「オラァ！　お前ら気合い入れろォ！　ビビちゃんに想われてるくせに死にやがったらタダじゃおかねぇぞ！　すっ転んでもすぐ起きやがれクソ野郎ども！」
「は、はいぃ！」
荒々しい鼓舞を続けながらバロックワークス社員を蹴り飛ばしていく。
その様子は拙いながも隊長を務めようとしている。
優先すべき敵は彼。
サンジが消えれば今度こそ、広場の戦いにおいてバロックワークスを止める障害は無くなる。Ｍｒ．２が彼を仕留めれば国王軍は脆くも崩れ去る。
「これって偶然？　それとも最初から計画されてた采配？」
Ｍｒ．２は、己のパートナーを持たない。それ自体はキリと同じだ。
彼と違うのは部下を持ち、部隊を持ち、時には集団で任務を行う状況があったこと。その経験が故に今回のように部隊を率いる作戦に慣れている。集団を倒す術を知っている。
以前の経験がものを言うならばともかく、一介の海賊ならば部隊を率いた経験があるとは考えにくいため、大した相手にはならないと

思っていた。ところがサンジは実力だけでなくその行動、思考が的確にＭｒ．２の邪魔をする。
どうやら彼は頭が良い。度胸もある。一人で戦い抜く実力もある。
そしておそらく、彼自身もまた集団の心理を理解した上で戦っている。
果たして、彼が部隊の長であるＭｒ．２の前に立ちはだかったのは偶然であるか。
思わずキリを疑ってしまった。
相手にして不足はない。Ｍｒ．２は笑う。
互いの目的は一致していたようだ。
部隊長を倒せば、この広場を制圧することができる。
理解したＭｒ．２がようやく駆け出すと、即座にサンジが反応して振り返った。
「んが～っはっはっは！　了解よう！　要するにあんたを仕留めりゃ問題ナッシング！　今度こそ覚悟しろやァ～！」
ダッシュで向かってくるＭｒ．２に対してサンジは立ち尽くしたまま迎える。
そして両者が地面を蹴った時、周囲の目は釘付けになった。
跳んだ二人の蹴りが空中でぶつかり、不思議と衝突の際に生じた風を感じる。果たして本当に風が吹いていたのかは不明だが、少なくとも見ていた者達は肌を撫でた迫力に脚をすくませた。
それほどの衝撃。彼らは、遥か高みに居た。
「ぐぐっ、ぐぅ……！」
「おおっ、おっ……！」
結果は互角。
どちらも弾かれ、しゃがむようにして着地した。
敵の情報は頭に入っている。サンジは蹴りを主体として戦う。むしろ蹴り以外はあり得ない。対するＭｒ．２はオカマ拳法を用いる。拳も蹴りもあり得た。
その違いはどう影響するのか。
Ｍｒ．２は、決して自身の有利とは思えない。彼の蹴りは尋常では

ない。それのみを追求してきたからこその強みがある。だがそれを言えばＭｒ．２も同じだ。
マネマネの実は戦闘に利用できる能力ではない。弱点がある。それも知られているのだろう。
しかしだからこそ格闘家としての血が騒ぐというもの。
逃げるのをやめた様子のサンジを目標に、Ｍｒ．２は小細工無しに駆け出した。
「どれだけ逃げられたって、あちし、めげなぁ～い！　それがあちしの良いところ！」
迎え撃つサンジはその場で待ち受けており、Ｍｒ．２の接近は思いのほかあっさり許される。
長い両腕が伸ばされた。まるで首を伸ばす白鳥の如く、柔和な動き、且つ読み辛い軌道で死角を探ろうとしていて、サンジは正面から虚を衝かれることとなった。
今まで見たことがない戦法。オカマ拳法とは普通の拳法では無さそうだ。
「うらぶれ白鳥（スワン）舞踏会！」
「チッ……！」
回避するため姿勢を低く、咄嗟の判断で側面へ回り込む。するとその動きを追ってＭｒ．２の腕が伸びてくる。その動きの流麗さにサンジの目が見開かれた。
辛うじて回避するが、わずかに顎を掠る。
尚もＭｒ．２が前進してくるため、後退を余儀なくされてしまった。
流石にこれ以上は味方の援護をしていられない。考えたサンジは思考を変える。
まずはＭｒ．２を撃破しなければ。
どちらにしろ当初の目的だ。彼は必ず倒す。迷いは持っていない。
「調子に乗れんのはここまでだぞ。首肉（コリエ）！」
「アァン！」
左足を軸に体を回転させながら、腰の入った蹴りを繰り出した。Ｍ

ｒ．２はそれを掌で受け止める。
互いに押し合うものの、押し切ることはできず。
次にサンジが左足を振り上げた時、Ｍｒ．２も蹴りを行った。
「肩肉（エポール）！　背肉（コートレット）！」
「ドゥ！　クラァ！」
「鞍下肉（セル）！　胸肉（ポワトリーヌ）！　もも肉（ジゴー）！」
「アァン！　ドゥ！　クラァ！」
連続して蹴りを繰り出すが全て掌底で払いのけられ、Ｍｒ．２も攻めきれずにいる。一進一退、どちらも攻め手に困っている様子だ。
サンジは攻めあぐね、Ｍｒ．２は攻撃の手が出せないことに表情を歪める。
この時点でかなりの手練れであることは間違いなかった。
両者は大技を出すためぐるりとその場で回転する。
「クソっ、吹っ飛べ――！」
「吹っ飛ばな～い！」
「羊肉（ムートン）ショット!!」
「白鳥アラベスク!!」
強烈なソバットが連続して激突し、その全てが互いを殺し合った。
当たったのは相手の足にだけ。お互いに技を止めただけで、肉体にはダメージがない。しかしその場に留まることができず、二人は勢いよく吹っ飛んでいった。
サンジは肩口から地面を滑って、Ｍｒ．２はゴム毬のように何度も跳ねる。
元居た場所からずいぶん離れたサンジが戦闘中だったバロックワークス社員に激突する。
同じく逆方向、Ｍｒ．２も味方にぶつかっていた。
もはや二人の頭に広場の戦いについては残っていない。目の前の敵に集中していたようだ。
立ち上がったサンジは周囲で驚くバロックワークス社員を蹴り飛ばす。
対称の位置ではなぜかＭｒ．２も周りに集まる社員を蹴り飛ばし

ていた。
「どけッ！　邪魔だ！」
「ぎゃああっ!?　八つ当たりぃ!?」
「邪魔よう！　どきなさ～い！」
「ぐぼぉ!?　なんでおれ達が……!?」
苛立った顔で歩いてきて、二人が対峙する。
ダメージという点では大したことは無いものの、自身の大技が止められたのは確かだ。
「ハァ、野郎、おれの羊肉（ムートン）ショットを……」
「あちしの白鳥アラベスクを、止めるなんて……」
互いに実力は認め合い、それ故に敵意はさらに膨らんでいく。
正面から対峙した二人は、不思議と広場の戦闘から切り離されて、誰に邪魔されることも無く睨み合っていた。まるで戦闘中の彼らでさえお膳立てをするかのように。
「中々やるじゃなぁ～い。やっぱりただのコックじゃないみたいね～い」
「おれ達のことは調べ尽くしてあるってことか」
「まあねぃ。トレジャーバトルじゃ予選敗退してたからそうでもないのかと思ってたけど、実際やり合ってみたら驚きじゃな～い」
「へっ。今更だな」
「ただし、あちしは負ける気なんてないけどねぃ」
音も無くスッと手を挙げて、顔の傍に置いたＭｒ．２が口の端を上げた。
「プロってのはどんな手段を使っても最良の結果を手に入れるものよ～ん。あちしとあんた、最大の違いはなんだと思う？」
「男かオカマかだろ」
「いいえ、違うわ。それはもちろんのことだけど」
サンジは呆れた顔でＭｒ．２を見ていた。
何を言わんとしているのかはわかっている。だがそれを恐れたりはしなかった。
「能力者であるか否か。これが最大の違いよ」

「やめとけ。お前がおれの仲間に化けたところで、おれは攻撃を躊躇わねぇ。見せかけだけの小芝居なんざ付き合う気がなくてね」
「あ～らそうかしら～ん。あんたがあちしを知ってるように、あちしもあんたを知ってるのよ」
おそらく能力を使うだろうということはわかった。
誰に変身しようとも攻撃を躊躇うつもりはないとはいえ、黙って見ているのも癪である。
サンジは迷わず駆け出していた。
「他人になったところで、てめぇの拳法は使えねぇんだろ」
「んが～っはっはっは！　正解よう！　あちしのオカマ拳法は、あちしにしか使えない！　来る日も来る日もレッスン、レッスン……そんじゃそこらの奴じゃ使いこなせないのよう！」
「なら変身しないことをおすすめするぜ」
正面から堂々とやってきたサンジの蹴りに対し、Ｍｒ．２は能力を使わず回避する。
背を曲げて屈み、頭上を通り過ぎたのを確認すると拳を突き出した。
「アァン！」
「オラッ！」
隙を狙ったつもりだったが、腹を打とうとした拳は素早く引き戻された右足で踏まれるように止められる。想像以上の反射速度。これではＭｒ．５に止められるはずがない。
即座に拳を引いて、Ｍｒ．２も足を出した。
反応するサンジと数度脚をぶつけ合って、互角のままで攻防を繰り返す。
やはりただの殴り合いでは時間がかかってしまう。
戦闘が長引けば広場の戦闘がどうなるのか読み切れない。現状、まだ押し切れてはいなかった。ここでサンジを倒し、Ｍｒ．２が戦線に加われば確かな勝利が得られるはずである。
取り逃がしたビビのことも気になる。
時間はかけられないと再度思考した後、Ｍｒ．２は自ら後ろへ跳ん

だ。
「やっぱりあんたには、これっきゃないみたいねい」
「逃がすか！」
「逃げるんじゃないわ～ん！　あんたに勝つ作戦よう！」
先程から何かを狙っている。その何かをさせないため、あくまでもサンジは追い縋った。
反撃に気をつけながら攻勢に出て、距離を詰める。
焦っていないと言えば嘘になるかもしれない。だが相手の実力はおそらく想定以上。肌で感じた蹴りの威力は戦闘を長引かせていいものではないと判断している。
サンジが一際強く地面を蹴った。
速度が変わり、気付けば目の前に居て、Ｍｒ．２が目を見開く。
真正面からの奇襲。この状況を見ればＭｒ．２は油断していたと言わざるを得ない。
勢いのある跳び蹴りは彼の腹へ突き刺さる。
Ｍｒ．２は耐え切れずに後方へ蹴り飛ばされてしまった。
「腹肉（フランシェ）シュートォ！」
「ぐほぉえっ!?」
驚きが大きかったのか背中を打って転がっていた。
慌てて飛び起きるも、すでにサンジは目の前に迫っている。あまりにも早い。何より攻撃に迷いが無い。戦いに慣れていなければこうはならないだろう。
体勢を立て直す暇すら惜しく、Ｍｒ．２は咄嗟に拳を前へ突き出した。
次いでやってくるサンジの蹴りと正面からぶつかる。
「どうぞオカマい拳（ナックル）！」
「胸肉（ポワトリーヌ）シュート！」
衝撃は相当なもの。しかし拳で受けたＭｒ．２の方が強い痛みを感じている。
強い衝撃を受けたとはいえ、サンジを止められるほどではなかった。

着地と同時に素早く腰を回して、右足を軸に左足を振り上げ、Ｍｒ．２の側頭部を蹴りつける。彼の体は面白いように飛んで頭から着地し、地面を削るように頭部を擦った。
その結果、勢いよく上体を起こした時には額から血を流していた。
「ふんがァ！　なんの、まだまだァ！」
視界にサンジを捉えた時には、すでに攻撃を繰り出す最中で、反応する暇も無く蹴りが当たる。
「二級挽き肉（ドウジェム・アッシ）！」
「あばばばばばっ――!?」
顔、胸、上半身を中心に無数の蹴りが叩き込まれる。
鼻血を噴き出しながらもＭｒ．２は再度地面を転がり、意思とは無関係に四肢を投げ出した。
たった数秒でこの状況。この蹴りを受け続ければ今に気を失ってしまう。敵の攻勢を止める方法は一つだけ残っていた。
倒れたままのＭｒ．２へ飛び掛かった時、サンジはＭｒ．２の右手が己の頬へ伸ばされたのを見る。
「無駄だっつってんだろ！」
「ちょっとォ！　止まりなさ～い！」
「なっ!?」
全力のかかと落としを顔面に食らわせてやろうとした瞬間、その顔を見て驚愕した。
思わず狙いを外して顔のすぐ横に脚を落としてしまう。
見ようによっては攻撃を失敗した状況。サンジはなぜか動かず、仰向けの状態で居るＭｒ．２の顔をじっと見つめている。
攻撃の直前、紙一重のタイミングで容姿は変わっていた。
今、サンジが見ているのはＭｒ．２であり、その顔はしかし彼のものではない。
見覚えのある金髪に可愛らしい顔。服装こそＭｒ．２のままで残念極まりないが、どんな格好であろうと愛おしく思えてしまうその人物は。
サンジが決して蹴れない相手は、女性。仲間のシルクの顔がそこに

あった。
「ちょっとちょっと、危ないじゃないのよう！　そんなに連続で叩き込まなくてもぉ～！」
「て、てめぇ……!?　シルクちゃんの顔を！」
「フフン、これがあんたの弱点でしょう？　かなり女好きらしいわね～い」
顔だけでなく肉体まで。
シルクの外見を手にしたＭｒ．２は動けないサンジの足下を抜け出し、悠々と立ち上がった。ただそれだけの状況でも、形勢は逆転したと言ってもいい。
サンジは悔しげにＭｒ．２を見つめ、彼は、彼女は笑顔で振り返る。
あまりにも隙だらけな立ち姿。しかし攻撃できなかった。
「これで形勢逆転かしら。女が好きなあんたにこいつの顔が蹴れる～？」
「ぐっ……だがその体じゃてめぇの拳法は使えねぇはずだ。シルクちゃんの美しい体じゃ本領は発揮できない。そうだろう」
「そうよう。でも、それは状況を見ると弱点とも言い難いのよねい」
「何？」
「周りをご覧なさ～い」
そう言われて、罠かとも思って警戒したが、サンジは恐る恐る周囲を見回す。
相変わらず国王軍とバロックワークスが戦闘していた。いまだにツメゲリ部隊敗北の影響と潜入していた工作員の裏切りにより、混乱は完全に取り除かれた訳ではない。形勢は贔屓目に見ても国王軍不利。このまま押し切られて敗北という展開もあり得なくはない状況だ。
冷静に判断した上でサンジはそう思っているのだ。
当然Ｍｒ．２も同じことを考えていた。
「火事を消したりだとか、民間人を逃がすためとかで、国王軍は散々走り回った後。すっかり疲れ切った状態から戦闘が始まったの。対するあちしの部下はその間ゆっくり休んでたからピンピンしてるわ

ん。さて、あちしとあんたが睨み合ってる間、あっちの戦いはどうなるかしら？」
「てめぇ……！」
「あちしとあんたじゃ勝利の条件が違うの。言ったでしょ？　プロってのはプライドよりも任務の遂行を優先するものよ。あちしをそうさせたのは紙ちゃんなんだけどねぃ」
シルクの顔で、声で、朗々と語り聞かされる。やはり蹴れない。たとえ偽物だとわかっていても女性を蹴ることは彼の流儀に反した。
その間にも周囲では国王軍の兵士が倒れていく。
時間は限られている。彼らを見捨てることはビビを見捨てることと同義だ。
「いいの？　放っておいて」
そう呟いたＭｒ．２の目的はわかっている。隙を見つけてサンジを仕留めるつもりなのだ。
バロックワークスを攻撃し、国王軍を助ければ、サンジ自身がＭｒ．２に狙われる。Ｍｒ．２の勝手を許さないために睨み合っていれば、国王軍が先に音を上げてしまう。どちらを選んでも状況が良くなるとは思えない。だが突っ立っているのは最低の悪手だとわかっていた。
覚悟を決めたサンジは歯噛みする。
余裕綽々で腕を組むＭｒ．２に振り返ると厳しい目で睨みつけた。
「ずいぶんな余裕だが、てめぇはキリじゃねぇんだ。今に痛い目見るぜ」
「そう？　じゃあ楽しみにしてるわん」
サンジは駆け出した。
Ｍｒ．２に背を向けて、国王軍を援護するために敵を目指して進む。
今まさに一人の兵士が地面に転び、サーベルを持つ男に刺されようとしていた。間に合うかどうかは微妙な距離。全力で地面を踏みしめて前へ跳ぶ。
「クソっ。てめぇら、それ以上好き勝手できると思うな――！」

「蹴爪先（ケリ・ポワント）！」
しかし届く前に、背後から強襲したＭｒ．２が彼の側頭部を蹴り飛ばした。
強烈な痛みで視界が揺れ、地面に転がる。
その時には助けようとした兵士が敵に刺されていて、サンジは、頭に血が昇る感覚に襲われていたようだ。ほんの一瞬だが思考が掻き消える。
驚くほどのスピードで跳ね上がり、即座に背後へ蹴りを繰り出す。
Ｍｒ．２の姿を見た途端、顔の前で蹴りが止まってしまった。
すでに容姿はシルクの物に変更されており、自分を諌めてもその顔は蹴れない。
「あらん。惜しかったわねい。もうちょっとだったのに」
歯を食いしばって自分を責めるが、幼少期から教え込まれた流儀だ。彼の一存で軽々しく捨ててしまうことはできない。どんな状況でも女は絶対に蹴らない。
サンジは悔しく想いながらも、如何にしてこの状況を打開するか思考する。
何か手があるはず。そう思うことすら、Ｍｒ．２は待とうとしなかった。
「でもねい。休んでる暇はないわよ。あちしってばこんなこともできるから～」
そう言ってＭｒ．２が右手で自分の頬を叩いた。その瞬間に顔が変わる。
シルクの物から、今度はビビへ。
瞬間的に嫌な想像が脳裏を駆け抜けてサンジが表情を変えた。
「お前、まさか……!?」
「早く止めた方がいいわよ～う。あちしの顔を蹴ってでもねい」
勢いよく振り返ってＭｒ．２が走り出す。ビビの容姿で、彼女のために戦う国王軍の下へ。
それをやられてはひとたまりもなかった。きっと抵抗する暇も無くやられる。兵士がみんな殺されてしまう。そうなってもおかしく

ないだけの隙を作り出せるだろう。
焦った顔でサンジも駆け出した。何としても彼を止めなければと躍起になる。
しかしＭｒ．２の行動は早く、走りながらも大声を出していた。
「みんな戦いをやめて！　反乱軍はこの国の国民なのよ！　あなた達が戦ってはいけない！」
「おいッ、やめろ！　耳を貸すな！　こいつは本物じゃない！」
「お願いします！　戦いをやめてください！　お願いします!!」
「聞くな！　ビビちゃんじゃないんだ！　戦い続けろ！」
戦いの中で、塵が舞い上がり、砂が散り、人が入り乱れる視界の悪い戦場。
突然ビビの声が聞こえてきて反応しない兵士は居なかった。居るとすればそれは予め潜入していたバロックワークス社員である。
ビビの声が兵士達の動きを止めさせる。
そしてその止まった兵士達を狙って、反乱軍に扮したバロックワークス社員が襲い掛かった。
「ビビ様？」
「ビビ様の声だ……まさかこの戦場に」
「ハハァ！　隙ありィ！」
「うぐぅ!?　うあぁ……」
「急に殺しやすくなったな、こいつら！」
「一人も逃がすなよ！　国王軍を皆殺しにしろォ！」
「お願いします！　戦いを、やめてください!!」
「やめろォ!!　それ以上、ビビちゃんの声で語るなァ!!」
被害は急増していた。
ビビの声に動揺した兵士が次々に倒れていく。Ｍｒ．２が移動すればするほど、声が届く範囲が広がっていく。その声を聞いたことにより多くの兵士が倒れる。
周囲から聞こえる悲鳴や呻き声に怒りを募らせ、サンジは冷静ではいられなくなっていた。
必死に兵士達へ呼びかけながら移動を続ける。

声を聞くな。アレは偽物だ。
言うのは簡単だが信じさせるには部外者という立場が邪魔をする。この国へ来たばかりの彼を知っている兵士が居るはずもなく、混乱も抜け切らない現状、咄嗟の判断でサンジの声よりビビを優先するのは至極当然。彼らが土壇場で行動を変えられるはずもない。
わかっていても黙ってはいられなかった。
喉が辛くなろうとも大声で叫び続け、すぐ傍に敵が居るようなら迷わず蹴り飛ばす。
そうしながらＭｒ．２を追っていると、またしても右手側に追い詰められる兵士を見つけた。
「う、うわぁっ!?　た、助け……!?」
「死ねェ！」
「クソッ、いい加減に……！」
「白鳥アラベスクッ!!」
思わず助けに行こうとそちらに体を向けた瞬間だ。
突如全身を襲った無数の蹴りが、サンジの体を激しく吹き飛ばした。
数メートルの距離を空中で過ごし、受け身も取れずに勢いよく地面を転がる。その最中で至る所を擦りむき、血を流して、ようやく止まった時には仰向けの状態でぐったりと動かなかった。
先程の兵士が、血を流して倒れる。
Ｍｒ．２はそのことも知らず、本来の姿に戻って笑みを浮かべていた。
「んが～っはっはっは！　もう終わり？　大したことないのねい、紙ちゃんの仲間も」
数え切れないほどの悲鳴が木霊する中。砂塵が舞い上がる環境でも、つい驚いてしまうほどに晴れ晴れとした青空が視界に入る。
体に染みついて離れない痛みに苛まれながらサンジは不意に表情を消した。
怒りがある。それが力になった。
何度目かの激突の際にとっくに煙草を落としていて、思わず吸いた

くなったが、今はそんなことをしている暇はない。後回しだと決めて、口の中にあった血を吐き出す。
「あちしの能力は人を惑わし、誑かす。あんたとは悪役としての年季が違うのよう。たかが海賊風情が舐めんじゃないわよ！　んが～っはっはっはっは！」
「ゲホッ、ガフッ。てめぇは……おれが海の彼方まで蹴り飛ばしてやる」
小さく呟いた後でサンジが立ち上がった。
相手には届かなかったかもしれない。それくらい小さな声だった。だがそれでも別に構わないと思っている。重要なのは相手に届けることではなく結果だ。
今、改めて決意する。
Ｍｒ．２を倒す。そして国王軍を守ってみせる。
立ち上がった時、すでにサンジの顔つきは変わっており、その様子を感じ取ってＭｒ．２も思わず笑みを深めていた。或いは、好敵手と言っていいかもしれない。
だからといって正面から立ち向かってやるつもりはなかった。
この場は秘密犯罪会社と海賊の戦い。格闘家の試合ではないのである。卑怯などという言葉が通用する世界ではなく、それは互いが理解していた。

Ｃａｌｌｉｎｇ　Ｏｕｔ（３）

素早いバック転を繰り返し、いまだに疲労は見せず、Ｍｒ．９は飛ぶ。

砂漠の熱気に加えて激しい戦闘を行った結果、重くて厚い鎧を身に着けたＭｒ．１０は大量の汗を掻いており、脱水症状も近い。これ以上避けられるはずもなかった。

軽い動きで飛んできたＭｒ．９は、一切の手加減も無く彼の顔面に金属バットを叩き込む。

「熱血ナイ～ン！　根性バット!!」

「ぶごぉ!?」

ヒットの瞬間、鼻血を噴きながらＭｒ．１０は意識を失う。

勢いよく地面に後頭部を打ち付けて、そのまま動かなくなった。

そう離れていない場所での敗北にパートナーであるミス・テューズデーが動揺した。

彼女もまた重い鎧を身に纏っており、決して砂漠での活動が得意な二人ではない。

ただでさえ疲労困憊だったというのに相棒が負けたとあってはダメ押しだ。見るからに動じた彼女はすっかり油断していて、対峙していたミス・マンデーは素早く動く。

顔の向きを変えて視線を外したミス・テューズデーの背後を取った。

鎧があるから打撃ではダメージを通しにくい。しかしそのせいで動きは遅かった。

ミス・マンデーはミス・テューズデーの首に腕を回して、締め落とそうと試みるのである。

「そんな、Ｍｒ．１０――うっ!?」

「いい加減こっちも終わりにしようか」

一瞬の隙を見せたことが決着を決定付けた。

ミス・マンデーの逞しい腕がミス・テューズデーから呼吸を奪い、酸欠に陥った彼女は抵抗もできずに失神してしまう。全身から力が抜

けた後で地面に転がしておいた。
これでようやく決着。
少し手間取ったが、さほどの怪我も無くフロンティアエージェントを倒すことができた。
すぐにＭｒ．９が駆け寄ってくる。
ミス・マンデーと共に周囲の戦況を確認してみた。
やはりと言うべきか、国王軍が押されている。鎧を纏った兵士達が大勢倒れているのが簡単に確認できるため、相当な数がやられたのだろう。一部は抵抗を続けているが、個人の喧嘩とは違って戦争には勢いというものがある。バロックワークスの勢いを止める力はなかった。
状況は判断した。しかし一体どうすればいいのか。
あいにく彼らも元はバロックワークスの構成員。しかもアラバスタから遠い地に居た。
国王軍からの信頼も無く、いざ部隊を率いてもこの状況をひっくり返せる力量はないだろう。
辺りを見回したところで困惑してしまうのが現状だった。
「どうする。かなり押されてるみたいだぞ」
「黙ってたって仕方ないね。とにかく目に付いた奴を殴って黙らせるんだよ」
「そうするしかねぇか……どうせおれ達が何を言ったところで、聞き入れられねぇんだろうし」
「無駄口叩いてる暇があるなら行くよ」
ミス・マンデーが雄々しく一歩を踏み出した。嘆息してＭｒ．９も続こうとする。
そこへ、聞き慣れた声が聞こえてきた。
どうやら背後からだ。
「Ｍｒ．９！　ミス・マンデー！」
「ん？　ミス・ウェンズデー？」
Ｍｒ．９が振り返った瞬間、強烈な蹴りが腹を打っていて、体は面白いほど軽々飛んだ。

警戒する暇さえない。ミス・マンデーが見た時にはＭｒ．９が攻撃を受けていて、すぐ傍を通り過ぎると勢いよく地面を転げていく。意識は失っていないようだが相当のダメージだ。
そちらを見ることもできずに、ミス・マンデーは彼を蹴った人物を見る。
すでに構えているＭｒ．２が笑みを浮かべて彼女を捕捉していた。
彼女自身、Ｍｒ．２を見たことはなかったが、Ｍｒ．９を蹴り飛ばしただけで実力はわかる。
おそらく正面から立ち向かっても勝てない。
「あんた達の裏切りをゼロちゃんが知らないとでも思った？　バレてないんじゃなくて、敢えて見逃されてたのよう。どうせ紙ちゃんに使われたんでしょう？」
「うっ、ぐっ……！」
「Ｍｒ．１０達は使えなかったみたいねい。まぁいいわぁん。あんた達もお役御免よ」
有無を言わさずＭｒ．２が駆け出した。
フェイントを入れるでもなく真っ直ぐに進み、ミス・マンデーは反応できず立ち尽くす。
軽く跳ぶと足を振り上げた。当たる場所はどこでもいい。当てさえすれば倒せる。そして威圧されて動けない彼女では避けられない。
Ｍｒ．２はすでに勝ちを確信していた。
「死になさぁ～い！」
ミス・マンデーに当たる直前、しかし、突如横からサンジが飛び込んできた。Ｍｒ．２の蹴りを自身の足で受け、かなりの激痛が走るが眉一つ動かさず止める。
再び至近距離で対峙した。
Ｍｒ．２は余裕を窺わせ、逆にサンジは不思議に思うほど静かだ。
「あら、やっと追いついた？　それであちしを止められるかは微妙なところだけど」
「お前、どういうつもりだ……？」
「アァン？」

「てめぇが男だろうがオカマだろうがおれにとっちゃどうでもいい。だが、女を蹴ろうとするとはどういう了見だって聞いてんだ」
「ハンッ。何よそんなこと？　一度戦場に立てば男も女もオカマも性別なんて――」
突然、Ｍｒ．２の頬が蹴り飛ばされた。
喋っている途中で集中力が削がれていただとか、そんな話ではない。ただ単純に見えなかった。サンジの蹴りが速過ぎて視認することすらできなかったらしい。
Ｍｒ．２は粉塵を巻き上げるほど勢いよく地面を滑る。
庇われたミス・マンデーですら何が起こったかわからなかった。気付いた時にはＭｒ．２が物のように宙を飛んでいて、起き上がることすら難しそうに血反吐を吐いている。
彼女の動揺が収まらないまま、目の前に居たサンジが颯爽と歩き出した。
明らかに違う。先程とはまるで別人。
Ｍｒ．２は地面に這いつくばった状態で彼に振り返る。
「ゲフッ、ごほっ……!?」
「おれの情報も手に入れてるんだろ？　だったらこれも知ってたか」
「ハァ、ハァ……あんた」
「おれは怒りでヒートアップするクチだ」
背筋が震えるほどの怒気。何があったかは知らないミス・マンデーはつい恐れてしまった。
彼が味方であったことを心から安堵する。
反対に、彼を敵にしたＭｒ．２は何かに納得した様子で笑みを深め、口元を拭いながら立ち上がり、身構えるのではなく背筋を伸ばした。
「がっはっは……なるほど。そーいうタイプはたまに居るわよねい。ただあちしも命が惜しい。手段を選んでられる立場じゃないのよう」
右手で頬へ触れると今度はシルクの顔になる。念には念を入れて

ということか。女性であると同時に大事な仲間、どんな覚悟があっても蹴れないだろうと推測する。
サンジはその顔を見ても冷静なままだった。
「あちしの能力は人を騙し、惑わせるのが真価。頭で理解してても心と体は反応してしまうものよ～ん。あちしはこれだけで戦場を支配するの」
「そう言ってられるのも今の内だ。次にお前が自分の姿に戻った時、もう二度と誰かに化けることはできねぇぞ。おれより速けりゃ別だがな」
「試してみましょうか。あちしはこれから真正面からあんたに突っ込んでいって技を繰り出す。もちろんあちし自身の顔と体で。止めるチャンスは、ほんの一瞬ならあるかもねい」
「ああ。十分だ」
「あんたも中々イイ男だけど、あちしは誰にも止められないわぁ～ん！」
シルクの外見のまま、Ｍｒ．２が駆け出した。
宣言通り正面からサンジへ向かって疾駆する。
攻撃の瞬間、彼は必ず左手で頬へ触れ、元の体に戻る。そうなった時は攻撃を躊躇わない。
故にサンジは待った。
直立不動で一切動きを見せず、Ｍｒ．２の姿をまじまじと見つめる。
「口だけでどうにかなる世界じゃないのよ！　あちし、負けな～い！」
Ｍｒ．２の手が頬に触れ、姿が元に戻り、右手の手刀が伸ばされた瞬間。
「反行儀（アンチマナー）キックコース!!」
サンジの蹴りがＭｒ．２の右腕を捉えていた。
絶対に攻撃が当たるだろうという距離でＭｒ．２は変身を解いた。反応できるはずがない。しかし現実として、彼の右腕は蹴られ、恐ろしいほどの衝撃が走っている。それだけならいいが、驚愕によって数

秒気付くのに遅れたとはいえ、どうやら骨が折れてしまったらしい。
右腕を起点に宙へ打ち上げられて、グルグルと視界が回転しながらＭｒ．２は混乱する。
何が起きたか、わからない。
気付けば自分の体は空中にあって、右腕は動かなくて、痛みすらわからなくなっている。
驚き過ぎた弊害なのか悲鳴すら無いまま、彼は落下していった。
サンジの目の前まで落ちてきた瞬間、今度は頬を蹴り飛ばされる。
先程の比ではない速度で空中を進んでいた。
「ぶべっ!?　かっ……ギャアアアッ!?」
何メートル飛んだかはわからない。だがどうやらバロックワークスの構成員に激突したところで体は止まったらしい。彼ら数名を巻き込みながら地面に倒れる。
この時点でまだ、Ｍｒ．２は何が起きたかを飲み込めていない。
ぶつかられた部下も訳が分からないと困惑している。
そこへ、軽い動作で跳んだサンジが現れた。
「薄切り肉（エスカロッペ）のソテー！」
「うごおぁっ!?」
「ぎゃあっ!?」
着地も待たずに周りに居た部下ごと水平に蹴られた。
再びＭｒ．２の体は飛んでいってしまい、あっという間にサンジから遠ざかる。
Ｍｒ．２が飛んでいった方向を、サンジはちらりとだけ確認した。しかしなぜか追おうとはしない。方角だけ確認するとすぐに別の方向を見た。
国王軍が苦戦している。
言い換えればバロックワークスが優勢であり、我が物顔で戦場を歩いているのだ。
意を決して走り出す。
向かう先はＭｒ．２では無く名前も知らないバロックワークス社員だ。

勝ち誇った顔で武器を振り上げていた男へ接近し、振り返ることも許さず顔面を蹴り抜いた。
「ん？　ぶおぱっ――!?」
蹴られた男はボールのように飛んで、別の社員に当たって共に転がった。
周囲にもまだ数名。
サンジは一人ずつ丁寧に蹴り飛ばしていき、また別の社員にぶつけて無力化していく。正確無慈悲に行うそれらの行動は味方を驚愕させ、敵に恐怖を与えた。
淡々と社員だけを選別して蹴り飛ばす様はひどく恐ろしい様相である。
「お、おい、ちょっと待て……!?」
「オラッ！」
「ぎゃほぁっ!?」
周りから敵が居なくなると、また別の集団へ接近して思い切り蹴り飛ばす。あまりにも素早く、恐ろしいと思ったところで逃げられる速度ではない。
サンジは一分にも満たない時間で、たった一人で幾人もの敵を蹴り飛ばした。
その姿、まるで鬼神の如く。影響は大きくバロックワークスの勢いが一瞬にして消え去る。
サンジが動く度、バロックワークスが悲鳴を発して、逃げ惑う者も徐々に増えた。
反比例して国王軍に笑みが戻り、勝てる、という意思が戻ってくる。
およそ三分間。サンジは一度も立ち止まることなく戦場を駆け巡った。
敵を見つけては蹴り飛ばし、また別の敵にぶつけて、そいつらをもう一度蹴ってまでまた別の敵にぶつける。この繰り返し。一切の容赦なく、油断なく、丹念に、冷徹に、一人も逃がさずに攻撃を加えていく。
もはや狂気の沙汰だ。

彼は己の体一つで戦場を支配しようとしていた。
もうすでに何人蹴り飛ばしたのかわからない。それでも動き続ける。
背を見せて逃げる者すら逃がさない。
雄たけびを上げながら襲ってくるサンジは敵にとっては鬼でしかなく、立ち向かう気力は誰にも存在しなかった。大半の人間が広場を離れようとすらしている。
駆け回り続けた効果はあり、それだけサンジも疲弊するが、状況は確かに変わった。
「な、何なんだよあいつは……!?」
「Ｍｒ．２・ボン・クレー様はどこだ！　あのお方なら……！」
「オオオオオオッ!!」
「ひいっ!?　来たァ！」
「そこをどけェ!!」
二人まとめて蹴り飛ばして、腹に凄まじいダメージを受けた彼らはあっさり気絶してしまった。
ようやく足を止めて周囲の状況を確認する。
逃げている敵は多いが、そもそもの人数が多い。戦闘が終了した訳ではなく、至る所でまだ国王軍が戦っている状態。これを平定とは呼べない。
まだ動かなければならないか。そう思っていた時だ。
一瞬の油断があったのかもしれない。
荒れた呼吸を整えようとしていたところ、背後から接近する気配に反応が遅れた。
サンジが咄嗟に振り返ると、防御しようとしたものの、腹に鋭い蹴りが刺さる。
「爆撃白鳥（ボンバルディエ）！」
当たったのは白鳥であった。
間抜けな外見とは裏腹に鋼鉄の嘴。しなる首が蹴りの威力を高めている。
サンジの体は呆気なく飛んで、骨を軋ませる威力が彼の意識から受

け身を奪った。背中を強く地面に打ち付けてようやく止まる。その瞬間に耐えられず血を吐いてしまった。慌てて仰向けからうつ伏せになったサンジは起き上がる最中、彼を攻撃した人物に目を向ける。

姿はＭｒ．２のまま。ただし両足に、肩にあったはずの白鳥が装着されている。

どうやらさっきはアレで蹴られたようだ。

おかしな技だが間違いなく強力である。今、身をもって体験した。

Ｍｒ．２は堂々と胸を張って仁王立ちしていた。

明らかに様子が変わった姿を見て、立ち上がるサンジはプッと血を吐き出す。

「待たせて悪かったわねぃ……こっからよ。こっから本気。これがあちしの技の主役（プリマ）」

「悪ふざけに付き合う気はねぇんだが。もう変装はやめたのか？」

「フフン。もうしたくてもできない状態みたいだからね」

彼の右腕はだらりと垂らされていた。全く力が入っていないことから動かせないのだろう。

怒りを込めた一撃で感じた骨を折った感触は間違いではなかった。

少しは戦力を奪えたようだ。だがそれだけで簡単に勝てるほど気の抜けた相手ではない。本人が言うようにここからが格闘家としての本気だと言える。

見かけはあまりにも間抜け。だからこそわかりやすい。

その技の特徴は事前にキリから聞いていた。

しなる首が標的を逃さず、鋼鉄の嘴が威力を倍増させて、Ｍｒ．２の蹴りを強化する奥義。厄介なのは己の身で感じたがこれさえ攻略すれば彼に勝つことができる。

ようやく、ここまでこぎつけた。

今しばらく周囲の戦闘については忘れる。

もう一度集中すべき時だ。

最初からわかっていたこと。目の前の敵さえ倒せばこの戦場を掌握できる。

今になって再び彼らはその思考に至り、目の前の敵にのみ敵意を向

けていた。
「これだけはあんたに言っとくわ。あんたから見て右がオスで左がメスよう」
「知らねぇよ。どうでもいい、そんな話は」
厳しい目で睨み合って静止する。
集中が一時、周囲の音すら消し去った。
狙い澄ましたかのように同時に動き出す。
足運びの一つ一つさえ気をつけなければならない緊張感。一つの間違いが敗北を呼ぶ。そんな程度には実力が近い者同士の戦い。
全力による急接近の中、先に攻撃したのはＭｒ．２だ。
長い脚をさらに長くする白鳥の履物。真っ直ぐに伸ばせばあっという間にサンジへの距離を詰めていった。しかしリーチが長い故に避けやすくもしてしまう。
サンジは上へ跳ぶことで回避した。
Ｍｒ．２の頭上を取り、絶好の位置とタイミングを手にする。とはいえ、Ｍｒ．２もその行動は事前に読んでいたのか、一切慌てていない。
異様な動きにも見える様子で、背面から体を折って地面に両手をつく。
逆立ちをするように両足を振り上げたのだ。
落下するサンジと蹴りを打ち合う格好となり、さらに腕の力でぐるりと体を回転させた。
両者は一撃に全力を込め、敵を目掛けて繰り出した。
「首肉（コリエ）！」
「爆撃白鳥（ボンバルディエ）！」
蹴りが激突する。競り勝ったのはＭｒ．２だ。
鞭のようにしなった白鳥がサンジの脇腹に届き、浅いとはいえダメージを与える。空中で姿勢を崩すもののサンジは辛うじてしゃがむように着地した。
達人にしかわからない、一瞬の隙が生まれる。
Ｍｒ．２は駒のように回ると逆立ちした状態のまま彼へ向かって

飛んだ。
サンジは先程のダメージで脇腹を押さえている。まだ立ち上がれてすらいない。顔だけはＭｒ．２の動きを確認していたが、避けられる体勢ではなかった。
敢えて強く前へ出ながら蹴りを突き出す。
真っ直ぐ伸びた白鳥は避けようとしたサンジの左肩に直撃し、鈍い音を奏でる。
「うおあっ!?」
「まだまだァ！」
勢いよく倒れたサンジへさらに追い縋る。
決着をつけるなら、今。
即座にもう一方の脚で彼の顔面を貫こうと距離を詰めた。
その時サンジは、左肩を庇いながらも視線だけは絶対にＭｒ．２を逃さない。
「クラァ～！」
痛む肩を無理に動かして、両手で地面を押すと、上半身を跳ね上げた。狙いがはっきりしていたことによりそれだけで白鳥は地面を穿ってサンジを見逃す。
リーチが長い分、次の挙動が遅い。
地面を這うようにサンジがＭｒ．２へ接近した。
目では見えていながら彼も反応できない。
ブレイクダンスのように体を回転させて軸足を払った。
当然Ｍｒ．２はその場に倒れてしまい、反対にサンジが両足で地面を蹴り、跳び上がる。
「ぬぅ……！」
「串焼（ブロシェット）き！」
「ぐへぇっ!?」
片足をピンと空に伸ばして、回転しながらもう片方の足でＭｒ．２の腹を踏みつける。
回転を加えた踏みつけはひどく強烈だったが、彼も黙ってやられる訳ではない。自身の腹を踏みつけた足を即座に左手で掴み、思い切り

横へ引っ張った。サンジの体を地面に引き倒し、自身も必死に起き上がりながら、再度仕切り直しを図る。
「うぐっ!?」
「まだまだこれからよ～う！」
即座に起き上がって攻撃を行う。
わずかに速かったＭｒ．２が蹴りを放った。しかしそれは読んでいたサンジが鮮やかに避ける。
次いですぐにサンジが反撃へ出ると、Ｍｒ．２は左手の手刀で彼を叩き落とす。
「ぬおおおっ！」
「どりゃあアッ！」
蹴りは顎へ。手刀は胴体を捉える。
攻撃が当たった二人は同じように倒れて、諦めずにすぐ立ち上がる。
両者同時に脚を上げ、攻撃が交差した。
Ｍｒ．２の蹴りを目の当たりにしたサンジは掬い上げるように当て、その衝撃が伸びる白鳥の首を空へ向けさせる。攻撃の真価は外されていた。
視線がぶつかり、瞬間的に次の一手を思考する。
しかしそれも体感にして一秒も存在していないため、気付いた時には二人とも動いている。
Ｍｒ．２が足を振り回し、サンジが跳んでそれを避けていた。
彼の攻撃が空ぶって左足が伸びきった時、サンジは頭上で脚を振り下ろしていた。
「肩ロース（バース・コート）！」
「ほげぇ～!?」
振り切られた足は今度こそＭｒ．２の体を打った。
彼は一度地面で弾み、慌てて立ち上がるとサンジの姿を探した。頭上を見てもすでに居なくて、周囲を見回そうとしたところで背後に気配を感じる。
一瞬視界から外れただけで見失うほどのスピードであり、すでに右

足が上げられていた。
「腰肉(ロンジュ)！」
「ごへっ!?」
腰に強烈な一撃。とんでもなく重い衝撃が体を駆け抜けた。
痛みを堪えながら振り返れば、その瞬間に蹴りが来た。
「後バラ肉(タンドロン)！」
首の根元に蹴りが突き刺さる。歯を食いしばって耐えるが呼吸が漏れ、倒れそうになるのを必死に堪えると両足が地面の上を滑った。
倒れない。凄まじい精神力を感じた。
その姿を認めてサンジがさらに攻撃を繰り出す。そして今度は黙ってはおらず、Ｍｒ．２も自身最高であろう技を繰り出した。
「腹肉(フランシェ)！」
「アァン！」
サンジの蹴りが腹に直撃していたのと同じ瞬間、蹴りによって突き出された白鳥が彼の腹に直撃していた。二人は弾かれたようにその場から飛ばされ、地面を転がる。
どちらも想像を絶する痛み。ただの蹴りとは思えない。
血反吐を吐きながら立ち上がって、反撃を恐れずに前へ走った。
「上部もも肉(カジ)！　尾肉(クー)！」
「アァン！　ドゥ！」
地面に手をついて駒のように回転しながら攻撃すれば、Ｍｒ．２は同じく対応してくる。
「うぐっ……！」
「ゲフッ……！」
それでも二人はすぐさま起き上がって接近した。
「もも肉(キュイソー)！　すね肉(ジャレ)！」
「クラァ！　オラァ！」
しゃがんだ状態で蹴り合っても互いの体は軽々と動いて転がる。
そう大したものではなかったが距離ができた。
二人は決着の時を見て強く地面を蹴る。
一瞬の交差。互いに選んだ飛び蹴りが空中で接触する。

確実に相手の体へヒットして、二人の体に今までの比ではない衝撃が走った。
「仔牛肉（ヴォー）ショット!!」
「爆撃白鳥（ボンバルディエ）アラベスク!!」
二人は無事に着地。しかし数秒もせず、サンジが大量の血を口から吐いた。
体の力が抜けて地面に膝をついてしまい、Ｍｒ．５との戦闘で負っていたダメージもある。腹部に受けた蹴りによって、もはや立ち上がるのも困難な状態にあったようだ。
対するＭｒ．２は、しっかりと両足で立ったまま、ビクビクと震えている。
これはおかしい。異常な技だと己の体で実感している。
サンジの蹴りは接触の瞬間にのみ痛みを伴うものではなかったらしく、動き続ける心臓が体内に血を送る度、筋肉が動く度、痛みが全身へ運ばれていく。
気付けばＭｒ．２は全身に先程の一撃を浴びていた。
あっと気付いた時にはどうすることもできず。
目を見開いたＭｒ．２を、遅れてやってきた衝撃が高速で吹き飛ばした。
「あっ、ああっ……ああっ!?　ぎゃあああああアアアアッ!?」
今まさに蹴り飛ばされたかのような様子で、弾丸のようにＭｒ．２の体が宙を飛んだ。
広場の中央から、広場を囲う建物まで。およそ数十メートルを一瞬で駆け抜け激突した。Ｍｒ．２の体は埋め込まれるようにして壁に磔になり、その巨大な衝撃音は広場に居た全員を惹きつける。
大きな絶叫が注目を集めたこともある。
敵も味方も、己の目で彼の敗北を知ったのだ。
「お、おい、あれ……」
「Ｍｒ．２・ボン・クレー様だ！　まさか、敗れたのか……!?」
「そんなバカな!?　あのお方はオフィサーエージェントの上位メンバーだぞ！」

サンジは天を仰いだ。
座り込んだままで目を閉じ、静かに息を吐く。その直後、目を開いて辺りを見た。
明らかに敵が怯えている。今更、彼らに情けをかけるつもりはなかった。
疲れ切った体でなんとか立ち上がって、声を低くして問いかける。
「次にああなりてぇのはどいつだ……？」
「ひいっ!?」
「ク、クソッ！　退けェ！　ボン・クレー様が負けたァ！」
決して大きな声ではなかったが、Ｍｒ．２の敗北によって一瞬の静寂が訪れていた。脅すように言えば面白いほどにあっさり撤退を決める。バロックワークスは一時撤退を始めた。
それを見送りながらサンジは思案する。
キリの説明が正しければ、これでまだ終わりではない。
敵が背を向けて去っていく光景に、国王軍は笑みを浮かべて安堵していたようだ。
これで終わったとでも思っていたのだろう。そうでないことを告げるためサンジは歩き出す。近くに居る兵士に目を向けながら声を大きくして言った。
「いいかてめぇら、まだ終わってねぇぞ！　敵はまだこの国に潜んでる！　幹部も全員倒したわけじゃねぇ！　こっちが気を抜くのを待ってんだ！　またすぐに次が来る……これで勝ったなんて思うな！　むしろこれからが本番だ！」
Ｍｒ．５、Ｍｒ．２との連戦が彼の体を痛めつけている。
素人目でもわかるほど状態は悪い。あばら骨は何本か折れているだろうし、火傷を負った足で何度も敵の蹴りを受けた。もはや痛みすら麻痺している。
これ以上の戦いは限界を超えたものになりそうだ。
サンジの声に反応して一人の兵士が彼の前に立った。
指揮官では無さそうだ。だが勇気のある人物ではあるだろう。
先程の戦いでサンジが国王軍に味方したのは誰の目にも明らか

だった。
信用できる相手かどうかはわからない。しかし害の無い人間だろうとは思える。
命懸けで助けてくれた彼を前にして、兵士は静かに頭を下げた。
「助けてくださって、ありがとうございます。しかし、あなたは一体……？」
「王女様の騎士（ナイト）さ」
足を止めると懐から煙草を取り出して口に銜える。火を点けてみると煙というより血の味がしたとはいえ、気分を落ち着けるにはこれが一番良かった。
改めてサンジは目の前の兵士に目を向ける。
おそらく聞きたいことはたくさんあるだろう。今は味方だ。ビビのために協力し合わなければならない。時間が気になるとはいえ、答えられることには答えるつもりだった。
「まだ終わりではないのですか？」
「ああ。敵は一旦退いただけだ。こっちの疲弊を待ってる奴が居る。もうすぐさっきの連中を引き連れて戻ってくるぞ。今度はもっと人数が多いかもな」
「そんな……」
「とりあえず怪我した奴は応急処置して連れていけ。ただし安全な場所なんてない。戦闘は無理でもできることはあるはずだ」
「同行させる気ですか？」
「その辺に置いていくか？　敵に見つかりゃそれこそ命はねぇぞ」
「……確かに」
兵士は、緊張した面持ちで多くを言えずに頷く。
「我々の敵とは、一体誰なのですか……？」
「秘密犯罪組織〝バロックワークス〟。ビビちゃんがずっと探ってた連中だ」
「ビビ様が？　確かにここ数年公の場に姿を現すことはありませんでしたが……まさかそんなことをお一人でずっと？」
「いや、イガラムっつーおっさんと一緒にだ。あのおっさんも生き

てるよ」
「イガラム隊長が。それは安心しました」
安堵した顔でホッと息をつく。
真面目な人間なのだろう。初対面のサンジを相手にしても嘘はつけない様子だった。
彼はその場に立ったまま後ろを振り返り、近くに居る味方へ声をかける。負傷者の治療と死者の確認、それに装備を集めて次に備えなければならない。テキパキと指示を出してから再びサンジに振り返る。この時になればすでに彼を信用する気すらあった。
見覚えのない人間だが関係ない。国王軍が生き残るには彼の力が必要だ。
たった一人で戦場を駆け回り、敵を倒して味方を救った救世主。彼しか居ない。
「まだ敵が居るのですね。我々はどうすればよいのでしょうか」
「それをおれに聞くのか？」
「あいにく私では力不足です。それに我々の敵について、あなたの方がよく知っているようだ。できることならばこのままご助力をお願いしたい」
眼前に居る兵士は真剣にそう言っている。
その顔を見ていると気配を感じ、ふと右に視線を向けた。
疲弊した様子だが自分の足で立ったＭｒ．９と、まだ余力を残したミス・マンデーが居た。どうやら彼らも同じ意見らしい。
「あんたが居なきゃこの軍は纏まらない。まだオフィサーエージェントが残ってるんだろ？」
「ああ。とびきり面倒なＭｒ．３って奴がな」
「それなら尚更、あんたが決めるべきだ。私達も協力する」
無我夢中で駆け回っていただけだったものの、意味はあったようだ。
彼らの信頼を受けたサンジは大きく息を吐き出す。
「まずてめぇらには指揮官が必要だ。おれじゃなく実績と経験があるな。ビビちゃんはそのために先を急いだ。まずは王宮へ向かうぞ」

「承知しました」
先程の兵士が味方に指示を伝え、移動の準備を始める。広場の中は一層慌ただしくなり、疲弊した雰囲気は消え去らないが皆が協力して動き出す。
Ｍｒ．９とミス・マンデーはサンジの傍へやってきた。どことなく不安そうな顔である。
「最悪の場合、そのまま王宮で籠城戦だな。相手がどう出るかだが……」
「さっき以上の人数で来られたら、もう長くはもたないぞ」
「一難去ってまた一難か。本当に勝てるのか？　この戦い……」
「よせ、Ｍｒ．９。思ってもそれだけは口にするな」
二人の声を聞きながらサンジは目を閉じ、煙草の味に集中しながら頭を働かせる。
オフィサーエージェントの情報は一通りキリから聞いた。だが直接的な戦闘を得意とするメンバーとは違い、Ｍｒ．３という人物は頭脳戦に長ける。例えば兵士全員で広大な王宮に立て籠もったとして、おそらく突破して王宮内部に雪崩込んでくるくらいのことは可能なはず。
どんな手を使い、どう攻めてくるのかは予想できない。
そういう意味ではＭｒ．２以上に厄介な人間だった。
頼れる人間はごくわずか。国王軍は疲弊しており、仲間もまだ散り散り。
皆は無事なのだろうかと考えてしまう。
せめてもう一人くらい一味の仲間が居れば自信に繋がるのだが。
（ビビちゃん、すぐに行くからもう少しだけ待っててくれ。ナミさんやシルクちゃんは無事だろうか……他の奴らはどうでもいいが、せめて二人の状況だけでも知りたい）
「王宮へ案内します。こちらへ」
先程の兵士が戻ってきて三人に声をかけた。
目を開いたサンジは声がした方を向く。するとその兵士の背後、数メートルの距離はあって少し離れていたが、見覚えのある人影があっ

た。
「ん？　おい、そいつら……」
「ああ、彼らはついさっきまで方々を走り回って索敵や負傷者の回収をしてくれていたんです。アラバスタ最速、超カルガモ部隊ですよ」
「クエーッ！」
そこにはそれぞれ個性的ながらも、カルーと同種だろうカルガモ達が居た。隊長のカルーはビビに同行しているため不在だが、そこには六匹も立っている。
サンジは不意に表情を柔らかくする。
仲間達の安否を確認する方法を思いついたのだ。

砂漠の国の王者

王宮内部の一室で対峙したルフィとクロコダイルは、開戦の時を待って睨み合っていた。
すでにコブラを連れたミス・オールサンデーはその場を後にしている。王が奪われないのであれば気遣う必要はない。思う存分戦えるというもの。
クロコダイルは冷徹な目で正面に立つルフィを眺める。
実物を見た第一印象としては、期待以上でも以下でもない、というもの。そもそもわずかしかなかったはずの興味を大きく裏切ることはない。
これが自分を倒せる実力者だと思っているのなら笑ってしまう。
冗談として言ったなら笑ってやれる。もしも本気で言っていたのならば目利きが悪くなったとしか思えない。それともそう思わせて油断させる作戦なのだろうか？
つらつらと考え事をする間、意外にもルフィは大人しくしていた。
拳を握ってはいるが奇襲を仕掛けるでもなく、クロコダイルを睨んで動かない。
事前に聞いていた情報では出会い頭に突っ込んでくる馬鹿かと思っていたが、違うのか。
どちらにしろ興味はない。すでに彼自身の目利きは済んでいる。
これは、時間を与えるほどの器ではない。三分間ですらもったいなかった。
「一応聞いておこう。おれの前に胸を張って立つお前は単なるバカか？　それともただの愚かな死にたがりか、どっちだ」
「どっちでもねぇ。おれは海賊だ」
「海賊か……名乗るだけなら自由。重要なのはそれ相応の実力があるか否かだ」
クロコダイルの言葉にもルフィは多くを語ろうとしない。
興味なさげにそれを見て、彼は自身の左腕にある黄金の鉤爪を撫でた。

「何も聞かねぇのか」
「何が」
「おれはついさっきまであいつと話していた」
「そうか」
そう言ってもルフィは動じず、挑発に乗る様子も皆無である。
「ハッキリ言って、奴の選択は失敗だった」
あくまでも冷静なままで、挑発には乗らなかったが、それはそれとしてルフィが動き出した。
元々じっとしていられない性分なのだ。それだけ時間をかけただけ珍しいだろう。だが逆に言えばそれほどクロコダイルを危険視していたという意味でもある。
彼は恐ろしく強い。
理屈ではなく肌で感じ取って、ルフィは最初から本気で挑みかかった。
右腕を振りかぶって前に一歩を踏み出す。
その挙動にクロコダイルはわずかに眉を動かした。
「ゴムゴムのピストル!」
その場に居たまま右腕を伸ばして攻撃を行う。パンチが飛んでいくスピードは速く、常人なら腕が伸びたことに驚くだけでなく、その速度にも反応できない。
クロコダイルは、一切驚かなかった。
一歩も動かずに顔の角度を変え、それだけで回避する。外れたパンチは彼の顔のすぐ傍を通り抜けていき、後方にあった壁を殴って破壊し、拳大の破壊の跡を残した。
「……おい。何だそれは」
驚いてはいない。だが、素直な心情を言えば驚いてもいる。
クロコダイルの表情は不思議と優れなかった。
素早く腕を引き寄せたルフィは止まらずに行動する。
さらに数歩を進んで予備動作を行いながら、今度は右足を伸ばして蹴りを放った。
まるで事前に察知していたかのように、クロコダイルは軽やかに跳

んでそれを回避する。
「ゴムゴムの鞭ィ！」
飛び越える形で回避して、足の下を蹴りが通り抜けた後で着地する。大した労力ではない。疲れることもなければ焦ることもなかった。
脚が戻ったルフィは勢いよく駆け出す。
やはりクロコダイルの表情は厳めしいままであり、相手を舐めるという態度さえ見せなかった。
「ゴムゴムの！」
「ふざけてんのか、てめぇは」
「ガトリング！」
両腕を高速で動かして無数のパンチを繰り出す。
辺り一面を制圧するような手数の多さに、普通ならば防御するか、或いは反応できない。しかし彼はそのどちらでもなく、ほんの些細な動きでルフィの腕を一つずつ回避していく。
それは疲れるほどの動きではない。
それは散歩に来たと言われても驚かないほど小さな動き。ただ揺れているだけのように避ける。
ようやくルフィの表情に陰りが見える。
攻撃を止めた彼はもっと接近しようと駆け出して、策も弄さず正面から近付く。
クロコダイルは動きを止めて彼を見ていた。
バカ正直に真っ直ぐ向かってくる姿。哀れだとしか思っていない。
「まさか本気でやってるのか……？」
「ゴムゴムのォ！」
右腕を後方へ伸ばして、本人がクロコダイルの眼前に到達した瞬間に勢いよく引き寄せる。
溜めた勢いをそのまま利用したパンチが繰り出された。
「銃弾（ブレット）！」
クロコダイルはそれを一歩横に動いただけで避ける。
まるで遊んでいるかのように。ルフィの攻撃は悉くが外れていた。

全てクロコダイルが的確に、最小限の動きで回避するためである。
動きが速い訳ではない。身体能力が特別優れている訳ではない。なのに当たらない。
ルフィは尚も攻撃を続けた。
「おおおおっ！　スタンプ！」
左足を真っ直ぐ伸ばして蹴りつけようとした。クロコダイルはさらに一歩動いて避ける。
「斧！」
右足を天井に向けて長く伸ばし、引き寄せる勢いを利用してかかと落としを放った。
後ろへ少し下がるだけで避けられてしまう。
「大鎌ッ！」
両足で強く地面を蹴って前へ跳び、両腕を長く伸ばし、挟み込むように攻撃する。それは高く跳び上がることで頭上を越えられてしまった。やはり当たらない。
着地したルフィは即座に振り返る。
避けるばかりで反撃はない。なぜかじっと見つめるだけだ。
「ゴムゴムのォ！」
今度はルフィが高く跳び上がってクロコダイルの頭上を取った。
両足の裏を合わせて、素早く足を伸ばして攻撃する。
敵は真下に居る。上手く当たればかなりのダメージが与えられるはずだ。
「槍！」
またしても一歩。たった一歩で避けられる。
驚くほど遠くに居る訳ではない。目を疑うほど素早く動いている訳ではない。どれもこれも当たったとしてもおかしくない威力と速度の技ばかり。尚且つクロコダイルの動きに秀でたものは見られない。それなのになぜ一度も当たらないのだろうか。
考える暇すら惜しいとルフィはとにかく動き続ける。
空中で脚を引き寄せた後、両腕を伸ばして壁にある窓枠を掴み、飛来した。

「ロケットォ！」
もちろんクロコダイルに体当たりするために腕を縮めて飛んだのだが、彼は慌てる様子も無く歩いてその場を離れ、ルフィに背を向けて回避した。
弾丸と化したルフィ自身は壁に激突し、痛みはないためすぐに立ち上がる。
先程からほとんど距離が変わらない。やってることに変化が無い。ただ技を変えただけ。当たるという確信が一度も得られないままだった。
この時、クロコダイルは険しい表情を見せている。
感じるのは憤怒。そうでないとしたなら、虚無感だろうか。対照的と言える二つは同時に存在しているらしく、ルフィが感じ取ったかは不明だが、もはや隠そうともしていない。
常人ならばすでに怯えて動けなくなるほどの迫力を醸し出していた。
「まさか本気でやってんのか？　それを」
「おれはいつだって本気だぞ。お前をぶっ飛ばす！　ゴムゴムの――！」
腕を後方へ思い切り伸ばしてさらに捻じった。
クロコダイルへ接近するため勢いをつけて走り出し、正面からの攻撃を試みた。
「回転弾（ライフル）！」
回転を加えた強烈なパンチを真っ直ぐ突き出した。
またしても鮮やかに、子供と遊んでいるかのように余力を残して回避されてしまう。
それでもめげずにルフィは強く踏み込んだ。
右腕で放ったパンチは壁に到達して一部を破壊するが、そちらはどうでもいいとばかりに確認しようともせず、すぐに引き寄せる。そして体ごと回りながら蹴りを繰り出した。
やはり避けられた。先程からそう大きく動いていない。
もはやそういうものだとすら思って、次なる攻撃に集中する。

「んん！」
「よくわかった……お前という人間の器がな」
「ゴムゴムの！」
なぜか立ち尽くしているクロコダイルの懐へ飛び込んで、その時には両腕を伸ばしていた。
限界まで力を溜め、引き寄せる力を使って強力な一撃を叩き込む。
今度はもう逃がさない。完全に避けられない位置に入り込んでいた。おまけにクロコダイルはまるで動こうとはしていないため、必ず当たる。
ルフィは自身の持てる力全てを注ぎ込んで攻撃を繰り出した。
「バズーカッ!!」
そして今度こそ彼の体に当たった。突き出された掌底は腹に直撃する。
その瞬間、クロコダイルの腹は消し飛んで、辺りに勢いよく砂がばら撒かれた。
驚愕したルフィが視線を上げると冷徹な瞳に気付く。
クロコダイルは自然系（ロギア）、スナスナの実の能力者。
全身が砂でできているため、たとえ攻撃が当たっても砂に変わって攻撃を受け流してしまう。ようやく触れたルフィ本人が感じた通り、ダメージは微塵も伝わっていなかった。
視線がかち合って、不思議と永遠にも感じるほど長い一瞬に囚われる。
やがてルフィは、クロコダイルの口が動くその瞬間を目の当たりにする。
聞こえたのはひどく冷たい声であった。
「失望したよ」
直後、腹部に異物感を感じ、ドシュッと奇妙な音を聞いた。
呆けた状態で自分の体を見下ろしてみる。
クロコダイルの鉤爪が腹を貫いていて、大量の血が流れていた。腹に刺さった爪は背中まで貫通しており、異常に気付いた瞬間、激しい痛みに襲われる。

声すら出せないルフィの体は、軽々とクロコダイルの左腕に持ち上げられた。
「おれをぶっ飛ばす？　大層な野望じゃねぇか」
四肢から力が抜けて、だらりと垂れ下がる。
持ち上げられた彼の体からは力が抜けており、漏れ出した血がぽたぽたと落ちる。
「口先だけのルーキーなんざいくらでもいるぜ、麦わらのルフィ……」
相手に勝った快感すら無く、酔いしれることも無く、クロコダイルはむしろ、怒っていた。それは言葉よりも雄弁に彼の表情が物語っている。
勝ったところで嬉しくもなんともない。それどころか腹立たしさを感じている。
鉤爪で貫いた細い体を揺らし、彼はつまらなそうに語った。
「覇気も使えねぇ、水も使わねぇ。おれの弱点なら知ってたはずだ。何一つ対策を用意してねぇお前の態度は……おれを油断させるためか？　それともただのバカだったのか」
「うっ、がふっ……！」
「くだらねぇ。お前を選んだことが、人生最大の失敗だったな」
気が遠くなりかける。体が、腹部が熱く、ルフィは必死に自分自身と戦っていた。
このまま気を失う訳にはいかない。まだクロコダイルを倒していないのだ。
そんな彼の必死な努力を嘲笑うかのように、クロコダイルは冷たい声で語る。
「お前のようなバカが船長をやるから仲間が死ぬ。力と勢いだけで勝てるほど甘くねぇんだよ、このグランドラインはな。イーストブルー最高額も所詮はこの程度だ」
ずるりと鉤爪を抜いて、ルフィの体が地面に捨てられた。
彼は仰向けに倒れ、クロコダイルは何の感慨も無く見下ろす。
「結局、お前に使いこなせる代物じゃなかったってことだな」

「ゲホッ、ガハッ……使う……？」
「お前には過ぎたオモチャだ。返してもらう」
そう言って、ひどくあっさり背中を向ける。
クロコダイルは外へ向かい、その場を後にしようとしていた。
必死に体を動かすルフィがうつ伏せになって彼を追おうとするが、自分が思う以上にダメージが大きい。腹から背まで貫通しているのだ。いくら彼が頑丈でもすぐには動けなかった。
彼の背が遠ざかる。
必死に手を伸ばそうとするも、伸びるはずの彼の腕は届かない。
「ぐっ、待て……」
クロコダイルは振り返ろうともせずに去る。すでに関心を持っていない。
「おれは、お前を……ぶっ飛ばすんだ……」
視界が霞む。
もうそこに居るのかもわからない。
「クロコダイル……！」
そうして、ルフィの腕は力なく落ちた。

ＹＯＬＯ

アルバーナ、メディ議事堂。
その表通りにおいて、四人の人間が向かい合って立っていた。
一組は麦わらの一味、ゾロとシルク。
アルバーナ突入後、ゾロのおかげで多少迷ったりもしたが、おかげで彼自身は標的と定めた人物に出くわすことができた。凶悪そうな笑みを浮かべて上機嫌である。
その相手こそ、彼らの前に立つＭｒ．１とミス・ダブルフィンガーであった。
「坊主頭の男と腰が特徴的な女性……間違いない。Ｍｒ．１とミス・ダブルフィンガーだよ」
「へっ。奇しくも狙った相手を見つけたわけだ」
「ゾロのせいで余計な時間使ったけどね」
「うるせぇ。その分こいつらをさっさと倒せばいいんだろ」
ゾロは早くも挑発的な態度で刀を抜く。視線にあるのはＭｒ．１ただ一人だ。
曰く、彼は剣士に負けたことがないらしい。
そんな相手に勝った時、己もきっと強くなっているはずだと確信している。
先程からずっとゾロはこの調子だ。当初から自身の相手はＭｒ．１と決めており、それ以外に会えば当然倒すが、あくまでも狙いは彼一人に絞っている。
呆れた様子で溜息をつくシルクは当然、ミス・ダブルフィンガーと戦うことになる。
それは相手側も察しているようで、文句の一つも無く意志を疎通させていた。
Ｍｒ．１が無言で腕組みを解く。
それと同時にミス・ダブルフィンガーが煙管から口を離して煙を吐いた。
「向こうはやる気みたいね。異論は？」

「必要ねぇ。標的を始末するのみだ」
「そうね。それじゃ、私は向こうのお嬢さんを」
妖艶に微笑んでミス・ダブルフィンガーが歩き出す。一歩踏み出すごとに大きく腰をくねらせ、特徴的な歩き方で細い路地に入ろうとしていた。
姿を消す前にシルクへ視線を向ける。
ついて来い、と言いたいらしい。
「ウフフ。男同士の対決を邪魔したくないの。私達は私達で楽しみましょう？」
「楽しむ気なんかないよ。私達は、勝ちに来たんだ」
応じてシルクも歩き出す。
共に同じ路地へ入って、表通りを後にし、裏通りへと移動した。
表通りからはずいぶん離れた後だろう。男達の姿が見えず、声が聞こえなくなった場所で、二人は改めて向かい合う。
裏通りは表通りよりも道が狭い。建物に左右を挟まれ、隠れる場所もあるとはいえ、カマカマの能力で風を起こせる彼女にとっては有利な場所だろう。
シルクはゆっくりと剣を抜いて右手に持った。
敵は一人。Ｍｒ．１と肩を並べるバロックワークス屈指の実力者、ミス・ダブルフィンガー。
油断はできない。脳内で改めて彼女の能力を反芻する。
彼女は、トゲトゲの実を食べた〝全身棘人間〟。
全身どこからでも棘を生やすことができる能力を持っており、その性質上、近接戦闘において真価を発揮するタイプ。中・遠距離を得意とするシルクとは正反対の人間だ。
しかし、シルクとて剣術を修める者。たとえ我流だとしても全く対応できない訳ではない。
地形の有利もある。彼女を止めるのは自分しか居ないと強く自覚していた。
「緊張してるのね。そのままだと本来の力が出せないわよ。もう少し気楽にしたら？」

「バカにしないで」
大人の女性らしく余裕を見せるミス・ダブルフィンガーは身構えもしていない。
果たしてそれは自分程度が相手ならば本気になる必要がないと言うのか。
ムッとしたシルクは落ち着いて剣を構える。
「戦う前に一つだけ確認したいのだけれど」
「何？」
「あなた、カマカマの実の能力者よね？　主な戦法はかまいたちを生み出すこと」
バレている。
ほんのわずかだがシルクは動揺した。
「私のことも知っているんでしょう？　私はトゲトゲの実を食べた棘人間。私自身の体なら髪も肌も服も棘にすることができる。この辺りの壁なら一突きで貫通できるわ」
余裕の表れなのか、それとも動揺を誘っているのか。ミス・ダブルフィンガーは自らの能力を簡潔に解説した。それもすでに知られていると気付いた上での行動のようだ。
どう判断すべきなのかシルクは逡巡している。
如何なる企みであれ、この時点ではミス・ダブルフィンガーが優位に立っていたに違いない。
「キリは元気？」
「そんなこと聞いてどうするの？　キリは私達の仲間だよ」
「つれないのね。昔の仲間を心配することがそんなに不思議かしら」
彼女の心が読めない。ミス・ダブルフィンガーは不思議な女性だった。
少なくとも大人びた雰囲気を纏っていることは間違いない。だがその奥に簡単には読み取れない不明瞭な何かを感じる。それがシルクに恐怖心を抱かせた。
冷静になれ。自分を見失いさえしなければきっと勝てる。

そう信じて剣の柄を握り直した。
シルクの様子に気付いたのだろう。ミス・ダブルフィンガーは優しく微笑み、そっと煙管を仕舞い始める。そして警戒していない態度で辺りを見回した。
道は狭く、左右に建物。道には樽や木箱、割れた瓶やカップ、家の残骸が散乱している。
事前の攻撃で荒れ果てた様子だった。
それを確認した後、再びシルクに視線を戻した。
「私もね、キリに鍛えられたの。間接的にサー・クロコダイルに鍛えられたとも言えるけど」
「それが……何？」
「あなたと私じゃ相性が悪いかもしれない。だけど」
ミス・ダブルフィンガーは唐突に、急ぐ様子でもなく歩き出した。
「暗殺のプロである私と、海賊のあなた。果たして能力の相性だけで勝負が決まるかしら」
「あっ、待て！」
慌ててシルクが剣を振り下ろす。しかし一足遅かった。
かまいたちが生じた時にはミス・ダブルフィンガーは開かれたままの裏口から家の中へ入り、姿を消していた。刀身から発生した風は無人の裏通りを走り抜けていく。
まさか彼女は知っているのか。それとも考察した上で辿り着いたのか。シルクの能力にある弱点に気付いていたのなら厄介だ。
シルク自身、自覚していることがある。
言うなればそれは能力の熟練度の問題でもあるかもしれないが、現状できないことが多いことは自覚していたし、カマカマの能力には更なる可能性があるとキリから伝えられていた。
シルクはかまいたちを起こすことができる。
発生した風は刃となって触れる物を切り裂き、程度にもよるがダメージを与える。
だが現状、シルクが起こせるかまいたちでは触れる物なら全て両断できる訳ではない。初めて使用した時は暴走気味だったため鉄の砲

弾さえ切り捨てたが、あれ以来、岩さえ真っ二つにすることはできていない。修練を積んでも威力に関してはあまり自信がなかった。
彼女の攻撃は、遮蔽物に隠れてしまえばなんとか耐えられる程度の物がほとんどなのだ。
力を溜めれば威力は変わるだろうが、その分風としての避け辛い性質は失われる。
今のところは一長一短。力を抜けば敵を斬れず、力を入れれば軌道が読み易い。
もしそこまで考察されているなら何か策を考えなければならない。
辺りを見回す。
狭い道は敵の逃げ場を少なくすると思っていたがとんでもない。むしろこの環境は姿を隠す場所の方が多いだろう。家の中に隠れられてしまうと、隠れた敵だけを斬る技など彼女にはない。だからといって敵を追って家に入れば近接戦闘を余儀なくされる。
シルクは立ち尽くしていた。ミス・ダブルフィンガーの行動で深い疑念に囚われている。
確かに能力の相性はあるはずだ。しかしそれ以上に使用者の人格が影響する。
彼女の去り際の言葉が、シルクを惑わせた。
(相手は暗殺のプロ……海賊とは違う。どこから来る？　どうやって戦う？　とにかく落ち着かなきゃ。冷静に行動すれば、どこから来ても対応できる……)
深呼吸して心を落ち着けながら周囲に目を走らせる。
今から家の中へ突っ込んでもきっと居ない。敵はすでにどこかから奇襲するのを狙って移動しているはず。ならばどこから来るかを予想して返り討ちにする。
隠れられる場所は多くても、人の死角を狙うなら場所は限られるのではないか。
思案するシルクの目は周囲の状況からいくつかのパターンを考え出した。
暗殺のプロ。近接戦闘の名手。

一撃で人間を殺すことができる技量と能力を持っている。
ミス・ダブルフィンガーはまず間違いなくどこかから接近してくるはずだ。周囲を警戒していつでも対応できるように体から余分な力を抜く。
幸い彼女は周囲の風を感じ取る体質を手に入れている。
異常があればすぐに気付けるはずだ。
周囲を警戒する緊張状態のまま、しばし時間が経った。ミス・ダブルフィンガーはまだ来ない。正確な時間はわからないが徐々に精神が摩耗していく。
迎え撃つ立場になればこれがある。嫌でも恐怖と戦い続けなければならない。
（どうしよう。今から追いかける？　ううん、下手に動いたらそれを狙ってるのかもしれない。今動くのは逆に危ないかも……）
待つ時間が長いため、必然的に考える時間が増えてしまう。
（だけど、もし、彼女がそれを狙っていたら。ここに居ることがむしろまずいとしたら――）
不意に考えた悪い展開が現実のものとなる。
突然、背後から物音が聞こえた。ついに来たと思って即座に振り返り、相手を確認する前に剣を振り抜く。聞こえてから攻撃まで一秒足らずの早業だった。
しかし放たれたかまいたちは無人の路地を駆け抜けていくのみ。
誰も居ないことに気付いたシルクは自分の心臓が跳ねたのを感じた。
「どっちを選んでも不正解よ。どちらにしてもあなたは逃げられない」
「しまっ――!?」
すぐ後ろから声をかけられ、振り返り様に剣を振ろうとする。しかし完全に剣が振り切られる前に長く伸びた棘で受け止められて、かまいたちは発生しなかった。
真後ろにミス・ダブルフィンガーが立っていた。気配を感じさせず、物音も立てず。

右腕は武器になるほど長い棘に変化していて、左手は五指だけが棘になる。
超至近距離で武器を押さえられた状態。反撃はおろか防御も許されず、回避するためには冷静さが足りない。ミス・ダブルフィンガーの左手がシルクの頬を切り裂いた。
「スティンガーフィンガー！」
「あうっ!?」
見栄えはただのビンタだが、鋭い棘が肉を裂いて浅く抉った。
驚いたシルクは痛みを感じながらその場に倒れる。だがいつまでもしゃがんでいては刺殺されるだけだ。すぐに気付いて転がるように彼女から離れた。
半ば無意識の反射的な行動。しかし意味はあった。
少なくとも腕は届かない距離を作って、すかさず剣を振ってかまいたちを飛ばす。
流れるような行動とはいえあらかじめ予想はできていたのだろう。
ミス・ダブルフィンガーは慌てずに移動した。
彼女が立っていた場所は家に入るための窓が近く、ガラスは割れて存在しない。シルクが剣を振り下ろす様を眺めて、優雅な動きで家の中へ退避したのだ。
「フフッ……」
「鎌居太刀（かまいたち）！」
ミス・ダブルフィンガーを狙ったかまいたちはまたも建物の外観を撫でるだけに終わり、本人には触れることすらなく通過する。風がどこかへ消えた後、そこに残っているのは呆然とするシルクだけだった。
身体能力が優れているとか、特別な力があるためではない。思考の違いだ。
彼女は初めて出会ったシルクを掌の上で躍らせていた。
追うべきか、追わないべきか。再び逡巡してしまうシルクが焦る。
これもきっと作戦の一つ。勝つためには早急にどちらかを選ばなければならないのである。

「さっきは確かに後ろから聞こえてきた。だけど本人は前から来て、一体……」
「簡単な仕掛けのブービートラップも、時間差を設ければ利用価値はあるわ」
今度は頭上から聞こえてきた。
咄嗟にシルクは駆け出し、その場を離脱する。
その直後、さっき居た場所にミス・ダブルフィンガーが降ってきて、靴の裏に鋭利な棘を生やした状態で地面に着地する。避けなければ脳天に穴を開けられていただろう。
「スティンガーステップ！」
「くっ……今度は、上……！」
「フフ。射程距離に入ったわよ」
妖艶に笑い、靴の裏の棘はすぐに消え、今度は両腕が棘になった。腕自体が棘だ。剣さえ受け止めるその腕は武器の領域にあり、それこそ石造りの壁を貫通してしまうほどの殺傷力を持つ。絶対に受けてはいけない。
転びそうになりながらもシルクは距離を取ろうとする。
走りながらではあったが剣を振ってかまいたちを飛ばし、彼女を迎え撃とうとした。
その行動も想定の範囲内。
地面を蹴って跳ぶミス・ダブルフィンガーは、棘を生やして壁に着地し、垂直に走り出す。
先を読んでいるためか行動に迷いが無く、何より能力の使用が速い。
彼女の動き自体も素早く、虚を衝かれたシルクは行動が少し遅れてしまった。
「そんなっ!?」
「能力は使い方次第で強くなる。これが私の使い方」
「か、鎌居太刀（かまいたち）！」
考える余裕を失ってシルクが我武者羅に剣を振るった。放たれるかまいたちは目に見えず、目にも止まらぬ速さで迫るが、ミス・ダブ

ルフィンガーは高く跳ぶことで回避する。
再びシルクの真上から落下してきた。
咄嗟に跳んで回避して、彼女の下から逃げ出す。
「きゃあっ!?」
「あら、惜しい」
辛うじて回避すると即座に起き上がり、あくまでも距離を取ろうとする。
警戒しながら離れようとするシルクを見て、ミス・ダブルフィンガーは余裕を見せた。だが彼女自身も反撃を受けないために今度は距離を取る。
「ええい!」
素早く剣を振るってかまいたちを飛ばすものの、一足先に動いていたミス・ダブルフィンガーは壊れた窓から家の中へ飛び込み、事なきを得る。無人の路地を強風が駆け抜けて、攻撃が成功していないことを認識したシルクは歯噛みする。
行動が読まれていた。動き出しが速いため攻撃が当たらない。
事前に情報を手に入れていたからこその速度。一筋縄では勝てない。
迷う暇すら無いと感じてシルクが後を追う。
このまま逃がせばさっきの二の舞。またどこかから奇襲を受ける。そうならないために敢えてこのまま追いかけることを決めた。
警戒していたとはいえ、窓に近付いた。
いつでも剣を振れるように強く柄を握り直してもいる。
窓へ飛び込もうとしたその時、内側から鋭利な棘が伸びてくる。
反射的にシルクは仰け反ったが、逃げるほどの時間はない。
左肩を貫かれる。同じタイミングで飛び出してきたミス・ダブルフィンガーに押され、勢いよく地面へ倒された。シルクの肩を貫いた右腕の棘が地面に突き刺さり、完全に固定されてしまう。
激痛が走るだけではない。逃げ場を失ったのだ。
「うあああっ!?」
「終わりね。一刺しで逝かせてあげる」

「ううっ、いやだ！　まだ終わらないよ！」
右腕を棘に変えて左肩を貫き、すでに左腕を棘に変化させ、彼女の顔を貫こうとしている。
微笑みを湛えるミス・ダブルフィンガーを睨みつけ、シルクは咄嗟に右腕を上げた。
押し倒された衝撃で剣は手放してしまった。だがまだ手は残っている。彼女の能力は、自身の体からも使用することが可能だった。
人差し指と中指を揃えて伸ばすと小さく振るう。
決して強力とは言えないが、確かに風を起こすことはできた。
ミス・ダブルフィンガーに向けて指を振り、超至近距離でかまいたちを当てる。
彼女の体は力強く押し上げられた。
空へ打ち上げられて、左肩から抜けていく棘が激痛を与えるも、シルクは必死に耐える。
「こんなところじゃまだ死ねない！」
「うっ――!?」
殺傷力は大したことがない。頬をわずかに切った程度。
ダメージは少なかった様子とはいえ、それ以上に吹き飛ばす力が強く、ミス・ダブルフィンガーの体は無理やりシルクから引き剥がされる。
刺さったままだった棘も無理に引き抜かれて、彼女は背中を打って地面へ転がった。
シルクは素早く起き上がると肩を押さえる前に剣を拾う。
片手で構え、素早い動きを見せるミス・ダブルフィンガーを視線に捉えた。
「やるわね。流石に度胸は据わってる」
「ハァ、ハァ……！」
気丈に振舞いながらもシルクは内心穏やかではいられない。
先程棘を刺された左肩に、ぽっかりと大きな穴が開いている。血はとめどなく流れてきて、激痛が消え去ることはなく、試しに左手を動かそうとするがひどく難しかった。

左腕は使えない。
この状態で戦わなければならないらしい。
「抵抗すればするほど、そうして痛みは増えていくだけ。何もしなければ楽に殺してあげる」
「ハァ、嫌だ！」
「残念ね。それならただでは死ねないわよ？」
両腕が元の形に戻されて、腰に片手を当てる。
魅惑的、且つ特徴的な歩き方で彼女はまたしても家の中を目指して歩き出した。
「体中が穴だらけになるかもね」
「ご心配なくっ。もう受けないから……！」
「フフ、そう。プロのお仕事、見せてあげる」
余裕綽々に告げて、彼女は悠々とその場から歩き去った。シルクは何もせずにただ見送る。攻撃しなかったというより動けなかった。肩に開いた風穴の激痛で気を失いそうにもなり、立っているだけで辛く感じている。
一刻も早く止血しなければまずいとは思うが、周囲への警戒心が判断を遅くさせた。
結局、外套の袖を破った彼女は肩に巻き付けて止血を行う。その間も奇襲を恐れて心が休まる時間は存在せず、視線は絶えず周囲を警戒する。
右手と口で何とか布を縛り終えた。
それからシルクは改めて考える。果たして、自分はどうするべきであるのか。
逃げることはあり得ない。だが正面から戦いを挑めない以上、無策で勝てる相手ではない。
たった一撃。それだけで左腕が使えそうになかった。
おそらく彼女の攻撃は全てが必殺。もし当たり所が悪ければたった一度で殺される。暗殺のプロという話は決して冗談ではないようだ。
奇襲を許せば一瞬で殺される。それ故に警戒を緩めてはいけない

ことを頭に植え付けられた。
（どうしよう……ここに居たらまた死角から攻撃される。こっちから探す？　でも敢えてそれを待ってる可能性もある。さっきは私の行動が読まれてた……）
肩を刺されたのは、ひとえにミス・ダブルフィンガーの予想が当たったからだ。
戦闘の経験が豊富なためか、彼女の方が何枚も上手。迂闊に動けば手痛い反撃を受ける。
苦しげな顔で考えるシルクの頬に汗が伝った。
（逃げるふりをして注意を引く……後ろから追ってくるなら攻撃は当てやすいかも）
このままでは埒が明かない。何か行動を起こさなければと一歩を踏み出しかけた時だ。
嫌な想像がパッと頭の中に浮かんで、思わず足が止まってしまう。
（だけどもし、追ってこなかったら？　私が逃げ延びることはできても、他のみんなが狙われるかもしれない……）
相手の姿が見えないだけに、どう動いているのかを確認する手立てはない。たとえ演技だとしてもその場から逃げ出した時、もしミス・ダブルフィンガーがシルクを追わなければ、彼女の次の行動は誰にも読めなくなる。きっと仲間の誰かが死角からの奇襲を受ける。
それだけはだめだと、動きかけた足が地面に縫い付けられた。
少なくともこの場に居る限り、彼女は自分を狙うはず。
これは賭けだ。もしそうでないなら耐えることすら無駄になってしまう。
シルクは動かなかった。敢えてその場に留まることで注意を引き、仲間を守る選択をする。
その分、自分を危険に晒すことになるが、覚悟はできている。今更逃げるつもりはない。どこから襲われようと必ず勝って仲間の下へ辿り着く。
覚悟を決めれば恐怖など関係ない。
足を開いて腰を落とし、身構えたシルクは右手で剣を持って辺りを

警戒する。
確かに左腕は潰されたかもしれない。だがまだ右腕も足もある。
そして何より、今日まで鍛えた悪魔の実の能力があった。まだ諦めるのは早過ぎる。
敵を待つ間シルクは思考する。
自身の能力でできること。できないこと。相手と自分の相性。受け取った情報の整理。
カマカマの能力で勝つにはどうすればいいのか。あくまでも勝つために思案した。
（やっぱり指先だけじゃ攻撃力が足りない。だけど剣を片手で振っても……このままじゃ多分ダメなんだ。あの人に勝つためには、これだけじゃ）
能力を使う練習なら、手に入れた日からずっと続けてきた。けれど今でもまだ足りない。
きっと発想その物を変えないといけないのだろう。
キリは言っていたはずだ。鍛えれば鍛えるほど能力は強くなると。これまで十分に鍛えてきた。あとはこれまでとは違う発想に辿り着けるか否かだ。
（キリによれば、カマカマの実は〝特殊な超人系（パラミシア）〟……ロギアと違って体質その物が風になるわけじゃないけど、風を感じやすくはなってる。何より、体のどこからでもかまいたちを、風を起こせる能力を手に入れた）
警戒心を絶やさずに待ち続ける。
敵は、ミス・ダブルフィンガーはその場を動かない彼女を見てどう思うのだろうか。
余計なことを考えている余裕はシルクにはなかった。
（今のままじゃダメなら、この能力をどう使えばあの人に――）
「私に勝つ方法は思い付いたかしら？」
少し距離があるとはいえ、背後から聞こえた声に一瞬動揺した。
シルクは咄嗟の判断、というより体に染みついた慣れで行動しており、振り返りながら剣を振るってかまいたちを飛ばしていた。

その行動はおそらくそれなりに修練を積み、戦闘も経験して身に付いたものなのだろう。それ自体を責める気は無いが、彼女の目から見ればあまりにも浅はか。

屋根に立っていたミス・ダブルフィンガーは素早い動作で高く跳び上がる。

シルクが放った目に見えないかまいたちを飛び越えるように、彼女自身の頭上も越え、落下してきた時には再度背後を取っていた。

着地と同時、再び両腕が棘に変わる。

長さは違ってもまるで槍。振り返ろうとするシルクに、素早く接近して突き出した。

「あうっ――!?」

またしても鮮血が舞い、地面を赤く汚す。

現状、苦戦は全くしていない。

ミス・ダブルフィンガーは口角を上げて微笑んだ。

ＹＯＬＯ（２）

乾いた砂の上に両膝をついたシルクは、辛うじて動かせた左手で、右の脇腹を押さえていた。
反射的な回避を行ったものの、避け切ることはできなかったようだ。串刺しになっていない分、肩に比べれば規模が小さいとはいえ、確実に肉を削がれている。彼女が跪いてしまったことも責められないほどの重症だった。
ミス・ダブルフィンガーはシルクの前で微笑む。
今のところ、彼女を見直すほどの何かは見つかっていないというのが正直な感想だ。
「諦めないなら、もっと辛くなるだけよ」
「うぅ、くっ……ハァ、ハァ……！」
「まだやるつもり？」
「まだ、負けてないよ……！」
「強情ね。その度胸だけは認めるけど」
左肩と脇腹。風穴が二つ。血がだくだくと流れ落ちる。
思わず顔を伏せてしまいたくなる疲労感を感じたが、目の前に敵が居てはそれもできない。必死に顔を上げたシルクだが呼吸は荒れたままだった。
激痛に耐えて脂汗を掻いており、明らかに顔色も悪くなっている。
あまりにも辛そうな姿に、ミス・ダブルフィンガーの様子は変わらなかった。
「辛いでしょう？　もう頑張らなくていいわ。楽にしてあげる」
「ハァ、ハァ……絶対、負けない……！」
「強がらなくてもいいの。逃げなかっただけあなたはよくやったわ」
ミス・ダブルフィンガーが右腕を鋭利な棘に変化させる。能力の使用は一瞬の出来事だった。
「あなたの能力は確かに特別よ。風を起こすパラミシアなんてそうそう居るものじゃないわ。だけどだからこそイメージが難しい。自

分の能力を理解することは簡単じゃない」
「そんな、こと……」
「その点私はトゲトゲの実。イメージはし易く、殺傷力は抜群。形状的に攻撃の方法は突きに限定されるけれど、一点集中の破壊力はとても暗殺向き。近付くことさえできれば標的を仕留めること自体は難しくない。あなたの体で証明したようにね」
そっと一歩を踏み出した瞬間、シルクは立ち上がろうともがいて後ろに下がった。
ミス・ダブルフィンガーはそれを無駄だとは言わない。
「例えば、ここまで自分の能力を解説してみても、あなたが勝つ要素は存在しない」
「そんなことない、よ……そんなの、やってみなきゃわからない」
「それじゃあ、あなた。集中しなくても能力を使えるの？」
改めて問われるとシルクの表情は曇る。
激痛に苛まれて確かに集中できていない。練習はもちろんした。しかしこの状態で練習通りの技が出せるかと言われれば素直に頷くことができない。
たったの二度。攻撃を受けたのは二回だけ。
この二回が恐ろしい。どちらも本当ならば彼女を殺せていた攻撃だ。
ミス・ダブルフィンガーの語り口調は敵とは思えないほど優しい。諦めることは決して間違いではない、そう伝えるかのように。
悔しさが募って、一方で諦めようとは思わない。
たとえ彼女が善意で言っていようが、挑発のつもりだろうが、シルクの心は折れていなかった。
「私がやらなきゃ……勝たなきゃ、仲間が困るんだ」
「美しい友情ね。だけどこの世界では何の意味もない」
さらに一歩、ミス・ダブルフィンガーがゆっくり近付く。
シルクは必死で立とうとしているがまだ立てない。
「どれだけ美しい理由があっても、勝てなきゃ何の役にも立たないのよ」

「くっ――！」
強く踏み込むとミス・ダブルフィンガーが右腕を突き出す。
咄嗟にシルクが両手で剣を持ち、体の前で構えて棘の先端を受け止める。幸い、刀身を貫かれることはなかったとはいえ、女性とは思えない腕力で押されてその場に倒れてしまった。
まずいと思った時にはもう遅いのである。
片足を上げたミス・ダブルフィンガーは靴の裏に長い棘を生やした。
その足を振り下ろし、鋭い棘でシルクの左足、ふくらはぎを貫く。
「ソーイングスティンガー！」
「きゃああっ!?」
機動力を削ぐため、細い棘が白い素肌を呆気なく突き刺す。
鋭い痛みが彼女に悲鳴を上げさせた。
すぐに足を上げたことにより、棘は脚から抜き取られた。靴は元通りの形になって、強く地面を踏みしめると再びミス・ダブルフィンガーがシルクに覆いかぶさる。
今度は両手が棘に変わった。
一つずつ重なっていく痛みで彼女は抵抗できないはず。今度こそ決着だ。
「これで――！」
「まだ！　終わりじゃない！」
我武者羅になってシルクが叫んだ。
この状況、このタイミングで生き残れるならば何でもいい。とにかく救いが欲しい。
彼女は訳も分からず能力を使用する。適当に剣を振り、痛む肩を無視して左手を振って、さらに足までバタつかせた。そうしながら風を起こそうと躍起になったのだ。
窮地に陥った一瞬、死をも覚悟したが故か、かまいたちは無数に発生した。
それはおそらく暴走にも近かっただろう。
剣から、手から、足から強弱様々なかまいたちが飛び、辺りの空気

を薙ぎ払う。
ミス・ダブルフィンガーは全身に風を浴びていた。
目に見える攻撃ではない。前もって予想しなければ避けることは難しい攻撃。そのため突然の反撃に対してはあまりにも無防備だった。
下から吹き上げるような強風を受け、ミス・ダブルフィンガーの体は吹き飛ばされる。
思った以上にふわりと軽い様子だった。耐える時間すら許さず、彼女は地面に落下する。
斬撃を伴う風を全身に浴びていた。しかも能力は半ば暴走している。
ミス・ダブルフィンガーの体は服ごと所々が切り裂かれ、浅いとはいえ血を流す。
二人の距離が開いたことでシルクが冷静さを取り戻す数秒は与えられた。
倒れていた彼女は上体を起こし、しかし足の痛みがあってすぐには立ち上がれない。
座り込んだままミス・ダブルフィンガーを見た。
敵は笑みを浮かべている。だが先程とは違って少なからず動揺があったようだ。
「そう……意外に手立てはあるんじゃない」
「ハァ、ハァ……！」
「舐めたことをしてごめんなさい。プロの仕事なんて言って、手を抜き過ぎていたみたい」
しゃがみ込んでいたミス・ダブルフィンガーが立ち上がる。
そうしてまた、驚くほど気配を希薄にして、静かにその場を立ち去ろうとした。今度はさっきのように手を抜いていない。本気で気配を殺そうとしている。
「もうあなたを甘く見たりしない。一人の敵として、標的として、確実に始末する……」
軽い足取りで狭い路地の中に身を隠し、姿を消した。

もはやミス・ダブルフィンガーがどこに居るかを知ることはできなくなったらしい。
シルクはしかし、なぜか冷静に立ち上がろうとしていた。その様子は痛みに耐えていて、痛ましい姿にはなっているが諦めた顔ではない。
先程の出来事を自分でも驚いている。
敵の強さに関してもそうだが、それ以上に、自身が起こしたかまいたちについて。
狙ってやった訳ではない。それでも可能性を感じる一瞬だった。
カマカマの能力はまだ強くなれる。
それを確信して以降、シルクの顔から焦りが消えた。
「ハァ、ハァ……私の力は、通用する」
痛む体を無理に動かしてなんとか立ち上がろうとする。
仲間のために負けられない。何より単純に自分が負けたくなかった。
可能性はあるはずだと、ふらつきながら立ったシルクは周囲に視線を走らせた。
（風の性質を。かまいたちの性質を利用する。私の技に距離は関係ない……）
一か所だけではなく、攻撃を受けた部分がズキズキ痛んでいた。どうしたって無視はできない。しかしそんな状態だったせいなのか、思考はよりクリアになる。
考えるべきことは多い。
ここまでの様子から考えてミス・ダブルフィンガーはヒット＆アウェイを基本として戦うつもりのようだ。シルクの能力を警戒しての判断だろう。おかげで彼女の長所が上手く生かせないまま、ここまで一方的に追い詰められてしまっている。
正攻法で勝てる相手ではない。だが決して弱点がない訳ではないはず。
周囲の環境を上手く使えば、或いは。
シルクは深く息を吐いた。

気配は全く感じ取れなくなっている。
やはり相当の慣れを感じさせる行動だ。見つけ出すのは簡単ではないだろう。
何にしても余裕がない。傷は深く、出血も多い。
考えている暇が無さそうだと判断したシルクは突発的な行動に出た。相手が隠れた状態では攻撃が成功するはずがない。まずはあぶり出す必要がある。
全力で剣を振るい、ぐるりと回って、周囲一帯に突風を吹かせた。
（もっと強い攻撃を……どこに隠れてても当たるくらいっ）
強風が無人の町を駆け抜けていく。
狭い路地裏から家の中へ飛び込んでいき、或いは路地から別の道へ向かい、至る所への攻撃を可能としたが、死角の方があまりにも多い。きっと当たってはいないだろう。
それでも構わないと考え、何度か風を通りに走らせた。
少なくとも簡単に接近できる状況ではなくなり、しばしシルクは攻撃を続ける。
手を止めた時、全身に力を入れたせいか、地面に落ちた血が大きな水溜まりを作っていた。今は気にならないそれも、戦闘が終わればどうなるかはわからない。
シルクは、自らの体を顧みようとはしなかった。
終わった時よりも今は敵を倒すことのみに集中する。その後どうなるかは考えない。
（私の力は、まだ進化する）
「あなたの能力、完璧じゃないんでしょ？」
背後、上の方から声が聞こえた。
シルクはぐっと堪え、振り返らずに手の中で剣を回す。
「アクションを起こさなければかまいたちは発生しない。そしてかまいたちは、物体を貫通するほどの力はない。隠れられると困っちゃう、でしょ？」
「うん……だけど、これから変わるよ」
シルクが振り向きざまに剣を振るう瞬間、ミス・ダブルフィンガー

は跳び上がった。
発生した暴風は周囲の全てを薙ぐが、建物の屋根を蹴って落下してくるミス・ダブルフィンガーに触れることはできず、風を飛び越えるようにして接近する。
彼女は無事に地面へ着地。直線距離はおよそ八メートル。
迷わずシルクがかまいたちを飛ばすと、ミス・ダブルフィンガーは近くの路地へ飛び込む。
タイミングさえ合えば迎撃はできる。だが現状、偶然でない攻撃以外は全て回避されている状態であった。今もそうだ、完璧に見切られて回避されている。
次の行動はシルクにも想像できた。
風が去るのを待った後、同じ場所からミス・ダブルフィンガーが駆け出してくる。
「繚乱・旋風！」
「フフッ……」
斬撃を伴う強風を放ち、吹き飛ばすと同時に攻撃を加えようとする。
風自体は目に見えないとはいえ、彼女の意思を理解したミス・ダブルフィンガーは微笑んだ。
もう路地に逃げ込む素振りは見せずに、軽く地面を蹴って、軽く跳んだミス・ダブルフィンガーは自身の膝を抱えると丸まったのである。
直後、全身から鋭利で長い棘が生え、地面に突き刺すと同時に転がり始めた。
「スティンガーヘッジホッグ！」
強風に撫でられるが吹き飛ばされることはなく、むしろ勢いよく前進を続けている。どうやら傷を負った様子もない。
今度は逃げも隠れもせずに正面から向かってきた。
思わずシルクが表情を変えて後ずさる。
「鉄の硬度の物を斬ることはできないみたいね？」
「くっ……！」

シルクは数歩後ろに下がった。
その合間にも剣を軽く回転させて、刀身に風を纏っている。
逃げられる状況ではない。ミス・ダブルフィンガーが接近する速度、自身の怪我、そして反撃の手立てを探していた現状。彼女は迎え撃つことを決めた。
人間サイズの棘鉄球が転がってくるのだ。怖いと感じない訳でもない。
しかし怯える自分を必死に殺し、自ら前へ踏み込んだ。
回転の最中にその行動を感じ取ったミス・ダブルフィンガーは不審に思った。
「串刺しになりなさい」
「ならないよ！」
正面から棘に剣をぶつけ、その瞬間、刀身に巻き付いていた風が爆発的に広がった。至近距離で受けた暴風は鉄の硬度の棘を斬ることはできずとも、棘鉄球と化したミス・ダブルフィンガーを軽々吹き飛ばし、これまで走ってきた距離以上を移動させる。
跳ねるように移動した後で転がり、やっとミス・ダブルフィンガーが立ち上がる。
また距離ができた。遠距離はシルクの領分である。
顔を上げた時にはシルクが剣を構えていて、その刀身に空気の動きが見える。やはり攻撃力を高めるために風を纏わせていたのだ。
気付いた瞬間は地面に膝をついていた状態。
跳んで避けるか、それとも全身に棘を生やしての防御か。一瞬の逡巡があった。
シルクが剣による突きを繰り出す。
纏っていた風が小さな竜巻となって放たれた。
今度は先程の比でない攻撃力がある。速度は速く、流石に強烈過ぎる空気の動きが風の流れを見えさせるだろうが、当たればただでは済まない。
ミス・ダブルフィンガーは、受けてはいけないと回避する行動を選んだ。

（この子、こんな技を……!?　受けるのはまずいっ）
素早く移動して回避する。
小さな竜巻の余波が髪を激しく揺らすが傷つけるほどではない。
狙って大きく横に飛び退いたのが結果的に功を奏したらしい。
そこまではよかったがその直後。
行動を読んでいたのだろう、シルクがすでに剣を振っていた。
「鎌居太刀！」
「きゃああっ!?」
速度に優れた、一点集中型の攻撃。
先程の竜巻に比べれば殺傷力は低いが、視認できない規模だからこそ避けられない。
ミス・ダブルフィンガーの体がそれなりに深く切り裂かれ、多くの血を流させた。
跪くように地面へ膝をついて、切られた腹を押さえながら、彼女はさらにシルクが剣を振りかぶる姿を見る。この距離で連続されては止めようがない。
仕方なくミス・ダブルフィンガーは近くの家へ飛び込む。
壊れた窓から屋内へ入り、姿が隠れた後になって強風が近くを通り過ぎる音がした。
落ち着ける状況になってミス・ダブルフィンガーは思案する。
剣をぶつけての一撃。あれで動揺してしまったようだ。
ただ遠くへ風を飛ばすだけの能力かと思っていたが中々変わった真似をする。確かに近距離でぶつけられては堪えきれないのも納得だった。
どうやら考え直す必要があるらしい。そう感じて、彼女は再び笑みを浮かべる。
「まさかあんな手に出るなんて……追い詰められた鼠は何をしでかすかわからないわね」
無傷で終えられる任務かと思っていたのに、傷をつけられてしまった。それでも冷静さを失わないあたり、まだ余裕があるのだろう。
ミス・ダブルフィンガーは笑みを絶やさず戦いに臨む。

思考は今も迷う様子はなかった。
（だけど傷は深い。長期戦を避けて今度は自分から動くはず。焦る必要はないわ。時間をかけて相手の出方を窺いながら待つ）
血は流したものの傷は浅い。自身の体を見下ろした彼女は作戦を決める。
焦りたくなるのは間違いなく相手だ。だからこそ自分は冷静に立ち振る舞い、多少時間を使ってもいい、確実に生き残りながら勝利することを優先する。
決断したミス・ダブルフィンガーは相手に見つからないように移動を開始した。
多少速くするがあくまでも歩いて路地を進む。
家から出て細い路地に入って、すぐに狭い道へ進んだ。
計算的に進路を決め、徐々にシルクが居た場所から遠ざかる。
（あの子はもうあまり動けないはず。決着はそう遠くないわね――）
ある程度の距離を置いた後、ミス・ダブルフィンガーはシルクへの接近を試みようと考えた。
その時、足を止めると同時に風を感じる。
身を斬るほどの強さはない。優しく肌を撫でる弱い風だった。
「風……？」
建物と建物の間に立って、それほどおかしなことではないのかもしれない。外に立っていれば風を感じるのは至極当然のことだ。しかし相手が風を使って戦う能力者とあってどうしても過敏になってしまう。不意に何気なく空を見上げた。
どこからともなく吹く風。気にし過ぎだろうか。
ふとした瞬間、気配を感じた。
足音も聞こえて、後ろに振り返ると、彼女は目を見開く。ちょうど路地の入口へシルクが飛び込んでくるその時を見た。考える暇も無くミス・ダブルフィンガーは地面を蹴る。
逃げ場はない。ならば上だ。
両手両足に棘を生やし、建物の壁に突き刺しながら屋根へ逃げた。

「私の位置を、感知した……!?　どうやってっ」
「鎌居太刀！」
まるで猿のように、或いはそれ以上に速く、ミス・ダブルフィンガーは屋根に逃げる。敵の攻撃は見えない上に速かったが辛うじて避けることに成功した。
屋根に逃れて、覗き込むこともやめて距離を取ろうとする。
想定しなかった状況だ。一体どうやって居場所を知ったのか。
考えるのは先程一瞬感じた風。確認できたとすれば異常を感じたあの一瞬だろう。あり得る訳がないと思いながらもそれ以外に考えられない。
逡巡するミス・ダブルフィンガーが、再び肌を撫でる風を認識した。
その時、背を向けて彼女の居る建物から離れるシルクを見つけて、違和感を感じた。
「まさか、あの子……」
見つけたと思えばピタッと足を止めて振り返る。
剣を構えて振り下ろすまで流れるような仕草。かまいたちを発生させた。
屋根の上に立つミス・ダブルフィンガーを狙って、敢えて距離を取ることで自身の攻撃を届かせる位置についた。先程の位置からは当てられないからこその移動である。
ミス・ダブルフィンガーは彼女との間に建物を置くように回避した。
強い風が建物に当たり、恐怖心を煽る音が強烈に耳に残る。
能力を使用し、素早い動作で屋根から降りる。先程の攻撃を見る限り、見晴らしの良い場所に立つのはかえって危険が増す可能性があった。自身の身を隠すようにしながら移動しつつ、シルクの動きを探りながらさっきの出来事を考察する。
視認できる位置ではなかったはずだ。退路を読む余裕もなかったはず。
先程の場所へ至るまでの痕跡も残してはいない。それは彼女も注意していた点だった。

不思議な風を感じた直後に姿を見せた。
あれで居場所を突き止めたのではないか。
ミス・ダブルフィンガーは不意に足を止めて考え込む。
情報では〝かまいたちを起こすカマカマの実の能力者〟と聞いていた。
風を起こして、対象を切り裂く能力だと聞かされており、そこから考えられる弱点について考察していたものの、ミス・ダブルフィンガーはシルクの体質までは理解していない。
全てを知った、とは言えない状態にあった。
シルクが食べたカマカマの実は超人系（パラミシア）に分類されるがその能力は特殊であると考えられる。風を起こすという点は自然系（ロギア）に近く、しかし体その物が風になる訳ではない。
彼女の体質はパラミシアとしても特異であり、人体の機能は常人と何も変わらなかった。
ただその一方、常人以上に風を感じ取る力に長けているらしく、同じく風を感じただけで天候を読むナミとはまた別の強みを持っているようだった。
「風を使って私の位置を探った……？　想定しきれていなかった力ね」
またしても撫でるような弱々しい風を感じた。
確認する必要がある。
ミス・ダブルフィンガーは敢えてその場に留まり続け、待つことを決める。そしてそう時間もかけずに同じ道へシルクが現れ、確信を得た。
直線距離にして十数メートル。
再度対峙した二人は視線を交わらせる。
やはり狙ってその場に現れている。考察は間違いではないらしい。
至る所から血を流しながらシルクは凛とした佇まいでその場に居る。
身を隠すのは不可能と感じ、ミス・ダブルフィンガーは正面からの戦闘を承諾した。

「不思議な能力ね……あなたのこと、何もわかっていなかったみたい」
「ハァ、ハァ……うん。私も、自分で驚いてるよ」
シルクが剣を構えて、意識が変わる。
指先を棘に変えたミス・ダブルフィンガーは自らの肩に触れた。攻撃のためではなく、尖った五指を自らの体に突き刺す。特別なツボを刺激したのか、もしくは棘人間の特徴なのか。彼女の肉体は見る見るうちに変化していき、両腕の筋肉が大きく膨れ上がった。
一回り大きくなった腕が自らの上着すら破いてしまい、圧倒的な腕力を得る。
「トゲトゲ針治療（ドーピング）！」
その両腕に棘を生やせば、棍棒すら超える鈍器となるだろう。
ミス・ダブルフィンガーの変化にしかしシルクは表情を変えず、じっと見つめている。
すでに腹は決まっているようだ。
（ごめんね、みんな……私、行けないかもしれない……）
柄を強く握りしめて覚悟を決める。
失血が多く、視界が揺れていた。頭も妙に重い。
（だけど、この人だけは、倒すから）
今や自分を気遣っていられる余裕もない。
彼女さえ倒せればそれでいいのだ。
決死の覚悟で向き合った今、どんな能力で、外見にどんな変化があっても動じない。シルクの眼差しはミス・ダブルフィンガー、そして勝利しか見えていなかった。
ミス・ダブルフィンガーはこの状況を不利と考えているが、退くことは考えない。プロとしては時間をかけることも有効な一手とはいえ、不安がある。
彼女は、この戦いの中で強くなろうとしているようだ。
短い時間の間に己が使える能力の幅を広げようとしている。窮地に立たされて覚悟を決めたことも彼女を強くしたのだろう。時間をかければ、逆に追い詰められてしまう可能性があった。

決着を望むのなら短期決戦で。
彼女の成長をまざまざと見たが故に見逃せなかった。
逞しい両腕に無数の太い棘が生やされた。
狙うのは接近戦。まずは近付くことが大変だ。
ミス・ダブルフィンガーが身構えるのを見てシルクが一歩足を引く。
「もう限界は近いんでしょう？　目を見ればわかるわ」
問いかけられたシルクは唇をきつく結んだ。
己の限界が近いことは自覚している。それ故に長期戦を望まないのは彼女も同じ。可能な限り早々に決着をつけなければ自分が先に倒れるだろう。
動き出したのはほぼ同時だった。
細い路地を覆うようにシルクが風を起こして、ミス・ダブルフィンガーが駆ける。
剣の振りで攻撃のタイミングは予想できた。何もしなければ全身を切り刻まれるとわかっているため、顔の前で腕を交差し、走りながらも全身に鋭い棘を生やす。
強風が全身を包んで通り過ぎるが、傷はつけられていない。
ミス・ダブルフィンガーはかまいたちの中を駆け抜け、正面からシルクへ接近した。
「その足じゃ逃げられない」
「ハァ、逃げないからいいんだよっ」
棘を生やした右腕が振りかぶられたことに反応し、シルクは剣で接近戦に臨もうとする。
自らも前へ踏み出して剣を振った。風を放ちながらの近接戦闘。上手くいけば相手を吹き飛ばしながらもう一度距離を作れたはず。しかしその行動は読まれていた。
素早い剣の動きを的確に見切って、潜るようにしてミス・ダブルフィンガーが回避する。
刀身は頭上を通り過ぎ、一瞬の行動でシルクの側面に入る。
避けるために足へ力を入れるが間に合わない。

ミス・ダブルフィンガーの腕は確実にシルクの体を捉えた。
咄嗟に防御のために構えた剣へ当たり、弾き飛ばし、彼女の右腕を棘で抉る。
「スティンガーフレイル！」
「あうっ!?」
右腕からまた血飛沫が飛ぶ。
シルクは勢いよく倒れ、すかさずミス・ダブルフィンガーが駆け寄り、真下に見下ろして腕を振り下ろそうとした。脚の間に彼女を置いて逃がさない。
痛みを堪えながらシルクはミス・ダブルフィンガーを見上げた。
剣が弾かれて遠くへ行ってしまった。手は届かない。
生身で受ければ防御にもならずに致命傷を受けるだけ。
思考は今やゼロとなって、肉体の反射でシルクは反応していた。
気付けば拳を握って思い切り横へ振っていた。
殴るためではない。その動作で強いかまいたちが発生する。
すでに腕を振り上げ、拳をシルクへ振り下ろそうとしていたミス・ダブルフィンガーは、思わず目を瞑ってしまうほどの強風を感じた。その時には上半身に無数の切り傷が入っていて、当然避ける暇も無ければ防御する術もない。
この場で選ぶべきは一刻も早い攻撃。
しかし防御を兼ねるため、ミス・ダブルフィンガーは全身に棘を生やした。
それが功を奏したのか、体を丸めて彼女を蹴ろうとしたシルクの行動に対抗できた。
思い切り伸ばされた右足はミス・ダブルフィンガーの腹に当たる。が、そこには彼女の生やした細くも頑丈な棘があり、自ら足を貫いてしまう。
「うあっ!?　ああっ!?」
「お馬鹿さんね。焦ったのがあなたの――」
失敗、と続けようとして、彼女の足から妙な力を感じた。
蹴りの衝撃は棘に刺さったことで殺されたが、腹に触れたままだっ

たシルクの足から、爆発的に生じた風がミス・ダブルフィンガーの体を押し上げる。
本人の意思とは無関係に彼女の体は宙へ放り出されて、驚きの声が抑えられなかった。
「あああああっ!?」
「ハァ、ハァ……」
ミス・ダブルフィンガーが吹き飛ばされたことで足に刺さっていた棘が抜ける。
シルクは、思わず足を降ろしてそのまま倒れてしまうが、いつまでも倒れてはいられない。
空へ舞い上げられたミス・ダブルフィンガーが落下し、辛うじて受け身を取って地面に触れると同時、辛そうにシルクが起き上がった。
ミス・ダブルフィンガーの姿勢を見れば、剣を拾っている暇は無さそうだ。
息を乱すシルクは指を二本だけ伸ばし、軽く腕を振って準備する。
迎撃の意志を目にしてミス・ダブルフィンガーは迷わず走った。
放っておけばまた手痛いしっぺ返しを食らう。
とどめを刺すなら早い内にだ。
「あまり好き勝手させると厄介ね……！　今度こそ仕留める！」
「ハァ、まだ終わらないよ……！」
真っ直ぐ駆けてくるミス・ダブルフィンガーへ、シルクが腕を振って風を起こした。
「つむじ風！」
放たれた風は砂埃を巻き上げ、軌跡をはっきり示しながら進んでくる。前を見ていれば気付かないはずがない。ミス・ダブルフィンガーは全身を棘で覆って防御した。
一陣の風が彼女の体を包み込む。
防御は成功した。肌は裂かれていない。
ミス・ダブルフィンガーは反撃の時を待ってほくそ笑む。
しかしそれで終わりかと思っていれば、いつまで経っても風が消えない。

どうやら彼女の体を包んで停滞しているようだ。
改めて確認すると目で確認できるほど強烈な風が、彼女の周囲を取り囲んでいたのである。
「何？　これは一体……」
「風の力は、進化する」
意識を朦朧とさせながらシルクは歩く。
落としていた剣を拾い、緩慢な動きで顔を上げる。
彼女の様子に、自身を取り囲む風に、ミス・ダブルフィンガーは表情を歪ませる。
明らかに正気の沙汰ではない。手酷いダメージが彼女から正気を奪っているらしく、すでに目の焦点は合っていないだろう。なぜか呼吸も落ち着きつつあった。
ゆっくり剣を構える姿に狂気さえ感じた。
おそらく次に来る攻撃は今までの比ではない。理屈ではなく本能で理解する。
多少の危険性は理解していたが、焦ったミス・ダブルフィンガーは前へ駆け出した。
全身に棘を生やした今なら、彼女が攻撃する前に接近して止められるはずである。
そう決めて、周囲を囲う風を思い切って通り抜けた時、全身に痛みが走る。生やした棘を物ともせずに、今度は実体が切り裂かれていたらしい。
歩けなくなるほどの重症はないとはいえ、全身に切り傷があった。
思わず足を止めてしまうほど衝撃が大きく、驚くミス・ダブルフィンガーは傷ついた自分の体を見下ろしながら我を忘れる。
風の力は、進化する。
言葉が示す通り、彼女の周囲で旋回しただけ、かまいたちの力が強まっていたようだ。
視線を上げるとシルクが剣を振り上げる姿を見た。
止めなければ。そう考えてミス・ダブルフィンガーが駆け出す。
この時には心の内が動揺で占められており、およそ冷静とは言えな

い状態だった。
「つむじ風……乱れ打ち!!」
刀身に風を纏わせた後、数度に渡って勢いよく振り回す。
腕で放つのとは訳が違う。剣から使用する方がよほど慣れているし、溜めた力の爆発がある。風の力は手元で増幅された後に放たれていた。
驚愕するほど強い風が辺りを薙いだ。
一度ではなく何度もミス・ダブルフィンガーの体を通り過ぎる。
鉄の硬度を誇る棘すら超えて、彼女の体には数え切れないほどの切り傷を与え、しかもそれだけではなく吹き飛ばして宙を運んでいく。
交差し、重なり合い、距離を進んでさらに力を強めていく。
シルクの起こした風はもはや小さな台風となって路地を駆け抜けた。
「ああっ……!?　あああアアアっ!?」
行き止まりまで運ばれたミス・ダブルフィンガーは背中から建物の壁に激突して、一瞬にして破壊してしまい、さらに反対側の壁まで吹き飛ばす。その後勢いは止まらず、大通りの地面に倒れた時にはすでに気を失っていた。
運ばれた距離は一体何メートルになるのか。
生死を確認することもできず、シルクはその場に膝をつき、倒れてしまった。
「ハァ、ハァ……勝った、んだよね……」
もしやまだなのでは、という不安もあるとはいえ、今からでは確認しに行くこともできない。
うつ伏せに倒れたシルクは苦しげに呼吸を繰り返し、急激に重くなった瞼を閉じてしまう。
「みんな……私、やったよ」
意識が遠ざかる。もはや体のどこにも力が入らなかった。
「早く……行かなきゃ……みんなの、ところへ……」
そのまま、眠りに就いてしまった。
今や出尽くしてしまったのかと思えるほど血に濡れて、全身を赤く

した少女が倒れる。
敵は倒したとはいえ、無人の路地に一人。シルクはその場を動けなかった。

発見

王宮へ辿り着いたビビ達は無事に門を抜け、建物内へ突入することに成功した。

待ち伏せがあるかとも思えたが今のところ敵の姿はない。正面の入り口から城の中へ飛び込んでみても、止める者は一人として居なかった。

その状況が逆に不安を煽りもするが、足を止める訳にはいかない。

ビビ、カルー、数名の護衛の兵士達は王宮の奥へと急いだ。

「お父様達が囚われているとすればここに居るはず……ハァ、どこ？」

「ビビ様、先頭は我々が」

「ここよりは敵の襲撃もあり得るはず。前に居ては危険過ぎます」

「心配いらないわ。それよりみんなを見つけることに集中して」

先頭を走るビビはそう言うが、彼女を守るために同行した兵士達は気が気でなかった。幼い頃から行動力に溢れる人間だったもののまさかここまで言うことを聞かないとは。

ともあれ、彼女を守るのが彼らの役目。

周囲を警戒しながらも必死にコブラ達を探す。

しばらく移動して、玉座の間へ辿り着いた時だ。

拘束されているペルと、体が干からびかけているチャカの姿を見つけた。

生きていた事実にビビが笑顔を見せ、隣でカルーが嬉しそうに鳴く。

「チャカ！　ペル！」

「クエーッ！」

生きてはいたが怪我を負っている。特にチャカは水分を抜かれて瀕死の重体だ。

迷わず駆け寄った彼女達は二人の拘束を解く。ペルは今でも話せる程度には余裕があり、解放した直後にビビはチャカの様子を見て兵士に振り返った。

「クロコダイルの仕業ね……水を持ってきて！」
「はっ！　今すぐに！」
「ビビ様っ！　なぜここに！　ご無事だったのですね！」
「心配かけてごめんなさい。色々事情があったの」
自由になったペルが血相を変えて身を乗り出す。ビビは冷静に彼と目を合わせた。
次いで同じく拘束を解かれたものの、倒れたままのチャカを見下ろす。
「ビビ、さま……」
「大丈夫よチャカ。私は、この国を守りに帰ってきたの。あとは任せて」
チャカを兵士の一人に任せ、また別の一人が水を取りに部屋を出て行こうとした。その際、部屋の入り口付近からその兵士が悲鳴を上げる。
まだ落ち着かない状態で一行の視線がそちらに向く。
部屋の入り口に不穏な影が立っていた。
カンカンッと貝を鳴らすラッコ、Ｍｒ．１３と、その隣で羽を畳んでいるミス・フライデー。
バロックワークスの始末人。動物のコンビだが実力はフロンティアエージェントをも超える。
当然彼らを知っているビビは身構え、すでに一人やられた事実に悔しげに唇を噛んだ。
咄嗟に、自由になったからにはペルがビビの前へ立つ。
怪我をしていようと彼女を守るためなら自らの体すら盾にするつもりだった。
「〝１３日の金曜日（アンラッキーズ）〟！」
「お下がりくださいビビ様！　誰か、武器を！」
「は、はい！」
ペルの叫びに兵士が反応し、素早く槍を手渡した。自身が戦うよりアラバスタ最強の男が扱う方が良いと判断したのだろう。自身は体を張ってビビを守ろうとする。

ビビは心配からチャカへ振り返った。
守らなければと思っていたが、すでにカルーがチャカに駆け寄り、庇うと共に自身が提げていた水筒の水を飲ませている。それを見てビビが思わず笑みを浮かべた。
「カルー、あなた……！」
「クエ～!!」
任せろ、と言いたいのだろうか。
言葉は通じないが意思は伝わってきてビビは頷く。
アンラッキーズは厄介な相手。如何にペルでも手負いの状態で相手にするのは危険過ぎる。
自身も武器を持ち、ビビが彼の隣に立った。
その姿に気付いてペルが驚愕してしまう。
「ビビ様ッ!?　ここは私が……！」
「守られてばかりじゃだめなの！　私もみんなを守りたい！」
覚悟を持った叫び声にペルは言い知れない何かを感じ、傍に居られなかった空白の時間を感じると共に彼女の成長を見る。
幼い頃を知っている彼に、断る術があるはずもなかった。
「失礼ながら、背中はお預けします。何があろうとビビ様は私がお守りします！」
「ええ。私も役に立ってみせるから。みんなで生き残るのよ」
カンカンッ、貝を叩いて鳴らしている。
Ｍｒ．１３は自身が手にしていた貝を分解し、両手に持つと、内部に仕込んであった刃を見せる。同時にミス・フライデーは羽の下に隠していた銃器を覗かせた。
たかが動物と侮るなかれ。彼らは任務を失敗したエージェントを消す始末人。
人間の始末はむしろそこらのエージェントよりも慣れていた。
槍を持ったペルが身構えて、まず真っ先に二匹と対峙した。
彼の方を見ているものの、彼らが優先して狙っているのは王女であるビビ。
最悪ペルを逃したとしても王女さえ仕留めれば戦況が変わる。そ

れがわかる程度には彼らは頭が良くて、すでに戦う覚悟もできていた。
威嚇するようにさらにカンカンと貝を打ち鳴らす。
Ｍｒ．１３が駆け出すと同時にミス・フライデーが翼を広げて空を飛んだ。
素早く右へ左へ跳びながら前進するＭｒ．１３に対抗するべく、咄嗟にペルが前へ出る。ビビの下へは絶対に行かせない。そんな意志が、彼の行動や表情に表れていた。
両者が同時に武器を振り、正面から激突する。浅くない傷を負っているペルの表情が歪んだ。
武器を合わせた瞬間に生じた一瞬の静止。それを狙ってミス・フライデーが銃を放とうとする。
あらかじめそれを読んでいたビビは彼女への攻撃を行った。
ミス・フライデーは咄嗟に回避行動を取り、避けられてしまうが、それによって銃撃も外れる。
両者は一旦距離を取って、その間にペルとＭｒ．１３が数度打ち合った。
「くっ……！　おのれ、ただのラッコではないなっ」
「下がってペル！　隙を作るくらい私が！」
「ビビ様、しかし！」
ペルの言葉を待たず、武器を払って互いに後ろへ跳んだ彼らを確認すると、ビビが両手に装備した武器を振り回した。それによってＭｒ．１３は上へ跳ぶ。
回避はされたものの空中での回避は不可能に近い。
ミス・フライデーが回収に向かう素振りを見せた中、ペルも自らの能力を使用した。
「孔雀（クジャッキー）・一連（ストリング）・スラッシャー！」
「ビビ様のご助力……無駄にはしません！」
一瞬にして隼の姿になったペルが勢いよく飛び上がる。
回避したＭｒ．１３はミス・フライデーの背に着地し、すでに迎撃する体勢だった。

構わずペルは槍を握りしめ、特攻を行う。
「飛爪(とびつめ)!!」
自らの爪と槍で、素早く駆け抜けながら一瞬の猛攻を繰り出す。
Ｍｒ．１３は背を蹴って跳び、ミス・フライデーはその衝撃を利用して即座に降下した。ペルの攻撃は紙一重で回避することができたようで、二匹はそれぞれ標的を変える。
飛び上がったＭｒ．１３はペルに空中戦を挑み、ミス・フライデーがビビを見た。
強い意志が災いしたのか、一瞬ペルは逡巡してしまう。自身を狙っているのはＭｒ．１３だが守らなければならない人物を狙っているのはミス・フライデーだ。
どちらを優先するかは、一秒にも満たない刹那で選ぶことができた。
背後の気配を無視したペルは、背を向けるミス・フライデーへ襲い掛かる。
互いに翼を持つ者であったとはいえ実力が違う。当然速度も違っていた。
すでに敗北し、醜態を晒した後。己の命を捨ててでもビビだけは守らなければならない。そんな覚悟が彼の表情から迷いを消して槍を握りしめる。
彼の行動は少なからず予想できたが、その速度はミス・フライデーを驚愕させた。
「これ以上……貴様らの好きにはさせんッ!!」
槍の穂先がミス・フライデーの肉体を切り裂いた。深くまで刺さった感触があるため、これで決着だろうと予想する。だが自身に迫る危険も知っていた。
彼を狙って落下してくるＭｒ．１３が武器を振り上げている。
落下速度はなぜか速く、前を見ながらもペルはおそらく避けられないだろうと思っている。
覚悟を決めた時、ふとビビの方へ目を向けた。
己の死を受け入れようとしていたその瞬間、彼女の行動に目を見開

く。
一切の迷いも持たず、振り回した武器をＭｒ．１３へ向けようとしていたのだ。
「孔雀（クジャッキー）・一連（ストリング）・スラッシャー！」
高速で伸ばされたその連結した刃は、空中で身動きの取れないＭｒ．１３を捉え、そして肌を切り裂いて吹き飛ばした。意識を刈り取るほどではないが明確な隙ができる。
この時、ペルは考えもせずに翼を動かして反転していた。
「これで少しは役に立てた？」
「ビビ様、多大なる感謝を……！」
ペルは今度こそ全力でＭｒ．１３へ接近し、地面へ落とす前に決着をつける。
「飛爪（とびづめ）ッ!!」
槍と爪による無数の攻撃を受け、Ｍｒ．１３はがくりと全身の力を失った。
受け身も取れず地面に落ち、そのまま動かなくなる。
戦闘が終了してすぐさまペルが地に降りて元の姿に戻る。激しい動きによってさらに多くの血が流れ出てきて、苦しそうな表情だ。
彼の様子に血相を変えたビビが慌てて駆け寄る。
ここまでよくやってくれた。しかしもう限界だろう。
咄嗟に兵士へ振り返って応急処置を頼む。
「今すぐペルに治療を！　それと、チャカに水を持ってきて！」
「はっ！」
「ペル、ありがとう。無理をさせてごめんなさい……」
「いいえ……ビビ様がご無事であったなら、それでいいのです」
疲弊した様子のペルが膝をついている。彼の背に手を添え、ビビは辛そうな顔を見せた。
本当ならもう休んでいていいと言ってやりたい。しかし現状、まだ諸悪の根源を倒していないという事実がその言葉を許さないのである。彼女はこれから傷つき、疲弊した臣下に更なる戦いを強いなければならない。そうしなければ国が滅んでしまう。

たとえ自分がどう思われても。ビビは表情を引き締め直して言った。
「まだ終わってはいないわ。敵は大勢残ってる。ペル、あなたの力を貸して」
「もちろんです。この身が朽ち果てるまで、アラバスタのために戦いましょう」
「無理をさせるわね……」
「ハハッ。慣れていますとも。あなたは幼い頃から活発な方でした」
脂汗を流しながら笑顔を見せたペルを見やり、ビビはわずかに苦笑する。
その直後、カルーが一声鳴いたので顔を上げた。
そちらでは苦しげながらチャカが体を起こして座り、真剣な顔でビビを見つめている。彼も万全の状態ではないというのにちっとも心は折れていなかった。
ビビは彼らの協力が得られることを理解した。
同時に気持ちまで受け止め、絶対に負けられないと再認識する。
「ビビ様……我々は何をすればよいのですか？　お教えください。我らの敵とは」
「敵はバロックワークス。七武海、サー・クロコダイルを頂点とする秘密犯罪組織。この国を乗っ取ろうとしているの」
「やはり……そうでしたか」
「私の仲間が、あいつらを倒そうとしているの。紹介している暇はないけど、信じて。彼らは海賊だけど、クロコダイルとは違う」
海賊。その一言が気にはなったが今更驚きはしなかった。
ビビは立ち上がり、座ったままのチャカやペルも含め、周囲の人間を見渡す。水や医薬品を取りに走った兵士を除けば全員が彼女に注目していた。
「チャカ、あなたは国王軍の指揮をお願い。反乱軍を装って襲ってくる敵が居るの。その人たちはみんな偽物、バロックワークスの社員よ」

「では、手加減はいらないということで？」
「ええ。私の仲間も協力してくれるはず。気をつけて……絶対、死なないで」
「了解しました。私も、敗北したままでは終われませんから」
カルーの水筒にあった水を飲んだとはいえ全快とは言えない。チャカはいまだやつれた体で辛そうに呼吸している。それでも目の色だけは微塵も変えなかった。
ビビが生きていた。失踪していたはずの彼女が元気な姿を見せてくれた。
それだけでまだまだ戦えると思えてくる。
チャカの顔を見たビビは任せることに決めて、彼を心配するのをやめようと努めた。まだ戦いは続いている。油断などしていられないし、誰も休んでいられる状況ではないのだ。
改めて室内を見回したビビはコブラが居ないことを確認する。
彼が居れば国王軍の士気を上げることなど簡単なのだが、そう上手くはいかないらしい。
今度はペルに目を向けて、彼には別のことを任せようと考える。
自分だけで行動するのは危険だとわかっている。おまけに護衛の兵士も多くは無い。
彼の同行はビビが自由に行動するために必要不可欠だった。
「ペル、あなたは私と来て。お父様を探しましょう」
「わかりました。全力でお守りします」
「お父様と……クロコダイルはどこに？」
「葬祭殿へ向かったようです。奴ら、何かを探しているようで」
「そう……」
外へ出ていた兵士が急いで戻ってきて、チャカには水が入った樽を渡し、ペルとアンラッキーズにやられた兵士も含めた三人へ応急処置を施し始める。
ビビは今や遅しと待ちながらも急かさず、彼らの準備を待つ。
あとは私に任せてくれ。そう言えればどれだけ気が楽だろうか。
彼らの協力が無ければ何もできない自分が情けなく、彼女は強く唇

を噛む。
（焦ってはだめ……勝てる勝負も勝てなくなる。落ち着いて、冷静に行動することが重要）
きつく拳を握る彼女は自分を落ち着かせようと頭の中で繰り返す。
他のみんなは大丈夫なのか。気になるのに知れないことが不安を大きくする。しかし今は確認する手立てがない。仲間を信じるしかなかった。
誰も倒れていなければいいが。
不安を押さえ込もうとするビビの手を、カルーが羽で軽く引いて振り返らせた。
「カルー？」
「クエー……」
心配するような、彼女を気にかけるような眼差しがある。
彼の様子を見てビビの表情は変わった。
一人で戦っているのではない。自分には多くの仲間が居て、常に傍にはカルーが居てくれる。彼の存在が焦り過ぎた心を落ち着かせてくれた。
拳を握っていた手からふっと力が抜けた。
ビビはカルーへ穏やかに微笑みかける。
すっかり毒気が抜かれたようで、カルーもにこやかに口角を上げた。
急ぎながらも丁寧に、それぞれへ処置を施した後、兵士達はビビの下へ集結して準備が整ったことを行動で示した。負傷した兵士は壁際に座らされて、チャカの傍に三名、残りはペルと共に彼女の護衛に就く。少ない人数で配属は決まった。
いよいよという場面でビビは意を決する。
この先、きっともう止まることはない。勝利するまでは振り返る暇もないだろう。
「みんな、無理を強いてごめんなさい。だけど、絶対に最後まで諦めないで。どんな状況だって希望はある。みんなで一緒に生き残りましょう」

「はいっ！」
「ビビ様、お気をつけて……ペル、ビビ様を頼むぞ」
「ああ。こちらの心配はしなくていい。自分の役目に集中してくれ」
チャカの言葉にペルが頷き、それを受け取ったチャカは兵士に肩を借りながら立ち上がった。
彼らは互いに背を向け、歩き出す。
ビビがペルと兵士を引き連れて城の裏口へ向かい、正面入り口にはチャカ達が向かう。
心配する気持ちを押し殺して振り返らない。そのままあっさりと離れていき、どちらも躊躇うことなく玉座の間を後にした。
歩きながらビビがペルへ尋ねる。
きりりとした眼差しは前方を見ながら、すでに待ちきれない様子となっていたようだ。
「お父様と一緒に居るのは誰？」
「クロコダイルと、黒髪の女です。ミス・オールサンデーと呼ばれていましたが」
「そう……やっぱり」
コブラと共に居る二人の名を聞いて、ビビの表情が曇る。
その二人が相手ではただではコブラを取り戻せそうにない。さらに考えるのは、クロコダイルが居るということはルフィと接触していないのか。それが妙に気になった。
彼が負けるとは思っていないが、拭い切れない不安が生まれてしまう。
ビビとカルーを先頭とした集団は外への出口が見える場所まで辿り着いた。
その瞬間、彼女と一匹は驚愕した。
血に濡れて倒れるルフィの姿を目撃する。無人の空間で彼一人だけが倒れていて、おそらくは目標の人物と接触したのだろう。部屋の一部が破壊されてもいた。
結果だけを見れば、何があったのかを想像するのは容易い。

顔色を変えたビビとカルーが慌てて駆け出した。
死んでいるかのようにぴくりとも動かないルフィへ駆け寄り、血に汚れることも気にせず彼の体を抱きかかえる。ビビが地面に膝をつき、その上にルフィの頭を乗せた。
状況が読み切れない兵士達は立ち往生する。その中で咄嗟に状況を見たのはペルだ。
誰かは知らないが、二人が激しく動揺してしまうほどの人物。何をすべきかはわかる。
「ルフィさんっ!? そんな……!?」
「クエ〜!? クエ〜ッ!?」
「薬と包帯を持ってこい! 応急処置だ! 急げ!」
ペルの鋭い声が飛ぶ中、ビビとカルーは顔を近付けて彼の様子を見る。呼吸は荒いが小さく継続している。まだ死んではいない。
必死に名を呼び続けること数秒、確かに反応があった。
突如動いたルフィの手がビビの手首を掴む。
「肉(にく)っ」
「ルフィさん……!」
「クエ〜!」
開口一番、思いのほか強い声色。
疲弊しているが目はしっかりと開いてビビを見ていた。
せき込んで尚も血を吐きながら意識を繋ぎ止め、ルフィはがくりと頭を落とす。
「わりぃ、ビビ……おれ、一回あいつに負けたんだ。キリも、どっか連れてかれちまった」
これまで聞いたことがないほど弱々しい声に息が詰まる。こんなルフィは見たことがない。何しろ今にも死んでしまそうなほど危険な姿なのだ。
周囲でバタバタと兵士が走り回っている。そのことにも気付かず、ビビは彼の言葉に集中する。
どうやらルフィはまだ諦めていないようだった。
「でも、次は負けねぇから……ハァ。おれがあいつを、ぶっ飛ばすか

ら……」
「うん……うんっ」
「だから、肉くれっ」
そう言って、ルフィはしっかりとビビの目を見た。
必死に涙を堪えながらもビビは力強く頷き、素早くペルへ振り返る。
「お肉を持ってきて！　できるだけたくさん！」
「ビビ様？　肉、ですか？」
「調理してても、してなくてもいいから、とにかく食べる物を！　クロコダイルに勝てるのは彼しかいないわ！　助けないと！」
「しかし、その前に傷を――」
「だったら治療しながらでいい！　たくさんお肉と……食べられる物全部！」
戸惑うペルだが、時間がない。ここは彼女の判断に委ねることを決めた。
「私が取りに行ってきます。少し離れますが」
「お願い……ルフィさんは私が」
「急いで戻ります」
ペルは人獣型に変身して翼を広げ、低空飛行で廊下を飛び始めた。
ビビがあれほど言うのだ。よほどの実力と、そしてそれ以上に信頼があるのだろう。長らく離れていた今の彼には何も言い返せない。
今はただ、ビビの求めたとおりに動く。それが勝利への唯一の道に違いない。
忠誠心のみでなく戦士として、国を守る国民の一人としてそう判断した。
（あのビビ様が、あんな表情を見せるなんて……何がなんでも、彼を死なせてはならない！）
素早く応急処置を始めた兵士の傍で、ビビはルフィの手を強く握る。
元気付けようと笑顔に努め、同じくカルーが大声で鳴いて彼の意識を繋ぎ止めた。

一度の敗北なんて物ともしない。まだ諦めてはいない。
「大丈夫よルフィさん……諦めの悪さなら、あなた達の船で鍛えられたの。こんな程度の問題、失敗でもなんでもないわ。私たちはまだ戦える。あなたは必ずあいつに勝てるっ」
力の限り彼の手を握りしめて、声をかけ続ける。
「あなたは私が、私たちが死なせない……だからルフィさん、クロコダイルをぶっ飛ばして！」
「おおっ……！」
悔しさを噛み殺すような力強い声を聞き、ビビは頷き、カルーは翼を動かして鳴く。
いまだ誰一人として心は折れていない。
戦いに決着をつけるためにはルフィの力が必要不可欠だ。ビビとカルーは何があっても傍を離れずに彼を応援し続けた。

BREAK

風を斬るような速度で振るわれた刀が、刃と打ち合う。
刃毀れすら気にせず正面から受け止めたのは、絶対の自信があるからだ。
幾度目かの衝突を経て、互いに傷はなく、相手の出方を確認している。
二刀流を駆使するゾロは高速で刀を振っていた。狙いは的確で力は激烈。常人ならば刃を合わせただけで吹き飛ばされるような力強さが伝わる。
それを受けるMr．1はピクリとも表情を動かしはしなかった。
自らの腕でゾロの刀を受け止め、金属を打った音を鳴らして平然としている。
スパスパの実の〝全身刃物人間〟。
体に裏も表もなく、全てが刃。全身どこで受けても刀では傷をつけられない。それどころか鉄の硬度を誇るため、刃物どころか生半可な攻撃では掠り傷一つつけられないだろう。
その上、彼はすでに完成された格闘術を持っている。
刃物の性質を加えた体捌きは些細な動きですらも必殺の攻撃力を誇った。
一切攻撃を受け付けない肉体を間近に確認し、ゾロは冷静に動きを変える。
地面を滑るように、転がるようにMr．1へ接近すると、二本の刀で彼の体を掬い上げた。
「鷹波！」
鈍い音を発して胴体に叩き込まれる。ゾロの攻撃は確かにMr．1へ届いた。しかしMr．1は顔色一つ変えず行動し、即座にゾロへ振り返って反撃する。
刃となった蹴りは咄嗟の防御で受け流された。
幾度かの攻防を経て、敵をつぶさに観察するゾロは能力の性質を肌で感じる。

交差した後、互いに距離を置いた状態で静止した。
佇まいを直して振り返り、視線を合わせる。
一時的に戦闘が止まった瞬間だった。
「なるほど……つまり、全身が鉄。刃の表も裏もありゃしねぇってことか」
「そういうことだ。これで、おれには勝てない理由がわかったか？」
首を捻って軽く鳴らすＭｒ．１に対して、ゾロは明らかに好戦的な笑みを見せる。
「いいや。むしろ望むところだ」
「ん？」
「こういう窮地を、おれァ待ってた。おれがお前を斬った時、おれは鉄をも斬れるようになってるってことだ」
「斬れればの話だ。あり得はしない」
「いやぁ、そりゃわかんねぇだろ」
ゾロは厚い上着を脱ぎ捨てた。
流れるような動作で腕に巻いていた手拭いを取り、頭に巻く。
目つきは変わり、野性的な眼差しが凶悪な敵意を醸し出していた。
「おれとお前は、今まで出会ったことがねぇんだからな」
「フン……所詮何も変わらん。お前もこれまでの奴らのように始末してやる」
「できりゃあいいな。タコ入道」
対峙し、鋭い眼光が敵を突き刺す。どちらも飢えた野獣のように、或いは無駄な感情を一切削ぎ落とした機械のように、恐怖心の欠片さえ持たずその場に立っている。
異様な空気が漂う中、微塵も動かず立ち尽くすこと数秒。
両者は全くの同時に動き出した。
接近する最中にゾロは三本目の刀を口に銜え、Ｍｒ．１は足を振り上げる。
刃と脚が激突した瞬間、人体にはあり得ない金属音が鳴り響いた。
相手は全身が武器。ただの手刀や蹴りが岩さえ削る斬撃となる。
望むところだとゾロは脚を払って前へ進む。

Ｍｒ．１は見るからに戦闘に慣れていた。流れるような動作で腕を突き出し、刃と化した五指でゾロの顔を切り裂こうとするが、彼はその手を左手の刀で受け止めた。
体の使い方一つ一つが暗殺や人体の分解に特化している。こんな人間は見たことがない。
再びけたたましい音を発して激突。
とんでもない力で相手を切り捨てようとしており、それでもＭｒ．１の肌は斬れず、ゾロは的確に攻撃を防ぐ。たった数度の攻防でフラストレーションが溜まった。
一瞬の視線の交差でわかる。
勝負は、おそらくそう長引かない。
「東の海（イーストブルー）のたかが一剣士が」
「そういうお前はたかが鉄だろ」
激烈に振り下ろしたゾロの刀を、Ｍｒ．１が腕を構えただけで受け止める。
Ｍｒ．１が首を切り落とそうと蹴りを放てば、ゾロの刀が受け流す。
一見すれば互角。互いに相手の体へ傷をつけることはできないまま、必殺の一撃を叩き込もうという時間が無情にも続き、状況は変化を見せない。
どちらが有利かと言えばおそらくはＭｒ．１だ。彼は悪魔の実を食べたことにより、全身が鉄で構成されている。事実いまだに傷はついていないが、何度か攻撃を受けているのだ。一度攻撃を受ければそれが致命傷となるため、避け続けなければいけないゾロとは違う。
だがゾロは恐れていなかったし、不満もなかった。
公平でないことは命の取り合いにおいて当然。これは試合ではなく勝負なのだ。
敵の攻撃をいなしながらゾロは笑う。
突然見えた表情の変化にＭｒ．１が顔をしかめるも、攻勢は止めなかった。
自らの五体を使って猛攻を繰り出すＭｒ．１は一方的に前進を進

める。
無理に足を止められたゾロは後退を余儀なくされ、しかし負けん気は強く、わずかな隙を見つけてはＭｒ．１の体に刃を当てていく。
いまだ鉄を斬れる兆候はない。だがそれでも刃は鉄の体に届いていた。
Ｍｒ．１は油断していない。本気で彼を消そうとしている。
確かに避ける必要はないとはいえ、それほど体に触れられるというのは彼にとっても不本意。まるで鉄さえ斬れればいつでもお前を倒せると言われているかのような不快感があった。触れられる度にＭｒ．１の表情は厳しくなっていく一方である。
所詮はどこにでもいる剣士。そんな認識を改める必要があるかもしれない。
そう考えながらＭｒ．１は尚も自分の勝利を疑わなかった。
跳び上がってＭｒ．１の強烈な蹴りがゾロを襲った。流石に受け流すのは辛いと思ったのか、彼は転げるようにして低く回避した。
Ｍｒ．１の着地と同時、ゾロが起き上がる。
地面に膝を着いたまま三本の刀を同時に構え、雄々しく駆け出すと正面から接近した。
「三刀流――」
それを見たＭｒ．１は咄嗟に拳をぶつけ、脚を開いて腰を落とし、全身の硬度を高める。
「斬人（スパイダー）」
「牛針！」
目にも止まらぬ連撃が突進と共に繰り出された。
防御のために身構えていたＭｒ．１の全身を激しく打ち付けるが傷はなし。血の一滴も流さない。
彼の傍を通り過ぎたゾロは咄嗟に振り返って駆け出し、即座に接近を試みる。
敵が来ると知ってＭｒ．１は慌てずに振り返った。その時にはすでにゾロが刀を振りかぶって眼前に迫っており、反応する暇すら与えられないタイミングだ。

首筋を狙った剣筋を目視し、Ｍｒ．１は敢えて受けず、しゃがむことで回避する。
初めて空ぶったことでゾロの眉が動いた。
隙を生むほど大きな動揺ではなかったとはいえ、わずかに空気が変わる。
返す刀で次の太刀筋を繰り出すゾロに、Ｍｒ．１は意識を変えた。
顔の横で腕を差し出して刃を受け止める。
敢えて動かず、Ｍｒ．１の鋭い眼光がゾロを射抜く。何かを伝えるかのようなその視線に少なからず苛立ちを感じ、また余裕も見える気がして、ゾロは次なる攻撃を行った。
「口先だけじゃねぇってのは認めてやろう。だがそれだけだ」
「ああそうかい。口なら何とでも言えるけどな！」
伸ばした右手で突きを繰り出すと、Ｍｒ．１は首を傾け、刃が頬を掠る。
金属が擦れた音が鳴って、彼自身は表情一つ変えていなかった。
「掌握斬（スパークロー）」
指が刃物に変わり、今度は至近距離でゾロの顔が狙われる。
伸ばされた右手は彼の顔を掴もうとしていたが、すかさず反応したゾロが口に銜えた刀でその手を上手く受け流し、辛うじて無傷で事なきを得る。
まずいと感じたゾロが一旦距離を取ろうとする一方、Ｍｒ．１が追い縋る。
両腕を振るい、蹴りを繰り出し、あらゆる角度から切り裂こうと攻撃が迫った。
その大胆な体捌きは避けるには速く、受け止めるには力強い。
必死に回避するゾロは攻撃の一つ一つを見切り、時には刀で受け流して後退した。
一進一退で一向に状況が変わらない。
どちらかが攻撃をして、どちらかが避ける。その繰り返しだ。
「ハァ、鬱陶しい野郎だ……！」
「お互い様だ」

思わず漏らしたゾロの一言にＭｒ．１が反応する。
ここまで手応えのない相手は初めてだ。苛立ちを感じるのも無理はない。かといって簡単に倒せる相手ではないため焦りは禁物。
一撃を潜り抜ける度、さらに意識が研ぎ澄まされていく。
Ｍｒ．１がまたしても脚を振り回した時、ゾロは屈んで避けた。
直後に前へ踏み込み、立ち上がる勢いを利用して彼の腹に三本の刀を打ち付ける。
腕力で強引に押し上げ、Ｍｒ．１を初めて地面に転ばせた。
衝撃はある。だがダメージはない。即座に起き上がったＭｒ．１はその場で膝を着いた状態で、早くも追いついていたゾロが目の前に居た。
反応する時間すら与えてもらえない。反撃は間に合わないだろう。
すでに刀を振りかぶっていた。
力強く踏み込んだゾロはわずかに跳びながら前進する。
構えられた三刀流は、まるで牙を剥く虎の如く。跪いたＭｒ．１の頭上から襲い掛かった。
「虎狩り!!」
「うっ!?」
肩口へ強烈な一撃が叩き込まれる。
つんのめったＭｒ．１は頭から地面へ倒され、無様に転がってしまった。
その一瞬ではゾロが遠くへ行けるはずがない。倒された屈辱を覚えながらも、それでも怪我一つしていないＭｒ．１は地面に両手をつき、駒のように回転しながら脚を振り回した。
読んでいたのか、ゾロは一歩遠のいてその攻撃を避ける。
触れることはできなかったとはいえ起き上がる時間はできた。改めてＭｒ．１が立ち上がる。
「底が見えたか？　おれはまだピンピンしてるが」
「ほざけッ」
笑みを見せるゾロの一言を耳にして、Ｍｒ．１はその場で脚を広げた。

自ら接近しようとはせず敵を待つ姿勢になったらしい。
好都合だとゾロが駆け出した。
「鬼――」
「何もかも消し飛ばしてやる」
「斬りィ!!」
「発泡雛菊斬(スパークリングデイジー)!!」
最も突進力のある攻撃でゾロが正面から襲い掛かる。それに対し、Ｍｒ．１は両手を前に突き出して正面から彼の攻撃を受け止めた。
衝突。その瞬間空気が揺れる。
辺りを駆け抜けた衝撃波ですら全てを切り裂くかのよう。事実、ゾロの後方、数メートルの距離はあったはずだが壊れかけた建物が音も無く両断されている。
その攻撃を己の身で、己の刃で受けたゾロは思わず歯を食いしばった。
想像以上の衝撃が全身を駆け抜け、彼の体が宙を舞う。
「吹き飛べ」
「おわぁあああっ!?」
細切れにされた建物へ突っ込む形でゾロの体が視界から消える。
吹き飛んだ彼は大きな残骸へ激突し、転げ回った拍子に体のあちこちをぶつけ、額や腕を切って血を流す。だがその様子からして斬撃が直撃した訳ではないらしい。
まだ動ける。まだ敗北ではない。
ゾロは休まず飛び起き、走り出した。
優れた反射神経と運動能力で降ってくる瓦礫を避け、足場としては劣悪な残骸を蹴りつけて跳ぶように進む。当然その先にはＭｒ．１の姿があった。
彼も決着がついたと思ってはいなかったのだろう。その場を動かず待ち受けている。
勢いを殺さずゾロが高く飛び上がった。
もう少しで何かが掴めそうな気がする。あと少しで何か見えそうな気がする。

唯一焦りを抱いているといえばその一点のみで、不思議な感覚にゾロは苦悩していた。
決して言葉では説明できない感覚がある。これまで何度か感じたことのある、周囲の存在を強く感じる独特の瞬間。まだ届かないが、遠くはない。
今、すぐそこまで来ているはずなのだ。
止まっている暇などない。多少無謀でも前に出なければ勝ち目はない。
真っすぐ駆けてくるゾロの気迫に、Ｍｒ．１は確かに他の剣士とは違うものを見た。
「うおおおおおっ！」
「まるで獣。気迫だけでおれに勝てると思ったか」
両腕を刃に変えて思い切り振りかぶった。愚かにも正面から接近する敵を斬るのは容易い。
「微塵斬（アトミックスパ）！」
高速で斬撃を繰り出し、対象を細切れにする技。
常人には見切るどころか何が起こったかもわからないはずの一撃。初見のはずのそれを、ゾロは逃げもせずに正面から捌き切り、強引に駆け抜けた。
無数の斬撃が襲う嵐を切り抜け、Ｍｒ．１の眼前に到達する。
これには彼も驚愕せざるを得なかった。
「何ッ――!?」
今度は怒涛の猛攻が始まる。
狼狽するも冷静に攻撃を受け流すＭｒ．１へ、息もつかせぬ攻撃が次から次へと襲い掛かった。
金属が擦れ合う悲鳴が何度となく続き、ゾロは前進をやめず、強引に足を止めさせようとしたＭｒ．１の行動にも怯まず、彼が足を止めた隙を見つけて額に一撃を入れた。
口に銜えた刀でＭｒ．１の額を打ち、体勢が崩れたのを見てその場で回転する。
瞬きさえ許さない刹那、反撃しようとしたＭｒ．１を待ち受けてい

たようだ。
一瞬の接近を敢えて許した上で自らの攻撃を叩き込む。
「龍巻き！」
「ぐっ……!?」
暴風さえも巻き起こす斬撃をカウンターで受け、下から掬い上げるような衝撃に足が地面から離れてしまう。本人の意思とは関係なくＭｒ．１の体は飛ばされていた。
背中から地面に落ち、受け身を取って即座に起き上がる。
その瞬間、そっと首筋に刃が添えられたのを感じたＭｒ．１は血相を変えた。
「蟹獲（ガザミ）り！」
「うぐぁっ!?」
蟹が鋏で切るかのように、首筋へ受けた衝撃は相当なものだった。
しかしまだ斬れない。血は流れてはいなかった。
転がって距離を取るＭｒ．１を見送り、ゾロは一旦息をつく。
自分は確実に成長しているはず。次の段階へ到達するのは遠くないに違いない。しかしあと一歩がいまだ掴めずにいる。そのせいで決着がつけられない。
斬れない体を持つ敵ではなく、彼は己を恥じずにはいられなかった。
戦意はむしろ高まる一方で、ゾロが放つ迫力はさらに大きく禍々しいものとなっていた。
体勢を立て直したＭｒ．１もまた厳しい表情を見せている。
ここまでやるとは思わなかった。想像以上の苦戦である。
他の任務もある。もはや時間をかけてやる必要はなく、全身全霊を以て始末してやるのみだ。
力を入れたＭｒ．１の両腕が変形し、小型の刃が複数並んだ。それらが回転し始めると耳障りな音を発し始め、もはやそれは刃などという生易しい物ではない。
触れた物を何一つ例外にせず粉々に粉砕する凶器。
慌てず冷静に眺めたゾロは、何度か刀の握りを確かめた。

「螺旋抜斬（スパイラルホロウ）」
甲高い音を発しながらＭｒ．１が歩いてくる。ゾロはそれを見ながら待った。
「ここまでやるとは思わなかった。おれの能力の神髄を見せてやろう。悪いが、おれをお前と同じ剣士だと思ってくれるなよ」
「剣士じゃなけりゃ、発掘屋かよ」
「殺し屋だ」
一歩、また一歩と近くなる。
おそらく触れれば押し勝てない。だが攻めなければ勝ち目があるはずもなかった。
「おれに発掘作業は無理だ。全て粉々にしてしまうからな」
「へぇ、そうかよ！」
一定の距離へ達した瞬間、覚悟を決めたゾロが駆け出した。
勝負は長引かない。
それを知っているが故に一瞬での決着を望んだ。
振り下ろした刃が、すかさず構えられた腕に接触する。その刹那、火花が散った。あまりにも速い回転が視覚で気付くほどの脅威を伝える。
気付いた時には刀が弾かれていて、両腕が上がっていた。
胴体は隙だらけ。それを見逃すほどＭｒ．１は甘くない。
「終わりだ」
Ｍｒ．１の腕がゾロの胴体に触れ、パッと一瞬にして血飛沫が飛ぶ。
ゾロ自身の体も勢いよく飛んでいて、激突するようにして地面を転がった。それ自体は不思議な光景ではないはずなのだが、Ｍｒ．１の表情は険しい。
手応えとゾロの体が飛んだ距離が一致しない。納得ができないのだ。
彼は決して慢心してはいなかった。
「自ら後ろに跳んで避けていたか。あの一瞬で大した奴だ。だが、肉の表面だけを削られてより辛くなるだけだぞ。今の一撃で死んで

いれば苦しまずに済んだ」
「ガフッ……あぁっ……！」
ゾロは、どうやら致命傷を受けた訳ではなかったようだ。
大量の血がボタボタと地面へ落ちて、見た目には生きているのが不思議に見えても、派手に血が出ただけですぐ死に直結する傷ではない。
少なくとも彼は自分の状態をそう判断して、血反吐を吐きながら立ち上がる。
まだ生きている。例の感覚も完璧には掴んでいない。
もう少し、あと一歩。その思考が彼の決意を揺らがぬものにしていた。
Ｍｒ．１は両腕の回転を止める。確かにそれを使えば負けはないだろう。だが強力であるが故に長時間連続して使える技ではなく、目の前の男だけを殺せば任務達成ではない。他の標的を仕留めるためには体力の温存もプロとして必要なことだった。
この男に関しては心配いらない。もう負けはない。
先程の一撃は決して失敗などではなく、浅くないはずだ。ここからの挽回はないと考える。
「そこで寝ていればとどめを刺してやったんだが。まだ無駄な抵抗を続ける気か」
「あいにく、無駄にはならねぇよ」
「そうか。それは結構」
Ｍｒ．１が威嚇するように強く一歩を踏み出した。
「愚かしいまま死んでいけ」
「三刀流奥義――」
ゾロは両手にある二本の刀を回転させて、歩いて接近してくるＭｒ．１を見据えた。
覚悟など、とっくの昔にしている。ようやく見えた勝利の感覚もある。あとはそれを己の物にするだけのこと。何も難しいことではない。
ここで負ければそれまでの男。

ゾロが膝を曲げた瞬間、両者が示し合わせたように前へ出た。
「滅裂斬(スパーブレイク)!!」
「三・千・世・界!!」
勝負は一瞬。
交差した二人はそれぞれ足を止め、結果は火を見るよりも明らかだった。
Ｍｒ．１は腕を交差させてしっかりと立っており、ゾロの体からは弾けるように血が飛んでいた。
視界が揺れる。体から力が抜け、地面に膝を着き、両手の中からは刀が消えていた。地面に落ちた音を聞いてつい手放してしまったのだと気付く。
まるで体の自由が利かない。倒れていくのを止められなかった。
ゾロは必死に手を伸ばし、地面に触れて倒れるのを防ぐ。その際、口に銜えていた刀を思わず離してしまい、地面へ落下する直前、無意識に右手で掴んでいた。
意識が朦朧とするほどの深手。本来ならば敗北したと認識する状況。
しかし彼はその刀だけは手放さず、絶対に自分が倒れることを良しとしていない。視界が揺れていようと体に力が入らずとも、勝利を諦めてはいなかった。
その証拠に、膝を着いてほんの数秒、早くも立ち上がろうとしていた。
この時になってＭｒ．１は表情を歪め、彼の異常性を理解していた。
死んでいてもおかしくなかった一撃を受けてなぜ立ち上がる。その精神力が信じられない。
「まだやる気なのか……そんな体で、本気でおれに勝とうと思ってるのか」
「悪いが、お前じゃねぇんだ……」
呼吸が荒い。膝が揺れる。何もしていなくても喉を駆け上がってきた血が口から出た。

それでもゾロは背筋を伸ばして立ち上がり、Ｍｒ．１へ振り返る。
なぜか顔には笑みがあって、今にも死にそうな姿で余裕綽々といった風体。誰が見ても異常と判断する様子でＭｒ．１を見つめていた。
「おれが目指すのは、世界一の大剣豪。お前程度で躓いてるわけにはいかねぇんだ」
「正真正銘のイカレ野郎だな……引導を渡してやる」
ゾロは、右手にあった一本の刀を鞘に納め、柄を握りしめる。
居合いの型であろうことはＭｒ．１にも理解できた。彼が見せる構えとしては初めてだがこれまで何度も見たことがある。それ自体を知っていれば恐ろしくはない。
次の一手で決める。Ｍｒ．１は身構えた。
一方のゾロは深呼吸を繰り返し、心を落ち着ける。
今は気分が良かった。
周囲にある音が良く聞こえ、耳を澄ませてみると驚くほど心が落ち着く。
それはまるで、自身の周囲にある物全てが呼吸しているかのように。
壊れた家々を作っていた石が。火が点くことなく生き残っていた木が。或いは地面、流れる風、自身が握っている刀でさえも。皆が呼吸しているかのように感じた。
この感覚だ。以前にも感じて、先程からずっと欲していたものだ。
かつて鷹の目と対峙した時、命の岐路に立たされた瞬間、確かに見えていた世界。
心は凪のように落ち着き、一切の雑念が消えていく。
迷いを断ち切った様子で晴れ晴れとした顔になり、ゾロはゆっくり姿勢を変えた。
纏う空気が変わったと、Ｍｒ．１も気付く。
何かがおかしい。勝利を確信したような様子には違和感しか持てない。
すでに死にかけの体なのだ。今からどんな抵抗をしようとも自分に勝つことは不可能なはず。そう思いながらも安心できないのは彼

が数々の窮地を潜り抜けてきたからだろう。
「刀を拾え。まさかそれ一本でおれの攻撃を受ける気か？」
「これだけでいい」
「呆れた奴だな。もう諦めたとは思えねぇが」
「いいんだ。もう受けねぇ」
ますます違和感が増す。頭の中で警鐘が鳴っている。
これ以上踏み込んでは危険だ。
己の勘か、それともこれまで培ってきた経験が打ち出した答えか。どちらにしても今更逃げることはあり得ない。彼を始末して、その次に別のターゲットを始末する。
Ｍｒ．１は決着をつけるべく、スケートのように足の裏へ刃を作って地面を滑り始めた。
「いいだろう。これで終わりにしてやる！　微塵斬速力（アトミックスパート）！」
「聞くが、お前……鉄の呼吸を知ってるか？」
フェイントを入れるでもなく、Ｍｒ．１は高速で真っすぐに接近してくる。
その様子を穏やかに眺めながら、ゾロがたった一本の刀を構え、静かに鞘から刀身を覗かせた。
「一刀流居合……獅子歌歌（ししそんそん）」
二人の距離がみるみる近付いていき、そして、交差は一瞬。
次の瞬間には勝負の結果が明らかとなっていた。
Ｍｒ．１の体が深々と切り裂かれ、大量の血が噴き出し、驚きと衝撃で膝を着いてしまう。半ば呆然としていた彼は自身の体を見下ろし、斬られていることを知ってから血を吐く。
スパスパの実を食べた鉄の体。全身が刃物で、剣士には斬れないはず。
状況を正しく理解した時、彼は自らの敗北を悟り、穏やかな気持ちで受け入れた。
ゾロは彼に背を向けて立っていた。
わずかに振り返って確認したＭｒ．１は、彼の背に語り掛ける。
大きな驚きと少しの納得。敗北を悔しく思いながら、それをぶつけ

ようとは思わなかった。
「ガフッ……！　まさか、本当に、鉄を斬っちまいやがるとは……」
胸元を手で押さえ、久方ぶりに見た自分の血を眺める。不思議と怒りも湧いてこない。
「次は、ダイヤモンドでも斬ろうってのか……」
「そりゃもったいねぇだろ」
「ハッ……」
ぐらりと揺れて、体が倒れていく。
遠ざかる意識を掴むことさえできずに、Ｍｒ．１は倒れた。
「まいったぜ――」
乾いた地面に横たわり、Ｍｒ．１は沈黙した。
同じくゾロも勝利したとはいえ万全ではなく、体力の限界を感じて膝を着く。寝ている場合ではないと思いながらもその場に横たわらずにはいられなかった。
やはり失血が多い。生きているだけまだマシだろう。
どうやらしばらくは動けそうになかった。
（クソっ、やっと〝呼吸〟がわかったってのに……血を流し過ぎた）
このままでは歩けもしない。それなら一旦休むしかないと判断する。
頭に巻いた手拭いを取り、いつものように左腕へ巻く余裕も無いまま、目を閉じた。
（あいつら、全員無事なんだろうな？　状況が知りてぇ。あと、酒でもありゃなぁ……）
確かに勝利したとはいえ、傷が深く、ゾロもまたあっさり意識を手放してしまう。
次に目覚める時がいつなのかは本人にもわからない。また動けるようになった時がその時だ。
辺りはやけに静かで、それを不自然に想いながら、ゾロの意識は眠りの中に沈んでいった。

LET　IT　DIE

各地で戦いが起こり、終わり、また次の戦いへ移行していく。
広大なアルバーナの町が安らぎを得ることはなく、いまだ戦争は続いている。
反乱軍が到着していないのにこの荒れよう。本隊は今頃動き出しているはずだ。必ずそう時間をかけずにこの町へ到達する。その時一体この国はどうなるのか。
壊れかけた家屋の屋根の上でしゃがみ、町並みを眺めるニックの顔には薄い笑みがあった。
「人の力ってのは恐ろしいもんだね。あんなにきれいな町並みがたった数時間でボロボロだ」
以前確かに見たはずの景色はもうない。多くが破壊されてしまっている。
かといって心は痛まない。彼にとってはさほど思い入れもない場所だ。
ニックは、旅をする賞金稼ぎである。
拠点を決めずグランドラインを流れに流れて、捕まえた賞金首を海軍に突き出し、金を手に入れて生活している。特に目的がある訳ではない。
それ故に壊れた町を見て、人々の悲鳴を聞いて、「そういうこともある」程度にしか思わない。
「これじゃどっちが勝っても復興が大変だねぇ。そういう意味じゃ、どっちに転んでも結果は同じってことか。ま、おれは最初からどっちでもよかったんだがな」
言いながらニックは右を向く。そこにはいつの間にか、静かにキリが立っていた。
「君はどうだ？　今はどっちについてるんだ？」
「関係あるのか」
「あるさ。仮に仲間だとしたら、戦う必要はない」
一人で来たキリは怪我の治療を受けており、所々に包帯を巻いてい

る。だが怪我をしたのはつい先程の出来事。万全な状態であるはずがない。
それなのに自分の前へ立った彼を、ニックはイカレていると判断していた。
目を見ればわかる。彼は標的を仕留めるためにやってきたのだ。
「どっちだっていいさ。どっちにしろ、お前は逃がさない」
呆れた様子でニックが目を伏せる。
彼はゆっくりと立ち上がった。
キリは冷たい目で敵を見据えていて、隠す気も無く殺気を発していた。
あらかじめ話は聞いていたが予想以上。これほど冷たい空気を纏うとは思っていなかった。しかし強いと聞いていたのだから油断はしない。
結局のところ、ニックは初めからこれを求めていただけだ。
金、地位、名声より、欲しいのは心が躍る戦い。
ただ面白おかしく生きていられればいいという彼は、強い敵を探していただけ。
七武海の一人が認めた男ならばきっと楽しめるだろうと、改めてキリに対峙する。
「どんな理由であれ、自分から海賊の世界に首を突っ込んだんだ。これからどうなろうと覚悟はできてるんだろ？」
「嬉しいねぇ。どうにかしてくれるのかい？」
懐から刀身の太いナイフを取り出し、両手に持つ。
すでに臨戦態勢。回避する素振りはない。
余裕が窺える笑みを見せて、むしろ彼は嬉々とした様子すらあった。
「おれはただ刺激のある毎日を過ごせればそれでいいんだ。海賊を狩るのも味方するのもただそれだけのため。君がおれを満足させてくれるならそれでいい」
仁王立ちするニックを見て戦意は十分に伝わってきた。対するキリは彼が持つ物と同じサイズのナイフを手にする。逆手に、両方の手

に握った。
それぞれ表情は違えども厳しく睨み合う。
張り詰めた空気。肌に刺さるプレッシャー。辺りの静けさが嫌でも気分を盛り上げた。
ニックは純粋に楽しめる戦いを欲し、キリは覚悟を決める。
如何なる手を使おうと、この男を始末する。
手の中でナイフを回して、唐突にニックが歩き出した。
物怖じせずに前へ進むとキリの目の前に立つ。そこはすでに攻撃が届く距離。腕を伸ばせば手に持ったナイフが肌を切ることができる近さだった。
二人は動きを止めて目を見つめ合う。だが少なくとも友好的な感情など微塵もない。
放出される殺気がぶつかり、二人の間で渦巻き、緊張感が漂った。
「じゃあ、やるか」
言った直後に静寂が数秒。
笑みが消え、目つきが変化した瞬間、ニックが素早く腕を突き出す。強く握りしめたナイフが首筋を狙って迫り、まるで動じずにキリがナイフで受け止める。
止められると無理には押さず、一旦引いて左腕を出した。
素早くキリも反応して右腕のナイフで受け流し、続けて互いに次の一手を繰り出す。
両手のナイフが絶えず振り回され、激突して金属が鳴き続ける。二人ともその場で一切足を動かすことなく、腕だけを動かし、わずかに体勢を変え、本気で相手の命を狙っていた。
それはまるで力量を確かめるかのよう。
刃同士が擦れ合って火花が散り、視界の中で大小様々な輝きが目に刺さる。
やがて二人は一際強く刃をぶつけて、互いの動きを止めた。
いつでも相手を殺せるように力を入れたまま、視線は目を捉えて離さない。
初手は同等。そう考えても良さそうな状況である。

「う～ん、いいねぇ。とりあえずはいい感じだ」
余裕を見せるニックは笑顔で話しかけるが、至近距離で睨むキリは険しい表情をしている。
「おれはよ、今まで倒した最高額が一億ベリーの賞金首なんだ。しかしまぁ、七武海に鍛えられた男が相手だっていうなら、それ以上の価値はあるよな」
「さあね。興味はないし、答える気もない」
「冷たいな。もう少し楽しもうぜ。せっかくの勝負だ」
キリが手首を返した。ギャリ、と音が鳴って刃が擦れ合い、角度が変わる。その挙動を見た後ですかさずニックが動き出し、咄嗟に両足で地面を蹴って跳ぶと同時、キリはしゃがみながら回り、伸ばした右脚で蹴りを、というより足払いを行った。
跳んで躱したニックは余裕を持って無事に着地。
反射的に自身が攻撃を行おうとするも、しゃがんだ状態でキリが腕を伸ばす瞬間を目撃した。
下から掬い上げるような追撃。背後に足を置いて下がりながら避ける。
立ち上がりながらさらにキリが攻撃を継続。
遠ざかるべく足を動かしながらもニックは楽しげだ。
「ハハッ、いいな。そうこなくちゃ――」
「別に楽しむつもりなんてないよ」
その言葉が聞こえた直後、気付けば眼前に振り上げられた脚があり、顔面に蹴りが直撃する。彼の体は紙のように軽々と吹き飛ばされ、屋根の上を何度か跳ねた。
辛うじて受け身を取って着地し、地面に膝を着く。
右手で顔に触れてみると鼻血が出ている。相当の痛みが顔全体を覆っていた。
確かに存在したはずの余裕も陰りを見せたか、顔から笑みが消える。
ニックが見つめる先に居るキリは、手に持っていたはずの紙のナイフを分解し、新たに能力を使用しようとしている。その証拠に、彼の

周囲に紙が浮いていた。
普段の緩さが一切消えた、あまりにも冷たく、感情を見せない表情。
何も語らない瞳は対象を獲物と認識する。
何も言わずに立ち上がったニックは表情を引き締める。
一億ベリーの賞金首を倒した実績を持つ自分は、負けるはずがないと自負、或いは慢心していたことは否めない。流石に七武海に勝てるとは考えていなかったものの、その部下程度ならば負けるわけがないというのが彼の本音だ。
まさかそれが今、崩れようとしているのか。
たったの一撃を入れられただけ。それなのに思考は自分でも予期していない答えを導き出す。
恐怖を抱いたのか。
あり得るはずはないと彼はナイフを回す。
仕切り直して改めて勝負を。まだ自分を見失う様子はないようだ。
「お前程度じゃ楽しめない。たとえ百人居たってな」
「言ってくれるねぇ。自分で言うのもなんだが、まだ本気じゃないんだぜ？」
そう言って構えたニックが前傾姿勢になり、タイミングを見計らって、飛び掛かった。
己の得意な距離に身を置き、両腕を振ってナイフを突きつける。冷淡な目でそれを見るキリは慌てず冷静に回避。大きく動くことも無くその場で背を反らし、頭を動かして避け切った。
攻撃はたったの数度。それでも全て見切られ、つまらなそうな顔をしたキリが脚を振ると簡単にニックの体を蹴りつける。正面から腹を蹴られて息が詰まった。
大した痛みではないがほんの一瞬、衝撃で動きが止まる。
振り上げた左脚が顎を捉え、足元がふらついた。
直後には右脚で側頭部を撃ち抜かれており、ニックの体は屋根を転がる。
能力を使用した様子のない、至って普通の蹴り。本来なら避けられないはずがない。

地面に寝転がっている自分を顧みた時、ニックは血相を変える。
おかしい。なぜこんなことになっているのだと純粋に不思議だった。状況はどうあれ、一度は自分が倒した相手なのである。現に今、彼の体にはニックがつけた傷が残り、治療した包帯姿で確認できる。つまり大きな差がある方がおかしいのだ。
気付かぬ内に冷や汗が流れた。
キリはニックが立ち上がるのを待つ。敢えて手は出さずに見守った。
動揺を消すかのようにゆっくりと起き上がる。
目を見ればわかるが、敵が少なからず混乱しているのは間違いない。しかし感情は動かない。あくまでもキリは感情を見せずに立っていた。
「たかが賞金稼ぎ風情が、何の覚悟もなく首を突っ込むからそうなる。こうして向き合ってみるとお前のことを怖いとは思わない」
「よく言うぜ……お前らはたかが海賊風情だろう。自分は他の連中とは違うってか？　何も変わりゃしねぇよ、おれもお前も」
「同じじゃないさ」
辺りを漂っていた小さな紙が一か所に集まってくる。
大きな動作を見せる訳でもなくキリの一部となりつつあった。
「お前は本当の覚悟を知らないんだ」
「何……？」
顔をしかめるニックに、今度はキリが攻勢に出る。
策も使わず正面からただ素早く接近し、驚く彼が反応できない速度で、突き出した左の拳が鈍く腹を打った。思わず背を曲げる衝撃にニックが苦悶する瞬間、軽く跳んで振り上げられた右脚は、隙だらけの後頭部にかかと落としを叩き込んだ。
ニックは顔から地面に落ち、かつてない衝撃を受けるほど激しく激突した。
鼻血が飛び散り、硬い屋根にヒビが入っていたようだ。
倒れるニックの背後でキリが右腕を振り上げる。
無数の紙が巻き付いて集まり、鉄のように硬化された拳は大きく、

彼の頭を再び殴りつける。
屋根の一部が破壊されて、粉塵が上がると共にニックの姿が消えた。轟音と共に瓦礫が室内へ落ちていくものの、キリは無言で屋根にできた大きな穴を見つめる。
人が一人通れそうな穴。そこからニックは下に落ちた。おそらくすぐ上がってくる。
敢えて離れず待とうと決め、彼はその場で敵の登場を待つ。
少しの間、物音一つなく気配を感じさせなかったが、予兆を感じさせず飛び出してくる。
粉塵を切って現れたニックは屋根に着地し、落としたのだろう帽子を被り直した。
頭から流血しており、少しだけ不満そうな表情。
激しい怒りを見せる訳でもないが先程と同じという訳でもないらしい。ニックは服についた汚れを払い、キリを見ずにぽつりと呟く。
「あぁ、くそ……痛ぇな」
改めてキリを視界に入れる。
すでに動揺は消えていた。冷静な面持ちで笑みもない。
その代わりようやく本気になったようで、真剣な表情は先程との違いを見せつける。
「まぁ、口であれこれ言うのは簡単だからな。それよりわかりやすいのはこっちだろ」
器用にナイフを回しながら彼は出方を伺っている。
キリは一切反応せずに黙り込んだままだ。
「覚悟がどうとか、カッコつけるなよ。所詮は生きるか死ぬかだけの世界。しっかり殺して生き残って、その繰り返しだけの世界で生きてるのさ。おれらは」
「ああ……そうだね」
反論はせずにあっさり受け入れた。
キリの手から独りでに紙が離れていき、再び宙に浮遊して、彼の周囲で待機する。
見ているだけで不思議な光景。それは悪魔の実の能力だった。だ

が悪魔の実を食べたのは何も相手だけではない。ニックもまた、ずいぶん昔に食べている。
なんの前触れもなく変化が始まる。
ざわざわと肌が動き出し、羽が生え、姿が鷲のようになっていく。
トリトリの実、モデル〝鷲(イーグル)〟。人獣型になったニックは翼を広げて、持っているナイフを敵へ向けて構える。
身体能力、機動力、肉体の多くが人型を超えている。
正面から戦うのは決して良い選択ではなかった。
しかしキリは逃げも隠れもしようとしない。
策を弄することも無く、直立不動でニックの姿を見つめるのみ。
ちらりと、視線だけは屋根に開いた穴から室内を確認した。
「こっからがおれの本領だ。お前を殺すことにのみ集中しよう」
姿を変えたことでニックが笑みを見せる。
彼が言う通り本領発揮はこれから。動物系(ゾオン)の能力者の最も秀でている部分は身体能力が飛躍的に強化されること。人型の時とは比べ物にならないほどの身体能力を得る。
一度目の襲撃でキリを仕留めたのもこの状態だった。
ここからは状況が変わると確信を得て、翼をはためかせたニックは空を飛ぶ。
「覚悟はいいか？　って、おれも軽々しく覚悟なんて言ってるよな」
徐々に上昇していった後で、どことなく楽しげにも見える様子で語り掛けてくる。
ニックは、自らの意思で落下を始めてキリの頭上から襲い掛かった。羽と一体化した腕が強くナイフを握りしめ、視線は絶えず彼の急所を狙っている。
ずっと眺めていたキリは冷静に行動し、咄嗟に穴の中へ飛び込む。続けてニックも飛び込んだ。天井から地面までそう高さはないが、二人は空中で急接近する。
振りかぶられたナイフが今まさに振り下ろされようとしていた。
それを見ながらキリは冷静に対処する。
彼に付き従うように宙を舞っていた紙が動き出し、ナイフを握る両

手に数枚張り付いた。
手を覆うために素早く接触した勢いで両腕がぐいっと後ろへ流される。
必然的に胴体が隙だらけになって、すかさずキリの攻撃が飛ぶ。着地する前に横っ面を蹴りつけられて、吹き飛ばされて壁へ激突した。
ニックが地面へ落ちる頃、キリは逆立ちをするように手で着地し、軽やかに地面へ足を着けた。
「ガハッ……!? くそ、また痛え……」
ひっくり返っていた彼が立ち上がろうとしている最中、視線を外したキリは室内を見回し、焼けずに残っていた本棚に目をつけた。そこには辛うじて無事だった本が残っている。
手を伸ばしただけでそれらが動いた。
バサバサと音を立てて無数の紙が本を離れて外へ出てくる。
数えきれないほどの紙が群れとなってキリの元に集まり、地面を這って移動する様は、悪寒や恐怖感すら与えるほど、不気味な様相を見せている。
目を離した時間はそう長くない。
だがニックが彼を見た時、その姿は変わっていた。
「なんだ……そりゃ」
見た目はまるで白いコート。集まった紙は服のように、そうとしか見えない状態になっている。
もはやそれが紙とは見えない。厚手の白い上着を羽織って、悠然と立ち尽くす。その姿のなんと美しく、残酷なことか。
能力の神髄。今まさにその姿を目にしていたらしい。
「これがボクの本領だ。紙が多ければ多いほど強くなる……紙鳴武装・白雷」
先程まで蠢いていた紙は、今はただの服として沈黙を保っている。
普通は見れないその光景と彼の言葉でニックは納得していた。
「なるほど。多ければ多いほどか……おれを見つけるまで時間がかかったのは紙を集めてたからってことか？ ここで姿を見せたってのも偶然じゃなさそうだな」

「慎重な性質でね。ここから先は時間をかけるつもりはないんだ」
「嫌な性分だぜ」
ニックは改めて室内を見回す。所々が壊れて、荒れ果ててはいるが内部の物は比較的無事に済んでいる。何よりここは大きな家だ。
おそらく内部の状況まで想定して姿を現したのだろう。
怒りに燃えていようが冷静な判断は失っていなかったらしい。その結果が現状だ。
確かに様子は変わったとはいえ、まだ実力がどう違うのかはわからない。
少なくとも狭い室内では不利。最も得意とする空中戦、或いは高所からのヒット&アウェイができないと考えてニックは外への脱出を考慮していた。
幸い壁はひび割れて今にも壊れそうな状態。天井には穴もある。
おまけに装備も万全で、如何様にもできると彼は踏んでいた。
「確かに強そうだが、実力のほどは見てみないとな。それだけ集めて回ったのに負けちまったんじゃ同情もできねぇ」
言って、ニックは軽い調子で地面に何かを落とした。
導火線に火を点けた爆弾である。
丸いそれがコロコロ転がって、キリが興味なさげに見下ろした一瞬に翼を広げ、素早くニックが飛び立った。天井に開いた穴から外へ出る。
そして爆発。建物の内部が爆破され、大量の煙が穴から空へ立ち上った。
ニックは翼を動かしながら滞空して見下ろす。
まさかあれで死にはすまい。出てくるのを空中で待つ。
かくして、やはり時間をかけずに外へ出てきた。
無傷のキリが煙の中から屋根へ現れてニックを見る。動じている様子は皆無だった。
この程度は想定した範囲内。驚きもしない。問題はここからであることは気圧されかけているニックが誰よりも理解していることだ。
翼を動かしてさらに高度を上げる。

トリトリの実の強みは人間には不可能な空の飛行と機動力にある。室内で無ければそうそう負けはしない。自信と、これまで培った経験、技術があった。
遥か高くからキリを見下ろした後、ニックは急降下を始めた。
「さて、こっからだ」
真っすぐ地面に向かって落下し、さらに羽で空気を掴み、自ら加速する。
キリの頭上から真っすぐ。眼下には彼の姿があった。
微動だにしない彼の姿を改めて確認すると、ニックは勝機を得たと判断する。
敵の弱点はすでにわかっていた。水に触れると弱体化し、自らの意思で動くことが困難になってしまう。そしてその弱点を突くための装置は自身の服の下に隠している。
操作が簡単な、挙動一つで水を撃ち出す必殺の道具。
普通の人間には水鉄砲程度の威力しかなくても、相手が彼なら効果があることは確認済み。
キリが忘れているとは思わないが、この時の彼は功を急いでいた様子もあった。
勢いよく落下してくるニックを見て、キリは慌てず身構える。
脚を開いて立ち、右腕を横へピンと伸ばして、人差し指だけを伸ばした。
「さあ、どうする！　生半可な攻撃じゃおれの突進は止められねぇぞ！」
距離がみるみる近付いてくる。だが水を発射するまではまだ遠い。
そんな距離感で、突如キリが右腕を天に向かって振るった。当然腕が伸びるはずもなく、どういうつもりだとニックが眉を動かした瞬間、彼は凄まじい衝撃を受ける。
あまりにも速い攻撃が、彼の頬を殴りつけていた。
確かに見た。見えていた。ただ反応できなかった。
キリが腕を振り上げたその時、白いコートが不気味に動き、伸びた触手がニックを打った。

予想だにしていない速さである。気付いた時には攻撃が終わった後だったようだ。
視界が揺れて体勢が崩れる。空中でがくりと揺れた彼は隙だらけとなった。
もう一撃。左腕を振った際に伸びた太い触手がニックの片翼を打つ。
ドスンと響く衝撃。気が遠くなりそうな痛みが走る。鉄の硬度で攻撃範囲も広く、おまけに避けられないほど速い。尋常なダメージではなかった。
彼の蹴りが遊びに思えるほど全く違い過ぎる。
翼に攻撃を受けたことで姿勢は崩れ、立て直す暇もなく体が無様に回転してしまった。
「ぐあっ……!?」
錐揉みして落下するニックにキリは更なる攻撃を行う。
右手を振って触手を伸ばし、落下するニックの体を上から捕まえ、無理やり打ち下ろすと落下する速度を倍以上にまで速めた。
打撃のダメージに加えてあまりの速度に逃げられない。
ニックの体は落下の勢いを殺すことなく地面へ叩きつけられた。
粉塵が上がり、彼の姿が一瞬見えなくなる。
凄まじい激突をしたニックは倒れており、全身を痛めて呻いていた。
風が粉塵を運ぶと同時、屋根からキリが飛び降りてくる。
悠々とニックの前へ足を運び、倒れた彼を見下ろして手を出さなかった。
あまりにひどい侮辱。とどめを刺せる状況で、敢えて見逃しているのである。
「立て」
「てめぇ……」
震える体で必死に立ち上がろうとするニックを待ち、キリは静かに見守る。全くの無事という訳でもなかったが戦闘の継続は可能なようだ。

立ち上がり、落としたナイフを拾う。一方で帽子を拾う余裕はない。
武器を手にした直後に翼を広げた。まるで威嚇するように。
キリの様子は変わらない。身に纏ったコートは先程の攻撃が嘘のように静かで、紙とは思えぬ見た目の美麗さ。凛として立つ様は恐ろしさを感じる。
しかし今更退くことはできず、ニックは挑みかかる。
「うおおおおあああっ!!」
地面を蹴って、翼で風を掴んで高速で前進した。
次の瞬間、前進する自身を迎え撃って顔面に強い打撃が突き刺さる。
前へ進もうとしたニックはさっきの地点より後ろへ移動させられ、大の字になって倒れる。
「立て」
簡潔に告げてキリが歩み寄ってくる。目で見ずともその気配は感じていた。
そのため、ニックは勢いをつけて飛び起きるとすかさず攻撃に移る。
不意を打てば届くのでは。そんな彼の思考を嘲笑うかの如く、紙で出来た触手が激突し、キリの攻撃が彼の体を軽く吹き飛ばす。
またしても地面を転がったニックは血反吐を吐いて動きを止めた。今や頭を切っただけでは済まない。鼻の骨が折れて、体内でも数本は骨が折れているだろう。
拭いきれない強い痛みが体に染みついていた。
再びキリが歩み寄り、今度は目の前に立つ。
明らかに先程より距離が近い。誘っているのかとニックの顔が歪んだ。
「立て」
繰り返す言葉は同じ。明らかな優位に立っても逃がそうとはしない。
口の中にあった血を吐き捨てて、立ち上がったニックは彼と対峙し

た。
ここまで近付けば腕が届く。ナイフで十分。先に当てさえすれば勝ち目がない訳ではない。
視線がぶつかって、何も言わず睨み合う。
あまりにも彼を舐め過ぎていたようだ。だが現状をきちんと理解した結果、まだ負けた訳ではないと考えるニックは、どうやら冷静ではなかったらしい。
キリの目を見て逃げなかったのがその証拠である。
「大したもんだよ、お前は……流石あの男が執着してるだけはある」
彼の言葉には一切反応せず、キリはじっとニックの顔を見上げている。
今更何か言ったところで動揺することはなさそうだ。
ニックが人獣型のままでナイフを振るう。
唐突なタイミングを選んだつもりだったが、キリは即座に反応した。
彼の動きを見てから動き出したのに、右腕を振るい、コートから伸びる触手が先にニックの頬を打っていた。強烈な衝撃で彼の攻撃など中断され、無理やり視界が変えられる。
足元がふらついたその一瞬、左腕の動きと共に触手がニックの腹を殴打した。
体が一瞬浮かび上がり、倒れないよう必死に足へ力を入れる。しかし時間を与えず、次の一撃が彼の顎を下から打ち上げた。
フラフラと、見るからに体に力が入っていないのがわかる状態にある。気付けばニックは両手のナイフを落としてしまい、しゃがんで取る余裕さえない。
キリの目はまるで動じずにその様子を眺めている。
意図せず体が揺れるニックだが、諦めてはいないらしく、震えながら腰に手をやった。辛うじて掴むことができたのは事前に弾を込めておいたピストルである。
必死にピストルを抜いて、気合で構えてキリへ銃口を向けた。
しかし引き金を引くよりも早く肩を殴られ、体は飛び、ピストルは

地面へ落とされる。
またしてもニックが倒れる。
冷静さを取り戻す暇さえ許さない冷酷無比な攻撃に、彼の肉体と精神はどんどん追い詰められていった。このままでは殺される、と思うのも無理はない。
疲弊した様子で立ち上がった時、またしてもキリが目の前で待っていた。
恐怖を抱くよりも早く、触手が胸を打ち、ニックの体が勢いよく吹き飛ばされた。だが彼はこれ幸いとその勢いを利用し、翼を広げて空へ逃れようとする。
生き残ることこそ最優先。だからこそ彼は今日まで死ななかった。
勝負の結果や過程よりも命が大事だ。故に彼は退却することにも躊躇いはない。
素早い動きで高く飛び上がり、脇目も振らずにその場を離れようとする。
（こりゃあ流石にだめだな……！　一旦距離を取って――）
しかし目標とする高度まで到達する前に後ろから強く引っ張られた。驚いたニックが振り返ると左脚に細い紙の触手が巻き付いており、その先を辿るとキリのコートに到達する。
伸ばした左腕を思い切り振った。
鷲の能力を抑えてニックの体が振り回される。
無理やり下へ引きずりおろされて、建物の屋根へ激突した。
そこから腕を横へ振るい、連動して動く触手はニックの体を引っ張り、一列に並ぶ建物の壁へぶつけながら移動し、壁が壊れる音がいくつも重なって瓦礫が落ちる。
キリが体を反転させる頃には、ニックの体は反対側の通りへ移動させられ、建物に激突。
大きな破壊音が聞こえた後にようやく脚から紙を離した。
壊れた家の中でニックが倒れている。
何度も壁に激突して引きずられた結果、もはや動けそうもない状態にあった。

石の破片や木材の切れ端が、所々肉を貫き、流れた血が地面に広がる。苦渋の表情は当然だ。
這いつくばったままで、自身が激突してできた穴から逃げようとしていた。彼にはもはやそんな程度の抵抗しかできない。圧倒的な力で打ち負かされ、心も折られた。
おそらく最初からこうできただろうに、敢えて時間をかけた拷問のような戦闘。
アレは、人間ではない。
数多くの賞金首を見てきたからこそニックは思い、戦おうという気力は消え失せている。
その時、背後で足音が聞こえた。振り返らずにニックは溜息をつく。
振り返ったまさにその瞬間に、姿を見ることさえ許されず、太い触手が胸を殴って、向こう側の壁をぶち抜いて吹き飛ばした。
ニックの体は受け身も取れず無様に地面を跳ね、力が入っていない様子はまるで人形のよう。
多量の血を吐き、揺らぐ視界の中へ距離を取ってすかさずキリが地面へ降り立った。
「ガフッ、ガハッ……！　ハァ、待て……」
両腕をついて必死に体を起こして、彼の方へ顔を向ける。
実力の差は圧倒的。どう転んでも勝つことは不可能。
そこでニックは、彼に対して交渉をすることにしたようだ。
「見ての通り、おれは……ハァ、空を飛ぶ能力を持ってるんだ。世界中で見ても珍しい能力だ。そうだろう？　こいつを使えば、いつどこであれお前に有利な状況を作れる」
道の真ん中に立ってキリはニックを見ていた。
冷たい目で表情はなく、少なくとも攻撃しようとしている様子はない。
「おれは、賞金稼ぎだしな……お前らじゃできないことも、あるだろう。一般市民の協力は、有難いものじゃないのか？　おれなら、海軍にも、顔が利く」

「へぇ……」
「悪い話じゃねぇはずだ。自分で言うのもなんだが、おれは、使える奴だと思うぜ……」
息も絶え絶えに決死の想いで説得を試みる。遮らない様子を見ると余地はあるのだろうかと考えてしまい、ニックの心に余裕が生まれようとしていた。
彼は頭が切れると聞いている。決して可能性はゼロではないはず。
そう信じることしか、今の彼にできることはない。
「確かに使える人材は好きだよ。そういう連中を集めて上手く使えば、仲間を守る術にもなる。特に専門的な能力を持った希少な人材はそう手に入るものじゃないしね」
「そうか……それならっ」
「でもお前はだめだ」
キリは初めて笑みを見せた。
純粋な、まるで子供のような笑顔。それが余計に彼の異常性を垣間見せる。
血まみれで倒れている人間に向ける表情ではない。
「今までそうやって生きてきたんだろう？　この先もきっと裏切る。お前は必ず、敵になるためにボクらの傍から離れる」
「ち、誓うよ。絶対にそんなことはしない」
「口先ならなんとでも言えるからね」
なぜか、ざわざわとキリのコートが蠢いていた。
紙の集合体であるそれが何かを始めようとしているかのように、一枚一枚が動き出し、触れ合うことで徐々に音が大きくなっていく。
血相を変えたニックには彼が鬼か悪魔にでも見えていただろう。
その口ぶりは確実に己の標的を仕留めようとしていた。
「何の覚悟もせずに首を突っ込むからそうなる。命を賭ける気のない奴が、中途半端な気持ちで海賊に手を出すな」
「あ、ああ……悪かったよ。反省してるんだ、今」
「一番いい利用方法は、トリトリの実の使用者を変えることかな」
笑顔でそう言ったキリは右腕を掲げ、指を一本だけ立てる。

白いコートが肥大化するように、無数の紙が一斉に動き出して、それだけで恐怖心を煽った。
もはやニックは生きた心地がしなかった。
今や表情は一転して。
顔を強張らせたニックを見据えて、笑顔を見せるキリは腕を振り下ろした。
「ひっ……!?」
「紙鳴――!」
怒声のような轟音を伴い、強風を纏って大量の紙の群れが宙を走った。
一瞬にしてニックの姿は呑み込まれ、その身を捕らえた上で運び、風のように過ぎ去っていく。遮る物が何もない大通りを駆けて、数百メートルを移動して尚も止まらない。
呑まれたニックは濁流の中に居るかのような感覚に陥っていた。
視界がなくなり、体の自由は利かず、どこへ行くかもわからず連れ去られる。
やがて行く先に大きな塔が見えた。
脇目も振らず高速で飛ぶ紙の群れが塔へ激突する。
次から次へ押し寄せる紙切れによって磔にされてしまい、ニックは呼吸すら困難になる。
ほんの数秒でも永遠にさえ感じる時間。ニックは耐えに耐えて必死に呼吸した。
そして押し寄せる紙が途切れた時、一気に視界が開ける。
耐え切った。まだ生きていた。彼は思わず笑みを浮かべる。
その眼前に巨大な紙の塊の中からキリが現れた。
「――餓鬼草紙(がきそうし)」
周囲を白い紙で包まれて、彼の姿は再び変化していた。
両手に剣。背には大きな輪を背負い、そこには等間隔で刃を持つ武器が八本、ずらりと並んで切っ先が全て標的に向けられている。
ニックは今度こそ覚悟した。
顔面蒼白になり、空から降るように近付いてくるキリの動きがひど

く緩慢に見えた。
そうして接触する。
結果は一瞬にして目にできた。
キリが体を回転させた瞬間、二本の剣が、八つの刃が、一斉に標的へ襲い掛かり、身を斬り肉を抉り、空へ壁へ撒き散らす。
それはまるで、赤い花が咲いたかのようだった。
地面から数十メートル。重力に従って落下してきたキリが着地した時、赤い雨が降って、頭からかぶった彼の体を赤く染めていく。
ひとしきり降った後で頭上を見上げた。
壁には赤く染められた人影が磔にされており、落ちてくることもなく沈黙している。
ふーっと息を吐いて、いつも通りの雰囲気に戻って。
満足げな顔で微笑んだキリは軽やかな声を発した。
きっと聞こえてはいないだろう相手へ向けてどことなく親しげに言う。
「まぁ、気は晴れたし、命までは取らないでおいてあげるよ。どうせ世界のどこかで悪魔の実が復活しても手に入れるのはほぼ不可能だし」
体中がどす黒い赤で汚れた状態だが、彼の表情は晴れ晴れとしていた。
やりたいことだけをやって気は紛れたらしい。
とにかくこれで不安要素は消えた。実力はそこそこだが飛行能力を持つ厄介な相手は戦線離脱、誰かが助けたとしてももう戻ってこれない。これで他の敵に集中できる。
今度こそキリは普段通り、しかし真剣な表情で歩き出す。
「これに懲りたら転職するんだね。海賊舐めんなよ」
颯爽と歩き出して振り返ることはしない。
キリの目は次の目的を見ており、それは何としても自身がやり遂げると決めたものだった。

遭遇

誰も居ない道を悠々と歩いていたある時、ふとした瞬間にクロコダイルは眉を動かした。

前方、思いもよらなかった集団の姿を見つける。

先に行ったはずのミス・オールサンデーとコブラは、本来ならば目的地に到着していてもおかしくないと思っていたのだが、どうやら足止めされていたようだ。

面倒だとは思うが、厄介だとは判断しない。

クロコダイルは逃げも隠れもせず、歩む速度すら変えず、正面から近付いていった。

足を止めたのは必然的にミス・オールサンデーとコブラの傍だった。

前方に立つ集団が道を塞ぐように展開しているのだから仕方ない。

薄い笑みを浮かべたクロコダイルは先頭に立つ男へ話しかける。

「ほう、これは招かれざる客だな……こんな場所まで何の用だ？白猟のスモーカー君」

ずらりと並んで銃を構える海兵の先頭、厳しい顔をしたスモーカーが居る。

銜えた二本の葉巻から煙を燻らせ、明確な意思を持ってクロコダイルを睨みつけている。その様子はまさに野犬。身の程を知らずに噛みつく気でいるのだ。

余裕があるクロコダイルは彼から発せられる怒気を楽々と躱す。おそらく相手は今にも戦う気だがその価値はないと見ている。実力に差があるのは明白だ。

噂は聞いている。将来有望ながら躾がなっていないため最弱の海へ飛ばされた野犬。

確かにそれも納得だと、彼の目やこの場に居る事実から察することができた。

「少しばかり探し物があってね。この国にあるかと立ち寄ったんだが……どうやらそれ以上のもんを見つけちまったらしい。こりゃあ

一体どういう状況だ？」
「一応聞こうか。どう、とは？」
「いちいち説明しねぇとわからねぇ状況じゃねぇだろ。今、おれの目の前には信じ難い光景が広がってる」
静かな物言いの奥には多少の苛立ちを感じさせ、スモーカーは語り出す。
何を言わんとしているのかは互いにわかっている。それでも敢えて説明するのは、言わばこれは前哨戦。この後にどうなるかを知りながら出方を窺っているに過ぎない。
特に警戒しているのはスモーカーとその部下たちだ。
目の前に居るのは世界的に名を売った海賊と、行方不明となっていた賞金首。そして怪我をしている上に拘束されているアラバスタ王国の王。事件でないはずがない。
大体の事情は察することはできるが相手が悪かった。
見過ごせないだろうとは考えるものの、果たして戦ったところで勝てるかどうか。それがわからないスモーカーではないとはいえ、やはり海兵として退くことはできない。
己の力の無さを恥じ、苛立ちが増す。
それでも彼は声色だけでも冷静にクロコダイルと対峙していた。
「国を守るべきアラバスタの英雄が、消息不明だった〝悪魔の子〟を連れて、怪我をした国王を拘束し、どこかへ連れて行こうとしている。これは夢か、性質の悪い冗談か？」
「言葉を返すようだが、それがわからねぇほどバカじゃねぇだろう。つまらねぇ問答がしてぇなら付き合ってやるのも一興……とはいえ、今は時間がない。悪いが次の機会にしてもらえないか」
「そういうわけにはいかねぇな」
本来ならあり得ないと思いながら、スモーカーが、ついに十手を抜いた。
彼の隣に立つたしぎは緊張しつつも刀を抜く。
すでに臨戦態勢。海兵たちも緊張して武器を構えていた。
力の入った様子にミス・オールサンデーがくすりと微笑む。

隣に立たされたコブラは、ただ逃げてくれと願わずにはいられない。
「おれは元々、七武海なんざ信用しちゃいなかった……何を企んでいやがる」
「探し物さ。そのためには協力者が必要だった」
「怪我をさせる必要のある協力者か？　好意的とは思えねえな」
「だとすればどうする。まさかとは思うが、お前が止めるつもりか？」
戦意を大きくするスモーカーをクロコダイルが挑発する。
時間がないと語るにもかかわらず逃げようともしないのは、〝時間はかからない〟という意思表明に他ならない。おそらくそれはスモーカーも気付いていたはずだ。
あまりにも無謀過ぎる挑戦。だが捕らわれた国王を見捨てて逃げられようか。
ここは死地だと理解しながら、彼の部隊は戦うという選択をやめなかった。
「そうする必要がありそうだな。おれが海兵で、お前が海賊である限り」
「安っぽい正義に同情しよう。それがお前の寿命を縮めることになるがな」
スモーカーの手が十手の柄を強く握り直す。
今にも動き出しそうな様子にクロコダイルは敢えて目線を外した。
「ミス・オールサンデー。お前はコブラを連れて先に行け」
「あら、また？　人数が多いけれど」
「火の粉を払うくらいお前にもできるだろう」
そう言ってクロコダイルは前方へ歩き出した。スモーカーを、というよりは道いっぱいに展開している海兵の部隊を目指しており、嫌でも緊張感が増す。
これでは黙っている訳にはいかないとスモーカーが顔を歪めた。
彼に対しては人数が多くとも無駄。おまけに能力者に有効な装備も決して多くはない。

ここは自分が止めるべきだとスモーカーが動き出す。
下半身を煙に変え、噴き出す推進力を利用してクロコダイルへ接近を試みた。
十手の先端には海楼石が仕込んである。たとえロギアでも能力者には有効な武器だ。
そう簡単に当たる相手だとは思わないが自分にさえ注意を引きつけられれば。そんな考えで接近したスモーカーの期待を裏切り、彼が目の前に来た時点でクロコダイルは砂となって消える。全身が砂に変化したおかげで構えていた十手は空ぶって、彼の姿を見失った。
辺りはどこを向いても砂がある砂漠の国の町。クロコダイルの力を十全に引き出す環境だ。
嫌な予感がして振り返った時、やはり直感は当たっていた。
部隊の中から突如悲鳴が上がった。海兵の数名が鉤爪で切られたのだ。
血相を変えたスモーカーは慌てて反転し、空中へ躍り出すように煙になって飛んだ。
「ぎゃあっ、ああっ……!?」
「痛え……!」
「チッ、おれの部下を――!」
件の位置を見つけた。逃げ惑う海兵たちに囲まれるようにしてクロコダイルが立っており、左腕にある鉤爪から血が滴り、倒れている海兵が五人居る。
スモーカーは急降下してクロコダイルへ接近する。
余裕を持ってその姿を見上げた彼はにやりと笑った。
「全員離れてろ！　お前らじゃ敵わねぇ！」
「スモーカーさんっ！」
「お前なら敵うと思ってるのか？」
上空から強襲してくるスモーカーを眺め、クロコダイルは右の掌を上に向けた。するとそこから小さな砂嵐が発生し、爆発的に大きく成長していく。
スナスナの実の砂人間とは知っていたとはいえ、これは予想外だっ

た。
迎え撃つ形で煙のスモーカーは吹き飛ばされ、周囲に居た海兵たちも次々地面に転ぶ。
図らずも意図的に地面へ落とされてしまったスモーカーは冷静に受け身を取る。
眼前には一瞬にして大きくなった砂嵐。海兵の体が宙を舞っている。
その向こうにはスモーカーに視線をやり、意味ありげに笑い、敢えて背を向けるクロコダイルの姿が見えた。なぜ背を向けるのか、理由は簡単にわかる。
一つはスモーカーを挑発するため。
もう一つは海兵を攻撃し、同じく彼を誘い出すためである。
左腕の鉤爪で、また誰かが切られた。砂嵐が移動する轟音の中でも悲鳴が聞こえる。
見過ごす訳にはいかない。
煙にはならずに走り出して、スモーカーは咄嗟に部下のたしぎへ声をかけていた。
「たしぎぃ！　国王を助けろ！　救助が最優先だ！」
「は、はい！」
大声で叫び、彼女の返事を耳にすると思考はすでにぶれなかった。
仮に大きな実力の差があるとして、対抗する術はある。海楼石の十手さえあれば全く勝てないという状況ではないはず。必要なのは、実力の差を埋める決死の覚悟。
スモーカーは死すら厭わず、部下を助けるために砂嵐の中へ飛び込み、駆け抜けた。
クロコダイルの背には時間もかからず接近して、振り返らないことに危険を感じつつ攻撃する。
先端で突くため十手が突き出された。
狙うのは最も当てやすいだろう背。頭よりも面積が広いため当たりやすいはず。
接近自体は簡単にできたが、しかし十手が触れようとした瞬間、砂

の体が動いて一部分にだけ穴が開き、十手はそこを通されて触れずに止まる。
事前にどこを狙うかわかっていなければあり得ない光景。
目を見開いたスモーカーは瞬時に十手を引いた。
動揺を消して体勢を立て直そうとする彼が身構える一方で、クロコダイルは焦らず振り返ると、自身の正面にスモーカーを置く。
危機を感じた様子は皆無である。彼はスモーカーの行動を嗤ってすらいた。
クロコダイルは動きを止めて彼を見る。
今から攻撃を始めるだろうことはわかっていた。だがスモーカーはその場を動けない。
自分は煙だから、攻撃を受けるわけがない。そう思っていた様子でもなかった。
動けないのはきっと彼の注意を引くため。それと同時に、肌を刺す威圧感に体が強張って、だ。
「白猟のスモーカー……お前の噂は聞いてる。新兵の頃から頭一つ抜きんでた存在だったが、イーストブルーに左遷されたそうだな。上司の命令は聞いておくもんだ」
「何が言いたい」
「惜しい男だと、そう言いてぇのさ。本部で鍛えられてりゃそんな玩具を使わずともおれに触れられたろうに。お前の敗因は最弱の海で無駄な時間を過ごした数年間さ」
砂嵐は一向に消えようとしない。むしろ規模を増しているようにすら感じた。
ふとクロコダイルが竜巻のような砂嵐に目を向けた時、スモーカーは眉をひそめた。
「いい砂の乾き具合だ。広場の小競り合いを放置しておれを仕留めようとしたことは評価しておいてやろう。だがおれを倒せねぇならそれも無駄な労力だ」
「最初からこのために七武海になったってわけか。一体何を狙ってやがる」

「それを調べるのがお前らの仕事だろう。できればの話だが」
右腕がサラサラと砂に変わる。反射的にスモーカーが全身に力を入れた。
「お前の命に興味はない。生きていようが死んでいようがこの先の出来事は変わらん」
クロコダイルが身構えたのを見て、視線を合わせるスモーカーは、汗が噴き出すのを感じた。
流石、七武海に名を連ねるだけのことはある。
改めて対峙してみると、あまりにも強大な存在感に気圧された。確かに彼もグランドラインに来て数々の賞金首を打ち取ったが次元が違う。
半ば無意識的に、選択は間違っていたのかと考えさせられた。それほどの脅威。
砂嵐が風に乗って徐々に移動を始めようとしていた。しかし気付いたところで止める方法はないに等しく、またスモーカーには余裕がない。
周囲から海兵が離れた後、クロコダイルが右腕を振り下ろした。
ぶれることなく直線に砂の刃が走る。クロコダイルの腕から放たれたそれは地面を走り、己が触れた大地すらも切り裂いて進み、高速でスモーカーに接近していく。
彼は考える前に回避行動を取っていた。
爆発させるように下半身が煙になり、推進力で素早く空へ逃げる。
大地が深く抉られているのを目で確認した。かなりの威力があることがわかる。
戦力の分析のためとはいえ、その一瞬が命取りであった。
気付けば眼前にクロコダイルの姿があり、彼と同様下半身を砂に変えて空を飛ぶ彼が鉤爪を振りかぶっていて、驚いた瞬間には攻撃が迫っていた。
本来ならば、煙の体に直接的な打撃や斬撃など当たらないはず。
それがどういうわけか、スモーカーが感じた嫌な予感の通り、彼の肌が切り裂かれた。

「ぐあっ……!?」
「ス、スモーカー大佐!?」
空中で血を流し、姿勢が崩れたスモーカーを見て一人の海兵が悲鳴を上げた。
その声に思わず反応してしまったたしぎは振り返りかけ、すんでのところで首の動きを止める。彼女の視線の先には穏やかに微笑むミス・オールサンデーが居た。
スモーカーに任された以上、自分の仕事はコブラを救うこと。集中しなければ。
決意を固く、たしぎは刀を中段に構える。
「振り返るくらいはいいけれど、いいの？」
「最優先は市民の救助です。さあ、その人を離しなさい」
「残念だけどそれはできないわ。私にはこうしなきゃいけない理由があるの」
ミス・オールサンデーは余裕の表情を崩さず、拘束したコブラの腕を離さず言う。コブラは猿ぐつわを噛まされており、言葉を発することができない。彼女たちを止めることは不可能だった。
使命感に燃えるたしぎは表情を険しくする。
彼女に関する情報も頭に入っているが、見逃すという選択肢はあり得ない。
「銃は使えません。人質の安全を優先して考えてください」
銃を下ろした海兵たちが下がり、剣を持った海兵が整列した。
たしぎの後ろに続き、いつでも戦えるよう準備を終える。
困った顔には見えない様子ながらミス・オールサンデーは溜息をついた。
「さあ！　その人を開放してください！」
「仕方ないわね……」
ミス・オールサンデーが胸の前で腕を交差した。
「三十輪咲き（トレインタフルール）」
しなやかな指が伸ばされると、ふわりと宙を舞う花びらを見た気がした。

警戒したたしぎが体を強張らせた背後で、三十人の海兵が不可解な物を見る。自らの肩に細い女性の腕が生え、意思があるように動く。
自分の物ではない腕に全員が驚愕して、多くの者が声を出していた。
たしぎが異常を感じて振り返った時には、肩に生えたそれが海兵の首に腕を巻き付けていた。
「ストラングル！」
三十本の腕が、一斉に首を絞め、奇妙な音が鳴ってくぐもった声が重なる。
海兵たちは剣を取り落として倒れ、三十人の人間が一斉に意識を失った。
たしぎはその瞬間をまざまざと見て言葉を失う。
ミス・オールサンデーはハナハナの実の能力者である。
彼女は、自らの体の一部を能力が届く範囲内であれば好きな場所に生やすことができる。たとえ他人の体であっても例外ではなく、範囲内であれば死角からの攻撃さえ難しくない。
目に見える場所も、見えない場所も、彼女から逃れることは決して簡単ではなかった。
ミス・オールサンデーは穏やかに微笑む。
部下がやられたことに狼狽するも、咄嗟に歯を食いしばり、一切声を出さなかった彼女はあくまでも自分の任務に集中しようとしていた。たしぎは再びミス・オールサンデーへ剣を向ける。
スモーカーが時間を稼いでいる。その間に国王を救わなければ無駄な努力になってしまう。
退くことは許されず、選べる道は一つしかない。
「意外に冷静ね。それなりに場数は踏んでいるのかしら」
「バカにして……！　あなたの思い通りにはさせません！」
「無理よ。あなたじゃ私には勝てない」
「たとえそうだとしても！」
たしぎはミス・オールサンデー目掛けて猛然と走り出した。
構えた刀を突き刺すつもりで、一心不乱に前へ進む。いつ攻撃か来

るかわからない恐怖心を押し殺して、力強く地面を踏みしめていた。
命を賭ける。相手の実力を知り、己の死すら恐れない突撃だった。
ミス・オールサンデーは再び胸の前で腕を交差する。
一瞬目を閉じ、静かに能力を使用した。
「六輪咲き（セイスフルール）」
「えっ!?」
地面から生えた二本の腕が彼女の足を掴み、同時に腰から生えた手が彼女の両手を、背に生えた手が首を捉える。
しっかり握っていたはずの刀も叩き落されて地面に落ちた。
驚愕したたしぎは抵抗する暇なく身動きが取れなくなり、絶句する。
ミス・オールサンデーが颯爽と歩き出した。
決して急ぎはせず、優雅にすら見える姿。まだ海兵は数多く残っているが、先に倒れた三十人の姿を見て恐怖しており、また自分たちより強いたしぎが拘束された事実に動けなかった。
やがてたしぎの下へ到着し、ミス・オールサンデーがゆっくり手を伸ばす。
その左手は彼女の頭へ触れた。
「パワー、スピード、それに人数も。私には何一つ意味がないものよ」
「ううっ……!?」
その行為自体に意味がある訳ではなかったが、触れた手がぽんと頭を叩いた。
「クラッチ！」
「あうっ!?」
ゴキッ、と体から危険な音が鳴って、体を反り返らせて背骨が極められた。
悲鳴を上げたたしぎが解放されるとそのまま地面に倒れ、脱力して動かなくなってしまう。死んだ訳ではないだろうがダメージは相当なものだった。
見ていた海兵たちが息を呑み、しばし動けなくなる。

たしぎが目の前で倒されたことは、今まで一度もなかったこと。士気への影響は大きい。
激しく狼狽する海兵は指揮系統を失って身動きが取れなくなっている。
その間にミス・オールサンデーはコブラの下へ取って返し、彼を連れて歩き出した。
「何もする気がないなら、そこを通してくれるかしら？」
「うっ……お、おい」
「バカッ、人質を助けないでどうする！　奴を逃がすんじゃない！」
「たしぎ曹長を助けろ！　倒れた仲間に応急処置を！　それから――」
「お、おい、あれ……」
動揺して隊列さえままならない部隊の中で、誰かが小さな声を発した。それが不思議と周囲の者たちの耳へ届き、視線が一か所に集まった。
振り返った先は建物の上。
彼らにとって信じ難い光景がある。
屋根の上で、スモーカーは血まみれになって倒れていた。
すぐ傍にはクロコダイルが立っている。
煙であるはずの彼の体は鉤爪によって幾度も切り裂かれており、呼吸が荒れているのは上下する胸を見ればわかることで、悔しげに目を閉じる姿は見たことがない。
その姿はあまりにも衝撃的で、たしぎの敗北よりも海兵の心に突き刺さる。
彼が負けることだけは絶対にあり得ないと思っていた。
滴る血が壁を伝って落ちてくる。
それは海兵たちの目には何よりも鮮明に目に焼き付き、大きな絶望を与えた。
クロコダイルは静かに語る。
倒れたスモーカーを見る目は何の感慨もない。これが当然とばかりに冷たい目をしていた。それ故に海兵たちには、彼が凄まじく大き

な存在に見えたのだ。
「お前の判断は間違っちゃいなかった。力不足も含めてな」
血が付着した鉤爪を振り、飛んだ滴がスモーカーの体へ落ちた。彼は反応すらできない。
「殺すのは簡単だが、もうしばらく生かしておいてやろう……せっかくなら見ておくといい。この国がもうすぐどうなるかを」
顔を上げたクロコダイルは砂嵐を見た。
風に運ばれて徐々に移動するそれはどこかを目指しているらしい。その行方を唯一知る彼は薄く笑みを浮かべ、この先の景色を想像する。
「あれはすぐにも広場へ到達する。その時、国王軍が壊滅するのは間違いない。全て計画通りに進んでいるのさ。お前たちが現れたのは、何の障害にもならなかった」
気が遠くなりそうになりながらもスモーカーはその言葉を聞いていた。
重い瞼を必死に持ち上げて見えたのは、勝ち誇る敵の笑顔だった。
「おれに勝てねぇならそいつらを救ってみるか？　まぁ結果は同じだろうがな」
クハハハハ、と特徴的な笑い声を響かせる彼を見上げて、歯を食いしばる他ない。
こんなにも自分の無力を嘆いたことがあっただろうか。
痛くなるほどきつく己の拳を握りしめ、彼はまだ起き上がれずにいた。

参入

アルバーナで最も大きな広場へ、国王軍は集結していた。
がやがやと活気を見せながら準備を急いでいる。おそらく次の戦いがあるだろうとの想定は決して間違いではなく、このままで終わるはずがないと語る者が居る。
それが臨時で彼らの指揮を執っていたサンジであった。
怪我をした者へは応急処置を行い、動ける者は武器となりそうな物を集め、家々の残骸などを使って簡素な柵や盾を作っている。
現在地である広場は広い。それだけに東西南北、至る所に入口があり、警戒が必要だ。
敵の数は不明。国王軍は傷ついた兵士が多く、戦力は低下している。アルバーナ全域から戦力を掻き集めても不利を想定しておくのが正常な思考だ。
煙草に火を点けてしばしの休息を得ていたサンジは広場の中を眺める。
いつ襲ってくるかわからないとはいえ、準備が整えばすぐに押し潰されることはないはず。
あとは時間との勝負。全ての決着がつくまで耐えるしかない。
瓦礫に座っていたサンジの下へ一人の兵士が駆け寄ってくる。
すっかり親しげな態度で、声をかけることに躊躇いがなかった。
「サンジさん、何か食べませんか？　大した物はありませんが軽食くらいは……」
「おれはいい。へばってる奴を優先してやってくれ」
「わかりました……でも、水くらいはどうです？」
そう言って差し出してくる兵士の心配そうな顔を見て、サンジが手を伸ばす。
「……すまん」
水筒を受け取り、蓋を外して水を飲む。
疲弊しているのは彼も同じだ。オフィサーエージェント二人との連戦。しかもＭｒ．２との戦いでは数本骨も折れたらしく、決して万

全な状態とは言えない。
それでもやらなければ。ここからが本当の正念場なのだ。
「我々は、勝てると思いますか？」
「そんなことおれが知るか。勝てると思わなきゃ戦ってねぇよ」
水筒に蓋をすると投げて渡し、兵士は落ち着いて受け取り、サンジは再び広場の様子を見る。
話していないと落ち着かないといったところだろう。
あちこちで作業している兵士たちの顔にも不安がありありと表れていた。勝つか、負けるか、或いは何が起こるのかが予想できずに不安が伝染している。軍隊の状態としては非常にまずい。これでは実力に関係なく最悪の結果もあり得ると思った。
今の彼らに下手な慰めをしたところで意味はない。何より普段通りであるサンジは相手が女性ならばいざ知らず、男を気遣うことを嫌っているため気の利いたことなど言わない。だが嘘をつこうとしていないのも事実だった。
兵士の問いには真剣に答えを返し、自らの考えを語る。
「ビビちゃんが生きろって言ったんだ。おれの役目はお前らを生かすことで、相手が誰だろうが襲ってくる奴は全員ぶちのめさなきゃならねぇんだよ。今はそのことだけ考えてろ」
「ありがとうございます……」
「男からの礼は受け付けてねぇ。全部ビビちゃんのためだ」
憮然とした顔で言い捨てた後、サンジの表情は引き締められる。
現在の国王軍の状況を考え、どうすれば犠牲を減らせるかを考えていた。ゼロにするというのは流石に無理だ。戦いが始まれば限界を迎えて倒れる者が出るのは当然。それが理解できないほどバカではないし、理想論者になる気はない。
だが犠牲者は可能な限り少なくする。
そう考えるのがサンジの甘さであって、優しさでもあった。
「とにかく目的は一分一秒でも長く生き残ることだ。敵を全滅させる必要はねぇ。その時が来れば必ず戦闘に決着がつく」
「それは、一体どうやって？」

「うちの船長が敵の頭を取るんだよ。そうすりゃ全部終わりだ」
自信満々に言い切ったサンジに兵士は顔をしかめていた。
彼のことは信用できると判断しているものの、その発言は鵜呑みにしていいものか。
先程の激しい戦闘を経験したせいか、すぐに理解できる言葉ではなかった。
「そう簡単にいくものでしょうか」
「それだけ影響力のある頭だってことさ。あいつさえ居なくなりゃ戦況がひっくり返ることはなくなる。そこからは気合で押し切るしかねぇな」
「相手の頭とは、誰のことです？」
「聞かねぇ方が身のためだぞ。特に今はな」
ただでさえ低い士気を考えてのことだろう。兵士は深く追及しなかった。
しかしわかったこともあり、彼は自分よりよっぽどこの状況を動かす能力に長けている。
見ず知らずの相手だが尊敬せずにはいられない。個人としての武勇も、出会ったばかりの軍隊を動かす頭脳や行動力、口の上手さも、近年稀に見る逸材だと思った。
語る言葉すらなくなり、気付けば兵士の顔には薄い笑みすらあった。
彼が居れば大丈夫。自然とそう思えた。
頭を下げて軽く礼を言い、彼の傍を離れる。
この状況においては迷いを断ち切り、決意を持って行動することこそ重要。
サンジの態度を見習おうとまで考えて、兵士は次の戦いに備えるべく他の兵士の下へ向かった。
「大丈夫だ。この国はきっと救われる……彼さえ居れば、この戦いに勝てる」
「お～い！　サンジ～!!」
彼と入れ違うようにして、サンジの下へ向かう者が二人居た。

超カルガモ部隊、帽子を後ろ向きに被った体の大きいストンプ、白い帽子を被って首に酒瓶を提げたバーボンＪｒ．、二匹に跨ってやってくる。
怪我をして、応急処置として包帯を巻いているが、笑顔を見せるナミとチョッパーだ。
顔を上げたサンジは即座に反応する。
「んナ～ミすわぁ～ん！　無事だったんだねぇ～！」
「サンジ君……よかった。そっちも元気そう」
「サンジ、おれは？」
到着した二人はカルガモの上から降り、ナミを見ながら嬉しそうに回るサンジと合流する。
近くに来てみれば、彼は瞬く間に表情を変えた。
「ハッ!?　ナミさん、まさかそのお美しい体に怪我を!?　可哀そうにっ、おれが一緒に居ればこんなことには……！　それじゃあ代わりに抱きしめて慰めよう！」
「いらん」
「怒った顔も好きだぁ～!!　ゴラァチョッパー！　てめーナミさんと一緒に居ながら怪我させるとはどういうつもりだ、アァン!?」
「えっ、おれ!?　おれも怪我してるんだけど……」
「てめーの体はどうでもいい！　それより一にナミさん、二にナミさん、三・四にナミさんで五にナミさんだ！　なんでそういう心がけができてねぇんだ！」
「うわっ、アホだ。こいつアホなんだ」
「相手にしなくていいわよチョッパー。ちょっと休みましょう……」
疲れた様子のナミは先程サンジが座っていた瓦礫に腰掛ける。すぐにサンジもそちらへ移動して彼女の近くへ立ち、ゆっくり歩いてきたチョッパーは地べたへ座った。
二人ともかなりの激戦を感じさせる風体である。
かくいうサンジも大怪我と表現しなければならない姿で、ここまでの苦労を感じ取れた。

「状況はどうなってるの？」
「Ｍｒ．５とＭｒ．２は倒した。それとこいつらは第一陣の攻撃を凌いだって感じだな。そっちは？」
「Ｍｒ．４ペアを倒したぞ。ぐるぐる巻きにしといたからもう自分じゃ動けねぇ」
「ほんと、めんどくさい連中だったわ。でもこの子たちが来てくれてよかった。サンジ君が向かわせてくれたんでしょ？　ありがとう」
「いえいえ～それほどでも～！」
照れるサンジを見るのもそこそこに、ナミは心配する様子で辺りを見回した。
「まだ私たちだけ？　他のみんなは？」
「今のところ音沙汰はねぇな。他の連中はともかくシルクちゃんとビビちゃんが心配だ」
「あれ？　サンジ、ウソップは？」
「やることがあるってのは聞いたな。何かは聞いてねぇが」
サンジとペアだったはずのウソップが居ないことに気付くチョッパーが首を振るが、彼の姿は広場にはなく、他の仲間たちも見つからない。
兵士たちが慌ただしく動いているのが気になった。
チョッパーは誰よりも早くここに居たサンジに質問する。
「あいつら何してるんだ？」
「敵を迎え撃つための準備だ。正攻法でやっても勝てねぇからな」
「ねぇ、ビビは見た？」
チョッパーとの会話もほどほどにして、サンジはナミの問いかけに反応する。
「王宮へ向かった。国王を助けるために」
「一人で？」
「いや、護衛の兵士が一緒だった。心配だったが、おれはＭｒ．２を逃がすわけにはいかなかったから見送るしかなかった。今頃無事だといいが……」
「ちょっと待って。それ、ここでのんびりしてていいの？　ビビを

助けに行かなきゃ」
「状況を確認するために兵士を数名向かわせた。全軍で王宮に向かい、籠城するって手も考えたんだが、負傷兵が多い。途中で待ち伏せにでもあったら一巻の終わりだ」
「サンジ君っ」
いつの間にか柔らかい空気など消えていた。
困惑するチョッパーは二人の顔を交互に見る。
ナミはビビを心配して話しており、だがサンジは、今ばかりは従順という訳でもない。
「ナミさん、こいつらには今、指揮官が居ねぇんだよ。誰かが支えてやらなきゃ誰も立てなくなっちまう。今のおれにできることはこいつらのケツ蹴りまくって、一人でも多く生き残らせるために踏ん張ることだ」
真剣な声と表情にナミも唇を噛んでその言葉を受け止める。
なぜ彼がそうするのか、聞けばすぐにわかるつもりだ。何も怖くて行かない訳ではない。そうしなければならない理由がある。
チョッパーもまた、真剣に彼の話を聞いていた。
「国王軍が全滅するようなことがあったら、たとえバロックワークスが壊滅してもビビちゃんの心は晴れねぇ。素直に勝ったとは言えねぇはずだ。だからおれは、彼女が守りたいものを一つでも多く守る。それができんのは、今ここにはおれしか居ねぇ」
サンジの言葉を聞いたナミは頷き、すぐに立ち上がった。
服を払って、一度は置いたクリマ・タクトを持ち、決意した顔でチョッパーを見る。
「行くわよチョッパー。サンジ君の代わりに私たちがビビを守るの」
「おおっ！　おれも今自分にできることをやるぞ。ビビはおれが守るんだ」
「後ろは任せろ。こっちはおれが守る」
妙に気合の入った顔で二人が再びストンプとバーボンＪｒ．に跨ろうとした時だ。

タイミングを見計らったかのように、王宮がある方角がざわめき、兵士たちが集まり始めた。
気になった三人がそちらを見るのは当然で、確認するために歩き出す。あいにく人が集まり過ぎていて何が起こったのかは視認できない。
目で確認できる状況ではなかったが兵士たちの声は聞こえた。
パッと表情を変えた三人は駆け出して、兵士を押しのけながら先へ進む。
人垣を出てすぐ見つけた。王宮から来たのであろう集団が歩いてくる。
先頭にビビ。疲弊したチャカは兵士に肩を借りており、確認に向かったＭｒ．９とミス・マンデーが同行している。少なくともここまでの襲撃はなかったようで皆無事だ。
「ビビ！　よかった無事で！」
「うおお～！　ビビぃ～！」
「ビ～ビちゅわ～ん！」
堪え切れない様子でナミがビビに抱き着いた。彼女は少し驚いていたようだが快く受け入れ、仲間たちの無事を笑顔で喜ぶ。
その様子を、チャカは無言で静かに見守っていた。
「ナミさんっ！　それに、トニー君も……二人とも、ひどい怪我を」
「あぁ、いいのよこんなの。名誉の負傷でしょ？　あんたもよく頑張ったわね」
ナミが手を伸ばし、ビビの髪に触れるとぐしゃぐしゃと乱暴に頭を撫でる。
気を使わせないように言ったのだろう。彼女の優しさが伝わった。
何より、仲間に出会えた喜びが大きいらしく、ビビはようやく朗らかな笑顔を見せた。その笑顔を目撃して国王軍は彼らとの関係性を漠然と察し、サンジがうるさくなる。
彼女の登場それだけで空気が変わり始めていた。
なぜ戦うのか。その理由を己の目で改めて確認した気がする。
長らく姿を見せなかった王女が彼らの前に居て、彼女は守るべき王

族で、子供の頃に見せたような笑顔が驚くほど心に突き刺さった。
その笑顔を守るために戦っていたのではないのか。
語り合わずとも皆がそう思い、顔つきが変わり、士気が上昇していく。
チャカは、その様子をまざまざと見ていた。
王族というだけではない。彼女を認める空気がすでに存在しているのである。
おそらく彼が傍に居なかった間に何かがあったのだろう。その時すでに兵士たちはビビのことを主と認めて、命を預けて戦おうとしている。
行方をくらませていた空白の時間は無駄ではなかった。今はその期間の詳細を気にするよりもついつい成長を喜んでしまう。
フッとわずかな笑みを見せ、思考を切り替えたチャカは辺りを見回す。
兵士の数をざっと確認し、状態を見て、辺りへ置かれた物を目にすると目的を理解する。やはり指揮官として人の上に立った経験が長く、意図を察するのに時間はかからない。それを考え付いたのが誰かまではわからないとはいえ、驚きさえしていた。
「あれは拒馬か？　ここで敵を迎え撃つつもりだな」
「素人の思い付きだ。あんまり期待するなよ」
気付いたチャカへサンジが声をかける。
彼の方に反応した時には立案者なのだろうとすぐ気付いた。
元は家だっただろう木材や石を掻き集め、場所によっては積み上げ、時にはそれらをロープ等で括り付けて、敵を迎え撃つための柵を作り、あちこちへ配置している。その位置を一つずつ確認したチャカは少なからず驚きを隠せないようだった。
彼も数々の訓練、及び実践を経験した兵士だ。
配置を見ただけで意図に気付く程度には大規模戦闘の知識がある。
最初に思ったのは素人ではないということ。
少ない兵士で大軍を迎え撃つため、敵の勢いを削ぐ配置をしている。止めきることは不可能だとしても上手く機能して、長期戦になれ

ば効果はあるはずだ。
思い付きで実行できる戦術ではない。これを即興でやったというのか。
チャカの目は驚きを隠せずに、疑わしそうにサンジを見る。
しかし本人はどこ吹く風。冷静な顔でいた。
「これが寡兵を生かす戦術なのか……。君たちは一体――」
「ただの海賊さ。だから人を率いる度胸なんてねぇ」
煙草を手に持ち、フッと煙を吐いて、サンジが言う。
「あとはあんたに任すぜ。その代わりビビちゃんのことはおれたちに任せろ。何があろうが絶対に守り抜いてやる」
「……わかった。君たちを信じよう」
本来ならば簡単には頷けない提案だ。だが彼は自分自身の状態と、ビビが彼らへ見せる表情をきちんと理解している。それが最善の策であるとも知っていた。
故にチャカはビビへ振り返る。彼らへ託す前に、自らの言葉を届けたかった。
「ビビ様、あなたが我々にとっての希望です。決してご無理はなさいませんよう」
「ええ。私は大丈夫。信頼する仲間が居るから」
彼女の強い瞳を、その中にある希望の輝きを見て、チャカは笑みを浮かべると目を伏せた。
次にビビを見た時には表情を引き締め、決意を持った顔を見せる。
「どうかご無事で。これが終われば話したいことは山ほどあります」
「必ず無事に会いましょう」
「もちろん、説教もありますからね。皆に心配をかけたんですから」
「ふふ、わかったわ。あとで必ず聞くから」
互いに笑顔を向け合って、チャカが振り返り、彼女の傍を離れる。
今は守ってくれる人が居る。彼女自身が仲間だと語る人々が。
チャカは迷わずに歩を進めていき、大声を張り上げて全ての兵士たちに言った。

「今からは私が指揮を執る！　皆、配置につけ！　戦闘の準備を怠るな！」
ビビの存在で士気が上がっていた兵士たちは雄々しい声を響かせ、意気揚々と動き出した。それぞれが配置につくために移動し、己の武器を手に取る。
チャカは彼らの行動を見ながら最善の布陣を考えようとしていた。
もはやここは死地。一手も間違えることはできない。
周囲が慌ただしくなる中でビビは改めて三人に向き直った。
話していられる時間はそう多くないが、言わなければならないことがある。
「ビビ、あなたのお父さんは？」
「連れていかれてしまったみたい。だけど大丈夫。ルフィさんとペルに任せたから」
「ルフィに会ったのか！」
「ええ……」
一瞬、表情が曇るが、すぐに立て直して強い目を見せた。
「クロコダイルはルフィさんが必ず倒すわ。それまで私たちは何としても持ちこたえましょう。あいつさえ居なくなれば、バロックワークスは次の手が打てなくなる」
「そうね。敵は着実に減ってるわけだし」
「ルフィが勝てばおれたちの勝ちだ！」
「つっても、ここからが大変なんだがな」
彼女たち自身も士気を上げようとしていたところ、一匹のカルガモが広場へ入ってくる。
超カルガモ部隊は味方であるため誰も止めようとしなかった。
そして角とゴーグルが付いたヘルメットを被り、部隊で最も体が大きいイワンXは、素早くビビたちの前へやってくると滑るように足を止める。
「えっ!?　Ｍｒ．ブシドー!?」
「嘘でしょ!?　ゾロ！」
「ゾ、ゾロォ～!?　お前、大丈夫なのか!?」

背にはぐったりしたゾロが倒れるように乗せられていた。
咄嗟にビビやナミ、チョッパーが心配して駆け寄り、流石にサンジも表情を変える。
その直後、彼はむくりと起き出した。
「ん？　おっ、着いたのか」
「寝てただけかよっ!?」
「あぁ～もう……ほんっとめんどくさい」
「チッ、そのままくたばってりゃよかったのに」
思いのほかあっさり起きたことに皆が驚愕する。大声を出すチョッパーや頭を抱えるナミ、眉間に皺を寄せるサンジとは異なり、ビビだけは安堵して胸を撫で下ろしている。
ゾロがイワンXの背から降りた。
服は血と砂で汚れており、胴体には多くの包帯が乱雑に巻かれていた。
それを見て一番にチョッパーが反応する。
「ゾロ、お前怪我したのか？　なんだよその包帯！」
「ああ。こいつが薬やらなんやら持ってたからな。応急処置だ」
「包帯の巻き方がめちゃくちゃじゃねぇか！　もっときれいに巻けよ！」
「別にいいだろ。血は止まった」
「だめだ！　おれが巻き直してやるからそっちに座ってくれ」
「お前右腕吊ってんじゃねぇか」
「吊ってたって医者だ、おれは！　早くこっち来いよ！」
「んナミさぁ～ん！　ひょっとしたらおれ、脚の骨が折れてるかもしれねぇ！　ほ、包帯巻いてくれぇ～！」
「嫌よ」
「辛辣なナミさんも素敵だぁ～!!」
士気が上がっているのか下がっているのか。
無理やり座らされたゾロはチョッパーに包帯を巻き直され、なぜかサンジが目をハートにしながら元気に地面を転がっていた。
そんな彼らを見ると気持ちが楽になる。緊張状態が続いていたか

ら尚更だ。
ビビはいつも通りのやり取りに表情を緩める。
しかし傍で見ている者には不思議だったようで、Ｍｒ．９とミス・マンデーは呆れていた。
「こいつら正気か？　まだ戦いは終わってねぇってのに……」
「緊張感がないね」
「これでいいの。この方がずっと彼ららしいわ」
まるで子を見る親のように優しい目で、ビビの顔を確認した二人は溜息をついた。
やはり彼らは変わっている。わざわざ止める気も失せてしまった。
緊迫した状況下で楽しそうな一行は、当然とばかりに広場の中で最も目立っていたようだ。
そんな時、一番早く変化に気付いたのはビビだった。
ふと空を見上げて、不思議そうに遠くの空を見た。
「何かしら……」
おそらく理由もない直感的なものだったのだろう。彼女自身、なぜ自分が気付いたのか理由がはっきりしている訳ではない。幾ばくもせずにそれは視界の中へ現れる。
轟々と音を立てて進んでくる巨大な物体。
それは高台にあるアルバーナを襲うはずのない、大きな砂嵐だったのだ。
「あれは……砂嵐!?　どうしてこんな突然……！」
接近してくる大きな脅威に人々が気付き始める。どよめきが起こるのは止められなかった。
特に驚いていたのはナミである。何の予兆も無く現れたそれを予測できなかったため、何かが変だと即座に気付いた様子である。その疑問に答えたのはビビだ。
「まさか……」
「ビビ？」
「あいつの仕業よ」
そう言ったことで原因はわかった。だがまさか悪魔の実の能力で

こんなことまでできるなんて。
ナミが戦々恐々とする一方、ビビは敵に対峙したように砂嵐を見つめる。
兵士たちは少なからず混乱していたが為す術はない。
やがて砂嵐が広場へ到達し、強風が吹き荒れ、飛び交う砂塵で視界が一気に悪くなる。しかも砂嵐はどうやらその場で足を止めたようで、規模は弱まらないまま停滞する。
状況は最悪。広場はまるで意思があるかのような強い砂嵐に包まれてしまった。これでは敵襲があった場合に敵の発見が遅れ、戦闘の妨げになってしまう。
不意にそう考えた時、サンジが血相を変えた。
いの一番に気付いた彼だけが視界の悪い中で周囲を見回す。
「しまったっ。最初からこのタイミングが狙いか……！」
気付くのが一瞬遅れ、砂嵐で動揺が広まった瞬間に、事態は急変する。
様々な方向、屋根の上から爆弾が投げ込まれ、広場の中で爆発した。爆音が耳をつんざき、爆炎はその周囲を破壊し、発生した煙がさらに視界を悪くしていく。
突然始まった攻撃は国王軍を激しく混乱させて、戦況を掴むには最も手早い方法だった。
砂嵐に紛れてバロックワークスが現れたのである。
「てっ、敵襲～!?」
「馬鹿げている……！　これも全て計算ずくだというのかっ！」
兵士たちが騒ぐ中で、チャカは痛みを感じるほど強く歯を食いしばる。いつ如何なるタイミングでも迎え撃ってやるつもりでいたのに、最悪の一手を打たれた。
視界が悪い。これでは部隊に指示を出すのが遅れる。
部下の報告を聞いてからではおそらく間に合わない。だからこそ優れたタイミングなのだ。
今、疲弊した彼らには強く腕を引っ張るリーダーが必要だ。だからサンジに任され、自分も任されようと決めた。王女の護衛を他人に任

せてまで。
何が起きているのかを目で確認するのは難しい。
兵士も動揺していて敵を迎え撃つ心構えが崩れていた。
このままでは総崩れもあり得る。焦るチャカは有効な手はないかと考えを巡らせるが、敵味方が入り混じる怒号と連続する爆音で落ち着かない。答えが導き出せない。
そんな状況で、広場を囲うように四方八方からミリオンズ、及びビリオンズが現れた。
彼らを率いるエージェントは二人肩を並べて立っていた。
機械を背負った小さな老人と老婆が奇妙なゴーグルを使って広場を覗いている。
つい最近加入したというＭｒ．１２とミス・サタデーだ。〝科学者ペア〟と称される彼らは直接的な戦闘力は皆無に等しいものの、その分発明で助力する。
「さて、ここからはお前たちの出番じゃろう。じゃ、あとはよろしく」
叫び声を上げて、バロックワークス社員が広場へ殺到する。発明品を使って屋根に上っていた者たちが、同じく発明品を使って勢いよく落下してきて、同時に広場へ続く地上の道から走って侵入してくる。当初の布陣が役に立たず、辺りは一瞬にして混沌と化した。
敵味方が入り混じり、瞬く間に乱戦となってしまう。
先程の戦闘があってバロックワークスの兵士も確実に減っていた。だが奇妙な発明品と手段を選ばない戦法により、まだ動揺が薄れない国王軍は不利へ押し込まれる。
チャカ自らも剣を取り、必死に戦いながら周囲へ叫ぶが、聞く余裕のある者は少ない。
実力勝負になれば疲弊している分、負ける。策は絶対に必要だと考えていたのに、このままでは敵の思う壺だ。ビビに約束したからには負ける訳にはいかないというのに。
何か手立てはないか。視線を走らせながら考えていたその時。
広場の中央部分で突如、雷鳴が轟いた。

「なんだ……!?」
「雷……？」
その音は国王軍だけでなくバロックワークスの注意も引き、一瞬とはいえ手を止めさせた。
どうやら先頭で突入してきた者たちが黒焦げにされたらしい。
数名が倒れる中、特別目立った威圧感を発する者たちが数名居て、いつの間にか視界が悪い中でも彼らに注目が集まっており、チャカは申し訳ないと思いながら口元を緩ませる。
「クソうるせぇ野郎どもだ……」
「おい。こいつら全部斬っていいんだよな」
「バッシバシやっちゃいなさい。ただしあんまり私を働かせないでよね」
「よしっ、おれも頑張るぞ！　うおおお～！　おれは海賊だぁ～！」
言った四人が四方へ散り、猛然と敵へ襲い掛かる。
一瞬停止した後の強襲だったため、バロックワークス社員は軽く吹き飛ばされるが、再び動き出すと同時にさらに熾烈な乱戦が始まった。
中央へ残ったビビは左右をＭｒ．９とミス・マンデーに挟まれ、事態を見守る。
この場において彼女が大将。絶対に討ち取られてはならない人間だ。
絶対に自分から手を出すなと言われていた。
戦闘は仲間たちに任せ、彼女は王女としての責務を果たし、国王軍の象徴であることを決める。
「まったく、あいつらバケモノか。大した奴らだぜ」
「さっきまであれだけふざけてたってのにね。強さまでふざけてるとは」
二人の軽口も聞こえていない様子で、ビビは戦いの一つ一つを見つめていた。
倒す者が居る。倒れる者が居る。どうしようとそれらで心を痛めるものの、決して視線は逸らさない。全て受け入れると決めたのだ。

ビビは堪らず胸の前で手を組み、ただひたすら必死に願う。
「みんな、お願い……もう少しだけ力を貸して。絶対に諦めないで……！」
ビビの願いに応えようと奮戦する者たちが居る。
見知らぬ仲間たちの助力を得たチャカは鼓舞され、奮起し、剣を振り上げて雄々しく叫ぶ。
「覚悟せよ国王軍！　これが最後の戦いである！　我らが祖国を脅かさんとする敵を打ち倒し、ビビ様を……アラバスタ王国を守るのだ！　皆、命を賭して戦え！」
暴風にすら負けない大声が兵士たちへ届く。
それは確かに彼らの心を震わせ、動揺を消し去り、恐怖を亡き者にした。
応える兵士たちが大声で叫び、全力で武器を振り上げる。
「全軍！　前進せよ!!」
この期に及んで守れなどとは言わない。敵を全て討ち滅ぼせと叫ぶ。
チャカの声に雄々しい叫びで応えた国王軍は前進を始め、己が敵を討ち果たさんと、凄まじい迫力で敵へ襲い掛かり、疲労すら完全に忘れて気迫と勢いでバロックワークスを押し返した。

反乱

スモーカーを倒したクロコダイルが、屋根から飛び降りる。
痛がる様子もなく無事に着地して、怯える海兵たちを目にした時、彼は特別な感情など何一つ持っていなかった。それはまるで道端の石ころを見るかのように。
一歩を踏み出す。
反対に海兵が後ずさりするが、その歩みを止められる者は居なかった。
「そこで見ていろ」
「ガフッ……待てっ」
「弱えってのは罪なのさ」
クロコダイルが右腕を上げた。
何をするのか、その挙動だけでわかってしまった海兵が顔を青くして固まる。
スモーカーは動かない体を必死に起こし、感情的に叫んでいた。
「よせェ!!」
腕が止められることはなく、振り下ろされて、地面に砂の刃が複数走った。それらは立ち尽くす海兵たちを薙ぎ払い、切り飛ばし、多くの血が流れて地面へ倒れる。
動かなくなった者も多く、そうでない者は味方を助ける余裕もない。
クロコダイルの攻撃はまだ続いていた。
一歩、一歩と着実に前へ進む。
急いでいる訳ではない。むしろ非常にゆったりとした歩みだった。
たった一歩を進むだけで悲鳴が上がり、多くの血が空を飛び、悲鳴が途絶える。
屋根に居たスモーカーは嫌でもその光景が鮮明に見えていた。
圧倒的な強者。我儘に生きる絶対的な王。その背に、怒りを持たずにはいられない。
血が流れようとも構わない。全身に力を入れて歯を食いしばった

スモーカーは、傷だらけの体を無理やり動かし、落とした十手をもう一度掴み直す。
膝に力を入れてボタボタ血を落としながら立ち上がり、呼吸を荒くして顔を上げる。
些細な挙動で視界や頭が揺れていた。しかしそれも気合でどうにかなる。今だけは激しい怒りによってそれら全てがどうでもいいものに感じられた。
血に濡れた髪をかき上げ、十手を握った右腕を思い切り振る。
体は動く。戦える。
悲鳴を上げる海兵の間を歩くクロコダイルを睨みつけて、力は不思議と湧き上がってきた。
「てめぇが不甲斐ねぇことなんざ誰よりもよくわかってる……！だからってそいつらが死んでいい理由にはならねぇだろ。お前に何の権限がある――」
爆発するように下半身が煙になり、スモーカーが空を飛んだ。
クロコダイルの背へ一直線に向かう。
「おれの部下に手ェ出してんじゃねぇよ!!」
思考すらゼロになって、ただひたすら怒りに任せて十手を突き出した。
万全の状態の時をも超える速度で接近していく。が、クロコダイルは冷静に振り返り、余裕の笑みを見せてスモーカーを迎え撃った。
腕を伸ばして構えていた十手を軽やかに避け、交差する一瞬に左腕を振る。
黄金の鉤爪がスモーカーの肩を深々と抉っていた。
スモーカーの体は煙になることもなく地面へ激突して転がった。
切られた肩を押さえる余力もないようで、苦しげな顔で辛うじてクロコダイルに目を向ける。
先程の位置から動かず、とどめを刺す様子もない。彼は笑っていた。
「哀れだな。海軍の野犬と呼ばれた男がこの有様か。お前はイーストブルーで何をしていた？」

その言葉に返すものがなく、スモーカーは悔しく思い、思わず目を閉じてしまう。
胸に広がるのはどうしようもない後悔。
イーストブルーに居た頃、海兵としての責務を果たして市民の平和を守っていた。それだけは確かなのである。現にローグタウン周辺は海賊の被害が格段に減っていた。
それは確かに彼の功績。だがおだてられ、自らの意思で戻ってきたグランドラインで、こうして醜態を晒しているのも誤魔化しようのない事実だった。
敵わない相手は居る。知っていたはずの事実を改めて教えられていた。
海賊遊撃部隊分隊長。聞こえはいいが、自分は何かを果たせたのか。
目を閉じたことによってスモーカーの心は深い闇に落ちていく。
（おれは一体……何をしていたんだ……）
戦意が薄れていくのが目に見えてわかる。心が折れるのも近い。
彼の様子を見ていたクロコダイルは視線もそのままにミス・オールサンデーへ声をかけた。
歩き出していた彼女は足を止めることなく聞く。
「ミス・オールサンデー、いつまでそこに居る気だ？　道は作ってやった。お前は先に行って例の物を解読しておけ」
「もちろんそのつもり。私もそうなりたくはないから」
「フン……」
ミス・オールサンデーがコブラを連れてその場を去っていく。
止めなければならない。しかしスモーカーが倒れたこと、仲間が大勢やられたことで混乱している彼らにそんな冷静な思考などありはしない。それよりもスモーカーを助けなければ、と息巻く者が居る一方で、恐怖に包まれて動けない者が大半だった。
「大佐ッ！　スモーカー大佐を助けないと！」
「それはそうだが、どうやって……？　大佐が勝てない奴に、おれたちが勝てるわけない……」

「おれたちじゃ命を張ったって壁にすらなれない……」
「た、たとえそうでも、大佐を見殺しにできるかっ！」
大勢いる海兵は恐怖で動けない。従ってクロコダイルが目を向ける価値もない。
彼はあくまでもスモーカーを見ていた。
そうして誰も動けずにいると、一足遅れたとはいえ、たしぎが声を張り上げた。
「その人から離れなさい！」
「たしぎ曹長……」
「よせ……やめろ……」
弱弱しいスモーカーの声を敢えて聞かずに、たしぎは刀を構えてクロコダイルに立ち向かう。彼自身は大して興味を持ちはしなかったが、面白いと笑っていた。
彼らの部隊を脅威とは考えていない。
クロコダイルにとってはミス・オールサンデーが任務を終えるまでの暇潰しに過ぎないのだ。
対峙してやることに決め、体の正面を彼女へ向ける。
たしぎは必死に恐怖心を押し殺し、剣先を微塵もぶれさせずに立っている。それだけでも褒められたものだろう。部隊で絶対的なスモーカーが倒されてもそうできるのだから。
だからといって褒めてやる気はない。クロコダイルはわずかに左腕を上げる。
それを何かの合図と考えて、たしぎが意を決して駆け出した。
「やああっ！」
「たしぎ曹長――！」
基本に忠実に、気合を入れて強く前へ踏み込む。
全力で上段からの打ち込みを行ったものの、刃は鉤爪に受け止められた。それだけでなく接触の直後に上手く力を逃がされ、攻撃を受け流すとたしぎの姿勢を崩す。
予想していたほどの衝撃がなかったため、前へつんのめった。そのまま彼女は転んでしまう。

刀だけは離さなかったが、スモーカーの傍で膝をつき、慌ててクロコダイルへ刀を向ける。
あまりにも無様。もはや笑みさえ生まれない。
クロコダイルは冷たい眼差しでたしぎを捉えると、スモーカー共々言葉をかけた。
「なんだ、その様は。所詮はそれがお前らの本質だろう。よく覚えておけよ、女海兵……負け犬に正義は語れねぇ。正義ごっこがしたけりゃ会議室からは出ないことだ」
「くっ……!」
悔しいが、返す言葉がない。
彼を黙らせるだけの武力がない。
スモーカーもやられた。彼女に勝てる相手ではない。
最後の抵抗で剣を構えていたたしぎだが顔には焦りが浮かび、どう見ても気圧されていた。
興味を失ってしまった彼は左腕を掲げる。
これ以上の波乱はありそうにない。これでは暇潰しにもならないだろう。
ようやくとどめを刺そうとしたクロコダイルであったが、なぜか腕を掲げると動きを止めて、そのまま停止してしまう。たしぎや海兵は怯えるばかりでわずかな変化に気付かない。
彼はその腕を振り下ろす前に、ひどく緩慢な動作で振り返った。
気配を感じていた。つい先程出会ったばかりの気配を。
そんなはずはないと思いながらも高速で近付いてきているのが伝わり、彼の目は空を見る。すると空を飛ぶ大きな鳥を見つけた。
姿を視認した途端に急降下を始める。
落下するように飛来する鳥には見覚えがあり、またその背に、覚えのある気配が乗っていた。
「クロコダイル～!!」
力のこもった絶叫が、彼の疑念を確信へ変えた。
一度殺したはずのあの男が再び目の前に現れたのだ。
獣型に変身したペルの背に乗り、大きな樽を背負ったルフィが拳を

握る。
急降下するため片手はしっかりペルの体を掴んでいたが、戦意は十分。このまま突進しても何も問題ない。それはペルにも伝わった。
一方、ペルは周囲を見回し、コブラの姿が見えないことに注目する。
それぞれの目的ははっきりしていた。だからこそ迷いはない。
どうやらここで別れることになるだろう。
ペルは背に居るルフィへ親しげに声をかけた。
「ルフィ君、国王様の姿が見えない。私は捜索へ向かうがいいか？」
「うん。ここまで送ってくれてありがとう」
「気をつけろよ。君も肌で感じたと思うが奴は普通じゃない」
「わかってる。もう負けねぇさ」
ルフィが膝を立て、脚に力を入れたのはペルにも伝わった。
「武運を祈る！」
「おう！」
急降下の最中にペルの背を蹴り、ルフィが飛び出した。落下の勢いはさらに強まり、ペルは彼を見送ると即座に軌道を変え、遠くへ飛び去る。
今、ルフィの目にはクロコダイルの姿が再び映されていた。
彼に勝つ。そのために来たのだ。
自らの意思でグルグル回転し、大きな音を立てて着地する。
ゴム人間である彼の体は落下の衝撃をものともしなかったらしく、表情一つ変わらない。
一方、クロコダイルはさっきより厳しい顔をしていた。
「生きていたのか。だが再びおれの前に立つとは思っちゃいなかった。何の用だ？」
「お前をぶっ飛ばしに来た」
「おかしなことを言う……それは無理だと丁寧に教えてやったつもりだぞ」
「ああ。さっきのはおれの負けだ。でも次は負けねぇ」
「理解に苦しむな。本物のイカレか、それともバカか……」
呆れた様子を隠そうともせず、クロコダイルは彼と向き合う。

舞台は整った。あとは何が変わったか。
つまらないと語る口ぶりだがこの時クロコダイルは彼の相手をするつもりで、それはつまり、一度目の対戦を経て慢心していたと言わざるを得ない。
やる気に満ちたルフィが体の筋を伸ばした時、背中にある樽を警戒しようとはしていなかった。
「腹を刺してやったはずだが」
「ああ、あれか。肉食ったら治った」
「馬鹿馬鹿しい」
屈伸を何度か繰り返して、準備運動を終え、ルフィが身構える。
「行くぞ！」
「くだらん……所詮お前が何をしようと――」
素早く駆けて真正面から接近していく。その様子からも変化は見られないと思っていた。
クロコダイルは交差する瞬間にもう一度腹を貫こうと考える。
身構えることなくルフィを待ち、敢えて接近を許す。
そして二人の距離が近付いたその時、野性的な勘でクロコダイルはまずいと感じたが、あまりにも気付くのが遅かった。
ルフィの拳が、強烈な勢いでクロコダイルの頬を捉えた。
砂になって回避することもできず実体に攻撃を受け、姿勢がぶれて足元が揺れる。すぐに立て直そうとしたため転ぶことはなかったものの、動揺は少なからず存在している。
足を踏ん張って堪えた時にはルフィが腕を伸ばしていた。
背面へ伸ばしたのを引き寄せ、ゴムの張力を利用して強烈なパンチを繰り出す。それは隙だらけの腹へ突き刺さり、やはり回避できないクロコダイルに背を折らせた。
倒れることはないとはいえ、地面を滑るようにしてクロコダイルが飛ばされていく。
「んんっ！」
少し距離が離れたことでルフィが両手を伸ばし、彼のコートを掴んで捕まえる。

その際、クロコダイルは彼の腕を確認して、ようやく合点がいった。
「ゴムゴムのォ――！」
（こいつ、やはり……！）
「丸鋸！」
服を掴んだ両手を軸に、地面から足を離したことで縦に回転し、回る度に速度を上げながら腕を縮める。そうしてルフィ本人がクロコダイルへ急接近した。
そのまま勢いを殺さず体当たり。自分より身長の大きい人間を跳ね飛ばした。
それでも倒れないため着地直後にすぐ一歩を踏み出す。
距離はさほど詰めようとせずに、ルフィは右腕だけを伸ばし、左手で右腕を持った。
伸ばした右腕だけを振り回して勢いをつけ、見た目はまるで投げ縄のよう。十分に勢いをつけた後でその腕を放り、クロコダイルへ投げつけた。
「連接鎚矛（フレイル）!!」
虚を突かれたクロコダイルは動けない様子だ。
側面から飛来したルフィの拳が頬を捉え、今度こそ殴り飛ばされる。
驚愕する海兵の間を抜けて、壊れかけた建物へ激突すると壁をぶち抜き、姿が消えた。その場に残ったのは崩れ落ちる瓦礫と騒々しい物音だけである。
「うしっ。当たった」
腕を引き戻したルフィは満足そうにそちらを見ている。確かに攻撃は当たった。だがその瞬間を目撃していた海兵にとっては何が起きたかわからず、また突然のルフィの登場をもまだ受け入れ切れてはいなくて、どうすればいいかわからないという顔をしていた。
倒れたままのスモーカーは目を見開き、たしぎも同様に驚いているらしい。
辺りの空気は一変していた。
「あれは……麦わらのルフィ」

「あの野郎、一体何をしやがった」
何が起きたのかは理解しがたいが、狙っていた標的が目の前に現れたのは事実。
不思議とそれだけで力が湧く。
動けなくなっていたはずのスモーカーは震える腕で体を支え、起き上がろうとしていた。
「スモーカーさんっ。無理をしては……」
「黙ってろ。おれたちは今、選択しなきゃならねぇんだ……」
必死な様子の彼に押され、たしぎは口を閉ざした。
彼はまだ諦めていない。何かを考えているようだった。
自身の衝突で開けた穴から音も無く、クロコダイルが歩いて戻ってくる。
銜えていた葉巻を落としており、拾う気にもならなかったらしい。
顔から笑みが消え、先程と比べて少し厳しい表情になっていて、感情を隠した瞳はルフィを睨みつけた。だが睨みつけられた本人は平然としている。
スモーカーが敵わなかった相手に攻撃を叩き込んだ。
噂の賞金首を知る者は多く、海兵たちは自然と息を呑んで見守る。手を出せる戦いではないだろうとはほぼ全員が理解していた。
少し苛立っているらしい顔でクロコダイルが自身の頬に触れる。
確かに触れた。どうやらさっきの戦いとは違うようだ。
それ自体はいい。当初から想定していたことで、油断していた自分が愚かだった。
言わばそんな事実など、自身の不利と考えるような要因ではなかったのである。
クロコダイルの目はルフィだけを見ていた。
「そうか、水を持ってきたな……ようやくおれの前に立つ資格を得たわけだ」
「キリが教えてくれたんだ。あいつは水に濡れると力が抜けるから、戦う相手の体が濡れてるのも嫌がる。お前も同じなんだろ」
にやりと笑うルフィは背負った樽、そこから伸びるホースを持ち、

ボタンを押して水を出した。それで自分の体をもう一度濡らす。
思い出すのはとレジャーバトル決勝戦、キリと一対一で戦った時のこと。
クロコダイル本人の言葉と合わせても水が弱点なのは間違いない。
今にして思えば、あの時すでに伝えていたのか。気付くのは遅れたがようやく使える。
スナスナの実は自然系（ロギア）に分類される。
本来ならば能力者の肉体は砂となり、全ての物理的な能力に対して絶対の回避力を得ることになるのだが、唯一の例外が水であった。水に触れた物体だけは砂の性質上受け流せず、物理的な攻撃でもダメージが入ってしまう。
それに気付いたルフィは勝機を得たと言いたげな顔だった。
だがクロコダイルからすれば致命的なミスではなく、あくまでも弱点が知られただけの話。
海賊の真剣勝負は、能力の有無、弱点のみで決まるものではない。
そこらの海賊ならばそれで通用するとしても、七武海クラスならば尚更だ。
いまだクロコダイルの余裕は崩れず、むしろ攻撃を受けたことによって意識は切り替えられた。
「これでおれは、お前を殴れる」
「忘れたか。そもそもお前は、おれが許してやった一撃を除けばおれに触れることすらできちゃいない。本当に勝てるつもりなのか」
「何言ってんだ？　さっき何発もぶん殴ったじゃねぇか」
どうも話に食い違いがあるらしい。そこが妙に苛立つ。
一度目の戦いについて言ったクロコダイルに対して、ルフィはつい今しがたの出来事について指摘した。何も間違えた話ではないのだがそれがクロコダイルの怒りを買う。
遊びでは足りないというのなら今度はもう少し本気を出そう。
目つきの変わったクロコダイルを見たところでルフィは物怖じしない。
「たったの数発だ。お前は何もわかっちゃいねぇ」

「そうか？　なんでか今は……負ける気がしねぇ！」
再びルフィが駆け出す。芸も無く真正面からの突撃だ。
クロコダイルは苛立ちを覚えながら待ち受けた。
このままでは何も変わらない。考え無しの特攻ばかり。本当に勝ちに来たのだろうか。
笑みすら浮かべるルフィの余裕は、根拠がないとしか思えなかった。
「伊達に七武海は名乗っちゃいねぇんだ……格の違いを教えてやる」
眼前にルフィが到達したところでクロコダイルが前へ踏み出した。彼の攻撃に合わせて、振り上げた鉤爪で首筋を刈ってやろうとする。
タイミングは完璧。まるで事前に行動を読んでいたかのように動きを合わせていた。
しかし不可解なことに、先に攻撃を当てたのはクロコダイルではなくルフィであった。
顔面へ拳を直撃させ、体格の良い彼を力ずくで吹き飛ばす。
予想もできなかった事態にクロコダイルの体は地面へ弾む。
一度背をつき、即座に起き上がったことで姿勢を整える。すると目の前にはルフィが居てすでに攻撃しようと両腕を伸ばしていた。
一度目の対戦とは単純にスピードが違う。さっきよりも速い。
流石に驚愕せざるを得ず、迫る攻撃の迫力に顔色が変わってしまっていた。
「おおおおッ――バズーカァ!!」
掌底が腹に直撃して、これには耐えられずクロコダイルの体が宙を飛ぶ。
勢いよく地面へ激突すると大の字に倒れた。
彼の強さを己の目で確認していた者にとっては信じられない光景。たしぎは息を呑み、厳しい顔をしていたスモーカーは大きな反応を見せない。
クロコダイル自身もこの展開が信じられず、しばし動くことができなかった。あまりの静けさに海兵たちが恐れる中、彼はぴくりとも動

かない。まるで怒りを溜めるかのように。
代わりにルフィが彼へ向かって言う。
「ハァ、何が七武海だ。だったらおれは……八武海だ!!」
自信に満ちた声だったが、賛同は得られずに、辺りは奇妙に静まり返る。
鼻息を荒くしたルフィはそれでも気にしていなかった。
やがてクロコダイルが起き上がる。
顔を伏せ、静かながらも強い怒気を感じる姿である。
改めてルフィも拳を構えて、彼との戦闘へ臨もうとしていた。
二人の姿を見ながらスモーカーは考えていた。
自分は今、何をすべきか。できることは何なのか。海兵として、海賊と敵対する者として、あの男に敗北したこの状況で何を為すべきなのか。
表情は厳しくなる一方であり、苦しんでいるのは傍目から見て明らか。
流れた鼻血を右手で拭った。自身の血を久々に目にしたクロコダイルは手を下ろすと、先程とはまるで別人のような迫力を醸し出した。
油断をしていた。慢心があった。この状況ならそれも捨てよう。
一方で手を抜いていたという自覚はなかったのだが、まだ奥底が遠くにあるのは事実であって、名を売ったばかりのルーキーに負けるつもりはない。
迫力が増してクロコダイルが顔を上げた。
その瞬間、変化をしっかり感じていて、反射的に走り出そうとしたルフィは動きを止める。彼の体が砂に変化して消えようとしているのである。
「少々遊びが過ぎたな……あまり図に乗るなよ。麦わらのルフィ」
「砂になってく……なんだ?」
拳を構えたままその姿を眺めていれば彼の体は完全に砂になってしまう。風に流され、あっという間にその場から消えてしまった。
一体どこへ行ったのか。

全身の神経を過敏にして待っていると、攻撃はすぐにやってきた。
素早く背後を取ったクロコダイルが元の姿に戻りながら腕を振り下ろしていた。
まだ体の端々が砂になった状態で攻撃が来る。音と気配で気付いたルフィが即座に振り返るものの間に合わない。スピードはクロコダイルが勝っていた。
鉤爪が彼の顔へ迫る。海兵が思わずあっと声を漏らしたその時。
左腕の鉤爪は、突如差し出された十手によって止められた。
攻撃したクロコダイルも、振り向いて反撃しようとしていたルフィも動きを止める。
彼らに割り込むようにして傷だらけのスモーカーが立っていた。
どちらかと言えば、その立ち位置はルフィに味方しているようにも見えて。
銜えた二本の葉巻からはモクモク煙が立ち昇っていた。
「お前……ローグタウンの煙？」
「どういうつもりだ。こいつはお前の大嫌いな海賊のはずだが？」
疑問を露にする二人を気にすることなく、十手を振ると鉤爪を振り払った。
仕方なくクロコダイルは後ろへ数歩下がって反応を見、彼の出方を改めて確認する。
そうして時間を与えられたスモーカーは苦心した末、部下へ語り掛けた。
「たしぎ。お前は部隊を率いて広場へ向かえ」
「え？　スモーカーさん……」
「この国の兵士が国王の後を追った。どのみちお前らじゃあの女には勝てん。それならせめてこいつの言う小競り合いとやらを止めるための努力をしろ」
「ちょ、ちょっと待ってくださいスモーカーさん。それって――」
「今はこれしかねぇんだ……」
噛みしめた歯をギリッと鳴らし、彼は大声で宣言する。
「おれの部隊に所属する全員へ告げる！　麦わらの一味を援護し

ろォ!!」
たしぎは、全身が震えたのを感じた。
あの海賊嫌いのスモーカーが、プライドを捨てて彼らを頼ったのだ。その決断にどれほどの迷いがあったというのだろう。傷つき倒れた彼はいつの間にか一人で決断していた。
我を忘れるほどの衝撃にもかかわらず、たしぎは誰よりも早く呑み込んだ。
即座に振り返って動揺する海兵へ指示を飛ばす。
「全員、すぐに動いてください！　負傷者は一か所に集めて応急処置を！　戦える人は武器を持って私に続いてください！　広場へ向かいます！」
「し、しかしたしぎ曹長、麦わらの一味は海賊で――」
「この状況がわからないんですかっ!!　誰にも文句は言わせません、急いで！」
必死に叫ぶたしぎが刀を振り上げたことで、ようやく彼らも事態の大変さに気付き、冷静になる暇もなく慌てて行動を始めた。
一気に慌ただしくなる周囲の中、たしぎは振り返らずに言う。
生き残れるとは限らない。それでも選択する必要はあった。
スモーカーはここで置いていく。彼を倒した、クロコダイルの前へ。
「スモーカーさん……どうかご無事で」
「いらん心配だ。さっさと行け」
力強く頷き、たしぎが駆け出す。
「お前はお前の正義に従え」
離れる直前、確かにその言葉を受け取った。
そこから先はたしぎが指揮官となり、全部隊が慌ただしくその場を離れていく。
残ったのはルフィとクロコダイル、そして海兵であるスモーカーだ。
溜息のように煙を吐き出して肩の力を抜く。
クロコダイルを睨みながら彼の隣に立つ。一切そちらを見ようと

はしなかったが声をかけたのは平然としているルフィに対してだった。
「勘違いするなよ。たまたま敵が同じだったってだけだ。奴の次はお前を捕らえる」
「うん。よくわかんねぇけどありがとう」
「礼なんか言うな。自分の判断を呪いたくなるぜ」
包帯を巻いた姿のルフィと血まみれの状態にあるスモーカーが肩を並べる。
一度は敗北した者同士、今度は力を合わせて立ち向かってくるつもりらしい。
クロコダイルは不敵に微笑む。
「追い詰められてなりふり構ってられねぇか。いいのか？　海賊だぞ」
「おれの仕事は海賊を捕らえることだ。結果がありゃそれでいい。違うか？」
「クハハハ、流石は野犬だ。そりゃあイーストブルーに飛ばされもする」
彼の笑みは凶悪なものに変わり、二人を威圧する。
「だが自惚れるなよ。このおれに、勝てるかどうかだ」
ルフィとスモーカーは同時に身構える。
戦いにおいて必要なものは勝利のみ。そこに卑怯などという言葉は存在しない。
彼らは多くを語らずに協力する姿勢を見せ、そしてクロコダイルもそれを良しとする。
早くも人気がなくなった道の真ん中で、彼らは再度対峙した。

ＲＥＶＩＶＥＲ

動き出すタイミングを見計らっていたルフィは、ふとしたタイミングでスモーカーを見た。
十手を構える彼だが体は濡れていない。全身砂人間であるクロコダイルに勝つためには水が必要不可欠。そう考えるとスモーカーへ尋ねた。
「おい煙、あいつに触れようと思ったら水がいるんだぞ。おれの貸してやろうか？」
「いらねぇよ。おれの十手には海楼石が含まれてる。能力者ならロギアだろうがパラミシアだろうが例外なく仕留められる。当たりさえすればな」
「へぇ……不思議十手か」
「チッ、頭が痛くなるぜ。なんでわざわざてめぇなんだ」
理解しようとして無理だったのか、そもそも聞いていないのか。ルフィの素直な反応に困惑したスモーカーは早々に会話を打ち切った。
頭脳はこれでも、実力は頼れるものがある。
悔しくも思うがこの場には絶対に必要な人間だった。
スモーカーはそう考えていても、クロコダイルにしてみれば大した脅威とは考えていない。
数度の攻撃を受けてもいまだ余裕は崩れていなかった。
「そう憤るな、スモーカー君。全ては君の力不足が招いた事態。他人に当たるものじゃない」
「ああ、自覚してる。バカな自分を情けなく思ってたところさ。だからてめぇを捕まえて、少しでも海軍に貢献しなきゃならねぇと思ってたところだよ」
「できないことを口にするものじゃないぞ。さっきそれを学んだはずじゃなかったか？」
「悪いが、他人の言うことにゃ素直に従えない性質でね」
互いに出方を窺って時間を使う。
一度始まれば止まることはないだろう。決着がつくその時まで。

それ故に空気は見る見るうちに重く、肌に突き刺さるほど刺々しいものとなっていった。
突然、ぐっと膝を曲げ、弾き出されるようにルフィが駆け出した。
何度目かの突撃。策があるようには見えない姿でクロコダイルへ接近していく。
クロコダイルはそれを待った。待ち構えることに恐怖や迷いはない。
まだ人体では届かない距離でルフィが軽く跳び、勢いをつけて右腕を伸ばすと素早いパンチを放ってくる。これを左に一歩動いただけで回避し、右腕を砂に変えて振り下ろそうとした。
その右腕を、煙になって移動したスモーカーが十手で受け止め、攻撃を始める前に止める。
二人の動きは上々。語り合わずとも連携し、互いの役割を理解して戦おうとしている。ルフィが攻撃を行って、スモーカーがそれをサポートしたのが良い証拠だ。
しかし相手は七武海として君臨する海賊。
たった二人で止めるのは難しいことなど誰が考えても当たり前であり、当然スモーカーもそう考えているからこそ後ろへ退いたのだが、ルフィだけは違った。
撃ち出されるように前へ跳び、全身の力を利用して全力の蹴りを放った。
確かに速いが、冷静になれば避けられない攻撃ではない。少し間を置いたことでクロコダイルに攻撃を当てることは格段に難しくなり、彼は体を砂にする能力を利用しながら避ける。
「ゴムゴムのスタンプ！」
「弱点を突くってのはいい考えだが、それだけで勝てるほど戦闘ってのは浅くない」
狙われた腹部だけが砂に変わって、ルフィの蹴りは何もない空間を通り過ぎていく。
すぐに引き戻され、元の長さに戻った直後、ルフィはさらに前進する。

そこまで物怖じしなければむしろ見ている人間を心配させるほどだ。迎え撃つクロコダイルを呆れさせる彼の行動力は尚も攻撃に特化していた。
「こんにゃろォ！」
飛び掛かって拳を振るうが、今度は全身が砂になって移動する。
気付けば彼は目の前から消えてしまい、肌で異変を感じて振り返った時、距離を取って元の姿に戻るその瞬間を目にした。
瞬間移動も自由自在。速い上に物音も少ない。
クロコダイルとの距離は数十メートルにまで広がっていた。
「おれはそこらの海賊とは違うぞ。能力を理解し、鍛え、研ぎ澄ましてある。悪魔の実の能力は鍛えれば鍛えるほど強化されるもんだ」
「それくらい知ってるぞ。おれだって鍛えたんだからな！」
「てめぇとおれとじゃ格が違うんだ」
砂に変わった右腕を掲げて、振り下ろし、再び地面を砂の刃が走る。
「砂漠の宝刀（デザート・スパーダ）！」
「避けろ麦わらァ！」
「言われなくても……！」
スモーカーは空を飛んで素早く距離を取っており、刃が進む直線状に居たルフィは右へ走って攻撃から逃れる。幸い軌道が変わることはなくひたすら真っすぐ進んでいた。
その攻撃が終わった時、ルフィは目を見開いて驚く。
大した音もなく地面に大きな亀裂が作られていて、先程の攻撃の威力を知ったのだ。
「すげぇ～!?　地面が割れた!?」
「邪魔な障害物は多いがここは砂の国。砂漠の戦闘でおれに勝てる人間は存在しない」
立ち止まって亀裂に注目するルフィを目標に、クロコダイルが下半身を砂に変えて飛んだ。
音も無く地面を走るように、猛然と彼へ接近すると右腕を掲げる。
その腕からは砂が散っていた。
「それを今証明してやろう」

「このォ！　ゴムゴムのピストル！」
迎え撃つべく右腕を伸ばしてパンチを飛ばした。
正面にそれを見たクロコダイルは、首をわずかに傾け、顔の左半分を砂に変えることで器用に回避する。前進する速度は変わらず、大した労力も使っていなかった。
彼の顔には不敵な笑みがあり、大きな自信が窺える様子である。
真正面からの接近を見てルフィは逃げない。
クロコダイルにとっても好都合。腕が届く距離になれば互いが攻撃を行った。
ルフィは左腕を後方へ伸ばして、引き寄せる勢いを利用してパンチを繰り出す。
対するクロコダイルは下へ落ちるようにそのパンチを避け、自身の右腕を振るう。
半月状の砂を引き連れ、彼の右腕は素早くルフィの腕を捉えていた。
「ブレット！」
「三日月形砂丘（バルハン）！」
二人の姿は一瞬にして交差し、互いに背中合わせで距離を置く。
見た目は大した怪我もなかったが、動きを止めた時、ルフィは自分の腕に驚愕する。
痛みも外傷もなかったのに、先程の攻撃で見た目が激変しており、まるでミイラのようにやせ細ってカラカラになっていた。力も入らずひょろりと風に揺れ、自分の腕ではないかのような錯覚にさえ陥ってしまった。
ルフィは肩を押さえて絶叫する。
「うわぁあああ～!?　腕がミイラになった!?　腕が……ミイラに……！」
「砂の神髄は渇きにある。この右腕はあらゆる物から水分を奪い取り、全てを砂に還す。お前もミイラになってみるか？」
余裕綽々でクロコダイルが振り返った時には、ルフィは激しく動揺していた。

攻撃を受けて痛みを感じることはこれまでに多々あったが、腕が動かせないほど痩せてしまうことは初めての経験であった。そのため彼はクロコダイルへ集中することができない。しかしハッと気付いて、水を出すためのホースを手に取る。
「そうだ、水っ……！」
ホースの口を銜えてボタンを押す。
慌てて水を飲み、体に変化が現れるのも早く、彼の腕は弾けるように元に戻った。
動かせることを確認して、彼は肩を落とすと安堵する。
「ハァ、危ねぇ！」
「クハハハ、大事な水だったはずじゃねぇのか？」
ルフィの様子にクロコダイルが笑う。それはおそらく嘲笑の部類だったはずだ。
「おれに触れることができても、その樽にある水には限りがある。そいつがなくなった時、お前はおれへの対抗策を全て失うわけだ」
「うるせぇ！　その前にぶっ飛ばすだけだ！」
「そうできるといいが、おれが黙って見てるとでも思うか？」
改めて体に水をかけ、ルフィが戦闘態勢に入る。
確かに彼の言うことは最もだ。水が尽きてしまえば彼に触れる方法はない。仮にそうなれば一方的にやられるだけだとは知っていた。
そうなる前に決着をつける。ルフィは決意を固めた。
対するクロコダイルは、そんなことできるはずがないと笑う。
単純なスピードやパワーならばルフィにも目を見張るものがある。しかし能力の利用方法、戦法や戦術といった点においてはクロコダイルが何枚も上手となる。
気合だけで勝てる相手ではないのだ。彼に勝つには頭が必要だった。
そこでルフィは考える。
つい先程だけでなく以前にもキリから聞いていた。能力は使い方次第で強くなると。
唐突にルフィが笑顔になる。どうやらいいことを思いついたらし

い。
その表情の変化にクロコダイルが眉を動かした。
警戒が必要だとはさほど思っていない。ただし彼の奇天烈な発言から考えて、何をしでかすかはわからないという認識は少なからずあり、その点に関してはすでに警戒している。
「おれだって殴ってばっかりじゃねぇぞ。頭を使って戦えるんだ」
「たかが知れてる。期待はできねぇな」
「だったら見せてやる！　ゴムゴムのォ～！」
そう言うとルフィは再び直線的に走り出した。
さっきまでと全く同じ光景にクロコダイルは不思議に思い、突っ立ったまま待つ。
「鐘ェ～！」
そうすると走りながら首を伸ばして頭突きをしてきた。
軽やかに避けたクロコダイルが額に青筋を浮かべ、バカにされているような気分になり、急激に湧き上がった怒りを燃やす。
咄嗟に足を動かしたため、勢いを殺しきれないルフィがすぐ傍を通ろうとする。
すかさずクロコダイルが左腕を掲げて鉤爪を構えた。
伸びきった首が戻り、バチンとゴムらしい音が鳴っている。その時の彼は隙だらけ。一思いに首を切り落としてやろうと振り下ろした。
「ふざけてんのか、てめぇは……！」
怒りを見せるクロコダイルの一撃を、再び十手を突き出したスモーカーが受け止める。
息を切らし、辛そうな表情は誰の目にも明らか。
鉤爪を止めた一瞬でルフィが通り過ぎていき、クロコダイルの視線は動いて、今にも倒れそうなスモーカーを捉えた。
とどめを刺す必要もなさそうな姿に思わず口元が弧を描く。
「死にかけの男がまだ動くのか。もう限界は近いはずだろう」
「ハァ、ハァ……」
言葉を返す余裕もないようだ。
ただ受け止めるだけで必死な十手を振り払って、再び振るわれる鉤

爪が彼を狙った。
「動けないならもう休め。自分の無力さを嘆きながらな」
十手を振り払われただけでスモーカーの足はふらついていた。それでも彼は必死に回避行動を取ろうとしており、煙の体になって離脱を試みる。
触れられれば切り裂かれる。クロコダイルにはそんな力があった。
間に合うかどうか微妙な瞬間、隙を見せたクロコダイルの背後からルフィが飛び掛かる。
気配で気付いたクロコダイルは後ろを見ることなく、頭部を砂に変え、回避する。
ルフィの回し蹴りは空を切った。
スモーカーへの追撃を中止し、顔を元に戻したクロコダイルは振り返った。
見ればルフィが懐の中へ飛び込もうとしており、ただでさえ近いが一足飛びで近付いてくる。それを見ても彼の態度は変わらなかった。
「んんっ！」
「無駄だ。いくら濡れていようが先読みして回避すれば――」
突然ルフィが口から水を吐き出した。
彼を傷つけようという攻撃とは異なる行動。呆気に取られたクロコダイルは顔に浴びてしまう。
ルフィは笑い、意気揚々と両腕を高速で動かした。
（しまった……！　体が――）
「もう逃がさねぇぞ！　ゴムゴムのォ～……ガトリング!!」
一瞬の油断だが致命的なミス。
大して量は多くないとはいえ体に直接浴びた水は影響力が強い。それも頭となれば途端に体の自由が利かなくなって、クロコダイルは棒立ちになり、そこへルフィの猛攻が襲い掛かる。
全力で繰り出された無数のパンチは彼の全身へ強烈に浴びせられた。
呼吸する暇すら与えない連続した攻撃。受け流す暇もない。
数えきれないほどのパンチが彼の体を打ち付け、血を流させてもな

お止まらない。
「おおおおおおっ――！」
ある時、唐突に猛攻が止まる。
ルフィ自身も間を置いて呼吸し、その場でほんのわずかだが跳ぶ。
クロコダイルは動けず、咳き込むと大量の血を吐いた。
「と……鞭ィ！」
思い切り振り回した足が鞭のようにしなり、標的の腰へ強く打ち付ける。
クロコダイルの体は軽やかに飛び、滑るように倒れた。
こうなれば水を浴びた影響だけではない。無数のパンチが彼に大きなダメージを与えていた。
如何に七武海といえど、普段は滅多に攻撃を受けることがない強者。
久方ぶりとなる激痛に思考は驚くほど揺らいでいた。
攻撃はまだ止まらない。
全力で高く跳びあがったルフィは倒れたクロコダイルの頭上を取り、両足の裏を合わせ、真下に向けて勢いよく突き出した。
回避できない彼の腹に両足が突き刺さる。
「槍ィ！」
無理やり吐き出させるかのように、口から血が噴き出す。
「ハンマー！」
落下しながら両手を組んで腕を伸ばし、上空高くから振り下ろした。
それで再びクロコダイルの体が力の入っていない様子で跳ねる。
「んんんっ……！」
落下していくルフィはどんどんクロコダイルに近付いていく。これで最後と言わんばかりに右脚を高く空へ向けて伸ばすと、落下の勢いを利用しながら彼へかかと落としを食らわせようとした。
そこでようやくクロコダイルが目を見開いた。
素早く全身を砂に変えて、その場から離脱する。
「斧ッ！」

ドスン、と踏みつけたのは誰も居ない地面。
一足遅かった。とどめとするには攻撃の手が足りなかったのだろう。
ルフィが辺りを見回したその時、背後を取ったクロコダイルが鉤爪を振り上げる。
「小僧、舐めたマネを……!」
素早い動きにルフィは振り返れない。というより前を向いたまま動こうとしなかった。
気にせずクロコダイルがその首を刈り取ろうとする。しかし、注意力が散漫になっていたのか、身に迫る攻撃に気付けなかった。
全力で突き出された十手の先端がクロコダイルの側頭部を撃ち抜く。
その一点から勢いよく血が噴き出され、スモーカーは気が晴れた様子だった。
「おれを忘れてもらっちゃ困るな」
受け身も取れずにクロコダイルが倒れる。一瞬にしてひどい有様であり、ルフィにしこたま殴られた挙句、スモーカーの一撃で虚を突かれた。
彼が倒れた後になってルフィが背筋を伸ばし、スモーカーと共にクロコダイルを見る。
即席ながら中々いいコンビだったようだ。
ここまでの抵抗があるとは予想していなかった。
口に含んだ水に気付けなかったのが最大にして最低のミス。さらに猛攻を受けて一瞬冷静さを失ってしまったことがスモーカーの攻撃に気付けなかった要因である。
まさかの大打撃に、クロコダイルは怒るどころか冷静さを取り戻していた。
慌てることなくゆっくり起き上がって、立ち上がらずにその場で片膝を着いた。
その時不思議と、二人は奇妙な感覚を覚える。
言いしれない悪寒が背筋を走った。

クロコダイルは笑っていた。
一方的に攻撃を受け続けた結果、上機嫌とさえ取れる笑みを見せて、静かに右手が下ろされる。指を広げて地面に触れ、そこで動きを止めた。
「ここまで殴られたのは何年ぶりだ……余計な体力を使わせやがって」
「なんだ？　降参すんのか？」
「バカ野郎。余計なこと言ってる間に攻撃しろ。おれはもう助けられねぇぞ……」
どうやらスモーカーはもう限界のようだ。手当もせずに動いた結果、再び血が流れだして足元がふらついている。これ以上の援護は望めそうにない。
ルフィはちらりと彼の様子を確認して、小さく頷いて歩き出そうとする。
その足を止めさせたのはクロコダイルの一声だった。
「〝渇き〟の力を見せてやろう」
ドクンと、耳には聞こえない音を聞いた気がした。
不思議に思っているとクロコダイルを中心に地面の様子が変わっていく。
水分が吸い取られ、生命力が枯渇していき、見た目で判断できるほど死んでいくようだ。
その規模は見る見るうちに広がって、着実にクロコダイルを中心に世界が変わり、あまりにも速くルフィたちの下へ到達しようとしていた。
この時二人は、初めて見る光景に目を奪われていた。
これが悪魔の実の能力。
自分たちとは異なる、圧倒的な力を見ていたのだ。
攻撃と判別しにくいクロコダイルの攻撃はルフィの足元へ到達する。
その瞬間、彼が履いていた草履までもが命を奪われたかの如く、一瞬にして枯れた。

「うわっ!? 草履が枯れたぁ!」
「全ての物体は砂へ還る……干割(グラウンド・セッコ)!」
ルフィの首根っこを掴み、体から煙を噴き出して、発射されるようにスモーカーが飛んだ。
直後に大きな異変が周囲の景色を変える。
大地が大きく割れ、瞬く間に崩壊を始めていき、さらに水分を吸い上げられて姿形さえ変貌させてしまう。その中心に居るクロコダイルは不敵に笑っていた。
「浸食輪廻(グラウンド・デス)!!」
大地が、周囲にあった建物が、残骸が、分類を問わずに全てが砂に変わっていく。
それはまるで地獄を生み出すが如く。自らの世界を作り、広げていく様は上空へ逃げた二人の目にも映っていて、あまりにも、あまりにも異常過ぎると驚愕させる。同じ能力者とは思えないほどの大変化が彼らの眼下で起こっていた。
巻き上がる砂に視界を遮られて、クロコダイルの姿を見失ってしまう。
規模はさらに広がっていき、辺り一面が砂漠に変えられようとしていた。
今やもう、下へ降りることはできない。
限界を超えて今にも倒れそうな体でスモーカーは必死に能力を使い、空を飛び続ける。
そんな中でもルフィはクロコダイルの姿を探そうとしていた。
町の中に砂漠が生み出されたが、観察していると規模の拡大が止まっていることに気付いた。
舞い上がった砂で視界が悪いとはいえ、おそらくもう広がらない。今なら大丈夫だ。
ルフィは自身の首根っこを掴んで、自分より上に居るスモーカーへ声をかけた。
「すげぇ……こんなことできるのか。なぁ煙、もう止まったみたいだぞ。今のうちに降りてあの砂ワニ探しに行こう。今度こそぶっ飛

ばしてやる」
声をかけたが返答はなく、不審に思ったルフィが彼を見上げようとした。
「煙、どうした？　もう降りても――」
上を向いてすぐ、ぽたりと頬に落ちる水滴を感じた。
よく見れば青い空と煌々と輝く太陽を背負い、スモーカーの胸に、赤く染まってなお鈍く光る黄金の鉤爪が生えている。
どうやらルフィの頬へ落ちたのは彼の血だったようだ。
信じ難い光景にルフィは驚愕し、大口を開けて目を見開いた。
「煙っ!?　おい、しっかりしろ！」
「いい加減……終わらせるとしよう」
鉤爪が抜かれ、途端にスモーカーとルフィの体は落下を始めた。
すでにスモーカーは意識を失っているか、そうでなければ目を開けることすらできない状態にあるらしく、勢いよく落下する最中に呼びかけても反応がない。
二人の体は、柔らかい砂によって受け止められ、唐突に町から砂漠の中へ放り出された。
不幸中の幸いで、二人の体は常人とは違う。落下の衝撃で命を落とすことはなかった。
その代わり、受け身を取り損ねたルフィは背から激突してしまい、衝撃で樽が割れてしまう。
唯一の武器だった水が砂の上へばら撒かれて、起き上がったルフィは表情を変える。
空を飛び、再び地に戻った時、そこはまるで別世界。
即席とはいえ唯一の相棒を失い、水を失って、彼は改めて砂漠の国の環境を知る。
座った砂の熱さ。体に纏わりつく砂、太陽の光、紫外線、熱。
見える位置に消されていない建物があるとはいえ、不思議と今の心境ではそれが途方もない距離にある気がして、今になって、どっと汗が噴き出した。
予測不可能な出来事によってか、それとも先程の攻撃を見てか、ル

フィは呆然としていた。
砂漠に一人取り残された絶望を町の中で味わっている。
一陣の風が吹き、彼の前へクロコダイルが現れた。怒りの念を発していた先程とは違って落ち着いた風に見える笑みを湛えている。
悔しげに歯を食いしばったルフィが立ち上がる。
身に染みついた慣れで拳を構えて、戦うための姿勢を取った。
「これが、おれとお前との差だ」
思い知らせてやろう、というよりは、優しく諭すように。
クロコダイルの様子を目にしたルフィは自分でも知らぬうちに焦りを抱いていた。
「おれにここまでやらせたことは褒めてやろう。だがそれまでだ。おれを超えるのがどれほど困難かは身に染みたはずだ」
「くっ……ゴムゴムのォ！」
裸足で砂を踏みしめ、駆け出して彼へ挑みかかる。
どんな状況になっても諦めるつもりはない。
拳を振りかぶり、彼の顔を目掛けて振り抜こうとした。
「ブレットォ！」
クロコダイルは冷静に動き、屈んで避けると同時に前へ踏み出し、右手でルフィの首を掴む。
彼の体を腕一本で吊り上げて静止した。
これが決着の時。ようやくにやりと口の端が上がる。
右手は触れた物から水分を奪い取る。先程見せたばかりの技だった。
持ち上げられたルフィの体がみるみるやせ細っていき、徐々に水分が抜き取られ、外見はまるでミイラのように変わっていく。
必死に手で彼の腕を掴むのだが、もはや抵抗と呼べるほどの力は残っていなかった。
「ガッ、カッ……!?」
「またお前の負けだったな……麦わらのルフィ」
気付けば全身から水分を抜き取られて、動くこともできないミイラに成り果てている。

手を離せばルフィの体はひらりと音も無く砂の上に落ちた。
「無駄な時間を使わせやがって……」
あっさり背を向けたクロコダイルは、彼らにとどめを刺さずに去っていく。
疲弊していたのか、苦しめようと思ったのかは不明だが、全身を砂に変えると目的地へ向かうため一瞬にして姿を消す。その姿を見つけることはもはや不可能だった。
誰も居なくなった町の中の砂漠に、ルフィとスモーカーだけが取り残される。
誰に見られることもなく、横たわる姿はただ死を待つだけの存在だった。
そこへ、意志を持って現れた影が一つだけある。
建物の蔭へ隠れ、必死に生きようとしていた彼は機を見て颯爽と走り出す。
砂の上を誰よりも早く駆け抜け、まず真っ先に渇いて倒れるルフィの下へ駆け付けた。
大きな樽を背負ったカルーは、考える暇も惜しいとルフィの口にホースを突っ込み、羽で器用にボタンを押す。勢いよく出される水は確実にルフィの体へ注がれていった。
彼自身、生きようという意思が喉を動かさせ、口の中へ飛び込んでくる水を精一杯飲み込む。全身の細胞へ、筋肉へ、内臓へ水分を与えようと必死に動く。
カルーは彼の名を呼ぶようにして必死に鳴き声を上げていた。
どんどん水を吸収していくルフィの体は元の姿に戻ろうとしていたのである。
「クエッ！　クエッ！　クエーッ！」
ゴクン、と喉から大きな音が鳴った後、ルフィがホースから口を離す。
その途端に彼は体を跳ねさせて飛び起き、体を縮めてぐぐっと力を溜め、全身を弾くように四肢を伸ばして天を仰ぐと大声で叫んだ。
「うおおおおおおぉ～!!!」

「クエ～ッ!!!」
同じくカルーも翼を広げて天に向かって叫んだ。
その直後、ルフィはそのまま動きを止めて倒れてしまい、大の字になって寝転んだ。
辛うじて死は免れたとはいえ、死んでいてもおかしくはなかった。体はすっかり疲れ切っているようで顔色も決して優れてはいない。
荒い呼吸を落ち着けようと必死に息を吸い、そして吐く。
カルーの存在に注意を向けられたのはしばらくしてからだ。
「ハァ、ハァ……ありがとう。お前、なんでここに……？」
「クエーッ」
カルーはベルトで提げた樽を叩く。
彼はビビの頼みを聞いてルフィの後を追っていたのである。
ひょっとしたら水が足りなくなってしまうかもしれない。トラブルで樽が壊れるかもしれない。クロコダイルに勝ったとしても怪我をしてしまうかもしれない。
あらゆる可能性を考え、彼に医療セットと水が入った樽を持たせ、あとを託したのである。
カルーの目的はルフィの危機を救うことにあり、絶対に攻撃を受けてはいけなかった。
戦いは遠くから眺め、辺りが砂漠に変わり始めれば全力で逃げて、しかし本気で逃げ出すつもりだけは絶対に持たず、あくまでもルフィのために自分の安全を優先していた。
その結果、危険はあったがこうして彼を助けることができた。
言葉は通じないがなんとなく事情を察してルフィがカルーの嘴を撫でる。
「そうか。悪かったな……また勝てなくて」
「クエ～……」
カルーは首を横に振り、謝る必要はないと態度で告げる。
彼が諦めるつもりでないことはもう伝わっていた。これからすぐに追いかけ、もう一度挑む。勝つまで何度でも挑戦する。そんな人だとわかっているだけに信頼はあり、決着をつけてくれるその時まで全

力でサポートしようと決めていた。
立ち上がろうとするルフィに手を貸してやり、立ち上がってからも支えてやる。
ルフィの目が辺りを見た。
クロコダイルはすでに居ない。スモーカーが倒れている。
それだけを確認し、彼はすぐに顔つきを変えた。
「くっそ～、あいつどこ行った？　すぐ追いついてぶっ飛ばしてやる！」
「クエー！」
気合を入れて拳をぶつけた。ルフィの鼻息は荒く、外見だけ見ればすぐにも戦えそうだ。
「あいつがどこ行ったか知ってるか？」
「クエ～！」
「よし。案内してくれ」
カルーが力強く頷いたことで、ルフィの目はスモーカーへ向く。
まだ生きているようだ。見捨てては行けない。
彼の下へ歩み寄り、抱き起こすとカルーを呼ぶ。
「こいつも連れて行こう。さっき助けてくれたんだ」
「クエーッ」
力強く頷いて、カルーが自ら背負おうとすかさず駆け寄り、ルフィの協力を得てスモーカーの体を背の鞍に乗せる。
そればかりか彼はジェスチャーを行い、ルフィをも背負おうと言うのだ。
気付いたルフィだが難しい顔をする。
「いいよ。走るから。そいつだけ助けてやってくれ」
「クエッ！」
強い声で有無を言わさず、多少怒っているのかと思える顔で要求した。
仕方なくルフィはカルーの背に跨り、ぐったりしているスモーカーに覆いかぶさるような形で二人乗りをする。当然ずっしり重くなって、カルーが一瞬だけ辛そうな顔をした。

「なぁ、やっぱりいいよ。おれまだ元気だしさ」
「クエ～ッ！　クエ～ッ！」
首を振って頑として聞かずに、そのままカルーは駆け出した。
すでに目的地はわかっているらしく、不意に安堵したルフィは瞼が重いことに気付く。
「よし……待ってろよ。おれは、クロコダイルを、ぶっ飛ばすんだ……」
体力の限界を迎えたかのようにルフィは眠ってしまう。やはり相当な無理をしていたのだろう。カルーはそれを見越して彼を背負うと言い出したのかもしれない。
本番はここではない。この先だ。それこそカルーに手を出せない場所にある。
少しでも休息を取れるのなら少々重かろうが構わない。
全てはこの戦いに勝つためだと、カルーは奮起して彼らを運んだ。
どこへ向かえばいいかは事前にペルから聞かされていた。
ルフィとスモーカーを乗せたカルーは一路、葬祭殿を目指す。

絶叫

馬に乗って全力で疾駆する反乱軍の先遣部隊が、前方にアルバーナを見つけた。

いよいよ戦闘が始まる時。流石に長距離での移動で全部隊が間に合っている訳ではないが、もはやその足は誰にも止めることができない。一度戦闘が始まれば勝利するまで手を止めることはないだろうと本人たちは覚悟している。

先頭を走るコーザはアルバーナを見据えて眉を寄せていた。

この期に及んで、始まってしまう、と思うのは間違っているのだろうか。

止められないことはリーダーとして理解している。だが、何が正解かは彼にもわからなかった。

これから始まる戦いが終わった時、この国は、アラバスタ王国はどうなるのだろう。懐かしき町を目にしたことでつい考えてしまう。

幼い頃から育ったこの土地を愛するからこそ戦いが生まれた。意見をぶつける羽目になった。

自分たちの行いは正しかったのか、今も正しいのか、もうわからなくなってしまった。今はただ止まれないから走っているだけに過ぎない。

迷うコーザは俯き、幼き日を幻視する。

過ぎ去った日は戻らないと知りながらも、あの頃に戻れたらと思わないでもない。

そんな彼に気付いたのだろう、隣を走っていた幼馴染が声をかける。

コーザが顔を上げ、再びアルバーナの姿を目にした。

もう迷っている暇はない。そういうことだろう。

「もうすぐアルバーナに着く。このまま突入するぞ」

「ああ……もう終わらせよう」

駆ける馬の足音が無数に重なり合っている。その轟音は凄まじい迫力となり、もう少し近付けば嫌でもアルバーナの人間が気付くはず

だった。
そうなれば勢いに任せて突貫するのみ。
サングラスの下でコーザの目が危険な色を灯し、輝き始める。
「覚悟を決めろよお前たち！　おれたちは今日！　勝利するために来た！」
「おおっ！」
「悪しき思想を排除し、殲滅し、この国を変える！　準備はもうできているはずだ！」
「おおっ！」
「おれは今日、コブラの首を取る！　意志を同じくする者は決死の覚悟でついてこい！」
「うおおおっ――！」
コーザの兵が一人も欠けずに声を出していた。大声が響き合い砂漠を走る。
「おれたちの祖国を、アラバスタを開放しろ！　行くぞォ!!」
「おおおおおっ!!」
勢いはさらに増してアルバーナへ接近する。
目的地までの距離はどんどん近付き、視界の中で徐々に大きくなっていた。
直線距離にして、まだ一キロはあろうかという距離に到達した頃。
アルバーナの様子がおかしいことに気付く者は少なからず居たとはいえ、それで止まれるような勢いではなかった。
彼らは尚も前進を続ける。
そこへ、唐突に声がかけられた。
電伝虫と拡声器が組み合わせられた、広大な砂漠へ遠く広がる大声である。
初めて聞く声が反乱軍へ語り掛けようとしていた。
《そこで止まれェ！　反乱軍!!》
ハッとしたコーザが思わず手を上げた。
反乱軍は先頭のコーザを筆頭に、必死に勢いを殺して止まろうと試み、そこからさらにずいぶん進んだが最終的には足を止める。アル

バーナへ入る階段まで数百メートルある。大砲さえ届かない距離に大軍勢がずらりと並ぶ。
それを不満に思う者は少なくなかっただろうが、先頭集団はおそらく理由に気付いていた。
コーザが目にしたのは、高く高く掲げられた白旗。降伏を示す旗である。それがアルバーナを外敵から守るための門へいくつも並べられていた。
これは一体どういうことなのか。動揺が広まる。
彼らの足が止まったことをしっかりと確認してから、再び握った受話器へ喋り始める。
階段近くの門へ立っていたのはウソップだった。
彼を迎えに来た超カルガモ部隊、ケンタロウスの背中に電伝虫が置かれている。
この電伝虫が、本来は町のイベント事に使われる拡声器へ繋げられているらしい。
ウソップが受話器に向かって喋り始めると、町の至る所に置かれたスピーカーから彼の声が聞こえ始めて、門のところに置かれた数個から砂漠へも届けられていた。
《よ～く聞け反乱軍！　お前らは騙されている！　お前らがしていた反乱は全て、最初から仕組まれていたことだったんだ！》
「なんだこれは……誰が喋ってる」
「国王軍の罠か？」
《みんな騙されてたんだぞ！　国王もお前らも、滅んだ町の連中も、今も普通に暮らしてる国民も全員だ！　このままお前らが国王軍と戦えば、喜ぶのはお前らを騙してた黒幕だけだ！》
信じてもらえるとは限らない。一笑に付して突撃してくる可能性がある。
そうさせないためにウソップは死ぬ気で叫んだ。
この状況になることをキリは初めから想定していた。おそらくこうなるだろうと。その時のためにウソップへ全てを託し、彼らへの説得を頼んだ。

もっと大事な用があるというキリに代わり、他の誰でもない、彼だけの大役だ。
喋っている最中も手が震えている。膝が笑っている。しかし逃げ出すことは許されない。
これはもはや自分の身を守るだけの作戦ではない。一国が潰れるかどうか、ビビの努力が報われるか否かの大事な局面だ。
今はまだ立ち止まって動かない反乱軍の大軍を見つめ、ウソップは語る。
全てを話して信じさせる。それができるのはウソップしか居ない。
《ここでおれが真実を語ってやる！　その前にまず最初に言っとくが、お前らの中にも裏切者が潜んでるぞ！　何年も前に堂々と反乱軍へ参加した工作員だ！　自分じゃ気付けないかもしれないが確実に居る！　これは嘘なんかじゃない！》
「これを喋ってるのは誰だ。何が起こってる……！」
「待て。もう少し聞け」
苛立ちを見せる仲間を制止してコーザが耳を傾ける。彼だけは真剣な目で門を見ていた。
まだ遠くて誰が喋っているのかは見えない。そこで彼は部下から双眼鏡を受け取り、覗き込んで喋っている人物を探そうとし始める。
《お前らを陥れようとした組織の名はバロックワークス！　秘密主義の犯罪組織でその多くが謎に包まれている！　お前らが知らないのも無理はない！　現におれもこの組織で働いていた仲間が教えてくれなきゃ何一つ存在を知らなかった！》
「陥れる……？　仕組まれていただと」
「デタラメだ！　国王軍の作戦に決まってる！」
《連中は国王軍と反乱軍を衝突させて、消耗したところで国を乗っ取るつもりなんだ！　このまま進めば奴らの思う壺だぞ！　いいか、そこから一歩も動くな！》
「おいコーザ、もういい！　進軍させろ！　奴も含めて国王軍は皆殺しだ！」
「待て。もう少し……」

双眼鏡を覗いていたコーザが声の主を見つける。鼻の長い男で見覚えはない。だがその隣に大人しく立っているカルガモの姿は忘れるはずがない。

この時、初めて逡巡が生まれた。

情報が少な過ぎてこれだけでは判断できない。国王軍の策略なのか、それとも本当にトラブルが起こっているのか。だが、不自然に町が荒れているのはすでに確認できた。

判断するには彼の話を聞く必要がある。

双眼鏡を下ろしたコーザは仲間たちに手を振り、待てと制した。

《お前たちの敵はバロックワークスを操る男、七武海、サー・クロコダイル！》

その名が出た途端に反乱軍全体がざわついた。

幾度も港町を海賊から守ってくれた英雄を黒幕にするとは。何たる侮辱だと怒る声が数多く上げられて敵対心はむしろ高まっていく様子だ。

「デタラメだ！　奴らは卑劣な嘘をついている！」

「そうだ！　砂漠の英雄がなぜそんなことをする！　根も葉もない中傷に過ぎない！」

「今すぐあいつを殺すべきだ！　コーザ、進軍させろ！」

《この町をよく見ろ！》

ウソップが叫んだことで、もう一度コーザが双眼鏡を覗く。

やはり指摘の通り、建物に残る焼け跡や、壊れた家屋が異様に感じた。

彼の話が嘘にしろ本当にしろ、アルバーナで何かがあったことは間違いないだろう。

《おれたちが来た頃には町はもうこの状態だった！　この町はバロックワークスの攻撃を受けて壊されちまってる！　これを見れば、おれの話が嘘じゃねぇってわかるはずだ！》

「コーザ、信じる気じゃねぇよな」

「大体あいつは誰なんだ。国王軍の兵士じゃねぇのか？」

「いつまで止まってる気だ。早く進ませろ！」

数多の声が彼を挟み込んでいるが、コーザは冷静に判断しようとする。ひょっとしたら戦いへの迷いが彼をそうさせたのかもしれない。
悩む素振りを見せた後、彼は仲間へ振り返って言った。
「拡声器はあるか？　持ってこい……」
「コーザッ！」
「お前正気なのか!?　こんなことしててもどうせ――！」
「いいから持ってこいって言ってんだ!!」
突然の怒声に仲間たちが怯み、仕方なく指示通りに仲間の一人が拡声器を持ってくる。
それをコーザが持ち、一人で少し前へ出るとアルバーナへ語り掛けた。
《長鼻の男。お前に質問する》
《なっ、なんだ？》
ウソップは驚いていたが、予想外の反応は決して悪いものではないと判断する。
彼らには話し合う気があるのだ。
ここが最も大事だと気合を入れ直して、単騎で前へ出たコーザを見つめる。
《まず、お前は一体何者だ？　それがわからなければ信用なんてとてもできない》
《おれは、ビビの仲間だ》
《ビビ……？　まさか、ネフェルタリ・ビビのことを言っているのか》
《それ以外に居ねぇだろ。おれたちはビビと一緒にこの島へ来たんだ》
コーザの穏やかな声にウソップは緊張する。
話はしやすそうだが、落ち着いた様子に安心はできない。こういう手合いは奥が深そうだ。
《ビビ王女は今、行方不明だと語られていた。それがお前と一緒に居たというのか》
《そうだ！　ビビはイガラムのおっさんと一緒にバロックワークス

に潜入して、今回の作戦を阻止しようとしてた！　疑うなら本人もこの町に居るから確認すればいい！》
《信じ難い話だ。それなら王女を呼んでくれ。彼女と話がしたい》
コーザの要求にウソップは顔をしかめた。
《それはできねぇ……ビビは今、おれの仲間と一緒にバロックワークスと戦ってる。お前らが到着するずっと前に戦いは始まってたんだ》
《それなら自分の目で確認させてくれ。もしそれが本当なら、おれたちが戦う必要がなくなるということだろう。おれたちだって本当は戦いを望んじゃいない。絶対に手は出させないと誓う。町へ入るのはほんの数人でいい。お前が案内してくれ》
《それはダメだ！　さっきも言ったが、反乱軍には何年も前から工作員が潜入して、多分お前らの信用を買ってる。そいつらが好き放題すればまたお前らは国王軍とぶつかろうとする！》
《証拠は？　なぜそこまで自信を持って言える》
《リストならあるぞ！　おれの仲間は元々バロックワークスに所属してた！　もっと言うなら反乱軍に潜入させたのもそいつの功績が大きい！》
ウソップは鞄から数枚の紙を取り出して掲げた。
事前にキリが記しておいた、彼が知る限りの反乱軍へ潜入したエージェントの名前が羅列されている。膨大な数であり、仮にこれが燃やされてもいいようにと複製も用意している。
そうまでしてでも反乱軍を止めなければいけないのだ。
キリの話をしたことでハッとウソップが気付いた。
前へ出てきた男の名を思い出したらしい。準備の最中、キリとの会話で教えられていた。
《お前がコーザってやつか！》
《そうだ》
《だったら知ってるはずだぞ！　キリって男の名前を！》
そう言われた途端にコーザの顔色が変わる。
何かに気付いた様子で、咄嗟に返事ができなくなった。

半ば無意識的に拡声器を下ろしてしまい、呆然とした顔でアルバーナの方向を見つめる。
《これまで言った全部、キリが教えてくれたことだ！　それでもまだ信用できねぇのかよ！》
コーザは声が出せないようだ。見守っていた仲間たちが不思議に思うほど動かなくなり、明らかにさっきまでと態度が違うが、だからといってウソップの話を信用するという顔ではない。ただ思考が停止して考えられなくなっているという風体だった。
表情を確認できるほどの距離に居ないウソップは、尚も訴えかけた。
これでだめなら止められないかもしれない。そう思いながら。
《お前らが殺し合えばビビの努力が全部無駄になるんだ！　頼むから戦いをやめてくれ！　もうすでに色々あったかもしれねぇが、今ならまだ間に合う――！》
話している最中に突如爆発音が聞こえた。
いくら遠かろうが目視できるほど大きな爆発が上がり、ウソップの声が途切れたことから察すると直撃したということだろう。
コーザは息を呑み、どよめく反乱軍を背後に黙って事態を見る。
倒れたウソップとケンタロウスの傍から電伝虫を拾い上げ、城壁の一部へ置く。
新たに受話器を持った人間が喋り始めた。
フラフラと危なげな足取りで、今にも倒れそうだった。
辛うじて動くといった様子のＭｒ．５は咳き込み、口の中にあった血を吐き出しながらも、冷静な声で語り始めた。その声は反乱軍を動かそうとしている。
《反乱軍の諸君。この男の話を信じるべきではない。この男は、海賊だ》
「海賊!?」
「アルバーナに海賊が……？」
「王女と仲間だと言ってたぞ」
Ｍｒ．５の言葉で反乱軍に動揺が走る。国王軍の刺客かと思って

いたがそうではなかった。部外者だとしてもその中では最悪な海賊という部類だ。
喋っている男のことも気になるがまずは先程の男について。
さらにＭｒ．５は言葉を重ねて、彼らの闘争心を高めようと試みる。
《この男は嘘つきで有名な男だ。君たちに嘘の情報を流し、混乱させた上でこの国を荒そうとしていたに過ぎないい。海賊とは、野蛮で卑劣で己の欲望に忠実な連中のことを指す。こいつらを信用するべきではない。君たちは自分の正義を信じて行動しろ》
「長々喋りやがって、海賊だったのかっ」
「コーザ！　これでわかっただろ！　奴の話は全部嘘だ！」
仲間の言葉を背に受け、固まったかのように表情を動かさずコーザが言う。
「今喋ってる奴が嘘をついてねぇって、なんで信じられるんだ」
「そりゃあ……」
「なぁ……」
「戦うための理由を探すな。おれたちがしてきたのは、そういうことじゃねぇはずだ」
不満の声を即座に殺して、コーザは集中して話を聞こうとする。
何が真実で、何が嘘か。
判断するのは結局のところ自分自身だ。
動き出さない反乱軍を見てＭｒ．５は苛立ちながらさらに説得を続けようとする。
その背後、音を出さないよう注意しながら動き出す男が居た。
《これまでの犠牲を無駄にするな。国王軍を倒し、この国に本当の王を招くんだ。それがこれまでの君たちの努力を実らせる唯一の――》
「必殺……鉛星！」
《はおっ!?》
突然の悲鳴も拡張され、受話器を取り落としてＭｒ．５が腰を押さえた。

背後にパチンコを構えたウソップが居て、放たれた鉛玉は正確に彼の腰へ当たった。ただでさえギリギリの状態で立っていたためそんな攻撃さえ致命傷となる。
Ｍｒ．５は怒りを滲ませて振り向き、攻撃をしようと決意していた。
その頃にはすでにウソップも動き出しており、走って接近を始めている。
「てめぇ……まだ生きてやがったか！」
「ウソップ輪ゴ～ム！」
「何ッ!?」
走りながら指で輪ゴムを飛ばす挙動を見せ、間抜けにも驚愕したＭｒ．５は全身を硬直させた。サングラスで隠れているだけで目を瞑っていたのかもしれない。
その隙にウソップは輪ゴムを捨てて前進を急ぐ。
鞄から取り出したのは本来射撃で使う特殊な弾丸だ。
赤い弾を手にたくさん持ち、足を止めずに真っすぐ走る。
パチンコで撃っている暇はない。衝動に突き動かされて彼は考えずに動いていた。
それに相手の状態もある。本調子ならともかく今の彼は脅威ではないはずだ。
地面を蹴って跳ぶようにＭｒ．５へ躍りかかった。
輪ゴムが飛んでくるのを恐れていた彼は反応が遅れてしまい、飛んでくるウソップに驚愕する。
「ウソ～ップ・スペシャル・激辛ビ～ンタ！」
「なっ――おぐっ!?」
山盛りになるほど手に乗せた激辛星を、己の掌で勢いよく顔面へ叩きつけた。
サングラスを力で叩き割り、刺激物たっぷりの弾が潰れて、彼の顔は辛味に襲われる。
Ｍｒ．５は絶叫すると両手で目を押さえ、訳も分からず我武者羅に暴れ出す。しかしボムボムの能力を使用する余裕もないためただ大

の男があちらへこちらへフラフラしているだけだ。
「ぐおおおぉ～!? 目がっ!? ああっ、目がぁあああっ!?」
「ウソッ～プ――！」
その後に素早くＭｒ．５の背後を取り、鞄から小さいハンマーを取り出したウソップが跳ぶ。
狙いは一点。人体の急所である後頭部。
一撃で仕留めるため、彼は全力で己の腕を振るった。
「ハンマーッ!!」
ゴキンと鈍い音が鳴り、叫び続けて暴れていたＭｒ．５は突然沈黙すると、その場へ勢いよく倒れて額を打ち付け、動かなくなってしまった。
それを確認してすぐ、爆撃を受けて頭から血を流すウソップは電伝虫の下へ向かう。
同じく爆発を浴びて怪我をしていたケンタロウスは、逃げ出すことなくそこに居た。
器用に羽で電伝虫の受話器を持つとウソップへ手渡した。
ふーっと深く息を吐いて肩を落とす。
さっきの爆撃で大きなダメージを受けていた。いつまで経っても呼吸は落ち着かずに、体も驚くほど重くて座り込んでしまいくなる。しかしそれではいけない。まだ説得を続けなければ。彼らをアルバーナへ入れてはいけない。
落ち着いて考える余裕を失って、ウソップの目は戦いへ赴く者の目に変わっていた。
どのみち、もう上手い説得方法を考える余裕など残っていない。
それなら言いたいことだけを素直に言うべきだ。
腹を括った彼は受話器を強く握りしめて語り出した。
《ハァ、ハァ……ああ、そうだな。信用できねぇのも無理ねぇよな。おれだって簡単に他人を信用したりしねぇんだ。臆病だからよ、どうしても疑ってかかっちまう……》
倒れそうになった体をケンタロウスが支える。ウソップは地面に視線を落としていた。

《おれだってよぉ……正直、本音を言っちまえば、この国がどうなろうが、お前らがどうなろうが知ったこっちゃねぇんだ。こんなに痛い思いして頑張ってよぉ。今だって倒れそうなのに、何やってんだって考えちまうんだ……》

爆発が起こった後、状況が読めない反乱軍は静まり返っていた。

そして、その声が聞こえた今、誰もが耳を傾けるために黙り込んでいる。

コーザは目視できないウソップへ真剣な眼差しを向けていた。

《この際だからはっきり言っとくぞ……！　おれは嘘つきで海賊だァ!!》

自分の体を顧みず、ウソップは力の限り叫んだ。

その声は遠く離れた場所へ居る者たちへ迫力を伴って伝わる。

《おれは麦わらの一味の狙撃手！　キャプテン・ウソップ!!　八千人の部下を持ち、世界に名を轟かせる勇敢なる海の戦士になって、いずれは船長麦わらのルフィを海賊王にする男だ!!》

朗々と語る声に力は宿って、いつしか勝気な笑みが浮かんで、口の動きが止まらなくなる。

《これだけは言っとくぞ……おれはお前らがどうなろうが知ったこっちゃねぇが！　ビビの努力を無駄にする奴らは誰だろうが絶対に許さねぇ！》

大声を出すせいで頭がふらつく。体の力が抜けそうになる。しかし一度吐き出した激情は簡単に止められるものではないようで、不調など無視してウソップは叫び続けた。

彼の様子を間近で見るケンタロウスは、見捨てることなく必死に彼を支えた。

《ハァ……お前らが国民同士で傷つけ合ってる間、あいつがどこで何してたか知ってんのか!?　自分が死ぬかもしれねぇって知りながらずっと戦い続けてたんだぞ！　この国を救うためにずっと命を賭けてたんだ！　お前らに死んでほしくねぇから、あちこち飛び回って必死にもがいて、今もずっと戦い続けてる！》

コーザは不思議な感覚を覚えていた。

さっきよりも彼の言葉が素直に胸の中へ入ってくる。必死な様子に感化されて、冷静な判断を失っているだけとも言えるかもしれないが、彼自身はそれを拒否しようとはしなかった。

《おれは嘘つきだけど、あいつが仲間だってことだけは嘘にはさせねぇ！　誰も傷ついてほしくねぇってビビの想いは無駄にさせねぇ！　もしお前らが戦いをやめずにこの町に入ってくるって言うんなら、おれたちが許さねぇぞ！　お前らを全員ぶっ飛ばしてでも戦争を止めてやる！》

がくりとウソップの体が揺れた。体に力が入ったせいか、血が噴き出している。

それでも受話器だけは離さなかった。

《海賊かこの国の英雄か、誰を信じりゃいいかくらい……それくらい自分で決めろォ!!》

言い終えた直後にウソップがその場で跪いた。

限界だったのだろう。俯いて荒い息を続け、顔を上げることさえできない。

傍に座ったケンタロウスに背中をさすられたまま、しばらく声を出せずに黙り込み、受話器を握った状態で何度も咳き込む。

彼の声が聞こえなくなったことで、再び反乱軍はどよめき始める。前へも後ろへも進めず立ち止まったまま、彼らの困惑はより大きなものとなっていた。

迷いを感じさせる声がコーザの背へぶつけられた。

リーダーは彼だ。どうするつもりなのか。

真剣な表情で考え込んでいたコーザは、大きく息を吸うとようやく決断する。

「どうするんだ……コーザ」

「……白旗を上げろ」

その声にぎょっとした一人が思わず身を乗り出す。

「本気か!?　ここまでどれだけの血が流れたと思って――！」

「責任ならあとでいくらでも取ってやる！　今は言う通りにしろ！」

普段にはないほど強い語気で仲間の意見を押しやり、コーザは拡声器を取る。
信じられるかどうかなどわからない。だが決断と行動は必要だ。
《長鼻の男。潜入した工作員のリストがあると言ったな》
《ハァ、ハァ……あるぞ。ただし、キリが在籍してた頃のメンバーだけだ。それ以降に入った連中に関しては何もわからねぇ》
《それでいい。読み上げてくれ……名を呼ばれた者を拘束する》
更なる衝撃を受けて仲間の一人が黙っていられなかったようだ。
再度の講義にコーザは微塵も表情を動かさず、冷静に受け止める。
もう決めたことだ。ここからは譲らない。
「おい、コーザ！　お前どうしちまったんだ！　本気で信じるつもりなのか!?」
「だったらお前、この状況をどうする気だ……」
「そりゃ……罠の可能性があるんだから、確かめるなら自分たちで行くしかねぇだろ」
「仮にこの中に裏切者が居たとして、後ろから襲われることもあり得る。部下が死んだら誰に詫びればいい？　お前か？　あの長鼻の男か？　それともそいつの家族か？」
冷静な声が、異論を唱えた男を逆に冷静にさせた。
コーザは俯いてぽつりと言う。
「今まで何人死んだと思ってる。おれだって本当は戦いたくねぇんだよ。必要がないんなら誰も殺したくねぇし、誰も死んでほしくねぇと思ってる」
馬を反転させたコーザは反乱軍に向き直り、怒声のような叫びで語り掛けた。
「これから名を呼ばれた奴は全員拘束する！　間違いだったならおれをどうにでもしてくれて構わねぇが、もしもおれたちを陥れようってやつが居た場合、覚悟してもらう」
明確な敵意を醸し出して告げた後、皆の顔つきが変わったのがわかった。
気にせずコーザは反転する。

ウソップへ向けて拡声器を使い、協力を求めた。
《名を読み上げてくれ！》
《よし！　まず最初に――》
名前がずらりと並ぶリストを見ながらウソップが読み上げ、コーザは幼少期からの付き合いがある親友たちを筆頭に、疑わしい者たちを拘束していく。
これが正しい行動なのかどうかはきっとそう時間もかからずにわかる。
コーザは厳しい表情で自軍を睨み、名前を呼ばれずとも怪しい者が居ないかを探っていた。

独言

戦闘が続く広場は激しい様相となっていた。
敵味方が入り乱れて慌ただしく展開が変わり、一息つくことさえ許されない。
そこへ先程、拡声器を使ったウソップの声が聞こえてきた。
人獣型になったチョッパーは左腕のみで敵を殴り飛ばしながら、ふとした瞬間に顔を上げた。
ちょうど近くにナミが居たため、笑みが堪えられない様子で彼女へ声をかける。
「なぁ、ナミ！　今のって……！」
「ウソップね。たまにはかっこいいことするじゃない」
そこから少し離れた位置で、人が放り投げられるように飛ばされている。それぞれが敵を薙ぎ倒しながら、サンジとゾロも声を掛け合っていた。
互いの顔を見ようとはせずに、戦闘を続けながらでも余裕を感じさせている。
「ウン十万の敵が入り込んできたとして、一人あたり何人がノルマだ？」
「おれが１０万人斬ってやる。お前は一人か二人くらいが限度だろ」
「あぁ!?　てめぇが１０万ならおれは１１万だ！」
「おれは１２万斬る」
「１３万！」
「１５万」
「２０万まとめて蹴り飛ばしてやる！」
「そりゃ無理に決まってんだろ、バカ」
「カッチーン!?　上等だ！　ここに居る奴らで証明してやる！　てめぇには無理だろうがな！」
「アホ言え。おれが先に全員斬っちまう」
どうやらウソップの語りはさほど関係なかったらしい。

自分たちで勝手に士気を上げた彼らは、さらに凄まじい勢いで敵を打ち払い、吹き飛ばし、戦況を変えるためというより自分が一人でも多く倒すため行動する。
そして自らも武器を使い、降りかかる火の粉を払っていたビビは、強く目元を擦った。
すぐ傍にミス・マンデーとＭｒ．９が居た。彼らもまた決死の覚悟で敵を払っている。
「ミス・ウェンズデー、そいつは戦いが終わった時までとっときな。まだ終わっちゃいないよ」
「なぁに、心配はいらねぇ。おれたちも最後まで付き合うぜ」
「うん……うん！」
顔を上げたビビは強い眼差しで戦場を見る。
もう少し。もう少しのはずなのだ。
兵士たちの士気は高く、ゾロやサンジの常人ならざる奮闘ぶりで敵の勢いは完全にくじかれ、流れは完全に国王軍が握っていた。このままなら敵を倒しての勝利もあるかもしれない。
戦いが終わることを誰もが望んでいた。身分を問わず、戦っている兵士も王族も、この場に居る国民たちは皆、この戦いが終わることを心から願っている。
だからこそ武器を振るい、押し寄せる敵を一人も逃がさず倒さなければ。
着実に、確実に戦いは終焉へ近付いていたはずだ。
そんなある時、砂嵐に包まれた広場で、不意にチョッパーが視線を上げた。
「なんだ？　あれ……」
小さな呟きは誰にも届かなかった。彼自身も聞かせようと思っていない。
「時計が、開いてる」
見上げたのは広場を見下ろす時計台。
いつの間にか文字盤が動いて、その奥の空間が露になっている。流石に内部まで見える角度ではなかったが異様な雰囲気を感じた。

広場からは見えない位置に二人の男女が立っていた。
どちらも奇抜な恰好で、手には奇妙な形の拳銃を持って笑っている。
「ねー聞いてＭｒ．７。これってきっと重大な任務。成功させれば組織の中でとんでもない地位と名誉と報酬がもらえるのは間違いないって思うの」
「んーそうだねミス・ファーザーズデー。おそらくそういうスンポーだね。だから絶対に失敗するわけにはいかないってスンポーだね」
「ゲ～ロゲロゲロ」
「オホホホホッ」
彼らは狙撃手ペア。Ｍｒ．７とミス・ファーザーズデーである。
二人の背後には巨大な大砲が鎮座しており、あまりにも巨大なそれは、たった一発だけ装填された巨大砲弾を内包し、吐き出すその時を待っている。
狙撃手である彼らの役目はその砲弾を発射すること。
ひいては、広場に居る全員を消し去ることが目的だった。
「失敗したら消されるしー」
「成功すれば得る物は多いってスンポーだね」
二人は時計を確認して、広場の状況を覗いてから顔を見合わせる。
「ねー聞いてＭｒ．７。そろそろ時間だと思うの。あいつら丸ごと消し去る時ね」
「オホホホホッ、そういうスンポーだね。邪魔者には全て消えてもらうスンポーだね」
上機嫌に移動した二人は導火線を見下ろす。
そしてマッチを手にして火を点けようと笑顔を見せ合う。
「着火スタンバーイ」
「さっさと仕事を終わらせようってスンポーだね。オホホホホ」
ミス・ファーザーズデーがマッチ棒に火を点けようとした、その瞬間。
突如部屋の扉が蹴り破られた。

二人は反射的に素早く拳銃を構える。それは体に染みついた行動であり、いつ如何なる状況で襲撃があっても返り討ちにできるよう鍛えてある。
強く地面を蹴りつけ、飛び込んできたのは白いコートに身を包んだキリだ。
彼の登場に二人は驚き、しかし攻撃は躊躇わない。
咄嗟に引き金を絞って弾丸を発射していた。
Ｍｒ．７の〝黄色い銃〟、ミス・ファーザーズデーの〝ゲロゲロ銃（ガン）〟。それらは奇妙な形の弾丸を発射するだけでなく、二つが接触すると破裂して攻撃力を増す。
その情報はキリも理解していた。
自身へ向かってくる銃弾に対して指を振り、コートから伸びる紙の触手が弾丸を弾き飛ばす。
「な、何っ!?」
「くそっ、どうしてここがわかった!?」
もう一発放とうと引き金に指をかけるものの、それより早くキリの攻撃が届く。弾丸を弾いた紙の触手が二人を捕まえ、驚くべき速度で壁まで運ぶと激突させた。
衝撃で息が詰まった瞬間、鼻と口に素早く紙切れが張り付く。
呼吸ができなくなった二人はしばらくもがいていたが、やがて気を失い、動かなくなった。
気絶した二人を解放して床に寝かせ、キリは静かに呟く。
聞こえていないことはわかっていたが彼らへの返答のつもりだった。
「知ってて当然。こいつを用意したのはボクだ」
冷たく告げると入口へ振り返る。
ここまで一緒に来た超カルガモ部隊、笠と蓑を身に着けたヒコイチを呼び込む。躊躇いもなく軽い足取りで近寄ってきた彼はキリの傍に立った。
「この二人を連れて先に降りててくれ。すぐ行くよ」
そう告げるとヒコイチはじっとキリの顔を見つめた。心配するよ

うでもあり、何かを疑っているようにも見える。鳴き声を発さずに黙って見つめるのみだ。
キリは苦笑して彼の嘴を撫でた。
そのすぐ後に倒れた二人の体を紙で動かし、ヒコイチの背に乗せる。
「頼んだよ」
多くは語らず、あとを託した。
ヒコイチは頷き、多少の戸惑いを見せながら部屋から去っていく。
部屋に残ったキリは改めて大砲を見る。
懐かしいと感じる。それはクロコダイルの指示を受けて彼がこの部屋に設置したものだ。
広場を吹き飛ばす計画があるのも知っていた。当初は念のためだと思っていたのに、まさか阻止するのが自分だとは思いもしなかった。おかしなことがあるな、と笑う。
砲口が見える位置まで移動して、砲身の中を覗く。
カチカチと音が聞こえていた。
その砲弾は時限爆弾になっており、発射しなくてもいずれは大爆発を起こす。
構造は知っている。止めようと思えば分解して無力化することもできるだろう。しかし残念ながらそのためにはかなりの時間を要し、そう簡単に分解できる代物ではない。おまけに下手な衝撃を与えれば簡単に爆発するようにも設計されていた。
キリは砲身の中へ入り込む。
時限爆弾であるが故に残り時間は表示されているはずだ。近付いて確認すると、予想はしていたとはいえ、思わず苦笑してしまった。
砲身の中でキリが座る。
物言わぬ巨大な砲弾を前にして、誰に言うでもなく呟いた。
「やっぱりそうか……ひょっとしてこれも計算済みなのかな？」
やはりというか、分解するような時間は残されていない。
おそらく本来の時間よりも短めに設定していたのだ。残された時間を見れば分解どころか被害がない場所まで運ぶことも難しい。か

といってこの場に残しておけば、起爆すると広場に居る人間の大半が死ぬことになるのは容易に想像できる。
分解、或いは砂漠へ運ぶ以外の方法で処理しなければならない。
深く溜息をつく。
正直な心境を言えば、ここまで起きた出来事の大半が計算通りに動いていなかった。
自らを情けないと思い、不甲斐ないと感じる。
ここへ来るまでもそうだ。もっと迅速に動いていれば何かは変わったかもしれない。
非常に後悔の多い一戦となってしまった。
「できれば、もう何人かエージェントを倒しておきたかったけど、それも無理そうかな」
時間がないのであれば仕方ない。あとは仲間に任せるしかないだろう。
幸い彼の仲間は皆、頼れる人ばかりだ。心配はしていない。
カチカチという音に耳を傾けていた。
時間がなかった。だが覚悟を決める時間が必要だったようで、彼はしばし佇む。
「ダメな副船長だな……結局、仲間を頼ることしかできてない」
笑みを消して寂しげな表情になり、誰も居ない場所で、一人で語る。
彼は緩慢な動作で立ち上がった。
コートに変化していた紙を操作すると、砲弾を運ぶべく唯一の取っ手を掴む。
（だけど……こいつだけは始末するから）
巨大な砲弾を引きずって動かし、外へ持ち出した。
広い場所へ出た瞬間、無数の紙は一か所に集まって巨大な鳥となり、翼を広げる。砲弾を動かすための取っ手を足で掴むと空を飛び始めた。
キリ自身は鳥の背に乗り、右腕が紙の体に組み込まれるように突っ込んで掴まっていた。
時計台を脱出した直後、紙の鳥は垂直に空を目指して飛ぶ。

大きな翼で風を掴み、砲弾を運んで広場から離れていく。
その巨大な存在は、当然と言えば当然だが、広場で戦っている者たちの注意を引いた。突然時計台の中から現れて一直線に空へ向かっていくのである。
思わず手を止めてしまうのも無理はなく、誰もがその姿を視認した。
その中で、彼の存在に気付けたのはほんのわずか。
キリの存在を知る者だけが彼の姿を見つける。
状況がよくわからないため、なぜ彼が急ぐ様子で空を飛んでいるのかも、持っている物が砲弾だともすぐには理解できない。ただその姿を見て不思議に思うだけだ。
（みんななら大丈夫だ。何があっても、きっとなんとかする）
上昇する最中、キリは安堵した顔で微笑む。
あまり役に立てなかったことを恥じながらも、頼れる仲間が居ることを嬉しく思う。
（ルフィも最後には必ず勝つ。これさえ処理できれば不安要素は全てなくなるはずだ。ボクができることはもうない――）
空を眺めて一人想う。その時キリは何かに気付いた様子でくすりと声を漏らした。
「なんだ、ボクの役目はもう終わってたんじゃないか」
心配することなど、何一つなかった。
彼は満足した顔で微笑む。
すでに自分ができることなどないのだと気付いて、不思議と体が軽くなった。今から自分にできることと言えばおそらく、せいぜいが死なないことだけである。
難しいことだとは思うが、最初から死ぬつもりはない。初めから恐れてはいなかった。
かつてとは違う。
この砲弾を時計台へ運んでいた時とは違うのだ。
今は、心を許せる仲間が居る。それだけで十分だと思えた。
ふとした瞬間にキリはアルバーナの町を見下ろす。

ひどく壊れてしまったことだけではない。以前この町に居る頃とは違った景色が見えた。
突然、腕を引き抜いて空中へ身を投げ出す。巨大な紙の鳥が空へ羽ばたき、振り返ることなく遠ざかっていき、着実に時を刻む砲弾を運んでいった。
キリはその姿を見送り、落下していく。
手元に残った紙はほんのわずか。だがそれでもよかった。これが彼の選択なのだ。
覚悟はできた。捨てるのではなく、生き続ける覚悟だ。
もう以前とは違う。
それを自覚するだけでも不思議と誇らしい気持ちになれたようだ。
「ボス……ボクらの負けだよ」
強い風を感じ、空から落下する最中、キリは広大な空を見つめていた。
満足そうな笑みを浮かべるとその目を閉じてしまう。
それと、と付け足して、誰かに聞かせる言葉を紡いだ。
「ボクらの勝ちだ、ルフィ」
巨大な鳥が能力を使用できる範囲外に到達し、自ら崩壊を始める。ただの紙に戻ってあちこちへ散らばり始め、風に乗って運ばれていく。
そして最後の一枚まで砲弾から離れた瞬間、時は来た。
広場の頭上を覆い尽くす大爆発が起こったのである。
空を覆う巨大な爆炎。
生じた暴風は砂嵐の比ではなく、そこに存在した塵旋風をかき消してしまうほど。
広場で最も背が高かった時計台は特に影響を受け、上部は爆発に巻き込まれて砲台ごと消し飛ばされてしまい、辺り一面を襲った爆風で大きく揺れてもいた。
そこに居た誰もが立っていられなくなる衝撃。
人々が紙のように空を飛び、武器さえ手放して地面を転がる。
その爆発は一時とはいえ戦闘を中断させた。

頭上を支配した爆炎は中々消えることはなく、そこに存在している間は誰もが動けなくなり、何が起こったのかを理解できなくて無言で立ち尽くす。
重苦しい沈黙が広がり、誰一人として動き出せない時間が続く。
ただ、やはりその中で気付く者は気付いた。
空へ上がった彼の姿を確かに見たのだ。
無数の人間が集まる広場の中で、たった数名が縋る想いで空を見つめ、辺りを見回す。
居るはずの人間は、居なければならない人物は、どこにも見当たらなかった。
しばらくした後、空の様子は変化し始めていて、どこからともなく雲が集まろうとしていた。

葬祭殿へ入る前の道に存在する、隠し通路。
長い階段を降りて行きつくそこは広大な地下空間。
ある物を守るために作られた場所は、王家の者だけが存在を知らされて、代々秘密と守る役目を受け継ぎ、長い歴史を辿ってきた。
そして現代、その役目はコブラに引き継がれていた。
隠し通路から続く地下聖殿。
そこへ到達していたミス・オールサンデーは四角い石の前に立っていた。
特殊な鉱石でできており、明らかに自然でないと感じるほど美しい四角形である。その一面には特殊な文字が記され、普通の人間では読めないものだ。
歴史を記す石、歴史の本文(ポーネグリフ)。
何があろうと決して壊れず、割れず、古代文字で人には語られぬ歴史を記した碑文。世界に限られた数しか存在しない不思議な石だった。
ミス・オールサンデーは読めないはずの古代文字を読み進めている様子だった。
古代文字を学ぶこと、或いはポーネグリフを解読・捜索することは法律で固く禁じられている。それ故にコブラは驚きを隠せない。
コブラは猿ぐつわも拘束も解かれ、壁際に座らされている。逃げようと思えばおそらく逃げられる状況だが、なぜか彼はすぐにそうしようとしていない。
それだけ彼女の行動が気になるのだ。
古代文字を読み、ポーネグリフを解読する者。普通とは思えない。
「その文字が読めるのか……?」
「ええ」
「なぜ。どこで学んだ。簡単に伝え聞くことができるものではないのだぞ」
碑文から目を離したミス・オールサンデーが振り返る。

感情を窺わせない微笑みを湛え、余裕を持つ態度でコブラへ言った。
「人には知られたくない過去があるの。この碑文と同じように。興味本位で詮索することはお勧めしないわね」
明確な答えは寄こさず、そう言うと再び石へ向き直った。
コブラは黙り込んで思案する。
ミス・オールサンデーは碑文を読み終えていたのだが、しばらく間を置いてから口を開く。
「これだけなの？　記されているのはこれで全て？」
「私はその文字を読むことができない。守ってきたのは内容ではなくその石と秘密だ。これ以上お前たちに教えられることはない」
「そう……」
「望んでいた物が記されていたのではないのか？」
ミス・オールサンデーは沈黙した後、少ししてから改めて口を開いた。
「ここを最後にするつもりだった。あの男に協力した以上、失敗すれば生きられない。それに逃げることにも疲れたの」
「どういうことだ？」
くすりと微笑む彼女は振り返る。
その笑みは怪しくも美しく、独特の雰囲気を纏っていた。言い知れないものを感じ、コブラは眉間に皺を寄せていて、じっと彼女の顔を見つめる。
彼女は、恐れることもなく冷静に伝えた。
「私は今日ここで死ぬのよ。この碑文が最後の希望だった」
立場は敵とはいえ、愕然としてしまう。
息を呑んだコブラは何も言えなくなってしまい、身じろぎ一つできなかった。
己の死を笑顔で受け止める人間を見たことがあっただろうか。彼女の様子から考えて、冗談ではないと断言することはできないが、その場の空気を肌で感じているコブラにしてみれば冗談などではないと受け取れる。彼女は今、本気でそう言ったのだ。

すでに死ぬことを覚悟した上でこの場に立っている。
その精神力に理解が及ばず、信じられない想いでいっぱいだった。
コブラは、怪我をして血を流し、疲れ切った体でよろよろと立ち上がる。
今一度ミス・オールサンデーの目を正面から見据えた。
敵ではあっても疑念が残る。何が彼女をそうさせたのかがわからない。
そうして向かい合っていた時、その空間へ通じる道を一匹の鷹が飛んできた。
獣型になっていたペルが到着し、人型に戻るとすかさずコブラの下へ駆けつける。
疲弊しているのは彼も同じだがそれを感じさせない速度だった。
即座にコブラの状態を確認するとミス・オールサンデーへ剣を向ける。
「国王様！　ご無事ですか！」
「ああ……心配はいらない。私は無事だ」
「遅れて申し訳ございません。これより私がお守りします！」
ペルはミス・オールサンデーを警戒しており、剣先を彼女へ向けて身構える。
その様子を目にしたミス・オールサンデーは笑みを崩さず、動かない。どうやら戦うつもりはないようで、彼女の能力ならいつでも手負いのペルを倒せるがそうしなかった。
構えもしないことを不審に思いつつも、今は脱出が先。ペルはコブラを急がせる。
必要とあらば彼を背に乗せるつもりで剣を持ったまま人獣型に変身した。
「すぐに脱出を！　外ではまだ戦いが続いています！　どうか兵たちに国王様のご無事をお知らせください！　それだけで彼らの士気は上がりましょう！」
「待ってくれ。少し、彼女と話したい」
「話す……？　何を仰るんです。この期に及んで何を……」

「少しだけだ。すぐに行く」
コブラがペルより前へ進み出てミス・オールサンデーを見る。
攻撃されるという危機感は持っていない。おそらくそんな意思はないだろうと考えている。
やはり対峙してもミス・オールサンデーは攻撃の類を行おうとしなかった。安堵という訳にもいかないまでもペルが理解し、静かに剣を下ろす。
二人の会話はそれから始まった。
「先程の言葉の真意を聞かせてほしい。これが最後だというのなら」
「信じるの？　あなたたちを陥れた相手よ」
「構わない」
王の器と捉えるべきか。間髪入れずにコブラは答えた。
数秒目を閉じたミス・オールサンデーは語り出す。
「私が探していたのは……〝真の歴史の本文（リオ・ポーネグリフ）〟。世界中に点在するポーネグリフの中で唯一、真の歴史を語る石」
「真の……歴史」
コブラが息を呑むのを理解しているが、ミス・オールサンデーは言葉を止めなかった。
「どこにあるかはわからない。何が記されているのか誰も知らない。私はそれを読むためだけに生きていた。だけどもう限界」
「なぜ……生きる意思があれば生きられるはずでは」
「あの男と手を組む時に覚悟していたの。確かにこの世界の〝闇〟から隠れることはできるかもしれない。けれど彼自身も大きな闇……すぐ傍に居て逃げられるとは思っていなかった」
その口ぶりからしてクロコダイルには敵わないと思っているらしい。その一方で恐れているようには聞こえず、諦めの念を強く感じ、語る声に動揺はない。表情を微塵も崩さない姿は死を恐れてはいなくて、それが異常に思えて仕方なかった。
生きることを諦めた人間とは、こんなにも悲しい存在なのか。
「彼に協力し始めた時から、ここが最後だと思っていた。だけど願

いは叶わなかったみたい」
「一つ聞かせてくれ……〝語られぬ歴史〟は、紡ぐことができるのか？　その記録がポーネグリフだというのか？」
疑問を抱いたコブラの問いに対し、ミス・オールサンデーは微笑んだだけだった。
それだけで伝わったらしく、コブラは再び驚愕しており、踏ん張らなければ膝から崩れ落ちそうになるほどの衝撃を受ける。
王族であるからこそ知るものもある。彼は何やら思考を巡らせていたらしい。
だが、どれだけ真剣に考えてみても答えが出そうにない疑問だった。
視線を外して、ミス・オールサンデーがポーネグリフを見る。
感慨にふけるものがある。これが最後と思っていただけにそれは尚更だ。
「私はただ歴史を知りたいだけ……だけどこの世界ではそれさえも許されない」
彼女の独白にコブラは何も言い返すことができなかった。
「私の夢には、敵が多すぎる……」
それは初めて彼女が見せる弱みだったかもしれない。
背を向けたまま、多くは語らず、それでも、その瞬間だけは彼女の背がとても寂しげなものに見えていた。コブラはもちろん、先程まで敵意を見せていたペルさえ戸惑うほどに。
真の歴史とは何なのか。ポーネグリフとは。〝空白の１００年〟とは。
突っ立ったままのコブラの思考はぐるぐる回る。
いつの間にか動けなくなっていた様子の彼らだが、少しするとミス・オールサンデーが言う。
彼女自身の事情から考えるなら、もはや用済みの相手。そういうことらしい。
唐突にこの場から離れるよう忠告して、彼女自身は動こうとしなかった。

その提案にはコブラもペルも驚く。
「行きなさい。止めはしないわ」
「何……？」
「ここに残れば、殺されるのだろう」
「そうね」
「なぜ逃げない。なぜそう簡単に諦めてしまうのだっ」
「言ったでしょう？　もう逃げることに疲れたの」
ミス・オールサンデーの態度は変わらなかった。
「私が生きられる居場所なんてない。あの組織の中にもね」
その声を聞いて、何を言っても無駄なのだと理解した。
厳しい表情を見せたコブラは思わず俯く。
「少し喋り過ぎたわ。誰かに聞いてほしかったのかもしれない。最後だけは、せめて」
「……この地下聖殿には侵入者を逃がさないための仕掛けがある」
コブラは、迷いながらも語り出した。
救いなどではない。むしろ冷酷なことをしようとしているのだろう。
わかってはいても黙って去ることだけはできなかった。
「ポーネグリフを守るために、小さな柱を一つ抜くだけで全ての重心がずれ、聖殿全体が崩壊するよう設計されている。役に立つかはわからないが」
「そう。ありがとう」
「すまん……」
「どうして謝るの？　フフ、おかしな人ね」
彼女はくすくす笑う。最後まで笑みを崩さなかった。
今しがたコブラが言ったのは言わば敵を道連れにするための方法で、彼女が生き残る方法などではないのだが、それを知ってなお動揺することもないらしい。
そんなことを言い出すなど、とんでもないことだと思っている。だが他に手向けがない。
悲痛な面持ちで目を伏せたコブラは彼女へ背を向けた。

王は優しい人だ。ペルは理解している。
何があったかは知らないが、きっと彼女が死ぬことを悔いているのだろう。
そんな王を誇らしく思う反面、彼自身はコブラの身の安全を保障しなければならない。一人の兵士として余計な思考はすぐに捨て去り、護衛としての任務を全うする。
迷いを捨て去ろうと目に強い光を灯すコブラを背に乗せ、ペルが飛び立った。
急ぎ広場へ向かい、兵士たちの戦いを見守るのだ。
「急ぎます！　しっかり掴まっていてください！」
「皆には迷惑をかけた……最後まで付き合わねばな」
二人の姿は素早く遠ざかっていく。
ミス・オールサンデーは振り返りもせず、彼らが逃げるのを止めはしない。
一人になった後、彼女はずっと立ち尽くしていた。
時計を忘れてきた、というよりは敢えて持ってこなかったため、時間の経過は正確に知れない。今はそれでいいと思っている。
静かに時間が進んでいき、しばらく耳が痛くなるほどの静寂に身を包まれていた。
結末はわかっている。今更何の感慨もない。
不意に蘇る記憶など決して幸福なものではなかった。
だからだろうか。死を前にしても心が少しも動かないのは。
長い間、ずっと黙っていた彼女は、ある時急に口を開く。
ポーネグリフを見つめたまま視線を動かさなかった。
「天歴２３９年。カヒラによるアラバスタ征服」
平坦な声は朗々と語り始める。
「天歴２６０年。テイマーのビテイン朝支配」
ポーネグリフに記された文字を読み進めるように言葉を紡いでいる。
非常に流暢な様子でつっかえることは一度もなかった。
「天歴３０６年。エルマルにタフ大聖堂完成」

しかしそれは彼女たちが求めていたものではなくて。
「天歴３２５年。オルテアの英雄マムディンが――」
「もういい。やめろ」
数メートルの距離はあるものの、彼女の背後に立っていたクロコダイルが声を遮る。
流れた血を拭った様子もなく、かといって疲弊は感じさせない。決して弱くはない怒気を露にする彼はミス・オールサンデーの背を睨みつけていた。
彼女の語りを聞いて納得できないものがある。
欲しかった情報は一つたりとも聞こえてこなかった。
そうではない。探していたのは〝プルトン〟という名の古代兵器。求めていたのはその現在地を示す情報であってアラバスタの歴史などではない。
それはミス・オールサンデーも理解していたはずだ。
遮られたことで口を閉ざしていた彼女へクロコダイルが問いかける。
そうする時にはすでに鉤爪を構えようとしていた。
「どういうつもりだ、ニコ・ロビン……おれは歴史の授業を受けに来たわけじゃねぇ。この国に隠された古代兵器の在処を言え。そこに記されているはずだ」
「ないわ」
「何……？」
「ここにはプルトンなんて文字はない。記されているのは歴史だけよ」
言葉を耳にした途端、威圧感が爆発的に増した。
常人では立っていられないほど強烈な殺気をぶつけられているが、ミス・オールサンデーは表情一つ変えずに立っている。さらには振り返って彼の顔を見た。
やはり目を見ればわかった。
初めから生かして帰す気などないのだ。
「隠せばどうなるかは知ってるはずだぞ。悪いが冗談を聞いてやれ

る心境じゃなくてな」
「冗談なんて言ってないわ。全て本当のこと」
「そうか……だとすれば非常に残念だ」
おそらく彼は気付いているのだろう。ミス・オールサンデーが嘘をついたと。そこに鎮座しているポーネグリフは確かにプルトンの在処を示していたことに。
古代文字を読めないクロコダイルには嘘を見抜けても示される位置がわからない。
彼女さえ黙っていれば情報はどこにも漏れないのである。
なぜ彼女がそうしたかを推察することはできないが、裏切りはあり得るものとして考えていた。
クロコダイルはさほど動じていなかった。
激しい憤りを感じる一方、すぐに思考が切り替わって冷静さを取り戻す余裕がある。
静かに左腕が上げられても動じない。
ミス・オールサンデーは彼の行動をじっと見ていた。
そう判断したことを責めやしない。それならば自力で探すだけだ。
決断したクロコダイルは少し前までパートナーだった彼女へ武器を向ける。これから刺し殺すことについて、何一つ心は動いていなかった。
「お前の選択を受け入れよう、ニコ・ロビン。代わりにおれの答えを告げてやる」
「あら。私が何の準備もせずにここへ来ると思った?」
緩やかに、優雅にすら感じる動作でミス・オールサンデーが懐へ手を伸ばす。
取り出したのはナイフと、少量の水。
長年傍に居ただけはあって弱点を理解していた。確かに実力では敵わないが弱点さえ突けば可能性はある。仮に生き残れるとするならばそれを否定するつもりはない。
どちらが生き残って、どちらが死ぬのか。
勝負は一瞬で終わるとミス・オールサンデーは踏んでいた。

しかしクロコダイルは勝負にすらならないと考えており、そこに二人の違いがある。
ミス・オールサンデーが水を手にしたことはクロコダイルにとっても想定内。それ自体が大した脅威になることは決して多くはない。
ルフィから受けたダメージが大きかったものの障害にはならないようだ。
二人を比較した時に挙げられる最も大きいことが一点。
それが戦闘経験の差だ。
ミス・オールサンデーが水が入った小瓶を投げつけた。
クロコダイルは前へ踏み込みながらわずかな動作で回避する。だが彼女の能力によって肩に一本の腕が生え、飛来した小瓶をキャッチした。
回避したはずの攻撃にもう一度襲われかけていたのである。
視線の端にそれを見たがクロコダイルの表情はぴくりとも動かない。
一方、ミス・オールサンデーはナイフを構えて走り出した。
「濡ればナイフも刺さるでしょう!」
肩に生えた腕が小瓶を投げようとする寸前。
地面を強く蹴りつけると同時に体を砂に変えて、クロコダイルの姿が視界から消えた。
あまりにも素早い動きに小瓶を投げるのが間に合わず、本体には当たらずに地面へ落ちて、全身が砂になったことでハナハナの能力が強制的に解除された。ミス・オールサンデーは彼を見失い、哀れにも水の入った小瓶がパリンと割れる。
驚き、一瞬の出来事に思考が遅れる。
その遅れを見逃すほど彼は甘くなかった。
後ろから押されるような衝撃を受けて、体がわずかに揺れ、直後に激痛が走る。
気付けば鉤爪が背から胸を貫通していて、背後からの一撃は気付くことすらできなかった。
不敵に笑うクロコダイルは鉤爪を勢いよく引き抜き、溢れ出る鮮血

に気を良くする。
「全てを許そう、ニコ・ロビン……なぜならおれは」
ミス・オールサンデーの体がその場へ崩れ落ちる。
その姿を冷徹に見下ろしてクロコダイルは静かに呟いた。
「誰一人、最初(ハナ)から信用しちゃいねぇからだ……!」
倒れたミス・オールサンデーへの興味を失い、彼はあっさり視線を外す。すぐに確認したのはそこにある巨大な石、ポーネグリフだ。
残念ながら読むことはできないがヒントになることは間違いない。
後にこれも確保しておくべきかと思案する。
「まぁいい……コブラの反応からこの国にあることはわかった。時間さえあれば見つけ出すことはできる。この国を掌握さえすればな」
裏切りはあったが動じてはいなかった。クロコダイルはすぐに考えを改める。
まず最初にアラバスタ乗っ取りを完成させる。
そう決めた直後、突如地下聖殿が大きく揺れ始めた。
「何ッ……!? チッ、てめぇか!」
クロコダイルの目は倒れたままのミス・オールサンデーを見ていた。
彼が察した通り、彼女はその場を動かずして能力を使い、コブラが言った通り小さな柱を一つ抜いたのだ。するとバランスを崩した聖殿その物が崩れようとしている。
ミス・オールサンデーはいつの間にか満足そうに微笑んでいた。
自分が死ぬことを拒否していない。死は免れない。だが辛うじて一矢報いることはできそうだ。
「てめぇも焼きが回ったな。この程度でおれが死ぬとでも思ったか？」
「フフ……見てみたいと、思ったのよ……」
「何？」
口の端から血を流しながらも、ミス・オールサンデーは微笑んで薄く目を開けた。
「〝D〟の名を持つ彼らが、何をしでかすのか……」

クロコダイルは、三度同じ感覚に陥った。
ゆっくりと振り返り、自らの背後へ目を向ける。
そこには、二度殺したはずのルフィが、強く拳を握りしめて立っていた。

ＨＩＳ　ＷＯＲＬＤ（２）

崩落を始めた地下聖殿は、天井から岩石が落下してくるほど危険な場所となった。
そこで彼らは再び対峙する。
息を切らしながら現れたルフィを見やり、クロコダイルは堪え切れず憤怒の表情を見せ、しぶとい彼に憤りを隠せない。確かにとどめを刺さない判断をしたのは彼とはいえ、あの状況下で一体どうやって生き残ったというのか。理解が及ばないのが腹立たしかった。
「なぜ生きてやがる……もう動けなかったはずだ」
「ハァ、ハァ……お前をぶっ飛ばすまで、絶対に死なねぇ」
彼の言葉を聞いて眉間に皺を寄せ、ますますわからないとクロコダイルが憤る。
なぜそこまでするのか。この国には関係のない一海賊だ。
「なぜそうまでしておれに挑む。すでに力の差は思い知ったはずだ。お前がおれに勝てねぇってこともバカじゃねぇならとっくに理解してる」
ルフィは敢えて何も答えず、無言でクロコダイルを見つめる。
「あいつが頼んだからか？　おれを始末しろとでも言われたか」
「それだけじゃねぇ」
キリのことを言っているのだろうと察したが、ルフィは即座に否定する。
きっかけはそうだったかもしれない。だが今となってはそれだけではないのだ。
不審に思うクロコダイルを強い光を灯した目で見据え、ルフィが言う。
「まだ返してもらってねぇからな。お前がこの国から奪ったもの」
「クハハハハ、何を言うかと思えば。海賊が命を賭ける理由とは思えねぇな」
馬鹿馬鹿しいと笑うクロコダイルは侮蔑の意味も込めた笑みを浮かべた。

「何を返してほしい。金か？　地位か？　名誉か？　それとも雨か？　奪った物ならいくらでもある。横から入ってきたお前が何を欲してる」
「国」
ルフィの発言にクロコダイルから笑みが消えた。
彼の発言の意図をわかりかねていたようだ。
「国……？　おかしなことを言う。国はこれからもらうのさ。おれが王となることでな」
「おれたちが来た時にはとっくになかったぞ。あいつの国なんて」
真剣に語るルフィはビビの顔を思い浮かべていた。
彼女は戦いを終えるまで泣くことをやめていた。それ故、涙を見たことなど一度もない。だが彼女が時折辛い表情を見せ、いつも祖国を心配していたことを知っている。
彼女が愛する国は、今ここにはない。
全て目の前の男が奪い取ってしまったからだ。
「ここが本当にあいつの国なら――」
ルフィの目つきがさらに鋭くなり、力強く地面を踏みしめて駆け出す。
「もっと……笑ってられるはずだ！」
感情のままに思い切り叫び、凄まじい気迫をぶつけた。常人ならばそれで気圧されるだろうが相手が悪い。クロコダイルはその程度で怯える相手ではなかった。
一足飛びで前へ跳び出したルフィが拳を握っているのを見て彼はその場で迎え撃つ。
繰り出されたパンチに対して鉤爪で反撃を行う。
拳から鮮血が飛び、ルフィの顔が厳しいものになった。
彼の着地と同時、今度はクロコダイルが鉤爪による攻撃を行った。
ルフィはその場から動かない。
腰を落として待ち構え、迫る鉤爪を見ると、切られたのとは逆の右手を前へ出す。そして自らの意思で指を開き、鉤爪が掌を貫いた。
赤々とした血が彼の顔にまで飛ぶが、その目は全く揺らいでいな

い。
違和感を感じたのはその時だ。
ルフィは掌を貫かれたままで鉤爪を握ると彼を捕まえる。
そして直後に左手で拳を握って振りかぶった。
繰り出されたパンチは、血で赤く濡れていたのである。
（こいつ――！）
「おおおおおっ！」
左腕を引っ張られて回避行動が遅れ、驚愕した一瞬に攻撃が届く。
ルフィの拳がクロコダイルの頬を打ち抜いた。
油断していた訳ではない。ただ、彼の行動の意図が読めずに行動が遅れてしまった。攻撃を受けてしまった原因はそこにあった。
ぐらりと頭が揺れて、姿勢を崩しながら倒れまいと両足を踏ん張る。
まだ痛みも引かない内にもう一度ぐいっと引っ張られた。
今度は真正面から顔面に拳が突き刺さる。
流石に耐え切れずにクロコダイルの体が飛ぶ。鉤爪はルフィの右手から抜けて、飛び散った血が自身の体を汚し、クロコダイルの体は地面に落ちていた瓦礫へ激突する。
「ガフッ……!?　てめぇ……水を持たねぇと思えば、そういうことか」
「血でも砂は固まるだろ」
攻撃を受けたのはわざと。
自らの血を武器として、砂の体と戦うために即席の策を講じた。
カルーが持っていた水を受け取る手もあった。しかしそれではさっきと変わらない。血を使うなら自分の体から流れるため、途切れることはないだろう。
これが今できる最善で唯一の策。勝つまでやめる気はない。
ルフィは覚悟を決めた目で敵を捉えている。
クロコダイルは右手で口元の血を拭い、体勢を立て直す。
確かに対抗策は講じたようだが限界があるもの。永遠に血を流せるわけではない。その判断がいずれ彼の首を絞めることになるのは

目に見えていた。
問題はない。その程度ならば恐怖を感じない。
いまだ彼の態度には余裕が窺える。
天井が崩れて、次から次に大きな岩が落ちてくる。それらは場所を選ばずに地面へ落ち、時にはそのままの形で静止し、時には砕け、周囲の環境は見る見るうちに変わっていった。
どちらに有利とも不利ともない。ただ劣悪な環境であることは間違いなかった。
二人の間に巨大な岩が落ちた。
ルフィが駆け出し、クロコダイルは気配でそれを知る。
障害物となった大岩へ素早く駆け寄り、走る勢いをそのまま使って蹴りを当てた。
裸足ではあるものの強烈な蹴りが岩を砕き、破片が宙を飛ぶ。弾丸のようでもあるそれらは一斉にクロコダイルを襲うが、砂の体はぶつかってきたそれらをあっさり受け流し、一歩も動くことなく全ての岩を無傷でやり過ごす。
その次にやってくるのがルフィだ。これが厄介だった。
握りしめた拳にはべっとり血が付着している。
砂の体にダメージを与えると知った上で、クロコダイルは接近戦を敢えて許した。
ルフィが繰り出した拳を、先読みしたかのようにクロコダイルが最小限の動きで回避し、反撃のため鉤爪を振るう。咄嗟にルフィも己の反射神経を駆使して避け、完璧に避け切ることはできずとも致命傷にはならず、頬を薄く切られて血が流れた。
決して退かず、さらに前へ出て攻撃する。
完璧に攻撃を避けたクロコダイルが、素早い動きでルフィの肩を切り裂いた。
またしても血が流れ、一瞬息が詰まる。
「ハァ、くそっ！」
「地力が違う。自惚れるなよ」
二人の姿は交差し、勢いを殺すため強く地面を踏みつけ、再びル

フィが走る。
どうやら攻撃が全て先読みされていた。大きく動かずとも確実に回避している。このままでは埒が明かないだろうとは、物を考える余裕のないルフィにもわかった。
そこで彼は咄嗟の行動で地面に転がる岩へ手を伸ばした。
「んんんっ――！」
人間よりも大きな岩石を掴み、自身の体を引き寄せてから、両手でそれを持ち上げた。かなりの重さだったが気合で動かす。全身に力が入って血が噴き出しても気にしない。
ルフィは大きな岩石を投げつける。
別にそのままでもダメージはないが、クロコダイルは右腕を上げた。
「おりゃああっ！」
「フン……くだらん」
自ら接近し、指を開いて岩へ触れた。
渇きを与えるスナスナの能力を使用した途端、一秒とかからず水分を吸い上げ、硬い岩が一瞬にして砂へ変わる。彼の眼前で砂がバッと飛び散った。
一瞬ではあるが視界の大半が砂に埋め尽くされる。その向こうから足が伸びてきた。
目を見開いたクロコダイルの喉元へ強烈な蹴りが直撃する。
「うおおおっ！」
必死に耐えようと足を踏ん張り、わずかだが滑りながら後方へ移動した。
息が詰まり、激しく咳き込み、動きが止まる。
果たして狙っていたのか、偶然か、彼の冷静さを奪ったルフィが素早く接近してきており、長く伸ばしていた腕を引き寄せながらクロコダイルへ到達した。
ゴムの張力を最大限に使ったパンチが腹を打つ。
クロコダイルの体がわずかに浮かび、それでも耐えようとした。
さらにそこへルフィの蹴りが側頭部を捉える。

息もつかせない速度に思考が消える。考える前に敵を迎え撃とうとしていて、体が勝手に回避するため動いており、自らの意思なのか否かさえわからなくなった。
ただ少なくともクロコダイルが逃げようとしていないのは事実だ。
勢いよく地面を跳ねるがその勢いすら利用して起き上がり、彼は素早くルフィへ目を向ける。いまだ止まる気のない彼はクロコダイルへ向けて拳を振りかぶっていた。
口の中に広がる血を吐き出すことも後回しにして、膝を曲げたクロコダイルが迎え撃った。
常人には反応できない速度で彼らは急接近した。
攻撃を行うのは全くの同時。
ルフィの拳がクロコダイルの頬を強烈に殴り抜いて、クロコダイルの鉤爪がルフィの胸を浅く抉っていた。どちらの体からも鮮血が飛んで辺りへ落ちる。
「うっ――!?」
「ガハッ……!」
どちらもダメージを受けたが、倒れたのはクロコダイルだ。凄まじい力で殴り飛ばされ、無理やり距離を開けられるほど動き、受け身も取れずに地面を跳ねる。
体に染みついた動作が咄嗟に起き上がろうと地へ手を着かせた。
彼が上体を起こそうとした時、ルフィは、すでに次の攻撃を行おうとしていた。
「ハァ、んんっ……ゴムゴムのォ!」
クロコダイルの目は彼の姿を捉えていたとはいえ、体が反応できなかったようだ。
「ガトリング～!!」
高速で繰り出された無数のパンチが、クロコダイルの全身を打ち付けた。
反射的に腕を交差し、防御の姿勢を取っていても、その威力は想像を絶する。むしろ先程の戦いよりも痛みが増している気がした。
途中で逃げることはできず、必死に耐えるクロコダイルは激しく吐

血した。
ここへきてようやく彼は気付く。
見た目の酷さはだんだん増すばかりだが、動きは速く、力は強くなっていた。
ルフィは、戦う最中も強くなっているのだ。
最後の一撃が頬へ強烈に突き刺さり、血を撒き散らしながら大きな体が飛んでいく。
滑るように倒れ、今度は起き上がるまでに時間を要した。
徐々にとはいえ余裕が薄れ、蓄積したダメージが確実に彼を苦しめていた。
それはルフィも同じはずなのだが、なぜか彼の動きは飛躍的に良くなってすらいて、一歩踏み出すごとに、一撃を叩き込む度に迫力が増していた。
「ゴムゴムのォ～！」
座り込んだ状態で立ち上がる暇すら与えられない。体を砂に変えようと思っても、血で濡れた拳で触れ続けたせいか、普段ほど上手く変化することができなかった。
急接近し、強く踏み込んだルフィが、長く伸ばした両腕を一気に引き寄せる。
「バズーカァ!!」
掌底が腹を突き刺し、クロコダイルの体を吹き飛ばす。
まるで放たれた銃弾のように空を飛んだ彼は風を切る速度でポーネグリフに激突した。パッと赤い花が一面へ咲いて、重いはずのそれがぶつかった衝撃でわずかに動く。
ずるりと滑り落ちて地面へ座り、俯いた状態で動かなくなる。
ルフィはそんな彼を見て、まだ終わっていないと判断し、拳を構えていた。
何かが、変わっていた。吹き飛ばされる前とは身に纏う空気が違う。
肌に突き刺さるような何かを感じてルフィは動けなかったのだ。
やがてクロコダイルはひどく緩慢な動作で立ち上がる。上げられ

た顔には怪しい笑みがあった。
「クックック……クハハハハハ。いいだろう。お前をおれの〝敵〟として認めてやる。ここからはおれも本気で戦うことにした」
そう言って彼は鉤爪に触れ、それを取った。蓋のような鉤爪の下から同じ形状の、しかし前よりずっと禍々しい様子を醸し出す爪が現れる。
ルフィは不思議そうな顔をしていた。
その爪を掲げ、クロコダイルは恐ろしい顔で笑う。
「海賊としてだ」
「取れた……なんだ？」
「毒さ」
短い返答に合点がいったと納得する。それ以外に反応はない。
「そうか」
「一端の覚悟はあるようだな。海賊の戦いは生き残りを賭ける。卑怯なんて言葉は存在しねぇ」
天井が崩れる。全壊まで時間はそう残されていないだろう。
そこで彼らは対峙していた。
周囲の環境には一切左右されず、覚悟を決めた目は互いの姿だけを映す。
「邪魔は入らん。一対一だ」
互いに視線をぶつけて、しばし静寂に包まれる。
再び動き出したのは二人の間に落ちた大きな岩が視界を遮った瞬間だ。
二人は同時に動き出した。
ルフィがただひたすら真っすぐ駆け出し、クロコダイルが素早く砂の刃を地面に走らせて岩を両断したため、地面を蹴ってルフィが跳びあがることになった。
空中に身を躍らせた彼は右腕を伸ばすと岩を掴み、体を引き寄せることで移動した。
あくまでも正面から向かってくる。好都合だとクロコダイルが細い外見の毒針を構えて、彼の体へサソリの毒を与えてやろうと考え

る。
それはルフィも感じていた。
おそらく受けてはいけない攻撃。一撃さえも許されない。感じ取るが故に毒針への警戒心は鉤爪の時以上に強くなり、常に意識していなければならない状況が作られている。
二人が接近した時、いよいよという瞬間を迎える。
クロコダイルは自ら飛び掛かって腕を振り下ろすが、ルフィは宙返りをするように回転し、伸ばされた腕を下から蹴り上げ、回避すると同時に彼の体勢を崩させた。
空中での一瞬。速い方が勝つという状況。
次の攻撃を先に叩き込んだのはルフィであった。
回転しながら繰り出されたパンチが腹を打ち、身を震わせる強い衝撃が全身に走る。無理やり吐き出させたかのように口から血が出てルフィの体へ降り注いだ。
さらにもう一撃。振りかぶった右腕を全力で振り抜く。
再び頬を捉えられたことでクロコダイルの体は吹き飛ばされ、頭から地面へ激突する。
力が抜けるという事象はなくとも、何度も水分で体を固められた結果、変化は確実にあった。
体を砂に変えることが難しくなっている。不可能になった、封じられたという訳ではないとはいえこれは大きなハンデになるだろう。一瞬が大事な戦闘で普段より時間がかかるのである。弱点が知られているとは知っていたがこれほどの攻撃を受けるとは思わなかった。
今もそうだ。本来なら地面へ激突した際、砂の体は衝撃を受け流すはず。今はそれがない。
手を着いて起き上がる彼は予想以上の疲弊を感じていた。
体を起こして顔だけ振り返った時、すでにルフィが飛び込んできていた。
咄嗟に反応しようと思うが間に合わない。
勢いよく飛んできた彼はぐるりと回り、強烈な蹴りをクロコダイルの顔面へ浴びせる。

「うおおおおっ――――！」
「ガッ、ハッ……!?」
どれだけ痛めつけても元気に動き回る。彼の運動能力はなんだ。精神力は異常か。
頭が良いとは思わないが、だからこそその野性的な動きが彼を翻弄している。
これはもはや相性の悪さでもあった。優れた頭脳で計画を練り、完璧な作戦を求めて行動するクロコダイルに対し、ルフィは思いつくまま、気が向くままに行動する。互いの戦闘にもそれが色濃く反映されていた。その結果、相性は良くないことが判明する。
冷静ささえ失わなければクロコダイルはルフィを圧倒する。しかし一撃を許してしまっただけで一瞬にしてルフィは勢いと気合で形勢を逆転してしまう。
実力的にはクロコダイルが上。しかしそれを凌駕する熱量がルフィにはあった。
再び離れた位置へ行ってしまったクロコダイルを追い、ルフィが走る。
このままにはしておけない。彼の勢いを殺す必要があった。
クロコダイルは起き上がる前に攻撃することを選択した。
倒れたままで右腕を振り、砂の刃を走らせる。
効果はあったようでルフィがわずかに表情を変えた。
「ガフッ、グッ……砂漠の宝刀（デザート・スパーダ）！」
人体を切断するほどの威力と見てルフィはすかさず回避する。直線的に走る軌道をすでに知っていたため横へ跳んで距離を取った。
その間にクロコダイルが立ち上がる。
ルフィが走り出すと同時に再び砂に変わった右腕が思い切り振るわれた。
「舐めるんじゃねぇよ！」
今度は一枚だけではない。全くの同時に複数の刃が地面を走った。
向かってくる攻撃を見てルフィは判断する。迷いはなく、ほんの一瞬の出来事。範囲が広過ぎて避けるのは簡単ではないと気付いたの

だ。
そこで彼は、敢えて低く跳んだ。
高く跳び過ぎれば隙を生み、毒針の餌食になる。そちらの方がまずいと判断しての行動だろう。
攻撃が当たるか当たらないかのスレスレを跳び、しかし全ては避けられず、砂の刃がわずかに彼の肌を撫でると、浅く肉を抉られて空中へ血が流れる軌跡を残した。
もはや理屈ではない。
勝つためならば手段を択ばない、しかし危険な姿に、クロコダイルは表情を険しくした。
二人は再び接近戦へ挑む。
姿勢を低く近付いてくるルフィを見て、対するクロコダイルは腕を振り上げた。
考える時間のない一瞬の攻防で、彼らは己の身を犠牲にする気さえあった。
「おおおっ……！」
「んんっ……！」
クロコダイルが振り下ろす毒針をルフィは屈んで回避した。
前へ踏み込んで一撃。猛然と襲い掛かった拳が彼の腹を強打する。
再び凄まじい衝撃が全身を駆け抜けるが、今度は違う。それを受けるつもりすらあった。
クロコダイルの右腕がルフィの左腕を掴む。
彼を捕まえた上で毒針を振り下ろし、右肩を深々と切り裂いて肉を抉った。
大量の血が視界の中で舞う一瞬、不意にルフィの顔は呆けていた。
それで終わらせる気はなくクロコダイルはさらに動く。
もはや毒で殺そうなどという考えは抜け落ちていた。自らの攻撃で殺そうと首筋を狙う。
「死ね！」
「んんがっ、死なん！」
左腕を掴まれたまま逃げられない状態で、背を反らして首筋を狙う

毒針を避けた。その直後に右脚を上げてクロコダイルの胴体を蹴りつける。
血反吐を吐くが、離さない。
水分を吸い取るという選択肢を捨て、やはり刺し殺すことに集中したようだ。
「うおおおおっ！」
反撃に転じたルフィのパンチがクロコダイルへ直撃する。側頭部に受けて視界が揺らいだ。
足が激しく揺れているが気にしない。
クロコダイルも全力で腕を振るうものの、接近戦においては今やルフィに勢いがあった。彼は頭を下げることで避け、さらに右腕でパンチを放ち、彼の腰を打つ。一撃一撃が驚くほど重く、途方もない激痛が何度も体の中を駆け抜ける。
強く地面を踏みしめ、ルフィの拳がクロコダイルの顔面を殴る。
それと全く同時に、素早く振るわれた毒針がルフィの脇腹を切り裂いた。
腹から駆け上がってきた血液が口から飛び出した。だがルフィはぐっと歯を食いしばり、彼もまたクロコダイルの右腕を強く掴んで離さない。
互いに絶叫しながら全力の攻撃を叩きつける。
毒針が深く胸を抉った瞬間、凄まじいパンチが胸を打って、その衝撃で二人の体は吹き飛んだ。
両者は背中から無様に倒れて、わずかに滑った後に勢いよく立ち上がる。
血を吐きつつも前進をやめずに攻撃を行う。意地と意地がぶつかる激闘は大量の血を伴って途切れることなく、彼らの命を激しく燃やした。
全力で伸ばされたルフィの腕がクロコダイルの頬へパンチを当てる。
代わりにクロコダイルの右腕は砂の刃に変えられ、ルフィの腹部を切り裂いた。

ふらついた体が同時に倒れる。
どちらも疲弊しきった様子でも、決して動きを止めようとせず、すぐ立ち上がろうとする。
クロコダイルはそんな彼の姿を見て怒りを募らせた。
実力やこの状況についてではない。なぜそこまでするのか。仲間のためだというならば馬鹿げていると彼の思想を否定するのである。
立ち上がった後、対峙して、両者は動きを止めて向かい合った。
「ハァ、ゼェ……なぜそこまでする……」
クロコダイルが喋り始めたことで、不思議とルフィはその言葉を待った。
「仲間なんてのはこの世で最も不要なものだぜ。他人のために命を捨てる気か？　てめぇも海賊になったからには野望の一つもあるはずだ。本来の目的をも捨てる気かよ」
「お前は、何もわかっちゃいねぇんだ……」
ルフィの呟きにクロコダイルが眉を動かす。
さらにクロコダイルが言う。
「仲間を捨てればお前は死なずに済んだ。たとえ一国の王女だろうと迷惑な火の粉には変わりねぇさ。お前が拾ったあいつなんてのは、その極致だろうな」
「だから、捨てろってのか」
「お前はあいつのことを何も理解しちゃいない。上手く利用すれば世界の均衡を崩すとんでもねぇ武器になるが、その分リスクはでかい。仮にこのまま連れていってもいずれ後悔するさ。捨てておけばよかったと考える日が来る。だからお前の手には余るんだ」
それを聞いてルフィは少しの間、言葉を選ぶように黙る。
崩落の音を聞きながらクロコダイルもまた突然襲い掛かるような愚行はしない。
やがてルフィは彼の目を見て、真剣に語り始めた。
「あいつらは、人には死んでほしくねぇって言うくせに、自分は一番に命を捨てて人を助けようとするんだ。ほっといたら死んじまう。しかもそれをやめようとしねぇ」

「わからねぇ奴だ。だから、そんな厄介者はさっさと捨てちまえば――」
「死なせたくねぇから……仲間だろうがッ!!」
ルフィの絶叫に、クロコダイルは言葉を止めた。
肩で息をする彼は再び静かに言う。
「おれは絶対に仲間を捨てねぇ……誰が相手でも守るんだ」
「てめぇが死んでもか……」
「死んだ時は、それはそれだ」
聖殿が崩壊していく。
周囲の状況は次々変化していって、その中に立ち尽くす二人の姿があった。
語らいは終わった。どうやら分かり合うことはできなかったらしい。
真剣な目で睨み合い、互いに動き出す時を図る。
そして特に大きな岩が落下し、地面に触れて真っ二つに割れた瞬間、二人は駆け出した。

ＨＩＳ　ＷＯＲＬＤ（３）

「予定外の爆発はあったが……まぁいいガネ。そろそろ決着をつけるとしよう」
突然静寂を打ち破った声に気付いたのは果たして誰だったか。
王宮がある方角とは正反対、広場へ入るための入口へずらりと並ぶ大勢の人影がある。その先頭には見るからに奇妙で巨大な人物が居た。
強烈な爆発によっていつの間にか砂嵐は消えていたが、代わりにというべきか、いつしか空が曇り始めていて薄暗くなりつつある。突然の気候の変化であった。
しかし、それを確認する暇もなく、事態を呑み込む暇もないらしく、彼らが現れた。
それはバロックワークスが用意した最後の一手である。
やってきたのはこれまでクロコダイルが仕留めた海賊たち。
秘密裏に組織へ吸収され、一枚岩とは言えないものの報酬で繋がれた膨大な戦力と化している。
それを率いるのは、ドルドルの能力で強固な鎧を着込んだ、先頭に立つＭｒ．３だ。
チャンスを待ち、敵が疲弊し、ここしかないというタイミングで国王軍の前に現れた。
いまだビリオンズとミリオンズも全滅していない状況で、現れた元海賊たちの戦力はその数を超えている。誰もが疲弊しきったこの状況下で千人近い人数が武器を持って立っている。
その光景を目にした途端、多くの兵士が顔色を変え、巨大な絶望感に囚われた。
「フィナーレといこうカネ。私の完璧な戦略でこの戦いは終わる」
増援となった海賊たちが武器を振り上げて雄叫びを上げる。
国王軍はさらに気圧されてしまい、逆に戦闘中だったバロックワークス社員は士気を上げる。
予想通りの景色を見たＭｒ．３は怪しく微笑んでいた。

「さて、それでは諸君――」
「集結せよ！　国王軍！」
攻撃開始の号令を出そうとしたその時、剣を掲げたチャカが声を張り上げた。
気落ちしていた様子の国王軍は皆が彼に視線を集める。そのことに気付くＭｒ．３は不意に笑みを消すものの、チャカの叫びは誰にも止められなかった。
ここで命を賭けずにどうする。生き残るため、彼はもはや死ぬなとは言わなかった。
「各々すでに疲弊し、諦めたくなる気持ちもあるだろう！　だが決して武器を下ろすな！　我々にはまだ戦うための術がある！　意志がある！　力がある！　命が、ある！　残る全てを使い、我々が守るべきものを守ろう！」
「犬め。余計なことを……」
チャカ自身、動き続けてすでに疲れ切っていたが諦めようとしていない。
今は、ビビには悪いが、ここで死んでもいいと思っている。
アラバスタを守るためなら喜んで死のう。そう考えて剣を掲げていた。
「我らが祖国を！　アラバスタ王国をめちゃくちゃにした張本人が今目の前に居る彼らだ！　ここで戦わずして一体何を守れるというのか！　兵士としての誇りを思い出せ！」
冷徹な判断だとわかっていても、それを止めることは誰にもできない。何を言わんとしているか理解しているビビですら口を挟めなかった。
彼らは戦おうとしている。生きようとしている。最後の最後まで諦めないでいようとしている。
完全に諦めてただ殺されるくらいなら、せめて一秒でも長く。
そんな刹那的な考えに胸を痛めて、しかしビビは、チャカの言葉に感謝した。
「立ち止まるな国王軍！　前進を続けろ！　本当に歩けなくなるそ

の時まで、命を失うその瞬間まで、決して諦めるな！　どうせ死に行くこの命なら、祖国のために捧げようではないか！」
「おおおおっ――！」
「怯える者は今すぐ逃げよ！　私についてくる者は武器を掲げ、雄叫びを上げ、最後のその時までついてこい！　お前たちに死に場所を与えてやる！」
「うおおおおおっ!!」
「全軍突撃ィ!!」
すでに狂気の沙汰であった。
一瞬にして最後の士気を盛り上げた国王軍は、凄まじい勢いで一斉に駆け出す。その迫力は到着したばかりの海賊たちを怯ませ、空気の違いに驚く。
Ｍｒ．３はしかし、勝ち誇るように笑みを浮かべた。
やはり彼の作戦は完璧だったのだ。
突如、国王軍の兵士が味方の兵士を襲い始めた。心を一つにした矢先のこと、襲われた者は驚愕して体を傷つけられ、襲った者は同じく、自身の行動に驚愕していた。
素早く気付いたチャカが後ろを振り返る。
味方同士で傷つけ合って、いくつもの動揺と悲鳴が飛び交っていた。
「何をしているッ!?　味方同士で争うな！」
「お、おいっ、何やってるんだ!?　おれは敵じゃ――ぎゃあっ!?」
「違う、おれの意思じゃない！　体が勝手に動くんだ！」
「おいやめろ！　ふざけてる場合かッ！」
「誰か、止めてくれ！　自分じゃどうにもできないんだ！」
味方を攻撃しているのは一人や二人ではない。半数には満たなくても、数百人は居る。悲鳴を発して辛そうな顔で、中には涙を流しながら仲間を切っている兵士が居た。
愕然としたチャカは立ち尽くしてしまう。
一体何が起こっているのか、見当もつかない。当然その状況を治める方法もわからない。

悲痛な叫びはいくつも彼の耳の中へ入ってきた。
「違うんだっ、おれじゃない！　おれがやったんじゃない！」
「誰かおれを止めてくれ！　仲間を殺させないでくれっ！」
「そんな、嫌だ……！　だれか、だれかおれを殺してくれぇェ～!!」
仲間割れではない。自分の意思でないことは明らかだった。
突っ立っているとチャカを狙って走ってくる者もおり、彼もまた涙を流して槍を持っていた。
「チャカ様っ！　お逃げください！」
「くっ……！」
振り下ろされる槍を剣で受け止め、鍔迫り合いになる。
彼の攻撃に全力を感じた。本気で殺しに来ている。しかし兵士自身は涙を流しながらその攻撃を嫌がっており、非常にちぐはぐな行動であった。
彼の顔を見つめ、チャカは全身が震えるのを感じる。
原因がわからなければ、怒りを誰に向けていいかわからない。
周囲の状況に焦るチャカは自身と刃を合わせた兵士へ、余裕のない声で問いかけた。
「言え！　お前の体に何があった!?」
「わ、わかりません……いきなり、体が勝手に動いて、気付いた時には味方を……」
その兵士は大粒の涙を流し、腕に力を入れたまま俯いてしまう。
「うっ、ううっ……あいつは、おれの親友だったのに……」
彼の様子を、倒れていく仲間たちを、彼らを倒した仲間たちを見て、呆然とするチャカは激しい怒りに囚われていた。冷静な思考が見る見るうちに消えていく。
首を回して辺りを見回した時、笑みを浮かべるＭｒ．３を見つけると、目つきが変わった。
「何をした……私の兵に何をしたんだッ!!」
「棒立ちだったので準備が容易かったガネ。これで貴様らは終わりだ」
わっと増援が一斉に駆け出す。

混乱する戦況へ飛び込み、瞬く間に国王軍を呑み込んでいった。
洗脳というより操作に近い。操られた兵士たちは己の意思を失わぬまま、敵を見逃して味方のみを攻撃する。それ故に国王軍の戦力ばかりが減っていた。
その手は今やビビへも伸びようとしている。
近付いてくる兵士が止まらないため仕方なく殴り飛ばしＭｒ．９とミス・マンデーが苦心する。
守るのはいいがいつまでも堪え切れるものではない。
二人は必死にビビを守ろうと兵士を退けるが、その行為自体がビビの心を傷つけることになるとも気付いており、決して本気では戦えない状況には違いなかった。
「くそっ！　どうなってやがるんだ！」
「しっかりしなよあんたたち！　一体どうしちまったんだい！」
「ミス・ゴールデンウィークよ……」
呟いたビビが、唐突に駆け出した。
二人の間を抜けて武器を振り上げている兵士へ接近する。
反応できなかったＭｒ．９とミス・マンデーは目を見開いて絶句した。
「ミス・ウェンズデー!?」
「だめだ！　戻りなァ！」
「ビビ様ぁ～!?　お逃げください！　自分では止められないのです！」
「あなたは悪くない……！　私が止める！」
振り下ろす刃は誰にも止められない。
ビビは危険と知りながら前へ突っ込んだ。
兵士が持つ槍がビビの肩を切り裂く。服が破けて肌が裂かれ、槍につられて血が舞った。切った兵士の方が悲痛な叫び声をあげるものの、ビビは足を止めずに彼へ飛びついた。
彼の背へ腕を回し、共に地面へ倒れ込む。
二人が地面に倒れた後でようやくＭｒ．９とミス・マンデーが反応できた。

「ミス・ウェンズデーッ！」
「ビビ様ぁ⁉　あ、あれ……？　体が、自由に……」
慌てて飛び起きた兵士が自分の意思で動けることに驚く。確認しても自分の意思に従っていた。
駆け付けた二人は状況の変化に呆然とし、彼女の行動の意味を知る。
ビビは傷ついた右肩を押さえ、傍に居る三人へ声をかけた。
「これが敵の策略よ……背中を見て。黒い絵の具でマークが描かれている」
「え？　背中？」
「ミス・ゴールデンウィークの仕業。みんな操られているだけなの」
真剣な眼差しで三人を見据えて、ビビはしっかりとした足取りで立ち上がる。
彼女の顔からは誰よりも強い覚悟が窺えた。
「このマークが消えれば解放されるわ。ほんの一か所だけでいいの。少しでもマークが崩れれば効果はなくなる」
「こんなもので人を操るのか……」
「あなたたちはこのことを他のみんなにも伝えて。そして操られているみんなを解放して。私たちはまだ負けたわけじゃないわ」
教えられた兵士は慌てて地面を転がり、背中についた絵の具を取る。
その間、ミス・マンデーは真剣な目で彼女を見つめていた。気付いたビビが目を合わせるも意志が揺らぐ様子はない。それだけで全てわかる。
「今は一刻を争うの。それぞれ散って行動しましょう」
「護衛はいらないってことだね」
「ええ」
「ビ、ビビ様っ⁉　そんな危険なことを……せめて私だけでも！
それでビビ様のお体を傷つけてしまった罪を償えるとは思いませんが、この命使ってお守りしなければ自分が許せません！」
「やめて。これはあなたのせいじゃない、私が自分でつけたものよ。

勝手に罪を被らないで」
「しかし……！」
慌てて立ち上がる兵士の顔を見上げてビビは言った。
迷いのない声は彼を瞬く間に冷静にした。
「私のためというなら一人でも多くの人を救って。あなたの力でたくさんの人が助けられるの。お願い、時間がないわ」
「ビビ様……わかりました。ご命令通りに」
兵士が槍を取って走り出すと、ビビはＭｒ．９とミス・マンデーに視線を送った後、駆け出す。
こうしている間にも多くの兵士が傷ついている。諦めてはいけない。さっきチャカが言ったばかりではないか。今からでも十分に間に合うはず。
彼女は単身戦場へ飛び込んでいく。
一人でも多くの兵士を救うため、自ら国王軍同士の戦闘へ近付いていく。
しかしどうやら、それを狙っていた人物も居たようで。
突然ビビへ声がかけられた。
「ビビっ、危ない！　逃げて！」
「えっ――？」
全力で振るわれた棒がビビの頭を打ち据えた。皮膚が破れて額から血を流し、走っていた勢いそのままに転んでしまう。
倒れたビビはすぐに上体を起こすも、座り込んだ格好で自分を襲った人物を見た。
「ああっ、嘘っ、ごめん……！　体が勝手に動いて……！」
「ナミさん……あなたも」
クリマ・タクトを振り抜いた姿勢のナミが目の前に立っていた。
彼女も腰の裏に黒い絵の具のマークが描かれており、操られていたらしい。
驚愕するビビを狙って、どこからか小さなチャクラムが飛来した。
直前に気付いて回避行動を取るも、鋭い刃が左腕をわずかに切り裂く。

ビビの口からは声が漏れ出た。
ブーメランのようにチャクラムは使用者の手に戻る。
汚れた格好をした兵士たちが周囲に居る中で小奇麗な服装の女だ。その隣には同じく兵士ではなさそうな服装の男が立っている。
彼らはナミの後方に陣取り、視線は座り込んだビビを捉えていた。
「うっ……!?」
「ビビっ！」
「お久しぶりね、ミス・ウェンズデー。一人でお出かけ？」
「ミス・マザーズデー……Ｍｒ．６……」
現れたのはこれまで姿を見せなかったＭｒ．６とミス・マザーズデーだったようだ。
ビビを始末するために出てきたのか、周囲の兵士には目もくれず彼女を見つめている。
そこへ加えて操られたナミが居る。彼女は戸惑っている様子で、自力でどうにかすることは難しいだろう。やはり誰かがマークを壊さなければ。
早くみんなを助けたいのにそれができない。
敵に阻まれ、ビビは悔しげな顔を見せた。
せめてナミだけでも。そうは思うのだが簡単にはいかなそうだ。
「ちょっとあんたら！　ビビに手ぇ出すんじゃないわよ！　それと私を元に戻しなさい！」
「あら、だめよ。せっかく手伝おうと思ってるのに」
「大体何なのよこれ！　体が勝手に動いてちっとも言うこと聞かない！」
「カラーズトラップ」
パリッ、と煎餅を齧る音が聞こえた。ビビはそちらに目を向けた。
そう遠くない位置、容姿の幼い、ミス・ゴールデンウィークが立っている。ナミや国王軍兵士にマークを描いたのは彼女で、絵の具の力で他人を操っているのだ。
「カラーズトラップ〝裏切りの黒〟。どんなに信頼する仲間でも裏切りたくて仕方なくなってしまうの。戦う気が強ければその気持ち

はより強くなる」
「ふざけんじゃないわよ！　私は裏切りたいなんて思ってない！」
「あなたはそうでも、あなたの体は違うんじゃないかしら」
「元に戻せぇ～！」
暴れようとするナミだが意思とは無関係に体は動かない。むしろミス・ゴールデンウィークを狙おうという意思によりビビへ攻撃しようとする挙動があった。
ビビも黙ってやられる訳にはいかず、即座に立ち上がる。
敵は三人。ミス・ゴールデンウィークは動かないとしても厄介な二人が居た。
「ごめんビビっ、私またあんたのこと襲っちゃいそう……！　何とかして！」
「大丈夫ナミさん。見捨てたりなんてしないから」
「お寒い友情ね。さっさと殺したくなってきたわ」
「私、仕事終わったから休んでるね」
やはりミス・ゴールデンウィークは動かない。
彼女はめんどくさがりだ。今回だけでなく普段から戦闘など面倒なものは好きではない。
だとすれば操られたナミと、チャクラムを使うミス・マザーズデー、大きな籠手を両手に装備したＭｒ．６がこの場での相手。ビビは小指に装着した武器を振り回す。
一人でどうにかできるかはわからないが誰かを頼る暇もない。このままやるしかなかった。
必死に抵抗している様子のナミが徐々にクリマ・タクトを構えようとしている。
その後ろでＭｒ．６ペアが攻撃を始めようとしていた。
最悪の場合、ナミが狙われてしまう可能性もあった。操っているだけで彼女は敵。Ｍｒ．６ペアがわざわざ守ってやる必要はないため、ビビもろとも始末しようとするかもしれない。
優先的にそれを避けなければとビビは敢えて前へ出ようとしていた。

そうして彼女が動きかけた時、ナミの後方でＭｒ．６ペアに襲い掛かる二人が居た。
気付いた二人は咄嗟に回避する。
Ｍｒ．６にはサンジが飛び掛かって蹴りを繰り出し、チョッパーがミス・マザーズデーに拳を振る。
その際、こんな状況でもサンジはチョッパーに怒鳴っていた。
「おいチョッパー！　レディを殴ろうとするとはどういう了見だ！」
「仕方ねぇだろ！　この状況じゃそれしかないんだ！」
Ｍｒ．６ペアはあの二人が止めてくれるらしい。
ビビは改めてナミに向かい合う。
彼女を解放すればまた状況は変わる。絶対に見捨てることはできないし、仲間たちの協力が必要不可欠だ。ビビはまず最初に彼女を救うことを決めていた。
「ビビ、ごめんね……！　あんたの足引っ張っちゃってっ」
「謝る必要なんてないわよ。ここはまだ諦めるところじゃないわ」
敵が離れたことでビビは武器を使おうとはしなかった。
無傷で助ける。その方法があるため、先程同様マークだけを消そうとする。
ビビは駆け出し、接近してくる彼女に反応したナミの体は勝手に攻撃しようとしていた。
「頭を狙ってる！　避けて！」
ナミの助言もあり、頭を下げてクリマ・タクトを潜るように避けた。
思い切り地面を蹴って跳び、ナミの腰に抱き着いて押し倒す。腰の裏に手が触れたことでマークが崩れて、効果が消えたようだった。
二人は共に地面を転がり、自由を得たナミはパッと笑顔を輝かせる。
しかしその姿を見逃さなかったミス・マザーズデーが二人へチャクラムを投げつける。
「やった！　自由になったわよ！」
「ハァ、よかった……」

「隙ありッ」
「あっ!?　ビビ!　ナミ!　危ねぇ!」
一瞬の隙を突かれたチョッパーが叫んだ時には、チャクラムは倒れたままの二人へ高速で接近していき、地を這うように脳天を狙っていた。
驚愕する二人は回避が間に合いそうもない。目を見開いてただただチャクラムを見つめる。
それを見て、自らチャクラムの前に割り込む人物が居た。
彼女は飛来するそれを刀で弾き、二人を背にして守る。
驚く二人が見た背中は女性のものだった。
同様に慌ただしく広場の中へ侵入してくる集団がおり、増援なのかと目を疑う。しかし彼らは服装からして海兵であり、そういえば彼女も、とナミが思い出す。
二人へ背を向けていたたしぎは、ミス・マザーズデーの動きに注意しながら口を開いた。
「あんた……」
「指示をください。何をすればいいんですか」
「え?」
「あなたたちを援護します。彼らに勝つための指示を!」
ナミは困惑している様子だったが、ビビはすかさず強く頷く。
その後は事情を聴いたたしぎが部下に指示を送り、海兵たちが迅速な行動を取り出した。
海兵が乱入してきたことで、多少だが広場の中の様子が変化する。
己はいまだ戦闘には介入せず、戦況を見守っていたＭｒ．３はほんのわずかに顔を動かす。まだ不利という状況ではないが予想していない方向へ動き出していたようだ。
「フン、海兵か。まぁいいガネ。どうせ奴らではこの戦況を変えられん」
「Ｍｒ．３」
「ミス・ゴールデンウィークか。よくやってくれたガネ」
「うん。仕事終わったから休んでるよ」

「ああ、それでいい。もう我々の勝ちは決まったようなものだガネ」
戻ってきたミス・ゴールデンウィークと話しているほんの一瞬だった。
比較的近くで戦っていた海賊たちの悲鳴が聞こえ、Ｍｒ．３が不思議そうに振り向く。するといつの間にか単身突っ込んできていた敵が眼前に迫っていた。
両手に刀を持ち、目を獣のように光らせるゾロがＭｒ．３を睨んでいた。
「つまり、戦況を変えるにはお前を斬ればいいってことか？」
「残念ながらそれは無理だガネ。最高硬度のドルドルチャンピオンは誰にも斬れんガネ」
「へぇ。誰にも斬れない、ねぇ」
それは聞き捨てならないとゾロが笑う。その笑みは獲物を見つけたと言わんばかりで、ちょうど鉄を斬る感覚を完璧なものとするため、練習が必要だと思っていたところだ。
巨体を持つＭｒ．３がついに動き出し、構えた刀にボクシンググローブのような両手をぶつける。
ぶつかった音からして全身が鉄のようなもの。蝋とはいえむしろ願ったりかなったりの相手に違いない。ゾロの戦意は急激に膨らんでいった。
戦闘はますます激化し、今やここが地獄だとでもいうかのよう。
数多の悲鳴が重なり、叫び声が常に絶えず、飛び交った血が足場を赤く汚していた。
ミス・ゴールデンウィークはそんな風景を見ながら、またしても煎餅を齧る。

ＨＩＳ　ＷＯＲＬＤ（４）

戦闘が始まってからどれほど経ったのか。
いつ終わるのかわからない戦いに兵士たちは疲弊し、何度となく襲い掛かってくる脅威がその度に彼らの心を動かし、喜んでは落ち込み、何度も天国と地獄を往復していた。
味方に襲われる状況まで起こってしまえば、流石に諦めてしまう者たちまで出てきてしまう。それはもちろん心の影響も大きいが、何より体力の限界だった。
休む時間もほとんど許されず、国王が攫われて以降、ほとんど動きっぱなしだ。
そこへきて士気が下がれば思わず膝を着いてしまう兵士も少なくない。
一人の兵士が地面を見つめ、倒れた仲間の手を握りながら呟く。
涙さえ枯れ、その顔からは生きる気力が失われていた。
「もうだめだ……この国はもう、終わりなんだ……」
突然乱入してきた海兵が必死に国王軍を救おうとしているが、それさえも焼け石に水。
今から状況をひっくり返すのは不可能だと、誰もが諦めてしまう状況がある。
そこへ、ようやく到着した一団が居た。
先頭に居る男はこの期に及んで不安があるらしく、しきりに隣に居る男へ質問する。すると必ず返ってくるのは「おれを信じろ」との言葉だけだ。
「おい、ほんとに大丈夫なのか？　もしこの中にバロックワークスが潜んでたら……」
「大丈夫だ。信頼できる奴だけ集めた。おれを信じろ」
「信じろっつーのは簡単だけどよぉ……よく知りもしねぇのに信じられねぇぞ、普通」
「それをお前が言うのか」
後方で電伝虫を使った連絡が済んだことを確認し、報告が為され

る。
「準備できたぞ。急げ。みんなもう限界だ」
「よし。それじゃあ行くぞ……」
大きく息を吸い込んで、手に握った受話器へ向かって喋り出した。
町の至る所にあるスピーカーへ繋げられたそれは、拡声された言葉を広場へも伝える。
《バロックワークスに告ぐ！　お前らは完全に包囲されているぞ！》
突然の声に広場の様子がおかしくなった。
状況を理解しようと辺りを見回し、戦いの手を止める者が多く、それは絶え間なく続いていたはずの戦いが一時的に止まるほどの驚きがあったようだ。
スピーカーから響く声はさらに続く。
その声は少し前にもアルバーナ中へ響いたものだった。
《そして喜べ国王軍！　お前らには心強い仲間が居る！》
ビビは、何かに導かれるように背後へ振り向いた。
広場へ入るための道を塞ぐようにして、新たな軍勢が集結していた。
その先頭に立つ、超カルガモのケンタロウスに跨るウソップ、そして馬に乗ったコーザ。信じられないことに反乱軍がここへ到達していたのだ。
以前であれば絶対に阻止したい展開だったが、ウソップの姿を見たビビは、思わず目に涙を溜めて笑みを浮かべる。彼女の仲間たちも同様の反応だった。
一目見ればわかる。その姿は、どう見ても反乱軍とは呼べないものだった。
大きな足音を立てて馬が駆ける。人数はかなりのものだっただろう。
新たに現れた軍勢は全ての広場の出入り口を塞いでしまい、先程ウソップが言った通り、完全に包囲した。これでバロックワークスに逃げ場はない。

ただ現れただけで圧倒的な威圧感。兵力が違う。しかも全員が馬に乗っていた。
バロックワークスに所属する者の動揺は、見るも明らかである。
ウソップが電伝虫の受話器に向かって叫ぶ。
意気揚々と言葉を紡ぎ、さながら指揮官の様相だった。
《降参するなら今の内だぞ！　言っとくがこいつらの怒りはおれにも止められねぇからな！》
自信を持って告げるその言葉がなおのことバロックワークスを怯えさせる。しかしどうすればいいかわからず戸惑う者は居ても降伏する者は出てこず、静寂が続く。
溜息をついたウソップがやれやれと首を振った。
彼は左腕を空へ向けて伸ばし、人差し指で天を指さすと、その腕を勢いよく振り下ろした。
《仕方ねぇなぁ……アラバスタ王国軍！　かかれェ!!》
ドンッ、と最初の一歩目が全て揃うかのように、広場全体が強い揺れを感じる。
反乱軍の兵士たちが駆け出し、一斉にバロックワークスへ襲い掛かった。
全てを呑み込むかのようなその迫力は大の男に悲鳴を上げさせ、元海賊だった者たちまで慌てて逃げ出し、しかし誰一人逃がさんとあっさり追いつく。
広場の中はかつてないほどの大混乱を見せていた。
それを生み出したウソップは得意げに進み、コーザと共にビビたちを見つける。
ビビとナミが笑顔で手を振っていた。戦闘中だというのに弾けるような笑顔を見せ、彼らが到着すると嬉しそうに駆け寄る。
地面に降りると、ウソップはナミに背を叩かれ、ビビはコーザと対面する。
「ウソップ～！　あんたやるじゃない！　反乱軍を味方にしたの!?」
「ハ～ッハッハッハ！　まぁな！　これくらいウソップ様にとっ

ちゃ朝飯前よ！」
「リーダー……！」
「ビビ、すまなかった。色々言いたいことはあるが、今は後回しだ」
コーザの目は鋭く敵の姿を見据える。
「まずはこいつらをぶちのめさねぇとな……！」
「ひっ――!?」
睨まれたミス・マザーズデーが小さく悲鳴を発し、Ｍｒ．６が冷や汗を流した。
一瞬にして戦場の空気を支配された。勢いは今や新たに現れたアラバスタ王国軍とやらにあり、周囲で次々味方がやられていく光景に彼らの心は落ち着かない。
さらに自分たちを狙う敵も居た。
彼らの勢いに乗ったサンジとチョッパーがＭｒ．６を狙う。
「行くぞチョッパー！　おれの足に乗れ！」
「ランブル」
「空軍（アルメ・ド・レール）――！」
右脚にチョッパーを乗せた後、全力で振り抜く。
撃ち出されたチョッパーは空中でアームポイントに変形し、左腕に力を溜める。
驚愕していて動けないＭｒ．６へ到達した時、彼の腹部へ鋼鉄すら砕く蹄を叩き込んだ。
「刻蹄桜（こくていロゼオ）シュートッ!!」
サンジに放り投げられたことにより普段以上の威力が加わって、殴られたＭｒ．６は一瞬たりとも耐えることができずに吹き飛ばされ、地面を滑りながら遥か遠くへ行ってしまった。
チョッパーはガードポイントで着地し、人獣型で立ち上がる。
全てが予測不可能だった。
Ｍｒ．６の敗北した姿を見て怯えたミス・マザーズデーは慌てて逃げ出す。
こんなはずではない。死ぬのは嫌だ。
考えるのはそればかりで必死に足を動かす。

どこへとも考えずに走り出したものの、恐怖心で視界が極端に狭くなっており、注意力も散漫だったらしい。その表情は本来の美しさを失って醜いものに変わっていた。
そんなことは関係ないとばかりに一心不乱に走る。
その時、前方の空気がぐにゃりと歪んだことに、彼女は必要以上に怯えた。
まるで時空が歪んだような、或いはそう、蜃気楼の如く。
気付けば突然目の前にナミが現れて、彼女を待ち構えてクリマ・タクトを構えていた。
今更止まれないミス・マザーズデーが目の前へ到達すると思い切りぶん殴る。
顔を思いっきり、しかも十字に組んでいたクリマ・タクトが接触した瞬間に暴風が吹き荒れた。
ミス・マザーズデーの体は激しく吹き飛ばされて来た道を戻る。着地にも失敗して地面をゴロゴロ転がって、顔を押さえると動揺しながらナミを睨む。
「どこ行くつもり？　ここまでやっといて今更逃げんじゃないわよ」
「こ、こいつ……！」
怒った彼女がチャクラムを取り出した瞬間。
気配を感じて右側を向けば、武器を振り回して待ち構えていたビビの姿を見つける。
顎が外れそうなほど大口を開けて、ミス・マザーズデーは悲鳴を上げた。
「孔雀（クジャッキー）・一連（ストリング）・スラッシャー!!」
「きゃあああああああっ!?」
鋭い爪が肌を切り裂き、体を吹き飛ばして、ミス・マザーズデーはべしゃりと地面に落ちる。
そのまま気絶したようで、動かないことを確認したビビは得意げにナミを見た。彼女が笑顔で駆け寄ってきて片手を上げるため、ビビは思い切りその手を叩いてハイタッチをした。

思わぬ姿にコーザは呆れ、サンジはメロメロになっている。
「すげーぜビビちゅわ～ん！　強い王女様って素敵だぁ～！」
「うるさいわよサンジ君」
「もちろんナミさんも素敵さぁ～！」
「おいおいお前ら、おれの功績が大きかったってことを褒めろよ、もっと」
「すげぇ～なぁ～ウソップ！　助かったよ！　もうだめかと思ったんだ！」
「そうだろうそうだろう！　やはり！　キャプテン・ウソップ様の作戦に穴はなかったのだ！」
集まれば途端に騒がしくなる彼らに、ビビの表情は驚くほど緩んでいた。
まだ戦いは終わっていない。だがほんの少し肩の力を抜くことくらいは許されるだろう。
ふーっと息を吐いて、心を落ち着けてから周囲を見回す。
兵士や海兵が協力して、操られた兵士たちを捕まえ、マークを消して回っている。犠牲は大きかったが全てが失われた訳ではない。
ビビの視線が、とある位置でぴたりと止まった。
そこではゾロとＭｒ．３が一対一で戦っていた。
じっと見つめているとサンジが肩を叩く。
振り向けば騒いでいた仲間たちは真剣な様子でビビを見ていた。
「あいつなら心配する必要はねぇよ」
「それより他のみんなも助けねぇと！」
「私は私たちにできることを、でしょ？」
「なぁ～に心配すんな！　このウソップ様がついてるからな！」
彼らの言葉にビビは柔らかく微笑み、力強く頷いた。
「みんな……ありがとう」
「それを言うのは全部終わった時。ほら、行くわよ」
ナミにくしゃりと頭を撫でられながら歩き出す。
彼らはまだ残るカラーズトラップの犠牲者を救うために移動を始めた。

そして一方、戦闘を続けるゾロとＭｒ．３は、それぞれ違った表情を見せていた。
ゾロは好戦的な笑みを浮かべて、嬉々として刀を振るい、ひたすら前進を続けている。
対するＭｒ．３は苦渋に満ちた顔である。完璧だった作戦が予測不能の事態に壊され、一転して彼らの不利となってしまい、呆気なく敗北しようとしている。せめて自分だけはと奮戦しているのが彼自身の状況だった。
巨大な体で拳を振るって、パワーでゾロを蹴散らそうとしている。しかし頭脳派である彼の戦い方は決して優れている訳ではなく、ゾロにとっては赤子の手をひねるようなもの。
どれほどの出血があろうが大したハンデではない。
繰り出されるパンチを次から次に受け流し、追い詰めようとしていた。
敵を斬るために必要なのは時間ではない。
呼吸と、集中力である。
今、ゾロは二本の刀だけで戦いながら、敵の呼吸を知ろうとしていた。
「な、なぜこんなことに……！　私の作戦は完璧だったはずっ」
「こっちの方が上手だった。ただそれだけの話だろ」
「そんなはずはないガネ！　私の作戦が勝てないものなどないのだガネ！」
Ｍｒ．３が全力で左のパンチを突き出した。
冷静な顔でゾロが刀を振った瞬間、鉄に等しい硬度の蝋の鎧が豆腐のように斬られた。肘から先が地面に落ちてＭｒ．３が目を引ん？く。
「んなっ!?　なっ!?」
「ふーっ……」
静かに深く息を吐き、さらに前へ一歩を踏み出す。
慌てたＭｒ．３が残った右腕を突き出して、彼にパンチを当てようとした。

再び一閃。たった一度触れただけで鎧の右腕が肘から切り落とされ、重い音を立てて落ちる。
Ｍｒ．３は思わず目を回してしまった。
ゾロは両手に持っていた刀を鞘へ納め、白塗りの一本に手をかける。
感覚を掴んだ。今なら斬れる。
焦ったＭｒ．３が彼を踏み潰そうと慌ただしく駆け出した時も、視線は一切ぶれなかった。
「ま、ま、まぐれだガネ!?　ドルドルチャンピオンを斬れる人間が居るはずがない！」
「一刀流……居合」
地を蹴ったゾロは見切れないほど速く跳び、気付けばＭｒ．３の背後に立っていた。
その時にはすでに彼を斬り終え、静かに鞘へ刀を納める。
「獅子歌歌（ししそんそん）……！」
直後に蝋の鎧が両断されて、徐々に崩壊していき地へ転がり、体を斬られたＭｒ．３自身も脱力した姿で落下してくる。しかし手応えからして満足していなかったらしい。
Ｍｒ．３はまだ動けた。よろよろしているが倒れた後で起き上がろうとする
「チッ、浅かった。おれもまだ修行が足りねぇな」
「ぐううっ……そんな、バカな……!?　あ、あり得んガネ……」
三本の刀を抜いて猛然と駆け出した。対抗しようとするＭｒ．３の行動は間に合わない。
「ドルドル、アーッ……！」
「鬼切りィ!!」
「はひょお～～!?」
凄まじい腕力で斬り飛ばされたＭｒ．３は宙を舞い、再び倒れた時には意識を失っていた。
ゾロは今度こそ刀を納め、倒れた彼を見やる。
「お前はよくやったよ。おかげで感覚は理解した」

深く息をついたゾロが肩の力を抜いた時、ミス・ゴールデンウィークはこっそりと逃げ出そうと抜き足差し足で歩いていた。
戦闘が得意ではないとはいえＭｒ．３が一方的に負けるなどあり得ない。
これはどうしようもないと彼女は顔色を青くしていた。
そんな彼女の進行方向を塞ぐかのように、轟音を立てて地面が抉られた。
さらに右側、左側、背後と、四方を囲うように地面が削られ、明確な線が刻まれる。そこから出れば命はないぞ、そう言われているようなものだ。
血相を変えたミス・ゴールデンウィークはその場にへたり込む。
物音に気付いたゾロが振り返ると、超カルガモのカウボーイが駆けつけていた。
背にはシルクが跨っていて、疲れた様子だがしっかりと剣を握っている。
珍しくギロリと睨みつけ、ミス・ゴールデンウィークを威嚇していた。
「そこ、動かない方がいいよ……ここからでも斬れるから」
「は、はい……」
小便をちびりそうな顔でがくがく震え、ミス・ゴールデンウィークは絶対に動かなかった。大人しくその場で正座をしてシルクの方を見ている。
言い終えた後はもう普段の彼女だ。
振り向いてゾロを見つけ、軽やかな声で語り掛けた。
「遅くなってごめん。ちょっと失血が多くて、中々動けなかったんだ」
「別にいい。お互い生きてたんなら儲けもんだろ」
ゾロは改めて広場の状況を確認する。
予想外の援軍が来たことでバロックワークスは総崩れだった。得意げだった者たちは皆勢いで弾き飛ばされて、事態を重く見て降参する者も多い。

操られていた国王軍の兵士たちも一人ずつ解放されている様子である。
この時、すでに勝利はアラバスタ王国にあったと言ってもいいのではないだろうか。
戦闘の気配が徐々に薄らいでいき、中には喜びの声を上げる兵士も居た。
だがそうではない。まだ終わってはいない。
厳しい表情を崩さないゾロは腕を組んで考える。
本当に勝ったと言えるのはルフィがクロコダイルを倒してからだ。いくら組織として機能しなくなったとはいっても、七武海のレベルは想像を絶する。ここから彼一人で全ての状況をひっくり返すことも決して難しいことではないはず。
一度七武海の実力をその身で感じたゾロは、きっとそうだろうと推測していた。
一人で考え込んでいると一人の人物が近付いてくる。
不意にそちらへ目を向けた時、彼の苦手な人物が居て、反射的に身構えてしまった。
「落ち着きましたね」
「なっ!?　てめぇ、なんでここに……!」
「安心してください。少なくとも今は、あなたとやり合う気なんてありませんから」
ゾロの隣で足を止めて、たしぎはどことなく気落ちした顔で口を動かす。
以前会った時とは違う様子になんとなく察するものがあった。
ゾロも警戒をやめ、同じ方向を見て背筋を伸ばす。
「海賊に手を貸すなんて、人生最大の汚点です。私は、こんなに自分の力の無さを恥じたことはない……私がもっと強ければ、今ここであなたを捕まえていました」
「恥じる気持ちがありゃ十分。もっと鍛えりゃいいだけの話だろ」
「あなたにはわからないでしょうね。こんな気持ちは……」
寂しげに言って、たしぎは数歩前へ進む。

「だけどいいんです。ようやく覚悟ができましたから」
振り返るたしぎは強かな目を見せた。
ぶつけられた闘志をゾロは正面から受け止める。
「次は逃がしません。あなたは私が捕まえます」
「やってみろ。おれは譲る気なんてねぇぞ」
フッと微笑み、広場の制圧のため彼女は歩き出した。海兵としての仕事が終わっていない。
残されたゾロの下へ改めてシルクが駆けつける。
先にミス・ゴールデンウィークを拘束しておいたらしく、ガタガタ震えている彼女は近くに人が居なくなっても逃げそうにはなかった。
「宣戦布告？」
「だろうな。ま、興味はねぇが」
「ふふ、そっか」
「なに笑ってやがる」
名を呼ぶ声を聞いて二人が振り向いた。
仲間たちが駆け寄ってきて、ようやく集まることができたのである。

ＨＩＳ　ＷＯＲＬＤ（５）

突き出された左腕を足で捉え、踏みつけるように体重をかけた。
厄介な毒針を地面に打ち付けてへし折ることに成功して、瞬間的にクロコダイルが歯噛みする。少なくともこれで毒を注入されることはなくなった。
咄嗟に右腕で砂の刃を作った彼から逃れ、ルフィは地面を蹴って宙返りをする。
着地と同時に、辛そうにしていたルフィの顔つきが変わった。
突然がくりと膝をつき、ルフィの体が大きく震えた。
本人の意思によるものではない。クロコダイルの毒針から送り込まれたサソリの毒が、彼の肉体に異常を生んでいた。見るからに顔色が悪くなり、体から力が抜けていって、立つことはおろか声を出すことすら難しくなっている。
彼はそのまま、立ち上がろうとする動きすら見せずに倒れてしまった。
「クックック……クッハッハッハッハ」
クロコダイルは笑う。
厄介な敵だったがそれもここまで。ようやく決着がついた。
「言ったはずだぞ、麦わらのルフィ。このおれに……勝てるか、どうかだ」
倒れた彼へ笑顔を向ける。
明らかに呼吸の音がおかしく、がくがくと震えが止まっていなかった。
動けないルフィは必死にクロコダイルへ目を向けているが、見えているかどうかすら怪しい状態であり、重い瞼を持ち上げるのが精いっぱいの抵抗だった。
サソリの毒を受けてよく動いていた方だろう。だが彼が激しい動きをすればするほど、毒が体を回る速度は速くなっていたはずだ。従ってこの状況は当然のもの。
冷静にルフィを見るクロコダイルは十分に彼を認めてもいた。

「おれにここまで血を流させたことは褒めてやろう。ルーキーにしちゃ上出来過ぎる結果だ」
語る声は勝ち誇り、いまだ余裕を失わず、格の違いを感じさせる。
「だがここまでだ。結果を見りゃ、今までと何も変わらなかったな」
「ガフッ……ゲホッ……!」
咳き込むだけで血を吐き出し、限界を迎えたルフィの姿はあまりに痛々しかった。
そのまま毒で死ぬのを見届けてもいいが、彼の生命力は末恐ろしいものがある。今後のためには確実に息の根を止めておくべきだろうと彼は考えた。
七武海の一角にそう思わせたことは確かな功績だろう。
しかし今や指一本動かせず、ルフィは声を発することもできない。
「このままでも死ぬが、念のためだ。せめて最後はおれの手で始末してやろう」
そういうと毒針を折られたその場所から、残骸を跳ね飛ばしてナイフの刀身が現れる。
クロコダイルは歩き出すと一歩も動けないルフィへ近付いた。
果たしてそれは、ダメ押しだったか、それとも救いか。
崩れる天井から巨大な岩が落下してくる。
突如それはルフィの真上へ現れ、その体を呑み込むように押し潰す。クロコダイルの目の前で大きな音を伴い、片腕だけしか見えなくなってしまった。
とどめを刺す気になっていたのに、気分が削がれてしまった。
つまらなそうな顔を見せた彼は静かに反転する。
ルフィに背を向け、その場を去るようだ。
「フン……まぁいい。どのみちその体では動けん。せいぜい最後の時を楽しむんだな」
地下聖殿の崩落を恐れもせず歩き出し、数歩進むとやがて全身を砂に変え、この空間から消えてしまう。今頃はどこへ向かったかわかりもしなかった。
落下する岩石が聖殿を埋め尽くそうとする。

崩壊は着実に進んでいた。
能力を使って移動し、壁に背を預けて座っていたミス・オールサンデーは一部始終を見ていた。
いつもの笑みは消えて、何かを真剣に考えているらしい。
時に人は、思いがけない行動を取ることもあるものだ。
彼女の場合はそれが今で、胸の前で腕を交差すると能力を使用する。
地面から無数に生えた腕は、特別大きな岩を動かそうとしており、辛うじて見える片腕を強く引っ張ってもいる。彼女はルフィを助けようとしていた。
なぜそうするかは自分でもわからぬまま、彼を助けるために行動する。
もう諦めた命。拾いたくなった訳ではない。
それなのになぜか他人を助けるという無駄な行為を行おうとしている。
自分自身でも不思議に思いながら、ミス・オールサンデーは能力の使用をやめなかった。
中々苦戦をして時間はかかったものの、なんとかルフィを引っ張り出すことに成功した。地面に整列した手が彼の体を次々受け渡して運び、ミス・オールサンデーの下へ連れてくる。
自身の隣へ彼を寝かせ、状態を見た。
目を閉じていたが呼吸はしている。まだ生きている。生きようという力を強く感じて、七武海が警戒するのもおかしくはない生命力だと納得した。
懐へ手を突っ込み、取り出したのは小さな瓶。中には液体が入っている。
もしもの時のために。そう思ってクロコダイルが持つ毒の解毒剤を持っておいた。結局彼女自身が使う必要はなかったとはいえ、だからこそ彼には使えそうだ。
体を引き寄せ、膝の上に頭を乗せ、蓋を外すと瓶の中身を彼の口へ注ぎ込む。

生きようとする力か、ルフィは口に入ってきた液体を自ら飲み込んだ。
もう少し時間を置けば彼なら動けるようになるだろう。ふと血塗れで赤くなった髪を撫でる。
背丈はミス・オールサンデーより低い。小さな体で、あのクロコダイルを追い詰めたのか。
感慨に耽っていると辛そうにしながらルフィが目を開く。
すぐ頭上に彼女の顔を見つけて、助けてもらったと認識したのだろう。麻痺していてまだ上手く動かせない口をなんとか動かし、ミス・オールサンデーへ礼を言う。
死にかけている状態というのは思った以上に人の心を動かすものだ。
彼と視線を合わせたミス・オールサンデーは不思議な気分に浸っていた。
「ハァ、ゲホッ……ありが、とう……！」
「いいのよ。ただの興味本位だから」
彼女も胸を貫かれて無事という状態ではないのだ。しかし彼に比べればよっぽど軽症なため、自然に主導権を握るような形になっていた。
次々に地面へ岩がぶつかり、大きな音を奏でている。
ポーネグリフも、誰にも見られることなく静かに眠るのだろう。そう思えば少し寂しさもある。
持ち運ぶことなどできないとはいえ、誰にも見つからずに埋もれてしまうのをなぜか嫌だと考えていて、そんな自分に気付いた時、ミス・オールサンデーは違和感を覚える。
なぜ柱の一部を抜いて崩落させたのか。
それは、自らの死体をそこに埋めるためだと思っていた。
刺し傷で死のうが、岩に潰されて死のうが、自分の体はここに埋める。ポーネグリフと共に。さっきまでそう考えていたはずなのに、今は何かが少しおかしい。
ポーネグリフが埋もれるのを寂しいと考えていた。

それではまるで、自分だけがこの広大な穴から抜け出ようとしているようではないか。
一緒にと考えていたはずなのに。
自分の死を何とも思っていなかった彼女は、自分の思考の変化に気付き、困惑している。今にして思えばわざわざルフィを助けたのもおかしなことだった。
咳き込んでいる音を聞いてルフィの様子に気付く。上を向かせて横たわっていたため、上がってきた血が吐き出せずに唇の辺りで泡となって停滞している。
ミス・オールサンデーは考えようともせずに、そこへ自身の唇を触れさせる。
血を吸い出してやり、近くの地面へ吐く。
何度か繰り返すとルフィの様子は落ち着き、再びうっすらと目を開いた。
自分の唇に指を触れて、付着した血を眺めてみる。
おかしなことをするものだ。なぜ彼を助けようとしているのだろう。
理由がわからない。だが今更見捨てるのもなぜかできなかった。
できればこの穴の中から出てほしいとすら思っていて、それを告げずに彼へ声をかける。
「聞いてもいいかしら」
「ハァ……ゲホッ。ハァ……」
「なぜ戦うの？　Dの名を持つ、あなたたちよ」
目を覗き込んで尋ねてみれば、彼は弱り切った姿で不思議そうな顔をしていた。
「D……？」
絞り出した声を聴いて知らないのだろうと結論付ける。
その後、その件についてはもう聞こうとしなかった。
「あなたなら、クロコダイルに勝てる？」
「エホッ……次は、負けねぇ……！」
「そう」

すぐ傍に岩が落下してきたのを見た時、ミス・オールサンデーは決断する。
「あなたを見ていなければよかった。そうすればこんな気持ちになることもなかったのに」
ミス・オールサンデーは立ち上がり、ルフィを背負った。
馬鹿げた行動だと思っている。しかし自らの直感に従って、未来を見てみたいと思った。それは自分が生きることを肯定した瞬間でもある。
歩き出した彼女は探し求めていたポーネグリフに背を向けて、ルフィを連れて去っていく。
この先どうなるかはわからない。だが、いつの間にか柔らかい笑顔が存在していたのだ。

＊

地下聖殿を出たクロコダイルはまず高い場所に上り、王宮前広場を確認することから始めた。
吹き飛んでいないことを確認すると神妙な面持ちになる。それは誰にも見せることのない表情だが一人になった今は露わになってしまう。
本来の作戦では今頃消し飛んでいるはずだった。確かに地下に居た時、爆発の衝撃をほとんど感じなかったため、そうだとは思っていたが喜ぶ様子はない。
予想していた通り、彼が止めたのだろう。
険しい表情は緩められることはない。
予想はできていた事態だ。意識を切り替えるのも思いのほか早かった。
目つきは変わり、即座に普段の彼へ戻る。
「バカな奴だ……影響されやがって」
呟くと自ら飛び降りて、重力に従って落下していき、空中で砂になることで無事に着地する。

歩き出した彼は広場へと向かっていた。
完璧に仕上げたはずだった。変わるきっかけがあったとすれば一つ。
思考から切り捨てようと考えたはずの彼は気付けばそんなことを思っていたらしい。
視界は、在りし日の風景を幻視する。
古代兵器を手に入れ、国家を我が物とした時、それだけで終わる訳ではない。その先に更なる野望を見据えていた。それを踏まえて最初から準備を進めていた。
最高傑作とはつまりそこを目指す上での代物だ。
いずれはアラバスタなど比ではない脅威に対抗するための戦力となる。その時には〝覚醒〟も〝覇気〟も完璧なものに仕上がっていたことであろう。
詰まる所、水の弱点を残したのも、彼が〝覇気〟を知らなかったのも離脱を想定してのこと。
再び戻ってきた時こそ完成する。そのつもりだった。
「決着をつけよう。これが最後だ」
計画が破綻したのか、それともそう見えるだけなのか、今はまだ答えは出ない。
どちらにしても国の乗っ取りは成し遂げる。それだけは決定していて揺らぐものではない。
クロコダイルは広場へ急ぎ、自らの手で終わらせようと力を入れる。その目はいつしかただの海賊であった頃の鋭さを取り戻し、尋常ではない迫力を纏って前進していた。

ONE

戦闘が終了した広場では状況を落ち着けようと慌ただしく動いていた。
降伏したバロックワークス社員を捕縛し、傷ついた者たちの治療を急ぎ、残念ながら、物言わぬ体となってしまった者を運ぶ。
戦いの傷跡はあまりにも大きく、やっと休める時が来ても心が落ち着かない者ばかりだ。
先頭に立って指示するチャカはビビに休むよう進言していた。
その結果、ビビは仲間たちと共に休息を取り、辺りに視線を向けている。
親しい者の死に涙を流す人が居る。戦いが終わった今も動けずに、深い傷によって生死の境を彷徨っている者が居る。そして、この世を去ってしまった者が居た。
彼女はきっとこの光景を忘れることがないだろう。
数多くの感情が入り混じる戦場の中を、彼らは生き残ったのだ。
途方もない怒りがあり、忘れられない悲しみがあり、確かに感じたはずの喜びがあった。
確かに苦しい時間だった。それは否定できない。しかしだからこそ絶対に忘れてはならないのだと彼女は思うのである。
アラバスタはここから新しく始まる。その瞬間を、ビビはしっかりと見つめていた。
仲間たちは彼女の真剣な表情を見て、簡単に声をかけようとはしなかった。
それからしばらくして、頭上に影を見たチョッパーが声を出した。
「あっ。あれ」
見上げると一羽の鷹が降下してくる。
アラバスタに住む者たちは大きな反応を見せ、口々に彼の名を呼んだ。そしてペルが翼を広げて地面へ降り立った時、背中に乗っていた人物にさらに驚く。
コブラが地面に立ち、広場に居る人間の視線を一身に集める。

戸惑いと緊張。多くがそんな感情を宿した視線だった。
ビビは、久しぶりに顔を見た父へ駆け寄っていいものか迷う。
コーザもまた、反乱軍のリーダー。ばつが悪そうな顔をしている。
直前の状況が状況だったためか、誰も彼に近付けず、チャカですら迷いを抱いていたほどだ。
「皆、どうした？　ずいぶん落ち込んでいるな」
敢えて知らん顔で問いかけてみれば、多くの人間が視線を逸らしてしまう。
言葉がない、といった様子だろう。責められている訳でもないのだが一体何を話せばいいのかわからない。伝えるべき言葉が思い浮かばない。
コブラはぐるりとその場に居る人々の顔を見回す。
国王軍の兵士、反乱軍だった市民、麦わらの一味に、バロックワークスの人間も居る。
いちいち聞かなくてもわかっていた。
どうやら彼自身、何から話すべきかと考えていたようだ。
ひとまず歩を進める。
最初に声をかけたのは疲弊した様子のチャカである。
「チャカ。よく持ち堪えてくれた」
「国王様……」
「お前の尽力に感謝している。ありがとう」
そう言うとコブラは深々と頭を下げた。
国王に相応しくない突然の行動。途端にチャカの方が慌て始める。
「お、おやめください！　何も国王様が頭をお下げになることでは……！」
「いや、私の考えが至らなかった。もっと早くに気付いていればよかったのだ」
「それを言うなら我々もです。奴の策謀に何一つ気付かず騙されていたのですから」
「そうか。それではおあいこだな」
にこりと笑ったコブラの表情に驚き、チャカはぽかんとしてしま

う。
どうやらそれが彼なりの励ましだったようだ。
笑みを湛えたまま視線を切ると歩き出す。
次に歩を進めたのはコーザのところである。
どんな顔を見せればいいかわからない。悩むコーザに笑いかける。
「久しぶりだな、コーザ。また少し痩せたか。だが精悍な男になった」
「国王……おれは」
「言うな。まだ終わったわけではないのだ」
彼の言葉にコーザの顔がハッとする。それはおそらく、この状況を生んだ元凶が残っていることを伝えたかったのだろう。事情ならばウソップから聞いていた。
表情の変化に気付いて頷く。
その後はただの世間話をするように気安く声をかけた。
「またこうして話をすることができて嬉しい。これが終われば、もっと語り合いたいものだな」
「……ああ。そうだな。話したいことも、謝りたいこともたくさんある」
「うむ。ではまた後程だ」
また次の機会に話すことを約束した後、コブラは彼に背を向ける。
そしてようやくビビの下へ赴いた。
ある日突然姿を消した娘と会うのはいつぶりのことであろうか。
表向きは王としての威厳を保つため、何も気にしていない顔をしてきた。しかし本心では毎日彼女を想うほど心配していたのだ。コブラの親バカぶりは国では有名なのである。
国民は彼が心配していることにも気付いていたのだが、本人は隠し通したつもりである。
コブラの顔には柔和な笑みがあった。
対するビビはどこか戸惑いを残す、困ったような笑みがある。
長く留守にして心配をかけた。その想いが表れていたのであろう。
「ビビ」

「お父様……」
「ペルから聞いた。この国を守るために尽力していたそうだな。ありがとう」
「いえ……心配させてごめんなさい」
彼女の声を聞いてコブラは安堵した様子だ。肩の荷がようやく下りたとも言える。
「何より元気そうでよかった。相変わらずお転婆は過ぎるようだがな」
「あ……」
包帯が巻かれた肩を見てビビが赤面する。子供の頃からお転婆で、女の子なのに危険なことをしてはよく怪我をしていた。その頃を思い出してしまう。
今や成長し、すっかり女性らしくなり、精神的にも成長した。
国を守るため奔走したことなどまさしくその証明だ。
視線を動かして、近くに座っていた面々を見やる。
仲が良さそうな姿からして友人、或いは仲間なのだろうと思う。彼らもまたボロボロで、治療はした姿だったがかなりの激戦を連想させる外見だった。
「君たちが、ビビの仲間かね？　娘が世話になっている」
「あんた国王か？」
「おいっ!?　口の利き方に気をつけろアホ！　このおっさんがビビの父ちゃんってことは国王なんだぞ！　処刑されたらどうする！」
「お前もおっさんっつってんじゃねぇか」
「ごめんなさいね。海賊だから礼儀がなってないの」
「構わんよ。互いにこんなボロボロの服装では礼儀などクソ食らえだ」
無礼な口を利くゾロの頭をウソップがはたき、そんな二人のやり取りをナミが苦笑して詫びる。
コブラはそれだけで彼らの人となりを察し、警戒することなく彼らの存在を受け入れる。
「今は少し慌ただしくてな。また話そう」

「ええ、もちろん。言っとくけど、慈善事業じゃありませんから」
「はっはっは。肝に銘じておこう」
踵を返して広場に居る全員をぐるりと見回した時、彼の心は穏やかになっていた。
適度な緊張とちょうどいい具合の余裕。今なら皆と話せるだろう。
国民の顔を一人ずつ確認して、落ち着いた態度で言葉を紡いだ。
「皆、どうしたのだ。そんなにしょぼくれた顔をして」
国民が彼の言葉に耳を傾けている。或いは、縋りついている。
心が壊れそうになるほどの戦闘を経て、心身ともに疲れ切った状態であり、誰かを頼らなければ息をすることさえ苦しい。今はもたれかかれる誰かが必要だった。
それを知っているコブラは彼らに寄り添おうとしている。
国王としてではなく、一人の人間として。彼自身がそれを望んでいた。
「心を痛め、落ち込むのもわかる。立ち止まってしまいたくもなるだろう。それほどの体験をしたことは、この場に居なくてもわかることだ」
ゆっくり歩を進めて静かに語る。誰もがその声に集中していた。
「だがこの経験を忘れてはならない。皆のために命を散らした者が居た。国のために誇りを守り抜いた者たちが居た。彼らを忘れることが正道か？　……否。此度の戦いをなかったことにするのが正道か？　これも違う。我々がすべきことは、今回の経験を決して忘れず次に生かし、そして後世へ伝えていくことにある」
静まり返った広場にコブラの声が広がっていく。
驚くほどすると胸へ入っていくその言葉は徐々に彼らの表情を変えさせた。
「君たちの友は、仲間は、家族は、この国と、そしてこの国で生きる人々のために勇敢に戦い、最後まで決して人への情を忘れなかった。失ったものは確かに多い。得られたものはない。だが守り抜けたものはそれ以上にもっと多かった。ここには皆が生きている！」
皆が集中していて、コブラが腕を広げた、その時だった。

「今日ここで起きたことは――！」
「新しい国が始まるための予兆だった。そう言いたいんだろう？」
広場を囲う建物の屋根の一つから、突然声が降ってくる。
視線が集まった瞬間、彼は笑みを浮かべて大勢の国民を見下ろした。
全員を驚かせたクロコダイルの登場は、この場でコブラが最も恐れていたことだった。
「その国の王は、おれだ。古き王には消えてもらおうか。反乱を企てる国民どもと共にな」
「クロコダイル……！」
「お、おい、ルフィはどうしたんだ？　あいつがぶっ飛ばすんじゃなかったのかよっ」
ビビがその名を呼び、怯えたウソップがその名を口にした時、彼の目はそちらに向く。
笑みを湛えたクロコダイルの一言は彼らの心を簡単に揺らした。
「あいつは死んだよ。今しがたな」
あっさりとした物言いに一味が思わず息を呑んだ。クロコダイルが現れた時点で何か問題が起こっていると想像できたが、はっきり言葉で告げられると衝撃を受ける。
どうやら一瞬にしてその場の空気を我が物としてしまったようだ。
恐怖に包まれるその中で、怒りを見せた人物が一人。コーザが前へ進み出る。
クロコダイルは笑みを湛えて彼を見下ろす。
「お前が裏で糸を引いていたのか……これまでの全部！」
「そうさ。全ておれが仕組んだものだ。アルバーナに雨が降るのも、町がいくつも枯れたのも、カトレアに反乱軍が入ったことも、ユバが捨てられたのも。お前が出会った〝友達〟さえおれの計画の一部に過ぎん」
思い当たる節があったのか、コーザが言葉を呑む。
先程、大まかな話をウソップに聞いたばかり。やはり嘘ではなかったらしい。

そんな彼の様子に気付きつつ、クロコダイルは言う。
「お前たちはおれの望む通りに動いてくれた。最後以外はな」
反乱軍だっただろう者たちが国王軍と共に居る光景を目にして、彼は目つきを鋭くする。
「面倒なことしやがって。おかげでおれが手を下す必要があるようだな」
「ふざけるなよっ。誰がお前の好きにさせるか！」
「クハハハハ。いいだろう……それなら守ってみろ」
不敵に笑う彼は砂になってその場から消える。
大勢の人間が驚愕した直後、クロコダイルの姿は空に現れ、眼下にはコブラの姿がある。見つけた時には彼の右手に異様な力を目にした。
「守りてぇんなら力で示せ。砂嵐（サーブルス）――」
「国王様ッ！」
「重（ペサード）！」
咄嗟にペルが国王へ駆け寄って彼と共に伏せた。
その直後、全てを押し潰すような暴風が頭上から落下してきた。
伏せた二人だけではなく、広場に居た全員が影響を受ける。ある者は勢いよく転んで、ある者は壁に激突し、ある者は宙を飛んだ。
クロコダイルは広場の混乱を見てすかさず行動する。
一瞬にして地面へ伏せるコブラの前へ現れた彼は左腕のナイフを掲げた。
普通ならば立ち上がることもできない暴風が吹き荒れていたが、彼の接近に気付いたペルが必死に飛び起きてコブラの前へ立つ。
剣を抜く暇も与えられず、突き出される刃を自身の右腕で受け止め、貫かれながらも止めた。
突然の事態に驚くコブラはいまだ倒れたまま。
ペルは敵の刃を必死に捕まえ、彼へ叫ぶ。
「ぐっ……国王様！　お逃げください！」
叫んだ直後に右腕が動き、砂の刃がペルの体を切り飛ばし、彼は勢いよく地面へ倒れた。

クロコダイルは冷静に足を進める。
ようやく立ち上がろうとしたコブラを見据え、ナイフで刺し殺そうとしていたようだ。
一歩ずつ近付いている最中、背後から人獣型に変身したチャカが襲い掛かる。
振り上げた剣で彼を頭から両断しようとしていた。だが気配を感じたクロコダイルが振り向き様に腕を振り、一方的にチャカの胴体が切られる。
吐血して足元が揺れる。
倒れかける挙動を見せながら踏ん張り、チャカは再び剣を握り直した。
クロコダイルの注意は彼に向けられていた。それだけでも大きな意味がある。
自らの命を捨てる覚悟で前へ踏み込んだ。
「これ以上……貴様の好きには――！」
「三日月形砂丘（バルハン）！」
反応できないほど速く、三日月形の軌跡を宙に残す腕に襲われ、無防備だったチャカの体からは大量の水分が抜き取られた。急激にやせ細った彼は抵抗もできずその場へ倒れる。
王国最強と呼ばれた兵士が二人とも戦闘不能になった。
余裕を持ってコブラを見据え、歯噛みしながらも逃げようとしない彼に歩み寄る。
「これがお前らの全力か？」
「くっ……！」
戦う術を持たない彼に逃げ場はない。
そう思っていた矢先、麦わらの一味が全員同時に接近してくる。興味なさげにそちらへ目をやりながら、クロコダイルは右腕を勢いよく振るった。
「てめぇ、いい加減にしとけよ！」
「邪魔だ」
無数の刃が地面を走り、一味へ襲い掛かる。

速い上に正確で、回避できなかった彼らは一瞬にして弾き飛ばされる。戦い続けてもはや体力は残っていない。呆気なく宙を舞う様は風に吹かれた木の葉のようだ。
その中でゾロとサンジだけは、軽症はあったが辛うじて回避し、さらに接近を試みた。
先にサンジが勢いよく飛び掛かる。
「オラァ！」
脚を伸ばして飛び蹴りを行った。しかしクロコダイルは軽やかに躱して、彼の脚をナイフで切り裂く。大した傷ではないが体勢を崩したサンジは激突するように地面へ落ちた。
クロコダイルの興味はその時点で失せ、すぐに視線が外される。
次いでゾロが二刀流で挑む。
鉄は斬った。砂も斬ると意気込み、両腕にある刀を振り上げる。
その一瞬、素早い動作でクロコダイルが彼の脇を抜け、通り過ぎ様に胴を切った。全く反応できなかったゾロは走る勢いのまま転んで悔しげな顔を見せる。
Ｍｒ．１との戦いで失血が多かったとはいえ、強過ぎる。まるで行動を読まれているかのようだ。
彼らを倒したことで改めてコブラに目を向ける。
一味はすでに疲弊しきった状態であり、一度倒れてしまえば立ち上がるまで時間を要した。
再びクロコダイルがコブラを狙ったため、広場に居る人々がようやく武器を取る。
暴風はすでに消えていて、今なら動き出せる。
兵士も市民も関係なく立ち上がり、国王を守らんとクロコダイルへ一斉に殺到する。人が大きな波となる様は凄まじい勢いだったものの、彼の表情は一切変わらない。
恐れるどころか表情一つ変えないクロコダイルの様子をコブラは見た。
想像したのは、最悪の展開。
咄嗟に殺到してくる人々へ叫ぶ。

「国王様を守れェ！」
「クロコダイルを倒すんだァ！」
「よせっ!?　誰も来るな！」
「うるせぇハエどもが居るな……」
右手の中で砂が旋回する。それは確かな風となり、爆発的に急成長した。
「消えろ！　砂嵐（サーブルス）！」
「うわあああああっ!?」
襲い掛かった数百人単位の人間が一斉に吹き飛ばされる。
紙屑のように薙ぎ払われた中にはコブラの姿もあり、彼もまた為す術もなく宙を飛び、どちらが上か下かもわからぬ状態で地面に激突した。
そして痛みに耐えながら顔を上げれば、目の前にはクロコダイルが立っていた。
「無様だな。それが一国の王の姿か」
冷たい瞳に見つめられたコブラは、不思議と冷静さを取り戻したようだ。
痛む体で立ち上がると正面から彼の目を見据える。
「確かに私は一国の王としてあまりにも浅はかだった。お前の暗躍を許し、これほどの犠牲が出ても何一つできることがない」
「よくわかってるじゃねぇか。己の不甲斐なさをな」
「だがこんな私でも王として国を見てきた自負があるっ。クロコダイル、お前がいくら私から玉座を奪おうとも、お前は王にはなれん！」
「フン。見解の相違だろうが、一応聞いてやろう」
激しい砂嵐が吹き荒れる中で二人は語り合う。
コブラは厳しい目を向け、クロコダイルは笑みを崩さない。
いつしか竜巻のような砂嵐の中心が彼らの居場所となり、お互いの声だけははっきり聞こえた。
「国とは人なのだ。あらゆる策謀で他人を操るお前には誰もついてこないぞ」
「そんな考えだからこの状況を生む。そもそもの生き方が違うの

さ。忘れたか？　本来おれは海賊だ。暗躍、策謀、悪巧みこそ真骨頂」
左腕を掲げ、ナイフを向けた。
まだ届かない距離とはいえコブラは一切怯えず、クロコダイルの言葉に耳を傾ける。
「国の乗っ取りは第一段階に過ぎん。おれはその先を見ているんでな」
「やはりお前は……王の器ではない」
「王如きに収まる器じゃねぇのさ。お前には理解できねぇだろう」
いよいよ仕留めようかという頃、突如、クロコダイルの頭が消し飛んだ。
背後から当てられた攻撃で頭だけが砂に変化して、辺りへ静かに砂が舞う。しかし体はそのまま残されており、舞っていた砂が集まるとまた元の姿に戻る。
それからクロコダイルは背後を見た。
肩で息をするビビが砂嵐を駆け抜けてきたようだ。
コブラは彼女に気付くと明らかに動揺し、思わず身を乗り出す。
「ビビッ!?　何をしている！　早く逃げろ！」
「ハァ、ハァ……いいえお父様、どこへ逃げても一緒。この男がこの国に居る限り、安全な場所なんてどこにもない……」
「娘の方がいくらか理解しているな。だがまさか、お前がおれに勝つ気か？」
「お前さえ居なければ――」
感情を露わにしたビビは、再び武器を振り上げて駆け出す。
「お前さえ居なければ、この国はずっと平和だったんだ！」
コブラの制止の声も聞かず攻撃を繰り出す。しかしその一撃は呆気なくクロコダイルに避けられてしまい、瞬く間に懐へ入られた。
目の前でナイフが怪しく光る。
最後かもしれないと思いながらもビビは決して目を閉じなかった。
彼女を刺し殺して全てを終わらせようとした、その瞬間の出来事だった。
突然目を見開いたクロコダイルがぴたりと動きを止めた。

ビビを見つめたまま、完全に殺せるタイミングだったのに途中で中断して動かない。
激しく動揺しながらも慌ててビビは彼の前から逃げ、視界から外れたところでへたり込む。
地面に座り込んでしまい、その状態で後ろを振り返った時、その理由がわかった。
「――あっ」
思わず漏れ出た、弱弱しい声。
クロコダイルの向こう側に、今にも倒れそうなルフィを見つけ、彼女の瞳に涙が浮かんだ。
全身に血を浴びて、真っ赤になった危うい姿で、ルフィはそこに立っていた。
ただ立っているだけでも足元がふらつき、普段の元気さなどまるで感じられず、生きているのがやっとという姿に見える。しかしそれでも彼の顔つきと目だけは力強さを感じさせ、ただ黙って諦める気などないことが明確に伝わってきた。
一味の仲間も気付いたようだ。
驚く仲間たち以上に、クロコダイルの方が驚愕している。
サソリの毒を受けてここまで生きているはずはない。彼は死んでいなければならなかった。
「てめぇは一体……なんなんだ」
「おまえ……なんかじゃ……」
絞り出すような声。弱弱しい様子は聞く者の表情を悲痛にさせる。
一瞬、ふらりと倒れかけた。
ルフィは左脚で強く地面を踏みしめ、その体を支え直す。
「ハァ……おれには、勝てねぇ……」
ただの虚勢とも取れる発言に、なぜかクロコダイルは大きな反応を見せた。
「一体何度殺されりゃ気が済むんだ……！　串刺し！　干からび！　毒殺！　生き埋め！　おれに三度殺されてなぜ立ち上がる！　そんなにこの国が大事か！」

息も絶え絶えで、声を出すのも辛い状態。
ルフィはぐっと顔を上げて、生気に満ちた目でクロコダイルを捉えた。
「おれは……海賊王になる男だ」
その発言を聞いてクロコダイルの表情が変わる。
如何なる状態であろうとそれだけは聞き捨てならない。彼の体からは激しい怒りが発され、凄まじい気迫は先程とはまるで別人のようだ。
怒りが大きくなり過ぎて恐ろしい笑顔を見せ始める。
「いいか小僧、この海をより深く知る者ほどそういう軽はずみな発言はしねぇもんだ」
クロコダイルが駆け出し、今度こそとどめを刺すべく素早く接近する。
「おれにも勝てねぇお前が海賊王だと？　笑わせるなッ！」
全力で振るわれたナイフは屈んで避けられる。
足元がふらつくものの、回避の一瞬だけは非常に素早い行動であった。
「おれは、お前を……超える男だッ」
苦しげな声で必死に呟いた後、二人は同時に攻撃を繰り出す。
突き出されたパンチとナイフが互いの頬をかすった。
視線が交わり、もはや思考も何もあったものではなく、疲れ切った体を動かすことに精いっぱいのようで、最後の力を振り絞って攻撃を行う。
今や二人の視界には、向き合った敵の姿しか入っていなかった。
自ら攻撃を繰り出すクロコダイルの腕を避け、ルフィはともすればふらつく体で右へ左へと動き続ける。そんな状態だからこそ攻撃を連続させるのだが当たらない。
反対にルフィが拳を突き出せば、クロコダイルは最小限の動きでそれを避けた。
二人は砂嵐の中心で、決められた動きを舞うかのように戦っていた。

互いの攻撃が当たらず、一撃が結果を分けるほどの死闘を演じる。
見ているだけで息を呑む戦い。
一番近い場所に居たビビは動くことができずにいて、冷静さを取り戻したコブラが駆け寄った。
ここは危険だ。一刻も早く離れなければならない。
コブラはビビの肩を掴み、二人の戦いから離れようとする。
「ビビ！　大丈夫か!?」
「え、ええ……」
「彼は一体……いや、それよりも。まずはここを離れるぞ！」
コブラの手で立たされたビビだったが、吹き荒れる砂嵐の向こうに行くのかと考えた時、自らの意思で咄嗟に足を止めた。連れ出そうとするコブラが驚く。
彼女の手がそっとコブラの手を下ろさせて、もう一度ルフィの方に体を向ける。
ここまで来れば今更逃げる気にはなれなかった。
「何を……」
「彼が最後の希望なの。ルフィさんが勝てないなら、もうあいつに勝てる人は居ない……だけど彼は絶対に勝つわ。私はそう信じてる」
そう言うとビビはスーッと深く息を吸い、声を張り上げた。
「ルフィさんッ！　がんばれーッ!!」
コブラが呆然とした顔で立ち尽くした。すると砂嵐を突き抜け、傍に来る人間に気付く。
彼らは、ビビの仲間だろうと思っていた人々だ。
誰よりも早く駆けつけてビビの周囲に陣取り、すでに限界を超えた体で必死に叫び始める。熱心な様子でルフィの名を呼び始めたのだ。
「ルフィ～！　あとはお前だけだぞ！」
「さっさとぶっ飛ばしちゃいなさい！」
「これが最後だよ！」
「ルフィ～！　がんばれ～！」
「気合入れろよルフィ！　お前が勝てなきゃ誰が勝つんだ！」
「ルフィ！」

口々に叫ぶ声を聞き、コブラは彼らのことを少なからず理解する。
全てをルフィへ託したのだ。長い戦いにより彼らもまたすでに限界を迎えており、それはつい先程クロコダイルに圧倒されたことからも推測できる。彼に勝てるのはルフィしか居ないと、自分たちにできることをするために声を張り上げて応援している。
確かにルフィは見た目からして危険な状態だった。だが唯一クロコダイルの攻撃を避け、彼に己の攻撃を届かせた。その一瞬で信頼するのは、わからないでもない。
とはいえ、きっと以前からの関係性も大きく影響しているのだろう。
彼らの顔からはルフィへの信頼感が見えていた。今までもこうしてきたのだろう、ずっと彼を信頼してきたのだろうというのが目に見えて伝わった。
コブラは、もう逃げようとは思わない。
ビビの傍で彼らと一緒に、必死に声を張り上げてルフィの名を呼ぶ。
長く、永遠にも感じる一瞬だった。
クロコダイルが突き出したナイフを横に移動して避け、ルフィのパンチを右に避ける。
呼吸をする暇さえない攻防がずっと続いていた。
砂嵐に吹き飛ばされた後、クロコダイルの実力に怯えていた人々はその光景を目撃した。
自分たちよりよっぽどひどい傷を受けた少年が、フラフラになりながら戦っている。
彼が誰なのかなど誰も知らない。だが必死な様子のビビの声を、コブラの声を聴いて、実際に戦っている彼の姿を見れば黙ってはいられないだろうと考える。
誰もが考え、緊張した状況下では決断が早かった。
見ていた人々も叫び始めて、最初は少なかったその数も、その戦いを見て徐々に増えていく。
いつの間にか多くの声が彼へ集められていた。

思考を失うほどの疲労感の中、不思議とその声は聞こえてくる。最初はビビ。次に仲間たち。そして顔を知らない者たちまで自分の名を呼んでいる。
ルフィは、一身に彼らの声を浴びていた。
「麦わら帽子ィ！　頑張れ～！」
「ルフィー！　お前だけが頼りだ！」
「行けェ！　クロコダイルをぶっ飛ばせ～!!」
ルフィ。ルフィ。ルフィと。
数多くの声が重なって、彼の下へ届いていた。
その声を聞いて、何かを想うほどの余裕はない。だがなぜか力が湧いてくる。
煩わしそうに険しい顔を見せるクロコダイルが前へ踏み込む。左腕を横薙ぎに振るって胴体を狙うが、転がるようにしてルフィに避けられてしまう。
立ち上がる際に少し体がぶれた。
それを隙と見て即座にナイフを突き出した瞬間、ルフィの動きが素早くなり、頬をかする。
なぜこんなに動けるのか。理解ができない。気分が落ち着かない。
クロコダイルは右腕を砂に変え、砂の刃を地面へ走らせる。
その場で軽く跳びあがったルフィは瞬く間に刃を飛び越えてしまい、回避する。
ならば着地の瞬間に仕留めようと刃で狙うが、振るわれた腕を空中で蹴られ、軌道が変わり、触れることもできずに空を切る。そして焦ってしまったその一瞬が状況を変えた。
強く地面を踏みしめ、ついにルフィの拳がクロコダイルを捉える。
正面から顔面を殴り飛ばした瞬間、周囲の人々がわっと更なる大声を出した。
たった一撃。だが今の体ではそのダメージが驚くほど重い。
攻撃を受けて、体が想像以上に動かないことに気付き、ダメージが蓄積した結果、いつの間にか体の限界を超えていたらしいとわかる。
「ガハッ……！　フッ、クハハハハハ……」

鼻血を垂らし、口から血を吐いて、不思議と笑えてくる。
動きを止めた彼に倣ってルフィも一時動きを止める。
互いの距離を見ながらじりじりと移動する二人を見て、周囲は応援の声を止めない。そんな環境の中で二人は視線を合わせ、思いのほか静かな様子で会話を始めた。
「たかが一海賊が、まるで英雄だな。おかしな状況もあったもんだ」
「ハァ、ハァ……おれは、お前をぶっ飛ばせれば、それでいい……」
「フン。てめぇも相当なバカだ」
クロコダイルが突進し、ルフィがわずかに退く。
振るわれたナイフを避けようとした時、今度はわずかに腕を裂いた。
周囲から悲鳴が上がって、本人は歯を食いしばって声を抑える。
「てめぇのような夢見がちのルーキーはいくらでもいるぞ！　口先だけなら誰でも言える！」
「ゲホッ……ゼェ……」
「てめぇに一体何ができる！」
眼前に迫るナイフを屈んで避け、ルフィはわずかに歯を鳴らした。
「お前に、勝てるッ！」
反射的に前へ出した拳が腹を打つ。
クロコダイルの体がほんの少し浮かんで、地面に足が着いた瞬間頬を殴り抜く。流石に足元がふらついてクロコダイルが姿勢を崩し、さらにルフィが拳を振るう。
今度は同時にヒットした。
自身を狙って動く腕をナイフでガリガリと削り、その腕が届くとクロコダイルの胸を打つ。
壮絶な一閃だった。
短い時間だが二人の心身をひどく消耗させ、徐々に極限状態へ追い込んでいく。
周囲では彼らの行動に一喜一憂する声があるものの、次第にその声さえ遠くなり、彼らは彼らだけの世界へ突入していった。
考える必要がなくなったため、あとは体が動く通りにする。

今すぐ倒れてもおかしくない体で、二人の攻撃はさらに速くなろうとしていた。
クロコダイルが右腕に砂の刃を作って振り回す。
ルフィは潜るように避け、懐へ飛び込んだ。
互いの攻撃が相手の体を刺し、またしても二人の血が宙へ飛ぶ。
「ゲホッ……！」
「ガフッ……！」
ルフィが思い切り腕を振り回した。クロコダイルが屈んでそれを避けて、瞬時にルフィが蹴りを繰り出すと、素足をナイフで貫いて体勢を崩させる。突き刺した左足を起点として、貫いたまま彼の体を無理やり持ち上げ、投げ飛ばすように地面へ叩きつけた。
足から荒々しくナイフを抜くとすかさずルフィの首を狙う。
息を詰まらせていた彼だが反撃は遅れなかった。
腕を伸ばして繰り出したフックが、一撃で倒すほど強くクロコダイルの頬を打ち抜く。
彼は勢いよく倒れて、その間にルフィが立ち上がった。
再び仕切り直し。
お互いにいつまで経っても倒れない。とうに倒れていてもおかしくないはずなのに、どれだけ攻撃を打ち込んでも必ず即座に立ち上がってくる。
この時、クロコダイルの頭にはサソリの毒についてなど残っていなかった。
本来なら死んでいるはず。そんな事実を捨て去り、実力で殺すことに集中している。
ルーキーであるのは間違いないとはいえ、この男は別格だ。
ようやくその実力を認めて、だからこそ全力で叩き潰そうとする。
グランドラインのレベルを知らない人間にこの先の海は越えられない。上にはいくらでも上がいるのだ。それは彼が体験として知っていた。
上を目指すべく、ここで負けてはいられない。それはお互いが思っていただろう。

ルフィは海賊王になるため。クロコダイルも己の野望を果たすため。ここで負けてしまえば全てが終わるという気持ちで相手と向かい合っていた。
先にクロコダイルが動き出す。
ルフィは繰り出される攻撃を紙一重で回避し、自身も反撃した。
砂になる時間も惜しいと彼は全てを見切って避け、退こうとはせずに前へ出ようとする。
やがて二人の負けん気が前進する姿勢となって現れた時。
急接近した二人は互いに渾身の頭突きを激突させた。
額をぶつけた状態で、拳を強く握り、ナイフを掲げる。
振り切った瞬間に相手の体へ届き、クロコダイルの顎を殴り、ルフィの胸を抉る。
今度は二人が同時に倒れた。周囲はその迫力に気圧され、怯えながらも必死に応援する声を発し続けて、戦いの激しさに目を白黒させていた。
すぐには立ち上がれず、時間をかけて、腕と足を震わせながら立ち上がった。
どんどん凄惨さを増していく外見。それなのに戦意はむしろ増している。
相手の目を見つめ合った瞬間、彼らは笑みを浮かべていた。
「ハァ、ゼェ……ここまでやって中途半端は許さん。どちらが死ぬかだ……」
「ハァ、ハァ……おう。勝つのは、おれだ」
血まみれで笑う姿は傍から見ているとひどく恐ろしい。だがその二人は自分たちにしかわからないものを感じていたようで、死にかけた今になっても手を抜こうとはしていない。
次は同時に動き出し、当たり前のように前へ走って激突した。
その際の戦闘は、今までと違って少し奇妙なものだった。
二人がダンッと強く地面を踏みしめた後、足を固定したかのようにその場を動かず、一瞬の静止で睨み合った後に攻撃を始めたのである。

どうやら回避と防御を捨てたようだ。
ルフィの拳がクロコダイルを殴る。クロコダイルのナイフがルフィの肌を裂く。
激しい攻撃は全て相手の体へ叩き込まれて、凄惨さはさらに増す。
本人たちだけでなく、周囲の者まで永遠に続くのではないかと感じていた。
もはや二人の体は生きているのがおかしいという状態になっている。
そんな頃に、ついに状況の変化が見えた。
ルフィが不意に足元をふらつかせた時だ。
好機と見たクロコダイルがとどめの一撃としてナイフを突き出す。
「何も、知らねぇ、小僧が……このおれを誰だと思ってやがるッ!!」
「お前がどこの誰だろうと!」
大ぶりの一撃を、頭を下げたルフィが躱した。
「おれはお前を超えていくッ!!」
そして咄嗟に出た蹴りで彼の腹を蹴り上げ、クロコダイルは天高く吹き飛ばされる。
ここで決着。二人は同時に決める。
クロコダイルは空中で右手の中に砂嵐を作り出し、ルフィは腹が膨らむほど大きく息を吸う。
「いい加減、くたばりやがれ……! 砂嵐(サーブルス)――!」
人々が頭上を見上げる中、クロコダイルの攻撃は広範囲に及んだ。
「重(ペサード)!」
再びの暴風。風の重しで押し潰されるかのような衝撃だった。
観戦していた者たちが呆気なく吹き飛ばされ、辺りは悲鳴が飛び交う状況となる。その中で唯一ルフィだけはその場で踏ん張り、最後まで耐え切った。
暴風が消えると砂嵐が吹き飛ばされており、周囲の視界は一気に広くなる。
その時にはルフィが自分の膨らんだ体を捩っていて、地面へ向けて一気に息を吐き出す。

自分が吐き出した息で高く飛び上がる。
体を捩っていたことが影響して、彼の体は空中でぐるぐる回転していた。
落下するクロコダイルと、空を目指すルフィが、空中で急接近する。
ようやくこれが最後。
ルフィは素早く両腕でパンチを伸ばし、クロコダイルは右腕に巨大な砂の刃を作った。
「ゴムゴムの……！」
「砂漠の（デザート）――」
最後の一撃は、凄まじい迫力を伴って相手の体へ伸びた。
「暴風雨（ストーム）!!」
「金剛宝刀（ラスパーダ）!!」
人々が見上げる中で勝負は一瞬にして決まる。
ルフィの拳が砂の刃に触れた時。それは血で濡れていたせいか、はたまた何か別の力が作用していたのか。砂の刃は呆気なく散った。
無数の拳がクロコダイルの全身を襲う。
一度捕らわれれば逃げられない怒涛の攻撃。その拳は、今までで最も強かった。
「うおおおおあああああっ――！」
殴り、殴って、また殴る。
一呼吸の隙も与えずに全身を殴って吹き飛ばす。
クロコダイルの体はどんどん上昇していき、その分ルフィの腕が長く伸びた。
「あああああああああっ!!」
最後の一発が彼の体を高く突き上げて、さらに天高くまで吹き飛ばした。
広場に居る者たちが皆、首を反らし、空を見上げて確認していた。
頂点へ達した後、二人の体は真っ逆さまに落下してくる。
その時、確かな変化があった。
意識を失い、自然に目を閉じたクロコダイルが落下してくる。その際に落下する軌跡は、奇しくも少し前に空から落ちた彼と同じで。

大の字になって落下してくる彼の顔へ、空から一滴の水滴が落ちた。
落下してきた二人の体が地面に激突する。
受け身も取れず、激しい音を立ててその動きが止まった。
誰もが沈黙していた。広場にはのしかかるような重苦しい静寂が広がっている。
落ちた二人をじっと見つめて、誰一人動けない。それは彼らが繰り広げた戦いが想像を絶するほど凄まじかったのもあるが、大きな理由がもう一つ。
ぽつぽつと雨が降り始めていた。
いつしか空を覆っていた厚い雲から、砂漠の国にとっては恵みと言える雨が降る。
「雨……」
「雨だ……」
口々に言葉で確認する。そうするほどの衝撃がある。
音を吸い込むように静かに、徐々に勢いを増していく雨を見つめ、ビビは呆然としていた。しかしハッとして、ルフィを助けなければと思う。
彼は今動けない。しかも死にかけていた。
助けなければ、と慌てて駆け出そうとした時、ちょうどそのタイミングでルフィが声を出す。
呼吸はいまだ整わず、意識が途切れようとしている。
それでも言いたいことがあった。
せめて一つだけ。彼は小さな声で呟く。
「ハァ……ハァ……勝ったぞ……」
大勢の人間の気が、ぐっと動くのがわかった。
ルフィは大きく息を吸い込み、今残る力全てを使って大声で叫ぶ。
「勝ったぞォオオオオッ!!!」
瞬間、これまでで一番の大歓声が上がった。
それを聞くとルフィは笑顔で目を閉じ、今度こそ意識を手放す。彼が安らかな顔で眠りに就いてから仲間たちが一斉に駆け寄り、その中

には、嬉しそうな笑顔で涙を流すビビが居た。
この時をずっと待ち望み、涙を流すまいと我慢していた。しかしもう我慢は必要ない。
ビビは戦いの勝利を心底喜び、感情が動くままに涙を流した。
広場に居たアラバスタ王国の民は様々な感情を抱き、苦心もするが、今この時だけは大きな喜びを全身で表す。雄叫びを上げ、抱き合い、涙を流す者も居た。
長い戦いがついに終わり、そしてその時を告げるように雨が降り始めた。
この時を信じて頑張ってよかった。そう語る者ばかりであった。
コブラはその様子を眺める。
国の一大事を乗り越えた。これからまたこの国は変わる。
静かに雨を降らす空を見上げて、彼は微笑む。
ひとまず戦いが終わったことは喜ばしいことだった。
辺りを見回したコブラは国民の笑顔に胸を撫で下ろし、何よりビビの喜ぶ様子に安堵していた。

終戦

突然の雨は奇跡のように。
アルバーナでの戦いが終結したその瞬間よりアラバスタ全域へ降り注いでいた。
それほど激しい様子ではない。しとしとと静かな様子で、普段滅多に降らないだけに、人々の心を癒すかの様子でアラバスタを包み込む。
アルバーナの王国前広場。
多くの人間が集まったここには、喜びと後悔が入り混じる、重苦しい雰囲気があった。
戦闘が終了した直後、バロックワークスに所属していた者は海兵に拘束された。
クロコダイルもその中に居て、意識を失っているため当然抵抗はない。彼には海楼石入りの手錠がかけられ、警戒しながらも静かに拘束が終わる。
これでもう王国乗っ取りの危機はない。そう思っても喜べない空気がある。
今回の戦いで、あまりにも犠牲が大き過ぎた。
倒れた兵士は数えきれないほど多く、アルバーナの町は壊れ、市民は今も砂漠に避難したまま。復興するには多大な時間と体力と精神力が必要になる。
この国の未来を考えたが故か、人々の顔には複雑そうな表情があった。
命を落とした兵士の顔を見るコーザがぽつりと呟く。
「おれたちがしてきたことは、間違いだった……」
反乱軍としての活動は過激なものも多かった。誰かが傷つくこともあった。誰かが苦しむこともあった。それら全てがバロックワークスのための活動だったのである。
利用されていることにも気付けないとはバカなリーダーだ。
自らのことをそう思って、後悔の念を抱かずにはいられないのだろ

う。
ビビは何と言っていいかわからず、静かに彼の背を見つめていた。
簡単に慰められる状況ではない。だから皆が口を噤んでしまっている。回りを見回せば似たような表情が並び、辛うじて無事だったチャカやペルも、声をかけられずに黙っている。
おそらくコーザは自分を責めていた。反乱軍の兵士も同じ気持ちに違いない。
かける言葉が見つからず、辺りは静まり返っている。
「おれたちはとんでもねぇことをしちまった……こいつらにどうやって詫びればいいんだ」
俯くコーザの背を見て、ビビは視線を落とす。
その時、そんな彼女の肩に手を置き、コブラが傍を通り過ぎる。
「悔やむことも当然。やりきれぬ思いも当然」
彼が声を発したことで、皆の意識がコブラへ向いた。
「失ったものは大きく、得たものはない」
「国王……」
「国王様……」
皆が口々に彼を呼ぶ。
こんな時、助けてくれるのはいつも彼の言葉だ。
皆の視線を一身に受けて、コブラは声に力を入れ、語った。
「だがこれは前進である！　戦った相手が誰であろうとも、戦いは起こり、今終わったのだ！　過去を無きものになど誰にもできはしない！」
コブラの言葉が人々の心を動かす。
彼らの表情は確かに変わろうとしていた。
「この戦争の上に立ち！　生きてみせよ!!」
チャカとペルは、静かに涙を流した。やはりこの男こそが王なのだ。
「アラバスタ王国よッ!!!」
彼の言葉は国民たちへ届いた。
全てを忘れることなどできない。忘れていいことではない。彼ら

はこの戦いに関する全てを深く胸に刻み込み、そして次へ生かそうとするだろう。
その様子を見たビビは薄く笑みを浮かべ、安堵していた。
ゆっくりとだが広場の空気が変わり始める。
彼らは歩き出さねばならない。その変化はきっといいものだったはずだ。
「クエ～！」
「え？　カルー？」
唐突に聞こえた声に驚き、振り向いたビビがカルーを見つける。
その背にはスモーカーが乗せられていて、同じく気付いたらしいたしぎが向かってきた。彼は包帯を巻かれて応急処置を済ませており、しかしそれはカルーが巻いたのか、どうにも下手くそな様子は否めない。だが本人は直す気がないようだ。
「スモーカーさん……」
「終わったか？」
「はい……クロコダイルは、捕えました。彼らのおかげで」
「そうか」
ダメージが大きいのか、少し危なっかしい様子ながらスモーカーがカルーの背から降りる。すぐにたしぎが駆け寄って彼に肩を貸した。普段ならば跳ねのけるところだろうが今はそうしてもらわなければ歩けない。何も言わずに受け入れる。
スモーカーは簡単に広場を見回し、大まかに状況を理解する。
すぐに視線を動かして言った。
「行くぞ」
「それは……どちらの意味でですか？」
「お前が考えてる通りの意味だ」
たしぎに支えられて歩き出す。しかし彼女の表情は暗く、優れた状態ではない。
二人が去ろうとするのを見てビビが遅れて気付く。
「あれ……？　みんなは？」
「クエ～」

いつの間にか麦わらの一味が居なくなっている。
その場に居る皆の心配をしていたせいで気付かなかったようだ。一体どこへ行ったのか。
海兵二人が去ったということはつまり、彼らを捕まえようとしているのかもしれない。急に焦りを感じたビビはカルーと共に走り出す。
「行きましょうカルー！　あの人たちと話さないと！」
「クエー！」
何から何まで彼らに助けてもらったのだ。海軍に捕まることを良しとなんてできるはずがない。
たとえ市民の責務を果たしていないと言われても、これだけは絶対に譲れなかった。
ビビとカルーは少し遅れて広場を離れ、静かに消えた麦わらの一味を探し始めた。

＊

戦いが終わった町へ静かに雨が降り続ける。
何も言わずに広場を離れた麦わらの一味は雨を避けるため、比較的損害が軽かった一軒の家屋へ入っており、それぞれ地べたに座って休んでいた。
「よし。終わったぞ」
右腕の骨が折れているチョッパーはナミに手伝ってもらい、ルフィの治療を終えた。彼はすでに回復するために爆睡しており、顔色は悪いが表情は穏やかなものだ。
呆れたナミは首から取ってやった麦わら帽子をルフィの傍に置く。
ようやく休めるようになり、道具を仕舞う余力もないチョッパーは大きく息を吐いた。
「ルフィはすごいな……七武海に勝ったんだ」
「そうね。ずいぶんひやひやさせられたけど、結局は信じてよかった」
苦笑するナミが言い終えると、眠るルフィの顔を見たウソップはし

みじみと言う。
「何が怖いってこの体で戦ってたことだよなぁ。なんで生きてんだ？　こいつは」
「頭がお粗末な分、全部生命力に割り振ってんのさ。お前なら今頃死んでる」
煙草を銜え、しかし火を点けようとしないサンジが脱力して呟いた。
勝ったことにも驚きだが、それ以上に気になってしまうのが彼の体に刻まれた傷。今も息をしているのが不思議に思えてしまう外見だ。
もう慣れてしまっていたのに今になって改めて実感する。
彼のタフさは明らかに異常だ。
彼らの言葉を聞いたチョッパーが顔を上げた。
壁にもたれて座るシルクも会話に参加する。
「山で修行したって言ってたぞ」
「それにおじいさんがあの拳骨のガープだからね」
「拳骨のガープ？　それってなんだ？」
「海軍の偉い人。ルフィの実のおじいさんなんだって」
彼女が話した内容は中々衝撃的なものだったが、知っている者は当然として、知らない者ですらほとんど反応はなかった。代わりに疲れた様子の溜息が漏れる。
壁に背を預け、刀を抱えたゾロが仲間たちの顔を見回した。
そして目を伏せると小さく呟く。
「あとはあいつだけか」
その一言で空気が変わる。
ウソップとシルクを除いて、どこか神妙な顔つきで言葉を失う。
不思議そうに彼らの顔を確認したウソップが尋ねようとした。
「キリは――」
「生きてるよ。用があって遅れてるんだ」
咄嗟にそう言ったのはチョッパーだった。
嘘をついたつもりはないのだろうが、彼らしくない言動である。或いはそうあってほしいという願望なのだろう。真剣な顔で、仲間の顔

を見ようとはしなかった。
事情を察したウソップは自ら口を噤み、余計なことは言わないでおこうと思う。
それはおそらくシルクを含めた皆が思っていたことだった。
話す声がなくなると雨の音がよく聞こえた。
砂漠に降る雨。普段彼らが見るものとは重要性が違うに違いない。
静寂が身を包んだことで、うつらうつらと頭が動き、ナミが眠気に負けそうになっていた。
シルクやチョッパーも同様で、皆が限界を感じている。
そんな状態でもサンジが呟いて、何気なくウソップが答えようとした。
「ビビちゃんは今頃、どうしてるんだろうなぁ」
「そりゃあお前、国民の奴らと喜んでるんだろ。まぁ、とにかく……」
ふらりと体が揺れる。
誰も抗うことはできずに全員が汚れた床へ横たわる。
「やっと終わったぁ――」
全員が意識を失い、辺りは再び静寂に包まれる。
雨の音に包まれ、安らかな眠りに就く。
邪魔する者はおらず、ようやく戦いから解放されたのだ。
長い時間が経つ。
この国で起きた全てを洗い流すかのように雨がアラバスタ王国へ降り注ぐ。
それからしばらくの間、周囲は静けさを保ったままだった。しかし時間が経つと慌ただしい足音が近付いてきて、眠ったままの一味を発見する。
警戒しながら家の中を覗き込んでも起きる気配はない。
家の前へ集結した海兵は武器の確認を急いだ。
「発見しました！　麦わらの一味です！」
「よし！　一気に突入するぞ！」
数十か、百人以上は居るかもしれない部隊が突入を開始しようとし

た時、声が割り込んだ。
「ちょっと待ってくれないかな」
全身ボロボロで、汚れた外見の男が一人歩いてくる。
あまりにもひどい姿だが、思いのほかしっかりとした足取りで、本来ならば歩けないだろう傷を受けながら、多少ふらつく程度で真っすぐ歩を進めていた。
海兵から距離を置いて足を止めたキリは、険しい表情で彼らを睨む。
「みんなもう疲れてるんだ。しばらく休ませてやってほしい」
「貴様は……紙使いか！」
「もしこれ以上やるつもりなら――」
彼は言葉を止めた。
直後、異様な変化が海兵を包み始める。
ドクン、と大気が揺れた気がした。
突如として海兵たちが次々に倒れていき、部隊は瞬く間に混乱する。
先頭に居た男が訳も分からず歯噛みした時、それだけでは終わらなかった。
部隊に指示を出していた男がカサカサと奇妙な物音を聞いた。すぐ近くだと感じたためふと左肩を見たところ、そこに小さな蜘蛛が乗っていた。全身が真っ白である。紙で作られた数センチ程度の小ささの蜘蛛が、肩の上を歩いていた。
不審に思ったその瞬間、他の海兵が大きな悲鳴を上げた。
顔を上げると他にも白い蜘蛛を見る。海兵たちは驚きで目を見開いた。
それらはサイズも様々で、最も大きい個体は数メートルに及び、屋根の上から海兵たちをじっと見つめていて、最も小さい個体は数センチ。視認が難しいサイズである。
警戒するように、脅すように。
辺りに散らばった数百匹の紙の蜘蛛が海兵たちを取り囲んでいた。
海兵たちが動じている間、大小様々な蜘蛛が彼らへ徐々ににじり寄

ろうとしている。
表情を消したキリは目だけを不気味に光らせていた。
「誰も逃がさない。ここで砂に還ってもらう」
「ひっ――――！」
誰かが一度悲鳴を発すれば、もう立ち向かうことはできなかった。
怯えた海兵たちが武器を落としてしまい、気絶した仲間のことも忘れ、思わず逃げ出そうとしてしまう。しかし紙の蜘蛛に取り囲まれているためそれもできない。
激しい混乱に包まれた時、幸いにも彼らが駆け付けた。
状況を見てたしぎが咄嗟に叫んだ。
それは彼女らしくない冷静さをかなぐり捨てた怒声である。
「何をしているんですかっ！　今すぐそこから離れなさい！」
「し、しかし曹長、ここには麦わらの一味が居ます！　今なら捕まえられますよ！」
「今！　彼らに手を出すことは私が許しません!!」
突然の声にまたしても海兵が怯えた。状況が理解できず見るからに狼狽えている。
たしぎの肩から離れてスモーカーが歩き出した。
彼は銜えた葉巻に火を点けようとしており、中々ライターに火が点かず険しい顔をする。
「チッ、しけてやがる」
「大佐……」
「今日はもう疲れた。帰るぞ」
そう言って彼は背を向ける。動揺する海兵たちはしかし、否とは言えない。つい今しがた恐ろしい目に遭ったばかりで拒否できるはずもなかった。
背を向けたスモーカーを見つめ、キリは呟く。
「ありがとう」
「フッ……皮肉だとすりゃ上出来だな」
バタバタと慌ただしく走る海兵が傍を通り抜ける中、スモーカーが振り返った。

たしぎと共にキリを見据えて、決意した顔で彼へ告げる。
「船長に言っておけ。お前らを捕まえるのはおれたちだ」
「伝えとくよ」
「今回だけだ。次はもうない」
そう告げてから二人が去っていく。
彼らの姿が見えなくなるまで見送ったキリは、見えなくなってから大きく息を吐き出した。
一瞬にして紙の蜘蛛がバラバラになって地面へ散らばった。
これでようやく休める。
頭からつま先までずぶ濡れになって、重くなった体を動かすキリは家屋へ入った。仲間たちが安堵した顔で眠っていて、一人ずつ顔を眺めると優しく微笑む。
疲れた顔でゆっくり歩いて、ルフィの隣で倒れ込む。
うつ伏せに倒れたが、緩慢な動作で体を動かして仰向けになった。
深く息を吐いて天井を眺める。攻撃を受けて汚れていても、彼には安堵する風景だった。
「みんな……ありがとう。色んなことを思い出したよ」
今は眠っている仲間たちへ声をかける。先程とは違い、穏やかな声色であった。
首を動かしたキリは隣で眠るルフィを見る。
「これでようやく自分に戻れる……ありがとう」
もう一度上を向いて目を閉じる。
すぐに意識は遠ざかり、彼も眠りの中で落ち着いた。
その顔には穏やかな笑みがあって、これまでの疲労を全て忘れてしまったかのよう。
優しい雨音に包まれて、今日はむしろいつもよりよく眠れそうだった。
深い眠りに落ちたキリは夢を見ようとしていたようだ。
それは自分で蓋をしたはずの過去。
思い出すのは楽しくも辛い、彼が最も大事にしている記憶。
そういえば雨が降っていた日は、いつも何かがあった気がする。

今再び、いつしか自分が忘れていたはずの自分を、様々な出来事を思い出そうとしていた。
静かな時の中で記憶の蓋を開く。こんな日が来るなど思ってもみなかった。
今はもう恐れていない。きっと前を向けるはず。
優しい雨が見守る中、彼は確かに己の過去に目を向け始めた。

《Ｐ．Ｓ．　１２　ｙｅａｒｓ　ｏｌｄ》

１

朝靄が視界を覆う、なだらかな海。

一隻の船が太陽が昇る方向へ船首を向けて停泊している。

掲げられたのは黒い旗。海賊であった。

船首のすぐ傍にある欄干へ腰かけている男が居る。大きな羽を差す古びた帽子をかぶり、煤が目立つような汚れたコートを身に纏い、長い髭を生やした中年だ。

口髭を濡らしながら豪快に酒を飲み、零れて己の服を濡らしてもいる。

見るからに不健康そうな男の様子をじっと、隣に座った少年が見つめていた。

酒瓶から口を離して腕を下ろし、男が口を開く。

「海賊は自由だ」

唐突な発言に、何を今更、と思う。

少年はわざとらしく溜息をついた。

そんなこと、いつも彼をはじめとした仲間たちから聞いている言葉だ。改めて教えられずとも覚えているし、彼自身それを体現しようとしているほどである。

また変な酔い方をしたのかと呆れてすらいたようだ。

男は左手に持っていた物を口にする。

桜餅、というそうだ。桃色の餅を葉っぱで包んで、本当は桜の葉を使うそうだが、滅多に手に入る物ではないらしく代用品を使っているのだという。

料理などできない、不器用な男が唯一作れる物。船のコックすら作れない特殊な一品だ。

それを食して、酒瓶を傾ける。

租借を数度。酒と共に飲み込んで喉を通す。

少年も手に持っていた桜餅をかじる。

その味は彼も好むものだ。普段滅多に作らないだけに格別な味が

する。
美味いとは感じるのに、なぜか表情は嬉しそうではなくて、やけに真剣に海を眺めていた。
「例えばだ。桜餅を食ってラムで喉を潤す」
もう一度かじって、酒を飲む。
口の中にある物を飲み込んだ後で彼は大きく息を吐いた。
「これが絶妙に合わない」
「ダメじゃん」
「ダメじゃない。要するに選択するのは自分自身だ。食いてぇ物を食って飲みてぇ物を飲む。たとえそれが合わないとしてもだ」
桜餅を食べてぐいっと酒瓶を傾けると、機嫌よく口元を歪めた。
「絶妙に合わねぇ。これが最高だ」
「よくわかんねぇや。うまい方がいいに決まってる」
「決まっちゃいねぇさ。世の理を決めたやつってのは誰だ？　どーせその辺でアホ面さげてる善人気取りどもだ。ルールなんざクソ食らえ。それがおれらの生き方よ」
男が少年へ酒瓶を差し出す。
右手で掴まれたそれをじっと見つめ、少し考える素振りを見せた後、少年は躊躇わず奪い取るように受け取る。
仲間たちが飲むなと言っていた物を彼だけはあっさり渡してきた。
そのことに少し驚きながらも、大人になるチャンスだ。
少年は酒瓶を傾けて中身を飲む。
「選ぶのはいつだってお前自身だ。攻めるも退くも、奪うも襲うも、桜餅にラムを合わせるかどうかさえな。選んで決めて、目にした現実は全て受け止める。それが自由ってもんだ」
酒瓶から口を離して、飲み込んだものに対して少しも表情を変えなかった少年に、そちらを見ようとはせずに男が呟く。
静かで、どこか恐ろしくて、仲間にとっては優しさを感じ取れる声色。
世間から変わり者だと言われる彼だが、少年にとっては信頼できるとても大きな存在だった。

「お前はガキだが海賊だ。てめぇの航路はてめぇで決めろよ。いつまでも他人のケツを追っかけてるだけの人生なんざ、つまんねぇもんさ」
海を見つめてそう語る男の顔を見て、少年は何も言わずに目を逸らした。
さっきの男の様子を思い出す。
自身も桜餅を食べ、それからもう一度酒を飲み、一緒に飲み込む。表情はさほど変わらなかったとはいえ、どことなく嬉しそうな顔にも見えた。
「うん。絶妙に合わねぇ」
「それが自由だ」
くつくつと低く笑う。どうやら男の機嫌はいいらしかった。
朝日が徐々に昇ってくる。広大な海原を照らそうとしていた。
何がかはわからないものの、その男に何かを教わった気がした朝。
それはまだ、彼が海賊になったばかりの頃の記憶である。

2

深い霧が立ち込め、異様な雰囲気が漂う暗い海。
空は厚い雲に覆われて、空気はどんよりと重く、青く見えるはずの海は辺り一帯黒く見える海域であった。海鳥も姿を消し、魚も現れない。生気を感じさせない不気味な場所。
この海の名は、〝魔の三角地帯（フロリアン・トライアングル）〟。
迷い込んだ者は簡単には出られない怪奇の海。
遥か昔から毎年百隻以上の船が行方不明になるという噂がある。
そこに迷い込んでいたのは、一隻の海賊船だった。
誰も居ない静かな甲板に一人の人物が立つ。
その姿はおよそ普通とは呼べない外見だった。
顔と言わずその全身、皮と肉がない骸骨なのである。白骨を剥き出しにして黒いスーツを着て、なぜか大きなアフロがあって、死人ではなく人間のように歩いていた。

手に持っているのはバイオリン。こちらは何の変哲もないきれいな一品である。
およそ人とは思えぬその人物。眼球のない目が沈黙している船を眺める。
そしてバイオリンを構え、優雅に弾き始めた。
最初は静かに。繊細で音の一つ一つを丁寧に選ぶような演奏を行う。しかし最初は人の心を癒すような音色だったはずが、徐々に激しさを増し、やがて弦が悲鳴を上げるかのような激しい演奏へ変貌していった。それは意図して騒音を起こそうとしている様子だった。
「ヨホホホホ！　みなさん朝ですよ～！　起きてくださ～い！」
けたたましい音を奏でるバイオリンの音色は甲板から船内に響き渡り、眠っていた者たちを起こし始める。途端にドタバタと船内が騒がしくなった。
下層に居た男たちが甲板へ上がってくる。
扉を開けて飛び出した瞬間、楽しげに凶悪な曲を奏でる骸骨へ怒声を発した。
「うるせぇえええ～っ!!」
「おいブルック！　選曲考えろって言っただろ！　耳が壊れる！」
「あ～さ～！　アーサーで～す～よ～！」
「もう起きたよッ！」
騒々しい声を聞いて手を止めた骸骨、ブルックと呼ばれた彼は男たちに目を向けた。
皮膚も表情筋もない骨の顔だが笑みを浮かべているように見える様子で、右手を上げて意気揚々と彼らへ挨拶した。耳を押さえている男たちとは対照的な姿である。
「ヨホホホッ！　みなさんおはようございます！　今日もいい朝ですね～！」
「いい朝って、いつも通りじゃねぇか」
「霧で視界は悪いし」
「漂流中だぞ」
「それでもみんなで居れば楽しいものです！　いや～もう非常にい

い一日の始まりですよ！」
ブルックは見るからに上機嫌な様子で、弾む声色で言っている。
寝起きで疲れた顔の男たちとは対照的だった。
「それじゃ私はお手伝いに行ってきますから！　ヨホホホホ！」
そう言ってブルックは元気に走り出すと船内へ向かう。
見送る男たちは呆れつつ、仕方ないという顔で苦笑していた。
それは彼の身の上話を聞いたからに他ならない。
「あいつは元気だな……」
「そりゃ、ウン十年も一人で漂流してたんだ。楽しくて仕方ねぇのさ」
「難儀な奴だなぁ。まぁ、おれたちに出会えてひとまずよかったってとこだが」
彼らは、ビロード海賊団と名乗る海賊だった。
船長を始めとしてほんの数名が賞金首として知られており、グランドラインにて存在を知られて以降数々の事件で名を広め、後半の海への進出も期待されている一味である。
その中でブルックは、つい先日拾われる形で仲間入りを果たした男だ。
船内へ入るとキッチンへ向かう。
入った途端にコックの男が振り返り、同時に小さな少年が笑顔でブルックを見た。
まず真っ先に薄い色の金髪の少年が手招きをする。
彼の名はキリという。
元来の好奇心の強さが故か、動く骸骨という不思議な存在の彼に懐いていたようだ。
「ブルック！　早く早く！」
「おはようございますキリさん。どうかしたんですか？」
呼ばれるままにキッチンの中へ入る。
キリはすぐにオーブンの前へ移動した。ブルックも興味を持ってそちらへ向かうが、別の作業をしていたコックに声をかけられ、そちらへ顔を向ける。

「ようブルック。今日もずいぶんうるさかったな。もう少し別の曲はないのか？」
「朝起きるにはこれが一番です。パッチリ目が覚めますからね。といっても私の場合、開く目がないんですけどー！　ヨホホホホッ！」
「やれやれ……」
少し呆れた顔で苦笑し、コックは作業に戻る。
従ってブルックはキリが見ているオーブンに目を向けて、腰を曲げて覗き込んだ。
「もうすぐ焼きあがるぞ」
「あっ。これは……」
しっかりとオーブンミトンを手につけて、キリがオーブンを開ける。
中で焼かれていたのは小麦色に光るパンだ。丸い形のパンがずらりと並んでいて、どうやら彼が作ったらしい。鼻もないのに一気に香った匂いに気分を良くする。
ブルックは興味津々にその様子を見つめており、キリが運ぶパンに目を奪われていた。
ミトンを外して素手になり、キリがパンを一つ取る。
それをブルックの顔の前で持ち、悪戯をするように楽しげな笑顔を見せた。
「見てろよ……」
ぐっと指先に力を入れて、丸いパンを二つに割った。
ほわっと広がる湯気と香り。柔らかそうな質感と断面が目に飛び込んでくる。
間近で見ていたブルックは思わず仰け反り、頬を両手で挟んで驚きを表現していた。見た目は骸骨であっても食欲はあるようで涎すら垂らしそうな顔つきだ。
そんな彼の様子にキリは嬉しそうに笑い、長身である彼を見上げる。
「うわ～おいしそう！　これキリさんが作ったんですか？」
「そうだよ。これだけは一人前だって認めてもらったからね」

「いや本当においしそうです。私我慢できなくなっちゃいますよ！」
「そう？　じゃあ半分だけな」
「え？　いいんですか？」
そう言ってキリが二つに割った片方を差し出した。
驚くブルックが咄嗟に受け取った時、呆れた顔でコックが振り返る。
「おい、勝手に決めんなよ」
「別にいいじゃん。一個だけ」
「仕方ねぇな……他の連中にはバレんなよ」
「やった」
「ありがとうございますフラノさん。では早速」
苦笑しながらではあったが認められて、顔を見合わせた二人は同時に大口を開ける。そして思い切り焼きたてのパンに噛みついた。
ふわりとした感触。香しい匂い。
ブルックは瞬間的にピンと背筋を伸ばして、キリは上出来だと口元を緩めた。
「うんまぁ～い！　これ、すごくおいしいですよキリさん！」
「へへっ、そうだろ？　これだけはフラノにだって負けないね」
「何言ってやがる。教えてやったのはおれだろうが」
コックの声も気にせず、二人はにこにこ笑いながらパンを食べ、その速度は速く、最初の一口からほど経たずに食べ終えてしまう。
咀嚼している最中だったがタイミングを見計らってコックが声をかけた。
「おら、つまみ食いが済んだら働け。スープ出来上がってんぞ。そろそろあいつら来るからな」
「う～い」
「ブルック、お前も手伝え。仕事なら山ほどあるぞ」
「ヨホホ、もちろんです。拾ってもらった恩返しにしっかりお手伝いしますよ」
コックに言われてキリとブルックが慌ただしく動き始めた。

船の乗組員は多い。食事の準備はいつも大変で、いつもコックとキリだけでこなしているのだがまるで戦場のよう。よく食べ、よく騒ぐ仲間たちのため、あちらこちらを走りながらいくつもの料理を盛り付け、酒を出し、食事の準備を急ぐ。
キリが完成したスープを皿に注いでいた時だ。
思い出したように顔を上げたコックが彼へ目を向ける。
「そういや船長を起こさねぇとな。キリ、行ってこい」
「え～またおれ？　朝はいっつも機嫌悪いんだぞ」
「お前しか部屋に入れねぇんだから仕方ねぇだろ。殺されねぇから大丈夫だ」
「毎回毎回めんどくさいなぁ～。いい加減ビロードも自分で起きればいいのに」
「そりゃ本人に直接言ってやれ」
作業を離れてキリがキッチンを離れる。その顔は決して嬉しそうではなく、ぶつぶつと文句を言いながらではあったが、無視しようという考えはないようだ。
廊下へ出るとすれ違うようにして仲間たちがやってきた。
皆大人でキリより年上。一味で最も幼いキリを見ると表情は緩む。
「ようキリ。お勤めご苦労さん」
「またビロードのとこか？」
「そ。なぁ、船長室の扉ぶっ壊しとくってのだめなのかな？」
「あっはっは！　そりゃいい考えだ！」
「でもそれができるとすりゃお前だけだよ。おれたちじゃ本気で殺されかねねぇからな」
「ちぇっ。いい考えだと思ったのに」
へらへらと見送る仲間たちを置いてキリが移動する。
一度甲板へ出て、一段高い場所にある船長室へ向かう。
扉は固く閉ざされていて、いつも鍵までかけられている。日中ならばいざ知らず、夜間は常に閉ざされていた。それは船長の警戒心の高さが故と語られている。
本来ならば鍵をかけられた扉を開けることはできず、中に入ること

はできない。しかしこの船に居る乗組員でキリだけが鍵を開けずに室内へ侵入できる。
一味に仲間入りしてからしばらくして手に入れた、悪魔の実の能力を使うのである。
ペラペラの実の力で、全身が紙のように薄っぺらく変身した。
その状態で器用に動き、扉の隙間から室内へ侵入する。これで大抵の狭い場所へ侵入できるのが彼の特技であり、仲間たちに認められている力であり、重宝される理由であった。
部屋に入ると体の厚みが元に戻る。
振り返って溜息をつく。扉の前には宝箱やテーブルといった重そうな物が山積みにされていた。
これでは他の人間が入れる訳がない。
当然、彼の寝首を掻こうという人間も入ってこれないわけだ。
唯一我が物顔で侵入できるキリがベッドへ近付く。
一人の男が眠っていた。いびきを掻かず静かに、死んだように動かない。
脱ぎ捨てられたコートを拾って、眠りこける彼へ歩み寄る。
その刹那、唐突に体が反転して腕が伸ばされる。
気付けば銃を突きつけられていて、眉間に触れるか触れないかという位置に銃口がある。引き金にはすでに指がかけられており、いつでも発砲できる状態。
光を灯さない瞳がキリに向けられたが、彼は呆れた顔で平然としていた。
「朝だぞ、ビロード。早く起きろよ」
一切動じることなくそう告げれば、ゆっくり瞬きを数度。やっと目が覚めたようで何も言わずに銃を下ろす。そして頭に手をやると乱暴に髪を掻いた。
反射的な行動はいつものこと。もうすっかり慣れてしまった。
こうしていつも彼を起こしているキリは、拾ったコートを彼の体へ投げつける。
「あぁ……そうか」

「いい加減何とかしてくれよなー。自分で起きるか、扉開けとくとかさー。いっつもおれが起こさなきゃなんないんだぜ？」
「頭が痛ぇな……飲みすぎた」
「聞けよ」
頭を抱えて動こうとしない船長、ビロードに溜息をついて、キリは面倒そうにしながらも世話を焼き始めた。これが彼の仕事の一つなのである。
船の上での雑用全般。何もかもを学習中の子供。
子供でありながら一端の海賊であり、自身の役目が船の上にある。
この海賊団の一船員であることが彼の誇りで、全てでもある。
からかわれながらも生意気に仲間たちと肩を並べ、共に広い海を航海する。
そんな日常が彼にとっての当たり前であった。

3

魔の三角地帯（フロリアン・トライアングル）に迷い込んで数日が経っていた。
簡単に航海できる海域ではないと聞いていたが、不規則に変わる波と星を読ませない深い霧に阻まれて、外へ出られるか否かは運次第。彼らも航海が長引くだろうと判断していた。
食料の問題もある。このままどこにも到達できなければ焦りが増していく一方だろう。
そんな状況下で、唐突に気候が変わろうとしていた。
波が荒れ出し、風が強くなり、雨が降り始める。
どうやら嵐が来るようだ。
「シケてきやがったな」
「フロリアン・トライアングルは気候が安定してんじゃねぇのか？」
「ここはグランドラインだぞ。これくらいのことは当たり前に起こる。どこに居たって不思議なことじゃねぇのさ。おいキリ、中に入ってろ。またへばんぞ」
甲板で操船の手伝いをしていたキリは、仲間の一人に声をかけられ

て振り向いた。
ペラペラの実を食べて全身紙人間となった彼が苦手とするのは水。雨は当然、風呂ですら一人で入れない。体が濡れると力が抜けてしまい、簡単に溺れてしまうからだ。
最初はぽつぽつと降り始めた雨も、風に乗せられて徐々に勢いを増そうとしている。
深い霧に包まれているとはいえ、空模様を見たキリは慌てて駆け出した。
「あーもうっ、雨って嫌いだな～。おれ船の中に居るからあとよろしくっ」
「おーそうしろ。邪魔にならなくて一安心だ。ブルック、お前あいつと一緒に居てやってくれ。一人にしとくとぶーたれて後がうるせーからな」
「わかりました。では私も少し休ませてもらいましょうか」
同じく操船を手伝っていたブルックが移動し、二人で船内へ入る。
その間にも雨の勢いが増し、波が荒れ狂っていた。
途端に船は大きく揺れ始めて、そんな状態でも霧は一切薄まることはなく、周囲の視界はさらに悪くなる一方。船上の海賊たちは顔をしかめた。
この海域で敵に出くわすことなどないと思うが、普段ならば危険な状況だ。
荒波を越えるために帆をたたみ、操船は先程以上に慌ただしくなる。
嵐の中へ突入してから、しばらく経った頃だった。
突然船長室から出てきたビロードが甲板へ立つ。
強く吹き付ける風や雨も一切気にせず、酒瓶を傾けながら海を睨む彼に船員は首をかしげる。
「ビロード、どうかしたか？」
「確かに妙な霧は消えてねぇが、これくらいの嵐なら今まで何度も――」
「気付かねぇか？」

彼の真剣な声に近くに居た男が口を噤む。
ビロードの目は何かを見ていた。
「さっきからずっとおかしな感覚があった。この嵐が来てからそれが急に強まったんだよ。こいつが来るのを待ってやがったな」
「どういう意味だ……？」
「何かが近付いてるってのか？　まさか敵襲――」
「明かりが見えたぞ！　船だッ！」
その時、メインマストの上から周囲を警戒していた一人の男が叫ぶ。
海に一隻の船が見えた。
一瞬にして緊張が甲板を駆け巡り、顔つきを変えた男たちがそちらの方向へ目を向ける。
「数は？　旗を確認しろ！」
「一つだけだが、あれは……小舟？　いや、っていうよりイカダじゃないのか」
「この嵐だぞ。何考えてやがるんだ……」
「しかもフロリアン・トライアングルでだ。明らかに普通じゃねぇな」
警戒は時間が経つにつれ増していき、自然とビロードへ注目が集まる。
「船長！」
「ビロード、どうする？」
「戦闘準備だ。急げ」
「戦闘？　襲うのか？」
「バカ言え。襲われてんのはおれらだよ」
ビロードの言葉は気になったが命令は出された。
男たちは声を張り上げながら行動し始め、甲板の上が一層騒がしくなる。
「戦闘準備だ！　ありったけの武器を持ってこい！」
「船長、砲撃は？」
「まだ待て。とりあえず話を聞くとしよう」

「砲撃は準備だけにしろ！　急げよ野郎どもォ！」
雄々しい声が豪雨の中でも広く伝わる。それは船内にも聞こえたようだ。
様子の変化に気付いたキリとブルックは甲板の方向へ目を向ける。しかしキッチンに居た彼らはその場所を確認することができず、首をかしげるばかりだった。
「なんだ？」
「何かあったんでしょうか」
二人が知らぬ場所で、小さな船が接近した。
一人の男がビロード海賊団の船へ乗り込んでくる。
４ｍを超える巨体を持ち、筋肉が大きく隆起した強靭な肉体で、無手ではあるが醸し出される雰囲気は明らかに危険。戦闘のために乗り込んできたとしか思えない。
その男、上着の前を開いて大きな筋肉を窺わせ、鉄仮面で顔を隠す奇妙な外見だった。
警戒する男たちが武器を構える中、ビロードが先頭に立った。
酒瓶を傾けながら冷徹な目を見せており、油断しているような風体とは裏腹に、相手へも伝わるほどの奇妙な迫力がある。しかし鉄仮面の男が怯えた様子はない。
「挨拶もなしに乗り込んできた無礼な客人に質問しよう。何の用で来られたのかな？」
穏やかな声で語り掛けるビロードに対して、鉄仮面の男は反応しない。
「助けが必要だというのならば考えよう。だが仮に我々への攻撃を考えている場合、ただで帰すことはできないと考えてほしい――」
言い終える前に鉄仮面の男が動いた。
何も言わずビロードを殴りつけ、酒瓶が割れて、彼の体は吹き飛んだ。凄まじい勢いで船体に激突すると一部が壊れ、甲板に緊張が走る。
あまりにも速い一撃。しかも突然の攻撃だ。
咄嗟の判断で全員が身構え、敵に武器を向ける。

それを止めたのがビロードの声だ。
「待て」
攻撃を受けたとは思えないほど冷静な声。
壊れた壁の破片を蹴りつつ、ビロードが出てくる。
様子はまるで変わらない。冷静で冷淡、つまらなそうな顔で鉄仮面の男を見ていた。
「ふむ……なるほど。そのつもりで来たわけか」
彼の言葉で仲間たちの顔つきが変わる。
戦意はますます高まっていった。
「では諸君。殺せ」
待っていたと言わんばかりに男たちが一斉に動き出す。
全員が武器を掲げて鉄仮面の男へ殺到し、同時に攻撃を行った。
鉄仮面の男はその場を動かない。
雄叫びと大きな物音を聞いて、キッチンに居たキリとブルックが不思議そうにしている。その奥で作業をしていたらしいコックは厳しい表情だ。
外で何かが起こっているのは間違いない。
気になる二人は確認せずにはいられない心境となっていたようだ。
「やっぱり騒がしいな……」
「この天候じゃ遊んでるわけじゃないでしょうしねー」
「よし。見てくる」
「おい待て、キリ！」
思わず部屋を出ようとしたキリをコックが呼び止める。仕方なく足を止めて振り向いた。
「外は雨が降ってる。何が起こってるにせよお前がどうにかできるもんじゃねぇだろ」
「なんだよそれ。おれにだってできることはあるよ」
「いいからここに居ろ」
「いやだ。おれは海賊だ。自分が何をするかくらい自分で決める」
コックの言葉に尚更その気になったのか、キリは飛び出すように部屋を出た。

慌ててブルックが追いかけ、さらにコックが見逃せずに慌てる。
「あ、ちょっとキリさん」
「戻れキリ！　外には出るな！」
甲板を目指して急いで走った。
後ろから怒鳴るコックが追ってくるものの今更怯えはしない。反抗的な態度でキリは頑として足を止めず、一心不乱に外を目指す。
そして扉を荒々しく開け、甲板へ到着した。
真っ先に目に飛び込んだのは宙を飛ぶ仲間の姿だった。
体が異様にでかい、鉄仮面の男に殴られ、体が歪んだ状態でキリのすぐ近くに落下する。
思考が停止し、訳も分からずじっとその体を見つめていた。
ピクリとも動かない。目は開かれたまま、瞬き一つさえしない。何も語らず、さっきまでいつも通り喋っていた男が奇妙に固まっている。
まさか、と思う間に別の男が地面を転がった。
大きな音を立てて床に激突して、途端に動かなくなる。
外傷はおそらく殴られたそれ。ただ、素手で殴ったとは思えないほど人体がひしゃげていた。
鉄仮面の男がでかい図体を振り回して暴れていた。
なぜか体の一部だけが漆黒に染まり、振るわれる刃を受け止め、男たちを殴り飛ばす。
人が木の葉のように空を舞い、脱力したせいでぞくりとするような様子で落下してくる。中にはあまりのパンチ力に皮膚を破かれ、頭や体の一部が潰れている者も居た。
一人、また一人と動かなくなっていく。
体の一部を破壊されて、治療する暇もなくこの世を去っていく。
まるで理解できなかった。見ていて思考が停止していた。
立ち尽くすキリはブルックやコックが追いつく頃になってようやく理解する。仲間を殺す敵が自分たちの船に居る。あれを殺さなければと判断した。
「お前ッ……何やってんだァ!!」

「待て！　やめろキリ！」
コックが慌てて彼を抱きとめた。ブルックも目の前の光景に動揺しており、立ち尽くしている。
過激な事件を引き起こし、戦闘には定評のあるビロード海賊団が一方的にやられていた。
異常事態だと咄嗟に察して、コックは血相を変える。
状況が有利か不利か。どちらであれ、とにかくキリを行かせてはいけない。横殴りの雨がすでに彼の体を濡らしていた。ただでさえ弱いのに、体が濡れた状態では逃げることすらできなくなる。
慌てたコックは必死にキリの体を押さえつける。
暴れる彼は敵に向かおうとして、こちらも必死に腕の中から抜け出そうとしていた。
「離せよフラノッ！　あいつ、おれたちの仲間を殺しやがった……！」
「バカ言え！　お前にどうにかできる相手か！」
「関係ねぇよ！　あいつをぶっ殺してやる!!」
「落ち着け！　お前もおれたちの仲間なら冷静になれ！　真正面から戦って勝てる相手じゃねぇって見りゃわかるだろうが！」
怒鳴り合いながらも必死に彼を止め、もがくキリは駆け出そうとする。
戸惑うブルックはどうすればいいかわからず動けない。
そうしているとビロードが現れた。
ふらりと歩み寄ってきた彼は頭から血を流しており、五体満足だが様子がおかしい。
少しとはいえ鉄仮面の男との戦闘を経験しただろうその姿を見て、三人はぞくりと走る悪寒に顔を歪めた。目を輝かせて笑うビロードは驚くほど恐ろしかったのである。
彼は元々、過激な戦法を用いて名を上げた海賊だった。
大砲や爆弾の扱いに長け、自作の火薬を用い、至る所を爆破して敵の動揺を生み出し、更なる爆発で全てを消し去る。そうして暴れ続けた結果グランドラインにもその名を広めた。

今日のように雨が降る日は火薬が使えない。おまけにここが陸地ならともかく己の船。
右手に持った剣も虚しいばかりで、本領を発揮できない状態で仲間たちが次々殺されていた。
ビロードが笑う。普段は押し殺していた凶暴性を露わにした顔で。
言葉を失った三人は動きを止めたまま。蛇に睨まれた蛙の如く動けない。
その間にも仲間たちの悲鳴が聞こえてきて、ビロードの笑い声は大きくなった。
「クククッ……こりゃあ止めきれんな。並外れた武装色の使い手だ。あの野郎硬くてちっとも切れやしねぇ。雨さえなきゃ何としてでも爆殺してやったんだがなぁ」
「ビロード、なに笑ってんだよ……みんなが殺されてるんだぞ!?」
「ああ。全員死ぬ。誰も助からん」
平然と言ったビロードの一言にキリの顔色が変わった。血の気が引いて青くなっている。
ビロードは変わらぬ声色で告げる。
どうやら彼だけは先に覚悟を決めていたようだった。
「なぁに、海賊なんてヤクザな生き方してんだ。いつどこで死のうと不思議じゃねぇ。ここに居るのはそういう覚悟ができてる奴だけよ」
「だ、だけど……」
「だがお前は違うなぁ、キリ。お前はまだガキ過ぎた」
仲間たちの悲鳴が何度となく響く状況下、ビロードはキリの目を、彼だけを見据える。
「命を捨てる覚悟ができてねぇ奴を連れていく気はねぇ。ブルック、こいつを連れて逃げろ」
たった一言で心臓を握り潰されるような衝撃を受けた。
目を見開いたキリは動揺し、コックが腕を離しても動けず、ビロードの前で立ち尽くす。
「なっ、なんだよそれ!?　おれだって覚悟くらいできてる！　いつ

死んだって惜しくねぇ！」
「ビロード船長、それは……」
「お前は客人だ。命張る理由なんかねぇだろう」
「話聞けよ！　おれだって海賊だ！　ビロード海賊団の一人だ！
なんでおれだけ逃げなきゃいけねぇんだよ！　おれも最後まで戦う！」
「船の後ろに小舟が吊ってある。使え」
「ビロードッ!!」
「いいか、キリ」
落ち着いた声を聞いて我に返る。
その瞬間、キリは自分でもわからない内に涙を流した。
「お前は死ぬには早過ぎる。覚悟を決められるほど世界を知らねぇだろうよ」
「海賊は自由だって言ったのはお前だろッ!!」
「そうさ。だがこの船のクルーである限り、船長命令は絶対だ。おれの命令には従え」
必死に叫ぶキリから目を離して、ビロードはブルックを見た。
仲間たちの声は着実に減っている。悠長にしている暇はなさそうだ。
静かに佇むブルックはとても寂しげで、言葉にできない何かを飲み込んでいたらしい。
「こいつだけでいい。後は奇跡とやらを信じるわ」
「いいんですか……そんなことをすれば、生き残れたとしても彼は」
「なぁに、どうにかなるだろ。だから奇跡ってやつしか頼れるものがねぇ」
言い終えるとすぐにビロードは背を向けた。
敵意、或いは殺意が爆発的に増す。鉄仮面の男へ向けられるそれは彼の本来の攻撃性で、檻から解き放たれた獣のようにコントロールしようとはせずただぶつける。
「クカカッ。こんなにおれの部下を殺しやがって。こいつをほったらかしておれたちだけ逃げようなんざ許されねぇよなぁ。心配する

なよ。こいつはおれたちが連れてってやる」
一歩目を踏み出した時、何も言わずにコックが後へ続いた。
ここから先は道を違える。そう伝えるかのようにキリを置いて。
「死出の旅路だ。ガキに背負わせるにゃまだ早えだろうよ」
「……わかりました！　私の命に代えても、キリさんだけは必ず！」
「待てよ！　ビロード!!」
覚悟を決めた様子のブルックがキリを抱きかかえた。そのまま勢いをつけて駆け出し、船の後部を目指して急ぐ。必死に手を伸ばすが、キリが誰かを止められることはなかった。
笑うビロードの隣でコックが呟く。
その顔には微塵の恐怖心も浮かんでいない。
「船内には火薬が山ほどありますぜ」
「クカカカカッ。燃やせィ」
この雨では外で使うのは不可能だろう。
頷いたコックは納得し、一人船内へ向かうため歩き出した。
船の後部へ到達したブルックは目標の小舟を見つけ、素早くキリを放り込む。
雨に濡れて体の力が抜けている。動作が緩慢だ。今なら彼の抵抗では逃げられず、このまま海へ逃がすことができるはず。ブルックは急いでロープで吊られた小舟を動かす。
キリを乗せた小舟が海の真上へ移動した時、ブルックはまだ帆船に残っていた。
「ブルック！　やめてくれよ!?　おれは死ぬのだって怖くねぇんだ！　覚悟だってできてる！　あいつらと一緒に居させてくれ！」
「いいえ……いいえ！　ビロード船長の命令です！　あなたは生きなければなりません！」
「なんで……」
「いいですかキリさんっ。生きることは戦いです!!」
別れるその前に、ブルックが強くキリの肩を掴んだ。
感情のままに顔を歪める彼を見つめて必死に言葉を伝えようとした。

「彼らはあなたに全てを託した。あなたが生きてさえいればビロード海賊団は死んでいない。あなたが生き残ることに大きな意味があるんです！　だから船長はあなたを選んだ！」
「そんなの……一人で生き残ったって……」
「ご心配なく。ビロード船長は私が死んでも守ります。再び出会った時、もう一度一緒に海賊をやりましょう。私も果たさねばならない約束がありますから」
一瞬目を伏せたキリだが、投げかけられた言葉に違和感を覚えて目を開いた。
その瞬間、船の真ん中で大爆発が起こり、船体が大きく揺れる。
それをきっかけとしてブルックは杖に仕込んだ剣を抜き、ロープを切る。支えを失った小舟は大荒れの海へ落ちていき、そこに乗せられたキリは一瞬にして遠ざかった。
「ご武運をッ！」
「ブルック……!?」
海面に着水。頭から水をかぶるが奇跡的に沈まなかったようだ。
荒れる波の上を無理やり走らされる小舟は、いつ転覆してもおかしくない様子で動き回り、不思議と彼を逃がすかのようにみるみる船から遠ざけられていく。
キリは必死に手を伸ばすが、やはり何も変わらず。
彼らの名前を呼んでも返事は返ってこなかった。
船が幾度となく爆発している。船内にあった大量の火薬が、自分もろとも敵を吹き飛ばそうと暴れており、度重なる巨大な爆発が一瞬にして船体を破壊していく。
その姿がどうなるかを見届けたいのに、深い霧が邪魔をして最後まで見させようとしない。
荒波と暴風に運ばれて、彼の乗る小舟はどんどん遠くへ離れていった。
キリは叫んだ。もはや考えも何もなく本能が赴くままに。
その声すらも嵐の中に飲み込まれ、誰に届くこともなく掻き消されていく。

その後のことは覚えていない。
様々な要因が重なり、動くこととさえできなくなった彼の姿は小舟の上にあった。
少なくとも、激しい嵐の中、何の変哲もない小舟が転覆することなく乗り切ったのは事実だ。

4

どれほどの時間が経ったのかはわからない。
朝になった気もするし、夜は過ぎ去った気もする。正確に言えばどちらも正解なのだが、もはや彼にはそれを理解しようという気力も、理解した上で生きようという気もなかった。
小舟の上で横たわったキリは、生気のない目を嫌味ったらしいほど青い空へ向けていた。
感情を感じさせない姿は人形のようですらあった。
彼らとの生活が全てだった。海賊として生きて、海賊として死ぬ。求めていたのはそれだけであって金銀財宝や名声にも興味がない。ただ海賊で在り続けられれば幸せだった。
それがある日突然、奪われた。何が起きたかを理解することもできず、ただ一方的に。
かつて両親を失った時か、或いはそれ以上の衝撃を受けて。
ピクリとも動かない彼はすでに生きる意味を見失っていたようだ。
元々のきっかけは両親の死だったように思う。
ひょんなことから家族を失い、一人になってしまった。
半ば自暴自棄になって海賊船へ潜り込み、故郷を離れたのが最初の航海で、それからあれよあれよという間に海賊に心を奪われ、船長ビロードに憧れを抱いて生きることになった。
全てを失うのはこれで二度目だが、慣れはない。むしろ今回は前回よりもきつい。
最後のビロードの決断には同意することができずに、なぜ死んではいけなかったのか。そればかりを考えては思考が消えていき、考える

ことすらやめてしまう。
もういい。終わりにしようと脱力する。
今更、必死に生きてまで欲しいものなどない。それはすでに手放してしまった。
もう帰ってくることはないのだと彼は目を閉じる。
彼は気付いていなかっただろうが、飲まず食わずですでに数日が経っていた。
ここが魔の三角地帯（フロリアン・トライアングル）かどうかすらわからない。
紙の体が大量の水分を吸い込んだためなのか、不思議といまだに死ぬことができず、流石に心身ともに弱り切っているとはいえまだ命を繋ぎとめている。
それが本人の望みとは知らず、彼の体は生きようとしていたのかもしれない。
絶望に打ちひしがれ、キリが目を閉じてどれほど経った後だろうか。
ふと、彼が目を開ける時があった。
現在地がどこなのかはわからず、少なくとも空が青いままだと判断した際。
いつの間にか小舟の上に一人の男が立っていた。
今にも死にそうな少年を前にして笑っているらしい。キリは霞む視界にその存在を捉えた。
「ころして……くれ……」
助けてくれと言う前に、無意識の内にそう言っていた。それはおそらく聞かされた人間に少なからず驚きを与えるものだっただろう。その誰かは一瞬、笑みを消した。
その後にやりと口の端を上げて、やけに上機嫌な様子で呟く。
「嫌だ」
キリはすぐに目を閉じた。
何も思わない。何も感じない。まだ死ねないのだという事実だけ受け入れることができた。
意識は途切れて、しかし特徴的な笑い声は、意識を失った彼の耳に

も届いていた。

《Ｐ．Ｓ．　１３　ｙｅａｒｓ　ｏｌｄ》

１

「政府の目が届かない場所っていうのは、この世に実在してるものだよ」

軽快な口調でそう言った少年を、ニコ・ロビンは警戒を込めた目で見つめていた。

暗闇に包まれた細い路地の中。身を隠して移動していた自分を目標としていたらしく、音もなく現れた存在に道を塞がれ、かといって攻撃の意思は皆無で、彼女は困惑する。

黒いコートを身に着け、フードを深くかぶり、口元だけが確認できる人物。おそらく少年だろうとは背丈の小ささと声色で判断できたのだ。謎が多く、見るからに怪しい。

彼女は人の目を逃れる日陰の世界で生きてきた。

警戒心は常人の何倍も強く、大きく、簡単には心を許せないと表情が険しくなる。

一方の少年は、少なくとも目で確認できる口元は柔らかい笑みを浮かべていた。

やけに楽しげな明るい声は強い警戒心をすり抜けようとするかの如く、思いのほか近い距離感でロビンへ語り掛けてくる。

「会ってほしい人が居るんだ。上手くいけば、今よりずっと過ごしやすい毎日が手に入る」

「信用できないわね……あなた、何者？」

「さあ。それを知るためにはまず来てもらうしかない。簡単に自分のことを話せないのはお互いさまでしょ？」

その物言いを聞いて油断できない相手だと判断した。

ロビンは自分を抱きしめるように左腕を掴む。

「色々知っているみたいね。私のことを調べたの？」

「まぁね。探すのに苦労したよ。隠れるのが上手だからさ」

やれやれと首を振って溜息をついて、彼は尚も明るい声で話す。

「だけど、かくれんぼは得意でね。最近は特に隠れるのも見つける

のも上手くなったんだ。別に今から逃げてもいいよ？　また探すだけだし」
「そう……やめておくわ。本当に見つけられてしまいそう」
「じゃあ話が早い。早速さっきの質問に対する答えが欲しいんだけど」
「だけど私がそう簡単にあなたを信用しないことも、理解してもらえるのよね？」
警戒しているのを隠そうともしない目つきに、少年はあっさり頷いた。
「うん。そうじゃないとここまで逃げ続けることはできないだろうしね」
「ならどうするの？　このままじゃいつまでも話が終わらないけれど」
「そこはほら、よく考えてもらうしかないかな。確かに信用はできないかもしれない。でもどのみち太陽の下で生きられるような身分じゃないでしょ？」
彼の言葉にロビンが口を閉ざした。
そんなことはわかっている。今更堂々と往来を歩くことなどできない人生だ。
やはり調べられていることが伝わって、彼への不安や、同時に興味も湧いてきた。
「ボクらは同じ穴の狢。誰かに見られることを恐れるなら深い闇に隠れるしかない。ボクなら君を連れていけるよ？　政府の目が届かない、深い深い闇の中へ」
「その代わり抜け出すことはできなさそうね……」
「役目を果たせば生き残ることはできるさ。代わりに裏切った場合は誰も生き残れない。ボクの目を欺ければ話は別かもしれないけど」
一切の恐怖心を感じさせない意気揚々とした声。ただの子供ではない。むしろ子供らしくない、確かな危険性を感じさせる人物だ。
そこらの大人では彼ほどの恐ろしさを感じないだろう。
逃げることは諦め、ロビンが小さく嘆息した。

「この話を断ったところで、どうせ同じような仕事しかできないんだ。だったら当面の間は安全が保障されて、大金も手に入る仕事を選んだ方がいいでしょ？」
「当面の間は、ね……」
「役目を果たすまでは安全だよ。君には特別な力がある」
「それって悪魔の実の能力？　それとも、別の何かかしら」
ロビンの問いに少年の口元は大きな弧を描いた。
言っておいた方がいい、との判断だろう。隠すことなく正直に言った。
「特殊な文字を読める人間が必要だ。世界的に見ても読める人間なんて滅多に居ない」
「やっぱりそういうこと」
「興味あるかな？　当面の目標はそいつを手に入れることになる」
問われたロビンは口を噤んで考える。
確かに、それは彼女も欲していた代物。できることならば一つでも多く手に入れたい。しかし自由に動けない現状では捜索も難しく、生きていくので手一杯。
信用はできずとも目的は同じのようだった。
「君は絶対に連れていかなきゃならない。だけどできれば傷つけたくはないし、脅しても効果はなさそうだよね。自発的に来てほしいところなんだけど、どうかな？」
「一つ聞かせて。あなたの背後に居るのは誰？」
「それは秘密。ボクらが作ろうとしているのは全てが謎に包まれた秘密結社。だからこそ上手く機能すればボクらの存在は誰にも気取られなくなる。もう逃げ続ける必要はないよ」
ロビンはしばし口を閉ざし、考えた。
「上手くいくの？」
「もちろん。そのためにボクが居る。君にも協力してもらうけどね」
考えてはみても結局のところ、選択肢は一つしかないのだ。
生きるためには何でもしてきた。そうしなければ生きられなかっ

たからだ。
他の人と同じようには生きられない。普通なんて無縁な人生。
生きるためには、彼についていくしかない。
ロビンの顔つきが変わったことを理解して、少年はフードの下でにこりと微笑む。
長くなるだろう旅の仲間が一人増えた瞬間であった。

2

砂漠の国とは思えないほど冷たい空気がする部屋へ一歩を踏み入れた時、ロビンは言葉にできない息苦しさを感じ、その迫力を醸し出す背を確認する。
豪勢な机と椅子があり、背を向けて座る男が居た。
前へ回り込まずとも能力を使えば顔を確認できるが、なぜかそれを躊躇ってしまうような、下手なことをすれば命を失ってしまうという危機感がある。ロビンは能力の使用を控えた。
「お茶でも淹れようか。男所帯だから大したものはないけどね」
後から入ってきた少年が隣の部屋へ移動する。
遊びに来たかのような軽い足取りで、彼だけは緊張感がない。しかしそんな彼だからこそ居なくなってしまえば余計に空気が重くなった気がして、ロビンの顔色が変わる。
予想はしていたがとんでもない相手に勧誘されたらしい。
尚も静かに待っていると、ようやく背を向けた男が口を開いて声を出した。
「ポーネグリフが読めるそうだな」
やはり狙いはそれ。先に聞いていた通りだ。
こういう手合いは嘘をつかない方がいい。特にこの初手を打つ場面では危険過ぎる。
慣れた様子でロビンは冷静に頷いた。
「ええ。読めるわ」
「そんな人材を探していた。決心はもうできたのか？」

「そうね……」
問いかけに対し、少し考えてから話す。
「ポーネグリフを見つけて、何をするの？　まずはそれを聞いておきたい」
「フッ。お前には副社長として表の顔になってもらわなければならない。教えておこう」
椅子が回ってその顔を確認することができた。
あまりにも有名な海賊。王下七武海の一人、サー・クロコダイル。
これは流石に予想しておらず、ロビンがわずかに冷や汗を掻き、動揺を隠しきることはできなかった。しかし気付いていながら敢えて指摘せずにクロコダイルが言う。
「この島にあるポーネグリフは、とある古代兵器の在処を記しているそうだ。そいつを手に入れることがおれの目的。この島のどこかにある」
「古代兵器……」
「流石に聞き覚えはあるようだな。話が早くて助かる」
クロコダイルは余裕を持って笑みを浮かべていた。
逆らえばどうなるかわからない。言葉を選ぶ必要があった。ロビンはこの一時に集中する。
「ガキの頃から逃亡生活を送っていたそうだな。協力すれば少なくともそんな生活とは無縁になるだろう。安心できる生活と大金をお前にくれてやろう」
「その代わりにポーネグリフに記された情報を渡せと？」
「悪い話じゃねぇはずだ。お前もポーネグリフを欲しがってる口だろう」
沈黙が生まれ、重苦しい空気が漂う。
断ることが許されない問答。とはいえ、一度足を踏み入れればどう転ぼうが危険である。何よりその男と手を組むことが死に直結するような危うさがあるのだ。
一度目を閉じて、決意を固めて、目を開いたロビンが毅然として言った。

それはまさにクロコダイルが求めていた答えである。
「わかったわ。あなたたちに協力する」
「ひとまずは感謝しよう、ニコ・ロビン。だが忘れるな。お前がおれたちの首根っこを掴んでいるのと同時に、おれたちもお前を始末することは簡単だとな」
「肝に銘じておくわ」
本当に心から信用することはできない。だが生きるためには必要だった。
ちょうど二人の会話が終わったタイミングで隣室から少年が戻る。
手にはお盆を乗せていて、その上には湯気を立たせるカップ。クロコダイルの下へは向かわず真っすぐロビンの下へやってきて腕を上げた。
「お茶が入ったよー。で、話はまとまった？」
「ああ。これでようやく始められる……」
背もたれに体重を預け、引き出しから紙を取り出したクロコダイルはそれを机の上に置く。
ロビンは少年が差し出すお盆に乗せられた一つだけのカップを受け取り、口元へ運んだ。どうやら自分は重宝されるようで、毒が入っていることは敢えて疑わない。
やはり予想は当たっていて、それはただの美味しい紅茶だった。
「メンバーを集めろ。リストにある名前は幹部として使う」
「リストにない奴を使うのはあり？」
「構わん。ただし情報の扱いには注意しろ。極秘で進める必要があるからな」
「うん、了解。その辺は上手くやるよ」
「組織の名はバロックワークス」
クロコダイルはにやりと笑い、二人を前にして好戦的な様子を醸し出した。
「国盗りを始める。いい働きを期待しているぞ」
組織の社長として、そう伝えた。
社長と言えば聞こえはいいがその実体は海賊。存在が知られれば

どうなることか。
不安がないと言えば嘘になるが、ロビンは冷静な表情を崩さず、静かに言葉を受け入れた。

3

強い日差しが照り付ける砂漠に囲まれた町。
ユバと名付けられたその町は、元は無人のオアシスだった場所に築かれ、旅人や商人が立ち寄る休息場所となるため開拓されたのである。
まだまだ発展途上とはいえ町としてかなり形になった。
数年前まではただのオアシスだったのだから、開拓団の努力が見られるというものだ。
ある日のことである。
開拓団の代表トトの息子、コーザが父の手伝いのため道を歩いている時だ。
角を曲がって突然現れた人物と接触しそうになり、慌てて避ける。すると相手だけが勝手に転んでしまって、背負っていた大きなリュックから荷物がぶちまけられた。
慌ただしく騒がしい様子にコーザは呆れ、同時に彼を心配した。
「いててて……」
「だ、大丈夫か？」
見れば自分と同年代くらいの少年だった。
背丈は小さく、髪の色は少しくすんだ金色。男だとは判断するが中性的な顔をしている。
彼はコーザの存在に気付くと飛び起き、慌てて頭を下げた。
「わっ、すみません！　気が付きませんでした！　お怪我はありませんか？」
「いや、別にいいけど……」
「うわっ、やばっ」
少年はその場でしゃがむとぶちまけた荷物を拾い始める。慌てる

姿にコーザは思わずぽかんとしてしまい、立ち尽くしていたが、自身もしゃがんで拾うのを手伝う。
様々な品物が転がっていて、その一つ一つがコーザに興味を持たせた。
いくつか拾うと少年と目が合い、ふと照れ笑いをする。
「あ、すみません……」
「すごい荷物だな。お前旅人なのか？」
「え～っと、行商人なんです。島から島を渡り歩いて、品物を売り歩いてまして」
にこやかな笑顔で言われた言葉にコーザは目を大きくした。
「行商人？　だってお前ガキじゃないか」
「ガキでも旅はできますよ。そうだ、何か買いませんか？　大した物はありませんけど、他の島で仕入れた物が色々あるんです。例えばそうだなぁ……」
拾う最中に周囲を見回し、目を輝かせてある物を手に取った。
ガラス製の入れ物で中には白い粉が入っている。それを目線と同じ高さまで上げ、不思議そうにするコーザが顔を近付ける。
「これはウォーターセブンで作られた塩なんですけど、ミネラルが豊富で、普通の塩より味わい深いんです。大匙一杯でコクが増すらしいですよ」
「へぇ……って、いきなり商売かよ」
「あぁっ、すいません。その前に集めなきゃですね」
ハッとした様子で少年が再び荷物を拾い始める。
コーザは心底不思議そうに彼を見ていた。
島の外から来たというだけでなく、なぜか気になる人物だったようだ。彼の顔や挙動をじっと見つめて、興味を持っているだろう様子を隠そうともしない。
やがて荷物を集め終え、金髪の少年が丁寧に巨大なリュックの中へ詰め込んだ。
よし、と呟いて顔を上げると、彼は改めてコーザへ頭を下げる。
「ありがとうございました。迷惑かけてすみません」

「あぁ、うん。お前さ、名前は？」
気になって質問してみた。
町が軌道に乗ってきたことで子供も増えてきたとはいえ人数は少ない。特に同年代だろう少年の存在は稀有であり、興味を持つのは仕方なかったと言える。
好奇心を表情にまで表すコーザの問いに、少年はにこやかな笑みを返した。
「キリっていいます。初めまして」
驚くほど敵意を感じない姿に、コーザは、仲良くなれそうだとにんまり笑う。

《P．S．　１４　ｙｅａｒｓ　ｏｌｄ》

１

じりじりと肌を焦がすような太陽の光に耐えるため、厚い服を身に着け、頭にも布をかぶって全身の肌を隠して、キリはＦ―ワニの背から降りた。

岩陰の向こうを見ればオアシス。ユバの町が見えていた。

少し休んでいるよう従順なＦ―ワニに告げ、歩き出した彼は自分の足でユバへ向かう。

背にはパンパンに膨らんだ大きなリュックを背負って、あらゆる品物が納められていた。

意識が切り替わって今やすっかり一人の行商人。

擬態するように自分自身の思考を塗り替え、一時任務のことを忘れるのも慣れている。今の彼は普段とは別人。誰が見ても純朴な少年に過ぎない。

誰が見ているかわからないから、一人であってもにこにこと微笑んでいた。

慣れた足取りで町へ入れば、町民が笑顔で手を上げながら迎え入れてくれる。

一年、何度となく通ったおかげで彼も身内の一人と認識されていた。

ここへ来るのはコーザという友達が居るため。

皆はそう思っている。

それでいい。彼自身もそう思うことに努めていた。

ユバへ来ればまず向かうのはコーザの家。キリの足取りは軽く、道行く人に挨拶しながら進む。

異変に気付いたのは目的地である家へ近付いた時だ。突然怒鳴り声が聞こえて、思わず足を止めたキリはコーザの家の前でしばし立ち止まる。

やがて扉を蹴破るようにして開き、中から荒々しい歩調でコーザが出てきた。

「もう十分待った！　おれは行くぞ！　アルバーナに！」
「待てコーザ！　ダンスパウダーなど使ってはならん！」
「そうでもしなきゃ、ここも枯れるだけだろう！」
いつになく怒気を発する顔で、父親のトトへ叫んだ直後、前を見たコーザが足を止めた。
ぽかんとした顔のキリを見たことで冷静さを取り戻す。
舌打ちを一つ。表情を変えて再び歩き出したコーザは咄嗟にキリの腕を掴み、強引に引っ張ってその場から連れ出した。家の入口に立ったトトが叫ぶが足を止めない。
「おい、待つんだコーザ！　考え直せ！　雨は今に必ず降る！」
「そう言い続けてどれだけ経った！　もうユバは限界だ！」
「コーザッ！」
引っ張られるままに歩くキリは抵抗せずについていく。
コーザは町の端、砂漠との境界線まで移動し、そこでようやく彼の手を離した。
怒りが溜まっているのか、荒い呼吸を続け、しかし友人が傍に居るからなんとか落ち着こうと深呼吸を繰り返す。頭を抱えて、最後に大きく息を吐き、やっとコーザがキリを見た。
思えばこんな彼を見たのは初めてだろう。
落ち着かせようと笑みを絶やさず、優しく彼に語り掛ける。
「どうしたの？　何かあった？」
「ああ……ちょっとな」
「トトさん、怒ってたね。前来た時は仲良かったのに」
「色々状況が変わったんだ。お前が居ない間に」
コーザは建物の壁際に置かれた木箱を見つけ、そこへ腰かける。
まだ気持ちは落ち着かないようだ。相当の何かがあったのだろう。
知らぬ存ぜぬという顔をしていると砂漠を眺めながらコーザが語り出す。
「もうずいぶん雨が降ってないんだ。知ってるか？　エルマルもやばいらしい。ここら一帯だけじゃなくてアラバスタに雨が降らなくなってんのさ」

「雨が……」
「だからおれは国王に直訴しようと思う。ほんの少しでいい、人の手で雨を降らすことができるダンスパウダーって物があるんだ。それを使えば、雨季まで耐えられる」
「聞いたことはあるよ。そういう物があるって。でも」
「リスクがあるって言うんだろ？　わかってる。だが人の気持ちはそう簡単じゃねぇ」
そう言ってコーザは町を見回した。同じようにキリも辺りへ目を向ける。
言われてみれば確かに町民の元気がない。いつもと同じように過ごそうとして、それでも幾分気落ちした様子が窺える表情だった。キリには辛い顔を見せまいとしたのだろうが、少し離れた位置に居る彼らには気付かず、溜息をつく者も少なくない。
雨が降らない。砂漠の国ではそれが大きな苦痛になるのだ。
「雨が降らないことで町の人間は限界だ。ここで生きていこうってやつを繋ぎとめるにはどうしても雨が要る。だから、ほんの少しだけでいい……」
「そういえば、前より人が少なくなってるような」
「離れていっちまう奴も多いのさ。この町は見限られた」
コーザが俯いてしまう。少なからず傷ついていたに違いない。彼はこの町が、広大な砂漠の中で町と町を繋ぐ大切な場所になってほしいと努力していた。住人が離れてしまうことほど傷つく出来事はない。どうにかしたいと今でも思っている。
話を聞くキリはしかし、戸惑った様子でコーザが呟く。
ゆっくりと顔を上げ、決意した様子でコーザが呟く。
今はキリが居る。信頼する友達になら胸の内を明かすことができる。
彼の言葉は野心の如き自らの望みを明らかにした。
「この町はまだやり直せる。ユバはおれが絶対に死なせねぇ。何か一つ、小さくてもいい、何かきっかけがあれば立て直せるはずだ。そのきっかけがダンスパウダーだと思ってる」

「そうか……でも」
言い辛そうにするキリにようやく気付いて、コーザが彼を見た。
らしくない。いつもはぽわぽわした顔で気安く喋っているのに今は言葉を選んでいる。顔をしかめて視線を落とし、何かを隠そうとしているかのようだ。
おかしいと感じたコーザはすかさず尋ねる。
「どうした？　気になることでもあるのか」
「いや、そうなんだけど、さ」
「言ってみろよ。なんでもいい」
頷いた後、戸惑った顔でコーザの目を見てキリが言う。
「今回ボクがアルバーナに立ち寄った時は、雨が降ってたよ。ほんの数日前だ」
自信なさげな声で、だがはっきりと伝えられた。
その瞬間コーザは目を見開いて、言葉を失って沈黙する。
信じられない。何も考えられなくなって頭の中は真っ白になっていた。
「どういう、ことだ……？　それは、本当なのか」
「うん……間違いないよ」
「どうしてアルバーナに雨が降るんだ。ユバには降っちゃいなかった。もう何日、何週間、何か月も雨なんて降っていないぞ。それがどうして、王族が住む場所にだけ……」
呆然とするコーザが、徐々に怒りを大きくしていく。
気まずげに目を逸らしたキリを見てふらりと立ち上がる。
「まさか、ダンスパウダーを使ったってことはないよな。リスクがあるって言ってたよな。そのせいでこの国に雨が降らなくなったってことはあり得るのか？」
キリの肩を強く掴んでコーザが顔を寄せた。必死の形相で彼に問いかける。
「お前なら知ってるだろ。おれに色んな物見せてくれたよな？　お前にもらった物だってたくさんある。教えてくれ、ダンスパウダーのリスクって何なんだ」

「ダンスパウダーは……人工的に雲を成長させて、雨を降らすことができる。その代わり、他の場所で降るはずだった雨を奪うことになってしまう」
それを聞いてコーザの手が肩からするりと落ちた。
ふらつく足でなんとか木箱まで戻り、座った後、彼は愕然とした様子で俯いてしまう。それを見ていたキリは慌てた素振りで付け足すように言った。
「でも、あくまでも噂で、それが本当かどうかは――」
「いや……ありがとう。それだけわかってれば十分だ」
ふーっと深く息を吐いて顔を上げ、その時にはすでにコーザの目つきは変わっていた。
「あとは国王に聞く。一緒に行ってくれるか、アルバーナへ」
最小限に抑えながらも、怒りの念を感じてしまう声がキリへ問うた。
彼は笑みを消して、戸惑う表情で頷き、確認したコーザがきつく拳を握る。
ユバからアルバーナへはかなりの距離がある。移動の時間はかかってしまうだろう。キリが到着したばかりということもあって気を使ったが、彼は頷いてくれた。
真実を知りたい。国王に確かめよう。
幼少期に話したことがあるコブラの顔を思い浮かべながら、信じたいという想いの一方、ふつふつと湧き上がる怒りがある。今は考える余裕もなく、行動に移さねば気が済まなかった。

2

雨が降るアルバーナは昼間であろうと人気が少なくなっていた。
通りから人の姿が消え、いつしか慣れた様子で雨を避けようとしている光景がある。
そうなる程度にはこの町に雨が降っていたということなのだろう。他の町ではまず見られない、雨という存在が当たり前になっていた様

子だった。
とある宿屋の二階の一室で、キリは窓辺に立って外に目を向けていた。
静かに降る雨が人気を減らして、悪巧みをするにはもってこいの環境である。
同じ部屋にもう一人居た。
椅子に座ったＭｒ．２はつまらなそうな顔でキリの背を見ていて、どこか困ったような、複雑そうな顔をしている。少なくとも楽しそうではない。
「雨は嫌いだな……どうも心が落ち着かなくなる」
背を向けて喋るキリを見てふんすと鼻息を出す。
Ｍｒ．２は頬杖をついたまま、何も言わずにいるとキリが言い出した。
「重要な任務がある。国王コブラとコーザの顔をコピーしてほしい」
「ふ～ん……国王が重要なのはわかるけどぅ。どーしてあのガキんちょが要るわけ？」
「コーザは逸材だよ。腕っぷしが強いし、頭もいい。人を率いる力もある。いずれは反乱軍のリーダーとしてこの国を盛り上げてくれるはずだ」
「そんなもんかしらねぃ」
「期間は長めにとってあるよ。バレないように慎重にやってほしい。事故死や通り魔事件が多くなっても怪しまれるからね」
ようやくキリが振り返った。
顔にはいつもの笑み。それがあるせいで心が読めない。本音がわからない。
Ｍｒ．２が気になっているのはそこだったようだ。
「今日は妙に静かだね。何かあった？」
「そうねぃ……あったと言えばあったわ～ん。ところで今日のレッスンはないのう？」
「うん。雨が降ってるから」

再びキリが窓の外を見る。Ｍｒ．２はわざとらしく溜息をついた。
「本当にいいの？　今のこの状況って、自分の友達を裏切ってることになるんでしょ？　ここで黙って見てるだけなんて胸が痛まない？」
「それは違うよボンちゃん。ボクは裏切るために友達になったんだ」
平然と語るその声が恐ろしくも感じてしまう。
だからこそ気になる。
Ｍｒ．２は迷いながら質問してみることにした。
「最近ちょっと気になってんのよねぃ～」
「何？」
「あんた、いつどこで何をしててもずうっとおんなじ顔。酔っ払いに殴られても誰に何言われてもずうっとにこにこ。それってなんか、生きてるっていう感じがあんまりしないのよね～……」
頬杖をやめて、少しだけ身を乗り出す。
不思議そうに振り返ったキリの目を見つめてＭｒ．２は真剣に問いかける。
「紙ちゃん、あんた……人生楽しんでる？」
初めて、ぱちくりと目を大きくした表情を見た。しかしそれもほんの一瞬。すぐにキリはいつもと同じ笑みを浮かべてくすくす笑う。
本来ならば取っつき易そうな表情だが、なぜかＭｒ．２の顔は晴れなかった。
「楽しい？　なんだっけ、それ」
その言葉を聞くと寂しい気持ちになってしまった。
まだ子供の域を出ないだろう若さだというのに、それほど冷め切っている姿が悲しかった。特に全ての感情を素直に表す彼だからこその感想だろう。
組織に居る他の誰もが気にしないが、キリの表情は子供にあり得てはいけないものだと思った。
気配に気付いたのか、キリが窓の外を見て人影に気付く。
肩をすくめて、彼は部屋の扉を目指して歩き始めた。

「じゃ、よろしくね。方法は任せる。後始末が面倒だから失敗しないように」
「りょうか～い」
あっさりとキリが部屋を出て行った後、静かに扉が閉まった瞬間にMr．2が溜息をつく。
「ほんと難儀なもんよねい、あの子は……」
一階へ降りて、傘を開きながら外へ出る。
降りしきる雨が開いた傘にぶつかり始めると同時、キリは困った笑顔で彼の姿を見つめた。
傘も差さずに道の真ん中へ立って、睨むような目つきでキリを見るコーザ。どうやら話し合いは相当こじれたらしいことがわかる。
コーザは立ち尽くしたまま動かない。
心情を察してか、キリが前へ歩を進めた。
一瞬たりとも目を離さない彼を気遣い、目の前に立って傘の中へ入れてやった。彼にとっては久方ぶりとなる雨を浴びるのはむしろ喜びかもしれないが、心配でもある。
コーザの目を見つめ返し、微笑んだままで優しく声をかける。
「そのままじゃ、風邪ひくよ」
「キリ……おれは」
ぽつりと呟いた。
その時、目の色が変わって、危険な輝きを放つのをキリは確かに見た。
「おれは雨を奪い返すぞ」
力強い呟きを聞いたのはキリだけだった。
一つの傘の下で、激しい思想が渦巻く。それを受け止めてなおキリが表情を変えなかったのは、これまで友人を見続けてきた親愛があってのものか、それとも別の理由か。
今となっては本人にもわからなくなっていた。

3

コトッ、という音と共に黒の駒が置かれた。
盤上を見るＭｒ．３は眉を動かす。
あらゆる可能性を加味し、先を読んで行動していたはずだが、流石の腕前。一手のみで盤上の戦況を変えてしまった。その可能性も読んでいたとはいえ、眉の動きでわずかな動揺が伝わる。
対面に座ったキリは得意げに口の橋を上げた。
「組織の拡大？　また人数を増やすのカネ」
「むしろ今までが少な過ぎた。行く行くは四つの海にも構成員を送り込みたい」
「スカウトか……使えない奴が増えるのも困りものだガネ。この間のパートナーも結局は使い物にならなかった。危うく組織の存在がバレるところだったのだよ」
「そんなこともあるさ。大丈夫。新しいパートナーを用意したよ」
白のポーンを進めたＭｒ．３が顔を上げる。
キリに促されて部屋の入口を見れば、一人の少女が立っていた。
「彼女か？」
「直接的な戦闘能力はない。その代わり君とは相性がいい。芸術家だよ」
「フン……私のセンスについてこれるかは疑問だガネ」
ミス・ゴールデンウィークは何も言わずに部屋の隅へ移動する。
持っていたトランクを開けて、シートを床に敷き、その上に座ると茶を飲みながら煎餅をかじり始めた。まるで自分の部屋のように寛ぐ様はＭｒ．３を驚愕させる。
現在地はアラバスタとは別の島。Ｍｒ．３が利用している何の変哲もない家の一室である。
つぶらな瞳でチェスに興じる二人を見ながら、彼女は煎餅を食べていた。
「……腹が据わっているのはわかったガネ」
「おすすめの物件だよ。さぼりたがる癖はあるけどね」
「まぁいい。それより指令の話だ」
盤上に向き直ってＭｒ．３が息をつく。

「具体的にはどれくらいの規模が必要になるのカネ」
「例の話があったでしょ？　ウィスキーピークの件。あそこは頂こうと思ってる」
「まさか奪う気カネ？　荒事になると足がつくぞ」
「力ずくじゃないさ。そこは上手くやれる」
「どちらにしても問題はありそうな気がするが……まぁ、君がやるのなら別にいいガネ」
互いに一手ずつ駒を動かしながら、盤上の展開は進む。
接戦ではあったが一瞬の油断のツケはあった。Ｍｒ．３が押されているらしい。
「ウィスキーピークを丸ごと我が社のものにするということか」
「グランドラインの入口に一つ置いときたかったんだ。中でもあそこが一番取りやすい」
「しかし町人全員を社員で賄うとなるとかなりの人数になるガネ。今から新たに集めるのか？　慎重に動くなら時間はそれなりにかかってしまうガネ」
「面子はこっちで集めてるよ。大体揃ってる」
「なんとも手の早い……」
呆れたＭｒ．３が駒を動かした後、すぐにキリが動かした。
表情が一瞬にして変わる。
どうやら決着がついたようだった。
「チェックメイト」
「フン……これで二十二勝、二十三敗か」
「いやぁ、流石は頭脳派。毎回毎回苦労するよ」
背もたれに体重を預けたキリが子供っぽく笑う。Ｍｒ．３はそんな様子に顔をしかめた。
「しばらくボクの方が忙しくなりそうだから、諸々のことは任せるよ」
「反乱軍とやらカネ。上手くいきそうカネ」
「火を点ければあとは勝手に大きくなるさ。ボクがやるのは微調整くらいだね」

そう言うとキリは席を立ち、両腕を上げると体を伸ばす。
いつもと全く変わらない笑顔でＭｒ．３を見て、まるで友達のように、それでいて距離感を掴ませない話し方で言った。
「本番はまだまだ遠いけど、準備はしっかりしなくちゃ。というわけであとよろしく」
「わかっている。失敗すれば命はない」
「よくご存じで。それじゃ」
踵を返すキリが部屋を出ようとすると、静かにミス・ゴールデンウィークが右手を上げた。
煎餅が入った袋を差し出していて、キリは笑顔で一枚受け取る。
「仕事、大変そうね」
「まぁね。でももう慣れたよ」
受け取った煎餅をかじりながらキリが外へ出ていく。
扉が閉まる音を聞いて、しばらくしてからＭｒ．３が目線を動かす。
こちらを見ながら煎餅を食べるミス・ゴールデンウィークへ初めて声をかけた。
「で、君は一体何カネ？」
「ミス・ゴールデンウィーク。芸術家、だよ」
パリッと煎餅をかじって、彼女は無表情でピースをした。

《P．S．　15　years　old》

1

がやがやと賑わうユバの様相を見て、キリは以前との違いを如実に感じた。
集まっているのは屈強な男たちばかり。かつての町民は悉くユバを離れていき、住む人間が極端に少なくなったその町は今や反乱軍の基地となっていた。
誰もかれも目つきが鋭い。武器を持っている人間も居る。
その中でキリの存在は浮きに浮いていた。
身長は伸びても外見はさほど変わっていない。顔立ちには幼さが残って、パンパンに膨らむまで中身を入れた大きなリュックを背負って歩いていた。
彼だけはのどかな様子で、荒々しい男たちの間を通り抜ける。
ここへ来るのは今も昔も理由は同じ。
町の中心部へ着いた時にはキリが目的の人物を発見した。
「コーザ」
「おお、キリか」
すっかり身長が伸び、精悍な青年となったコーザが彼を迎え入れる。
ついさっきまでは疲れた顔を見せていたが、キリを見つけた途端に表情が変わり、普段あまり見せなくなった笑顔が自然と見せられた。
そのおかげと、品物を売るからという理由もあり、反乱軍の兵士たちもキリを好意的に迎える。
ひとまず椅子を勧められ、重いリュックを置いて落ち着く。
正面にコーザが座って、そうすると彼のやつれた顔が改めて確認できた。
「疲れてるみたいだね。ちゃんと寝てる？」
「ああ……なに、大した問題じゃねぇさ。それより、よく来てくれたな。この国もずいぶん物騒になっちまった。もう会えないかもしれねぇと思ってたんだ」

「大した問題じゃないよ。危ないとこ歩くのは慣れてるしね」
昔と変わらずにこりと笑うキリを見て、コーザは安堵を覚えていたようだ。
日ごとに激しくなる反乱の中に身を置いた結果、心は徐々に疲れていく。味方は日ごとに増していくとはいえ、だからこそ大変でもあり、物資は明らかに足りていない。癒しのない日々を送っていただけに友人の訪問は何よりも彼の心を躍らせた。
「ちょうど、お前に言わなきゃいけねぇことがあったんだ……」
「何？」
「反乱軍のリーダーがおれになった。みんなからの推薦だ」
キリは少し目を大きくしたが、すぐに笑みを取り戻して言う。しかし困った様子にも見える。
「そうなんだ。よかった、とは言えないか」
「まぁな……たまに思うよ。どうして戦わなきゃいけねぇんだろうなって。でも一度始まったものは終わるまでやり続けなきゃいけねぇ」
重く息を吐いて言葉を切る。
やはり疲れが溜まっているらしい。彼が俯いている間に周囲へ目を向けると、皆が小さく首を横に振っていて、言っても休まないようだった。
「前任者は……」
尋ねるとコーザが首を横に振る。だめだったということだろう。
危険な立場だ。誰にでもできる役ではなく、それだけコーザが信頼されていたらしい。
考え込む様子を見せたキリが彼の姿を確認する。周りに居る男たちに比べて彼だけが疲弊しているように見えて、若くしてリーダーを任された重圧に苦しんでいるに違いない。
パッと表情を明るくしたキリは自分のリュックを開いた。
「そうだ、いい物がある」
取り出したのは四角い入れ物だったが、コーザを含めて周囲の注目が集まっていた。

「って言ってもただのお香なんだけど、香りを嗅げばきっと気分が落ち着くよ。疲れてる時はぐっすり眠った方がいい」
「キリの言う通りだ。コーザ、いい加減少し休め」
「だが……」
耐え切れずに反乱軍の一人が言い出した。
躊躇うコーザへ溜息交じりに伝える。
「お前一人が休んだところで大した影響はねぇよ。いいから、休め」
「……すまん」
仲間の言葉を受け、立ち上がったコーザは移動しようとした。
その際、先程彼へ言った男の視線に気付いたキリも立ち上がる。荷物を置いたまま、移動するコーザと一緒に彼の家の中へ入った。
掃除がされていないのか、中は記憶の中にある姿よりずいぶん汚れていた。
それでいてあまり生活感がない。まるで住人が居なくなった廃墟のようにも感じる。
気が抜けたのか、コーザはふらつく足取りで歩き、倒れ込むようにベッドへ寝転がった。それを確認したキリはお香に火を点けて、そっと枕元に置いてやる。
それから、少しきれいにしてやろうと部屋の中の掃除を始めた。
物音を立てないように静かに作業を始めると、腕で目元を隠すコーザが呟く。
「すまねぇ……」
「色々、大変みたいだね。トトさんは？」
「しばらく町を離れてる。反乱なんて馬鹿な真似はやめろっつってたよ」
「そっか」
サングラスを外して、疲れた顔でコーザは天井を見た。
子供の頃とは違う。
場所は同じでも、家の中でさえ同じ景色には見えなかった。
今はキリが居る。幼馴染に比べると付き合った年月は少ないが、不思議と頼ることができた。

鬱屈としたものがあったらしく、ぽつりと心の内を明かし始める。
「人を、殺したんだ」
キリが振り返った。今はもう笑みはない。
右の掌で目元を覆い、彼は深く息を吐き出す。
「仲間を守るためだった。おかげでそいつは生きてるが……別に殺したいわけじゃなかった。こんなことがしたかったわけじゃねぇのに。思う通りにはいかねぇもんだな」
「そうだね。だけど、コーザがこの国のことを想ってるっていうのはわかるよ」
「そうかな。おれにはよくわからなくなっちまった」
疲弊した静かな声に感情が乗る。それは深い後悔を感じさせるものだ。
「この国の行く末を憂いてた。なんとかしてやりてぇと思った。それが気付けば、あちこちで国民同士が傷つけ合ってよ。おれがしたかったのはこんなことなのか……？」
「仕方ないよ。人の心を動かすのは簡単じゃない」
「それでも、思うんだ。他にやり方があったんじゃねぇかって。仲間の誰かが、国王軍の兵士が死ぬ度、決心が鈍りそうになる。〝おれは人殺しがしたかったんじゃない〟って」
コーザの語りに集中するため、キリは椅子を持ってきてベッドの傍に座る。
気付いたコーザが手を下ろしてすぐ傍に居る彼を見た。
彼だけは昔と変わらない。穏やかで素直で、自分に正直に生きている。本人がどう思っているにせよ、少なくともコーザはキリのことをそう見ていた。
自分はすっかり変わってしまった。たった数年、されど数年だ。
こうして彼に会うと昔のことを思い出して心が安らぐ。
同時に、変わらない彼が羨ましくもあった。
以前もそうだった。どんな弱みも受け止めてくれる瞳を見つめて喋る。
キリはコーザを安心させるように優しく微笑み、ただ静かに傍で見

守った。
「でももう戻れねぇんだ。死んでった奴らのためにも、おれが殺した人間のためにも、この国を変えなきゃならねぇ。もう前に進むしかねぇんだ」
「うん。わかってるよ」
「できれば、お前が怖がらずに歩ける国にしてやりてぇなぁ……」
再び腕で目元を隠して、今度こそコーザは眠るために目を閉じる。本人は気付いていなかったかもしれないがお香の匂いは確かに彼の心を落ち着けていたようだ。
キリに心の内を明かした、というのも大きかっただろう。
不眠症が続いていたはずなのに、今日はあっさり眠りに落ちることができて、そう時間もかからずに静かな寝息が聞こえ始める。これで少しは安心できそうだ。
キリは、椅子に座ったまま動かなかった。
いつもの笑みはない。代わりに不思議そうな、妙に緊迫した表情がある。
近頃、妙な感覚があることを自覚していた。しかし彼自身はその理由に気付けなかった。
自分でも気付かない間に、工作員である自分と、コーザの友人である自分が、乖離しているかのような状況がある。いつしか本気でコーザの心配をして、一方で彼ら反乱軍の活動を活発化させようと動く自分が居る。そのどちらもが別々に存在していた。
まるで自分が二人に分かれたかのような感覚。それを彼は自覚できていない。
自分が心からコーザを心配していることをおかしいと思わないようになっていた。
生きる意志を自ら捨てて、他人の思想の入れ物になったことで心が狂い始めている。
壊れていく。かつての自分が塗り潰されていく。
過去の記憶が霞んでいき、今や彼自身すら以前の自分を認識できなくなっていた。

キリはしばしコーザの傍を離れず、自分の中で渦巻く奇妙な感覚に思い悩み、沈黙する。その内思考は混乱して、コーザを心配しているのか自分のことを考えているのかわからなくなった。
あらゆる場所でいくつもの顔を持っていたことが変化の原因であろう。
しかし、やはり彼本人はその変化も原因も理解してはいなかった。

2

とある島の、深夜の出来事である。
一人の男が息を乱して必死に走っていた。
誰も居ない狭い路地裏を進み、誰かから逃げるように足を動かしている。時にゴミ箱を蹴り飛ばしながらもその足を止めようとはしない。
やがて足を止めるのだが、気付けば本人にすらどこかわからない場所で。
怯えた表情で辺りを見回す彼は大量の汗を流していた。
「キャハハハッ。逃げきれなくて残念だったわね」
頭上から声が聞こえて男がすかさず上を見た。しかしそこには誰の姿もなく、屋根の上にも異変は見られない。男は動揺しながら後ずさった。
その直後、嫌な予感がして咄嗟に振り返る。
気配を感じさせることなく一人の男が立っている。
ピンと指を弾いて、暗闇の中では見辛い何かが飛ばされた。
「鼻空想砲（ノーズファンキーキャノン）！」
男の体が爆心地となり、肉体は一瞬にして黒焦げになって吹き飛ばされた。
地面に転がったそれが動けないことを確認するとＭｒ．５はポケットに両手を突っ込む。
そして屋根の上からはミス・バレンタインが降ってきて、ふわりと軽く地面に着地した。

「任務完了。アンラッキーズはどこに行った？」
「キャハハ、簡単な仕事ね。張り合いがないわ」
「当然だ。逃げることしか能がねぇターゲットじゃな」
彼らが話していると突然背後から声が聞こえる。
「簡単はいいけどできればもう少し静かにやってほしいもんだね。みんな起きちゃうよ」
Ｍｒ．５とミス・バレンタインが素早く飛び退いた。余計な動作を一切排除して背後に目を向け、着地した時には攻撃できるよう身構えられている。些細な動作とはいえ卓越した戦闘技術を感じさせる速度と動き、そして表情である。
しかし声の主を確認してすぐに拍子抜けしてしまった。
立っていたのはフードをかぶって立つキリだったのである。
これまで何度も顔を合わせている。同じ組織に身を置く人間だ。
彼らが持つ悪魔の実の能力をさらに強くしたのも彼との訓練、指南によってだ。
警戒をやめた二人は背筋を伸ばして立つ。
口元だけが確認できる様子でキリはひらひら手を振っていた。いつも通り柔らかい笑みがある。
二人の態度は特別親しい様子でもなかったが、先程よりは肩の力が抜けていた。
「君らは暗殺に向かないねぇ。やっぱり他の人に頼むべきだったかな？」
「他に務まる奴が居るのか？　おれたち以外に」
「心配しなくてもこの辺りに人は居ないわ。誰も気付かないもの」
「だといいけど」
肩をすくめたキリは、すぐに本題を口にし始めた。
「次の任務だよ。実は反乱軍の武器が足りないらしくてね。入手してきてほしい」
「またガキの使いか」
「つまらない任務ねー。もっと他にないの？」
「まぁそう言わず。これも大事な仕事なんだよ」

ミス・バレンタインはつまらなそうに唇を尖らせ、Ｍｒ．５は鼻を鳴らす。
面白味は感じないが仕事はやらねばならない。Ｍｒ．５がキリへ聞いた。
「標的は？」
「世の中には悪い人間が居るもんだね。武器を密輸してる業者が居るそうだよ」
「そいつを奪ってこいってわけか」
「悪い人間って、それあなたが言う？　キャハハ」
キリは背後を振り返り、背を向けて二人へ言うと手を振りながら歩き出す。
「今回は派手にやっていい。跡形もなく消してくれると助かるよ」
「そいつを待ってたぜ」
「キャハハハッ、ようやく楽しめそう」
キリの姿が再び暗闇の中に消えていく。
それを見送ってからＭｒ．５とミス・バレンタインは正反対の方向へ歩き出し、その場を後にした。

３

アラバスタ王国、レインベース。
連日大盛況を誇るカジノ、その建物の一室で、クロコダイルはキリと向かい合って座っていた。
彼らの間にあるのはチェス盤。そして激戦を見せるチェスの駒。
どちらも冷静な顔で戦況を見つめており、クロコダイルは無表情で、キリは微笑みを湛えながら駒を動かしていた。
「予定通りコーザが反乱軍のリーダーになった。いい働きをしてくれてるよ」
「全て計画通りに進んでいる。予定を早められるかもしれんな」
クロコダイルが黒の駒を動かした。
その動きを確認したキリが少し悩む素振りを見せる。

「それにしてもめんどくさいことするんだね。こんなに準備が長いなんて思わなかった」
「完璧な計画ってのはそういうもんさ。成功するのは当然。問題なのはその後だ。全てを手に入れた時こそ本当の始まりになる」
「そういうもんかな」
キリが白の駒を動かした。
何を考えたのか、クロコダイルは薄く笑みを浮かべる。
「こちらにも動きがあってな。王女ビビと護衛隊長のイガラムが我が社に潜入した」
「王女が？　なんで」
「大方反乱の原因を探ろうとしたんだろう。おれたちの存在に気付きやがった」
「よく潜入なんてできたね。どうやったの？」
「なに、大したことじゃない。ミス・オールサンデーが導いてやっただけのこと」
「なるほど」
クロコダイルが次の一手を見せた時、ついにキリは苦しむように唸った。
どうやら決着の形が見えたようで苦心しているらしい。
それでも諦めずに盤上を睨み、その間に会話は続く。
「監視は？」
「必要ない。それほどの価値もないもんでな」
「じゃあなんで入れたの？」
「考えがあるのさ。行く行くは利用価値が出ると思ってな」
「ボクにはよくわからないね、そういうの」
次々駒を動かすものの、状況は徹底して良くならない。そしてようやく決着がついたようだ。
結果はキリの敗北。
今まで一度たりとも彼に勝ったことはなく、言うなれば今日もいつもと同じ結果。しかし成長は感じられる。クロコダイルの笑みには彼を認める意味があったのだろう。

目を伏せたキリが背もたれに体重を預ける。
悔しさを感じなくなるほど敗北に慣れてしまった。目を閉じて今日の反省点を思案する。
その時、ふと頭をよぎるものがあった。
目を閉じて脱力したままクロコダイルへ問いかける。
そうしている時のキリはいつになくリラックスしていたようで、子供っぽいと思える姿だ。
「用意周到なボスらしくないね。案外足元掬われるかもしれないよ？」
「フン。もしそうなった時はお前がなんとかしろ」
「またそんな無茶を……今だって結構働いてるんだよ」
呟くように言って、不服そうな顔を見せたキリは唐突に大あくびをした。

《Ｐ．Ｓ．　１６　ｙｅａｒｓ　ｏｌｄ》

１

雨が降らなくなった影響で、すっかり枯れてしまったエルマルの町の近く。

砂漠にぽつんと立つカフェがあった。

ごく一部の人間しか訪れないその店はスパイダーズカフェと名付けられていた。店内には穏やかなＢＧＭがかけられており、落ち着いた雰囲気を感じさせる。

店の女主人、ポーラがコップを洗い終えた時、タイミングよく店の扉が開いた。

キリがフードを下ろしながら入ってきて、彼女に笑みを見せる。

「あら、いらっしゃい」

「やぁポーラ。相変わらずここは人気を感じないね」

「ふふ、仕方ないわよ。だけど今日はお客さんが一人居るのよ」

そう言ってポーラが左を向いて、目線の先を追うと坊主頭の男が座っている。

何も頼まなかったらしく、カウンターには何も置かれていなくて、店の隅で目を閉じて腕組みをしていた。見るからに威圧感を感じる様子だった。

キリはまるで躊躇いを見せず彼に話しかける。

「やぁＭｒ．１。今日も怖い顔してるね」

Ｍｒ．１は何も答えず、動かなかった。

どうやらあまり気に入られていないようだとキリが苦笑する。

彼もカウンターの席へ座り、ポーラが前へやってきてキリの顔を見つめた。

「それで今日は？」

「大した仕事じゃないんだけどね。要人の暗殺。あ、それとコーヒーちょうだい」

「ええ。アイスでいい？」

「うん。流石にこの国でホットを飲む気にはなれないなぁ」

頷いたポーラが準備を始める。
その間にキリは懐から指令書が入った封筒を取り出し、Ｍｒ．１の方へ投げた。真っすぐ飛んだそれは目を閉じたままのＭｒ．１に受け止められ、目を開いて中身を読み始める。
内容を理解し、カウンターへ置く。
キリの前にコーヒーを置いた後、そちらへ移動したポーラも指令書に目を通した。
コーヒーを飲みながら俯瞰的に二人を見た時、彼らはあまり表情が変わらないことに気付く。
Ｍｒ．１は常に不機嫌そうな無表情で、ポーラは薄く笑みを湛えていることが多かった。
そういえば、以前自分も似たようなことを言われたことがあったなと思い出す。
ポーラが灰皿の上で指令書に火を点けた時、Ｍｒ．１が即座に立ち上がった。
もう行ってしまうのだろう。颯爽と扉へ歩いていってしまう。
椅子ごと回って背に目を向けたキリは思わず呟いた。
どうも彼は付き合いが悪い。気安い一言も投げかけたくなるというもの。
「もう行くの？　ちょっとくらい喋ろうよ」
「必要ねぇだろう」
「つれないなぁ。息抜きがないと人間ダメになるよ。ちゃんと人生楽しんでる？」
「フン」
一度も足を止めずにＭｒ．１が店を出ていってしまった。
残されたキリは少し不服そうな顔を見せる。するとそれを見ていたポーラがくすくす笑い、再びカウンターに肘を置いたキリが彼女に笑いかけた。
「寂しいねぇ。あの人がパートナーで辛くならない？」
「大丈夫よ。あなたがたまに店に来てくれるから」
「それはよかった」

「だけど気になることを言ってたわね。ねぇキリ」
「ん？」
「あなたこそ人生楽しんでる？」
唐突な質問にキリはきょとんとした顔に変化した。彼らしくない、すぐには答えを出せない姿を初めて見た気がして、微笑みはそのままでもポーラは少し驚く。
彼女が予想した以上に深刻に考え始めてしまったらしい。
次第に俯き、ポーラの姿すら見ないようになって、それでも彼は悩んでいた。
「楽しい、か……」
真剣に考え始めた彼を残し、ポーラは裏口から店を出ていく。
話しかけない方がいいと判断したのだろう。どうせ客は来ない。戸締りは必要なかった。
気付かない間に店の中へ一人残されたキリは、しばらくそんな状況にも気付かず考えていた。
楽しいとは何だっただろう。言葉としては理解するがすっかり忘れてしまった。
何かもやもやすると、彼は眉間に皺を寄せてさらに考える。

2

人通りが多く賑わうアルバーナの町で、キリは一人座っていた。
広場の隅に店を開き、露店商として品物を並べている。
時折商品を覗き、買っていく人も居るのだが、彼本人はどこか心ここに非ずな様子だった。
彼の視線の先では時計台の修繕が行われている。外壁から文字盤、あまり存在を知られていない内部まで修繕するため多くの作業員があちこちで動いていた。
傍目からは、実は巨大な大砲のパーツを運び込み、内部で組み立てているとは思わないだろう。
もしもの時の奥の手。クロコダイルの指示に従っての作業であっ

た。
白昼堂々と秘密裏に悪事を働く工作員たちの監督をしながら、キリはぼんやり考える。
何かを忘れてしまった感覚がある。それに気付いてから妙に落ち着かなかった。
一年経つごとに心身ともに成長していき、この頃には落ち着きつつあったことがきっかけか。
心に余裕ができた彼はつらつらと考え事をする。
何かが抜け落ちてしまったのか、何かを忘れたのか。はっきりしない心情に表情は暗くなり、常に相手の警戒心を無くさせるような微笑みを湛えていただけに、その変化は明らか。
たまたまそこを通りかかったペルに声をかけられ、ハッと我に返った。
「キリじゃないか。どうした？　今日は売れ行きが良くないのか」
「ペルさん。巡回なんて珍しいですね」
「いやなに、今日は時計台の修繕が行われると聞いたからな。少し様子を見に来た」
そう言うとペルは時計台を見上げる。
アルバーナで店を出すことが多かったため、自然と顔と名前を覚えられるようになった。ペルと会って話すのも今日が初めてではない。
どうやら大砲についてはバレていないようで、キリは平然と話を続ける。
「ずいぶん久しぶりなんですってね。時計台の修繕」
「ああ。ここ数年は少し、国内の状況が思わしくなかったからな……」
ペルの表情が陰りを見せた時、そうだとキリは思いつく。
わからないなら聞いてみればいい。
簡単なことだったと、彼は地面に座ったままでペルの顔を見上げた。
「ペルさん。楽しいって、なんですかね」
「ん？　どうしたんだ、急に」

「いやね、最近わからなくなってきて。ペルさんにとって〝楽しい〟ってなんですか？」
「それを考えて浮かない顔をしていたのか」
「え？　そうでした？」
「ああ。いつもとは様子が違ったから気になったんだ」
それほどわかりやすい顔をしていたのだろうか。
常に心を読ませないよう表情に気を付けていたキリにとっては驚いてしまう言葉。そんなに気を抜いていたつもりはないのだが。そう考えている間にペルも考えていた。
簡単なようで難しい質問だ。〝楽しい〟とは何なのか。
考えて自分なりに答えを出した彼はキリに笑顔を向ける。
「きっと私にとっては、この国の人々が平和に暮らせる状況こそ、〝楽しい〟に値するものなのだろう。表現として正解かどうかはわからないが」
「この国の平和、ですか」
「そうだ。私はアラバスタを守るため生きている。この国の人々が笑顔で居られた時ほど楽しいと感じられる時はない。それはもちろん、この国に来た者も含めての話だ」
ペルの視線にぽかんとして、キリはなぜか呆然としていた。
「君だってそうだ。暗い顔をしているより、笑顔で居てくれた方が私も楽しくなる」
「そういうものなんですかね……」
「フフッ、どうかな。正直なところよくわからない。あくまでも私にとってはだ。こんな意見で参考になればいいんだが」
「いえ……ありがとうございました」
さらにキリは考え込み、難しい顔をする。
これは相当調子が悪そうだと、ペルは普段との違いに気付いて判断していた。しかしいつまでもここに居る訳にはいかず、自分の仕事に戻らなければならない。
「それじゃあ私は失礼する。少し様子を見に来ただけだから、仕事に戻らないと」

「あ、はい。すいません。引き止めちゃって」
「構わないさ。あまり考え過ぎないことだ」
ペルがその場を離れていく。
そう言われはしても、キリの表情は晴れず、ぐるぐる回る思考が止められることはなかった。

3

反乱軍の拠点は、アルバーナへの道筋を考慮し、ユバからカトレアへ移された。
そのことを知っていたキリはカトレアへ足を運び、反乱軍のキャンプに到着する。
反乱軍の兵士たちは彼のことを知っていて、迎え入れる態度は当然のものであった。
「キリか」
「お疲れさま。コーザは？」
「奥のテントに居る。今日は機嫌が良くなさそうだったが」
「いいよ。少し話すだけだから」
物騒な目つきの男たちの間をすり抜け、悠々と進むキリは今日はリュックを背負っておらず、いつもと違うことに気付く者は多かったが説明はしなかった。
目的のテントを見つけて、外から声をかける。
返事は待とうとせずに中を覗き込んだ。
「コーザ。入るよ」
中では自分の腕を枕にしてコーザが横になっていた。
キリの声に気付くと目を開き、ゆっくり体を起こしてそこに座る。
機嫌は良くないと聞いたが笑顔だった。少なくとも彼は好意的に受け入れられていた。
「キリか。久しぶりだな」
「うん。こっちもちょっと色々あって」
「まぁ、座れよ」

妙に静かな雰囲気だった。
キリは進められるままに彼の前へ座り、コーザの視線を受け止める。
定期的に訪れているとはいえ、前に会った時と比べるとまた少し痩せただろうか。逞しい体をしているのだが疲弊した様子を感じるのには心が痛む。
一方のコーザは彼の訪問に喜んでいて、いつもにない頬の緩みがそれを表していたようだ。
「どうかな、調子は」
「まずまずってとこかな。革新的な進展はねぇが、徐々に前へ進んでる気はする」
「そっか。体は大丈夫？　ほっとくと何も食べないから」
「心配かけて悪ぃと思ってるよ。最近は大丈夫だ。ちゃんと飯食って寝てる」
頷くコーザに、キリの笑みは少し様子が違っていた。
目敏く気付いた彼は表情を変えて尋ねる。
「どうした？　お前こそ調子悪いんじゃないか？」
「そうかな。そう見える？」
「ああ。いつもと違う感じがする」
「最近色んな人に言われるんだ。自分じゃそんなつもりないんだけどさ」
「何かあったのか？」
真剣に問いかけてくるコーザから視線を外し、俯いた後、すぐにキリは顔を上げた。
「あのさ。楽しいって、なんだと思う？」
「楽しい？」
唐突な質問に驚くが、ほとんど見たことがないキリの真剣な顔を見て、コーザは息を呑んだ。そんな顔をするということは何かあったに違いない。
何があったかを聞くのは簡単だが、求めているのはそんなことではないのだろう。

真剣に考え、頭を悩ませたコーザは、自分が質問するのではなく答えを出そうとする。
「おれの楽しいってのは、そうだな……平和に暮らせることだな」
「平和に？」
「今でも思うよ。本当は戦いたくねぇって。だけど、この戦いが終わった後、この国の連中が何の心配もしねぇで笑って暮らせてたら良いと思う。だから戦いをやめねぇんだ」
コーザが視線を落として自分の腕を掴んだ。
一瞬、悲痛な顔を見せ、彼が本当に戦いを拒んでいるのが窺えた。
「もう殺したり殺されたりなんてたくさんだ。早く何も考えずに飯食って酒飲んで、仲間とバカ騒ぎしてよ、眠くなったら寝る。そんな生活が送れればいいと思うよ」
キリも神妙に考え込む素振りを見せた。
また、彼に対しては素直に本音を話すことができた。言った後でコーザは苦笑して、しかし彼が相手だと恥ずかしいとは思わない。きっと受け止めてくれただろうと信じている。
一方でキリが考え込んでいる様子なのも気になり、今度は試しに聞いてみる。
「お前はどうなんだ？　日々生きてりゃ楽しいって思うこともあるだろ」
「え？」
「聞かせてくれよ。旅の話でも、些細な話でもいいから。考えてみりゃあんまりそんな話したことなかったしな。お前が楽しいって思うこと、話してくれ」
「ボクは……」
キリの瞳が初めて揺れた瞬間をコーザは見た。
「おれは……」
しかしすぐに揺れる光は消え、元通りになる。
どこか寂しげに感じるが、苦笑した彼は咄嗟に言う。
コーザはその一瞬が気になったらしく、心配するような顔つきに変わった。

「楽しいこと、なんだったかな。最近忙しくてわからなくなっちゃった」
「キリ……大丈夫か？」
「何が？　全然大丈夫だよ。ほら、こんなに元気だし」
いつものように笑ってぶんぶん腕を振るキリだが、やはり今日はいつもとは違う何かを感じずにはいられなかった。コーザの表情は見るからに困惑している。
キリはにこやかに話題を変え、もうその話をしようとは思わなかった。
脳裏に浮かんだのは大海原を行く帆船。見覚えのある海賊旗。
穏やかな波の音が耳に残って離れなくなっている。
結局、なぜ彼が動揺しているのかはついぞわからず。
最後にはいつも通りと思える笑顔を取り戻していたとはいえ、印象に残ったのはほんの一瞬だけ見せた感情の揺れ。彼らしくないと思ったその瞬間。
この日を境に、キリがコーザの下を訪れることは二度となかった。

4

「イーストブルーへ帰ろうかと思うんだ」
突然告げられた言葉に、背を向けたままのクロコダイルは動じなかった。
さほど間も置かず、冷静に返事の声が聞こえる。
「そうか」
「驚かないんだね」
「そう言い出す可能性があると考慮していただけのことだ」
背後に立つキリへ振り返ることなく、クロコダイルは静かに語る。
「好きにすればいい。お前はここへ戻ってくる」
「すごい自信だね。根拠はあるの？」
「あるとも。どこへ行こうが何をしようが、お前の根本は〝海賊〟だ」

自信を感じさせる声でそう言い、クロコダイルは口を閉ざした。
従ってキリも背を向けて歩き出す。
戻ってくるかどうか、それはまだわからない。ひょっとしたらレッドラインを越えるための旅路で死んでしまうかもしれないし、どこかでそれを望んでいるかもしれない自分に気付いている。
根本は〝海賊〟だ。その通りだと思う。だから落ち着かなくなってしまった。
昔のままだったならばいくらか楽だっただろう。
蘇った光景に決意を固めた彼は、ひとまず故郷を見てみようと考える。その後どうするかはいずれ考えなければならない。だが少なくとも、このままここには居られない。
あらゆる物を捨て、一人になろうとしている。
ただし今度は強制じゃない。自分の意思で選んだ道だ。
今の彼にいつもの穏やかな笑みはなかった。
「いずれお前はおれの下へ戻る。必ずな」
最後にクロコダイルの言葉を耳にして、彼は姿を消した。

《Ｐ．Ｓ．　１７　ｙｅａｒｓ　ｏｌｄ》

１

「これからよろしく、ルフィ」

「しっしっし。やっとおれの名前呼んだな」

そう言った後、少しの間ができて。

夜の静寂を感じる状況の中、キリは苦笑した顔で溜息をついた。

「きっと後悔することになるよ。ボクを仲間にしたこと」

「そんなことねぇよ。おれは嬉しいんだ。やっとキリが仲間になって」

ししと笑うルフィは言葉通り心底嬉しそうにしている。

ここまで底抜けに明るくて身勝手な人間は見たことがない。旅をする中で様々な人間を見てきたという自負があるものの、これほど変わった人間は生まれて初めてだと思う。

だが、だからこそ惹かれてしまった。

他人の言葉をまるで聞かず、思う通りに行動し、断られても諦めずに突き進む。

誰かはこれを迷惑な身勝手と呼ぶだろう。

キリにとっては、これこそ自由だと感じていた。

忘れたはずだった。気付かない間に忘れようとしていたはずだ。それがいつしか自然に脳裏へ浮かび上がり、それ自体を良しと考える自分が居る。

ここで旅に出なければもう二度とチャンスはない。

そう思わされてしまった時点で彼の負け。キリは知らず知らずのうちにルフィと戦い、そして敗北したのだ。おまけに勝てないとさえ思ってしまっている。

気分は悪くない。それどころか最高だった。

やけに楽しそうな笑顔を向けて、キリはルフィへ問うてみた。

「ねぇ、ルフィにとって、楽しいって何？」

「楽しい？　そりゃお前、〝海賊〟だろ！」

一秒たりとも迷わない姿に思わず吹き出してしまった。

「だと思った。ボクと同じだ。海賊やってる時が一番楽しいって感じる」
「しっしっし。ほらみろ」
「ただ、迷惑かけることになるよ。グランドラインに居る頃色々あったから」
「そんなの別にいいよ」
平然と言ったルフィの顔は、何一つ恐れてはいなかった。
これから始まるだろう冒険に期待していて、希望を持って、キリが言う面倒事さえ楽しもうとしているかのようで。輝くような笑顔にキリは驚愕し、自身は真顔になってしまった。
「キリじゃなくても色々あるだろ。そんなこと気にすんな。楽に行こう」
「楽観的だなぁ。いいの？　そんなので」
「いいんだ。何も知らねぇ方が楽しいに決まってる。とりあえず行ってみりゃわかるさ」
何も考えていなさそうな言葉に、思わずくすぐったそうに笑って、キリが頭を抱えた。
かなりの大物、と考えた方がいいのかもしれない。色々と規格外な人だ。
「本当に、一人にしとくとあっさり死んじゃいそうな人だね。目が離せそうにないよ」
「ししし。大丈夫だ。キリが一緒に来るからな」
キリの顔をじっと見つめ、改めてルフィは宣言する。
「後悔なんてしねぇしさせねぇよ。お前はおれの仲間だ」
やはり彼の言葉には弱い気がする。
不思議とかつての船長を思い出させる気質だった。
キリはその言葉を信じてみることにして、今回は力強く頷いた。

2
「メシィィ〜!!」

騒がしい声を出すルフィが甲板からキッチンへ入ってきた。どうやら食事の支度が終わるのを待ち切れずに飛び込んできたらしい。
作業中だったキリとシルクは苦笑して振り返り、駆け込んでくる彼を見る。
ルフィは空腹を我慢できずにキリへ言った。
「キリ！　メシまだか！」
「もうちょっとでできるから待っててよ」
「メリー号のキッチン、結構いい感じだよ。前の船よりおいしくできたかも」
「ほんとかぁ～!?　早く食おう！」
「だからまだできてないって」
ルフィの様子を気にしながら、キリがオーブンを開けた。
焼きあがったパンが並んでいて、久々に焼いたがいい出来だと自負する。ちょうど開ける瞬間を見ていたルフィも覗き込んで、出来を確認した二人は笑顔で顔を見合わせた。
「うんまそぉ～だなぁ～」
「しょうがないなぁ」
そう呟いてトレイを出した後、熱いそれを素手で一つ取り、キリがルフィと向き合う。
「見ててよ……」
ぐっと指先に力を入れて、丸いパンを二つに割った。
ほわっと柔らかそうな質感と断面が目に飛び込んでくる。
間近で見ていたルフィは思わず顔を寄せて、そのままかぶりついてしまいそうなほど近く、堪え切れない様子で舌を伸ばして涎が垂れそうになっていた。
そんな彼の様子にキリは嬉しそうに笑い、同じくらいの身長の彼を見る。
「すんげぇ～！　これキリが作ったのか？」
「そうだよ。これだけは一人前だって認めてもらったからね」
「めちゃくちゃうまそうだな。なぁ、これ食っちゃだめか？」
「他のみんなにバレないならね」

そう言ってキリは二つに割った片方を差し出した。
嬉しそうな顔でルフィが受け取った時、一部始終を見ていたシルクは苦笑する。
ちょうどルフィが大口を開けてパンを食べようとした瞬間、再び扉が開いて、今度は数日前に仲間になったばかりのウソップが入ってくる。
笑顔で入ってきたもののルフィの行動を見て驚き、一瞬にして目が吊りあがった。
「いや～おれも腹が減っ――ってうおいっ!?　お前何やっとんじゃルフィ!?」
「んんがっ！」
「あ～食いやがった！　今のは現行犯だぞ！　おれは確かにこの目で見たッ！」
ウソップの登場に驚いたのはルフィも同じで、持っていたパンを隠そうとしたのか、そのまま勢いよく口の中へ放り込み、素早く咀嚼した。そして味わう間もなくあっという間に飲み込んでしまったのである。
同じ頃、冷静だったキリは一口かじってゆっくり食べていた。
「つーかキリも食ってんじゃねぇか!?　食べ盛りの男の前でのつまみ食いは重罪だぞ！　というわけでおれにも一個ください！」
「だめだよ。みんなの分が無くなるじゃん」
「ルフィには食わしたじゃねぇか！」
「なぁキリ、それ食ってもいいか？」
「いいよ」
そう言うとキリは口を開けて待ったルフィに持っていたパンを食べさせた。
それを見てより一層ウソップの声が大きくなる。
「ちょっと待てぇ～！　はい議長！　今重大な事件が目の前で起きました！」
「え？　議長って……私？」
「被告キリは同じく被告ルフィにつまみ食いを許可しましたがおれ

には何も食べさせません！　この贔屓はいかがなものでしょうか！」
「しょうがないよね。船長だもの」
「前から言いたかったがお前はルフィにだけ甘過ぎる！　〝船長に甘過ぎる罪〟で実刑を求める次第であります！　具体的には空腹なおれにも一つのパンを！」
騒ぐウソップと動じないキリに困った笑みを浮かべ、議長と呼ばれたシルクが口を挟んだ。
「え～っと……そうは言うけど、もうすぐできるよ？　別に今じゃなくても」
「違うんだシルク、それは違うぞ。食事を始めるという場で食べる料理と、作る過程の途中でのつまみ食いとでは趣が違う。感じる味わいが全く別物なんだ。つまりこれは空腹を満たすためというよりたった一口の幸せのための戦いなんだ」
「ウソップ、ちょっと皿並べてくれる？」
「おう。……って違～う！　まだ話は終わってねぇ！」
軽い口調で言ってきたキリに反応して思わず頷いてしまった。
慌てながら体勢を立て直したウソップは完成したスープを皿に入れようとするキリを指差す。
「今後のためにもこの件は今のうちにはっきりさせといた方がいいぞ、キリ。おれだってたった一個のパンでこんなにうるさく言いたかねぇが、ルフィだけ特別扱いというのがどうかと思うんだいう話をしているわけだ」
「特別扱いなんてしたっけ？」
「した。おれが一味に加わってからだけでも何度も。しかもついさっきそれを見たところだ」
「ごめんなさい」
「よし。素直に謝る姿勢は気持ちがいいぞ。で、おれにもつまみ食いの権利はあるのか？」
「それはないけど」
「ねぇのかよ!?　何の謝罪だったんだ！」
ウソップの必死の抗議にもめげず、飄々とするキリは皿にスープを

移していた。
扉を開けたまま大声を出していたため気になったのだろう。次はゾロがやってきた。入口で騒ぐウソップを面倒そうな目で見て声をかける。
「なに騒いでんだ。うるさくて寝れねぇだろうが」
「おぉいゾロ君！　おれは裁判をすべきだと思うぞ！　罪状は〝つまみ食い〟と〝船長にのみ甘過ぎる罪〟だ！　特に後半のはなんとなくひどい！」
「あ？　なんだってんだ一体……」
眉間に皺を寄せるゾロは面倒そうにウソップの声を聞いていた。
「要するにキリのルフィに対する態度が問題だって話だ。お前はどう思うんだよ」
「どうも思わねぇ。今更だろ」
「いやいやいや。確かにルフィは船長だ。でも本人はこんな感じだ。別に船長船長と崇め奉らなくてもいい空気がこの船には――」
「その肉うまそうだなー。食っていいか？」
「いいよ」
「ちょっと待てェ!?　お前それメインだろ！　それは絶対にだめだァ！」
堪え切れない様子のルフィが盛り付けられたばかりの肉に顔を近付ける。それを見たウソップが慌てて駆け出し、彼を羽交い絞めにして止めた。
ここまでくると態度が甘いなどという話ではない。
どうやらウソップの抗議を面白がっているらしいキリは、暴れる二人を見て楽しげだった。
余計に騒がしくなったキッチンで、ルフィとウソップが暴れ、シルクが困った顔で彼らを叱る。
キリはからからと笑って完成した料理をテーブルへ運び、ゾロは呆れて嘆息していた。
騒がしさに気付いてナミがやってくる。
まだ新しい船に慣れていないこのタイミングでよく騒げるものだ。

呆れる顔をしていて、見ようによってはひどく楽しそうにも見える彼らのやり取りに冷たい眼差しを向けた。
「また騒いでるの？　ほんっと飽きないわね」
「お前らも止めろよ！　メシの一大事なんだぞ！」
「なんだよウソップ、キリはいいって言ったじゃねぇか！」
「アホかぁ！　お前のつまみ食いはおれたちの食事だっつーの！」
「だめだよ二人とも。喧嘩するなら甲板に行って」
「二人ともあんまり暴れないでくれないかな。埃が料理に入っちゃうよ」
「暴れさせてんのはお前だろうがッ!?」
反省した様子のないキリにウソップが怒り、楽しそうな笑顔があっさりそれを受け流す。
シルクは仕方ないと彼らを見守って、ゾロとナミは呆れていたが、止める素振りはなかった。これがこの船で生きるということなのだろう、と理解を示したようだ。
ひとしきり騒いだ後、食事の前だというのに、ルフィも至極楽しそうな顔だった。

3

ある日のこと。
昼食を終えた直後、室内で和やかな時間を過ごしていた時のことだ。
テーブルに積み上げられた皿は大量。人数が増えただけでなく、大食漢であるルフィの腹を満たすために一食が多い。さらに専任でコックを務めるサンジの加入により、卓越した技術を用いれば大量の料理を用意するのも簡単なため、その分後片付けが大変になった。
食べ終えた時の席に座ったまま話をしていると、唐突にキリが提案した。
何やら良いことを思いついたと言わんばかりの表情である。
「せっかくならさ、皿洗いする人くじ引きで決めようか」

「おっ、いいなそれ」
「なんだよ、気ぃ使ってんのか？　別にいいってのに面倒なことを……おれはナミさんかシルクちゃんと一緒に皿洗いしたいなぁ～！」
突然の提案にウソップやサンジが同意したことで、いそいそとキリが紙を取り出し、その場で簡単にくじを用意し始める。
呆れた顔のナミの隣には上機嫌そうなシルクが居て、対照的な表情だった。
「別にいいけど、高いわよ？」
「ナミ、仲間にまでお金請求する必要はないと思うんだけど……」
「よしできた。じゃあサンジのリクエストに応えて二人一組にしよう」
作ったくじを持ってキリが手を差し出す。
真っ先に取ろうとしたのは乗り気らしいルフィであった。
「うし、じゃあおれ取るぞ」
「待て待て待て！　よく考えたらルフィにやらせていいのか？　皿が無くなるぞ」
くじを引こうとしたルフィの手を咄嗟に掴み、眉根を寄せたウソップが抗議をした。
「この場合ルフィは外しておいた方が手間が減るんじゃねぇか？」
「そうね……お皿だって安くないんだし。ただでさえ食費がかさむんだから節約はしないと」
「お前ら失敬だな。おれだって皿洗いくらいできるぞ」
「どうだキリ。ルフィにやらせると皿が割られる危険と財政難が一緒に襲ってくるぞ」
「いいんじゃないかな。それはそれで面白そうだから」
あっけらかんと言ったキリの反応にウソップとナミが見つめ合う。
基本的には頼れるが、こういった状況では彼に話を振らない方がいいようだ。
「あんたが悪いわ、ウソップ。あいつに聞いちゃだめ」
「だな。ありゃ愉快犯の目だ」
「引くぞー！」

「待ったルフィ。選ぶのはいいけど引く時は全員同時にね」
船のトップ二人が乗り気なため、仕方なく付き合うしかないだろう。
全員が用意されたくじを持ち、引くタイミングを待って動きを止める。
そしてキリが号令を出して一斉に引いた。
「せーのっ」
パッと自分の手元へ引き寄せる。
その瞬間、全員が辺りへ視線を動かし、結果を知った。
くじの先端、赤い色が付けられているのは二つ。
当たりを引いたのはゾロとサンジだった。
二人とも見るからに嫌そうな顔をしていて、それはおそらく皿洗いをするのを嫌がっているのではなく、パートナーに対する態度だったのだろう。
彼らは、仲間の目から見てもはっきりと仲が悪い。口も利かないほどというわけでもないのだが相性は悪く、よく挑発し合っては喧嘩する姿が見られた。
その組み合わせにルフィとキリが大笑いし、ウソップとナミがにやにやする。
「んなっ!? なんでマリモとなんだよっ!」
「チッ、めんどくせぇ……しかもアホと一緒か」
「あっはっは! ゾロとサンジだ!」
「水と油だね。良いコンビだと思うよ」
「ぷふ〜っ! ま、まぁこういうこともあるよな」
「仲良くやんなさいよ。言っとくけど、喧嘩してお皿割ったらあんたたちのお小遣いから差し引いて弁償してもらうから」
「ふふ、ちょうどいいんじゃないかな。これを機に仲良くなってみたら?」
笑顔で言うシルクにサンジは寂しげな顔をして、ゾロは嫌そうに首を横に振った。
「ちくしょう、シルクちゃんと組みたかったなぁ……こいつと組む

くらいなら一人でやる方がよっぽどマシだぜ」
「だったら一人でやれ。そもそもお前の仕事だろ」
「あぁん？　仕事がねぇからひがんでんのか？　お前だけ大した役目もねぇもんな」
「なにぃ？」
「あー君たち。喧嘩する暇があるならとっとと皿を洗ってくれたまえ。片付かねぇから」
睨み合ってまた喧嘩を始めようとした二人へ、止めるためというより面白がって、勝者の余裕を感じさせるウソップがしたり顔で言う。
非常に腹が立つ顔だったが文句は言えない。
たかが遊びとはいえ全員で決めたのだ。結果が出た今からごねたのでは男が廃るというもの。
「ハァ……やるか」
「仕方ねぇな……」
渋々といった様子で二人が席を立ち、汚れた皿の片付けを始めた。
普段ならば食事が終わればそれぞれ別の行動をして、大半がすぐに部屋から居なくなってしまうのだが今日だけは違い、いつも元気に走り回っているルフィも席に座ったまま。
仲の悪い二人が協力して皿洗いをしている姿を一味全員で見守っていた。
「おいクソマリモ、もっと力抜いて拭け。てめぇのバカ力で割っちまう気かよ」
「あぁ？　ちゃんとやってんだろうが。これで割れるなら皿の気合いが足りねぇんだ」
「何言ってんだ。バカか」
「うるせぇ、アホ」
「いやー新鮮。なんか、やっぱあり得ねぇな」
「そうね。喋ってる感じはいつも通りなのに、ちょっと……ねぇ？」
大の男二人が口喧嘩をしながら肩を並べて皿洗いをする光景は、思いのほか来るものがあったらしい。ウソップとナミは微妙な顔をしていた。

一方、ルフィとキリとシルクはどことなく楽しそうである。
「ししし。あいつら仲悪いなー」
「何が合わないんだろ。割と初めからああだよね」
「だけど、たまにすごく息が合うから不思議。実は仲がいいのかな？」
文句を言いながらサンジが洗い、皿を受け取ったゾロが拭く。
口は止まらないとはいえ一応協力はしているように見える。
やっぱり不思議な関係だと彼らは笑い、居心地が悪そうな二人を最後まで見守った。

4

船内で本を読んでいたチョッパーは、突然外から聞こえた声に肩をびくつかせた。
「チョッパー！　出てこいよ！　すんげぇのが見れるぞ！」
喜々とした様子のルフィの声だった。
不思議に思ったチョッパーは少し怯えながら甲板へ向かう。乗り込んだばかりでまだメリー号の構造にさえ慣れていないのだ。恐る恐る歩いて外を目指す。
扉を開いて甲板へ出ると、仲間たちが欄干の方へ集まっていた。
気になったチョッパーが歩き出すと同時にルフィが振り返り、手招きして彼を呼ぶ。
「チョッパー！　あれ見ろ！」
「え――？」
少し急いで小走りになった。欄干へ到着してルフィの隣、ぴょんと飛び乗って海を見る。その瞬間に目の前へ水しぶきが上がった。
船のすぐ傍を、たくさんのイルカが泳いでいたのだ。
まるで並走するようにメリー号の傍に居て、上機嫌そうな泳ぎを見せてくれる。数十匹の群れであった。自らの力で悠々と海を進む姿はあまりにも美しい。
ドラム島に居た頃、ほとんど海に近付かなかったチョッパーが知ら

ない光景。
彼は目を大きく見開き、イルカの姿や数十匹が自由に泳ぐ光景に感動を覚えていた。
イルカという存在すら知らなかったのかもしれない。
言葉を失った彼はただただ見惚れる。
そんな彼の顔を確認したルフィは笑顔で言った。
「どうだ？　すげぇだろ」
「すげぇ……海って、こんなにきれいなんだな」
「そうなんだ。冒険してるともっと色んな景色が見れるんだぞ」
「冒険……これが冒険なのか……」
言葉にできない。噛み締めるようにチョッパーが呟く。
感動は彼の体をわずかに震えさせ、好奇心を刺激して冒険への期待を大きくしたようだ。
その気持ちを体験として知っている者は多くて、不意にウソップが彼の隣に立ち、また何か嘘をつくつもりだろうと気付いたキリとシルクが口角を上げた。
「チョッパー、お前はまだ気付いてないようだが……こいつらを呼んだのはおれなんだぜ？」
「ええっ!?　そうなのか!?」
「すんげぇぇ～ウソップ！」
「実は昔、世界中のイルカたちのボスを助けたことがあってな。それ以来イルカはみんなおれの友達になったのさ。こいつらもおれを慕って集まってきちまったんだろうなぁ」
なぜかルフィまで目を輝かせているが、チョッパーは彼の嘘を信じたようだ。
欄干に腰掛けて海の方へ足を出したキリの傍に、たまたまゾロの姿があって、腕組みをしながら険しい顔をする彼にキリが振り向いた。
気になっていたのはチョッパーだったものの、その様子からしてもう安心だろう。最初は少し怯えていたのに早くもウソップやルフィと騒いでいる。
海賊になることへの不安や恐怖心は薄らいだか、或いは消えたのか

もしれない。
そんなことをゾロに確認した。
「結構ノリやすいんだね。あれなら心配いらないかな？」
「心配なんてしてたのかよ」
「いや、ほんと言うとそんなにしてないんだけど。楽しそうだなぁと思って」
「また騒がしいのが増えたみたいだな……」
「ゾロははしゃがないよね。無理して我慢してるなら気にしなくていいんだよ？」
「してねぇよ。これが普通だ」
「普通で顔が怖いんだね」
「ぶった切られてぇのかお前は」
ゾロをからかうのをやめて、上機嫌に笑うキリはチョッパーへ声をかける。
彼よりも少し高い位置に居たため、つぶらな目で見上げられた。
「チョッパー、彼らとは話せる？」
「あ、うん。〝どこに行くんだ？〟〝一緒に散歩しよう〟って言ってる」
「そういえばお前、動物と喋れるんだっけか」
驚くウソップとは対照的に、何やら思いついたルフィはチョッパーに顔を近付けた。
「そうだ！　チョッパー、あいつらの背中に乗せてもらえねぇかな？　そしたらおれ泳げねぇけど泳いでるみたいな気分になるだろ」
「え？　そうなのかな……おれ、試したことねぇし」
「やめとけルフィ。能力者は海水に触れただけで力が抜けるんだろ。体半分も浸かっちまったら掴まることもできなくなるぞ」
「え～？　だって泳ぎてぇじゃねぇか。キリも泳ぎてぇよな？」
ルフィが問いかけるとキリは笑顔で頷いた。
彼など特に水に弱い。ウソップはすかさず両腕でバツ印を作る。
「うん。できればカナヅチ克服して泳げるようになりたいと思ってるよ」

「だめだ。無理だ。だってお前ら一生カナヅチだもん」
「アホだなーウソップ。だからイルカに乗るんだろ。それにチョッパーが喋れるんだぞ」
「アホはお前らの方だ。溺れたら助けるのはおれたちになるんだぞ。いいから見るだけにしとけって。船動かしてる最中に助けるのがどれだけめんどくせぇか」
ウソップがルフィに指を突きつけて話している時、チョッパーが欄干から身を乗り出した。
試しにすぐ傍を泳ぐイルカへ声をかけてみる。
「お前ら、ルフィを乗せて泳ぐことってできるか？」
鳴き声を発するイルカが答えたのだろう。チョッパーはルフィを見る。
「〝乗っていいぞ〟って言ってる」
「ほんとか～！」
「おい、だからやめろって。どうせ苦労すんのはおれたちなんだぞ」
嫌な予感がする。
慌ててウソップがルフィを捕まえておこうと腕を伸ばした。しかし素早い動きを見せた彼はするりとウソップの腕を避け、欄干を蹴り、メリー号から海へ飛び出す。
皆があっと大口を開けて驚愕していた。
ルフィの体はちょうどイルカの居ない場所へ落ち、高い水しぶきを上げる。
「アホ～!?」
「だから言ったのに！」
「ウソップ、ＧＯ」
「あ～もうっ、やっぱりこうなんのか～！」
急いでウソップが海へ飛び込んだ。イルカたちが海中へ沈むルフィの下へ集うが、彼らは一緒に泳いでくれると考えているようで、溺れている事実に気付いていない。
船上から海を覗き込んでいたチョッパーは慌てふためく。
自分のせいでルフィが溺れた。彼は動けない。

おそらく責任を感じたからなのだろう。
気付けばチョッパーは考える余裕もなく、同じように欄干を蹴っていた。
「た、大変だぁあああっ！」
「あっ、チョッパー!?」
慌てて叫んだシルクの叫びも虚しく、チョッパーもまた海へ落ちて水しぶきを上げた。
まさかの行動に先程よりも船上が騒がしくなる。ルフィの突飛な行動は常だったが、まさか同じような船員がもう一人増えるとは思っていなかった。
その中でキリが最も冷静に口を開く。
「ゾロ、ＧＯ」
「ったく何やってやがんだあいつは!?」
腰から外した刀を三本ともキリへ投げつけ、ゾロが跳ぶ。
海中へ飛び込んでチョッパーの体を拾うと海面まで上がってきた。
先にルフィを助けたウソップが顔を出して、次にチョッパーを連れたゾロが顔を出す。あきれ顔で船へ泳いでくる二人は見るからに険しい顔だった。
「だからおれが言っただろ！　苦労すんのはおれたちなんだよ！」
「げほっ、えほっ……おかしいなぁ。乗っていいって言ったのに、受け止めなかったぞ……」
「なんでお前まで飛び込むんだよ」
「う、海って……すげぇ広いんだな……」
それぞれ一人ずつ担いで、ゾロとウソップがメリー号まで泳いで戻ってくる。ロープか何かで引き上げてもらおうかと考えた時だ。
船を見上げた途端、欄干の上に立つキリの姿を見つける。
二人の視線に気付き、彼がにんまり笑った。
「じゃあ、次はボクの番かな？」
「んなわけあるかァ!?」
「てめぇ、いっそ海の底まで沈めてやろうか……」
「あはは、冗談だよ。今引き上げるから」

怒気を発する二人に叱られてようやくキリが動き出す。こちらはこちらで厄介だ。
二人は揃って溜息をついてしまい、その周囲ではそんな心境を知らず、遊んでほしいのだろう無邪気なイルカたちが集まって彼らにじゃれついていた。

5

アラバスタへ到着する前夜。
戦いを前にしたメリー号では決起集会と称し、盛大な宴が始められていた。
サンジが多種多様な料理を大量に作り、一枚も残さず全ての皿が甲板へ運ばれて、それだけで船の見栄えはずいぶん違っている。
今はこの時を盛大に楽しもう。意思を一つにして決断し、彼らは大いに騒いでおり、英気を養うために精一杯楽しもうとしていた。
一人も欠けず皆が輝くような笑顔だった。
ウソップとチョッパーが鼻に割り箸を突っ込んで踊り、ゾロはカルーと共に酒を飲んで、それを見ているナミに呆れられている。ビビはシルクと楽しそうに話し、イガラムはビビに近付いて鼻の下を伸ばすサンジを警戒して慌ただしく動いていた。
いつの間にかずいぶん仲間が増えていた。
戻ってくるつもりのなかった、命を捨てることすら考えてしまった自分が、これほど心を許せる仲間に囲まれて、再びグランドラインに戻ってくるとは。
何もかも捨てるつもりだった。しかし今の状況ではそれもできない。
それどころか以前捨てた物さえ取り戻そうとしている。
一人離れた場所、船首付近の欄干に腰掛けて仲間たちの姿を見るキリは微笑んでいた。
以前とは何もかも違う。
今なら胸を張って言える。生きていることが、彼らと共に航海する

ことが楽しくて仕方ない。
キリが居る場所へ肉を持ったルフィがやってきた。
「なぁキリ。言っただろ？　後悔させねぇって」
大きな肉にかぶりつきながらルフィが笑う。
そう言われては反論のしようもない。彼が言う通りになったのだ。まるで予言のように、かつてした約束の通り、後悔なんて微塵もない。
だからこそキリは晴れやかな顔で甲板を眺めている。
隣に座った彼に感謝し、穏やかな表情で頷いた。
「うん」
「でもまだ途中だ。仲間はもっと増えるし、旅はまだまだずっと続く」
同じ場所で肩を並べ、同じ光景を眺めて、笑みを浮かべていたがいつになく真剣に告げた。
「これからもずっとついてこい。おれが海賊王になるまでずっとだ」
「……うん」
多くは語らず。キリは目を閉じて頷く。
もう迷いはない。最後までずっとここで生きていく。
覚悟を決めた彼が目を開いた時、その目は穏やかであり、同時に驚くほど力強くもあった。

戦いのあとで

アラバスタに雨が降る。
空には大きく厚い雲。近海から見ていても島中に降っているだろうことがわかる。
一隻の船が島から離れようとしており、その動向に気付く者は居ない。しかもその隣には普段はないはずの船を一隻引き連れている。
バロックワークス所有、人工降雨船〝フール号〟。
不思議な粉、ダンスパウダーを空へ打ち上げ、人工的に雨を降らせるための船だ。
それを奪取した彼らは誰にも知られることなくその場を離れようとしている。
雨に濡れることも気にせず甲板に立ち、島を眺める二人が話す。
態度は冷静だが気になるのは麦わらの一味の動向についてだった。
「あいつら、どうなったんだろうなぁ。勝ったのかな」
「いやーそりゃどうだろう。勝つのはまず無理って相手だからなぁ」
「なんせ七武海だろ？」
「今頃は死んでるかもなー……」
腕組みをしながら溜息交じりに言う。
その後、二人は壁に背を預けて立っている男へ目を向けた。
「船長はどう思います？」
問いかけられたトラファルガー・ローは、海賊島でキリから受け取ったエターナルポースを見つめており、冷静な面持ちで思案する。
ペンギンとシャチの心配は当然だろうと思っている。しかし不思議と予想する結果は一つだ。
「さあな……ここで死ぬようならその程度の奴らだったってことだ」
静かにそう言い、島へ目を向ける。
本来なら勝てるはずがないと考える相手。何せ相手は七武海。名を上げたばかりのルーキーはおろかグランドラインで生き延びた海

賊ですら簡単には勝てないだろう。
それなのに不思議と彼らが負けるとは思っていなかった。
何とかして勝つと思っている。だからこそ彼と手を組んだのだ。
アラバスタでの決戦にあたって、ハートの海賊団は多くの物を準備していた。
Ｍｒ．９とミス・マンデーをこの島まで導いたり、幻とさえ呼ばれる生物、ヒッコシクラブを見つけて手懐けておいたり、現在の国の状況を調べたりと大活躍である。報酬は人工降雨船。彼らの協力が無ければ麦わらの一味の勝利はなかっただろう。
ローはアラバスタを指すエターナルポースを近くに立っていたベポへ渡した。
この船の航海士は彼だ。投げ渡されて慌てて受け取り、大事そうに両手で抱える。
もう一度この島へ来るかどうかはわからない。だがエターナルポースは貴重な物だ。
気のない様子のローの返答を聞き、シャチとペンギンは顔を見合わせる。
アラバスタで何が起こっているのか。できれば今すぐにも知りたい心境だった。
「キリ、上手くやってんのかな」
「せっかく面白そうな奴に会ったからなー。できれば死んでほしくねぇよ」
「でも頑張ったわりにこの船だけって、安くねぇか？」
「まぁ船としてはそんなに使えねぇしな。でもあれ、売ったら高くつくらしいぜ？　もちろん闇の商人じゃねぇと無理だけど」
「マジ？」
話す二人に背を向けて、船内へ向かいながらローは小さく呟いた。
「この貸しは高くつくぞ」
顔には薄い笑みがあった。
その言葉からして、彼らが死ぬとは思っていない。いずれ借りを返してもらう。人工降雨船だけでは報酬としてあまりにも安過ぎるか

らだ。
いずれまた会うことになる。
もはや確信と言っていい想いを持って、彼はアラバスタに背を向けた。

＊

場所は変わって、アルバーナ。
優しい雨に包まれて静寂に満たされた町は、その静けさで人の気配すらも覆い隠していた。
ただでさえ戦闘が終わった直後。疲労感から呆けてしまっている者が多く、こっそり逃げ出した人間に気付く余裕がある者など皆無に等しい。
咳き込みながらよろよろ歩くＭｒ．２は、変装の達人でもあり脱獄の名人でもある。サンジに蹴り飛ばされた後に捕縛されていたはずだが今は一人で道を歩いていた。
辺りは無人。砂漠へ逃げた町人が戻ってくるまで時間があるはず。
負けはした。だが諦める気はない。
彼は一人になって体がふらついても歩き続ける。
ふらつく足取りで歩きながらもつらつらと考え事をする。
元々国盗りに興味はなかった。スカウトされて、組織を抜ければ死ぬ。だから続けていただけ。
これからどうしようと考えることに躊躇いはない。
そう考えてふと気付いた時、そういえばそれだけではなかったと組織に居た理由を思い出す。
顔を上げたＭｒ．２は雨を降らす空を見た。
いつからか、キリのことが気になっていた。
子供なのに心は冷め切っていて、まるで人形のようだった彼。成長するごとにその心に軋みが生まれ始め、本人さえ戸惑っている様子だったことは彼も知っている。
フッと笑って、Ｍｒ．２は少しだけ足を止めた。

再会した彼はいい顔をしていた。組織に居た頃にはなかった顔を鮮烈に覚えている。
突然姿を消した時は嫌な予感すらあったのだが、どうやら良い選択をしたようだ。
そうだ、と思いつく。
彼を頼ってみるのもいいかもしれない。
どうせ元々は仲間だった。色々あったが個人的に仲違いした訳でもなく、彼の今後が気になるという想いもある。せめて話すくらいはしてみたい。
Ｍｒ．２は笑みを浮かべて再度歩き出す。
「んが～っはっはっは……み～てなさいよ～う……」
雨が降る町に静かに消えていく。
その姿を見つけることは終ぞできず、逃げ出したのは彼一人だった。

二日後

ゆっくりと目を開いて、キリが目覚めた。
開かれた窓から穏やかな風が入ってくる一室。たくさんのベッドが並べられた客室だ。そこは王宮の内部であり、町より少し高い位置にあって風が入りやすかった。
爽やかな風に涼しさを感じながら、キリは眠そうな目で周囲を見回す。
視界がはっきりするとすぐ、覗き込んでくるチョッパーとビビの顔に気付いた。どうやらずっと看病してくれていたらしい。
目元を擦り、のそのそと上体を起こすと咄嗟にチョッパーが背を支える。
疲労感は残っていた。が、生きている。
大きく息を吐いて安堵を覚えた。
「キリ、やっと起きた。気分はどうだ？」
「んー……おはよう」
「キリさん。よかった、目が覚めて」
ほっと息を吐いている二人を見るにそれなりの時間が経ったのだろう。
改めて自分の体を見下ろすと、ローブのような服を着せられていて、体の汚れもすっかり落とされていた。何気なく髪に触れてみるとさらりと柔らかい感触がある。
大量の包帯も巻かれていて、寝ている間に迷惑をかけたようだ。
キリは二人へ目を向け、力の入らない声で言った。
「うん、大丈夫だよ。まだちょっと眠いってこと以外は特に問題ない」
「まだ眠いのか？　二日寝てたんだぞ」
「二日？　うわー、そんなにか」
「二日で起きただけすごいと思うぞ。運び込まれた時はもっとひどい状態だったんだって」
叱るような目でチョッパーが言う。

その声を聞きながらキリが視線を動かすと、隣のベッドでルフィが寝ていた。全身包帯だらけでお互いひどい様相だが、どうやら無事に生き残ったらしい。
彼の寝顔を見たまま二人へ聞いてみる。
自分たちが無事だったのだ。予想はできているが聞かないと落ち着かない。
「他のみんなは？」
「ちゃんと無事だぞ」
「あなたたちが最後。みんな起きてそれぞれ好きに行動してるわ」
「そっか」
安心した様子がわかりやすく表されている。笑みを深くしたキリは再びベッドに背を預け、四肢を伸ばして脱力した。まだ眠いと言った通りすぐに目を閉じる。
ひとまず安心できる状況にはなったのだろう。
大変な一日だったと、振り返ってみて初めて気付いた。
「じゃあ、ボクらが勝ったんだ」
「うん。そうなんだ」
「あなたのおかげよ。本当にありがとう」
「そうでもないよ。今回ほとんど何もしてないし」
「いいえ、そんなことない。キリさんが居たからこの国を守れたの」
目を細めて微笑み、静かながら嬉しそうに言うビビに、キリは苦笑して答えた。
「その代わりこの国を陥れたのもボクだけどね」
「もういいわ。全部終わったことだから」
「そうだ、全部終わったんだ……だからようやく謝れるよ」
寝転がったままだったが少し表情が変わって、目を開いたキリがビビを見る。
真剣な、神妙ともいえる様子で告げた。
「ごめんね。君の国をめちゃくちゃにして」
「……ええ」
そういえば、きちんと言葉にして謝られたのは初めてな気がする。

ビビはその言葉を正面から受け止めた。
この時が来るのを待っていたのだと判断した。全てが終わってから謝罪する。その時までは絶対に死なないと決めて戦いへ臨んだに違いない。
今こうして彼と向き合えてよかった。
二人の様子にチョッパーがうんうんと頷く。
もう一度キリが大きく息を吐いた。
天井を見つめてふと思う。今もまだ生きているのは奇跡に等しい。
きっと実力だけでなく運もよかったのだろう。自分の行動を思い返し、すぐに反省する。
「ほんとに、よく勝てたもんだよ……誰も死ななくて本当によかった」
「おれは、キリが死んじまったのかと思ってびっくりした」
「あぁ、ごめん。時間がなかったからああするしかなかったんだ」
「キリも結構無茶するんだな」
「必要があればね。でも死ぬつもりはなかったよ」
からりと笑って言う姿には呆れもするが、今この状況では責めようと思わなかった。
キリもルフィも、命を落としかねない窮地を生き残ったのである。その覚悟はチョッパーから見れば尊敬するものであり、ビビはただ純粋に彼らへ感謝する。
もしもあの砲弾が広場へ落ちていたら。
もしもクロコダイルを倒すことができなかったら。
今回の戦いでの彼らの功績はあまりにも大きい。
せめて今日くらいは肩の力を抜いてだらけるのも許してやろう。
そう思った。
眠気はあるが起きてしまったからにはあまり眠る気になれない。
そのままの体勢でキリは話を続けようとする。
「みんなはどうしてるの？」
「色々だ。ゾロとウソップとサンジは町の建物を直すのを手伝ってるって。町に住んでた人たちが戻ってきたから協力して作業してる

んだ」
「シルクさんは、女性の人たちが集まって炊き出しをしているのを手伝っているみたい」
「みんな働くねぇ。まだ疲れてるだろうに」
「ナミは国王に交渉してくるって言ってたぞ」
「んん、ナミはいつも通りだ」
チョッパーの言葉にキリが肩を揺らし、ビビは困ったように苦笑する。女や子供にだけは優しい彼女も疲弊した国家から大金をせびることはないだろうが、タダで帰るつもりもないらしい。
少し会話に間ができて、お互いにふと落ち着く一瞬がある。
いつにも増して力の抜けた顔を見せるキリがそう大きな声も出さずに尋ねた。
「アーロンたちとは連絡取った？」
「うん。言われた通り海軍の船がこの島に近付かないように沈めてるって。ナノハナの辺りには海軍は一人も居ないって」
「でもどうしてそんなことを？　その、町の状況から言って海軍の協力はあった方が嬉しいんだけど……もちろん、あなたたちのことを通報したりしないわ」
「その件についてだけど、ちょっと考えてることがあってね……」
キリの表情がほんの少しだけ変わる。笑みを浮かべていても目が違った。
少し寂しげな様子だと二人は受け止めた。
「バロックワークスはどうなったかな」
「海軍が捕まえたぞ。でもまだこの島は離れてないみたいだ」
「キリさん……何かする気なの？」
不安そうな顔でビビが問いかけると、キリはにこりと笑っただけだった。
ちょうどそのタイミングで扉が開いて人が入ってくる。
現れたイガラムは多少の怪我を負っていたものの平然としており、目覚めたキリに気付くと笑みを浮かべて、その手には電伝虫が持たれていた。

「おぉ、キリ君。目が覚めたかね」
「ご心配おかけしましたー」
「どうしたのイガラム」
「ええ。それが実は……」
言い辛そうにイガラムが手に持った電伝虫を見る。今も通話中だったようだ。
それだけで何かを察して、キリが体を起こすとその場に座った。イガラムの手にある電伝虫を見て手を伸ばし、それを要求する。
「ボクが話すよ」
「む……そうだな。ビビ様に相談してからと思ったが、一番の適任は君か」
「誰だ？　キリが適任って、どういうことだ？」
チョッパーが首をかしげる中、表情を険しくしたビビは察したようだ。
その様子に気付きながらイガラムは彼が居るベッドに電伝虫を置き、受話器を渡す。
キリが受話器へ声をかけると途端に返事が返ってきた。
「もしもし」
《んが～っはっはっは！　おひさしぶりねい紙ちゃん！　やっぱりあんた生きてたのぉ～！》
聞こえてきたのは弾むように元気な声。戸惑うまでもなくＭｒ．２の声だとわかる。
ビビやチョッパーも聞いた瞬間に理解できたらしく、瞬間的に緊張感が生まれて、少なからず表情が変わった。一方でキリは変わらず微笑みを湛えている。
「久しぶり。意外に元気そうだね」
《もう大変だったわよ～う。逃げたり、傷を治したり、正直今でも体が痛むわ～ん》
「仕方ないね。で、用件は何？」
《あら、もう本題？　あんた付き合いの悪さだけは変わってないわねい》

「こういう性分なんだよ」
《ぷうっ。まあいいわ～ん》
気を取り直したＭｒ．２が少しトーンを落として語り出す。それは彼への問いかけであった。
《紙ちゃん、あんたチェス好きよね？》
「ある程度はね。心を奪われるほどってわけじゃないけど」
《だけどチェスやってる時の不満もあるんでしょ？　自分なら取った駒を利用するのにって》
「へぇ……よく覚えてるね」
おそらくその時、何を言わんとしているのかを理解しているのはキリだけだっただろう。
その場で聞いていた三人は険しい表情で、見るからに疑問を持っている様子だった。
《あんたが取った駒、今一か所に集められてるんだけドゥ。奪うつもりなら協力するわよ～ん》
「ボンちゃん……」
《何ぃ？》
「ボンちゃんのそういうところ有難いね。言われなくても取るつもりだったのに」
《んが～っはっはっは！　やっぱりねぃ！　あんたはそう考えると思ってた》
話しながらキリは窓の外を見て、明るさから大まかな時間帯を確認する。
「今はどこ？」
《もう変装して忍び込んでる～。タマリスクの港に停泊中よ～ん》
「近いな。今からそっちに行く」
《待ってるわ～ん。んが～っはっはっは……》
通信が切れ、電伝虫が眠り始める。
殻の上に受話器を置いた後、キリは重い体を動かしてベッドを降りようとした。とてつもない爆発を至近距離で浴びた危険な状態。たった二日で動けるほど癒えてはいないはずである。

慌ててチョッパーが止めようとするが、彼が目を向けただけでチョッパーを止めた。
「キリ、お前まだ動いちゃ……」
「大丈夫。無茶はしないから」
「キリさん……」
不安そうな顔でビビが呼びかける。この時には気付いていたのかもしれない。
安心させるようにキリが微笑み、優しい口調で言う。
「心配いらないさ。もうこの国は狙われない」
「……ええ。あなたのことは信じられる」
「期待には応えるよ」
ベッドを降りて立ち上がり、キリはふらつきながら歩き出して部屋を出ようとした。しかし扉の前へ到着する時になってあっと呟き、振り返る。
目を向けた相手はビビだった。
「悪いんだけど、超カルガモ部隊貸してもらえないかな？　流石に自分の足じゃきつい」
「いいけど、全員を？」
「うん。できればそっちの方がいい」
きっと止めたって聞かないだろう。何せ彼は海賊だ。
苦笑したビビは頷いて、同じく困惑しているイガラムへ言った。
「イガラム、お願い」
「よろしいのですね？」
「ええ。だってキリさんだもん」
にこっと笑った彼女を見て、やれやれと溜息をついたイガラムも扉へ向かった。
「わかりました。すぐに呼び寄せましょう」
「ありがとう」
「ただ、そんな体ですから、あまり無理はしないように」
「了解。今度は気を付けます」
へらりと笑うキリを連れてイガラムが出ていく。

残されたチョッパーはぽかんとしており、彼らが何を言いたいのかがわからなかった。
ビビの顔を見上げ、不思議そうに尋ねてみる。
「どういうことだ？」
「またキリさんの悪巧みよ。トニー君も後でびっくりすると思うわ」
「そうなのか……そういえばみんな、キリが一番悪いことするって言ってたなぁ」
ふーんと頷いて、チョッパーはその時が来るのを待つことにする。どちらにせよ彼が知らないことはたくさんある。楽しみに取っておくつもりのようだ。
ビビはそんな彼に笑みを見せ、二人が潜り抜けた扉へ視線を向ける。
少し前なら猛反対していたかもしれない。しかし彼らとの短くも長い航海を経て、海賊の生き方や彼らの生き方を知った。今なら反対はしない。
キリは、ルフィは、麦わらの一味は信じられる。
命を賭けてアラバスタを守ってくれた彼らがこの国を脅かすことはない。
ビビはそう信じてキリを送り出し、たとえ何が起ころうとも受け入れようと思っていた。

＊

一日が終わりに近付き、夜がやってきた。
辺りは暗く、人に恐怖を与えるほどの静けさが暗闇と共に周囲へ広がっている。よく見れば周囲の状況も寂しさを助長するような風景だった。
海軍が所有する軍艦、その一隻。
船内の牢屋に特別広い物があった。
囚われていたクロコダイルは囚人服に身を包み、海楼石の手錠をつ

けられ、暴れることもなく壁際に座っている。その顔は何の感情も表してはいなかった。
船内はいくつかの蝋燭の火で照らされており、暗闇の中に溶け込むように存在している。
予想外のことが起こった。自分は負けた。それは疑いようのない真実。
それ故、事実を否定することはなく、彼は冷静な面持ちで目を伏せ、ピクリとも動かない。
海軍に捕まってどこへ連れていかれるのか。興味はない。どこへ連れていかれようとも大して心は動かず、しかし思考は常に動いていた。
静寂と暗闇。それらを敵ではなく味方につけて、彼の心は凪のように静かだ。
どれくらいそうしてじっとしていたのかはわからないが、物音が聞こえた。
不思議なことに見知った気配がすぐ傍へ来ている。予想していなかった訳ではないが、本当に来るとそれはそれでおかしなものだと思う。
目を開いた時、鉄格子の向こうにはキリが立っていた。
「こっぴどくやられたね」
「フン……お前も人のことは言えねぇだろう」
彼の登場に動揺することもなくクロコダイルは薄い笑みを浮かべた。
すでに決着はついている。今更命を奪おうなどとは思っていない。ではなぜ彼がここへ来たのかと言えば目的は一つ。礼を言うためである。
笑みを消して真剣な顔で、昔を懐かしむような表情でキリが言葉を紡ぎ出した。
「ありがとう。ボスのおかげだ」
「この状況じゃ皮肉に聞こえるな」
「それは悪いと思ってるよ。でも、あの時助けてもらわなかったら。

鍛えてもらわなかったら。ボスに出会わなかったら今はなかった。だから感謝してるんだ」
キリもまた薄く笑みを浮かべ、作られた笑顔ではない、彼本人の笑顔を見せる。
「もし、秘密結社じゃなく海賊のまま生きてたとしたら、こうはなってなかったかもね」
「もしもなんて話をしても意味はねぇさ。この状況は変わりはしねぇ」
「それもそうだね」
しばし間が空く。
少しの時間黙ったまま、ただ視線がかち合う。それだけで理解できる気がした。
考え込んでいたのか、何かを感じ合っていたのか、少ししてからキリが口を開いた。
「今まで一度も勝ったことなかったけど、初めての一勝だ……ボクはルフィと一緒に行く」
「そうか」
クロコダイルは平然と受け止めて、表情は微塵も変わらない。
「やっと自由に生きる覚悟ができたんだ。ボクがルフィを王にする」
真剣な声色で告げられた。そこには一片の迷いもない。
ようやく心が決まったのだろう。
変化を目にしたクロコダイルはくつくつと笑う。
何も返事はなかった。肩をすくめたキリはやれやれと溜息をつく。
話を変えるべくキリが室内を見回した。
「さて。そうは言っても、そこに居るのも退屈でしょ？　鍵ならそこにかかってるけど」
「そうだな。足を伸ばせるだけマシだが、退屈なのは間違いない」
苦笑してキリが壁にかけられた鍵の下へ移動する。
その背へクロコダイルが声をかけた。
「お前がおれと来るならそれを受け取ってやる」

指先が鍵に触れた瞬間、動きが止まった。
振り返ることもできず壁の方を向いたまま。キリの顔から笑みが消えて驚きが確認できた。
クロコダイルはさらに言う。
「おれは欲しい物を妥協するつもりはねぇよ。野望もそうさ」
キリが振り返る。
今は再び薄い笑みを浮かべて、落ち着いた心境で向き合うことができた。
「興味が失せたんだ。しばらくはゆっくりするのもいいかと思ってな」
「そうなんだ。それじゃあ、これはいらないね」
言い終えて、長居するのもまずいと思ったのだろう。キリが背を向けて行こうとする。
その背へクロコダイルが呼びかけた。
「キリ」
名を呼ばれたのは、ひょっとしたら初めてかもしれないと、キリは彼に目を向けた。
「おれはこの程度じゃ終わらねぇぞ」
「……うん。待ってるよ」
やはり、彼は海賊だったということか。目は死んでいないどころか野望を見据えてギラギラと強い光を放っている。社長という肩書を捨てたことが大きかったのかもしれない。
キリは笑顔で頷き、何もせずにその一室を後にした。
この夜、アラバスタ王国のタマリスクという港町に停泊していた軍艦は三隻。
その内の一隻で突然の大爆発が起こり、何者かの襲撃を受けたという報告が上がった。
バロックワークスの主犯格とされる三人が捕まっていた船とは別の軍艦。
クロコダイル、Ｍｒ．１、Ｍｒ．３を乗せた軍艦には傷一つなかったが、それ以外の幹部、専門的な言葉で言うならばオフィサーエー

ジェントを乗せた船が襲われ、多くの脱獄者を出した。
襲撃した犯人は不明。
主犯格三人を除くオフィサーエージェントを逃がした誰かは、砂漠へ姿を消したのである。

三日後

「いやぁ～よく寝たぁ～!!」
目覚めて早々、ルフィは元気に叫んでいた。
体に残るダメージや倒れた時の疲労が嘘のように、誰よりも元気な笑顔を見せる。
同室に居たナミとウソップは呆れ、ずっと看病していたビビとチョッパーは安堵していた。
「あれ!? 帽子! おれの帽子は!? 腹減ったな! メシと帽子!」
「起きてすぐに全速力だな……」
「帽子ならそこにあるわ。傷ついてたから直しといたわよ」
「ほんとかっ? ありがとう!」
ベッドの枠にかけられていた帽子をかぶり、落ち着いたルフィが楽しげに笑う。
誰よりも傷が深かったはずなのに誰よりも早く回復してしまったらしい。それが彼らしいと言えば確かにそうなのだがあまりにも人間離れし過ぎていないだろうか。
微妙な顔つきのウソップとナミは改めて船長の化け物ぶりに驚いた。
「しっかしこいつはなんでこんなに元気かね。死んでてもおかしくなかったはずだろ」
「まぁ、これがルフィよね。丸三日寝てたからって言われれば確かにそうなんだけど」
「ん? 三日!? おれは三日も寝てたのか!?」
ナミの何気ない一言でルフィは驚愕する。
いつになく思考が高速で動き、瞬時に一つの答えを導き出した。
「15食も食い損ねてるっ」
「なんでそういう計算早いの、あんた」
「しかも一日五食計算だ」
「道理で腹減ってるはずだよ。メシは?」

ルフィは空腹を訴えてビビを見る。すると彼女はにこりと微笑んだ。
「ふふっ、約束だものね。給仕長に確認してくるわ」
「おう！」
そう言ってビビはルフィの傍を離れると部屋を出ていく。
その間にチョッパーは再度ルフィの傷を確認しており、やはり驚くほど回復が早いことに目を見開いていた。適切な処置があったからこその回復なのだがそうとは感じさせないほど。そもそもの回復力が人並み外れて優れているのだ。
これが生まれつきのものか、はたまた幼少期の修行によるものなのかは不明である。
傷を確認したチョッパーは太鼓判を押す。
包帯は取らない方がいいが動くくらいは問題ない。
胸元を蹄でポンポン叩き、安心した顔でチョッパーが言った。
「うん、大丈夫だ。もう日常生活くらいなら普通にしてていいぞ」
「ししし、そうか」
「これが異常なのか正常なのかわからなくなってきた」
「考えるだけ無駄よ。だってルフィだもん」
ルフィの様子を確認し終えた後で、ウソップの興味がナミへ移った。
彼が起きるまでの話が途中で終わっていたのだ。
「そういやナミ、国王のおっさんになんかせびってたみてぇだけど何もらったんだ？」
「失礼ね。せびってたんじゃなくてあくまでも正当な報酬。一国の王女を無事に連れ帰ったんだから少しくらい良い想いしてもいいでしょ？」
「その気持ちはわかる気がするけどなぁ……」
「心配しなくてもこんな状態の国からお金は請求しないわ。珍しい本をもらっただけ」
「あぁ、それなら納得だ」
「とりあえず貸しね。ちゃんと復興して元通りになったら改めて、

ね？」
「あ、諦めてはいねぇんだな。鬼か……」
ナミが少女然とした顔で可愛らしく笑うと、それを見たウソップはげんなりする。ルフィも大概だが彼女も人のことは言えない気がした。
待ちきれない様子でルフィがベッドから降りる。
ベッドの上で立っているチョッパーもトナカイだし、普通なのは自分だけみたいだ。ウソップは改めて自分の仲間を見回して思う。
「ん～なんか体がなまってんなぁ」
「そりゃ三日も寝てたからな。だからってまだしばらくはじっとしてろよ」
「そうだよルフィ。無理は禁物だぞ」
「おう！」
「そうは言ってもルフィだからね。気になるならちゃんと見といた方がいいわよ、チョッパー」
くすくす笑って言うナミの言葉でチョッパーは表情に力を入れた。
「うん、わかった。おれ今日はルフィから目を離さないぞ」
「大変だろうけど頑張ってね」
「みんな居ねぇな。どこ行ったんだ？」
「この国全体が慌ただしいからな。あちこち行ってんだよ。家直すの手伝ったり、出航準備のために食料買ったりとか。そういやキリはどっか行ったらしいけど」
「へぇ。出航すんのか？」
船長でありながらルフィは不思議そうな顔でウソップに聞く。
少し呆れながらもウソップは平然と答えた。
「まだわかんねぇけど、海軍が近くに居るらしいからな。いつでも出れるようにしといた方がいいんだってよ」
「ふーん。メシまだかな」
「いや聞けよっ!?　お前が聞いたんだろ！」
ルフィが部屋の扉に目を向けた時、ちょうど外から開かれた。食事が運ばれてきたのかと目が輝くものの、実情は違って、入ってきたの

はシルクとサンジだ。
外で町人の手伝いをした後戻ってきたらしい。
寝ていたはずのルフィが立っていることに少し驚き、シルクはすぐに笑みを浮かべた。
「おはようルフィ。体は大丈夫？」
「ああ。どこも問題ねぇぞ」
「ビビちゃんとチョッパーに感謝しろよ。熱がひどいってんで付きっ切りで看病してたんだ」
「そうなのか？　ありがとな」
振り返ったルフィが礼を言い、チョッパーはくすぐったそうに笑う。
ビビにも後で礼を言わなければ。
そう思ったところでシルクがナミの隣、ベッドに腰掛け、サンジは椅子に腰を落ち着ける。
激しい戦いを終えたばかりであるせいか、どこかまったりした空気があり、ルフィを除けばであるが騒ぐこともなければ大きなリアクションを取ることもない。
ふーっと深く息をする音が妙に大きく聞こえた。
徐々に仲間が集まる一室で、いつものようにはしゃぐ気にはなれない。
みんなが妙に落ち着いているためルフィは不思議そうにしていた。
いつもの雰囲気と違う。これほど気の抜けた空気は初めてのものだった。
「どうしたんだお前ら？　疲れてんのか？」
「そりゃ疲れもするだろ」
「あれだけ激しい戦いだったからね。体力は大丈夫でも、気疲れしちゃって」
「そうか？　おれは元気だぞ」
「お前は三日も寝てたからだろ」
「んん、それもそうか」
すっかり万全の状態らしいルフィは体力を持て余す余裕もあるら

しい。
煙草に火を点けたサンジが笑い、シルクは心底楽しそうに微笑んだ。
そうこうしていると再び扉が開いてゾロが入ってくる。
彼の場合、町人の手伝いもそうだが、時折どこかへ消えては勝手に鍛錬をしていたようだ。いつの間にかチョッパーが巻いた包帯を外しており、それでも平然と歩いている。
目敏く見つけたチョッパーが目つきを変えた。
「おう、起きたかルフィ」
「おーゾロ。久しぶり……久しぶり？」
「あ、お前またっ」
部屋の隅に置かれた水をコップへ注ぐゾロへ、慌てたチョッパーが急いで駆け寄った。
「またどこかで修行してきたな!?　激しい運動はだめだって言っただろ！」
「別にいいだろ。おれの勝手だ」
「勝手じゃない！　おれは船医だぞ。みんなの傷はちゃんと治さなきゃ気が済まないんだ。包帯も取るなよ」
「動きにくいだろ、あれ」
「動くなよ!?」
ゾロを叱るチョッパーが声を荒げる頃、ルフィは腕組みをして首をかしげ、混乱している様子で疑問を口にする。自分で「久しぶり」と言った感覚が奇妙だったのだろう。
確かめるように呟くルフィを見ながらシルクが声をかけた。
「久しぶり？」
「無理もないよ。三日も寝てたんだから」
「まぁ、寝てても三日だから体はおかしな感じになるか」
感心した様子でウソップが頷くと同時、扉を開けてビビが戻ってきた。
後ろにはフルーツを山盛りにした籠を持った侍女が数名ついてくる。そしてビビの隣には、なぜか外見がイガラムそっくりな女性が居

た。
まさか女装か、と驚く一同の反応に、誰かが口を開く前に慌ててビビが彼女を紹介した。
「みんな、彼女はイガラムの奥さんで給仕長のテラコッタさん。私もお世話になってるの」
「ビビ様が世話になったねぇ」
「あいつも女なのか」
「似たもの夫婦にもほどがあるだろ……」
驚いている様子のチョッパーとゾロが呟くものの聞こえなかったようだ。
テラコッタは腰に手を当てて立ち、ルフィを見ていた。
侍女たちがルフィの下へ籠に入れたフルーツを運び、目を輝かせる彼はすぐに手を伸ばす。
「船長さんが空腹らしいけど、もう少しで夕食なんだ。みんなで食べた方が美味しいからもう少し待っておくれよ。そいつはそれまでのつなぎさ」
「わかった」
答えた瞬間に大口を開け、ほとんど一口で全て食べてしまう。しかも侍女たちが気付くのに一瞬遅れるほどの早業で、悲鳴のような声が上がる。
同じく驚き、気付けなかったウソップが咄嗟に叫んだ。
「手品かよっ!?」
「あっはっは！　ほんとにすごい船長さんだ！」
「おばちゃん、おれは三日分食うぞ」
「望むところさ。給仕一筋三十年、どんな大食漢にも負けないから存分に食べな」
「しっしっし！　わかったぁ！」
上機嫌にルフィが頷き、それを見たテラコッタは今から気合いを入れる。
どちらもすっかりやる気で、ビビはおかしそうにくすくす肩を揺らす。

そんな時にキリが戻ってきた。
何やらいつもと違う空気を察知し、ルフィとテラコッタが笑顔を向け合っていたり、ウソップがなぜか呆れていたり、ゾロが人型になったチョッパーに捕まり、ほとんど無理やり包帯を巻かれていたりと、室内の静けさとは裏腹に外見的には騒がしい様相を感じる。
とにもかくにも仲間が全員揃って楽しそうなのは間違いない。
部屋に足を踏み入れたキリは笑顔になる。
入れ違いで侍女たちが出ていき、テラコッタを含む気付いた皆が彼に目を向けた。
「おはようルフィ。無事に起きたみたいでよかった」
「あ、キリ。久しぶり」
「うん、久しぶり、だね。なんとなく」
「どこ行ってたんだよ。しばらく居なかったよな？」
ルフィとキリが挨拶する中へウソップが質問を投げかける。するとキリは彼へ言った。
「戦いが終わったし、ルフィも起きて、町がこんな状態でしょ？色々思うところあってね」
「ん？」
「海獣の肉やらなんやら色々獲ってきたんだ。馬車馬みたいに働いてくれるやさしーい知り合いが居たからね。今頃は全部広場へ運び込んでるよ」
キリの後から走ってきたカルーが部屋に現れた。
急ブレーキで滑るように足を止め、バッと勢いよくキリへ敬礼する。超カルガモ部隊の隊長としてのプライドがそうさせたのだろうか。やけにやる気漲る態度である。
慣れた顔でキリが敬礼を返し、カルーは右の羽を下ろす。
「運んでくれたのは超カルガモ部隊だよ」
「クエーッ！」
「というわけで、今日の夕食は思い切って町中全部巻き込んだ盛大な宴にしない？　こういうみんなが疲れた時こそ何も考えずにパーッと騒いだ方がいいよ。今日だけでも嫌なこと忘れて、思いっき

り楽しめば、明日になったらまた頑張ろうって思えるさ」
そう提案するキリに、ビビは笑みを深める。
罪滅ぼしという訳ではないだろうが、自分たちだけでなく国民のことまで考えてくれた彼の優しさに胸が熱くなった。確かにそうすれば国民はきっと元気を取り戻すはず。
それは、海賊の宴に参加した経験があるビビだからこそ賛成できた。
テラコッタが顎に手を当てて考えているのを見て、咄嗟にビビが背を押していた。
自分もそうしたい。心からそう思う。
せっかく帰ってきた祖国だ。国民と一緒に楽しい時間を過ごし、明日への希望を持ちたい。
「それがいいわ、テラコッタさん。お父様やイガラムに話してそうしましょ」
「ん～確かに、国民のみんなも疲れ切ってるだろうからねぇ。元気になるならそれがいい」
「私からも頼むわ。ずっと気を張っていても仕方ないもの。たまには息抜きも必要よ」
「よしわかった。ビビ様がそこまで言うならお願いしてみようじゃないか」
そう言って笑顔で頷き、すっかりやる気になったテラコッタは、反対されても止まりそうにない様子で部屋を出ていく。通り過ぎ様、よくやったと言わんばかりにキリの肩を軽く叩いて。
続くようにビビがキリの前へ来て、彼に笑顔を見せる。
何から何まで助けられてばかり。少なくとも彼女はそう思っている。
深々と頭を下げ、顔を上げて礼を言った。
「ありがとうキリさん」
「迷惑かけたのはボクだからさ。ま、これでもまだ足りないだろうけど少しくらいね」
「ううん、これだけで十分。その気持ちが嬉しいの」

「そりゃどうも」
ビビは移動し、部屋の入口へ向かう。
そして廊下との境目に立つと振り返り、晴れやかな笑顔で仲間たちを見回した。
「みんな、先に行ってて。私も後から追いかけるから」
「早く来いよビビ！　宴楽しみにしてるからな！」
「うん！」
子供のように無邪気に頷いて、ビビはカルーと共に走り出し、長い廊下を進んでいった。
その背を見送った一同は彼女の喜びを受け止める。
あれほどはしゃいで、何一つ心配せず、あれほど心から笑っている姿は初めて見る。今では彼女の中から全ての不安が無くなっているのがやっと理解できた。
キリが仲間たちへ向き直った。
戦いは終わった。後は楽しむだけ。
やっとこの時が来たと仲間たちが纏う空気も一瞬にして変化する。
「それじゃボクらは先に行ってようか」
「うおぉぉ～！　宴だぁ～！　肉ゥ～～!!」
「やっとこの時が来たかぁ！　これが楽しくて生きてるなぁ！」
「宴だぁ～！」
まず真っ先にルフィ、ウソップ、チョッパーが動き出して、ドタドタと騒がしい様子で廊下を走り出した。その背はあっという間に遠ざかっていく。
彼らが無邪気なのはいつものことだ。誰も驚きはしない。
やれやれという顔でナミが立ち上がり、颯爽とサンジが歩み寄る。
「お手をどうぞ、ナミさん。転ぶと危ないですからおれを頼ってください」
「ありがとうサンジくん。でも別にいらないわ」
「あはは、ふられてやんのー」
「うるせぇよてめぇは！　これがおれとナミさんの愛の形なんだ！」

キリが軽い様子で歩き出し、その後からナミとサンジが進んでいく。
必然的に後ろになってしまったゾロとシルクが最後に部屋を出た。
「ふふ、みんなすっかり元気になって」
「どいつもこいつもうるせぇけどな」
「ゾロもあんまり変わらないよ。またチョッパーに叱られたでしょ？」
「あいつ……どんどん口うるさくなってやがる」
「優しいだけなんだよ、チョッパーは」
がしがし髪を掻くゾロの隣でシルクが微笑み、共に部屋を出て、そこは無人になった。
この後、そう時間も経たずにアルバーナの広場へ話題の海賊たちが現れ、宴を始めて思い切り騒ぐことが宣誓された。

雨のち晴れ

つい先日、激しい戦場となった王宮前広場で、かつてない規模の宴が始められていた。

アルバーナ中の人間が集まり、運び込まれた海獣の肉が次々焼かれ、王宮にあった食料もどんどん運び込まれていて、数時間前までの表情はなく、誰もが弾けるような笑顔を見せている。

数多の笑い声が重なり合い、雰囲気に呑まれて踊り出す者が大勢居た。

麦わらの一味が主導して始めた宴はアラバスタ史上最高の規模。

広場に入りきらなかった国民でさえ至る所で焚火を作り、焼けた家々を前にして騒いでいる。

広場の中央には大きなキャンプファイヤーを設けて、一度は多くの火で建物を焼き払われたはずなのだが火を恐れず、火による嫌な記憶を同じく火で燃やしてしまうかのような、精一杯今を楽しもうという態度が誰の表情からも窺える。

最初は戸惑っていた者さえ、陽気な海賊たちにつられ、見習うかのように笑い声を出し始めた。

一時とはいえ、疲弊していたはずの町に活気が戻っているのである。

大きく切られて焼かれた肉の塊にかぶりつき、早くもルフィは腹をパンパンに膨らませている。

脇目も振らずに食べ続けた結果、誰よりも多く料理を平らげていた。

その勢いは人々を驚かせ、アルバーナの町人たちは彼の姿を呆然と見つめている。

「すげぇ……」

「もう何人前食ってんだ？」

「んんがぁ～！　おかわり～!!」

見る見るうちに料理を平らげていくルフィの勢いは衰えず、給仕長のテラコッタはその姿を確認しながら、笑顔で調理を続けていた。

まさかここまで食べるとは思わなかった。それに思い切りのいい食べ方だ。
彼女も調理が楽しくなってきて、気分が良いままで次々料理を生み出していく。
「言うだけあるね。だが負けないよ！」
慣れた様子で勢いよくフライパンを振り、手早く皿に盛りつける。
忙しなく動く侍女たちへ声をかけながら大きな皿が調理台へ置かれた。
「はいよ！　次できたよ！　持っていきな！」
侍女たちは休む暇もなくあちこちへ料理を運んでいた。それはそれで疲れる仕事だが、不思議と笑みを浮かべる余裕があって楽しそうだ。戦争に比べれば少しも苦ではないということだろう。
テラコッタは早速次の料理へ取り掛かる。
広場に設けられた簡易的なキッチン。設備は王宮内に比べればお粗末かもしれないが十分。
今必要なのは人々を満足させる量なのである。とにかくたくさん作れればそれでいい。
そこにはサンジの姿もあって、テラコッタの隣で見事な手腕を見せていた。
大きく切り出した海獣の肉を焚火で焼きながら、片手間で野菜を刻んでサラダを作りつつ、さらに女性のためにとスイーツにまで手をかけているようだ。
笑顔で料理を作り、時折宴の様子を確認してはやる気に漲る。
新たな皿を数枚同時に出し、やってきた侍女へ笑いかけた。
「こっちもできたぞ。持って行ってくれ」
「次があるよ！　ほらほら、きびきび動きな！」
ほぼ同じタイミングでテラコッタもまた数枚の料理を提供した。
その内の一つが目に入り、なぜか気になったサンジは手を止めてテラコッタへ尋ねる。
「ん？　なぁ、その料理はなんてんだ？」
「コナーファを知らないのかい？　これは麺をオーブンで――」

興味津々なサンジは手を止めずに話すテラコッタの説明を熱心に聞く。彼女は実際にその料理を作り始めたようで、手元を注視し始める。
やはり世界には彼が知らない料理があるのだ。
勉強のためテラコッタの手つきを一つ一つ観察し、手順を覚え、次は自分も作ろうとその場で実践を始める。その様子にはテラコッタも驚いていた。
ウソップはどこからか持ち出してきたメガホンを持ち、いつの間にか建物の屋根に立っていた。
酒や料理も大事だが彼の場合は宴を盛り上げることも大きな使命。同時に自身にとっての大きな楽しみでもあり、昔から目立つのは大好きだった。
メガホンを使って声を大きく、宴で騒ぐ人々へ語り掛ける。
「よぉ～し諸君！　盛り上がってるかァ！　おれこそが反乱を止めた功労者且つ張本人、キャプテン・ウソップだァ！」
「おおっ、あれが例の！」
「キャプテン・ウソップ～！」
「アラバスタの救世主！」
姿を見せただけで国民がわっと盛り上がり、気分を良くしたウソップはますます胸を張る。
「え～歌います！　キャプテン・ウソップのテーマ！」
ウソップが大声で歌い始めたことで、メロディも知らずに歌い出す者は多かった。辺りは先程よりも騒がしくなり、見よう見まねで踊り出す人々が続出する。
それを見下ろすウソップはさらに気分を良くして、どんどんノっていった。
至る所で一味が大騒ぎして注目を集めている。
大なり小なり違いはあったが、それだけ目立つ人間だったということだろう。
ただただ酒を飲み続け、その量で驚かれていたのはゾロとナミだ。
別に勝負をしているつもりはなかったが、今日くらいはいいだろう

と酒が進んでいるらしい。
ゾロは何本かの酒瓶を空にした後、面倒になったのか樽に手をかけていた。一方のナミは次から次にジョッキを開けるため、侍女が慌てて辺りを行き来している。
「なんだ、もうねぇのか。樽でもらえるか」
「こっちもなくなったわよー。どんどん持ってきて～！」
上機嫌な二人は宴の中で遠慮する気はなく、酒を飲み干す速度は変わらない。
近くに居た者たちは驚き、興味を惹かれ、どこまで飲むのか好奇心を持って眺めていた。
比較的近い位置にシルクが座っていて、辺りを見回し、笑顔だった。
彼女の隣にはチョッパーが居て、緩んだ顔で甘いお菓子を頬張っている。にこにこしているその可愛らしさに目を奪われるのは老若男女問わなかった。
「うんめぇ～！　宴って楽しいなぁ～」
「そうだね。みんなも楽しそう」
シルクは国民が楽しそうに騒いでいる姿を見て、微笑ましい気持ちで頬を緩める。
「よかったね。またこうして集まれて」
「うんうん。本当に大変だったなぁ」
「今回、改めて思ったよ。ずっとみんなでこうしてたいね」
彼女の呟きにチョッパーは嬉しそうに頷く。
こうして宴が楽しいのは仲間が居るからに違いない。
何度でもこの仲間たちと宴をしたい。この先もずっと旅をしていたい。改めて心からそう思う。
仲間たちが騒いでいる姿を、キリは微笑ましそうに見ていた。
椅子代わりに用意された木箱に腰掛け、酒が入ったジョッキを片手にじっとしている。
以前見た風景と同じ。だが今は心境が違う。
ようやく肩の荷が下りたようだ。いつからか頭には常にバロックワークスとの戦いがあり、そのために費やした時間も実は多い。全て

はこの一味で戦いに勝つため。
終わった現在は本当にほっとしている。
そのため、体には一切力が入らず、緩んだ顔で辺りの風景を見回している。
だからだろうか。彼女たちがすぐ近くに来るまで全く気付かなかった。
落ち着いた顔で座るキリの下へ、ビビがやってくる。その隣にはコーザが居た。
見るからに複雑そうな顔をしていて、キリは以前会った時と変わらない笑顔、しかし少しだけ前とは違うように感じる姿で、不思議と緊張している。
「キリさん」
呼ばれて振り返ると初めて気が付いたらしい。キリは一瞬驚いた表情を見せた。
直後には仕方なさそうに苦笑し、彼の方へ体を向ける。
何から話せばいいのか。
ビビに促されて一歩だけ前へ出たが、コーザは立ち尽くしたまま動けず、彼の顔を見つめてぴくりとも動けない。完全に普段の自分を見失っていた。
どちらも視線を合わせて口を開かない。それでもキリは敢えて待った。
今なら彼と向き合うことができる。
微笑みを絶やさずキリは待ち、もし罵倒されるようならそれさえも受け入れる気だ。
その覚悟が伝わったのか。コーザは戸惑いがちにぽつりと言葉を発した。
「久しぶりだな、キリ……」
「うん。久しぶり」
「ビビから聞いたよ。お前やこの国にあったこと、全部……」
「そっか」
いつかと同じような状況。こうして彼と話す機会は多かった。し

かし、本当はコーザが知らないキリが居て、ずっと彼に隠し事をされていたのである。それどころか利用されていた。国を潰すために動かされていたのが自分と、そして反乱軍だったのだ。
戦闘中にウソップから、そして戦いが終わった後にビビから聞かされて信じられなかった。
彼は何も弁解しようとしない。その態度から、本当なのだろうと納得してしまう。
「おれは――」
ふと地面に視線を落とした。
自分の気持ちに向き合い、本心を語ろうとしているのだろう。少なくともコーザはこれまで彼に対してずっとそうしてきた。付き合った時間は短くとも心の支えになるほど頼りにしていたから。
たとえそれが作戦で、偽りの関係だったとしても、コーザにとっては紛れもない事実。
顔を上げた時、すでに迷いは断ち切ったらしい。
コーザは先程よりも力強さを感じさせる目でキリを見つめる。
「親友だと思ってたのはおれだけか……？」
キリは目を伏せた。
様々な想いがあった。生きることを諦めようとさえ思った。そんな中で出会ったのが彼だ。
今度は偽りの自分ではなく、本当の自分として。静かに言葉を紡ぐ。
「最初は計画のためだった。それは本当だよ。だけど、いつからかユバに行った時、君と話している時だけは普段の自分とは違ってた」
目を開いたキリはコーザを見、やはり以前とは違う顔を見せて言う。
「君と居る時は、多分、安心してたのかな。それだけは嘘じゃない」
「……そうか」
深く息を吐いた後、ようやくコーザが笑みを見せた。
座ったままのキリの前まで移動する。
近くで見れば余計に彼の怪我がひどかったのだとわかる。ほとん

ど全身に包帯が巻かれており、聞けば巨大な砲弾を空へ運び、爆風を浴びたらしい。一時は死んでしまったのかと思ったとはビビから聞いた話だ。
それもこれもアラバスタとその国民を守るため。長い時間をかけて陥れようとしていた人間が命を張って守るなどおかしな話だ。
そっと手を伸ばして、コーザはキリへ握手を求める。
「お前がどこの何だろうが、どんな考えがあったとしても、お前の存在に助けられたことは変わりねぇんだ。もう一度……今度こそ友達になってくれねぇか？」
「いいの？　今までずいぶん嘘ついてたのに」
「その怪我でチャラってことでいいだろ。せっかくこれだけ盛り上がってんだから」
これほど陰りのない笑顔を見るのは初めてな気がすると、キリはコーザを見て頬を緩めた。
差し出された手を静かに握る。
怒鳴られるかもしれないと予想していたのにずいぶんあっさりした様子だ。しかしコーザは満足した様子であり、自分から追及するのもおかしな話だろう。
手を放した時には、彼らは以前に似た、しかし確実に違うだろう関係になっていたに違いない。
コーザが近くにあった樽を運んでくる。
キリが座る木箱の隣へ並べて、その上へ腰掛けた。
アラバスタの国民たちが宴で大いに笑っていた。もちろん麦わらの一味に感化されてだ。彼らの存在があるから皆が一時の辛さを忘れ、精一杯笑い、今を生きている。
こうなるまでに使った時間はあまりにも多い。だがかつて望んだはずのもの。
キリの隣で同じ風景を眺め、やっと肩の荷を下ろしたコーザが呟いた。
「いつか話したよな。おれはこういう国を見せてやりたかったんだ」

「ちゃんと見せてもらったよ。いい国だね」
「おれの力じゃねぇさ。ビビと、お前らのおかげだろ」
「そう？　結果的に反乱軍じゃなくなったし、コーザの力も少しくらいはあるよ」
「おい、少しって……まぁそうだが」
少し前の緊張感が嘘のように、子供のように笑い始める二人を見てビビは安堵する。
もう少し揉めるのかと考えていたが杞憂だったようだ。
彼女はそっと傍を離れ、迎えにきたらしいカルーと一緒に仲間たちの下へ向かう。
さっきまでバラバラに楽しんでいたのにいつの間にか集まっていた。
大きく作ったキャンプファイヤーの周りで、肉や酒を片手に持ち、太鼓代わりにフライパンやメガホンを叩き、口いっぱいに甘いお菓子を詰めながら踊り出す。
だんだん騒々しさが増してきた。
やはりこういう時、中心には彼らが居るのだ。
「ビビ～！　肉食ってるか～！」
「アラバスタのお菓子もうまいぞっ！」
「ビビ！　カルー！　お前らもこっち来い！　今日は踊るぞぉ～！」
「ビ～ビちゅわ～ん！　一緒に踊ろぉ～！」
すでに飛び跳ねるように踊りながら呼んでくれる。これを無視する訳にはいかない。
ビビは嬉しそうにカルーの顔を見た。
「行きましょカルー。みんなに遅れちゃうわ」
「クエ～！」
彼女たちも仲間たちの下へ向かい、参加して、打ち合わせた訳でもなく一列になると、彼らはキャンプファイヤーの周りを歩き始めた。
それを見て国民たちも寄ってくる。
いつしか大きな輪が生まれ、歌いながら踊り、広場の盛り上がりは

また形を変える。
一瞬にして空気を変えてしまい、アルバーナは今、まるで彼らの手の中にあるかのよう。
ある意味では海賊に支配されてしまったように見えて、しかし人々はそれを拒んでいない。
俯瞰的に広場を見ていたコブラは穏やかな笑みを浮かべる。
隣には同様に微笑むイガラム。今だけは一味の輪に加わらず、確かに変わろうとしている国の姿を王と共に眺めている。
弾けるような笑顔を見せるビビは、彼らにとっては何よりも眩しかった。
アラバスタは変わる。
それはもはや確信であった。
その瞬間をこの時に見た二人は短く語る。
「イガラム」
「はい」
「これでいい。アラバスタはこれでいいのだ」
「そうですな……私もそう思います」
町を照らす大きな光は、いつになっても弱まることはなく。
彼らの心に呼応するが如く雄々しい姿を見せた。
広場に居る大半の人間が歌い、踊る姿に目を奪われ、二人は座ったままだった。
キリとコーザは会わなかった時間を埋めるように語らう。
彼らの顔は晴れ晴れとしており、以前と似た、しかし以前よりも近い関係にあった。
「そういや、お前海賊だったんだよな」
「そうだよ。子供の頃からずっとね」
「考えてみりゃそんな話、聞いたことなかった……まぁ、言わないようにしてたんだろうが」
「だって、言ったらバレちゃうしさ」
「今ならいいだろ？　聞かせてくれよ。お前の話」
問いかけてくるコーザの表情を確認して、キリはわずかに肩を揺ら

す。
「そうだなぁ……そもそものきっかけは――」
ぽつぽつと静かに語り出す。周囲の喧騒とは打って変わった様子だった。
静かに、周囲の音に耳を傾けるように。
キリの語りをコーザは聞き、夜は騒がしくも楽しいまま更けていく。

裸の王様

「うおぉ～!? すげぇ～!」
「でっけぇ風呂だなぁ! ゴージャスゴージャス!」
あまりに広大な風呂場に立って、ルフィとウソップは目を輝かせる。
怪我をしているからという理由で宴を抜け出し、やってきたのは宮殿内にある風呂。コブラの誘いに乗った彼らはその豪勢な雰囲気に口元を緩ませていた。
誰もが裸になって立っている。
コブラは皆を見回し、手短に説明する。
「宮殿自慢の大浴場だよ。本来雨季にしか使わんのだがね。礼というには安いが、せめてここで体の疲れを取ってくれ」
「うわっ、滝がある!」
「おい見ろゾロ! 修行ができるぞ!」
「なんの修行だよ……」
呆れたゾロが一応目を向ける。
巨大な浴槽は正面にあり、金色に輝く獅子の像が口を開け、大量の湯を吐き出している。洗い場だろう空間は右側、彼らが言う滝は左側の隅にある。
浴場内を確認してからルフィとウソップは我先にと駆け出した。
「おれが一番だぁ!」
「いやおれだぁ!」
走り出した途端、二人は足を滑らせ、勢いよくこけて頭を打ち付ける。
「へぶっ!?」
「何がしてぇんだお前ら……」
あくまでもゾロは呆れていて、先に体を洗うため洗い場へ向かう。
同じくキリやチョッパーもそちらへ歩き出していた。
「おれ、こんなにでかい風呂初めてだ」
「ボクもこの規模は初めてだなー。王族とは敵対してた立場だから

ね」
「お前は要領がいいな。自分だけちゃっかり生き残りやがって」
「まぁね」
彼らは椅子に座って体を洗い始めた。
キリが桶を使って頭からお湯をかぶる。横目で見ていたゾロは一応彼の挙動に気を付け、普段ならそれだけで動けなくなるだろうと注視していた。しかし、確かに体から力は抜けたが、意外にも全く動けなくなるという様子ではなかった。
力が抜けてふにゃりとしながら、キリはもう一度お湯をかぶろうとする。
「はぁ～力抜ける～」
「お前、平気なのか？」
「どうも前とは体質変わったみたいだね。力は抜けるけど、完全に動けなくなるわけじゃないみたいだ。紙の操作でも少し試してみたよ。まだ慣れるまで時間かかるけど」
キリは桶に入れたお湯の水面を眺めて穏やかに笑う。
「死にかけた甲斐はあったってことだ。これで少しレベルアップかな」
「縁起でもねぇ……」
「そういうゾロこそ、斬り殺されそうになって鉄が斬れるようになったって聞いたけど？」
「関係あるか。おれは実力で斬ったんだ」
「別に強がらなくていいのに」
「強がってねぇ」
「認めてもいいよ？」
「実力だ」
二人の間に座ったチョッパーは頭からお湯をかぶり、顔を振って水滴を飛ばす。
風呂に入ること自体を嫌っている訳ではない。しかし元々が動物。くれはや仲間との生活で感性は人間に近付いていても動物としての生き方を忘れた訳ではなく、日頃はあまり重要視していない様子だ。

風呂に入ることよりこうして仲間と一緒に居る方が楽しいようだ。
だからか、仲間と一緒に風呂に入れることを楽しんでいる顔だった。
石鹸を使って体を洗い始め、泡にまみれながらチョッパーが言う。
二人の顔を見ながら不思議そうな顔だ。
「弱点が無くなったってことか？　そんなことってあるのかな」
「能力の練度が高くなったってことかな。今回のは偶発的だけど死ぬ気で動いたしね」
「へぇ～。それじゃあキリはいつか泳げるようになったりするのかな」
「そりゃ無理だろ。一生カナヅチだ」
「ボクは諦めたわけじゃないよ。いずれはって思ってるし」
「やめとけ。どうせ溺れて助けられてるのが目に浮かぶ」
「え～」
彼らが話している一方、コブラは湯船の縁に座り、皆へ語り掛け始めた。
はしゃいで動き回っているルフィとウソップ以外は自然とその声に耳を傾ける。
「宴は実に楽しかったよ。途中で抜け出すのがひどく惜しかったくらいだ。あれだけのことがあったばかりだからどうなることかと思ったが、君たちが相手ではいつまでも沈んだ顔をしていられないらしい。この町の者たちは元気を取り戻したようだよ」
「大したことはしてませんよ」
「まぁ、ただ食って飲んで騒いだだけだからな」
振り返ったキリが言うとゾロが付け足す。彼らにしてみれば、国民を助けようだとか笑顔にしたいという想いは希薄だ。ただ騒げるなら人数が多い方が盛り上がるというだけである。
そのためだけに多くの人間を巻き込み、大騒ぎをした。
その結果として参加した国民が笑顔になり、元気を与えられたというだけの話。
あくまでも態度は海賊として。彼らはヒーローになりたい訳では

ない。
行動の根本には自分たちのためという意思があるのである。
彼らの言葉を聞いたコブラが笑みを深めた。
どんな考えにせよ、広場で一緒に騒いだ人間の心が救われたのは事実。どれほど言葉を重ねても感謝は足りないと思い、その考えは今も変わらなかった。
改めて礼を言おうとした時だ。
かけ湯をしていたイガラムの背を叩き、緩い顔を見せるサンジが鼻の下を伸ばしていた。
「まぁ堅い話は後にしてだ。そろそろいいだろ？　女湯はどっちだ？　ん？」
「アホか!?　ビビ様もおられるのだぞ！」
サンジの声が聞こえたのだろう。コブラがおもむろに立ち上がった。
「あの壁の向こうだ」
「国王コノヤローっ!?」
「おっ。おっさんイケる口だなー」
真面目な顔でコブラが壁を指差した途端、イガラムは立場を忘れて絶叫していた。
彼の行動によって一味は動き出す。
まず真っ先にサンジが喜々として壁へ向かって歩き出し、先程まで子供のようにはしゃいでいたウソップもそちらへ向かった。
そうとは知らず、女湯では三人が穏やかな一時を過ごしていた。
椅子に座ったナミの背をビビが流しており、近くにある広い湯船にはシルクが居る。
三人は笑顔で話をしており、あまりにも無防備な姿だった。
「きもちいい～。こんなに広いお風呂がメリーにもあればよかったのに」
「ふふふ、そんなこと言うとメリーが拗ねちゃうよ？」
「メリーには感謝してるわよ。でもこれを見せられちゃうとなぁ～」

流石は王宮。風呂場を見回すナミは羨む様子で目を輝かせる。それを見るシルクは優しく微笑んでおり、歳は下だが姉のように彼女を見守っていた。
ナミの背を洗うビビもまた、いつになく上機嫌そうに笑みを浮かべている。
「どこかにこんなお風呂がついた船ってないかしら」
「きっとあるわよ。海は広いもの」
言い出したのはビビ。手を動かしながら、弾むように楽しげな声で語り出す。
「巨人も居た。動物たちの王国もあった。雪国には桜も咲いた。海には、まだまだ想像を超えることがたくさんあるんだわ」
その声があまりにも楽しそうで、ナミは思わず振り返った。
彼女の視線でハッとした様子のビビが言葉を止めるが、妙に戸惑ってしまい、逃げるように視線を彷徨わせるとシルクも同じような表情をしていることに気付く。
不思議と恥ずかしくなってしまって、笑みはぎこちないものに変わった。
「えっと、その……」
「交代」
「え？　あ、うん」
ナミがそう言ったことでタオルを受け取ったため、ビビは彼女に背を向けようとした。
その時自然と壁に目が行って、壁の縁に捕まるようにして男たちが顔を出している。なぜか当初は止めていたはずのイガラムまで確認できた。
サンジやウソップはもちろん、ルフィとチョッパー、コブラまで参加している。
当然ビビは驚いて、タオルを巻いて隠していたのだが咄嗟に自分の体を抱きしめ、同様に湯船に居たシルクが体を沈ませる。ナミだけは背を向けて座っていたとはいえ全く動じていない。
「ちょっとみんな!?　何やってるの!?」

「ん？」
ナミが振り向いて気付いた時、溜息をついたシルクが困った顔をする。
すぐに右手を上げ、指を伸ばし、わずかに振ると風を動かした。
「もう、しょうがないなぁ……」
些細な動作で皆が即座に気付いた。
シルクが右腕を振った瞬間、強烈なかまいたちが浴場を駆け抜ける。
男たちは本能的な行動で咄嗟に壁から手を離し、重力に従って落下していった。
「こら！」
「うおおっ!?　危ねぇ!?」
「覗いちゃだめだよ、みんな」
悲鳴を上げながら落ちていった男たちを見送り、ナミはからからと笑う。彼女につられたのか、焦りを見せていたビビも徐々に落ち着きを取り戻して、最終的には苦笑する。
二人は全く怯んでいなくて、むしろ彼らを一蹴してしまった。
わかってはいたが、その度胸で彼女たちが海賊なのだと改めて見せつけられた気がする。
泡を流し、一応体にタオルを巻き、ナミが立ち上がる。すると自分が居た場所をビビに勧めた。
男湯には背を向けていた方がいいと判断したようだ。
「こっち座って。今度は私が洗うから」
「ええ……ところで、みんな大丈夫かしら」
「気にしなくていいわ。むしろちょっと痛い目に遭うくらいでちょうどいいの」
「ルフィさんはまだ怪我が……」
「大丈夫大丈夫。あいつは人一倍頑丈だから」
ナミの手がビビのタオルを取り、恥じらった彼女は振り返るのをやめて前を向く。
泡立てたタオルで彼女の背を洗い始めた。

シルクは時折男湯の方を気にしながらも二人のやり取りを見守り、しばし口を閉ざして聞き役に徹する。ちょうどナミが核心をついた質問をしたところだ。
「ねぇビビ。あんたどうするの？」
「え？」
「もしその気があるなら、私たちには受け入れるつもりはあるわ」
そう言われてビビの表情が一瞬で変わった。
迷うような、戸惑うような顔を見せる。角度の関係上、シルクにしか見えなかった。ひょっとしたらその顔は見せたくなかったのかもしれない。
「今すぐ出発するわけじゃないわ。ゆっくり考えてくれていい。だけどルフィとキリの怪我が一段落したらこの国を出るつもりよ。それまでには答えをちょうだい」
「……ええ」
「ただね。私はなんとなくわかってるつもり」
ナミは手を止めて、ふと目を伏せて笑顔で言った。
「これでも仲間として一緒に航海してきたんだもん。同じ女だし、話すこともたくさんあった。だからあんたの選択にケチをつける気なんてさらさらない」
目を開けると背を見つめ、語る声はひどく穏やかだった。
「あんたの自由にしなさい。心配しなくても、私たちの船長はそれを許してくれる奴だから」
ビビは、今の気持ちを言葉にすることができなかった。
何も言わないが頷くことで意思を表す。
選択する時間は与えられた。選ぶのは自分だ。
ナミはさっき、ビビの決断がわかる気がすると言ったが、傍から二人を見ていてシルクにもわかる気がした。ビビがどんな選択をして、船長であるルフィになんと言うのかが。
彼女も同じくその決断を無理に覆そうとは思わない。
どんな道を選ぼうと彼女を仲間だと思っている。シルクは迷うビビを笑顔で見つめた。

一方、シルクのかまいたちを避けて落下した男たちは、床に背をつけて転がっていた。
バカ騒ぎをして心地よい疲労感。ぽつりとコブラが呟く。
「ありがとう……」
「エロ親父」
「そっちじゃないわ!?」
覗きをしたことへの礼かと思った一同が声を揃えた瞬間、コブラは飛び起きた。
皆もその場へ座って、胡坐を掻いたコブラに注目する。
「国をだよ」
言った直後に頭を下げた。地面に擦りつけるほど低かったことにより、イガラムは絶句し、間近で見ていたルフィたちも真剣な顔を見せる。
湯船に居たゾロは呆れており、隣に居たキリはだらしない姿勢で微笑んでいた。
皆の注目を一身に浴び、コブラは口を開く。
「君たちが居なければこの国は滅んでいた。ずっと礼が言いたかった」
「おいおい、いいのか？　あんた国王だろ」
「お気持ちはわかりますが、これは大事件ですよ国王様……たとえ国の一大事といえど、王が人に頭など下げてはいけません」
「イガラムよ。権威とは服の上から着るものだ。だがここは風呂場」
彼の言葉にイガラムは息を呑んだ。
今日まで待っていたのだろうか。王ではなく一人の人間として彼らと向き合えるまで。
こういうお方だったと、今度は安堵して笑みが浮かぶ。
「裸の王などいるものか。私は一人の父として、この土地に住む者として心より礼を言いたい」
顔を上げてルフィの顔を見、皆の顔を見回す。
そして国王ではなく一人の人間として礼の言葉を告げた。

「どうもありがとう」
「ししし。いいよ。勝手にやっただけだ」
ルフィは笑顔で気楽に答えた。
彼なりの気遣いか、それとも本心か。どちらにしてもコブラは心から笑う。
その時、湯船の縁にもたれてだらしなく座っていたキリが口を開いた。
「いいなぁみんな。女湯覗けて」
「いや今更かよ」
「お前、この空気でなんつーことを」
力の抜けたキリの発言にウソップが反応し、サンジも呆れた顔だ。そもそも女湯を覗こうと言い出したのは彼なのだが素知らぬ顔だった。
首を動かしたキリがサンジを見てその点を指摘する。
「言い出したのはサンジだよ」
「バカ。おれは空気を読んで言ってんだよ。お前らが喜ぶと思ってな。そもそもおれが本気でそんなことしたいなんて思ってると思うか？」
「むしろ君しか喜ばないよ」
「頭ん中にそれしかないからな」
「あぁん？　なんだマリモ、なんか言ったかコラ」
立ち上がったサンジが湯船へ近付き、ゾロを睨みつける。当然彼も怖い顔で睨み返した。
すぐ傍で二人を確認したキリは余裕を見せて微笑む。
「大体がお前の方がおかしいんだ。前にも言ったはずだがアホだからさては忘れたな。魅力的な女性を見て恋をするのは男として正常な反応だぞ。頭おかしいんじゃねぇか？」
「おかしいのはお前だろ。その辺に頭でもぶつけたらどうだ？　もう少しマシになるぞ」
「ボクはどっちもおかしいと思う。一番マシなのはボクくらいの感じだよ」

「あぁ？　むしろお前が一番ぶっ飛んでんだよ」
「ある意味じゃルフィ以上だ」
「ひどいなぁそれ。ルフィよりはマシだと思ってるんだけど」
話している最中に、楽しげに走ってきたルフィが広い湯船へ飛び込んだ。
勢いがよかったために水しぶきが飛び散り、ゾロが迷惑そうに顔を拭って、キリが湯の中に沈みかけたことで咄嗟にサンジが頭を掴む。
辛うじて沈まずに済んだ様子のルフィは笑顔で彼らに向き直った。
「しっしっし。キリは変な奴だからな」
「お前が言うんじゃねぇよ」
「そもそもお前が変な奴だから、変な奴ばっか集まるんだ。だがナミさんとシルクちゃんを見つけたのはグッジョブだ。そこだけは尊敬できる」
「ルフィ、危ないよ。ちょっとは動けても水に浸かってるとほとんど動けないんだから」
口々に飛び込んできたルフィへ文句を言い、しかし彼は笑って聞き流す。
それからすぐにウソップとチョッパーもやってきた。湯の中へ入りながら会話に参加する。会話には加わっていないがコブラやイガラムも湯の中に入った。
「まぁ～実際バケモノばっかりだよな、うちのクルーは。怪力剣士に女好きのコック、考えることがおかしい副船長に喋るトナカイ。で、船長がアレだ」
「でもおれはみんなのこと好きだぞ。バケモノでも好きだ」
「一番のバケモノはお前だろ」
「そうなのかっ!?」
「お前も人のこと言えねぇだろ、長っ鼻」
最後にサンジが湯に入って落ち着いた。
あれこれ言うものの仲は良い。コブラとイガラムは微笑ましく彼らを見る。
「ナミとシルクが居てよかったね。バケモノだらけのうちの船に」

「いやぁそれは全くそうだ。彼女たちが居てくれるだけで生きる活力が湧いてくる。おれはあの二人が実は天使と女神だったんじゃねぇかと思ってるんだ」
「んなわけねぇだろ」
「あいつらもかなり問題はあるがな……」
気を抜いたキリと浮かれるサンジに、呆れたウソップとゾロがすかさず反論。
もうそれなりに長く航海しているのに不思議と会話が尽きることはない。
彼らは滅多に見れない広い風呂を楽しみ、落ち着いて話した後にはまた騒ぎ始める。先頭になるのはやはりルフィやウソップで、今度はすかさずチョッパーも続いた。
どうやら少しも黙っていられない性分らしい。
それが海賊なのか、はたまた彼ららしさなのか。
今度はコブラも同様に、無邪気に遊び始めて、今度こそイガラムの叱責が飛ぶ。たとえ今だけは王でなくとも、大人として如何なものか、と怒声が広大な浴場に響き渡った。

第一回枕投げ大会

風呂から上がった一味はベッドが複数並ぶ広い寝室に集まっていた。

散々騒いで、これまでの疲れを洗い流して、それぞれがぐったりしつつもまどろみのような一時を味わっている。多くがベッドに座り、或いは寝転んでの静かな時間だった。

疲れた顔で深く息を吐いたウソップはチョッパーと共にベッドの上で脱力していた。

その隣ではルフィが果物をかじっており、頬を膨らませている。

「はぁ～……改めて大変だったなぁ。ルフィも起きてこれでようやく終わりって感じだ」

「海賊ってすげーなぁ」

「そりゃそうだろ。でもなチョッパー、実を言うとおれ一人でもバロックワークスを壊滅させられたんだぜ。今回はたまたま調子が悪かったけどな」

「そうなのかっ!? すげーなウソップ！」

「ああ。なんせおれは、あのキャプテン・ウソップだからな」

またしてもチョッパーがウソップの嘘に騙され始めた頃、窓辺に立ったビビは外を見ていた。

空の色を変える大きな炎。今の色は暖かい。破壊された時とは違う。

彼女は国民の笑顔を想って微笑んでいる。

静かに隣へ立ったシルクはビビの横顔を見ながら尋ねた。

「抜け出してきてよかったの？」

ビビはじっと広場の明かりを見つめて、迷わずに頷く。

「ええ……もう少し居たかった気持ちもあるけど」

振り向くビビがシルクの目を見る。

迷いなど一つもない澄んだ瞳。シルクは安堵した。

「今は、あなたたちとの時間が大切だから」

「ありがとう」

二人が笑顔を向け合う。
言葉にはしなかった彼女の決断を、シルクは理解した気がする。しかし気付いたことを伝えず、何も言わなかった。
どんな選択であっても否定はしない。それが彼女の意思なら。
ベッドの上で胡坐を掻くルフィも広場の明かりに気付き、腹を鳴らす。一時は満足したはずだが大きく膨らんでいたはずの腹はすっかり元通り。もう腹を減らしたようだ。
風呂に入った後だが今から戻ろうかとうずうずしている顔だった。
気付いたサンジが彼へ言う。
戻りたいのは彼も同じだが全員が回復したばかり。流石に今日は大人しくしていた方がいい。
「まだ肉あるかなぁー。もう一回食いに行こうかな」
「やめとけ。お前が食っちまうと国の連中の分が無くなる」
振り向くルフィに気付きながらも窓の方を見るサンジは冷静な顔で呟く。
「この国が受けた傷は相当なもんだ。腹が減ってりゃ復興もできねぇ……お前の大食漢はよく知ってるが今日は我慢しとけ。明日になったらおれが嫌ってほど食わせてやる」
「うーん……そうだな。今日は我慢する」
「お、ルフィが肉を諦めたぞ」
「明日は雨かな。雪かもしれない」
珍しく我慢するつもりのルフィにウソップとキリが心配そうに窓の外を眺めた。
その発言が気になったチョッパーが質問する。
「砂漠にも雪が降るのか？　涼しくなるかな？」
「普通は降らないよ。雨が降るのも珍しいからね」
「でもグランドラインだからな。どっかの砂漠なら雪も降るかもしれねぇぞ」
「そうなのか……見てみてぇなぁ。おれやっぱり暑いの嫌だ」
チョッパーが小さく溜息をつく頃、窓の傍を離れたビビが彼の隣に座り、シルクは彼らが居るベッドの傍に立ってくすくす笑う。

非常に和やかな空気。少し気だるさを感じさせる、重くも軽い疲労感がある。
そんな中でウソップの目がじとりとサンジを捉えた。
「で、お前は何してんだよ」
「あ？　見てわかんだろ。ナミさんのために布団を温めてんだよ」
誰よりも早くベッドに寝転び、布団をかぶっているサンジが真剣な顔で告げた。
どうせそんなことだろうと思っていたので今更誰も呆れない。
話を振られたナミは扉の近くにある椅子に座ったまま彼へ答えた。
「言っとくけど、私たちは別の部屋で寝るから」
「えええええっ⁉　一緒の部屋じゃないのぉおおおっ⁉」
「当たり前でしょ。大体昨日もそうだったじゃない」
「いやほら、宴のテンションで……！」
「誰がそんな手に乗るかっ」
ナミに睨まれてサンジは意気消沈する。
逆にキリは上機嫌に笑い、当たり前だと言わんばかりにウソップが枕を投げつけた。サンジの顔に直撃してぼふんと音を立てる。
「めげないねぇサンジは」
「つーかお前は見境ねぇのか。いい加減学べよ」
顔に受けた枕を咄嗟に掴んだサンジは、起き上がって即座に枕を振り上げた。
「学んでねぇのはお前らだろ。おれはむしろ正常で、お前らの方が異常なんだよ」
「うおっ⁉　危ねぇ！」
ウソップ目掛けて投げつけた枕は回避された。あらかじめ来るだろうと予想していた彼がベッドの上で転がり、同じくチョッパーも楽しげに転がっている。
徐々に空気が変わりつつあるのはウソップだけでなくキリも認識していた。
素早く枕を一つ回収したウソップは立ち上がる。
胡坐を掻いたサンジに指差し、怒るような口調で言い始めたのだ。

「大体だ。お前が女を蹴らねぇって言うから、おれはあのレモン女を一人で、しかも傷一つつけずに倒したんだぞ。おれの本分は援護だって知ってんだろ！」
「ならお前にボム男を任せりゃよかったってか？」
「いや、お前が主力でおれが援護がよかったです」
「んな甘い話があるか。まぁ、レディを傷つけなかったって話は評価するが」
不穏な空気を察してサンジは冷静に四肢を動かし始める。
そしてウソップが枕を振り上げた時、サンジは素早く動いて飛んでくる枕を回避した。
「とにかく！　おれはお前に不満があるって話だ！」
「おっと」
華麗に避けたサンジはベッドを降り、悠々と着地するとゆっくりとした動きで自身が寝転んでいたベッドの枕元へ歩き、枕を手に取る。いつの間にかにやりとした笑みがあった。
すかさずウソップは別のベッドから枕を取った。
パッと顔を上げた瞬間にサンジを見るのだが、腕を振った時には狙いを変え、興味津々に身を乗り出しているルフィへ枕を投げつける。
「お前もだぞルフィ！　いつもいつも心配させやがって！」
「ぼふっ!?」
顔面に枕が直撃し、しかしダメージのなかったルフィは喜々として枕を手にした。
ウソップはさらに別の枕を確保。ダイナミックな動きでベッドからベッドへ飛び移る。一つ手にした時点で次は呑気な顔をしていたキリを狙って投げた。
「お前も！　心配やら迷惑やら色々かけやがって！」
「うわっ。危ない危ない」
涼しい顔で避けたキリはすでに落ちた枕を拾っていて、立ち上がると早々に構える。
この時になればチョッパーは目を輝かせていた。
意図を理解した面々はそれぞれ反応している。ナミは呆れて溜息

をつき、シルクは苦笑し、ビビは楽しそうに笑っていた。
各々が動き始めて枕を手にする。
新たな戦いの予感を感じていたようだ。
きっかけを与えたのはルフィだった。誰を狙おうかと注意力が散漫になっていたウソップの後頭部に枕をぶち当て、驚いたウソップが倒れたことで笑う。
その瞬間にチョッパーとサンジがウソップへ枕を当てて、楽しげな悲鳴が上がった。
「しっしっし！　かかれ～！」
「うおいっ!?　卑怯だぞルフィ！　つーかおれだけ狙うなッ!?」
ウソップが飛び起きると同時、キリが投げた枕がウソップの顔に直撃する。
けらけら笑うキリを見てウソップが即座に反撃した。
自分に当てられた枕を拾い上げ、次々投げつけて、室内を枕が飛び交う。笑顔と悲鳴に包まれたその一室は王宮で最も騒がしい場所となった。
ベッドを使って飛び跳ねて、まるで子供のようにはしゃいでいる。
ある時、ウソップが一足先に寝ていたゾロへ目を向けた。
一人だけ呑気に眠りこけ、不参加など許さない。
ゾロが眠るベッドへ飛び移り、飛び跳ねて大きく揺らしながら、彼の顔へ枕をぶち当てた。
「で、なんでお前だけ寝てんだよ！」
「ん？」
枕を当てられた衝撃でゾロが目を覚ます。眠たげな眼を擦って上体を起こし、ひとまず何が起きたかを理解するため周囲を見回す。すると枕を持った仲間たちが自身を見てにやついていた。
まだ呆けていたせいで理解が遅れ、頭を掻いていると全員が一斉に動く。
「何やってんだお前ら？　宴か？」
無言で、複数の枕をぶつけられた。
仲間たちは楽しげに笑うものの、当てられたゾロは瞬時に意識を切

り替える。
その時の彼の目は戦いへ挑む際のものだった。
「よし……覚悟はできてるんだろうな？」
「だっはっは！　ゾロが怒ったぞ～！」
「逃げろ～！」
「待ててめぇら！」
各々が枕を手に持ち、動き出したゾロを避けて部屋の外へ飛び出した。
まず先にルフィとチョッパーが勢いよく廊下を走り出し、続いてキリとウソップ、その次に女性陣三人とサンジが駆ける。
一番最後に部屋を出たゾロが両手に枕を持ち、彼らを狙って猛然と追ってきた。
彼らの騒ぎは寝室だけでなく、王宮全体へまで広められる。
多くは広場の宴へ出かけていたが、管理のために残っていた人間が驚いた顔で彼らを見ていた。
侍女や執事、或いは兵士。通り過ぎる際には驚愕の顔を見ることとなった。
走りながらウソップは隣を走るキリへ声をかける。
追ってくる相手が何しろ強敵。自分一人では不利と考えたのだろう。
「おいキリ、手を組まねぇか？　流石にゾロが相手じゃきつい。二人がかりであいつを撒こう」
「いいよ。それじゃもう少し怒らせた方がいいね。冷静な判断が無くなる」
「よし。それについてはおれが最も得意とするところ――おごっ!?」
ウソップがちらりと後方を走るゾロへ目を向けた途端、彼の顔に枕が直撃した。どうやら隙を見つけたキリが投げつけたらしい。
突然の攻撃に驚いたウソップは思わず転んでしまう。
傍を通り抜けるナミたちが迷惑そうに彼を回避して走り抜けた。
「ちょっとウソップ、そんなところで寝ないで。邪魔よ」

「おぉいキリ!? なんでおれなんだよ!」
「ごめんね。海賊って嘘つきなんだよ」
「裏切者ォ〜!?」
取り残されたウソップの悲鳴を聞きながら彼らは進む。
大声を出していたせいか、当然彼らが起こす騒ぎに気付く者は居て、移動を続けているためその範囲は確実に広がっていた。
先頭を走るルフィとチョッパーが角を曲がった時、騒ぎの出所を探そうとしていたイガラムが正面から歩いてくる。それを見た二人はにやりと笑った。
イガラムが彼らを見て事態を理解するまで一秒にも満たない時間。
納得した瞬間に二人の手から枕が投げられていた。
「うおっ!?」
「あっはっは! ちくわのおっさん討ち取ったり〜!」
「討ち取ったりぃ〜!」
「き、君たち、一体何を……!?」
咄嗟に腕で顔を守ったが、腕と胸元に直撃した枕に怯んだ一瞬、ルフィとチョッパーがすぐ傍を通り抜ける。何の説明もない攻撃であったため戸惑うばかりであった。
その直後にはスライディングの要領でキリが足元へ迫る。
落ちた枕を二つとも回収し、転がると体勢を立て直して立ち上がり、走り出す。
イガラムが何も言えずにぽかんとしていると、また次の一団がやってきた。
騒がしい声に振り返ればナミを先頭にした四人が走ってくる。
ひどく楽しげな様子なのは一目で判断できた。
イガラムは、枕を右手に持ったビビが笑顔で参加していることに気付き、目を見開く。
まだ怪我も癒えていないはずだろうに走り回るとは。
そんなお転婆さは知っていたはずとはいえ、心配性な彼は思わず大声を発する。しかし彼女の傍に居るはずの麦わらの一味は一向に彼を気にしなかった。

「ビビ様ッ!?　なぜ走っているのですか!?　まだ安静にしていませんと危ないでしょう！」
「ごめんなさいイガラム。でも楽しいの！」
「あっ、ちょっとォ!?」
ナミの後ろに続き、シルクと肩を並べ、サンジに後方を任せる。
完璧な布陣でビビはイガラムの横を通り抜けた。止められても止まるつもりはなく、この馬鹿げた戦いを思い切り楽しもうとしている様子である。
「サンジ君、後ろはちゃんと見といてね」
「任せてナミさぁ～ん！　みんなのことはおれがしっかり守るからね～！」
「ねぇ、いっそのことゾロと手を組むってのはどう？　多分厄介なのはルフィとキリだよ」
「あの……そもそもこれって、一体どういうルールになってるのかしら？」
戸惑う顔でビビが呟けば、シルクがにこりと笑った。
「気にしない、気にしない。とにかく楽しんだ者勝ちだよ」
心から楽しんでいるだろう表情を見たビビは、シルクと同じく穏やかに微笑む。
「……そうね。こればっかりは理屈じゃないもの」
「うん。やっぱり海賊は楽しくなくちゃ」
「って言っても、我ながら何やってるんだろうって呆れるけどね。特に意味なんてないもん」
苦笑するナミはそう言いながらも彼女たちを先導して廊下を走る。途中でやめようとしない辺りに現状を楽しんでいる様子が見られた。
シルクもビビもそれを理解していて、メロメロになっているサンジですらわかっている。
とても楽しげな一団はイガラムを置き去りにして遠ざかっていった。
呆然と立ち尽くすイガラムが冷静になることすら待たず、ドタドタ騒がしい足音が聞こえる。

やってきたのはゾロとウソップで、いつの間にか協力的な姿勢にあった。
突っ立っているイガラムを気にせずに横を通り抜けようとする。
「チッ、逃げ足が速ぇな」
「よーし行けゾロ！　おれが援護してやるぞ！」
「なんでお前が偉そうなんだよ」
彼らが目の前を通り過ぎていったのを見送ってから、ようやくイガラムがハッとした。
ビビだけでなく全員がひどい怪我を負っている。数日が経って多少は回復しているとはいえまだ無理をしてはいけない。そもそもはそういう理由で宴を途中で抜けたはずだ。
焦った顔でイガラムは駆け出し、彼らを止めるために大声を出し始めた。
「ビビ様ッ！　皆さん！　なぜ暴れているんですか!?　今夜だけでも体を休めてください！」
声をかけても彼らは止まらず。驀進は続き、王宮の中を駆け回る。
ある時、ルフィたちとは別の道を行き、一人移動を続けていたキリは前方に見つけた人影に笑みを浮かべた。コブラとコーザが窓の外を見ながら話していたのである。
たかが遊び。ルールも目的もないただの思いつきだ。
それでも始まってしまえば誰もが本気になって向き合っている。
キリもまた同じで、勝利の定義さえ定まっていない現状で勝利を狙おうとしている。しかも彼の場合は頭が回り、ずる賢い。
単独行動になってしまったのが自分だけだと把握している。
二人が振り返る頃には素早く近付き、左手に持っていた枕を軽くコーザに投げ渡した。
「コーザ！」
「キリ？」
「ほら、行くよ」
問答無用で手を掴むとキリはコーザを連れていく。
何が起きたかわからないコーザは目を白黒させながら、引きずられ

るように駆け出した。
「何の騒ぎだ？　こりゃ」
「一味の中で反乱さ。一刻も早く鎮圧しないと」
「反乱？　……この枕は？」
「反乱鎮圧用の武器」
訝しみながらもキリに手を引かれるまま進み、角を曲がった瞬間、ちょうど先回りした形でナミたちと出会った。彼女たちはぎょっとして足を止める。
キリはすかさず腕を振り上げ、コーザにも指示を出した。
「ゲッ、キリ!?」
「なんで前から……！」
「行くよコーザ。攻撃開始！」
まず先にキリが枕を投げ、戸惑いながら言われるままにコーザが投げる。
硬直して動けないナミとビビは目を見開いていたが、その様子を知り、すかさず後ろからサンジが飛び出してきた。飛んでくるのはたかが枕だが一撃さえも許さない。思い切り振り回した足で二つの枕を蹴り飛ばし、思わずキリがおおっと声を漏らした。
「てめぇ……おれの前でレディに手を出すとはいい度胸だ」
「おっ、ナイトが怒った。こりゃ厄介だね」
キリが振り返って逃げ出した。手を離していたことでコーザは置いて行かれかけるが、混乱しつつも自ら彼の後ろについて駆け出す。
今度はナミたちが攻勢に出る番だった。
やる気になっている彼女たちは二人を追い始め、今度はサンジを先頭に走り出す。
コーザは、前を走るキリを見ながら呆れた口調で呟いた。
「これはただの枕投げだろ……」
「ただのじゃないって。大事な一戦だよ？」
「遊びにしか見えねぇんだが」
「遊びにも全力なんだよ、うちの一味は」
上機嫌に笑うキリを見て苦笑する。こんな奴だとは思いもしな

かった。
だが悪くない。こうして子供のように遊べるのも、長く辛い時間を生き延びたからだ。自分たちは今生きているのだと強く実感できる。
わずかに後ろを振り返った。
子供の頃を思い出させる、とても楽しそうなビビの笑顔が視界に入る。
「リーダー！　私負けないからね！」
「フッ……バカ言え。お前がおれに勝てるかよ」
ビビの挑発によってコーザがその気になり、楽しそうな笑顔を見せる。
こうして何も考えずに騒ぐことなどいつぶりだろうか。
ずいぶん懐かしい気がして、次第にやる気になっていった。
そう長くも走らずに前方からルフィとチョッパーが走ってくる。少しの間迷っていたようだが、どこかで合流したらしいカルーに跨っていた。
キリとコーザは急ブレーキ。後続のナミたちも速度を緩める。
対して、二人を乗せたカルーは意気揚々と真っすぐ駆けてきた。
衝突が推測された頃、ナミたちよりさらに後方からゾロとウソップが駆け付けた。
長い廊下で自然と挟み撃ちの状況が出来上がる。
コーザが連れ去られた後、何が起きたかを確認するために移動したコブラがその場を目撃した。
この国を救った海賊の一味が全力で枕を投げ合い始めたのである。
時刻はすでに夜で、荘厳で普段は静かな王宮の内部における暴挙に彼の表情は歪む。
「みんな見つけたぞー！」
「しっしっし！　いっけぇー！」
「クエー！」
突撃してきたルフィたちを見やり、肩をすくめたキリは諦めたように呟いた。
「また妙なとこから乱入してくるね。しかも援軍付きとは」

彼は怪我を気にせず高く飛び上がると壁を蹴ってルフィたちごと回避しようとする。
その動きに反応したサンジが彼を狙い、枕を蹴り飛ばして宙へ送り出した。
「逃がすか紙男。一番厄介なのがお前だ」
「うわお」
飛んできた枕を華麗にキャッチして、宙返りをしながらキリが落下してくる。
その間にルフィとチョッパーが狙いをつけずに思い切り投げ、ナミは咄嗟にサンジの背に隠れるものの、同じタイミングでビビとシルクが枕を投げる。
間に挟まれたコーザは慌てて地面に伏せた。
頭上を枕が飛び交い、落下してくるキリが視界に入ると、彼が枕を投げたのが見えた。
上から降ってきた枕がルフィに当たり、体勢が崩れた結果、カルーもろとも転ぶ。そこからは乱戦である。常に枕が飛び交う激しい戦場となった。
その様を見ていたコブラの顔は非常に険しい。
「いかん！　出遅れた!!」
悔しげな顔で叫んだ彼は廊下の向こうからイガラムが走ってくるのを見つける。
急いで彼の下へ駆け出した。
「イガラム！」
「申し訳ありません国王様！　今すぐ止めますので……！」
「急いで枕をかき集めてくれ！」
「国王コノヤローッ!?　参加する気かッ！」
まさかの発言にイガラムが目くじらを立てる。
その間も麦わらの一味による枕投げは熱中しており、先程よりも激しさを増している。
今日くらいは大人しくしているかと思えば、結果のところいつも通りか、或いはそれ以上に騒がしくなった。王宮内で起きたアラバスタ

始まって以来の大騒ぎは、その後数時間続いたという。

次なる航路

朝まで続いた宴を終えて、まどろみを覚える朝。
王宮内部で大騒ぎをした結果、そのまま城内に泊まったコーザは、一人部屋を抜け出すと城門に立ってアルバーナの町と砂漠を見渡している。
この国には大きな傷が残ったことだろう。しかしそれ以上に大きな何かを振り払うことはできたはずだ。己が生まれ育った国を眺めるコーザの心は晴れ晴れとしていた。
不思議と今日は体が軽い。
まるで生まれ変わったような気分で彼は己の国と向き合っていた。
「おはよう」
声がした方向に振り向いてキリの存在に気付く。
彼を見つけるとコーザは薄く笑みを浮かべた。
「おう。早いな。いつもなのか？」
「いや、今日はたまたま。なんとなく目が覚めてさ」
コーザの隣にやってきたキリも同じ方角に目を向ける。
家々が破壊されて、一見すれば悲惨な町の状況。しかしコーザには笑みを浮かべるほどの余裕があって、国民も決して悲観的になっている様子ではない。これも王の言葉の影響か。自分たちが始めた宴も多少は力添えできたと思う一方、国の力は大したものだと思う。
振り返ればキリが生まれたのは小さな島の小さな村。島民たちの名前は全員が知っていて、皆が家族のように親しく接し、噂など一日も経たずに広まる場所。
離れてからは海賊になり、海の上で生きて、多くの島を巡ったとはいえ住んだ経験はない。
人が作った国という力の強さを改めて思い知った気がする。
ビビやコーザがこの国を好きでいる理由がわかった。
町並みを見ながらキリが言う。
そうなってしまった原因は自分にもあるが、気を使って話したりはしない。

そんなこと、コーザ自身が望んでいないと知っているからこそ、かつてと同じ話し方をする。
「これから大変そうだね」
「心配いらねぇさ。一からやり直す。そういう意味じゃ分かりやすくていいかもな」
「タフだね。この国の人はみんな逞しいや」
「国王と王女がああだからな。感化されちまったのかもしれねぇ」
コーザの言葉にキリは、確かに、と笑みをこぼす。
それからすぐ話を変えてコーザが質問した。
「そういやお前ら、いつまで居られるんだ？」
「そろそろ出るよ。今日か、明日か、時間はあまりない。いい加減海軍の介入も許してやらないといけないし、援助も欲しいところでしょ？」
「まぁ、な……心配すんな。お前らのことは話さねぇ」
「別にいいよ、話しても。ただどうせなら悪く言ってもらった方が得なんだけどね」
「得？」
疑問に思った顔でコーザがキリの顔を見た。
「悪名を広めた方が海賊は得するんだよ。相手への威圧になるから度胸のない奴は自然に逃げていくし、血気盛んな奴は向こうから近付いてきてくれる。情報操作も大事な武器だ」
「それもバロックワークスの教えか？」
「まぁね。おかげで悪巧みが得意になった」
「食えねぇ奴だな……」
苦笑したコーザは溜息をつく。
対照的にキリは朗らかに笑った。
「今回はこれで最後かもね。落ち着いて話せるのは」
「急ぐんなら止めねぇよ」
「寂しくないの？」
「まさか。今までと同じだろ。お前はいつもふらって現れて、ふらっと去る。今までずっとそんな感じだった」

コーザは穏やかな顔で言い、キリは彼の目を正面から見つめた。
「待つのは慣れてる。いつでも来いよ」
「うん……」
ふと吹き抜けた風に髪を遊ばれながらキリは微笑む。
決意と覚悟はできた。
心境は以前と比べて少し変わり、今の方が余計な力が抜けている。過去を受け入れ、新たな一歩を踏み出そうとしているのはアラバスタだけではない。
「今度の旅は、きっと長くなる。だけど次に来た時は海賊王のクルーだ」
揺らがぬ意思を覗かせて、澄んだ目で告げたキリにコーザはきょとんとする。
直後、その壮大な夢を理解して思わず笑ってしまった。
「アッハッハッハ！　海賊王か、そりゃすげぇ夢だな」
「ボクらは本気だよ。なるのはルフィだけど」
「そりゃ長い旅になる。行ってこいよ、キリ。お前らの活躍を楽しみにしてるぞ」
「ありがとう。まぁ、ボクらが活躍すると世間は荒れるんだけどさ」
「たとえ海賊でも悪いことばかりじゃねぇさ」
コーザが再びアルバーナの町を眺めた。
晴れ晴れとした笑顔で上機嫌に語る。
「その間におれはこの国を立て直して、もっと良い国にする。国王は元気だが歳も歳だ。支える奴はきっと必要になるだろう」
「コーザならできるよ。ボクが保障する」
「贖罪をしなきゃならねぇしな……お前が次に来る頃には、本気でびっくりするような国にしといてやるよ。今度こそおれたちの力で」
「うん。楽しみにしてる」
言い終えるとコーザは移動しようとした。キリはその場で見送ろうとする。
「さて、元反乱軍の連中を起こさねぇとな。まずはアルバーナを人が住める状態にしねぇと」

「ほどほどにね。無理はしないように」
「まさか、そんな状態のお前に言われるとはな」
言われて自分の体を見下ろし、包帯が巻かれた姿を再確認した。
楽しげに笑うとひらりと手を振った。
振り返って気の抜けた顔を確認すると、本当にあの日々が嘘だったのだと感じるが、それはそれで変化を感じて喜びもある。コーザは去る前に彼へ言った。
「またな。気を付けろ、って言っても無駄だろうが、死ぬなよ」
「わかった。またね」
あっさりした様子で別れを告げて、コーザは手を振りながら背を向け、その場を後にする。
屋内へ姿が消えるのを見送ってからキリは体を伸ばす。
晴れた気分だった。
空と同じく、今までの比ではなく晴れ晴れとしている。
辺りの景色を眺めてから、彼は弾む声で呟いた。
「さて、諸々準備しないと。まずは連絡と、脱出ルートの確認……食料は諦めるか。あーあ、海軍がいっぱい来るんだろうなー」
嫌そうな顔でキリがゆったり歩き始めた。
最優先で考えなければならないのは島からの脱出。おそらく海軍との交戦は避けられない。海戦を得意とするアーロン一味が居るとはいえ、その存在はすでに知られているはずであり、対策が講じられていたとしてもおかしくないだろう。
考えることは多そうだと、彼はだらしない姿勢で屋内へ向かった。

＊

明かりをつけていない軍艦の一室で、スモーカーはベッドの上に居た。
脱力して四肢を伸ばし、葉巻を二本銜えて、しばらく部屋を出ることもなく動こうともしない。
室内は葉巻の煙で満たされ、海軍の船とは思えないほど不衛生な様

子に変貌している。
アルバーナでの決戦が終結した後、彼の部隊はすぐにアラバスタを離れていた。
報告は全て嘘偽りなく行われている。クロコダイルを捕らえたこと、その功績は自分たちではなく麦わらの一味にあること、そして彼らを取り逃がしたこと。
当然海軍及び世界政府の上層部は彼らを責め、今すぐ引き返して捕らえろと言う。
その命令を無視してスモーカーの部隊は本部を目指していた。
不甲斐ない。心底自分を嫌いになる。
もしも自分がクロコダイルに勝っていたなら、当然麦わらの一味を捕縛しただろう。
現実は違う。スモーカーは敗北し、もしもルフィが居なかったならアラバスタは奪われ、海賊が支配する国として作り替えられていたに違いない。
力が足りない。勝つことができなければ何も守ることはできない。
海兵としてのプライドを傷つけられたスモーカーは自身に向ける激しい怒りを覚えていた。
そんな状態でも心は穏やかだった。やけになっている訳でもなく投げだしたつもりもない。ただ自分に足りない物を数えて、自分に必要な物を見据える。
諦めてなどいない。むしろ彼は己が目指すべき理想を見つけてもいたようだ。
扉がノックされる。返事をしなかったため、失礼しますと言ってたしぎが入ってきた。
彼の様子に思うところでもあるのだろう。ここ数日ろくに食事をとろうとはしなかった。
スモーカーを心配しながらも、彼女自身もまだ完全に立ち直れた訳ではない。
冷静な声で事務的に伝え、小さな声が重苦しい沈黙を破った。
「スモーカーさん。電伝虫の通信が入っています」

「出られねぇと伝えろ」
「本部やヒナ大佐ではありません。直接話したいと……」
今日になるまで何度となく電伝虫が鳴っていた。ウザったく感じていたスモーカーはそれら一切を無視しようと決め込んでいたが、たしぎの戸惑った声を聞いてよっぽどの事情だろうと察する。
ベッドに寝そべったまま、静かに聞いた。
「誰だ」
「……クザン大将からです」
ぴくりと眉が動いた。
予想することもなかった名前。確かに過去、目をかけてもらったこともある人物だ。
起き上がったスモーカーはベッドから降りる。
上半身は裸のまま。いまだに包帯が取れずに巻かれている。
長ズボンにブーツという姿で自室を出るべく動き出した。
「繋げろ」
小さな呟きにたしぎは頷き、先に歩いて彼を先導する。
スモーカーが姿を見せたことで部隊の人間は驚き、少なからず怯える様子も見せたが、彼自身は気にしていない。葉巻を銜えた厳めしい顔で前だけを見据える。
到着したのは別の船室だった。
室内に居た海兵は全員が立っていて、緊張した顔を見せている。
それが果たして、スモーカーに対するものか、或いは通信相手へのものか。
どちらとも考えずにスモーカーが席へ座る。
荒々しく椅子に座った物音で通信相手は彼が来たことに気付いたようだ。
スモーカーが受話器を握った途端、相手から話し始める。
《よお。ずいぶん苛立ってるみたいだな》
「まさかあんたから連絡が来るとはな……」
《まぁ～おれも普段ならこんなことしねぇんだが、今回は話の内容が内容でな。個人的に気になったのよ。心配するな、あーだこーだ言

わねぇから》
「用件はなんだ？」
明らかに不機嫌だろうという声色でスモーカーが尋ねる。するとだるそうな声が答えた。
《報告は聞いてる。クロコダイルと麦わらの一味だろう。ずいぶん大事になったもんだ。こうなるなんて誰も予想してなかったってのにな》
「腹立たしい話だ。一生の恥だぜ」
《そう自分を責めるな。お前はよくやったよ。上層部に噛みついたとこなんてお前にしかできねぇことだろうよ》
「フン……」
その言葉にスモーカーは苦渋を噛む顔を見せる。
背後ではたしぎが同じような表情だった。
《啖呵を切ったのは見事だが、結果は変わらねぇ。報道ではクロコダイルを捕らえたのはお前だってことにされる。ただし二階級特進は取り消し。ちょっと噛みつきすぎたな》
「いらねぇよ。そんな称号なんざ」
《お前も潔癖だな。その考えは立派だとは思うが、組織に居りゃこういうことは必ず起こる。そして今のお前にはそれに逆らえる力がねぇ。今回のことで身に染みてわかったんだろうが》
「ああ、そうだな。大きなお世話だ」
《まぁそう怒るな。いずれお前らの時代が来る。今は傷を癒して力を蓄えとけ。あ、言われなくてもわかってたことか？》
スモーカーはわざとらしく溜息をついた。
「用件はそれだけか？」
《おっと、そうだった。聞きたかったことを忘れてた。お前が連絡取らねぇからだぞ？》
「いいから早く済ませてくれ。こっちは疲れてんだ」
《あーはいはい。と言っても大したことじゃねぇ。一つ聞きたいだけだ》
少し声が変わり、真剣みを帯びる。

些細な変化にスモーカーは眉を動かした。
《ニコ・ロビンを見つけたらしいな》
彼の発言を受けてスモーカーは口を閉ざし、ゆっくりとたしぎへ振り返った。
事情を知っているらしい彼女がスモーカーを相手に説明を行う。
「あくまでも可能性の話ですが、昔の手配書で見た少女の面影を感じたので報告をしておいたんです。クロコダイルの傍に居た……ミス・オールサンデーという女性です」
「なるほどな。そいつが本物かどうかが気になるってことか？」
《奴は元々政府から逃げ続けていたが、ある時期を皮切りに足跡が追えなくなった。一部じゃ死亡したと考える奴も居たくらいだ。まさかクロコダイルと組んでたとはな》
「確かに、政府の信用を買ってたクロコダイルなら怪しまれもしねぇか。だがなぜあんたがその女を気にする？　とんでもねぇ女だとは聞いてるが、わざわざ連絡するなんざ普段やる気のねぇあんたならあり得ねぇことだ。何か関係があるのか？」
ほんの数秒、考え込むように間が生まれる。
その時間が答えを示しているかのようで、スモーカーは勝手に納得した。
《教えてやってもいいんだが、電伝虫じゃ不安もある。その件は次に会った時にしてくれ》
「そうか……言っておくがおれたちには真偽を確かめる時間も余裕もなかった。そいつが本物のニコ・ロビンか否かは定かじゃねぇ。あくまでも推測の域を出ねぇぞ」
《んん、いや、いいんだ。組織が崩壊してクロコダイルが捕まった今、まだ生きてるならどこかで情報が入ることもあるだろう。とりあえず聞きたかったのはそれだけだ》
わざわざ連絡を取るくらいなのだから相当のことなのだろう。しかし緊迫感をあまり感じさせないだらけた声。まだ彼の心が読めずにいる。
スモーカーは多くを言わずに、追及しようともしない。

彼の言う通りだ。いずれ手に入る情報もあるだろう。今焦る必要はない。
今は、今やるべきことを考えるのみだ。
《それからあれだ……あー、なんだっけか……忘れた。もういいや》
「またそれか」
《まぁとにかく本部に戻るんだろ？　その時にまた会えば、あ、思い出した。お前も今は遊撃隊の一隊長ってことになってる。ゼファー先生の方にお小言が飛んだそうだ》
「関係あるか。おれは自分の正義に従っただけだ」
《そうか。それならおれから言うことは何もねぇが、問題は自分で解決しろよ。助けるのがめんどくさいからおれは助けねぇ》
「そもそも期待してねぇよ」
《それから……あー、もういいか。じゃあ切るわ》
一方的に言って突然通信が切られてしまった。
今の今まで話していた電伝虫は眠り始めてしまい、スモーカーは溜息をつきながら殻に受話器を置く。連絡を取ったのはずいぶん久しぶりだが相変わらずの人物だったらしい。
気になることを聞いた。
思えば彼のあれほど緊迫した声を聞いたのは初めてな気がする。
しかし結局はそれも今はまだ気にすることではない話。それよりも今、現時点で気にすべきは七武海の一角を落とした麦わらの一味の台頭。
彼らを見逃すことだけはできない。今すぐとはいかずともいずれは自分の手で捕らえる。
その場を動かず考えていたスモーカーの背へ、たしぎがポツリと尋ねた。
「これからどうなるんでしょう……」
「決まってる。おれたちの目的は一つだ」
呟いた瞬間、再び電伝虫が鳴り始めた。
面倒に思って深い溜息をついたが、今度はスモーカーが直接受話器を取る。

口を開いてすぐ聞こえてきた声はこちらも懐かしいものだった。
「なんだ」
《呆れた。やっと連絡がついたと思ったら開口一番がそれ？　幻滅よ。ヒナ幻滅》
「お前か……」
それは同期で海軍に入隊した女性の声。階級は同じだが上官に逆らって左遷されたスモーカーとは違い、ずっとグランドラインで勤務していた人物。
面倒な相手だとスモーカーは表情を歪める。
予想通り、電伝虫の口から気の強い声が聞こえてきた。
《スモーカー君。あなた、どういうつもり？　海賊を取り逃がしたばかりか、クロコダイルの連行を他の人間に任せるなんて》
「何か問題でもあったか」
《あるからこうしてあなたに連絡しているの。あなたたちが島を離れた後、捕虜を乗せていた船が攻撃を受けたの。バロックワークスの構成員は一部が脱走。幸いクロコダイルが居た船は無傷だったようだけど、逃げられてしまう可能性は十分あったわ》
「それはおれの責任か？　部隊長は居たはずだぞ」
《あなたが居ればこんなことにはならなかった。ひょっとしたらクロコダイルを逃がしてしまうかもしれなかったのよ。どうして現場を離れたの》
スモーカーは聞いていないかのような様子で葉巻の煙を吐き出す。
天井を仰ぎ見て、あまりの態度にたしぎが緊張してしまったほどだ。
《ちょっとスモーカー君。聞いてるの？》
「そもそもあの海域はお前の管轄だろ。今までどこで何してやがったんだ？」
《仕方ないでしょう。応援を頼まれて少し離れていたの。だから今急いでアラバスタへ向かっているところよ》
「あとのことは任せる。好きにしろ」
《話は終わっていないわよ。この数日でノコギリのアーロンが軍艦

を何隻沈めたと――》
「そうだ。アラバスタへ向かうなら一つ忠告しといてやる」
唐突に呟かれたスモーカーの声に反応し、声が途切れた。
「あいつらには手を出すな。どうせ捕まえられねぇよ」
《はぁ？　それって何？　私では力不足だとでも言うの？　心外よ。ヒナ心外》
「忠告はしたからな」
言い終えるとスモーカーは勢いよく受話器を置いて通信を切った。
突然の行動で室内に居た海兵は背筋を伸ばして緊張する。
大きく溜息をついて席を立ち、スモーカーは自室へ戻ろうと歩き出した。
「たしぎ、あとのことは任せるぞ。おれァ寝る」
「は、はい」
そう言うとスモーカーは部屋を出ていく。
やはり機嫌があまりよくないのだろう。普段から良いということでもないが、今回は顕著だ。
呆然とするたしぎが立ち尽くしていた時、再び電伝虫が鳴り始めた。相手がわかって慌てて受話器を取る。やはり先程無理やり切られてしまった人物だ。
彼女はかなりの怒りを表しており、たしぎは思わず頭を下げてしまう。
《スモーカー君ッ!!》
「あ、あのすみませんヒナさん。たしぎです」
《あら、たしぎ……スモーカー君は？》
「今しがた部屋に戻られました……」
《ああもうっ。全く変わってないんだから……！》
同期である彼女はたしぎよりも付き合いが長い。怒りながら諦めも感じられた。
普段から品行方正なたしぎはスモーカーとは対極であり、それを知っていた相手だからこそ八つ当たりをされることはなかったが、その代わりスモーカーに対する愚痴を聞かされる羽目になる。

困惑する彼女は拒むこともできず、その後数時間も相手をさせられることになったのである。

更新

夕刻になり、徐々に太陽が沈もうとしている。
空の色はオレンジ色になりつつあった。
出航準備を仲間に任せた後、二度寝を決め込んで一度たりとも起きなかったキリがようやく目を覚ました。ベッドの縁に座って大あくびをする姿にウソップは呆れている。
今やすっかり元通り。東の海に居た頃と同じか、それ以上に気が緩んでいるらしい。
人はここまで変わるものかと驚きを隠せなかった。
「ふわぁ～……あぁ、よく寝た」
「寝過ぎだろ。おれたちだけ働かせやがって」
「しょうがないよ。大怪我したんだから」
「怪我ならおれたちもしてんだよ」
「ピリピリしてた頃がもう懐かしいわね。そっちの方があんたらしいっちゃらしいけど」
椅子に座って本を読んでいたナミが苦笑する。
実情として彼女も色々理由をつけてはさほど動いていないのだが、それは敢えて言わず、しかし事情を知っているウソップは彼女に対してもジト目であった。
「お前は何もしてねぇだろ」
「私はか弱い女の子なの」
「か弱い女の子が自分で言うか」
「いい加減にしろウソップ。ナミさんはか弱くて可愛くて美しい女の子なんだ」
「ありがとサンジ君。その通り」
「納得できねぇ……」
サンジが口を挟んだことでウソップはげんなりした顔をする。
いつの間にか再び横になっていたキリがウソップへ尋ねた。
「なんか大変だったみたいだね」
「大変ってほどじゃねぇけど、お前らの態度の問題だっつってんだ」

「あーそういう」
「ほんとにわかってんのかよ」
軽い調子で聞き流したキリはだらしない姿勢で話を続けようとしていた。
出航準備の報告を聞かなければならないのだろう。
本来なら怒りさえ生まれそうな体勢であるが、すでに慣れている仲間たちは指摘せず、至って冷静に彼と話し始める。
「で、首尾はどう？」
「食料なら少しだがわけてもらったぞ。国がこんな状態なら上出来だろ」
サンジが煙草を銜えたまま言う。
自ら交渉した訳でもないのにテラコッタが少量の食材や調味料をくれたのだ。アラバスタ特有の料理をするためには必要な物らしく、礼の代わりに持って行ってくれと押し付けられた。
彼はそれを有難く受け取り、航海に出てから研究も兼ねて試してみるつもりである。
「アーロンたちとも連絡取れたよ。ここから真東のところまでメリーを連れてきてもらうように頼んでおいた」
笑顔でシルクが言った。だがその直後、表情が変わって少し困った様子になる。
「ただ、気になることもあるんだけど……」
「何？」
「昨日から海軍の軍艦が姿を見せないんだって。諦めた訳じゃないよね？」
「うーん、戦力を整えてるってとこかな。やっぱりもう少ししたら前以上の艦隊で襲ってくると思うよ。アーロンたちに対抗するための装備を準備してるのかも」
寝返りを打ちながら真剣な顔でキリが考え込む。
その様子に思わずゾロが口を開いた。
「戦闘になると面倒だ。急いで出た方がいいね」
「起きてから喋れよ」

「あー動きたくないなー」
「お前……前にも増してひどいな」
だらけた姿勢で喋るキリにゾロは呆れてしまい、言葉すら出なくなってしまった。
そういえばこんな奴だったと思い返す。ここ最近はあまり見れなくなっていた顔だが当初はこんな感じで、良くも悪くも力が抜けていた気がする。
寝そべっているキリの隣にはルフィが居て、自身が船長だというのに呑気な顔で聞いている。口を挟む様子はなくて全て任せ切っている顔だった。
彼が気になるのは出航についてよりも今日の夕食について。
ひょっとしたら聞いていないかもしれないと感じて皆は敢えて彼には言わなかった。
「やっぱり今日出発しよう。いい加減海軍をこの国に入れないと問題もあるしね」
「いよいよ出航かー。長かったような気がするけど、実際は結構短かったんだよな」
キリの言葉にウソップが反応して、アラバスタに到着してからの行動を思い出しながらしみじみ呟く。数日はゆっくりしたがそれも傷の療養のためだ。アルバーナ以外の町へ訪れることも結局は一度もないまま離れてしまうようである。
もう少しゆっくりしたかったという想いもあるが仕方ない。
一連の話を聞いていて、ルフィがビビを見て言った。
「ビビ、一緒に来ねぇか？」
「え？」
「おれたちと一緒に冒険しよう。これまでみたいに」
笑顔で問われてビビは固まる。
仲間の顔を見回せば皆が彼女を見つめていて、受け入れるように優しい目をしている。しかしすぐに口を開くことはできず、数秒沈黙した。
ビビが口を開いたのは床に視線を落としてからだ。

「私は……」
迷う素振りで声を途切れさせた時、慌てた様子でイガラムが部屋へ飛び込んできた。
何事かと一斉に彼を見た一同はビビから注目を外す。
「皆さん！　大変なことになりましたよ……！」
「どうしたんだよおっさん。なんかあったのか？」
「ええ、つい今しがたのことです……とにかくこれを見てください！」
そう言ってイガラムはルフィとキリが居るベッドへ近付き、何かを置いた。
全員がそこへ集まって覗き込む。
広げられたのは数枚の紙。認識した彼らは目を輝かせた。
「あ～っ！　おれたちの手配書だ！」
「君たちの懸賞金額が上がっている。しかもとんでもない額だ。君たちはすでに第一級の犯罪者として海軍将校から狙われることになった」
イガラムが真剣な顔で、彼らに伝わりやすいように一人ずつの名を読み上げる。
「〝麦わらのルフィ〟……懸賞金1億ベリー」
「やっほ～！　上がった～！」
「1億⁉　嘘でしょ……！」
自身の懸賞金を知ったルフィは腕を伸ばして喜んだ。一方でナミは億を越えたことに危機感を抱いたらしく、顔を青ざめさせて動揺している。
その気持ちはわかるがイガラムは続ける。
手配書はまだ数枚あった。
「〝紙使いキリ〟……懸賞金９０００万ベリー」
「んん、まずまず」
すでに賞金首となっていたキリは納得した様子で頷く。
本音を言えばルフィと自身の上がり方が少ない気がするものの、情報操作をされるだろうとは考えていたため、この結果が予想できな

かった訳ではない。彼は落ち着いていた。
「〝海賊狩りのゾロ〟……懸賞金６０００万ベリー」
「へぇ……」
「わっ。初頭手配で６０００万だって。凄いね、ゾロ」
自身の名を呼ばれたことでゾロはにやりと笑う。それなりに嬉しかったらしい。
隣に居たシルクは彼の金額に驚き、感心してもいた。
手配書が出たとはいえ、ここまでは概ね予想通り。以前にルフィとキリの手配書が出たため、金額が上がることはあっても取り消されることはない。そこへゾロが加わっただけならば順当で、誰も疑問を持つような理由を持っていなかった。
問題は次に呼ばれた人物である。
気を抜いてきちんと手配書を見ていなかった一同は驚愕する。
「〝キャプテン・ウソップ〟……懸賞金２５００万ベリー」
「へー、キャプテンウソップ……え？」
急に名前を呼ばれて、他でもないウソップ本人が呟き、そして固まった。
訳が分からず立ち尽くすこと数秒。
次の瞬間には彼も含め、一同が大声を発していた。
「えええええっ!?」
「ウソップが賞金首!?」
「すげーウソップ！」
「おいちょっと待て！　おっさん、それだけじゃねぇよな!?　おれは！」
ナミやウソップがただただ驚き、ルフィやチョッパーが目を輝かせて喜ぶ。シルクやゾロも驚きを隠せない様子で、キリは素直に感心していた。
その中で最も大きな反応を見せたのがサンジだ。
まだ自分の名が呼ばれていない。ゾロが呼ばれただけで心中穏やかではなかったというのに次はウソップだ。いよいよ焦り出してイガラムに詰め寄る。

「ほら、あと二枚も持ってんだろ！　どっちがおれだ？　ん？　おれはいくらなんだよ！」
「いや、これは君たちの仲間のアーロン一味の物で……〝ノコギリのアーロン〟が８０００万ベリーになり、もう一枚は〝タコ焼き屋はっちゃん〟１５００万ベリーです」
「なんだと……!?」
「あ、はっちゃんも賞金首になったんだ」
絶望か、憤怒か、かつてない表情になったサンジがよろりと足をふらつかせた。
その背後ではシルクが二人の懸賞金に目を丸くする。島内に上陸することはなかった彼らだが海での戦闘を何度か繰り返したらしい。海軍へ与えたダメージの結果が懸賞金に表れたのだろう。
では麦わらの一味におけるそれぞれの内訳はどうか。
納得できないサンジがイガラムへ掴みかかった。
「ちょっと待てェ！　もう終わりか!?　もう一枚残ってんだろ！　おれの手配書がまだ見せられてねぇぞ！」
「手配書はこれで全部ですが……」
「ふざけんなァ!?　なんであの長っ鼻が賞金首でおれの手配書がねぇんだ!!」
「わ、私に言われましても」
怒り心頭のサンジは火すら吐き出しそうな様子で叫んでいる。
納得できていないのは明白なためキリが言い出した。
「ひょっとしたら例の演説じゃないかな」
「あぁ!?」
「反乱軍に向けたあれだよ。アルバーナにも海兵は居たし、可能性は高いと思う」
微笑む彼は穏やかな口調で説明する。
「懸賞金は実力じゃなく政府や市民への危険度を示すものだ。七武海を倒したルフィや西の海で知られた殺し屋〝ダズ・ボーネス〟を倒したゾロは実力的にわかりやすく危険だし、ボクは元バロックワークス構成員。有名らしい賞金稼ぎも一人倒したしね」

呆けて思考停止していたウソップもその語りを真剣に聞いていたようだ。
「今回ウソップは言葉だけで反乱軍を止めた。市民の心を動かしたってことだ。政府にとってこんな厄介な海賊は居ないと思うよ。守るべき市民が海賊の味方なんてし始めたらさ」
「そっか。市民を味方にする海賊になるかもしれないと」
「出る芽は早めに潰そうってとこか」
「金額からしてあくまでもまだ可能性かな。でも初頭手配２５００万はボクより高いじゃん」
「お、おれが、賞金首になったのか……!?」
やっと事態を飲み込めてきたらしいウソップは、嬉しさ半分、怖さ半分で動揺しており、激しく取り乱すと頭を抱えながら叫び出した。
その足元では、彼の手配書を手に取ってじっと見つめるチョッパーが羨ましそうにしている。
頭から血を流し、傷だらけになりながらも何かを叫ぶ男の姿。
戦いの凄惨さと彼の勇気を表す写真が貼りつけられていた。
「ぎゃあああっ狙われる～!?　でもちょっと嬉しい～！　写真も凛々しい～！」
「いいなーウソップ。おれも手配書欲しいなー」
「ちくしょう、なんでおれの手配書がねぇんだ……！」
嘆くサンジは歯をギリギリ鳴らして悔しそうにしている。
そんな彼を見て腕組みをするゾロが呟いた。
「まぁそう気に病むな。懸賞金なんざただの飾りみてぇなもんだろ」
「あ？」
反射的に睨んでくるサンジにゾロが笑顔で伝える。
「お前はよく戦ったよ、０ベリー」
「表出ろコルァ!!　てめぇの首を海軍に差し出してやる！」
「おい、無理はするな。できんのか？　その……危険度がねぇらしいが」
「ふっざけんなァ!!　政府の野郎どもの目が狂ってるだけなんだよ

！」
またいつものやり取りである。
堪えられなくなったサンジが飛び上がってゾロへ襲い掛かり、彼は即座に刀を抜いて対応しようとした。しかし二人を見てどうせそうなるだろうと思っていたシルクが動き出す。
「てめぇがおれに勝てる要素なんざ一つもねぇことを証明してやる！」
「やってみろぐるぐる！　刀の錆にしてやる！」
「こら！」
腕を振ってかまいたちを起こし、二人の体を吹き飛ばす。
室内に風が吹き荒れるものの、日常茶飯事であるためさほど反応はなく、皆はゾロとサンジが床を転げ回るのを冷静に見ていた。
腕を下ろしたシルクは腰に手を当て、子供に言うように二人を叱る。
「喧嘩しちゃだめだよ。それに部屋の中で暴れない」
「はぁ～いシルクちゃん……」
「部屋の中で能力使うのはいいのかよ……」
無様に転んでしまった二人は喧嘩する気を失ったようで、大人しく立ち上がると近くにあったベッドへ腰掛けたため、シルクは満足そうに笑顔で頷く。
彼らの騒ぎが収まったためようやく会話に戻れる。
口火を切ったのはキリだ。
「七武海を倒したんだからもう少し欲しかったところだけど、とにかくこれでルフィは億越えの海賊。トータルバウンティはうちだけで2億を越える。傘下の分を入れればさらに上がるしね」
「そういや巨人のおっさんたちも賞金首だって言ってたな」
「いよいよ停滞もまずくなってきたか。じゃあ、やっぱり出発は今日だ」
今になって体を起こしたキリがベッドから降りる。
喜ぶ者、嘆く者、羨む者、この先の航海を憂う者と様々だが、士気は決して低くない。

仲間たちに向かって出発の号令を出した。
「みんな準備するよ。荷物をまとめたらすぐにここを出発する」
「よーし！　準備だー！」
「こんなに賞金首が増えるなんて……また海軍に狙われやすくなったのね。まぁ私の顔が知られてないのは不幸中の幸いだけど」
ドタドタと騒がしくルフィが動き出す一方、ナミは頭を抱えて溜息をつく。
そんな彼女にシルクが笑いかけた。
「私はちょっと羨ましいな。懸賞金と手配書」
「やめときなさいって。また危ない目に遭うのよ？」
「でも、このメンバーと一緒ならどっちにしても危険な目に遭うと思うよ」
「あー……それは言えてるわね。だからこそ少しでも可能性を低くしたいの。私は絶対、何があっても賞金首になんてならないわ」
「ふふ。でもナミが決めることじゃないよ。ひょっとしたら、ってことがあるかも」
ナミとシルクが荷物をまとめるために行動を始める。
ウソップとチョッパーも自分の物を整理しようと歩き出していたが、開いた口は閉まらず、楽しそうな様子の会話は途切れなかった。
「まぁ～今は２５００万ベリーだけどな。実はおれはその昔、ガキの頃にも賞金首になったことがあるんだ。その頃は２億ベリーくらいだったかな」
「そうなのかっ!?　すげぇ！　ウソップ、何やったんだ？」
「そりゃ色々あったけど、一番はあれかな？　ある王国の重大な秘密をおれが暴いちまったって話なんだが、いや～あれは大変だった」
軽やかに嘘をつくウソップの顔は自信に満ち溢れており、手配書は海賊として認められたという証明にも感じられて、非常に嬉しそうである。
それ故にチョッパーは羨んでいたようだ。
同じく悔しそうなサンジは横に居るゾロへ対しての恨みつらみが止まらない。

「まったく気に入らねぇ話だぜ。今から海軍の奴らにわからせた方がいいんじゃねぇか？　なんでてめぇの手配書があっておれのはねぇんだ」
「当然の評価だろ。おれは海軍を支持するぜ」
「あぁん？　そりゃどういう意味だ？」
「わからねぇならわからせてやろうか」
「喧嘩してる？」
「い、いや、してないよシルクちゃん」
「よかった」
一時剣呑な空気を生み出しながらも、結局は彼らも衝突することなく準備のために動き出す。
皆が方々へ散って部屋を出る者が居る中、ルフィとキリは動かず。
ビビもまたじっと佇んで動かなかった。
思い悩む様子の彼女をカルーとイガラムが心配そうに見つめる。
彼女が何を悩むのか、後から来たイガラムは知らないがカルーは知っている。皆が手配書について話している間もビビはずっと考え込んでいたのだ。
頭にあるのはルフィの言葉一つ。
一緒に来ねぇか。
彼の問いかけで心は揺れている。
キリはともかくとして、ルフィがその場を動かなかったのはやはり彼女が居たからのようだ。思い悩む素振りは全員が気付いていたため、話を聞こうと思ったのだろう。
ルフィはもう一度ビビへ問いかける。
「なぁビビ、お前はどうする？　おれたちと一緒に来るか？」
「なっ、何を言うんですか！　ビビ様はこの国の王女ですよ！」
「知ってるよ。でも選ぶのはビビだ」
「それは、そうかもしれませんが……いやしかし」
ルフィの発言で驚いたイガラムが咄嗟に言うも、ビビの表情を見て言葉を失った。
彼女は今、悩んでいるのだ。

ひょっとしたら彼らと行きたいのかもしれないと考えて、それはいけない、という想いを持つ一方で、彼女の思う通りに生きてほしいという想いがぶつかる。
カルーが問いかけるように弱弱しい鳴き声を出してもビビは動かない。
苦しむかのような表情の彼女にキリが言った。
「自分の好きな方を選んでいいよ。強制はしない。君の自由だ」
彼の言葉を受けたビビは二人の顔を見つめ、少しするとくすりと笑った。
初めから悩んでなどいない。ただ名残惜しかっただけだ。
ようやく覚悟ができた様子でビビが口を開く。
「ルフィさん。キリさん」
二人の名を呼び、仲間たちへ向けて。
「私――」
ビビは自分の決断を言葉にした。

出発

翌日の朝。
アルバーナの王宮前には大勢の人が集まっており、或いはそれ以外の場所でも、先日の戦いを忘れさせるような活気があった。
国民には笑顔があって、誰もが何かが始まることを期待していた。
今日は王族からの言葉がある日だ。
先日の戦いを受けて復興のために国民へのスピーチを行うらしい。
長らく行方不明だったビビ王女が帰ってきたということで国民は浮足立っている。いつスピーチが始まるのかと待ちきれない様子だった。
その中にはユバという町に住んでいるコーザの父、トトも居た。
アルバーナでの戦乱が終わった後、全てが終わったことを伝えるためコーザが呼んだのだ。過酷な環境だったためか昔と違ってずいぶんやせ細り、それでも今日は目を輝かせている。
元々アルバーナに住んでいた彼とコーザはビビが子供だった頃からの知り合い。
無事だったと知って、久しぶりに元気な顔を見れるのだと普段にはないほど元気になっている。
一方、再建中の建物の前に座って、トトとは対照的な姿が息子のコーザだ。
「おいコーザ！　こんなところで何してる！　早く王宮前広場に行くぞ！」
「スピーチは国中に聞こえるんだ。どこに居ても一緒だろ」
「一緒なもんか！　ビビちゃんの――ビビ王女の元気な姿を見なきゃいかんだろう！」
「それは親父だけだろ……おれはもう会った」
「何ッ!?」
ユバで孤独な生活を送っていたトトが特別はしゃいでいる様子もあったが、アルバーナでの戦いに巻き込まれた者は彼と同じくらいその時を楽しみにしている。

王女の帰還はアルバーナだけでなく、電伝虫で繋がったアラバスタ中で待ち望まれていた。
王宮の門の上にずらりと兵士が並んで、ビビの到着を待っていた。
この日が来るのは彼女が行方不明になった時から望まれていた。無事に国へ戻り、再び国民の前に顔を見せてくれる日が来て本当に嬉しい。
王族を護衛する兵士たちは誇りを持ってその場に立っていた。
大勢が喜んでいる中、一部には戸惑いを覚えている者も居る。
その場に客人として立たされていたＭｒ．９とミス・マンデーである。
「いいのか？　おれたちがこんなとこに居て……王族側のポジションじゃねぇか」
「仕方ないだろ。ミス・ウェンズデーがここが良いって言ったんだ」
「なんつーか、場違いだよなぁ。おれたちも元バロックワークスだぞ」
「いっそのことこのまま兵士になるってのもいいかもね」
冗談交じりに話している彼らは国民ではなく、客人であり、ビビの友人でもある。しかしいまだ自分たちの身の振り方が決まっておらず、少なくともこの場は大人しく佇んでいた。
所在なさげにしながらも嫌ではなくて、最後かもしれない景色を楽しんでいる。
集まった人々を見下ろし、チャカとペルは笑みを浮かべる。
国民の顔に笑みがあることは遠目にも確認できた。
この状況を生み出せたのはあの騒がしい海賊たちの存在や、他ならぬコブラ王やビビ王女の力があってのこと。自分たちではどうにもできぬからこそ尊敬の念を持つ。
一方、正装したイガラムはどこか浮かない顔をしていた。
「国民に笑顔が戻った。つい先日の出来事だというのに逞しい限りだな」
「ああ。それもこれも彼らの協力があったからこそだ。あの時の国王様の言葉も力強く……ん？　イガラム隊長？　どうかされました

か？」
彼の表情に気付いたペルに声をかけられ、ハッとしたイガラムは咄嗟に背筋を伸ばす。
「いやいや、別に。ただ、ビビ様は立派になられたと考えていてな」
「ええ……本当に」
「あのお転婆だったお姫様が、素晴らしい成長をされました」
「うむ。まぁ、お転婆は変わっていないかもしれんが」
イガラムが苦笑すると同時、時間が来たのだろう。
王宮からビビとコブラが姿を表す。
カルーを引き連れ、白いドレスを着た彼女はあまりにも美しく、もはや子供とは呼べない様子に多くの者が息を呑んだ。
微笑を浮かべる彼女を見た時、イガラムは安堵した。
自分が心配するようなことなどなかったのだ。
途中で足を止めたコブラに促され、ビビとカルーが国民に姿を見せられる場所まで歩を進める。
姿が見えた途端、国民から大きな歓声が上がった。
ビビは笑顔で小さく手を振り、カルーは答えるように大きな鳴き声を発する。
立ち止まって広場をじっと見回して、一人一人の顔を見るようにビビは少し時間を置く。
再度動き出すきっかけはカルーの小さな声だった。
自分に言っているのだろうと気付いて、用意されていた電伝虫の受話器を取ると、彼女はゆっくり大きく息を吐く。そして穏やかな笑顔で話し始めた。
「少しだけ、冒険をしました――」
ビビが言葉を紡ぎ出すと、歓声は一瞬にして消え、国民は静かに耳を傾けた。

＊

「ちょっとちょっとォ!?　ジョーダンじゃなーいわよーう！」

スワンが船首の快速スワンダ号に乗ったＭｒ．２が叫んでいた。
脱獄したバロックワークスの元幹部たちと驚愕の合流を果たした麦わらの一味、及びアーロン一味はタマリスクという港町へ近付こうとしている。その途上、突如現れた海軍の部隊、通称〝黒檻部隊〟と直面していた。
ヒナ大佐率いるこの部隊は海賊の捕縛に特化しており、捕まった海賊は数知れず。
先日のトレジャーバトルに参加した人間もかなり捕まったという噂があった。
メリー号の後部から海を眺めるキリは考えを巡らせる。
軍艦が八隻。対してこちらは三隻。
聞けば黒檻部隊は敵を包囲する布陣を得意としているらしい。それならば包囲されるのは避けなければならず、かといってあまり遠くに逃げてしまうと面倒になる。
海戦ならばアーロンたちに任せてしまうという手もある。だがそれは先日やった。
今回は何かしらの対策があるかもしれないと、キリはアーロン一味を止める。
「ようやく麦ちゃんたちと合流して海軍から逃げられると思ったらば！　あいつら海賊捕縛の名手〝黒檻部隊〟じゃないのよーう！　ここら一帯じゃ有名な奴らよ！」
「うるせぇオカマだな。なんだあのしぶとさ」
「ちょっと紙ちゃん！　どうする気ッ!?　あいつらケツについたら中々離れないわよう！」
隣の船でＭｒ．２が騒ぐ一方、サンジが溜息をつき、キリは冷静に後方を眺める。
戦えばおそらく厄介な相手。直接対決は避けたい。とはいえいまだ解決策は見出しておらず、周囲の喧騒とは裏腹に彼は呑気な態度だったようだ。
「正面衝突は面倒だね。まともにやり合うとこっちもダメージを受ける」

「アーロンたちにやらせりゃいいんじゃねぇのか？」
「対策くらいはしてるさ。そう簡単にはいかないと思う」
「じゃあ、このまま逃げ続けるか？」
「それだけじゃ見逃してもらえなさそうだね」
後方をぴったりついてくる船団を目にしてため息をつく。静かな旅立ちにしたいと思っていたのにそうはならないらしい。
苦笑したキリは大きく伸びをした。
ようやく考える気になったようで仲間の顔を見回す。
「仕方ない。やるか」
「結局正面衝突か？」
「可能性が高い道を選ぶさ。心強い味方も居るしね」
「よっしゃー！　野郎どもォ！　戦闘だァ!!」
ルフィが声高々と叫ぶ。
彼が最も怪我の状態がひどかったはずなのにもう戦うつもりのようだ。せめてもう少しゆっくりしたかったとため息をつく者も居る中、ゾロとサンジは笑みを浮かべている。
「最初からこうしときゃよかったんだ」
「海賊稼業にゃ切っても切れねぇもんか。忙しい毎日だぜ」
彼らは戦闘準備のため動き出す。大砲の準備をして舵を握った。
一方、憮然としたナミはつまらなそうに呟く。
「いっそのことアーロンを餌にして置いていけば？　こんなに戦闘が続くなんて嫌だもん」
「ナミ、それはちょっと……一応もう私たちの仲間なんだし」
「気持ちはわかるけど利用価値はあるんだ。中々手に入る駒じゃない。持っておいた方が今後も楽できるよ。まだ捨てるには惜しい」
「あんたも悪趣味ね。同情はしないけど」
ナミがキリを見て苦笑すると同時、メインマストの上に居たウソップが大声を出す。
「おぉい！　あれなんだ!?」
海軍の船団を確認していたはずの彼の声に全員が海を見る。
方角は東。彼らが進む方向から見て左側。

かなり距離はある。海面が盛り上がろうとしており、どうやら海中から何かが出てこようとしているようだ。それがかなりの巨大さを感じさせるためだろう、まさか海王類か、と身構える者はどの船でも少なくなかった。
やがてそれはあっと言わせる間もなく勢いよく姿を現す。滝かと見紛うほど大量の海水を跳ね上げては海面に落とし、島かと思ってしまうほど巨大な船が確認できた。
木製の帆船。持ち上げた海水が全て落ちると軽い音を立ててシャボンが割れる。
海中から現れた規格外のサイズの船に、多くの人間が驚愕して声すら出せなかった。
あれは敵か。それとも味方か。
掲げられた旗は黒地に髑髏。海賊であることは間違いない。
では一体誰だ。誰もがそう思った時、身を乗り出した二人組が確認できた。
数百メートルの距離があってもわかる、あまりにも大きな姿。彼らは巨人族だった。
剣と斧を担いでにやりと笑う顔が見えて、ウソップが誰よりも大声で叫んだ。
「あれはっ……師匠たちだァ！　ドリー&ブロギー師匠だッ!!」
巨人族の二人が乗っても有り余るほどの余裕がある超巨大船。
甲板の船首付近に立ったドリーとブロギーは探していたメリー号を見つけ、その後方に居る敵だろう船団を見つけ、待ち切れぬと言わんばかりに武器の柄を握りしめた。
久方ぶりの航海。海賊としての生活。忘れていた感覚が蘇ってくる。
存外、良いものだ。
隣には二度と共に航海はできぬだろうと思っていた相棒が居る。新たに手に入れた相棒となる船もある。新たな武器もある。捨てたはずの海賊としての誇りを取り戻せる。
彼らは戦士である。と同時に、海賊なのだ。

ひょんなことからとはいえ、仲間となった者たちのために武器を振ることを躊躇わなかった。
「懐かしき……この感覚よ」
「久しく忘れていたな。心が躍るこの旅路を」
二人はゆっくりと得物を振り上げる。
力を入れて筋肉が盛り上がると、すでに準備は万端。目標とする船は遥か彼方。いくら巨人族と言えど届くはずがない距離なのだが武器を降ろすつもりはない。
ドリーとブロギーの目は揺るぎなくしっかりと海軍の船団を捉えていた。
「友との約束を果たすとしよう」
「我らが船長に手は出させん」
思い切り踏みしめても動じない船に安心感を覚えつつ、全力を込めた一撃が繰り出された。
「蘇った我らの〝槍〟を見せてやろう――！」
「受けてみろ！　覇国ッ!!」
全くの同時に剣と斧が振り切られた。
新たに手にした武器は彼らの全力を受けてなおびくともせず。放たれた斬撃は空を飛び、海面を走り抜けると一瞬とはいえ海を割り、障害となる物全てを破壊した。
海軍の軍艦、八隻。
海が爆ぜたその瞬間、バラバラになった船が宙を舞っていたのだ。
あまりにもあっさりと。あまりにも圧倒的に。激戦になるだろうと予想されていた敵はほんの一瞬にしていないものとなってしまった。
あり得ない光景を見た一同は言葉すら失っている。
アーロン一味、脱獄したバロックワークス元幹部が硬直する中、唯一違ったのは麦わらの一味。
強力な援軍となったドリーとブロギーの登場に歓喜の声が上がっていた。
「うおおぉ～!?　師匠オオオ～!!」

「すっげぇぇぇぇぇっ!?」
「ギャアアアッ!? バ、バケモノだぁあああっ!?」
「そりゃお前もだろ」
「ちょっと何なのよアレェェ!? あれもあんたたちの仲間なのぅ!?
一体どんな冒険してきたらあんなのが仲間になるってゆーのよう!!」
ルフィやウソップが絶叫する間、唯一彼らを知らなかったチョッパーが悲鳴を発しているが、その声に反応するのは冷静なゾロだけだった。
隣の船ではＭｒ．２が騒がしくしており、その他の面々は大口を開けて声すら出せなかったようだ。
振り抜いた武器をそのまま掲げて、二人は笑う。
「ガババババ！ 今日より巨兵海賊団、完全復活よ！」
「ゲギャギャギャギャ！ 良い船出となりそうだな、相棒！」
その巨大な船は味方だったらしい。
理解が及んでもしばらくは開いた口が塞がらず、彼らが冷静さを取り戻すのに時間がかかった。
少なくとも、麦わらの一味が規格外の海賊だという認識はされていたはずである。
「まさかの登場だったけど助かったね。しかし凄い船だ」
「つーか海の中から現れなかったか？」
「師匠ォオオオッ！」
「すっげぇぇぇぇっ！」
「あんたたちいい加減うるさいわよ！」
船上のムードは和やかになり、騒がしくもなり、落ち着かない緊張感は消え去った。
その時を見計らってキリはルフィに言う。
「これで敵は居なくなった。時間はできたよ」
「ああ。それじゃ急ごう」
帽子を押さえた彼が笑い、メリー号は進路を変えて進み出す。
目的地は遠くない。

すぐに離れることになるだろう。ほんの少しの、最後の寄り道だ。

For the future

「私は、ここに残るわ」

夜の静けさを切り裂くような一言は、強い決意を感じさせる声で伝えられた。

イガラムは息を飲み、ルフィとキリは笑顔で受け止める。

カルーが心配そうな目で見ているものの、ビビは彼の頭を優しく撫で、もう一度目の前に居る二人を見ると穏やかな笑みを見せた。

「本当のことを言うと、もっとあなたたちと一緒にいたい。もっとたくさん冒険してみたい。私の知らない、色んな世界のことを知ってみたい。そう思うの」

一度目を伏せ、言葉を区切って。目を開けて迷いのない意志を窺わせた。

「だけど一緒には行けないわ。私は、この国を――」

小さく息を吸って、内から溢れ出る感情を隠すことなくその言葉を口にする。

「愛しているから」

それは何よりの言葉。彼女を表す上でこれ以上ないほどわかりやすい。

故に止めようとは思わない。

ルフィはにっこり笑って冷静に答えた。

「そっか」

「ええ。それが私の意思……」

言いながらも顔は少し寂しそうで、彼らを見ていた視線は床に落ちる。

カルーも同じだ。これまでの冒険が楽しく、決して忘れられない日々になった。だからこそ離れ難いという想いが拭いきれない。

彼女の背を見つめるイガラムは複雑な心中だった。

ビビの決断は王女として正しいものだろう。しかし彼らとの別れが辛くないはずがない。

何が正しく、何が間違っているのか。

もはや彼自身にも指摘できるものではなくて、彼らが言う通り、ここはビビが自分で選択した道を応援するのがいいに違いない。自然とそう考えていた。
また小さく息を吐いて、ビビが顔を上げた。
二人は彼女を待っているらしく、急かすこともなければ逃げようともしない。
「私、自分がなんとかしなきゃと思ってた。私がこの国を守らなきゃって何度も思ったわ。だけどあなたたちに出会って、本当に救われたの」
胸の前で手を握って、彼女は真摯に仲間たちと向き合った。
「ありがとう。何度言っても足りないくらい、その気持ちでいっぱいなの……」
「いいよ。おれたちは好きでやっただけだ」
ルフィはからりと笑ってあっさり言った。
そんな彼の笑顔につられてビビの肩から力が抜ける。
「私が船を降りても、あなたたちの冒険は続く……」
言ってもいいのだろうかという迷いはあったはずだが、今は迷わなかった。
「こんなことを言うのは勝手かもしれないけど。もし、みんながまたこの国に来た時、いつかまた会えたら……私を仲間と呼んでくれますか？」
「当たり前だ。どこに居たってビビはずっとおれたちの仲間だろ」
そう言われた途端にほっとしたようだ。明らかにビビの表情が柔らかくなった。
身を乗り出したルフィは普段とは違って落ち着いた様子で語る。
「おれたち、この海を一周したらまたこの国に来るからよ。そしたらまた一緒に冒険しよう」
「いいのかな？　海賊王と一国の王女様が一緒に冒険なんて」
「いいに決まってるさ。おれたち仲間だもんな。な、ビビ」
「そうね。ずっとはだめでも、たまには許されるわよね？」
肩をすくめたキリが苦笑する。ちらりとイガラムの方を見ればす

ぐに彼も気付いて、同じように困った様子で苦笑した。少しは心の余裕ができたらしい。
カルーも嬉しそうな様子で羽を動かし、元気な声を室内に響かせる。
ビビは、ルフィを見つめて言った。
「約束よ。必ず、私を迎えにきて」
「わかった、約束だ。ビビもおれたちのこと忘れんなよ」
「忘れないわ。絶対に……」
静かに、そっと右手を差し出した。小指だけは何かを求めるように伸ばされる。
ルフィも右手を前に出す。
二人の小指は絡められ、再び会う約束とし、穏やかな様子で笑い合う。
いつになるかはわからない、きっと遠い約束。そのいつかを求めて彼らは言葉を交わした。
辛くなんてない。約束したからには、必ず再会することができるのだから。
彼らは仲間だ。
理由なんて作らずとも、彼らの言葉は信じられる。

＊

《――私は小さな約束をしました》
ビビ王女のスピーチが続いている。
アルバーナで行われるそれは電伝虫を使い、国中どこに居ても聞けるようになっている。当然港町であるタマリスクでも最大音量のスピーカーで流していた。
彼女は歌うように朗々と言葉を紡ぎ出す。
その声は、言葉は、海に浮かぶ船へも届いていた。
《いつ果たされるとも知れないその約束は、きっと海の中では消えてしまうのでしょう。だけど船は言いました。〝また一緒に冒険し

よう〟と》
甲板に立つ彼らは遠くても聞こえるその声に耳を傾けていた。
《その言葉は私にとって大きな光。暗闇の中を進む道標。私はもう、迷いません》
国に居る人々は今頃どんな顔をしているのか。
知る術はない。だが知らなくていいと思っている。
《私はこの国を、愛しているから》
彼女が居ればこの国は大丈夫だ。
シルクとナミは優しい微笑みを浮かべて顔を見合わせ、サンジは煙草の煙を吐き、突然ウソップが嬉しそうにチョッパーを抱え上げて肩車をすると彼は驚いていた。
「もう大丈夫そうだね」
「ほんと、あの子は強くなった」
「ビビちゃんはきっと良い王女になる。これから今以上に」
「へへっ、そりゃそうだろ。なんたっておれたちの仲間なんだからな」
「わっ……！　お、おおっ、そうだ。ビビはおれたちの仲間だもんな」
珍しく笑みを見せたゾロが腕組みをして、黙ったままだった二人に振り返った。
「どうする、船長」
「よし！　出航するぞ！　キリ、どっちだ？」
「どっちでも。好きな方に進めばいいさ」
キリに促されたルフィはいつもの調子でメリー号の船首に飛び乗った。
目一杯の笑顔を大海原に向けて、力一杯拳を振り上げる。
「野郎どもォ！　出航だァ!!」
力強い雄叫びを上げて、ゴーイングメリー号は新たな旅路へ漕ぎ出した。

幕間3
断章　七人の海賊

1

サー・クロコダイル陥落。

突然伝えられた情報は爆発的に世界中へ広まり、人々に驚きと衝撃を与えた。偉大なる航路（グランドライン）の均衡を守る三大勢力の一角、たった一人とはいえ何の前触れもなく消えてしまったのである。

その噂は連日至る場所で、様々な人物によって語られ、あらゆる憶測を生んだ。

ただし一部の人間は気付いていた。クロコダイルが起こした事件、それを阻止したのが海軍だという情報に疑問を抱き、〝大将〟クラスが動いたのならまだしも捕えた張本人の名前が明らかにされていない。そして時を同じくして懸賞金が跳ね上がった海賊の存在に裏があると察したのである。

海賊〝麦わらのルフィ〟。

イーストブルーで大きな話題を作ったばかりの彼が、何の情報もなく一億の首になったのだ。

あらゆる国の市民の多くは目先の情報に踊らされ、誰がクロコダイルを倒したのか、真実に辿り着ける者は決して多くなかった。居たとすれば麦わらの一味に会ったことがある人々くらいのものだっただろう。だが裏社会で生きる者はそうではなかった。

危険な海で名を上げ、長く息をする者ほど何が起きたかを漠然と察する。

ただ成り行きを見守る者。自ら情報を欲する者。或いは興味を示さない者。

決して行動が同じという訳ではなかったが、着実に名を上げている新たな嵐を目にして、少なからず彼らへの認識を改めようとしていた。

グランドライン。クライガナ島、シッケアール王国跡地。

度重なる戦争によって住む者が居なくなり、廃墟のような大きな城と朽ちた大地、寂しげにそびえる細い木々だけが存在する島に、たった一人だけ人間の住人が居た。
誰も住む人間が居なくなった大きな城に住みついた男が古びた椅子に座っている。
鷹の目のミホークは新聞を手にし、その前にあるテーブルには数枚の手配書が置かれていた。
「七武海を落としたか。この短期間で目覚ましい成長だ」
語る声は静かで、顔にはわずかな笑みがある。
自分の前に立ちはだかった瞬間のことを思い出す。まだ頼りなかった男たちが、顔を合わせる機会はないとはいえ自分と同じ〝七武海〟であった男を倒すとは。可能性を考慮しなかった訳ではないがまだ先の話だとさえ思っていた。
彼らは、ミホークの予想さえも裏切った急成長を遂げているようである。
「面白い。どこまで来れるか見物だな」
小さく呟いて広いテーブルに新聞を置いた時だ。
気配を感じたため、開かれたままの窓の外を見る。
少しすると外から一匹のコウモリが城内に侵入してきて、脇目も振らずミホークへ接近した。
世界政府の連絡係、伝書バット。
手紙を持ってきたらしいその存在を見てミホークの眉がわずかに動いた。

2

ドレスローザ。
町を見下ろす〝王の台地〟と呼ばれる高台に石造りの王宮がある。
その一室において、一人の男が待っていた。
この国は海賊が王となって統治している。かつての事件の後、ドンキホーテ・ドフラミンゴが王としての信認を集め、この地の支配者と

なっていた。
王はほとんど国民に姿を見せず、しかし圧倒的なカリスマ性で絶大な人気を誇っていた。
今日も彼は王宮の中で部下の到着を待っており、不遜な態度で椅子に座っている。
やがて扉が開いて誰かが入ってきた。
ドフラミンゴが顔を上げると鼻水を垂らす大男の姿を確認する。
「んね～んね～ドフィ～。調べがついたぞ。例の件だ」
「そうか。早速だが聞かせてくれ」
「べ～っへっへっへ！　せっかちだーんね～」
引きずるほど長いコートを身に着けた大男、トレーボルはゆっくり歩いて近付いてくる。しかし止まる気がなかったのか、必要以上にドフラミンゴへ近付き、顔と顔が触れそうな距離になったところでようやく足を止める。
ドフラミンゴは顔をしかめていたがトレーボルは上機嫌そうだった。
「大体お前の読み通りだ。海軍の手柄ってのは嘘なんだなー」
「寄り過ぎだ」
「寄りすぎ？　だけど……？　んね～んね～、だけど何？」
「そこがいい……座れ」
「んねー！」
穏やかに注意されてトレーボルは彼の傍を離れ、椅子へ座った。
落ち着いて話せる距離感になって改めてドフラミンゴは質問を始める。
「俺の読み通りってことは、やはりあいつらか？」
「んね～！　ズバリその通り。麦わらだ」
トレーボルが懐から手配書を数枚取り出し、それを掲げてドフラミンゴへ見せる。
「クロコダイルはこいつらがやったらしい。海軍は話題になるのを恐れたってところか。こいつら少し前にも海軍の粗を暴露してたからなー」

「フッフッフ。しばらく大人しくしてると思ったら、ワニ野郎め、そういう魂胆だったか。残念ながら失敗しちまったようだがなァ」
「べ～っへっへっへ！　考えることは一緒だな！　だがおれ達の方が上手だった！」
椅子の肘置きを叩きながらトレーボルが笑う。
その様子を見ながら口角を上げるドフラミンゴは静かに右手を上げた。すると指を動かしただけでトレーボルが持っていた数枚の手配書が宙に浮き、彼の手元へ移動する。
もう一度写真を確認し、彼らへの認識を改めようとしていたようだ。
「奴はドジったようだがまぁいい。問題はこいつらだ。３０００万のルーキーが七武海を落としたなんて話はそりゃ異常だろうよ。腰の引けた海軍が隠したがるのは当然だ」
「でもおれ達には関係のねぇ話だ。んねー。結局はクロコダイルがミスっただけの話で、おれ達を脅かすとは思えないんね～」
「ああ。そりゃあそうだ……」
言いながらドフラミンゴは不意に笑みを消す。
サングラスの下にある目が注目していたのはルフィの名に記された〝Ｄ〟の文字。
しばし真剣に考え込む様子だった彼をトレーボルの言葉が引き戻す。
「それより面白い話があったぞ」
「ん？」
「危険なのは麦わらか？　そうじゃないかもしれん。面白いのは紙使いだ」
「こいつか」
ドフラミンゴがキリの手配書を見る。
以前話題になった時に確認した。写真はその頃と同じだ。どうせ少し頭が回るだけのずる賢い海賊だろうという程度にしか思わなかったことを覚えている。
トレーボルは普段通りの笑顔で平然と語った。

「そいつ、どうやらクロコダイルの右腕だったみたいだ。んね～」
「ほう……そういうことか」
何かを察した様子でドフラミンゴがにやりと笑む。
「フッフッフ。てめぇの右腕に裏切られて負けるとは焼きが回ったな。しかしそう考えるならこの話の信憑性も増す。実力で負かしたとは思い難ぇが」
「結果は偶然にしろ運にしろ、最初から狙ってやり合ったみたいだんね～」
「数奇な運命だな。七武海の右腕がルーキーの下に転がり込んだわけだ」
「おまけにバッファローからの報告があったぞ。そいつ、ベビー5に言い寄ったらしいんねー」
「何？」
「ローを探してる時に会ったそうだ。それ以来奴にぞっこんらしい」
何も気にせず平然と言ったトレーボルに対し、その話を聞いたドフラミンゴは表情を歪めた。
これがただの海賊だったならば、妹同然に想う部下に変な虫がついたというだけの認識。ただ単に消してやればいいだけの話だ。そう慌てる状況ではない。しかし今しがた聞いた話が本当ならば事情が変わってくる。
クロコダイルの部下だった人間が、自分の部下に接触した。
これを聞き流すほどドフラミンゴは愚かではない。
「そりゃいつの話だ。ワニ野郎が討たれるより前か？」
「ん～？　ずいぶん前みたいだな。それがどうかしたか？」
ドフラミンゴがキリの手配書を見下ろす。
「ガキども、このおれに楯突く気か？　ワニ野郎の右腕ってのは嘘じゃねぇかもな。とんでもねぇバカだが計画的な行動ではありそうだ」
顔を上げた彼はトレーボルに指示を出す。
思考が高速で動いており、ただのルーキーではなさそうだという認

識が考え方を変えさせた。
「ベビー5とバッファローはしばらく向こう側に待機させろ。ちょうど取引がある。任務に就かせて管理させておけ」
「んん～？」
「こいつに興味が沸いた。機会があるならおれが直々に会ってやろうと思ってな」
そう言ってドフラミンゴは他の三枚を捨て、キリの手配書のみを見せた。
「ワニ野郎の残した片腕はとんでもねぇイカレ野郎らしい。てめぇの飼い主はまず手始めで、この海を荒らすつもりの〝危険人物〟ってとこだろう。それなら七武海として危険な海賊を仕留める必要があるよなァ？」
「べへへへへ～。悪い顔してるぞドフィ～」
「フッフッフッフ。利用価値があるならよし。ただの身の程を知らねぇバカなら消すまでだ」
部下を使ってとはいえ、自分に近付く気でいるなら普通の海賊であるとは思えない。
傘下にしてもらおうというつもりなら今頃とっくに連絡が来ているはず。そうでないということは自分たちに悟られぬよう行動したがっているに違いない。少し前ならいざ知らず今はクロコダイルを倒した実績がある。
良からぬ思想を感じて、ドフラミンゴはむしろ上機嫌だった。
「いずれ奴と潰し合うのも面白そうだと思ってたところだ。忘れ形見があるなら面倒見てやろうじゃねぇか。フッフ、しばらくは退屈せずに済むかもな」
「べっへっへ。可哀そうに。こいつら、死んだな」
トレーボルの呟きに反して、ドフラミンゴは彼を好意的に見ている。
仲間にするつもりはないが好きに暴れさせておけば混乱は生まれるだろうと考えていたのだ。
まるで新しい玩具を見つけたかのように。ドフラミンゴの顔には

笑みがあった。

3

新聞を手にして、見つめる記事はクロコダイルが捕縛されたという内容。

少し視線を降ろせば、地面に置かれている手配書が二枚。

地べたに胡坐を掻いて座っていた彼は誰にも気付かれぬよう小さく嘆息した。

七武海の一人、海峡のジンベエはルフィとアーロンの手配書を前に浮かない顔だった。

以前、イーストブルーでの彼らの記事が出た時からずっと気になっていた。かつての自身の弟分であるアーロンの悪行と、それを止めた見知らぬ海賊。まだ若くも勇敢で豪快な彼らによってアーロンの支配は終わったという。

本来ならば自分が止めなければならなかったのに。

深く心に刺さった後悔が彼の表情を暗くさせていた。

そんな彼を見て何か思ったのか、声がかけられる。

振り向けば白い髭を蓄えた大男が酒の入った樽を傾けていた。

「妙なもんだな。ワニ野郎がルーキーに負けちまうとは」

髭を濡らしながら酒を飲む彼の呟きに、ジンベエは視線を落としながらも答える。

「ええ……しばらくは英雄などと持て囃されておりましたが、まさか裏でこんな行動を取っていたとは」

「グララララ。おれァそれを聞いて安心したクチだ。あの小僧が大人しく政府に従ってるはずがあるめぇよ。まあ、流石に今回の結果は驚きだが」

「何が起こるかわからんもんですな。この世界は」

畳んだ新聞を地面に置いて、彼の方へ体を向けたジンベエは背筋を伸ばす。

いつしか表情が引き締まっていて、真面目な話を始めようとしてい

た。
「オヤジさん。わしはしばらくこの海を離れようと思うとります」
「んん？　そうか」
「礼と、謝罪をせにゃならん相手が居る。わしはこの子らに会おうと思うとるんです」
大男は笑顔で酒樽を傾けた。
「好きにすりゃあいい。おめぇも一端の海賊で、おれの部下じゃねぇんだ。引き留めやしねぇし責めることもしねぇよ」
「いえ。一応報告をと」
「相変わらず律儀なやつだ」
空になった酒樽を乱暴に置き、大きな椅子の背もたれに体重を預けながら体の力を抜く。
肘掛けに腕を置いた大男は冷静な目でジンベエを見ていた。
「一人で行くのか？」
「ええ。これはわしの問題。それに一味総出で出向いては警戒されるでしょう」
「連中はまだ前半だ。長い旅になりそうだな」
「なんの。その程度、苦難とも感じ取りません。彼らのしたことに比べれば」
「グララララ……行ってこい。おれの息子に会うことがありゃあ、その時は頼む」
ジンベエは薄く微笑んで頷き、頭を下げると静かにその場を立つ。
歩き出した彼は広場を離れようとしていた。
その途中、たった数歩進んだ時点で新たに声がかけられた。
「聞いたか？　ジンベエ」
「ん？　なんじゃ」
ジンベエが持っていこうとした手配書を指差し、男は言う。
「そいつ、エースの弟だそうだ」
「エースさんの……この男が？」
「飛び出していったきりしばらく連絡も寄こさなかったってのに、その手配書が出た途端に電伝虫で連絡があった。ずいぶん張り切っ

た様子でよ。どうやら相当嬉しかったみたいだよい」
「なるほど。エースさんの弟というなら、今回の一件も多少は合点がいく」
手配書を見てから顔を上げたジンベエは男に笑顔を向けた。
「その辺のことも話せそうじゃな。ひょっとしたらこの子とは仲良くできるかもしれん」
「だが、気をつけろよい。あのエースの弟だ。一筋縄じゃいかねぇぞ？」
「わっはっは。それもそうじゃな。気をつけよう」
礼を言ったジンベエはその場を立ち去り、ひとまず仲間に報告するため自分の船へ向かった。
その間に先程の男が大男へと近寄る。
新たな酒樽を手にしていた大男は彼の言葉にも平然としていた。
「オヤジ、いいのか？　気になってたんだろ？　あいつのこと」
「ああ……構やしねぇよ」
「エースの弟と同じ船とは。因果なものだよい。仮に本当ならの話だが」
大男は何も言わず酒樽を傾ける。
その目は遠く、ここではないかつての光景を眺めるかのようだった。

4

女ヶ島。
そこは女人だけが住むことを許された島。男子禁制であり、万が一にでも迷いこもうものなら処刑されてしまうのが常。とはいえ、そんな事態もほぼあり得ない。海で最も危険だと言われる海王類の住処、凪の帯（カームベルト）にその島はあった。
島民全てを束ねる女帝が住む城。その一室にて。
湯気に包まれる浴場には湯浴みをする三人の女たちが居た。
この国の女たちは強い者こそ美しいと考えている。故に外界の男

よりも強い女は珍しくなく、外へ出ればその実力で幾度も恐れられてきた。
そんな国の戦士たちを束ねる人間こそ、彼女たち三名である。
大きな体にオレンジ色の長髪の女、ボア・マリーゴールド。
広い湯船の縁に座り、彼女は届けられたばかりの新聞に目を向けていた。
「姉様、これ見て。七武海サー・クロコダイルが捕えられたって。国を奪おうとしたそうよ」
「男ってバカね。七武海の座を捨てて全て失うなんて」
頭部が大きい緑髪の女性、ボア・サンダーソニア。
彼女は寝そべるようにして縁へ手を置き、隣に居るマリーゴールドを見上げている。
新聞の記事にはさほど興味がないのか、気の無い声で返答していた。
「また海軍の情報操作かしら……懸賞金が跳ね上がった海賊が居るそうよ」
「くだらない。今までにもそんなこと何度もあったわ」
「だけど七武海を倒した海賊なんて居なかったでしょう？　ほら、これを見て」
マリーゴールドは傍に置いていた手配書を取る。湿気の多い場所に置いていたせいでずいぶんふやけてはいたが、顔写真を見る分には困らなかった。
ルフィの手配書を持ち出したマリーゴールドはサンダーソニアに見せる。
「聞けば以前は３０００万だったそうよ。それが急に億を越えた」
「噂のルーキーじゃない。この子がやったとでも？」
「そうだとしか思えないわ。タイミングが良過ぎるし、時折あるでしょう？　腕のあるルーキーが常識知らずのスピードで名を上げることが」
「確かにあるけど……別に脅威だとは思えないわね」
サンダーソニアの指が手配書を摘み、余裕を窺わせる笑顔でそれを

ひらひらと振る。
　これまでも名前を売った海賊は数知れず居る。しかし長く生き続けられるかどうかは別。いくら大きな事件を起こして話題を攫ったとしても、彼らはまだグランドラインに入ったばかり。本物かどうかを判断するのはこれからの活躍を見てからだ。
　そんな気の無いサンダーソニアを見てマリーゴールドは別の手配書を手に取る。
　何やら真剣な顔つきであり、本当に見せたかったのはこちらのようだ。
「クロコダイルのことは置いておくとしても、こっちが気になるの。似てると思わない？」
「何？　似てるって……あら、確かに」
「似てるのよ。〝リンブル〟に」
　マリーゴールドの真剣な声色に、背を向けていた黒髪の美女がわずかに反応した。
「ただの偶然じゃないかしら？　子供が居るなんて噂、聞いたことないし」
「だけど面影は感じるわ。髪の色だって近いはずよ」
「うーん……そうねぇ。でも……」
「ねぇ姉様、見てくれない？　似てると思うの。あのマリージョア襲撃事件の〝リンブル〟に」
　背に声を受けた長女、ボア・ハンコックは湯船の中で立ち上がった。長い黒髪に隠された背を向けたまま、わずかに振り返り、二人の妹へ言う。
「居るはずがない。悪魔は死んだ。海賊王と同じく関係者まで残らず処刑されたはず」
「そうだけど……」
「取りこぼしがあったのかも」
「どちらにせよ、男に興味はない」
　歩き出した彼女は二人の傍を通り過ぎ、湯船から上がる。
「わらわを脅かすのならば別だが、どうせこの島に現れることもな

い無関係な人間。気にするだけ無駄じゃ。お前たちも外に興味を持つのはいいが現を抜かし過ぎるな」
言い終えるとハンコックは浴場を出ていった。
残された二人は顔を見合わせ、何か気に障ることを言っただろうかと考えてしまう。
七武海が倒されたことを気にしたのか。それとも昔のことを思い出したのか。
二人は先程の会話を止め、浴場を出るため立ち上がって歩き出した。

5

グランドライン、どこかの島。
名もなき廃墟に立つ一人の男が落ちていた新聞を読んでいる。
多少薄汚れてはいたが内容は読めた。そして近くに落ちていた手配書を見て、表情は一切動かすことはなく、無感情な声で呟く。
「ドラゴン……あんたの息子だったな」
その男、バーソロミュー・くまはそう呟くと手配書を拾った。
感情を見せない目は懐かしそうに手配書の写真を見ている。映っている男、麦わらのルフィに会ったことはない。だが遠い人だとも思ってはいなかった。
いずれ会うことになるのだろうか。
そんなことを考えながらしばし思考に集中する。
彼の周囲には数多くの人間が倒れていた。人が住まなくなったとある島の古びた廃墟をアジトにしていた海賊たちである。近頃近隣の島々を困らせていたという話だが、もう全ては終わった。一人も残さずくまが武力行使で排除したのである。
突っ立っていたくまは持っていた手配書を手放し、地面へ落とす。
すでに全員を倒した。だが死んではいない。
このまま置いて帰ればまた悪さを始めるだろうとは予測できた。
故に彼は歩き出す。

まず最初に近付いたのは一番近くに倒れていた男だ。顔に見覚えがないことから手配書が出ていない無名の男なのだろう。
くまは傷ついた姿を見ても何も思わず、冷静に近付いていく。
苦しげな呻き声を出していた男は、彼の姿を見た途端に怯え始めた。その様子を目にしてもくまの表情は微塵も変わらない。
「た、助けてくれ……!? もう、海賊はやめるから……!」
「旅行するならどこへ行きたい？」
「は――？」
軽く振った手が触れた途端、倒れていた男の姿が消えた。
まるで最初からそこに存在していなかったかのように、忽然と消えたのである。
その光景を見ていて悲鳴を発する者が居た。しかし散々痛めつけられ、まるで動かない体で逃げ出すことは不可能。ゆっくり近付いてくるくまを見つめることしかできない。
次は自分かと、待つしかなかった。
くまは一人ずつに歩み寄り、攻撃する意思を持たずに手で触れていく。
「ま、待ってくれ――!?」
「助けて……！」
「命だけはっ」
ポン、と軽く触れるだけ。
それだけで人の姿が消えてしまう。
存在そのものを消されてしまったかの如く、そこには何も残らなかった。
総勢二十名を超える海賊たちがそこに居ただろう。だが気付いてみればたった一人。残っていたのは一味で唯一手配書を出されていた船長だった。
目の前で仲間が消される光景を散々見せられた後、くまが歩いて近付いてくる。
彼は何も言えずに逃げ出そうとした。
「ひっ、ひぃ……!?」

「お前だけは別だな。このまま本部へ送ってやろう」
ボロボロの体で這って逃げるものの逃げ切れるはずもなく。
ポンっと触れた瞬間、男の姿は消えてしまった。
背筋を伸ばして辺りを見回したくまは小さく呟く。
「任務完了」
呟くとどこかへ歩き去った。
その日、島には壊れた帆船だけが残り、一人の人間も存在してはいなかった。

6

霧に覆われた海域。そこに漂う巨大船〝スリラーバーク〟。
巨大な城の一室に集った数名は、現在話題になっている事件について話していた。
「麦わらぁ？」
「はい。サー・クロコダイルを倒したとかで」
「ほう……そいつに興味はねぇが、そいつの影には興味があるな。上手く使えば強大な戦力になるかもしれねぇ。まぐれだとしても七武海に勝った奴ならな」
椅子に座った妙な体型の大男、一味の船長であるモリアは不気味に笑う。
胸を張って座り、自身を主と見上げる部下の四人を見下ろしていた。
〝他力本願〟を掲げて上を目指す彼は現在、戦力強化に従事していたようだ。それを証明するかのように自分の下に集った四人へ言う。
「キシシシシ！　おいお前ら！　もっともっと強力な影を奪ってこい！　最強のゾンビ軍団を作り上げて、早くおれを海賊王にならせろ!!」
高らかに言った彼に部下たちは恭しく頭を下げる。
その中で一人、モリアが捨てた手配書を拾い、何気なく眺める者が居た。

「あの時殺し損ねたガキか……」
男は鉄仮面の下で冷徹に呟く。

7

グランドライン、とある島。
ここにも〝麦わらのルフィ〟の手配書を見ている人物が居た。
「ゼハハハハ……麦わらか。派手に暴れ回ってるようだな。前にも聞いた名だ」
「ウィーハッハァ！　船長！　ようやく狩りかァ！」
「バカ言え。話題性があるとはいえ1億じゃちと安い。せめて3億でもありゃあ力を示せるってもんなんだがなぁ」
「しかしこちら側でそれだけの額を探すのも些か面倒なのでは」
狙撃銃を抱える男の言葉に、黒い髭を蓄えた男はにやりと笑う。
「あぁ、わかってる。だが最初が肝心だ。ここは吟味が必要なんだよ」
「そういえば、一つ気になる噂があるが」
「なんだ？」
「その麦わら、なんでも〝火拳〟の弟だとか」
「何イ？　本当か、そりゃ。そういや義兄弟が居るって話ならおれも聞いたことあるな」
「確かだとは思う。トレジャーバトル開催地で、二人が一緒に居る姿を見た」
「トレジャーバトル？　あぁ、そういやそんな噂もあったな……お前もそこに居たのか」
「一応。海賊の情報収集のために」
「カーッ。もったいねぇことしたぜ。おれたちがそこに乗り込んでりゃ名のある海賊の一人や二人捕まえられただろう。なぜおれに言わねェ」
「言ったが興味を持たなかったはずだ」
「ならもっと強く言え。大損失だ」

「それもまた巡り合わせ」
やれやれと首を振る黒い髭の男はため息をついた。
「ガフッ……あぁ。そこに居た奴らは……運が良いな……」
「しかし振り出しに戻りましたね。そろそろ狙いを絞った方がいい時期なのでは」
「うーむ、さて……七武海を倒した、火拳のエースの弟か。話題性はあるが、政府と海軍がどう見てるかだな。あいつの首一つで称号を寄こすかどうか」
「では船長。一つ提案が」
シルクハットを被った細身の男がステッキを手に提案する。
「何だ？」
「ここは一つ、こちらから政府に売りこんでみるのも手かと。私が行ってきますよ」
「なるほど。上手く説得すりゃ1億の首でも十分って魂胆か」
「試してみる価値はあるかと。ひとっ飛びしてきましょうか？」
「ゼハハハハ。それもいい。ならそろそろ動くとしようか」
黒ひげの男が立ち上がった。
同時に仲間たちも肩を並べて歩き出す。
「ウィーッハッハァ！　やっと戦闘か！　待ちくたびれたぜ！」
「では船長。ここからしばらくは別行動で」
「ああ。こっちはひとまず麦わらを探すとしよう」
「出会うか否か、それも巡り合わせ。日々の行いの賜物である」
「ゴフッ……あぁ……おれたちに会うようなら、麦わらも運がない……」
男たちは船に乗り込み、新たな航路へ進む。
それは今までとは違ってはっきりとした目的のある航路であった。

断章　一億ベリーの賞金首

1

小さな衣擦れの音を立てて、カヤは静かにベッドを降りた。
カーディガンを肩にかけて窓へ近付く。
清々しい朝だった。太陽の光が部屋へ差し込み、窓を開けると爽やかな風が入ってきて、目を細めた彼女は見慣れたはずの風景に頬を緩めた。
今朝はいつもより少しだけ早く起きたらしい。そうしようと思った訳ではない、自然に目が覚めてしまったのだ。理由はわからないがいつもとは違う気がする。
しばしカヤは窓辺に立って風に触れ、朝の一時に感じ入っていた。
少しすると部屋の扉が開いて執事のメリーが入ってきた。
すでに起きていたカヤの姿に驚き、彼女が振り返ったと同時に思わず足を止める。
「おはようメリー」
「おはようございます、お嬢様。今日はお早いのですね」
「ええ。なんだか目が覚めちゃって」
風に揺れる髪を押さえながら外を見る。
今日のカヤは機嫌がいいようだ。何があったかはわからないがそう判断したメリーは、薄く微笑むと共に彼女が見ている風景に目を向けた。
かつては毎日のように彼がやってきていた場所。
庭が広いとはいえ柵も生垣もある。見える部分が限られているのに彼女の目は輝いていた。
「そういえば今朝は、何やら村の方が騒がしいようで――」
「カヤさぁ～ん!!」
メリーが話し出そうとしたところにかぶって、新たな声が庭から聞こえてきた。
敢えて残しておいた、生垣にある穴を通って侵入してきたらしい子供たちが大慌てで走ってくるのである。先頭をピーマン、両側を挟む

ようにニンジンとタマネギがやってくる。
身を乗り出したカヤは平然と彼らを受け入れた。
反射的にため息をついたメリーも、呆れはするが彼らを怒りはしない。
「みんなおはよう。どうしたの？　そんなに慌てて」
「カヤさんッ！　大変なんだ！　今日の新聞見た!?」
「いいえ、まだ」
「こらこら君たち、来る時は正面玄関から来なさいと言っておいたでしょう。わざわざあんなところを通らなくても……」
「そんなこと言ってる場合じゃないんだよ！　大変なんだ！」
「一大事！　カヤさん絶対びっくりするよ！　僕たちもまだ信じられなくて……！」
「何があったの？」
慌てる彼らを落ち着かせようと冷静に尋ねる。するとピーマンが大きく息を吸った。
「とにかくこれ見てほしいんだよ！」
手に持っていた紙を一枚渡される。
受け取ったカヤはその紙切れを確認して、驚きから目を見開いた。
一枚の写真と〝ＤＥＡＤ　ＯＲ　ＡＬＩＶＥ〟の文字。そして懸賞金が書かれている。
手配書ならば見たことはあったが問題なのはそこに映っている人物。
今まさに、いつもの庭のいつもの場所に居る姿を思い出していたその人が、以前とは違う、頭から血を流しながら何かを叫ぶ顔で映っていた。
「ウソップさん……」
「すごいんだ！　キャプテンが賞金首になったんだ！」
「村のみんなもやっと信用したんだよ！　キャプテンが本物の海賊になったって！」
「しかも２５００万ベリーだって！　やっぱり僕たちのキャプテンはすごい人なんだ……！」

彼らの言葉を聞き、カヤの反応を見たメリーが歩み寄ってきて手配書を覗き込む。
そこでようやくウソップが映っているのだと知り、彼も驚きを隠せなかった。
「そんな、まさか……ウソップ君が賞金首に」
「すごいだろ!?　おれたちまだ知らない人たちに教えに行かなきゃ！」
「隣町にも行こう！　これがおれたちのキャプテンだって！」
「きっとみんなびっくりするよ！　どうせ嘘だって信用しなかったんだから！」
「君たち、これは喜んでいいことなんかじゃないんですよ。賞金首になったということは、これからウソップ君は色んな人間に命を狙われることに――」
言いかけたメリーの目を見て、三人の子供たちは希望に満ちた顔で答えた。
「そんなの全然へっちゃらさ！　キャプテンが負けるわけないだろ！」
「そうさ！　キャプテンは嘘を現実にする男なんだ！」
「早くみんなにも教えてやらないと！　こんなすごいこと黙ってられない！」
興奮した様子の三人はまた駆け出し、飛び込むように生垣の穴から外へ出ていく。
咄嗟に手を伸ばしたメリーだったが今の彼らを止めることはできなかった。
「あっ、君たち！　そっちじゃなくて正面から……やれやれ」
手を降ろしたメリーはカヤの横顔を見る。
彼女はじっと手配書を見ていて、何かを思案しているらしく、ぴくりとも動かない。
苦笑したメリーは窓の外へ目を向け、かつて彼が居た場所を見ながら呟く。
「何はともあれ、元気そうでよかった。こんな形でも彼の無事を知

れてよかったです」
「ええ……だけど危険なんでしょう」
「なぁに、心配ありません。あの子たちの言う通り、きっと彼なら大丈夫でしょう」
顔を上げたカヤも外を見る。
その顔には微塵の心配もない。晴れた笑顔が輝くように存在していた。
「勉強、頑張らなきゃ。ウソップさん怪我してるもの」
「そうですね」
「次に会った時に私が全部治してあげられるように」
決意は優しげな微笑みと共に告げられた。
微笑むメリーはただ一人その決意を耳にして、彼女ならきっとできると頷く。
カヤは大事そうにその手配書を持ち、改めて彼の無事に安堵して写真を眺める。

2

海辺に突っ立っていた男、ジョニーは、今しがたニュースクーから受け取った新聞を流し読みしてぺらぺらめくっていた。その中に手配書を見つけて、興味本位で何枚かを確認してみたところ、ある地点で完全に硬直する。
自分の目が間違っているのでは。じっくり確認すること数分。
なぜかわなわなと震え出した彼は大慌てで走り出し、急いでココヤシ村へと戻っていった。
「相棒ォ～!!　どこだ相棒ォ～～!!」
大声を発しながら走ってくるジョニーに村民は怪訝な目を向けたが、敢えて止められはせず。
探していた人物であるヨサクはすぐに見つかった。
ココヤシ村で漁師になり、生計を立てていた二人はすっかりその村の仲間であり、今日も仕事へ出るべく準備をしていたところだったら

しい。
ヨサクはうるさいとでも言いたげな目でジョニーを見ていた。
目の前に止まった彼は新聞を投げ捨てんばかりの勢いで数枚の手配書を差し出す。
「どうしたジョニー。朝っぱらからうるせぇなお前は」
「これを見ろ！　あの人が、ついにやったんだ……！」
「あぁ？　何をわけのわからねぇことを――」
うざったそうな顔で手配書を見たヨサクはその瞬間に驚愕した。
「うおおっ!?　あっ、アニキィィ～!?」
「６０００万だぞ！　６０００万！　一体何やったらいきなりこんな額が出るんだ!?」
「しかもこっちはルフィのアニキたち！　い、１億ってあんた!?」
「とんでもねぇ！　紙一重でとんでもねぇ人たちだ！」
騒ぐ二人につられるようにして、今朝の新聞を読み始めた村民は何に対してそれほど騒いでいるのかを理解しつつあったようだ。
かつてこの村を救った英雄が、手配書の額を大きく上げているのである。
ゾロとウソップに関しては今回が初手配。騒ぐのは無理からぬことであると言える。
二人の騒ぎに乗じて村民たちも笑顔で和気あいあいと話し始めていた。
いつもより声が大きいヨサクとジョニーの下へ、呆れた顔のノジコが歩み寄る。
「何騒いでんの、あんたたち」
「ノジコのアネキ！　これ見てくださいよ！」
「ゾロのアニキが賞金首に！」
「知ってるわよ。さっき見たから。それにしても、元気でやってるみたいね」
「いやいや元気でやってるとか!?」
「そういう問題じゃなくてですね！　いやそういう問題もありますが！　それ以上にこう、あの人たちは何かでかいことをやったんだっ

ていう証明がここに――！」
「別に今更驚きやしないわよ。この村に居たんだから当然ね」
くすりと笑うノジコは平然と語る。
そもそも、アーロンに勝つこと自体が彼女たちにとって奇跡に等しい行為だった。その経験がある後で「彼らは凄い」と言われたところで、何を当然なことを、としか思わない。
惜しいのは妹の写真が確認できないことか。
きっと楽しくやっているのだろうと考えながら、ノジコはヨサクの手から手配書を取る。
「あいつらも大物になっちゃって。１億ベリーだってさ」
「流石ルフィのアニキ！　おれァあの人ならやれると思ってた！」
「いやいや、おれはこれでも足りないくらいだと思ってる。あの人はもっと上に行くんだ」
三人が道端に立って話しているとまた新たな声が割り込んでくる。
「けしからん！」
怒っている様子で、ぴしゃりと言い切ったのはゲンゾウであった。
三人の下へ歩いてくる彼に目を向けて、ノジコは別段驚いた様子もなく名前を呼ぶ。
「あら、ゲンさん」
「懸賞金が上がっただの、手配書が出ただの、そんなことで喜んでどうする。手配書が出た時点で世界政府に狙われているということなんだぞ」
「それはそうっすけど、こういうのは男のロマンが……」
「あの小僧が狙われれば狙われるほど！　ナミに危険が及ぶんだぞ！」
「ああ、そういうことっすか」
やけに凄んでくるので何かと思えば、ただナミが心配だっただけらしい。
ヨサクとジョニーはいつものことだと当たり前のように受け流し、最初から予想できていたらしいノジコは微笑んだだけで多くを言わなかった。

「あぁ心配だっ。ナミは無事なんだろうか？　あの子のことだ、賞金稼ぎや海軍だけでなく求婚者が後を絶たない可能性がある……！」
「大丈夫よゲンさん。約束したんでしょ？　ちゃんとこいつらが守ってるから」
「親バカだ」
「ああ。ドがつく親バカだな」
取り乱すゲンゾウを見て微笑み、ノジコはルフィの手配書を見下ろした。
彼は笑顔で映っている。約束をしたとゲンゾウから聞いたのだ。きっと彼と同じ船に乗ってナミも心底楽しそうに笑っているに違いない。
彼女はゲンゾウとは正反対に何一つ心配していなかった。
「楽しくやれよ、妹。どうせこいつが守ってくれるんだから」
「ええい、だめだ！　やはり私も海へ出るぞ！」
「無理なこと言うのはやめときましょって。どうせ追いつけない」
「親バカもここまで来ると災害だな、こりゃ」
ヨサクとジョニーが止めに入るもゲンゾウは今日も娘を心配して騒がしい。今となってはそう珍しくもない光景になってしまって村民も呑気に笑っていた。
ノジコはそんな彼らを見て苦笑する。
流石にゲンゾウの親バカもどうにかした方がいいかもしれない。そんなことを考えていた。

3

世界のほぼ中心に位置すると語られる島、マリンフォード。
巨大な和風の建造物こそ海軍本部。世界の秩序はこの島を基点に守られていると言っていい。
その建物の一室において、センゴクは頭を抱えていたようだ。
度重なる問題が彼を悩ませていて、特に今回はそれが長く苦楽を共にした親友の孫がもたらしたというのだから心の整理がし辛い。

同じ部屋でソファに座り、呑気に煎餅を食べているガープは対照的に気楽な様子だった。
「七武海の敗北に加え、クロコダイルが秘密裏に進めていた悪事が公になり、世間は今政府や海軍へ向ける目を変えつつある。信用に関わるぞ、これは」
「まぁー今回は仕方ないじゃろ。わしの孫がどうこうというより、ルフィが止めねばアラバスタは大惨事になっとった。こりゃわしを責められんぞセンゴク」
「それでもお前の孫が大事をやらかした事実に変わりはない。まったく頭が痛い……あの若さで七武海を討ち、おまけに取り逃がすとは」
センゴクがため息をついた直後、ガープがかじった煎餅がパリッと音を立てた。
「ヒナの報告によれば、奴らあの若さで傘下を従えているようだ。以前から報告のあったアーロン一味に加え、脱獄したバロックワークス幹部、おまけに巨人族が加勢したらしい。一体どこで見つけてくるんだ……奴らが居るのは前半の前半だぞ」
「ルフィがそんなことできるはずがない。おそらく紙使いの仕業じゃろうな。思えばわしの手から逃げた時もあいつがあれこれ指示しておった」
「胸を張って言うことかっ。独断とはいえその時に捕えておけば、ここまで厄介な海賊になることはなかったかもしれん」
「ぶわっはっは！　かもしれんなど口にする男じゃったか、センゴク？　起きてしまったことはもうどうしようもないじゃろう」
「お前の孫なんだぞガープ！　笑ってる場合か！」
荒く息を吐き出したセンゴクは椅子に座り直す。
問題は多い。おまけに気になるのは彼らの将来性だ。
短期間にこれほどの事件を起こす一味が、この後で大人しくしているとは思えない。おそらくこれからも様々な問題を起こすに違いない。
厄介なのはガープも言った通り、紙使いだ。おそらくガープの孫な

らば細かいことを考えることなど苦手なはず。彼と長い付き合いになるセンゴクは彼についてよく知っている。それだけにクロコダイルを破ったというルフィも気になるが、現時点ではそれよりもキリのことだ。

以前から彼に対して疑念を持っていたセンゴクは思案する。

自分の考えが間違っていればいい、と思うことなどそう多くはない。

クロコダイルを倒した一味の話になったからだろう。当然彼のことは避けられない。

悩むセンゴクはガープへ尋ねてみた。

色々と問題は起こすが、ずいぶん昔から信頼している。聞くならば彼しか居ない。

「紙使いか……お前は一度会ってるんだろう。どう思う?」

「そうじゃなぁ……あの時はルフィを捕まえることしか考えとらんかった。じゃが、思い出してみれば確かに重なる部分がないこともない」

「リンブルは味方よりも敵の方が多かった。だが奴にも居たはずだ。心を許せる人間が」

「子供を残していたと? まさかとは思うが、誰もそんなことは考えとらん。リンブルに関係した者はロジャーの時以上に執拗に探し出して処刑された。もうこの世界にリンブルの息がかかった人間は誰一人残っておらんと認識されてるくらいじゃ」

「だが肝心のリンブルは見つかっていない」

煎餅を食べる手を止め、ガープは怪訝な顔をした。

センゴクの真剣な顔を見ると今や笑い飛ばす余裕もない。

「まさか生きとるとでも? リンブルに関係する人間の大粛清があった。あの娘が黙ってるはずがないじゃろう。生きてりゃ必ずどこかで騒ぎを起こす」

「心境に変化があったとしたらどうだ。例えば、奴が子を産んだとか」

ガープは言葉に詰まった。すかさずセンゴクが続ける。

「女は自分の子を産めば少なからず変わる……あくまでも可能性の話だが。誰にも知られず子孫を残していたとすれば、あの容姿に説明がつく」
「ふーっ、やれやれ。わしには難しいことはわからん」
「ガープ、芽を潰すなら今の内だぞ。もしおれたちの推測が当たっているならこれまでの事件なんて可愛いものだ。今後奴がとんでもないことをしでかす可能性は十分ある。なんせ奴を連れているのがお前の孫だからだ。すでにクロコダイルを討ち取ったんだぞ。このまま見逃しておけばすぐにでも簡単には手を出せなくなる」
「そんなに気になるなら監査役の譲ちゃんにでも聞け。死んだジジイは生涯リンブルを追い続けとった。話を聞いとりゃ詳しいじゃろう」
「ウェンディか……あれも自由気ままな奴だ。情報は寄こさんし、リンブルについてはほとんど何も知らんとまで言う」
再びセンゴクは頭を抱えて深く嘆息する。
その際にガープは再び煎餅を食べ始め、パリっと快音を鳴らした。
「悩みの種はそこら中にある……とにかくガープ。お前にはポートガスの前例もある。引き返せなくなるのが嫌なら、孫のことは自分でケリをつけろ。いいな?」
「なんじゃ。海兵にしていいのか」
「今更そんなことができるか。だが、奇しくも席は空いた。七武海として迎え入れるならまた話は変わってくるが……」
言いながらセンゴクは眉間に皺を寄せていた。
このガープの孫が、祖父の言い付けに背いて海兵ではなく海賊になった。そんな人間が果たして与えられた地位に満足して大人しくしているだろうか。
センゴクは吐き出しそうになったため息を呑み込み、指で眉間を揉みながら言う。
「物は試しだ。政府にはおれから掛け合ってやる。とにかく行ってこい」
「よし、孫の顔を見に行くか。まぁ心配するな。今回は上手くやる」

「期待はしていない……最悪の場合、お前の孫であっても始末しなきゃならんのだ。奴はすでに海賊として名を上げた。そのことを忘れるなよ」
「わかっとる。わしが意地にかけてルフィを海兵にしてやろう」
「わかっとらんだろうが！　待て！　戻ってこいガープ！」
「また忙しくなりそうじゃなぁ」
煎餅をかじりながら笑顔でガープが出ていった後、センゴクは胃の辺りを押さえた。
元帥になって長くなるが心労は多い。特にガープが上機嫌な時に多かった。
ここ最近は大人しくしていたと思えばこれだ。
また何か問題が起きるのではないかと考えるセンゴクは、やれやれと頭を振り、やけになった様子で机の引き出しから取り出した煎餅を食べ始める。

4

「あはははははっ！」
「いい加減笑うのをやめてくれる？　不快よ。ヒナ不快」
いつもとは違ってスーツ姿ではなく、ストライプ柄のワイシャツと借り物のズボンを着て。
明らかに不機嫌そうな顔を見せるヒナは目の前に座ったウェンディを睨んでいた。
船が大破してしまったことにより、アラバスタから動けなくなった部隊を迎えに来たのがまさか彼女の部隊だったとは。時間に余裕があったのか、それとも失態を今のように笑いに来たのか。おそらく後者だとは思うがヒナは心底苛立っていそうだった。
ウェンディが訓練兵だった頃からの知り合いなのだが、彼女だけはどうも苦手だ。昔から本心を隠しているかのような話し方をして掴みどころがない。
久しぶりに会ってみていきなりの大笑いである。

ヒナはつまらなそうな顔で頬杖をつき、笑うのをやめたウェンディがにこにこして喋り出す。
「ふふふ、ごめんなさい。堅物なあなたが大失敗したって聞いて、それがもう可笑しくって」
「今すぐあなたを拘束(ロック)したい気分なんだけど、いいかしら？」
「だめよ。私は真面目な海兵なんだもの。ロックするのは海賊だけにしておいて」
「不満よ。ヒナ不満」
嘆息する彼女は憮然としていて、今すぐに話すのをやめてしまいたいと思っているだろう。
そうと知りながらウェンディは上機嫌な笑顔で問いかける。
「コテンパンにやられたんですってね。相手は当然彼ら？」
「知ってて聞くのは趣味が悪いわよ」
「スモーカー大佐の忠告を聞いてればよかったのに。手を出すなって言われたんでしょ？」
「そう、もう裏も取ってるわけ……それは私を笑うためかしら？」
「ふふ、いいえ。単純な興味で。もちろん笑いたい気持ちでいっぱいだけど失礼だもの。そんな理由でわざわざ連絡を取ったりしないわ」
「そうかしら……あなたならしそうだけど」
楽しげなウェンディの相手が心底嫌で、ヒナはそっと視線を外す。
こういう時の彼女は非常に厄介だ。経験はそう多くないが今はっきりと思い出した。
一方でウェンディの語り口調は変わらずに言葉を吐き出した。
「まぁあなたにも同情するけどね。トレジャーバトルとかいう大会に集まった海賊の捕縛、その直後に噂のルーキーと追いかけっこでしょ？　おまけに戦力が増えてたとか」
「ええ。予想外にね」
「魚人族にバロックワークス、それに巨人族も居たとか。この短期間で大所帯ね。船長がとんでもないカリスマだったのかしら？」
「ねぇ、あなたどうしてそんなに楽しそうなの？　彼らは海賊、敵な

のよ」
叱る口調でヒナが言えばウェンディは笑顔で返す。
「相手が誰でも心が躍る時は立場なんて関係ないものよ。それに私の仕事柄、別に海軍が味方だなんて思ったことはないわ。むしろ普段は海賊よりも敵っぽいんだから」
「ハァ……あなたに言ったのがバカだった」
「そうね。今のはあなたがバカだった」
「殺意が沸きそうよ。憤慨ね。ヒナ憤慨」
深いため息と共にヒナは俯いてしまった。もう話す気力もないらしい。
彼女にとってここまでの失態は珍しい。慌ただしかったとはいえ取り逃がした海賊は多く、麦わらの一味に関しては無傷で逃がしてしまい、しかも八隻の軍艦は全壊。壊した相手をはっきりと確認できた訳ではなくて、巨大な船とおそらく巨人族だろう人影を二つ見ただけ。名前どころか顔すら確認できていない。
勇んで出て行って生み出したのは自軍の被害だけ。彼女は今、かつてないほど落ち込んでいた。
だからこそウェンディは珍しい姿を見れて嬉しくて仕方ないのだ。
「まぁまぁそう怒らないで。相手が相手だもの。仕方ないのよ」
「その相手が問題でしょう。グランドラインに入ったばかりのルーキーよ」
「だけどただのルーキーじゃない。３０００万ベリーの賞金首が次から次に傘下を作れる？　彼らを普通の海賊として見てはいけないのよ」
「あなた……ずいぶん楽しそうね」
顔を上げたヒナに指摘され、ウェンディは隠しもせずに笑みを深めた。
「ええ。だって楽しいもの。ヒナ大佐のこんなに弱った姿を見れて」
「不快よ。ヒナ不快」
「ふふ。しばらく休んでてちょうだい。本部に戻るまで優雅な旅を

約束するわ」
席を立ったウェンディはヒナを残して部屋を出ていく。軽い足取りは彼女の上機嫌さをこれでもかと表していて、ヒナは恨めしそうにその背を見送った。
廊下へ出るとすぐに副官が歩み寄る。
ウェンディの後ろを歩いて共に甲板へと向かった。
「裏は取れました。彼がバロックワークス構成員だったという話、本当のようです」
「そう」
「これでようやく納得できそうです。何度捕まっても逃げ出せたのは七武海仕込みの頭脳があるからということですか」
「それだけじゃない気もするけど、その経験は大きいでしょうね」
甲板に出るとすぐに日の光を浴びて、潮風が肌を撫でる。
風に遊ばれた髪を手で押さえ、ウェンディは大海原に目を向けると微笑んだ。
「一波乱も二波乱もありそうね」
「ひょっとして喜んでいますか？」
「まさか。私は海兵だもの。世の平和を願ってるに決まってるじゃない」
そう言って微笑むウェンディに、副官はため息を禁じ得なかった。

5

海軍本部の建物内を荒々しい歩調で歩く女が居た。
端整な顔立ちはいつにも増して厳しい表情を浮かべており、唇はきゅっと結び、眉間に皺を寄せて鋭い眼光で前を見据えている。
そうして辿り着いたのは一つの執務室だった。
扉をノックするが返事はなく。それが当然なのでまるで動じない。
彼女は一声かけると躊躇わずに扉を開けた。
「失礼します」
足を踏み入れるとすぐに目つきが鋭くなった。

ため息をつきながら荒々しく足音を立てる。
それでも居眠りしている男は起きず、椅子に座ったまま呑気に寝息を立てているため、机の前に立った彼女は怒りを隠さずに口を開いた。
「クザン大将。また、居眠りですか」
声に反応して大きく体が震えた長身の男は、動じていない素振りを見せるためか、そっと静かに腕組みをした。
椅子に座って背筋を伸ばしたままだったものの、アイマスクをしている。
普段の行動も相まって言い逃れできる状況ではないとわかっているはずだ。
呆れた女はわざとらしく嘆息する。
「いや違うんだよ。今ちょっと見聞色の覇気の修業をね」
「今更必要がありますか。今のあなたに」
「んん、時には必要だろう。初心を忘れないために」
「いいからそれを外して下さい」
言い訳を許さずにぴしゃりと言われ、クザンはアイマスクを取った。
見えたのは怒った顔の赤毛の女だ。
こうして叱られるのは今に始まったことではない。ずいぶん前に彼女が部下になって以来、常にあったことだがいまだに慣れないらしく、クザンは困った顔で頬を掻く。
アイマスクを机の上に置き、色々と言葉を選んでいた様子だ。
「まったく。何度言っても直らないんですね。あなたのそのサボり癖は」
「あーあれだ。おれは〝ダラけきった正義〟を掲げてるもんでね。そんなに事を急ぎ過ぎてもいい結果は得られるもんじゃない。だから力を抜いて――」
「まだ資料に目を通して頂いていないようですが」
「あーうん、あれだ。色々忙しくてね。これからやろうと……」
「大将。あなたが〝ダラけきった正義〟をおやめにならないなら私

は〝ダラけさせない正義〟を掲げようかと思います。ではまず頼んでおいた資料の整理を。一目見た限りではサインもなければ判も押して頂いていないようなので」
にっこり笑って言われて、それが妙に恐ろしい笑顔だったため、クザンはため息をつきながら渋々手を動かし始めた。
どうも彼女は真面目過ぎる、と彼は思う。
彼女がいわゆる側近となって以来、確実にクザンは仕事をするようになっており、海軍上層部はそれを狙って彼女を寄こしたのだが、クザン本人はいまだに困っているようだ。
すぐ目の前に立たれて作業を見守られながら、やらなければならない状況で仕事を始める。
渋々とはいえ仕事を始めたクザンを彼女は微動だにせず監視していた。
ついさっきまで昼寝をしていた。まだ眠気も消えずにあくびをしてしまう。
事情や彼の性格を知っているからか、それを指摘することはなかったが、黙ったままでも居心地が悪いと思ったのだろう、彼女が話し出す。
「そういえば大将。お聞きになりましたか」
「んん？　何を」
「つい先日非合法で行われたトレジャーバトル大会とやらに〝火拳〟が現れたそうです」
「あーまた火拳の話か。まだ諦めてなかったの？」
「当然です。奴は私が捕えると決めましたので」
「イスカ大佐。君も真面目だねぇ。火拳は今や白ひげの部下。迂闊に手を出せば海の皇帝との戦争になるぞ」
「わかっています。悔しいですが、海賊が居るからこそ守られる平和もあると言うんでしょう。しかし火拳についてだけは目をつぶれません」
迷いのない顔でイスカはそう告げて、クザンはやれやれと首を振った。

「君も堅物だねぇ。おれのところに異動した理由がわかるよ」
「大将」
「わかったわかった。口より手を動かせってんでしょ。はいはい……」
クザンが再び紙切れに向き合うとイスカは思案する。
力を抜けとはよく言われるがこればっかりは妥協することができない。〝火拳のエース〟は自分が捕えると決めた唯一の海賊だ。
そのため、彼に関する情報ならどんな小さな物でも掻き集めた。
「そういえばその火拳についてですが、気になる噂がありまして」
「あーはいはい」
「革命軍のサボや、例の麦わらのルフィと義兄弟だという話が」
それを聞いてクザンが手を止めた。
やけに真剣な顔でイスカを見る。
「サボっていやぁ革命軍の幹部だとかいう……それに噂のルーキー麦わらか」
「ええ。そのトレジャーバトル大会で本人たちが話していたと」
「麦わらといやぁ、つい先日クロコダイルを倒した張本人だったな……」
完全に手を止めてクザンは考え始める。
普段やる気のない彼が滅多に見せることがない真剣な顔。思わずイスカも不思議そうにした。
やがて彼はイスカを見て、いつになく真剣に頼みごとをする。
「イスカちゃん。ちょっと頼まれてほしいんだが」
「何か気になることでもあるんですか？」
「ああ。ちょうどその麦わらのことだ」
机に肘を置いた彼はある一つの可能性を考慮していた。
「アラバスタに居たってことは、そいつの船に乗ってるかもしれない……」

金色の獅子編
新たな仲間

穏やかな一帯なのか、海は驚くほどの穏やかさを湛えていた。
波はほとんどないような静かな水面。遠くで鳥が海を渡っており、時折海中から魚が顔を出す。
広大な大海原を五隻の船が進んでいる。
形状、サイズは様々だが、掲げる旗はどれも同じ。麦わら帽子を被った髑髏。
その中で最も大きな帆船にルフィたちは居た。
「うっひょ～！　でっけぇ船だなぁ～！」
「流石は師匠たち！　やっぱりスケールのでかい男だぜ！」
「世界には、こんなに大きい船もあるんだな……！」
「ちょっとちょっとォ！　ジョーダンじゃな～いわよう！」
規格外の巨大さを誇る巨人族のための船。
甲板に居るのは主である巨人族の二人。ドリーとブロギーが胡坐を掻いて座っていた。そして彼らが迎え入れた小さな人間たちと珍妙な動物が一匹居る。
ルフィ、ウソップ、チョッパー、Ｍｒ．２はあまりにも広い甲板を無邪気に駆け回っていた。
なにせ彼らの船とは違い過ぎる。これが本当に船なのかと驚きは絶えなかった。
「あんたたち、いつの間にこんな連中仲間にしてたのよう！　こんな奴らが相手ならあちしたちに勝ち目なんてなかったじゃなーい！」
「そりゃそうさ。なんたって師匠たちはエルバフの戦士なんだからな」
「まぁー結局間に合わなかったんだけどな」
「そういやそうだ!?　それでも勝てなかったんだから結局一緒だったわねぇ！」
やけに楽しげな様子でＭｒ．２は豪快に笑う。

奇妙な格好をした彼にドリーとブロギーは不思議そうにしていた。
「お前たち少し見ない間に変わった奴を見つけたな」
「おもしれぇだろ？　ボンちゃんだ」
「よろしくねぃ！　あんたたちも十分変わってるわよう！」
「まさかこれほどの大所帯だったとは。お前たちを見くびっていたかもしれん」
素直に驚いているらしいドリーとブロギーは彼らへの認識を改めていたらしい。
まさか傘下の海賊を持つほどの大物であるとは思わなかったのだろう。
彼らを大物と呼ぶにはまだ規模は小さく、賞金額が際立って高い訳でもない。だが度重なる事件への関与で話題性と注目度はあった。ただの無謀な若者たちという認識は今の彼らには当てはまらないと考えたのである。
ウソップは巨大な船を見やり、巨大な二人を見上げる。
憧れている男たちが駆けつけたことで彼が最も興奮していたようだ。
「しっかし師匠たち。こりゃ凄い船だな。こんな大きい船どうやって作ったんだ？」
「海賊島を訪れてな。昔の友人の世話になった」
「なんでも腕の良い船大工が知り合いだったらしくてな。短期間で作ったのに良い船だ」
「へぇ～、船大工かぁ……」
何かを思案したらしいウソップは笑顔でルフィを見る。
「なぁルフィ。おれたちもそろそろ船大工を仲間にした方がいいんじゃねぇか？　メリーが傷ついたらすぐ直してやらなきゃだめだろ」
「んん、そうだな。でもウソップ。その前に大事なことがあるだろ」
「なんだ？」
ルフィは真剣な顔で言う。
「その前に音楽家を仲間にしないとだめだ」
「お前なぁ、たまにそんなこと言い出すけど、音楽家は正直後回しで

もいいと思うぞ？」
「だめだ。海賊は歌うんだぞ。音楽家は居ないとだめなんだ」
「歌ならおれたちだけでも歌えるじゃねぇか。まぁ楽器できる奴は居ないけどよ」
「歌うのは楽しいからおれたちだけでもいいけど、音楽家が居たらもっと楽しくなるだろうが」
「お前にしては意外と細けぇこだわりだな……」
呆れたウソップはひとまず彼の主張に負けておくことに決めた。
真剣な態度のルフィから目を外した一瞬、自分の傍に立つチョッパーを見下ろす。黙り込んでいた彼は呆然とドリーとブロギーを見ていたようだ。
「どうしたチョッパー？」
「巨人って本当に居たんだな……おれ、見たの初めてだ」
「ああそうか。どうだ？　でっけぇだろ」
「うん……でっけぇ……！」
腕組みをしたウソップは嬉しそうに頬を緩ませた。
「おれもいつか、師匠たちみたいなでっけぇ男になりたいと思ってんだ」
「巨人にか？」
「違うっ！　誇りの話だ！」
巨大な帆船の上で騒ぐ彼らの声は、すぐ傍というより真下と言っても良い光景で、少しだけ離れて並走するメリー号にも聞こえていた。さらにメリー号の近くにはアーロン一味の船と元バロックワークス幹部が乗り込むスワンを船首にした船が居た。
メリー号の甲板でナミはため息をつく。
その隣でシルクは楽しげに微笑んでいたが、どうやら彼女だけ機嫌が良くないらしい。
「なんていうか、改めて考えると信じられない状況よね……」
「うん。すごく大きいね」
「大きいのもそうだし、気付けばあちこちに部下が居るじゃない。グランドラインに入る前はまさかこんなことになるとは思わなかっ

たわ」
思えば、グランドラインに入ってすぐ、バロックワークスとの確執に巻き込まれた。
ただ一人事情を知っていたキリは事前に覚悟を決めていたそうだが、訳もわからない内に戦いを強制されて、その頃の彼と言えばどこかピリピリしていたようにも思い、アラバスタでの戦いが終わるまではそんな状態が続いていた。
それが今ではどうだ。
視線の先を変える。
激戦を終えた副船長は居眠りするゾロの腹に足を置き、欄干に背を預けてだらけていた。
今になって思い返してみると彼が仲間の誰かにそうして絡んでいるのは珍しくない。
ルフィと一緒に遊んでいたり、ウソップと会議をしていたり、ゾロをからかい、サンジの調理を手伝うこともあって、シルクとは生活に関係することで話し合いを行っていたりして、ナミとは航路について話し合うことも多かった。
グランドラインに入って以降はそれがあまり見られなくなったのだ。
ビビやカルー、チョッパーとそうした姿を見た覚えがないのはやはり気苦労があったからなのかもしれない。しかしそれも今や彼の態度からは抜け落ちていた。
そこに居るのは普段通りと称すべきだらけた男の姿。
ナミは苦笑し、彼女の視線に気付いたシルクも微笑む。
「本当、考えてみるとおかしなことだらけ。全部あいつのせいなんだから」
「そんなことないよ。ルフィの行動力も大概なんだし」
「それでも、よ。もうこれ以上傘下は増えないんでしょうね？」
「どうかな。ねぇキリ、どう思う？」
「いやぁまだまだ」
目を閉じて柔和な笑みを浮かべ、キリは彼女らを見ずに返答する。

キッチンの前に立っている彼女たちからは見下ろす位置に居るのにどこか不遜な態度に見えた。
閉じた目を開けることもなく、彼が吐き出す声は楽しげなものだった。
「これからボクらはグランドラインの後半へ向かうんだ。戦う相手は七武海、海軍本部、そして四皇。この程度じゃまだ戦力にだってならないよ」
「せめて起きて言いなさいよ」
「それじゃあまだ傘下を作るの？」
「チャンスがあればね。誰でもいいってわけじゃないけど、どうせこのまま進んでも潰されるのがオチだ。生き残るためには必要なことだよ」
「結構すごいと思うんだけどな。巨人に魚人、それにあの人たちは能力者集団だし」
言いながらシルクはＭｒ．２の快速スワンダ号を眺める。
つい先日死闘を演じたばかりの相手と一緒に航海していることに違和感を覚えるも、すぐに慣れてしまった。なにせこちらにはキリが居る。選んだ仲間だけを欲しがるルフィと違い、何から何まで欲しがる彼が居ればこの程度は当然だろう。そんなことを言い出せば、ナミは自身の親の仇を連れて航海しているのだ。
以前からそうだったが、彼の上昇志向は自由を愛するルフィを凌駕している。むしろ対極に位置していると言っていいだろう。この二人の仲がいいのが不思議だった。
だがそれが心地いい。色々問題があってもこうして旅を続けているが故に再び思う。
シルクはもう一度キリへ問いかけた。
「ねぇ、次はどうするの？」
「しばらくはのんびりしたいかなぁ。流石に今回は大変だったからね」
「できるわけないでしょ。うちの船長はあいつなんだから」
ナミは巨人の船を見上げて呟く。

腕を伸ばして跳び回るルフィが嬉しそうな大声を発しており、羨むウソップとチョッパーの抗議もはっきり聞きとれていた。
あいつが船長でのんびりした航海ができるはずがない。
またすぐに忙しくなると彼女は観念していた。
彼女の意見にはシルクも同意する。船長の懸賞金が億に達したというなら尚更。
賽は投げられた。彼らは七武海の一人を破ったのだ。
扉が開いてキッチンからサンジが現れる。両手には今日のおやつであろうスイーツを乗せた皿を持っていて、いつも通り真っ先に女性陣へ目を向けた。
ちょうど立っていた位置の関係上、最初に視界へ飛び込んできたのがナミとシルク。
嬉しそうに頬を緩ませる彼は間抜けな顔で声を大きくした。
「んナミすわぁ～ん！　シルクちゅわ～ん！　今日のおやつできたよ～！」
「え～っ！　おやつ～！」
「おい、割り込んでくんじゃねぇよ！　おれは可愛いレディに言ってんだ！」
遊んでいたルフィが誰よりも早く空から降ってきて甲板に着地した。サンジは乱入するような声の割り込みに抗議するが彼の笑顔は崩せない。
ナミとシルクは笑顔で礼を言った。
色とりどりの小さなケーキが数種類。小皿に乗せて手渡すとサンジは素材がもったいないと感じるほどだらしない笑顔を見せる。
「ありがとうサンジくん」
「ありがとう。今日もおいしそうだね」
「いえいえ～それほどでも～！　二人のためならこれくらいなんでもないさ～！」
「サンジィ！　おれも！」
「おめーらはキッチンだ！　勝手に取って食え！」
「いやっほ～！」

待ち切れない様子でルフィが船室へ飛び込んだ。
呆れたサンジは嘆息し、彼を前にした二人はどっちもどっちだろうとくすくす笑う。
座ったままでその場を動く気がなかったキリが唐突に言った。
「サンジ、ボクも」
「てめぇで取れ」
「実は足が折れてるんだ」
「マリモ蹴んのやめてから言え」
起こしてやろうとしているのか、キリは眠りこけるゾロの脇腹を足先で小突き、最初は軽く突いていたのだがその内重い一撃を刺す。
詰まった声を出したゾロは機嫌が悪そうな顔を上げた。
すぐ傍に居て、キリの片足が腹の上にあったことで、彼は瞬時に理解する。
「斬られてぇのかてめぇは……」
「起きてすぐそう言えるって地味に凄いよね。成長した？」
「うるせぇ」
不機嫌そうにゾロが体を起こして、めんどくさそうにキリも立ち上がろうとする。
巨大な船からロープを使い、慎重なために時間はかかるが、ウソップとチョッパーも合流するためにメリー号へ戻ってきた。同時にＭｒ．２もメリー号へ乗船する。
死闘を繰り広げた相手だけにサンジの表情が険しくなり、鬱陶しそうに彼を見やる。
「なんでお前まで来んだよ。言っとくがてめぇの分はねぇぞ」
「んが～っはっはっは！　お構いなく～！　えっ!?　あちしの分ないの!?」
「チッ、うるせぇな。まぁあいつらがまだ食ってなきゃ多少は残ってるかもな」
「ほんと～！　んじゃ早速行かないと！」
船内へ飛び込もうとしたＭｒ．２がピタッと足を止め、サンジへ振り返って笑顔で言う。

「ちょっとグル眉ちゃん、あんた、いい男じゃな～い！」
「蹴り飛ばされてぇのか。とっととおれの視界から消えろ」
「んが～っはっはっは！　じゃあそうするわぁ～ん！」
我が物顔でキッチンへ飛び込んでいき、先に行ったルフィやウソップ、チョッパーと共におやつの争奪戦でも始めたのだろう。途端に騒がしい物音が聞こえてくる。
呆れた顔で溜息をつくサンジにシルクは優しげな笑顔だった。
「まったく……たまには静かに食えねぇのか。マナーのなってねぇ連中だ」
「サンジは優しいね」
「いやいやそんなことないさ。おれが優しいのはレディに対してのみだよ、シルクちゃん」
笑顔でへらりと返し、サンジもその場を離れてキッチンへ向かう。
その背を見送ってナミとシルクが視線を交わらせて微笑む。
ちょうどそんなまどろんだ空気の中。
小皿を持って甲板へ戻ってきたキリの姿を見つけて、巨大帆船からドリーとブロギーがメリー号を見下ろし、彼へ声をかけた。
「キリよ。我らはそろそろ行こうと思う」
「ん？　どこへ？」
「いずれはエルバフへ。だが今はまだお前たちと足並みを揃える。それでも自分たちの足でこの海を巡っておきたくてな」
彼らの声は大きく、まるでメリー号を包み込むようなもの。
聞こえたルフィたちが慌ただしく甲板へ出てきた。口の周りにクリームやケーキの残骸を付着させたまま現れて、驚いた顔で二人を見上げる。
特にルフィとウソップは離れ難いとでも言うかのような態度だった。
「え～っ!?　おっさんたち行っちまうのか!?」
「せっかく合流したのにぃ!?　師匠たちが居れば向かうところ敵なしだと思ってたのに！」
「すまんな。だが長くあの島に居過ぎた」

「戦士としての腕は衰えずとも、海賊としては鈍ってしまった。いずれお前たちと共に戦うことを考えればもう一度鍛え直す必要があってな」
ドリーとブロギーは笑みを浮かべて落ち着いた態度である。その風格に気圧されてしまった二人はぐうの音も出ず黙り込む。
おそらく何を言っても止められないのだろう。彼らは部下というより仲間だ。
最初から命令に従わせようと考えていないキリは肩をすくめてその言葉を受け入れた。
「確かにその方がいいかもね。こんなに大きな船だと目立つし」
「心配するな。結果は結果」
「我らはお前たちについていく」
「そういうことだからルフィ、一旦別れよう。彼らなら大丈夫さ」
適当に言うように軽やかな口調で主張して、キリはルフィの背を押してやったようだ。
その言葉もあってか、彼は少し考える素振りを見せた後でにかっと笑う。
「わかった。おっさんたちも冒険したいもんな」
「百年ぶりの航海、楽しんで」
「感謝する」
「これが今生の別れじゃない。いずれまた会おう」
嬉しそうに頷く二人は操船のため動き出す。
その姿を見ながらウソップは期待に込めて彼らへ叫んだ。
「師匠たち！　今度会う時までにおれたちもっと強くなってるから、いつか一緒に行こう！　勇敢なる海の戦士たちの村！　エルバフに！」
「ガババババ！　ああ、必ずだ」
「ゲギャギャギャギャ……楽しみにしているぞ」
ドリーとブロギーはたった二人で帆船を動かし、徐々に一団から離れようとする。
彼らの主張をこれ幸いと思ったのはキリだ。大勢で行動するのは

利点もあれば面倒を生む場合もあるだろう。一時的に別行動するのは悪い話ではない。
他の面子は意外にも大人しいアーロン一味と、友好的なＭｒ．２が率いる能力者軍団。
おそらくだがそれほど悪事を働くこともないだろうと考え、彼らとも別れた方がいいと決めた。
やけに騒いで巨兵海賊団へ声をかけるルフィやウソップ、チョッパーを尻目に、キリは欄干に腰掛けてアーロン一味の船へ声をかける。
腕組みをして椅子に座り、黙り込んでいたアーロンは微塵も表情を動かさなかった。
「ボクらも一旦別れようか。君らもその方がいいでしょ？」
アーロンは彼を鋭い目で睨みつける。
「襲ってこないってことは今の位置が馴染んできた？」
「ふざけるな……今はまだ時じゃねぇだけだ。いずれてめぇらはおれが殺す」
「待ってるよ。それまでは、一旦ここでさよならだけど」
小さく舌打ちしてアーロンが席を立った。
彼が号令を発すると船員が一斉に動き出し、船を動かして己の航路を行こうとする。
「船を動かせ！　行くぞ！」
彼らは彼らで動き始めた。再び会うことにはなるだろうがそれまでは違う道を進む。しかし東の海に居た頃とは違った生き方をするに違いない。
ずいぶん丸くなったものだとキリは苦笑して彼らに背を向ける。
そのやり取りを見ていたらしいＭｒ．２が近くに立っていて、手づかみで小さなケーキを食しながらにやりと笑い、わかっている様子で尋ねた。
「ってことは、あちしらも別行動ってわけ？」
「うん。名を広めるには効率よく動かないとね」
「んが～っはっはっは……いい感じねぇ」

クリームがついた指をぺろりと舐め、彼はしたり顔で自分の船へ向かって歩き出す。
「今のあんた、楽しそうにしてるわぁん。悪巧みが楽しくて仕方ないって感じ」
「海賊だもん。仕方ないよ」
メリー号の隣を行く快速スワンダ号へ一足飛びで移り、欄干へ着地して。
背を向けるＭｒ．２はルフィたちへ語りかける。
迫力のある大声に彼らは揃って振り返って注目した。
「麦ちゃんチーム！　あちしらももう行くわぁん。なんだかんだでついてきちゃったけど、乗りかかった船なら最後まで付き合うわ。今度はあちしらと一緒に大騒ぎしましょう」
「ししししっ。ああ。また会おうなボンちゃん！」
「行くわよ野郎どもっ！　んが～っはっはっは！」
快速スワンダ号も航路を変えて徐々に遠ざかろうとする。
奇しくも四隻がほぼ同時にメリー号の傍を離れていき、それぞれが異なる方向へ進んでいった。
ルフィたちはしばらく手を振り、声をかけて再会の時を楽しみにする。
傘下の船が離れたことでメリー号だけが大海原にぽつんと残された。
それだけで急に景色が変わった気がする。こちらが当たり前であるはずなのだがなぜか寂しさのようなものも感じてしまい、シルクは風に揺れる髪を押さえながら海を眺めた。
少し前の喧騒が嘘のような静けさ。こんな状況も久しぶりのような気がする。
アラバスタで過ごした時間が濃密過ぎたことも感覚を狂わせるのだろう。
ようやく元通りになる。そう思って笑みをこぼした。
「なんだか久しぶりな気がするね。こんなに穏やかな時間は」
「まぁね。やっぱりあいつのせいなんじゃない？」

にこやかに言うナミの視線の先にはキリの姿があった。
少し前までピリピリしていた彼。アラバスタでの戦いの後にはすっかり肩の力が抜けて東の海に居た頃のような柔らかい雰囲気に戻っている。
よほど気を使っていたのか、今や別人のようだ。
おやつのケーキを奪い合う仲間を眺めて、時折邪魔しながら楽しそうに笑っていた。
シルクは朗らかに笑って、ナミは苦笑する。
少し離れた位置で彼らを見る二人は、仲間たちのいつもの姿を見ていた。
「ほんと現金なんだから。誰のせいで苦労したと思ってんのよ」
「ふふっ。もうしばらくはこのままで居たいね」
「あら、お仲間は行ったのね」
ふと背後から声が聞こえた。
仲間たちは全員前に居る。その上聞こえたのは女性の声。
驚く二人が警戒する余裕もなく振り向いた時、軽い足取りでやってきたのは一人の女性。しかも直接会うことはなくとも話に聞いていた人物。
「え!?」
「あっ、あんた……!?」
「はじめまして、だったかしら。お邪魔してるわ」
騒いでいた男たちがナミとシルクの声でようやく彼女の存在に気付く。
ルフィとキリにとっては見覚えのある、ニコ・ロビンがいつの間にかメリー号へ乗船していた。

冒険の誘惑

甲板、メインマストの傍に木製の簡易テーブルと椅子を置いて、取り調べが始まっていた。
質問するのはウソップ。険しい顔で手元にあるメモを睨んでいる。
対面に座るのはいつの間にか船に居たニコ・ロビン。長い脚を組んで頬杖をつき、感情を読み取らせない薄い笑みを湛えて狼狽するウソップを眺めている。
聞けば彼女はルフィたちが戻ってくる前からメリー号に乗り込んでいたらしい。
なぜ気付かなかったのかと振り返れば、アラバスタ脱出の際のゴタゴタがあったせいだろう。あの時は非常に慌ただしかったため船内を見回る時間もなかった。
甲板へ出て気付かれるまで、シャワーを浴びたり読書をしたり、優雅に時間を過ごしたという。
服はナミの物を借りたとは本人の口から確認した。
とにかく、読めない。彼女の本心がわからず、何を目的としているのかがはっきりしない。
動揺するウソップはひとまずロビンの目的を本人の口から確認しているところだった。
「バロックワークス崩壊後、一人で生き延びてうちの船に……でもなんでそんなことを？　まさかおれたちに復讐しようってか!?」
「いいえ、違うわ。正直に言うと私はあの時自分の命を諦めていた。終わるならそれでもいい。そう思った時、この船の船長さんが私を助けたのよ」
ウソップの傍らに腕組みをして立つルフィを見てロビンが言う。
「私はあの時、死ぬつもりだった」
「へぇ、そうなのか」
「だけどあなたを見て気が変わったの。私が生き残ってしまったのはあなたのせい」
ルフィは真剣な顔で聞いているが、或いはわかっていなかったのか

もしれない。
傍から見ていてハラハラするほど呑気に構えていて、ロビンがくすりと笑い、核心を突こうという時になっても態度は変わらなかった。
「責任を取ってもらおうと思って。それでここへ来たの」
「責任？」
「私にはもう行く場所なんてない。生きる場所もない。どこにも居場所がないの」
ロビンは表情を変えずにルフィの目をじっと見ていた。
「だから私を仲間に入れて」
「おう。いいぞ」
「ルフィ!?」
周囲から一斉に声がかかる。
どうやら皆が怒っている様子だがルフィには理由がわからず、きょとんとした顔で周囲を見回してみる。不安そうなウソップ、怒った顔のナミ、険しい表情のゾロが声を発したようだ。
「あんた何考えてんのよ！　元バロックワークスなのよ!?　それもクロコダイルの側近！」
「そんなのキリも一緒じゃねぇか」
「キリとは状況が違うだろうが！　いいか、キリは自分から組織を抜けてきておれたちの仲間になってるけど、この女はほんの数日前までおれたちの敵だったんだ！」
「そうだな。ボンちゃんもそうだぞ」
「あーもうっ。それはそうなんだけど！」
「何怒ってんだよ」
憤るナミとウソップに対してルフィは意見を変えようとはしていなかった。一度言い出すと意見を変えない男だとは知っている。二人の焦りは次第に高まっていく。
空気に耐えかねてついウソップがキリに振り返った。
味方か敵か、彼は甲板に寝そべって大の字になり、興味さえ持とうとしていない。
「おぉいキリ！　なんとか言ってくれ！」

「別にいいんじゃないかな」
「そう言うと思ってたけどな！」
何の危機感も抱いていない態度にどうせそうだろうと想像していたら、予想していた通りの答えが返ってきてウソップの声は大きくなった。
その時になってようやくキリが少しだけ顔を上げて彼らを見る。
「大丈夫だよ、多分。利益がある限りは裏切らないだろうし、そこまで危険ではないと思う」
「特技は暗殺だって言ってたんだぞ!?　どこが大丈夫だ！」
「ボクは昔仲間だったんだよ？　それに居場所がないって話だから、この船に居るのが安全だと判断したらしばらく居つくんじゃないかな」
「いや……それが問題なんじゃねぇかな」
「あれ？　そう？」
「居つかれるのが問題だからこうして相談してんだろうが」
「じゃあそれはもう知らないだろーが」
「お前せめて起きて喋れ」
苦笑するキリは手をひらひら振り、寝返りを打って背を向けてしまう。異論を受け付けるつもりはないらしい。彼はロビンを危険視していないのだ。
しかし彼ほど信用できないウソップは気が気でない。
元々敵だった人間を置いて危険はないのだろうか。キリとは違う。彼はそもそも離反するつもりで組織を離れたが彼女は組織が無くなったから仕方なくここへ来ただけだ。
賛成する者が居れば反対する者が居る。
予想通りであるためロビンは慌ててはいなかった。
どうしてもこの船でなければいけない訳ではないが、きっとこの船、この一味でなければ見られない物があるはず。そう思う彼女は自ら口を開く。
「もちろんタダでとは言わないわ。乗せてもらうからには役に立つわよ」

「なにぃ？　得意の暗殺でか」
「それもあるけど、諜報も得意なの。キリの能力と合わせることもできる」
ロビンがそっと右手を上げた。するとルフィの肩からしなやかな腕が生えてくる。
「ハナハナの実の能力。私の体は、あらゆる場所へ咲かせることができるの」
「うっはぁ～。おもしれぇ能力だなぁー」
「暗殺と諜報か……とにかく危険な女だな」
肩に生えた手の指先がルフィの頬を引っ張る。ゴムである肌は常人ではあり得ないほど伸びて、離せばバチンッと音を立てて元に戻る。一連の行動があってもルフィは面白がっているらしく楽しそうに笑っていた。
その様を見るウソップはますます安心することができない。
暗殺が特技と言った通り、この能力があればいつでも寝首をかかれそうだ。
ウソップが怯えているのを感じ取ったのだろう。ロビンが能力を使う。
彼の体に四本ほど腕を生やして、突然体をくすぐり始めたのである。
「お気に召さない？」
「あっひゃっひゃっひゃ！　おい、やめろっ！」
「ししし。お前おもしれーなー」
くすぐられたウソップは身を捩って笑い声を発し、隣で見るルフィは楽しげだ。
二人を見るロビンも柔和な笑みを浮かべている。
対照的にナミは彼らから少し離れ、腕組みをして遺憾の表情で呟いた。
「まったく、頼りない男どもね。言っとくけど私は違うから。あんたがこれから何をしてどんなことを言っても絶対に籠絡なんてされない――」

「そういえばクロコダイルの宝石を持ってきたんだけど」
「いやん、大好きよお姉さま♡」
「おい」
テーブルに小さな袋を置いただけでナミの目の色が変わり、素早くロビンにすり寄った。変わり身の早さにゾロが冷ややかな目で睨む。
くすぐりから解放されたウソップが大きく溜息をついた。
笑っている間にあっさり籠絡されたナミを見て、このままではまずいと不安を抱く。
ルフィは乗り気。キリは関与せず。重要な戦力だったナミが敵に回った。他の面子がどうかはまだ多くを主張していないとはいえ、非常に不利に感じる。
ウソップの心は一つ。危険そうなこの女性が怖いから居つかせたくないのだ。
もう一度溜息をついてロビンを見ると、彼女はそこに座ったまま、また能力を使ってルフィと遊んでいたようだ。
「そりゃうちは変な奴らばかりだけどよ。この上危険人物を抱え込むって……」
「うわっ、それすごいぞルフィ」
「あっはっは！　こりゃいいや」
「おい、聞いてんのかルフィ！」
「見ろよウソップ！」
チョッパーとルフィが騒いでいる声を聞いて、ウソップが振り返った。
笑い転げるチョッパーの前にはルフィが立っていて、彼もウソップに振り返る。するとその頭にロビンの腕が二本生えて指を伸ばし、まるでトナカイの角のようだった。
「おれはチョッパーだ！」
「ぶふ～っ!?」
どうやらそれがお気に召したらしく、ウソップも二人と共に笑い転げて喜び始めた。
これで彼も籠絡されたようだ。

黙って行く末を見守っていたゾロは頭を抱えて溜息をつく。改めて辺りを見回してみると彼の仲間はあまり頼りにならないと感じられた。
「どいつもこいつも不甲斐ねぇ。緊張感ってもんがねぇのか」
「ふふ、でもこれがいつも通りだから」
隣に立つシルクが笑顔で言う。
彼女も反対意見ではないのだろうと表情で判断し、ゾロがシルクに目を向ける。
「お前はいいのか？」
「うん。私たちより年上で頼りになりそう。ゾロは信用できない？」
「当たり前だ。見ず知らずの人間を簡単に信じる方が問題だろ」
「そうだね。でも今回はキリの知り合いだよ？」
「それが問題だろ」
だらだらと寝そべり、ルフィたちが遊んでいる姿を眺めるキリを見る。
二人の表情は違い、シルクはどこか安堵した様子で嬉しそうだが、ゾロは普段より険しい表情で睨むかのようである。
「キリがああしてるってことは、本当に心配してないんじゃないかな。まずいと思ってるなら最初からみんなのこと説得してるよ」
「だからって信じる気にはならねぇな」
「ふふ、そっか。ゾロがそう思うならそれでいいと思う」
キリから視線を外し、ゾロがシルクを見て、彼女の笑顔を確認した。
「ルフィが信じやすい人だから、ゾロが疑い深い方がバランス取れるでしょ？」
「ハァ……つまり、おれ以外は賛成ってことか？」
「そうかな。サンジは？」
「もうわかるだろ」
話しているとちょうどロビンに近付いていくところだった。
二人は軽やかな足取りのサンジを見送る。
「あぁ……突然降って轟いたこの衝動は雷。君は天から舞い降りた

天使。僕はただ漆黒に焦げた体を恋という流れに横たえる流木……おやつです♡」
「あら、ありがとう」
「どうせああなんだ、あれは」
「ふふ。うん、わかってた」
予想した通り、彼には抗う気持ちなど微塵もなかった。
おやつを用意したサンジはロビンの前に皿と紅茶が入ったカップを置き、恭しく頭を下げてその一時に幸せを見出していた。
ゾロは呆れて、微笑みを湛えるシルクは肩を揺らす。
ひとしきり遊んだ後で立ち上がったルフィは笑顔を見せた。
すっかりロビンとその能力を気に行った様子で迷うことなく告げる。
「まぁいいじゃねぇか。心配すんな。こいつは悪い奴じゃねぇから」
「ああ、もういい。好きにしろ」
「ねえ、あれ何？」
ゾロが納得、というより仕方なくそう言った時、ナミが海を指しながら言った。
全員の目がそちらへ向く。
メリー号から見て西の方角。海に浮かぶアンモナイトのような巻貝が見える。しかもそれが人間よりも数倍大きな物で、事実巻貝の上に人が乗っていた。
白髪で細身の老人が直立していた。真っすぐにメリー号を見ている。海に揺られて近付いてくるようで注目しない訳にはいかなかった。
いつも通りルフィ、ウソップ、チョッパーが興味を持って欄干まで駆け寄る。
反応が良いのは彼らだけで、他の面子は大体が渋い顔をしていた。
先程までだらけていたキリも流石にそれは見過ごせず、立ち上がると表情を引き締める。
ゆっくり、波に乗って老人を乗せた巻貝がメリー号へ近付いてく

る。
攻撃の意思はないらしい。腹の前で手を組み、背筋をピンと伸ばして老人が口を開いた。
「ごきげんよう、海賊諸君。選ばれし子らよ。君たちは幸運だ」
「おっさん、その貝なんだ？　食えんのか？」
「でっけぇなー。中身あんのか？」
「お～い。貝～」
「お前らせめて聞いてやれよ」
老人の言葉を受け止めようとしない三人に思わずゾロが苦言を呈す。しかし聞いていないのは彼も同じのようで、全く意に介さずに言葉を続ける。
会話をしようという気が感じられない。一方的な主張といった様子だ。
胡散臭い奴だ、と彼を疑問視する者が居てもおかしくはなかった。
「諸君らは選ばれた。従ってこの世で最も価値のある栄誉が与えられる」
「何？　お金!?」
「ナミ、あまり信じない方がいいんじゃないかな……」
「受け取る気があるのならこちらへ。私についてくるといい」
一方的に言うだけ言って、巻貝は踵を返して移動を始める。
話し合いに応じるつもりはないらしく、呼びかけても一切止まろうとはしなかった。
仕方なく一味は船長に判断を委ねる。誰が言い出す訳でもなく視線がルフィに集まり、意見を問おうとしている空気が伝わって、代表してキリが尋ねた。
「どうする船長。罠かもしれない」
「行こう。面白そうだ」
ルフィがにやりと笑顔で言った。
途端にウソップとナミが揃って肩を落とす。何かをもらえるという話には幾分興味がある。だが危険がありそうだという空気が濃厚なため頭を悩ませるところである。

しかし彼の一言で進路は決まった。
メリー号は不思議な巻貝と老人を追って、航路を変えて進み始める。

＊

老人の先導に従って進むと島を見つけた。
アラバスタで入手したログが指す島とは異なる場所。鬱蒼と生い茂る森に覆われ、全体が緑色に染まり、中央だけが山になって特別高くなっている。その部分にだけ木々が生えておらず、そこには石造りの大きな、それでいて朽ちた砦が雄々しく立っていた。
気になるのは沖合に複数の船が停泊していたことだ。
双眼鏡で確認すればどれもこれも髑髏の旗を掲げた海賊船。海賊が集まる島らしい。
島に近付くのは危険かもしれないと足を止めたメリー号では、本当に上陸すべきかどうかを話し合おうとしていた。
想像していた状況とは違う。ウソップとナミが際立って怯えていた。
「おいおいおい、一体全体何が起こればこうなるんだよっ。滅茶苦茶海賊が居るじゃねぇか。祭りかなんか始まんのか？」
「祭りかー。楽しそうだな」
「バカっ、呑気に構えてる場合じゃない！　やっぱり罠だったのよ。おかしいと思った、急にお宝くれるなんて言うし、何の説明もしないんだもん」
「お前途中まで乗り気だったじゃねぇか」
呑気に構えるルフィが反論するも二人はすっかり尻込みして上陸する気がない。
仕方ないと思ったルフィは行ける者だけを募って島に向かおうと決めた。
「上陸するぞ。キリ、行けるか？」
「もちろん」

「ほ、本気で行くのか？　絶対罠だぞ！　これから攻撃を受けるんだ！」
「サンジ君、あんたは留守番！　行っちゃだめよ！　私を守って！」
「ナミさんがそう言うならぁ～！」
「サンジくん、おれも～！」
「お前は勝手にしろ」
「そんなぁ～!?」
騒ぐウソップを相手にする者は少なく、淡々と事が進められる。
確かに不測の事態だ。キリは周囲に見える海賊船を気にしながらも上陸するメンバーを考える。全員で行ってはメリーが危ない。上陸メンバーを少なくするべきだ。
それでも半分に分けてみようと仲間たちを見回す。
ウソップとナミは上陸する気がない。サンジはナミの護衛に選ばれた。すでにルフィとキリの上陸も決まっており、残るクルーは四人。
一応本人の意思も聞こうとキリが尋ねてみる。
「半分に分けて行こうか。あと二人ほど行けるけど、志願は？」
「おれも行くぞ。罠なら望むところだ」
刀の柄を握ってゾロが前へ進み出た。好戦的な笑みを浮かべてやる気である。
彼に遅れて少し。恐る恐るだがチョッパーも手を上げる。
「お、おれも行こうかな。怖いけど……おれも海賊だ。冒険してみてぇ」
「オッケー。これで決まりかな。異論は？」
「ううん。大丈夫」
キリが認めたことでゾロとチョッパーの参加が決まった。
彼の発言に頷いたシルクがちらりとロビンを見る。先程から静かにしているが怖がっている様子ではなくほとんど動かない笑顔だった。彼女にも意見を聞いてみる。
「ロビンさんは大丈夫？」
「ええ。新参者が勝手に動くと困るでしょう？　大人しくしてる

わ」
ロビンの言葉を受けてシルクが頷いた。
次いでキリへ視線を向け、理解した彼も軽く頷いて同意する。
「小舟を出そう。残ったみんなで周囲を警戒して」
「何がもらえるんだろうなー。肉かな？」
老人はすでに島へ到着していた。
目的地が見えていたこともあって慌てることはなかったものの、小舟を降ろした四人はメリー号を離れて島へ近付く。
状況から考えて他の海賊団もそうしているのであろう。
停止している船には人の気配があり、クルーの多くが残っているようだ。
離れていく四人の姿を見ながらウソップは心配そうに吐息を洩らす。
振り返ればこれまでの道中、数多の海賊が集まる島で何も起こらなかった試しがない。
また何かが始まる予兆なのではないかと不安に苛まれていたらしかった。
「よくよく考えてみりゃよ。あのおっさん、お宝をくれるとは言ってなかったんじゃねぇか？　それどころか質問しても答えねぇし、こっちも見ねぇし、やっぱり怪しい」
「そうね……私も今頃になって嫌な予感が」
「でもルフィたち行っちゃったよ」
ううむと唸るウソップとナミにシルクが軽い声で伝える。
途端に彼らは止めるべきだったかもしれないと大きな溜息を吐き出した。
「しかも行ったのはルフィだ……何もなくても何かを起こす天才だぞ」
「なんだかんだキリもおかしなこと言い出すし、これはまずいかもしれないわね……」
「しょうがないよ。ルフィが冒険しないはずないから」
「大丈夫さナミさん。アホどもが何をしようと君はおれが守るよ」

不安そうなナミへ力強く告げたサンジは、続けてすぐにシルクとロビンへ視線を向けた。
「もちろんシルクちゃんとロビンちゃんも♡」
「ありがとう。でも私は大丈夫だよ。前より強くなったんだから」
「ふふふ。楽しい船ね」
メリー号で和やかな会話が続けられている一方、小舟は島へ着いた。
先に上陸した老人は砂浜に立っており、無表情で彼らをじっと見ながら待っている。
意気揚々と真っ先に地面へ降り立ったルフィが腰に手を当て、楽しみで仕方ないと言いたげな笑顔を見せる。それから幾ばくもせずキリ、ゾロ、チョッパーも彼の傍に来た。
「で、何もらえんだ？」
「こちらへ」
感情が希薄な、まるで人形のようにも感じられる淡々とした声で言われる。振り向いて歩き出した老人は森の中へ進み出した。
四人は多くを言わずにその後へ続く。
ここまで来れば罠があろうがなかろうが関係ない。そもそもルフィは全く気にしていなかった。
ただただ冒険を楽しんでいるらしいルフィとチョッパーが前を歩き、その後ろに続くキリとゾロが素知らぬ顔で周囲を警戒するが人の気配はない。
鬱蒼と生い茂る森の中には人工物の類はなく、人が生活する痕跡も見られなかった。
何かのきっかけで無人島になったのか。山頂の砦を見るにそう考えられる。
老人の後ろを歩きながらルフィとチョッパーは能天気な様子だった。
彼らにとっては罠より道端に落ちていた木の枝の方が興味があったらしい。
「おっ、いい感じの枝だ」

「うわっ、いいなぁ～ルフィ。それいいな」
「いいだろ。欲しかったら自分で探せよ」
「くそーおれも見つけよう。棒、棒……」
ルフィが拾った木の棒を振り回しながら上機嫌に鼻唄など歌い始める。するとなぜか羨ましがるチョッパーは周囲を見回し始めて、時折草むらの向こうへ姿を消しながら熱心に落ちている木の枝を探し始めた。
一部始終を見ていたゾロは呆れた顔だ。
「何がいいんだ、ありゃあ……」
「言ってみれば男の子の浪漫みたいなものかな。刀バカのゾロにはわからないよ」
「バカは余計だろ」
「じゃあアホ」
「てめぇよりマシだ」
にこにこ笑って言うキリを隣に置いて、ゾロは前を歩く老人の背を見据えていた。
「突然いいもんやるっつって呼び出されたら、お前、どう思う？」
「いい気はしないね。何か裏がありそうだ」
「それでも来たのはなんでだ？」
「意味があると思ったのかな。これだけの海賊が集まってるなら多分、呼び出してる人間は相当の大物か、そうじゃなくても危ない奴だよ」
チョッパーが自分の手に馴染みそうな枝を見つけた。それをルフィと同じく軽やかに振り回し、近くの木を叩いたりしながら上機嫌に歩く。
その姿を見た後、キリは島で最も高い位置にあるだろう砦を見上げる。
「あの人も只者じゃなさそうだし、こういう状況は普通じゃない」
「危険を承知で飛び込むってわけか」
「いいじゃねぇか。面白そうだろ」
話を聞いていたルフィが振り返って後ろ向きに歩きながら二人へ

言う。
チョッパーも真似して振り向き、二人を見ながら後ろ向きに歩き始めた。
「海賊王になるためにはどんな奴が敵になってもぶっ飛ばすんだ。だったら今すぐ戦ってもおんなじだろ？」
「最初からやり合う気だったってことか」
「まぁ手っ取り早くていいかもね。問題は誰が相手だけど」
「ししし。まぁーなんとかなんだろ」
再びルフィが前を向く。つられてチョッパーも同じ方向を見た。
ずいぶん安易な考え方であるが、不幸にもここにはそれに反発する者はいない。
キリとゾロは納得して戦闘も辞さない様子であり、チョッパーはそんなものかと危機感もなく素直に納得するだけだった。
やはりそこが目的地だったようで、やがて彼らは山頂の砦に到着した。
朽ちた建造物は所々が壊れて、均等に切られた石が積み重なって造られているものの、その石自体が欠けているのも珍しくない。木製の大きな扉はすでに壊れていて、片方はすでに地面へ倒れ、片方は外れかけて斜めになっていた。
老人は迷いもなく扉の横を通り抜け、内部に入る。
内部はもう何年も人が入っていなさそうなほど荒れ放題だった。天井は壊れて無くなり、建物の中のはずが空を眺められる。
おそらく入口から入って砦の一番奥。小部屋に入ったところで老人が振り返った。
「では、この先は諸君だけで」
「この先？　もう道なんかねぇぞ」
首をかしげたルフィが言うと老人は地面にあった戸を開いた。
地下へ繋がる細く長い階段が姿を現す。
ルフィとチョッパーが目を輝かせてそこに見入り、溢れる冒険心が不安を消し去る。
「すんげぇ～！　隠し通路だ！」

「お宝がありそうだなぁ～！　この下に宝があるのか？」
笑顔でチョッパーが問いかけても老人は無反応。役目を終えたとばかりに黙り込む。
その様子にチョッパーの表情がわずかに曇るとはいえ、やはり目の前にある階段が気になって仕方ないのか、気分を害すこともなくすぐに笑みを見せた。
まずルフィが意気揚々と階段へ向かい、勢いよく駆け下りていく。
「いよいよお宝だ！　行くぞ野郎どもォ！」
「おぉ～っ！」
すかさずチョッパーも飛び込んで階段を下りていく。
それからキリが歩き出し、ゾロも続くが、入る直前にキリが老人へ問うた。
「案内はここまで？　この先には何があるのかな」
声をかけても聞こえていないかのように反応せず、視線すら寄こさない。
仕方なく肩をすくめたキリと険しい顔のゾロが階段を下り始める。
ゆっくり進む彼らが入口から離れていった後、背後で老人の声が聞こえた。
「行けばわかる」
その言葉を最後に扉が閉められる。
辺りは一気に暗くなるが、幸いにも壁に蝋燭が置かれて、火が点けられているため見えなくなるということはない。二人は冷静に階段を下りていった。
会話もないまま下りていくと、長い階段の先に、広大な空洞があった。位置から考えて島の中央にある山の内部だろう。大きくくり抜かれたかのように部屋がある。
そこには数え切れないほどの人間が集まっていた。
人相の悪い、或いは不潔な身なりの男たちや、中には女も居るが明らかに堅気でなさそうな雰囲気を纏っている。状況から考えて全員が海賊なのだろう。
先に到着していたルフィとチョッパーが階段を降りた先に居て合

流する。
てっきり宝箱があると考えていた二人の表情は曇っていた。
予想と違い、目の前の光景に不満を抱いているらしい。
キリが隣に立つとルフィは見るからに不服そうな顔で言った。
「キリ、お宝がねぇぞ。肉は？」
「用意されてるのは別の物みたいだね。さて、何がもらえるのか」
達観した様子で呟いた。ルフィはそんなキリの返答にも不服だったようである。
すでに周囲の人間は新たにやってきた彼らに気付いており、注目が集まっていた。
ここへきてチョッパーは少し怯え始めて、周囲からの敵意を浴びて警戒し、頼るようにゾロの傍へ歩み寄る。一方のゾロは楽しげに笑みを浮かべ、刀の柄に触れて感触を確かめていた。

〝金獅子〟

辺りの景観から見るに、そこは大昔に利用されていた住居の類だったようだ。

壁は岩盤が削られているのか、所々穴が開いたり傷があるが、全体的にはつるりとした様子で人の手が入っているのが目に見えて確認できる。天井も同様、それどころか模様まで描かれている。長年放置されたであろうボロボロの椅子やテーブルが散乱しており、その他に樽や木箱なども部屋の隅で転がっていた。

どうやら別の部屋へ続いているらしい扉が入口から見て左右の壁にいくつか並んでいる。

集められた人間は数百人。それだけが入って尚もかなりの余裕がある広大さであった。

入口から見て正面。壁際にステージのような一段高い場所がある。

ある時、コツコツと靴音を鳴らしてそこに一人の男が立った。

全員の注目が彼に集まる。若い男だ。にこやかに笑って人々を見回し、パンっと手を叩く。

「お集まりの皆様。今日は全員にとって良き日になるでしょう」

耳が痛くなるほど静まり返っている。それだけ男の言葉に注目しているということだが、あまりの静けさに不穏な空気さえ漂い出すほどであった。

男は気にせず明るい声で話す。

屈強な海賊たちにも怯まず、朗々と語る声は広い場内に響き渡った。

「すでに察している方、そうでない方も、等しく同じ恩恵を得られます。ご安心ください。とはいえあまり長々語っても興味はないでしょうからね……早速ですが本題に入りましょう」

その時、男の背後で大きな布が降ろされた。

新たに用意された物であろう巨大なモニターが姿を現す。いつの間にか映像電伝虫もその場へ移動してきており、何かが映し出されるらしい。

男が舞台役者のように大きく腕を振り、モニターを指し示す。
その際の表情は満面の笑みで、非常に嬉しそうだった。
「皆様にご紹介しましょう！　あなた方を呼んだ立役者！　この海を統べる王！　伝説の海賊と語られる、〝金獅子〟のシキ様を！」
言い終えると同時、モニターに映像が映し出された。
一人の男が不敵な笑みを浮かべて立っている。
かなりの高齢を予想させる外見。金色の長い髪と頭に刺さった半円状の舵輪が映り、煙を立てる葉巻を銜えて、黄色を基調とした和装に身を包む。
紹介された名は金獅子のシキ。
その名と目に映った外見に、集まった海賊たちは大きくどよめいた。
かつて、後に海賊王と呼ばれる男、ゴールド・ロジャーと渡り合った男。行方を眩ませてから長い時が過ぎ、すでに死んでいるのではと囁かれていた。
それがまさか、生きて目の前に現れるとは。
海賊たちは息を呑み、彼が何を語るのかを固唾を呑んで見守る。
余裕綽々。彼らの反応を当然の物として、シキはゆっくりと口を開いた。
ただそれだけの所作で感じる気迫は気のせいではないだろう。
それはまさに強者の証。敵うはずがないと感じさせて姿だけで彼らを圧倒した。
《グランドラインに生きる海賊諸君。ごきげんよう》
こんな声だったのか、と素朴な感想を抱く。だが言葉にして口にはしない。たとえ囁き声だとしても許されないほど緊迫した空気に包まれていた。
数百人の海賊が一心にモニターを見つめている。
シキの語りを聞き逃してなるものかと集中していた。
《おれのことを知ってる奴も多いだろう。諸君を集めたのは他でもない。この度、そろそろ動き出そうと思った次第でな。派手にやろうと思うんだがあいにくまだ戦力が足りん。そこでこれだけの名のあ

る賞金首を集めたわけだ》
辺りは再びしんと静まり返っていた。
期待と不安、その両方を胸に、映像ではあるが本物の動くシキに魅入られている。
《難しいことは言わん。どんなバカでも理解できるよう簡潔に伝えてやろう。おれの目的はこの軟弱な海に真の海賊の恐ろしさを思い出させてやることだ》
表情を変える者は少なくない。彼らの胸に野望が灯されようとしていたのだ。
《ロジャーの死後、その後釜を狙おうと無能どもがこぞって海賊を名乗り、偉そうなツラでこの海を闊歩してやがる。奴らは何もわかっちゃいねぇのさ……海賊の本分は支配だ。おれがこの軟弱な時代にとどめを刺し、グランドライン、そして四つの海を支配してやる》
途方もない野望。
本来ならできるはずがないと断じる夢。しかしこの男ならと希望を抱かせる。
〝金獅子〟の名はそれほど大きなものであり、そして実現可能だと思わせるほどの力を持った人物である。その場に居た多くの人間が彼の野望に呑み込まれた。
《諸君らにはその功績の一端を担ってもらおうと思っている。別に強制はしねぇが……まぁ遅かれ早かれ同じことだ。どうせこの海は全ておれの物になる。それなら初めからおれの部下になっておいた方が余計な手間もねぇってことを教えといてやろう》
果たして誰がその言葉に逆らえるというのか。
海賊たちの顔つきが変わっていく様は見るも明らかで、電伝虫を使って音声だけだがそちらの状況を窺っていたシキにも緊迫感が伝わっている。
《従う奴はおれと共に来い。この世の全てを見せてやる》
ごくりと、誰かが息を呑んだ。おそらく一人ではない。ほとんどの人間がその言葉に魅入られ、さっきまでは抱いていなかった野望を胸に覚悟を決めていた。

そのせいだろう、しばしの沈黙が続く。
時が止まったかのような場内では唯一草履で歩く間抜けな音だけが存在した。
背筋を伸ばして並び立つ海賊たちの傍を通り抜け、一人の男が前へ出る。
ステージの目の前まで来て立ち止まり、真剣な表情でシキを映すモニターを見上げた。
誰もが注目していなかった。あまりの衝撃に存在さえ忘れていたはず。
シキには見えていない。だが通話中の電伝虫で音は拾っている。
そうと知ってか知らずか、ルフィは迷わず言い放った。
「いやだ」
その瞬間、空気が大きく動いた。
さほど大きな声でもなかったが不思議とそこに居た全員に聞こえてしまい、それだけ場内が静かだったということであるが、当然シキの耳にも届いた。
わずかにシキが眉を動かす。
確かに聞こえた声は彼に反発するもので、彼はそれを冷静に受け止める。
《んん？　誰だ？　このおれに楯突こうって奴が居るのか？》
「ああ。居るぞ」
《どこのどいつだ。名を名乗れ》
「おれはモンキー・Ｄ・ルフィ。海賊王になる男だ」
ざわざわとどよめきが大きくなる。
もはや言い逃れはできない。シキが認識しているのだ。当人ではないとはいえ緊張は多くの者へ伝わっていき、ルフィに集められる視線は恐怖と不安が大半だった。
シキは腕組みをして深く息を吐く。
機嫌を悪くしたのか。大半がそう思って恐れたがルフィの様子は変わらなかった。
《そうか、モンキー・Ｄ・ルフィ。聞き覚えのある名だな。てめぇは

なぜおれに従わない？》
「おれは海賊は好きだけど、支配なんか求めてねぇよ。この世で最も自由な奴が海賊王だ」
《自由？　くだらねぇ……てめぇは何もわかっちゃいねぇのさ。本物の海賊をな》
怒りを露わにすることはなかったが、明らかに先程とは違ってもいる。
シキは挑発的ににやりと笑い、まだ見ぬ人物へ語りかける。
ルフィはモニターに映る彼をじっと見ていた。
《今一度確認しておこう。てめぇはおれに従わねぇ、そうだな？》
「ああ。おれは船長がいい」
《あいにくおれも船長がいいんだ。ならどうする》
言葉を向ける対象はルフィではなくその他の海賊へ変わった。シキは突然大声を発してその場に居る海賊たちへ命令した。
聞いていた海賊たちはビクッと震え、逆らう術を持っていなかったようだ。
《てめぇらに最初の命令を下すぞ！　そのガキの首を取ってこい！　おれのところに持ってきた奴は幹部として取り立ててやってもいいぞ！》
楽しむように、まるで余興を思いついたように。笑顔で命令を下したシキは怒りを抱いた訳ではないらしい。むしろ見せしめにできる人間が居て喜んでいるといった表情か。
そう言われて逆らえる者が多いはずもない。
ルフィの周囲に居た海賊たちが即座に武器を取り、厳しい顔で彼を睨みつける。
《さぁ殺れェ!!》
言われた途端、一斉にルフィへ襲い掛かった。
怒号が飛び交い、殺意を持って大勢の人間が彼の下へ殺到していく。
しかし、彼らの間を縫い、ルフィの傍へ到達した一団が海賊たちを吹き飛ばす。大勢の男たちが宙を舞って、手放した武器があちこちへ

散乱した。
いつの間にかルフィを囲むようにして三人が立っていたのである。
ゾロは二本の刀を手に持ち、待ちわびていたように舌舐めずりをする。数百人を敵に回して笑うその様は人の気迫ではない。彼らを獲物としか見ておらず、心配など微塵もなかった。
そんな彼の様子を確認してから、左手に紙で作った剣を持つキリは気楽に笑う。
「まぁ、不足はねぇとは言わねぇが、試し切りには十分だろ」
「中には高額賞金首も混じってるよ。問題は？」
「あったらここに立ってねぇよ」
一瞬の攻防であった。
何が起きたか理解できていない様子の海賊たちが立ち往生する。少なくとも敵の数が増えたことは理解しただろう。気を取り直すまでそう時間はかからない。
キリが人型になったチョッパーを見る。彼も今日はやる気のようだった。
「行ける？　チョッパー」
「もちろんだ！　おれも強くなったんだぞ！　ルフィには近付けさせない！」
雄叫びを上げる珍妙な大男に自然と注目は集まっていた。かといって彼らをやらなければ更なる脅威となるのが金獅子のシキ。迷うはずもない。
再び海賊たちが武器を振り上げて襲い掛かってくる。
「小僧を殺せーっ!!」
「ひ弱そうだ！　すぐ殺れるぞ！」
「こいつを殺れば大幹部に……！」
「てめぇらどけェ！　おれが殺す！」
怒号を響かせながら次から次に向かってくる男たちを目にして、彼らは怯むことなく迎え撃つ。
にやりと笑うルフィが敵の中へ飛び込んだことであっさり状況は変わった。ゾロは当然のように同じく集団の中へ飛び込んで暴れ出

し、呆れたキリはチョッパーの背を庇うように移動する。
作戦も何もない、突然始まった乱闘だったが問題はなかった。
彼らの無事はあちこちで聞こえる悲鳴と宙を舞う人間の姿で確認できるのだ。
伸びる腕と足を使ってルフィは大立ち回りを繰り広げる。
群がってくる人間は鬱陶しいが、彼が腕と足を振り回せばそれだけで数多の悲鳴が響き渡った。
ゾロは自身へ向かってくる敵を斬り飛ばしながら周囲を見回し、腕が立ちそうな人間を探す。適当に相手をしているとも思えるほど気楽そうだが一太刀も浴びない強さだった。
武器を振り回す男たちを掻い潜り、斬り捨てながら前進する。
どれだけ倒そうが喜びはない。彼が求めるのは対峙する価値のある者だった。
「貴様見覚えがあるぞ！　懸賞金６０００万ベリーの海賊狩りだな！」
サーベルを持った男と拳を構えた男を同時に斬った直後、一際大きな声が聞こえた。
振り返ると二メートルを超える身長の太った男が棍棒を振り回しながら接近してきた。
彼に向き直ったゾロは三本目の刀を銜える。
「おれは懸賞金７０００万ベリーの〝怪腕〟ペギ――！」
言い終える前に横をすり抜けて胴体を斬った。
血を撒き散らしながら空を飛んだ大男は背中から地面に落ち、多くの人間を下敷きにすると動かなくなる。そちらを見ることもなくゾロは呟いた。
「悪いな。眼中になかった」
続けて隙をつこうと接近してくる敵を返り討ちにしながら、ゾロはさらに走り回る。
一方でキリとチョッパーはほとんどその場を動かず、向かってくる敵を迎え撃つことに集中していた。囲まれている分危険はあるが、この状況ではどこに居ても変わらない。

チョッパーは大きな体を存分に活かすべく、獣のように激しく動き回る。
彼の迫力がそうさせるのだろう、近付く海賊たちは巻き添えを恐れて及び腰だった。
「うおおおぉ～！　おれに近付くな～！」
「いいねチョッパー。吹っ切れた感じで頼もしくなった」
両腕を振り回して敵を殴り飛ばし、時にはタックルをかまして敵を捕まえ、大の大人を武器のように振り回してさらに大勢の敵を吹き飛ばす。チョッパーの戦い方は非常に荒々しいが、だからこそ乱戦では敵を威圧する効果があった。
キリはそんな彼の背を狙う者から順に仕留めていく。
時に紙の剣で切り裂き、時に蹴り飛ばし、時に殴りつける。余裕を感じさせる戦い方である。
持ち上げた男を投げ飛ばして、前方に居た男たちに直撃させると纏めて倒した。
直後にキリが紙で作った大きなハンマーを投げ渡すため、振り回して敵を仕留める。周囲で跳び回るキリを気にしながらも大きな動きを心掛けた。
「しかし数が多いね。これじゃいつ終わることやら」
「ハァ、ルフィとゾロは大丈夫かな。かなり離れちゃったぞ」
「大丈夫だよあの二人は。ほっといたって道に迷わない限り帰ってくる」
気楽に言いながら敵の後頭部を掴み、体重をかけて引き倒すと地面へ頭を叩きつける。その男の頭を思い切り踏みつけて気絶させながら、キリは近くに居た女の足首に紙のロープを巻きつけ、強く引っ張るとその場に転ばせた。
危なげなく戦いながら周囲を見渡す余裕もある。
どうやらルフィもゾロも元気に戦っているようで心配はいらなかった。
「こうなるならもう少し戦力が欲しかったな。せめてシルクかロビンが居れば――」

キリが言いかけた時に爆音が聞こえた。仲間の行動ではないだろう。何かと思ってそちらを見ると知らない海賊が黒焦げになって倒れるところだった。
戦いながらもその辺りを視線だけで探る。
すぐに犯人らしき男を見つけたのは偶然ではなく目立つ位置に居たからだ。
「アッパッパー！　予定外だがこれはこれで面白い。金獅子に逆らうバカが居たのか」
古びたテーブルの上に乗ってしゃがむ男はスクラッチメン・アプー。
特徴的な外見に理解は早かった。
尚も近付いてくる海賊たちを退けながら、キリは彼に注目する。
アプーも高額賞金首の一人。トレジャーバトルで見かけたこともあった。敵を怒らせては逃げるという妙な癖も噂として聞いていて、無視できるほどの小物ではない。
「あれは……海鳴り」
「おれだけじゃねぇぜ。名を上げた海賊には片っ端から声をかけてやがった。まぁ運が悪いというよりそのせいだろうな」
彼の発言に応えるように別の方向で無数の武器が宙へ浮遊する。
「ほら見ろ。きかん坊が動き出しやがった」
浮遊した金属が一か所へ集まり、大きな拳の形になる。
振り回された腕は怒りを体現するかのように数多の人間を殴り飛ばし、その後も止まらず攻撃を繰り出す。
凄まじい攻撃と騒ぎに注目が集まらぬはずもなかった。
振り返ったキリが見たのは逆立った赤い髪を持つ屈強な男。
数十人という人間が一斉に狩られていた。
ユースタス・〝キャプテン〟・キッドが振るう猛威に、背を取られた海賊たちは為す術もない。
「てめぇらどけェ！　邪魔だァ!!」
頭上から人が降ってくるという光景を生み出しながら、キッドはにやりと笑って悠々と進む。

その歩みを止める者は居ない。背を狙おうとすれば〝殺戮武人〟キラーが動き出し、彼の周囲から脅威を全て排除した。
キッドの目は敵を薙ぎ払いながら駆け回るルフィを捉えており、思わずキリが表情を変える。
「あれは流石にまずいかな……」
「アッパッパッパ！　こりゃもう祭りだな！　金獅子は面白ェことしやがったよ！」
アプーは戦闘に参加する気がないようだ。命令がないせいか、彼の能力が不思議すぎるせいかはわからないが周囲の海賊もルフィたちに気を取られて構う様子がない。
キリは彼に背を向け、キッドを止めるべく動き出す。
現在ルフィは再びステージ近くまで移動し、向かってくる敵を殴り飛ばしている。
彼の下へ向かっているのならキッドは見逃せない。直接ぶつかった場合の勝敗を判断するほど情報を持っていない上に、そのまま行かせるのは癪だろう。
急ぐキリが走るのに対してキッドはそう速くない速度で歩いていた。
紙を操作して二本の剣を持ち、前方へ跳んで左側面から接近した。
そこへ割り込むようにしてキラーが現れる。
視界に飛び込んできた彼は両腕に装備した刃を振るい、応じたキリが剣を振るう。
両者の得物が激突し、硬質な音が響いた。尚も前進したかったが無理やり阻まれて、敢えて退かなかったキリはキラーとの超接近戦を強いられることとなった。
「そこ通してくれるかな。船長が狙われてるんだ」
「それを言うならこちらも同じだ。あれでもうちの船長でな」
剣の間合いより内側へ入ったことで、キリが両腕に紙を巻きつけて硬化し、拳を突き出す。
キラーは一歩も引かずに背を逸らして回避すると、腕に装備した刃を振り回した。

彼らが戦い始めたことでチョッパーが孤立する。それでもしばらくは気付かずに戦っていたが周囲を見回した時、傍に仲間が居ないことに気付いて動きを止めた。
仲間の位置を確認しようとしたのだろう。辺りを観察しようとする。
その隙を狙って殺到する者は多かった。
「ハァ、ハァ、みんなバラバラになっちゃったのか……」
「このバケモンがァ！」
「あっ!? しまった……！」
サーベルを振り上げて向かってくる男たちが三人、すでに背後へ迫っていた。
慌てて振り向くが少し遅い。対処するには距離が近過ぎた。
攻撃を受けることを覚悟した瞬間、横合いから攻撃を受けて彼らが吹き飛ばされる。突然の事態に呆けるチョッパーが見たのは柱のような武器だった。
「失礼、お若い人。勝手ながら助太刀させてもらった」
「え？ 誰だ……？」
チョッパーの体躯でも見上げるほどの巨漢。
〝怪僧〟ウルージが笑顔で彼を見下ろし、再度近付く者を巨大な武器で弾き飛ばした。
「どちらにつくかと問われれば、君らにつくとしようか。金獅子相手にどこまでやれるか」
「味方か？」
「ふふ、今はまだな」
ウルージはちらりとルフィの姿を見て呟く。
「大胆不敵。勇猛果敢。無鉄砲さは目につくが、大した船長だ。興味を惹かれた」
「そうなんだ。ルフィはすげぇんだ」
「おまけにクルーの信頼も厚いときた。やはり中々の逸材」
そう言うとただ興味を持っただけなのか、ウルージはチョッパーを守るように戦う。

戸惑うチョッパーだが彼から敵意を感じず、そのまま背を任せて戦闘を続ける。かなりの強さを誇る彼は安心感を覚えるほどの実力を見せた。
あちこちで戦闘が始まる中、ついにキッドがルフィの下へ到達しようとしていた。
まだ彼には届かない位置でキッドが声を張り上げる。
「麦わらァ！」
「ん？」
ルフィが彼の方を見た瞬間に、キッドの腕に纏われていた金属が発射された。空中を駆け抜けるそれは眼前に居た人間を弾き飛ばして真っすぐ進む。
そしてルフィの真横を通り抜けてから四散した。
邪魔者を弾き飛ばした後、悠々と進んだキッドは足を止めたルフィの前に立つ。
「てめぇを始末できるチャンスが巡ってきて嬉しいぜ。まさかこんなに早く会うとはな」
「あっ、お前、海賊島で会った燃え頭」
「今すぐぶちのめしてやってもいいんだが……それには邪魔が多いな」
派手な上に威力のある技を見せた後でも、敵は怯むことなくさらに向かってくる。
背後から迫った敵に対して、ルフィとキッドは同時に振り返り、自身を狙った男を強烈なパンチで殴り飛ばす。そのまま彼らは背を向け合った。
「こいつらを仕留めた次がてめぇだ。逃げられると思うなよ」
「おれが逃げるかっ。お前こそ逃げんなよ」
ルフィとキッドはそれぞれ別の敵を狙って拳を振るう。
どうやら今すぐ戦う訳ではなかったらしい。
目で見て確認してからキリとキラーは再び刃をぶつけて、鍔迫り合いの状態で互いに顔を近付けると少し驚きながら言葉を交わす。
「どうやら杞憂だったみたいだね」

「とはいえ、一時的なものだ。結局後で同じことが始まる」
「その時はその時さ。きっと今ほど騒がしくない」
刃を滑らせ、互いに駆け出した二人は相手の背後に迫っていた男を斬り伏せる。
そのまま振り返ることなくそれぞれ別の敵を狙い、目につく者を片っ端から倒していった。
明らかに先程より騒がしくなっていることを知って、ゾロもまた一旦足を止めることにした。
敵は多いがそれと同時にこちらへ味方する者が多くなっているらしい。理由はわからないが敵に囲まれたチョッパーをウルージとその部下が護衛しており、ルフィの傍にはキッドの姿が見える。キリとキラーは彼らから少し離れた場所でフォローするように戦っていた。
どんな理由であれ、確実に状況は変化しているようだ。
それを証明するように、ゾロの前に一人の男が放り投げられてきた。
ふと視線を動かせば黒衣に身を包んだ男、X（ディエス）・ドレークが靴音を響かせて歩いてくる。
ゾロは自身に接近した敵を見ずに斬りながら、彼へ尋ねてみた。
「どういう風の吹き回しだ？　味方される理由が思い当たらねぇんだが」
「……こちらはこちらの理由で動いている。礼なら必要ない」
「そうかい。元々礼を言う気もねぇけどな」
答える気がないなら構っている暇はない。ゾロは踵を返した。
その途端、大勢の子供と老人が彼の視界に入る。今までそこには屈強な海賊しか存在しなかったはずだが、隠れることも不可能なほどの人数が居た。しかも不思議なのは困惑か驚愕しているように悲鳴を上げて、動揺した様子で自分の体を確認していることだ。
「あっはっはっは！　傑作ケッサク！」
大声がした方を見れば桃色の長髪の女が古びたテーブルに腰掛け、男勝りな所作で脚を開き、下品な様子で大笑いしていた。これまでの経験からゾロは彼女の仕業だと仮定する。

そもそも、これだけの乱戦で大笑いしてられる女が普通であるはずがない。
どことなく豪快そうな女、ジュエリー・ボニーはゾロの視線に気付くと彼を見る。
にやりと笑い、鋭い視線を受けても全く怯まなかった。
「まったく、めんどくさいことしてくれたぜ。船長がアホなら手下もアホだな。お前ら誰に喧嘩売ったかわかってんのか？」
「あいつも能力者か……」
「まぁいいや。どうせこの話に乗る気はなかったしな」
ボニーがテーブルの上で胡坐をかいて動く気はなさそうだった。
ひとまず敵ではなさそうだと判断してゾロも背を向ける。
どうやらその近辺に妙な人間が集まっていたようで、ドレークが別の場所へ移動して交戦しているのはいいが、また別の方向へ目を向けて固まった。
椅子に座って、カードを使って占いをしている男が居たのである。奇妙なのは地面から生えた藁のような物にカードを置いている点。
乱戦の中で冷静さを崩さないバジル・ホーキンスには、流石にゾロも表情が動いた。
「麦わらのルフィの生存確率……妙だな。８０％もある」
「おい。そんなとこで何やってんだ」
ボニーとドレークの行動が影響したのか、敵の姿が減っていた。少なくとも近くには居ない。
余裕ができたためゾロはホーキンスに話しかける。
近くへ歩いていけば、座っている彼がゾロを見上げ、全く表情を動かさずに呟く。
「お前の船長は運がいいのか、それとも……」
「さあな。悪運はいいみてぇだが。それよりおれの質問に――」
言いかけた時に再び爆音が聞こえた。
思わずそちらを見る。立ち昇る煙の向こうから声が聞こえた。ついでにそう大きくはないとはいえ奇妙な音も聞こえ、周囲の敵が減ったこともあってゾロは注視する。

「馬鹿げたことをする奴が居たもんだぜ。まぁいい。他にもやりようはある」
キュラキュラと音を鳴らす、下半身がキャタピラになったスーツ姿の男が現れ、胸の辺りには窓のような物が均等に複数並んでいる。
カポネ・〝ギャング〟・ベッジは葉巻を吸いつつ、冷たい眼差しでゾロの姿を視認する。
対して、予想だにしない姿を、特に下半身を見たゾロは不服そうに眉間に皺を寄せていた。
「イカレた連中ばかりだってのは本当のようだな。よくも巻き込んでくれたもんだ」
「あぁ？　なんだありゃ……」
「うほぉぉ～!?　すんげぇ～！」
ゾロが呆けている一瞬に離れた場所で戦っていたルフィが飛んできた。
どうやらベッジの姿に惹かれたらしく、見るからに目が輝き、興味津々な様子で彼に近付くとそのキャタピラに注目し、周囲を回りながらじっくり眺める。
ベッジは驚くことこそなくとも迷惑そうにしており、気付かぬルフィは傍を離れない。
「お前それぇ！　ロボなのか!?　かっこいいぃ～！」
「ええい、なんだいきなり！　離れやがれ！」
「おれにもそれくれ！」
「無茶言うな！　こいつはおれの能力だ！　てめぇにできてたまるか！」
「えぇぇ～!?」
「ルフィ、お前何やってんだ」
先程まで真面目に戦っていたはずだが、すっかり戦闘から興味が失せたルフィはしばしベッジのキャタピラを観察して、仲間であるゾロにさえ呆れられていた。
しかしそうなってもおかしくないほど敵の数は減っていたのである。

どうやら、ルフィたち以外にも歯向かう者が居て、しかも強いために士気が低下したらしい。
もはや数え切れないほど大勢の人間があちこちに倒れており、勝敗は決しているも同然。終いには恐れを為して逃げ出す者も出てくる始末。
海賊たちは敵わないと知ってその場を逃げ出し、こぞって狭い階段へ殺到した。
「ひぃぃ～!? こいつら人間じゃねぇ！ バケモンだぁ!?」
「もうやってられっかぁ!? おれは海賊やめるぞ！ こんな奴らに付き合ってられねぇ！」
ドタバタと騒がしく走っていき、あまりの速度で人が居なくなるまで時間はかからなかった。
残ったのはシキの命令に逆らった者と、気絶して地面に転がった者だけ。
戦闘が終了したのを確認して一息ついたキリは、部屋の隅で椅子に座って、逆らってはいるが戦闘にも参加しなかったらしい一味を見つける。
帽子を被ったツナギ姿の二人組と白い熊。彼らを従えるのは危険な目つきの男で、長い刀を傍に置いて椅子に座り、まるで王様のように事の成り行きを見守っていた。
トラファルガー・ローはキリの視線に気付いてわずかに口の端を上げる。
人数が一気に減ったことで彼らに気付くのも当然だった。
ルフィは白熊のベポに気付いて口をあんぐり開け、キリが近付いたことにも気付かない。
「あ。クマだ」
「味方じゃないけど敵でもないって感じかな。それよりルフィ」
「ん？」
「まだ報告を待ってる人が居るみたいだ」
促すとルフィはモニターを見やる。
そこにはまだシキの姿が映されていた。こちら側の映像は見えて

いないがいまだ電伝虫の通信は生きており、戦闘が終わったことには気付いているだろう。いつの間にか彼を紹介した男も姿を消している。今なら邪魔する者は居ない。
ルフィは電伝虫の受話器を拾い上げて口元へ運んだ。
そして恐れることなく口を開く。
「おい。金獅子っていったか」
《そうか。残ったのはてめぇか》
「おれは海賊王になるんだ。邪魔するんならお前もぶっ飛ばしておれたちはこの先の海に進む。芋洗って待っとけ！」
「芋じゃなくて首ね。それじゃただの料理人だから」
キリが口を挟むも相手にはされず。シキは思いのほか上機嫌そうに笑う。
《バカな野郎だ。命が惜しくねぇのか》
「命が惜しくて海賊なんかやれるか」
《ジハハハハ。よぉくわかった……その言葉、忘れるなよ》
「お前こそ忘れんな！」
映像が途切れて、電伝虫の通信も切れる。
ルフィは荒っぽく受話器を置き、何気なく振り返った。
そこに立っていたのはシキに逆らった海賊ばかり。だからといって仲間ではない。むしろ敵対する気満々の人物も混じっていて、決して安全と言える状況ではなかった。
ルフィは気楽に構えていたかもしれないが周りはそうもいかない。
ステージに立つルフィの下へキリ、ゾロ、チョッパーが集まって彼らを見回す。
小さく息を吐いてキリが呟いた。
「さて、と……」
突然のシキの登場、そして敵対。これ自体にはもう驚かない。ルフィと一緒に行動していればいずれこうなることはわかっていた。だから傘下を集めることに拘ったのである。
確かにそうだが、如何せん時期が早過ぎた。
考え込むキリの隣で、船長のルフィは相変わらずペポに気を取られ

ていたようだ。

海賊会談

「金獅子のシキに喧嘩を売ったァ!?」
「嘘でしょ!?」
船に戻ったゾロとチョッパーの説明を聞いて、ウソップとナミが悲鳴を上げた。
金獅子のシキと言えば大人から子供まで世界中の人間が知っているビッグネーム。海賊王と並ぶ伝説の海賊として、おとぎ話のようにその伝記が語られている。
そのシキに喧嘩を売ったと、険しい表情の二人が語った。
一体どうすればそんな展開になるのか。ウソップとナミの混乱は当然だった。
「シキっていやぁあのゴールド・ロジャーと引き分けたっていうライバルの!? なんでそんな奴が居るんだよ! この島に居たのか!?」
「いや、だから映像で……」
「もう終わりよ!? 私たちきっと殺されちゃうんだわ!?」
「そうだ!? だって相手は伝説の海賊なんだぞ! もうだめだぁ~!」
「大丈夫さナミすわぁ~ん! 君はおれが守るから~!」
緊張感のないサンジまで加わっていよいよ船上は騒がしくなった。
腕組みをするゾロは彼らの様子に呆れ、チョッパーは不思議そうな顔をする。
「うるせぇな。今更騒いでもしょうがねぇだろうが」
「そんなにすごいのか? シキって奴」
「らしいな。おれもよく知らねぇ」
「すごいなんてものじゃないよ。もし本物だとすれば生きる伝説だもん」
どうやら、彼らだけ他の面々より緊張感が欠けていたのは、金獅子のシキを理解していなかったからのようだ。くれは以外の人間に接することなく生きてきたチョッパーと、子供の頃から剣の修業に明け暮れたゾロの耳には情報が届かなかったのだろう。

わかっていない顔の二人へシルクが説明する。
海賊に詳しいらしい彼女はよく話を聞いていたようで、すらすらと言葉が出てくる。
「金獅子のシキは少し前の時代にこの海に君臨した大海賊なの。海賊王ゴールド・ロジャーを語る上では白ひげと並んで外せない人物。若い頃から圧倒的な実力と用意周到な計略で瞬く間に名を上げて、白ひげに並ぶか、それ以上の大艦隊を率いた」
「すげーシルク。よく知ってるな」
「マニアなんだろ。海賊の」
「でもまさか生きてたなんて……インペルダウンを脱獄した後行方不明になって、もう二十年くらいは噂を聞かないって話だったよ」
ゾロとチョッパーは顔を見合わせ、映像で見たシキの姿を思い出す。
「あいつ、そんなすげぇ奴だったんだな」
「舵輪がぶっ刺さってたけどな」
「頭に？　だとすれば本物だよ。それ、エッド・ウォーの海戦でめり込んだんだと思う。まだ海賊王になる前のロジャーと痛み分けになったって聞いたから」
意気揚々と語るシルクは不安を抱きながらもどこか興奮した様子だった。
死んだと思われていた伝説の存在を近くに感じ取り、なんとも言えない感覚に体が一瞬とはいえ震えさえした。
そんなシルクの呟きを聞いて、ハッとしたウソップが彼女に振り返る。
「本物だった方が困るだろ！　どうせなら偽物の方が良かった！　伝説の海賊だろ!?　なんでそんな奴に狙われなきゃいけねぇんだよ！」
「せっかく七武海に勝ったのに、どうしてこんなに不幸なの……私が可愛過ぎるから？」
「ナミさん、そう悲観的にならないでくれ。確かに君は女神が逃げ出すほどの美しさと可憐さを併せ持ってるが、断じて君のせいじゃな

い」
「お前ら実は余裕あるだろ！　向こうでやれ！」
目に涙を浮かべるナミにハンカチを差し出して、サンジが優しく微笑む。
そんな二人に思わず大声を出すほどウソップは余裕がなかったようだ。
慌てふためき騒がしいクルーを見てロビンは微笑む。
今まで数多くの組織を見て、時には海賊船に乗ることもあったが、ここまで楽しそうな一味は見たことがない。少なくとも彼女の目には盛り上がっているように映ったのだろう。
彼女が何気なく言った一言をウソップは聞き逃さなかった。
「あなたたち凄いわね。こんな状況でも楽しそうなんだもの」
「これのどこが楽しそうだァ!?　自慢じゃねぇがおれは本気でびびってるぞ！」
「あら、ごめんなさい。てっきり喜んでるのかと」
「落ち着いてよウソップ。もう喧嘩を売った後なら抗議したって仕方ないよ。前向きに受け止めないと。それよりルフィとキリは？」
ウソップを落ち着かせようと声をかけたシルクは、件の二人が居ないことを改めて気にしてゾロとチョッパーへ問いかける。
二人は振り返って島を眺め、呟いたのはゾロだ。
「あいつらなら――」
その頃、島内では。
朽ちてボロボロになった砦の一室、というより四方を壁に囲まれながら天井が無くなって空が見えるという、外とも内とも言える場所だったが、そこに島に残った人間たちが集まっていた。
どこかから無事だったテーブルと椅子を持ってきて、丸いテーブルに沿って円を描いて座る。
九つの椅子に、九人の船長。
その後ろには一人ずつ腹心を置いて、計十八人の人間が居た。
それ以外の人間は皆、己の船へ帰っており、敗北した海賊団ならすでに逃げた。地下で倒れていた者たちもすぐに目を覚まして逃げ出

し、今残っているのは彼らしかいない。
料理も酒もなく向き合う場はひどく緊迫していて空気が重い。
互いに牽制するように視線を鋭くして、今にも始まりそうな戦いに備える。
これは会談である。
それも今後彼らが進む航路を決定するほどの重要な。
この場を設定したのはキリであった。
理由を考えるのは難しくない。なにせつい先程、誰もが驚くほどの大物に出会ったばかり。
そのせいか断る者は誰一人としておらず、全員が大人しく席についた。
「ここへ集まった理由ならもうすでにわかってるとは思う。それに賛同する者、反対する者は様々だろうけど、少なくとも話し合う余地はあるはずだ」
ルフィの傍らに立ったキリが口火を切って話し出す。
重苦しい空気が漂うものの全員が耳を傾けていた。
今の彼は真剣な表情で、ふざけた態度は欠片も見せず、ここが正念場と言いたげな態度で全員の顔を見回す。誰もが真剣にこの場へ臨んでいる。しかし簡単にまとまるとは思えない。
「たった今、ボクらには共通の敵ができた。大海賊〝金獅子のシキ〟だ。情報漏洩も厭わず戦力を掻き集めてたことから考えて、そろそろ動き出す気だろう。シキは計算高い海賊で、計画を遂行するための準備には時間をかけることもある。姿を消してから二十年。これだけの時間をかけたということは、かなり大規模な何かを始めるつもりに違いない」
わかっている者も多いだろうが改めて言葉で説明した。すると不意にキッドがにやりと笑って重い口を開く。
何を言い出すかは理解しているはずなのに、敢えて彼へ続きを促した。
「それで？　一体何をしでかそうってんだ」
「事は簡単だ。さっきの状況を見ても、シキはすでに艦隊レベルの

戦力を持ってるはず。これからさらに増えていくことも考えられる。それに対して、ボクらはまだまだ弱小。四皇に匹敵する海賊に挑むにはあまりにも戦力が頼りない」
そこで、と続けて、キリは九人の船長へ伝えた。
「シキに対抗するため、ここに居る海賊団で同盟を組んではどうか、という提案だ。ここに居るのはシキに歯向かった者のみ。このままじゃどの道奴に狙われる。生き残る術を考えるならボクらと手を組んだ方が――」
「ハッ」
最後まで聞かずに言葉を遮ったのは、凶悪な笑みを浮かべたキッドだった。
腕を組み、背もたれに体重を預けながらいつでも動ける体勢にあり、それはいつでも暴れられるようにとの意思だったに違いない。
言葉を止めたキリを見据えて、キッドは楽しげに言い出す。
「どの口がそう言いやがる。一番信用できねぇのはてめぇだろうが」
「信用されるとは思ってないさ。でも緊急事態だ。今は普通じゃない状況にある」
「海賊の同盟に裏切りはつきものだ。そもそも声をかけてきたのはお前。てめぇが作った同盟を利用し、自分だけ成り上がろうと考えてるとしてもおかしくねぇ」
「アッパッパ！　そりゃ言えてらぁ」
関節が二つある長い腕を動かして、手を叩いて笑うアプーが口を挟む。
彼も同意する様子でキリを見、疑っている様子を隠さない。
「お前らの悪評は広まってるしなぁ。噂じゃクロコダイルに絡んでるのはお前らじゃねぇかって話もある。中でも信用しちゃいけねぇタイプだ」
「噂なんていくらでも作れる。それで怯えてちゃ前に進めないよ？」
「怯えちゃいねぇよ。おれが言いてぇのは」

キッドが右手を胸の前に上げると、周囲の金属がカタカタ揺れ始めた。
「ここでてめぇらを始末した方が後々のためになるだろってことだ」
凶悪な殺気を発することで、彼は明確な敵意をルフィとキリへぶつけた。
元々攻撃的な人物であることは噂されていた。こうなることは想像するのも難しくなく、問題なのは彼が反対した今、誰が敵に、誰が味方になるのかだ。
周囲を観察しながらキリはキッドへ言う。
「シキはそこらの海賊とは違う。動き出せばこの海の状況は一変する。海軍本部や七武海は当然として、四皇まで動き出す事態になるはずだ」
「それがどうした。立ちはだかる野郎はどいつもこいつもぶっ潰す。海賊ならそれが当然だろ。伝説だろうが四皇だろうがそれは同じだ」
「驕りを持つ人間は潰される。この先の海は今までとはレベルが違うんだぞ」
「たとえそうだとしても、てめぇに背を見せるつもりはねぇな」
いつキッドが動き出すのかという緊張感の中。多くは静観し、反論することはない。それはおそらく少なからずはキッドに同意しているということだろう。
楽しげなアプーが口火を切った。
「おれは面白いと思うぜ。確かにシキがこの海を丸ごと支配しちまうのは鬱陶しい」
「なら」
「だが面子は選ばねぇとなぁ。どいつもこいつも信用する気にはならねぇが、中でも面倒なのが雁首揃えてやがるからな」
集まった面子を見回して臆することなく言い切った。
気になったウルージがアプーをちらりと見ながら問いかける。
「では、誰を削る気だ？」

「あーとりあえず今殺気立ってる奴と寝てる奴じゃねぇの？　やべぇ奴には違いねぇからな」
アプーが言ったことでようやくキリはルフィの状態を確認した。
いつの間にか腕組みをしたまま、カクンと首が揺れ、居眠りをしていたようだ。そうなることはキリだけは驚かないものの、周囲はそうではない。
呆れる者、笑う者、逆に大物だと感心する者など様々だ。
椅子にふんぞり返って座り、テーブルに足を上げるボニーは呆れて大笑いする。
マナーのなっていないそんな彼女にも苛立つベッジは険しい表情だ。
「あっはっは！　大したバカ野郎だな。だからって組もうって気にはならねぇけどな」
「フン……例の話題性でどれほどの男かと思えば、腕っ節だけだったか」
不遜な態度で腕組みをするベッジは冷たい声でキリへ言った。
「おれには計画があった。シキの首を取るためのな。傘下として奴の陣営に入り、隙をついて内側からシキのみを仕留める。そうすりゃ組織は崩壊するはずだったが……よくもまぁ邪魔してくれたもんだぜ。全て台無しだ」
「集った面子が悪かったな。麦わらが動かずともキッドが反発していた。お前の計画は奴が居なくとも台無しになっていたよ」
達観した様子でキラーが口を挟む。
ベッジにはベッジなりの計画があっただろうが、居合わせたのがルフィやキッドではその通りに成功するはずもない。冷静に語れる彼はある程度予想していたのだろう。己が船長のキッド、そして以前海賊島で一度見たルフィを漠然と理解している。
本質こそ違えど、二人の性質はよく似ているのだろう。以前ぶつかった時からそんな予感はしていたのだ。それが今回の出来事ではっきりした。
それだけにキラーが注目するのはキリの存在である。

金獅子のシキにも臆することなく牙を剥く。それを異常と呼ばずして何と呼ぶのか。
そんな異常な船長を抱えて、彼は動揺することもなくその場でシキに対抗する術を用意しようとしている。並の精神力ではそんな対処はできない。
実のところを言えば、キラーも同じことを考えていた。
キリが居なければ彼が他の海賊を集め、シキに反抗する勢力を作ろうとしたであろう。
それ故に同じ匂いを感じ、キラーの視線は最もキリを警戒していた。
黙して語らぬ者も居る中で、空気はますます重苦しくなっている。
どうやらこの話に乗ろうという人間は居ないらしい。少なくともキリを信用していない。
海賊同士であるならば仕方ないとはいえ、ここまで危険な空気になるとは。
キラーが言う通り、集った面子が悪かった。
想像よりも説得が難しそうだとキリが思案する。とはいえ、彼らへ声をかけたのはシキに反旗を翻したから。誰でもよかった訳ではない。彼らだからこそ協力する価値がある。
めげずにキリは全員の顔を見回す。
「奴が表舞台に出てくれれば多くの海賊が恭順する。事実、さっきまでこの島に集まってた連中は相手が金獅子のシキだというだけで忠誠を誓った。これから先自分から動き出せば、あんな連中が次から次に現れてくる。膨れ上がった後じゃ対処だって間に合わないんだ」
「ふむ。叩くなら今の内だと?」
「そう簡単に済むか。どうせ今頃は大艦隊が結成されてる。しかもシキは空飛ぶ海賊だ。航海のスピードも並じゃねぇ」
ウルージが好意的な態度で考えるものの、すぐにベッジがその考えを打ち消そうとする。
シキの能力は彼の名声や悪行と共に世界中へ伝えられていた。なにせ彼はその力で数多の海賊や海軍を撃破し、国を落とし、世界中を

恐れさせた。
生きていたのならそれだけでもう遅い。
動き出したのならそれは一方的な蹂躙を始める準備ができたということだ。
今からでは何もかも遅い。だからベッジは内側から崩壊させようと計画していたのだが、今からではそれも不可能だろう。
ステージに立ったあの青年、シキの手の者が冷静に乱闘を見ていたのを知っている。
混乱に乗じて逃げてしまった今、自分たちの情報は全て伝えられているはずだ。
ベッジが考える限り、事態は最悪の展開になりつつある。
このままではシキの一人勝ちということもあり得た。それほどの危険性がある。
それを知ってか知らずか、キリは呑気にも見える言葉を吐いた。
「ボクらが組む理由はそれだけじゃない。言わばシキは最初の標的だ」
「何？　どういうことだ」
「ルフィはいずれ海賊王になる。そのためには新世界に君臨する四皇を倒さなければならない。だけどこのまま進んでも結果は見えてる」
ベッジの問いかけに対し、キリはそんなことを言った。
一瞬で空気が変わる。全員の顔から笑みが消え、彼の姿を凝視した。
「ボクらで四皇を引き摺り落とす。その後、この中から決めればいい。次の王を」
躊躇いもなく言い切った姿に多少は見る目が変わったのか。
この男はイカレている。
それが最初の印象。まだ新世界にも足を踏み入れていない時分から海の皇帝を標的に見据え、彼らを倒すために他の海賊団を利用しようとしている。更にはそれを隠すのではなく本人たちに伝えてしまう胆力。よほどの自信がなければそんなことはしない。

その時、眠っていたはずのルフィが顔を上げた。
腕組みをして目には強い意思を浮かべ、はっきりした口調で告げる。
「そりゃ違うぞキリ。おれがなるんだ」
キッドが思わず歯を鳴らした。
怒りと驚きと歓喜。同じ野望を持つ男に出会い、しかもそいつは彼を笑うどころか、彼を笑わせるほど躊躇わずにその野望を語る。自分の物であるのは当然と言わんばかりに。
今まで彼と同じ野望をそこまで堂々と語る者はルフィ以外に見たことがない。そんな馬鹿が居たことに喜びも感じてしまうが、同時に怒りもあった。
おれ以外がその称号を取れるはずがない。
目つきを鋭くするキッドは今すぐにも動き出そうかと拳を握った。
寸でのところで止めたのはホーキンスの声だった。
いつからか話し合いにも参加せず占いを始めていた彼は最後のカードを置き終わる。
想像していなかった結果なのか、他人にはわからないがその目には多少の驚きがあったらしい。
ルフィの一言で全員が口を閉ざした一瞬。
無感情な目でカードを見つめる彼は冷淡な声で呟いた。
「麦わらのルフィが金獅子のシキに勝つ確率……3%」
ホーキンスはキリを見て尋ねる。
「それでもやる気か？」
「ゼロじゃない。確立ならこれから上げられる」
「そうか。結果は見えているが……少なくとも途中で逃げ出す輩ではなさそうだ」
カードを仕舞いながらホーキンスは口を閉ざす。
キリはそう言うが、やはり周囲の反応は望ましいものではない。半信半疑、彼らを危険視している状況は何も変わっていなかった。
不穏な空気が漂っている。その空気を破壊すべく、キッドはふーっと息を吐いた。

「あぁ、鬱陶しい話だぜ……確かに賛同するとこもある。海賊王の称号を得るには四皇どもをぶちのめす必要があるからな。だが気に入らねぇのはてめぇらが対象外みてぇな口ぶりだ」
言いようのない居心地の悪さを生む空気は、彼によって肌に突き刺さるような危険な物へと変貌していった。それは居合わせた全員が感じている。
キッドが放つ殺気は特定の誰かではなく全員へ向けられている。
まるで狂犬。今にも暴れ出しそうだ。
キラーは一瞬止めるべきかを逡巡したが、これは止められそうにないと判断した。
「この中から次の海賊王を決める……それなら」
右手の指を勢いよく開いたキッドは周囲に散乱していた金属を素早く手元へ引き寄せた。
「ここで決めちまえばいいだろう!!」
椅子を蹴り飛ばして立ち上がると同時、右手に金属を纏って巨大な拳を作る。
全くの同時に、船長の後ろに立っていた副官が身構えていた。
ピストルや剣を手に八人の副官がキッドへ狙いを定め、船長を庇うようにして立つ。タイミングを同じくキラーもキッドを守るように武器を見せ、いつでも戦える体勢にあった。
八人の船長は座ったまま。睨む様子でキッドを眺める。
少なくともこの場では八対一の構図が出来上がった。キッドは気にしていないだろうが、彼を排除しようという意思が統一され、それどころかその後の乱戦まで感じさせる。
確かに一石は投じた。しかしそれは全員の潰し合いに発展しかねない。
それでもキッドは笑みを浮かべて止まる様子がなかった。
しばし睨み合いが続く。
このまま潰し合う以外に道はない。そう思ってしまうほど緊迫した空気だ。
その空気を切り裂いたのはたったの一言だった。

これまで黙り込んでいたローが俯いた状態でぽつりと呟く。小さな声だったがそこに居た全員が耳にして、注目は彼一人に集められる。
「おれは乗るぞ」
それは意外な言葉。
彼の噂を聞いていれば話に乗るとはまず想像しない人物像だろうと考える。
「お前らを信用する気はねぇが、利用はできそうだ」
顔を上げてキッドを見る。その冷たい眼差しが、他人を信用するはずもない。
「気が乗らねぇなら賛同する奴だけ集めりゃいい。おれに異論はねぇぞ。邪魔になるならその都度消せばいいだけの話だ」
にやりと笑って、右手を上げる。
地面へ向けられた掌からはヒュルルッと奇妙な風が生み出される。
それを攻撃の意思と取り、キッドの目付きがさらに凶悪に鋭くなった。
「おれにも目的がある。そのためなら手段は選ばねぇ。おれは麦わら屋につくぞ」
「何か企んでるって顔だよなぁ。てめぇみてぇな野郎が居るから気に食わねぇんだ」
「そりゃこっちも同じだ。てめぇが居ちゃうるさくて敵わねぇ」
「なら消えとくか？」
「消せると思ってんのか」
ローの左手が背後に居るベポへ預けていた刀を取る。
座ったままでもキッドと対峙し、いつでも戦える状態を作り出したらしい。
二人が睨み合って空気が重くなる中。それを良しとしなかったのだろう。唐突にパンっと手を叩いたウルージが自分に注目を集める。
にこやかな笑みを顔に張り付け、語る声は思いのほか穏やか。
彼だけは冷静に場を整えようとする。
「まぁまぁ、そう焦りなさんな。時間はまだある。結論を急ぐ理由

もない」
彼が割り込んだことで剣呑な空気が霧散していく。
ローはすぐに手を下ろし、キッドも流石に気が散ったのか、舌打ちを一つして腕を下ろした。それを確認してから副官たちもようやく警戒を解いて武器を下ろす。
戦闘が始まらなかったのは不幸中の幸い。ぶつかれば誰もがただでは済まなかっただろう。
キリは胸を撫で下ろして、しかし状況は悪いと冷静に判断する。
流石にシキに逆らうような連中をまとめるのは簡単ではない。
少なくとも今は一旦時間を置くべきだと考えた。
同じことを思ったのだろう。ドレークが嘆息する。
今まで口を閉ざしていた彼は冷静に状況を判断すると小さな声で呟いた。
「仕切り直しだな」
彼の一言が全てだった。
一同は一旦解散して時間を置き、再び集まることを決めた。
異論を口にし、この島を去ろうとする者が居なかったのは何かしら思うところがあったからなのであろう。彼らは再び集うため、島内の各地へ散らばる。

Ｂｌａｃｋ　ｏｒ　Ｗｈｉｔｅ

「紙使いだ。危険なのは奴だった」
砂浜に立って海を眺めるキッドの背へキラーが言う。
再度話し合いを行う時のために副官と共に意見を纏めておく。そのための休憩を取っているのだがしばらくの間キッドは口を開こうとはしていなかった。
代わりにというべきか、人の気配が無くなったところでキラーが口を開いたのである。
「聞けば奴らはすでに傘下の海賊を引き連れているらしい。海賊島とついさっき、二度麦わらを見て思ったが奴は今後のためを考えるタイプじゃない。だとすれば、今回の話し合いの場を設けた紙使いが一味のブレーンと見て間違いないだろう」
「ああ……それがどうした？」
「正直に言えば、おれも奴と同じことを考えていた。この先本当にシキに対抗するならおれたちだけでは心許ない。作戦を練って順当に進めるにしても戦力がいる」
キラーは淡々とした口調で語る。それは意見を言うようでも、説得する様子でもあった。
「今日集まった連中と手を組めば相当な戦力になるだろう。確かに手は焼きそうだが利益さえあるなら無駄な衝突を避けられそうにも思う。だが奴らは、麦わらと紙使いだけは嫌な予感がした」
「お前らしくもねぇ。まさかびびってんのか？」
「そうじゃない。よく聞けキッド。お前が海賊王になるための道を歩むなら、奴らは必ず大きな障害となって現れるぞ。潰すなら早いうちにと、頭をよぎった」
真剣な声で伝えられてキッドは思案する。
熱くなりやすいというだけで彼とて状況は理解している。金獅子のシキと戦えるほど己の一味に力あるとは思えず、準備が整っているとは言えない。これから入念な準備が必要だろうとはシキが本物であると認識した瞬間から思っていたことだ。

それなのになぜ拒むような素振りを見せるのか。理由は単純でありながら不可解。ただただ彼らが気に入らないという敵意のみである。
彼らを認めているからこそ排除すべき敵という認識があり、それは簡単には覆らない。
キッドの心情を理解しながらもキラーは進言する。
もはや引き返せないところまで来た。今は利用できる力が必要なのだ。
「同盟の話はおれも賛成だ。だが面子は選ぶべきだろう。気になる連中ばかりだが、麦わらの一味は消した方がいいかもしれん」
「意外だな。お前なら大人しくしろとでも言うかと思った」
「いずれ敵になるというだけじゃない。今回の麦わらの行動から考えれば、どちらにしても足並みを揃えるなんて不可能だ。おれたちが作戦を立てたところで台無しにされるか、或いは出し抜かれる可能性も高い。おまけに紙使いも居れば計画的な犯行もあり得る」
キラーの言葉を受けてキッドはにやりと笑う。
彼の助言はむしろキッドが望んだ形であったらしい。これで思う存分暴れられる。
おそらくキラーもそれを考慮して言っているのであり、一度口にした意見を引っ込めない。
二人がそうして意見をまとめようとしていた時だ。
森の向こうから歩いて現れる二人に気付いた。
笑みを浮かべる巨漢、ウルージと彼の部下が一人、隠れるつもりもなく堂々と現れる。キラーは多少の警戒心を露わにしたがキッドは背を向けたままで振り返ろうともしない。
わざわざ姿を見せたということは理由があるはず。
戦闘ではない。足を止めたウルージが二人へ向けて語りかけた。
「そちらも定めなさったかな？　今後の指針を」
「何の用だ？」
「話し合いを。おそらく意見は同じなようで、鍵は麦わらだろう」
そう言われてようやくキッドが彼の方を見た。

部下の方は戸惑っているようだがウルージは堂々とした態度で立っている。
キッドはウルージを見やり、好戦的な笑顔で彼に向き合う。
「意外だな。てめぇは麦わらに好意的かと思ったが」
「もちろん認めている。だが作戦や同盟といったものには向かないようだ。あの性分では多くの危険を引き寄せ、味方を危険に晒す」
「キッドは違うと？　悪いがこいつもかなり危険な部類だ」
「ふふ、確かに。だが興味はある。麦わらは笑顔で死地に飛び込むが、そちらは少しばかりは自制することができそうだ」
「気に障る野郎だ。今すぐ消してやりてぇがな」
目を鋭くするも笑みは崩さず、キッドはウルージを見据えていた。だがその場では手を出そうとはせずに、いつになく冷静に話そうとしている。
集まった顔ぶれの中で危険視するのは誰か。意見はほとんど同じだったようだ。
本来ならキッドもその一人に数えられるはずなのだが、そこへ現れたウルージは彼の危険性を理解した上で密約を交わそうとしているらしい。
わざわざ姿を見せたということはそれだけで意図が伝わっている。
生き残るためにはどうすべきか。
面子を見渡した結果、彼らは手を組む相手を選別したらしい。
「麦わらが盟主を気取るのは気に入らねぇ」
「おれは紙使いに実権を渡すのはまずいと感じている。従うか従わないかは別にしてだ」
「こちらも同じ意見。彼らを野放しにしておけば、いずれ大きな波乱を生む」
彼らがそうしていた時、さらに森の中から姿を現す人物があった。
振り向く一同を冷静な目で見つめるホーキンスと、彼の副官、ベポと同じく人間サイズで二足歩行の猫、ファウストが後ろに従っている。
現れた時点で彼も同じ意見なのだろうと察した。

キッドはホーキンスを見てにやりと笑う。
「お前も同じか？」
「おれは確率の高い方法を選ぶ」
「おれたちなら確率が高いのか？」
キラーが尋ねるとホーキンスは感情を見せずに淡々と語った。
「あらゆるパターンを占ってみた。その結果、あくまでも個人としてはだ」
「他の方法がありうると？」
「全員が仲良くお手て繋いで歩くってか？　馬鹿馬鹿しい。連中がじっとしてるわけねぇだろ」
言外にホーキンスが促した方法をキッドは一笑に伏して否定する。
それぞれ思想も実力も違う船長が九人。全員が協力するなどあり得ない話だ。彼はそう断じており譲る様子がない。キラーも大部分は賛成していた。
そんな彼らから見て現在目の前に居る二人はまだ利用価値がある方だと判断していたのだろう。決して信用して背中を任せるつもりはなかったが、他に比べればマシだ。
冷静な判断と熱した鉄のような凶暴性を併せ持つキッドを評価したウルージ。
勝率だけを判断基準とし、キッドの人間性に興味がないホーキンス。
彼らも決して普通の海賊だと言えないとはいえ、手を組む価値はありそうだった。
キッドにしてみてば他の誰かでもよかった。
ただこの場においては麦わらのルフィと決着をつけることができるのなら。
まずは麦わら。その次が金獅子。
獲物を定めた彼は楽しそうに笑い、眼光を鋭くする。
負けるつもりなどない。簡単にはいかないだろうとは思うもののそれこそ望むところ。簡単に終わられては困るとすら考えていた。
「邪魔する野郎はぶっ潰す。何か企んでるならその企みごとだ。例

外はねぇ」
どうやらキッドは時を同じくしてグランドライン入りした海賊を前に熱くなっていたようだ。協力よりも戦うことを望んでいるのが良い証明である。
そうと知りながらキラーは今回ばかりは敢えて止めない。
普段キッドを止めることが多い彼でも今回だけは嫌な予感がしていた。
それが何を意味するかまではわからず、キッドの考えに乗る。
標的は決まった。後は行動するだけ。
「本当ならてめぇらもここで消してやりてぇところだが」
「そう言うなキッド。どちらにせよ金獅子に対抗する術は必要になる」
「本当に金獅子に太刀打ちできるかどうか……少なくとも今日、死相は出ていないが」
「ふふ。一時ばかりの共闘となるか、はたまた。どちらにせよこの海は荒れる」
三者三様、決して足並みを揃えた訳ではなく、それぞれ違った表情を見せる。
次の会合が行われるまで一時間。
時が来れば、いずれ状況が変わることは明白であった。

＊

「お前らももうわかってるだろ？　この話し合いで誰がキーマンになるか」
岩の上にしゃがみ込んで語るアプーは意気揚々としていた。
彼が声をかけて集めたのは二人。腕を組んで険しい顔をするベッジと、無表情でアプーを見定めるかのようなドレークだ。それぞれに一人ずつ部下を連れ、警戒しながらも彼の話を聞くためにこの場へ集っていた。
アプーは楽しげに笑みを浮かべている。

「右も左も危ねぇ奴らばかりだが、中でも危ねぇ野郎が居るだろ？」
「てめぇが言えた義理じゃねぇがな」
「アッパッパ。逆に危険じゃねぇ奴がこの島に居るか？」
アプーの言葉にベッジが鼻を鳴らす。
彼が言った通り、この島に残っているのはシキに逆らった者ばかり。危険というなら全員がそうであろう。今やこの島に危険でない者など居なかった。
それを知るアプーの部下は明らかに怯えた表情であった。
シキに歯向かっただけでも大事だというのに、これ以上何が起こるのか気が気でない。
「アプーさんっ。こいつらはやばいですって。黙って島を離れた方がいいんじゃ……」
「黙ってろ。オラッチが上手くやるから」
「あんただから怖いんでしょうが！」
部下の悲鳴も聞かずにアプーは二人へ語りかける。真剣にもふざけているようにも見えた。
「トラファルガーだ。今回集まった中じゃあいつが一番やべぇ。これまでのあいつの経歴から考えて紙使いの提案に乗るわけがねぇんだ」
ベッジはわずかに眉を動かし、ドレークは無表情で受け止める。
確かに違和感はあった。〝死の外科医〟の異名に違いはなく、冷酷で冷血、残忍な海賊だという噂が流れている。少なくとも初対面の海賊を信用するほど不用心ではない。
ではなぜあの発言に繋がったか。
アプーはすでに一つの答えに辿り着いていた。
「何か企んでることは間違いねぇ。ひょっとしたらすでに麦わらと通じてんのかもな。奴らが手を組んで他の連中を一網打尽にしようってんならこの話はわかる」
「最初から罠だったと言いたいのか？」
「だとすりゃ合点がいくだろ。トラファルガーは計画的に名を上げた。紙使いはともかくとして麦わらが作戦を考えるとは思わねぇか

らな」
先程のシキに対する態度を見て思ったのだろう。アプーに迷いはない。
さらに彼は声を潜めて言った。
「しかも、こういう話を知ってるか？　麦わらのバックには〝火拳〟がついてる。つまり行きつく先は〝白ひげ〟の一派だ。利用価値なら十分ある」
「火拳と白ひげ？」
「なんでも義兄弟らしい。なぜ麦わらが金獅子に歯向かったと思う？　そうしても問題ないだけの策か戦力がある、もしくは何も考えねぇバカのどっちかだ。おれは本命は前者だと見るね。後者ならそうなる前に仲間が止めてるはずだ」
「白ひげか……それが本当なら大したタマだが、本当にあり得るのか？」
ベッジは怪訝な顔でアプーを見る。すると目を伏せたドレークが言った。
「おれは後者だと見た。あの行動が計算されたものだとは思えない」
「おれからすりゃどちらでもいい。どの道麦わらに付くのは危ねぇ話だ。奴自身が同盟を作るなんて言い出すとは思えねぇし、この話がまとまったところで同盟を潰すのも奴になる」
「アッパッパ。そりゃ言えてらぁ」
意見の差異はあれど、彼らの結論は同じだ。麦わらのルフィを味方にするのは敵になった場合とは異なる危険を及ぼす。そういった性質をほんの一言の内に見た。
シキに対して逆らったという事実が何よりの証明であり、それ以上は必要ない。
逆らった者は他に居れども、面と向かって彼に対して宣戦布告したのはルフィだけなのだ。
今が重要な決断を迫られている時だとは皆が理解している。
ここで間違えればその後に大きな損失を及ぼす。だから彼らは選

別しなければならない。
誰と組むのが生存率を上げる結果になるのか。
アプーの説得があってか、少なくとも彼らの意見は固まろうとしていたようだ。
考えてみれば危険な海賊ばかりが集まっている。その中でも目につくのが数名居た。
抑えきれない凶悪性と暴力性で知られたキャプテン・キッド。冷酷な性分と計画的な思考が評価されているトラファルガー・ロー。そして話題性と真偽不明の噂で注目を集める麦わらのルフィ。どれを取っても不安は拭いきれない。
たとえ戦力になるとしても、それを覆い隠してしまうほどの不信感があるのは確かだった。
「つまりオラッチの考えをまとめるとこうだ。トラファルガーはすでに麦わらと通じていて、しかも奴を利用しようとしてる。ゆくゆくは白ひげにまで辿り着き、従うとは思わねぇが首を獲るぐらいの野望を持っててもおかしくねぇ」
「おれたちはその踏み台ってことか」
「だとすれば大胆だな。白ひげがそう簡単に堕ちるとは思わないが」
「頭がイカレてやがんのさ。じゃなきゃ海賊なんかやってねぇ」
にやりと笑うアプーは、自身と、目の前に居る二人を含める島内の人間全てに当て嵌めて言う。
そもそも、自ら海賊になるような人間を正常だなんて考えていない。
そこに居る二人でさえシキには従わず、如何なる経緯にせよ自らの意思で敵対する道を選んだ。十分に大胆なことをしでかして、さらに大きな野望を見据えている。
そろそろ意見をまとめようとアプーが尋ねた。
どちらも睨むような目でアプーを眺め、黙り込んで思考を巡らす。
「同盟を組むってアイデア自体は面白いと思うぜ。利点はある。派手に暴れりゃそれだけ注目は集まるだろうしなぁ。だがトラファル

ガーを野放しにしとくのは間違いだ。ついでにキャプテン・キッドがこの話に乗るとは思わねぇ。間違いなく話し合いをぶち壊しに来る。どうも麦わらに敵意満々だったみたいだしな」

アプーもまた野心を持っている。それだけは間違いなく伝わってくる。

「この場で潰しとくべきなんじゃねぇか？　オラッチたちの作戦を邪魔するような連中をよ。別にあいつらじゃなくても役に立つ奴なんざ探せば見つかる」

この場に居る三人が手を組むことが前提とされていることを、誰も指摘しなかった。

言わずともわかっている。全員を敵に回しても得にはならない。信用できる、できないに関わらず同盟は必要なこと。たとえこの場限りになったとしても、この場で死ぬわけにはいかないと全員が考えていた。

細かい話は後回しにする。まずは目の前の大敵であった。

簡単に決断できることではないはずだった。

彼らは口を閉ざして思案する。

沈黙が続いた時、ベッジの背後に控えた長身の男、ヴィトがベッジへ耳打ちした。

長い手を口元へ添え、特徴的な長い舌が垣間見れる一瞬。

彼は賛同する意見を船長へ述べる。

「頭目（ファーザー）。ここはこいつらについた方がいいレロ。確かにトラファルガーとキャプテン・キッドは傍に置いとくには厄介。麦わらにもヤバい噂があるレロ。こいつらも信用ならねぇが、仮に何かあってももしもの時は……」

ベッジは険しい顔を崩そうとはせず、その後も黙ったまま。

ドレークも同様に簡単には口を開こうとしない。

「ドレーク船長……」

部下の声が聞こえていないかの様子でアプーをずっと見つめている。

信用できる相手ではない。そもそもアプー自身も数多の事件を起

こして名を上げた、危険性は広く知れ渡っている海賊。いまだルーキーと呼べる経歴とはいえ油断ならない人物。

果たして、彼と手を組むべきかどうか。

彼らが考えている間、部下が不安そうにしているのにも気付かず、アプーは笑顔だった。

Ｂｌａｃｋ　ｏｒ　Ｗｈｉｔｅ（２）

「どうやらそう簡単にはいかないみたいだ」
森の中に身を潜めて、木を背にして立つキリが深刻な様子で呟いた。
当初から簡単にはまとまらないと思っていた。そう考えれば予想通りとも言えるものの、ここまでこじれるとも思っておらず、最終的には戦闘になる可能性もある。
キリは能天気に過ごしているルフィへ目を向けた。
彼は喋る白熊、ベポに興味津々な様子であった。
不思議そうに彼の毛皮を撫で、迷惑そうな様子も気にせず楽しげに話しかけている。
「お前おもしれぇなぁ～。なんでしゃべるんだ？」
「おれはミンク族だぞ。みんな喋るのくらい当たり前だ」
「ミンク族？　なんだそれ」
「おれたちみたいな種族のことだよ」
「へぇ。しゃべるクマか」
「熊だけじゃなくてもっとたくさん居るよ。猫とか犬とか」
「しゃべるのか？」
「うん。喋る」
「あっひゃっひゃ。おもしろそうだなぁ。お前おれの仲間になれよ」
「ええっ!?　それは無理だ。おれはキャプテンについていくんだから」
話すのは今日が初めてのはずだが、意外に仲が良さそうに話していた。ひとまず彼らのことは心配いらない様子なので少しだけ安堵する。
しかしそれ以上の問題があった。
キリは木に背を預けて立つローを見やり、少し離れた場所に居る彼へ歩み寄る。
「どうなると思う？」

「誰かが仕掛けるか……或いは徒党を組んで襲ってくるか」
「そのどちらかか」
「少なくとも素直に頷くとは思えねぇな」
ローは迷いを見せることなく冷静に言い切った。
これまで互いを敵として見ていた海賊が簡単に手を組むとは思えない。特に今回の面子はあまりにも信用が無さ過ぎる。ローの判断は当然であり、キリも否定はできなかった。
不幸中の幸いはこの場にローが居たこと。彼とは以前から協力関係を築いている。その時にはまさかこんなことになるとは思っていなかったが、今考えてみれば良い判断だっただろう。
もしもここでローが敵に回っていれば事態はさらに過酷だったはず。
とはいえ、まだ信用できない者が多いのは間違いない。決して安全ではなかった。
キリはベポと遊ぶルフィに目を向けて口を閉ざす。
そんな彼へ、目を向けることなくローが尋ねた。
「本気でやる気か？　奴らはお前に従わない」
「シキに喧嘩を売った。もう引き返せない」
「面倒なことを……おれの目的には薄々感付いてるはずだ。なぜ止めなかった」
「どうせ止めたって聞かない人だからね。それに、シキが動けば世界は動く。それくらいの影響力は今もあるはずだ。遅かれ早かれだよ」
「それにしたって準備もできねぇ」
睨むような視線を向けてくるローへキリが笑顔で言う。
「それと、別に従わせるつもりなんてないよ。ただ協力しようってだけだ」
「それが問題なんだ。奴らが協力するとは思えん」
「でも従わせようとするよりは可能性があるはず。まぁ、拗れそうではあるけど」
キリが言い終えたところでルフィが振り返った。

やはり当初から思うところはあったのか、表情は優れない。
嫌悪感を示すほどではないとはいえ、どことなく不服そうにも見える表情で眉をひそめ、困った様子を隠そうともせずに言い出す。
「なぁキリ、おれは別に同盟なんていらねぇぞ」
「そう言うとは思ってたけど、事態はそれほど簡単じゃない。シキを相手にするなら一人でも多くの戦力が必要なんだ。このままじゃあまりにも危険過ぎる」
「巨人のおっさんが居るじゃねぇか」
「全盛期のシキなら巨人が十人居ても一瞬で倒し切った。奴の能力は島を空に浮かべてしまう。本気を出せば、白ひげ同様世界を滅ぼすことだって可能なんだ」
「へぇ～。そんなにすげぇのか」
「事の重大さがわかってるかな？　まぁいいけど」
呑気に考えているルフィを相手にするキリはもはや慣れっこで、別段彼の反応を特別視しようとはしていない。しかしローはそうではなかった。
いつの間にか頭を抱えていた彼にキリが眉を動かす。
あぁ、と気付くまで数秒。普通はそのリアクションこそが正しかった。
「気にしないで。いつもなんだ」
「おい。大丈夫なんだろうな、こいつは」
「やる時はやるよ。でもやらない時は全くやらない」
「組む相手を間違えたか……」
彼らとの同盟を後悔するような一言だった。
緊張感がないルフィを睨みつつ、ローは追求を諦める。
そもそもおかしな奴だと判断していたはずだ。それ故にこれを問題と捉えるのをやめた。
不意にローが視線を外した。
ずいぶん距離を置いた森の向こう、こちらを眺めて立つ二人組を見つける。
「なんだ、やっぱりお前らデキてんじゃねぇか」

「ボニー船長……やっぱりこいつらには近付かない方がいいんじゃ」
島に残った唯一の女海賊、ジュエリー・ボニー。髭を蓄えた太った男を伴ってその場へ現れた。
警戒するローは冷たい眼差しで彼女らを見据える。
想定していない訳ではなかった。島内で会ったならば戦闘か手を組むか、どちらかだろう。ただの世間話のためにわざわざ各地へ散った海賊を探すはずがない。
ローが刀に手をかけようとすると、ボニーが余裕を見せる笑顔で止めた。
「待てよ。ここでやり合う気はねぇからさ」
「信じると思うか？」
「こっちは別にいいんだぜ。方法は他にもありそうだしな」
ボニーがすっと右手を上げた。
掌を彼に見せ、好戦的な笑みを浮かべる。
「私に触れられなきゃいいけどな。なんなら試してみるか？」
眉をぴくりと動かしたローが刀を抜こうとした時、咄嗟にキリが声をかける。
「ロー」
「チッ……利用できると思ってんのか？」
「余地はある。まだゼロじゃない」
ローが刀を下ろした。
それを見てボニーも手を下ろし、ひとまず戦闘は回避される。
警戒心が強いだけでなく、どうやら彼らを受け入れる気のないローに代わり、キリが彼女の方へ一歩進み出た。その時になってようやく交渉の余地があると判断したらしい。
「用件を聞くよ。ここへ来た理由は？」
「別に。ちょっと面白そうかなと思っただけだ」
「協力する気は？」
「お前ら次第だな。悪いが私は金獅子には興味なんかねーよ。目的は別にあるんだ」

キリは真剣な表情で挑むものの、ボニーは余裕のある笑みを崩さなかった。
勝算があるのか、もしくは戦う気がないのか。
彼女の態度に変化はない。
「見返りがあれば期待できるのかな？」
「それでもいいぜ。で、何ができる？」
「情報と戦力なら多少は提供できる。と言ってもそう多くはないけど」
「ハンっ。頼りねぇ連中だなぁ。まぁいいや」
ボニーは近くにあった岩に腰掛けて話す。
「どうせ他の連中も手を組んでるだろうよ。お前ら特に嫌われてそうだもんなぁ。だから敢えて狙い目かと思って来たんだけどな」
「予想はついてた。このままだと戦争になるぞ」
「シキとぶつかる前にか。避けたかった事態だけど」
キリが嘆息する。
簡単にはいかないと知っていたとはいえ、このままでは彼らを呼び止めた甲斐が無い。なんとか策を講じた方がいいかとは思うが、それもまだ思いついてはいない。
とにかく誰もかれもが個性的過ぎる。
一応の協力を取りつけたローでさえボニーを始末しようとした。きっと全員がこうなのだ。
信用にはほど遠く、利益を重視した協定さえ許さない。彼はつい不安を抱く。
少なくともボニーはこちらにつくつもりのようだ。
それが最善であるのか。はたまたここで小さな同盟を作ったことにより混沌となるのか。
味方は多い方がいいはず。そう考えたキリは彼女を拒否しようとはしなかった。
おそらくボニーの想像通り、他の面子が密かに手を組んでいる。
仕掛けるとすれば一番に予想できるのはキッド。次いでアプーかベッジ。

ローはキリが抑えているため一応我慢するつもりではいるのだろう。敵が手を出してこない場合に限るが、それでも状況を整えるには十分だ。
「感謝するよ。味方は多い方がいい」
「つっても、とりあえずだけどな。お前らが役に立たねぇんなら捨てていくだけだ」
「それでもいいさ」
約束は取りつけた。
信用できるかどうかは定かではない。まだ警戒が必要な段階。一応とはいえ味方が増えた。
小さく鼻を鳴らすローが呟く。
「説得は無理だ。こいつにしろ、奴らにしろ」
「ハァ……なんとかするしかない」
キリは思わず俯き、それでも言う。
彼の表情が曇っていることを確認した後、ローは視線を逸らした。
「そろそろ時間だ。作戦は決まったか？」
いつになく考えあぐねるキリは目を閉じる。
頭を働かせ、考え、それでも決定的な答えは出なかった。
彼らを一つにするには絶対的な何かが必要になる。自分たちが何を言ってもおそらく状況は変えられない。今この場所にはその絶対的な何かがない。
頭を振ったキリはルフィを見つめ、眉をひそめた顔で伝えた。
「ルフィ。もしも戦闘になったら、思いっきりやっていい」
「おう。もちろんだ」
それが彼の決断らしい。
ローは何も言わずに視線を落として、ボニーは嘲笑するように鼻を鳴らす。
「なんだ。噂の紙使いも大したことねぇんだな」
「おい、キリを悪く言うなよ。こいつはすげぇんだぞ」
「そのすげぇとこが全然出てねぇみたいだが？」
「そうなのか？」

ルフィが不思議そうにキリを見るものの返す言葉がなく。あいにくと今は彼の信頼に応えられるほどの働きができていない。申し訳なさすらあった。
こうなればぶっつけ本番。
最悪の場合、実力でわからせて話をつける。
それが海賊らしさだとすればそれもいい、と彼は結論付けた。
「時間だ。行こう」
かくして彼らは再び山を登り、集合場所である砦へと集結した。
同じ場所、同じ空間に全員が集まる。
船長が九人。護衛が九人。全部で十八人。
丸いテーブルを囲んで座り、さっきよりも空気は明らかに重々しかった。
誰が話を始めるのか。
肌に突き刺さるような空気が漂って互いにけん制し合うが、彼らを呼び出したということで代表としてキリが喋り始めて先陣を切る。
各々、すでに答えは用意してきたようだ。
さっき集まった時と見るからに表情が違った。
「決を聞こう。同盟に賛成か、それとも反対か」
尋ねたところで沈黙が続く。
誰も黙して語らず。それが奇妙な不気味さを醸し出している。
おそらく誰もが機を窺っている。いつ、どこで言い出すべきか。
このまま何も語らずに終わるのか。そんなことを考え始めた時、やはり動いた。
口を開いたのはキッドだった。
「おれからも提案していいか？」
「どうぞ」
「てめぇの言い分はわかった。だからおれも答えを決めたぞ」
一瞬、爆発的に緊張感が増して、空気が変わった。
「答えは――」
そしてついに動き出す。
キッドがテーブルを下から持ち上げて思い切り投げ飛ばした。

真っすぐ上へ向かい、くるくる回る。
「こういうことだッ!!」
素早く能力を使って金属を腕に纏わせ、拳を繰り出したキッドは落下してくるテーブルを全力で殴り飛ばし、轟音を起こしてバラバラに破壊した。
彼の行動と同時に全員が身構えていた。
キッドの正面に座っていたルフィが素早く拳を伸ばし、キッドの拳にぶつける。
両者の間で空気が爆発するようにパンっと鳴り、弾かれるように腕を引く。
その瞬間、キリが紙を投げてキッドへ突き刺そうとした。
硬化した紙が真っすぐキッドを狙って飛来する。それらを全てキラーが刃で打ち落として、瞬時にキッドの傍で彼を守るために武器を構えて見せた。
それでいて彼はキリに注意を向けていた。
どうやらここで始末するつもりらしい。他の誰よりも優先してキリに刃を向ける。
一瞬の内に数多起こる攻防。
彼らは尚も止まらない。
キッドとルフィ、彼らが同時に前へ踏み出した。
飛び散ったテーブルの残骸が体に当たることも気にならず、思い切り拳を握る。
同時に前へ突き出して、再び二人の拳が正面から激突した。
「うらぁあああああっ!」
「うおおおおおおっ!」
激突の衝撃で再び空気が破裂した。
たった一発だけで強い風が起こって周囲へ駆け抜けていく。同じタイミングで身構えていた面々はその風を浴びながらも素早く周囲を見回す。
誰が味方で、誰が敵だ。
即刻その場で判断をした。だがその中で意外な行動に出たのがボ

ニーだ。
「あっはっは！　やっぱりおっぱじめやがった」
「ボニー船長ォ!?　待ってェ！」
軽快な動きで壊れた砦の壁によじ登り、高い位置から彼らを見下ろす。攻撃のためではない。彼女はその中で唯一観戦することを決めたようだ。
その選択は誰の味方にもならないということに他ならない。
ボニーの行動を確認した一同はそれを考慮して判断する。
「さて、誰が誰についたか……」
大笑いするボニーの行動に全く揺らがず、ローはにやりと笑う。
最初から信用していない。あてにもしていない。だからそれはイレギュラーなどではなかった。
標的にしていいのは誰だと、彼は武器を手にする面々を見回して刀の柄を握る。
嘆息して、ドレークが武器を抜いた。
左右それぞれに異なる得物を持つ。左手には剣、右手には四枚の刃が付いた斧のようなメイス。それらを軽く操って戦闘に参加しようとする。
彼としてはルフィとキッド、どちらが生き残ろうと気にしない。
生き残った方と手を組めればいい。そんな気持ちだった。
前へ踏み込んで攻撃を行おうとする。その時、突如横から視界へ入ってきた石柱。その辺りに倒れていただろうそれで思い切り殴られる。
武器を構えて防御したとはいえ、凄まじい強さで勢いよく吹き飛ばされた。
ドレークは脆くなった壁を破壊して外へ消えていき、石柱を振り回したウルージが笑う。
「おーおー、派手にやりなさる。だが、こちらにも気を配ってもらおうか」
落ちていた巨大な石柱を軽々と持ち上げて、彼はそれを武器にしていた。

見ただけでわかる怪力。見物していたアプーは拍手を送る。
「アッパッパ～！　そりゃいい技だな。シンプルだからこそ強い」
「海鳴り」
「だ～が～、おれが聞いた噂じゃそいつに手を出すのはまずい感じなんだけどなぁ」
アプーが指差した方向を見る。
ウルージは笑みを消さぬまま目を見開いた。
一部が壊れた壁の向こう、禍々しい巨体がウルージを睨んで唸っている。
「元海軍少将、Ｘ（ディエス）・ドレーク。とにかく能力がおもしれェ。アッパ～！」
さらに規模を大きく壁を破壊して巨体が現れた。
突撃してきたのは大きな恐竜。集まった面子の中で最も大きなウルージの体よりも大きく、強靭な脚力で素早く駆け、迷わず頭から突っ込んできた。
驚くウルージは辛うじて防御に間に合うが、頭突きを受けた衝撃で石柱が折れた。
まともに腹へ頭突きを受け、彼は運ばれるようにして逆側の壁へ激突する。
恐竜に変身したのはドレークであった。
彼は鋭い牙をむき出しにして雄々しく吠える。
まさに野生の力。壁に押し付けたウルージの体をさらに押し込み、壁を破壊してその向こうへと消えていく。非常に荒々しくも騒々しい戦いだった。
ホーキンスは彼らの戦闘を冷静に眺めていた。
そんな時に、突如頭上から音楽が聞こえてくる。
見上げれば高所に上ったアプーが自分の体を楽器にして音楽を奏でている。非常に陽気な音で軽快なリズム。いくつもの楽器の音が重なっていた。
何もせずにホーキンスが見上げていると、アプーは急に彼を見下ろす。

「アパパパパッ！　爆（ドーン）!!」
突然、ホーキンスの体が爆発した。
彼の体はゆっくり倒れていき、やがて完全に地面へ背中をつける。
得意気なアプーは大喜びして笑っていた。これで一人倒したと思い込んだのだろう。
「イエーッス！　なんだ楽勝だな！　とりあえずこれで一人――！」
言っている途中でホーキンスがむくりと起き上がった。
平然と立つ彼と視線が合ってアプーは顔色を変える。
「脱落……ってわけじゃなさそうだな」
ホーキンスの腕からわさわさと藁人形が出てくる。それがほとんど全身焦げていて、ただの人形なのだが力尽きるように腕から地面へ落ちた。
時を同じくしてある場所でベッジの部下が悲鳴を上げていた。
その声に気付いてベッジ自身が異常に気付き、ホーキンスの腕から落ちた人形を見る。
「ぎゃあああああっ!?」
「おい、どうした!?　バジル・ホーキンス、まさかてめぇか……！」
「これだけの能力者を相手に無策で挑むほど、おれはお人よしでも馬鹿でもない」
ベッジが怒りの形相を見せる。
危険を感じたアプーは一旦距離を取って彼らから離れた。
その一方、ホーキンスは冷静に剣を抜き、戦闘準備を行う。
「砲撃準備！」
叫ぶと同時にベッジの胸にある砲門が複数開き、内部に居た部下たちが動いて準備をする。
「やはりお前も能力者……」
「おれの部下に手を出してんじゃねぇよ！」
あまりにも小さな大砲の砲弾が放たれた。しかしそれらはベッジの傍を離れると突然本来の大きさに戻り、そのまま軌道を変えることなく前方へ飛ぶ。

避けなかったホーキンスは直撃した。
大きな爆発に包まれるのだが彼自身は全く影響がなかったかのように突っ立ったまま。代わりに藁人形を腕から一つ捨て、同じ頃、アプーの船で一人の男が悲鳴を発して黒焦げになった。
流石に受けてばかりもいられないと思ったのか。ついにホーキンスが動く。
ざわざわと肌が動き出し、藁に覆われていく。
身長や体格も大きくなって、まるで巨大化した藁人形。怪しく光る目がベッジを捉え、その手には指を絡みつけるようにして五寸釘を持っている。
あまりにも怪しげな、化け物のような姿。
流石にベッジも冷や汗を流して驚かずにはいられなかった。
「〝降魔の相〟」
「チッ、なんだこの能力は……！」
「お前には死相が出ていない。どうやら仕留め切るのは不可能なようだ」
ホーキンスが動き出してベッジへ襲い掛かろうとする。
その瞬間、辺りが奇妙な膜で覆われた。
「ＲＯＯＭ」
ある地点を中心に一瞬にして広がった不思議な部屋。
全員が一旦手を止めてそこを見るとローが左手を地面に向けている。
どうやら彼の能力。
ローが右手で刀を振るおうとする姿に誰もが強く警戒した。
「生き残った奴ァ連れてってやる。そうでないなら、死ね」
刀を一閃。
異様な太刀筋で、古びていたとはいえ巨大な砦が一瞬にして両断されてしまった。
砦は轟音を立てて崩壊していく。
それでも彼らは誰一人として潰されてはいなかった。
見事に先程の一撃を回避し、改めて厄介な敵を潰すために戦闘を開

始する。

Ｂｌａｃｋ　ｏｒ　Ｗｈｉｔｅ（３）

瓦礫を跳ね飛ばして起き上がり、両者は即座に駆け出した。
砦の内部でルフィとキッドは同時に拳を繰り出す。
互いの顔にパンチが直撃して、体勢が崩れかけるもすぐさま持ち直し、そのまま退くことなくさらに攻撃を行った。敵のパンチを避けつつ拳を突き出し続ける。
「うおおおおおっ！」
「オラァァァァァッ！」
時折防御しながらも攻撃が止められることは一瞬たりともなかった。どちらもかすり傷はあっても致命的な一撃はないまま、一進一退の攻防を続ける。
その迫力は簡単には近付けないほどで、彼らは孤立した状態で向き合っていた。
互いの頬に拳が突き刺さり、体勢が崩れてもお構いなしに腕を突き出した。
気が逸るのか、攻撃に集中して行われる戦闘は普段よりも荒さが目立つ。それだけにダメージは相当な物だっただろうがそれすらも気にならない。
ルフィとキッドは一歩も退こうとはしなかった。
ルフィの拳がキッドの腹を撃ち抜いた。
次いでキッドの拳がルフィの脇腹を殴りつける。
姿勢が崩れるが地面を削りながらも必死に耐えて敵を睨みつけ、少しも怯まず、もはやほとんど考えずに反射的に動いているのだろう。気付けば前へ踏み込んでいる。
再び至近距離で睨み合った時、攻撃を待つことはなかった。
「んんっ！」
「オオオッ！」
鈍い音が鳴り響き、幾度となく拳が当たる。
腹を打ち、顎をかち上げ、頬を殴り飛ばしてまたぶつかる。屈強な肉体を持つとはいえキッドの体は常人の物。ゴム人間であるルフィ

とは違う。ルフィがパンチによるダメージを受けた様子がない一方で、キッドにはそれなりの影響があったはずだ。
殴った感触も違う。彼の能力を思い出したキッドは自ら後ろへ跳んだ。
以前やり合った時のことを思い出し、にやりと笑う。
今日は本気で始末するつもりだ。手加減する必要などない。
「ハッハァ！　麦わらァ、お前は確かゴムだったな」
「うん」
「だったら――」
掲げた右腕に反応して、周囲に落ちていた金属が一斉に宙へ浮かび上がる。壊れた武器の刃や砕けた石が付いた鉄骨、決して数は多くないがほとんどの物が朽ちて錆びていた。
それらを己の手の如く操り、キッドが吠える。
「引き裂いてやるまでだッ!!」
右腕を勢いよく振ったことで金属が飛来した。
大小様々な金属が高速で向かってくる。身構えたルフィは真剣にその様を眺めていたが一歩も動かない。代わりに頭上から人影が降ってきた。近くで戦闘していたキリだ。
二人の間に割り込むように現れ、紙を束ねて大きな壁を作り、飛んでくる金属を受け止める。
硬化した影響でぶつかった傍から跳ね返されて辺りへ散らばった。
飛来した金属を全て弾いた後、キリと戦っていたキラーが飛び込んでくる。気配を感じたキリは壁にしていた紙を手元へ集め、長い槍へ作り変えた。
互いの武器が激突して甲高い音が鳴る。その場で押し合い、正面から睨み合う形となった。
「おれに背を向け、船長の戦闘に割り込むか。感心しないな」
「ルールなんてあったっけ？」
「いや。だがおれが見逃すと思うなよ」
「キラー！　どけェ！」
キッドの鋭い声が響いて、迷わずキラーはその場から飛び退く。そ

の直後にキッドが大きな鉄板を能力で飛ばし、真っすぐキリの方へ向かってきた。
それを見たキリは何もせずに飛び退く。すると代わりに前へ出たルフィが蹴り飛ばしたのだ。
「おりゃあっ！」
「フン……！」
蹴られた鉄板が地面を転げる頃、二人は再び接近していた。
キッドは右手に自身のナイフを持ち、左手に拳を作ってルフィへ飛びかかった。
対するルフィは伸ばした足をしならせて、鞭のように振り回す。
ルフィの蹴りがキッドの側頭部を捉えた。
蹴られた衝撃で地面を転がり、素早く立ち上がるキッドが表情を歪める。
「前からてめぇが気に入らなかった！　ここで殺れて嬉しいぜ！」
「お前なんかにやられねぇよ！」
激突する二人の傍で、キリとキラーも再度武器を合わせていた。
籠手から出た刃を槍で受け止め、擦り合わせる。
そうしながらキリは苦い顔で思わず笑った。
「まったく……！　どいつもこいつも、人の話を聞かない奴ばっかりだっ」
「お前が言うのか？　シキの勧誘を蹴ったお前らが」
刃を振り払い、キリが後ろへ跳んで距離を取った。見たところキラーは能力者ではなさそうだ。少なくともここまで能力を使っていない。しかしそれでもキリに遅れを取らない実力は彼を驚かせるほどのものだった。
素早く身軽な動きと、標的を確実に仕留めようとする必殺の一撃。
彼の攻撃には明確な殺意があった。キラーという名は伊達ではない。
槍を回してキリが周囲を窺う。
ルフィとキッドは相変わらず大暴れして、周囲の被害も気にせず激しい攻撃を行っている。森や砦の外側が破壊されているが全く気に

していない。
妙な気配を感じた途端に眉間に皺を寄せた。
バキバキと木々を薙ぎ倒して、巨体が飛び出してくる。
彼らが居る場所へ現れたのは恐竜になったドレークだった。地面を滑るように転がって、即座に立ち上がると自身がやってきた方向に目を向ける。
そこに立っていたのはウルージであった。しかし先程とは様子が違う。服が肌蹴て上半身だけ裸になり、筋肉は異様なほど膨れ上がって、体自体が巨大化していたようだ。
恐竜に変身したドレークと同等の体長、或いはその倍はあったかもしれない。見た目が違えば肌に感じる迫力も段違いだった。
一旦手を止めた四人とドレークを見回した彼は、笑顔を全く崩さずに呟く。
「おーおー、派手にやりなさる。流石は悪名高いルーキーたち」
「でっけー!? なんだあのおっさん!」
「あれも能力者か……」
「ではそろそろ、こちらも本気で行かせてもらおう」
身構えただけで相当な迫力。そちらに反応せずにはいられない。
拳を握ってウルージが駆け出した。
即座に全員が反応するも、特に目立ったのがルフィだ。彼はキッドではなくウルージに向かって走り出し、正面からの戦闘に臨んだのである。
キリはやれやれと言いたげな顔で見送るが、キッドは苛立ちを露わに能力を使用した。
「ゴムゴムのォ～!」
「麦わらァ! てめぇ!」
「フフッ、麦わらの人。やはり無謀か?」
ウルージが右腕を振り上げた。
同時に接近してくるルフィが後方に腕を伸ばし、引き寄せる反動を利用して拳を突き出す。
体格差はあまりにも大きい。しかし臆することなく、繰り出された

パンチが激突した。
「ブレットォ!!」
「因果晒し!!」
接触した瞬間に強い衝撃波が巻き起こる。
威力はほぼ互角といったところか。だが体のサイズが違うことが影響して、ウルージがわずかに後ろへ押されただけなのに対し、ルフィは激しく吹き飛ばされた。
「うわぁ!?」
「むぅ……！　思いのほかやる」
倒れなかったウルージに対してルフィは勢いよくごろごろ転がる。
彼が膝をついて起き上がった時、すでに背後にはキッドが迫っていた。
能力で集めた金属を右腕に纏って巨大な拳を握り、振り上げた状態で向かってくる。気配に気付いて振り向くルフィは、その巨大な影の下に居た。
「てめぇの相手はこのおれだッ！」
「またあれか！」
以前にも見た巨大な腕。サイズだけでなく金属の寄せ集めであり、ただの打撃ではなく肌を引き裂く性質まで持っている。ルフィにとっては天敵だ。
素早く判断した彼は後ろに跳んで回避し、距離を取った。
キッドの一撃は地面を激しく叩きつけ、地面を大きく陥没させる。
帽子を押さえながら着地したルフィはキリの隣へ移動した。
同じ方向を見て警戒しながら、今更になって告げる。
「キリ！　恐竜がいる！」
「X（ディエス）・ドレークだよ。あれも能力者だ」
「あれも？　すっげーなぁ！」
純粋に感心しているらしいルフィの隣でキリは嘆息する。
悠長なことを言っていられる状況ではなさそうだ。おそらく何らかの能力だろうが、ルフィを吹き飛ばすほどの一撃。ウルージもまた警戒すべき危険人物である。

さらに恐竜に変身するドレーク、金属を操るキッド、能力は無さそうだがキラーも居る。
個人の戦闘力ではバロックワークスを凌ぐ。油断すれば一瞬でやられるだろう。
腕を上げたキッドが睨んだのはルフィではなくウルージだった。
乱入してきた彼を邪魔な存在だと感じたのだろう。怒気を隠さず殺気をぶつける。ウルージの表情はそれでも変わらなかった。
「怪僧ォ！　おれの邪魔をするんじゃねぇよ！　殺されてぇのかッ!!」
「おーおー。味方になったはずだが、やはり狂犬の噂は伊達ではない」
「あれはおれの獲物だ！」
キッドが猛然と駆け出した。
反射的にルフィとキリが身構えて迎え撃とうとする。
「またあいつか」
「流石に話を聞くタイプじゃないね、あれは」
接近してくるキッドに目を向けていたものの、咄嗟に目を見開いたキリが武器を掲げた。
いつの間にか横から接近していたキラーが刃を振るい、辛うじて槍で受け止める。やはり速い。乱戦の中で気配を殺し、一瞬にして近付いてきた。
武器を払って距離を置こうとするがさらに向かってくる。仕方なくキリは後ろへ跳んだ。
「お前の相手はおれがする」
「嬉しくない申し出だねっ。もうほっといてほしいんだけど！」
槍を分解して二本の剣に作り変えた。
素早く移動しながらも刃を交える二人は己の船長から遠ざかり、戦闘を邪魔しないようにしながらも状況を確認しつつ、それでいて戦闘にも集中する。彼らは確かに船長から離れた。だが何かあればすぐ駆けつけられるようにとの意思もあったようだ。
木の幹や枝を蹴って跳びながら、二人は跳び回りながら刃をぶつけ

る。
場所が変わったことで先程まで戦っていたウルージとドレークが動きを止めた。
すでに乱戦の様相を見せている。もはや一対一のつもりでいては命取りだ。
その証拠と言わんばかりに、彼らは目撃した。
巨大な拳で殴りかかるキッドの眼前から、突如ルフィの姿が消えたのである。
移動したようには見えなかった一瞬の内に彼の姿が消え、代わりにそこにあった丸太が拳で破壊されていて、殴った本人でさえ驚いていた。
「アァ!? どこへ……!」
「麦わら屋」
「お?」
視線を走らせると砦の壁を背にしてルフィと共にローが立っていた。
刀を抜いて俯き、そこの誰を気にすることもなくルフィへ声をかけている。
その姿を見たキッドは忌々しそうに、だが好戦的に笑みを見せた。
「紙屋の件があってお前と手を組むつもりだった。だが忘れるな」
ローが右手を上げて、ルフィの首の前に刀が添えられる。
「少なくともおれにはお前を殺すことに躊躇いがない。こんなところで潰れるようなら助ける価値もねぇ。おれが味方になったとは思うなよ」
「知るか。おれはおれのやりたいようにやるだけだ」
「せいぜい後ろに気をつけるんだな」
刀を下ろしてローがキッドに鋭い視線を送る。
ようやく彼の様子を見た。まだ襲ってこないがいつ動いてもおかしくない姿勢。戦うことなく並んで立った二人を見てさらに戦意は増していた。
明らかに空気が刺々しくなっている。

あまりの迫力にドレークやウルージも反応せずにはいられない。
「てめぇらが何をしようが無駄だ。むしろ有難いぜ。ここでまとめて始末できるからなァ」
「うるせぇ！　お前に負けるかぁ！」
「調子に乗るなよ、ユースタス屋。それはこっちのセリフだ」
ローが左手を前に伸ばし、掌を上に向けて指を開いた。
すでに攻撃の準備は整っていた。彼が能力で作り上げた青い半透明のドームは、彼が完全に支配執刀する手術室。その中に居る者はすでに彼の獲物であり、彼の患者であった。
手術室の中で彼は絶対的な王者。できないことなどありはしない。
「お前が邪魔だ。ここで消せて有難い」
「やってみろッ!!」
吠えたキッドが飛び出した。
凄まじい力で地面を蹴りつけ、まるで弾丸の如く前へ進む。金属を集めた巨大な右腕は持ち上げるだけで威風堂々としており、脅威に感じられる。
ローは慌てず指を振った。
身じろぎ一つせずほんの些細な動作。それで景色が変わる。
突如、キッドの足元が隆起し、尖った岩が彼を突き刺そうと現れる。瞬時に気付いた彼は慌てることもなく跳んで回避した。だが攻撃はそれだけで終わらない。
ありとあらゆる場所から同じく岩が隆起して、轟音を奏でながら周囲の景色が変わっていく。
バリッ、と音が鳴るほど歯を食いしばり、キッドが腕を振り下ろした。
巨大な腕で地面を殴りつけて隆起した岩を消し飛ばす。
たった一撃で地形を変えるほどの威力だった。砕けた欠片が宙を舞い、視界は最悪。その中でもキッドは敵を睨みつけて逃がさない。
彼が着地して足に力を入れ、駆け出そうとした時だ。
先にルフィが飛び込んできて拳を繰り出した。
「ピストル！」

反射的に金属を纏っていない左腕で受け止める。鋭い痛みと衝撃が走って表情が歪み、キッドの視線が彼を捉えた。
やはりどちらも気に入らない。
優先順位などない。消すなら二人纏めてだ。
攻撃を終えたルフィはさらに接近しようとする。
その行動に虚を突かれたローは口を開けたまま呆けていて、彼の背を見て思わず言った。
「おい麦わら屋、そいつはおれがやる。邪魔をするな」
「何言ってんだ！　こいつはおれがぶっ飛ばすんだ！　お前こそ邪魔すんな！」
ピクリと眉が動いた。
目付きが変わり、あまりにも冷たいその眼差しは一切の感情を捨てて前を見る。
どうやら今、標的は増えようとしていたようだ。
「チッ。言うこと聞くはずもねぇか」
抜き身の長刀を構えて、彼は能力を利用した一撃を放とうとしていた。
「さっきも言ったぞ。邪魔するんなら容赦なく消す。いいからそこをどけ――」
ローが何かに気付いて視線の先を変えた。
瞬間、大爆発が起こる。
彼が立っていた場所は爆炎に包まれ、それによって生じた煙が辺りを漂い、近くにあった草や木材の破片に火が点いた。
砦の一部である石柱の上でしゃがんでいたアプーは、その様を興味深そうに見ていた。
自身の能力を使った奇襲だが想像以上の結果だったようだ。
「おー……こりゃすげぇ。瞬間移動か」
感心した様子で呟く。そして彼は自分の右側へ顔を向けた。
少し距離を置いて隣に立った石柱の上、無傷のローが立っていたのだ。爆発に巻き込まれた様子はどこにも確認できず、さっきと何も変わらぬ姿でアプーを見ている。

にやりと笑って、しゃがんだまま戦う姿勢も見せずにアプーが言った。
「おもしれぇ能力だなぁ。それどこでも使えんのか？」
「お前に教える義理はねぇ」
冷たい声で簡潔に答えるとローは素早く刀を振るった。
上から下へ真っすぐ振り下ろして、刃が届かぬその位置から一歩も動かず攻撃する。しかしなんとも言い難い危険を感じていたアプーは横へ跳ぶことで回避行動を取った。その行動は正解だったようで、明らかに刃が届いていない石柱が真っ二つに両断される。
落下しながら口笛を吹いた。
着地してすぐにアプーは再び跳んで回避する。ローがさらに何度か刀を振っていたのだ。
「おっかねぇな！　このドームがお前の能力ってわけか！」
「お前の能力は音だな。もう一度やれるもんならやってみろ」
「そうかい？　じゃあ遠慮なく！」
体が楽器のように変身し、笛になった腕を吹こうと口を近付けた瞬間、ローが指を振った。
「タクト」
その動きに合わせて彼が切った石柱の一部が宙を飛ぶ。
回避するため跳び回り、空中に居たアプーは体を動かすことができず、目を見開いた次の瞬間には瓦礫に激突して弾き飛ばされていた。
「ぐはぁ⁉　そんなのもありか！」
ローが刀を振り下ろそうとする。距離があっても彼を分解することは難しくない。アプーが地面に落ちた時にはすでに腕が動いていた。
それを阻止するかの如く、砲弾が飛んできた。
腕を止めたローは指を伸ばし、軽く振ることでその砲弾の狙いを逸らす。
どうやら森の向こうからやってきたらしい。キュラキュラと騒がしい音がしていた。
姿を現したのはベッジである。ただしその姿はいくらか変わって

いて、足の代わりに戦車のようなキャタピラを使って移動していた。
「キャッスルタンク！」
「すっげー!?　なんだあれ！」
「余所見をするとはいい度胸だなァ！」
キッドと戦闘するルフィが楽しそうな声を出したことも影響して、周辺に居た者は当然反応してその姿を見た。
何らかの能力を使った姿なのだろう。想像するのは難しくない。
異様な姿で乱入したベッジは体中の砲門を開く。
シロシロの実で自らの体内を要塞と化した、通称〝城人間〟。彼の体内には部下である人間が大勢存在しており、彼らが大砲の準備をして攻撃を行う。
放たれた砲弾は初めは小さく、ベッジの体からいくらか離れると元の大きさに戻って飛来した。
砲弾は四方八方へ放たれていた。
闇雲にではない。そこに居た全員を狙って攻撃しているのである。
「全員吹き飛ばしてやれェ！」
「了解です！　頭目（ファーザー）！」
「撃てェ!!」
雨あられと無数の砲弾が次々撃ち出された。
戦場は混乱し、ベッジを中心にあちこちへ吐き出される砲弾に対処するため、戦闘を中断せずにはいられない。一人残らず行動は早かった。
中でもローの能力はこういった乱戦に秀でていた。
左手の指を動かす彼はそれだけで自分に向かってくる砲弾を操る。
「好都合だ。タクト」
真っすぐに飛んでいた砲弾が急に動きを変えて、縦横無尽に動き回る。
それらは比較的近い場所に居たアプー、或いは彼が敵として認識しているルフィやキッドに降り注いだ。ただ大砲から発射されただけなら回避も簡単だが、ローが操るそれは物が違う。直線的ではなく変則的な軌道を見て、当然回避するための行動があった。

ルフィは大きく息を吸って腹を膨らませ、キッドは接近する砲弾に掌を向ける。
「ゴムゴムの風船！」
「邪魔だァ！　反発（リペル）！」
ルフィはゴムの腹で、キッドは磁力を操って砲弾を跳ね返し、またしても不規則な軌道で四方八方へ飛び散っていく。もはや回避も難しいほどの荒れ模様だった。
一方でアプーは長い腕を振りながら走っていた。
能力を使おうとはせず、巧みに避けながらではあるが厳しい表情でベッジに叫ぶ。
「おいおい！　てめぇおれたちを裏切る気か!?」
「裏切る？　バカ言うんじゃねぇよ。生き残った奴と組めばいい話さ」
「ちくしょう！　これだから過激派は信用できねぇ！」
至る所へ着弾した砲弾は次から次に爆発する。
木々を薙ぎ倒し、砦に穴を開け、ただ立っていることすら難しい状況下。しかしこの状況で倒れた者は一人として居ない。
正面から飛来した砲弾を素手で掴んだウルージはベッジに目を向ける。
キャタピラで爆走しながらの無差別攻撃。ここが町だったならば地獄絵図だろう。誰も居ない島ですらこれほどの被害をもたらすのだ。
もう少し理性的な海賊かと思っていたが想像以上に荒っぽい。彼に対する認識を改める。
「まさかこんな戦法に出るとは。これではやり合っている暇はなさそうだな、赤旗の人」
次いで目を向けた先、ドレークが自ら能力を解いて人間の姿に戻ろうとしていた。
狙いを定めた精密射撃ではなく、所構わず行う無差別攻撃。これでは体の大きい恐竜であった方がおそらく不利。そう判断したのであろう。元の姿に戻ったドレークは苦々しい顔で上機嫌に走るベッジ

の後ろ姿を眺めた。
「甘く見ていた……〝ギャング〟・ベッジ」
「せいぜい踊れよてめぇら！　内臓をぶちまけたくなきゃな！」
ドレークとウルージも慌ただしく動き、飛んでくる砲弾をとにかく回避する。
戦場は混沌としていた。あちこちで轟音が鳴りやまず、足を止めた瞬間に死が近付く。今やバカ正直に向かい合っている暇すらない。
尚もベッジは爆走しながら砲弾を乱射し続け、周囲への攻撃と島の破壊を続けた。
戦いを続ける余裕こそなくなったが、どことなく嬉しそうな笑顔でルフィが跳び回っている。
キリはそんな彼の下へ駆けつけ、共に避けながらルフィを見た。
「おお～！　なんだあのおっさん！　あの足ぃ！　かっこいい～！」
「そんなこと言ってる場合じゃないから。能力のお披露目会じゃないんだよ」
木の幹を蹴って地面に着地するとベッジの様子を窺う。ルフィは能天気なことを言っているが滅茶苦茶な攻撃は戦況を混乱させるという意味があった。確かに砲弾を受けて倒れた者は居ないとはいえ、あれがあったことで彼らの目付きが変わっている。
嫌な予想が頭をよぎった頃、唐突にキリが背後へ振り向いた。
「藁備手刀（わらびでとう）」
ルフィを狙った剣を紙の剣で受け止め、気配を殺して現れた人影を確認する。
奇妙な剣だ。藁を編んだかのような刀身でありながら、硬化した紙の剣とかち合ってキンっと硬い音を奏で、尚且つそれでも止まらない。刀身は止めたはずだが、剣先だけがぐにゃりと曲がって伸びるようにルフィの後頭部を狙った。
咄嗟のことで反応できなかったキリは思わず叫ぶ。
ひとまずキリに任せたとはいえ、攻撃にはルフィも気付いていたらしく、即座に回避される。

「ルフィ！」
「んっ」
首を捻ったことで藁の剣先は彼の頬を掠めて通り過ぎる。
二人はすぐに動き出してその場を離れた。
幽鬼の如く生気のない姿で立っていたのはホーキンスだった。奇妙に動く藁の剣を右手に持ち、殺意を感じない、しかし感情を見せない冷たい目でルフィを見ている。
乱戦の中にあって突然の奇襲。二人は当然戦闘のために身構える。
「あっちもこっちも忙しい」
「こいつも変な奴だなー。あの剣なんだ？」
「麦わらのルフィ……お前に興味がある」
ぽつりと呟かれた言葉に二人は疑問を持った。しかしホーキンスは多くを語らない。
攻撃をしてきたことは事実であり、二人は警戒を解かなかったが、それ以上の攻撃をしようとしないのは立っている姿を見ただけでも明らか。
その時、ルフィはホーキンスの背後に立つ人影に気を取られる。
「あ。猫」
「興味があるって？　話を聞く気になってくれたのかな？」
「判断はまだ済んでいない。少なくともこの状況を終えるまでは、味方ではない」
ルフィがファウストという猫のような人物に注目する一方、ホーキンスはカードを取り出す。
「その男、何度占っても死亡率が０％だ」
「しぶとい人だからね」
「お前は一体、何なんだ？」
ホーキンスがじっとルフィを見つめて疑問を口にした頃。すでにベッジの攻撃は終わっていた。
能力の使用をやめて本来の足で立った彼は辺りの海賊たちを見回す。
すでに火は点けた。これで様子見などする者は居ないだろう。

そろそろ本気でぶつかる頃合いである。
「フン、目付きが変わりやがったか。ヴィト、ゴッティ、出ろ」
ベッジの体内から二人の人間が現れて瞬時に武器を構えた。
ひょろりと細身で長身、長い舌と大きな手が特徴的な男、ヴィトが拳銃を抜く。
大柄な体を持つ気性が荒らそうな男、ゴッティは右腕代わりのガトリング砲を構えた。
「てめぇらの首は利用できる。使えねぇ奴から脱落していけ」
体内で部下が大砲の準備を進めているため、ベッジ自身も攻撃態勢だった。
ヴィトとゴッティと共に敵となる者は殲滅する心積もりである。
それを察知してか。或いは関係なかったのだろうか。
他にも即時的な決着を望む者は居た。
刀を鞘に納めたローはいまだに手術室を広げたままであり、いつでも戦闘に参加できる。それでいて両手を動かす彼はドームの内部に居る者全員へ攻撃を仕掛けるつもりであった。
彼の下にバック転をしながらペポが近付いてくる。
今まで他の海賊団の副官と戦っていた彼は、ローの傍に立ってようやく安堵した様子だ。
「アイ！　アイ！　アイ～！　キャプテン、平気!?」
「ああ。そろそろいいだろう」
鋭い眼光を光らせたローは、ペポがぞっとするほど冷たい声で短く伝える。
「もう十分だ」
本気だ。本気で彼らを消すつもりだ。
そう思ったペポはごくりと喉を鳴らした。
彼とは長い付き合いになるが、実のところ本気で戦えばどれほど強いのか、右腕であるペポですら正しく判断できていない。どんな敵もローが本気になるほどの実力を持っていなかったからだ。
それだけにローが本気で戦うならば、楽しみである一方恐ろしくもある。

ベポは反射的にローの後ろへ隠れるように身を寄せた。
同じ頃、キラーは自身の前に立つキッドの背を見て判断した。
ローの様子が変わったことには気付いている。しかし、それはこちらも同じこと。
もう彼らは生きて帰れない。
敢えて止めようとしなかったキラーは冷静に状況を見ていた。
「キラー……流石におれアブチギレたぜ」
キッドがそっと右腕を掲げる。
腕を伸ばして、天に掌を向けると、周辺にある全ての金属が空へ舞い上がった。
全てが彼の得物。全て彼の支配下にある。
「皆殺しだッ。どいつもこいつも、このふざけた連中は生かして帰さねぇ……！」
「ああ。わかっている」
普段ならばいざ知らず、今回ばかりは否定することなくキラーは身構えた。
最初から思っていたことだ。少しだけとはいえ手合わせをしてわかった。ここに集まった連中はいずれ必ず邪魔になる。生かしておいて得はない。
好戦的なコンビはそこに立つ全員を標的と定めたようだ。
空気が変わる。重々しくなる。
それを感じないほど彼らは穏やかに海を渡ってきたのではない。
いつしか全員が目の色を変えていた。まるでここが海賊王を決める一戦だというかのように、誰一人として退くつもりがなく、持てる力を全て見せようとしている。
ルフィもキリも、ドレークやウルージ、アプーとホーキンス、一人として欠けていない。
たった今から決戦が始まる。
そう思っていたはずだ。しかし、結局それは始まることはなかった。
突如空に浮かんでいた金属が落ちた。一つ残らず地面に落ちる。

しかし攻撃のための動きは何一つとして見られず、ただ持ち上げてその場へ落としただけだ。
異変を感じ取ったキラーはすぐさま隣を見る。
何らかの異常があったという考えは正しい。見れば彼は、子供の姿になっていたのである。
「キッド……!? お前、それは――」
「なんだァ、こりゃ……!」
慌てて辺りを見回せば、他も変わらなかったようだ。
船員は覗いて、船長だけが子供になっている。彼らも突然の事態に驚愕しており、何が起きたのか理解できていない。
異変を知るため、何ができるのか。思考する前に答えはやってきた。
彼らから少し離れた位置。木の枝の上に座った女がけらけら笑っていたのだ。
「あっはっはっは! こりゃいいや」
「ジュエリー・ボニー……! てめぇの仕業かッ!!」
キッドの怒声がきっかけとなって全員の視線がそちらに向いた。
見ればボニーとその部下だけが平然としており、驚愕している彼らを笑ってもいる。となればこの状況が彼女によって起こされたことは間違いない。
戦闘力を削がれた形の船長たちはともかく、変化がなかった部下たちは彼女らに武器を向ける。
そんな緊迫した場面でボニーは余裕綽々という顔だった。
「落ち着けよ。別にあたしはお前らの内誰が死のうが興味ねぇけどな。手を組んで楽できるならそれに越したことはねぇと思っただけさ」
「クソがッ。さっさと戻しやがれ!」
「口のきき方がなってねぇなぁ。もう一回ガキからやり直したいのかよ」
彼女の能力で子供にされてしまったと考察する以上、ボニーは圧倒的な優位にある。

へらへら笑って言う顔を見てキッドは強く歯を食いしばった。
能力を使えば戦えなくはないだろう。だが体が子供のままではあまりにも不利。この状況を冷静に判断できないほど、彼の頭脳は子供ではない。
状況が停滞しかけた時、これを好機と見たキリが口を開く。
彼の隣に居るルフィは子供になったことではしゃいでいたが一切気にせず、子供の姿になってしまった船長たちを見て説得を始める。
「戦闘はここまでだ。確かにボクらは足並みを揃えるような仲良しじゃない。だけどお互いに利用価値があることはこれでわかったはずだ」
流石に状況を見たのか、それとも興が削がれたせいか、彼らは黙って耳を傾けた。
自信がある訳ではない。しかしキリは躊躇わずに言葉を吐き出す。
「いずれ敵同士になることもあるだろう。だからってここで潰し合えば必ず疲弊する。それじゃ得にはならない。シキが動いた今なら尚更だ」
「そーそー。最初の目的を忘れんなよ」
「すでに今、ボクらはシキと敵対した。いつか伝説の海賊と戦うのは確実。誰かがシキを止めてくれるのを待ってたんじゃ遅いんだ。自らシキを討ち取った方がずっと良い」
キリは一人一人の顔を見ながら熱心に言う。
ボニーが味方していたのも影響していたのだろう。彼らは冷静に話を聞いた。
その上で、自身にとっての利害を考慮し、あくまでも冷静に判断しようとしている。
「このメンバーでまずはシキを叩く。そしてその次は四皇だ。覇権を争うのはその後でいい」
話を聞いて判断した結果、最初にキラーが籠手の中に刃を仕舞った。
それを見たキッドが眉を動かす。
「キラー、お前……」

「呑み込む訳じゃない。仕切り直しだ。どうせこの面子で協力関係を結ぶなら、いくつか決めておくべき事柄がある」
キラーはキリの方へ仮面を向け、決して心を許していない声色で端的に告げた。
「明日、もう一度会談を開く。最終的な判断はそこでだ」
「……わかった。それでいい」
二人の会話が終わったのを見計らって、パチンと指が鳴らされた。
子供に戻っていた船長たちが一瞬にして元の姿に戻る。まるで何事もなかったかのようで、この状況ではそれが最も奇妙な能力だと思えるだろう。
ルフィが元に戻ったのを確認してからキリがボニーを見る。
彼女はにやりと笑っていた。
「一つ貸しだな」
「そうだね。覚えとくよ」
少なくとも本気で殺し合う事態は免れた。彼女の乱入がなければ大惨事になっていただろう。
首の皮一枚で繋がった。
勝負は明日。今度こそ答えが出るはずだとキリが表情を曇らせる。
「いやーおもしろかった。変な能力持ってる奴ばっかりだなー」
「君は心底楽しそうでいいね」
様々な経験をして楽しげなルフィが上機嫌に笑う。
キリはそんな彼を見て溜息をついた。
「そんなことねぇよ。おれもわかってるぞ。要するに明日も話し合いだろ？」
「まぁね。あんまり気は進まないかもしれないけど」
「いいよ。おもしろそうだし」
彼はあくまでも楽観的に考えていたようだ。言い換えればそれは興味がないとも言える。
この場に集まった危険な海賊たちを前にして、或いは伝説と称された海賊の復活を目撃して、今までと何ら変わらない態度で居られる。彼の方が異常だと思わずにはいられない。しかしキリもすでにそん

な彼に慣れっこだった。
部下と共に険しい顔をする他の船長とは明確な違いがあって、彼らだけはもう笑顔だ。
「クマと猫が居るんだよ。何なんだろうなあいつら」
「いつか出会えるよ、そういう種族に。この海に居るのは間違いないんだからさ」
「そうだな。ミンクとかっていうの仲間にしよう」
「いいけど、うちにはもうチョッパーが居るよ？」
「お前アホだなーキリ。チョッパーはトナカイでミンクじゃねぇだろ」
「つまりミンク族が欲しいわけだね」
「そういうわけだ」
「細かいんだか大雑把なんだか。まぁ、いずれ出会った時にね」
ハートの海賊団のベポ、並びにホーキンス海賊団のファウストを見たことで出た話題なのは明らかである。この状況でそんな話をしているのは彼ら以外に居ない。
そんな姿を見るからこそ不安になるのだ。
麦わらと手を組んでいいものか。この場でそう思う者は至って冷静な判断力を持っていた。

牙を剥く者

「あっ」
島の様子を双眼鏡で見ていたチョッパーが声を出した。
甲板に居た船員が振り返り、彼の方を見る。何か動きがあったと気付いたのだろう。
島の方を眺めたままチョッパーは嬉しそうに笑みを浮かべる。
「ルフィたちだ！」
「帰ってきたのか！　無事か!?　あいつらは！」
「うーん、多分怪我はしてないと思うけど……」
小舟に乗ってメリー号へ近付いてくる。おそらく他の船長も同じだろう。ふと双眼鏡を動かしたチョッパーは遠くに見える帆船にも小舟が向かっているのを確認した。
「何があったのかな……」
「まさかほんとに同盟組むなんて言わねぇだろうな。信用なんてできねぇぞ」
心配そうなウソップが思わず呟く。不安から冷や汗を掻いていた。
疑問を持ったチョッパーは双眼鏡を下ろして彼に振り返る。
すぐ傍に来ていたウソップは不思議そうな顔をするチョッパーの顔を覗き込み、まるで自分が見てきたかのように、彼の質問に答えた。
「なんでそんなに嫌がるんだ？　同盟って他の海賊と協力することだろ？　それっていいことなんじゃないのか？」
「そんな簡単なもんじゃねぇんだ。海賊同士の同盟ってのは裏切りがつきものなんだよ。最初から裏切るために同盟を組むようなもんなんだからな」
「どうして裏切るんだ？　力を合わせた方が強いんだろ？」
「そりゃ自分だけおいしい想いしたいからに決まってんだろ。同盟組んだ相手を利用して、自分は疲れずに利益だけもらおうって寸法だ。海賊ってのはそういうもんなんだよ」
「そうなのか……なんかイメージと違うな」
チョッパーは少し気落ちした顔で呟いた。ウソップはそんな彼の

頭にぽんと手を置く。
「海賊をヒーローだなんて思うなよ。基本的に自分勝手な奴が海賊になるんだ」
「でもルフィは違うよ」
「あいつこそ自分勝手の極みだろ。お前を誘った時のセリフ忘れたのかよ」
そう言われてチョッパーは少し考える。
ルフィに誘われた時。言葉にするのも難しい、心から嬉しかった瞬間だ。
思い返してみて改めてわかった。やはりルフィは違う。そう判断したらしい。
「うん。でもやっぱりルフィは違うよ」
「はぁ～……まぁお前がそう思うんならそれでいいけどな」
少し離れて二人の会話を聞いていて、しかし他の面々は参加しようとはしなかった。
気になることは一つ。
海賊同盟は締結したか否か。
それによって今後の彼らの航路が変わる可能性があり、それだけでなく、ウソップが言った通り裏切りについても考慮しておかねばならない。決して安心できる状況ではなかった。
特に心配そうだったのがナミだ。
我慢していても溜息が出てしまい、彼女が俯く度にサンジがナミを気にかける。
「はぁ……」
「大丈夫かいナミさん？　何か気分が落ち着く温かい飲み物でも用意しようか」
「ううん、大丈夫……ほんと、どうなってるのかしら。私たちの旅は」
ナミが頬に手を当てて俯いてしまった。いよいよ本格的に落ち込んでしまったらしい。
傍に居たサンジはもちろん、隣に立っていたシルクも彼女を心配し

て、そっと背に手を触れる。怖がりだと自称する彼女だ。不安も大きいに違いないとわかっていた。
「心配いらないよ。ルフィは強いし、キリも居るから」
「そういうことじゃないのよ。グランドラインに入って早々七武海に狙われるし、やっとそれが終わったと思えば今度は伝説の海賊？どうかしてるわ……呪われてるのかも、私たち」
「の、呪いだなんて、そんな」
「落ち込まないでくれナミさん。たとえ呪われていたとしても、その呪いが羨み、悔しがるほどに笑顔の君は美しい」
「サンジ。そういうことじゃないよ」
シルクにぴしゃりと言われてサンジは口を噤んだ。こういう場合は彼女に任せておけばいいという信頼があってのことだった。そうでなくても彼はいつも通りでさほど不安に思っていない。ナミの気持ちを本当の意味で理解しているとは言い難かった。
その点、シルクはナミとの距離が近く、思考や人となりを深く理解している。
仲間ではあっても男と女という違いは明確にあったはずだ。
シルクはナミを落ち着かせようと声をかける。
穏やかな笑みを浮かべて、まるで子供に言い聞かせるような、温かく優しい声色であった。
「確かにいきなりでびっくりしたけど、バロックワークスの時だって私たちが勝ったでしょ？　大変だったけど何もできないわけじゃなかった。ちゃんと準備すれば大丈夫」
「そう……そうね。まだ何も始まってないし。落ち込んでもいられないわよね」
「だけど金獅子となれば話は別ね。影響力で言えばクロコダイルの数倍。なにせ彼は知らない者は居ない生きる伝説。対面すれば八つ裂きにされるのかしら」
腕組みをして冷静な面持ちでロビンが呟いた。彼女はクロコダイルの元側近にして、組織の全貌を知っていた人物。そんな人間がシキの方が上と明言している。

その言葉を聞いてナミとウソップの顔が青ざめた。
二人の不安を感じ取ってシルクがロビンへむっとした顔を見せる。
「ロビン。不安がらせるようなこと言っちゃだめだよ」
「フフッ、ごめんなさい。つい反応が面白くて」
「これ……実は全部嘘だったとかねぇのかなぁ。本当は金獅子なんて居なかったって」
「無理に決まってんでしょ。キリはともかくルフィが嘘つけるわけないし」
「そうだよなぁ……あいつほんとに嘘下手だからなぁ」
ウソップとナミが揃って溜息をつき、肩を落とした。
シルクが苦笑して励ますものの、くすくす笑うロビンが時折不吉なことを言って邪魔するため、あまり効果は期待できなさそうだ。
短くなった煙草を携帯灰皿で押し潰して、サンジは思案する。
本音を言えば彼は金獅子の名を聞いても怯えていない。名前ならば聞いたことがある。だがそれで怯えているなら海賊になっていないし、荒っぽい海上レストランで鍛えた料理の腕と足技には絶対の自信がある。たとえ相手が誰でも負ける気はしない。
彼が怯えるならばそれは、目の前で女性に泣かれた時だ。女の涙にはめっぽう弱い。
言い換えればそれ以外の場面において、彼は恐怖で動けなくなることなどない。
ルフィたちが到着するまで、シルクたちが話を続けている。
その間、実際に金獅子を見たというゾロは腕組みをして立ったまま、目を閉じていた。
眠っている訳ではないのはわかる。珍しく今日は瞑想か何かでもしているらしい。興味が無さそうな目でちらりと彼を見てから、視線を外してサンジが呟いた。
「しかし実際どうなんだ。金獅子ってのは本当に居るのか？」
「あ？」
「もう何年も前に姿を消した海賊だろ。今更復活なんて話があるか？」

「なんだ。びびってんのか？」
ゾロの一言にサンジは一旦口を閉じ、彼を見ずに答えた。
「アホか。ただの見間違いじゃねぇかってだけの話だ。てめぇの目は節穴だからな」
「女しか見えねぇアホのお前より見えてる。一緒にすんな」
「よーしわかった。金獅子の前にてめぇを蹴り飛ばしてやる。覚悟はできてるよなぁ？」
「まったくめんどくせぇな。今日は腰抜けしか切ってねぇってのにまた腰抜けを切らなきゃいけねぇのか。とんだ災難だな」
口を開けば喧嘩をする二人である。彼らは無言でかまいたちを発生させたシルクによって吹き飛ばされて甲板を転がる。もはや何も言わないほど慣れてしまって、不思議と彼らもそれ以上言い合いをしようとはしなかった。
やがて小舟に乗った二人がメリー号へ到着した。
甲板に飛び乗ったルフィは開口一番、大声でサンジを呼ぶ。
「腹減ったぁ！　サンジィ！　メシィ！」
「それからかよ!?　その前に言うことあるだろお前！」
「何が？」
「もうちょっと待て。もう少ししたらおやつを出してやる」
「そんなこと言ってる場合でもねぇ!?」
驚愕するウソップとは対照的に、あくまでも普段通りのルフィは不思議そうな顔をする。
共にやってくるキリの顔を見る限り、良い結果ではなかったらしいと、傍から見ていたシルクは気付いた。しかしウソップは全く緊張感のないルフィに呆れていて気付かない。
それもまたいつも通りに、まずはルフィへの抗議から始まったようだ。
「何がってお前、金獅子が復活したって話だっただろ！　本当なのか!?」
「ああ。ちゃんと喧嘩売っといたぞ」
「余計なことを～!?」

「だってよ、あいつ海を支配するとか言ってやがったんだぞ。おかしいじゃねぇか。海賊は自由なのによぉ」
「おかしいのはお前だぁー!!」
「ん？」
ウソップの絶叫が響き渡る。
その後も彼は金獅子の危険性や伝説を教えて、その相手に宣戦布告したという事実がどれほど危険かを訴え続けたのだが、終ぞルフィに響くことはなかった。
怯えているウソップの声を耳にしながら、先にナミが覚悟を決める。
逃げ腰になっていても仕方ない。どうせ状況は動き続けている。
彼女が望むにせよ、望まぬにせよ、彼らが止まることはあり得ないのだ。
腹を決めたナミがキリに尋ねた。
「それで、どうだったの？　他の一味との話し合いは」
彼女に目を向けたキリは気の抜けた顔で肩をすくめる。
「まぁそりゃ拗れるよね」
「ちょっと……何よそのやる気の無い顔。あんたが海賊同盟結ぶって言い出したんでしょ？」
「しょうがないよね。海賊だもの」
「ひょっとしなくてもふざけてるわね」
どうやら重度のストレスによって妙なスイッチが入ったらしい。いつにも増してやる気に欠けた顔を見せるキリは、ルフィに負けず劣らずで何も考えようとしていなかった。
一体島の中で何があったのか。
とにかく話が拗れたことだけは伝わり、作戦が失敗したことだけは理解できる。
「キリがおかしくなったわ」
「嫌なことでもあったのかな？　思った通りにいかなかったみたいだし」
「金獅子……今から謝れば許してくれるかしら」

「そ、それはどうかなぁ。シキの性格的にそれは無理だと思うけど……」
「やっぱりそうよね。はぁ……」
ルフィは戦闘こそ任せられるがそれ以外はトラブルを起こす引き金。
信じていたキリでさえああだ。
状況は最悪だと察知してナミは頭を抱えてしまう。現時点ですでに生きた心地がしない。彼女を気遣うシルクだが、残念ながらかける言葉が見つからなかった。
彼の様子を見ていたゾロは呆れた顔ながら、それだけではないだろうと質問する。如何に失敗したとはいえただで起きる男だとは思っていない。
見るからに気が抜けて早々に座りこむキリを見下ろすようにして言った。
「失敗かどうかは知らねぇが、次はどうする。おれたちはどこに向かうんだ？」
「まだ出航しないよ。明日も話し合いだから」
「まだ話すのか」
「話さないとね～、あとで大変だよ。いつ戦争になるかわからないんだから」
「戦争って、そんなすごい話なのか？」
驚いた顔で思わずチョッパーが聞いた。いつの間にか近くに来ていたようである。
キリは彼を抱きしめると力無く横になってしまう。
「そりゃすごい話さ。だって金獅子だもん。しょうがないよね」
「そうかー。金獅子だからか」
「お前、何をどう話せばそんな態度になるんだ？」
悲嘆に暮れるウソップの横でルフィはからから笑っており、キリはチョッパーを抱いて驚くほどにだらだらしている。こんな二人が船のトップであるのか。
ゾロは思わず眉間の辺りを指で揉み、目の前の現実を受け止めよう

としていた。
「こいつらだけ残したのは失敗だったか……」
「ウフフ。楽しい一味ね」
ゾロはふと気になった。
金獅子の名を聞いてもまるで恐れず、意にも介さず、ロビンはにこにこ笑っている。彼女の余裕はどこから来るのか。その二人、或いは一味を信用してのこととは思えないが、こうまで表情を変えないと何かおかしいと感じてしまう。
彼女に振り向くゾロは幾分厳しい表情だった。
「なに笑ってやがる……」
「あら？　気に障ったなら謝るわ」
「別にそういう意味じゃねぇが、お前はなんとも思ってねぇらしいな。金獅子のことも、海賊同盟のことも」
「そうね。あなたたちの判断に従うつもりよ」
「どういうつもりだ？」
ゾロの厳しい眼差しを受けて、くすりと微笑むロビンはやはり余裕を持っていた。
「そのままの意味だけど」
「何も裏はねぇと？」
「ええ。あなたたちを裏切る利点なんてない」
貼り付けられた笑顔で、やはり心の内が読めない。
他のクルーは安心していてもゾロは彼女が傍に居る状況に安心できなかった。
「もし私があなたたちを売るつもりなら、とっくにキリが私を消してる。それくらいのことをする子だと思ってるけど」
「あれを見てそう言えんのか？」
ゾロが顎で示すと、ロビンは床に寝転がっているキリとチョッパーを見た。
目を細めて微笑み、彼女はひどく嬉しそうにする。
「いい顔ね。組織に居た頃とは大違い」
「そんなことを聞きてぇわけじゃねぇが……まぁいい」

追求は諦めたようだ。
信用できないが、今すぐ追い出そうというつもりもない。もし何か行動があればと考えているだけで彼女のことを心底憎んでいる訳ではないのだ。
言葉を呑み込んだゾロは再度キリに向き直る。
信用しているがこういう奴も居る。いつまでも寝かせておく訳にはいかないだろう。
「で？　もう算段はついてんのか」
「いやー何も」
「おい……」
「難しいんだよ。みんな自分勝手でさ。全員がルフィだと考えてみてよ」
厳しい顔のゾロだったが、想像してみた結果、躊躇わずに答えを出す。
「あぁ、そりゃ無理だな」
「右も左も雁字搦めで、動きにくいったらありゃしない。自由が欲しいなー」
ぶつぶつ文句を言いながら寝返りを打ち、背を向けてしまった。どうやら重傷らしい。普段の生活でルフィに慣れていても、彼のような身勝手さを持つ他人では事情が違ったようだ。
ゾロが振り返ると仲間たちが一所に集まっている。
寝転がるキリに捕まったチョッパー、彼らと共に休み出したルフィを除いて揃っていた。
現状を見る限り、安心できるはずがない。
頼みのキリがおかしくなっている今、彼らも頭を働かせる必要があった。
そう思うくらいには危機感を持っていたのだろう。まず最初にナミが口火を切る。
「とにかく、明日も同盟のための話し合いがあるみたいだけど大丈夫かしら。上手くいったからと言って安全じゃないし。どうすればいいの？」

「そうだ！　あのエースとサボがルフィのアニキだって話じゃねぇか！　協力してもらえるように頼もう！　そっちの方がずっと安心できる！」
名案を閃いたとばかりにウソップが提案した。しかしそれを聞いてシルクが顔を曇らせる。
実現すればこれ以上ないほど有難い話だが、相手が相手。たとえルフィの義兄弟だからといってそこまでの協力が得られるのか。
確信を持てない彼女は否定的だった。
「確かにエースは白ひげ海賊団の一員。サボも革命軍って話だけど、エースは忙しそうだし、革命軍が協力してくれるとは思わないよ」
「だからって海賊も同じだろ。しかもキリの様子を見る限りじゃ明らかに断ってきてるぜ」
「うーん、いくら二人が協力的でも、傘下の海賊でもないし、わざわざ私たちのために動くとは思えないなぁ」
「ルフィの性格上、傘下になるなんて絶対言わないしね」
ウソップとナミが同時に溜息をつく。
考えても考えても行く道は暗い。藁にも縋りたい想いだった。
彼らの焦燥感を見てサンジが口を開いた。
「伝説の海賊ともなりゃあ、戦力も相当なもんなんだろうな。流石に今回ばっかりはおれたちだけじゃ無理があるか。おまけにそのクラスなら世界政府や海軍も黙っちゃいねぇ」
「おれたちが直接戦えるかも運次第ってとこか。できれば先に探し当ててぇが」
「そういうことを言ってんじゃねぇよおれたちはっ!?　できれば戦いたくねぇっつってんだ！」
奇妙な危機感を覚えたらしいゾロに、ウソップは叫ばずにはいられなかった。戦いたくない彼の主張と真逆を行く、戦うつもりでの話し合いへの参加。これではまるで話が違う。ほんの二言を聞いてぞっとしてしまったほどだ。
騒がしいウソップを気にすることなく、周囲を見回したサンジが締めくくる。

「とはいえ、まだキリの話し合いも終わってねぇようだ。おれたちが結論を急いでも、どうせ明日の結果を待つ必要がある。それまでは考えても無駄な徒労だな」
「そうかもしれないね」
「任せたくないけど……仕方ないわね」
「明日は誰かついてった方がいいんじゃないか？　あいつ、あんな調子だぞ」
ウソップが寝転がったままのキリを見て心配していた。
その時、彼の傍に座ったルフィがさっきより幾分真面目な顔で話しかけていた。
「キリ、やっぱり同盟やるのか？　無理ならおれはいいぞ。別に欲しかったわけじゃねぇし」
「うーん……そりゃあった方がいいさ。金獅子とやり合う気なら」
キリはルフィの顔を見てやる気が感じられない声で尋ねる。
「ルフィ、尻尾巻いて逃げてくれる？」
「だめだ。おれはあいつに勝ちてぇんだよ」
「そうだよね。じゃあ同盟は必要かなー」
抱かれたままのチョッパーは二人の会話を聞くことに専念していた。
別に目的があった訳ではない。なんとなくそうしていようと思っていただけのことだ。しかしそれが功を奏したのか、彼とルフィだけがそれを聞く。
「一応種は蒔いた。あとはホーキンスがどう動くかだ」
キリの声は一瞬だけ真剣になり、そしてすぐにだらけてしまった。

＊

ぷわん、ぷわん、と奇妙な足音が鳴っていた。
靴自体が鳴っているのか、原因はわからないが少なくとも彼が歩くことによって変な音が鳴る。歩く度に必ずだ。その理由を知ろうとする者は不思議と存在しなかった。誰でも最初は疑問を持つものの、

慣れてしまうとそういうものなのだろうと納得してしまうからだ。
その音は広大な一室へとやってきた。
巨大な帆船、その内部。仰々しい機械が多数置かれている通称〝気象予報室〟。今後の天候を計算すべく大勢の航海士が機械に向き合っており、どこか慌ただしい様相を感じる。
部屋に入ってきた男、ピエロのような外見をした人物に気付いて視線を向けた。
海賊大親分、〝金獅子のシキ〟である。
自身の右腕とも称すべき男が来たことでにやりと笑みを浮かべた。
「Ｄｒ．インディゴ。航路を変える。一つやりたいことが増えてな」
シキがＤｒ．インディゴと呼んだ男はぴたりと止まり、両手を動かし始める。どうやらジェスチャーで何かを伝えようとしているらしい。
じっと眺めていたものの、理解できなかったシキは眉間に皺を寄せる。
「あ？」
「シキの親分」
「喋れんのかよっ!?」
強めにツッコミを入れた後、彼らは息を合わせてポーズを決めた。
「ハイッ！」
「いや……えっと」
強制的に見せつけられることになった部下たちはひたすら困惑していたようだ。
気を取り直して椅子に座ったシキは、Ｄｒ．インディゴの質問を聞く。
先程の言葉が気になったのだろう。ついさっきまで研究室に籠っていて事情を知らない彼の質問は至極もっともだった。
「航路を変えるって、また急になぜ？　確か挨拶に出向くはずでは？」
「挨拶はするさ。ただ相手が増えた」

「とすると、ひょっとして白ひげに？」
「違うな。おれに楯突こうっていうガキどもにだ。どうやらおれの誘いを蹴ったばかりか、おれの首を取るつもりらしい」
「へぇ。それはそれは、命知らずなことで」
コミカルな様子はどこへやら。
怪しく笑ったシキは恐ろしい迫力を醸し出す。部下たちですらぞっとするその様子の変化を、Ｄｒ．インディゴは平然と眺めていた。
「ガキどもに教えてやろうと思ってな。誰がこの海の支配者なのかを」
「では、えーっと、どこへ？」
「奴らが集まっている島だ。まだ遠くへは行っていないだろう」
シキの言葉にあぁと呟いたＤｒ．インディゴは手をぽんと叩く。
「戦闘ですか？」
「当然だ」
そう言ったシキの笑みは深まるばかり。
Ｄｒ．インディゴは激しい戦闘になるだろうと予想し、何を想うでもなく平然と受け入れた。
大事の前の小事。彼の口振りからしてそれほど大変な事態ではない。ちょっと散歩に出かけるかのような言葉にしか感じなかった。ということはつまり大事な用ではないのだろう。
どうせすぐ終わる。
シキが自ら動くつもりでいるのなら尚更。
納得したＤｒ．インディゴはうんうんと頷いていた。

海賊会談再び

時間が経過して日が落ち、朝が来て、再び日が昇った後に彼らは再び島内へ集まった。

昨日と同じ砦に集まり、この場で会談を開く。しかし昨日の戦闘があったことで砦はさらにボロボロになっており、場所こそ昨日と同じだがもはや部屋とは呼べない状態で、テーブルは壊れ、壁は吹き飛び、椅子も壊れて座る場所がない。

一同は壁の残骸や辛うじて無事だった木箱、或いは自分で持ってきた椅子など、それぞれが自分の判断で座っていた。

当然と言えば当然、先日とは様子が違う。形は歪で間隔は広いが一応円を描いている。

散々話が拗れて乱闘まであった後だ。今日の空気は異様に重い。

それでも集まったからには黙っている訳にもいかず、キリが話を切り出した。

「一夜経った。みんなそれぞれ意見をまとめてきたとは思うけど」

集まった面々の顔を見渡す。

重苦しい緊張感に包まれていた。沈黙は重く、一言発することすら重労働になる環境。彼らを見ているだけで味方でないことは伝わってくる。

皆、この会談が戦いだと思って挑んでいるのだ。

この場における一挙手一投足が勝利に、或いは敗北に繋がる。そんな意思を感じた。

「改めて提案する。ここに集った九人で海賊同盟の結成を。賛同する者は？」

問いかけてしばらくは様子を窺っているようであった。

彼らは沈黙し、見るからにキリを、その場に居る海賊を信用していない顔で言葉を噤んだ。しかしある時になって急に手を上げる者が現れる。

最も長い腕を持つアプーだ。にやりと笑ってそこにある空気をぶち壊す。

「オラッチは乗るぜ。同盟に参加だ」
まさかの反応であった。他人を疑っていた彼が一番に参加を主張するのは違和感がある。その反応があるだけで何か企んでいるのではと疑ってしまうほどだ。
そういった反応も考慮した上でか、手を下ろしたアプーは語り出す。
「そりゃ今でもおめぇらのことは信用しちゃいねぇさ。だが興味がある。おめぇらと同盟を組んでこの先の海を進むとどうなるのか。ちょっとばかし確かめたくてね」
「ちょ、アプーさん!? あんた昨日船じゃ話に乗らないって……!」
「そう言わねぇとおめぇらうるせぇだろ」
「そりゃうるさくなりますよ! 興味あるからって、あんたそんな理由で……!?」
驚いているのは部下も同じ、というより彼の方が大きいらしい。
どうやら船に帰ってからの一味同士の話し合いとは意見が違ったようだが、キリにとっては好都合であると判断され、彼ら二人の言い合いを止める者は居ない。
敵対してもおかしくなかったアプーの行動はバランスを崩す要因となるだろう。
そう判断した直後には、まるで主導権を握ろうとするかのようにキラーが口を開いた。
「おれからもいいか」
「どうぞ」
「おれたちは同盟に参加することを快く思っていない。だが無暗に突き放すことはやめた。条件次第では参加してもいいと思っているつもりだ」
「条件ね……いいよ。聞こう」
そういった要求は予想できなかった訳ではない。むしろ多くの者が予想できていただろう。
腕組みをして沈黙し、葉巻を銜えて静観するベッジは心中で思う。
（やはり動いたか。本命は紙使いと殺戮武人、次点で海鳴り、大穴が

赤旗と呼んでたが……この同盟を支配するつもりか）
金獅子のシキに逆らった時点で、この場に残ったのは海賊の中でも厄介な者ばかり。たとえ転んだとしてもただで起き上がるはずがない。
昨日の顛末があって去らなかったことから、何かしらの思惑があるのは当然。
ドレーク、ウルージ、ボニーもまたそれぞれにキラーの提案について思案する。
（同盟自体に利用価値はある。だが不安要素は多い。自分たちが動かしやすくする気か）
（とはいえ、ここに居るのは一癖も二癖もある者ばかり。果たして従うかどうか）
（従うわけねぇよなー。あんだけ殴り合っといて）
傍目には静観の姿勢であったが彼らも状況を判断し、行動するつもりだ。
あくまでも基準は自分にあり、協力するつもりはない。信頼するには彼らは危険過ぎて、たとえ多くの時間を共有したとしても疑念は尽きない。いずれ裏切る時のために信頼を得ようと嘘をついている可能性があるからだ。
当然、キッドやキラーが彼らを信用していないのは明らか。だからこそ彼らを威嚇し、尚且つ自分たちが行動しやすいようにと提案している。
その本心に、彼らとの協力を望む考えがあるとは思えなかった。
キリはそれでもキラーの提案を拒もうとはしておらず、落ち着いた面持ちで彼の言葉を待ち、その上で話を進めようとしている。
キラーは周囲の空気を感じながら発言する。
慈悲の心はない。徹底的に冷徹に、淡々とした口調だった。
「おれが提案するのは同盟を形作る上で必要なことだ。一つ、海賊行為によって得た富は公平に分配する。二つ、それぞれのナワバリには干渉しない。三つ、同盟の長たる〝海賊長〟を定める」
あまりにも行儀が良い言葉。

凶暴として知られたキャプテン・キッドの一味らしくない。富の分配、ナワバリへの不干渉、むしろ彼らが嫌がりそうなものだ。
三つ目の海賊長に関する発言については理解できる。要するに他人に従えられたくないという意思が顕著に現れていた。やはり自分たちこそが従える立場だという主張に他ならない。キッドをその海賊長とやらに据える気なのだ。
「四つ、同盟への裏切りが発覚した場合、総員でこれの討伐に当たる」
そこまで聞いてベッジが眉間に皺を作った。
表情は険しくなり、キラーの言動の意味を悟ったようだ。
（おれたちを狩る大義名分。こいつには初めから協力する気なんざねぇ。隠そうともしてねぇ）
同じくアプーは険しい表情になり、睨むでもなくキラーの姿を注視していた。
（面の皮の厚い野郎だぜ。つっても仮面着けてて見えねぇが。これだけ集まってる敵の前でここまで堂々と宣戦布告かよ）
どうやら彼らには協力する姿勢がないと断じて、多くの者が警戒心を強めている。
そんな空気すら予想通りだったのか。
キラーは一切動じずに言葉を続けていた。
「以上の条件が認められるのであれば、おれたちも同盟に参加する」
「認められない場合は？」
「やることは変わらない。今度は止められると思うな」
薄く笑みを浮かべて語らないキッドの代わりに、彼の意思をキラーが告げた。
話し合いなど不可能。そう判断してもおかしくないほどに彼らの考えは明白だった。
果たして何と答えるのか見物である。キリの顔を眺めていた一同は敢えて反対意見を出さずに沈黙を保った。好戦的な彼らがどう処理されるか、その手腕を見たかったのだろう。そしてキリがにこりと笑みを浮かべたのを確認する。

「いいんじゃないかな。同盟が一つになるのは大事だ」
「おいおい、正気か？」
「こいつの提案を受け入れるとでも？」
「そのまま採用しても問題ないと思う。ただしボクからも提案がある」
「聞こう」
誰よりも早くキラーが答えた。
指を立ててキリが説明し始めて、他の者もそれを冷静に聞く。
「まず一つ、海賊長は固定ではなく会談の度に持ち回りで担当すること。二つ、同盟の行動指針は海賊長が決定すること。この二つを追加してもらえるならそのまま呑んでも構わない」
「海賊長が持ち回り？　定期的にこうして顔合わせるってことか？」
「それがいいだろうね。せっかく作った同盟が機能してないんじゃこの話し合いも意味がない。あくまでもボクらは協力関係として動きたい」
「協力関係ねぇ。言葉通り受け取ってる奴が何人居るかな」
呆れた口調でアプーが呟く。
彼も含めて、本当にこの場に居る者を信用しようという考えの者は居ない。海賊の同盟に裏切りは付き物。切っても切れない関係にある。
キリがそれをわかっていないとは思えないが、あくまでも彼は同盟に固執するらしい。
聞いていて良い気分にはならず、周囲の空気が歪んでいく。
提案を聞いたところ、キラーは微動だにしなかった。
彼の本心が何であるかは別にして、平然と答えた彼は、キリの言葉を無下に斬り捨てることもなく受け入れようとしているように見えた。ただし、あくまでも外見上はだ。
「わかった。こちらに異論はない。賛成する者が居るならばそれで呑もう」
「では全員の意見を。異論がある人は？」

キリが問うと一瞬静寂が漂った。
必ず裏がある。故に話に乗るのは危険が付き纏う。だからと言って抜け道がない訳ではない、とはおそらく全員が思ったことだろう。彼らはルールを設定したがっているようだが、そのルールを利用するのは難しくない。
彼らは海賊。無法者である。
ルールに従って生きるような人間ならこの場に集ってはいない。
まず最初に考えるのは、如何にしてそのルールを守るかではなく、如何にしてルールを利用して他人を蹴落とせるか。彼らにとっては自分たちで定めたルールでさえ武器の一つでしかない。
反対意見はまさかのゼロ。全員が賛同する。
代表するようにベッジとアプーが声を出した。
ボニーも行儀悪く足を開いて座り、だらしない姿勢のまま気楽そうに答える。
「異論はない。それで構わん」
「オラッチもだ。別にそれでいいぜ」
「別にいいんじゃねぇの？　めんどくせぇけど、まぁそれでいいだろ」
黙っていた者も反対する意思を示さないことを確認して、キリは頷いた。
「それじゃあ決まりだ。一応今はボクが取り仕切ってるような感じだけど、このままじゃ気に入らない人も居るようだし、まずは今回の海賊長の決定から」
「一つ確認したい」
「どうぞ」
腕を組んだままドレークが話を止めた。
キリに促された彼は厳めしい表情で彼を見、淡々とした口調で質問する。
「その海賊長とやらに絶対的な権限はない、という認識で良いんだな？　海賊長の示した指針に従わなければ裏切りなどという馬鹿げた話もあるまい」

「そういう訳じゃないと信じたいね。どうかな？」
答えを拒んだキリはキラーに話を促した。すると彼は間髪入れずに答える。
「無論、絶対的な権限を持つという訳ではない。だが先程紙使いが提案した通り、海賊長が定めた行動指針に従わないと言うのなら、それは裏切り行為と見なされる。でなければ海賊長という立場は形骸化されるばかりで意味がないものとなってしまう」
「では、海賊長の行動指針が意に反するものであれば？」
「議論で考えを改めさせる必要がある。それができないなら全員を黙らせればいいだけだ」
事も無げに言い放ち、反論を許さぬかのようにキラーは言葉を切る。
ドレークはそこで質問をやめた。
結局は武力行使が増えそうではあるが、それを望む者が居ては仕方ない。ここでの議論は無意味だろうと判断して状況を見守ることを決める。
そこでボニーが割って入った。
警戒するという様子ではないものの、流石に笑みを消しており、素直に疑問を解消したいという風体で質問する。目を向けていた相手はキラーだ。
「あー、つまり海賊長になった奴に他の奴らが協力しろって話か？」
「有体に言えばそうなる」
「だったらこの同盟って意味あんのか？　全く興味ねぇ問題に付き合わされたらどうすんだよ。結局は海賊長になった奴のわがままを叶えてやるって話だろ？　議論だとか言ってるけどそれも時間かかってめんどくせぇし、協力しなきゃ〝裏切り者〟だ。どっちにしたってあんまり利益があるとは思えねぇんだよなー」
「そういった状況のために会談が必要になる。自分にとって利の無い問題に付き合わされるようなら当然反対意見は出るだろう。権力の乱用を許さないためだ」
「よく言うぜ。だったら海賊長ってのを作らなきゃいいだろうが。

自分たちだけが権力を乱用したいって言ってるようなもんだ」
「別々の海賊団が集まれば、我を押し通すばかりで議論にならない。そういった状況に備えての暫定的な仕切り役だ。こうでもしなければ話は前に進まず、昨日と同じことを繰り返す」
中空を眺めていたキラーの仮面がボニーの方を向き、彼女にのみ尋ねる。
「それともお前は、このまま紙使いが同盟を仕切っていてもいいのか？」
「へいへい、わかりましたよ。ま、一応チャンスは平等にってことなんだろ。私物化してやんのもそれはそれで面白そうだし」
やはり彼女もキリが、ひいては麦わらの一味が同盟の代表となることを拒んでいるのか、そう言われると素直に引き下がる。
納得した訳ではないが彼女は元々こうした話し合いを得意としていない。
考えるのも面倒になって、あとは状況に合わせて動こうと身の振り方を決めたようだ。
険しい表情を崩さずにベッジが切り出す。
彼もこの状況を好んではいないらしく、居心地の良さを感じてはいない。話し始める際は自然とキラーを睨むような顔つきだった。
「私物化だろうが形骸化だろうがどっちでもいいが、問題はてめぇらが使えるかどうかだ。ここで二日も使ってるのは金獅子が関わってる。優先する標的は奴でいいんだな？」
「そうした方が身の為だろうな。昨日の展開を避けることができる」
「まぁいい。釈然としねぇがこのままじゃ埒が明かねぇ。で、どうやって海賊長を決める？」
その言葉に反応してキラーが真っ先に反応した。
最初から予想していた一同は驚かず、やはりと思って彼らを見る。
「おれは海賊長にキッドを推す」
「そう来ると思ったぜ。だが却下だ。そいつにだけは任せらんねぇなぁ」

間髪入れずにアプーが答えた。だがキラーは気にせず続ける。
「ここに集まった海賊の中で最も懸賞金が高く、世間の認知度、実力もある。敵を金獅子のシキと定めるなら強者こそが先導しなければ道は開けないはずだ。それならこれ以上の適任は居ない」
「だめだ！　おれは船長がいい！」
今まで黙っていたルフィが咄嗟に反応した。
彼の方を向いたキラーは冷静に言う。
「麦わら、確かにお前も腕っ節は立つようだ。しかし話し合いに参加することもなく、昨日は居眠りをして、多くの仕事を紙使いに任すだけ。お前が本当にリーダーの器か？」
「そういう難しいのはキリがやる。おれの仕事は金獅子をぶっ飛ばすことだ」
「そんなお前だから、海賊長には向かない。同盟を纏める者には腕っ節はもちろん、状況を冷静に見て作戦を考案する頭脳も必要だ。強いだけでは務まらない」
「それじゃそこの男は務まるってか？　笑えるぜ」
見るからに挑発するつもりでアプーが言った。不敵な笑みを浮かべて、納得していないのはわかりやすく表されている。納得していないのは他の者も同じだ。
今度は無視することなくキラーがアプーへ顔を向ける。
「キッドは気性こそ荒いが状況を読む力はある。少なくとも麦わらよりは優れているはずだ」
「その気性の荒さが問題だっつってんだ」
「リーダーの器、という意味ではお前が適任とは思えん」
アプーに続きドレークも反対意見を唱え出す。
そもそも昨日の戦闘が起こった原因はキッドにあると言っていい。確かに他にも仕掛けようと考えていた者は居たかもしれないが誰もが思ったはずだ。和を乱すのは彼であると。
言い換えればそれは信頼の無さとも言える。
リーダーには相応しくないと彼は主張し、おそらく賛同する者は多かったはずだ。

「ではどうする。どうやって決める。殴り合って誰が海賊長か決めるか？　それでは昨日と何も変わらない。時間を無駄に使うだけだ」
「投票制にするか？　まぁ全員自分に入れて終わりだろうけどな」
「この面子で公平に決めることは不可能だろう。必ず誰かが不満を訴える」
「かといって、決めない限りは誰も納得して話を続けようとはしない。今は何が何でも海賊長を決めることを優先したいと、そういうことでよろしいかな？」
締めくくるようにウルージが言って、一同は一旦言葉を区切った。
今この状況で恐ろしいのは特定の個人に主導権を渡してしまうことだ。キリやキラー、キッドに代表のトップという顔をされるのは気に入らない。ルフィがその地位に就くのは最も恐ろしい。絶対に作戦など考えず「金獅子をぶっ飛ばしに行こう！」と言い出すのは目に見えていた。
海賊長を決める方法の提案が無くなったことで、キリが紙を取り出した。
にこやかな笑顔でメンバーの顔を見回すとそれを見せる。
「今回は最初だ。くじ引きでいいんじゃないかな？　なんなら今後の決め方もその都度変えていいかもしれないし。反対意見が出なければだけど」
咄嗟に反応したアプーが身を乗り出す。わざわざ腕を伸ばして彼を止める様子だ。
「ちょっと待て。お前バカか？　お前は紙を操る能力者だろうが。紙でくじ引きなんかしたらいくらでもイカサマできるだろ」
「そんなことしないよ。ただ、イカサマはイカサマだとバレなければ正攻法だと思ってるけど」
「てめーはもう黙ってろ。ここには位置を入れ替える能力を持ってる奴も居るしなぁ。ただのくじ引きでも気が抜けねぇぜ」
ちらりと視線だけで確認したのは沈黙を保つロー。話し合いが始まった当初から首を傾げて難しい顔をしているルフィとは違い、彼は確実に策謀に秀でている。条件の提示から始まった一連の話し合い

に参加しなかったのも、それを利用できるから、と判断することができた。
アプーは当初からローを警戒しており、必ずどこかで仕掛けるはずと考えている。
言うなれば彼が同盟に参加する気でいるのはそんなローの裏を掻いてやりたいというのが一番の理由であった。金獅子の脅威よりも目の前の享楽なのである。
否定されたことでキリは見るからに不満げだった。
出した紙を直そうとはせずにアプーへ反対意見を述べる。
「もうくじ引きでいいんじゃないかな？　他の方法を考えるのも面倒だし」
「黙ってろって言ったろ。誰がそんな見え透いた罠にかかるか」
「じゃあどうするのさ。ここには何もないよ。誰かさんが破壊したからテーブルまでない」
「あ？　なんだと？」
これまで沈黙を保っていたキッドが思わず口を開く。彼の怒りをぶつけられたキリはにこやかな笑みを崩すことなく、ようやく紙を仕舞った。
問われたアプーは考える。
確かにこの砦には何もない。くじ引きでなくともいいのだが、公平な方法でなければ納得しない連中が揃っている。かといって全員が納得する方法などあり得るはずがない。
本音を言えば彼は楽しめればそれでいい。
公平な方法などクソ喰らえだし、キリやローの好きにさせないのならある程度の不利益さえも覚悟の上。それでも上手く立ち回る自信はある。
真面目に考えるのも面倒になったアプーは一人の男に目をつけた。
「それでいいんじゃねぇか？」
指差したのはホーキンスが使用していたタロットカードだ。
アプーが笑顔で言ったのに対し、ベッジはあからさまに嫌そうな顔をする。キリが持つ紙と一体何が違うというのか。アプーの不用心

さに腹を立てていた。
「ふざけたことを言うんじゃねぇ。それもそいつがイカサマし放題だろうが」
「まー実際そうだろうな。方法としてはあり得なくはねぇ。ただおれの見立てじゃ、そいつはわざわざイカサマするほどの野心はねぇと見たが、どうだい？」
ホーキンスは黙して語らなかった。
馬鹿馬鹿しいとベッジが呟く。
「野心がねぇならこんなとこに居るか？　沈黙は肯定にも否定にもなる。腹の内を明かさねぇために口を噤んでるだけに過ぎねぇ」
「あくまでもこの会談においてはの話だ。別に結成しようが破滅しようがどうでもいいんだろ。違うか？　おれにはそう見えたぜ」
やはりホーキンスは語らず、タロットカードでの占いを続けている。
「論外だ。紙であれカードであれ、所持者が有利なのは同じだ」
「じゃああんたは何を提案するんだ？　言っとくがあんたが紙かなんか用意しても同じだぜ。むしろあんたの方がイカサマ得意そうだしな」
舌打ちをしてベッジが口を閉ざす。
条件は誰にでも当てはまる。誰が何を用意したところで疑われるのは間違いない。
そう悟ったことで、停滞しかけた状況を動かすべくウルージが言い出した。
「誰が出しても同じなら、ここは紙使いより可能性の低い魔術師に頼むのが得策だろう」
「ボクってそんなに信用されてない？」
「フフッ、発案者は辛いな。どうだろう魔術師。カードを貸してくださるかな？」
ウルージに問われて、手を止めたホーキンスはしばし考える素振りを見せた。そして最終的には占いを中断し、集めたカードを持って立ち上がる。

近寄ったのはウルージの下だった。
彼にタロットカードの束を手渡して淡々と告げる。
「おれが触れない方が信用されやすいだろう。公正を期すためだ」
「意外にも協力的だな。だが確かにそうかもしれん」
「フン。だからといってイカサマがあり得ない訳じゃねぇがな」
カードを受け取ったウルージはそれをシャッフルした。
手渡してすぐにホーキンスが離れたため、カードに何か細工をした風には見えない。少なくとも現時点ではウルージが触ったのみだ。
立ち上がったウルージが倒れていた壁の破片を持ち上げ、部屋の中央に置く。
大きな石を前にして、ふとウルージの手が止まった。
「それで、どうやってこのカードで決める？」
「そういやそれを決めてなかったな。トランプじゃねぇのか？　めくって数字がでかいとかなら手っ取り早いのによぉ」
「やっぱりくじ引きがいいんじゃない？」
「お前は黙ってろ。おい魔術師、タロットってのはどう使えばいい」
アプーが尋ねるとホーキンスは中央に置かれた石を見つめて呟く。
「二十二の大アルカナには順番がある。めくったカードの数字が大きい者が勝ち、とするのが簡単ならそれも可能だ。大アルカナの順番を知る者が居ればな」
「お前は当然知ってんだろ。じゃなきゃ持ち歩かねぇよな」
「一人しか知らねぇんじゃ嘘をつくことも可能だろう」
「ボクは知ってるよ」
「おれも知っている。問題はない。嘘をつけばすぐに見破れる」
ベッジの言葉に反応したのはキリとキラーだった。彼らもカードの意味を知っているらしい。
実を言えばベッジも大アルカナの順番を知っていたのだが敢えて隠した。それによってホーキンスがどう出るかを確かめようとしたのだが、彼らの発言によって思惑は潰される。
全てが想定通りという訳でないとはいえ、状況は徐々に進もうとしている。

ルールを定めた後はウルージがカードを石の上に並べた。
「さあ、一人一枚取ってくれ。順番が最も後ろの者を今回の海賊長とする。異論は？」
「これをやらなきゃ始まらねぇだろ？　いい加減この話し合いもだれてきた。そろそろ決めて今後のことを決めようぜ」
「フン……」
キッドやベッジといった、不服そうな者が居なかった訳ではないとはいえ、このままではいつまで経っても話が進まない。仕方なく受け入れる者がほとんどだった。
キリがルフィの背中を軽く叩いて、石の傍へ向かわせる。
「船長、出番だよ」
「おし！　やっとか！」
やる気満々で立ち上がったルフィが石の傍へ移動した。
九人の船長がそこを囲んで、並べられたカードを前にする。
誰が仕切るでもなく手を伸ばし、一枚選んで指で掴む。そのまま持ち上げようとはせず、石の上から動かさずに全員の意思を窺った。
この場はウルージが取り仕切って、顔を見回した後で号令を出す。
「恨み合いはなしだ。では」
言葉に従って一斉にカードをめくる。
全員が手に持っていたカードを一瞥し、様子を探る。カードの意味を知る者、知らぬ者、反応は様々だったが結果はすでに出ていた。
それを告げたのは最も深く知るだろうホーキンスである。
「最もカードの順番が後ろの者」
彼の目は全く動じておらず、淡々と事実だけを見て告げる。
「〝審判〟のカード。おれだ」
決定したのはホーキンスだったようだ。
やはりか、と言いたげな顔でベッジが石の上にカードを投げ捨てる。
「イカサマだ。自分が長になるように仕向けやがった」
「アッパッパ！　まさかほんとにこうなるとはな」
「やり直しになるんじゃねぇのか？　まさかこの結果を受け入れる

奴は居ねぇよな」
隠そうともせず敵意を醸し出すベッジはホーキンスを睨みつける。しかし彼自身はまるで怯むこともなく、表情一つ変えようとしない。
石に置かれたカードを回収しながらぽつりと呟いた。
「イカサマはしていない。それにイカサマとは、イカサマだとバレなければ正攻法だという話を聞いたが？」
「てめぇ……」
「フフッ、肝が据わっている。真偽はどうあれ、ここは認める他ないのではないか？　事実彼がイカサマをしたと証明できる人間はこの中に居ない」
助け船を出すかのようにウルージが発言したことで、ベッジの目はウルージを捉える。
「てめぇらがツルんでたって話じゃねぇよな？　共犯なら罪が重いぞ」
「まさか。ただカードを受け取って並べただけだ。それ以外のことはしていない」
「チッ……まぁいい。証拠がねぇのは確かだしな」
「ちぇー。おれが海賊長じゃねぇのか」
不満そうにするルフィを筆頭に、中央に集まった一同はまた元の場所へ戻って距離を置く。
すぐ隣に居たのでは安心できない。激しい戦闘があった翌日なら特に。
それぞれ離れた場所に座って円を描き、唯一中央に残ったホーキンスが部屋を見渡した。
海賊長と言えば聞こえはいい。だが実情として、それがどれほど機能するかは定かではない。何か企んでいたらしいキッドをその席に座らせなかった時点で一つ得をしているとはいえ、果たしてその号令があったところでどれほどの変化があるものか。
ただ少なくともホーキンスは能動的に発言しようとしていたようだ。
促すためにキリが声をかける。

それを疑う者はなく、ホーキンスは彼を見ずに口を開いた。
「では海賊長、今後の指針は？」
「海賊長か……とはいえ、おれはまだお前たちを信用した訳じゃない。さらに言えば、この同盟に参加するか否かもまだ決めあぐねている状態だ」
「へぇ。素直に言うじゃねぇか。今までよく黙ってたな」
茶々を入れるようにアプーが口を挟むも、まるで気にせずに発言は変わらなかった。
「おれが海賊長として何かをするとしたら、この同盟に参加する利点を得るための行動を取るべきだろう」
「確かに。そうおかしな話ではない」
「ではどうする気だ？」
ウルージが頷き、ドレークが促した際、ホーキンスは誰を見る訳でもなく言った。
感情の波を感じない淡々とした声は、崩壊した砦から逃れるように広がる。
天井が存在しなかったせいで、頭上から降り注ぐ太陽の光が彼を照らし、円の中央に立った彼だけに注目が集まっていた。誰しもが海賊長と呼ばれた男に目を向けていた。
「さっき話していたことにも通ずる。おれが定める指針は、同盟の掟を設定することだ」
「掟……？」
「それさえ済めばおれは海賊長の任を降り、この同盟に参加してもいい。その後はこの場で次の海賊長を決めてくれて構わない。ファウスト」
自身の部下を呼びつけ、傍へ寄らせる。
やってきた猫のミンクのファウストはホーキンスに紙とペンを手渡した。立ったままそこに何かを記して、顔の前に掲げた彼はそれを一同に見せる。
疑念は深まっていた。だが即座に反抗する者は居なかった。
「同盟を同盟として形作り、且つ己に利がある掟を設ける。それが

おれの要求だ」
ホーキンスが記した同盟の掟は以下の通りだ。
・同盟は同盟メンバーの招集に応じ、会談に参加すること
・招集に応じない同盟メンバーは同盟から追放とする
・会談の度に海賊長を設定すること
・海賊行為によって得た富は公平に分配すること
・それぞれのナワバリには不干渉であること
・同盟の掟は同盟メンバーによる変更、追加を可能とする
・九人の海賊による同盟を〝海賊連合〟と呼称する
彼が持っている紙を読んだ一同は、それぞれが表情を変えていた。
得とするか、害とするか。それは個人の状況によって異なる。
距離はあったがその場を動かず、一通り読み終えたドレークは思案する。これはあくまでも同盟を同盟たらしめるものとするために記された物だと。
裏切りが付き物である海賊同盟を崩壊させまいとしているのか。
否、そうではないと彼は断じる。
（殺戮武人の要求を取り入れた上で、裏切りの記述に関しては消している。来るなら来いということか？　他の項目についてはそれほど絶対的な力があるものではない。あまりにも自分への利益が欠如した、〝同盟を作るための普遍的な掟〟でしかない）
アプーは自分の顎に手をやり、面白がることさえ忘れて真剣に考える。
（ちょっとおかし過ぎやしねぇか？　これが〝己に利がある掟〟だと？　とてもそうは思えねぇ。この程度その辺のガキでも書けるぜ。一大チャンスに海賊が提案するルールでは、ない）
笑みを消したウルージはふとホーキンスの様子を確認する。
心の内が読めない、冷静と言うよりは心がないかのような静けさ。彼の考えが読めずにいる。
（同盟への参加を前提とした提案。同盟が壊れないのならそれに越したことはない。しかしなぜこの局面でこの掟を設定する。何よりもまずこれを欲した理由は何だ？）

にやりと笑ったボニーは楽しげにホーキンスを見ており、改めて掟を確認する。
（ここに居る連中を当てにしてんのか？　そんな訳はねぇよな。だからってあの仮面野郎みたいにわざと壊そうとしてる訳でもない。付かず離れず、微妙な位置に立とうとしてやがる。確かにこいつらを利用するだけならそれで構わねぇが……）
眉間に皺を寄せて、不意に目を伏せたベッジは己の思考に集中した。
居心地が悪いと感じているのは確かだ。自己顕示欲を露わにする掟を提示されるよりもよほど気持ち悪い。それはあまりにも海賊らしさが欠如していた。
（ふざけやがって。どういう意図かは見え見えだぜ。あれならこいつらは黙っちゃいない。同盟を形作るだと？　それが目的ならこんな形にはしねぇだろうよ）
目を開いたベッジはホーキンスに厳しい視線を向けた。
（牽制……おれたちが睨み合ってる状態が均衡を保ってるってことか。こいつを見せて他の連中が気付かねぇはずはねぇからな）
思わず嘆息してしまう。
まともな人間ではないと思っていたがやはりそうだったらしい。海賊になるような人間だ。何かしら裏があったところでおかしいことなど何もない。
（殺戮武人と変わらねぇじゃねぇか。まだ潰し合いは終わっちゃいねぇ。結局は腹の内の探り合いになる。その中で邪魔な奴は消そうって魂胆か）
一枚の紙を見せて、しばらくは沈黙が続いていた。だがそれぞれが確信を持っている。それを明かすことはないが己の中で考えを固めていた。
キッドは小さく歯を鳴らし、キラーは口を閉ざしたまま。
ローは密かに薄い笑みを浮かべていた。
沈黙を破ったのはアプーの一言だった。
紙を掲げて立つホーキンスに軽い声をかけ、純粋な疑問をぶつけ

る。
「海賊連合ってのは何だ？　それも掟か？」
「ただの海賊同盟ではないことを明確にするだけだ。深い意味はない」
「へぇー、そうかい。お前の提示する掟をそのまま呑むんなら、今後大変なんじゃねぇか？　誰かが招集したら必ず集まらなきゃいけねぇ訳だろ。連日連夜招集かけられたんじゃこっちは海賊稼業やってる暇なんてなくなるぜ？」
「そこはお前たち次第だろう。用があるのなら招集し、なければ招集をかけない。それだけで事足りるはずだが」
「海賊長になりてぇって奴らが居るだろ。そいつらが競い合いでもしたらどうする」
「会談の場で新たな取り決めを作ればいい。これはあくまでも最初の掟だ」
「なるほどね……」
気の無い様子でアプーが頬杖をつき、口を閉ざす。
続いてドレークが口を開いた。
「招集はどうやって行う」
「おれの伝手で運び屋を使う。金さえ払えば何でも運んでくれる連中だ。海軍に気取られることもないだろう」
特徴的な笑みを浮かべたウルージが質問した。ホーキンスがそちらに振り返る。
「掟とは言うが、強制力は如何ほどかな？　まさか海賊相手に絶対遵守とは言うまい」
「掟とは言ったが、これはあくまでも規範だ。絶対的な強制力があるのは同盟メンバーによる招集に応じなかった場合のみ。少なくともおれはそのつもりだ」
「ふむ。不都合があれば同盟、いや、海賊連合内で掟の変更もできると」
一連の話を聞いていたベッジは突如追求するように声を冷たくする。

それでもホーキンスの態度は微塵も変化しなかった。
「こいつはお前一人で考えたのか？　誰かの息がかかってるなんてことはねぇよな」
「ああ。おれが考えた。おれは今でもお前たちを信用していないが、同盟を組むことによって得られる恩恵は理解しているつもりだ。ただそれだけに過ぎん」
「そうか……どちらにせよ面倒は変わらねぇがな」
改めて一同の顔を確認したホーキンスは話をまとめようとする。
賛成か反対か。そろそろ考えは決まったはずだ。
「合意があれば同盟の掟をこれで設定し、おれは海賊長の任を降りる。異論はあるか？」
そう問われて声を出す者は居なかった。
納得したという意思の表れではない。今この場で議論する必要はないとの判断である。
穴は、ある。
この中から抜け出て勝者となる方法は確実にあった。
おそらくはその場に居たほとんどの者がそう考えており、それだけに誰がいつ動くのか、警戒せずにはいられない状況だったが不利とは考えていない。
自分こそがこの同盟の中で勝ち残る。彼らの意思は、歪な形で一つとなっていた。
誰からも反対意見が出なかったことでホーキンスが再度言う。
本当に興味があるのか疑問である声だがその話を締めくくろうとしていた。
「では同盟の掟を決定し、おれは海賊長の名を返還する。次の目的については、次の海賊長が話を進めてくれ」
「とは言うけど、次の海賊長をどうやって決める？」
「お前が直接指名すりゃいいんじゃねぇのか？　その方が早いし、それくらいしないとほとんど何もしねぇまま交代になっちまうだろ」
キリの疑問に素早くアプーが答えた。
ホーキンスにも拒否するような理由がなく、自身が選ぼうかと周囲

を見回す。誰も止めなかったことでそのまま一人が選ばれようとしていたようだ。
その時、突然奇妙な気配を感じる。
その空間に居た者全員が空を見上げて、急速に落下してくる何かを見た。
地面に激突する寸前、ふわりと停止する。
空中に浮かんでいたのは人間。それも奇怪な外見と派手な服装の男だ。
男は葉巻を吸いながら一同の顔を見渡した。
そしてにやりと笑い、まるで勝ち誇るかのように自信に満ちた声を発する。
「ずいぶん楽しそうだな。おれも混ぜてもらえるか？」
先日映像で見た人物、金獅子のシキが、突如として目の前に現れていた。

伝説の海賊

島へ向かったルフィとキリを見送り、メリー号に残っていた面々は島の上空を見ていた。
いつの間にか巨大な影がある。雲よりも高い位置、浮かんでいるのはまさかと思うが、島とも帆船とも言い難い、しかしおそらくは船なのだろうという物体。ゴツゴツした巨大な岩の上に数本のマストと張られた状態の帆が見えて、そこにはマークが描かれていた。
旗を確認するまでもない。それは悪名高く全世界に知られたマーク。
舵輪を背景にしたドクロに、黄色い髭と髪が描かれている。
かつてゴールド・ロジャーと渡り合った男、金獅子のシキが用いた旗印。
何よりも、空を飛ぶ船。疑う余地もなかった。
金獅子海賊団がこの島に現れたのだ。
絶叫するウソップたちの傍で、冷や汗を垂らしたシルクが叫ぶ。
「あれはっ……金獅子海賊団の船!?」
「嘘だろぉ!? なんでこんな突然にぃ!?」
「映像で顔が見れたって話だから、近くに居たのかも……」
絶叫していたウソップは激しく取り乱していたようだ。できることなら今すぐに逃げ出したいが島の中にルフィとキリを残したまま。そのせいで逃げようとも言い出せない。
できることなら偽物であってくれ。意地でも遭遇したくない彼はそう思うのが精一杯だった。
「ほ、本物なのか? 本物じゃないよな。頼むから本物じゃないって言ってくれぇ!」
「多分、本物だよ。あのマークに、船が空を飛んでる。偽物にはあそこまでできないから」
「ちくしょー!? やっぱりそうなのかー!?」
「どうすんのよ! ルフィたちがまだ帰ってない! 連れ戻さないと!」

焦るナミが叫んだ直後にゾロが前へ踏み出して冷静に告げた。
「船を島に寄せろ」
「お、おい！　大丈夫なのか!?　攻撃されでもしたら……！」
「標的が向こうから来たんだ。ここで仕留めちまった方が早いだろ」
「まさか戦う気かよっ!?　無理無理無理無理ィ!?　勝てるわけねぇだろ!?」
「どっちにしろここで立ち往生できねぇだろ。いいから、島に近付けろ」
彼は好戦的に笑っていた。
息を呑んだウソップは言葉に詰まり、混乱してしまって次の展開が予想できなくなっている。しかし少なくとも立ち往生できないという点には共感できた。
ウソップがナミと目を合わせ、言葉に詰まると、同じく怯えていたチョッパーが言い出した。
「ルフィとキリを置いていけねぇよっ！　島に向かおう！」
勇気を振り絞った一言だったのだろう。彼も体を震わせていた。
それでも前へ踏み出すのは勇気が要る行為だったが、サンジがそっとナミに歩み寄る。
「大丈夫さナミさん。何があろうと、君はおれが守ってみせる」
「サンジくん……」
「サンジくん、おれは？」
「勝手にやってろ」
「あ～ちくしょーっ!?　こうなりゃヤケだぁ！　島に行ってルフィとキリを拾ってすぐに逃げればいいだけの話だろぉ！　やってやるってんだこのやろ～っ!!」
「だから戦った方が早いだろって」
ゾロの言葉を聞き流して、ウソップの号令の下、メリー号が動き始める。
島に近付き、ルフィとキリを回収する。あくまでもそれだけが目的だと念を押して、戦闘に臨むつもりのゾロとサンジを押さえながらの

接近であった。
一方、島内。
半壊した砦に集まった船長とその右腕たちは、予想外の事態に顔色を変えていた。
目の前には金獅子のシキ本人。突然空から降ってきて、地面に激突することもなくふわりと宙に浮いたまま、集まった面子を確認していた。
そこに居る全員の顔を見回した後、彼は鼻を鳴らす。
勧誘を蹴って集まっている姿を見れば大まかに状況は理解できた。
「シキ！」
「こんなところで何をしてやがる。答えなくてもいいが……なるほど。おれに歯向かう気ならお前らの判断は間違っちゃいない。もっとも、その前ですでに間違えてるんだがな」
にやりと余裕綽々の笑みを浮かべて、シキには一切の恐れがなかった。
周囲を若き海賊たちに囲まれ、脅威とは感じていないのか。わざわざ位置を変えようともせず囲まれたままで話を始める。
この場に集ったのは野心を抱いた海賊ばかりである。しかも伝説と謳われた海賊の勧誘すらも断るほど血気盛んな者たちばかり。当然冷静に話を聞くはずもなかった。
中でもじっとしていられない性分なのがルフィだ。
シキに背中を向けられ、彼に挑む気が抑えられないルフィは勢いよく拳を突き出す。
「お前はおれがぶっ飛ばす！」
「お前らは選択を間違った」
高速で伸びてくるルフィの拳が後頭部に迫る。しかしシキは背後を振り返ることもなく、首をわずかに横へ動かして、たったそれだけでルフィの攻撃を回避した。伸びた腕は彼の顔の横を通り過ぎただけでまた勢いよく戻ってくる。
バチンと強い音がした時、シキの興味は背後になどない。
その場に居る全員へ向けた言葉だった。

「だが今ならまだやり直せる。何の抵抗もせずに従うような奴らに比べりゃよっぽど面白い。と言ってもお前らは何もわかっちゃいねぇ。そこで、どうだ？　おれの部下にならねぇか？」
「ならねぇ！　船長はおれだっつっただろうが！」
「海賊は海の支配者だ。強者だけがこの海で名を上げられる」
緊迫する彼らに手を差し伸べて、どれだけルフィが声を発しようが気にしない。
「おれの下に来い。真の海賊とはなんたるかを教えてやる」
「いやだ！」
真っ先に反応したのはルフィだった。だが黙っていた他の者もシキを睨みつけ、従う気が皆無なのは目を見ればわかる。
呆れた顔になったシキは笑みを消した。
「話の通じねぇ奴らだ。どうやらこの場で教えてやらなきゃならねぇらしい」
「ルフィ、ここでやり合うのは――」
「ここでぶっ飛ばせば終わりだろ」
キリが肩を掴むがルフィは止まらない。彼が思考を変えるのは早かった。
あまりにも時期尚早過ぎる。たとえ相手が一人であっても、この場で仕留められるほどシキは甘くない。彼の力は弱くない。
それでも、出会ったからには逃げられるはずがなかった。
ルフィが拳を構えた。
それを追うようにしてキリは懐へ手を忍ばせ、ローへ目を向ける。
「お前をぶっ飛ばして、おれたちは前に進む！　邪魔すんなァ！」
「仕方ねぇから教えてやる。本物の海賊の恐怖ってやつを」
誰よりも早くルフィが飛び出した。
地面を蹴ってシキへ跳びかかり、目の前まで接近して固く握った拳を突き出そうとする。しかし彼が腕を前に突き出すより先に、どこかから飛来した岩がルフィの顔面に直撃した。それ自体にダメージはなくとも空中で攻撃を受けたことにより、彼の体は勢いよく吹き飛ばされる。

受け身を取る暇もなく地面を転がって、ルフィは即座に跳び上がって地に足を付けた。
一体どんな攻撃だったのか。死角から来たことで見えなかった。
疑問を持った様子のルフィは周囲を見回す。
同盟を組もうと集まった海賊が裏切った訳ではない。あらゆる角度から二人の姿を見ていた彼らでさえ先程の攻撃を理解していなかった。
少なくともシキは何もしていない。否、何かをしたように見えなかった。
彼は彼らの視線の先で浮かんでいるだけで、指先一本さえ動かしていないのだ。
「なんだ!? どっから飛んできたんだ!?」
「ジハハハハ……威勢がいいのは認めよう。だがそれだけだ」
シキが右手を動かし、銜えている葉巻に触れた。しかしそれだけだ。攻撃を行う仕草ではない。
彼らの前に浮かんだ状態で、シキは胸を張る。
そこから動こうとしない。動く必要がないと言いたげな態度だ。
「来い。少しだけ遊んでやる」
明らかな挑発。この場に居る全員を見下していた。
そんな言動を受けてじっとしていられるほど、ここに居る海賊は大人しくない。
真っ先に駆け出したのはやはりルフィだった。
迷う素振りなど一切見せず、勢いをつけて真っすぐシキに向かっていく。だがその行動は早くも見飽きていた。同じ行動なら驚くはずもない。
シキはその場を動かないどころか彼を見ようとすらしていなかった。
「おれがお前に負けるかァ! ゴムゴムの～……!」
ジャンプすると同時に右腕を伸ばす。高速のパンチが振り向かないシキの後頭部に迫った。
「ピストル!」

やはりシキは首を動かすだけで回避する。今度はそれだけではない。彼の向こうから飛んでくる岩が視界に入って、咄嗟にルフィは左腕で顔を守った。
狙い違わず左腕に岩が当たって、痛くはないが体勢は崩れる。
ルフィは一旦着地して、それからすぐに脚を振り回した。
「ゴムゴムのォ！」
「次は蹴りか？」
「鞭ィ！」
思い切り振り回した右足が長く伸びてシキに迫る。
興味が無さそうな顔のまま、迫ってくる脚を見ることもなくシキが右手を動かした。すると自身の体に迫った脚をいとも容易く掴み、思い切り右腕を上げる。たったそれだけの動作でルフィの体を投げ飛ばしたのである。
空中に投げられたルフィは目を丸くしていて、悲鳴を上げるが身軽な動作で着地した。
「うおおおっ!?　くそっ！　こんにゃろ！」
「一応確認しておくか。お前が、何になるって？」
「海賊王だよ！　忘れんな！」
一連の攻防を経てもルフィの闘志は折れない。再度突撃しようと駆け出す。
彼が前に踏み出した時、今度はそうもいかなかった。
投げ飛ばされた先に居たキッドが金属を纏った大きな腕を振り抜き、シキにのみ注意を向けていたルフィを裏拳で殴り飛ばしたのだ。
「うわぁっ!?」
「勘違いするなよ、麦わら。海賊王になるのはてめぇじゃねぇ。おれだろうが」
「あん？」
シキが眉を動かした。
好戦的に笑うキッドに目を向けて、さほど興味が無さそうに、しかしさっきまでとはどこか様子が違っていて、身に纏う空気が変わっている。

「どいつもこいつも〝海賊王〟か……」
「お前はゴールド・ロジャーと渡り合ってたらしいな、金獅子ィ。だがもう過去の遺物だ。お前はいい踏み台になるぜ」
シキの表情は変わらなかった。
冷徹な目でキッドを見据えて動かない。
如何に伝説であろうと何年も昔の話。金獅子が姿を消して二十年が経った。
どんな人間だろうが歳には勝てないものだ。
もはや脅威ではない、とキッドは物怖じせずに前へ踏み出した。
「あいつの名前を出すんじゃねぇよ」
わずかに怒りのようなものを感じたが、気にすることはなかった。
キッドが駆け出してシキへ向かう。
金属を纏った腕を振り上げ、猛然と襲い掛かる。その様子はルフィとそう変わらない。同じ高さに到達するために跳び上がる思考まで一緒だ。
キッドの攻撃が繰り出されようとしたその瞬間、またしてもどこかから岩が飛んできて、キッドは驚かずに右腕でそれを払った。
今度こそ攻撃を、と右腕を振り上げた瞬間、今度は目を見開く。
シキの背後から飛んできたのは今まさに地面から引き抜かれたばかりの木だった。周辺に落ちている岩とは大きさが違う。
攻撃をやめて彼はその木を殴って叩き落とした。しかしそれでも虚を突かれる。
さらにもう一本の木が飛んできていた。
振り下ろした腕を持ち上げる暇もなくキッドの体に飛んできた木が激突する。
凄まじい衝撃だったことで受け身も取れずに地面を転がるものの、やられたまま黙っている男ではない。すぐさま立ち上がって反撃に出ようとした。だが、起きた時にはすでに次の攻撃が繰り出されている。
先程キッドが叩き落とした木が、地面を這うようにして飛んでくるのだ。

咄嗟に防御の体勢を取ったキッドは、回転を加えたその木に殴り飛ばされる。
キッドがやられたことでキラーが籠手から刃を出し、シキへ跳びかかった。
動きが速い。きっかけは突然。明らかに奇襲が成功するタイミングだったはずだ。だがシキは顔色一つ変えず、また体を動かすことなく、彼を見ようともしない。キッドを殴った木が戻ってきて背後からキラーの体を打ち返した。
滑るように着地したキッドは怒りの形相でシキを睨んだ。
火が点きやすい彼の性格だ。一撃を与えた時点で敵を逃がすつもりはない。
右腕を構えて地面を踏みしめると、まるで大砲のように金属の固まりを射出した。
「チィッ！　オラァ!!」
金属を集めて出来た巨大な拳が空を飛ぶ。
向かう先には当然シキが居て、そのまま進めば激突する。ただ、やはり不可思議なことが続いているらしく、撃ち出された金属の拳はシキの眼前でぴたりと止まった。
彼の能力に操られた金属である。それがキッドの意思に反して動きを止めた。
まるで何かとせめぎ合うかのように震えていて、シキの力で止められたようだった。
「こんなもんか？　ガキども」
「何イ……!?」
撃ち出した拳は凄まじい速度で戻ってきた。予想外の動きに虚を突かれたキッドは動けず、防御することもできずに直撃してしまう。
能力の支配下から逃れた金属は辺りへ散らばって、一つずつ地面へ落ちた。
何が起きているのかわからない。いまだに理解が及んでいない。
突然戦闘が始まり、ルフィとキッドとキラーが挑みかかって、一発も当てられていない現状に不安を抱かずにはいられなかった。

彼らがシキの能力を思い出すのは一旦戦闘が止まった瞬間だった。
超人系悪魔の実、フワフワの実の能力。
触れた物を浮かすことができるという能力。
戦闘向きとは思えないが練度が違う。宙に浮かせた物を自分の手足のように操り、キッドが操る金属でさえも支配権を奪って操ってしまった。それを見る限りキッドよりも能力の練度が上ということは間違いない。
ただ違和感があるのは、岩も木も金属も彼の手で触れていないという事実だ。
彼は触れることなくそれらを操ってみせた。操るための条件を満たしていないことになる。
気になることなら他にもある。攻撃が来るより先に、まるで攻撃がどこから来るのかわかっているかのような行動が見られた。
目を向けることなく回避したり、相手の行動を先読みしているかのように迎撃する。それは悪魔の実の能力とは別の理由があるはずだ。しかし何であるかはわからない。
立ち尽くした一同は脅威の原因がわからず、動き出すことができなかった。
「もう終わりか？　おれの下につけ」
「全員、総攻撃だ！　こいつを殺れ!!」
その時、キリの怒声が響いた。
全員へ攻撃するよう指示する言葉。この状況を見ても諦めてはいない。それどころか勢いをつけて勝とうと考えている。
シキは思わず項垂れ、溜息をついた。
「はぁ～……まだわかってねぇのか。仕方ねぇからもう少しだけ教えてやる」
従うつもりはなかったがきっかけの一つにはなった。
全員がキリの一言で攻撃しようと身構える。
それと同時にシキもほんの少しだけ本気を出そうとしていたようだ。
突然の攻撃が目の前に迫り、気付いた時にはウルージが吹き飛ばさ

れていた。
砦の壁が自壊するように一部を剥がされ、石造りのそれが塊のまま飛んできたのである。予想外の攻撃にウルージは直撃し、背中から地面へ激突することとなった。
やはり触れていない。誰の手も届かない位置の壁が独りでに動き出していたのだ。
ウルージへの攻撃を見たアプーは咄嗟に能力をしようとする。だがそれも遅い。
一瞬視線をウルージへ向けた瞬間に、傍にあった石が浮いて腹へ激突した。
一瞬の内に二人が攻撃を受けた。しかも攻撃した者が何もしていないのにだ。
疑念は強まるばかりだが止まってはいられない。
ちょうど吹き飛ばされたルフィが戻ってきた。攻撃を受けたキッドとキラーも立ち上がり、包囲している今ならチャンスなはずである。
一斉に攻撃を仕掛ける。それ以外に勝つ方法はない。
「降魔の相――」
わさわさと体が藁に包まれて、ホーキンスの姿が怪物のようになった。
その直後、砦の壁が壊れて真上から落下し、ホーキンスに直撃して下敷きになる。当然事故などではない。シキの能力によって意図的に起こされた攻撃だ。
前へ踏み出したドレークが恐竜に変身しようとしていた。しかし外見が変わり切るのを待たず、外から飛んできた木が彼の背中を強く殴りつけた。その衝撃で彼は地面へ倒れ込み、変身が中断されてしまう。ただ殴られただけとはいえ衝撃は相当なものだった。
彼を殴った木はふわりと浮かび、さらに別の人間を狙った。
キッドに向かって飛んでくる木へキラーが飛びかかり、両断する。
斬り捨てれば支配から逃れる、かと思いきや二本に分かれた木が両側から襲い掛かってきた。

前後から同時に木の幹が直撃して、挟まれる形となったキラーは力無くその場に倒れる。
「クソがァ！　てめぇ!!」
怒声を発しながらキッドが跳び出した時、同時にルフィが跳んでいた。
意図せず肩を並べて挑んだ二人は拳を突き出そうと腕を振る。
「ここで死んどけェ！」
「どけぇ！　邪魔すんな！」
攻撃してくる二人を見てもシキの表情は微動だにしなかった。
その余裕は虚勢ではなく、彼らの拳が完全に伸びきってシキの顔に届く前に、死角から飛来した大岩が二人まとめて叩き落とす。突っ伏すように倒れた二人は感じた屈辱に歯を食いしばり、のしかかる大岩を殴って破壊すると立ち上がった。
それを待っていたかのように、壊された岩の破片が四方八方から彼らを襲った。
あらゆる角度からぶつかり、殴られるような衝撃に体勢が崩され、またも吹き飛ばされる。
圧倒的である。
まるで遊ぶかのような戦闘からは彼の本気が感じられない。
見ているだけで感じ取る。遥か高みに居る者の力量を。
彼らとて一度や二度の攻撃で諦めるような人間ではない。次から次に立ち上がってはシキへ挑みかかっていき、その都度空を舞う岩や木に殴られ、近付くことすらできない。
戦闘に加わらずにその様を見ていたボニーは悔しげに歯噛みした。
近付くことさえできれば状況を変えられるのだ。しかしその隙が微塵も見つからない。
「チッ、あいつら、こんだけ居て囮にもなれねぇのかよ……！」
「ボニー船長ぉ!?　もう逃げた方がいいんじゃ……！」
「うるせぇ！　黙ってろ！　逃げて済むならとっくにそうしてる！」
状況を変えるべくボニーが駆け出した。

圧倒的な力であろうと人数で勝っていることは変わりない。チャンスを探れば、わずかな隙が見えてくるのではないか。ボニーはシキの周囲を回るように走り出す。
「おいお前ら！　少しはきばりやがれ！　あたしがあいつに触れさえすれば――」
声をかけることすら許されなかった。
背後から後頭部へ石が当たり、体が揺れる。走っていた足は止まって、頭から流れてきた血で視界が赤く染まった。
ボニーがシキを見ると、こちらを見ようとすらしていない。敵として認識していないのだ。
彼女は正面から飛んできた木を避けられず、腹を殴られて吹き飛ばされる。
もはや至る所で様々な物が飛び交っていた。その辺に落ちていた大小問わず石や岩、少し前まで砦の壁だった石材、土に根付いていた木、キッドが操る金属片。ありとあらゆる物が宙を舞って視界が悪くなってすらいた。
それらのほとんどをシキが一人で操っている。
時にはキッドから支配権を奪い、金属までも操って彼らを攻撃した。
無事な場所などない。一時たりとも足を止めることができない激戦地。それでもまだ、シキが手を抜いているのは明らかだった。
「ＲＯＯＭ」
彼らの戦いを見ながらローが半円状のドームを作った。
シキを取り囲み、周囲で浮かぶ様々な物体を利用するには十分な広さ。
その中の端に立って、厳しい顔のローは近くに来たキリを見た。
「本当にやれるのか？」
「正攻法じゃどうしたって無理だ。仕留めるなら一発で」
キリがローに目を向け、準備ができたことを伝える。
「これでやるしかない。頼んだ」
「フン……失敗すればおれがあいつをやる」

指を開いて腕を伸ばすと、動きを止めてシキを注視する。
如何に伝説と呼ばれようが完璧であるはずがない。気の緩みや油断、特にこれほど一方的な戦闘ならばどこかにあるはず。それを見極め、貫く。
ローはシキとその周囲を飛び回る物体を注意深く観察して機を待った。
彼ら以外のほぼ全員が吹き飛ばされていた。
衝突する物は選ばず、四方八方から飛んでくるため数度回避してもすぐ次が来る。必ず避け切れなくなる。特に自ら彼へ向かっていく者は他よりも攻撃を受ける回数が多い。
距離を置いて砲撃を行っていたベッジは顔をしかめる。
あまりにも危険過ぎる。手を抜いている場合ではなかった。
「城(ルーク)イン・フォラ・グレーセ――!」
「ん?」
初めてシキが振り向いた。
彼が見ている先でベッジの肉体は変化していき、巨大化、そして城のような外見となる。
「〝大頭目(ビッグ・ファーザー)〟!!」
「ほう。こりゃでけぇな」
巨大な城の姿となり、無数の大砲がシキへと向けられる。堅牢の守りと圧倒的な攻撃力を備えたこの姿。簡単に破れる物ではない。
ベッジの体内、城の中で部下たちが動き回っている。
狙いをつけるとすぐに砲弾が発射され、巨大なそれがシキを狙った。
「くたばれ!」
眼前に迫ってもシキの表情は変わらず。そして、目の前でぴたりと止まった。
ベッジは思わず息を呑んだ。
たった今自分が発射した砲弾が、すでにシキの支配下に入り、あろうことか発射した時と同じ速度で自分に向かってきたのだ。
巨大な城となったベッジの体に直撃して、大きな爆炎が上がる。

嵐のような攻撃をくぐり抜け、ついにシキの傍へ接近することに成功した。
普段の姿からさらに巨大化したウルージとドレーク、中でも巨体を持つ二人が接近する。
ウルージが全ての力を込めた拳を突き出し、恐竜になったドレークが大口を開けた。
懐に入った。今度は届く。
そう信じた二人を裏切るかのように、強く踏みしめた地面が揺れる。
「因果晒しッ――むおっ!?」
石や岩という話ではない。大地が動いていた。
突然一部だけが隆起して土の中から大きな岩石が現れ、足を掬われた二人はその場で転ぶ。そして持ち上げたばかりの大岩が降ってきて潰されてしまった。
操れる物に際限はないのか。土を巻き上げ、大地が彼の味方をしていた。
攻撃を掻い潜ったキッドがシキの目の前へ飛び込む。拳を構えて、何がなんでも彼の顔を殴るつもりのようだ。その形相は恐ろしく、シキは鼻を鳴らす。
真下から飛び上がった岩が彼の顎を打ち抜き、キッドは体の自由を失って落ちた。
それから幾ばくもせずルフィが接近してきた。
ゴムの張力を使い、キッドよりも早い。だが軌道はあまりにもわかりやすかった。
右側面から真っすぐ飛んできた彼は空中で回転し、両腕を高速で突き出して無数のパンチを繰り出してくる。それを見てもシキは涼しい顔だ。
「ゴムゴムの暴風雨(ストーム)ッ!!」
「何度も何度も、懲りねェ奴らだ……」
呆れた口調で呟くと同時、横から飛んできた木がルフィの体を弾き飛ばした。

彼は向かってきた時と同じスピードで遠ざかっていく。
その時、妙な気配を感じたシキは背後に振り返った。
何をどうしたのか、突然背後に人が現れている。両手に紙を持つキリだ。
シキの目が大きく見開かれる。
キリが両腕を振って紙を投げた。硬化したそれらは刃の如くシキに迫る。が、やはり手を離れた時点で彼の支配下に取り込まれ、空中でぴたりと動きを止めてしまった。
自分の能力だ。あの紙がもう使えないことはすぐわかる。
コンマ数秒の中、二人の視線は交わった。
そしてキリは、操作した紙で懐に隠し持っていたピストルの引き金を引く。
放たれたのは海賊島で手に入れた海楼石の銃弾。数は多くないとはいえ、当たれば能力者を無力化することができる。言わば彼の隠し玉、ここぞという場面で使う切り札だ。
今がその時。当たれば決着はつく。
そう思った時にしかし、シキは素早くその場から飛び退いて銃弾を回避した。
飛来した岩が側頭部を打つ。
殴り飛ばされたキリは地面に激突し、倒れたままで悔しげな顔をするとシキを見上げた。
（外した……！）
最後の切り札。一度だけしか通用しない奇襲。それでも彼には届かなかった。
敗北を感じた様子でキリは飛び起きて素早く距離を取る。
その彼を、シキは追撃しなかった。
「海楼石か……そんなもんまで持ってるとはな」
実のところを言えば、彼は奇襲に驚いた訳ではない。突然背後に気配を感じた時点では大したことではないと思い、避けられると踏んでいた。
驚いたのはその攻撃を仕掛けてきた人物だ。

キリの外見に驚いて一瞬攻撃が遅れてしまったのである。
「もう十分やっただろう、お前ら……遊びはそろそろ終いにしよう」
突然、浮遊していた全ての物が地面へ落ちた。
シキの呟きを聞いていた海賊たちは動きを止める。
彼の一言に異様なものを感じ、警戒して動けなくなったようだ。
「良いことを教えといてやる。悪魔の実の能力は稀に覚醒することがある。そして覚醒した能力は周囲の物に影響を及ぼす」
にやりと笑ったシキは勝ち誇るように説明していた。
「おれの能力は触れた物を浮かすことができる。それだけと言えばそれだけの力だが、ここまで言えばわかるか？　さっきからおれは何にも触れちゃいねぇ。触れたと言やぁせいぜいこの葉巻くらいのもんだろうよ」
「それがどうしたぁ！　舵輪！」
「てめぇには難し過ぎたか？　つまりおれは、ここにある全てを浮かすことができる」
そう言って両手を広げたシキに従うかの如く、地に転がった物が動き出す。
「石も、土も、木も」
小さな石が、大きな岩が、細かい土が、横たわっていた木が、ふわりと浮かび上がる。
今度はそれだけではなかった。
「朽ちた砦も」
シキが右手を上げれば、ほとんど破壊されてしまったとはいえ、彼らが中に居た砦自体を浮かべてしまう。砦が大きく揺れたことでそれがわかった。
まずい状況だと感じるのは早く、舌を鳴らしたローが全員へ向けて叫んだ。
「まずいぞ……外へ出ろ！」
全員が砦の外へ飛び出した。
浮遊していたせいで高さはあったが、迅速な行動のおかげで着地の衝撃はそれほどでもない。大地に立った彼らはすぐに頭上を見上げ

た。
シキの姿も砦の外にある。
さっきとはほど遠く、天高くで浮遊していた。
ズズン、と大きく地面が揺れた。
誰もが周囲に目を走らせる。状況から考えて、島自体が動いているとしか思えない。
「なんだ、こりゃ……!?」
「まさか……」
「てめぇらが立ってるこの島も」
島が空へ浮かぼうとしていた。
大きな揺れを伴って動かぬはずの物が浮かび始めて、初めからそうであったかのように、空へ向かって進んでいく。その様は島の中に居た者よりも外に居た方が異常と感じやすい。
「そして能力者の天敵たる海も」
海上に居た者たちは、幸か不幸か、その光景を眺めていた。
島へ向かっていたメリー号の甲板で、空を見上げたウソップが呟く。
「おい……なんだよ、あれ……」
向かっていたはずの島が空に浮かびあがって、その島を囲うように四本の巨大な水柱が立ち、空へ昇っていく。上昇し続ける島よりも高い位置に海水が集まっていたようだ。
島内に居た者たちも空を見上げてそれを目撃する。
島の上に海があった。水柱が一所に集まり、巨大な海と化している。
それらが全て空で行われているのだ。
驚愕し、言葉を失った一同を見下ろしたシキが笑う。
間違いなくそれは伝説として語り継がれた力。世界を破壊しかねない能力。
ちっぽけな一海賊でしかない彼らを、伝説の海賊は見下ろして嗤う。
「おれは手を触れずとも全て浮かすことができる。これでわかった

か？　おれとてめぇらの絶対的な力の差が」
言葉はなかった。肌で感じていた。
想像することもできなかった脅威を前にして、彼らの思考は完全に停止していた。
「もう一度聞こう。おれの下に来い。この海を支配する瞬間を見せてやる」
だが意思は揺らいでいなかった。
どれほどの脅威であろうと己の考えが変わることはない。
意地のせいか。知らず知らずの内に声を揃えて、九人の船長は叫んだ。
「断る!!!」
「残念だ」
シキが腕を振り下ろした。
落ちる。
天高くまで持ち上げられて、突き落とすというより手を離しただけのような、一瞬の静止の後に落下を始めた。
島が、海が落ちていく。
シキだけを避けて、彼らを道連れに海へと落下した。
巨大な島は海面へ叩きつけられ、さらに上から落ちてきた海に激突して、破壊される。
大地は粉々になって後には何も残らない。
その日、名もなき島は完全に崩壊した。

敗北のあとで

とある島に、九つの海賊船が停泊していた。
北側に小さな村がある小島で、それ以外には何もない、自然が豊かな場所である。
到着する頃、日は落ちて夜になっていた。
生きていたのは奇跡だった。
そう語り合うほど壮絶な光景を見た後である。
島の崩壊により船長とその副官たちは海に投げ出され、揃いも揃って泳げない者ばかりだが、海も激しく荒れ狂っていたためそもそも泳げるような状況ではなかった。島に近付いていた船も当然危険で、高波が何度も押し寄せる状況下で一隻も転覆しなかったのはまさに奇跡だっただろう。
海中へ落ちた船長たちも、命からがら救うことができた。
救出の際はとにかく必死で、何が起きたのかも覚えていない。
ともかく彼らは生き残り、近くにあったこの島へ辿り着いたのである。
表情は明るくなかった。生き残ったことを喜ぶ様子もなく、乗組員たちは口を噤み、救出してからこの島へ辿り着くまでほとんど話す者が居なかった。
痛々しい沈黙を保ったまま、再び場が整えられた。
話し合いの場は上陸した直後に設けられた。
砂浜に辿り着いてすぐにテーブルと椅子が用意され、誰が言い出す訳でもなく自然と集まる。
焚き火を作って、明かりに照らされて彼らは円を作る。
今度は船長と副官だけとは言わない。乗組員たちは周囲を取り囲むようにして、しかしあまり近付くこともできず遠巻きに見ていた。
席について以降、しばらくは誰も口を開かなかった。誰も喋ることなく時間が過ぎ、漂う緊張感が周りで見ている乗組員たちを恐怖させる。
百人以上の人間が集まってこんなに静かなのか。そう思わずには

いられなかった。
それぞれが考え、苦悩していたのだろう。その時間は必要なものだった。
やがて腕を組んで俯いていたキッドがぽつりと切り出した。
「お前ら……あの野郎をぶちのめしてやりてぇとは思わねぇか？」
彼らしくない、沈んだ様子の、あまりにも静かな一声だった。
自然と発言したキッドに視線が集まる。
キッドは顔を上げ、集まった面子を見回しながら言う。
「てめぇらのことも気に入らねぇが、もっと気に入らねぇ奴が現れた。気は進まねぇが、こうなりゃ手段を選んでいられねぇ……おれは同盟に参加するぞ」
まさかの発言だった。特にキラーはともかく彼の口から聞いたのが意外だ。
キラーも相当驚いているらしい様子で、傍にある椅子へ座った彼に顔を向ける。
「いいのか？」
「言うな、キラー。わかってるだろ」
簡潔な言葉で制されたことでキラーは追求をやめた。
不必要な一言だったと今になって気付く。彼が自分で決めたことだ。すでに決断したのならば言うことはない。キラーはそれに従うだけだ。
パンっと膝を叩いてルフィが笑った。
彼なりに真剣に考えた結果、同盟は必要であると判断したようだ。
「おれもやるぞ。元々キリが言い出したことだしな」
ついさっきまで彼も黙り込んでいたのだが、一度口を開けばあっけらかんとした様子である。
黙り込む一同の顔を見回して、普段と変わらない声色で尋ねた。
「お前らはどうすんだ？　怖ぇんならやめてもいいぞ」
その一言で表情が変わる。
ある種の挑発じみた言葉であった。だからこそ血の気の多い海賊には効果がある。

次から次へと参加を表明し、顔には笑みが戻りつつあった。
「怖えもんかよ。どうやってやり返そうか考えてただけだ。オラッチも参加するぜ」
アプーが軽い口調で告げる。長い腕をひらひら振って、ルフィの発言に反発する様子だ。
「このまま奴を放っておけばおれたちにも悪影響を及ぼす」
ホーキンスが淡々とした口調で告げる。無表情ながら意思は強かった。
「負けっぱなしってのも癪だしなぁ」
ボニーがにやりと笑って告げる。いつになく好戦的で怒りを滲ませてすらいた。
「フフ、勝機はあるのか。試してみるのもよかろう」
ウルージが微笑んで告げる。いつもの余裕を取り戻して、頼りになりそうな態度だ。
「計画は必要だぞ。無策で勝てると思うな」
ベッジが厳しい顔で告げる。心が折れていないのは良いが、それだけでは勝てないと語る。
「いずれ奴とは戦うことになる。それなら、どの道この関係は必要だ」
ドレークが冷静な口調で告げる。表情は動かず、すでに持ち直していた様子だった。
「フン……面白い」
ローが不敵な笑みを浮かべて告げる。どうやら彼も乗り気らしい。
全員の意思を確認した結果、ここで降りる者は居ないようだ。
以前とは違う。自分たちの標的を確認したためか、ようやく本来の目的通り同盟が締結した。
満足げに頷いたルフィがにっと口の端を上げる。
「じゃあ決まりだ。これでおれたちは海賊連合だ」
「おい、てめぇが仕切るんじゃねぇよ」
「まぁまぁ。ようやく話がまとまりそうなんだから」
またしてもキッドがルフィに噛みつきかけたため、咄嗟にキリが口

を挟む。ここまでまとまりかけているのに今から戦闘では流石に気が滅入る。
幸いキッドもそのつもりはなかったようですぐに引く。
それを確認してからキリが仲間たちに振り返った。
シルクやチョッパーが酒の入ったジョッキを運んでくる。
それを彼らの前に置き、キリが促したことでルフィがジョッキを持ち上げた。
「それじゃあ、やるぞ。おれたちで金獅子をぶっ飛ばすんだ」
他の八人もジョッキを手に取った。
眼前に掲げ、顔を見回す。
まさか本当に手を組むことになるとは思わなかったが、すでに目的は定まった。今は他の何を置いても優先すべきものがある。そのためならば、敵とも組もう。
彼らは中身を飲み干した後、ジョッキをテーブルに叩きつけた。

＊

海軍本部、マリンフォード。
世界の中心に位置すると言われるこの島にけたたましい警報が鳴り響いていた。
緊急事態を知らせる音などいつ以来であろうか。常時海軍の主力が集まるこの島を襲おうという海賊は居ない。ほんの一握りを除いては。
思い出されるのは二十年以上前に起きた、島にとっては忘れられない襲撃事件。
部下を引き連れて廊下を歩くセンゴクはその当時のことを思い出していた。
「敵の数は？」
「一人です。今はまだ動きがないそうで」
「市民の避難を急げ。動き出せば町はただでは済まんぞ」
部下の報告を受けて状況を確認し、表情はますます険しくなる。

嫌な予感がした。
誰が来たのか、すでに報告は聞いている。その上で心が激しくざわめき、もはやただでは済まないだろうとまで予想している。考え得る限り最悪の展開だ。
センゴクは己の感情を抑え、務めて冷静に状況に向き合おうとしていた。
「すでにガープ中将には連絡しましたが、なにぶん距離があるようで、今から戻るとは言っていましたが」
「間に合わんだろう。ここにある戦力で対応するしかない」
そう言ってセンゴクは屋外へ出た。
外へ出ればすぐに対象を目にすることができた。宙に浮遊しているのだ。
懐かしい人物。顔を見れば互いに歳を取ったと実感する。
歩を止めて空を見上げると、金獅子のシキはセンゴクよりも先に声を発した。
「久方ぶりだなぁ、センゴク。こうして会うのは何年ぶりだ?」
「金獅子……まさか今になって動き出すとは」
彼らは古い関係であった。
若き日から敵として何度も出会い、殺し合い、認め合い、一度は決着をつけた。海賊と海兵ではあるが浅からぬ関係である。
かつてシキは、センゴクとガープによって海底の大監獄〝インペルダウン〟へ投獄された。かつての海賊王が処刑されるほんの一週間前のことだった。
難攻不落、一度入れば誰も出ることのできない監獄に身を置いたシキは、しかし自分の両足を切り落とすことで錠から逃れ、脱獄した。インペルダウンから出ることができたのは後にも先にも彼一人のみである。
姿を消したと聞いた時、いずれこうなるのではないかと考えていた。
腐ってもシキは海賊であり、腐ってもセンゴクは海兵である。
友などではない。今更関係が変わることなどない。それでも同じ

時代を生きた情はある。
己の感情を押し殺し、センゴクは冷淡な視線でシキを睨む。
「世間話をしに来た訳では無さそうだな。目的はなんだ？」
「目的？　お前はもうわかってるはずだぞ」
シキは、かつてこの島に現れた時とは異なり、笑っていた。
以前ここで向き合った時は怒りの念に溢れていた。あれほど激怒した姿は見たことがないというほど、あの時の彼は怒りで我を忘れていた。その結果がマリンフォードを舞台にした激闘であり、センゴクとガープは二人がかりでシキを撃破し、捕縛した。
あの頃は今より若かった。
当時の戦闘ではマリンフォードの町が半壊したのだ。この島に住んでいた人々にとって、或いは世界中の人間にとっても思い出したくない悲劇だろう。
ここに現れたということは理由は一つ。
再び海賊として動き出す。その宣戦布告に他ならない。
「ロジャーの居ない海はどうだ？　おれが見たところずいぶん生ぬるくなったなぁ」
「生ぬるくなったのではない。海軍が平和を維持しているということだ。貴様が見た通りの海だとするならばな」
「馬鹿馬鹿しい話だ。海賊王だの大航海時代だのと。所詮はミーハーどもが好き勝手に海賊を名乗っているだけに過ぎん。おれたちの時代とは違う」
「時代は変わる。ロジャーは死んだ。金獅子、お前ももう足を洗ったらどうだ？　おれたちが生きていた頃の海とは違うぞ。これからも変わり続ける」
「だからこそだ」
シキの声が突然冷たくなった。
気配が変化したことにセンゴクは眉間に皺を作り、拳を固く握りしめる。
「海賊のなんたるかを知らねぇミーハーどもがのさばる海を、このままにはしておけねぇ。忘れたんならおれが思い出させてやる。本

当の海賊の恐怖を」
そう言った時、彼の姿からは凄まじい覇気が感じられた。
歳を取っても変わらない。強靭な覇気も、彼の考え方や生き方も。
一度目を伏せたセンゴクは、改めてシキの姿を捉えた。
「お前は変わらんな。昔からそうだった。だからこそおれとガープはお前たちを追い続けた」
「昔の話だ。ロジャーはもう居ない。白ひげの野郎も椅子に腰かけたままだそうだな」
「ああ。お前と話していると昔を思い出す。どれも懐かしい話だ」
他に手はないのか。
不意にそう考えてしまう自分はあまりにも甘い。
「ガープはどうした？　あの騒がしい奴が見当たらねぇな」
「ここには居ない。惜しいな、お前に会えば問答無用で殴り倒しているところだろう」
他の海兵も聞いている。だが数十年来の知り合いだ。言わずにはいられなかった。
「なぁ金獅子よ……郷愁に駆られる心があるのなら、お前も――」
「おれに全てを言わせる気か？　センゴクよ」
藁をも掴む想いで差し出そうとしたその手は、見ることもなく振り払われた。
センゴクは甘さを捨て、目の前の男を再度敵として見据える。
そしてシキはそんな彼に殺意をぶつけた。
「今日はただの挨拶だ。お前とはいずれまた会うことになる」
「おれがお前を逃がすと思うか？」
「いいや。お前は逃がしちまうんだよ。このおれを」
空気が変わる。
おそらく彼の姿を見ていた海兵は誰もが気付いただろう。何かが来る。
彼を知らない若い海兵が多過ぎた。上機嫌に笑うシキを見て、気付けば体が震えていた。
「言っただろう？　今日は〝挨拶〟に来たんだってな」

変化はすぐにやってきた。
曇天の向こう、巨大な影が現れたかと思えば雲を突き破って降りてくる。帆船だ。無数の船が空を飛んで、マリンフォードの上空を埋め尽くすかのように現れた。
一人で現れたかってとは違う。これこそが金獅子本来の姿。
海賊をやめろ。なんて馬鹿馬鹿しい言葉なのだろうか。
彼は初めからこのつもりで来ていた。昔と何一つ変わらない。
狡猾で計算高く、冷徹で一切の慈悲を持たない獰猛な獅子。ロジャーとの関係もまさしくそれ。狙った獲物を逃がすはずがなかった。
彼は今日、世界を揺るがすつもりでここに来たのだ。
「世話になったなぁセンゴク……一世一代の大勝負だ。おれはこの世界に喧嘩を売るぞ」
轟々と音を立てて船団が降ってくる。
それらを背後に従えたシキは凶悪な笑みを浮かべていた。
「よく見ておけよてめぇら！　この世界はおれが頂く！　ジッハッハッハッハ！」
船団が砲撃を開始した。
無数の砲弾が雨となって降り注ぎ、無慈悲にマリンフォードを破壊し始める。ほんの数秒で被害は甚大であったが、海軍も黙ったままではいなかった。
「流星火山――！」
海軍も反撃を開始したことにより、マリンフォードは激戦地となる。
戦闘自体はすぐに終了し、シキの一味が退いたことで事態は一旦終息したが、短時間でも被害はあまりにも大きく、マリンフォードの町は半壊どころかほぼ全壊となった。
金獅子のシキ復活。
衝撃的なニュースは翌日の朝、瞬く間に全世界へ伝わった。
大小を問わずあらゆる町で噂話が流れ、予想していなかった事態に興奮する者があり、その名の恐ろしさを知る者は姿を見ずとも恐怖で

震えあがった。
シキが動いたとなれば狙いはただ一つ。
支配に拘る彼が目指すものは名声や財宝、安泰などではない。世界征服、それのみである。
世界各国の王族、貴族、平民。絶大な影響力を持つ世界政府、海軍。各地で動く海賊。立場や境遇を選ばない。誰もがその名に心を乱し、世界の終わりだと判断していた。
たった一人の男の名が世に広まっただけで、世界は、絶大な恐怖と混乱に包まれたのである。

ねじまき島の冒険編

荒れ狂う海

昼頃に起き出すと小さな集落はすでに大パニックになっていた。

あくびをしながら身支度を整え、朝食が欲しかったが宿代わりに泊まった民家に誰もおらず外へ出てみると、昨日宴のように騒いだ村民たちが新聞片手にあれやこれやと大声で話している。

さほど気にせず、まずは朝飯と声をかけようとしたところ、村民の一人に声をかけられた。

「エースさん、新聞読んだかい？　凄いことが起こってるよ」

それだけを言って強引に新聞を手渡された。普段あまり読まないのだが試しに目を向けてみるとでかでかと書かれている文字を認識する。

思わず目が止まった。

朝飯などと言っている暇はない。確かにこれは凄いことが起こっている。眠気すら吹き飛んで彼は真剣な顔つきになった。

「あの金獅子のシキが復活したんだ。マリンフォードが攻撃されたって」

知らぬ者のない大海賊の名が新聞にあった。

そんなこと、ここ数十年はなかったはずだ。もう二十年近く前に姿を消して、生死不明の行方不明と語られていたのである。それが今になって動き出した。

狡猾な男という噂は流れている。用意周到で準備に余念がなく、計画を遂行するためなら何年でもかけると語られていたため、不思議ではないのかもしれない。来るべき時が来たというだけだ。しかしそれが一体どれほどの損害に繋がるのか。

冷静な面持ちだったがエースは嫌な予感を覚えずにはいられなかった。

彼が親父と呼んで尊敬する男は伝説の海賊、〝白ひげ〟エドワード・ニューゲート。

その白ひげと同じ時代を生きた、同じく伝説と語られる海賊。
嫌な感じがするのは彼ら二人と同じ時代を生きた海賊についてだ。彼らと同じ時代を生き、一時代を作った〝海賊王〟ゴールド・ロジャーが存在する。特にその男への執着が強かったというシキの登場に、その名を思い出さずにはいられず、エースの表情は曇る。
昨日仲良くなったばかりの村民からすれば、金獅子復活の報で顔が曇ったと思ったのだろう。
新聞を読むエースの顔を見て呟いた。
「まさかまた金獅子の名前を聞くとはね。世も末だよ。うちのじいさんなんかは久しぶりに聞いたんで嬉しそうにしてたけど、本当にわかってるのかねぇ。何も起こらなければいいけど」
村人の男はこの島も危険に晒されるんじゃないかと心配していた様子だ。
彼の言葉を聞いていないのか、エースは新聞から目を離さなかった。
昨日とは様子が違うことに気付き、村人は再度彼に話しかける。
「エースさん？　そんなに驚いたかい？　まぁ無理もないけどね」
「ああ……そうだな」
「でも、あんたにしてみればそんなに怖くないのかな。なんたってあの白ひげ海賊団だ。いつかは金獅子とやり合うのかな」
「どうだろうな。おれ個人としちゃ別に興味はねぇが」
フッと笑い、新聞を折り畳んだエースはそれを村人に返す。
「おれが探してるのは別の男だ。金獅子より先にそっちを片付けねぇとな」
「そうか。おれには海賊の詳しいことはわからんが、まぁ頑張ってくれ」
「ああ。メシと宿をありがとう。もう行かねぇと」
そう言ってエースは荷物を取るためにさっきの家へ戻ろうとした。ちょうど今話している男が家族と住んでいる家だ。
その背を見送ろうとして村人はきょとんとした顔をする。
「もうかい？　朝食は？」

「いいよ。世話になったな」
「忙しそうだね。でも、あんたが来たおかげで楽しかったよ。近くに来たら寄ってくれ」
「ああ。また会おうぜ」
笑みを見せながらだが簡潔に言って、エースは荷物を取ってすぐに村を離れた。
大きな岩に挟まれるような小道を進むと砂浜に出る。そこに彼専用の船、ストライカーを停めてあるのだ。村人が使う小舟の傍に置いてあるはずだった。
胸騒ぎを感じながらも早めに出航しようと、朝食も取らずに砂浜へ足を踏み入れた時。
すでに客人は彼を待っていた。
エースに背を向け、砂浜に座り、葉巻を吸って海を眺める男。
会ったことはないが見間違える訳がない。
頭に舵輪が突き刺さっている人間など、世界広しと言えど彼しか存在しないだろう。
嘆息したエースはもう少し歩いて近寄り、しかし傍には寄らず距離を置いて立ち止まった。
「おれになんか用か？」
「２０年待った。その間に色々と変わっちまったなぁ」
誰に言って聞かせるでもないような、己に確認するかのような呟きだった。
自ら声をかけたエースは眉間に皺を寄せる。
「ロジャーにはガキが居たそうだ。結局見つかることはなかったらしいが」
思わず拳を握っていた。
戦うつもりはない。余計な面倒を増やすだけで、今は他にやるべきことがある。しかしその言葉には体が勝手に反応してしまい、彼の右拳は気付けば炎に包まれていた。
そんな様子に気付いていながら、背を向けたままでシキはぽつりと語る。

「つまらねぇ最期だったが、奴が遺したものは二つある。一つは大航海時代とかいうこのふぬけた時代と、もう一つは――」
「それ以上言うなっ」
「お前だった」
エースの覇気にまるで反応せず、シキは堂々と言い切った。
言い切られたことで逆に何かを想ったのか、エースの拳から炎が消える。とはいえいまだに込められた力は抜けておらず、拳は固く握られたままだ。
「馬鹿馬鹿しいにもほどがある。適合することはなかったが、あいつとは長いことやってきた。その最期が最弱の海イーストブルー。おまけにその死に際で宝狙いのミーハーどもを生んでこの海を堕落させちまった」
「その話が、おれに何の関係がある」
「どうしようもねぇ話だと思ってた時に思い出したんだ。あいつにガキが居るってな。噂だけは牢の中に居た頃には聞こえてたぜ」
シキの顔に笑みはない。
どこか空虚な、ともすれば寂しそうにも見える顔でじっと海を眺めている。
その様子には流石にエースも何かを感じたのか。感情のままに吠えることはなかった。
「つまらねぇ海になっちまった。ここはもうおれの知る海じゃねぇ」
「だったら引退でもしたらどうだ？　今更動き出してなんになる」
「決まってる。全てを丸ごと変えてやるまでだ。真の海賊の在り方を思い知らせてな」
葉巻を指で摘み、煙を吐き出すと初めて振り返った。
シキは笑みを浮かべてエースの顔を見ると、彼に尋ねる。
「今は白ひげの船に身を寄せてるようだな。どうだ？　おれの船に来ねぇか？　あいつは最期まで気に食わなかったが息子となれば話は別だ。悪いようにはしねぇぞ」
「断る。おれは白ひげの息子だ。そんな野郎は知らねぇし、親父の

船以外に用はねぇ」
「ジハハハハッ。そう言うだろうと思ってた」
再び葉巻を銜えて海を見る。シキは動じてはいなかった。
「何も本気で勧誘しようなんざ思っちゃいねぇよ。ただ話をしに来ただけだ」
「さっきも言ったぞ。おれの親父は、白ひげだけだ」
「それでもいい。お前の顔を確認しときたかったんでな」
シキが右手の人差し指をくいっと曲げた。
近くに置いていた大きな杯と酒樽を運んで自分の近くに置いた。
背を向けたまま、自分の隣へエースを呼ぶ。
「やり合う気はねぇよ。一杯付き合え」
しばし無言で沈黙に包まれた。
何を想えば、どう判断すればいいか。複雑な心境だった。
少なくとも敵にはならないようだがかといって味方でもない。ただ話をしたい。そうは言うもののエースにとっては触れられたくない問題でもある。わかっているに違いない。
ただ、不思議とこの時はエースの心は乱れなかった。
相手が自分を笑うならば反応も違うが、シキにその様子はない。穏やかに、奇妙なほど静かに彼との対話だけを求めている。
歳をとり、郷愁に浸って戦意も削がれたのか。
エースは何も言わずに彼の隣へ座り、胡坐を掻いて杯を受け取った。
酒を注がれる。それを呑む。
同じタイミングでシキが自身の杯を傾けた。
二人はしばし黙ったままで何も語らず、打ち寄せる波の音を聞く。
「お前はどうせ知らねぇんだろう。ロジャーのことを」
「知りたくもねぇよ。おれには必要のねぇ話だ」
「ジハハハ、跳ねっ返りが。まぁ聞け。おれが認めた数少ない海賊だ」
酒を片手に語らう。
なぜこんなことをしようと思ったのか。心中を知るのは彼以外に

居ない。
「あいつと会ったのはまだ若ぇ頃の話だ――」
ただ少なくとも、その小さな酒宴は彼の意思で行われたことだけは事実だ。
誰に知られることもなく、知らせることのないわずかな会話。
かつての海を眺めるかの如く、語られる言葉は朗々と紡がれた。

＊

世界に名を売って海賊王の好敵手と知られた男。
〝白ひげ〟エドワード・ニューゲートはあまりにも有名な海賊だった。
数メートルの巨大な体を持ち、年老いてもいまだ揺らがぬ絶対的な力と迫力を感じさせ、数多の海賊が口を揃えて言う。〝最も海賊王に近い男〟だと。本人にその気はない様子だが、その影響力や組織力は世界を動かすほどのものであった。
そんな彼が酒も飲まず、いつになく真剣な顔で新聞を読んでいた。
彼の手にすれば新聞など紙切れ同然の大きさだが、今日ばかりは小さな新聞をじっと見つめる。
「やはり動いたか金獅子。しかし今回はえらく準備に時間をかけたもんだ」
「奴が現れたおかげで世界中大混乱だよい。早くもあらゆる島が襲撃に遭ってるらしい」
傍に立っていた男、特徴的な髪型を持つマルコが口を開く。
彼は白ひげの船団の中で一番隊隊長という肩書を持ち、一味の古株で白ひげからの信用も厚い。従って次の航路を決めるべく白ひげの前に立っている。
「おれたちはどうする？　金獅子が動いたとなりゃ他の連中じゃ止められねぇだろうよい」
「金獅子か……」
馴染みのある名前だがしばらく聞いていなかった。いずれは、とは

思っていたものの、これほど準備に時間をかけたことは初めてであり、今回ばかりは白ひげでも想像がつかない。
なにせ二十年だ。
最後に顔を合わせたのが二十年前。しばらく姿を消すと宣言を聞いて、本当にぱたりと名前を聞かなくなってしまった。この間にどれほどの準備をしたのだろう。実際に見てみるまでは軽々しく結論を急ぐこともできなかった。
ただ一つわかるのは、シキが誰かと組むことはないということである。
同じ時代を生きた海賊ならばまだしも、格下と肩を並べることはまずあり得ない。かつては後の海賊王ゴールド・ロジャーを自身の右腕にしようとしたほどだ。
今回も間違いなく一人で動く。傘下を作り、島を支配して、世界に喧嘩を売るつもりだ。
「おれたちが手を出す訳にもいくめぇよ。他の連中が暴れ出すのは目に見えてるからな」
「確かにそうか。だがいいのか？　相手は金獅子だ。止められるのはオヤジくらいしか居ねぇ。特に前半の海で暴れられたんじゃどうしようもねぇよい」
「誰も止められねぇならそれまでだ」
新聞を置いた白ひげは酒瓶を手に取り、中身を口にする。
豪快に飲んでから一息つき、腕組みをするマルコへ目をやる。
「おれもあいつも歳を取った。いずれ時代は変わる。おれが動かなくても若ぇ奴らがどうにかするだろう」
「そこらの連中とは違うぞ。それでもいいのか？」
「ああ。構わねぇ」
マルコは嘆息する。
彼らが動けば情勢は動く。金獅子とぶつかりなどすればどうなってしまうのか想像もできない。そればかりかチャンスを狙って彼らのナワバリに攻め込む者も居るだろう。仮にそうなれば大規模な戦争は免れない。

白ひげは若い世代に解決を託したようだ。
果たしてその決断が如何なる結果をもたらすのか。今はまだわからない。
「ただエースには連絡しておけよ」
「聞くはずがねぇよい。弟の件を除いて一切連絡を寄こしやがらねぇ」
「手紙の一つも送ってくれ。嫌な予感がしてなぁ」
そう言った白ひげがいつになく心配そうにしているのを、マルコは見逃さなかった。
「金獅子が妙な気を起こさなきゃいいんだが」
再び酒を口にする。
マルコはひとまず彼の言う通りにしておこうと決断した。
部下に命令し、エースに連絡を取るために動き出す。
同じ頃。別の島では。
金獅子復活の報は全世界へ届けられており、今や知らぬ者が居ないほどの重大な問題である。新聞を読めば誰でも知ることができた。
その名を恐れる者も居れば、逆に彼の復活を喜ぶ者も居たようだ。
大きな瓢箪に入った酒をがぶがぶ飲み、口元を濡らしながらも喉を潤す大男が居た。左手には読んだばかりの新聞を握りしめていて、力が入ったのかくしゃくしゃになっている。
部下たちはあまりにも大きい彼を見ながら緊張していた。
その男、酒癖が悪いことで有名であった。その癖は決して一定ではなく、果たして今日は笑い上戸か、怒り上戸か、泣き上戸か、酔ってみるまでわからない。ただ少なくとも酔った時点で命の保証がないことだけは確かなようだった。
空になった瓢箪を勢いよく地面に置いて、胡坐を掻いた大男は笑う。
どうやら今日は上機嫌。笑い上戸だったらしい。
「ウォロロロ……金獅子のジジイが戻ってきた。いつか現れるとは思ったが、最初に狙ったのはマリンフォードか。予想とは違ったがまぁ妥当だろう」

「カイドウ様、お酒はそろそろやめた方が……」
「バカ野郎。こんな日に呑まねぇでどうする」
異様な巨躯を持つ大男、カイドウはそう言って別の酒樽を掴んだ。
杯に注ぐことなく直接口へ運びながら、再び新聞を読み始めた。
「あぁ、今日はいい日だ。酒がうまい。まさかこんな日が来るなんてな」
「あの……カイドウ様？」
「遅過ぎたくらいだ。もっと早くに来ると思ってた……ウォロロロロロ」
「まさかとは思いますけど、その、金獅子に喧嘩売るって話じゃありませんよね？」
ビクビクした手下の一人が小さな声で尋ねる。するとカイドウの声は上機嫌に跳ねた。
「喧嘩？　そんなことしねぇよ」
「ホッ、よかった……。では、我々はどうするので？」
「決まってるだろ。戦争を仕掛けるんだよ」
「え？」
幹部ではないだろう男の問いかけにカイドウは機嫌を崩さない。
それほどの喜びが金獅子の名にあった。
「おれがあいつを殺せる日が来るなんて夢みたいだ。おれァ運がいい。そうだろう？」
あっという間に酒樽を空にしてしまって、空になった木製のそれを手で握りつぶしてしまった。破片が散らばる頃には報告に来た手下たちが怯えてしまい、一歩後ずさる。
そのまま去っていれば何事もなかっただろうがそうはいかなかった。
数人の中の一人が疑問を口にし、あろうことかそれをカイドウ本人にぶつけてしまう。
「し、しかし、相手はあの金獅子ですよ？　戦争なんて仕掛けたらどうなるか……」
「あの？　あの金獅子？　ああ、そうだな……あの金獅子だ」

急に声色が変わってわずかに沈んだ様子になった。
さらにもう一つ、酒樽を持ち上げて中身を呑む。
息を呑んで立ち尽くし、口を閉ざして彼の姿を見上げていた手下たちは次の言葉を待っていた。
「それがどうしたァ!!」
次の瞬間、鼓膜が破れたかと錯覚するほどの大声で全身が揺さぶられていた。
そして気付いた時にはカイドウが振り切った金棒が手下の一人を殴り飛ばしていて、厚い岩盤を一瞬にして破壊し、天高くまで吹き飛ばされてしまう。
状況を把握できたのは降ってくる瓦礫が近くに落ちてきた時だ。
怯えた手下たちは腰を抜かしてその場へ座りこむ。
「おれが誰だかわかってんのかァ!!!」
「ひええっ!? 怒り上戸に変わったぁ〜!?」
人間の倍はあろうかという大きな酒樽を片手で掴み、今度は一気に中身を飲み干してしまう。
明らかに酔っ払っている彼は空になった酒樽を地面に捨てて、さっきの怒りも一瞬にして忘れてしまったらしく、再び上機嫌に笑い始めた。
手下たちはもはや何も言えず、必死に口を閉ざして自分の存在を忘れさせることに尽力した。
「あの金獅子……そう、あの金獅子だ。あの金獅子をこの手で殺れるのさ。こんなに嬉しい話があるか。他の連中だって黙っちゃいねぇだろうよ。白ひげのジジイも、ビッグ・マムも、赤髪の小僧も、あのジジイを放ってはおかねぇ」
山と積まれた酒樽、次の一つを取ろうとして、右手が一度空ぶった。もう一度動かしてきちんと手に掴むがどうやら相当酒が回っているらしい。
最高に良い気分だと言っていいだろう。それも一重に金獅子の復活を知ったからだ。
「もうすぐ世界最高の戦争が始まるのさ。今すぐジョーカーに連絡

しろ」
「ジ、ジョーカーと言うと……」
「準備を怠るな。派手な戦いにしようぜ……ウォロロロロロ」
手下たちがぞっとする前でカイドウはいつになく嬉しそうに笑う。
この日、彼は前半の海への侵攻を決定。
必ず他の海賊たちも黙っていないと判断した上で、均衡を破壊すると知って決断した。引き金を引くのは金獅子ではなく自分だ。そう考えての決意である。
また別の島で、同じく新聞を読んで笑う者が居た。
こちらも人々が見上げるほどの巨躯を持つ女性であった。
彼女は自分の息子、娘たちに囲まれ、会議をするように話し合おうとしている。
「マ〜ママママハハハハ……金獅子が動いたって？　面白いじゃないか。マリンフォードは崩壊。宣戦布告は済んだんだ。これでこの海は荒れるね」
怯えた様子など欠片も見せず、笑みを浮かべてただ楽しいものだと考える。それは絶対的な力と地位を持つ者特有の余裕であった。
彼女が産んだ息子や娘も同様の反応であり、金獅子の名に怯える者は居ない。
その証拠と言わんばかりに長男が母親を見上げて口を開いた。
「ペロリン♪　しかしママ、金獅子はゴールド・ロジャーへの執着が強い。〝新世界〟を襲う前にイーストブルーを狙うんじゃないか？」
「それはどうだろうねぇ。奴は狡猾な男だよ。おれもずいぶん煮え湯を飲まされた。新世界だろうが四つの海だろうがまとめて襲えるくらいの戦力は用意しそうなもんだ」
「我々はどうする？　こちらから動くか？」
「マ〜ママハハハハ。それが問題だ。少なくともカイドウは動くだろうねぇ」
巨体の女、ビッグ・マムは嬉々として語る。
彼女も世界に知られた海賊の一人。思考は常人のそれとは違い、海賊であり覇者であった。

「金獅子を逃がすなんて手はないよ。だがこの機に他の連中を蹴落とすのも面白そうだ……」
にやりと笑う彼女は傍らに座った長身の男に目をやった。
「どうだいカタクリ？　近頃は戦闘が無くて退屈なんじゃないかい？　ちょうどお前が満足しそうな男が居るんだけどねぇ」
腕組みをした男は黙して語らず、彼女に顔だけを向ける。すると別の大男が前へ進み出た。
「ちょっと待ってくれママ。何も将星最強の男が出るまでもないだろう。おれにやらせてくれ」
「おやクラッカー。お前が行ってくれるのかい？」
「もちろんだ。金獅子でも白ひげでも言ってくれればおれが首を獲ってこよう」
「マ～ママママハハハ。そりゃいいね。行っておいで」
かくして、ビッグ・マム海賊団もまた動き出すことを決めた。
どうあっても変化するだろう状況を予測し、この波に乗ろうと楽しげに考える。
そしてグランドライン後半の海に君臨する四人の皇帝、最後の一人もまた情報を得ていた。
〝四皇〟の一人に数えられる、ルフィが憧れた海賊、赤髪のシャンクス。
彼は険しい顔で新聞を見ていた。
「金獅子か。懐かしい名前だ」
「懐かしんでる場合じゃねぇぞお頭コノヤロー。やばい男が表舞台に戻ってきたんだ」
こんがり焼けた骨付き肉を食しながらラッキー・ルゥが呟いた。いわゆる大物と噂されるシャンクスだが平時はどこか間の抜けた部分もある。それを心配しての言葉だろう。
今は真剣な態度だったせいかその心配も杞憂だったようだ。
「ああ……そうだな」
「どうする気だ？」
副船長のベン・ベックマンが煙草を口にしながら尋ねた。

シャンクスは少し考え、すぐに答えを出す。
「白ひげは動かないだろうが、他の二人は黙っちゃいない」
「まぁ、そうなるか」
「前半の海に攻め込まれたら大惨事になるだろうしなぁ」
腕組みして渋い顔になったヤソップが呟く。
彼らは海の皇帝と呼ばれている海賊。現在の状況が均衡を保たれているのは四皇が睨み合いを続けているからであり、誰かが仕掛ければ途端に海は荒れ始める。
四皇の衝突は世界を揺るがす。それを知っているシャンクスは彼らの行動を警戒していた。
「さあ、船を出そう」
「野郎どもォ！　出航だァ！　行くぞォ！」
船員たちの怒号を聞きながらシャンクスが歩き出す。
海の状況を眺めるべく、彼は独自の道を進むことを決定した。

再起を誓って

穏やかな波の音を聞きながら、チョッパーはうたた寝していた。
船から持ってきた白いチェアを砂浜に置いて、燦々と照りつける太陽の光を浴び、いつになく落ち着いた雰囲気に気を良くしていた。
雪の降る冬島を出て以降、こうした気候は珍しくないため、だんだん慣れてきた。
毛皮のある彼には少し暑いとはいえ、砂漠のアラバスタを経験した今、あれに比べればよほどマシだと余裕も出てきたらしい。今日のチョッパーはひどく安堵していたようだ。
たまたま立ち寄った島は広いようで、町はあるようだが東側に集中しており、西側には現在地である砂浜を始めとした自然が広がっている。彼らは身を隠すようにしてそこに船を停めたのだ。今は一部の者が町に買い物に行っていて、残りは砂浜で一時の休息を得ている。
先日の疲労や気苦労を忘れるべく、皆が好きなことをしていた。
金獅子との邂逅からほんの数日であった。
当初の予想通り、新聞によってその名を広められた途端、世界は大きく揺れた。かつて自ら姿を消したはずの大海賊の復活。それは新たな戦いを予感させ、どこに居ても安全ではない、いつ自分が犠牲者になるかわからないという恐怖を抱かせた。
影響は少なからず彼らも感じている。
激動の世界の渦中に居て、変化を感じずにはいられなかった。
しかし今、砂浜に居る者たちはそんなことも忘れて遊び呆けている。
岩の上に座ったルフィは釣りをしていて、ちょうど魚がかかったらしく、嬉しそうに目を見開くと思わず大声を出した。
「おっ!?　かかったぁ！　シルク、網～！」
「釣れたのルフィ？　大物？」
「すんげぇ～でけぇ！　急げー！」
隣で同じく釣りをしていたシルクが網を手に取った。
見れば確かにルフィの竿は大きくしなり、海面近くでバシャバシャ

と水が暴れている。よく見れば魚の影も確認できた。かなりの大物だろうと予想できる。
二人は逃がさぬようにと躍起になり、大騒ぎを始めていた。
そんな二人やチョッパーを見て、砂浜に立つウソップは厳しい顔をしていた。
腕組みをしていつになく表情は険しく、呆れている様子である。
珍しく遊びに参加していない彼は、どうやら今後の心配をしているようであった。
「あいつら……緊張感の欠片もねぇな。こんなことしてていいのかよ、こんな状況で」
こんなことをしていていいのか。
何の準備もせず遊んでいていいのか。
金獅子に逆らった今、自分たちを始末するための刺客が送り込まれる可能性もある。金獅子の傘下になった海賊が襲ってくる可能性もある。本当にのんびりしていていいのか。
敵の居ない島においても安心できないウソップはいつになく神経質になっていたようだ。
「たまにはいいじゃない。気を張ってばかりじゃ疲れちゃうんだからさ」
チョッパーの隣、同じチェアに寝そべって目を閉じるキリが言う。
彼に気付いたウソップは安堵している姿に眉をひそめた。
「たまにはって言うけどな、今は状況が状況なんだぞ。金獅子に目えつけられたんだ！　いつあいつの部下がおれたちを殺しに来るかわからねぇんだぞ！」
「まぁーその可能性はあるけど」
「あんのかよ!?」
「でも今すぐじゃないって。現在地もわからないだろうし、少しくらいの猶予はある」
「だからってなぁ……」
溜息をつくウソップに対し、キリは目を閉じたまま薄く微笑んでいた。

金獅子に出会った日、或いは海賊同盟との会談中、あれほど真剣に話していた男は居ない。驚くほど力が抜けていて何も考えてはいなさそうだ。
彼のそんな姿を見るから余計に心配してしまう。と本人は気付いていないのだろう。
「気を張ってばかりじゃ辛くなっちゃうよ。戦う時は戦って、遊ぶ時は遊んで、休む時は休む。海兵じゃあるまいし、それでいいんだって、海賊なんて」
「そりゃ海兵じゃねぇけど、相手が相手だってこと忘れんなってことだ」
「ちょうど歴史的大敗をしたばかりだからね。余計に休暇は必要だよ」
「聞いてるか？　おれの話」
おそらく真面目に聞いていないだろうと感じてウソップは視線を外す。
こんな調子だ。切り替えが早い彼らは今を楽しんでいた。自分もそうなれればどれほど気楽だろうと思いながら、やはりあの時の光景が忘れられない。
伝説の海賊、金獅子のシキ。
彼の姿を肉眼で捉えることはなかったがその能力の一端は見た。
島を持ち上げ、海に叩き落としたのである。
あの一瞬にして島は完全崩壊。島内に居た者も船に残っていた者も、生き残ったのは奇跡と言うしかなかった。あれを見た上で金獅子に立ち向かうと決意すること、こうして今まで通りに過ごすこと、それらをできることが信じられないのだ。
思い出すだけで体が震える。だが彼らは平然としていた。
ルフィとシルクは魚を釣り終えたらしい。砂浜にはルフィと同じくらいは体長があるだろう巨大魚が横たわっていて、二人は嬉しそうに談笑している。
思わず喜んでしまいそうなサイズだったが、ウソップは務めて真剣な顔を崩さなかった。

「これからどうすんだ？　同盟の連中と話したんだろ？」
「あー、やることは多いねー。敵の戦力を削いで、こっちの戦力増やして、情報を集めて、本拠地見つけて、金獅子に勝てるくらい強くなって、本人見つけてぶっ飛ばす」
「お前……本気で言ってんのか？」
「言ってるよ」
「相手が誰だかわかってんのか？」
「わかってるよ」
「島を空に浮かべたんだぞ？」
「浮かべてたねぇ」
「あいつに勝とうって言ってんのか？」
「勝たないと。じゃなきゃボクらが殺されるだけだ」
ウソップは頭を抱えてしまった。重々しい溜息がつかれる。
今回ばかりは逃げようと提案することもできない。逃げたところで、必ず追いつかれる。相手は世界中に恐れられる大海賊。あらゆる海賊がその傘下となり、この先も戦力は増大し続けるだろうと予想される。どこへ隠れても、顔と名前を知られた以上、必ず見つけられるに決まっていた。
少なくともウソップは諦めの境地でそう考えていた。
「信じたくねぇなぁ……誰か夢だって言ってくれねぇかな」
「ウソップ。実は全部夢だったんだよ」
「ありがとよ。嬉しくて涙が出そうだ」
「よかった。じゃあそろそろ現実見ようか」
ウソップが肩を落とす一方、巨大魚を担いだルフィとシルクが近付いてくる。
一匹だけとはいえすでに大漁と言っていいサイズだ。ルフィが食べることを考えれば少なくもあるが釣果としては嬉しい一匹だろう。
報告をすべくやってきた二人を、キリは目を開けて迎え入れた。
「しっしっし。見ろ、でっけぇだろ」
「いいね。でもあそこ浅瀬じゃなかった？」
「たまたま来てたのかな。食いしん坊だったのかもしれないね」

ルフィが魚を砂浜に下ろし、シルクはチョッパーが眠るチェアに腰掛ける。
他のメンバーは町へ買い物に出ていて、今ここに居るのは彼らだけだ。
少し口を閉ざせばすぐに静寂が訪れ、彼らにとっては珍しい、誰がはしゃぐでもなく静かな一時がやってくる。船の上に居る時とはまた違った波の音が心地よかった。
ルフィは自分が釣った魚を気にしているようで、いつものように腹が減っていたらしい。みんなに目を配ると普段と変わらず提案する。
それに対応するのは再び目を閉じたキリではなく、微笑みを湛えるシルクだった。
「サンジが戻ったらこれでメシ作ってもらおう。うめぇだろうなー」
「ふふっ、そうだね。でもナミたちの買い物が長引くと、もう少し遅くなるかも」
「え～？」
「それとも、私たちで先に食べちゃう？」
「いいなそれ！　にしし、丸焼きにしたらうまそうだ」
二人のやり取りを聞いていたウソップは険しい顔で口を開いた。
いよいよ黙っていられなくなったのか、ルフィに向かって指を突き出す。
「待て待てルフィ、これだけでかい魚だぞ。身はたっぷりあるんだ。サンジに任せりゃ三品も四品も作ってくれる。それを丸焼きにするってのはもったいねぇだろ」
「そうか？　でもおれ腹減ったしな」
「焼いて食うならちっちぇ魚で十分だろ。おれについて来い。おれ様の釣りテクニックで十匹でも二十匹でも釣ってやる」
「ほんとかウソップ～！」
やけにノリノリだったウソップと共に釣り竿を持ったルフィは海辺に戻っていく。
ついさっきまで怖がっていたのにこの態度だ。

彼も十分図太い神経を持っているだろう。少なくともキリは彼の後姿を見てくすくす笑う。
「意外と楽しそうだなぁ」
「ウソップも慣れてるからね。うちの一味に」
早速釣りを再開する二人を遠目に見守りながら、彼らはその場を動かなかった。
その時、何かを思い出した様子でシルクがあっと声を洩らした。
「そういえばキリ。聞きたいことがあったんだけど」
「んー？」
「これって何？」
彼女がポケットから取り出したのは小さな紙切れだった。何の変哲もない白い紙で、さほど特別な様子は見られない。それをクルー全員に渡されていたのだ。
それを見たキリは納得した様子で声を出す。
「言ってなかったっけ？　だめだな、力が抜け過ぎた」
「キリがみんなにこれを渡した時、私、見張り台に居たから。説明聞いてなかったんだ」
「ああ、そういうこと」
説明を始めるためキリが体を起こす。
座った状態で彼女と目を合わせ、少しは真面目な態度で話そうとした。
「それはビブルカード。特別な方法で作られる特殊な紙で、特定の人物が居る方角や状態を教えてくれるんだ。バジル・ホーキンスの仲間が作ってくれた」
「教えてくれる？」
「そう。みんなに配ったのはルフィのビブルカードだ。これでルフィの居場所がわかる」
掌の上に紙切れを置いたシルクは、その紙が少しずつ動いていることに気付いた。そちらの方向を見れば離れた位置にルフィの後ろ姿がある。
こういうことか、と少し納得できた。

どういう原理なのかは知らないが、確かにルフィの現在地を知れるようである。
「これがあればたとえはぐれてもルフィとは合流できる。あとは傘下に配るだけ」
「そっか。みんなが集まる時のために」
「便利な物だよ。それと、もしこの紙がもっと小さくなったりした時、それがルフィの身に危険が迫ってることを表すサインだ。この紙が全て燃えて消えてしまったら」
「ルフィが……死んだってこと？」
キリは頷いた。
深刻な様子ではない。気の抜けた顔は依然そのままだが、その話を聞いたシルクは少し緊張していた。冷静に受け止められる話ではない。そう言われるとどうしても気になってしまう。
彼女の様子とは正反対に、キリは再び背もたれに体を預けて寝転ぶ。
「まぁ、心配はいらないさ。だってルフィだし。自力でなんとかするよ」
「うん……そうだよね」
「むしろ迷子になることを心配しないと。これがあれば安心だろうけどね」
「そうだね。じゃあホーキンスには感謝しなきゃ」
シルクはにこりと微笑んで緊張を解いた。
ビブルカードを大事そうにポケットの中に仕舞って、失くさないように注意しようと決める。これさえあれば少なくとも彼を見つけることは可能だ。大事な物には違いない。
「他の一味はもう動き出してるんだろうね。金獅子の傘下を潰したり、情報収集したり、協力者を募ったり……やり方は様々だ」
「私たちも動かなきゃね」
「だね。さて、何から始めたものか」
キリは目を閉じて眠ろうとしているかのようだった。
そんな彼の態度を気にせずシルクはルフィたちの背中を眺めてい

る。
始めると言ったところで、海賊同盟に始まり、大海賊との抗争、あまりにも規模が大きな話で何から手をつけていいものかわからない。今はまだのんびりできているがやがてシキと正面から向き合った時、間違いなく大戦争になる。そのための準備をした経験がある者が居るはずもなかった。
同盟締結からその後の指針の決定まで、しばらく尽力していたキリは現在、何も考えたくないと言わんばかりにぼんやりしている。もうしばらくはこのままだろう。
ちらりと彼を確認したシルクはすでに理解していた。
時として真剣に頭を働かせる彼は、その後しばらくは何もしなくなる。クロコダイルの呪縛から逃れて緊張から解かれた今なら尚更だ。彼女は急かそうとは思っていなかった。
「私たち、これから仲間を探すの？」
「或いは協力者を探すかだね。どんな些細なことでもいい、武器や食料や、何かしら協力してくれる人が居た方がいい。別に海賊じゃなくても問題ないから」
「協力者か……見つかるかな？」
「相手の状況によるかな。対価が要るのか、要らないのか。契約か無償か。一番いいのはシキの傘下が町を荒らして、それをボクらが助けるとかだね」
「それで私たちの印象が良くなるって？　なんか悪いことしてる気分……」
「海賊だから良いことなんてしないさ。人助けをするならルフィの気が向いた時か、ボクが判断して利がある時のみに限る」
「そっか。うん、そうだと思ってた」
思考としては正常でない、悪辣としたものだが、彼がそう言い出すことはわかっていた。
驚かなかったシルクは比較的平然と受け止める。
出会ったばかりの頃ならもう少し強く止めたかもしれない。しかし今はあの頃よりも彼のことを深く理解している。敢えて跳ね除け

ようとは思わない。
そうでもしなければ生き残る方法がないのだ。
これだけのんびりした時間を過ごしながら、その実危機的状況にある。
海賊として生き延びることを考えて、そうするしかない。
二人で話していたその時、突然ウソップが大声を上げた。
魚が釣れたのだろうかと改めてその背を見ると、どうやら違うらしいことが伝わる。
「たた、大変だぁ!? メリーが動いてるぞ!」
ウソップの焦った声を聞いて視線を移動させてみる。島の近くで錨を下ろして停泊させておいたゴーイングメリー号が動き出しているのである。波に攫われている訳ではない。誰かが錨を上げて動かしている以外にあり得ないのだ。
呑気にその様を見ていたルフィはまだわかっていなかったらしい。不思議そうな顔でメリー号を見て大した反応はなかった。
「なんでメリーが動いてんだ? ……動きたくなったのかな」
「んなわけねぇだろ! 船泥棒だよ! 誰かがメリーを盗もうとしてんだ!」
「なにぃ!? 船泥棒!?」
「当たり前だろうがっ! おいキリ、船に戻れるか! 船泥棒を捕まえるんだ!」
「よし、おれが――!」
ウソップに言われてようやく状況を理解したルフィが腕をぐるぐる回す。その場から腕を伸ばして船を掴んで飛ぶ気らしい。
それを見た頃になってキリが手を上げた。
慌ててはおらず、姿勢を変えようともしない。さっきまでと同じ体勢で居た。
「ちょっと待った。多分大丈夫」
「はぁ!? 大丈夫って、メリーがどっか行っちまうんだぞ! 今すぐ止めねぇと!」
「多分止めてくれるよ。心配いらないと思う」

冷静というにはあまりにも無関心な態度に少しカチンときたものの、理由もなくそんなことを言い出す男ではないはずだ。ウソップは険しい顔のままキリの下へ移動する。
大丈夫だと主張する理由は何なのか。
彼が言うから大丈夫なのかもしれないが、親友からもらった大事な船だ。やはり気分は落ち着かないままウソップは理由を問いただした。
「どういう意味だよ。船には誰も残ってないだろ？　サンジたちは町に行ってるし」
「いや、起こしても起きないから置いてきたんだ」
「ん？　……あぁ」
「ボクらが居るのすぐそこだからさ。起きたら勝手にこっち来ると思ってたから」
どうやらその言葉だけで全てを理解したようである。
あれだけ慌てていたウソップは唐突に冷静さを取り戻し、何一つ心配していない顔で振り返ると島から遠ざかろうとするメリー号に目を向けた。
彼の変化を感じ取り、ルフィは首を傾げる。
シルクはキリの言葉で気付いていたが、離れた場所に居た彼はよく聞こえなかったのだ。
動き出したメリー号には彼らが想像した通り、船を動かす人物が居た。
厚手のコートを着て、頭にゴーグルを着けた男が帆を張る作業を行っていた。帆船を一人で動かすのは決して簡単なことではないが、彼も船上での生活が長いのか、手を止めることもなく素早い作業で帆を張り終える。
帆が風を受けて、徐々に島から離れていく。
目視で確認した彼は船の後方に目を向けて問いかけた。
「どうだアキース。あいつらは動いたか？」
「いいや！　こっちには向かってこないみたいだ！　このまま逃げ切れる！」

「そうか。思ったより上手くいった」
双眼鏡で砂浜を確認し終え、勢いよくメインマストの傍へ走ってきたのは小さな子供だ。
長身の男、ボロードと、小さな子供、アキース。
まだ広くは知られていなかったが、二人を指して〝泥棒兄弟〟。そう呼んでいたのは他でもない本人たちだ。主に海賊たちを標的に盗みを働く彼らは時として財宝を、時には大胆にも海賊団の船を盗んでしまう。相手を吟味し、確率が高い時しか動かないため、大きな失敗もない二人組だ。
アキースが諜報、索敵を行い、ボロードが実行犯として動く。
今回は突発的ではあったが、船に人気がないと見て犯行に及んだのである。
徐々に島を離れていくのを確認しながら、安堵する二人は笑みを浮かべていた。
邪魔は一切入らなかった。今頃は島に残った者たちが気付いているかもしれないが追いつく術などないはず。今回の盗みも大成功。そう思ってほっとしていたのだ。
「やったなボロード！　今回は帆船だぜ！」
「ああ。少し小型だが物はいい。傷も少ないし、良い物もらったな」
「言っとくけど、俺が見つけたから盗み出せたんだぜ。あいつらバカそうだし、ちっとも気付かないからいけるって思ったんだ」
「わかってるよ。だが船を動かしたのはおれだ。一人だけの手柄にすんなよ」
上機嫌で会話する程度には彼らの喜びは大きかった。
互いに笑顔で、ボロードが手を上げると背が低いアキースも精一杯右手を上げた。
「おれたち泥棒兄弟は最高のコンビだ！」
「おれたちに盗めない物なんてない」
喜びからハイタッチしようとしたその瞬間、ガチャッと扉が開けられる。
突然の事態で呆けた二人は手が触れる前に動きを止めた。

船室から現れたのは、扉越しにはっきりと彼らの発言を聞き取っていたゾロであった。彼は意地が悪そうな笑顔を二人に向ける。
「惜しかったな、泥棒兄弟。おれが居なけりゃ成功だった」
「なっ!? まだ人が居たのかよ!」
「待て、アキース。落ち着け。おれが話す」
船を動かすことに精一杯で、船内の確認までは手が回らなかったらしい。
ただ一人男部屋で眠りこけていたゾロは仲間たちに置いていかれ、船上の気配に気付いて目覚めたようだった。
これは彼らにとって不測の事態。だがボロードは落ち着いていた。
手で押しやってアキースを下がらせ、ゾロの前に立つ。
冷静な面持ちのボロードは彼と対等に話そうとしていた。
その様子を感じ取ってゾロも彼に注目する。
「船を盗もうとしたことは悪かった。だが話せないか? おれたちにも事情がある」
「悪いがお前らに興味はねぇ。さっさと船を戻してくれ」
「お前たちにも利益がある。当然、おれたちにも。取引をしたいんだ」
「そういうのはうちの副船長にしてやってくれ。おれには関係ねぇ話だ。まずは島に戻ってもらおうか。話はそれからだろ」
ボロードの冷静な語りに対して、ゾロは興味がないと突っぱねる。
まるで聞く耳を持たないのを感じたのか、意を決したボロードは銃を構えた。懐から素早く取り出して、銃口の狙いはゾロの胸に定める。
「悪いがおれたちも手段を選んでいられない。手土産が必要なんだ」
「やめとけ。それじゃおれは仕留められねぇよ」
「殺すつもりはない。ただ話を聞いてほしいだけだ」
「だとしても意味はねぇよ。脅迫に屈するようなタマに見えたか?」
にやりと笑った瞬間、ゾロは動いた。

直立不動だった姿から一転、姿勢を低く、反応を許さないほどの速さ。まるで獣のようだ。
咄嗟に怯んだボロードが腕を動かそうとした時には、すでに抜かれていた刀で銃身が斬り飛ばされていて、気付いた時には甲板でカツンと音がした。
銃と刀。圧倒的優位に立っていると思っていたがとんでもない。
首筋にそっと刃を添えられ、冷や汗を流したボロードは指先一本すら動かせなくなった。
「ボロード!?」
「下がってろアキース……！　そこを動くな……」
「お前らの命に興味はねぇ。おれが言ってんのは一つだけだ。さっさと、船を、戻せ」
右手に残った銃の残骸を捨て、恐る恐るボロードが両手を上げる。降参するしかない。
表情は強張っていたが彼の思考は速く、この状況でも生き残るべく、いまだに諦めてはいない。
「わかった……船を元の位置まで戻す。それでいいんだな？」
「ああ。あとのことは船長に任せるよ。副船長に目ぇつけられねぇように祈っとけ」
「船は戻すが、話は聞いてほしい。こうなった以上、おれはあんたたちと手を組みたいんだ」
「この期に及んでまだ言うのか？　好きにしろよ。おれァどうでもいい」
ゾロは刀を納めた。
その途端にボロードはがくりとその場に崩れ落ち、膝をついて座り込んだ。慌ててアキースが彼に駆け寄って顔を覗き込む。
「ボロード！　この野郎ォ……！」
「よせアキース。やめろ」
「言っとくが船を盗もうとしたのはお前らだ。暴れるってんなら相手になるが？」
この状況を歯牙にもかけていない様子でゾロは淡々と告げる。

流石に勝てるはずがないと踏んだのか、アキースは暴れようとはしなかったが、敵意を込めた目で彼を睨みつける。ボロードは彼を止めるように腕を掴んだ。
盗むことには失敗した。だが全て台無しになった訳ではない。
ボロードは尚もゾロに語りかけた。
「お前ら、有名な海賊だろう。手配書を確認した……麦わらのルフィの一味だな？」
「だったらどうした？」
「手を貸してほしい。おれはお前らに会えたことを幸運だと思ったんだ」
「船を盗めるからか？　大した交渉だな」
「いいや。船を盗んだのは、ある海賊と戦ってほしかったからだ。嘘をついて利用しようとしたのは悪かった。結果的に失敗したわけだが……今からは本当のことを言う」
「おい、それよりも先に船を元の位置にだな――」
ゾロが呆れた顔で髪を掻くも、真剣な顔のボロードは止まらない。
彼を見つめて熱心に伝えてくる。
「お前たちの力を借りたい。ある島を、海賊たちの手から救いだしてほしいんだ」
その提案を聞いてゾロはぴくりと眉を動かした。
海賊に持ちかける話としてはらしくない。何を期待してそんなことを言っているのか。確かに彼らはアラバスタを海賊の手から解放する一因となったが、その話は広まっていないはずだ。
よもや麦わらの一味を慈善団体と認識しているのではあるまいか。
呆れたゾロは島に目を向けて呟いた。
「そういうことはうちの副船長に言え。上手く乗せれば、可能性はあるかもな」
気まぐれなルフィはどう動くかわからないが、彼なら利があると知れば動く可能性はある。
彼がそう告げるとボロードは力強く頷き、一方でアキースは困惑した顔だった。

溜息をつき、ひとまず島に戻るのを優先すべく、ゾロはもう一度二人を急かして船を動かす。

ねじまき島

航海を再開したゴーイングメリー号は、曇天の下で海を進んでいた。
立ち寄った島で必要な物を買い揃え、航海の準備は万端。大きな問題も特に起こっておらず、出発はいつもとさほど変わらず平然としたものであった。
ただいつもと違ったのは、船に部外者が二人乗っていたこと。
ゾロが見つけた泥棒兄弟、ボロードとアキースは、甲板に座っていた。
周囲を海賊たちに取り囲まれ、まだ幼いアキースは不安そうな表情を隠せなかったが、覚悟を決めていると見えるボロードは強い眼差しで彼らを見ている。前に居たのはルフィとキリ。一味の船長と副船長が揃って彼の提案を聞こうというのだ。
手を組もうと言い出した彼の提案はひどく簡単なものだった。
とある島を支配する海賊を倒してほしい。言うなればただそれだけのこと。
その対価として渡された情報は、その島にあるというダイヤモンドクロックについて。
「ダイヤモンドクロック？」
「ああ。その島の象徴とも言うべき代物だが、その名の通りダイヤモンドで作られた時計だ。お前たちが思ってるより大きな物だぞ」
「頂くわ」
「早ぇよ!?　まださわりだぞ！」
思わず反応してしまったナミをウソップが止め、ボロードの視線は改めて二人へ。
ルフィは自身が釣り上げた巨大魚の料理を食べながらであるため、集中できているかは不安な姿ではあるが、その分キリが真剣に話を聞いている。ボロードの視線は彼に向きがちだった。
「そのダイヤモンドクロックを持っていっていいから、海賊を倒して島を解放してほしいと」

「そういうことだ」
「おいしい話ではあるけどずいぶんな対価だね。その島の人間？」
「いや……」
「ということは時計は盗むことになるってわけだ。まぁそこは別にいいよ。海賊だし、いざその時になったら別に躊躇わない。ただそこまでしてボクらに頼むのがわからないな」
乗り気に見えるキリではあったがすぐに頷こうとはしなかった。
まだボロードを信用していないのは目に見えて伝わった。おそらく隠そうともしていない。それを感じ取っていたボロードも当然のものとして受け取って、それでも意見を変えようとはしていなかったようだ。
それはまるで、彼らに頼るしかない、と考えているようにも見えた。
「島の人間じゃない、故郷でもない人間が海賊に頭を下げてまで助けてほしいなんて。どうしてそんなことを？」
「それは……」
「大体予想はつくけどね」
キリの目がちらりとアキースを確認する。ボロードの隣に座る彼は所在なさげにしていて、気丈に振舞っているが現状に不安を覚えているのは明らかだ。
ボロードも彼の視線に気付いて顔を伏せる。
予想は当たっているらしい。彼の態度だけで感付くことができた。
「まぁいいか。ボクらにも利益があるなら試す価値はある。相手は？」
「トランプ海賊団。ここ数年、ねじまき島を拠点にしている一味だ」
キリの質問にボロードが即座に答えた。
その名を聞いてキリがシルクに視線を送る。何も言わずに頷いた彼女は手配書の束から該当する者たちを探し始めた。
彼女が手配書を探す間、キリはさらに質問を続ける。
ついさっき不意に言われた。目的地はねじまき島になる。その名は聞いたことがなかった。
「ねじまき島って言ったね。どんな所？」

「言っておくが、おれは解放してほしいと頼んだわけで……」
「略奪なんてしない。ボクらも色々入用でね。欲しい物はたくさんあるし、略奪はしないにしても力を貸してくれる人を探してる。どんな特徴があるのか知りたいんだ」
「手は出さないと、約束してくれるんだな？」
「もちろん。ただ忠告しておくけど、海賊が必ず約束を守ってくれるなんて思わないことだ。大体の奴は嘘つきだからね」
そう言われてボロードの顔が険しくなるが、彼はゆっくりと口を開いた。
「ねじまき島は……機械技術が発達してる島だ。小さな町が一つあるだけだが、そこに入ることは簡単じゃない」
「海賊が支配してるから？」
「それだけじゃない。島自体はさほど広くないんだが、ほとんど人工島のような物で、町は島内と言うより空にあると言っていい」
「空に町？　なんだそりゃ。さっぱりわからねぇ」
訳が分からないと思わずウソップが口を挟む。
他の者たちも同じ感想を抱いているようで、話を聞いても想像できなかった。一体どんな形をしているのか予想を立てることすらできない。
気にせずボロードは説明を続ける。
「島は当然、トランプ海賊団が占拠してる。そこで町の人たちを無理やり働かせ、自分たちが使う兵器を作らせてるんだ。奴隷のようなものだ。彼らに自由はない」
「そういう奴が居るのよね、海賊の中には……」
顔をしかめたナミがつい反応した。
彼女も同様の経験がある。黙ってはいられなかったのだろう。少なくともこの時点で、彼女にはトランプ海賊団を倒す理由が二つは用意されたのだ。
「おそらく侵入者に対する罠も多く設置されてる。正面突破は不可能だと考えてくれ」
「相手と罠の種類にもよるけどね。どの程度の物かわかる？」

「種類まではわからないが、トランプ海賊団の船長、ベアキングは冷酷な男だ。自分に逆らう奴は簡単に殺してしまう。侵入者にも同様だろうな」
「ずいぶん詳しいね。昨日今日知ったわけじゃなさそうだ」
頬杖をついたキリが気の無い声で呟く。
微笑みを湛えている彼だがなぜか気になる。一応話を聞いている風で、同時に魚を食べるのに忙しいルフィを見るのとは印象が違った。何か見透かされているような気がして仕方ないのだ。
難しい顔をするボロードだが、彼には覚悟があった。
最大の目的はトランプ海賊団を倒すこと。それだけを考えて口を動かす。
「時間をかけて調べた。それでも全てを知ることができたわけじゃないが……」
「執着が強いわけだ。島内の状況は？」
「小さな町が一つだけだ。トランプ海賊団の兵士が支配してる。むやみやたらと殺すわけじゃないようだが、少なくとも、作りたくもない兵器を作らされてるのは間違いない」
「となれば武装もそれなりなわけだね。ふむ……」
頷いたキリが何かを思案する。
その様子に嫌な予感を感じない訳ではなかったが、誰かが指摘する前にシルクが言った。
「あったよ。トランプ海賊団。幹部四人と船長に懸賞金がついてて、一番上は６６６０万ベリー」
「んん、まずまず。厄介なのは科学力だね。雑兵の装備も整ってそうだ」
「それに、船長のベアキングと幹部のハニークイーンは能力者だ。他の三人もねじまき島が生み出した装備を持ってる」
「詳しいね。実際自分の目で見てきた？」
キリに問いかけられ、わずかに逡巡したボロードだが、覚悟はあった。彼は唐突に左手にしていた手袋を取る。
その手を見て数名が息を呑んだ。

現れたのは機械仕掛けの左手。いわゆる義手だ。どうやらトランプ海賊団を知った時、本来の腕を失ったらしいことが彼の態度からわかる。
「ああ……この目で見た」
「だから〝手を組もう〟か。自分一人では不可能だと知って」
「おれもしがない泥棒だ。払える物なんて何も持っちゃいないが、あいつらは違う。トランプ海賊団が持ってる物なら何でも持って行ってくれ。おれはあいつらが失脚すればそれでいい」
真剣な、それでいて熱を感じる静かな言葉である。
彼らは黙り込み、ボロードの頼みを受けて真剣に考えた。
そんな折に、黙っていられなかった様子のアキースが口を挟む。
そもそも彼は唐突に海賊に捕まってしまって、自身が憧れるボロードが彼らを頼っていて、この状況その物にまだ違和感と憤りを持ったままだった。
なぜボロードが彼らを頼らなければいけないのか。下手に出なければいけないのか。
そんな怒りが彼の口を動かさせた。
「しがないってなんだよ、ボロード……おれたち、世界一の泥棒になるって決めただろ？　こんな奴らの力なんて借りなくていいよ。おれたちだけでさ――」
「アキース」
「おれとボロードが組んでるんだ！　絶対やれるって！　お前らは知らないだろ、ボロードはすげーんだぞ！　喧嘩は強いし、航海術は持ってるし、何だってできる！」
アキースは拳を握りしめ、興奮した面持ちで主張した。しかしその言葉に対する彼らの態度は冷やかなものだった。誰も口を開かず、じっと彼の顔を見つめる。
奇妙な空気は感じていて、それすらもアキースを苛立たせた。
こいつらはわかっていない。ボロードを認めようとしていない。その想いが衝動となる。
思わず体が動いた時、アキースを止めたのは他でもないボロード

だった。
「もうやめろ」
「でも！　こいつらボロードのこと何も知らないでさ！　なんでボロードが頭下げなきゃいけないんだよ！　そんなの泥棒兄弟じゃないだろ！」
「必要なことなんだ。おれたちだけじゃトランプ兄弟には勝てない……」
「そんなことねぇよ！　おれとボロードだったら勝てるって！　そりゃ、前は失敗したかもしれないけど、おれだってピストルの練習はしたし、何よりボロードは強いだろ！　そんなのやってみなきゃ――！」
「アキース！」
ボロードが大声を出した時、アキースの体がビクッと震えた。
見つめ合って改めて気付いた。長い付き合いになるが、かつてこれほど追い詰められたボロードを見たことがあっただろうか。そこに居たのは普段のボロードではない。何かに焦り、怯え、普段の自信に満ち溢れた男の顔ではなかった。
ようやく事態の重さを知ったらしく、アキースは所在なさげに口を閉じ、座り直す。
どうすればいいかもわからず俯いてしまった彼が気になったものの、今はその時ではない。改めてボロードはキリに目を向けた。
彼は待っていた。まだ話し合いは終わった訳ではない。
不意にキリが目を伏せて、頬杖をついたままボロードに問う。
「どうする？　彼の意思を尊重することもできるけど」
「頼む。力を貸してほしい」
「よっぽどの事情みたいだね。仲違いしてまで海賊に頼むとは」
目を開けたキリがルフィに視線を投げた。
ちょうど魚の骨を噛み砕いている最中だった彼は、視線に気付いても二人を見ていた。
「船長に任すよ。ボクはどっちでもいい」
「うーん……」

ガリガリと骨を噛み砕いて、呑み込んだ時。ルフィの目はアキースを見ていた。
「おいお前。自分の身は自分で守れるか？」
「あ、当たり前だ！　バカにすんな！」
「おれはボロードじゃねぇし、お前の仲間じゃねぇから、危なくなっても助けてやらねぇぞ。それでも戦えんのか？」
「戦えるよ！　おれだって戦える……！」
固く握りしめた拳を震わせながらも、俯いたアキースは感情的に叫ぶ。
ルフィは淡々とした様子で彼を見つめていた。
いつになく静かで、笑みを見せることもなく表情はなかった。
「ボロードの腕が無くなったのだっておれのせいで、おれがもっと強かったら、ボロードが傷つく必要なんてなかったんだ……」
「アキース、お前はそんなこと気にしなくてもいい。おれが勝手にやったことだ。腕の一本くらい後悔はしてないし、お前が気に病むことじゃ――」
「おれのせいだろ！　足手まといになったからだろ!?」
感情が爆発したらしく、思わず立ち上がったアキースはボロードに向き直った。
ボロードは驚きながらも彼から目を離せず、叩きつけられるようなその言葉を受け止める。
「ボロードが言ったんだろ！　二人で世界一の泥棒になろうって！　なのにおれ、おれが足手まといになってていいわけない……！　お前の相棒はおれなんだぞ！　こいつらじゃなくて！」
「わ、わかってる……でも、今回ばかりは相手が悪くて」
「そんなこと知るか！　おれはボロードに命がけで守ってもらったんだ……だからおれも命がけでボロードを守る！　それがおれたち泥棒兄弟だろ！」
最後にはアキースがボロードの胸倉を掴んで、反論は許さないとばかりに言い切った。思わぬ出来事に言葉を失った彼は何も言えず、初めてぶつけられた想いに目を白黒させている。

一方でルフィは笑みを浮かべていた。
彼の決断はすでに終えられたようで、唐突に席を立つ。
「そっか。じゃ、がんばれ」
「え……？」
簡潔に告げられた一言に怒りも霧散し、アキースはボロードの胸倉を掴んだままぽかんとする。気持ちは同じだ。ボロードも何を言われたのか理解できていなかった。
ルフィはいつもの人懐っこい笑顔で言う。
「わりいけどお前らとは手を組まねぇ。おれたちはおれたちで勝手にやる」
「お、おい、ちょっと待て……」
「そのダイヤモンドなんとかはもらうし、トランプ海賊団ってのもおれたちがぶっ飛ばす」
状況を理解できない二人へ向けて、彼の発言は迷わなかった。
「早い者勝ちだ。勝負するか？」
「あ、当たり前だ！　おれたちが負けるわけないだろ！」
「んなことねぇよ。おれもおれの仲間も強ぇからな。おれたちが勝つに決まってる」
「そんなの、やってみないとわかんねぇだろ！」
「おいちょっと待てアキース……！　あんたも、この話し合いは……」
「お前らの助けなんかいらない！　泥棒兄弟が勝つに決まってる！」
アキースが叫んだ直後、キリが肩をすくめた。
席を立った彼は歩き出し、傍を通り抜ける際にボロードの肩をぽんと叩く。
「残念ながらそうなったみたいだから」
「そうなったって、お前ら……」
「うちの船長はこうだからさ。言い出したら聞かないし、発想が自由だ」
言い残して歩き去るキリは船首へ向かう。

ボロードはぽかんとしていて、その背に声をかけることもできない。
その間にもルフィとアキースは、まるでライバルのように敵意をぶつけて見つめ合っていた。
「だったらやってみりゃいいじゃねぇか。手加減しねぇけどな」
「へっ、そんなもんいるか！　泣いたって謝ってやんねーからな！」
「おれが泣くか！　バーカ！」
「うるせー！　バーカバーカ！」
「ガキか」
「どっちもガキだろ」
傍から見ていたウソップとゾロが呆れていた。しかし彼らもまた一連のやり取りを聞いておきながらルフィを止めようとはしなかった。
周りの人間にしてもそうだ。ルフィの言葉に反発して議論しようとはしない。
すでに話し合いは終わったと言いたげにそれぞれが会話など始めている。
状況を理解できず、置いていかれた形のボロードだけが困惑していた。
その時ちょうど、船の前部で双眼鏡を覗いていたロビンが彼らに振り返る。
にこやかな笑みを湛え、涼やかな声が届けられた。
「話し合いは終わった？　ちょうど見えたわよ。目的地の、ねじまき島が」
その言葉をきっかけにルフィやウソップ、チョッパーがいの一番に駆け出し、船首付近に集まると船の前方を眺めた。
確かに遠くに島が見える。そしてその姿に目を見開いた。
聞いていた通り、或いはそれ以上に奇怪な風景。
島自体は小さな物だが、何より目につくのが天へ向けて伸びた台地。形はまるでキノコか花のようでもある。茎のように細い大地が揺れることもなく直立していて、町があるだろうというのはその上な

のだ。雲に届くほどの高さではないとはいえ、恐ろしい環境があったものである。
果たしてあれは倒れないのか。自然の物か。機械とすればどうやって建てたのか。
次から次に見つかる謎に彼らは目を輝かせて、まだ見ぬ冒険に心躍らせていた。
「すんげぇ～！　なんだあの島！」
「ありゃどうなってんだ!?　ほんとに島か!?」
「あの上に人が住んでるのか？　すげー！」
「こんなところがあったんだね。流石に知らなかった」
「フフ。まだ退屈せずに済みそうね」
真剣な話し合いもすでに記憶の彼方。すでに和気あいあいと緩んだ雰囲気が漂っていた。
困惑しているのはボロードばかり。アキースでさえもすでにやる気を漲らせていて、負けん気が先行して躊躇いや戸惑いなど今や忘れ去っていた。
少し慌てた様子でボロードがキリの下へ移動する。
まだ疑念を持ったまま。これを解消せずにはいられなかった。
「手を組むという話は、これは……」
「結果は同じなんだ。問題ある？」
笑顔で振り向いたキリは多くを言わずにそう問いかけた。
問われたボロードは咄嗟に考える。
大事なのは過程か、結果か。考えずともわかることだ。そもそも彼自身が海賊とそう違わぬ身分の海の泥棒。細かいことを気にしてどうする。
やれやれと言いたげに首を振り、深い溜息を一つ。
それで気分を入れ替えた。ボロードは呆れた目で、しかし薄く笑みを浮かべてキリを見る。
「いいや……結果があればそれでいい」
「ん。それはよかった。じゃ、そっちも頑張って」
頷いたボロードはアキースの隣へ戻っていく。そしてすぐ話し始

めたようだ。
それを確認してから、仲間たちが船の前部へ集まってくる。
島を見てはしゃいでいた三人も加えて、彼らは彼らで作戦を立て始めるつもりだった。
「で、どうすんだ？」
「メリーを囮にするって案があったみたいなんだけど」
「断固として反対だ！　絶対反対！　メリーが傷ついたらどうする！　うちには専門の船大工も居ねぇんだぞ！」
ゾロが口火を切ってキリが試しに言ってみれば、すかさずウソップからの反対意見が飛んだ。普段よりも熱い彼はメリーのことになると厳しくなる。その作戦を実行することは不可能だろう。
そうと知って煙草の煙を吐きながらサンジが提案した。
「なら潜入ってのが手っ取り早いんじゃねぇのか？　どうせ検問の類もあるだろうし、あの様子じゃ正面突破ってのも時間がかかるぞ」
「町の様子、ここからじゃ確認できないしね」
「少数精鋭で片付けましょ。もちろん私は残るけど」
シルクが背伸びをしながら島の上部を眺めている隣、ナミはそそくさと自分の安全を確保する。海賊の支配が許せないという気持ちと怖さは別のようで、やはり自身が赴くことはないようだ。
彼女らが真剣に上陸作戦を考案しようとする一方、チョッパーはロビンに質問していた。
島を出て少ししか経たない彼。まだ知らないことも多い様子だ。
「しょうすうせいえいってなんだ？」
「必要最低限の少ない人数で動きましょうってことよ。全員では行かないの」
「不思議作戦ってことか」
納得した様子で頷くルフィも理解したようだ。
にかっと笑った彼は真っ先に言い出す。
「おれは行くぞ！　トランプ海賊団をぶっ飛ばしに！」
「立候補で決める？　敵の幹部は全部で五人。残りは四人」
キリが提案したことで各々が反応した。

「おれは行くぞ。試したいことがある」
「おれはノー！」
「おれはナミさんを守らなきゃならねぇ」
「おれは、どうしようかな……行きたいけど、ウソップが危ないって言うし」
「チョッパー行かないの？　じゃあ私、行こうかな」
「私も参加するわ。フフフ、一度行ってみたかったの。あなたたちの冒険」
好き勝手に喋る一同の声を聞き、意見をまとめたキリが頷いた。
すでに行く気満々な面子を見ると再考する必要性も感じなかった。
これで決定だ。
「ボクを入れて五人か。じゃ、さくっと終わらせよう」
「お前、ルフィが言わなくても引き受けたろ。この話」
「どうかな？　ルフィが興味持たなかったらスルーしてた気もするけどね」
「よく言うぜ……」
早々に話をまとめたらしい彼らは、まるでこれから遠足に行くかのように盛り上がっている。
その様を見たボロードとアキースは真剣な顔つきをしていた。
「なぁボロード……」
「うん？」
「絶対勝とうぜ。世界一の泥棒になるって言ってただろ？」
一瞬、答えに詰まったボロードだが、アキースの顔を見下ろして笑みを見せた。
「……ああ。当たり前だろ。負けていい勝負なんてないからな。たとえ相手が海賊でもだ」
「へへっ！　そうこなくっちゃ！」
本音を言えば、勝負など二の次。
本来の目的はトランプ海賊団の撃破とねじまき島を支配から解放することにある。それ以外は、たとえダイヤモンドクロックであっても興味がないと言っていい。

だが、楽しげに言うアキースの態度を見ると、勝負という言葉も悪い気はしなかった。

トランプ海賊団

ねじまき島には、町を見下ろす位置に巨大な城がある。
からくり仕掛けでいくつもの仕掛けを搭載されたその城にはかつて貴族が住んでいた。近隣の国にも知られた領主が存在したのである。だが今はもう居ない。この島を奪い取る際、トランプ海賊団が逆らう者たちを一掃したからだ。
今、その城に住むのはトランプ海賊団の手の者だけだった。
美麗なステンドグラス。豪華な装飾品。海賊には似つかわしくない物だ。
それらに囲まれた城の最上階にある玉座の間において、海賊団の船長、ベアキングが巨大な体を椅子に押し込めていた。
「ベアキング様。下層に商人がやってきて、ベアキング様に会いたいと言っています」
「商人？　何の話だ。そんな予定はないぞ」
「なんでも商談をしたいとかで」
「どこのどいつだ。馬鹿馬鹿しい。おれ様にそう簡単に会えると思ったら大間違いだぞ」
ベアキングという男、身長は二メートルを越え、体は丸いが体格は良く、髭はもちろん胸や腕など体毛が濃いようでまるで熊のような威容である。また、本人もその意識があるのか、可愛らしい熊の帽子を頭の上に乗せていた。
海賊としては些かファンシーな服装をしているが、体の大きさから迫力は十分。
その証拠と言わんばかりに、彼の部下たちはベアキングに対して絶対的な忠誠心を見せている。可愛らしい熊の帽子を笑う者など一人も居なかった。
「どこの誰かは知らんが、今更その辺の商人から買うような物はない。金も兵器も兵士も女も、おれ様は全て手に入れているのだ」
「しかし、そいつはジョーカーの使いだと言っていましたが」
「何？　ジョーカーだと？」

報告に来た部下の言葉にベアキングの顔色が変わった。
名も知らぬ商人が来たならば無視して終わりだが今回は事情が違っているようだ。
ジョーカーという名は知る者ぞ知る、グランドラインで暗躍する闇の商人だ。武器の密売を始めとして人身売買、悪魔の実の取引など、政府に知られればただでは済まないだろう物ばかりを取り扱っている。
素性は不明。グランドラインに居るかどうかすら知られていない。そのため自ら接触することは不可能。相手からの接触を待つしかない相手と考えられている。
ついにおれのところに来たか。
ベアキングはにやりと笑って考えを改める。
「気が変わった。そいつをここへ呼べ」
今の彼は自信に満ち溢れていた。
玉座に座り、まるで自分が王になったかのような気持ちだ。細々と活動し、島を支配しながらも外敵を警戒していたかつてとは違う。それは彼自身の力だけが理由ではなかったが、割り切った今では細かいことを気にすることもなくなった。
たとえ相手がジョーカーであっても恐れることはない。
彼は胸を張って使いの者を待っていた。
空に届くほどの高さに大地があるため、時間はかかったとはいえ、その人物は来た。
ベアキングは彼らを見下したかのように余裕のある笑みで迎え入れる。
相手は三人だった。
眼鏡をかけた薄い色の金髪の少年が先頭に立ち、頭にはキャスケットの帽子を被って、柔和な笑みを浮かべている。
その隣には額にバンダナを巻いた、厳めしい顔の緑髪の男が立っている。腰には白い鞘の刀を一本だけ提げていて、武装解除には応じなかったことを理解できた。
さらに逆側の隣には頭にバンダナを巻いた金髪の少女が、大きな鞄

を背負っている。
全員が全員まだ若い。ジョーカーの手下という話を疑ってしまうほどだ。しかしベアキングは細かいことを気にせず、堂々とした態度で彼らを見ていた。
「ジョーカーの使いらしいな」
「ええ、どうも。初めまして」
先頭に立つ少年が軽く頭を下げる。
素性が知れなかったことで、高く買い過ぎていたかもしれない。交渉人としてやってきた三人を見てそう思う。あまりに若く、威厳も何もあったものではない。これなら大したことは無さそうだとベアキングは笑みを深めていた。
「要件を聞く前に一つ言っておこう。来るのが遅すぎたってなぁ」
金髪の少年は笑顔を浮かべたまま、表情を変えずに小首を傾げる。
「どういう意味でしょう？」
「闇のブローカー、ジョーカーの噂は聞いてる。この海で知らねぇ奴は居ねぇほどの有名人だ、裏の社会ではな。だが素性も知れねぇ人間を信用する馬鹿はいない」
「はぁ。仕方ないですね。こっちも商売なので」
「その点おれは、信頼に足る男を見つけた。もうお前らが現れたところで今更だ」
全く効果はなかったとは言わないが、わずかに眉が動いた程度で表情に変化はない。
少年はあくまでも下手に出る態度で彼と対話しようとしていたようだ。
「では商談の話は不要ですか？」
「フン。一応聞いといてやろう。何を売るつもりだ？」
「売る、というよりは、手を組みたいという話です。ベアキング様が治めていらっしゃるこちらのねじまき島、相当な科学力があるとか」
「そういうことか。おれ様に売りつけようという話じゃなく、武器を買い取りたいと」
「もちろん対価は払います。相応の資金か、或いは要求があれば物

品でも」
「いらん。貴様らは知らんだろう。おれ様が作る武器・兵器の買い手はすでに居るんだ」
流石に少年の笑みが消えた。
それを見て勝ち誇るようなベアキングは敢えて彼に教えてやる。それはある種の自慢のようですらあった。
「金獅子のシキだ」
語る声は朗々と。まるで自分の力であるかのように語られる。
「少し前なら別だったろうが、今のおれのバックには金獅子がついてる。これほど強大な戦力があるか？　ジョーカーが相手でももう興味はねぇのさ」
「金獅子、ですか。確かに名声も戦力も申し分ない相手ではありますけど、果たして金獅子が傘下の海賊団を気にかけるかどうか」
「おれたちが捨てられるかもしれねぇと？　そう言いたいわけだな。心配することはねぇ、すでにその点も考えてある」
相当上機嫌であるのか、ベアキングは警鐘を鳴らされようと意に介した様子はなく、むしろ自信満々に解説を始める。そうしても問題ないという判断の上である。
彼本人の力ではないとはいえ、金獅子の名を得たのは自身の海賊団であるという自負。
それが彼の態度を大きくさせているようだ。
「金獅子は全ての海賊に言ったんだ。〝おれに逆らう九人の海賊を捕まえて差し出せば幹部にしてやる〟ってな。すでに手配書も配られてる。馬鹿な小僧どもがあの大海賊に逆らったらしい。そいつらを捕まえただけでおれはさらに上へ行ける」
「なるほど、もうそこまで……」
「これでわかったか？　ジョーカーがおれ様と取引したいと言ったところで今更だ。その上でおれ様が興味を持ちそうな品はあるか？　ん？」
意地が悪い顔でベアキングは彼らに問いかける。聞いてはいてもないと決めつけた質問であったことは間違いない。

ジョーカーが何者か知らないが、金獅子以上の大物はあり得ないと確信があったからだ。
問いかけられた少年はわずかに後ろへ振り向いて仲間の意見を求める。
キリのまさかの行動にゾロとシルクは小さな驚きを抱いていたようだった。
「思ったより食い付きが悪かった」
「おい。まさか作戦失敗とか言わねぇよな？」
「金獅子が相手じゃ仕方ないよね。でもまさか、金獅子の傘下になってたなんて」
「おかしな話じゃないよ。多分同じようなことがグランドライン中で起こってる。逆らえば死ぬだけだろうし、無抵抗で降伏は当然の判断だ。普通の海賊ならね」
顔を突き合わせて話す三人にベアキングは黙って待つ。しかし一向に振り返ろうとしないため訝しげな顔をしていた。浮かれている一面はあっただろうが、これほど上機嫌になっている自分がないがしろにされているのを感じて不満を持ったのである。
「おい、話し合いは終わったか？　まだか？」
「めんどくせぇな。ここで斬っちまえばいいだろ。潜入には成功したんだ」
「まぁボクはそれでもいいんだけどさ。ルフィたちを下に置いてきちゃったし、陽動作戦で色々やってもらおうと思ってたんだけど」
「でも、よく考えるとロビンはともかく、ルフィがじっとしてるとは思えないよ。向こうが動き始めると見つかっちゃうかも」
一切こっちを見ずに会話する三人にベアキングは焦れていた。
自信に満ち溢れている今、もっと自分を見てほしいはずが、全く相手にされていないのだ。彼がだんだん苛立ってくるのも仕方ない状態だった。
「おい、早くしろ。まだ終わらないのか？」
「大した作戦だな。あっという間に破綻してるじゃねぇか。最初から全員でこっちに集まれば話は早かったわけだろ」

「こんなにあっさり通してもらえるなんて思ってなかったんだ。その点は相手が馬鹿で助かったけど逆に困らされる結果になったね」
「船長を倒して終わりならいいけど、他の幹部も居るんでしょ？　別行動は無駄じゃないよ。向こうも誰かと出会ってるかもしれないから」
大人しく待っているつもりなのだが全く相手にされていない気がしてきた。
イライラするベアキングはだんだん落ち着かなくなってきて、指先や脚が自然と動き始める。
「おい、もう終わったか？　それともまだか？　どっちだ？」
「とりあえず見たところ船長らしい奴と部下が数人だ。こいつら仕留めてから後は順々にでいいんじゃねぇか？　時間かける相手でもねぇだろ」
「うーん、仕方ないね。ほんとはもうちょっとスマートに済ませたかった」
「結果が同じなら問題ないよ。それにぐずぐずしてるとルフィたちが見つかっちゃうかもしれないから、できるだけ急いだ方が――」
シルクが喋っている途中だった。
ついに焦れたベアキングが椅子の肘置きを叩きながら立ち上がる。
「ええい！　まだ終わらんのか！　おれ様を待たせるとは何事だ！」
それと同時にけたたましい警報が鳴り響く。
突然の出来事にベアキングは周囲を見渡して、話していた三人も口を閉じて天井を見上げた。
ベアキングとは違い、その音を聞いただけで何が起こったのか大体わかった。おそらくは、と頭の中に予想を立てた三人は顔を見合わせ、驚いた様子もなく無言で意見を同じくする。
そして城内に電伝虫による連絡が始まった時、彼らの想像は確信になった。
《侵入者を発見！　対象は麦わらのルフィ！　繰り返す！　麦わらのルフィを発見！》

「何イ!?」
「ほら来た」
「どうせそうだろうな……あいつの性格上」
「これで答えは決まったね。じゃあ、開始だ」
報告を聞いたベアキングは驚きを隠せなかった。
心中は複雑である。城内に侵入者があったことなど島を支配してから初めてのこと。純粋な驚きであると同時に、相手はあの麦わらのルフィ。金獅子が捕縛せよと指名した海賊の一人で、捕まえれば幹部の座を手に入れられる、格好のターゲットだ。彼の胸の中には驚愕と喜びが広がり、しかしあまりにも突然で混乱してもいた。
ともかく今はジョーカーなどに構っている場合ではない。
苛立ちは全て消え失せ、今では心底嬉しそうな笑みだけが顔に張り付けられていた。
彼はその三人が偽物だと、侵入者を導いた存在だとは微塵も思っていなかったようで、彼らを相手にしている暇はないとだけ伝えようとしていた。
「なんという幸運だ！　おれ様が幹部になるための捧げ物が向こうから飛び込んできた！　悪いが商談は終わりだ！　おれ様はこれから麦わらのルフィを捕まえねばならん！」
意気揚々と歩き出そうとした、その一歩目。
目を見開いた彼は思わず反射的に動きを止めてしまった。
今の今まで商人だと思っていたキリが紙の武器を持ち、ベアキングに飛びかかったのである。

＊

《侵入者を発見！　対象は麦わらのルフィ！　繰り返す！　麦わらのルフィを発見！》
「もうバレた!?」
「そりゃバレるよ!?　なんで外に出ちゃうんだよ!?」
驚愕するルフィの隣でアキースが絶叫していた。

彼らは商人が運んできた荷物として木箱の中に隠れていたのだが、長く待たされて焦れたルフィが唐突に外へ出てしまい、その瞬間を大勢の兵士に見られたのである。
当然そうなるだろうというアキースの忠告も聞かず、ほんの一瞬の出来事であった。
外の騒々しさを知って、それぞれ別の木箱に隠れていたボロードとロビンも思わず外へ出た。
「くそっ!?　もうバレたのか！」
「ウフフ。刺激的な作戦ね。気に入ったわ」
「まぁー見つかっちまったもんは仕方ねぇな。今更隠れられねぇし」
「お前のせいで見つかったんだろ!?　じっとしてれば見つからなかったのに！」
トランプ海賊団の乗組員たちが次々と武器を手にして集まってくる。
気付けばあっという間に囲まれていた。
城の最下層、地下にある巨大な倉庫だ。
ねじまき島で製造された武器や兵器、海賊行為で略奪した金品や食料、あらゆる物が一度ここへ集められる。彼らも荷物としてそこへ運ばれたのだ。
それだけに無数の武器も置かれていて、彼らが手に取るのも当然だった。
周囲を取り囲まれながら、少なくともルフィとロビンは平然としていた。
普通ならばアキースとボロードのように狼狽し、恐怖を覚え、自分の死を覚悟してもおかしくないほど危険な状況。彼ら四人に対して数十人の兵士が武器を持って敵意を向けてくるのだ。腕組みをして困惑しているルフィや微笑みを湛えるロビンが信じられない。
責めるようなアキースの言葉に、ルフィは不満を持って唇を尖らせていた。
「だってよー、ずっと隠れてたってあいつらぶっ飛ばせねぇだろ。

どうせ最後には戦うんだから別にいいじゃねぇか」
「作戦はどうしたんだよ！　こっそり倒す予定だっただろ!?」
「んん、そうだ。忘れてた。ごめん」
「バカヤロー!!」
呆れたアキースがルフィを叱りつける。しかし彼はどこ吹く風だ。聞いてはいるのだろうが自分の判断に後悔がないせいで、悪びれる様子は皆無だった。
そんな二人に焦りを滲ませたボロードが声をかける。
「お前ら、喧嘩してる暇はないぞ……どうやら危機的状況だ」
「そうか？」
「ルフィ、あれを見て」
全く慌てていない様子のロビンが前方を指差した。
ルフィがそちらを見るとこちらに歩いてくる女性を発見した。
「あらあら。ずいぶん大胆ね。まさか自分から出てくるなんて」
「幹部のお出ましみたいよ」
「そうか。じゃああいつをぶっ飛ばせばいいんだな」
近付いてきたのは金髪の女性だった。
トランプ海賊団の紅一点、ハニークイーンである。
余裕を見せる微笑みを浮かべ、彼らを前にして怯んではいない。懸賞金はよほど彼らの方が高いのだが気にする様子はなかった。
彼女の隣にごろごろ転がってやってくる太った男が居た。
豚の意匠を組んだ服を見に着けた、ブージャックだ。
大量の汗を掻きながら現れた彼はルフィに目を向けて話しかける。
「ここでなぞなぞだゾナ。海賊王になるのはだ～れだ？」
「おれ」
「ブッブー！　正解はベアキング様だゾナ。お前になれるわけなどないゾナ」
「何言ってんだお前？　海賊王になるのはおれだぞ。アホなのか？」
「アホはお前だゾナ！　お前らはここで死ぬのだ」
ブージャックが手を上げると同時に兵士たちが一斉に銃を構えた。

囲まれている状況で逃げ場があるはずもない。アキースとボロードは思わず声を洩らし、絶体絶命だと顔を青ざめさせた。だがその一方、ルフィとロビンは普段と何一つ変わらぬ顔色で冷静に彼らを眺めていた。
「あいつらどっちか船長かな？」
「いいえ。どちらも幹部だったはずよ。船長はもっと大男だから実物を見ればわかるわ」
「なんだ違うのか。まぁいいや。キリたちも居るし、とりあえずこいつらだ」
準備運動をするようにルフィが腕を回す。
ロビンも胸の前で両手を交差させた。
その素振りを見て戦うつもりなのだと気付いたハニークイーンとブージャックは、あまりにも不利な状況をわかっていないのかとほくそ笑んだ。
「もしかして戦うつもり？　たった四人しかいないのに」
「しかもその内の一人はガキだゾナ。勝てるわけがないゾナ」
「周りの人たちが邪魔ね……三十輪咲き（トレインタフルール）」
二人の言葉をまるで意に介さず、ロビンは周囲の人間を見回した。
能力を使用する。銃を構える兵士たちの背から一本の腕が生え、しなやかなそれはロビンの意思に従って彼らの首へ勢いよく引っ掛けられ、一斉にゴキッと嫌な音がした。
「ストラングル！」
「な、何っ!?」
三十人の兵士が一斉に攻撃を受けて、泡を噴きながらその場に倒れた。当然銃を取り落として包囲は瞬く間に崩壊する。全員を仕留めた訳ではないとはいえ、個人の力としては異常。無事だった兵士たちは恐れを抱いたようだ。
ハニークイーンやブージャックも同じだ。
圧倒的優位に立っている。どうせすぐに終わると思っていたのに、どうやらそうではないと一瞬で理解させられてしまった。これは彼らにとっては不本意な事態である。

「あの女、能力者……！」
「むむむっ!?　なんて生意気な奴らだゾナ！　トランプ兄弟に逆らう気か！」
少なからず動揺していた彼らは、そもそも近頃は戦闘に出ることも少なかった。
ねじまき島を支配してからというもの、彼らの地位を脅かす者は現れず、数年に渡って平穏な時を過ごしてきた。その間に彼らの自尊心は大きく膨れ上がり、その上で金獅子の傘下に加わったという大きな変化もある。幹部のみならず、現在のトランプ海賊団は油断と慢心が強まっていた。
そこへきて麦わらの一味はアラバスタでの激闘を経たばかりである。
戦闘においては相応の自信があり、慣れもある。咄嗟の判断を躊躇うことはなかった。
ロビンの攻撃によって数十人が一斉に倒れて、ルフィは突如攻勢に出た。
何も言わず、楽しげな笑みを浮かべて駆け出し、隙だらけのブージャックに接近する。
彼の行動に目を見開いた彼はまるで反応できなかった。
「にっしっし！　ゴムゴムのォ～スタンプ！」
「ぶひっ!?」
気付いた時にはルフィの右足が勢いよく伸びてきて、草履の裏が目の前にあった。
顔面を蹴られたブージャックはボールのように地面を弾んで飛んでいく。すぐ隣でそんな光景があったせいか、ハニークイーンは血相を変えて取り乱した。
「ちょっと!?　いきなり!?」
「ん？　だめだったか？」
「普通はもう少しやり取りするでしょ！　何よ、突然！」
「六輪咲き（セイスフルール）」
目の前に居るルフィに抗議しているその瞬間、ハニークイーンは体

に生えた六本の腕に拘束されて身動きが取れなくなった。ロビンの能力が使用されたのだ。
両腕、足、それに首を掴まれて、驚愕する彼女は目だけでロビンを捉えた。
ロビンは微笑み、胸の前で腕を交差してハニークイーンを見つめている。
「うっ、ぐっ……!?」
「海賊同士の戦いに卑怯なんて言葉があったかしら？　クラッチ」
開かれていた指が内に入り、拳が握り締められる。その動きに合わせてハニークイーンを拘束した腕が動き出し、彼女に関節技を極めた。しかしその瞬間、衝撃を受けた体はバシャリと音を立てて液体に変化してしまう。
流石にロビンも驚いたらしく笑みを消す。
対照的にルフィは目を輝かせてその光景を見ていた。
「あら。能力者だったのね」
「変な能力だなー。また殴れねぇのか？」
「心配ないわルフィ。パラミシアもロギアも、弱点を突けばいいのよ」
「そうか！　わかった！」
距離を取ったハニークイーンを見据えて二人は冷静だった。二人は彼女の能力がトロトロの実を食べた結果得た物であり、超人系（パラミシア）に分類されることはまだ知らなかったが、同様の能力者と戦った経験がある。不思議な光景を目の当たりにしても微塵も取り乱さない。
ルフィとロビンは並んで立ち、すでに戦闘態勢を整えていた。
一方でボロードとアキースは棒立ちのまま、まだ展開についていけていなかったようだ。
ほんの一瞬の攻防だが、押されていると感じたハニークイーンは歯を食いしばる。
まだ自信は失っていない。きちんと向き合えば彼らを倒すくらい訳はない。そう考えていた。
倒れたままだったブージャックを叱りつけ、すぐさま意識を切り替

えた。
「ブージャック！　いつまで寝てんのよ！　さっさとあいつらを始末するわよ！」
「了解だゾナ！　我々に逆らったこと、後悔させてやるゾナ……！」
彼女たちがそうして戦闘に臨もうとしていたため、周囲で呆けていた残りの兵士たちも慌てて加勢に入ろうとする。しかし勢いはもはやルフィたちにあった。
集まってくる兵士たちを見ても態度は変わらず、むしろ望むところという表情。
すでにその場を空気を掌握していた彼らが恐れるものなどなかった。

トランプ兄弟

警報が鳴り響いてすぐ、城の最上階に急ぐ者たちが居た。
ピエロのように白い顔と派手な服装、顔には斜めに傷跡が残る、ビンジョーカー。
白い毛で作られた特殊なスーツを着た小柄な中年、スカンクワン。
トランプ海賊団の幹部である二人は船長の下へ向かうべく階段を上っていた。しかしその途中で上から轟音が聞こえてきた。非常事態だと気付いたのである。
最上階の玉座へ飛び込んだ瞬間、ベアキングが入り口近くの壁に激突した。
部屋を見渡せばすでに倒された兵士たちが転がっている。
驚愕する二人はそれをやった本人、見知らぬ三人をすぐに発見した。
「船長！　これは……！」
「一大事だガス!?　こいつらいつの間にここまで！」
「くそぉ……ガキどもが舐めやがって……！」
ダメージは受けている様子で、腹や肌に汚れは目立つが、いまだ目立った傷がないベアキングは即座に立ち上がった。駆けつけた二人を気にすることもなく自身を襲う三人へ向けて叫ぶ。
「おれ様はカチカチの実の鋼鉄人間だぞ！　てめぇらがどんな攻撃をしようがおれ様には一切通用しない！　無駄な足掻きだなァ！」
「なるほど。道理で妙な感触だ」
「へっ、全身が鉄の硬度ってわけか。ちょうどいいな」
「新手が来てるよ。二人共注意してね」
シルクが持ってきた鞄から武器を取り出し、ゾロとシルクはすでに武装していた。
ゾロは腰に三本の刀を差し、その内二本を両手に持ってベアキングを見据えていた。
その姿を見た途端、ビンジョーカーが顔色を変える。
「あいつは……！」

彼が血相を変えて剣を抜くことにはさほど注目せず、三人は新手を見て冷静に話し合う。
ここまでの戦闘で相手の力量はわかった。彼らの相手になるほどではない。
「新手か。面倒だけど、向こうの負担が減ること考えたらやるしかないか」
「そうだね。町に向かわれるの嫌だし、倒さなきゃ」
「そっちは任せる。おれはあの鋼鉄人間だ」
好戦的に笑うゾロを見てキリが肩をすくめた。
「本当に鉄が斬れるかどうか。試し斬りにはちょうどいい」
「ずいぶん嬉しそうだね。まぁ別にいいけど」
「ロロノア・ゾロ！」
突然ビンジョーカーが駆け出した。レイピアを抜いて鋭く突き出し、ゾロの首筋を狙う。当然反応した彼は刀の腹でそれを受けた。
接近を許したことで至近距離で向かい合う。
ビンジョーカーはその目に激しい怒りを映していたが、ゾロは訝しげに彼を見ていた。興味など欠片も無さそうな冷めた目である。
「私を覚えているか？　数年前イーストブルーに赴いた際、貴様と斬り合ってこの顔の傷を付けられた男だ……！　あの日以来、私は貴様への復讐を忘れたことはなかった！」
「覚えてねぇな。お前誰だ？」
相手の熱意とは裏腹に、にべもなく、あっさりと斬り捨てた。
予想しなかった返答を受けてビンジョーカーは激昂したが、相手をする気はないと言いたげにゾロが剣を払う。彼の意識は今、ベアキングにしか向けられていなかったようだ。
「斬った奴をいちいち覚えちゃいねぇよ。強い奴以外はな」
「貴様ッ……！」
「今の一太刀でわかった。何年前か知らねぇが、今やっても同じ結果だ」
「ふざけるなァ！」
ビンジョーカーが大きく剣を振りかぶった。その隙をついて横か

らキリが襲い掛かり、紙を束ねて作った巨大なハンマーで殴り飛ばす。ビンジョーカーは受け身も取れずに地面を転がって壁際まで運ばれた。
武器を担ぎ、キリは呆れた目でゾロを見る。
彼の態度を知りながらもゾロの視線の先は変わらなかった。
「可哀そうに。一生恨むだろうね」
「海賊だぞ。恨まれるのが怖くてこんなとこまで来るか」
「確かに。じゃあ、いいんだね？」
「おう。言ってもおれも二度目だ。集中したいんでな」
やれやれといった顔のキリがシルクと顔を見合わせ、幹部の二人に目を向ける。
ビンジョーカーは悔しげな顔で立ち上がり、スカンクワンはすでに戦闘が始まっていた現状に驚きながら、自らも敵を討つべくスーツを起動させる。
彼が身に着けるそれはねじまき島の技術が生み出した戦闘用のスーツだ。
攻撃方法は特殊だが、それ故に初めて見る者を驚かせる。
「何が何だかわからないガスが、とりあえずお前らを仕留めるでガスー！」
彼の体を包み込むようなスーツの尻の部分から突然煙が噴き出される。かなりの勢いがあり、それはスカンクワンの体を宙へ浮かせてしまうほどだ。
特別に作られたガスは異臭を漂わせ、吸い込んだ人間は体の力が抜けてしまう効果がある。
見た目からしてどうにも強烈な屁にしか見えないが、だからこそ見た者は驚き、近付くことを躊躇い、逃げたところでガスを噴き出す推進力を使って追いかける。小柄な彼にしかできない独特な戦法であった。
三人に吸わせようとガスを噴射させるスカンクワンは、ともすれば室内をガスで満たしてやろうとさえ考えていた。ガスの効果を知っているベアキングやビンジョーカーならば危険を感じればすぐ室外

へ避難するだろうと考えてのことだ。
その攻撃を見た三人は呆れ返る。
特にシルクの目は冷たく、二人とアイコンタクトを取ると剣を構えた。
「このガスを吸い込んだ人間は体の力が抜けてふにゃふにゃになるでガス！　お前たちのことはその後でじっくり調理してやるで――」
「鎌居太刀！」
「ガス～っ!?」
シルクが剣を大振りすると同時、突如吹き荒れた風に巻かれてスカンクワンが吹き飛んだ。
窓ガラスを割るほどの強風でガスと共に室外へ運び出され、姿勢の制御ができない彼の視界は目まぐるしく回り、訳も分からず両手足をバタバタ動かす。
悲鳴を発しているとふっと頭上に影が差して、彼の視線はそれを捉えた。
空中に自ら飛び出してきたキリだ。
彼は小さな紙切れを重ね合わせ、ロープのようにして振るとスカンクワンの首に巻きつけ、両手で握って思い切り回転し始める。キリを軸にしてスカンクワンの体は円を描いて振り回された。その速度は抜け出すことを許さないほど速い。
白目を剥きながらも抜け出そうと思って、咄嗟にスーツの機能を使い、ガスを噴射しようとした彼だったがそれは叶わなかった。スーツの尻の部分には紙が張り付けられており、まるで金属の如く硬いそれは一切剥がれない。噴射されるはずのガスを全て押さえつける。
行き場を失ったガスは、彼のスーツを見る見るうちに膨らませていった。
「ぐえええ……!?」
そしてついに彼を投げ飛ばしたキリは、スカンクワンを頭から壁に激突させ、衝撃でガスを溜め過ぎたスーツが爆発したのを確認した。
彼自身は紙を使って城の外壁に張り付いて、落下していくスカンクワンを眺める。

「くさっ。いくら強くなるためでもあれは使いたくないなぁ」
漂ってきたガスの臭いに顔をしかめ、苦しげに退散する彼は能力を利用して壁を登っていった。
最上階に戻れば尚も続く戦闘を目撃する。
部屋の中では風が荒れ狂い、その中心に立つシルクとビンジョーカーを発見した。
「おお、やってるやってる」
指揮棒を振るかの如く剣を振るい、彼女の意思によって風が吹く。
触れる物を切り裂く風はますます力を増すばかりで、ただ突っ立ったままでそれを眺めることしかできないビンジョーカーは言葉を失っていた。
ロロノア・ゾロを殺すはずが、こんな小娘に。
風の中心地で微笑むシルクに対して、信じられないという視線を向ける。
予備動作を終えたシルクが剣を止めた。そして改めて構える。
その姿を見てビンジョーカーは悔しげに歯噛みし、襲い掛かる恐怖を打ち払おうと叫んだ。
「行くよ」
「ぐっ……うおあああっ！　ハリハリ剣！」
彼はゾロを倒すため考案した技、相手に刺されば体を痺れさせる羽を無数に飛ばすが、それさえも吹き荒れる暴風に彼方へ運ばれてしまう。
為す術もない彼に対し、一閃。
剣を薙ぐ動作で凄まじい風が吹き、ビンジョーカーの全身をズタズタに切り裂くと共に、彼の体を城の外へと吹き飛ばした。
どれくらい吹き飛んだか。おそらく島の外までは行っていないだろうが、城から離れた場所にある町には届いたかもしれない。それくらい彼の姿は遠くに飛んでしまった。
ビンジョーカーが飛んでいった軌跡を眺めていたキリは、シルクに振り返る。
吹き飛ばしたのは彼女だが、本人も少なからず驚いていたようだ。

「やり過ぎちゃったかな？」
「いいんじゃない？　負けた奴が悪いんだよ、この業界は」
シルクが暴れたことで室内はひどい有様だった。
物は散乱し、石造りの壁には深い傷がいくつも刻まれ、周囲を囲っていたガラスは全て割られて一枚も残っていない。凄まじい戦闘があったのだろうと連想させる光景だ。
想像よりも簡単に終わったが、幹部は二人倒した。
おそらく自分たちの役目はほぼ終わりだろうと彼らは考えていた。
しばし部屋の中を眺めてからキリが尋ねる。
ほんの一瞬、外へ飛び出したその間にゾロとベアキングの姿が消えていた。
決着がついたのならどちらかが倒れているだろう。しかしどちらも居ないため、何かあったのだろうとシルクに確認してみると、やはり彼女は知っていた。
「で、ゾロは？」
「敵を追いかけて下に行ったよ。急に逃げ出しちゃったから」
「まずいな。実力はともかく、迷子を利用されると逃げられる可能性がある」
「ふふっ、大丈夫だよ。振り切れるスピードじゃなかったし、見失わなければちゃんと追いかけられるから」
心配するようでいながら茶化しているだけだった。二人共ゾロが負けるとは思っておらず、敵を逃がすこともないだろうと考えている。
ベアキングのことは彼に任せておけばいい。
他の任務を遂行すべく、二人も階下に向かって歩き出す。
「さて、その間にボクらは残党狩りだ。一人でも残すと町の人が迷惑する」
「そうだね。決着はつけないと」
二人は幹部以外の戦闘員を処理すべく、急がずに悠々と階段を降り始めた。
一方、不利を悟ったベアキングは城内を必死に走っていた。

正面から戦うのはまずい。悪魔の実の能力があるというのにそんな行動に出たのは、理屈ではなく気付けばそう思っていたからだ。理由は説明できないものの、おそらくあのまま戦っていれば最悪の結果になると予想していた。

ビンジョーカーとスカンクワンが到着するまでのほんの数分間。三人を同時に相手にしたベアキングは全く歯が立たなかった。ゾロの豪剣に、キリの柔軟な戦法、シルクのかまいたち。優れた連携で一方的に攻撃され、拳を振るっても一度も当たらなかった。

カチカチの実を食べた影響で、全身が鉄のように硬く、最悪の結果には至らなかったとはいえ、勝てないと判断するのは決して間違いではない。だが彼はまだ諦めてはいなかった。

あの場所に行けば。あれさえあれば負けるはずはない。

ベアキングは目的を持って急いでいた。

「くそっ、ガキどもめ……！　今に目に物見せてくれる！」

ベアキングが荒々しく扉を開けて飛び込んだのは開発室だった。

新兵器の研究・開発を行っている広い一室には白衣を着た多くの研究員が居て、そこに集められているのはねじまき島の住人だった。侵入者の報に怯えていた彼らは突然現れたベアキングにも怯えていて、怒りの形相を見てさらに体を小さくする。

「アレはできているか!?　今すぐ準備しろ！」

「べ、ベアキング様、侵入者があったというのは本当なのですか？」

「うるさい！　余計なこと言ってる暇があったら早く持ってこい！」

荒々しく歩くベアキングは突っ立ったままの研究員を手で払いのけ、自身の巨体が当たる机や椅子をひっくり返しながら部屋の奥に向かう。

そうすると目的の物を見つけた。

彼は勝ち誇った様子で笑顔になる。

ベアキングが最終兵器として開発を進めさせていた、通称〝キング砲〟。

従来の大砲よりも殺傷力を倍増させ、石造りの壁も容易に貫通し、

誰にも止められない砲弾で圧倒的な攻撃力を得る。そのための特殊な大砲だ。
完成の報告は聞いていないが、すでに形になっていたそれを見つけて上機嫌になった。
歩み寄ろうとするベアキングに主任らしき男が慌てて駆け寄る。
「お待ちくださいベアキング様！　キング砲はまだ調整が済んでいません！」
「やかましい！　これを使って奴らを木っ端微塵にしてやる……！」
にやりと笑ってベアキングはキング砲に手を伸ばそうとした。
その瞬間、地面が勢いよく破壊され、階下から血反吐を吐くブージャックが吹き飛んでくる。彼の体はキング砲を押し上げ、そのままの勢いで天井に激突する。
つい数秒前まで笑顔だったベアキングは絶望していた。
ブージャックの体と天井に挟まれたキング砲は、強い力が加わって粉々に破壊され、その姿は一瞬にして無残な物に変化してしまう。
飛んできたのはそれだけではなかった。
ブージャックの腹に突き刺さり、階下から伸びる腕が下へ縮んでいく。
それを見送った直後、殴り飛ばした当人であるルフィが勢いよく飛び上がってきた。
「ん～ゴムゴムのォ～！」
「も……もう、無理……」
「暴風雨（ストーム）!!」
「ゾナ～～!?」
回転しながら次々繰り出される無数の拳がブージャックの全身を打った。彼の体はさらに上の階へ押し上げられ、天井を破壊して上へ上へと向かっていく。そしてとどめの一撃を受ける頃、ブージャックは気絶し、最上階の天井を破壊して空へ投げ出された。
攻撃を終えたルフィは自身が開けた穴を落下してくる。
あんぐり口を開けるベアキングの前を通過して、さらに階下へ姿を

消した。
「にっしっし！　おれの勝ちだー！」
「な、な、な……!?　お、おれ様の、キング砲が……！」
身軽に着地したルフィを見てハニークイーンはわなわなと震えていた。
強過ぎる。こんな相手に何をしたところで勝てるはずがない。
怯えきった彼女は咄嗟にトロトロの実の能力を使って逃げ出そうとした。全身を粘度の高い液体に変化させてその場からの逃亡を図る。
「ひぃいいいっ!?　なんなのこいつ!?　もう無理！　相手にしてらんない！」
「だめよ、逃げちゃ。私が怒られるもの」
地面を滑って逃げる液体を目撃して、ロビンは能力を使用した。
彼女の戦法は見ていた。全身、或いは体の一部を液体化させて相手を拘束したり、呼吸器を包んで窒息させたりする。ロビンには通用しない戦法ではあったが中々強い能力だ。そして彼女の能力なら些細な隙間や小さな通路を使って逃げられることも察していた。
ハニークイーンは自身が通るようにと専用のホースを城中に張り巡らせており、そこへ飛び込んで彼女たちを撒こうとしていた。だがそれを察したロビンは戦闘中にホースの近くへ、何の変哲もない樽を移動させていて、ハニークイーンが逃げ出したのを見計らってそれを動かした。
ホースへ飛び込もうとした彼女を樽で受け止める。
殴られても効かないトロトロの体は、しかし自在に形を変えられるためにどんな物にでも入ってしまえる。逆を言えば閉じ込めることも難しくはないのだ。
恐怖で焦っていた彼女は勢いよく樽に入りこんでしまい、それから驚愕した。
慌てて引き返して外に出ようと思った頃には、樽の側面に生えた手が蓋を閉めてしまい、密閉されてしまう。ハニークイーンは中で必死に暴れるのだがガタガタと樽が震えるだけだった。

鮮やかな手つきでハニークイーンを捕縛したロビンはいつもの調子で微笑む。
彼女にしてみれば勝つことが難しい相手ではない。いわゆる楽勝というやつだった。
「面白い能力だけど、使い方はもう少し考えた方がよかったわね」
地面に開けられた穴から上下を見たベアキングはいまだ冷静にはなれず、状況を理解することもできずにただ呆然と突っ立っていた。
その背後へ、悠々と歩いて落ち着いたゾロが足を止める。
気配に気付いて振り返ったベアキングは、彼の姿を見て怒りを再燃させた。
「貴様ら……誰に喧嘩を売ったかわかってるのか？」
「さぁな。興味はねぇよ。お前らが誰かなんてのはな」
「おれ様はっ……トランプ海賊団の船長だぞ！　この島の支配者として君臨してきた！　金獅子が姿を現す前からのことだ！」
激昂したベアキングは振り返って大股に歩き出す。
真っ正面からゾロへ向かい、振るうために拳を硬く握りしめていた。
「この島でおれ様に逆らう奴は全員死刑だ！　無論貴様ら全員もな！」
「そうかい。じゃあそうしてくれ」
「ただの剣士がこのおれに勝てると思ってるのか！　おれ様の体は鋼鉄だ！　カチカチの実の力にそんな鈍らが勝てるわけねぇだろう！」
「体が鋼鉄？　だから都合がいいんだろうが」
にやりと笑うゾロは、自分より何倍も体が大きい彼を見て微塵も怯んでいなかった。
その事実にさらに腹を立て、ベアキングは拳を振り上げる。
刀を鞘に仕舞っていたゾロはその行動を見てから一本の刀を掴んだ。
「このおれ様を、舐めるなァ!!」
「一刀流、居合」

ベアキングが拳を振り抜いた時、忽然とゾロの姿が消えていた。殴った感触はない。まるで最初からそこに居なかったかのように姿が見えなかった。
ぞくりと背筋が泡立ち、いつの間にか背後に立っていることに気付いた。
怒りに任せて即座に振り向いて殴ろうとする。
その前にゾロが刀を鞘に納めた。
「獅子歌歌(ししそんそん)」
瞬間、ベアキングの体から血が噴き出した。
深々と刻まれた一文字の傷は明らかに刀でつけられたもの。カチカチの実を食べて鉄のように硬い肉体を手に入れたはずの彼が、ただの刀で斬られたらしい。
驚愕するベアキングは体から力が抜けるのを感じ、思わず地面に膝をついた。
信じられない。何が起こったのかわからない。
久しく感じていなかった痛みに呼吸を乱しながら視線を上げる。
こちらに振り向いたゾロは当然と言いたげに悪そうな笑みを浮かべていた。
「良い感覚だ……ありがとよ。お前が居て助かった。ようやく掴めたからな」
「て、てめぇは、一体何なんだ……」
「海賊だ。それ以外に見えたか?」
目にも止まらぬ速さでゾロが刀を抜いた。
とどめを刺すかのようにベアキングの体へもう一筋の刀傷が刻み込まれ、血を吐き出しながら彼は意識を失って倒れる。
血ぶりをして、刀を納めれば静寂に包まれる。
辺りを見回したゾロは物も言えない研究員たちを確認し、つまらなそうに呟いた。
「終わりか? ずいぶん張り合いがねぇ……もう少しマシな奴らかと思ったが」
言うだけ言ってゾロは部屋を出ていこうとする。そこに居た人間

を一人でも斬ろうとする素振りは見せなかった。ベアキングだけを斬って去ろうとしたのだ。
徐々に状況を呑み込んでいく。
ねじまき島を支配していた男が、血だまりに倒れて気絶していた。
思わず、抑え込まれていた感情が爆発する。
わっと歓声に包まれた。
どうやら支配から解放されたようだと感じ取った研究員たちは喜びを露わにし、互いに抱擁してこれまでの我慢を称え合い、自分の感情を素直に表現する。
歓声と笑顔が抑えられず、数年ぶりに心からの笑顔になった。
一同の騒ぎを見てゾロは少し驚き、そういうものかとすぐに納得する。
同じような経験なら以前にもあった。
彼はさほど大きな反応は見せないまま、とりあえず仲間と合流するため適当に道を選んで進む。

解放

ベアキングの巨体が半ば蹴るようにして放り投げられた。
敗走して傷だらけになったトランプ海賊団兵士は驚きながらも受け止めようとして、力が足りずに数人が下敷きになる。倒れた彼らは苦しげに声を発し、他の兵士が慌てて駆け寄る。
船長を含む幹部が全員倒されて、さらには容赦なく兵士たちまで痛めつけ、すっかり心を折られたトランプ海賊団は彼らから逃げるべく島を出ようとしていた。
律儀にもそれを見送りに来たルフィたちから逃れるべく、彼らは慌てて行動する。
ルフィたちはそれを冷静に見ていた。
「忘れ物ないように。ほら行った行った」
「なんだ、ゾロが倒しちまったのか」
「作戦が裏目に出たな。まぁ大した奴らじゃなかったが」
「考えてみたらすごいことだよ。これだけの人数で勝ったんだから」
「あなたたちいつもこんなことしてるの？　刺激的な毎日ね」
トランプ海賊団を追いたてるキリの背後で四人が想い想いに話していた。
彼らが慌てて町から去っていくのを見送った後、振り向いたキリはゾロの言葉に反応し、何か言いたげな顔で反論を始める。
「失敗とは言うけどね、警戒してない船長の前まで潜入できたんだからほとんど成功してるよ」
「ありゃ相手がアホだっただけだろ」
「君は失礼なこと言うなぁ」
「ゾロもアホなのにな」
「あ？」
ゾロがルフィとキリを威圧し始めた一方、傍で見ていたボロードとアキースは呆然としていた。
頼んだのは彼らであったが、いざ現場に来てみれば何もしていな

い。敵と対面した途端にルフィとロビンが一網打尽にしてしまい、子供のアキースは別として、戦えない訳ではないボロードが手を出す暇すらなかった。
偶然の出会いから依頼しただけだがとんでもない連中だ。
彼らは驚きの言葉すら忘れて、事態が終息した今でも驚愕したままだった。
「あいつら、すげぇな……」
「ああ。実際のところ、おれたち何もしてないからな」
引き攣った笑みを浮かべてボロードが言う。だが考えてみれば当初からこうなることを期待して頼んだのだ。結果は望んだ通りのものだった。
これで良かった。そう思うことは間違いではない。
町の人々は歓喜に酔いしれていた。
城に連れて行かれた研究員たちが家に帰ってきて、家族との再会を果たし、さらにトランプ海賊団の支配が終わったことを知った。辛い日々は終わりを告げたのだと抱き合って喜んでいる。
振り向いてその光景を見たボロードは表情を柔らかくした。
笑みにも見え、同時にどこか寂しげにも見える。
「なぁ、アキース」
「ん？　なんだよボロード」
「お前に言ってなかったことがある」
「隠し事か？　水くせぇな、おれたちは泥棒兄弟だろ？　隠さずになんでも言えよ」
「そうだな……ようやく言える時が来た」
やけに遠い目をしてるのが気になってアキースは怪訝な顔をする。
ボロードは彼の顔を見ずに、町の方ばかりを気にしていた。
「お前の家族についてだ」
「え……？」
「海でお前を拾った時、小舟にあったのはお前自身と小さな玩具だけだった。調べてみるとそいつはこの島で作られたらしいってことがわかってな」

今耳にした言葉を理解し難いという顔で、アキースの表情は固まっていた。
何かに気付いた様子で肩から提げた鞄に手を突っ込み、件の玩具を取り出す。アキースと名前が彫られたそれは、ネジを巻けば羽が回る小さな風車。改めて確認してみると同じ形の建物が町の中にいくつかある。
全く同じ形の風車を見て、アキースは混乱した。
ボロードは常々言っていた。おれたちは兄弟だと。アキースはその言葉を疑わなかったし、両親を欲したこともなかった。彼の中にある世界は、ボロードが与えてくれたものと、彼と共に見たものが全て。それ以外を望むという考えがなかった。
困惑するアキースとは裏腹にボロードは何かを成し遂げた顔だった。
お互いの気持ちがすれ違ったまま、ボロードは言う。
「きっとここがお前の故郷だ。お前の両親がここに居るかもしれない」
「そんなこと、急に言われても……」
アキースは苦心した様子で、自らの想いを素直に言葉にする。
「両親とか言われても、おれ、会ったこともねぇし……おれの家族はボロードだけだったんだ。なのに今更会ったって」
「黙ってたことは悪かった。だがなアキース、血の繋がった肉親ってのは代わりが居ない。お前には必要なんじゃないかってずっと考えてたんだ」
ボロードはアキースと視線を合わせるようにしゃがむと彼の肩に手を置く。
不安げな顔をする彼に優しく微笑みかけた。
「心配するな。おれたちが泥棒兄弟だってのは変わらない」
「でも……会ってどうしたらいいのか」
「ただ会うだけでいいんだ。それだけでいい」
「……うん」
軽く背中を押されたことで、アキースは一人歩きだす。

喜ぶ人々の間を歩いて両親を探し始めるのだが、見つかるはずがない、と彼は思う。会ったことがない人間を見て気付けるはずがない。赤ん坊の頃から彼はボロードに育てられて、それ以外の家族など居なかったのだ。今更会ったところで、という気持ちも少なからずあった。

唯一の手掛かりは彼が持つ風車の玩具だけ。

それを両手で握りしめ、アキースは不安そうな顔で歩く。

多くの人とすれ違い、顔を見回し、探すも、やはり見つからない。

それはそうだ、と彼は諦めに近い感情を持っていた。

元より必要とはしていない。ボロードが居ればそれでいい。それが彼の本音だった。

どうせ見つからないから。引き返そうかと考えだした時だった。

前方にとある二人組を見つけた。城に連れて行かれた研究員たちのまとめ役だったのだろう、多くの人々に声をかけられ、気遣いを見せている中年の男女が居る。

不意にアキースは足を止めた。

特別な理由があった訳ではないが何となく気になったのだ。

見知らぬ二人をじっと見つめていると、やがて彼らもアキースに気付いた。

不思議そうな顔でまじまじと見つめられる。当然だ。彼は島に住んでいた訳ではなく、彼らの知り合いでもなければ顔見知りでもない。今日初めて出会った。

ただ、不思議と何かが気になって、しばらく視線が外せなかったようだ。

その時不意に、女性が何かに気付いた。

アキースが持っている玩具を見て顔色を変えたのだ。

わなわなと震え、恐る恐る近付いてくる。その様子にアキースはなぜか緊張してしまう。

「それ……ひょっとして」

その女性はアキースの前で立ち止まり、信じられないという顔で彼を見つめる。

「あなた……アキース、なの……？」
「え……？　じゃあ――」
呆気にとられていたアキースは思わず呟く。
それは考えるまでもなく自然に出てきた言葉だった。
「かあ、ちゃん……？」
女性が思わず息を呑んだ。
その直後には体が勝手に動き出していた。その場に膝をついてアキースの体を強く抱きしめる。自然と涙が溢れ出て、腕に強く力を込め、二度と離さないと言うかの如く胸の中へ引き寄せる。
アキースは呆然としていた。
実感はなく、自分でもよくわからない、初めての感覚に悩まされている。
ただ、彼女が泣いているのはわかったし、それが決して悲しいから流れている涙ではないと理解できていて、逃げ出そうとはしない。
不思議と嫌な気分ではなかった。
その様子に気付いた二人組の片割れの男性も近付いてきて、驚いた顔を見せた後、その女性と同じようにして二人を纏めて抱きしめる。
離れた場所で見ていたボロードは満足げな顔だった。
いずれこうなる時が来るのではないか。想像していたことが現実になった瞬間だ。
「目的は達成したってことでいいかな？」
背後からかけられた声にボロードが振り向く。
島に上陸した麦わらの一味の五人が並んでいて、キリの問いかけに小さく頷く。
「ああ。ありがとう。お前たちのおかげだ」
「これからどうするの？」
シルクが質問する。
アキースは両親と再会できた。しかし泥棒兄弟として活動していたらしい話は聞いている。二人はこれから離れ離れになるのか、それとも異なる道を選ぶのか。
聞かれたボロードは晴れ晴れとした顔で答えた。

「おれは元々一人だったからな。子守りにも飽きてきたとこだし、また元の生活に戻るだけだ」
「子守り、ねぇ」
「飽きたにしてはずいぶん仲が良さそうだったけれど」
何かを見透かしたようにゾロとロビンが笑みを見せるが、ボロードは取り合わなかった。
これでいい。このために努力した。
彼の決意は揺るがないようだ。
そんなことはどうでもいいと言いたげなルフィが彼に声をかけた。
喜色満面で笑いながらなぜかウキウキした様子だ。
「まだ島は出ねぇんだろ？　ならお前も参加してけよ」
「何の話だ？」
「宴だ！」
やけに楽しげに言ってキリに振り返る。町の人々が笑顔になっている様を見て、彼としてはこんな時に宴をしなくてどうする、というのが最優先だったらしい。
呆れたボロードは彼らのやり取りを見ながら何も言えなかった。
「ナミたちも呼んでパーっとやろう。サンジのメシも食いてぇしな」
「ここまでの道のりが長いね。ナミとウソップあたりは文句言いそう」
「それでもみんな居た方が楽しいじゃねぇか。呼びに行こう！」
「オーケー、ボクが行く。君ともう一人は帰ってこれなくなる可能性が高いからね」
一番に走り出しそうだったルフィを片手で止め、自ら役目を引き受けたキリが早速歩きだす。
来る時はトランプ海賊団の兵士に案内をされたがずいぶん時間がかかった。あれをもう一度やり直すのかと考えれば面倒だが、船に残した仲間をないがしろにする方が辛くなる。彼は面倒そうにしながらも一度来た道を引き返していった。
「その代わり準備はよろしく。すぐ戻るから」

「おう！　まかせろ！」
キリが去った後でルフィはボロードに向き直った。
にかっと笑って黙ったままだった彼へ言う。
「お前だって時間は欲しいだろ。アキースとしゃべるから」
「あ、あぁ……そうだな」
「出航は明日でいいじゃねぇか。今日はゆっくりしていけ。宴は人が多い方が楽しいんだ」
しばらく呆けていたボロードがようやく肩の力を抜く。
急ぐ理由はない。敢えて言うなら別れが辛くなるという一点が気にかかるが、確かにその前に話す時間が欲しかったところだ。
頷いた彼は宴への参加を了承した。
「そうだな……今日だけだ。お前らは恩人だしな。海賊と宴をするのは今日だけにする」
「よーし野郎どもォ！　宴だー！　準備しろォ！」
ルフィが大声を出したことで町民たちも気付く。宴をするらしいと聞かされて、解放感と喜びから即座に好意的に受け入れられたらしく、反対する者は居なかった。
一気に町中が騒がしくなる。
町民があちこち走り回り、家にある物、城にある物を惜しみなく運び出し、一時の宴を盛大にすべく準備に奔走する。
彼らは支配者などではなく、今日この島に来たただの海賊だ。
それなのにこれほど統制の取れた動き。
驚いたボロードは道の真ん中に突っ立ったまま、皆を動かすルフィを見ていた。
「一体何なんだ、お前らは？　ただの海賊じゃなかったのか？」
「れっきとした海賊だよ。自由を愛する船長が居るだけの、ね」
隣に立ったシルクがそう伝えた。
ボロードはその言葉を受け止めながら思案する。
「自由、か……」
彼が知る海賊とは異なる姿。
こんな海賊も居るのかと素直に感心してしまった。

町中を駆け回り、町民を急かしながらも互いに笑顔を向け合う彼は、ちっとも海賊らしく見えないのだが、今まで見たどの海賊よりも自由であったのは確かだ。

＊

ブー、ブーと間抜けな音が靴音として廊下に響いていた。
長く薄暗い廊下を歩くのはピエロのような外見の男だ。派手な服装と白衣、相反する二つを組み合わせた上に額にはサングラスがある。一歩進む度に奇妙な足音がして、現れれば気付かないはずはないほど存在感のある人物だった。
Ｄｒ．インディゴは広大な一室に入り、すぐに目的の人物を見つけた。
不遜な態度で椅子に座る、海賊大親分の金獅子のシキ。
彼の右腕と言って過言でない立場にあるＤｒ．インディゴは、足音に気付いたシキがこちらに視線を向けると同時に体を動かし始めた。
腕を振り、足を上げ、何かをジェスチャーで伝えたがっているらしい。
「あ？」
「シキの親分」
「普通に喋るんかい!?」
ジェスチャーをやめて声を発した途端、シキが大声を出した。
その直後には二人で肩を並べてポーズを決め、その場に居た部下たちへアピールする。
「ハイッ！」
「え……いやぁ……」
これはもはやお決まりのやり取りであった。
陽気な彼らはいつからだったかお決まりになってしまったこのやり取りを、めんどくさがることもなく毎度毎度必ずやる。見慣れた部下たちが反応に困っていてもだ。
満足したシキは改めて椅子に座り、Ｄｒ．インディゴと向き合う。

彼が目の前に現れる時は大抵報告がある時だ。シキは黙って彼の言葉を待つ。
「シキの親分。先日傘下になったトランプ海賊団ですが」
「おう。どうかしたか？」
「負けました」
「え～っ!?　もう!?」
「どうやらねじまき島が奪われたみたいです。あと他にもいくつかの海賊団が潰されてます」
「早ぇな！　どうなってんだうちの傘下は！」
「やったのは例の海賊たちみたいですよ」
最後の一言を聞いてシキの表情が変化した。
にやりと笑って余裕を見せ、まるで予想していたかのように、さっきまでの間抜けさがまるで感じられない姿でその報告を受け入れる。
「そうか。そりゃ面白い話だな」
「同様の報告が続いてましてね。いかがいたしましょう」
「弱小海賊団がいくつか潰れただけだ。大した損害にはならねぇ。が……何もしねぇってのも相手に悪い。ゲームはまだ始まったばかりだ」
「では、対策を取るので？」
「当然だろう。そうだな……どう遊んでやるか」
言葉通り、まるで遊びを始めるかのように楽しげな笑顔で彼は考えていた。
彼にとって傘下の海賊が敗北する程度のことは痛くも痒くもない。そもそも興味の無い話だ。勝とうが負けようが有象無象などどうでもいい。
ただ今回の一件で確信する。
傘下が増えれば増えるほど世界の情勢は面白くなりそうだ。
「ナワバリ争いか。面白そうだから付き合ってやろう。Ｄｒ．インディゴ」
「はい」
「研究は完成の域に達しているはずだな。そろそろ試してみてもい

いだろう」
「クリーチャーのことですか？　ええ、まぁ、使用できるくらいにはなってますけど、ただ問題なのは一度放てば町は跡形も残らないってことでして」
「それでいい。使え」
シキは迷いもなく告げ、Ｄｒ．インディゴは即座に頷いた。
「あのガキどもがどれだけもつか見物だな」
「もし本当にここまで来れたらどうするんです？」
「その時はおれが直々に相手をしてやるまでだ。それと傘下の数は今後も増やしておけ。その方が連中も楽しめるだろう」
「その件に関しては任せてあるので大丈夫でしょう。今も続々と報告は上がってます」
Ｄｒ．インディゴが言う通り、金獅子海賊団に次から次に傘下ができるのは、それのみを任務とするスカウトマンが存在したからだ。彼は各所を飛び回り、名の大小を問わずに海賊へ声をかけ、味方に引き込もうと暗躍しているのである。
それは今も変わらなかった。
とある島、白髪で細身の老人は静かな語り口で海賊を誘う。
「君には力がある。自由を勝ち取る力だ。今のままで居たいとは思わないだろう」
彼が語るのは己の主たる金獅子のため。主が世界中の海を支配するためである。
迷いはなく、不可能などとは考えたことがない。
必ず成し遂げる。それ以外の未来はあり得るはずがないと考えていた。
「我々に力を貸せば、必ずや君が望む未来が手に入るだろう。我々のためではない。自らのために戦う気はあるかと聞いているんだ」
故に彼はどんな海賊を前にしても臆することなく言葉を紡ぐ。
するりと心の中へ入り込むように、その語りは恐ろしいほど他人の心を掴んだ。
「自由が欲しくないかね？　何をすべきかはわかっているはずだ

……ノコギリのアーロン君」
一筋の光が差し込む狭い部屋の中。
老人と向き合って座る男は暗闇の中で目を光らせる。
その目には以前にも増して強い怒りが、ほの暗い光が灯されていた。

ナワバリ

ふわぁ、とナミはあくびを抑えられなかった。

仮眠は取ったが夜通し続いた宴の影響は少なからずある。こうした生活やイベントはすでに慣れているとは言っても健全な体は睡眠を欲するものだ。おそらく出航してから昼寝をすることになるだろうとは朝の時点で彼女もわかっていた。

町を丸ごと巻き込んだ宴は盛大に行われ、町民たちの笑顔を生む結果となって朝方に終わった。

用事を済ませた麦わらの一味は早くも島を出ようとしており、出航の準備をしている最中。

皆も夜通しの宴には慣れていて、男たちに関しては疲労の色も見せず今も騒いでいる。欄干に頬杖をついて呆れているナミに気付くこともなくいまだに楽しそうだ。

よく知る仲間ながら、よくもあれだけ体力があるなと呆れてしまった。

「いやぁ～見せてやりたかったね実際。お前らが上で戦ってる間にここら辺は海獣ドクアザラシでいっぱいになっちまったんだ。辺り一面が紫色になってたんだぜ。奴らの皮膚の色だ」

「ええっ!?　そうだったのか!?」

「そうだったのかウソップ!?　でもおれ、一匹も見てねぇぞ！」

「馬鹿だなチョッパー。お前が怖がると思ってお前に気付かれる前に倒したからだよ。しかしそれも簡単じゃなかった。あの激闘は流石のおれ様でも息を呑むほどだった……」

宴のテンションが続いているのか、ウソップの口は止まらず、上機嫌な語りは次から次に嘘をついて聞く者を楽しませた。すっかり虜となったルフィとチョッパーは目を輝かせて聞いている。

少し冷静に考えれば彼が嘘をついていることなどわかりそうなものだが、考えることを放棄しているのか、それともわかった上で楽しんでいるのか、二人が疑問を持つ様子はない。ウソップの言うことに素直に頷いて全て呑み込んでいる。

「いいなーウソップ。おれもそいつ見たかったなー」
「すげーなウソップは！　いつの間にそんなことしてたんだ！　おれ全然気付かなかった！」
「お前らがあいつを見なかったのは運が良かったかもな。ドクアザラシは丸っこくて可愛いやつなんだ。だけど凶暴で滅茶苦茶強くて一度暴れ出すと手がつけられない。毒も吐くしな」
「そいつに勝ったのかー！」
「毒吐くのか!?　危ねぇーなー」
「しかも五百匹は居たな。あれには流石に焦ったぜ。もっとも、全部おれが仕留めたわけだが」
「すげー！」
「五百匹も!?」
「まぁおれにかかれば朝飯前ってやつさ。大したことじゃねぇって。それで言うなら五歳の頃に戦ったドククジラの方がよっぽど強かったぜ。あの時もおれが一人で仕留めたっけ……」
「ええ!?　ドククジラも居んのか！」
「しかも一人で勝ったのか!?　ウソップって強ぇなぁー」
「いやいや、どうもどうも」
ますます勢いに乗ってきたウソップの嘘は止まらなくなっていた。
さらに次の話へ繋げようと彼が佇まいを直した時、船に食料を運び込もうとしていたサンジが木箱を抱えてメリー号の甲板にやってくる。
上機嫌なウソップに歩み寄り、持っていた木箱を落とすように彼の胸へ押しつけた。
「ほぉ～、そりゃすげぇ。なら逞しいキャプテン・ウソップにもぜひ手伝ってもらおうか」
「ふげっ!?　お、重～!?」
「お前らもだよ。積み込みも済んでねぇのに遊んでんじゃねぇ、ったく」
「だって気になるだろ。ドクアザラシとドククジラだぞ」
「五百匹も居たんだぞ！」

「そんなに居りゃおれやお前も気付いてるはずだろ。いいからとっとと運べ。それとも今日のおやつは抜きがいいか？」
「急げチョッパー！　全部運ぶぞ！」
「うん！　わかった！」
ルフィとチョッパーが荷物を積み込むためメリー号を一旦降り、港の桟橋に集められた木箱や樽に飛び付く。慌てている素振りはあったが元気に荷物を運び始めた。
彼らが大急ぎで作業を始めたため、サンジは一旦足を止めて煙草の火を点ける。
その隣ではウソップが木箱を抱えたまま、何かを後悔するように深い溜息をついた。
「はぁ～、もう出航か。ここならゆっくりできそうなのになぁ。確かに移動は疲れるけど、簡単に海賊が入ってこれなさそうだし、せっかく追い出したってのによぉ」
「文句ならルフィかキリに言えよ。どうせ決定は覆らないだろうけどな」
「そんなに先を急ぐ必要あるか？　おいキリ、どうなんだよ」
ちょうど荷物を抱えてメリー号に乗り込んできたキリに目を向け、ウソップが問う。
声が聞こえていて内容を理解していた彼は迷う素振りもなく答えた。
「確かに見た目的には堅牢そうだけど、ここは海賊に支配されてたんだよ？　それでも残る？」
「また海賊に襲われるってことか？　だったら余計に残った方がいいんじゃねぇか？　せめて少しの間だけでも」
「その点は大丈夫だと思う。作った武器や罠の使い方とか、島の警備についてもある程度指示しておいた。入口がこうだから作戦さえしっかりしてれば素人でも十分守れるよ」
「じゃあ安全なんだろ。もうちょっと居よう」
「ウソップ、ボクらはシキに目をつけられてるんだ。シキの情報網は相当なものだし、同じ場所に長居するとボクらも島の人も危険な目

に遭う。今は次から次に移動していかないと。そっちの方が無事に航海を続けられるんだよ」
「うへぇ、聞きたくなかった話だな……それじゃあおれたちに安息の地はねぇのか」
答えた後でキリは自分が持っていた木箱をウソップに渡す。元々持っていたそれの上に同じサイズの物を乗せられて、思わず腕と膝を震わせた彼はよたよた歩きだし、どこかに下ろさなければと慌てて彼らの傍を離れていった。
その場に残っていたサンジは煙草を銜えながらキリに尋ねる。
「で、協力は得られたんだろ？」
「今後のことも含めてね。この島の科学力は侮れない。快く協力してくれるってさ」
「人助けもしてみるもんだな。脅す必要がなくなる」
「それ、ボクのこと悪く言ってる？」
「いいや。ちっとも」
サンジは次の荷物を運ぶべく移動し始めた。
入れ替わるようにシルクとゾロが荷物を持って甲板へやってくる。
「次はどこへ向かうの？　当てはある？」
「ない。でもどこへ行っても同じような状況さ。結局やることは変わらない」
「ほんと嫌になるわね。どの島に行っても戦ってばっかりじゃない」
少し眠そうに髪を掻きながらナミが階段を降りてくる。
元々冒険や戦闘が好きではない彼女にとっては悪夢のような状況だ。ルフィの懸賞金が1億に達したことだけでも大変な事態だというのに、そこに輪をかけて金獅子である。いまだに受け入れ難いようで思わず溜息をついてしまった。
疲れている雰囲気のナミを見てシルクが苦笑した。
昨夜はあれだけ大酒を呑んで楽しそうだったのに今朝はこうだ。
様子の変化に気付いたからこそ、彼女は気遣う言葉をかける。
「眠そうだねナミ。飲み過ぎた？」

「ううん。ただ眠いだけ。飲もうと思えばまだ飲めるわよ、私」
「おれもまだまだ飲める」
「そんなに飲まなくていいんだよ。消費が多いとサンジとナミに泣きが入る」
ゾロに新品の酒瓶を一つ投げて渡しながらキリが移動していった。驚くこともなく受け取ったゾロはすぐに蓋を開け、瓶に直接口をつけながら同じく仕事に戻る。
彼らは常に金欠の恐怖と戦う海賊団だった。
主な資金源は海賊からの略奪であり、町や市民を襲ったりせず、機会が限られるため収入にはある程度の制限がある。しかし消費が圧倒的に多い。主にルフィの食費を始めとして、航海には色々と入用になるためすぐに金が外へ出ていってしまう。彼の言葉はそれを示していた。
食料を全て管理するサンジと、一味の資産を全て管理するナミには気苦労も多いようだ。
キリの言葉を聞いて改めて自分たちの貧乏ぶりを見つめ直し、肩を落とした彼女は溜息をついてしまう。その後は全てを忘れるかのように両腕を伸ばしながら空を見上げた。
「確かにキリの言う通りね。ダイヤモンドクロックは大き過ぎて結局運べないし、手に入れたのはトランプ海賊団のお宝だけ。それも期待したほどじゃないし、町の人にもちょっと分けたし……あーあ、たまには何も考えずビーチでのんびりしたいわねー。お金のことも海賊のことも海軍に追われることも考えずにさ」
「そうだね。たまにはそんな時間があればいいんだけど」
「次の島はどんなところかしら。せめて気候は安定しててほしいわ」
「またシキの手下が居るかもしれないよ。今はそんなところばっかりみたいだから」
「はぁ……それだけは勘弁してほしいわ」
心底うんざりだという顔をするナミを見て、シルクはくすくす笑う。

船の外を見れば、皆が協力したおかげで用意した荷物を積み終えたらしい。今彼らが持っている物が最後のようだ。
「ロビンちゅわーん！　君はそんな重い物持たなくていいんだよ！　僕が運ぶからー！」
「あら、いいの？　力持ちなのねコックさん」
「えへへ～！　それほどでも～！　ロビンちゃんのためならこんな荷物の一つや二つ……！」
「おう、そうだ。全部お前が運べばいいんだ、バカ」
「あぁ!?　てめぇにゃ言ってねぇよマリモ！」
「ちょっと力持ち、こっちにも一つあるよ」
「そりゃてめぇの分だろうが！　自分で運べ！」
「よーしこれで最後だぞ！　おやつだサンジー！」
「おやつだー！」
「まだ早ぇよ！　さっき朝メシ食わしたとこだろ！」
仲間たちがぎゃーぎゃーと騒がしくしながら乗船してくる。
ナミは苦笑で、シルクは微笑みで彼らを迎え入れ、出航の時が近いことを感じる。
彼らが乗船し終えた頃、倉庫に荷物を運び終えたウソップが甲板に戻ってきて、ふと船の外に目を向けて気になる物を見つけた。
小舟に乗って出航しようとするボロードだ。
彼は一人で準備をしていて、今まさに船を出そうとしている。
「おーい。お前も島を出んのか？」
ウソップが手を振りながら声をかけた。仲間たちも気付いてそちらに目を向ける。
振り向いたボロードは薄く笑みを浮かべた。以前ならまだしも、協力してもらった今では彼らに対する悪感情は持っていなかったようだ。
「ああ。世話になったな」
「ここに残ってもいいんじゃねぇか？　あいつを拾って育ててたんだろ」
「そういう生き方は性に合ってなくてな。おれは元々こうだった。

今更生き方を変えて平和に町の中でじっとしてるなんて、おれにはできそうもねぇ」
「ふーん。もったいねぇ気もするけどな……」
ウソップは欄干に頬杖をついて、複雑そうな顔でそう呟く。
他人の生き方を好き勝手に言うつもりはないが、付き合いが短いとはいえ、彼が一人で居る姿を見て何も思わない訳でもなかった。だから寂しげな顔なのだろう。
同じことを考えたのか、サンジがボロードに尋ねる。
「お前一人で行く気か？」
「ああ。アキースは家族に出会えたんだ。無理に引き剥がす必要はないだろ」
言いながらボロードは小舟を押し、海に浮かべて乗り込んだ。
船に乗ってから振り向くと最後の挨拶のために彼らを見た。
「じゃあなお前ら。本当にありがとう。また機会があればどこかで――」
「お前、荷物は確認したのか？」
「え？」
「ちゃんと見といた方がいいぞ」
サンジが言うとボロードは船の後方、自身の荷物に目を向けた。
きちんと確認はしたはずだが、今見てみるとかけておいた毛布がもぞもぞ動いている。驚愕した次の瞬間には、落ち着く暇も与えずその下からアキースが現れた。
「ボロード！」
「うわっ!?　アキース!?　お前、ここで何してるんだ！」
「水くせぇじゃねぇか！　おれたち二人で泥棒兄弟だろ！　おれを置いて行こうったってそうはいかないぜ！」
「お前、せっかく両親と会えたってのに……」
「ボロードが言ったんだろ！　二人で世界一の泥棒になるって！」
突然の事態に驚きを隠せず、受け止め難い状況だったようだが、必死に訴えるアキースを見て流石にボロードも何も感じないはずはなかった。

これが彼の選んだ道なのだ。
がしがしと頭を掻き、仕方なさそうに笑ったボロードは態度を変えた。
「仕方ねぇな……じゃあ行くか」
「おう！」
「よかったなアキース」
いつの間にか欄干に座っていたルフィが笑顔を見せる。
アキースとボロードも彼らに晴れ晴れとした表情を見せ、手を振りながら遠ざかっていった。
「お前らありがとなー！　また会おうぜー！」
「おう！　またなー！」
彼らも手を振って送り出す。
一緒に過ごした時間は短かったが、共に戦い、宴をした。笑顔で見送る理由はそれで十分だ。
二人が去っていった後、一味も出航すべく行動を始める。
「さて、ボクらも行こうか」
「しばらく他の海賊と出会いませんようにー」
「言えてる。これですぐ出会うようなら神様を呪ってやるわ」
ウソップとナミが不安を口にしつつも、彼らもまた出航のために準備を進める。
一所に留まるのは危険らしく、かといって海上に居ても襲われる可能性は十分にある。考えるだけで嫌になる展開だ。
それでも船上にある雰囲気は穏やかで、いつも通りに呑気な会話をする程度には冷静だった。
準備を進めて、出航しようかと考える頃。
メリー号に近付いてくる人影があった。
のしのしと歩いてくる男は砂浜に立ってメリー号を見上げる。
「おぉ、居た居た。まだ出航してなかったな」
「ん？　誰だ？」
声に気付いたルフィが軽やかに欄干へ飛び乗る。その上にしゃがんで男を見下ろした。

見知らぬ男だった。町の中でも宴の最中にも見ていない。初めて見る顔で不思議そうに見下ろすと彼は笑っていた。
「お前らの噂を聞いてきたんだ。おもしれぇ奴らじゃねぇか。金獅子に喧嘩売ったって？」
「ああ。そうだ」
「やっぱりそうか。噂は本当だったってわけだ。わざわざここまで来た甲斐があった」
ルフィが話している声を聞いてキリが近寄ってきた。
船の外に目を向け、相手の男を確認する。知らない顔だ。出会ったことはない。
「おっさん誰だ？　この島のやつか？」
「いやぁ、ただの名もねぇ海賊だ。お前らに一目会いたかったんだよ」
「へぇ、海賊か」
「それと一つ頼みがある。おれも加えちゃもらえねぇか？　お前らの海賊同盟とやらに」
ルフィはあっさりとその言葉を受けたが、キリは怪訝な顔をした。
自分たちのことが知られている。シキが敢えて情報を広めているとすればおかしな話ではない。元々は彼らもシキと対立し、シキの名を利用して自分たちの名を広め、戦力を増強して、ゆくゆくはシキを打倒するつもりだった。しかし、こうして自分たちに近付いてくるにはあまりにも早過ぎるのではないだろうか。
同盟は結成したばかりでまだ明確な戦果を上げていない。
このタイミングで近付いてくるということは、おそらく自分たちを利用したがる人間だ。
キリは警戒して件の男を見る。しかし本人が言う通り、手配書で見た顔ではない。おそらくはまだ無名の知られていない海賊だった。
だからといって安心はできず、会話はルフィに任せて彼は観察に集中する。
男は友好的な態度だ。
少なくとも今は騙まし討ちをする素振りもない。興味本位で声を

かけた風にも見える。
「海賊同盟に？　仲間にしてほしいのか？」
「まぁ要するにそういうことだ。だがおれァこれでも船長でね。お前らの部下になりたいってわけじゃねぇ。そこだけは頼むぜ」
「どうするキリ。同盟に入りたいってよ」
振り向いたルフィに見られているのを知りながらキリは視線を動かさない。
警戒されている、と本人も感じ取ったのだろう。
楽しげに、豪快に笑う彼は両手を広げて友好的な態度を示した。
「ゼハハハハ！　仲良くやろうぜ。おれも金獅子を仕留めてぇだけさ」
確かに味方は必要だが、彼の参入は果たして吉と出るか、凶と出るか。
敵には伝説と語られた海賊。普通に戦って勝てるはずがない。ならば危険な賭けに出てでも確率を上げることはきっと必要になる。
素早く思考を巡らせたキリは思わず前へ出た。
「なぜボクらのところに？」
「あぁ？　噂を聞いたからだ。勝ち馬に乗りてぇのは誰だって同じだろ？」
「その噂はどこから？　言っちゃなんだけどボクらはまだ大して何も結果を残してない」
「なんだ、警戒してんのか。そうなるのは仕方ねぇが、目的は今言った通りだ。おれは金獅子の首を獲りてぇだけなんだよ」
彼の発言にキリの表情は曇る。その顔を見て男は笑った。
「もちろん名を上げるためにだ。別にお前らを騙まし討ちしようなんて考えじゃねぇ。まぁ信用するとも思ってねぇけどな」
「わかった……詳しい話を聞くにしても、ボクらは慈善団体じゃない。手を組むためにはそれなりの対価がほしいところだ」
「ああ、わかってる。何が欲しい？　情報か？　それとも金か？」
金という言葉に反応してナミがキリを見るものの、彼はそれを黙殺する。

キリが厳しい顔で黙り込んでいるのを確認すると男が言った。
「お前ら、いずれは新世界へ行くんだろう？　おれはあっちの海に詳しくてな」
「ということは、向こうの出身？」
「ゼハハハ、どう思うかはお前らの自由だ。だが良いことを教えてやろう。おれは白ひげのナワバリに詳しいんだ」
予想していなかった名前を聞いてピクリと眉が動いた。
反応があった。海賊がいくら集まろうとそんな情報は集まらなかったのだろう。
些細な挙動から相手の野心を見抜き、この時男は確信を得る。
話は通じた。同盟に入ったも同然だと。
「仲良くできそうだな。まずは何の話から始める？　ゼハハハハ……」
彼にはわかった。キリの目は警戒しながらも相手を利用できないかと考えている。彼も同じことを考えていたからだ。
同盟に入るのは成り上がるため。得る物を得れば興味はない。
今後の動きを頭の中で想定し始め、男は面白いと言いたげに楽しそうな笑顔だった。

幕間4
断章　動き出す海賊たち

1

金獅子のシキ復活。

世間を大きく揺るがしたニュースは世界政府や海軍すらも驚かせた。

可能ならば一刻も早く彼を捕縛せねばという考えがある一方、現存する戦力で可能か否か。判断に困る程度には金獅子の勢力は爆発的な成長を遂げている。

速やかに対策を練らねばならない。

世界の状況を見てそう判断した世界政府は、政府に与する海賊を呼び集めた。

王下七武海の招集である。

世界政府によって海賊行為を許可された、たった七人の海賊、及びその一味。彼らは有事の際に世界政府に助力することを条件としてその存在を認められている。

今回の一件などはまさにその時であった。

金獅子の復活は彼らを動かす理由としてはあまりに相応しく、指令が下されるのも当然である。

王下七武海の下には世界政府からの手紙が届き、聖地マリージョアへ集うよう書かれていた。

一体その命令に何人が従うのか。

彼らは信用されておらず、称号の剥奪をチラつかせでもしない限りは動かない者も居る。世界政府が緊急事態であるなど、彼らにとっては興味のない話。招集しても誰も集まらないことも十分にあり得た。

ただ、今回は話があまりにも大き過ぎるためか、予想外のことがあった。

海軍元帥センゴクが広大な一室に入った時、そこにはすでに二人の姿があったのだ。

「うわっ!?　おいやめろ！　ふざけている場合か！」
「違うんだ、ふざけてるわけじゃない！　体が勝手に……！」
「よせ！　一体何を考えているんだ！」
部屋の中ではスーツ姿の海軍将校が二人、ナイフを片手に揉み合いをしていた。何が起こっているのかと入口の辺りで静観してみれば考えずともすぐわかる。
七武海の男が指を動かしているのである。
その動きを見ただけで、彼が何をしているのかはすぐに理解できた。
「そうだよ。いい子だからおやめ。ドフラミンゴ」
「フッフッフ。いい子だから、か。あんたには敵わねぇな、おつるさん」
海軍中将、おつるに声をかけられて、ドンキホーテ・ドフラミンゴは能力の使用をやめる。
彼が手を下ろすと同時に揉み合っていた二人の海軍将校は体を離し、息を切らして困惑しながらもようやく落ち着ける状態となった。彼の能力で操られていたのだ。
部屋に入って早速気分の悪いものを見た。
忌々しいと言いたげな顔をしたセンゴクは中央のテーブルへ歩み寄りながら口を開く。
「いつになっても嫌なものだな。海のクズどもとこうして顔を合わせなければならんとは。しかも貴様らは逮捕してはいかんらしい」
「よく言うぜ。そのクズどもの力を借りたいってのはお前らだろ」
幅の広い大きなテーブルの上に座ったドフラミンゴが最も早く反応する。
もう一人この場に来たのは寡黙で知られる〝暴君〟バーソロミュー・くま。彼は椅子に座って静かに本を読んでおり、この喧騒に全く反応していない。
センゴクはドフラミンゴを見て小さく溜息をついた。
「政府の決定に逆らうわけにはいかんからな。結局集まったのは貴様らだけか」

「いやぁ、二人も集まったんだ。上等だろ。大体何の話かはわかってる。さっさと用件を聞かせてほしいもんだな」
「フン……これ以上は集まらんか」
センゴクがテーブルに近付いて椅子に腰かけようとした時、彼が入ってきた所とは別のドアが開いて新たに人が入ってくる。
姿を現したのは意外にも〝鷹の目〟ジュラキュール・ミホークだった。
現れるはずがないと思っていた人物の登場に居合わせた者たちは目を丸くする。
「まさかお前が来るとはな……鷹の目」
「今回の議題に上がるだろう男に興味があっただけだ。お前たちに力を貸す気はない」
「フッフッフ！　よくもまぁこの場でそんなこと言えたもんだ。嘘でもつきゃあいいのによ」
「貴様もそう変わらないだろう。政府に従う男とは思えん」
「おれはお前より協力的さ。ただし利益があればの話だがな」
ミホークは空いていた席に腰を落ち着ける。腕組みをして鋭い視線を辺りに投げかけ、それでいて我関せずといった空気を纏っていた。
ようやく場が整ったと言っていいだろう。
用件を告げるのは当然センゴクであり、冷静な様子で淡々と説明する。
「貴様らも予想はついているだろうが、話は金獅子についてだ。奴はマリンフォードへの宣戦布告以来、本格的に活動を再開した。すでに抑え込めないほどの被害が各所で出ている。早急に対応しなければ奴の力は増す一方だろう」
「やはりその話か。ワニ野郎の件もあり得ると思ったがな」
ドフラミンゴが口を挟んだことでセンゴクはそれにも反応した。
「本来ならばクロコダイルの件だけで良かった。だが奴が現れたことでそうも言っていられなくなったんだ。奴と貴様らに関しては後回しにする」

「おれたちもかよ。ひでぇ話だ」
「すでに政府からの要請は出ている。貴様ら七武海も金獅子討伐に協力しろとな」
「当然、タダとは言わねぇよな？」
すかさずドフラミンゴがセンゴクに笑みを向けた。
笑顔ではあるが迫力のあるその顔は明らかに悪巧みをしている。無視できるはずもなく、ただ言い返すだけでは足りないとも予想できた。
「状況をよく考えて答えろよ。片や政府を転覆させられるほどの力を持つ海賊。片や海賊に力を借りねぇと対策もできねぇ組織。どっちについた方が利点があるか」
「七武海の座を捨てる気か？　自ら望んだものだろう」
「七武海が機能しなくなる世界になるとすりゃどうだ？　政府が無くなりゃその名に価値はなくなるはずだ」
不穏な発言であった。
たった一人の海賊の発言が元で、室内は刺々しい殺気で満たされていく。
同席した海軍将校ですら冷や汗を掻く空気。原因となっているのは笑顔を崩さないドフラミンゴと彼を睨みつけるセンゴクだった。
やがてその空気を壊すべく、おつるが冷ややかな声で呟く。
「自重しなセンゴク。ここでの争いに意味があるかい？」
「ああ……すまんなおつるさん」
「ドフラミンゴ。あんたもやめな。人をからかうのもそこまでだよ」
「フッフッフ」
おつるが言うとドフラミンゴはすぐに矛を収めた。ただ単にからかうことが目的だったらしく本気で敵対しようとは考えていなかったようだ。
帽子のつばを触り、位置を正したセンゴクは再度冷静に話し始める。
さっきは思わずドフラミンゴに殺気をぶつけたが、彼の発言に関係

のない話題ではなかった。
「実を言えば、お前たちがそう言うだろうと考えて政府はすでに先手を打っている。何もタダで協力しろとは言わん。今回に限った話だがな」
「ほう。意外に話がわかるじゃねぇか」
「金獅子を討った者にはそれ相応の恩赦が出る。わかったら一刻も早く奴を止めろ」
《キィーッシッシ！　恩赦か。ずいぶん濁した表現だがまぁいいだろう》
センゴクの発言を聞いて突然電伝虫から声が発された。
あらかじめテーブルに置かれていたそれはずっと通話中だったようで、センゴクを始めとした多くの人間が反応していた。
「モリア。貴様も居たのか」
《おれは元々金獅子を狙うつもりだった。奴の影を手に入れさえすれば、おれは世界最強の戦力を手に入れることになる》
「お前が金獅子を殺るって？　バカも休み休み言え」
《黙ってろドフラミンゴ！　報酬があると聞いて安心した。その言葉忘れるなよ》
特徴的な笑い声を響かせた後、通話は切られてしまった。
必要とした情報はそれだけだったのか。他者と協力しようという姿勢を見せることなく、彼はすでに動き出そうとしているようだ。それを止めようとする海兵は居ない。所詮は海賊。味方である一方敵でもある彼らを心配する者はこの場に存在しなかった。
話の腰を折られたが続きを話そうとした。
センゴクが口を開きかけた時、再び訪問者が現れる。しかし今度は乱入と言っても過言ではない様相だった。
「話は少し戻りますが、七武海の空席の件」
聞こえてきたのはドアではなく窓だった。
いつの間にか見知らぬ男が立っている。開け放たれた窓から入ってきたらしい。
「こちらは一人相応しい男を知っていましてね。私から推薦させて

頂きたい。例えば金獅子の首を持ってきたら、当然その席は頂けるわけですよね？」
「誰だ、貴様は。どうやって入った？」
「お前ラフィットだね」
怪訝な顔をするセンゴクの隣でおつるが反応した。センゴクはすぐ彼女に質問する。
「知ってるのかおつるさん」
「ウエストブルーで保安官だった男だ。度を越えた暴力で国を追われたと聞いてるよ」
「ええ。それは昔の話。しかしよく私のことなど知っておいでで」
「妙なことを言っていたね。七武海の後任だって？」
シルクハットを指で触って、優雅な仕草でラフィットが話し始める。
集った面々の視線を一身に浴びても緊張しておらず、恐怖を感じてもいない。至って平然とした態度で話していて、この場に集った面子を見ればそれだけでも大した度胸だった。
「はい。ぜひ皆様に知っておいて頂きたく。今はまだ無名ですが、いずれ相応の結果を持ってあなた方の前に現れることでしょう」
「誰の話だ？」
「我らが船長の名はマーシャル・D・ティーチ。懸賞金はゼロ」
「フッフッフ。未知数か。おもしれェ」
ドフラミンゴはくつくつと笑っていたが、センゴクは懐疑的な目で彼を見ていた。
それも当然だ。唐突に現れた見知らぬ男の話をすぐに呑み込めるはずがない。
「金獅子を倒すと言ったのか？　何の保証もなく言い切る人間を信用できるわけがない」
「決して不可能な話ではありません。いかに伝説と言えども相手は老兵。それなりに時間はかけるかもしれませんが成果は見せましょう」
ラフィットはにこりと微笑み、持っていたステッキをくるりと回し

た。
「ご心配なく。我々には計画があります。いずれご理解頂けるでしょう」
自信を持ってそう言い切るラフィットにセンゴクは表情を険しくしていた。
海賊から計画があると聞かされることほど落ち着かないことはない。決して安心できない話だ。
このマリージョアまで辿りつけた事実も含めて警戒しておいた方がいいかもしれない。
センゴクは厳しい目でラフィットを見据えていた。

2

「キィーッシッシッシ！」
上機嫌な笑い声が部屋に響いていた。
広大な部屋に集められた幹部は船長の異変を感じており、いつになく上機嫌な様子で、他力本願を掲げる彼にしては珍しい態度である。
幹部を集めたのは命令を下すためだった。
そしてその命令が〝船を動かす〟というものだったため、彼らは驚愕したのだ。
「モリア様ァ、本当に出航するんですか？」
「しかしおれたちはこの海域を根城にして長いのに、なぜ急に」
「そりゃあ理由は一つしかないだろう。あの装置の完成と、それから――ぎゃあああああっ!? シンドリーちゃん!? なぜ正確無比におれの眉間に皿を投げる!?」
騒がしい部下たちに苛立った様子もなく、ソファにふんぞり返って座るモリアは彼らを見た。
「お前らももう聞いてるだろう。金獅子が復活したそうだ。奴の影を奪うことができればおれに敵う者は居なくなる。おれが海賊王になるのもすぐってことだな」
「しかし、相手はあの金獅子。そう簡単に勝てるとは」

「フン！　奴の全盛期がいつだと思ってる。もはや老兵だ」
モリアは笑みを絶やすことなく余裕綽々という態度である。
部下の心配も他所に野望の成就しか見えていなかったようだ。
「金獅子本人はすでに老いたが、その覇気と実力は世界中が認めるものだ。奴の影を〝オーズ〟に入れれば世界中の誰も敵わねぇ強大な戦力になる。世界政府だろうが七武海だろうが四皇だろうが止められねぇのさ。海賊王は目の前だ」
敵は強大だが、倒した際に得られる物も大きい。
そういった理由からモリアはすでに金獅子を標的に見定めていたらしい。
それを聞いた幹部は同意する一方、その選択が難しいことを指摘する。
「なるほど……確かにオーズには金獅子クラスの影は相応しい。だが上手くいくかどうか」
「たとえ金獅子でもおれの〝不死のゾンビ軍団〟は止められない。奴も戦力は増やしてるだろうが所詮はハエどもだ。ハエを払ってるだけでおれのゾンビ軍団が増員される。警戒するのは金獅子と元々奴に従ってた連中だけでいい」
モリアの目は一人一人を捉えて言葉をかけた。
「アブサロム。例の装置は完成してるな？」
「もちろんだ。科学者の影を入れたゾンビどもが霧を発生させる装置を作り出した。これで〝魔の三角地帯（フロリアン・トライアングル）〟を出ても姿を隠しながら航行できる」
「ホグバック。ゾンビの調子はどうだ？」
「はい。順調に数を増やしています。ちょうど新作も完成したばかりで」
「ペローナ。影はどうだ？」
「ホロホロホロ。まだまだたっぷり」
「ジェイル。死体は集まってるか？」
問われた大男はつまらなそうに低い声で呟く。
「ああ。必要なら外から取ってきてやる。最近はこの海域に近付く

奴も減ったからな」
「キィッシッシ。その必要はねぇ。今度からはこっちから迎えに行ってやる」
体を起こすこともなくだらしない姿勢で彼は語る。
勝算はあった。確かに相手は強敵だが勝てないはずはないと思っている。何やら自信がある様子のモリアを見れば、幹部たちに文句はない。彼を信頼しているからこそ多くを言わずとも任せておけばいいと考えている。
ただ一人を除いて。
「まずは金獅子が集めた雑魚どもを狩って影と死体を集めてやる。さらにゾンビの数を増やしていけばすぐに奴の戦力など相手じゃなくなる。組織力ならこっちが上だ」
「あんたはそう言うが、おれはゾンビなんざ信用しちゃいねぇ。あいつらあんたが気絶すれば使い物にならなくなるだろう。生きた人間を使うって手も考えといた方がいいぞ」
「おれが気絶する？　馬鹿を言うな。そんなことあるはずがねぇだろう。なぜなら敵を倒すのはお前らだからだ」
にやりと笑ったモリアは自信満々に言う。
そんな彼の態度に大男が嘆息した。
「あんたが戦闘に出ないことを祈るよ」
「おいおい、また心配性か？　問題ねぇ。おれにはお前らが居るんだ」
それは部下たちへの信頼を示す言葉であり、たとえ他力本願であろうと彼らの気持ちが揺らぐことはなかった。モリアはすでに彼らにとっての王なのである。
全ての影を従える影の王。
モリアの命令は絶対だった。
「すでに計画は始動した。とっとと金獅子の影を奪って、早くおれを海賊王にならせろ！」

3

「この先、わしは一人で行こうと思う」

突然ジンベエが吐き出した言葉に、仲間たちは驚いた。

これまで共に航海してきた仲間、それも船長の立場に居る彼の突然の離脱を、冷静に受け止められるはずもなかった。

仲間たちは驚きの声を口々に発して反対しようとする。

「どういう意味だよ船長！　あんた一人でどこに行く気なんだ!?」

「例の麦わらのとこに行くんだろう！　おれたちゃ反対してねぇぞ！」

「エースに会えるかもしれねぇし！」

「どういう風の吹き回しだ、ジンベエ。ここまで来てそんなことを言い出すなんて」

副船長である人魚のアラディインが彼に問う。

真剣な顔つきで仲間たちの顔を見回したジンベエは重々しい様子で答えた。

「皆も知っておる通り、世間は今、金獅子の脅威に怯えておる。オヤジさんの名があれば心配はいらんことはわかっとる。じゃが、できれば皆には魚人島に残ってほしい」

「ジンベエ。わかってるとは思うが」

「金獅子が魚人島に手を出せば、オヤジさんのナワバリに手を出したことになる。そうなれば戦争になるじゃろう。それはわかっておる。じゃがそれをせん相手だと思うか？」

アラディインは腕を組んだまま厳しい表情だ。

彼の心配はわかるが、仲間たちだってジンベエを心配する。それでも仲間を遠ざけて一人で行くというのは自分勝手な判断なのではないか。そう思いながらも止めることはできない。彼が苦心して考えた末に答えを出したと知っているからだ。

「金獅子だけではない。この混乱に乗じて魚人島に手を出す輩が居るかもしれん。それがただ無知な馬鹿どもなら問題ないが、四皇であったならどうする？」

「あり得ると思うか？」

「わしはゼロではないと思っとる。今のこの海なら何が起こっても不思議ではない」
ジンベエはきっぱりと言った。微塵も迷いがない様子だ。
「エースさんの弟のところにはわし一人で行く。アーロンの件について謝罪を。これはお前たちを付き合わせるまでもないわしの問題じゃ」
アラディンは頭を振って嘆息した。
責任感のある彼は意外に頑固で意見を変えないことが多々ある。そんな彼を支え続けてきたアラディンはジンベエのことをよく理解していた。仕方ないと認めてしまう。
きっと不満に思う仲間たちも多いだろうが、これ以上は言っても聞かない。
代表してアラディンがジンベエに言った。
「わかった。だがジンベエ、注意しろ。お前が言ったんだ。今のこの海じゃ何が起きても不思議じゃないってな」
「すまん」
「謝るな。こっちは何年付き合ってると思ってる。エースに会えたらよろしく言っといてくれ」
アラディンが認めたことで仲間たちも声援を送った。
皆、船長を信頼している。常に仲間たちや故郷のことを考えて行動してきた彼だ。今回のことがたとえわがままだったとしても、素直に認めてやりたいと思う。それくらい彼がわがままを言うのは珍しく、そして今まで他人のために尽くしてきた。
寂しくはあるがまた再会できる。
そう思って彼らはジンベエを見送った。
ジンベエは用意していた一人用の小舟に乗って出航する。
嫌な胸騒ぎがしていた。
金獅子の登場がそうだったのか、或いは別の理由があったのかは彼にもわからない。
仲間たちに言った通り、これから彼は弟分であるアーロンの一件に関わったという麦わらの一味の下へ向かう。しかし本心を言えば理

由はそれだけではない。
この胸騒ぎの原因は何なのか。考えた時にふとエースの顔が浮かんだ。
理由はわからないが居ても立っても居られず、ジンベエは彼にも会おうと決めていた。

4

大汗を掻いて頭を抱えたバギーは苦悩していた。
原因となるのは数日前に見た新聞だ。金獅子の復活。それを見て以来、彼は極端に様子がおかしくなって怯え始め、苦しむ顔を続けていた。
質問をし、理由を聞いたとはいえ何も思わない訳ではない。
呆れた顔のアルビダは溜息交じりに彼へ声をかける。
「いつまでそうしてるつもりなんだい？　男らしくないねぇ」
「うるせー！　この状況がわかってねぇのか！」
「わかってるさ。金獅子が復活した話だろ？　確かに大物だけどそんなに怯えるほどかい？」
「お前は会ったことがねぇからそう言えるんだ……おれは嫌と言うほどあいつを見てきた」
気落ちした様子のバギーは今も悩み続けているようだ。
彼の悩みはわかっている。
金獅子の傘下になって安全を確保すべきか。それとも否か。
傘下になれば彼の勢力から狙われることはなくなり、少なくとも金獅子と戦闘になることはなくなる。しかしそれを決断できないのは、イーストブルーで結成した同盟の代表として君臨する彼が金獅子の手下になってしまうからだ。せっかく組織のトップとなったのにそれを捨てるのはもったいないと、バギーは躊躇っているのである。
一番良いのは金獅子に狙われず、自身がトップであり続けること。
そんな方法が無いものかと諦めきれない彼は悩み続けているのだった。

すでにそれを聞かされていたアルビダは呆れながらも余裕のある態度で彼を見ていた。
「このままじゃまずいな。何か方法は……」
「煮え切らないねぇ。そんなに怖いならさっさと傘下に入っちまえばいいのに」
「そんなことできるか！　おれァ船長だぞ！　そう簡単に頭を下げられるわけねぇだろ！」
「強情だねぇ。だったら戦うのかい？」
「フン、戦って勝てるなら苦労はしねぇ。あいつはロジャー船長と引き分けた男だぞ」
不機嫌そうな顔で腕組みをしたバギーに、肩をすくめたアルビダが言う。
「こだわるんだね。それにしたっていつまでもこうしちゃいられないだろ？　その内金獅子に目をつけられるかもしれないよ」
「そんなこたぁわかってる。だからこうして考えてるんだろうが」
「いっそのこと身を隠したらどうだい？　金獅子はほっといても政府や他の海賊が狙うさ。事が落ち着いてからまた表舞台に戻ってくればいい。それまで身を隠すんだよ」
「なにぃ？　簡単に言うなぁ。それができたらおれだって――」
言いかけたバギーは何かに気付いた様子でハッとした。
その挙動を見たアルビダは素直に問いかける。
「何か思いついたかい？」
「身を隠すか。フッフッフ、良いことを考えたぞ。金獅子に気付かれず、且つ略奪を続けるための作戦を。おれ様にしかできないことだ」
ようやく晴れやかな顔になったバギーは立ち上がり、腕を振って部下たちへ命令した。
「同盟の連中を集めろ！　ド派手に雲隠れ作戦開始じゃあ！」
やっと本来の勢いを見せたバギーに部下たちが歓喜の声を上げていた。
バギー本人も何やら勝算がある様子で、自信満々に船の進む先を見

つめている。
アルビダはそんな彼らに苦笑し、異論を口にすることなく見守った。

断章　空から降る敵

まだ黒煙が上がる町の中。崩壊した建物がずらりと並び、そこに住んでいる人たちの姿が消え、残っているのは気絶して倒れた海賊と、彼らを倒した海賊たちだ。

激しい戦闘があったのはその惨状を見れば明らかだった。

以前は平和だっただろう景色は失われ、港町の半分が破壊されている。

パチパチと上機嫌に手を叩く音がしていた。

壊れた家の屋根に立ったアプーはなぜか楽しそうに笑っている。

「アッパッパッパ！　やっぱりお前らイカレてんな」

手を叩くのをやめて眼下に居る面々を見回す。

以前から噂は聞いていて、実際手合わせしたこともあるとはいえ、敵を前にしてこれほど苛烈になるのかと感心せずにはいられない。そういう彼自身も大規模な破壊に関わっているのだが、自分だけ棚に上げての発言だった。

つまらなそうに舌打ちしたキッドは敵の船長を地面へ放り投げる。

血だらけになったその男は、彼を満足させるほどの実力を持っていなかったらしい。

同じく剣を納めたホーキンスが何の感慨もない目で町並みを眺めている。

ずいぶん破壊してしまった。逃げた町民はきっと彼らのことを怖がっているだろう。

本来はこの町を襲った海賊を撃退しようとしたのだが、想像していた以上に被害が大きくなり、もはや町民にとってはどっちも同じ野蛮な海賊でしかないに違いない。

上手く行けば協力を望めるかと思っていたのに、これではそれも不可能だ。

「ずいぶん壊したものだな」

「あぁ？」

「紙使いが言っていただろう。協力者を募れと。どんな些細な物で

も金獅子打倒のために掻き集めるために。ここもその一つだったはずだが」
「フン。馬鹿馬鹿しい。大体海賊が妥協してどうする。必要なもんは奪えばいいだろ」
不機嫌そうなキッドはそう言って壊れた家の中に入って、使える物がないか探し始める。
ホーキンスは彼の姿を見もせず、何も言わなかったが、話を聞いていたアプーが下りてきた。彼はキッドが入った家の入口に立って机をひっくり返す姿を見る。
「まぁお前の言いたいことはわかるぜ。確かに必要な物は奪っちまえばいい。だが今は一応味方を増やしてぇって時だろ？　悪評広めてると誰も近付いてこなくなるぞ」
「おれたちは海賊だ。ヒーローになるつもりはねぇ」
「アッパッパ。そりゃ確かに。そういう話だが、お前はどうなんだよ？」
アプーはホーキンスに振り返った。だが彼は背を向けたままだ。
「どちらでもいい。略奪に興味はないが、止める理由もない」
「相変わらず愛想がねぇなー」
呆れた態度のアプーは溜息をついて身軽に歩きだした。
敵を倒したことは事実。それなら上手く話をつければ町民からの評価もあるかもしれない。
ヒーローになる気はない。キッドが言った通り、それは彼も同じだった。ただ単に人からの尊敬を欲して海賊を討伐した訳ではない。海賊を討伐したのは彼が金獅子の傘下であることを明言したからであり、金獅子への反抗を態度で示すためだ。
ヒーローになる必要がなくても、金獅子の傘下を倒したのが自分たちで、立ち向かう意思があることを広める必要はある。
アプーは町民が逃げた方向に向かおうとしていたようだ。
その途中で自分の仲間へ気軽に言う。
「お前らも好きなもん持ってっていいぞ。どうせすぐ出るんだから急げよ、なぁ」

「船長……ほんとによかったんですかねぇ？」
「いいんだよ。壊しちまったもん直せねぇだろ。それにオラッチたちは良いことをしたんだ。少しくらい報酬があったって罰は当たらねぇよな？」
「あんたやっぱり悪い奴だなぁ……」
部下の呆れた目から逃げるように進むとキラーが待ったをかけた。
仮面を着けて外そうとしない彼は、表情を知ることはできず、人となりがわからない。
相変わらず変な奴だとアプーが訝しげな顔を見せる。
「町の連中のところに行くのか？」
「ああ。ちょいと世間話にね」
「別に構わんが、問題を大きくするなよ。すぐに次の島に向かう」
淡々としたキラーの言葉にアプーは肩をすくめて不服そうだった。
「そもそも、なんでオラッチがお前らと一緒に行動しなきゃいけねぇんだ？　はっきり言って気持ち悪いぜ。一番気に入らねぇっていう奴だろうが、お前らの船長は」
「おれの提案だ。こちらが組織的に動いていることを伝えられる上に、万が一イレギュラーが起きても対応できる。これだけの面子が居れば誰が相手でもそう簡単には負けない」
「そうか、お前の提案か。よく言うこと聞いたな」
キラーがキッドの入った家に顔を向ける。すると中から壁を蹴り壊しながらキッドが出てきた。拝借しただろう物を袋に詰めて、決して上機嫌ではない顔だ。
「あの敗北が相当堪えてるんだろう。これほど聞きわけが良いのは初めてだ」
「それにしちゃ町を破壊しまくってるがな。相手はそんなに大したことなかったぜ？」
「まぁ、癖のようなものだ。直そうと思ってもすぐにはできん」
「はた迷惑な癖もあったもんだな」
「お前が言えた義理ではないだろう」
からからと笑ってアプーは歩き出す。

以前ほどギスギスした空気ではないとはいえ、いまだに距離を測りかね、決して信頼し合っているとは言えない関係。会話することそのものに興味はない。
「じゃ、ちょっくら行ってくるか。オラッチの評判も関わるしなぁ」
歩きだしてすぐ、彼は立ち止まる。
視線は空へ向かい、妙な物を見て眉間に皺が寄った。
「って、なんだありゃあ……」
薄い雲の向こう側、何かの影が見える。
空を見上げてそんな物が目に入ると嫌な予感はしないが、まさかと思う気持ちもある。アプーはまだ冷静にその影の正体を確認しようとしていた。
彼の呟きと歩みが止まったことで、他の者も空にある異変に気付いたようだ。
雲の向こうで動く何かは島の方へ来ているようだった。
近付いてくるのを感じて誰もが警戒し始める。
空に敵が居ないとは限らない。そう思うのは彼らが空飛ぶ海賊と敵対したからだ。
いよいよ影が島の上空に到達した。
その頃にはほぼ全員が身構え、敵の来襲を警戒していたのである。
予想は、或いは予感は正解だったと言っていいだろう。彼らはその影がある地点から何かが落下してくるのを目撃する。やはりあれは空を航行する帆船だったようだ。
落下する物体は誰が止めることもなく町に到着する。
ドスンと着地した途端に地面が揺れた。
巨大なそれは動物だった。異様に巨大で奇妙な外見であったが、確かに動物だ。
見事に着地したのは巨大な熊だった。
前脚が異様に長く、後ろ脚二本で直立し、可愛らしい顔をしているものの、その場に立っていた海賊たちを見つけると途端に雄々しく吠え始める。
その挙動を見て、ただ遊びに来たのだと思う人間が居るはずもな

かった。
「おいおい、こりゃあ……こんな展開ってありか？」
「おもしれぇ。向こうもその気ってわけだ」
状況を理解したキッドが好戦的に笑い、持っていた袋を投げ捨てて歩き出した。
右手に力を込めると周囲に落ちていた金属が集められ、右腕に纏い始める。見る見るうちに大きくなっていく腕を掲げてキッドはついに走った。
それに気付いたテログマも咆哮を上げながら前へ走る。
互いが戦意十分な状態で接近していき、いよいよという瞬間にキッドが右腕を突き出した。
「オラァァァッ!!」
敵は金獅子一派。そう思っての全力の一撃であった。しかしテログマは普通の動物ではなく、普通の熊よりよっぽど大きく、力が強く、凶暴性は比べ物にならないほど差がある。その生物は戦闘用に育てられた熊だったのだ。
キッドの拳は正面から受け止められた。
長い腕が絡みつくように拳を受け、強い筋力で抱きつくように押さえ込む。
驚愕した時にはテログマがその拳を持ち上げ、キッドの体を投げ飛ばそうとしていた。
咄嗟に能力を解除して、金属が集まって出来た腕がバラバラになる。キッドの体は空中へ投げ出されるがすぐに着地の姿勢を取った。その最中にテログマの腕が向かってくるのを目撃する。
まるで格闘技を習得しているかのような美麗さと、普通ならあり得ないスピードでパンチが繰り出されていて、キッドの体は殴り飛ばされた。瞬時に顔の前で腕を交差し、防御したとはいえ、想像もしなかった衝撃に腕の骨が軋む。
彼は壊れた家屋に突っ込み、壁を破壊して姿を消した。
「ハッ！　こいつはヤバそうだな……！」
ほんの一瞬の攻防だが、こいつは危険だと全員が瞬時に理解した。

即座にアプーが能力を使用するべく体を楽器に変化させる。しかし笛になった腕を銜える前にテログマが飛びかかってきて、避けようと後ろへ飛んだ瞬間、異常に発達して長い前脚が伸びるように目の前へ迫り、殴り飛ばされた。まるでこうした状況を想定したかのような肉体である。

同じく危機感を覚えたホーキンスは能力を使用していた。鞘から抜いた剣を構え、刀身が藁のように変化して奇妙な軌跡で伸びていく。それすらもテログマは身軽な動作で避け、流石に驚愕したホーキンスを華麗に殴り飛ばした。

本能に従う動物とは思えないほど鮮やかな動き。

殴り方や攻撃を避ける仕草を見る限り、人間らしさを感じてしまうのだ。

装備した籠手から刃を出し、自ら飛びかかったキラーはテログマの反応速度に驚く。

やはり動物らしくない動きでキラーの刃を避けて、逆にキラーが攻撃を避けようと動くと先読みするかの如くパンチを繰り出してくる。辛うじて避けたが、不思議な感覚だった。

キラーは素早く動き回って攻撃を行う。

テログマは全て見えているかのように避け、隙を見つけては反撃を行った。

気配を感じてキラーは後ろに跳んだ。バック宙をして距離を取り、パンチを避ける。

入れ替わるようにしてキッドが飛ばした金属が無数に飛んできた。

流石にそれは想定していなかったのか、テログマの体に次から次へ金属がぶつかり、鋭利な物はわずかに毛皮を切って、しかし硬い皮膚なのか血を流す様子はない。

危険を感じて彼らは集結した。

キッド、アプー、ホーキンス、さらにキッドや他の部下たちまで。

全員が勝利の余韻を捨て、強者を相手にする心積もりでテログマを見ていた。彼らの様子が変化したのを感じ取ったテログマもまた威嚇すべく咆哮する。

さっきの海賊たちの数倍は強い。それはこの短時間でも確かだと判断していた。
「てめぇ、調子に乗ってんなぁ……！」
「金獅子が送り込んできた、ってことでいいな？」
「どうやらこいつが金獅子の主戦力のようだ」
傘下の海賊と比べ物にならない。実力で言うなら断然こちらだ。
呟いたホーキンスはこの生物こそ金獅子が主力とする戦力だろうと想定する。一匹だけとは限らない。このレベルが数匹、或いは数十匹存在すると考えて間違いなかった。
唸り声を響かせて身構えるテログマは、しかしぴたりと止まって動かず、感情的に突進してくることが無くなった。彼らが勢揃いしたことで警戒している様子だ。
この態度を見てからもわかる。戦闘用に改造・教育されている変種の動物だ。
機を窺っている様子のテログマを見てキッドは舌を鳴らした。
「こいつ、一端に考えてやがるってのか？」
「迂闊に手を出すなよキッド。こいつはおれたちから手を出すのを待っている」
「バカ野郎。睨み合ってても状況は変わらねぇだろうが」
右手の指をガッと開いたキッドは能力を使った。
周囲にある金属がふわりと浮かび上がり、彼の下へ集まっていく。
テログマはその様子をじっと見ていた。驚いた様子はない。
キッドの手元で金属が集まり、歪な球体が完成した。剣や銃、鉄骨や家具の一部、壊れた物や破片も多かったが固められて巨大になれば十分な武器である。
「躾が足りねぇ獣は、ぶん殴るのが一番いい」
腕を振ったキッドは投げるように金属の塊を前へ飛ばした。
当然の如くテログマはパンチを繰り出してそれを殴り飛ばそうとする。
テログマの前脚が触れる直前、集まって固まっていた金属は全て弾かれたように吹き飛び、各々が四方八方へ散っていく。想定外の状況

にテログマは驚いたらしく、自らの体に当たる金属を嫌がるように激しく動いていた。しかし強靭な皮膚に傷はない。
目くらましを成功させて、キッドは飛び上がっていた。
気付いた時にはテログマの目の前に居て、振り上げた右腕を思い切り振り下ろす。
「舐めてんじゃねぇぞコラァ!!」
上から下へ、鼻先をぶん殴る。彼の全力を込めた一撃でダメージがあったらしく、テログマは驚いた様子でたたらを踏む。だがそれも一瞬。すぐに前脚を振ってキッドをはたこうとした。
その前脚へ無数の斬撃を加えて、キラーの刃が硬い皮膚を初めて裂いた。
テログマは今度こそ悲鳴を上げて大きく後退する。
すかさずキッドが追い縋る。
両腕に金属を纏わせ、一回り大きくなった拳で殴りかかった。
テログマは反撃のため前脚を振るがくぐって避け、懐に飛び込んで腹を打つ。
「オラァ!」
鈍い音を立てて丸い腹を殴る。すかさずもう一撃。テログマの悲鳴が洩れる頃にさらにもう一撃を叩き込んだ。
勢いよく跳んだキッドはテログマの顎を殴り、体勢が崩れたところで能力を使用した。
両腕を合わせて、同時に金属を飛ばすとまるでロケットパンチのようにテログマの喉元を打つ。テログマは背中から地面に倒れ込んで、暴れるようにして四肢を振り回した。
離脱したキッドに代わり、ホーキンスが剣を抜いて前に出る。
藁のように変化して刀身が伸びる剣がテログマを襲った。
「藁備手刀(わらびでとう)」
迫る刃を目にしてテログマは大きく跳び上がった。俊敏な動きで軽やかに避けてしまい、それだけでなくホーキンスの頭上を取って彼を踏み潰そうとする。
冷静に移動したホーキンスはそれを回避した。

テログマは荒々しく着地し、さっきまではなかった奇妙な音楽を聞いた。
アプーが自らの体を楽器として演奏していた。
いまだ同盟の味方にすら明かしていない謎の能力。その力は楽器が奏でる音色により、テログマへ攻撃を加えようとしている。
「ステイチューン！　悪いがクマ公、お前に慈悲をかける気はねぇ」
音楽を聞いているとそれだけでテログマの左前脚が飛んだ。鮮血が散り、あまりにも呆気ない様子で体の一部が地面に落ちる。
痛みに唸っていると今度は胴体の辺りで爆発が起こった。
テログマは悲鳴を上げ、堪らず地面を転がった。
「アッパッパッパ！　いいねぇ。調子がいい」
ホーキンスが追撃のため異なる能力を使用していた。
彼の背後にはいつの間にか巨大な藁人形が浮遊していて、持っていたカードから一枚選ぶと、彼はすぐに攻撃へ移行する。
本人の動きに合わせて藁人形が動き出し、手にあった巨大な剣を振り抜いた。
頑強な皮膚を持つテログマの体を簡単に切り裂いて尚、藁人形の口から釘が吐き出されて追撃を狙う。素早く反応したテログマは転がって逃げたがダメージは大きかった。
急にがくっと体が揺れて、何事かと本人が下を見ると後足から血が噴き出る。
キラーが足元を通り抜けて刃で裂いたのだ。
悲鳴を上げたテログマは鬱陶しそうにその場でジャンプし、キラーを踏み潰そうとする。しかし動きの素早い彼はあっという間に距離を取った。
呼吸が荒くなり、痛みを無視できなくなっているテログマは混乱している。
度重なる攻撃は確実に効果があった。
それを見たキッドが好機と感じて攻勢に出る。
右腕に無数の金属を纏わせ、巨大な拳を前へ突き出した。
混乱していたせいで避けるのが遅れたテログマは正面から激突し

てしまう。巨大な体は一瞬にして運ばれ、半壊していた建物にぶつかって全て吹き飛ばす。
テログマは勢いよく地面に倒れた。キッドはそれでも止まらなかった。
跳び上がって上空からテログマに向かって落下していく。
「ウオオオオオオラァァッ!!」
叩き潰そうと巨大な拳を振り下ろす。避けられないテログマはその拳を全身で受けた。
轟音が響き渡る。
大地が揺れるほどの衝撃が走り、キッドが着地した時、すでにテログマは沈黙していた。流石に無敵という訳ではないらしい。先程の荒々しさが嘘のような静けさだ。
決着は着いたと判断したキラーは腕を下ろして武器を仕舞う。
同様にアプーやホーキンスも肩の力を抜き、テログマから目を外す。
キッドだけが最後まで倒れた姿を見ていたが、しばらく動かないのを確認して納得した。
突然の襲撃だったがなんとかなった。
仲間たちの称賛を受けながら、彼らはテログマを見つめて確認する。
「で、何なんだこいつは。金獅子の手下か？」
「どうせそうなんだろ。おれたちのことはバレてて、報復に送り込んだってことだろ」
「おそらく奴はこうした特殊な動物を戦力にしているんだろう。傘下はついでだ。事を荒立てるために集めているに過ぎない」
「本当の戦力はこいつらってことか」
鼻を鳴らしたキッドは不服そうに呟く。
「それなりの力はあった。が、結局はこうだ。全く相手にできねぇわけじゃねぇらしい」
「そうだな。だが一匹仕留めるのにこれだけかかった。さらに数が増えれば厄介だぞ」

キラーが確認するように言うとキッドも同じことを考えていたらしい。
一匹だけなら他の仲間の手を借りずとも四人だけで仕留めることができた。だが同様の動物があと一匹、二匹居ただけで状況は変わる。テログマの動きは明らかに戦闘に慣れていたからだ。
どうやら金獅子は厄介な戦力を隠し持っているようだ。
そう考えていた矢先、彼らは咆哮を聞いて瞬時にそちらへ視線を向けた。
倒したと思っていたテログマが起き上がっていた。片方の前脚を失い、爆発を浴び、後足を切り裂かれてキッドの拳を受けたのに、まだ立ち上がってくる。
このタフさ、明らかに異常である。
見ていた者たちは戦慄し、怒り狂って吠えたてるテログマに恐怖を覚えていた。
「こいつ、まだ動けんのか……！」
「おかしいと思ったぜ！　オラッチの爆発で死なねぇんだからよ！」
「これが、他にも居るとするのなら……」
「おれたちが思っている以上に状況は最悪……ということだな」
戦慄した彼らだが、戦わなければ死ぬだけだ。
今度は四人と言わず他の仲間たちも武器を取り、戦闘に参加する構えを見せた。
状況を見てもテログマの怒りは変わらず、まるで一人も逃がさないと宣言するかのように、さらに音量を上げて吠えていた。

オーシャンズドリーム編

同乗者

「ゼハハハハ！　こりゃうまい！」
大口を開けてチェリーパイにかぶりつきながら、マーシャル・Ｄ・ティーチは笑っていた。
上機嫌に口角を上げて、酒を片手に、食べ合わせなど気にせずに食事を楽しんでいる。
チェリーパイをリクエストしたのは彼だった。好物らしく、元々余裕を窺わせる態度ではあったが一口食べた後では隙を見せるほどであった。彼が現在乗っているのは自身の船ではなく麦わらの一味の船、ゴーイングメリー号。そのことに微塵も不安を抱いていない。
ルフィは彼の隣で肉の塊を食べていた。
サンジの料理を褒める彼に対して緊張することもなく言ってのける。
「当たり前だ。サンジの料理はうめぇだろ。まずいなんて言ったらぶっ飛ばすぞ」
「ぶっ飛ばす？　お前が？　ゼハハハハ、それはそれで面白そうだ。まぁ好きな味じゃねぇのは確かだがな」
「さっきうめぇって言ったじゃねぇか」
「否定はしねぇよ。だが人には好みってもんがある。わかるだろ？」
言った途端にルフィが大口を開けて肉に噛みついたため、答えは得られなかった。
気にせずティーチは周囲に目を向ける。
「お前らは食わねぇのか？　そんな顔してても状況は変わらねぇ。今はまぁ食えよ」
周囲に居た面々は座ることもなく、リラックスした状態のティーチを見て警戒していた。一時船に乗ることを許可したとはいえ、まだ素性の知れない海賊。何よりキリが警戒している様子を見て仲間たち

も彼を危険視していたようだ。
何も気にせずに話せるのはルフィだけだ。もし暴れ出すようならぶん殴ればいい。そんな風に考えている彼以外、ティーチに向ける視線は厳しいものだ。
彼の言葉に反応したのは一人だけだった。
キリが歩み寄って彼らの傍に座り、輪に加わってチェリーパイの一欠片を手にする。ティーチは好意的にそれを見ていた。
手にしたチェリーパイを口にしながら、彼の表情は変わらなかった。
味は良い。だが緊張感は拭えず、ティーチに目を向けると真剣な声色で尋ねる。
「計画があるって言ってたね。それは金獅子を倒すための計画？それとも、何か別の？」
「まだ全てを教えるわけにはいかねぇ。時が来ておれたちの関係が良好なら教えてやるかもな」
「良好なら、ね」
「わかってるはずだろ？　海賊の同盟に絶対なんかねぇのさ。お前らがおれを信用してねぇようにおれもお前らを信用しちゃいねぇ。まだ始まったばかりだ」
キリは肩をすくめて、ティーチは小さく頷いた。
「だが同盟を作るってのは良い手だ。実はうちも戦力が不足してててな。これだけ海が混乱してる状況だ、上手くいきゃ手駒を増やそうと思ってる」
「言っとくけど、ボクらは手駒にはならない」
「わかってるさ。命令に従いそうもねぇしな。そりゃこっちで探すから心配はいらねぇ」
豪快に笑ってティーチは嬉しそうだ。
敵か味方か、取り囲まれているこの状況でも笑えるのは大物に違いない。
周囲の視線は厳しくなる一方だが、彼は微塵も気にしていなかった。

「何から何まで良い展開だ。金獅子の登場もお前らの同盟もな。ここ数年でこれほど海が荒れていることがあったか？　どうやら天はおれに味方するつもりのようだぜ」
「どうかな。まだ始まったばかりだ」
「ゼハハハハ！　今にわかる」
敵意を滲ませるような、それでいて友好的に接するような態度のティーチに、キリを始めとした一味の面々は自分の船だというのに気が休まらなかった。
そもそも彼を乗せていていいのか。
いまだにその判断が正しいかどうかわからない。
離れた位置から見ていたチョッパーは隣に立つナミを見上げた。
怖がりな彼女が不安そうにしているのはわかっている。
気持ちはチョッパーも同じで、ティーチに向ける眼差しは決して安心していなかった。
「あいつ、黒ひげって言うんだよな？」
「そうみたいね。本人がそう言ってたし」
「それって、おれの故郷を襲った奴だ」
「そういえばそうだったわね……」
「キリ、あいつのこと仲間にするつもりなのかな……」
不安そうなチョッパーの呟きを聞き、ナミは彼の顔を覗き込む。
「チョッパーは嫌？」
「うーん……わかんねぇ。あいつのせいでいっぱい人が怪我したし、おれの故郷だし、好きにはなれねぇけど」
「それが当然よね」
「でも、シルクだってそんな海賊好きじゃねぇし、ナミもアーロンのこと嫌いなんだろ？　だけど仲間にしたって聞いたから……海賊にはそういうのも必要なのかなって、思ってる」
不安そうではあったが、覚悟を極めた顔にも見えた。
溜息をついたナミは顔を上げ、話をしている三人を確認する。
「そうね……ついていく相手を間違えたと思って諦めるしかないわ。だって明らかに普通じゃないもん。あいつらに目をつけられた

のが運の尽きね」
「でも、おれはルフィでよかったと思ってる。他の誰かの仲間になるなんて考えられねぇ」
「フフッ……それは私も一緒」
ようやくナミが笑みを浮かべた。
それで少し安堵したのか、チョッパーも表情を柔らかくした。
二人の会話を聞いていたらしいゾロが、壁に背を預けて立ったまま口を開いた。
顔の向きを変えた二人は彼の姿を確認する。
いつにも増して厳めしい表情で、片時もティーチから目を離さなかった。
「どうせ一時の関係だ。いずれは敵になる」
「あいつが？」
「なんでだ？」
「海賊だからだ。あいつがおれたちに攻撃しねぇって保証があるか？」
明らかに信用していない顔で素っ気なく呟かれた。薄くだが笑みを浮かべていた二人もそれを聞いて危機感を抱く。不安に揺れた眼差しでティーチの姿を確認した。
如何にも海賊といった風貌の彼は、同盟の話を聞いて自ら近付いてきた。何も考えていない男がそんな行動を取るはずがない。考え直すとまた不安になる。
そもそも海賊という存在は簡単に信じていい相手ではない。
ナミは自分が海賊になる前から理解していたが、近頃はチョッパーも言い聞かせられていた。
ゾロの一言で表情が変わったのを見てシルクが口を挟む。
同様の心情であったことは確かだが彼女は一足先に割り切っている。すでに迷いはない様子で、二人を不安がらせるゾロを叱るようでもあった。
「ゾロ、あんまり不安にさせちゃだめだよ」
「本当のことだ。いずれわかるだろ」

「大丈夫よシルク。何かあってもあいつらがなんとかするんだから」
再び笑みを浮かべてナミが軽やかに言う。
矛先はゾロへ向けられ、彼女がからかうようにして笑顔を向けた。
「あんたもそのつもりでしょ？」
「お前は自分で何かしようって気はねぇのか」
「私はか弱いのよ。女の子に無理させるつもり？」
「か弱い女が自分で言うか」
呆れたゾロがそっぽを向いて黙り込んだ。一方のナミは余裕を醸し出している。
シルクは二人のやり取りに安堵した。想像していたよりナミは怯えていないようで、ゾロは仲間を守る覚悟をしてティーチを警戒している。
少し置いていかれた様子のチョッパーだったがそんな二人を見て落ち着いていた。
見ているとティーチは豪快な笑い声を響かせていた。
ルフィも同様に笑顔になっていて、キリは警戒しながらも笑みを見せている。
そこへサンジが料理を運んで近付いていった。
「お前らいつまで食ってるつもりなんだよ。言っとくがこれで最後だぞ」
「え～っ!?　もう終わりか!?」
「当たり前だ。レディに作るならともかくなんでてめぇらに」
そう言いながら皿を置いて、サンジはティーチを見る。その目はひどく冷ややかだ。
「お前、いつまでここに居るんだ？」
「んん？　気にするな。次の島に着いたら降りるさ。仲間と合流する予定だからな」
「先に島に行ってんのか？　そもそもなんで別行動してんだよ」
「お前らに会いたかったからさ。会った甲斐はあったぜ」
酒を呑んで喉を潤し、ティーチは自信満々に言う。

置かれた皿には真っ先にルフィが手を伸ばした。手掴みで肉を食べ始め、話を聞いていない素振りで他のみんなの顔を見る。
酒瓶を手にしたキリは先程とは違い、薄く笑みを浮かべながらティーチに尋ねた。
「ボクらのことはどこで？」
「情報屋ってのはどこにでも居る。なんなら教えてやろうか？」
「いいよ。多少のことは知ってる」
「お前らの噂は多いぞ。例の七武海の件とかな」
キリはその話を内心嫌がったが、表情には変化を見せなかった。
ティーチは食事に集中するルフィの顔を覗き込む。おそらく疑問というより確信だっただろうが確認しておきたいことがある。ルフィは素直に答えた。
「クロコダイルをやったのはお前か？」
「ああ」
「ゼハハハ。正直な奴だな。だが想像通りだった」
その言葉を聞いたティーチは動じることもなく受け入れる。
さらに機嫌が良くなって、それに反比例して声は小さくひそめられた。
「この覇気で1億ってのは納得だが、まさか七武海に勝つとはな。想像以上にやるらしい」
「嘘じゃねぇぞ。ほんとにおれがぶっ飛ばしたんだ」
「別に疑うつもりはねぇよ。成り上がる海賊ってのはそういうもんだ。計画を立ててチャンスを逃がさず、大敵を討って一気に名を売る。お前らは見込みがあるってことだ」
「褒めてくれんのか？　しっしっし、ありがとう」
ルフィは緊張することもなく自然体だった。傍から見ていたサンジは思わず心配してしまうが、敵かもしれない男の前で指摘する気にはなれずに口を閉ざす。
次いでティーチはキリに目を向ける。
平然と視線を受け止めた彼は感情を隠したままだ。
「一味の頭脳は見たところお前か？　イーストブルーでも問題を起

こしたみたいだな。ありゃ痛快だったぜ。相手は小物だけどなぁ」
「うちの仲間がひどい目に遭っててね。それでさ」
「いやぁ、おれが言いたいのはそういうことじゃねぇ。上手く名を上げたなって話だ。新聞屋に海軍に海賊、まとめて利用して自分たちの名を広く知らしめた。あれでお前らの注目度が上がったのは確かだぜ」
「まぁ、そのための派手なパフォーマンスだしね」
「その次が七武海のクロコダイル陥落だ。もみ消されちまったが、誰かが暴露してりゃ1億程度じゃ済まなかったろうな。考え直してみりゃ面白いと思ったんだ」
今度はティーチがルフィとキリ、両方に向かって笑顔で言った。
「おれの本音としちゃあ、お前らを仲間にしてぇと思ってる。どうだ？　おれの船に乗ってさらに名を上げる気はねぇか？　おれァお前らの将来性を認めてるんだ」
「いやだ！　おれは船長がいいんだ」
「ゼハハハハ！　そりゃそうか。まぁおれも同じこと聞かれりゃ同じことを言う」
断られたことも笑い飛ばしてティーチは酒を呑む。
機嫌を損ねるどころか、少しとはいえルフィを認めるような素振りを感じる。
奇妙に思いながら、キリは唐突に質問した。
「白ひげのナワバリに詳しい、って言ってたね」
「ああ。そう言ったな。興味あるだろ？」
「素直に考えるなら、白ひげの関係者だからと考えられる。詳しく聞いても？」
「ゼハハハ……お前はいいとこに目ぇつけやがる」
酒瓶を下ろして、ティーチとキリが目を合わせた。
笑みを絶やすことはない。余裕は失われず、答えを詰まらせることもなかった。ただ今回ばかりは反応が違ったのも確かだ。
「そりゃあ気になるだろうよ。だがだめだ。こればっかりは教えられねぇ。もし教えりゃおれの命にかかわるからだ」

「なら、良くない話だね」
「だがこれだけははっきり言っておいてやろう。白ひげの時代はもう終わりだ」
はっきりとした強い口調だ。キリは思わず聞き入る。
「転機は来たんだ。次の時代はおれが作る。海賊王になるのはおれだ」
あまりにも強く、鼓動が跳ねるような衝撃がある。
キリは表情を意図して変えないまま、大きな驚きを抱いていた。
もしルフィに出会う前に彼と出会っていたら。そう思わずにはいられない覇気を感じた。それだけにティーチを危険だと感じ、彼の言う大敵になるかもしれないと想像した。
キリが思案する一方、ルフィも反応せずにはいられなかった。
あっという間に肉を食べ終えて皿を空にした彼は意思の強い目でティーチに言い切る。
「何言ってんだ。海賊王になるのはおれだ」
「なるほど。お前もそうか……」
ティーチがそちらを向いて、胡坐を掻いた二人が互いに向き合う。
ルフィは真剣な顔でティーチを見据え、ティーチは笑顔のまま敵意を滲ませてルフィを見る。
「この海にゃそう言う奴が山ほど居る。お前に勝てんのか？　並み居る覇王や海の強者に」
「勝てなきゃ海賊王にはなれねぇだろ」
「良い目をしてやがる。ますます欲しくなったが、残念ながら仲間にゃならねぇみたいだな」
「お前がどこの誰かなんて知らねぇけど、邪魔するんならそん時はぶっ飛ばす。最後に勝って海賊王になるのはおれだ」
「ゼハハハハ！　おもしれぇ！　その言葉、覚えとくぜ」
いつの間にか空気が張り詰めていた。
誰も割り込めないほど、身動きすることすら躊躇われるほど空気が重く、さっきまではあれでも和やかだったのだと思わずにはいられない。船上のクルーは誰もが緊張していた。

今ならいつ激突してもおかしくないだろう。そう思って向き合う二人を見る。
結局はそうならず、ティーチが敵意を消したことでその心配はひとまず無くなった。
「だが今のお前じゃおれには勝てねぇな。クロコダイルに勝ったってのは大した話だが、それで勝ちを譲るほどおれも衰えちゃいねぇ」
「なにぃ？　だったら試してみるか？」
「まぁ待て。おれはお前らを気にいってるんだぜ？　それにここで潰し合うより先に金獅子を討ち取る必要があるだろ。おれにも奴の首は必要なんだ」
酒を一口飲んで瓶の中身が空になったことを知り、ティーチが傍らに瓶を置く。しかし今はそれすらも気にならずにルフィへ語り続ける。
彼は右手に拳を作って彼へ向けた。
「だからこうしよう。お前らに覇気について教えてやる」
「ハキ？」
「やっぱり知らねぇか。それでよくクロコダイルに勝ったもんだな。どうやって勝った？」
「キリがあいつの仲間だったんだ。弱点を知ってたんだよ」
「ロギアの弱点か。それにしたって大したもんだ。覇気を使ってなかったのか？」
「なんだよそのハキって。悪魔の実の能力か？」
「いいや違う。それを今から教えてやるんだ」
ぐっと拳を握ったティーチはそれをルフィに見せながら語り出した。
「覇気ってのは人間だれしも持ってる力だ。だが大抵の奴は眠らせたまま一生を終える。こいつを使うにはそれなりの訓練が必要なんだ」
「ふーん。おれも持ってんのか？」
「ああ。使えねぇんだろうがそれなりのもんがある。それに覇気は強くなるからな。多分お前ならこれからもっと強くなるだろう」

「へぇ～」
理解しているかは微妙な反応だがルフィは真面目に聞いているようだ。
すぐ傍ではキリが真剣に耳を傾けている。彼も知らない話だ。クロコダイルに従属していた頃にもそんな話は聞かされていない。そのための訓練も受けていなかった。それだけに初めて聞く情報に興味津々だったらしい。
「麦わら、お前能力者か？」
「おれか？　おれはゴムゴムの実を食ったゴム人間だ」
「パラミシアか。ってことは全身がゴムってことでいいな？」
「ああ」
ルフィは質問にあっけらかんと簡単に答えてしまった。
呆れたキリは眉間に皺を作り、諌めるように彼の名前を呼ぶ。それだけで意図が伝わり、視線を寄こしたルフィはハッと気付いた様子だった。
「ルフィ」
「あっ。これ言っちゃだめだったか？」
「構わねぇよ。情報が洩れると思って警戒してたか？　別にこの程度じゃどうとも思わねぇ。なんならおれの能力もお前らに教えとこうか」
ティーチの発言にルフィとキリは目を丸くしていた。それぞれ理由は違っただろうが、予想していなかった事態になったことだけは事実だ。
周囲で聞いていたクルーも少なからず驚き、黙ったまま話を聞こうと集中している。
ルフィは驚いた顔で即座にティーチへ尋ねた。
「お前も能力者だったのか？　何の実食ったんだ？」
「それはあとで教えてやる。まずその前に覇気についてだ」
ずいっと拳を突き出して、ティーチはルフィの顔の前で拳を止める。
「おれァ今からお前を殴る。本気じゃねぇから安心しろ。軽く小突

く程度だ」
「なんで？」
「そうすりゃ覇気についてわかりやすいからな」
「別にいいけど、打撃なら効かねぇぞ。おれの体はゴムだからな」
「そう思ったから都合がいいんだ。すぐに意味がわかる」
握っただけの拳がそっと伸ばされてルフィの額に触れる。
ルフィは不思議そうにその様子を見ながら全く警戒していなかった。
「まずは覇気を使わずに殴る。行くぞ」
「うし。来い」
一旦拳を引いて、突き出された。
本気ではないようだがスピードはそれなり。腕は振り抜かれた。
ゴツンと額に当たるがルフィの頭が揺れただけで全くダメージはない。それは傍から見ていてもよくわかって、痛がる様子など皆無だった。
「これ何の意味があるんだ？」
「次でわかる。覇気を使って全く同じ力で殴るぞ」
「うん」
「痛がるだろうが、お前ら、おれに攻撃すんなよ？」
最後の言葉は周囲に居る麦わらの一味へ告げて、もう一度ティーチが同じ行動をした。
さっきと全く同じ力、同じ動作でルフィの額を殴る。
同じ力だったが、違いは一目瞭然だった。ゴツンと音がして拳が当たった途端、ルフィの表情はわかりやすく歪んで、後ろへ倒れて両手で額を押さえると激しく悶え出した。
「いっ!?　いってぇ～!?」
「ルフィ!?」
周囲の仲間たちが一斉に反応する。
打撃は効かないはずのルフィがただの拳骨で痛がっているのだ。疑いようもなく異常事態だ。全員が咄嗟に身構えて、攻撃のための姿勢を整える者も少なくなかった。

特別な何かをしたのは間違いない。
座ったままのティーチへ向ける視線は鋭く刺さるようなものへ変わっていた。
激しく動揺するルフィを前にしてティーチの態度は変わらなかった。周囲の仲間たちが一斉に襲い掛かってくるかもしれない状況でもまるで同じだ。
彼は低く笑うと周囲を見回した。
全員が驚いていて、信じられない物を見たと言いたげにしている。
「う、嘘だろ!? ルフィに打撃が効くわけねぇ!?」
「ルフィ! あんたふざけてるわけじゃないわよね!?」
「てめぇ! 今何しやがった!」
「まぁ落ち着け。言ったろ、覇気について教えてやるってな」
驚いた顔で、痛みに堪えながら額を手で押さえたルフィが起き上がる。
さっきと同じように彼の前に座ってティーチに問いかけた。
「いってぇ〜……おれゴムなのになんでだ?」
「これが覇気さ。武装色の覇気を使えば能力者の実体を捉えることができる。わかりやすく言うならロギアだろうがパラミシアだろうがぶん殴ってダメージを与えられるってことだ」
「パラミシアも、ロギアも?」
疑念を抱いたキリが呟いた。すかさずティーチが彼を見る。
「そうだ。武装色を使えば相手を攻撃する矛にもなり、自らの身を守る盾にもなる。クロコダイルのスナスナも武装色の覇気を使えば普通にぶん殴ることだってできるわけだ」
「そんな力が……本当に?」
「事実だったろ? 打撃が効かねぇってのはちょうどいい能力だったぜ。おれが武装色を纏わせた拳で殴れば、麦わらはこの通り痛がる」
「いでっ!?」
もう一度額を小突けば、やはりルフィが堪えられずに悲鳴を発した。長らく打撃によるダメージを受けなかった彼だ。痛みそのもの

より、打撃によるという部分に驚きを隠せない。
実際見ていても信じられないが、事実としてルフィは痛がっている。
ダメージが通っているという話は嘘ではなさそうだ。
拳を下ろしたティーチはさらに説明を続ける。
さっきの驚きから立ち直っていない彼らは冷静に話を聞ける状態ではなかったが、そんなことは知らないとばかりにティーチは話を進め出した。
「もう一つは見聞色の覇気って言ってな。個人によっちゃ多少ものは違うんだが、簡単に言やぁ生物の気配を読んだり、敵の行動を先読みする力だ」
「先読み？　超能力か何かの話？」
「言ったろ。覇気の話だ。そこまで行くには鍛える必要があるが、こいつを使いこなす猛者の中には未来が見えるなんて奴も居るらしい。逆にわかり辛くなったか？」
ルフィがついに全くわからないという顔をして首を捻っていたものの、今回ばかりは他の面子も似たようなものである。一様に難しい顔で理解し難いという顔をしている。
それを笑って確認して、全く動じずティーチは言葉を重ねた。
「混乱ついでに言やぁもう一つあってな」
「まだあんのか」
「これが最後だ。覇王色の覇気って言ってな。これは誰でも持ってるわけじゃねぇ。選ばれた人間しか持って生まれねぇ特別な覇気だ」
ティーチはにやりと笑ってルフィだけに目を向ける。
「聞けば数百万人に一人の確率で生まれてくるらしい。だがな、〝新世界〟の海にはこれを持ってる奴がごろごろ居る」
「ふーん。なんで？」
「わからねぇか？　王の資質だ」
その一言で目付きが変わった。
何かを察した様子でルフィがティーチを見据えて、それを感じて彼は笑う。

「王座を狙ってるのはおれたちだけじゃねぇぞ。続々と集まってきやがるのさ。グランドライン後半、〝新世界〟の海に。その中で覇を競い合って、たった一人だけ決めるんだ。海賊王を」
すでに理解している様子だった。ティーチは気にせずに続ける。
「この先に進めば覇気を使える奴はそこら中に居る。白ひげも金獅子も、四皇や海軍大将、七武海の連中も当然使える。逆に使えねぇんじゃ歯が立たねぇくらいだ。だから驚いたんだ。覇気を使えねぇお前がクロコダイルに勝ったって話にな」
「でもほんとだ」
「ゼハハハハ……ああ。信じるよ。だが今のままで先に進めると思うな」
まるで彼に取り込まれたように周囲は静かになり、その声だけが明確に伝えられる。
聞き逃す訳にはいかない。
気付けばそう思って集中していた。
「おれの能力を教えてやってもいいと言ったな？　ありゃ本当の話だ。教えたところで今のお前らじゃどうにもできねぇ。おれが勝つのは目に見えてる」
「そんなもん――」
「やってみなきゃわからねぇってか？　いいや、わかる。能力を使わなくてもおれは武装色でお前をぶん殴ることができるんだ。殴られて痛ぇって感覚はまだ覚えてるか？」
ティーチが右腕を顔の前まで上げたのを、ルフィはじっと見つめていた。
「おれはお前らに期待してるんだ。だから教えてやった。もっとも習得するには時間がかかるもんだから今すぐ使えるようにはならねぇけどな。それでも知らない状態よりマシだ」
「それが使えなきゃ、海賊王にはなれねぇんだな」
「ああ。確実にな」
キリは、ルフィが何かを決断する瞬間を感じた。
それが何かは想像することも難しくないが、彼も同様のことを考え

ている。他の仲間、特にゾロやサンジなども同じことを考えていただろう。
「お前らは運が良い。クロコダイルに勝ち、金獅子に会っておきながら生きて帰り、その結果おれに出会えた。だがそれだけで生きていけるほどこの海は甘くねぇ」
「いずれボクらが敵になることは考えない？　黙っておいた方が良い気がするけど」
「言っただろ。計画があるんだ。すでに海賊王までの道のりは見えてる」
ティーチはキリに振り返り、事も無げに言った。
「ただの道草なんだ。おれにとってお前らはその辺に落ちてる石ころと変わらねぇ。少なくとも現時点ではな」
「後悔することになる。すぐに追いついてみせるさ」
「それも面白そうだ。海賊王になってから退屈なんじゃつまらねぇからな」
キリに言い終えた後、ルフィがティーチへ言い出した。
彼はその鋭い視線を受け止めて聞く。
「黒ひげって言ったな。忘れねぇようにもう一回言っといてやる」
「おぉ、なんだ？」
「その覇気ってのが必要なら使えるようになってやる。お前をぶっ飛ばして、海賊王になるのはおれだ」
「楽しみにしてるぜ……お前がおれの敵になるかどうか。ゼハハハハ！」
再度の宣戦布告を終えて、ルフィはにやりと笑い、ティーチは豪快に笑った。
同盟に加わるという話だったはずだが、彼らはすでにいつかの敵対を予感していたようだ。
敵対するとわかっているのに手を組むつもりなのか。困惑する仲間たちを他所に、彼らの意思は明確なまま、互いに笑みを絶やすことなく見つめ合った。

記憶喪失の島

突如聞こえたパリンという音に思わず振り返った。
どうやら皿が割れた音らしい。
店内の床に皿の破片が散らばっていて、椅子がひっくり返って倒れてもいた。座っていた人が勢いよく立ち上がった際、思わず落としてしまったのだろう。
「ふざけんなよッ!!」
大音量の声で無視できなくなる。立ち上がった人物が怒っているのだ。
傍から見ていても緊迫した状況である。立ち上がったのはまだ若い青年で、対面に座っているのも同年代の青年だ。
立っている方は怒っているのだが、座っている方は困惑している。
何やら修羅場らしいことは嫌というほど伝わっていた。
「お前、自分が何言ってんのかわかってんのか!?」
「わかってるよ……っていうか、大きい声出すなよ。周りに人も――」
「ふざけんなよ！　おれのこと覚えてないって、それ本気で言ってんのか!?」
立っていた方の青年が座っている青年の胸倉を掴む。
周りで見ていた客も驚いて、思わず止めた方がいいのかと逡巡するが、そんな周囲の反応も視界に入らない様子で怒っている青年が大声を出す。
「おれはお前の幼馴染だぞ！　ガキの頃から何をするにもずっと一緒で！　一年前まで普通にしてたじゃねぇか！　それがなんで！　仕事から戻ったら知らないになるんだよ！」
「だから……言っただろ。記憶がないんだよ」
「記憶がないって、なんだよそれ！　一体何があったんだ！」
だんだんヒートアップしてきたのはわかったが目が離せなかった。
止めることもなく見ていると座ったままの青年も苛立っているのを感じる。彼はうざったそうに視線を外して喋っていた。

「そんなのおれが聞きてぇよ。ある日目覚めたら何も覚えてなかったんだ。何が起きたかなんてこっちが知りたいよ……」
「お前……そんなので納得できるかよ！　わけわかんないこと言うなよ！　ちゃんと説明しないと納得できるわけないだろ！」
「あぁっ、うるせぇな」
「うるせぇって、お前、おれのこと覚えてない癖に……！」
「じゃあ言うけど、おれが記憶無くなったってのに、幼馴染なのに、一度も戻らないでずっと島の外に居たのはお前だろ！　本当に幼馴染なら助けてくれたっていいんじゃないのか！」
「おれは仕事で島から出てたんだ！　お前にもそれは言ってただろ！」
「だから、全部忘れたって言ってんだよ！」
「忘れたで済むかよっ!!」
ついに取っ組み合いの喧嘩が始まってしまった。
二人の若い青年は胸倉を掴み合い、周囲の大人が止めに入っても気にせず言い合いを続ける。
「親友のことをよく軽々しく忘れたなんて言えるな！　ふざけてるなら今すぐやめろ！」
「ふざけてねぇって！　だから誰なんだよ、お前は！」
「それがふざけてるって言ってんだ！」
テーブルをひっくり返し、椅子を倒して、騒がしい様子で二人は床を転げ回る。
店の端で見ていた老婆はその痛々しい様子を見ながら呟いていた。
「いやだねぇ、またあれかい。最近よくあるねぇ。どうして忘れてしまうんだろう」
その呟きを耳にしたナミは思わず彼女へ質問する。
近くに居てよかった。でなければ聞き逃してしまうところだ。
ナミは騒動を無視して老婆に顔を寄せる。
「ねぇお婆ちゃん、あれは何？　忘れたとか記憶がないとか、何が起こってるの？」
「あんた、島の外から来たのかい？」

「うん」
「そうかい。なら早くこの島から出た方が良い。最近多いんだよ、記憶喪失になる人が」
「記憶喪失？」
驚いたナミは思わず聞き返してしまった。
その言葉の意味自体は理解できるが、本物に出会ったのは初めてかもしれない。もしその話が本当だとするならあの二人の喧嘩も納得できる。だが問題はなぜ記憶喪失になるのかだ。
老婆が言った、最近多い、という言葉が気になった。
「実を言うとねぇ、一人や二人じゃないんだよ。記憶を失った人はね。最近になって急にみんな自分のことを全部忘れてしまって、それが原因で喧嘩をしたりなんて、多くてねぇ」
「そう……みんな忘れちゃうの？」
「島の人全員じゃないんだよ？　私も自分のことは覚えてる。でもある日突然失うんだ。今日は覚えてるけど明日は忘れてるかもしれない。みんなそう思いながら暮らしてる」
「それって、この島の人だけなのよね？」
「多分だけどねぇ。この島の外のことはあまり知らないから」
老婆は物悲しげに話していた。嘘をついているとは思えない。
礼を言ったナミは老婆の傍を離れる。
店に代金を払ってすぐに外へ出る。喧嘩のことは気にならなかった。それよりも気になったのは記憶喪失があって当然の物として扱われている事態だ。
近頃の状況から彼女は警戒していた。
誰かが意図的にこの状況を生み出しているのではないか。
咄嗟に考えたナミは仲間を探すために小さな町の中を歩く。
幸いそれほど大きな町ではない。四方を森に囲まれていて、特に変わった地形のない、山もなければ谷もない平坦な大地が続く小さな島だ。町もどうやら一つしかなく、少数の町人で農業や漁業を主として生活しているらしい。
調査したところ海賊の姿はないが、それは今のところ表向きの話。

記憶喪失の話を聞いて一気に疑問が沸いてきた。
早足で歩いていたナミはこちらに駆けてくるウソップを見つけた。足を止めて、彼の到着を待って合流する。
「おーいナミ」
「ウソップ。あの話聞いた？」
「ああ。記憶喪失のことだろ。ついさっき知ったとこだ」
「なんか、変な感じしない？」
「おれもそう思ってたとこだ。ひょっとして、能力者の仕業なんじゃねぇかなって」
道の真ん中で突っ立った二人は深刻な顔で話し始めた。
ウソップは焦りを滲ませ、現状がまずいことをすでに感じている。ナミも同じ気持ちだ。彼と同じことを考えたからウソップを探した。だから合流できたのだ。
「だっておかしいだろ。聞けば事故があったとか大きな怪我をしたとかじゃなくて、寝て起きたらもう全部忘れてたんだぜ。一人だけならまだしもそれが二十人近く起こってるらしい。これは明らかに誰かが記憶喪失にしてるんだ」
「ってことは……ねぇ、金獅子の手下かしら？」
「可能性は高いな。キリの話じゃどこもかしこもそんな状態らしいし、この島を支配するために能力者を派遣したのかもしれねぇ」
「そうね。現にさっき喧嘩してるのを見たわ。二十人なんて……みんながみんな喧嘩してたら、ここで生活するのも苦しくなるわよ」
申し訳程度に舗装された道の真ん中に立って、二人は辺りを見回す。
閑散としていて人の姿がほとんどない。仮にすれ違っても挨拶の一つもなく、町民は元気が無い顔で俯きがちに歩き去っていく。異変が起こっているのは間違いなかった。
改めてこの町の異質さを知ったナミとウソップは、言い知れない不安を覚える。
「とにかく、一旦メリーに戻るか」
「そうね。敵が居て戦うことになるなら私たちだけじゃまずいし」

「この島をこのままにしとくってのもなぁ……」
「みんなで話し合いましょう。相手が能力者の可能性もあるしね」
ナミとウソップは逃げるようにしながら町を離れる。
幸いこの島にある森は危険を感じるほどの険しさはない。ほとんど真っ平らと言っていい地面で歩きやすく、木々が多くて視界が悪いとはいえ危険な生物の気配もない。せいぜいたまに鹿を見かけて逃げられるだけだ。
二人だけの移動でも怯える理由はないようで、行きは軽やかな足取りで町へ到着できた。
ただ今は事情が変わって、自然と早足になる二人はメリー号へ一直線に急いだ。
森を抜けて海岸へ出るとすぐにメリー号が見えた。
道を間違えなければ小さな島だ。すぐに帰ることができる。
まるで助けを求めるように、二人は走るようにしてメリー号へ向かう。
船が見える場所まで到達すると甲板でキリとゾロが寝転がっているのが見えた。
急いで船に乗り込んだ二人は眠りこける彼らを起こそうとする。
「ちょっとキリ！　緊急事態よ！」
「敵襲かもしれねぇぞ！　おい起きろって！」
ナミとウソップは真っ先にキリへ駆け寄って、彼の体を揺すって起こそうとした。
眠そうにしながらも目を開いた彼は二人の顔を確認する。
大きなあくびをしながら体を起こして、座ったキリにしゃがんだ二人が顔を寄せた。
「町で変なことが起こってるみたいなの。話せば長くなるんだけど、記憶喪失の人が次々に増えてるんだって」
「詳しくはわからねぇが、おれたちはそれが能力者じゃねぇかって話してたんだ」
「金獅子の部下かもしれないわ」
「まだ誰の仕業かわからねぇけど、敵が居るかも」

「へぇ～、そうなんだ」
キリは再び大あくびした。
寝起きの状態とはいえ気の抜けた様子の彼に二人の表情は厳しくなる。敵が居るかもしれないと話しているのになぜそんな顔ができるのか。多少の苛立ちもあった。
「ねえちょっと、ちゃんと聞いてる？　敵が居るかもしれないのよ。この島に」
「そんなこと急に言われてもねぇ」
「あのな、眠いのはわかるけどな、こういう時はふざけてる場合じゃないって知ってるだろ？　相手は金獅子なんだぞ。逃げるとかこっちから手を打つとか、方法はあるはずだ」
「うん、そうだね」
柔和な表情でキリが答えた。
ますます二人の表情は険しくなる一方で、思わずウソップがぐいっと顔を寄せる。
「そうだねじゃなくてどうすんだよっ。逃げんのか？　戦うのか？　みんなバラバラに行動してるから集まらなきゃいけねぇし、こういう時はお前が決めるだろうが」
「そうだっけ？　そりゃ大変だ」
「大変だじゃなくて！　のんびりしてる暇があんのかって言って――！」
「待ってウソップ……何か変よ」
その時、何かを察したナミがウソップを止めた。確かにキリはぐうたらしている時もあるが、有事の際にはそんな態度は微塵も見せない。敵が居ると聞かされて全く取り合わないなど様子がおかしいとしか思えなかった。
ナミに止められたことによってウソップも徐々に我に返っていく。
よく考えてみれば彼の反応がおかしい。態度も仲間に向けるそれではなかった。
ナミはキリの顔をじっと見つめて、さっきよりも注意して観察した。

眠そうにしていた彼は手で目元を擦り、ぱっちり目を開いてナミと視線を合わせる。
「キリ……私たちのこと、わかる？」
「それを聞こうと思ってたんだ。君たち、誰？」
その一言を聞いた瞬間、ぞくりと背筋が凍った。
柔和な表情も声色もその容姿も、いつもと何も変わりない。二人が知るキリ本人のものだ。しかし彼本人が二人のことを覚えていないと言う。
恐る恐る、信じられないという態度でウソップが尋ねた。
「ほ、本気か？　本気で言ってんのかキリ？　おれたち仲間だろ？」
「ここ、海賊船みたいだね。君ら海賊？」
「冗談きついって！　お前こんな時にそんなこと……流石にそれじゃ笑えねぇって！」
「待ってウソップ！　キリ、それ本当なの……？　私たちのことわからない？」
「わからないよ。というより知らないね。記憶にはないし、君らが呼ぶからボクが〝キリ〟だっていうことはわかったけどさ」
微塵も慌てていない、平然とした態度でそう言われた。
ナミとウソップは驚きを隠せず、また動揺がわかりやすく態度に出てしまう。
町で見た喧嘩の理由がわかった。これは叫び出したくもなる。
「ここで何してたんだっけ？　うーん、何も覚えてないな……」
「ウソップ、これってやっぱり……」
「や、やっぱり敵なんだ……金獅子の部下がおれたちを狙ってきやがった」
まだ些か冷静だったナミに比べて、わずかに震えるウソップは恐怖を覚えていた。町で見た状況と全く同じだ。ほんの一時間前までと違い、キリは記憶を失っているのだ。
危機感を覚えた二人は顔を見合わせ、逡巡した。
一味の頭脳として認識していたキリが記憶を失った以上、今後の行動は彼抜きで考えなければならない。この状況を楽観視できるはず

もなく二人は焦りを覗かせる。
キリが立ち上がって甲板を歩き始めた。
辺りを不思議そうに見回し、まるで初めて見たかのようにメリー号を確認する彼を気にしつつ、二人は声を小さくして話す。
「キリが記憶を失ったんならあの噂は本物ね……」
「ちょっと待て。よく考えりゃあのキリだぞ？　どっかで噂を聞きつけてからかってるだけじゃねぇのか？」
「あり得なくはないけど……」
ナミが背後を振り返ってキリを確認すると、彼は一味の海賊旗を見上げていた。
「麦わら帽子かぶってる。かわいいデザインだね」
「あの感じを見てると演技には思えないのよね。それに町では喧嘩してたくらいだし」
「マジか……本当に忘れちまったってのか？　どうやって？」
「わからないけど、それこそ悪魔の実の能力でしょ。今までだってわけわかんない能力はあったじゃない。結局そういうもんなのよ、悪魔の実って」
「ちくしょう、元に戻れるんだろうな。一生このままなんて嫌だぞ」
不安を拭いきれないウソップは自分の頭を荒々しく掻く。
その気持ちはナミにも痛いほどよくわかった。
これまで過ごしてきた時間が理由もわからない内に全て無くなってしまったのだ。元に戻せるならまだしも、今後もこのままだと考えるだけで恐ろしくて堪らない。
必ず元に戻さなければ。
仲間の姿を見て強く思った二人は顔を突き合わせて考え始める。
「とりあえずみんなを集めましょう。敵が居るかもしれないし、ほっといたらまた誰かが記憶喪失になっちゃうかもしれないわ」
「そ、そうだな。能力者だったら敵をぶっ飛ばせばなんとかなるかもしれねぇ」
「まず全員集合して、それから対策を考えましょう。敵を見つけなきゃ――」

「うわっ!?」
突然キリが大声を出して、慌てて二人が振り返った。
彼の体は紙のように薄くなっており、立てなくなって地面に横たわっている。本人が誰よりも戸惑っているようだったが、ふとした拍子に元に戻れてほっとしていた。
「びっくりしたぁ。これって悪魔の実？　ボクって能力者だったのか」
「え？　キリ……それも覚えてないの？」
「そういやさっき、自分の名前も覚えてなかったみたいだし……何も覚えてないのか？」
二人は今になってキリの状態を理解した。
仲間のことはおろか、自分のことすら覚えていないのだ。
自分が能力者だと気付いたキリは試すように体を紙に変化させようとしたり、成功した時には嬉しそうな笑顔になって、上手くいかなければ難しいと言葉を洩らす。
その姿は二人の知るものではなかった。
自分が能力者だということすら忘れている。つまりそれは能力を使った戦い方も忘れているということになり、本来の戦闘力を期待できなくなるということだ。
ぞっとしたナミとウソップは抱いた危機感をさらに大きくしていた。
もし仮にこれが敵の仕業だとすれば、一味の崩壊は簡単に成功してしまうかもしれない。
慌てたウソップは眠りこけていたゾロを叩き起こそうとした。
いつまで経ってもいびきを掻いて起きない彼の頬を叩いて、必死に声をかける。
この際一人でもいい。情報を共有する味方が欲しかった。
「おぉいゾロ!?　起きろ！　寝てる場合か！　たた、大変なことになってんぞお前!?」
「ん……んがっ……」
「起きろ～！　起きろゾロ！　早くしろゾロ～！」

「うぅるっせぇ!!」
がばっと起き上がった彼を見てウソップはひとまずほっとした。いつも通りの彼だ。
頭をがしがし掻いて不機嫌そうなゾロは辺りを見回す。
「ったく、人が寝てるってのに起こしやがって……」
「ふぅ。ゾロはそのままか。じゃあキリだけが――」
「ん？　ここどこだ？」
彼が呟いた一言に二人の動きが固まった。ゾロは気にせずきょろきょろしている。
「お前ら誰だ？　なんでこんなとこで寝てんだ、おれは」
「ちょ、ちょっと待てよ……冗談だろ？」
「ゾロ……あんたも覚えてないの？」
「あ？　おれに言ってんのか？」
厳めしい顔でゾロが二人を見る。警戒しているのだろうと一目でわかる表情だ。決して仲間に向ける顔ではなく、これを見れば普段の彼がどれほど柔らかい表情で居たのかがわかる。
思わず喉を鳴らしてしまった。
仲間であるのに緊張してしまって、話しかけるのを躊躇うほど敵意を感じた。
物怖じしたウソップに代わり、ナミが一歩前に出る。
気の強い彼女は以前からゾロに対して怯むことはなかった。
関係性がゼロになろうとも以前と同じように話しかける。
「いい？　あんたの名前はロロノア・ゾロ。私たちの仲間よ。あんたは海賊なの」
「海賊だぁ？　嘘つけ」
「嘘じゃないわ。あんたがここで寝てたのは、この船の乗組員だからよ」
「そんなわけあるか。おれは……あん？　おれの野望は……」
反論しようとしたところでゾロは自身の野望を覚えていないことに気付き、難しい顔のまま腕組みをして悩み込んでしまう。
やはり覚えていないのだと知って、ナミとウソップは不安そうに顔

を見合わせた。
その時ウソップが視界の隅に捉えたのは、メリー号を降りようとするキリの姿だった。
慌てて振り返った時、キリは島に上陸して歩き出してしまう。突然の行動を見過ごせるわけもなく急いでウソップが欄干まで駆け寄って声をかけた。その声を聞いてキリは振り返るのだが立ち止まろうとはせず、後ろ向きに歩いて尚も遠ざかっていく。
「おいちょっと待てキリ!?　勝手にどこ行くんだよ！　戻ってこい！」
「どうして？」
「どうしてって、お前もおれたちの仲間だからだ！」
「そんなはずないよ。君ら海賊でしょ？　知ってる？　海賊って悪い奴なんだ」
「そうだよ！　お前もその一人だし、むしろお前が一番悪い奴だ！」
「まさか」
「いいから戻ってこいって！　勝手にどっか行くな！　お前が全部忘れてても、おれたちが全部覚えてるから教えてやる！　わからないなら聞け！」
「あいにくだけど、海賊の友達はいらない。騙されるほどバカじゃないからね。面白い能力もあるしボクは勝手にやらせてもらう」
そう言ってキリは笑顔で彼らに背を向け、迷いの無い足取りで遠ざかっていく。
記憶が無ければなんと淡白な態度か。
焦ったウソップがメリー号から飛び出そうとしたが、彼の服を掴んでナミが止めた。
「待ってウソップ！」
「なんで止めんだよ！　キリが行っちまうぞ！」
「それもまずいけど、一人になったら危ないでしょ！　敵はそれを狙ってるかもしれない！」
「そりゃそうかもしれねぇけど……！」
ナミに止められて躊躇った一瞬。同じくガッと欄干にかけられた

足が目に入った。
今度はゾロがメリー号から降りてしまい、二人は驚愕してその姿を見る。
「お、おいゾロォ!?」
「あ？」
「何やってんの！　戻りなさい！」
「うるせぇな。なんでおれがお前らの言うこと聞かなきゃなんねぇんだ」
冷淡な声でそう言うとゾロは二人から視線を切り、背を向けて歩き出してしまう。全く後悔を残さない歩調は二人への興味の無さを示すかのようだ。
驚くナミとウソップが必死に声をかけるも、彼の歩みは止まらない。
「待ってよゾロ！　戻ってきて！」
「ゾロォ！　一人でどこ行く気だよ！　おれたちと一緒に居ろって！」
ゾロは森の向こうへ行ってしまった。
高い草むらを掻き分けて進むためすぐに姿が見えなくなってしまう。
呆然と見送った二人はしばし考えが追いつかず黙り込んだままだった。しかしゾロの姿が見えなくなった後でハッとし、状況が悪い方向へ進んでいることに気付く。
「まずいわ……すぐにみんなを集めないと！」
「と、とりあえず集合しよう！　あいつら無事なんだろうな……！」
ナミは懐から子電伝虫を取り出して通信を開始し、ウソップはマストに登って周囲を確認した。
おそらく敵襲があったという考えは間違えていないはずだ。その考えを信じて二人は行動し、仲間たちがバラバラになっていては危険だと瞬時に判断する。
徐々に空模様が変化していく。
二人が行動を始めた頃、島の上空は厚い雲に覆われようとしてい

た。

お前は誰だ？

キリとゾロが姿を消して数十分が経っていた。
島に危険がないか、探索に出かけたクルーを大慌てで探し出し、メリー号に集結した時点でやはり二人の姿は見当たらず、一度戻った痕跡もない。
ナミとウソップは事情を説明し、二人が記憶を失ったことを仲間たちに告げた。
「記憶を失うって？　確かなのか？」
怪訝そうな顔でサンジが呟く。
数多の悪魔の実の能力者を見てきたとはいえ、そんな話は聞いたことも見たこともない。仲間の言葉を信じたい気持ちはあるがすぐに呑み込むことはできなかったようだ。
そんな彼の様子を見てウソップが必死の形相で言う。
嘘ではないと、まずは信じてもらわなければ行動に移せないからだ。
「本当だって！　キリとゾロがおれたちによそよそしかったし、止めても行っちまうし、明らかにいつもと違ったんだ！」
「町でも記憶が無くなって喧嘩してたから、多分同じことが起こってるんだわ。自然現象とは思えない。誰かがこの事態を引き起こしてるのよ」
「それで能力者か。ついでに金獅子の一味じゃねぇかと」
「その辺りはただの予想だけど、タイミング的にあり得ない話じゃないでしょ？」
「ナミさんが言うならきっとそうだ」
「おれは!?」
ナミの説得もあってサンジは納得したようで、それでなくても金獅子の手の者による襲撃はあり得ると想像していた。実際のところはやはり来たかという印象だ。
疑う素振りは見せたものの、初めからあり得てもおかしくないと思っていたらしい。

問題なのはキリとゾロが手にかかったことだ。
彼らは一味の主戦力であって、戦闘においては絶対の信頼を寄せられている。その二人が、如何なる方法を使ったかは知らないが敗北したも同義と考えていい。仮に能力者の仕業であったとするならば、無事だったメンバーも安心できない状況だろう。
難しい顔をするルフィはいまだ事態を受け止めきれない様子だった。
キリとゾロはイーストブルーから長く一緒に居る仲間だ。自分たちのことを忘れるはずがない。
「本当に忘れてんのか？　おかしいだろ、そんなの」
「うん……おれも信じられねぇ。あの二人がおれたちのこと忘れるなんて」
困惑している表情のチョッパーがルフィに同意する。
ついさっきまで一緒に居ていつも通りに話をしていたのだ。今はもう違うと言われてすぐに納得することは簡単ではなかった。たとえ事態を作った能力者が居ると言われても、その能力者に関する詳細は知れず、何の実を食べたのかすら定かではない。困惑は深まるばかりだ。
実際に彼らの様子を見たナミとウソップは表情を曇らせていた。
信じたくない、という気持ちは彼らと同じである。しかし考えとは裏腹に彼らは居ない。
ウソップが気落ちした声で呟いた。
「そりゃ、おれたちも冗談であってほしいと思ってるけどよ……」
「とにかく二人を探しましょう。見失ったままなのはまずいわ。冗談だったとしたら拳骨で許してあげてもいいけど、もし本当に記憶を失っていて、この島を出るようなことがあったら……」
「うん。早く二人を見つけよう。みんなで一緒に居た方がいいよ」
シルクが同意して力強く頷いた。
二人の性格はよく知っているとはいえ、今の二人がどんな行動をとるか彼らにもわからない。記憶を失った状態ではぐれたなら二度と会えない可能性も十分にあった。

彼女たちの言葉があったことで、一同はひとまずキリとゾロを見つけることを最優先とした。
その時、船の外から声をかけられた。
甲板に居た全員の視線が自然とそちらへ向けられる。
「心配いらないよ。あの二人はまだこの島に居る」
島に目を向けて、森の前に立っている小さな少年を見つけた。
黄色と薄緑色の縞模様が入った帽子を被り、眠そうな細い目で彼らを見ていて、首から紫色のマントを身に着けている。何より気になったのは彼が抱えている物だ。彼の背丈よりは小さいが、それでもほとんど同サイズのタツノオトシゴを持っていた。
この状況でただの子供のはずがない。先程の発言も気になった。
突然の登場に誰もが警戒する。
子供とはいえ能力者だと仮定するなら油断できない。
少年は笑っていた。
海賊を前にして余裕を見せ、微塵も恐怖することがなかった。
「あの二人がこの島を出る時は、君たちも記憶を失った時だと思うよ」
「やっぱり……あんたがやったのね!?」
「お、おお、お前かぁ!? キリとゾロに何しやがった!」
「何もしてないよ。少し話をしただけ」
一気に緊張が走る。
本人が認める発言をしたため、もはや疑いようもない。一人で彼らの前に現れたことからも普通でないことは理解できる。改めて彼の雰囲気は異様なものに感じられた。
敵だと判断してルフィとサンジが前に立った。強そうには見えないが、能力者であったとすれば彼らの想像通りになるとは限らない。無傷とはいえキリとゾロがやられたのだ。
彼らの背後でシルクが剣の柄を握り、チョッパーが不安そうな顔で身構える。
ロビンだけは表情一つ変えず全く変化がない。
ナミとウソップは気付けば誰よりも陸地に立つ少年から離れた場

所に立っていた。
「お前がおれの仲間になんかしたのか。キリとゾロの記憶返せよ」
「返してほしい？」
「やっぱりお前が持ってんのか！」
「早く返せー！　コノヤローー！」
「だったら僕の話を聞いて」
怒りを露わにしたルフィとウソップの発言を気にせず、少年は淡々と語り出す。
「君たちも知ってると思うけど、近頃この海の情勢は荒れている。今に大物たちがぶつかるよ。世界を揺るがす戦争だ。君たちも参加する気はないかい？」
「こいつ、やっぱり……」
「僕が従う船長は海の支配者だ。傘下になる気はない？」
ナミが嫌そうな顔で呟き、やはり金獅子の手下なのだと確信を得ていた。
そうでなければこんな子供が海賊に攻撃することなどないはずだ。
どうやら、記憶を奪われたことでこの場に居ないキリとゾロが人質に取られたらしく、全て言わずともそんな状況を理解できる。しかし、ルフィの返答は普段と変わらなかった。
「いやだ！　おれは船長がいいんだ。誰の下にもつかねぇ」
「いいの？　このままじゃあの二人は帰ってこないよ」
「要するに、お前をぶっ飛ばせばいいんだろ」
不敵に笑ってルフィが指を鳴らした。相手が誰であれ邪魔をするならぶっ飛ばす。彼の基本的な思考は変化しておらず、仲間が人質になったことすら関係ない。
少し驚いた顔で少年が問いかけてもルフィの様子は変わらなかった。
「驚いたね。仲間が死ぬかもしれないってのに、本当に僕をぶっ飛ばす気？」
「キリとゾロなら心配ねぇ。何があったってあいつらは死なねぇよ」

「信頼してるってことだ。いつもならそうかもしれないけど、今はどうだろうね」
少年は再び微笑んだ。
後ろへ足を伸ばしてルフィだけに語りかける。
「ねぇ、ゲームをしようか。僕に勝てたら二人は返してあげるよ。本人も記憶もね」
「なにぃ？」
「ついてこれるかい？」
そう言って少年が後ろへ跳び、草むらの向こうへ姿を消した。
咄嗟に目を丸くしてルフィが飛び出す。
一人で上陸すると少年を追って草むらに飛び込み、さらにその奥へと駆け出した。
「あっ!?　おい待て！」
「待ってルフィ!?　一人で動いちゃだめだってば！」
「おいルフィ!?　戻ってこい！」
仲間たちの制止を聞かずにルフィは走る。
少年の姿は見えていた。子供とは思えないほど速いが見失うほどではない。ルフィの方が少し速いくらいの差か。十分に仕留められる速度だ。
その森は草むらが多く、また背が高い。海岸を離れて奥へ行けばそれがより顕著になって、進めば進むほど高くなり、いつの間にか数メートルの直立する草に囲まれてしまう。
それでもルフィは少年を見失ってはいなかった。
不規則な軌道で右へ左へと姿を消すが、優れた動体視力で確実に追い、速度では勝っているため徐々に距離を詰めていく。
少年は逃げるばかりだった。
攻撃するでもなく、ただ離れようともがくばかり。
ルフィは何度も腕を伸ばそうとしながらもその度に走る軌道を変えられ、伸ばすことすら許さない奇妙な動きに翻弄されていた。徐々にフラストレーションが溜まっていく。
「おい待て！　逃げんな！　勝負するんじゃねぇのかよ！」

「君の勝利と僕の勝利は意味が違う。これが僕の戦い方だよ」
「こんにゃろォ！」
ついに耐え切れずにルフィが右腕を伸ばした。だがそれをあらかじめ知っていたかのように、少年は素早い動きで避けており、伸びきった頃には空を掴むしかない。
まるで動きを読まれているようなタイミングで回避していた。
ルフィは訝しげな顔になり、ふとクロコダイルとの戦いを思い出す。
「あいつ、なんか変だぞ……追いつけそうなのに追いつけねぇし、避けた」
「どうして追いつけないと思う？　振り切っちゃうと僕が困るからだよ」
邪魔な草むらを押しのけながら必死に走って、少年の背を見失わないように目を凝らしていた。しかしその時突然、少年の姿が消えてしまう。草むらを利用した上、さっきとは比べ物にならないスピードで身を隠したのだ。
思わずルフィは立ち止まり、周囲の気配を探ろうと辺りを見渡す。
「でもそれも終わった」
少年はタツノオトシゴの尻尾を銜えて息を吹き込んだ。
抱えていたタツノオトシゴから笛の音色が出て、辺りへ広がっていく。
その音は当然ルフィの耳にも入った。
「なんだ？　笛か？　さっきの奴が吹いてんのか？」
音はどこから聞こえるのか。それさえわかれば相手の位置がわかる。ルフィは集中して音の出所を見つけようと歩き出すのだが、急に接近してくる気配を感じ取った。
意識した時には体が反応していて、咄嗟に回避行動を取っていた。
半ば倒れるように頭を下げた瞬間、草むらを斬り飛ばしながら頭上を刀が通り過ぎていく。
一度転がってルフィが体勢を整えた時、攻撃した人物は走り去るように姿を隠した。

笛の音色が今も聞こえている。
少年を探したいが、別の誰かがルフィを狙っているのは嫌でも理解できた。
「こいつが居るから逃げてたのか……」
誘い込まれたようだと理解した上で、ルフィは退こうとはしていなかった。
たった一太刀でも相手が強いとわかる。だが負ける気はなかった。仲間を取られた上に、こいつさえ倒せば状況が変わるとわかっている今、相手を見逃すつもりなどない。
笛の音色が辺りを包み込む。
そんな中でも草むらの中で動く音が聞こえていた。
徐々に近付いてきていた。ルフィは拳を握って待ち構える。
少年の位置がわからない以上、まずは襲撃者の相手だ。
視界が効かない草むらの中、意識を研ぎ澄ませて敵の動きを察知しようとしていた。笛の音が邪魔ではあったが無駄ではなかったようだ。
背後から刀を振り下ろされ、気付いていたルフィは振り向いて足を振り上げて、刀を握っている手を蹴ることで受け止めた。
その瞬間、相手の姿を見て目を見開く。
尚も腕に力が込められたままで刀を振り下ろそうとしているが、足で無理やり押さえつけた。
刀を握っている相手は見間違えるはずもない、ゾロだったのだ。
「ゾロォ！　お前こんなとこに居たのか！」
声をかけても腕から力が抜けることはなかった。
鋭い眼光でルフィを睨みつけたまま、ゾロは彼を敵として見据えている。
再会できたことでルフィは喜び、足で彼の腕を押さえたまま普段通り笑いかける。
「みんなお前のこと心配してたんだぞ。記憶なくなってどっか行ったとか言うからさぁ」
その時になってゾロが後ろへ跳んだ。

改めて刀を握り直し、さらに左手でもう一本抜いた。両手に刀を握った状態でルフィを睨み、明らかな殺意を彼へぶつけている。
やっとルフィも異変に気付いたらしく、それでも態度はあまり変わらない。
「ちゃんと聞いてんのか？　あ、そっか。記憶なくなってたんだっけ。あのなぁ、おれはお前の仲間だから戦わなくていいんだぞ。おれもお前も海賊なんだ」
親しげにそう言ってもゾロの表情は変わらず。
彼がゆっくり構えたのを見て流石にルフィも眉間に皺を作った。
「ゾロ？」
名前を呼んだ瞬間に飛びかかってきた。
確実に首を斬り落とすつもりで振るわれた刃を、ルフィは軽やかに避け、ゾロの頭上を飛び越えるとお互い入れ替わるようにして再び距離を取る。
この時になってゾロを見るルフィの目に疑念が生まれていた。
覚えていないだけでなく、話を聞いていないような。
妙な態度を見せられてルフィは彼を警戒し、次もまた攻撃されることを理解する。
思った通りゾロはルフィに刀を向けて、仲間に向けるはずのない殺気が溢れていた。
「なぁゾロ。別におれとお前は戦わなくていいんだぞ」
ルフィが話している間にゾロが三本目の刀を抜き、口に銜える。
三刀流は彼が最も得意とする戦法で、本気になった時は必ず使う技だ。
嫌な予感を覚えながらもルフィはその姿を見ていた。
「お前とキリの記憶を奪った奴が居るんだよ。そいつをぶっ飛ばしたらなんとかなるから、もうちょっと待っててくれ」
ゾロを見つめて言っている最中、奇妙な音が聞こえた。待つ暇もなく右側面から草むらを斬り飛ばして何かが飛来し、気付いたルフィは咄嗟に跳ぶ。
それを見てゾロが動いた。

第三者による攻撃は避けたが、空中に居たルフィはゾロの攻撃に苦心し、仕方なく足を伸ばす。ゾロの刀を草履の裏で蹴り、勢いで自らを飛ばすようにして回避した。
距離を取って着地すると、頭上から影が差す。
避ける前にルフィは上を見た。
その瞬間、またしても驚いて目を丸くする。
「キリ!?」
頭から落下してくるキリが紙の剣を手にしており、ルフィの頭を狙って振り抜く。彼は地面を転がって辛うじて避けた。そうしなければ命はなかっただろう。
体を起こすと同時に二人が追撃してくる。
キリとゾロ、襲ってくる二人から逃れるべくルフィは慌てて後ろへ下がった。
「ちょっと待てよ!? どうしちまったんだお前ら! おれだぞ!?」
声をかけても反応はなく、攻撃の手を止める様子がない。
仕方なくルフィは腕を伸ばして近くの木の上へ逃げた。太い枝の上に着地し、草むらが斬られていたことで見えやすく、地面に立つ二人を再度確認する。
ルフィを見上げる目には敵意があり、同時に普段の様子が皆無だった。
なぜ攻撃をされるのか、いまだに理解ができない。
確かに今まで多少迷惑をかけたことはあったが、文句なら直接ぶつけてくる二人だ。本気で命を奪おうとする現状を正常だと判断することはできないだろう。
困惑したままのルフィはその場を動かずに再び声をかけた。
二人は彼を見上げて、片時も武器を下ろそうとはしていなかった。
「あのな、お前らの記憶を持ってる奴が居るんだよ。そいつをぶっ飛ばしたら――」
「無駄だよ。説明したって伝わらない」
少年の声が聞こえた。
顔を上げると少し離れた位置にある木の上に少年が座っているの

が見えた。
「彼らは今、夢を見てるんだよ」
「お前ェ！」
「おっと」
すかさずルフィは腕を伸ばして捕まえようとするが、少年はその前に自ら地面へ落ちた。
再び背の高い草むらに阻まれ、見えなくなる。
その中から少年の声が聞こえてきた。
「今の彼らに君の声は届かない。何を言っても聞こえない」
「出てこい！　おれと勝負しろ！」
「勝負はもう終わりだよ」
突然足場が揺れてルフィが声を洩らした。ゾロが木の幹を一刀両断し、木が倒れたのだ。
落下の最中にルフィが枝を蹴って跳ぶ。その動きに反応したキリが飛びかかってきて、両手に持つ紙の剣を振り、胴体を斬ろうと迫ってきた。ルフィは彼の手首を蹴り、すぐに両手でキリの両腕を掴むと地面へ落ちながら押さえつけようとする。
勢いよく地面を跳ねて転がり、辛うじて押さえることができた。しかしそれも一瞬の話。彼は両腕を紙にするとあっという間に拘束から抜け、驚くルフィの顎を殴る。
ダメージはないが隙ができるのは当然だった。
キリが両足でルフィの腹を蹴り上げ、勢いよく吹き飛ばされる。
そこへゾロが刀を振り上げながら追いつき、空中で向き合うと互いに攻撃を行った。ゾロの斬撃が胴体をわずかに斬って血を流させる一方、ルフィの蹴りが彼の腹に突き刺さる。
二人共同時に背中から落ちた。
休む暇もなくルフィの頭上に影が差して、紙で作られた巨大なハンマーが振り下ろされた。素早く体を起こして回避したルフィだが、流れるような動きでキリに顔を蹴り飛ばされる。
ルフィは自ら転がると距離を取って立ち上がった。
「ハァ、お前ら、いい加減にしろよ……！　仲間だろうが！」

「何を言っても無駄だよ。君の声は何の意味もない」
間髪いれずにキリとゾロが襲い掛かってくる。
記憶を失っていても彼らは仲間だ。攻撃を嫌がったルフィは名前を呼びながら回避する。
その間にもどこかから少年の声が聞こえてくる。
「正面から殴り合ったら僕は君に勝てない。だけど勝つ必要なんてないんだよ。時間を稼げれば君の記憶は僕の物になる」
三人が戦っている間に、再び笛の音色が流れ始める。
回避に専念していたルフィだが埒が明かないと思い始めて、このままでは敵の思うつぼだと察したらしく、覚悟を決めた。
「お前ら……いい加減にしろッ！」
ルフィが一転して攻勢に出た。
正面から迫るゾロに向けて蹴りを繰り出し、刀と草履がぶつかって、すぐに足を引き戻すとキリを狙ってパンチを繰り出した。キリは体を紙にして避け、直撃とはならなかった。
埒が明かないと考えたルフィが攻撃したことにより、戦闘は本格化しようとしていた。
それを確認した上で少年は微笑む。
「時間さえあれば、僕の能力は誰にだって通用する……」
前奏を終えて、少年は本格的にタツノオトシゴの形をした笛を吹き始める。
「バイバイ、麦わらのルフィ――」
先程とは違う曲が演奏される。
三人の戦闘を彩るかの如く、森の中に広がっていく。
ルフィは聞く余裕などなかったが、本人の意思に関係なく耳に入ってきていた。

＊

「ルフィ～！」
「おーいルフィ！　どこ行ったんだ！」

ナミとサンジは勝手に船を飛び出したルフィを探して、森の中を走っていた。
咄嗟の出来事で反応が遅れてしまったのが致命的だった。一人にならないよう仲間に忠告して、混乱している間にルフィの姿を見失ってしまい、遅れて出発した時にはどちらに行ったかさえわからない状態だったのである。
その島の森は鬱蒼と生い茂っていて、草むらの背が高く、極端に視界が悪い。
山すらない平坦な土地であることは幸いだが、それが利点にならないほど自然が巨大だ。
大声でルフィの名前を呼びながら、ナミとサンジは恐る恐る前へ進んでいた。彼と少年が進んだ方角がどちらかさえわからぬまま、勘を頼って探すしかない。
少し進んだ程度では見つからず、必然的に海岸を離れて森の奥へ向かっていた。
「ルフィのやつ、気をつけてって言ってる最中だったのに」
「あのアホとマリモもだ。簡単にやられやがって……金獅子の手下か。厄介だな」
二人は緊張した面持ちで周囲に目を走らせている。
視界が悪い森の中。いつ敵が襲ってきてもおかしくない。
すでに敵が居ることは確定しており、一人であるという確証はない。現時点では何人居るかわからないのだ。警戒するのは当然だった。
島の奥へ進むごとに草むらの背が高くなっていき、少し離れただけで姿が見えなくなるほど。そこまで行けばナミの不安は抑えようがないほどになっていた。
サンジはそれほど怯えてはいなかっただろうが、彼女は違う。
前を歩いていたサンジは不意に立ち止まって振り返る。なぜかはわからないが彼には雰囲気だけで伝わったらしい。ナミが不安になっているのを感じて声をかけた。
「大丈夫かいナミさん？」

「ええ。なんともないわよ」
「このまま進めば敵が待ち構えてるかもしれない。なんなら一度戻ろうか？　ルフィのやつなら死ぬことはないだろうし……」
「だからってほっとけないでしょ。問題が起こる前に早く見つけなきゃ」
不安そうではあるがやはり彼女は気丈で、笑みを見せて言い切った。
サンジは頷き、そっと両手を広げる。
「わかった。だがナミさん、怖い時はいつでもおれの胸に飛び込んでくれ。ここは君の特等席だからいつ言われたっておれは優しく受け止め――」
「さ、行くわよ」
「はーい！　素っ気ない君も好きだ～！」
呆れたナミがサンジを追い抜いて歩き出したことで、彼女が先頭になった。
二人は尚も背の高い草むらを掻き分けて進み、ようやく変わった物を見つける。
「待ってサンジ君。あの辺り……」
「ああ。戦闘の痕跡かもしれない」
草むらが乱雑に斬られているのが見えた。
ただ単に刈り取ろうとしたのではないことは明らか。高さはバラバラ、斬り方も適当。おそらく草ではない何かを斬ろうとしてそんな風景になっている。
警戒して進んだ二人は、その地点へ着いた。
そこでやっと目的の人物を見つける。
「ルフィ！」
思わず叫んでナミが駆け寄った。
彼は地面に大の字になって寝ていて、穏やかな寝息を立てている。
ナミが傍らに膝をついて彼の状態を確認し、サンジも駆け寄って顔を覗き込んだ。腹部に浅いとはいえ刀傷があり、血を流した痕がある。当然だがまだあまり時間は経っていない。

気絶している、というより眠っているという印象だった。
状況が理解できず、二人は困惑した顔になる。
「ルフィ。ルフィ、ねぇ起きて」
「ここで誰かに襲われたのは確かだな。でも殺されたわけじゃねぇし、傷は浅い。無理やり気絶させられたわけでもなさそうだ。一体何があったんだ？」
「ルフィ？　ねぇルフィ、大丈夫？」
ナミが体を揺するとルフィは反応して目を覚ました。
眠そうに目元を手で擦り、瞬きを繰り返して周囲を確認しようとする。
ひとまず無事だったことに二人は安堵し、彼の顔を見つめた。
「ん？　んー……」
「よかった。とりあえず大丈夫そうね」
「ったく。勝手に行動すんじゃねぇよ。ナミさんを心配させやがって」
「ねぇルフィ、何があったの？　あの子供は？」
「ルフィ？　ルフィって誰だ？」
「え……？」
ぱっちり目を覚ました様子のルフィは、開口一番にそう言った。
ナミとサンジは驚愕する。
体を起こして座ったルフィは二人の顔を確認して、困った顔で首を傾げた。
「あり？　なんでこんなとこ居るんだ？　お前ら誰だ？」
「ちょ、ちょっと待ってよルフィ……私たちがわからないの？」
「冗談ならよせよ……おい、ルフィ」
「ルフィっておれのことか？」
何もわかっていない顔でルフィが二人にそう質問する。
純粋に質問されては、二人には返す言葉がなかった。
何とも言えない感覚に支配される。背筋にぞくりと悪寒が走った。
キリやゾロの時と同じ、或いはその時以上に。
ルフィが記憶を失ったと気付いて、二人は彼の問いかけに何も答え

ることができなかった。

お前は誰だ？（２）

草むらを掻き分けて歩きながら、ナミは気落ちした様子だった。
全員でキリとゾロを探しに行くつもりが、それほど時間をかけずにルフィまで同じ状態になってしまったのである。
記憶を失い、全て忘れて、それでも能天気なルフィと一緒に歩きながら溜息をつく。
サンジは一見冷静に見える様子だが、普段に比べて気落ちした表情なのは確かだ。
「そうかぁ～、おれは海賊なのかー。そんでお前らが仲間なんだな？」
「ええ、そうよ。そんなことも忘れるなんて……」
「そもそもお前が連れ出したんだろうが」
自分の名前さえ覚えていなかったルフィは、事情を聞いて上機嫌に笑っていた。
自分の名前がルフィであること。自身が海賊であること。ナミとサンジは仲間で、海賊王になるという野望を持っていること。諸々を聞いて楽しげにしている。
彼らは現在、仲間と合流すべくメリー号へ戻ろうとしていた。
少年を追ってずいぶん走ったらしい。振り返ってみれば道のりは長く、船は遠かった。
歩いている最中、ルフィはナミとサンジへ思うように質問をぶつけている。忘れてしまったせいで彼らや自分に関する情報は一切持っておらず、一つ一つを聞くだけで楽しそうにしている。
同時になぜか悔しそうにもしていた。
「くっそー、そんなおもしろそうな冒険してたのか。なんで忘れちまったんだろうなー」
「そりゃこっちが聞きてぇよ。何があったんだ？」
「ちょっと目を離した隙に記憶喪失になるなんて……だけどこれではっきりした。やっぱりあの子供が犯人なのよ」
苦々しい顔でナミはルフィの顔を見た。彼女の心境とは裏腹に彼

は呑気な顔をしている。記憶を失っても彼は彼のままで、キリやゾロのように警戒して立ち去ることはなかった。それは嬉しく感じる部分でもあり、それでもやはり寂しさはある。
共有していた情報が全て失われてしまったのだ。
知っている相手なのに別人のようでもあり、今の彼を見る目には複雑な感情があった。
「ねぇルフィ、本当に何も覚えてないの？」
「うーん……なんも覚えてねぇな」
「そう……ハァ」
「めんどくせぇことになりやがった。ルフィまでやられたとなりゃ厄介だぞ」
サンジは厳しい表情で呟く。
現状、戦闘員ばかりが敵に狙われ、結果的に敗北している。ルフィは軽傷を負い、キリとゾロは無傷だったようだが、三人とも記憶を奪われた。強くは見えない子供相手にだ。外傷がほとんどないところを見ても厄介なのは戦闘力そのものではなく悪魔の実の能力であることは間違いない。
一味の内、すでに三人がやられている。
最悪の展開を頭の中に思い描くのも無理はなかった。
サンジが思案し、ナミが溜息をつく一方、ルフィがあっと声を出した。
何かを思い出した様子だと感じて二人が振り向く。
ルフィはあっけらかんと気楽に言う。
「あっ、そうだ。誰かが笛吹いてた気がするなぁ」
「笛？」
「どういうことだ？」
「音が聞こえたんだ。寝てる時にずっと聞こえてた」
歩きながらも二人は顔を見合わせ、嫌な予感を覚える。
「笛の音色か……」
「それが能力に関係してるのかしら？」
「可能性はあるな。聞き間違いか、ただの夢じゃなきゃいいんだが」

「本当だって。あれは絶対笛だった」
ルフィの言葉を素直に受け止めながら、さらに思考を巡らせる。
いまだ名前さえわからない少年は彼らにとって脅威だ。特にどんな能力を持っているかわからないことが危険性を高めている。
これ以上の被害を食い止めるためにも情報は必要だった。
ナミはサンジの顔を見て語りかける。
とにかくまずは全員で集まることが重要だ。仲間たちとの合流を急ぐ必要があった。
「とにかくメリーに戻ったら全員で行動しましょう。ルフィの件ではっきりしたけど一人になると危険よ」
「そうだな。お前が安い挑発に乗ったおかげでわかったよ」
「なんだ？　おれなんかしたのか？」
「ルフィ、もう勝手に動いちゃだめよ。絶対私たちから離れないで」
「そうか？　わかった」
性格その物は変わっていないせいか、ルフィは素直に頷いた。周辺を気にしながらではあったが並んで歩くナミとサンジの後ろをついてくる。
こういった素直さは以前と変わっていなくて良かった。
現時点でわかることは、記憶を失っても性格は変化していないという事実だ。
キリとゾロは警戒心が強く、ルフィは全く警戒心がない。その辺りは想像通りだった。はぐれてしまうのは予想外だったが普段の性格を知っていれば納得はできる。自分の名前すら忘れるのは不便ではあるが、知識まで失う訳ではないのが幸いでも不幸でもあった。
勝手にどこかへ行ってしまったキリとゾロがどこへ消えたのか。今や誰にもわからない。
不安は募るばかり。なぜか胸騒ぎが止まなかった。
彼らは早足で森を抜けて、メリー号が停泊している海岸に戻った。
船上にはウソップとロビンが残っていて、彼らを見つけるとウソップが手を振って迎える。少なくともルフィの姿を見て安堵していたようだ。

「お～いルフィ！　よかった！　無事だったんだな！」
「あいつ誰だ？」
「お前の仲間だよ」
「鼻が長ぇな」
三人は歩みを止めずに船に乗り込んだ。
ウソップやロビンと合流して、全員ではないがこれで一人にならずに済む。
ウソップは笑顔でルフィを迎えていた。しかしルフィは不思議そうにウソップを、特に長い鼻を見ていて、ナミとサンジは明らかに気落ちした表情だった。
ロビンはすぐに彼らの様子に気付く。
親友と言っても過言ではない程度の間柄だと思っていた。だが今はウソップを見るルフィの目が好奇心に満ちていて、普段の様子が皆無である。彼女の予想通り、彼の前にやってきたルフィは、初めて会うかのような態度だったのだ。
「おいルフィ、勝手に一人で行くんじゃねぇよ。危ねぇって言ったとこだろ？　お前も少しは人の話を聞いてだな、そろそろ落ち着いた船長として――」
「ウソップ……」
「ん？　どうした？　なんかあったのか？」
「お前ウソップっていうのか？　鼻長ぇなー」
「は？　いきなり何言い出してんだ」
妙な態度を取るルフィを見てウソップは訝しげな顔をしていた。彼の顔をまじまじと見つめて、少し遅れてルフィが怪我をしていることに気付いた。
腹の辺りだけ服が破けて血が滲んでいる。彼はあっと声を出した。
「お前、怪我してるじゃねぇか!?　あいつにやられたのか!?」
「あいつって誰だ？」
「誰って、さっき知らねぇ子供を追ってってただろ？」
「そうだっけ？」
「あのなぁ。今はふざけてる場合じゃねぇんだぞ。まぁとにかく、

チョッパーはお前のこと探しに行っちまったけど、とりあえず応急処置だけしとこう」
「ウソップ。ちょっと待って」
耐え切れずにナミがウソップを止めた。彼は不思議そうな顔で振り返る。
「その前に話しておかなきゃいけないことがあるの」
「なんだ？　あの子供のことか？　見つかったのか？」
「そうじゃなくて、ルフィのこと」
「ああ、怪我してるのはわかってるぞ」
「あのね……ルフィも、記憶喪失になってるの」
ウソップはゆっくり瞬きをした。
ナミからルフィへ視線を移してじっくり眺める。上機嫌そうに笑う顔はいつも通り。しかし確かに同じようで違うような、なぜか不思議な感覚があった。
「おれはルフィだ。海賊王になるらしいぞ。よろしくな」
まるで他人事のように、彼は笑顔で言った。
思い返せばウソップを見た時の反応も普段と違っていた気がする。
ゆっくりと状況を呑み込んでいったようで、彼の変化を知るとウソップは激しく狼狽する。
「んなっ、なにいいいっ!?　う、嘘だろっ!?　ルフィが、記憶喪失!?」
「ああ。そうみたいだ」
「おれたちのこと覚えてねぇってことか!?」
「覚えてねぇな。でも仲間だったんだろ？」
「仲間だったんだろって……笑えねぇぞそんなの！」
理解はしても受け入れることはできなかったらしく、ウソップが激しく取り乱す。そんな様子を間近に見ていてもルフィは危機感もなく笑っているだけだった。普段は能天気な彼だが、先程までの憤る様子が皆無だったことから異変を感じずにはいられない。
ナミとサンジが気落ちした表情なのも追い打ちとなったようだ。
ルフィ本人とナミとサンジの表情を見て、納得せざるを得なくなる。

ウソップは愕然とした様子で肩を落としてしまう。
話には加わらず聞いていたロビンでさえ深刻な表情で言葉を失っていた。
「ほ、本当か……？」
「ええ。ルフィが嘘つけないのは知ってるでしょ」
「嵌められたな。わざわざ自分から姿見せにやってきたのはこのためだってわけだ」
腕組みをしたサンジが溜息交じりに呟く。
思い出すのは一人でメリー号の前へ現れた少年。一目見た時点では脅威と感じなかったが、結果を見れば彼を追ったルフィが記憶喪失になった。これで記憶喪失騒動の真犯人はすでに判明したと言っていい。
それとは別に、その子供によってルフィ、キリ、ゾロと一味の戦力が欠かれてしまった。
子供だからといって油断できない、という事実だけは無視できないだろう。
「そもそも、おれたちをこの島に連れてきたのはあのティーチって野郎だ。あいつに嵌められた可能性はないか？」
「た、確かに……島に着いてからすぐに姿を消しちまったし」
「あいつ自身が言ってたんだ。この島で仲間と合流するってな」
「じゃああいつがその仲間だってことか？」
「可能性はゼロじゃねぇ。最初から信用ならねぇ野郎だったしな」
サンジとウソップが険しい表情で話している間、ナミは甲板を見回す。
キリとゾロは相変わらず居ない。それに加えて今はシルクとチョッパーも居なかった。ルフィが飛び出していった後、ナミとサンジと同じタイミングで彼を追って船を出たのだ。
今ここで姿が見えないことが嫌になるほど不安を生んだ。
彼女は優先すべき事柄を、これ以上仲間の記憶が奪われないことだと判断した。
「シルクとチョッパーは？　まだ戻ってないの？」

「ああ。お前らこそ一緒じゃなかったのかよ」
「途中で手分けして探すことにしたの。この森は視界が悪いし……とにかく今は全員で行動することを優先しましょ。一人になるとますます危険だわ」
「そりゃそうだ。探しに行くか？」
ウソップの問いかけにナミは即座に頷く。
このまま離れ離れでは不安が募る一方。全員の顔が見れる状況でなければ辛いだけだ。
先にシルクとチョッパーを見つけて、その後キリとゾロを見つける。現状で先にしなければならないことはそれらだろう。ナミが指揮を執って行動に移そうとする。
「一人になると危険だから全員で行動しましょう。あの子供を見つけたら気をつけて。ルフィたちがやられるなんて普通じゃない」
「全員で？　メリーはどうすんだよっ」
「今は仕方ないでしょ。幸いここは町から離れてるし、少しだけならなんとかなるわ」
「あのガキには場所がバレてるんだぞ！　おれたちが居ない間に何されるかわかんねぇだろ！」
「だったら船番を残す？　言っとくけど、キリとゾロは船番しててやられたのよ」
「うっ……!?」
ナミの言葉にウソップはたじろぐが、それでも簡単には意見を変えられなかった。ゴーイングメリー号だって彼らにとって大切な仲間だ。仮に敵が船を壊そうとして誰も止められなかった場合、船を沈められた場合は後悔してもしきれなくなる。
不安を抱く彼は引けない様子で、仲間を心配するナミも同様だった。
どちらの懸念も理解できるがこのまま停滞している訳にもいかない。
意見をぶつける二人へ助け船を出すようにサンジが言う。
「どっちにしろここで悠長にはしてられねぇ。まずはシルクちゃん

とチョッパーを呼び戻すことが先決だ。アホ二人は後で探せばいい」
「そ、そうだな。でもメリーは……」
「ナミさん、ロビンちゃんはここに残ってくれ。おれとウソップで二人を探しに行ってくる」
「お、おれかっ？」
思わず体をびくつかせたウソップにサンジが厳しい視線を向けた。
「当たり前だろ。おれはレディを危険な目に遭わせたくねぇんだ」
「おれはいいのかよ!?」
「お前もそれなりに修羅場くぐってんだろ。気合い入れろウソップ。アホどもがやられた今、お前が頼りになってくるんだ」
「あぁ～あのアホども、一体何やったらこうなんだよ……！」
頭を抱えながらではあったがウソップは同行を決意したようだ。嫌々に見える素振りながらも自ら歩き出してメリー号を降りようとする。
船を降りる寸前、サンジは甲板に残る三人へ目を向ける。
記憶を失った状態のルフィが気になるものの、彼にとってはそれ以上にナミとロビンが無事で居てくれるかの方が気になるらしい。当然のように二人へ声をかけた。
「少しだけ待っててくれ。すぐにあの二人を見つけて帰ってくる。もし何かあったらルフィを盾にしてでも持ちこたえてくれ」
「できるだけ急いでね」
「ああ。行ってくる」
「ちくしょー！　こうなりゃヤケだ！　急ぐぞサンジ！」
船を降りたウソップとサンジは二人が向かっただろう方角を目指して走り出した。
その背を見送ったナミは小さく溜息をつく。
ルフィは改めてメリー号を珍しそうに眺めており、まるで初めて乗船した時のように、あちらへこちらへ移動して詳細を確認し、何よりかつてのように羊の船首を気に入ったようだ。おもむろに頭の上へ飛び乗ると上機嫌そうに海を眺める。
彼女にとっては見慣れた光景なのに、彼にとっては初めての体験な

のだ。
複雑な心境で彼の背を眺めて、寂しさに胸を痛めながら現状を憂う。
落ち込んでいるナミと本当に記憶を失っているらしいルフィ。
二人を見ていたロビンは思案する。
会話には加わらなかったが彼女なりに考えることはあったらしく、いつになく真剣な顔つきだ。
「人間を記憶喪失にする能力なんて聞いたことがないわね。もし本当に能力者だったのなら対策を考えないと犠牲者はまだ増えることになりそう」
「そうだけど、まだ何もわかってないし……多分能力者はあの子供だってことくらいで」
「共通点はないの？　キリと剣士さん、それにルフィが記憶を失った瞬間の状況とか」
「共通点？」
「ええ。そこから能力の詳細を推理できないかと思って」
質問したロビンがにこりと笑みを見せた。
笑い合える心境ではなかったためナミの表情は優れないが、真剣に考え始める。今ある情報などほんの少ししかない。とはいえ、相手の能力を知っておいた方がいいのは確かだ。
「うーん……共通点って言われても」
「不思議に見えるかもしれないけど、悪魔の実の能力には一定のルールが存在するの。できることとできないことは明白よ。それを理解できれば対策は打てるかもしれない」
ロビンの言葉を聞きながらはたと何かに気付いた様子だった。
恐る恐る彼女の顔を見たナミは、自信を持てないながらも思い出したことを伝える。
「そういえば、キリもゾロも、ルフィも、見つけた時にはみんな眠ってた。ルフィなんて敵を追いかけてたはずなのに、怪我をして、誰も居ない森の中で」
「ということは、〝眠り〟が能力に関わっている可能性があるわね」

「でもそんなことあり得るの？」
「あり得ない話ではないわ。私も全ては知らないけれど、悪魔の実の能力は不可解だもの」
呆然としていたナミは、徐々にその話を呑み込んでいって理解しようとしていた。
「それじゃあ三人ともあの子に眠らされて、記憶を奪われたってこと？」
「そうだとすれば、その手段も知る必要があるわね」
「人を眠らせる手段？　そんなのあるのかしら――」
ナミが呟いた直後、彼女は何かに気付いた様子で森に目を向けた。
遠くから笛の音が聞こえてくる。
美しい旋律は耳にするだけで安らぎを与えられるが、一方で町から離れた森の中から聞こえてくるのは不可解に思えて仕方なかった。
「ねぇロビン、聞こえる？」
「ええ。笛の音色のようだけど」
「どうしてこんなところで……町までは少し距離があるのに」
誰かが近くに居るかもしれないと警戒していたのだろう、ナミが森を注視している時、ロビンがルフィの様子に気付いた。
船首の上に座っていた彼は体の力を抜いて俯いている。落ちていないのが不思議な体勢だ。
背中を見ただけでも眠っているのだろうかと思う様子であった。
異変に気付いたロビンが表情を変える。
つい今しがた話していた内容。記憶を失った三人が眠っていた。人を眠らせる手段があるのではないかという思考。それらが瞬時に脳裏へ浮かぶ。
笛の音色は遠い。だがルフィが眠っているとするならば無関係とは思えなかった。
ロビンは船首へ向かって歩き出し、ルフィの背へ声をかける。
「ルフィ？　どうかしたの？」
声をかけると同時にふらり、ふらりと頭が揺れる。
やはり様子がおかしいと感付いた直後には動き出した。

ぐるりと勢いよく振り返って、怪しい目つきで彼はロビンを睨みつけていた。
思わず身構えた瞬間、ルフィは緩慢な動作で拳を握り、力を溜めるように右腕を後ろへ引いた。
その時になってナミが彼の様子に気付き、眉を顰める。
「どうしたのルフィ?」
「下がって、航海士さん」
ロビンは咄嗟に胸の前で両手を交差させた。明らかに様子が違う。おそらく止めることは容易ではないだろうと感じずにはいられない。
ルフィの目を見ればわかる。視線は鋭く、空虚であった。
本人の意思で動いているのではないことは間違いなかった。
「ちょっと、ルフィ!?」
ゴムの腕が伸びて猛然と繰り出されたパンチがメリー号に突き刺さった。
ロビンは冷静に見極めて避け、ナミはそもそも当たらない位置に立っていたが驚いて尻もちをついてしまう。
ルフィの攻撃はメリー号の壁を貫き、一部とはいえ破壊していた。
普段の彼ならばあり得ない状況を見てナミも異変に気付く。
「何やってんのルフィ!? 私たちは仲間だって言ったでしょ!」
「無駄よ航海士さん。今は何を言っても耳に入らない。本人の意思じゃないわ」
迷わずロビンが能力を使用してルフィを拘束する。彼の体から六本の腕が伸び、四肢と首を掴んで押さえ込んだ。それでも彼は動こうと体に力を込めている。
動揺したナミは立ち上がるとすぐにメインマストの陰に隠れた。
「どういうこと!?」
「私たちの声が聞こえないなら、操られている可能性があるわね」
冷静に状況を見て、ロビンは観察を行う。
ルフィは正気を失っている様子だ。記憶を失ったことで自身の体質、ゴムの肉体の使い方や戦い方さえも忘れていたはずだが、今は記憶を失う前と同じ戦法を可能としていた。明らかな矛盾から第三者

の介入があったと見ていいだろう。
尚も乱暴に全身を動かすルフィはロビンの拘束を振り解いた。
彼の体から生えた腕が消え、再び自由に動き出す。
ルフィの強さは誰よりも仲間たちが知っていた。それは最近加入したばかりのロビンであっても例外ではない。如何なる理由であれ、彼はクロコダイルに勝ったのである。
表情は自然と険しくなり、受け身も考えずに跳ぶと地面へ転がった。
伸ばされた足がロビンの頭上を掠め、船室の壁を蹴り破り、ナミが悲鳴を上げる。
ルフィの攻撃はさらに続けられ、本気で二人を傷つけようと、それどころか殺そうとしている。
目は虚ろで、本人の意思は感じられなかったが、明確な殺意があった。
今のルフィは彼本人ではなく誰かの操り人形なのだろう。本人が自らの意思でこんなことをするはずがなく、ナミはその姿に恐怖を覚えずにはいられなかった。
体を回転させて勢いよく蹴りを繰り出そうとする。それを見てロビンは能力を使用し、素早く再び彼を拘束した。今度は八本の腕で捕まえる。
空中に跳び出した時点での捕縛であったため、ルフィはそのまま地面に落ちる。
その様を見てからナミは仕方なく武器を手にした。
「どうして急に……！　ルフィ！　しっかりしてよ！」
「話は聞いてくれそうにないわね。仕方ないわ」
押さえ込もうとしてもルフィは必死にもがいて抜け出そうとするため、先程の経験からまずいと考えたロビンはさらに腕を生やして、無数の手で彼の体を拘束する。
少なくともさっきよりはマシになっただろう。少なくともすぐには逃げられない。
その状態でロビンはナミに視線を送る。

「あとはお願いね」
「え？」
「百花繚乱（シエンフルール）」
甲板に無数の腕が生えてきて拘束したままのルフィの体を持ち上げた。
「大飛燕草（デルフィニウム）！」
抵抗する彼を押さえ込んでどこかへ運ぼうとする。どうやら行き先は陸ではなく海だ。
ロビンは軽々とルフィを運んで、欄干の上から海へ放り投げる。
反応が遅れたナミがあっと声を洩らした時、船のすぐ傍で大きな水柱が立った。
「ロビン!?　あんたも何やってんのよ!?」
「だから言ったでしょ？　あとはお願いって」
咄嗟にナミが駆け出して自ら海へ飛び込んだ。
能力者であるルフィは当然泳げず、真っすぐに沈もうとしており、彼を抱えると慌てて上を目指して泳ぐ。大変ではあるが泳ぎが得意なおかげでなんとか海面へ辿り着いた。
勢いよく顔を上げるとロビンの手が見えた。
能力を使用してメリー号の船体に生やしているようで、引きあげてくれるらしい。
ナミはロビンの手を複数借りて、なんとか甲板へ戻ることができた。
引きあげたルフィは気絶している、というよりは眠っているらしく目を閉じている。
濡れた髪を掻き上げ、彼の顔を確認し、ナミが溜息をついた。
「まったくもう……次から次に、何がどうなってるのよ」
「おそらく例の能力が関係しているんでしょうね。誰かに操られていたのよ。あのまま戦えば無事じゃすまないだろうから、溺れてもらえば元に戻るかと思って」
「それならそうと早く言ってよ」
「時間がなかったの。ごめんなさいね」

ロビンは微笑みを湛えて軽やかに言う。
ナミは気落ちした顔でルフィの寝顔を見つめる。これで元に戻ってくれればいいのだが、流石に記憶が戻ることまでは期待できそうにない。ひとまず攻撃が止んだことをよしとすべきか。
「ちゃんと思い出すんでしょうね……忘れたままなんて許さないわよ」
「能力者本人を倒せば、きっと元に戻るわ。それより人を眠らせる手段だけど、一つ気になることがあったわ」
「え？　何？」
「笛の音よ。森の方から聞こえてきた後にルフィが正気を失った。多分、記憶を奪う時も同じ方法で眠らせたんじゃないかしら」
「笛の音で？　そんなことが……あっ」
直観に従ったロビンの予想ではあったが、ナミは不意にルフィの言葉を思い出した。
思い返せばここへ戻ってくる途中、彼も同じことを言っていたのだ。
「そういえばルフィも言ってた……寝てる時に笛の音が聞こえたって」
「能力の使用条件は〝音〟ね。特定の笛が必要なのか、それとも楽器なら何でもいいのか。どちらにせよあの音色が能力者本人によるものだと考えていいと思う」
「音を聞いちゃいけないってこと？　そんなのどうしようもないじゃない！」
思わぬ言葉にナミは驚愕した。能力者には何人か会ってきたが、記憶を奪う能力という特殊なものは初めて知り、しかも笛の音を聞くだけでだめらしい。
ロビンは思案する顔で言葉を続けた。
「まだ確定とは言えないけれど、状況から考えてあり得なくはない話よ。特に超人系（パラミシア）は悪魔の実の能力の中でも常識が通用しないものが多いから」
「そ、そう……だけどこっちにはロビンが居るからね。なんとかな

るかも」
気を取り直そうとした彼女はなんとか笑みを浮かべた。
考えてみればロビンの能力も特殊であり、かなり便利なものである。所構わず体の一部を生やして動かせる彼女なら、笛を吹く例の子供が相手でも押さえられるかもしれない。
少しの希望を抱いて、大きく息を吐き出したナミは肩の力を抜く。
そうしているとルフィが目を覚ました。眠たげな顔でむくりと起き上がり、何が起こったのかを理解していなさそうに辺りを見回す。
彼が起きたことを知ってナミは心配そうな顔で見つめた。
「ん～……？　あり？　おれまた寝てたのか？　なんで濡れてんだ？」
「ルフィ、覚えてないの？　私のことわかる？」
「ああ、わかるぞ。航海士だろ。えーっと、ナミっていったっけ？」
「ええ、そうよ……ハァ」
なぜナミが溜息をついてしまうのかがわからず、ルフィは首を傾げた。
少なくとも彼が先程のように攻撃してくる危険はなかったようだ。
ロビンはナミと同じく安心した様子で、いつものように柔和な笑みを浮かべる。

お前は誰だ？（3）

さらさらと風で葉が揺れる音がする。
辺りは緑の匂いが充満していて、自然の中に居るのだと実感する。
目を閉じ、些細な音を聞いて、匂いを嗅いでいるとまるで自分が大自然の一部になったかのような感覚さえ生まれつつあった。それは周囲の環境がそうさせたのだろう。
瞼が重く、思考がはっきりしない。まだ眠気に負けているのだ。しかし意識は徐々に覚醒しつつあってゆっくり浮上するかのよう。
ふとした瞬間、シルクは目を開いた。
背の高い草むらが周囲を覆い隠して、さらにその上から樹が見下ろしている。
彼女は自分でも気付かぬ間に大の字で眠っていて、自分自身でも不思議に思った。
一体なぜこんなところで寝ているのか？
起きたと同時に疑問を抱き、またいくつかの違和感を覚える。しかし何がおかしいのかを明確に判断することはできず、眠そうな目は物事を考えられそうにない。
上半身を起こしてその場に座る。シルクは辺りを見回した。
自分が居るのは静かな森の中。
手元には抜き身の剣と鞘が落ちていて、それに気付いた彼女は手に取ってみる。
「これ……私の？」
右手で剣の柄を握り、左手で恐る恐る刀身に触れてみて、目には不安が浮かんでいた。
ひとまず剣を鞘に納めて、それから再び森の風景を眺める。
「ここ……どこなんだろう」
美しい緑で溢れる静かな森の中だ。いつ自分がここに来たのだろうとは思うが、不思議と焦ってはいなかった。おそらくその風景を見たことで気持ちが穏やかになっているからだろう。
まだ思考がはっきりしていないのか、シルクはしばし呆然と辺りを

見る。
しばらく座ったままぼんやりしていると遠くの方から声が聞こえてきた。大勢の人間の声だ。
何かあったのだろうかと考え、そちらへ向かおうとする。すると近くの草むらが揺れた。彼女は少し不安に思いながらもその地点を見る。
がさりと草むらを掻き分けて飛び出してきたのは四足歩行のトナカイだった。
「シルク！　ここに居たのか！」
「喋った!?」
勢いよく現れたチョッパーが声を発すると、シルクは驚愕して身をのけ反らせた。自然界ではあり得ないだろう、ピンク色の帽子を被ってズボンを履いたトナカイが人語を操っていた。彼のことを知らなければ驚くのは当然である。
彼女の反応を見たチョッパーは狼狽していた。
シルクは仲間だ。彼が加入するより早く一味に参加していた。助けられたこと、教えられたことも多く、信頼する一人であることは間違いない。
そんな彼女がまるで初めて会ったかのような反応を見せていることに驚かずにはいられない。
遠くで大勢の人間の声が聞こえる。
それを聞いてハッとした様子のチョッパーが人獣型になり、シルクの手を掴んだ。
「とにかく一旦ここを離れよう。みんなにも伝えなきゃ」
「わっ。小さくなった」
「え？　シルク？」
「ねぇ君、どうして喋れるの？　それに体が変わった。あ、そっか。悪魔の実の能力者？」
「どうしたんだシルク？　何言ってるんだよ」
「えっと、一つ聞きたいんだけど。私の名前、シルクっていうのかな？」

信じられないという顔になってチョッパーは思わず彼女の手を離した。
改めてじっくり顔を見つめてみれば、シルクは興味津々という笑顔でチョッパーを覗き込み、初めて会った時のような素振りを見せている。明らかに普段の彼女ではない。
チョッパーはすでに記憶喪失になったキリたちの話を聞いていた。まさかと思って恐る恐る質問してみると、予想は最悪の形で当たってしまう。
「シルク、ひょっとして……記憶喪失になったのか？」
「記憶喪失？　うん、そうかもしれない……自分のことも覚えてなくて。私、なんでここに居るんだろうって思ってた」
「そ、そんなっ……!?」
愕然としたチョッパーは思わず足をよろけさせる。
船を飛び出していったルフィを探しに船から出てきたはずだが、まさかシルクが記憶喪失になるとは予想していなかった。
突然の事態に激しく動転し、彼はその場をちょこまかと駆け回る。
「たたっ、大変だぁ～!?　シルクが記憶喪失になったぁ～!?　どうしよう、どうしよう!?」
「落ち着いて。ねえ、君の名前を教えてくれる？」
「う、うん。おれはトニー・トニー・チョッパー」
「チョッパーっていうんだ。よろしくね」
柔和な笑みで優しく言うのはいつもの彼女だが、残念ながら今のシルクにはチョッパーと過ごした思い出が残っていない。それを感じて寂しくなった。
悲しそうな顔をするチョッパーを見てシルクも事情を察し、苦笑してしまう。
「ごめんね。多分、私と君は友達だったんだよね」
「う、うん……おれたち、海賊の仲間だった……いや、今もそうなんだ」
「海賊？　私が？」
「そうだよ。ルフィの船に乗ってて、一緒に冒険してるんだ」

「海賊、か……」
シルクは思案して神妙な顔つきになり、小さく呟く。
思い出そうとするが霞がかったように肝心の情報が出てこない。チョッパー、ルフィ、或いは自分が海賊だという事実。そんな日々の光景は一つも思い出せなかった。
表情を見て察したらしいチョッパーは落ち込んでしまう。
肩を落とす姿に申し訳なくなって、シルクは彼の肩に手を置いた。
「忘れちゃってごめん。でも、チョッパーと仲良くしたいって思ってるんだ」
「シルク……うん。記憶が無くなってもやっぱりシルクは優しいんだな」
「私、シルクっていう名前なんだよね？」
「そうだよ。おれたちの仲間なんだ」
状況は受け入れ難く、チョッパーは自分の感情を理解できないほど複雑な胸中だったが、彼女の性格が劇的に変わる訳ではなかったことだけが唯一の救いだった。
全てを忘れ、初めて出会った時のような態度になっている以外は普段のまま。
少なくともキリやゾロよりも話が通じそうで助かる。
背の高い草むらに囲まれた場所で向き合っていると、遠かった声が徐々に近付いて来ていた。
シルクは何も思わなかったが、それに気付いてチョッパーが焦りを覗かせる。
「こっちから声が聞こえたぞ！」
「しまった……!?　とりあえずここから離れよう！」
改めてチョッパーはシルクの手を掴み、慌てて駆け出す。
声を聞いた途端、或いは姿を見せた時からチョッパーは焦りを見せていた。まるで何かに怯えるようだったことを今の表情を見て思い出す。
走りながらもシルクは気になって彼に質問をした。
「どうしたの？」

「町の人たちが、みんなが記憶を失ったのはおれたちのせいだって追いかけてきたんだ。逃げてる途中でシルクとはぐれちゃって……」
「記憶を失ったって、私だけじゃなくて？　みんなも？」
「そうなんだ。キリとゾロも記憶喪失になったみたいで、なんとかしなくちゃいけないんだ」
立ち塞がるような草むらを掻き分けながら二人は声の主から遠ざかろうと足を動かす。
そんな最中に新しい名前を耳にして再びシルクが問いかけた。
「キリとゾロっていうのも、私たちの仲間かな」
「うん。二人共すごく強いんだけど、記憶喪失になったらしくて……」
「たくさん居るんだね。私たちの仲間」
「もっと居るよ。みんなルフィが集めたんだ。今はみんなと合流しよう」
「うん。わかった」
シルクはまだ見ぬ仲間に会えることを想像して笑みを浮かべる。
記憶を失ったことを自覚し、不安もあったが、チョッパーが頼りになるおかげで彼女は不安に押し潰される心配を失くしたようだ。
記憶が無くても旅を通して培った冒険好きは今もなお失われていないらしい。
草むらを抜けて視界が開けた。周囲は森であったが地面を覆う草が極端に短くなっている。
人の気配を感じなくなったことで一度足を止める。
お互いの顔を見合わせた二人は呼吸を整えて一息つく。
「シルク、大丈夫か？　記憶喪失以外に痛いところとかないか？」
「うん。大丈夫だよ」
チョッパーは周囲を見回して現在地を確認しようとしていたが、残念ながらそこは彼の知る場所ではなく、どちらへ進めば船に戻れるのかわからない。
いつまでもここには居られない、という唯一確かな気持ちが彼を焦らせる。

「とにかくみんなと合流しないと……でもどっちに行けばいいんだ？」
「ごめんね。私は全部忘れちゃってるし……」
「いいんだ。シルクは悪くない。おれが覚えてなきゃいけなかったのに」
焦るチョッパーは苦悩し、いっそのことがむしゃらに歩き出そうかと考え始める。
そんな折、高い草むらの向こうから草が揺れる音が決めた。
咄嗟に二人、特にチョッパーが警戒して身構え、そちらに振り返る。がさがさという大きな音は確実に誰かがこちらへ向かっている証明だった。
頼むから野生動物であってくれ。
そう願いながら戦闘になるかもしれないという心積もりで居て注視する。すると草むらを掻き分けて勢いよく人が飛び出してきた。
顔を見れば瞬時に二人がサンジとウソップであることに気付いた。
チョッパーはすぐさま笑顔になり、シルクは不思議そうに彼らを見つめる。
「サンジ！　ウソップ～！」
「シルクちゃ～ん！　こんなところに居たんだね～！」
「え？　だ、誰？」
シルクが思わず呟いた一言にサンジが石になったかの如く固まる。
少し遅れて彼の隣に並んだウソップは気付いていなかったのか、二人を見つけたことに安堵して笑顔だった。困惑しているシルクとチョッパーにいつも通り話しかける。
「お前ら無事だったのか！　しかし何したんだよ。町の連中が追いかけてきたんだぞ」
「あの、ウソップ……実はさ」
「こっちはルフィを見つけたぞ。でもよ、実を言うと問題が起こってて……いやわかってる。驚くのはわかるが落ち着いて聞いてほしい」
「実は、シルクが……シルクが記憶喪失になっちゃったんだ」

「そう、ルフィが記憶喪失になったんだ――なっ、なにぃ!?」
お互いの発言に、ウソップとチョッパーにサンジも加えた三人が驚愕した。
誰もが相手の言葉を待つ余裕を失くして我先にと話し始めてしまう。そうなってしまう程度には受け入れ難い状況だったようだ。
「シルクが記憶喪失になったぁ!? ほ、本気で言ってんのかそれ!?」
「ルフィが記憶喪失!? なんでそんなことになってんだ!?」
「シルクちゃ～ん!? ひょっとしておれのこと忘れちゃったの!? 他の奴らならいざ知らず! そんなぁ～!?」
「そりゃそうだろ! おれたちのこと忘れてお前のことだけ覚えてるわけねぇだろ!」
次から次に仲間たちが記憶喪失になっていくという、今まであり得たはずがない、そしてあり得てほしくない状況である。
ウソップは頭を抱えて唸り、チョッパーは狼狽し、サンジはシルクを見つめて大粒の涙を流す。
シルクだけは彼らの感情についていけず、何を言っていいかもわからず困り果てていた。
「と、とにかく、これは……どうすりゃいいんだ!? キリとゾロと、ルフィとシルクも記憶喪失になっちまったってことだよな!? 一体どうなってんだよ……!」
「それがわからないんだ。ちょっとはぐれただけなのに、シルクがおれのことわからないって」
「ルフィも同じようなこと言ってたし、何が起こってんのかさっぱりだ。シルク、本当におれたちのこと忘れたのか?」
ウソップが縋るように見つめると、彼女は悪いと思いながらも恐る恐る頷く。
「うん……ごめん。君たちが誰なのか、わからないや」
「そ、そうか……」
「シルク、この二人もおれたちの仲間だよ。こっちがウソップで、こっちがサンジ」
同じく取り乱していた様子のサンジだが、新たな煙草に火を点けて

煙を吸い、大きく息を吐き出して自分を落ちつけようとする。その顔は真剣そのものだ。
この状況がどれほどまずいか、彼だって理解している。
ついに女性にまで危害が及んだことで、今では犯人に対する怒りすら感じられた。
「少なくともこれではっきりした。あのガキがおれたち一味を狙ってることは間違いない。アホの順に狙ってるのかと思ったがシルクちゃんが狙われたならそうじゃないようだな」
「いや単純に戦闘力がある奴からだと思うけど」
「となれば、今ここに居ないナミさんやロビンちゃんが心配だ。ルフィなら記憶喪失になっても死ぬことはねぇだろうが、レディを危険に晒すわけにはいかねぇ。船に戻るぞ」
真剣な眼差しで言ったサンジはシルクの前へ移動し、地面に膝をついて手を差し出した。
「お手をどうぞ、シルクちゃん。あなたのナイトです」
「おい、やめろ。お前がどんな奴か覚えてねぇんだぞ。仲間にただの変質者だと思われる」
「え？　変質者じゃなかったのか？」
「変わった人なんだね」
サンジの行動を見ただけならば紳士的で済んだかもしれないが、ウソップとチョッパーの反応を見てシルクは苦笑し、手を差し出すのを躊躇った。
結局はウソップがサンジを小突いてやめさせたため、一同は普通に歩き出すことになる。
ウソップが記憶している限り、現在地は海岸からそう遠くないらしい。
ひとまず海岸まで出れば船に戻るのは簡単だろうと彼らは前へ進み始めた。
傍に居るだけでわかる。シルクは同行しながらひどく緊張していた。
それは海賊だと語る初対面の男たちを相手にする態度だ。決して

仲間に対するそれではなく、彼女が記憶を失っているのを肌で感じる。
キリやゾロ、ルフィの時にも感じたが、喪失感は大きい。
何もしていなくても不思議と彼らまで緊張してしまい、耐え切れずにウソップが溜息をついた。
「はぁ……キリやゾロがどこ行ったかだけでも頭が痛ぇのに、その上ルフィとシルクまで。これからどうなっちまうんだ？　おれたち……」
「考えても仕方ねぇだろ。あの口振りからすりゃあのガキが犯人なんだ。とっ捕まえて奪った記憶を取り戻す。それでいい」
「そりゃそうだけどよ。あいつ、金獅子の手下なんだろ？」
「関係あるか。おれたちの仲間に手を出したんだ。ガキだろうが許されやしねぇよ」
そう語るサンジの表情がより一層険しくなったのをウソップは見た。
「特にシルクちゃんの記憶からおれの存在を消しやがったのは許せねぇ。今までの時間の積み重ねが全て無駄になったってことだぞ？　レディの記憶を奪ったこと、後悔させてやる」
「やっぱりそっちがメインか。わかってるとは思うけどルフィたちもだからな」
「男は知らん。いや、むしろ好都合じゃねぇか？　あいつらを教育してやりゃ前より扱いやすくなるかもしれねぇ」
「そりゃ無理じゃねぇか？　記憶を失っても、あいつらそのままだったぞ。ルフィなんか絶対おれたちの言うこと聞きゃしねぇって」
先頭をサンジとウソップに任せて、二人の後ろを歩くシルクは、彼らの会話を聞いていて少しでも状況を理解しようと頭を働かせていた。
彼らの一味にはルフィという人物が居て、彼も記憶を失ったということはわかった。
それについて二人は、チョッパーも動揺しており、おそらく精神的な支柱になっていたのだろうと想像して、シルクは麦わらの一味への

理解を深める。
自分も彼らの仲間だったらしいが、一体どんな冒険をしていたのだろうか。
名前、経歴、過去の一切を忘れた彼女が興味を持ったのはそこだった。
いつの間にか不安は薄れていて、かつての自分についてより、一味の航路が気になってしまう。状況が状況なら彼らに聞いただろうが、今はまずいだろうとそれはやめた。
隣を歩くチョッパーを見下ろす。
表情は優れず、地面を見つめながら何かを思案しているらしい。
彼を心配する気持ちもあって、シルクは彼に声をかけた。
「ねぇ、ルフィってどんな人？」
「ルフィ？　ルフィは……すごい奴だよ。勝手にどっか行っちゃうし、すぐ怪我するし、人の分のメシまで食べちゃうけど。強くて、大きくて、本当の海賊なんだ」
「そうなんだ。本当の海賊か」
「でもルフィまで記憶喪失になるなんて……今回の敵はそんなに強い奴なのかな」
抑えきれずにチョッパーが溜息をついた。
顔色も優れず、彼自身が他人の心配をできる状態には見えない。
それくらい影響力のある人なのだろう。まだ見ぬルフィを想像してシルクは納得した。
少し歩くだけで海岸沿いへ出ることができた。どうやら道は間違っていなかったようだ。
船がある方角もわかるらしいウソップへ続いてそちらへ向かっていく。しかし少し進んだだけで森の奥から声が聞こえてきた。彼らを探しているという町の住民たちだろう。
咄嗟に警戒心を露わにした二人が姿勢を変えた。
「お、おい、またさっきの奴らだぞ。チョッパー、お前ら何かしたのか？」
「おれたちじゃないよ。でも、町のみんなが記憶喪失になったのが

おれたちのせいだって言われたんだ。多分さっきの子供が言ったんじゃないかな」
「なんだそりゃ！　おれたちは被害者だぞ！」
「それも作戦の一つってことか。面倒なことしやがるな」
見つかることを恐れたサンジが煙草を携帯灰皿の中に押し込んだ。
戦闘になったところで負けるつもりはないが、相手は海賊や海軍ではない。箒やフライパンで武装した、戦闘に慣れてさえいない町民。流石に蹴り飛ばすのは気が引ける。
身を屈めて草むらに身を隠した彼らは、町民の動きを耳を澄まして探ろうとしていた。
あいにくこの森は草が木に負けないほど高く伸びていて視界が悪い。相手の姿が見えなかった。言い換えれば町民からもこちらは見えず、身を隠すには好都合である。
「別におれは男が相手ならいくらでも蹴り飛ばしていいんだが、記憶を失っててもシルクちゃんが居る手前、それはできない。できれば見つからずに移動したいところだが」
「メリーが見つかったらどうする？　ここまで来てたら多分遠くないぞ」
「最悪、一旦船を出す必要があるかもな。少なくともあいつらに見つからない場所まで」
「マジかよ……キリとゾロが見つかってねぇままなのにな」
「あのガキの口振りからするとまだ島は出ねぇだろ。チャンスはある。それより先にナミさんとロビンちゃん、シルクちゃんの安全を優先だ」
「少しはおれたちのことも気にかけてくれよ……」
呆れたウソップが嘆息するが、普段とまるで変わらないサンジは平然とした態度だった。
こういう関係性なのか。シルクはそう理解し、サンジが女性に優しい、或いは異様なまでに甘いのだということまで知る。
二人の背から目を離した時、彼女はひらりと宙を舞った紙切れを見つけた。

それは海の方へひらひら飛んでいって、空中で動きを止める。
不思議な光景だった。本来ならあり得ない。
まるで意思があるかのように海の上で停滞して、風に揺れながら彼女の視線の先にあった。
記憶を失ってもこれまで得た知識まで失った訳ではない。それが異常であることは理解できる。
シルクは警戒する様子もなく、ただ不思議そうにその紙のことを二人に質問した。
「二人共、あれは何？」
「なんだいシルクちゃん？　何か見つけた？」
「うん。紙が飛んできたんだけど、海に落ちずに浮いてるんだ」
「紙？　それって――」
二人の視線が宙に浮かぶ紙を見つけた。その様子を見たことがあり、覚えている彼らは咄嗟に脳裏へ一人の顔を思い浮かべて、彼の能力に違いないと考える。
そうなれば自然と周囲へ視線を巡らせた。
「キリか？　どっかに居んのか？」
「隠れる意味があるのかよ。おい、こっちに気付いてるならさっさと出て来い」
「あれ？　ちょっと待って、チョッパーは？」
シルクが、隣に居たはずのチョッパーが居ないことに気付く。ついさっきまで居たはずなのだが姿形の欠片もなかった。ちょうど不思議な紙切れの存在に気付いた後だ。
訳も分からず周りを見回したサンジとウソップが怪訝な顔をする。
改めて紙切れに目を向ければ、今や浮かぶことを止めて海面に落ちて漂っていた。
あまりにもタイミングが良過ぎないだろうか。
紙切れへ目を向けているほんの一瞬、チョッパーが姿を消してしまった。
おかしいとは思いながらも、サンジとウソップは仲間を疑うことはできず、混乱する。

キリがチョッパーを攫ったなど、考えられない話だ。
彼は記憶を失ったはずで、能力の使い方も忘れていたはず。情報は全員で共有していたのだ。
「これは……どういうことだ？」
「わ、わからねぇ。でもさっきのはキリだよな？」
「ああ、多分な。問題なのはあの紙に気を取られてる間にチョッパーが姿を消したってことだ」
「キリが何かしたってのか？　そんなのあり得ねぇだろっ」
「だが事実だ。忘れるなよ。おれたちはまだ何が起こってるのか理解できてねぇんだ」
サンジが厳しい視線を森の奥へと向ける。
ウソップは恐れを抱いた様子で顔を青ざめさせ、嫌な想像を振り払うように頭を振って、恐々と静かな森へ目を向ける。
しばし静寂に包まれていた森の奥から、美しい音色が聞こえてきた。
位置は遠い。だが確実に誰かが演奏しているだろう楽器の音だ。
「ありゃなんだ？」
「町の奴ら、じゃねぇよな。だったら……」
「この音、聞いた気がする……確か、夢の中で」
ぽつりとシルクが呟いた。
二人が振り返って彼女の表情を確認する。
シルクは笛の音に聞き入っているのか、それでもおかしな様子だったが、眠気を覚えているかのようにうとうとしていて、今にも眠ってしまいそうだった。
「さっきまで聞いてた曲……暖かくて、優しくて、だけど寂しい……私の知ってるみんなが、どこかへ行っちゃうような感覚……」
「シルクちゃん？　どうしたんだ」
「なんか変だぞ。おいシルク……シルク！」
ウソップが大声で名前を呼んだことで、彼女はビクッと震え、正気を取り戻した。目はぱっちりと開いて驚いた顔で二人を見ている。
ほんの数秒、遠くから聞こえる音色を耳にして様子が変わっていた

ようだ。
これは何かあると気付かぬはずがなかった。
「な、何？　ごめんなさい、なんか、急に眠くなっちゃって……」
「おいウソップ、こりゃあ」
「ひょっとしてあいつか？　じゃあキリやチョッパーは――」
音色は今も続いている。探すチャンスは今しかない。
顔を見合わせて二人は決断した。
ここで躊躇っている場合ではない。仲間を取り戻せるなら今すぐ行動だ。
「探しに行こう！　あの子供は近くに居るぞ！」
「シルクちゃん、もう少しだけ付き合ってくれ。調べてみる価値はありそうだ」
「わかった。私もついていくよ」
三人は船に戻ることを後回しにして、再び森の中へ入った。
音色が聞こえる方へ、音の出所を探して早足で進む。しかししばらく続いていた音色はその途中でぴたりと止まってしまった。それなりの長さだったが曲が終了したのだろう。
それでも方角は判明している。三人は迷わずそちらへ進んでいた。
草の長さが徐々に長くなり、すぐに木と並ぶほどの高さになって、視界が悪くなる。それらを掻き分けてさらに進み、音の出所を探っていた。
残念ながら誰かに出会うことはなく、例の少年の姿も見当たらない。
曲が終了したのか、それともこうなることを恐れて逃げたのか。どちらにせよ、このままでは結局何の収穫もなく戻るしかないのかもしれない。
上手く煙に巻かれている気がしてならない。
苛立ちを隠せないサンジとウソップは足を止め、変化の見られない周囲を眺める。
探すか、戻るか。今後の進退を決めなければならなかった。
「くそっ、チョッパーはどこだ。いっそのこと呼んでみるか？　町

の連中に気付かれる恐れもあるが贅沢は言ってられねぇ」
「そういやさっきから町の奴らの声が聞こえねえぞ。どうなってんだ？」
「ちくしょう、最初から全部後手後手だな。おいチョッパー！　ここに居るのか！　居るんなら出てこい！　一旦船に戻るぞ！」
「チョッパー！　キリィ！　早く出てこーい！」
町民が追ってきている状況から考えて、見つかるのはまずいとも思っていたが、募る焦りから堪らずチョッパーの名を大声で呼び始めた。二人は似たような予感を覚えていたようである。しかし呼んだところで反応はなく、返事はない。
代わりにではないが、がさがさと草むらの揺れる音が聞こえた。
シルクが反射的にそっちを見て、何かが動く影を見つける。
「あっち！　何か居たよ！」
「チョッパーか？　お前どこ行くつもりだよ！」
「待てよチョッパー！　何があったんだ！」
シルクが示した方向に、今度は彼女を先頭にして走る。
がさがさと草むらを揺らす音が大きく聞こえていて、逃げていることは明らか。相当慌てているらしいこともわかる。だが幸いにも真っすぐ逃げていたようだ。
三人は大慌てでその影を追い、一目姿を見ようと目を凝らした。
やがて背の高い草むらを抜け出て、視界が開けた場所へ出た。
三人は一旦足を止めて周囲を見回す。
最初に気付いたのはウソップだ。数メートル先にある木の下にチョッパーが居たのだ。
「あっ」
思わず声が出て、慌てずに歩いて向かう。
ウソップの後ろに続いてサンジとシルクも彼の下を目指した。
チョッパーはなぜか、木の幹に隠れるような姿勢で立っていた。しかし残念ながら隠れる方向を間違えていて、三人からは全身が視認できて、頭の一部だけ木の幹に隠れている。驚きもしない、いつもの彼の間違った隠れ方だ。

無事だったことに安堵しながら、その姿勢をおかしいと感じつつ傍へ寄る。
なぜ、仲間であるチョッパーが三人の前で隠れなければならないのか。
嫌な予感を覚えつつ近寄ると、チョッパーは彼らを見ながらびくりと震えた。
ただの冗談であってくれ。そう思いながらウソップが声をかけてみる。
「チョッパー……お前、おれたちのこと、わかるか？」
チョッパーは見るからにビクビクしていて、怯えていた。まるで初めて会った時のように。
今にも逃げ出しかねない姿にサンジが嘆息し、否定したい気持ちを抑えて納得する。
彼もまた記憶を失ったのだ。

眠りを操る者

「どうしてこんなことになるのよ……」

メリー号の甲板で、思わずナミは頭を抱えてしまう。

戻ってきたサンジたちから状況を伝えられた今、チョッパーとシルクは見つけたが、二人共記憶喪失になってしまったことを理解した。途中まではシルクだけだったのだがほんの数分目を離しただけでチョッパーも同様の状態になってしまったと聞かされている。

とても簡単に受け入れられる状況ではなく、彼女は悲しげな顔をしていた。

これで五人。姿を見せないキリとゾロ、一人で動いたルフィ、彼を探して島内に入ったシルクとチョッパー。仲間たちが次々に記憶喪失になっていく。

今まで体験したことのない状況は彼らをひどく混乱させていたようだ。

「ルフィを探しに行ったらシルクとチョッパーまで……どうしたらいいのよ。だってあの子供とは会わなかったんでしょ？」

「ああ。でもおれたち、笛の音を聞いたんだ。その時シルクの様子がおかしくて――」

「ちょっと待って。笛の音？」

ウソップの言葉にナミが反応すると、彼女はロビンと顔を見合わせた。

ちょうどそんな話をしていたところだ。どこからともなく聞こえてくる笛の音色が怪しいのではないか。ひょっとすると能力を使うための条件かもしれない、とそう考えている。

「私たちも聞いたわ。その時ルフィがおかしくなって、私たちを攻撃してきたの。名前を呼んでも聞こえてなかったみたいで、ロビンのおかげでなんとか正気に戻ったんだけど」

「ルフィが？　それでメリーが傷ついてんのか……」

「おかしいと言えばおれたちも妙な物を見た。チョッパーが姿を消す直前、紙を見たんだ。勝手に宙を飛んで動く紙をな」

続きを受け取るように言ったサンジを見て、ナミが怪訝な顔をする。
「それって、もしかしてキリ？」
「だとしか思えない。だが本人の姿を見ることはできなかった」
「なんだか変な話ね……それじゃあつまり、キリが注意を引いたか、チョッパーを攫ってどこかへ連れ去ったってこと？」
「最初はあり得ないと思った。だがルフィも同じような状態だったとすりゃ」
彼らは結論を出そうとしていたようだ。多くを言わずともわかる。
少なくともはっきりしていることは、敵が能力者だということ。
集めた情報を脳内で整理したロビンが代表して呟く。
「だんだん情報が揃ってきたわね。つまり、敵は対象を眠らせることで記憶を奪い、尚且つ自分の能力の影響を受けた人間を操ることができる。そういうことでいいかしら？」
「あ、あり得んのか？　そんなもん最強じゃねぇか」
「だけど実際、ルフィは私たちを襲ってきたし、明らかに目の色が違ってた」
「それで、対象を眠らせるには笛の音を使うってことだな。この推理が正しけりゃ」
四人は同じ方向に目を向ける。
記憶を失くした彼らは危機的な状況を理解してはおらず、驚くほど呑気に過ごしていた。
「ぎゃあああ～!?」
「おもしろトナカイぃ！　お前おれの仲間になれェ！」
「助けて～!?」
「ふふ。二人共仲がいいんだね」
すでに仲間だというのに、いつかのようにルフィがチョッパーを追いかけ回して、シルクはそれを微笑ましそうに見守っている。
普段なら穏やかに見ていていい光景だが今は笑えない。
疲れた表情の彼らは嘆息せずにはいられなかった。
呆れているナミは騒ぎを見つめながら思わず呟く。

反応したのはウソップだった。
「見たことあるわね」
「ああ。中身は変わってねぇからな」
「ちゃんと元に戻るのかしら。一生このままなんてことになったら……」
「そうならねぇようにするには、やっぱりあいつを見つけなきゃいけねぇだろ」
気を取り直したナミは他の三人に目を配り、改めて作戦を練ろうとする。
「落ち込んでても仕方ないわね。対策を考えましょ」
「とりあえず相手が能力者ってことはわかってんだろ。でもよぉ、ルフィたちがやられちまうような相手だぞ。おれたちでどうにかできんのか？」
「バカ言え。よく考えろ。ルフィが受けたのはかすり傷程度で、戦闘の形跡もほとんど残っちゃいねぇ。単に相手の能力を知らなかっただけだ」
「相手が音を武器にするなら、笛の音色を聞かなければ対処可能かもしれない。今のところそれに賭けるしかないようね」
ロビンの言葉を受けてウソップが鞄に手を突っ込み、取り出した物を皆に差し出した。
渡されたのは耳栓だった。
これで対策をしようということなのだろう。受け取った瞬間に全員が理解する。
「お前らにこれを渡しとく。通用するかわかんねぇけど無いよりマシだろ」
「これでどうにかなればいいけどね……」
「作戦はもう決まったかな？」
注意を耳栓へ向けているちょうどその時だった。
以前と同じで陸地から声をかけられる。慌ててそちらに振り返れば、さっきとほとんど同じ光景がそこにあって、件の少年が立っていた。浮かべられた薄い笑みを見て全員に緊張が走る。

またしても正面から堂々と姿を現してきた。これは宣戦布告に他ならない。
「そろそろ考え直してくれたかな。僕らに従うなら、仲間の記憶は返してあげるよ」
改めて姿を視認できたことで身構える。
背丈が小さい、力もさほど無さそうなこの少年にルフィたちが負けたのだ。どれだけ警戒していても足るものではない。
状況が理解できていない様子の者が数名居て、ルフィの背後にナミが隠れる。
それでも彼女は視線を鋭くして、不安そうな表情で彼に声をかけた。
「あんた、こんなことして私たちが言うこと聞くとでも思ってるの？　人に頼むにはそれなりの態度ってものがあるでしょうが」
「そうかな？　わかりやすいようにと思って人質を取ったつもりなんだけど」
「は、早くルフィたちの記憶を返せ～！　コノヤロー！　あとキリとゾロをどこやったんだ！　そっちも返せ～！」
同様にいつの間にかルフィの背後に隠れていたウソップが声を張り上げる。威勢良く聞こえるが腰が引けていて姿は情けなかった。
少年は動揺することもなく溜息をつく。
「やれやれ。ちっとも話を聞かないね。それでいて自分たちだけ要求するんだから」
「当たり前よ！　こっちは海賊なんだから！　それにあんただって同じでしょ！」
「背中に隠れて言ってもかっこつかないよ」
冷静に言いのけた彼は何やら思案し始めた。
警戒しているのはわかるがやはり子供が相手というせいか、攻撃してくる素振りはない。おかげで突っ立ったまま考えられる時間は十分にあった。
「君たちが降参しないなら全員の記憶を奪わなきゃいけなくなる。それはそれで構わないけど、できれば自分の意思で従ってくれた方が

いいんだよね。人形遊びは好きじゃないんだ」
「人形遊びか。可愛げのねぇガキだぜ」
「さて、どうしよう。どうすれば君たちが言うこと聞いてくれるかな」
あくまで自分のペースを崩さない少年に対して、険しい表情のサンジが一歩前へ出た。
もし笛を吹く素振りを見せたなら動くが、今のところその様子はない。
ひとまず話してみようと思ったようで口調は冷静だった。
「一つ聞きたい。なぜおれたちを狙うんだ？　そういう命令でもあったのか？」
「いいや。これはただ僕の暇潰し」
「暇潰しだぁ？」
「たまたま見かけたからちょっかい出してみたくなっただけだよ。見つけた時は驚いたもんさ。最近1億を超えたばかりの麦わらのルフィ」
少年がルフィに目を向けると、本人は何もわかっていない顔で首を傾げる。
「お前ら何の話してんだ？　あいつ友達か？」
「いいから黙ってろってっ。ここはとりあえずサンジに任せとけ」
「君たちなら話題性もあるし、ひょっとしたら喜ばれるかもしれないでしょ？　だからただの思いつきだよ」
「勝手なことを……手を出す相手を間違えたな。後悔させてやるぞ」
「できるかな？　それもいいね」
怒気をぶつけてもさらりと受け流されてしまい、まるで相手にされていない。自分こそが優位に立っているとでもいうのか。彼らを値踏みするような視線が気になった。
サンジの視線など意に介さず、彼の声は楽しげだ。
「彼らの記憶を返せば、僕らの傘下になってくれるかい？」
「そりゃ無理だろうな。うちの船長は誰かの下につくタマじゃねぇ

よ」
「うーん、そうか。どうしよう。このままじゃいつまで経っても進展しないね。何か他の方法を考えないとずっとこの言い合いが続きそうだ」
目を伏せて考え込む少年を注視しながら、サンジは気取られないようにそっと歩いた。
ロビンの傍へ移動すると声をひそめて彼女に尋ねる。
「ロビンちゃん、君の能力であいつを捕えられないか？」
「ええ、可能よ。姿さえ見えていれば」
「頼む。まずはあいつの笛を奪ってくれ。能力さえ使えないなら、おれが押さえ込む」
「わかったわ」
簡潔に作戦を伝え、サンジは注意しながら一瞬ウソップに目を向けた。
「ウソップ、お前は援護だ。逃げるようなら狙撃していい」
「よ、よーし。援護なら任せろ」
彼が小声で喋っていることから状況を察し、ウソップも声を小さく、相手にバレないよう気をつけながら鞄からパチンコを取り出す。もし彼の行動で少年が警戒すれば作戦失敗だ。少しでも成功率が上がるように気をつけなければならない。
ロビンが胸の前で腕を交差して、ウソップがこっそり準備を終えたのを確認した。
まだ警戒する様子を見せない少年を睨みつけてサンジが彼の方へ歩き出す。
今度ははっきり足音がして少年が目を開いた。こちらに接近しようとしているのは見てわかるが逃げる素振りはない。その態度からはやはり余裕が窺える。
「じゃあこうしよう。今からゲームをしようか。僕に勝てたら彼らは返してあげる」
「ゲームだと？」
「せっかくの機会なんだから楽しまなきゃ。今までと同じやり方で

記憶を奪ってもいいけど、それじゃ面白くないしね」
「せっかくの提案だがゲームなんか必要ねぇよ。こっからはおれが相手してやる」
「あれ？　君一人で？」
「クソガキの相手なんざおれ一人で十分だ。あいつらとは一味違うぞ」
「そうかな。その分じゃ一緒だと思うよ」
メリー号を降りるまで少年が動く様子はなかった。
サンジが少年と対峙する。逃げる素振りはない。大の男が相手ではあるが距離を取ろうとする様子すら皆無で、初めの位置から全く動いていない。
それ相応の自信と策があるのだろうとサンジは考えたが、退く考えはなかった。
どの道すぐ後ろに船がある。仲間が居る。自分が前に立って守らなければと考えていたようだ。
子供を蹴るのは気が引けるが覚悟はしている。或いは、押さえ込めさえすればそれでいい。速さには彼も自信があった。
ポケットから手を出して、身構えたサンジが迷わず地面を蹴る。
「その笛吹く暇与えねぇぞ！」
サンジが一直線に駆け出した。
最短距離を最速のスピードで。それのみを考慮した姿勢で、回避や防御を省みず、何があろうと敵を捉えるために走る。
少年はフッと笑みを浮かべて笛を構えた。
息を吹き込もうと口をつけかけた時、突然彼の体から八本の腕が生える。狙い澄ましたタイミングに少年の顔から笑みが消えた。気付いた時には首、両腕、両足を掴まれて固定されており、さらに残った二本の腕が笛を奪って遠くへ投げてしまう。
完璧なタイミングだった。そうなることを想定して走っていたサンジは迷わず飛び込み、転がるようにして少年を地面に押さえ込む。
投げられた笛は地面に転がり、倒れた状態では届かない距離にある。

作戦は一瞬にして、そして呆気なく成功した。
少なからず驚いている様子の少年は、すぐに先程と同じ微笑を浮かべてサンジの顔を見上げる。
「へぇ、そうなんだ。まだ能力者が居たんだね」
「予想通りにいかなくて悪かったな。シルクちゃんとあいつらの記憶を返してもらおうか」
「確かに、これは僕の負けだね」
「よーし！　でかしたぞサンジ！　能力さえ使えなきゃもう安心だ！」
笑顔で叫んだウソップがメリー号を飛び出した。
先程とは違って安堵した顔だ。サンジが押さえているなら心配はない。捨てられた笛を拾おうと駆け寄り、タツノオトシゴの形をしたそれを見下ろした。
「そのまま押さえといてくれよ。こんなもんがあるからいけぇんだ。いっそ壊すか海に捨てるかすればそいつも諦めがつくだろ」
「んだとォ!?　ふざけんじゃねぇぞコノヤロー！」
ウソップの目の前から突如怒声が聞こえて、驚愕して体が硬直した一瞬、笛が自発的に動いてその場から跳ね上がった。ウソップが驚いて跳びはねるのと同時に、笛は意思があるかの如く、少年を押さえていたサンジへ跳びかかる。
虚を突かれたことで反応は遅れ、死角からの突進を避けられなかった。
笛に体当たりされたサンジが跳ね飛ばされてしまい、その一瞬に少年が笛を回収し、彼らから離れるべく飛び退く。
「ぎゃあああ～っ!?　笛が喋った!?　そして動いた!?」
「すんげぇ～！　なんだあいつ！　不思議笛だ！」
「壊すぅ!?　海に捨てるぅ!?　バカ言ってんじゃねぇぞコノヤロー！　こちとらまだ本気出してねぇんだ！　舐めるんじゃねぇよボケがァ！」
喋るタツノオトシゴの笛は少年の手の中で激しく暴れていた。
慣れているのか、彼は涼しい顔で抱えたままである。

突然攻撃を受けたサンジは咄嗟に起き上がって距離を取った。
笛が喋っている。さらに動いて暴れている。
想像もしなかった事態に驚きを隠せない。まさか自ら少年の下へ戻るとは思わなかった。彼らの作戦は成功したが、状況は一瞬にして元通りにされてしまったようである。
ウソップが慌てて近くの木の陰へ逃げ込む一方、目を輝かせたルフィが船から飛び出してくる。動く笛に興味津々の彼は特に警戒もせず少年の下へ駆け寄ろうとしていた。それを慌てて追いかけたナミが肩を掴んで止める。
この状況で彼が動き出してしまってはさらに混乱する一方だ。
余計な行動を取らないよう、必死に彼の行動を制止する。
少年は彼らにではなく、自身が持つ笛に向けて声をかける。
この状況を危険視してはおらず、さも当然という態度である。或いは、こうなることが初めからわかっていたのかもしれない。そうであってもおかしくないほど冷静だった。
「落ち着いてよタツ。今のは良い判断だったよ。そんなに怒ることないじゃないか」
「何言ってんだバカヤロー！　あいつらおれたちを襲ってきやがったんだぞ！　これで怒らねぇなんてどこの聖人だよ！」
「まぁまぁ。先に襲ったのはこっちなんだし」
「ノコは甘ぇなぁー。んなこと言ってたら足元掬われるぜ」
「な、なんなんだあれは……笛じゃなかったのか？　生物？　生きてんのか？」
ウソップの小さな呟きは彼らに聞こえたようで、少年が振り返って平然と告げる。
「れっきとした笛だよ。いくらグランドラインでも、人の言葉を操るタツノオトシゴは僕は見たことがないなぁ」
「おれが喋れると何か問題あるってのか？　笛か？　笛だからか？　笛が喋るとおかしいってのかよコルァ！」
「落ち着いて。彼らはそんなこと言ってないよ」
彼らの会話から察するに、少年はノコ、喋る笛はタツという名前の

ようだ。
性格は対照的。一切冷静さを崩さないノコと感情的なタツ。初めて見るのは当然というほど異質な存在で、見ていて飽きないのは確かだが、冷静に受け止めるには時間が必要だった。
必死にルフィを止めていたナミは表情を歪めずにはいられなかった。
彼が何であれ、喋る笛がなんであれ、彼らが今まで見たことの無いタイプの敵で、危険なのは間違いないだろう。笛を奪うという友好的な手段も無駄だと見せつけられたのだ。ナミは少なからず恐怖していた。
咄嗟にまずいと感じた彼女はルフィの背を押して歩き出す。
「ルフィ！　こっち来て！」
「なんだよ！　おれはあの不思議笛が見てぇんだ！」
「いいから言うこと聞いて！　シルク！　チョッパー！　あんたたちも！」
「え？　あ、うん」
「お、おれもか？」
シルクとチョッパーも同行させ、強引にルフィを引っ張る彼女は船の中へ入り、一目散に船倉へ誘導する。
三人を移動させたナミは耳栓を手渡し、厳しい表情で言い聞かせた。
「いい？　しばらくここでじっとしてて。耳栓して耳を塞いで、何も聞こえないように」
「なんでそんなことすんだよ。それより不思議笛がさぁ――」
「シルク、チョッパー、ルフィがどこか行かないように見張ってて」
「うん。わかった」
「え、う、うん……こいつと一緒に居なきゃいけないのか？」
さっきまで追いかけられていたせいだろう、チョッパーはビクビクしながらルフィを見ている。現在のルフィの興味はタツに向けられているため、今は何もされていないが、しばらく同じ部屋に居ればどうなるかはわからないという不安が感じられた。

ナミ自身、今の状況では焦りを抱いている。彼の不安を取り除いている時間はない。
慣れた動作でチョッパーの帽子にぽんっと手を置き、撫でる仕草を見せた。
「大丈夫よ。ルフィはあんたを傷つけたりしない。ほんのちょっとだけだから」
「うん……わかった」
「状況はよくわからないけど、ここに居るだけでいいんだよね」
「そうよ。またすぐ戻ってくるから、それまで甲板には出ないで」
言い残して踵を返したナミは再び甲板へ戻った。
鼓動が早くなっている。緊張してわずかに汗ばんでいて、嫌な予感がしていた。
ルフィもシルクもチョッパーも、まるで赤の他人のようで、普段ならばいざ知らず今は頼ることができない。自分がなんとかしなければならないのだ。
扉を開けて外へ出た直後、まず真っ先に状況を確認する。
目立った変化はない。先程と同じ光景だ。
ノコはまだ能力を使用する素振りを見せず、サンジは警戒した様子で彼と対峙し、一度船を降りてしまったウソップは戻るに戻れず木陰に隠れて状況を見ている。甲板に残っているロビンは冷静な面持ちで彼らを眺めていた。
「もうめんどくせぇ。ノコよ、お前のネムネムの力で全員眠らせちまえばいいんだ。今更こいつらにチャンスを与える必要なんてねぇぜ」
「それじゃもったいないよ。せっかくなら楽しまなきゃ。だって彼ら、話題の人だよ」
「ケッ。話題っつってもたかが知れてるだろ。所詮は前半のレベルだ。現にこいつらの船長はもう仕留めたわけだしよォ」
「もう少し見てみたいんだ。麦わらの一味がどんな人たちなのか」
ノコとタツが会話していることで状況が動かなかったらしい。
ナミはロビンへ駆け寄り、そっと自身の武器を取り出す。

腕に自信はないが戦えないとは言えない。泣く泣く参戦するつもりのようだ。
「ロビン」
「ずいぶんおしゃべりね。タツノオトシゴなら、舌を噛んで死ぬことはないのかしら」
「何を考えてんの!? そんなこと言ってる場合じゃないでしょ!」
「そうね。少なくとも笛を取り上げたくらいじゃ止められそうにないわ」
妙な思考を持つ彼女で、乗船してから日も浅いが、戦闘力を考えれば頼りになる。
ナミは縋るような想いでロビンの顔を見上げた。
「ねぇロビン、さっきみたいに捕まえられない? この際だから相手が子供だからなんて言ってられないわ。なんならそのまま攻撃しちゃって」
「できなくはないけれど、こっちの能力もバレたわ。そう上手くいくかしら」
「ロビンの能力なら大丈夫よ。こうなったら仕方ない。私も援護するから、よろしく」
天候棒(クリマ・タクト)を構えてナミは強い眼差しでノコを見据える。
そんな彼女を横目で確認して、ロビンは胸の前で手を交差した。
当然協力するつもりではいるが、どこか不思議そうな表情だったのも確かだ。
「前から思っていたけど、不思議ね」
「え? 何が?」
「私をそこまで信用していることがよ。よろしく、なんて、初めて言われたわ」
こんな状況で何を言い出すのか。
一瞬きょとんとしたナミだったが、すぐに勝気な笑みを浮かべて答えた。
「何言ってんの。当たり前でしょ? 成り行きとはいえルフィがあんたのこと仲間だって言ったんだから、あんただってもう仲間よ」

「そう……」
「その代わり、乗り込んだからにはきっちり働いてもらうわよ。とりあえず今はあいつをやっつけてくれればそれでいいわ」
「フフッ。ええ。善処するわ」
ナミにつられるようにしてロビンが微笑んだ。
仲間。そう言われたのは新鮮で、不思議な感覚だった。
少なくとも悪い気はしていなくて、任されたからには役に立たなければと思う。
小脇にタツを抱えているノコは依然として笛を吹く素振りを見せなくて、考えが読めないサンジは焦れたのか、小さく舌を打った。
笛の音を聞かせることが能力の使用条件なら、今ここで全員に効果を及ぼすことも決して難しくはないはず。しかし彼はそれをしようとはしない。さっきの発言通り、おそらく遊んでいるのだ。大した危機感もなくこの場を楽しもうとしている。
まるでその考えを証明するかのように、口を開いたノコは再度提案を始めた。
やれやれと言いたげなタツでは彼の考えを変えられなかったらしいことが伝わる。
「それじゃゲームを始めようか。心配しなくても僕は君たちを眠らせないし、記憶を奪うつもりもない。少なくとも今はね」
「ふぅー、やれやれ。わざわざそんなめんどくせぇことを……」
「本当は町の人たちも使って攻めようかと思ったけどやめたよ。これから僕が使う手駒は二つ。君たちは彼らの攻撃を避けて、僕を気絶させれば勝ち。僕が気絶すればみんなの記憶が戻るよ。その代わり今度は、僕も君たちを殺すつもりで攻撃するからそのつもりでね」
平然と吐かれた子供らしくない言葉に、思わず苦笑してしまう。
そうした言葉を口にしながらも彼はどこか他人事で、自分のことのようには聞こえない。
つま先で地面をトントンッと叩いたサンジは、薄く笑みを浮かべながら問いかけた。
「ゲームってのは気に入らねぇが、お前が気絶することが条件って

ことは、お前を蹴り飛ばしていいってことだよな？」
「もちろん。じゃなきゃ難しいだろうからね」
「それを聞いて安心した。ガキだからって容赦しねぇぞ」
「それはもちろんいいんだけど、こっちもただでやられるわけじゃないよ」
そう言うとノコはタツを改めて構え、音色を奏でた。
突然の演奏に身構えるも、彼らが眠らされる様子はなく、それを理解するよりも早く草むらの向こうから新たな人影が現れた。
タツから口を離したノコは不敵に微笑む。
「果たして彼らを抜けるかな？　知ってると思うけど、強いよ」
左右を挟むようにして立ったキリとゾロの間で、ノコは自信満々に宣言する。
彼が手駒と呼んだのはその二人のことだったようだ。
ウソップは息を呑みながらも怒りを覚え、ナミは目の色が違う二人に驚愕しており、ロビンは冷静な面持ちで彼らの姿を見ていた。
一番近くで対峙することになったサンジは、しかし動揺していないようで、小さく鼻を鳴らす。
「へっ、上等だ。ちょうどいいからもろとも蹴り飛ばしてやる」
そう宣言したサンジはネクタイをきゅっと締め上げ、銜えていた煙草を捨てる。
彼が一歩を踏み出すと同時、感情や表情が感じられない二人は機械的に動き出した。

ネムネムの戦い

光を反射し、ギラリと光る刃が猛然と襲い掛かってきた。
思わず歯を食いしばったサンジは背を反らすことで、辛うじて回避することに成功する。しかし体勢を崩したのか、転がるようにして一旦距離を取った。
止まらず起き上がった彼は視線を上げると同時に表情を変える。
周囲にふわりと浮かぶ紙が、針のように鋭く連なり、四方八方から飛来してきた。
刀ならば受け止めようもあるがこれは止めようがない。サンジは即座に跳んで避ける。
無事に避け切ったが着地した時にはすでに眼前へ敵が迫っており、止まる暇は一瞬たりとも与えられない。全て計算され尽くしているかのような連携。一時も相手を休ませない波状攻撃。機械的なそれは彼ららしくないもので、だが確実に強い。
縦横無尽に跳び回るキリとゾロを目の前にして、サンジの表情は曇っていた。
一人だけでも厄介な相手が同時に二人もだ。しかも普段とは違う、綿密に隙を狙うような戦い方は彼の疲弊を誘っていて、避けるだけでも大変な苦労を伴う。
彼らを操っているのはノコの笛の音だ。
常時演奏しているわけではないが、彼の演奏によって動きのパターンが変わる。
手駒とはよく言ったもので、確かに今のキリとゾロはノコが動かす盤上の駒。彼が敵と認識した人間へ襲い掛かり、彼が思う通りに動き、追い詰める。ノコ本人を狙おうものなら即座に二人が立ちはだかって彼を守り、距離を取ればナミたちが狙われる。
不利とは知りつつもサンジが前へ出るしかなかった。
状況は一向に変わらない。
ウソップやナミやロビンの援護があってもそれは同じだ。彼らも決して手を抜いているわけではないが、二人の正確無比な行動によ

り、悉くが無効化されている。
四人が苦心する一方、ノコとタツは上機嫌な態度を露わにしていた。
「ハハハハハッ！　どうしたどうしたァ！　さっきまでの威勢が嘘みたいだなぁ！」
「ふふ、それにしてもよく避ける。思ってたより良い戦いじゃないか」
「クソ野郎ども、舐めやがって……！」
彼らの態度に憤りを隠せないサンジが自らゾロへ蹴りを放った。鋭い視線を持ちながらどこか空虚な目をする彼は、素早く胸の前で二本の刀を交差させ、彼の蹴りを受け止める。
力で押し合っても決着はつかない。サンジの蹴りを受けてもゾロはその場を動かなかった。
少しでも動きを止めるとすぐに次の攻撃がやってくる。
背後に異変を感じたサンジは咄嗟に首を下げ、その頭上を紙の塊が通り過ぎた。
息もつかせぬ連続攻撃。前線に立つが故に誰よりも危険は多い。
キリの攻撃を回避したのも束の間、再びゾロが刀を振りかぶっており、噛み合わせた歯を小さく鳴らしながらもサンジは足を振り回す。
「クソマリモがっ……！　いい加減にしろよてめぇら！」
振るう腕を下から蹴り上げ、刀の軌道を無理やり返させた。
次の攻撃はほぼ同時。サンジの蹴りがゾロの腹を打ち、刃はサンジの腕を切り裂く。
両者共に勢いよく地面へ倒れた。ゾロは蹴られた衝撃によってだが、比較的軽傷で済んだサンジは体勢を崩しただけで、それだけ無理のある動きをしたのだ。
倒れた拍子に頭上を見上げる。
影が差したと思えばキリが紙の槍を持って降ってきて、慌てて彼は地面を転がった。
「うおっ!?」
「サンジィ！　ちくしょう、あいつさえなんとかできれば……！

必殺火薬星！」
苦戦するサンジを見ていられず、慌てたウソップが離れた位置からノコを狙った。
放たれた弾丸は狙い違わず真っすぐに向かっていく。しかしノコの下へ到達する前にキリが投げた紙切れに直撃し、中空で爆発した。
これで何度目かの失敗だ。ノコ本人を狙撃しても必ずキリが防御に回る。
悔しげに顔を歪めたウソップは叫ばずにはいられない。
「ちくしょう、ちくしょう!?　何やってんだよキリ！　お前おれたちの仲間なのによぉ！」
「無駄だよ。君の声は彼らには届かない。何を言っても聞こえない」
「なんなんだよこの能力は……！　あの二人相手に一体どうすりゃいいんだっ」
声をかけるがキリは振り返りもせず。軽い動作であちこちを飛び回り、四方八方へ紙を投げて、前線に居るサンジばかりか、木々を盾にするウソップや、離れた位置に居るナミやロビンにまで攻撃を続けていた。
逃げることすら許されない。絶えず全員が標的となっている。
針のような細い紙が群れを成して飛来してくる。
ナミとロビンは回避のために思わず跳び、地面へ倒れ込んで辛うじて回避した。飛来した紙は地面へ突き刺さり、またすぐに宙へ浮遊してキリの武器となる。この繰り返しだ。彼の得物が尽きることはなく、常に武器を補充しながら戦っている。
倒れた二人は服や肌を汚していて、疲弊した様子で呼吸を乱しながら体を起こした。
普通の人間ではあり得ないほど軽く跳び回るキリを見て、改めてその厄介さを思い知る。
近くに居ようが、離れていようが、どこからでも攻撃が飛んでくるばかりでなく、攻撃の手段は幾通りもあり、絶えず変化する戦法は対策の立てようがない。

攻めも守りもこなす彼一人が居るだけで、驚くほど動きづらさを感じてしまう。
ノコを狙うことはできず、かといってゾロに集中することも許されず、キリ本人を標的にしようと思えば彼は一転して逃げに徹する。戦いが長引くのは主に彼のせいだ。
「もう、どうすればいいのよっ。何言っても反応しないし、サンジくん一人じゃ無理よ」
「まずいわね。何とかしたいところだけど、私の能力じゃ相性が悪いみたい」
珍しく余裕を失ったようにも見えるロビンの様子は、表情こそ普段と大差ないとはいえ、どこか困惑しているらしいことが伝わってくる。
彼女の手から少量の血が流れていた。
能力を使った際、キリの攻撃を受けて傷ができたのである。相性か、それとも彼女の能力について知識がある彼が相手だからなのか、ハナハナの能力であっても優位に立てそうにない。
「六輪咲き（セイスフルール）」
試しに彼女はノコを拘束すべくハナハナの能力を使用する。彼の体から六本の腕が生え、関節を極めて意識を刈り取ろうと狙う。しかし瞬時に小さな紙切れが飛んできて細い腕に触れ、刃物のように鋭利なそれが柔らかい肌を切り裂いた。
ロビン本人の表情が歪んだ。
能力で生やした腕は攻撃を受けた瞬間、花びらのように霧散して消滅してしまう。
その時、ロビンの腕には新たな傷が作られていて、能力で生やした腕が受けた傷と同様の物だ。
ロビンの能力は自身の体の一部を任意の場所へ自由に咲かせることができるというもの。その体の一部がダメージを受けると本体にもダメージがあるだけでなく、生やした体はたとえ小さな傷ができただけでも呆気なく消えてしまう。
強力である一方、花のような儚さも持ち合わせる能力だ。

初めから知っていたのか、途中で気付いたのか、キリはこの性質を確実に突いていた。ノコ本人を気絶させることができないのも、キリやゾロを拘束できないのも、至る所から繰り出される攻撃のせいである。

ロビンの腕から血が垂れたのを見たナミが慌てた。

強いと信じていた彼女の苦戦が信じられない様子で、焦りは隠しきれない。

「ロビン!?」

「平気よ。大した傷じゃない。でも、これじゃちょっと止められそうにないわね」

自身の傷を手で押さえながらロビンが呟く。

状況を考えるに、打開する方法は真っ先にキリを止めること。彼が居る限りはノコに攻撃することは不可能と考えていいだろう。ゾロだけが相手ならばサンジに任せればどうにかできる可能性がある。現状で最大の障害は彼一人だ。

考えたところで簡単にできることではない。サンジの蹴り、ウソップの狙撃、ナミの妙な戦法はともかくとして、ロビンの能力が合わさってもキリの行動が止まることはなかった。

このままの状況が続けばおそらくサンジの体力が先に尽きる。彼の負担はあまりにも大きい。

「改めて考えると、キリは強いわね。味方なのが当たり前だと思ってたわ」

「呑気なこと言ってる場合!? 強くてもなんとかしなきゃいけないんでしょ!」

「でも、彼には弱点がある。そうよね?」

冷静さを取り戻したロビンが言うと、ナミはハッとした表情で背後へ振り返る。

「そうか、水……!」

「まだ希望が無くなったわけじゃないわ。問題はどうやって当てるかだけど」

「考えてても仕方ないわ。バケツ一杯かぶせてやれば止まるでしょ

！」
決断は早かった。ナミは大急ぎでメリー号へ引き返し、バケツを取ろうと船室へ飛び込む。
思いつくのは簡単な作戦。問題は成功するか否かという点だ。
ロビンは自在に跳び回るキリの動きを改めて観察した。
「せめて少しでも疲れてくれればいいわね」
効果があるかはわからないが何もしないよりきっといい。
能力を使用して、ロビンは空中に跳び上がったキリを拘束しようとする。
「六輪咲き（セイスフルール）」
首、両腕、両足を掴んで拘束した。このまま関節を極めようと腕に力を入れた瞬間、彼の全身はぺらりと紙になってしまい、手の中からひらひらと抜け出てしまう。
ロビンの手から逃れれば一瞬にして体は元通りだった。
鋭い目で彼女を睨んだキリの手から、槍のような紙が投擲され、ロビンは急いで後ろへ跳ぶ。
「やっぱり捕まえるのは無理ね。でも……」
走りながらさらに能力を使用する。
再び生えた二本の腕がキリの首を掴んだ。またしても首から上が紙になって手から逃れる。しかしその直後、キリの体から腕が生え、両腕と両足を掴む。それさえも紙になって回避されてしまうが時間稼ぎにはなっていたようだ。
逃れられるならそれでもいい。ロビンはキリの足止めに努めることを決めたらしい。
自身の体から、地面から、無数に生える腕が彼を狙い、キリは一転して回避に追われる。
狙撃の合間にそれを見たウソップは思わず笑みを浮かべた。
状況を打開する一手になったなら幸運だ。ついガッツポーズを取って喜びの声を上げていた。
「いいぞロビン！　これなら流石にキリも――！」
叫んでいる途中で、キリが思い切り腕を振り抜いたのが見えた。

目を見開いたロビンは着地も考えずに横へ跳ぶ。投げられたのは鋭利な先端を持つ紙の針で、避けなければ胴体に突き刺さっていただろう。土の上に倒れ込んでロビンは大きく息を吐いた。
拘束はできずとも一時引きつけることはできたはず。そんな考えを裏切るたった一度の反撃。効果はこれ以上なく見て取れ、ロビンが倒れた拍子にキリは本来のペースを取り戻した。
先程同様、サンジの背後から紙を組み合わせて作った槍を投げつける。
気付いた彼はなんとか回避したが、見てわかるほど疲労は相当なものだった。
「うおおおっ!? てめぇ！ さっきから邪魔すんじゃねぇ！」
「惜しいな、せっかく上手くいったと思ったのに。おいキリ！ こっち見ろォ！」
前後を挟まれ、このままではサンジが危ない。意を決したウソップが叫んだ。
「喰らえ！ ウソップ輪ゴ～ム！」
声に反応してキリが振り向いたが、ウソップは指に輪ゴムを引っ掛けて伸ばすだけだった。それ以上の何かが起こるわけでもなくウソップは静止する。
本来の目的としてはそれでびびってくれればという考えだったのだろう。
全く怯まなかったキリは無表情で腕を振り、無数の紙切れが刃となってウソップを襲う。
「ぎゃあああああっ!? なんでだめだったんだ!?」
「それは、当たり前なんじゃないかしら」
冷やかなロビンの声も聞こえずウソップは逃げ惑う。
木々の間を駆け回り、飛んできた紙切れが木の幹に突き刺さっていく。
なんとか避け切ったウソップは再び慌ただしく走って戻ってきた。
「これならどうだ！ ウソ～ップスペル！ 裸足の足の裏に画鋲が刺さった！」

キリは両手に紙を集めて、大きなハンマーを作り出す。
それを振り上げて前方へ跳び、一切の躊躇なくウソップへ襲い掛かった。
「おおいっ!? まさか効いてねぇのか!? 想像するだけで恐ろしいだろうがっ！」
「いけない」
あまりの素早さに回避が間に合わない。気付いた時には目の前だ。
このままでは直撃すると判断したロビンが能力を使った。飛ぶようにしてウソップへ向かうキリの両腕を絡みつくように掴む。突然の変化で体勢が狂ったようだ。
腕を振り下ろすことができず、仕方なくキリはウソップの眼前に着地した。
色々と想定外の事態はあったがウソップは冷静だった。
これが見ず知らずの相手なら逃げ惑うかもしれない。だがキリは仲間だ。
仲間と戦う辛い状況も、相手をよく知るという一点だけは幸運だった。
鞄に手を突っ込んだ彼は勢いよく水筒を取り出す。
そして半ばキリに体当たりするようにして、その中身をぶちまけたのだ。
「だったらこれだァ！」
水の量はそう多くなかったが、彼の体には十分だった。
ペラペラの実の紙人間にとって、水は他の悪魔の実の能力者以上に弱点となる。少量とはいえ頭から水をかぶったキリの動きは完全に止まり、操られている状態でも呆けた顔をする。
すかさずロビンは彼の両手足を能力で掴んで拘束した。
状況を変えるなら今しかない。ふざけているようにも見えたがこれはウソップの大手柄だ。
時を同じくしてナミが戻ってきた。全速力で走る彼女は一部始終を見ていて、手には海水を入れたバケツが握られている。それはキリにとって凶器となるだろう。

ナミはロビンの傍を通り過ぎ、一目散にキリの下へ向かう。
そして嬉しそうに手を振るウソップの目の前で、キリに向かって思い切り水をかけた。
「ほら！　あんたの苦手な水よ！　しばらくじっとしてなさい！」
今度は頭だけでなく全身が水に濡らされた。
凄まじい効果だ。がくんと膝が折れて座り込んでしまい、見るからに力が入っていない。
すかさずロビンが能力を使う。無数の腕が彼の体と周囲の地面に生えてきて、関節のみならずほぼ全身を掴んで押さえ込む。倒れ込んだキリは見るからに動けそうにない状態だった。
「よっしゃ～！　ナイスだナミ！　ロビン！」
「あーもう……ほんっとに疲れる」
「こっちは任せて。逃がさないわ」
キリが無力化されたことでウソップの視線はゾロとサンジへ向けられる。
彼もこちらに気付いているらしく、ゾロの刀を蹴って防御しながら大声を発した。
「おいウソップ！　こっちを援護しろ！」
「よし！　聞けゾロ！　そして想像しろ！　ウソ～ップスペル！」
「それじゃねぇよ!?　ふざけんな！」
正確に回避しながら器用にこちらを向くサンジに気圧されつつ、仕方なくウソップはパチンコを構えた。別段ふざけたつもりはなかったのだが気に入らなかったらしい。
今はノコのことすら頭にはなく、勢いに任せてゾロを止めるべく狙いをつける。
「悪いなゾロ。大事にはならねぇから、三連鉛星！」
ただの鉛玉を続けて三発。正確にゾロ目掛けて発射される。
気付いたゾロは防御すべくそれら三つを迷うことなく斬り捨てた。
目の前で行ったほんの一瞬の防御。その隙を逃さず、サンジが足を振り上げる。今までの怒りやストレスを全て込めるような一撃が、ゾロの腹へ突き刺さる。

「いい加減どいてろ……！　腹肉（フランシェ）シュート！」
凄まじい一撃が大の男を蹴り飛ばす。
勢いよく飛んでいったゾロの体は激突した木の幹をへし折り、荒々しく地面を転がった。
間を置かずにロビンが能力でゾロの体を拘束する。またしても無数の手が彼を押さえつけ、絶対に動けないよう力を込める。
二人を止めることには成功したようだった。
ロビンの能力で押さえつけられたキリとゾロは起き上がれないらしく、もがきはするが無数の腕の下から這い出ることはできない。
必然的に全員の視線が一か所に集められる。
タツを抱えたノコが微笑を湛えたまま立っていた。
もはや彼を守る者はない。さっきとは違って無防備な状態である。
「マジかよ。やられちまった」
「これは予想外だね……もう少しできるかと思ったんだけどな」
「ハァ、ハァ……お前の駒はおれたちが取っちまった。まぁ元々こっちのもんなんだが」
息を切らすサンジがノコが居る方向へ一歩踏み出す。
回避に徹していたおかげもあって、致命的な深い傷は一つたりともない。流石に全てを避けることは不可能だったため、軽傷はそこら中にあって血を流しているが、あの二人を相手にして軽く済んだ方だろう。
残る敵は一人。
決着をつけるべくサンジは心を鬼にする。彼を気絶させれば全て元通りだ。
「これでてめぇの悪趣味なゲームは終わりだ。手加減してもらえると思うなよ」
「本当に終わったかな？」
「何？」
「ちょうど来たよ。新しい手駒」
嫌な予感がしてサンジはふと背後を振り返った。そして驚愕する。
メリー号の甲板に、船室へ移動したはずのルフィたちが立っていた

のだ。
何もわかっていない様子の顔で不思議そうに彼らを見ている。
「何やってんだお前ら？　喧嘩か？」
「ごめん、止めたんだけど聞いてくれなくて……」
「お、おれも、出てきたくなかったんだけど、でも……」
「バッ、バカ野郎!?　なんでそこに――！」
即座に思考を切り替え、途中で言葉を止めたサンジは振り返り、駆け出した。
ノコがタツの尻尾を銜えている。笛を吹けば、また彼らが操られてしまう。それではまた同じことの繰り返しだ。
必死に止めようと走るサンジだが、間に合わない。
そう思った時、タツの体から細い腕が生える。
「八輪咲き（オーチョフルール）」
息が吹き込まれ、演奏が始められようとした瞬間、タツの口がぎゅっと握られる。女性の物とはいえ二つの手でそうされては空気など通るはずもなかった。
タツは苦しそうな顔をして、発されるはずの音色は詰まってしまう。
同時に残る六本の腕が今度こそノコの体を拘束して、あっという間にタツを取り落とした。
「ぶほぉ!?　てめぇ何する――！」
「スラップ」
「おべべべべべっ!?」
地面に転がったタツは顔面を往復ビンタされて喋ることもままならなかった。
この時、表情が変わらずにはいられなかったようだ。
流石に不利を悟ったノコは笑みを消して、青ざめた顔でロビンを見る。
「しまった、この能力……!?」
「あなた自身には防ぐ力はないみたいね。ごめんなさい」
胸の前でぎゅっと掌を握る。

それに応じて、六つの腕がノコの体に技を極めた。
「クラッチ！」
「ぐあああああっ!?」
「ノコ～っ!?　気絶するなよ！　お前はまだ負けちゃいけねぇんだ！」
ボキッと重々しい音が鳴ったがノコは歯を食いしばり、全身に力を込める。
焦った様子のタツがノコに突進するのを見て、おそらく腕を攻撃されると思い、ロビンは一度能力の使用をやめる。キリとゾロを押さえる腕はそのまま、ノコに生えた腕だけが消えた。
苦しげに跪いたノコは鋭い眼差しでロビンを見た。
想定外があったとすれば彼女の存在。視線が届く先は全て攻撃範囲という、直接的な戦闘能力を持たないノコの天敵のような人間だ。逃げ足や回避能力は大人も顔負けとはいえ、背丈や筋力は小柄な子供でしかない彼は、関節を極められてしまうと逃げようがない。
一撃を受けたことでロビンを警戒した彼はそっと後ずさり始める。
「流石に遊び過ぎたかな……考えが甘かったよ」
「ハッ、今更ロビンちゃんの美貌に恐れを抱いたか」
「いや美貌じゃなくて能力だろ、ハナハナの」
「作戦を変える必要がある。僕も負けるつもりはないからね。今度こそ本気でやるよ」
「これで勝ったと思うなよ！　こっからが本番だ！」
ノコが逃げようとしていることに気付いてウソップが焦り出した。
逃げられたらまた同じことが始まる。仲間が操られ、町の人たちを利用され、時間をかければ後々追い詰められるのは自分たちだ。それだけは避けなければいけない。
「おい、逃げるぞ！　その前に気絶させねぇと！」
「ロビンちゃん、頼む！」
「ええ」
「もうその手にはやられない」
ロビンが能力を使用しようとした瞬間、ノコの姿が掻き消えた。目

に見えないほどのスピードで現在地を離れ、森の中へ隠れたのだ。
多少は見えたとはいえ、サンジですら完全に追うことはできなかった。
海岸に立ち尽くした全員が周囲を見回し、ノコを探しながら表情が焦る。
「うそっ……!? まずい、逃げられたらまたルフィたちが!?」
「おおいっ!? どうすんだサンジ! ロビン、なんとかできねぇのか!」
「彼らを見つける必要があるわね。私の能力なら索敵もできるけど、追いかける力はない」
「クソっ、往生際の悪い……!」
森の中へ潜んだノコは痛みを堪えながらも頭を働かせる。
殴ったり蹴ったりは最も苦手としていること。直接戦って勝てるはずはない。そんなことは初めからわかっている。だからこそ能力を鍛え、逃げることのみを努力した。隠れ、潜み、付かず離れずで敵を翻弄することは彼が最も得意としていることである。
まだ負けたわけではない。気絶していない。奪った記憶は彼の中にあるのだ。
木々の隙間、草むらの中から海岸に立つ一味を眺める。
脂汗を掻きながら彼はまた微笑んだ。
ここからが本番。今度はこっちがやり返す番だとタツに息を吹き込もうとする。
「こっちから仕掛けておいて負けるなんて、そんな恥ずかしいことはない。悪いけど君たちは逃がさないよ。まだ1億の首は僕の支配下にあるんだ」
「そうさノコ。バカなゲームなんざしなきゃお前が最強なんだ。隠れてこっそり操ってやればいいんだ。そうすりゃお前は誰にも負けねぇ」
「そうだったね、タツ。じゃあここから第二ラウンドだ」
「見つけたわ」
タツと話していたノコは、突然聞こえた声に気付くと勢いよく右側

に首を振る。
すぐ傍にある木の幹、そこに誰かの右目と、唇が生えていた。あまりにも不気味な光景だが意味はわかる。それが誰の物かわからないほど彼は馬鹿ではなかった。
「私の能力は敵の姿さえ見えていれば使える。意味はわかるわね？」
「こ、こいつぁ……!?」
わなわなと震えるタツに返事をする暇も与えられず、ノコの体に腕が生えてきた。
咄嗟に手で掴んで押さえようとしても数が多い。二本の腕だけでは、生えてくる全ての腕を止めることなど不可能だった。
自分の体から、地面から、すぐ傍にある木から、次から次に細い女性の腕が生えてくる。
その光景に恐怖したノコはタツを落としてしまい、気付けば耐えられずに叫んでいた。
「うわっ、うわぁあああああっ!?」
「ノコォ!?」
「クラッチ」
重く鈍い音が響いて、ノコの絶叫は突如途絶えた。
傍で見ていたタツは怒りのあまり駆け出そうとするが、自身も体に生えた腕に捕まってしまう。
「ちくしょう！　よくもノコをやりやがったな！　こうなりゃおれが――ん？　あれ？」
「スラム」
「ぐへぇえええっ!?」
タツもまた関節を極められ、更には木の幹に勢いよく体を叩きつけられて意識を奪われた。
一人と一匹はその場で泡を吹いて倒れ、今度こそ気絶した。
腕を下ろし、閉じていた目を開けたロビンは仲間の顔を見回す。
サンジとナミ、ウソップは心配そうにこちらを見ている。森の中で何が起きているのか彼らには見えていないのだ。三人を安心させる

ためにロビンはふふっと微笑んだ。
「終わったわ。ちゃんと気絶してるから大丈夫」
「それじゃあ……」
「ええ。みんなの記憶は戻ったはずよ」
それを聞いてから周囲を確認する。
ゴーイングメリー号の甲板ではルフィとシルクとチョッパーが寝転がっていて、いつの間にか穏やかな寝息を立てている。ついさっきまで拘束されていたキリとゾロも、気付けば何事もなかったかのように眠っていて、動く気配はなかった。
それを見てようやく胸を撫で下ろす。
どうやらロビンの言う通り、ノコは気絶して、みんな元通りになれたようだ。
目覚めて確認するまで安心できないとはいっても、戦闘が終わったことを悟り、肉体的にも精神的にも疲弊していた三人は思わずその場に座り込む。
最初はそれを見ているだけだったロビンも、ただの気まぐれか、同じく自分もそこに座った。

オーシャンズドリーム

深い眠りの中から不意に意識が浮上してくる。
今まで体感したことのない、不思議な感覚だった。自分が眠っていることはわかっていて、おそらく今は夢を見ているのだろうと思っていて、まるで海の中に引きずり込まれたかのように、体は動かず、起きることもできない。自分が自分じゃなくなる感覚。自分の中に誰かが入り込んで、違う誰かが自分の体を動かしているような気がしていた。
そんな時間が、永遠に続くかと思われたが、突然自分に帰ってくる。
目を覚ました時、キリは何も覚えてはいなかった。
ただ不思議な夢を見たという感覚だけは残っていて、たまにはそんなことあるだろうと、そんな程度の認識で本人は何とも思ってはいない。
なぜか間近で凝視してくるナミとウソップの前で、キリは大あくびをする。
「キリ、大丈夫？」
「おれたちのことわかるか？」
「ふわぁ～……もちろんわかるよ。ナミとウソップでしょ？」
簡潔に告げた一言に二人の表情は見るからに明るくなった。
二人の服や体は土が付いて汚れている。なぜそんな姿になっているのかわからないが、明るい表情を見て何か良いことがあったのだろうと推測し、キリは呑気に微笑んでいた。
「いきなり何の質問？　なんか汚れてるね。掃除でもしてた？」
「お前なぁ……おれたちがどれだけ大変だったか」
「大変？」
「あとで話すわ。とりあえず元に戻ってよかった」
彼らの発言の意味はよくわからなかったが大して気にしない様子だ。
キリは体を伸ばして脱力し、節々の痛みに気付く。
「うーん……ちょっと寝過ぎたかな。体が微妙に痛い」

「それ多分寝過ぎただけじゃないぞ。おいゾロ、お前も起きろ。頼むから暴れるなよ……」
「暴れるって、ゾロの寝相そんなに悪かったっけ」
現在、彼らはメリー号の甲板に居た。
キリの隣ではゾロが眠っており、ウソップが彼の頬を軽く叩いて起こそうとする。何度かはたいたことでゾロが気付き、寝起きは良いようでがばっと体を起こした。
「おっ、朝か」
「もうお昼よ」
「ふぅ～。こっちも無事か。ちゃんと全員戻ってるな」
安堵した様子のウソップは額の汗を拭う。
発言の意図はわからぬまま。とりあえず安心していることだけはわかる。
キリは隣に座ったゾロに目をやり、あくびをしながら頭を掻く彼に言った。
「船番中に寝ちゃだめじゃないか。何かあったらどうするんだよ」
「あ？　そもそもお前が先に寝てたんじゃねぇか」
「そうだっけ？」
「それよりお前ら、なんでそんなになってんだ？　戦闘か？」
「お前ら二人とも寝てたんだよ。おかげで大変だったんだぞ……その話はあとでするからまず休ませてくれ。今回は妙に疲れた」
大きく息を吐き出してウソップが座り込む。
キリとゾロは不思議そうに首をかしげていた。
彼らが居る位置から少しだけ離れて、サンジは船の外に目を向けていた。
キリたちが眠っている間にメリー号の隣には、イカダとそう変わらない形の巨大な丸太船が鎮座している。甲板であろうその上に居たのがマーシャル・D・ティーチとその仲間たちである。
サンジの目は厳しく、彼らを問い詰めるように会話していた。
「本当にお前らの仕業じゃねぇんだろうな」
「だから違うっつってるだろ。弱ぇ奴には興味がねぇんだ。おれの

仲間はここに居る奴らともう一人だけで、同盟を組もうって気になったのはお前らだけさ」
「フン……そうだといいがな」
険しい表情のサンジを見てティーチは豪快に笑う。
どうやら彼らが居ない間に起こった敵襲はティーチが仕組んだものではないかと疑っているようだが、本人に尋ねてもどこ吹く風であっさり違うと言い切ってきた。とはいえ、本人の言葉だけでは簡単に信用できず、彼の態度が軟化する様子はない。
ティーチは酒瓶片手に上機嫌に答える。
「おれたちを信用できねぇってのはわかる。だが心配するな。同盟を組む以上はこんなところで潰し合いなんざしねぇよ。少なくとも金獅子を狩るまではな」
「ウィーッハッハ！　もしそのつもりならおれたちの手でやるしな！」
「ただし、お前たちが討ち取られたのならそれもまた巡り合わせ」
「ハァ……ああ、お前ら、運がいい……ガフッ」
ティーチを含めて、長身で体格の良い男たちが四人。気味の悪い面々だ。
顔を歪めたサンジは一旦納得することに決め、彼らから視線を外す。
「まったく、気が進まねぇな。あんな連中と手を組むのかよ。せめてレディが居れば……」
「不満の理由はそこなんだ」
「でもあいつ、凄い奴だったな……まさか記憶を奪うなんて」
サンジが加わった輪には記憶を取り戻したシルクとチョッパーが居た。敵の姿を見たかすら定かではないキリやゾロとは違い、二人はノコの姿を見た上で記憶を奪われた。それまでの出来事は全て覚えている様子だ。
不安そうな顔で呟くチョッパーに同意するシルクが頷く。
悪魔の実は自然界の法則すら無視する不思議な力がある。
それは彼ら自身も理解していたはずだったのに、今日改めてその恐

ろしさを思い知った。
煙草に火を点け、ようやく落ち着いたサンジが表情を和らげる。
「仲間を奪われるってのはきつい敵だったな。だがロビンちゃんのおかげで助かった。あいつが目を覚ます前にさっさとこの島から離れよう」
「え？　もういいのか？」
「ここにはあいつの仲間と船を拾いに寄っただけだ。これから同盟の連中と会うんだと」
「新しい味方も増えたしね。信用できるかどうかはわからないけど」
シルクはティーチの船を見て神妙な顔つきになる。
「あの人も悪魔の実の能力者だって言ってたよね」
「ああ。そうらしい」
「能力者って、戦闘が得意な能力ばかりじゃないんだね。正直今回は危なかった……一歩間違えてたら私たち、今までの航海も、故郷のことも、私たちが仲間だったことも忘れて、今頃金獅子の部下になってたかもしれない」
そう考えると背筋が凍る。実現可能だったのだから恐ろしい相手だった。
彼女の視線の先では、ティーチの丸太船に乗り込んだルフィが彼と話していた。少し前までの危機を全て忘れてしまったかのように呑気な態度である。
「お前これイカダじゃねぇか。よくグランドラインを航海できたな」
「なぁに、どんなもんでも要は使い方だ。それに見てくれよりずっと頑丈だしな。てめぇの船ともなれば愛着もあるだろ？　そうそう変えられねぇもんだ」
「ふーん」
「麦わら、お前懸賞金が1億らしいな。何しやがったんだ？」
「お前誰だ？」
「おれか？　チャンピオンだ。ウィーッハッハッハ！」

「チャンピオン……？」
何やら一触即発の雰囲気を醸し出している。そんなルフィを見て安堵すると同時に、彼が自分たちのことを忘れた時の恐怖は何とも言えないものだった。
その時のことを思い出したのだろう、壁に背を預けて座るチョッパーが自分の鞄を抱きしめて、眉間に皺を作って俯いてしまう。彼の表情に気付いたシルクはその気持ちが理解できて苦笑した。
「次からは気をつけなきゃね。この海は広くて、何が起こるかわからない」
「相変わらず真面目ねぇ、あんたは。こんな時なんだからもうちょっと気楽に構えなさい」
キリたちの傍を離れたナミがやってきてぽんと軽くシルクの肩を叩く。
空気を変えるため、彼女の声は明るい。
疲弊した空気が流れる甲板を少しでも普段通りにしようと手を叩いて注目を集めた。
「さあ、用は済んだからさっさとここを出ましょう。町の人たちはまだ私たちを疑ってるみたいだから今更町には戻れないし。まぁ、追われるのはいつものことだけどね」
「ロビンちゃん、怪我は平気かい？」
「ええ。大した傷はないわ。これくらいすぐ治るわよ」
「あいつら、レディに傷をつけやがって、しかも覚えてねぇときた。三枚にオロしてやろうか」
「気にしないでコックさん。彼らは操られていただけだもの。責めても仕方ないことよ」
「んんなんて心優しいんだロビンちゅわ～ん！　あんな奴らに情けをかけてくれるなんて、君は天使か!?　それとも女神か!?　あぁ、君の優しさに心を打たれた僕はまるで稲妻の如く――！」
「うるさいわよサンジくん」
まだ気が抜けている様子のキリではなく、自由に行動しているルフィでもなく、ナミが指示を出して船員たちが動き出した。

落ち込んでいた様子のチョッパーが奮起して立ち上がる。
自分の頬を軽く叩いてシルクも顔つきを変え、いつも通りに操船を始めようとした。
ナミはティーチの船に居るルフィを大声で呼ぶ。
彼の振る舞いはいつも通りだが船長が居ないままでは締まらない。やはり彼が居なければ。
「ルフィ！　船を出すわよ！　帰ってきなさい！」
「おう！」
「さて、それじゃあ行こうか。海賊連合、面白エじゃねぇか。ゼハハハハ」
ルフィがメリー号へ戻ってきて、ティーチたちも出航準備を始めたらしい。
雰囲気としてはのんびりしているとはいえ、起きたばかりでもう出航。
置いていかれた気持ちのキリとゾロは座り込んだままだった。
「何があったんだろう」
「さあな。何もなかったとは思えねぇが」
「おらアホども、お前らも働け。人より倍働け。散々迷惑かけやがって」
「だから迷惑って何の？」
「よくわからねぇが、とりあえず島を出るらしいぞ」
「働きますか」
ようやくキリとゾロも立ち上がって仕事を始めた。
補給すらほとんどできていない状態で、滞在は一日どころかほんの数時間。日付が変わる前に出航することになる。当然ログは貯まっていない。それでも同盟との合流は可能らしく、慌ただしくも迷いを持たずに島を離れようとしていた。
瞬く間に準備を終えると留まることを知らなかった。
元々冒険好きの船長が乗る船だ。航海に出ることを恐れてはいない。
「出航～！」

高らかな宣言と共にメリー号は大海原へ旅立った。
幸いにも波は穏やかで風があり、日が落ちるまでまだ時間がある。今日中に次の島へ到着するのは不可能だろうが少しは近付けるだろう。
二隻の船が島を離れていく。
その姿を見送る人影が海岸にぽつんと存在していた。
木の根元に背を預けて座り込み、呼吸を乱しながら、傍らには電伝虫が置かれていた。
目を閉じた電伝虫がプルプルプルと口にしながら誰かに電波を送っている。
やがて向こう側の誰かが受話器を取って、通信が繋がった。
「ハァ、ハァ……ノコだよ。ママに代わって」
通信相手は驚いていたようだが断られることはなかった。
少しだけ待ち、次に聞こえてきた声は彼が想像した通りの人物だった。
《ノコかい？》
「そうだよ。久しぶり、ママ」
《放浪癖のあるお前が連絡してくるなんて珍しいね。何かあったのかい？》
「うん。実はね、負けちゃったんだ」
全身に残るズキズキと脈動するような痛みに耐えながら、ノコは薄い笑みを浮かべる。
今、彼の中にあるのはその声を聞いた安心感と、自身を倒した一味への興味だ。敗北したことへの怒りはない。自身の敗北は想像もしなかったが、久しくなかった出来事だ。それだけに麦わらの一味が如何なる存在なのか、関わってみて更に知りたくなった。
《ハ～ハハハハ、ママママ……戦闘になったのかい？　バカだねぇ。お前が前線に出て勝てるわけないだろう。上手く隠れなと言ったはずだよ》
「ごめんねママ。ちょっと調子に乗っちゃったみたいだ」
《それで何の用だい？　まさか仇を討てなんて話じゃないだろう

ね。なら自分で始末しな。お前の能力ならそれくらいできるだろ》
「違うよ。そもそもの目的はその人たちを傘下にしようと思ったんだ。ママが喜ぶと思って」
彼女の反応を聞いたノコは少し拗ねるような表情になった。
顔を見てなくてもわかったのか、ママと呼ばれる相手は高らかに笑う。
《おや、それはいいね。つまり使える奴らなんだね？》
「多分だけどね。ママの目から見たら今はまだ弱いかもしれないけど、いずれきっと強くなると思うんだ。僕は彼らを気に入った」
《珍しいこともあるもんだ。あのノコがそこまで言うなんてねぇ》
「金獅子との戦争になるんでしょ？　だったら戦力は多い方がいいよ。僕が説得する。今度は能力じゃなくて納得してもらうさ」
《面倒なことをするね。記憶を奪って操ってやればいいんだ。その方が早い》
「それじゃ僕が指示を出さなきゃ動かないんだよ。一番は本人の意思で動いてくれることだ」
《フン……まぁいいさ。お前が気に入った相手だ。自分でケリをつけな。おれの名前に泥を塗るんじゃないよ。息子と言えども甘えは無しだ》
「わかってる。ただ、そのためにちょっとだけ兵士を借りたいんだ」
自分の理想を語るノコはうきうきしている様子だった。
そんな態度が珍しいのか、ママはさほど考える素振りもなく即答する。
《ハ～ハッハッハママママ。それならちょうどいい。そっちの海にカタクリが向かってる。合流して頼んでみなよ。カタクリが良しと言うならそれでいいさ》
「カタクリ兄さんがこっちに？　どうして？」
《クラッカーが止められたんだ。赤髪のガキにね。おかげでカタクリを送り込める隙ができたわけだが、他の連中も相当殺気立ってるようだ。面白くなってきたよ》
少し驚きはしたものの、冷静に受け止めたノコはあっさり頷く。

「わかった。カタクリ兄さんに会ってみる。兄さんもきっと気に入ってくれるよ」
《それはどうだろうねぇ。前半の海でそれほどの逸材がいるもんか》
「一度ママにも会ってほしいな。麦わらの一味に」
《麦わらァ～？　あぁ……思い出したよ。七武海を落とした奴だねぇ。たった1億程度の首じゃないか。話題のルーキーだってペロスペローは言ってたけどねぇ》
「だから言ったでしょ。今はまだだよ。将来性はきっとある」
《まぁいいさ。そこまで言うなら連れてきな。甘いお菓子のお土産を持ってね》
「わかった」
通信はあっさりした態度で切られてしまい、ノコは受話器を置く。
負けたというのにどこか晴れ晴れとした表情だ。
そんな彼の顔を覗き込んで、眉間に皺を寄せるタツは嫌そうに言う。
「ノコよ、お前本気か？　まだあいつらを狙うのかよ。傘下にするって？」
「そうだよ。僕は彼らが気になるんだ。このまま無視はできない」
「かーっ。毎度毎度お前の気まぐれには参ったもんだぜ。さっきの聞いたろ？　よくよく考えてみればおれたちは懸賞金１０億ベリーの化け物を知ってる。それに比べりゃあんなの、どうってことないだろ」
「そうだけど、少ししたらわからない。なんだか面白くなりそうな気がする」
「やれやれ。言い出したら聞かねぇのはお前もママも一緒だな。そんなとこは似なくていいってのに……そもそもこの旅だって目的地も決めずに始めちまって。万国（トットランド）を離れて何ヶ月経ってると思ってる。流石にそろそろ故郷も恋しくなるってもんで――」
「楽しみだな。早く追いつきたいな」
「おい、聞いてんのかノコ」

立ち上がったノコはタツを持ち上げ、尻尾を口に銜える。
喋り、動き、自らの意思を持つがそれは正真正銘の笛。息を吹き込めば音が出る。
海上を進むゴーイングメリー号の甲板で、突如ルフィが背中から倒れ込んだ。大きな音を立てたせいで全員が振り向いてその姿に気付き、目を見開いてぎょっとする。
中でも大きな反応を見せたのがナミとウソップだ。
慌ててルフィに駆け寄った二人は突然眠り始めたルフィの頬を叩いて起こした。
「ルフィ!?　おいルフィ！　どうした!?　何があった!?」
「嘘でしょ!?　まさかまた……！　寝ちゃだめよルフィ！　早く起きて！」
「んがっ……ふがっ？　ふああっ」
多少驚いたような素振りを見せ、大あくびをしながら彼は起きた。
血相を変えた二人を見て眠そうに瞬きを繰り返す。
まさかノコの能力がまだ効いていたのか。彼らの疑問にルフィは平然と答えた。
「なんでいきなり眠っちまったんだ？　ひょっとしてお前まだ――」
「ん？　んー……いや、眠かったから昼寝しようと思ったんだ。だめだったか？」
「なんじゃそりゃあっ!?」
「紛らわしいことするなぁ!?」
「何怒ってんだお前ら？　いつものことじゃねぇか」
どうやら彼は自分の意思でただ昼寝しようと思っただけらしい。攻撃を受けたかのようにいきなり倒れてしまったから妙な姿に見えたが、理由は至って単純である。
ひとまずほっと胸を撫で下ろし、しかし紛らわしい行動に二人はすぐさま怒りを向けた。
「バカヤロー！　またあいつの能力かと思ったじゃねぇか！　それならそれで言え！　先に！」

「そもそも眠いだけで倒れるな！　前も見たことあるけど！」
「いいじゃねぇか別に。痛くねぇし」
「おれたちがびっくりするだろうが！」
「そうよ！　特にあんなことがあった後なのに！」
「んん、わかった。じゃ、寝る。おやすみ」
「寝るなァ!?」
たかが睡眠。いつもの昼寝。だが今日の出来事があってはそれさえも不安になってしまう。
再び勢いよく倒れたルフィを無理やり起こさせて、ナミとウソップは大声で彼に自分たちの不安と苦労を伝え始める。一度は聞いたはずだが、もう終わったことだと言って彼は真剣に聞かず、それがまた二人の声をより大きなものにしていたようだ。
ぎゃーぎゃーとうるさい仲間の様子に耳を傾けながら、船尾付近に居たキリは振り返り、今や遠くに見える島へ視線を向けていた。
そこへゾロもやってきて、キリの近くに立つと何を言うでもなく同じように島を眺める。
「聞こえた？」
「ああ。こりゃあ、笛か？」
「そうだと思う。今思い出したんだけど、寝てる間ずっと聞こえてたんだよね」
「へぇ……おれもだ」
二人は不思議そうに、さっきも聞いた気がすると思いながら、島を見る。
距離を見れば本来は聞こえそうにないほど遠くだ。だが彼らだけが聞こえた気がしていた。
名も知らぬ島から聞こえる、名も知らぬ曲。
それはまるで、ここではないどこかへ連れ去られるような、寂しげな音色だった。